

ハイスクールD∞D

心はいつも14歳

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

コンセプトはエロ&バトルです。

九頭竜安里（くとうりゆう あざと）は

親友である兵藤一誠に彼女が出来たと知ると

彼のためにチンピラのふりをして

引き立て役になろうとデートの様子を見ていたら

彼女の天野はなんと人間ではなかったのです。

時々R―18になります。

※なりマークをつける予定です。

原作敵キャラがオリ主、

オリキャラにぐへへされる要素があります。

原作改変要素があります。

NTR要素はほぼないです。

基本的に何でも許せる方向けです。

※原作や外伝とは違う設定で

様々なキャラが登場しますが

パラレル時空、

漫画版ゲッターや冒険王版ガンダムと思い

ご笑納、ご容赦下さい。

リクエストなども随時歓迎しておりますが

ifバッドエンドやNTR系は対象外としております。

ご了承下さい。

## 目次

### レイナーレ編

プロフィール (オリ主陣営) 挿絵あり | 1

第一話 | 13

※第二話 (オリキャラ×オリ主 クンニ パイズリ) | 37

※第三話 (オリキャラ、オリ主×ミツテルト 肉体操作 レズプ

レイ 疑似脳姦) | 61

第四話 | 83

第五話 | 101

※第六話 (アーシア×イツセー 愛のあるセックス 正常位

里×ナイア 覗き 手コキ 寝バック) | 120

※第七話 (オリ主×ミツテルト イツセー×ニグラ) | 150

※第八話 (オリ主×レイナーレ 洗脳 触手攻め アナルセック

ス) | 178

### ライザー編

第九話 | 198

※第十話 (リアス×イツセー エロ妄想) | 217

第十一話 | 239

第十二話 | 255

※第十三話 (イツセー?リアス) | 278

※異聞・幕間 (松田?ナイア 元浜?ニグラ) | 304

※第十四話 (イツセー?アーシア) | 329

第十五話 | 360

※第十六話 (イツセー?リアス) | 374

### 聖魔剣編

第17話

398

第18話

415

第19話

430

※幕間（イツセー×シユターク&イザイヤ イツセー×リアス×  
アーシア）

第20話

486

第21話

502

※第22話（安里×ミツテルト）

529

第23話

554

第24話

579

第25話

597

第26話

620

※異聞・幕間2 水泡の淫夢（匙×ソーナ?）

639

第27話

664

第28話

690

※第29話（イツセー×イザイヤ&木場）

704

### 3 勢力会谈編

※第30話（イツセー×シユターク）

731

※異聞・幕間3 撮影会（イツセー×ヒロインズ 松田&元浜×ニ  
グラ）

754

第31話

780

※第32話（アザゼル×シユターク）

803

※第33話（イツセー×朱乃 本番なし）

825

※第34話（イツセー×リアス 水着メイドプレイ）

841

第35話

857

第36話

—————

879

第37話

—————

892

第38話

—————

912

第39話

—————

930

第40話

—————

943

※第41話 (イツセー×アーシア リアス 木場 ゼノヴィア)

966

※第42話 (匙×花戒桃&仁村留流子 イツセー×ニグラ&ナイア  
&シユターク) —————

第43話

—————

1000

※第44話 (イツセー×ナイア 安里×カテレア) —————

1046

オリジナル強め 夏休み編

第45話

—————

1066

※異聞・幕間3 とあるグレモリー家のメイド (イツセー×リアス  
イツセー×メイド) —————

1084

第46話

—————

1101

第47話

—————

1133

※第48話 (イツセー×シユターク&メイドのリアス) —————

1152

第49話

—————

1175

※第50話 (イツセー×モブ ※本番なし) —————

1194

※第51話 (イツセー×イザイヤ) —————

1215

※第52話 (安里×ミツテルト) —————

1253

※第53話 (イツセー×エルシャ モブ ※エルシャとは本番な  
し) —————

1277

※異聞・幕間4 六業の壺・愛憎 (イツセー×ルイーナ&スコグル

非純愛要素注意！

第54話

第55話

第56話

※幕間・異聞 おいでよ！エロフの森！（前）（イツセー×ニグラ）

1403

※幕間・異聞 おいでよ！エロフの森！（後）（イツセー×ミダーラ  
安里×ヤンリマ 匙×オーブリー&パコル）キャラ立ち絵あり

1430

※第57話（イツセー×白音【大人化小猫】）

第58話

※第59話（イツセー×シュターク）※エロ挿絵あり

※第60話（イツセー&シュターク×黒歌）

※第61話（安里×カテレア&スコグル）

第62話

第63話

※幕間・異聞 煽情のメリークリスマス（イツセー×キユクロ  
里×ジャンヌ・オルタ）

第64話

※第65話（イツセー×ニグラ）

※第66話（イツセー×アーシア&リース）

※第67話（安里×ナイア）

※第68話（イツセー×リアス 本番なし）

第69話（キャラ立ち絵あり）

※第70話（イツセー×ヘル 快樂堕ち要素注意）

1716

1704

1689

1669

1656

1639

1624

1598

安

1581

1566

1546

1524

1503

1487

1457

誰71話	—————	1732
第72話	—————	1747
第73話	—————	1759
※幕間・異聞（イツセー♀×木場&朱乃 &ヘル）	—————	1770
第74話	—————	1793
※幕間・異聞（イツセー×ニグラ&クトウ）	—————	1809
※幕間・異聞（安里×キユクロ ギヤスパー×ナイア&トウ）	—————	1826
第75話	—————	1847
※第76話（イツセー×朱乃 バラキエル×朱璃）	—————	1863
第77話	—————	1875
※第78話（安里×ニトクリス）	—————	1890
※幕間・異聞 イツセーのなつやすみ（イツセー×黒歌 イツセー×シユターク&アーシア） ※疑似NTR注意！	—————	1904
※第79話（イツセー×ゼノヴィア&イリナ）	—————	1921
オリジナル強め 暗黒のファラオ編	—————	1939
※第80話（安里×ミッテルト&レイナーレ）	—————	1955
※第81話（安里×カテレア）	—————	1970
※第82話（ニグラ×モブ モブ姦注意！）	—————	1991
※リクエストSS（ニグラ×モブ 偽イツセー登場）	—————	2007
第83話	—————	2018
※幕間・異聞 イツセーの契約奮闘記（イツセー×リアス エツチ イツセー×清芽）	—————	妄想
※第84話（ロスヴァイセ、ジャンヌ・オルタ 陵辱風味注意！）	—————	2018

2034

※第85話（曹操&ヘラクレス×七符）

第86話

20632048

※第87話（『英雄殺し』×トウ・ルチャ 敗北エロ注意！）

2075

第88話

2091

※異聞・幕間（セラフオール×安里 快樂墮ち要素注意！）

2102

※第89話（イツセー×エルシャ 他）

2116

※サタナエルの逆襲！ 前編（安里×偽リアス&偽朱乃&偽ルイ）

ナ

2137

幕間・異聞 魔法少女レヴィアたんHNEXT（安里？ゼノヴィア

疑似NTR注意）

2168

※週末のワルキューレ（安里？スコグル イツセー？シユターク、

ロスヴァイセ）

2185

※リクエスト編（イツセー×セラフオール&カテレア&レイナ）

レ

2210

リクエスト編2（サイラオーグ×クイーシャ 兵藤三希×兵藤五郎

ヴェネラナ×ジオテイクス サーゼクス×グレイフィア）

2230

第90話

2249

機械仕掛けの竜神と不毛なる愛憎

※91話（安里×ルイーナ&スコグル）

22822263

※92話（安里×セラフオール）

22822263

※週末のワルキューレ・イツセー編（イツセー&フェンリル×ヘル）

22822263



- ※リクエスト編 おいでよエロフの森2前編(イツセー×イザヨイ  
&ベルフラウ 安里×パコル&オーブリー 本番なし) 2320
- ※週末のワルキューレ・安里編(安里×スコグル&セルベリア) 2334
- ※93話(イツセー×レイヴェル&ロスヴァイセ&木場(イザイ  
ヤ)) 2349
- ※幕間・異聞 若きギヤスパアの悩み(ギヤスパア×ニグラ) 2370
- ※94話(イツセー×小猫&黒歌 イツセー×レイヴェル) 2382
- ※第95話(イツセー×ルチャ) 2401
- リクエスト編(ライザー×ナイア&ニグラ&ルチャ(?)) 安里×ル  
イーナ(本番無し) イツセー×ルチャ) 2417
- リクエスト編 魔法娼女レヴィア☆たん(安里×セラフオール  
サーゼクス×グレイフィア) 2447
- なかがきのようなもの(一言解説やら寸書き、一部ネタバレあり) 2464
- ※リクエスト編(イツセー×イリナ&ゼノヴィア&アジア) 2476
- ※96話(イツセー?ベラナディア) 2491
- リクエスト編(イツセー?シユターク、セラフオール、七海、ベル  
フラウ、サクヤ) 2508
- リクエスト編(安里?スコグル&フレイヤ イツセー?ロスヴァイ  
セ+α バルドル?ニグラ&トウ&キユクロ 非NTR) 2535

	リクエスト編 前編(ジャンヌ・オルタ&ルイーナ&朱乃?痴漢(※本番無し) イッセー?朱乃)	2552
	リクエスト編 後編(安里?ルイーナ&ジャンヌ・オルタ イッセー&分裂体?朱乃)	2568
	リクエスト編 前編(ギヤスパ?キユクロ)	2582
	リクエスト編 後編(トウ?シヨタ キユクロ?シヨタ ※非TR)	2594
2609	外伝・異聞リマスター (TS安里&イッセー?アザゼル TS安里?ヴァーリ)	安

## レイナーレ編

プロフィール（オリ主陣営） 挿絵あり

九頭竜安里

誕生日：9月10日

身長：181センチ

体重：78キロ

種族：人間↓逸脱者

所属：外なるものたち

属性：火・土・闇

容姿：黒のややツンツン頭。

切れ長の目。筋骨隆々。

AIに描いてもらった。

一人称『俺』

二人称○○さん、

○○、○○ちゃん、

○○の旦那など。

概要

主人公。

駒王学園高等部にて

松田、元浜、兵藤一誠と

共に行動することが多い。

その体躯と悪人面の外見から

人から恐れられることが

多々あり、本人も自覚している。

そのため人付き合いは苦手で

友人と呼べる者は数少ない。

悪ぶってはいるが実のところ

根っからの善人であり

困っている人がいれば  
見過ごせない性格をしている。  
実はムツツリスケベなためか  
一誠とは小学生の頃から  
ウマがあい、親友の関係である。  
レイナーレに一誠が殺害された際  
逆上して向っていくが  
返り討ちにあい死亡した。  
が、ゲイト・オールドワンにより  
逸脱者に転生。

『燃える三眼』を与えられ、  
リアス達の同盟相手として  
様々な事件に同行することとなる。  
なんか知らんが凌辱系エロゲ  
主人公特有のベッドヤクザ  
ムーブをかますこともある。  
しよっちゆうメンタルが曇る。  
所有神器スキルなど

『燃える三眼』  
自身の腕（後に四肢）を  
触手に変換する事ができる。  
殴打された相手は発火し  
生命体に引火した場合は  
相手を灰にするまで  
通常の方法では鎮火しない。  
触手の太さは繊維クラスから  
巨木クラスまで様々。  
一応発火させずに叩くこともできる。

『武態』  
触手を武器化する事が出来る。  
鈍器や槍、あるいは矢など。

複雑な機構を持つ武器には  
できないらしい。

(例えば時限爆弾や

誘導ミサイルなど)

数分間なら切り飛ばされたり

飛び散った触手の破片でも可能。

高速歩法『轟』『霞』『蹄帝』『蛟』

要は六式の『剃』と『紙絵』と『月歩』。

これらを組み合わせる無音のゲッター移動が『蛟』

六合太極

六合とは世界の事。

太極とは陰陽がバランス良く

極まった状態にして根源の事。

要はゼロを十と一の状態に分けて

各々の力を引き出すこと。

調整にしくじると暴走しかねない。

なお安里が出来るのは初歩の初歩。

殻がケツについているヒヨコレベル。

現状は大地を媒介としないと

使えない。

なお、サリエルとの戦いにより

ピンチになると異空間でも使える。

『秘密の皇帝』

※詳細不明

『顕色』

燃える三眼の目の力により

過去、現在、未来を顕し、観る力。

心を読んだり、ダメージを受けている場所を見たり

極めると未来予知まで出来るらしい。

現状は意識を集中しないと使えない。

『冥獄長の豪腕（ヘカトンケイル）』

俺自身がビツクバン・パンチになることだ。

九頭竜ナイア

誕生日：2月29日（自称）

身長：166センチ

体重：50キロ（自称）

種族：自称女神

所属：唯一無二にして輝く

シスターナイアとその引き立て役共

属性：金

容姿？金髪の肩までのセミロング

爬虫類の様な目

3サイズ88―59―84

一人称 私

二人称貴方 クソ虫くん

AIに描いてもらった

## 概要

ゲイトの懐刀というか使い走り。

何故か黒を基調とした

シスター服を好んで纏う。

基本的に口が悪く冷笑的な毒舌家。

安里曰く性格は最低最悪。

曰く何かあった未来のアーシア実際

一回り年上にした位の外見イメージ

時折口調が男性的になる。

松田と時折好んで交わるが

趣味の一環らしい。

料理は意外に得意だが

作るのには黒いものばかり。

所有神器スキルなど

『女の子のスカートには

秘密が一杯

(グミ・チョコレート・パイソ)』

尋常じゃねえスリットが入った

スカートの中から兵器を取り出す。

連結式時限爆弾やら戦車やら

ロケット弾など近代兵器が多い。

神秘性の強い武器を出すことは

できないが極めて不浄な

おぞましい何かを召喚することは

可能。

『不吉の凶星』

※詳細不明

ニグラ・サセコヴィツチ

誕生日2月9日

身長174センチ

体重63キロ

種族地母神

所属外なるものたち

属性 土

容姿黒の腰まで伸びたロングヘア

金色の瞳白い肌頭に山羊の巻き角

3サイズ105―63―91

一人称私

二人称○○ちゃん○○様

AIさんに描いたもらった

概要

ゲイトの副官にして側近。

ナイア曰く『淫売を超えた淫売』  
色情狂で、その趣向も

男女も攻めも受けも問わない。  
見た目だけは

絶世の美女であり、

その美貌で数々の男女を

墮落させてきた

ビッチの中のビッチである。

その魔手は安里やイツセー

のみならず、

ほぼ全ての駒王学園の

生徒や教師、理事長にまで

及んでいる。

幸いにして生徒会、

オカルト研究部のメンバーは

無事ではあるが。

表向きは駒王学園の

養護教諭として行動している。

体重に関しては突っ込んではいけない。

所有神器スキルなど

### 『権能咀嚼』

交わった相手の能力や権能を

一部コピー（租借）できる。

なお保有、貯蔵、代替も可能。

但し禁手化に

至ったスキルなど

コピー不可能なものも

あるらしい。

### 『巨竜の頭』

イツセーと未遂とはいえ

交わったことにより得たスキル。



ドライブグの持つ

倍化、譲渡を擬似的に使用できる。

倍率や回数は決まっているが

ニグラの魔力はほぼ無尽蔵なので

ガス欠の心配はない。

『死者再誕の秘法』

ニグラの持つネクロノミコンと

『巨竜の頭』のスキルを

組み合わせる事で

非業の死を遂げた者達の肉体を

産み直す事が出来る。

なおこのままでは人格までは

復活できないのでゲイトが

魂を復活させる事で

完全なものになる。

要は英雄ガチャであるが

ゲイトが運営サイドなので

結果はニグラの思いのまま。

『魅了の香気』

男女、雄雌問わずに

虜にしてしまう匂い。

更に言えば耐性のない者は

性的嗜好に関係なく彼女への

無関心や嫌悪、憎悪、

恐怖などのマイナス感情は

一切湧かない。

しかし一部例外もある様だ人造生命体や

性的欲求より他の欲求が極端に高いなど。

『豊穡の美』

対象から生命力、

魔力を吸収して自身の体力や魔力に変換する。

吸収量の上限は無いので  
実質無限に活動可能。

なおニグラは性的に交わることで  
このスキルの効果を高めている。  
パコパコの実を食べた  
全身パコパコ地母神。

『狂信者の愚詩』

※詳細不明

ゲイト・オールドワン

身長171センチ

体重54キロ

種族解析不可

所属外なるものたち

属性 不明

容姿やや痩せ型 紫陽花の様な髪型

虹色の瞳

概要

外なるものたちのリーダー。

しかし『副王』を名乗っている。

(本来ならば有り得ない事だが)

人間や命に対して好意を持っており

『永劫に回帰するもの』と

『禍津星』による滅びの未来を

回避するために行動している。

基本的に温厚だが

色々発想がズレている。

また時折言動が意味深な時がある。

ドライグとは彼に力を貸してもらう

代わりに彼が喪失した宝を

搜索するという

契約を結んでいる。

なおヴァーリヤ  
リゼヴィムとは考え方が合わない。  
所有神器スキルなど

『融通無碍』

彼はあらゆる封印、制約、  
呪いといったものを無効化して  
全ての拘束を無視して行動できる。  
だがあくまで行動に留まり、  
破壊や創造はできない。

(ただし例外はある)

『夢幻泡影』

全ての不都合な事実を  
なかったことにするのみでなく  
展開すら変更できる。  
但し自分自身のためには使えない。

『万華境』

あらゆるフィールドを生成し  
展開する。  
レーティングゲーム様の異空間から  
バカンス用のビーチまで  
バリエーション豊か。  
なおフィールドを上書きする力を  
応用することで  
相手の攻撃や相手そのものを  
消し飛ばす事も可能らしい。

『無花果のタルト』

※詳細不明

トゥールルチャ (m j a 8 2 3 . v e r 2 様 原案キャラ)  
誕生日：6月8日  
身長：190センチ  
体重：120キロ

種族：炎の魔人

所属：外なるもの

属性：火

容姿？赤黒いロング髪で

オッドアイのFGOの妖精騎士ガウエイン

3サイズ130―86―90

一人称 私

二人称貴方 貴様 卿

概要

ゲイトが呼び寄せた追加人員。

性に関しては寛容的。

ゲイトとニグラの部下で

安里に関しては様付け呼んでおり

ナイアとは犬猿の仲ではあるが何かと世話を焼く。

安里とは勿論の事、イツセーの事は

お気に入り認定している。

所有神器スキル

『全ては炎の中へ』

尋常では無い熱量をブレスとして吐くのと

他に相手に傷を付けた所から炎を出す。

安里の燃える三眼とある意味似ているが

こちらの方が威力が上。

『癒しの燈火』

触れた人物の傷を癒やす。

その後、自身が配下にするか

どうかを選択する事が出来る。

『焼却四季』

相手のフィールド効果や陣術、魔法陣などを

概念ごと焼き払う。

焼却空間は霊的に清める事もあるいは

瘴気に塗れた空間にする事のどちらも可能。

『原色舞踏』

彼女が人間と言う知性体を認識できた  
切っ掛けを模倣した格闘術。  
所謂ルチャ・リブレである。

『狂った太陽』

※詳細不明

AIさんに描いてもらった

眷属の皆さん

煉獄杏寿郎（出典・鬼滅の刃）

身体的特徴は原作と同じ

炎の呼吸は実際に炎の闘気を発する様になった。

痣はまだ出ていないが擬似的な赫刀は出来る。

安里の事を継子認定している。

現代的な格好もするが隊士服が

一番性に合うらしい。

実ははぐれ悪魔を独断で何人か倒している。

日輪刀の件で職務質問を受けたことがある。

オリジナル剣技も使ったりする。

生前の事は『未練はあるが悔いはない』と  
断言している。

ランサー（出典・fateシリーズ）

身体的特徴は原作と同じ。

モードチェンジも出来るらしい。

ちなみにUBWルート後。

今回は異邦人かつ傭兵というスタンス。

彼の信条とゲツシュに反しない限り

力を貸してくれることうけあい。

冬木市の経験を生かしたのか

職務質問を受けたことはない。

ニトクリス（出典・f a t e / G r a n d O r d e r）

身体的特徴は原作と同じで最終再臨。

街中は職務質問を受けたため

アイドル霊衣姿で出歩くことにした。

煉獄さんと組むことが多いが何故か

フラグは立たない。

ニグラに関してはその奔放さに眉を潜めている。

セルベリア・ブレス（出典・戦場のヴァルキュリア）

身体的特徴は原作と同じ。

銃を携行していたためやっぱり職務質問された。

ランサーと絡むことが多い。

因みに原作での自爆直後の世界線から

召喚された。

マクシミリアンにはまだ未練があるとかないとか。

（フラグ）

安里に対してはカールに近いものを感じている。

ナイアとは考え方がまるで合わず犬猿の仲。

ジャンヌ・オルタ（出典・f a t e / G r a n d O r d e r）

## 第一話

俺は幸福になりたかった。

「……今日は散々な一日だったわ。悪魔祓いや眷属の類なら兎も角、ただの人間が私に勝てると思っていたのかしら？」

天野とかいう一誠のガールフレンドだった女が何か言ってるやがる。背中の鳥みたいな羽根は何だ……？　しかし頭がくらくらするし、月も何もかもが赤く染まっている。それにひどく寒いし、ひゆうひゆうと風が鳴っている。焼け付く様に痛い胸に手をやろうとしたが肩から下の感覚がない。

ああ、そうか……。俺は天野に腕ごと胸を貫かれたんだ……。ぐるぐると世界が万華鏡の様に回る。吐き気が止まらない。視界の端で俺の身体から流れた血溜まりが広がっていく。

……ああ、俺はここで死ぬのか。何も出来ず、何も守れず、一人ぼっちで虫のように死ぬのか。

「畜生……」

赤いカーテンが降ろされる様に血まみれの瞼がストーン、と落ち、そして……。

1

死んだはずの俺は泥濘を抜けて螺旋階段を降り、廃墟の街へ。その中央には廃墟にまるで似つかわしくない

虹色の大樹と樹液を啜る甲虫。気流に流される様に俺は

大樹の下のテーブルへとまるで流される木っ端の様に

辿り着いた。そこにいたのは3人の男女。山羊角が印象的な妙に色気のある女の人、黒ずくめのシスター、そして紫陽花の様な髪の色が静かそうな兄さんという取り合わせ。

ここは何だ。一体どこだ。更に言えば胸の穴も失ったはずの片腕も何事もなかったかの様に戻っている。

たじろぐ俺に一番早く気がついたのは物静かそうな兄さんだった。位置取りからして多分この兄さんがリーダー格なのだろう。

「あら、てつきりあつちの子が来ると思っていたけど……」

「いや、向こうは赤龍帝ですからこつちには来ないでしょう」

「そうだね」

「すいませんが……ここは？」

状況を確認しようとすると思わずくめのシスターが口を挟んできた。

「まあ、よくある話ですよ。」

九頭竜安里（くとうりゅうあざと）君。貴方は死んだんですよ。それが何の因果かこんな所に流れ着いたんですね。しかしまあ……」

思わずくめのシスターは俺をジロジロと品定めする様に

視線を送ってきた。

「な、何スか……？」

「いやあ、吃驚する程華がありませんね貴方。」

本当に人間ですか？実は徳を積んだアリなんてことはないですか？まあいいですけど。

えつとですね、ここがどこかと言うと貴方達で言う

冥界に近い場所ですね。この世界には本来存在しない筈の異物が紛れ込んだ時に生じる歪みによって出来た空間なのです」

「頭大丈夫ですか？」

しまった、シスターの姉ちゃんがまくしたてるモンだから思わず口に出してしまった。この性格、何とかならんものか……。

「あら、私はいいと思うわよ？正直なコって可愛いじゃない」

「そ、そうスか……」

山羊角の女の人がかつちに

笑いかけてきたが顔が

赤くなっているのが

自分でも解る。

どうもこういう雰囲気は苦手だ……。

と、言うか俺の心を読んだかの

用なタイミングだったような……。

すると思わずくめのシスターが

あからさまに嘲笑する様な笑みで



言葉を続けた。

「何言っているんでしょう。」

貴方アリ語が解るんですか？」

「もう。」

まるで話が進まないじゃない。

そうやってすぐに

マウントを取ろうとして

人を口汚く罵るのが

貴方のダメな所よ、反省なさい」

「はー？ 息をするように

股を開く淫売を越えた淫売に

言われたくはないんですけどー？

鍵で門は開くにしても

限度があるでしょー？

盗賊の鍵で開くとか

そのまんますぎて笑えてくるわ」

う、うわあ……。

なんて品の無い言い争いだ……。

二人とも美人なのに台無しだ……。

「所で君、無花果のタルト

食べるかい？」

俺が呆気にとられていると

漸く男の人の人が話しかけてきた。

「い、いえ……別にいいです」

「そうか、残念だ」

「それより、あの二人に代わって

俺に説明してくれませんか？」

「そうだね。」

まずは自己紹介を。

僕の名はゲイト・オールドワン。

としておこう」

しておこうって……

何かあからさまに怪しいが

大丈夫なんだろうか？

いや、ここでそんな話をしても  
仕方がない。

俺は覚悟を決めた。

「俺は、九頭竜安里です」

「では安里くん、君は今何処にいるかは解るかな？」

「さっきの話だと冥界に近い場所だって事ですけど」

「そう。ここは門の中間点。

君は鍵を抱くものなんだ。

だからここに來ることが出来た」

「よく意味がわからないんですけど」

「うん、だろうね。

でも何れ解るよ」

ニコリと笑って

ゲイトさんは言った。

なんとというか、

虹色にキラキラ光るような

笑みだった。

いかん、その気はないのに

ドギマギしてしまった。

すると罵り合いを終えたらしい

シスターが矛先をこちらに向けた。

「解んなくていいんですよオ。

所詮アリはアリらしく巣穴に

水流されて溺れる様を

私達にゲラゲラ笑ってもらえば

いいじゃないですかア？

どんなカスでも死ぬことと笑われる事だけは  
出来るもんなア」

「なっ……」

何だこのシスター……。

明らかにこつちを

人間扱いしてねえ……！

それに何て

イヤな笑い顔をしやがる。

人の悪意を煮凝りにしたような

醜悪な表情だ。

「ああ、ごめんなさいねエ。

私ったらつい口が悪くて。

貴方みたいなフナ虫にも

優しくしてくれる方がいるから

調子こかない様について標本釘を

ぶっ刺しましたわホホホ」

「ぐ、ぐうう……！」

「はいはい、そこまで」

さんざん愚弄される

俺を見かねたのか

山羊角の女の人が仲裁に入る。

「全くもう、

ごめんなさいね……。

大丈夫？ おっぱい揉む？」

無花果どころか椰子の実が2つ……。

って一誠みたいなセクハラかまして

どうするんだ!!

俺は火照った頭を冷ますべく

ぶんぶんと左右に首をふる。

「い、いえ……結構ツス……」

「あら、遠慮しなくてもいいのに」

ふあさり、と黒いロングヘアを

かき分けると甘い香りが鼻を

くすぐった。

すると次に黒ずくめのシスターが  
いかにもかかったるそうに  
俺へと話しかけてきた。

「で、クソ虫くん」

「九頭竜だ」

「ああはい、クソ虫くん。

とにかく貴方はこれから

チート能力貰ってやりたい放題の

人生が送れるワケですよ。

良かったですねー？

良かった良かった、

良かったって言えばよ三下。

お前らには丁度いいご褒美だろ？」

「……………」

この女、完全に

俺の事バカにしてやがる……。

どこをどう拗らせたら

こんな女が生まれるんだ。

だが、こんな女の

挑発に乗るのはアホらしい。

冷静になれ……。

すると山羊角の女の人の

機嫌が良くなった。

「偉いわ安里ちゃん。

よく我慢したわね。

カツとなつたらきつとこの子に

潰されていたわよ貴方」

と、目を細めて

俺の頭を撫でてきた。

何だ、何だコレは。

恥ずかしくて死にそうだ。

「所で九頭竜君。

君には兵藤一誠という友人が  
いる筈だよね」

「え？ あ、はい。

あいつとは小、中、高で

同じクラスになって

ずっとつるんでますけど」

「うん、そうか。

なら彼もまた大きな運命の鍵を  
握る者だ。

彼の助けになつてあげてほしい」

言われるまでもない。

あいつは親友だからな。

「解りました。

俺にできることなら」

「ありがとう。

君がいれば心強いよ」

「はい！」

思わず笑顔が溢れてしまった。

「あ、でも一っだけ言っておくよ。

無花果のタルトは食べておくべきだった」

「はい？」

「自信作だったんだけどな……」

「さあ、そろそろ門が開く頃だよ」

「なんというか、ゲイトさんは

スケールのデカイ人だ。

俺とは感覚が違うというか……」。

「そうこうしている内に

門が開き始めた。

」

「と、いう夢だったのさ……。」

「ってオチか……はあ……。」

一人暮らしのボロアパートで  
俺は目を覚ました。

駒王学園の生徒ではあるのだが  
諸事情あつて、というか

両親は

「学費は出すがある程度生活費は

自分で何とかせんかい」

という教育方針のせいで俺は

絶賛勉学とバイトに

大忙しの苦学生という訳だ。

だからといって、だからと言って！

「あんな夢を見るなんて

どうかしてるぞ……。」

一誠に彼女が出来たもんで

嫉妬したのか……？」

だとしたら情けない話だ。

「いやー吃驚する程ダサイですね。

俺が守ってみせるッ！（迫真）

いやーサイコーサイコー。

あの弱さで何を守るんですかね。

というか何ですこの汚ねー部屋は。

蟻の巣でももうちよつと

マシなんじゃねーですか？」

煩いな。

これはこれで整頓されてるんだよ。

少なくとも溝底以下の人間性の

お前の中身よりはキレイだよ

馬鹿野郎。

「って……!?!」

何であの性格最低最悪のシスターが俺の部屋にいるんだ!!  
すると奴はニマアツと邪悪な笑みを浮かべた。

「どうも何も、ここは私とクソ虫くんの家なんですよ。つまり同棲ですね。

偶には女王蟻もいいでしょう。おい働きアリ。パン買ってこい。黄色いヤツな」

「誰がアリだ!!」

黄色いヤツって何だ!

ヒントが少なすぎるんだよ!」

「おや、ご不満ですか?」

じゃあ『ゴキブリ』の方がよかったですでしょうか?

それと、私の事は敬意を込めて

唯一無二にして輝く

シスターナイアと呼びなさい。

略して神でもいい」

顎をくいと上げて

見下しきつた傲岸不遜なこの態度。

俺が神なら間髪入れず

往復ビンタだわ。

「ふざけんな!」

長えよ! 長えんだよ! 二つ名が!

てめえみてえな性格最悪女を

どうして敬えってんだ!

大体何だっつてんだこの展開は!」

怒りの余り、涙が出てきた。

「まあまあ、

そんなに怒らないで下さい。  
ほら、おっぱい揉みます?」

わざとらしくしなを作るや

俺の目線の先には

禁断の果实の林檎が二つ……。

ってイカンイカン!

こんな性格最低最悪の女の罠に  
掛かったら最後。

血の一滴まで搾り取られる。

「搾り取るのは精子でしょう。」

エロ的に考えて」

「喧しい!」

「ああ、そんな事より

学校が始まりますよ。

ほら貴方も着替えて着替えて」

「つてうわっ!?!」

な、何でコイツいきなり

服を脱ぎだしたんだ!?

見た感じは俺と同年代っぽいのに

体つきはその……なんだ……。

大人びているというか……。

や、やばい。

目線が釘付けになってしまう。

すると彼女は俺の顔を見て

ニヤリとした。

そして自分の胸を持ち上げ、

谷間を強調してきた。

その仕草がまた妙に色っぽくて

心臓の鼓動が早くなる。

「堪んねえこの女。」

俺の股間のマグナムで



ひいひい言わせてえ〜。

おいそのデリンジャーしまえよ」

「人の心の声を捏造するな！」

朝から何でこんなコントを  
するハメに……。

俺も一応駒王学園の学生服に  
着替えたがナイアの奴は  
さつきと同じ

黒のシスター服だった。

じゃあ何で着替えたんだよ!!

「いやサービスシーンは

必要かなと思って」

まるでシスター服とは思えない  
尋常じゃねえスリットから  
足を覗かせてナイアは言う。  
マジでなんなのコイツ……。

↓

そして今は駒王学園の昼休み。

俺は屋上にてナイアと

二人きりだった。

しかしまるで、ちつとも、  
これっぽっちも嬉しくない。

「まあそう言わず

お弁当でもどうぞ。

愛憎たっぷりですよ?」

そういつてナイアはバスケットを  
取り出した。

クソ……こういう時の雰囲気と顔、

あと声だけは

美少女だなコイツ……。

あと憎しみは込めるなよ。

と内心ツツコミを入れながら  
バスケットの中身を見ると……。

小倉トーストが入っていた。

「……何だこれは」

「小倉トースト知らないとか

どこの地底の生まれですか貴方？」

「知ってるわ！」

それより何で小倉トーストなんだ」

するとナイアは肩をすくめて

こつちを憐れむ視線を送る。

「わかりませんか？」

これは暗黒とあんこ食うを

かけた高度なギャグですよ。

どうせ暗黒空間が出てくるとか

思ってたやがったんだろこのトンチキが。

残念！ 激ウマ

ご当地スイーツちゃんでした！」

何でいきなりキレてんだ。

情緒が不安定すぎるだろ……。

しかしナイアは

そんなドン引きする

俺には構わずてきぱきと

準備をする。

「あとはアイスコーヒーを

水筒に入れておきましたので

宜しければどうぞ」

「お、おう……」

これは冷やしコーヒー、レイコと

冷酷無比をかけたとかって奴か。

「いや、面白くも何とも

ありませんが何か？ あと

今どき冷コなんて言いませんよ」

冷ややかな目線で俺を見つめる

ナイアに俺は泣きたくなる。

こんな理不尽が許されていいのか？

「何を抜かしますか。」

女が男にヒドイ目に合わされるのは

アダムとイヴの失樂園の頃から

決まっているんです。

まあ、それとそれとして

はい、あーん」

そして何故か俺の口元に

小倉トーストを持つてくる。

「な、何だよコレは」

「見ての通り

食べさせてあげようってんですよ。

ほら口を開けやがれトンチキ」

仕方がない。

とりあえず一口だけ貰うか……。

俺は恐る恐る一口食べる。

「どうです？ 美味しいでしょう」

「……」

う、美味しい……。悔しいが……。

「黙っているという事は

認めたいみたいですね。悔しいでしょうねえ」

「くっ！」

くそっ！ コイツのペースに乗せられてしまった！

このままではまずい！

何とかしなければ……！

「あく、腹減ったな〜」

そのとき少年漫画の主人公が

最初に言う台詞と共に

誰かがドアを開いた。

俺はこの声に覚えがあった。

親友の兵藤一誠だ。

「よお安里……！」

「ってその子は？」

「はじめまして。」

私、唯一無二にして輝く

シスター、

九頭竜ナイアと言います」

何さらつと俺の名字名乗ってんだ！

少なくとも三親等以内に

お前みたいな性格最悪の親戚なんて

うちにはいねえ！

「九頭竜って事は……。」

安里の従兄妹かー。

俺は兵藤一誠。

イツセーって呼んでくれよな」

「まあ、丁寧にこのギンバエ野郎」

丁寧にお辞儀しながら

この罵倒だった。

コイツマジでぶっ飛ばしてえ……。

だがそんな俺の気持ちを知らずか、

ナイアは俺の背中越しにイツセーに話しかけていた。

「ところで貴方は何者ですか？」

私はこの男を

私のモノにしようと思っておりますので是非協力を」

「そ、そうなんだ……。」

まあ従兄妹は結婚できるもんな。

親友の未来のためだ。

喜んで協力するよ」

いや、イツセー。

ナイアの与田を本気で  
受け取るんじゃない。

お前がいい奴なのは解っているが  
コイツが嫁になるなんて……。

なる、なんて……。

(貴方、ご飯にします?)

お風呂にします?

それとも……)

く、クソ……。

朝の下着姿のせいで

妙な想像をしちまう……。

具体的にはナイアの新妻スタイル。

落ち着け、素数を数えるんだ。

「今スケベな想像しましたね？」

因みに私は裸エプロンではなく

水着メイド派ですので宜しく。

因みに宗教上の理由で黒のビキニ」

「知らねえよ！」

何だ宗教上の理由って！」

「ええと、

二人は仲がいいんだなあ……」

ほら見ろ流石のイツセーも

引いてるじゃねえか!!

「そうですよお。

貴方と天野さんと同じ位ねえ。

ハハッ」

また、あの粘ついた笑顔をしてナイアは言う。

見るだけで胸焼けしそうな

嫌な笑いだ……。

そしてイツセーの顔つきが

途端に変わった。

ドンツと壁に手を突いて  
ナイアを凝視している。  
いかん、ナイアの奴が  
どうなろうと構わんが  
暴力沙汰でイツセーが処分される  
わけにはいかん!

「お、おい……落ち着けよ。」

昨日の今日だぜ!

あんな事があつた後に

そんな嫌味を言うんじやねえよ」

「!? どうして二人は

天野さんの事覚えてるんだ!?

松田も元浜も……。

他のクラスメイトは皆忘れてるのに!」

どういう事だ?

一誠と俺を一度殺したあの女の事を

皆忘れてるって……?」

「それについては

私が話すわ。兵藤一誠君。

九頭竜安里君。それに……

唯一無二にして輝くシスター

九頭竜ナイアさん」

その言葉と共に屋上の扉から一人の女が入ってきた。

赤い長髪に超然とした

雰囲気醸し出す才媛を

絵に描いたようなそんな人だ。

でも、ナイアの奴を二つ名まで

含めて呼ぶことはないだろう。

天然の気があるのか

それともスケールがデカいのか。

しかも間が悪いことに

昼休み終了のチャイムが鳴った。

「あら、もう時間？ 仕方ないわね……。」

続きは放課後に部室で話しましょう」

そう言って彼女は嵐のように去って行った。

しかし……。

「あの人何部なんだ？」

ズルツとナイアとイツセーが

俺の側でコケていた。

何なんだ一体……。

「アンタ本当に馬鹿ですね。」

脳細胞がハエと同数なんですか？

彼女はリアス「リアス・グレモリー先輩。」

高等部の三年生で

オカルト研究部の部長さ」

「ふーん、偉いんだな」

「貴方より下の存在は

関東方面に3人位なのを自覚

してくださいよ」

コイツ、ホントにぶっ飛ばしたい！

「安里、俺達も行くこうぜ。」

授業が始まるぞ」

「そうだな……。」

じゃあな、ナイア」

「ええ、また放課後に」

え？ まさかコイツ

オカルト研究部に同行するつもりなのか!?

何とかゲイトさんの所に

返品できねーものかな……。

」

そんな訳でイツセーと俺は

オカルト研究部に招かれた。

堂々と部長の席に座り

リアスさんは

俺達を待っていた様だ。

イツセーは緊張しているのか

ソワソワしていた。

俺も悪さして職員室に連れてこられた様な

気分で落ち着かない。

で、ナイアはと言うと……。

「お茶位出してくださいよ。」

気が利かないなあ」

ソファアーのど真ん中に陣取って

エラっそうに言いやがった。

しかしシスター服なのに

そのスリットのデカさは何だよ。

目のやり場に困るだろ……。

あと、足を投げ出すな。

行儀が悪い。

「うふふ、ごめんなさい

気が利かなくて……」

いかにも大和撫子な雰囲気

黒髪ポニーテールの女の人

コーヒーを持ってきてくれた。

「あ、どうも……。

安里、

この人は二年生の姫島朱乃先輩だ。

学園の三大お姉さまの一人だぜ」

イツセーが興奮気味に言う。

確かにこの人の色っぽさと来たら

グラビアアイドル顔負けだ……。

「あらあら、私なんてそんな

大層なものじゃありませんわ。



ただの一学生ですもの」

「いえ！俺にとつては憧れです！」

イツセーは鼻息荒くそう言った。

まあ気持ちは解らんでもない。

「まあ嬉しい。」

ありがとうございます」

そう言つて微笑む姿は

まさに天使だった。

「それで、早速だけど……。」

一誠君、安里君。

昨日の事を覚えてる？」

その辺りで

リアス部長が早速尋ねてきた。

忘れようがない。

天野とかいう女が

イカれた格好になったと思つたら

イツセーの胸を貫き、

その有様にキレて

向かつていった俺も

返り討ちになつたという……。

情けねえ話だ。

「そう、覚えているのね。」

では単刀直入に言うけど

一誠君、いえイツセー。

貴方は悪魔になつたの」

……は？

「い、今何と……。」

イツセーは口をパクパクさせて

驚いていた。

俺もたぶん昨日までなら

同じ顔をしていたんだろうな……。

「あら、安里君は

あまり驚かないのね？」

「正直実感がわかないんです。

だって俺達は人間でしょう？

人間がいきなり悪魔って言われても……。

何かの冗談にしかな聞こえませんよ」

俺は至極真つ当な事を言った筈だ。

しかしリアスさんは少し悲しそうな表情をした。

「残念ながら現実なの。

貴方達が生きている世界とは違う

理屈が存在するの。

信じられないかもしれないけれど

事実として受け入れて欲しいの。

そしてイツセーには

その力が宿っているわ。

貴方は……よくわからないけど」

で、部長から聞かされた話は

神器とか魔界とか

天使や悪魔、そして墮天使。

まるでゲームの世界だな……。

「信じますよ。

だってリアスさんが

言うことですから！」

イツセーは単純だな。

そこが良いところではあるんだが。

「貴方はどう。安里君？」

私としては貴方の背景が

気になる所だけけれど」

そう言っつてリアスさんがこちらを見つめてくる。

俺はどうするべきか……。

ナイアの方に視線を向けるが

しれっとコーヒー飲んでやがる。  
助け舟を出す気は更々ないってか。

しょうがないので知っていることは話すことにした。

「ゲイト・オールドワンって

人……なのかな？」

紫陽花みたいな色の髪で

何か天然っぽい菓子作りが

得意な男の人なんすけど、

知ってます？

俺はその妙な奴に

助けられたみたいで。

鍵を抱くものがどうか

門がどうか……」

するとリアスさんは

暫し考え込む様に視線を落とし

沈黙。

「残念だけれど、

悪魔でも天使でも堕天使でも

その名前は聞いたことがないわ。

もしかしたら外国の神の

偽名かもね。

それに鍵……？

私達という悪魔の駒かしら。

或いは神器かも……」

まあ、たしかにあの雰囲気は

神と言われても納得だが……。

「それでナイアさん。

貴方について尋ねたいのだけど」

「3サイズなら

上から88―59―84ですよ」

ナイアは真顔でそう答えやがった。

そういう話はしてないだろ。  
アホか。

「というのは冗談で

ゲイト・オールドワンは

私の上司です。

リア様の縄張りで

事を荒立てるつもりはないので

ご用命の際はなんなりと」

「じゃあ、その上司の

ゲイトさんに

連絡を取って貰えるかしら？」

「それは無理ですね。

彼は基本自由人なので

滅多に連絡には応じません。

LINEも既読スルーは当たり前。

そのくせワン切りはするし」

マジかよ……。

いやコイツの事だからテキストに

タコ吹いてるだけだろう……。

「そう……。

敵対するつもりがないなら

別に構わないわ。

ただ、もしその人に会えたら

私に教えて頂戴」

「解りました。

ではそろそろお暇しましょうかね

クソ虫くん」

「さらっと俺を人前で

クソ虫呼ばわりするな！」

こいつ、初対面の時からずとこんな調子だぞ！

ホントどういう神経だよ！

1

何故、天野とかいう女は  
あんな真似をしたのか。

それにあの男は何者だったのか。

そしてナイアの奴は何で

現実に現れたのか。

帰路の際も疑問は

ふつつつと湧いて止まらない。

「下手の考え休むに

似たりですよ」

そしてコイツは何故当然の様に

俺の隣を歩いているんだ。

「お前、本当に何なんだ？」

「だから言ったでしょう。」

唯一無二にして輝くシスターにして

同棲相手かつ

貴方が仕えるべき

女王蟻ですってば」

「ああ、もういい……」

何か疲れた……。

いつの間にか俺の部屋の前まで

来ている位時間の感覚も

あやふやになっている。

「ほら、早くドアを

開けて下さいよ。

私はとにかく一眠りしたいんです

それはもう泥の様に」

俺は渋々、鍵を取り出し、

玄関を開ける。

というか布団は一枚しかねーぞ。

俺は布団、お前は床だ。

「お帰りなさい。

ご飯にしますか？

お風呂にしますか？

それとも……」

あの山羊角の女の人が

出迎えた。裸エプロンで。

何なのだこれは！

どうすればいいのだ!!

※第二話 (オリキャラ×オリ主 クンニ パイズ  
リ)

「ご飯にしますか？」

お風呂にしますか？

それとも……」

…何がなんだかわからない。

何故俺の前にこの間会った

山羊角の女の人が裸エプロンで

俺を出迎えているのか。

しかもここは俺の住む

ボロアパートである。

「……えっと、

取り敢えず服を着てくれますか？」

俺は顔を真っ赤にして言うと

彼女は頬に手を当てて首を傾げた。

いや、どうしてかしら？みたいな

顔をされましても……!!

「服を着たままするのが

好きなの？」

さらっと爆弾発言まで

かまされたア!?

というか何なのこの人？

そもそも山羊角がある時点で

人かどうかも怪しくないか!?

「おい！ナイア！

説明してくれ！」

あの性格最悪のシスターでも

いないよりはいいだろう！

と思ったらいいねーよ！

さつきまで横にいたはずなのに！

(はー？)

誰にでも股を開く

淫売を越えた淫売には

言われたくないんですけどー？)

淫売：つてつまり

そういう人：なのか？

確かに髪は黒の腰まで伸びた

ロングヘア。

肌は真珠か新雪の様に白く滑らかだ。

目は吸い込まれそうな程深い青。

鼻は高く筋が通っている。

唇は血色の良い桜色。

顔立ちはあのリアス先輩や

姫島先輩にも引けを取らない美女と

言つて差し支えないだろう。

寧ろ年齢が一回り上に見えるから

その色気は倍増している気がする。

しかし胸は：二人以上だ……。

そしてそんな美人さんが

妖艶な雰囲気で迫ってくるのだ。

……そういえば

名前を聞いてなかったな。

あんまり熱いと逆に身体が

寒く感じる様になるつて聞いたことがあるが

頭もそうなのかもな。

「すみません、お名前は……!？」

つてうわああああ!!

いきなり目の前でエプロンを脱ぎ始めたぞ！

もう勘弁してくれ……!

見たくないわけじゃないが……!



目を瞑っている間に終わったかな？

目を開けるとそこには

白のレースの

下着姿になった彼女がいた。

思わず息を飲む俺を見て

彼女はくすりと笑った。

その仕草一つだけでも

とても絵になっていた。

まるで名画のようで

俺は見惚れてしまう。

「ごめんなさい安里ちゃん。

貴方を困らせるつもりはなかったのだけれど

貴方の好みに

合わせた方が喜ぶかと思って…」

「こ、光栄です！」

つてそうじゃあねーだろ俺。

でも彼女はガチガチの俺を見て

楽しそうだった。

ナイアには御免だが、

この人になら笑われてもいいかな。

と思うくらいに魅力的だった。

「まずは名前ね。

えーと確か…。

ヤリマン・サセコヴィツチつて

名乗れってあの子は言ってたわ」

「駄目です駄目です！

なんですかその名前は！

他のにしてください！」

流石にそれは許せない。

せめてもう少ししまともな名前を……！

「あら残念。

でも安里ちゃんのためなら  
仕方ないわね。

それじゃあ……」

少し考える素振りを見せる彼女。

やがて思いついたのかこちらに向き直り、口を開いた。

「私の事は、そうね……」

ニグラと呼んで頂戴♡」

「に、ニグラさん……ですか。」

今日はいい天気ですね！」

「ふふ……そうね。もう夜だけど。」

でも安里ちゃんと一緒にいるだけで私は幸せよ？」

「そ、そうですねか？……って近いですよ！」

今俺達は玄関先で話し合っているのだが……。

距離感がおかしい。

俺の腕に自分の腕を巻きつけて密着してくるのだ。

彼女の豊満な胸が当たって柔らかい。

……っていかん！このままではまた……。

「ねえ、安里ちゃん？」

私……なんだか身体が熱くて火照っちゃった。

だから鎮めて欲しいな……っ？」

「あ、あの……!?俺達会ったばかりだし……!」

「大丈夫。優しくしてあげるから……ね？」

「ひゃい……!?!」

耳元で囁かれた声にゾクツとした。

するといつの間にか俺のズボンに手を

かけていて……っておい!

「や、止めてください……。」

俺達知り合ったばかりじゃないですかあ！」

「そうね♡

でも、知り合ったばかりだから

気持ちよくなれる事もあるわよ♡」

「……そ、そんな事が!？」

そうかな……そうかも……。

『構うことはねえ。』

犯っちまえよ』

俺の中の悪魔が囁く。

『そうですよ。』

ここで逃げたら神様が

怒りますよ』

俺の中の天使が同調する。

確かにそうだ。

ここは男として逃げるわけにはいかない!

俺は覚悟を決めて彼女に言った。

「わ……分かりました!」

「ありがとう♡それじゃあベッドに行きましょうか。

そこでたっぷり愛し合いましょう♡」

「は、はい……!」

や、ヤバい……!もう後戻りできないぞこれ……!

「うふふ……可愛い。

さ、行きましょう。

私も……興奮してきたわ……♡」

そう言うとな彼女は俺の手を引いて部屋に入っていった。

「ん……ちゅ……れる……はあ……

安里ちゃん、もつと強く……!」

「はい……こう……れすか……!？」

俺はニグラさんの言われた通り、

胸を強く揉みながらキスをした。

彼女の胸は下着越しなのにとても柔らかくて温かい。

それにしても何だこの大きさと柔らかさは……!

俺の片手じゃ収まりきらないぞ……!

しかもこんな綺麗な人が俺なんかと……!

「ああ……いい……いいわあ……!」

安里ちゃん、上手ね……」

「あ、ありがとうございます……」

「でもまだまだね。」

これから練習しましょうか。

まずは下着を脱がせてみて……♡」

「はい……」

俺は言われるままに下着を脱がせる。

ブラジャーを外すとそこには……

「す、凄い……」

思わず息を飲む。

それは見事な双丘、いや山だった。

まるで大玉の西瓜の様に大きい。

その先端にある突起はピンク色でとても可愛らしい。

そのあまりの大きさに、

俺は無意識のうちに吸い寄せられていた。

まるでミルクを濃縮した様な甘い匂いに

頭がクラクラしそうになる。

「あん……♡安里ちゃんったら、

赤ちゃんみたいね……」

「すみません……つい……」

謝る俺の項をニグラさんは優しく撫でてくれた。

「いいのよ。貴方の好きなように

私の身体で愉しんでね……♡」

「は、はい……」

ニグラさんに促され、

俺はニグラさんの大きな胸の周りをおつかなびつくりそうつと撫でた。

「ん……ふう……♡」

ニグラさんは少しくすぐったそうに身体を動かす。

だが嫌がっている様子はない。

むしろ嬉しそうに微笑んでいる。

「ど、どうですか……？」

「ええ……いいわよ……」

もっと自信を持って……。

そうすればもっと上手くなるわよ♡」

「は、はい……頑張ります……！」

「

それから暫くの間、

俺は彼女の胸に夢中になって触れた。

強弱をつけたり、内から外に円を描いたり、

渦の軌道で回したり、舌で舐めたりした。

そしてニグラさんの反応を見て、

自分の中にあったイメージと

照らし合わせていく。

ズレているようなら直し

嵌っているようなら続ける。

「あ……はあ……♡

安里ちゃん、上手、上手……♡

もうお姉さん……感じちゃう……♡」

ニグラさんの呼気はスチームのように熱い。

身体は汗ばみ、肌は紅潮している。

表情も瞳も蕩けていて、

まるでバニラアイスが

溶け出したかの様だった。

そんな彼女を見つめながら、

俺は夢中で手を動かしていた。

「はあ……はあ……安里ちゃん……

私の事、もっと……もっと

好きにしてね……♡

ほら、見て……♡

安里ちゃんのおかげで

私のここ……こんなに濡れてる……」

「は、はい……」

俺は言われるまま、

ニグラさんの股間に視線を向ける。

写真や動画で見たことはあったが

生身の女性、ましてや

ニグラさんの様な

美人な人を見るのは初めてだ。

ゴクツ…と自分でも

生唾を飲み込む音が聞こえた。

「ふふふ……そんなに見つめちゃって……可愛い♡」

「す、すみません……!」

「ふふ……謝る事ないわ……♡」

貴方の年なら興味を持つのは

普通のことだもの……♡」

そう言っただけ彼女が妖艶に笑う。

その仕草だけで俺はまた喉が渴くのを感じた。

嘗めたい……嘗めてみたい……

ニグラさんのあそこを……。

オマ○コを……!

ちる……じゆる……ちゅぶる……

「ん……ふふ……♡美味しい? 私のアソコ……」

ニグラさんに返事ができない……

俺は彼女をあそこに顔を埋めて

必死にクンニをしていたからだ。

俺の口の中で彼女の秘部は生き物の様に脈動する。

その度に俺の脳味噌は快楽物質で満たされていく。

これが女の味なのか……!

「あらあら……♡」

答えられないほど

夢中になってるなんて……♡」

「んぐ……んん……」

「あはは……♡」

そう、そのまま頑張つて……♡

私を悦ばせて……♡」

俺は言われるままに舌を動かし、

彼女を気持ちよくさせる。

舌先でクリトリスを転がし、

膣内に挿入しては抜き差しを繰り返す。

するとニグラさんは俺の顔を

太腿できゅつと摘むかのように

優しく挟み込んだ。

そして俺の頭を優しく撫でてくれる。

まるで子供をあやすように。

それがとても心地良い。

もつと褒めて欲しい。

もつと甘えたい。

もつと愛して欲しい。

そんな欲求がどんどん湧き上がってくる。

「安里ちゃん……♡」

いい子ね……♡あ……♡そこ……♡」

「ん……んん……」

「ああ……凄いわ……安里ちゃん……」

初めてなのにこんなに上手にできるなんて……♡」

「ん……んん……」

「安里ちゃん……♡」

ああ……安里ちゃんの舌と息つかい……♡

いいわ……♡もつと、もつと私を愛して……♡」

「はい……」

俺は舌と指を使って彼女の身体に奉仕した。

彼女の性感帯を探し当てようと、

全身くまなく舐める。

「あん……♡そっお……♡」

いいわ……いいの……あつ……あつあつ♡」

ニグラさんは俺の舌に感じてくれているようだ。

彼女の声色から余裕がなくなってきた感じているのを感じる。

俺はニグラさんの秘部だけでなく、

乳首や腋、耳などあらゆる場所を刺激していく。

「もう……私……わたしい……♡」

安里ちゃん……私、もう……もう……♡」

「はい……」

俺はニグラさんが達しやすい様に

クリトリスを中心に攻めていく。

そして彼女が絶頂を迎える寸前、

俺はニグラさんの顔を見た。

彼女は目を瞑り、口を半開きにして喘いでいる。

その表情はまるで恋人とキスをしているかの様だった。

「安里ちゃん……安里ちゃん……♡」

私……イク……イツちゃう……♡」

「はい……どうぞ……！ニグラさん……！」

「ああ……あああああー♡」

イク……イクう♡」

ビクビクツとニグラさんの

身体が痙攣する。

そんなニグラさんが愛しくて

すぐに抱きしめながらキスをした。

「ん……ちゅ……んふ……♡」

「ん……ちゅ……ちゅぶ……」

ニグラさんとの濃厚なデーパーキス。

唇と舌と唾液と吐息と……

五感全てで彼女を感じ取る。

その感覚だけで

射精してしまいそうだ……。



俺はもうニグラさんに  
骨抜きどころかぐずぐずの  
シチューのように蕩けてしまっていた。  
彼女はそんな俺に微笑みかける。  
その笑顔は女神のようであり、  
邪神のようでもあった……。  
でも、どうでもいい……。  
今はただこの人の側に居たい……。  
俺はニグラさんの胸元に顔を埋めた。  
ニグラさんの鼓動の音が聞こえる。  
それは俺の心臓の音よりずっと速い。  
ニグラさんが俺の頭を撫でる。  
俺はそれに身を任せる。

「安里ちゃん……」

「はい……」

「今日は楽しかった？」

「はい……」

「そう……良かった……」

ニグラさんは俺を抱き寄せる。

その腕はとても温かくて心地良い。

「あの……ニグラさん……」

「ん？何？何かしら……？何でも言ってみて……」

「こ、これだけで終わるなんて……」

堪えられない！俺……俺……！もつと……！

もつと貴方が欲しいんです！」

「あはは……♡」

安里ちゃん、正直ね。

前にも言っただけ……

私は正直な子、好きよ♡」

脳をまるで大砲で吹き飛ばされたかのような  
衝撃が襲った。

好き、という言葉がこんなにも嬉しくて、  
気持ちの良いものだったなんて知らなかった。  
俺の事を好きだと言ってくれる人が居る。

ただそれだけの事がとても嬉しい。

俺はニグラさんを強く抱き締めた。

「ん……♡あらあら……♡」

そつと彼女が俺のモノに  
手を添える。

「ねえ……♡安里ちゃん……♡」

私にどうして欲しいのか教えてくれる……？」

「あ……♡ニグラさんに……」

ズリ…してほしいです…！」

興奮しすぎて言葉遣いがおかしくなる。

だが、それくらいに俺は彼女に狂わされていた。

「あはは……♡いいわ……♡」

お姉さんに任せなさい……♡

パイズリをすればいいのね♡」

「はい……♡」

ニグラさんは迷いなく

勃起した俺のモノを大きな乳房の間に挟み込んだ。

「おお…おおお……」

「うふふ……♡可愛いわ……♡」

ニグラさんは俺の

亀頭に軽く口づけをする。

まるで寝付けない子供をあやすように。

そしてゆっくりと乳房を持ち上げる。

「ん……♡ん……♡」

「あつ……あつ……！」

「ほら……♡安里ちゃん……♡」

私のおっぱいの中で……♡

安里ちゃんのおちん○んが……♡

びく……♡っしてしてるわ……♡」

「はあい……」

「はあい……じゃなくて、

はい、でしよう……?」

安里ちゃん……♡

返事はきちんとしないと

ダメじゃない……♡」

「はい……!ごめんなさい

ニグラさん……!」

「ふふふ……♡謝る事はないのよ……♡

さあ……♡続けましょうか……♡」

ニグラさんは俺のナニを挟んだまま、

ゆっくり上下に動かし始めた。

まるでスクワットのように。

「あっ……ああ……ああああ……!」

ニグラさんの胸は大きい。

だから、

彼女の動きに合わせて俺のものが擦られるのだ。

「どう……?♡気持ち良いかしら……?♡」

「はい!凄いい……気持ち良いです!」

「ふふ……♡良かった……♡

どうする?ゆっくり動かす?

それとも激しく動かす?」

ニグラさんは上目遣いで俺を見つめながら言う。

その瞳には俺への慈愛と

嗜虐心が入り交じっているように見えた。

「え……選べないです!両方お願いします!」

「欲張りね……♡

でも、そういう子……好きよ♡」

そう言っって彼女はウインクと

共にまた胸を動かし始める。

今度は少し速く。  
しかし決して痛くならない様に。  
角度を時々変え、様々な所に擦り付ける。  
時には優しく包み込む様にして。  
あるいは激しく削り取る様にして。  
最高だった。ニグラさんは  
俺の身体を知り尽くしている。  
その事実が俺を更に昂らせた。

「くっ…うう…！」

だが夢は覚める様に  
俺のモノがビクビク痙攣し  
精巢は精子を吐き出そうと  
準備を始める。

嫌だ…！出したくない…！

この夢のような時間が  
終わってほしく…ない！

俺は必死に耐えた。精子の代わりなら  
幾らでも出してもいいとばかりに  
涙まで流して。

だがそんな俺を嘲笑うかの如く、  
限界はすぐに訪れた。

「ああ…！…もう駄目え！…出ちやいます！」

「あらあら…！…♡いいのよ…！…♡

我慢しないで…！…♡

安里ちゃんが満足するまで…

何回でも…してあげるから…！…♡」

ニグラさんが俺の目を見て

囁いた瞬間、俺は射精した。

「あああ…！…！あああああああ…！！！」

俺は盛大に果てた。

「ああ…！…♡たくさん出たわねえ…！…♡」

ニグラさんは俺のモノから出たものを  
指先で掬い取り、舐めている。

その姿は淫靡な事この上なかった。  
やがて、全てを飲み込み、

口元についたものも舌を使って丁寧に拭き取った後、  
妖艶に微笑んだ。

「ああ…ニグラさん。」

俺、まだ…まだっ！」

腰が猿の様にカクつく。

彼女の満月や金星の様な胸に

俺のモノは再び天を仰ぎ、

ロケットか何かが着陸しようとはかりに

ぐりぐりと夢中で擦りつけてしまう。

ああ、柔らかい…温かい…。

「んん…♡もお…♡しょうがない子ねえ…♡」

ニグラさんは呆れたように呟いたが、

どこか嬉しそうだ。

そしてまた胸で挟み込んでくれた。

今度は下乳の方でだ。

媚熱で蒸れたその湿度は

俺が出したモノのせいであるで

密林の中の様に湿っていた。

「はああ…！」

「うふふ…♡どう？安里ちゃん…♡」

お姉さんのおっぱいの中で…♡

おちん○んは元気になってる…♡？…♡」

「はい！凄いです！こんなの初めてです！」

「それは良かったわ…♡」

ニグラさんは俺の言葉を聞いてクスリと笑った。

「ああ…駄目だ…また…！」

また射精感が襲ってくる。

しかしニグラさんは胸を動かすのをやめ、  
また挟み込んだまま俺を見つめていた。

「ああ……ニグラさん……」

「ふふ……♡」

まるでセックスの様に俺は  
腰を前後に動かし続けた。

「ああ……ニグラさん……!」

「ふふ……♡可愛いわ……♡」

「うう……!おお!おおっ!」

「ほら……♡もつと動いても良いのよ……♡」

ニグラさんはそう言っただけで俺の下顎をすりりと撫でた。

「ああっ……!出る!出すっ!」

「良いのよ……♡いっぱい出して……♡」

俺はニグラさんに促されるまま、精液を放出した。

精液がニグラさんの上半身のあちこちに飛散すると

その刺激で彼女は淫らに身体をくねらせた。

「あああ!!熱いっ♡

濃くて…粘ついて…♡

勢い良く出てるわあ……♡」

「はあ……はあ……!」

ニグラさんが言う通り、俺のナニからは

白い液体が噴水のように吹き出している。

それがニグラさんの

胸から溢れベッドシーツを汚していた。

「はあ……はあ……!」

すみません……!すぐに拭きます!」

「ううん……いいのよ……」

それより気持ちよかったかしら……?」

「はい……最高でした……!」

「そう……良かった……♡」

ニグラさんはそう言っただけで

俺の背中を優しくさすってくれた。

俺はその心地良さに身を委ねながら、

自分の身体が浄化されていくような気分だった。

「ありがとうございます……」

もう大丈夫です……！」

「そう……でも私は大丈夫じゃないの♡」

「え……？」

ニグラさんはそう言い終わると同時に俺の唇を奪った。舌を入れられ唾液を流し込まれる。

「んぐ……!? んんー!!」

突然の出来事に頭が混乱する。

だがそんな事は関係無いとばかりに

彼女はキスを続けた。

やがて満足したのか、ゆっくりと離れていく。

銀色の糸を引きながら。

「ぶはあ……ーな、何を……！」

「ふふ……♡ごめんなさいね……」

私も我慢できなくなっちゃって……♡」

ニグラさんはまるでベッドシーンを

演じる女優の様に妖艶に微笑んだ。

そしてそのまま、俺の上に跨ろうとする。

ま、まさか……!?

俺は光栄ではあったが

ある予感がして、

慌てて起き上がった。

「あらあら……どうしたの？」

もう満足しちゃった……?♡」

「いえ、そういう訳じゃ……」

その……ゴムが……」

「ゴム?」

「コンドームです……」

生ではちよつと……」

「ああ、なるほど……」

ふふ……優しいのね……♡」

ニグラさんがクスリと笑う。

何だか照れくさかった。

「す、直ぐに買つてきますんで！」

「あ、安里ちゃん！」

ちやんと服を着なくちや！」

「は、はい！」

俺は急いでパンツを履いて、  
服を整えた。

そして財布を手に取り、  
ドアを勢いよく開けて

コンビニまで走る！

ああ、たかだか数百メートルが  
こんなに遠いなんて！

あつちは裏路地だが近道だ！

俺は必死で裏路地に入る。

すると……。

「貴様、九頭竜安里だな？」

何やら黒ずくめの痩せぎすな野郎に  
呼び止められた。

「人違いだ！バアカ！」

悪態をついてしまったが

今はそれどころじゃない！

何より俺の初体験が……!?

「~~~~~!?!」

天野に腕と心臓を貫かれた時の  
痛みと熱が再び俺の身体を襲った。

見れば俺の肩に深々と光の槍が  
刺さっていた。



「ぐがあああはあー！」

「ふん、無駄だ。」

「お前の肉体は既に我が手中にある。」

「テメエ………ふざけんなよ！」

「俺の初体験なんだぞ！」

「初体験だと……？」

「ははは！」

「そうだな二度死ぬなど

「だれもが出来ることではないな。

「レイナーレ様は少々大雑把な所が

「あるから私が出向いたのだが、

「じっくり念入りに……

「四肢を切り裂いて内蔵を

「焼き切って殺してやる。

「精々楽しませてくれよ？」

「まるで映画の殺人鬼さながらの

「迫力だったが……。

「俺には関係ない。」

「……ねるか……」

「何？命乞いか？」

「ならば豚の様に鳴いて、

「このドーナシックに命乞いでも

「してみるか？」

「私は慈悲深い事で有名だからな。

「首を撥ね飛ばされるだけで

「すむかもしれないぞ？」

「何か言つてやがるが関係ねえ。

「俺は肩に刺さった

「光の槍に手をかける。」

「はははは、愚かな。」

「我々墮天使の光の槍は肉を焼き

骨を焦がす。

人間ごときに引き抜ける…

引き抜け…!!?」

ずるり、とまるでネジが外れる様に  
槍を抜いた。

何か言ってやがった瘦せぎす野郎は

口をパクパクさせてるが

知った事じゃねえ!

「死ねるかあっ!!」

俺はボールを女投げする感覚で

槍を投擲しようとした瞬間、

俺の腕が変化した。

皮、筋肉、骨、繊維が一旦バラけ

糸の様になる。

続けて糸は太さを増し、黒化して

まるで触手の様にウネウネと動き出す。

「な、何だこの腕はああ!!」

まさか野郎と

シンクロするハメになったが

とにかく腕を振り抜いた。

すると当に打鞭の軌道で

数十の打撃が瘦せぎすの野郎に

見舞われた。

「びぎいっ!!」

「どつちが豚なのかわかんねえな」

俺は吐き捨てるように言った。

「くそおおおお!人間の分際でええええ!!」

野郎は逆上したのか、

背中を翼を広げて飛び立とうとした。

しかし……。

「ぐぎやああああああ!!」

突如瘦せぎす野郎が燃えだす。  
ど、どうなってんだ？

苦しんでる辺り奴の必殺技って  
事はないだろうが……。

「燃える…!? 私…!?」

俺の身体が燃えてしまおうう……

レイナーレ…さばあああ……」

やがて灰になって消えた。

俺は呆然としながら、

野郎の断末魔を聞いていた。

「こっちの童貞卒業の方が

先だったみたいですねー」。

『燃える三眼』の

覚醒おめでとうございまーす」

突如背中から聞き覚えのある

声があった。

まさか……。と思ったら

やっぱりナイアだった。

「燃える三眼…?」

「はい。今の貴方の腕ですよ。

普段は擬装してますが

戦闘時はそういう風に触手に

出来ますよ。

まあ訓練次第で鞭以外にも

出来ますが」

「……」

「で、追撃で相手を焼くことも

出来るわけですね。

クソ虫にくれてやるにしてい

なかなかのチートでしょう?」

そうやってナイアはニマアつと

共犯者の様に嘲笑った。

まるで三日月の様に口角を

あげながら。

「あ、そうだ。もう一つの童貞の方なんですが…

ここで捨てちやいます?」

「はあ!」

い、いきなり

何を言い出しやがるんだ!?

俺にはニグラさんという

女性がだななな。

「何どもった上に

勘違いしてんだこのクソ虫野郎」

「ひょっ」

いかん、つい

気持ち悪い声を出しちゃった。

「私が相手するんじゃないやなくて

クソ虫くんのチュートリアルは

こっちこっち」

と、言って引き出して来たのは

ゴシック調の服を着た美少女だ。

縄で縛られてボールギャグを

噛まされてる絵面はかなりヤバい。

「つてお前拉致ってきたのか!?

犯罪だぞ!!」

「アホですかアンタ。

グレモリー家の令嬢の縄張りで

そんな無茶するわけねーでしょ。

ホレ、背中見ろ。

翼があるだろうが、

堕天使の翼が」

あ、本当だ……。

よく見りや天野と  
同じ鳥の翼がある。

「んー！んんー!!」

「え？『もう私我慢できないの！』

その黒くてぶつというねうね触手で

ばこばこハメ殺してエ！優しく殺してエ！？

とんでもないクソ雌犬ですよこれ」

いや、絶対言つてねえよ。

長さがあつてねえだろ。

ゲスマイルで言われると可哀想になるな、

いや墮天使の子の方がさ。

取り敢えずボールギャグを

取ると、唾を吐きかけられた。

「なんでエ？」

「くっ、テメエ等！

このミツテルトに手を出したら

ただじゃすまねえっスよ！」

何だろう、テンションが

落ち着いてきた。

なんていうか液体窒素みたいに

腹の底が冷たくなってきたぜ……。

「具体的には？」

「レイナーレ様はアゼザル様の

気に入りなんスよ？

わかってんのか？ああ!？」

何だか睨みをきかされた。

フーン…そう。

「ミツテルト…か。

お前の上司はレイナーレ。

その上はアゼザルって言うんだな」

「あっ」

「グレモリー家の縄張りで

神器狩りつてつまりはあの方達に

停戦交渉ガン無視で

喧嘩売るって事ですよね？

あ、録音したから無駄ですよ？」

「あっあっ」

「はいっ、アホ確定」

「あああ〜……い〜」

ニグラさん、ゲイトさん。事件です。

夜なのに鳥が鳴きました。

※第三話 (オリキャラ、オリ主×ミツテルト 肉体  
操作 レズプレイ 疑似脳姦)

「実は俺……」

リアス部長と同じベッドで

寝たんだ」

イツセーがしみじみと

屋上にて俺とナイアに騙った。

じゃなくて語った。

なんかイケボで。

イツセーもイケメン死ねとか

言っているくせに黙ってりや

イケメンなのになあ。勿体ねえ。

「はっはっはそうですか。」

で、ヤツたんですか?」

「ぶふお!?」

いや、まだ何もしてない!

けど……」

「何れはコマして

俺の女にしたいとか

そんな感じですか?

引くわー……うわー……引くわー」

ナイアは殊更

大袈裟に身を引きながらイツセーを

軽蔑する調子で言う。

しかも2回言いやがった。

しかし、

イツセーの奴はスケベではあるが

クソ野郎ではない。

「いや……どうなんだろう?」

確かに部長は凄く魅力的だけど  
力づくでどうこうって言うのは  
違うと思う」

と、紳士的なことを言った。  
まあ、当然だよな。

エロいだけのクズだったら  
10年も友達やってねえ。

「へえ……。」

いいこと言うじゃないですか。  
でも覗きやらセクハラ発言は  
するんですよね?」

「そ、それは否定できない!」

ちゃんと皆に謝ったさ!」

そこはきつぱりと肯定すんのかよ。

まあ実際クラスメイトに  
頭を下げて詫びを入れた所は  
見ていたし、

ボコボコにされてもいた。

リアス部長の眷属になつて

イツセーの状況も好転している。

「それに……部長にも

ちゃんとした相手がいるみたいだしな」

「いや、貴族の令嬢なら

婚約者の一グロスくらいは

いるでしょ」

ナイアが即座にツッコミを

入れたがそりやそうだ。

貴族の娘なんて

政略結婚の道具だろ。

親が決めた許嫁の一人や

二人いてもおかしくはないよなあ。



「それでも……」

俺はいつか必ず部長を

振り向かせてみせるぜ！」

「頑張つてね？」

「何でそこは疑問形なんだよ！

ナイアちゃん！

言いきつてくれてもいいだろ！」

流石のイツセーもナイアの

冷徹っぷりにシヨツクを

隠しきれず肩を揺さぶって

抗議した。

しかし、コイツの根性だけは本当に見上げたものだ。

どんな相手に惚れようが諦めずに

アタックし続けるその姿勢は尊敬に値する。

「なあ安里！

お前は応援してくれるよな！

夢中で頑張る君にエールを

送ってくれるよな！」

「お……おう……」

いきなり振られて戸惑ったが一応は答えておく。

「ありがとう！」

それでこそ親友だ！」

そう言つてイツセーは爽やかな笑顔を見せた。

……ホントこいつは

こういうところがあるから

憎めない。

「……………」

あれ、何かお前の首筋に痣があるぞ？ 蚊か？」

イツセーが俺の首元を見て言った。

「いや、それはその……」

何と申しますか……」

何と答えたらいいものか。  
俺は答えに窮してしまう。

と、ナイアがふへつと  
小バカにした様に表情になる。

「まあ、体液を吸って

ブクブク太るって意味なら蚊と  
言えなくもないですねーワハハ。  
ズバリ言って

キスマークと言うやつですよ」

おいコラ、ナイア!

折角ごまかそうとしたのに  
台無しにしてんじやねえ!

「まあ、その……色々あつて……」

「相手は!?

俺の知っている子か!?

それともナイアちゃん?!?

「いや、一対一では

なかったので

なかなか刺激的でしたよ私も」

「……!?

さ、3人で合体……!?

爛れてる……!!

耳打ちされたイツセーは

目を見開いて俺を凝視していた。

いや、まあ

あの時は色々あつてだな……。

↓

「くっ、殺せッス!」

堕天使のミツテルトは

縛られたまま

俺、ナイア、ニグラさんの

三人を見上げながら  
キツと睨みつけていた。

場所は裏路地から

俺のボロアパートの一室。

流石に四人では少し狭い。

「いや、殺してどうする。

あの痩せぎす野郎は

仕掛けてきたから

仕方なかったにしても」

ドーナシックとかいう

堕天使が燃え尽きた時の事を

思いだす。

本来ならざまあみろ、とか

思い知ったか、とか

思っべきなんだろうが……。

どうもな……。殺すのは嫌だ。

「そういえば、

貴女のお仲間さんは結局

一人残らず逃げちやいましたね。

しょーもな」

「ふんっ、

あんな連中どうでもいいツスよ。

私が慕うのは

レイナーレ様だけツスから」

と、強気な発言をするミツテルト。

だが、彼女は今、

ナイアが用意した縄に縛られ、

更には魔力封じの

手錠まで掛けられている。

「どうしてそのレイナーレって

子にそこまで義理立てするの？」

流石に裸では格好がつかないので  
俺のYシャツを羽織っている  
ニグラさんが改めて尋ねる。

「そんな事アンタ達に

話す必要はないツスよ。

弄ぶつもりならさっさと

殺せばいいだろうが！」

ミッテルトは半ば捨て鉢

になって叫ぶ。

隣の部屋から苦情が来るから

止めてほしい。

「まあ、この子の言う通り、

あんまり遊んでも

時間がないんですよね。

とりあえず、貴方にはこれから

ちよつとした実験に付き合ってもらいます。

大丈夫、痛いことはしませんよ？」

ナイアがニツコリ笑って言った。

「ふざけんな！ 誰がお前らの……！」

「ガタガタ煩えんだよ」

ナイアの急に荒くなったと思つたら

ミッテルトのこめかみに

光の針を挿し込んだ！

「ほいっと」

そしてぐるん、とひと捻り。

「あぎやあアっ！」

「お、おい！」

明らかに女の子が放つてはならない

悲鳴だぞ！

思わず声をかけてしまうが

ナイアは澄ましたものだった。

「安心して下さい。」

「気絶させただけです。」

「起きた時にはもう私の術中にハマっていますよ?」

「そ、そうなのか?」

「な、何をしたんだよ……」

「墮天使の光の槍は肉を焼き、

骨を焦がすとあの痩せぎす墮天使が

言っていたがまさか……。

「脳を焼いたのか?」

「クソ虫にしてはなかなかの

発想ですね。ですが違います。

「百点満点中の2点ですね」

「じゃあ何をしたんだよ」

「彼女の感覚と認知を弄りました」

「サラツととんでもない事を

言っていないか?」

「ふふ、大丈夫よ安里ちゃん」

「ニグラさんがそつと

俺に寄り添いつつ言った。

「今の安里ちゃんになら分かるでしょう?」

「この子はきつと

安里ちゃんにとって良い結果をもたらしてくれるわ。

「だから信じてあげましょう?」

「……分かりました」

「俺は素直に答えた。」

「ナイアはともかくニグラさんが

言うなら……。

「と、言うかさつき続きを……。」

「いや、傷は治ったけど

そんな雰囲気じゃないしそもそもゴムは

買いそびれたし……。」

「おっ♡おおっ♡おおおっ♡」  
すると目を開けたミッテルトが  
突然ガクガク痙攣し始めた。  
目は虚ろで口は半開き。  
涙や涎、涎を垂らして  
時折ビクンと跳ねている。  
さつきニグラさんが絶頂した時と  
似た様な感じだ。

「どうやら  
上手くいったみたいですね。  
では早速、始めましょうか。  
まずは服を脱いで貰いましょうか」  
ナイアの言葉に  
ミッテルトは従順に従っていく。

「は、はひい……  
わかりやしたあ……  
へっ、へっ、へっ」  
まるでちんちんをする犬の様に  
蹲踞の姿勢になったミッテルトは  
舌を出して息遣いも荒く、  
トロンとした目で  
こちらを見つめる。

その顔はさつきまでの彼女からは  
想像もできない程ドスケベだった。  
「はい、ミッテルト。」

「お前は私達の何ですか？」  
「私はあ……ミッテルトお……」  
「ご主人様たちのお……♡  
忠実な下僕れすう……  
どうか卑しいメス犬めを  
可愛がってくらはいいれすう……」

ミッテルトの口から  
出てくる言葉はまるで

元浜秘蔵のエロゲーに出てくる  
調教済ヒロインさながらだった。

「よく出来ました。」

それでは貴方の使命を言いなさい。

堕天使のミッテルトよ」

「は、はひっ！ 私和使命は

ご主人様たちの為にこの身を捧げる事です！」

まるでミッテルトの尊厳を

ハンマーで砕くかのように

ニグラさんが言葉を被せる。

「具体的にはどうするの？」

「はっ、はいつ、このミッテルトはあ、

皆様に精一杯奉仕いたしますっ！」

「どんな風に？」

「はっ、はいつ、

ミッテルトは、ミッテルトは

淫乱ビッチな雌犬ツスからっ！

ご主人さまたちに喜んで頂けるように

一生懸命……あれっ!？」

そこでミッテルトの

瞳に光が戻った。

そして俺達を見るなり悲鳴をあげる。

「う、うわあああっ！ みみみ見ないで欲しいツス！ うううううっ、

恥ずかしいよお……」

ミッテルトは胸を隠し、

内股になって座り込む。

だが、ナイアが強引に身体を

開かせた。

「なに今更カマトトぶってんだ

雌犬墮天使。

てめえの本性はとつくにバレてんだろうが」

「ち、違うんす！

これは何か変なんす！

ああ、もう消えてしまいたい！」

まるで子犬の様に震える

ミッテルトだがナイアは決して

容赦しない。

「じゃあ取り敢えず

チン媚ダンスしてしましようか？」

とびきりの嗜虐的な笑みを

浮かべてまるで子供が

何して遊ぶかを提案するかの様な

気軽さで言った。

「そ、そんな事出来る訳……」

「は？ お前立場分かってねえの？

さっきまで自分が

やってたこと思い出せよ。

ほら早くしまししようよ」

「うぐっ……い、嫌ッス」

ミッテルトは目に涙を浮かべながらも

抵抗を続ける。

「ふーん、そうですか。

じゃあ仕方ありませんね。

針をもう二本位ぶっ刺しましょう。

8割くらいの確率で戻らなくなりますが

仕方ないですね」

既に何度も他の墮天使やら

はぐれ悪魔で実験したのだろうか。

ナイアの口調には微塵の躊躇もない。

「ま、待ってくれッス！ やりやあいんすよね？



分かったツス……やるツス……」

「やるツス？ なにその言い方？」

「や、やります……」

「だから……お願いします」

「はい、良くできました。」

「それでは始めてください」

「は、はい……」

「わ、分かりました……」

「やらせていただきます」

ミツテルトの顔が絶望に染まる。

彼女はおずおずと立ち上がると

ゆっくりと両手を頭の後ろに組む。

そして、両足を大きく広げた。

「こ、これでいいツスか？」

羞恥心で真っ赤になった顔を

涙目でこちらに向けつつ言った。

「まだまだですよ。」

そのまま腰を落としてガニ股になりなさい」

「う、嘘……だろ……？」

ミツテルトは信じられないと

ばかりに呟くがやがて諦めたのか、

「……はい、こうツスか？」

言われた通りの姿勢をとった。

その姿はまさに変態そのもの。

「はい、まずは私が

操作してやりますから基本を覚えるんですよ」

まるでピアノのレッスンでもするかの

ような軽いノリでナイアは指を

鳴らすとミツテルトの腰が

へこつ、へこつと小刻みに揺れる。

「ひいひいひいひいっ!？」

な、なんだよこれえっ!？」

「頭の悪い雌犬ですね。」

チン媚ダンスって言ったでしょ？

チンコ♪ チンコ♪ チンコ大好きって

浅ましい鳴き声もはいよろしく」

「チ、チンコ………チンコ………」

ああ……嫌だあ……助けてえ……

チンコだいすきい………」

ミツテルトが泣きながら

弱々しく言う。

「はい、よく出来ました。」

次は自分でやってみなさい」

「う、うううっ、ううううっ」

ミツテルトは号泣しながらも腰を振り続ける。

「はい、よく出来ました。」

66点です。

ご褒美にキスをしてあげましょう。

嬉しいでしょう?。」

「う、嬉しくなんか無いツス!

こんなの全然気持ち良くない!

早く終わらせて欲しいツス!」

ミツテルトは必死に抵抗する。

だが、それはナイアの様な

サド女には逆効果だ。

「あら、そうですか。」

それなら仕方ないですね。

もう一度最初からやり直しましょう」

「そ、そんなあ………」

ミツテルトが力無く項垂れる。

「はい、どうぞぞ」

ナイアがまた指を鳴らした瞬間

ミッテルトの身体が勝手に動き出す。

「う、うわあっ?!? 身体がっ!」

やめてくれっ! やめっ……」

ミッテルトの腰がガクンガクンと前後に動く。

小ぶりの尻や僅かな膨らみの胸がプルンツと震えていた。

そういう所に目が行く辺り

俺もナイアと同類かもしれない。

「はい、止めて良いですよ」

ナイアの言葉と同時にミッテルトは崩れ落ちる。

「はあっ、はあっ、はあっ……」。

もう……無理……です。

許してください……」

ミッテルトは荒い息をしながら

懇願した。確かにこれ以上は見えていられない。

「そうね……これ以上は可哀想よね。

許してあげましょ」

「あ、ありがとうございますッス」

「いえ、こちらこそごめんなさい。

ちよつと虐めすぎちゃったわね」

と、ニグラさんは目線を

ミッテルトに落とす。

「えっ? あ、あの……その」

ミッテルトは怯えた表情で

後ずさる。流石にさっきのアレのあとじゃな。

「ふふふ、大丈夫よ。

もう酷いことはしないから。

ただ、私達の仲間になって欲しいの」

「な、仲間ッスか?」

それは一体どういう……」

「こういう事♡」

と言うなりニグラさんは

ミッテルトの唇を強引に奪った。

「んんっ!？」

ん——っ!？」

突然の出来事に混乱するミッテルト。

だが、抵抗しようにも身体がきかないようだ。

やがて二人の舌が激しく絡み合う音が聞こえてくる。

「ぶはあっ」

長い口づけを終え、

二人は唾液で繋がった糸を引きながら離れる。

呆気にとられた俺は

ナイアの方を見る。

すると『あー、また始まった』と

言いたげな顔をしていた。

どうやらこれが日常茶飯事らしい。

「ナイア……まさかニグラさんって……」

「あの淫売、男も女もイける口で

受けも攻めもできるんですよね」

ま、まあ……受けも攻めも

俺は体験したしそれはもう

たまらなかったが……。

「ほら、ミッテルトちゃん。

ミッテルトちゃんの可愛いお顔

見せて?」

「い、嫌ッス！ 私はあんたみたいにな

変態じゃないッス！ 離せえっ!」

「うふふ、可愛い反応ねえ〜。

そんなに恥ずかしがらないでいいのよ?

これからもっと凄いくさるんだから」

「な、何をする気ッスか? ひっ!？」

「あら？ ミッテルトちゃんも

期待してるんじゃないのお？

だってココ、こんなにピンとなってるもの  
確かにミッテルトの

クリトリスはビンビンに勃起している。

「こ、これは違うツス！

生理現象で……ひゃうんっ!？」

「生理現象なら仕方ないわね〜♪

はい、ミッテルトちゃんのココ、

よしよししてあげる♪」

「ひぎひぎっ！

そこだめええええっ!!」

ミッテルトはドロドロに濡れきった

あそこを激しく擦り上げられ、

獣じみた悲鳴を上げる。

「おっ♡ほおおっ♡」

「うふふ、気持ち良さそうな声出しちゃって。

お姉さんも嬉しいわ♪

でもまだ足りないみたいね。

じゃあ、こうすればどうかしら?」

「あっ♡あっ♡はあっ♡」

ニグラさんはミッテルトの

つるりとした丘と花弁を

軽く指先でなぞるように撫でると、

その手を素早く動かし、

指の腹で敏感な部分を強く刺激し始めた。

「おっほっ!？」

イグウツ！ イツぐうううっ!!

あへ……っ?」

絶頂の直前で指の動きを止められた

ミッテルトは困惑の声を漏らす。

「あらあら、ミッテルトちゃんったら  
物欲しげな目をしちやつて。

どうして欲しいのか言ってみて？」

「そ、それは……」

ミッテルトが口をつぐむ。

するとニグラさんは再び

ミッテルトの秘所を弄り始めた。

今度はゆっくりと焦らすようだ。

「ん……♡く……♡」

「どうしたのミッテルトちゃん？

さつきまでの威勢はどこに行ったのかしら？

言わないとずつとこのままよ？」

「ふ……ふぎけるなあッス！

誰が言うもんかッス！」

「そう……それならそれで構わないけど。

いつまでも耐えられるかしら？」

ニグラさんはそう言いながら

人差し指と中指をミッテルトのオマ○コの

入口辺りにぬるり、と

入り込ませて

上下にスライドさせるような動きを始めた。

ぐりゅっ♡ ぐちゅっ♡

「あふっ……♡ああっ……!!」

「ミッテルトちゃんのおま○こ、

私の指を飲み込もうとしてるわよ？

素直になつた方が楽になれると思うんだけどなく？

あとミッテルトちゃんは

入口とその周りを擦られるのが

好きなのね」

「お、おほっ♡す、好き♡ 大好きッス♡」

「よく言えました。」

「ご褒美をあげなくっちゃね」

ニグラさんは人差し指と中指を

重ね合わせてぐるん、と

ドライバーの様に捻りを加えた。

「んほおおおつつつつつ!!!」

「あひいいいっ! らめえっ!」

イクツ! イキますツス! イグウツ♡

指マンイグウうくく♡♡♡」

ミツテルトは大きく仰け反って絶頂を迎えた。

「あらあら、ミツテルトちゃんったら

盛大に潮吹きまでして。

もうすつかり出来上がってるじゃない。

それにしても凄いわね。

こんなにビショビショにしちゃって」

「あ……ひゃあ……ごめんなしい……」

ミツテルトの顔は完全に蕩け切っており、

口の端からは唾液が垂れている。

「謝らなくてもいいのよ。」

これからもつと気持ち良くなるんだから。

ね、安里ちゃん?」

俺にウインクして、

更に手招きをしてきた。

曰く百合に割り込む男子は

言語道断。と松田が言っていたが……

関係ない。俺はニグラさんの誘惑に抗えなかった。

「一緒に楽しませよう?」

そう言っつてミツテルトを抱き起こし、

自分の膝の上に座らせた。

「ミツテルトちゃん、

今度はこっち向いて」

「は、はいツス……んむっ」

ミッテルトは顔を赤らめて  
恥ずかしげに俯きながらも、

ニグラさんに言われるままにキスをした。

「安里ちゃんはミッテルトちゃんの

色んな所に触れてあげて。

私にさつきしてくれたように、ね♡」

「わ、分かりました」

俺はミッテルトのつるりとした丘を撫で回し、  
時折指先で弾いてやった。

「んっ……♡あ、ああんっ♡」

ミッテルトは体をピクつかせ、甘い声を上げる。

「ほら、こことかどうだ？」

クリトリスを摘んで軽く引つ張ったり押し潰したりしてやると、  
ミッテルトは一層大きな声で喘いだ。

「おほっ♡クリクリしゅきっ♡気持ち良いッス♡」

「嫌いな所はないのか……？」

「はいっ♡私は全身性感帯なんス♡」

だからもっといっぱい弄ってほしいッス♡」

「そうか、じゃあ望み通りにしてやるよ」

「ありがとうございますッス♡」

お礼に私のおっぱい吸わせてあげるッス♡」  
そう言ってミッテルトは

俺の眼前にその胸を突きだす。

「あらあら、ミッテルトちゃんったら

またそんな大胆な事を……」

「うふふ、ニグラ様だって

人の事言えないじゃないッスかあ……♡」

ミッテルトの胸は見た目相応の大ききで、

乳首は綺麗なピンク色をしていた。

「ん……ちゅぱっ」

「あはあっ♡」



ミッテルトの乳房を口に含み、吸い上げる。  
するとミッテルトは

艶っぽい吐息を漏らした。

……悪い気はしない。

「ふふふ、次はこうよ」

ニグラさんはそう言うと、

ミッテルトの耳穴に舌を伸ばした。

「あひっ!? ニグラさま、そこは……!」

「大丈夫、痛くはしないから」

ニグラさんはミッテルトの

耳孔に舌を入れ、項を

丁寧になで上げた。

するとミッテルトは顔をのけ反らせ更に興奮し始めた。

「あっ♡あっ♡あっ♡」

犯されりゅ……頭犯されりゅ♡」

「ミッテルトちゃん、腰がくねってるわよ?」

もしかして感じてるの?」

「はいい♡気持ち良くて勝手に動いちゃうんす♡」

「ふふ、正直な子は好きよ。」

でも、まだまだこんなものじゃないからね。

安里ちゃん、『燃える三眼』は

使える?」

『燃える三眼』?

あ、ああ……俺の腕が

変形した触手の事か。

でもいいのかな……発火したら

マズインじゃ。

「大丈夫。大切なのはイメージ。

触手を糸の様に細くなが……

優しく柔らかく伸ばしてみて」

俺は言われた通り、イメージしてくる。

蜘蛛の糸や漫画の糸使いが  
使うワイヤーの様なイメージを  
懸命に湧かせると  
やがてそれは実体化した。

「よし、出来たぞ……！」

「それじゃあ、それを

ミッテルトちゃんの耳の孔に入れてあげて」

「ええっ!？」

俺は一瞬躊躇したが、覚悟を決めて実行に移した。

「イメージして、赤ん坊を

抱きあげる父親の様にそつと、慎重に……」

「わ、分かりました……」

俺の指先から伸びた細い糸状のソレが、

ミッテルトの耳に侵入を開始する。

「お、おおおおお……おおおおお……！」

入って来るツス！ 耳の中にいい……！！

凄いツス！ 凄いツスうううううううう！！！！

溶けるゆ♡頭溶けりゆうう♡」

ミッテルトがニグラさんに耳孔を

責められた時より甲高い歓喜の声を上げる。

そして遂に先端がミッテルトの脳に

到達した……のだろうか。

いや、大事なのはイメージだ。

傷一つつけないように……。

新品の林檎を磨くように……。

ジャガ芋の皮をペティナイフで剥くように……。

「あひやつあ♡あひいつ♡

すごいつ♡すごひいつ♡」

ミッテルトが小さく悲鳴を上げ、

全身をビクンと痙攣させた。

「ミッテルトちゃん、今何が起こったのか分かる？」

「はい……分かります……♡」

私は……私の身体は……脳味噌の奥まで……  
安里サマの愛で満たされたツス……」

「よく出来ました。」

さあ、仕上げよ」

ニグラさんはミッテルトの耳から伸びる

『糸』に吐息を吹きかける。

「おほおほおおおツツ♡♡♡♡」

ギマルツ♡脳アクメキマるっ♡

イグ♡イグ♡イキ過ぎて死ぬっ♡

死んじやううう♡♡♡」

ミッテルトの絶頂の電気信号が

『糸』に伝わり甘く痺れる。

「はい、終わりよ。ご苦労様」

そう言っつてニグラさんはミッテルトの頭を撫でる。

「はあ……はあ……」

あ、ありがとうございます……♡

ニグラ様と安里サマのおかげですう……♡」

ミッテルトは荒い呼吸を整えながら言った。

「どういたしました。」

ミッテルトちゃん、安里ちゃんの事は好き？」

「はい、大好きです♡」

ミッテルトは即答する。

「ふふ、良かったわね。」

「これからも仲良くしてあげてね？」

「もちろんツス♡」

ミッテルトは

安里サマに忠誠を誓いますう♡

ぶじゅううう♡」

「うわっ……!?!? 痛っ……何すんだ」

「はー、キスマークも知らねーとは

童貞クソ虫はこれだから」

……と、この様に

やりすぎたワケだ……。

こんな事をイツセーに

言えるワケ……ねーよなあ……。

しかし天野夕麻、改め

レイナーレか……。

イツセーに何て

説明すべきだろうか……。

出来れば悪魔や墮天使のしがらみがない

俺が直接ぶちのめしたいが……、

## 第四話

どうも、九頭竜安里です。  
今の状況なんですけど……。

「で、どこに行きましようか  
安里サマ。

うちとしては

いきなりホテルでもいいッスよ」

ミッテルトが俺の『燃える三眼』の  
宿る方の腕にしがみついて

頬ずりしながらうっとりとした

顔で言つてのける。

ナイアに心をぶち折られ、

ニグラさんに絶頂させられ

しまいには俺の『燃える三眼』で

頭を犯された結果、

こんな事になってしまった……。

ちなみに、

「……えーと、俺はその……」

俺自身はこの子に対して

特に思うところはないのだが、

さすがにこの状況はマズいだろう。

それに……。

「まあ、まずは服屋だな。

四六時中そのゴシック・ロリータの

ドレスは人目を引くから、な」

今のミッテルトは全身を

黒で統一した

ゴスロリ衣装に身を包んでいる。

正直、街中では浮いて見えるし、

何より動きづらいと思うんだが……？

「そうなんスか？」

結構人間のルールも

面倒くさいんスねえ……」

ミッテルトは小首を傾げて

不思議そうな顔をする。

墮天使つてのは皆こうなのか……？

しかしそのデカイ鎖と首輪の

アクセサリーは何なんだ？

「まあ、

とりあえず服を買いに行くぞ。

いつまでもそんな恰好じゃ

不便だしな」

俺はリッテルトの手を引いて

歩き出すと輝く様な笑顔になる。

「おおー。遂にうちの体に触れてくれるんスね!？」

あざーっす！

でも出来れば鎖を

引いて引きずって欲しいス！

そう、雌犬ばりに！」

「なにそれこわい」

やっぱり手を離そうかな……。

と公園の側を横切った時、

イツセーが何やら

雲梯で懸垂に励んでいた。

「あく、あの兵藤とかいう

悪魔また遊んでるっすよ？」

ミッテルトの言葉に俺は

小さくため息をつく。

「あれは遊びじゃないんだよ。

あいつなりの努力の形だ。

身体を鍛えているんだろうぜ。

見ろよあの真剣な顔」

俺は指差して見せるが、

ミツテルトはいかにも

それがどうした、と

言わんばかりの顔だ。

「安里サマは蟻が巢に餌を

運んでいる時、どう思います?」

更にはやおらナイアみたいな事を

言い出し始めた。

「別に何も」

「つまりそういう事スね。

忌憚のない意見つて奴つス」

そうか、お前ら悪魔やら堕天使に

すれば人間は蟻か……。

何れ俺もそう考えるように

なってしまうのか……。

何ともやりきれない気分になり

かけた時、

ミツテルトが急に叫び出した。

「あゝっ！ アレは神器持ちの

アーシアちゃんっス!!

なんで兵藤と一緒に!?!」

アーシア? 誰だそりや?

駒王学園の生徒じゃないって事は

確かだが……。

「おいミツテルト、知り合いか?」

「ええ、レイナーレが囲っている

神器持ちのシスターっす」

レイナーレが

シスターを囲っているだと……?」

一体どういう事だ?

俺が訝しんでいる間に

イツセーの方が

俺達に気付いた様だ。

手を振って俺達に呼びかけて  
きている。

「よう安里！」

そっちの子は彼女か？」

「あら、そちらの方は

ミツテルトさんですよね？」

イツセーとアーシアと呼ばれた

女の子が俺とミツテルト、

それぞれに話しかけてくる。

「ち、チガイマス。ワタシミツテルトチガウネ

リツテルトデスネ」

ミツテルトはアーシアって子から

目を逸らして滝のように汗を

流しながら誤魔化そうとしていた。

いやいや、無理あるだろ……。

「まあ、そうだったんですか。

はじめまして、私は

アーシア・アルジエントと

申します」

ペこりと、恭しく頭を下げ

アーシアちゃんが挨拶してきた。

信じてるし！

すげー純粹無垢だよこの子ったら！

「ああ、これはごく丁寧にどうも。

九頭竜安里です。

イツセーとは幼馴染で……」

俺も軽く会釈しつつ自己紹介をする。

見た感じ西洋の生まれなのか



金髪にエメラルドの様な色の瞳、  
白を基調とした修道服に  
身を包んでいた。

しかし、この子……。

「? どうかしましたか?」

「いや、何でもないよ」

同じ修道服と金髪でもナイアとの  
違いは何だ……。

あつちは爬虫類みたいな目だし。  
まさに月とすつぽん。

あ、無論アーシアちゃんが月な。

「そ、そんな。」

私がお月様だなんて

恐れ多いですよお!」

「ハハッ。相変わらず」

思った事をすぐ口に出すよなお前」  
照れる仕草まで可愛らしい。

この差は一体どこから……。

慢心、環境の違い……。

あるいは何かあつた未来という

やつなのか……?」

この天使の様な女の子が

あんな性格最悪最低のシスターに  
なるなんて夢にも思いたくねえ。

何でもアーシアちゃんは今、休みで公園に  
散歩に来ていたらしい。

「あ、そうだ。」

だったら今日は目一杯楽しもうぜ!」

イツセーがアーシアちゃんを

遊びに誘うと彼女は

嬉しげに笑顔を浮かべた。

うん、実に平和だね……。

こんな日々が続けば良いな……。

「いや、特訓はどうしたんスか」

「お前は白ける様な事を

言うんじゃあないよ。

俺の知っている人は

言っていた……。

『明日のことは明日の俺が

なんとかするから悩んでも

意味無くない?』って」

「堕天使のうちにその人の

言葉使うンスか……」

「いんだよ、細かいことは」

そんな感じでアーシアちゃんを加えた4人で

遊び回るようになった。

バイト先の喫茶店に行ったり

ゲーセンに行ったりだ。

イツセーやアーシアちゃん、

あとミツテルトと遊んでいる間は、

とても楽しくて時間が経つのが

あつと言う間だったが、楽しい時間というものは

すぐに終わってしまうもので……。

一先ずはさつきとは別の公園の

ベンチで一休み。

「私、こんなに楽しいのは

生まれて初めてです!」

イツセーに取ってもらった

ぬいぐるみを抱きしめつつ

アーシアちゃんは輝かんばかりの

笑顔で喜んでいる。

「ははは、アーシアは

「いちいち大袈裟だなあ」

ジユースを手渡してイツセーは  
アーシアちゃんの頭を撫でる。

「いえ、本当に嬉しいんです。」

だつてずっと教会で暮らしていて  
友達がいなかったんですもの」

……教会？

確か悪魔祓いとかの

宗教施設だよな？

「そっか……。」

じゃあさ、今度からは俺達が

アーシアの初めてのお友達だ。

だからまたいつでも遊びにおいでよ……つて痛て……」

イツセーがアーシアちゃんの

頭を撫でようとする

肩を抑えた。

あいつ怪我しているのか？

「イツセーさん、大丈夫ですか？ ……あの時の怪我ですな……」

「ああ、これくらいなら平気さ」

何の事だろうかと俺は首を傾げる。

そんな俺を他所に

アーシアちゃんがイツセーの肩に

手を翳すとどうしたことだ。

傷跡がまるで紙でも剥がしたように

消え去ったのだ。

「凄いな……。」

「これが神器の力か」

「ええ、私の力は神様からいただいたものです」

「神器って事はやっぱり

アーシアちゃんも転生者なのか？

ゲイトさんからその力を？」

なら話してくればいいのにな。

いや、ナイア曰くあの入

自由人らしいからな……。

聞いても答えてくれたかどうか。

「てんせいししゃ？」

しかしアーシアちゃんは

ぽかんとした様子でこつちを見る。

えーと、これはつまり……。

「スマン。今のは忘れてくれ。

それより神様から頂いたって

言うのは？」

それからアーシアちゃんは

今までの経緯を話し始めた。

捨て子の彼女は孤児院で

育った中である時怪我をした犬を

助けようとした時、治癒の力に

目覚めたそうだ。

それを見た教会の人間は彼女を

『聖女』として祭り上げ、

持て囃したのも束の間。

怪我をした悪魔を助けたら

一転して魔女だの背教者だのと

掌を返されたらしい。

「酷いな……」

イツセーがぼつりと怒りに

拳を震わせながら呟く。

俺も同感だ。

人でも悪魔でも助けようとする事が

何故いけないんだよ。

しかし、そう思っているとアーシアちゃんが悲しげな顔で俯く。

「……いいんです。」

皆さんが優しい方達なのは  
分かります。

これも主の試練なんです。  
この試練を乗り越えた時、  
きっと主は私の願いを

叶えてくださるはず……」

と、その時骨まで凍る様な  
冷たい風が吹く。

「!？」

何だ、まだ夏にもなっていないぞ！

風上を見ると知らない男と女、  
公園の泉に見知った顔の女が  
立っていた。

「天野……ちゃん？」

イツセーは呆然とした顔で呟く。  
そりやそうだ。

自分の命を奪った

堕天使女が現れたんだからな。

「そうなの。」

私、寂しかったんだからあ♪

それなのにイツセー君ったら  
他のコにムチューになるなんて……

ヒドイわヒドイわ」

頭のイカれた格好のまま

天野夕麻の声色で堕天使の女、

恐らくレイナーレは

俺達を挑発するかの様な

くっせえ三文芝居を見せつけて  
きやがった。

それと共にさっきの凍る様な風、  
いわゆる殺気を放ってきた

銀の短髪に閉じ目の男が口を開く。

「主の試練だと？」

そんなものはお前達に存在しない。

何故なら羊を導くのは狗の役目。

それに貴様が助けた悪魔が

人々を襲ったら

どうするつもりだったのだ？」

「それは……」

アーシアちゃんは言葉に詰まる。

「何だと……！」

じゃあアーシアが

助けを求めた悪魔を助けたのは

間違いだったのかよ！」

イツセーが俺より先に咆えた。

いいぞ、もつと言ってやれ。

しかし、そんなイツセーの言葉を

ヤツは鼻でフン、と笑う。

「そうだ。過ちだ。」

アーシア・アルジエント。

灰は灰。塵は塵。そして屑は屑。

屑は再生など出来はしない。

ならば排除するのが唯一絶対の

真理、神の教えだろう」

「ふぎ……」

「ふぎけんな!!」

俺が言い切る前にイツセーが声を張り上げた。

「アーシアがどんな思いで

あんたらに助けを求めたのか分かってんのかよ!!

助ける奴を選んで楽しんでズルをして

何が神様だ！」

イツセーは血が出るほど  
強く握りしめた拳を震わせる。  
その怒りの余波でイツセーの神器が  
具現化していく。

「狗が吠えるな。」

ただ頭を垂れて……死ね」

男が仕掛けてきた。

早い！ 瞬間移動かと思紛う程のスピードで

一瞬にして距離を詰めてくる。

そして貫手でイツセーの心臓を

貫こうとした！

マズい！ 幾ら何でも心臓を

潰されたら悪魔だって

治癒どころじゃない！

しかしその貫手はミツテルトが

その身で庇い、肩口に突き刺さる。

「ぐうッ!？」

苦痛に顔を歪めながらも

ミツテルトは男の腕を掴む。

「安里サマ以外のおさわりは……

ペナルティッスよ……!？」

「興味もない、貴様も死ね」

男は舌打ちすると腕を捻り

ミツテルトの傷口を強引に広げた。

「あっ……ぐうっ!？」

俺は咄嗟に男の横腹に蹴りをくれて

強引に距離を開かせた。

まるで、噴水の様にミツテルトの

肩から鮮血が吹き出す。

「おい、テメエ……!？」

好き勝手やってんじゃねえぞ

「コラアアアアッ!!!」

イツセーは更に激昂した様に叫び、  
神器の正拳突きをあの  
スカしたサイコ野郎の顔面へ  
繰り出す!

同時にビシィッ! と

ガラスにヒビが入るかの様な  
音が周りに響いた。

よし、これであるサイコ野郎の  
面は弾けたザクロみたいに……!?

「狗が……噛み付く相手を  
間違えるな」

サイコ野郎とイツセーの

籠手の間に薄氷の壁が出来ていて  
攻撃が阻まれていた。

こいつ、あの痩せぎす野郎  
より強えのか……?」

「ボールク! 待ちなさい!」

そこでレイナーレが

サイコ野郎の名前を呼び静止する。

「それは命令か、依頼か。

命令だというなら貴様から  
排除する。

墮天使も悪魔も俺には

何の違いはないのだからな」

「依頼よ……」

「了解した」

そう言うとボールクは

またしても瞬間移動の速度で

1メートル80はありそうなドデカイ  
眼帯女の側へと下がっていった。



眼帯女はしらつとした顔で

こつちの様子を見ているだけだ。

「それにしてもミツテルト。」

貴方が私を裏切るとは

少し意外だったわ……。

ドーナシックはその小僧に

倒された様だけど……。

どちらにせよ裏切り者は始末しないとね」

レイナーレは墮天使特有の翼を広げると

ミツテルト、

そしてイツセーに視線を向ける。

不味いな……。

ボールクとかいうサイコ野郎は

明らかに俺達より強い。

だが、それと同じ位

あのドデカい眼帯女だ。

アイツも明らかに強い。

イツセーが殺された時と

同じ様な悪寒が走りやがる。

「キョクロー！」

ミツテルトとあの小僧を

始末しなさい！」

「いやだ。わたしはととさまの

たのみしかきかない」

「……ッ！……どいつもこいつも……」

……何だア？ レイナーレ、

自分の部下も御しきれてねえぞ。

そんなモンで大幹部目指してます

とか笑っちゃまうぜ。

「止めてくださいー！」

私……私は戻りますから！」

アーシアちゃんが  
涙ながらに訴える。  
クソ……情けねえ……情けねえが……!!  
今の俺じゃあコイツらに太刀打ち出来ん。  
ここはアーシアちゃんを連れて  
逃げるしか無いだろう。  
俺はアーシアちゃんを抱えて  
走り去ろうとしたが……。

「無駄だ」

「きゃあっ！」

アーシアちゃんが俺の片腕と  
一緒に地面に投げ出された。  
振り返ればボールクが手刀で  
俺の片腕を切り飛ばしたのが  
はつきり見えた。

「……!? うっ……おお……!?」

切り飛ばされた俺の片腕と傷口は  
完全に凍結していた。  
想像を絶する痛みと吐き気に  
襲われて俺は片膝をどさりとつく。

「安里さん！」

「俺の事はいい……！」

アーシアちゃんは自分の幸せを  
考えて逃げるんだ！」

「できません！」

イツセイさん、リツテルト……  
いいえ、多分ミツテルトさん。  
安里さんを見捨てて私一人だけが  
幸せになっただけ

嬉しくなんてありません！」

アーシアちゃんはキツパリと言い切った。

この子は……本当に優しい子なんだな。  
だからこそこんなにも残酷な運命に晒されてしまっているという  
のに。

「くそつたれ……!」

だらしねえ……!

元々あの時死んだ命だろうが!

死んでかかれ! 九頭竜安里!!

片腕と切り口から

『燃える三眼』を発動させ、

糸の触手でまずは無理やり

傷を縫合する。

痛覚は俺の脳に糸を纏わせる

イメージで遮断。

よし、少しぶらつくが動く。

「感動的な姿だな。

だが無価値だ」

「うっ……ぐう……!」

しかしボールクはミツテルトの

首を掴むと印籠の様にこちらへ

見せつける。

みしみし、とミツテルトの首筋に

ボールクの爪先が刺さり

血が滲み出す。

「アーシア・アルジェント。

次はこの女の首を押し折る。

恐らくは数秒もしない内に死ぬ。

そしてその間にその小僧の

脚をちぎり飛ばす。

癒やしたい方を勝手に治せ。

次にあの兵藤一誠の心臓を

握りつぶす。

癒やしたい方を勝手に治せ」

「……ッ!! や、止めてください」

「それは命令か、依頼か。」

「お前に何の報酬が用意できる?」

「依頼です……!」

「報酬は……私の……です!」

「了解した。ならば」

「依頼を履行する」

「ボールクはそう言つて」

「ミッテルトから手を離れた。」

「ッ!? アーシアッ!!」

「ごめんなさい……」

「アーシアちゃんが俺に向かって」

「眩き、手を翳す。」

「その直後、俺の腕の断面が」

「溶接したように塞がっていく。」

「更には傷跡もない。」

「ありがとうございます。」

「私、幸せでした」

「ありがとうございますますつて何だよ。」

「幸せでしたつて何だよ。」

「そんな諦めた顔で自分の人生を」

「終わった様な顔で語るなよ!!」

「畜生……! 畜生!!」

「そして奴等はアーシアちゃんを」

「連れ去り、消えていった……。」

「」

「クソッ……情けねえ!」

「ホントに情けねえ話ですねー。」

「恥ずかしくて恥ずかしくて」

「顔から火と笑いが止まりませんよ」

それよりもうすぐ  
バイトの時間でしょ」

場所は戻って俺の自宅。

テーブルを叩く俺に

ナイアは服を縫い合わせ

皮肉たつぷりの口調で言う。

「ナイア。貴方少しいい加減に  
しなさいよ」

「いや、いいんすよ。

コイツ、誰かに貶されて怒られて

スツキリしたいって俺の腹を

読んだんでしようよ」

わずかに表情の険しくなった

ニグラさんを俺は制する様に

説明した。

「安里ちゃん……」

「そうでしょうそうでしょう。

いいじゃないですか。

今日知りあつた奴が生きようと

死のうとそれが何なんですか？

どんなに惨めで情けなくても

生きていた方がさア？

明日のことは明日の貴方に

まかせて面白おかしく、

自分のためだけに

幸せになりましたようよ？　ね？

決一めたつと♪」

……俺は幸せになりたかった。

だが、自分だけ

ただ生き残る事だけが

幸福なのかよ。本当に？

「都合の悪い事は忘れるのが

人間の特権なんだよな……」

「ですよー。だからさっさと

バイトに行つて

夜食でも買つてきてくださいよー。

ついでにゴムも」

「ああ、ボールクや

レイナーレが俺よりも強いつて

都合の悪い事は完全に忘れる」

俺は教会に行く。

多分犬死にするだろうが……。

アーシアちゃんへの詫び代に

目ん玉の一つ位は持つていく。

それ位はしねえと生き返つた意味も

甲斐もねえ。

「安里ちゃん。

誰かの力を借りるのだから

人間の特権よ？」

「私は調子が悪いのでパス、

え？ ダメ？ 仕方ねえなあ……。

ミッテルトは留守番でいいでしょ」

「安里ちゃん。

貴方が本当に人間として

生きていきたいなら

今のままじゃいけないわ」

「……頼みますナイアさん。

ニグラさん。俺を助けて下さい！」

俺はアーシアが捕われた

教会へと二人を連れて向かう。

死ぬためではなく、生きるために。

## 第五話

教会に向かう俺達だったが  
その途中でイツセー、木場、  
そして小猫の三人と  
ばったり会った。

「安里！ 来てくれたのか！」

やっぱりお前は心の友だよ！」

「悪いなイツセー。」

俺達の学生生活は三人用なんだ。

アーシアちゃんを抜きにするわけにはいかねえよなあ！」  
腕をがっしり組ませて

俺とイツセーは挨拶をすませる。

するとイケメン王子こと木場が

爽やかに笑いかけてきた。

「やあ、こんばんわ。」

部長から大凡の話しは聞いているよ。

この作戦必ず成功させよう」

「ああ、よろしく頼むぜ木場」

そういつて俺達は握手をかわした。

それから小猫ちゃんとも

挨拶を交わす。

「……よろしくお願いします」

やはり物静かな子だ。

「と、所で安里……。」

お隣の大人のおねーさんは一体……」

「ニグラ・サセコヴィッチよ。」

宜しくねイツセーちゃん♡」

ニコニコ微笑みつつもこの名乗り。

いや、サセコヴィッチはないだろうニグラさん……。」

名乗るにももう少しまともな

偽名をさ……。

「ロシアとかの生まれツスか？」

よ、宜しくお願いしますツス！」

しかしイツセーは疑う様子もなく  
照れていた。

しかしニグラさん。

戦闘に行くのに

そのオープンドレスはどうなんだ？

小猫ちゃんも目がそう言っている。

「あらあん。

そんなに見つめられたら

恥ずかしいわ〜♪」

……………本当に大丈夫だろうか。

「おいおいお前らこのナイアさんを

無視するとはいい度胸だな。

これで突撃ー！ とか

言い出したら私はもう帰るぞ」

そんな事を言われても困るが

しかしナイアの憎まれ口も居て

今は少し心強い気がする。

俺達の戦力は6人。

対して今の所解っている相手の

戦力は四人だ。

レイナーレ。

フリード・セルゼン。

ポールクとかいう

氷使いのサイコ野郎。

あとキユクロとかいう

眼帯をつけたデカい女。

「キユクロって子の能力は？」

「いや、すまん……。」



見た目からしてパワータイプだと  
思うんだが……」

「見た目で相手を判断するのは  
危険だよ九頭竜くん。

うちの小猫ちゃんも役割は  
城兵だからね」

「……ふんす」

名を呼ばれた小猫ちゃんは  
何だか誇らしげに力こぶを作る様な  
マッスルポーズを決めていた。

静かなタイプだが、  
意外にノリがいいのか？

「それにしてもイツセーちゃん。

あなた凄く可愛いわねえ……。

食べちゃいたいくらいだわあ」

そう言つてニグラさんは

イツセーの腕を取つて抱き寄せる様に  
身体を寄せていく。

「ひよえ!?!」

突然の行動に驚くイツセー。

そしてそれを見ていた小猫ちゃんの顔が呆れ出した。

「……ニグラさん。

あんまりイツセーを

からかわないで下さいよ」

そう言つてニグラさんは

ふう……とため息をつく。

「あらあん。

私つたらつい

イツセーちゃんの魅力に

取り憑かれてしまったみたい♡

でも安心してね。

安里ちゃんの事も大好きよ♡」  
ニグラさんのその言葉を聞いて  
イツセーの顔が真っ赤になる。  
……うん。

この人のこういう  
魔性の女っぽい感じ……  
頭は上がらんし  
手も足も出ないぜ……。

「それよりも作戦です」  
小猫ちゃんの言葉で俺達は  
軌道修正。

正面と裏口……どっちから行く？  
「ここは数を分けた方が  
いいかもしれないね」

「戦力の分散は悪手じゃないの？  
知らんけど」  
木場の提案にナイアが疑問を  
ぶつけた。

「いや、こういう所には必ず  
抜け道があるものだからね。  
警備が手薄なら大した被害もなく  
アーシアちゃんの所に  
辿り着ける確率が高いよ」

「じゃあ私はそこで」  
おいおいナイア……。  
お前、単に  
楽しただけじゃなからうな。  
俺の怪しがる目線をうけても  
平然としてやがったが……。

「私はイツセーちゃんと  
安里ちゃんのフォローに入るわね。

正面を薄くする事はまずないから  
裏口はスピードのある木場ちゃんと  
ナイアが適任だと思うわ」  
ニグラさんの意見に俺達は納得。  
そんな訳で俺、ニグラさん、  
小猫ちゃん、イツセーが正面。  
木場とナイアが裏口という事にな  
った。

「

まずは正面だが……

当然の様にバリケードが  
作られていた。

「よしー

まずはアレをどけないとなー！」

「待てよ。バリケードをどける間に  
教会の中の連中がやたらめったら  
撃って来るはずだ。

蜂の巣にされちまうぜ」

「じゃあどうするんだよ！

こうしている間にもアーシアに  
もしもの事があつたら……」

ってニグラさんが夜なのに

傘をさして正面に

向かって行ったぞ！

どういうつもりなんだ!?

当然、ニグラさんへと

銃弾の雨どころか暴風雨が  
襲い、土煙が上がる。

「お、おい！ ニグラさん！」

「ニグラお姉さん！」

「……………」

しかし小猫ちゃんもイツセーも心配しているが当の本人は余裕  
綽々だった。

「あらあら……。」

通り雨ならこんなものかしら?」

あの傘、特別製なのか?

破れも解れもまるでない。

そして連中がマガジンやドラムを

交換すべく銃撃を止めた瞬間。

「そうれ♪」

傘を突くとバリケードどころか

門すら吹き飛ばす威力の

衝撃波が発生した!

「な、何だありやあああつ!?!」

「す……凄え……!」

「早く……突入」

小猫ちゃんの合図で

俺達3人は教会内部へ駆け出した。

「こ、これは一体……」

入った途端、

そこで待っていたのは

顔色の悪い男とあの眼帯女だ。

そばにあるのは

何だあのでっかい斧槍。

4メートルはあるんじゃねえか!?

やっぱりパワータイプじゃないか

木場あ! 恨むぞ!

「知らないやつがなんにんかいる」

眼帯女の方は

相変わらずの無表情だ。

顔色の悪い奴は初めて見るが

イツセーの顔がみるみる

険しくなる。

「フリード……フリード・セルゼン!？」

「あら？ あらあら？」

何でくっせえドブ以下の

悪魔なんかの名前呼ばれなきや

なんねーツスカねえコラア!

訴訟モンですよコイツはあ!

判決は死刑! 上告棄却!

執行はコマージュの後で!」

……何だこのプツツンヤローは。

男版ナイアって感じだな。

「お前……!」

アーシアをどこやった!!」

イツセーが怒鳴るとフリードは

「アーシアさんは

こちらで大事に

保護しておりますよくん。

まあ今頃はきつともう

一番搾りカスになってんじやね?

ギャハハハツ!!」

「うるやい」

眼帯女がそう言うと言にした巨大な斧槍を振り上げる。

「ととさまにいわれたから

ここはおさない」

その言葉と共に振り下ろされた一撃は床ごと俺達の

足元まで切り裂いた!

食らったらこりや一撃で

あの世行きだな。

「ひやははははははは!!」

このクソ雑魚どもがあ!

黙って死んどけやあ!」

「私達が雑魚なら貴方は

外道かしらあ？」

フリードの銃弾を容易く回避して  
ニグラさんは肉薄する。

「えいつ」

そしてくるん、と

クラックを回す様にフリードの  
腕を二回転程軽く回した。

「んぎゃはあああ！

腕が折れたあああ!？」

「貴方はイツセーちゃんを

バカにしたからこっちもね」

淡々とニグラさんはフリードの  
持っていた剣の柄を奴の拳ごと  
握りつぶしてしまった！

「ぶぎひいいっ!!」

「駄目よ、男の子がそんな

情けない悲鳴をあげちゃ……。

イツセーちゃんはもつと

大変な時でも泣き言一つ

言わなかったのに」

「おいしい！ デカブツのウスノロ！

なにしてやがんだあ!!

さっさとこのゴリラ女を

叩き殺せやあ!!」

残念だがそのデカブツのウスノロは

俺達の相手で忙しくてな。

予定の空きなんて無エよ。

「そらよっー」

俺は『燃える三眼』を発動させ  
触手を多条鞭にして

叩きつけようとしたが  
向こうの斧槍の風圧が  
想像以上に強大だった。  
軌道を逸らされてしまい、  
教会の壁の一部にぶつかり  
発火し始めた。

こんな所で能力が仇になるとは……。

「うわわわ！ 教会が燃えてるぞ！ どうすんだよ!？」

「しよ、消火器はどこか」

「……消火活動」

小猫ちゃんが眩き、なんと壁に

軽々とテーブルを持ち上げて

ぶつけていく。ガラガラと崩れる壁は燻りだして延焼は防がれた。

「あ、荒っぽいなあ小猫ちゃん」

「さ、流石に火事はまずいもんな……」

「……」

瓦礫の向こうには先程の眼帯女が立っていた。当然の様に無傷だ。

「ふくがよこれた」

「……」

「……」

「あつはつは。そうですか……」

もう何を言われても驚かねえぞと

身構えていたら

眼帯女は今度は戦法を変えてきた。

何と何個かの鉄球を

瞬時に用意し始める。

「えいっ」

何とそれを

サッカーボールの様に

蹴り飛ばしてきやがった！

掛け声はかわいいが

威力も速度もまるで可愛くない！

「な、何だありやあ!？」

「くそ、あんなの当たったら……」

レッドカードなんてもんじやないぞー！」

しかも速い！ 俺達は何とか避けたが教会のあちこちに当たって破壊していく。

「おいおいおいおいー！」

教会ぶっ壊す気かよ!？」

「イツセー！ 俺達も行くぞ！ このままじゃ教会が危ない！」

「おう！ アーシアを取り返してから弁償すりやあいいい！」

「……」

小猫ちゃんは黙って

眼帯女の方に突っ込んでいく。

なんて度胸だ……。

せめてフォローくらいは……！

「とうっ」

「させるかよっ！」

眼帯女の鉄球蹴りに合わせて

俺は触手を投網の様に展開。

どこぞのタイガーショット

ばりの豪速鉄球を食い止めてやる！

ぶちぶちぶちいっ！

「ぐあああああああ!？」

俺の触手が数本千切れた。

痛ええええええええ！ が

痛くないと思えば痛くない！

『痛覚遮断』!!

同時に受け止めた鉄球を包んで

フレイルみてーにぶん回す！

あの眼帯女にぶつけてやるぜ！

「おおりやあー！」



だが眼帯女は飛んできた俺特製の  
フレイルを見ても  
慌てず騒がずに片手で  
あっさり止めた。

「ふんっ」

「はあ!？」

鉄球は俺の触手ごと  
戻ってくる。

何で戻ってくるんだ!?

避けられん! うわあああ!

「どりゃあああ!」

その時イツセーが雄叫びと共に  
神器を展開。

籠手の右ストレートで

鉄球を粉碎した。

「す、すまん! 助かった!」

「いいさ俺とお前の仲だ!」

……あれ?

今のイツセーって

なんかちよつとカッコよくな?

「……? おかしい。」

こいつのパンチでてつきゆうが

くだけのはずがない」

「俺が知るか!」

要は気合の……問題だああ!」

『Boost!』

同時に聞き慣れない音声と共に  
イツセーのパンチの威力が増す。

「……やりますね先輩」

そして小猫ちゃんの追撃の  
ドロップキックによりあの眼帯女も

流石にふらついた。

あれ？ 俺、邪魔になつてない？

……いや、火力がなくても  
牽制はできる！

俺は俺に出来ることをやる！

「うらあ！ 俺だつて男だ！

女の子一人守れなくてどうするよ！

俺が相手だ！」

「お、おまえとおくからひきよう。

こつちにこい……」

「断る！」

「ならこつちからいく」

眼帯女がそう言った瞬間

彼女の姿が消えた。

なにい!?

「は、速い！」

「……安里先輩！」

「イツセーちゃん!？」

「ひゃっはははあ!!」

キュクロちゃん鬼強え!!

そのまま僕ちに逆らう奴等

全員ぶつ殺してくださいまし!!」

フリードが狂喜しながら叫ぶ。

この野郎！ 調子に乗りやがって！

だが、この眼帯娘、只者ではない。

スピードが尋常じゃないぞ。

小猫ちゃんとはほ互角か。

「……せいっ」

「……えいっ」

「……ふんっ」

眼帯女の拳、蹴り、肘打ち、頭突き、  
どれをとつても一撃必殺。

並大抵の悪魔では歯が立たない程に強い筈なのに……。それを受け流したり弾いたり受け流されたりして。だがイツセーの方が余裕そうだ。

「……やっぱりおかしい」

「何が？」

「……わたしはあなたより

はやくなぐっているのにきかない」

「そりやそうさ！

キミの攻撃は一発でもまともに

喰らうと

死ぬ可能性があるもんな。

けど、俺にはこの籠手がある！

これがあれば攻撃が当たらなくとも

パワーだけは上がるみたいでな！」

「それはすごい。

ならこぶしでかつのはあきらめた」

「ちよっ、ちよつとタイム！

女の子がそんなでかい斧槍

振り回しちやいけません！」

「なんで」

「危ないでしょう！」

「じゃあどうやって

つよいちからをだす」

何であいつ等急に

コント始めているんだ。

ニグラさんも思わず微笑んでるし。

尤もニグラさんの下で

マウントパンチ食らった

フリードの顔は現代アートの

なりかかっていたが。

『キュクロ、そこまでだ。』

ボールクと共に帰ってこい』

と、その時どこかから

老人の様な声がした。

スピーカーか何かかは分からんが

少なくともここにはいない様だ。

「いやだ」

『レイナーレは目的を果たした。

奴がトワイライト・ヒーリングの

摘出に成功した以上

戦う意味はない』

……!?!? 今なんて!?!?

「いやだ！　まだやる！

もつとたたかいたいたいっ！」

『キュクロ、

我の命令が聞けぬのか？』

「うう……わかった、ととさま」

『いい子だ』

くそっ！　会話の内容が全く理解できない！

一体どういう事なんだ？

「アーシアはどこだ！

どこにいるー！」

『貴様達の健闘とデータ収集の

協力の対価に教えてやる。

この教会の地下だ』

「ふざけんなー！」

そんなの取引材料になると思ってるのか！」

イツセーの必死の怒声が轟くも

声の主から返答はない。

「取り敢えず

地下に行きましょう！」

ニグラさんの呼びかけで

俺達は地下へと駆け込む。

「おまえ、なまえは？」

「兵藤一誠だ！」

「……なまえ、おぼえた」

眼帯女はイツセーにそう言うと

幽霊の様にフリード共々

消えていった。

「大丈夫かな」

「今はあの声を信じるしかないわ」

階段を降りて地下の礼拝堂へ。

そこには……

「アーシア！」

十字架の下に横たわる

アーシアがいた。

血を抜かれたかのように

その顔は青白い。

「待つてろ！ 今助けるから……」

しかしその前に

レイナーレが立ち塞がる。

なにやら切り札が

ありそうな余裕綽々の態度だった。

「トワイライト・ヒーリング……」

想像以上の神器ね。

この癒しの効果は聖書の神の

加護を喪った私達に

絶大な恩恵を齎してくれる。

これで墮天使としての私の地位は

確固たるものになったわ。

ああ、アザゼル様。シエムハザ様。

そしてサタナエル様……。

私は貴方達の為にこの力を捧げます……」

「待てよ……」

陶然と自分の世界に酔っている  
レイナーレにイツセーが  
低い声で呼びかける。

「ハア？ 何よ？」

「アーシアはどうなった」

「どうしたも何も……死んだわ。

ああ、丁度いいから

片付けてくれる？

そこのボロクズをね！」

「ボロクズだと……？」

アーシアのどこが……ボロクズだ！」

イツセーの拳が

見事にレイナーレの頬を捉えた。「うっ……！」

よくもやったわねええ!!

下級悪魔風情があ!!」

激昂したレイナーレが

光の槍を放つ。

「イツセー君!？」

「危ない！」

小猫ちゃんとニグラさんが

咄嗟に庇おうとするが間に合わない。

が、イツセーは光の槍を

まるでシャーペンの芯の様に

簡単に握りつぶしてしまった。

籠手の宝玉が赤く輝いている。

「なっ!? 何なのこの力!？」

こんな馬鹿げた力がある筈がない!

この力は神器……いやまさか

神滅具!？」

「神も堕天使も関係ねえ!

お前だけは許さない！」

「許すも許さないと無いのよ

この下級悪魔が！」

お前達悪魔や人間は永遠に

私達に搾取されて

泣き寝入りしていれば

いいんだよ!!」

なんとまあ醜悪な叫びだ……。

だが俺の出る幕じゃねえ。

ここはあいつに任せよう。

「何なの……!?!」

何なのよお前は！

死になさいよ……!! 死ねよ！

いいから死ねって!!

何一つ守れないクズの分際で！」

「そうだな……俺はアースシアを

守れなかった。

けど……

無念を晴らす事はできる！」

戦きながら光の槍を投擲する

レイナーレだがどれ一つとして

今のイツセーには通用しなかった。

「……あんなに強いなんて

聞いていないです」

小猫ちゃんがぼそりと呟く。

「そうね、確信はなかったけれど

今のイツセーには

駒8騎分の力は

確かにありそうだわ」

朱乃さんと共に現れた

リアス部長が答えた。

駒……？ 8騎……？ どういう事だ？

「今のイツセーの

腕に宿っているのはかの有名な

『龍の手』ではない。

『赤龍帝の籠手』と呼ばれる神器、

神すら打ち倒せるといふ

伝説の聖遺物。

歴史上でも数えるほどしか存在しない

『二種類以上の力を持つ』希少な存在。

その能力は10秒ごとに力が倍化していくというものよ。

それがあの子の秘められた能力なの。

まだ覚醒して間もないから、今はまだ4〜5倍の上昇率だけれど、これからもっと強くなっていくでしょうね」……おいおい、マジでとんでもないぞ。

それなら今の時点で既にレイナーレを凌駕している。

更に強くなるっていうのかよ……。

「だからこそそのままには

しておけないのよねえ……」

ニグラさんが何か呟いた様だが

それどころではなかった。

「くっ……！」

かくなる上に

アレを使うしかないわ……！」

レイナーレが何か不穏な事を

言い出したぞ？ 大丈夫なのか？

「今のトワイライト・ヒーリングの力があれば起動はできるはず……！」

来なさい！ ネフィリム!!」

指輪をかざしてレイナーレは

叫ぶ。

すると、指輪が黒く輝き出すと



夥しい泥状の何かが  
レイナーレを包み込んだ。  
そして教会が崩落していく！  
俺達はアーシアの亡骸を  
抱きながら何とか脱出。  
そして……。

教会のあった場所に  
赤黒い泥の巨獣が佇んでいた。  
それはまさに怪獣。

その威容は今まで対峙してきたどんな奴よりも強大だった。  
「これが私の切り札。」

前堕天使総督より賜った  
限りなく神滅具に近い神器、

『愛玩の巨獣兵』（ネフィリム）！

この子を使って私は  
至高の存在となる！」

※第6話（アーシア×イツセー 愛のあるセツクス  
正常位 安里×ナイア 覗き 手コキ 寝バック）

「これが私の切り札。

前墮天使総督より賜った

限りなく神滅具に近い神器、

『愛玩の巨獣兵』（ネフィリム）！

この子を使って私は

至高の存在となる！」

赤黒い泥の巨獣の口の奥から

レイナーレの声が響いた。

まさかこんな切り札が

あったとはな……。

「さて、まずはお前達から

片付けるとしましょうか！」

吠えると共にネフィリムの

前足が浮き上がり、俺達を

踏み潰そうと迫る！

さ、サイズが違いすぎる……！

「なんのおおお!!」

イツセーの叫び声と同時に

赤龍帝の籠手が輝く。

『Boost!』

ネフィリムの踏みつけを

俺達を庇うために前足を

受け止めてくれたのだ。

俺たちはかろうじて踏みつけをかわした。

「やってくれますわね……！」

これだから墮天使は！」

朱乃さんも飛び上がるなり  
雷光を放ちながら  
攻撃するが、

あまり効いていないようだ。

「アハハハハ！バカね！」

そんなチャチな稲妻なんかで

このネフィリムが止まると

思っているの!？」

レイナーレはネフィリムの中から

高笑いを放つと

まるで潜水艦からミサイルでも

発射するかのように背中の窪みから

泥の対空弾を朱乃さんめがけて

放ち始めた

「くっ……っ！」

防護壁を張り

威力こそ軽減させたが

数があまりにも多すぎる。

対空弾は朱乃さんの翼や巫女服の

あちこちを

掠めて 焦げ臭い匂いを放つ。

「あーっら？」

そっちの攻撃はこれだけかしら？

こっちにはまだまだ力が

溢れているわよお！」

嘲笑うレイナーレの言葉と

共に巨獣の口から

光の槍が何百単位で放出された！

「……っ！」

回避不可能な密度だ。

防御するしか無い！

俺は『燃える三眼』の触手で

大盾を形成するが奴の光の槍の

威力は想像の遥かに上。

数秒耐えただけで盾ごと吹っ飛ばされた。

「ぐあ……！」

「安里くん！」

「安里先輩！」

木場と小猫ちゃんが俺に駆け寄る。

しかしそこに更に追い討ちが！

「アハハハッ！」

無様ねえ！そのまま死んでしまいなさいっ！」

まるで机のゴミでも

払いのける動作で俺達三人は

片方の前足で薙ぎ払われてしまった。

地面に叩きつけられながら

俺は確信した。コイツはヤバイ。

恐らく神器の能力は巨獣化だが

その大きさが異常すぎる上に

あの対空弾だ。

あんなものを

何発も撃たれたら 街への被害も免れない。

何より一番の脅威はこの 巨大さだ。

いくら神滅具クラスと言えど

こんなデカいもの相手にしてちや

分が悪いにも程があるぜ。

「リアスさん、

このままじゃマズイです！

撤退命令を！」

俺は立ち上がると同時に叫ぶ。

「そうしたいのは山々だけど」

このタイミングで撤退すると

街に大きな被害が出てしまうわ  
確かにそうだ。

ここで退いては また仕掛けてくる可能性が高い。  
「ならどうすればいいんですか!?!」

「私達にはまだ」

アレを倒す手段が無いわ」

部長が悔しそうに言う。

「そんな無茶な……」

何だよそれは……!」

もうどうしようもないのかよ……!

アーシアを奪われて……!

あんな墮天使女に……

故郷まで奪われちまうのかよ……!」

「待ちなさい安里君。」

倒せないということと

勝つことができないというのは

別の話よ」

「え……?」

絶望しかけていた俺たちに

リアスさんは告げる。

「祐斗、小猫、貴方達は

ネフィリムの注意を引き付けておいて頂戴」

「はい、わかりました」

「……了解です」

二人は返事をして

ネフィリムの左後方へと

突っ込んでいく。

「ニグラさん、ナイアさん。」

貴方たちも協力してくださる?」

「イツセーちゃんに

木場ちゃん。

何よりも安里ちゃんの

ためですもの。喜んで♪」

「すみじきものは何とやら…  
ですネエ」

二人の協力を取り付けたところで  
次は俺達の番だ。

「煩いアリどもが後ろをこそこそと…

うっとおしいのよ！」

レイナーレがキレた調子で

叫びながらネフィリムの尾を

木場と小猫ちゃんに向かって

叩きつけた！

その衝撃はあまりにも凄まじく

地割れが生じる程だった。

「ツハ！ 残骸も残らないとは

見事な最後ねえ！」

木場と小猫ちゃんの骸がない事を

勝ち誇った様にレイナーレは

鼻で笑うがとんだ見間違いだ。

「それでもないよ。

ね、小猫ちゃん」

「はい」

尾撃が叩き込まれる前に

俺は二人に触手を伸ばして

こちらに一旦引っ張り

そのまま砲丸投げの様に

スイングさせてネフィリムの

身体へと投げつけたのだ。

「なっ!？」

まさか反撃されるなんて

思っていなかったのだろう。

驚愕の表情を浮かべたレイナーレを  
他所に木場と小猫ちゃんは  
ネフィリムの背中をあちこちを  
破壊していく。

「がああああつ!?!

貴様らああああ!!」

「これであの厄介な対空攻撃は  
使えなくなつたわね」

怒り狂うレイナーレを尻目に  
リアスさんは冷静に呟く。

と、同時にあの眼帯女の使っていた  
4メートル超えの斧槍を担いだ  
ニグラさんが唐竹割りの要領で  
ネフィリムの頭部にその刃を  
深々とめり込ませた。

その衝撃は凄まじいの一言に  
尽きる。いかに巨獣化したとは言えど  
流石にあれだけの大きさだと  
耐えきれなかつたようだ。

「ナイア、切れ目は作つたから

後は頼むわよ」

「へいへいっと……」

そう言えばナイアって  
どういう戦闘スタイルなんだ?  
てつきり後方から支援する  
タイプかと思っていたが……。  
するとナイアのやつは  
スリットから生足を覗かせる様に  
スカート裾を持ち上げた。

「うおっ!?!

美人のお姉さんの生足!?!」

「イツセー？安里クン？」

「アツハイ、スマセン……」

部長が怖い笑顔を見せてきたので  
反射的に謝ってしまった。

しかしこれは一体……

と思っていると 数珠繋ぎの時限爆弾が  
百足の様に連なったものを

取り出してネフィリムの傷口に 放り込んだ。

「しまった……再生を中断させなけ

……ぎやああああ!!」

レイナーレの言葉は

途中で悲鳴に変わる。

そりや中身で爆弾が爆発すれば

衝撃の逃げ場はなくなるものな……

「いいぞ、ナイアー！」

「いえいえ〜♪」

俺の賛辞に

彼女は手を振って応える。

そしてその隙に小猫ちゃんは

ネフィリムの右脚に

ニグラさんが使っていた

特別製の傘をぶっ刺した。

「ぐう……このガキがア！」

ネフィリムは 小猫ちゃんに

狙いを定めて 振り払おうとする。

だがそれを阻む様に

木場が刃を振るう。

「安里君！今よ！」

リアスさんの指示に従い

俺は小猫ちゃん達三人に 触手を伸ばしてから

一気に引き戻した。



奴の攻撃は空を切るどころか  
傘をさらに突き刺しただけ。

完全な自滅コースだ。  
ざまあねえぜ。

「くそ……こんなはずじゃ……!」

「こんなハズじゃなかった……  
でしようか?」

するとあちこちが裂けたままの  
巫女服を纏う朱乃さんが  
不敵な笑みを浮かべている。

「私、やられたままは  
性に合いませんの♪」  
バチイツ!!と

朱乃さんの最大出力の  
雷光が傘を導線にして  
ネフィリムの体内へ流れ込む。

「ギャアアアアア!!」  
レイナーレの断末魔が響き渡る。  
「そろそろ仕上げね…。」

美味しい所をもらうようで  
悪いけれど『紅髪の殲滅姫』  
の名にかけて

貴方に引導を渡してあげるわ!  
流石グレモリー家のご令嬢かつ  
イツセー達のリーダー。

見得を切る様も堂に入っている。  
朱乃さんの雷光と傘によって  
バツクリと裂けた裂け目から  
業火の弾を幾つも撃ち込む。

裂け目はみるみる広がり、  
遂にネフィリムは横転した。

「これでよし。」

レイナーレ……だったかしら？

これで貴方もおしまいね」

「ほざけ……！」

たかだか片足を奪っただけで

私達に勝ったつもりか!？」

「あら、まだ喋れるのね。」

しぶとさだけは一流みたいだけど

それだけではどうしようもないわ」

レイナーレの悪態を 一蹴する様に言い捨てる。

「まあ……そのしぶとさも

あと僅かといった所でしようね」

「何を……えっ!？」

な、何……私の身体が……!

身体があっ……!?!？」

突如レイナーレは苦しみ出す。

それを見たりアスさんは満足げに

説明を始めた。

「幾らトワイライト・ヒーリングの

治癒の力があるうと

あれだけの質量をノーリスクで

完全に治癒できるわけではない。

致命傷を負ったネフィリムは

遠慮なく貴方の全魔力、魂すら

吸い上げて再生しようとする

でしようね……」

「あああああ!熱い!熱い!!

溶ける……!燃える……!

溶けてしまおううう……!!」

彼女の言葉通り、ネフィリムは

レイナーレの全身から

肉と骨を溶かしながら 吸収していく。

「怜悯なものね。」

信頼のない主従関係

なんてそんなもの。

イツセー。いい機会だから

見ておきなさい。

己を見失い、律する事ができず

欲望に溺れて他者を陥れるものが

辿る末路というものを……」

「は、はい……」

イツセーの返事を聞いてから

リアスさんは視線を戻す。

「イヤアアアアアア!!!」

た、助けて! イツセー!

私よ! 夕麻よ!

私は悪い人たちに

操られていただけなの!」

「……」

「お願いよお……!」

何でも言う事聞くからあ……!」

「それも…嘘なんだろう…」 「え……?」

「そ、それは……!」

「もういい……。」

お前とは 二度と会いたくない……。

消えてくれ……」

「そ、んな……」

主を融解させた結果、

ネフィリムは自壊していく。

それはレイナーレ、

天野夕麻の消滅も意味していた。

「う、うう……。嫌……。死にたく、ない……。」

誰か……助け……て……」

それが最期の言葉となり 肉体の全てが消滅する。

こうして俺達の初陣は終わった。

ネフィリムとの死闘が終わり

俺は皆が無事かを確かめていた。

幸い大きな怪我はない。

だがイツセーは落ち込んでいた。

「なんだよ……これ……」。

なんでこんな事に……!」

「イツセー君……」

木場が声をかけるが反応がない。

「木場……。今のイツセーは

初めてのカノジョと

ガールフレンドが

こんな事になっちまったんだ。

そつとしてやれよ」

「……そうだね。」

彼の気持ちは痛いほどわかるよ。

大切なものを奪われたり、

失ったりする悲しみは、ね」

恐らく木場も色々あったんだろう。

が、今はそれを

根掘り葉掘り聞く時じゃないな。

「えーと、……じゃない、

あそこでもない……お、あつた!」

しかしナイアの奴は

何やってんだ。

ネフィリムの赤黒い泥に塗れて

死体漁りって……」。

「おい、何してる?」

まさかレイナーレの死体を

探しているのか？

いくらなんでも趣味が悪いぞ」

「いやいや、それよりもですね。」

もっと大事なものですよ」

「大事なもの……？」

俺が首を捻ったら

ナイアは現物を俺に見せてきた。

「それは…」

トワイライト・ヒーリング!？」

「ま、そういう事ですね。」

この神器とリアスさんの

悪魔の駒があれば…

あの子、復活できるんじゃない

ないんですか？知らんけど」

あの子ってのは

レイナーレじゃなくてアーシアの事だろう。

「そうか……！」

お、お願いしますナイアさん！

その神器、俺に譲ってください！」

イツセーは人目も憚らず

土下座をして頼み込む。

一方のナイアは粘着く笑顔で

イツセーを弄ぶ様に難色を示す。

「どうしましょうかね。」

私としてはこのチート級の

回復アイテムは

蒐集したいんですけどね。」

「そ、そこを何とか！」

「ナイアさん。」

イツセーの主である

私からもお願いするわ…

いえ、お願いします」

なんと流石に土下座までは

しないがあのご令嬢のリアスさんが

ナイアに頭を下げて頼んだ。

これには俺も驚いた。

「あらあら。部長さんまで。

まあ……いいでしょう。

今回に限り譲ってあげますよ。

あの人怒らせると怖いし」

あの人ってのはゲイトさんか、

それともニグラさんか……。

「ほ、本当ですか!?

ありがとうございます!」

「いいええ」

「よかったね、イツセー君!」

「ああ!これでアーシアを

生き返らせてあげられるん

ですね部長!」

そしてリアスさんの力で

アーシアちゃんは復活。

シスターが悪魔になって

良かったのか……。

いや、良かったんだよな。

アーシアちゃんとイツセーの

喜びっぷりを見ていたら

心からそう思えた。

更にリアスさんが家への報告も

兼ねて皆で泊めてもらう事に

なったのだが……。

「ま、私としてはこっちが本命だったり?」

ナイアが泥に塗れたシユシユを愉しげに

指に引っ掛けて回していた。  
そんな珍しいものには見えないが……。

「……もしもしっ？もしもしっ？」

リアスさんの別荘の客室にて  
眠っていた俺を誰かが  
揺り起こす。

何だよいい気持ちで  
寝ていたのに……。

「うーん……あと5時間……」

「いや、流石に寝すぎでしょ  
アンタ」

チラツとスマホを見たら深夜の  
3時位だ。まだ朝でもねえぞ。  
何だっつてんだ……？

俺は仕方なく目を開けて  
相手を確認。

「誰……っってお前かよ……」

そこには金髪の美女がいた。  
しかも黒のランジエリーに  
ガードーベルトという

エロ過ぎる格好だ。

松田の洋モノエログラビア  
コレクションから

飛び出して来たような存在だが  
何分このナイアって女の  
中身を知っているからか  
別の意味でため息しか出ない。

「何ですかその態度。」

人が折角

夜這いに来てやったってーのに。

はー、贅沢なクソ虫ですことよ  
「うるせえ……。」

そんな格好で人の布団に  
潜り込んで来やがって……。

一体どういうつもりなんだ?」

「どういうつもりって…」

セックスしかないでしょ?

アホなんですかアンタ。

まあアホ丸出しな顔なのは

一目でわかりますが」

「誰がアホ丸出しだ!」

つーか、こんな真夜中に

いきなり襲ってくるとか

非常識にも程があるぞ!」

ああ、もう目が冴えちまった…。

「ま、これは半分冗談として

ちよつと向こうの部屋覗きに

行きませんか?

おもしれーモンが見れますよ?」

「はあ? 何言ってるんだ?」

今頃みんな

ぐっすり眠っているに

決まっているだろう?

それをわざわざ覗くなんて

悪趣味過ぎないか?」

「まあまあいいからいいから」

結局俺はナイアに

促されるまま言われた部屋の

前に立つ。

何やら声が漏れている……。

これは、アーシアちゃんの声?



「イツセーさ……ん、もつと……もつと……!」

「ああ、わかってるよ……」

「アジア、愛している……!」

「な、なんじやこりやあ!」

「扉越しなのに聞こえてくる

艶っぽい声……」

「フフ、面白いでしょ。」

「誰かさんみたいなのへタレ虫と

違ってあの二人、

「生本番の超特急臨時便ですよ♡」

「お、おま……!」

「まさかこれを狙って……!」

「いえいえ、偶然です。」

「ただの成り行きです。」

「しかし、中々凄い光景ですね」

「俺はつい、ドアの隙間から

覗きこんでしまう……」

「いや、どうせマツサージとか

「そういうオチの筈だ……」

「あ……ああ……♡」

「私……♡私……♡」

「イツセーさんの愛で

「ホントの悪魔に

「なつちやいそうです♡」

「ベッドの上部に手をかけながら

「四つん這いになっている

「アジアちゃんがイツセーから

「激しくピストン運動をさせている。

「そしてその度に彼女の

「程々な胸が上下に揺れる。」

「一方、アジアの背後では

イツセーが彼女をバックで 攻め立てていた。  
アーシアは快楽に蕩けた表情で  
イツセーに懇願する。

「イツセーさん♡も…もつと♡  
もつと♡」

「う…うう…アーシア。」

無理しなくても…いいからな…」

アーシアちゃんの中が締まるのか  
余程気持ちがいいのか、

イツセーの奴は齒噛みしながら  
イクのを我慢している様子だ。

だがアーシアちゃんは

ト口顔を隠さずにイツセーに

向けるとこう言った。

「いえ…いえ…！」

私はイツセーさんとなら

どこまでも堕ちたいんです…！！

貴方となら…貴方とだから…♡」

「アーシア…！！」

顔と尻をふるふると振る

アーシアちゃんの様子に

イツセーは感動したように

目を見開く。

そして更に腰をズンツと突く。

「あ…あぁ…♡」

届いた…届きましたぁ…♡

イツセーさんの私への気持ち…♡

大きくて…嬉しい…♡」

「うう…俺にも伝わってくる。

アーシアの俺への気持ち…！！

アーシアのお腹から…！！」

「ああ…♡私達両想いなんですね♡

悪魔になつても神に感謝しちゃいますう♡」

イツセーの奴は涙まで流して

感激していた。

「いやあ…マジでウケますねアレ。

あれだけ好き放題やっておいて

お互いがお互いに 片思いだとか

思っていたとか どんなコントですか。

しかもまだ告白すらなかったとか

もう笑うしかないっすわ」

「……」

「あれ？あれあれあれ？

チ○ポ勃起させちやって

どうしました？

親友が童貞卒業RTA完走を前に

チン○コ男泣きですか？」

く、悔しいがナイアの言うとおりだ……。

さつきから勃起が収まらない…。

「あーあアンタって

本当に最低なウジ虫野郎だな。

まあでも安心しなさいよ。

慰めツクスはしてもらった後に

服を着る時の惨めさが

マジでヤバいんでねえ♪

死にたくなりますよオ？」

「お、お前……いー」

「ほら、そんな事より

チン○コシコってあげますから

じっくり親友の

生ハメラブラブセックスを

ご鑑賞あそばせ？」

「ぐっ……！」

俺は結局覗き見をしながら  
ナイアにシゴかれてしまう。

「へえー、

結構耐えるじゃないですか。

我慢汁で手がベトベトですよ。

ゴツイ見た目も納得の

凶悪SRチ○ポ。

この調子で今後もお願いしますよっ。」

「うるせえ……黙れよ……。」

クソツタレが……！」

ああ……何て情けないんだ……。

「ああ、そうだ。

折角だし私が

アナタの事を名前で呼んで あげましょうかね。

ほら、言ってみてください。

『僕の名前は？』

「……………」

「あらら、無視ですか。

じゃあいっすよ。

こっちも勝手に呼びますから。

ええっと、安里君のオチ○ポ……

凄く熱い……ドキドキしちゃう♡」

「……………」

「あ、また反応した。

やっぱそうだったんすか。

安里君ったら甘えん坊っスねー。

まあアタシとしては

扱いやすくて助かりますけど」

「だ……黙れよ……」

「黙りませーん」

くそう……。

俺は一体どうすれば……。

俺は今イツセーとアーシアちゃんの

激しくも愛のある交わりを覗きながら

ナイアに手コキをされている。

しかし、俺はこんな事でいいのか……。

駄目だ……頭に靄がかかっているようで

思考が纏まらない……。

イツセーとアーシアちゃんは

いつの間にか体位は正常位。

お互い抱きしめ合いながらキスをしている。

「ぶはあ……♡イツセーさん♡

大好きです♡愛しています♡」

「俺もだよアーシア……！」

「嬉しいです……♡

あの、イツセーさん……♡

私の初めてを

全部もらってください……♡」

「アーシア……！・それは……！」

「私……ずっと夢見てたんです。

いつか好きな人と結ばれる日が 来ることを……。

そしてその相手がイツセーさんなら

これ以上ないくらい幸せ……♡

だから、どうか……♡

初めての……その……イツセーさんの

愛をお腹の中に……♡」

アーシアちゃんは 頬を赤らめて

イツセーに膣内射精を懇願する。

それを聞いたイツセーは決意した様に

スパートをかけた。

「ありがとうアーシア……！」

俺、絶対忘れないよ……!!

今のアーシアの優しさと温もり……!!」

「はい……♡」

私も絶対に忘れません……♡」

「アーシアー!」

「イツセーさん!」

そして二人は強く抱き合ったまま 絶頂を迎えた。

「アーシア……! 好きだ……! 大好きだ……!」

「イツセーさん……♡ 私も……♡」

私もイツセーさんの事が 大好きです……♡」

「うう……! ううう……!!」

「ああ……♡ あああ……♡♡♡」

ドピュツ!!

ドピュツツツツツ!!

「うわあああ!?!」

ビュルルツ! ビュビュツ!

アーシアちゃんとイツセー、

そして俺は同時に絶頂する。

「あゝ良かったっすね〜。

二人とも気持ち良さそうかつ

幸せそうで。

それにしても安里君は

マジで最低ですね〜。

親友が童貞卒業RTA完走を前に

盗み見オナニーとかマジでクズ。

あーあーカワイソカワイソ。

うわ、殊の外粘着く。

どんだけ溜めてたんだ」

∴俺の中の何かがざわめく。

それも一つじゃない。

まるで烏賊や蛸の足の様に  
複数の何かが。

『おいおい、ナメられたままで  
いいのか?』

『眼の前に』

丁度いい雌がいるだろう』

『奪え、犯せ、吞食せよ』

『それがお前の』

存在意義であり存在理由だ』

『血に連なるものよ、』

我らと共に在りて我らと共に

滅ぶべし』

『ふひ、ひひ、ひひひ、ひははは』

俺は心の中で

囁き続ける声に従う事にした。

「へえ……? 急にやる気になりましたね?

そんなに羨ましいなら

混ぜてもらえばいいじゃな…

んぶ!?

ナニカが煩いので黙らせるべく

そのの口に俺の勃起したモノを

突っこんだ。

「おごっ!?おごっ!?おごっ!?おごっ!!」

「うるせえよ。」

少しは静かにしろ。

彼奴等の邪魔になる」

「おごっ!?おごっ!?おごっ!?おごっ!!」

ぶはっ…! あ、テメエ…正気かよ!?

アタシは女神なんだぞ!

神だぞ! 信仰心の欠片もない

クソ虫以下の塵屑が! ふざけるな!

「アタシが本気になれば…んぼ！」  
俺は十二かの口に何度も突っ込み  
頭を抑えて扱いていく。

ああ…気持ち良い…キモチイイ。

キモチヨスギル。

キモチイイ…キモチワルイ…

キモチイイ…。

「ぐっ……げほっ……うえっ……。

何だよコレ……テメツ…

チ○ポ…どうなって…んぶう♡」

こえが きこえ ますねこれは せかいが かわったときの こ  
と わたしは いつも ふしあわせでした さいきん めつきり  
げんじつで むかいあうことが すくなくなり さびしいおもいを  
していました そこで きいろいろあおと こうせいが あらわれ  
てきました わたしは それを しりぞくことなく うけいれるこ  
とと しました なぜなら それは いままで わたしが あこが  
れていた じんせいだったからです そうして ついに それは  
やってきてくれました そうです それは さそりのはりのあかい  
あかいあかい

しあわせですしあわせですしあわせですしあわせですしあわせで  
すしあわせですしあわせですしあわせ

しねしねしねしねころすしねしねしねしね

『凶星に惑わされてはいけないよ』

!?! お、俺は…一体…!

ゲイトさんの声が…聞こえた様な。

って…!

「な、ナイア！何して…!」

「ゲホッ…そらっつとぼけやがって…♡」

あとひと押しで鍵なしでも

門が開いただろうに…♡

副王サマはノンキすぎんだよ♡」



「え……う？」

「まあいい……。」

さあ続きをしようぜ♡

今度はちゃんとした形でな♡」

「え？ちよ、ちよつと待ってくれ！

お、俺……お前に酷い事を……」

そうだ。

いくらなんでもやり過ぎた。

いくら相手が自称邪神の類いでも、

やっていい事と悪い事がある。

なのに……。

「うるせえなあ♡

私がしたくなつたから

いいんだよ♡

行きズリつてのも乙なモンだぜ♡」

ああ、ダメだ。もう止まらない。

ナニカが暴れている。

抑えきれない衝動が溢れてくる。

甲虫が樹液を啜る様に、

眼の前のナイアを喰らいたい……！！

直ぐに用意された客室に戻った俺は

鍵もかけない内にナイアを

床へと押し倒す。

「おいおい♡

焦んなくても私は逃げねえよ♡」

俺を誘う様に流し目かつ

妖艶に微笑み、舌なめずりする。

「ほら、早く来いよ♡」

「ああ……！」

俺はそのまま覆い被さるようにキスをする。

「ん……ちゅぷ……れる……れる……」

ふふ……上手いなあ、お前。

初めてにしちや上出来だ」

俺がリードする筈が、

いつの間にか 主導権を奪われ、

口内を犯し尽くされる。

「ふはあ……！ はあ……はあ……はあ……はあ……！」

「おいおい、息切れてんぞ？ 情けないヤツだな。

そんなんで私を抱き堕とせるのかよ？」

……俺は負けじと 再び唇を重ね、激しく貪る。

「ん……ちゅぱ……くちゅ……ふふ……

そうそう、それで良いんだ♡」

俺は夢中で彼女を味わう。

まるで獣の様に。

だが彼女は嫌がる事なく、

寧ろ積極的に受け入れてくれる。

「ん……ふう……っん……

なあ……そろそろいいだろ？

私のココも疼いて仕方無いんだ。

責任取って慰めてくれよ……♡」

そう言つてナイアは自分の秘所を指差す。

まるでメイプルシロップの様な

甘ったるい匂いが

俺の理性を壊していく。

「凄……こんなに濡れてる……」

彼女のそこは洪水のように愛液で溢れており、

ヒダの一本一本まではつきり分かる程だ。

「はは、どうだ。

これならすぐ入るだろ。

なあ……早く入れてえだろ……？」

「ああ……！」

俺は堪らず挿入した。

互いへの愛や慈しみなんてない、  
獣にも劣る交わりに耽溺するために。

「あっはっはっはっはっはっ！ 来た来た！

熱いのが来たぞお！ひいつ♡」

ナイアの中はとても

熱くて狭くてキツキツで、

とても気持ち良かった。

「くっ……気持ち良い……！」

「はんっ！ そうかいそうかい！

そりや嬉しいですね♡

「ぐっ!?急に締め付けが……！」

「こつちも本気を出すしかない……か」

そこから先は互いに本気を出し合い、

お互いを貪り合った。

「ぐううう!! 出る！」

「あはは♡ イけ♡ イけっ♡

童貞捨てたてチ○ポに

くっせえチ○ポ汁吐きだせ♡」

どびゅっ！ どびゆるるるる！

パン！ パン！ パン！ パン！

「んひっ♡ひいい♡強いい♡

イク♡ イク♡ 童貞チ○ポに

イカされるう♡♡♡」

「イケ…イけっ！俺のチ○ポで イけ！ナイア！」

ドピユツドピユー!!!

大量の精液が何度もナイアの中に放たれた。

同時にナイアも盛大に潮を吹き出し、

絶頂を迎える。だが、まるで止まらない。

俺のモノは甲虫の角の様に勃起したままだ。

俺も、ナイアも、そしてナニカも。

「おいおい、まだ足りねえって顔してんなあ……♡

いいぜ、もつとやろうや♡」

ナイアは仰向けのまま股を開き、

両手を使って

自分の膣穴を広げながら言う。

ぶびっ、と下品な音と共に

俺が吐き出した

白濁液が逆流してくる。

「次は後ろから頼むぜ♡

イツセーさんみたいにい…♡

ナイアを犯してください♡

ナイア、安里クンのモノに

なりたいのお♡ヒハハハハツ！」

言われるままに背後から覆い被さると、

彼女は自ら尻を突き出すように持ち上げた。

俺はその淫靡な光景に我慢出来ず、

勢い良く腰を打ち付ける。

パンツ！パン！と肉を打つ音が響く度に、

ナイアの口から艶やかな声と嘲笑が漏れる。

「んお”っ！ほお♡しゅごいっく！」

安里くんのおちんぽ、

おつきくてたくましいよお♡」

「くそ、ビッチのくせに

馬鹿にしゃがって…！

そんなに俺のち○ぽが良いのかよ！」

「うんっ♡いいのお！ ナイア、

イキリケダモノチンポに

無理矢理犯されてるのお！

でもそれがイイのお!!」

「変態が！」

俺は更に激しく責め立てる。

「そうですよお♡

お前と一緒にできあつ♡」

「黙れ……!」

「ああん♡また大きくなつたあ!

イク、イク、イクウウウツ!

イツセー君より先に

安里君の赤ちゃん汁

ナイアのチ○ポ抜き穴にいつぱい出してええ!

どぴゅっ!どぷぷぷぷぷぷ!

「ふああああああん♡

出てりゅうう!

ナイア、男の人に種付け

されちやつたああああ♡」

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……」

ナイアが絶頂する脇で

俺は荒い息を整えようとする。

しかし、

「はは、もう終わりか?」

じゃ、今度は私が攻める番だな。

へばんじゃねえぞ? 夜はまだ始まったばかりだぜ?」

そう言つて彼女は妖しく微笑んだ。

「ああ……!」

血が滾る。煮える。

今日は本当に最低で……最高の夜だ。

↓

「ぐふふ、レイヴェルたん

サイコー!俺の嫁!

レーティングゲームのお宝映像で

ご飯三杯はパクパクですわ!」

とある魔界貴族の令嬢が

参加している兄のチームの

映像を見ながら大兵肥満の男が悦に入っていた。

すると男は舌打ちと共に

懐から通信用の魔方陣を

取り出す。

「何だよもー。」

今いいトコだったのにさく

僕ちゃんがレイヴェルさんと

ラブラブチュッチュのイメトレしてたのに、

邪魔すんなよな〜」

『火急の用事ですのでご容赦を』

「ん？ああ、君か。」

それで？何か用？」

『はい。』

例のネフィリムが斃されました』

「あつそう。」

じゃレイナーレも死んだの？

ま、あんなケバい堕天使BB Aが

どうなろうと知らないけど

アザゼルの奴がな〜」

つまらなさそうに鼻を穿りながら

肥満の男は欠伸をしながら言った。

『その事でマンモン様に

あの街で情報管制を依頼したいのです』

「気軽に言ってくれるなあ。」

あそこはゼー君の妹さんの

管轄じゃん」

『かの四大魔王の御方を愛称で呼べるのは

もはやネフレン・カ・マンモン様を

おいて他にはおりません。

それだけのお力を持つ貴方様です。

どうかお願いします』

「んー。分かったよ。

ちよつとだけなら良いよ。

僕ちゃんは優しいからね。

その代わりさ、

例の件、ライザー君と話した上で

ちゃんとやってよね」

『勿論。

では失礼致します』

「はいはいー」通話を終えた男、

ネフレン・カ・マンモンは

ぐふつと蝦蟇の様に一人笑う。

富、人脈、魔力。

どれを取っても恐らく冥界屈指。

しかしオアシスの

真水も流れねば澱み腐る。

万物万民を呑み、虐げ、膨張を

続けたこの辺境公の精神は

既に灼熱の太陽の如く常軌を逸していた。

※第七話（オリ主×ミツテルト イツセー×ニグラ）

ここは俺がバイトしている

喫茶店『ラヴ・クラフト』

ラヴってのはLOVEじゃなくて

ゼロの方のラヴらしい。

まあ、そんな話は店長の

辰郎叔父さん以外には

どーでもいい話だったな……。

大事なのはそこじゃなくて

眼の前の光景だ。

「はい、イツセーさん、あーん」

「あー、美味しいなー！」

アジアの食べさせてくれる

ホットサンド！ 世界一だ！」

「もうっ、大袈裟ですよ……」

あっ、卵がほっぺたについてます」

ちゅっ……

家は水出しからのブラックコーヒーが

売りなんですよお客さん……。

あと、それモーニングセットの余りを

まとめて焼いたなんスよ。

親友と彼女のイチヤイチヤを

見せつけられる俺の身にも

なっってくれよなあ……。

懐は温まっても心が寒い……。

「おい、バイト。

スムージーお代わり。

ジヨッキでな」

一方その隣では

ご存知性格最悪のシスター



ナイアがお代わりを要求している。  
俺の金で。

「へいへい……」

俺は渋々厨房に行きミキサーに材料を入れて混ぜる。  
そしてジヨツキではなく  
コップに入れてカウンターへ持っていく。  
クソツ……。

ツバでも入れりや良かったな。

でも辰郎叔父さんにバレたら

殴られるどころじゃないし……。

「はい、どうぞ。」

ちゃんとお代は払えよ?」

「うむ。」

ところでお前も少しは彼女の一人くらい作れ」

「余計なお世話だよ!」

なんなんだコイツは!?

いきなり現れて

飯食ってジユース飲んで

挙げ句に説教かよ! 人の金で!

「あのなあ、ナイア。」

俺は今それどころじゃねえんだよ。

色々大変だしさ」

嘘です。

今言っている事は全て嘘です。

本当は彼女がめちやくちや欲しい。

俺も誰かとイチャイチャしたい……。

「えっ?」

ナイアさんと安里さんは

お付き合いしているんじゃない

ないんですか!?

アーシアが驚いたように言う。

まあ……付き合いじゃないけど  
深い関係にはなっただけ……

まあ……何だ……。

「うわ、一回ヤツただけで

私に『オレの女』みたいな

ムーブをかましてくるとか

最低ですねえ」

「わーっ！ わーっ!!」

「ナイアが爆弾発言をかましたので

俺は殊更喚いて誤魔化すと

アジアはポカンとしている。

くそっ、なんて事を

言いやがるんだこの女!!

「……おう、安里。

今日はもう上がっていいぞ。

片付けは俺がやっておく」

「マジすか！ あざす！」

私は店長の言葉を聞いて

喜び勇んで更衣室へ向かう。

今日は土曜日だしこの後は……

やることあったかな？

バイトと勉強位しかしてなかったからなあ……。

「全くミジメな青春だなオイ」

って何でナイアが入ってきてんだ！

ここは関係者以外立ち入り禁止だぞ！

「うるせえ放っておいてくれ！」

「で、放っておいたら

オレナンテドーセって

拗ねるんでしょ？

めんどくせえなコイツ」

「うるさい黙れ。」

だいたいお前は

何しに来たんだよ」

「んー、別に用は無いよ。

ただ単に安里君が寂しくしてないかなって」

だから急にキヤラを変えるな！

気持ち悪い！

「と、まあ本題はこれからで

私達の同棲先、

引越したんですよ」

「はア？ 引越しなんて

聞いてないぞ。

しかも事後承諾かよ！」

なんとという横暴な……。

「いいじゃないですか、

敷金、礼金、家賃はニグラさんが

払うらしいし。

貴方も楽が出来ていいでしょ？」

「そ、それは……うーん……

でもあの人お金持ってるのか？」

「アイツ、駒王学園の保険医に

なっただよ。

生徒の奴等も可哀想になあ……」

それは悪くはない条件だが

これ、世間一般ではヒモって

言うんじゃないだろうか……？

」

確かにニグラさんが言うとおりの

街外れであることを除けば

文句のない一軒家だった。

部屋は勿論、

トイレも共用じゃないし

風呂、キッチンまで着いている。  
それに……。

「んぶ……んむ……ふむう……♡」

ここは新居の地下室。

防音対策もバツチリな上に

色々なアイテムまで備えてある。

何でも元々は会員制の

SMクラブだったらしい。

金持ちの考える事はわからん……。

今はもう

営業していないみたいだけど。

で、俺はそこで

ミッテルトに

ベッドの上でフェラさせている。

犬耳の飾りと首輪を自分から

着けてきたあたり、

彼女もやる気だ。

「んぶっ……んぐっ……ぶあっ」

喉奥まで突っ込んでやる度に

彼女は幸福そうな声を上げる。

その顔を見てると何だか俺の嗜虐心が刺激される。

「なあ、ミッテルト……。」

そろそろいいか？」

「はい……安里サマ……。」

そう言っつてミッテルトは

スカートを捲り上げる。

もう愛液でふやけきつたパンツは

下着の機能を果たしておらず

太腿まで垂れている。

そして俺の手を掴み、自ら秘所へと導く。

既に指二本が入る程に解れているそこに

俺は一気に三本突き刺した。

「あつ、あつ、あつ……♡」

ミッテルトが甘い声で鳴く。

彼女の弱い部分を責めながら俺は彼女にキスをする。  
舌を入れ、彼女の唾液を全て吸い尽くす。

「ああ、イク、イツちやいます……」

あ、あ、あ、あああああつつつつつ!!」

ミッテルトが絶頂を迎え、

ガクガクと痙攣する。

そのままミッテルトは

俺の上に倒れ込み、ダウンしてしまった。

「ミッテルト……大丈夫か？」

「はい……平気ツス……」

ミッテルトは

ゆっくりと起き上がる。

少し無理させ過ぎたかな……？

「ところで安里サマ、

一つお聞きしたい事が」

「なんだ？ 答えられる事なら答えるけど」

ミッテルトが真剣な表情で言う。

何か大事な話だろうか？

「あのですね……」。

安里サマは

私をどう思ってますか？」

「どうって言われてもな……」。

可愛いし健気だなとしか言えねえ」

ミッテルトが可愛くて健気なのは事実だしな。

俺の言葉を聞いたミッテルトは

嬉しそうに微笑むと

文字通り愛犬の様に

俺に抱きついてくる。

頭を撫でてやると

ミッテルトは更に強く抱きしめてくる。

ちよつと苦しい……。

「どうかしたんスカ安里サマ？」

「ん……いや……。

イチャイチャしたいなと

思っただけだ」

何でこうも俺は素直になれないんだろうな……。

そんな事を考えつつミッテルトを優しく抱擁する。

「ひゃっ♡

今まさにうちとしてるじゃあないツスカあ♡」

「しているのはイチャイチャ

じゃなくてセックスだろ……」

「おんなじ事ツスよ♡」

ミッテルトはそう言うのと再びキスしてくる。

「んちゅ……れろ……んんんんん……」

今度はこちらから攻めてみる。

舌を絡ませ、歯茎をなぞり、上顎を刺激する。

「んっ、んんっ、んふう……！」

ミッテルトが身を振らせる。

快楽に耐えかねたのか腰がカクついていた。

「はあ……はあ……安里サマあ……

もつとお……！」

「わかっているよ」

俺は右手で乳首を弄びながら

左手でミッテルトのクリトリスを摘む。

「んんん♡」

ミッテルトが達し、

身体を仰げ反らす。

「はあ……はあ……んっ……♡」

ミッテルトは肩で息をしながら

ベッドに横になる。

「はあ……はあ……」

もうダメ……我慢できないツスう……♡

安里サマのオチ○ポ……♡

早くうちのおま○こに入れてえ……♡」

ミッテルトがスカートを脱ぎ捨て、

パンツに手をかける。

そしてゆつくり下ろす。

「ほら見て下さい♡こんなに濡れてるんす♡」

ミッテルトの秘所からは大量の

淫汁が流れ出ており、

ベッドのシートに大きな染みを作っている。

「もう準備万端って感じだな。

それじゃあ入れるぞ……」

「はい……お願いします……♡」

ミッテルトの割れ目に自分のモノをあてがい、

少しずつ挿入していく。

「おっ……おほっ♡

入ってくる……♡」

ミッテルトが喘ぐ。

その顔を見てると俺の嗜虐心が刺激され、

一気に奥まで突き入れたくなる衝動に駆られるが、

ここはグツと堪える。

「あっ……ああ……ああっ！

凄い……気持ちいいツス……♡」

「そうか……じゃあ今回は

ミッテルトが自分で動け」

「え……？」

はい……わかりました……」

ミッテルトは戸惑いながらも

ゆつくりと動き始める。

しかし……。

「はあっ、はあっ、はあっ……」  
すぐに限界が来たようで  
動かなくなってしまう。

ミッテルトの背中中は真っ赤になり  
汗が滴っていた。

「どうした、もう終わりか？」

「う、動かないでください……。」

「イツちやいますからあ……。」

「何だ、俺とのセックスで

イクのは嫌なのか？」

ミッテルトは言いづらそうにモジモジしていたが  
俺の反応を又ずに自白を始める。

「そ、そういう訳

じゃないですけど……。」

でも、もつと安里サマとは  
繋がっていたんです……。

だからもう少しだけ待ってください……

ひゃうん!？」

こういうところ、本当に可愛いよなコイツは。

ミッテルトが言い終わる前に

俺は下から突き上げた。

「ああ、あああああっ!!」

だめっ、だめっ!!」

ミッテルトが叫ぶ。

俺は構わず突き続ける。

子宮を突き破るんじゃないかって  
位に勢いと弾みをつけながら。

「やめてっ、やめてくださいっ!」

おかしくなる♡

おかしくなっちゃいましたゆうっ!!!



イチャイチャしたいって……  
いつへたのにひいいい♡♡♡  
ミッテルトが涙を流しながら  
懇願する。

だが、それはもつと自分を  
犯してくださいという  
催促にしか聞こえなかった。

「そうかそうか……」  
そんなにして欲しいなら望み通りしてやるよ  
俺はそう言うときさらに激しく動く。

「やだあ、やだやだやだあっ！  
壊れりゆう、うちのおま○こ  
壊れちやうよおおおおっ!!!」  
ミッテルトが絶叫を上げる。

彼女の膣内はヒダ一つ一つに至るまでが痙攣しており、俺のモノを  
離すまいとして締め付けてくる。

「出すぞ……受け止めろっ！」  
「はひゃいっ♡」

きてくらしい、いっぱい出してええっ♡♡♡  
どぴゅっ、ぶびゅーっ、びくびくんっ！  
俺はミッテルトの中に大量に射精した。

「あはあああ♡♡♡出てるう……♡♡♡」  
ミッテルトは嬉しそうに笑うと  
そのまま気絶してしまった。  
……やり過ぎたかな。

甘いビロートークなんてものは  
夢のまた夢なのかな……。

「まあいいか、今はミッテルトを  
抱きしめて眠ろう……」

ミッテルトを抱きしめて眠る。  
温かい。ミッテルトも俺も汗をかいているが、

それが気にならないくらい心地良い。  
ミッテルトの寝息が聞こえる。

可愛い。愛しい。

そんな感情が湧き上がってくる。

そうして一時間程仮眠した。

「んん……」

少し身じろぎしたが、

起きる気配はない。

今のうちにシャワーを浴びておくか。

火照った身体に冷たいシャワーが

これまた心地いい。

「安里サマあ〜♡」

「うわっ!?!」

後ろから抱きつかれた。

「もう、どこ行ってたんスかあ？」

寂しかったツスよう」

「悪い、ちよつと汗を流しに……」

「そうなんスね……」

じゃあうちがキレイにしてあげるツス♡」

ミッテルトが俺の背中に舌を這わせる。

「んん……ちゅぱ……れる……。ん……」

「おい、くすぐりたいぞ」

「んん……。はい、終わりました……」

次は前向いて欲しいツス……」

「はいはい……」

俺はミッテルトの方に向き直る。

ミッテルトの顔が目の前にある。

ミッテルトがキスしてくる。

「んむ……♡」

俺達はしばらくお互いの唇を求め合った。

「ぷは……♡」

ミッテルトが口を離す。

「安里サマ……大好きッス♡」

ミッテルトが蕩けた顔で言う。

「ああ、俺もだよ」

「えへへ……。じゃあ今度

一緒にお風呂入るッス♡」

「そうだな……。ここの風呂は

大分広いからな。

その時は今以上に可愛がつて

やるよ、ミッテルト」

「はい………お願いします♡」

「あらあら、二人共

すっかり夢中ね……」

お姉さん妬けちゃうわ……」

ガラス張りのシャワールームの

向こうでニグラさんが

溜息をついているということなど、

俺達が気づくはずもなかった。

↓

「ねえ、安里ちゃん。

引っ越しパーティの事なんだけど」

食卓のテーブルにて。

向かい側に座るニグラさんが

唐突に切り出した。

「イツセー君を呼んできて

ほしいのだけれど頼めるかしら？」

「ええ、構いませんよ。

アーシアちゃんも呼んであげても

いいスカね？」

パーティとかの経験は

ないだろうからきつと

アーシアちゃんも喜ぶだろう。

「うーん……」

だが意外にもニグラさんが  
難色を示す。何故だろう。

「どうかしましたか？」

「ちよつと事情があつてね……」。

安里ちゃんとイツセーちゃん二人の  
方が色々都合がいいのよ♪」

「男手が欲しいなら木場も

誘いましょうか？」

「あら？」

安里ちゃんは知らないの……？

あの子ホントの所は……」

木場の名前を出すと

ニグラさんは

驚いたような顔をした。

「何の話ですか？」

「うふふ、内緒よ♡」

ニグラさんがウインクする。

はぐらかされてしまった気が  
するが仕方がない。

今の俺は

居候みたいなモンだし……」。

「いや、ペットだろ」

「ナイアさん、言い過ぎツス。

せめてヒモって言うってください」  
ひどくない？

↓

そして次の日、

イツセーを呼んで

細やかながら

引越しパーティが催された。  
「美味しいですっ！」

どれもこれも初めての味ツス！  
料理を口にして笑顔を見せる。

イツセーは酷く満足げだ。

「よかったわ。」

「いっぱい食べてね」

「はいっ！　ありがとうございます」

「いや、私が作りましたみたいな

顔しているが作ったのは

私だからな？」

ナイアが抗議するが、ニグラさんはどこ吹く風だ。

「まあまあ……。」

細かいことは気にしないで……」

「お前が言うな」

イツセーが苦笑しながら言うど、

すかさず突っ込まれていた。

なんやかんやでパーティは充分

盛り上がり宴もたけなわ。

「ねえ、イツセーちゃん……。」

地下にちよつと見せたいものが

あるんだけど……いいかしら？

付いてきてくれる？」

「えっ……あつ、は、はひっ！」

突然のことで

吃りながらもイツセーは

畏まって返事をする。

「それじゃあ行きましょうか♪」

「は、はい……。」

↓

二人は地下へと続く

階段を降りていく。

先の安里とミツテルトが盛っていた地下室とは

別のその部屋は薄暗く、

明かりは天井から吊るされた

電球一つだけ。

「あ、あの……」

見せたいものって……

なんなんでしょうか……？」

「ん？ それは見てのお楽しみよ」

ニグラが振り返る。

ニグラの瞳は妖しく光っていた。

「さあ、着いたわよ」

彼女はカチャ、と

躊躇いなく扉を開けると

そこには部屋一杯の魔法陣が

描かれているではないか。

「魔法陣……？」

「死者再誕の儀式って

知っているかしら？」

「はい……」。

死んだ人を

生き返らせるっていう……」

するとニグラは頭を振る。

「それは死者蘇生ね。

再誕は少し違うわ。

肉体を既に喪ったものから

過去の英雄まで……」。

あるいは幻創種……」。

あらゆるものを

呼び戻すことができるの。

私の持つ『権能咀嚼』と

『ネクロノミコン』が揃わないと  
出来ない事だけれど……ね♡」

「え……？」

イツセーは言葉の意味が  
よくわからない。

彼がこの方面の知識に

疎いから、という理由だけではない

ニグラから放たれる魅了のオーラに

頭が痺れていたのだ。

「あらあら、まだ理解できないのかしら。

仕方がないわね……。

もつとわかりやすく教えてあげるわ」

ニグラが近づいてくる。

その目は獲物を狙う蛇のように爛々と輝いていた。

「まずね、貴方が私を

欲望のままに犯すの……♡」

ニグラが甘く耳元で囁く。

「え……」

イツセーは思わず固まる。

ニグラがイツセーの股間を

そろりと撫で上げた。

「うふふ、こんな風にね……」

ニグラの手がズボン越しでも

わかるくらい膨らんだペニスを揉みしだいてくる。

「うう……」

ニグラの巧みな手つきに

イツセーは為す術もなく悶える。

「これが赤龍帝の……」

安里ちゃんのより立派ね……」

「え……？」

「ああ、なんでもないわ。

とにかく、私は抵抗しないわよ。  
好きにしているの。

そうすればイツセーちゃんは  
新しい力を手に入れる事ができるのよ」

「はあ……はあ……」

「早く……♡焦らさないで……♡」

ニグラが甘い吐息で誘う。

「うう……」

イツセーは葛藤していた。

このまま欲望に任せて

ニグラを犯してしまえば

どんなに素晴らしい快樂が

味わえるだろうか。

(だがそんな事を

してもいいんだろうか？

リアス部長やアーシアを裏切る事に

ならないか？

なのにどうしてニグラさん

の誘惑に抗えないんだ？)

「迷っているのね？」

イツセーちゃん。

大丈夫よ。

私の身体をいくら汚しても

貴方が汚れることはないのよ……♡」

「あっ……」

ニグラの淫靡な声が脳髓に響く。

「それに、

安里ちゃんも喜ぶわよ……？

穴兄弟……だったかしらね？」

「ッ!？」

その一言で迷いが吹き飛んだ。



イツセーは本能に従い、

ニグラを押し倒すと服をビリビリに引き裂く。

『待て小僧!! 惑わされるな!』

「黙っててくれ!」

今俺は忙しいんだよっ!!」

自分を制する様な誰かの声を

イツセーは払いのける様に叫ぶ。

左手でニグラの豊満な胸を掴むと、

ぎゅううと万力の様に締め上げた。

朱乃以上に豊満な胸は

スライムのようにぶにゆりと

形を変える。

「ああんっ♡

いきなりっ♡激しいいっ♡」

ニグラの口から艶めかしい喘ぎを引き出していた。

イツセーは乱暴にニグラの乳首をつねり上げる。

「ひゃうんっ♡」

ニグラは背筋を仰げ反らせ、

ビクンっ と跳ね上がる。

イツセーはアーシアには

とても出来ない暴力的な愛撫に

昏い興奮を覚え、ますます激しく責め立てる。

「んんっ♡ああっ♡あはああっ♡」

その度に淫らで美しい旋律を奏でるニグラの肢体。

イツセーは欲望のままに

彼女の全身にむしゃぶりつく。

「はあはあ……」

凄い……なんて綺麗なんだ……。

ニグラさんのカラダ……。

はあはあ……。

ずっとこうしていられそうだ……」

イツセーもニグラも互いに  
陶酔した表情を浮かべていた。  
しかしそこにアーシアとの情交の様な  
慈しみは一切ない。

「ふふふ……。」

いいわよ……。

もっと好きなだけ貪ってちょうだい……。

でも、安里ちゃんは貴方より

激しくしてくれたわよ……♡」

「え……」

イツセーの動きが止まる。

「貴方はアーシアちゃんを抱いたのに

これじゃあ少し買いかぶりすぎたかしら……」

想定外の比較と嘲弄に

イツセーは戸惑いと同時に

怒りを覚えた。

「なんで……なんで……」

なんでそんな事言うんですか……?」

「あらあら、ごめんなさいね。

怒らせるつもりはなかったの。

だから続きをしましょう……♡」

「うう……!」

あ、安里より……!」

安里よりも俺が……!」

イツセーはニグラの言葉に従うように  
再び彼女に覆い被さった。

「そう、それでいいの……。」

もっと……もっと……♡」

「くそお……!」

イツセーは涙を流す。

その雫はニグラの顔に落ちた。

「泣かないで……。」

私は貴方のもの……。

貴方だけのものよ……。」

「うう……。」

「ほら、泣いてばかりいないで……。」

ニグラはイツセーの頭を

優しく撫でた。

イツセーは泣きながらニグラの

乳房にむしやぶりついた。

「ふふ……♡」

イツセーの情けない姿にも

ニグラは慈母のような微笑みを浮かべている。

イツセーは一心不乱にニグラの胸に吸い付き、

もう片方の手で柔らかな双丘を揉みしだく。

「ん……♡素敵よイツセーさん……♡」

ニグラは子供をあやすような口調で

イツセーの行為を褒め称える。

「ちゅぱ……い… ああ……い… 美味しい……い…」

こんなに気持ちいいこと生まれて初めてだ……。」

「嬉しいわあ……♡」

ニグラは聖母の様な

笑みを崩さない。

だがそれは娼婦の母の淫蕩さも孕んでいた。

「んん……♡」

ニグラはイツセーのペニスに手を伸ばすと、

その先端を指先でなぞる。

イツセーの肉棒は先程から勃起が収まらず、

パンパンに張り詰めていた。

「凄いわね……もう我慢できないんでしょう？」

私の中に挿れたくて仕方ないのよね？」

「は、はい……お願いします……い……」

「ふふ、それならおねだりしてみても……？」

アーシアちゃんに言った時と同じようにね」

「うっ……！」

イツセーは背徳感と

自己嫌悪に身を震わせる。

しかし、ニグラの身体の誘惑には逆らえない。

イツセーは欲望の赴くままに己の欲求を口にする。

「に、ニグラさん……！」

ニグラ……！

俺、ホントは君のことが……！」

「私の事が……何なのかしら……？」

「好きだったんだ……！」

ずっと前から……！

好きだ!! 大好きなんだよ!!

俺はニグラが好きなんだよ!!

安里の奴なんかより、俺が……！」

『止める！ お前自身が

お前の友誼や信義を貶めるな!』

誰かの制止を聞き入れるには

イツセーはまだ若い悍馬であった。

「ふふ……あははは……！」

貴方も、貴方もそうなのね♡

愛憎は他ならぬ

人の宿業ですもの♡」

ニグラは嬉しげに笑う。

「ああっ……！ ニグラ……ニグラ……！」

愛しているよ……！ ニグラ……！ ニグラアツ！」

「イツセーちゃん……。」

嬉しい……。

私も愛していたのよ……？」

「えっ……!?!」

イツセーは驚愕した。

ニグラの口から発せられたのは  
今までとは真反対の言葉。

「う、嘘だっ!!」

「本当よ……」

でも、貴方はアーシアちゃんを選んだ……。

だから私は身を引いたの……。

貴方が幸せになってくれることを願って……。

でも、ダメだったわ……。

やっぱり私は貴方を諦められない……。

貴方を愛している……。

だから貴方が望むなら、

どんなことでもしてあげる……」

「ニグラ……」

イツセーは呆然とした。

「ね、来て……♡」

ニグラは脚を大きく広げ、

淫らな蜜壺の入り口を晒す。

「あ、ああ……」

イツセーは誘われるまま、

その花卉へと腰を沈めていく。

「んんんんん……♡」

ニグラはイツセーの全てを受け入れ、

彼の背中に腕を回す。

「ニグラ……!」

イツセーはニグラを抱き締め、

その唇を奪う。

「んん……♡」

二人は舌を絡め合い、唾液を交換し合う。

「ぶはあ……」

どう……??

大人のキスの味は……」

「うん……。」

甘くてしょっぱくて……最高だよ……」

「ふふ、嬉しい……。」

もつとしましょう……」

「う、うん……」

イツセーは再び口付けを交わす。

アーシアとの初夜が

ドス黒い靄に塗りつぶされていくのを

止めることはもはや出来ない。

(ニグラ……)

イツセーはニグラとの情事に没頭していった。

「くそおおおおお!!」

イツセーは絶叫しながら

遂にニグラの膣内にペニスを挿入する。

ニグラのそこは温かくぬめっていて、

とても心地良かった。

「んん……♡やっとなつになれたね……♡」

「う、動くぞ……!」

イツセーはニグラの太腿を掴み、

激しく抽送を開始する。

「どう……? 気持ちいいでしょう……?」

「ああ……! 凄い……! 凄いよ……!」

ニグラの言う通り、彼女の中はとも具合が良く、

気を抜くとすぐに果ててしまいそうだった。

ジリジリと身体の内側から

焼け焦げていくような感覚を覚える。

ニグラと繋がっている箇所から

快楽物質が分泌され、脳内で麻薬となって弾ける。

イツセーはその快感に溺れながら、

一心不乱に腰を振り続けた。

「あん……♡はあっ……♡」

ニグラは艶っぽい声を上げながら、  
イツセーのピストンを受け入れる。

二人の結合部からは、大量の愛液が流れ出ており  
ニグラの下腹部はまるで

妊婦のように膨らんできていた。

「あ、熱い……！ 熱くなってきた……！」

「ふふ……生まれる……！」

私たちの赤ちゃんが生まれるわ……！」

「うっ……！」

ニグラの言葉に興奮したのか、

イツセーのペニスに更に膨張する。

「くう……！ もう我慢できない……！ 出すよ……！」

「ええ……！ 私の中にいっぱい出して……」

貴方の力で……あの子を再誕させなさいなっ♡」

「う、ぐ、おおおっ！」

どびゅ！ びゅーっ！

ニグラの胎内に大量の精が放たれ、

子宮を満たしていく。

「あ、あ、ああっ！ 入ってくる……♡力が……♡

赤龍帝の子種が……♡」

ニグラはビクビクと痙攣し、

絶頂を迎える。

「は、はは……はははははー！」

イツセーは泣き笑いをしながら

ニグラを犯し続けていた。

「ああっ！ イク！

またイツちゃいます！ イツセーちゃん……！」

ニグラは背筋を仰け反らせ、全身を震わせる。

「お、俺もだ……！ 俺も出るよ……！」

「ええ、来て……。私の中でイツて……！」

「う、うううっ！」

イツセーは最後の力を振り絞り、己の子種を解き放つ。

ドピユツ!! ビュルルーツ!!

大量の白濁が注ぎ込まれ、

ニグラの腹が膨れ上がっていく。

そして、次の瞬間イツセーの脳へ

快樂以外の悍ましく冒瀆的な何かが流れ込んでいく。

わたしたちはつみをおかしました

きいろいすながふきあれるどくろのおか

はえのむれがぶんぶんぶん

いばらをふみつけてあざわらう

いぬやぶたのこえがきこえる

つみぶかいいなごたちが

いずみでぬかるみくさりはてる

ゆるされないゆるされない

ゆるされないゆるされない

のろわれてもしかたがない

のろわれてもしかたがない

のろわれてもしかたがない

のろわれてもしかたがない

『いい加減にしろ、この淫婦が!』

「いけないね、これは」

イツセーは一時的な狂気に吞まれ

自我を消失しかけていた。

【副王】様! それに二天龍!」

ニグラは驚愕の声を上げる。

『全く、おっぱいおっぱいと

馬鹿丸出しで喚いている内は

まだ馬鹿なりに可愛げがあったのだが……

何故いつも人間は滅びを選択する』



「滅びに至る門は、

広く、大きい。

その磁場に耐えうるものは

ごく僅かなのだらうね」

二天龍と呼ばれた存在の嘆息に

【副王】ゲイト・オールドワンも

哀しげに同調した。

『しかしこの小僧が今廃人に

なられては俺が困るし面白くない。

【副王】どうにかしろ』

「解ったよ。時の歩みを

ほんの少しずらしてみれば

何とかなるかもしれない」

「何ですって?」

「大丈夫。

君には危害を加えないさ。

君はただそこにいるだけで良い」

「……わかりました」

「うん、じゃあ始めようか」

ゲイトは右手を掲げると、

パチンと指を鳴らした。

すると時は巻き戻り因果が

ねじ曲がる。

「お、俺は何てことを……!」

あまりに興奮したためか

ニグラに挿入する前に

イツセーのモノは暴発。

魔法陣に彼の精液が飛びかかる。

そして興奮が醒めたイツセーに

津波の様に自己嫌悪と後悔が

押し寄せた。

(俺は何て馬鹿野郎なんだ！)

アーシアちゃんやリアス部長、  
まして安里の奴を裏切るような  
真似をして……！)

パンツ一丁のまま

イツセーは部屋を飛び出した。

「あん……もう……」

でも仕方がないわね。

【巨竜の頭】を咀嚼できただけ

良しとしましょうか」

寝そべるニグラの下腹部は

臨月の様に膨らみ、魔法陣が

光りだす。

「さあ、生まれ直しなさい。

『レイナーレ』」

ニグラはあの堕天使の

再誕を前に微笑む。

その笑みは慈母の様に優しかった。

↓

「安里！俺を殴ってくれ!!」

コイツ、パンイチでやってきたと

思ったら何言い出してんだ？

「どうしたんだよ、イツセー？

いきなりそんな事言われても……」

「いいから殴れー!」

ああ、そういうことか。

何となく想像がつくわ。

「よし、歯あ食い縛れよ!」

「おう!」

オレはイツセーのボディに

『燃える三眼』を発動させない様に

気をつけながら

全力で拳を叩き込んだ。

「これで満足か？」

「お……お前……こういう時は……」

うげ……、か、顔を殴るもんだろ……」

「いや、ダメージがキツイ方が

罪悪感が減るんじゃないかと」

いや、体験談でさ？

「安里サマ、厳しいスね」

ミツテルトが軽く引いていたが

まあ、それはそれ……。

しかしニグラさんが

保険医……。

駒王学園の風紀、大丈夫かな……？

※第8話（オリ主×レイナーレ 洗脳 触手攻め ア  
ナルセツクス）

（ば、バカな……。）

私は確かにあの時、

死んだ筈じゃ……）

レイナーレは自身の最期の時を

思い返していた。

リアス・グレモリーによって

自身の肉体はネフィリムに

融解され、

魂すら消失した筈なのに……？

今の自分の体には火傷どころか

鴻毛程の傷もない。

（一体……。）

何がどうなっているの？

とにかく、まずは総督様に……！！）

が、その時中に

二人の男女が入ってきた。

二人の顔には見覚えがある。

九頭竜安里に、九頭竜ナイア。

兵藤一誠と共に自分達の

野望を打ち砕いた

忌まわしい二人だ。

しかし、

これは好機であるともいえた。

この二人を始末して

安里の神器らしきあの片腕を

アザゼルに持ち帰れば

再起の機会を与えられるかも

しれない。

ならば、と勇んだレイナーレは  
先ずは安里の首を掻き切ろうと  
飛びかかろうとしたのだが……。

ぬにゆう♡

抱きついて自分の胸を

安里に擦りつけ、更に淫らに

その丸出しに近い臀部を

くねらせていく。

(ば、バカな……?)

な、何がどうなっているの……?)

激しく混乱するレイナーレだったが、

しかしそんな彼女を嘲笑うかのように、

彼女はまたも信じられない事態に遭遇する……。

「あぁっ!! いやぁっ!!」

尻たぶを触れられると

激しい悲鳴をあげて

抵抗しようとするレイナーレだが、

「ふふ……」

「ひいつ!」

ナイアが耳元で囁きかけると、

たちまち力が抜けてしまう。

へなへなとアヒル座り。

呆然としている彼女に

今度はナイアが語りかけた。

「あなたは自分の存在価値を

理解していないようですね。

あなたのような女は本来

転生もかなわぬ程滅却されて

然るべきなんです……。

まあ色んな意味で勿体ないから

我々の手で再利用する事に  
したんですよオ

「……………!!!」

愕然と目を見開くレイナーレ。

「そ、そんな……………」

「ふふふ、いい表情ですなえ。

あなたのその絶望に満ちた顔。

堪りませんねエ、ヒハハハハ！」

そう言つて

不敵に笑うナイアの傍らで、

安里は微妙な面持ちである。

しかしやがて彼は意を決すると、

レイナーレに向かって

一歩踏み出す。

「ち……………近寄るな！」

近寄らないで！」

言葉の勢いまで失うほど

怯える彼女に対し、

安里は彼女の身体を弄る。

「い、嫌よ！ 絶対にイヤッ！」

人間如きに高潔な私の身体を……………！」

必死の形相で拒絶の意思を示す

レイナーレであったが、

安里の指が肌に触れた途端、

彼女の意思に反して

全身に甘い感覚が生じ始める。

「ああんっ……………いやあああっ！」

はあああくっ！」

身をくねらせて悶えるレイナーレ。

その美貌が悩ましく歪む。

そして彼女の股間からは

熱い愛液が大量に溢れ出してくる。

(嬉しい…………)

(欲しい…………)

(早く…………私を抱いて…………)

(安里様に奉仕する事が

私の存在理由…………)

脳裏に響く声を振り払おうとするものの、最早それは不可能なまでに強まっていた。

それは糸から紐、

十重二十重の鎖となって

レイナーレの精神を呪縛し

淫欲の沼底へと引きずり込む。

「い、いやあ…………嫌なはずなのに…………

嫌じゃない…………♡♡♡」

「声まで蕩かせて情けないったら

ありませんねエ、レイナーレ」

妖艶な笑みを浮かべながら

レイナーレに歩み寄り、負けず劣らずに

稔る自らの乳房をレイナーレの

乳房へと押し当てていく。

互いの乳首が擦れ合い、甘い痺れを感じてしまう。

「ひゃうんっ！ ダメえっ……………！

おっぱい擦れて気持ちいいのお……………！」

「あらあら、すっかり牝犬の貌になっていますねエ。

ほら、待望のクソ虫にしては

規格外の鬼チンポが来ましたよ♡」

安里のペニスに指を這わせながら

ナイアは嘯く。

「ああ…………嫌あ…………人間のチンポなんて…………

チンポなんてえ…………♡

雄臭くて…………最低え…………♡」

「顔とマンコドロドロにして

ケツ肉震わせても説得力無エんだよ  
淫売墮天使がア！」

「んぎっ……痛……ぎもちいい〜！」

ナイアが恫喝するなり

彼女のクリトリスをペンチで

捻るかの様にして刺激しながら、

ナイアは唇を重ねる。

舌を絡め合う度にレイナーレの

口から切なげな喘ぎが漏れ、腰が震える。

「んちゅっ……んふうっ……」

んんっ……んふっ……♡」

既にレイナーレの意識の大半は

快楽に支配されており、抵抗する気力が

愛液と共に漏れ出していた。

「さあ、それじゃあ早速頂いちゃいましょうかねえ？」

「いや、いきなりはちよつと……」

「へえ〜……クソ虫くんは

レイナーレちゃんを

ハエが集るみてーにグズグズに

ノーミソ腐らせて

身も心も専用雌犬に墮とすのが

好きなんですネエ」

「いや……そこまで

アレな感じじゃないんだが……。

どうせなら

レイナーレも

気持ち良い方がいいだろ？」

捻られて赤らんだクリトリスを

安里は優しく撫でる。

「はっつっつっつっつー」



ビクンツ！ 身体を大きく仰け反らせる  
レイナーレ。

その反応に満足したのか、  
今度は強く握り締める。

「ひいひいっー」

「ほら、こうして握るとコリコリって  
硬くなって可愛いぜ？

お前のココはもう俺のモノなんだからな。  
しっかり可愛がらないとな……」

「あ……あ……あ……」

安里の言葉に、レイナーレは  
身体を痙攣させるばかりであった。

「許して……ああ……許して……」

許してええ……私……ああ、

私……ホントは男を知らないの……。

初めてなの……だから……お願い……。

ああ、こんなの耐えられないわ……

ああ……ああ……！」

凌辱への恐怖に彼女の自負心や  
高慢な態度は脆く崩れ去り、  
彼女は涙を浮かべて哀願する。

「ハハハハハ！ 聞きました

ミツテルト？

この女イツセー君のデートを

笑いものにしておきながら

処女ビッチですってよ！

マジヤバくねえ？」

「うわー引くわー……」。

元上司ながら引くツスわー……。

っーかウチのボスも

何やってたんすかねえ。

こんなド変態を放置しておくなんて」

「いや、この変態で厚遇は

無理でしょ」

「ですよね」

「いやあ………！」

いやああああああああ!!!!

殺して………！ もう殺してよお！

私は純潔を、アザゼル様に

捧げたかっただけなのに………」

涙を流して絶叫するレイナーレ。

そんな彼女を嘲笑いながら

ナイアが言う。

「あーあー、泣いちゃいましたよ

泣けば許されるとか駄々っ子

じゃないんですからもう」

「でもレイナーレ、アンタ、

自分の事しか考えてないツスよねエ。

あの時、アジアちゃんを

殺そうとしたのは誰だったっけ？」

「それは………」

「それにさあ、

アジアちゃんの神器を取り上げたりさあ」

「………」

「結局さあ、自分さえ良ければいいんでしょう？」

「違う！ それは………」

嘗ての部下からの糾弾に

レイナーレは反論できない。

「まあいいよ。

お前もこれからは

俺達の仲間になるんだからさ」

安里はそう言つてズボンを脱ぐと

既に勃起しているペニスを

レイナーレの目の前に差し出す。

それを目にした瞬間、

彼女の意識は真っ白になり、

次の瞬間には口の中に含んでいた。

安里のペニスは太く、長く、そして熱かった。

(ああ……凄い……臭い……)

彼女の意識は快楽で満たされていた。

ナイアの指が乳首を摘み、捻る。

「んふうっ！」

ミツテルトの指が彼女の

穢れない花弁を弄っていく。

「ああっ！　そこは駄目え！」

「あらら？　ここは正直みたいですわねえ。

じゃあもつと虐めてあげます♡」

「ウチもやるツス♡」

(ひいっ！　いやああああ!!)

二人の責めは激しさを増していく。

まるで熟練の職人が氷塊から

彫像を生み出すかのように丁寧に、

丹念に堕天使の肉体を愛撫していく。

ナイアの指がレイナーレの乳房に沈み込み、

揉む度に彼女の口から

甘い吐息が漏れるとその呼気が

安里のペニスを刺激する。

「んふう……ちゅぷ……んん……」

「おい、レイナーレ、そろそろ行くぞ」

「んんんん!？」

レイナーレの口に大量の精液が流れ込む。

同時にミツテルトの手が

彼女のクリトリスを強く捻った。

「あひいいいいいい!!!」

ビクンツ！ ビクンツ！

レイナーレは絶頂を迎え、

秘所から勢いよく潮を吹き出した。

「ハハハ、イツたか。」

「どうだ？ 気持ち良かったか？」

「あ……あ……」

「返事が聞こえませんか？」

「ひっ！」

「き、気持ちよかったです……！」

「ホントツスかあ？」

「助かりたいと思って

テキトー吹かしてませんか？」

「ほ、本当です！」

「それならいいツスけど……」

「じゃあ安里サマに処女を

捧げるのもヘーキッスよね？」

「そ、それは……」

ミツテルトの言葉にレイナーレは

思わず言い淀んでしまう。

そんな彼女を見てミツテルトは

ニヤリと笑みを浮かべた。

ミツテルトが安里の方を見ると彼は

ミツテルトの視線の意味を理解し

コクンと小さくうなずいた。

「解った。レイナーレ。」

「お前の初めてを奪うのは

やめてやるよ」

「あ……ありがとうございます」

「ホッとした様子を見せるレイナーレ。

だが安里は更に言葉を続ける。

その口調は酷く冷淡なものとなっていた。  
安里が手の甲をレイナーレに  
向けると彼の片手が徐々に  
解れていく。

彼の片手はまるでイソギンチャク  
の様に触手へと変化し、

彼女の成熟した女体を絡め取っていった。

それは淫猥ながらも

おぞましい光景であった。

やがてレイナーレの身体に変化が現れる。

肌の色艶が良くなり

全身から汗が吹き出し、妖しく輝く。

レイナーレは自分の変化に戸惑う

しかなかった。

「こ、これは一体どういう事ですか？」

「今からお前は俺の女になるんだよ。

嬉しいだろう？」

「そんなっ、嫌っ！ 私にはアザゼル様が……」

「あ、アザゼル様なら

アンタが安里サマの

女になるのは了承済みっすよ

てゆうか誰だよその墮天使って

言ってたっす」

「う、嘘よ！ そんな事……」

ミツテルトの告げた言葉に

レイナーレは動揺を隠せない。

確かに彼女はアーシアの神器を奪おうとした。

アーシアを殺そうとした。

それは紛れもない真実であるし、

彼女の犯した罪は決して消える事はないだろう。

それでも、彼女は信じたかったのだ。

あの優しい上司が自分を裏切るなど  
あり得ないという事を。

だが現実是非情であり、

彼女が慕っていた上司は既に

彼女の元を離れてしまっていた。

(私は、どうすれば良いの?)

こんな下等な人間のペット扱いで

終わってしまうの……?

嫌……嫌よ……何とかここから

脱出しないと……!)

焦燥感を募らせる彼女に追い打ちを

かけるようにミツテルトが口を開く。

「大丈夫ツスよ。

意地とか墮天使のプライドとか

そんなくっだらねえモンは

安里サマの触手がこそぎ落として

くれますからね。

そのままうちと同じく

安里サマのペットになれば無問題じゃね?」

ミツテルトの言葉に

レイナーレの精神は追い詰められていく。

既に彼女の肉体は完全に安里の虜になっており、

快楽を求めて疼いている。

(ダメ……耐えないと……)

ここで屈したらもう戻れない。

そうなったら、本当に終わりよ)

「行くぞ」

それは処刑宣告かあるいは

救済の福音だったのか。

安里の触手はまずブラシ代わりに

レイナーレの全身を愛撫していく。

「あっ♡あっ♡あひっ♡あひい♡」

「あらあら、

あっさり蕩けちゃいましたねエ？」

ナイアの言葉通り、

レイナーレの顔は快感に歪み、

口からはだらしない

喘ぎ声が漏れている。

「アハッ♪ まじヤバいっしょ？」

全身の毛穴がオマ○コになって

潮を吹く様な……

脳みそぶっ飛ぶっしょ？」

「んふう……んん……」

ちゅぷ……じゅるるるるるるるる!!」

「おいおい……触手をがっつり

啜えても何も出ないんだけどな」

安里の触手に対し、一心に

自分の口にて奉仕する

レイナーレ。

そんな彼女をミッテルトと

ナイアはニヤニヤした

表情で見つめていた。

そしてレイナーレの身体が

完全に安里のものとなった時、

ミッテルトは言った。

「お前は今日から安里サマの

性処理係兼戦闘要員ツス。

精々頑張つて媚びるツスよ？」

ミッテルトの言葉にレイナーレは

動物の様に頷き尻を縦にぶんぶん、と振る。

「ハハハ、口じゃなくて

ケツで返事してますね

「この変態処女ビッチ」

(ああ……)

私、酷いこと言われてる……。

でも、仕方ないじゃない♡

安里様のお触手チ○ポ、

じゅぽじゅぽ奉仕しなくちや

いけないんだものお……♡♡♡)

ナイアの嘲笑すら今の

レイナーレにはさながら

賛美歌のコーラスに聴こえる。

肉体は完全に、精神は完全に

逸脱者に屈服してしまったのだ。

「ほら、お前の大好きな

俺の触手だぞ。しっかりと味わえな」

「んぶっ……んぶううう♡♡♡」

「あーあ。

すっかり触手中毒ツスね。

ま、これからはずっと一緒なんで

安里サマにずーっと

尽くしましょうね」

「ああ……。

ありがとうございます。

私、一生懸命ご奉仕しますう……」

堕ちたレイナーレは安里に抱きつき、

舌を絡ませていく。

もはやかつての上司に対する

敬意など微塵もなかった。

「安里サマ、

そろそろ其奴だけ

じゃなくて……♡」

喜々としてミツテルトは



己の意志によつて服を脱いでゆく。  
レイナーレやナイアに比べれば  
胸は慎ましいものの、  
その分引き締まった  
肢体は健康的で美しい。

その美しい裸体に鳥の8対の翼は  
実に倒錯的なバランスであつた。

「貴方……その翼はあ……♡」

中級は勿論、上級でも屈指の翼の  
数を見てレイナーレの目が  
見開かれた。

「ふふふ、そうツスよ。」

ニグラお姉様や安里サマに  
愛していただいたらいつの間にか

こんな風になつたんスよ♪」

ミツテルトが言う様に

ミツテルトの背中にある

漆黒の八枚の翼は安里が愛した結果、  
このような形状へと変質した。

「ああ……じゃあ、私も……」

これほどの力を手にすることが  
できるのだろうか、と思うだけで  
子宮が熱くなる。

「ああ、待つて……！」

待つて……下さい!!」

同じ言葉だが初めの時とは

意味がまるで正反対。

拒絶ではなく懇願であつた。

しゆるしゆると、秘所へと

細い触手が光を求める鳶の様に  
伸びてゆく。

「ああ……はああ……♡」

期待と高揚により、

レイナーレはリンボーダンスの  
様に腰を浮かせ、

足をガクつかせる。

そんな彼女に

安里は不敵に告げる。

「じゃあ、行くぞ?」

「はい……♡来て来て来て……♡♡♡」

レイナーレは甘い声で応える。

そして遂に安里の触手が

レイナーレの処女子宮に……。

ではなく肛門へと差し込まれた。

「んほおおっ!?!」

予想外の刺激にレイナーレは

目を見開き、絶叫する。

「はは、凄い悲鳴スね。」

とんだ初体験になりましたけど

感想は?」

髪をぐい、と引つ張り

ながらミツテルトが問う。

「あひいっ♡」

わ、私♡

私もう狂っちゃいましたあ♡♡♡

安里さまあ♡

どうか私をもっと虐めて下さあいつ!!

この変態マゾ豚の

レイナーレをもっと苛めてくださいいっく!!!!

自らを貶める事すら快感となり、

レイナーレは激しく身悶えする。

「そうか、凄いなレイナーレは」

安里はレイナーレを褒めるが、

「ああ、ありがとうございませすっ♡嬉しいですう……♡」

頑張ってケツ穴締めませすう♡」

レイナーレは嬉しさのあまり、

更に尻の穴に力を入れていく。

「んんんんんんん♡♡♡」

「くっくっく、

尻の穴で感じてるのか？

この変態。こんな変態に

笑いものにされたと知ったら

イツセーも怒るだろうな」

安里はそう言ってレイナーレを

嘲笑う。

「ああ……申し訳ありません♡

私みたいなゴミ虫が

貴方様を笑ったなんて……。

罰して下さい♡

どんな償いでもしますう♡」

「罰っていうのはこういう事か？」

触手の鞭が軽くしなり、

赤く熱るレイナーレの尻たぶに

振り落とされる。

「い、痛あい♡」

「あのな、幸せそうな顔で

痛いなんて言うなよ。

罰にならないだろ？」

今度はレイナーレの頬を優しく撫でる。

「はい……。ごめんなさい。

私、悪い子でした……。

ご主人様、安里様あ……。

私をもっと叱って下さい……」

「ああ、お前は俺の仲間だからな。

たつぷり可愛がつてやるから安心しろ」

「は、はい……♡」

レイナーレは歓喜の声を上げる。

(ああ……♡)

私はなんて

愚かだったのだろう……♡)

安里による責めは

本来ならとても耐えられるものではない。

だが今のレイナーレにとっては

それこそが最高の快樂であった。

「あはっ♡あははあ♡

あははあ♡♡♡」

安里の触手が動く度にレイナーレは

艶やかな声で喘ぎ、美しい裸体を淫らによじらせる。

その表情はまさに幸福そのもの。

かつての禍々しくも

凛々しい姿など見る影もない。

そんな彼女を安里は己の所有物だと

誇示するかの如く、己の体液で汚すのだ。

「ああっ！ あああああんんっ!!

イクッ！ イキますっ！

ああ……またイツちやいますうっ!!」

ビクンッ！ と身体を大きく仰け反らせ、

レイナーレは絶頂を迎える。

「おい、誰が休んで良いと言った？

まだ始まったばかりなんだぜ？」

安里は冷たく言い放つ。

「あ、ああ……申し訳ありません。

わ、私のいやらしい

ケツ穴をお好きにだけお使いくださいませ……♡」

四つん這いになったまま安里の方へと尻を突き出す。

「ああ、俺も一度興味があつたんだ……」

がしつ、と虎バサミの様に

彼の両手がレイナーレの腰を掴む。

「ひゃうんっ♡」

そして安里は指先をぐい、と広げ

そのまま肛門へと挿入した。

「んほおおっ！

ケツ穴広がってるっ!!

ケツ穴広がっちゃいましゅうううく!!」

尻穴拡張の激痛快感に

レイナーレは目を見開き、絶叫する。

「凄いな。

こんなに簡単に広がるなんて……。

実は前から

広げてたんじやないか？」

安里はレイナーレの

尻を撫でながら感嘆の声を漏らす。

「そ、それは……♡」

レイナーレは顔を赤らめ、口籠る。

処女である引け目からか

そちらの方では数多の

経験を積んでいたのかもしれない。

「ふん、まあいいや。

これからは俺が可愛がってやるからな」

「は、はいい♡♡♡」

レイナーレは甘えた声を出し

自らの律動によって肛内を

かき回される快感に酔い痴れる。

「本当に気持ち良さそうだな」

安里は満足げに笑いつつ

レイナーレの尻穴を激しく犯す。

「はいっ♡ケツ穴最高ですうっ!!」

もっと激しく突いてくだしゃいっ!!」

「そうか、じゃあ望み通りにしてやるよ」

「あはあっ♡♡♡♡」

ズブウツ、と音を立てて

安里のペニスが根元まで挿入される。

「ああっ♡♡♡♡」

腸壁を擦り上げられる刺激に

レイナーレは再び絶頂を迎えてしまう。

「おいおいレイナーレ。」

もう何回目だ？

ケツアクメキメるのが

そんなにいいのか？」

「はいい♡私はケツ穴奴隷なんですうっ!!」

ケツ穴好きの変態女なおっ!!」

安里の言葉攻めにもレイナーレは

喜悦の表情で答える。

その瞳にはもはや光はなく、

完全に安里の虜となっていた。

既にレイナーレにとって安里の命令は絶対であり

彼に抱かれる事こそ至上の喜びであった。

そして快樂のみでなく

嘗て求めていた力をも得られる。

今やレイナーレは名実ともに安里の忠実な下僕なのだ。

「くっ……そろそろ……出すぞー!」

「ああ……私もイキます!」

イツちやいますうううっ!!!」

びゅるるるるっ!! どびゅーっ!!

安里の精液がレイナーレの腸内に注がれ、

同時に彼女も絶頂を迎えた。

が、変化はそれだけではない。  
文字通り彼の精液がレイナーレの  
五臓六腑に浸透し、血肉となっていくような感覚に  
彼女はこの上ない幸福を感じていた。

## ライザー編

### 第9話

ここは冥界の一角にして

フェニックス家の屋敷。

その次期当主にして

リアス・グレモリーの婚約者である

ライザー・フェニックスは

とある美女と睦み合っていた。

相手は彼の眷属のユーベルーナで

あった。

「ふ、ん……」

「ああっ！」

ライザーがユーベルーナに

覆い被さりながら腰を動かすと、

彼女は艶かしい声を上げる。

ライザーはこの女を

心底愛していた。

彼女も自分に惚れているし、

何より身体の相性が良い。

フェニックス家は名門貴族ではあるが、

代々政略結婚が多くて

恋愛結婚は殆どない。

その為、このユーベルーナとは

運命的な出会いだっただけとも言えるだろう。

そして、二人はお互いを求め合い、

絶頂へと昇っていく。

「出すぞー！ ユーベルーナ!!」

「来て……私の中を満たして!!」

ライザーはユーベルーナの中に



大量の精液を流し込んだ。

それと同時にユーベルーナもまた達したようで

ビクビクツツと痙攣している。

そして暫くしてライザーは一息つく

ユーベルーナから自分のモノを引き抜いた。

するとそこから

白濁とした液体が流れ出る。

「ふう……。気持ち良かったぜ」

「私もです……ライザー様♡」

そう言って二人はキスをする。

出来ることならば

このまま時が止まれば良い。

だがそんな願いは叶わない。

炎はいつか燻り、陰る。

風はいつか澱み、止まる。

時はいつだつて無情だ。

「お悩み事ですか……ライザー様」

ベッドにねそべるユーベルーナは

身体をむくりと起こし、

彼女に背を向けてベッドに座る

ライザーの背に

しなだれかかりながら言う。

その表情は夫の重荷を

少しでも担ぐ様な良妻のそれ。

「ああ……まあ、な」

ライザーはその問いには答えず

ただ一言だけ返した。

しかしそれで充分であった。

ユーベルーナはそれを察する。

「あの男のことですね？」

ライザーは何も言わない。

だがそれが肯定の意を示していた。

ユーベルーナはそれを見て微笑む。

「ご安心ください。」

私はどんなことがあっても

貴方のお側にいますわ」

「……すまないな。」

いつもお前には損な役目ばかり

押し付けてしまう」

ユーベルーナの言葉に

ライザーは感謝しながら

再び窓の外を見る。

そこには月があつた。

その光はとても優しく見えた。

（俺はまだ迷っているのか？）

俺は一体どうすればいいんだ？）

ライザーは自分の心の迷いを

振り払うように目を閉じた。

」

「……」

「……」

「……」

どうも、九頭竜安里です。

はぐれ悪魔討伐の件で

話に来たんですが

オカルト研究部の雰囲気は妙です。

というか最悪だ！

なんだこの氷結地獄みたいな空気！

誰かなんとかしてくれよ！

「えつと……今日は何用で？」

とりあえず、

部長さんに聞いてみることにする。

ちなみに朱乃さんの話では

アジアとイツセーは遅刻らしい。

「珍しいツスねあの二人が

遅刻なんて。何かあつたんスか？」

「そんな事貴方に関係ないわ」

こ、コワイ！

リアス先輩マジで怖い！

紅髪の殲滅姫モードで

こつちを睨まないでくれよ！

俺ははぐれ悪魔じゃなくて

貴方の同盟相手である

ゲイトの旦那の部下なの！

いわば出向社員だから！

「いや、でも……」

「関係ないと言っているでしょう!？」

……ダメだこれ。

完全に聞く耳を持ってくれない。

「木場、どういう事なの？」

「それより安里君。

君は墮天使たちと付き合いが

ある様だけど……あまり

関わらない方が君のためだよ」

「おい、祐斗！

お前何を言っているんだ！」

「……………」

木場の奴、

何を言いたいんだよ。

珍しく冷たい残酷な目だった。

それにしても、

なんだろうこの感じ。  
何か嫌な予感がする。

「ふふ、アーシアちゃんと  
イツセー君が深い関係なのは  
公然ですもの。」

この間は部室のシャワールームで  
あんなことやこんなことを  
していた様ですわ。

仲良き事は美しきかな。  
うふふふふ」

「……」

朱乃さんは妖艶に笑いながら  
そう言った。

彼奴等そんな事してたの!?  
時と場所を考えろよ!

「いや、

やりたい盛りの蜜蜂イツセー君の  
眼の前に箱入り娘がいたら  
そりやそうなりますよって話。

高嶺の花より近くの蓮華草。  
男のサガですなあ」

ナイアの奴がなんか煽ってるし。  
っていうかお前性別上は女だろ。

「それにですよオ。

昔のローマじや奴隷同士の  
結婚は合法だったし。

眷属同士の子供なら  
当然生まれついての眷属。  
英才教育を叩き込んで

尖兵にするか、  
あるいは冥界版

光源氏計画なんてのも  
いいじゃないですかあ？」

「……下衆な女ね。」

ゲイトさんがどうして貴方を  
側近にしているのか

理解に苦しむわ」

「人手不足が深刻なんですよウチ」

リアス先輩は嫌悪感丸出しで

ナイアへと吐き捨てる様に言う。

まあ確かに俺もそう思わんでは

ないけどなあ……。

レイナーレとミツテルトの

ふたりはある意味頼れるけど

木場と朱乃さんは堕天使嫌いだし

イツセーとアーシアちゃんに

レイナーレを会わせるのも

気まずいし……。

と、その辺りでイツセーと

アーシアちゃんの二人が

部室に入ってきた。

「すいません、遅れました！」

「イツセー……最近部室への遅刻が

多いようだけれど……

どういうつもりかしら？」

「す、すみません部長……」

「言い訳は聞きたくないわ。」

貴方は私の大切な眷属の一人なの。

それなのに……一体どういうことなの？」

何だかパワハラの現場に

居合わせている気分だ……精神的に辛い。

下級の眷属は解体するとか言い出したらどうしよう。

「これでは貴方の処遇について  
少し考えなければならぬわね……

場合によっては……」

「す、すみませんでした!!」

イツセーは深々と

頭を下げて謝った。

「まあまあ、いいじゃないか。

許してやれよリアス」

すると炎が巻き起こり、

何かチャライホストみてーな

奴が現れた。誰だろう？

身なりからして金持ちっぽいが。

「フェニックス家の三男坊……。

ライザー・フェニックス……。

部長の婚約者……です」

小猫ちゃんが

そつと俺に解説してくれた。

しかし小猫ちゃん、

リアスさんの婚約者を三男坊つて。

しかも呼び捨てつて。

「久しぶりだな、リアス。

会いたかったぜ」

「私は会いたくなかったけどね、

ライザー」

「おいおい、つれないことを言うんじゃないよ。

俺たちは婚約者同士なんだ。

もつと再会の喜びを分かち合おうぜ？」

そう言つてライザーは

リアス先輩の肩に手を回して

髪を撫でる。

「ちよつと、離してちようだい」

「いいじゃないか。」

別に減るもんでなし」

「……」

「おお怖い怖い。」

相変わらずお転婆なお姫様だな。

だが、そこがまた可愛いんだがな」

何か一々所作が

芝居くさいんだけど

金持ちつて皆こうなの？

それとも三男坊だけ？

「おい、そこの下民」

ライザーは俺の方を向き、

指差した。

「お前が九頭竜安里とかいう

はぐれ悪魔のなり損ないか？」

「いや、悪魔じゃないし」

俺は手を振って即座に否定するが

三男坊は鼻で笑った。

「ハッ！ どうせ堕天使と

つるんでいる様な連中は

ろくでもない屑ばかりさ。

そんなのと一緒にいるんだ。

お前も同類だろ？ 違うか？」

「……」

「黙るなよ。」

凶星だから何も言えないのか？

情けない奴め。

大方お前みたいな奴は

『はぐれ悪魔狩り』すら

満足に出来ないんだろ？

全く……お前ら無能共は

本当に使えないクズどもだ。  
俺達上級貴族がいるからこそ

この学園や人間界を

支配できているというのに……。

その事実すら認識できないとはな」

「安里君は部長の……」

ひいてはグレモリー家の食客です。

先の墮天使との一件でも

功績をあげた彼を侮辱するのは

やめてくださいますか」

話してもムダだなと思って

黙っていたら

木場が冷たい視線を向けながら

口を開いた。

お前、本当にいい奴だな。

「ふん、下級の成り上がり風情が

調子に乗るなって話だ。

お前らのご主人サマがどれだけ偉いか知らんが、

いずれはこのフェニックス家の

次期当主である

このライザー・フェニックスが直々に討滅してやる」

え、なに言ってるのこの人。

コワ……。

そんな無茶苦茶通るとか

冥界の法律どうなっているの？

っーかゲイトさんが負ける

ビジョンが

何となく想像できねえけど。

「おーおー、好き勝手言いなされる。

次期当主の器量が伺えますなあ」

そこでソファに座っていた



ナイアが漸く口を開いた。

よし、今回に限っては

お前の煽りスキル発揮ヨシ！

言ったら言ったら！

「と、言うかフェニックス家自体

元々秘薬フェニックスの涙の原料である

ルルドの泉を掘り当てた

俄成金の家でしょうに。

確か、

初代のライザー・フェニックスが

フェニックスの涙を体制型に

ばら撒いた功績で爵位を貰えたと

聞いた覚えがありますけど？

いやーフェニックス家って

自分が肥えるために先祖の頃から

他人には死と滅びを齎す

ウイルスみたいな

家なんですわねー」

「……ッ!! 貴様ア!!」

俺のみでなく同じ名の始祖を

愚弄する気かあッ!!」

誰がそこまで煽れと言った……。

ナイアの服の襟首を掴み、

ライザーは痠筋を震わせる。

「御一方共そこまで。」

ナイア様も声が高すぎます」

その時メイドさんが現れて

ライザーに告げる。

声が高いつて……否定はしないのか。

「……見苦しい所をお見せした」

ライザーは舌打ちしながら

渋々とナイアから手を離す。

あれ？ あのメイドさんの方が  
立場が上なのかな？

「ライザー様、

ネフレン様がお待ちです。」

これ以上待たせるのは失礼です」

「……ああ、そうだな。」

今日のところはこれくらいにしておいてやる。

リアス、近いうちに迎えに行く。

それまで身辺を整えておけ」

「結構よ。私は貴方と結婚するつもりはないわ」

「まあ、そう言うなよ。」

俺はお前を幸せにする自信がある」

「私は不幸になる自信しかないわ」

「ふっ、照れるなよ。」

お前の気持ちはよく分かっている」

そう言っただけライザーは再びリアス先輩の肩に手を回す。

そして顔を近づけ、

キスをしようとした。

「ちよ、ちよっとライザー!?!」

リアス先輩も流石に慌てるが、

ライザーは構わず続ける。

だが次の瞬間、ライザーの顔面に強烈な右ストレートが……  
当たらなかった。

「……これは何の真似かな下僕君」

「部長から離れるよクソ野郎!」

勿論拳を放ったのは

イツセーだった。

ライザーの顔スレスレで

拳は掌で止められていたのだ。

「おいおい、いきなり殴りかかるなんて

どういうつもりだ？

まさか、俺がお前のご主人様にご主人様に手を出すと思ったのか？  
だとしたら心外だな。

俺はお前のご主人サマにも惚れているんだぜ？」

「嘘つけ！ お前はただ単にハーレム要員を増やしたいだけだろ！

それにお前なんか部長に触れるんじゃないやねえ！ 汚らわしいんだよ  
！」

イツセーは遙か格上のライザーに

堂々と吠え立てた。

同じ立場だったら果たして

俺に同じ事が出来るだろうか……!?

「ハッハッハ、元気のいい奴だ。

そういう奴は嫌いじゃない。

だがな、お前は少し身の程を知った方がいいぞ？

お前みたいな雑魚が

この俺に楯突いてタダで済むと思ってるのか？

それとも俺が誰なのか知らないのか？

俺は泣く子も黙るフェニックス家の……」

「知ってるぞ。さっき聞いたよ！

だけどな！ 貴族とか平民だの話じゃねえ！

部長はお前の様なクソ野郎には相応しくない。

だから絶対に渡すもんか！

部長はお前みたいに下衆な男に堕ちたりしない！

部長に相応しい男は

もつと強くて優しくてカッコいい奴なんだからな!!」

「……ほう？」

イツセーの言葉を聞いた

ライザーがニヤリと笑みを浮かべた。

「中々嬉しいことを言ってくれるじゃないの

この下僕クンは」

「ちげーよー！

人の話聞いてたのか！」

三男坊、

自分の家名への煽り以外には  
強いのかな……。

と遠巻きに見ていたのも束の間。

「止めなさいイツセー。」

私に恥をかかせるつもり！」

ええ!?

まさかりアスさんがイツセーを

咎めた!?

基本ゲロ甘だったのに!?

「そ、そんな……!?!」

俺はただ……!」

イツセーは明らかにシヨツクを

受けていた。

俺でさえ意外だったんだから

イツセーにすりやシヨツクは

めっちゃ大きいよな……。

するとライザーはイツセーから

手を離し、同時にリアスさんからも

するりと離れた。

「お前達のような低俗な輩には

想像できないだろうが、

貴族の結婚とは

家と家を繋ぐものだ。

本人達の感情など関係ない。

ましてや俺は次期当主となる者。

その妻になる者は、

即ち一族の女帝となるべく教育される。

そこに愛や恋といったものは

必要とされない。

俺達は政略結婚し、  
子を産んで育てる。

それが貴族の在り方であり、  
駒としての役割なのだ」

「そのどっこに幸せがあるんだよ！

そんなもん

サラブレッドと思い込んでる

家畜じゃねえか！ ふざけんな!!」

「……お前は

本当に面白いやつだな下僕クン。

だが、フェニックス家を

侮辱してただとすむとは思うなよ?」

「……ライザー！ 貴方、

まさかイツセーを殺す気!？」

リアスさんの顔色が変わった。

流石にそれは俺も看過できんぜ

三男坊よ。

「安心しろ。殺しはしない。

飽くまで決闘の形だ。

不幸な事故は起こる可能性までは

否定できんがな」

「望む所だ！ お前みたいな

ゲス野郎に俺は負けない!」

「ふん、威勢だけは一人前だな」

……こりやマジでヤバいかもな。

「止めるイツセー君！

君がどうあがいても

勝てる相手じゃない!

殺されるぞ本当に!」

木場が必死になって

イツセーを止めようとする。

と、そこでナイアが割って入る。

「そうだ。こうしましょう。」

部下の責任は主の責任ですからね

ここはレーティングゲームで

決着をつけませんか？」

「気は確かか女？」

俺のチームは8勝2敗の上に

その内の2敗は諸事情あつての

ものだ。だが、

リアスのところはまだ一度も公式戦を行っていない。

その時点で既に

チームの実力差は明白だ」

そう、リアスチームはまだ

公式試合に出たことがない。

ライザーの言う通りだ。

「まあそれもそうなので、

私達もリアスチームに

ゲストとして参加して

戦うという事でどうでしょう？

これなら戦力の差も

埋まると思いますが？

貴方たちが負けても

これなら言い訳が立つでしょ」

「ほぐくなよこの売女が……」

「フェニックスというか72柱家がそれ言えます?..」

確かにそれなら

多少はマシかも知れんが……。

でも、それでも圧倒的に

不利であることに変わりはない。

「お待ちなさいな!」

こちらにとって何のメリットも

ありませんわ！ そのの  
なんちやつてシスター！

取引の言葉の意味を辞書で  
調べてから出直してらっしゃい！」

いつの間にやらライザーの側に

金髪縦ロールのいかにもな

お嬢様が立っていた。

あ、これはあれか。

悪役令嬢の類か？

「誰が悪役令嬢ですよ！」

私はレイヴェル・フェニックス。

そちらの無礼者は

一体どなたでいらつしやいました？」

しまった、また無意識の内に

言葉が出た……。

件のお嬢様は俺をキツイ目で

睨んでいた。

「ああ、こいつは九頭竜安里。

先祖代々由緒正しい昆虫ですハイ」

「平民にしとけよそこは！」

お前も同姓なんだから

昆虫になるだろうが！」

「あ、そうでした。てへ☆ぺろ」

思わずツツコミを入れてしまった。

「ええい！ 黙りなさい下郎姉弟！」

貴方たちのような下賤な者に

高貴なる私が話し掛けているだけでも

ありがたく思いなさい！」

「そっちが何者だって

聞いたんじゃねえかよ……」

俺は呆れながら呟いた。

あと俺は弟って扱いなのか……。

「そう怒るなレイヴェル……。

では俺達が勝った場合は

リアスを俺の嫁として貰う。

そしてゆくゆくは

俺の子供を生んでもらう。

それでいいな？」

「ええ。構わないわ」

リアスさん即答!?

ちよっ……!!

そういう人生の一大事は

周りと相談しないと……。

「ふふ、リアスがああなったら

梃子でも動きませんわ」

朱乃さんが微笑みながら言った。

「さて、これで決まりですね。

では、ごきげんよう皆さま方。

あとその下民、今度会った時は

必ず跪かせてさしあげますわ!」

そう言ってお嬢様は去っていった。

なんで俺だけ下民呼ばわりなんだ……。

「さあ、ゲームは一週間後だ。

せいぜいそれまでに強くなれよ。

特に下僕クン」

こうして、ライザーとの

一件は持ち越しとなった。

しかし。俺達レーティングゲームに

関しては完全に素人なんだけど。

どうすんのかね……。

「特訓……しかないわね!」

部長が力強く宣言した。



「……はい？」

「だから、私達は個人としては

ともかくチームとしては弱いの！

このままじゃとてもじゃないけど

ライザーには勝てない！

そこで、イツセーは悪魔しての

基礎能力の向上、祐斗と小猫は

戦闘技術の向上を目指して

修行するのよ！

あと安里君……貴方は神器の

使い方を本格的に覚えなさいけないわね」

「分かりました部長！

この命に代えても強くなつて

アイツをぶっ倒します！」

「俺も参加するの!?!」

イツセーは燃えていた。

コイツ一旦やる気出すと

とことん突っ走るモンな。

「あの、俺はバイトが……」

「休みなさいな。辰郎さんには

私から話しておくから」

笑顔で言われた。

「いや、流石にそれはちょっと

「ダメよ」

有無を言わさず却下された。

これだから上流階級は。

「まあ頑張つて下さいよ」

「何言っているのナイアさん。

貴方も私達と

連携の訓練をするのよ?」

「えー……」

嫌そうな声を出すな。

「……よろしくお願いします」

結局、押し切られた。

こうして、

俺達の修行が始まった。

……俺も頑張らないとな。

どんな奴でも死ぬことは出来るが  
弱いやつは死に方も選べない。

※第十話（リアス×イツセー エロ妄想）

「だ……駄目よイツセー！」

私は貴方の主で、

貴方は眷属で、下級悪魔なのよ！

こんな事をしちや……ダメよ♡」

リアスは潤んだ瞳で

浴室の壁にもたれながら

イツセーを見つめる。

体はシャワーで濡れて瑞々しい。

しかも湯気でほんのり上気している。

イツセーは欲望のままに

部長の胸に触れると、そのまま揉み始めたのだ。

「んあぁっ……いー」

甘い声が漏れ出るリアス。

イツセーはその反応を見て

更に興奮したのか、片方の手で乳首を摘まむ。

「だ、駄目よイツセー！」

そんな所を触ったら……あっ！」

「可愛いですよ部長……いや、

リアス」

どちらが主が解らぬ悠然とした

態度でイツセーはリアスの項を

擦りながら唇を合わせる。

家族以外と行う初めてのキスに

リアスは顔を真っ赤にして

ほんの僅かに抵抗する。

だが、その力は弱々しく全く意味がない。

それどころか逆に舌を入れられてしまい、

口内も犯されてしまう始末だ。

（こ、これがディープ・キッス!?!）

経験のない快感にリアスの頭がボーッとする。

「緊張しているんですね……」

大丈夫です。

俺に任せてください……」

そう言うとイツセーは手を

背中へとすう、と這わせていく。

「はうっ……い！」

思わず声を上げてしまうリアス。

まるでブランド物の

エレキギターの様に響く嬌声にイツセーは

口元を歪ませた。

そして遂にお尻にまで手がいくと、

優しく撫で回す様に愛撫し始めた。

「ああ……凄く綺麗なお尻ですね……」

それにこの太股なんか堪らない……」

「ダ、ダメエー！ それ以上されたら私い……い！」

イツセーの手の動きが激しくなるにつれ、

リアスの声も大きくなっていく。

もう我慢の限界だった。

（ああ……もう既成事実を

作ってしまった方が……

良いのかしら？）

既に思考力が

低下しているリアスはそう思い始めていた。

「大丈夫だよリアス。

俺は、君を必ず守ってみせる」

普段のイツセーとはまるで別人、

さながら白馬の王子様、

いや王の如き立ち振舞に

リアスは身も心も

奪われていた。

そしてとうとうその時が来たのだ。  
イツセーがシャワーを止めると、  
お互い裸のまま向き合う二人。  
リアスは既に腰砕け状態だ。

「リアス……」

「イ、イツセー……お願い、来てえ？」

リアスの言葉を聞いたイツセーは、  
力強く彼女の体を抱きしめると、  
そのリアスの臍まで届く程の  
大きさを誇るペニスの先端を  
リアスの膣穴の先端に当てる。  
ぬちゅり♡くちゅう……♡

卑猥な音が浴槽内に響く。

リアスの顔は紅潮しきっており、  
今から起こるであろう快楽を期待してか、  
リアスの子宮がきゅんつと疼いた。

（ああ……私……私♡

イツセーのモノに  
されてしまうのね♡）

しかし次の瞬間——

ピロン♪ 突然スマホが鳴る。

「……えっ？ あ、あら？」

その音に我に帰ったリアスは  
呆気にとられてしまう。  
つい、うたた寝をしてしまったらしい。  
どうやら昨日は遅くまで

起きていたので  
疲れてしまったのだろう。

「ふう……いけないわ。」

これから皆でレーティングゲーム  
対策のための特訓をすると

言うのに……!?!」

とろお……♡とリアスは  
自分の太腿に

垂れてくる熱い液体の存在に気付いた。

それは紛れもなく自分の

愛液であった。

その事実には驚くと共に、

イツセーとの淫夢を思い出してしまい、

再び体が熱くなる。

(まさか夢の中であんなに感じてしまうなんて……。

でも、あれが現実だったら……)」

眠気覚ましにシャワーを

浴びたはずだがリアスの頭は

未だに夢の中にあつた。

つい、シャワーヘッドを

自分の秘所にあてがい、愛液を流し始める。

「んっ、くう……!」

声が漏れそうになるのを堪えるが、

それでも快感には勝てず、指を動かしてしまう。

クチュクチュといやらしい水音が浴室内に響き渡る。

「ああ……イツセー……!」 — 誠 —

最早完全に夢の世界に再び

トリップしたりアスは更に激しく手を動かす。

そのせい、次第にシャワーの

勢いが強くなっていき、遂に最大になる。

「んんっ♡イクウ♡」

ビクンツ!!

と大きく痙攣して絶頂を迎えるリアス。

その反動で手に持っていたシャワーは床に落ち、

そのままお湯をしゃあつと出し続ける。

(イツセーのアレが欲しい……。

あの太いのを入れて貰わないと、私は……)

イツセーのペニスの

大きさは知っている。

そしてそのテクニクも。

とは言えそれは抱かれたわけではなく

イツセーとアーシアが

このシャワールームでセックスをしているところを

偶然見てしまっただけなのだが。

『あっ……♡あっ……♡』

イツセーさん♡イツセーさん♡』

あの女……もといアーシアは

駅弁の構えでいつの間にもやら

腕や腿の筋肉が増し、

腹筋も割れだしたイツセーに

抱かれていた。

イツセーは汗まみれになりながらも、

懸命に腰を振り続けていた。

『アーシア……！』

『はいい♡何ですかあイツセーさああん♡』

いつもの純朴で可憐な美少女とは

完全に別人。

そこには一匹の雌がいた。

そして……。

『愛している……！』

愛している……！』

リアスは

雷鳴に自身を切り裂かれるかの

衝撃を受けた。

イツセーは惑わされているので

なく確たる愛のもと、雄として

アーシアを愛している。

リアスはその事実を知ってしまった。  
だからこそ、二人は幸せそうだった。  
それに比べて自分はどうか？  
イツセーのことを好いているのは確かだが、  
果たしてそれは恋愛感情なのか？  
イツセーのことは好きだし、  
彼も自分を好きでいてくれる。  
ならば問題ない……答だった。  
しかしイツセーが他の女の子と  
イチャついているのを見ると、  
どうしても胸が痛んでしまう。  
嫉妬しているのだ。  
そしてその度にリアスは思う。  
自分はイツセーのことが好きなんだと。

「うう……！」

リアスはイツセーへの想いを再確認すると、  
その思いをぶつけるかのように、  
自らのクリトリスを摘まみ上げた。

その瞬間、リアスは本日二回目の絶頂を迎えた。

「ああ……♡イツセー……♡」

私『も』……貴方を愛しているわ♡

愛しているのに……♡」

イツセーのことを考えるだけで、  
リアスの体は火照ってしまうのであった。

↓

どうも……九頭竜安里です。

俺も神器……

もとい『燃える三眼』の

使い方の発展のため修行する事にな  
ったんだが……。

「な、何でお前らが



俺のコーチなの!？」

「報酬が良かったからな。

神の御心に従うだけでは

兵は繋げない」

「それはそれとして、

いつせいはどこだ」

昨日の敵は今日の友？

往年のジャ○プシステム宜しく

タイマン張ったらダチシステム？

俺の前にはジャージ姿の

ポールクならびに

キユクロの二人がいる。

お前らレイナーレが

起こした騒動の時は敵だったろ！

「じかんがない。

はやくはじめる。

キユクロはおにこーち。

リアスみたいにやさしくないぞ」

ヒュゴオツ!!

いや、竹刀を振った音の

レベルじゃねえぞ！

しかも碎けてるよ!!

どんだけ力強いんだよ!？」

いや、怪力つぷりは知っているが！

「あせるひつようはない。

おまえならできる。

キユクロもきあい入れていく」

「ちよっ、待っ……!」

ー

どうも……九頭竜安里です。

今、絶賛キユクロから

逃げようとしています。

冗談じゃねえ……強くなる前に  
死ぬだろ！　こんなの！

「ふんっ」

ドガアアンツ！　バキイツ！

と木々をなぎ倒しながら、

俺を追ってくるのは

キユクロである。

環境保護を考えてくれ！

「ぜえ……ぜえ……」

「かくれんぼは

さいきんすたれてきた。

いまはおにごっこがはやってる」

いや、鬼ごっこって……

これ命懸けだからね？

と、ツツコミたい気持ちを抑え、

俺はひたすら逃げる。

「くっそ……！」

「はっけいー！」

ズドンツ！！

キユクロの掌底打ちが、

背中に命中した。

「ぐふう！！」

衝撃で吹き飛ばされるも、

何とか受け身を取る。

俺の身体は森を抜け河原へ

投げ出された。

こんなの発勁じゃないわ！

ただのバカ力よ！

「いてて……効いた……！」

「だいじょうぶか？」

「大丈夫に見えるか!？」

「この脳筋!」

「叫ぶ元気があるなら問題は

あるまいキュクロ」

「そうだな。ぼるく」

「解ったよ、やればいいんだろ!」

「と言ってまずは岩をキュクロが

ダンボールでも運ぶみたい

に軽々と持つてきた。

「まずはこれにおまえの

しよくしゆをとばしてあてろ」

「はあ!？」

「いや、その位は

出来るけどさあ……。

「はやくする。

でないとよるまでにかえれない」

「バオンツ!! シュゴオ!!」

「だから竹刀振る音じゃねーよ!

俺は『燃える三眼』を

発動させて片腕を触手化。

更にボウガンにするイメージで

展開。そして発射。

「バスンツ!

「やったか!？」

「まるでだめ。

ぶきのいりよくがたりない」

「そう言つてキュクロが

「河原の石を拾い上げた。

「えいっ」

「相変わらずゆるい掛け声と共に

触手が刺さったままの岩に

石が当たると……ボゴツ!!

「うわあああつー!」

ダニイ!?

なんと、直径30センチ程のクレーターが出来てしまった。

「どうした。」

つぎいくぞ」

「いや、ちょっと待ってくれ!

その攻撃は俺には無理だ!」

「むりではない。

がんばるしかない」

「いや、頑張っても出来ないもんは出来んの!

だから頼む!

せめて普通の修行とか

そういうのにしてくれ!」

「なんであきらめる。

にんげんはあきらめなかつたから

くるま、ふね、ひこうき、ふねを

つくりだせたのだ。

と、ととさまはいつていた」

何故かドヤ顔でキユクロは

俺の意見を却下した。

「お前の父さん何なの!?

って何で船が2つあるんだ!?!」

「きいておどろけ。

それはおりゆんほすの……」

「余計な話はよせキユクロ。

所詮一週間の関係だ」

「それもそうだな」

「いや、待て!

今の話気になってしょうがないんだけど!」

「きゆうどー、はなしはあとだ。

とにかくつづける。

ぐたいてきにはこのいわを  
くだけるくらいまで」

岩を砕けと言われても

デケえよこれ！

三メートルはあるぞ!!

ろくに罅すら入ってないし！

「この位出来なければ話にならない

赤龍帝の邪魔になるだけだ。

その時は諦めて死ね」

無茶苦茶言うなあこの二人！

俺は再び『燃える三眼』を発動。

そして両腕をボウガンに変形させる。

そして先ほどと同じように、

発射！ 発射！ 発射！

が、流石にボーガンの矢で

岩が砕けるはずがない。

「やはり俺の力はこの程度なのか？

イツセーと俺とじゃ

ものが違う……」

言っていて悲しくなったが

キュクロは首を横に振る。

ただの慰めではないみたいだ。

「きゆうどー、たぶんおまえもちからはあるほうだ」

「……え？」

「きあいのいれかたが

わかってないだけだろう。

きゆうどー、

おまえのちからのいれかたはこうやるんだ」

と言ってキュクロは、

俺の背後に回り込むと……  
ギョツと

後ろから俺を抱き締めてきた。

「キュクロ……何を……!？」

「しずまれ……」

しずかに……おちつく……

からだのちからはぬく。

そしておまえのちからをゆびさきにあつめる。

あせるな。ゆつくりだぞ」

キュクロの言葉通りにすると

地面から足への

力の流れを感じる……。

同時に全身に力が湧いてくる……。

「これは……!」

「きゆうどー、おまえはいま

きゆうどーほんらいの

りくごうたいきよくのじょうたいになった。

これならできるはずだ」

「あ、ああ……やって見るよ」

俺は深呼吸をして

心を落ち着かせる。

そして触手のボウガンを構える。

「ふう……ふう……ふう……」

「がんばれ……きゆうどー」

応援されたので頑張る。

集中しろ……力を纏めて……

脚、膝、腰、腹、脇、腕から

血液の流れのように

力の流れをイメージ……。

触手のボウガンのトリガーを

引く瞬間を想像する。

矢は固く、固く、鋭く……。

そして引き金を引く。

すると岩は突き刺さった場所からガラガラと崩れ去った。

「おめでときゅうどー」

「キュクロのおかげだぜ！」

「いいや、おまえのちから。」

だが、まだつかいこなせてない」

「だろうな。上級墮天使や

魔神の類ならこの位は

呼吸と同様、自然と出来る。

このように……な」

と、言うとボールクは

指先に氷の弾丸を作り、

指弾を飛ばした。

その間は一秒もない。

だが、放たれた弾丸は

近くの滝を割り、

真つ二つのまま

凍結させてしまった……！

「うわっ！ すげえ……！」

「さあ、次は貴様の番だ」

「おうよ！」

俺は触手のボウガンを構え、

岩に向けて発射する。

キュクロが運んでくる

大小様々な岩は砕け、

バラバラになっていく。

「……まあまあか」

「でもだいたいうまくなったぞ」

「そうか？ そうかな？」

「うん。きゅうどーはじかんをかければ  
もつとすごいことができるとおもうぞ」

「そうか！ よし！ 頑張ってみる！」

「では次に行くぞ」

「おう！」

……って言うかきゅうどーって  
何だ？」

「？ きゅうどーはきゅうどーだ」

キククロは『何言っている？』

みたいにキョトンとしていた。

あ、これあだ名みたいなモンだ。

まあ……いいか。実害はないし。

「おう！」

そんなわけで日が暮れるまで

俺は射撃訓練に勤しんだ。

ふと思っただけど……。

俺の触手弾とか

何で作ってんだろう？

「じゃあふつかめは

おまえのひとみのちからを

きたえる」

「瞳の力？」

「きゅうどーのもえるさんがん  
のちからのことだ」

「へー……」

俺の力のひとつねえ。

「えっと、どんな能力なんだ？」

「しらんのか？」

「知らねえよ。」

そもそも俺は



自分の力をよく知らないし……」

「全く情けない男だ。」

評価できるのは今日まで

生き延びられた運だけだな」

以前に片腕切り飛ばしてきた男に

言われると返す言葉がない。

「きゅうどーのちからは

かこ、げんざい、みらいを

よむちからだ」

……？ よくわからん。

こういう時自分の頭の悪さが

嫌になるなあ……。

「解りやすく言えば流れを視る

力だ。流れというのは何も

水や風だけではない。

時間の流れ、運命、人の心、

大地の脈動、極星の煌めき……。

あらゆるものの

動きを観る事が出来る」

「なにそれ凄いじゃん!?!」

話だけ聞くと

すげーチート臭いな。

「ただしこの力は強すぎる。

濫用は危険だ」

「え？ そうなの?」

「ああ、下手すれば

貴様の精神は崩壊する。

脆弱すぎるのだ、方寸というものは」

「……俺の魂の事か?」

「そうだ。その通りだ。」

だがそれは常人では仕方ない。

覚醒者や超越者、逸脱者に  
至るには貴様はあまりにも未熟。  
まずは地固めからだ」

「地固め……ね」

確かに今のままだと心も体も脆い。  
鍛える必要がある。

「で、具体的にはどうやれば？」

「燃える三眼の目を開け」

「こうかな？」

俺は目をぐわつとできる限り

見開いたがボールクは

呆れたように溜息を漏らした。

「馬鹿か貴様は。」

誰が身体の目を開けと言った。

燃える三眼の目だ」

え？ 何言ってるのこの超人。

触手に目なんてないじゃん。

「腕から目が現れて開く

イメージをしろ」

「腕から目が……」

腕から目玉が飛び出てギョロつとなる感じ？  
想像してみる。

うお……なんかキモいな。

「無理だよ。だって腕から

目が出てくるとかさ……」

考えただけで痛いし気持ち悪い」

「痛みを伴わない戦闘など

あると思うのか？ この現実」

「そりやそうだけどさあ……」

せめて何か別の方法はないの？」

「そんなものはない」

「……はい」

俺は諦めて

触手の腕に意識を集中させる。  
すると、

徐々に感覚が広がっていく。

まるで腕の骨の中央に神経が

通っているような錯覚を覚える。

すると目を開けているのに

マルチスクリーンの様に

別の視点が広がる。

「うわっ！ マジだ！」

「それが燃える三眼の力の一つ、遠望だ。

貴様はその力で敵を捕捉、

狙撃するのだ」

「了解！」

俺は触手のボウガンを構え、

遠くの岩に向けて発射する。

矢は空気を切り裂き、岩を砕く。

「おお！」

「まだまだ、次はこれだ。

これを撃ち落としてみる」

ボールクは小石を拾い上げ、俺に投げつける。

「よっしゃ！ やってやるぜ！」

俺の腕に現れた3つの瞳は石の動きを捉えていた。

「そこだ！」

俺は狙いを定め、ボウガンを放つ。

弾丸は小石を粉々に打ち砕いた。

「ほう、良いぞ。では次だ」

「おう！ どんどん来い！」

「……ぎゃあ!?」

「どうした？」

一度に一つづつしか来ないとは  
限らんぞ」

だからって拳大の石を  
シヨットガンの弾みたい  
に  
拡散させて投げるなよ！

めっちゃ痛いし！

「きゅうどーはちようしに  
のりやすいな。

しゅぎようがたりない」

それから日暮れまで、

俺はひたすら射撃訓練に励んだ。

射撃訓練を終えて、

俺はボールクが地脈を視た事で

湧き当てた温泉に浸かっていた。

「ふい〜……極楽ごくらくう……」

温泉ってこんなに気持ちいいんだな」

「気に入ってくれたようで

何よりだ」

「ああ、最高だ。生き返るぜ。

でも何で急に風呂に入りたいてって言い出したんだ？」

「俺の趣味だ」

「何それ……」

氷使いの格闘家なのに

温泉が趣味って……。

「それにしても……ふーむ……」

「どうした？ きゅうどー」

いや、なんでさらっとキユクロが

温泉入ってんだよ！

おかしいじゃん!?

しかも裸で！

「お風呂にははだかであるのは  
あたりまえだ」

いや、それはそうだけど……

お前女じゃん！

身長デカいけど

よく見れば美人だし!!

身長以外もふつーにデカいし！

だしだしうるさいし！

……じゃなくて。

「俺も男だからね？」

流石に女の子と一緒に入るのはどうかと……」

「なにをいう、

きゆうどーはぼるくがほった

おんせんをひとりじめするのか」

「いや、そういう訳じゃないんだけど……。

その……色々とマズいというかね？」

「なにがいやなんだ？」

ぼるくにみられたくないものか？」

「いや……もう、いいです……ハイ」

すると予期せぬ客たちが

現れた。

「あら、湯気が見えると

思ったら温泉があるじゃない」

「あらあら露天風呂だなんて

久し振りですわ〜」

「私、ニホンのオンセンって

初めてです〜」

え!?! ちょ、ちょっと待てえい!

木場とナイア以外のメンバーが

勢揃いだし!

しかもイツセー以外全裸!

逆だろうがフツ―は！

「おい……どうなってるのこれ」

「どうもこうもない。」

「はだかのつきあいだ」

「みんな一緒にいるんですかあ？」

「何だか楽しいです♪」

「え？　え？　え？」

「まあ、良いではないか。」

「こういうのも悪くなくろう」

「そうね。」

「たまには良いかもしれないわね」

「うへえ……マジですか……」

「ありがとうございます！」

「神様ありがとうございます！」

「っていててて!!」

「いつせい、あくまがかみに

いのるな」

「……変態ですね」

「こうして温泉に全員入り込んできた。」

「俺の『燃える三眼』から

見えちゃいけないものも

しつかり見える。スイッチオフにすべきなんだが……。

「い、イカン……!!」

「バレたら色々と終わる……!!」

「ねえ、安里くん。」

「さつきから何を見ているの？」

「げっ！　リアスさんに見つかった……」

「どうしよう……?」

「い、いえー！　別に何もー！」

「そうかしらあ？　何か視線を感じるのよね。」

「私の胸とか脚にい」

「いやいやいやそんな事ないですよ！」

「嘘ばっかり……！」

安里くんのえっち！」

「ひいっ！」

俺は慌てて後ろを振り向く。

そこには一糸纏わぬ姿の朱乃先輩がいた。

「うふふ……どうしましたの？」

そんなに赤くなって……

湯あたりでもしました？

それとも……わたくしの身体を

じっくり見てしまいました？ うふふ……」

朱乃先輩は妖艶に微笑む。

そして俺の顔を覗き込む。

「はい、実はバッチリ見てます……」

「あら、正直な方。」

殿方の皆様は女性の裸を見たがるものでしょうけど、女性にも選ぶ権利というものはあるのですわ。

安里君では

少々家賃が高いですわねえ……」

要はお呼びじゃないって

事か……。

「……ムツツリスケベ」

「ぐはあっ！」

遂には小猫ちゃんにまで

言われるとは……！！

「小猫ちゃん、安里君は

スケベではないと思いますわ。

だって小猫ちゃんのお胸を見ても

平然としているんですもの」

「……………!!!」

ああ、朱乃さん、貴方はDSだ。

小猫ちゃんが凄まじい形相で  
睨んでくる。

こ、殺される……!!

「ち、違うんだ……小猫ちゃん。

俺は成熟した女性の胸にだけ

興味があるわけ……」

「……そうですか」

湯を割るほどの剛拳が当に迫る。

いや、しかし今の俺には

『燃える三眼』でパンチを見切る事が……。

こ、拳の動きが速すぎて視えない!

あ、流れ星……。

「南無……」

遠望の力で合掌するイツセーの

姿を最後に、俺の意識は途絶えた。無念……。



## 第十一話

……どうも、九頭竜安里です。  
今、絶賛修行中です。

「射撃、狙撃については  
まあいいだろう。」

後は歩法を教えてやる」

「ほうほう」

「何だ、ジョークのつもりか？」

ボールクの大將、

普段は閉じ目なのに

こんな時に見開かなくても……。

「いやいや、そんな事ないっすよ。」

「お願いします！」

「そうか？ ……では、始める。」

『轟』『霞』『燕蹄』『蛟』『肢幻』

の5段階があるのだが……

『轟』が出来れば今は

問題はなからう」

「いや、いきなり専門用語を

言われてもさ……。」

この人、大丈夫かなあ……。

「まず、『轟』だがこれは

単純に言えば距離を保つ為の技術だ。

足裏に力を込めて

瞬時に幾度も地面を踏み締める、

ないし立ち退く」

「具体的にはどのくらい？」

「多ければ多い程いい」

……何か投げやりな気がするけど、まあいいか。

「で、『霞』とか『燕蹄』は？」

「話した所で

お前が扱えねば意味はない」

「……」

まあ、そりやそうだ。

「とりあえずやってみるか……」

俺は言われた通り試してみる事にした。

「ふう……よしー」

足の指先から地面に力を込める。

そして何度も蹴るんだっけな……。

ってうわ！

「どうしたきゆうどー」。

なにもないところでころぶな」

「い、いや足が纏れて……」

これ思ったより難しいぞ!?

足の裏だけじゃなく

膝にも力が入らないし、

腰の位置も安定しない……。

それに踏ん張りが効かないせいか

勢い余って転んでしまう。

これがもしレーティングゲーム

だったら……。

間違いなく囲まれてリンチだ。

ぞつとするなあ。でも、

何回かやつてると

コツは掴めてきた。

次はもつと上手くいくはずだ。

今度はもう少し力を抜いて……

よし！ おおっ！ 出来た!!

やったぜ！

これならいけるかもしれない！

その後も何日か練習したが、

最終的には何とか形になった。

しかし瞬間的に何度も踏込むから轟音が響いてしようがない。

あ、だから『轟』なのか……。

納得したわ。

「ほう、もう出来たのか」

「いえいえ、大将の教え方が上手いおかげですよ」

実際、教え方はかなり上手かった。

まるで俺の性格や傾向を

理解しているかのように的確だったからだ。

曰く『六合太極』の

一つで『顕色』の力だそうだ。

「見識、じゃないんスね」

「そうだ。流れ、色を視るのは

貴様の『燃える三眼』の

専売特許ではない。

本来ならば地に在る者全てに

備わっていた力だがな……」

「へえ……」

大将に曰く大地に住む者は皆、

大地の流れを知覚していたらしい。

それが天の星の煌めきに照らされ、

その陰陽の合一によつて

彩られた色合いこそ

『顕色』なのだとか。

正直、理解不能だったが、

要するに自然の力とかオーラを

感じろという事だろうか？

哲学っぽくて頭が痛くなってきた。

「なんか中国拳法っぽいスね。」

「ボールクの大將は出身どこスか」

「スラヴ地方……とだけ言っておく」

「スラヴ……ああ！」

前に授業で聞いた事ありますよ！

確かロシア人と東欧人の

血が入った所なんですよ？」

「……まあ、そんな所だ」

若干間があっただけど悪いこと

言ったかな……。

「お、やってるなあ！」

「感心感心。少しはクソ虫から

アップグレードしました？」

「ほっほっほ」

そこにイツセーとナイア、

あと何か見たことない爺さんが

現れた。

しかし爺さんにしては

ガタイがいい。

首から下は30代ですって言っても

通るんじゃないかねかな？

「どうしたお前ら？」

サボりってワケでもないだろうが」

「いや、安里。

実は俺も修行の結果、

新しい技を編み出したんだ！」

「ほう……其奴は凄いな！」

それで、どんな技なんだ？」

きつと赤龍帝の名に恥じない

凄い技なんだろうな。

俺は期待に胸踊らせた。

「ああ、この必殺技はな……」

そしてイツセーは

右手に力を込め始めた。

おいおい、まさかこの期に及んで

まだ厨二病を拗らせてんのか!?

いや、俺も人の事言えないけどね?

まあ、それはそれとして

『Boost!』

「おっ、きたな。」

なら見せてくれ」

「おう、行くぜ!! 必殺!

ドラゴ……」

「ぶへっくしよいー!」

突然爺さんがくしやみをする

イツセーの奴はバランスを

崩してしまい、籠手の力が

ナイアとキユクロへと

向けられてしまった。

そして所謂二人は服ビリ状態に。

「いやあ〜ん☆

まいつちんぐう〜」

「?」

いや、そのリアクションは

おかしいぞ!

というかイツセー!

お前なんて事をしてくれたんだ!

「ほっほっほ。」

これがイツセー君の新必殺技

『洋服破壊』じゃ!

むほほほほ目の保養」

……このジジイ何いってんの?

翻訳して。

「成程。『顕色』の応用か」

いや大将もなに言ってるの!?

あの哲学的な話からの服ビリって

色は色でも色欲だよ!

「これを使えば相手の衣服を破けるようになるのじゃ!

これぞまさしく逆転の一手!!」

「いや、俺が見せようとしたのは

もっとピカーツとしてドカーンな

ドラゴン波みたいな技だから!」

何がまさしくなのか

サツパリ分からん……。

「まあそれはそれとして

社会的に死ぬと思うんですがね」

「じーじ、よくきた」

え?!

このエロジジイ

お前の爺ちゃんなの?

あ、紹介しなくてもいいから。

とりあえず、孫並びにナイアの

服ビリを見てムホホとしている辺り

この人は絶対変態だと思う。

「しかし脱がせるだけでは

なんじゃのく……。

女のコは恥じらったり

いや、止してー! から

いやよ、してー! に羽化する

姿を愛でたいとは思わんか

イツセー君!」

「わかります! (キリッ)

うーん深いな

『顕色』の世界! (キリリッ)」

「わかってくれるかマイ・サン!」

「ああ、わかりますとも！」

「そうか、お主には我が秘技を授けてやるぞい！」

「ありがとうございます！」

何が深いだ。

地獄の底に沈んでろお前ら……。

ー

そんな感じで一週間が過ぎ、

リアスさんと

ライザーチームの対決の日と

あいまった。

「ほーほっほっほー！」

また会いましたわね下郎姉弟！

私に跪いて『ギャフン』と言う

覚悟は宜しくて！」

俺とナイアを見るなり

あのレイヴエル・フェニックスが

悪役令嬢そのまんまの高笑いを上げながら現れた。

相変わらぬの金髪縦ロールと

それに負けず劣らずのお嬢様オーラ。

「ギャフン」

「どうして今おっしやいますのよ

このへっぽこ!!」

いや、出鼻を挫こうかなと思って。

「何という姑息な！」

やはり下賤なものは戦い方から

して汚らしいですわ！」

あ、キレた。

「と、言うかこういうのは

主同士がいい試合をしましょう

とかフェアに行こうとか

挨拶するのが先じゃないの？」

「うぐっ……」

あ、正論に対しては

ゴネないのなこのお嬢様。

すこし見直した。

「やれやれ、

一本取られた様だなレイヴェル」

「ライザー……い」

真打ち登場って顔で現れたライザー。

一方イツセーの顔を

見る限り相当ライザーにイラついてる様子だ。

「少しは強くなつたか下僕クン？」

このライザー・フェニックスに

対してあれだけの大口を

叩いたんだ。

俺の可愛い眷属達に勝てぬまでも

10秒位は持つてくれよ？」

「こっちの台詞だ！」

うーん……これで五分。

いや、あのお嬢様は見たところ

数合わせのお飾りだろうだから

将棋でいやあ二手遅れって感じだ。

しかしイツセーの奴、かなり熱くなってるな。

「おいおい落ち着け。

勝てるモンも勝てなくなるぞ」

「ああ……悪かったよ安里。

少し落ち着いた」

「やあ、元気かな？」

そこに突如ゲイトさんが

やってきた。

ホント神出鬼没だな。



「ゲイトの旦那じゃないスか。

何でまたここに？」

「バトルフィールドの作成のためだよ」

「はい。ゲイト様は

バトルフィールド作成の際は

ギミックや耐久性にも

柔軟に対応して頂けるので

助かっております」

この間のメイドさん、

何でも魔王サーゼクス様の『女王』

グレイフィアさんが補足した。

そんな事もやってたんだな……。

「ではゲイト様。手筈の通りに」

「解ったよ」

「？ 何をするんだろう？」

俺達は首を傾げていた。

すると突然俺達の足元に

魔法陣が現れた。

ワープとかそんな感じか？

「さあ、準備は出来たよ」

そして俺達を光が包むと

一瞬にして俺達は会場へと移動していた。

「って何も変わってない!？」

まさか俺の魔力が低いから

とかそんな理由で!？」

イツセーが慌てふためくが

それにしちや空気が違う……。

生き物の気配が全然しない。

外を見ると緑のオーロラの様な

ものがゆらゆらしていた。

「リアス君とライザー君の

意見を照らし合わせて

君達の通う駒王学園と

同じ規模のバトルフィールドを作成したよ」

「ルールは簡単、

どちらかが全員『戦闘不能』

もしくは王が

『サレンダー』するまで

勝負を続けて貰います。

『戦闘不能』は意識を失ったり

体力の限界を迎えた場合も

含まれます。

ライザー様の不死性は

今のリアス様達で打ち破る事は

不可能ですので」

リアスさんもはつきり言われると

少し悔しそうな顔になっていた。

……成程、つまり

『戦闘不能』になったら

リタイヤになる訳ね。

しかもその『戦闘不能』の判定は

審判役のゲイトの旦那と

グレイフィアさんが行うと。

てゆうか審判役も任されるって

大分信頼されているのな……。

「じゃあ、始めるとしよっか」

「リアス様たちの本陣は

旧校舎、オカルト研究部。

ライザー様たちの本陣は

新校舎、学長室。

『兵士』の『昇格』は

敵陣に踏み込んだ時にのみ  
発動可能となります」

こうして

レーティングゲームが幕を上げた。

「オイ。今回は私が『城兵』、

お前が『僧正』って立ち回りに

なる、解ってるな？」

ナイアの奴、いきなり口が

悪くなつたな……。

「成程、わからん」

「どんだけ低能なんだよテメーは！

頭まで海綿体が

この触手脳ミソ野郎！」

そこまで言うか。

「いいか？」

バカと煙は何とやらだ。

テメーは見晴らしのいい

高い所に陣取れ。

そしてこの間教わった遠望と

狙撃でイツセーと私の周りに

来た奴の頭をズドン……

と撃ち抜け」

「親友を囮にしろつてのか？」

「俺は構わないぜ安里。

チームワークって

そういうもんだろ？

で、

もし俺が途中でリタイアしたら

俺の代わりにライザーの野郎を

ぶん殴ってくれよな！」

イツセーは親指を立てて

俺を激励する。

その瞳は真っ直ぐ俺やナイアへの  
疑いは一切ない。

眩しいなあ……。

「クククッ、

また差が開いちやいましたねエ

クソ虫くん」

「……五月蠅え。

お前が立てた作戦なんだから

気張れや。

イモ引いたら

そつちの頭ぶち抜いてやるからな」

『燃える三眼』を展開しながら

俺はナイアに釘を差した。

そうしないと自分が保てない位

惨めな気持ちだった。

「おおこわいこわい。

弾は前から飛んでくるとは

限らないとはよく言ったもので」

ナイアは口笛をぴゅう、と

吹きながら

そのまま俺から離れていった。

「さあ、行きましよう部長」

「ええ、小猫も裕斗も

頼りにしているわ。

勿論朱乃も」

「はい」

「あらあら……」

「アーシアは私の側で待機していて

頂戴。最終的にはライザーと

私とでケリをつける事になると

思うわ」

「はいっ！」

そして俺達は最初の作戦通りに分散。

俺は学校で一番高い所。

つまり学園の鐘がある時計塔の頂上へと登った。

「……」

それは意識を腕に集中させて目を閉じる。すると感覚は研ぎ澄まされ、遠くにあるものの気配をより鮮明に感じる事が出来る。まるでスナイパーライフルのスコープが視界全体を鮮明に映している様に……。

「ふう……。……あれは」

そして、俺が目にしたのは校庭の真ん中に立つ中華娘っぽい子と向き合うイツセーの姿だ。

若干押され気味か……。

確かにイツセーの力は

倍々ゲームだが

逆を言うと初動を潰されると脆い。

棒術使いの子は巧みな技で

イツセーの胸元を突く。

「……!?!」

「……」

だが棒術使いの子は

殊の外ダメージがない事に

動揺し、イツセーは口元を

不敵に歪めていた。

イツセーの奴、

恐らくインパクトの瞬間に

重心を移動させることで

打撃をずらしたのか……。

あれはポールクの大將が

最終日に話した『霞』だ……。

俺ができなかった事が

アイツにはできる……。

皆に慕われたり

誰かから心から、

力や魔術を使わずとも

愛される。

俺に無いものを沢山持っている。

羨ましいよ……お前が。

『ひひ、惨め。惨め。ひひひ』

『何を義理立てする事がある。

奪い取れ』『お前だって欲しいだろう？

ろう？』

あんな風に好かれないだ

『欲しくて堪らないはずだ』

『なら奪えばいい』

『憎いだろう？ 殺したい程』

『ほら、見てみる。

奴はまた皆からよくやったと

称賛されてしまうぞ？』

『悔しいか、悔しいだろうなア

はははははは』

ドロドロした泥とコールドタールを

煮詰めた様な悍ましいモノが

俺の背中を這い寄る。

「黙れよ。そんなモンで

俺たちが潰れるか」

俺はそれを触手の先端に詰め込む

イメージを広げると、

俺の腕が砲塔に変化した。

弾丸は……こいつらでいいな。

『ひひ、ひどいやつ、ひどいやつ』

『お前は誰も愛せない。』

だからお前は誰からも愛されない

誰もお前を愛さない』

『お前は独りぼっちだ！』

断末魔なら

もう少し気の利いたモンにしろよ。

放たれた呪詛は棒術使いのコの

胸元を貫くと彼女はドス黒い焔に

包まれる。

「あああああー！」

彼女が校庭を

必死に転げ回るも焔はまるで

消えない。

すると突然大音量が響いた。

『ミラー・ しっかりしろ！ ミラー！

俺が今すぐ助けてやるからな！！

レイヴェル！ フェニックスの

涙を今すぐ用意しろ！

時間がないのだ！

グズグズするな！！

ユーベルーナ！！

お前の全身全霊を以て

今の狙撃手を始末しろ！

他の何を捨て置いてもだ！』

ライザーの声に驕りや傲慢はない。

自分の眷属に対する

思いやりが溢れている。

その声に俺は

一瞬呆気にとられてしまった。

「っ!!」

『轟』を使って俺は時計台から

跳躍するといくつもの火球が

時計台をシチユーの様に

融解させてしまう。

「……流石毒虫の様に卑劣な男。

身のこなしは雀蜂……と

言った所かしら」

なびく髪を漂わせながら

いかにも只者じやない雰囲気の

女王様って感じの魔導師が

宙に浮いていた。

「一応名乗っておきましょう。

私はユーベルーナ。

ライザーさまの『女王』です」

「

「ヒヤツハハハア！ 死ね！ 死ねエ!!

弾けた柘榴みてえにしてやるあア!!」

「わー！ こっち来るなー!!」

どうも、兵藤一誠です……。

ナイアさんがスカートから戦車を出したと

思ったらケモ耳少女を追って森の中に消えました。

あつ……そっちは木場と小猫ちゃんが仕掛けた罠が……。



## 第12話

「一応名乗っておきましょう。」

私はユーベルーナ。

ライザーさまの『女王』です」

「そうかい」

俺は『燃える三眼』を

砲塔から鎌へと変化させた。

魔法使いと遠距離で戦うのは

明らかに不利なものな。

しかし、

「それは悪手よ、坊や」

ユーベルーナと名乗った女が

そう言うと同時に、

俺の背後で凄まじい魔力が

膨れ上がった。

「……ッ！」

振り返るとそこには

巨大な魔法陣が展開されていた。

「!?!」

そうかあの女も、

木場や小猫ちゃんと

同じく罠を……!?!

『支配者の機雷』

(クエスター・マイン)」

ドゴオオオオン!

ユーベルーナの言葉と

持っていた杖が淡く光るや

俺の背後で大爆発が起こり、

その衝撃に

俺は吹き飛ばされてしまう。

「ぐあああああっ!!」

そのまま地面をバウンドしながら  
近くの林の中まで転げ回る。  
くっ……

背中が痛え……。

焼けるように熱い……。

「妙ですわね……。

はぐれ悪魔くずれと

聞いておりましたのに……。

背中に羽根がない？」

「ぐ……。」

全身が痛む中、

どうにか身体を起こす。

それにしても、

まさかこんなところで

『女王』の攻撃を受けるなんてな。

だがコイツを倒せば

否が応でも皆が俺を

認めざるを得ないだろう。

ならばここでリタイアなんて

してたまるか。

そう思いながら立ち上がり

ユーベルーナを見ると、

奴はこちらを見ながら

何事かを呟いていた。

「……………おかしいですわね？」

……どうにも先程から

様子が変だと

思っていましたか……。

貴方からは悪魔の気配がしない……。

かと言って天使でも墮天使でもない。

「一体どういうことですか……？」

「……」  
まあ確かに今の俺は天使でもなければ悪魔でもない。

転生したてはやほやだからな。そんなことを考えているうちに俺の周りに無数の魔法陣が現れた。

「さっきのなんたらマインって技か……!? こいつは拙い！」

慌ててその場から離れようとするが、  
「無駄ですわよ」

ズガアアアン!!  
ユーベルーナの一言と共に

展開された魔法陣が一斉に爆破した。

周りには土煙がたちこめて俺の姿は向こうには見えない。

俺は『轟』の歩法を応用したハイジャンプでこれを回避。

そのまま唐竹割の要領でユーベルーナに迫る！

「貰ったア!!」  
「奇襲というものはもつと

静かにするものよ、坊や」  
「ッ!?!」

気づかれていたのか!  
だが相手は『女王』とは言え

女で更に魔導師だ!  
こっちの全力を弾ける手段はねえ!

「嫌なこと……」  
そちらに都合の良い妄想を押し付ける坊やというものは」

ユーベルーナの周囲に  
魔力が集中していく。

この感じ……ヤバそうだ！  
だがもう遅い！

このまま斬撃をぶち込んでやる！

「いい加減にしなさいな。」

ライザー様と私の可愛い駒達を

たくさん可愛がってくれたようですし、

私も少しだけ本気を出しますわよ」

ユーベルーナの杖を中心に

凄まじい魔力が渦巻いている！

なんだあれは!?

まるで周囲の空間ごと圧縮しているようだ！

「喰らいなさい、『支配者の戦槌』

(クエスター・ストライク)!!」

ユーベルーナの叫びとともに

杖の先端にあった球状の宝玉が輝きを増し、

次の瞬間……

「ツツ!!?」

俺の目の前に

巨大なハンマーが現れていた。

しかもそれはただのハンマーではなく、

焰でできた巨人が持つような

巨大ハンマーだったのだ。

そしてその巨大なハンマーは

まるでハエ叩きの様に

無慈悲に振り下ろされた。

避けられない……！ 当たる！

「ぐあああっ!!」

俺は咄嗟の判断で防御をするが、  
あまりの威力に触手製の鎌は

砕け散り

俺もトラツクに撥ね飛ばされた  
小石の様に吹き飛ばされる。

「うぐっ……！」

地面を転がりながらもどうにか体勢を立て直す。

背中をやられたのか!?

うまく立てない……。

「立ちなさい。」

この程度でリタイヤなんて

許さなくてよ」

ユーベルーナの声が聞こえる。

くそ……！ ふざけん……！

こちらら

まだ負けちゃいねえんだぞ……！

「……ああああっ!!」

激痛を堪えながら立ち上がる。

既に背中の傷口からは血が流れ出している。

「フフ……なかなか頑丈ですわね。

でも……いつまで持ちますかしら?」

ユーベルーナが再び攻撃の準備を始めた。

今度はさっきのどデカイハンマーじゃない。

小さな魔法陣を複数展開させている。

「吹き飛びなさい。」

『支配者の猟犬』

(クエスター・ハウンド)！」

放たれたのは焰の塊だ。

だが大きさがハンパじゃねえ!

あんなもんくらったらひとたまりもないだろう。

だが、そんなことは関係ない。

「こんなものオオオオッ!!」

俺は両手を突き出して

その炎の塊を受け止める！

「ぐっ……おとおおっ!!」

「ほう……」

あの状態から耐えましたか……。

これは少々予想外でしたわね……。

ですが、これで

王手と言った所ですわね、フフ」

ユーベルーナは火球を当然の

様に連発し、

俺は焔に飲み込まれて

大地に斃れた。

全身から煙を上げながら倒れる俺を見て

ユーベルーナは笑う。

「ハア……」

これで終わりですか……。

まあ一応はミラを倒したのですから

虫けらにしては

上出来と言っておきましょう。

それではごきげんよう」

そう言い残してユーベルーナは

俺のもとを離れていった。

俺は薄れゆく意識の中で考える。

「(畜生……俺はここまでなのか？

せつかく転生したつてのに……

俺はまた……何もできずに終わるのか……?)」

そんなことを思いながらゆっくりと目を閉じかける。

『ふひ、ふひひ、またまけた

またまけた』

『なんでだまっているの?』

『お前は無力だ』

『お前は世界から弾き出されたんだ、弱いからな!』

『だから誰も守れない。』

誰にも必要とされない。

誰からも愛されない』

うるせえ……

『ふひ、ふひひひ』

それがげんじつ、ふひひひ』

『結局、どの世界でも』

お前は大切なものを

守ることなんかできないんだよ』

『あははは、ばーかばーか』

『いなくなれ』

『消え去れ』

『ふひ、ふひひひ、きえてしまえ』

『しねしねしね』

『ころせころせころせ』

『けせけせけせ』

俺を……オレヲバカニスルナ

あのナニカが俺を囲んでいく。

ああ、月がツキが

あんナに模キれ異だ

↓

一方場所は代わり

ソーナ、椿姫、

そしてニグラのいる中継所。

「何故です、リアス……」。

何故九頭竜安里をリタイア

させないのですか？」

確かに駒の一つを犠牲にして

戦術的な目的を果たす

『犠牲』という

レーティングゲームでの戦法は存在する。

だがそんな冷酷残忍な戦法を

あの眷属に対して情の深い

リアスが実行するとは

思えなかった。

「貴方の差金ですか。

ニグラ・サセコヴィツチ」

傍らの保険医を軽く睨む様な視線を

向けてソーナは質問、というより

尋問する調子で尋ねる。

正直ソーナはこのニグラという

保険医に

良い感情は持っていなかった。

服装はまあ

自由を重んじる校風とは言え

山羊角を隠す事なく顕現させている上に

露出も激しい。

更には胸元を大きく開けた白衣など、

明らかに男を誘っていると思えない

格好をしているし、

実際に男女訪わず

誘っているからだ。

生徒は言うに及ばず、

教師や用務員、果ては理事長まで

籠絡した今の彼女は

学園内の支配者とも言えよう。

拳句の果てには匙まで誘惑する

始末。

辛うじて堪えた様なので

尻叩き100回で許したが



それはともかく。

「うふう。

酷い言われようですね。

私はただ……

【副王】様に頼まれて仕方なく……」

「……！ やはり貴女が……！」

「怖い顔しないで下さいな。

私だって好きでこんな事を

しているわけではありませんよ。

可愛い安里ちゃんがあんな風に

痛めつけられるなんて……」

その表情は確かに口先ばかりの

ものではなく、

悲壮感漂うものだった。

だからこそ歪で、かつ悍ましい。

「……わかりました。

ですが我々としては

これ以上は看過できません。

グレイファイア様に打診し、

今すぐリタイアの判定を……」

言いかけた時に中継ポイントの

観客がざわめきだした。

「な、何だアレはっ!？」

「三頭の龍!! 冥界でも

多頭龍の存在はごく僅かの筈……!？」

「あ、あばばば、いあ、

いあいあ……はははははは」

何事か、と思い画面を見ると

安里のいた場所に常軌を

逸した存在が移っていた。

「な、何ですかアレは……!？」

「あああ……、つ、冷たい……」

寒いいい……」

「椿姫！ 大丈夫ですか！  
しっかり!!」

顔面蒼白で震える彼女を  
抱きしめつつソーナは

ニグラに視線を戻す。

「……やったわね安里ちゃん。

『月に吠えるもの』の顕現よ」

ニグラはそう言って微笑んだ。

その笑みはまるで新しい玩具を

与えられた子供のように、

同時に得体の知れない恐怖を感じさせるものだった。

安里だったものの周りでは

氷が砕け散り、風が吹きすさび、

大地が腐る。

その姿はまさに異形と呼ぶに

相応しいものだ。

「これは一体……?」

「あれこそが

『月』の『力』の一端。

月は太陽と共に空に浮かぶ

衛星である事は知っているね。

そして太陽の光を受けて

夜闇を照らす。

つまり『陽』と『陰』。

相反する二つの性質を内包する。

とはいえ過剰な陰は太陽の光すら

飲み込んでしまう。

今の彼は『陰』の力の化身なんだ。

月の裏にて玉座に在る

『秘密の皇帝』。

そうなんだろう、ゲイト君？」

言葉を失いかけたグレイフィアの

側に現れたのは現魔王にして

彼女の夫である

サーゼクス・ルシファー。

まるで講義をする教授の様に

解説をしながら現れた。

「そういう事になるね。

けれど彼らは未だ

【九頭竜天君】には至らず」

「くずりゆうてんくん……？」

グレイフィアは首をひねった。

その様な文献には人間界、

冥界、天界。

果ては地獄においても

その様な存在は記されてもいないし

語られてもいないのだ。

「……！　これは一体……！」

ユーベルーナは安里の

異形への変貌に驚愕していた。

だが、同時に理解もした。

これがライザー様を襲う前に

殺さねばならない、と。

『く……る……る……る……』

それが発したのは

声と音の狭間の振動。

獣でもなく、虫でもなく、

天使でもなく、悪魔でも、

龍でもない。その正体は不明。

不明とは恐怖だ。未知なるモノに

人も悪魔も本能的な恐怖を感じる。  
故に、それは音というより最早  
衝撃波として周囲に広がった。

「ぐうッ……！」

咄嗟の判断により防御魔法を展開したユーベルーナ。

しかし、その衝撃は

彼女ごと周囲の全てを

薙ぎ払った。

「くっ、はあ、はあ……」

何とか意識を保つ事が出来た

ユーベルーナだったが、

全身の骨が軋むように痛み、

呼吸すらままならない程に疲弊し、

視界が霞んでいく。

「ぐうっ……ライザー様……」

お許し下さい……！」

ユーベルーナは主への

謝罪と共にフェニックスの涙を

呑んだ。

傷口は癒え、魔力は満ちる。

しかし状況は依然として最悪。

何かはまるで霧の様に

かき消えていた。

「……ライザー様が危ない！」

ユーベルーナは

主人の危機を救うべく、

急いでその場を離れた。

↓

「さて、リアス。

そろそろ投了してくれないか？」

「お断りよ。」

貴方が想像していたよりも  
紳士なのはこのゲームで  
理解したけれどそれとこれとは  
話が別だわ」

「強情だな。」

君の眷属達は既に戦闘不能。

仮にリタイアしていなくてもまともに動けまい。

それに、だ」

ライザーが指差した先には一誠が

膝をついていた。

「この通りあの

下僕クンのダメージは深刻だ。

今すぐ治療しないと命に関わるぞ？

それとも……ここで死ぬか？」

「……………」

「無論、

俺としては君をこれ以上

辱めるつもりもない。

だから降参して欲しい。

これ以上続けるのなら、

俺は彼を殺すしかなくなる。

……これは最終警告だ」

リアスの顔色が変わった。

「や、やめなさい！

イツセー……………」

彼は関係ないでしょう！」

「無関係ではないよ。

君は彼を眷属としてではなく

一人の男性として愛し始めている。

そうだろうか？」

「なっ……………!?!」

リアスは流石に動揺した。  
自分の秘中の秘をあつさり  
看破されたからだ。

「同病相憐れむ……」

と言えばユーベルーナや  
あの下僕クンには悪いが  
俺にもその位の事は解る。

ここからはオフレコで構わんが、  
籍だけ入れて後継者が生まれたら  
後はお互い好きにやる……。

君がそうしたいというなら  
それでもいいさ」

ライザーの口調は穏やかだった。  
心からリアスを想っている。

そんな印象を受ける程に。

「ぶ……部長……」

「イツセー！」

一誠はよろめきながら  
立ち上がり、拳を構える。

しかし足取りは覚束ず、  
フラついていては

満足に立つ事すら難しい。

それを見たアーシアは

回復の術式を展開。

一誠の体力を回復させる。

「悪いな、アーシア……」

「いいえ、イツセーが

いなくなったら……私……」

「……アーシア」

二人は見つめ合い、そして頷く。  
それを見たリアスの表情が曇る。

(あの子はアシアで、

私の事は部長と呼ぶのね……)

「……そう。わかったわ。」

でも私は最後まで諦めない!

最後の一人になっても戦う!

それがグレモリー家の

次期当主である

私が背負うべき責任なのだもの!」

「そういう勇気は匹夫の勇。」

リアス、何故チェスにおいて

王が最強ではないか知っているか?

王とは最後の一人になる前に

配下と共に手段を尽くして

勝つものだからだ!」

ライザーが叫ぶと同時に炎の翼を広げ、

上空へと飛び上がる。

そして、

「フェニックスの業火!」

羽ばたけ、不死鳥の翼よ!!」

両手に宿った紅蓮の炎を思い切り振り下ろす。

それは巨大な火の玉となって

リアスに向かっていった。

だが、その刹那。

きゅおん……。

空間が歪み、火の玉が消失した。

「何者……いや、何だアレは!?!」

あれがネフレン・カ・マンモンの

言っていた預言の存在なのか!?!」

現れたのは安里であったもの。

この世の理から外れたそれは

この世の理による制約を受けない

様だ。

「あ、あれは……一体……」

ライザーは驚愕し、

リアスは呆然と呟いた。

「……!」

「ライザー様! ご無事ですか!」

ユーベルーナが駆け付ける。

「おお、ユーベルーナ。

無事だったか……!」

「息災を喜ぶのは後で……!」

まずはあの異形を始末します!」

「ああ、そうだな!」

ライザーとユーベルーナは

得体の知れぬ何かに向けて同時に攻撃魔法を放つ。

「喰らえ!」

「はあッ!」

二つの閃光が交差する。

しかし、

『く……る……る……る』

「何だど!?!」

「馬鹿な!」

支配の戦鎚も不死鳥の翼も

所詮この世の理において

可視化されているものだ。

しかし、それを嘲笑うかの様に

ソレは二人の攻撃をすり抜け、

そして3頭の首とも触手とも

つかぬものが光った。

放たれたのは刃ではなく空間の断裂。

「ぐっ……!」

ライザーはとっさの機転で



ユーベルーナを翼に包んで飛ばす事で避難させ、  
断裂の直撃を受けた。

「が……は……!?」

ライザーの意識が消失しかけた。

彼の身体は二つに分かたれ、

片方は発火と共にかき消えた。

(ず……頭痛がする……!)

は、吐き気もだ……!

バカな……!

このライザー・フェニックスが

敵を前に立つことが出来ないだどツ!?)

「ライザー!」

先まで殺し合いを

していたというのにリアスは

叫んだ。

(何ということだ。

ゲームの勝敗よりも先に

俺の身を案じてくれるとはな……

リアス・グレモリー……!)

ライザーは己の不甲斐なさに

歯噛みすると自身の力で

下半身を復元させた。

↓

「部長! 大丈夫ですか!」

一誠はリアスが倒れている

場所に辿り着くと彼女を

庇い立てる様に前に出た。

「イツセー、

貴方は下がってなさい。

今の私には魔力が無いのよ……!」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょう!」

……それに、俺だつてまだやれます！」

「いいえ、もういいの。」

ゲームは私の負けよ。

あの怪物にはこの場にいる

誰も勝てない。

だから……

これ以上は誰も傷付けさせないわ」

「部長！」

「イツセー、私はね。」

自分の夢の為に、皆の夢を踏みにじってきた。

お父様の期待に応えられない自分が嫌だったから。……でも、それ

も今日で終わる」

「何言ってるんですか……！」

勝手に結論を出して

勝手に諦めるなよ！」

「イツセー……う？」

諦めかけるリアスにイツセーは叫んだ。

まるで龍の咆哮の様であった。

「俺はこんな所で皆との生活を終わりにたくない！」

部長……リアスが好きだからだ！

部長と一緒に居たいからだ！

部長の選択は

間違つてたかもしれない！

でも、それが間違いだなんて誰にも言わせない！

部長が自分を否定するなら、

そんな部長ごと愛してやる！

部長の、リアスの

全部を受け入れてみせる！

それが、

俺の……ハーレム王としての

生き方だあー!!!」

「イツセー……」

ライザーの言葉が脳裏に蘇る。

(リアス、何故チェスにおいて

王が最強ではないか知っているか？

王とは最後の一人になる前に

配下と共に手段を尽くして

勝つものだからだ！)

「ふ、ふふ……」

そうね。そうよね。

……ありがとう、イツセー。

私はまるで

なっていない王だったわ……！

そんな私でも信じて……

付いてきてくれる？」

「当然です！」

「勿論です！」

イツセーとアジアは

真っ直ぐに自分を見据えて

答える。

「あらあら……私達も

忘れてもらっては困りますわ」

「そうですよ部長。

僕たちは貴方の駒です」

「生きるも死ぬも一緒……です」

服のあちこちが破れているもの

朱乃、小猫、木場の三人は

しっかりとした足取りで

リアスやイツセーを守る様に

取り囲む。

「木場！ 朱乃さん！ 小猫ちゃん！

皆無事だったのか!？」

「ほーっほっほっほー！」

当たり前ですわ！

私の隠しておいたフェニックスの涙を大盤振る舞い致しましたの！

さあ、リアス様もこちらを！」

と、レイヴェルが得意気に言うど、小猫がコクリと首肯する。

どうやら、

事前に彼女が隠し持っていたフェニックスの涙を飲んだらしい。

「けど、これで僕達は実質

反則負けになってしまった……」

「それはそれ！　これはこれ！

今はアレを何とかする事を

考えようぜ！」

「ええ、その通りよ」

「はい！」

「はい……！」

リアス達6人は改めて敵を見る。

そこには空間の裂け目があり、

そこから得体の知れぬものが

またも這い出てくる。

『く……る……』

3つの顔がこちらを向くと

それぞれ口を開く。

そして空間が震えると、

そこから光の奔流が放たれた。

「うおっ!？」

「ぎゃっ!？」

「ぐっ!？」

「ああっ!？」

「あうう!？」

光の波動が6人を呑み込み、  
そして爆発が起きる。

「うおっ……!？」

な、何だ今のは……!？」

『俺達でいうブレスの様なものだ

奴にとつては虫けらが自分に

挑んできた事に対しての

溜息と変わらんがな』

瓦礫から何とか起き上がった

イツセーの耳元に聞いたことが

あるような渋い声が聞こえた。

「え……!？」

イツセーは周囲を見渡すが、

視界に映るのは蹠踉めきつつ起き上がる

リアス達と壊れた壁だけ。

「な、何だよコレ……!？」

『お前の左腕の籠手だ。

俺の名はドライグ。

お前の相棒さ』

「俺の、左腕の籠手が喋ってるのか!？」

「っーか一体どういうことなんだ!？」

『説明は後回しだ。

それよりもまずは

目の前の脅威を退ける事が先決だろう?』

「そ、そうだ! 部長達が危ない!

早く行かないと!」

「おっとオ、いいんですかあ

イツセーくん?」

後ろから急にナイアが抱きつき、

というより這い寄ってきた。

むにゆり、と柔らかな胸の  
感触と蜂蜜酒の様な香りが  
鼻と背中を刺激した。

「ちよ、やめてくださいよ！

今はそれどころじゃ……」

「何言ってるのよお。

アナタがああ怪物を倒すのよ？

だってえ、

その為の力が有るんでしょ？

貴方もチャホヤされてハーレム王に  
なりたいでしょう？」

「……ッ！」

違う。違う！

さっきのドラゴンではない

自分の意志が

ナイアの甘い囁きを拒む。

ああ怪物を殺す事は正解ではない。

だから……だから……！！

「俺は……部長達の所へ行きます！」

「あー、残念ねえ。

でも、それでこそイツセーくん。

さあ、行ってらっしゃい」

「ありがとうございます！」

それじゃ、行って来ます！」

イツセーはそう言うど、

リアスのところへと

走って向かっていく。

「走って向かっていくとは

なんとも若いですねエ」

イツセーを見送る

ナイアの顔はまるで

サーカスの道化を嗤う観客の  
様であつた。

## ※第13話（イツセー？リアス）

「おのれ……攻撃を

かわそうともせんとは。

このライザー・フェニックスも  
侮られたものだ！」

憤怒か、或いは

恐慌を抑え込むための虚勢か。

ともかくライザーは

安里であったものに

幾度目かの火炎を放つ。

全方位を包み込んで、

ライザーの羽根が連鎖爆発を

起こす。

まともな相手ではあれば

「王手」どころか「詰み」である。

所がライザーが

相対しているのは

まともな相手ではなかった。

『くつるるるる』

またあの奇妙な振動を発すると

安里であったものの周囲の

空気が文字通りに変化した。

「何だこれは!？」

それは不可視の重力場。

謂わばブラックホールとでも

いふべきものか。

爆発の一切合切がその

ブラックホールに呑み込まれて、

消え失せてしまう。

「ぬうう……」



ライザーはその現象の正体を  
理解することは出来なかった。  
精神が摩耗していくのが解る。

「ならばこれでどうだ!!」

それでもライザーは攻撃の手を止めない。

無数の炎剣を生み出して

それを全て安里だったものへと放つ。

その全てが吸い寄せられていく。

しかしライザーの攻撃はそれで終わりではない。

己の肉体そのものを炎に変えて、

それが燃え尽きるまでひたすらに放ち続けるのだ。

「おおおお!!」

「……………」

やがて全ての炎剣を放ち尽くした

ライザーは肩で息をしながら、

目の前の存在を見据えた。

そして気付く。

「…………馬鹿な！ そんなことが！」

『く……るるる』

それは咆哮か、

あるいはライザーの無為に

対する嘲笑か。安里だったものは、

先ほどまでと全く同じ姿でそこにいた。

「俺の全力は……」

貴様にすれば何もしていないと

同じだったと言うのか…………おのれ…………」

ライザーの精神は

もはや限界だった。

フェニックスの身体は不死でも

精神まではそうはいかない。

「認めんぞ…………俺は断じて

「お前など認めるわけにはいかんだ……!!」

ライザーの心は折れかけていた。

己の全霊を持ってしても、

眼前の異形を

打倒することは叶わない。

「だが……!」

このまま終わることも出来ん……!!

俺は貴様を倒し、必ずレイヴエルを

あの卑劣漢から守らねばならんだ!!」

ライザーは意地だけで立っていた。

ここで諦めることだけは出来ない。

たとえ勝機がゼロであろうとも、

ライザーはこの化け物に打ち勝つために

最後の力を振り絞った。

「俺が死んでも構わん!!」

この身ごと全てを焼き尽くす!!」

「待てよキザ野郎!」

自爆技に等しい最後の切り札を

放とうとした

ライザーを止めた声があった。

ライザーにとって

聞き覚えのある声だった。

「邪魔立てするか小僧!」

「ああ、するさ!」

一誠は迷いなく言った。

下級悪魔が名門の純血悪魔に

物怖じせずにいる。

これだけでも大した胆力で

あつたらう。

「お前がやろうとしていることは  
命を捨てるようなもんだろ?」

そこまでしなくてもいいだろうが！」

「黙れ!!」

これは俺の意地の問題だ!!  
貴様に

口出しされる筋合いはない!!」

ライザーの怒りの言葉にも怯まずに一誠は言い返す。  
それはまさに、

ライザーの決意に対する挑戦であった。

それを感じ取ったのか、ライザーの顔色が変わる。  
最早そこには傲慢な貴族の姿はなく、

ただ信念に殉じようとする

戦士の姿があるのみ。

「お前の気持ちはよく解るぜ。

好きな人を守りたいって気持ちは

男なら誰だって持つてるもんだ。

……けど、

だからこそ俺は

「お前のやりかたを認めねえ！」

「貴様あ……ッ!!」

ライザーの表情が怒りに染まる。

彼は誇り高い貴族の出であり、

そのような言葉を下級悪魔に投げかけられるの  
は彼にとって最大級の侮辱であるからだ。

「イツセーの言う通りよ

ライザー!

レイヴェルは二人の兄が

いるからまだいいわ。

でもユーベルーナや貴方の眷属は  
どうなるの!？」

「うっ……!」

リアスの糾弾がライザーを射抜く。

「貴方一人でも、私達だけでも  
アレは止められない。」

「……ああ。そうだならば……！」

「……ああ。そうだな」

ライザーはようやく落ち着きを取り戻した。

「俺としたことが……」

少し熱くなりすぎたようだな。

今回は君の指示に従おう」

「ええ。お願いするわね？」

「ああ、任せておけ」

そう言ってライザーは

安里だったものに向き直る。

「しかしアレに対して

打つ手立てはあるのか？

あるとすれば君の

『滅びの魔力』位だろうか……。

正直俺すら倒しきれないレベルの

攻撃で効果はあるのか？」

ライザーの疑問は尤もだ。

安里だったものを倒すためには、

その核となる部分、

即ち九頭竜安里を叩くしかない。

だが、あの悍ましい存在には

毛程の傷も付けられなかった。

「痛い所をついてくれるわね……」

けれど大丈夫よ。

私の『滅びの魔力』よりも

強力な切り札がこっちにも

あるのよ」

「ほう、それは何だ？」

「ふふん、

それは見てのお楽しみよ」

自信満々に答えるリアスに

ライザーは苦笑を浮かべた。

(恐らくはあの下僕クン……)

いや兵藤一誠の事だろうな。

信頼しているのだろうな……彼を)

「まあいいか。」

ならばその切り札とやらを見せてもらおうか」

「ええ！ 行くわよ皆！」

リアスの掛け声を皮切りに

皆が作戦を決行する。

「恐らくだけど、アレの

重力場による攻撃の無力化は

一度の攻撃に対してしか

発動できない……。つまり

複数の攻撃を同時に行えば

効果があるかもしれないわ」

「成る程。」

では、私が囷となります。

その間に皆さんは攻撃を……」

朱乃の提案に全員が同意を示す。

「それじゃ、始めるわよ？ 準備はいいかしら？」

「いつでもいいですよ部長！」

さつきみたいなへまはもうしませんから！

今度は絶対に成功させます！」

一誠の力強い言葉に、他の面子も笑顔を見せる。

「あらあら、頼もしいわね。」

期待してるわよ、イツセーくん。……アーシアちゃん、回復の準備

は宜しくてっ。」

「はー。」

「よし、行きましょー。」

「はいっ！」

「了解です！」

「はいなのです！」

そして、遂に戦いが始まる。

『くとなるるるる』

「随分とイメージチェンジ

した様だけど……

私は背伸びしたがる

子は好みではありませんの！」

朱乃はそう言いながら

天に魔法陣を描き幾重にも

雷を束ねた

「はあああああつ！！」

気合いと共に放たれた一撃は、

狙い変わらず安里だったものの中心へと

吸い込まれていった。

天を轟き、地を砕くその豪雷は

朱乃が放つことが出来る技でも

最大威力のものだったろう。

重力場によりその豪雷を

闇に呑み込もうとしたが……。

「……させません。」

あと、私は普段の安里先輩の方が

おちつきます」

小猫は小声ながらもはっきりと

宣告すると共に丸太の槍にて

安里だったものを突いた。

僅かながら朱乃の豪雷の発動よりも

小猫の攻撃の方が早かった。

重力場が呑み込んだのは

小猫の攻撃の方だ。

豪雷の直撃を受けた

安里だったものは

一瞬動きを止める。

だが、それも束の間のことだった。

『くっくるるるる』

今度は重力場にて

攻撃を吸い込むのではなく

何と吐き出したのだ！ 「なっ!？」

驚愕の声を上げる一同。

吐き出された雷撃は真っ直ぐに

一誠達のもとへ向かってくる。

「うおっ!!」

「きゃあっ!!」

咄嗟に回避するも、

完全には避けきれずダメージを負ってしまう。

「ぐっ……!」

「うう……!」

「ああっ!」

「あうっ!」

更に、吐かれた雷撃の余波で

辺りの木々が燃えてしまう。

「クソツ……!」 何でもありがよ!

インチキ攻撃もいい加減に

しやがれ!」

「イツセーくん! まだ来ますわ!」

朱乃の言葉通り、安里だったものがまたも攻撃を仕掛けてくる。

『くっくるるるる』

再び重力場を展開させて

こちらの動きを封じようとしてくるが……。

「二度も同じ手は使わせないよ。」

君はそんな力押しタイプだとは

思わなかったけどね、安里君」  
祐斗がそう言うと同時に、

木場の持つ魔剣が輝きを放つ。

「魔剣創造」

木場はこの能力で創り出した

魔剣の力を操ることができなのだ。

複数の属性で同時に攻撃すれば

あるいは……。

『くつるるるる』

しかし、安里だったものは

その程度ではびくともしない。

「相変わらずタフだね。

僕にはないその強さは、

素直に尊敬するよ」

「祐斗！ 危ないわ！」

「分かっています！」

祐斗に向かって放たれる闇の波動をライザーが

炎を纏った拳で打ち消す。

「ありがとうございます」

「礼には及ばんよ」

そう言いつつも、

ライザーは内心焦っていた。

(まずいな……。

あの重力場の能力は厄介すぎる。

あの黒い球体を本来の用途

に使われれば終わりだろう。

忌々しいが奴が遊んでいる内に

何とか打開策を考えねば)

そして、リアスもまた

安里だったものを見て思うところがあった。

(あの重力場で私達を呑み込めば



「あっさり終わる筈なのに  
それをしない……!?

「安里君の意思は生きている……!」  
「ならば、勝機はある！」

「魔剣創造！」

「幾百もの魔剣が安里だったものへと  
迫りゆく。」

「(これで少しだけでも

動きが止まれば……!)

「だが、安里だったものは

先程の様に重力場を展開しない。

「代わりに『いい加減にしろよ』と

苛立ったかのように腕を振った。

「その腕の一振りで発生する

空間の断裂は幾百の魔剣を

一瞬で全て粉碎してしまった！」

「そ、んな……」

「馬鹿な……」

「余りの光景に呆然とする面々。」

「そして、木場と小猫へと予想だに

しなかった攻撃が襲う。」

『く……る……る……』

「三本指の両手の掌を

彼に向けるとその掌に

数十もの魔眼が文字通り生えた。

「その魔眼の力は二人の

嘗てのトラウマ、心の闇を無理やり

掘り起こされた。」

『どうして助けてくれなかった』

『何でお前だけ生きている』

『許さない』『呪ってやる』

『役立たずめ』

『姉はあんなに優秀なのに』

なんでお前は』

『何でお前だけが』『消えてしまえ』

『う、あああああああ!!!』

僕は……ああ……『私』は……!』

「……ごめんなさい!」

ごめんなさい!」

二人の絶叫と共に

身体が石へと変化していく。

「祐斗!! 小猫!!」

「あの二人の治療は私が!」

アーシアが二人の元へ駆け寄るとその体に触れ、  
癒やしていく。

しかし、元の世界に戻る事を

拒むかの様に

石化が解けることはない。

「そんな……」

私の力が足りないばかりに……」

涙を流すアーシアに

安里だったものが迫ってゆく。

「アーシアッ!!」

だが、間に合わない!

アーシアは恐怖から目を瞑る。

だが、その時だった。

「巫山戯るな!」

貴様の思い通りになどッ!!」

文字通り火の鳥と化した

ライザーの呐喊、

彼の最後の意地による特攻で  
あつた。

「ライザー・フェニックスだ!!  
ぶっ潰れるおツ!!」

ライザーの渾身の一撃が安里だったものに直撃した! しかし、それでも尚安里だったものは健在であった。

『くっくるるる』

安里だったものはライザーに狙いを定め掌を向ける。

だが、その火の鳥の背には

二人の男女が乗っていた。

「朱乃! イッセー!」

「ええ!」 「はいっ!」

朱乃の豪雷を纏ったリアスの

魔弾が安里だったものの

胸部に当たる。

理外のものであるならば

理外のものに通るのは道理。

血とも泥とも解らぬものを

飛び散らせながらソレは哭いた。

『いあ! いあ! いあ! いあ! いあ!』

『それで、どうする相棒?』

奴は理外の存在だぞ?

下級悪魔のお前が触れれば

文字通り消し飛ぶぞ?』

「構わねえよ!」

ただ、部長のおっぱいを

左手で揉めなかった事だけが

心残りだけどな!!」

まるで傍からは意味のわからぬ

迫真の叫びであった。

「い、イッセー……!」

「全く……大した男だよ。

君の下僕クンは」

「うおおおっ!!!」

『Boost!!』

一誠は更に倍加させ、力を込める。

まともな手談でダメージを

通らないならば

まともでない手段を使うのみ。

理外には理外を。

と、言ってもドライグの

力ではない。

(安里……!)

本当に思っていることを言えよ!

お前の『裸の心』を

俺にみせろ!)

「洋服破壊!」

一誠の左腕が虚無に呑まれるのと

同事に安里であったものの

外装が針を刺した水風船の様に

バチン、と弾けた。

そして、安里だったものの中から人影が現れる。

それは、

「……………安里?」

そう、九頭竜安里本人だ。

「……………俺は、幸福になれなくても

良かったんだ……………」

安里は呟き続けた。

誰に向かって話しているのかは

解らない。

吐露なのか、はたまた独白か。

「ただ、

誰かから愛されたかったんだ。

それだけだったのに……………」

だが、その言葉に嘘偽りは無いと一誠は感じた。

「安里……」

「なのに、どうして……」

一誠だけに……皆集まる……

一誠だけが……愛されるんだ……

俺は一誠が羨ましかったんだ……」

安里は膝をつくと頭を垂れる。

「バカ野郎！」

イツセーは殴りかかろうとしたが

片腕がないためもたれ掛かる

形になってしまった。

「イツセー！」

気持ち解るけど！」

早合点したりアスが

イツセーを制しようとするが

ライザーが制した。

「ライザー！ どうして！」

ライザーは無言で首を振った。

恐らく

『二人の友情に割って入るな』と

いうのであろう。

「俺だって……俺だって……」

安里が羨ましかったぜ！

力もケンカも強いし、

困っている奴を見たら放っておけないし、美人の従姉さんもいる

し、でも、本当は寂しいのを必死に隠してる様な……

そんなお前に憧れてたんだ！」

「……………」

「だから、安里！」

何度だって友達になろう！」

イツセーの言葉に安里は顔を上げると涙を流した。

「ありがとう……。」

イツセー……。」

安里は立ち上がると

イツセーに手を差し伸べた。

イツセーはその手を

しっかりと掴む。

二人の絆は改めて

不動のものとなった。

ー

「うーん……。」

その日の冥界での夜。

イツセーはベッドの上で唸る。

片腕を喪った事に後悔はない。

流星のアーシアでもないものは

回復できないと知った時は

軽いショックを受けたが、

過ぎたことは過ぎたことだ。

くよくよ考えた所で

どうなるものでもないだろう。

(父さんと母さんに何て

言ったら良いだろうか……。

トラックに撥ねられたーとか……？

いや、異世界転生じゃないんだから！

巨人に喰われたーとか？

いや、そんなデタラメ小学生でも

信じないだろ！

鯨に喰われたーなんてのは？

いや、俺が目指しているのは

新時代じゃなくて

ハーレム王だから！)

イツセーは両親になんて

説明しようか考えあぐねていたのだ。  
それに浮かぶ考えがもう一つ。

(何か、木場の石像を一旦運んだ時に  
違和感があったんだよな……)

いや、アレはちゃんと付いてたけど  
すると、コンコン。

部屋の扉がノックされた。

「はいはい」

ガチャリと開けるとそこには  
リアスがいた。

「ぶ、部長!？」

ど、どうしました?」

リアスは顔を赤らめながら  
モジモジとしていた。

しかもランジェリー姿だ。

「そ、その、腕の具合はどうかしら?  
もう大丈夫なの?

何か不自由があったりしない?」

「へ、平気です!」

ほらこの通り元気モリモリ!」

力こぶを作るポージングを  
するが肝心の腕がない。

「ふふっ私のイツセーは  
相変わらずうっかり者ね」

そう言うときリアスは部屋に入り、  
そのままイツセーを抱きしめた。

「ぶ、部長!？」

「ごめんなさい……」。

私のせいでこんな事になって……」

イツセーの胸に顔を埋め、  
震える声で謝罪する。

しかしイツセーは  
突然の至福に硬直していた。

(い、今)

私のイツセーって言った!?

言った!?! 言ったよね!)

暫くして、

リアスはゆっくりと身体を離す。

そして真剣な表情になった。

これは、リアス・グレモリーとしてではなく、

リアス個人としての決意表明だ。

「ねえ、イツセー。」

私は貴方が好きよ。大好き。

愛しているわ。

ずっと一緒にいたいわ。

その為ならどんな犠牲を払っても構わない。

例え、それが私の命であつても……」

「ぶ、部長……」

「もう……こういう時は

リアスって呼びなさい」

「リ、リア……ス……」

「そう。それでいいの。」

イツセー。貴方の側にいるために私が何をすれば良いか解るかし

ら?」

「えつと、それは……」

愛していると言われた時から

イツセーの頭はそれで一杯。

それ以外の事は考えられない。

「教えてあげる。」

私も……同じだから……」

リアスは再びイツセーに抱きついた。

「イツセー……お願い……。」



私の全てを貰ってくれる？」

「……は、はい！」

「嬉しい！ イッセー！」

二人はベッドに倒れ込む。

そしてリアスは

イッセーの服を脱がせた。

「イッセー……好き……！」

「俺も……好きです……！」

「うん……知ってる……！」

「ん……ちゅぷ……はあ……！」

二人の熱い口付けで

水音が二人の中で鳴り響く。

「イッセー……」

脱がせて……」

リアスの一言にイッセーは彼女の下着に手をかけた。

「うお……」

「これが……」

「そんなに見つめないで……」

「恥ずかしい……」

イッセーは感動した。

リアスの胸はまさに芸術品。

形の良い乳房に張りのある乳首。

更にその大きさときたものだ。

「ゆ、夢みたいッス……」

「もう……。焦らないの……」

「こっちにも触ってみて……」

リアスは脚を拡げると

指で秘所を開いて見せた。

「うおおおー！」

そこは既に濡れており、

ヒクついていた。

イツセーという眷属ではない  
一人の夫を求めているのだ。

「さ、触っても……いいですか？」  
恐る恐る聞くと、

リアスは頬を赤らめて微笑んだ。

「もちろんよ……。来て……」

「は、はい……」

イツセーの右手が

リアスの股間に触れる。

「んっ……あっ……」

あ……ああ……はああ……」

くちゅ……♡ちゅく……♡

くちゅ……♡

イツセーの手淫によって

リアスの性器から溢れる蜜は量を増し、  
彼の手を濡らしていく。

「ああ……イツセー♡イツセー♡」

イツセーの頭を抱きしめると、

リアスは自ら腰を動かし始めた。

（はああ……イツセーのが欲しいの！

早くう！ もう我慢できない！

私を滅茶苦茶にしてえ！）

が、

リアスのおねだりを焦らす様に

イツセーはリアスの唇を優しく奪う。「はむ……んふ……はあ……  
ん……ちゅぷ……レロ……んふ……」

舌を差し込みリアスの口内を犯していく。

「はあ……はあ……はあ……はあ……ん……」

リアスの呼吸は次第に荒くなり、

瞳は潤み、顔は上気していた。

「お、俺も限界です！」

「きて……イツセー！ あなたの全てを感じさせて♡」  
「はいー！」

イツセーはズボンとパンツを下ろし、既にギンギンになっている彼女の臍まで届く程の肉棒をリアスの膣穴にぴたり、と亀頭の先端を当てる。

ぬぷり……♡くちゅう♡ちゅう♡

「う……おお……！」

「は……ああ……♡」

（や、ヤバイ……！）

部長のオマ○コ、

気持ち良すぎる！

慎重に行かないと……暴発する！）

（あ、はああ……♡

イツセーのオチ○ポ♡

気持ち良すぎる♡

一気に突いて……貫いてえ♡）

リアスは両膝の裏を手で持ち、脚を大きく開いて、より挿入しやすい体勢をとる。

イツセーはその姿勢に興奮し、彼女の細いウエストを掴み、ゆっくりと突き刺す、のではなく

訪問の様な遠慮がちの勢いで

挿入した。

「ひゃうん!? あ、ふう……♡」

リアスも予想外だったのか、

甲高い声を上げる。

（え？ 何これ!?）

こんなの知らない……！

私の中に入って来る!?

ダメエ！ 感じちゃう……♡

イツセーのオチ○ポが

入ってきただけなのに……  
甘イキシちゃう……♡♡♡)

リアスは陶然として、  
快感に震えた。

イツセーも久々の  
処女の締め付けに戸惑っていた。

「ぐ……凄……！」

部長の中、キツくて、  
肉が詰まってる感じで……

「凄……！」

「そ、そう……良かったわ……。」

動いて……あなたを感じたいわ……」

「はい！」

イツセーはリアスの両太腿を掴むと、上下に動かし始めた。

「ずちゅん♡」

「あんっ♡」

「うお！」

イツセーの肉棒がリアスの膣内で暴れ回る。

リアスの膣内は狭く、イツセーのモノをキュウキュウに包み込む。  
そしてリアスの子宮口が下りてきて、イツセーの亀頭に吸い付く。

（うおおお！ ぶ、部長の

赤ちゃんの部屋が……！ キスしてる！ 吸われてる！ こ、これが部長の一番奥か……。）

でもまだ全部入ってないんだよな……）

「んん……はあ……♡」

リアスは目を閉じて喘ぎながら、イツセーの動きに合わせて腰を揺らしている。その表情は幸せそうだ。

イツセーはリアスの腰を持ち上げて、さらに深く繋がるようにする。  
だが、イツセーの巨根は根元まで入りきらない。

「くうう……！ ま、まだまだ……！」

イツセーはさらに強く押し込んだ。ズブウツ!!

「あうう……♡待ってえ……♡

イツセー……♡刺激が……♡

セックスの刺激が……

強すぎるから♡」

「うおおおお!!」

(エロ過ぎます……!)

エロ過ぎますよ……リアス部長!)

イツセーはリアスの言葉を無視して、激しく動き続ける。

「ああん♡そんなにしたら……

私……もう……もう……」

リアスは涙目になり、絶頂寸前だ。

イツセーはリアスの腰を両手で掴むと、自分の腰を叩きつける様に、ピストン運動を始めた。

パン! パアン! グチュ! ヌチャ! 二人の結合部から卑猥な音が響く。

「はあん! イツセー! イク! イツちやう! ああ! イツセー!  
! 好き! 大好きい♡」

リアスは涙を流し、歓喜の声を上げている。

イツセーはラストスパートをかける。「うう……俺ももう限界です……

出します……リアス先輩……

中に……出します!」

「来て! 私の中に出してえ!」

「うおお!」

どびゆる! ビュルルル——!

「え……?」

ど、どうして外に……!?!」

リアスは予想外の

出来事に困惑する。

「い、いや……流石に学生の内に

妊娠はまずいのではないかと……」

ぽりぽりと左腕で頬をかきながら答える。

「……うう……」

リアスは瞳を潤ませ、泣きそうな顔になる。

「ああ……ごめんなさい！」

俺のせいですよね！ 本当にすみません！」

イツセーは慌てて謝る。

「……」

「部長？」

「いいわ……許してあげる♡」

頬にキスをしながらリアスは言う。

「お、俺感激ツス！」

「大袈裟ねイツセー……って

あら？ 貴方のその腕……？」

リアスは気付いた。

失った筈のイツセーの左腕がある。

『ハッハッハ。』

良かったな相棒。

お前の腕ではないものの

これでそこのお嬢さんの胸は

揉みたい放題だな？』

「ど、ドライブ……!?!」

これは……一体!?!」

『何、いいものを見せてもらった

礼だ。』

本来木戸銭にしては過ぎたものだが

まあ、偶には良かろう。

光栄に思えよ。本来強欲な

俺達ドラゴンが見世物に対して

何かを払うなど有りえぬ事だからな』

「いいものって……部長の裸？」

『……やはり』

俺の見込み違いだったか？』

ドライグの声が呆れ声に変わった。

「返せって言われても」

返さねーぞ！ 俺は！」

『別に構わんさ。』

まあ、それはそれとして

アーシアとかいう娘には

受精を強請って、

そこのお嬢さんには妊娠を

防ごうとしたのはどういう

理由だ？』

「ば、バカツ!!」

今言うやつが……!」

イツセーは焦る。

「そう……そういうことだったの……。」

私のこと……大切に想ってくれてるのね……」

リアスは微笑みを浮かべた。

「うう……。」

恥ずかしいッス……」

「ふふっ……嬉しいわイツセー。」

ありがとう……なんて言うと思

った？」

リアスの含み笑いには

明らかに怒りが籠もっている。

「えっと……部長？」

「そんな事を言っても私は許さないんだから！ あとリアス！」

「ご、ごめんなさいリアス部長！」

」

場所は変って

高層マンションの一室。

一人の壮年男性が黙々と酒を呑んでいた。

「旨いのかい？ それ？」

「まあな。大人は苦い酒を

旨いと言って飲むもんさ」

カラカラと豪快に笑って

男性は眼前の美女に答える。

「物憂げな雰囲気を放つ

まるで牛の様に泰然自若。

片目が隠れた長めの髪が

印象的な美少女であった。

「ボクには解らないなあ。

苦いものは苦いだけだよ」

「おいおい……仮にも暴君とはいえ

王様と

言われるお前さんが

そういう事を言うもんじゃない。

例えばあの絵を見て

美しいとか鮮やかだなーとか

思える心のゆとりを持ってよ」

グラスを持ち上げて一枚の

絵画を示す。

高名な画家の残した貴重な絵だ。

見るものが見れば本物だと

解るだろう。

すると壁にもたれかかる銀髪の青年が

口を挟んだ。

「俺には芸術は解らん。

俺にとっては戦いこそが全てだ」

「今世の白龍皇は血生臭いなア

いつの世も戦、戦、戦。



裏切り、裏切り、裏切り。

そんな奴等ばかりだよネ。

滅びたものは美しいけど……

滅びるものは無惨だよ。

ね、『飛將軍』もそう思うだろ？」

「……」

飛將軍と呼ばれた巨大な

鎧を纏う何者かは

少女に何も言わなかった。

※異聞・幕間（松田？ナイア 元浜？ニグラ）

時は少し安里の暴走と前後する。

「なあ元浜」

「何だ松田よ」

ここは駒王学園の屋上。

兵藤、元浜、松田、そして

九頭竜の4バカチームの内の

二人、松田と元浜が

連絡を取っていた。

「近頃イツセーと安里の

付き合いが悪い気がせんか？」

「うむ、全く同感だな」

「俺もそう思う」

最近の一誠は昼休みになると、

アジアと一緒にどこかへ行ってしまう。

所謂逢引であろう。

「まさか……二人はもう付き合い合ってるのか!？」

実際は付き合いどころの

話ではなく既に男女の仲

なのだがそれはともかく。

「あり得るぞー！あの二人なら!」

「ああ！いつの間になんな事に!」

「許せねえ……!」

あんな可愛い娘を独り占めするなんて!」

松田の発言に元浜は

激しく同意した。

すっかり嫉妬の焰に

身を焦がし、近くに誰かが

やってきたのも

気がついていなかった。

「何の話をしているんです？」

「あ、九頭竜……ちゃん!？」

松田は彼女の名字を呼びながら  
畏まる。

彼女の名は九頭竜ナイア。

安里の従姉……を自称している。

金髪に独特の爬虫類の様な瞳、

学生の平均値を越えるバスト。

何故か制服ではなく

シスター服を着て通学している。

更にスカートのスリットが

極めて煽情的なもので、

その脚線美を

惜しげもなく披露していた。

「お、お前には関係ない事だよ！

すまん、元浜！

あとでかけ直す」

「ふーん？ まあいいですけどね」

松田は顔を真っ赤にして誤魔化す。

実は松田は、

密かに彼女を想っているのだ。

そんな彼の想いを知っているのか

いないのか当のナイアは

ニヤリと蛇の様に口角を歪めた。

何か怪しい雰囲気ではある。

しかしその得体の知れなさが

彼女の魅力でもあったが。

「酷いですねえ。私はただ

アーシアさんをイツセー君からの

毒牙から救いたいただけですよ？」

「ぐぬぬ、やはりイツセーの奴、

我々の誓いを裏切ったな！」

松田は涙を流して

ナイアの言葉に

裏も取らない内から激昂する。

ちなみに彼らの言う誓いとは、

我ら生まれた日は違えども

彼女を作る日は同じ日、同じ時を

願わんというフルーツ園での

誓いである。しかし悲しいかな、

松田は気づいていない。

ナイアが口にしたのは

ただの方便だという事を。

彼女がアーシアを救うなどという

殊勝な動機を持っている筈もない。

「し、しかしだな。

証拠もない内からイツセーを

疑うのもな……」

「証拠ならありますよ？」

スリットの中に無造作に

手を入れるナイアに

松田は思わず目を逸らす。

そこから出てきたものは一枚の写真だった。

そこにはアーシアと一誠が

全裸で致している真つ最中の

場面が無修正で映っている。

そして写真はほんのり温かく

香水の香りが移っていた。

「こ、これは一体……」

「昨夜私が撮ったんですよ。

ほら、よく見て下さい。

二人の表情を見ればわかりますよね？」

ナイアの手にある写真を覗き込み松田は息を飲む。  
そこに写ったアーシアの顔からは  
完全に男に対する  
媚びに満ち満ちており  
まるで女そのものになった  
様な顔つきだ。

「で……デタラメだ！

デタラメに決まっている！」

松田は思わずナイアへと叫ぶ。

だがナイアはクスリと笑うだけだ。

そして彼女は松田の肩に手を置き、耳元で囁いた。

甘く蕩けるような声で。

その声は男の脳髓まで響いて犯し尽くす。

彼女の瞳が怪しく輝く。

「信じてくれないの松田君……？」

私が頼れるのは貴方だけなのに……」

ナイアは松田に抱きつくとその

豊満な胸を押し付ける。

松田はその感触に一瞬

我を忘れそうになるが辛うじて理性を保つ。

「だ、だ、駄目だ！

仮に事実であろうと

一誠を退学にするなんて

俺には出来ない！」

松田の叫びにナイアは微笑む。

「ふふ……ふふ……」かく★

普段とは違いだいぶ砕けた声だ。

松田には言葉の

意味が解らない。

「へっ……っっ」

「松田君は合格って言ったの。」

「これは合成写真だから」

口調まで変わっている。

松田は訳も分からず呆然とした。

「じゃあ……どうしてこんなものを……？」

「松田君を私の物にするためだよ？」

「……………え？」

ナイアの言葉の意味が理解できない。

「あのね、松田君の事が好きなの。

私の恋人になってくれたら

凄く……嬉しいかなって……」

ナイアの告白を聞き、

松田は頭が真っ白になる。

驚きの視線を向けた後、ナイアに向き直る。

「おい九頭竜……お前……正気なのか？」

お前は安里が好きなんじゃないのか？」

「振られちゃった……」

お前みたいに何を考えているのか

解らない女なんて嫌いだってさ」

ナイアの瞳から涙が零れた。

松田はナイアの泣き顔を見て

慌ててフォローしようとする。

「ま、まあ……何だ。

気を落とすなよ……！」

「ううん。松田君に慰めて欲しいんだ。恋人として……ダメ？」

「いや、俺はそんな事言われても……」

棚から牡丹餅どころか

金塊が降ってきたかの様な

状況に、松田は戸惑ってしまう。

「大丈夫だよ。優しくしてあげるから……」

ナイアは松田の頭を撫でると

その唇を奪った。

「んぐう!？」

「ぷはあ……」

「きゅ、九頭竜!？」

「ナイアって呼んで……♡」

そう言つてナイアは

再びキスをする。

今度は舌を入れて

ディープなものだ。

彼女の甘い唾液と柔らかい舌の

感触に、

松田はもう何も考えられなくなる。

「ねえ……。松田君って

撮影が好きなんでしょ？

私の事も撮って欲しいんだけど……どうかな？」

ナイアの提案を聞いた瞬間、

松田の脳内で何かが弾け飛ぶ。

「さ、撮影……!？」

「うん。だって、アーシアさんも

イツセー君もお互いに夢中で

全然構つてくれないし……」

ナイアは拗ねた様に言う。

松田はナイアに言い寄る一誠を想像すると、

何故か無性に腹が立った。

「ああいいぜ！ 最高に可愛い写真を撮つてやるよ！」

「わあい、ありがとう松田君♪」

それじゃあ今夜宜しくね！」

こうして松田は夜になるまでに、

色々と準備を整えておくのだった。

逃われているだけかもと何度も不安に駆られたが

彼女は家にやってきた。

——そして夜になり、

松田の部屋で二人はベッドの上に座っている。

「まずは裸になってもらおうかな……」

「ふふ……恥ずかしいな……」

頬を染めながらもナイアは服を脱いでいく。

やがて彼女は生まれたままの姿になった。

松田はその美しさに見惚れてしまう。

彼女の肢体は男なら誰でも欲情する程に淫靡だ。

胸はアジアよりも大きく、腰は細くくびれている。

尻は丸みを帯びていて柔らかさそうだ。

太腿は肉付きが良くムチっとしている。

脚は長くスタイルが良い。

まさに女神的女体と言うに

相応しい。

「う……うお……」

「どう？ 松田君……興奮してくれた？」

「あ、当たり前だろうが……！」

「良かった……♡」

彼女がくすりと微笑むだけで、

松田は胸が高鳴るのを感じる。

「じゃ、じゃあ次はこっちに來てくれ……」

「は……い……」

松田の指示に従い、

ナイアは松田の膝の上に乗る。

その重みと柔らかさに、

松田は思わず生唾を飲む。

「ナイア……もっと近くに來てくれ」

「うん……うん……」

松田の注文通り、ナイアは更に密着してくる。

互いの肌が触れ合い、

体温が感じられる程の距離だ。

「ああ……良いぞ……」



「ふふ……じゃあ始めよっか♡」

ナイアは松田の耳元に顔を寄せる。  
そしてそつと囁いた。

「私……松田君の事が大好き……  
だから……いっぱい可愛がつて？」

「うっ……！」

ナイアの言葉が脳髓まで響く。

松田は全身の力が抜けていく  
のを感じた。

「あれれ？ 松田君、緊張してるの？」

リラックスしないと駄目だよ？」

「す、済まん……」

「ふふ……別にいいよ♡」

じゃあ私が脱がせてあげるね……」

ナイアが松田のズボンに手を  
かけた時、彼は思わず口走る。

「ま、待ってくれ……！」

実は撮影のためにつけてほしい物があるんだ……」

「ええ？ どんな物？」

「それは……これなんだが……」

松田が出したのは

メイド用のカチューシャと

黒のビキニだ。

「す、すまん……」

変態だと思ってくれて構わん！

だが俺はどうしてもこの姿のお前を撮りたいんだ！

家宝にするから！」

松田の熱意を聞き、ナイアは嬉しそうに笑う。

「ううん……気にしないよ。」

だって私達恋人同士だもん。

好きな人の頼みを聞いてあげたくなるのは当然でしょう？」

そう言つてナイアは松田に優しくキスをした。  
その感触に、松田は天にも昇る気持ちになる。  
今この瞬間、自分は世界で一番幸せな男だと松田は思った。  
そして彼の目の前で  
ビキニに着替え、カチューシャを  
装着する。

所謂水着メイドという奴である。

「ど、どうかな……似合ってる?」

恥ずかしそうに尋ねるナイア。

そんな彼女を見て、

松田は感涙していた。

「い、生きていて良かった……!」

俺の17年はこの一瞬のためにあつた!

「そんな大袈裟な……」

苦笑するナイアだったが、

松田は真剣な表情で言う。

「いや、本当に感動したぜ……」。

こんな素晴らしい光景が見られるなんてな……」

「ふふ……ありがとう……」。

それにしても凄くドキドキしちやつたなあ……♡

ねえ、もっとドキドキすること

しようよ♡」

「もっ、もっ」と

ドキドキすること? それは……」

水着メイド姿のナイアは

一旦松田から離れて

ベッドに腰を下ろすと

くすつと笑う。

「セックスしている所を

カメラで撮ったり動画にするの♡

松田君と私で♡」

ナイアの口から放たれたのは、  
とんでもない言葉だった。  
しかし松田は動じない。  
今の彼なら何だって出来る。  
そしてナイアと交わるのだ。  
もう何も怖くなかった。

↓

「じゃあ簡単に自己紹介を」

松田はビデオカメラを  
構えながら言う。

それに対して、ナイアは笑顔を浮かべた。

松田が録画ボタンを押してから

松田が隣に座ると

彼女は語り出す。

「はい……♡私は……」

旦那様の松田君との

セックスが大好きな……♡

変態エロメイドのナイアです♡」

ナイアは甘える様な声音で言う。

すると松田はすかさず彼女の尻肉を掴む。

そして揉み始めた。

ナイアは甘い吐息をつく。

「あんっ♡いきなり

お尻い……♡」

松田の手つきは荒々しい。

だがそれが逆にナイアには心地良い。

その証拠にナイアの顔は蕩けていた。

そんな彼女を松田は抱き寄せて強引に唇を奪う。

そのまま舌を絡め合った。

唾液が混ざる音が部屋に響く。

二人の呼吸はどんどん乱れていった。  
やがて松田がナイアを押し倒す。

「あ……ん……♡」

松田が服を脱ぎ捨て、自分の裸体を晒すと、  
ナイアは興奮を抑えきれない様子だ。

「わあ……♡松田君の体……♡」

カッコいい……♡筋肉がすごくてたくましい……♡」

「旦那様、な……」

一応そういうプレイだからさ」

松田の指摘を受け、ナイアは顔を赤らめる。  
だがすぐに妖艶な笑みを見せた。

「ふふ……ごめんなさい♡」

つい夢中になっちゃって♡じゃ始めましょうか♡

私達の愛の営み♡

今日は私が上になってもいい？」

「ああ……勿論いいぞ。」

でも俺も負けていられないな……

そろそろお前のおっぱいも触らせてくれよ……!」

松田がナイアの胸に触れる。

ビキニ越しでも柔らかかさと弾力を兼ね備えた

乳房の感触が手に伝わってきた。

その感触に松田が感動していると、

ナイアが微笑む。

「どう？ 私のオツパイ♡柔らかくて気持ち良い？」

「ああ……最高だぜ……」

松田がそう答えると、ナイアは嬉しそうに笑う。

そして彼の首に腕を回してキスをした。

今度は先程と違い、優しく、慈しむようなキスだ。

お互いの愛情を確かめるように二人はキスを続けた。

やがてどちらからともなく口を離す。

「ねえ、松田君……」

愛してるよ……♡」

ナイアの言葉に、松田は照れ臭そうに笑った。

「おいおい……」

それはこっちの台詞だよ。

お前の方こそ、

こんな変態な男を愛してくれるなんて……

感謝してもしきれんぐらいだ。

ありがとうな……」

その言葉を聞き、ナイアは松田にキスをする。

そして言った。

「もう……♡またそんな恥ずかしいこと……♡」

それに今は撮影中なんだから

真面目にしてくれないとダメでしょ？」

「悪い……！ けど……やっぱりニヤケちゃうよ……」。

俺は幸せ者だぜ……」

「ふふ……♡嬉しいなあ……♡ね

え、次はどんな風にする？ 何でも言ってね♡」

「そうだな……」。

まずはフェラチオをして貰おうかな」

「うん、分かった♡」

ナイアは躊躇も嫌悪もなく

松田のモノを口に含む。

「うっ……」

松田は思わず声を出してしまう。

機械やオナホでは得られない

暴力的な快楽に松田は

酔いしれた。

「どうしたの？ ♡」

「いや、なんでもない。

ただ、すごく上手いなと思って」

「ふふ……♡ありがとう♡」

もつと良くなつて欲しいなあ♡」

ナイアは更に激しく松田のモノを刺激する。

口に含んだり、飲み込んだり、

竿全体に舌を這わせたり、

しつかり睾丸への愛撫も

怠らない。松田の身体に快感が蓄積されていく。

そしてついに限界を迎えた。

「ああっ……出るッ!!」

松田が叫ぶと同時に、大量の精液が放出された。

ナイアはそれを全て口で受け止め、

そのままゴクリと喉を鳴らす。

「んく……んく……んく……んく……♡」

そして松田のモノに残った

精子まで丁寧に舐め取った。

それからようやく口から松田のものを解放する。

「ぶはっ……♡」

いっぱい出たねえ……♡美味しかったよ♡」

「はあはあ……」

ナイア……凄すぎだつて……堪らないよ……!」

「えへ……♡じゃあ次はいよいよ本番ね♡」

「ああ……頼む」

「じゃあ……いくよ……♡」

ナイアは騎乗位の体勢になり、

ゆつくりと腰を落としていく。

そして松田のものを挿入していった。

「あ……んん……♡入ってる……♡」

「ああ……全部入ったぞ」

「良かった……♡これでやっと一つになれた……♡」

「俺もだ……!」

二人は見つめ合う。

そしてどちらからともなくキスをした。

舌を絡め合い、唾液を交換する。

「動くね……♡」

ナイアはそう言うと、ゆっくり腰を動かし始めた。松田のものはナイアの中で更に大きくなっていく。愛する番を満たし、新たな命を稔らせるべく。

「あん……♡おつきくなった♡」

「当たり前だろ……。」

「そんなにされたら大きくなるさ」

「ふふ……♡」

「じゃあもつともつと気持ちよくさせてあげる♡」

ナイアの動きが激しくなる。

それに伴い二人の呼吸も乱れていった。

「ああ……気持ち良いよ……。」

「私も……すごく良い……♡」

「俺もそろそろヤバイ……！」

「いいよ……出して♡」

私の中にたっぷり注いで♡

旦那様の子供、産ませて♡」

「ナイアッ……！」

松田がナイアの一番奥に自分のものを押し込む。

その瞬間、彼女の中に大量の精が放たれた。

と、同時に彼は意識を失った。

↓

時はほぼ同じ頃。

本来ならば閉校時間を過ぎている

時間の駒王学園の保健室にて

二人の男女が交わっていた。

「うふふ……元浜ちゃん♡」

私のおっぱい……美味しい？」

「は……は……！」

元浜は朱乃よりも豊満に

捻ったニグラの乳房を揉みながら、  
乳首を吸っている。

「あらあら……そんなに夢中で吸い付いて……。  
可愛いですわね♡」

「す、すみません……。」

「っい……。」

「謝ることなんてないわよ？」

「好きだけ飲んでくださいな♡」

「はい……。」

本来元浜は幼女趣味であり

女性の巨乳にはさほど

食指を動かすことはなかった。

しかし、目の前にある二つの

果実の魅力は別格だった。

それに加えてこの母性である。

甘えたくなるのは当然だろう。

「本当に大きいですね……。」

「それに柔らかくて……。」

「ふふ……ありがとう♡」

けど、そんなに褒められると

恥ずかしいわあ♡」

元浜の賛辞にニグラは瞳を潤ませて

喜びを露わにする。

その淫靡さはこの世のものとは思えなかった。

「でも……もつと触りたいです！

お願いします！ 後生だから……。」

「お願いだなんて……♡」

元浜ちゃん♡今はガマンもムリも

しなくていいのよ……♡」

「はい……。では遠慮なく……。」

そう言うと、元浜は



再び胸を貪るようにして吸い付いた。  
じゅわあ、と牛乳を濃縮した様な  
母乳が口の中に広がる。

(甘い……)

今まで飲んだどのミルクより芳醇で、  
そして濃厚な味。

一滴たりとも無駄にしたくないという  
感情が沸き上がる。

そして同時に、

(なんだこれ……？ 身体が熱い……？)

身体が熱くなり、興奮が抑えられなくなる。  
まるで媚薬のようだ。

「どうかしら……？ 美味しい……？」

「はい……すごくおいしいれふ……」

もつと……もつと飲みたいですう！」

「うふふ……良い子ねえ♡」

素直になつたご褒美をあげなきや……♡」

きゅっ……とまるで牛の乳首の様に

反り立つ元浜のペニスを

ニグラが握りしめる。

「あぁっ……!!」

「あらあら……もうこんなにして♡」

そんなにおっぱいが好きなのかしらあ……♡」

「はいいい……好きです！」

「じゃあ、おっぱいとお口、

どっちが良いか選ばせてあげる♡」

「お、おっぱいで……」

「わかったわ♡」

そう言うと、彼女は

躊躇いなく元浜の熱いペニスを

谷間に挟み込んだ。

その豊満さは元浜の誇る

エロスカウターでも測定不能。

もはや爆乳という言葉すら

似つかわしくないレベルだ。

男を蕩かせ狂わせる魔乳、その域にあった。

「ああっ……すごい……！」

「うふふ……気持ち良いかしら？」

「は、はい……！」

「じゃあこのままイカせてあげましょうねえ……♡」

「あっあっあっ……イクッ！」

ドピユツドピユー!! と勢いよく射精する元浜。

それをうつつとりとして全て受け止めるニグラは

ぶるぶる、と身を震わせた。

「ああああああ……最高だ……」

「良かったわあ……。私も嬉しいわ。」

「じゃあ次は本番に行きましょう……♡」

「はい……」

そう言うと、二人は服を脱ぎ捨てて

そのままベッドに倒れ込み、

側臥位にて本番行為を始めた。

香り、肌触り、肉質、それに何より

ニグラの膣穴の滑りと温もりが

元浜の情慾をかき立て、脳漿を煮えたぎらせた。

「ああ……凄い！　これが大人のセックス！」

「どう？　気持ち良いでしょう？」 ♡

「はい……すごく気持ち良いです！」

パンツパチユパチユンと肌同士が

ぶつかり合う音が響く。

その度に元浜のペニスが肥大化していく。

しかし、それでもまだ足りないとはかりに

さらに激しく腰を振る。

すると、二人の限界はすぐに訪れた。  
絶頂が近づくとつれ、ピストン運動が激しくなる。

「ああん……………♡元浜ちゃん♡  
私もう……………♡

そろそろイキそうだからあ……………ね♡

一緒にイこお♡」

「はい！俺もそろそろ……………！」

「じゃあ最後に思いつきり突いてえ♡

奥まで一気に♡♡♡♡」

ニグラの言葉と同時に、

元浜は彼女の子宮を目掛けて、渾身の一撃を放った。

ズブウウツ!!

「イツ……………クウウウツ♡♡♡♡」

「出るっ……………!!」

元浜が叫び、ニグラが大きく汗を

振り乱してのけ反るのと同時に、

ニグラの中に大量の精液が注ぎ込まれる。

それはまさに破裂といった表現が

相応しいほどに激しいものだった。

「んぐう……………♡元浜ちゃんの子種……………

私の子宮へ泳いでるう……………♡

うふふ♡ 元氣イツパイ♡」

「はあ……………はあ……………」

はい、良くできました……………♡」

そう言いながら、頭を撫でてくるニグラ。

その顔は聖母のようで

とても優しかった。

しかし、

それだけでは終わらない。

「じゃあ、今度は私の番ね♡」

「えっ……………?」

「言ったじゃない。」

『好きなだけ飲んで』って……。

「まだまだ飲ませてあげるわよ♡」

「ほ、本当ですか!？」

「もちろんよ。だから……」

「だから……?」

「もつと楽しませてちょうだい……♡」

「はいっ！ 喜んで！」

そうして再び始まる淫乱な宴。

元浜の欲望は尽きることを知らない。

「はい、じゃあ次はこれね♡」

「うひょー、これは素晴らしい……」

ニグラが纏うのは黒と白とビキニ。

謂わば牛柄ビキニである。

その破壊力は抜群であり、

先程までの授乳プレイを

増す魅力があった。

しかも、乳首部分は剥き出しのまま

元栓の締まらぬ蛇口のように

母乳が滴っている。

「どうかしら? 可愛い?」

「はい、最高です……!」

「ふふ……ありがとう♡」

「あの……もう我慢できないんで

早くやらせてください!」

元浜にはもはや嗜好だの

性癖だのは頭になかった。

ニグラを犯すことしか考えていない。

それくらい彼は興奮していたのだ。

それも当然だろう。

何せ、目の前には

自分の欲望を受け止める  
絶世の美女がいるのだから。

「うふふ……慌てなくても大丈夫よ。  
いっぱい私を可愛がってね……♡」

むにゅにゅ♡そう言っ胸を押し当てるニグラ。

(やばい！ 柔らかい！)

その柔らかさに感動していると、  
彼女は耳元で囁いた。

「じゃあ始めましょうか……♡」

私をめちゃくちゃにして……♡」

「は、はい！」

元浜は元氣よく返事をすると、  
その剥き出しの乳首を両手で

寄せて口の中で母乳を吸いながら

勃起したばかりのペニスを

ニグラの胎内に挿入した。

パンツパチュパチュンツ!!

じゅるっ♡じゅるるる♡

ちゅぱっ♡れろれろろっ♡

ニグラの母乳を飲み、乳首を舌先で転がしながら、

ひたすら腰を振る元浜。

その姿はまるで獣そのもの。

だが、そんな彼を

慈愛に満ちた表情で見つめるニグラは

優しく語りかける。

「ねえ……私のおっぱい美味しい？♡」

「は、はい……すごくおいしいです……♡」

「そうですよ？」

だって元浜ちゃんが私を

たっぷり愛してくれているから

こんなにたくさん出るようになったもの♡」

「えへへ……嬉しいです……」

「それにしてもすごい量……」

これなら、赤ちゃんもすぐできるかもね♡」

「赤ちゃん……!! はい……頑張ります!」

パンツパチユパチユンツ!!

二人の激しい性交により、

部屋中に響く水音は激しさを増していく。

そして、その快楽は限界を迎える。

ドピユツドピユールルルル!!!

大量の精液が膣内に放たれる。

それは子宮の奥深くまで届き、

新たな生命の礎となるであろう。

しかし、それで終わりではない。

なぜなら、まだ本番前なのだから。

元浜はニグラに覆い被さり、

正常位の体勢をとると、

そのまま激しく腰を振り始めた。

その動きに合わせるように、

彼女の豊満な乳房が激しく揺れ動く。

元浜はその光景を見て、さらに興奮する。

(ああ……凄い! このアングル最高!)

さらに、彼の興奮は止まらない。

今度はバックの体位で突きまくる。

ニグラの大きな尻が波打つように震えていた。

それを見ているだけで

ぶじゆるつと暴発してしまうが

それだけでは終わらない。

今度は対面座位になり、

お互いの顔を見ながらキスをする。

互いの唾液を交換し合うような

濃厚で熱いディープキスだ。

その最中も、元浜は休むことなく  
射精してなお萎えないペニスで  
ピストン運動を続ける。

その度に、ニグラの口から  
甘い吐息が漏れる。

「ふああ……♡ ああ♡♡♡ 気持ちいい♡♡♡♡

元浜ちゃんのオチンポ……堪らない♡

そのオチンポで私をママにしてね♡」

ニグラの節操もない喘ぎそれがまたたまらなく  
そそられるのだ。

パンツパチュパチュンツ!!

じゅるっ♡じゅるるるる♡

ちゅぱっ♡れろれろろっ♡

二人は何度も絶頂を迎え、その度に大量の精液を放つ。

そのせいで結合部から溢れ出たものは、  
シートに大きな染みを作っていた。

そして10度程射精が済んだ辺りで

元浜は意識を喪った。

↓

(はあく……夢でも九頭竜ちゃんと

セックスできたなんて……)

(ぬうう……紳士たる俺が

夢とはいえニグラ女史に

惑わされるなど……しかし……!)

「最高だったなあく」

二人は交わった後それぞれ

精神操作により彼女達と

交わったのは

夢だと思わされていた。

「何が最高なんだよ?」

「おお、イツセーか」

「息災で何よりだ、我が

義兄弟よ」

屋上にてイツセーと会うなり  
普段とは違い朗らかな二人に  
僅かに彼は戸惑うのだった。

↓

ここは嘗て、安里が

漂流した虹色の大樹が

輝く廃墟の街。

そこには時代も背景も生い立ちも  
異なる四人の男女が

【副王】ゲイト・オールドワンの

前に立っていた。

「何だこりゃ？」

まさかまた陰険神父の差金か？

それともあのジジイか？

どっちかなら俺は帰るぞ」

「まあそう言うな！

袖擦り合うも他生の縁だ！

ここは彼の話を聞いてから

首を撥ねるなり力を貸すなり

対処するべきだろう!!」

ぶつきらぼうに

ゲイトを訝しむ紅い槍を持つ戦士を

眼力の強い極東の刀を差す

青年が宥める。

「それはそれとして、

貴方。ファラオの前で

足を組んで鎮座するなど

不敬ですよ。慎みなさい」

「……ファラオとは何だ？」



ガリア大陸ではほとんど

聞かぬ言葉だ」

「そういう嬢ちゃんは

何となく知り合いの雰囲気  
似ているな。生まれは北欧かい？」

「ほくおう？ 何だそれは？」

銀髪で長身の明らかに軍人、  
それも佐官らしき勲章をつけた  
女性は明らかに別世界の住人の  
様で二人の言葉に首を傾げた。

「どうやら私達はそれぞれ

違う時代や国からここに

招かれたようですね……」

「よもやよもやだー！」

どうやら水着めいた格好以外は  
良識的な褐色肌の美女が  
話の流れを纏めた。

「それはすまない。

まずは無花果のタルトが  
あるんだけど……食べるかい？」

それにしてもこの【副王】

マイペースである。

彼、彼女の共通点は

非業の死を遂げたものであるのに。

「結構です。

どうせ我々を縛る様な罫が  
あるので……食べてるー!？」

「うまいー！ うまいー！ うまいー！」

「本当だ、美味しいなこりゃー！」

「……まあまあイケるな」

褐色肌の女性が目を見開いて

他の人物達な

天衣無縫ぶりに度肝を抜かれた  
様子で絶句する。

「気に入ってくれたなら嬉しいよ。  
それで君達に頼みたいことが  
あるのだが……」

※第14話（イツセー？アーシア）

「あっ♡あああ♡♡

イツセーさん♡

今日もイツセーさんの

嬉しいおちん○んで……♡

エッチな私のおま○こを

グチャグチャにして下さい……♡」

アーシアが俺の首に腕を巻きつけてくる。

そしてその唇を近づけてきた。

堪らず俺は彼女の腰を掴み、

思いつきり突き上げる。

パンツ！ パアンツ！！ パンツ！！

「ああっ♡あんっ♡す、凄いですううっ♡

イツセーさんのおちん○ん

私の中でビクビクしてますうううっ♡」

「くううっ！！ アーシアの中も最高だよ！！」

「嬉しいですっ♡

もつと気持ち良くなつて下さいね？

はむっ……ちゅぷっ……レロオ……」

そう言つて彼女は俺にキスしてきた。

舌を入れて濃厚なディープキスだ。

さらに興奮した俺は

激しくピストンする。

ズプツ！ グチュツ！ ヌポツ！

「んふううんっ♡

イキそうなんですネ……イツセーさん？

いいですよ♡

私のお腹の中にいっっぱい出して下さいー！」

言われずとも俺は

そのつもりだった。

ズンツ！ ドピュルルル——！！！！

俺は躊躇いなく

アーシアの奥深くにまで

大量の精液を放出した。

「熱いですうろううつ！！！！

あひいいいいいっ♡イクウウウツ♡」

ビクビクつと痙攣しながらアーシアは

俺とのセックスで絶頂した。

可憐かつ純粹無垢なシスターだった

アーシアは色々あつて

リアス部長の眷属となった。

本来なら眷属同士のこういう事は

奨励はされていないのだが……。

「イツセーさん♡大好きです♡」

「アーシア……好きだよ」

俺は今日もアーシアとの

情事に夢中になっていた。

今、俺達はベッドで抱き合っている状態だ。

俺達二人は全裸になり、お互いに愛し合っていた。

ちなみにこの部屋には

人よけの結果を

張つてあるから大丈夫だ。

父さんや母さんが踏み込む事は

ない。

アーシアのおっぱいは

形が良くとても柔らかい。

揉み心地抜群だ。

「アーシアの胸つて本当に大きいよね？」

「はい……♡」

でもイツセーさんだつて大きくて素敵です♪

アーシアは慣れた手付きで

俺の愚息を撫で回す。

同時に淡い光を発すると

彼女の「トワイライト・ヒーリング」により俺の愚息と体力は回復していく。

そして今度は彼女が仰向けになる。

その大きな胸を自分で揉んで見せつけるようにしてくる。

「あうう……イツセイさんが

毎日私を愛してくれるから

いつの間にこんなに……♡

大きくなっちゃいましたあ♡」

なんて恥じらいながら言ってくる。

こんな素敵な日本語があったなんて……！

もう我慢できねえ！

俺は彼女に覆い被さる。

そしてお互いの顔を見つめ合う。

アーシアは俺とのセックスに

恥じらいつつ、期待満面な表情をする。

そんな彼女を優しく抱きしめ、

キスをした。

「んっ……んむっ……んんっ♡」

互いの舌が絡み合い、唾液を交換すると

まるでフェニックスの涙を飲んだ様に

俺の気力が満ちていく。

もつと……もつとアーシアと愛し合いたい！

「んっ……ふはあっ♡」

一旦唇を話すと、名残惜しそうに糸を引いた。

それを指先で拭いながら微笑む彼女を見て、

再びキスをして激しく舌を動かす。

「んふっ……んちゅっ♡んむっ♡」

アーシアの小さな口の中に舌を入れ、

菌莖や口蓋などこそげ取る様に舐める。

その間も片手では彼女の乳房を弄ぶ。

乳首を摘んだり押し潰したりしながら、

もう片方の手は太股の付け根あたりには這わせると

アーシアの秘所は既にじつとりと濡れていた。

「あふっ♡んっ♡あぁっ♡」

アーシアの声が段々と艶っぽいものになっていく。

俺は左手で彼女の左胸に

右手で右胸を鷲掴みにして揉む。

すると彼女は体を震わせて感じてくれた。

「あっ♡あぁんっ♡あぁんっ♡いい……いいっ♡

私ったら……はしたないですう♡♡♡」

アーシアの喘ぎ声を

聞いているだけで興奮してしまう。

俺はさらに激しくアーシアを攻め立てる！

「あっ♡あぁっ♡

イキますううっ♡

イツセーさんのおっぱいタッチ……♡

凄く、凄くいいですうっ♡」

彼女は絶頂を迎えようとしていた！

だが俺は攻め手を緩めない！

「あふっ♡んんっ♡あふううっ♡」

アーシアが

可愛らしい声で鳴いている。

彼女のおっぱいは

とても柔らかかくて弾力があり、

ずっと触っていたくなるほどだ。

さっき自分が言っていた通り

部長に劣らないまでに

その胸が成長したアーシア。

その大きな胸を揺らして

身悶えする様に興奮を  
押さえきれない。

「あ、アーシアー！」

「イツセーさん♡来てえっ！」

イツセーさんの大好きな

私のおっぱいをもみもみしながら

私の大好きなイツセーさんの

おちん○んを……♡

いけない悪魔シスターのアソコにくださいいい♡」

アーシアの顔は俺とのセックスで

快楽に染まっている。

エロすぎる……！ エロすぎるよ！

俺はアーシアの

おねだりを聞き入れ 思いつきり

腰を突き出した！！

ズプツ！！ ズプツ！！ ズプツ！！

「あうううう♡凄いつ！」

凄すぎますうううっ！！

イツセーさん♡イツセーさん♡」

『Boost!』

ドライグの力で

倍化した力で俺は全力で

ピストン運動を始めた。

パンツ！ パアンツ！ 肌がぶつかり合う音が響く。

アーシアの中はとて熱くて気持ち良い。

アーシアも俺のペニスで

突かれる度に甘い声で鳴き続ける。

「あんっ♡あっ♡ああんっ♡

イツセーさん……♡もっとお……♡」

「アーシアー！」

俺はアーシアのリクエストに応えるべく、

更に激しくピストンした。

『Boost!』

「ひゃうんっ♡

イツセーさん……♡」

アーシアは俺のピストンを

受け止める度に嬉しそうな顔をしていた。

「アーシア、俺、もう……」

くう……倍化しすぎたせいかも、限界だ。

「はい……イツセーさん♡

私の中に……いっぱい……

出して下さい……♡」

アーシアは潤んだ瞳で

俺を見つめる。

もう、たまらなかった。夢中だった。

「アーシア……好きだ！ 愛している!!」

「私もです……イツセーさん♡

私もあなたを愛しています……♡」

俺はアーシアの一番奥まで突き入れると

同時に欲望を解き放った。

ドピュツドピュ——！ ビュルルルー！

「あああああああああんっ♡

熱いのが……もっど……

たくさん出てるううううっ♡」

アーシアは俺の子種を身体いっばいに受け止める。

同時に彼女も大きく果てた。

「ふあああああっ♡

イク……イツちやいますううううっ♡

イツセーさん……♡ 素敵ですう……♡♡♡」

そして彼女は幸せそうに微笑んでいた。

「大好きです……イツセーさん♪」

「俺もだよ、アーシア」



「嬉しいです……」

アーシアは笑顔のままキスをする。  
与え合う様な優しいキスだ。  
すると射精しながらなのに  
俺のペニスは萎えることなく  
アーシアの中で大きくなっていった。

「あ……♡」

またおつきくなってるう……。  
私のヒーリングおま○こでえ  
おちん○ん元気になあれ……♡」  
こ、これは……!?

アーシアの  
トワイライト・ヒーリングを  
子宮の中で  
発動させているのか？

「あはあああ♡」

イツセーさんが出してくれた  
赤ちゃんの種……私の力で  
妊娠させちゃいましゅうっ♡」  
妊娠……!?

俺はその言葉を聞くと  
ドン、と理性が弾け飛ぶ。  
アーシアが孕む……。  
俺の子供をアーシアが……。  
俺だけの……アーシアに……。  
俺はアーシアを  
抱きしめると  
激しく腰を振り始めた。

『Boost!』

『Boost!』

『Boost!』

俺の欲望も、アーシアの  
快感も相乗作用で

天井知らずに高まり続ける。

パンツ！ パンツ！ ゴリユツ！

「あふうっ♡

イ、イツセーさん……♡

怒らないでください……♡

私、イツセーさんとのセックスと

赤ちゃんが欲しくて堪らない……

シスター失格の悪魔に

なつちやいましたあ♡♡♡

「こ、このオ……！」

いやらしすぎるぞアーシア!!

そんなに俺のチ○ポと

赤ちゃんを欲しがる

エッチなシスターには

お仕置が必要だな！」

パンツ！ パンツ！

パンツ！ パンツ！ パンツ！

俺は両手で彼女の乳房を掴み、

強く揉みながら、

腰の動きをさらに速めた。

グチュツグチュツヌププツ♡

卑猥な水音を立て、

俺のモノがアーシアの胎内を

蹂躪する。

「ああ……♡気持ち良い♡

気持ち良いですう♡

イツセーさんの

愛情たっぷりお仕置きセックス

いいです♡凄くいいですうううっ♡

私はイツセーさんがおっぱいを  
驚掴みにして乱暴に犯されるのが  
好きなんですううう♡」

「アーシア……い・お前って奴は！  
そんなに俺の子供が欲しいなら  
たっぷりと種付けしてやるな！  
アーシアの人生は俺が貰った!!」  
俺はアーシアの奥深くまで

ペニスを突き入れて  
子宮口に亀頭を押し付けた。

「出すよ……アーシア。」

アーシアの一番奥に……！！  
俺の子供……産んでくれ……!!」

「はい♡イツセーさんの  
子供いっぱい生ませてください♡  
私……もうイツセーさん無しじゃ  
生きていけません……♡」

「俺も……アーシアが居ない生活  
なんて考えられない！ だから……！！  
ずっと一緒に暮らそう！」

「嬉しい……イツセーさん♡  
愛しています……♡」

アーシアは俺の首に手を回し、  
キスをしながら言った。

「ああ……俺も愛している！」  
俺はラストスパートを  
かけるように

腰を強く打ち付ける。

「ああんっ♡ 激しいっ♡  
激しいですっ♡

イツセーさん……♡」

「アーシア……！　アーシア！」

「イツセーさん……♡」

イツセーさん……♡」

「アーシアは俺の名を連呼し、  
何度も絶頂を迎える。」

「アーシア……俺もそろそろ……」

「はい……イツセーさん♡」

私ももう限界です。

どうか……♡

私の中を満たして下さい♡」

「アーシアの言葉に応えるべく、

俺は限界寸前のペニスを

アーシアの小さな子宮口に

押し当てた状態で

一気に解き放った！

ドピユツドピユ——！

ビュルルル——！

「イク……！　イクうう！」

「アーシアは俺の子種を

一滴残らず搾りとるように

俺のモノを締め付けてくる。

俺達は同時に果てた。

「アーシアは俺の上に倒れ込み、

荒い息をしている。」

「アーシア、大丈夫か？」

「は、はい……。なんとか……」

「アーシアは少し

恥ずかしそうに微笑む。

「イツセーさん。」

大好きです……」

「アーシアは潤んだ瞳で

俺を見つめる。

その儚さと健気さが  
堪らなく愛しい……。

「俺もだよ、アーシア」

俺の言葉にアーシアは  
嬉しそうな顔をしていた。

「アーシア、俺、もう……。

アーシアのおっぱいと

お尻で 挟まれただけで……。

我慢できなくて……！

ごめん……アーシア」

俺のモノは一回出したのに  
そのことを頭から忘れた様に  
カチカチに勃起していた。

「ふふふ。イツセイさんたら

本当に甘えん坊さんですね♡」

そんな性欲魔神となった俺にも

アーシアは優しく笑ってくれる。

「でも……私、イツセイさんに

こんな風に求められるの、

凄く嬉しいですよ」

「アーシア……」

俺はアーシアのおっぱいに

顔を埋めて、

乳首を吸いながらお尻を撫で回す。

「あん……イツセイさん、

そんなに強く吸われたら……

母乳が出ちゃいます……♡」

アーシアが可愛すぎて、

胸から口を離すと、

今度は彼女の唇を奪った。

そして舌を絡ませる濃厚なキスをする。

「ちゅぱっ、んふっ……れろっ、んむっ、あむう……ぷはあ……！  
イツセーさん……好き、好きです……！ もっと、たくさんキスしま  
しょう……♡」

「ああ……いいぜ。アーシア」

「はい……イツセーさん……♡」

俺はベッドの上で仰向けになり、アーシアは俺の顔の上に跨が  
り、

互いの性器を舐め合っていた。

「ぺちよっ、じゅぶぶっ！ はあ……はあ……アーシアのおま○こ美  
味しいよ」

「ああん……イツセーさんのお○んぽも とつてもおいしいですう  
♡」

アーシアは小ぶりなお尻を振って、激しく俺を求めてきた。

「アーシアのお尻、

柔らかくて気持ち良い……」

俺は両手でアーシアのお尻を

揉みながら、彼女のクリトリスを軽く噛んでみる。

「ひゃうんっ！ だ、だめえ……！ イツセーさんに触られると 感  
じすぎちゃうんですううう！

お尻も♡お尻もいやらしい

大ききになっちゃいますうう♡」

アーシアはビクンと身体を震わせ、

膣口から大量の愛液を吹き出した。

「はあ……はあ……♡

イツセーさん……♡

私……私も……イツセーさんの

おちん○ん……♡

お口で気持ちよくしますね♡」

アーシアはそう言うと、

俺の股間に顔を近づけ、

チロチロツと亀頭を舐める。

「く……くすぐったいな」

「ふふ……イツセイさん、可愛い♡」

アーシアはそう言つて、

ペニスを口に含んで ゆっくりと前後に動かす。

「んっ、んっ……」

アーシアは一生懸命

フェラチオしてくれるし、

最初こそ 恥ずかしさがあつたのか

遠慮がちだったけど、

今は積極的に

俺に奉仕してくれている。

「アーシア……俺もアーシアのこころ、

いっぱい愛してあげるからな……」

「ふあい……お願いしまふ♡」

俺はアーシアのヒップにキスをし、

そのまま秘所へと顔を近づけていく。

「ああん……イツセイさん……」

私のエッチなお汁でぐしょ濡れです……」

アーシアのアソコからは

イヤらしい匂いが漂っていた。

「はは、アーシアだって 興奮しているじゃないか」

「はい……。イツセイさんが

相手だと自分でする時より

ずっとドキドキしちゃいます……♡」

アーシアは頬を赤らめて微笑む。

「アーシア……。好きだよ……」

俺はそう囁きながら、

彼女のヴァギナに指を入れた。

「あっ、ああんっ！」

アーシアは甘い声を上げて悶える。

「凄い締め付けだ……。」

「アーシアも期待していたんだな？」

「はい……。でも、イ

ツセーさんの方がもっと凄いです……。」

「ああ……。俺ももうアーシアに夢中だよ……。」

「もうガマンしきれない……。挿れるぞ？」

「はい……。どうぞ、

来て下さい……♡」

俺はアーシアの腰を掴むと、

バツクの姿勢で

一気に奥まで突き入れた。

「ううううう……！」

ああんっ！ 凄いつ！

イツセーさんのお○んぼが……

私の中で暴れ回ってますうう!!」

アーシアの膣内は熱く潤っっていて、

とても心地よかった。

「アーシアの中、気持ち良すぎるよ……。」

エッチのたびにどんどん良くなってるんじゃないか？

凄く締まる……。」

「はいいい……。嬉しいです……。」

イツセーさんが喜んでくれて……

もっともつと気持ちよくさせてあげたいですう♡」

アーシアは更に強く

自ら腰を動かして俺のモノを

刺激する。

「んっ……。ちゅっ……。れろっ……」

イツセーさん……。大好き……。♡」

アーシアは俺のモノを

受け止めながら

自分のおっぱいを掴んで



乳首を摘まんで

コリコリと弄っている。

いやらしすぎる……。

なんてスケベなんだよ……。

「んっ……！」

んふう……んうっ！ イッセーさん……♡

私……幸せ過ぎて

死んじゃいそうです……♡」

アーシアは涙を流していた。

「大丈夫。

アーシアが死んだら俺も死ぬ。

アーシアは俺の命だから」

「はい……！ イッセーさん……♡」

アーシアは嬉しそうな表情を浮かべると、

ぐるんと体勢を変えて

俺の首に腕を回して

抱きついてきた。

そして、耳元に口を寄せて囁いた。

「愛しています……」

私の王子様……♡」

「ううっ……！ アーシア……！」

俺は我慢できずに

激しく腰を動かした。

パンツ、パアンツ、

と肌同士がぶつかり合う音が響く。

「ひゃうん……!?!」

ああん……イッセーさん……♡

激しすぎますう……♡」

「アーシア……アーシア……」

アーシアあああああ!!!」

俺は何度も名前を呼びながら、

ひたすら欲望をぶつけた。

アーシアの膣内はとても温かく、俺のモノを優しく包み込むように迎え入れてくれる。

「ああんっ……………イクっ……………イツセイさん……………♡

私またイっちゃいますっ!」

「俺もだ……………。一緒にいこう……………」

「はい……………イツセイさんと一緒に……………」

アーシアは俺を強く抱きしめる。

俺はアーシアの子宮口を突き上げた。

ああ……………最高だ。

アーシア……………アーシア……………アーシア!

「やあ、随分と激しく

交尾をしているようだね」

!?

「え……………!? キャアッ……………!」

突如の乱入者にアーシアは

毛布で自分を裸体を隠す。

現れたのはゲイトさん。

安里を転生させた張本人……………

いや張本神だ。

「な、何で!?

アーシアの人よけの結界は

完璧だった筈なのに!」

「ああ、時間や結界、門、

封印は

僕にとっては意味を為さない。

全ては一つの終点に帰結するんだ

『永劫に回帰するもの』を

除いてはね……………」

いや、男らしい覗き見に

哲学的な言葉を被せられても……………!

『そう怖い顔をするな相棒。』

コイツは男だの女だの  
惚れた腫れただのには

まるで関心を示さなのだ』

するとドライグが

呆れ気味な声で言う。

神様は俺達とは考えのスケールが  
違うと言うことなのだろうか？

「というかゲイトさんと

お前は知りあいなのかよ！」

『まあな。俺達は

あの小僧とその仲間<sup>に</sup>力を貸す。

奴は俺が嘗て喪った財宝を

回収するため動き回る。

そういう契約を交わした仲だ』

おいおいおい！

そういう事は相棒の俺を

通してくれよ！

安里に関しては親友を助けるのに

理由はいらないけどさ！

なんつー超展開だよ！

って アーシアのアソコから

俺のアレが出てきちゃってるよ！

アーシアは恥ずかしそうに

股間を押さえている。

「あ、あの……イツセイさん……

見られてしまいました……」

「い、いや、これはその……」

「うふふ……大丈夫ですよ。

私は気にしてませんから……♡」

アーシアは笑顔を浮かべていた。

ま、まさかアーシアは見られると喜ぶとか……？  
一方のゲイトさんは  
不思議そうな顔をして  
言葉を続けた。

「それにしても……」

君達がこんなにも

仲睦まじく しているなんて知らなかったよ。

君はてつきり リアス・グレモリーと 結ばれるものだとばかり  
思っていたけど？」

「そ、それは……！」

「ふふふ……」

別に言い訳しなくてもいいさ。

僕は君の魂の色が見える。

アーシアくんや

リアスくんに対する愛は本物だ」

あ、あれ？

てつきり二股なんて何事だ！

と怒られると思ったのに……。

「そういえば、 どうしてここに来たんですか？

アーシアとのエッチを覗いただけなら、

そのまま帰れば良かったんじゃない？」

「ああ、それなんだがね。

リアスくんがライザー君と

結婚を発表する事になったのは

知っているかい？」

し、知らねーよ！ そんなの！！

な、何で……!?!?

レーティングゲームは

安里の暴走の件で

木場が言うには

俺達がレイヴェルちゃんの

くれたフェニックスの涙で  
回復したから

反則負けがどうこう言ってたけど  
有耶無耶になっただろ！

部長と俺はあのとき、

確かに愛情を育んだ筈なのに……！

「実は、

僕もつい先日知ったばかりだね。

それで、今日ここに来た理由だが、

君に忠告をしに来たんだよ」

「え……!?!」

忠告だと……!?!

「このままではリアスくん、

ライザー君、ひいては

冥界そのものが破滅する事になる」

「な、何だって……!?!」

どういうことだ！ ですか!?!」

驚きのあまり敬語を使うのも忘れかけた。

「それを今全てここで話す事は

できない。知りすぎると

『永劫に回帰するもの』と

『禍津星』が君達を

感知してしまうからね。

ともかく、君には

ライザー君とリアスくんの

結婚を破談にしてほしいんだ

この世界、いや全ての世界

にとって、最も重要なのは

『幸福』だ」

「ど、どういう意味ですか……!?!」

いや、幸せが一番なのは

当然だし部長が結婚するなんて  
絶対認めないけどさ!!

ゲイトさんの目的が知りたい。

神様らしいけれど、何を考えているのか分からない。

『解らぬものを無理に解ろうと

しても仕方がないだろう。

それより今はライザーと

リアス嬢ちゃんの婚約を

破談させる方が先じゃないのか?』

ドライグの言葉にゲイトさんは

目を細める。

『永劫に回帰するもの』は

あらゆる可能性を内包した存在だ。

だから、

どんな未来でも 起こり得る。

そしてアレは

『禍津星』を呼び寄せる事で

本来ならば『滅び』の運命を回避できた

筈の者達を全て焼き払い、『滅び』へと

向かわせようとしている。

そんな事を許してはならない。

決してね……」

慈愛に溢れる瞳でゲイトさんは

呟いた。

解った、信じよう。

安里も暴走したとはいえ

生き返らせてくれたし……!」

俺達の会話に割り込むように

ドライグが声を上げる。

『おいおい、俺様はお前と契約したが

お前の仲間になるつもりはないぜ!』

「分かっているよ。」

ただ君達のことを確認したかったただけだ。

僕の願いはただ一つ。

『永劫に回帰するもの』を 倒して世界を救ってくれ。

鍵のないものは門を開く事も、

閉じる事も出来ないが

鍵を抱く君達ならばそれも適う」

何だかスケールの大きい話にな

ってきただけだ呆気に

取られている場合じゃない……！

早く止めに行かないとな……！！

と、言っても会場どこだっけ？

途方に暮れる俺にゲイトさんが

手を差しのべる。

「ついて来てくれ。」

案内しよう」

「ありがとうございます！」

俺はゲイトさんの手を取る。

「いいんだ。僕にも責任があるからね。」

それに君とは一度ゆつくり話がしたいと思っていたし」

そう言って微笑むと

俺達は転送されていた。

いや、まさかマップで

婚約会場に

俺達が行ったわけじゃないよ？

廃墟の街の中継地点で

俺とアーシアは着替を貰いつつ

色々と準備をする。

まさかなんの準備もなしに

ライザーに勝てると思う程

俺だってバカじゃないからな。

「どうも……九頭竜安里です。」

「今、ライザー主催の

結婚発表パーティーに来ています。

リッテルトとレイナーレは

留守役。

まさか悪魔のパーティーに

堕天使連れてくるのは

不味いだろう……。

「うまつっ！ うまつっ!!」

「このローストビーフ最高に

ウマツ！」

「鯨飲馬食とは言うがアホみたいに

食うな……ナイアの奴……。

「一体どこに入ってるんだ……？」

「いや、スリットの中から

時限爆弾やら戦車やら

質量保存の法則を無視して

取り出してくる女だからなあ……。

「ふう……ダメね。」

「上級貴族の御曹司も来ると聞いて

期待していたけど……

「虚勢を張るだけで中身はがらんどうの

つまらない人達……。」

「ちつとも欲情してこないわ……。」

「パーティードレス姿のニグラさんは

囲まれていた男達と一しきり

談笑した後、俺の隣に来る。

「いかにもガツカリした様子だ。」

「そ、そういうものスか」

「あら、安里ちゃん。」



私だって男なら誰でもいいって  
ワケじゃないのよ？」

分かってますよ。

ニグラさんは美人だし、

何より人間に理解あるから

人気もあるんだってことが。

「……………どう？　こんなつまらない

パーティーの顔見せはナイアに

任せて私達は別の部屋で……………」

ぎゅむうつと俺の腕に

抱きつきしなだれかかりながら

ニグラさんは俺を誘う。

「む、無茶苦茶

言わんで下さいよ！

俺達は一応リアスさんの

友人として招かれてるんですから！」

「もう……………照れ屋さんね。

じゃあ今夜はたまには二人っきりで

お話しましょう。

ベッドの中で……………ね」

妖艶な流し目。

くっ……………。

流石はゲイトの旦那の側近。

いろんな意味で我が道を行く人だ。

「それはそうと安里ちゃんは

ずーっと壁にもたれているけど

どうしたの？」

「性分なんスよ。

中心にいるより端で

皆を観ている方が着になるんです」

まあ、未成年だから

ノンアルコールなんだけどな。

「ふふ……、

安里ちゃんらしいわね」

それにキユクロや

ポールの大将も言っていたしな。

『何も修行とは特別な時間を

取って特別な事をする事だけを

指すものじゃない』

流れや鼓動、蠕きを意識して

集中すると色々な事が視えてくる。

「いやあく、まさか

レイヴェル様がリアス様の

友人を助けるために

奮闘していたとは！」

(……と持ち上げておかないと

ネフレン様から何をされるか

解らんからな……)

「その機略、兄を立てる度量。

私などとても及びませんわ……」

(調子に乗るなよ

この成り上がりが。

我が一族がその気になれば

貴様らなど)

「是非、将来は我が息子と……」

(何とか利権に食らい込んで

我が一族を再興させてやる。

所詮子供など駒だ。道具だ。消耗品だ)

うわあ……人間不信……

この場合は悪魔不信になりそう……。

心が読める事が幸せになるとは

限らないって漫画とかで

よく言うけれど……ホントだよな。  
さらに……。

「え……ええ……まあ……」

(イヤ……私はこんな下劣な

嘘つきどもみたいになりたくない！)

不幸なのはあの悪役令嬢然とした

レイヴェルがそういう心の機微を

わかってしまう頭の良さが

ある事だよな……。

「やあやあやあレイヴェルたん。

元気かい？」

ん？ 何だあの規格外のデブ。

ピチピチの特注の燕尾服は

ともかく自分では動けねえのか

二人の従者が車椅子を

押しているじゃねえか。

「え……ええ……まあ……」

ネフレン様もご機嫌麗しゅう……」

引き攣り笑いでレイヴェルは

ネフレンとかいうクソデブに

恭しく挨拶する。

「ぐふふふ。

他人行儀じゃなくてもいいよお

レイヴェルたん……♪

今日の僕チンは

リアスとライザー君の

仲人だからね」

「……ひっ！」

許可なく他人の頬に触って

クソデブはニタニタしながら言う。

「ほら、もつと顔をよく見せておくれ。

……うん？ なんだい？

僕の顔をじろじろ見て……

もしかして惚れちゃった？

大丈夫♪

僕チンも愛しているから♪」

「いえ……別に……」

(いやあ……誰か……助けて……)

レイヴェルは泣きそうな目で

周りを見る。

(関わると後が面倒だ……)

(フン、成り上がりの小娘が

いい気味よ……)

(ここはおだてあげて

ネフレン様の心象を良くしよう)

(うう……誰も助けてくれない。

お父様も……お母様も……

お兄様まで……)

「おいおいおい……ここは

いつからクソの見本市に

なったんだよ？」

「えっ……？」

あ……！ やっちまった……！

つい、うつかり……！

「な、何だとうくく!?

き、貴様ーっ!?

この僕ちん、

ネフレン・カ・マンモンを

侮辱する気かーっ!!」

「あ、フンコロガシのウンコが

何か喋ってらア」

「ぐ……ぐぬぬぬ！」

お前はもう謝っても許さないぞ！

お前は僕チンの領土の砂漠で

干殺しにした後、

水牢でブクブクの醜い水死体に

した後、天牢でハゲタカ共の

餌にしてやるからなあ!!」

う、うわあ……執念深いにも

程があるだろ。

周りのおべっか使いも

『そこまでするのか……う……』みたいに

ドン引きするのも気づかないで

クソデブは喚き散らしている。

「あ、あんた……」

いくら何でも言い過ぎよ！」

「そうですわ！ 相手はネフレン様ですよ！」

「そ、そうですわ！ いくら何でも……」

「喧しいッ!!」

何でお前ら黙ってるんだよ！

貴族のくせに自分より強い奴には

ヘコヘコするのかよ！

イツセーの言うとおりでたっただぜ……!!

てめえ等は貴族じゃねえ！ 家畜だ！」

ええいもうヤケだ！

言いたい放題言っただけだ！

「成程、貴様の言う事も

一理ある」

収集がつかなくなりかけた時

見知らぬ誰かが割って入った。

「あんた誰です？」

「ぎ、サイラオーグ……！ 貴様……！」

あ、クソデブが明らかにビビった。

……強いなこの人。

明らかにオーラが違うし……。

何より気脈をコントロールできるのか

心の流れが読めねえ。

「俺の名はサイラオーグ・バアル。

宜しく頼む。

それはそれとしてネフレン卿。

我が友ライザーとリアス嬢の

仲人をとりもってくれた事には

感謝するが、ここは貴方の

我儘放題を許す保育所ではない。

控えられよ」

保育所って……この人も

なかなか言うなあ。

「何い……！ 僕チンは

ただ領民に娯楽を

提供してやろうとしたただけだろう……！」

そこまで言うならいいだろう！

そこのヤツと僕チンの

従者の間で決闘だ！」

え……？

決闘に部下を使うのかよ……？

呆れる俺をよそに

クソデブは二人の従者に

声をかけた。

「セベク！ アヌビス！ この男に

世の道理を叩き込んでやれ！」

いや、アンタが

世の道理と言える立場か……？

と身構えたがセベクと呼ばれた  
従者は用意されたメシを食っている。

「ふむ、このスープは  
実に美味しいな。」

材料は何を使っているのだ？」

「は、はい。」

そのスープは……」

クソデブはメシ食ってる

バカ従者を見て怒りに震えていた。

正直さまあとしか思えない。

「おいおいおいおい……」

そんな悠長なことしてないで

このバカを噛み碎けよ！」

真っ赤になるクソデブに

もう一人の従者、

山犬っぽい目つきの悪い

男が前に出た。

「クヒヒツ、いいですよ。」

私が代行と参りましょう」

「グフフ、アヌビスか。」

いいだろう、君ならコイツに

楽勝って所だもんな」

何だかイヤな笑いと

雰囲気のあるヤローだなあ。

周囲がこわごわと俺達を

取り囲んでいる中、

もう一つ騒ぎが巻き起こった。

「その結婚、ちよつと待ったア！」

イツセーの大声が

パーティー会場中に響き渡る。

「イツセー!?!」

「……来たか、下僕クン。

いや、兵藤一誠」

「……何の用だ？」

「何の用だ……じゃねーよ！ 部長を返しやがれ！」

「……返すも何も彼女は

自分の意思で

ここに來ているんだが？」

「嘘つきやがれ！」

「だったらぶちよ……リアスは

何で泣いているんだよ！」

「びしり、とイツセーは

婚姻のお披露目用のドレスを纏う

リアスさんを指さして叫んだ。だが、それを嘲笑うかのように

あのクソデブが鼻で笑う。

「君いゝ、世の中には

嬉し涙つていうのがあつてさア、

下級悪魔にはそんな事も

解らないのかな？」

「煩えな！」

「お前には聞いてねーよ！」

俺はリアスと

ライザーと話してる！

引っ込んでろ!!」

「ぐぬぬぬ……！ お前……お前え……！」

クソデブは怒りに震えているが、

ライザーは悠然としていた。

「ほーお。だが貴様に

俺とリアスの婚姻を破棄させる

いわれはあるのかな……？」

「あるっ!!」

一瞬のタメもなくイツセーは



ライザーに答えた。

「俺は……！」

「この俺兵藤一誠はな……！」

「ぐふふ。」

まさか愛しているからなんて

言わないよねエ？

そんなの下級悪魔と貴族の間で

理由になんてならないよオ？」

クソデブが混ぜっ返すが

イツセーは堂々と次のように

言い切りやがった。

「リアス・グレモリーの処女を

貰った男だからだツ!!」

「えっ！」

「へえっ!？」

「な……何い!？」

「コラ、クソワニ！」

そのロボスターは私が先に

取ったんだ！ 返せボゲツ!!」

「喧しい、ビッフエに

早いも遅いもあるものか……！」

## 第15話

「リアス部長の処女を

貰ったからだッ!!」

あ、アイツ…いつの間に…!?

というか声高に

何を叫んでるんだ…!?!?

「ほ、本当なのか…!?!」

ライザーはリアスさんの方を

向いてビツクリ仰天と言った

面持ちで確認すると

リアス部長は赤面しつつも

肯定していた。

「ええ……。確かにあの日

私の初めてをイツセーに

捧げたわ……」

「そ、そうですか……」

まさかの敬語かよ!?

まあ仕方ないと言えば仕方ないか。

ライザーからすれば

イツセーはリアスの眷属だもん。

シヨックめちやデケえよな。

まあでもさすがはイツセーだぜ!

あんな強敵相手に堂々と宣言して

リアスさんまで

自分の彼女にするなんてな!

やっぱお前は最高だよ!

「が、それはそれで興奮するな…

コホン。

それが事実だとするならば

捨て置くわけにはいかん……!」

そりやなあ……。

イツセーとリアスさんが

深い仲になった今、

子供が産まれたら

どっちの子になるんだって

お家騒動待ったなしだもんな。

だからこの場で

潰しときたいんだろうな。

だけどこのパーティーで

発表した以上揉み消すわけには

いかないよな。

イツセーの奴そこまで計算して：

ないよな。

そんなこせこせしたイヤなヤロー

ならアーシアちゃんや

リアス部長が惚れる筈もねえな。

「じゃあどうする？」

「前にも言っただろう……。

サーゼクス様！」

ライザーはリアスの後ろに

控えていた大物っぽい人の前に

跪いて頭を垂れた。

「誠に勝手ながら、

リアス・グレモリーを賭けて

男同士の決闘を彼、兵藤一誠と

行う事をお許し願いたく存じます！」

忽ち周囲がざわついた。

「ふむ……」

サーゼクスと呼ばれた人は

思案顔になり、

数秒ほど黙考した後 口を開いた。

「いいだろう。」

この状況ではそうすることではか  
君の心情も名誉も回復しないだろうからね」

「ありがとうございます」

ライザーは深々と頭を下げた後、  
立ち上がると

イツセーの方を振り向いた。

「そういう事だ。」

逃げるつもりはなからうな。

逃げるというならば

貴様は主を捨てて逃げた腰抜けと

して、私が子々孫々語り継いでやろう」

ライザーはそう言って ニヤリと笑った。

だがその挑発的な態度にも

イツセーは一切動じた様子もなく

むしろライザーへの共感すら

感じられる表情を浮かべている。

「上等だよ。」

俺が勝ったら二度と俺の

部長に手を出すんじゃないぞ」

イツセーの言葉を聞いて

俺は思わず苦笑いしてしまった。

「お前それ死亡フラグだつて……」

まあ負ける気はないだろうけど」

「ああ。勝つのはこの俺だ」

俺達は互いに不敵に笑うと

拳を突き合わせた。

「お前もレイヴェルのために

あのいけ好かないデブの

手下と決闘するんだろ？

負けるなよ！」

えっ？ 何それ？

俺、受けてないよ？

なんか勝手に

決められてるんですけど!?

「いやいや！

ちよつと待ってくれよ！」

「……ハア。」

なんですかの貴方？何なんですかの？

この状況でネフレン卿の決闘を

受けないなんて……

やはり下郎姉弟は下郎ですわ」

「最低ですわね」

「最低だね」

「……最低です、先輩」

………うう。

なんなんだよ！

朱乃さん、木場、

小猫ちゃんまで

いきなり出てきて

人を罵りやがって、泣きたい。

「ここは決闘を受ける流れでしょ

『燃える三眼』の力があるくせに

解りませんかねえ？」

パスタを食うナイアからも

ダメ出しを受けてしまった。

どうやら逃げられないらしい。

「……分かったよ。受けるよ」

俺が渋々承諾すると

サーゼクスさんが声を上げた。

「よし！決まったようだね。

じゃあ会場に行こうか！」

「では不肖ながらこの

サイラオーグが立会人を  
務めよう」

サーゼクスさんが手を叩くと

ゲイトの旦那が音もなく

マジックショーか何かの様に

フツと現れた。

「では決戦用の

バトルフィールドは僕が

作るとしようか」

ゲイトさんがパチンと指を鳴らすと

俺達がいる場所が 光に包まれた。

光が収まると そこは

巨大な闘技場の アリーナだった。

だが観客はいない。

恐らく中継されてはいるだろうが。

そして俺達の目の前には

既にライザーが立っていた。

「ほう。ここなら思う存分暴れられるな。

貴様の主の計らいには

感謝しておくよ、九頭竜安里」

あ、そうですか……それはどうも。

それよりも俺は対戦相手の

アヌビスとかいう男の方を見る。

山犬っぽい雰囲気

の三節棍使い……。

取り敢えず距離を詰められねえ

様に心がけなきゃな……。

俺は『燃える三眼』を展開して

戦闘態勢を取った。

「さあ、始めるとするか。

リアス・グレモリーを賭けて、  
兵藤一誠、貴様を倒す！」

「やれるもんならやってみろよ、  
種まき焼き鳥野郎！」

向こうは俺達よりも先に  
ぶつかり合いを始める。

さて…こっちは……。

「クヒヒツ。どうして俺が  
三節棍を使っているか  
教えてやろうか？」

「いや、興味ねーし」

俺はアヌビスとかいう敵の  
言葉を受け流した。

どうせこういうタイプが

本当の事を言うわけねーし……。

「おいおい、つれないなあ？

まあいいや。冥土の土産に 教えてやるよ。

三節棍はなあ、打撃・斬撃・槍術、

全てを兼ね備えた万能な武器なんだぜえ」

「ふくん。

それがどうかしたのか？」

「お前はもう

詰んでるって事だよお。

何故ならお前は今、

俺の術中にハマったからだあ!？」

バシイツと俺の

『燃える三眼』の鞭の一撃が

アヌビスの横面を張った。

アホか、ぐだぐだ喋りやがって。

「グバツ…!?て、テメエ…！」

俺は更に追撃を加えるべく

間髪入れずに 攻撃を放った。  
だがその時！

ドオン！

爆発音と共に

俺の体が吹っ飛んだ！

……何が起きた!?

見ればアヌビスが手に持った

三節棍をこちらに向けていた。

あの三節棍……何か仕掛けが

あるみてえだな……!!

油断した……!だが……!!

「ぐあっ……!」

俺の身体が燃える……!?!」

俺の『燃える三眼』の効果だ。

俺の触手で攻撃された奴は

基本的に皆燃える。

そしてこの炎が燃えている間

奴にスキが出来る筈だ!

「喰らいな!」

俺は片手を筒状にして

弾丸をアヌビスめがけて放つ。

「煩えッ!!」

アヌビスの三節棍が蛇の様に

しなると

俺の弾丸が打ち消された!

くそ……!!

だが俺も負けちやいない!

「まだまだよッ!」

俺はもう片方の手にも

『燃える三眼』を展開し、

両腕で交互に攻撃を繰り返す!



が、俺の集中が甘くて

『六合太極』が不十分だ。

まるでダメージを与えられない。

「チイツ！」

「無駄だアツ!! 俺の神器、

『カドウケウス（神医の錫杖）』は

俺のイメージするあらゆる

軌道に対応できるツ!!

更に中の霊薬により

軽傷ならすぐに癒え、

爆薬でテメーをふっ飛ばす事も

できんだよなア!!」

言葉通りにアヌビスの野郎の

三節棍の軌道は縦横無尽。

つまりオートデیفエンスか!?

だがそれでも俺は

攻撃を続けるしかない。

そうこうしているうちに

アヌビスが反撃に出た。

「クヒヒハッハア！」

隙だらけだぜエ！オラアツ!!!」

俺の胴にぐーんと伸びてきた

三節棍の

一撃が脇腹にクリーンヒットする。

爆薬の追撃までついてきた。

「ぐはあっ!?!」

い、痛え…!?!

ムチャクチャ痛えぞ…!?!

まるで墮天使の使う光の槍並の

威力じゃねえか…!?!

これが『神医の錫杖』の力か!?

「クヒヒッ！ ヒヒッ！」

その程度でネフレン様に齒向かうとは、

馬鹿もいい所だなあ？

その命を持って償うがいい！」

アヌビスはイヤミな引き笑いを

あげながら三節棍を巧みに操り、

四方八方からの猛攻を仕掛けてくる。

「くそっ……！ 調子に乗るな！」

俺はアヌビスの攻撃を避けながら、

なんとか攻撃を当てようとするが、

中々上手くいかない。

「どうしたどうしたあ!?!」

避けるだけか!?! クヒヒッ!

情けねえ奴だぜえ!

そんなんだからお前は 女一人守れねーんだよお!

お前が弱いから誰かが

傷つく事になる。

お前が弱いから誰かが

泣くことになる。

お前が弱かったから

皆が悲しむことになった。

全てはテメーのせいだあ!

全てはテメーの罪だあ!

テメエはここで死ねえエツ!!」

アヌビスは俺を罵倒しながら

攻撃の速度を上げていく。

『ふひひ、ひひ、また負けそう』

『あんな雑魚に言われたままで

悔しくないのかよお?』

『我等を使えよ、無理するな』

『ね、じゃまなやつ、』

いやなやつはみんなころしちやおう』

『殺せ』

『殺せ』

『殺せ』

「……………るせえ」

「ああ？…遂にビビりすぎて

いかれちまったか？

ならその壊れたノーミソ……

廃品回収も出来ねえ位に

ブチ砕いてやるぜエ!!」

奴がケリをつけようと

大振りな攻撃を仕掛けてきた……。

見え見えの攻撃だ……。

まるでアヌビスの野郎だけが

スローモーションで動いている。

こんな攻撃……

当たるわけがない。

「……………煩ええ!!」

俺は震脚の要領で地面を踏み砕く！

「なっ……………!?何だこれは……………!?

ぐわあああっ!?!」

俺の足下を中心に発生した 爆発的な衝撃波により、

アヌビスはバランスを崩し、

殴って下さいとばかりに

顔突き出した。

「喰らえ……………!」

俺は渾身の力を込めて

奴の顔面に拳を叩き込んだ!

棍棒の武装化のおまけつきでな!

「グブハアアアッ!?!」

アヌビスは吹き飛び、  
そのまま壁に激突した。

受け身を取ってない辺り  
こっちもクリーンヒット。

壁にめり込んでエンタイトル  
ツーンベースって所だな……！

「……しゃあッ！」

「グウウッ……！」

ガッツポーズを決める俺を

アヌビスは充血しきった

ケダモノの様な眼で

睨みつけてきた。

「て、てめえ……！」

俺の大事な顔に……！！

俺の顔になんてことを！

このクソガキがあッ!!」

アヌビスが怒り狂いながら

三節棍を振り回してきた。

だが俺は落ち着いて その攻撃をかわす。

「お前ナルシストか？」

防御はピカ一みみたいだが、

攻撃は大した事ねえな……！」

「クソが……クソがあッ!!」

何故だ……何故当たらねえっ!!」

アヌビスは必死に攻撃するが、

俺は全ての攻撃を回避する。

種は2つ。

棘付きの拳の攻撃で

奴の眼と三半規管にダメージを

与えたこと。

もう一つは高速移動の歩法『轟』の

ステップを細かく素早く

自分の周囲で刻む事で

瞬発的な回避を可能にする技

『霞』を使っているからだ。

イツセーはこれを素で

やってたんだからマジで

天才だよなアイツ……。

と、羨んでも仕方ねえ。

俺は俺の歩き方で行くつて

決めたんだ。

そうじゃなきやアイツと

肩を並べる資格がねえ！

だから俺が今出来る事は……！

「おらあっ!!」

「ぐうっ!?!」

俺はアヌビスの腹に蹴りを入れる！

そして怯んだ隙に、

アヌビスの三節棍を奪い取る。

「さっきまでの

威勢の良さはどうした？

アヌビスさんよ……!!」

俺は勝利を決定づけようと

奴の『神医の錫杖』を

奪い取る。が、それがまずかった。

「クヒヒ……!・馬鹿がああ!」

俺を舐めるんじゃないやねえ!!」

アヌビスは激昂し、

奴の肘から鎌のような刃を

生やし襲いかかってきた!

「螻蛄狼刃ア(とうろうろうは)！」

「うおっ!?!」

俺は咄嗟に避けようとしたが、  
鎌の斬撃だけじゃなく、  
奴の爪による同時攻撃は  
躲しきれない！

「ぐああああっ!!」

俺は手首を切り裂かれ、  
血飛沫が上がる。

「ヒヤハハハハハハッ！

ざまあみやがれ！

俺の『神医の錫杖』を

奪おうなんざ百年早えんだよお！」

アヌビスは勝ち誇るように 高笑いする。

「畜生……畜生!!」

「お誂え向きに首まで

下げてくれてありがとよ……!!

お礼にすっぱり斬首してやるア！」

アヌビスは勝利を確信したのか

涎たらしめてまで興奮しきっていた。

「なーんつつてよ……!!」

忘れたか？

俺の『燃える三眼』は

武装化できる触手なんだぜ？

手元を離れても切り飛ばされても

数分間なら自在に操作できるんだぜ？

「こういう事も出来ちまう訳だ！」

「な……い……ぐわあああっ!!」

俺は『燃える三眼』により

手首そのものを投げナイフに

変えて誘導した。

当たったのは……奴の眼だ！

「ぐがっ……ぎゃあああ!!」

更に大分エグいが…

恨むなよ！

お前も俺を殺す気だっただろ？

『燃える三眼』の能力を発動させて

奴に刺さった投げナイフを

ぐるん、と抉り込んで発火させた！

「グギャアアアアアアアアアア！」

アヌビスは断末魔をあげながら 燃え上がる。

俺はアヌビスが 消し炭になる前に駆け寄り、

奴の顔面に膝を叩き込む！

「いぶえ……！？！」

アヌビスは奇妙な声を出して

どさりと倒れた。

「そこまで！」

この勝負、

九頭竜安里の勝ちとする！」

審判役のサイラオーグが宣言する。

ま…死んじやいないし……、

治癒を受ければ助かるだろ……

悪魔は頑丈だって言うし……。

※16話（イツセー？リアス）

九頭竜安里とアヌビスが  
死闘を演じていた頃、

アリーナにてイツセーと  
ライザーは対峙していた。

「10秒だ！」

やおらイツセーは

ライザーを指さして叫ぶ。

ライザー・フェニックスは

不死鳥の化身であったが

兵藤一誠もまた不死鳥の

如き覇気と熱気に満ちていた。

「10秒以内にお前との

勝負のケリをつける！」

『ハア？ 何を言っていますの？

お兄様相手に10秒持つの

間違いではなくて？』

レイヴェルは呆れと侮蔑の

両方が揃った声音で言った。

他の貴族達もまた嘲笑を

隠さずイツセーの蛮勇を笑う。

（この男の実力は未知数だ……。

舐めてかかってはいかんな

が、ライザーと審判の

サイラオーグのみは笑わなかった。

「10秒か……。

いいだろう！」

ライザーは不敵な表情を浮かべる。

そして二人は構えた。

「では——始め!!」



サイラオーグの声と同時に、  
イツセーは駆け出す。

だがライザーは背中に炎の  
翼を宿し一気に飛び上がった。  
無論、逃げたワケではない。

（兵藤一誠！）

貴様の赤龍帝の籠手には  
明確な弱点がある……！）

そう、倍化により幾何数級的に  
能力が増すのは事実だが  
逆を言えば初動の実力は  
下級悪魔程度のもの。

ライザーは冷静に判断を下す！

「開始10秒以内に

カタをつけるツ!!」

二人は同時に天と地より叫び合い  
イツセーは赤龍帝の籠手を顕現。

一方のライザーは自らを

炎の巨大な怪鳥へと転じ

イツセーへと突撃した！

「アル・フェニックスツ!!」

あの『月に吠えるもの』にも  
通用したライザーの放ちうる  
最大火力の攻撃である。

その巨体から繰り出される一撃は  
まさに必殺の破壊力を誇っていた。  
だが――

「リアス！ プロモーションの  
許可を！」

「……!? え、ええ……解ったわ！」

イツセーの要請にリアスは

一瞬呆けたが即座に了承。

(恐らくは女王に転じて

魔力を一挙に高めるつもりであろうが、  
そうはさせん!!)

ライザーも瞬時にそう判断するも  
イツセーの行動は想定外のものだ。

「プロモーション！」

『騎士』!!」

「何イ!？」

イツセーが選択したのは

万能の女王ではなく

機動力に特化した騎士であった。

「全力で……回避ッ!!」

そしてイツセーはその脚力で

真上に飛び上がると、

そのまま上空へ飛翔する。

しかしライザーはそれを逃さない。

(逃がしはせずに兵藤一誠！

アル・フェニックスの羽ばたきによる最大加速は

音速を超えるのだ!!)

ライザーの背の炎の翼が大きく広がり空気を叩きつけるようにし  
て噴射すると凄まじい速度で上昇していく。

そして――

「もらったああああっ!!!」

アル・フェニックスの

嘴がイツセーを

捉えようとした瞬間、

「……こっちもなあッ!!」

プロモーション! 『僧正』!」

イツセーは真下に向けて

極大のドラゴンショットを放った!

「ぐうっ!?!」

それはアル・フェニックスの腹部に命中し、ダメージこそ与えられなかったものの体勢を大きく崩すことに成功した。

更に貫通した余波はアリーナのリングを吹き飛ばす程の

火力であった。

閃光と熱波はモニターに拡がり、観戦している貴族達は皆目を覆うか

さながら神話か寓話の再現の

如き二人の争いに度肝を抜かれ

呆然とするのみ。

そんな中、サイラオグだけは

真剣な眼差しで戦況を見つめていた。

(状況は五分……)

いや、ライザーに今のままならばやや有利か)

「どうした?」

10秒経ったが

俺はピンピンしているぞ?」

怪鳥から人型に戻りながら

ライザーは不敵な表情を崩さず

イツセーを挑発する。

だが、イツセーは逆上せず

軽口を叩く。

「別に……」。

しくじっても何度だって挑むさ!

諦めない限り俺達は強くなる!」

「弱者が自己陶醉めいた事をツ!」

「いや、強者の傲慢だね!」

「ほぞいたな兵藤一誠!!」

このライザー・フェニックスに

対して!!」

ライザーは戦法を変え、  
炎の剣を周囲に展開。

一斉にイツセーへと放つ。

「燃え尽きろおおおっ!!」

だがイツセーは慌てず

左手を前に突き出すと

「倍加はしないぜ? そんなことしたら——」

イツセーの左腕が紅く輝く!

「——10秒じゃ済まなくなるだろ!」

『強エ弱エは結果が決めるのさ』

俺様がいるんだ。ヒヨッコが

ピーピー囀るんじゃ無エよ』

(龍の声……!?)

その瞬間、イツセーの全身を

紅い甲冑が展開された。

そしてライザーの放った炎の剣は

悉く鎧の輝きに触れるやマッチの様に

押し折れ消滅する。

「ば……馬鹿な!」

「リアスのおっぱいの為にも

負けられないんだよ!!

これが俺の……フルパワーだア!」

驚愕するライザーに向け

イツセーは拳の弾幕を張る。

だが何れも龍の吐息の破壊力。

ライザーも応戦するがイツセーの

一撃一撃がライザーのそれを上回る。

バスン! バスン!!

バオオオオオンツ!!

超高速の両者の攻防は

既に音速を越えていた。

周囲のサイラオーグを除く物質は  
衝撃波と熱波で破壊されていく程だ。

「ぐわお!？」

ライザーの肉体に衝撃が走り思わず怯む。

そして遂にライザーは

イツセーの強烈な左フックを

腹に受けてしまった。

「ぬううう……!？」

並のものでなくても意識と

内蔵が粉碎されるに違いない

一撃であつたがライザーは

耐え抜いた。

しかし、動きは完全に止まる。

「これで………終わりだア!!」

勝負を決めるべく

イツセーは

ライザーの顔に渾身のストレートを

打ち込もうと腕を振り上げる!

だがライザーの意思は

死んではいなかった。

「舐めるなあ——ッ!!」

リングの残骸すら竦み上がったかの

様に振動させる雄叫びを発して

何とライザーは自らの意思で

左腕を引き千切った!

「な、何のつもりだっ!？」

『相棒!・ 受けるな!・ 避けろ!!』

「もう遅いッ!・ 回避不可能よッ!

『紅の火葬』(バーニング・

クリメイション)!!」

何とライザーは自らの片腕を

触媒に地獄の焰を呼び出し、

イツセーの全身に浴びせかけた!!

ライザーもまた異常者であった。

「ぐあああああつ!?!」

一瞬にして装甲ごと

炎に包まれたイツセー。

(あ、熱い!・ 熱すぎる!・

今までの攻撃とは次元が違う!)

だが、ライザーの

攻撃はまだ終わらない。

「俺をここまで追い込んだのは

サイラオーグを除いては

貴様が初めてだ!

最高の賛辞を抱いて……消えいッ!」

ライザーは称賛と共に残った片腕へ

背中 of 炎の翼を纏わせ、

恒星の爆発ばりの強大無比な寸勁を放つ!

『恒星寸勁

(ノヴァ・ライザー)!!』

ドゴオオオンツ!!!

凄まじい衝撃波と業火が

リングを揺らし、

イツセーの体は吹き飛ばされる。

「イツセー!」

その惨状にリアスは目に涙を

浮かべ、愛する者の名を呼んだ。

サーゼクスが肩を掴んで

留めなければ文字通りに

イツセーの所へと

飛んで行ったであろう。一方観客席では、

朱乃が両手を合わせて祈るようになっており、  
小猫は無表情ながらも

手には爪が食い込む程に力を込めていた。

（イツセー君……）

木場もまた、心の中で祈っていた。

そんな彼等の願いに応える様に

イツセーは立ち上がった。

しかし、先の甲冑は砕け散り

生身の姿を晒していた。

「まだ立つか……。出来れば寝ていて欲しいが……

だが、最早これまでだ！

お前は既に満身創痍！

これ以上戦う事は出来ないだろう？

大人しく負けを認めろ！」

とはいえライザーも片腕を喪失。

更に地獄の炎による

反動ダメージは深刻で

立っているのもやっつとであった。

「悪いけど、それは出来ねえな。

俺は

リアスの為に勝つて決めたんだ。

ここで降参なんて出来るもんか。

それに、これは

ゲームなんかじゃない。

誇りをかけた男同士の

真剣勝負なんだ……！

何よりライザー……！

お前が自分の腕を捨ててまで

挑んだのに、

俺、もう辛いから止めます。

なんて言えるもんかよ！

さつきまではいけ好かない  
ボンボンだと思つてたけど  
謝るぜ！ 悪かったな！」

イツセーはライザーを真っ直ぐ見据え、  
謝罪の言葉を口にした。

その瞳は先ほどまでの  
虚ろなものとはまるで違う。

(何という男だ……)

出逢い方が違えば或いは……)

「ふん、俺も少々やり過ぎた。

お互いの健闘を称えよう。

とはいえ

そろそろ終わらせるとしよう。

俺ももう限界だ。

だが最後に一つだけ教えてくれ。

何故そこまでしてあの女の為に戦える？

俺もフェニックス家の者として

貴族として生きてきた。

だから解らないんだ。

どうしてそう迄して、

己の命を賭けて戦い続けられるのかが……」

「……………」

ライザーの問いにイツセーは黙する。

そして――

「最高の人だからだ。

強くて、綺麗で、優しくて、

余裕がありそうだけど

本当は何事にも一生懸命で……」

すう、とイツセーは息を吸った。

そしてあらん限りの大声で言う。

「最高のおっぱいの



持ち主だからだっ!!」

持ち主だからだっ!!

——主だからだっ!

——だからだっ!!

パーティー会場に響き渡る

イツセーの言葉に

皆は言葉を失った。

「帰りましょうか皆さん」

「……はい、帰りましょう」

「すみません、ちよつと

通りますね」

眷属の仲間達は早々と撤収し、

「さ、サイトテーですわ……」

レイヴェルは絶句し、

「い、い、イツセー!!」

なにを公衆の面前で……!」

「成程、サンデーじゃないか……。

彼のテーゼを続けさせたまえ」

リアスは耳まで赤くなつて

あたふたと戸惑い、

サーゼクスは目は笑っていない

笑顔で錯乱気味に呟いた。

「色彩!・肌触り!・香り!

そして揺れ具合!・弾み具合!

何より大きさと向きの

黄金比!! 全てが完璧だ!!

うおおー! リアス部長のおっぱいを

想うだけで力が湧いてくるぜ!」

『馬鹿も極めれば頂点だな。

本当に魔力が回復するとは

恐れ入る』

ガッツポーズまでして

訴えるイツセーに

ライザーは驚愕するしかなかった。

「だからこの勝負……！」

絶対に……負けられないんだあ！」

イツセーは僅かに回復した

魔力を乗せて拳を放つ。

しかし最早半死の身故か

その動きは精彩を欠いていた。

「そんな攻撃が当たるものか！」

これで終わりだ！」

ライザーは片腕から火球を

放つべく手をかざす。

『Boost!』

イツセーの籠手が鳴り響く。

「まだこんな余力があるとは

恐れ入ったが……！」

これで終わりだ！」

「終わらねえよ！」

イツセーは迫り来る

火の玉に対して右手を突き出した。

いくら重傷とは言えライザーの

火力は瀕死の火球悪魔を

葬り去るには充分なはずで

あったが……イツセーの手には

鎖で十字架のペンダントが

吊るされていた！

「ロザリオで俺の焰を……!?!

拙い……！」

だが、最早完全に足に来ている

ライザーには為す術もない。

かに見えたが……!!

「まだだ……」

我が最愛のユーベルナのため……  
レイヴェルのため……

倒れるわけにはいかんん!!」

ギリギリの所で体を捻り、

イツセーのパンチを回避した

ライザーは流れるままのイツセーの

首に腕を絡め、

片腕ながらフロントチョークの

構えに入る。

完全に頸動脈を

締め上げ意識を刈り取る気であった。

「ぐ……おお……!」

イツセーは苦悶の表情を浮かべる。

だがライザーは必死の形相で絞める力を更に強めた。

「お、俺、は……!」

負けん……!! 絶対に……!!

絶対に……!! 二人のためにも……!!」

ライザーの腕力は徐々にイツセーの首を締め上げる。

イツセーの意識が薄れていく。

最早勝負は決まったかに見えた。

「リアス……リアスのために

俺は勝つ……!! 勝つんだあー!!」

なんと締め上げられたまま

ライザーの身体を持ち上げる。

この土壇場の精神力にはサイラオーグも

流石に驚きを隠せない。

(バックドロップ……!?)

しかも……アレは……!?)

キラリ、と光るのは

先程の攻防でイツセーが  
落としてしまったロザリオだ。

「ブーステッド・ギア……ギフト！」

『Transfer!!』

ロザリオの魔を祓う力が増し、  
光り輝き、叩きつけられた

ライザーの後頭部に直撃した！

ゴシヤアツ!!

と鈍い音が響き、

同時にライザーは白目を剥いて気絶する。

「そこまでだー！」

勝者……兵藤一誠！」

親友ではあるがサイラオグの

審判は公正であった。

会場はまさに悲喜こもごも。

数の上では悲の方が多かったが

イツセーの勝ちに喜ぶ者。

ライザーの敗北に嘆く者。

様々な反応を見せる中、

リアスは喜の最たるものだ。

「イツセー……！」

よくやったわ……！ 貴方って子は……！」

感極まって涙を流していた。

「イツセーさん……！」

アーシアは感動に

瞳を潤ませ、

「やりましたわね、

イツセー君」

朱乃は優しく微笑む。

「おめでとうイツセー君」

木場は拍手を送り、

「……ナイスファイトです」

小猫は小さく

ガッツポーズを取る。

「全くとんでもねえ親友だよ、

お前は！」

安里は喜色満面でイツセーを

称える様に頭をわしわしと

撫でると皆の顔を見渡し

提案する。

「よし！ 皆、イツセーを

胴上げするぞ！」

その言葉に全員が賛同し、

イツセーは宙へ放られた。

「おおおっつっ!!」

リング跡に駆けつけた

全ての者が歓声を上げる。

こうして、イツセーの勝利により

今回の決闘騒ぎは終了した。

ある一人を除いて。

↓

「ん……。あ、あの……部長？」

「ん……。んむ……。♡ぶはっ……」

何？ どうしたのイツセー？」

ここは療養所のベッドの上。

治療中のイツセーに寝そべって

寄り添いながらナース姿の

リアスが彼と唇を合わせていた。

あの日以来リアスはイツセーに

付きつきりで看病していたのだ。

「いや、その、

もう大丈夫ですよ」

「駄目よ。」

まだ傷が治っていないもの……♡」

そう言つて再びキスをする。

イツセーは困った顔をしながら

されるがままに受け入れていた。

リアスにすれば

自分のために命を賭け、

更に奇跡の逆転まで成し遂げた

愛しい男が可愛くて仕方がない。

故に、この様な行動に出るのも致し方ない事なのだ。

「ん……ちゅ……♡」

んん……んふ……♡ イツセー♡

……好きよ……大好き……♡

愛しているわ……♡ 誰よりも♡」

とまあこの様に二人きりの時は

呼吸するように愛を囁く所か

公言するに憚らない。

だがそれは二人の関係が

進展した証でもあった。

「ぶ、部長……」

つん、とイツセーの唇を

リアスの白魚の様な人さし指が

突いた。

「リアス……でしょ？」

決闘の時は私をそう呼んでくれたじゃない……？

寂しいわ……」

「い、いややや！

それはですね！

一時的にテンションがワーツと

なってしまうんですね……！」

「ううん、いいの。」

嬉しかったから……♪

だからもつと私の事を

名前で呼んでちょうだい……?」

「えっと……り、リア……ス……さん。」

……これで勘弁して下さい」

「ん……♪ 今は

それでも良いわ……♡

私だけのイツセー♡」

そう言うとりアスは

イツセーに甘える様に抱きついた。

甘く、艶やかな香りがイツセーを包む。

「り、リアス部長さん！

そういう風に密着されると

興奮してしまうというか

治療に悪影響が出るという

ですね……!?!」

生理現象には逆らえない。

イツセーの股間は熱を帯びて膨らんでいく。

「あら……じゃあ

私が鎮めてあげる……♡

毒が溜まっているなら鎮めるのが

婚約者の務めですもの……♡

それにね……?」

私だって……好きな人に触られると……

こんな風になるの……♡」

と、スカート裾を捲り、ショーツを見せる。

そこには既に染みが出来ており

そこから漂う甘い匂いに

イツセーは理性を失いかけたが。

「こ、婚約者あ!?!」

寝耳に水、青天の霹靂。

リアスの口から告げられた衝撃的な  
事実にはイツセーは驚愕する。

「だってそうじゃない♡」

公然の場で私を疵物にしたと  
叫んで、私のおっぱいのことを  
吹聴してくれたじゃない？

私は眷属に純潔を奪われて  
弄ばれた愚か者……。

もう見合いの話は

絶対ないとお兄様も

嘆いておられたわ……♡」

まるで蛇が脱皮を始める様に

ナース服をはだけさせつつ

リアスは嫌がる素振りも見せずに

イツセーのモノを扱き立てる。

「す、すいません！

俺のせいで!!」

イツセーはペニスを扱かれながらも

リアスに罪悪感を抱いたように謝るが、

彼女は優しく微笑んだ。

「大丈夫よ♡」

だってイツセーに

責任を取ってもらうもの♡

だから貴方は今日から

私の婚約者なの♡ふふっ♡

これからは

二人で幸せになりましょうね♡

イツセー♡」

(ま、マジか……!!)

二人で幸せになりましたよね……!!

こんな偉大な日本語があつたなんて……!!)



イツセーは感動に打ち震えていた。  
すると隣でもお盛んなのか  
女性の喘ぎ声が聞こえてきた。

『あっ♡ああっ♡ひっ……♡♡♡』

ひいっ♡♡』

完全に発情しきって快樂に堕ちた  
女の声だった。

「ふふ……♡オチ○ポが

反応して膨らんできたわ……♡

イツセーもああいう風に

私をひいひいよがらせてみたい？」

まるで発火させる様な勢いで

激しくイツセーのモノを

扱き、我慢汁で手がベタつくのも

構わずに

リアスは亀頭を果敢に責めていく。

あまりの快樂と興奮に

イツセーの歯がカタカタと鳴る。

「うお……！ リアスさん！

ちよつと待った！ ストップ！

それ以上はヤバイ！」

「何がどうなるの……？」

ほら……♡出して……♡♡

イツセーの精子一杯出して……♡♡」

イツセーの言葉の意味を理解しつつ

更に激しさを増す手淫に

イツセーの理性も限界を迎えた。

「くう……！ 出る……！！」

『んひいっ……♡御主人様の

オチ○ポでイクうう♡♡♡』

カーテンの向こうの相手と

同時にイツセーは絶頂した。

「あ……♡出てるわ……♡」

こんなに沢山……♡」

リアスの手にはべつとりと

粘っこい精液が付着していた。

「ハア……！ハア……！」

凄かった……」

「うふふ……♪」

気持ち良かった？」

「はい……！最高でした……！」

慈愛に満ちた笑みをみせる

リアスを前に

イツセーは涙と欲望が止まらない。

『んおお……♡抜くの……』

抜くの止めてくださいっ♡

オチ○ポ♡オチ○ポ大好き

ケツマン抜かず

パンパンひてええっ♡』

向こうのカツプルの真つ盛り。

その淫らな病は二人にも

しっかり感染していく……。

「あ、あの……リアスさん……。

良かったら……なんですけど……」

イツセーは顔を赤くしながら

リアスに提案する。

「ん……♡いいわよ……♡」

リアスは質問の意図も答えも

わかりきっていたので

いちいち説明もしないし求めない。

そう言うところリアスはナース服の

前を開けて胸を露わにして、

濡れ雑巾となりかけた  
パンツのみを脱ぐ。そして  
その胸の谷間からコンドームを  
取り出した。

「イツセーはまだ私を

ママにしたくないみたい

だから……♡んっ……♡ん」

リアスはコンドームの先端を

膣穴の入口で

挟むとそのまま腰を落としていき、  
騎乗位の体勢になった。

「ん……♡ふふ……♡

イツセー……こういうのが

好きなんでしょう？

元浜君から聞いたわ♡」

リアスはそう言って微笑むと、

イツセーのモノを挿んで

自身の中へと挿入し

コンドームを被せていく。

ぶびっ！　ぶびび！　ぶびゅう〜！

イツセーのモノとコンドームの

隙間から空気が漏れ出し

極薄のそれは完全に密着。

ぐりつと上向きのリアスの膣内を

亀頭で擦り上げる。

「んふ……♡イツセーのおち○ポ……♡

ビクビク脈打ってるわ……♡

ゴム越してもわかるわよ……♡」

「お、俺も……！

リアスさんのオマ○コ……！

ぶるぶる震えてるのが……

ゴム越しでも解ります……!!  
う、動いてもいいですか!?

「ふふっ♡どうぞご自由に……♡  
だってイツセーは私の婚約者  
ですもの♡」

許可が出た瞬間、

イツセーは獣の様にリアスを突き上げ、  
その豊満な乳房を掴み揉み、  
乳首を吸いながら激しく犯す。

「おほっ!」

おっぱい! おっぱいだあ……!!

リアスさんのおっぱい……!!」

「ああんっ♡イツセーったら……♡

そんなにながっついて……♡

仕方ない子だわ……♡

なのに凄く遅しくて……

素敵よ♡あなた♡」

リアスもイツセーの動きに合わせて

上下に動き、快楽に酔い痴れる。

「リアスさん……!」

リアスさん! 好き……! 好きです……!」

「私も好きよ……♡イツセー……♡

貴方を愛しているわ……♡

貴方と一つになれて幸せ……♡

ずっと一緒にいましょうね……♡

貴方との子供が欲しいの……♡

産ませてくれる? 私に赤ちゃん……♡

あっ♡あっ♡あっ♡」

「はい……! ゆくゆくは……!」

二人はお互いの名前を呼び合い、  
激しく交わり続けた。

ぎゆう♡ぐちゅっ♡ぐちゅぼ♡

(あ、あれ!?)

何だか急に俺のチ○ポに

リアスさんの絡みつく……!?)

イツセーはコンドームが

溶けている事に気づいてしまうが

最早止まることも抜く事も

かなわずにいた。

『うほおおおおおっ♡

イグううううう♡』

向こうのカップルの絶頂も近い様だった。

『ケツマンに♡

安里様の支配者ザーメン♡

いっぱいひいつ♡

死ぬう♡

ケツマンイキスギて

ケツマン死ぬっ♡

でもオチ○ポ様で

メス豚レイナーレ

生き返るう♡♡♡』

「おお……」

あまりにも卑猥な一枚向こうの

有様にイツセーは感嘆の声を

漏らすだけで二人の名が

明かされている事に気づかずにいる。

そしてそれはリアスも同じだ。

「ダメ♡ダメよ♡あなたあ♡

側妻はガマンするけどっ♡

エッチの時は……♡

子づくりするときは

私だけを見るの♡見てえ♡

貴方のオチ○ポで

私がイクところたつぷり見てえ♡」

リアスはイツセーに抱きつき、  
身体を押し付けながら懇願する。

その声はイツセーの耳元で囁かれ、脳髓まで響く。

「あ、ああ……！」

見ます！ リアスさん……！！

リアスさんがイクところを……！！

全部……！ 見せてください……！！

リアスさん……！！ うおおおおおっ！！」

どびゆるるるるるるるるるっ！！

びゅ——っ！！ びゆるるるるるるるるっ！！

「ひゃうんっ♡ お母様と義姉様の言うとおり

中でちゃんと出てるうう♡♡♡」

イツセーは射精し、

リアスの子宮へと直接注ぎ込まれていく。

「はあ……♡ 暖かい……♡」

これがあなたの愛の証……♡」

リアスはイツセーに覆い被さり、

息を荒げながら喜びに溢れた顔で唇を重ねる。

「ん……♡ んん……♡」

んふふ……♡

凄く良かったわ……イツセー♡」

「俺もです……リアスさん」

喉の渴きを覚えたイツセーは

水を飲むべく脇のデスクに

机を伸ばしたが……。

シヤアアアアア！

ついカーテンの方に手が行き

勢いあまって全開にしてしまう。

「「えっ」」

安里、イツセー、リアスは  
同時に絶句し、

「おほおおっ♡」

レイナーレは安里と繋がったまま  
絶頂を続けていた。

## 聖魔劍編

### 第17話

オッス、オラ兵藤一誠！

今日も今日とて悪魔の

契約を取るために

頑張ってます！ チャリンコで！

で、今日小猫ちゃんの

代わりにやってきたのは

マンスリーマンシヨンの一室！

小猫ちゃん曰く

変わり者でちよつと苦手な

タイプらしい。

「…………ふう」

俺は部屋に入るとまずは

息を吐いた。

そして部屋の中を見渡す。

あれ…………誰もいない…………？

つてまさか…………前みたい

逆さ十字に礫になってる

なんて事はないよな…………!?

そう言えばフリード・セルゼンも

未だ行方不明だし…………。

「いやいやそんな訳…………」

俺が一人で呟いていると

突如視界が真っ暗になった！

な、何だ!?! 罨か!?!

罨なのか!?!

ぎゅむううう♡

だがそ直後、リアス部長や



朱乃さんばりのおっぱいの  
感覚が……!?

「んーっ!・んーっ!」

突然の出来事にパニックになり  
じたばたともがく俺。

すると耳元から甘い声がした。

「だーれだ……♡」

……その声で分かった。

間違いない。この声の主は――

「ジャンヌ・ダルク!」

「この状況でその解答は

凄いセンスだねエ……」

だって解らないし!

けどわかりませんで話終わらせたら

後のトークが弾まないって

朱乃さんがアドバイスして

くれたから……。

「ま、いいか。

キミは面白い奴って解ったしサ」

「ところで……」

なんでこんな事を?」

ドアの死角に入り込んで

相手の後ろから目を塞ぐなんて

下手すれば迎撃されると

思うんだよなあ……。

振り向けばそこには

所謂アニメや漫画ででてくる

道士って感じの女の人がいた。

なおスタイルは道士の

イメージと外れているが……。

それでいて不思議とコスプレっぽくないと

いうか着こなしているというか……。

髪は黒っぽい紫の片目ガクレロングヘア。

胸はかなり大きくて、

朱乃さんの次に大きいかもしれない。

顔立ちは整っていて

美人系っていうのかな。

あと、眼鏡もかけているけど

支鳥会長とは雰囲気が違う。

あの人は知的な雰囲気だけど

この人は物憂げながら

ニグラさんばりに

妖艶な印象を受けるんだよな。

「どうかした？」

ボクの顔に何かについている？

あ、目と鼻と口ですなんてのは

無しだよ？」

「す、すいません……」

しまった！ つい見惚れてしまったぜ！

でも仕方がないじゃないか……。

だってめっちゃくちゃ

美人なんだもん！

「フフツ、冗談だよ。

キミみたいな男の子になら

いくら見られても構わないサ」

「えっと、

それで何故俺をここに……？」

「退屈だから、

慰めて欲しくてサ……♡

悪魔って、そういうサービスも

してるんだロ？」

赤ワインとチーズとクラッカーを

準備しながら女の人は  
俺を誘惑するかの様に言う。

正直言っただけかなりエロい。

「いや、そういうサービスは専門外なんですけど……。」

あ、酒はダメなんで炭酸水下さい」

「悪魔だから赤ワインは苦手ってワケ？」

キリストの血だものねえ」

シユタークさんはサツと用意をして

俺に炭酸水を振る舞ってくれた。

「でもキミ位の男の子なら

ヤリ友の一人や二人

いるんじゃないのかな？」

ヤリ友って……。

この人見た目によらず

下ネタ好きなのか!?

松田や元浜、あと安里との

猥談で耐性がなければ

炭酸水を吹き出していたかも……。

「いや、そんな相手はいないんで。

それにここ最近

悪魔稼業が忙しいんです。

不景気だからかな？」

「そうなの？」

モテそうに見えるけどネエ」

「そんな事はないですよ。

モテた経験もないですし」

実際、中学高校と

女子には嫌われていた。

が、今にして思えば

変態じみた事を平気でしていたから

当たり前だよな……。

「じゃあさっき言った事は  
本当カナ？」

寂しさ紛らわせてくれる相手が  
欲しいんだ……♡」

そして彼女は俺の腕にしがみつき、  
豊満なおっぱいを押し当ててきた。

うわぁ……柔らかい……！！

しかも良い匂いまでするぞ！

こんな美女に迫られて

ドキドキしない男が

いるだろうか!?

否、いない！（反語）

「ねえ……こっち向いて……♡」

そして相手は俺の頬に手を当て、

ゆっくりと顔を近づけてくる。

「ま、待ってください！

俺には大事な二人の彼女が!!」

我ながらひどい日本語だ。

彼女が二人って。

「ふうん……?」

なら3人になっても平気だロ?

「ね、年齢制限があるので

ダメですダメです!!」

俺は彼女の肩を掴み引き離し、

慌てて部屋の隅に逃げ込む。

流石にこの流れでキスはまずい。

それは浮気になってしまう!

アーシアと部長に

合わせる顔がない!

しかし俺の焦りとは裏腹に

目の前の女の人は

余裕綽々といった様子だ。

「ウブなんだネエ……♡」

そういう所も可愛くて

好きだよ、イツセー君……♡」

か、可愛い!?! 好き!?!

と、その時彼女のスマホが

鳴り出した! ひとまず助かった!

「思ったより早かったネ」

彼女は軽い溜息と共に

スマホの画面を見てアプリを

確認していた。

「じ、じゃあ今日の所は

コレで!

炭酸水美味しかったです!!」

急な仕事が入ったなら

キャンセルもやむなし!

というかこのままでは

リアスさんを裏切ってしまうかも

しれない!!

強引に帰ろうとしたが俺の

襟元を掴まれた。

「待った待った。

キミはボクのパートナーに

なるんだからネ」

「えっ、ちよっ!」

グイと引つ張られ、俺は再び彼女と向かい合う。

するとさっきの画面に何かが表示された。

「これは……」

『はぐれ悪魔出現警報』?」

「そ。ボクは

フリーの悪魔祓い師なんだ。

シユターク・ゴーズって  
聞いたことないかな？

尤もやり方はフツの

悪魔祓い師とはちよつと

違うけどサ♪

だから、

ボクの仕事を

キミに手伝って欲しいんだ……」

そう言つて彼女――

シユタークさんは微笑みかけてきた。

天使の様な悪魔の笑顔……と

言うのかな？

とにかく、その笑みに

俺は思わず

コクリと首を縦に振つてしまった。

あ、でもシユタークさんつて

小猫ちゃんが担当だったんだ。

「フフツ、いい子だね。

じゃあ早速行こうカ？」

「え、あ、はい……」

「あ、言い忘れてたけど、

ちゃんと報酬も出るから安心してネ？」

「は、はい」

こうして、俺達二人は

はぐれ悪魔討伐に向かう事になった。

……………

「うおらあああつー！」

「グギャアアアア!!」

はぐれ悪魔は俺のパンチ一発で

文字通り吹っ飛んでいった。

あ、あれ……？

はぐれ悪魔ってこんなに  
弱かったかな……?」

「やったネ、イツセー君。」

「というかキミが強すぎるのサ♪」

「そ、そんな事ないですよ……。」

この前なんか下級悪魔相手に  
手こずっちゃいましたし……。」

あの時だって、

アーシアや木場が

助けてくれなかったら

危なかったですし……。」

ホント、俺なんてまだまだですよ……。」

そう言っただけは

少し落ち込んだ様に頭を掻く。

すると、シユタークさんが

急に近づいてきて俺を胸元に

抱き寄せてきたっ!!

「大丈夫だよ、イツセー君。」

そんな風に自分を

卑下する必要はないよ。

君は強い。

そして優しい心の持ち主だよ

多分歴代で一番優しい

赤龍帝じゃないかなア」

「で、でも、俺……アーシアの事

一度は死なせてしまっ……。」

それに、部長も俺のせいで

大変な目に合わせちゃったし……。」

「うん、そうだね。小猫ちゃんから聞いたヨ。

確かにその通りかもしれない。

だけど、その後悔があるのなら、

これからどうするかが大事だと思わないカイ？」

シユタークさんは俺の

項をなでながらあやす様に

慰めてくれた。

「過去を悔やんでも仕方ない。

今を生きようぜ？ 未来を、明日を見据えてサ？」

「……はい！」

俺は元気良く返事をした。

そうだ。

過去を振り返るより、

今の自分出来る事をする方が大事なんだ。

『死んでくれないかな？』

!?

何で今

レイナーレの言葉が

脳裏に……？

アイツの事はもう吹っ切った筈……！

『相棒！ 上だ!!』

「えっ!？」

シユタークさんから名残惜しくも

胸から離れて見上げると

3メートル位の赤黒い甲冑を纏う

大男が上空から槍の様な武器を

振り下ろしてきた！

「危ない!!」

「解っているサ！」

シユタークさんは術符を

五芒星の位置に展開すると

魔法陣を展開した。

そこから大量の水が噴き出し、

巨大な水の壁を作った！



その壁で攻撃を弾き返すと、  
今度は自分の前に5つの同じ様な水の壁を作りだし、  
相手へとぶつける。

「……………又、ウウ……………!!」

シューシューと独特の金臭い  
刺激臭と甲冑から煙があがっている

辺りただの水じやなさそうだ。

けど、あの大男の持つ武器……………!

アニメやゲームで見たことが

あるぞ……………!?

「方天画戟……………!?!」

「よく知っているネ」

そう、三国志で有名な武将

呂布奉先の

愛用の武器である方天画戟だ。

何故それがはぐれ悪魔に……………!?!

「……………」

相手はフルフェイス型の兜で

顔が隠れているから表情は

分からないけど、どこか余裕の態度に見えた。

「この程度では効かないカ。」

ならばこれならどうかナ?」

シユタークさんはそう言うど、

術符を呂布もどきへと飛ばす。

術符は空中で雷の隼に変わり

奴に迫る。

「ブーステッド・ギア・ギフト!」

『Transfer!』

俺は右腕の籠手に魔力を送り拳を突き出すと、

雷の隼が鳳凰へと変わると、

呂布もどきに襲いかかる。これでどうだ!

『……』

所が赤と青の片手剣の二刀流で  
相手はその鳳凰をあつさり  
切り払い、

シュタークさんへと迫る！

「！」

次の瞬間。

赤と青の剣がシュタークさんの  
両胸へ突き刺さった！！

「あ、ああ……っ！！」

「シュ、シュタークさん！！」

「フフフ……」

「……ッ！！」

この野郎！！

何笑ってんだア！！

『Boost！』

『Boost！』

『Boost！』

俺は怒りに任せて  
力を倍加させ続け、神速の速さで  
はぐれ悪魔に迫った。

「うおおおおっ！！！！」

「……！」

そして、渾身の一撃を

呂布もどきの顔面に叩き込む！

どうだ……！！

が、奴はぐらりともしない！  
俺のパンチはシュタークさんの  
術符より弱いつて言うのか!?

「……灰となれい！」

双剣から一瞬で

槍に持ち替えたが

槍の先端から

業火が俺へと放たれた。

「火尖槍……!?!」

武器庫か何かかコイツ……!?!」

俺は咄嗟に身を屈め、

攻撃を避けた。

すると、その炎は

俺の横を通り過ぎ、

背後にあつた木や草を瞬時に燃やし尽くした。

「ぐっ……!!」

このままじやマズイ……!!」

「手こずっているネ、イツセー君」

「! シュタークさん!

大丈夫ですか!」

「ああ。まだ生きてるヨ。

というか道士キヤラお約束の

身代わりの術ってヤツさ♪」

人型っぽい符にチュツと

口づけしながらシュタークさんは

ウインクしてみせた。

すると呂布もどきの野郎は

棒高跳びの様に火尖槍を使って

飛び上がり、

俺達から離れていく。

そしてそのまま夜の闇へと

消えていった。

しかも焔をバラ撒く土産つきだ。

「逃げられた……。」

クソツ……!! 俺の力は

こんなものなのかよ……!!」

『相棒。落ち着け。』

焦っても良い事なんてないぜ……。

それよりもアイツ、

妙な感じだったな。

何というか、本気でやっていない

雰囲気かしたぞ』

確かにドライグの言う通りだ。

アイツからは殺意とか

そういうのは

全く伝わってこなかった。

かといって戦いを楽しむ感じでも

ない……。一体どういうつもりなんだ？

『まあ、考えても仕方ねえ。』

それより今はあのおっぱい道士様の手当てが先だろ？』

「あ、ああ、そうだな……」

俺は気を取り直し、

シユタークさんに駆け寄る。

「シユタークさん、今治しますー！」

「ありがとう。」

しかし、まさかあんな大物が

釣れるとはネエ」

「すみません。」

俺が油断していたせいでシユタークさんを危険な目に……！」

「ハハッ。気にする事はないサ。」

それよりも人が来ると

このボヤ騒ぎの犯人に

されかねない。早く移動しよう」

「はい……！でも何処へ？」

「それは勿論、キミの家だヨ？」

「へっ？」

そう言つてシユタークさんは符を

展開すると、魔法陣の中に消えた。

えっと、これは……

魔法陣の中に入ったら別の場所に行けるっていう転移魔法陣!?

そんなものがこの世界にあるのか!? 俺が戸惑っていると、シユタークさんは俺の腕を掴む。

む、胸が当たってますけど……

「ほら、行くゾ?」

「は、はいっ!」

俺は慌てて彼女の後を追って

魔法陣へと入った。

――

「ふう、到着。無事に着いたネ

100回に一回位は壁の中に

入っちゃうんだけどサ」

辿り着いたのは俺の部屋だ。

転移の感覚が気持ち悪かったが、

無事に帰って来れて良かった。

「さてと、まずは治療しないとネ。

傷を見せてくれる?」

「はい! お願いします!」

そう言ってシユタークさんは俺の服を脱がせ始める。

「ちよっ! シユタークさん!」

「ん? どうしたノ?」

「どうしたのじゃないですよ!

な、なんでシユタークさんが上着を

はだけさせているんですか!」

め、目の保養……じゃなくて目の毒だよ!

顔を逸らそうとしたらぐつと頬を掴んできた。

「キミはおっぱいが好きなんだロ?」

「は……はい、好きです……」

「だからこれはご褒美って奴サ♪」

そして俺の前にあるのはシユタークさんの  
生おっぱい。まさに恐竜を滅ぼした隕石級の  
カタストロフおっぱいだった……！

「どうしたノ？」

折角のご褒美なんだから楽しまないのかイ？

触ったり、揉んだり、頬擦りしたり……♡

ああ、突くなんてのもいいかもネ♡

新しい扉が開くかもよ♡」

シユタークさんは白い肌をほんのり上気させて  
俺を誘う様に呟いた。

新しい扉……！？ そうか進化とは……！！

おっぱいタッチとは……！！

などと俺が悟りを開きかけたその時だ。

「イツセー、帰っていたの？」

遅いから心配したわよ？」

「イツセーさん、

もうお帰りでしたか？」

ドアの向こうから

リアスさんとアーシア、

二人の声が聞こえる。

ま、拙い！

半裸の男女が相部屋！

この状況は端から見たら

浮気そのもの！！

ドライグモン！ 何とかしてくれ！

『俺がお前を逃がす

異次元ポケットを

持っている筈がないだろう。

無理だな。ハーレム王を

目指すなら修羅場位、

諦めて受け入れろ』

ううっ……!!

「……イツセー、誰かいるのね？」

朱乃？ それとも小猫かしら？ 入ってもいいかしら？」

「イツセーさん？ 開けても宜しいですか？」

二人の声のトーンが

若干低いです、ハイ。

……どうやら逃げられないらしい。

俺は覚悟を決め、

二人を招き入れる。

もはやこれまで……!!

果たして往復ビンタで

勘弁してもらえらるだろうか……。

「つて誰もいないじゃない」

「え……？ あれ!？」

さつきまでそこに……」

俺はリアスさんの指摘の後

周りを見渡す。

そこにはさつきまでいたシユタークさんの姿は無かった。

代わりに一枚の符があった。

キスマーク付きの。

取り敢えず握り潰す事にした。

『おいおい。道士の符を

そんな風に扱ってもいいのか？

思わぬしっぺ返しがあるかも

しれんぞ?』

構わん!

それよりも今は俺の

平穩の方が大事だ!

」

「……と、ことういう話が

あつたんだ」

「モテてモテて

俺ってば困っちゃう。

いやー赤龍帝ってつらいわー」

「違うだろ!？」

どうしてそういう結論に

なるんだよ!!」

安里は缶の

ブラックコーヒーを

飲み干すとクシヤツと

スチール缶を握りつぶしながら

つまらなさそうに言った。

鍛えてるんだな……お前も。

「まあな。

お前がその道士のおねーさんと

イイコトしてる間に

こっちはこっちで

大変だったんだぞ……」

安里はため息を吐きながら

公園のゴミ箱に缶コーヒー空き缶を

投げた。見事にホールインワン。

「悪いとは思ってるが、俺にも色々と事情があつてさ」

「知ってるよ。

お前の家庭環境の事くらいはな」

「……ゴメン。

というか何かあつたのか?」

「ああ、実は……」

と、安里は語り始めた。



## 第18話

ウツス、俺、九頭竜安里！

今日は土曜なモンで

昼から辰郎叔父さんの

店にバイトに向かう道すがらに

俺は妙な光景に出くわした。

「恵まれない神の信徒に

愛の手をー」

「愛の手をー」

「募金のコインがチャリンと

鳴れば天国の門が開くでしょー」

「開くでしょー」

「今日一日の食事代、

たった10円を寄付すればいいだけー」

「いいだけよー」

「どうか、この私めを愛の手で救ってくださいませんか？」

「くれませんか？」

何だあれは？ 托鉢って奴か？

だが件の2人の身なり、

服装は尼さんじゃなくて

白いフード付きのローブ姿。

怪しいってレベルじゃねえ。

誰か通報しろよ。

思わずスマホを起動させて

緊急通報をタップしようと

したその時だ。

「あー、君達ちよつといいいかな？

ここは一応宗教じみた事は

禁止なんだよねー」

駐在さんがチャリンコを

キイツと急にブレーキをかけ、  
キビキビとした

動作でやって来た。

真面目そうな駐在さんだし

これで一件落着だな。

「貴方、異教徒ね」

「さては悪魔の使いか」

「我等が神の御心に

従わぬ異端者め」

なんと怯む所か怪しい2人は  
駐在さんを弾劾し始めた。

フードで顔は見えないものの  
声のトーンは相手を威圧する  
ものだった。

……なんか雲行きが

怪しくなってきた。

「いや、君達ねえ……」

「さあ、我らが神の御心に

従わない愚か者へ天罰を与えるわよ！」

って何だあのアブねー女！

いきなり剣抜きやがった！

しかもあの剣、

普通の剣じゃなさそうだぞ！

と、その時俺と

アブねー女の目があつてしまった！

するとどうだ、目が輝き出した。

「貴方、安里君よね！」

って、俺の名前を知ってるだど!?

俺の知り合いにお巡りさんへ

光り物抜くアブねー女は

いない……かな？

二人くらいいる……。

「私よ私！ ほら、紫藤イリナ！」

幼馴染のイリナよ！

思い出して頂戴！」

自称幼馴染は俺につかつかと

歩み寄り、フードを外して

自分の顔を指さしながら

訴えかけている。

そう言われてもな……。

顔は確かに美人なんだけど、

昔の面影が全然無いし。

と、俺がつれない様子でいる事に

焦りだしたのだろうか。

顔を覆い声を震わせ、

情に訴えかけ始めた。

「ううっ……！」

やっぱり私の事なんて

忘れちゃったのね……。

「あんなに一緒に遊んであげたのに！」

私は今でも覚えているわ！

幼稚園の時、

私と一緒に洗礼ごっこした

じゃない！」

そ、そう言えばガキの頃に

そんな事をしたような……。

ああ、捨てられた子犬の様な目で

俺を見るな……！

↓

ハムツ！ ハフハフ！ ハムツ！

ぐあつぐあつムシヤムシヤ！

「う、美味しい……！」

「このホットサンド美味すぎる……！」

故郷の味がするわっ！」

そんなワケで、ここは

喫茶ラヴ・クラフト。

辰郎叔父さんの料理を

二人は貪り食っていた。

もう3日も食べていないというから

ここでメシを食わせる事にした。

ツケも効くしな……。

クソ……この性格ホント

治らねーかなア。

「二人とももう少しゆっくり

食ったらどうだい？」

アイスコーヒーを

コップに注ぎながら

辰郎叔父さんははにかみながらも

二人に呼びかけた。

「すまない。

必ずこの恩は返す」

蒼い髪にメツシユの入った

女が生真面目な顔で言うが

辰郎叔父さんはその硬さを

解すべく豪快に笑い飛ばした。

「ハッハア！ 構わねエよ。

どうせ安里が払うからな」

そして

肩を軽く竦めて親指を俺に向け、

ちらりと

アイコンタクトを取ってきた。

「た、辰郎叔父さん！」

勘弁してくれよ！」

「冗談だ。

余り物でひもじい子供から  
金巻る程落ちぶれちやいねえさ。

飲みなよ嬢ちゃん達。

淹れたてだが、俺の奢りだ。

気分が落ち着くぜ」

「あ、ありがとうございます」

「ありがたくいただきます」

二人は同時にコーヒーを

一口啜ると揃って

深いため息を吐き、

イリナは瞳をキラキラさせ、

メツシユの女の緊張は

若干緩んだ。

「ふう、本当に美味しい。

コーヒーには自信があつたけど、

これ程のコーヒーは初めて」

「ああ、この店はこの辺りでも

指折りの喫茶店だったのだな」

声の調子も明るい。

どうやら気に入ってくれたようだ。

それにしても、メツシユの方は

素の表情だと大分可愛いよな……。

「名前は？」

あ、思わず口に出ちまつた……。

まるでナンパだな、これじゃあ。

顔が火照るのが自分でも

解るほどだ。

「ゼノヴィアだ。

宜しくね♪ 安里君♪」

「答えてくれたのはいいけど、

なんで後半の声のトーンは妙に  
明るいんだよ！ イリナかよ！」

「いや、こうした方が

受けが良いと昔聞いたことが

あつてな」

またしても生真面目な

声のトーンに戻ってやがった。

わからんヤツだな……。

乙女ゲーの主人公なら

「おもしれー女」とか

不敵な笑みで言うんだろうが、

俺は所詮モブみたいなモンだし。

「おい、安里。

俺は少し外すから、

店番しておけよ」

辰郎叔父さんはそう言うと、

エプロンを外して店を後にした。

「あの人、マスターさん？」

何か用事があるのかしら？」

「いや、

気を遣ってくれたんだろう……。

だってイリナ、ゼノヴィア。

お前ら悪魔祓い師だろ？」

腹の探り合いは無しだ。

野暮ではあるが単刀直入に訊く。

じゃあなきやあんな剣なんざ

白昼堂々抜き出さねえ。

答えたのはゼノヴィアが

先立った。

「ああ、私達は聖剣の適合者だ」

「聖剣？」

何だか話がエライ方向に  
ぶっ飛び始めたもんで  
、つい聞き返してしまった。

「そう、エクソシストである  
私達が信仰する神より  
授けられた聖なる武器。  
その力はあらゆる魔を  
払うと言われているわ」  
イリナは

俺の問いに対して、  
何故か得意満面かつ誇らしげに、  
腰に手を当てて説明した。

「それでその聖剣使いが  
何のためにこの街に来たんだ？」

「ああ、実はな……」

俺の質問に対し、ゼノヴィアは  
滔々と説明を始めた。

要は頭のイカれた司教が  
聖剣を束ねてとんでもねえ事を  
やらかそうとしている話だ。  
極端なヤツはホント碌な事  
しねえのなあ……。

「で、あんた等は  
行くあてはあるのか？」

「勿論あるわ！」

こここの教会に向かう所  
だったんだけど知っている？」  
出された教会の写真を見て  
俺は思わず冷や汗が出た。  
あ、そこは……！

「知っているのなら話は早い。

店主が戻り次第で構わないから

案内してもらえないか？

「お願いよ安里君♪」

答える前に手を取り、

ゼノヴィアが頼んできた。

だから急に美少女ボイスに  
なるなよ！

心臓が悪い！

「あ、ああ。解ったよ……」

地図は書いておくから後は自分で頼む」

と、カランコロンとベルが鳴る。

一先ずは接客に撤しないと……！

「いらっしやいませー！」

「何だ、辰郎はいないのか？

ヤスが店番なら今日は

コーヒー位しか

期待できそうにねエなあ……」

頭を掻きながら浴衣姿でボヤくのは

家の常連さんの一人。

金髪に黒のメッシュが入った髪の

昔でいう『ちよいワルオヤジ』って

雰囲気を纏う

ナイスミドルの男性だ。

名前は確か、えっと……。

「何だ、また来たのか……」

そこで叔父さんが返ってくるなり  
悪態をついた。

客商売ならあり得ないことが

もう十数年の付き合いらしいから

別に仲が悪いわけじゃない。



むしろ、お互い気心知れているからこそ  
言えることなんだろう。

「へっ、相変わらずつれねえなあ。

それより、いつものだ」

俺が案内する前に店の奥のテーブルに  
足を組んで注文すると叔父さんが  
早速調理に入る。

オリーブオイルとハーブが  
混ざり、パン粉を軽く焦がした  
芳醇な香りが店内に漂う中、  
料理が完成した。

「安里、運んでくれ」

「あ、はい……」。

「お待たせしましたー」

運んだのは

ラム肉の香草と

オリーブオイルソースの

パン粉焼きとガーリックトースト、

オニオンスープのセット。

それに赤のホットワインだ

いや、イリナ。涎が出てるからな。

「ひょーっ……これこれー」

と、おっさんは喜び顔で

料理を口に運ぶ。

おっさん年甲斐もなく

ひょーっ……これこれ！　なんて

燥ぐなよ、とは思わんでもないが

客商売だから顔には出さない。

「全く日の沈まねえ内から

酒を喰らいやがって……

真面目に働けよ」

「勤労はお前ら小市民に任せろ。

俺は大抵の部下が優秀なモンでね  
昼から酒を喰らえる身分なワケよ」  
叔父さんの皮肉にも

おっさんは意を介さず軽口を叩く。

一体何の仕事してるんだ？

「ハハッ、当ててみなヤス！

一発で当てたら

ハワイに招待してやるぞ？」

って言われても

ノーヒントじゃな……。

「少々タチの悪い自由業？」

「おいおい……人をヤクザか

マフィア扱いするなよ……。」

違うのか？ じゃあ何だ？

「そうだなあ……。」

まあ、強ち間違いでもねえが。

実際俺のシマじゃあ

去るものは追わねえが

ケジメはきっちりつけさせる。

それが俺の流儀だ」

と、おっさんはドスを効かせた。

明らかにカタギの人間が出せる

威圧感と眼光じゃなかった。

「それってつまり……。」

「バーカ、冗談だよ。

そういう機微が判らん内は

まだまだ小僧だな、ヤス」

そう言っておっさんは

上品にホットワインを

くいっと一口飲んだ。

「ねえ、あの人何者なの？」

「さあ、知らないけど……。」

昔一緒に叔父さんとあちこち放浪したとか……。  
少なくとも悪い人間ではないさ」

俺はそう答えた。

俺の知る限り、この人は

叔父さんにとって一番親しい友人だ。

それは叔父さんも解っている筈だし、  
だからこそ俺の前で

こんな風に振る舞えるのだと思う。

「しかし、どこかで

見たような……。」

ゼノヴィアが腕組みしながら

思案顔になりおっさんを見る。

そりやああんだだけ目立つ格好だと

一度見れば忘れないと思うが。

「世間には同じ顔が3人いるって

言うからなア。

嬢ちゃん勘違いじゃないか？」

叔父さんが珍しく口を挟んだ。

あれ、『お客さんには挨拶と

注文の確認以外は

聞かれた事だけ答えりゃいいんだ』

って考えだつたんじゃ……。

ま、いいか……。

「ふむ……。」

確かにそうかもしれないな。

世の中似た人間はいるものだしな」

納得したのか、

ゼノヴィアは

それ以上は追及しなかった。

そして食うだけ食ったイリナと  
ゼノヴィアは教会に向かい、  
おっさんも一時間位新聞を  
読むと帰っていった。

何でも夜釣の約束があるんだとか。  
なら、昼から酒飲むなよなあ……。

「はあー、疲れた……」

時間は既に夜の8時になっていた。  
取り敢えず帰ったら風呂に入って  
寝よう。明日はオカルト研究部の  
会合もあるしな……。

「ただいま……」

「遅かったな少年！」

……？ 家を間違えたかな？

いや、だったらカギが

開くのはおかしいよな……。

もう一度ドアを開けると、

黒い服を来たエライ眼力の強い

人が腕組みして立っていた。

なんとなく焰と獅子のイメージが

浮かぶ人だった。

しかしどこを

見ているんだろう……。

「遅くなる時はニグラ女史に

連絡をすべきだ！

皆が心配するからな！」

と、その男は言った。

はい、すいません……じゃなくて！

何で俺の家の玄関先に居るのだろう？

いや、それ以前に……。

「えっと、どちら様ですか？」

「うむ！ 俺の名は

煉獄杏寿郎！」

故あって君を鍛える事になった！

ゲイト氏とナイア嬢に聞く所によれば、

弱きを助け、強気を挫く

鍛え甲斐のある若者達と聞いたが

俺も同感だ！」

チヨットナニツテルノカワカリマセンネ……。

「……ええと、

まずどうやって

ウチに入ったんですか……？」

「無論！ 玄関からドアを開けて入った！

何か問題でもあるだろうか!？」

声がデカイ。

もうちよつと音量を抑えて欲しい。

「ええ……いえ……ありませんが」

「そうか！ ならば良いな！」

では早速稽古を始めよう！」

「も、もう夜ですが……？」

それに、何で俺が貴方に

教えを請わねばならないのでしょうか？

失礼ながら見ず知らずの方とは

余り関わりたくないのですが……」

この手のタイプは怒らせると怖そうだから

穏便に済ませよう……。

「それは違うな！

君は先程

『関わるべきではない』

と言っていたが、それは違う！

自ら関わらぬ限り

人は変われないし

変わらないのだ！」

何だかよくわからないが、

凄く熱い人だな……。

ちよつとだけ……やってみようかも。

「……あの、一つだけ質問があります」

「なんだ!？」

「何故、俺は強くならなければ

ならないのでしょうか？」

「強くなれる理由か……。

その答えは自らで

見つけねば意味が無いぞ！」

笑顔なのに一喝されてしまった。

「だが、敢えて言うとなれば

大切なモノを守りたいのであれば

強くなるしかないからだ!

そして、守りたいという想いがあれば、

人は何処までも強くなれる!

俺がそうであつたようにな！」

「そう、ですか……。

ありがとうございます」

「うむ、それでこそ俺の継子だ!

さて、では行くとするか!!」

「えっ、ちよ、まだ心の準備が……。

待って下さいよー!」

……結局俺はこの人に

振り回される羽目になった。

でも不思議と嫌じゃなかった。

誰かから本気で相手をされるのは

辛くても、嬉しいよな……。

一方その頃。

「な、ないわ……！ 教会が影も形も……！」

「な、何という事だ……！」

教会は更地になっていた事実

にイリナとゼノヴィアは打ちのめされていた。

が、捨てる神あれば拾う神ありというべきか。

「……遅かったな聖剣使『われ』共。

それにしてもミカエルの奴も

よりにもよってこんな小娘二人をよこすとは……。

聖剣を取り戻すつもりがないのか。

いや、或いは『それどころではない』のか……？」

呆れた様子で二人を出迎えたのは

あのボールクその人だった。

## 第19話

私は幸福になつてはいけなかつた。

「私のために生きなさい」

誰かのために生きていれば

己の罪深さを忘れていられた。

ああ、だけど、だけれども。

忘れることと償うことは

まるで別なんだ……。

どうすれば許されるのだろう。

だから私は剣となろう。

己を鞘に封じ、主のためだけに

振るわれる刃となろう。

この身が朽ちるまで、永久に。

そうすれば、もう

苦しむことも嘆くことも

ないだろう……。

↓

「おい、木場！　木場!!」

イツセー君の声で僕は目覚めた。

目の前には

僕の身体を揺さぶる

彼の姿があつた。

「あ……あれ？　ここは？」

「部室だよ。」

なんかうなされてたぞ」

言われて周囲を見ると、

そこにはオカルト研究部の

面々がいた。

朱乃さんも小猫ちゃんもいる。

そして安里君も。



皆、心配そうな表情で  
僕を見つめていた。

ボロを出してはいないだろうか、  
そんな不安が頭をよぎった。

「あの夢……」

そうだ、僕は見たんだ。

忌まわしい聖剣の因子適合の

儀式の記憶だ……。

「木場、大丈夫か？」

「うん、ありがとう。」

「ちよつと悪い夢を見ただけだから」

イツセー君は

それ以上聞いてこない。

気遣いに感謝した。

鏡を見て自分の顔が

どうなっているか確認したかった。

「本当か？」

何か隠し事とかが

あるんじゃないか？」

……なんだろう。

安里君が妙に踏み込んでくる。

やはり

彼は何かを知っているのか。

「……本当になんでもないんだよ。

それより、

そろそろ帰らないかい？」

神は人を救わない。

人は人を救えない。

ならばせめて悪魔だけは、

我が主の御心のままに

在り続けたい。

そのためなら、  
命なんて、どうでもいい。

「それは不自然だぜ」

「……僕の心を読んだのかい？」

流石堕天使なんかと

懇意にしているだけは

あるね……」

「お前、俺に嘘をつくとき

いつもより口数が多くなるよな」

やめろ。

「何を言っているんだい？」

僕は何も隠してなんて……」

やめろ……。

「何をそんなに怖がってる？」

本当の自分を曝け出すのが

そんなにイヤなのか？」

やめろ……!!

「俺もイツセーも

お前の正体を知っても

友達をやめたりしない。

だから安心しろよ」

「やめろ!!」

思わず叫んでいた。

違う、本当は分かっている。

僕は恐れているだけなんだ。

真実を知られてしまうことを。

そして、知ってしまったら、

きっと今まで通りでは

居られなくなるであろう。

リアス部長以外に、

特にイツセー君に知られて  
軽蔑されたら……

と思うだけで恐ろしかったのだ。

「僕は……ただ……！」

ただ、なんなのだ？

何を言おうとしたんだろう？

言葉が出て来ない。

「待てよ安里！」

木場が話したくないなら

無理に話させる事はないさ！

それに木場の事情だってさ」

『いいんだ！』

イツセー君の言葉を遮るように、

僕は叫んだ。

これ以上彼に追及されるのを恐れた。

「……分かったよ。」

木場、悪かったな。

無神経なこと言って」

そんな辛そうな顔をしないで……

イツセー……。

違う。やめろ。

彼と僕はそんなのじゃない。

一人の眷属として、同志として

彼を愛し……尊敬しているだけだ。それだけなんだ……。

「でも、

これだけは言わせて貰うぞ。

俺はお前を大切な仲間だと

思っているからな！」

「ありがとう……イツセー。」

ゴメン、お花を摘みに行ってくる」

「ハハハ、何だよ木場。」

まるで女の子みたいな事を  
言って……」

「え!? あ、ああ、ごめん。」

そういうつもりじゃなくて、

その、あの……」

「ハハッ、冗談だよジョーダン！」

早く行ってこいよ!」

そう言いながら笑う彼の笑顔は、とても眩しくて、

優しくて、まるで陽だまりの

ように暖かかった。

……だけど、

そんな君だからこそ、

僕のような穢れた存在は、

傍にいるべきではなかった。

君を汚してはいけない。

僕は部屋を出た。

そしてそのままトイレに向かい、

鏡を見ることなく個室に入る。

ああ、駄目だ……隠しきれない……!」

途端に僕の胸がせり出してくる。

勢いは男子用のYシャツには

収まらず、ぎちぎちと圧迫される。

ボタンが飛び散り、

やがて僕の乳房を覆う布が裂けた。

「うっ、ぐう……!」

痛みに声を漏らしながら、

下半身の衣服も脱ぎ捨てる。

本来睾丸のあるべき位置に

女性器があった。

それも陰核ではなく、膣。

ヴァギナと呼ばれる部位だった。

「ふーッ、

ふ——っ!!」

荒い息遣いで己の肉体を見下ろし、  
そして、

震える手で男性自身に触れる。

既にそこは固く隆起していた。

「んくあぁっ!! くひいっ!!」

ビクビクつと身体が痙攣する。

快感が背筋を走り抜けた。

でも足りない……。この程度の刺激では、

この身体に渦巻く欲望を発散させることは出来ない。

「は、あぁ……」

ペニスを扱きながらも、

もう片方の手で自らの乳首を弄ぶ。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

イツセー君、イツセー君……!

はやく、はやくきてえ……!」

今すぐにでも駆け出して、

愛しい君の胸に飛び込みたい。

抱き締めて欲しい。

キスして欲しい。

そして僕を……私と……

ワタシと……堕ちて欲しい♡

「はぁ、はぁ、はぁ……」

イク、イツちゃう、イツセーくん、

イツセー、イツクウウツ!!」

びゆるるるるるる!

ぶしゅっ♡ぶしゅうう♡

精液と潮が同時に私の身体から

貝が砂を吐き出すように溢れ出す。

「ふぁぁ……気持ちいい……♡

気持ちいいよう……♡」

全身が性感帯になったような錯覚を覚える。  
肩に自分の髪がかかる感覚だけで、  
ゾクゾクとした快感が背中を走る。

「ああ……また髪が……伸びて……

切らなくちゃ……」

肩まで僕の金髪が伸びていた。

そう私……僕は男性でもあり

女性でもある。

或いはどちらでもないのかも  
しれない。

聖剣の因子は女性に現れやすい、

あの男、パルパーはそのために

僕らの肉体を改造したのだ。

聖剣に適合する因子に耐えられる様に……。

ならば何故、

僕は男の振りをしているか？

それは、

僕自身が望んだことだからだ。

僕は強くなりたかった。

だから僕は女を捨てた。

いつか来る戦いのために。

全ては復讐の為に。

その為なら僕は

どんなことでもすると決めた。

そう……どんな事でも。

↓

「雨か……」

部活終わりの帰りの夜道、

降り出した冷たい雨に打たれながら、

僕はひとりごちた。

今日は生憎傘を持って来ていない。

「やれやれ」

濡れて帰るしかないようだ。

まあ、

たまにはこんな日もいいだろう。

結局髪は切らずに束ねておいた。

これで少しはマシになるかな？

その時、

「アイムシ〜ンキングザレイン♪

お、ひ、さ、だねエ〜♪」

路地裏から白髪の狂人じみた

はぐれ神父、フリード・セルゼンが

一本の剣を持って現れた。

「シンギングだよ……」

考えなしの君に相応しくない

替え歌はどうかと思うよ？

フリード・セルゼン」

落ち着け……。

あんなことがあつた後だが……。

心を静かに……鞆に納める様に。

「ハア？ ハア？ ハアア？

何ですかア溝底這い回るネズミより

きつたねー悪魔くんが

人をフルネームで呼んでるのオ？

何？ ラノベ主人公になつたつもり

なのかにやあ？

当世の流行りはフクシユー系

主人公らしいツスよお！

ヒツハハハア!!」

フリードは何が可笑しいのか

狂つたように高笑いをした。

復讐者か……。やはり彼はまだ、諦めてはいなかったようだ。

しかし、あの剣は明らかに

あの忌まわしい聖剣と

同じ波動を出している。

……危険だな。

「そうか。」

生憎僕は今、機嫌が悪くてね。

誰でもいい気分なんだ……」

「おや？　おやおやおや？」

キレる十代ですかア色男君？

切れてるチーズかな？　かな？

「生憎ソイツは生産終了でして……

廃棄！　廃棄！　テメーも廃棄イ！」

相変わらず彼はふざけている。

いや、これは挑発か？

だとしたら、

乗ってやるのも一興かもしれない。

僕はフリードに向かって

創造した魔剣を構える。

「それは……聖剣かい？」

「そーだよ。」

え・く・す・か・り・ヴァー♪

エクスカリバーでございますウ!!

俺様ちゃんの頼れる相棒！

光栄だろ！　感謝しろや

クソボケのクソ悪魔ア！」

成程、あの男は知らない訳か。

その聖剣の真の意味を。

それとも、知らされていないだけだろうか？

いずれにせよ、



油断はできない。

気を引き締めなければ。

「しゃべってないで

はやくなぐれ」

「っせナア！」

このデカブツのウスノロがア！

こういうのはバトル前の

お作法なんですよオ!!

『お点前のお首頂戴致します』

ってなあ!!」

「うるさい。

いいからはやくたたかえ

おんしらず」

「ハハッ！ ヒヤーツヒヤツヒヤ！」

「ふっ！」

キン！

「カモンベイビー！ ほおう!?!」

僕の持つ魔剣とフリードの聖剣がぶつかり合う。

拙い、さっきの声の

女の子、キユクロの

攻撃を凌げない！

『魔剣創造』！

咄嗟に地面から幾本の魔剣を

突き上げるようにして出現させ、

彼女の攻撃を防ごうとする。

だが、彼女の一閃は

僕の魔剣を一瞬で叩き砕いた。

何だ……あの剣は……!?!

まるで鉄の棒じゃないか……!?!

バキイっ!!

お、重い……!?!

そして、速い……！

「ぐあああつ!!」

僕は彼女の一撃を受け、  
よろめいた所にフリードからの  
連撃を受けてしまう。

「ヒハハハハハハ！」

ア——ーッハハハハハハ!

ザマア見やがれゴミ虫が!

どうだい？ 痛いかな？ 苦しいかな？

気持ちいいだろ？

気持ちいいよな？

そうだろ？ そうと言えよ！ 言え！ オラア！」

ザクツ！ ザシユツ！

「……ぐ、ああ……」

「あ……う？ 何だコイツ？

急に喘ぎ出してんじゃねーぞ？

神父なのにボキたん

コーフンしちゃうでしよっ!?!」

フリードの攻撃は止まらない。

僕はただひたすら、

彼の攻撃を受けるだけだ。

「おらア！ もっと苦しめエ！」

「テメーの罪の重さを思い知れエ！」

「ぐ、う……」

「お？ まだ生きてんのかよ？

しぶてえな。

ゴキブリかテメエは。

いい加減死ねよ」

ああ、死ぬのか……。

僕は……。私は……。

でも、それもいいか……。

「……………」

何か遠くから声がする。

何だ……けど……いいや……。

眠らせてくれ……。

「止めろおおお!!」

「いたあい!」

突然の怒号と攻撃に

フリードが吹き飛ばされた様だ。

「……ってキュクロ!」

キュクロじゃないか!」

イツセー君の声がする。

ああ……キミは本当に……。

イツセー君は、

やはり優しかったんだな。

こんな僕にも、

分け隔てなく接してくれる。

でも、もういいんだよ。

」

俺が木場の家に向かっていたら

何だかとんでもない事に

なっていた!

っていか何で!?

何でキュクロちゃんと木場が

戦っているんだよ!

ワケがわかんねーよ!!

「やっときたかいっせい。

わたしとたたかえ」

何でキュクロちゃんも

やる気なんだよ!

一緒に温泉入った仲だろ!

「え? 何でだ! お前、

安里に技を教えた仲だろ！  
戦えるわけない！」

「ぎゆうどーはぎゆうどー。

いっせいはいっせい」

ダメだ！ 聞く耳を持つてくれない！

木場のケガも気になるし……

何とか気絶させる程度に……！

俺はキュクロちゃんに向き直る。

しかし、彼女は既に

俺に向かって安里と同じ歩法を使って

距離を詰めてきた。

くそっ！ 仕方がない！

『Boost!』

「……っ!? うわあっ!?」

俺の倍加した拳を

キュクロちゃんの

デカイ切っ先の丸い棒みたいなの

剣で防ぎきった。

な、何だ……!?

この猛毒入りの熱湯を

腕に浴びせられたみたいなの

激痛は……!?

いや、これはまさか……!

聖水を受けた様な……!?

「えくすかりばー・くるたな。

(不殺の聖剣)

ととさまがつくつてくれた

せいけんだ」

『聖剣を造るだど……!?!』

流石のドライブも驚きを

隠せない様子だ。

「聖剣なんてそんなに

ポンポン造れるもんじゃないよな？」

「そうだ。ととさまはすごいんだ。ほめろ」

「あ、うん。凄いね」

「うむ。それでよいのだ」

「……」

『……』

「さあ、とつととやるぞ。

とつとと」

再びクルタナを振り回す

キュクロちやんだが

ビュゴオツ！

とんでもない風切り音と共に

その風圧まで武器として

利用してきた。

まるで大型台風だ！

「ぐっ！」

咄嗟にガードしたが、

動きが止まってしまった……！

拙い、あのとんでもない一撃が

飛んでくる！

『Boost！』

咄嗟に龍の方の拳を出すか、

ピシッと骨にヒビが入る音がした。

その直後から激痛が走る。

「ぐあああっ!!」

「それでじまんのぶーすとは

つかえないな」

籠手を見ると宝珠にヒビが

入っている。こんな事があるのか!?

『スマン相棒！』

「自己修復に一分程時間をくれ」  
マジかよ！

どうする！ どうする！

俺が焦っている間に

キユクロちゃんが

トドメを刺そうとしてくる！

このままじゃマズイ！

キユクロちゃんは一步踏み込んできて、

上段からくるりと円を描く様に

クルタナを

振り回して斬りかかって来た。

俺はその攻撃を紙一重でかいくぐり……。

「洋服破壊！」

バリインツツツ！！

轟音と共に、彼女の服が弾け飛ぶ。

キユクロちゃんには悪いけど

これで動きは封じたぞ！

そして木場を抱えて逃げる……！！

「にがさない」

って、え、ええーっ!?

裸の身長とか色々デカい女の子が

大剣を持って

おいかけてくるって

どんな絵面!?

しかも滅茶苦茶速いし！

「ちよ、ちよつとタンマー！」

その時ポケットが光る。

な、何だ!?

そう言えばこの間ポケットに

握り潰して突っ込んだ

シユタークさんの術符が……！！

と、俺と木場は光に包まれて……。

シユタークさんの部屋にいた。

俺は腰が壁に挟まれた状態で。

「おやア？」

知らない内にボクの部屋の

壁が現代アートに

なっているじゃないカ？」

どうやら転送用の呪符

だったらしいが

シユタークさんは

慣れているのかあまり

驚いていない。

「ど、どうも……。」

100分の1の確率に

引つかかっちゃったみたいで」

何ともバツが悪くて、

頭をかきたいけど

挟まっているから無理だ。

「ま、いいヨ。

それより木場君だつケ？」

随分とケガをしている様だけど」

「ええ、実は……。」

「説明は後ダ。

大分強力な武器に

やられたらしいねエ。

ふーむ……これはキミの恋人を

呼ぶのをオススメするヨ」

と言って転送用の呪符を

2枚くれた。

この人何枚持っているんだろう。

「ありがとうございますー。」

俺は礼を言いつつアーシアを呼びに行くため呪符を使う。

アレ……よく考えたら

木場を呪符で運んだ方が

早くないか……？

しかし、使用した後に

気がついて後祭りだ……。

↓

「これで大丈夫です」

アーシアちゃんの

トワイライト・ヒーリングを

譲渡の力で治癒力を高める事により

木場の傷は大分回復した。

「へエ。」

噂には聞いてきたけど

加護なき悪魔も癒せるなんて

凄いものだねエ。

ボクの治癒符じゃこうは

いかないヨ」

「いえ、そんな……」

シュタークさんは手放して

アーシアを褒めそやすと

アーシアは手を擦り合わせて

もじもじとして照れていた。

自慢の恋人を褒められて

俺も鼻が高いよ……。

「ところで、何があつたノ？」

「ええ、それがですね……！」

俺達は今までの経緯を

シュタークさんに話した。

「なるほどなるほど……。」



しかし聖属性の剣ではなく  
聖剣を作るなんてねエ……」

「はい。でも聖剣なんて

そう簡単には作れないですよね」

俺が確認すると

シユタークさんは頷いた。

「そうだね。

聖剣というのは様々な武具の

中でも特に特別な代物だからサ。

まず材料が手に入らないシ。

世界を回ってそれを求めた

『アーネンエルベ』って

阿漕な連中もいたんだけど

そんな話は別にいいネ」

『アーネンエルベ』か……。

オカルト研究部の表向きの活動で

聞いたことがあるな。

超人やら英雄やらの存在証明から

人為的に再現、量産するとかいう

眉唾な組織だ。

そう言えばシユタークって

最高とかパネえって意味の

ドイツ語のスラングだけど……

偽名なんだろうか？

「いや、イカンイカン！」

俺は疑心を振り払う様に

頭を振って払拭すべく声を出した。

今はシユタークさんの事より

優先すべきことがあるからな。

「とにかく彼女の武器が

新たに作られた聖剣なら

その造り手は人間じゃあないネ。  
錬鉄や鍛冶関係の神様だろうなア」

「神様ですか……。」

でもその神様がどうして  
キユクロちゃんに味方するんですか？」

待てよ。キユクロちゃんは  
やたらととさま、

って言っていたな。

それはつまり父親って事か？

「まあ、推測だけどネ。

彼女の父親は鍛冶の神で、

『窯』の権能をも持つ神だ」

「そんなチートな存在って

アリなんですか？」

「赤龍帝のキミが言っても

説得力がないねエ……。」

「すみません……。」

シユタークさんの

ツツコミに思わず頭を下げる俺。

しかしシユタークさんは

いなすように俺の肩をぽんと叩く。

「いや、謝る事はないヨ。

しかし、その子は

かなり強力な武器を

持っているようだし、

このままだと

ヤバイかもしれないネ」

確かにキユクロちゃんの強さは

異常だった。

あの怪力だけじゃなく

あの剣の頑丈さは特にヤバイ。

恐らく今の俺じゃ破壊する事は

不可能だろう。

もし、また襲ってきたら……。

「ええ、ですから何とか彼女を説得できないかなと」

「ふーむ……。」

「ちよつと難しいんじゃないかな？」

「かもしれないけど……！」

難色を示すように腕を組んだ

シユタークさんに対して

俺は尚も食い下がる。

「無理だ」「できっこない」

「諦めろ」

そんな言葉の百や二百で

諦めちやあハーレム王なんて

夢の又夢だ！

「まあ、

やるだけやってみるといいヨ。

無理、無茶、無謀は

若さの特権さア」

「はい！」

俺は力強く返事をした。

」

一方その頃。

「……いっせいにはにげられた」

キユクロは3人の男女に

顛末を報告していた。

一人は肌の色からして

人間ではなかった。

もう一人はミイラのように

顔全体を包帯で覆う

車椅子の男。

そして最後に3人の真ん中に  
いるのは白い短髪の少年。

位置的には少年がリーダーという  
陣取りになるが

その表情はどこか狂気を

忍ばせていた。

「ごめんなさい、ととさま」

「……まあ、いい。」

その木場という輩が

『禁手化』に至る前に

殺してしまつては元も子もない」

車椅子の男がキユクロの

父親、という立ち位置である事は間違いないだろう。

すると人離れた見た目の

堕天使が口を挟んだ。

「その木場とかいう男の

『禁手化』だが……」

本当に果たせるのか？」

「できるとも。」

というか彼がその領域に

至ってくれなきや困る」

車椅子の男の代わりに

少年が堕天使に返答した。

「どういう事だ？」

「あの一件を

ベストなタイミングで

公表するには

『あらゆる属性の剣』を

一人の悪魔が作成できるという

事実が欠かせないんだ」

「なるほど……。」

そういうことか。

かんぜんにかいした」

「貴様……実の所は

まるで解っていないだろう……？」

腕組みして何故かドヤ顔きみに

キククロはうんうん、と

何度も頷いていたが

堕天使が肩をすくめつつ

溜め息をつく。

「ばれたか、じつはそうなのだ」

「何故誇らしげなんだ……。」

全く貴様の情操教育は

どうなっているのだ？」

「女は無垢に限る……。」

誰かが下らん入れ知恵をするから

あのような生き物になつて

しまったのだ……!!」

車椅子の男は両手を潰れんばかりに

握りしめながら呻く様に

声を震わせた。

その瞳はまるで窯の覗き窓の

様に炯々としていたが

その炎は憎悪と呪詛が

渦巻いている。

「ああ、あれは傑作だったねエ。

でも、まさかあの子達があそこまで

壊れるとは思わなかったよ。

ああ、思い出すだけで

ゾクゾクする!

もう一回、『女』の記憶を消して

やってみたいなあ!!」

少年はしんそこ

愉快そうな笑みを浮かべ

ブルブル震えていた。

墮天使、コカビエルは

自身が墮天使の中でも異端だと

自負、乃至自嘲していたが

この少年に比べれば

まだマシかもしれないとさえ

思える程に彼は狂っていた。

「そんな憐れんだ顔を

しないでくれよコカビエル。

君は飽くなき闘争のため

彼は怨念晴らしと

機甲龍帝の完成のため

僕は……神様ごっこのために

手を組んだ仲じゃないか」

「……そうだったな

サタナキア」

眼の前の少年サタナキアは

『愛玩の巨獣兵』を始めとした

外法や禁呪を好んで研究し、

遂にアザゼル、シエムハザに

その地位を追われた。

墮天使の

現総督であるアザゼルに

半身を封じられはぐれ悪魔を

詐称する身であるが

未だに神の位を篡奪するのを

諦めていなかったのだ。

「さて……と。」

僕もそろそろ次の段階に移るとしよう」

「……………」

キユクロは首を傾げた。

「ああ、そうだ。」

ミカエルの呑気者が動いたなら  
僕もそれなりに

礼を尽くすだけさ。

えーと、フリード君？」

「ハイハイハイ！」

なんでござんしょボス！」

サタナキアが指差すと

何処からかあのはぐれ神父が現れ

ビシッ！ つと敬礼を決めた。

「君に僕の力の一部を貸すからさ

あの二人……紫藤イリナと

ゼノヴィアだっけ……。

あの子達を君の好きにして

いいよ」

「マジですか!？」

ありがとうございます!!

流星はボスですぜい！」

「……………」

「……………」

餌を与えられた犬さながら

はしやぐフリードに対して

キユクロは絶句し、

コカビエルは

苦虫を噛み潰したような表情になった。

「じゃあ、よろしく頼むよ。」

ああ、あと……………」

「へい、分かっておりますぜ。

木場って野郎が『禁手化』したら

すぐにお知らせしますんで。  
んじゃ、早速行つてきますわ。  
そいじゃま、いってきマツスル！」  
そう言つてフリードは  
その場からヒュンと消え去つた。



※幕間（イツセー×シユターク&イザイヤ イツセー  
×リアス×アーシア）

「ん……んむ……♡んん……♡」

「はむっ……♡んん……♡んん♡」

何だか股が凄え生暖くて

気持ちいいな……。

何だかぼーつとするし……

最高だ。……あれ？

俺は今、何をしてるんだろう？

確か昨日は

お風呂に入つててそれから……

記憶があやふやだ。

股を見れば

木場にそっくりな美少女と

そしてシユタークさんが

頬を上気させながら

俺のモノに口づけをしている。

……これは一体どういう状況なんだ!?

「うわああああっ！」

「ふふ、起こしてしまったカナ？」

叫ぶ俺に構わずシユタークさんは

俺のモノを口に含んでいく。

ぬぼ……ぬぼぼ……ぬろお♡

じゅぼ！　じゅぶ！

ぐっぽぐっぽぐっぽ♡

ちゅぱ♡レロオッ♡

「うう……」

や、ヤバい……！

年上のおねーさんだけあつて

シユタークさんの  
バキュームフェラは凄かった。

「う……………うう……………！」

「ふふ……………そろそろ

イキそうなのかな？

……………良いよ、出してモ♪」

そう言って彼女は

更に激しく吸い付いてくる。

ぢゅぽ！ ぢゅぽ！

ぢゅぞぞぞぞぞぞ！！

うお……………こ、腰が勝手に……………!!?

気持ち良くて……………

シユタークさんの喉の奥まで

突きこむ様に動いてしまう！

「ん……………んぶっ!?! ンンッ!?!」

唾が逆流しているのか、

苦しそうな表情で涙を流す

シユタークさんを見てると

罪悪感が湧き上がってくるけど……………でも、

そんな彼女の顔も堪らなく

エロくて興奮してしまう！

「ごめんなさい……………！」

もう我慢できません!!」

どびゅ！ どくっ！ びゅーっ！

びゅーっ！

「んぶうううっ!?!」

俺はついシユタークさんの後頭部を

押さえつけながら勢いよく射精した。

どくん……………どくん……………と

脈打つ度に精液が溢れ出る。

シユタークさんは目を白黒させて

口の中に出された大量の精子を  
自ら飲み込もうとするが、

飲み込みきれずに口から零れてしまっていた。

「げほっ！……けほけほ……♡」

「大丈夫ですか!？」

流星に少しやりすぎてしまった……

俺は上体をムクリと起こして

シユタークさんの背中を擦る。

すると、彼女はゆっくりと

呼吸を整えていった。

「すいませんでした……!」

つい調子に乗って……」

いくら相手が美人のお姉さんだからって、

ちよつと性欲に流されすぎたかもしれない……。

反省しないと。

しかしシユタークさんは

何事もなかったかのように

はにかむような

笑顔を浮かべた。

「別に構わないヨ。」

むしろ私としては嬉しいくらいサ♡

だって君は私の事を女として

見てくれているんだから♡」

「え？……あ、はい。」

それは勿論です!」

そりや当然だ。

あんな風に迫られたら誰だって

意識しちゃうよ……。

「じ、じゃあ次は私が……♡」

おずおず、と木場にそっくりな

美少女が俺のモノを見つめると

おっかなびつくりといった様子で  
口に含んできた。

ぬるりとした舌使いで舐め回され、  
吸われていく。

「うわあああつー！」

や、ヤバイ……………!

この子のフェエラも

気持ち良すぎて

声が出ちまう……………!

それにしても……………

どうして

こんな事になったんだろう？

まるで解らない……………。

解るのはこの二人の美女が

朝っぱらから俺のモノを

一人は貪るように、もう一人は

慈しむ様に

しゃぶりついているという

素晴らしい事態だけだ。

(うう……………この子のフェエラ……………)

まるで俺の気持ちいい所を

理解している様な……………何でだ？

初めて会った子の……………筈だよな?)

「うう……………ううう……………!」

駄目だ……………!

このままだとまたすぐに出てしまう!

だけど、これ以上二人に

情けない姿を見せたくない!

そう思って歯を食い縛る。

すると俺のモノを口に含んでいる

美少女はクスリと笑った。

「ふふ……我慢しないで、イツセー。」

私は貴方のモノなら

全て受け入れます。

遠慮せず、思う存分出して……♡」

そして更に優しくも俺のモノを

アイスを口内で溶かす様に

丁寧にねっとり舐められて

否が応でも反応してしまう。

「うう……ううう……！」

耐えろ！　ここで出したら男が廃る！！

……と自分に言い聞かせて

我慢しようとするのだが。

ちゅぽ……♡ちゅぽ……♡

じゅぷ……♡レロオ〜ツ♡

「フフ、イツセー君。」

そんなに指をベッドにカリカリ

と引っ搔いてまで我慢して

どうしたのサ……辛くない？」

ここでシユタークさんが

美少女に援護する様に

俺の玉袋を口に含みながら

手で揉み込んでくる。

「うっ……うう……！」

お、俺は負けないぞおおお!!」

それでもなお必死に耐えようとするが、

二人は更に優しく、

激しく緩急をつけて

責め立ててきた。

ちゅぽ♡ぬぽ♡ぬぽ♡

ぐぽ♡ぐっぽぐっぽぐっぽ♡

「ふふ……♡もう限界みたいネ……♪」

「イツセー君、良いんだよ、出しても……♡」

美少女がとどめをさすように

吸い付きを強めてくる。

その瞬間、何かが弾けた気がした。

「うっ……うあああっ!!」

どぴゅ! どくっ! びゅーっ! びゅーっ!

「んぶうっ!?! ……んくっ……んくっ♡」

俺は一回目以上の勢いであえなく射精するが

美少女はまるで

治療薬を口に含む様に

精子を飲み干すと

満足げに微笑んで俺の頬にキスをした。

「ありがとうございます……♡」

とても美味しかったですよ……♡」

「あ、ああ……」

それなら良かったよ……うん……」

まさか朝からこんな事になるうとは……。

人生何が起きるか解らないものだ。

しかし、この木場にそっくりな

美少女は誰なんだろう?

やっぱり悪魔か?

でも俺にあんなエロい事をしてくる

なんて普通の女の子じゃないよな……。

木場のお姉さんとか?

もしくは親戚のお姉さん?

いや、それにしても似過ぎている。

それに、もしそうだとしたら

どうして俺の家にいるんだろう。

うーむ、謎だ。

しかし今は、そんな事よりも

もっと重要な事がある。

それは……

「あの……シユタークさん。

そろそろ退いて貰えると助かるんですけど……」

「ええ……まだダメだよ」

俺の上に跨がって胸板に手を這わせている

シユタークさんのお尻の感触で

ムラムラしてしまい、

また勃起してしまっているのだ。

「いや、でもですね……!」

さつきからずつとこの体勢で、

俺、もう限界なんですよ……!」

「フフ……仕方がないナア♡

じゃあ、今度は私達二人で

気持ち良くシテあげるサ♡」

そう言うとシユタークさんは

美少女と共に俺のモノを

その悪魔のおっぱいで挟み込む。

しかもそれだけじゃない!

もう一人の美少女も頬を

上気させながらもその

大天使のおっぱいで俺のモノを挟み込んできた。

「うわ……!」

凄い光景だ。

美少女二人が左右から

俺のをパイズリしてくれてる!

しかも二人は

それぞれ極上の柔らかさ、大きさを誇り、

どちらもきめ細やかな美肌の

スベスベした至高の谷間だ!

「うう……! 二人ともスケベ良すぎる……!」

こんなの我慢できるわけ無いじゃないか……!!」

二人のおっぱいに挟まれて

上下に擦られる度に快感が走るどころか飛来する。

「フフ……気持ちいいカナ？」

「はい……最高です……！」

「そうですか、なら……良かった♡」

美少女が微笑みながら

優しく俺のモノを撫で回してくれる。

「ふふ……イッセー、

我慢しなくて良いんですよ♡

それより私たちがおっぱいで

貴方のチ○ポを押しやるから……

動いてみて……♡」

何ですかその素晴らしい提案は！

「はい……やってみます……!!」

俺は言われた通りに腰を動かしてみる。

すると二人の柔らかい乳肉が形を変えて、

まるで膣内のように刺激してきた。

ずりゅっ♡ぐちゅっ♡

ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡

ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡

「うおおおおっ!! これはヤバイ……!!」

あまりの気持ちよさに

俺は思わず叫んでしまう。

これはもうセックスに等しい快樂だ。

美少女達が俺の為に一生懸命にパイズってくれて、

おまけにおっぱいの形まで変えてくれる。

なんて贅沢なんだ……!

「ふふ……どうだい？」

「はい……最高です……！」

このままだとまたすぐに出ちやいます……!!」

こんな素晴らしい光景で射精しない奴が



いるなら呼んできて欲しい位だ……。

「それは嫌だなア。」

もう少し射精を我慢して

ボクたちも興奮させてヨ♡」

「いいんですよ……いつでも

幾らでも……わたしの身体に……

貴方の熱い……熱いザーメンかけて……

汚れた私を貴方のザーメンで

清めて下さい♡」

美少女が蕩けた表情で懇願してくる。

くっ……！ 美少女にそこまで言われて

断れる男がいるだろうか!?

否、いるはずが無いツ!!!

俺は美少女の胸を掴み、激しく動かし始めた。

「うあ……！ す、凄いつ……！ うあ……！」

「フフ……上手だヨ♡」

そうやって私たちのおっぱいを使って、

過酷なオナニーするみたいに

シゴいてごらん……♡」

「は、はい……！」

シユタークさんの言う通り、

俺は自分の欲望のままに彼女たちの

おっぱいを乱暴に揉みしだいていく。

柔らかく張りのある乳房が、

指の動きに合わせて形を変え、

淫らに歪んでいく様はとて扇情的だった。

「ああ……凄いや……！」

こんなにエロいおっぱい初めてだ……！

ああ……ああ……ああっ！」

「ふふ……喜んで貰えて嬉しいヨ。」

もつと気持ち良くなつてネ……♡」

シユタークさんが優しく微笑むと、  
彼女はおっぱいを両手で寄せて  
ぎゅーっと圧迫してくる。

その状態で左右に揺らしたり、  
前後に擦ったりされるともう堪らない。

「あつ……イヤ♡シユタークさん  
だけじゃなくて私も……」

イザイヤも可愛がって♡」

「勿論だよイザイヤちゃん！」

俺は左手で胸を鷲掴みにして、  
右手でパンティイの中に手を入れてアソコを弄った。  
すると、そこは既に濡れていて、  
クチュクチュと音を立てている。

「ん……あ……あん……！」

あ……ダメ……！」

そんなに強くされたら私……僕は……♡」

え？ 俺の手に

俺の股間についているモノと

同じアレが

当たっている!?

ど、どういう事!?

イザイヤちゃんの股は

女の子のそれなのに……!?

するとシユタークさんが

パイズリ奉仕を続けたまま

解説を始めた。

「フフ……♡

不思議そうな顔をしているネ。

でも大丈夫サ。

彼女は所謂半陰陽。

キミのボキヤブラリーでいうと

ふたなりって奴だヨ♡」

「な、なんですってーっ?!?!」

俺は驚愕の事実

思わず声を上げてしまう。

そうか、だから

俺のモノと同じ物が……。

しかし、触ると確かに

イザイヤちゃんのも勃起していた。

……あれ、でも待てよ。

という事は……シコれば出るのかな？

いや、それよりも今は……!!

「あの……シユタークさん。

ちよつと試したい事があるのですが……」

「ん……何かな？」

「はい、その……もし良かったら

お二人のおっぱいを使わせて頂きたいな、

と思ひまして……!」

俺は思い切つてある提案を

してみた。

すると二人は妖艶に、

または朗らかに笑みを浮かべる。

嫌がる素振りはまるでない。

「フフ……♡」

そういうことなら良いヨ♡」

「はい……わたしたちの胸を使って

貴方が気持ちよくなるのなら

いくらでも使つて下さい♡」

「ありがとうございます!」

では早速……!」

俺は二人のおっぱいに

取り出したガムテープを

巻いていく。

「あうっ♡」

「ひゃんっ♡」

美女と美少女が喘ぐ。

「ふふ……どうですか？ 気持ちいいですか？」

「これはこれで悪くないかな……？」

「はい……とても気持ちいいです……♡」

もつと、もつと強く縛ってください……♡」

「うおおおおおっ!!」

俺は二人の要望に応えて

よりキツく締め付ける。

すると美少女達のおっぱいが

まるで極上のハムのように、

そして餅のように柔らかく変形した。

その光景を見て俺は感動する。

なんて素晴らしいんだ……!!

この柔らかさ、張り、弾力……!!

これこそまさしく至高のおっぱい!!

「フフ♡こんなにボクらの

おっぱいをガムテープで縛って

どうするつもりだい……♡」

「ああ……私……なんだかドキドキします……♡」

「くっ……!! もう我慢できないっ!!」

俺は欲望のままにまずはイザイヤちゃんの

おっぱいとガムテープの隙間に

唆り立ちっぱなしのチ○ポを

容赦なしに突っ込んだ!

「あっ♡あああああんツツツツツ♡

熱い♡イツセー君のチ○ポ♡

熱い♡♡♡」

ぷしゅっ♡ぷしゅっ♡

興奮しきりのイザイヤちゃんは  
何とそれだけで絶頂してしまい  
愛液が噴き出す。

「ああ……♡ああ……♡」

「うわあ………凄………！」

こんなにグシヨ濡れになつて………！

それに、おっぱいが凄い事に………！」

イザイヤちゃんが乱れた

息を整えようとする

俺のチ○ポにもおっぱいを通して

彼女の体温と鼓動を感じる。

イザイヤちゃんの身体が

火照つてるせいなのか、

それとも俺自身のモノが

激しく脈打っているのか、

はたまた両方か………。

とにかく、俺はおっぱいを使って

今イザイヤちゃんとセックスしているんだ………！」

しかも相手はふたなり！

なんて背徳的なプレイなんだろう！

「ああっ！ イザイヤちゃん！

最高だよ！ 君と出会えて本当に良かった！」

「あっ♡あっ♡嬉しい♡私も貴方と出逢えた事を

心から感謝しています！

貴方にこうして求められる事こそが

私の幸せなんです♡」

「俺だつてそうだ！ 君は最高の女だ！

俺の理想の女はまさにイザイヤちゃん、

君みたいなのなんだ！」

「本当!?… じゃあ僕たちも相思相愛だね♡

これからはずーっと一緒だよ♡」

「勿論だ！ ずっと一緒に居よう！」

俺はおっぱいを揉みながら

腰を振って快樂を貪った。

「あんっ♡あんっ♡イクっ

♡イツちやいますっ♡

貴方と繋がれたままイキますうっ♡」

ぶしゅっ♡どびゅどびゅーっ♡

「おほおおおおおっ♡」

びくんっ♡どびゅどびゅーっ♡

イザイヤちゃんと俺は

同時に射精した。

「はあはあ………すげえ出た………」

「あはは………すごい量だネ………」♡

それにしてもキミはホントに絶倫だネエ………」♡

流石ハーレム王を目指す事は

あるねエ………」♡

流石にバテかけ、

ベッドに仰向けになった俺にシユタークさんが

ずん、と跨り舌なめずりをする。

「んっフ………」♡

次はボクの番だヨ………」♡

「え、ちよ、ちよっと待って下さい。

まだイザイヤちゃんが………」

「フフ………大丈夫サ。

彼女なら既にダウンしているシ………」

だから今度はボクの事を犯してヨ♡」

そう言っって彼女は俺の股間に

彼女の股間を擦り合わせてきた。

……ぬるっとしてて温かいな。

「ふふふ………」♡どうだい？ 気持ちいいかな？」

ガムテープで巻かれている

シユタークさんはどこか  
興奮気味に見えた。

「顔はとろけ、肩を揺らし、  
むちつとした太腿とお尻が  
俺の身体に擦れると」

シユタークさんはまるで酔いが回ったのか様に  
上気した表情を浮かべている。

俺は俺でシユタークさんが  
動く度にむちつとした彼女の  
お尻や太腿が当たり、  
頬が緩んでしまう。

「ああ……気持ちいいです。

もつと動いてください」

もう自分を押しやる事も

できなかつたし、その必要も  
感じていながった。

「フフ♡すっかり顔がトロトロに  
なっているじゃあないか♡」

イツセー君はエツチだねエ♡」

「そ、それを言うなら」

シユタークさんだつて

エロ過ぎですから……!」

「アハツ♡そうだねエ♡」

ボクはエロくてキミはエツチ♡

なら相性はバツチリ♡」

腕もおっぱいもガムテープで

縛られているからか、

ヘビの様にシユタークさんは

その身を振らせて俺に覆い被さり

耳元を甘噛し、舐め回してくる。

ちゅぱ……れろっ……♡

ああ、まるで毒が回っていく様に  
頭がドロドロになりそうだ……！  
もう、何も考えられないくらいに  
快感が脳を支配していく……！  
したい……！

シユタークさんとセックスしたい！  
いや、セックスする！

「んんっ……♡」  
俺は彼女の唇を奪い強引に舌を絡めた。

「んんっ♡……♡」  
んんっ♡……♡んんっ♡」  
ほほ同時にシユタークさんの  
ほそりとした腰を掴み、  
ズンツと押し込んだ。

「あ……ヒイツ♡」  
俺の突然かつ強引な挿入に  
目を白黒させたシユタークさんだが  
すぐにその驚きや悦びに  
変わっていった。

ずぶぷぷぷつ！ ぐちやつ！ ぬちやつ！  
シユタークさんとの結合部から淫らな水音が響く。  
俺のチ○ポはシユタークさんの  
奥深くまで入り込み、子宮口を突き上げていた。  
凄まじく締め付けてくる彼女の  
膣内はまるで餌が入り込んだタコ壺  
さながらに壁が吸盤の様にうねり、  
俺のモノをビリビリ刺激する。

「あはあああああっ♡  
ああっ♡ああっ♡ああっ♡  
すごっ♡しゅごいっ♡」  
あの大人の余裕たっぷりの



シユタークさんが

俺のモノでまるで振り子の様に  
俺の股の上で揺れている……。

俺は彼女の細い腰を掴むと

乱暴に上下左右に動かした。

ずぶっ♡ずぶずぶっ♡

「ひゃうんっ♡あひっ♡激しっ♡

そんなっ♡いきなりひいつ♡」

まるでモンsoonにしなる

椰子の木みたい

シユタークさんは

激しく俺に揺さぶられる。

汗と激しい動きのためか

ペリペリ、と音を立てながら

シユタークさんを縛る

ガムテープが剥がれていく。

まるで決壊したダムから

溢れる様にばるんつと

シユタークさんの爆乳が

たわみ、弾んでいく。

何ていやらしい光景なんだ……！

「はあはあ……シユタークさん……

最高ですよ……」

「ああん……ダメえ……♡

これ以上されたらボク……♡」

「大丈夫です……！

俺に任せて下さい……

シユタークさん……愛してますよ……」

俺はシユタークさんを抱き寄せてキスをした。

舌と舌が絡み合い、

唾液が混じり合う

卑猥な音が部屋中に響き渡る。

「んんっ♡……んんっ♡」

「んんっ♡……んんっ♡」

逃さない。絶対に離すもんか。

俺はシユタークさんを強く抱き寄せると

そのままベッドに

組み伏せる様に押さえつけた。

そして彼女をベッドと

サンドイッチによる様に

寝バツクの姿勢で再び挿入。

「んおおおっ!?!」

再び俺のモノがシユタークさんの

最奥に届き、彼女は背中を大きく仰け反らせた。

その反動で彼女のお尻が

俺の股に押し付けられる。

「ああんっ♡」

その瞬間、彼女の膣内がきゅつと締まり、

俺の精液がまたしても搾り取られそうになる。

「うおっ……!」

「ああ……イツセー君……」

キミってコは本当に……♡」

横目かつ流し目で上体を

起こしかけてシユタークさんは

お尻をぐりん、と捻りながら

俺を見つめてきた。

まるで獲物を狙う蛇の様な

その視線にゾクツとする。

「ハア……♡」

いやっ! ここで怯んでは

ハーレム王を目指す俺の名が廃る!

「ううっ……!」

俺は気合を入れるとシユタークさんを  
後ろから抱きしめ、首筋にキスをする。

「あ……んっ♡」

シユタークさんは一瞬、

身体をビクンと震わせると艶かしい声を上げた。

その反応を見て、俺は彼女の耳元に息を  
吹きかけた。

「ふうー……」

「あああっ♡」

シユタークさんは再び大きく背を仰げ反らせる。

どうやら耳が弱い様だ。

なら……

「ちゅ……れろっ……♡」

「あ……ひいっ♡」

舌先で優しく舐めてあげると

シユタークさんはさらに可愛らしく喘いだ。

「ああ……ダメだよオ♡」

ボクはキミより年上の大人なんだカラッ！

だからそんな子供みたいな扱いはッ！」

そう言いながらもシユタークさんの声は

明らかに喜んでいる。

それどころかもっと

気持ちよくなりたいのか

自ら腰をくねらせている。

その姿はまるでハブのようだ。

俺は彼女の腰を掴むと一気に引き寄せた。

ずぶぶぶぶぶっ！

「あ……ヒィィンッ♡♡♡」

シユタークさんが絶叫する。

ここが決め所だ！

俺はまるで競馬の最終直線で

追込をかける馬の様にラストスパートをかけた。  
パンツ！ パシンツ！

俺のモノとシユタークさんのお尻が激しくぶつかり合う。

「あああつ♡激しすぎルウっ♡」

俺の激しいピストンに

シユタークさんも限界の様で

彼女の膣壁のうねりがどんどん激しくなっていく。

まるで別の生き物のように俺のモノに絡みついてくる。

俺の限界もまた近づいてきた。

「シユタークさん……俺もう……

出しますよっ！」

俺はシユタークさんの最奥まで

突き上げるとそのまま射精した。

どびゅるるるっ!!!

びゅるるるっ!! どばあっ♡

「あっはあああん♡♡♡

イクウウウウ♡♡♡」

シユタークさんが絶頂を迎えた瞬間、

俺を包む膣肉が今までにないほど激しく痙攣し、

俺のモノから最後の一滴までも絞り出そうとする。

「うわあ……！ すげえ……！」

凄まじい快感に耐え切れず

思わず情けない声を上げてしまう。

「ああん……♡」

受け手のシユタークさんも

満足そうな表情を浮かべる。

そして俺達は繋がったまま、

ベッドの上に倒れ込んだ……。

「ねえイツセー君……」

「はい？」

ベッドの上で二人、横になりながら

俺がシユタークさんの髪を撫でてあげていると

彼女は唐突に口を開いた。

「蠱毒の外法って

知っているかな？」

「えっ……」

蠱毒の外法？

ゲームで聞いたことがある様な

無いような……。

「古代中国で使われた

呪いの一種でネ♡

虫とかを壺の中に閉じ込めて

共食いさせて

生き残った一匹を使って

相手を呪うっていうヤツだヨ♡」

俺の胸板に頬擦りしながら

シユタークさんは

エツチの余韻に浸っているのか

まだ顔に赤らみが残っている

状態で解説してくれた。

「呪いをそんなエロい顔と

声で説明されても……」

「アハハ、ごめんネ。

キミとのエツチがとても

気持ち良かったものだからサ……」

そう言つて微笑む彼女の姿は

いつもの大人の余裕たつぷりの

お姉さんに戻っていた。

「勿論許しますけど」

それはそれとして……

「何でそんな話したんスか？」

「何故だろうねエ。」

所謂賢者モードって奴なのか

あるいはハーレム王を目指す

キミに警告する夢のお告げ……

って奴かもねエ」

えっ!?! 夢!?! 夢って……!!

それは……!?!

シユタークさんが答える前に

ぐにゃあ、と特撮の効果ばりに

視界が歪み……やがて……。

↓

「アレっ!?!」

はっと目が覚めると俺を

上半身を起こしてベッドの上で

見下ろすリアスさんとアーシアの

姿があつた。

朝の太陽ばりに眩しい4つの

おっぱい！ ありがとうございます！

思わず手を合わせたが

何だかりアスさんが

酷く不機嫌でアーシアも

頬を膨らませていた。

な、何だろう？

俺、二人を怒らせる様な

真似をしたかな!?! したかも……。

「ねえ、イツセー？

『大丈夫です……!!

俺に任せて下さい……

シユタークさん……愛してますよ……』って何?!

「イツセーさあん！

『君は最高の女だ！ 俺の理想の女は

まさにイザイヤちゃん、君みたいな人なんだ！』

ってなんですかあ！ 私じゃダメなんですかあ！

ヒドいですう！」

アーシアは涙目だし

リアスさんは瞳から

ハイライトが消えている!!

こ、これはマズい！

早く弁明しないと！

「ち、違うんです！ あれは

夢の中での話であって

決して浮気などでは……!!」

「へえ〜。普段はあんなにも

情熱的に私の事を想ってくれてるのに

夢だと全然関心が無いのね……」

「わ、私もイツセイさんの

夢の中でも一緒にいたいんですう！」

え、これって夢でも

浮気判定!?

意外と二人共独占欲が

強いタイプ!?

「これは婚約者というより

主としてきつちりしないと

いけないわね……」

「きつちりしますう！」

やべっ！ なんかスイッチ入ったぞ！

俺は慌てて二人の誤解を解こうとした。

しかし……

ガシツ!! 二人は俺の両肩を掴むと

そのまま押し倒してきた。

こうして俺は二人に朝から

みっちり絞られる事に  
なったのだった……。

「  
その頃

「うむ！

今の振り方はなかなかいい  
残心だったぞ！

身体もびったりズレもなく  
いい振り下ろしだ！

今の呼吸を忘れるな！」

「はい！」

安里は煉獄から素振りの稽古を  
受けていた。

「

「んあ……♡あつ……♡ああつ……♡

イツセーのが

私の上の所に当たるう……♡」

じゅぶつ！　じゅぶぶつ！！

ぱんつ！　ぱんつ！　ぱんつ！！

「ああ……イツセーさん……♡

イツセーさん……♡

お願いです……♡

私を捨てないでえ……♡」

ちゅっ♡むちゅっ♡

今、俺兵藤一誠は絶賛

お仕置き中です……。

リアスさんは俺に背中を見せたまま  
蹲踞の姿勢で跨り

バコバコと腰を振り、

アーシアは俺に甘える様に  
縋り付きながら俺に何度も



キスをねだっている。

そう、俺は今リアスさんと

アーシアに同時に責められているのだ。

こんなお仕置きが許されるのか!?

と、思うだろうが……!

リアスさんから装着させられた

グレイフィアさんから借りたという

ペニスリングは俺の雁首を

ガツチリとホルドした

状態になっていた。

そして、その状態で

リアスさんに騎乗位で激しく

攻め立てられていた訳だが、

彼女が動く度に彼女のお尻が

ばるん、ばるんとうどん生地ばりに

たわみながら俺の股を擦る感覚が

堪らない刺激を与えてくる。

アーシアはそんなリアスさんを

羨ましそうに見つめていた。

あのアーシアが俺のチ○ポを

順番待ちしているんだぜ?

これが興奮せずにはいられようか?

しかも、アーシアは俺に対して

「ああ……♡」

私、もう我慢できません……

イツセーさん……♡」

と、赤面しながらも俺の顔に

股を沈めてきた!

これがダブルマンズリと

いうやつか!?

俺の顔面を

アジアのおま〇こが覆っている。  
ぬめつとした感触が俺の鼻を包み込む。

アジアの匂いがダイレクトに脳を刺激し、  
俺の息子は痛いくらいにビンビンになっている。

「んんっ……♡また、雁首

ブルブルしてるう……♡」

俺の興奮に併せてペニスリングも

微振動し、それがリアスさんを

更に気持ち良くするらしく、

彼女はますます激しさを増していく。

「ああん……いー イッセーのが大きくなって……!!」

ああああああ!!!」

だ、出したいが……!!

出せない……!!

今俺は、ペニスリングの魔力により

射精できないようにされている。

これが、リアスさんからの

おしおきの内容だ。

っ、辛い……!!

お預け以上にこれは……辛い!

「んん~~~~っ!!」

涙目の俺を他所にリアスさんは

弓の様に背をしならせ、

イルカのジャンプ後の

水面ばりにだばん、

だばんとおっぱいを

弾ませて汗を飛び散らせた。

「はふう……♡イッセーの……

いつも以上に凄いわよ……♡

でも、まだ許さないわ……!!」

「リアスさあん……♡

私も早くイツセーさんと

おチ○ポしたいですう……♡」

「そうね……。」

私ばかり

気持ち良くなつては主失格よね。

イツセー、ちゃんとアーシアを

気持ち良くしなきゃダメよ？」

リアさんは俺から降りると

今度はアーシアが俺に覆い被さる。

すると、アーシアの胸の谷間が

俺の視界を埋め尽くす。

むにゅむにゅと形を変える豊満なおっぱい。

乳輪はぷつくりと膨らみ、

ピンクの突起はツンと主張している。

アーシアはゆつくりと腰を下ろしていき、

遂には俺の先端がアーシアの割れ目に触れた。

「んっ……♡イツセーさんのが当たってます……♡」

ああ……♡イツセーさあん♡」

「アーシア……い！」

じゅぽおっ!!

我慢できずに俺はアーシアの

膣内をまるで火の輪くぐりの

正確さで穿ちぬく。

数え切れない位に交わったから

位置も高さも解りきっていた。

「ひゃうううううんっ♡」

突然の不意打ちにアーシアは

目を白黒させながら仰け反り、

大きな乳房をぶるぶると震わせる。

ああ……堪らない!

俺だけのアーシアが

俺のチ○ポでこんなにも  
いやらしくなるなんて……!!

ビキッ! ビキビキッ!!

「あぁっ〜っ♡」

「ぐううう!!」

ペニスリングの振動と

収縮によりアーシアは絶頂し、

俺は射精を封じられる。

まさに天国と地獄だ……!

「アーシアばかりズルいわ……。

次は私の番ね……♡」

「えへへ……♡イツセーさんと

たくさんエッチできて幸せです……♡」

俺の上で二人が抱き合う。

二人の結合部からは愛液が止めどなく溢れている。

しゃ、射精さえできれば

桃源郷なのに……!

出したい……!

チ○ポから精子出したい……!!

だが、今の俺にはそれすら許されない。

リアスさんは騎乗位の体勢になり、

アーシアは俺に跨がりながら

背を向ける姿勢になった。

そして、リアスさんが上下運動を始め、

アーシアはリアスさんと

胸と唇を合わせて

キスを始めた。

「んちゆる……♡れろお……♡

はぁ……♡リアスさん……♡」

「あぁん……! アーシア、

そんなに激しくしたら

私まで感じちやうじやない……♡」

アーシアはリアスさんとの濃厚なキスをしながら、彼女の胸に手を這わせ、揉みほぐす様に動かしていた。

「ふふ……アーシア。」

貴女もすっかりいやらしい子に育ったわね……♡」

「はい……♡ 私はもう

リアスさんとイツセーさん

無しでは生きていけません……♡」

「嬉しい事言ってくれるわね……♡」

リアスさんは更にペースを上げていく。

アーシアは、その激しい動きに

合わせて自らも身体を動かしていた。

「ああん……！ リアスさん……！

私、イツセーさんの

おチ○ポでイツてしまいそうです……！」

「いいのよ、アーシア。」

イツて頂戴。

一緒にイきましょう……！」

「はいっ♡ イツセーさあん♡」

「うおおお!!」

俺は二人を抱き締め、

リアスさんとアーシアの

おま○この隙間に

ペニスを擦り付けるように動かす。

ペニスリングは益々振動し、

容赦なく二人のクリトリスを

擦り上げる。

「ああ……！ イツセーさあん♡

私、イツちやいますう……♡」

「私もよ、アーシア……！」

「ぐうう……！ リアスさん！

アジア!!」

「イクウウツ!!」

俺達は三人同時に果てた。

しかし、それでもペニスリングは

外される事は無く、むしろより一層収縮を強めた。

「あぐううっ!」

俺はたまらず腰を引くが、

すぐにリアスさんとアジアに引き戻される。

「ダメよ、イツセー。」

まだ許してあげないんだから……♡」

「そうですよ、イツセーさん。」

まだ終わりじゃありませんよ?」

「お、お許し下さい、リアスさん! アーシア……!」

「ダ・メ♪」

「ひいひい!!」

どうやら二人の機嫌が直るのは

まだまだまだ先の様だ……。

ー

一方その頃。

「うむー。」

大分調子が出てきた様だな!」

「あの……あとのどのくらい

素振りすればいいんでしょうか」

恐る恐る尋ねる安里に

煉獄は目を見開き、堂々と

はきはきとした声で言いきる。

「できる様になるまでだ!」

俺が出来たのだから

君にだって出来る! 必ずだ!!」

「ひ、ひい〜」

どうやら安里の鍛錬もまだまだ続くようだ。

## 第20話

「よし！ 今日はこちらまで！」

「あ……ありがとうございました……」

よ、漸く煉獄さんとの特訓が終わった……。

いやあ……マジで死ぬかと思った。

安堵しながら息を切らしていると、

煉獄さんがすたすたと近寄ってきた。

「辛いかな？」

「え？ ま、まあ……」

肩を貸す様にする煉獄さんに対して

いかん、しんどすぎて

素っ気無い態度を取ってしまった。

けど煉獄さんは怒るでもなくいつもの煉獄さんだ。

「すまんな。」

だがお前には

強くなって貰わねば困るのだ！」

期待されていると思うと

人間は現金なもので

頑張ろうという

気持ちになるから不思議だよな。

若干だけど、身体が軽くなった。

「はーい、しんどい修行は

そこまですてまは飯に

しましようね〜」

と言ってナイアが

猫なで声でやってきた。

すると煉獄さんも嬉しそうに

ナイアの方を向いた。

「うむ！ では食事にしよう!!」

「相変わらず声が



デカイ人ですねえ……」

ナイアは心なしジト目で

煉獄さんの方を見ていた。

人間には相性があるからな。

腹黒暗黒シスターには煉獄さん

みたいなタイプは苦手なんだろう。

「だから思っている事は

いちいち正直に言わなくても

いいんですよ？」

でもそんなナイアを見ても煉獄さんは笑顔だった。

やはりこの人は良い人だ。

「それでもない！」

腹に嘘を溜められないのは

良いことだ！

至誠天に通ずという言葉もある！」

至誠天に通ずって言葉初めて聞いたぞ。

なんか凄そうだな。

しかし、煉獄さんの言葉を聞いて

ナイアは口元だけをニチャアつと

笑わせていた。

相変わらずイヤな笑いだ……。

「あらあら、

それはつまり私達とは

価値観が違うということですね？」

「そうかもしれん！」

「ふうん……？」

じゃあ貴方にとつて

馬鹿正直こそが

正義だと仰りたいのですか？」

「俺は君達の事を良く知らない！

故に君の言うことが真実なのか

どうかを迂闊に

判断することはできない！

ただ俺にも譲れないものがある!!

それだけだ!!!」

ナイアの挑発じみみたいじけた風を

吹き飛ばす様な晴れやかさだった。

翻弄されない視座を持つ……か。

やっぱり煉獄さんて強いんだな。

「……まあ、

そういう事なら仕方ありませんね。

分かりました。

それでは食事を頂きましょう」

ナイアは諦めた様に肩を

すくめ、食堂に向かって一人で歩き出した。

そしてその横顔は少しだけ苛立っていたのだった。

あれ？　もしかして今のやり取りって……。

「さあ行こうか安里！

早くしないと

料理が無くなるぞ!!」

ナイアの後を追うように煉獄さんは駆けていった。

……うん！

深く考えるのは止めよう！

きつと煉獄さんなりに

考えがあつての行動なんだろうしな。

……それにしても

あの人の食欲は底無しだな。

あの位食えば俺も少しは

マトモな強さになれるのかな？

なんてことを考えつつ、

俺も食卓に向かった。

↓

「く……食いすぎた……！」

苦しい……！」

現在時刻は午後8時くらいだろうか？

既に空は暗くなっており、星々が瞬いていた。

俺はベッドの上で

苦しさに悶えていると

ドアが開いた。

「大丈夫ですか？」

やってきたのはレイナーレ。

アーシアや俺を殺そうとした

墮天使だがまあ、色々あって……

今は俺の屋敷に住んでいる。

まあ、あの痴女みたいなカツコは

させてないけど。

「いや……全然ダメかも……」

「ちよつと失礼しますね……」

そう言ってレイナーレは

ベッドの上上がった。来た。

そしてそのまま俺の

お腹に手を当ててきた。

「何してるんだ……？」

「身体強化の魔法です」

いや、それはいいけど

何で俺の傍で一緒に寝そべるんだ？

おかしくないか？

まあそれはともかく

消化能力が強化されたのか

大分腹が楽になった。

「どうです？ まだ痛みますか？」

「いや、もう平気だよ」

「良かったです♪」

そう言いながら微笑む姿は  
まさしく聖女の様だった。

うむ。墮天使だけどき。

そんなことを思いながらも

彼女の美しさに見惚れてしまう。

「ありがとうな。」

助かったよ」

「いえ、私はただ貴方の

お役に立ちたかっただけです」

「本心か？」

「はい。もちろんです。」

「私達は家族なんですから」

「そういつて彼女は俺に

優しく抱きついてきた。

豊満な胸が押しつけられて

柔らかい感触を感じる……。

しかし同時に心臓の音まで

聞こえてくるので

妙に恥ずかしい気持ちになる。

『自分の都合の良い様に

作り直した女に尽くされるのが

そんなに嬉しいか？

イツセーは皆が

心から慕っているのにな。

人形使いを気取っても

お前も所詮はふらふらと

糸に揺られる人形さ』

……俺を嘲笑う声が聞こえる。

幻聴だ。

いや罪悪感って奴だろうな。

俺はそれを理解している。

でも、それでも俺は……。

「どうかしましたか？」

「いや、何でも無い。」

それより今日はありがとな」

「いいんですよ。」

だって貴方は

私の大切な人なのですから」

そう言うとき彼女も

静かに目を閉じた。

そして俺の腕を抱きしめたまま

眠ってしまったようだ。

「……………」

本当に不思議な気分だ。

この屋敷に来てからは

ずっとこうやって

誰かと一緒に寝起きしていた。

でも今、俺の胸にいるのはただの人間じゃない。

俺の復讐相手である

堕天使の女だ。

なのにどうしてこんなに

温かい感情が生まれるのだろうか？

きっと俺は

間違っていたのかもしれない。

正しくないのかもしれない。

いずれ俺は罰を受けるべきなんだろう。

でも……。

「それでも俺は

救われたいんだ……」

俺はそう呟いて

彼女の頭を撫でた。

するとレイナーレは

嬉しそうな表情を浮かべた。  
まるで子供の様に無邪気に。

その姿を見て俺は思う。

その笑顔だけでも

俺が力を得た意味はあるのだと。

それでも思わなきや

誰も幸せになれないし

救われないだろ？

「なあ、レイナーレ……」

「はい……」

「俺はどうすれば良いんだろうな」

「分かりません……」

ですがきつといつか

貴方の願いは叶いますよ」

「ああ、そうだな。

きつとな」

そう言うと彼女は

再び眠りについた。

俺もそれにつられて

眠ることにした。

きっと明日からはまた、

いつも通りの日常が始まるはずだ。

……

……

……

「あっ♡あっ♡あはああっ♡」

レイナーレは俺が作り出した

触手に犯されていた。

その光景を見ながら

俺は興奮すると同時に虚しさを感じていた。

俺は一体何をしてるんだろうか？

目の前にあるのは俺の望みのままの光景だぞ？  
それなのにどうして

俺はこんなにも

虚しさに囚われているんだ？

だが俺の器はがらんどうで

満たされた端から漏れていくんだ。

分からない。

何もかもが分からない。

俺は狂っているのか。

「ああっ♡好きっ♡

大好きっ♡

愛しているの……♡」

そう言っつてレイナーレは

俺にキスしてきた。

俺もそれに答えて舌を入れる。

「ぶはあ……！」

はあ……！ はあ……！」

「はあ……！ はあ……！ はあ……！」

お互いに息切れしながら

見つめ合う。

『ふひ、ふひひあわれあわれ』

『お前が吹き込んだ息吹の様に

愛の言葉を繰り返すだけ

なのになあソイツは、ひやはははは』

『お前の中身はがらんどう。』

そいつの心もがらんどう』

『お前は誰も救えない』

『お前は誰からも救われない』

『ふひひ、さまよえさまよえ。』

かげろうをもとめておろおろ

さまよえ』

うるさい。黙れ。

俺はそんな言葉を聞きたくない。  
耳を塞いでも声は消えず頭に響く。  
やめてくれ……。やめてくれ……。

暗闇の中に星は見えない。

助けてくれ、何も見えない……。

愛しているのに……。

愛しているのに……！

「あはああっ♡

イキますっ♡

また無様に安里様の触手で

アクメ晒しちやいますうウ♡」

「くううううううううううッ!!」

「イクうううううううううう——ッ!!!」

絶頂の瞬間に彼女は

俺を強く抱きしめた。

そしてその衝撃で

俺は果ててしまった。

しかしそれでも俺の空っぽの器から

精液は一滴も出なかった。

↓

「ウース……」

オカルト研究部員ではないが

俺はここに来ている。

リアスさん、木場、朱乃さん。

アーシア、小猫、そしてイツセー。

この6人が揃うとやっぱり迫力が違うな。

「さて、全員揃ったところで話を始めましょうか」

そう言うリアスさんは真剣な顔つきになった。

「安里君以外にはもう

話したけれど、



例の聖剣使い二人とポールクが

この部室に来る事になっっているわ」

「討ち入りっスか!？」

俺は思わず立ち上がって叫んで

しまったがリアスさんは

困ったような表情をした後、

首を横に振って言った。

「違うわ。」

飽くまで会談よ。非公式のね」

「そうですか……」

俺は少し安心したが

すぐに疑問に思った。

「でもなんで

わざわざ非公式なんですか？」

「今回の件は聖剣の所有権に

ついて話し合う為に行うもの。

聖剣の欠片が揃って復活されても

悪魔側には厄介だけど、

堕天使側の力が強くなりすぎても

マズいのよ……。

だから私達と聖剣使いで

共闘は無理でも不戦同盟は

組めるんじゃないかと思って……」

なるほどな。

確かに聖剣使いが二人もいれば

戦力としては申し分ないもんな。

でもそうなる……。

悪魔と天使が手を組んだと

知られたら色々リアスさんの

立場がまずくなるんじゃない……。

「部長、大丈夫でしょうか？」

こんな事を独断で決めたら  
余計に危険じゃありませんか？」

俺と同じことを考えていたのか

朱乃さんが心配そうに声をかける。

するとそれを聞いていた

木場が口を開いた。

「いや、虎穴に入らずんば

何とやらです。

サーゼクス様がこの状況で

迂闊に動けば純血派がまた胡乱な

動きを見せるだろうから」

「純血派にすれば

聖剣は数ある兵器の一つにしか

思っていないの……。

それが復活した所で

眷属達を使い捨てればいいと

考えているのよ……！

奴らは眷属を家族ではなく

『駒』……つまり兵器と

言いきっているのだから！

私はそんな連中が許せない……！」

「……………」

怒りのこもつたりアスさんの言葉に

俺とイツセーは言葉を失った。

「だからこそ、ここで手を打たないといけないの。

幸いにも天界側は既に

聖剣使いの返還には合意しているわ。

後は私達が上手く立ち回れば

問題は解決するはずよ」

……………

「はつきりさせておくが、

俺は初めからこの密約には  
頭から反対だ。

貴様ら悪魔も堕天使も等しく  
神の教えのもと

裁きを受けるべきと考えている」  
いきなりこれだよ！

「だがここには悪魔でも

堕天使でもないものが

混じっている様だがな」

ボールクの大將は俺の方を

真つ直ぐ見据えていた。

アンタには

鍛えてくれた恩はあるけどさあ。

「安里君は貴方にとって

弟子の様な物でしょう？

愛弟子か不肖の弟子かは

解らないけれど師弟愛を

期待してはいけないのかしら？」

「下らん」

リアスさんの言葉を

まるで氷山の様に跳ね除けた。

これじゃ頓挫どころじゃねえ。

沈没だよ！

「済まないが

貴方はミカエル様の客分の筈。

我々の代表の様に振る舞うのは

いかななものか」

ゼノヴィアの指摘に

ボールクの大將は

「ふん」と鼻で笑った。

「おいアンタ、さつきから

何なんだよ！」

そこでイツセーが

我慢の限界に來たようだ。

「リアスさんは同盟の為の

話し合いの場を用意したんだぞ！

なのになんでお前は最初から

喧嘩腰なんだよ！

そもそもレイナーレの

一件の時の事の詫びはどうした！」

イツセーのその一言に

一瞬だけ眉間にシワを寄せたが

すぐに平静を取り戻した様だ。

「何故謝る必要がある？」

「な、なんだと!？」

イツセーは怒り心頭のご様子。

まあ気持ちはわかるぜ。

「その女は聖女でありながら

魔王の妹である

悪魔の手先になっていたのだ。

更にその女の魂は赤龍帝の淫欲に

塗れきって既に汚れている。

本来、死んで当然なのだ」

パキイツ!!

あの時と同じ様にイツセーの拳は

ボールクの大將の結界に

阻まれた。

いや、少し違う。

ピシッ……!!

薄氷の結界にヒビが入り、

そのまま砕け散った。

「ほう、

ライザー・フェニックスを

退けたのは出鱈目ではないらしい。

今の一撃は中々だった」

ご丁寧にパチパチと拍手までして

イツセーを褒めた。

「ふざけんなよ……」

俺は、俺は確かにリアスさんの婚約者である前に

グレモリー眷属の兵藤一誠だ！

でもそれ以前にアシアの恋人で

オカルト研究部の部員なんだよ！

お前の言う通り、

アシアは俺の欲望に

塗れて聖女失格かもしれない。

でも今はもう自分の意思で

悪魔として生きていくと決めたんだ！

だから俺達とアシアの間に

横槍を入れる権利なんか

誰にも無いはずだろ!？」

イツセーの怒りの声に

ボールクの大將は目を見開いた。

とはいえ感動した訳じゃない。

サファイアじみて冷え切った

青い目だった。

「そうやって拳を振るって

喚き散らせば押し通せると

思っているのか？

さながら白痴だな。

今代の赤龍帝は……」

「バカで悪いか！

お前みたいに何でも決めつけて

一方的に切り捨てるくらいなら

俺はバカのままでもいい！」

熱いな……イツセーの奴は。

「これではまるで話が纏まらないな……」

ゼノヴィアは二人の様子には視線を床に落として溜息をついた。

「ポールクの意向はともかく

私としては聖剣が墮天使達に

渡る位ならば破壊しても

構わないと思っている」

「構うわよ！ 何言っているのよ！」

ゼノヴィアの言葉に

今度は静観の姿勢だった

イリナが動揺し始めた。

まるで纏まっていけないぞ

コイツら……。

「ゼノヴィア、あなたねえ……！」

私はこんな事をする為に

ここまで来たんじゃないのよ!？」

イリナは憤慨しながら叫ぶが

「だがこの者達や、墮天使達を

相手取って戦いきれるか？

汝、神を試すなかれ。とは言うが

主への信仰の厚さだけで

どうにかなるものではないだろう」

ゼノヴィアの冷静かつ

辛辣な言葉にイリナも

「それは……」

と言葉を詰まらせた。

「それで……結局はどうするの?？」

「こういう時は聖剣使いの

流儀で行く」

リアスさんの問いに

ゼノヴィアは不敵にこう答えた。

「勝ったものの総取りだ。」

我々と君達でまず試合をして

負けた方が勝った方の意向に従う。というの」

「解りやすいわね。好きよ、そういうの」

リアスさんもまさかの乗り気だった……。

## 第21話

そんな訳で

「聖剣使いの流儀」

とやらの則り、

俺、九頭竜安里とイリナ。

木場とゼノヴィア。

イツセーとボールクの大將。

その戦いの結果で

同盟するかしないかを

決めるとなった。

「つて何で俺が戦うんすか？」

「理由は幾つかあるわ」

初戦は俺とイリナが

戦うことになったワケだが……。

一応幼なじみでもあるから

戦う理由を知りたい。

というか幾つもあるんだな……。

「まず客分のボールクが

イツセーと戦うワケだから

こちらも客分の貴方を出すのは

当然でしょう？」

いやまあ……。

確かにそうかもしれないけれど

さあ……。

朱乃さんを当てた方が

勝率が高いような……。

「あと貴方は悪魔ではないから

聖剣のダメージを緩和できる。

それが第2の理由」

第2？ まだ何かあんのかよ。



「そして最後に……。」

彼女からの指名なのよ。

どういう幼馴染みなの……貴方達」

理解不能だと言いたげに

リアスさんは頭をかいて

纏めた。

……俺が聞きたいよ！

そんな血生臭い幼馴染み

なんてアリかあ!?

「ああ……！」

数年ぶりに出逢った私と

貴方が敵同士になるなんて……！

何という残酷な運命なの……!?

「いや避けようは幾らでも

あつたよな!?! なあ!」

涙目になつてるイリナを見て

俺は思わずツツコむが

まるで聞いちやいなかった。

「ううっ……！」

これも神の与え給うた試練なのね!

けれど私はめげない!

挫けない! 諦めない!

この試練を越えて私は

神の御使いとして聖剣使いとして

成長してみせる!

貴方の屍を越えて!」

バカヤロー! 二度も

殺されてたまるか!!

しかも今回はこっちが

圧倒的に

不利な状況じゃねえか!

……まあいいか。

勝てばいいだけの話だし。

それにイリナは

本気じゃないだろうし。

本気ではないと思うけど。

思いたいんだけど。

なんかすんごい殺気が

ヒシヒシ

伝わってくるんですが……。

「悪魔の使いよ！」

神の名の下に滅ぶがいいわ!!」

「幼馴染みを滅ぼすんじゃ……

ねえっ——」

俺は『燃える三眼』を起動させ

右腕を触手へと変化させる。

「うわっ……」

いや、ドン引きするなよ。

傷つくわ……。

いや、集中だ……集中……！

煉獄さんの言葉を思い出せ……！

——素振りと乱取りしか

覚えてない！——

とにかくイメージしろ！

腕を変化させるんだ……！

「喰らえッ!!」

右腕から生えた触手が

俺の意思に従って武器へと変化する。

「何よ、その凸凹した剣は？」

「……………」

イリナは鼻で笑うが

人は外見より中身っていうだろ。

これは凸凹である事が真価なんだ。  
「フン……！」

どうせ大したこと無いんでしょ？  
さあ来なさい！

私の擬態の聖剣の前に  
ひれ伏すがいいわ！」

自分から武器の名前を  
バラしていくのか……。

いや、思えばコイツは  
昔からポンコツ属性だったっけ……。

「貰ったわー！」

まず仕掛けてきたのはイリナ。  
聖剣を振りかぶって突撃してくる。

……。

アレ？ コイツ煉獄さんより  
遅くないか？

しかし油断は禁物だ。

なんととっても相手は伝説の聖剣。  
どんな力を持っているのか

分からないから

俺のソードブレイカーで  
刀身を引っ掛けて押し折る！

そしてそのまま触手で首を締め上げる！  
それで終わりだ!!

「……ぐうっ!？」

しかしイリナの聖剣は  
飴細工の様に軌道を変えて、  
俺の肩を刺し貫いた！  
痛えええっ!?

なんだよコレエ!?

「聖剣で切られて

傷つくという事は貴方も  
罪深い存在なのね……！  
貴方の罪を裁いてあげるわ！  
アーメン！」

「捌くならアジやサンマ位に  
してほしいもんだな！」

俺は痛みに耐えながらなんとか  
距離を取ろうとするが

イリナは執拗に俺を追いかける。  
そしてまた攻撃のフェイントを  
織り交ぜて斬りつけてきた。

今度は触手を盾の形に変えて  
防御を試みたがまたしても  
剣の軌道が曲った。

「ぐあぁっ……いー！」

今度は太股に突き刺さり  
激痛が走る！

動脈が貫かれていないから  
まだ致命傷じゃあないが……！

応急処置ではあるが  
俺は触手をより細め、  
融合するイメージを投影する。

触手はさながらパテや縫合糸の  
様に俺がダメージを  
受けた場所を

塞いでいく。

これでとりあえず  
出血だけは止まったが……。

「貴方再生者!？」

イリナは驚きの声を上げるが  
そんな都合のいいものじゃねえよ。

今も無理矢理痛覚を遮断しないと  
泣き叫びそうだけ。

しかし、

イリナの聖剣……。

一体どういう能力を持つてるんだ？

「このお！」

俺はイリナに向かって

触手の矢を放つ。

だがこれも聖剣によつて

逸らされた。

しかも今度は

刃ではなく柄の部分でだ！

「……ッ!?!」

「チャンス！」

そこにイリナはすかさず

追撃を仕掛けてくる。

だが、背中に隙が出来たぜ！

「戻れッ！」

俺のイメージするままに

公園の大樹に刺さった矢は

苦無に形を変えてイリナの

背後から急襲する。

これなら……!!

「甘いわね！」

だがイリナは振り向きすらせず

新体操のリボンの

様に聖剣の刀身を自分の

全周囲に回しあつさり弾く。

なっ……!!

聖剣ってこんな事も出来んのかよ！

じゃあコイツの能力は……!!

俺の持つ触手と同じで  
形状を自在に変えられるのか!?

そーいやアイツ……

擬態とか言ってたよな……。

つまりそれは……!

俺は聖剣の能力の正体に気付いた瞬間。

イリナの剣は俺の触手を絡めとり、

鞭の様にしななって俺を縛り上げた。

「ふふっ!

どうやらここまでね安里君!

このまま輪切りのバナナに

なりたくなければ

大人しく降参しなさい!」

イリナは勝利を確信した

笑みを浮かべ俺に勧告する。

確かに状況は圧倒的に不利だ。

だが……!

「お前は一つだけ忘れていている事があるぞイリナ……」

「なんですって?」

俺の言葉にイリナは

不機嫌そうに聞き返す。

「俺は触手使いだ……!」

この程度のピンチ、何度も経験してんだよ!」

俺は左腕からを伸ばしイリナの

両足の自由を奪う。

「なっ……!」

イリナは驚いた顔をしたが

すぐに冷静さを取り戻し

聖剣の形状を刀身から三日月型に変える。

「フフン♪ 無駄よ?」

私の聖剣はあらゆるものを切り裂くわ!」

イリナの言う通り

触手は簡単に切断される。

「どうやら終わりみたいだね?」

「いや、ここからだぜ?」

ほんの少し用心深ければ

お前の勝ちだったろうにな!」

俺は『燃える三眼』のもう一つの

特性の発火能力を発動させる。

すると触手の切り飛ばされた

先端から炎が吹き出した。

「きゃあああつ!」

イリナは悲鳴を上げて慌てて

回避したが触手の切れ端やら

液はアイツの擬態の聖剣にも

ベツトリと付着した。

そして……!

擬態の聖剣は黒煙をあげながら

燃え上がっていく。

流石に融解まではしなかったが

形状変化もできねえ

上に刃が焦げついた聖剣は

ナマクラ刀と一緒にだぜ!

「くっ……!」

貴方まさか最初から

コレを狙って……!」

悔しげに口元を歪めるイリナへ

俺はニヤリと笑う。

「言つたろ? 用心深くなれば良かったんだつてな。

まあ、今回は相手が悪かったけどな」

まあ、ホントは

怪我の功名なんだけど

これでイリナが焦るなら  
そう言い切ってやるぜ！

「そ、それに……何……？」

身体が……♡

ああ、熱い……♡熱いよう……♡

っておい!?

なんでイリナの瞳が潤んで  
戦闘服を脱ごうとしてるんだよ!?

まさか色仕掛けか!?

俺が呆気にとられてると

イリナは遂に下着姿に

なってしまう。

し、しまった！

俺の触手の体液は

ミツテルトやレイナーレを

散々快樂墮ちさせた影響か

媚薬や媚毒ガスの

効果もあるんだった!!

「ちよっ!?

待てよイリナ！

今すぐ脱ぐのを止めないと

俺もお前も大変な事に……!」

俺は慌ててイリナに駆け寄るが

イリナの両手が俺の胸ぐらを掴む。

ぐおっ……!?

コイツ、意外と力が強い……!?

「もうダメええ！

私に乱暴する気でしよう!?

エロ同人みたいに！

エロ同人みたいに!!」



「バカッ！　するかつ!!」

俺はイリナの延髄にトン、と  
当て身の手刀を当てて気絶させる。  
ふう……。危なかったぜ……。

俺は一息ついてから改めてイリナの全身を見る。  
うーむ……。やっぱりコイツの  
戦闘服はスケベだな……。

俺は思わずイリナの艶やかな肢体に見とれてしまう。

「……早く離れて下さい」

小猫ちゃんの鋭く

冷たい声ではっと俺は気づく。

何だか皆の視線が冷たい……。

な、なんか誤解されてないか!?

これは勝利を得るための

犠牲という奴で

コラテラルダメージと言う奴!

そうそれ!　よく知らないけどネ!

俺は必死になってそう弁明するが

「あらあらまあまあ……」

「そうね。安里君はいつもこうよ」

「安里さん、

これはどうかと思いますう」

女子部員達は

ジトーツとした目で俺を見つめてくる。

「お、おい!!　頼むから話を聞いてくれ!」

……結局、

俺が勝利のためにイリナに

媚薬を使った挙げ句、

その身体に興奮した

外道のド変態だと

思われてしまった。

な……何故……？

俺はイリナを介抱した後、  
何とか事なきを得た。

いや、ホントに……

危うく俺の社会的地位が

ヤバイところだった……。

一勝したのにこの疎外感……！

な、泣きたい……！

「まずは一勝！」

ここで木場がゼノヴィアに勝てば  
俺達の勝ちだな！」

イツセーは木場の肩を叩いて

笑顔を見せる。

だが木場の表情は妙に険しい。

イツセーの言葉が敗北フラグ

じみていたからとかか？

いや、そんなゲンを担ぐ

タイプでもないよなあ木場は……。

「ああ、勿論さ……。

僕にとつて忌まわしく

破壊したくて堪らなかった

聖剣が眼の前にあるんだ……。

ウズウズしてくるよ……！」

木場は妙に好戦的な、闘犬じみた

歯を剥く様な笑みを浮かべている。

アイツ、ああいうキャラだったか？

イツセーもそんな木場の不審な

様子に気づいたのか

「おい……祐斗？ どうした？」

と問う。

すると木場はフツと微笑んだ。

しかしその笑みはどうも寒気を感じるものだった。

「すまない。少し昔の事を

思い出してしまっただね」

「お、おう……」

イツセーは多分

「今はゼノヴィアに集中しろ」って

言いたいんだろうが

逆効果になるとみなしたのか

敢えてそれ以上は言わなかった。

始めの合図もない内から

仕掛けたのは木場だ！

木場が踏み込むと同時に魔剣のオーラが

剣身から溢れ出し、

一気に間合いを詰めるなり

ゼノヴィアへ斬りかかる！

しかしゼノヴィアは冷静だ。

噂の聖剣で

木場の斬撃を受け止める。

ガキイイイン……!!

激しい火花が散り、

両者は鏝迫り合う形になる。

木場は更に一歩前に出て

聖剣を押し込む。

「うおおおおっ!!」

咆哮と共に全力で押し込む

態勢だった。

対するゼノヴィアは

「ふん」と鼻で笑いやがると

片手で軽々と受け止める。

「この程度の力で

私を倒せると思っているのか？

嘗められたものだ」

嘯くだけあつて余裕の表情だ。

敢えて片手で受ける事で

力の差までアピールするとはな……。

「ならばこれで！」

木場が叫ぶなり左手に握っていた

もう一本の魔剣を創造し、

二刀流となる。

更に逆十字の構えにすることで

魔の力を増幅させる構えだ！

これなら幾らなんだって

ゼノヴィアといえども……！

「ほう。双剣使いとは珍しい。

だが珍しいだけだな」

ゼノヴィアは

木場の二刀流の攻撃を

華麗に捌いてみせる。

まるで相手にしていない感じだ。

「クッ……」

それでも木場は果敢に攻め立てるが

その悉くがゼノヴィアには届かない。

何て奴だよ……。

あのゼノヴィアの動き……。

明らかに只者じゃない。

「祐斗！ 落ち着きなさい！」

いつもの貴方ならもつと

冷静に戦える筈でしょう!？」

部長が木場に激を飛ばす。

そうだぜ！ 木場！

いつものお前はクールな

剣士じゃねえかよ!？」

剣の腕なら負けてねえんだ。

お前の剣術を活かせばきつと……!!

「黙れ！・ 僕はこの日の為に

悪魔に魂を売り、

聖剣への復讐を誓ったんだ！」

木場は部長の声に耳を傾けず、

攻撃の手を止めない。

何か変だぞ!?

ちつとも木場らしくないぜ。

それに今の言い方は……。

「私は貴様の様な

半端者にやられる程弱くはないんだよ、先輩」

木場の攻撃をかわしながら

ゼノヴィアは挑発的に言う。

その瞬間、木場の表情が変わる。

「……ッ。

……今、僕の事なんて呼んだ？

『先輩』だど？・ ふざけるなッ！

僕達をあんな所に閉じ込め、

何年も何年も苦しめ、辱め、

殺し合いをさせたお前達が……!!

僕をそんな風と呼ぶなアアッ！」

木場の怒声が響き渡る。

同時に木場の身体から凄まじい

魔力が放出され、

双剣が融合した。

これは木場の

『魔剣創造』の暴走か!?

「怨恨を固めた所で

醜いだけだな」

「黙れエエエッ!!」

木場の怒りに呼応して  
更に膨れ上がった魔力が  
魔剣へと流れ込み

多重の刃を作った！

「はあああああつー！」

ゼノヴィアは木場の豪剣の一閃を  
両手持ちにした破壊の聖剣で  
受け止める。

「成る程、はぐれの雑魚共よりは  
少しマシな程度の力はあるようだ。  
だがまだ足りないな」

「くっ……」

木場は悔しげに歯噛みする。

「祐斗！ 止めなさい！」

貴方の『騎士』の性質は  
そういう風には出来ていないわ！  
怒りに任せてはダメ！」

部長は木場に呼びかけるが

木場は聞く耳を持たない。

「僕はもう止まらない！」

僕らを救ってくれた人達の想いを  
踏み躪ろうとする者は許さない！  
この魔剣で全て斬り裂いてやる！

この学園で得たもの全てを  
無に帰そうとする者も斬り伏せる！  
そして……、そして……」

木場は一瞬、言葉を止めると  
悲痛そうな顔で言う。

「そして、あの時、

僕を助けてくれなかった  
者達にも同じ苦しみを与えてやるツ！！

どいつもこいつも『有罪』だッ!!」

「祐斗ッ!!」

木場の言葉を聞いた途端、部長が嘆くように叫ぶ。

その叫びが合図になったかのように

木場は一気に攻め込んだ!

「おおおおっ!!」

僕の魔剣の破壊力と

君の聖剣の破壊力!

「どちらが上か勝負だ!!」

木場はオーラを纏わせた

魔剣を振りかざし、

叩きつける様にゼノヴィアに振るう

オーラの力は凄まじく、

魔剣から焰が噴き出す。

対するゼノヴィアは

破壊の聖剣を横薙ぎに一振り。

たったそれだけで木場が

放った一撃が跡形もなく消し飛ぶ。

「な……い……」

今の一撃で魔剣が粉々に

砕け散ってしまったためだろうか。

木場は完全に硬直してしまっていた。

「マズい!

」それが『魔剣創造』か。

思ったよりも

大したことはなかったな……。

いや、使い手が自滅しただけか」

ゼノヴィアは

失望を隠そうともせず

冷たい笑みと共に鼻で笑う。

そして剣の束で木場の腹部を  
打ちのめした。

「ガハッ……！」

木場は苦悶の声を上げながら  
ずるり、と地滑りを起こす様に  
ゼノヴィアの横に倒れてしまった。

「祐斗！ 大丈夫!？」

「祐斗さん！」

しっかりとして下さい！」

部長達は慌てて駆け寄る。

ゼノヴィアはそんな

俺達を一顧だにしない。

「過剰な焔で剣を焼けば

付け焼き刃どころか、

切れ味を失う……。

その変態男の戦法から

学ぶ所か自ら台無しにするとは……」

吐き捨てるように言い放つと

勝負はついたと言わんばかりに

破壊の聖剣を包んだ。

「……僕の剣は……、

僕は……まだ……！」

木場はまだ意識があるのか、

ゼノヴィアを睨む。

そのガッツは買うが

今はそれ以上にゼノヴィアへの怒りが勝っている。

「いい加減にしろ、先輩。

君では私に届かない。

騎士の特性による俊足と

多彩な攻撃が真価だろうに……。

その真価を自ら投げ捨てて



「よくもまあ聖剣を破壊しようなどと考えたものだ」  
ゼノヴィアは侮蔑を露にする。

「く……クソッ……い！」

木場は無念に顔を歪め、  
握り潰した草を引きちぎる。

俺も解るが、自分の弱さを  
見せつけられた感覚は辛い。

まるで内蔵が焼かれ、

肺の空気が押し出される様な苦痛。

俺はかつて、それを味わった。

そしてそれは、木場も同じ筈だ。

「祐斗、もう良いのよ。」

これ以上戦っても貴方が傷つくだけよ」

部長が優しく語りかけると

木場は俯き、むせび泣いていた。

けど一勝一敗、

後はイツセーがボールクの大將に

勝てば何の問題も無い！

無い……のだが

ボールクは一応俺の師匠みたいな

モンなんだよな……。

どっちを応援すればいいのか……。

複雑な気分だぜ。

「俺がアンタに勝ったら、

ちゃんとアジアに謝れよ！

すいませんでしたってよ!!」

「解った。」

お前の持つ力、見せてもらおう」

イツセーはボールクを

指差し、睨みつけながら

ダンツと地面を踏みしめた。

対するボールクは

まるで『身の程知らずめ』と

言いたげに腕組みをするだけだ。

「構えないのか!？」

「必要がないからな……。」

それよりも貴様……、

ここはグレモリーの陣地で

プロモーションは出来んぞ？

そんなザマで本当に俺を

倒せるのか？」

「うるさいー！」

やってみないとわからないさ！

行くぞ!!」

『Boost!』

音声が鳴り響くと同時に

イツセーの全身が

赤いオーラに包まれた。

『赤龍帝の籠手』を予め発動させ

ある程度倍化させていたのか!？」

「ほう……。」

「おおおおっ!!」

イツセーは雄叫びを上げて

拳を繰り出し、

大将を殴りつけた。

少し卑怯かもしれないが

勝つためだし、この位なら

戦略の一端だよな！

パキイイイイン!!

ヨシッ!

少なくともイツセーの实力は

マグレじやねえ!

大将の氷の結界を碎けるレベルに  
まで成長している！

だが碎けたのは

イツセーが殴った箇所のみ。

碎け散った氷の破片は

そのまま宙を舞い、

大将の片腕に薄刃になって

集まる。

そしてあつという間に

鋭い鉤爪へと変わった。

「どうした？」

かき氷造りはやめたのか？」

「くそ……！」

イツセーは悔しそうに

歯噛みするがビビる事はない。

「まだまだあー！」

イツセーは更に力を込め、

パンチを繰り出す。

「フム……。」

先ほどよりパワーは増したが

スピードが落ちたようだな」

「ぐああっ!？」

戻り際のイツセーの龍の腕を

カウンターの様引つ掻くと

イツセーの引つ掻かれた傷が

凍りついていた。

「痛い！　なんだこれ!？」

「今のはほんの小手調べだ。

次は俺も攻撃する」

イツセーが持つのは

『赤龍帝の籠手』

もとい小手だけにつてか……？

「……」

「兵藤一誠、

お前の弱点は甘さだ。

戦いとは

力だけで決まるものではない。

敵を倒すためには多角的に

思考を練る必要がある。

例えば、そうだな……。

こんな風にな！」

「ガハアッ！」

大将はいつの間にもやら漂っていた

破片を素にして左手に

氷のガラスの様な薄刃を破片から造り、

イツセーの腹に突き刺していた。

「イツセー！」

「部長！ 俺は大丈夫です！」

部長が心配して声をかけるが

イツセーは目で静止する。

「多角的に思考を練るって

忠告はありがとうよ！

けどな、計算しているのは

お前だけじゃあないんだよ!!」

イツセーが吠えた途端、

赤龍帝の籠手が反応した。

『Transfer!』

譲渡の能力で大将の氷の武器や

結界が益々厚みを増す。

ど、どういうつもりだ……？

大将を強くしてどうする？

「イツセー君、まさか

勝てないと踏んで

勝負を捨てたの?」

「バカヤロー! お前それでも

イツセーの幼馴染みかよ!」

呆れ気味のイリナに

遂怒鳴ってしまった……。

……だけどイツセーの目は

まだ諦めていない!

きつと考えがあるんだろう……。

「過ぎた力は身を滅ぼすって

よく言うよな! アンタは

氷を扱うが、氷そのものって

ワケじゃない!

アンタの足元に砕いた氷の破片を覚えてみるよ!

五芒星になっているだろ!」

「ぬ……うう……!!」

五芒星の捕縛効果で自慢の歩法による

高速機動も今の大将は使えない!

イツセーの言葉と共に

大将の身体が冷気を帯びる

爪も剣も巨大化し

ズシン、と大音を立てて

地面に落ちる。

「なるほど、そういう事ね」

部長が何となく

理解した様に呟いた。

「リアスさん、イツセーの

言っているのは

どういう意味ですか!?!」

「イツセーの譲渡の力で

ボールクの力を増したのは

彼を氷漬けにするためだったの。

それがまず一つ目。

そして彼の氷の力が過剰に  
なった今、

この場は彼の陣地になった……！」

それはつまり……！」

「イツセー！」

全力で叩き潰しなさい！」

「了解です！ プロモーション!!」

『女王』の駒の力を宿す

イツセーがその力を発動させる。

『Explosion!』

音声が鳴ると同時に

イツセーは拳を突き出しながら

跳躍する。

「これで決めるぜ!!」

イツセーの拳もまた

ボールクの氷の重装により強化され、

籠手にカイザーナツクルの要領で

追加されるに留まらず更に巨大化していく。

「……っ!! その力は……！」

「はああああああ!!」

イツセーは大将に向けて拳を放つ。

あれなら結界もクソもねえ!

轟音と共にイツセーの一撃は

見事に大将に命中したが

だがイツセーの攻撃は

それでは終わらなかった。

「まだまだあー！」

ドライブグウウツ!!

『迫撃のドラゴンショット』!!

おおおおおおおつ!!」

イツセーの籠手から放たれるのは龍のオーラ。

しかもただの龍ではなく、

神滅具である

赤龍帝の籠手の龍のオーラだ!

しかもビームにするんじゃない

バーナーの要領で零距离の敵を焼き尽くす応用版だ!

「ぐあああつ!!」

イツセーの放った必殺技

とも言える攻撃は大将に直撃。

これなら幾ら何だつて……!!

水蒸気が晴れると、

そこには大将の姿があつた。

マジかよ……。

あのイツセーの猛攻を受けて

まだ立ってられるのか!?

大将はゆつくりと

イツセーの方へ振り向く。

表情こそ無だが、

口元は笑っている様に見える。

だが次の瞬間には、

ビリリと大気が震える。

これは殺気なのか……!?

「……見事だ。」

まさかこれ程とはな。

しかし俺を倒したいならば

俺を殺すつもりで来い。

でなければ俺を倒す事は出来んぞ。

もつと非情になれ。

その甘さは何れ

取り返しのつかない惨事を招くことになる」

「な、何を言ってるんだよ……?」

イツセーが困惑した顔で

そう呟いた。

確かにそうだ。

イツセーはこの間まで

松田や元浜、そして俺と

バカやってた学生なんだぜ?

それが今はもう悪魔に転生して、

赤龍帝なんてモンに祭り上げられて

命懸けの戦いをしてるんだ。

だけど俺は知っている。

イツセーが優しい奴で、

皆に好かれる存在で、

だからこそ今のイツセーは

誰よりも強いって事をな……。

『Reset!』

「あ……」

「どうしたのイツセー君!」

「おい、大丈夫か!」

籠手が鳴り響くと共に膝をつくイツセー。

慌ててアーシアと共に

俺は駆け寄っていった。

「……魔力の枯渇か」

大将はいつの間によら

閉じ目に戻ると静かに呟き、

殺気を収めた。

「な、なんのつもりだよ!」

「興が醒めた。」

お前達との勝負は預けておく。

次に相見える時を

楽しみにしているぞ。



お前……お前達は

この世界の希望となるやもしれん。  
精進しろ」

どういう事だ？

悪魔も墮天使も等しく

裁きを与えるべきって

言っていただろアンタ？

いや、待てよ……。

裁きを与えろということと

皆殺しにするということは

違うって事なのか!?

「なに勝手に纏めてるんだ……!!

俺はまだ……まだ……やれ……」

イツセーが力尽き倒れ、

部長達が介抱している中

大将は静かに立ち去った。

結局、大将の目的も

分からずじまいか……!!

部長の話によると

イツセーは暫く動けないらしいし、

とりあえず今日は解散となった。

結局一勝一敗一棄権だから

決着つかずか。

イツセーの奴、本当に大丈夫かな。

まあ明日には回復してまた学校にくるだろうけど。

それにしても……

大将は一体何者だったんだろう。

そして最後に言った言葉の意味は……??

しかし疲れた……。

早く帰って寝たい……。

↓

くたくたで帰宅すると

何やら妙なモノが

玄関にやってきた。

背丈は俺の脛位の

ミイラが入る様な棺っぽい

人形たちだ。

な、何だ!? と慌てる暇もなく

人形たちは俺の鞆やら制服やらを

勝手に持っていく!

自分の家だからいいけど

玄関でパンイチとか

変質者だろ……!

俺は慌てて人形を追いかけたが

その時だ。

「全く……。杏寿郎は

見回りに行くと言って勝手に

出歩くし、彼は釣りに行くし。

彼女はナイアと射撃訓練に

明け暮れたままだし……。

皆、身勝手が過ぎます……。」

奥で見たことがない女の人が

愚痴りながら頭に三角巾をつけて

埃を払っていた。

ほぼパンイチで。

向こうもこちらに気づくと

俺達は同時に叫んだ。

「へ、変態だあ!?!」

## ※第22話（安里×ミツテルト）

何だこの人!?

何でこんな所で

パンツ一丁で 掃除してるんだ？

「な、何ですか貴方は！

人を変態呼ばわりするなど！

私を誰だと思ってるんです！

私は誇り高きフアラオにして

メジエドさまの導きによりて

その秘術を治めるものですよ！」

謎の女性はまくしたててきた。

メジエドって

エジプトの神様だよな……？

それはそれとして

この人は どう見ても女性だ。

しかもかなりの美人。

スタイルも良い。かなり……。

どうか何故水着みたいな

格好を？

「な、何ですか！

その痴情にのぼせきつた

淫らな顔は！不敬ですよ！」

褐色肌でも解る位に赤面している。

いかんいかん。

つい凝視してしまった。

「あ、いや、すいません。

あまりに綺麗だったんで……」

「な、何を言っているのです！

こ、この不敬者！

あまつさえ私の美貌を褒めるとは

一体どういふ見です！

……!? 私が綺麗!？」

怒ったり照れたり忙しい人だ。

……なんだろう。

この人からはイリナと

似たような雰囲気を感じる。

ぽんこつ属性というか、

残念系というか、

天然ボケキャラ的な感じがする。

「ところで、

お姉さんはどちら様？」

「むっ……そういえば、

まだ名乗ってませんでしたね。

申し遅れました。

私はニトクリス。

偉大なるファラオにして

メジエドさまの……」

「それはさっき聞きました」

「それならもう

一度自己紹介します。

私は古代エジプトの

ファラオであり

メジエドさまの導きにて

不敬なる者に死を賜る

魔術を会得した

魔術師でもあります」

「は、はあ……。凄いですね」

「ふふん！まあ当然でしょう！

これくらい出来なくては

ファラオを名乗る

資格はありませんから」

なかなかの胸を張り、  
フン、と誇らしげだ。

何なんだこの人……。

とりあえず、話を聞かないと  
判断ができません。

「えっと、俺は

九頭竜安里と言います。

それで、どうしてここに？」

「ああ、それは簡単です。

私は貴方の主と

盟約者となったからです」

……は？

今なんて言いましたか？

「だから貴方の主と

盟約を結んだと……。

つまり契約関係となりました。

よって貴方には 私を使役できる

権利を得たのですよ。

フツ、良かったではありませんか。

これで貴方も晴れて

主人に仕える身として 恥のない様に生きるといい」

……。

ちよつと待ってくれ。

頭が追いつかない。

冗談じゃないぞ！

理性が持たない！主に下半身が！

「何やら不埒かつ不敬な視線を

感じるのですが……」

ニトクリスと名乗った女性が

ジト目でこちらを見ている。

ここは話題を変えよう！

「あ、あの棺みたいな人形は？」

俺が聞くと 彼女は棺人形の方に  
目を向けて 得意げに語りだす。

「あれはシャブティ。」

我が秘術により使役される

家事などを死者に代わり

行うもの達です」

「ならシャブティに任せて

ニトクリスさんはノンビリして

いれば良かったんじゃないか……」

俺の提案にニトクリスさんは

指を立てて却下する。

「メジエドさまのお導きによって

この世界に顕現された以上、

私の力をもってこの世界の者達に 更なる

繁栄と栄光を与えねばなりません。

その為にも、まずはこの世界における

私の立ち位置を 確立する必要があるのです」

……よく解らないが、

どうやら彼女は真面目な人らしい。

しかし、俺の疑問はまだある。

ある意味では最大の疑問だ。

「何故水着の様な格好を？」

「出ませい！」

彼女が叫ぶと同時に

床に魔法陣が現れ光り出す！

そしてそこから現れたのは……

何だか被り物をした何かの集団に

ボコボコにされてしまった……。

↓

「あいてて……」

「全く安里サマはデリカシーがないッスねえ。」

もう少し女心を勉強しなきゃ」

俺は自室でミツテルトから

簡単な治療を受けつつ、

説教を食らっていた。

ちなみに俺の目の前にいる少女の名は

ミツテルト。

背中 of 鳥じみた翼から解るように

墮天使だ。

元はレイナーレの部下だったんだけど

まあ、なんやかんやあつて……

俺の家に住み着いている。

「そう言えばお前、

回復魔法とか使えないの？

使えるんならそれで治してくれよ」

「無理っすね。」

そもそも神の加護を受けられない

うちら墮天使や悪魔にとつて

回復魔法を使える奴はレアなんすよ」

「そっかあ……」

「アザゼル様とサタナエル様は

それを懸念して人工神器を

作って下さったんでしようけど」

「人工神器？」

初めて聞いた単語だ。

しかもいきなりアザゼルだの

サタナエルだのと

聞いたことのない名前が

一気に出てきた。

「神の力の欠片が神器だとすれば

聖書の神以外の力の欠片、  
例えば土地神や精霊の力を利用して  
作り出したのが人工神器って事ッス」

「へえ……。」

ならアーシアの神器を狙うより

その人工神器の回復版を

バンバン開発すりゃ

良かったんじゃないのか？」

俺がそう言おうとミツテルトは

かぶりをふった。

「人工神器には

色々デメリットが

あるんスよね……。」

回数制限があったり、

使用する魔力がハンパなかったり

特にサタナエル様は

下級墮天使がどれだけ死のうが

知ったことじゃねえって

感じの方でしたからねえ。

アザゼル様に放逐されたって

聞いた時は正直ホツとしましたよ

マジでマジで」

ミツテルトはしみじみと語る。

墮天使も墮天使で

苦労があるんだなあ……。」

話を聞くにサタナエルって

ロクな奴じゃなかったんだな。

「それはそうと

アザゼルとサタナエルって

どんな奴でどんな感じの

顔なんだ？」



「そうっスねえ……。」

説明するより絵で描いた方が  
早いかもしれないんで  
ちよつとやってみますわ」  
と言うなり二人の似顔絵を  
スラスラと描き始めた……。  
で、数分後。

「……これ、マジなの？」

「マジっスよ」

俺はミツテルトが描いた  
似顔絵をまじまじと見る。

片方の白ロン毛を後ろに束ねた  
四白眼ヤローはとにかく、  
もう一人の金髪メツシユの  
チヨイ悪風親父には  
すっげえ見覚えが  
あるんだけど……！

とは言え、

確認するわけにもいかなしいし  
そもそも確認したって  
本当の事を言うわけがない。  
どうしたもんか……。

ナイア、もといない頭を  
絞ってうくんと考えていた矢先、  
ピンポーンとチャイムが鳴った。  
玄関まで行くと

そこには 木場の姿があった。

「……少し、いいかな」

木場の顔つきは険しく、  
目には光が宿っていなかった。  
ゼノヴィアとの手合わせに

負けたことが堪えているのかも  
しれない。

そう思うと無碍にもできなかつた。

「まあ、上がれよ。」

大したもてなしもできねえけどさ」

「ありがとう、お邪魔します。」

君の部屋に行ってもいいかな？」

「ま、まあいいけど……。」

ミツテルト、

お茶とテキトーな菓子を頼む」

「はーいっすー！」

ミツテルトは元気よく返事すると 台所に向かった。

「……本当に堕天使と

仲がいいんだね」

木場は相変わらず冷めた調子、

というより酷く投げやりな

口調と様子だった。

「ま……何だ。色々あるんだよ……。」

別に俺は堕天使側のスパイって

訳じゃないぞ。

俺がミツテルト達と

一緒に 住んでいるのは

ただ単に 居心地が良いからだ。

「色々って？」

「俺も憧れているんだよ、

リアス部長とイツセー達の様な

関係に……な……。」

と言っても俺のは能力やら

魔術やらにあかせたまがい物なのは

解ってはいるんだ……。」

それでも俺は、そんなまがい物の

日常を 守るために戦っている。

「それで……話って？」

「君は墮天使も仲間……いや

眷属や下僕に出来る異能が

あるんだろ？」

唐突に木場は切り出した。

何やら切羽詰まっている様な

焦燥感さえ感じられる。

「まるきり、

ないわけじゃあないが

誰かに譲ったりはしないぜ。

増して奪われるつもりも無エ」

俺がそう言うのと木場の表情が

哀しげなものに変わった。

「そうじゃないんだ……」

と、言うなり木場は

いきなり服を脱ぎ始める。

な、何だ!?

俺にソツチ系の趣味はない！

ってか男同士って……。

だが、

脱いだ上半身を見て合点がいった。

その胸は明らかに男性のものでは

なかったのだ。

更に下まで脱ぎ始めた。

呆気にとられてしまった俺は

木場を止まる事すら出来なかった。

「目を背けないでくれ。」

これが僕……私の十字架なんだ」

艶やかな金髪が肩まで伸びると

声や体つきまで変化していた。

しかし股間には女性器……  
まあオマ○コと男性器……

つまりチ○ポの両方がある。

両性具有……なのか？

で、でも何で脱ぐ必要があるんだ？

口で説明すれば良いじゃねえか!?

と、動揺して隙だらけの俺に

木場は抱きついてきた。

男の肌でもなく、匂いでもない。

柔らかくて甘い香り……。

「おい、何を……!?!」

「キミに抱かれれば異能の力を

得られるんでしょう？

だから……私の事を

好きにしてくれても……いいから」

誰かに何かを吹き込まれたのか

或いは勘違いしているのか!?

明らかに今の木場は

力を求めるが余りに暴走し、

自分を見失っている……!!

少し前の俺の様にだ……!!

「お前、自分が

何言ってるか 解ってるのかよ!?!」

「勿論だよ。

僕はもう……!!

自分の居場所を 失いたくない!

その為なら……!!

「落ち着け! こんな事したって

悪い結果にしかならねえよ!!

後悔するのはお前だけだ!」

「それでも私は……!!

あの人のそばにいたい……！！  
あの人の為に戦いたい……！！  
それだけが

「私に残された希望なの……！！」

木場、いや

木場と混ざっている誰かが

涙を流しながら叫ぶ。

「お願い……。」

私を抱いて……。

そうしたら貴方のモノになる。

絶対に裏切ったりなんかしない。

この命に代えても貴方を守る。

約束するわ。

だから……どうか、私を……」

「ふざっけんなアツ!!!」

俺は大声で叫んだ。

木場が守りたいのはイツセーだ。

解っている。解りきっている。

『ふひ、ふひひひ』

もつたいないもつたいない』

『いいじゃねエか、犯っちまえよ』

『お前の愛はまやかし。』

なら支配すればいいじゃないか』

『やせがまんやせがまん。』

ふひひ、あわれあわれ』

煩え……。

お前らの思い通りになんて

なっってやらねえ！

「怒鳴って悪かったな……。」

けど、何だ。悪いけど抱けねえ。

自分を安く売る様な奴には

思えないからな……」

俺は木場に上着をそつと被せた。

「それに俺は

お前の事は嫌いじゃない。

だから余計にそういう真似は できないんだ……」

「……………」

木場は俺の上着を握りしめ、

嗚咽を漏らす。

「ごめんなさい……」。

本当に……ごめ……」

「うーす。

お茶はそこそこ。

お菓子は辰屋の高給羊羹つすよ

……つてええー!？」

ミッテルトは当然、

目を丸くしていたが

盆をひっくり返さない辺りは

流石だな……」。

↓

そして俺は木場の話を聞いた。

君達は神に選ばれたんだ。

浮浪児同然だった当時の自分に

その男は笑顔で言った。

教会にいたのは

死にたくなかったからだ。

信仰心はなかった。

ただ生きるためだけに

生きていただけだった。

なのにその人は僕を助けてくれた。

雪の様に白い髪が印象的だった。

そして連れて行かれたのは

地獄にも等しい場所だった。

悪魔祓いの儀式と称して

毎日のように拷問、

虐待、異常性愛による

陵辱を受けた。

最初は抵抗したが、

やがて諦めた。

どう足掻いても自分は助からないと。

けれど一人の女性が

常に僕を守ってくれていた。

彼女はイザイヤ、と名乗る

僕と同じ金髪の女性だった。

いつも優しく微笑みかけてくれる

彼女を僕は好きになった。

彼女を守る様な強さが欲しい。

だから祈った。戦った。抗った。

誰よりも、何よりも、強く。

そうして僕の祈りは届いた。

ある日、僕はこの

『魔剣創造』の力に目覚めた。

皆殺しの大司教は僕を褒め称えた。

これでお前は聖剣使いになれると。

けれど、僕にはほんの僅かに

因子が足りなかった。

「何という事だ……！」

これでは私の成果が、悲願が……！

いや、何よりもサリエル様からの

御聖断が……！！

何とかしなければ……！！

何とかしなければ……！！」

と、狂乱した様に喚く

皆殺しの大司教、バルパーを  
尻目に 僕は彼女……

イザイヤさんに告げた。

二人で逃げよう、と。

僕は彼女を手を取り、

一緒に逃げようとした。

教会の追手は皆殺した。

血に塗れようと平気だった。

罪深い奴らを神のもとに

返したただけだ。

本気でそう思っていた。

けれど……。

「駄目だね。君は神（ぼく）に

選ばれたって言ったろう」

「僕以外に祈りを捧げる手は

要らないよね？」

逃げようとする足なんて

必要ないよね？」

黒い翼を持つ白い髪の男は

そう言ってズタズタにした僕と

四肢を切り飛ばしたイザイヤさんを連れ戻した。

奴は墮天使だった。

光を操り、人を晦まし、

神の信徒すら欺き弄ぶ本物の悪魔だった。

「なあバルパー。」

ちよつと思いついたんだけどさ」

奴は四白眼を剥き出しにして

三日月の様に口を歪めた。

「この二人、混ぜちゃえば？」

そうしたらきつと君の



理想が叶う筈だ。

幸い聖剣の因子のパターンも

双子の様に同じだからね」

奴らは狂っていた。

「やめろーやめてくれ！」

頼む！ 何でもする！

だから……！！」

「何を言っているんだい？

君たちはずーっと

一緒にいたいって言っていただろ？

だから僕は

その望みを叶えてやるのさ。

これは神の愛なんだよ？」

「嫌あああああっ！」

助けて！ お願い！

やめてえええええええっ!!!」

そして僕、私は『僕達』になった。

だけど、天使は聖剣計画を

異端と断じた。

「ああ、罪深い。何と罪深い。

私は悲しい。私は嘆こう。

お前達の罪が消えるまで

この涙は枯れる事はないだろう。

消えよ、消えよ、疾く消えよ。

生まれてこない方が

お前達のためには幸いだったのだ」

天使は毒の霧と鎌を振るい、

僕達、バルパー、墮天使以外の全てを

殺し尽くした。

僕達はリアス様によつて

悪魔となることで長らえた。

バルパー、白髪の墮天使、  
そしてあの天使。

その3人に復讐を果たすまでは  
死ねない。死んでたまるか。  
それだけが

僕達の生きる理由だった。

「……だから僕は聖剣と

墮天使を憎む」

体つきも男に戻った

木場はそう締め括ると、

深く息を吐いた。

「木場……。お前……」

俺は言葉が出なかった。

そんな俺を木場は横目で見て、  
困ったように苦笑していた。

「うう、何て悲惨な……」

うちだったら耐えられないツス……  
すいません、元とはいえ

家のモンが……!」

ミッテルトは両手で

鼻をかみながら、

嗚咽混じりに言っていた。

「いや、良いんだ……」

もう昔の話だしね……」

それに僕にとって彼女は、

掛け替えのない存在だった。

だから後悔はないよ」

木場の瞳は澄んでいた。

そこには一片の曇りもない。

本当にそう思っているのだろう。

だが、だからこそ 余計に悲しく感じた。

「じゃあ、お前は

そのイザイヤって女の人と  
融合しているって事なのか？」

「そういう事になるね……。」

けど時折彼女の力が

表に出てくる事もある……。

イツセー君が現れてから

それは顕著になってきている」

うーん、やっぱり

赤龍帝の力が

影響しているんだろうか？

俺は腕組みして唸ったが

ミツテルトは呆れていた。

「だから女心を学べと言ってるじゃないスカ。

これだから安里サマは」

「うるせーな！しょうがねえだろ!？」

だって、なあ……!」

俺は木場に視線を送ると、

木場も気まずげに頬を掻いていた。

「ま、まあ、確かに安里君には

難しい問題かもしれないね。

この事はイツセー君には

黙ってくれていると、嬉しい」

「あ、ああ……。」

けどまあ、今日は泊まっていけよ

別に変な意味じゃないからな!」

「……ありがとう」

そうして俺達は夜遅くまで 色々な話をした。

木場が寝た後、

俺はミツテルトの部屋へと行く。

ミッテルトはまるで

俺が来るのを待っていた様だった。

あのゴスロリドレスは脱ぎ捨て

生まれたままの姿で

ベッドに腰かけて微笑んでいる。

「待ってたスよ安里サマ。

文字通りの全裸待機って奴っすね」

「…………お前なあ」

「…………」

俺はミッテルトの隣に腰を降ろす。

するとミッテルトは

身を寄せてきた。

「どうしたんだよ、急に」

「ううん、何でもないス。

ただ、ちよつとだけ 甘えたくなつたっていうか…………

ダメですか？」

「…………いいぜ」

俺はミッテルトの肩を抱く。

するとミッテルトは目を閉じて、唇を寄せてくる。

「…………ん」

俺達はそのまま口づけを交わし

舌を絡め合う。

そして口を離すと、唾液の糸を引いた。

「なあ、ミッテルト？」

「ぷは…………なんスか？」

ミッテルトは頬を染めていた。

「お前つてさ、俺の事好き？」

「嫌いって言ったら

どうするんスか？ 殺すんスか？

木場さんの話に出た奴らみたいに」

吸い込まれそうな瞳で

ミッテルトは見つめ返してくる。

「いや、殺さないよ。」

お前を殺したりしない。

お前は俺やナイアに頭を

弄くられて無理矢理俺を愛する様に

仕向けられるだけだって言っても

信じてくれるのか？」

「……………」

ミッテルトは押し黙った。

そして、暫くしてから呟いた。

「本物と偽物の区別なんて

どこでつけるんスか…………？」

うちは安里サマになら殺されても

いいツスよ…………♡」

そう言うともミッテルトは 再びキスしてきた。

今度は触れるだけの優しいものだ。

だが、それでも俺は嬉しかった。

ほんの少し器のヒビが塞がった。

そんな気がした。

「そうか…。俺もお前になら

殺されてもいいよ」

俺もミッテルトを抱き締め、 耳元で囁く。

その声は自分でも驚く程、優しげだった。

俺はミッテルトの首筋に顔を埋め、

その肌に優しく噛みついた。

ミッテルトは甘い吐息を漏らし、

身を震わせる。抵抗はなかった。

いや、出来なかつたんだろう。

俺がミッテルトを抱きしめる力を強めれば、

身動きが取れなくなる。

そのままベッドに押し倒し、

覆い被さると顔を真っ赤にして、俺を見上げてきた。  
潤んだ瞳が俺に訴えかける。  
それは、もっと欲しいという  
懇願だ。

「……安里サマ、うち、もう……!」

俺は無言のまま、

ミッテルトの胸に手を伸ばす。

その体は熱を帯び、

心臓の鼓動が激しくなっている。

「ひゃう!」

ミッテルトの体が跳ね上がる。

その反応が可愛くて、

俺はついその小さな乳首を指先で何度か

転がした。

「あっ! ああん! んんっ! そ、そこばかりい……!」

するとアイツは切なげに喘ぐ。

俺は更に強く胸を揉み、

片方の手でもう片方の乳首を刺激する。

「あう♡ふああ♡んんっ♡

はああああ♡」

そうすると不敵な表情は

瞬く間に崩れ去り、

快感に悶えるメスの

顔へと変貌していった。

俺はそんなミッテルトの変貌に

歪な充実感に包まれていくのを自覚していた。

体からは力が抜け、

完全に俺にされるがままになっている

ミッテルトの小さな乳房は、

俺の手の中で自在に形を変え、

その柔らかさを示していく。

「あっ♡ひっ♡」

さつきから…♡

安里サマばっかり♡」

「良いじゃねえか。」

「楽しませろよ」

「んんっ♡んむっ!?!」

俺は再び唇を重ねると、

ミッテルトは自分からも舌を絡めてきた。

「ちゅぱっ!れろれろ!」

じゅぷっ! んっ♡んっ♡んっ♡」

淫靡な水音が部屋中に響き渡る。

ミッテルトは俺の体をまさぐりながら、

自らの秘所を俺の下腹部へと擦り付けていた。

既にミッテルトのそこは濡れていて、

俺のズボン越しにも

ミッテルトの体温が伝わってくる。

股間は既に洪水状態で、太腿には愛液が伝っていた。

顔は蕩けきっていて、その目は焦点が合っていない。

「あ、安里サマア…♡」

うち、もう我慢できないッス…♡」

ミッテルトは自ら腰を振り、

俺のモノをひたすら求める。

その度に向こうの割れ目と

俺の下半身がこすれ合い、

弾ける様な

快楽を生み出していった。

「行くぞ」

前置きと共に俺のモノが

ミッテルトの奥まで深々と突き刺さる。

「んああああああ!!」

ミッテルトは大きく仰け反り、

悲鳴を上げた。

ミッテルトの中は狭く、

俺の男根を

ぎゅうつと強く締め付ける。

「うおっ……。」

相変わらずすげえ締まる……。」

「んんっ♡くうん……♡」

ミッテルトは涙を浮かべ、

快感に耐えている。

俺はミッテルトの

頭を撫でてやった。

「大丈夫か？」

「……うん。平気ッスよ」

ミッテルトは不敵に笑うと、

ゆっくりと自分の足を上げ、

俺の腰を蟹の鋏の様に 足を絡ませると、

上半身を蛇の様な動きで 絡み付いてきた。

そして俺の背中に腕を回し、

密着してくる。

抱き締めた傍から

俺の首筋に 何度もキスをして、

時折甘噛みする。

痛みはなかった。

「安里サマ、大好き」

「知ってるよ」

「えへへ」

ミッテルトは照れた様に笑い、

俺に抱きつく力を強めた。

俺もそれに応える様に、ミッテルトを強く抱く。

お互いの心臓の鼓動が

直に伝わり合う。



ミッテルトは

俺の首筋を舐めてきた。

くすぐつたい感覚に身を振る。

だが、不思議とその行為を

不快だとは思わなかった。

「ねえ、安里サマ……♡」

うちのこと好きって言つて下さい」

「好きだよ」

「もつと」

「……お前が思つてる以上にな」

「嬉しい……♡」

「……そうかい」

「うちも、安里サマのことが……」

だーいすきっスよ……♡」

ミッテルトが耳元で囁いた。

俺の中にコイツに対する

愛おしさが芽生えていく。

「んっ……♡安里サマ、

泣いているんスか？」

「うるせえな、見んじやねえよ」

「泣かないで欲しいっス」

ミッテルトが優しく微笑み、

俺の目尻に溜まった涙を

猫の様に舐めとつていく。

「……やっぱ、変な感じだな」

俺はミッテルトの体を抱き上げ

上下に攪拌する様に突き込み、

ミッテルトが悶える様を見て眩く。

「んあっ♡あん♡あん♡あん♡」

ミッテルトの声はすっかり蕩けきっており、

俺のピストン運動に合わせて

喘ぐことしか出来なくなっていた。

ミッテルトの膣内で俺のモノが脈打ち、

ミッテルトの最奥に精液を流し込む。

ミッテルトはそれを受けて絶頂し、

体を大きく痙攣させた。

「あつ……♡出てる……♡」

ミッテルトは幸せそうな笑みを浮かべると、

そのまま意識を失った。

俺はミッテルトの中から

男根を引き抜くとベッドの上に寝かせた。

その体は汗と愛液に塗れており

顔には涙の跡があった。

「……………」

俺はミッテルトの顔を拭いてやり、

隣へと横になる。

ミッテルトは無意識なのか、

俺の体に抱きついてきた。

俺はミッテルトの頭を撫でてやる。

ミッテルトは気持ち良さそうに目を細めた。

「安里サマ……」

「何だよ」

「うち、幸せッス……」

「そうかい」

ミッテルトが俺の腕の中で

幸せそうに言う。

「ずっと、こうしていたいっスね」

「そうだな」

「うちは……」

もう何処にも行かないッスよ」

「ああ」

ミッテルトは少し不安げだった。

だから俺は安心させる為に、  
強く抱き寄せた。

すると嬉しそうに笑って

俺の胸板に頬ずりをしてきた。

「安里サマ、愛してるっスよ」

「知ってるよ」

「えへへ」

そう微笑む顔はとても

堕天使には見えなかった。

## 第23話

「ここが奴等の根城か……」

ゼノヴィアはとある廃墟の前にて  
聖剣を片手に呟いた。

そして、

その隣にはイリナの姿もある。

「何なのよ

あのボールクって人は？」

『赤龍帝や安里たちと

足並みを合わせずに踏み込むのは  
危険だ』なんて！不信心者よ！」

イリナはボールクの慎重に対して  
明らかに怒っていた。

そんな彼女を横目に、

ゼノヴィアも思うところが

あるのか、

神妙な面持ちで語り出す。

「確かにそうだね……」

「でしよう!?!私だって——」

「だが、私は

この任務を失敗する訳にはいかないんだ。

これは教会から課せられた使命であり、  
私の存在意義でもある。

だからどんな手段を使つてでも

やり遂げなければならぬ。

これは試金石だ」

「試金石？」

「ああ、

赤龍帝たちや

他の皆がどう動くか……。

それを見極めるためにも

この偵察は

必ず成功させなければ……」

ゼノヴィアはそう言うと、

目の前にある

廃墟へと視線を向けた。

「……」

ゼノヴィアは十字を

切った後にミカエルより賜った

アミュレットをかざす。

するとどうだ。

廃墟がまるで

溶剤をぶちまけられた

油絵の様にドロリと溶け出したではないか。

いや、違う。

溶けたのではなく”剥がれた”のだ。

廃墟だったモノの下からは、

大きな門が現れた。

それはまさにフアンタジー

世界に登場するに相応しい

威容を誇っている。

途端に門が二人を招くかの様に

自然と開いた。

「教会……っいや、違うな」

「雰囲気は確かに聖堂ではあるが、

漂う空気は神聖さとは

まるでかけ離れている。

どちらかと言うと禍々しい。

二人が身構えている中、

白い髪の少年が機械式の

パイプオルガンを作動させる。

流れるのは第9交響曲4番。  
所謂賛美歌だ。

「ようこそおいでくださいました。  
歓迎しますよ、

ゼノヴィアさん、イリナさん」

少年の声に二人は警戒を強める。

しかし、少年の方は

二人の様子を気にも留めず

言葉を続けた。

「まずは、挨拶を。」

僕はサタナキア。

所謂今回の騒動の黒幕さ」

サタナキアと名乗った少年は

にこやかに笑う。

「そうか、では死ね」

ゼノヴィアは初めから

問答するつもりもない。

破壊の聖剣を振りかぶると、

サタナキア目掛けて斬りかかる。

だが、足の力が抜け

その場に膝をつく。

「何だこれは……!?!」

全身が震える。

体の内側から込み上げる

恐怖心により

立っていることさえままならない。

「神よ……！敬虔なる信徒たる

この紫藤イリナにお力を！」

イリナとゼノヴィアは祈りの力で

何とかその場に立ち続ける。

そして、そのままの状態で

まずイリナが擬態の

聖剣の剣先をサタナキアの

喉元へ放つ。

だが――

「うそっ!?!」

イリナの攻撃は

サタナキアに届く前に逆走した。

「ははは、どうしたんだい？

その程度の攻撃は

僕には届かないよ？

今度はこちらの番だね…」

嘲笑を浮かべながら

サタナキアは指先で宙空に円を描く。

その瞬間、チャクラムらしき光輪が2つ現れた。

サタナキアはそれを念じるだけで

さながら雀蜂の速度で飛ばす。

2つのチャクラムは、

それぞれゼノヴィアとイリナの首筋を狙う。

「甘いー!」

ゼノヴィアはその攻撃を難なく弾く。

だが次の瞬間、

「――ッ!?!」

ゼノヴィアは驚愕する。

なんと弾け飛んだ筈の光輪が

一瞬で復元していたのだ。

「なるほど、

それがお前の力か……」

ゼノヴィアがそう呟いた時、

既にチャクラムが

彼女の首に迫っていた。

ゼノヴィアは咄嗟に身を捻り回避するが、

完全に避けきれず、

左頬に掠った。

そこから血が流れ出る。

「ゼノヴィア!？」

「大丈夫だ！問題ない！」

ゼノヴィアは傷口を手で拭き取ると、

サタナキアに向かって走り出す。

「はあああああっ!!」

そして破壊の聖剣を振り下ろす。

しかし――

「何度やっても無駄だよ?」

破壊の聖剣の波動は

なんとサタナキアの前で逆流して消えた。

「そんな馬鹿な!？」

「ゼノヴィア！危ないわ！」

イリナがゼノヴィアを突き飛ばすと

サタナキアが放ったチャクラムが

彼の眉間に深々と突き刺さる。

「が……は……っ」

「ふふん！」

自分の技でやられるなんて

とんだ間抜けな堕天使ね！」

イリナは無邪気に喜んでいたが

ゼノヴィアは構えを解かずに行った。

「油断をするな、

まだ何かあるかもしれない」

果たして光輪はサタナキアの

眉間から彼の体内に吸収されると

むくりと起き上がる。

「自分の技でやられる間抜けな

堕天使が何だって？」



サタナキアはニヤニヤと

イリナを嘲るが流石に

聖剣使いに選ばれたイリナである。  
すぐに切り替えて戦闘態勢に入る。

「擬態の聖剣よ！」

イリナは再び擬態の聖剣を構え、  
ゼノヴィアと共に攻撃を仕掛ける。

「だから無駄だというのが

解らないかなあ？」

サタナキアは見下す表情のまま

再び光輪を二人に

目掛けて飛ばす。

だが、二人は

その攻撃が自分に届くよりも

早く大きくジャンプをして避ける。

「へえ……」

サタナキアは二人の予想外の

動きに驚くというより感心した

声をあげれ中

ゼノヴィアとイリナは空中で

体を反転させると

サタナキアに全力の蹴りを放つ。

「どうよ！日本の特撮ヒーローを

参考に編み出した私達の

コンビネーションキックよ！」

ゼノヴィアとイリナの

渾身の一撃は

サタナキアに直撃し、

彼は勢いよく吹き飛ぶ。

だが、それでもサタナキアの  
表情は変わらない。

「僕の昔馴染が

小躍りしそうな技だね。

タイミングと発想は

良かったけれど温い」

サタナキアはまるで効いていないと

言わんばかりに余裕の笑みを浮かべていた。

「それじゃあ今度は僕からいくよ？」

君たちの流儀に則って

トクサツヒーロー？の

必殺技でいこうか」

サタナキアは嘲笑う様に

二人を見やると

拳を握り固めて胸の前で

交差させて、魔力を溜める。

一気に腕を上下に開き、

半月型の光のカッターを作り出した。

サタナキアは

その光の刃を無造作に放つ。

ゼノヴィアは破壊の聖剣の力を

最大限に高めた斬撃を放ち、

迫り来るサタナキアの

必殺の光刃を受け止める。

しかし、

「ぐう……っ！」

ゼノヴィアは苦悶の声を上げる。

破壊の聖剣を以てしても

サタナキアの光刃を破壊することは叶わなかった。

辛うじて回避するも、

光刃はゼノヴィアとイリナの間を通り過ぎ、

背後にあった壁を大きく切り裂いた。

壁は大きく崩れ、

瓦礫となって辺りに降り注ぐ。

「……ッ！」

破壊の聖剣の刃が欠けている!？」

ゼノヴィアは

瓦礫をかわしながらも

自分の聖剣の状態に

愕然としていた。

(奴の光刃の方が

私の破壊の聖剣よりも

上だと言うのか!?)

ゼノヴィアの心中に焦燥が募る。

まるで水圧でドアが破れるかの如く、

ゼノヴィアの心に

怒涛の勢いで恐怖が入り込んでくる。

自分の心を侵食する

恐怖を打ち払おうと必死に抵抗し、

叫び出したくなる様な衝動を堪えながら

ゼノヴィアは聖剣を強く握る。

「うおおおおっ!!」

「殉教希望かな?」

ゼノヴィアが斬りかかると

サタナキアは余裕の表情で

その斬撃を回避する。

そして頭を垂れたゼノヴィアの首を

刎ね飛ばすべく光刃を

撃ち出す構えに入った。

だが、ゼノヴィアの背を

踏み台にしてイリナは跳躍した。

完全にサタナキアの虚を衝いた

イリナは擬態の聖剣を変化させる。

「喰らいなさい! 私の必殺技!

『聖ペテロの投網』！』

イリナの手には白い光が

凝縮された擬態の聖剣が変化した

巨大な投網が顕現していた。

イリナはその投網を振り回すと

サタナキアに向けて投げつける。

サタナキアは先の光刃で

その投網を引裂こうとしたが

まるで霞を相手にしたかの様に

すり抜けた！

「何だと!？」

「これは貴方を縛るための

捕縛武器っただけじゃないわ。

ゼノヴィアが狙った獲物を

逃さないためのものよ！」

イリナの言葉の通りだった。

サタナキアは投網に絡まり、動きを封じられた。

「今よー！」

「解っているー！」

イリナの合図を受けてゼノヴィアはサタナキアに

全身全霊の一撃を放とうとする。

だが、その瞬間、

「ふふふふふふ……」

サタナキアが不気味な笑みを浮かべると

彼の身体から閃光が放たれる。

いや、彼自身が閃光そのものに変貌したのだ！

「ぐわあああつー！」

「きゃああああつー！」

サタナキアの閃光を浴びた二人は

大きく吹き飛ばされて壁に激突した。

「がはっ……」

「くっ……！」

ゼノヴィアとイリナの口から  
血が吐き出される。

二人ともかなりの

ダメージを受けている様だ。

サタナキアは彼自身が閃光となる事で

光の加護をすり抜けたのだ。

「成る程……。」

レイナーレクラスなら

まず間違いなく

仕留められたろうし、

コカビエルでも少しは

手こずったかもしれないね。

だけど君たちは所詮人間だ。

隣れで、矮小で、貧弱で、

取るに足らない存在だ。

そんな君たちが

僕に勝てるわけがないんだよ」

難なく自身を復元した

サタナキアは嘲り笑う様に言う。

すると、ゼノヴィアは

立ち上がってサタナキアに啖呵を切る。

「そうか……。」

だがお前が墮天使である以上、

私はお前達に抗ってみせる！」

「いや、美しい美しい！」

美しい神への比類なきチューギ！

涙と一緒にへドが出ますなあ〜！」

ゼノヴィアの悲壮な決意を

侮蔑しながら現れたのは

フリード・セルゼンだった。

「やあ、遅かったじゃないか？」  
「いやー、すみません。」

ボスのパワーが僕ちゃんには  
刺激的だったモンで

調整に時間がかかったんスよく。

許してクレオパトラ♪」

(妙にハイになっている……。)

とるに足りないはぐれ神父が

一体何を……)

全身に焼け付く様な痛み

を感じながら、ゼノヴィアは何とか立ち上がる。

そのゼノヴィアの前にイリナが立ち塞がった。

ゼノヴィアは、イリナの行動の意図を理解した。

彼女はゼノヴィアを庇うつもりなのだ。

そしてイリナはゼノヴィアを振り返らずに言う。

「アタシの擬態の聖剣なら

少しは時間稼ぎができる。

その間に早くここから逃げて！」

「……分かった。」

感謝するぞ、イリナ」

即断だった。

「おんや〜？」

コンビを捨て駒に

して逃げるのかにやあ〜？

『私はお前達に抗ってみせる！』

だっておー！」

「……」

フリードの挑発的な言葉にも

ゼノヴィアは反応しない。

そのゼノヴィアの反応を見て、

フリードはニヤリと笑い、

「あらら、

無視されちゃいましたよ。

流石は聖剣使い。

クールでカッコいいですねえ。

ま、俺としては新必殺技を

試す絶好のカモネギタイムに

ワクテカなんですけどねえ!!

ギャハハハハハ!!」

と凶刃をイリナへと

振るうのだった。

」

「うくん……」

俺はボールクの言っていた言葉を

ベッドの上で思い出していた。

『もっと非情になれ。

今のままでは何れ取り返しをつかない

惨事を招く事になる』

クソツ……!

何をいきなりワケの解らない事を!

それに棄権までしやがるなんて!

こつちに勝ちを譲ったつてのか!

ムカつくぜ……!!

…。

……。

いや、解っているんだ……。

俺がホントにムカついているのは

ドライグの力を使いこなせない

赤龍帝失格の俺自身なんだ……。

「……」

ダメだなあ……。

こんなんでリアスさんの

婚約者ですって  
胸張れんのかよ！  
ハーレム王に相応しい  
男になれるのかよ！

「……よしっ！」

俺は自分の頬をパンと叩いて  
気合いを入れた。

ウジウジ、イジイジしても  
仕方ない。まずは走ってくる！

悩んだ時は走る！

それが兵藤一誠だろ！

そう思い、俺は部屋を出た。

夕日に向かって走るぜ！！

夜だけど。

……。

そして走り始めて一時間後、  
俺は郊外の山間に辿り着いていた。  
悪魔化のせいで夜目が効くから  
迷子や遭難の危険はない。

「ふう……」

何ていうか……。

走るのも意外と悪くないな。

次は森の木に

パンチ撃ち込み二百回！

気合入れていくぜ！

と、その時だ。

フラフラと歩く人影が見えた。

あれは……ゼノヴィアじゃないか。

何だか様子がおかしい。

「おい、どうしたんだよ？」

慌てて駆け寄ると



するとゼノヴィアの顔色が尋常じゃないくらい悪い。

これはマズいな……。

「大丈夫か？」

声をかけると

ゼノヴィアは

ゆっくりと顔を上げた。

「貴様か……。

悪魔から手助けを受けるつもりは……」

弱々しい声でそう呟いた

ゼノヴィアの瞳は焦点が定まらず、

虚空を見つめている様だった。

「バカヤロー！天使も悪魔も

堕天使もあるか！

そのままでしたら死んじゃうぞ！」

ゼノヴィアの肩を掴む。

すると

ゼノヴィアはその手を掴んだ。

「恥を偲んで頼む……

イリナを」

「解った！まずはお前の

治療が先だ！

アーシアの所に連れていく」

ゼノヴィアの言葉を待たず

俺は俵を運ぶ感覚を

イメージしながら担いだ。

「お、降ろせ……！」

ゼノヴィアは手足をバタつかせて

抵抗するが相当弱っている様で

全く力が入っていない。

俺はゼノヴィアを担いで走った。

「しつかり掴まってるよ！」

「うう……屈辱だ。」

私ともあろう者が……」

俺はゼノヴィアを連れて

全速力で部屋に戻った。

「ああっ！イッセーさん！」

突然飛び出してどうしたんですか？」

「一体何処に行ってたの？」

玄関に入るなり

心配そうな表情を浮かべた

二人が詰め寄ってきた。

「ちよつとランニングしてた」

「ええっ!？」

「そ、そんな！あんな状態ですか!？」

「ああ、でもお陰で少しはスッキリできた」

「もう！心配させないで下さい!！」

アーシアはプンスカと怒り出した。

「あはは、ごめんよ。」

それよりゼノヴィアの治療を頼めるかな？

何かかなり衰弱しているみたいでさ……」

俺の言葉を聞いて

二人はハツとした。

「ゼノヴィア、

貴方まさか奴等の本拠地に……」

部長の問いに

ゼノヴィアは首を縦に振った。

「今回は私の不注意だ……。」

私が慢心したばかりに

偵察どころかこのザマだよ……。」

情けない……」

「情けなくなんか無いって。

だってまだ生きているんだ。

それにイリナだって

きつと無事さ。

だから元気を出せよ」

落ち込むゼノヴィアの手を

できる限り優しく握って励ます。

華奢な手だった。

そうだよな。

普通なら聖剣だの悪魔祓いだのと

縁がない年頃の女の子だ。

怖い目に遭えば誰だって

心細くなるし、不安にもなる。

それなのに彼女は仲間の為に

敵地に乗り込んだんだ。

勇気があるなんて言葉じゃ

到底足りない程の覚悟と

信念が彼女にはあったんだ。

俺にはまだそこまでの

強い気持ちはないかもしれない。

けど俺にも譲れないものがある！

それは俺を

慕ってくれる皆を守る事だ！

ボールクに甘いと言われたって構わない！

この甘さを貫くのが

俺のハーレム王道だ！

「ありがとう……」

ゼノヴィアは小さく呟き、

微笑んでくれた。

「ゼノヴィアさん、今から治療しますね！」

そう言ってアーシアは

ゼノヴィアの頭に手を置いた。  
すると淡い光が発せられて

ゼノヴィアの顔色が良くなっていく。

おおっ！流石はアーシア！

「助かった……。感謝するよ」

「いいえ、これくらい当然です」

アーシアはニコリと笑みを浮かべる。

良かった……。

これで一安心だな。

ゼノヴィアも大分顔色が戻ったし。

と、その時だ。

「あゝあゝ、

只今マイクのテスト中。

あ、念のためおことわりしますが

この放送はスクランブル放送に

なっておりますので、

クソ悪魔とビッチ聖剣使いと

えーと、それから

よく知ら騎士（ナイト）以外には

感知できませんので悪しからず！」

外からフリードの奴の声が

聞こえてきた。

あいつ、何をするつもりなんだ!?

嫌な予感がした俺は

窓から外の様子を窺う。

すると夜空にホログラフィの様に

見知った顔が何人か浮かんでいた。

フリードの野郎にキユクロちゃん。

あとは…知らない奴だらけだ。

だがどう見ても悪党面だった。

「見ているかミカエル!？」

聖剣を奪取するためによこしたのがこの程度の聖剣使いとはどうやら大分俺達を

見くびっていた様だな！」

まず最初にガタイのいい

墮天使が口火を切る。

羽が8…9…10枚!?

明らかに今まで戦ってきた

はぐれ悪魔や墮天使とは

格が違う！

「コカビエル…!?!」

リアスさんが驚きの声を上げる。

何…?!?知っているのか

リアスさん!?

ってふざけてる場合じゃない。

「墮天使の中でもタカ派の

武闘派幹部よ。

お兄様によると、

昔サタナエルという男と組んで

とんでもない事を

目論んだらしいわ」

じゃあ隣の車椅子のミイラ男と

いけ好かない感じの子供は？

コカビエルの部下…:…:…にしては

畏まった感じが無い。

明らかに同格の雰囲気だけど…:…:…。

「この程度の扱いに

僕達はとても傷ついたよ。

悔しいよ。悲しいよ。

情けないよ」

と、いけ好かない感じの子供が

言っているが明らかにウキウキしている感じだ。

「とはいえ、僕は心が広いからさ。

水に流すとするよ。

ざっぱくんってね♪」

何だ、酷くろくでもない事を

目論んでいるのがみえみえだ。

「ノアの洪水って覚えてる？」

ノアの洪水……。

確か人々が墮落しているのに

呆れ果てた神様が洪水で

地上の人間を一掃しようとしたけど

ノアとその家族だけは箱舟で

逃して新しい世界を

作ろうとしたとか……。

「バルパー君が行う

聖剣の融合エネルギーを

僕の人工神器と

彼の模造聖剣で増幅させて

ここから南極へ撃ち出すと

どうなると思う？」

南極の氷は砕け散り、融解。

世界中を大津波が襲うってワケさ」

「そうだ！

これは肅清でもなければ

断罪でもない！呼び水だ！

万魔の万魔による

飽くなき闘争のな！」

コカビエルが嬉しそうに叫ぶ。

何言ってやがるんだコイツ等!?

頭がおかしいのか!?

車椅子のミイラ男は  
我関せずって感じた。  
コイツもコイツで何なんだよ！  
駒王町だけじゃない！！  
何千万、いや億以上の人間が  
死んでしまうかもしれないんだぞ！  
わかってんのか!?

「本来なら

今すぐ始めちやつても  
いいけどさア。

それじゃ詰まらないだろ？  
人間じゃないんだから  
核ミサイル？だっけ？

そんなのを飛ばして

はい、おしまいよじゃねえ……」

あのガキが

ヘラヘラ笑いながら言う。

「だからリアス・グレモリーと

その眷属、あと序の連中が

夜明けまでに僕の所に来るんだ。

そして僕らと遊ぼう！

最高の前夜祭にしようじゃないか！

今度こそ存分に

とことん殺し合おうよ！

アーハッハッハッハ!!」

クソガキは高らかに笑う。

ふざけるな！

こんなバカげた事絶対に許してたまるか！

「リアスさん！行きましよう！」

奴等をぶっ潰しに行きますす！」

俺はそう言って

窓から飛び出そうとする。

だが、リアスさんは

俺の肩を掴む！

「リアスさんー！どうしてー！」

「待ちなさいイッサーー！」

まずはお兄様、お父様に打診して

直ぐに増援の手配を！」

リアスさんの言う事は尤もだ…！

だけど……！

「それでは遅いんです！」

もう奴等は

この町にいるんですよ!?

一刻も早く奴等の所に行かなきゃ

手遅れになるかもしれません！」

俺は焦りを感じていた。

サーゼクス様に連絡すれば

増援が来てくれるだろう。

けれど、今は奴等が

既に町に潜んでいて時間との勝負なんだ。

モタモタしていたら……

この町は滅びる……！

俺の大切な人達が住む

この世界が滅ぶ……！

そんな世界で

ハーレム王になっただって！

羨む松田や元浜がいない世界で！

呆れる桐生がいない世界で！

初孫を楽しみに待つ

父さんや母さんのいない世界で！

俺だけが幸せになっただって！

ちつとも



嬉しくなんかあるものかよ!!  
だからこそ!

俺は急がなければならぬ!  
例え命に代えてでも……!!

「あ、サーゼクス達に

相談するのはダメだよ。

そうしたらこの子の命はない  
付け足す様に

クソガキが続けた。

奴等の視線の先には  
生まれたままの姿で

磔にされた挙げ句

あちこち切りつけられた

イリナの姿があった……!!

「私の事はいい……!!」

聖剣使いになつてから

こうなる事は覚悟の上よ!

イリナは毅然として

涙一つ零すことなく言い放つ。

「なに勝手に喋ってんだオラァ!」

「うぐっ!?!」

フリードが

イリナの腹に蹴りを入れる。

「テメエは『タスケテェー!』とか

『ヤメテェー!シニタクナーイ!』

とか泣き喚けばいいんだよ!

何アドリブかましてんの?

馬鹿なの?死ぬの?」

「『エリエリレマサバクタニ』

なんてのもいいんじゃないかな?

先人をリスペクトして」

フリードとクソガキはイリナを辱めてヘラヘラ笑っている……。

どこまでも腐りきってやがる……！！

「……もう我慢ならねえ！」

俺は一人でも行くぞ!!」

「待ちなさい！イツセー!!」

止めようとする

リアスさんを振り切って

窓枠に手をかける。

するとそこにふわっと

何者かが現れた。

「……ゲイトさん!?!」

そうだ！この神様の力なら

一瞬でサーゼクス様達を

転送できるんじゃないだろうか！

「ゲイトさん！お願いします！」

サーゼクス様達をこの場に

連れてきて下さい！」

俺はそう頼むがゲイトさんは

寂しげに首を横に振る。

「それはできない。

この問題は君達の力で

解決しなければならなんだ。

そうでなければ救いの門は

永遠に閉ざされてしまう」

救い？そんな悠長な事を

言っている場合じゃないのに！

「それに、恐らくは

車椅子の彼の仕業だろう。

転送を阻害する仕掛けが

この街全体に張り巡らされている

恐らく僕以外で転送の魔法陣を  
発動させるのは不可能だ」

「そんな!？」

リアスさんの顔が曇る。

やっぱりこの人にそんな顔は似合わない。

「解りました!なんとかします!」

「うん。それでこそ

鍵を抱くもの……希望の恒星だ。

健闘を祈るよ。

さあ、行きたまえ。

赤龍帝とその主。

私も陰ながら応援しているよ」

ゲイトさんは

微笑みを浮かべて見送ってくれる。

「はい!行ってきます!」

「……仕方ないわね。」

私はリアス・グレモリー。

この駒王町の長として

何もせずに滅びるワケには

いかないわ!」

「俺だって!俺は兵藤一誠です!」

リアスさんの眷属にして

最強の兵士です!」

「……聖剣使いも必要だろう?」

「……ッ!？」

突然現れた声に振り返ると

そこには回復したばかりのゼノヴィアの

姿があった。

「大丈夫なの?」

貴方の破壊の聖剣はもう……」

「心配はない紅髪の滅殺姫。」

火急の時でなければ使えない  
切り札というものもある」

「ゼノヴィア……！」

「お前達だけに

背負わせるつもりは毛頭無い。

私も共に行こう。

そしてあの者達に正義の鉄槌を下すのだ」

あのゼノヴィアが

加わってくれるなら百人力だ！

俺達は意気揚々と

窓から飛び出した！

待ってろよ！

今すぐ助けに行くからな！

イリナ！

## 第24話

時は少し前後する。

「起きるのだ！・安里！

ミツテルト嬢と

愛を紡いでいる場合ではない！」

煉獄さんの大声で

俺とミツテルトは目を覚ました。

相変わらず声がデカイ人だ。

「僕はノックをするべきだと

言ったのだけれど……」

イザイヤ、もとい木場は

照れた様に目を泳がせていた。

しかし、一体何があったんだ？

しかし、親友と師匠の前で

女と服を着るのは中々恥ずかしい。

とにかくも服を着終えた俺達は

煉獄さんと木場から

状況を確認する。

「ノアの洪水!？」

奴等この町どころか

世界を飲み込むつもりなのか？」

俺は思わず驚愕の声を上げる。

無茶苦茶にも程があるだろ！

「ああ、どうやらその様だ！」

煉獄さんは腕組みしながら答える。

「ノアの洪水なるものが

何かは解らないが

無辜の民を巻き込む破壊とは

許し難い行為だ！」

「夜なのにテンション高いスね……」

ミツテルトは呆れながら呟くが  
煉獄さんはいつもこんなモンだよ？

「とにかく、イツセー達が

そいつ等の所に向かっていているなら

俺達も合流しないと」

「そうだな！」

そう言うのと煉獄さんは

勢いよく部屋を出ていく。

全く……相変わらずだな……。

「じゃあ僕等も行こうか？」

「いや、ちよつと待つてくれ」

別に怖気づいたわけじゃないぞ。

ナイアかニグラさんのどちらかでも

同行してもらわないと

かなりヤバい！

と、計った様なタイミングで

スマホが鳴った。

画面に映るアドレスは……

『唯一無二にして輝く』

シスターナイア』

……あいつ人のスマホ

勝手に弄りやがったな！

後でめる！

「今どこにいる？ 直ぐに来いよ」

「今貴方の後ろにいるの」

バカ！ メアリーさんかオメーは！

とりあえず振り向いた。

すると本当にいるじゃねえか！

「うわあ！ 急に出てくるな！」

「来いよと言うから来てやったのに

その態度は

あんまりじゃないですかねえ」

ナイアは鼻先で笑いながら

手の平を上向きにして

肩まで竦める仕草をきめた。

コイツは俺に対してだけ

こういう態度をとるんだよな。

ホント嫌味な性格してるぜ。

ちなみにこのやり取りを見て

木場は気まずそうではあったが

和やかな笑みを浮かべていた。

まあ、結構優しい奴だから

こんな感じの対応の方が気が楽なんだろうな。

そんな事より今はノアの大洪水だ。

町ごと飲み込まれる前に止めないと！

「よし、行くぞー！」

「どこへ？」

だから何でナイアは俺の言う事に

いちいち茶々を入れるんだよ！

……でも言われてみれば

どこへ向かえばいいのか……！

「では私もお供せねば

なりませんね」

ふんす、と誇らしげに

ニトクリスさんと

何故か仮面を着けた

レイナーレも来た。

何で仮面なんかつけてんだ？

つか初めて会った時と

同じアブねーカッコだし！

「いぢやぶぢやと喧しいですね。

今は少しでも戦力が

欲しいんでしようが」

ツツコミ所も多々あるが

ナイアの言う通りだ。

取り敢えず

俺は素直に感謝の言葉を口にした。

「助かります！」

「礼など不要です」

ニトクリスさんは

少し照れた様子で顔を背けた。

何だかんだで良い人なんだよね。

「ところでさっきの質問だが

一体どこに行けばいいと思う？」

「それは簡単です。

私のシャブティは従者として

杏寿郎の後を追う機能もあります！

故に何処に居ようと

彼の居場所を知る事が出来るのです！」

そう言ってニトクリスさんは右手を掲げると

掌の上に小さな光が現れた。

「これで彼が居る場所が

解る筈ですよ。どうですか？

私の秘術は？」

そう言いながら彼女は得意げに胸を張る。

確かに便利だ。これなら

ノアの洪水が発動する前に

兵藤達の元に着く事も出来る。

「ヒョードー？」

誰ですその人は？」

あ、これはイツセーの事は

知らないってパターンですね……。

いや、今は煉獄さんを追おう……。



「じゃ、行きましよう！」

「はい！」「了解しました」「ええ」

俺達はニトクリスさんの先導の元、  
煉獄さんを追って走り出した。

「

「……………これは……………!？」

ニトクリスさんは

驚愕の声を上げる。

無理もない。

何故なら十字路の辺りで

シャブテイが粉々に砕けていたのだ。

一体誰がこんな事を？

と、考える前に犯人が

自分達から現れた。

「キユクロ……………」

「ひさしぶりだな、きゆうどー」

キユクロが俺達の前に姿を現した。

どうやらコイツが

シャブテイを破壊したらしい。

しかしあのゴツい棍棒みたいな

大剣は何だ？

「ととさまのいいつけだ。」

「ここはおさない」

キユクロは大剣を構えながらこちらを睨む。

「お前もアイツ等の仲間なのか？」

「ととさまはおまえたちのことを

ゆるせないといっている

きゅくろは

ととさまのいうとおりにする。

ととさまがいうには

きゆうどーたちはここでごろせとのことだ」

「待て！ 話し合おう！」

俺達友達だろ！」

俺は必死の説得を試みるが

キユクロは無表情のまま

俺の眼前まで迫る。

「きゅくろはととさまの

めいれいしかうけいれられない」

「うわっ!？」

そしていきなり

俺に斬りかかってきた。

ギリギリでかわすが

路面が陥没どころか

爆発でも起きたかの様に吹き飛んでしまう。

あんなの喰らったら即死間違いなしだ！

「クソッ！ 何でだよ！」

ととさま、ととさまつてよオ！

親父の命令なら友達も殺すのか！

死ねって命令されたら死ぬのか！」

「……」

俺の問いに対し、

キユクロは沈黙を貫いたまま

今度は大剣で薙ぎ払ってきた。

「ぐうー！」

何とかガードしたが衝撃で吹っ飛ばされてしまう。

「黙ってないでなんとか言えよ！」

「……きゅうどーは

きらいじゃない。

でもきゅーどーは

ととさまのじやまをする。

きゅーどーもととさまの

じやまするひともみんなみんなきえるべきだ」

「はあ〜？」

何だよナイアの奴！

横からまた口を挟もうと

しやがって!!

「誰々がそう言った、

こう言った。何ですかそれ？

キユクロさんの考えが

どこにもありませんよね？

貴方は自分の考えも

言えないんですか？

いやあ素晴らしいお人形さん

ですことオホホ」

ナイアは挑発するように言うのと両手を広げ、

呆れたように首を左右に振った。

「だまれ、ととさまのいうことは

ぜつたいなんだ……！」

「はあ、何だか可哀想になつて

来ましたね〜。

貴方その内捨てられますよ。

もつといい玩具が手に入ったから

お前は不要だつて。

このアホの魂を賭けてもいい」

ナイアは俺を指差して更に

キユクロを煽る。

あと、人をアホ扱いするな。

「そんなことありえない！」

ととさまはきゅくろたちを

あいしているんだ！」

「愛している〜。」

まあ、愛してはいるでしょう。

便利な道具として」

「ちがう！」

「違わないですよ。」

ほらよく思い出して下さい。

貴方のお父様の顔を。

まるで感情の無い機械の様な

顔付きをしているではないですか？

それが本当に愛情を持った親の

態度でしょうか？

フツ―娘を褒める時は

笑顔になるものですよ？

公園の家族連れを見た事ない？

あ、そもそも公園に仕事道具を

持っていく鍛冶屋なんて

いるわけねエわなあ！

あははははは!!」

ナイアは腹を抱えて笑う。

「だまれ……！　だまれ……！！

おまえ、いやなやつだ……！！

おまえだけはゆるさない！」

「はっ、許さない？」

だったらどうします？

キュクロさん、

私に勝てるかと本気で思っているんですか？

テメー如きがア？　笑わせんな！

人形如きにやられるナイア様じゃねエんだよ！」

「うるさい！　きえろ！　きえろ！　きえろお！」

もうキュクロの頭は

ナイアを殺さなければ

気が済まないという衝動で一杯だ。

大剣を握り締め、ナイアの方にだけ

攻撃している。

「これは……ナイアさんは

その身を呈して

囿になっているのでしょうか？」

ニトクリスさんの言う通りだ。

恐らく今のキュクロは

完全に冷静さを欠いている。

こんな状態ではいくら強いと言っても

あの馬鹿には勝てないだろう。

しかし……。

アイツ本当唯一無二にして

最悪最低のシスターだよな……。

とにかく俺達は

ナイアを囿にして

先を急ごう……。

↓

そして1キロ位進んだらどうか？

今度はあのはぐれ神父が

待ち伏せしてやがった……！！

「フリード・セルゼン……！！」

「おんやあく？　いつぞやの

人間もどきじゃあくりませんか？

まだ生きてたのオ？」

俺が名前を呼ぶと

はぐれ神父のフリードが

ニヤリと笑いながら現れた。

相変わらずいけ好かない野郎だ。

あと俺は人間だ。

「お前も俺達の邪魔をするのか！」

「あつたりまえよオ！」

俺様は神のご意志のままに動く

敬虔な信徒だからねえ！

俺様の神は

お前みたいなクズ共を

皆殺しにしろって仰ってんだよ！」

何いってんだコイツ？

悪魔祓いの神は唯一神だけだろ？

「おいおい……」

冗談は顔と

品性の無さだけにしてくれよ。

アంత、自分が何言ってるか

分かってんのか？」

「わかっておいでと聞かれれば

当然ですよと答えますよバケモノ君！

神は宇宙（てん）にいます！

カミは我と共に在リイイ

ひゃっはははははははは！！

電波電波電波ア！」

頭を掻き毟り口から泡を零して

フリードは恍惚に浸っている。

ダメだコイツ……。

完全にイカレてる……。

もう会話にならないな。

「ここは僕等が引き受ける。

安里君達は煉獄さんを追ってくれ」

木場が俺とニトクリスさんに

目配せした。

と、言う事は……。

木場はミツテルトとレイナーレの

3人でフリードを相手するって事か。

木場も変わったな。いい意味で。

墮天使と肩を並べて戦うなんてな。

「いいのか？ サタナキア……」

いや、サタナエルは

お前とイザイヤさんの一生を

無茶苦茶にした奴だろ？

お前が直接打ちのめしたいんじゃないのか？」

俺がそう聞くと、

木場の目が少し寂しげになった。

「そうだね。確かに憎んでいるよ。

でも、それは僕だけの問題なんだ。

それに……今なら分かるんだ。

僕の復讐と駒王町の平和、

天秤にかけるまでもない。

あと……

『貴方とイツセー君が

いるでしょ？

私達よりも貴方達の方が

あの外道に吠え面かかせて

くれるでしょうから』

「木場……それにイザイヤさん」

そこまで言われちゃあな。

俺も男だ。やってやるぜ。

あのクソガキ、

サタナキアを半殺しにしてやる。

俺は拳を強く握り締めた。

すると、

「……………」

ニトクリスさんが俺に近づき、

俺の手を優しく握ってきた。

「ニトクリス……さん？」

「……行きましょう、我が盟友。

あの方々の想いを

無駄にはいけない。

彼等の分も私達が頑張らなくては」

ニトクリスさんは真剣な眼差しで俺を見つめている。  
その瞳には一点の曇りも無い。

「ああ、行こう。ニトクリスさん！」

俺はニトクリスさんの手を取り駆け出した。

「おおっとオ！」

なにイチャイチャしてるんですかね

俺つちの前で！

行かせるわけねエだろがア！

死ねエエエエエ!!」

クソツ……！

スピード自慢だけあつて

速い……！

このままじゃ追いつかれる……！

ジャギイイン!!

すると俺達の間为数多の魔剣が

一瞬で精製された。

「うおっ!?!」

『男の嫉妬は見苦しいわよ?』

木場の側に何か守護天使みたいな

イザイヤさんの姿が見える。

そのイザイヤさんと木場が

右手を横に振ると

俺達の行く先に次々と魔剣が生み出されていく。

そしてその度にフリードの動きが鈍くなっていく。

「あああああ！」

つまんねえ！ つまんねえ！

つまんねえ！

テメエらはカスだ！

ゴミだ！ クズだ！



焼却されて当然の残滓共だア！」

フリードは血走った目をしながら

木場達に罵声を浴びせる。見苦しい事この上ない。

「お前も聖剣の因子持ちの癖に

悪魔に加担するのかア！」

「僕達は

自分の意思に従って生きる。

悪魔だろうが何だろうが関係ない！

それがグレモリー眷属であり

魔を祓う騎士としての答えだ！

フリード・セルゼン……

貴様は神の信徒を

語る資格など無い！」

木場はそう叫ぶと

左手を前に突き出した。

すると木場の周囲に

無数の魔剣が出現して

木場の前方に飛んでいく。

「ぐがっ……ぎゃああああ!!」

フリードの無様な叫び声が

俺の後ろから聞こえてきたが

振り向く必要も今はなかった。

↓

「大丈夫ですかニトクリスさん！」

「ええ……平気ですが。」

何故私をこの様な姿で

運ぶ必要があったのですか？」

俺はニトクリスさんの問いに

苦笑いしながら答える。

「いや……だってそんな格好してたら

目立つじゃないっすか……」

俺達は公園を出て  
半分になったシャブティを  
追っていた。

ニトクリスさんを  
お姫様抱っこして。

「そんな格好とは何ですか！

これはフアラオとして在るべき

正装として……」

ニトクリスさんが話し終える前に  
何やらぞわりとする感覚が  
背中に走る。

「我が盟友。

どうやら私達は異界化した

空間に入り込んだ様ですね。

戦闘の準備を！」

すつとニトクリスさんは

俺から離れて杖を構える。

すると、目の前に

巨大な扉が現れた。

「これって……」

冥界の門……か？」

俺がそう呟いた瞬間、

煉獄さんが降りてきた。

待っていてくれたのだろうか？

「煉獄さん！」

「来てくれたか！

安里！ それにニトクリス！」

「私はフアラオなのですが……」

何故呼び捨てに？」

「細かい事は

気にしない方がいいですよ。

特に煉獄さんを相手にする時は」

俺は苦笑しながら

ニトクリスさんと煉獄さんを見る。

「そうだな！ 今は火急の時！」

議論は後だ！」

「……分かりました」

煉獄さんはいつもの調子で

言い切るのでニトクリスさんは

折れたようだ。

「しかし

この門はまるで開く気配がない！

俺の日輪刀を以てしても

傷一つ付かないのだ！ よもやよもやだ！」

確かに……

さつきから押ししたり引いたり

叩いたり撃つたり色々試しているのだが、

ビクともしなかった。

すると、ニトクリスさんが

門の前まで歩いて行き、

何やら鏡を展開し始めた。

「ニトクリスさん!?!」

「ここは死者の国。

死は隣人。

死とは生者への最大の敬意。

ならばこそ、死は全ての生命に平等であるべき。

死を恐れるな。

死を受け入れよ。

死を敬え。

死を尊べ。

死の国へと続く道は開かれん」

そう言つてニトクリスさんは  
詠唱を始める。

すると鏡から数多の死霊が  
飛び出すと門をこじ開けた！

「ニトクリスさん！」

「うむ！ 流石だな！」

俺には真似の出来ぬ秘術だ！」

「いえ……」

それほどでもありませんよ」

ニトクリスさんは照れ臭そうにしている中

そして俺達は門の中へ……

ズガガガガッ！！

凄まじい轟音と共に

地面が抉られ、土煙が上がる！

今度は何だよ！

邪魔者が多すぎるんだよ！

「キュクロとフリードは

しくじったか……」

つくづく使えん……」

期待した我が愚かだったか……」

射線上を見上げると

車椅子に座るミイラ男が

青銅色のデカイロボの掌で

眩いていた。

手の乗せる台を

カリカリ引っ掻いている辺り

イラついている事が分かる。

「おい、キュクロは

お前の娘みたいなモンだろ？

もう少し言い方があるだろう！」

「バカバカしい……」

血など水に不純物が幾らか  
混ざっただけのモノだろう。  
目的を果たせないなら  
只の役立たずだ」

『顕色』を使わなくても

口調と態度で

はつきり解っちゃまった。

このクソジジイは本心で

言ってるやがるんだ！

ナイア……癩だが

お前が正解だったぜ……。

「成程。御老体。

貴公と我々との間では

埋めようのない思想の隔たりが

有るようだな」

心なしか煉獄さんの

声のトーンが低い。

煉獄さんが怒っているんだ。

「行くぞ、安里、ニトクリス！

『鬼退治』だ！」

「ええ！」

「はい！」

俺達は各々の武器を構えて

臨戦態勢に入る。

「愚か者が。

貴様達がこの神工神滅具

『制動の巨神』（タロス）」に

勝てると思ってるのか？」

「思ってるよー！ クソジジイ！」

「ほう……。」

俺の言葉に感嘆の声を漏らす

ミイラ男……

もとい神工神滅具所有者。

ソイツの名前とキククロへの態度で

テメーの正体も本性も大体解った。

「ならばその

愚行を後悔させてやろう。

消えろ！ 凶星に産み落とされた

逸脱者よ！ それと手を組んだ

異端者共よ！」

奴がそう言うと、

機械仕掛けの神が

瞳を輝かせて動き出す。

今更そんな虚仮威しでビビるかよ！

## 第25話

「ぐがっ……ぎゃあああー！」

フリードの全身に木場と

イザイヤにより創造された数多の魔剣が  
突き刺さる。

炎、氷、旋風、雷撃……。

あらゆる属性の剣をその身に受けて

フリードはまるで

人形かめ組の纏のように

宙で踊らされていた……！

「大口叩いた割には

あっさりツスね。

いや、木場さんとイザイヤさんが

強すぎただけツスカねえ」

ミッテルトは勝利を確信したのだろう。

木場のほうを見て余裕たつぷりに

微笑んだ……だが――

次の瞬間！

ザシュツ！

「……!?!」

背後から鎖骨辺りを

刺されたミッテルトも

木場、イザイヤ、レイナーレも

あまりに突然

の出来事に一瞬呆然となる……。

そして――

「あくあ、俺たちのコートに

きつたねえ墮天使の血が

ついちまいましたよ……。

どうしてくれんだよ……！ なあ！」

そこに立っていたのは、  
フリード・セルゼンではないか！  
そう、木場たちが倒したはずの  
フリードが、

今、確かにそこに立っているのだ！

その形相は加虐の歡びに  
満ち満ちて、

反吐が出そうな位に

悍ましく、身の毛のよだつ

凶相であった。

(幻術か!?)

(まさか!?! バカな!?!)

「おいおい、もう忘れちゃったんですかい？

俺っちが悪魔祓い以外にも

使えるもんがあるってことを……？

あ、話してなかったね♪

御免なすつてえ〜♪」

バキッ！ ビシヤッ！

ミッテルトをまるで空き缶の様に

蹴飛ばすと彼の周囲に鮮血が

飛び散った。

「いぶふう……!!」

地面に転げ落ちるミッテルト

の肩口は大きく裂けて、

抉れていた。

只の剣による裂傷ではないのは

明白だ。

「ああん？ まだ生きてたのかよオ〜？」

フリードは虫けらを潰すような

目つきでミッテルトを見下ろす。

更にその口は嘲笑を浮かべていた。



「馬鹿な……。」

あの攻撃でお前は  
完全に死んだはずだ……。」

確かに先程まで木場の魔剣に貫かれた  
フリードの死体はある。

しかし同時に無傷のフリードが  
視線の先には存在しているのだ！

驚愕する木場の言葉に

フリードはニタリと笑う。

「へえ、この程度で

勝ったつもりになってくれちゃったわけですか？

甘いはず！ 甘すぎますぜ!!

マツ○スコーヒーだって

もうちよつとホロ苦いって

もんですぜえ！ ヒハハハハハハ！」

フリードは不気味に笑った。

どうやら隠している切り札があるのは

木場達だけではないようだ。

『……どうやら何か

秘密があるようですね。

一体何を使ったのです？』

イザイヤが

油断なく構えながら訊ねると

フリードは待ってましたとばかりにニタリと笑う。

「フツ……教えてあげましょう。

俺っちが使ったのは、これだ！

テツテレく♪」

まるでどこかの猫型ロボットが

ひみつ道具を取り出す様な効果音を

口ずさむや、何とフリードが

二人になったではないか！

『……これは！』

「ま、マジツスか!？」

3人の驚きの声が重なった。

「驚いたようだねエー！

これが俺つちがボスより賜った

分身能力って奴さ！

ヤバくね？ マジヤバくねえ？」

勝ち誇るフリード・セルゼン。

だが、そんな彼に

イザイヤが静かに言う。

『そうね。』

でもあなた自身は

大した力は

持っていないようですね』

「ああん？」

フリードは眉間にシワを寄せたが

すぐに道化じみた笑顔を見せた。

「そう思うさんしよ？」

けど今なら

ノアの洪水キャンペーン中に

つき同じフリードさんを

もう二人おつけします！」

「ええ、そんなに安くて

いいんですかあ〜!？」

「さらにさらにいー！

車椅子の旦那が作ってくれた

『透明の聖剣』『夢幻の聖剣』

『天閃の聖剣』『擬態の聖剣』の

セットまで！（※本製品は

レプリカです）」

「なんとお！ 悪魔祓い師の必需品ですぞこれはー！」

何と異様な光景だろうか。

あのフリードが四人に増えて更に通販番組さながらの小芝居まで行っている。

しかもそれぞれが握っている剣のデザインがどれも違う。

「7種の聖剣……!?!」

木場の身体に緊張が走る。

あの悪魔、堕天使に特効を持つ

7つの聖剣の内4つが

フリードとその分身たちの

手に握られているのだ！

「クツ……厄介な事になったな」

木場が呟いたその時――

「ニヒヤツハー！」

とりま死んどけやア!」

フリードの分身たちが一斉に襲いかかってきた！  
どれもこれもが人格はともかく

一線級の殺戮者である。

「チィー」

木場は舌打ちすると、

手に持つ魔剣をフリードに向けて

振り払うが……!!

「なーにがチィだよ！」

鳴き麻雀かあ！ テメーはよお！」

「関西麻雀は完先だからさア！」

その手親チョンだよお!!」

フリードと2体の分身が

怒濤の勢いで攻め立てる！

「ぐっ……！ この……！」

木場は歯噛みしながらも、  
何とか応戦するが、

自身を高速化させる

天閃の聖剣と

様々な角度から敵を攻撃する

擬態の聖剣の相性は各別。

多角的攻撃に苦戦する木場。

「クソッ！ このままでは……！」

『落ち着いて祐斗！』

私が貴方の目になるから……！」

焦りを見せる木場に対し、

彼を落ち着かせるように

声をかけるイザイヤ。

その言葉の通り、

彼女の霊力を借りる事によって

フリードの攻撃をある程度はかわせるようになった。

だが……反撃の糸口は未だ

掴めずにいた。

「やあやあ、元雇い主の

レイナーレさんお元気でしたあ？」

「ええ……。」

あなたも生きていたとは

思わなかったわ」

「ええ、ええ、俺たちですよ。

仮面キャラになってまで

しぶとく生き残ってたなんて

思いませんでしたよぉ？

っーかぶっちやけ聖女の微笑みを

得た所でアザゼルの野郎が

アンタに振り向くって

ホントに思ってたん？

ヤツベヤツベ！

笑いすぎて腹イタアイ！

しかも文字通り頭隠して

尻隠さずそのまんまのそのカツコ！

マジサイコー！」

「黙れ！・ 貴様があの御方と

賜った戦闘服を愚弄するなっ！」

どうやらレイナーレは格好を馬鹿にされた事が

気に障ったらしい。

まるで戦士のように吠えるが

フリードは剽げた態度を崩さない。

「ああん？ 何言ってるの？」

そんなエロいだけのコスプレまがいの衣装が

人工神器とかマジあり得ねえし〜！」

「ほぎけー！」

レイナーレは光の大鎌を振るい、

フリードのよく回る舌を顎ごと

切り飛ばそうとしたが……！！

『止めろよレイナーレ。』

お前には悪い事をしちまった。

本当にすまない』

まるで時間が停止したように

レイナーレの大鎌が止まる。

無理もないことだ。

堕天使総督アザゼルが

真剣な表情を浮かべて、

彼女に詫びの言葉を口に行っているのだから。

「そ、そんな……！！！」

アザゼルさまが私に謝るだなんて!?!」

『ああ。だが俺は決めたんだ。』

もう二度と

部下を見捨てたりしない。

今度こそ皆を守ってみせると』

「ああ……アザゼルさまあー！」

『という訳で今からでも遅くない。

俺の所に帰ってこい』

「はいー…喜んでー！」

大喜びでアザゼルのもとへ

帰ろうとするレイナーレ。

やはり産み直された身であつても畏敬や私淑は  
消え去るものではない。

だが……！

『ヒヤツハハハハアア！

ウソに決まってるだろ

このバカアママア！

ホントに

ノー味噌入ってるのか!?!』

「……!?!? ぐがっ……!?!」

突如アザゼルの人相が変わると

その胸元に深々と

聖剣が突き刺さる！

墮天使すらも打ち払う聖剣は

レイナーレの胸を違う意味で

焦がしていく。

「夢幻の聖剣による幻覚だよ！

このマヌケがああ！

こんな使い古された手に

引っかかるとか

BB A何年生まれ?」

「き……さま……!?!? よくも……!?!」

仮面の下にて

憤怒に満ちた形相で

フリードを睨むレイナーレに

フリードは舌を出しながら言う。

「テメーの

その面が見たかつたんだよ！

そのジュンジョーを踏み躪られた

悔しそうな顔がなあ！

テメーみたいなカスのクズ女が

俺に勝てるワケねーじゃん！

マジウけるうー！

テメーは一生

ゴキブリみてーに

這いつくばってるや！」

フリードの多段切りにより

レイナーレの羽根が切り裂かれ、

地面に叩きつけられる。

「ぐはっ……！……う、ぐ……」

「さあ、さあ、さあー！

泣いて命乞いしろよ！

そしたら墮天使ダルマジやなくて

首チョンパで楽に殺してやるぜ？

ま、どっちみち死ぬんだけどネ！」

「く……く……」

仮面の下からレイナーレの

声が漏れていた。

嗚咽かはたまた呪詛か。

どのみちフリードの加虐嗜好を

大いに満たすことには変わりなく

つい聞き耳を立てる。

「……くく……くくくく……」

レイナーレは笑っていた。

フリードの嘲笑を受けてなお、  
その声は止まらない。

「アーハッハハハ!!」

何笑ってやがんのお!

ついに頭おかしくなった?

それとも怖くて気が触れちゃった?

マジキモいんですけどお? ……ん?」

フリードは鼻をしかめた。

周囲に立ち込める悪臭のためだ。

排泄物、吐瀉物、腐肉を

煮詰めて凝縮した様な

匂いが辺りに立ち込めている。

しかも燻した様な煙まで

羽根が生み出した鋭角の

魔法陣から放たれている。

「……ああん? ……なんだあ?」

この臭いのはよオ? クソか?

クソでも漏らしやがったか?

ゲロの次はクソかよ!

マジあり得ねえわ!

これだから下品なメス墮天使は!」

「……………」

「あれれえ〜? ……なんか言ってみろよ!

まさか本当に糞を漏らしたん

じゃあないだろうねえ〜?」

「……………」

「チツ……無視かよ!

まあ、いいや。

テメーの愛するアザゼル様の

姿で葬ってやらあ!」

夢幻の聖剣により再び



アザゼルの姿へと変貌した  
フリードはその凶刃を  
振るわんとする。

が……フリードの手首より  
下がなくなっていた。

まるで噛み砕かれたかの様に  
ギザギザの断面を残すのみ。

『ぎやああああ!!』

お、俺の腕がああああ!!』

ドボドボと赤黒い血が

切断面から流れ出る。

フリードが腕を押さえつつ

振り返るとそこには

「うまい、うまい。

せいなるかな。せいなるかな」

いつの間にか何かがいた。

霧に塗れたひどく穢らわしい何か。

獣とも人ともつかないソレは

フリードの夢幻の聖剣を

手首ごと噛みちぎっていたのだ。

「あくまはらい、せいなるかな。

うまいうまい」

そしてその異形はフリードの足に

飛びかかる。

『ひいっ!? やめっ!?』

バクンツ! と音がして

フリードの膝から下が噛みちぎられた。

『い、痛え!・痛え!・痛え!』

あまりの激痛に絶叫するフリード。

だが彼の不幸はここからだ。

「ほしい、ほしい。

もつとくわせる。せいなるかな」  
「うまいうまい。」

よこせよこせ」

見た者は恐らく目を背けるか、  
心弱い者は卒倒するか

小間物屋を広げるだろう光景だ。

鋭角の噛み傷から

おぞましきモノたちが

産道を抜ける赤子の様に

溢れ出していく。

『な、何だよコレはあ!?!』

片手と片足を失つては

逃げることも叶わず

異形のモノたちにフリードはあつさりど

囲まれる。まるで仔羊の様に震え

失禁までしていた。

「美味そう。うまそう。」

いただきます。いただきます

せいなるかな、せいなるかな」

「いただいてあげる。」

わたしたちで、くつてあげる。

せいなるかな、せいなるかな」

口々に言いながらフリードの

身体に食らいつく異形の者たち。

レイナーレは仮面を外して

無表情で謝肉祭の惨劇を

見つめている。

「聖剣使いの因子……。」

光の墮天使の権能……。

不浄より生まれ清浄を求める

そいつ等にすればアンタは

「この上ない御馳走でしようね……」

『ぎゃあああああ……！』

イダ……イダイツ！

たず……たずげ……!?

だすげべべ……』

「たべたい。たべたい。

おいしくたべるから。

いただきます。いただきます」

「ごちそうさま。せいなるかな。

せいなるかな。おいしいおいしい。

たのしかった。たのしい」

レイナーレはただ黙って見届ける。

尤もそれはフリードへの

黙祷でも哀悼の意を表する

ものではなかった。

（あの方の似姿と声で断末魔を

聞かせてくるとは……

最期まで下衆な男だったわ）

レイナーレは再度装着した仮面の下から

一筋の涙を流す。

彼女の瞳にはアザゼルの

偽者の姿の残骸が映っていた。

↓

「うっわマジか……。

えげつねえ技持つてるわく。

流石元上司！」

自身の分身が喰われたというのに

ミッテルトを相手にする

フリードは余裕の表情だ。

ミッテルトは肩口を抉られ

半死の状態である故か。

あるいは既にその精神は  
狂気に蝕まれていたためだろうか。

いや、彼の『透明の聖剣』は  
自身を不可視の存在にする。

つまり彼自身が周囲の風景と同化し、  
姿を隠すことができるのだ。

一方的に相手を打ちのめす快感に  
酔いしれるフリードは

好き勝手にミッテルトへと  
斬撃を加える。

ミッテルトも反撃を試みるが、  
不可視の存在

となったフリードを捉えられずにいた。  
フリードの剣がミッテルトの

脇腹を切り裂き鮮血が舞う。  
「ぐっ！」

「アーハッハ！」

俺様強靱！ 俺様無敵！ 俺様最強！  
テメーら雑魚なんて相手にならねえよ！」

『透明の聖剣』による

一方的な戦い、いや狩りに  
フリードは大喜びだ。

フリードは高笑いしながら  
「さて、次はどこを

切り刻んじやおっかなあ〜？」  
と獲物を前に舌舐めずりまでする有様だ。

フリードは『透明の聖剣』を振るい、  
辺りを滅多斬りにしていく。

その猛攻を受けたミッテルトの悲鳴が上がる。  
「きゃあああああ!!」

「アーツハッハ！」

良い声で泣きやがるぜ！

俺様ちゃんに恐怖したか？ ん？」

フリードは調子に乗って更に

『透明の聖剣』を振るい続ける。

「おらおら！ どうした！

逃げてばつかじゃあ勝てねーぞ！

おらおらおらおら！」

フリードが振り回す

『透明の聖剣』が、

ミッテルトを何度も打ち据え、

血飛沫と肉片が宙を舞った。

「ぐっ……」

ミッテルトは遂に近くの

大木へと背中を預ける。

「おやおやあ〜？

クソビツチのクソ墮天使にしては

頭が回るねえ？

後ろや横をカバーすれば

前からしか攻撃できないから

カウンターでワンチャンって？

ヒヤハハハハハハ！

いいぜ、

乗ってやるよクソビツチ！

テメーの小汚え光の槍と

麗しく清い聖剣の一撃、

どっちが早いかなあ!？」

と、口では言うがフリードは

勝負に乗る気など初めからない。

(ギャハハハハ！ バカが！

俺様の剣技でその程度の本が

切れねーなんて

思ってたんのかよ!?

ヒヒッ……! 大木ごと真つ二つに

なった時のコイツのツラが

見ものだぜ……!

驚愕するか、絶望するかなあ!?)

フリードは勝ち誇って笑う。

そして彼は『透明の聖剣』を

大きく横薙ぎに振る態勢に構えた。

「オラアッ! 死ねや! 墮天……!」

フツ……シユオオオオン!!

音を置き去りにした斬撃の後

ジェット気流の如き一陣の風が舞い、

フリードは

辺りの木々ごと

真一文字に切り裂かれていた。

(な……何だこりゃああ!?)

自分の身に何が起きたか理解できない。

彼の表情は驚愕に満ちていた。

見上げた先には

ミッテルトの姿があるが、

背丈、肉付ともに

先程までの彼女とはまるで違う。

レイナーレと遜色ない程に

体は成長しているだけでなく

彼女の肌は褐色に染まっており、

両翼も闇色に染められている。

さらに全身からは

ドス黒いオーラが溢れている。

「これは……一体……!?!」

ヒュゴッ! グシヤッ!!

力量差に絶望した彼の顔は

まるで圧搾機に処理される  
野菜屑の様に踏み潰された。

「散々うちに

フカシてくれたじゃないスカ……

このクソ神父……！」

姿を保つ事が限界だったのか

すぐに元の姿に戻ったミツテルトは

切り株にもたれかかり溜息を

漏らしていた。

「ふう……」。

あー、しんどっ。

にしてもあの野郎、

うちの事馬鹿にしすぎっしょ……。

まあでもおかげで少しだけ

『禁手化』に近づけたツスけど……」

ー

そして木場と二人の

フリードとの戦いは続いていた。

フリードはそれぞれ

『天閃の聖剣』、『擬態の聖剣』を

駆使して木場とイザイヤを

追い詰める。

しかも戦況は圧倒的にフリードが有利であった。

『天閃の聖剣』の刃が煌めき、閃光の如く斬りかかる。

「くっ！」

「甘いんだよー。アメイジングだよ！

クソガキィ！」

フリードの聖剣を辛うじてかわすものの、

もう一人のフリードの

『擬態の聖剣』の螺旋状になった

刀身が木場の腹部に突き刺さる。

「ぐあっ！」

「アーハッハー！　まずは一人いく!!」

木場は腹を押さえて膝を突いた。

フリードは嘲笑いながら

『擬態の聖剣』を引き抜こうと

したが……。

「アレ？　何だ抜けねえ……？？」

コラコライケメンちゃん？

聖剣はクソゴミ

悪魔に毒ですよオ？

ペーッてしなさい！

ペーッつてえ！」

フリードは『擬態の聖剣』が

木場の体から抜けずに困惑する。

「チッ！　面倒クセエ！」

オイテメエ！　さっさと死ね！」

だが、『天閃の聖剣』も木場の体に

吸い込まれていく。

更には主を一時失った『夢幻の聖剣』、

『不可視の聖剣』までもがだ。

「おいおいおい！」

マジックショーですかあ!？」

流石のフリード達も困惑を

隠せずにいた。

すると木場の双眸から

涙が溢れ出る……。

無論だが痛みによるものではない。

「ずっと……思っていたんだ。

僕達が……私達が生きていて

いいのかって……」

「懺悔室じゃねーんですけど



「ココはあ!?!」

木場とイザイヤの独白に

フリードは嫌悪感を露わにしながら発砲した。

しかし木場達にその凶弾すらも

吸収されていく。

「僕よりも夢を持った子がいた」

「私よりも生きたかった子がいた」

「聖剣の因子も神の救いも

関係ない人間の子だった」

『僕らでは一人では駄目だった』

『私達だけでは

因子が足りなかった』

歌が聞こえる。

卑賤も高貴も、墮天使も悪魔もなく

全てを救うかの様な美しい歌声。

『聖剣を受け入れるんだ』

『怖くなんてない』

『神がいなくても』

『神が見ていなくても』

『僕たちの心はいつだって……』

「ひとつだ」

木場とイザイヤが光に包まれ、

その姿が一つになる。

その姿はイザイヤの麗しさと

木場の精悍さを併せ持つ

天上の大天使か戦女神を思わせた。

そしてその手に一本の剣が宿る。

「これは……?」

『神が死んで、悪魔が去っても』

『僕らの道は終わらない』

『生きていく限り、道は続く』

『運命なんて関係ない』

『道は自分達で切り拓くモノ』

『だから恐れず進もう!』

「おいおいおいおい!」

何だよそりゃあ!

何だよそりゃあ!!

レプリカとはいえ聖剣だぞ!?

融合したら

街が消し飛ぶんじゃねーのか!?

パニック寸前のフリードたちは

すぐにでも逃げ出そうとした。

だがその背後にはフリードたちの

見知らぬ青年の姿がある。

紫陽花の様な髪型に

虹色の瞳を持つ静かながら

威容を放つ青年だ。

「どうやら鍵の一つが

生まれた様だね。

これで滅びの未来はまた遠ざかる。

喜ばしい事だ」

解らない。

フリードたちには

眼前に現れた聖と魔が

融合した究極の聖魔剣も

青年の言動の真意も。

だが確実な敗北と死が

迫っている事はわかる。

「冥府の狭間にて

『禍津星』に伝えるといい。

凶星に魅入られた小さきものよ。

彼らの命の輝きがある限り

滅びの未来は訪れないと」

はつきりと宣戦布告をするかのように

青年は言った。

しかしフリードにメッセンジャーになる

義理などはない。

「バカが！」

死んでたまるか！

俺は死なねえ！

死ぬわけがねえ！

俺は『禍津星』に選ばれたんだ！

特別なんだよ！

だからテメエらは……！！

消えろおおお！！」

フリードたちは最後の抵抗と

ばかりに特攻を試みたが

木場はすらり、と剣を構えた。

『福音呼びし勝鬨の剣！！』

(コール・ブランド)』

木場が振るうのは

聖剣に魔の力が融合したことによる

原初の宝剣。

斬撃は透明による不可視。

軌道は夢幻による縦横。

段数は擬態による千撃。

その速さは天閃による刹那。

更に数多の魔剣の力が備わった事による

多重の属性攻撃。

今、木場祐斗とイザイヤは

融合を果たす事による

『聖魔剣』の素養に

目覚めたのだ。

フリード達は知る由もない。

何故ならその圧倒的な

斬撃の嵐は彼らの肉体を

塵と化していったからだ。

「やったッスね！」

「……どうやら貴方も

至ったようね。

アザゼル様が昔仰っていた

『禁手化』に」

称賛の言葉と共にフラフラながらも

木場のもとへと歩み寄る

ミッテルトと木場を

後方にて支えるレイナーレ。

3人の目の前ではフリード達が

光の粒子となって消滅していく。

だが木場はそんな光景を

見ても表情を変えない。

何故ならまだ二人の黒幕が

残っている。

サタナキア、

もといサタナエルとコカビエル。

この二人だけはフリード達の

様にはいかないだろう。

それでも木場達は進む。

死ぬのではなく生きるために。

↓

「所でコイツらは……？」

「いや、それが戻し方までは

教わってないのよ……」

穢れし靄に包まれた

おぞましきモノたちであったが。

「ああ、だめだ。だめだ。」

「まるいものはだめだ！」

「おまえたちははげがれている。」

「いやだ、いやだ、もうかえる」

「おっぱいこわい、かえる」

「かえろうぜ、おれたちのくにへ」

好き勝手な事を言いながら

それ等は靄と共に消え去って

いった。

「泣いていいスか？」

「泣いていいかしら？」

「泣かないでくれ……。」

僕達まで泣きそうになるから……。」

「……………グスっ」

木場、ミツテルト、レイナーレの

3人は涙目になりつつ

歩き始めるのであったとき。

## 第26話

制動の巨神はまるで咆哮の様に  
齒車を軋ませた。

途端に巻き起こるのは、

大地が爆ぜる様な震動と暴風。

それはさながら

天変地異にも等しいものであった。

「ただ動いているだけで

攻撃になるっていうのかよ……!!」

踏ん張りながらも安里は

忌々しげに齒噛みした。

その言葉通り、巨大な質量を持つ

機動兵器はただ動くという事が

それ即ち攻撃手段となるのだ。

質量差があまりにもありすぎる!

「くそっ!」

どうすりゃいいんだよ!？」

「落ち着け安里!」

どのような名機であろうと

足を挫けば動けなくなる筈!」

煉獄は安里にそう言う

自ら制動の巨神へと駆け出す。

その速さは尋常ではない。

疾風の様な速度を以てして

瞬く間に巨神の足元へ到達する。

ひゅうう、と息吹を吐き出すと

彼は腰に差した日輪刀を

居合の要領にて抜き打ちに

振り抜く。

「炎の呼吸、壱の型『不知火』!」

刃より放たれたのは  
火炎を思わせる程の  
高熱を帯びた斬撃。

それは見事に

巨神の脚部へと命中し傷跡を残す。  
筈であった。

「妙な……！」

これは、妖術か!？」

何と制動の巨神に日輪刀の刃が  
迫ろうとした時、

不思議な力で弾かれたのだ!

しかし煉獄は一度切りで挫ける  
やわな男ではない。

反動を利用して第二撃を放つ。

「式の型、『昇り炎天』！」

今度は下方から上方に向けて  
斬り上げる様に放つ技だ。

これまた狙い変わらず命中するも

やはり結果は同じである。

しかし煉獄はその事実をまるで  
気にする事無く第三撃を放った。

「参の型『気焰万丈』！」

その名の通り、

激しく燃え盛る炎の如く  
力強い踏み込みからの

渾身の一撃だ。

これならば流石に効いただろうと  
安里とニトクリスも思ったのだが……。  
またしても刃は阻まれてしまった。

「ぬう……！」

これには流石の煉獄も

驚きを隠せない。

一体どんな仕組みなのか？

表情は変わらぬも、

内心では

動揺している様子だった。

そんな彼に対して制動の巨神は

齒車を鳴らすと、無造作に

近くの木々を掴んで持ち上げると

それを軽々と投げつけてきた。

軽々とは言っても

駒王町の豊かな自然が育んだ

巨木たちだ。まともに喰らえば

大怪我どころではなく

下手をすれば命を落としかねない。

だが、それ故に読みやすい。

「ふむ、単純な力比べなら望む所！」

煉獄は再び地を蹴って

加速すると次々と飛んでくる大木たちを

何と石段を駆け上がるかの様に

跳躍しながら避けていく。

そしてそのまま巨神の

掌へ辿り着くと、

日輪刀を構えて迎撃に出た。

「肆の型『盛炎のうねり』！」

轟く様な叫びと共に

日輪刀を振るった刹那、

炎が巻き起こる。

それはまるで生き物のように

渦を巻き、掌に乗っていた

車椅子の男へと迫る！

しかし、男の口元はニタリ、と



歪み狼狽や恐怖はまるでない。  
寧ろ余裕すら感じさせるものだ。  
果たして、日輪刀から発せられた  
炎の斬気すら制動の巨神の結界は  
阻んでしまったのだ！

(なんとという堅牢さ……！)

さしもの百戦錬磨の煉獄杏寿郎とて  
内心舌を巻く。

刹那、巨神の片手がまるで  
蠅でも追い払うかの様に振られた。  
途端、煉獄は  
弾き飛ばされてしまう。

「ぐっ……!?!」

咄嗟に身を捻るも回避は叶わず、  
彼の身体は地へと  
叩き落されようとしていた。

咄嗟に安里は

『燃える三眼』の武態により

両腕を触手と変えて、  
ネット状に展開することで  
彼を受け止めた。

「大丈夫ですか!?!」

「ああ、助かったぞ安里！」

そう言いながら二人は  
同時に体勢を立て直す。

「しかし俺の斬気すら阻む

結界とはな……。

俺も未だ修行の足りぬ身！

汗顔の至りだ！」

表情は崩さぬが煉獄の言葉には  
悔しさが滲んでいる。

それを感じ取ったのか、  
男は楽しげに笑い声を上げた。  
まるで嘲笑うかの様な響きを持った  
不快なものではあったが。

「コラッ！ ミイラジジイ！

デカブツの掌に乗って

いい気になるな！

降りて勝負しやがれ!!」

いかんせん挑発にしては

安里の言葉は魂胆が

見え透いていた。

勿論、それは男にも

わかっている事だろう。

案の定、彼は再び侮蔑に満ちた

笑みを浮かべると

制動の巨神に命じ

巨大な拳を振り上げさせた。

当然、その標的は……。

安里達である。

ドゴオン！ と、

爆音を立てて振り降ろされ、

その熱波で先に投げ捨てられた

木々が発火する有様であった。

しかし、安里達は無事だ。

何故ならば、先程まで

彼が立っていた場所にはニトクリスの張った

結界が展開されているからだ。

「恩に着る！」

「お礼は後で構いません！」

それよりも、この怪物は……」

「うむ、妖術の類ではない！」

恐らくこれは何らかの機械仕掛けによるもの！  
故に、動力源を断つのが肝要だろう！

安里！ 君の力で

奴の動きを止めてくれ！」

止めてくれ！ とは気軽に言うが

あの巨体を相手にするのは

簡単ではないだろう。

と安里は天を仰ぐ。

彼の見立てでは

制動の巨神は

全長50メートルは下らない。

しかも、巨神はただ

止まっている訳ではない。

あれだけの重量があるにも

関わらず一歩ずつ前進して来ているのだ。

このまま進めば数分と経たずに

此処に辿り着くのは

自明の理である。

「わかりました！」

やってみます！」

しかし、安里も覚悟を決めた。

ここで自分が踏ん張らなければ

多くの命が失われてしまう。

それだけは避けなければならない。

（燃える三眼……『顕色』！）

ギョロリ、と彼の触手と

化した右腕から瞳が現れ

その虹彩が赤く輝く。

（幾ら何だってあの

無敵バリアが

いつでもどこでも

発揮されている

筈はねえ………!

どこかに継ぎ目が有るはずだ………!)

安里は全身全霊の力を込めながら

制動の巨神の結界を解析した。

そして遂に

弱点を見抜くことに成功する。

「そこかあっ!!」

刹那、安里の右腕が

一際大きく膨張すると

そこから放たれたのは

体内で精製された榴弾だ。

砲弾は一直線に飛翔すると、

結界の繋ぎ目へと直撃し、

そこにヒビを生じさせた。

「今ですー!」

「承知!」

煉獄は日輪刀を構えながら疾走し、

制動の巨神の足下へ潜り込むとその臍を切断した。

「よっしゃあ!!」

流石煉獄さん!

これであのデカブツは

伝承通りなら御陀仏だぜ!!」

と、思わずガッツポーズを取る

安里であった。

制動の巨神、タロス

は伝承通りならば

歩行不能どころかそこから

破壊された筈だ。

ところが、だ。

「くく………くつくつく………」

車椅子の男は愉快そうに笑うと  
車椅子の腕置き場を

バンバンと上機嫌に叩いた。

「馬鹿め！・ 馬鹿め!!・ 馬鹿め!!!

この錬鉄の神にして『窯』の

権能を呑み込んだこの

へパイストスが弱点を

そのままにしておく

思っていたのか!?!」

「なんだって!?!」

驚愕する安里の前で

巨神の右足が修復されていく。

「この巨人はな！

我が権能による産物なのだ！

故に、その構造など

手に取るようにわかるし

復元など容易い！

貴様らの浅知恵ごときで

この私を倒せると言うてか！

愚物どもが！」

そう言つて高笑いをする。

しかも真名まで明かしてだ。

つまり安里達に対する

必殺の自信の現れでもある。

「何と……それでは

倒しようがないではありませんか！」

ニトクリスもこれには

驚きを隠せない。

しかし、傍らの

安里は一方でこうも思った。

(それなら何でサタナキアや

コカビエルと組んだり、  
キユクロやフリードを

足止めに使う必要などある？

何か隠してやがるのか？)

その疑念が浮かぶと同時に

彼は再び制動の巨神を観察した。

(…………… よく見ると……………コイツ……………)

改めて『顕色』を発動し、

過去の映像と比較する。

そこで安里は

一つの可能性を見出した。

(やっぱり、そうだ……………！)

よく見るとコイツ……………！)

「どうするのです我が盟友！

杏寿郎！

退くにしても進むにしても

そろそろ決断しなければ！」

「うむ、確かにな！… だが、

この怪物を放置すれば

イツセー達が挟み打ちとなる！

如何に赤龍帝と言えども

三者を一度に相手取るというのは

至難の業だろう！」

「私とて未熟なれど

フアラオなれば、

その程度解つてはいます……………」

ニトクリスは俯き、肩を震わせた。

この状況を打破するには

力が足りない。

しかしその時、安里が口を開く。

「飽くまで俺の読みなんです

……分の悪い賭けなんすけど  
付き合ってくださいますか？」

そう言うのと安里は

自らの仮説を語り始め、

煉獄とニトクリスは

黙って彼の説を聞き入れた。

「いいだろう！

俺は元々死んだ身の上！

君の策に乗ろう！

安里！ ニトクリス！

命を燃やす時が来た！」

「死してもあるべき所に

戻るだけの事ならば」

そして、二人は揃って

首を縦に振った。

二人の反応を見て、

安里は満足げに微笑んだ。

その表情には

微塵も諦めの色はない。

その瞳は勝利への

渴望に燃えていた。

「行くぞ!!」

そして三人は同時に

巨神へと総攻撃をかけた。

「愚劣なり！

愚鈍なり！

愚物なりいっ!!」

へパイストスは更に笑みを

深めながら高らかに叫ぶが今更

怯む安里たちではない。

「今一度教えてくれよう！」

我が権能の恐るべき力！

『モロクの大窯』を！」

「それは

もうわかつているんだよタコ！」

安里は制動の巨神の左足に

ありつたけの榴弾を

両手両足を砲台にして叩き込む。

制動の巨神の足元が火の海

に包まれるが、それでも巨神の

歩みは止まらない。

「無駄だあつ！」

この巨神の

足を止めることなど

できぬわあ!!」

制動の巨神の目が光ると

何と紅色の熱線が放たれた。

「くうッ!」

「あぢやああああつ!」

安里とニトクリスは回避を

試みるが、シャブテイを防御壁に

したニトクリスはともかく

両足まで砲台に武装していた安里は

完全に避けきれずに被弾してしまう。

「ぐあああつ!」

「くくく……い… 無様な姿だな！」

やはり貴様らは所詮はその程度の存在よ！

我が権能の前にはいかなる攻撃も無意味！

故に、この巨神を止める術はないのだ！」

車椅子の男は高笑いしながら

再び車椅子の腕置きを



バンバンと叩く。

「果たしてそうかな？」

煉獄は上空にて安里の仮説を再び  
思い起こしていた。

(俺の読みが正しければ……………は

……………なんです。

だから俺とニトクリスさんと

煉獄さんでありつただけ

攻撃を叩きこめば……………！)

二人の支援砲撃を受けながら

煉獄は再び飛び上がる。

狙うのはまたしても

車椅子の男だ。

「何度やっても同じだ！」

車椅子の男が叫ぶと

巨神の目が光り、熱線を放つ。

「同じではない！」

人は常に成長する！ 神と人の差はそこにある！」

煉獄は叫び返すや熱線すら

切り払った！

「何だと!？」

驚愕する男を尻目に

煉獄は全ての力を込めて

日輪刀を握りしめる。

するとどうだ！

何と彼の日輪刀は

伝承の緋緋色金の如き

輝きを発した！

「炎の呼吸……………奥義!!」

玖ノ型・煉獄!!!」

そして彼は渾身の力で

その一撃を振り下ろした！

「ぬおおおおっ!!」

振り下ろされた斬撃が

巨神を捉えかけるが……!!

人ならざる身になりかけても

神滅具を打ち壊す事は

不可能なのか……!?

「クハハハッ！」

結界は撃ち抜いたものの

必殺の一撃とは成り得ず……!!

余りにも質量差がありすぎた。

「馬鹿な奴め！」

『モロクの大窯』とこの『制動の巨神』に

敵う者などいない！それが世の理なのだ！」

へパイストスは断言して勝ち誇る。

それに呼応するかのように

安里の心の中に暗闇から

彼らの健闘を嘲笑する声が

響いていく。

『ふひひ、ひひひ。』

むだだ、むだだ』

『お前達の方なんてこの程度さ』

『虫虻はぷちりと潰されて

死ぬだけなのさ』

『馬鹿め、馬鹿め。』

見て見ぬふりをして

泣き寝入りすれば

良かったんだ』

『ふひ、ふひひ……あ……』

しかし、今の彼には

ニトクリス、煉獄杏寿郎という

闇夜に浮かぶ星がある。

『不吉の凶星』の嘲弄に

呑まれることなどない。

それどころか……。

がしり、と一つ首を

掴むイメージを浮かべる。

まるで毒蛇の首根つこを

驚つかみにする様に。

『ふひ？ はなせ、はなせ。』

おまえはまけるんだ！

おまえたちはむだなんだ！

はなせ！ はなせ！

つかむのをやめろ!!』

「無駄じゃない。」

無駄なんかじゃねえよ。

だって俺はこんな所で負けてらんねえ。

俺の大切な仲間達がいるんだ。

あいつらのためにも……。

てめえらも高みの見物ばかり

してねえで木戸銭払えや！」

そして安里は叫んだ。

「出て来いやッ！」

『忌まわしき狩人』ッ!!』

安里の呼びかけに応じる様に

彼の触手が変化していく。

その腕はこの世の理を無視する

様に膨れ上がり、一つの形を

成していく。

それは巨大な蛇、或いは

一頭龍ともいべき

異形の姿だった。

鉤爪の様な顎門に禍々しい鱗。

そして、安里の意思に

呼応して大きく開かれた口腔は

既に獲物を喰らう為の牙を剥く。

「k i e e e e !!」

『忌まわしき狩人』は

正気を刈取る様な

甲高い絶叫を上げながら

制動の巨神へと突進した。

「何イツ!？」

車椅子の男の顔から

余裕の笑みが消える。

制動の巨神の身体は瞬く間に

巨大かつ鋭利な鱗の棘に覆われ、

その瞳は紅玉の如き

真紅に染まった。

「ぐあああつ!？」

そして安里は苦痛の叫びを上げる。

「安里!?! 大丈夫ですか!?!」

ニトクリスが慌てて駆け寄る。

安里の身体は『忌まわしき狩人』を

顕現させた負荷によるものか

酷く傷つき、血飛沫をあげている。

「くくく……!」

人の身にて神の奉仕者を

無理矢理顕現させたのだから

さもあろうよ!

貴様はもう終わりだ!

そのまま無様な肉塊に

成り果てるがいい!」

肉体が軋み、肉が弾け、



笛の原理と同じ空気の

振動であつたが制動の巨神の

悲鳴にも似た断末魔が辺りに響き渡る。

「馬鹿な、馬鹿な、馬鹿なあつ!?

何故だ、何故だ、何故だ!!

何故こうなる!?

何故!?! 何故!?!

何故皆、私を裏切るっ!?

私の作つた存在が何故私の期待を……!?!

車椅子の男、ヘパイストスは

その時何かの声を聞いた。

『ふひ、ふひひ。あわれあわれ。』

おまえのかべはおまえのひつぎ。

かまのなかでめらめらもえろ』

その時は『忌まわしき狩人』の

口が歪んだ。

「嘲笑つたな……!」

嘲笑つたな蛇がっ!!

奴等の様に……

あの女の様に……!!

貴様も

私を嘲笑つたなああ!!!」

ヘパイストスの激昂と共に

『モロクの大窯』は

更に出力を増し、

『制動の巨神』の装甲を溶かし、

内部機構まで焼き尽くしていく。

しかし嘲弄は止まらず炎以上に勢いを増す。

『ふひ、ふひひ。あわれあわれ。』

おまえのかべはおまえのひつぎ。

かまのなかでめらめらもえろ』

「おのれ……おのれ……」

おのれえええええ!!!」

車椅子の男の呪詛に満ちた叫びは

崩れ落ちる制動の巨神の轟音に

掻き消された。

『赤兎よ……翔べ!!』

炎に飲まれかけた彼を

一騎の騎兵が馳せ参じて

掬い上げると虚空へと消え去ったが

果たしてそれが誰であったか

知る者はいない。

「安里、コホン。」

我が盟友ご無事で……」

ニトクリスの言葉に安里は

弱々しく微笑んだ。

「しかしこれじゃどっちが

勝ったのか、わかんねーっスね」

力なく笑う安里を

激励する様に煉獄は言った。

「何を言うか！

俺達は生きているのだ！

生きている限り負けてはいない！

胸を張れ安里！ お前は見事勝利したのだ！」

「……ありがとうございます。」

恐縮ツス……」

「ふふ、どうしたのですか

我が盟友。

勝者が涙を流すなど……」

「いえ、ただ嬉しくて……。」

こんな嬉しいのは久しぶりなんス」

しかし勝利の余韻に浸ってばかりも

いられない。

夜明けまでに

サタナキア、コカビエルを

止めなければノアの洪水の

再現により駒王町が消える所の

騒ぎではなくなる。

「……さあ、行くぞ皆！

最後の決戦だ！」

そして彼等は

さらなる戦いの舞台へと

向かった。



※異聞・幕間2 水泡の淫夢 (匙×ソーナ?)

「はあ〜……」

この日、匙は何度目になるか  
解らない溜息を一人漏らしていた。  
それは今朝からずっと続いている。  
原因は勿論……

近頃養護教諭となった

ニグラ・サセコヴィツチに

関する素行調査に関してである。

確かに彼女は

絶世の美女であるし

誰に対しても親切だ。

しかし、明らかに保険医にしては

明らかに白衣の露出度が

高過ぎる。

(あの人……

やはり

フツの人間じゃねえよな。

となるとやっぱりサキユバスの

親玉とかそんな感じか?)

寧ろ男を誘う為に

わざと肌を見せている様にしか思えない。

というのは彼の想い人であり

主のソーナ・シトリの評だ。

現に男子生徒達の間では、

彼女に関する噂話

が飛び交っている程なのだ。

そして今日は

授業中にも関わらず

何人かの男子生徒や女子生徒、

一年生から三年生まで  
多くの生徒が保健室の中へと  
堂々と入っていくのだ。  
まさか全員や風邪やら腹痛やら  
で来た訳でもあるまい。

(あー……)

あれって絶対アレだよな)  
その光景を見て、彼は思う。  
サバト。という悪魔召喚の儀式を。  
悪魔崇拝者達による秘密集会。  
それがサバトと呼ばれる儀式であり、  
それを行う者は魔女と呼ばれ恐れられる。  
そしてそのサバトは悪魔と交わる為に行われる。  
つまり……

保健室での行為とは  
性交渉を意味するのだろう。  
そして恐らく、  
今保健室に居るであろうニグラも  
サバトに参加しているか、  
或いは主催しているに違いない。

(でも……)

もしそうだとしたらなんで  
イツセーたちは一言  
俺に教えてくれなかつたんだ？  
いや別に俺はそういう事を  
したいなんて思っただけだよ！  
俺が愛しているのは会長なんだ！  
いや、でもかしだな！  
できちゃった結婚に持ち込むには  
こういう知識も必要だとは  
聞くぞ!?)

何しろ相手は超ド級の美形だし、  
おまけに性格もいいし、  
それに胸だつて  
とてつもなく大きい。  
いやしかし、厳しくて厳しいのが  
ソーナ・シトリーという主。  
事が露見したらどの様な  
おしおきが待っているのか……。  
そう考えるだけで  
彼は身震いしたが、  
(くそっ！)

こうなつたら意地でも  
サバトの証拠を  
見つけ出してやる!!)  
そもそもサバトなるものは  
この時点では  
匙の勝手な妄想に過ぎないが  
それでも何かしら証拠を  
見つければ

ソーナはきつと褒めてくれる筈。  
『よくやりました、匙。  
やはり貴方は私の眷属に  
相応しい男性です』

「なんちやつて、わはははー！」  
そしてその後、ご褒美として  
あんな事やこんな事も  
してくれるかも。

という期待が彼を突き動かした。  
「すいませくん……ゴホゴホ」  
なるべく体調不良を装い  
匙は保健室を覗き込むかの様に

そつとドアを開けつつ  
恐る恐る室内の様子を伺う。  
するとそこには……！！  
何もない。

「あ、あれっ!？」

思わず素の声が出てしまう。  
おかしい。

サバトはどこへ行つた？

キヨロキヨロと不審者そのものの  
挙動で左右を見渡すが

無人の保健室があるばかり。

「ええー……」

思わず落胆し、肩をがくりと  
落とす匙一人。

これではただ単に

自分がバカみたいではないか。

と溜息をもらしてニグラ先生の

椅子へどかりと腰を降ろす。

その時だった。

ふわり……

と鼻腔に漂う甘い香り。

(これは……っ?)

どこかで嗅いだ覚えのある匂いだ。

恐らくはニグラ先生の香水だ。

しかしこれほど匂いが残ると

言う事はいさつきまで

この椅子に彼女が座っていたのだろう。

だが何故だろうか。

何故か分からないが

彼女の残り香を嗅いでいる内に

下半身の一部分が熱を帯びてきた。

それはまるで禁断症状の様で……。

「いやいやいや！」

俺はあいつ等の様な変態じゃない！

俺は会長一筋なんだ!!」

必死に自分に言い聞かせ

頬を叩いて気合を入れ直す。

とにかくこの部屋を

もう少し調べよう。

そう思い立った時である。

はらり、と机からメモが落ちた。

何やら走り書きで記されていた

その紙を手に取り、そこに書かれた文字を見る。

《いあーる むなーる

うが なぐる となろろ

よらならーく しらーりー！

いむろくなるのいくろむ！

のいくろむ らじやにー！

いえ いえ しゅぶ・にぐらす!》

その文章を見た瞬間、

背筋に悪寒が走った。

ただの落書きの様だが……。

何とも言い難い言霊を感じる。

そして、ついその走り書きを

呟いてしまった。

「い、いあー……っ?」

その刹那。

彼の足元に隠し塗料で描かれていた

魔法陣が妖しく光を放つ。

「な、なんだ!？」

一体どうなってんだ!？」

慌てて立ち上がり、

保健室を出ようとするが……。まるで転移呪文が発動したかのように一瞬にして視界が暗転する。そして……。

「くうう……！」

ま、まさかこんなエッチな女の子と白昼堂々セックスができるなんて……！」

気がつくときながらラブホテルの様な空間に変わっていた。そして

匙の目の前では感涙に咽び泣く後輩男子の姿がある。

そして彼に組み伏され犯されている同学年の女子はもまた、快楽に溺れていた。

「あつ、あぁつ♥

そんなに激しくされたら私……♡もうイツちやうよ！

ああ、あぁつ、あぁんっ!! はあああああああぁんっ!!!」

匙は彼女の姿に覚えがある。清楚系のロングヘアの後ろをリボンで結ぶという特徴的な髪型。ピンク色の上下の下着は

既に外れかけ、形の良い美乳と程よい大きさの美尻が露わになっている。

匙はその美しい肢体に見惚れてしまい言葉もなかった。羨ましいとかそういった

感情が追いつかず

ただただ呆然としていた。

「うう……！ 先輩、俺……もう……」

彼女との接合部がぶじゅぶじゅと

沸騰している様に泡立つ中、

後輩は明らかに射精寸前だった。

「ああ、待って……待ってえ……」

その言葉ではたと匙は我に返る。

「そ、そうだぞお前！

学生の身で膣内射精をして

どうするつもりだ！

責任取れるのか!!」

自分は会長とできちやった結婚を

目論みながら

どの口が言うのか。

しかしリボンの少女の次の言葉は

彼の想像の外にあるものだった。

「ち、違うよお♡

○○君のチ○ポ♡

チ○ポおつきくて気持ちいいからあ♡もつと♡

もつとズゴズゴオマ○コ突いて♡

キミのチ○ポでもつと

グリグリっしてほしいのお♡」

彼女は明らかに正気ではない。

それどころか自ら腰を振り、

淫語を並べ立てて

更なる快感を求めているのだ。

そしてそれは彼女だけではなかった。

隣にはまたピンク色のボブヘアの

少女が横になり、

前と後ろから逞しいペニスを持つ

男子達に犯されている。

「まだ、まだ……まだだよお♡

もう少し、もう少し我慢して♡

そうすれば最高にキモチイイ

精液が私の子宮にビュルルル〜ツ!!

って注がれるの♡」

彼女の顔は普段の快活そうな

ものとはまるで別人どころか

別の生き物の様に

快楽に蕩けきっていた。

その膣穴も今ではまるで

熟練の名器の如く男子達のペニスに絡みついてくる。

しかもそれだけでは飽き足らず、

奥へ、更に奥へと誘い込むように

腰を艶めかしくくねらせていた。

「うう……○○さんの、

締まるっ……!!」

「た、頼む○○!」

「お前のマ○コに出させてくれ!」

同時に彼女を犯す

男子二人は限界が近いようだ。

顔を真っ赤にしながら懸命に腰を振り、

彼女に恥も外聞もなく射精の許可を頼み込んでいた

一方、犯される側の彼女はと言うと……。

「ああ、もうダメエ♡

イク時は一緒がいいの!

だから早く出して♡一緒に♡

みんなと一緒にイイ——!!!」

「うおおおっ! 出すぞお○○!」

「出ます! 出るうウツ!!」

ビュルルルル〜ツ!!



「ああん♡熱いいいいっ!!」

二人分の熱くて濃いのが  
いっぱい入ってくるよおお—!!!」

「俺も！俺も出します！中に！」

先輩の子宮に一番近い所に

出しちゃいますよオ——ツ!!!」

どびゆるるるる〜！

「ああ〜♡いああ〜♡

熱いい♡ ○○君のおち○ポ汁で

お腹の中が溶けちゃいそお♡♡♡」

その瞬間、皆が同時に果てる。

そして彼女達の秘所からは

入り切らない程の量の白濁が溢れ出してきた。

しかしそれでもなお、

彼女達の肉壺はそれを搾り取るかの様に

締め付けてくる。

まるで、最後の一滴まで

子種を残さずしゃぶり尽くそうとするかのように。

そしてその隣では……。

「あひいいいっ！ すごいですう！

○○先生のおっきいのが

わたしのおしりの穴に

入ってきてるですう！」

アナルセックスをしている

女子までもがいた。

その未発達な身体に似つかわぬ

豊満な胸を揺らしながら、

彼女は必死に尻を振る。

しかも彼女のアナルを無心で

ペニスで穿るのは男性教諭だ。

「ううっ！ こっちもいい具合だよ！

やっぱり○○のお尻は格別だ！

ああっ！ ○○！ ○○○う!!」

彼は彼女の名を呼びながら

激しく腰を打ち付ける。

彼女の方もまたそれに

呼応するかの様に激しく乱れていた。

「す、すっ(っ)いっ♡

先生の大人のおちんちんすごいです♡

わたし、イッてるのに！

こんなにイッてるのに

またイッちやううううううう!!」

「ああ！ イけ！

好きなだけ俺のチ○ポでイけ！

夏休みは毎日セックス補講だぞ！」

「はいっ！ 嬉しいれふううう!!

もっ♡もっ♡とください！

先生ええええええええ!!!」

彼女は絶頂を迎え、意識を失う様に眠りにつく。

その表情はとても幸せそうだ。

(な、何だよこれは……?)

匙は気が狂いそうだった。

まるで眼の前の乱交は

駒王学園、もとい現実のものとは

とても思えなかった。

しかし、五感全てがこれが現実だと訴えかけてくる。

「ああ、もうだめだあ……」

彼の精神が限界に達しようとした時

ポン、と肩を叩かれた。

「あらあら、どうしたの匙ちゃん」

誰あろう、ニグラ・サセコヴィツチ

その人である。

あいも変わらず露出の激しい  
上乳を放り出す様な白衣の  
出で立ちであったが

そんなことはどうでも良かった。

(よかった、

やっとまともな人がいた……)

彼女は一見すると普通に見える。

だが、今の彼にはその存在が

どんな救いの言葉よりも有難かったのだろう。

そして、彼女なら

この異常な状況下から

自分を助けてくれるに違いない。

と、判断した匙は早速

ニグラに問いかけた。

「ここは何処なんですか？」

まずはここがどこなのか確認する必要がある。

それがわかれば何か

脱出の糸口が掴めるかもしれない。

しかし、彼女の答えは

ある意味で予想通りだった。

「詳しい説明は省くけれど

大体は貴方の想像通りよ。

ホラ、最近ははぐれ悪魔も

多くなってきたじゃない？

リアスちゃんたちだけじゃ

退治しきれないでしょうから

私たちも協力する事にしたの。

すると精気が不足しがちに

なるから皆に

手伝ってもらっていたの」

やはりこの異様な光景は

全て現実なのだ。

ソーナが危惧した通り、  
いやそれ以上に常軌  
を逸している。

しかし、彼女はこう言ったのだ。

私に任せておけば大丈夫と。

それはつまりこういう事なのだろうか。

彼女はこの場にいる全員の

精気を吸い取って、

それを自分の力に変えている。

そしてその為には

男女問わずセックスさせなければならない。

ならば今日の前で

行われている事はあくまで

彼女なりの食事に過ぎないのでは……。

その考えに至った瞬間、

彼は吐きそうになった。

あまりにも醜悪過ぎる。

一体どうして

こんなことになったのか。

自分が何をしたというのだろうか。

しかし、今はそんな事を考えている場合ではない。

一刻も早くここから出なければ。

「あ、あの俺トイレに行きたいんですけど……」

「ああ、それならユニットバスが

あるから……ほらあそこよ」

そう言つて彼女が指差したのは

部屋の隅にある一室。

「本当ですか!？」

「ふふふ、おかしい事を言うのね

匙ちやん♪ 貴方にウソを吐いて

「私に何か得があるのかしら？」

「い、いえ……」

「何でもないです……」

彼女の言う事は尤もである。

確かにこの状況で

嘘をつく意味はない。

素直にユニットバスのある部屋へと

匙は向かった。

部屋に入るや彼は鍵をかけて

通信用の魔法陣が描かれた羊皮紙を

取り出す。

相手は勿論会長である。

何とか連絡を取り、

状況を打開するしかない。

だが、そう思った時、

浴槽の蛇口から水が勝手に流れる。

「な、何だ……!?! 故障か!?!」

慌ててレバーを確認するが、

何故か水は止まらない。

そして徐々にその水は

形を取っていく。

不定形のものからまるで

今の匙が待ち望むものの形に。

「か……会長……!?!」

そこに現れたのは

外見は紛れもなく

支鳥蒼那であった。

そして彼女は全裸で微笑む。

その表情からはいつもの

厳しさを優しくはなく、

ただひたすらに

妖艶な色香を漂わせていた。  
明らかに彼女の皮を被った  
別のナニカなのは明らかだ。

「な、何だよお前は……！」

「……♡」

ナニカは質問には答えなかった。  
代わりに匙に抱きつき、  
激しく、熱いキスをする。

「んっ！　ちゅぱ、れろお……」

「うわぁあっ!!」

な、何すんだよ!!」

突然の出来事に混乱しながらも  
咄嗟に彼女を突き放そうとする。  
だが、その腕は彼女に掴まれ、  
強引に引き寄せられた。

「やめろっつてば！」

「……」

しかし、その言葉が  
届くことはなかった。

彼女は無言だが微笑みながら  
彼の服を脱がせていく。

(な、なんだこれ……?)

身体の方が効かない……  
抵抗したいのだが  
まるで金縛りにあったように  
動けなくなってしまった。  
そして遂に下着まで脱がされ、  
完全に裸にされてしまった。

「くそッ、ふざけるなよー！」

「あそぼ……♡」

怒りに呼応する様に勃起してしまう

匙のペニスにナニカは甘く  
囁き口づけをかわす。

ちゅっ……♡

「うっ、おおお……！」

柔らかな唇の感触と

暖かな吐息が敏感になった亀頭を包み込む。

それだけでも十分すぎる程の

快感なのに、

舌先でチロチロと舐められればひとたまりもない。

しかし、それでも必死に抗おうと歯を食いしばる。

だが、そんな努力も虚しく、

更に深く肉棒が飲み込まれていった。

「くう、あああ……！」

ぬぷり、と音をたてて彼女の口内に吸い込まれる。

同時に彼女は喉の奥を使って締め付けてきた。

ぐぼっ、じゅぶ、ぢゅぶっ……。

卑猥な音を立てながら上下運動を繰り返す。

「お、おお、おおおっ……！」

あまりの快楽に腰砕けになり、

思わず膝をついてしまう。

だが、ナニカは動きを止めない。

それどころか、今度は玉袋にまで

手を伸ばし優しく揉んできた。

その刺激によって匙の射精欲が益々高まる。

しかし、ここで果ててしまえば

終わりだとわかつているいた。

だからこそ彼は懸命に耐えようとする。

しかしそんな彼を慈しむかの様に

彼女は優しく静かながらも

念入りなフェラチオを続けた。

「ふ、ふう……、いい加減にしろよ……！」

「……………」

なんとか声を振り絞り、相手を睨む。

しかし、それは逆効果だった様だ。

ナニカの瞳に妖しい光が宿ったのを感じ取る。

そして次の瞬間まるで

排泄物が便器に流されるかの様な

激しいディープスロットが

展開された。

じゅるるるる！

じゅぼっ！ じゅぼっ！！

じゅるるるるるるるるるる！！

「うああああああああ！！！！」

凄まじい勢いで

精巢から汲み上げられるかの様に

精液が彼のペニスの内部を

登っていく。

既に限界を迎えていた彼には

耐えられる筈もなかった。

びゅ——っ！ どびゅるる！

「はあ……………はあ……………」

大量の精子を搾り取られ、

彼は便器に背を預けてへたり込んでしまう。

しかし、まだ終わらない。

「おいしい……………」

匙の精液を堪能するナニカは

妖艶な笑みを浮かべている。

その姿はまるで悪魔のようだ。

そして彼女はゆっくりと立ち上がる。

その視線の先にあるもの。

そう、そこには彼の分身がいた。

未だに元気よく勃ち上がっている。



それを目にした彼女はまるで  
獲物を見つけた獣のように舌なめずりする。

一方の匙は敬愛する会長を  
模したナニカと交わることによる

喜怒哀楽の感情が

ごちゃ混ぜになっていた。

(なんで……こんなことに……)

自分の身体が自分のものでは無いような  
感覚に陥り、

ただ呆然と便器に座り

ナニカからの性奉仕を

甘受するのみだ。

「あなたのこと……すきい……♡」

「うっ……」

彼女の言葉に心臓が高鳴る。

偽者だと解ってはいるが……！

その鼓動に呼応するかの如く

ペニスは一層硬さを増していく。

「あはあ……♡うれしい……」

彼女は微笑むとツン、と胸を張る。

「おっぱい……すきい……」

その言葉と同時に彼女の

やや慎ましいバストは

逆に強調される。

「あ……う……、

す、好き……です……

会長……シトリー……蒼那……」

「えへ……えっち……♡」

謔言の様に想い人を呼ぶ匙に

対してナニカは

嬉しそうな表情を浮かべる。

そしてそのバストがみるみる  
副会長の椿姫のものと  
変わらぬまでに大きくなっていく。

「あん……………♡」

彼女は匙のペニスさながら膨らむ

自らの乳房を掴み、

ぐにぐにと揉みほぐしていく。

すると、乳首からは

ぴゅつ、ぴゅつと

白い液体が溢れ出した。

「は、母乳……………!?!」

「できちゃった婚……………」

するんでしょ?」

驚愕の事実を突きつけられ、

頭が真っ白になる。

確かに、彼女とのできちゃった婚は

望んだことはあった。

しかし、それはあくまでも

妄想の世界の話であって、

現実起こりうる可能性など

皆無に等しい。

「あ、ありえない……………!」

そうだ……………! これは……………夢なんだ!

匙は思考を放棄した。

今起きていること全て、

自分が見ている都合の良い幻想なのだ。

そんな彼を愛する妻の様に

ナニカは照れた様にはにかむ。

「えっち……………しよ♡あなた……………♡」

そしてナニカは誘うように腰をくねらせ、  
蹲踞の姿勢から股を匙へと見せつける。

そこには愛液が滴る秘裂があった。

「う、お、おお……会長……！ ソーナ！」

ごくりと唾を飲み込む。

もう我慢できなかつた。

彼はナニカを自分に跨らせ、

対面座位の姿勢で一気に挿入する。

「あああんっ!!」

ナニカはその衝撃で

軽く絶頂を迎える。

「くうっ……！ ソーナ……！

締まるっ……!!」

「あなたが……おおきいのが、悪いのよ……♡」

彼女はそう言うのと、自ら腰を振り始めた。

「あっ、あっ、あっ……♡」

ぱちゅんぱちゅんと淫らな音と声が

幾度も室内に響く。

その淫らな輪唱を匙は指揮棒でも

振る様に腰を前後左右に動かしナニカの

膣穴を夢中で犯した。

「きもちいい……♡」

ナニカが耳元で囁いてくる。

「気持ちいい……！ 最高だ！」

ガツン、ガツンと突き上げながら

匙が間をおかずその問いに答えると、

ナニカは満足気に笑う。

「もっとお……♡」

そして、己の下腹部を擦りながら

更に激しく腰を打ち付けてきた。

その貌は完全にあの女生徒と

同じく色情に狂いきつていた。

「ああっ……！

ソ、ソーナあっ…………!!

会長のくせに…………!

会長なのに…………!

俺とのセックスで……

婚前セックスでそんなに

いやらしい顔になりやがって…………!

「あっ、あっ、あっ…………♡」

「この淫乱め…………! 愛しているぞ!」

そして遂にはナニカを押し倒し、

正常位の体勢へと移行する。

ぱん、ぱん、と肉と肉のぶつかり合う

激しい音を立てながら

ピストン運動を続ける。

「ひゃうっ♡」

そして、彼女の膣内から

どぶどぶと大量の愛液が溢れ出す。

「ソーナあ…………! 好きだあ…………!

孕ませてやるからな…………!

孕んだら…………!

お前は俺と結婚するんだ…………!

絶対幸せにしてみせるからな…………!

「うん…………♡」

そして二人は唇を重ね合い、

舌を絡ませる。

一方的なキスではなく

お互いを貪りあう様な

情熱的なものだ。

「じゅるっ…………れろっ…………はあ…………はあ…………

はあ…………はあ…………はあ…………!」

「あむっ…………♡」

二人の結合部からは  
白く泡立った本気汁が漏れ出していた。  
既に何回も中出しされている為、  
彼女の子宮には彼の精がパンパンに詰まっている。  
それでもなお射精を続ける  
彼のペニスによつて栓をされ、  
逆流してくることはなかった。

「あはあ……♡しゅい……♡

さじのせいし……いっぱい♡」

ナニカは孕んだかの様な下腹部を撫でると、  
うっとりとした表情を浮かべる。

その表情はまるで聖母のようだ。

「あ、ああ……！」

その表情を見て、興奮したのか、  
彼の分身はより一層大きさを増していく。

「あん……♡」

それを感じ取った彼女は再び笑みをこぼす。  
聖母から淫蕩な女の笑みへと形が変わる。

「まだ……♡」

「当たり前だ……！」

まだまだソーナは俺のモノになってないんだ……！  
もっと……！ もっとだ……！

俺の女になってくれ……！ ソーナあつ！！

こつちが……こつちが  
現実なら……！！

そう言つて彼は

ナニカの子宮に

幾度目かも解らぬ射精を放つた……。

↓

「ほい」

気がつくとは

保健室のベッドの上だった。  
幾度も会長見た目のナニカと  
交わった筈なのに  
衣服に乱れはないし  
汗一つかいてない。

「あら、気がついた？」

養護教諭のニグラが  
声をかけてきた。

相変わらずの白衣以外は  
変わった所は一切ない。

じゃあ……あれは一体……？

夢見心地の匙に、スツと

一杯のホットミルクが差し出される

「ふふ、どうぞ。」

気分が落ち着くわよ匙ちゃん」

「あ、ありがとうございます……」

言われるがままに

ベッドから起き、腰を降ろして

カップを受け取ると、

ほんのりと甘い香りが漂う。

まるでニグラその人の様な……。

「けれどどうしたの？」

何かブツブツ保健室の前で

呟いていたと思ったら

突然倒れたと聞いたけれど……

大丈夫？」

「え……う。」

あの呪文を聞かれたのだろうか？

只走り書きを読んだだけだが

なぜか匙は気恥ずかしくなった。

「そ、それは……」

ちよつと寝不足でして……  
すみません、お騒がせしました」  
そう言うと、

「彼は慌てて立ち上がり、  
保健室から出ていこうとしたが  
つい足がもつれる。

むにゆうう ♡♡♡

「きゃっ……♪」

「うおっ……！」

倒れる寸前、ニグラが

咄嗟に受け止めてくれたおかげで

何とか大事には至らなかった。

いやある意味大事ではあった。

彼の顔は謀ったかの様に

朱乃以上に豊満なニグラの

胸の中に埋もれていたからだ。

「あ、あの……！ これは……！」

所謂ラッキースケベの到来に慌てる彼だったが、

その頭上からクスリと笑い声が聞こえる。

「いいのよ。

そのまま甘えてなさい。

生徒会のお仕事も大変だし、

疲れているんでしょう？」

「……はい」

彼女の優しさに触れ、

少し落ち着きを取り戻した彼は

素直に身を預けることにした。

「よしよし、良い子ね」

すると、ニグラは

優しく頭を撫でてくる。

「ん……気持ちいいです」

「うふふ、可愛い♡」

まさに至福の心地の匙であったが。

「何をしているのです匙。」

それにニグラ先生……」

会長の言葉に匙はまるで

背中に氷柱を丸ごと押し付けられた

様に飛び上がり仰天した。

「か、会長……！」

いつからそこに……！」

「たった今来たところですよ。

貴方が倒れたとニグラ先生から聞いたので。

それより……何をしていますか？」

会長の目は笑ってなかった。

「あらあら……蒼那ちゃん。

匙ちゃんが辛そうにしていたから

支えていただけよ」

「支鳥です。」

匙、そうなのですか？」

会長は無言のままニグラを

睨みつける。

眷属を貶められたことへの

怒りかそれとも別の何かかは

解らない。

「そ、そんな事はありません！」

俺は会長の側に居られて

最高に幸せです!!」

「そうですね、それはよかった」

匙は思わず主の迫力に

直立不動で答えるが

蒼那、もといソーナは

にこりともせず逆に冷たい視線で



見下ろしながら言葉を選ぶ様な  
調子で匙に指示を下す。

「ならさつさと」

仕事をしてください。

今日中に終わらせないといけない

書類がまだ残っているでしょう？

……まったく」

「そ、そうでしたー！」

「早く行ってください。

……ああそれと、

後で私の部屋に来なさい。

話があるので……」

「はい！　すぐに行きます！

失礼します！」

ソーナに急かされ、

彼は慌てて保健室を

出ていくのであった。

「あらあら……御馳走様♪」

そんな年頃の二人に

ニグラの揶揄の真意など

伺える筈もなかった。

## 第27話

俺達が奴等の根城に  
辿り着くまでの間に

特に妨害されることはなかった。

「……妙だな。」

奴等の妨害が一つもないとは」

「サタナキアは来いと

言っていたのだから

待ち伏せているのかしら……?」

ゼノヴィアは

サタナキアの真意を掴めず

不審に思っている感じで

眩くとリアスさんが

予測を立てる。

だけど俺にはなんとなく解る。

きっと安里達がどこかで

戦ってくれているんだろう!

恩に着るぜ!

無事なら辰郎さんのお店で

パーティーでもやろうな!

『だが気をつけろよ相棒。

俺がついているとはいえ、

サタナキア、コカビエルは

お前より何枚も格上だ。

舐めてかかると死ぬ事になるぞ』

……わかつているさドライブ。

確かにあいつら二体は強い。

でも俺は信じてるんだよ。

だって――。

俺は一人じゃないからな。

『ハッハッハ！』

俺が周囲を見渡して気合を入れると  
ドライグは急に笑い出した。  
な、何だよ！

俺、そんなにおかしい事言ったか？

『いやあ、スマンスマン。』

俺を宿した赤龍帝は大概  
己の力や才能を誇っていたが  
周りの力を誇ったのは  
お前くらいのものだからな！』

しよ、しようがないだろ！

俺はリアスさんみたいに

凄い才能があるわけじゃないし、

ゼノヴィアみたいに

聖剣がつかえるわけじゃないし、

木場みたいに

剣技がすごいわけじゃないし、

小猫ちゃんみたいに

怪力があるわけじゃないし、

アーシアみたいに

皆を癒せるわけでもないし、

何より安里みたいに

何でもできるわけじゃないし……。

『そうだな。』

歴代最弱の赤龍帝。

だが、相棒……いや、兵藤一誠。

お前は選択を間違えるなよ』

自分の不甲斐なさに

落ち込みかけたが

その時のドライグの声は

まるで父さんの様だった。

選択って……？

と、その辺りでゼノヴィアが  
言っていたデカイ門に辿り着いた。  
ドアは『いつでも入ってこい』と  
言わんばかりに開いている。

「罨かもしませんわよ？」

朱乃さんの言葉を聞きながらも  
俺は躊躇うことなく中に入った。  
するとそこにあつたのは……。  
髑髏があちこちに転がっている  
荒野の丘を模した異空間だった。  
廃墟、いや戦場跡って感じだ。  
凄くどんよりとした

イヤな空気が漂っている。

「よく来てくれたね、

正直来なかつたら  
どうしようかなくって  
思っていたよ」

丘の頂上に礫にされていた  
イリナの横でサタナキアは  
ニヤニヤしながら余裕ぶつた  
態度で俺達を出迎える。

「バカッ！ どうして

貴方達だけで来たのよ！

イツセー君！ ゼノヴィア！」

イリナは傷だらけの身体なのに  
俺とゼノヴィアへ怒鳴りつける。  
けどそれは俺達を心配しての事だ。

「幼馴染だからだろー！」

俺はそう言い返す。

俺にとってイリナは幼馴染みだ。

小さい頃からずっと一緒なんだ。  
だから、幼馴染みのピンチに  
駆けつけないなんて選択肢はないんだよ！  
それに――。

「私達の事は気にするな。」

同士、いや友人を犠牲にせねば  
守れない信仰など私はいらない」

おお……！ カッコいいぜゼノヴィア！

けど神様に

それを聞かれたら

拙いんじゃないか？

リアスさんの眷属で

悪魔の俺が言うのも何だけど！

「ほう……。」

只の盲の様に神に従うだけの  
愚か者だと思っていたが……  
少し見直したぞ小娘。

名前は？」

コカビエルも好感を持ったのか  
眉を上げて愉快そうに

ゼノヴィアを見ながら訊ねる。

「……ゼノヴィアだ」

ゼノヴィアもコカビエルを見て  
興味を持ち、自分から名乗った。

「フハハハ！ 面白い！ 面白いな！

サタナキア！ 手を出すなよ！

コイツらは

俺一人で相手をしてやる！」

コカビエルは両腕を広げて

高笑いしながら天を仰いでいた。

自分一人でも勝てるつもりかよ！

舐めるなよ！

「まずは小手調べだ！」

コカビエルは挨拶代わりに朱乃さんと同じく雷を放った！

見た感じからして火力は

朱乃さん以上か!?

「雷の巫女と言われた私を

見くびっておいでかしら！」

相殺する様に朱乃さんも雷撃を放つ！

二つの雷がぶつかり合い、

轟音と爆風が巻き起こる！

すげえ！ 流石朱乃さんだ！

「ん……う？ ああ！」

誰かと思えばバラキエルの娘か！

奴はどうしている？」

けどコカビエルはまるで

動じていないばかりか

世間話まで始めやがった……！！

なんて奴だよ……！！

「私の前で……あの男の名を

口にするな!!」

朱乃さんは怒りの形相を浮かべ

特大級の雷を撃つ！

まるで竜の様な形に変じた雷は

コカビエルに直撃した！

いくらなんでもコカビエルだつて

これ程の雷を受ければ……！！

「フハハハハハ！」

何だこれは？

マッサージのつもりか？

こそばゆいぞバラキエルの娘！」

朱乃さんの名前には  
興味も持たず、

フンと気合を入れただけで  
雷の竜をコカビエルは  
かき消してしまった！

嘘だろ……！！

あれが効かないって……！！

これが墮天使の

幹部の力なのかよ……！！

「どうした？」

これで終わりか？

お前達は魔王の直系なのだろう！

力を見せろ！ 才覚を示せ！

俺を楽しませてくれ！

もつと俺を興じさせろ！

俺は貴様らの

虐殺がしたいのではない！

血湧き肉躍る死闘がしたいのだ！

アーハッハッハッハッ！！」

上空に浮かぶコカビエルは

狂喜しながら叫ぶ。

そして衝撃波を放ってきたが

その勢いはライザー以上だ！

「小猫ちゃん！」

「……はい」

『boost!』

『boost!』

俺は力を倍加させて、

小猫ちゃんと一緒に

地面を殴りつける事で

その衝撃波を相殺する。

が、コカビエルは衝撃波を  
更に3回も4回も重ねて放ってきた！ くそっ！

このままじゃ防ぎきれない！

「リアスさん！ 朱乃さん！」

「ええ！」

『Boost!!』

「了解ですわ！」

俺の呼び掛けに応じて、

皆がそれぞれの攻撃で

衝撃波を打ち消していった。

「攻めてこいッ！」

半端な守りでは万年かかろうと

俺には届かんぞ！」

「アドバイス

しているつもりかよっ!!」

俺は右手に魔力を集めて、

ドラゴン・ショットを

コカビエル目掛けて放った！

だがコカビエルの奴は

反撃もしなければ

よけようとしなかった。

そのままともに喰らうが

奴はほんの少し

仰け反っただけだった。

「何だと!？」

「どうした!？」

下らん体力の削り合いなど

願い下げだぞ！ 赤龍帝！」

おいおいおい！

何を勘違いしているのか

解らないがコカビエルは



俺のドラゴン・ショットを

ただの牽制技だと思っただらいい。

両方の目元に痙筋を浮かべて

怒気を露にしたコカビエルは

背中黒い翼を展開し

そこから漆黒の光弾を撃ち出してきた。

それはさながら

流星群の様に降り注ぐ。

幾らなんでも

多すぎだ！ 捌き切れないぞ！

更にコカビエルは

両腕にまるで籠手の様に光を

纏わせて俺にインファイトを

仕掛けてきた！

ヤバイ！

あんなの一発でも

貰えば致命傷だ！

「この程度か！ まだ足りん！」

まだまだ足りんぞ！」

「調子に乗るんじゃないわよ！」

一喝と共にリアスさんが

紅いオーラを全身から放出し、

両手から特大のビームを放った。

「かあああっ!!」

すると奴は両手をかざして

リアスさんの放ったビームを

受け止める！

「ほう……」

これは中々の威力だな」

そう言っただけで感心する様に眩くと

コカビエルは両拳を合わせて

巨大な光の槍を形成していく！

今まで見たこともない様な

巨大さに思わず足元が竦んでしまう。

「消え失せろー！」

そしてそれをリアスさんに向けて投げつけた！

「きゃあああああああ!!」

コカビエルが投げた光の槍はリアスさんに直撃した！ まるで戦車砲で撃たれた様に吹き飛ばされる！

「リアスさん!!」

慌てて駆け寄ると、

そこには服が破れ、

身体中に傷を負っている

リアスさんの姿があつた！

「イツセー……」

でもそんな状況でも

俺達に心配をかけまいと

弱々しく微笑む。

「リアスさん！」

直ぐに私が……!」

アーシアが駆け寄り

直ぐに治療に入ろうとした。

だがその時！

音もなくサタナキアが

アーシアを後ろから

羽交い締めのような姿勢に入る。

「離して下さいー！ 離してー！」

このままじゃリアスさんが……!」

アーシアは涙を零して

サタナキアに訴えるが

奴は不気味に口元を歪めた。

「いや、当たり前じゃん？

コカビエルはああ言ったけど  
回復なんて許すはずないだろ？

キミたち、もしかして

誰も死なないで僕等に勝とうって

思っていたの？ ハハハ、

冗談はよしてくれ」

………ツ!!

その言葉を聞いて

俺達全員の顔色が変わった。

「まあ、いいか。

どうせもうすぐ終わるんだし。

それより君達はこれから

起こる事を

しっかり目に

焼き付けておくといい。

この世の終わりの始まりなんて

そう何度も見られるものじゃ

ないからね」

そしてサタナキアはアーシアを

抱えて上空へと飛び上がった。

「アーシアー！」

「………部長ー！」

「………朱乃先輩」

俺達が必死に手を伸ばすが

届くはずもない。

「ははは。そういえばキミは

治癒の神器を持っているんだっけ？

それって脳だけになっても使えるのかな？

色々試してみたいなあ」

「イツセイさん……！ イツセイさあーん！」

アーシアが俺を必死に呼んで助けを求めている………！

クソ……！　ここまでなのか！

本当にここまでなのかよ！

何か……！！　何かあるはず……！！

『ないでもない。』

だがそれはお前が人間でも

悪魔でも竜でもなくなる選択だぞ』

「それで構わない。

俺は、俺は皆を守る！

その為なら

どんな代償だって払う！」

俺は左手の赤い籠手を輝かせ、

ドライグに誓いながら

高く掲げた。

『よく言った。相棒！』

すると、俺の左腕に装着された

神器が輝きを増していき、

同時に激しい痛みが走る。

「ううっ！」

そのあまりの激痛に

意識が遠のきそうになるが歯を食い縛って耐える。

痛い！　痛い！！　痛い!!!

一瞬で全身が引き裂け、

神経全てが焼き焦がされるかのように熱く、

そして鋭い痛みが

永遠に感じられる様に襲ってくる。

だが構わない！

イリナやリアスさん、

ましてやサタナキアに

弄ばれた木場やイザイヤさんの

痛みには比べれば……！！

俺はありったけの力を

込めながら叫び声を上げる。

「俺は……俺は負けない!!」

「ははは、そういうのは

真っ先に死ぬやつの常套句だよ?」

すると籠手が更に眩しく光り輝く。

そして、次の瞬間!

俺の体中を

真っ赤な光が包み込んだ!

『神の名を騙る愚か者め。』

お前は竜の逆鱗に触れた』

「え? なにあれ?」

「え……きやああああ!」

サタナキアの奴が

俺を見て眩いた。

だが俺には解っている。

この光はドライグの力だ。

ライザーの時に纏った鎧よりも

遥かに強い力が

全身に流れ込んでくる。

って野郎!

呆然とするのはいいが

アシアを落とすんじゃねえよ!!

けどまるでスローモーションの

様に動きがゆっくりだ。

これなら間に合う!

キュオオオオオツ!!

って何だよ?

ダツシュしたら俺の周りの

空気が吹っ飛んだ。

『気をつけろよ相棒。』

今のお前は俺の力の殆どと

融合している状態だ。

だから力加減を間違えると

この領域ごと消し飛ぶぜ?』

「お、おう……」

「イツセイさん!？」

その姿は一体……!」

アーシアは驚愕しながら

俺に聞いてきた。

「ああ……」

これが俺の新しい姿さ」

「イツセイさん……」

アーシアは俺の言葉を聞いて

顔を赤くして俯いてしまった。

厳密には2回目なんだけどね……」

「まずはリアスさんの手当を」

「はい!」

アーシアが駆け寄ろうとすると、

コカビエルが空から降りてきた。

「ほう?」 面白い。

それが貴様の真の姿か。

実に興味深い」

「ヤローに言い寄られて

喜ぶ趣味はないんだよな……!」

それよりリアスさんを

痛めつけたお礼はたっぷりと

させてもらうぜ!」

「フハハ! 良いぞ! もっと怒れ!

そうでなければ面白くもない!」

俺の怒りを受けてもなお

余裕を見せるとはな。

だったらこっちは遠慮なく

行かせてもらおう

じゃねえか……!!

けどその前に……!!

「行くぜ！・ドライブグ！」

『応よ!!』

俺は空中にいるサタナキアに

向けて駆け出した。

「イツセーさん！」

後ろからアシアの声が

聞こえるが今は構ってられない。

奴をぶちのめす事だけに集中する。

「へえ？　少しはやるみたいだけど

僕に勝……ぐがあっ!!」

バゴオオオン!!

俺はサタナキアの

顔を殴り飛ばす。

すると何だか知らないが

奴の余裕が崩れ去った。

「な、何だと……!?!」

僕は……俺は……光の墮天使だぞ!

光そのものであり神なんだ!

光が！　神が殴られる事なんて……!」

あつてたまるかああああ!!」

サタナキアが叫ぶと同時に

周囲に無数の魔法陣が現れた。

「死ねえええ!!」

シャオオオオンツツツ!!!

そこから一斉にまるで

ギロチンの様な光の刃が数十も発射される。

「知らねえよ！

ならお前の前提が

間違っているんだろ!!

お前は神じゃなくて、

タダのサディアスの

基地外墮天使なんだよ!!」

『boostboostboostboost!!』『BoostBoo

stBoostBoost!!』

『BoostBoostBoostBoost!!』

『BoostBoostBoostBoost!!』

「その腐った根性……!」

叩き直してやる!!」

俺は迫り来る全ての攻撃を

全て拳で打ち砕きながら

奴に迫る!

「ひいっ……! やめろ……!」

来るんじゃないっ!!」

背中を見せて逃げ出すサタナキアを

追いながら俺は拳に魔力、

いや竜のオーラを集中させる。

まるで夕焼けの様な色をした

そのオーラはどんどん凝縮されていく。

『ドラゴン・メガフレア!!』

ギョオオオオツ!!

俺の右腕に集まったオーラが

一気に解き放たれ、

巨大な夕日の様にサタナキアを

飲み込みながら

地面へと落ちて行く。

「ぎゃあああああ!!」

ドガアアアアン!!!

サタナキアの断末魔の叫びと共に、

激しい爆発音と爆風が巻き起こる。



そして煙が晴れるとそこには……。  
何もなかった。

「くそっ……い！ 逃げられたか！」

『違うぞ相棒。奴は文字通り  
消滅した』

「え？」

ドライグが突然そんな事を言った。  
「どういう意味だ？」

消滅つてまさか……」

『ああ、だが気に病むな。』

奴は分霊。真の姿はまだ……』

ドライグが言い終える前に  
背中に衝撃が走った！

振り返るとコカビエルが

俺に光弾を放ってきていた。

「来い！ 赤龍帝！」

俺の放った光の槍の威力は

あのリアス・グレモリーに

放ったものと同じ！

だが大して効いてはいない筈だ！」

コカビエルは翼を広げて

またさっきの流星群めいた

攻撃を放つつもりだろうな。

「この野郎！」

リアスさん達を巻き込もうなんて

考えがセコいぜ！」

「そんなつもりはない！」

今のはフェイント！

本命はこちらだ!!」

コカビエルは光の大剣を

作り出すと、

それを振り下ろしてきた。

うおっ………！

サタナキアのチンケな刃とは  
重さも威力も段違いだ！

肩に打ち込まれた衝撃で

左の肩甲骨にピシリと罫が入った。

だが、今の俺なら耐えられる！

「うおっらあー！」

腕は二本ある！

なら右の拳でぶん殴る！

『boostboostboost！』

『BoostBoostBoostBoostBoost！！』

「ふうふうっ！」

俺は拳に込めた力を解放した。

衝撃が荒野を薙ぎ払い髑髏を

打ち砕くが、コカビエルは

踏みとどまって俺の右フックを

受けきり、ニヤリと笑った。

「フハハハハハ！」

感謝する！ 感謝するぞ赤龍帝！

俺は今生まれて始めて

勝つか負けるか解らない

一対一の勝負の中にある！」

そう言うなりコカビエルは更に

スピードを上げて斬撃を繰り返してくる。

「おおっとおおー…こいつはマジで強いな！

今まで戦ったどの敵よりも………！」

俺は光の軌跡を描きながら

襲い来る光の大剣の連撃をかわし、

いなしながら

相手の強さに舌を巻いていた。

「ふはは！ そうだ

！ 俺がお前と戦っている！

その事実こそが重要！

お前の様な存在を待っていたのだ！

もつと見せろ！ もつと聞かせろ！

お前の強さを！ お前の可能性を！

戦え！ 戦え！！

諦めを一蹴しろ！

絶望を踏破しろ！！

そして戦い続ける魂こそが！

より強く！ 美しく！！

純粹に光り輝くのだ！！」

「アンタの哲学なんか知るか！」

何言ってるのかサツパリ解らん。

でも何となく

理解できた事が一つだけあった。

コイツはこういう生き方しか

できない奴なんだ。

でもそれは

良いとか悪いの話じゃない。

「いいぞ！ その目だ！

その目が見たかった！

俺の全てを否定できるその瞳！

お前こそ我が宿敵！

俺の生涯最大最後の相手に

相応しい！！ さあ！

俺の全てをぶつけよう！！」

「ああ、俺も全力でいくぜ！」

俺は両腕を突き出してそこに全ての魔力、

いや竜のオーラを集中させる。

今度は刃のイメージを固め

俺の両手から放たれる膨大な  
エネルギーの塊を一本の剣にする。

『ドラゴン・ラグナロク！』

ズバアアアアン!!

まるで神話に出てくる様な

巨大な光の剣が

コカビエルの放った無数の光の矢を  
切り裂きながら

ヤツに向かって飛んで行く。

「うおおおおお……!!!」

ドガアツ!

凄まじい衝撃と共にコカビエルは  
両断されて地面に叩きつけられた。  
俺はスツと奴の下に降り立つ。

「一つ聞かせてくれ。」

なんで俺とやりあってる時に  
イリナを人質にしなかったんだ？」

俺がそう訊くと、

上半身だけで辛うじて息をしている

コカビエルは苦笑いを浮かべた。

「ふ、ふふ……!」

貴様と戦うのが楽しくてな……!」

つい、忘れていた……!」

「嘘つけ。アンタ、本当は

戦って死にたかったんだろ？」

「……」

コカビエルは何も言わない。

だが俺は確信していた。

コイツには戦う事以外に

何も無かったのだと。

「まあいいや」。

俺は別に正義の味方じゃない。

ただ自分の大切な人達を守る為に拳を振るうだけだ。  
だからもし次に誰かに牙を剥く時は……」

俺は光の剣を振り上げ……。

「容赦なくぶつ潰す」

ズシヤアツ！

コカビエルの横に突き刺すと

光の剣はかき消えた。

「ぐ……！ フハハ……！」

見事だ……！ 俺の完敗だ……！

俺は地獄よりも深い奈落に

落ちるだろうが

先達の奴等に誇つてやろう！

俺は赤龍帝に挑んで敗れた

愚かな墮天使だとな！

ハハハハハ！ フハハハハハ……」

満足そうに高笑いをしながら

奴は塩になって消えていった。

「イツセーさん！」

「大丈夫か!？」

アーシアちゃんと

ゼノヴィアが駆け寄ってくる。

「おう！ 見ての通りだぜ！」

俺は二人に笑ってみせる。

でも兜越しに見えているかな？

「よかったです。」

イツセーさんの身に何かあれば

私、どうしようかと……！」

「まったくだ。」

心配させてくれる。

だが、よくやったぞ、赤龍帝！」

二人は安堵した表情を見せた。  
この顔だけで

ドライグに心臓を捧げた  
甲斐があつたつてモンだ。

「はは、悪い悪い。」

でもコカビエルも

サタナキアは倒したし、

これでこの町は守られたな」

「おーい！」

その時、あちこち怪我をした

安里達が駆け寄ってきた。

良かった、

あいつらも無事だったんだな！

「皆！ 無事で良かったぜ！」

それにしても、お前らボロボロじゃねえか。

一体何が……」

「ハハハ、

まあ話すと長くなるんだが……」

安里は自慢げに鼻の下を

擦りながら話し始めた。

要は車椅子の男こと

へパイストスやフリードを

木場達と共に倒したらしい。

あちこち破れているのに

軽傷なのはソーナさん達が

駆けつけてきてくれて

手当やサポートをしてくれたから

との事だ。

「バルパーはソーナと匙、

後フリーの悪魔祓い師で

取り押さえて融合は封じたつて

「いうからもう大丈夫だぜ！」  
「そっか！」

「ソーナさんとシュタークさんが  
いるなら大丈夫だな！」

「それはそれとして

何だよその鎧？ イメチェンか？」

「いや、それが……」

「どう説明しようか、

俺は頭を悩ませた。

安里はとにかく、

リアスさんとアジアに何て

説明しよう……。

「その悪魔くん、

いや赤龍帝は心臓を

二天龍に捧げた結果、

奴の一部になったのさ。

「どういう訳かは知らんが

悪魔クンの人格は

そのまま残っているがね」

「誰かがフラリと現れ

あっさり説明した。

あれ？ 契約先のお金持ちの

おじさんじゃないか？

安里も知り合いらしくて

俺と同じく目を丸くしていた。

「うおっ！ おっさん!?!」

「いつの間にそこにいたんだよ!?!」

「ふむ。

悪魔クンとヤス以外には

ほぼ初めましてって所かな？

俺はアザゼル。

墮天使総督にして

コカビエルの上司で

サタナキアとはまあ……

音楽性の違いで別れた

バンドメンバーって所だな。

よろしく頼むよ」

ええ……!!

まさかの新たな敵の登場!?

しかも墮天使の親玉だつて!?

が、アザゼルは外人みたい

に両手を広げて肩を竦める

おどけたポーズをして

敵意がない事をこちらに示す。

「おいおい、そんな怖い顔をしないでくれたまえ。

君達に危害を加えるつもりはない。

俺の狙いはあくまで

コカビエルを捕らえに来て

サタナエルにケジメを取らせに

きただけだ。

俺の部下の不始末は

俺の責任だからな」

「え？ 何を言っているんです？

二人とも俺が倒した筈じゃ……」

「いいや、違う。

コカビエルはともかく

サタナエルの奴はそう簡単に

くたばるタマじゃないのさ」

頬をかきつつ視線を地面に向けて

アザゼルは言った。

『ああ、

さつき言いそびれたがな。



あのサタナキアとかいう小僧は  
誰かの分霊だ。本体は別にいる』

「ええっ!？」

ドライグがいきなり喋った事に

アーシアちゃん達は驚いていたが

アザゼルは特に動じなかった。

「ほう……流石は伝説の龍だ。

既に見抜いていたか」

『世辞はいい。それより

奴の本体はどこでどうしている?』

ドライグの声に苛立ちが見えた時

アザゼルの近くにシユタークさんが

現れた。

「アザゼル、実に拙い事に

なりそうなんだけどネ……。

あれ、イツセー君じゃないか?」

鎧姿なのに俺に気づいた様で

パチリ、とウインクしてきた。

いや、やっぱりエロかわいいと

いうか……と、リアスさんの前だぞイカンイカン!

「シユタークさん、

拙い事って何です?」

「いや、まさかバルパーが

自分の身を犠牲にしてまで

聖剣を融合するなんてネ……。」

ええ!?

じゃあ暴走したエネルギーは!?

南極の氷を破壊して

ノアの洪水が起こるのか!?

皆に衝撃が走る中

一人アザゼルは笑い出した。

って笑い事じゃないだろ！

「いや、スマンスマン。」

「お前さん、若いだけあって  
ホントに人がいいな」

「何がですか！」

「サタナエルみたいな奴を

まともに信じたらダメだぜ？

ノアの洪水なんてデタラメだ。

奴は玩具にしている人間を

滅ぼすつもりなんてないのさ。

奴の目的は聖剣融合のエネルギーを

へパイストスの人工神具で

増幅させてある一点を狙撃して

破壊することにあつたのさ」

解説はいいから結論を

言ってくれよ！

俺達のイラつきが伝わったか

アザゼルはまたもや悪気なく笑ってみせた。

「奴が狙ったのは

氷結地獄の一点。

自分の本体が封じられた場所だ」

同時に異空間が振動を始め、

地割れが俺とゼノヴィア、リアスさん、

序にアザゼルを

呑み込んだ。

「はははははー！

よくもやってくれたねえ

赤龍帝！ それにアザゼル！」

聞こえてきたのはサタナキアの声。

恐らくサタナキアの本体、サタナエルが

俺達を引きずり込んだのだろうか。

い  
い  
ぜ  
！  
こ  
う  
な  
っ  
た  
ら  
と  
こ  
と  
ん  
や  
っ  
て  
や  
る  
！

## 第28話

「はははははー！」

よくもやってくれたねえ！

赤龍帝！アザゼル！」

地割れに飲み込まれた先は

また異空間だ。

今度はまるで宇宙空間の様に

星が煌めいている。

左右上下を見渡して

メンバーを確認すると

俺、リアスさん、

ゼノヴィア、

あとはアザゼルだ。

他のメンバーはどうしたんだ？

「どうやらサタナエルは

俺達にご執心らしいな」

アザゼルが視線を上に向けつつ

顎をさすりながら言う。

それにつられて見上げると

リアスさんとゼノヴィアの

スカートの中が……っておい！

ふざけんなよこのスケベ親父！

人のことは言えねーけどさ！！

「どこを見ているのよー！」

リアスさんが赤面しながら

アザゼルに魔力弾を放つが

ひらりとかわした。

やっぱり墮天使総督だけあつて

実力はコカビエル以上だ。

「いやいやすまんすまん。」

俺はもう少し苦味走つたいいい女が  
好みなんだが相方がなあ……」

するとサタナキア、いや  
サタナエルの声が響く。

「その軽薄さも

周りを油断させるか

取り込むための策……。

相変わらず癪に障る野郎だ」

「おいおいサタナエル。

地金がちらりと見えてるぜ。

神様名乗るならもう少し

メツキの腕をあげなきや

駄目だぜ？

はー、煙草がうめえ」

「つて貴方！

煙草まで……いつの間に!？」

リアスさんが驚くのも当然だよ。

この騒動の黒幕との決戦なのに

人を食ったこの態度と来たら……。

流星の俺でも呆れるわ！

「まあいい、これを見ても

まだ余裕ぶつていられるか？」

そして現れたのはサタナキア。

が、一人じゃなかった。

サタナキアが何と4人同時に

現れた！

「成る程、フリード・セルゼンに

分身の秘術を与えたつてのは

本当らしいな……」

アザゼルがそう呟くと

煙草をポイ捨てした。

総督ならマナーは守れよ。

そしてサタナキア達は

散開して俺達へと襲いかかった！

「気をつけろよ、

分身というか量産型とはいえ

そこいらの墮天使より

実力は確かだ」

アザゼルはサタナキアの刃を

結界で防ぎながら注意を促す。

「わかってるわ！

私の家族である眷属を

傷つけた罪は重い！」

「このゼノヴィア、

同じ相手に二度負けた事はない！」

おお、リアスさんも

ゼノヴィアもやる気だ！

けどコカビエルにやられた

ダメージが気になる所だ。

俺は二人から少し離れると

全身にドライグのオーラを流して

鎧を強化する。

「ふっー」

俺は手刀で斬りかかってきた

1体のサタナキアを切り裂いた。

「ほう？中々やるじゃないか！」

すると残りの3体が

俺を取り囲むように移動する。

そして光の剣や槍を構えて

一斉に襲ってきた！

だが俺は冷静だった。

何故なら――

「遅いんだよ!!」

俺は全ての攻撃を紙一重で避けた。

確かにスピードは速いし強い。

だけど攻撃パターンが全て一緒な上、直線的過ぎる。

だから簡単に見切れるんだ。

俺はまず1体を殴り飛ばし、

残り2体の攻撃を避けながら

一人を蹴り飛ばし、

最後の一人には裏拳で

カウンターを決める。

すると

3体とも光に包まれ消滅する。

これでサタナキアは

全員倒せたかな？

「くっ……!! 流石に元墮天使の

大幹部というのは確かな様ね！」

リアスさんが二人のサタナキアから

光弾を放たれるが飛行しながら

かわし続け、

「ふんっ！」

傍らゼノヴィアも他の

サタナキアの斬撃をかわし、

その腹に

破壊の聖剣を突き刺す。

「何だよこれ？」

何でサタナキアが

倒しても倒しても

湧いてくるんだ!？」

バギイン!

「はははー 余所見している

余裕があるのかい赤龍帝？」

ヒビの入っている

俺の肩甲骨の辺りに

奴の光の刃が命中してしまう。

「ぐあっ！」

俺は痛みを耐えながらも

何とか踏ん張って停止すると

上と下から同時に気配を感じた。

まさか……!?

「くたばれ」

やはりそこにはサタナキア達がいる

放ってきたのはさっきの

ギロチンの様な光の刃だ！

「ちいっ！」

俺は横に飛び回避するが……

やはりサタナキアがいる！

コイツは何人いるんだ!?

「あらら、かわされちゃった。

まあ良いか。次は確実に仕留めるだけだもんね」

そう言っつてサタナキアは

また俺に斬りかかる。

しかも今度は左右同時だ！

「くそっ！」

俺は仕方なく両腕を

クロスさせて防御する。

キイイイイン!!

流石というべきかドライグの

オーラを集中させれば

攻撃は防げるが……!!

「はははは、後ろががら空きだよ

赤龍帝」

サタナキアがそう言うのと



背後からもう一人のサタナキアが現れ、  
俺の首筋に光の刃を当ててきた。

しまった！ 挟まれた！

「さようなら、赤龍帝」

俺にとどめを刺そうと

更に刃が迫る！

「なんのおー!!」

俺は兜の口で奴の光の刃を

受け止めた。

真剣白刃取りならぬ白歯取りだ！

「なっ!?!」

そして驚く奴の鼻面で

強烈な頭突きをかます！

「うっおっ!!」

何人目かは解らない

サタナキアはかき消えたが

すぐさま他のサタナキアが

現れる！

クソツ……! !

これじゃキリがない！

俺はどうすればいいんだ？

「ほれほれ、もっと楽しませろよ

この俺を退屈させるなよ？」

サタナエルの声が聞こえた。

高みの見物って奴か！

どこまでもムカつく野郎だ！

リアスさんもゼノヴィアも

サタナキアに善戦しているが……

「ゼノヴィア！

貴女はもう限界でしょう！

下がってなさい！」

「いや、私はまだやれる！」

私はまだ……負けていない！」

二人は明らかに疲労している。

それにゼノヴィアに至っては

破壊の聖剣も折れてしまっている。

「ははははは！」

そろそろ種明かしをしてやろう！」

「実はこの空間そのものが

サタナエルなんだよ。

あの星の煌きみたいなのは

サタナキアの欠片だ。

つまりシコシコシコシコ

奴はこの空間で

俺に封じられていた間に

猿みたいに自分の分霊を

量産していた訳だな。

ホント自分大好きのナルシスト。

そういう所は直らんなあ」

サタナエルが解説しようとしたら

アザゼルが先に解説していた。

しかも煽りまで加えて。

するとアザゼルの解説を聞いた

サタナエルは……

「……殺す。殺してやるぞ

アザゼル！貴様は

特に念入りに

いたぶり殺してやる……！」

この空間で癒やしては引裂いて、

焼き払っては癒やし……！！

粉微塵にしては復元し……！！

お前は1000回

狂って死んでいく……!!」

うわあ……。これはヤバイ。

凄まじい殺意を感じる。

色々拗らせたというか……

小人閑居してナントカカントカ。

「おいおい、あんまり怒ると

血圧上がるぜ？大丈夫か？

ああ、自称神様だから

面の皮と血管は丈夫だよな？

悪い悪い、ついウツカリ」

ブチイッ！

「死ねえええ！アザゼルウウ!!」

俺の分霊共！

奴らを巻き込んで自爆しろ!!」

遂にキレたサタナエルが

俺達に向かってサタナキア達を

けしかけてくる。

その数は……数え切れねえ！

アザゼルが咄嗟に結界を張るが

奴等はまるで砂糖にたかる

アリの様に押し寄せてきた！

「おっといけねえ。

オイ、悪魔クン……いや赤龍帝。

譲渡の力は使えるんだろ？」

いや、そりゃ使えるけど……!!

まさかアンタに使えっというのか？

すると、俺の考えを読んだらしい

アザゼルは首を左右に振った。

「そうじゃなくてだ。

その聖剣使いのお嬢ちゃん  
隠し玉にリアスの滅びの魔力を

乗せて切り裂く、

「このプランはどうだ？」

「なっ!？」

「何だと!？」

ゼノヴィアは驚き、

リアスさんは目を見開く。

「確かに……」

それなら消滅させられるかもしれない!

……でもどうやってそれをするの?

「私の魔力では足りないのよ」

「心配すんなって。」

お前さんには

隠された力がある。

俺がそれを引き出してやるよ」

キリツと引き締まった顔で

アザゼルはリアスさんに言う。

「お願いします!」

リアスさん!

俺に力を貸してくれ!」

俺はリアスさんの手を握り、

真っ直ぐに見つめる。

「イツセー……」

リアスさんは頬を染め、

潤んだ瞳を向けてくれる。

「ようし話は決まりだな!

おい、お嬢ちゃん!

例の隠し玉を出しな!

俺の人工神器の守護結界も

実はそろそろ切れそうだな……!頼むぜ!」

「……ええい解った……!」

出し惜しみは無しだ!!」

ゼノヴィアは叫びながら

手を掲げると何やら物々しい

大剣が出てきたぞ!!

おおっ！　なんかカツコイイ！

「因みにそいつの名は

デユランダル。

エクスカリバーと並ぶ

聖剣の中の聖剣だ」

「いや解説はいいから！

早く私の隠された力の

引き出し方を教えなさい！」

この状況ならリアスさんが

キレかけるのも無理はない！

俺だって殴りたいし！

「解った解った……。

それはな……

こうするんだ……よっ！」

ぼちっ……ずむずむ♡

リアスさんのおっぱいに

アザゼルの指が沈んだ……!?!

え？このおっさん……!?!

何してやがんだああああ!!

「いやああああ!!」

「うおああああ!!」

『Transfer!』

俺とリアスさんの怒りが

同時に振り切れると

2つのオーラが呼応して

ゼノヴィアのデユランダルが

輝きだす！

「今だ！その剣を思い切り

ぶんまわせ!!」

「ええい……!」

もうどうにでもなれー!!」

言われるままにゼノヴィアは  
デュランダルを横薙に払うと

その一閃は空間を切り裂いた!

「ぐがあああああ!」

「ぎゃああつ!」

サタナキア達が切り裂かれ、

更にサタナエルもダメージを

受けたらしい。

「ぐおお……!」

だ、だが貴様らの魔力も限界だ!

だが俺にはまだ数多の

分霊がある……!」

どの道俺の勝ちだ!」

サタナエルは勝ち誇るが

アザゼルは余裕の顔だ。

まるで勝利が確定

しているかのように。

「解んねえかな?」

俺がマナー破りをしてまで

煙草をポイ捨てした意味が……?」

「何……!」

サタナエルが動じた様子を

見せたその直後……!」

ドオオオオオンツツツ!!!

激しい轟音と共に俺達の背後、

空間の裂け目から

何かが飛び出してきた!

何だ……俺と同じ様な鎧だけど

真っ白だ……！

あれは一体……？

「相変わらず煙草の趣味は  
悪いなアザゼル」

「言うなよ『白龍皇』ガイドビーコンの  
カモフラージュには丁度いいだろ？」

「ヴア、ヴアーリ……！！」

ヴアーリ・ルシファー！」

アザゼルに言われて現れた

白い全身甲冑の男は、

ヴアーリというらしく

サタナエルの声は震えていた。

「久しいな墮天使サタナエル。

相変わらず弱いもの殺ししか

能のない矮小な男め」

「だ……黙れ！ 黙れ！！ 黙れ!!!」

俺は、魔王をも凌ぐ、墮天使を

凌駕する聖書の神亡きこの世に

復活する新たな神となるのだ！」

『二天龍に怯えながら

箱庭の世界で神を騙って

満足すれば良かったものを……』

ヴアーリの鎧からだろうか？

誰かの声でした。

いや、ドライグの記憶が

流れ込んでくる。

アレは……アイツは……俺の……

ドライグの宿敵の……！

アルビオン！

「消えろ！ 白龍皇！」

サタナエルの金切り声と共に

ヴァーリの身体が震える。

「この世界での俺は全知全能！

分子単位まで貴様を細かく  
ちぎり飛ばしてやる!!」

な、何だと!?

いくら何でもそれは……!?

いや、平気だな。

何故ならアイツの、

アルビオンの力は……。

『Divide!』

奴の力は俺の……

いや、ドライグの真逆。

相手の力を半減させる力だ。

「ぬうっ!」

「ば……馬鹿な!俺の力が!

半減……!?ぐおおおつ!!」

「俺の力は全ての光と闇、

そして次元すらも半分にする事が出来る」

「お……おおお! や、やめろ!

やめて……! やめてくれ……!!」

『Divide!』『Divide!』『Divide!』

星の煌き、

もといあの墮天使の分霊が

消え、徐々にこの空間が

崩壊していく。

「嫌だ……やめろ……消えたくない!」

「ふん。やはりその程度か。

所詮お前などその程度の存在だ」

「や……やめ……

助け……」

『Divide!』



遂に空間はイツセー……

いや、俺達でも果てが見えるまでに  
小さくなっていた。

『後はお前でも何とかできるだろう？ 赤いの』

「言ってくれるぜ、白いの」

勝手に口が動いた。

俺……？あれ、俺は何だ？ 誰だ？

ドライグ？赤龍帝……？

あれ……おれは、だれだ？だれだ？

「イツセー！」

ぎゆうつと誰かに抱きしめられた。

ああ、暖かい……この温もり……！

俺は兵藤一誠！

リアスさんの婚約者で

ドライグの相棒で赤龍帝だ！

「じゃあな、サタナエル！」

俺はコカビエルを倒したあの

光の刃『ラグナロク』で

空間を切り裂くと、

サタナエルは魂と

空間ごと消滅した。

## ※第29話（イツセー×イザイヤ&木場）

遂にサタナエルを倒す事に  
成功した俺達だが、

上空にはヴァーリ・ルシファーが  
いて、俺は白龍皇と相對する事と  
なつた！

俺も無理な連戦はキツイが  
リアスさんやゼノヴィアの前だ！  
泣き言は言つていられない！

「勢いこんでいる所悪いがな、  
兵藤一誠君」

？

ヴァーリが俺の名前を知っている？  
何でだ？ 俺とアイツは  
初対面の筈なんだけど……。

「君はもう限界だろう。」

そこで提案なんだが……、  
このまま帰る気はないか？  
えっ!?! どういう事だよ！

「このまま戦い続けたら、

君の身体は壊れてしまう。」

そうならないように、  
ここで引いてくれないか？」

あれ？ 赤龍帝と白龍皇は  
争う定めにあるとかないとか  
、そんな話じゃなかったのか？

ヴァーリって奴、

随分優しい事を言っているけど……。

まあ、確かに今の俺の状態だと  
とてもじゃないが戦えないからな。

ここは一旦引いた方が  
無難かも知れない。

「君とはベストの状態で

闘ってみたいからな……」

腕組みしながら、

こちらを見つめるヴァーリから

俺はコカビエルと同じ匂いを

感じる……。

所謂世界と折り合えない

闘争狂ってタイプだ。

そしてその強さは本物だろう。

「後ろからドカン！」

なんて事はないだろうな！」

「勿論約束する」

………よし、決まりだ。

そもそもサタナエルは

ヴァーリがアルビオンの力を

使ったから倒せたってのも大きい。

正直なところ、これ以上戦うのは難しいし、

部長達に迷惑をかける訳にもいかない。

ここは一度退くべきだ。

「分かった、今日は助かったぜ。

ありがとうな！」

「……変わった男だな、君は」

こうして俺達は一時撤退を決めた。

皆に迷惑をかけない為にも、

仕方のない判断だったと思う。

↓

そしてその週の日曜日、

俺の家で戦勝会を開く事になった。

母さんだけじゃなくて

安里の叔父さんである辰郎さんも料理を作ってくれていた。

流石と言うべきか、美味そうな料理の数々が並ぶ。

そんな中、俺達のテーブルではアーシアがお祈りをしていた。

「主よ、本日もあなたの恵みに感謝致します……いたたた！」

「ハハハ、アーシアはうっかりだなあ。

今は悪魔なんだから神様へのお祈りなんかよりいただきますって言えばいいんだよ」

「はい！ 分かりました。いただきます！」

俺の言葉にアーシアは元気よく返事をする。

やっぱりアーシアは可愛いな。

アーシアの隣にいる

ゼノヴィアが微笑ましそうに見ていた。

「しかし、妙なものだ」

「何がだよ？」

唐突にゼノヴィアが言う。

「いやね、サタナエルとの戦いで

私はデュランダルを

振るつたのだろうか？

その時、私には神の加護など

全く感じられなかったんだ」

……えっ？

「私の信仰心が足りなかったせいなのかな？

それとも、悪魔や堕天使と

共闘した事が

神の御意にそぐわなかったのだろうか……」

ゼノヴィアの表情が

若干沈んでいる様に見える。

「おいおい！」

それはそれでヤバいだろ！

まさかその事でお前が

破門なんて事はないだろうな！

そんな事になったら

俺は天界の天使達を許さねえからな！」

「皆を助けたのに破門だなんて

おかしいだろ！

アーシアちゃんの時もそうだ！

皆の命や平和よりメンツかよ！

ふざけんな!!」

安里の奴も俺と同じ気持ちらしい。

やっぱり親友だよな。

「ああ、すまない。大丈夫だよ。

神から破門されようと

神の教えが間違っていたとは思えない。

私は私のやり方で

この世界を生きていくだけだ」

そう言って力強く笑う

ゼノヴィアを見て安心した。

ゼノヴィアと初めて会った時、

コイツからは

どこか寂しさを感じた。

でも今なら分かる気がする。

ゼノヴィアもまた、

世界と折り合えない者なんだと。

「そう決まっているから諦めろ」

「秩序のためには犠牲も必然」

そう言いつけてくる世界に対して。

そう言いつけてくる世界に対して。

それでも

彼女は自分の信じる道を進む。  
それがどんな道であれ、  
きつと彼女の心に迷いはない。

「ああ、その事なんだが  
心配はいらんぜ？」

……つてアザゼルじゃねえか！  
アンタを呼んだ覚えは

無いんだけど!!

いきなりの登場でビックリだよ！  
っ—かなんで

アザゼルがここにいるんだよ!?

「まあそう言わずに聞けつて」

アザゼルはいつもの様に、

気楽な調子で言う。

「聖書の神は

もう死んでいるからな」

……は？ 何言ってるんだ？

神が死んだだって？ そ、

そんな馬鹿な事がある訳がない。

いや待てよ……??

確かサタナエルの奴……。

『神亡き世に新たなる神となる』

とかほざいてた様な……。

「ああ、あれな。

実はアイツ、聖書の神の地位を  
乗っ取るつもりだったらしい。  
身内の情けで一回は白龍皇と  
協力して

氷結地獄に閉じ込めたんだが  
全然反省してなかったなあ。

すまんすまん」

いや、すまんすまんじゃないよ！

「何やってんだよ！」

そういう大事な事は早く言え！」

安里も当然ツツコむが

アザゼルは気にせず続ける。

「いや言っても信じねえだろ？」

た、確かに……。

アーシアなんて明らかにシヨックを

受けているし、ゼノヴィアも

箸が止まっている……。

イリナがいなくて良かった……。

そんな中で

木場は……静かに頷いた。

「何となくですが……」

予感はしていました……。

僕達が『福音呼びし勝鬨の剣』を

作り出せたというのが証拠です」

「お、流石に察しが良いな。

聖と魔が融合するなんてのは

本来はあり得ない事だ。

バランスを担当する存在が

消えたか……」

アザゼルはそこでチラリと

安里やナイアちゃんの方角を

見た後一息置いた。

「俺達が知らないナニカが

介入したかだわなあ……」

「アンタ、どこまで知っている？」

ナイアちゃんの

口調がいつもと違うな……。

そう言えばキュクロちゃんと  
戦ったらしいけどどう勝ったかは  
教えてくれないし……。

なんか二人の間に  
剣呑な雰囲気……。。

戦勝会で喧嘩なんてイヤだぜ？  
と、その時だ。

「スイートポテトを

焼いたんだけど食べるかい？」

ゲイトさんが私服の上に

エプロン、ミトン、

三角巾という出で立ちで

出来たてのスイートポテトを

キッチンから持ってきた。

思わずズツコケる所だった……！！

なんなのこの人！

メチャクチャマイペースじゃん！

しかもタイミング的に

ナイス過ぎだし！

「うおー、いいね！」

甘いモンは大好物だ！」

アザゼルが食いついた！

コイツ、ホントに何でも食うんだな！

「有難く頂く！」

わっしょいわっしょい！」

「杏寿郎。

もう少し行儀の良い食べ方を

しなさい」

煉獄さんは

両手に持って食べてるし！

ニトクリスさんから



ツッコまれているし！

まあ、雰囲気是和んだからいいや。

それにしてもゼノヴィアが  
神がない事に

シヨツクを受けないのは

こういう理由があったのか……。

そして俺はふと思った。

「なあ、アザゼル。

アンタさつき『身内の情け』って  
言ってたが、

もしかしてアジアの時に

力を貸さなかったのも

そのせいなのか？」

「……まあ、そんな所だ」

何か若干間があっただけど……

まあいいや。

「まあ、それよりもだ。

リアスのお嬢ちゃんに

サーゼクスと渡りをつけて

欲しくてね……」

……はい？ え？

何それどういう事!?

「私に何をしろと……？」

「いやね、俺としては

武断派のコカビエルと

サタナエルを肅清した事で和平に動けると

判断したのさ」

肅清って……。

意外とアザゼルって

過激なんだな……。

「それは良いけれど

二人が消滅したというのは  
貴方達が著しく弱体化したという  
事実でもあるわ。

なら貴方達を天界と組んで  
排除したあと

相互不可侵とする手もあるわね。

サタナエルもコカビエルも

私のイツセーが討ち滅ぼした

事実はお兄様も既に承知だし

ミカエルだつてイリナから報告を

受けているのではなくて……?」

おお！ 流石リアスさん！

アザゼルに一步も引かない！

カツコイイーツ!!

そこに痺れる！ 憧れるう！

「その心配はない。

俺とコイツはもう同盟関係だ。

ヤスも俺の舎弟みたいなモンだし

ミツテルトやアイツと良い仲だろ？

つまり墮天使勢力つてワケだ」

アザゼルはゲイトさんと

肩を組んでぬけぬけと言う。

な、何だと!?

「な、何ですって!?!

ゲイト！ これはどういう事!?

貴方は家の領地に間借りしている身でしょう!」

「え？ 同盟は一つの勢力としか

してはいけないものだったのかい?」

不思議そうにゲイトさんは

尋ねてきた。

安里に視線を送ると

すまん、と言いたげに首を横に振っている……。

あ、この人所謂天然タイプなんだ。「なに言ってるんだ。」

どんだん同盟していいんだよ！

昨日の敵は今日の友！

冥界情勢は誠に複雑怪奇ってな！

人類皆兄弟！ ガハハ！

おう飲め飲め！」

「僕は蜂蜜酒が好きなんだけど」

「仁義ってものがあるでしょう！」

ゲイトのおたんこなす！」

アザゼルはビールを注いだ

グラスをゲイトさんに

渡して豪快に笑っていた。

人類皆兄弟って人間じゃねえし

アンタさつきサタナエルと

コカビエルを粛清したって

言っただろうが！！

とんでもねえおっさんだよ！

アーシアは目を丸くしながら

「凄いです……。」と呟いていた。

確かに凄いや……。

しかもアザゼルはボールクとも

伝手があったらしくて

ミカエルさんは了承済みらしい……

どんだんだけコネがあるんだこの総督。

1

「は〜今日は楽しかったな」

パーティーも終わり、

俺はベッドに横になっていた。

すると、ドライブグの声がした。

『なかなか言い出すタイミングが  
なかったから改めて話すぞ』

「ん？ どうした？」

『あの鎧を纏う所謂「禁手」だが  
なるべく使うな』

「はあ!? なんでだよ！

アレを使えば

もつと強くなれんじゃねーか！」

思わず叫んでしまった。

俺がパワーアップすればリアスさんや

朱乃さんや小猫ちゃんや

木場も守れる！ なのにどうしてだ!?

『お前は俺に心臓を捧げただろう?』

その代わりとして俺の心臓が

代わりの役目を果たしているのだが……

今の相棒は

肉体と精神が脆弱すぎるのだ。

まだ眷属というカテゴリーに

いるから仕方がないがな。

余り多用すると俺が望む、

望まないに関わらず相棒の自我が

消失しかねん。覚えはないか?』

「……あ」

言われてみれば……

ヴァーリに会った時に

俺は自分が誰なのか、何なのかすら

曖昧だった。

リアスさんのおっぱいのおかげで

どうにかなったけど……。

『それに俺にも

一応のデメリットはあるんだぜ？  
俺の心臓が具現化したのだから  
相棒が死んだ時は俺も死ぬ。  
文字通りの一蓮托生だ』

「そ、そんな……」

じゃあ俺が死ねば

ドライグも死んでしまうのか!?

わ、悪い……俺が歴代最弱の

赤龍帝なばつかりに……!

『別に気にするな。』

俺達は運命共同体だ。

どちらか一方だけが

生き残っても意味はない。

相棒も生きてくれ。

そして俺を宿した者として

誇りを持って生きていけ。

俺を最強へと導く存在として

生まれてきた事を自覚しろ。

お前にはそれだけの力がある。

神器は所有者と共に成長する。

さあ、明日からも特訓だ!』

「ああー、分かったー！

やってやる！ 絶対に強くなる！」

こうして俺は決意を新たにしました。

最強の兵士、そして

最高の赤龍帝になる為に！

「……イツセイさん。

お話があります」

って誰だろう？

見た感じ俺と

同年代っぽい女の子だ。

でもどこかで見覚えのある顔だ。

「はい？」

って木場!? 木場じゃないか!?

いや、だけど金のロン毛だし

その……豊かなおっぱいを

お持ちだし!?

ど、どういう事だ!?

「私はイザイヤ……。」

木場と融合した聖剣の因子の

所有者……

と言えはお解りでしょうか?」

ニコリと微笑むイザイヤさんは

凄く綺麗だな……って

そうじゃなくて!

ま、まさか嘘から出た誠!?

あのエツチな夢は予知夢だった……

ってコト!?

「え、ええと……。」

イザイヤさんは俺に何の用で?」

「その……祐斗を通して……」

貴方のその……優しく、逞しく、

雄々しい姿を見ていたら……」

もじもじとしながら、

頬を染めるイザイヤさんは

本当に可愛らしいな、って

しっかりしろよ俺!

「あの……その……」

貴方を……愛してしまっただんです!

だから私を抱いて下さい!」

………はい!?

「ちよっ! ちよつと待って!

いきなり何を言ってるんですか！

アంతは木場と融合しているんでしようが！

俺がイザイヤさんを抱いたら

木場がどうなるか分かんないじゃないですか！

貴方の体の中に

木場の人格と

記憶があるんですよ!?!」

「それは大丈夫です。

祐斗も了承済みですから。

今は私が表に出ていますけれど」

「はあああ!?!」

何それ!?!

俺は今とんでもない状況に

置かれている気がするぞ!?!

「いやいやいやいや!!」

流星にダメでしょう!?!」

と、慌てふためく俺に構わず

イザイヤさんは服を脱いでいく。

「ちよ、マジで勘弁してくださいよ!」

「お願いします……」

涙目になりながら

必死に訴えかけるイザイヤさん。

俺は心の中で葛藤していた。

確かにこんな可愛い子に迫られて

嬉しくない訳がない。

でも、木場が了承してるとか

そんなのは関係ないだろ！

木場が許しても俺が納得できないんだよ！

だって、

俺はリアスさんが好きなんだから！

しかし、俺の気持ちとは裏腹に

俺の体は勝手に動き出した。  
これもハーレム王を目指す俺の  
悲しいサガなのか……!?

↓

俺はベッドの上で全裸になった  
イザイヤさんの上に  
覆い被さっていた。  
俺の下で恥ずかしげに  
顔を赤らめながらも  
潤んだ瞳で俺を見つめてくる  
イザイヤさん。

「はぁ……はぁ……」

イザイヤさんのおっぱいが  
俺の胸板に当たる。  
柔らかな感触が伝わってきて  
とても心地いい。

「イツセーさん……」

イザイヤさんが俺の首の後ろに手を回し、  
唇を重ねてきた。  
触れ合う様な優しいキスだった。

「ん……あぁ……♡」

イザイヤさんの口から漏れ出る  
艶やかな声が耳に届く。  
俺は我慢できなくなつて  
舌を絡めていった。

「ちゅぷ……れる……」

はむう……♡」

イザイヤさんも  
積極的に応じてくれる。  
そして俺達は互いの  
唾液を交換し合い、



混ざり合ったモノを飲み干していった。

「あ……ああ……♡」

イツセーさあん……♡」

トロンとした表情で

俺の名前を呼ぶイザイヤさん。

そのエロさに

俺のモノが

痛い位に勃起してしまう。

けど、いきなりするのは

イザイヤさんに

負担がかかりすぎる。

まずはイザイヤさんを

イカせてあげよう。

俺はイザイヤさんのお尻を鷲掴みにして揉んでみた。

木場の肉体とは信じられない位に

丸みを帯び柔らかかった。

「ひゃう……！」

イツセーさん……お、お尻なんてえ……！」

驚いた様子のイザイヤさんだったが、

すぐに快感を

得始めたのか甘い吐息を

漏らし始めた。

「あつ……あん……ああん……」

そ、そこお……もつと強くう……♡」

要望通り、指に力を入れてお尻を強く握ってあげた。

「ああああ……！」

しゅごい……しゅごく気持ち良いです……！」

あああ……！ イツちやいます……！」

ビクンと大きく跳ねた

イザイヤさんは

全身から力が抜けてしまった様だ。

「はあはあ……」

イツセーさん……

凄く上手ですね……。

あの男達とは全然違う……♡

優しく力強くて素敵です……♡」

そう言ってくれるのは嬉しいんだけど、

あの男達って誰なんだろう？

やっぱり木場と融合した聖剣使いの人達の事かな。

「あ……ごめんなさい……」。

私……祐斗と融合する前は

教会で……好きでもない、

名前も知らない男達に無理やり……

何度も犯されて……！」

涙を流すイザイヤさん。

そんな事があつたなんて知らなかった。

木場が言っていた

「教会には近づかない方が良い」って言葉の意味が

ようやく分かったよ。

「でも……こんな汚い私でも

イツセーさんを気持ち良くする事はできますから……」。

気兼ねなくオナホにしてくれて

いいんですよ……♡」

痛々しく全てを諦めた様な笑顔だ。

「嫌です」

「え……」

イザイヤさんの顔が不安に慄くが

論より証拠だ。

彼女を優しく花束を扱う様に抱きしめる。

「ふわっ!？」

「もう大丈夫ですよ。」

貴方は綺麗で素敵な女性だ。

貴方は汚されていないし、  
貴方は傷つけられていない。  
貴方は穢れてなんかいない。

だから、そんな風に自分を卑下しないで下さい。

俺はそんな悲しい顔の女の子を

抱いたりする程馬鹿じゃない」

イザイヤさんの目から涙が零れた。

「ありがとうございます……！」

こんな私でも愛してくれるんですか……？」

「勿論！ そんなイザイヤさん

だからですよ！」

「イツセーさん……♡」

イザイヤさんが俺の胸に

顔を擦り寄せてきた。

俺はイザイヤさんを抱き締めたまま

ベッドに倒れ込む。

「あっ……ん……♡」

イザイヤさんは俺に抱きついたまま、

首筋に吸い付いてくる。

「ちゅぷ……れろ……」

はむう……♡」

イザイヤさんの柔らかい舌が

俺の首元を這い回るのがこそばゆい。

「はあ……イツセーさんの味……♡」

俺の匂いを嗅ぎながらうっとりとするイザイヤさん。

そして、俺の手を取り自分の

股間へと導いた。

「お願いします……」。

私のここを触ってください……！」

そこは既に洪水の様に濡れていて

股間のモノも勃起していた。

「分かりました」

俺はイザイヤさんの秘所を指先でなぞった。

「ひゃうん……………」

は、激しいですう……………」

俺が激しく指を動かす度に、

イザイヤさんは激しく乱れていく。

そして股間のモノも

しゅっしゅっ、と勢いをつけて

扱いていく。

「あっ……………ああん……………あぁ……………」

どっちも、どっちも……………」

おチン○ンもオマ○コも

いいです♡

ああ、イクツ……………」

イツちやいますう……………」

びゅく、と白濁液が放たれ

ぷしゅつと潮が吹く。

「はぁはぁ……………凄い量……………」

こんなに出るなんて……………」

知らなかったぁ……………」

「イザイヤさん、可愛いよ……………」

「イツセーさん……………」

イザイヤさんがキスを求めてきてくれたので、

俺はそれに応えた。

イザイヤさんとのディープなキスはとても長く、

お互いを求め合うものだった。

「ん……………ん……………ん……………」

長い口づけの後、イザイヤさんは

ゆつくりと唇を離れた。

「ああ……………私……………私……………」

イツセーさんとキスするだけで……………」

気持ち良くて頭が真っ白になる……。  
イツセーさんに愛してもらえるなんて……。  
夢みたい……。♡

イツセーさんのおちん○ん、  
すごく硬くて大きくなってる……。♡

これが私の中に入るんだ……。♡嬉しい……。♡」  
イザイヤさんは、

俺のモノを見て嬉しそうにしている。  
すごくイヤらしくて堪らない！

「イツセーさん、私の中に入れてください……。♡」  
そう言っつて足を開くイザイヤさんは

明らかに俺以上に興奮しきりだ。

「はい、行きますよ」

「ああん……。早くう……。♡」

イザイヤさんが急かすので、  
俺は彼女の中に挿入していく。  
ずぶぶっ！

「あん……。入ってきた……。♡」

イザイヤさんの膣内は熱くて狭く、  
俺をキュウウツ、と締め付けてくる。

「ふわ……。おつききて……。硬い……。♡」

イザイヤさんは

とても気持ち良さそうで、

表情も蕩けている。

しかし、まだ半分程度しか入っていない。  
ここから一気に奥まで入れる。

ズブブツ!! イザイヤさんの奥に突き当たった。  
子宮口に先端が当たる感覚がある。

その瞬間、イザイヤさんが  
大きく跳ねる。

「ひゃうううん♡♡♡」

イザイヤさんの

口から甘い声上がる。

イザイヤさんはビクビク震えながら、  
体を仰け反らせていた。

どうやら軽く達してしまつたらしい。

絶頂を迎えた事で、イザイヤさんの中が痙攣して  
俺のモノを搾り取ろうとしてくる。

だが、俺は耐え抜く。

そしてピストン運動を開始した。

「ふわぁ……すごい……♡イッセーさんのが……

中で動いて……ひゃん……♡」

イザイヤさんは感じてくれているが、

あまり激しく動くと

痛がりそうだ。

俺はイザイヤさんに覆い被さり、

密着しながら腰を動かしている。

この体勢ならイザイヤさんの顔が見えるからね。

「あつ……んん……はあん……」

イザイヤさんは快感に喘いでいる。

「イッセーさん……好き……大好きですう……♡」

俺の背中に手を回してきた。

俺達は今、正常位で繋がっている。

「イッセーさん、

もつと突いて下さい……!」

「はい……」

俺が応じて腰をグラインドさせる中

イザイヤさんは俺に抱きつきながら、

足を絡めてきた。

いわゆるだいしゆきホールドだ。

更に俺の首筋や耳を舐め回してきた。

ちゅぱちゅぱという音が聞こえる。

「イザイヤさん、俺もそろそろ……！」  
出しますよ！」

俺もイザイヤさんの舌の動きに合わせて  
舌を絡ませると、

イザイヤさんは激しく舌を動かす。

「出してえ……♡いっぱい注いでください……♡」  
ドピユツドピユ——ツ!!!

「ああんっ……熱い……♡」

イクツ……イツちやいますううううっ!!」

ビュルルルーツ！ ビューツ！ ビュシユシユ！

俺の膣内射精にリンクするかの様に

イザイヤさんは盛大に潮を吹き、

尚且つ彼女のモノから精液を

飛散させた。

「はあ……はあ……♡」

絶頂を迎え息も絶え絶えな

イザイヤさんだがその表情がまたそそる。

「はあ……イツセーさん……♡」

イツセーくん……♡」

イザイヤさんは俺の名前を呼びながら、

ぎゅっとなぎしめてくる。

俺はそんなイザイヤさんを抱き返した。

「イザイヤさん、大丈夫ですか？」

「はい……♡とても気持ち良かったです……♡」

イザイヤさんは笑顔を浮かべた。

やっぱりかわいい。

「イザイヤさん、可愛いよ」

「えへへ……」

イザイヤさんは照れ臭そうに笑った後、

俺におねだりを始める。

「あの……僕……私……」

もつとイツセーくんを感じたい……♡」  
「いいですよ」

俺は当然了承した。

ん？ でも今僕って言った様な……？

けど、俺の目の前に満月の様に

美しい尻が突き出されている事に

比べれば些細な事だよな……！！

イザイヤさんは四つん這いになり、

俺に向かってお尻を突き出している。

そして俺の方を向いてこう言ってきた。

「僕の中に……入れて……♡」

「はい！」

俺は返事をして、

イザイヤさんの腰をがっしり掴む。

「あんっ……♡」

イザイヤさんは

俺のモノがオマ○コの入口に

あてがわれるだけでもう

艶かしい声を上げる。

俺のモノは既に

臨戦態勢に入っている。

イザイヤさんのオマ○コは

愛液で濡れており、

いつでも挿入可能だ。

イザイヤさんのモノも

ピンピンになり、小刻みに

震えている。

「イザイヤさん、

もっと気持ち良くなりたくないですか？」

「うん……♡なりたい♡」

イツセーくんとセックスして



気持ち良くなりたい♡」

イザイヤさんは

もう完全に俺とのセックスに

夢中でドロドロに

蕩けた表情をしている。

「じゃあ……」

俺は松田推薦のオナホを

ローションで濡らして

イザイヤさんのモノに鞘のように

納める。

イザイヤさんのモノは

既に先走り汗が溢れ出ていて、

挿入もスムーズだ。

「あうっ！ ううう！！ はううう！！」

イザイヤさんは快楽に耐えようと

必死になっているようだ。

「イザイヤさん、

もつと力を抜いた方がいいよ」

「むりい……♡」

きもちよすぎて……

力ぬけないいい♡」

イザイヤさんは快感によって

呂律すら回っていない。

「しようがないな……」

イザイヤさんのモノをオナホールから引き抜くと、

「ひゃああああん！！」

と悲鳴を上げて

イザイヤさんは達してしまった。

だが、俺は気にせずまた挿れる。

今度はオナホと俺のモノで

イザイヤさんの男と女に

同時に快樂攻めだ。

イザイヤさんのモノが

ビクビク痙攣している。

「ふわぁ……………♡きもちいい♡」

僕……………こんなの初めてだ……………♡

ああ、僕、僕♡

イツセーくんの女になりたい♡

キミのチ○ポで僕をキミの女に

してえ♡♡♡」

イザイヤさんはすっかり

淫乱モードに入っている様だ。

「イザイヤさん、俺のモノになるんだね!？」

「なるううううっ!!」

僕はイツセーくんのお……………♡」

「俺のなんだ？」

「僕のおま○こはイツセーくんだけのもの♡」

「よく出来ました」

俺はそう言つてイザイヤさんにキスをする。

「んちゅ……………♡んん……………♡」

イザイヤさんは目を閉じて俺と舌を絡ませてくる。

イザイヤさんの口の中はとても甘く、

唾液も甘い味がする気がした。

「んぎっ、ひいひい……………♡♡♡」

ズコズコと最奥までノックされ

じゅぼじゅぼオナホでしごかれて

イザイヤさんは白目を剥きながら

盛大に潮を吹きまくっている。

もうお互いに限界だ!

イクぞ……………!! イザイヤ……………!!

「あ、あ——ッ!!!」

ドピユツドピユーツ!

ビューツ！ ビュルルル！

俺はイザイヤさんの中に  
躊躇なく亀頭を擦りつけて射精した。

「はあ……はあ……」

「はあ……はあ……」

イザイヤさんと俺の荒い息遣いだけが聞こえる。

「イツセーくん……♡」

イザイヤさんは俺の名前を呼んで抱きついてきた。  
少しムチャが過ぎたか心配したけど  
問題はないみたいだ。

「イザイヤさん、大丈夫？」

「うん……♡凄く良かった……♡」

君さえよければ……これからも  
僕を抱いてほしいな♡」

ん……？ 声は違うが……

この口調と雰囲気……！

「祐斗……!?!」

「お前今、祐斗の意識か！」

「そっだよ♡」

けど、大丈夫♡

心は男だけど身体は女さ♡」

ちゅっ……♡

「逆だ逆——！」

や、やめろ！

俺のチ○ポに嬉しそうに

キスをするなあああ!!」

俺は思わず叫んでしまった。

けどイザイヤさん、いや

木場は媚びた様な笑みを浮かべた。

「なんで？」

僕はもう君のモノだから……♡

僕を愛してくれるチ○ポに  
感謝するのは当然だろ♡」

「うわああああ!!」

俺の叫び声に駆けつけた

リアスさんが硬直したのは

その数秒後のことだった……。

### 3 勢力会談編

#### ※第30話（イツセー×シユターク）

「どりゃあああ!!」

今日も今日とて

俺ははぐれ悪魔

討伐に勤しんでいる。

今日のはぐれ悪魔は

下半身が蠍の様な不気味な奴だ!

俺はそのはぐれ悪魔の

尻尾の攻撃を紙一重でかわし、

カウンターをくらわせる。

「ギャアアッ!」

はぐれ悪魔は悲鳴を上げるが

反撃とばかりに毒液を

尻尾から放出してきた!

俺の顔めがけて飛んでくる毒液を

俺は咄嗟に身をかがめて避ける。

そして懐に入り込み

渾身の力でアツパーカットを

繰り出す。

跳躍の瞬間に倍化を使うことで

その破壊力は数倍、

いや数乗に跳ね上がるんだ!

「ぐああっ!」

俺の攻撃を食らった

はぐれ悪魔はそのまま吹き飛び、

壁へと激突する!

「大人しく降参しろ!」

だが、はぐれ悪魔は

よろめきながらも立ち上がる。  
まだ戦う気力があるのか？

「ふうん……なかなか」

頑丈なはぐれだねエ……。

イツセー君のパンチを食らって

まだ向かってくるとは

そのガッツは恐れいるヨ」

シユタークさんは髪をかきあげつつ

もの憂げな態度でそう言った。

褒められると照れるな……。

「ぐっ……お、おのれえー」

はぐれ悪魔は叫ぶな否や

下半身の多脚を同時に使って

天井を突き破って跳ね上がる！

まさか逃げるつもりか!?

「それは困るなア」

とは言うがシユタークさんに

焦りの色はない。

やっぱりベテランの悪魔祓い師は

違うなあ……。

「それじゃ、イツセー君。

海岸側の入口に立って

例の倍化を2回程使っておいて」

「は、はい」

多分シユタークさんには

考えがあるんだろう。

俺は素直に従うことにした。

2回目の倍化を使い終わった後、

更にシユタークさんが

追加の注文をする。

「じゃあ君のドラゴン・ショットを

放ってくれるかな？」

「わかりました！」

俺が了承すると

シュタークさんは

射線上に一枚の札を投げると

魔法陣が展開され……

さっきの

はぐれ悪魔が転送されてきた！

「な、何いいい!?!」

驚愕に顔を歪めるはぐれ悪魔の顔に

俺のドラゴン・ショットが

直撃！

ドオオオオン!!

轟音と共に

はぐれ悪魔の身体は爆散した。

「うわあっ!?!」

その衝撃で俺も後ろに

吹っ飛ばされてしまうが

後ろにいたシュタークさんが

支えてくれた。

「ありがとうございます……」

「いいサ、これくらい。」

キミと僕の仲だロ？」

シュタークさんは

優しいな笑顔を浮かべた。

あと豊かなデカメロンが

背中にむぎゆつと当たっている。

……幸せです。でへへ。

ってイカンイカン!

俺はリアスさんの婚約者で

眷属!

シユタークさんとは契約中で  
あくまでビジネスパートナーだ！  
うう………！ 煩惱退散煩惱退散………！  
極楽往生………！

「どうしたノ、イツセー君？」

身体から煙が出ているヨ、フフ」  
ってあちちちち！

今の俺は悪魔だから仏様に  
祈るのはまずかつた………！  
危うく

昇天するところだったぜ………。

でもこれで今日の仕事は終わりだ。  
明日に備えて帰らないとな。

何でもリアスさんの眷属の一人を  
解放するとか言っていたけど………。

「深夜に自転車を漕いでいくのは  
危ないヨ？ ボクのマンションに  
止まっていけばいいじゃないカ」  
自転車に跨る俺にシユタークさんは  
そんなことを言い出した。

確かにシユタークさんの部屋なら  
ここから5分程度だし

ありがたい申し出ではある。

「えーと、その……」

嬉しいんですけど……

流石にそれはマズくないですか？」

「何故だ伊？」

イツセー君は僕の

大事なビジネスパートナー。

何も問題はないヨ。

相談したいコトもあるからネ」



しなだれかかられると

シユタークさんから

放たれるラベンダーの香りが

俺の鼻をくすぐる。

そうかな……？　そうかも……。

ああ、

何て意志が弱いんだ……俺は。

↓

ぎゅむっ♡ぎゅむむう♡

「どうかナ？」

「す、すごく気持ちいいです……！！」

最高です……！！」

俺は今、風呂場で

シユタークさんに

胸でご奉仕されている。

何だかお世話になりっぱなしだ……

色んな意味で。

ドライグの心臓により

力が昂ると龍化する恐れがある……

確か朱乃さんもそう言っていた。

それはそれとして髪を下ろして

ロングヘアになったシユタークさん

は凄くセクシーで綺麗だ。

それにおっぱいも大きい。

俺のモノをすっぱりと

そのメロンおっぱいで

包んでくれる。

「イツセイ君のは大きいねエ……。

挟んでいても溢れてくるヨ」

シユタークさんは自分の谷間に

溜まった先走り液を見て

嬉しそうに頬を染める。

エ、エロすぎるぜ……！

「そ、そうでしょうか……」

「うん、こんなに大きくて

立派なのは初めて見たヨ……」

イツセー君って意外と経験豊富なのかな？」

リアスさん、アーシア、

木場……いやいや！ イザイヤさん。

あと……まあ、未遂だけど

ニグラさんともまあ……」

何だかんだで

ハーレム系主人公に

なっている様な……」

「ハハッ、冗談サ。

ボクもそれなりに遊んできたが

イツセー君のは別格だヨ……」

お姉さんがたっぷり可愛がつてあげるヨ」

シユタークさんはそう言うよと

俺のモノを更に強く挟み込んでくれた。

ぐにぐにと柔らかい暖かい感触が伝わってきて

思わず腰砕けになり、

浴槽に座った。

「うわ……!？」

「フフッ、どうしたんだい？ 顔が赤いヨ？」

「その……何か恥ずかしくて……」

「こういうことに慣れていなくて……」

俺は正直に言った。

リアスさんもアーシアも

俺とエッチするのが初めてだったし……

リードされるのは

なかなか新鮮な気持ちだった。

「フッフ、可愛いネ……」

イツセー君は♡」

シュタークさんは

まるでメスカマキリの雰囲気

妖しい笑みを浮かべると

俺の前に屈み込み

舌でぺろつと亀頭を舐めた。

「ひゃっ!?!」

いきなりだったので

変な声が出てしまった。

「ハハハ、イツセー君は

亀頭を攻められるのが

好きなんだねエ♡」

シュタークさんは

そう言つて笑うと今度は

口を大きく開けて俺の

亀頭を口に含んだ。

「うあっ……い!」

ぬちゆりとした暖かく湿った感覚に

背筋に快感の電流が流れる。

そして唇と舌で唾液を

コーティングする様に

「じわじわと舐め回す。

「んふっ……んっ……♡」

どうだい? 気持ちいいかな? ♡」

「は、はい……い!」

すごく気持ちいいです!」

ウソを言つても始まらない。

シュタークさんのパイズリフエラは

すごく上手い。

しかも俺の反応を見ながら

攻め方を変えている様だ。

「はあ……はあ……」

シユタークさんって

すごいですね……。

男の人の扱いが……

うまいというか……。

あ、あの、その……

すぐく、きもちいいです……!!」

ああ、このまま出したい……!!

大人のお姉さんのシユタークさんに

ぶっかきたい……!!

「はは、嬉しいネ……」

イツセー君が喜んでくれて……。

ボクも嬉しいヨ」

シユタークさんは優しく微笑むと

また俺のモノをパイズリしてくれた。

ぎゅむむう♡ぎゅむむう♡

「くっ……!!」

「イツセー君のがすぐく脈打ってるヨ?

もう出そうなんじゃないかな?」

シユタークさんはパイズリしながら

上目遣いで見つめてきた。

こんなお姉さんに俺の精液を搾りとられたら……!!

「あ、はい……!! もう……!! でます……!!」

俺は限界が近づいてきたので

シユタークさんにそう告げた。

「ハハ、じゃあいつぱい出してネ……」

んん……!!」

シユタークさんは

ラストスパートをかけるべく

俺のモノを深く挟んで上下させた。

「くっ……!!」

どびゅ……!! びゅくう!!

「うあああ……!?!」

「ンツ……!♡」

俺は勢いよく射精してしまった。

シュタークさんの顔にかかった

白濁液はまるでボディソープの

原液の様に濃くてネバついている。

それを恍惚として浴びる

シュタークさんの身体と顔は

とてもイヤらしいものだった。

「はあ……はあ……」

す、すいません……」

顔やおっぱいにかけてしまった……」

「フフ、気にしないで良いヨ?」

むしろイツセイ君の熱いものを

たくさんかけられてボクは満足サ……」

イヤな顔ひとつしないで

優しい笑顔で応えてくれる

シュタークさん。

なんて心が広くスケベな人なんだ……」

そして俺はシュタークさんの身体を

洗いその身体を存分に味わった。

「あ、あんん……♡」

イツセイ君のが

お姉さんの中に入ってきてル♡

熱くて、気持ちいいヨ……♡」

お風呂から出た後、

シュタークさんと

ベッドの上でエッチしている。

俺は今、シュタークさんと

正常位で繋がっている。

「はぁ……はぁ……♡」

シュタークさんの中つて  
すごく暖かいですね……！

それに優しく包んでくれて……！」

俺は腰を動かして

シュタークさんの

膣内を堪能する。

「ふふ、ボクもイツセー君に

気持ち良くなつて欲しいからネ……。

イツセー君は気持ちいいカナ♡」

シュタークさんは少し頬を赤らめて訊ねてくる。

その表情はとても可愛らしくて

思わず抱きしめたくなる。

俺はシュタークさんの胸に

手を伸ばし乳首を摘んだ。

ぐにつ……♡ぐにぐにつ……♡

シュタークさんの胸は大きくて柔らかい。

乳首も綺麗なピンク色だ。

こんな大きなオツパイを触ったのは

リアスさん以来かもしれない。

その上触り心地は抜群だ。

指先で弄ぶと柔らかく変形した。

ぐにい……♡ぷにゆん……♡

くにゆん……♡

そんな感触を楽しみながら

乳首を揉みほぐしていく。

そして乳首をクリクリと捏ね回したり、

軽く引っ張ったりする。

するとシュタークさんは

気持ち良さそうに喘いだ。

「あっ…………♡はうっ…………♡

ふあっ…………♡」

「シユタークさんのこころも

すごく敏感なんですね…………。

すごく可愛いですよ…………！」

「ふふふ…………。

そう言ってくれると嬉しいネ…………。

もっといっぱい感じさせてネ…………？」

「はい、任せてください…………！」

俺はシユタークさんにキスをしながら激しく突いた。

パンツッ！ パアンツッ！

ズチユツッ！ ズブズブツッ！

くちゅっ…………！ ぬちゅっ…………！

ぐりゅんっ♡

シユタークさんの

中も締め付けが強くなってきた。

俺もそろそろ限界だ。

「はあ…………はあ…………！」

シユタークさん…………！ 俺、もう…………！」

「うん…………。

ボクの中でイッて欲しいナ…………。

お姉さんの中にたっぷり出してネ…………♡」

シユタークさんは脚で

ガツチリとホールドしてきた。

逃さないつもりらしい。

そして俺の動きに合わせて

自らも腰を振り始めた。

「くっ…………！ もう…………！ 出るー！」

「あ、あああ…………♡

イッサー君！ 出して！

ボクの中にいっぱい出してええ♡」





俺はされるがままにしていた。

……………

しばらくしてようやく解放されると

シュタークさんはバスローブを

羽織るとミネラルウォーターと

グラス、氷を取り出す。

「イツセー君、

喉乾いてないかな？

なんだったら口移しでもいいけどネ……………♡」

「いえ、自分で飲みますから！」

「そうかい？」

遠慮はいらないんだヨ♡」

シュタークさんは

クスクスと

笑みを浮かべながらそう言った。

何とというか翻弄されっ放しだよ。

「じゃあ、いただきます……………」

俺はミネラルウォーターを一気飲みする。

「どうだい、美味しい……………？」

「はい、とても……………！」

「フフ、よかったネ♡

それ、実は毒入りって

言ったらどうすル？」

シュタークさんは悪戯っぽく笑う。

しかし、そんな事はありません。

なぜなら、俺がそう信じているからだ！

「それでも構いま……………」

言いかけたところでシュタークさんの

人差し指が俺の口を塞いだ。

「冗談サ……………」

イツセー君みたいな可愛い子に

毒なんて盛るわけないじゃないか……♡」  
かあつ、と顔が赤くなるのが  
自分でも解る。

ある意味メロメロになる毒が  
入っているのかも……？

なんてバカな事が頭をよぎる。

「あ、そ、そのボトルですけど

アザゼルの奴と

同じヤツですよね！」

俺は話題を変えるために慌ててそう切り出した。

「ああ、これカ……。」

アイツとは色々好みが合うのサ」

そう言うシユタークさんの顔は

どこか楽しげだ。

何というか……、

そういう関係なのかな？

俺がやいのやいの言う

立場じゃないのは解るけどなんかこう……

モヤモヤするな……。

するとシユタークさんは

俺の顔色から考えを読んだのか

クスクス笑い出した。

「まあそういう関係と言われれば

そうだけどサ。

将来を誓いあったという仲でも

ないし、向こうも向こうで

好きにやっているし

ボクもボクで楽しくやってるから。

心配はいらないヨ……。」

そ、そういうものなのか!?

う、うくん……色々あるんだなあ

男と女は。

「キミもハーレム王を目指すなら  
相手を見てどうしていくか  
決断しないとねエ……。

身も心も支配するか

或いは姫の様に全てを与えて

許すか、中間はないヨ」

確かにそれは難しい問題だ。

でも、今の俺はそんな事より、

ただ目の前にいる

皆を幸せにしたい。

それだけだ。

「そ、それはそうと最近

はぐれ悪魔が増えましたね……!」

俺は最近気になる話題に変えた。

「そうだね。

フリーのボクとしては

仕事が増えるから万々歳だけど

記憶操作やら情報操作やは

グレモリー家の皆は大変だろうネ。

リアス君は何か言っていたかい？」

俺に切ったリングを運びつつ

お酌までしてくれる

シユタークさん。

なんか高級クラブみたいだな……。

行った事はないけど。

「ええ、少しだけ……。

何でもはぐれ悪魔

討伐依頼が山ほど来ていて眷属総動員で

当たらせているとか……。

でも、この前の墮天使騒動の

後始末もまだ終わっていないし、正直きついんじゃないかと……」  
まさかサタナエルが最後のイヤガラセに何かバラまいたんじゃないかならうか……？

「フフ、それは大丈夫だと思っようよ。

あの子達は優秀だからネ。

それに、リアス君だつて

無茶をする程愚かではないサ。  
もつとも、

それでも限界はあると思っうケド」

シユタークさんは優雅な手つきで  
ブランドーを自分のグラスに注ぐ。

「限界……ですか？」

「そうサ。イツセイ君。

キミも眷属に甘んじるなら

それでもいいが夫になるならリアス君の

そういう機微にも

敏感にならないとダメだよ？

夫婦というのはお互いに

支え合つて生きていくものだからサ……。

アザゼルの話じゃグレモリー家の

裏工作には旧魔王派と

現魔王派の両方に顔が利く

ネフレン・カ・マンモンが

かなり関わっていると

聞いたヨ。注意する事だネ」

うう……、エツチな事だけでなく

男としても教育を受けている。

これは本格的に

勉強しないとイケないかも……！

それにネフなんとかって  
ライザーとリアスさんの  
婚約を破断にした時に

あーだこーだ言ってきた

あのデブ貴族だったかな……？

などと考えている内に何だか

眠くなってきたな……。

疲れたのか……？

ここ数日は色々なことがあったし、

緊張の連続だったもんな……。

俺はソファーに深く腰掛けると

そのまま寝入ってしまった。

………

どれくらい時間が経っただろうか。

俺が目覚めるとベッドの上で

布団らしきものを掛けられていた。

シユタークさんが

運んでくれたのだろうか？

って何だ!?

リアスさんの転移用の

マジックロールで布団が出来ている!?

「いっせーはやくもどれ」

うわぁ………!

多分転移をシユタークさんの

結界術に阻まれたのか

通信用のロールにビツシリと

文句が書き込まれている……。

すると私服姿のシユタークさんが

朝食を運ぶ。

美味しそうだがそれどころじゃない!

「すいません……！」

俺は慌てて部屋から出ると  
すぐに自室へと転移の巻物を  
発動させた。

その後のことはまあ……

察してくれ……。

↓

し、尻が痛くて

ソファーに座れない……！

ある意味空気椅子的な

トレーニングにはなるけど……！！

リアさんはむくれているし、

朱乃さんは察しているから

何も言わないけど

アーシアはオロオロいるし、

小猫ちゃんは

見下げ果てた先輩と

言いたげな表情をしている。

そして木場は何故か

やたら爽やかな笑顔で

俺を見ている。

「……とにかく今日は

近頃異様に増加している

はぐれ悪魔討伐のために

私の眷属の一人である

ギヤスパーを解放しようと

思うの」

そう言ってリアさんは

俺達を旧校舎の一室へ案内した。

み、見るからに厳重な封印だな……。

やはりとんでもないヤツが

封印されているんだろうか……!?

「……妙ですわね。」

何やら中から笑い声が……?」

「えっ? そんなはずは……」

リアスさんが不審そうな顔をする。

「あの子は極端な人見知りかつ

日光が苦手だから、昼間は

ずっと部屋に籠っている筈なのだけれど……」

確かにその通りだ。

「とりあえず開けてみましょうか」

リアスさんは封印を解くと

ドアノブに手をかけて

扉を開けた。

「アハハ、ゲイトさんってば

ホントにゲームヘタクソですね!」

「うーん……」

なかなか難しいものだね」

「ここはこうすると

ドラゴン波が出るんですよー」

「成る程、

所でクツキーを焼いたんだけど

食べるかい?」

「頂きまーす♪ おいふい〜♪

いやーん、

これじゃまた太っちゃいますぅ〜」

金髪の華奢な女の子が

ゲイトさんにドラグソボールの

ゲームを教授をしている……!?

何だか家デートみたいなの

雰囲気だな……?」

おじやましちや悪いかな……。

「……って誰ですかあああ!?!」

女の子は俺を見るなり  
青ざめると段ボールに  
籠もってしまおう。

しよ、シヨックだ!

「あらあら、イツセー君ったら  
すっかり嫌われてしまい  
ましたわねえ」

朱乃さんが楽しげに笑う。

「心配いらないよイツセー君。

君には僕がいるじゃないか」

肩を叩いて爽やかな笑顔で言うな!  
誤解とは言えんが誤解されるだろ!  
今の姿じゃ!

「やあ、元気そうで何よりだ。

甘みを抑えたフロランタル風  
クッキーだけど君達もどうかかな?」

ゲイトさんはゲイトさんと  
相変わらず超マイペースな人だ。

貰うけど……。

とにかく女の子を

どうにかしないと……。

段ボールを揺すってみる。

「ひゃあああ! ごめんなさい!

ごめんなさいああいい!!」

……なんか泣かれてしまった……。

この子もしかして男嫌いなのか?

「……は、はじめまして……

ボ、ボクは……。

ギヤスパー・ヴラディといいます……。

あの……よろしくお願ひします……」



「俺は兵藤一誠。」

「こちらこそ宜しく」

10分程して漸く自己紹介までこぎつけた。

ギヤスパーと名乗った少女は

恐々と顔を出しては引つ込める。

どうも男の人と喋るのは慣れていないようだ。

でも可愛いから全然OK!

「彼は男性だよ。」

女装が趣味なんだとか」

木場がサラリと言う。

ま、マジかあ!?

こんな残酷な話が許されるもの

なのか!?

神は死んだ!

「だって……このカツコの方が

カワイイもん……」

もんとかいうな! もんとか!

「そうだね、そんな君も

凄く魅力的だと思うよ」

「悪いけれど私の眷屬を

口説き落とそうとしないでくださる?」

ゲイトさんが

ナチュラルたらしムーブをかます中

リアスさんが不快そうな表情を浮かべて言う。

確かに面目丸潰れだよなあ。

アザゼルとは同盟するわ

ギヤスパーとはなんか知らない内に

打ち解けているわ……!

「は、はい………すみません。」

もう二度と………しません………」

「いえ、貴方が悪い訳じゃないから

気にしなくて良いのよ」

リアスさんは優しく微笑むと

ギヤスパアの頭を撫でた。

むう、少し羨ましいぞ。

「はい……なるべく努力します」

「そうしてちょうだい。」

それと、今日からあなたは

ここの部員としても活動してもらおうから

そのつもりでね」

「ええっ!？」

ギヤスパアが悲鳴をあげると

また段ボールに籠もった。

「む、無理ですううううう!」

僕、目立ちたくないですう!!」

そう言っただけ泣き叫ぶギヤスパアだが

いや、女装して目立ちたくないは

無理がないかギヤスパア……?」

「さて、と。」

そう言えばリアス君。

そろそろ時間じゃないのかい?」

「そうね……。」

イツセー、小猫、アーシア。

私はこれから朱乃と祐斗と

一緒にトップ会談の準備があるから

その間、ギヤスパアの教育係を

お願いできるかしら?」

「ええっ!？」

俺が驚くと同時に段ボールに

籠もっていたギヤスパアがビクツとする。

「部長、

僕、まだ死にたくありません!」

涙ながらにリアスさんに

訴えているが

アイツ俺を何だと思っているんだ？

風評被害も甚だしい！

「……私もいます」

そして俺の後ろでは

小猫ちゃんがぼそりと言った。

「お、お手柔らかにお願いしますううう!!」

「……大丈夫です。」

痛いのは一瞬だけです」

「それって死ぬって事ですよねえ!？」

先行き不安だ……。

※異聞・幕間3 撮影会（イツセイ×ヒロインズ 松田&元浜×ニグラ）

「スタジオで撮影会？」

「そうなんですよお」

松田は突然のナイアからの

申し出に困惑していた。

何でもオカルト研究部の

部員募集のポスター撮影に

自身の力を貸して欲しいという

申し出だった。

「しかしだな……」。

そう言ったことはプロを

頼むべきではないだろうか？」

河豚は食いたし命は惜しし、

というべきなのか……？

彼はあまり乗り気では

なかったようだ。

だが、

「えーっ！

そんなこと言わずにいゝ。

お願いしますよう！」

と泣き落としにかかる

ナイアに

つついっ負けてしまった。

「うむ。

まあそこまで言うなら……」

ナイアは悪友の従姉でもある。

その彼女に頼まれては断れない

ということだろう。

同時に松田はナイアに  
奇妙な感覚を抱くのだ。  
何か彼女と交わった様な……  
男女の仲になった様な……。

(これは一体何なんだ?)

当の松田の心境はさておいて  
そして撮影当日を迎えた。  
何故かアシスタントとして  
元浜の姿もあつた。

「水臭いではないか我が友よ!  
撮影会となれば俺のスカウターが  
必要不可欠の筈ではないか!」  
元浜は眼鏡をキラリと光らせ、  
松田に向かって叫んだ。

「……言われてみれば  
そうかもしれん!」  
松田と元浜は親友同士である。  
増して近頃はイツセーはおろか  
安里にまで女性の影がチラホラある。  
彼等にとって

今や女性との付き合いは  
死活問題にまでなっていた。  
だからこそ、松田と元浜には  
互いに互いが 必要な存在になっていたのだ。  
「おお、そうだとおも。

「だから今日は共に行こうぞ!」  
「うむ! 共に行こうぞ!」  
こうして二人は連れ立って  
スタジオ、もとい

安里とニグラの家へと赴いた。  
「ぐぬぬ、安里め。

この館でナイアやニグラ先生と  
毎夜毎夜淫行に

励んでいるとは……!!」

元浜は血涙を流さんばかりに  
齒噛みしていた。

どうやら彼は安里への嫉妬で

気が狂わんばかりの様だ。

しかし彼はニグラと両手に余る

回数交わっているのだが

その記憶は忘却の彼方にあつた。

ともかく、二人がインターホンを

鳴らすと何やらエジプトの

ミイラを納める棺らしき人形が

何体か二人を出迎えた。

「何だこれは!？」

「解らん……!？」

お掃除ル〇バの親戚では  
なかるうか？」

二人が動揺している間に

人形達は荷物を収納して

地下へと運んでいく。

二人は挨拶もそこそこに

その人形を追い、地下室へと入る。

「ハ、ハハハは……?」

「地下室にしては広いな」

松田達が降り立った場所は

体育館ほどの

広さのある部屋であつた。

壁際には様々な衣装が置かれており、  
中央には

大きなベッドが置かれている。

更に奥の壁際にある棚からは

怪しげな器具まで

取り出されている。

「よく来てくれたわね

松田君、元浜君」

「多忙の中、ご足労いただき

ありがとうございます」

快活な調子で二人を迎えたのは

オカルト研究部部長の

リアス・グレモリー。

そして副部長の姫島朱乃だ。

彼女達はそれぞれ

魔女風オープンドレス、

あるいは露出の高い看守風

ボンテージの姿であり、

その姿態は男達の情欲を誘う。

「……お待ちしておりました、にや」

そしてもう一人の少女の名は

塔城小猫という。

名は体を表す、というのか

猫ビキニ姿での出迎えだ。

「はわわ、シスターの私が

こんな姿だなんて……」

最後にアーシアが小悪魔風

ゴスロリの衣装を着ていた。

彼女は羞恥心から

顔を真っ赤にしている。

4者共それぞれ松田や元浜の

欲望をそのまま転写したかのような

コスチュームに身を包んでいた。

「くっ、何という破廉恥な格好だ……!」

「なんと素晴らしい! これがコスプレというものなのか!?! うむ、

実にいいものだ……!」

二人の男はその光景に

興奮しきりだった。

鼻血ではなく涙を流して

四人を拝み倒す始末だ。

「まあ、そんなに

お喜び頂けるなんて♡」

朱乃は頬に手を当てて

嬉しさを隠しきれない様子だ。

松田は違和感を感じかけたが

自身の抑えがたい興奮のためだと

あっさり流した。

「ふふん。

これなら私達の宣伝にも なりそうじゃない?」

「はい!・ 皆さん素敵です!」

リアスの言葉にアーシアは

満面の笑みを浮かべた。

そしてそんな彼女を見て

元浜は首をひねる。

「うくむ……。 妙だな。

俺のスカウター観測値と

リアスさん達の実数が

ズレている様な……」

「気のせいだろう。

それより撮影を始めようじゃないか」

松田は元浜の肩を叩くと

カメラを手を取った。

「ではまずは各自ポージングから……」

松田が促すと、

皆思い思いのポーズを取る。

「さあ、撮影会の始まりよ!」



こうして撮影会は始まった。

松田は必死になって

シャッターを切り続ける。

そして数多のポーズを取った後、

一旦出来栄えを皆で確認する。

どれもこれも生唾ものの写真で

許されるなら個人用に永久保存したいと

思える代物ばかり。

「流石は元写真部。」

昔取った杵柄というべきかしら?」

背中に身体を密着させながら

朱乃は松田の耳元に顔を寄せ、

艶やかな声で囁きかける。

「い、いやあー!」

モデルの皆さんが素晴らしいからですよ!」

「あら、お上手ですわね」

「嬉しい事を言ってくれる

じゃない♪」

「えへへ、ありがとうございます!」

朱乃、リアス、アーシアの三人は

互いに目配せすると、

それぞれ妖しい微笑を見せた。

松田は勢いに乗じてノリノリで

撮影を続けていたが

小一時間程経った頃だろうか……?」

「皆、調子はどうかしら?」

家主であるニグラが地下室へと

入り、松田と元浜に出来栄えを

尋ねる。

「最高だよ先生!!」

「この元浜、一生の思い出に させていただきました……!」

松田達は感涙しながら、ニグラに礼を言った。

「それは良かった。

けど……うくん。

何というかももう一ステップ

欲しいわねえ」

写真のデータを確認する

ニグラは少し不満げに

腕を組みながら思案した。

「も、もう一ステップ？」

松田はニグラの真意を

掴みかねた様で恐る恐ると

いった調子で繰り返した。

「そうねえ。

もっと異性に対するアピールと

いうか色気というか……。

そういうパンチが欲しいわ」

受けてのニグラは顎に指をあて、

更に注文をつけてきた。

「は、はい。解りました」

とはいえどうすれば良いのか……

雲を掴む様な気持ちで松田は

考えを巡らせる。

「そうねえ……。

女性の美しさはエクスタシーに

あるというじゃない？

なら絶頂の瞬間をフィルターに

かけて撮ってみるといのは

どうかしら？」

どうかしら？　と言われても

ハイと言えよう筈もない。

それはつまりハメ撮りと

いうことではないか。

流石に松田、元浜とて

彼女達を公然と襲う

勇気はなかった。

するとニグラはぽん、と手を叩く。

「そうよね。いきなり

そんな事を言われても

決められないわよね……。

なら、イツセーちゃんに

お願いしましょう！」

「ええっ!?!」

嘘から出た誠、という言葉はあるが

まさかイツセーが本当に

あのオカルト研究部の美少女達を

毒牙に欠けていたとは……!!

しかも相手は 選り取り見取りだ。

松田と元浜が驚愕していると、

当の本人であるイツセーが

地下への階段を降りてくる。

「お待ちせしました〜」

「ご苦労さま、イツセーちゃん。

早速だけど、貴方に

撮影の協力を頼もうと思うの。

お願いできる?」

「はい。任せて下さい!」

快く引き受けたイツセーに 対して、

松田と元浜は 焦燥に駆られる。

(おい元浜! どういう事だ!?)

(し、知らん! 俺は何も聞いていないぞ!?)

二人はアイコンタクトで

必死に言い訳をする。

「じゃあ松田君と元浜君は

そこで座って準備していてね？」

「は、はいっー!」「はい!」

「さて、始めましょうか」

と、言うどベッドの上で

リアスとイツセーがその身体を

絡ませ始めたではないか。

「え、ええーつと……」

困惑する松田と元浜に 構わず、

二人の行為は続く。

「ふふふ、イツセーったら、

私のおっぱいが好きなの？

いいわよ。ほおくら♡」

「部長の胸、柔らかくて 凄く綺麗です……!」

「うふふ、可愛いんだから。

イツセーは私だけのものなんだから

他の女に目移りしたらダメよ?」

「は、はい! 勿論ですよ!!」

イツセーは惜しげも恥ずかしげも

なく晒されたリアスの豊かな双丘に

顔を突っ込み、その感触を楽しんでいた。

そしてそのまま唇を重ねると

互いの舌を絡め合う。

濃厚なディープキスの音が響き渡り、

時折唾液の糸が引いていた。

「おお……」

松田と元浜はシャツターを切る事を

忘れてただただ二人の痴態に

見入ってしまう。

やがて長い口づけが終わると、

今度はイツセーが

リアスの身体を 愛撫し始める。

「あつ……んんっ……んんんっ！」

リアスの艶やかな声と

くちゆりと湿ったが響く中、

イツセーの手が

彼女の秘所を攻めていく。

「んん……あああ……いー」

イツセー……もつとしてえ……いー！」

「はい、喜んで！」

それから暫くの間、

二人の行為が続いた。

松田と元浜はもはや撮影することも忘れ、

目の前で

繰り広げられる光景に見入り、

ゴクリと唾を飲み込む。

無修正の生本番シヨを前に、

松田と元浜の股間は

痛々しい程に隆起していた。

当然の様に二人はズボンを下ろし 自慰を始める。

すると、その様子を見ていたニグラが

松田達に近寄ってきた。

そして松田達の耳元で囁く。

——手伝ってあげるわ……♪ と。

そう言っつてニグラは松田と元浜の

モノを握り、手淫を始めた。

白魚の様に美しい指先が

松田と元浜の男根を扱き上げる。

それはまるで熟練した 娼婦の様な巧みな技だ。

「うう……いー」

「あ、あぐう！」

「うふふ、二人共イキそうなのね……♡」

でももう少し我慢なさいな♡  
そうすればもつともつと……

気持ち良くザーメンが吐き出せるわよ♡」

ニグラの言葉に松田と元浜は  
ただひたすらに射精を堪える。

まるで母親の帰りを待つ

幼子のように

松田と元浜は 必死に耐えた。

と、二人の眼前では リアスと

イツセーによる側臥位のセックスが 行われていた。  
腰を振る度に揺れ動きリアスの乳房。

そんな彼女を後ろから抱き締めながら

イツセーは激しくピストン運動を繰り返す。

松田と元浜は自分達の分身が

今にも弾け飛びそうになるのを

懸命に 抑えつつ、ニグラの奉仕を受けていた。

「うっ……あがつ……！」

「くっ……ううっ……！」

精巣がキュウウツと収縮し、

熱いマグマが三者三様に

尿道を駆け上がる。

「松田ちゃんも元浜ちゃんも

想像してみて……？」

貴方達のバキバキのチ○ポで

リアスちゃんがあんなに

よがっている所を……。

あの綺麗なお顔が快楽に歪んで、

可愛らしいお口から

ヨダレを垂らしながら

アへ顔を晒しているのを……。

ああ、なんて素敵なのかしら♡」

「……………」

松田と元浜は黙って妄想する。

あのリアス・グレモリーが

自分らの肉棒で犯されている姿を。

「ああー… もう駄目だ！

イク！ イツちまう!!」

「俺だってもう限界だ!」

松田と元浜は 絶頂寸前で ニグラから

手を離されるが、二人はそのまま勢いよく射精する。

びゅくっ! どびゅーっ!!

まるで消防車のホースばりに

放出された大量の白濁液が

アーチを描いて虚空へと放射される。

「ふふ、いっぱい出たわね♡」

ニグラは妖艶に微笑むと、

松田と元浜のペニスを口に含み、

丹念に互いの亀頭を突き合わせ、

その間に舌を差し込んで

丁寧に恥垢ごと残り汗を

舐め取っていく。

「うふふ、♡(馳走様♡)」

「……………」

松田と元浜は呆然としていたが

その表情にはどこか

満足気なものがあつた。

「じゃあ次は私ですわね

イツセー君」

「は、はい朱乃様!」

普段とはまるで別人の様に

朱乃は看守風ボンテージの

出で立ちにふさわしく

どこかサデイスティックな声で  
イツセーに語りかける。

「さあイツセー、

今日も私の足でたつぷりと

虐めてあげるわねえ？」

そう言うのと、朱乃はヒールを

脱いでシミ一つない彫像の様な

素足を露にする。

そしてイツセーの顔の前に

差し出した。

「ほら、まずは挨拶代わりに

このブーツ越しの蒸れた足の匂いを嗅ぎなさい。

そうしたら次は口で直接味見して 頂戴。

いいこと？ わかったかしらあ？」

「はい……わかりました！」

イツセーは言われるままに

朱乃の艶かしい生脚に鼻先を近づけると、

すんすんと 犬の様に

彼女の美脚の香りを堪能し始める。

「うふふ、どうやら 随分と

夢中になっているみたい ね。

そんなに美味しいかしら 私のおみあしい♪」

「ええ、最高ですよ！」

イツセーは

下僕根性丸出しで答える。

普段ならば松田も元浜も

違和感を抱く姿だが

ニグラからの巧みな口舌奉仕を

受けている最中である二人は 最早、

目の前の光景を 異常だと認識する事は出来ない。

「そう、それは良かったわ。」



それならもつと気持ち良くさせてあげて……  
ほら、仰向けになりなさい」

「は、はい……い！」

イツセーは言われた通りに  
床に寝そべる。

すると、朱乃はイツセーの  
そそり立ったペニスを足を添え、  
優しく踏みつけた。

「うっ……ああ……い！」

「あら、踏まれて悦ぶなんて、  
変態さんなのかしら？ まあいいわ。

じゃあ始めるから しつかり耐えるのよお？  
じゃないと、また おしおきですからね♡」

そう言つて朱乃は イツセーの股間を  
グリグリと 容赦なく押し潰した。

「うっ……ぐっ……ああっ！」

傍から見れば何とも情けなくも  
惨めな姿に見えるだろうが、

今のイツセーにとっては、それが至上の喜びだった。

「ああ……イイ……い！」

「イイですう！」

「うふふ、こんなに嬉しそうな顔しちゃって……」

「イツセーは可愛い子ねえ……♡」

朱乃は まるで子供をあやすかの如く  
ゆっくりとした口調ながらも

イツセーのペニスを踏みつける。

「さあ、どんどんいきませすわよっ。」

「これはどうかしらあ？」

「ああ、なんて素晴らしいのかしらあ？」

「イツセーのおち〇ぽが ビクビク震えてるのがわかる♡  
それに段々大きくなってる……。」

うふふ、イツセーだったら 興奮してるんだ？  
いけない子ねえ……」

朱乃はそう言いながら 緩急をつけつつ、  
イツセーの ペニスを踏みつけていく。

「うふふふ、松田ちゃんと

元浜ちゃんのおち〇ポを

踏むわけにはいかないから

私のおっぱいで我慢してね……♡」

ニグラは二人に詫びる様に

下乳の間にそれぞれのペニスを挟み込み、

パイズリを始めた。

「おほっ！ おふっ！

ニグラさんの おっぱいとつても

柔らかくて 暖かいです！

しかもヌルヌルしていて すごく心地良い!!」

「ぐおお……」

ニグラ女史の爆乳……!!

ずしりと足で踏まれる様な

重量感と湿度……!!」

松田と元浜はニグラからの

下乳ズリ奉仕の快楽に

酔い痴れる。

「ああん、もうイツセー君たら

あの子達より先にイツちゃダメですわよ？

私達のお仕置きを受けたいのでしょうか？」

「はいいー！ お願いします!!

俺、朱乃様の足で虐められたいんです!!

もっと強くしてください!!

あと出来れば罵倒も欲しいです!」

「あらあら、すっかり 私の足に夢中なのね。

いいわ、たっぷりと虐めてあげる」

「あはっ♡ 松田ちゃん、

元浜ちゃん。イツセーちゃんの

おチ○ポに負けないでね♡

イツセーちゃんより早く

どぴゅどぴゅできたら

もっど……もっど

気持ちいい事をしてあげるからねえ……♡」

「はい……頑張ります！」

「うおおおおおおお!!!」

ニグラからの提案を受けるや否や

二人はイツセーよりも早く

果てようと必死になつて腰を振る。

「んはあっ♡ 二人共

おチ○ポが擦り切れる位

私のおっぱいで

ザーメンコキ捨ててえ♡」

「うっ、イクッ！」

「出るぞおー！」

そして遂に限界が訪れた。

二人の男根からは勢いよく精液が飛び出し、

その飛沫は ニグラの顔や胸を

まるで消火栓から放たれる

消化液の様に白く染め上げるに

飽き足らず、ニグラの美しい

乳房や腹、太ももにも白濁の粘液が

大量に付着している為、

その姿は淫猥極まりないものとなっていた。

「おお……」

その艶姿に思わず松田は

思い出したかの様にニグラを

カメラにて激写する。

それは元浜も同様であり、

二人は欲望のまま、自らの欲望を満たす為に己の分身たるペニスを再び勃起させ、撮影会を再開する。

そしてイツセーはというと……？

「じゃあ次は……アーシアと

小猫ちゃん……お願いできるかな？

俺はもう準備万端だからさ……」

「はい、わかりました♡」

「……了解ですよ……」

二人は小悪魔風ドレスと

猫ビキニの出で立ちのまま、

ベッドに四つん這いになり

尻を突き出す形で待機していた。

「どうですかイツセーさん、この格好は……？」

「……イツセー先輩、どうですか……にや」

二人は恐る恐ると

イツセーに訊ねる。

イツセーは無言で そんな二人に近づき、

まずはアーシアのお尻を撫で回した。

続いて、次に小猫の尻尾を掴み、

優しく さすり始める。

「んああっ♡」

「……はぁ……♡」

イツセーは二人の 反応を楽しむかのように、

ゆつくりと焦らすように 優しく愛撫していく。

「ああ……素敵だよ二人とも……」

特に小猫ちゃんなんて普段無表情なだけに、

感じてる時のギャップがまたそり立つよ……。

それにアーシアも、

いつも優しい微笑みを浮かべているのに

今はすごくエッチな顔してる」

「うふふ、ありがとうございます」

「……嬉しいですよん……♡」

二人共、嬉しそうに 頬を赤らめながらお礼を言う。

一方、松田も元浜も

精液に塗れたニグラの身体を

遠慮も躊躇もなく

揉み解し舐め回し続けていた。

「うへへ、ニグラさんのおっぱい最高だぜ！

乳首もこんなに大きくなつて……

母乳とか出ないのか!？」

「全くけしらんかん！」

俺の嗜好を無視するにも程がある

この魔乳は折檻せねば!!」

二人は好き勝手な事を言いながら

その熟れた肉体を弄ぶ。

だがニグラは抵抗せず、

むしろそれを受け入れていた。

「はう……♡」

乳首クリクリされてる……

でも、もっと強くしてえ……♡」

ニグラは快樂に蕩けた声で

更なる刺激を求める。

彼女の瞳はハートマークになっており、

完全に快樂の虜と化していた。

その様子を見たイツセーは 不敵に笑った後、

今度は小猫の背後に回り込み、

背後から抱き締める形で 両手を前に回すと、

そのまま 小猫の胸を鷲掴みにした。

同時にもう片方の手は

猫耳カチューシャとチョーカーの隙間から

中に侵入し、小さな穴をくすぐるように指先で責め立てる。

すると小猫は全身に電気が流れた様な感覚に襲われ、ビクンツ！と大きく仰け反り、

イツセーの腕の中で痙攣し始めた。

しかしイツセーは手を緩めない。

さらに激しく、その幼い乳房を攻め立てていく。

更に、イツセーはそのまま顔を近づけると、

まるで赤ん坊が母親の胸に吸い付く様に

小猫の小さな突起を口に含み、

強く吸ったり甘噛みしたりを繰り返した。

そしてもう一方の手では、

猫ビキニの股間部分にある布地の中に

片手を入れ、秘裂に沿って上下に擦り始めた。

「んにゃああっ♡」

その瞬間、小猫は今までで一番大きな声を上げる。

そして、ついに絶頂を迎えた様だった。

まるで尺取虫の様に身体を

への字に曲げながら

秘所からは愛液が大量に吹き出し、

シートに大きな染みを作る。

「おやおやお猫ちゃん、

もうイツちやつたんだね。

まあ仕方ないか」

「だってあんな風にされたら誰だって……」

イツセーは小猫の痴態を見ても尚、

行為を止めようとはしない。

それどころかより一層、

激しく攻め立てて行った。

「んにゃっ♡ にゃあっ♡

んにゃあああん♡♡♡」

小猫は連続する激しい快感に堪らず猫の様な喘ぎ声を上げ、身体を大きく跳ねさせる。

その姿はまさに発情期の雌猫そのもので、イツセーだけでなく

特に元浜の興奮をより高めた。

「うふっ……元浜ちゃんは

小猫ちゃんがお好みなのかしら？」

ニグラは悪戯っぽく笑いながら

抱きつき元浜を挑発するが、

当の元浜は

既に我慢の限界を迎えており、

ニグラの言葉など

耳に入っていない様子であった。

今の彼の頭にあるのは

女性を犯すというただ一点のみ。

「うおおお!!」

まるで獣が吠える様な

雄叫びと共に、元浜はその剛直を

勢いよく突き出すと、

狙い変わらずニグラの膣内へと突き刺さる。

一瞬にして根元まで挿入され、

子宮口を突かれた事で、

ニグラは甲高い悲鳴を上げた。

「ひいひいひいっ!! 凄いわぁ♡」

ニグラは歓喜の声を上げて

それぞれの頬に手を当てながらの

ご満悦の表情で

元浜のモノを受け入れる。

ニグラの中は蕩けたチーズの様に

とても熱くヌルついでいて、

肉壁全体で包み込むかの如く  
ギョウつと締め、

極上の名器である事が伺えた。

あまりの名器っぷりと、

絡みつくような粘膜質な動きに

思わず果てそうになるが、

そこは男の意地で耐える。

そして一度奥深くまで到達させた後は、

一気に引き抜き、

再び最深部を突き上げる。

それを何度も繰り返していった。

パンッ！ パアンッ！

と肌同士がぶつかり合う音が響き渡る度に

、結合部から溢れ出た蜜汁が飛び散っていく。

それは背後から小猫におぶさる形で

腰を打ち付けているイツセーの顔にまで届き、

その頬を濡らすのだが、

そんな事は気にしていなかった。

ただひたすらに彼らは

目の前の女性を犯し尽くす事だけを

考えていたからだ。

イツセーの動きに合わせて

揺れ動く小猫の肢体を見ながら、

元浜はニグラの胎内を蹂躪する。

しかしそれでも彼女は怯まない

ばかりか松田と元浜に

とんでもない提案を始めたのだ。

「ねえ……♡」

松田ちゃん、元浜ちゃん♡

小猫ちゃんみたいなキツキツの

オマ○コを犯してみたくない？」



突然の提案に驚いた二人だったが、その言葉の意味を理解する。

二人で同時にニグラの膣穴を犯せ、と提案しているのだ。

「で、でも大丈夫なのですか!?!」

ニグラ女史のその……

お、オマ○コが裂けてしまうのではありますまいか!?!」

「心配いらないわよ♪」

貴方達とのセックスが

気持ちいいから……

ほら、こんなにも濡れてるじゃない?

これなら何の問題もないと思うわ♡」

背後でグニグニと生地でも

捏ねるかの様に松田から

動かされる爆乳から伝わる快樂によつて

またもや甘い吐息を漏らしながら答えるニグラ。

その言葉を聞いて二人はゴクリと唾を飲み込んだ。

これ以上の快樂があるという

未知の世界に興味津々なのだ。

「で、では……!?!」

「うむ……!?!」

二人は遂に示し合わせて

互いのペニスを合わせてニグラの

胎内へと押し込ませていく。

ズブブツ……ヌプウ——ツ!!!

「あああ~~~~♡♡♡」

二人の男性の象徴を同時に受け入れたニグラは、苦悶どころか

淫欲に耽りきつた様に眉を

下げ、背筋を仰げ反らせ、

絶叫に近い声を上げる。

そして二人の男根を全て飲み込み終わると同時に、今度は逆に自分の方から腰を動かし始めた。

前後左右にグリグリ動かしたり、円を描くように回したりして

松田と元浜の

怒張した肉棒を刺激し続ける。

「お、お、お、お……」

松田と元浜は想像を遥かに

超える快樂にただただ

案山子ばりに突っ立っているしか

出来なかった。

一方、小猫の方も まだ絶頂から

立ち直っていないにも関わらず、

更に激しいピストン運動により

意識が再び沈殿していく様であった。

「んにゃ……あっ……あー……」

だが彼女の肉体は

本能的に精を求めののだろうか。

無意識のうちに腰を浮かせて、

イツセーに合わせて振り始める。

するとそれに呼応するかの様に、

イツセーもまた小猫の奥底に向けて

大量の白濁を解き放った。

ビュルルルーツ!!!

ビュツビュツビュ——ーツ!!!

熱い奔流を受けて、小猫は再びビクンと

大きく痙攣を起こす。

「あぁっ♡ 小猫ちゃんも

イツセーちゃんのセックス

で イっちやってるみたいね♡

ほら、松田ちゃんも

元浜ちゃんもおち○ポ汁

ビュ〜って出してえ♡」

そう言いながらもニグラは一切休まずに、

上下左右前後に激しく身体を振り続け、

膣内や子宮口で松田と元浜の男根を刺激する。

当然それによって二人の射精感の高まり、

程なくして松田と元浜も同時に果ててしまった。

ドピユツドピユ——！！！！

ドピユツ！！

ドクンドクン……！！

二人分の大量の精液は

さながら土石流の様な激しさを持って

ニグラの最奥へ注ぎ込まれていき、

瞬く間に子宮を満たし尽くしてしまう。

それでも尚止まらず、

逆流してきて秘所からも漏れ出してきた。

それを見て松田と元浜は

ニグラを征服したような感覚に

酔い痴れるのであった……。

↓

「はい、撮影は終わりよ。

お疲れ様」

はっと、気がつく松田と元浜。

全裸になっていた筈だが

二人とも着衣に乱れはないし

時計を見たらニグラが現れてから

3分も経っていないではないか。

(こ、ここれは一体……?)

ニグラを散々犯した感覚は

確かに現実のものなのに、

時間はまるで経過していない事に  
驚く松田。

元浜と共にデジカメのデータを  
確認すると確かに部員募集の  
ポスター用のコスプレ姿はあるが  
それ以降の痴態を映したものは  
一切なかった。

「う、うゝむ……」

松田と元浜は同時に唸った。

白昼夢にしてはあまりにも  
生々しすぎるあの感覚。

現に今だって股間が痛くなる程に勃起していて、  
今もお

ニグラを犯したくて仕方がない。

（いやいや、いかんだろう！

ニグラ先生は教師だぞ！）

そんな事を考えてはいけないと  
自分に言い聞かせて

必死に落ち着けようとするが、

どうしてもニグラの

豊かな肢体、香り、肌触りが  
頭から離れない。

しかし松田と元浜が苦悩する中、  
当の養護教諭であるニグラ本人は  
何やら生暖かい視線を

二人の背中に送っていた。

（まさかあの子達が

ここまでのモノなんてねえ……♡

これならもう一人位は

産み直す……いえ

『竜の魔女』すら創り出せるかも）

死角より

オカルト研究部の皆に擬態していた  
不定形のナニカを影に飲み込み、  
舌なめずりしながら甘く疼く  
自身の下腹部を撫でるニグラは  
彼女の顕現に思いを馳せた。

### 第31話

イツセー達がギヤスパアの  
引きこもり脱却に  
尽力していた頃……。

↓

「よお、

俺は『ランサー』ってんだ。  
何やかんやでお前さんと  
組む事になった。宜しくな  
気さくだが明らかに死線を  
幾度もくぐり抜けた男の  
不敵さと余裕を醸し出し、  
青い短髪の青年は安里へと  
握手を求めた。

「ど、どうも。九頭竜安里です。

宜しく……所でランサーって本名ですか？」

安里は握手に応じつつ、  
素朴な疑問を投げかけた。  
するとランサーは掌を  
向けて安里の

質問をいなす様な態度を示す。

「まさか。

俺は背中を預けるに足ると  
認めた奴にしか名を明かさな  
主義なもんでな。

そういう訳だ、よろしく頼むぜ  
坊主！」

ランサーは快活に笑いながら

安里の肩をバンバン叩く。

(結構体育系だなこの人……)。

信頼してほしいなら

実力を示せつてワケか)

成る程、わかりやすい。

安里は内心そう思いつつも

表情には出さず愛想良く笑う。

一方、ランサーと同時に現れた

銀の長髪、長身の美女は氷の様な

冷やかな視線を安里へと送る。

その様はまるで研ぎ澄まされた名刀を

彷彿とさせる。

「セルベリア・ブレスだ……」

ただ一言、腕を組みながらの

名乗りであった。しかしそれは

彼女なりの挨拶だと 感じたのか、

安里は特に気にせず

自己紹介をする。

「ああ……どうも初めまして。

九頭竜安里です。

こちらこそ 宜しくお願いします」

すると彼女は無言のまま、

小さく会釈する。

どうやら礼には礼で返す辺り

最低限の礼儀はあるらしい。

安里は少し安心したが、

彼女の眼差しは依然として鋭いままである。

「まあ、お互い紹介が済んで

めでたしつてワケだが……」

ランサーは周囲を見渡し、呟く。

「こんな氷まみれの場所が

初仕事とはなあ……。

俺は暖かい場所の方が好き

「なんだが：まあ、仕方ねえやな」

「ランサーの言葉通り、

現在三人がいる場所は何と氷結地獄の最奥地。

本来ならば絶対零度に迫る

極寒の世界であるが、

安里達の周囲には特殊な術式による結界が

展開されており、

内部は非常に快適な温度を保っている。

そしてその結界を展開しているのが

他ならぬランサーなのだ。

「ランサーさんは魔法も

使えるんですか？」

「魔法だな。魔法というには

ちよつとチャチな代物だ」

「へえ。凄いなあ……」

安里は素直に関心するが、

ランサーはそれを

鼻にかける事もなく続ける。

「それにしても

お前さんも大概だよな。

あんな状況で

よく生き残れたもんだぜ」

ランサーは愉快そうに語る。

サタナエルとイツセーが

異空間で死闘を繰り広げていた時に

安里達もまた魔獣達と

戦わされていたのだ。

「まあ、シトリーさんが

結界術でフオロー

してくれたからですよ」

実際、あの時



彼女達生徒会のフォローが  
いなければ

今頃命はなかっただろう。  
と安里は身震いする。

「ほおー……。」

しかし、その生徒会長様の姉さんが  
氷結地獄に呼びつけとはねえ……。  
一体どういう見なんだろうな？」

「いやあ、俺もゲイトさんからは  
何も……。」

面目ない、といった様子で  
頭を掻いてみせる安里。  
するとセルベリアは眉を顰めた。

「貴様の上官から

下知がないのか……？

全く嘆かわしい……。」

彼女は呆れ顔を浮かべて  
ため息を吐く。

どうやらセルベリアは 軍人氣質であり、  
組織の緩みや乱れを

殊更嫌悪しているようだ。

一方のランサーは

苦笑しつつ肩をすくめる。

「まあまあ。

そう言いなさんな。

俺達は軍人ってワケでもねエ。

異邦人は異邦人らしく、

自由にやるのが一番さ」

そんな事を言っている内に

合流場所にやって来たのだが……。

「やつほ〜☆今日はよろしくね☆

はじめまして☆

私、魔王セラフオルー・レヴィアタンです☆

『レヴィアたん』って呼んでね☆」

「何だ姉ちゃん、酔っ払いか？」

やはり異邦人と自称するだけあり

四大魔王に対しても

この辛辣なツツコミである。

しかし当の本人は特に気にせず、

快活な笑顔を振りまく。

ツインテールに魔法少女と

いう出で立ちがこの一面の

銀世界にはまるで似合っていない。

しかしランサーは

その点について突っ込む事はしなかった。

それは彼なりの心遣いなのか、

単に興味がないのか、

あるいは両方か……。

「えくと……あんた、じゃない。

貴方がシトリーさんのお姉さんの

セラフオルー様でいいんですよね？」

「コラコラ☆『レヴィアたん』って

呼ばなきゃダメでしょ☆」

「いや、そういうのは別に……」

「ぶう☆ノリ悪いぞ少年☆」

「な、何なのだ一体……」

ぷっくりと頬を膨らませる

レヴィアタンにセルベリアも安里も目が点に

なるしかなかった。

「で、改めて用と言うのは……？」

「えーとね☆ オルっちが言うには

サタナエルがこの氷結地獄に

エネルギーを撃ち込んで  
復活したじゃない？

その時に二天龍の財宝の一部が  
一緒に

吹き飛ばされちゃったのよね☆  
だからそれを

探し出して回収してきてほしいの☆

あ、ちなみに

宝探してみたいなものだから、  
気楽に行ってらっしゃい☆

何というか、独特のテンションに

飲まれ気味の安里は

質問もロクに思い浮かばない。

するとランサーと

セルベリアが助け舟を出す。

ランサーはともかく、

セルベリアが対応したのは

安里にしても意外だった。

「了解したぜ。まあ、それくらいなら お安い御用だ」

「所でレヴィアたん」

(レヴィアたんって 真顔で

言っているし……)

ある意味すげーなセルベリアさんも……)

「何かしら☆」

「探索の範囲、対象、

戦略上の意図並びに

その行動目的を教えてください」

「あらら☆ もうちよつと

遊んでくれても 良かったんだけどなあ」

「遊びではないからな」

「うふふ☆ 分かったわよお。」

範囲は氷結地獄全域。

対象はサタナエルが

隠匿していた宝物、神器の回収。

戦略上の意図と目的は……

そうねえ。

旧魔王派の跳梁を未然に防ぐため

サーゼクスちゃんの地固めと、

あと私がちよちよいとこの

ジユデツカを修復する事で

日和見主義の貴族達を

こちら側に引き入れる為かな」

能ある鷹は爪を隠すとは言うが

流石は魔王。

伊達や酔狂で

魔王を名乗っている訳ではないらしい。

「ま、そんなところだろうな。

じゃ、行ってくるぜ」

「はい☆ お願いね☆」

こうして三人は氷原を進む。

氷結地獄。

そこはその名の通り

氷の世界である。

「こりゃあはぐれたら最後。

たちまち氷のオブジェになるかもねえ……」

ランサーは呟く。

実際、

その言葉は冗談でも何でもない。

結界の外から出たら忽ち

凍死してしまうのは明らかだ。

そうした訳で安里達は辺りを

見回しながら慎重に進む。

「所でランサー」

「何だい姉ちゃん」

「サタナエルとやらの遺物には  
結界を無効化する様な代物は  
あつたか？」

「さあ？ 俺ア武闘派なモンで、  
そっち方面はサツパリだが……。  
無いとは言い切れねエわな。

ああいうタイプは  
何でもかんでも一通り  
揃えたがるモンだからなア」

「ほう……。  
まるで具体例があるかの様な  
もの言いだが」

「まあ、昔英雄王とかいう  
阿漕な野郎と  
付き合いがあつたんでね……」  
と、ランサーは軽口を叩くが  
あまり良い思い出ではなかつた  
らしい。

「苦虫を噛み潰したような表情だ。  
「ふむ、殿下も思えば  
そんな所があつた。  
世界を問わず王というものは  
皆そうなのかもしれんな」

「違うない」  
セルベリアの感想に  
ランサーは同意する。  
氷結地獄であつても  
昔話には花が咲くものらしい。  
と、その時。

片腕をドリルに武態化させる事で  
安里は氷の地面を突き破りながら  
地中から出現した何者かの攻撃を防いだ。

「どうした坊主!？」

石油でも掘り当てたか？」

「そんな有難いものじゃないスよ！」

ランサーのボケにツツコミを入れつつ

安里は敵の攻撃を防いだ。

氷の中から現れたのは

黄色いローブに身を包み、

腰に袋と縄を下げる男だった。

そしてその手には杖を持っている。

袋からはちやり、ちやりんと

金属が擦れ合う音がする辺り

硬貨でも入っているのだろう。

「……あのお方の威光を流す

異邦人めら……」

声とも音ともつかぬ、

不思議な響きを持った

囁き声で男は言う。

「まあ他所モンなのは

否定しねエがな。

何と仰る地元の兄ちゃん、

アンタ何者だい？」

先程までの飄々としたランサー

とは打って変わり、

その声や表情に真剣味が混じる。

それを感じ取ったのか、

安里もセルベリアも身構えた。

「……」

しかしローブの男はランサーの

質問には答えなかった。  
恐らくはサタナエルの本体の  
近くにて収監されていた大罪人で  
あろう。

「無視かよ……！ まあいい！

どの道それはうちのボスが  
取ってこいって言われたんでな！  
悪いけど頂いてくぜ！！」

安里は言うが速いか片腕を巨大な  
モーニングスターへと変化させる。  
結界から外に出るわけには  
いかないから、という事だろう。  
ブオオオオン！！という

風切り音を響かせ

安里はローブの男を殴りつける。

この攻撃は、

ただのパンチではない。

鎖分銅付きの鉄球なのだ。

それも、尋常ならざる速度である。  
常人が避けようとしてもまず  
避けられない。

しかし。

「……！」

ガキイン！ という

硬質な音が響くなり

ローブの男の目の前で

攻撃は弾かれてしまう。

「これは……っ………障壁……っ？」

セルベリアが呟く中

安里は冷静に分析する。

確かに今のは

魔術的な力による防衛だ。

つまり、何らかの神器だろうか。

しかも相当なレベルのものである事は間違いない。

「おいおい……いー」

神器どころか神滅具レベルの

使い手って事はねえだろうな！」

安里は内心舌打ちしながらも

第二撃として腕を

モーニングスターから砲塔に変更した。

そしてそこから砲撃を放つ。

轟ッ!!! と、

爆裂音が鳴り響き

ローブの男が立っていた場所を

跡形もなく吹き飛ばすのみならず

氷結地獄であるのに火柱が立つ。

(俺の『燃える三眼』を使った

特製焼夷弾だぜ！)

炎に包まれたローブの男は

流石に耐えきれない筈だ。

そう思った瞬間。

ちやりん、と硬貨が擦り合わさる

音が響いたかと思うと

炎は瞬く間に消え去った。

「何イ!？」

驚く安里に構わずローブの男は

腰の投げ縄を投げつけてきた。

「何だテメエー！

インディ・ジョーンズにでも

なっただつもりかよ！」

安里は砲塔の弾頭を

榴弾に変えて発射



その投げ縄を炎上させ  
撃ち落とした……筈であつた。

「……んげあつ!？」

安里は目を白黒させた。

何故なら燃え尽きた筈の投げ縄の  
輪が形を保つたまま彼の首に  
巻き付いたからだ。

そしてそのままローブの男は  
肩を使つて投げ縄を締め上げる。

結界から氷塊に吊るされる  
形となつた安里の意識が

寒さと窒息により

急速に遠のいていく。

「不浄なるモノよ。

奇妙な果实より稔れ」

ローブの男が呟くと同時に

安里の身体が痙攣を始めた。

明らかに異常な事態に、

セルベリアは自身の持つ

馬上槍さながらの武器から

閃光を放つ!

狙つたのは投げ縄とローブの男

との支点でありその閃光は

ローブの男と安里を繋ぐ

縄を切断した。

「ゲホッ!ゴホ!」

地面に落下した安里は

咳き込むも、何とか立ち上がる。

「無理をするな!下がれ!

呐喊する!ランサー、援護しろ!」

「任せなア!」

まるで戦場指揮官か何かの様に

セルベリアは指示を出すと

ランサーも即座に応じる。

先程のローブの男の攻撃は

恐らく何らかの呪術であろう。

だが彼女のいた世界は

神秘が解明された鋼の世界。

ならば幾らかの耐性はある。

故に彼女はローブの男の

呪縛から逃れられたのだ。

「女が…!! マグダラの淫婦の末裔が私に……!!」

「女ならば何だと言うのだ?」

怒りの形相を浮かべた

ローブの男は セルベリアに

狙いを定め 再び呪文を唱え始める。

しかし、その詠唱が完成するよりも早く、

セルベリアの武器から放たれた

強烈な光がローブの男の視界を焼いた。

目くらましも兼ねているのか、

眩いばかりの光を放ち続ける。

「どうやら無効化できるのは

お前に直接向けられた攻撃のみらしいな……!!」

ランサー!」

「応ッ!!」

ランサーは穂先にて自身の

周囲に真円を描くと、

赤い光を発する陣が浮かぶ。

同時にランサーは

槍をローブの男に向けると、

「紅い棘は茨の如く……っつてな!

『刺し穿つ死棘の槍』!」

と言いつ放つ。  
すると、その先端から  
赤黒い光の軌道が描かれる。  
渦巻き、捻じれ、絡み合う。  
そしてそれはローブの男の  
心臓へと吸い込まれていった。  
いかにローブの男とて因果律を捻じ曲げられては  
無効化する術はない。

「……!!」

ローブの男は声にならない叫びを上げると  
その場に膝をつく。  
そしてセルベリアの持つ槍から  
氷原を裂くほどの光線が発射され  
ローブの男の全身を飲み込んだ。  
ズゴオオオオン!!  
という轟音と共に 大地を揺らし、  
ローブの男が居た場所には  
クレーターが出来ていた。

「ゲホッ……!」

俺の手柄じゃねえけど、  
ざまあみやがれてっんだ!」

「……油断するなよ坊主。」

まだ生きてるぞ」  
ランサーはそう言うと、  
クレーターの中心を指差す。  
そこには確かに あの  
ローブの男が立っていた。  
ただし、

既にその姿は変貌していた。  
端的に言えば  
人の形をしていなかった。

人型ではあるものの、  
蝮の触手めいた何か  
杖に腕の代わりに巻き付いている。  
背中には羽ではなく翅、  
顔は仮面で覆われ、  
その表情は何えない。

「マジかよ……!」

心臓貫かれて死なないのかよ!」

「そう嘆くなよ。」

この業界じゃよくある話だ。  
かくいう俺もやられる方で

経験済だ」

「そういう問題っスか!?!」

ランサーの言葉に

思わずツツコミを入れる安里だが、  
状況はそんな事を言つてられる程 甘くはなかった。  
ローブの男はゆつくりと立ち上がり、 天を仰ぐ。

「おお……おお……」

感謝致しますぞ我が主……!!

茨の穂先によりて受けた

決して癒えぬ槍の傷……!!

これならば万、いや億分の一にも満たねど

あの御方への贖罪となるでしょう……!!」

仮面より歓喜の涙を流す

ローブの男に安里は形容し難い

恐怖を覚える。

まるで目の前の男は

サタナエルの誇大妄想とは比較にならぬ

何かの妄執に取り憑かれているかの様だ。

狂信、或いは盲愛というべきか。

そんな中で氷結地獄の天蓋の一部が

割れ、氷塊が落下してきた。

「どわあああっ!?!」

慌てて安里達は飛び退くと  
彼の前に見覚えのある男が  
現れた。

「おやまあ、外来種の皆様方。

ご機嫌よう!」

男の名はフリード・セルゼン。

元はぐれ神父、元聖剣使いという  
異色の経歴の持ち主だ。

「生きてやがったのか!?!」

安里は驚きの声を上げた。

何せ木場とイザイヤが塵と化した

筈の敵が 生きていたのだから当然だろう。

だが、フリードは笑みを浮かべて

安里達を見つめる。

その瞳は狂気と

狂喜に染まっていた。

「塵は塵に、灰は灰に!」

俺たちはとつてもハイですよつと!

はいさいまいどお!マイロード!」

「どういう意味だよそれ……?」

「バーカ!!意味なんてねーよ!」

安里の問い掛けに対して

フリードは突如激昂し始めた。

「お前らみたいなきずどもにや

俺つちがどんな気持ちなのか

分かるわけねえだろ!?!

ま、分かんなくていいんだけどさ!!」

「貴様、一体何を言っている?」

セルベリアの疑問に対し、

フリードは

嘲笑を浮かべながら答える。

「デメーらで勝手に想像して

布団でビクビク震えてろや！

ママー！オシッコ漏らしそうな

位怖いヨー！つてなあ！

んじゃ、まあ行きましようかね？」

どうやらフリードは

ローブの男が主と呼んだ存在に

今は仕えているらしい。

そしてローブの男もまた、

それに付き従う様に動き出す。

「そのまま行かせると思ったか！」

セルベリアは勇ましく

槍を構えて跳躍。

だが、

「どこへ行かれるのですかってエ？」

次の瞬間、ローブの男の身体から

無数の触手が伸び、

セルベリアの四肢を拘束した。

「な、なんだこれは……！」

「セルベリアさん!!」

「ギャハハハハ！旦那の触手は

もがけばもがく程に食い込む

サービスタイル付きだぜい！」

「うぐあああ……ッ!!」

離せっ……！離れんか……っ!!」

ローブの男から伸びた

幾本もの触手は

セルベリアの四肢を締め上げ、

彼女の美しい肌に

赤い跡を残していくばかりでなく  
その豊かな

胸や尻にまで 絡みついていた。

「こゝこの程度で……！」

私は負けはせんぞ……！」

「うっひょー！」

テンプレ女騎士様の

ストレートな台詞！

最高に勃起モンじゃね？」

フリードは下卑た

笑い声を上げると

ローブの男に目配せをする。

すると触手が更に

強くセルベリアの肢体を

縛り上げる。

「テメエら

いい加減にしやがれ……！」

安里はフリード達の暴挙に

怒りを顕にし、

『燃える三眼』の炎にて

触手を焼き切った。

「セルベリアさん！無事ですか？」

「無事は無事だが……」

貴様、何故赤面している？」

「それは……その、神器を

使った際の影響という奴です、

オホン」

まさか縛られる貴方に興奮しました

とは口が裂けても言えない。

安里は咳払いをして誤魔化す。

そんな彼にセルベリアは

首を傾げるのみだった。

フリードは舌打ちを一つし、

安里を睨む。

一方の安里も彼を

憎々しげに見つめ返す。

不倶戴天の敵、とも言うべきか。

「……おつとお。」

このままじや禍津星様が

開けた天蓋が

塞がっちまいますよ旦那ア」

「……解っている」

ローブの男は杖をかざすや

天蓋から漏れた紅い光が

二人を包み、上空へと

エレベーターの様に上昇していく。

「逃がすか!!」

安里は再び武態により、

片腕の触手を鞭に変えると

ローブの男の足へと巻きつけるべく振るった。

だが、

「ぎゃああああつ!?!」

突然、安里の右腕に激痛が走った。

見ると腕の表面に何か、張り付いているのが見えた。

多数の蝗が牙を立てて、

彼の右腕に噛み付いていたのだ。

「おい坊主、

そいつから鞭を離せ!」

ランサーが槍を振るうと、

その風圧によって

安里の腕から引き剥がされた

蝗達は地面に落ちる。



恐らくあの男の持つ杖によって  
召喚されたものだろう。

「クソツタレが……！」

何らかの呪術によるものなのか

安里の触手が再生しない。

安里の顔を見てフリードはしてやったと  
言わんばかりにほくそ笑む。

「さてさてさてさて、

それでは皆さんご機嫌よう！

はいちやらば！」

フリードは勝ち誇る様にそう言い残すと  
ローブの男共々天蓋を抜けていった。

「……………」

安里は無言で齒軋りをし、

ランサーは苛立たしげに

虚空を睨む。

セルベリアは己の不甲斐なさに

悔しさを滲ませていた。

↓

「まさかあの子が

ドライグンのお宝をせしめて

脱獄するなんてね……………」

安里達から報告を受けた

セラフォル・レヴィアタンは

嘆息混じりに呟いた。

「すまない、レヴィアたん。

我々の落ち度だ」

（この人、ホント真面目なんだな……………」

あと、ドライグんって……………」

セルベリアは真摯な態度で

彼女に頭を下げるが

セラフオルーは手を振って  
彼女を宥める。

「ううん☆ セーちゃんは  
悪くないわ☆

私が修復にかまけず  
すぐに増援を送ればよかったのよ」

「過ぎた事をあだのこうだの  
言っても始まらねえ。

魔王の姉ちゃん、あの男は  
何者だい？

俺アどうもこの世界の事情には  
疎くてなあ、奴が何者かは  
解らないと対策も立てられねえ」

ランサーは槍を両肩に  
預けながら、セラフオルーへと  
質問を投げかける。

確かにその通りだ。

彼は 異世界の存在である為、  
元の世界の知識があるとはいえ  
その知識はこの世界とは  
ズレている可能性の方が高いのだから。

「あら？ あの子、かなりの  
有名人なんだけどな……☆」

「腹の探り合いはナシにしようや  
そういう騙しあいだの駆け引きは  
苦手だな」

ランサーは あくまで  
真剣な表情のまま 言葉続ける。  
一方のセラフオルーは  
苦笑しながら答えた。

「それもそうね。」

彼の名はユダ。

この世界で最も有名な裏切り者よ。  
サタナエルもとんでもない  
置き土産を残していったわ」

「ほう、裏切り者か……」

そりやまた厄介そうな野郎だぜ」

「そのユダという者は

誰を、何のために裏切ったのだ？」

セルベリアが問うと

セラフオールは顎に手を当て、

考え込む素振りを見せる。

「……正直、

私にも詳しい事は解らないの。

彼はどんな拷問にも歓待にも

口を割らなかつたから。

ただ言えるのは彼が

裏切りを決意した理由は

とても重いものだって事だけ」

安里の知る限りでは

ユダは救世主であるキリストを

ユダヤの司教に売り渡したという

話だが、実際は諸説あり

どのような理由だったのかは

解っていない。

「しかし妙だな。

俺のいた世界のユダは

人間の筈だ。

あんな昆虫の翅やらタコみてえな

触手やら生えてない筈だぜ？」

ランサーが顎をさすり

ながら言うが安里は何となく

想像がついた。

(アイツも誰かによって

転生したんじゃないやねえかな?)

もしそうだとしたら

一体誰が彼を

転生させたのだろうか。

禍津星、という言葉が

何らかの鍵を握っているのは

間違いないが……。

しかしここで一人頭を

悩ませても 仕方がない。

まずは目の前の問題を

解決しなければならぬだろう。

なにせ、魔王、墮天使総督、

天使長が揃い踏みでの

和平会談が迫っているのだから。

### ※第32話（アザゼル×シユターク）

ここはアザゼルの  
人間界での住居。

ベッドの上ではアザゼルと  
とある女性が

愛しあう最中であつた。

女の名はシユターク・ゴーズ。  
フリーの悪魔祓い師である。

「んっ、ちゅぷ……」

シユタークは舌を伸ばし、  
アザゼルの舌を絡めとる。

「髭が少し痛いネ……」

「そうか？」

二人は笑いあい、  
再び唇を重ねる。

「ん、ふう……ああ……」

相変わらずおっぱいが好きだねエ

「そのおかげで

墮天した様なモンだからな

とんだ知恵の実だ」

アザゼルは軽口を

交えながらじつくりと

シユタークの胸を揉み、

乳首を摘まんで刺激を与える。

汗ばんだ彼女の肌はまるで罌の様に  
アザゼルを捉えて離さないながらも

女の股間からは透明な液体が

トロリと溢れ出し、

シーツを濡らす。

「もうこんなに……」

可愛いヤツめ」

「ああンッー！」

彼の指先が陰核につう、と触れると彼女は身体を震わせ、甘い声を上げる。

まるでアザゼルの手はハーブを弾く様にゆっくりと円を描き、

やがてそれは速度を増していく。

「あつ、あつ、あつ、あつ！

イク、イツちやうウ!!」

彼女が絶頂を迎えると同時に

膣内から大量の蜜液が噴出し、

腰がガクガクと震える。

「はあ……ん……」

「浸っている所悪いがな、

そろそろいいか？」

「ああ、勿論だヨ……♡」

そう言つてアザゼルは己の男根を取り出す。

イツセーに負けず劣らず

雄々しくそそり立っているソレを見て

シユタークの頬は緩んでいく。

「おいデ、ダーリン♡」

女は妖艶に微笑むとばかりと貝柱が切られた

二枚貝の様に脚を開き、

アザゼルを受け入れる体勢を取る。

「いくぞ」

「うん」

そして二人は一つになった。

「あああああ!!」

女の絶叫が響き渡る。

アザゼルの肉棒は子宮まで貫き、

既に亀頭が子宮口に到達していた。

「あつああ……♡」

ダメ、そんな奥、突かれたら、  
壊れ、ひぎいイ!？」

イツセーのモノとはまた異なる  
苛烈かつ暴力的なピストン運動に  
シユタークは悲鳴に近い喘ぎ声を上げ、  
更に深く快樂の海へと沈んでゆく。

「アツ、アヒイ、イイ!!」

はげし……すぎるよオ……!!!」

激しい動きに翻弄されながらも

必死に男にしがみつき、快樂を得ようとする  
彼女を見てアザゼルはニヤリと笑う。

「どうだ？ 気持ちいいか？」

「あ、当たり前だろ……♡」

けどダーリンみたいな絶倫の変態と  
付き合つてやってんだ……♡

このくらいでへばつてたまるかア♡」

「上等だ」

アザゼルは満足げに笑みを

浮かべると何やら筒らしきものを

取り出した。

「それ、ハ……?？」

「なーに、ヤスの触手から

発案したマンネリ防止の

人工神器さ」

そう言いながらアザゼルは

筒のスイッチを入れる。

するとそこから蛭の様なものが

飛び出し、シユタークの

肛門に張り付いた。

「ひゃあんっ♡」

「これはな、吸盤型の  
バイブレーション装置だ。

チ○ポじや擦れない襷のスキマまで  
責めてくれる優れもんだ」

「ああんっ、すごい！

お尻の中がブルブルして熱くて、  
変になるうう!!」

蛭はアザゼルの説明通り、

シユタークの直腸に入り込み

振動を与えながら内部を犯していく。

「ほれ、俺の事も忘れるなよ?」

「は、はい！ ああん、

おっぱいモミモミツてしてえ!

乳首もクリクリって

シてエエツ!!」

シユタークは蛇の様にうねり、

舌をチロチロと伸ばして催促をする。

アザゼルはそれに応える様に乳房を鷲掴み、

乱暴な手つきで揉みしだいた。

「ふあっ、しゅぐい……♡

何も♡何も考えられなくなっちゃううう♡」

「そうかそうか、

ならもつと考えらんなくなる程狂わせてやるぜ」

アザゼルはシユタークの腰を掴むと

一気に引き下ろし、彼女とより深く結合する。

尻たぶがぱちゅん、と波打ち、

衝撃でシユタークの瞳が裏返る。

「んぐほおおおっ♡」

獣じみた叫びと共に

シユタークの結合部から潮が噴き出す。

その乱れる様にアザゼルは満足げに眉を上げるも



その攻勢を緩めることはない。

ぱんっ！ ぱちゅんっ！

ぬちゅっ！ ずぶずぶっ！ ずぶずぶっ！

「もう少し色気のある

喘ぎ声を頼みたいもんだが……。

そういう余裕のないお前さんを

抱くのも乙なモンだな」

「ああ……ん……

ダーリン、好き、大好き……♡」

「ああ、愛しているぞ」

二人は愛を確かめ合う様に

又しても唇を重ね、舌を絡ませる。

そしてアザゼルは再び抽送を開始した。

「うっ、くふ、うう、ううううう♡」

子宮口を突かれる度に

シユタークの口からは苦悶の声が漏れる。

しかしそれは苦痛によるものではなく、

快樂によるもの。

「あはあアア♡

お尻も、オマ○コも気持ちいい♡

ボク、もうダメになっちゃうウウ♡」

快樂の虜となった様に見える彼女は

自ら腰を振り、

更なる快感を求め始める。

膣穴も肛門もまるで絞首台の

縄さながらにぎゅうつと

アザゼルのモノと蛭を

絞め殺す勢いで収縮する。

「ダーリン、ダーリン、ダーリン♡

もつと激しく♡

壊すくらいにめちやくちやにしてえ!!」

「言われなくてもそうしてるだろうが!!」

「ああ、そうだったネ♡」

ベッドをギシギシと軋むのもお構いなしに  
アザゼルはラストスパートをかけ、

シユタークを絶頂へと導く。

「ああああ♡♡♡」

絶頂を迎えた彼女の子宮に

大量の精液が注ぎ込まれ、

その刺激によって更に絶頂を迎える。

どびゆるるる♡♡♡

「おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡」

ああ……♡お腹の奥が熱い……♡

でも……まだ足りないんだ……

もっともっと、欲しい……♡♡

女として満たされつつも

未だ満たされない雌の貌をしながら、

シユタークは

アザゼルを求める。

それを見てアザゼルは

満足げに笑って

シユタークを抱き寄せ、

再び彼女の

胎内に己の分身を埋め込んだ。

それから暫くの間、二人の淫らな宴は続いた。

↓

「ふう……俺も色んな女と

ヤツたがお前さんとやるのが

一番いいな」

「相変わらず自分に正直だネ」

シユタークはアザゼルの寝タバコに

火をつけつつ呆れた様に言う。

シユタークに答える前に

彼は煙を大きく吸い込む。

そして吐いた紫煙は宙へと消えていった。

「まあ、墮天使総督だからなア。

役得だ役得」

「よく言うヨ、まったく……」

たゆん、と胸元から

こぼれ落ちた乳房をアザゼルの胸板に乗せて

シユタークは不機嫌そうな顔を作る。

しかしアザゼルは気にせず続けた。

「そーいや、あの赤龍帝君とは

どうなった？」

「ああ、彼の事は好きだヨ。

口の中が煙草臭くないからねエ」

冗談めかしてシユタークが言えば、

アザゼルは肩をすくめて苦笑した。

「手というか根回しの早い女だな

初心な赤龍帝君に

愛憎を絡めさせてイザって時に

決断を鈍らせる算段か？」

「ボクはそこまで姑息じゃないサ。

愛情深い女と言って欲しいネ」

アザゼルの言葉にシユタークは

悪びれもせず

不敵な微笑みを浮かべて答えた。

「なるほど、愛情深い女ときたか。

アイツを幸せに出来るなら

俺は構わんよ。

序に俺を幸せにしてくれるなら

尚良しだが……」

「努力はするヨ。」

幸せの形は人も墮天使も

それぞれだかう」

アザゼルの眩きに、

今度はシユタークが

苦笑いする番であった。

そんな彼女を尻目に、

アザゼルはゆっくりと立ち上がり、

ガウンを羽織り窓の外を眺める。

空には雲一つなく、

星々が輝いていた。

アザゼルの視線の先には

月が浮かぶ。

「今夜は月が綺麗だな」

「ハハハ、随分古めかしい

口説き文句だね。」

でもダーリンらしいヨ」

アザゼルの背中越しに月を見つめながら、

シユタークは彼の言葉を肯定した。

アザゼルは彼女の方を振り返らずに言葉を続ける。

「お前さんも一緒に見るかい？」

満月まであと二日あるが

明日も明後日も晴れるさ」

「そうだね、たまにはそういうのも悪くないかな」

アザゼルの誘いにシユタークは応じると、

上着を羽織り彼と共にベランダへと出る。

そして二人で並んで夜空に浮かぶ

美しい天体ショーを楽しんだ。

こうして墮天使総督の夜は更けていく。

余談だが、翌日二人は仲良く風邪を引いた。

1

「何やってんだあの

エロオヤジ……」

安里はミツテルトから両者の  
顛末を聞いて呆れるしかなかった。

レイナーレは爪を噛んで

「むう……」

と不満げな声を漏らす。

「俺はコキユートスで

フリードとユダを相手に

してたつてのに……」

安里は未だ傷の癒えない

右腕を包帯の上から撫でながら

がくりと項垂れていた。

「その傷まだ治らないんスか？」

「まあなあ……」

アーシアちゃんの

『聖女の微笑み』でも

芳しくなくてなあ……」

アーシアの申し訳なさそうな

顔を思い出すと安里の心は

少し傷んだ。

「それはそうですよ。

ユダと言えば反キリストの

象徴みたいなもの。

聖書の神の力の欠片である

神器との相性は最悪です」

と、久し振りに現れたと思えば

ナイアは見下しきった貌で

安里の右腕を評した。

「そ、そうなのか……？」

「そうですよ、物知らずの

クソバカ虫安里クン？」

と、ナイアは嘲笑う様に言った。  
相変わらずの性格と物言いだ。  
もう怒る気にもならない。

「はいはい、  
どーせ俺は無知な愚か者だよ。  
それでいいから用件を頼むわ」

「突っかかってこないとは  
相当堪えている様ですねぇ……。  
まじウケる、

もといまあいいでしょう」  
鼻を鳴らしつつも、

ナイアはいつも通り  
淡々と説明を始めた。

「もうすぐ和平会談が始まるので  
その護衛を頼みたいのです。  
相手は三大勢力のトップ。  
当然、襲撃もあると思われます。  
というかないわけないんですけどね  
アハハハ」

乾いた笑いをするナイア。  
この女は本当に笑い事ではない状況の時は  
こんな風に笑うのだ。

どこまで情報を掴んでいるのか  
定かではないし寧ろ騒乱と  
混沌を望んでいる様に見える。

安里はそんな彼女の態度に  
きな臭いものを微かに感じていた。

「きゆうどー、しんぱいするな。  
なるようになる。」

レット・イット・ビーだ」

黄緑のボブ入りフリンジカットの

一際長身の眼帯美少女が安里の肩を叩いた。

「ありがとな……。」

「ってキュクロ!？」

「何でお前がここにいるんだ!？」

「はなせばながくなるのだが

このしようわるおんなにやぶれたわたしは  
はいぐんのしようになった。

いじようだ。

キュクロはしようぐんだから

いちへいそついきゆうどーより

えらいのだ。えっへん」

キュクロは胸を張って

自慢気に言う。

安里は頭痛を催し、頭を抱えた。

(ああ、やっぱりコイツも

あの女に負けたんだなあ……)

「おい、キュクロ」

「なんだ」

「お前さんの親父の事だが……」

へパイストスの事を思い出しながら

安里は気まずさを感じつつ

確認する。

「ととさまのことはいうな」

「あ、ああ……」

「きにしないでよいぞ。

ととさまはととさままだ。

わたしのきもちわからん。

おまえはやさしいな。

まあまあだいすぎだ」

「お、おう……」

そう言つて微笑む彼女に安里は  
思わず顔を赤らめた。

「はいはい！」

私も大好きですよ!!

近所の犬ころの次に！」

「ぐえッ」

と、そこへ割り込んで来た

ナイアが安里の首を軽くネクタイで絞める。

「げほっげほ、何すんだよ！」

「いえ、なんかムカついたので」

「理不尽すぎるだろう!!」

「というか、貴方達いつの間に

仲良くなつたんですか？

正直意外です。

戦いから産まれる友情とか

キモいです。受け入れられません。

死ねば良いと思います。

てか死ねよ」

ナイアは汚物を見る様な目で

二人を見下す。

安里は心底嫌そうな顔を浮かべた。

一方のキユクロはと言うと

何故か誇らしげに胸を張る。

「ふふん。

ナイアもなかまになりたいなら

いえばよかったではないか」

「誰が仲間ですか気持ち悪い。

私はクズどもの仲間じゃありません。

そもそも私の辞書には友達なんて

言葉は載っていませんし」

「またそういうことをいう。」



ほんとうはさびしいのだろうか？

みんなからわすれられるくらいなら

きらわれたほうがいいとおもっているのだろうか？」

「……」

ナイアは珍しく沈黙した。

そして安里は、

(あれ、コイツ案外鋭い?)

と感嘆していた。

「と、じーじがいつていた」

「受け売りかよ！」

「うけうりではない。」

じーじはすごいのだ。

おんなごころをのぞいて

なんでもわかるといつもいってる」

キユクロの祖父とやらを

想像してみる安里であるが

どうにもいいイメージが湧かない。

(何だかロクな大人じゃ

無さそうだな……アザゼルを

そのままジジイにしたような

テキトーなジジイなんだろうな)

安里はそう思った。

「ともかく、魔王様が

集まったのでそろそろ行きましょう」

ナイアはそういうと、

転移魔法陣を展開した。

↓

さて、その頃のイツセーであるが、

朱乃が巫女を

勤める神社に来ていた。

イツセーに紹介したい人物がいると

言われて来たのだが……。

「久し振りだな、兵藤一誠」

「……アンタは、ボールク！」

そこには何度も敵として

まみえたボールクの姿があった。

しかし今回は

敵意や殺気のようなものは

感じられない。

「和平会談の前だ。

俺達が無駄に争っても

始まるまい」

ボールクは淡々と語る。

確かに、

この会談は和平の為のものだ。

その前に戦えば、

何もかもぶち壊しになるのは

間違いない。

イツセーもその位は解る。

「それもそうだけど……」

アンタ、悪魔専門の殺し屋だろ？

何でここに？」

「誰が殺し屋だ……」

「ち、違うのか？」

呆れた様なボールクの視線に

イツセーは少し慌てる。

そんな彼に彼はこう言った。

「俺は神の教えに従うもの。

今回はミカエルの護衛に

来ただけだ」

「ミカエルの護衛？」

そう言えばアンタ堕天使の

レイナーレとも組んでいたし  
キョクロちゃんとも

行動していたよな？

墮天使についたり、

天使についたりって何なんだよ

一体？」

イツセーは、

疑問をそのまま口にする。

彼の価値観からすれば

あちらについたり、

こちらについたり

コロコロと態度を変える

ボールクの行動は理解出来ない。

しかしボールクは怒るでもなく

淡々と目を閉じたままだ。

「何度も言わせるな。

俺は神の教えにのみ従うものだ」

「答えになってねえよ……」

イツセーの言葉は尤もだが、

ボールクは何も言わなかった。

その代わり、というわけではないが

光と共に現れた輝かしい翼を持つ

青年が両者に割って入る様に

声をかける。

「申し訳ない。彼は永久凍土の

様に頑なな所がありますので……」

「ええと……その口ぶりからすると

貴方がミカエルさんですか？」

「ええ、初めまして。

私は天界を束ねるものです。

貴方とは一度お会いしたいと思っていましたよ、

兵藤一誠くん」

ミカエルと呼ばれた男は微笑む。

そしてイツセーも挨拶をした。

そしてミカエルは言う。

会談までまだ時間がある。

それまで二人で話でもしよう。

イツセーも断る理由がないから

か、それに了承する。

二人が通されたのは

神社の中の応接間であった。

そこで二人は向き合う。

先に口を開いたのは

ミカエルだった。

「先の件では紫堂イリナ、

並びゼノヴィアに協力して

頂き、ありがとうございます」

深々と頭を下げるミカエルに

イツセーは面食らった。

(こ、こんな礼儀正しい人が

あの三人の上司なのか?)

「いえ、

それは構いませんけど……」

「私達は神に仕え、

人々を導くものです。

ならば当然の行いでしよう」

何とも謙虚かつ寛容な態度。

そして慈愛に満ちた表情。

その姿はまさに天使長と

呼ぶに相応しい。

しかし、そうなるとイツセーには

幾つか疑問が浮かぶ。

「ミカエルさんを見てみると、

アーシアを破門にしたりする様な

天使様には思えないんですが……」

イツセーの問いにミカエルは

少し悲しげな顔を浮かべる。

「残念ながら、我々にも

様々な派閥があるのです。

あまり公にすべき話では

無いのですが……。

我々熾天使は先の大戦で

功績をあげた事で

神の側近となりました。

しかし、それを快く思わぬ

天使達もいるのです」

番茶を一口啜りながらミカエルは

沈痛な面持ちで語る。

「それは変ですよ！

天使だろうと悪魔だろうと

人間だろうと

働いた人が評価されるのは

当たり前じゃないですか！」

イツセーは憤慨する。

天使であろうとなかろうと

自分の力で何かを為したものが

正當に評価されなければ

おかしいではないか。

「そうですね。

確かにその通りです。

しかし、それでも尚、

旧魔王派と同じく

画一化された世界を是とする

大天使達は存在する……。

如何せん……我々は

固定化された世界に慣れすぎた。

天使も悪魔もあまり

変わらないのかもしれないですね」

ミカエルは自嘲気味に笑う。

するとイツセーが慌てだす。

「天使も悪魔も変わらないって……

俺なんかが心配しても

仕方ないですけど、

今の発言はマズいですよ！」

何とも不思議な男だ。

いわば敵勢力の首魁の失言を

あげつらうでもなく本心から

心配し、思った事を言っている。

ミカエルは思わず笑ってしまった。

「ふっ、確かにそうですね。

これは迂闊でした。

以後気をつけましょう」

「あ、いえ、

そんなつもりじゃ……」

「解っています。

貴方は優しい赤龍帝だ。

だからこそ、これを託するに

値する」

と彼が取り出したのは

輝かんばかりの鞘に

納められた一本の剣だ。

イツセーは触れずともそれが

聖魔剣である事がわかる。

「これは……？」

「かつて私が使っていたもの。」

今は私の力を受け継げる者がいないため、  
封印しているものです。

兵藤一誠くん、君になら、

この力を預けられます」

ミカエルの言葉にイツセーは驚き、  
同時に困惑する。

「さ、流星にそれは……」

「相変わらず鈍い男だな」

兵藤一誠。

貴様は既に九大天使からも

敵視されているのだ。

ミカエルはそれを奇貨として

貴様らを潰し合わせたいのさ」

いつの間にか部屋に入ってきた

ポールクが身も蓋もなく言い放つ。

その言葉にミカエルは

苦笑いしながら否定した。

「いえ、そういうわけでは……。」

ただ、私達の争いに巻き込まれぬよう、

お守りしようと思っただけです」

「……」

イツセーは押し黙ったまま

ミカエルの申し出を受けるべきか悩む。

するとミカエルはイツセーに

選択の余地を与えるべく更に言う。

「もし、会談の場で戦う事になった場合、

その時は私達が全力でサポートします。

ですから安心して下さい」

「……わかりました。」

「お預かりさせて頂きます」

イツセーは

その提案を受け入れた。

ミカエルは安堵の息をつく。

「ありがとうございます。」

では私はこれで。

今日はお逢いできて幸いでした」

「ええ、それじゃ」

ミカエルは立ち上がり、

ポールクと共に

応接間から出ていくのを

イツセーは呆けたように

見送る。

「天使にも

派閥争いがあるなんてなあ……」

二人が去った応接間にて

イツセーは呟く。

『天使だからこそ、だ。』

奴らは聖書の神を唯一無二とする  
集権体制。

その神がいなくなれば

我こそは、と舞い上がる者やら

神に代わる新たな主を求める者、

または神そのものに

成り代わろうとする者も現れる』

神そのものに成り代わろうと

したのは墮天使のサタナエルだったのは

何とも皮肉な話である。

イツセーはその話を聞いて納得すると

同時に一つの疑問を抱く。

「神に代わる新たな主って

誰だよ？」



『そこまでは俺も判らん。

だが自らを絶対不可侵として  
他者に隷属と信仰を要求する  
存在に従うなど、俺はごめんだな。

お前はと思う?』

ドライグはイツセーの意見を  
求める。

イツセーの答えは決まっていた。

「神様っていうのは皆を

幸せにするものだろ。

皆を苦しめて何が神だよ」

『そうだな、ある意味相棒の

目指すハーレム王と同じだ』

「ハハハ、何だよそれ」

ドライグの冗談に対し

イツセーは笑って返すと、

残っている番茶を飲み干した。

「ああ、美味いなあ!」

朱乃さんが淹れてくれたお茶!」

「ふふ、冷めてしまったお茶では

美味しくないでしょうに……。

イツセー君は本当に優しいのね」

「いやあ、そんなわけでは……」

朱乃の微笑みにイツセーは照れると

彼女は目を細めながら続けた。

「ミカエルとの会談で

喉が乾いたでしょう?」

お代わりを用意してありますから

どうぞこちらへ……」

わざわざお茶のお代わりのために

場所を替えるなんて妙な話だが

イツセーはまるで気にせず、  
言われるままに朱乃の  
案内に従った。

※第33話（イツセー×朱乃 本番なし）

俺が案内されたのは

何と朱乃さんの寝室だった！

「あの……お茶のお代わりは

ここでは飲めないと思うんですが……」

俺は恐る恐る朱乃さんにそう言う。

すると、朱乃さんの表情が

悲しげなものに変わっていった。

「そうね、貴方を騙すつもりは

なかったのだけれど……」

あれ、なんか普段とは口調と

雰囲気も違う？

いつもはもつと

おおらかというか

『あらあらうふふ』

みたいな感じなのに

今は俺とそんなに歳が変わらない

女の子のようで……。

その変化に戸惑っていると

朱乃さんの方から話を切り出す。

「コカビエルの話している事を

覚えているかしら……？」

恐る恐る、といった様子で口を開いた

朱乃さんの言葉を聞いて、

俺はコカビエルとの戦いの最中、

奴が口にしていた事を思い出す。

「バラキエルの娘……ですか？」

覚えていない、って

誤魔化してはいけない気がしたから

正直に答えたんだけど、それを聞いた途端、

朱乃さんの顔色が青ざめていく。  
そして震えながら俯いてしまった。  
やっぱりまずかったのか!?  
俺が焦りを感じ始めたその時、  
朱乃さんは

何かを決意したように顔を上げる。

「そう。

貴方が聞いた通り、

私はバラキエルと人間との間に  
生まれた者です」

……えっと、

これはどうすればいいんだ?  
とりあえず、

この空気を変えないと!

「そ、そうなんですかあ〜!」

ああっ! なんだよこれえ!!

我ながら情けないにも程があるだろお!!!

……とまあこんな風に

心の中で叫んでみたところで

朱乃さんが変わるわけでもない。

ここは俺も腹を決めて

話を促すしかないだろう。

そう思つて口を開こうとした時、

先に朱乃さんが言葉を続けた。

「私の父、バラキエルは

とある大天使との戦いに敗れて

この神社に落ち延びた時、

巫女であつた私の母と出会いました。

母は神に仕えながらも

父を愛し、父は墮天しながらも

母を愛していた……。

その縁で私を宿したと聞きます」  
朱乃さんはまるで他人事のように  
自分の生まれを俺に話す。

あの時、

「私の前であの男の名を呼ぶな！」

って言っていたのと

関係あるのかな？

そんな俺の様子に構わずに

朱乃さんはすつ、と立ち上がると

俺に背を向けると巫女服の

上着をはだけさせたじゃないか！

白磁の様な肌が露わになり、

綺麗な背中には悪魔の羽と……

堕天使の羽があった。

「これが私の本当の姿よ。

イツセー君。

軽蔑するでしょうけどこれが事実だから……。

人間にも堕天使にも、

どちらにもなれない自分が

嫌で、私はリアスと出会い

悪魔になったの。

でもその結果、悪魔の羽と

堕天使の羽を持つ穢れた

存在になっただけだった。

本来なら貴方達と

一緒に居られる資格なんてどこにもないの……」

そう言つて朱乃さんは

再び俺の前に座ると、泣き出してしまった。

その姿はとても痛々しくて

見ているだけで胸が締め付けられるようだった。

俺は思わず朱乃さんの

肩を抱き寄せた。

すると朱乃さんは  
ビクツとして体を震わせる。

「イツセー君!？」

「俺は今日までの朱乃さんのことしか知りません。

悪魔とか墮天使とか関係ないです!

それに……たとえどんな過去があっても、  
今こうして泣いている

朱乃さんを放っておけません!!」

「……ありがとう。

ごめんなさいね、

取り乱してしまつて。

貴方が優しい人だつて

事は分かつていたはずなのにね。

私ったら本当にダメね。

先輩なのに貴方に甘える様な

真似をして……。

もう大丈夫よ。

これで涙を止められたから」

朱乃さんは俺の腕から離れ、

無理矢理笑顔を作つて見せる。

けれどそれは、

とても弱々しいものだつた。

そして朱乃さんはおもむろに

巫女服の上着を脱ぎ捨てる。

その行動の意味が分からず戸惑う俺に対し、

朱乃さんは自分の体を見せつけるように腕を広げた。

「イツセー君。お願いがあるの。

私を抱いてください。

私、あなたが欲しいの……」

突然の事に驚く俺だったが、

朱乃さんの言葉を聞いた瞬間、  
頭の中が真っ白になる。

えっと、どういう意味なんだ!?

朱乃さんは一体何を言っているんだろう?

もしかして俺、

からかわれているのか?

それともこれって夢なのかな?

混乱している俺を見て、

朱乃さんがクスリと笑う。

「私がこんな冗談を

言うと思います?」

「いや、思わないですけど、

どうして急に

そんなことを

言い出すんですか!?

訳が分からない。

俺はただ単にミカエルとの

会談に呼ばれただけなのに。

すると、朱乃さんは俺に抱きついてきた。

そして耳元に口を寄せ、

囁くように言葉を紡ぐ。

その声音はどこか艶っぽくて、

体の芯まで響いてくるような感じがした。

「私、決めましたわ……♡」

「な、何を決めたんですか!?

「うふふ……」

3番目で構いませんわ♪」

「3番め……ですか?」

「って、ええええええ!!!」

素っ頓狂な叫びをあげる俺に

覆い被さっていた朱乃さんは

ゆつくりとその豊かなおっぱいに  
体重を乗せて押し付けてきた。

うおおお……!!

なんとという暖かさと柔らかさ!

と、感激している俺の目の前に

朱乃さんの顔が近づいてくる。

その表情は妖しく微笑んでいた。

そのまま朱乃さんは俺の頬に手を添えると、

唇を重ねた。

柔らかい感触に頭がボーッとする。

「んちゅ……れるお……ぴちや、じゅぷう」

舌と唾液を絡ませながら情熱的なキスをされる。

息苦しくなった俺は朱乃さんの背中に回していた手でバンバンと

叩くと、ようやく解放された。

「はあはあ……」。

いきなりどうしたんですか!?

荒い呼吸をしながら尋ねるが、

朱乃さんは俺の質問を無視して

再び顔を近づけてきた。

「ちよつ、待って下さい!」

まだ話の途中じゃないですか!

「イツセー君……いえ、イツセー」。

私の事は朱乃って呼んで……♡」

そう言つて朱乃さんはまた

俺の口を塞ごうとしてくる。

その瞳は潤みを帯びていて、

顔は上気して赤くなっている。

あ、頭がどうにかなりそうだ……。

今までの人生の中で

一番刺激的すぎる展開だよ!!

俺が心の底から



パニックになっていると、  
朱乃さんが俺の股間に手を伸ばしてきて、  
ズボン越しに触れてきた。

「イツセーのこーい、

硬くなっていますわね。

そんなに興奮してくれているの？

嬉しいですわ……♡」

朱乃さんはそう言って

妖しい笑みを浮かべた。

俺は慌てて腰を引くけど、

朱乃さんのおっぱいによってガッチリと

ハートを掴まれていたため、

逃げる事ができない。

そして朱乃さんは、

今度は直接接触してきた！

「あああつ！ 朱乃さん！

ダメですってば！そこは敏感だから……」

「あら？ 女の子みたいなの

可愛い声で鳴きますのね。

ますます好きになってしまいましたわ……♡」

朱乃さんは、俺のモノを取り出して

優しく握り締める。

そして上下に擦り始めた。

ああ……気持ちいい。

副部长から

こんなことをしてもらえるなんて……。

しかも俺のことを好きだと

言ってくれて。夢みたいだ……。

でも、これは現実なんだ。

俺は朱乃さんに身を委ねることにした。

朱乃さんの手の動きが徐々に速くなっていく。

「ああ……朱乃さん……!!」

「ふふ、イツセーの

おチン○ンがビクビクしてる……♡  
気持ちいいかしら？」

「はい……。凄く……」

「いいです!!」

朱乃さんの手つきはとても

繊細かつ大胆で、

男なら誰もが快感を覚えるだろう。

俺が喘いでいると、

朱乃さんは胸元をはだけさせ、

俺のモノをしゅつ、しゅつと

しごき立てつつも

片手自分の乳首を摘まんだ。

おっぱいは前人未到の氷山か

と思うほど、圧倒的な美しさのみならず

ポリュームを誇っている。

乳首も乳輪も

大人の女性らしく大きいのが、決して下品ではない。

そんなおっぱいが今、

俺の目と鼻のすぐ先にあるのだ。

「ほら、見て……。イツセー♡」

貴方、私のおっぱい好きでしょ？」

朱乃さんは俺に見せつけるように

両方の乳房を鷲づかみにして

ぐいつ、ぐいつと寄せ上げた。

すると二つの膨らみの谷間が深まり、

その奥底はまるでブラックホールの様に俺の

視線を吸い寄せた。

「はい……。大好きです。」

朱乃さん……。朱乃のおっぱいが……。!!

でもおっぱいだけじゃなくて、  
髪型も、雰囲気も、性格も、  
あと意外に怒らせると怖い所も  
全部好きです!!」

俺が正直に答えると、

朱乃さんは嬉しそうに微笑む。

「嬉しい……♡ 本当の私を

受け入れてくれるのね……♡

私もイツセーのこと、好きよ……♡」

朱乃さんはそう言うのと、

俺の耳を甘噛みしてきた。

「ひゃう!?!」

耳を噛まれた瞬間、

背筋に電流が流れたような感じがした。

その感覚がとても心地よくて、

俺は思わず変な声を出してしまう。

「あらあら、イツセーったら、

本当に可愛い反応をしますわね……♡」

朱乃さんは俺の反応を見てクスリと笑う。

「ねえ、イツセー……♡

私、貴方が射精する所が見たいの……♡」

「ええっ!?!」

朱乃さんが

とんでもない事を言い出した!

いやおっぱいを見せてもらって

なおかつアレを扱ってもらっているけどさ!

「そ、それは流石に

恥ずかしいですよ!」

俺は顔を真っ赤にしながら叫ぶ!

「あらっ……さっき私のこと、

好きって言ってくれたじゃない……♡」

朱乃さんは俺のモノを握ったまま、妖しく微笑んでいる。

「そうですけど……。」

それとこれとは話が別というか……。

俺だつて一応、男ですから……。

出す時は自分の意志でと言うか……

あうっ!?!」

「ふふふ、そういうものなのかしら？」

でもイツセーのここ、

もう我慢できないみたいですわ……♡」

ぎゅうううっ!!

朱乃さんは俺のモノを強く握ってきた!

「あああっ!!」

俺は身体を大きく仰け反らせながら叫んだ!

「ほら、こんなになつていますわ……。」

朱乃さんはそう言つて俺のモノの

先端部分を指先でなぞる。

「ああっ!・ 朱乃さん!」

そこ敏感だから……触らないで下さい……!」

「あらあら、敏感なのは

おチン○ンだけではありませんのね。

乳首もこんなに硬くなつてますわ……♡」

朱乃さんは俺の乳首を軽くつまんだ。

「ひゃん!?!」

俺は情けなくも女の子みたいな声で鳴く。

朱乃さんはそんな俺を

愛おしそうな目つきで見ている。

「ふふ、イツセーってば、本当に可愛いですわ……。」

なら、

私の一番好きな所に出して……♡

髪? 顔? 口? 胸……? 臍?

それとも……♡

イツセーのおチン○ンから

直接かけて欲しいですわ……♡」

朱乃さんは俺の耳に

息を吹きかけつつ、

自分の鼠径部の辺りを

なぞり囁いた。

その甘い吐息と言葉に、

俺はゾクツとした。

ああ……！ もう、限界だ!!

出すとするなら………！

あそこしかない!!

「朱乃……!!」

「ああん♡イツセー♡」

そして俺は朱乃さんの胸を

強引かつ大胆に揉みしだきつつ

まるで塗装するかの様に

ザーメンをその

おっぱいにぶちまけた!!

「ああ——っ!!」

ドピユツドピユールルル——っ!!

「きやあん♡」

朱乃さんはその勢いよく発射された

大量の精液を上半身いっぱいに浴びた。

「ハア……ハア……朱乃さん……」

いや、朱乃……俺……!」

俺は荒い呼吸を繰り返し、朱乃さんを見つめた。

朱乃さんは俺のモノをうっとりとしながら見つめている。

その顔も白濁色に染まっていた。

「うふふ……イツセーったら、

こんなにたくさん出しちゃって……♡  
気持ちよかった？」

「はい……最高です……！」

おっぱいにぶっかけるなんて、  
考えただけで興奮しちゃいました……！」  
俺は素直に感想を述べると朱乃さんは  
目を細めていた。

「そう……嬉しい……♡」

私もイツセーのが熱くて、量が多くて、  
すごく良かったわ……♡」

朱乃さんはそう言うのと、

俺のモノに付いた残滓を舌で舐め取った。

「ああっ!？」

その刺激に俺は思わず声を上げてしまう。

「あらあら、まだ元気なようね……。」

じゃあ今度は私がしてあげるわね……♡」

朱乃さんはそう言って、

白濁まみれの身体にも構わず

俺のモノを躊躇いなくおっぱいで

挟み込んでくれた。

「ああっ!？」

柔らかい感触に包まれた瞬間、

俺の口から喘ぎ声が漏れる。

その快感たるや、

凄まじいものだった。

「うふふ、ごうかしら？」

私のおっぱい……？」

気持ちいい？

もっとしてほしい？ ……うふふ♡」

朱乃さんはおっぱいを

上下に動かしながら訊いてくる。

ばるんっ♡ばるるんっ♡  
むちっ♡むちむちっ♡

「はい……………！　お願いします……………！」

「あらあら、正直な子ね……………」

なら……………こう言ってくれる？

『お前のおっぱいが一番いい』って……………♡

はつきりと言って……………♡」

ああ、当に悪魔の誘惑だ……………！

三番目でいいってというのは

あくまで順序の事だったのか!?

し、しかしリアスさんを

裏切る事になるのでは……………！

だ、駄目だ……………！

それは……………できない!!

「い、言えません……………！」

俺は……………!!」

俺はそう言って、

必死に理性を保つ。

「そう……………残念ですわ……………♡

でも……………、貴方のモノ、

いえ、おチ○ポは

こんなになってるのに……………♡」

朱乃さんは俺のモノを

優しく包み込みつつも

俺のモノを理性ごと

鉛筆削りさながらに擦り上げて

削ってくる!

「ううっ……………！　朱乃……………！」

俺は……………！　ううっ……………！」

「イツセー……………♡」

朱乃さんは俺の名前を呼びつつ、

俺のモノを自分の胸に挟んだまま、  
自分の乳首を指でくりくり、と弄り始めた。

「うふふ♡イツセー……♡」

貴方がそう言ってくれるなら、

私……♡ 貴方との子供だって……♡」

瞳を潤ませて、吐息を漏らしながら朱乃さんは  
躊躇いなく言ってきた。

貴方との子供だって……!?

そんな凄まじい日本語が

あろうとは……!!

「ううっ……!」

朱乃……! 俺は……!」

「ねえ……イツセー……♡」

私の事を愛しているなら……♡

言葉だけでもいいの……♡

愛してるって……♡

お前のおっぱいはリアスよりも

上だって……言ってる……♡」

朱乃さんはそう言いつつ、

俺の龟头をチロリ、とひと舐め。

その言葉はまるで麻薬のように

俺の脳髓を蕩けさせた。

「あ、あ、あ、朱乃……!!」

ああっ!! 好きだ!!

だから……! 頼むから、

俺から離れないでくれ……!!

朱乃のおっぱいが一番だ……!!」

俺は誘惑に耐えきれず叫び、

同時に朱乃の身体へと

射精してしまった。

ドピュツビュルル——ッ!!



「あはあああつ♡♡♡」

朱乃さんは俺の精液を

その全身を歓喜と快楽に

震わせ、受け止めた。

そして俺のモノをゆつくりと離すと、

俺のモノに付いている精液を

美味しそうに舐め取っていく。

「ああ……♡イツセーのおチ○ポ汁……♡

すごく濃くて、熱くて、すごくいい匂い……♡

それに、イツセーが私の事を愛してるって……♡

嬉しいわ……♡」

朱乃さんはそう言うと、

俺のモノを丁寧に舐め取り、

最後にキスをした。

「ねえ……♡

シャワーを

浴びてきてもいいかしら？

初めては綺麗な身体で

貴方に愛されたいの……♡」

朱乃さんは

そう言っつて俺に微笑みかける。

「はい……！」

俺は力強く答えて、

朱乃さんを見送る。

うおお……！ まさか……

朱乃さんとこれからエッチできるなんて……！

夢みたいだ……！

しかも、あんなに美人でスタイル抜群の

朱乃さんが俺の恋人になってくれるなんて……！

母さん！

俺は嬉しくて涙が止まらない！  
というか、これって

『先にシャワー浴びてこいよ』

というアレではなからうか！

くうく！ 何という感動的な展開なんだ！

もう死んでも悔いはないぜ……！

「それは……何よりね……」。

死んでも悔いはない……ですって？」

「はい！ リアスさんと恋仲に

なれただけでも一生分の幸福を

使い果たしたと思っていたのに、

朱乃さんまで恋人になってくれるとは！

リアスさんには感謝してもしきれません！」

ハイテンションのために

気が付かなかったが今の声って

もしかして……?!

「そう……それは、何よりね……」

り、リアスさんが赤黒いオーラを

纏って仁王立ちになっている……。

め、目にはハイライトが無いような……！

母さん、俺は恐ろしくて

涙が止まらない……！

この後、俺は頬を抓られながら

転移の魔法陣まで運ばれたのだった……。

※第34話（イツセー×リアス 水着メイドプレイ）

「イツセー……目を閉じなさい」

転移先は俺の家のリアスさんの部屋だった。

そして到着するやリアスさんはまず俺にそう言った。

うう、未遂とは言え朱乃さんと事に及びそうになった事を

やはり怒っているのだろうか……？

平手打ちやお尻たたきで

済めば良いけど……。

とにかく覚悟を決めて俺はリアスさんの命じるままに  
した。

「目を閉じるだけじゃなくって、

耳も塞いでいなさい」

言われた通りにする。

すると、パチン！

という音が聞こえてきた。

「……これでよし」と。

さあイツセー、もういいわよ？」

恐る恐る目を開けてみると

——そこには白と黒を基調にした

ビキニを纏い、頭にはカチューシャをつけた

リアスさんの姿があるではないか！

おおおっ!!これは凄いつ!!

なんていうか……

この胸とか腰つきとか

太股とか……っ!!

まず目を引くのは

ビキニから溢れそうなほど大きくて形の良いバストだ。

しかも肌が白くきめ細かい上に

僅かに透ける乳首の色は綺麗なピンク色。

白と黒の色彩効果なのだろうか？

余計にその大きさが強調されているぞ！

くうっツ！これが部長のおっぱいかあ……！！

なんとというボリューム感！

弾力性がありそうだし、揉み心地抜群だろうな！

さらに腰回りも細く引き締まっていて、

実に魅力的である。

そして下半身だが、

これも素晴らしい！

何しろ黒い

ニーソックスを履いているのだ！

これまた絶妙にエロい！！

こんなエロエロなメイドなんて

冥界中を探してもいないぜ！まさに至高の一品！

俺の煩惱を刺激する最高のコスチュームだよ！

「どう？・似合うかしら？」

そう言ってくるリアスさん。

ああ、最高ですとも！

思わず

抱きしめたいくらいですよ！

いや、しかし……。

「あれ？・お、お仕置きは……？？」

おずおずと訊ねてみると、

リアスさんは考え込む様な

仕草をする。

その際におっぱいがむぎゆうと

狭まり視覚の暴力が俺を襲う！

「あら？」

お仕置きの方が良かったの……？」

「い、いえ！」

リアスさんならお仕置きも

覚悟の上ですが、

甘々イチャイチャプレイの方が大好きです！」

つい勢い込んで言ってしまった。

ハツとなつて見ると

リアスさんは嬉しいような、

困った様な表情をしていた。

ど、どうかしたんでしようか？

何かマズかったかな……？

「ふふ、本当に仕方がないわね。

イツセー……いえ、旦那様♡」

だ、旦那様!？」

いやいや、リアスさんは

グレモリー家の御令嬢で

俺は先祖代々由緒正しい平民！

いくらなんでも恐れ多過ぎる！

「あ、あの!？」

どうしてこのような

有難いも嬉しい格好を……!？」

俺は焦りまくっていた。

だってリアスさんはグレモリー家の御令嬢で、

そんな方がまさか俺みたいな男に

こんな真似をしてくれるなんて

思っただけだったんだもの！

そりゃ誰だってビックリするさ！

するとリアスさんは艶っぽい笑みを浮かべた。

「だって……イツセーは

私の婚約者でしょ？

貴族社会を学ぶなら

まずは形から入って学んでみるのも  
いいと思うの」

……………。

悪魔の貴族社会ってこーなの!?

「さて、先ずはゲイトが

作ったプリンを食べる所から

始めるわよ♡」

「は、はい…………」

と、リアスさんが用意したのは  
ぷるん、と揺れる

大きなプリンだった。

スプーンを手に取りいざ食べようとすると、

リアスさんから

待ったが入った!

何か無作法があつたのだろうか?

「違うわよ。使うのはこっちの

お皿…………でしょ♡」

リアスさんが指差すのは

プリン以上にぷるんぷるんな

彼女のおっぱいだった!

お、おっぱいをお皿に…………!?

そんな素晴らしい日本語と

テーブルマナーがあつたとは…………!

俺は感激していた。

そう言っておっぱいにプリンを乗せるリアスさん。

くうっ!この光景だけで

ご飯三杯はいけるぜ!!

しかもリアスさんの胸は大きいから

プリンの乗せ甲斐があるってもんだ!

リアスさんの巨乳を眺めながら

俺が感動していると、  
リアスさんが少し頬を赤らめつつ  
恥ずかしそうに言ってきた。

「……………じ、実はね。」

これはグレイファイアから教わったんだけど……………。

その……………お、お兄様はこのまま  
プリンを皿から直に食べるのが  
紳士の嗜みだとか……………♡」

俺はまたしても衝撃を受けた!!

さ、流石魔王様だ……………!

は、発想のスケールで……………

ま、負けた……………!

俺は今、

敗北感に打ちひしがれていた。

だが挫けてばかりはいられない!

今はこの冥界一のメイドリアスさんに

相応しい旦那様として振る舞わなければ!

ようし……………やるぞ!

「う、うむ……………!」

では頂くとしようか……………!

まずは下乳に溜まった

カスタードクリームを一口。

甘い! そして柔らかい!

それにリアスさんの胸の感触も

ぷるぷるのむちむちで

素晴らしいじゃないか!

そして次に上乳へ舌を伸ばす。

するとそこにはひやりと冷たい

生乳の感触がありました。

ま、まさかリアスさん!

プリンの風味を損ねないために

氷でおっぱいを冷やしていたのか!?  
俺は感動した!

何という気遣い!

これぞ侘びの極地にして真髓!

その思いに応えなくては!

俺はリアスさん、いやリアスの

ビキニの間にパッド代わりに

プリンを投入していく!

「ひゃうん♡旦那様♡だめえ♡」

ばるるんっ! ぶぢゅ♡ぶじゅ♡

ばちんっ♡むぎゅむぎゅ♡

当然プリンまみれになった

リアスのおっぱいを、俺は美味しくいただきます。

ペロペロ、チロチロと舐めたり

刮げとったり、チエリー代わりに

敏感な乳首を甘噛みしたり……。

その度にリアスは喘ぐように悶える。

「あん♡旦那様あ♡そこお♡ダメエ♡」

リアスは感じているようだ。

それならもつと

責めてあげないとな♪

俺はリアスの大きな胸に吸い付く。

「あっ♡そ、そこはあ♡」

ちゅぱちゅぱと音を立てて吸っている内に

段々と母性の象徴たるおっぱい全体が

赤く染まっついていき、

同時に汗ばんできた。

それはまるで果実のように甘く、

練乳の様に濃厚な味。

更にはミルクのような白い肌まで合わされば

もう止まらない。



俺は夢中になってリアスの  
おっぱいプリンを堪能し続けた。  
やがて彼女は絶頂を迎える。

「ああっ♡もう……ダメえ♡」

びくっ！ ビクビクン！

リアスはがくがくと膝を笑わせつつも  
崩すことなく耐え切った。

凄いな、これも貴族の礼儀作法というものなのか？

「ふう……ご馳走さまです。

とても良い体験が出来ました！」

「お粗末様でした。

私も良い勉強になりましたわ。

……ところで旦那様。

私にもプリンを頂きたいのですが」

「ああ勿論だよ。

はいどうぞ」

俺はそう言って

自分の分のプリンを差し出した。

「あと、旦那様の

特製ヨーグルトソースを

たっぷりかけて

欲しいのですけど……」

「と、特製ソース？」

エッチな流し目で見つめてくるリアスに

ドキドキしながらも聞き返す俺。

なんだ？ 一体どんな事をすればいいんだ？

しかし次の瞬間、予想外の出来事が起きた。

なんと突然リアスが俺の前にひざまずいたのだ！

そして……

むにゅ♡ぶるん♡

たゆん♡ぷりん♡

「リ、リアス!？」

「うふふっ♡」

女の子座りをしたリアスは  
太腿の間に皿とプリンを乗せて、  
胸の谷間に俺のチ○ポを下の軌道で  
すっぽりと挟み込む！

特製ソースってまさか……!!

その答えはすぐに出た。

リアスは両手でおっぱいを持ち上げるようにして

寄せ、左右から圧迫してくる！

柔らかく大きな両房が押し潰され形を変えた状態で

ゆっくり上下運動を始めた！

たぱんつたぱんつと弾けるような音を奏でながら、

パイズリを始めるリアス！

ぬっぶん♡ずっぶん♡ぷっちよん♡

ぶるんっ♡ぱっんぱっんっ♡

おっぱいの動きに合わせて、

波打つように揺れ動く二つの膨らみは

まさに小宇宙！

おっぱい好きの俺にとっては堪らない光景だ!!

その効果は絶大だった！

おっぱいに挟まれた肉棒からは、

すぐに先走り汗が出始める！

リアスはそれを指先で掬うと、

そのまま亀頭に塗りつけてきた！

ぬちよぬちよとした刺激が心地よい！

「うおおお……!」

「ふふ、旦那様のおチ○ポ、

リアスの谷間にビクビクドキドキ

してる……♡

朱乃よりも、いいでしょ?」

思わず声が出る！

そんな俺の反応を楽しむかのように、  
リアスは妖艶な微笑を浮かべつつ、  
更に激しく動き始めた！

ずりゆずりゆっ♡ずりゆりゆっ♡ずにゆにゆっ♡

まるでミキサーにて攪拌されたか

ヨーグルトの様にドロドロの精子が

俺の金玉からせり上がる……！

どびゅっ！　びゅ——っ！

びゅくんっ！　びゅるるるるっ！

「きゃっ♡」

勢いよく発射される精液は

まるでカラメルソースの様に

プリンへと浴びせられていく。

「うふふっ、熱い……♡」

旦那様の特製ソースたつぷりの

プリン、頂きます♡」

こ、これは

所謂食ザーではなからうか……！

じゅるるる〜！じゅる！

冥界の作法なのか

音を立ててリアスは

ザーメンプリンを皿から啜る！

俺は驚愕しつっリアスの

ザーメンプリンを食べる仕草に

興奮しきりだ！

「けふっ……♡」

とても美味しかったです……♡」

口の周りを白く染めたまま、

リアスは幸せそうな顔で言う。

なんていう破壊力だろうか……。

だがまだまだ終わらないぜ！

俺はリアスをうつ伏せにする！

「ひゃあん♡旦那様ぁ♡」

何か私、無作法を……♡」

リアスは恥ずかしさに

耐えながらも必死に腰を振る。

その度に彼女の巨乳もぷるんぷるんと震えていた。

俺はそれを後ろから鷲掴みにして揉んでいく。

むぎゅっ！　ぐにいつ！

柔らかい感触と共にプリンの甘い匂いが広がる。

何とも言えない幸せな気分になる。

この素晴らしい時間を堪能する為に、

俺はひたすらにリアスの大きな胸を揉み続けた。

しばらくするとリアスは我慢出来なくなったのか、

自ら俺の方を振り向いて抱きついてきた。

そしてキスを求めてくる。

ちゅぱっ……♡

「この……！　何て無法なエロメイドだ！

音を立てて食べるだけじゃなくて

許可もないのにキスするなんて……！」

ホントは大歓迎だがここは

心を鬼にして注意するんだ！

だってそれが旦那様つてもんだろ？

すると彼女は涙ぐんで言った。

「あぁ……♡ごめんなさい旦那様♡

このダメダメメイドなリアス・

グレモリーに罰を下さい♡♡♡」

すっかり発情した様子で、

リアスは俺の顔を見上げている。

潤んだ瞳、上気した頬、荒い吐息。

全てが愛らしく、魅力的だ。

「ああ、やるぞ……！」

お仕置きの生ハメセックスだ！  
罰はできちやった結婚だからな！」

「はいい♡」

ありがとうございますう♡♡♡」

喜びを満面にしてリアスは

俺に振り向きながら感謝してきた。

四つん這いになったリアスの背後から、

俺はチ○コを突き出す。

そして、一気に挿入した！

ずぶっ！ずぶううう！！

すっかり濡れきったリアスの

オマ○コは推しのアイドルを

待ち望んでいたかのように

沸き立ち、褰がまるで

手を振るかの様に蠕く。

「あつ、ああんっ♡」

リアスが嬉しげに喘いだ直後、

膣内がブルツと震え、

弾みに尻たぶが揺れまくる！

「ああっ♡ごめんなさい♡」

イツセー♡イツセーのチ○ポが

イク前に私……

甘イキしちやったあ♡」

「うおお……！・ リアスウ！」

なんとという事だろう！

あの清楚なお嬢様然としていた

リアスさんがこんなにも

淫乱エロエロメイドさんに

なってしまうとは……！！

責任は取らなければ……

「俺達はお互いの名前を

呼び合いながら、

激しく求め合った！

パンツ！ パアンツ！！

クラツカーばりに乾いた音が

響き渡る中、俺達の行為は加速していく。

パンツパアアン!!!

リアスとの結合部から溢れる体液は

混ざり合って泡立っている。

激しいピストン運動により、

遂にビキニは外れ、

上下左右に踊るリアスの爆乳。

俺はそれを掴むと、

離すまいと力強く握り締める。

ぐにゆううつ♡♡♡♡

「ほらっ、どうだい!？」

これがして欲しくて

堪らなかつたんだろ?」

「はい♡

もつと強く握ってえ♡」

「言われなくても

そうしてやるよ!! リアス!」

リアスが懇願してくるので、

望み通り更に力を込める。

赤い痕がつくくらいに強く。

「おっぱい潰れてるう♡

気持ちいいけど……♡

お兄様達に会議前に

ヤキモチエツチしたのバレちゃうう♡♡♡」

「なら良かったぜ!!」

それもエロエロメイドな

リアスへの罰だぞ!!」

「あああっ♡

恥ずかしい……♡恥ずかしい……♡

恥ずかしいのに……♡気持ちいい♡」

汗塗れで淫らによがる

リアスの中を俺は更に激しく動く!

リアスの豊満な肉体を味わい尽くす様に、

何度も何度も突き上げる!

「はあっ、はあっ、もう限界だ!

リアスの中に全部出してやる!」

「はいい♡いっぱいください♡

私の中に濃厚精液どびゅどびゅ注いでくださいあいつ♡」

リアスは蕩けた表情で応えと、

ずぶんとコネクターを合わせる様に

その尻を結合部へと押し付けた!

「あふっ♡凄いわ……♡

貴方のおちん○ん……

私のオマ○コでビクビクしているの……♡」

おお……もう……限界だっ!

びゅーっ!

どくんっ! どくんどくんっ!

俺はリアスさんの中で果てた。

大量の熱い白濁液が、

子宮の奥まで流れ込む感覚に、

リアスさんは身体を大きく震わせた。

「はあ……はあ……♡」

肩越しに振り返り、

潤んだ瞳で見つめてくるリアス。

その姿はどこか扇情的で、

思わずゴクリと唾を飲み込みつつ

唇を重ねた。

一方その頃……。

アザゼルのアジトのマンションでは  
二人の男と女が会談の準備を終え、  
駒王学園へ向かおうとしていた。

玄関にて男がアザゼルに問う。

「なあ、アザゼル。

この会談には俺も出席しなければ  
駄目か？」

「勿論だ。

なんと言ってもお前は白龍皇  
だからなあ」

アザゼルの

言葉に男はため息をつく。

男の名はヴァーリ・ルシファー。

今生の白龍皇にして

歴代最強の白龍皇と謳われる存在。

「なあ、アザゼル。

もう本当に

戦争は起こらないのかな？」

不安げ、ではなく

物憂げに訊ねるヴァーリに対し、

アザゼルは仕方ない奴だとても

言いたげに肩を竦めた。

そして、一拍置いて答える。

それは確信に満ちた声音だった。

「そのために会談をするんだよ」

「そうか。

じゃあ俺はお役御免か」

納得したように呟くヴァーリに、  
アザゼルは苦笑する。



「おいおい、何を言ってるやがる？」

お前だってこれから先の未来、

世界を引っ張っていく

若手の一人なんだぞ？

煮たり焼いたり、

蔵に納めたりすると思うのか？」

「けど、

コカビエルとサタナエルは

粛清したよネ？」

横から口を挟むシユタークに

アザゼルは僅かに顔をしかめる。

「確かに

アイツらは始末したが……

止むを得ない事情があった。

と言っても所詮言い訳だな……。

今回の一件は墮天使総督として、

ミカエル達天界トップや

サーゼクス達冥界トップと

話し合わなければならぬ問題だ。

俺達の内ゲバとは違う」

真剣な面持ちで言うアザゼルに

シユタークはおどける様に被せた。

「ま、いいサ。

それはそうとゲイトって男は

色んな世界を渡ったり

干渉する事が出来るんだロ？

ならヴァーリ君は

彼の力で宇宙人や色んな世界の

神様と武者修行なんてのも

ありなんじゃないかい？」

「神殺し……か。

それも悪くないな」

「おいおい、勘弁してくれ……」

冗談めかす二人を見て、

アザゼルは嘆息しつつ頭を掻いた。

「まあいい。そんじや行くとするかね。

鬼が出るか蛇が出るか、

或いはその両方か……」

「ああ、行こう」

こうして、三人は駒王学園へと

向かった。

## 第35話

「概ねはこれで良いでしょう」

学園全体を魔力の結界で

覆いながら会長のシトリーさんは

満足げに眼鏡の縁を上げて、

そう言った。

「うーん☆さすがシトリーちゃん☆

惚れ惚れする結界の出来ね☆」

と、自慢の妹を称賛する

セラフオルーさん。

なにせ今日は天使、悪魔、墮天使の

トップが一堂に会するのだ。

流石に魔法少女の格好では

なかった。

「でも会談前に

墮天使勢力の俺達と魔王様の

セラフオルーさんが会っても

大丈夫なんですかね？」

「大丈夫大丈夫☆」

セラフオルーさんは

あっけらかんと言う。

相変わらず

冥界の重鎮らしからぬ

軽い調子だぜ……。

「今、君の親友のイツセー君と

ミカエルが会っている筈だから」

サラッととてつもない事を……！

「え!?何でそんな事になってるんですか!」

「うくん……ミカエル君も

色々大変な立場だから……」

セラフオルーさんは腕組みして  
むむむ、と唸っていた。

全く複雑すぎる……。

複雑なのはスープの味わいだけに  
してほしいもんだよな……。

「おう、待たせたな」

今度はアザゼルのおっさんが  
悠揚な態度でやって来た。

秘書か誰かは解らんけど

赤と黒の道士服に白いモコモコした  
マフラーみたいなものをつけた

物憂げな感じの美女、

シュタークまで連れて。

「女連れて遅刻かよ、おっさん」

「ハハハ、まあな。」

主役は遅れてやってくるもんさ。

巖流島の決戦しかり、だ」

このふてぶてしい態度ときたら  
どうだ。

いや、そもそも決戦じゃねえし！  
会談だからな！

っーか、

あの時も遅れてきたよな！

俺は呆れ果て、連れの二人を見た。

えーと……。

「ハハ、イツセー君とは

何度も会っているけど

君とはコカビエルとの戦い以来だネ。

ボクはシュターク・ゴーズ。

フリーの悪魔祓い士サ」

「ども、九頭竜安里です……」

お姉さんの方はともかく、

男の方は何者なんだ？

俺と同年代のくせに

妙に老成しているというか……。

すると俺の視線に気づいた

男の方が挨拶してきた。

「ヴァーリ・ルシフアーだ。

白龍皇……と言った方が

君には分かり易いかもな」

ああ、あの時イツセーと

対峙していたあの白い鎧の……！

「成る程……

君は色々混じっているな？」

開口一番いきなり意味深な

事を口走ってきたぞ……。

こいつ何モンだよ!?

いや、白龍皇なのは解るけど

俺の『顕色』も効果がないのか

まるで考えが読めないし。

しかもこいつの場合何か得体の知れない怖さがある。

見た目は同年代なのに歴戦の猛者の

オーラが漂ってるというか。

俺の警戒心を感じ取ったか、

ヴァーリはフツと笑った。

そして肩をすくめる。

その仕草すらも様になっていた。

「そう構えなくてもいい。

今の君なら俺と戦っても

俺が勝つとはいえ

その過程が楽しめそうだ」

「おいおい、冗談はよしてくれ。

あんたみたいな凄そうな奴と戦えるわけないだろう。

俺は平和主義者なんだよ。

この見た目のせいで好戦的な

イメージがあるけど！」

「それは残念だな。

だが、君のような強者は好きだ。

いずれ戦う事もあるだろう。

その時はよろしく頼む」

……チョットナニツテルノカワカリマセンネ。

よくわからんけど

戦うならゲームとか早食い対決

とかにしてほしい。

と、その辺りで鐘時計が鳴る。

何やかんやで会談の時間となったようだ……。

↓

「私達からの報告は

以上です……。」

会談の場でコカビエルと

サタナエルの件を報告するのは

リアスさんとイツセーだ。

あーあ、カチカチに

固まっちゃまってイツセーの奴……。

しかも二人とも何だか

プリンの匂いがするし……。

まあ、いいや。

それより問題は墮天使のトップ、

アザゼルのおっさんだ。

「まあ、ウチのモンが

迷惑をかけて悪かったって話だな。すまねえ」

おっさんが意外と素直に

頭を下げた。あのおっさんが！

「これからはこのアザゼルが

新総督として一致団結

して『神の子を見張るものR』を

盛り立てていこうと思う。

よろしくな！」

ってコラコラコラア！

おっさん！

ちよつと見直したらこれだ！

名前を変えただけでお咎め無しとか

通ると思ってるのかそんなもん!!

「と、君の客分は

承知していないようだが……?」

サーゼクスさんが苦笑いして言う。

あれ、俺声に出てた……?」

隣のキュクロに視線を送ると

「うむ」と頷いていた。

「問題はコカビエルと

サタナエルが事を起こした動機です。

それが判明しなければまた同じ事が起きるでしょう」

「まあ、そりや当然だわな」

おっさんは頭をボリボリ掻きながら

いかにも面倒臭そうに答える。

「ズバリ言つて

『お互いに不自然な位

都合の悪い情報が漏れている』

からだろうなあ……。

あっちもどっちも

不満や不安が燻ってる。

それも今回の

きっかけになつたんだろうぜ。

迷ってる奴、怯えている奴は  
すぐ正解を求めて

「継りたがるからなあ」

「つまり何者かによる内通や

扇動が為されている……

という事なのかしら？」

「ああ、そういうことだ」

とセラフオルーさんの問いに

アザゼルのおっさんは

鷹揚に肯定した。

「まあ、それを言ったらコイツが

一番怪しいって話になるが……

同盟相手だからなあ」

ゲイトさんは穏やかに笑みをたたえ

アザゼルの話を聞いている。

すげーな……。

俺なら軽く文句を言っている所だ。

「それを言えば諸勢力を

渡り歩く彼も

怪しい話になりますか……。

私とは知己ですから」

困った様な顔でミカエルさんは

ポールクの大將を見るが

我、関せずとばかりに

大將は腕を後ろに組んで

不動の構え。

傍らのゼノヴィアは

溜息を漏らして、

イリナは訝しげな視線を

送っていた。

「……………」



サーゼクスさんは何も言わない。  
まあ、セラフオルーさんが  
裏切るわけないからな……。

「よそう。ここは特定の誰かを  
生贄の羊として

吊るし上げる場所ではない」

ここでサーゼクスさんが

助け舟を出すとミカエルさんが  
促すように合いの手を入れた。

「ではどうします?」

「我々としてはこれ以上の

戦争の継続は種の滅亡を意味すると判断する。

魔王の名において宣言しよう!

これ以上の戦争は冥界、天界、

人間界に於いて続行する理も益もなしと!」

おおっ!? 流石は魔王様だ。

和平への第一歩を踏み出したぞ。

「私も同意見です。

主の御心はあくまで

迷える子羊に安寧を与えるもの。

我ら熾天使も争うは

本意ではありません」

ミカエルさんもそう言う。

「なら、決まりだな。

が、その前に……

特異点とも言える赤龍帝と白龍皇の

意見も聞いておきたいが……」

おっさんはヴァーリとイツセーに

視線を向ける。

まあイツセーはともかく

ヴァーリは読めない……。

「俺は強い奴と戦えれば、

それでいい」

「俺はリアスさんと

イチヤイチャできれば

それだけでいいです!!

リアスさんとエツチな生活

したいです!!」

うん、まあ……。

ふたりともそうだな……。

解ってた。

「よし、じゃあ話は決まりだな!

この会談が終わり次第、

それぞれの陣営は一度引き上げてくれ。

後々禍根を残すのもアレだしな」

アレって何だよおっさん……。

もう年か?

まあ、平和になるならそれが

一番だな……。

俺も恋にバイトに大忙しの

学生生活に戻れそうだし……。

「……と、言いてえところだが

最後にもう一つだけ話が

あるんだよなあ……。

禍の因って知っているか?」

突然アザゼルのおっさんが

話題を変える。

何だそれ……?」

聞いたこと無いな。

名前の響きからして

碌でもないのは確かだが……。

イツセーの方を見ると

首を傾げていた。

まあ、そんな感じだろうな。

「最近、各勢力内にテロリスト集団が  
潜伏していると報告を受けている。

さつき話した不都合な情報を

漏らしているのもその輩だろうな」

おっさんは悠然と視線を上

向ける。

上？天井でも見てんのか？

いや、違う！

これは……影!?

影の刃がまるでギロチンの様に

俺達の頭上から降り注いだ！

「皆、無事かい？」

サーゼクスさんが手を掲げると同時に

結界の様なもの張られ、

攻撃を防いでくれた。

「ケツが割れた……」

「元からだろおっさん!!」

こんな時にふぎけるなつての!!

が、アザゼルのおっさんは

真剣な表情だった。

おい、マジかよ……!!

冗談じゃないぞ!

俺達を殺そうとした奴がいる!

それも、

よりによって和平会議の最中に……!

「この刃は……レリエル!?

どういうつもりです……?」

ミカエルさんが静かに、

でも無然とした顔と声で問う。

レリエルって名前からして

天使だろうがなんで

天使長のミカエルさんを

襲ったんだ!?

「ホホホ、墮天したお前には

関係のない事」

「貴方が首謀者ですか……。」

一体何を考えているのです!」

ミカエルさんが流石に激昂する。

しかし墮天ってミカエルさんの

羽は白いままだぞ!

何をトチ狂ってやがるんだ。

「決まっている。」

神の計画を円滑に進める為だ」

「神の計画だ?」

おいおい、『聖書の神』は

死んだのはお前らも解っている

だろう」

アザゼルのおっさんは未だに

姿も見せねえチキン天使に

向かって語りかける。

「愚かな。主は

常に我等と共に在る。

シナイの山脈より我等を

見守る紅き星。

その主が我らに命じるのだ。

ケガレ共、悪魔、墮天使、

それに与する者全てを抹消せよと

そして神器を結合させることで

神の復活と共に千年王国が

降り立つのだ」

「チョットナニツテルノカワカリマセンネ……。

頭の病院に行ったほうが

いいんじゃないかねえのかコイツら。

いや、天使専門の病院が

あるかは知らんが……。

「ミカエル、

貴様は『御方』を侮辱するか……」

「……」

ミカエルさんは沈黙する。

「どうせ、主の力を我が物としよう」と

企んでいるのでしょうか?」

「下らぬ。我らが主の力、

威光は我らにこそ相応しい」

「未来は決定されている」

「悲しきかな。悲しきかな」

次々と声が響いてくる!

いっぺんに喋るんじゃないやねえよ!!

しかも何なんだよこの声は……!」

するとボールクの大將が

口を開いた。

「九大天使……いや、

今は『旧大天使』とでも

言うべきか。

神に幽閉されていたのを

神の面前に立つのを許されたと

嘯き、聖書の神亡き後は

勝手気ままに動き出したか」

そう言っつてボールクの大將は

一歩前に踏み出す。

するとゼノヴィアも

その隣に並んだ。

「破壊の聖剣よ！」

ゼノヴィアは戦闘服に換装するや  
破壊の聖剣を取り出そうとした。

だが、その手には何も

握られていない！

どういうことだ!?

「未来は決定されている。

『システム』は既に私が

ハッキングしている」

旧天使の一人であろう声がする。

「何だと!?

では私達は既に……!?!」

「そうだ。

お前達の未来はここで終わる」

と、言うなり周りの風景が

モノクロに変わるだけでなく

サーゼクスさん達や、

おっさんの姿がかき消えた?

これは、分断されたのか?

「くっ……!?!ならば私は

運命を斬り開くのみだ!!」

ゼノヴィアは顔を歪めつつ

デュランダルを取り出そうとするが

やっぱり何も起こらない!

「悲しきかな。悲しきかな。

偽りに魅入られた魔女は

偽りの力に飲まれ、

偽りの刃を以て神の御心に

逆らうか……消えよ」

「うわああ……！」

「ぐああああっ……！」

ゼ、ゼノ……ヴィア……！」

「ど、どうしたふたりとも!？」

ゼノヴィアとイリナが

突如として苦しみだす!

何をしやがった!?

「サリエルか……」

ボールクの大將は天使側だけど

顔は青ざめている位で

ダメージはあまりなさそうだ。

だがイリナ、ゼノヴィアの

ダメージはかなり深刻そうだ。

アーシアちゃんが咄嗟に

『聖女の微笑み』を使って

くれなければどうなっていたか……！」

「アーシア、ありがとう」

「いえ、これくらい当然です!」

お友達が苦しんでるんですから……！」

「やはり魔女か。

悲しきかな。悲しきかな。

悪魔を癒やしていたあの時、

迷わず

首を刎ねておくのであった。

神よ、このサリエルを赦し給え」

すつと降り立ってきた

泣き顔みたいな仮面をつけた

天使がアーシアちゃんの首

めがけて大鎌を振り下ろす!!

駄目だ!間に合わない!

ぶしやつ、と赤黒い血が飛び散り

ぼとり、と何かが落ちる音が届いた。

「ま、まさか……！」

しかし、アーシアちゃんの首は繋がったままだった！

代わりに落ちていたのはボールクの大将の右腕だった……！！

「ど、どうして私を……？」

庇ってくれたのか？

けど何でだよ……？

「フンッ。貴様のような小娘に興味などない。

だが……主への忠義、

友への仁義は本物だ。

だから助けただけだ」

「そ、そんな……。」

わ、私なんかのために……！！

すぐに回復を……！！」

しかし、アーシアちゃんの

『聖女の微笑み』が発動しない。

な、何でだ？

さつきイリナとゼノヴィアを

治癒した時は発動しただろう！

「無駄ですよ。

その男はもう助かりません。

神に逆らい、神の敵に味方し、

神の威光を穢しました。

その罪は万死に値します。

その癒やしの力は私の

影の力で封じさせてもらう」

と、今度は喪服みたいな



出で立ちでブルカみたいな  
黒い布で顔を覆う女天使が  
現れた！

話の流れからして

コイツがレリエルだな！

「勝手に殺すな……」

大将は片手を氷の義手にする事で  
取り敢えず出血は止めたが

幾ら何でもムチャが過ぎる……！

そんな大将をレリエルとサリエルは  
馬鹿にした様な目つきで見つめる。

「憐れなこと。」

あなたの様な愚者が

我々の仲間にいたなんて……。

主もさぞ嘆いておいでのはず」

「そうだ、悲しきかな。」

悲しきかな。

生まれてこない方が

お前達のためには良かったのだ」

「いい加減にしとけよテムエ等！」

もう我慢ならねえ！

俺の怒りに呼応してか、

右腕が蠕くと武態の

能力が復活した！

「まだ動けたか。」

悲しきかな。悲しきかな。

その身は滅びを待つだけ。

最早これまで」

「うるせえタコ！」

アーシアちゃんを泣かせて  
ゼノヴィアとイリナを

痛めつけやがって!!」

大鎌を振るうサリエルに

俺は片腕を鉤爪に変化させて

その攻撃を滑らせた。

そしてカウンター気味にもう片方の腕も

巨大なドリルに変形させる!

「喰らいやがれえっ!!」

名付け螺旋豪錐撃いっ!!!」

回転しながら突撃する!

ギャリリリリリ!!

「ぬうっ!?!」

サリエルの腹に俺のドリルが

直撃!通した隙間を鉤爪で

こじ開ける!

「うおおらあああああ!!」

雄叫びと共にそのまま突き進む!

そして遂に、

サリエルの野郎の腹を

貫通した!

「ぐおおおおお……」

何だ、大した事ないな!

そう思った瞬間だった。

奴の身体から血の色の霧が

吹き出す!

「これは……!?!」

「離れる小僧!奴が

噴き出したのは

嘗て奴が皆殺しにした

聖剣使いの研究所に

放った猛毒の霧だ!」

ポールクの大將が叫ぶ!

くそっ！そういうことか！  
武器でダメージ与えたら俺たちが  
不利になるっていうのか！？

「憐れなこと」

レリエルがそう言うと同時に  
俺の影から棘付きの槍が

せり出した！ま、まずい！！

「ボールクさん！

安里さんを助けて下さい！！」

「依頼ならば、請け負う」

バキンッ！

俺の背後に割り込んだ

大将が氷の義手でそれを弾いた！

更に、その勢いのまま

サリエルに肉薄する！

「貴様の毒霧を封じさせてもらう」

「悲しきかな。悲しきかな。」

我等の力の前に

抗える者などいない」

「黙れ」

ガキイイン！！

サリエルの振り下ろした大鎌を

氷の義手が受け止めると

ピキピキ音を立てて大鎌が

凍てついていく！

「この程度の攻撃で

俺を止められると思うな……。

あの女、アーシア・アルジエント

からの依頼は果たす」

大将が左腕を薙ぎ払うと冷気が吹き荒れ、  
サリエルが纏っていた

毒霧を凍結させた！

アイツらの腹の中に相応しい

赤黒い霜が奴らの足元に落ちていく。

「くっ……………」

「そこか……………」

その隙を逃さず、

大将は左腕を振りかぶった。

「砕け散れ……………」

ヒュオオツ!!

凄まじい氷の螺旋槍が

レリエルめがけて

一直線に伸びる！

「小賢しい……………」

レリエルは咄嗟に手を掲げると、

そこから影の巨腕が幾重にも伸びて

螺旋槍を掴み、打ち砕いた！

「大将、援護する！」

「無用だ、

貴様とキユクロは

アーシア・アルジエントを

護れ」

大将はクールに言うが

隻腕で二対一なんて……………!

「フン、確かにその男は油断ならぬ。

だが、所詮は一人。

我ら二人を相手に勝てるだけでも？」

「悲しきかな。悲しきかな。

穢れた背教徒よ、

今その苦痛から解放してやろう」

「戯言を……………」

大将はレリエルとサリエルに飛びかかると、

レリエルは大鎌で大将の氷の義手を弾き返し、更に影の巨人を召喚し、

大将にその拳を叩きつけた！

「ふんっ!!」

しかし、大将は氷の義手に冷気を集中させると、巨人を凍結させて粉々に打ち砕く！

「何と……!?!」

「まだだ……依頼は果たす、

と言った筈だ！」

大将は目をカツと見開いた！

そして、左手から

氷の杭を飛ばすと

サリエルの肩を貫く！

と、同時に大将とサリエルの身体を

赤い氷が包んでいく……!!

自分諸共凍らせるつもりなのか…?

「悲しきかな。悲しきかな。

その選択、後悔するぞ」

「さてな……」

大将が呟くと同時に二人は

氷の十字架の中に

閉じこめられた。

「憐れなこと。

このレリエルが

直々に引導を渡しましょう」

するとレリエルの影から

巨腕が現れて氷の十字架を

掴もうとした！

「やせねえよ!!」

俺は即座に右腕をフレイルに

変化させてレリエルを殴りつける！

「おらあっ!!」

そのままフレイルの鎖を  
首に巻き付けて

地面に叩きつけてやる!

だが、レリエルは影から

またしても巨腕を生じさせ

自分をキャッチさせて難を逃れた。

「チッ……!」

『燃える三眼』!!』

思わず舌打ちしつつ

俺のもう一つの力を

発動させるとレリエルは

燃え上がる。

「このまま灰にしてやんぜ!

灰は灰に、塵は塵になってな!」

「ホホホ、憐れなこと。

我等は光より生まれしモノ。

塵より生まれし貴様らとは

違うと言うのに」

そう言うレリエルは

影のコートに身を包むなり

炎をかき消しやがった!

「そんな……!」

「では、次はこちらの番ね」

そう言うレリエルは

影の刃を俺へと放った。

クソッ、こんなトロいスピードの

刃をかわせないと思ってるのか!

いや、待てよ……。

そんな単純な攻撃を

コイツらが今更してくるか?

だとしたら……。

俺は回避ではなく敢えて触手に変化させながら防御する。

案の定、俺の予想通りだった。

俺のガードした触手がスパッと切断される。

だが縦に伸びる

影の刃の軌道とは異なり、

袈裟斬りに、だ。

つまりこれは2つの軌道で

攻撃しているが片方の刃が

見えないって事か!?

なら、もう片方は……!!

俺は慌てて身を翻すと、

その瞬間、影の斬撃が俺の横を

通り過ぎた。

危ねえ……!!

危うく真つ二つになるところだ……。

と、安堵していた矢先に肩が

スパッと裂ける! 更に足がズバッと切られた!

や、ヤバイ……!!

この攻撃はまるで……!!

影の刃が縦横無尽に飛び回り、

あらゆる角度から

俺を切り裂いていく!

この影の刃、実体がない……?!

じゃあどうやって俺を攻撃して

やがるんだ……!?

俺の能力で無理やり身体の

切創は接合できるが

限度がある……。

「すけだちするぞきゆうどー!」

言うが早いかレリエルへと  
キユクロが真後ろから  
不殺の聖剣で殴りかかる。

「ホホホ、憐れなこと。」

「影を殴るなど無意味だというに」

キユクロの一撃は

レリエルにすれば

まるで水をかき分けた様なもの。

一瞬だけ形は変わるが

すぐに元通りになる。

攻撃の正体は掴めないし、

殴るのは効かない……！

どうやって戦えばいいんだ!?



## 第36話

レリエルからの影の刃の  
正体が掴めぬまま奴からの攻撃が  
続く。

このままじゃあジリ貧も

良いところだ……何か手立ては

ないものか……！)

そう考えていた時だった。

『諦めるな！』

「!？」

突然俺の頭に誰かの声が響いたのだ。

(これは……念話?)

声の主を探そうと辺りを見渡すと、

目の前に赤い光を放つ魔法陣が現れ

その中からセルベリアさん、

そしてナイアが姿を現した!

ゲイトさんが何とかがして

増援を送ってくれたのだろうか?

「セルベリアさん!」

「挨拶はいい、状況は?」

俺は大凡の

現状を報告しつつ指示を仰ぐ。

「成る程、奴らに打撃の類は

効かないというのか」

「うむ、そうなのだ」

セルベリアさんにキュクロは

レリエルの特性を伝えた。

「俺の炎もコートでかき消して

しまう有様で……すいません」

俺は謝罪の言葉を口にした。

だがそんな俺の言葉とは裏腹に  
彼女は不敵に微笑んだ。

そして俺に向かってこう言ったのだ。  
「何を謝ることがある？」

奴は炎をそのままにせず

『コートで掻き消した』の  
だろう？

何らかのアクションを起こしたと

いう事は奴にとつて貴様の

炎は捨て置くには

何か不都合があるということだ」

その言葉を聞いてハツとする。

そうだ、何で気が付かなかつた。

奴は光から生まれたと言っていたが

何で影を武器にしているんだ？

そもそも影って言うくらいだから

光が無ければ

存在出来ないんじゃないのか？

俺は頭の中でパズルのピースが

はまるような感覚を覚え、

そして同時に

ある一つの可能性に気が付く。

しかし確証を得るには

『顕色』を使う必要がある……。

何とか時間を稼いで貰わねば……。

イリナとゼノヴィアはアジアちゃんを

レリエルの攻撃から

庇うので手一杯だから……。

「いくぞ、しようわるおんな。

きゆうどーがなにかひらめくための

じかんかせぎをする」

「誰が性悪女ですか」

そう言つてキュクロは肩に

不殺の聖剣を担ぎ

四股でも踏むように腰を落とした。

答えるナイアもスリット腰から

一丁のライフル銃を取り出した。

「それは……!?!」

セルベリアさんの表情が

ナイアが取り出した一丁の

ライフルを見るなり

驚愕に染まった。

彼女の世界にも銃器はあるらしいが、

あの銃は珍しい物なんだろうか？

そんな事を考えていると

ナイアはぼい、とセルベリアへ

そのライフル銃を渡した。

「R u h m (名声) でしたか？」

複製は難しいものでは

ありませんでしたよ」

それを聞いたセルベリアさんは

再び驚いた様子を見せた後、

少し悲しそうな顔をした後で

それをキャッチする。

俺はセルベリアさんの様子を見て 不思議に思った。

彼女の反応を見るに

あまりいい思い出のある武器じゃ

なさそうだが……。

そんな事を考えていたら

セルベリアさんは

こちらを振り向いて言った。

「……気にするな、私は大丈夫だ」

俺は一瞬迷ったが、

彼女がそう言っている以上

詮索するのは野暮だと思い 深く聞くのをやめた。

「それより、あれを倒す

算段が付ける手段を見つけてくれ。

援護は任せろ」

俺とキユク口は力強く答えた。

「はいー」

「りようかいした！ いくぞ、しようわるおんな」

「ですから性悪女呼ばわりは止めなさいっての」

そう言って二人は レリエルへと向かって行った。

「てりやあー！」

自身の身体をバネにするように跳躍すると

そのまま空中で回転しながら斬撃を放つ。

しかし、やはり攻撃は

レリエルは自身の形を水面の様に歪ませて

受け流されてしまう。

しかしキユク口は着地と同時に聖剣を構え直し

今度は高速で踏み込み込みながら 連撃を繰り出す。

「おおお！！」

だが、それも先程と同じく

奴の肉体をすり抜けてしまう。

「すり抜け、すり抜けと

ガチャやつてるんじやねえんですよ！

うっとしいアマですねぇ！」

ナイアは忌々しげに呟くと

スカートから1ダース程の

ピンが外れた手榴弾

のような物をばら撒き、

そして起爆させた。

バババババツ！！

凄まじい爆音こそするが

レリエルの影から伸びた数多の手が  
手榴弾を握り込み、炸裂を防いだ。

「ホホホ、憐れなこと」

「ぬう……」

いかにも余裕そうに高笑いをする

レリエルにキュクロは苦虫を

噛み潰した様な顔で睨みつける。

その直後、セルベリアさんの

R u h mとかいうライフルから

轟音と共にマシンガンばりの

勢いで弾丸が撃ち出された。

ドガガガッ!!!

「……!?!」

不意打ち気味の攻撃に

レリエルは思わず目を見開いたが

それも束の間。

やはり、というべきだろうか

煙の立ち上る銃創が塞がっていく。

「チツ……駄目か」

セルベリアさんは小さく舌打ちをすると

レリエルはそら見た事かと言わんばかりに

せせら笑った。

「ホホッ、憐れなこと。

この空間では私の肉体は

無敵なのだから。

諦めて裁かれよ」

言うが早いか俺達の数倍はあろうかという

影の巨人を繰り出してきた。

勝負を決めにかかるつもりなのだろう。

「ああ、お前の『肉体』はな?」

『顕色』を使い奴の

気の流れを観察、

更に奴が

ライフル攻撃に目を見開き、

ナイアの手榴弾を影の手により

炸裂を防いだこと……。

これで全てがはつきりした。

「タネが割れりや

どうということはないねえ!

これでテメーの負けだぜ!」

俺は声を上げて叫んだ。

「貴様、何を言っている?」

怪しむように言うレリエルに

俺は敢えて

不敵な笑みを浮かべて

片腕を砲塔に変化させ

砲弾を上空へと放った。

「ホホホ、遂に錯乱したか。

どこを狙っている?」

レリエルは俺が

見当違いの方向を狙ったものと

みて嘲笑する。

だが、次の瞬間。

俺が放った照明弾によって

空間自体が照らされる!

「そうか! やつのからだは

かげだった! つまり、ひかりに

てらされているあいだは

キユクロたちのこうげきにたいして

たいおうできないのだな!」

キユクロは俺の方を向いて

顔を華やがせて笑って言った。

ナイアも同じように 口角を上げている。

セルベリアさんもライフルの

照準をレリエルに合わせつつ応じる。

「そういうことか。」

奴の弱点が分かった以上 後は私達が倒すだけだ」

「その通りだな。」

いくぞ、しようわるおんな」

「だから性悪女呼ばわりは止めろ」

二人は再び

レリエルに向かって行つた。

だがレリエルは硬直を解き、

高らかに笑つた。

「ホホホ、

憐れ、憐れ、実に憐れ！

光が強くなれば

闇もまた強くなる！

私を照らせば影の力は

益々強くなると解らなかつたか！

これこそが真の闇の力よ！」

そう言つてレリエルは 全身から黒いオーラを吹き出し

影の巨人達を更に出現させる。

そしてナイアと キュクロに向けて 攻撃を仕掛けた。

ドガアアアン!!

巨人達の拳が二人に迫るが

それぞれ辛うじて回避に成功する。

「ホホホ、そこな小僧などを

信じるからその様な目に合うのだ」

「おまえが……」

きゆうどーをばかにするな！」

レリエルの幾度目と解らぬ

嘲笑に対してキュクロは  
聖剣を構え直し、叫ぶ。

それは怒りの声だった。  
だが、それ以上に悲痛さを  
感じさせる叫びでもあった。

レリエルはそれに構わず

今度は俺の方に視線を向ける。

そして、ニヤリと イヤらしく笑う。

が、俺が焦りも絶望もなく

ニヤついている事に対して

動揺を隠せない様子でいた。

まあ、無理もない。

何せ、今の俺は 既に勝利を

確信していたんだからな。

「な、何だその目は……!?!」

「キュクロには悪いが

お前は光に照らされて

パワーアップするのは予想済みだ。

俺が確かめたかったのは

これだよ!」

「!?!」

俺が親指を

下に向けるジェスチャーと共に

照明弾の残りが針へと変化し、

急速に落下する!

狙いは……奴の目だ!

「ギヤアアアアアア!!」

レリエルは片目を押さえながら

今までの余裕が消え去った

表情で悶絶する。

そう、奴は『目だけが実体』



なんだ。

だから炎を過剰なまでに防ぎ、  
予想外な照明弾に対して  
目を瞑るしか

リアクションをしなかった。

「セルベリアさん！」

俺の言葉が終わる前に

セルベリアさんはライフルの引き金を引いた。

ドガガガガツ!!

「お、おのれ……おのれ……!!」

凄まじい弾丸の嵐が

レリエルの両眼を打ち砕くと

ブルカと喪服だけが残り、

奴は完全に消滅した。

「やったなきゆうどー！」

「ああ」

俺はキュクロの頭を撫でてやる。

「えへへ……」

「フツ……」

微笑むキュクロに セルベリアさんは

小さく 鼻を鳴らして笑った。

「……」

視線を向けるとセルベリアさんが 俺達の方を

振り向いたが 何も言わずに前を向いてしまった。

「どうしたんですか？」

「何でもない」

彼女は短く答えた。

何だかよく解らないけど、

機嫌が悪いつて訳じやなさそうだ。

「いい気分になっている所

悪いんですがね、

この氷の十字架はどうします？

このパターンだとこの空間は

このまま消滅しますよ？」

ナイアの言う通り、この空間はレリエルが

作り出したもの、つまりこの空間は奴が消えると

同時に消滅してしまうのか……？

しかも、ボールクの大將と

サリエルは共に氷の十字架の中だ。

アーシアちゃんとゼノヴィア、

あとイリナもいるというのに……！

何とかしないと！ だが、その時。

突然、背後から声がした。

「ふう、

何とか繋げる事が出来たヨ」

現れたのは術符を持つ

シユタークさんだった。

「シユタークさん！」

「やあ、皆、無事かい？

いやあ、危なかったネ。

これで皆を

こちらの世界に召喚できそうダ。

とはいえ一度に全員は無理だけド」

そう言つて彼女は

苦笑いを浮かべた。

だが、今はそんな事は

気にしてられない。

「まずはアーシアちゃんと

怪我人の皆さんをお願いします！

それから他の人達も！

俺とナイアは最後で構いません！」

それを聞いて シユタークは

満足そうに頷いた。

そしてアーシアちゃん、

ゼノヴィア、イリナが最初に

転送され、キュクロとセルベリアさんが転送された。

「所で何で貴方はともかく

私が最後なんです？」

「レディファーストだからな」

すると、ナイアは ジト目になり、ため息をつく。

「相変わらずクソ虫君は

どこに目をつけてやがるんです？」

「ほぎきやがれ、お前は

人でなしだろ。

女性扱いされると思うなよ」

「いや、アンタの童貞を喰ったのは私ですが？」

何だかこの陰険漫談も

久し振りの気がする。

「ま、大凡この後の展開を

読んで殿を務めたんでしようが。

その程度の考えも私が読めないと 思っているとは……。

実に嘆かわしい。

これではもう救い様がないですね」

ナイアが呆れた様に首を横に振る。

……何だこいつ、何で俺が

庇う前提で話を進めてるんだ……!?

まあいいか、今更だしな。

ピシッ！とその時、

氷が罅割れる音がする。

見れば氷の十字架が

崩れ始めていた。

「氷が砕けるヨ君達！」

シユタークさんが叫びつつ

転送の術符を投げ渡すと

俺達は即座にそれを

ひび割れた氷の中の

ボールクの大將に投げつけた。

「何をしているんだ君達！」

時間がないと言ったろう！」

「あ、普通のイントネーションで

話す事もできるんですね

シユタークさんって」

俺より先にナイアが代弁した。

「まあ、あのサリエルとかいう

殺人狂を

野放しにはできんでしょう。

ここでキツチリ仕留めておかないと

また厄介な事になるのは目に見えていますから。

それに、俺の勘が正しければ

奴はまだ何か企んでいる筈です。

そうでなければ、

こんなに早く復活できないと思います」

「ふむ、確かにそうかもしれないが……」

「大丈夫ですよ、シユタークさん。

奴は俺が絶対に倒しますから」

俺は彼女の肩に手を置く。

「……そうか、なら任せるヨ」

そう言って彼女は、少し寂しげに

微笑みながら、俺に背を向けて、

ボールクの大將と共に転移していった。

さて、これで後顧の憂いはない。

後は奴を倒すだけだ。

「悪いな、巻き込んだ」

「イヤ本当ですよ全く」

「悪かったって」

「まあ、良いですけどね、

「貴方が いない世界なんて  
つまらないですから」

ナイアが珍しく愛想のいい事を言った。  
本当に珍しい。

普段もこれくらい可愛げがあれば  
もっと楽なものなあ。

そんな事を考えつつも

俺はサリエルへと向き合う。

「敗れたか、レリエルよ。

悲しきかな。悲しきかな。

だが、安心するがいい。

お前の無念は我等が晴らす。

お前の恨みは我等が晴らしてやる。

それが、我等の誓いなれば……」

そう言い終えると、奴の大鎌が

斧槍へと変化してゆく。

「随分仲間思いな事で……」

皮肉を込めて 嫌味を言うのと、

奴はフンと鼻を鳴らした。

どうやら自覚はあるらしい。

そして、サリエルは構えを取る。

それを見て俺も戦闘態勢を取った。

こうして俺達の第2の決戦が始まった。

## 第37話

サリエルの大鎌が斧槍に変化していったがその穂先は何やら血の滴る釘の形状をしている。

明らかにヤバそうな雰囲気が漂っている。

「ナイア、あの釘は何だと思う?」

俺はナイアに尋ねるが、

ナイアの奴はあからさまにニヤついた顔をした。

どうも何か知っているらしい。

しかし、あの釘からは尋常じゃない魔力を感じるぞ?

「悲しきかな。悲しきかな。」

貴様らケガレ共にこの『聖釘』の

本当の力を見せる破目になろうとは」

サリエルは大仰な仕草で聖釘の先端を

俺に突きつけて言った。

聖釘って言えばえーと……何だ?

確か聖書に出て来る釘だったか?

するとナイアが

殊更大きな溜息を吐いた。

まるで馬鹿を見るような

目つきである。

「本当に救えねえ

クソバカ虫ですねえ。

おバカな安里君にわかりやすく言うと

神をも殺せる槍、ロンギヌスの

亜種だと思いなさい」

神をも殺せるだと……!?

それじゃあ、俺達が

今迄戦っていた相手は

そんなとんでもない代物を

持っていたというのか！

旧大天使の異名は伊達じゃねえな。

「悲しきかな。悲しきかな。

この『聖釘』の真の力さえあれば

貴様等のような穢れた者共など塵に還るのみ」

「ああ〜うぜえ〜。マジうぜえ〜。

何ですかその小物臭漂う台詞は？

悲しいのはこっちだよクソピエロ」

こいつの罵詈雑言は無差別な上に

容赦が無いな。

まあ、確かにちよつと痛い台詞だが……。

「悲しきかな。悲しきかな。

貴様等がどれだけ足掻こうとも

我らの勝利は揺るがぬ」

サリエルは意にも介さず

音すら立たない程の速さで斧槍の先端にある聖釘を

突きつけてきた。

俺達は回避こそ出来たが

後ろの空間には聖釘によって

穿たれた穴が空いていた。

恐らく掠っただけでも

致命傷は間違いないな……。

しかも接近戦は毒霧のせいで

逆に危険だ。

となると

やはり……遠距離攻撃しかないか。

片腕をボウガンに変化させながら

もう片方の手で盾を構えて距離を取る。

しかし、それは読まれていたようで一瞬にして距離を詰められてしまった。くそっ！ やっぱり速い！！

更に聖釘付きの斧槍による連撃が来る。

どうにか避け続けるが、

このままではいずれ直撃するだろう。

俺は覚悟を決めて両腕に力を込める。

そして、聖釘を

受けた瞬間、

片腕の感覚が喪失した。

腕自体はまだ繋がっているもの

そこから先は全く動かない。

俺は即座に残った方の腕を使い

ボウガンを放つ。

狙うは奴の顔だ。

狙い通り命中したが、

それでもダメージは無く全く怯む様子もない。

「全く仕方のない！」

ナイアは呆れ顔をしながら

サリエルに向けてスリットから

取り出したマスケット銃を接射した。

当然の如く弾かれるが、

ナイアの攻撃はこれだけでは終わらない。

今度はショットガンを取り出し

散弾を浴びせる。

流石にこれは効いたようで少しだけよろめいている。

ナイアはその隙に俺を抱えて

再び間合いを取った。

「おい大丈夫なのか？」

俺は心配になって聞いてみたが



ナイアはいつものとぼけた口調と顔をしてみせた。

「知りませんね。」

お前がヤバくなったら

私は逃げるだけですのぞ」

………そうかい。

まあ、いいさ。

何とか右腕も動くようになったし、

ナイアの援護もあてにはなるからな。

それにしても聖釘とは厄介な武器だ。

手の感覚が戻ったが貫かれた

片腕が変化できない。

能力を封じるのが奴の聖釘の

能力のようだな。

何とか打開策を考えないとジリ貧になる一方だ………！

しかし、

そんな考えは無意味だとばかりに

サリエルは

容赦なくこちらに突っ込んで来て猛攻を仕掛けてくる。

こちらは避けるのに精一杯だ。

クソツ！何とかしないとこのままじゃ負けちまうぞ。

しかしぶん殴ってみても駄目だし、

遠距離も通じないし、

どうすりゃ良いんだ？

奴らのせせら笑いも聞こえて来ないのが

逆に不安を煽る。

すると業を煮やしたかの様に

ナイアが俺に叫びだした。

「ああもう面倒ですなえー！

アンタの唯一の取り柄は

ガムシヤラに進む事でしょうが！

虫ケラなら虫ケラなりに  
もつと無様にあがけや

このド低能!!」

しかし、その一言は

俺の心に火を点けた。

そうだ。俺に出来る事は

たった一つだけだ。

俺の持ち味はただ必死に

足掻いてもがくことだけだった筈だ。

拳を握り締めると一気にサリエルに向かって走り出す。

サリエルは音も無く

移動してくると斧槍を振り下ろしてきた。

それを横に跳んでかわすが

漂う魔力を僅かに固めて踏む

『蹄帝』を行うことで

軌道を蛇の様に変化させ、

強引にサリエルへと回り込む。

これが『蛟』だ。

「悲しきかな。悲しきかな。

無駄な事を」

「そうかい、だが世の中の

殆どは悲しい事と、無駄な事だらけだぜ!

それでもよお!!」

俺は左腕に力を込め、

そのまま奴に殴りかかった。

同時に聖釘が俺の肩を貫く。

俺の両手の能力を封じるつもりだ。

だが、それでいい。

何でもかんでも与えられた

能力だけに頼るのが

間違いだったんだ。

俺の能力なんて所詮は  
小手先の技に過ぎない。  
俺の本領は腕力の限り  
足掻くことだ。

それは傍から見ればモルモットが  
滑車を回す様なものかもしれない。  
ましてや神だの魔王だの  
墮天使総督だのからすれば尚更だ。  
しかし、それでも構わない。  
それが生きるという事だからな。  
滑車が回るイメージが  
俺の中で広がっていく。  
聖釘によつて

俺の能力は制限されている。  
故に普段より動きは鈍い。  
しかし、そんなことは関係無い。  
本来なら絶望的な状況だろう。  
だが、不思議と焦りは無い。  
滑車は回り続ける。

延々、いや永遠と。  
ならその滑車から生まれる  
エネルギーは無限だ。  
俺の中にある光と闇は今、  
限界を超えて回転している。

「うおおおおお!!  
喰らえええっ!」

「……!?!」  
サリエルの表情が驚愕に染まる。

「馬鹿な!」

何故、貴様は動けるのだ!」

「何でだど? 知らねえなあ!!」

サリエルの問い掛けに対し、俺は怒号と共に渾身の一撃を放つ。それは奴の腹部に直撃し、衝撃の余波が辺りに吹き荒れ、奴の毒霧を吹き飛ばした。

「ヌウウ……！」

サリエルは忌々しげに呻き声をあげていた。

皮肉だが今のパンチが

奴に一番ダメージを通つたらしい。

ナイアも驚いている。

「おいおい、マジですか。」

一体、何をやっただんです？」

「さあね。俺にも分からんよ」

俺がそう答えると同時に

サリエルが体勢を立て直す。

どうも俺の攻撃でダメージを受けたのは事実らしい。

すると奴は斧槍を鎌に戻すなり

側の空間を切り裂いた！

「あつ！ アイツ逃げる気ですよ！」

「チツ！ 逃がすか!!」

俺は急いで後を追いかけるが

サリエルの逃げるスピードの方が

上だった。

奴が潜り込んだ

亜空間は俺が近づくと

否や閉じてしまった。

「クソツ！ 逃げられたか！」

「全く相変わらず

詰めが甘いですね。」

で、どうやって脱出するんです？」

「さあ？ 分かんねえ。

まあ何とかなるんじやねえか？

とりあえずこの空間を

ぶっ壊せば良いんだろ？

ほらこうやって……」

俺は拳を振り上げると

サリエルが切り裂いた

目の前の空間を殴ってみた。

するとまるでガラスが割れる様に空間にヒビが入り、

やがて粉々に砕け散った!?

「えええええ!？」

「つてテメーが驚くのかよ!」

ナイアが荒っぽくツツコミを

入れてきたが……

いや、だって仕方ないじゃん!

まさか、そんな方法で

脱出できるとは俺も思わなかったんだよ!

自分でもビックリだったの!

「君も色んな意味で規格外だねエ」

そこにやって来たのは

シュタークさんだ。

良かった、無事そうだ。

「シュタークさん、大丈夫か？」

怪我とかしてないか？」

「ああ、お陰さまで助かったヨ。

ところでそっちこそ

随分派手に暴れたみたいだね。

レリエル様とサリエル様が

やられたーとか言いだして

一部の天使達は逃げて

ミカエル達は天界に戻ったヨ」

「敵前逃亡」？

マジかよ熾天使最低だな」

ナイアがまたふざけた事を  
抜かす。いい加減にしとけ。

「あはは、でもまア

ある意味正しい判断かもしれないネ」

受けてのシユタークさんは

頬をかきながら御愛想を言う。

アイツが凶に乗るから

気を遣わなくてもいいのにな。

と、俺の顔から考えを読んだのか

シユタークさんは

目を細め、補足し始めた。

『システム』のハッキングを

阻止しないことには

天界の機能停止は必至だからサ。

そうすれば天使達の大半は

無力化されてしまうからネ。

それにしてもよくあの二人を倒したものだネ。

正直、驚いたヨ」

何だか褒められると

むず痒いな……。

俺は照れ隠しに頭をかく。

「いや、

たまたま上手くいっただけで……」

「イヤホントホント。

唯一無二に輝くシスターこと

このナイア様のサポートが

なければどうなっていたか……

って聞いてます？」

「途中までな」

ナイアの放言なんてどうでもいい。  
今は状況がどうなっているのかを  
確認しないと……。

とにかくサーゼクスさんや  
アザゼルのおっさんに  
合流すべきだな。

そう思い俺は歩き出す。  
だがその時だ！

何やら三角錐の何かが  
俺達に熱線を放ってきた！

「危ない！ 主に私が！」

ってナイアが俺を盾にして  
熱線を防ごうとしゃがる！

テメエ！ ふざけんな！

俺は空間を殴って風穴を開ける事で何とか回避した。  
我ながらとんでもねえ新技だな……。

そして、熱線が飛んできた方向を見るとそこには……。  
髪を後ろで纏めた細面の

青年が立っていた。

蝙蝠の羽を見るに悪魔だろうか

明らかに普通の悪魔とは違う  
雰囲気がある。

「大天使の次は大悪魔かよ……」

俺は思わず呟いた。

しかし、その言葉を聞いた  
当の本人は

いかにもイヤそうな顔をしていた。

「俺が大悪魔？」

何を言ってるのだ？ 貴様らは」

そう言うなり、奴は俺を  
ギロリと睨み付けてきた。

そんなに怒ることだったか……？

「いくらなんでも

大悪魔はないでしょう。

アレは魔王、旧魔王の

クルゼレイ・アスモデウスですよ」

俺が首を傾げていると

横にいたナイアが耳打ちしてきた。

しかしアレ呼ばわりは酷くないか？

「ああ、成程。

つまりコイツは

今回の騒動の親玉じゃないんだな

しかも大天使と俺達との

戦いの後に漁夫の利狙って

来たわけか……」

俺は奴を見据えながら

ナイアに答えると

相変わらず粘ついた様な

ニヤつき顔で俺の側に寄る。

「クソバカ虫の安里君にしては

まあまあ理解が早いですねエ。

流石です」

一々人を煽らないと

褒める事もできないのかコイツ……。

すると細面が痺れを切らした様に

こちらに敵意を更に剥き出しにして

話かけてきた。

「おい、その人間と化け物。

先程の話を聞いていれば……

一体誰と喋っているつもりだ？」

「そりゃあ勿論名家をかさにきた

時代錯誤の勘違い野郎に決まってるじゃありませんか」



「黙れ！　誰が時代錯誤だ！

そもそもお前等の様な下賤の輩と話すなど言語道断！  
身の程をわきまえろ!!」

「いや、アンタが話かけてきたんじゃねえか……」

ナイアの言葉を受けて激高する

クルゼレイに俺は思わず突っ込む。

しかしそれが奴の逆鱗に触れてしまったらしい。

「黙れと言っている！」

一喝すると共に先の三角錐状の武器が何個も飛来し、  
各々ビームを放とうとする。

マズイ、攻撃が来るぞ！

「ぐわああっ!?!」

身構えた時、突如巻起こった

竜巻がクルゼレイを襲った!

三角錐も一旦コントロールを

失い、地面へどさどさ落下していく。

「いやあ、あんまりペラペラ

喋っていたから退屈でネ、

幾らか術符を

仕込ませてもらったヨ、ワハハ」

どうやらシユタークさんの

アシストだったらしく

彼女はカラカラ笑っていた。

何気にエグいのなこの人……。

一方クルゼレイは、

ダメージはそうでもないが

殊の外プライドを

傷つけられたらしい。

「貴様……よくもこの私に傷をつけたな!

許さん!　絶対にな!!

その首引き千切ってやる!!」

「おー怖い。」

「これだから野蛮な下級悪魔は嫌いなんだヨ」  
「シユタークさん、それは酷い。」

「せめてバカボン魔王でしよう」

「喋るなああ!!」

「怒り心頭のクルゼレイは

軽口を叩く二人に

三角錐を束ねるや収束式の

赤黒いビームを放ってきた。

大きさは俺達を軽く飲み込む程、

まともに喰らえば蒸発しかねない!

だがシユタークさんが術符にて

鏡を顕現するや熱線を

跳ね返してしまった。

「おやまあ、ボクの術符で

本当に反射できるとは

思わなかったヨ。

てつきり魔王なのだから

もつと強力な攻撃だとばかり……。

「これは申し訳ない事をしたネ」

と、失笑しつつ謝る始末である。

全く狼狽してねえなこの人……。

「ふざけるな!」

「この程度で私が怯むと

思ふなよ! ……ぐがあああつ!」

「反射されたビームを魔法陣で

吸収したクルゼレイだが

途端に身体から白煙が生じる。

そしてそのまま膝を着いて

苦しそうにもがき始めた。

「な、何だコレは……?」

力が抜けていく……！」

「エッ？まさかマジで

単なる反射だと思いました？」

目を見開き、

驚愕しているクルゼレイにナイアは

意地の悪い笑顔を浮かべて質問した。

「どういう事かと僅かに頭を捻った

俺だが直ぐに疑問は解けた。

何故ならナイアの胸元には

いつの間にやらロザリオが

キラリ、と光っている。

恐らくシユタークさんが

あのビームを反射した時に

ロザリオの光を増幅させつつ

混ぜ込んだってワケか……。

「しかしこんな基本的な技に

引っ掛かるなんてな……。

アンタ、口で言う程強くねえのな」

俺は呆れた様に呟いたが、

クルゼレイは益々怒り顔に

なっていくと何やら赤い瓶を

取り出して口に含む。

恐らく中身はフェニックスの涙って

霊薬だろう。

みるみると奴の火傷が治っていくと

余裕を取り戻したらしく悠然と構え直す。

「フツ、油断したただけだ。

次こそ貴様等を消し炭にしてやろう！」

「所でアンタ、その三角錐を

操る以外に技ってないのか？」

別段煽るつもりはなかった。

単に気になっただけだ。

するとクルゼレイはフン、と鼻を鳴らして得意げに語る。

「愚か者め、魔王たる我等が

自らの手足を振るうなど

下劣に過ぎる。

我等はバアル家の恥晒しとは

違うのだ！ 我が力はこれ一つあれば十分！

その証拠に……見ろ!!」

と、クルゼレイが叫ぶや周囲の空間が歪み、

無数の三角錐が出現した。

しかも一個一個のサイズが

さつきまでの数倍はあるぞ！

「何だこりゃあ……」

「ハハハハハハッ!!」

クルゼレイは狂喜の笑みと共に

それらから一斉にビームを

発射してきた。

マズイ、あんなの喰らえばひとたまりもない！

俺は咄嗟にシュタークさんと

ナイアを抱えて庇うべく身構えた。

が、いつの間にやら俺達と

クルゼレイの位置が

入れ替わっている。

「えっ!?!」

「な、何い!?!」

戸惑う俺とクルゼレイだったが、

その答えはやはりすぐに分かった。

「いやあ、

あんまりスキだらけだったもので

彼とボク等に転移の術符を

貼り付けておいたんだ」

と、何食わぬ顔で言う

シユタークさんと俺達の足元には

あちこち黒焦げたクルゼレイが

転がってきた。

どうもさっきのビームを

モロに喰らってしまったらしい。

「な、何故だ……!？」

純血で高潔なこの私が

何故貴様等如きに負ける!？」

「いや、弱いからだろ。

努力はしねえし他人から

学ぼうとしねえ。

実戦で経験を積むつもりなんて

更々ねえ。

いくら才能があつたつて

そんな根性ナシになんざ

俺達が負ける訳ねえだろ」

俺の言葉にクルゼレイはギリ、と

齒軋りする。

そして徐に立ち上がると再び三角錐を呼び出した。

だが今度は先程までと違い

三角錐が結集し、何やら筒型の

物体へと変形していく。

やがて完成したソレは巨大な大砲の様な形状だった。

「あれが禁手化ってヤツかな?」

「その通りだ!」

これが私の最大の切り札

『ジェネシス』だ!」

禁手化って何だ?

よくわからんがヤバいのは

解る！

「この砲門からはあらゆる存在を消滅させる

エネルギー波を放つ！

これならば貴様等も跡形もなく

消え去る筈!!

これで私に屈辱を与えた

貴様等の愚行も帳消しにしてやる!」

「なんで自分からペラペラ説明するんです？

それよりも消え去る『筈』ね……。

アナタ、ひよつとして自分が負けるかと思って

ビビっていますね？」

「な、何だと!？」

私が怯えているだと!？」

バカを言うな!」

こうやって煽りをスルーできない

辺りがつくづく貴族様だな。

と、俺が醒めた視線を送っていた

事で奴は若干冷静になったらしい。

「……………そうか!」

私を挑発してきつきの様に

反射するか私と貴様らの位置を

入れ替えて直撃をする手筈を

整えようとしたのだな……………!

卑劣な奴等めが……………!

だがその策には乗らぬ!」

と、クルゼレイはジェネシスとかいう

武器をこちらに向けた。

すると砲身から膨大な量の魔力が溢れ出す。

成るほど、確かにあのビームを喰らうのは危険そうだ。

なら、こっちはこっちのやり方を

通させて貰うさ!

「ハハハハハ！」

既に『ジエネシス』に魔力は  
充填された！

最早止める術など無い！

世界が数多持つ予言の日だ！」

と、勝ち誇った様に笑うクルゼレイ。

だが、俺はシユタークさんの

術符にて瞬時に『ジエネシス』とやらの

真上に陣取り、

「うおりゃあああ!!」

雄叫びと共に渾身の一撃を

『ジエネシス』に見舞った。

ピシッ……!!　ピシッ……!!

『ジエネシス』が周りの空間ごと

罅割れていく。

「な、何イ!?馬鹿な、

我が最強の攻撃が

破られるというのか!?!」

クルゼレイが驚愕の声を上げる中、

遂にジエネシスは碎け散り、

その余波でクルゼレイは

大きく吹っ飛んだ!

肉体はともかく精神的な

ダメージは相当な筈だ。

「そ、そんな……そんなバカな……!!」

こんな不都合な事が私に起こる筈がない……!!

何かの間違いだ……!!」

実際遂に頭を抱え、両膝を地面に

つきながらブツブツと呟く

クルゼレイ。

俺はそれを見て溜息をつく

奴に背中を向けた。

「見逃すのかイ？」

顔に似ず優しいんだネ」

するとシユタークさんが

茶化してくる。

……まあ、別にそういう訳じゃねえけど。

ただコイツにはこれ以上

何もする気が起きなかつただけだ。

それに……。

チラツとクルゼレイを見る。

さつきまでと打って変わって

虚ろな目をしながらぶつくさと

独り言を漏らしている。

アイツのプライドはご自慢の『ジェネシス』

とやらと一緒に砕け散った。

もう俺達と正面から戦うなんて事は出来ないだろう。

だったらせめて冥界の片隅で

精一杯生きていけば良いさ。

し、しかし頭がさつきから

グラグラするし

足元が覚束なくなってきた……。

恐らく力を使い過ぎちまったのかな……？

「お疲れ様だヨ。」

キミのお陰でボクも助かったし、

ボクの友達も死なずに済んだヨ」

「まあ虫ケラ安里君にしては

それなりに頑張ったんじゃないですかね？

褒めてあげますよ。

エライエライ」

と、いつの間にか俺達の側に居た

二人が俺に労いとテキトーな



誉め言葉を掛けてくる。

全く……。

色んな事が起こりすぎて

パニックになりそうだ……。

イツセーやおっさんは

無事なんだろうか……？

## 第38話

安里達が影に吞まれたと思つたら  
ギヤスパーの時間停止に近い感覚が  
俺を襲つた。

思わず身構えたが身体は動ける。  
ギヤスパーが能力を暴走させたのかと  
思つたがそうでもないらしい。

「おつ、お前さんは無事か。」

赤龍帝たるものそうじゃなきや

イカン」

アザゼルが顎をさすりながら  
言う。

どうやら俺は無事だったようだ。

でも朱乃さん、小猫ちゃん、

会長さんは文字通り固まっていた。

サーゼクスさまやセラフォル様は

無事みたいだけど

まさか朱乃さんまで止まるなんて……！

「どうやらイツセーは

大丈夫の様ね」

「流石だね僕のイツセー君！」

リアスさんと木場は

問題ないらしい。

いや、『僕の』と前置きするのは

余計だと思う……うん。

しかし一体何が起こつたんだ？

皆は動かないし

声も聞こえてこないし……。

「恐らくは……」

「ズバリ言つてテロだわな。」

窓の外を見てみな赤龍帝クン」  
アザゼルが外を指差す。

その先には学園を囲むようにして  
黒いローブを着た集団がいた。

しかもそいつらは全員仮面を着けている。

「恐らくは禍の団の使い走り共って  
所だろうな。」

旧大天使の反乱に動きを

合わせたんだろうが

足並みが随分揃ってやがるぜ。

誰か司令塔がいるのかもな」

アザゼルが説明すると窓の外へ

光の矢を放つ。

ただの一本の矢は忽ち2本、4本、

8本と俺の倍化の要領で

増え続けて、あつという間に

外から学園内に降りたとうとする

ローブの集団を

全員撃ち抜いてしまった！

墮天使総督ってこんな

強いのか……!?

俺は呆気にとられてしまうが

アザゼルは苦虫を噛み潰した様な

顔で頭を搔いていた。

「やはり、奴等はダミーか……。」

倒しても倒しても湧いてくる辺り

キリがないぜ」

アザゼルは忌々しげに呟く。

確かに撃ち抜かれた途端、

ローブの中身は雲散霧消。

空のローブが学園の校庭に

落ち葉の様に舞い落ちる。

そしてまた次の瞬間には同じ姿の連中が現れる。

しかもちよくちよく学園に

魔法弾を撃ち込んでくる。

威力はたいした事はないだろうが

いずれこのままじゃ結界が

破られてしまうのでは……!?

それじゃ学園に被害が

出てしまう……!

何とか魔術師もどきを

繰り出してくる奴を見つけないと!

そう思っているとサーゼクスさまが口を開く。

「どうやら相手は我々が焦れて

出てきた所を一網打尽にする

つもりなのだろう」

え!? そんなバカな!

魔王様、天使長、墮天使総督を

いっぺんに倒そうとするなんて

どんだけ自信家なんだよ

今回の黒幕はさあ!!

「そうか、それ程の奴が

現れるなら是非手合わせ願いたい」

いやいや、ヴァーリ……

だったかな?

お前さ、戦闘狂過ぎるよ!

とにかく、今はその黒幕の

狙いをぶち壊しにするのが

第一って事だよな……!

となると……。

「リアスさん!

まずはギヤスパーを助けに

行きましょう！」

俺は真つ先にギヤスパアの救出を提案する。

部長もすぐに賛成してくれた。

「そうね。私達の目的は

この騒動を止めることだけど、

その為にもギヤスパアを助け出す事が最優先事項だわ」

よしっ！ 決まりだ。

そうと決まれば早速行こう！

「ちよいと待ちな」

「ちよつと待つタ」

するとアザゼル、シュタークさんが

同時に俺を呼び止めた。

一体なんだろう？

「これを持っていきな」

「これを持っていくといいヨ」

アザゼルとシュタークさんが

それぞれ何かを投げ渡してきた。

俺と部長はそれをキャッチする。

それは腕輪と3枚の御札だ。

「な、何スかこれは？」

「腕輪は神器の力がある程度

抑えるものだ。

恐らくギヤスパアとかいう奴は

連中に力を暴走させられているんだろ？

それを少しは抑えられるはずだ」

「お札の方はちよつとした

特殊な術式を組み込んでいるんだ。

多分相手はギヤスパア君の

力を暴走させるために

精神攻撃を仕掛けている筈サ。

それを防いでくれる筈ダ」

アザゼルとシユタークさんの2人が説明してくれる。

な、成程……。

ギヤスパアの事はともかく、相手の戦法を読み切るなんて

流石ベテランの悪魔祓い師だな

シユタークさんは……！

「ありがとうございます！

何から何まで……！！」

「ハハハ、そんなに

恐縮させると照れちゃうネ。

ボクはただアザゼルの作戦を

予測して対応しただけだヨ」

と、シユタークさんは

俺に笑いかける。

アザゼルとは

以心伝心ってヤツなのかな

やっぱり……。

でも、これで準備は整った！

「よし！ それじゃ行きましょう

リアスさん！

ゲイトさん！

転送の方はお願いします」

「いいとも」

ゲイトさんは快諾すると

魔法陣を展開する。

そして俺達はその魔法陣の中に足を踏み入れた。

↓

「ハハハ……？」

転移先は夕暮れの公園、  
そして噴水の前。

目の前にはベンチに座っている  
女の子……いや、女がいた！

「天野夕麻……!?!」

そう、そこにいたのは紛れもなく  
あの時の墮天使だ……!!

レイナーレ……!?!

でもアイツはなんだかんだあつて  
安里の眷属になった筈じゃ……!  
動揺する俺を差し置いて

レイナーレ……いや、天野夕麻は  
口を開いた。

「どうしたの、一誠くん？」

急に眠ったと思ったら

急に怖い顔になって……!

……ッ!

俺はハツとして我に返る。

じゃあ……今までの事は

夢だったのか……!?!

神器とか、悪魔とか、墮天使とか  
そういうことも

全部夢だったのか!?

いや、そんな筈があるか!

「ねえ……大丈夫？」

「やめろ……!」

心配そうな表情で

俺に話しかけてくる夕麻に

俺は思わず叫んでしまう。

「え……?」

「お前は誰だ!」

本当にお前は……!?!」

俺の問い掛けに彼女は

悲しげな顔をする。

「何を言ってるの？」

私はあなたの恋人の天野夕麻よ？」

「違う！　こんなのは嘘だ!!」

嘘だ！　嘘だ!!　まやかしだ!」

そうだ！　こんなのは偽物だ!

俺は今、きつと幻術か何かに

掛かっているに違いない!

俺がそう叫ぶや

天野を突き飛ばす……!

「……えっ」

天野は信じられないという顔で

後ろの噴水に激突すると

そのまま水の中へと落ちていった。

「あ……ああああ!!」

しまった!!

ついカツとなって突き飛ばしてしまった!!

俺は慌てて駆け寄って彼女を抱き起こす。

だが、彼女はまるで

糸が切れた人形のようにぐったりとしていた……。

「おい、しっかりしろよ!」

「……」

夕麻は答えない。

噴水が徐々に紅く、染まっていく。嘘だろ……!?!

こんな……!?!　こんなことって……!?!

コッチが現実なのか!?!

「人殺し!!」

「悪魔め!」

「お前なんて人間じゃない!」



背中から浴びせられる

罵声に振り向かずにはいられなかった。

そこには涙目で俺を睨み付ける

少女が一人。

俺が助けようとしたシスターの

女の子だ。

彼女の周りでは他の人達が

俺に対して

恐怖と侮蔑の視線をぶつけていた。

その中には見知った顔も何人か  
いる。

松田、元浜、それに父さん、

母さんまで……!?

まるで化物か悪魔を見るような目をしている……。

そんな……!!

一体何が起こってるんだよ……!?

訳がわかんねえよ……!!

どうして

誰もわかってくれないんだ!?

俺は赤龍帝で……!!

リアスさんの婚約者で……!!

転生した悪魔で……!!

悪魔……アクマ……あくま……

? ……悪魔ってなんだ?

なんなんだ……?

なんなんだよおおお!!!

パアツとその時胸元に

入っていた御札が光ると

光に包まれたリアスさんの

幻影が現れると胸をまるで

スイツチでも差し出すかの様に

突き出してきた。

『さあ、この胸に手を触れなさい』

俺は無意識のうちに

その豊満なバストの先端に指をポチツと……  
ずむずむ……♡

『いやあ〜ん♡♡♡♡』

リアスさんの幻影がよがるように

身をくねらせて嬌声をあげると

空間全てが絵の具でもぶち撒けたかのように

デロデロに溶けていく……。

そして気がつくところこそは

オカルト研究部の部室。

真ん中には魔法陣に縛られた

ギヤスパーを取り囲む魔術師達に

一際目立つ陰険そうな孔雀みたいな

扇子を持った男と、

そいつらに対峙する煉獄さんがいた。

年は俺達と同じ位に見えるが

天使、悪魔、墮天使の何れの

特徴もなかった。

まさか、人間……!?!?

「気がついたか少年!」

「あれ、俺は……!?!」

リアスさんと一緒に転移して……!

って、近くに焦点の合わない目で

アヒル座りをしている

リアスさんがいるじゃないか!

これはどういうことだ……?!

「皆目わからん!」

君達がやって来た途端、

君も彼女もその状態だ!

恐らくは俺も経験した事もあるが  
催眠術か幻術の類だろう!!」

リアスさんに撃ち込んでくる

魔法弾を刀で切払いながら

煉獄さんは俺にそう言った。

「リアスさん!!」

大丈夫ですか!？」

俺は煉獄さんにカバーしてもらいながら

リアスさんを揺すってみる。

「うう……ごめんなさい……!」

ごめんなさい……!」

私は……グレモリー家の役立たず……

残りカス……」

「しっかりしろ! リアスさんは

そんなんじゃない!

俺達の大切な部長だ!」

語りかけるが

彼女はまるで廃人の様な

虚ろな瞳で

ぶつぶつと呟き続けるだけだ。

「デメエ……!」

リアスさんに何をした!!」

俺は孔雀の扇子を持つ野郎に対して

叫ぶ。

「クックック……!」

いや、別に?

ただちよつと潜在意識を

解放してあげただけですよ?

その女は今、己に課せられた

使命を忘れてただひたすらに

自分の無力さを嘆いている……

フハハハッ！

これぞ我が八卦が陣略の一つ

『陣略・石兵八陣！』

その女はもはや戦うことは叶い  
ますまい！」

「ならテメエをぶっ飛ばしてから

ゆっくり治すだけだ!!」

俺はそう言おうと奴に向かって駆け出す。

『Boost! Boost! Boost! Boost! Boost!』

『赤龍帝の籠手』から

音声が鳴り響くと力がみなぎってくる！

一撃でコイツを吹っ飛ばしてやる！

それで終わりだ!!

「待ちたまえ少年！」

煉獄さんがリアスさんを庇いつつ

俺を止めてくる。

「邪魔しないでください！俺が、俺がアイツを!!

あの『人でなし』をぶっ飛ばす！」

俺は叫びながら

竜の鎧を纏い、右腕から光の剣

『ドラゴン・ラグナロク』を

発動させる!!

あのコカビエルだって倒した

俺の必殺技なんだ！

こんなヤツら……!!

「フフフ、人でなしとは

言い得て妙ですねぇ

我々は人にして人に非ず。

英雄に非ず。

覇道を嘲弄し、

王道を峻拒するもの！」

扇子男が俺の

『ドラゴン・ラグナロク』を

前にしても余裕たっぷりといった感じで微笑み、  
パチンと指を鳴らす。

突き刺さった筈の奴の周りから

バチバチと電気の様なもの

溢れ出すや否や凄まじいエネルギーの激流が

吹き荒れる！

「ぐあああっ!？」

俺はその圧倒的な威力の前になす術もなく

弾き飛ばされた。

なんだ今のは……!？」

あんなのくらっちゃやひとたまりもない……!？」

「フッフ、これぞ我が八卦の陣略が一つ

『陣略・根元一気』！ その力を貴方に反射する事で

貴方は貴方の力によつて

敗れ去るのです!？」

孔雀男は勝ち誇ると今度はその手に持った扇子をリアスさんと  
煉獄さんに向ける！

すると二人の周りに紫電が発生し二人の動きを止める。

「さあ、まずはお仲間が

たあ〜っぷりいたぶられて殺される所を

見ていて下さいよ？

そして絶望して頂きましょう！

その後、ゆっくりと貴方達も

殺して差し上げますよお……」

「くそお……!？」

俺は悔しさに歯噛みする。

一体どうすればいいんだ……!？」

「クッククック……!？」 どうしましたか？

もう諦めてしまいましたか？

これで終わりとは情けない。

さぞやヴァーリ・ルシファーも

落胆なさることでしょうな」

孔雀男の言葉に俺は唇を噛む。

確かにこの圧倒的不利な状況じゃどうしようも……。

俺がそう思った時だった……。

「う、うう……。

ごめんなさい……。

ごめんなさい……」

リアスさんが虚ろな瞳で涙を流しながら謝っている。

「なにを言っているんですか部長!!」

部長は悪くありません!

悪いのは全部アイツ等なのに……!!」

「違う……私は……私は……無能で役立たず……

だから……! 私のせいで皆が……! ごめんなさい……! ご

めんなさい……!」

俺は必死になって彼女を宥めるが彼女は涙をボロボロ流し、謝罪を

繰り返すばかりだ。

「リアスさん!

しつかりしてください!

リアスさんはそんなんじゃない!

リアスさんは……リアスは……!」

俺は彼女の肩を掴み揺すり続ける。

だが孔雀の扇子を持つ男は

俺達を嘲笑う様に眺めているだけだ。

「フハハハハハハ!

無様! 無思慮! 無分別!

弱者共が傷をなめ合う様は実に

醜悪極まりなし!!

何が赤龍帝か!

貴様が赤龍を名乗るなどは

「おこがましい！」

「補い合う事の何がいけない？」

大喝する孔雀扇子の男に

煉獄さんは真つ向から反論するように

目を見据えながら言った。

「ほう……。」

ではお聞かせ願いたいですね？

その『補い合い』とやらを？

弱者が群れを成しても

結果は見えている……！」

「さもあろう。」

だがそれは

強者にも言えることだ。

君とて生まれた時から強者で

あつたわけではあるまい。

初めは弱かつたからこそ

人に会い、人に塗れ、

群れの中で己を研鑽し、

同士と共に智や武を

練り上げた筈だ。

それこそが補い合いであり

弱く儂い人間のみが育めるものだ」

「……………」

煉獄さんの問い掛けに対し、

孔雀の扇子を持った男は沈黙した。

「そしてその集大成として

君はここに立っているのだ！

ならばその道程を否定することは

君の歩んできた道を

侮辱する事だと何故わからん？」

「黙りなさい！」

英雄の紛い物がこの私に……！

叛英雄、司馬懿に吠えるな！」

バチツ……と奴の周りと

ギヤスパーを縛っている魔法陣に

火花が走り揺らいだ！

「いかにも俺は紛い物だ！」

英雄に非ず！ 今生に在るべきものに非ず！

しかして幽鬼に非ず！

俺は炎柱、煉獄杏寿郎！

我が身命を賭し、

護るべきもののために戦う！

例え我が身が陽炎の定めにあろうとも！」

自らを偽物と称し、それでもなお戦い抜くと

叫ぶ煉獄さんの姿はとても眩しく見えた。

そうだよ！

俺が俯いてどうする！

俺だつて戦わなくちゃ！

俺は再び立ち上がり、

『赤龍帝の籠手』を発動させる。

「まだやる気ですか？」

フフ、良いでしょう。

所詮貴様達にこの

『陣略・根元一気』を突き崩す事は不可能なのです！」

孔雀扇子男、もとい司馬懿は

余裕たっぷりにそう言う。

だが今なら解る！

奴の結界を無理矢理破ろうとしたから

反撃されたんだ！

それなら……！！

シユタークさんから貰った

術符を手に持ち、俺は



『讓渡』の能力を発動させる！

『Transfer!』

術符が光り輝き、

効果が発動する………！

「フフ、何をしようと無駄です！

さあ、私の力を受け………！

あ………あああああ!?

嫌だ……イヤだああああ！

誰から必要とされなくなるなんて

嫌だあああ!!」

するとみるみる司馬懿の顔が

青ざめていき、ギヤスパアの

周りの魔術師もどきの傀儡も

霧が晴れる様に消え去った。

司馬懿は動揺しながら

自分の周りを見渡す。

そう、俺がやったのは奴の

使った『陣略・石兵八陣』を

シユタークさんの術符を使って

奴に転写したんだ！

奴の潜在意識の中にある

恐れが奴自身を縛るんだ！

「………はっ!? イッセー!?!」

リアスさんの目に生気が戻る。

「………！ 良かった………!」

「目覚めた様だな！ 少年！

リアス嬢!」

煉獄さんは安堵の表情を浮かべながら

俺達の方を向く。

それにつられて司馬懿もそちらに顔を向ける。

だがその時！ ゴウツ！ と

風を切る音と共に、

何かが高速で

天井をぶち抜いて降り立ってくる！

そして現れたのは

炎の様に赤い鬣を持つ馬鎧を

纏う馬とあの時の鎧の男だっ！

その男が俺達の前に降り立つ。

俺は咄嗟に身構えたが、男はこちらには目もくれず、真っ直ぐに司

馬懿の方に歩いていく。

「な、なんのつもりだ！

この司馬懿はまだ負けていない！」

「そうだな。だが勝てもすまい。

貴様の本領は蜘蛛の様に陣取り、

相手を搦めとること。

その糸の陣略が切られた以上、

貴様の勝ち目は万に一つもない」

「や、やってみなければ

解るまい！」

「策士が偶然に期待をかけては

おしまいだな」

司馬懿はまるで駄々っ子の様に喚き散らす、

鎧の男は石突にて司馬懿を昏倒させると

馬の背に乗せた。

「ど、どこへ行くつもりよ！」

リアスさんが尋ねると、

「アザゼルによって

カテレア・レヴィアタンは

敗れ去り、九頭竜安里によって

レリエルも敗れた。

これ以上は我等にとつても益なきこと。

故に我らはこれより撤退する」

いや、理路整然と撤退すると  
言われても……。

いや、今は無理をする時じゃない。  
ギヤスパーを助けて、

悪魔、墮天使、天使の和平会談を成功させることが  
一番大事なんだ。

「じゃああんたらは何者なんだ？」  
「知れたこと。」

我等は『禍の団』の『叛英雄派』。  
化物を倒すのは人に非ず。

英雄にも非ず。

黒を塗りつぶすのは

より強い黒であれかし」

……え？ 今何て言った？

なんか凄い重要な事を言われた様な……？

ま、待て！ 考えろ！

考えるんだ！ そして思い出せ！

方天画戟を持って、馬に乗る。

狼顧の相の司馬懿に対して、

虎……虎狼の化身……！

そうか……！ こいつは……！

「そうかい、勝負は預けるぜ、

呂布！」

呂布は答えずに風のように

ぶち抜いた天井から去ったが

その直前、顔を覆う装甲の中で

笑っている様に見えた。

## 第39話

「良かったギヤスパー……！」

無事だったのね！」

ギヤスパーは魔法陣の中に

囚われていたが、司馬懿と呂布が

撤退したことで解放された。

どうやら身体にダメージは

ないようだが、司馬懿の術の

影響が残っているのか

さめざめと泣いている。

「部長……僕、もう嫌ですう……」

「大丈夫よ、ギヤスパー」

部長は優しくギヤスパーを抱きしめる。

「でもお……怖いんですう……」

皆んな僕の事なんか忘れて、

どんどん先に行っちゃうのが……！

僕はイツセー先輩や部長みたいに

強くないから、

いつか置いてかれちゃいますう……」

このギヤスパーの姿が

情けないヤツだ。なんて言うのは

人の痛みがわからないヤツだ。

ギヤスパーは生まれ持った力に

苦しんでいるんだ。

神器セイクリッド・ギアと呼ばれる特別な力を宿した者は、

その力が強ければ強いほど

狙われやすくなる。

増してギヤスパーの力は

時間停止という特別すぎるもの。

俺も赤龍帝だからな。

だからギヤスパーの気持ちはよくわかる。

煉獄さんはただ、ギヤスパーの泣き言に腕組して怒るでも

慰めるでもなく聞き入っている。

これは俺達の問題だから

自分が出しやばるべきではない。

そう考えているんだろう。

「僕なんて……！」

僕なんて死んじやった方がいいんです……！！

皆が思っている様に……！！」

その時——パアンツ！！

乾いた音が響いた。

部長がギヤスパーの頬を

思い切り叩いたのだ。

「ぶ、部長？」

「ふざけた事を言わないで

ちようだい！！」

今まで見たこともないくらい

激しい怒りの形相を浮かべている。

「いい？ 私はあるあなたを置いていったりしないわ。

例えばどんな事があるうと、あなたの事は私が守るわ！

だから一杯私たちに迷惑をかけて。

私達は何度だって貴方を叱るし、

慰めるために何度でも立ち止まるから」

部長の言葉を聞いたギヤスパーは、

驚きに満ちた表情になる。

「ほ、本当ですかあ……!!？」

「ええ、本当よ。それに朱乃だって

祐斗だって小猫ちゃんだって、

勿論イツセーだって

私と同じ考えよ」

部長は慈母の様に微笑みながら  
ギヤスパアの涙を拭い、  
そう言った。

「ぶ、部長おおおーっ!!」

涙と鼻水を流しながら  
抱きつくギヤスパア。

感動的なシーンだぜ。

やっぱりリアスさんは

こうじゃなくつちやな!!

すると突然、

ぶち抜かれた天井の上から

パチパチと拍手する音が鳴る。

一体誰だ!?

と上を見上げるや

そこにいたのは

白い龍の鎧を纏う

ヴァーリ・ルシファーだった!

助けに来てくれたのか?

いや、それにしては……

明らかに殺気をこちらに

放っている様な……?

「さあ、やろうか」

と、言うなりこちらに向けて

俺のドラゴン・ショットと

似た様なエネルギー波を放つ!

だが悔しい事に威力も大きさも

桁が違う!

『ドラゴン・メガフレア!!』

俺は龍の鎧を纏い、ヴァーリの

エネルギー波を相殺しようとするが

威力は五分と五分って感じだ……！  
けど俺の後ろにはギヤスパーや

煉獄さん、

それにリアスさんがいるんだよ!!

負けていられるかよ!!

「おおおおおつ!!」

「忘れたかい？」

俺達の力は徐々に君の力を

半減させていく事を？」

『Divid!』

涼しげに言ってくれるなり

白龍皇の力によって

俺が放つ魔力弾の威力が落ちていく!

「くそっ!」

なら倍化させればいいだけだ!」

『Boost!』

俺は倍化によって

『ドラゴン・メガフレア』の

威力を元に戻し、

ヴァーリに向けて撃ち返すが……。

『Divid!』

再び半減されてしまう!

これじゃいつまで経っても

キリがない!!

俺が焦燥感を募らせていると

煉獄さんは俺の背から飛び上がり、

ヴァーリに攻撃を仕掛けようとする。

「煉獄さん!」

「炎の呼吸・伍の型―炎虎!!」

煉獄さんの刀身が燃え盛り、

更に上下の斬撃はまるで虎が

牙を剥く様に繰り出される。

しかしヴァーリはその攻撃すら  
奴の力で半減させて

防ぎきってしまおう。

「一対一の戦いに割って入るとは

サムライにしては無粋だな」

「ぬう……い！」

ヴァーリはちらりと

一瞥した煉獄さんに言うが早い

羽から炎を吹き出し、

跳ね飛ばしてしまった！

「煉獄さん!!」

「案ずるな！ 俺は無事だ！」

吹き飛ばされながらも体勢を立て直す煉獄さん。

だが、俺にはわかる。

今の一撃はわざと受けたんだ。

ヴァーリに隙を作るために……。

なら、このチャンスは

無駄にしない！

「行くぞ、ヴァーリッ!!」

「ほう、まだ何かあるのかな？」

余裕を見せるヴァーリに

俺はもう一発

『ドラゴン・メガフレア』を

放つ！

幾ら何でも2つ同時に半減は

できないだろ!!

『Divid!』

ヴァーリはまたも白龍皇の力で

『ドラゴン・メガフレア』の

威力を半減させ、



両手でそれを受け止める。

そしてそのまま握り潰そうとしてきた。

「くううううう!!」

バチバチツツと火花を散らしながら

徐々に2つの

『ドラゴン・メガフレア』を

圧縮させて、遂には手のひらサイズにまで小さくしてしまった。

マジかよ……!!

サタナキアを消し飛ばした

『ドラゴン・メガフレア』を握りつぶすだど!?

「しかもこんな芸当を

やってのけるなんて……!!

「凄まじいな。

想像以上のパワーだ。

やはり君は面白い」

「そりやどうも!」

「こっちは面白くねえよ!」

俺は煉獄さんに目で合図すると

無言で頷いた。

「今度は君達二人がかりか?

卑怯とは言わないよ。

それが戦争というものだからね」

「そうかい、んじや遠慮なく

行かせてもらうぜ!!」

俺と煉獄さんは同時に左右に分かれて走り出す。

俺はリアスさん、

煉獄さんはギヤスパーを抱えてだ。

「逃げるんだよおー!」

「ええ!?!」

「な、何故ですかあー!?!」

「三十六計逃げるに如かず!

時には退く事も勇氣だ!!」

驚く二人に構わず

全力疾走する俺と煉獄さん。

これでヴァーリが

呆れ果ててくれれば良いけど

そんなワケないよなあ……。

俺は後ろを振り返る。

そこには翼を生やして追ってくる

ヴァーリの姿が!

「卑怯とは言わないが逃がすとも

言っていないだろう?

君達は俺の好敵手なんだから」

ヴァーリはそう言うなり

こちらに向けて手をかざし、

掌から光の矢の様なものを

連続で放ってきた。

俺と煉獄さんはそれを避けながら

廊下を走り抜ける!

くそっ!

やっぱりこうなるのかよ!

「おおおおおっ!!」

『Boost!』

俺は倍化させ、更に加速していく!

このまま逃げ切れば……! ……いや、無理だ!!

俺のスピードでも奴の方が速い!ならばここは俺が囿になってそ

の間に皆を逃すしか……!

と、腹を括ろうとした時、

煉獄さんがまるでラクビーのボールでもパスする様にギヤスパ

を俺に投げ渡した!

「うわああああっ!?!」

煉獄さん!?!何を――

「――俺はここに残る！」

君達の誰も俺は死なせない！」

俺が問いかけようとしたその時、

煉獄さんは力強く言った。

「安心しろー誠少年！」

金髪の少年！

俺とて死ぬつもりはない！」

「煉獄さん……僕なんかのために……！」

煉獄さん……！」

煉獄さん

！」

ギヤスパーは涙をポロポロ流し、

俺に抱えられながら何度も

煉獄さんの名前を呼んだ。

「心配はいらない。

君は自分の身を守る事だけを考えろ。

必ず生きて帰るのだ。

そして、また共に戦おう」

「……はいっ！」

「いい返事だ……！」

煉獄さんはギヤスパーに微笑むと迫り来るヴァーリに向き直った。

「成る程、彼を守るために

捨て駒に甘んじるか……。

サムライにしては感動的だな

……」

「Divid！」

「Divid！」

「Divid！」

「だが無意味だ」

ドゴオオオン！！

凄まじい爆発が巻き起こり、

旧校舎ごと俺達をヴァーリは

吹き飛ばそうとした。

「ぐわあああああっ!!」

リアスさんとギヤスパーを庇い、  
俺の翼に炎や旧校舎の破片が  
容赦なく降り注いでくる。

それでも、俺は二人を守り通した。

「大丈夫か？ 二人とも」

「え、ええ……」

「はい……。ありがとうございます。」

ですが、煉獄さんは？」

二人の無事を確認した後、

俺は背後を見る。

そこには完全な更地と化した

旧校舎があった。

その光景を見て、

俺の中で何かが弾けた。

「……よくも……!」

「ほう、まだ動けたか。」

流星は赤龍帝だな。

君のその怒りと憎しみを

引き出しただけでも

彼の人生に価値はあったな」

人生……?」

こいつは何を言っている……?」

「煉獄杏寿郎は

こなみじんになって死んだ。

そして次は——」

『Divid!』

「——その女を頂く」

………は?今、何だった?

「君の怒りと憎しみを

増幅させるためには、

彼女の存在が必要なのだろうか？

尊敬する人物と愛する者を

同時に奪われた君はきつと

最高の復讐者になるだろう。

実に楽しみだよ」

……ああ、そうか。

そういうことか。

お前はどこまでもオレの逆鱗に

触れてくれるんだな。

白いの。

「お前は……何だ？

それでも人間か？」

「人間ではないかも……な。

俺はヴァーリ・ルシファー。

ルシファーの血を引くものだ」

そういうヤツの顔は悲しげだ。

ああ、つくづく逆鱗に触れるヤツだ。

サタナエルみたいなクソヤローなら

躊躇う事もなかっただろうに……。

「そうか……じゃあオレも

人間じゃあ……なくなる……」

「イツセー！何をするつもり！」

赤い髪の女……チガウ。

リアスがオレを止めようとしてくるが、もう遅い。

オレの全身から赤黒い血のような

オーラが噴き出し、

身体が変貌していく。

『イツセー君、

蠱毒の法って知っているかい？』

シユタークさんが言っていたのは

この事だったのかな……？

だが、今はどちらでもいい。

「リアス・グレモリー……。」

俺から逃げろ」

「イツセー！ やめなさい！

やめて!!」

『我、目覚めるは』

『覇の理を神より奪いし二天龍なり』

『無限を嗤い、夢幻を憂う』

『我、赤き龍の霸王と成りて』

『汝を紅蓮の煉獄に沈めよう』

こいつを……

この白いのをだけを……

『Juggernaut Drive!』

……殺してやる。

↓

安里Side

あの後、サーゼクス様たちや

アザゼルのおっさんと合流した

俺達は怒涛の展開に

呆然としていた。

突然現れたテロリスト集団が

いきなり襲ってきて

大天使やら旧魔王派が襲ってきて

アザゼルのおっさんは片腕を

喪いつつも、褐色肌の女の人を

捕縛しているときたもんだ。

「その人は？」

「ああ、この女は

カテレア・レヴィアタンとかいう

旧魔王の一人だとき」

え？ 生け捕りにしたのか？

片腕ふつとばされたのに？

「なんでそんなことを？」

「そりやお前……。」

レイナーレとお前さんと

同じことだよ。

皆まで言わせんな恥ずかしい」

「……………」

「ふむ、アザゼルは

じーじとおなじですけどこましか」

もう、ホントこの

おっさんときたら……。」

俺達は言葉を失うしかねえよ。

しかもシユタークさんの目の前で！

倫理観ゆるふわかよ！

サーゼクス様もセラフオルー様も

苦笑いするしかねえって。

「で、実はな。お前がレリエルやら

サリエルやらクルゼレイと戦っている間に

ヴァーリが裏切った」

……へ？

「ちよつと待て！

どういうことだ!？」

「どういふことも何も

向こうの言う世界の方が

面白そうだからだよ！

なあ、ゲイトはどう思う？」

アザゼルは視線をゲイトさんに

向けるとかぶりを振った。

「理解できないな」

うわ、普段はのほほんを地でゆく

ゲイトさんがバツサリ言い切った。

怒ってんのかな？

「そんな事よりボス。

何だか赤龍帝の子が面白い事に  
なっていますよ」

などと言いつつナイアの奴がニヤリと

口元に笑みを浮かべるや否や……。。

ドゴオオオン!!

旧校舎が吹き飛ぶ程の大爆発が

巻き上がった!

「なっ!?.. なんだありゃ!」

そして聞こえてくるのは

呪言の響き。

『我、目覚めるは』

『覇の理を神より奪いし二天龍なり』

『無限を喰い、夢幻を憂う』

『我、赤き龍の霸王と成りて』

『汝を紅蓮の煉獄に沈めよう』

地の底から沸き立つ様な

怨念に満ちた声が木霊した。

な、何だかよく知らんが

取り返しのつかない事になりつつ

あるのは解る!

俺はイツセーの元へといち早く駆け出した。



## 第40話

「Gyaaaaaa!!」

凄まじくも、悍ましい雄叫びが  
辺りに轟くと俺の足が

勝手に止まってしまう!

クソツ! 何をビビってやがるんだ!

親友のピンチだっというのに!

俺は震える膝を殴りつけて

気合いを入れ直す!

よし、動ける!

雄叫びの中心にいたのは

一匹の竜だった。

いや、あれはイツセーなのか?

確かに竜の鎧を纏っているが、

さらに鋭角なフォルムを増し、

翼は更に巨大化。

両手両足からは爪の様なもの伸び

兜からは幾つも角らしきものが生えている。

何より特徴的なのはその目だ。

爬虫類のような縦割れした瞳孔の奥では

眼球全体が真っ赤に染まり、

まるで深淵を見つめているかの如く

ただひたすらに深く暗い闇をたたえていた。

「イツセー!」

何だよ! 何だよその姿は!」

そんな姿お前らしくねえ!

ちつともお前らしくねえぞ!!

「……………」

イツセーは何も答えず、

ただ黙っていた。

「何とか言えよ！」

俺の声が聞こえていないのか!?  
それとももう喋れないほど消耗してんのか!?  
だが次の瞬間、

「コロス……コロス……」

ワレラガ……フツカツハ……

ナツタ……。

オロカナアクマ、ダテンシ、

テンシ……ニンゲンタチハ……

イツピキノコラズ……コロス……」

ゾツ……と全身の震えが

また止まらなくなる!

ダメだ……! 思考が止まる……!

土下座してでも生き延びたくなる

弱い考えしか浮かばない……!!

「うう……ぐあああああつ!!」

「落ち着き給えヨ安里君」

背中にペタリと術符を貼られると

気持ちがり落ち着き、震えが止まった。

いつの間にシユタークさんが

駆けつけてくれたようだ。

「すまねえシユタークさん！」

「別にいいサ。」

しかしあれが「覇龍」か。

つくづく神滅具という奴は規格外だネエ。

欲しいなア、あの力」

この状況で震え上がる所か

くつく、とシユタークさんは

笑った。

何て度胸だよ……!」

「安里君！」

木場、朱乃さん、小猫ちゃん、  
アーシア、少し遅れてゼノヴィア、  
キユクロと

アザゼルのおっさんが  
追いついてきたが

おっさん以外、

今のイツセーを見て文字通り  
言葉を失った。

「あれが……『覇龍』？」

呆然と呟いたりアスさんの言葉に  
俺はただ首を縦に振るしかなかった。

『『覇龍』……何ですか!?!』

それって何なんですか！

イツセーさんは……!!

イツセーさんはどうなってしまったんですか!?!』

悲痛な声で叫ぶアーシアの肩を

俺は優しく叩く。

今にも泣き出しそうな表情をしている

この子を安心させる為にも、

今は冷静になつて貰わないといけないからだ。

「大丈夫だアーシア！ あいつは必ず戻ってくる！

だからそれまで俺達がしっかりしないと！」

そう言つて俺は力強く笑つてみせた。

「はい……!! 私も頑張ります!!」

俺の笑顔につられたのか、

アーシアも無理矢理ではあるが微笑んでくれた。

「そうだな！ それにしてもあれは何なんだ！

あんなものは見たことがないぞ！

堕天使総督殿！

貴様なら何か知っているのではないか!?!」

ゼノヴィアは声を荒らげ、

アザゼルに掴み掛からんばかりの  
勢いで問い詰める！

するとおっさんはオーバーに  
手を上に上げつついなした。

「ああ、それなりにな。

お前らに解りやすく話すと

今のアイツはブチギレ、暴走  
状態だ。

さっきの光の柱もアレが原因だろうよ」

わかりやすくまとめすぎだ！

と、いうより……

シャキン！

と俺が右腕を刃に替えると同時に

ゼノヴィアもデュランダルを

取り出し、アザゼルの首筋に剣先を突きつけた！

「ふざけるな！

あれは暴走などではない！

あの男が言うはずがないだろう！

あんな言葉を！」

「親友の俺も同感だな」

「落ち着け。

まずは話を聞け。

まあ、お前さんたちが

看破した様に

確かにあれは単なる暴走じゃねえ。

歴代の赤龍帝の怨念が具現化した姿だ」

怨念？ 何言ってやがる。

赤龍帝はとんでもない力を持った

凄まじい存在だったんだろ？

それが何で怨霊みたいになるんだよ。

「自分達に都合のいい様に

歴史を捻じ曲げるのは  
何も人間だけじゃねえって事さ。  
歴史上、赤龍帝には数々の逸話がある。  
だが、その誰もが最終的には  
道半ばで死んでいる。  
そいつは何故だと思う？」  
おっさんの質問に対し、  
俺達は皆黙り込んでしまった。

「……解らないか。」

ならば答えてやる。

答えは単純明快、

歴代の所有者全てが

悪魔や堕天使、天使、

あるいは人間によって

利用されて殺されているからだ。

お前さん達、歴代の赤龍帝の

墓碑を誰も見た事ねえだろ？

不自然だとは思わなかったか？」

「……ッ！」

「馬鹿な……！」

「そんな……！」

「あり得ませんわ……！」

「嘘だ！」

おっさんが言い放った衝撃的な事実  
全員が驚愕し、絶句する中、  
おっさんは話を続けた。

「まあ、無理もねえわな。」

自分達『だけ』は正義でいたいのは  
誰だって同じだ。

だが、残念ながらこの世界は  
綺麗事で成り立つちやいない。

戦争がいい例だ。

勝てば官軍負ければ賊軍とはよく言ったものだけ。

用済みになった赤龍帝や白龍皇は

やれ『力に呑まれた』だ『悪竜の

本性を現した』だのと

『人々のために尽くした立派な存在』『英雄』

だのと罪や悪行を

捏造されるか言葉だけで

持て囃し、自分からは何もしない連中に

よって討ち倒されたり、

寿命を削り取られて無念の内に

死んだ。

だが誰も彼も知ったことじゃない。

どうせ死んでも次の持ち主を

利用すればいいってな。

つまりは、そういうことだ。

そんなワケであれば

赤龍帝の怨念が具象化したもの、いわば怨霊だ」

……………。

な、何てことだ……………！

言われてみれば確かに……………。

サタナエルやコカビエルの時も

今回の騒動も俺は……………どこかで

『どうせイツセーが

何とかしてくれるだろう』

なんてアイツに重荷を

押し付けていたんじゃないのか……………！

そして俺は今になって気付いた。

そういえば今までイツセーは

一度でも『助けてくれ！』と

誰かに本気で助けを求めたことがあつただらうか？

……ない。

一度もなかった！

いつも俺に何かあった時は  
必ず駆けつけてくれた！

なのに、アイツの方からは一度も

俺に救いを求めたことはなかった！

何で気付かなかったんだ!?

バカ野郎！

親友なら真っ先に

気づくべきだった！

けどよ……。

人間がそんな奴等ばかりだったら

ドライグは疾うの昔に

人間に愛想を尽かして一誠に

力を貸すことなんて無いはずだ！

「アイツは……アイツは……」

俺が悔しさに歯噛みしていると、

ゼノヴィアが震える声で呟き始めた。

「……こんな理不尽なことがあつてたまるか！

一誠はただ、人々の幸せを願つて

戦っていただけだ！

そののどこが悪い！

何故だ！ 何故なんだ！」

「そうやって俺達を偶像化し、

神聖化するのはお前たちの

一番悪いところだ」

ゼノヴィアの嘆きに対して

ヴァーリはフワリと降り立ち、

苛立った様子で言う。

「俺達がお前たちに何をした？

ただ神滅具を持っていたという理由だけで

勝手に祭り上げ、そのくせ都合が悪くなれば俺達に全ての責任を押し付ける。

全く迷惑極まりない話だ」

「私達は、そんなつもりは！」

リアスが反論するが、

「黙れ。」

お前たちがどんなつもりでも

世界は俺達をそう見ていない。

いい加減この世界の身勝手さには

うんざりしていたんだ。

だからここで、赤龍帝の怨念と共に

全て終わらせる」

「ふざけんなあ!!」

俺の親友の命を

勝手に終わらせるな!!」

ヴァーリの極論に対して

俺は思わず叫んだ。

何か、何か手段がある筈だ!

「ないでもないけどネ……」

その時シユタークさんが

口を開いた。

あるのか!?

イツセーを助ける方法が!!

俺は思わず声を上げる。

するとシユタークさんは

ゆっくりと語り出した。

その方法は――。

それはあまりにも荒唐無稽で

突拍子もないものだった。

しかし、もしそれが成功すれば、

イツセーを救えるかもしれない。



なら、やるしかねえ！

腹を決めろ！ 九頭竜安里！！

俺は覚悟を決めて

イツセー、いや……

赤龍帝に向き直った。

↓

「イツセー君の人格が

消える前にまずはアジアちゃんが

彼の人格を繋ぎ止めるための回復を行う必要があるネ」

「ナンセンスだな。

討伐した方がお前にもリアス・

グレゴリーにも都合が良いだろうに」

シユタークさんの作戦の

第1段階を始める前に

ヴァーリが呆れた様にシユタークさんに言う。

煩え！ 俺は親友を助けたいんだよ！

それにこれはアジアちゃんと相談して決めたことだ。

「確かに私はイツセーさんを助けたいです……」

でもそれ以上に……私があの人を失いたくないんです」

「フン……くだらん。

まあいい、好きにしろ」

「はい、大丈夫です。

この力を使いこなせるように

修行をしましたから。

イツセーさんの為に

死ねるなら、それでも構いません」

そう言つてアジアは

聖母のような微笑みを浮かべた。

「お前も……他人のために

死ぬタイプか……？」

「いえ、そんなことはありません。」

私だって死にたくはないですよ？

イツセーさんと結婚して

イツセーさんとの赤ちゃんを

授かりたいですから」

ヴァーリが苦笑しながら言った言葉に

対してアーシアは少し困ったような顔で返す。

「……お前たち、本当にそれで良いのか？」

ヴァーリが再度問いかけてくるが、

俺もアーシアも、木場も

朱乃さんも何よりリアスさんも

それについて答えは変わらない。

俺達の決意にヴァーリは肩をすくめ、

同時に殺気も消えた。

「……勝手にしろ。」

だが、どうなっても知らんぞ」

と言ってくれた。

そして俺達は

赤龍帝の目の前に立つ。

「シネ……シネ……！」

何て禍々しい

オーラを放つんだ……。

しかし、俺達は今までの様に

お前達を殺すんじゃない！

お前らの怨念を殺す！

「アーシアちゃんー！」

「はいー… お願いしますー！

神器……発動!!」

俺が叫ぶとアーシアは

おっさんから貰った腕輪を

装着すると自ら神器を発動させる！

今までの聖女の微笑みより

効果は遙かに強力だ！

「聖母の抱擁」

アーシアちゃんが膝を付き  
祈りを捧げる様になると、

彼女の身体が眩く輝き、

その光が俺達や赤龍帝を包み込む！

暖かいだけじゃなくて

傷や疲労が洗い流される様だ。

「ああ、

これが神の慈悲なのだな……」

ゼノヴィアの言葉に皆が頷く。

どうやら『システム』の

ハッキングはある程度収まったらしい。

ミカエルさんたちが上手くやってくれたんだな。

皆一様に癒やされていく。

いや、一人を除いてだ。

「ヤメロ……！ ヤメロ!!」

オマエタチモ……ワレヲモテアソビ

ツカイステヨウトスルクセニ……！

オマエタチモ……アノミニクク、

イヤシイモノドモト……同じだ！」

そう言いながら赤龍帝は

翼を拡げると顎をぐわつと開く！

恐らくはブレス攻撃だ！

「やらせないー！」

「はあー！」

その瞬間、俺の背後から二つの影が飛び出し、

それぞれ『福音呼びし勝鬨の剣』と

デュランダルを振りかざす！

二人の一撃によって

赤龍帝の口から炎の息吹が

吐き出されるのは阻止された！  
だが……!?

「ぐわっ……!!」

「うわあっ……!!」

バシユウウウン!!

爪を振り下ろしたただけだというのに

二人は吹き飛ばされてしまう。

それだけでなく、アーシアを

庇う俺の糸の結界も

切り裂かれた。

痛い……耐える！

俺はすぐに立ち上がり、

二人に視線を向ける。

「二人とも大丈夫か……?」

「ええ、問題ありません」

「ああ、まだいけるさ」

「そう言って立ち上がる木場とゼノヴィア。

良かった……。

しかしアーシアの回復により

赤龍帝の火力は衰えることはない。

むしろ怒りのためか

更に威力が増している気さえする。

だが、奴の怒りを噴出させないことには始まらない。

ここは耐えるんだ！

俺は歯を食い縛り、痛みを耐えた。

「ぐう……!ー アーシア!

もうちよつと頼む!」

「はいー!」

アーシアは再び祈りを始めると

赤龍帝は更に吠え狂う。

「イタイ……クルシイ……」

コワイ……クルシメ……

ニクイ……アツイ……シネ……

シネ……死ね!!」

怒りと憎しみに満ちた声と共に

翼から老若男女の声が響く。

「Boost Boost Boost Boost

Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost

t!!」

何と一斉に倍化を使う事で

瞬時に口に溜めた波動砲みたいな

エネルギーのチャージを

完了させやがった!!

「やばい……!」

幾ら何でもアレが直撃したら

学園ごとお前ら消し飛ぶぞ!!」

おっさんが叫ぶが、

そんなことは分かってたんだよ!

俺も木場もゼノヴィアもそしてアジアも、

皆、覚悟は出来てるんだ!

「止めておけ。」

今、ヤツが撃ち出そうとしている

のはロンギヌス・スマツシャー。

神をも滅する究極のブレス。

その力は魔王であっても塵一つ残らん」

ヴァーリは冷静に告げる。

そうだろうな……。

解ってるよ、解っているが……!」

だからって尻尾まいて

逃げ出せるかよ!!

俺達は赤龍帝を相手に一步も引かない。

ここで退いたら俺達とイツセーの友情や愛情は  
見せかけだけの偽物になる！

そう思うからこそ俺達の気持ちは揺るがないし、  
恐怖だつて感じない！

「そうか。」

所で俺はかねがね思っていた。

神を討ち倒してみたかつたとな」

俺達がア－シアを庇い、

赤龍帝に対して

一步も引かない様子に

ヴァーリは突然、

嬉しそうな笑みを浮かべる。

「だからイツセーをあんな風に

したつてんだな！

アイツを元通りにしたら

覚えてやがれよ！」

俺が睨むと、

奴はフツと笑つて返した。

「ああ、勿論だ。

楽しみにしている。

だが、こうも考えられないか？

神をも滅するあの一撃を

防げばそれは聖書の神を超えた事だと。

ならばこの一撃で、

俺が最強であることを証明しよう！」

そう言う奴は魔力を高めるや

俺達と赤龍帝の間に割つて入った。

『○○……！…??……！…』

□□□……!!』

老若男女の声がそれぞれ誰かの

名前を呼んだ。

多分戦った歴代の白龍皇の姿を  
ヴァーリに重ねているのか!?

「オオオオオオオオ!!」

アルビオン……! アルビオン!!

アルビオオオオオオン!!!」

遂に四つん這いになった赤龍帝から

ロンギヌス・スマツシャーとやらが

放たれた!! 凄まじい勢いで

一直線に突き進む巨大なドス黒い

暗黒の奔流がヴァーリに向かっていく!

「d i v i d !」 「d i v i d !」 「d i v i d !」

アルビオンの能力が幾度も

発動しているがロンギヌス・スマツシャーの

威力は衰えるどころか、

ますます増大していく。

恨みや憎しみは決して減ることは

ないっていいのかよ!?

じゃあ俺達が生きるっていうのは、

その恨みと憎しみをずっとずっと

永遠に積み重ねるだけの

意味のないどころか

間違いだらけの繰り返しなのか!?

『そうだ、お前たちは

永劫に罪を重ね、滅びに回帰するのだ……。

それがお前達の未来』

赤龍帝でも、ヴァーリでもない

リアスさんたちでもない。

全く聞き覚えの無い声が

俺の頭に響いた。

違う! 違う!!

そんなことあるもんか！ 俺は心の中で叫んだ。  
俺だけじゃない。

木場もゼノヴィアも、アーシアも朱乃先輩も小猫ちゃんもおっさん  
も兵藤も皆、同じ気持ちだ！

俺達は罪を重ねるために

生きるんじゃない！

補いあって、支えあい、

積み重ねるために生きているんだ！

だから、だからこそ……！

その時、さっきの様に

光と闇が輪転するイメージが

はつきり浮かび上がる。

ゼロとゼロが交わり幾度も

積み重なることでその軌道は

無限になる！

だから俺は……！

「イツセー！ いい加減に……！」

目を覚ましやがれええええ!!」

俺は雄叫びと共に

全身そのものを拳にする武態を

発動させる。

「おおおおおっつ!!」

ロンギヌス・スマツシャーを

受けるヴァーリの背から俺は

飛び立ち、突撃した。

「グ……ガアアアアッ!」

パキイイイン!!

次元ごと打ち砕く俺の一撃が

赤龍帝の片翼を破壊し、

ぐらりとその巨体を蹠踉めかせた。

「お、おのれ……！」



おのれおのれおのれおのれエエツツ!!」  
赤龍帝から漏れ出す怨霊達が憤怒の形相で俺を睨み、憎悪の言葉を吐き散らす。

ア－シアちゃんの回復があるのに  
俺は全身に力が入らない……………!

力を使い過ぎちまったのか……………!?

これまでか……………!

俺が覚悟しかけたその時!

「あ……………あざ……………と……………たすけて……………」

イツセーの声がした!

確かに今、聞こえた!

俺に助けを求めているなら

やることは一つだよなあ!

「勿論だ! ダチ公!」

俺は気合いを入れて立ち上がり、イツセーに叫ぶ。

『何で動けるんだ?』って感じで

こつちを見るヴァーリ。

それは簡単な話だ。

「男の……………いや、人間の根っこは……………」

痩せ我慢なんだよ!!」

シュルルルル!!

俺は足を触脚にして、

地下から赤龍帝を締め上げた!

ほんの数秒の足止めに

しかならないだろうが……………!

「愚か者めがあ!!」

ブチブチブチブチイ!!

「ぐあああつ!」

一秒も持たないってのかよ!

全身を引き裂かれる様な痛みが

走る! 泣き叫んで逃げ出したい!

だが、この程度の痛み……………!

今まで泣き言も言わず、

スケベでお調子者の仮面をつけて

俺たちを守ってきたイツセーの

痛みに比べりゃ……………なあ!!

「うおらああああ!!」

「ぐおおっ!」

赤龍帝に動揺が走る。

「まさかちぎり飛ばされた触手から

更に触手を展開して更に奴を

縛るとはな。千切れば千切るほど

強度を増す捕縛技とは恐れ入る」

あちこち鎧が罅割れ、

血を流しているヴァーリが

感心した様に俺の技を評している。

「アザトオスウ……………! コロス……………コロシテヤル……………!

キサマハ……………キサマハアア!!」

赤龍帝が何だか錯乱してやがる。

俺の名前は九頭竜安里だよ!

「死ネエエエツ!!」

「死ぬかボケえ!!」

俺が口を返したその時、

またしてもロンギヌス・スマツシヤーを

撃ち出そうとしてきた!

幾ら何でもアレはヤバイ!

何とか口を塞ぐか妨害できる

時間さえあれば……………!

「安里先輩……………! 僕も……………!

僕だって……………男です!

だから、煉獄さんや先輩みたいに

「僕も痩せ我慢します！」

その時ギヤスパーが必死に

走り寄ってくるなり俺の傷だらけの

触手の一部を血液ごと口に含む！

そしてギヤスパーの停止結界が

赤龍帝に発動する！

ありがとよギヤスパー！

認めてやるぜ！ お前も男だ！

その僅かな停止が助けとなり

俺の触手が赤龍帝の口を塞ぐと

同時にリアスさんたちの準備が

完了した！

「さあ、いいかな君達？」

チャンスは今しか無い!!」

シユタークさんはリアスさんたちに

一枚の術符を持たせつつ、

数百枚の術符を落ち葉の様に

赤龍帝の足元に敷き詰めると、

その術符は忽ち陣となり

魔法円へと変わる。

「奥義、悟涼授颯札（ふりようじゆさつふだ）!!」

すると赤龍帝からまたしても

赤黒いオーラが漏れ出す、

というより収まっていく……??

「厳密には少し違うヨ。

彼らの恨みや憎しみを

イツセー君を媒介にして

別の感情に変化させる事で

鎮魂の儀とかえさせる技サ」

別の感情？

愛とか友情とかそんな感じかな？

タイムマン張ったらダチとか  
そういうの？

すると赤龍帝の瞳があ  
の  
禍々しい深淵を覗き込むものから  
イツセーのものに変わる。

「……ぱい」

ん？ 何か呟き出したぞ？

イツセー！ お前、大丈夫なのか!?

『……ぱい』

「ぱい？」

『おっぱい……おっぱい……!』

うおおおおお！ おっぱい！

リアスさん！ 朱乃さん！

アーシア！ ゼノヴィア！

小猫ちゃん！ ナイアに

ニグラ先生のおっぱい！

おっぱい！ おっぱい！ おっぱい!!」

……チョットナイツテルノカワカリマセンネ。

「どうやら成功したようだね。

彼の一番強力な感情は

怒りでも憎しみでもなく

おっぱいを求める渴望だったのサ。

それが歴代赤龍帝の怨念を

凌駕したのサ」

いや、凌駕したのさじゃねえよ！

おっぱいドラゴンに封印される

なんて歴代の赤龍帝も浮かばれないだろ……。

「ふ……ははは！ ははははは!!」

ほら見ろ、ヴァーリも

笑うしかねえじゃねえか。

「まさか、こんな結末を迎えるとはな……」

「そう言ってる割には随分嬉しそうな  
ツラしてんじゃねーの？」

「ああ、嬉しいともー」

これ程までにバカバカしくも  
清々しい敗北感に浸ったのは  
初めてだよ！

彼は本当に自由だな！

はははははは！」

そう言いながら奴は笑っていた。  
ろ、ロンギヌス・スマツシャーとやらの  
直撃で頭でも打ったのか？

『全く……今生の赤龍帝……』

いや、兵藤一誠のあの奔放さを  
見ると今まで赤いの、

いやさドライブと

いがみ合っていたのが

バカバカしくなってきたぞ』

と、ヴァーリの鎧、

恐らくもう片方の二天龍

アルビオンがそう言う。

何やら感慨深げな声音だ。

え？ まさかイツセーのスケベが

歴史的和解を生み出したのか!?

す、スゲエ！ 流石は俺の親友！

「いや、全くヴァーリが笑うなんて

明日は槍が降るんじゃねえかい？」

「全くだにゃー」

と、そこに聞き覚えのない声が

響くと空間が裂けて二人が現れた。

一体今度は何だよ！

すると現れたのは西遊記の

孫悟空みたいな出で立ちの  
妖怪と猫又みたいな姿の美女だ。

「美猴、それに黒歌か」

ヴァーリは鎧を解除すると

二人の名前を呼ぶ。

つまりヴァーリの仲間ってわけか。

「大変だにやヴァーリ！

スグに私が手当してあげるにや！」

と、猫又らしき美女はヴァーリに

抱きつこうとするがアイツは

するりと身をかわした。

「心配は無用だ。」

既に傷はある程度癒えた」

「むう〜！ 相変わらず私に冷たいにや！

もっと優しくして欲しいにやん！」

「傷はそれでも魔力はそうは

いかねえだろうよい。暫く温泉で休むこつた」

ヴァーリたちは軽口を叩き合いながら

空間の中に消えていった。

ってオイ！

イツセーはどうするんだよ！ コラ！

「おっばい！ おっばい！

うおおおっばい！！」

って暴れまわるな！

学園が崩落するだろ！！

ブチブチ捕縛網が

千切られるから滅茶苦茶痛い！

「うーん、思ったより

長引くかなこれハ。

具体的には3日3晩位かモ。

まあ、頑張り給えヨ」

三日三晩も引き摺られたら  
俺が死ぬだろ！

誰か助けてくれえええっ  
!!!!

「うん。」

ここはなんとかしよう。

僕にいい考えがあるんだ」

泣き叫ぶ俺の頭上にフツと

現れるなりゲイトさんが

妙なフラグを立てる様な事を

言ってきたが今はいい！

何とかイツセーを止めてくれえ！

「安里、君はここで休んでいるとい」

そう言つて

ゲイトさんはイツセーと

リアスさん達をどこかへ

連れて行かれたのだった。

『うおおお！ おっばい！ おっばい！

うおおっばい!!』

「イツセー！ いい加減になさい!!」

※第41話（イツセー×アーシア リアス 木場 ゼ  
ノヴィア）

俺がハツと気がついたら

いたのは駒王学園ではなく

所謂ラブなホテルの一室の様な部屋だった。

い、一体何がどうなったんだ？

ヴァーリは？リアスさん達は!?

「あら？目覚めたみたいね

イツセーちゃん♡」

「気分はどうですイツセー君？

まあ、ギンギンなチ○ポを

見る限り絶好調みたいですねえ」

それぞれ柔らかな笑みと皮肉げな

笑みを浮かべるニグラ先生と

ナイアちゃんがいた。

しかし、それぞれ普段とは

まるで違う格好をしていた。

肌が透けて見える程に薄い

白のネグリジエと

黒のナイトドレス姿だ……。

なんというか……すごくそそる！

ドクン、ドクンと

俺とドライグの心臓に合わせて

俺のモノがムクムクと膨らみ、

脈動する。

うう…おっばい！おっばい!!

おっばいだああああ!!

やるぞ！今すぐ……!!

俺はそう決意すると



二人へ迫ろうとする。

だが――

「ダメ！ダメですうううう!!」

イツセーさんは私と

エッチするんです!!」

突如二人の後ろから

アーシアが叫びながら

飛び込んできた。

そしてそのまま

俺の上に馬乗りになる。

さらに両手両足を使って

ガツチリとホールドしてきた。

む、胸が！柔らかいものが

顔に押し付けられる！くっ！動けない！

なんて力なんだ!?

「あらあら恋する女の子の子のパワーは凄いわねえ♡」

「まあお互いの初体験の

相手でしたからねえ……」

そんなことを言いながら

ニグラ先生は言いしれない

肉食獣の様な微笑を浮かべた。

まるで俺を雄と認める様な

目つきだ。

その視線だけで俺の

下半身が反応してしまう。

一方ナイアちゃんの方も

アーシアの行動を見て苦笑いしている。

しかしネグリジエと

ナイトドレス越しでも二人の体のラインが

よく分かる。

特にニグラ先生なんかもう

ほとんど裸に近いような感じだし、  
ナイアだつてスリットから彼女の  
アソコが見えている状態だ……！  
したい……！

今すぐにも……！

二人のおっぱいを……！

身体も心も俺のモノに……！！

（一体どうしたんだ？）

まるで俺が俺ではないみたいだ……！）

俺自身が俺の欲望に戸惑う中、  
アーシアが泣き顔で俺の胸に  
その幼さが残る

キレイな顔を押し付けてくる。

ふわりと黄金の様な金髪が舞い、  
ぐにぐにと稔りきつた2つの  
ふくよかなアーシアのおっぱいが  
形を変える。

ああ……最高だよおく！

アーシアの温もりが直に伝わる……！

やわらかい感触と甘い香りが鼻腔を刺激する。

ああ……この瞬間だけは

神に感謝しよう！

神様ありがとうございます！！

って痛たたたた！

そうか！

俺は転生悪魔なんだから

神に感謝するのは拙かった……！

俺は慌てて感謝の言葉を引っ込めた。

だけど……！

それでも感謝せずにはいられない。

だって今の俺は………！

こんなにも幸せだから………！

「あ、あの………♡イツセーさん♡

これを見てください♡」

耳まで真っ赤になつて俯きながらも

アーシアは自分の下腹部、

子宮の位置を指差す。

そこにはハートマークに似た

子宮を象る様な紋章があつた。

「これは？」

「わ、私がイツセーさんの

お嫁さんになる証ですう………！

ニグラ先生にお願いして

描いてもらったんですう………！」

え!?マジで!?

俺はニグラ先生に視線を向けると

彼女は微笑む。

「アーシアちゃんがどうしてもって

いうから仕方なくね♪

良かったわねイツセーちゃん。

こんなに愛してくれる女の子が

側にいるなんて」

「うう………イツセーさんと結ばれるなら

私も頑張ろうと思ひまして………」

な、なんという健気さだ!

俺は感動で思わず涙が出そうになる。

そうだ!俺は今こそハーレム王として

生まれ変わる時なのだ!

俺はそう決意するとアーシアを

抱き締めてキスをする。

「ん………ちゅっ♡れろれろ………♡

イツセイさん♡好きい……♡  
大好きですう……♡♡

「俺も好きだよアーシア。」

君を愛してる。ずっと一緒にいよう！」

そう言つて俺は彼女をベッドに押し倒す。

そして再び唇を重ねた後、

俺は彼女の胸元へ手を伸ばした。

むにゅ♡むにゅむにゅ♡

俺はアーシアのおっぱいを揉みほぐしていく。

柔らかくも張りのある乳房は

手に吸い付くように形を変えていく。

ああ……！気持ちいい……！

最高のおっぱいだよアーシア！

アーシアは目を潤ませながら

恥ずかしそうに身を振る。

そんな彼女の姿は可愛らしく、

俺の興奮は高まっていくばかりだ。

「アーシア……もつと君の可愛い姿を見せてくれ……」

「はい……イツセイさん……」

アーシアは小さく呟くと俺の背に腕を回してきた。

そしてゆっくりと俺達は口づけを交わす。

「ん……♡ちゅっ……はあ……♡」

アーシアは積極的に舌を伸ばしてくる。

そんな彼女に負けじと俺は更に激しく責め立てる。

するとアーシアはピクツと体を震わせた。

「あ……♡だめえ……♡」

ばるんっ♡ばるるんっ♡

アーシアの胸は

俺の掌の中で大きく弾む。

その度にアーシアは艶やかな声を漏らした。

俺のモノは既に限界寸前だ。

早くアーシアと一つになりたい……。

「あらあら、すつかり

イツセーちゃんはアーシアちゃんに夢中ね♡」

「そうですねエ。

お邪魔虫の私達は退散すると

しましょう」

遠巻きに見つめていた

ニグラ先生が俺達の様子を見ながら微笑んでいる。

一方ナイアの方も苦笑いしながら

部屋から退散していく。

えっ…!? 帰るの？

いや、しかしアーシアを

放っておくなんてそんなことは

できないし……!!

あー!

俺の身体が2つあれば良いのに!!

くそお!! 俺の身体さえ自由に動けば!!

俺の身体が2人いれば!!

俺の身体が2倍になれば……!!!

俺の欲望が2倍に膨れ上がったその時、

とんでもない不思議な事が起こった!

パアアツと眩しい光が辺り一面に広がると

俺と瓜二つの男が

現れたじゃないか?!

「え?! 誰ですかあなた?」

突然の出来事にアーシアは驚く。

すると俺に瓜二つの男は

アーシアの唇を奪う。

「ん……いーちゅっ……いー!

れるれる……! はあ……♡ はあ……♡」

「アーシアのおっぱい……いー!

「おっぱい……!!」

男の言葉を聞いたアーシアの顔が  
みるみると赤く染まる。

しかもそれだけじゃない。

くりっ♡くりくりっ♡

桜色のアーシアの乳首と

クリトリスを指の腹と爪先で弄ると、

俺にも解る位に彼女のそれらは

勃起し始める。

「ん…ああん♡

ち、乳首とクリトリス…♡

同時に弄られたら……♡

すごいですう……♡」

アーシアはウツトリしながら

甘い吐息を漏らすと男は益々興奮していた。

「うお……おっぱい！」

「おっぱい！」

「ああ……凄いですう……♡

普段とは違うイツセーさんに

触られるの……♡

強引なもの

き、気持ちいいですう……!!」

ま、待て待て待て！

俺の顔と声で

恥も外聞もなく

おっぱいばかり連呼するん

じゃない！

と、パニックになりかけていた

俺にドライグが語りかけてきた。

『慌てるな相棒。』

あれはお前の欲望によって

産み出された

分身と言うやつだ』

「俺の欲望……だと……!?」

仰天する俺とは逆に

ドライグの声はどこか愉快そうだ。

『フハハハ！俺も『赤龍帝』だの

『二天龍』だの大層な呼び名で

忌み嫌われて久しいが

『おっぱいドラゴン』と

呼ばれ、遂には中身の詰まった分身まで

作り出されるとは思いもしなかったぞ！

クハハ！流石は相棒！

全く恐れ入る！

名付けて『パインサージエント』

(乳独創) と言うのはどうだ?」

「う……うるせえ！

好きでこんなことになってる

訳じゃねえよ!!」

俺は顔を真っ赤にして叫ぶ。

な、なんて事だ！

まさか自分の欲望にアーシアを

奪われかけるなんて……!!

しかもアーシアも満更じやなさそうだし……!

でもアレも俺の本能なワケで……。

浮気とかじゃないワケで……!?

ずりっ♡ずりずりっ♡

ぱちゅん♡ぱちゅちゅん♡

迷っている間にもう一人の俺が

アーシアにパイズリを

してもらっているじゃないか!!

くそお!!羨ましいぜ!!

「アーシアのおっぱい……！」

おっぱい……！」

「ああ……♡」

イツセーさんのオチ○ポ……♡

ビクビクしてますう……♡

こんなにおつきくて逞しいオチ○ポなのに……♡

可愛い♡」

アーシアはもう一人の俺のモノを

その至高のおっぱいにて

優しく包み込むと、

まるで年上のお姉さんさながらの表情を浮かべた。

そしてゆっくりと上下運動を始める。

ぬぷっ♡ぐちゅっ♡じゅぽっ♡

ちゅこっ♡ちゅこっ♡

アーシアの胸の中で奴の肉棒が激しく擦れる。

アーシアの胸の谷間から覗かせる

亀頭の先端からはドロリとした

先走り汗が溢れ出ていた。

「ちゅっ……♡」

その赤黒く膨れ上がり、

ビクビク震える亀頭に

アーシアは軽くキスをする。

すると奴の身体がブルツと震えた。

くそお!!なんなんだこの敗北感は!!

「あ、アーシアッ！」

そいつばかりじゃなくて……！

俺のも……!!」

「はい、イツセーさん♡

いつものイツセーさんも……

ワイルドなイツセーさんもお♡

私のおっぱいでいっぱい



気持ち良くなつて下さいね♡」  
と、アーシアは半身を起こすと  
俺達のモノを左右の下乳で  
挟み込んだ。

「うわ……っ！すげ……っ！

アーシアのおっぱいが

左右から俺のチ○ポで……!!」

「あふっ♡ああっ♡

左右からイツセイさんの

オチ○ポが左右のおっぱいに♡

凄すぎですうっ♡」

「アーシアのおっぱい！おっぱい！おっぱい！おっぱい！！」

俺の分身はアーシアの乳圧に耐えきれず、

白濁液を吐き出した。

ドピユツドピユー……!!

ぐうっ……！俺も……限界だ!!

アーシアのおっぱいに挟まれて果てちまう……!!

どびゅー！びゅー！ビュルルー！

すると忽ちアーシアのおっぱいの中、周り、顔に

精が解き放たれる。

「ふああ……♡素敵い……♡」

アーシアは下腹部の怪しく光る

紋章を愛おしそうに撫でると、

ベッドにその身を横たえ

肩で息をしていた。

出しておいてなんだが

流星にやりすぎじゃないか……？

少しアーシアを休ませなきゃ……。

と、一息おこうとしたその時だ。

ずぶぶぶうっ!!

「あはあああ♡

イツセーさんのオチ○ポ、  
私のお腹に

いっぱい入ってきますうう♡♡♡」

「あ、アーシア!？」

もう一人の俺が躊躇いなく

アーシアの中に挿入していく!

早いもの勝ちと言わんばかりだ!

くそ!なんてヤツだ!

だが、そんな俺の分身に対して

アーシアは幸せそうな表情を浮かべている。

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……」

アーシア……!アーシア……!」

「はあ……はあ……はあ……」

イツセーさん♡もつと……♡

もつと私を滅茶苦茶にしてください♡

俺の分身はアーシアの側にねそべると

彼女の乳首を吸いながら

激しく腰を打ち付ける。

パン!パン!パンツ!

ぶちゆうううう♡

「ああん♡イ、イツセーさん♡

激しい♡激し過ぎます♡あひやあ♡

おっぱいとオマ×コ同時になんてえええ♡

あ、あ、あ、あ♡イツセーさん♡

イツセーさあん♡ああああああん♡♡♡」

アーシアは絶頂を迎え、身体を大きく仰け反らせると、ビクビクと

痙攣しながら、

その豊満なおっぱいと股間から大量の潮を吹き出した。

くそお……!羨ましいぜ!

俺だってアーシアと

あんな風にセックスしたいのに……!

すると、俺の分身がぶるり、と震えた。

「はあ……♡アーシア……！アーシア！」

「ああああ♡♡♡またイクウ♡イツセーさん♡

イツセーさん♡イツセーさあああん♡」

アーシアが二度目の絶頂を迎えると

もう一人の俺がアーシアの膣内に

射精しようとしているのが解る。

だ、ダメだダメだ！

咄嗟に俺はもう一人の俺から

咄嗟にアーシアを引き離し、

上書きするかかの勢いでアーシアと合体する。

「アーシア！今度は

俺がアーシアを抱く番だからな!!」

「ああ……♡ああ♡♡♡♡

凄いですう♡イツセーさんのおち○ポが

こんなに奥までえ♡

あ、あ、あ、あ♡イツセーさん♡

イツセーさん♡イツセーさん♡」

アーシアの膣内はまるで

生き物のように俺のモノに絡み付いてくる。

「さん付け禁止！イツセーって呼んでくれよ！

アーシア!!」

「はいいいい♡

イツセーさああん♡好き♡大好き♡イツセー♡」

アーシアは俺の首に腕を回し、キスをしてくる。

俺もアーシアの背中に手を回して抱きしめた。

アーシアのおっぱいが俺の胸板で潰れて形を変える。

アーシアはキスをしながら

俺のモノを自分のボルチオに擦りつけてくる。

ぬちゅっ♡ぐちやっ♡ずちよっ♡

卑猥な水音が部屋に響く。

アーシアのおっぱいを揉みしだき、  
腰をアーシアの子宮めがけに  
ひたすら夢中で突き立てる。  
アーシアの喘ぎ声も次第に大きくなり、  
快楽に溺れた表情を浮かべていた。  
ズブツ！グチュツ！  
パンツ！パンツ！パンツ！  
まるで太鼓を鳴らす様に  
肉と肉がぶつかり合う音が激しくなる。

「はあ……はあ

アーシア……！アーシア！」

「イツセーさああん♡もつと♡

もつと突いて♡もつと犯して♡

イツセーのチ○ポで私を

ママにして下さあい♡」

アーシアの言葉に理性を失った俺は  
更に強く激しくアーシアを貪る。

アーシアが俺のモノを

強く締め付けるたびに射精感が込み上げてきた。

「あっ♡あっ♡

イ、イツセー♡わ、私の中あ♡

気持ちいいですかあ？

私のおま○こお♡

イツセーのオチ○ポでいっぱい

ぐちやぐちやに

掻き混ぜられてますううう♡」

アーシアの言う通りだ。

俺とアーシアの結合部はもう

お互いの体液が入り混じり泡立っていた。

「ああ……アーシアの中は最高だよ……！  
熱くてヌルついて……！」

俺のを離さないように吸い付いてきて……!

アーシア……!好きだ……!愛している……!」

「ああん♡嬉しい♡

私もイツセーの事が好きです♡♡♡

はうううう♡♡♡」

アーシアが一際大きな声で鳴くと同時に

彼女の身体が大きく跳ね上がる。

そして、それと同時に彼女の膣内が収縮し、

俺のモノを強く絞り上げた。

どびゅ!びゅー!ドピユツ!

俺の分身から大量の精液が流れ出すと、

アーシアの膣内に収まり切らずに溢れ出した。

「ああっ♡出てる……♡

熱い……♡

イツセーのせーえき……♡」

アーシアは幸せそうに呟くと、

俺のモノから流れ出る白濁した

液体を愛しげに見つめた。

「はあ……はあ……はあ……」

アーシアとのセックスを終え

息を整えている最中に後ろから

別の女性の甘い喘ぎが聞こえた。

「ああん……♡イツセー……♡

ああん♡イツセーのオチン○ン……♡

アーシアだけズルいわ……♡

次は私がイクところを見て頂戴ね♡んんっ♡」

振り返るとそこには

全裸のリアス先輩がいた。

その豊満なバストをもう一人の俺に対して

押し付けるように抱きついていて、

股間からは大量の蜜が垂れ流れていた。

「え、り、リアスさん!?

どうしてここに……?」

「あら、イツセーったら……」

そんな事を聞くなんて野暮よ♡

私はどんなイツセーの事の中でも

誰よりも好きなんだから♡

ああっ♡

そんなに強く

おっぱい吸わないでえ♡」

俺の問い掛けに答えながらリアスさんは

もう一人の俺におっぱいをしやぶられ、

乳首を甘噛みされていた。

むにいいいいいい♡

くにいいいいいい♡

おっぱいを揉み潰され、

おっぱいを噛まれているのに

リアスさんの口からは

喘ぎ声が漏れる。

「んはああっ♡いいいっ♡

もっとおっぱい虐めてっ♡イツセー♡

あああん♡そ、そこお♡気持ちいいっ♡

私……おっぱいだけでイツちやいそおっ♡」

俺は二人の情事に釘付けになっていた。

あのリアスさんがこんなに乱れて……

それにおっぱいも凄い!

あれだけのポリウムなのに

形も整っていて張りもある!

しかも、あんなに激しくされても

全然嫌がってないどころか悦んでる!!

「リアス……リアス!」

リアスのおっぱい!!」

もう一人の俺はひっきりなしに  
おっぱいを揉みしだき、時には口で吸い付き、  
時には歯で齧っていた。

「ああん♡イツセーのスケベ♡

私の胸ばかりなんて……♡

でも、いいの♡

優しい貴方も素敵だけど……

強引でケダモノみたいなイツセーも好き♡」

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……！」

俺は無意識のうちに背後から

リアス先輩を抱き締めていた。

「きゃあっ♡イ、イツセー？

いきなりどうしたのかしら？

んんんんんんんっ♡♡♡」

そしてそのまま強引に唇を奪う。

「ちゅぷ♡れろお♡ちゅぱ♡

じゅるるるるるるる♡♡♡」

舌を差し込み、激しく絡め合う。

唾液を流し込み、相手のそれを飲み干す。

「んふうううううううう♡♡♡」

キスをしながら俺は右手で

リアスの乳房を驚掴みにした。

「んんんんん♡♡♡」

柔らかさの中に確かな弾力がある。

指の間から肉がはみ出しそうさ。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

前後から俺に責めを受ける

リアスさんはもう限界の様だ。

「ああん♡ダメエ♡激しいっ♡

イツセー激しすぎよっ♡はああん♡♡♡」

リアスさんが一際大きな声で鳴くと

同時に彼女の身体が大きく跳ね上がった。  
汗とフェロモンと愛液が混ざり合った匂いが  
辺りにむわっと立ち込める。

リアスさんが絶頂を迎えたのだ。

そのあまりにドスケベな光景に

俺の息子は硬度を取り戻していく。

そして……!!

ぬぷううう♡♡♡

「あああああ♡♡♡

い、いきなりおま○こなんて……♡

ダメえ♡イクウ♡」

ビクビクッ

と身体を痙攣させ、リアスさんは再び達した。

イツたばかりで

ドロドロに粘ついたリアスさんの

膣内はヒクつき、俺のモノを

一瞬たりとも離すまいと

絡みついてきた。

俺は後ろからリアスの胸に手を回し、

もう片方の手でクリトリスを刺激すると

彼女はスイッチを押されたかのように

自ら腰を振り始めた

。

「ああん♡イツセーのオチン○ン♡

奥まで届いてるわ♡はあん♡ああん♡

イツセーのオチン○ン気持ちいいつつ♡

もつと突いてつつ♡」

「くっ………リアスのアソコがキツすぎるっ………!!

でも、負けるかっ………!!

俺のチ○ポもリアスの子宮に

入りたがっているんだ………!!」



パン！パン！ズチュ！ヌプツ！  
俺はピストン運動を繰り返しながら、  
同時にリアスの乳首を強く摘む。  
すると、リアスの喘ぎ声が大きくなる。

「ああん♡乳首をそんなに

弄られたら私またイツちやいそう♡

ううううん……♡んぶうっ♡」

興奮しきってるリアスの口を塞ぐように  
四つん這いになった彼女の口に  
突如もう一人の俺がペニスを  
差し込んでいた。

前後からくし刺しの形になった

リアスは一瞬目を白黒させたが

直ぐに麻酔がかかった様にトロンとした表情になる。

更に自ら積極的に舌を絡ませ、

喉の奥深くで受け入れていた。

「んんっ♡んぶう♡んんんっ♡」

リアスは口内を犯しているペニスに

夢中になってしゃぶりついている。

「んっ♡んんっ♡んんっ♡」

リアスがフェラチオをしている間も

俺は腰の動きを止めない。

「ぐうう………！」

そっちの俺のチ○ポを

そんなに美味しそうに………！！

しかもアソコの

締りも粘つきも増すなんて………！！」

俺達はリアスの痴態に我慢できず、

益々ピストンを加速させる。

「ああん♡イツセーのが

私の中を激しく出入りしてるの感じるっ♡

「はあん♡ああん♡いいのお♡こんなの初めてえ♡」  
くあ……！リアスの膣壁が

俺のモノに吸い付いてくる……！

俺は歯を食い縛り、射精感に耐えながらも

リアスのGスポットを探し当てると、

そこを中心に責め立てた。

「ひゃあん♡そこっ♡そこだめっ♡

イツセー♡そこ弱いからああ♡」

弱点を見つけたことで一気に余裕がなくなったのか、

リアスの声には切羽詰まったものが混じり始める。

しかし、それでも彼女は健気に舌を動かし続け、

もう一人の俺のモノへの奉仕を忘れない。

その献身的な姿に俺はますます欲情する。

俺はリアスの尻を鷲掴みにして、激しく打ち付けた。

その度にリアスの乳房が揺れ、汗が飛び散った。

リアスはもう限界に近いようだ。

俺の方ももうすぐだ。

リアスの膣内の締め付けが更に強くなり、

俺のモノに絡みつく。

「ああん♡イツセーのおちん○んが

ビクビク震えてるわ♡

ああん♡出して♡いっぱいちょうだい♡」

ドピュッドピュー！！

その言葉を皮切りに

俺はリアスの最深部に

容赦なく精液を放った。

「ああああああ♡♡♡」

その瞬間、リアスは身体を大きく仰け反らせ、

最大の絶頂を迎えた。

「はあはあはあ……」

「はあん♡イツセーの熱いのがたくさん出てる♡

ああん♡まだ止まらない♡」

「くっ……っ」

リアスの膣内に大量の精子を流し込む。  
それと同時に、リアスの膣内が激しく収縮し、  
俺のモノから一滴残らず搾り取ろうとしてきた。  
その刺激に思わず腰をグリグリと押しつけてしまう。

「お……お……♡♡♡」

恐らく意識が飛びかけていた

リアスにはそれがトドメとなったようで、  
ビクンビクンと身体を痙攣させながら、  
白目を剥いてもう一人の俺から顔射を  
受けながら気絶してしまった。

俺の目の前にはアへ顔を晒した

リアスとアーシアが横たわっている。

二人とも完全に脱力しており、

荒い息遣いだけが聞こえる。

その息遣いに呼応する様に二人の秘所からは  
愛液が止めどなく溢れ、

太腿を伝ってシーツに染みを作っている。

そして、二人は未だ快樂の余韻に浸っている。

俺は、そんな彼女達の姿を眺めながら、

自分の股間を撫で回す。

そこには、未だに硬度を保ったままの息子がいた。  
したい……っ！

もっ……っ！もっ……っ！！

と、俺の欲望が叫ぶ。

もっ……っ、もっ……っ……っ！

けど今のダウンしている二人を  
抱くのは流石に危険すぎる……っ。

俺は必死に理性を総動員させて  
欲望を抑え込んだ。

すると、

ニグラ先生とナイアが退出した  
ドアからゼノヴィアが入ってきた。

「これは……一体!？」

突然の事に驚くゼノヴィア。

無理もない。

部室に入ったら、

リアさんとアーシアが

裸で喘ぎながらその裸体を

ベッドに投げ出して

いるんだもんな。

しかも、全員下半身丸出しで。

そりゃビックリするよ。

でも、そんな事より大事な事がある。

それは……!!

「うおおお……!!」

おっぱい!!おっぱい!!

ゼノヴィアのおっぱい!!

ビリビリイ!

もう一人の俺が

ゼノヴィアの服を強引に破った!

ば、バカ!

幾ら何でもレ○プは駄目だろう!

「きゃあん!」

が、当のゼノヴィアは

悲鳴と言うより、

女の子らしい可愛い声を上げた。

それを聞いた俺の心臓が

大きく跳ねる。

か……!!かわいい……!!

俺の中で何かが弾けた。

「ま、待ち給えイツセー♡

そ、そんなに強引なあ♡

君のご両親に

挨拶もしていないのに♡♡♡

ああっ……♡」

むにっ♡むにっ♡

もう一人の俺は

無我夢中でゼノヴィアの胸を

揉んでいた。

「やっ♡やんっ♡だめえ♡」

ダメと言いながらも、

ゼノヴィアの表情は

完全に蕩けていた。

こ、この……!!

ドスケベ聖剣使いめえ!

何て羨ましい!俺だつて!

俺だつてあんな風にゼノヴィアに甘えてみたい……!!俺の心に

またしても嫉妬心が芽生え、

俺のモノに熱が帯びていく。

「ゼノヴィアアアア!!」

「ああっ♡き、キミまで♡

キミまで私に夢中なんだな♡♡♡」

俺はもう我慢できずに、

もう一人の俺と同じようにゼノヴィアの服の

一部を破り捨てると、その大きな胸にしゃぶりついた。

「はああ♡」

俺は赤ん坊のように

ゼノヴィアの大きな乳房を吸った。

ちゅぱ♡ちゅぷ♡ちゅるるるる♡♡♡

甘い味と匂いが口の中に広がり、

頭がクラクラしてくる。

俺は本能的に母乳を求めていた。  
しかし、いくら吸い付いても  
一向に出てくる気配はない。  
当たり前だけど……。

「ああん♡い、イツセエ♡イツセー♡  
ああん♡そんなに強くう♡す、吸いすぎだよお♡」  
「んん……い……」

ゼノヴィアの艶っぽい声で、  
俺のモノはさらに元気になった。

俺達はさらに激しくゼ  
ノヴィアのおっぱいを貪り続けた。

左右から乳首を吸われる

ゼノヴィアはリアスとアーシアの様に  
戦いの時とは別人の緩みきった

顔で腰をカクカクと揺らし、  
そのおっぱいを波打たせた。

「ひゃうん♡ダ、ダメだ♡」

わ、私は♡わ、わたし♡な、何かくる♡  
くる♡来ちやう♡来ちやう♡」

ビクンビクンッ!

ゼノヴィアが身体を震わせながら絶頂を迎えた。

「ふわー……」

ゼノヴィアは、まるで魂が抜けたかのように惚けてる。  
その顔はとても可愛くて、  
思わず見惚れてしまった。  
けど、まだ足りない……! !

「あ♡ああ♡待て♡」

待ってくれ♡私はまだ……♡

イツセーとキスすらしてないのに♡

こんなの酷いよお♡♡♡」

ビクビクと痙攣するゼノヴィアだが

無意識の内に彼女の膣穴は  
俺の亀頭にフレンチキスを  
繰り返している。

「そんなにオマ○コを

俺のチ○ポにキスさせて

言われても説得力ないぜ……」

俺はそう言いながら、

ゼノヴィアのファーストキスを

もう一人の俺と交互に奪う。

「やっ♡だ、だめだ♡

そ、それ以上は♡

本当におかしくなってしまう♡

やめてえ♡こわいい♡♡♡

ちゅっ♡ちゅう♡

れろれろ……。

すっかりゼノヴィアは俺達との

前戯に心を奪われたようで、

俺の舌が膣内に侵入する度に

「あん♡」とか「やん♡」といった

可愛い声を上げて悦んでくれた。

「はあ……♡はあ……♡

お、お願いだから……♡

も、もつと優しくしてくれ……♡」

ゼノヴィアが涙目になりながら懇願する。

けど俺のモノはそんなゼノヴィアを見て、

ますます大きくなっていく。

「大丈夫……！痛くしないよ……！

気持ちよくさせるだけさ……！」

「ぞ、そういう意味じゃ……！

あっ♡あんっ♡ああっ♡」

ゼノヴィアの抗議を無視して、

俺はゼノヴィアをクリトリスを軽く? いてカリツと甘く噛む。

「……ん!? お、お、っ♡♡」

ゼノヴィアが仰け反って悶える。

……あ、あれ?

ちよつと強すぎたかな。

でも、ゼノヴィアの表情を見ると、とても感じてくれてるようだった。

するともう一人のものが

ゼノヴィアの背後に回り込んで

背後から胸を揉み始めた。

俺も負けじとゼノヴィアの膣穴に息を吹きかけ、陰唇に何度もキスをする。

そして、俺達の愛撫に反応するように、

ゼノヴィアの乳首がピンと勃起し、

おっぱいがプルンと震える。

「あぐっ…♡ひっ♡ひいん♡

た、たすけてえっ♡

おかしくなるっ♡

イツセーとのセックスで♡

バカになるっ♡

頭バカになるうう♡♡♡」

プシヤアアア!

ゼノヴィアの股間からは大量の潮が吹き出し、ベッドシートに大きな染みを作った。

ゼノヴィアは、あまりの快感に

自我を失いかけていた。

「あはあっ♡

ゼノヴィア♡イツセーくん♡

イツセーくんにおしっこ

かけちゃったああ♡」



ゼノヴィア潮を吹きながら  
錯乱気味に叫ぶ。

「いいんだよ……ゼノヴィア。」

これは君が俺達の恋人になる  
儀式だからな」

俺はゼノヴィアの頭を撫でてやった。

「う、うん……♡」

したい♡ゼノヴィア♡

イツセーのモノになる儀式する♡

セックスする♡

イツセーの赤ちゃん産む♡♡♡」

するとゼノヴィアは

まるで催眠術にかかったように

瞳をトロンとさせ、俺達に服従宣言をした。

「よし。それなら俺と

もう一人の俺で

ゼノヴィアを孕ませてやる。

覚悟しろよ？」

「うんっ♡ゼノヴィアをいっぱい愛して♡

二人の精液で♡ゼノヴィアを溺れさせてえ♡♡♡」

な、なんてエロい日本語なんだ……！！

ゼノヴィアは外人だけど、

日本人以上に日本語の表現を理解しているようだ！

素晴らしい！

……が、どっちの俺が

初めてを貰うべきだろうか？

もう一人の俺はゼノヴィアの

おっぱいに夢中だがそのペニスを

ゼノヴィアの陰唇にずりずりと

擦りつけている。

い、いかん！このままでは

俺の欲望の化身に

ゼノヴィアの初めてを奪われてしまう！

それはマズい……………！

と、その時……………。

「やあ、イツセー君♪」

突然木場が入ってきた

じゃないか!?

どうしたんだ突然!?

「うふふっ、実は僕もね、

今日はイツセー君に愛してほしくて

やってきたんだけど……………♡」

いや、その男の姿のままでも言われても困るんだけど！

そのユニセクシヤルな雰囲気で

言われるとヤバイ扉が

開きかねない!!

「所で……………」

ぬる♡ぬるっ♡

もはやゼノヴィアの

愛液なのかももう一人の俺の先走り汗なのか

わからなくなつた粘液が、

奴の亀頭にまとわりつく。

「あはああ♡イツセーのチ○ポが

私のオマ○コの入り口にキスしてくれて……………♡」

幸せそうに目を閉じるゼノヴィアは

自分から奴のチ○ポに腰を下ろそうとしていた！

すると……………。

「うおおお……！おっばいいいい!!」

我ながら何て節操のない

欲望の化身だろうか……………！

イザイヤさんの姿になつた

木場の豊乳にもう一人の俺は

ゼノヴィアをポイツと放ると、  
彼女の胸にしゃぶりついた。

「ああんっ♡もう、

そんなに僕のおっぱいが好きなのかい？

嬉しいなあ♡じゃあ、

僕はこっちのイツセー君を

可愛がってあげるよ♡

僕だけの……イツセーくん♡」

「おお……おおお……！

木場……！木場のおっぱいいい！」

いや、木場……

お前目からハイライトが

消えている様な……。

ヤバイ扉を開けたのは

木場の方なのか!?

しかしその時ゼノヴィアは

涙目になっていた。

い、いかん！

もう一人の俺がした不始末を

フォローしなければ……！

「あ、あのさ、ゼノヴィア。

別にゼノヴィアが木場より

魅力がないとかそういう事じゃないぞ？

ほらっ、ゼノヴィアには

ゼノヴィアの良さがあるというか、

なんっーかさ、

つまり、えつと、ゼノヴィアもすっげえ可愛いぜ？」

俺は必死になってゼノヴィアを慰めると

ゼノヴィアの涙が治まった。

「イツセー……♡

イツセーが私を愛してくれるなら、私はそれで十分だ。

ありがとう、イツセー♡」

「ああ、愛してやるとも」

俺はゼノヴィアを抱きしめた。

その一方で……。

「ああ♡イツセーくん♡

イツセーくん♡♡♡

キミが僕を選んでくれたって

事は…僕を一番愛しているんだね♡♡♡

嬉しいよお♡♡♡ 気持ちいい♡

イツセー君の生ハメセックス……気持ちいい♡」

「うおお……！木場！木場！！」

いつの間にやらもう一人の俺と

木場が完全に盛り合っていた。

なんか二人共凄い勢いで

お互いを求め合っている。

凄く複雑な気分ではあるが仕方ない。

こうなった以上、俺はゼノヴィアを満足させるだけだ。

俺は背面座位の姿勢で

ゼノヴィアの体を受け止める。

「ゼノヴィア、行くぞ？」

「うん……来て♡イツセー♡」

つぶ……♡

まずは亀頭から……。

「うっ……」

「くうう……」

ぷち……ぷちぷち……

じわじわと雁首まで挿入っていく。

初めて男を受け入れる彼女

にとってはこの圧迫感はかなりキツいだろう。

だが、それでも彼女は健気に微笑んでくれる。

俺はゆつくりと、だが確実に、

彼女の膣内へと侵入していく……。

やがて、俺のペニスが根元まで飲み込まれた時、

「ああっ、入って……きたあ……ッ。」

イツセーのチ○ポ、奥まできてりゅ……っ♡はあ、はあ、イツセーのチ○ポ……

あつたかくて、気持ちいいよ……♡」

ゼノヴィアが熱い吐息と共に呟いた。

その言葉に俺も興奮し、更に膨張してしまう。

「うっ、うっ、イツセーの、

また大きくなってる……♡」

「ゼノヴィアの中が熱くて、

締め付けてくるからだ……。」

痛くないか？ゼノヴィア……」

俺の言葉にゼノヴィアは首を横に振った。

そして、潤んだ瞳で言う。

「平気だ……♡」

それよりもっと……キミと

一つになっているのを感じたい♡」

その表情は快樂に蕩けていた。

その顔を見て、俺も我慢できなくなってきた。

ゼノヴィアの腰を掴み、下から激しく突き上げる。

ぱんっ♡ぱちゅっ♡ぐちやっ♡

ぬるるっ♡ずぶっ♡

「ああああああっ!!すっ!!いっ!!」

激しいっ!!あはっ、あはははっ、ああああっ!!」

ゼノヴィアの口から苦痛ではなく歓喜の声上がる。

「ゼノヴィア……!ゼノヴィア……!」

ゼノヴィアあっ!!」

「ああんっ!イイよっ!イイっ!」

ああんっ、イツセーのおち○ぽお、

私のおま○こをいっぱい突いて、

すごく感じてるよお♡」

俺は夢中で腰をゼノヴィアの胸を揉みながら振り続ける。

俺の手の中で、彼女の乳房が形を変えていく。

それはまさに前衛芸術だった。

指の間からはみ出す程のポリウムある乳肉が、卑猥な形に変形する様は、

見ているだけで射精してしまいそうだ。

そうしている間にも、

もう一人の俺とのセックスもまた

激しさを増していた。

木場の巨乳がもう一人の俺の顔に押し付けられ、

奴は木場を犯しながらおっぱいを吸いまくっている。

木場の顔は女の快楽に蕩けきっていた。

「あはあ♡僕のおっぱい、

そんなに美味しいかい？

じゃあ今度は僕の番だよ♪

僕のおっぱいを吸ってオマ○コしていいのは、

イツセー君だけなんだからあ♡」

木場は、自分の胸にむしやぶりつくも

う一人の俺を愛おしそうな目で見つめると、

「ほらあ、イツセー君♡僕も動いてあげるよ♡

一杯気持ちよくなつて……♡

男の気持ちよさを知る僕だからこそ

イツセー君を一番良くしてあげられるんだから……♡」

自ら腰を動かし始めた。

「うおお……木場……！」

祐斗！祐斗！」

もう一人の俺は、まるで発情期の猿のように

木場の尻を鷲掴みにして、

パンツ♡パンツ♡と音を立てて打ち付ける。

「あはあ♡イツセー君のオチンポが、  
僕のなかで暴れ回ってるよお♡

ああ、僕もうダメえ♡イツセーくん！  
僕、僕、イツっちやうよおおつ!!」

木場が絶頂を迎え、体を震わせた。  
しかしもう一人の俺は止まらない。

「木場あああああつ!!」

「え!?! イツセーくうんっ♡♡♡

いきなり膣内射精なんてええ♡♡♡」

どびゅっ!びゆるっ!!どびゆるるる!!

「うおおおおおおおおお!!」

もう一人の俺の精液が、

木場の膣内に大量に注がれていった。

量も粘り気も俺の数倍の量はあるだろうか……??

その様を見て呆けていた俺に

ゼノヴィアが自ら全力で腰を降り出した!

「うおお……!」

どうしたんだ、ゼノヴィア!」

「私も、キミを愛している……♡

だからキミの赤ちやんが欲しい……♡

今すぐ……♡早く……♡

イツセーの精子がほしい……♡

お願いだ……♡私の中に出して……♡

孕ませてくれ……♡

イツセーの子供を産みたいのだ……♡

ああああっ♡イクツ!イツてしまうううっ♡♡♡」

ゼノヴィアが全身を大きく痙攣させ、

膣内が激しく収縮する。

「うっ……!」

その刺激に耐え切れず、俺も限界を迎えた。

「出るぞ、ゼノヴィア……!」

俺の子を……妊娠してくれ……!!」

「ああっ♡イツセーの熱いのが、中にたくさん出てりゅ……♡嬉しい……♡イツセーの子供がデキたら、きつと可愛い子が生まれるだろうな……♡」

どびゅっ！ どびゆるるる!!

ゼノヴィアは胎内に

溢れるまでのザーメンを

俺から注がれながらも

幸せそうに微笑んだ。

ヤバイ…凄くかわいい……!

ゼノヴィアのかわいさに興奮し、

更にペニスが大きくなっていく。

「ああんっ♡また大きくなった……♡」

ゼノヴィアは嬉しそうに

言うのと、再び腰を振り始めた。

ま、待ってくれ……!

少し休憩を……!?

しかしそんな俺の願いなど聞き入れられる筈もなく、

木場のみならず回復した

アーシア、リアスが俺に群がる。

「うおおおおー」

おっぱいいい!!」

身動きの取れない俺を放って

もう一人の俺はドアを開けて

向こう側へと行ってしまう!

俺を置いていくなあ……!

だが、もう一人の俺は振り返らず、

そのまま部屋を出ていった……。

そして、残された俺はというと……。

「イツセーさん……♡」

「イツセー……♡」



「イツセー君……♡」

「イツセー……♡」

俺の目の前には、裸の美少女たちがいた。

リアスさん、アーシア、ゼノヴィア、それに木場。

彼女達は皆、俺に好意を寄せてくれる女の子たち。

か、身体よ持ってくれよ……！

※第42話（匙×花戒桃&仁村留流子 イツセー×ニ  
グラ&ナイア&シユターク）

うう……ま、また来てしまった。

俺は匙元士郎。

支鳥蒼那、もとい

ソーナ・シトリー様の眷属だ。

そんな俺が今いるのは……

保健室だ。

と、言ってもこの間の様な

如何わしい事が目的じゃないぞ！

禍の団の攻撃で負傷した

悪魔だけじゃなく、

墮天使や天使を治癒するために

来たんだからな!?

「はー忙しい、忙しいッスー！」

「聖女の微笑みとまでは

いかずとも回復用の人工神器を

創造されるなんて、流石

アザゼル様……！」

でもコレ使うと凄い疲れるんだけど……」

ミツテルトと、

レイナーレだったかな……。

確か安里といい仲の墮天使だが

看護士姿で奔走していた。

とにかく野戦病院さながらの

忙しさだがその中でも

てきぱきと指示を飛ばす

女性が俺の目を引いた。

銀髪で長身、ノースリーブの

黒いドレス姿のワンピースの女の人だ。

確か名前はセルベリア・ブレス。

アザゼル総督の盟友である

ゲイト・オールドワン直属の

配下らしい。

『君の神器は魔力、霊力の

吸収並びに血液の譲渡や

分与が可能だと聞いたが

事実か？』

はい、と答えたばかりに

俺は『黒い龍脈』を

フル稼働して

臨時の麻酔士や、点滴係と

なったワケだ……。

……………

そして数時間後。

ようやく皆の治療が終わったようだ。

治療を受けた悪魔達が次々と

部屋を出て行く中、

ソーナ様の言いつけで

同行していた仁村と桃先輩が

ベッドにもたれかかっていた

俺を見下ろしていた。

「見てましたよ〜元士郎先輩。

大活躍でしたね♪」

「私も先輩として鼻が高いわ元ちゃん♪」

2人とも眩いばかりの笑顔だ。

はつきり褒められると

なんだか照れくさいな……。

「ああ、ありがとよ二人とも。

でも今回はたまたまだよ。

セルベリアさんがいなければ  
どうなっていた事か……」

「確かにあの人はスゴいよねー。  
バリバリのデキる女って感じ？  
私たちも見習わないとね」

「そうねえ。」

あんな風になれたら素敵かも。

ああいう女性って憧れちゃいます」  
憧れの先輩を思い浮かべるような  
目で仁村が言っている。

そ、そうですか……。

何にせよ、

無事に終わったなら良かったぜ。

「あ、でもそう言えば……」

ニグラ先生は？」

仁村が言うニグラ先生ってのは

ニグラ・サセコヴィツチ。

この駒王学園の保険医だ。

まあ、色んな意味でスゴい人だよ。

ウン……。

「何でもイツセー君の治癒が

あるからここは任せるって

セルベリアさんに丸投げしたみたい」

「ええっ!？」

そんな無責任な……。

元士郎先輩はどう思います？」

いきなりこつちに話を振られた。

職務を放棄するなど言語道断!

……と会長なら仰りそうだな。

しかし、俺はその……。

あの人に色々弱みを握られている

わけなので……。

「そ、それはそのう……」

なんと申しますか……」

口ごもりながら言葉を濁す俺を見て  
仁村は呆れたようにため息をつく。

「やっぱり元士郎先輩も」

あの人の味方するんですね!?

信じられない!

それだから会長さんも物に

できないんですよ!!」

「ちよ、ちよつと待て!!」

会長は今関係ないだろう仁村!」

それにしても……。

会長の事を言われたら

ついムキになってしまう

自分がいる。

「もういいです!」

元士郎先輩なんか嫌いです!」

プイっと横を向いてしまう仁村。

しまった、またやってしまった……。

すると、それを見ていた桃先輩が

ポンポンと優しく俺の肩を叩く。

「大丈夫よ元ちゃん。

そういう時はアレを使うの。

ほら、例のセリフを言ってみて」

れ、例の台詞と言われても……!?

ま、まさか桃先輩……!?

ニグラ先生の秘密を

知っているのか……!?

「ぎ、早く。恥ずかしがらずに」

そう俺を急かす先輩は

どこか色気漂う表情だった。

仕方がない……こうなればヤケだ！ 俺は意を決してあの呪文を唱えた。

《いあーる むなーる

うが なぐる となろろ

よらならーく しらーりー！

いむろくなるのいくろむ！

のいくろむ らじやにー！

いえ いえ しゅぶ・にぐらす》

するとあの時と同じ様に

俺の視界がグニヤリと歪み、

仁村と桃先輩、そして俺は

あの桃色空間へと

転送されていくのであった……。

ー

「こ、こころは……!?!」

ツインテールを揺らしつつ

仁村は不安そうにキョロキョロ

左右を見回す。全裸で。

ちなみに俺もいつの間によら

全裸だ。

「あら、元ちゃん。

どうしたの？ そんなに慌てちゃって。

まるで初めて

お風呂に入った時の男の子みたい♪」

クスツと笑いながら桃先輩は

俺の手を取りベッドへ誘う。全裸で。

「な、ななな……!」

何をしているんですかあ！

桃先輩！ 元士郎先輩!!」

顔を真っ赤にして叫ぶ仁村。

しかし桃先輩は涼しい顔だ。

「ふふん♪ 私だっついっまでも

会長の後ろに甘んじてばかりじゃないって事よ♪」  
そう言いつつ、

まるで魔女の様に妖艶な笑みを浮かべる

桃先輩はその白色の長髪も

合わせてとても美しい。

「元ちゃん。

今日こそ私のモノになってもらうわ。

さあ、覚悟してちょうだいね♪」

「げ、元ちゃん!？」

元ちゃんって何ですかあ!?! って、きやあつ!」

「フッフ。」

相変わらず可愛い声を出すのね

仁村さん♪」

「うう……。」

せ、先輩いく……。」

涙目で俺へと助けを求める仁村で

あったがその視線は徐々に

俺のモノへと向けられる。

「な、何でそんなに

先輩のモノがムクムクって

大きくなってるんですかあ!?!」

「えっ? いやこれはその……!」

何というか……!」

「あ、元ちゃんったら……。」

そんなにおチン○ンを

勃起させていけない子ね……!」

もう我慢できないわ……!」

桃先輩はそう言うと、

俺の股間に向かって

するすると手を伸ばした。

「あぁっ！ 先輩ダメですっつてば！

そんな所触っちゃイヤですっ！

このままだと元士郎先輩まで

変な気分になっちゃいますからあ!!」

しかし時既に遅し、

というのだろうか。

俺は桃先輩の手コキによって

完全に興奮しきっていた。

しかも、いつもの

会長にされている妄想をしながら……。

ああ、会長……!

俺、会長の為に頑張ります……!

だから会長も俺の事、いっぱい可愛がって下さい……! 俺が会長

への想いを馳せていると、

仁村がプルプル震えながら俺に問いかけてくる。

「何ですか！ 会長、会長って!」

私だって本当は……! ホントは!

元士郎先輩の事大好きなんですからあ!!」

「きゃん♡」

え? 口に出ていたのか?

ドン、と桃先輩を押しつけて

俺のモノを桃先輩に変わって

握ってくる仁村。

「も、元士郎先輩!

今私が気持ち良くさせますから!」

そう言っつて桃先輩の真似をするように

俺のを上下に擦り始める。

うお……! あの仁村が

顔を真っ赤にしながら

必死に……!



「はあはあ……！ 元士郎先輩……！

好き……！ 大好き……！ 元士郎先輩……♡」

しかも自分でオマ○コを弄りながら……！

後輩が生オナニーショーを

見せながら手コキまでして

くれるなんて……！！

反則過ぎるだろ……！！

「うお……！ 出る……！

仁村……！ うおっ……！！」

ドピュツ！ ビュルルルーツ！！

俺は仁村の手に思い切り射精した。

「はあはあ……！

元士郎先輩の精子が

こんなに一杯出てるう……！！」

仁村は俺の精液が付着した

自分の右手を見ながら頬を紅潮させる。

そして、そのままそれを

口元へ運ぶと舌を出してペロリと舐めた。

「ん……♡美味しい……♡」

に、仁村が……あんな

スケベでいやらしくて

変態みたいな表情をするだなんて……！！

普段真面目で元気娘な仁村からは

想像もつかない程エツチな表情だ。

「フッフッ。

元ちゃんったら、

随分と良い顔になったじゃない♪」

桃先輩は俺の頬にキスすると、

射精したばかりなのに復活した

俺のモノを手取る。

「あらあら、凄いわねコレ。

まだ全然萎えてない。

ねえ元ちゃん、今度は私が  
イかせてあげるわね……♡」

桃先輩はそう言うと、

仁村とは違う強さでゆつくりと

俺のモノを扱っていく。

「ねえ♡元ちゃん♡

私の事好き？」

「す、好きでしゅう……！」

呂律も回らず俺は答える。

すると桃先輩はそのピンク色の唇を開き、

俺の唇と重ねてきた。

「ちゅぱっ、れろっ、じゅるるる……！」

「ふぁあっ……！ せんばいい……！」

「フツッ♪ 元ちゃん、可愛いわよ♪」

だ、ダメだ……頭がドロドロに

なっていく……！

このままじゃ俺……！ 俺……！

桃先輩の事が本気で好きだって思っちゃおうよ!!

そして俺は、

気付いた時には桃先輩の胸に顔を埋めていた。

柔らかくて大きな胸に

包まれた俺の頭の中は桃色に染まっていく。

「元ちゃん……♡

私の事、本当に好きなのね……♡」

「はい……」

「もう、仕方がない子ね……♡

ほら、私のおっぱいでいっぱい甘えなさい♡」

「むぎゅっ……」

先輩に抱きしめられ、

その豊満な乳へと顔を押し付けられると

何もかもどうでもよくなっていく。

「元ちゃん、どう?」

気持ちいいかしら?

桃のおっぱいで

包まれる感触は……♡」

「はい……すごく柔らかくて

いい匂いがします……」

「フフツ。嬉しいな♪」

元ちゃんったら、すつかり

私のおっぱいに夢中になっちゃって……。

まるであっちのイツセー君みたい」

はい?

何で急にイツセーの話が

出てくるんだ……?」

「ふふ、気になる?」

じゃああつちを見てみなさいな」

と、桃先輩の言葉に従い

名残惜しくも先輩のおっぱいから

顔を離れた視線の先には……!?

「んああああん♡」

イツセーの顔をそれぞれの

両胸に挟み込んで

喘いでいるニグラ先生と

ナイアちゃん。

そしてバキバキに反り立った

イツセーのモノをその爆乳で

挟み込む黒いロングヘアに

片目が隠れた女の人がいた!

「ひよ、兵藤先輩!」

仁村はイツセーを見て、

ひっ、と言わんばかりに

声を漏らす。

そう。仁村が驚くのも無理はない。

何故ならイツセーの評判は

変態行為を控える様になったとは

いえまだまだ悪いからだ。

しかし、仁村にイツセーは

一瞥もくれずにニグラ先生と

ナイアちゃんのダブルぱふぱふと

女の人からのパイズリに

夢中だった。

「うおおおお!!」

おっぱい！ おっぱい!!

おっぱい!!!」

ニグラ姉さんとナイアの

双頭おっぱいに挟んで貰いながら

奴はひたすら叫んでいた。

気持ちは解らんでもないが……!

「ああん♡イツセー君のおち○ぽ、

どんどん硬くなってくう♡」

「あはあん♡ボク達のおっぱいの中で

安里くんより硬くておっぱい

チ○ポがビクビクしてるヨ♡」

「凄いですー誠くん♡

安里よりも、

あそこの匙って

男なんかよりずつと

大きいし硬いし熱い……♡それに……♡」

「「きやーっ！ 出たあああ♡

すーごーいっ♡♡♡」」

「うおおおおっー!」

どびゅるるるるる!!!

と勢いよく放たれた精液は  
二人の顔面にまで飛び散り、  
パイズリに励む女の人を  
窒息寸前まで追い込んだ。

「ぶはあ……♡ 凄い量……♡」

でもまだ元気そうだね……♡」  
す、すげえ……。

ナイアちゃんに当てつけられた事も  
忘れて俺はイツセーの  
酒池肉林っぷりに見入っていた。

「や、やっぱり」

兵藤先輩は最低です……！

それより先輩……！」

仁村が一誠への嫌悪感を示しつつ  
キツと俺を睨みつけてきた。

な、何だ？

俺もイツセーと変わらない

性欲魔人ぶりに愛想を尽かされたのだろうか……!?  
と、思った矢先だった。

「な、何ですかナイア先輩の

あの言葉！ 匙なんかよりもって！

私が、私がいるのに！

ナイア先輩といやらしい事を

先にしたんですか!？」

「へ?。」

「わ、私はそんな事、

先輩にして貰った事ないのに……!」

「い、いや待て仁村……!」

誤解だ!

俺はまだ生身の女の人とは

……」

仁村の剣幕に押されながらも俺は必死に弁解する。  
だが仁村は俺の話など聞かずに  
俺に跨ろうとする。

「な、何をするんだ!？」

「セックスします! 先輩と！」

私だって先輩が好きなのに……! 先輩……!」

仁村は目に涙を浮かべながら俺を見つめてくる。

ええい、こんな状況で

初めての生身の子との

セックスを……!

いや、こんな状況だからこそ、

なのか……?」

ぐっ♡ぐぐっ♡むちっ♡

胸よりも肉付のいい仁村の尻は

程よい弾力をもつて俺の跨に当たる。

「あ、ああっ……」

「あう……♡」

その快感に二人揃って

甘い声をあげてしまう。

まだ挿入もしていないのに

セックスが始まったら俺達……!

「ふふ、元ちゃんのおチン○ン

仁村ちゃんに入りたくて

ウズウズしているみたいね♪」

「そ、そうなの?」

じゃあ入れるよお? せえんぱあい……♡」

「ああ……いいぜ……仁村あ……」

仁村はゆっくりと腰を下ろし、

自分の中へと俺のモノを入れていく。

もう抵抗しようとも思わなかった。

仁村が欲しいなら幾らでも

付き合うさ……。

「はあん♡入ってますう……♡

私の中に先輩のがあ……♡」

「くっ……！」

仁村は入れただけで軽く

いった様でぎゅつと目を閉じている。

そして仁村の膣がキツくなった事で

俺にも限界が来た。

「仁村……！ 出るぞ……！」

うおおお!!」

「あん♡ダメよ元ちゃん、

そんなにすぐに射精しちゃ♡

仁村ちゃんの処女オマ○コが

キツキツで最高だからって、

ねえ♡」

桃先輩からダメ出しをされてしまうが

そう言われても……！

すると桃先輩はチロチロと

俺の耳をなめ回しながら囁く。

「我慢できない？」

なら、貴方の『黒い龍脈』を

私に繋げて分与してみて♡

あなたのおチン○ンの気持ちよさ、

セックスの気持ちよさを

私に教えてえ♡♡♡」

ちゅるるるるるる♡れろっ……♡

じゅるるるるるる♡♡♡

ちゅるっ♡ぺろんっ……♡

ぢゅるっ……♡はあはあ……♡

桃先輩の荒い息遣いと囁きに

俺は逆らう事が出来ず、

彼女の舌技に翻弄されつつ、  
俺の体には今まで感じた事の無い力が  
湧いて来るのを感じた。

「うっ……！　く、来るっ！」

『黒い龍脈』を発動させ、

桃先輩の提案通りに

彼女の下腹部と乳首にまるで

電気マッサージ器の様に繋げるや彼女は

今まで聞いた事もない様な艶っぽい声で喘いだ。

「はひひひひひひひひっ♡♡

ここ、これっ♡すごいっ♡

これが男の人の感覚なのねえっ♡

こんなの初めてっ♡

あなたも気持ちいいのよね？　ね？　♡

もつと突いてえ♡私達の奥まで来てえええええッ♡

「は、はい……！」

俺は桃先輩の言う通り仁村の

膣内をガシガシと刮りぬく。

すまん、仁村……お前にも！

ずぶぶっ！！

「あっ……！　先輩！

そんなに激しくしたら私……！

あああっ！　イツくううううううーっ！」

どぴゅーっ！　びゆるるるる！　びくん！　びくん！

仁村は目を剥き、

潮を吹きながら絶頂する。

破瓜の痛みと苦悶は俺の

『黒い龍脈』で吸収することで

セックスの快樂だけを仁村に

与えてやれるって寸法だ。

「ああん♡元ちゃんのおちんちんで



仁村ちゃんがイクところ見ちゃったわ……♪  
元ちゃんもいつぱい出してあげなさいね……?」

「はい……!」

俺は仁村の尻を驚掴みにして  
更にピストンを加速させる。

「ああ……ああ♡ああ♡♡♡♡

気持ちいい♡せんぱい好き♡

大好きですうううう♡

ああっ! また来ちゃいますうううっ♡

先輩、私、いつちやいますうううっ!!」

ああ、いいぞ仁村!

何回でもイクんだ! 俺のチ○ポで!

「おっ♡おっ♡おっ♡♡♡♡

桃先輩の絶頂でイクながら

私がいクウ……♡

私の絶頂で先輩達が気持ちよくなるう……♡♡♡

アクメループ完成しちゃいまひたあ♡♡

あはあっ♡♡♡」

もう仁村の頭の中は

俺のチ○ポと桃先輩のアへ顔と

絶頂の事しか頭にない様だった。

「元ちゃん、そろそろ時間切れよお♡

仁村ちゃんもそろそろ限界みたいだし♡」

「くっ……!」

もうそろそろか……。

俺はラストスパートをかける。

「あっ♡先輩のが膨らんで♡

出そうなんですネ?♡

私の中にください!♡

先輩のせーえき♡

留流子のお腹の中に欲しいですうううっ!

♡♡♡」

俺達はお互いの名前を呼び合いながら果てた。

「留流子！ 出すぞお！」

うおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

「はいいい♡留流子もイキます♡

イク♡イク♡イク♡

イグウウウウウウウ♡

会長より先に先輩と

できちやった結婚しゆるううう♡

♡♡♡あはあああ♡♡♡♡♡♡♡♡

どびゆるるるるるるっ!!!

どぶっ！ どびゆるるるるるっ！

びゅーっ！ びゅーっ！

「ふおおお♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「おおお♡♡♡♡♡」

仁村と桃先輩は同時にアクメした。

桃先輩は白目を向いて舌を出してビクビクしている。

その光景に俺は思わず興奮してしまう。

……凄いな。

これが女の人のオーガズムなんだ……

「はあ……♡はあ……♡

はあ……♡ふう……♡

どう？ 元ちゃん、気持ちよかったかしら……♡」

「は、はい……！ とても良かったです！」

「それは嬉しいわ♡

ねえ、今度は二人だけでしましょう……？

仁村ちゃん、今はもう

グロッキーしているし……ね♡」

桃先輩はそう言い、

自分の割れ目を指差す。

俺は彼女の提案に二つ返事で

了承してしまう。

そうだよな……。

こんな俺を想ってくれる  
後輩と先輩を放っておくなんて……  
出来るか……！

イツセーの気持ちがおほんの  
少しだけ解った気がするぜ……。

「ねえ……元ちゃん♡」

次は元ちゃんが自分の好きな風に動いてみて……♡

私のオマ○コの中で♡」

「は、はいー！」

俺はくぱあつと尻を向けて

自分から割れ目を広げる

桃先輩に促されるまま、

自分で腰を動かし始める。

パンツ！ パアンツ！

俺は桃先輩の尻を掴み、乱暴にピストンを繰り返す。

「あんっ♡すごい、

仁村ちゃんとしてた時より

元ちゃんのピストン激しいっ♡

元ちゃん、私の事好き？♡愛してる？！」

「はいっ！好きです！愛しています！」

「ああ……♡うれしい……♡」

私も大好き……よっ♡」

んちゅっ♡んむっ♡じゅぽっ♡

れろっ♡ぴちやぴちや♡

桃先輩は俺の首の後ろに手を回し、

情熱的なキスと腰振りをしてくれた。

俺はそれに答えるように

彼女の唇を貪り、唾液を交換する。

「ならあ……♡」

あっちで

3人とセックスしてる

イツセー君より先にイツちゃ

ダメよ……♡頑張ってね……♡」

「はい！頑張りますー！」

「ふふつ、良い子ねえ……」

じゃあいくわよ？ せえーのっ！

えいつ！ ほおーらっ♪

えへ♡えいつ♪ んっ♪ んんん♪ どう？」

桃先輩は俺のピストンに合わせて

小さく可愛らしい声で喘いでくれる。

た、たまらない……!!

「ああっ！先輩の中、オマ○コ

気持ちいいです！最高です！」

「うふふ……良かったわ……♡

でも、まだイクのは早いからね？

もう少し我慢しよう……♡」

イツセーの方を見ると

ニグラ先生、ナイア、女の人の

尻を横に並べ、二人の膣を手で

弄りつつ、交互に奴のチ○ポで

蹂躪していた。

「ぶはあっ……♡美味しい……♡

安里ちゃんよりずっと

イツセーちゃんのオチ○ポ

美味しいのお……♡

もつと欲しい……♡」

「ああ、素敵い……」

イツセー君、いえ、

ナイアのご主人様あ……♡」

「ああっ♡イク♡イクウ♡

安里クンじゃ届かない所に

キミのチ○ポが届いてるよオ♡」

三者三様にイツセーに

すっかり身も心も

虜にされたかの様に喘いでいた。

なんだか安里の奴が

可哀想になつてきたな……。

アイツも悪いヤツじゃないのに。

女運に恵まれないのか……？

まあ、今度飯奢つてやるか。

そんな事を考えていると、

ぐいっと桃先輩に引つ張られ、

強引に桃先輩の顔の前に突き出される。

そしてそのままベロチューされてしまう。

じゅるるるるる!!

俺は抵抗する事なくそれを受け入れる。

桃先輩との口付けはとても甘く、

脳髓まで痺れるような感覚だ。

俺は桃先輩の舌に自分の舌を絡め、

お互いの唾液を交換し合う。

「ぶはあ……♡元ちゃん、

私とセックスしている時に

他の事を考えちゃダメよ……♡」

「はい、すみません……」

つい、うっかりしてしまった。

そうだよな、

今は目の前にいるこの人のことだけ考えよう。

「ああっ……♡元ちゃん、

また大きくなってる……♡

もう限界みたいね……♡

良いわ……膣内射精で

さっきのことは許してあげる♡」

桃先輩はそう言い、俺の耳元で囁く。

その言葉を聞いた瞬間、

俺は頭が真っ白になり、絶頂した。

どびゅっ！　びゅーっ！

「きやあっ♡熱い……♡」

元ちゃんの子種、いっぱい出てるう……♡

私も仁村ちゃんと

合間できちやっただ結婚式になるかもお……♡♡」

桃先輩の子宮に

大量の精液を吐き出すと

彼女のお腹は少し膨らんで見えた。

俺はそれを確認してからゆっくと

桃先輩の秘部から自分のイチモツを引き抜く。

すると、ドプツという音と共に、

桃先輩の割れ目からは白い粘液が流れ出る。

そして……。

イツセーもまた、

同時に果てたようだ。

「ああ……♡イツセーちゃんの

アツアツ精子、私の中に入ってる……♡

んっ♡んんっ♡ああんっ♡」

ニグラ先生がぶるぶる震える中、

次は自分だと言わんばかりに

女の人が先生から引き抜いたばかりの

イツセーのモノを招き入れ、

激しく前後運動を繰り返す。

イツセーはイツセーで彼女の腰を掴み、

何度も腰を打ち付ける。

パンパンパンパン！

パンパンパンパン！

「ああッ！　イク！　イクよオ！　イツセー君！

一緒にイコウ!

イツセー君のアツイのを中に出してエ♡」

「おお……おっぱいいい……う？」

イツセーは

彼女の一番奥に

勢いよく精を解き放った。

しかしおっぱいって何だ？ 他に言いようがあるだろ。

「ああんっ♡すごい！ すごいイー！

熱くて濃いのがドクンドクンって中で暴れてるウ！

♡

あああっ♡イクウウウ——♡♡♡」

女の人がチロチロ蛇の様に舌を出しながら

身体を大きく仰け反らせ、ビクビクと痙攣する。

イツセーは最後の一滴まで出し切ろうと、

彼女の膣内にゴールを決め続ける。

「はあ……はあ……♡

気持ちよかったア……♡」

女の人は満足げな笑みを浮かべて

ベッドに身を投げ出すと

流石にイツセーも尻もちをつく。

すると今度はナイアちゃんが

イツセーに馬乗りになると、

イツセーの腕を自分の胸に抱き込む。

「ご主人様♡

私にももつとちようだい？

ほら、まだ元気だろ？

テメーの唯一の取り柄なんだから

猿みてーにチ○ポ立てろ♡」

あれ？ ナイアちゃんって

あんな口調だったっけか……？

それにあんなにサドっ気あったか？

「おっぱい……いい……」

「ヒハハハハ！ バカか？」

おっぱいじゃなくてオマ○コだろ！

なあ、クソ虫御主人様がよお！」

ナイアちゃんはイツセーを罵りながら  
蚤が跳ねる様なすごい勢いで腰を振る。

イツセーはというと、もう

完全にされるがままになっている。

でも、確かにアレは凄いな……。

さつき出したばつかなのに

二人のケダモノセツクスにあてられた

俺のモノももうビンビンだ……！！

すると仁村……いや留流子と

桃先輩……桃は勃起した俺のモノを見て、  
クスリと笑う。

「元ちゃん、そっちの子達に見惚れる位なら、  
私としましょう……♡」

「先輩……♡私も……♡」

あの人達より私が……

先輩のオチ○ポ気持ちよくしますう♡」

俺は二人の恋人に迫られ、

すっかり理性を失っていた。

「先輩……♡」

「元ちゃん……♡」

ちゅっ♡じゅるるるるるっ!!!!

俺は二人同時にキスをし、舌を絡める。

「それで……俺、二人にして

ほしい事があつて……」

「ふふっ♡元ちゃんの

してほしい事なら何でもしてあげるわ♡」

「わ、私だって……！」

二人はそう言つて、



俺のリクエストに従い、

それぞれのお尻の割れ目に

俺のモノを挟み込んでくれる。

俺はその感触に興奮し、思わず腰を動かしてしまう。

「あつ♡先輩、ダメですう……♡」

「元ちゃんつたら、しょうがない子ね……♡」

ずぶっ！ ぐちよっ！ ぬちやつ！

さんざん出した精液をローション代わりにした

ダブル尻コキは極上のもだった。

「ああつ……♡先輩の……熱い……♡」

「んっ♡元ちゃんの熱いのが

お尻に当たってるのがわかるわ……♡」

ああ、最高だ……！

こんな最高の恋人の思いに気づかないなんて

俺はなんてバカだったんだ……！

いずれは会長……貴方にも

俺の思いを……！

牙を研ぐ様に、いや……

まるで刀を研ぐかのように

俺は二人の尻を砥石にするように、

己の刃を擦り付ける。

そして、ついにその時が来た。

「ああー！ 出るー！ 出るぞー！ 留流子！ 桃！

受け止めてくれ！ 俺の想いを！ うおおおおお!!」

どびゅー！ びゅー！ ぶしゃああああー！

「きゃあああ♡出てます♡先輩のがいっぱい……♡」

「んんっ♡すごい量……♡」

私の背中にまでびちびち跳ねて、

当たってるう……♡」

俺は二人の尻の間に挟まったまま

最後の一滴まで絞り出そうと腰を振っていた。

「ふう……」

落ち着いてちらりとイツセーに  
視線を戻すと……。

「お……お……お……ぱい……い……い……」

!?

な、なんかアイツやつれてないか？

それに今一瞬、イツセーが何か喋ったような……？

まあいいか。

どうせまた、

おっぱいおっぱいとかいう下らない事だろう。

「うふふ、イツセーちゃん♡」

夜はまだまだこれからよ♡

もつと、もつと楽しみましょう♡」

「はああ……いいい……」

「オラッ♡」

一滴残らずチ○ポ汁出すまで

終わらねえからなあ♡

量が減ってんぞ♡気合入れろ♡」

「はああ……」

イツセーの息も絶え絶えな返事に

満足げな笑みを浮かべると、

ナイアは再び腰を振り始めた。

それだけじゃなくて

イツセーの顔を塞ぐ様に

女の人とその爆乳を押し付けていく……!!

「ん、ふう……♡」

今で何回目のセックスか解るかナ？

イツセーくうん……♡」

「……………」

おいおい……。膝枕する

ニグラ先生のおっぱいに伸ばしたイツセーの手が

ぱたりと落ちたぞ。アイツ、大丈夫かな……？

↓

安里Side

「しかし煉獄さんが本当に無事で  
良かったよなあ」

旧校舎が吹っ飛んでしまった事で

ある意味ホームレスとなってしまったギヤスパーを歓迎する意味  
も

込めて今、俺達は

ホームパーティーをしている

最中だ。

「すまんな！

心配をかけてしまった様だ！

あの爆発の時、

俺は咄嗟に地面を抉って

地に潜ったのだ！

天元から聞いていた

『微塵がくれの術』の応用だ！

持つべきものは友とはこの事だな！

ワツハツハ！」

「へえ、流石ですねえ……

さ、どうぞどうぞ」

そう言いながら俺は酌をしつつ

内心、冷や汗を流していた。

(いやいや、

いくらなんでもそれは無理があるでしょう……)

側のニトクリスさんも

同じ気持ちらしくやれやれ、

と肩をすくめている。

「ま、いいじゃねえか。

この国には『終わりよければ

『全てよし』って言葉があるだろう？  
なあ？」

「ひいッ！ 赤い槍！  
怖いですううう！！」

ランサーさんが場を仕切り直そうと  
ギヤスパアの肩をポンと叩くと、  
ギヤスパアがビクついて  
悲鳴をあげるや段ボールに籠もる。

「お、おう。悪かった。  
でも、ほら。お前だつて  
あんな凄い力を手に入れて  
強くなつたんだしよ。  
もうちよつと

胸張つてもいいんじゃないか？」

「こら、もやし。らんさーに  
しつれいだろう」  
ランサーさんがフオローに  
入っているのにキユクロの奴が  
段ボールをひよいと持ち上げる。  
北風と太陽じゃねえんだぞ！

「や、やめて下さい〜！」  
「うるさい。みんなは

しんぱいしてきてるんだ」  
「そ、そんな事言われても……」

僕、こんな見た目だし、  
皆からも能力で  
怖がられてたから……。  
こんな風到人前で  
話したりパーティーに  
参加する事なんて……。  
あ、ありがとうございます」

「……あ？ ああ。そうだな」

俺がなんとも言えない表情で答える中、

「どうやら皆集まっている様だな」

キリツとした顔でミートローフの

入った器をミトンで持ちながら

セルベリアさんがやって来た。

この人、軍人さんだったらしいのに

意外に料理が得意なんだよな……。

ギャップ萌えというか

家庭的な面もあるんだなって

感心してしまうぜ。

「ああ、ミートローフか。」

良い匂いだな」

「うむ。今日は私が腕によりをかけて作ったからな。

沢山食べてくれ」

「は、はい！ 頂きます！」

まあ、ギヤスパーも馴染めそうで良かった良かった。

しかしイツセーの奴は学校休んで

どうしたんだろうな……。

アーシアちゃんもいるから

病気って事はないだろうが……。

## 第43話

カツン、カツンと

地下へと降りるたびに音が響く。

向かっているのはアザゼルの

お手製秘密基地の地下室だ。

キイ……と

扉を開けて中に入る。

「……………」

地下なのに窓がないことを

除いてはホテルばりに

綺麗な室内。

そしてベッドには

アザゼルに捕らえられたっていう

女の人が寝かされていた。

この人って確かあの時の……。

確か旧魔王家の一員で

カテレア・レヴィアタンだったな。

『お前の【燃える二眼】の

糸は相手の脳にも

干渉できるんだそうだな?』

アザゼルはこの部屋のカギを

俺に手渡す前にそう言っていた。

一応は……な。

「それじゃ

ちよつと試してほしい事がある。

精神と肉体が別れた女に

新しい精神を入れて、

その後元に戻したらどうなるか

一度試してみたいと思わないか?」

さらつとんでもねえ事言うなよ!

つかそんな実験のために  
俺をここに呼んだのか!?

「悪魔の法に照らせばコイツは

滅びの魔力で消滅させられても

文句は言えない立場だぞ？」

魔王として得た資質や才覚を

全部無にする位なら

愛人にするなり参謀にするなりした方が

世のため人のためだろ？」

おっさんは俺の罪悪感を

打消そうとしているようだ……。

ミツテルトやレイナーレの

前例もあるし今更善人ぶるなど

言うのだろうか……。

俺はしばらく考えた末

結局アザゼルの提案を受け入れた。

本当に俺ってどうしようもねえ。

そんなわけで俺は

カテレア……いや、カテレアさんの

耳元に糸のようにか細くした

【燃える三眼】の触手を伸ばす。

うわあ……。

なんか変な気分になつてくるぜ……。

何せ自分の恋人とかそういうんじやなくて

あくまで他人の身体だからな。

しかもその相手が美女ときてるから

尚の事やりにくいったらない。

しゅるり……しゅるり……。

俺の伸ばした【燃える三眼】が

彼女の耳に絡みつくように入り込む。

そしてそれは鼓膜から脳にまで達する。

するとカテレアさんの

頭上のモニターのスイッチが入る。

そこには何かの映像のようなものが表示されている。

……なんだこれ？

見たところ、

カテレアさんの

精神状態のモニタリングを

しているらしいのだが……。

「お前は旧魔王の血を引く者なのだ」

「あんな下等な成り上がりものに

何故負けたのだ！

レヴィアタン家の恥晒しが！」

「貴様などもはや不要だ！消え失せよ!!」

「恩知らずめ！

恩知らずめ!!

恩知らずめ!!!」

「誰も……誰も……私を

愛してくれない……。

お父様も……お母様も……

クルゼレイも……誰も……。

私はいつたいなんなの？

何のために生まれてきたの？」

うーん……。

何だか可哀想になってきた……。

まずはこの辺りを変えてみるか。

まずは毒親をまともな親にしてみよう。

そう思って俺はアザゼルに言われた通りに操作する。

『カテレア……。』

おまえは素晴らしい子だよ』

「おとうさまっ！」



おお！いきなり親父と抱き合うとは  
なかなかいい感じじゃないか！

「カテレアよ。お前は我が家の誇りよ」  
今度は母親が幼い頃のカテレアさんを褒めてくる。

「ありがとうございます。おかあさま」

満面の笑みのカテレアさん。

うん！いいね！いいよ！

この調子でどんどん変えていくぞ！

そう思った矢先のことだった。

「カテレアちゃんって可愛いよね〜」

「えへへ……そうかな？」

「ねえねえ今度デートしない？」

「はい！喜んで♪」

おいおい……

さつきまであんなに頑なに

なっていたのがウソみたい

クルゼレイといい仲になりやがって。

捏造した記憶とはいえ

人のイチャコラを見せつけられるのも存外癪だな。

あのヤロー、カテレアさんと

いうものがありながら

俺にちよつと負けた位で

心折れやがって……。

よし、ここは書き換えよう！

ここをこうして……、

ああして……こうだ！

↓

そして一通りの精神干渉を

終えたあと、俺はカテレアさんを

起こすことにした。

「……………ん？」

むくりと起き上がるカテレアさん。

「大丈夫か？」

俺が尋ねると彼女は  
きよとんとした顔で呟く。

「はい……」

どうやらうまく行ったようだな。

カテレアさんの瞳はあの過去の

映像の時のような

狂気じみた光は宿っていない。

これでよかったのだろうか？

よかったん……だよな？

「あなたは？」

そんな俺の心中はともかく

カテレアさんは不思議そうな顔をして尋ねてくる。

「九頭竜安里だ」

俺が名乗ると、

「安里さん……」

クルゼレイの魔の手から

私を助けてくれたのは

貴方なのですね？」

「ま、まあ……ね」

アイツには悪いが

元恋人のクルゼレイに騙されて

オーフィスの蛇を植え付けられた、

という設定にした。

アザゼルも特に異論はないようだ。

そしてカテレアさんは

アザゼルの方を見るなり、深々と頭を垂れた。

「アザゼル総督……」迷惑をおかけしました。

旧魔王家の末裔として、

あるまじき失態です……」

「気にするな。」

「お前は利用されただけだ」

「私の力……ですか？」

「そうだ。お前は強い。」

「それこそ並の上級悪魔では歯が立たない程にな」

「おっさんはしみじみと言う。」

「まあ、復元したとはいえ」

「この墮天使総督の片腕を」

「ふっ飛ばしたワケだしなあ、」

「カテレアさん。」

「だが心の方はどうだ？」

「旧魔王家のしきたりだの」

「純血だのと、そんなくだらんものに縛られて、」

「お前は本当に幸せだったのか？」

「その証拠が今の状況だろう？」

「アザゼルが言う。」

「流石墮天使総督だって口がうまい。」

「確かにその通りかもしれませんが……。」

「私にも思い当たる節がありました。」

「しかし、これからどうすれば良いのか……。」

「なら簡単だ。自分の意思を持って。」

「自分が何を望んでいるか？」

「それを見つめ直せばいい」

「はい……。」

「カテレアさんは素直に頷く。」

「それと、」

「これは俺からのアドバイスだ。」

「自分を偽り続けるのは疲れるぞ？」

「だからもっと周りを見ろ。」

「仲間を信じて頼れ。」

「そしたらきつと道は開けるさ……。」

おっさんは最後にそう言った。

「はいっ！」

カテレアさんは力強く返事をする。

ま、これで俺はお役御免だと

思ったのだが……。

その数日後、

俺はアザゼルに呼び出された。

「なんだ？」

まだ何か用があるのかおっさん？

「

俺は少しうんざりしながら

アザゼルに尋ねる。

するとアザゼルは真剣な顔つきで

俺の質問に答えてきた。

「ああ。実はだな。

お前に折り入って

頼みたいことがある」

「何だよ、『神の子を見張る者』に入れ

とか言うなら断るぞ」

するとアザゼルの奴が

頭をポリポリ掻き始めた。

「まああわよくば、

とは思っていたが……。

それはそれとして

カテレアの事だよ……。」

「何？結婚でもするのか？

引き出物は皿以外で頼むわ」

冗談めかしてそう返すと、

アザゼルは苦笑を浮かべながら首を横に振った。

そして真面目な口調で言う。

まあ、アザゼルの表情から察しはつくが。

このタイミングでカテレアさんの話となると  
一つしか無いよな……。

「お前さんの精神干渉が

殊の外効果バツチリでな……。

これからはお前の陰となり

日向となり、支えたいんだと」

カテレアさんは俺に精神干渉されたあと、

俺と行動を共にしたいと申し出て来たのだ。

アザゼルとしては、

俺にカテレアさんの監視をお願いしたいらしい。

まあ…仕方ねえよな……。

実行犯は俺なワケだし……。

「分かったよ。

カテレアさんの面倒くらい見てやる」

「おおー引き受けてくれるか！助かるぜ！

……ところで、

お前さんはカテレアの事をどう思ってる？」

「どうって……」

「カテレアは美人だし、頭もいい。

それに……お前さんとカテレアは

結構相性が良いと思うんだよな」

な、何だか話の流れが

変わってきたぞ……!?

「いやいやいやいや、待ってくれ。

俺にはカテレアさんは勿体ないよ」

「そんなことは無いと思うけどな……。

じゃあ、カテレアが嫌だって言うなら諦めるが……。

どうだ？」

何でアザゼルが見合いの

仲間みたいなポジションになってるんだ……？

まあ、向こうから

俺みてーな転生悪魔ですらない  
馬の骨みたいなモンなんて  
ゴメンだ！つて言うはずだ！  
きつとそうだ！

「オメー、女心を解ってねえなあ」  
アザゼルは煙草をふかしながら  
俺の考えを読む様な事を  
言いつつ天を仰いだ。

「な、なにいつ?!」

「お前さんはもう少しカテレアの気持ちを考えてやった方がいい。

まあ、そういう訳だから

今、カテレアを呼んでくる」

そう言つてアザゼルは

その場を後にした。

取り残された俺は、どうしたものかと思案する。……しかし、数分  
後。

アザゼルに連れられて来たカテレアさんを見て驚愕する事となる。

「安里さん……。」

この度は

ご迷惑をおかけしました……。

そして、私を助けてくれてありがとうございます」

「えっと……」

カテレアさんは伏目がちに

もじもじしている。

「それで私は考えたのですが……

純血だの旧魔王だのと

拘っていたのは間違いだったと気付きました。

ですから私、これからは貴方の眷属悪魔として誠心誠意仕えさせて  
頂きます！」

カテレアさんはそう宣言すると、俺に抱きついてきた。  
うおおっ!? 柔らかな感触がっ!!

「カ、カテレアさん……」

「カテレア、とお呼び下さい。……それと敬語も必要ありません。だって貴方は私の主なのですから……」

そう耳元で囁かれると、背筋にゾクツとした感覚を覚えた。

まあ、確かにこの人は美人でスタイルも良い。

その上、性格も真面目で能力も高いときている。

俺なんかより遥かに良い男がいくらでも居るだろうに……。

「いやいやいやいや！ちよつと待て！アンタは俺が怖く無いのか？それに、こんな俺に付いてきて後悔しないのか？」

するとカテレアさんは、少し寂しげな表情を浮かべた後、真剣な眼差しでこちらを見つめてきた。

「……正直に申し上げれば、

最初は恐ろしかった。

あのクルゼレイを一蹴する程の

方ですもの……。

でも、今は違います。

私が今まで出会った

どの殿方よりも、

貴方様は素晴らしいお方だと

理解しています。

……それに、

私はもう決めたんです」

「何を？」

「純血だの混血だの転生だのと……

そんな下らぬ考えを打払うためには

新たな時代を作る命が必要でしょう？」

カテレアさんは愛しげに笑みを浮かべると、

俺の手を握りしめた。

「あ、あのですね……。

俺は一応ガクセーなんで……。

結婚とかはまだ早いかなあ、と」

俺のその言葉を聞いたカテレアさんは、  
一瞬キョトンとすると、クスリと笑う。

「ふふふ、その様な些事に

安里様が気を患う必要は御座いません」

「いやー大事だよ!？」

「あら、では……」

将来的な展望としては考えてくださるのですか?」

「そ、それは……まあ……」

「なら、よいではありませんか」

そう言っているとカテレアさんは

朗らかだがどこかゾクツとする

妖艶な笑みを見せた。

何だか、この人のペースに乗せられてるな……。

」

「おーい、安里!

飯食いに行こうぜ!

偶には俺が奢ってやるよ」

昼休みに匙が珍しく食事に

誘ってきた。

左右には後輩の仁村ちゃんと

桃先輩が控えている。

「いや、俺はいいや……」

俺がそう言うと、

三人は不思議そうな顔をした。

「どうしたんだ?」

留流子や桃……いやいや、

二人の事は気にしなくてもいいぞ」

二人を名前呼び……。

あ、そういう事か……。

「いや、俺にはコレがあるから」

と、言って弁当箱を見せてやる。



ピンクの包みに

入れられた二段重ねのお重だ。

「あら？ひよつとして愛妻弁当？」

桃先輩が誂う様に言う。……あ、愛妻って！

まあ、確かにそう見えなくもないけど……。

「い、いやー！」

これは母親が作ったモンなんです」

俺は慌てて否定する。

すると、仁村ちゃんが

口を挟んできた。

「嘘だあ、前に先輩は

ウチの親は放任主義だって

愚痴ってたじゃないですかあ」

「うぐ……」

何で俺が言ったことを覚えてんだよ……。

しかし、困ったな……。

「安里、別に無理して隠す必要は無いと思うが……」

「いや、本当に違うんだよ。じゃ」

ボロが出ると拙いので

俺はそそくさと屋上へと

逃げ出すこととした。

」

「しかし……いつの間に

俺の好物を知ったんだよ……」

弁当箱の中は、色とりどりの

美味しそうなおかずが所狭しと詰められている。

「ま、まさか……。

これ全部カテレアが作ったんじゃないよな……」

見た目は完璧だ。

だが、料理の腕が絶望的に下手という

可能性も捨てきれない。

俺は恐る恐る箸で卵焼きを口に運んだ。

……う、美味しい……！

俺に語彙力がないのが

悲しくなる位に美味しい！

他のおかずも絶品だった。

下の重箱はノリで文字が

書いてある。

『目指せ大魔王』って……。

俺、魔族じゃないからね！

……しかし、俺にこんな美人の

嫁さん候補が出来るなんてな。

しかも、カテレアは真面目だし、

性格も良いときている。

もしかすると、この先……

良い関係になれるかも知れんな。

始まりこそ最悪に近いが……。

↓

「ただいまー」

帰宅した俺とギヤスパーを

出迎えたのはカテレアだ。

流石に裸エプロンなんて事はないが……。

何故かメイド服姿である。

「おかえりなさいませ、旦那様」

ぽっ……と顔を赤らめながら、

上目遣いにこちらを見つめてくる。

「ど、どうしてそんな格好を

しているんですかああ!?!」

「何です?」

「ひいっー」

明らかにギヤスパーが

ギロリと眼鏡越しにメンチを

切られてショックを受けていた。  
面食らうのも無理は無いよな。

何せ旧魔王がメイドの姿だぜ……。

現魔王家のセラフオルー様は  
魔法少女姿だったが

レヴィアタンってそうなの？

「いえ、アザゼル殿と

セラフオルーからの薫陶を

受けまして……。何事も形から

入るのがセオリーだと」

あ、セラフオルー様とも和解したんだ……。

それはいいけどセラフオルー様も

もう少しチヨイスをだな……。

いや、凄いいメイド長っぽくて

似合うけどね!!

「まあ……」

カテレアさんは頬に手を当て、

少し照れ臭そうに微笑む。

これは中々……。

「ぼ、僕見たいDVDがあるので……!」

こ、コラ!ギヤスパー!

俺を置いていこうとするな!

「あら、では私もお供いたしますわ」

そう言うとかテレアは自然な動作で腕を組んでくる。

「ちよ、ちよつと待つて!」

何で付いて来るんだ!?

「旦那様のお世話をする為です」

「いや、その設定まだ続いているのかあ!?

「はい」

カテレアさんはニツコリと笑う。

幸せそうならまあいいか。

よくねえ。

そんなワケで俺は  
ギヤスパーとカテレアと  
DVD鑑賞をしているワケだが……。  
俺の隣にはカテレアが座り、  
ギョツと身体を寄せている。

「うふふ……」

俺が側にいるだけで  
心が満たされているのだろうか。  
男としてはこの上ない名誉だが  
この状況は色々マズい……。  
ギヤスパーは気まずそうだし。  
しかも見てるのは

『魔法少女マジカル☆レヴィアたん』だしき！

何でこんな物を見てるのかと言えば、  
ギヤスパーがクラスの話題に  
ついていくためだとか……。

カテレアさんは楽しげにテレビ画面を見ているが、  
俺はもう気が気じゃない。

「あ、あの……」

意を決して俺はカテレアに  
話しかけた。

「何でしよう？」

「いや、その……セラフオール様とはもう、  
大丈夫ですか？」

「まあ、旦那様は

私の身を案じて下さるのですね……  
嬉しいです……」

うっとりとした表情で

俺の手を握り締めてくる。

これは俺が何言っても好意的に

解釈している様だ。

「セラフオールとは最早

遺恨はありません。

それに彼女の妹の夢の話を

聞いて私も感銘を受けましたもの」

セラフオール様の妹……。

ああ、会長さんか。

匙から聞いた話じゃ

転生悪魔だろうと下級だろうと

分け隔てなく学べる

レーティングゲームの学校を作りたいらしいし。

そりゃ、カテレアさんも

感化されるよな。

「そ、そうなんですわ……」

「はい！唯才是拳……」

たかが人間風情が

何を言うのだと

あの男の言葉を

鼻で笑っていた我が身に

恥入るばかりです……」

………ん？

……今、何か変な

単語が聞こえてきたような。

「あの唯才是拳……って？」

俺は恐る恐るカテレアに問いかけてみる。

我ながら学がないなあ……。

カテレアは俺の問いに対し、

眼鏡をクイ、と持ち上げ解説した。

「唯才是拳。

曹操が発したとされる『求賢令』  
の一節ですわ。

曰く、才能ある者は身分を問わず  
登用せよとの事ですが、

当時は能力と家柄は比例すると考えられていました。  
故にこの言葉は広くは受け入れられませんでした。

才能のみを是とするならば力のある者は  
何をやっても良いと成り得るのですから。

今の冥界の様に」

な、成程……。

確かに、貴族主義が蔓延している

今の冥界にそんな事を言ったら

反感を買いまくりだろう。

でも貴族の最たるものである

カテレアがそんな事言っつていいのか……？

俺の疑問を察してか、

カテレアは口を開く。

しかしその内容は俺の予想を遥かに超えていた。

「ですが私の今の考えは

彼とは少し違います。

例え無能であろうとも

努力を重ねればいずれは必ず報われる。

それが人の世というもの。

それを体現したのがあなたではありませんか、

九頭竜安里様」

カテレアは真っ直ぐな瞳で

俺を見つめてくる。

いや、アンタが言う程俺は立派なモンじゃねえよ。

「そうあってほしいもんだな……」

「はー」

俺の含みのある言葉にすら

カテレアは嬉しそうに微笑む。

その笑顔は今まで見た中で一番

輝いて見えた。

「あ、あの……。」

僕もいるんですけども……。」

「あら、ごめんなさい。」

貴方の事を忘れていた訳では有りませんよ」

「そ、そうですか……。」

あっ！先輩の机にDVDが

置いてありますよ！」

と、ギヤスパーは話を変える様に

大声を上げる。

置いた覚えはないんだが……。

しかも九頭竜ナイアって

ケースに書いてある。

アイツの置いていったものだから

ロクなモンじゃなさそうだな。

「一体どんなDVDなんでしょうかね！」

ちよつと見てみましょうよ!!」

ギヤスパーが目を輝かせて

DVDのパッケージを手取る。

お前さつきまで気まずそうにしてたのに……。

まあ、別に構わないが。

「どうせろくでもない物だよ。」

俺も見るのは初めてだけどな」

俺は苦笑いを浮かべる。

そしてDVDプレイヤーに

ディスクを入れ再生ボタンを押した。

そしてそこに映っていたのは

とんでもない内容だったのだ……。

※第44話（イツセー×ナイア 安里×カテレア）

そしてそこに映っていたのは  
とんでもない内容だったのだ……。

『んっ……ああああん！』

画面に映し出されたのは 真っ最中の女性の姿だ。  
艶めかしい喘ぎ声を上げながら

彼女は金の長髪を

振り乱し、激しく腰を振っている。

『ダメえ……イクう!!』

そして絶頂を迎えたのか

女性は体をビクビクと痙攣させる。

当然のように無修正のポルノライブ映像だ。

しかしそのセックスしている

面子が問題であった。

画面の中ではイツセーが

一心不乱にナイアを

責め立てている。

それはもう乱交、あるいは

サバトと言える程に

激しいものだった。

アイツはすっかりイツセーとの

セックスにハマってしまったようで

とても気持ち良さそうな

表情をしている。

それだけなら、まあ……。

男と女の事だから俺がとやかく

言うことではないんだが……。

「ああ……っ♡♡♡」

ナイアは黒のナイトドレス姿で

イツセーに組伏せられながら



容赦なく井戸掘りの様に

奴のチ○ポに刺し貫かれていた。

その顔は快感に染まりきっており  
完全にメスの顔になっている。

『ほら、もっと欲しいんだろ?』

「はいい……ありがとうございますうございませうう!!

あへえええええっ!!!」

ズブウツ!ドチュツドチュンツ!

けたたましく水音を立てながら

イツセーのピストン運動が激しくなる。

「おほっ!おおおおっ!」

イキますっ!イグうううっ!」

その息つく暇のない猛攻に、

ナイアが尻を震わせて

アクメを決めながら

結合部から盛大に潮を吹き出す。

ぷしゅっ♡

「す、すっ……っ♡はひいいいっ!」

私こんなにいっぱい イカされちゃいましたあ♡」

イツセーはナイアの下腹部に正の字を書き込む。

併せて彼女の子宮には

大量の精液が流し込まれており

まるで妊娠でもしてるかの様な

腹の大きさになっていた。

「はふー……っ♡ はふー……っ♡」

あまりの激しい快樂に ナイアの

体はガクンガクンと 震え続け、

目は虚空を見つめている。

その瞳からは涙が流れ落ちていた。

とはいえ悲しみによるものではなく

口の端からはヨダレも垂れている。

『ふふ、まだまだこれからだぜ?』

「はい……」

イツセーはそう言って再びナイアを押し倒す。  
アイツはイツセーに身も心も屈服しているのか  
まるで抵抗する様子もなかった。

「あっ! あああっ!」

そしてそのまま正常位で

イツセーに弄ばれるが

ナイアもそれを歓びとして

はしたない顔で喘いでいた。

「んぐう! あひっ! あっ! あああん!」

パンツパンツパンツ!

ビデオ越しにも

激しく肉を打つ音が響き渡る。

「ああん! 奥まで届いてるう!

すごすぎりゆう!」

『そらそら!』

ここが良いんだろう!』

イツセーはそう言いながら

なおも腰の動きを加速させていくと

ナイアはむせび泣くのだ。

「だめえ!」

そこばかり突かれたら

またすぐイツちやいますう!」

ナイアは既に何度も達してしまい

体の方は限界を迎えているのが

映像からも丸わかりだ。

しかしイツセーの絶倫ぶりは

衰える事を知らない。

『またイツたのか?』

本当にはしたない女だな』

「ごめんなさいー！ごめんなさいー！」

だってイツセー君の

おち○ぽが凄すぎるんですもの！」

そう言いながらもナイアは

オマ○コにハメられた

イツセーのモノを離そうとしない。

「あぁっ！イクっ♡」

そしてナイアが絶頂を迎えると

同時に イツセーも射精していた。

「あぁっ！熱いのが

中に出されて るうううっ！量も熱さも濃さも

安里なんかと全然違うのおお♡♡♡」

その快感に耐え切れず

絶叫しながら全身を痙攣させる。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

ありがとうございます……。

気持ち良かったです……♡

安里とのセックスなんかより

……ずつと……♡♡♡」

『そいつは何よりだな。』

それじゃあ次は尻を俺に向けろ』

イツセーがそう言うと

ナイアは四つん這いになり

嬉々として自ら尻を突き出した。

「は、はいい♡

イツセー様専用のおま○こを

どうぞ好きなだけ使ってください♡」

そして既に濡れきった

秘所を見せつけるように 大きく足を開く。

その光景に興奮したのか

イツセーのチ○ポが再び 勃起していく。

「ああ…………♡ 大きい…………♡」

ナイアの目が益々蕩けていく。

『いくぜ？』

「はいっ♡」

ズプウウウツ!!

「あああああつ!!!」

イツセーの巨根が 一気に

ナイアの中へと入っていく。

「はっ♡はっ♡はっ♡」

その圧倒的な質量と圧迫感に

息をすることすらままならないのか

まるで発情した雌犬の様に

ナイアは荒く短い呼吸を繰り返す。

「ふーっ…………ふーっ…………」

イツセー…………♡

ゆっくり…………お願ひしますう♡」

イツセーに媚び、

甘えるような声で

懇願するナイアだが

しかしイツセーはニヤリ、

と獍猛な笑みを浮かべた。

『悪いな、それは無理な相談だ』

ズブウツ!!ぐりいっ!

ドチユドチユツ!!

「ひぎひぎひぎひぎっ!!」

イツセーは容赦なくその剛直をナイアの

奥深くに突き入れた!

その衝撃でナイアは目を見開き、

口から舌を出して悶絶。

あまりの衝撃に声にならない

叫びを上げる。

『おいおい大丈夫かよ。』

もうちよつと優しくして欲しいんだらう？  
だつたらもつと色っぽく喘いでくれないと  
俺も楽しくないぜ？』

ごりゅつ！　ぐじゅぶう！

イツセーはナイアの髪を引つ掴んで  
グイツと持ち上げるとアイツは  
すつかり緩みきつた顔をカメラに晒す。

「は、はひっ！　ぐっ、ぐめんなさい♡

アクメがんばりましゅ♡

がんばりましゅからパコパコしてえ♡

あん！あん！あん！

イイ！イイ！イイ！イイイ！」

『はははは！無様だなあ！』

まるでA Vの様にあの傍若無人を  
地でいくナイアがイツセーの  
激しいピストン運動に為す術もなく  
されるがままに犯されている。

しかもイツセーは彼女の弱点を熟知しているのか  
的確にそこを攻め続けナイアを責め立てている。

「あひっ！あひん！あへええ！

しゅごい！しゅごくて死んじやう！

こんなのすぐイグ！

すぐイク！　イク！イク！イクうううううううう！」

ビクンツ！ガクガクガクツ

！イツセーが腰を動かす度に

まるで陸に打ち揚げられた魚のように  
ナイアは激しく体を跳ねさせる。

イツセーはそんなナイアを見て

俺と自分とのセックスの違いを

ナイアの口から説明させるべく

一旦引き抜いて視線を  
カメラに向ける。

『ほら、言ってみな。』

さつきまでお前の体は  
どんな感じなんだった？

言ってみろよ』

「は、はいいい……いー」

私のオマ○コはイツセー君の

おち○ぽが欲しくて ヒダが絡みついて

離れませんでしたあ♡

子宮口があ、ぐぐつと降りてきて

亀頭に吸い付いてえ♡

早く精子が欲しいって

オマ○コが疼いて仕方がないんですう！」

そう言いながらナイアは

自らの指先で秘所を割り広げ

物欲しそうにパクつく膣内を晒した。

そして更に彼女は言葉を続ける。

「ナイアの淫乱なメス穴

かわいがって欲しいの♡

この卑しい牝豚を

あなたのおち○ポで

調教していただければ

嬉しいです♡」

そのあまりにも下品なセリフに

俺は思わず顔を赤らめてしまう。

しかしイツセーの方は全く動じず、

むしろ嬉々としてナイアの言葉に応えるように

再びその巨大な肉棒を挿入した。

『よく言えたな。偉いぞ』

そう言うときイツセーは再び激しい抽挿を開始する。

パンツ！パンツ！

「あああっ♡」

イツセーが勢い良く腰を打ち付けると  
ナイアが歓喜の声を上げた。

『どうだ、気持ち良いか？』

「はい♡ イツセーのおちんぽ最高です♡

オマ○コがキュンキュンして

イツセーのおち○ぽから

ザーメン搾り取ろうとして

ヒダも子宮口も 勝手に動いてしまいますう♡」

ナイアはそう言うとうと

自ら胸を揉んで 乳首を摘まんで弄くり回す。

「ああん♡ おっぱいも

凄く興奮します♡」

『どうだ、ナイア？』

安里のセックスとどっちがいい？』

「は、はいっ♡

イツセー様の方がずっと 素敵♡

安里の粗チンなんかよりずっと♡

アイツの猿みたいなセックスじゃ

全然満足できなかつたのお♡」

ナイアはイツセーに媚びるように

その豊満な肢体を押しつけキスをせがみ、

媚びるような声で甘える。

イツセーもそれに応えて ナイアと

濃厚なディープキスを交わしていた。

↓

えーと……。

時間が止まる感覚を色々

味わいました。

実際ギヤスパーが時を止めて

逃げ出したみたいだし……。

事情を知らないアイツにすりや  
気まずいなんてもんじゃないよな。

実際普通ならこんな映像見せられたら  
半狂乱になるだろう。

しかしどうせナイアが仕掛けた  
悪戯みたいなモンだ。

イツセーがあんな鬼畜エロゲー主人公の  
ような真似をするわけが無い。

わざわざ俺とイツセーの間に  
ヒビを入れようとするのが

楽しいのかね……理解できん。  
ま、いいや。

とりあえず

ニセイツセーのやりたい放題っぷりと  
それに付き合うナイアの様子の子の続きでも見てみるか。

そう思い俺は動画を再生しようと  
したがカテレアさんがリモコンを  
持つ俺の手をぎゅっと掴んできた。

「えっ?」

「旦那様……自身を

責めてはいけません。

貴方は何も悪くないのです……」

「いやまあ確かに

悪いとは思わないけどさ」

「ああ……」

どうやら俺の言葉の意味を取り違えたのか  
カテレアの顔が曇りだす。

「大丈夫ですよ。

私には分かっていますから」

そう言っつ俺の股間に手を伸ばしてくるのだが、



残念ながら俺のそこは既に臨戦態勢である為、ズボン越しとは言え 彼女に触られるのはマズイ。

「ちよ!?待った!」

慌てて彼女を止めるが既に遅かった。

俺のそこは彼女の手で

直接接触られてしまう。

「うぐっ……!?」

「ああ……何を勘違いしているのでしょうか。

あのナイアとかいう売女は……」

ば、売女って……。

あ、そうだった……。

カテレアはナイアが

こういうニセのビデオを

流布して俺を嫉妬させたり

憎悪に狂う様を愉しむ

最低女だつてことを知らないんだ。

そりゃあ心配するよ。

「安心してください。

私はちゃんと分かっているのです。

あなたがどれだけ優しく素晴らしい人なのかを。

だからそんなに自分を卑下しないでください」

そう言つて彼女は自分の胸を

押し付けてきたりしてくる。

や、柔らかい匂いもする……!!

年上の包容力という奴だろうか。

俺は思わずドギマギしてしまう。

だがしかし、このままでは

流されるままになってしまう。

「いやその、別に俺は

気にしていないっていうかさ」

「ああ、私を氣遣って優しい嘘を吐いているのですね旦那様……。でも解りません。」

恋人に裏切られた辛さや痛みは私もクルゼレイから思い知らされています。

だからこそ、今の貴方に寄り添い悲しみに沈む貴方を癒したい。

そう思っただけです」

カテレアは真剣な瞳で俺を見つめる。

その眼差しは慈愛に満ちており、彼女が心の底から

自分を心配してくれている事が分かる。

その事に嬉しさを感じながらも、同時に罪悪感を覚えてしまう。

俺は今も彼女を騙し続けている。

人格を改造して、記憶を捏造して

俺はこの偽りだらけの関係を続けようとしている。誤魔化す様に

俺はカテレアの身体を

強く抱き締めると、

そのままベッドに押し倒した。

「あっ♡旦那様♡」

そしてゆっくりと

互いに唇を重ね合わせる。

最初は軽く触れあうだけのキスだったが、

徐々に舌を絡め合い、

互いの唾液を交換し合うような

激しいキスへと変わっていく。

「んちゅ、れろ、

くちや、ぴちや、ぷはあ♡」

やがて俺達の口の端からは

飲み込みきれなかった大量の唾が流れ落ちていく。

「ふう、こんな感じですか？ 私のテクニックは」

「うん……凄いよ……」

正直ここまで上手だとは思わなかった。

まだキスしただけなのに興奮が収まらない。

というか、そっちの経験も

ありそうなカテレアなら

もつと気持ち良くしてくれるかもと

邪な期待もしてしまった。

「じゃあその、お願いします」

「はい♡」

俺の言葉を受けて

カテレアはするり、と

メイド服を脱ぎ始める。

まず上着に手をかけて脱いでいき、

次にスカートとショーツを

同時に下ろして足を抜いていった。

そうして全裸になったカテレアの

身体は見事なものだった。

出る所は出て引つ込むところは

しつかりと引き締まった体型。

肌は褐色ながら艶があり、

胸は大きいが垂れておらず形も良い。

お尻もキュツと上がっていて

太股もムチつとしている。

男なら誰もが憧れるような美女が

自分に尽くしてくれているという現実に

感動すら覚えた。

そんなカテレアが俺の前に膝立ちになると、

両手を使つて肉棒を掴み、亀頭にチュツチュと音を立てて何度も吸い付いてくる。

「あむっ、じゅぽ、ぺちよ……  
ふう……♡」

俺への奉仕だけでカテレアは息が荒くなり始めていた。

カテレアも興奮しているらしい……。

奉仕フェラの動きに合わせる様にして、

彼女の豊満な乳房が揺れ動き、

更に先端の乳首が勃起していく。

「はっ……はっ……旦那様……」

どうか私にも……

御慈悲を……くださいませ……」

そう言つてカテレアは

自分の秘所に指を入れ始めた。

くちゅ……♡くちゅう♡と

淫らな水音が響く。

カテレアの膣内は熱くなり

トロけていくのが見て取れる。

「はっはあ、はあ、はあ……」

カテレアは俺のモノをしゃぶりつつ

自身の陰部を弄っている。

その姿に俺は興奮を隠せない。

するとカテレアは熱さと太さを

増していく俺のモノに歓びと

驚きを覚えている様だ。

「す……♡……♡」

もうこんなになつて……♡

それにとっても熱いです……。

はあ、ああ♡」

そう言うなり彼女は 再び激しく舐め回し始める。

「うう!？」

いきなりの激しい刺激に耐え切れず、俺は思わず声を上げてしまった。

「ああー!ごめんなさい!」

痛かったですか?」

「いや大丈夫だよ……続けてくれ……」

「はい♡分かりました♡」

「ちゅぱ!ちゅるるる!」

「ぐああああ!」

今度はカリ首を

重点的に責めてくる。

「ああ、ああ♡」

(旦那様のおちん○ん美味しい……)

ああ、早く欲しい……)

「ああ、ああ、旦那様の先っぽから

ドロリとした物が……。

……頂いてもよろしいんでしょうか……♡」

発情したカテレアは

理性の薄皮一枚を残しながらも

俺に射精を強請り続ける。

そして遂にその時が訪れる。

ビュルルルルー!!

ドピュドピュー!!!

カテレアの顔と胸に

大量の白濁液が降りかかる。

「あっ♡旦那様の精気が♡

濃いい……♡」

カテレアは俺の射精を

進んで浴びながら歓喜の声を

上げていた。

ゴクリ、と俺は生唾を飲みつつ

、その光景に見入っていた。

そして、やがてカテレアは自身の身体を俺に預けてきたのだ。

「……旦那様には、私がいるではありませんか。だから元気を出してくださいね」

「ありがとう……」

カテレアの言葉はとても優しく、温かくて心地良いものだった。

「いいえ、当然のことですよ。」

私は貴方の妻なのですから」

カテレアは微笑み、そして妖しく目を細める。

まるで獲物を狙う肉食獣のような眼差しで

見つめられた途端、ゾクツと背筋に震えが走った。

だが、それは恐怖ではない。

むしろ逆だった。

カテレアの視線に晒された瞬間、

俺の肉棒はビクンと脈打ち、

その反応を見たカテレアは嬉しげに笑う。

その笑みの美しさ、艶かしさに、

またも心臓が跳ね上がる。

「なあ……次は俺がカテレアを

気持ちよくしたいけど……

いいか？」

「はい♡光荣ですわ♡」

そう言って、カテレアはベッドの上で仰向けになり、両足を広げて秘所を見せつけるようにしながら、

誘うように両手を広げる。

その仕草は男の本能を刺激するには

十分すぎるほどだ。

しかし……

ここで欲望のままに襲いかかれば

今までと同じになつてしまふ。

だからいきなり挿入するのではなく

俺はカテレアの身体に

愛撫を始めた。

まず胸元に顔を埋め、両手を使って揉んでいく。

柔らかく弾力のある感触が手に伝わり、

カテレアが身をよじらせる度に

乳首が擦れて快感が走る。

そのまま舌を出して乳首を口に含むと、

カテレアの口から甘い吐息が漏れた。

さらにもう片方の乳房にも手を伸ばし、

同じように口付けする。

するとカテレアの呼吸はさらに荒くなり、

乳首も硬く勃起していった。

それを指先で摘むようにしてコリつと捻ると、

カテレアは一際大きな声で鳴き始める

「ああんっ♡ 乳首っ……」

そんなに強くされたら私っ♡

ああっ！ 凄いつ！ 旦那様ああっ♡」

(ああああっ♡

旦那様におっぱい吸われてるう♡

こんなの初めてえ♡)

カテレアは俺の頭を抱きしめながら

俺からの愛撫を甘受し、全身を震わせている。

俺は彼女の柔らかな乳房の感触を楽しみつつ、

彼女の耳やうなじにキスをしたりして、

彼女を更に昂ぶらせていく。

「ああっ♡ 旦那様ああっ♡」

カテレアは俺にしがみつきながら、

その胸に劣らない豊満さを誇る

双丘を押しつけてくる。

カテレアのキュツと上向きながら  
大きな尻が俺の腰に

押しつけられているせいか、  
互いの陰部は既に濡れそぼっていて、  
今にも繋がりそうな状態だ。

「行くぞ……カテレア」

「ああああああ♡」

俺もカテレアも我慢できず、既に  
ガチガチに勃起しているペニスと  
ドロドロに濡れる  
ヴァギナが触れ合う。

「ああ……旦那様のおちん○ん……♡」

「うう……！」

カテレアはうっとりとした表情で  
自らの膣内にゆつくりと迎え入れた。

「んふ♡ 旦那様のおちん○ん♡

熱くて硬いですう……♡」

カテレアは俺のモノを根元まで呑み込むと、  
そこで一旦動きを止める。

そして俺の胸に手を添え微笑んだ。

「旦那様……動いて下さいませ♡」

「ああ……」

言われるままに俺は挿挿を開始した。

「あっ♡ 激しい♡

旦那様ったら……ひやうん!？」

カテレアは俺が動くたびに喘ぎ声を上げ、  
俺を喜ばせようと健気に頑張ってくれる。  
その姿はとてもいじらしく、可愛らしい。

「はあっ……はあっ……はあっ……」

（旦那様に喜んでもらうため、

もつと頑張らないと……♡）



カテレアは俺の動きに合わせて自らも激しく腰を振り始めた。

そしてお互いの汗ばんできた肌同士がぶつかり合いパンツという音が響くたび、二人の興奮が高まっていった。

やがてカテレアの子宮口に

亀頭がぶつかるようになる。彼女は

ビクビクと痙攣し始めた。

それを見た俺はラストスパートをかけるべく、より一層強くピストン運動を繰り返す。

「くっ……出るッ!!」

ドピユッドピユーー!!ビュルルルーー!!!

「あああああああああゝ♡」

(ああ♡私は今……旦那様に愛されている……♡

幸せえ……♡♡♡)

カテレアは一番奥に

大量の白濁液を注ぎ込まれると、

背中を大きく仰け反らせて

俺にしがみつきながら絶頂を迎えた。

「ああ……旦那様の精が私の中に……♡」

ペタンと、俺のモノを収めつつも

ベッドにアヒル座りになった

カテレアは自分のお腹をさすりながら、

満足げな笑みを浮かべた。

俺もまたそんなカテレアの

満足そうな笑顔を見て、

自分の心も満たされて行くような気がしたんだ……。

↓

コトが終わった後だが

俺はもう少しカテレアと一緒にいたかった。

「なあ、カテレア……」

「はい……」

俺の腕と胸板を枕にしていたカテレアは、  
身体を起こして俺を見つめてきた。

「どうしました？ 旦那様」

「あのさ……」

もうちよつとだけ一緒にいたいなと思ってさ、

嫌か？」

そう言つてカテレアの顔を見ると、

少し驚いた顔をした後

すぐに笑みを浮かんできて、

俺に抱きついて来た。

「嬉しいですね、旦那様♡」

でも私は悪魔なので夜の方が元気になるんですよ♪

お忘れでしたか？」

確かに、カテレアから

感じる魔力は昼間よりも強い。

まあ、だからと言つて何か

問題があるわけじゃないけどさ。

それにしても、本当に綺麗だ……。

「……旦那様、

私の顔になにかついてますでしょうか？」

「えっ、ああ、悪い！ つい見惚れちゃつて……」

気の利いた事なんて言えないし

思つた事を素直に伝えたら カテレアは

頬を赤らめて俯きながら眩くように言った。

「旦那様に褒めていただいたのは初めてです♡

とても嬉しく思います。……ですのその、

もう一度言つていただけませんか……？」

「ああ、もちろんいいぜ。」

……凄く可愛くてつい見惚れてた。カテレア」

「あぁっ……♡」

カテレアの身体がピクつと震える。

その反応に思わず苦笑いしてしまった。

「おいおい、まだ何もしてないんだけどな……」

「まだ？　ということとは

これから始めるのですね？」

「ああ、そのつもりだけど」

「うふふ……♡嬉しいです♡」

カテレアは恥ずかしがりながらも

期待に満ちた目をしていた。

綺麗なだけじゃなくて、

こういう所も可愛くて好きだ。

「カテレア、愛してるぞ」

「はい……♡」

俺達はそのまま唇を重ね、

結局朝まで何度も求め合った。

## オリジナル強め 夏休み編 第45話

俺は今冥界行き列車に乗り、  
イツセー達と共に冥界に向っている。  
行き先はリアスさんの故郷。

グレモリー家だ。

リアスさんの里帰りと

若手悪魔達の会合。

あとはイツセー達の修行だとか……………。

ゲイトの旦那とナイア、

ランサーさん、煉獄さん、

ニトクリスさん、セルベリアさんは

イツセー達が留守の間

駒王町を警備している。

まあ、シユタークさんもいるし

大きな騒ぎは起こらない筈だ。

「しかしまあ……………」

「どうしたんスか？」

俺が窓から外を眺めながら言うと、

隣に座っていたミツテルトが

聞いてきた。

俺は肩をすくめながら答える。

「いやなあ……………」

この一学期の間に色んな事が

起こったなと思いついていただけだ」

俺の対面には

レイナーレが座ってこちらを

見ている。

全ての始まりはコイツが

イツセーから神器を奪い取るために  
命を奪い、

その光景を見て逆上した俺も  
殺そうとした事だった。

だが、今はこうして一緒に  
旅をしているんだから解らんもんだ……。

「確かにそうね。

でも……あの時、

貴方が助けてくれなかったら

アザゼル様に報いる事が出来ないままに  
死んでしまっていたわ。

だから私は感謝しているのよ？

「ありがとう、安里様」

「様づけはよせよ。

背中が痒くなるぜ」

レイナーレの言葉に

俺は苦笑しながら言った。

「そうだな、きゆうどーは

いちへいそつだから、

さまづけはよけいだ」

レイナーレの横に座る

キユクロが腕組しながら言った。

コイツもなんやかんやで

いつの間に俺達の

仲間になったんだよなあ……。

最初は敵として現れたんだけどさ。

「アンタはもう少し敬意を

払うべきだと思うっすけどねえく。

あと安里サマを一兵卒（いっぺいそつ）

呼ばわりするな」

ミツテルトがキユクロに

向かって呆れたように言うが、  
キョク口は動じる気配もない。  
そして反対側の隣ではニグラさんの  
隣に座る女の子が刺すような  
視線をこちらに向けていた。  
え……？ 初対面なのに  
なんで敵意を剥き出しに  
されているんだよ……？

「あの……」

「何です？」

俺が声をかけると女の子は  
冷たい声で応じた。

……怖いんですけど。

「いや、君は一体誰なんだ？」

初対面だよな？」

「ええ、初対面ですが」

何か問題でも？」

……いや、問題大ありだと思っぞ？

だってこっちは

アンタの名前すら知らないんだからさ。

「……名前くらい教えてくれないか？」

いつまでも『君』とかじゃ不便だし」

「あら、名前なんて

所詮符号の様なモノ。

そんなものにご執心だなんて

器量の小ささが伺いしれますこと」

うわあ……。

なんか凄く

嫌味つたらしい言い方だな……。

そんな俺の顔色から

彼女は何となく

拗ねた雰囲気醸し出しつつ、鼻で笑う。

「ふん、冗談ですよ。」

私の名はアヴェンジャー。

貴方の様な無教養な田舎者に  
名乗る必要もないでしょう？

ほら、仮契約書もここにありますが」

彼女が差し出した紙には

彼女の名前が書いてあった。

……それはそうと。

「達筆だなあ……。」

しかも日本語も出来るのな」

「なっ……！」

俺が感嘆の声を上げると、

彼女は顔を真っ赤にして俯いた。

「べ、別にこれくらい普通です！」

それにこんなもの

私が本気を出せば

一時間足らずで書けますし！」

「と言うか本名書いてあるんすがね……、

まじヤバくね？」

こ、コラミツテルト！

俺がそっとしておいた事を

あっさり口に出すんじゃない！

「な……!?!」

案の定、アヴェンジャーと

名乗った少女は口をあんぐり開けている。

「ふむ、まあしかたないか。

アヴェンジャーは

『ちゅうにびよう』というやつなのだろう？

きゆうどーは、

そういうのよくわからないし」

キユクロオツ!!お前のフオローは

余計傷口を広げるだけなんだよおおおつ!!

「誰が厨二病よ!!」

……コホン。

人を病人扱いしないで

くださいますか?

それに貴方だって何ですか

その眼帯は?

まさか異能の力が封じられている

なんて妄想に囚われていませんかよね?

全く、それだから貴方みたいな

中途半端な田舎者は嫌いなんですよ。

もつと自分の頭で考えなさい」

「よくわかったなじゃんぬ。」

キユクロの

かためをふうじているりゆうを

さつするとはなかなかやるな。

それはそれとしてなつなのに

くろいコートとよろいをきて

あつくないのか?」

そうだったのか!?

一体どんな力を封じてるんだ?

気になるがキユクロが

隠している事に踏み込むのは

野暮つてもんだ。

「実名をバラすな

この眼帯ゴリラ女ツ!!

あとこのコートと鎧は

私の趣味! なんなのよアンタ!

……こほん。

失礼、取り乱しました。



とにかく私は貴方達の事など  
微塵も興味がありません。

「どうぞお好きに呼んでくださって結構です」  
「ではちゅうにびようでいいな。」

よろしくたのむぞちゅうにびよう」

「良い訳あるか！」

キユクロの言葉に

思わず突っ込んでいる辺り

ジャンヌ、

もといアヴェンジャーは

常識人でツツコミ気質か？

俺は彼女達のやり取りを見て

苦笑する。

「まあまあ、落ち着けよ。

せつかくの縁だ。

これからは仲良くしようぜ？」

「……わかりました。

仮初めとはいえ

マスターの貴方が

そこまで仰られるなら

嫌ですけど仕方がありません。

嫌ですけど！」

うわあ、凄く嫌そうな顔してる。

しかし流石はニグラさん。

たじろぎもしない。

「ふふふ、ジャンヌちゃんが

皆と仲良くできそうぞうで

何よりね♪」

「何で母親みたいなコメントをしてるんですか？

馬鹿なんですか？」

ニグラさんが嬉しそうに言うものの、

アヴェンジャーは不機嫌さを

露骨に見せるがこの辺りニグラさんは  
年長者の余裕を見せていた。

「馴れ合うつもりは

毛頭ございません。

それに私に話しかけるのはやめてください。

耳障りですから」

「あらあら、嫌われちゃったかしら？

でも大丈夫！

すぐに皆と仲良くなれるわよ」

ニグラさんが何だか妖しい

笑顔でアヴェンジャーに

語りかける。

「……………」

それに対して

アヴェンジャーは

無言で目を逸らす。

……なんか凄く

嫌な予感がしてきたんだけど。

『間もなく終点、

グレモリー本邸前。グレモリー本邸前。

皆様御乗車有難うございます』

「おっと、もう着いたみたいですね」

「ふむ、ようやくついたようだな」

「ええ、やっと着きましたわ」

俺達はアナウンスを聞き、

席を立つ。

そして荷物を持って降りる準備をする。

アザゼルのおっさんとカテレアは

現魔王に挨拶に行きつつ

禍の団の情報提供や共有を

するとの事だ。

まあ墮天使総督だからな。

なんて考えていたら

俺達の前に銀髪のメイドさん、

グレイファイアさんが立っていた。

そう言えばライザーとイツセーが

リアスさんの婚約破棄の一件で

会ったっけか。

「ようこそおいで下さりました。

お嬢様の盟約者の皆様」

恭しくグレイファイアさんは

一礼すると、俺達に微笑みかけた。

するとニグラさんも一礼し、こう言った。

「歓迎に感謝致します。

我々「外なるものたち」の

リーダーである

ゲイト・オールドワンの名代として

罷り越しました」

キリリ、と真面目な表情で

さながら名刀の様な凛々しきで

ニグラさんは答え、

そのまま俺達は馬車にて

リアスさん達の別邸へと

案内されることとなった。

↓

「しかし別邸と言っても

この広さはヤバいな……」

ひよつとしなくても

駒王学園位の広さは

在るんじゃないのか？

この広さでお客様用の別邸とか

流石はサーゼクス様を輩出した  
家柄……と言うべきなのか？

そんな事を考えていると  
不意に声をかけられた。

「あら、貴方。

以前にお会いしましたわね」

声のした方を見るとそこには

以前出会った金髪ドリルロールの  
見るからに勝ち気なお嬢様感を  
丸出しの美少女が居た。

「ああ、ライザーの妹さん」

「まあ、なんと無礼な！

これだから地上に住む

片田舎の無作法者は

嫌いなのです！

私はレイヴエル・フェニックス。

貴方のような下賤な者とは

格が違うのでしてよ！ お解り？」

相変わらずの高飛車な態度。

だがそれがイヤミじゃなく

似合っている辺り

ある意味で凄いと思う。

「ですがまあ、あのパーティーで

イツセー様と一緒に

私を庇ってくださいった

事には感謝していますわ。

ありがとうございます」

そうやって彼女は

優雅に礼をした。

こういう所は貴族だな。

「まあ、気にするなあって。

それより、こんな所でどうしたんだ？」

「私はライザー兄様に

呼ばれて来ましたの。

何でも大事な話があるから

一緒に来るようにとの事ですの。

恐らくはリアス様達上級悪魔の

跡取り達の会合への参加ですわね」

成る程、そういうことか。

確かにそれは大事そうだ。

「あら、楽しそうに

二人でお話ですか？」

「きゆうどーもいろをしるとしか」

俺達が会話しているとジャンヌ……

もといアヴェンジャーと

キユクロがやってきた。

キユクロの奴、

色を知る年って……。

意味解って言っているのか？

「あら、そちらの方は？」

見たところ悪魔では

なさそうですけど？」

レイヴェルは紹介する前に

ジャンヌの正体を見破った。

やっぱりコイツ、只者じゃないな。

「初めまして、私の名前は

アヴェンジャーと申します。

訳あって今はこちらのの

マスターに仕えている身ですが

宜しくお見知り置きを」

「復讐者……？」

「うむ、ちゆうにびようは

ちゆうにびょうなので  
そうなのるせつていなのだ。  
わらってゆるしてやれ」

「設定じゃない！」

勝手に人のキャラ付けをしないでよ！

一度変なイメージがつくと  
払拭するのが大変なのよ！  
そんな気がするの！」

「お、おう……」

確かにイツセーもドスケベの  
変態野郎というイメージが  
ついたせいで駒王学園では  
散々な扱いだからなあ……。

俺は俺で怖いイメージが

独り歩きして危険物扱いだよ。

そんな話はどうでもいいか……。

「なんというかイツセー様といい、

貴方達といい変わった方が多いんですね……」

「まあ、否定は出来ないな」

「ところで、その隣にいる方は

どちら様でしょうか？」

そう言いながらレイヴェルは

アヴェンジャーの隣に立つキユクロに視線を向ける。

「キユクロはキユクロだ。

ゆえあつてはいぐんのしよーを

やっている」

「敗軍の将……？」

よくわかりませんが、まあ良いでしょう」

レイヴェルは首を傾げながらも

納得してくれたようだ。

「それでだな。

きゆうどー、ひまだから  
キョクロたちをどこかへ  
つれていけ」

「突然言われてもなあ……」  
どこかへ連れていけ、と  
言われても俺はこの冥界に  
関してはまったく詳しくないぞ。

「全く仕方のない……」  
女性のエスコートも満足に  
できないとは情けない殿方ですわね。  
……私が街まで案内しますわ。

付いてきてください」

「あ、ああ……」  
なんか怒られたが

案内してくれるならありがたい。

「そうか、かたじけない」

「貴方、意味解って使ってる？」

……まあ、退屈なのは

私も同じですから？

付き合っただけても良いです。

精々感謝なさいな」

アヴェンジャーも意外と暇なのか？

というより、この子ツンデレ属性持ちだな。

「じゃあ、行くとするかな」

こうして俺達はレイヴェルの先導の元、  
街へと向かうことにした。

↓

そして案内されたのは

グレモリー領の公園。

と、言っても博物館やら美術館やら

ショッピングモールまである超大規模な場所だが。

そして五角形の頂点それぞれに  
ルシファア、ベルゼブブ、  
アスモデウス、レヴィアタン、  
それにバアルといった

「原初の魔王」の彫像もある。

それらを辿れば丁度魔除けの  
五芒星になるのだとか。

スタンプラリーみたいなもんか？

けど公園は六角形なのはどういうワケだろ？  
そして、今日は日曜日。

冥界に日曜があるのは

意外だったが当然、

多くの人で賑わっていた。

そんな人達を見てアヴェンジャーは  
物珍しそうに見つめていた。

「ちゅうにびよう。じろじろと

ひとをみるものではない。

いなかものがばれるぞ」

「それはお気遣いをどう致しまして……。

生憎田舎も何も、

私は芯からの聖女なんていない。

人は皆愚かで弱くあってほしい、

という悪平等と嫉妬の念から

産まれたうたかたの夢です。

まあ、貴方には解らないでしょうけど」

「うむ、わからん。

キユクロはにんげんではない  
ばけものだからな」

キユクロの忠告に対し、

アヴェンジャーは皮肉交じりの返答をするが  
キユクロはあっさり肯定した。



するとアヴェンジャーは一瞬いらただしげに眉間に皺を寄せたが直ぐに冷笑を浮かべる。

「……成程、確かに貴方は

人間ではありませんでしたね。

ただ、私のような存在とも違うようですけど?」

「せつめいするとながくなるのだが

キユクロはととさまが

つくりたいからつくられた

いのちなのだ。

そういういみではキユクロと

おまえはにたものどうしだ」

「……そうですか。

まあ、私としては

どうでもいい話です。

というか説明が短くない?」

アヴェンジャーとキユクロの仲は

中々に興味深いが、どこに向かっているんだ?

「ところで、

これから何処へ行くんだ?」

「そうですね。

何やら中央の方で催しがあるそう

ですからそちらに参りましょう」

レイヴェルの指示で俺達は

人混みの集まる場所へと向かう。

そしてそこで見たものは……。

『あの赤龍帝に君も会える!?』

ヒーローショー本日開幕!』

の垂れ幕であった……。

なにこれ?」

「なんだこれは?」

キユクロの疑問も当然だけど

俺だつて解かんねえよ！

レイヴェルの方をちらりと見ると  
彼女は顔を

真っ青にして震えている。

いつの間を買ったパンフレットを  
ぐしゃりと握りつぶしている。

「何ですのこの脚本は！

『リアス様を手籠にしようとする

悪しきライ・フェネクスに

赤龍帝は正義の鉄槌を

振り下ろす事ができるのか!?!』

ですつて！

事実誤認も甚だしいですわ！

お兄様がそんな事する訳ないでしょう！」

「お、おう……」

レイヴェルの剣幕に押されて

俺は思わず一步後ずさるも

キユクロがレイヴェルをなだめ始めた。

「おこるなレイヴェル。

これはじじつをもとにした

ふいくしよんとかいうものだろう」

「事実無根でしてよー！

フェニックス家の者として

断固抗議しますわ！」

だ、ダメだ！

不死鳥の家柄だからか

レイヴェルは完全に怒りに

燃えてやがる……。

このままじゃまずいな……。

「落ち着けて……。

ほら、こんな所で騒いでたら

他の人に迷惑がかかるぞ？

それにこのイベントはもう始まる

直前だしさ！」

スタツフの控室まで歩き出した

レイヴェルを俺も宥めていたその時。

「あら、遅かったじゃないの！」

オネエ系の雰囲気と

プロヂュースーサーの肩書を持つ男が俺達の後に

いたアヴェンジャーとキユクロに声をかける。

「何です？」

「アナタ達がネフレン様の

言いつけで代理に

来てくれたコでしょ？

ダイジョーブダイジョーブ。

脚本通りにやってくれれば

ノープロブレムよ」

「……………」

どうやら俺達を役者と

勘違いしているらしいが

レイヴェルが何やら悪い顔を

していた。

「ええ、その通りですわ。

ネフレン様にくれぐれも宜しくと頼まれましたの。

精一杯頑張らせていただきますわ」

が、直ぐにその悪い顔を

引っ込めた。

「役者だなあ……色んな意味で。

と、感心していたら脇腹に

肘鉄砲を喰らった、痛い。

するとプロヂュースーサーの死角から

凄まれた。怖い。

「何を呆けておりますの。」

「貴方も参加の準備をなさい」

「は？」

「貴方も、ですわよ」

「いや、実は演劇に参加するなというのが

先祖代々からの教えで……」

「嘘をおっしゃいー！」

「そんなわけで俺も

ヒーローショーに参加するハメに

なってしまうのだ……。」

「しんぱいするな。」

「ようはぜんいんたおせば

いいのだろう」

「良くねえよー！」

「ヒーローショーと

バトルロイヤルとを間違えるな！」

「ああ、せめてアヴェンジャーは

空気を読める女であってくれ！」

「ふふ、心配なくマスター。」

「恐怖のショーを始めましょうか」

「不敵な笑みを浮かべてこれだよ！」

「殺る気マンマンじゃねえか！」

「誰も台本読んでないし！」

「ぶち壊しにする気しかないだろ

お前ら！」

「さあ、皆さん！本日のメインイベント！」

『悪の首領ライ・フェネクスVS

正義の使者赤龍帝のヒーローショー』が始まりまゝす！」

「うおおおっ！」

「司会の声に観客が湧き上がる。」

「ああ俺はせめて客席に

被害が出ない様にしないと……。

※異聞・幕間3 とあるグレモリー家のメイド（イツ  
セー×リアス イツセー×メイド）

皆様、初めまして。

私はリアスと申します。

と、言ってもお嬢様と

同じ名前なだけの

グレモリー家にお仕えする

メイドなのですが……。

グレモリー家の皆様は

とてもお優しい方ばかりです。

私のような使用人にも優しくして下さい、

いつも気にかけて下さいます。

特に、旦那様とお嬢様は

私が両親を亡くして一人になった所を

引き取って下さったのです。

だから私はこの御恩に報いる為、

そして、この素晴らしいグレモリー家を守る為にも

精一杯頑張ろうと思います！

↓

「若、そろそろ休憩に

致しましょう」

赤龍帝のイツセー様に

冥界の作法を教えるのも

私の勤めとなりましたが

今ではすっかり上達されました。

これも日々の努力の成果でしょう。

しかし、その前に少しお休みになって頂かないと。

このままでは

身体を壊してしまいますもの。

「いや、まだだ！」

リアスさんに恥をかかせるわけにはいかない！」

「ですがお嬢様も若様を案じておられます。

無理は身体に毒ですわ」

「うーん、じゃああと10分だけ」

イツセー様は

そう仰ると

また本を読み始めました。

イツセー様はとても勤勉で努力家で

才能もあるというのに決して満足せず、

更に高みを目指しています。

本当に素晴らしい御方です……。

そう、リアス様の夫に

相応しい太陽の様な方です……。

私などにはとても……。

……でも、

夢を見る位はいいですよね……？

「イツセー様……。」

「はい？」

ああっ！ 私はまたとんだ粗相を！

未来の主に対して

呼び付けにするなんて！

「す、すみません！」

今すぐお茶をお持ちします！」

私は何とか取り繕うべく

慌てて

部屋を出て行こうとすると

イツセー様から声をかけられました。

「待ってください！」

大丈夫です！ 俺は全然気にしてませんよ!?  
と言うか若様って

呼ばれる方がなんか嫌なんですけど……」  
そんな事を言われたら  
ますます申し訳ない気持ちになります。  
それにしても、若様と呼ばれるのが  
嫌とはどういう事でしようか？

「あの、若様と呼ばれたくない理由を  
教えて頂けますか？」

私が恐る恐る聞くと

イツセー様は少し恥ずかしそうな顔を  
されながら答えてくれました。

「いやあ、俺ってば由緒正しい

平民の生まれだから、

家が突然デカくなったり

貴族みたいな扱いには

どうにも慣れなくて……。

いや、俺のワガママなのは

わかっているんですけど……。

せめてこの家にお客さんが

いない時は

普通に接して欲しいんです」

イツセー様の言葉を聞いた時、

私は胸の奥が熱くなるのを

感じました。

「……わかりました、イツセー様。

ただ、もし何か失礼があつた際は

遠慮なく仰って下さい」

「リアスさんは真面目だなあ。

俺なんかそんな

丁寧な態度じゃなくても良いんですよ？

まあ、それでもダメなら

ちやんと言いますから安心して下さい」



そう言つて笑う彼の笑顔を見て、  
私は改めて思いました。

ああ、やっぱり

この方は素敵だと……。

あのライザー様とリアスお嬢様を  
巡つての死闘、

サーゼクス様から送られてきた

サタナエルやコカビエルなる

墮天使から駒王町を救い出した

戦いの記録を見た私は驚きを禁じ得ませんでした。

何故ならば、そこには

目の前のお優しいイツセー様からは

想像もつかない程、

剛毅で勇猛果敢な姿が

ありましたから。

でも、とても怖かったです。

イツセー様の強さがではありません。

リアス様の為に

命をかけて戦うその姿に。

いつかイツセー様は自身を省みずに

戦い続ける事で

自らを焼き尽くしてしまうのでは……と。

私などがイツセー様の身を

心配する資格など無いのかもしれない。

けれど、どうしても不安になるのです。

そして、今日もまた、

私は貴方に恋をするのです。

—————

「うくん……リアスさんの

お茶を何度も飲んだせいか

ちつとも眠れないぞ……」

リアスさん、と言っても

俺の婚約者のリアスさんじゃなくて

メイドさんのリアスさんだけだ。

リアスさんは俺を『若様』と呼ぶ。

別にそれがイヤってわけじゃないし、

むしろ嬉しいくらいだけど

ちよつと気になってることがあるんだ。

それは、リアスさんが俺を呼ぶ時の表情。

なんというか、リアスさんはいつも微笑んでくれている。

まるで月のように優しくも

朧げな雰囲気で、見ているだけで癒されるような、

そんな雰囲気だ。

リアスさんはとても綺麗だ。

艶やかな銀髪に整った顔立ち、

スラリとした体つきなのに

おっぱいは部長よりも

一回りは大きく満月の様だ。

そして何より、その優しさに溢れた瞳。

リアスさんの目を見ると 吸い込まれそうになる。

リアスさんにじつと見つめられる度に

心が落ち着かなくなる。

「……………」

でも、一つだけ言えることがある。

メイドのリアスさんも

俺にとって大切な人だ。

この気持ちだけは嘘ではない。

そうだ、身体から

お茶を抜くために

ひとつ風呂浴びてこよう。

そして俺は浴場に向かったのだが

『清掃中』の看板をつい

見落としてしまっていたのだ……。

—————

「皆で入るのもいいけど

こんなデカイ風呂に一人で

入るのもいいモンだな」

メイドのリアスさんには

ああ言ったけどお風呂がデカイのは

貴族の賜物だよなあ。

まあ、この広い湯船に

浸かっていると身も心も安らぐ。

「ふう……疲れが取れていくなあ」

俺は湯船の縁に頭を預けると

そのまま夜空を見上げた。

冥界にも月や星は

あるんだなあ……。

厳密には魔法で

そう見せているだけだと

メイドのリアスさんに

教わったけど 作り込まれた

美しい風景だと思う。

「今夜は月が綺麗ですね……

なんちやってな」

そんなキザッたらしい台詞を

一人で呟いてみた。

するとその時だった。

「私、もう死んでもいいわ……

なんちやってね♡」

と、突如目の前を塞がれた。

この柔らかかさと暖かさは……！

「り、リアスさん!？」

どうしてここに!？」

俺が驚いて尋ねると

リアスさんはそのおっぱいを  
まるでアイマスクをする要領で  
むにゆうつと瞼に押し付けつつ  
楽しげに話し出す。

「あら、だつてイツセーが

清掃中のお風呂に入りに行くのを  
見かけたものだから。

てつきり誰かと逢引するとばかり」

「ええっ!? そんな、誤解ですよ!」

「ウフフ、冗談よ。

最近リアスと仲が良いみたいだから  
ちよつとからかっただけ」

そう言うリアスさんは

俺の隣に座り湯船に浸かる。

そして、肩を寄せてきた。

当然、俺の右腕に

リアスさんの柔らかい部分が当たる。

一糸纏わぬ姿のリアスさんを間近にして、  
俺は興奮して顔を赤くした。

しかし、リアスさんは

そんな俺を見てクスリと笑うと

とんでもない事を言ってきた。

「ねえイツセー、今から二人で

一緒に汗を流しましょう?」

「あ、汗を……ですか……?」

それってつまり

アレをするお誘いですか!?

「うふふ、なに?」

イツセーったら 緊張しているのかしら?

もしかして誰かに見つかるかもって

ドキドキしているの？」

そう言ってリアスさんは

俺に抱きつくつくと耳元で囁いた。

「イツセー……愛してる」

「……!!!」

こ、これでリアスさんを

襲わないのは却って

無作法というもの！

いや、習ってはいないけど！

俺は覚悟を決めると

リアスさんの背中に腕を回し、

湯船の中で抱きしめる。

リアスさんも俺の首に手を回す。

そして、俺達は唇を重ねた。

――

な、何という事でしょうか！

湯船の中でリアスお嬢様と

イツセー様が、だ、男女の営みを……!!?

ああ、私は何故こんなにも

間が悪いのでしょうか……!!?

ここで顔を出そうものならば

リアスお嬢様のみでなく

イツセー様に恥をかかせてしまう事に……!!

けれど、私には覗きという

破廉恥極まる行為など 到底出来ません。

ここは耐え忍び、

お二人の死角に身を潜めるしか……!!

決意と共に私は身を隠すことに

しました。

しかし……。

「あつ……♡んん……♡」

イツセー……♡

もつと……もつと触つて……♡」

「は……はい！ リアスさんの

おっぱいに……触れます……！」

「ひゃうん……♡

そ、そこお……♡ す、すごい……♡」

「ど、どうですか？ 気持ちいいですか……？」

「き、気持ち良いわ……♡

あんっ……！ こ、声が出ちゃうの……！」

イツセー様がお嬢様を

『リアスさん』と

私を呼ぶ時と同じ様に呼ぶ度に、

私も雷に打たれたかのような

衝撃が走りました。

リアスお嬢様のお身体は

とても柔らかくて滑らかでした。

私の胸とは比べ物にならぬ程

艶やかで張りがあり、

それでいて形も整っていて……。

あの美しい胸が あんなに揺れたり

跳ねたりするのは 見ていて飽きないと思いました。

それに、あの声も……。

『あぁっ……！ い、いつちやいそう……！』

「あぁ……リアスさん……！」

そして、その度に

リアスお嬢様が果てる時の顔や表情を自分に

置き換える浅ましい妄想が膨らんでいきました。

『リアスさんのおっぱい……！』

『リアスさんのオマ○コ……』

「こんなに濡れてる』

『リアスさん、大好きだよ……』

妄想の中のイツセー様は 優しく、

かつ激しく私の胸や秘部を

弄び、絶頂へと導いて下さいます。

くりくり……♡ むきっ♡

くちゅ……♡ くちゅ♡

ああ……♡ 私の内に埋もれた乳首が

剥き出しになり、イツセー様の

寵愛を求めて、秘部が……♡

お、オマ○コが濡れていきます……♡

イツセー様に抱かれ、

愛される自分の姿を想像するだけで

私の指が……♡

おこがましくもイツセー様の

代役を果たさんと勝手に

動き始めてしまいます。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

私は息を荒げながら 自らの乳首を摘み、

クリトリスを擦り、膣内へ二本の指を入れ、

かき混ぜるように動かし続けました。

やがて、その時が訪れました。

「あっ♡ あ……イク……♡

イツセー……私……もう……♡」

「リアスさん……エロすぎです！

俺……もう！もうっ!!」

まるで猛牛の角のように力強く、

イツセー様はその一物を奮い立たせ

リアス様へと擦りつけています。

「あ……イツセー……来て……

貴方の子種を頂戴……!」

リアス様もそれを迎え入れようと、

脚を開き、両手を広げてお待ちになっています。

「リ、リアスさん！」

「イツセー……♡」

イツセー様の一物が

リアス様の秘部をじわじわと貫いていくと、

「あつ……♡ 入って……くる……♡」

リアス様の口から甘い吐息が漏れ出ます。

「リアスさんの中……」

熱くてヌルヌルして……すごく締まってる……！」

「は、恥ずかしいわ……」。

こんな所でそんな事言わないで……。

でも、イツセーのも太くて硬くて……

奥まで届いているわよ……？」

そう言うと、二人は互いに抱き合い、

腰を振りはじめました。

ぱちんっ！ ぽんっ！ ぽつんっ！

肌と肌がぶつかり合う音が浴場に響き渡り、

湯船からは湯が溢れ出て行きます。

（ああ……何て羨ましい……♡）

嫉妬ではなく羨望の眼差しで

お二人を見つめる私。

イツセー様がお嬢様を突き上げる度、

リアス様は艶かしく悶え、

お身体を仰け反らせ、

豊かな乳房がぶるん♡ぶるん♡と

揺れ動いていました。

私もそのリアスお嬢様の様になりたいと

思ってしまう。

私は気付けば無意識のうちに

自らの股間へと手を伸ばしていました。

そして、そのまま中指と薬指を

ゆっくりと挿入し、かき回しました。



「あっ……♡ はあっ……♡ イ、イツセー……♡」

ああ……♡

イツセー様……♡

イツセー様あ……♡

「はあ、はあ、はあ……！ リアスさん……！

好き！好きです！大好きです！」

（は、はいっ！ 私もイツセー様の事が好きですっ♡ だ、だからもつと突いてえ♡ イツセー様の愛でいっぱいにしてっ♡ ふしだらメイドのおま〇こを滅茶苦茶に犯して下さいいい♡）

イツセー様が私につき込み

胎内をかき回す妄想が膨らんできます。

「リアスさん……！ そろそろ……！」

「き、きて……。」

イツセーの……全部ちょうだい……。

私も……もう限界……！」

リアス様は背後からお嬢様を愛する

イツセー様にお尻を突き出しながら 振り向き、

涙目で訴えかけました。

そして、私も同じ姿勢で……♡

「リアスさん！ うううううううう！！！」

「あっ……イツクウウウツツ！！♡」

どびゅっ♡ びゅーっ♡ びゅくっ……♡

イツセー様の白濁液が勢いよく飛び出し、

リアス様のお嬢様の秘部からも

潮吹きのように 透明な液体が噴き出していました。

「はあ、はあ、はあ……」

「はあ、はあ、はあ……」

お二人の荒い呼吸音だけが 浴場に響いています。

やがてお二人が落ち着いた頃、

イツセー様が立ち上がり、

お風呂から上がろうとします。

「あ、あの……イツセー様……？」

その……もう終わりなのですか……？」

!!

あ……ああ！わ、私は……！

口に出してしまった瞬間から

後悔が止まりませんでした……！

ああ……！私はなんて事を……！

！

「リアス!？」

貴方いつからここに？」

ちよつとややこしいが

リアスさんがメイドのリアスさんに質問を始める。

ドロリ、と俺の出した精液が

リアスさんの太腿に垂れていた。

ってそんな所に注目してどうするんだよ

俺というヤツはさ！

「あ、あ、あ……」

メイドのリアスさんの顔が

みるみると真っ赤に染まっていくと

「………いやらしい子ね」

リアスさんが呆れたように言う。

「も、申し訳ありません！

この不始末はお詫びのしようも

ございません！」

メイドのリアスさんはリアスさんと

俺に真っ赤になりながら

全裸のまま土下座の姿勢を取る。

な、何というか……倒錯的だ！

リアスさんはおろかニグラ先生以上の

超爆乳は身体と床の隙間から

はみ出る程でその雪原のかまくらの様なお尻も

風呂の明かりと月光を浴びて 艶々と輝いていた。  
い、いかん……!」

俺の愚息が勝手に反応してしまう……!」  
俺は慌てて

メイドのリアスさんから目を逸らす。

「イツセー?」

うう……こころなしか視線の先の

リアスさん……部長の視線が険しい。

「全く……しようがない子ね。

イツセーは。

確かにリアスは平民とは

思えない位のスタイルだし

可愛いし、素直だし……。

お手つきしたくなるのも分かるけど」

「り、リアスお嬢様……!?!」

「イツセーの好きなようにしていいのよ?

でも、私の事も忘れないでよね」

そう言つて、リアスさんは 今度は

自分の胸にメイドのリアスさんを抱き寄せた。

むぎゅつと二つの巨大な果実が形を変え、

まるで一つの塊のようになる。

そして、リアスさんはそのまま

メイドのリアスさんの耳元に囁いた。

「なら貴方もイツセーを

満足させてあげなさい。

でも私より先にイツたら承知しないわよ」

「ええええええ!?!」

俺が驚愕の声を上げる中、

「はい……分かりました……!」

リアスお嬢様……!」

決意を固めたりアスさんは

俺の方に向きなおる。

「ふ、不束者ですが」

宜しくお願い致します!」

「こ、こちらこそ!」

俺とリアスさんはお互いに

手合わせでもする様に

互いに膝をついての礼を

するのであった……。

↓

ああ……♡

夢にまで見たイツセー様の指と…

舌と唇が私の身体に……♡

「ああ……♡ イツセー様あ……♡」

イツセー様が私に覆い被さるように

背後から抱き付いてきます。

イツセー様の吐息が顔にかかり、

イツセー様の体温が伝わってきます。

イツセー様の匂いに包まれ、

私は幸福感に酔いしれるのみで

奉仕することを失念していました。

「あらあら、リアスってば

イツセーにしてもらうのが

そんなに気持ち良いのかしら?」

リアス様は私に優しい笑みを向けて来ました。

「あ……♡ は、はい……♡ とても……♡」

イツセー様の愛撫によって 既に私の秘部……

おま〇こは洪水状態です。

するとイツセー様は私の首筋に

キスをしながら私に甘く囁いてきました。

「俺とのセックスで感じてくれてるんだね……

リアスさん。凄く嬉しいよ」

「……っ♡ はうううっ♡♡♡♡」

イツセー様がそうおっしゃった瞬間、  
私は達してしまいました。

ビクビクと痙攣のみならず

イツセー様への思いが止まることなく  
沸き立っていくのが解ります……♡

「ああ……イツセー様♡

イツセー様あ♡」

せめて至らぬまでもイツセー様に  
気持ちよくなつて頂こうと

私は教本で見た様に

イツセー様のモノを扱っていきます。

「んう……！ リアスさん……」

イツセー様のモノが段々と

硬度を増してビクビク脈打っており、

先走り汗なるものが溢れ出していました。

「ああっ！ ……なんて遅しい……」

これがイツセー様の一物……」

はしたなく私はゴクリと唾を

飲み込んでしまいます。

ああ、またしても

お二人の前で粗相を……♡

「ダメよりアス。

一物なんて気取った言い方。

チ○ポって呼ばなきや」

「お、お嬢様……！」

「さ、さすがにそれは……！」

ああ、あのリアスお嬢様が

そんなはしたない言葉を……!?

ですがそれでイツセー様が

満たされるならば……♡

「ち……ち○ポ……？」

恐る恐る私はお嬢様の言葉を  
繰り返すとお嬢様は満足そうに  
頷きます。

「ええ、そうよ。」

ほら、もう一度言ってみて？」

「は、はい……！」

イツセー様の……立派なち○ポ……

素敵です……♡」

ビリビリッと、忽ち電流が

走ったかのように私の全身を快感が駆け巡ります。

「はあ……はあ……はあ……はあ……♡」

ああ、我慢できない……♡

欲しい……♡ 欲しい！

あの逞しい……太い……熱い……

イツセー様の……ち○ポ……！

「はうううううう!!」

お、お嬢様の仰った通り……

素敵……で……ごきますう♡♡♡」

「ちよ!! リアスさん!! いきなり何を!!」

私の視界が真っ白に染まりました。

絶頂に次ぐ絶頂、今まで経験したこと

無い快樂が私を襲い、意識が飛びそうになりました。

「ふふふ……どうやらリアスはイツたみたいね。

でもまだこれからよ？ イツセー？ 次は貴方の番よ？

貴方のち○ポでリアスの

初めてを奪って女にしてあげなさいな。私の様に」

お嬢様は妖艶に微笑むと、くぱあと

私のオマ○コを拡げられました。

軽く陰唇を引っ張られただけで、

私はまた達してしまいました。

イツセー様の視線が私の股間に注がれています。

ああ……見られている……

イツセー様に……見られてる……♡

私はもうそれしか考えられませんでした。

そして、私の中にイツセー様の太くて長い、

熱くて硬いもの……チ○ポがゆっくり入ってきます。

「あ……ああ……♡ イツセー様のが……♡」

イツセー様のペニスを入れられた瞬間、

私はまたしても達してしまいました。

破瓜の瞬間より既に

痛みより充足感が勝り、私は幸福感に包まれます。

「あらあら、リアスったら

入れた瞬間にイっちゃったわね。

でもまだまだ始まったばかりよ？」

「は、はい……！」

イツセー様はお嬢様のお言葉に

応える私に対して

腰をグイッと動かし始めました。

「ああっ！ ああっ！ ああんっ！」

イツセー様のピストン運動に合わせて

私の口から思わず喘ぎ声が漏れてしまいます。

「んっ……くっ……！」

イツセー様も感じて下さっているのか、

私の中に入ったままのお、オチ○ポが

ピクツ、ピクンツと脈打ちながら

大きくなつていくのを嬖全体で理解できました。

「ああ……♡ イツセー様……♡」

私はイツセー様の動きに合わせてるように

身体を動かします。

するとイツセー様は私の想いに

応えてくれるように激しく動いて下さいました。

パンツパンツと

肌と肌がぶつかり合う音が鳴り響きます。

ああ……♡ 凄い……♡

こんなに気持ち良いのは初めて……♡

イツセー様のモノが奥まで突かれる度に

子宮の奥がキュンと疼いて堪りません。

もつと……♡ もつともつと……♡

イツセー様に愛されたい……！

その一心で私は夢中で

はしたなく腰を振り続けるとお嬢様が口を開きます。

「うふふ、リアスってば

大きいお尻とお胸を揺らして

本当にエツチねえ……。

イツセー、リアスの

大きなおっぱいを揉んであげて」

お嬢様はそう言うのと、

私の大きな乳房を鷲掴みにされました。

「ひゃうんー」

つい、バランスを崩してしまい

私は床にお尻を浮かせた姿勢で

うつ伏せに倒れ込みました。

「あうう……」

途端、イツセー様のオチ○ポが

膣内から抜けてしまいました。

私は喪失感を感じつつもイツセー様を見つめます。

「リアスさん……大丈夫？」

イツセー様は優しく微笑むと、

私の背中に覆い被さってきました。

まだ……入れて貰える……♡

そう思うと私の顔はだらしなく緩んでしまいます。

「はい……♡ イツセー様……♡」



「じゃあ入れるよ?」

「はい……お願い致します……♡」

イツセー様は再び私の中に入ってくると、  
今度もゆつくりと抽送を始められました。

「ああ……♡ ああ……♡ ああ……♡」

イツセー様は私が少しでも

痛くないように気遣ってくれているのでしょう。

お優しい方です。

そして、イツセー様は

動きを止められると私の耳元で囁かれました。

「リアスさんの乳首、

すっかりビンビンになってるね」

「はい……♡」

イツセー様の言葉通り、私の

陥没していた両乳首はピンツと勃起しておりました。

「触ってほしい?」

「はい……! どうか……」

私の淫乱な乳首を弄ってくださいませえ……!」

イツセー様が私の両方の

乳輪を指でなぞり始めました。

「はうう……! あっ、あっ、あっ……!」

「リアスさん……すごく可愛いよ」

イツセー様は更に私の乳頭を

床へ押し付けるようにグリグリとされました。

「はうう!! イツセー様あ!! お嬢様あ!!」

お許し下さい!! イツちゃいます!!

またイツつちやいましたゆう!!

あああああああ!!」

私はまたしても絶頂を迎えてしまいました。

しかし、イツセー様は止まらず

ピストン運動を再開されます。

「ああんっ♡ ああんっ♡ ああんっ♡」

イツセー様のペニスが

出入りする度に出る喘ぎ声が止まりません。

「ふふふ、イツセー？」

次は貴方の番よ？

リアスの処女を奪った貴方のペニスで

この子をイカせてあげなさいな」

「はいー」

イツセー様は力強く返事をされると、

今までよりも激しく腰を打ち付け始めます。

その勢いと

快楽に私は為す術などありません。

汗を振り乱し、イツセー様に尽くす事も出来ず、

痴態をお二人ね前で晒すのみでした。

「ああー！ ああー！ ああー！ ああー！ ああー！ ああー！」

「ぐっ……いー！ そろそろ……いー！」

イツセー様が呻くや否や

私の中でイツセー様のオチ○ポが

ビクビク震えて射精の準備に入ります。

ああ……♡ 遂に……♡

イツセー様の熱い精液を……♡

注いで頂ける……♡

私は期待に胸を膨らませると、

膣内がキュツと締めまりました。

次の瞬間ー

イツセー様のオチ○ポから大量の

白濁液が放出されました。

~~~~~♡♡♡

）

ドクンドクンと脈打ちながら放たれるそれは

竜の吐息の様にとても熱く、

まるでマグマかのように

ドロリとした粘っこいものでした。

ああ……♡　これが……♡　イツセー様の……♡

子宮にどくどく注ぎ込まれる感覚に

酔いしれていると、

イツセー様が私の身体を抱き起こしました。

そして、そのまま対面座位の体勢になり

私の唇を奪いました。

んちゅ……♡　レロオ……♡

イツセー様とのキスはとても甘く感じられて、

私は夢中で舌を絡め合わせます。

「ぶはあ……♡」

やがて、イツセー様は私の口から離れると、

今度は私の耳を甘噛みされました。

「はむ……♪　リアスさん、かわいい……」

イツセー様はそう呟かれると、

私の耳の穴に舌を挿入されました。

くちゅ……くちゅ……と

卑猥な音が頭の中に響き渡ります。

ああ……！

イツセー様にこんなにも

求められているなんて……！

私は嬉しさのあまりイツセー様に抱きつきますと、

イツセー様のモノ、オチ○ポが

再び硬さを取り戻していききました。

イツセー様は私のお尻を掴むと、

上下に動かし始めます。

パンツ、パアン、という

肉と肉が激しくぶつかり合う音とグチュツグチャと

愛液と精子が入り交じる水音を

響かせて私達は交わり続けました。

「リアスさん、気持ちいい？」

「はいっ♡ 最高ですよ♡」

「俺もだよ……。」

リアスさんのおっぱいが目の前で揺れてるんだもん。

我慢できないよ」

そう言うとイツセー様は

私の乳房に顔を埋められました。

そして乳首をちゅうつと吸われ、

舐められます。

それだけで私の体は

快感に打ち震え、

頭がクラクラする中で

イツセー様は

私の乳首を歯で軽く噛まれ、

陥没していた私の乳首を引き出しました。

(痛いはずなのに……！ 痛いのに……！)

痛いのに……！ それも堪らなく気持ち良い……！

ああ、ダメエ……！ イツセー様、そんなに強くしたら私……！

また……！ イツちやいますうううう♡)

「イツセー様！ イツセー様！」

私は夢中で

イツセー様の名前を

呼びながら腰を振りました。

「リアスさん、好きだよ」

「はいい♡ 私もですよ♡」

私はイツセー様のお言葉だけで

絶頂を迎えるまでに

夢中になってしまいました。

「ああんっ♡

ああんっ♡ ああんっ♡」

私はイツセー様の

ペニスが出入りする度に喘ぎ声を上げると  
お嬢様もイツセー様も

満足そうな表情を浮かべられます。

「ふふふ、イツセーったら随分と激しいわね。

リアスをここまで乱れさせるだなんて」

「はうう!! あっ、あっ、あっ……………」

「リアス？ イツセーのチ○ポはどうかしら？

貴方の中に入って

るのだから分かるでしょう？ 答えなさい」

「はい…………… とても大きくて……………」

硬くて……………！ 熱くて……………！ 素敵です……………」

私は偽りなく本心をお嬢様に

述べました。

もはや取り繕う事も出来ず、

イツセー様のペニスを受け入れ、

悦ぶことしか出来なかつたのです。

イツセー様がピストン運動を再開されると、

私は快樂に身を委ねてしまいます。

「そう、良かったわ。

なら、もつと楽しみなさい」

「ああんっ♡ ああんっ♡ ああんっ♡」

私は腰の動きを激しくしますと、

それに呼応するようにイツセー様の

オチ○ポが膨張してきます。

（ああ……………♡ イツセー様のが……………♡ 射精の準備に入りました……………

♡ ああ……………♡ 早く……………♡ 熱い精液……………♡ 再び私のメスマ○

コに注いで下さい……………♡）

イツセー様は口にするのも

憚られる私の哀願を理解なされていたのでしよう。

私の子宮に自身の精液を叩きこむべく

最後の一突きを

されました。

その瞬間、私は歓喜の声を上げながら  
イツセー様に抱きつきます。

「イクウウウツ!!」

「ぐあああああ!!!」

どびゅっ♡どびゆるるる♡ どぶどぶ♡

次の瞬間、主の帰還を待ちわびたかの様に

子宮口がぐわっと開き、

イツセー様の子種を搾り取るように締め付けました。

そして、それと同時に大量の白濁液が流れ込み、

私の膈内を満たしていきました。

ああ……! 凄い……! こんなにも沢山出されて……♡ 私は

幸せすぎてどうにかなつてしまいました……♡

私は身体を大きく震わせ、何度も絶頂を迎えました。

やがて、イツセー様のモノが全て引き抜かれますと、私の秘裂から

は収まり切らなかつた精子と

愛液の混合液が大量に溢れ出しました。

ああ……なんて量なのかしら……。

これが全部私の中に注ぎ込まれていたなんて

信じられない……。

私は自分の下腹部に手を添えますと、

子宮の中で脈動しているのを感じます。

まだイツセー様の温もりが残っている気がしました。

「うふふ、もしかしたら

今のセックスでリアスも

イツセーの子供を妊娠したかもね」

お嬢様はそう言って微笑まれました。

「え!? そ、それは……」

リアスお嬢様のお子様だけでなく

私とイツセー様の子が……♡

その二人の乳母となることが

できたのならどんなに

素晴らしい事でしょうか……。  
ああ……。私の前に神々しい光が  
差し込んでくるようです……。  
私はまるで極上の羽毛に  
抱かれるような幸福感に包まれ、  
ついまどろんでしまうのでした……。  
♡

## 第46話

「これより『悪の首領ライ・フェネクスVS正義の使者赤龍帝のヒーローショー』が始まりまくす！」

「うおおおっ！」

司会の声に観客が湧き上がる。

ああ俺はせめて客席に

被害が出ない様にしないと……。

「ふふふ、お前は俺のカキタレになるのだあ〜！」

「きゃー助けてー！」

ライザー、もといライ役の役者が

リアスさん役の女性に迫る。

しかしひでえ脚本だなオイ……。

取り敢えず赤龍帝の鎧（レプリカ）を

着た俺はゴンドラから舞台に

降りる手筈になっているんだが……

ガキン！とゴンドラから

不穏な音がしたぞ……!?

おい、まさか

このまま落下

するんじゃないやねえだろうなあ!?

ガツシャーン!! と轟音が

鳴り響く中俺はどこぞの

イーノック式着地を決めた。

少し足首が痛いがそこは我慢だ。

「……………!?!」

ふと気がつく

予想外のトラブルに

ライ役とリアスさん役の役者が

硬直していた。



マズい……！

何とか場を繋げなければ……！  
するともくもくと舞台袖から  
煙が立ち込める。

成程……こういう演出か。

同時にゴンドラの破片を

回収するのかと思ったのだが……。

(なんか……煙くないか!?)

よく見たらキュクロが舞台袖で

火を焚いているじゃねえか！

引火したらどうするんだよ！

というか舞台客はパニツクに

なっていないのか!?

だが、皆は固唾を飲んで

ステージを見守り誰も動かない。

更に……。

「おーほっほっほー！

私はネフレ！

ライを操りフェニツクス家を

破滅させ、

更にはグレモリー家に乗っ取り

冥界の支配を目論む

大大悪党でしてよ！」

仮面舞踏会で使うようなマスクを

つけてノリノリで芝居をする

レイヴェルがキュクロと

アヴェンジャーに担がれる様にして現れた。

そして彼女は扇子を広げると高笑いを上げる。……………これって

台本にあったかな？

しかも何か観客席の方々が

拍手をしているんですけど……。

流石にこれは予想外だったぜ……。

「さあお前達！」

私に従いなさい！

逆らう者はこの私が許しませんわ！！

因みに今煙いのは私の毒ガスに

よるものですわ！」

何と客席に向かって叫ぶ

レイヴェル。

……うん、これも

台本には書いてないね。

「ヒドい！ ヒドいやー！」

「僕たちはお前なんか

従わないぞ！」

「帰れー！」

子供達はレイヴェル……じゃなくて

ネフレに扮する彼女にブーイングを送る。

「フッ……」

ならば仕方ありませんわね。

力づくでも言うことを聞かせますわ！！

お前達、やっておしまいなさい！」

そう言って

ネフレはキュクロとアヴェンジャーに指示を出す。

お前は来ないのかよ！ ……まあ良いか。

とにかくこれで舞台は整った訳だしな。

「そこまでだ！」

大大悪党め！！」

俺は右手を前に突き出すと

ポーズを取るや

『おおっ！』という

皆からの歓声上がる。

何だか少し照れくさいな……。

「ま、待て！ 貴様の相手はわた」

「がやがやとやかましいぞ」

「バツコオン！」

「キュクロがいきなりライ役の

「お兄さんをふっ飛ばしたぞ!？」

「何やってんだあ!？」

「ふん、まるででこたえのない」

「パンパンと埃を払いながら

「呟くキュクロに何故かギャラリーが

「沸き立った！」

「あ……ここグレモリー領だから

「ライザーは嫌われ者なのか……？」

「ちらりと見るとレイヴェルは

「明らかに不機嫌そうに

「顔を歪ませている。」

「気持ちは解らんでもないが……。」

「さてと、やろうか

「きゆうどー」

「いや、赤龍帝だからな！」

「今の俺は！」

「俺がツツコミを入れると会場がどつと湧いた。

「……ではいくぞ」

「おう」

「俺達は互いに構えると

「「勝負だ!」」

「同時に叫んだ。

「次の瞬間俺達の拳がぶつかり合い

「衝撃波が辺りに広がった。

「バシユウウン！」

「凄まじい音を立てて

「俺とキュクロの攻撃が

相殺される。

会場に突風が吹き、会場が静まる。

「うでをあげたな（腕を上げたな）」

「そちらもな（加減しろー!）」

俺達が互いの実力を認め合う

芝居をする

観客が更に盛り上がる。

臨場感溢れるバトルに

興奮しているようだ。

「えい」

シュン!

「おつとおー!」

ヒュン!

キュクロが放った音が

遅れてやってくる速さの

攻撃を避け、

俺は体勢を立て直すと

今度はこちらから仕掛ける。

「ドリアアアッ!」

ゴオン!

渾身の一撃を繰り出すも

キュクロは【不殺の聖剣】で

防御すると轟音が鳴り響く!

ぐお……! 拳が痛い……!

「どうした、きゆうどー?」

キュクロのおしえたわざを

わすれたか」

馬鹿!

【六合太極】を

こんなヒーローショーで

使えるかよ! 大惨事になるだろ!

あと赤龍帝だつて言つてるだろ！

「ふーむ、

やはりほんきでやらないと  
きゆうどーはつよくならないな。

つよいものとたたかわないと

せいちようはない。

と、ぼるくがいつていた」

ぼるく？

ああ……、

ボールクの大將の事か。

確かに強い奴と戦えば成長できるかもしれないけど、

今ここでキユクロと本気で戦ったら

「グレモリー領の皆さんが

大変な事になりかねないんだぞ……。

どうしたものか……と

考えあぐねていた所。

「そ、そこまでよー赤龍ていー」

妙に上擦った裏声で

アヴェンジャーが見知らぬ

女の子を人質にしていた！

「あ、あわわ……」

人質にされているのは

見知らぬ女の子だ。

年は俺達と同じくらいに見えるが

身長はだいぶ小柄で

小猫ちゃんと同じ位だ。

髪は少ウエーブがかつた

水色の髪で背丈は小猫ちゃんと

同じ位だ。に、しては

豊かなモノをお持ちだが……。

「この娘の命がー？」

惜しいならー→？

さっさとー、降伏しーなさいー」

し、しかし演技が酷すぎる……。

アヴェンジャーはツンデレの上に

ポンコツ属性まで持つているのか？

「……………」

キュクロはアホみたいに

ポカンとしていたが

一方人質の子は震えながら

涙目になっている。

うう……物凄い罪悪感を感じる。

「貴様！ お嬢様に何を！」

急に控えていた黒服達が

アヴェンジャーを取り押さえようと

したが

「竜の魔女の前に

雑魚が吠えるか！ 耳障りな！」

アヴェンジャーが

腰に差した剣を一振りするや

黒服達は昏倒してしまった！

あ、そこは演技じゃないんですね……。

人質の女の子はもうすっかり

顔面蒼白になって俺に助けを

求める視線を送ってくる。

「た、たすけてええええ!!」

その悲鳴はステージ上の俺達にも

よく聞こえてきた。

大事になる前に何とかしなければ！

「やめろ！ その子を離せ！」

「ハア？ なんで私が貴方の

指示に従う必要があるんです？」

めちやめちや煽る様な冷笑を浮かべながら  
アヴェンジャーは俺を嘲笑する。

「私はネフレ様の部下ですよ？」

無能な上司が命令しないなら

部下が勝手に最善の行動しても

問題ないですよね？ フフツ」

地味にレイヴェルまで煽る始末だ。

すると、キユクロが

「きゅうどー」。

あのこをまもってやれ」

と俺に語り掛けて来た。

そうしたいのはやまやまなんだが

アヴェンジャーは想像より遥かに

スキがない。どうしたもんか……。

「お、お願いです！

私を傷つけるのは止めてください!!」

「あら？ 貴族の様な身なりの

くせに平民ばりに命乞いでか？

無様なこと」

「そ、そうではなくて……！」

大変な事になっちゃうんですう！」

アヴェンジャーがそう言った途端

俺は思わず飛び出してしまった！

シュン！

アヴェンジャーが俺の拳を難なく避ける。

しかし俺はそのまま突っ込むと

人質を掴んでいる腕を力ずくで引き剥がす！

ドガツ！

そのまま俺はアヴェンジャーの鎧を殴り飛ばした！

「きゃあああああ！」

アヴェンジャーの手から離れた

女の子をキャッチすると、

俺はすぐさまアヴェンジャーから距離を取る。

「あ、ありがとうございますー！」

女の子がお礼を言う

キュクロもこちらに向かって来た。

「ひっ……！」

人質にされていた子は

キュクロの迫力に怯えてしまっている。

た、確かに今のキュクロは

悪役だからな……。

「しんぱいするな。

せきりゆうていはつよいからな。

おまえたちを

きずつけることはない」

キュクロが優しい口調で語ると

女の子は

少しかだけ落ち着きを取り戻した。

「は、はい……」

顔色も徐々に良くなっていく。

良かった。これで一安心かな。

と思ったら……。

ズガガガガッ！ブオッ！

槍の様な燃え盛る鉄杭が

俺達の近くに突き刺さると

赤黒い炎を噴き出していく。

アヴェンジャーの仕業か……？

俺が鉄杭の飛んできた先の方を

キツと睨むとそこには

アヴェンジャーが怒り満面で

俺達の方に歩いて来ていた。

「よくもこの私を殴ってくれましたね……。



いいでしょう……。

この【竜の魔女】が直々に  
相手をしてあげますよ……」

ゴオオオオオン!!

アヴェンジャーの

怒りに呼応したのか

周囲の空気が熱気を帯びていく。

「……」

俺もアヴェンジャーを見据えるが

先程までのアヴェンジャーとはまるで別人だ。

さつきまではただの

ツンデレポンコツ残念キャラかと思っていたが

今日の前にいるのは本物の殺気にまみれた修羅だ。

「喰らえッ！」

アヴェンジャーが叫ぶと同時に

その右手には燃え盛る火球が宿り、それを

間髪入れずに俺へと投げつけて来る。

「危ない！ 避けて！」

人質の子が悲痛な叫びを上げる中

俺はアヴェンジャーの放った

火の玉を受ける。

避けたらあの子に当たるからな！

「ぐっ……！」

「ふん！ 私の攻撃を防ぐなんて流石ですね……。

でも次はどうかしら？」

シユババババ！ ドカアツ！

今度は剣と槍の様な旗を合わせて

多段攻撃が繰り出される。

「ぐう……！」

「ハハッ！ 防戦一方じゃないですか！

もつと楽しませてなさいよ！ ねえ！」

バシッ！ ザシユ！ ドガッ！

「く、くそお！」

俺は必死で攻撃を捌いて行くが  
反撃する隙が無い。

アヴェンジャーがこれほど

強いとは想像もしていなかった。

だが俺は諦める訳にはいかない。

ここで負けたらあの子はどうなる？

「まけるなーせきりゆうてい！」

「がんばえー！」

「赤龍帝！ 赤龍帝！」

ステージの観客も

すつかり応援ムードだ。

皆の声援を力に変えて俺は戦うんだ……！

「はあああ!!」

シユンッ！

「何!？」

アヴェンジャーの背後を

一瞬で取ると俺は渾身の一撃を繰り出す。

しかしアヴェンジャーは

俺の攻撃を避けようもしない。

……一体何を考えている？ そう思った時だった。

フツ、とまるで蜃気楼の様に

俺の攻撃はすり抜けていった!?

幻術でも使ったのか!?

「我が身は泡沫の夢……!」

汝が道は……既に途絶えた！」

詠唱と同時に俺の周囲に

虚空から鉄杭が突き出して来る。

まずい！ これは避けられない！

ドスドスドスッ！

「うわああっ！」

俺は咄嗟に防御したが、  
数か所被弾してしまった！

更に鉄杭が火を噴き

身体を鎧の中から焼き焦がす。

強烈な痛みと衝撃を受けて

俺はその場に膝をつく。

「おや？　もう終わりなのですか？

私のマスターにしては

期待外れもいい所ですね」

アヴェンジャーが失望した様子で語り掛けてくる。

クソ……！俺はアヴェンジャーを

睨みつけると立ち上がろうとするが

上手く力が入らない……。

このままじゃ……負けてしまう……。

「あ、ああ……！」

人質の女の子は恐怖のあまり

声も出せず震えているが

そんな彼女をキュクロが

宥める様に肩を叩く。

「だいじょうぶだ。

せきりゆうていはつよいからな」

キュクロがそう言うと

女の子は少しだけ安心するが、

それでも不安そうな表情は消えない。

……そうだよな。

こんなに怖い思いをしたら無理もない話だよな。

俺は何とか立ち上がりながら

自分の不甲斐なさを悔やむ。

「……ごめんなさいー」

人質の女の子が何故か俺に

謝ると急に身体が軽くなり、  
痛みが嘘の様に引いて行った。  
だが回復を使った様子はない……？  
どういう事だ？

それにこの感覚はまるで

俺が使う糸の技の様な……？

だがこのヒーローショーを

円満に終わらせる事の方が

先決だ。

「うおりゃあああ!!」

陰と陽を混ぜ合わせた気合と共に

俺はアヴェンジャーに向かって突進していく!

「無駄ですよ!」

ズガガガガツ!!

俺の行く手を阻むように

周囲の地面から大量の鉄杭が

出現して来るが俺は構わず突っ込んでいく!

「関係ねえな!」

俺は【六合太極】の力を

発動させてアヴェンジャーへの

攻撃を無効化する魔術を空間ごと

拳で打ち砕いた!

「そんな……!?!」

アヴェンジャーがありえないとばかりに

目を見開く中俺は彼女の懐まで潜り込むと、

渾身の右ストレートを寸止めた。

(ほ、ほら!取り敢えず

吹っ飛んだフリをしろ!)

(え、ええ……)

俺はアヴェンジャーに目配せすると

彼女は戸惑いながらも

俺のパンチを喰らう演技をする。

「うわああー!?!」

なんてえ、すごいー←、

攻→撃←なのかしらああ〜」

……あまりにも戦闘時と

ギャップがありすぎやしませんかね

アヴェンジャーさん……。

俺とアヴェンジャーがステージの端で

待機していると、司会者がマイクを持って来た。

「な、なんととおおお!赤龍帝くんのお、

必殺技が炸裂ううう!

そしてそれを受ける竜の魔女ちゃんも見事お!」

司会の言葉に合わせて会場も沸く。

「お、おのれ!」

実は私は一発パンチされただけで

ダウンする貧弱悪魔ですから

ここは立ち去りますわ!」

「おぼえていろー」

レイヴェルとキユクロは

そう言い残してステージの袖へと走って行った。

いや、お前のそのキャラ設定はどうなんだレイヴェル……。

俺は呆れるが、今はあの子だ。

「大丈夫か?」

俺は人質になっていた女の子に

近づくとすつと手を差し伸べる。

「は、はい……大丈夫、です!」

女の子は俺の手を掴むとゆつくりと立ち上がる。

「本当にありがとうございます……!」

女の子はそう言って深々と頭を下げる。

「皆さん!赤龍帝と竜の魔女の

熱い戦いに大きな拍手をお願いします!」

司会の男がそう言うのと観客から盛大な拍手が送られる。  
まあ、何にせよよかったよかった……。。

しかし俺とキュクロ、

そしてアヴェンジャーとの

戦いの余波が相当あつた筈だが

観客には怪我も汚れもない。

誰かが防壁を張ってくれたのか？

『フーン……ロスヴァイゼから

貰つた特売特典のチケットで

見に来たショーだけど

すつごい掘出し物見つけちゃつたかな？』

『ふう。リアスお嬢様とイツセー様を称える

舞台上で騒ぎを起こす訳にはいきませんもの……』

俺が疑問に思っていると何処からともなく

そんな声が聞こえてきた。

一体誰の声だ？

俺が周囲をキョロキョロと見渡したがもはや

その声の主達はどこにもいなかった……。

↓

場所は変わって俺はリアスさんと

イツセーに付き添って

会合とやらに向かう事になった。

正直、貴族の会合になんて

行きたくはないがヒマだし……。

すると通路で見知った顔に会った。

「ほう、赤龍帝にリアス。

それにアザゼルの右腕か。

皆息災で何よりだ」

そこに居たのはサイラオーグさん。

何でも若手悪魔のナンバーワンで

その実力は次期魔王の

呼び声も高いとか何とか……。  
と、言うか俺がいつの間にか

おっさんの片腕扱いになってるんだけど!?

「違うわよサイラオーグ！」

彼はゲイトの右腕！

私のイツセーの親友で

私の盟約者よ！

誤解しないで頂戴！」

するとサイラオーグさんは

肩を揺らして豪快に笑った。

いや、俺は誰の右腕でもないよ!?

「ハハハハハ！ それは悪かった！

非礼を詫びよう、すまなかつたな

九頭竜安里」

「いえ、別にいいスよ。

ところで何をしに通路に？」

「何、

下らん諍いに少々疲れたのでな。

気分転換を兼ねて

外の空気でも吸おうと思ってな。

そうしたら、

たまたまお前達を見かけた」

嘆息と共にサイラオーグさんは

答えた。

諍い？まあ、魔族で更に貴族なら

我の強い奴も多いだろうからなあ。

「下らん諍い……ということとは

全員出てきているの？」

リアスさんが訊くと

サイラオーグさんは小さく首肯した。

「ああ、そうだ。

アガレス、アスタロト、  
フェニックスは勿論、  
ゼファードルも来ている」  
ゼファードルって

名前が出てきた途端、

リアスさんは嫌そうな顔をした。  
多分ロクな奴じやなさそうだな。

「気持ち解るが

そう嫌そうな顔をするなリアス。  
それに悪い話ばかりでもない。

あのルイーナが珍しく出席している」

「え、ルイーナが……？」

リアスさんが意外そう、

かつ嬉しそうに言う

「イツセーがリアスさんに尋ねる。

名前から女の子だと見たんだろうが

反応が早いな……」

「もう、イツセーってば！

ルイーナは私とサイラオグの

幼馴染でムールムール家の娘なの。

ムールムール家は代々バアル家と縁があるの」

「へえ、どんな人なんですか？

リアス先輩の幼馴染って事は

やっぱり美人だったりしますか？

おっぱ、もとい胸が大きいとか……」

イツセー……お前という奴は……」

リアスさんも苦笑いだぞ。

「ははははは！

お前は相変わらずだな。

俺の主観も入るが冥界で

二番目に美しい女だ。



性格は……

文字通りの箱入り娘と言った所で

『紅髪の滅殺姫』に対して

『蒼髪の生誕姫』と

呼ぶものもいる」

サイラオーグさんは

そう言って笑う。

と、その時だ！

ドオオオオオン！

「きゃあ!？」

「うお!？」

突如として爆音が鳴り響き

建物が激しく揺れる。

「全く、擦り合わせがとんだ

私闘騒ぎになりかねんな」

サイラオーグさんが呟くと

眷属らしき面子と大広間に

急ぐ。

俺とイツセーも慌てて後を追う。

「これは……」

大広間に入るとそこは荒れ果てていた。

壁や床が砕け散っており

天井には大きな穴まで空いている。

そして、そこには……

一触即発といった雰囲気醸し出す

二つのグループと、

テーブルで紅茶をキメる糸目の

兄ちゃんとフード集団。

それとレイヴェルに……。

そのテーブルの下でブルブル

頭を抱えて震える青い髪の

女の子がいた……ってアレ!?  
ヒーローショーの時に

人質になっていた女の子じゃないか!?

「ルイーナ!」

リアスさんが叫ぶと皆が驚く。

すると青髪の女の子は顔を上げ、

涙目でリアスさんに抱きついた。

「ふ、ふえええん!

リアスちゃん!」

「ちよつとどうしたのよ!」

一体ここは何があったの!」

「それがね、私が

ここに来た時にこの人達が

いきなり襲いかかってきて、

それで怖くて隠れていたの」

すると、ヤンキーっぽい

グループのリーダーがキレ出した。

「おいコラー!

人聞きの悪い事言ってるじゃねえぞクソアマア!

俺達が折角百発百中のお宝を恵んでやるつてのに

テメーみてーなメンヘラ悪魔が断わりやがったから、

実力行使に出ただけだ!

薄汚えムールムール家の血を

俺達の精液で清めてやろうつてのによお!

なあオイ!」

そう怒鳴ると、

他の連中もそうだそうだと

喚きだすやら笑い出すやら……。

……チヨットナニツテルノカワカリマセンネ。

「ゼファードル……貴方は」

「今の言葉、取消せゼファードル」

「なんだよバアル家のむの」

ガツシヤアアアン!!

サイラオーグさんが最後通告を

出していたが一瞬遅れて俺の拳が

ゼファなんとかの顔面にめり込む。

「ぐが……!?!? テメエ……い!」

吹っ飛ばすつもりだったが

流石は腐りきっても貴族。

踏ん張って堪えたか。

「なにしやがんだア!!」

「俺は部外者だから

しがらみがないのでテメーを

遠慮なく殴った。文句あるか?

クソ野郎」

「こんな事して生きて冥界から

出られると思うなよ!」

ゼなんとか、面倒だからカスの

取り巻きがゾロゾロと

俺を取囲み始めた。

ケツ、わかり易い奴らだな。

「ゼファードル、

それにそののチンピラ。

こんな所で戦いを初めても

仕方ないのではなくて?

馬鹿なの? 死ぬの? 死にたいの?

殺しても上に咎められないかしら」

カスと諍いをしていた

青いローブを羽織った

メガネをかけた女悪魔が言う。

ち、チンピラ……。

まあ、事実だけどさ……。

「へ、この方は……」

チンピラじゃありません！

わ、私の騎士様です！」

すると怯えていたルイーナさんが  
俺の腕に抱きついてきた。

うっ……や、柔らかなものが  
むっちり当たる。

いかんいかん、心穏やかに……！

俺は大きく深呼吸する。

「すう……はあく……」

よし、落ち着いた。

「そうなんですか。」

なら、レーティング・ゲームで

決着をつけたらどうでしょう」

何と紅茶をキメていた

糸目の兄ちゃんが

口を挟んできた。

いや、レーティング・ゲームって

俺は悪魔の駒じゃないぞ!?

ルイーナさんが言ったのは

ものの喩えだろ！

しかし、カスはニヤリ、と

勝利を確信した様な笑みを浮かべる。

「いいぜえ、

レーティング・ゲームなら

殺しても罪にはならねえからなあ」

「そうですね、不幸な事故です」

何だ糸目の兄ちゃんとカスは

妙に意気投合している。

さてはコイツら……グルなのか？

「ちよつと待てよ！

ルイーナさんはここに眷属を  
連れてきていないだろ！

さては安里をリンチするつもりだな  
お前ら！」

イツセーが叫ぶと、

糸目の兄ちゃんはキョトンとした後、  
クスッと笑う。

「ああ、すみません。

赤龍帝さん？

僕は貴方が嫌いなので

話しかけないでくれますか？」

「なっ……!?!」

イツセーが絶句すると、

糸目の兄ちゃんはゴミを見る目で続ける。

「だってそうでしょ。

私の作品を貶める輩なんて、

私にとって

ただの害悪でしかないですよ……ぐうう……」

作品？は？何言ってるんだコイツ？

紅茶をキメ過ぎて

頭がイカれちゃったのか？

「安里、彼は何を言っているのですか？

意味不明すぎて理解できませんわ」

「安心しろよ、俺も解らん」

俺もレイヴェルに同意すると、

「ふふふ、まだわからないのかい？

君達には失望させられたよ。

やはりあの時、私の『作品』の

素晴らしさを伝えておくべきだったわね。

後悔先に立たず、というやつだ……や、やめろ……!」

何かトリップしてやがるな……。

何か頭を抱えだしたし……。

とにかく、その後遅れてやってきた

ソーナさんの取り計らいで

レーティング・ゲームの話は一旦保留となった。

だがカス取り巻き連中はやる気満々で、

一週間後に奴等とルイーナさんで

レーティング・ゲームを

やる事になった。

まあ、こうなったらやるしかない。

と俺は決意すると共に、

先程から気になっていた事を訊くことにした。

「ルイーナさんの眷属の皆さんは？」

姿が見えない様ですけど」

「……はい。実は……いません」

「……はい？」

「私には眷属はいません……。

私がお父様に嫌われているから

誰も近寄って来なかったんです」

悲しそうな顔で言うルイーナさんを

俺は思わず抱きしめてしまった。

「えっ、安里さん？ど、どうして急に……」

「嫌な質問をしてしまってますみませんでした。

でも、もう大丈夫です。

これからは俺がいますから」

「……ありがとうございます」

俺の言葉に、ルイーナさんは顔を真っ赤にして小さく呟いた。

## 第47話

「成程成程。」

で、お前さんはそのこの嬢ちゃんの騎士としてレーティング・ゲームに参加するハメになったと……」

ことの顛末を聞いて

アザゼルのおっさんは

顎を擦りながらルイーナさんを見やりつつ言う。

「仕方ねえだろ、話の流れで

そうなたちまつたんだ……」

俺はガシガシ頭を搔いて

溜息をつく。

「あうう……ごめんなさい。」

私が迂闊な事を口走らせたばかりに……」

ルイーナさんが申し訳なさそうに

俺達へ頭を下げた。

「ルイーナさんが謝る事はないさ。」

俺がプツンして、

あのゼファードルとかいう野郎を

ぶん殴ったのがそもそも発端なんだから」

俺の言葉に、アザゼルのおっさんも

同意する様に頷いたがそこは

フォローしてくれないのな。

「まあ、事情は概ね理解したぜ。」

しかしそうなるとメンバー集めを

どうするかになるな……」

おっさんは腕組みして

考える素振りを見せる。

「まあ、事情は概ね理解したぜ。」

え？ カテレア、レイナーレ、ミツテルトは駄目なのか？俺の疑問を先読みしたらしくおっさんはタバコに火を点けて話を続けた。

ルイーナさんが煙たそうにしているから止めてほしい。

「おいおい、無茶言うな。」

墮天使と旧魔王家の幹部だぞ？

嬢ちゃんの眷属って事にするには限界があるだろ」

そ、それはまあ……確かに。

でも、じゃあ他に誰が居るんだよ？

キユクロやアヴェンジャーは

嫌だって言うし。薄情な奴等だ。

するとおっさんはフツと笑って

意外な名前を口に出した。

「シユタークと

ボールクはどうだ？」

「ええっ!？」

シユタークさんはフリーの

悪魔祓いだし、

ボールクの大將は

デビルハンター

みたいなモンだろ!？」

悪魔の下につくなんて有りなのか？

目が点になっている俺をよそに

アザゼルは二人に電話を始めた。

……そして数分後。

「やつてもいいってよ。」

シユタークの奴は



イツセーと試してみたいコトがあるとかでノリ気だった。

ま、ボールクは報酬次第だとさ」

……マジか。

いやまあ助かるけどさ。

何考えてるのかよくわかんない人だよなあ……。

「ありがとうございますー！

これで

レーティング・ゲームに

出られますね安里さん！」

ルイーナさんは

嬉しさ満面といった様子で

俺達に礼を言う。

嬉しくはあるが

浮かれてもいられん。

せめてあと一人か二人は

力を貸して欲しい。

だが、これ以上の人材となると

なかなか難しいだろう。

「出切ればもう一人か二人は

欲しい所ですね。

安里様とボールク氏が前衛、

シュタークが後衛としても

中衛か後衛が欲しい所です」

俺は『騎士』扱いなら

ボールクの大將は『戦車』か？

シュタークさんは実力的に

『女王』だろうから

『兵士』か『僧正』になるだろう。

しかし『兵士』になってください

なんて無礼なスカウトも出来ない。

するとドアがコンコンと  
ノックされる。

一体誰だ？ と首をかしげている  
俺より先にルイーナさんが  
応対に向いた。

「はい、どちらさまですか？」

そう言っつて扉を開けると

そこには二人の女性を連れ立つ  
爺さんが立っていた……！

「何じやお前さん。

アザゼルの新しいイロか？」

い、イロっつて……!?!?

いきなり現れて何言いやがるんだ

このジジイ!

おっさんの知り合いは

こんなのばかりかよ!?!

「イロ……?」

ルイーナさんは箱入り娘だけ

あつてイロ、つまり情婦の意味を

知らずに首を傾げていた。

よかった、まだ知らないようだ。

「知らんのか？」

イロというのはな、愛人の事じゃ」

「ふええええっ!?!」

ジジイの言葉に 顔を真っ赤にして

慌てるルイーナさん。

なんてことを言いやがるんだ

このジジイは……!?!

「ち、違います!?!」

私は安里さんのモノです!?!」

つてルイーナさんも

とんでもねえ事を口走ってる！

そういう誤解を招く発言は  
勘弁してくれませんかね!?

「ほっほ、

若いとはいいいものよのう。

全く羨ましいわい」

爺さんはかっかつ、と笑いながら

俺達を見回すと長い髭を擦って

ご満悦の様子だった。

「しかし、爺さん。

若い女二人も侍らせてどうした？

若い女をそばに置くのは

歳を取った証拠らしいぜ？」

おっさんがからかい半分に言う

爺さんは「ふん」と鼻を鳴らした。

「ワシに言わせりゃ

そんなものはただの偏見と僻みじゃよ。

人生は楽しまねば損というもの。

ならば若く美しい女子と

戯れるのもまた一興。そう思わぬか？ アザゼルよ」

「ま、否定はしないさ」

アザゼルのおっさんと爺さんは

互いにニヤリ、と笑うと

握手を交わした。

……この二人、

意外と気が合うんじゃないのか？

「全く嘆かわしい……」。

主神オーデインとしての

節ある態度をお忘れなき様に！」

エロオヤジとエロジジイの

親交にたまりかねた様子の

レディスーツを着た女の人が  
オーデインと呼ばれたジジイを  
注意していた。

……ん？ オーデイン？

このスケベジジイが!?

「あつはは！ 信じられないって

顔してるねえキミ！」

俺の顔を見て、もう一人の

カジユアルな感じに肩の空いた上着と

黒のミニスカートを履いた

ピンク色のツインテールの子が

愉快そうな声で笑った。

声もデカいが、背も含めて

色んな所もデカい……!!

「あの、あなた達は……?」

ルイーナさんが尋ねると その女の人は

「あはは」と笑って 自己紹介を始めた。

「初めまして！」

アタシはヴァルキリーのスコグルってんだ!

よろしくボーイ! フーセンガム食べる?」

何だかテンションが高いな……。

苦手とは言わんが、ちよつと疲れるぞ。

そしてもう一人はというと……。

「私はロスヴァイゼと申します。

以後お見知りおきを……。」

落ち着いた雰囲気的女性だった。

クールビューティーというか

スコグルさんとは正反対って感じだな。

「あーダメダメ、ロスヴァイゼ。

硬い硬い! 硬くていいのは

身持ちだけにしときなつてば!」

スコグルさんが茶化すと

ロスヴァイゼさんは何と急に泣き出した！  
な、何でだ!?

「どーせ……いーどーせ私は

彼氏いない歴イコール年齢の

行き遅れですよおく!!

私は私で頑張っているのにー!!」

「そういう所じゃない?」

「そういう所じゃろうなあ」

「うわああああん!!」

ロスヴァイゼさんは

遂に床に突っ伏して、

ドンドン床を

叩いて号泣し始めた……。

え、えつと……何これ?

「……ええと、

とりあえずミントティーでも

飲んで落ち着いてください。

心が安まりますよ」

困惑する俺達に気を使ったのか

ルイーナさんがそう言っ

皆にハーブティーを差し出してくれた。

本来なら令嬢で主なものに使い走りをさせて

いいのかな……?」

「ありがとうございます……ぐすっ」

まだ泣いているけど

何とか落ち着く事は出来たようだ。

よかったよかった……。

「アタシは

オレンジジュースがいいな」

しかしスコグルさんと来たら

ガサゴソと冷蔵庫を勝手に開けて漁りだしたぞ！

なんなのこの人！  
自由過ぎる！

「は、はい……どうぞ」

ルイーナさんが恐る恐る

オレンジジュースを渡すと

スコグルさんは

それをグビグビ飲み干した。

「ふはあ！ 生き返るう！」

「そ、それはよかったです」

いや、よくねえ……。

態度がデカすぎるだろ！

「で、爺さん。

何をしにきたんだ？」

「何をしにとはなからう。

ゼウスの奴は

赤龍帝に会いに行くというから

ワシはお前たちの方にな」

「いきなり寝業かよ」

アザゼルのおっさんが

呆れたように 言うが

寝業って何だ？ 食えるのか？

「あははっ！

安里クンって強いだけじゃなくて

面白い所もあるんだねー！

ますます惚れちゃったよ！」

スコグルさんは 何故か上機嫌に笑いながら

俺に抱きついてきた！

胸の感触が気持ち良い……！

そ、それに惚れたって何だ!?

「私の旦那様から離れなさい！」

「私の騎士様から離れてくださいあい！」

しかしそんなスコグルさんを

引き剥がそうとするかのように

ルイーナさんとカテレアが

両側から引っ張ってきた。

流石に二人には勝てなかったのか

スコグルさんは俺から離れた。

「もう、二人とも嫉妬深いなあ。

こんなのスキンシップだってば！

カリカリしないのー」

「どこの世界のスキンシップですか!?

もつと慎みを持って下さい！」

「そうですよお！」

「はいはい、

分かりましたよーだ！」

ロスヴァイゼさんと

ルイーナさんが怒るとスコグルさんは

子供みたいに拗ねてしまった。

本当にこの人は掴めないな……。

「あ、因みに寝業っていうのは

裏工作とか密談って意味だよ♪」

「……心を読まないでくれませんかね」

俺がジト目で言うと

スコグルさんは ケラケラ笑った。

「あはは！ ごめんごめん！」

アタシは思った事を

すぐ口に出しちゃうんだよねー！

でもそれがアタシの

チャームポイントだから

許してクレーター☆ この通り！」

てへぺろのポーズと両手を  
合わせながら詫びられても……。

何だかロスヴァイゼさんとは  
違うベクトルで

残念な感じだな……。

だが、嫌いになれない魅力がある。  
不思議な人だ。

「まあ、スコグルの事は置いておいて  
早速本題に入らせて貰おうかのう。

実はワシの未来視によると

ロキが不穏な動きをしておる」

「何だよジジイ。

身内の揉め事をわざわざ報告しに来たのか？」

アザゼルのおっさんが

面倒くさそうに言うのと スコグルさんが

目を細めた。

「だよねー！」

「いや、違うわい！」

ワシはロキを止めようとして

逆に返り討ちに遭うという予知を見たんじゃ！」

「何だジジイ。

アンタ口で言うほど

強くねえのなあ……」

おっさん少し言い過ぎじゃねえか？

しかしオーデインの爺さんは

怒るところかどこか寂しげに微笑んでいた。

「ワシも年を取りすぎた。

全盛期の力は既に無い。

老いぼれのワシでは 奴らを止める事など出来ぬ。

数多の雷神が集い、

乱を起さんとしておる……」



「奴等と数多の雷神……?」

「ヤバそうな話だが」

「俺はまずルイーナさんと」

「レーティング・ゲームで」

「ゼファードルの野郎を」

「ぶっ潰す事が肝心だ。」

「すると俺達の作戦を書いた」

「紙を見たスコグルさんの顔が」

「華やいだ。」

「なにになにー!・面白そうじゃん!」

「アタシも参加させてよー!」

「な、何を言ってるんですか!」

「これは遊びじゃないんですよ!」

「そうですよお!・危なすぎますう!」

「ルイーナさんとロスヴァイゼが」

「慌ててスコグルさんを引き留めるが」

「笑顔で首を横に振っている。」

「大丈夫だって!」

「アタシはこれでも結構強いんだよ!」

「それに、こんなに楽しそうなイベントを」

「見逃せる訳ないでしょー!」

「おいスコグル……お前まさか」

「おっさんが何かに気付いたのか」

「眉間にしわを寄せた。」

「うん、アタシはこれから」

「このコと一緒に行動するよ!」

「いいでしょ? オーディン?」

「俺に肩を組んでスコグルさんは」

「野放図に言い放った。」

「いや、勝手に決めないで欲しいんだが……。」

「しかし、オーディンの爺さんは」

小さく溜息をつく。静かに言った。  
まるで仕方がないと言わんばかりに。

そして俺の方を見ると 真剣な眼差しを向けた。  
まるで俺の覚悟を問うように……。

しかし今は勝率を少しでも上げるためにも  
この提案に乗るしかないだろう。

「解りました。お願いします」

「だーかーらー！ 硬い硬い！」

スコグルさんは俺に抱きつくと 頬ずりした。

柔らかい感触と甘い匂いが

俺の身体を刺激する。

「ず……ずるいですう！」

今度はルイーナさんが反対側から

抱きついて真っ赤になりながら

抗議してきた。

な、何だよこの状態は!?

嬉しくないと言ったら

ウソになるけどさあ!

「あはは！」

安里クンつてばモテるねー!

でもライバルは多い方が

楽しいモンね！」

「そ、そういう問題じゃありません！」

ルイーナさんが顔を赤くしながら

叫ぶがスコグルさんは 悪戯っぽく笑っていた。

しかし、シユタークさんに

ボールクの大將、スコグルさんが

いれば何とかなるよな……。な？

↓

どうも、兵藤一誠です!

今、絶賛死にかけています!

タンニーンさんから

ドラゴンのブレスをかわしたり、しのいだり、逃げまどいと、もう大忙しです！

『相棒、流石に逃げてばかりでは 勝てないぜ』

ドライグが呆れた様に言うが そんな事は分かってる。

『パインサージェント』（乳独創）

による分身もあつという間に消されてしまった。

「ふむ、なかなかやるではないか。

ならば、次はこれでいくぞ」

「え、ちよつ……！」

タンニーンは背中の翼を広げると

そのまま飛び上がった。

空中に滞空した状態で 魔力を高めていく。

ヤバイ！

「むううん！」

ズゴオオオオン！

タンニーンさんが魔力を込めつつ

竜の巨体を活かした踏み荒らしで地面を踏み抜くと、大地が隆起し、巨大な土の壁が出現した。

その壁は俺の目の前まで迫ってくる。

「うおおー！」

俺は咄嗟にドラゴン・ショットで

土の壁を破壊したが……！

「ぬるい！」

タンニーンさんの尾撃が俺を襲う。

強烈な一撃を受け

ハエたたきを食らったかのように  
地面に叩きつけられた。

くそ、やっぱり強い！

「ふん、まだだ」

「げえっ！ またかよー！」

再びタンニーンさんが

口を開くと 口から火球を吐き出す。

どわああああ!!

俺は慌てて転がりながら回避するが

今度は背後にあつた 岩山が爆発し、崩れ落ちた。

マジでヤバすぎるだろコレ……!!

「ほれ、次行くぞ」

「ひい！ 勘弁してくれ!!」

それから数時間後。

「うくむ……。やはり厳しくするだけでは

禁手化に至らぬのだろうか」

タンニーンさんが地面に転がる俺を見ながら呟いた。

俺の全身はボロ雑巾の様になっていて、

立ち上がる気力すら残っていないかった。

「……………」

「ドライブ、何かアドバイスは無いか？」

『そうだな……。今や相棒の漲る欲望は

俺の心臓の侵食にも動じぬレベルのものだからな……。

このままではダメだ。

何かしら強い動機が必要だと思ふのだが……』

強い動機……？

確かに俺はエロい事には貪欲だが

それだけで禁手に成れるとは到底思えない。

もつと別の何か

必要なんだろうけど……

ああ、エロい事と聞いて

思い浮かぶのはおっぱい……。

リアスさん、アーシア、

イザイヤさん、朱乃さん、

ゼノヴィア……小猫ちゃん。

そしてもう一人のリアスさん。

……いかにいかに！

これ以上考えると

ムラムラして しまう……。

幻覚か？ まるでたわわに稔った

おっぱいが目の前に……!?

「ふふ、キミは本当に

おっぱいが好きだねエ」

こ、このおっぱい……!?

もとい声は……!?

「うわああああん！

シユタークさあん！ 俺！ 俺ツ!!」

「はいはい。泣かないノ。

でも、キミはハーレム王を

目指すんだロ？」

「……ぐすん、がんばります」

俺が泣きつくと

優しく頭を撫でてくれた。

何だか、子供扱いされてるけど

凄く安心できる。

「ご無事ですかイツセー様！」

むぎゆ!?

今度はメイドのリアスさんが抱きついてきた。

「ああ、もう最高です！」

俺がそう叫ぶと

タンニーンさんの視線が

冷たいモノになった。

仕方ないだろ！

おっぱいが嫌いな男なんて

いないんだから！

「ま、まあいい。

どうやら兵藤一誠は女に囲まれると

強くなるようだな……。

ならば、女性陣に相手をしてもらうのも悪くはないかもしれん……」

タンニーンさんが

苦笑しながら言う

シユタークさんも賛同する様な

笑みを浮かべた。

で、でも二人を傷つける真似なんて

できませんよ！

と、俺が戸惑う様子を見せると

シユタークさんは俺の顔に

キョンシーみたいな御札を張った。

「心配しなくていいヨ。

キミが戦うのは

ある意味キミ自身だからネ」

それは……どういう？

『相棒、これは……！』

ドライグの驚いたような声で 我に帰る。

すると、いつの間にか

俺の身体から分身が現れた！

『パインサージエント』は

使っていない筈だけど……!?!

「……………」

すると分身は赤龍帝の鎧を

纏うと俺へと殴りかかってくる！

「うおおー！」

俺は咄嗟に避けたが

地面が割れてクレーターが出来ていた。

うっそお……!?!

「生憎現実サ。

その分身は

キミから恋人を奪った相手と  
戦っている場合をシミュレート

してみたけど想像以上だネ」

「な、なんすかソレ！」

「まあまあ。」

これも一種の試練だと思えば良いじゃないカ」

「そんな無茶な！」

すると分身は

俺の得意技の『ドラゴン・メガフレア』を

同時に二つ放ってきた！

ヴァーリと戦った時に

編み出した必殺技なのに……！

「うわああああ！」

俺は必死で回避したが爆発に巻き込まれた！

「大丈夫、

あくまでシミュレーション。

実際にダメージは無いヨ。

キミの精神は別だけどネ」

「だとしても熱いんですよおおお!!」

俺は半泣きになりながら叫んだ。

しかし、よく見ると服は焼けていない。

あれ？ じゃあ 熱く感じたのは精神の方なのか？

「うむ……。」

やはり、もっと厳しい修行が必要の様だ」

タンニーンさんが呟いた。

「ハア……。ハア……。」

『相棒、しつかりしろ。』

気を強く持てば あの程度は耐えられるだろう?』

「お、おう……。」

ドライブに励まされ 何とか気を取り直すと、

「仕方ないなア。」

「ねえ、イツセー君……♡」

色っぽい流し目で シュタークさんが俺を見る。

「え？ な、何ですか？」

「キミがその分身に勝てたら

何でもしてあげようじゃないか」

……!!

な、何でも……!!

してあげようじゃないか!?

「ほ、本当ですね!？」

「勿論サ♪」

うおおおおお！ やるぞ！

やってやるぞ……!!

そして一時間後……。

「オラア！ 次はどいつだあ！」

現れる俺の分身をちぎっては投げ、

ちぎっては投げる様にひたすら

蹴散らし続ける！

『ま、待て相棒！』

一度に力を使い過ぎだ！

人格だけでなくお前の身体にも

異常が出る可能性がある!』

「うるせえ！ っここでもやらなきや

男が廃るんだよオ!!」

『おい！ やめろ！』

それ以上は危険だぞ!』

丁度その辺りで最後の分身が

消滅した。

「ふう……。ふふふ……。

どうだい？ 俺だって結構強いんだぜ？」

俺は勝ち誇った笑みを浮かべた。

『相棒……!』



「イツセー様……！」

へろへろな俺に

二人が駆け寄ってくる。

「流石だね。」

これでキミは更に強くなったヨ」

強くなったのも大事だが

それよりも……それよりも!!

「約束ですよね！」

シユタークさん！」

「うんうん。」

ボクに出来る事なら何なりト」

ま、マジか……！」

いや、シユタークさんを

疑っていたわけじゃないけど！

な、涙が止まらない！

「さあ、ご褒美の時間だよ、

イツセー君♡」

※第48話（イツセー×シユターク&メイドのリアス）

兵藤一誠です！

なんだかんだで分身を

倒した俺はシユタークさんから

ご褒美タイムの真っ最中です！

特設コテージ内の浴場にて

俺は左右からシユタークさんと

リアスさんから湯船に浸かって

手コキでご奉仕してもらっています。

「フフ、相変わらずバキバキに

硬くて太いネ、イツセー君の

おチ○ポ……♡」

「本当……♡

凄く熱くて脈打ってます……♡」

二人の身体は薬湯によって

頬もほんのり赤く染まっついて

何ともエロい雰囲気が漂っている……。

そして俺のチ○ポを握りながら

上目遣いで微笑むシユタークさんと

伏し目がちに俺のチ○ポをガン見しながら

懸命にシコつてくれる

リアスさんを見るだけで

もう限界に達してしまいそうだけぜ！

「ああ……いいですよお〜！

二人共っ！」

「うふふ、イツセー君ったら

そんな可愛い声出しテ？

もっとして欲しいのかイ？」

百戦錬磨の手捌きで巧みに  
竿を刺激しつつ、玉袋まで揉んでくれる  
シユタークさん！

……すげえテクニツクだ！

「ううん……イツセー様……♡」

素敵……♡」

一方のリアスさんは  
優しく撫でるように

チ○ポを握ってくれている。

これはこれで気持ち良いな……。

でも、やっぱり俺は——

「あ、あの……リアスさん！」

「な、なんででしょうか!?!」

まるで自分に不手際があつたのかと

焦るような表情を浮かべる

リアスさん。

そうじゃない事を示すのに

俺は優しく優しくリアスさんの

頬を撫でる様に触れると

同時に口づけをする。

「ちゅ……ん……」

すると最初は驚いていた様子だったが

次第に瞳を潤ませていき、

俺を受け入れるように自分からも舌を伸ばしてきた。

それからたつぷり1分ほどキスをして唇を離すと、

名残惜しそうな表情を見せるリアスさん。

その可愛らしい顔を見ると堪らずもう一度

今度は深く強く彼女の唇を奪った。

「んっ……ちゅぶ……れろ……」

ちゅばっ……♡はあ……はあ……んう……」

何度も角度を変え、互いの唾液を交換し合い、

貪る様に激しく濃厚なディープキスを交わす。

「ンツ……！……ちゆる……！……！」

レロオ……！！チュパア……！！

ハア……ハア……♡」

すると、遂に我慢できなくなったのか

息継ぎのために口を離れた瞬間を狙って、

またもや俺の方から強引に口内へと舌を差し込み、

再び彼女の柔らかい舌と絡め合う。

「ああ……♡」

一方、それを見ていた

シユタークさんはというと――

「フッフ、情熱的だね。

イツセー君もリアス君も

本当にキスが好きなんだネ♪」

と嬉しそうに笑いながら、

左手で俺のチ○ポをしこしこしつつ

右手で自分のおっぱいを揉み始めた！

ぐにっ♡むにゅっ♡くにゅっ♡

眼福とはまさにこの事だが

シユタークさんにはばかり

目を奪われては駄目だ！

「リアスさん、普段は

サーゼクス様やジオテイクス様からは

どういうふうと呼ばれているんです？」

「はい……皆様からはリース、と

渾名で呼ばれております」

愛称を聞いたのは俺の主の

リアスさんと呼び方がまぜこぜに

なるのもあるけど……。

「それが……何か？」

恐る恐る尋ねるリアスさん、

改めリースさんに俺より先に  
答えたのはシユタークさんだ。

「うふふ、イツセー君はネ。

キミの主であるリアスちゃんの  
代わりとして

キミを愛しているわけじゃないって事を  
はつきり示したいのサ♪」

そう言っつて俺の考えを代弁してくれる

シユタークさん。

流石は駒王町でコンビを

組んでいるだけあつて

以心伝心というべきだろうか。

「……………っ！」

それを聞いて感極まったのか

目に涙を浮かべながらリースさんは再び

自ら唇を重ねてくる。

しかも俺の項に手を回し、

自分から積極的に舌を入れてきて―

「ちゅぷ……………んっ……………ちゅぱ……………れろお……………  
♥

あむ……………ちゅっ……………ちゅぷっ……………！」

俺とのキスに夢中になっている

リースさん、いやリースを

見ると無性に愛しくなつて、

彼女の頭の後ろに手を当て、更に深いキスを返す。

「ふくム。

ご褒美タイムとはいえ

リースにばかり構つてちやダメだよネ？

ボクにもサービスしてくれないとサ？」

そう言いながら、

大きな谷間を見せつけてきた！

「もちろんです！」

俺は即答し、両手で  
そのローストビーフの  
切断面さながらにピンク色に  
染まった乳房を掴む。

「あんっ♥」

柔らかく弾力のある肌触りに、  
指が沈み込むような柔らかさに、  
思わず興奮してしまう。

百聞は一見にしかず、  
百見は一触にしかず、だ。

そして、乳首を摘んでみると  
リースと同じく既に硬く勃起していた。

「ああん……！ イッセー君ったら、

いきなりそんなに強くしたら痛いだろう？」

「すみません、つい……。」

でもこんなに大きくして……。

感じてくれていたんですね？」

「当然だよ？ イッセー君のおチ○ポに

奉仕する時は常に発情状態なのサ♪」

そう言うと、シュタークさんは俺に抱きつき、

胸板に自分の豊満な乳房を

押しつけその手で俺のモノを

まるでシエイカーの様に

上下左右に動かし始める。

容赦のない手コキとリース、

シュタークさんの肌触りに

俺の欲望は限界まで高まる。

「うう……もう限界です……！」

どびゅっ!! びゅ——っ!!

俺は堪らず、リースの顔や胸に

大量の白濁した液体をぶちまける。

「きゃっ!?!」

突然の事に驚くリース。  
だが、すぐに笑顔になると  
俺が出した精液をそれぞれ  
身体に舌を這わせて舐め取り始めた。

「んあ……♥はあ……♥」

シユタークさんの肌……

とても綺麗……♥」

「うふふ、ありがとうネ♪」

キミの陥没乳首に給った

イツセー君のザーメンも中々美味しいヨ♪」

そう言ってお互いの体液と、

俺の精液を交換し合う二人は

この上なくいやらしかった。

俺も二人の裸に触れたいと思い、

リースの肩にそつと触れると――

「あつ……」

と声を漏らす彼女。

しかし、それは嫌悪ではなく

期待に満ちたものだった。

だから今度は遠慮せず、

彼女の両乳を鷲掴みにする。

「んっ……はあ……♥」

すると、リースの方からも求めてくる様に、  
俺の手に自分の手を重ねて来る。

リースはおっぱいだけじゃなくて

手も柔らかいんだな……!」

それに、俺の手で包み込んでも

まだ余るぐらい大きいなんてとんでもない!

「リース……!」 好きだ……!」

「はい……私もです……!」

互いに告白し合い、再び熱い口づけを交わす。

「ちゅぷ……んむ……！　ぢゅるる……！！」

「あはア♥キミ達二人とも

本当にキスが上手だね♪

ボクも負けてられないナ♪」

シュタークさんもそう言っつて、

俺とリースのキスに割り込んできた。

「はい、「一緒に気持ちよくなりましょう♪」

「はい♪」

三人で同時に絶頂を迎えるために、俺達は互いの性器を刺激し合った。

「リース、シュタークさん……」

また出るっ……！！」

「ああっ……！！　来て……。」

来てー来て下さいっ……！！」

「ボクの身体に

いっぱい出してネッ！」

どびゅっ！　ぶっぴゅうっ！

「ああああああっ……！！」

俺とリース、そして

シュタークさんが一斉に果てた。

「はあ……はあ……はあ……！！」

「あは……あはは……凄かったヨ♥

けどお湯はともかく、

ボク等の身体がすっかり

ベトベトだよオ……♥」

シュタークさんはそう言いながら、

蛇の様に身をしならせ、俺の首筋に舌を這わせる。

「はい、イツセー様のモノなら

私は全て受け入れます……♥」

一方のリースは



俺にしなだれかかってくる。

うおお……幸せすぎて

のぼせ上がりそうだよ……!!

「な、なら一旦湯から上がって

二人の身体を俺が洗いますね!」

「ふふふ、お願いします♪」

「あはは、それもいいかもネ♪」

俺は一度、風呂場から出て

まずはシュタークさんの身体を洗う。

「それでは失礼して……」

「うん、よろしく頼むヨ♪」

シュタークさんの身体は

相変わらずどこもかしこも肉感的で、

普段のミステリアスな

雰囲気に対して、ムツチリしている。

た、たまらない……。

そして、生睡を飲み込みつつも

スポンジを使って

彼女の背中を流す。

「んん……良い力加減だヨ……♪」

シュタークさんはそう言って、

艶かしく微笑んで見せる。

くう……っ!

エロ可愛い過ぎるだろ!

そんなシュタークさんの美貌と

エロエロぶりに感涙していた俺だが

次のシュタークさんの行動に

度肝を抜かれた!

なんとシュタークさんは、

いきなり俺の手を

掴むとその豊満極まりないおっぱいに

押し当てて来たのだ!

「うわっ!?!」

「おっつト! 手が滑ったア〜♪」  
わざとらしく言うシユタークさん。

その手のセリフは俺が言う事ですからね!

いや……俺の中途半端なヘタレた

攻めに痺れを切らしてしまったのか!?

ならばここは男として覚悟を決めよう!

俺は意を決して、

シユタークさんのおっぱいを鷲掴みにした。

指の間からはみ出す程に豊満なそれは、

俺の手に吸い付く様な柔らかさだった。

これはヤバすぎる……!!

リリースのおっぱいがマシユマロならば

シユタークさんのおっぱいは

ババロアだ……!!

いや、ババロアよりも

もっと柔らかくていつまでも触っていたくなる……!!

「んんっ……ふうんっ……!!」

イツセー君の手つきイヤらしいネ♥」

「す、すみません……」

「いいんだよ? むしろ

キミの好きな様に弄つてくれると嬉しいナ♪」

「そ、そうなんですか?」

「うん♪だから遠慮なく

揉んでくれていいんだヨ……♥」

そうまで言われたらもう我慢できない!

俺はシユタークさんの言葉に甘えて、

おっぱいを好き勝手に揉みまくった。

むにゅむにゅ♥もにゅっ♥ぶるるん♥

「あっ……あん……!!」

「はああ……！気持ちイイ……！」

「おっぱいを揉まれているだけで

感じてしまうシユタークさんに俺は興奮しきり。

くっ……なんてスケベなんだ……！」

「けど、俺だって負けちゃいけないぜ……！」

「シユタークさん、次は前も洗いますね……！」

「んん……♥ああ、頼むヨ……♥」

俺がシユタークさんの前に回ってみると、

そこには泡まみれになりながらも、

その存在を主張するように、勃起した乳首があった。

「う……うおおっ……！」

あまりの迫力に思わず声が出てしまった。

何というスケベさだ……！」

それに、こんなにビンビンに硬くしちやって……！」

俺に洗われるのを期待してるんだろうか……！」

なら期待に応えてあげないと……！」

俺はシユタークさんの胸に

ボディーソープを塗りたくるようにしながら、

両手でおっぱいを

マツサージするように優しく揉みほぐしていく。

「あああ……！んん……！」

「シユタークさん……どうですか……？」

「ああ、気持ち良すぎて……！」

ボク、おかしくなっちゃいそウ……♥」

「へえ、じゃあもつと気持ち良くして上げますよ……！！」

そう言つて、今度は両胸を中央に寄せ集め

上下左右に揺すり刺激を与える。

おっぱいがコントローラーであるかのように

シユタークさんはますます喘ぎ、打ち震える。

「あああ……！ダメエツ……！」

「イツセー君のエツチ……！」

「そうですよ……！」

俺のエロいところ、いっぱい見てください……！」

「うん……。」

でも、ボクだけ恥ずかしい姿を

キミに見られるのは不公平だね……。

リースちゃんも一緒に見て貰おうか……♡」

「はい……お願いします……♪」

リースは俺に後ろから抱きつくと

耳元に唇を寄せて来た。

「イツセー様、どうか私の身体も洗って下さい……♡」

どうか私の身体も洗ってください……!？」

これ程人の心を打つ日本語が他にあるだろうか……。

そんな感動的なセリフを聞いた俺は、

すぐさまリースの方に向き直り、

彼女の身体を抱きしめた。

「きやつ……！ あ、ありがとうございます……！」

「こちらこそ、

リースのような子がそう言ってくれるなんて……！」

嬉しくて涙が出てきそうだよ……！」

などと言いつつリースの身体を

隅々まで綺麗に洗うべく、スポンジを手取る。

そして、スポンジにボディソープを染み込ませると、

彼女の魅力あふれる肢体を

撫で回すようにして洗い始める。

「あっ……はあっ……！」

イツセー様……

は、恥ずかしいですう……♡」

敏感な彼女の身体は俺が触れただけで

もビクビクと反応する。

そんな自分を恥ずかしがる

リースは自分の手で胸と股を

「隠そうとするのだが……！」

「むにいつ♡たゆゆんっ♡」

「ぷりんっ♡」

「その仕草がまた可愛いだけでなく」

「おっぱいやお尻が強調される形となり、」

「俺の劣情を煽ってくるのだ！」

「リース……！　なんて女の子なんだ……！」

「この子は俺が責任を持って」

「幸せにしてあげなければ……！」

「俺は決意を改たにスポンジを握り直す。」

「コラコラ、リース。」

「恥ずかしがるのは解るけれど、」

「ちゃんと手をどけてくれないか？」

「は、はいいい……♡」

「素直に言う事を聞いてくれたので、」

「引き続きリースの全身をくまなく洗っていく。」

「特に下半身の方は念入りだ。」

「んん……ふうん……♡」

「俺が陰毛を掻き分ける度に、」

「艶っぽい吐息を漏らすリース。」

「よし！　これでOKかな」

「はい……♪」

「リースは満足気に微笑んでくれた。」

「しかし、まだまだこれからだよ……！」

「俺はリースを正面に向かせると、」

「再びスポンジではなく」

「俺の愚息にボディソープを」

「たっぷりと浸し、」

「扱いて泡立たせていく。」

「フフ……♡」

「ああ……♡」

おそらく次の俺の行動を理解したのだろう  
二人はそれぞれ、

恥じらいと期待に満ちた

目をしながら俺を見つめ、

ゆっくりと張り出たお尻を突き出してくる。

リースの白く柔らかい桃肉の丘。

シユタークさんのハリのある巨峰の丘。

二人とも最高だ……！

二人の極上の美尻を前にした俺は、

もはや我慢の限界だった。

だから、俺は二人同時に可愛がってあげる事に決めた。

まずはリースのお尻からだ……！

「行くぞ、リース……！」

「はい……♡」

俺はリースのヒップに両手を添えて、

そのまま揉みしだいた。

「あん……！ あああ……！」

リースの口から甘い声上がる。

続いて、俺は両手で

リースのヒップを左右に広げながら、

彼女の秘部に顔を近づけた。

「あああ……♡」

リースが期待に満ち溢れた声で喘ぎ出す。

そんな彼女に構わず、

俺はリースの花弁に舌を這わせた。

ぺろりっ♡ちろちろ♡

「あああ……！！イイツ……！！」

リースの反応を見て、

さらに調子に乗った俺は、

彼女への責めをさらに加速させる。

「あああ……！ イッサー様……！ 私、もう……！」

「ああ、いいよ……！」

遠慮せず、思いつきりイッてくれ……！」

「はい……！ あ、ありがとうございます……！」

リースはそう言い残すと、

「イクツ……!!」

ビクンつと身体を大きく震わせ、絶頂を迎えた。

さて、次はシユタークさんだ……！」

リースの痴態を目の当たりにしていた彼女は、

既に準備万端といった様子で、

俺にお尻を突き出して来た。

「イツセー君……。」

ボクのここも洗つてくれるかな……！」

もちろんだとも！

俺は彼女の豊満な臀部に手を当て、優しく撫で回す。

そして、割れ目に指を差し込み、

彼女の最も奥まった場所へと侵入していく。

「あつ……！ そこつ……！」

「どうですか……？」

気持ち良いですか……？」

「うん……すごく……！」

「そうか、じゃあもつと良くしてあげますね……！」

そう言つて、シユタークさんの膣内をかき回しつつ、

クリトリスにも刺激を与えていく。

「んん……♥はあん……♥」

快感に悶える彼女の顔が見たくて、

俺は敢えてじゅぼじゅぼと音を鳴らしつつ、

激しく指を動かし続ける。

「はうう……！ このままじゃ

すぐにい、イツちやうヨオ……！」

「ええ、いっぱい出して下さい」

「んひい……♥イグウ……♥」

ぷしやあつ！

シユタークさんは大きく潮を吹き出しながら、盛大に果ててしまった。

肩で息をしつつも彼女は俺の方に振り向いた。

「フフ……♥イツセー君はすごいネ……♥

いつの間にこんなテクニックを身につけたんだい？」

「まあ、色々と勉強しましたからねえ……！」

それより、今度は……」

俺はパインサージエント（乳独創）にて

分身を三体生み出すと、

それぞれの手にスポンジを持たせて、

四人掛かりでシユタークさんの全身を洗い始めた。

当然、その間もシユタークさんのおっぱいや股間、

お尻を重点的に洗っていく事も忘れない。

「やあんっ……！・ はあんっ……♥」

俺達の愛撫によつて感じているのか、

それとも単にくすぐったいだけなのか、

あるいはその両方か、

いずれにせよそんな艶っぽい声を上げ続ける

彼女を見ていると、

こちらとしてもますます

興奮が高まってくるというものだ。

だが、本番はこれからだ……！

俺は分身達にシユタークさんを

取り押さえるかのように指示を出すと、

シユタークさんの足を持ち上げて開脚させ、

その間に自分の身体を入れ込む。

いわゆる『まんぐり返し』の体勢だ。

「ちよ、ちよつと待つて欲しいナ……！」

この格好は流石に恥ずかし過ぎるヨ……！」

シユタークさんの言う通り、



このポーズはかなり恥ずかしい。  
しかし、俺の性欲は既に限界を迎えており、  
このままでは収まりがつかないのだ。  
だから、シユタークさんには申し訳ないが、  
我慢してもらおう他無い……！  
俺はシユタークさんの花卉を押し広げると、  
そこへ自身の剛直をあてがい、一気に挿入した。  
ずぶぶっ……!!

「あ、ああアーツ!!」

シユタークさんが悲鳴の様な声を上げる。  
だが彼女の中には完全に蕩けきっており、  
もはや準備は万端だった。

「すみません、シユタークさん……！」

もう我慢できなくて……!!」

俺は謝罪の言葉を口にしながら、腰を振り始める。  
パン！ パチン！肉を打つ音が浴場に響き渡る。

「あああ……♡」

む、無理矢理されているみたいなの二……♡

キミとのセックスだからかなア♡

なんだかゾクゾクするヨオ……♡ハハツ……♡

ボクってば淫乱だなア……♡」

シユタークさんはすっかり悦に浸っている様で、  
彼女自身の頬に手を当てそんな事を口走っている。  
普段ならドン引きしそうな発言だけど、  
今はむしろ歓迎だ。

それに、俺自身ももう歯止めが効かない……!!

俺はさらに抽挿を加速させた。

ぱちゅんぱちゅんっ!!

ばんばんぱん！ シユタークさんと

繋がった部分からは、

いやらしい水音と肌と肌が激しくぶつかり合う

乾いた打突音が鳴り響いている。

そして、それと同時に、

俺の目の前で揺れ動く二つの大きな膨らみ……。

俺は無意識のうちにそれを鷲掴みにしていた。

「んああああ〜っ ♡♡♡

堪らないヨオ ♡」

彼女の顔もオマ○コの中も

トロトロだ。

よし、そろそろいけるな……！

俺は最後の仕上げに入る。

今まで以上に激しくピストンを繰り返しながら、

シユタークさんのGスポットを集中的に責め立てる。

すると、シユタークさんは一際大きく喘ぎ出した。

「ひゃあんっ ♡♡♡

そこおっ…… ♡ダメエ…… ♡♡♡」

どうやらここが弱点みたいだ。

俺はシユタークさんの弱い部分を執拗に攻め続けた。

「ああっ！ イッセー君 ♡

ボ、ボクまたイキそうだヨオ…… ♡

イクウ…… ♡イクイクイクウ…… ♡♡♡」

「俺もです……！ シユタークさん、一緒に……！」

「うん ♡イッセー君の精液いっぱい注いでネ…… ♡」

「はい……！ うう……!!」

びゅるる！ どびゅー！

勢いよく放たれた白濁色の液体は、

シユタークさんの最奥部へと注ぎ込まれていった。

「んんんんんんん ♡♡♡

出てル…… ♡熱いのきてりゅウウ…… ♡」

シユタークさんは再び絶頂を迎えたらしく、

ビクン！ と身体を大きく跳ねさせると、

その後ぐつたりと脱力してしまった。

「ああ……シユタークさん。

あんなに幸せで……気持ちよさそう……♡」

シユタークさんの痴態を見て、興奮しているのか、リースは鼻息荒くしながらそんな事を言う。

俺としては本懐だ。

何せ、俺の分身達は未だ元気いっぱいだしね。

というわけで、

今度はリースの番である。

けどリースはシユタークさん程

慣れているわけじゃないからな……。

念の為、手加減してあげないと。

「あ、あの、イツセー様……♡」

もじもじしながらも視線は

俺の股間に向けられたままのリースに、

俺は優しく声を掛けてあげる。

「心配しなくても大丈夫だよ、リース。

ちゃんと痛い思いをさせない様にするから……」

「いえ、そういうわけではなくてですね……」

その……わたくしにも……

シユタークさんと同じ事をして欲しいんです……!」

顔を真っ赤にしながら

そう懇願してくるリース。

俺のためにエッチな女の子に

なるうとまでしてくれるなんて……

断る理由なんてあるはずがない。

俺は分身達にリースを

うつ伏せで押さえつけさせる。

だがあくまでソフトに、

優しくだけどね。

「あ、ありがとうございます……♡」

リースは目を潤ませながら礼を述べると、

ゆつくりと足を開脚させていく。そしてくぱくぱと

金魚の様に開閉を繰り返す秘裂が露になった。

俺はそこへ自分の剛直をあてがう。

しかし、いきなり挿入はしない。

まずは先つぽだけ挿入し、そこで一旦止める。

「ふあ……♥あ……♥」

それだけで感じてしまっている様子のリリース。

お尻もぷりんとしていて可愛い。

俺はしばらくそのままの状態でいる事にした。

けど分身達はリリースに

甘く囁き続ける。

「かわいいよリリース」

「愛してるぜリリース」

「絶対幸せにするからな」

「好きだ」

等々、様々な愛の言葉を紡ぎ出す。

もちろん俺自身も同じだ。

「リリース、本当に綺麗だ……」

ずっと大切にしたいと思う……!」

「俺だけのものだ」

「絶対に離さないぞ」

そんな風に耳元で何度も呟かれる言葉の数々。

リリースの顔は既に蕩け切っていた。

そろそろ頃合いかな？

俺はいよいよ本格的に動き始めた。

じゅぶ♥じゅぶぶぶ♥

どちゅっ♥どちゅっ♥

「あ、あああーっ♥♥♥」

「じわじわ速度を上げる

ピストン運動に合わせて、

可愛らしい声を上げるリリース。

そんなリリースに俺は更に  
押しの一歩とばかりに

『譲渡』の力を発動させる！

(ほら、もっと俺を感じてくれ)

「え、こ、これは……？」

突然身体中を駆け巡った快感に、

戸惑っているリリース。

俺はそんな彼女に説明をしてあげた。

「俺が君の感度を倍化させてみたんだ……。

大丈夫？ 怖くないか？」

「はい……♡」

とても気持ちいいです……♡

イツセー様の御心のままに……♡」

リリースはすっかり悦に浸ってる様だ。

よしよし、これなら遠慮はいらないな……。

俺はリリースの弱点を探るべく、腰を動かし続ける。

ずんっ！

「おうおうっ♡♡♡」

すると、

リリースが一際ケモノの様な

大きな声で喘いだ。

あの恥ずかしがりやのリリースが

ここまですると言う事は……。

どうやらここが良いみたいだ。

俺は重点的にそこを攻め続けた。

「ああっ♡ダメですっ♡そこは弱いんですう♡♡♡」

リリースは身体を仰げ反らせながら激しく悶える。

その度に胸が大きく揺れていた。

俺はそれを見逃さず、すかさず揉みしだいた。

快楽に染まり切ったリリースは、

最早されるがままの状態だ。

「んひい♥おっぱい気持ち良すぎますう♥♥♥♥」

リースは甘い声を上げながら絶頂へと昇りつめる。  
もう限界が近いようだ。

俺も一緒に果てるべく、ラストスパートをかける。

パンツ♥パンツ♥ドチュツドチュ♥

リズムカルな音を立てつつ、

激しいストロークを繰り返すと

リースの子宮口は俺の子種を求めて、

亀頭に吸い付いてくる。

「ああ♥イキそう♥イツちやいます♥♥♥♥」

「俺も……出る……!!」

びゆるるるる!! どびゅー!

「ああーっ♥♥♥♥」

俺の精液が

リースの膣内を満たしていくと

リースはその感覚にまた達してしまった様だ。

「すごい……いっぱい出て……♥」

リースはそう言い残すと、ぐったりと床に寝そべり、

シユタークさんと全く同じ様に

意識をトバしてしまっていた。

↓

安里Side

「し、シユタークさんが

来られない!?!」

ゼファードルとの

レーティング・ゲームが

始まるうとしている中

シユタークさんが来ないだど!?!

「ああ。何でも『仕事よりも

外せない私用』だそうだ」

ポールクの大將は涼しい顔で

言つてのけた。

止めてくれても良かっただろ!?  
作戦が台無しだ!?

「が、俺の伝手で

悪魔祓いではないが

仙術使いを連れてきた。

実力は確かだ」

と、大将が言うと同時に一人の  
美女が入ってきた。

着崩した和服に猫の耳。

尻尾の生えた姿はまるで

漫画に出てくる猫又の様だった。

「ま、ボールクの頼みで

来てあげたにや。よろしくにやん」

そして彼女はウインクをしながら  
挨拶をした。……というか。

「お、お前はあの時の猫又!?!」

「お前じゃない、貴方にや」

俺の鼻をツン、とつきながら

あの時ヴァーリを介抱しようと

していた猫又女がそこにいた。

「それと私は厳密には猫又じゃなくて

猫鬼だにや。名前は黒歌にやん」

と、訂正を入れてきた。

いや何が違うんだよ。

俺にはさっぱり解らん……。

「とにかく助かった。

早速だが助太刀の方を頼むぜ」

とにかく

兵士はボールクの大將

(兵士扱いを引き受けてくれた)

騎士は俺

戦車はスコグルさん

僧正は黒歌。

女王はニグラさん。

そして王はルイーナさん。

このメンバーならイケる！

多分……。

そして、ゼファードルは

ニグラさんの顔を見た途端

もの凄い顔をしてシヨツクを

受けていた。

一体何をしたんだ……？

いや、想像はつくけどさ……。



## 第49話

どうも、兵藤一誠です！

俺は今人生（悪魔生かな？）で最大のピンチを迎えています！

俺、シユタークさん、リースの

3人は特設コテージの外で

リアスさんの前で

正座の構えと相成りました！

「どうして貴方の修行先に

リースはともかく、この女が

いるのかしら……？」

ああ……部長の声に怒りが含まれてる……。

滅びの魔力のオーラを纏っている

リアスさんも美しいが

そんな現実逃避

をしている場合じゃない。

なんとかかしないと！でもどうやって!?

「いや、あのですね？」

これには深い訳がありまして……」

「どんな理由よ？」

うわっ！ リアスさんの視線が痛い！

なんか滅茶苦茶怒ってるよ！

こりゃ下手な言い訳はできないぞ……。

考えろ！ 考えるんだ兵藤一誠！

お前ならできる！

この状況を打破する策を考えるんだ！

そして思いつけええええ!!

……。

あっそうだ！

これだ！ この手しかない！

「実はですね……俺が

禁手化に至るには俺の欲望を

極限まで高める必要が……

あるとか……ないとか……」

だ、駄目だ！

リアスさんのド迫力を前にしては

最後まで言えなかった……。

「じゃあ私に不満があると

言うことでいいのね？」

藪蛇どころじゃあない！

完全に大噴火だよ！

「ち、違います！

そういうことではなくて！」

「どういふことなの？」

うう……。

これはもう誤魔化しきれない。

「別にいいじゃあないか。

一夫多妻は魔族でも

よくあることだよ。

それとも自信がないのかなア？」

フツ、とシユタークさんが

リアスさんを鼻で笑って挑発した。

やめてくださいよお!!

これ以上事態を悪化させるのは!!

ほら見なさい!

リアスさんの額に青筋が浮かんできたじゃあないか!

「リースはともかく、

貴方を認めるわけにはいかないわ」

「何でキミの認可がいるんだイ?」

男と女の事に口出しは無用ダ」

そう言っつてシユタークさんは

俺の顔をおっぱいに埋めるように

抱き込んできた！　ちよ、ちよつと！

やめて下さいってば！

柔らかい感触と鼓動がダイレクトに伝わるし！

「イツセー！　離れなさい！」

すぐにその女から離れるのよ！」

「むウ〜！　むぐう〜!!」

くそっ！　喋れない！　息ができない！

何とか抜け出そうとするが

力が強すぎてびくともしない！

「ふん、嫉妬かい？　まったく醜いネエ」

「黙りなさい！　それ以上

ふざけた真似をするなら消し飛ばすわよ！」

「やってみるがいいサ。

ボクはこの程度の事で

揺らぐようなヤワな鍛え方はしていないからネ」

ああああ！　どんどん状況が悪化していく！

誰か助けてくれえ！

「まあまあ、リアス嬢。

締め付けるだけでは男は逆に

逃げていくもんじゃぞ？

ソースは儂」

ん？　この間会ったマツシブな

お爺さんじゃないか？

またなんでこんな所に？

「うっさいジジイ！」

余計なお世話よ！

私はただイツセーを

助けようとして……」

「ならもう少し

優しくしてやるといい。

ほれ、こうやって……ムニユつとな♪

「ひゃん!?!」

な、何しやがるんだ!

俺のリアスさんとリアスさんのおっぱいを!

許せん!

瞬時に俺はドライグの力を

解放して爺さんに掴みかかろうとしたが!

バシッ!

俺の拳は容易くキャッチ

されてしまった!

この爺さん……強いぞ!?!

「ほほう、なかなか

良い殺気を放つのう?

やはり若い者はいいわい。

どれ、ここは一つ年寄りの

アドバイスを聞かせてやろうかの?」

「アドバイスだと?」

「うむ、そうじゃ。

まあ聞け。お主、

リアス嬢の胸ばかりに着目して

本当に大切なものを見失っておるぞ!」

くわつと目を見開いて

力説する爺さん。

な、何だつて……!?!

俺が大切なものを見失っている……!?!

「そ、そんな事はない!

俺はハーレム王の夢は夢として

真剣にリアスさんを愛して……!」

「愛しておるなら態度で示さんか

若造が!」

ビシヤアアアアン!!

雷オヤジの怒声とはよく言うが

マジの落雷が3本同時に俺に直撃した！

「うわああああ!!」

「イツセー!!」

なんて事をするの！

殺すなら私を殺しなさい！

イツセーには手を出さないで！」

ああ、リアスさん……。

俺なんかのために……！

雷の熱で制服が焦げて火傷するのも

構わず庇うなんて……。

「安心せい。殺してどうなる？」

俺はその若造に無償の愛の

なんたるかを解らせるために

した事じゃい。

まあ7割はやつかみじゃがなあ

ワツハツハ！」

……何なのこの爺さん。

でも今ので解った……！

俺はまるでなつちやいなかった！

「ありがとうございます！」

おかげで目が覚めました！」

雷だけじゃなく威に

打たれることでようやく気づくことができたぜ……。

「ふん、やっと気づいたか。

これで少しはまともな顔つきになったわ。

だが忘れるでないぞ？

愛する者の心を掴むには

まず己の心を

磨くことから始まるのじゃ。

それを忘れればたちまち

お前の心は暴に

吞まれてしまうじやろう」

「はい！ 肝に命じます！」

そして必ずや皆を幸せにして見せます！

だからご教授お願いします！」

「ふむ、良い返事だ。

では早速教えようかの。

早速下山じや！ ついてまいれ！」

「ちよ、ちよつと！」

ゼウス様！

私のイツセーを勝手に……！」

ゼウス様は天馬を呼び出すなり

俺を乗せて駆けてゆく。

リアスさんの声が遠ざかり聞こえなくなった頃、

俺はようやく冷静になつて考える。

ゼウス様つて……あのゼウス様!?

ギリシヤ神話の最高神、

主神である全知全能の神が

どうしてここにいるんだ!?

しかも俺に愛の何たるかを

教えるためだけに！

一体どうということだ!?

俺の湧き出る疑問はともかく

ゼウス様が向かった先はというと……。

↓

安里Side

ゼファードルは

ニグラさんの顔を

見た途端

もの凄い顔をして

シヨックを受けていた。

一体何をしたんだ……？

いや、想像はつくけどさ……。

「……チツ、まあいい！」

俺様は最強だからな！

テメエら三下なんかに負けるかよ」

「え？何？キャインキャイン？」

ゼファなんとかの

月並みなセリフが

気に入らなかつたのか

スコグルさんは耳に手を当てて

聞き返す煽りをかました。

「……舐めてんのか、

テメエ……」

流石にカチンときた様子だが

黒歌がさらに煽っていく。

「ワンちゃん、

キャンキャン吠えてるにや。

可愛いにや〜」

「て……テメエ等……！」

「まあ言わせてやれよ

ゼファードル」

ブチ切れ寸前のゼファードルに

ポンと肩を叩いてサブリーダーらしきヤツが

クールダウンさせるべく声がけする。

「ああ!?まずはテメエから

やってやろうかあ!？」

コワ〜……。

凶兇じゃなくて狂犬じゃん……。

しかしサブリーダーらしきそいつは

ビビるでもなくむしろ

余裕たっぷりな態度で

話を続ける。

「まあ落ち着けて。」

ここでお前らが暴れてみる。

せつかくの祭りが台無しになる。

それに、今俺達が争っても仕方がないだろ？

俺達の作戦はただ勝つこと。

こいつはゲームさ。

バトルじゃあなくてな……」

明らかに場馴れしてやがる。

多分このレーティング・ゲーム

対策に雇ったヤツだろう。

出で立ちは迷彩服なのに、

金髪にサングラス、更には

左手薬指以外にも金の指輪を

嵌めている。

目立ちたいのか目立ちたくないのか

どっちなんだ……!?

「チツ……」

ゼファードルも納得したようで

渋々引き下がった。

あのサブリーダーは男だから

『女王』粹って事はないだろうが

要注意だな……!!

「そろそろ宜しいですか？」

その辺りでグレイフィアさんが

確認の合図を告げる。

「ああ、いいぜ。」

始めようか。

じゃあルールを説明するぜ。

今回のレーティング・ゲームの

フィールドは戦場をイメージして



作られている。

基本的には平地だが塹壕や

奥の方には司令塔がある。

司令塔を本陣にしてもいいし、

狙撃ポイントや

大魔術を使うための

起点にしても構わねえ。

ま……主の指揮官としての

センスが問われる訳だな」

グレイフィアさんではなく

なぜかサブリーダーが

得意げに説明する。

しかもゼファードルの方を

見ながらだ。

「では、開始の時刻になりましたので、

これよりゼファードル様率いる

グラシヤラボラス家チームと、

ルイーナお嬢様の眷属悪魔チームによる、

非公式のレーティング・ゲームを開始いたします」

そう言うなりグレイフィアさんは

空中に巨大なモニターを出した。

そこには、俺たちと相手の陣地、

そして中央に設置された互いの

陣地の割合が表示されている。

「へっ、俺達にはもう勝算は見えてるぜ！

行くぞ野郎共！俺様について来い！」

ゼファードルが兵を引き連れて

敵陣に向かっていく。

「あらら、行っちゃったね」

「……そうだな」

スコグルさんとボールクさんは

落ち着き払った様子で

それぞれ前衛につく。

俺は最初前衛でいくつもりだったが  
ルイーナさんが、

「あ、安里様は機動力に優れる

『騎士』ですから……。」

中衛の方が……。」

と言ってきたのでそれに従う。

今はルイーナさんが『王』だからな。

「……さて、私達はどうするにや？」

私は一応後衛だけど……。」

ゼファードルは馬鹿だから

勝手に突っ込んでくると思うにやん？

そこを囲んでボコボコにすれば

お茶の子さいさいにや〜」

黒歌は名前通りに黒い笑みを浮かべて

とんでもない事を言っている。

「いや、それは駄目だ」

インカムからボールクの大將が

黒歌のアイデアを制した。

「えー？なんでなんで？」

スコグルさんが尋ねると、

「あのゼファードルとか

いう奴はおそらく単独で動く。

しかしその位のことは

あのサブリーダーも想定済だ。

奴の言ったことを思い返してみろ」

え〜と……。確か……。」

『司令塔を本陣にしてもいいし、

狙撃ポイントや

大魔術を使うための

起点にしても構わねえ。

ま……主の指揮官としての  
センスが問われる訳だな』

『俺達の作戦はただ勝つこと。

こいつはゲームさ。

バトルじゃあなくてな……』

ん……？

つまりサブリーダーは

ゼファードルが単騎で

攻めていくと初めから読んでいるのか!?

それにあの迷彩服からして……

スナイパータイプか!?

つまり奴はゼファードルを囿にして

俺達を狙い撃つつもりなのか？

「可能性はあるな」

「うん、ありえるね」

「うにゃく、面倒臭いにゃく。

じゃあどうするのかにゃ？」

黒歌が呆れたようにため息をつくど、

「ふむ、ならここは俺が出よう。

ヤツらの作戦を見極める。

安里、支援を頼む」

そう言つて大将がゼファードルの

陣地へと向かっていく。

「じゃあアタシもー！」

スコグルさんも

それに続いていった。

そして前線では……。

「へっ！雑魚どもが！

まとめてかかつてきやがれ！

テメエらに本当の戦いってもんを教えてやるよ！  
オラアツ！」

ゼフアードルが叫びながら  
ラム付のバイクに乗っている。

そしてその後ろには  
屈強な兵士達が続く。

兵士の一人一人が、  
皆何らかの武器を持っている。

「成程……。」

前衛は総出で

一気に陣地を拡げるつもりか」

大將が敵の陣形を見て眩く。

まあ、そうだろうな。

だが、俺達がそれを

許すわけがない。

「それでどうする？」

ルイーナ・ムールムール」

「え……!？」

ルイーナさんは

今ニグラさんと共に

司令塔を本陣として守りの構えだ。

てつきりこのまま俺達が

勝手気ままに動く事で

勝敗が決まるとばかり思っていたが……

まさか、この人が指揮をとるのか……??

「わ……私がですか!?でも私なんか……」

「何を言っている。」

貴様はムールムール家の跡取りだ。

単に俺達がああ凶兇を公衆の

面前で痛めつける事が勝利ではない。

貴様が真に貴族たる姿をここで

示さなければ『蒼色の虜囚姫』、  
つまり生涯お飾りのままだ。

それでいいのか？

貴様は何のために生まれてきた？」

大将の叱咤激励にルイーナさんは

少しの間黙っていたが、

「……分かりました。」

私やってみます！」

そう力強く宣言した。

「よし、ならば行くぞ！」

貴様の器量を見せつける！」

「はいー！」

「「「おおっ!!」」」

ルイーナさんと大将の掛け声で

俺達は士気を高める。

「先ずはボールクさん、

スコグルさんが前に出てくれますか？」

「あー、ダメダメ」

「ふええっ!?!」

いきなりスコグルさんが

命令を無視するつもりか!?

俺達の言うことを聞くなって

約束で参加しただろうアンタ!

しかしスコグルさんの真意は

別にある事がすぐに解った。

「さん、とかくれますか？」

なんてよわよわ指揮官じや

ダメダメ!

呼び付けで命令口調でいかないとき!

今はいいけどアタシら以外の眷属さんや

部下には

ナメられちゃうだけだよ？

リアスちゃんや

サイラオーグ君なら

こんな時どうしただろうね？」

あ、そういう事だったのか。

確かに、今のルイーナさんは

他の貴族の眷属や観客達にとって、

『おい、あれって

ムールムール家の娘じゃねえの？』

『ああ、そうだな。

てことは、あの女が新しい『王』なのか』

みたいな感じで

評価の真っ只中なんだ。

なのに俺はゼファードルを

ぶっ飛ばす事しか

考えていなかった……。

騎士としては全然ダメだな俺は……。

「えっと……その……」

ボールク！ スコグル！

まずはゼファードルさ……

ゼファードルの兵達を相手にして！

ゼファードルは無視してね！」

「了承した！」

「はくい！ あとゼファードルじゃなくて

『バカ』でいいんだよ」

ゼファードルを無視して……？

奴を倒せば戦いは終わるんじゃないや？

いや、ルイーナさんの言うことを

信じないで何がルイーナさんの

騎士だよ俺は！

「へへ、いい武器じゃん。」

「ちょっと貸してね？」

「ギャアアアー！」

「ベキイツ！」

「せーのつとー！」

「ありや、壊れちゃったよ？」

「結構強そうな投擲槍だったのに」

「ドグオオオオオン!!」

「ぎゃああつ!？」

「ぐわあああー！」

「な、なにい!？」

「俺の兵士3人を一瞬で!？」

「ひ、ヒイツ！」

「こ、凍る……! 俺の馬と

「身体が凍っていくううう!？」

「逃げるな。お前は『兵士』では

「なく『騎士』だろう……。」

「『騎士』ならば『王』のために

「戦って、死ね」

「ピキイイイイン！」

「バギツ!ゴシヤアツ！」

「ゼファードルの兵は大将と

「スコグルさんによって

「次々と撃破されていく……。」

「まるで、ゼファードルなど

「眼中にないと言わんばかりだ。

「しかもゼファードルの攻撃は

「回避に専念。

「サブリーダーの射撃も防御でしのぐ。

「クソが……! クソが

「クソがクソがあアア!!

「使えねえ! 使えねえ奴等ばかりだなあ!!

レーティング・ゲームだの  
仕来りだのもう関係ねえ!!  
ぶっ殺す! あの日陰女は  
犯して殺して!

野晒にしてやるぜエエ!!」

ブウウウン!!

ゼファードルは激昂しながらラム付のバイクで  
塹壕を跳躍して飛び越え、  
本陣に攻め込んでくる。

だが……。そうはさせねえよ!

俺の能力の『武態』で

触手から網を作成。

そしてそれを

海のゴミをせき止めるネットのように展開する。

「な……なにいつ!」

これは俺のアドリブじゃなくて  
ルイーナさんの指示によるものだ。

思い通りにならないと

キレて暴れだすだろうから

捕縛の準備をしてくれってさ!

「ぬおおお……!」

抜け出せねえ……!」

この……! この……!」

野郎を縛り付けるのは

いい気分はしないが

完全な勝利のためには我慢我慢。

「ニグラさんはゼファードルの

魔力を奪う間に

前衛の二人は敵陣に切り込んで!

多分罠が張ってあるだろうから

気をつけてくださ……気をつけて!」



「うふふ、解ったわ」

「承知した」

「ほ〜い」

3人は文句なく従うが

しかし敵の罠をどうやって凌ぐ？

が、それは俺の余計な心配だった。

「ん〜、左に魔法陣の罠があるにや」

「ほい、じゃ、地形ごと吹っ飛ばせばいいね！」

「感知式の地雷か……」

しかし、俺の結界で

信管が起動できねば

無用の長物に過ぎん」

黒歌の仙術による探知や

大将の氷の結界、あと

スコグルさんの強引な解除（物理）

により奴等の罠は忽ち無力化。

しかも……。

「参った。俺の負けだ」

「私も、降参します」

苦渋どころか余裕の態度で

『戦車』の一人と『女王』らしき

バトルスーツを着た女が諸手を

上げて降参した。

い、幾ら裏切るにしても

迷いとか躊躇いとかないのか!?

まるで前々からそう決めていたみたいに……!!

「な、何でだ!?!」

何でお前らが裏切る!

昔から一緒だっただろ!?!」

「はあ? あんたバカ?」

だから、前からゼファードル様より

ルイーナちゃんの方が

断然魅力的だつて言つてるじゃない？」

「そくだよ？」

ゼファードルなんか顔がカッコイイだけで

中身は子供だしバカだし？

正直うんざりしてたんだよ」

ゼファードルはもう

見ていられない位泣き笑いの様な顔に

変じていく……。

「そんな……！俺は、

俺は……！うわああああ!!」

「ああ……何て可哀想な

ゼファードルちゃん。

でもそんな貴方もとても素敵よ♡

あの時よりもずっと……♡」

「うああ……あ……はは……

ははは……ニグラ……。

ニグラさま……ははは……」

ゼファードルを母親か恋人の様に

抱きしめつつ、奴の死角にて

悪どい笑みをニグラさんは

浮かべる。

多分ゼファードルだけじゃなく

あの二人にも『寝業』を

仕掛けたんだろう……。

隣れになつてきた……。

ボコボコにされるだけの方が

アイツにすりや幸せだったん

じゃねえかな……。

とにかく勝負はこれで

決したろう……。

陣地はルイーナさんの青で真っ青。  
残っているのはサブリーダー一人。  
肝心のゼファードルは

精神崩壊寸前と来たもんだ……。

これ以上は見えていられない。

と、力を緩めたその時！

シュツ、とゼファードルが

消えたと思ったらあの

サブリーダーと入れ替わった！

さては『キャスリング』か!?

「ま、チエスってのは

王を取るゲームだからよお。

コイツで逆転の一手って奴だ」

そうか！

スナイパーだからコイツには

機動力は必要なかったんだ……！

迂闊だった……！

隙間からライフルの照準を

司令塔の窓に向けてサブリーダーは

サングラスを額にずらす。

「アンタに恨みはねえがよ。

アンタに死んで欲しいヤツが

いるんだとよ。

だから……死んでくれないかな？

ルイーナ・ムールムール」

死んでくれないかな……？

止めろ……！

俺の前でその台詞を吐くな……！

「じゃあな……」

そう静かに呟き、男は

引き金を引いた。

※第50話（イツセイ×モブ ※本番なし）

「アンタに恨みはねえがよ。

アンタに死んで欲しいヤツがいるんだとよ。

だから……死んでくれないかな？

ルイーナ・ムールムール」

死んでくれないかな……？

止めろ……！

俺の前でその台詞を吐くな……！

「じゃあな……」

そう静かに眩き、男は

引き金を引いた。

「させるかよっ！」

【六合太極】を使う時間はない！

高速機動にて

俺はルイーナさんを庇うように

射線上に割って入り

肩で弾丸を受けた。

「ぐう……ッ!？」

肩から血飛沫が上がる。

だが痛みを感じている暇などない。

すぐに反撃せねば！

そう思い顔を上げた瞬間――

「……えっ？」

眼前に銃口があった。

「な……っ!？」

「悪いね。

お前の事は嫌いじゃないけどさ、

これも仕事なんだわ。

恨むなら自分の不運さを呪ってくれや」

パアンと乾いた音が響き

拳銃の引き金を引いた後、奴は冷然と言う。

「別に……不運なのは今に

始まったことじゃねえ！」

俺は眉間を硬質化させて

弾丸を防いだ！

間一髪の所だったが向こうは余裕綽々。

ピユウ、と口笛を吹いていた。

「やるねえ……」

余裕を崩さない辺り、

やはりコイツも強いのか……。

しかしこの至近距離なら俺が有利だ！

「喰らえー！」

腕を伸ばして顔面を掴む。

そのまま握り潰すようにぐいと力を込める。

だが向こうは二丁拳銃をホルスターから

取り出すや俺の身体に乱射してきた！

バババババン！

「チィ……ッ！」

咄嗟に身を振り回避する。

そして石でも投げる様に、

掴んでいた男を投げ飛ばした。

「おおっ!?」

所が飛んでいった男は

まるで猿の様な身軽さの持ち主だった。

空中で体勢を立て直すと、

何事もなかったかのように着地した。

今、痛覚は遮断しているが、

肩から流れる血が止まらない。

このままだと出血多量で死ぬかもな。

いや、それ以前に傷の回復にも

エネルギーを使ってるし

あまり長引かせる訳にはいかない。

「大丈夫安里ちゃん!？」

「私が直ぐに手当をするわ!」

「いえ、それより今はアイツです!

あの野郎……絶対に許さねえ!!」

ニグラさんにはルイーナさんを守ってもらわねえと。

だがその時俺の視界がぐらりと

揺らいだ。

それに咳き込んだ時に口から血が

溢れ出してきた……!？」

(毒か……!?)

最初のライフル弾に毒が仕込まれていたようだ。

これはまずいな……。

しかしこの好機に男が反撃に出るものと

思っていたが二丁拳銃を床に置く。

降参の構えを見せてきた。

どういうつもりだ!？」

「どうよう? その毒の血清は

俺にしか用意できねえヤツなんだわ。

ソイツを渡すからよ。

俺を見逃してくれねえかな?」

何言ってやがる……!」

そんな提案が飲めるわけねえだろうが!

「ぞけんな……! そんな月並みな

脅しで屈すると思うのかよ……

俺が……!」

「思わねえ。

けど俺ア兄さんに交渉している

訳じゃねんだわ」

「何……!？」

野郎の視線は

ルイーナさんに向いている。

すまねえルイーナさん……俺のせいだ……!!

「本物ですよね？」

「お嬢ちゃん、

敵の言葉は真に受けるな……。

ってガツコの先生から

教わらなかったかい？

ま、俺アガツコに行けるような

身分じゃあ無かったけどなカカカツ！」

そう言っつて男は嘲笑う。

俺が毒で弱っている様を

見せつけられ、

ルイーナさんはすっきり

青ざめている。

自分が情けねえ……!!

結局何も守れてねえじゃないか!!

クソツタレ……ッ!!!

「わ、解りました！血清を！」

「ハハッ、物分りと

金払いの良い女は大歓迎だぜ。

ほれ、コイツが血清だ」

アンプルを取り出したなり男は

それを無造作に俺に投げ渡す。

偽物じゃねえだろうな……!!?

「おいおい、兄さん。

俺みたいな稼業は信頼が第一だぜ。

この手の取引で嘘つく程、

バカじゃねえよ。

嬢ちゃんを仕留めるチャンスが

無い以上

はこんな所で リスク背負うかよ」

「……確かにそうだな」

信用は出来ない。

だが今はコイツに頼るしかないのもまた事実……。

俺は血清のアンプルを手に取り、

迷わず体内に取り込んだ。

「おお……？」

すると身体に活力が戻ってくるのを感じた。

「よし、取引成立だな。

それじゃ俺はお暇させてもらうわ」

「……何言ってるの？」

いつの間に男の後ろにスコグルさんが立っていた。

今までのおちやらけた雰囲気とは一変。

冷たい声で呟く。

だが男は余裕を崩さない。

「はあく、こりやまた

厄介そうなのが来たねえ……」

「アンタが約束したのは

ルイーナちゃんと安里クンでしょ？

アタシとはしてないよね……」

「そりやそうだ。

けど残念だなあ。

アンタじゃ俺には勝てねえよ。

勝てねえ理由があるのさ」

「あつ、そう」

バゴオオオオン!!

と凄まじい音が響き渡る。

スコグルさんの拳が

文字通り地面を抉り、砕いた!

『戦車』の補正があるとはいえ、なんて威力だ……!」

「逃げるなよ」



「逃げさせて貰うよ！」

俺アサービス残業はしない主義でねエ！」

そして再び引き金を引こうとするが――

「遅いよ」

既にスコグルさんが懐に入り込み、

男の腹に前蹴りを放った！

「ぐう……ッ!？」

そしてそのまま吹っ飛んだ男に追いついて

奴を司令塔の壁に叩きつける。

パワーだけじゃなくてスピードも桁違いだ。

「ぐ、あああっ!!」

「アンタがどんな力を持つてるか知らないけどさ、

どうせその銃が本命なんですよ？」

ならもう撃てないようにすれば良いだけだもんね」

そう言うとスコグルさんは

男の指を割り箸でも折る様に あっさりとはし折った！

「ぐおっ……!？」

「それで自慢の銃も使えない」

ドスの効いた声で言うと

今度は足を掴んで振り回し、

地面に何度も打ち付けた。

「うが、あ、が……ッ!!」

「これでトドメ……!」

散々叩きつけられた男はサングラスも

割れて半死の状態。

スコグルさんがとどめを刺そうとしたその時だった。

バキユウウン!!

「なっ……!？」

「へへ……」

スコグルさんは目を見開いて

自分の脇腹を見る。

そこには ライフル弾が撃ち込まれていた！  
何でだ……!?

奴の指は折られていたし、  
ライフルなんてもうどこにも……。

いや、奴の肘から下は義手だったのか!?  
掌に穴が開いて硝煙を上げている。

どうやらあの状態から狙撃を成功させたらしい。  
なんて野郎だ……!!

「やっってくれるね……けど」

毒が回り切る前にアンタの首を

捻じり切るくらい……!!

ぐふっ!?

スコグルさんが吐血した!?

何でだ!?

幾ら何でも毒の周りが早すぎる!

「何で? って顔してんなア。」

何故ならそれが俺の

『叛英雄』としての特質だからだよ。

アンタ、ちよつと自分ばかり活躍しすぎたねエ」

『叛英雄』……!?

イツセーから呂布だの司馬懿だのと

名乗る奴等と戦ったのは聞いたが

コイツもその一味なのか!?

しかし、男は肩を竦めて話を続けた。

「おつと真名は教えねえよ。」

アイツらと違って俺はマイナーな上に

嫌われ者の笑われ者でね。

何せ『英雄殺し』だ。

真名を知られただけで

「後家さんに追い回されちまう」

『英雄殺し』……だと……!?

しかしそれよりスコグルさんだよ！

このままじゃ奴を殺す前に毒で死ぬぞ！

「ぐほっ……げほ……ッ!!」

口から大量の血液を吐き出す

スコグルさん。明らかに致死量だ。

「そこまで！」

ゼファードルチームの本陣は

黒歌選手とボールク選手により制圧！

ルイーナチームの勝利です！」

おお……！流石の二人だ！

試合に勝って勝負に負けた感はあるが

仕方ねえ！

アナウンスが流れると

スコグルさんは糸が切れたように倒れた。

「スコグルさん！」

慌てて駆け寄ると彼女は既に虫の息となっていた。

顔色は蒼白。いよいよヤバイ……！！

「大丈夫ですか!?!」

「ハハハ、

やっぱり安里クンは優しいね……。

女の子を心配するなんて……。

こんな時だつてのに……。

そんな所が……大好き……。」

スコグルさんは死ぬ覚悟をしている様に

静かに呟いた。

「馬鹿な事言わないで下さいよ……!!」

まだ生きてるじゃないですか……ッ!!」

「ゴメンね、安里クン。

ちよつと疲れちゃった。

少し寝かせて貰うね……。」

そう言つて目を閉じようとするが

俺はスコグルさんの唇を塞いだ。

「んむっ……!?!」

彼女の口内に俺の体内に残っている  
免疫血清を凝縮して流し込む。

これで助かる保証は無いが、

何もしないよりマシだ。

「ぶあ、ちよ、いきなり何を……!」

「キスですよ。嫌でしたか?」

「い、いや、そういう訳じゃ無いけど……」

スコグルさんは真っ赤になって

目を泳がせる。

攻めは得意だけど守りはさっぱりって

タイプなのか?

「とにかく」

今はゆっくり休んでください」

「うん、ありがとう……」

そう言うとスコグルさんは

安らかな表情のまま眠りについた。

「んにゃ?」

仙術で解毒してあげようかと思っただけどその必要も

なさそうだにゃー。

お熱いことだにゃん」

するといつの間に戻ってきた

黒歌がニヤニヤと笑って言った。

う、煩えよ!

非常事態だったんだ!

なりふり構ってなんて

いられなかったんだから仕方ないだろ!

あの野郎はいつの間に煙の様に

消えていやがった。結局奴の正体は何者なんだ?

そして誰が何のために

ルイーナさんの暗殺を

あの野郎に依頼したんだ？

分からないことだらけだが一つだけハッキリしていることがある。

それは……奴等がルイーナさんの敵、つまり俺の敵だということだ。

↓

イツセーSide

どうも、兵藤一誠です！

ゼウス様に連れて行かれたのは

セイレーンの皆様が

水浴びをしている泉でした。

な、何て……！

何て素晴らしい特訓なんだ！

さすが全知全能のゼウス様！

エロに妥協が無いぜ！

では早速覗きをば……。

「バックカモーン！」

ピシヤアアアアン！！

あばばばばっ!?

突然頭に雷が落ちた！？

ど、どうして!?

この桃源郷を脳内フォルダに

永久保存しようと思っていたのに！

だが次のゼウス様のお叱りに俺はカブトを脱いだ。

「違う！

真実の愛とは痛みや

誤解を恐れぬものじゃ！

こそせと覗きなどとは

彼女達を侮辱するの程がある！」

な、成る程……！

確かに仰る通りだ！

「故に、覗きではなく……」

堂々と正面から入るのじゃ！

さすれば お前の望む樂園がそこにあるはず！」

何という正論！

俺が間違っていました！

はい！ 行つてきます！

俺は意を決して飛び込んだ。

そこは天国のような光景が広がっていた。

そこには美女美少女達が

一糸纏わぬ姿で戯れていたのだ。

ああ、ここは本当に現実なのか!?

俺は今夢でも見ているのか!?

「……きゃああああ！変態よー！」

「な、何なの!? 何で男がいるの!?

「キヤアアアアアア!!」

ドツガシャーン!!

「ぶべらっ!!」

俺の視界は真っ暗になった。

恐らく何かを投げつけられたの

だろうか……!?

だ、だが……まだ……!!

俺は意識を手放さなかった！

まだだ！まだ終わらんよ！

「うおおおお！ 待ってくれ！

話を聞いてくれ！」

「イヤッ！来ないで！」

「誰か！ 助けてえ！」

「来るなあああ！」

「死ねええ！」

非難轟々だが……俺は諦めない！

「ま、待って！」

「これは覗きとかじやないんだ！」

「なら何故貴方はここに居るの!？」

「そ、それは……」

君達の姿が余りに魅力的で……

迷惑だとは思うけど……

仲良くなりたいたいと思って……」

俺は芯からの土下座と

さめざめと泣きながら

本心を述べた。

すると場の空気が替わっていく。

「う、うくん……」

「ま、まあ悪い気はしないわ……」

「それにこのコ、よく見たら

可愛くない？」

「どつちかと言えば凜々しくくない？」

「ふむ、それならば……」

彼を受け入れてやっても良いのではないか？」

そこに現れたのは

俺をここまで連れてきた ゼウス様だった。

赤面せずキリリと引き締まった顔で

仲裁に入ってくれたのだ。

「う、ううう……。もう許して……」

俺は涙目で懇願すると、

セイレーンの中での話し合いの結果、

どうやら俺は受け入れられたようだ。

何故かゼウス様も一緒に……。

「あくん♡ゼウス様ってば

胸板が逞しい♡」

「赤龍帝君もカワイイのに

こんなに強いなんて素敵です♡」

「あら、意外と鍛えてるのね。

少し見直しちゃった」

「ははは、そんなに褒められると照れるのう！  
がっはっは！」

めちやめちや楽しんでるよ

この主神様！

何なんだよこの流れは！

さっきまで命の危機だったのに！

そして現在、俺達は

セイレーン達から歓待の真っ最中。

「はい♡

だくれのおっぱいかな？」

今やっているのは

目隠しをした上で

俺達が触ったり挟まれたりして

当てるゲームだ。

ちなみに正解したら

ご褒美が貰える。

「こ、これはリリースちゃん？」

「外れー！」

バツチーン！と平手で打たれた様な衝撃が走る。

すげえ痛え！

……がビンタはビンタでも

豊富なセイレーンさんたちの

おっぱいによる乳ビンタならば！

我々の業界ではご褒美です！

ありがとうございます！

俺も既に10回ほど間違えて

乳ビンタされているが、

その度に 段々と威力が増している気がする……。

だがそれでも！



俺は負けられない！負けられないんだあ！！

「バッカモーン！」

ピシヤアアアアン！

あばばばばっ！！

またしても頭に雷が落ちた！

だが、今回は気絶しなかったぞ！

しかし、どうして？

どうして俺は怒られているの？

俺、何かしましたか？ 訳がわかんねえよ！

「なんじゃ負けるわけにはいかんとは！

おっぱいは競わせるものでなく

愛でるものじゃろう！

比較し、優劣を決めるなど言語道断じゃ！

お前はそれでいいのか!?

お前が求めたのは本当にそんなハーレムか!」

成る程！確かに仰る通りだ！

俺は何て愚かな事を！

自分のちっぽけなプライドのために

皆のおっぱいを蔑ろにしていたんだ！

恥ずかしくて死にそうだ！

俺は猛省した。

これからはもっと謙虚な心を持って

女性と接する事にしよう。

そう決意した時、俺は気付いた。

何か声が聞こえる……??

(イツセーさん叱られて可哀想……)

ハーブが慰めてあげたい……♡)

むににいつ♡

おっぱいが当てられると

ハーブちゃんの声が聞こえてきた!?

何だこの能力は!?

おっぱいから声が聞こえるだど!?  
一体どんな仕組みだ!?

「え、えつと……ハーブちゃん?」

「え、ええ!?! 何で解るの?」

口ではそう言っているが

俺にはおっぱいからハーブちゃんの本心が聞こえるのだ!

ハーブちゃんの本音を知った俺は

もう彼女に躊躇いはしない!

俺は彼女の本心をおっぱいともども

揉みほぐすんだ!

もみつ♡ もみもみもみ♡♡♡

「あつ♡あああん♡」

するとどうだ! 俺の誠意が通じた!

ハーブちゃんは甘い声で

俺のおっぱいもみに喘ぎ出したのだ。

「い、いやあ……♡」

こんなヘンタイになんかあ……♡

私は負けない……まけにやいからあ♡」

だが、俺は知っている!

彼女は照れ屋でエッチな事に興味津々なのだ!

おっぱいの感度が良いのは そういう事だったのだ!

さあ、もつと気持ち良くさせてあげるよ。

おっぱいだけじゃない。

君の全身をくまなくマッサージして あげよう。

そして俺のテクニクでイカせてやる!

俺はハーブちゃんの身体を優しく 撫で回し、

刺激を与えていく。

おっぱいから解る!次に何をしてほしいのか!

どうしてほしいのかが ……!

むにゅむにゅ♡

ふわふわふわっ♡ さわっさわっ♡  
ふわふわふわふわわ♡♡♡

「はうううう♡♡♡  
び、びりびりする♡

アタマもカラダもビリビリして♡

お、おかしくなっちゃうううう♡♡♡「

ビクンツ♡ ビクビクウ♡♡♡

ハーブちゃんは激しく痙攣している。

「今じゃ！お主のパワーを指先に！」

いいですとも！

俺はゼウス様の指示に従い、

全ての力を人差し指に込めて

ハーブちゃんの乳首に埋めていく！

何で目隠しされているのに

乳首の位置が解るのかって!?

愛だよ！他に何がある！

ずむずむっ♡ ぽちいっ♡

「あひい♡♡♡

そ、そこお♡♡♡ ちくび♡ きもちいひい♡♡♡「

ハーブちゃんは快樂で まともに喋れないようだ。

これは……一体!?

「それこそワシがお主に授ける

帯電による力！名付けて

『絶頂雷撃』（クリムゾン・ショック）じゃ！」

「こ、これが俺の力……」

「うむ…この技を使えば

セイレーンのみならずあらゆる女魔や夢魔、

はたまた女神や天使までもが イチコロころりじゃ！

これで今度からはセクハラし放題！

まさに無敵！最強の必殺技と言える！」

「セクハラ……！

遂に正体を表しましたね

この変態主神！

なにか絶頂雷撃ですか！

そんなものはこの私が封印します！」

一際凜々しい声が響く！

この声の主は一体誰なんだ!?

(ぜ、絶頂雷撃……?)

アポロン様に弄ばれて以来

男性不信の私だけ……。

そんな事をされたら……♡

ツボネ……どうなってしまうのかしら?)

「な、何じゃ貴様は！

何処から現れた!?

い、いかん！逃げるぞイツセーよ！

あやつはセイレーンの中でも 最強と言われる女王じゃ！ 捕

まったら何をされるか わからんぞい!!」

「何を言っているんです！

あんな哀しいおっぱいの悲鳴が

貴方には聞こえないんですか!」

ゼウス様ともあろう御方が 何という言い草だ!

俺の師匠はもつと優しい方だと思っていたのに!

俺がツボネさんの悲しみと

頑なになった心とおっぱいを癒やす!

癒やしてみせる!!

「な、何をバカバカしい……!」

私は貴様の様なケダモノになど!」

……数分後。

「あおおお〜♡イグ♡イギます♡

イツセーしやまあ♡

私のドスケベおっぱいを

どうかご自由にいじめてくださいやいはい♡♡♡」

「虐めるだなんて……。」

俺はただ、ツボネの おっぱいを愛しているだけだよ」  
ぴりっ♡ ぴりぴり♡

どうやらツボネさんも俺のマッサージが  
気に入ってくれたみたいだ！ よかった！

まだ希望はあるんだな！

「く、悔しい！ でも、気持ち良すぎて逆らえませんが

悔しい♡おっぱいさえなければ♡

こんな転生悪魔様なんかにい♡」

「良かったじゃないですか

おっぱいのせいでできて」

ずむむむっ♡もみもみもみ♡♡♡ ぷるんっ♡

ずむずむっ♡ ぼちっ♡

帯電した俺の絶頂雷撃（クリムゾン・ショック）が  
見事に決まった！

「はぁ……はぁ……♡

イツセー様のマッサージもおチ○ポも……♡

凄すぎですう♡」

俺のマッサージで すっかり

骨抜きになってしまった ハーブちゃんと

ツボネさんは初めの時とは別人の

ように従順になっていた。

俺は二人の巨乳を同時にペニスで責め立てる！

ぬちゅ♡ ぐぐぐぐぐ♡♡♡

指先だけでもなくペニスの先端でも

絶頂雷撃（クリムゾン・ショック）を

出来る様に鍛錬せねば！

「はぁぁぁぁぁぁぁ♡♡♡

しゅごい♡♡♡ こんな初めてえ♡♡♡」

やった！

二人同時にイカせる事ができたぜ!?

「うむ！見事じゃ！」

ワシの教え通り以上にやったのう！

流石はワシの弟子じゃ！」

「ありがとうございます！」

これも全てゼウス様のおかげです！」

「ふふふ、良い心掛けじゃ！」

さて、次はいよいよ本番じゃ！

「お主がこれまで習得してきた技を駆使して

あの娘達も昇天させてやるのじゃ！」

あと3割ばかりワシに融通してくれ」

「はい！お任せください！」

が、その時……！

「これは……どういう事？」

「どういうことです……貴方？」

リアスさんとリアスさんより

少し年上っぽいムチムチ金髪ショートの

女性が現れた。

「ぶ、部長！ど、どうしてここに!?!」

「ここは部外者立入禁止のはずですよ!?!」

「ええ、そうね。」

本来なら私だつて入るつもりはなかったわ。

けれど、こちらのヘラ様がどうしても

貴方達の様子が見たいと仰つてね……」

へ、ヘラ様!?! って事はまさか!?!

あの曰く付きのヘラ!?!

「お久しぶりですね。」

ゼウス。そしてイツセー君。

こんな形で出会うなんて

残念ですね。」

あ、あれ？意外にほわほわした

温和な感じじゃないか？

もつと苛烈で恐ろしい女神様かと思っただけ……。

「ち、違うんじゃない！」

これは儂じゃなくてこの小僧がじゃな……！！」

「貴方とのお話は後で。」

それはそうとく、イツセーくんは

どうでしょうか？

ちよん切つてしまいましょか？」

ひいっ!? こ、この人怖い！

目が笑ってない!?

「ま、待ってくれ！」

そ、その前に一つ聞きたい事があるのじゃ！

お主にはイツセーがどう見える？

正直に答えてくれれば悪いようにはならないぞい」

「え〜？

私は貴方の前ではどんな男性でも

等しく赤子同然にしか

見えないですよ？

最愛の妻にそんな事を聞く必要ありますか？」

(許さない許さない許さない

許さない許さない許さない許さない

どうしてどうしてどうしてどうしてどうして)

ひいーっ！ 憤怒なんてものじゃない!!

おっぱいの声を遮断しないと

俺の精神が持たないぞ！

そして、ゼウス師匠の奥さんと

言えど絶頂雷撃ならば……！！

俺は決意を固めて

へらさんの乳首をつついた！

ぼちっ♡ ずむっ……。

バチイイ!!

「うわああああ!!」

全身に高圧電流を流されたような  
痛みを感じて 思わず叫んでしまった!

「あらあら。イツセー君は

悪戯っコさんですね。

でも大丈夫。子供に欲情する

母親なんていませんもの……」

き、効かない……!?!?

俺の新必殺技が……!?!

そうか……!ヘラさんは地母神!

母なる大地の力そのものだから

雷には無敵なんだ!

「ふふ、どうやらイツセーくんも

お仕置きが必要みたいですね」

「すすすすすみません!

お許しを!!」

俺とゼウス様は心から謝罪するが

「ダメです」

「駄目ね」

神は俺達を見捨てた!

いや、聖書の神は死んでいるけど!

「うふふ、では行きますよ」。

私達の愛の鞭を受けてください」。

それ」

「ぎゃああああああ!!」

セイレーンの泉に俺とゼウス様の

悲鳴が雷鳴の様に轟くのであった……!!



## ※第51話（イツセイ×イザイヤ）

安里Side

「それでは非公式とはいえ  
ルイーナの勝利を祝福して

乾杯！」

「「かんぱーいー」」

ここはリアスさんの実家の本邸。

ルイーナさんの指揮する

俺達のチームが勝利したことによる

祝勝会が開かれていた。

「ささやかで申し訳ない」と

ジオテイクス様は言っていたが

ささやかかって意味を間違えているん

じゃねえかな？

テーブルには豪華な料理が並び、

そのどれもが見ただけで

高級品だと分かるものばかりだ。

「ほら、くえくえ。」

はらがへっぺはいくさはできぬ」

キユクロは黒のドレス姿の

出で立ちで俺の皿に

料理をよそった。

山盛り、という言葉では

足りないほど盛られたそれは

まさに圧巻の一言だ。

というか戦は終わったんだよ！

祝勝会だからさあ

このパーティーは！

「まあまあいいじゃないですか。

キユクロちゃんも

お腹空いているんですよきつと」

そう言いながらアーシアも

赤ワインの入ったグラスを片手に

優雅な笑みを浮かべた。

……なんだかんだで

似合っているな赤いドレス。

まあ……悪魔だから飲酒しても

大丈夫なんだろう。

つてあの糸目、

ディオドラとかいう奴が

アーシアちゃんに

酌をしているじゃねえか。

いつの間に入ってきた？

「ふう……」

ワインをぐいっと飲み干すや

アーシアちゃんの頬が

ほんのり赤く染まる。

あまりお酒が強くないんだろうか？

「どうぞアーシアさん」

「あ、ありがとうございます

ディオドラさん」

間髪入れずにディオドラが

ワインを注ぐやアーシアは

困った様な表情を浮かべてそれを飲み始めた。

……。

あの糸目ヤロー、

アーシアちゃんを

酔い潰してどうこうしようとして

しているんじゃないやねえだろうな……！！

俺が割って入ろうとキュク口に

皿を預けようとしたその時。

「へー！」

美味しそうなワインだなー！」  
殊更大声でイツセーは両者の間に  
割って入るやディオドラの持つ  
ワインの瓶に目をつけた。

「……これは僕からのお祝いです。

ささ、グイっと」

若干の間を挟んだが

ディオドラは笑顔のまま

イツセーワインを勧めてくる。

「うわあ……本当だ。

凄い香りですね」

イツセーが興味津々という様子で

瓶を手にとると……

一気にラツパ飲みしてしまった！

「……なっ!?!」

驚くディオドラの前でイツセーは

ゴクゴクと喉を鳴らしながらワインを飲み干し、

そして空瓶をやや乱暴にディオドラに渡した。

「ぶっはー!! 旨かったぜ！」

俺はお酒初めて飲んだけどさ！

いいモノなんだろうなコレ！」

爽やかな笑顔で親指を立てた。

あ、ディオドラのヤロー僅かに

こめかみをピクピクさせてやがる。

でもすぐに立ち直るとまた

アーシアちゃんに酒を注ぎ始める。

すると今度はそこに木場も

やって来て

同じように瓶を奪い取り

一気飲みし始めた！

お前そんなキャラだったか？

「うん。確かに良い味だね。」

君にもあげるよ」

「おうサンキューー！」

イツセーは礼を言うのと

瓶を受け取りそのまま口をつけた。

駒王学園の一部が見たら

飛び上がって喜びそうな

光景だがそれはともかく……。

「き、キミ達少し遠慮したらどうだい？」

さすがに我慢できなくなっただのか

ディオドラが苦笑いと共に

二人に自重するようにと言った。

しかし……。

「あら、ごめんなさいね。」

今日は主従の隔てもなく

無礼講で行きましょう、と

私が申し出たものだから……。」

リアスさんがそう言うのと

ディオドラは言葉に詰まった。

そしてそこへさらに

追い打ちをかけるように

朱乃さんが艶っぽい

微笑みを浮かべディオドラの

側へと寄り、

スコグルさんは快活な笑顔で

奴の前へと近づいていく。

「それに、

あなたのような殿方からの

お酌なんて光栄ですわ。

私にも頂けますか？」

「あ、アタシもアタシも！」

ちよつとその鶏の腿取つて、奥のやつ」

おーおー、モテていいなー。

アスタロト家の跡取り息子は（棒）

まあ、傍から見りや使い走りだから

全然うらやましくもないぞ。

ホントだぞ！

「あらあら？」

羨ましくて仕方がないつて

指を咥えて悔しがっている

顔をしている様にしか

見えませんが？ マスター」

ニヤニヤしながら

近づいてきたのは

アヴェンジャーだ。

しかし普段の

鎧に黒いマントの

出で立ちではない

パーティードレスの姿だった。

そのせいで

一瞬誰か分からなかった……。

「何です？ その間抜け面は？」

燃やされたいんですか？」

「なわけあるか！」

珍しいカツコだと思つて

ビックリしただけだ！」

「は？ 幾ら私でもTPOを

弁えるくらいできますよ。

それより、せつかくの機会なのですから

マスターも何か召し上がれ。

貧乏舌を鍛える数少ない好機ですよ」

俺の手を取り、  
料理の方へと引つ張っていく。  
意外に力が強いなコイツ……。  
連れて行かれたのは  
チョコレートフォンデュの  
装置前。

きよとんとする俺に

アヴェンジャーは不敵に笑う。

「フッフ、どうです？」

硬派ぶっているマスターに対して  
公衆の面前にて甘ったるいモノを  
食べさせるこの仕打ち。

実に悪魔的でしょう？」

フン、とスタイルのいい

胸を張って鼻息を鳴らす。

しかし、悪魔的なのは

お前のぽんこつ属性じゃない？

しかし当のアヴェンジャーは

俺の反応など意に介さず

チョコレートをたつぷり付けたバナナを

フォークで刺し、俺に差し出す。

「ほれ、あ〜ん」

なあアヴェンジャー……。。

ほれ、はないと思うぞ？

まあ、いいや。

「……あむ」

「どうですか？」

恥ずかしくて恥ずかしくて

言葉も出ないでしょう？

増して私の様な陰気臭い、

魅力もない女から

こんな事をされては。

フ、フフ、フハハハハ！」

うーん、このツンデレぽんこつ  
捻くれっぷり……。

俺が何とかしてやらんと……。

「いや、フツーに美味えよ。

人から食わせてもらうと

味が変わるっていうけどさ。

ジャンヌみたいな美人から

食べさせてもらえたら

どんな物だつてご馳走だよ」

少し気障すぎたかな？

ジャンヌ、もといアヴェンジャーの反応は

どうだろうかと間をおいたが……。

「なっ……！」

ななな何を言っているんですか！

ば、馬鹿じゃありませんか!?

歓待で出されたものを

どんな物でもだなんて！

そんな事言つてると、

毒とか盛られるわよ!?

このおバカ！」

俺の言葉に真っ赤になって罵倒する

アヴェンジャーだが怒ってはいない。

怒っていたらきつと剣やら

槍みたいな呪旗が

飛んでくるはずだから。

「すまん。それを言われると

返す言葉もない。

敵から毒の弾を食らつて

皆の足を引っ張ったのは事実だ」

俺は素直に頭を下げた。

するとアヴェエンジャーはため息をつく。

「まったく、これだから

マスターは困ります。

もつと自分の行動に

責任と自覚を持ちなさい！」

「ウツス……スマセン……」

なんか説教されてしまった……。

「フフフ、

なんだかイチャイチャ

してるね〜お二人さん♪」

腰を結んだ白いシャツに

相変わらずのホットパンツという

カジュアル極まりない姿の

スコグルさんが俺たちの前に立つ。

その顔にはニマニマとした笑みが張り付いていた。

「な、何がですか？」

「もお、照れなくてもいいじゃん。

私も混ぜてほしいかな〜ってさ！」

たじろぐアヴェエンジャーに

グイグイ迫るスコグルさんに対し、

アヴェエンジャーは解りやすい位に

近づくなオーラを発して

牽制している。

「嫌です」

「なんでエ？（半ギレ）」

「私はマスターの契約者であつて、

あなたの玩具ではありませんから」

「ふ〜ん？」

あまりにも世渡りが下手すぎる物言いだな。

俺の心配はともかくとして



スコグルさんはアヴェンジャーを  
ジロジロと上から下まで見る。  
そして一言。

「へえ、かなり美人だし、  
スタイルもいいし、

大分気が強そうだけどそこもまた魅力的！

でもアタシも負けてないよ！」

胸を張るスコグルさんの胸元で

大きな二つの山が揺れる。

うん、確かにデカイ……。

アヴェンジャーはその圧倒的な存在感を誇る

スコグルさんのバストを凝視している。

「あももう！マスター！」

早くこの人の相手をしてください！

私はそっちの隅っこで一人で飲んでますから！

絶対ですよ！

絶対に来ないでくださいよ！」

アヴェンジャーは

俺をキツと睨むと

テーブルに置いてあつた

ワイングラスを手に

隅の方へと歩いていった。

追いかけた方がいいのか!?

「あはははは！」

あの子可愛いねえ！

アタシの見た所

キミの事が好きと見たね！」

「いや、どうでしょう？」

よく分かりませんが……」

「フッフ、大丈夫。」

恋愛経験マシマシの

アタシならよく分かる。

あれは恋をしている目だよ。

間違いないね！ アタシと同じく！」

「そうでしょうか？」

まあ、俺の事を憎んでいないのなら

助かります」

後ろからズドン、だなんて

誰だつてゴメンだからな。

「おっと！ 安里クンつてば

私の言葉を華麗にスルー!？」

「それよりスコグルさん、

身体の方は？」

『英雄殺し』から毒入りの弾を

食らったのはスコグルさんも

一緒だからな……。

しかも奴の特性で

目ざましい活躍をした

しかも有名なヴァルキリーの

スコグルさんには効果覿面。

俺が血清を口移ししていなかったら

今頃どうなっていたか……。

俺の心配をスコグルさんは

ケラケラと笑い飛ばして

胸をドンと叩いてみせるのだ。

「あはは！ 全然平気だよ！」

アタシはほら、

ヴァルキリーの中でも特にガンジョーだからさ♪

ほら、脇腹の傷だつてバツチリ♪」

「……そ、そうでしたか。

良かった」

脇腹に指指しながら彼女は言うが

括れた破綻のない

ボデイラインから覗く綺麗な肌に、  
銃創らしきものは見当たらない。

と、というか気恥ずかしいな………！

「ん〜？今エツチな想像した〜？」

「してません！」

「ふくん、まあ別にアタシは

構わないけど？ どうせこれから

そういう関係になるんだから」

「ええっ!？」

飲んでいた酒を思わず吹き出しそうになった。

冗談なのか本気なのか……。

しかし、

「実際アタシ、安里クンの事が

好きなんだけどキミはどう？

フリーだったりするワケ？」

ブツ！

今度は口に含んでいた

酒を吹き出してしまった。

ゲホゲホと咳き込む俺に

スコグルさんは熱っぽい視線を向ける。

「あら、そんなに驚く事ないじゃん♪」

「す、すみません………！まさか、

あなたのような人から

好意を寄せられるとは思わなくて」

「ふくん？じゃあさ、

アタシがアタックしてもいいよね？

ほい、取り敢えずあくん」

スコグルさんはイチゴを

摘むとそれをチョコレートフォンデュ用の

フォークに突き刺し、俺に差し出した。

「はい？」

「あくんだよ、あくん」

「いや、あの……」

「いいじゃん、減るもんじやないし。」

ほら、アーンして♪」

俺は戸惑いながらも口を開けた。

するとスコグルさんはひよい、と

引っ込めた。

なんだ、ただ詭われただけか。

儂い夢だったぜ……。

などと黄昏れる俺であったが

次のスコグルさんの行為に

驚愕する事になる。

「ふぁい、ぼーぞー」

なんと、イチゴのへタの部分を

啜えて反対側の方を

俺の口内へ押し込んできたのだ。

「んぐうー」

甘い香りが鼻腔をくすぐる。

舌の上で転がるイチゴと

チョコの甘み。

スコグルさんは目を細めながら、

「どう？ 美味しい？」

「お、おいひいれす……」

「フフ、アタシとキミの

ファーストキスが血の味なんて

イヤじゃん？」

そう言って笑うスコグルさんに

俺はすっかり魅了されていたのか

頭はクラクラするし、

ドキドキするし、胸から

何かこみ上げてくる……!?

「う……うえ……うええ……」

「ちょ!? ちょっと!」

大丈夫!?

急に吐き気が込み上げた。

用心して酒は一滴も飲んでないのに……!?

慌ててトイレに向かおうとした

その時、視界の端に映る

ルイーナさんが

此方に駆け寄ってきた!

「だ、大丈夫ですか!」

心配そうな顔で

俺の背中を摩りつつ

トイレへと誘導してくれるが……。

「あ、ああ、ありがとう。

大丈夫だよ……う、うぐ……!」

や、ヤバイ……!

気持ち悪すぎて……!

限界だ……!

遂にやってしまいかけた

その時、咄嗟にルイーナさんは

俺の吐瀉物を手で受け止めて

くれていたのだ!

!

情けない……。恥ずかしい……。

死にたい……。

消えてしまいたい……。

トイレの便器にひとしきり吐いた

俺がトイレから退室した時に

真っ先に見たのはバシヤバシヤと

自分の手を洗う

ルイーナさんの姿であつた。

「ごめんなさい……。」

私のせいで、もっと早く  
安里さんを案内できていれば……」

手洗い場にて

彼女は申し訳なさそうに  
そう言った。

「い、いや、

ルイーナさんは何も悪くない……。」

悪いのは全部俺の方さ……。」

ゴメン、汚いところ見せちゃつて。

こんな情ない、汚え騎士なんて

ルイーナさんの方から願ひ下げだよな……あはは……。」

自分でも分かるくらいに

声が震えている。

きつと今の俺の顔は酷いものだろう。

目も当てられない様な

醜態を晒しているに違いない。

「そんな事ありません！」

「えっ?」

ルイーナさんはキツと

俺を睨む様にそう言い放つた。

「あの英雄殺しからの凶弾から

私を守ってくれたじゃないですか!

誰がなんと言おうと安里さんは

私の騎士なんです!

文句を言う人がいたら……

えーと……その……!」

………。ふふ。

「ふえっ?」

な、なんで笑っているんだか!」

「い、いや、必死に考えて、

言葉を紡ごうとする姿がなんか可愛くてさ」

「もう！ 人が真剣に話してるのに！

安里さんのバカ！ バカ！

おたんこなす！」

ぽかぽかと俺の胸を叩く

ルイーナさん。

「あはは！ 痛いよ、ルイーナさん」

「知らないです！ ふーんだ！」

拗ねてしまったようだ。

でも可愛い。

「でも私の言う事を一つ聞いたら

許してあげます！」

ああ、この子のためなら

命を賭けても悔いはないな。

心からそう思った。

「うん、分かった。

何でも聞くよ。

俺に出来る事ならなんでも」

「はい！ じゃあ早速お願いします！

あのですね……………！

さん付禁止の刑です！」

「えっ？」

「さん付けはダメですよ！

さんを付けずに呼んで下さい！

ほら、早く！」

えっと、それはつまり……………。

「ルイーナ……………？」

「はい！ よろしい！……………えへへ」

満面の笑顔を浮かべる彼女を見て

俺は自然と微笑んでいた。

姫様ってというのは  
きつとルイーナみたいな子のためにある  
言葉なんだなって……。  
そう、思えるんだ……。

↓

一誠 Side

う〜い……転生悪魔とはいえ  
飲み過ぎてしまったかなあ……？  
ふわふわするぜ〜。  
あれ〜？ 俺の部屋どこだ〜？  
まあいつか〜。  
ここで寝よう〜♪  
ガチャツ。

部屋に入るとそこには見知った  
木場の顔があるじゃねえか。

「おっす〜」

「あはははは！ イッセー！

顔が真っ赤じゃあないか！

赤龍帝だけに!! わははははは！」

コイツ笑い上戸だったのかな〜？

「ハハハ！ 確かに！ お互い

酔った勢いで一線を超えないように

気をつけような！」

「え……しないの？」

セックス……？」

え……？ 何いってんの？

木場……いや？ 今の姿は……？

麗しい金髪ロングに整った眉毛、

青い瞳、スラツとした鼻筋に

プルンと潤う唇。

「あっはははあ〜！



「イザイヤさんじゃないですか〜!!  
うひゃひゃひゃひゃひゃ!

「ど、どうしたんですかあ!?  
そんなエッチな姿でえ!!」

「やべえ! 俺のおっぱいセンサーが

感度MAXレッドゾーン!

イザイヤさんは……

「大ききヨシ! 形ヨシ! ハリヨシ!

ツヤヨシ! エロさヨシ! の完璧ボディだ!

「これは頂かないわけにはいかないおっぱい!

「あははあ♡イツセーってば

目つきがいやらしいよお♡

「僕を自分の女にしたいんだねえ♡」

「いや、そりやもう! 俺の女になってください!」

「フフン、いいよお♡

「僕の身体はあ勿論心だつて……

もう君のものさあ……♡

んっ……」

「チュツ。

「ああ、

「なんて柔らかい唇なんだろう。

「たまんねえ……!」

「んっ……ちゅぱっ……」

「れろ……ぺちや……はむ……」

「ん……くちや……じゅる……はむ……はむ……はむ……」

「俺達はベッドの上で

「激しく舌を絡ませて

「唾液の交換をする。

「そして、その流れのまま

「彼女の胸を鷲掴みにする……」

「あんっ……イツセー……くうん♡

もつと強く激しく揉んでえ……！」

言われるがままに力一杯両手で

イヤイヤの乳房をこねる様に握る。

だが握るだけではないかん！

意識をおっぱいに集中……！」

(ああ……酔ったフリをして

イツセー君に犯してもらえる……♡

優しいイツセー君もいいけど……

一回位僕は強いイツセー君に屈服して

服従してみたいんだよね……♡)

ゼウス様との特訓や

ヘラ様のおしおきの成果により

俺は新しいおっぱいの扉を

開いたのだ！

名付けてパイリンガル！

相手のおっぱいの声を聞く事によつて

その人の本音が分かるというものだ！

「あむっ……ちゅっ……」

ぷるっ……んっ……ふうっ」

「れろっ……むっ……ふっ……」

おおっ！ 乳首が勃ってきたぞ！

興奮している証拠だ！

これはいよいよ本番だな！

まずはお尻から！

俺の右手がイヤイヤのお尻にすつと伸びる。

「あつ、そこはダメだよ……」

まだシャワー浴びてないから……」

「大丈夫。

そのままのキミを感じたいんだ」

「も、もう……イツセー君のエッチ……！

でも嬉しい……！じゃあ……来て……！」

(イツセー君のチ○ポ……♡)

僕のモノより全然大きいよ……

こんなの今入れられたら……壊れちゃう……♡  
もう少し待ってえ♡)

フフフ、イザイヤは

エツチで健気だな……！

だから俺はいきなり挿入はせずに

焦らすようにお尻の穴の周りを指先で撫で回す。

「あつ……！　　そ、そこ違う……！

あ、あ、あ……！　い、入れて欲しいのお……！

お願いい……！　　意地悪しないで……！」

(んひい♡お尻♡お尻感じちやってる♡)

僕のチ○ポが爆発しそうだよ♡♡♡)

イザイヤはすっかり

ト口顔になりながら腰をクネクネさせている。

可愛いなあ……。

だからもつともつといやらしい

エロエロ聖魔剣使いに仕立て上げないとね！

だから俺はピリツと帯電させた

指先でイザイヤの乳首や亀頭、

更にはお尻の穴に性感電流を流し込む！

ビリビリ！びち！びちちい！

「きゃうん！　しびれりゆう！

ちくびとち○ぽとおケツが

ビリビリイ！　　ってするのお！

イツセーきゅんしゅごいよお！

ぼくもう

げんかいでしゅうううう！

したい♡だすっ♡

ち○ぽしこしこしておしるだす♡」

すっかりアへったイザイヤは

自ら乳首とチ○ポを扱き始める！

俺も一緒にイザイヤの

ふたなりエロチ○ポを

シコシコしてやるぜ！

しゅっ♡しゅっ♡ぐちいつ♡

「ああっ！ イク！

イっちやいます！

イツセー君！ イツセーくうん♡」

まるで雌犬の様に喘ぎ声を

上げながら射精した

イザイヤの精液が

ドバアツと飛び散りシートを汚す。

「うわあ！ すげえ量だな……。」

しかもイカ臭い……。

どんだけ溜まってたんだよ？」

「はあはあ……♡

だって最近忙しくて

自分で処理出来なかったん

だもん……♡」

「しょうがない奴だな……」

ほれ、綺麗にしてやるよ」

俺はティッシュでイザイヤの

ふたなりチ○ポを拭ってやると

、その刺激で再び彼女の

モノが勃起してしまう。

「おいおい、これはまた

いやらしいエロエロ聖魔剣だな！」

「はうん♡ごめんなさいいっ〜！

淫乱な僕を許してくださいい！」

「許して欲しいのか？」

じゃあ、次はどうすればいいか

分かっているだろう？」

ぐっ、ぐっ、とアナルの先に

俺のチ○ポを擦り付ける。

するとイザイヤは自ら

四つん這いになってお尻を

フリフリして誘惑してくる。

「はい♡イツセー君の

その立派なおチン○ンで

僕のスケベなお尻を犯して下さい♡」

「よし！ よく言った！

望み通りお尻でしてやるぞお！」

俺は遠慮なくイザイヤのお尻に

チ○ポを突き立てる！

ズブウウ！

「ああああああん♡♡♡」

(入ってきたあ！

太くて長いイツセー君のチ○ポが

一気に奥まで入ってくるううう！)

「おおっ！ 締まるっ！これがイザイヤのア○ルか！

なんて気持ち良いんだ！最高だよ！」

パンツ！ パシン！

「ああっ！ もっとお♡

もっと突いてえ♡

バシバシ叩いて

いっぱいパコパコしてえ！」

俺はつい気持ちよさの余り

イザイヤのお尻を叩くと

彼女は嬉しそうに叫ぶ。

すっかり俺のチ○ポに夢中らしい。

そして俺はピストンを始める。

グチユツグチャ！

「あっ！ あっ！ あっ！

あっ！ あっ！ あっ！ 凄いつ！ おつきい！

太い！ 熱い！ 強いっ♡強い♡♡」

（ああ♡♡♡イツセー君のオチン〇ンは

本当に最強だよ♡

この大きさ、太さ、硬度、熱、匂い、味、

全てにおいて最強のチ〇ポ♡

もう僕は一生イツセー君から離れられない♡♡♡）

イザイヤ……いや木場も含めて

もう完全に堕ちていた。

俺は帯電した指をイザイヤの乳首に

押し当てると

更に激しく腰を打ち付けていく！

「あひっ♡しゅごっ♡らめらよお！

またイク♡イク♡イクイク♡♡♡」

「俺もだ……！ 出すぞ……！」

（あっ……♡イツセー君の精液が……

僕の中に入って来る……♡）

ドピュルルルー！ビュク！

ビュツビュ——！！

「ふああ……♡あついい……♡

おなかのなか、

ドロドロになつてるう……♡」

俺は全ての精子を出し切ると

ズルリと引き抜く。

「あひゃう……♡」

そしてイザイヤのア〇ルから

はみ出た大量の精液を見て

更に俺の興奮が高まっていくのが解る。

「すげえ量だな……」

それにしても凄いな……。

こんな量が出るなんて……。

これはもう一回楽しませて貰わないとな……。

次はマ○コを使わせてくれよ……。」

「はい♡イツセー君♡」

僕によわよわアナルだけじゃなく

ちゃんとした女の子を

使ってください♡」

「勿論だよ！ イザイヤ！」

お前の身体全部使ってやるぜ！

その代わり俺がキミを満足させてやるぞ！」

さあ、後半戦の始まりだ！

俺はイザイヤの腰を掴むと

そのままバックの体勢で挿入する！

「ああっ♡またきたあ！」

イツセー君の

極太雄チ○ポが

僕のおま○こにいいいい♡」

ズブズブ……ぐちゅ♡ちゅぶぶ♡

「くぅ……！ 流石にキツイ……！」

でも、それがいい！」

「ああっ！ 大きいよお！」

そんな奥まで入らないよお♡」

俺は構わず根元まで突き刺す。

すると子宮口まで届いたらしく、

コリっとした感触を感じた。

俺はそこに龟头を押し付けると

グリグリと動かす。

すると、イザイヤは堪らず

喘ぎ声を上げた。

しかし、これだけでは終わらない。

今度は前後に動かしてやる！

すると膺壁全体が絡みつくように  
俺のチ○ポを締め上げてきた。

イザイヤは何が何やら  
解らなくなるまでに悶えていた。

「ああっ！ ダメえ♡

イツたばかりなのに♡

敏感すぎるのにイ！

激しいっ！

生ハメセックス激しすぎますう♡♡♡」

「へっ！まだ始まったばかりだろ！ほらほら！

ここか!?ここが良いのか!？」

「ひゃん♡そこお♡気持ちいい♡気持ちいいよお♡」

俺は腰を引くと一気に

最深部目掛けて突き入れる！

「ああん♡すっごいっ！ これ好き♡

このチ○ポが好き♡♡♡」

「チ○ポ！ チ○ポって!」

イザイヤはそればかりか！

俺の事はどうでもいいのか!？」

『BOOST!』

パンツ！ パンツ！

パンツ！ パンツ！

怒りを込めて倍化を伴った

おしおきマジピストンだ！

あまりの激しさにイザイヤの

お尻は事故車のフロントの様に

ぐにゆうっ♡と潰れていく！

「ああっ♡ごめんなさい♡

イツセー君のこともちやんと大好きですう♡

だからもつと突いてえ♡

僕をメチャクチャにしてえ!」



「言われなくてもそうしてやる！」

パン！ パン！

パン！ パン！

バチバチバチ！

今度は倍化ピストンと

帯電チ○ポからの絶頂雷撃の

合わせ技だ！ とことんやるぞ！

「おおっ♡ほおっ♡

おほおおお♡♡♡

イクウウウウ！

イキながらイグ♡イギますう♡」

ビクンツ！ ぶるぶる♡プシャー！

体液を垂れ流すイザイヤは見る陰もないまでに

よがり狂い、俺に夢中になっている……最高だ！

「おおお！ 締まるっ！

俺もそろそろ限界だ！ 中に出すぞ！

受け止めてくれ！

うおおおおお！！」

俺は雄叫びと共に

止めの突きこみを放つと

イザイヤを抑え込んで

その膣内から溢れる勢いで

射精した！

ドピュツドピュー！

ドクンドクン！

「あっ……♡出てる……♡

イツセー君の熱い精液がいっぱい♡

ああ……♡幸せ……♡

気持ち良すぎて、頭おかしくなってるう……♡」

俺は全てを吐き出すと、

チ○ポを引き抜いた。

「ふぁ……♡」

抜かれてもまだ感じてる……♡

おチ○ポ……♡おチ○ポ素敵……♡」

……。

……。

……。

や、やってしまったああ!!

俺は今更ながら自分のやった事を思い出し、  
激しく後悔していた。

だが、もう遅い……。

イザイヤもとい木場はと言うと、  
女体アへ顔のまま気絶している……。

「俺が……こんな事を……」

流石にやりすぎた……!

アーシアに頼んで木場を

回復してもらわないと……!」

俺は急いで着替えると、

アーシアを探しに行く。

しかし、その時訓練所にて

鍛錬に励む小猫ちゃんを発見した。

一心不乱にサンドバッグに

パンチを打ち込んでいるが

一体いつから打ち込んでいるんだ!?

ぴゅっ!とその時俺の頬に

液体がかかった。

汗かと思つたがコレは違う……。

血だ!

「小猫ちゃん!」

俺は思わず叫び出すと

彼女を羽交い締めにした。

「……な、何ですか？」

「幾ら何でもオーバーワーク過ぎだ！

このままだと本当に壊れちゃう！」

「大丈夫です……。私は平気……。」

「そんなわけ無いだろう！」

「いい加減自分を労れ！」

「離してください！」

ブーン！彼女は俺の腕を振り払うと、

そのまま俺に回し蹴りを放つ。だが……。

バシッ！

「ほら見ろ。倍化もしていない

『兵士』の俺一人にも通じない位

弱っているじゃないか！

そんな身体でトレーニングしたって無意味だ！

いいから休め！そしてアジアに診てもらえ！

頼む……！

君が壊れていくところなんて、

俺は見たくはない！」

俺の言葉に少し冷静さを取り戻したのか

小猫ちゃんの動きが止まる。

すると、

彼女はゆつくりと口を開いた。

「……解りました。あう……。」

小猫ちゃんは足を押さえて呻いた。

やはり足も痛めていたのか、

こうしちやいられない！

俺は咄嗟に彼女の肩を

抱き上げると、

そのまま部室へと連れて行った。

「……あの、降ろして下さい」

小猫ちゃんは恥ずかしいのか、

顔を赤く染めている。

「駄目だよ。足を痛めた女の子を

歩かせる訳にはいかないよ。

それにこう見えて俺、力持ちなんだぜ？

だから気にしないでくれよ」

「でも、先輩のお洋服が汚れてしまいます。

私の事なら構わずにいてください」

「そんなこと出来るわけないだろう？

服なんか洗えばいいんだよ。そ

れより今は君の事が心配だ」

「でも……」

「いいからいいから。

後輩は先輩に甘えればいいのか」

「はい……。ありがとうございます」

一連のやり取りの後

小猫ちゃんの部屋に一旦運んだ後、

俺はアーシアを呼ぶと

ソファアーの上に彼女を寝かせた。

アーシアはすぐに

治療に取り掛かる。

「アーシア、お願いできるか？」

「はい。任せてください」

アーシアの手に緑色の光が宿ると、

小猫ちゃんの傷が癒えていく。流石だよな。

「ありがとうございます」。

じゃあ私はトレーニングに

戻ります」

ってオイオイ！

アーシアのパワーアップした

「聖女の微笑み」もとい

「聖母の抱擁」でも

体力までには急に回復できないぞ！

「ダメダメ！今の君はまともに

動けるような状態じゃないよ！」

「私はまだやれるんです！」

「無理だ！今の小猫ちゃんは

ボロボロだ！」

これ以上やったら

確実に取り返しの

つかない事になるぞ！」

「それでも構わないです！」

私が弱いせいで

部長や皆さんに迷惑を

かけたくないんです！

赤龍帝の力を使いこなしている

先輩に、私の気持ちは解らない！」

小猫ちゃんは真剣な眼差しで

俺を見据えた。

どうしてそこまで……？

「解った……じゃあ外に出ようか」

俺はそう言うと、窓へと向かう。

そして、小猫ちゃんに手をかけると、

そのままに放り出した。

「きゃっ!？」

「いきなり何をするんですか？」

イツセーさん!？」

動揺するアーシアの声を

背中で聞きながら、

俺は小猫ちゃんを見る。

彼女は起き上がると、

俺を睨んできた。

……その目からは

強い意志を感じる。

どうやら覚悟を決めたようだな。

「……やるしかないみたいですね。

はあああ！」

小猫ちゃんは気合いを入れると、

全身から殺気が溢れ出し

瞳が金色に染まる。

『戦車』の能力を

発動させたんだろう。

「……行きます」

ダツ！小猫ちゃんが床を蹴ると、

俺の目の前に現れる。だが、遅い！

シュババババ！

ガガガガガガ！

俺は余裕を持って

小猫ちゃんの拳を受け止める。

俺が特別強くなったわけじゃない。

パワーもスピードも

今の疲れ切った小猫ちゃんでは

到底俺には及ばないためだ。

「まだまだアー！」

小猫ちゃんはパンチを放ち続ける。

俺はそれを全て受け流していた。

「くっ……。当たれ！」

当たらない事に苛立ったのか、

今度は蹴り技を繰り出す。

だがその蹴りもやはり

俺には全く通用しなかった。

バシィッ！

俺は小猫ちゃんの脛を膝で受ける！

「あうー！」

小猫ちゃんが痛みで怯む。

俺はそんな彼女に構わず

足払いを仕掛けた。

上体が浮き上がっていた小猫ちゃんは

為す術なく倒れてしまう。

「そんな……どうして!？」

「解らないって感じの顔だな。

なら教えるよ。」

小猫ちゃんが弱くなっているんだ」

「どういう意味ですか？」

「簡単な話さ。」

今の小猫ちゃんの攻撃は、

俺が倍化していない時の攻撃より

遥かに遅かったぜ？それはつまり、

今の君は限界を越えるどころか、

力を半分も引き出せていないという事だ」

「う、嘘です！」

私は確かに全力を出して……」

小猫ちゃんも自覚はあるのか

目が泳いでいた。

「小猫ちゃんは今までずっと、

自分の力を出し切って

戦ってきたのか？

違うだろう？

君の本当の力は

こんなもんじゃないはずだぜ？

じゃなきゃ、なんで俺ごときが

君の攻撃を全部受け止められるか、説明がつかない」

「……………」

「それに小猫ちゃんの

身体を見てみたけど、

さつきまでの

筋肉痛だけじゃなくて、

あちこちにダメージがある。

多分、今までの戦いや過度な

トレーニングの最中で怪我をした

箇所もあるんじゃないかな？

そんな状態でトレーニングしても、

効果は薄いと思うぜ」

アザゼル先生が言っていた事を

そのまま代弁して

俺は小猫ちゃんへ言った。

『新参の俺が何を言っただって

聞きやしねえよ。イツセー。

だがお前さんの言う事なら小猫も

聞くさ。何せ最弱の赤龍帝の

お前はいつも格上とばかり当たってきただろう？

諦めずに這い上がる事にかけては

お前が最強なものな』

最弱はヒドいぜ先生……。

まあ、事実だから

言い返せないけどね！

「……じゃあ私はどうすればいいんですか？

私は強くなりたいのに……。」

小猫ちゃんの目から涙が零れた。

「君の過去を受け入れるんだ。

木場みたいに」

「祐斗先輩のように……？。」

「そう。小猫ちゃんは過去に

何か辛い経験をしてきた。

でも、もうその

記憶に縛られる必要は無い。



君を虐げた連中なんて、

この世にいないんだ。

君はもう自由になつてもいいんだよ」

「私が……」

「おっおっ、

好き勝手いつてくれるにやん」

すると小猫ちゃんの後背から

声がした。

振り向くとそこには、

着崩した和服姿の猫耳美女がいた。

一体誰だ!?

本邸の警備の人達は!?

「にやーは、

黒歌つていう者にやん。

小猫……もとい

よろしくにやん♪

優しい赤龍帝ちゃん♪」

「そう言つて猫耳美女――

黒歌つて人は

俺に手を差し出してくる。

こんなお色気たつぷりの

お姉さんから握手を求められたら

答えないのは無礼も無礼!

俺が握手を返すと、

彼女はニツコリと微笑んだ。

「先輩・姉さんから離れて!」

必死の形相の小猫ちゃん。

だけど、

その表情には焦りが見える。

ははーん。

俺が小猫ちゃんのお姉さんを

毒牙にかけないか心配なんだな？

「小猫ちゃん。大丈夫だよ。

君の姉さんを君から奪う

真似なんてしないからさ」

「違います！ 姉様は……」

黒歌は先輩の力を……！」

『雷峰式・弱憎強贖』

何やら黒歌さんが眩いた途端。

ドクン……ッ!?

な、なんだ？

急に胸が苦しくなったぞ？

俺は思わず膝をつく。

「イツセーさん！」

アーシアが

俺の元へ駆け寄ってくる。

「にやははははは！」

ボールクの言っていた通り

甘ちゃん坊やだにゃ♪

『奴は人も魔も妖も、

聖までもを惹きつける。

最強の赤龍帝になれる

素養はあるがそれが弱点。

人を疑ったり

非情に徹しきる事ができない

だから誰かに裏切られて

結局は負けるのだ』つてにゃ♪」

ドライグの力を封印しながら

黒歌さんが笑った。

『ぬう……女狐が……！』

スマン相棒……意識が……！」

ドライグ!? 大丈夫か！ しっかりしろよ！

「狐じゃなくて猫だにゃ〜。」

「二天龍は勘も頭も悪いのかにゃあ?」

「くっ……。」

「どういうつもりですか?」

「なぜあなたが」

「ここにいるんですか?」

「小猫ちゃんは警戒心を」

「剥ぎ出しにして黒歌さんに訊いた。」

「まあ理由は色々あるけど……」

「本命は白音。お前だにゃん。」

「ネフレンはお前の身体を希望」

「しているみたいだにゃん♪」

「私の身体……?」

「そう。」

「お前、そしてあのムールムール家の令嬢の」

「身体は素晴らしいらしいものにゃん。」

「猫鍾から猫鬼にクラスチェンジした」

「私にはよくわかるにゃん」

「ムールムール家の令嬢っていうのは」

「ルイーナさんの事だろう。」

「でも、私にそんな価値があるとは思えませんけど……」

「だが男の俺には」

「ネフレンの目的が何となく解る。」

「奴は二人にいやらしい意味で」

「自分のモノにしようとしているんだ!」

「ふん。そんなの関係ないにゃん。」

「強い者は弱い者を支配する。」

「強ければ全てを手に入れられるにゃん。」

「所詮この世は弱肉強食。」

「弱い者は何をされても」

「仕方がないにゃん♪ にゃはっ」

間違っている……！

絶対に間違っているよそれは!!

少なくともリアスさんやドライブは

そんな人や奴じゃねえ!

「ふざけんじゃねえ!!」

俺は立ち上がると同時に

黒歌さんへ殴りかかる。

が、パシッ!

「にゃん♪」

あっさり受け止められた!?

やはり倍化を使っていないからか?

ならっ!

『BOOST!』

倍化させた一撃ならばと

腰を深く落としたその時……!

「イツセーさん!」

ドクン……ッ!

「ぐはあっ!」

またしても胸が苦しい……!

一体なんなんだこれは?

「にゃははははは!」

さっきの『雷峰式・弱憎強贖』は

お前の赤龍帝の力と意識を封じるための技なのにや。

その状態で戦うなら、今のお前は右腕と心臓以外は

ただの雑魚にや。にゃははははは!」

俺を見下すように

嘲笑する黒歌さん。

ク、クソッ……!

赤龍帝の力さえ使えれば……。

「イツセーさん……」

「イツセー……」

アーシアと小猫ちゃんが

心配そうな眼差しで俺を見る。

そうだ。

こんな所で諦めちゃダメだ。

例えドライグの力が封じられて

いても

『諦めずに這い上がる事にかけては

お前が最強だものな』って

アザゼル先生も太鼓判を

押してくれただろ！

ここで立ち上がれなきや

俺は本当にただの役立たずになる。

それこそ安里みたいに

足掻いて、歯を食いしばって踏ん張るんだ！

九頭竜安里。

俺の親友であり、ライバル。

そして憧れの存在。

奴みたいに強く、

カッコよくなりたい。

その為には、何があっても折れない心が必要だ。

だから、

「うおおおおお——ツ!!!」

シャキーン！

その時、ミカエルさんから

預かった剣が俺の籠手から

現れ、鞘から抜けた。

まるで自分を使い、

と言っているかのように。

「……先輩！」

小猫ちゃんは驚きながらも

嬉しそうだった。

俺は黄金色に輝く剣を握る。

見かけに対してまるで稲穂のように軽い。

これならいける！

「にははははー。」

どうやらその剣はお前を主と認めたまいたいだにや。

なら私はお前とは正面きつては

戦わないにやん♪ 美猴！

黒歌さんが呼ぶなり

この間の猿の妖怪が姿を現す。

「なあ、黒歌。

別にオイラはお前の使い魔って

ワケじゃねえんだぜい？」

と、軽口を叩くが

準備万端といった感じだ。

だが、逃げるワケにはいかない！

俺は改めて美猴を前に

黄金の剣を構えた！ いくぞ！

## ※第52話（安里×ミツテルト）

イツセーSide

どうも！兵藤一誠です！

今俺は黒歌さんと美猴とかいう

猿の妖怪と向かい合っています！

「んー……その剣からは

光と闇、両方の力をひしひしと

感じるにや〜……」

黒歌さんは興味深そうに

黄金の剣を見ていた。

確かにミカエルさんに

喧嘩を売った旧大天使の奴等は

ミカエルさんを墮天使扱いしていたけど

闇の力ってどういうこと？

「おいおい赤龍帝よお。

何言ってるのかわかんねーって

顔してやがるぜい」

美猴は俺の顔を見て

ニヤリと笑う。

くっ……何も言い返せない

自分が憎いッ!!

「その剣は嘗て魔王ルシファーを切った剣。

要はソイツは天使にも魔王にも

ダメージを与えられる聖魔剣って

事なんだぜい？」

なるほど！そういうことか！

そんなチート武器をポンと

預けるなんて……！

俺、この戦いが終わったら

ミカエルさんに手紙を書こう。

ありがとうございます！

大事にします！

ってノンキしてる場合じゃない！

「なんで俺っちが

ペラペラ剣の解説をしたと思う？」

「な、なぜって……知識マウント？」

「ま、それもあるが……」

いつの間にか周りが異空間に

変わっていた！時間を稼がれたのか？

これはあの司馬懿の使っていた陣略・

うんたらかんたらって

ヤツの一種か!?

だとしたら後ろのアーシアと

小猫ちゃん達を巻き込んじゃうぞ！

バツと目を向けるが二人に変化はなかった。

「安心しろよい。」

このフィールドには遮断結界みたいなモンで

中で何が起きても外に被害はないんだぜい！」

「お……お前、いいヤツなのか？」

こんな状況なのに思わず

感心してしまったが

美猴は目をパチクリさせると

豪快に笑いだした。

「カツハハハ！ボールクが

言っていた通りだぜい！

『ズレているが気持ちのいいヤツ』ってのは

的確な人物評だなあ赤龍帝！」

いや、だけどいいヤツが

『禍の団』なんて

テロリストなんてやるか？

事情があるのか……？



や、やりづらいなあ……!!

「さて、そろそろ始めるか。

出来ればお前さんとは

フェアな条件でやりたかったが……

それはこつちの都合でしかないんでねい」

美猴は気合いを入れるように

両拳をぶつけると如意棒を出して

構えをとった。

「行くぜい!!」

瞬間、美猴の姿がブレた!

速いッ!!コカビエル以上だ!

「チィッ!」

俺は舌打ちと共に

咄嗟に黄金の剣を構えて

美猴の如意棒の先端を受けた!

重いが……弾ける!

ガキン!今度はゼノヴィアの剣技の様に

受け流しからの反撃を試みるが

美猴はそれを見越していたようで

後ろに下がって回避する。

「カツカツカー!やるじゃねえかあ!

だがまだまだいくぜい!」

再び高速移動!しかも、棒を使って

黒歌さんが展開した領域内を

猿の様に四方八方飛び回る!

「ぐうっ!?!」

なんとかついていけるが

ギリギリの状態だ!

ドライグの力を封じられている今、

一撃でもまともに食らえば

戦闘不能になっちまうだろう。

「ハイイイツー！」

ドガツ!!

一瞬、視界から消えたと思ったら  
強烈な衝撃が腹部を襲った！

これは噂に名高い

如意棒での伸縮自在の

突きか！くっ、吐き気が……！

「俺たちの『肢幻』は

残像の目眩ましだけじゃねえ！

応用する事で俺たちは残像からも

お前を攻撃できるんだぜい！」

遠く的美猴が叫ぶと同時に

頭上から気配を感じた！

上を見ると、そこには空中に立つ美猴がいた！

「もらったぜい！」

「させるかっ！」

ガキーン！

美麗の攻撃を防ぐ為に

真上に黄金の剣を振るった！

シュバアツ！

すると黄金の剣撃が放たれ

美猴に襲いかかる！

だが奴は空中で軌道をぐにやりと

変えて避けやがった！

「おいおい、そんな隠し玉を持つてるなんて

聞いてないぜい？」

美麗は何だか嬉しそうに言う

そのまま地面に着地した。

仕切り直して所か……？

しかし、ここが黒歌さんの

展開した術式空間であると  
考えると、迂闊には動けない……。  
けど大丈夫だ！

外にはリアスさんもアザゼル先生も  
安里だっている！

俺の仲間達は皆強い！

それに……

「イツセーさん、信じていますわ……」

「先輩……」

アーシアと小猫ちゃんはそう言ってくれた！  
俺を信頼してくれている！

ならば俺はその期待に応えよう！

今の俺では美猴には勝てない！

なら負けなければいい！

俺がここで倒れる訳にはいかないんだ！

俺は再び黄金の剣を中段に構えた。

↓

安里Side

「安里サマー……いるっすか？」

「ああ……」

しまった、つい気のない返事を  
しちゃった。

ここは俺用の客室で

ただ広いベッドを持って余していた。

「お疲れみたいっすね。

まあ、仕方がないと思うっすよ。

なんせ、あのグラシヤラボラス家と

一戦交えた後なんすから」

ミッテルトはどうぞ、とも

言っていない内に勝手に

部屋に入ると

ベッドに腰を下ろした。

その姿はいつものゴスロリドレスではなく、白いYシャツに黒いミニスカートというラフな格好だ。

「……何の用だ？」

俺は視線を向けずにぶつきらぼうに聞く。

「女が男の部屋に入ってくる

理由なんて一つしかないじゃないツスカ♡

イケズツスねえ♡」

ミツテルトが甘い声で

猫の様にすり寄ってくる。

「……………」

「……あはは、

無言は辛いつスよ〜」

俺が無視していると

ミツテルトは困り顔を浮かべていた。

別に怒っているワケじゃない。

迷っているんだ。

「……何かあつたんすか？」

さっきのパーティーの後、

ずっと考え事をしてた様ツスけど」

「……………」

「アタシに話せない事だったら

それでも構わないツス。

ただ、溜め込むより吐き出した方が楽になる事もあるツス。

まあ、アタシが聞き役になれるかは分からないツスけどね☆」

パチリ、とウインクする

ミツテルト。

……コイツは本当に俺をよく見ている。

「……俺、恋をしたかもしれん」

「へ〜!?安里サマがあ!?!」

「……うるさい。」

耳元で叫ぶなよ……」

「あ、ゴメンっス」

素直に謝るミツテルト。

コイツは

感情表現豊かなんだよな……。

俺は小さく息を吐いて続ける。

ルイーナさん、いやルイーナと

話していた時に

穏やかな気持ちになる。

今までこんな気持ちになった事はなかった。

だから俺は戸惑っていたんだ。

これが、恋なのか？

「安里サマ、その相手って誰っスか!?!」

やっぱりあの

姫島朱乃とかいう墮天使のハーフっスか?」

「違う、もつと別の人だ……」

「ええっ!それじゃ一体……」

もしかして、搭城小猫っていう、

ちんちくりんな小娘っスか?

ロリコンならウチにもワンチャンあるでっスねえ!」

「お前は何を言っているんだ……」

「冗談っスよ〜!」

そんなマジレスしないでくださいっス!

でも、そうなる後は

リアス・グレモリー

ぐらいしか思いつかないっスねえ。

あ、でも、それはないか!

だってあの女は、イツセーのコレっスから！  
ねっ！安里サマっ！うふっ♪」

ミツテルトはそう言っつて小指を  
立てた。お前なあ……。

「あるいは社内恋愛？」

そろそろ教えて下さいっス！誰なんスか！

まさか……兵藤一誠……なんて言いませんよね？」

ミツテルトは

目を輝かせて聞いてくる。

俺はそんな彼女に

苦笑しながら答えた。

「残念ながら、

そのどちらでもない。

俺が好きになったのは――

ルイーナだ」

「……へえ、それで？」

「それだけだ」

「……はい？」

目を丸くするミツテルトに構わず

俺は話を続けた。

「ああ、俺はルイーナに恋をしている。

だけど、アイツは俺にとって遠い存在なんだ。

俺はただの一般人で、彼女は悪魔の貴族の令嬢。

俺なんか相手にはされる訳がない。

それに、俺はもう二度と……

あんな悲劇を繰り返さない為に

戦うと決めたんだ。

俺は……自分の為に戦わない。

俺は誰かの為に戦いたいんだ……」

「安里サマ……」

俺の言葉を聞いてミツテルトは神妙な顔をしていた。

そして……

「バカっスね、アンタ。

ホントにバカっスよ」

そう言つて、ミッテルトは俺を優しく抱きしめた。

「み、ミッテルト？」

「えへへ……♡」

ミッテルトはそのまま俺の胸に頭を預けた。

「アタシ、安里サマのそういう所、好きっスよ。

自分を偽つてでも、真っ直ぐに生きようとしてる。

その姿勢は凄くカッコいいっス」

「ミッテルト……」

違う、そうじゃない。

また奴等が囁き出す。

『お前の力は偽り。』

お前の存在もまた偽り』

黙れ、黙つてくれ。

「でも……正しさだけを求めるのは少し寂しいっス。

今だけは……アタシの事だけを考えて欲しいっス。

それが例え、間違つた道であつても」

ミッテルトは俺の背中に回した腕に力を込めた。

その体は微かに震えている。

「ミッテルト……」

「あはは……、ちよつとクサかつたっスかね。

まあ、何が言いたかつたかと言うと

ウチは安里サマのモノつて事っス。

もし、誰かに欲情する事に

罪悪感があるなら、

アタシがこうしてあげるっスよ」

ミッテルトはそのままベッドに横たわると、

俺の腕を引っ張つた。

「ほら、安里サマ。早く来てくださいっス」

「ミッテルト……」

『その女の存在は偽り。』

お前の空虚が生み出す残響』

『お前が愛しているのは

お前を称賛するものだけだ。

お前の愛は有償で穢れている。

そんなお前が得られるものは

砂漠の蜃気楼。

自分に都合のいい幻想だ』

やめてくれ、頼むから。

嫌だ…嫌だ…！

俺は…俺は…！！

「安里サマ？どうしたんスか？

大丈夫っスよ。

ウチに任せておけば、すぐに気持ちよくなるっス！」

ミッテルトは俺の服を脱がすと、

そのまま俺の下半身へと手を伸ばした。

『お前は何一つ守れない』

『全てを失うまで止まらない』

『何故なら、お前は——白』

「ミッテルト……！！」

俺は絶る様に彼女の名を呼んだ。

「えっ……っ？」

突然の事に驚くミッテルト。

俺は彼女を引き寄せると、

その唇を塞いだ。

「えっと……安里サマ？」

ど、どうかしたんスか？」

ミッテルトは戸惑いながらも、

嬉しそうな表情を浮かべていた。

俺はそんな彼女に言った。



「ミツテルト、俺を愛してくれ……！」

「えっ!？」

「あんな話をしておいて、

説得力はないのは解る!

でも、それでもお前は俺のものだ!

誰にも渡さない!だから、お前も俺のものになれ!

お前も俺を……愛してくれ!

俺もお前を愛するから!お前も俺にお前自身をくれ!

俺も……!俺は……!」

「安里サマ……」

ミツテルトは纏まりのない

狂人じみた俺の言葉を聞くと、

涙を一筋流した後、満面の笑みを浮かべた。

「ウチは……幸せ者っスね。

こんなにも想われて……。

そんな事を言われたら、

断れる訳ないじゃないっスか……。

本当にズルい人……。

そんなこと言われたら、

もつと好きになるしかないじゃないっスか……。

いいっスよ、全部あげます。

ウチの体も心も何もかも、

改めて貴方に捧げましょう。

だって、ウチはもう……

貴方なしでは生きていけないっス。

ねえ、お願いします。

ウチを……

安里サマだけのモノに……♡」

ミツテルトはそう言うと、

俺のズボンに手をかけた。

そして……

俺達は、互いの全てをさらけ出していく。  
ミッテルトの体が震えている。  
俺の心臓が早鐘の様に脈打つ。  
ミッテルトの息遣いが荒くなる。  
何度もミッテルトを犯した  
経験はあつた筈なのに……。  
初めて彼女を抱いた時の様な緊張を覚える。  
ミッテルトは俺の股間に顔を埋めると、  
優しくそれを口に含んだ。

「ああ……♡」

ミッテルトの口の中は熱く、  
そして柔らかい。

ミッテルトはそのまま俺のペニスを舐める。  
その舌使いはとて巧みで  
思わず目を閉じてしまった。

「うっ……くっ……」

「ふっ……、可愛いっス。

感じてるんスカ？」

そう言つて、ミッテルトは上目遣いで  
微笑みつつ自分の顔を上下に動かし始めた。

「はむっ……ちゅっ……んっ……れろっ……」

「ぐっ……あっ……」

ミッテルトは更に強く吸い付く。  
まるで搾り取るかのように。

ミッテルトの唾液と俺の先走りが混じり合い、  
ぶちゅ、ぶちゅ、と

いやらしい音が部屋に響く。

それは腐つた俺の精神がグズグズに  
益々腐敗していく様を示すガスの音の様でも  
あつた。

「あ、安里サマ……、凄いいっス。

どんどん硬くなって……ビクビクって震えて……、  
はあ……はあ……、

ウチも我慢できなくなってきたっスよお……♡」

ミッテルトは毒気に当てられたかのように

蕩けた表情を浮かべながら、

自身の股の間に手を入れ、

下着越しに秘所をなぞっていた。

「んっ……、はあ……んう……」

その瞳にはハートマークが浮かんでいる。

すぐにでも犯して……いや

愛してほしそうなのに俺への

奉仕フェラを止める事はなく、

むしろ激しくなっていく。

「うぐ……ミッテルト……」

そろそろ……！」

俺は震えるチ○ポを抑えきれずに

訴えるとミッテルトは一度口から離すと

今度は手でしごき始める。

「安里サマのコレ……すっごく大きいっスね……」

それにすごく熱い……」

これがウチの中に入るなんて……想像しただけで……、濡れてき

ちやっただっスよ……♡」

「ミッテルト……入れる前に……」

一度……」

俺は情けない声を上げてしまう。

だがミッテルトはそれを聞いて嬉しそうに

笑みを浮かべると、俺の股間の上に跨ってきた。

「フフ、いいんスよ。」

ウチを都合のいい女として使ってくださいっス。

貴方の為なら何でもするっスから……」

だから……早く……ウチの中に来てっス♡」



「安里サマ……」

勿論死にたいわけじゃない。

これも所詮コイツの精神を

操っているという汚い俺の計算の

上に立っているかもしれない。

だけど、こうでもしないと

俺はこの世界で生きられない。

呪縛が解けたミツテルトが

俺を殺してもそれはそれで

仕方がないからな……。

俺の言葉を聞いたミツテルトが泣き笑いのような

表情を浮かべた。

「本当にズルいっスよ……。」

そんな事を言われたら……ますます好きになるしかないじゃ無

いっスか……。

じゃあ、ウチの今の姿を

見て欲しいッスよ……。」

するとミツテルトの姿が

変じていく。

髪は変わらないが肉つきは成熟した女性のモノになり、堕天使のも

のとは違う悪魔の様な尻尾も生えた。

そして肌の色もエキゾチックな肌色へと変わる。

「ど、どうッスかね……。」

これも人工神器の『禁手化』による

賜物らしいんスけど……。」

「ああ……。」

口より先に俺のモノの方が彼女に

応えていた。

ミツテルトの肉体以上に

膾内をみちみちに

埋め尽くしているそれが

はつきり物語っていた。

「あぁっ……！安里サマのおっきいので  
ウチの中いっぱいになってるっスよお……♡」

ミッテルトは艶めいた声を上げると、  
うつとりした表情を浮かべながら

俺の首から手を離し、自分の下腹部を撫でた。

ミッテルトの顔は紅潮しており、

息遣いは荒く、その瞳は潤んでいた。

「俺の首はいいのか……」

「後でもいいスよ……♡」

もう……我慢できないっス……！」

ミッテルトはそう言う俺に抱きつき

俺にキスをしながらずん、ずんと腰を動かし始めた。

「んちゅ……、れろお……、むう……」

ミッテルトの舌使いはとて巧みで、

まるで脳まで溶かすかのような甘美さだった。

それにすっかり捻った奴の胸が

押し当てられると、

その柔らかさに頭がクラクラしてくる……。

「安里サマぁ……♡」

そしてミッテルトの瞳には

俺しか映っていない……。

どんな姿のウチでも愛してくれると

言った事からこの姿に嘘はない筈。

ない筈なんだ……。

『虚ろなる石には

相応しい愛妾か。

虚無を内包しながら永遠の愛を嘯くとは

走狗にすら劣る畜生よ』

不意に頭の中に奴等の声が響く。

クソ……こんな時に……。

「おい、ミッテルト……！」

「はい……♡」

「愛しているぞ……」

「ウチもっスよ……♡」

ミッテルトは嬉しそうに笑うと

俺と唇を重ね合わせた。

「なあ、ミッテルト……」

俺から離れるなよ……？」

「はい……♡ずつと一緒っス……！」

ミッテルトは幸せそうな笑みを浮かべると

俺にしがみついた。

俺も咄嗟にミッテルトの身体を抱きしめる。

「安里サマ……大好き……」

好き……！あつ……、ああ……！！」

ミッテルトは俺にぎゅつとしがみつくと体を震わせた。

ミッテルトの胎内が激しく収縮するのがはつきり解る。

「ミッテルト……掴まえていろよ」

「ふあ……♡でもお、それじゃ

動いてあげられないっス……♡」

「いいんだよ……」

お前をもつと感じたいんだ……」

「嬉しい……♡」

ミッテルトが微笑んでくれたのが嬉しくて、

俺はミッテルトの尻に手を回してしっかりと固定する。

「あ……♡安里サマ……、これだと……」

ああ……！ダメえ……、イク……、イツちやうっス……！！ひやう

んっ……、んんっ……！！」

ミッテルトの体が跳ね上がり、

絶頂を迎える。

「ああ、いしぞ……」

今度は俺が動くからな……」

「安里サマ……、安里サマあ……♡」

ミッテルトが俺の名を呼びながら俺を大蛇の様に締め付ける。

俺はミッテルトの体に腕を回すと、激しく突き上げた。

「あんっ！ああ……、気持ちいいッス……」

安里様……、ウチ、またイキそうッス……！」

「そうか……。じゃあ一緒にいこうぜ……」

「はいっス……♡」

ミッテルトは夢中で俺にキスをする。

俺もそれに応えた。

そして……。

「ああ……、ウチ、ウチ、もう……、

イク、イクウツ……!!!」

どぶぶぶぶぶ♡どっちゆう♡♡♡

ミッテルトの体が大きく震えた。

ミッテルトの子宮が精液を求めて吸い付いてくる。

その刺激が堪らなく心地よくて、膣内に

まるでサイフォンのコーヒーが逆流する時の様に

たっぷりと射精した。

「はあ……はあ……」

「ああ……、出てるっス……♡

ウチの中で安里サマの子種がいっぱい……♡」

ミッテルトは陶醉しきった

表情を浮かべながらしがみついていた。

そんな仕草が可愛くて、

俺はまだ繋がったままの状態

何度も口づけを交わし、

それからしばらくの間、

俺達は互いの存在とぬくもりを

確かめるように抱き合っていた。

「ねえ、ウチのこと好きっスか？」



「好きだよ」

「本当に？」

「本当に」

「えへへ……♡」

ミツテルトは嬉しそうに笑うと、俺にしなだれかかってきた。

「じゃあ、もう一回しよっか……♡」

言葉使いすら変わっていたが、

それはそれで可愛いのでよしとしよう。

俺もまだまだ足りないしな。

「ああ……」

俺は再びミツテルトの体を擦り出すと

豊満で敏感な身体は

恥じらいなく俺の上で

震えだしていた。

「はあ……♡」

と嬌声を漏らすミツテルトは今や

悍ましさと美しさを

内包した魔性の女へと変貌した

墮天使なんだな……と俺は実感した……その時だ。

……!?

何か助けを求めている

イツセーの声が

聞こえた気がした。

気になって辺りを見渡すが、特に変わった様子はない。

「どうしたんスか？安里サマ……」

「すまん……。こんな事を

したばかりで悪いが……」

イツセーを探さないと……」

俺が着替えるとミツテルトも慌てて服を纏う。

「待って下さいッス！」

「ウチも行くツス！」

ミッテルトも急いで戦闘服を着ると  
俺に駆け寄ってきたが……。

「そのカツコは……？」

「う、ウチも恥ずかしいんスけど

アザゼル様はこれしか無いって

……。

あ、あの、似合うっすか……？」

ミッテルトは少し頬を赤らめながら  
もじもじとしている。

レイナーレと同じひどく

肌の露出したボンテージ姿だった。

「ああ、凄く綺麗だよ」

「本当っすか！嬉しい……！」

ミッテルトは嬉しそうにはしやぐと  
俺の腕に絡みついた。

むにゅん♡とレイナーレ以上の

胸が当たるのが何だか妙に

気恥ずかしくもあったが

それどころじゃない！

「行こう……ミッテルト」

「はいッス……♡」

俺達は急いで外に出ると、

イツセーの声が聞こえてきた方へと

向かうや、

真黒い闇が窓の外に見えた。

何だアレは？

明らかに別の空間に繋がっている様な……。

シユタークさんが見当たらない

以上一刻を争う今、

俺がぶち破って乱入するしかない！

「ミッテルト！しっかりと掴まっているよ！」

「はいっす……い！」

俺はミッテルトを片手に抱えて窓から飛び出すと

【六合太極】を

発動させて空間の壁をぶち破った！

待っているよ！イツセー！

ー

イツセーSide

「いい加減しつこいにや〜……」

ドヒユウウン！

ドガツ!!バキイツ!!

黒猫さんの呪術弾と美猴の

連携攻撃が炸裂し、俺は

またしても吹っ飛ばされる！

ベキベキ！ボキツ!!

恐らく右腕以外の

いくつかの骨が折れた音が響く。

そしてそのまま俺は地面に叩きつけられた。

「グハッ！」

「ふん……。これで完全に

ダウンだにや。

私の呪術で心もバキボキに

へし折ってやるにや！

私達を見ただけで失禁して

泣きわめきながら逃げ出す位ににやあ！」

黒歌さんが般若の様な形相で

俺に仙術と妖術、呪術を

ミックスしたオリジナル魔術を発動させる……!

半透明の蒼く燃え盛る

死霊が俺に迫ってくる……!

俺はそれを見据えながら、構えを取った。

「さて、いくにや……！」

煉獄より来たれ、亡者の怨念よ！

この世の理を歪め、彼の者に永遠の呪いを！

【雷峰式・死屍尽誅】!!」

ゴオオオオオツ!!!

俺に迫り来る幾つの死霊が轟音と共に俺に  
入り込む。

『ううー……いたい……くるしい』

『幾ら祈っても神様は助けて

くれなかった……!! 憎い……!!

アイツが憎い……!!』

『どうして……どうして私が

魔女だなんて……!?!』

『呪ってやる……!!』

お前も地獄の底で私達と

同じ思いを味わうのよ……!!』

「な、なんだこれは!?!」

俺の中に流れ込んでくるのは無数の魂の声だった。

それは全て……、

無実の罪で魔女に貶められた子達の

失意と呪怨の叫びだった。

それはまるで人々に利用されて

無念の内に死んだ赤龍帝の無念と

重なる様だ……。

「ぐわああああ!!」

黄金の剣も冤罪の人の怨念を

切ることは出来ない……!!

まるで体内から燻され、

引き裂かれる様な激痛が襲う!!

だが、俺は負けない……!!

いや、違う……!!

ゼウス様が言っていただろ！

『比較して優劣を決めるなんて

言語道断じゃ！』って……！！

聖女だ、魔女だって比較して比べるものじゃ無い！

誰も彼女達の怒りや悲しみに

目を向けて来なかったなら……！！

俺がその怒りも苦しみも全て受け止めてみせる！

「イツセーさん！

すぐに回復を！」

「あつはははは！無駄にや♪

神の奇跡なんて使おうものなら

恨みが増幅するばかりじゃなくて

お前にも飛び火するにやー♪

キレイ事を言った所で

誰だって

自分が一番かわいいにや♪

お前だってそうだろ？

アーシア・アルジエント？」

黒歌さんは口調を変え邪悪な笑みを浮かべると、

更に呪術を追加した。

うわあああ……！！

熱い……苦しい……痛い……！！

死んだほうがマシだって

思える位の痛みと熱さが俺の全身を襲う……！！

「やめて……！！

やめてください姉さん……

どうしてこんなひどい事を……」

小猫ちゃんが顔を覆い、

涙を流し黒歌さんに訴える。

すると黒歌さんは冷たく笑う。

骨まで凍るような吹雪を思わせる  
蒼白な笑いだった……。

「はっ！私ほね、散々酷い目に  
あわされてきたんだ……！」

家畜、いや玩具扱いされて！

これはその復讐にや！

アーシア、

あんたの優しさは私には毒にや！あんたみたいな偽善者は見てい  
るだけで虫酸が走るにや！」

「そ、そんな……！」

「そして白音。

お前は私の最愛の妹……。

皆に愛されて、素晴らしい主に

仕えて、先輩や仲間にも恵まれて……。

だから、お前も私と同じにしてやるにやあ！

このクソつたれの世の中じゃ

誰も幸せになる権利なんか無いって

皆に教えてやる!!」

そう吠える黒歌さんは鬼だ……！！

今の黒歌さんはまさに猫『鬼』だ……！！

俺はもう限界寸前で意識が遠のきそうになる。

でも、ここで倒れたら駄目だ！

俺は……！！俺は……！！

黒歌さん達を倒したいんじゃない……！！

救いたいんだ！

※第53話（イツセー×エルシャ モブ ※エルシャ  
とは本番なし）

「そして白音。

お前は私の最愛の妹……。

皆に愛されて、素晴らしい主に

仕えて、先輩や仲間に使われて……。

だから、お前も私と同じにしてやるにやあ！

このクソつたれの世の中じゃ

誰も幸せになる権利なんか無いって

皆に教えてやるにやあ!!」

鬼だ……！

今の黒歌さんはまさに猫『鬼』だ……！

俺はもう限界寸前で意識が遠のきそうになる。

でも、ここで倒れたら駄目だ！

俺は……！ 俺は……！

黒歌さん達を倒したいんじゃない……！

救いたいんだ！ だから……！

俺はまだ諦めない!!

そう思つて必死に耐えていた時だった。

「おいおい……、ふざけんなよう？」

誰が誰を不幸にするって？」

パキイイイン！

黒歌さんが作つたこの遮断空間に

ヒビが入り、ガラスの様に

上空の一部が割れた！

この声は安里……！

来てくれたのか！

その瞬間、空が割れると同時に黒い羽が舞った。

そして、そこから現れたのは——

安里と、ミツテルトだ……！

けど、ミツテルトの姿は

いつもと違うぞ……？

ゴスロリじゃなくて

アイツみたいなボンテージ姿だし、

ボン♡キュツ♡ボン♡の

ナイスバディになってるう!?

なんか肌まで褐色になってエロい感じに

様変わりしているし、

それに、手に持つてるのは……鞭か!?

あれって、どう見てもSMプレイ用のアレだよな？

まさか、ミツテルトは安里から

調教されちまったのか？

………マジですか？

あの安里がミツテルトを調教したとか、

想像できないんですけど……

俺が呆然としながら二人を見ていると、

「お待たせッス！」

安里サマのパートナー、

ミツテルトあざまる推参☆」

「悪いな、遅くなった！」

ミツテルト、イツセーの回復を！」

「かしこまりー！」

なんか口調までギャルっぽくなってるう!?

俺がそんな風に驚いている間に、

ミツテルトが鞭を振るうと、

緑色の光が俺に降り注ぐ。

すると、さっきまでの激痛が

大分抑えられた。

だが怨霊を退けるんじゃダメだ……

彼女達の痛みや哀しみを……心を癒さないと！



その為にはまず――

「安里、頼む……！」

「おうよ！」

お前をあゝの猿と黒歌から

庇えばいいんだな！ 任せとけ！」

俺の言葉を聞いた安里は、

ニヤリと笑って俺を庇う様に前に躍り出た。

「猿呼ばわりとはイラつく

野郎なんだぜい！」

向こうも黒歌さんを庇う様に

美猴が立ち塞がる。

そして黒歌さんはミツテルトが

引き受けてくれる様だ。

これなら精神世界にダイブする

時間が取れる。後は頼んだぞ、皆……！」

俺は意識を集中して、自分の心の中に飛び込んだ！

↓

そして精神世界では

火炙りにされた炎の中で

怨霊と化した魔女とされた人達が

苦しみの中で死んでいった。

そしてその亡骸は燃え尽きて灰になり、

それが怨念となって更に苦しめた者達へと

呪いをかけていった……。

「私は……ただ普通に生きてたかっただけなのに……」

「私達は悪くないわ……何もしていないのよ？」

「何で私がこんな目に遭わなければならぬの？」

ねえ……誰か教えてよお！」

「どうして……どうして……！」

あんな奴らの為に死ななきゃいけないの!？」

怨霊達が口々に嘆きの声を上げる。

彼女等は理不尽な運命によって命を奪われたのだ。  
だから……！

「キミたちを苦しめた奴等は  
もういないんだ！」

過去にとらわれるのはやめにしなきや！」

俺は叫びながら彼女達に近づき、

その魂に触れようと手を伸ばした！

………が、俺の腕は

危うく彼女達の恨みの炎によつて

焼かれそうになった。

な、何でだ!?

「許せない……！ 許せない！」

「私達を苦しめた奴等が

幸せのまままで天に召されたなんて……！」

「憎い……！ 憎い!! 奴等の

子孫も……幸せな奴等は皆呪つてやる!!」

俺は彼女達の怒りを理解していた。

彼女等の怒りは当然だ……！」

自分達が受けた仕打ちを

忘れる事など出来ないだろう。

晴らすべき相手もないなら

尚更だ！ けど、それでも……！」

俺がそう思った時だった――。

「貴方は私達とは

違う赤龍帝でしょう？」

私達がしてきたような

憐れみや裁きでは彼女達の魂は

決して救われることはないわ」

……っ!?

振り向いた先にはばるるんっ♡と

金色に輝く様な二つの丘が……!?

って、どちら様ですか!?

見目麗しい胸元の開いた青紫のドレスを着た  
金髪ロン毛の絶世の美女がそこに立っていた。

俺の精神世界にいるんだから

多分俺の心象風景の具現化した人なんだろうか?

俺が首を傾げていると、

彼女は微笑みながら言った。

「はじめまして。私はエルシャ。」

貴方より大分前の赤龍帝よ」

「そ……そうですか……」

「貴方の活躍は今までずっと

見てきたけど貴方の様な赤龍帝は

初めてだわ」

凄くお色気たっぷり髪をかきあげると

ゆさつ♡とおっぱいがたわんだ!

むふふ目の保養。

って違う違う!

「え? 俺みたいなの……? どういう意味です?」

「それはね、ドライブがあなたを

『おっぱいドラゴン』と呼ぶ位なもの、

本当に面白い子ね? しかもおっぱいへの欲望を

具現化分身にさせてしまうなんて……。

フフ、あの時は思わず笑っちゃったわ」

「す、すいません……」

「いいのいいの。」

それが貴方なのだから。

それよりも上辺だけの慈しみでは彼女達は救えない。

それどころか余計に傷つける事になる」

「……はい」

確かに俺のやっている事は

表面上の事しか見えていない。

俺のやろうとしているのは  
ただの偽善に過ぎない。

そうだ、だからこそ……！

今こそ俺のやるべき事が分かる！

俺が拳を握り締めると、

エルシャさんがクスツと笑い手を取った。

「行きなさい。」

彼女達を救う為に……！」

その言葉と共に、

俺は燃え盛る死霊と化した彼女達の胸元を見る。

彼女達は生きていた頃の憎しみに囚われている……。

そして、ここは

俺の精神世界……！ ならば！

しゅわああああ……

艶やかなピンクのオーラが

彼女達に降り注ぐ……！

すると――

「あ、あれ……？？」

「一体どうしちゃったのかしら？」

「何だかとても気分が良いの！」

「それに凄く体が軽い……！」

彼女達が戸惑うのも無理はない。

ドライブだけじゃない、

俺の力でも怨霊となった彼女達の魂に

働きかける事が出来る！

そして俺は更に力を籠めて彼女達に語りかけた。

「キミたちは怨霊なんかじゃない！

だって……こんなにも温かいじゃないか……！」

「「「あっ……」」」

そう、彼女達は魔女に貶められる前の

生前の姿に戻っていたのだ。

生まれたままの姿で大中小、  
様々なおっぱいが露わになっている。

そして彼女達は穏やかな表情で涙を流す……。

彼女達に哀しみの涙なんて

似合わない！ だから！

『パインサージエント！』

俺の欲望より生まれた分身だが

今は本能のままに暴れる獣じゃない！

皆の願いに応えるヒーローだ！

むにゅ♡むにゅ♡

「ああん♡

マリアのおっぱいがあ♡」

むぎゅ——っ！

「くうん♡セレナのおっぱいいじめないでえ♡

ホントに魔女になっちゃう♡」

くりっ♡くりくり♡

「はああ♡美波の乳首、

赤龍帝にコリコリされてるう♡」

くちゅくちゅ♡くちゅう♡

「ふうん♡そ、そこは

ダメえ♡サシヤのアソコ、いやらしい音

出ちやうかりやあ♡♡♡」

分身達は彼女達のおっぱいや

あそこを優しく愛でていく。

彼女達は抵抗する様子もなく、

むしろ自ら進んで

その身を委ねていた。

俺は続けてパイリンガルを

発動させて彼女達の本心を

覗いて言った。

「キミたちの本当の望みは何だい？」

(私は……王子様に抱かれてみたい♡恋も愛も知らないで天国に行くのは寂しい……♡)

(僕はお姫様になってみたいな……絵本の中だけだと思ってたけど……)

(あたし、本当はずっと誰かに甘えてみたかったの……♡)

(私は、好きな人になら虐められてもいいかも……♡)

彼女達の切実な想いを知り、

分身達はそれぞれ彼女達の

望みを叶えるべく愛撫を始めた。

俺は彼女達を安心させるように微笑んで言った。

「もう大丈夫だよ。」

俺が君たちを幸せにしてあげるから……！」

「は、はい……お願いします……♡♡♡」

こうして俺の分身達による

ハーレムプレイが始まった。

「マリア……俺の最愛のマリア……」

「んん……ちゅぷ……れろれろ……」

「はあ……ん……じゅるる……」

ぺちよ……

美味しい……もつと頂戴……♡

あはあ……好き♡

キスするの大好き……♡

ゾクゾクするう……♡」

マリアは俺の分身と

ディープなペロチューを楽しんでいた。

俺の分身は彼女の巨乳を揉みながら

舌を絡め合う……！

そして、もう一人の俺は

セレナちゃんに後ろから抱きつき、

彼女の爆発的おっぱいを鷲掴みしながら、

その先端に吸い付いている。

「ふふ、セレナは可愛いね……」

俺だけのお姫様……。

ほら、自分でもおっぱいを吸ってごらん？」

ぐいいつとまさにスイカップに

相応しいもう片方の

おっぱいを競上げながら

俺の分身がセレナちゃんを誘導する。

彼女は赤面しながらも

初めての経験に期待の色を

浮かべながら自分の乳首に

舌を這わせていった……。

「は、はい……こうかな……？」

ちゅう……ぴちや……レロ……」

「そうそう上手だね。」

さあ、今度は俺と一緒に気持ちよくなるうか……！」

「はい……宜しくお願いします……♡」

分身の俺はセレナちゃんのお尻に

ペニスを擦り合わせ、快楽を共有し始めた……！」

また別の所では……。

「はは、いい眺めだ……！」

美波、君は本当に綺麗だよ」

「ああ……ありがとうございます……！」

貴方の為に一生懸命尽くします……！」

スレンダー体型の美波ちゃんは

リースみみたいな奉仕属性持ちらしく

分身のモノを愛おしげにしゃぶったり、

しごいたりして奉仕していた。

「そうかい。じゃあ、

僕のモノをお口で慰めてくれるかい……？」

「はい……喜んで……！」

「ああ……凄く良いよ……！」

ああ……イクツ……！ 全部飲んでくれ……！」  
どびゆるるるる！

「ぐくっ……ゴクツ……んんっ!？」

熱くて……変な味い……♡でも……

これがお兄さんの味なんですネ……♡」

分身とはいえこんな美少女が

俺の精液を飲んで興奮している様を

見せられてはたまらない……！

まさか自分の分身を見て

羨ましがるハメになるとは……!!

「そうだよ。これから毎日飲ませてあげるからね」

頬を撫でながら分身は美波ちゃんに

告げるや美波ちゃんは嬉しそうに

うっとりした顔で身を震わせた。

「嬉しい……！ ああん♡

またおつきくなってるう……♡」

「ああ……君がすごく魅力的だからさ。

責任を取ってくれるよね……?」

「もちろんです……！ 私の

初めて……貫ってくださいあい♡」

そして……

サシャちゃんは

俺の分身から言葉責めを受けつつ

その身体を弄られていた。

「こんなにドロドロにしちゃって

恥ずかしくないの?」

「ああ……は、恥ずかしい……ですう……♡」

そして……

サシャちゃんは

俺の分身から言葉責めを受けつつ

その身体を弄られていた。



「でも君のここはもつと欲しいみたいだよ？ ほら、指2本も入っちゃった♪」

「ふわぁんっ!? そ、そんなこと言わないれえ〜!」

ずぶうつと分身の指マンにより

彼女はビクンツと身をのけぞらせ

ながらイヤイヤと恥じらう。

サシャさんはマゾ属性なのか？

かなり感じてる様子だ。

胸と尻を攻められまくり、

秘所からは愛液がダラダラ流れている。

しかし手慣れているな……。

俺ならこう攻めるだろうという

ポイントを押さえてきていた。

サシャちゃんも弱点を責められて

どんどん乱れていく。

「ひゃうん！ そこお……弱いんですう……♡」

「へえーここか……」

すると分身の手がピタリと止まるや

サシャちゃんの顔色が曇る。

まるでお預けを食らったかの

様に視線は虚空を見つめていた。

「え……ど、どうして止めちやうんですか……?」

「だってまだ満足してなさそうなんだもん。

どうして欲しいのか言っごらん?」

意地悪っぽく言う分身に

サシャちゃんは顔を真っ赤にして俯いた。

「うう……そ、それは……」

「じゃあもういらないんだね?」

「あつ……ま、待ってください!」

……イジワルしないで下さいよう……

お、オマ○コとおっぱいいじめてください！  
エツチなサシヤをイカせて下さいい！」

ついに我慢出来なくなったらしく

サシヤちゃんは泣きそうな声で懇願する。

分身はニヤリと笑うと再び

動き出して愛撫を再開する。

それに呼応するようにサシヤちゃんの声も

大きくなつていく。

皆はもう限界といったところだろうか。

マリアちゃん、セレナちゃん、

美波ちゃん、サシヤちゃんは

それぞれ自分の分身に秘部を晒して

俺を求めている……。

「私も……私も早く入れて欲しいのお……！」

「美波ばかりズルいわ！ 私にも下さい！ お兄さん♡」「私にも

……♡」

彼女達は物欲しそうな目で俺の

分身達を見つめる……。

そして皆、彼女達に優しく微笑みかけると……！

ぬぷうううう♡

ずぷうううう♡

どちゅううううう！

ぬるるる♡

それぞれが彼女達の望むタイミングと

強さで挿入した！

「ああっ！ きたああ♡入ってきましたああ！

凄い……こんなに大きいなんて……♡」

「うわあ……こんなに奥まで届いてるのに痛くない……むしろ快感で

おかしくなりそう……♡」

「こんなの知らないわあ♡

こんなに激しくされたら壊れちゃいますうう♡」

「はぁん♡赤ちゃんのお部屋が潰れちゃううう♡  
許してえ♡おチン○ン許してえ♡♡♡」

俺の分身達は彼女達の望み通りに  
緩急自在に激しいピストンを繰り返す……！

四人共セックスの快楽に昇天間近なのは  
いいんだけど……！

うう……俺だけチン、

手持ち無沙汰だが我慢我慢……？

と涙ぐんでいたところ……!?

ちろお♡

うおおっ!?

パイリンガルに集中していた

俺のモノをエルシャさんが舐めてきた……！

しかもパイズリしながら……だど……!?

捨てられるおっぱいあれば拾ってくれるおっぱいあり！

こ、これはヤバイぞ……！

ぐちゅ♡むにゅ♡ぶちゅちゅ♡

ちゅぱ♡じゅぽ♡じゅぷ♡

「ふふ、どう……?」

「はい……最高です……!」

自信と余裕に溢れた声と態度のエルシャさんに

パイズリの感想を求められ、

俺は素直に称賛の

言葉を述べた。

「ふふ、それは良かったわ。

……ねえ、もっとして欲しい?」

「勿論お願いします……!」

「ふふ、いいわよ。

その代わり……私も楽しませてね♡」

そう言うと彼女は俺のモノを

口いっぱいに頬張り乳首ズリ+がつつりフェラの

ペースを上げていく……!!

じゅるる♡むにゅう♡♡

ぐぼっ♡じゅぼぼっ♡

「あ、ああああああ!!」

「あらら、もうイツちやうの?」

……仕方のない子ねえ。

そんなんじや私が満足出来ないでしょう

? もっと頑張つて……♪」

俺の射精タイミングを見切った様な

小休止をはさみながら、

エルシャさんは俺の雁首を

チロリとひと舐めずりして

激励してきた……!!

うう……凄いぜエルシャさん!

まさに最強の赤龍帝の名に恥じぬ

エロエロ美魔女っぷりだ……!!

そして、俺の分身達はというと、

セレナちゃんと美波ちゃんとは

騎乗位で繋がり、

マリアちゃんとサシャちゃんとは

対面座位で?がっていた。

「はは、マリアのナカは温かいね……」

「ふふ、ありがとうございます。」

貴方のも……お、おチン○ンも

とても立派ですよ……」

ちゅぷ♡ちゅぷ♡

ちゅぷ♡ちゅぷ♡

「はは、俺たちを褒めてくれてありがとう。」

サシャも可愛いよ……」

「ああ♡♡♡い♡♡♡さい♡お♡♡♡」

にゆるるる♡にゆるるる♡にゆるるる♡

「はは、俺も好きだよ」

にゆるるる♡にゆるるる♡にゆるるる♡

「はあ……はあ……ああ……はあ……♡

お兄さん……イツてえ……美波のま○こで

イツてえ♡」

「ああ、良いよ。

ほら、舌を出してごらん？」

「うん……れろお……♡

はあん……キス、しゅきい……♡」

「ふふ、今のセレナの顔、

凄くいやらしいよ？」

「はあん……恥ずかしいよう……♡」

「大丈夫。凄く綺麗だ」

「えへへ……ありがとう……！」

んっ……ああん……気持ちいいよう……♡」

「俺もセレナのお腹の中、凄く気持ち良いよ。

さあ一緒にイこうか……！」

「はいっ……！ きてっ……！」

「ううう……！」

どびゆるるるるるるる！！

どびゆるるるるるるる

どびゆるるるるるるる

「「「イクう♡♡♡」」」

四人の美女達が絶頂すると

同時に俺もエルシャさんの胸の中で果てた……。

そしてエルシャさん以外の

女性達は光と共に安らかな顔で

天に召されていった……。

皆『生まれ変わったら必ず

貴方の妻になります』との

言葉を残して……。

ええ……。

その時は俺、もうきつとおじさんになっ  
ていると思うんだけど……？

呆然とする俺にエルシャさんは  
精液を拭き取りながら語りかける……。

「これで彼女達も幸せになったわ。

ありがとう」

「いえ、こちらこそ……」

「ふふ、それにしても

あんなに分身共々沢山出したのに

まだこんなに元気だなんて……若いつて凄いわね♡」

「いや、その……はい」

「さっきの子達の願い通り、

私とも楽しみましょうか」

「は、はい！」

エルシャさんのお誘いに対して

俺はつい期待に胸とナニを

膨らませてしまったが……。

しかし……、

こんな事をしておいて

アレだけど安里やドライグが

気になる……！

早く帰らないと……！

「あの、すみません。

申し出は光栄なんです

そろそろ帰りたいんです……！

すみません！ ホントすみません！」

俺はエルシャさんに土下座して

断腸の思いで現実に戻る事に

決めた。名残惜しいが……！

親友と相棒の身には変えられない！  
だがエルシャさんは  
そんな俺の心情を察してくれて  
和やかにほほ笑んだ。

「あら、そうなの？ 残念ね。」

「……でも、また来てくれるんでしょう？」

その時はたつぷり可愛がつてあげるからね♡」

「はい、是非お願いします！ じゃあ、失礼します！」

よし、言質取ったぞー！！

こうして俺は名残惜しくも

桃色精神世界を後にしたのだ……！！

あれ、何かを忘れてる様な……。

↓

安里Side

「いい加減しつこいんだぜい！」

「テメエこそ大将の技を

パクってるんじゃないやねえ！」

「そりゃ違うぜい！」

ボールクの歩法は

仙術ベースだよい！」

残像からも攻撃が来るとは

これが歩法を極めた『肢幻』って

技なのか……！！

「オラァ！」

「甘いよい！！」

ボオン！ バキイツ！

「ぐっ……!!？」

俺が蹴りを放った瞬間に

カウンターで腹に一撃を食らう！

だが俺もやられてばかりじゃない！

『武態』により俺の爪先を飛刀に

変化させて相手に飛ばす！  
キーン！

しかし読まれていたのか  
如意棒を回転させて

即席の盾を作られ弾かれた！

やはり一筋縄ではいかないか……。

そろそろイツセーの様子も気になるし

勝負を決めるか……!!

「いくぜい!!」

そう言うと相手は一気に距離を詰めてきた！  
速い!!

そして如意棒が蛇のように動き回り

俺の身体を打ち付ける！

「オラオラオラオラオラ！」

「ちっ……!!」

アヌビスの棍術とは雲泥の差だ！

何とか避けるがこのままだと

防戦一方だな。

仕方ない、こちらも攻めるか……!!

「はああああー！」

俺は【六合太極】により

一気に気を高め、あの

空間ごと相手を打ち砕く拳を

発動させようとしたが……!!

ドクンツ……!!

「がはっ……!!?」

突然心臓が大きく脈打ち

全身に激痛が走る……!!

「何だ……これは……?」

口元を拭うと血がついているが

血の色が溝の様に黒い……!!?



これは……一体!?

「安里サマ!?! しつかり!」

即座にミツテルトの声を聞き

我に帰る……!!

そうだ、今は戦いの最中だ。

余計なことを考える余裕はない。

そして再び構えると、イツセーの方に変化があった!

「よっしやあああ!」

どうやらあの怨霊達を

浄化したらしいが……

なんで怨霊が裸の美女の姿で

天に召されているんだ……?!

猿と黒歌も

あまりの事に

呆気を取られていた。

「な、何よ……何なのよ

アンタは!?!」

黒歌は語尾ににやを付けるのも

忘れてイツセーを指差す。

まあ当然の反応だ。

俺も正直驚いている。

するとイツセーは右手を突き出し叫んだ!

「俺はエロく、凶太く、逞しく!」

愛とおっぱいのために生きると決めた男!

兵藤一誠! リアスさんの婚約者であり、

ハーレム王になる男だ!」

……中々堂々と宣言した。

そのクソ度胸は流石だ。

「私のミックス呪術を破った位で

いい気になるんじゃないにや!

お前を仕留める手なんて幾らでも……!」

黒歌はイツセーを睨みつけながら  
再び呪術を仕掛けようとしたが  
その時、俺とイツセーの間を  
白い何かがすり抜けた！

それは俺達の間を抜けると同時に  
黒歌のどてっ腹に双掌打を放つ！  
ドオオオオンツ！

「がはっ……!?!?」

「[[[!?!]]」

黒歌の多重結界を  
一発で突き破る程の  
不意の一撃をモロに食らい  
吹っ飛ぶ黒歌をみて  
俺達は呆然とする。

「小猫……ちゃん?」

イツセーは啞然として呟いた。  
そう、そこには小猫ちゃんが立っていた。  
そして猫耳と尻尾が生えているのみでなく……。  
ボン！ キュツ！ ボン！

黒歌に劣らない位のナイスバディだった。

「……お姉様でも

これ以上好き勝手させない。

私も私を受け入れます。

おバカでエッチで変態だけど、  
優しくて

頼り甲斐のある先輩が好きだから」  
そう言ってイツセーを見る彼女の瞳には  
涙が浮かんでいた。

「調子に乗るんじゃないわよおお!!」

アンタは私の最愛の妹なの！  
だからアンタは私の物になるの！

私の妹モウなのがいいいい!!」

吹き飛ばされた黒歌は怒り狂い

イツセー達に向けて呪術を放った!

「いい加減にしろよ黒歌さん!」

小猫ちゃんの心は誰のものでも……ねええええ!!」

イツセーの叫びに呼応するように

黄金の剣は眩い光を放つと

この薄暗い遮断空間を照らし出した!

そして黒歌の放った

呪術を斬り裂き、

ついでに黒歌の和服をも切り裂く!

「きゃあああ!?!」

黒歌は一糸纏わぬ姿にひん剥かれて

地面にへたり込んだ。

もはや勝負はあつたな……。

すると美猴は即座に黒歌を

肩に担いだ。

「な、何をするにやあ!」

「何って、潮時だよい。」

ゼウスへの仕事を果たした

お前のワガママに

付き合ったがこれ以上は

付き合いきれねえんだぜい」

「ならお前一人で逃げればいいにや!」

駄々っ子の様に身体を揺らし、

抵抗しようとする黒歌だが、

美猴はその程度ではビクともしない。

とか色んな所が揺れたり、

弾んだり丸見えになっているんだが……。

「全裸で戦うつもりかよい?」

それに仙術でヤバい奴等も

「何体か観測しちまったんだぜい」

「うう……！ 美猴！」

「じゃあせめてコイツだけでも！」

「黒歌は何故か」

「俺を指名してきやがった！」

「身体が弱っているからか……？」

「そいつは尚更無理だねい。」

「やり合って解ったが」

「ソイツのガワはともかく、」

「中身はまさにお釈迦様でも」

「ご存知ないんだぜい」

「しかし美猴と呼ばれた」

「猿野郎は黒歌の提案を」

「却下した。」

「ガワ、中身……？」

「何言ってるんだコイツ？」

「まさか時折聞こえるあの声に」

「関係があるのか……？」

「ぐう……」

「まあ、とにかく」

「今回はここまでって」

「事なんだぜい」

「いうだけ言うと美猴と黒歌は霧の様に消え去った。」

「どうやら転移魔法で」

「脱出したらしい。」

「またしても解らん事ばかり」

「増えちまった……。」

「でも、今回はイツセー達を」

「守れたんだから……それで……」

「いいか……な……。」

「そこで俺の意識は一旦途切れた。」

※異聞・幕間4 六業の壺・愛憎（イツセー×ルイー  
ナ&スコグル 非純愛要素注意！）

イツセーSide

「ほら、しゃぶれよ」

俺はルイーナちゃん……

いや、ルイーナの頬に彼女を

貫いたばかりのチ○ポを

ぐりぐりと押し付ける。

「うっ……くっ……くっ……」

涙目で歯を食い縛って耐えている。

可愛い顔が台無しだ……。

悔しそうに睨みつけるその姿は

この上なく俺をクソ野郎という

事実を認識させる。

俺だって……本当はこんな事、

したくないんだ……。

でも……これは仕方ないんだ。

俺は許されない事をしているんだから。

「おいおい、口開けろよ……」

愛しの騎士様のために

一肌脱ぐって決めたんだろ？」

「……ッ!!」

ルイーナが口を開こうとした瞬間、

代わりに散々俺に犯された

スコグルさんが

割って入った。

「んん……んんん……」

「ハハハ、飯の主に代わって

お掃除フェラか？健気なもんだぜ」

スコグルさんの喉奥深くまで  
突き刺さったチ○ポを引き抜きながら  
俺は苦笑いするしかなかった。  
だが、そんな俺を嘲笑うように  
彼女は眼光鋭く言い放った。

「ああ、そうだよ……。」

アンタは気持ちよければ

それでいいんだろ？」

そして親の仇を見る様な瞳で

スコグルさんは俺を睨みつけ、

俺のチ○ポを口に含んで舐め啜っていく……。

クソ……。

気持ちいいのに気持ち悪い……。

苦しい……。

「クク……どうしたあ？」

随分苦しそうなツラじゃねえか。

まさかとは思うがお前……

本当に好きな奴がいるのか？」

ああ、我ながら何て

どうしようもない男だろう。

スコグルさんは何も応えない。

(ああ……アタシが愛しているのは安里だけさ……。

アイツが助かるためなら、

アタシは何だって……するよ。

どんなに汚れようが……

アイツの命だけは……)

パイリンガルにより

彼女の本当の気持ちが

解ってしまう。

心の一切通わない

偽りの快樂に身を墮とされてなお、

彼女は安里への想いを  
揺らがせる事はないのだ。

その事がたまらなく辛くて、  
同時に情けなくて仕方なかった。

「出すぞ……！」

アイツを治すための薬だ……

零すなよ！」

「ゴホッ!!ゲホオッ!!」

びゅるるるっ!!

激しく咳き込む

スコグルさんの口から

大量の精液が瓶に溜められていく。

大凡半分位……と言った所か。

まだ……やらなきゃいけないのか。

もう、これ以上は嫌なのに……。

「次はお前だな……」

俺は絶望的な気分になりながらも、

ルイーナちゃんに凶器の様な

チ○ポを向けていた。

ルイーナちゃんには申し訳ないが、

これも全ては安里のためなんだ。

だから許してくれ……。

「や、やめろ……！」

ルイーナの初めてを奪っただけじゃ

飽きたらないのかよ……!!

何が赤龍帝だ……!!

このケダモノ野郎！」

ああ、そうだ……。

俺は最低のケダモノなんだ……。

俺の初恋を実らせようと

汚れ役を買ってくれた親友の

初恋の相手の純潔を平然と奪ったり薄汚い欲望を満たすためだけにニグラさんを犯そうとした

畜生以下の男なんだ。

「ごめんなさい……………」

私なんかのために……………」

泣き崩れるルイーナちゃんを見て、

罪悪感で押し潰されそうになる。

でも、ここで止めるわけにはいかないんだ。

俺は悪魔みたいな笑みを浮かべながら

彼女の処女を失って間もない膣穴へと凶器を

ずぶりと突き入れた。

「うっ……………くうっ……………」

涙を流すルイーナちゃんの

膣の中は暖かく心地良かった……………。

だが……………

すぐに罪悪感と自責の念に

吐き気が込み上げてくる。

「うえっ……………」

胃の中のを飲み込み

俺は必死に堪えて

腰を動かしていく。

「んぶ……………んん……………」

(んん……………く、苦しい……………！)

でも安里さんを助けなきや……………！

私なんかよりずっと辛くて苦しい

安里さんに比べたら……………この位！)

俺のチ○ポを受け入れながら

懸命に耐えるルイーナちゃん。

その健気さに心が痛むが、

俺は容赦なく彼女の膣内を犯し続けた。

「出すぞ……………！お前を俺の精液で染めてやる！」



「んん……んん……」

んぽっ……！　びゆるるー！

やがて、彼女の身体にかけられた  
ルーナちゃんのお液や汗が混じり合った精液を  
全てを瓶にかき集めると

涙目のまま俺を見つめてきた。

「こ、これで……良いんですか？」

「あ、ああ……」

「うう……」

俺は思わず目を逸らすが、

すぐにスコグルさんから鋭い視線を浴びせられた。

「おいおい、

アンタが出したモンだろうが。

最後まで責任持って見届けろよ」

俺は言われるままに

涙を流しながら

精液を瓶に詰めていく彼女を眺め続ける。

ひどく惨めな気分だ……。

何が皆を守る赤龍帝だ……何が優しい赤龍帝だ。

……時間は少し前に遡る。

↓

黒歌さんと美猴を退かせた後、

安里は倒れてしまった。

力を使いすぎた過労かと

思ったが、アザゼル先生が

安里の容態を見るなり顔色を変えた。

「これはまずいぞ……」

「ど、どういう事ですか？」

アザゼル先生の顔には

いつもの余裕がない。

マジでヤバいって事がヒシヒシと

伝わってくる！

「どうもこうもねえ。

コイツに撃ち込まれた毒が  
変異しやがった……！」

毒の変異……？

そう言えば少し前に『英雄殺し』って  
名乗る男から毒の弾を撃ち込まれたって  
聞いたけど……。

「ああ、だがコイツは

体内に残った血清を

毒が治癒しきる前に

スコグルに分け与えちまった。

それで毒がコイツの体内に

残って変異したんだろうよ。

このままだと安里の身体は

内臓から腐つちまうぜ……！」

そ、そんな……！

俺は目の前が真っ暗になった。

安里が……？

あの安里が死ぬ……？

それもゾンビみたいの内側から

腐って死んでいくなんて……

嘘だろ!?

「どうすりゃいいんだよ……！」

俺は頭を抱えるしかなかった。

何か、何か出来る事はないのか!?

俺の目の玉を抉れって言うなら抉る！

お前の内臓がいるから

腹を切れって言うなら内臓を

ぶちまける位に切腹する！

だから頼むよ神様……！

どうか安里を救ってくれ!!  
神様……そうだ!

アーシアの力なら!

「お願いだ! アーシア!

安里を治癒してやってくれ!」

俺はアーシアに向かって叫んだ。

だがアザゼル先生は

首を横に振った。

「ダメだ……。

奴に撃ち込まれた毒は

不死竜の血から作られた

相手の生命力を過剰に消費させるものだ。

回復系の能力は

一切効かないどころか逆効果だ」

クソツ……! 無理なのか……。

俺の無力さのせいで安里が……。

「いや待てよ……。

あるかもしれんぞ……。

安里を救う方法が……」

「本当ですか!」

アザゼル先生の言葉に希望を見出した俺は  
すぐるように聞き返した。

「ああ……。

お前の心臓はドライグと

融合している。その心臓の血を

使えば……あるいは……」

「出来るんスね!

やってください!!」

心臓にぶつとい針を打ち込まれる

らしいが関係ねえ!

安里を助けるためならこの位……!」

「分かった……。」

だが、下手をすれば即死だ。  
覚悟しておけよ」

「はいー!」

こうして俺は自分の胸に  
人工神器の針を突き立てた。

「ぐっ……うっ……」

痛え……!!

すげえ痛えけど……!!

安里の命には代えられない。

びっ、びつと少量づつだが器に

俺の血液を入れていく。

そして器に血が入れ終わると、

アザゼル先生は治療薬を作るべく

即席の工房へと籠もる。

頼むよ……!

何とかしてくれよ先生……!

俺はアザゼル先生に

祈るように手を合わせて

その背中を見送った。

そして……その数時間後。

アザゼル先生は憔悴した顔で

工房から出てくる。

どうなったんだ!? 結果は?

けどアザゼル先生は

俺の顔を見るなり

首を左右に振った……。

「結論から言うと……失敗だ」

「そ、そんな!!」

血の量か!? それとも時間か!?

何が足りなかったんだ!?

「すまん。完全に俺の力不足だ……」  
謝るなよ……。

何、全てやり尽くしたみたいな  
話になっているんだよ!!

いたたまれない俺は

ベランダに飛び出した!

「ちくしょう!なんでだよ!

どうして上手くいかないんだ!

もう嫌だ! 何もかも

めちゃくちやにしてやる!!」

俺は叫びながら地面に

拳を叩きつけようとした。

その時、パシッ、と

俺の頬に平手打ちが見舞われた。

「うおっ!?!」

俺は驚きながらも振り向く。

そこには怒りと悲しみの

形相を浮かべた

リアスさんが立っていた。

「何をするんですか!?!」

「それはこっちの台詞よ。」

貴方、自分が今どんな顔をしているか分かってるの?」

「え?」

「まるで鬼のような形相よ……」

そう言っただけリアスさんは

涙をこぼした。

「あ……」

俺の目からも涙が溢れてきた。

「私も悔しいわ……」

でも泣いている暇はないわ。

安里君の為にも……ね」

「はい……。そうですね」

そうだ。俺がしつかりしないと。

まだ諦めるのは早い。

だって、安里はまだ生きているんだ！

何か！ 何かまだある筈だ！

決意を固めながら俺は涙を拭くと

シュタークさんが歩み寄ってきた。

「手段がないワケでもないヨ」

「本当ですか!？」

思わず詰め寄る俺を宥めるように

シュタークさんは両手を前に出した。

それから小声で話し出す。

俺はその言葉を聞いて、

目を見開いた。

「コレはアザゼルも門外漢の

房中術に関わる分野だからねエ。

しかもルイーナちゃんは

死霊術の大家ムールムール家の

血統の上、

性と精を司る夢魔の血も引いている。

不死と相克する誕生の源で

あるキミの精液と

彼女の破瓜の血があればあるいは……」

「待ちなさいよー！

ルイーナを素材扱いするつもり！」

シュタークさんの言葉を聞いた

リアスさんは当然激昂するが、

シュタークさんは悠然と首を横に振る。

「違うよオ。

これは賭けだ。

成功すれば万々歳。

失敗したら次を考えれば良いサ」

「……………」

「ヤアどうする?」

シユタークさんの言葉は

悪魔の囁きのようでもあり、

蛇の甘言の様でもあった。

実は俺、

ミツテルトから聞いている。

ルイーナちゃんが安里の

初恋の相手だと。

俺はルイーナちゃんから

聞いた。

安里がルイーナちゃんの

初恋の相手だと。

まるで俺とアシアの関係の様だ。

そんな二人の仲を引き裂く様な

真似はしたくない。

そんな事が許される筈がない。

だけど……………!

俺は安里に生きていて欲しい!

だから……………!

「それにしてもシユタークさん。

よくこんな方法を知っていたわね。

流石百戦錬磨の悪魔祓いつて

ところかしら?」

「おやおや、

ボクを舐めないで欲しいネ。

これくらいの情報

簡単に仕入れられるヨ。

独自のルートがあるのサ」

リアスさんとシユタークさんの

刺々しいやり取りもそこそこに、俺は安里の部屋に向かおうとしたがリアスさんにもシユタークさんにも止められた。

今は話すべき時じゃない、と。

ルイーナちゃんも

安里に軽蔑される覚悟は

していた様だが確かに……。

↓

そして俺は用意された寝室に

向かうと、ルイーナちゃんのみでなく

スコグルさんも裸で待機しており、

ベッドの上で待っていた。

ルイーナちゃんは

緊張しきって震えており、

スコグルさんは俺を

射殺さんばかりに睨みつけていた。

う……。

そんな目でみないでくれ……。

俺は……俺はただ……。

安里を助けたいんだ……。

「さっさと始めようよ……。

けどさ、アンタが何度も

ルイーナちゃんを犯したら彼女が持たないだろ……。

だからさ、

アタシが先に抱かれてやるよ……。」

確かに……スコグルさんも

凄くスタイルのいい活発で

勝ち気な美女だ。

身体に反して控え目で

おどおどしたルイーナちゃんとは



ある意味対照的ではある。

だが二人とも俺を愛しているワケじゃない。

二人が愛しているのは……

安里なんだ。

俺は持ち込んだグレイフェイス様の

酒蔵の中で一番強い酒を

強引に一本丸ごと呷った。

舌と脳が爆発しそうだ……！

喉が溶けそうに灼ける……！

胃が燃え上がるようだ……！

「ぐおおおおおっ!!」

「ちよ!?アンタ何してんのよ!!」

バカなの!? 死ぬつもり!?

「黙れよ……飲まなきや……」

狂いでもしなきや……、

やりきれねえんだ……!!」

「む……ぐう……!?!」

俺は心配してくれた

スコグルさんの唇を無理やりふさぎ、

口移しで無理矢理流し込む……！

「ん……!…ふぁ……」

やがてスコグルさんは抵抗も虚しく、

俺の口に注がれた酒を

ゴクツ、ゴクツ、と飲み干した。

「ふう。これでアタシも共犯者だね。

……ま、アイツが生き残るためなら別に良いか

……楽しむもうよ、

どうせならさア……」

(クソ……!…ふざけやがって……!)

けど……アタシのせいだ

安里が苦しんでいるんだ!

罪滅ぼしにもならないけど……  
この位の事はやらないと……！（  
捨鉢気味な態度と口調だったが  
スコグルさんは意外と従順で、  
積極的に奉仕してくれた。  
彼女も安里を助けたのだ。  
そして、その想いは俺も同じだ。

「ほら……お前達を

気持ちよくしてやるチ○ポだ……挨拶しろよ」

「う、うん……。」

あ、アタシは……チ○ポ欲しさに

安里の親友にも股を開く

最低の淫乱ヴァルキリー……です」

「へえ……。じゃあ、もう処女じゃないんですね……」

「え、あ、はい……」

「そうですか……」

「くっ……」

俺は彼女の胸を掴むと

乱暴に揉み潰す。

それから乳首をつねると、

彼女はビクンと震えた。

「へえ、

散々開発されちゃったみたいですね。

乳首だけでもう感じてるんですか？」

「う、うるさい……！」

俺は意地悪く笑うと、

彼女にキスをして、

そのまま舌を入れて絡める。

そして、右手でクリトリスを刺激しながら、

左手で彼女の乳首を

帯電した指で擦りあげた。

「んむうううっ!？」

スコグルさんも流石に

これには耐えられなかったのか、  
全身を痙攣させて絶頂した。

「どうしました？ イツたんですか？ ま

だ入れた訳でもないのに？ 随分敏感なんですね？

それとも好き物なのか？」

「く……くそお……」

「それとも……」

親友の彼氏に犯されて

興奮してんスカ？」

「くっ……！ は、はい！」

淫乱なアタシは安里を裏切って、

貴方に犯される妄想をしながら、

毎晩自分で慰めていました！」

(煩い！ いい気にならずに

さっさと射精しろ！ このクソ赤龍帝！)

俺はスコグルさんの本音が

パイリンガルによって解っている。

これは不甲斐ない俺への罰だ。

だから、俺はスコグルさん達を

侮辱し、

責め立てる様に言葉を選んだ。

だから俺を憎んでくれ。

だから軽蔑してくれ……。

(うっ……！ うっ……！)

こんなの嫌だ……！

アタシは安里が好きなのに……。

なのに、こんな……。

こんな奴の……

こんな……！ こんな……!!)

スコグルさんは心の中で  
涙を流しながらも、  
懸命に耐えていた。  
だから俺も冷酷に、残酷に  
ならねば……。

「へえ……。

そんなに俺に  
犯されたかったんですね。

でも、その前に……挟んで下さい」  
俺はズボンを脱いで、  
いきり立ったチ○ポを露出させる。

スコグルさんは一瞬躊躇したが、覚悟を決めて豊満なおっぱいで俺  
のチ○ポを挟み込んだ。

柔らかな感触が俺のモノを包み込み、スコグルさんの体温と  
温もりをチ○ポから感じる。

「んっ……！ はあっ……！

はあっ……！ はあっ……！

ふうー……ふうー……ふうー……ふうー……！

彼女は顔を真っ赤にして、  
荒々しく息を吐いている。

きつと恥ずかしくて、  
苛立って仕方がないのだろう。

しかし、それでも必死に  
奉仕しようとしてくれる……。

「くくっ……。

そんなに顔を紅くして……  
興奮してるんですか……？」

「そ、そうなの……♡

ああ、赤龍帝様のチ○ポ……  
素敵……♡」

(くっ……!! 黙れ……！

「黙れ黙れ黙れ!! 黙れよお!!」

スコグルさんは涙目になりながら、俺のチ○ポを激しくしごき始めた。

「ははは、涙が出る位嬉しいか。」

「ならたつぷりと可愛がつてやるぜ」

俺はスコグルさんの顔の前にチ○ポを突き出し、亀頭を舐めろと目配せで命令する。

彼女はそれを無言で受け入れた。

「ちゅぱっ、ぺちやつ……」

「うおっ！ こいつ……！」

意外とパイフェラも上手いな……！」

（あぁっ！ あぁっ！ あぁっ！ あぁっ！ あぁっ！

アタシはなんてことを……！

ゴメンね安里……！ ゴメンよ……！）

スコグルさんは涙を流しながら、

一心不乱に俺の肉棒をしゃぶっていた。

そして、その光景を見て、俺は更に興奮して、

スコグルさんの口内に射精した……。

「うっ……」

「うぐうっ……！ うう……。 げほっ、げほ……」

「あ、す……スコグルさん……」

（酷い……。 酷すぎる……。

こんなことまでするなんて……

イツセーさんはもつと

優しい人だと思っていたのに……)

慄く様に

ルイーナちゃんのおっぱいからも

彼女の本音が聞こえてくる。

「ふっ、じゃあ、次はルイーナさんの

パイズリでお願いしますよ！」

「はい……かしこまりました……」

赤龍帝さま……。うう……………！」

彼女は健気にも

泣きながら俺の命令に従った。

そして、彼女は胸で俺のモノを挟むと、

上下に動かして刺激を与えてきた。

(やめてえっ……………私のおっぱいで

安里さん以外の人に

こんなことするの嫌だよおっ……………)

「くくく、そうかそうか。

お前も本当はこういうことがしたかったんだな。

この変態女が……………」

「ち、違います……………」

私はそんなんじゃない……………」

ひゃうんっ!？」

俺は微かに抵抗する

彼女の乳首をつねる。

すると、彼女は可愛い声で鳴いた。

「へえ、痛くされて感じてるのか？」

やっぱりドMなんだな」

「そ、それは貴方が……………」

あんっ! あっ! だめえっ!!」

(ああ……………、私は……………やっぱり

安里さんに相応しくない卑しい淫乱な女なんだ……………。

だから、

こうして好きでもない人に

犯される運命にあるのかな……………)

違う……………違う!

「おい、何勝手に諦めようとしてんだよ!

俺はまだ満足してないぞ!もっと頑張れよ!」

「うう……………。はい……………」

わかりました……………」

俺は彼女に言葉の鞭を打つ。

彼女は悲しそうな顔で

まるで罪人の様に俺の言葉に従う。

だが、俺は人間のクズの様な

言葉と態度で彼女を責め続けなければいけない。

「違うだろ！」

『私を存分に虐めてください』だろ？」

「はい……。わ、わたしを……」

いじめて……ください……！」

「くく、そうだ。」

それでいい。そのまま続けろ」

「は、はい……。んっ……」

(ああ……。どうしてこんなことに……)

これは罰なんだ……)

卑しい妾の子のくせに好きな人と

結ばれたいと願った私への……)

俺はルーナちゃんに命令しながら、

彼女の胸を犯した。

違うよ……、

キミは卑しくなんかない。

安里のために身も心も

捧げられる君は、誇り高い貴族じゃないか。

だが、それを言っではいけない。

俺は善人ぶってはいけない。

この二人から軽蔑され、

唾棄されるべきなんだ。

そうじゃなければ……

安里を裏切った報いにとても

ならない……。だから、俺は……

「くっくく……」

気持ち良いぜ……。

さすがは貴族のお嬢様だ。

最高の感触だぜ！」

「あ、ありがとうございます……。んっ……」

俺は激しく腰を振り、

ルイーナちゃんの胸に欲望をぶつけて

彼女を汚す。

「くくく、どうした？」

随分苦しそうな顔をしているな？」

「はい……。ごめんなさい……。」

赤龍帝さまのモノが熱くて……

発情してしまいそうです……♡」

(ああ……。熱いよお……。苦しいよお……。

早く終わって欲しいよお……。

イツセーさんのアレがビクビクしてる……。

もうすぐ出るのね……。

ああ、でも、まだ終わらないよね……。

だって、まだ、私の口の中

に出してもらってないもの……)

「うっ……」

びゅっ……びゆる……

俺は彼女の口内に射精する。

彼女はそれを嬉しそうに

受け止めた。

「うう……！ うう……！

ゴメンなさい……！ ゴメンなさい……！

ゴメンなさい……！」

ルイーナちゃんは泣きながら

俺の精液を搾り取るように吸い付く。

(ああ……。すごい量……。

それにすごく濃い味と匂い……。

これがイツセーさんの精子の味なんだ……。



頭がクラクラしてきちゃう……。

ああ……ダメ……こんな……いやらしい……(

「ふう……。」

なかなか良かったですよ。

けど、まだ足りないですね。

今度は……二人でパイズリしろよ？」

俺は二人の前に未だに萎えない

チ○ポを突き出すや

二人は怯えながらそれを見つめる。

「はい……。」

かしこまりました……。」

「でもその前に挨拶しろ。」

とびつきりスケベなお前たちに相応しい奴をだ」

俺はチ○ポで二人の頬を叩き、

挨拶を促す。

スコグルさんは涙目になりながらも、それに従った。

そして、ルイーナちゃんもそれに従う。

俺はそんな彼女たちに再び欲情し、勃起してしまう。

「あ、あの……、私は、貴方の……、

オチ○ポ様に奉仕させて頂くために、

赤龍帝様に忠誠を誓います。

どうかこの卑しい貴族もどきの

おっぱいを使ってくださいませ……。」

「私は、赤龍帝さまに仕えることを誓います。

この卑しい淫乱ヴァルキリーの

おっぱいをお使いください……。」

二人は同時にそう言った。

さめざめと涙を流しながら。

(ゴメン……ゴメンな二人とも)

俺は心で詫ながら二人に命令する。

すると、二人は自分の胸で

俺のチ○ポを挟み込み、擦り始めた。  
にちゅ……にちゅ……  
ぐじゅ……ぶぢゅ……!

(ああ……! 熱い……! 大きい……!)

うう……! 硬いよ……! 太いよ……!

(ルイーナちゃんだけはせて

最小限の苦痛で済むようにしてあげないと……!!)

二人は俺のモノを必死で挟んで上下に動かしている。

だが、それだけでは俺を射精させるには至らない。

そこで、俺は彼女達に新たな命令を下した。

「よし、次は舌を使って舐めてみろ」

そう言われた瞬間、

二人は驚いた表情を浮かべたが、すぐに従順になった。

「はい……」

「わかりました……。赤龍帝さま……」

そういうと、まずはルイーナちゃんが

恐る恐るといった感じで、チロつと先端を舐めた。

「んっ……。んん……。んんん……」

れろれろれろれろ……」

ルイーナちゃんは目を閉じて、

一心不乱に亀頭をしゃぶり始める。

「くっくく……。いいぞ……」

いいぞお!もつとだ!

もつと奥までくわえ込め!」

俺は人でなしの様にそう言つて、

彼女の頭を掴み強引に喉の奥にまで突っ込む。

「んー!? んんー!!

むぐうううう!」

彼女は苦しそうに喘ぎ声を上げるが、

それでも決して歯を立てないように注意しながら、

懸命にフェラチオを続ける。

「んっ……。んっ……。んっ……。んっ……。んっ……」

スコグルさんも負けじと、

竿の部分を下から上に丁寧にゆっくりと

おっぱいで刺激する。

(クソ……。調子に乗りやがって……。!!)

いつか見ているよ……。!!)

「くくく……」

なかなか上手いじゃないか……。

二人とも……。ご褒美だ！」

ドピユツ！ ビュルルルー！

「きやつー」

「ううっ……」

俺は二人の顔に精液を

浴びせかけた。

普段なら燃え盛るように

興奮するだろう光景だが……。

(ああ……。熱い……)

(すごい……。これが男の人の……)

「おい、口開けて見せてくれよ？」

「はい……。ご主人様……」

二人は貝柱を切られたアコヤ貝ばりに口を開けた。

そこには白濁した液体が大量に溜まっていた。

「ふふふ……。よくできたな……」

よし。ごほうびに

俺のザーメンまみれのお前らの口に

キスしてやる」

俺はそう言いながら、

スコグルさんの口に濃厚なキスをした。

「んっ……。んん……」

(ああ……。気持ち悪い。)

自分の精液も

気にならない変態ナルシスト野郎が……！  
安里の方がコイツなんかより……ずっと！)

「ぶはあ……。ふふ……。どうだ？

俺の女になる気になったか？

俺の奴隷になってくれるなら、

毎日好きだけ犯してやるぜ？」

俺がそう言った瞬間。

「誰がお前なんかに！ お前なんて死ねばいい！

……あつ、ち、違います！

アタシ、コーフンしちゃって……。

心にもないことを！」

スコグルさんが遂に本心を叫ぶ。

そうだ、それでいいんだよ。

俺は内心はともかく、

スコグルさんの悲痛な叫びを

鼻で笑う。

「ふん……。まあ、いいさ。

今はまだな……。

いずれ必ず屈服させてやる。

それまでせいぜい楽しみにしているよ」

俺はスコグルさんにそう言う。

そして、今度はルイーナちゃんの方を向いた。

「よし、今度はルイーナちゃんにしようかな？」

「はい……。私も貴方の

奴隷になります……。

だから、お願いします……。

私のおま〇こを犯してください……。

う、うう……。」

涙を流しながらルイーナちゃんは

俺へと股を開く、止めろよ……。

「へえ……。」

じゃあ、自分で広げてみせろ」

「はい……。わかりました」

そういうと、ルイーナちゃんは

自分の指で割れ目を広げながら

俺に股を開いて処女を捧げる。

そして、つう、と流れる彼女の

涙にも構わず

彼女の膣口にチ○ポな

先端をあてがい一気に貫いた。

ずぶううう!!!

ぶちぶちぶちいっ!!

「あぐううっ……!?!」

(痛いっ!!でも、我慢しなきや……!)

気持ちいいフリをしなきや!

じゃないと……この人が

私に射精してくれない……!)

ルイーナちゃんを気持ちよくする

ワケにはいかない。

彼女の傷を癒し、満たすべきなのは

俺ではなく安里だからだ。

「くく……。動くぞ!」

パン! パアン! グチュ!

「ああん! あひい! い、いい……」

(痛い……苦しい……)

安里さん……助けてえ……)

「ああ……イイツ! すげえ締まる! 最高だよ!」

「ああ……うれ……し……いやあ……いやあ……」

何が嬉しいものか。

ルイーナちゃんの泣き笑いを

見るだけで俺は死んでしまいたくなる  
自責の念に苛まれた。

「くく……。」

ほら！ 出すぞ！ 受け止めるよ！」

「!!」

えっ……!! や、嫌っ！ いやあ!!

他の事なら何でもします！

ずっと貴方の性奴隷になっても

いいですから!!

中は！ 中は嫌っ！ 嫌あ!!

これ以上安里さんを

裏切りたくないよお!!」

俺の無慈悲な宣告に対して

彼女は演技も忘れて叫んだ。

クソ……だけど一度は彼女の

膣内に精液を出さないと

治療薬を作れない……。

俺は……ここまで人でなしに

ならなきやいけないのか……!

ごめん……ごめんな安里……

ルイーナちゃん……! 俺は……!

「ぐっ……出るっ！」

ドピユツ！ ビュルルル——!!!!

「あっ！ あああっ！ 熱いいい!!」

（ああ……! 出されてる！安里さん以外の人に！

中に！ 汚されちゃった……私、もう……

安里さんに相応しくない

汚い女になっちゃったんだあ……)

俺は彼女の子宮に

大量の精子を流し込んだ。

けど……まだ瓶に精液が足りない。

「よし、次はスコグルだ！」

「はい……。」

よろしくお願いします」

スコグルさんは四つん這いになると、こちらに向けて尻を高く上げた。

「はやく……。はやくうう……。」

「わかっているさ……。」

俺はすでに勃起している肉棒を取り出し、彼女の秘部に  
迷いなく突き入れた。

ズブウウ!!

「うう……！ー！ 大きい……。」

(クソオ……こんな奴との

セックスなんかで気持ちよくなんなってたまるか……！)  
「ふっ……。さすがに処女じゃないようだな。

安心したぜ。

デカイ割にマ○コは狭くて

キツいんだな」

「はい……。」

私は赤龍帝様専用の

オナホールです。

今は好き勝手に使ってください……。」

(くそお……。悔しい……。)

なんで……。どうして……

こんなゲス野郎が安里の

親友なんだよお……。)

「くく……。そうか。

それじゃあ遠慮なく使わせてもらうとするか！」

俺はスコグルさんの細い腰を掴み激しく打ち付ける。

パン！ パン！ パアン！

スコグルさんのおっぱいと

お尻が激しく揺れると

スコグルさんの口から  
喘ぎ声が出る。

だが、その表情はどこか苦しそうだ。

「ふあああ……アタシ、アタシ……」

もう……死んでもいい……」

(ああ……気持ち悪い……)

早く終わってくれ……

コイツも私も死んだ方が……いい)

……ダメだ。

そこまで思い詰めちゃ……

俺は彼女の背中に

覆い被さり耳元で囁く。

「おいおい。

そんなに絶望するなよ……

クズのチ○ポに犯されて

死ぬなんて考えるなよ？

そんな事を考えられなくなる位

頭が真っ白になるまでイカせてやるからな？」

「は……」

(何を……言っている?)

俺は絶頂雷撃をフル稼働させ、

指、舌、龟头に帯電させ

性感電流を彼女の皮膚、膣内、

更には脳髓にまで流し込むように刺激していく。

ビリリリイイイ——ン!!!

「ひっ!? ヒギヤアア——!?!?」

ビクンビクビク——!!

「あひゃああああ?!?」

(嘘……!?!?またイク……!?!?)

頭おかしくなるうう!!)

バチイイン!! バチン!!



バリリツ!!! パン！ パン！  
パチイッ!!

「あひい!?

イグうううううううう!!!」

(駄目え！ 止まらない！)

身体中の神経焼き切れそうなくらい

気持ち良いのおお!! 安里お……………!

許して……………! 許してえ!!)

「イけ！ イケ！ イつちまえ!

お前の大好きなチ○ポ様に屈服しろ!

「ひああああ！ イつちやいますう!

負けます！ 堕ちるう!

イツク……………イツグうう——!!!」

(……………)

プシャアツ!! ジョロロツ!

シャア〜! ガクリ……………!

ピク……………! ピクン……………!

「くく……………派手に潮吹いてイツたか。

本当に頭が真っ白になったみたいだな」

「あ……………♡あ……………♡ああ……………♡」

(……………)

そしてその精液を掻き集めた分で

漸く瓶は満たされた……………。

良かった……………これで、もう

二人を汚さなくて済む……………。

安里を裏切らなくて……………済むんだ。

Side

『定点……………一つ残したネ』

安里Side

あ、あれ？

どこなんだここは？

レイナーレに殺された時とは  
違う場所のようだけど……。

何だこの真っ暗な

牢獄みたいな場所は!?

地獄の底でもないだろうに。

「ここはタルタロス……!。」

お主らの言葉では地獄と呼ばれる所じやな」

振り向いた先にいたのは

沢山の頭と腕を持つ異形の

機械仕掛けの巨人だった。

しかし地獄だと……!?!?

地獄に落ちる心当たりが……ありすぎる……。

「まあ、安心せい。

お主を罪人として呼んだワケではないわい。

ワシの名はヘカトンケイル。

アバドンと同じく、

このタルタロスを守護するものじゃ」

意外に見た目の割に気さくな感じだ。

罪人ではなく呼んだのなら

一体どういう用件だろうか？

「実はのう……。

ワシとは親しい仲のゼウスが

やらかしたせいでヘパイストスも

ハーデスも酷く精神を拗らせてしまつてのお……。

ハーデスともども

『禍の団』なるものに身を寄せおつて。

……実に嘆かわしい」

えつとつまり、

あの2人は今テロリスト集団の

一員になつているといふことなのか……。

「そこで、お主に頼みがある。

へパイストスは恐らく

『機皇龍帝』をハーデスの不可視の兜と

ゼウスの雷霆により

近々完成させるじやろう。

それを破壊して欲しいんじや。

頼めるかな？」

いや、頼めるかなと言われても！

ゼウス様の雷霆の力と

あのミイラ野郎のチート錬鉄が

合わさったバグキャラが襲つてくるとか

冗談じゃねえよ！

白竜皇のヴァーリや赤龍帝の

イツセーに頼めよ！

俺より強いだろうが！

しかしどうやらそれでは

ダメらしくメカメカ爺さんは

腕をブンブンと横に振る。

「ならぬ。へパイストスは

遂に星の禁忌に触れて

しまつておる。

大地に根ざすもの、

冥界にあるものでは機皇龍帝は決して倒せぬ。

大地の寵愛を破るには

この星の外なるものたち、

この世の理の外にあるものの力で

なければならぬ……」

へカトンケイルと名乗る

ビックリドッキリメカ爺さんは

そう言つて話を締め括つたが、

話のスケールがデカすぎる……。

「星とか宇宙とか

よくわかんねーツスけど……

要はアイツらをブツ飛ばせばいいんですね？」

「ほっほっほ……。その単純さと

がむしやらぶりは若い時のゼウスそっくりじゃな。

宜しく頼むぞ。

九頭竜安里よ。

この困難を越えてこそ

世界は再び生まれ変わるであろう。

新しき時代の幕開けとなるのじゃ。

我らの様な古ぼけた機械など

踏み台にして

新しい時代へと羽ばたくがよい。

そのためならばワシ等の権能も

存分に使うがよいぞ」

「はっはいっ！」

と、その辺りで俺の意識は

急速にどこかへ引き寄せられた。

## 第54話

安里Side

「……はっ！」

ヘカトンケイルのメカメカ爺さんから

まだ聞きたいことがあったが

気がついたら勝手知ったる他人の

別邸の天井だった。

確か美猴、そして黒歌と

やり合っていた筈だったが

皆無事なのか……？

「あ、安里さん！」

「安里クン〜！ 良かったあ〜！」

困惑していた所に

ひしっ、といきなり

ルイーナとスコグルさんに

抱きつかれた。

「え、えーっと……」

「うう……心配したんですよお」

「安里クンつてば全然起きないしい〜」

「す、すみません。」

それより他の皆さんは？」

涙ぐむ二人を宥めつつ

今の状況を尋ねた。

するとスコグルさんが口を開く。

「ヤツらならソーナさんと

やり合ってるよ？」

や、やり合ってる!?

リアスさんと会長のソーナさんが!?

な、何でそんなことに……!?

「あ、あの、安里さんの

想像とは違ってですね……。

飽くまでレーティング・ゲームでの対決ですよ」  
ルイーナが補足してくれた。

……確かにそれなら安心だけどさ。

誤解する様な言い回しなんて

スコグルさんも人が悪いぜ……。

「イツセーは大丈夫かな……」

俺が呟くと二人はビクツとして

目を逸らした。

「そ、そういえば見てないです……」

「い、今頃アジアちゃんに

介抱されてるんじゃないの〜?」

………。

あ、多分アレか……。

怨霊を裸の美女に変化させて

解放した話にドン引きしてるんだな二人とも……。

全くイツセーときたら

仕方ねえ奴だなあ……。

でもまあ無事なら良いんだけど。

とにかく俺は二人に

一旦退室してもらって

身支度を整えると

リアスさんとソーナさんの

レーティング・ゲームを観戦するべく、

暇そうなアヴェンジャーとキユクロ、

そしてスコグルさんとルイーナを連れて

会場へと赴いた。

今のルイーナはあの『英雄殺し』みたいな

殺し屋が彼女の命を狙っている可能性があるから

しっかり用心しないと……。

俺はルイーナ以外の全員に

目配せするとキユクロ以外は静かに首を縦に振った。

「どうしたきゆうどー」

だれかをさがしているのか？」

「いや、何でもねえさ」

キユクロは不思議そうにしてるが、

こつちにも色々あるんだよ。

ルイーナは俺の腕にしがみついて

離れない。

……うん、可愛い。

しかしルイーナは

ムールムール家の

ご令嬢ということ

VIPルームへと通された。まずは一安心。

↓

そこには何人が先客がいた。

まずは当然の様に

アザゼルのおっさんに

巖ついおっさんの墮天使。

次にオーデイン様と

ロスヴァイゼさん。

サーゼクス様に

セラフオール様。

いなくてもいいが

ディオドラの奴まで。

あとは……何人か知らない方々だ。

挨拶した方がいいのかな？

すると……。

「ああ……やだもう……」

帰りたいたい……」

な、何だか漫画とかで見る

卑弥呼様みたいなカツコの

肩開き巫女服を着た女神様が部屋の隅っこで体育座りしていた。何これギヤスパアの親戚？

「我儘を申されますな

アマテラス様。

天界、冥界、アスガルドのお歴々が

一同に会される機会など滅多にありませんぞ？」

「だってえ……！」

私こういう騒がしい所苦手なんだもん！

来世から本気だす……！」

ちよんまげを除けば

イケメンをそのまま擬人化した様な

お付きの人に叱られても

尚グズる女神。

いや、来世って。

貴方女神様だろ！

……っーかさアマテラスって!!

俺達の国の最高神じゃないの!?

て言うかさつき凄まじい力を

感じたけどまさかね……。

「アマちゃんってば

相変わらず暗いなあ☆

ほら、お客様が注目してるよ☆

居た堪れなくなったのか

セラフオール様がその最高神の

頭を撫でながら宥めだした。

うくん、この辺りはソーナさんのお姉ちゃんだけある。

見た目は子供っぽいけど魔王の中でも

屈指の実力者だしな……。

「うう……何で私がこんな目に……。」

「うう……何で私がこんな目に……。」



これも全部あのコカビエルや  
サタなんとかつていう

墮天使が悪いんです……。

あのうんこたれのせいで

私の予定が滅茶苦茶ですよ……。

あいつら絶対許さない……。

タケミカツチ……あいつら

粘着ストーキングして

ダルマにしてきて……」

コワ……。

いや、うんこたれって……。

サタなんとかつて……。

サタナエルの奴に至っては

名前覚えてもらってないのかよ……。

可哀想に、認知してもらえて

なかったから聖書の神に

成り代わろうとしたんだな。

死して尚、哀れなヤツ……！

あれ？ でもタルタロスには

二人の姿はなかったような……。

墮天使だから地獄に行ったのかな？

知らんけど。

「ははは、

それについてはご安心を。

その二人はうちのリーアさんと

うちのイツセイ君が

片付けておきましたからね。

貴方達の国土をお借りしている

立場ですからその位の仕事はしますとも」

ここぞとばかりにサーゼクス様が

二人の手柄を誇らしげに語った。

まあ、俺もそこそこ頑張って  
制動の巨神倒したんだけど……。  
いや、自分の宣伝なんか  
みつともない！

今の俺はルイーナの騎士なんだ。  
恥ずべき真似はできないぜ。

「ほっほっほ。」

タケミカツチも苦勞が絶えんの。  
しかしワシら神々の長たる者が  
いつまでもそんな調子では  
示しがつかんぞ?」

「うう……」

……オーディン様が優しく諭すように言うと、  
アマテラス様は更に小さく縮こまってしまった。  
こ、これはこれで萌えるな。

俺は思わず生唾を飲み込んだ。  
だが、その時だった。

音すらない雷光の如き  
居合の刃が

俺の首のギリギリまで迫った！

……見えなかった!?

「貴様……アマテラス様に

色目を使ったか?」

「え……ええ!」

いきなり抜刀して来た

男に俺は戸惑うしかなかったが

そこをまたしてもセラフオール様が

宥めに入ってくれた。

「あちゃあ……」。

アマちゃんに手を出すと、

タケミカツチくんが黙つちやいないから

気をつけてね☆

彼はアマちゃんの厄介古参勢だから、  
彼女に邪な気持ちを

抱く男は絶対に許さないんだよ」

そ、そういうことか。

いや、でも待ってくれ。

俺は別にアマテラス様に対して

変なことなんて考えていない！

そもそもルイーナという

大切な人が……ってそうじゃなくて！

俺は必死で弁解した。

カクカクシカジカツツウラウラ。

「……そうなのか？」

「はい……！」

俺が答えると、タケミカツチと

呼ばれた男性は納刀してくれた。

「……すまなかった。」

お前がアマテラス様に

不敬なことを働いくのではと思ったのだ」

おお、ミスを働いたら謝る辺り

ちゃんとしている！

どっかの墮天使総督とは大違いだ!!

大違いだなあ!!

「まあまあ、ソイツは俺の

右腕みたいな存在なんだ。

悪い奴じゃないんだ。

万年発情ムツリスケベを

哀れと思って、許してくれや」

コラおっさん！

何部下の心情を汲み取れる

デキる上司アピールしてやがる！

というかアンタの右腕は  
そこについているだろ！

いい加減にしやがれ!!

「そうそう！ 安里クンは  
私に夢中だからさっ！」

「ち、違いますう！」

安里さんは私に

メロメロなんですう!!」

な、何だか左右からひつつかれて

ギリギリ腕を締められてるんだけど……!?

痛い、痛いよ！

つていうかなんで

この人達俺に抱きついてるの!?

スコグルさんはともかく

ルイーナまで……?」

「……………」

アマテラス様は

ドギマギするだけの俺を

無言でしばし

こつちを見つめていたが……。

「チツ……リア充、爆発しろ……」

舌打ちされた挙げ句の暴言を

吐かれたぞ！ 何でだよ!?

あなた、万人を明るく照らす

太陽神様だろ!?

日照り神じゃあるまいし。

「アマテラス様、

そのような言葉遣いは

いけませんよ。

全く、悪い影響ばかり受けて。

この『すまほ』なるものは

今日一日没収です」

「ああ!? 鬼! 耶蘇禍霊!

タケミカツチ!」

お付きのタケミカツチさんに

注意されスマホを没収された

アマテラス様はまたもや

体育座りになってしまった。

大丈夫なんだろうか……?」

「まあ、なんじゃな……。」

折角来たんじや安里とやら。

スコグルと一緒にここに座れ」

隣に座っていたオーデイン様が

空いている席を指し示した。

「は、はい……。」

俺は言われるがままにその

空いた場所に腰掛けようとするも

何故かルイーナは俺の膝に

乗ろうとしてきた。

「ちよ、ちよつとルイーナ!」

「は、離れません!」

私は安里さんの主なんですから!」

俺は慌てて彼女を引き剥がそうとするが、

彼女は頑として俺から離れようとしなかった。

スコグルさんはスコグルさんで

俺の隣でニコニコしているし……。

何かアヴェンジャーからは

殺気を送られてるし……。

親友の晴れ舞台の観戦どころじゃねえ……!

どうすりゃ良いんだ……。

「ふむ、これがじよなんのそうと

いうものか」

キョクロオ!

頼むから余計なことを言うな!

これ以上ややこしくなるのは御免だぜ!

胃も痛くなってきたし……

泣きたい!

「全くこれ程の美少女達に

囲まれておきながら情けない。

ワシが若い頃なんぞは

若い女子の手を握っただけで

妊娠させておったぞ! わっはっは!」

……オーデイン様が笑い声を上げるが

ロスヴァイゼさんは呆れ顔だった。

ルイーナとスコグルさんは

顔を曇らせて視線を逸した。

ほら見ろ、少しはアザゼル共々

反省してほしいもんだ。

「……それは

オーデイン様だけですよ」

「……そうだよね☆」

セラフォル様も

これは苦笑しながら釘を差す。

結局俺は針のむしろのまま、

イツセー達の戦いを見ることとなった。

しかしディオドラの奴は

ニコニコしているだけで

会話に入っただけなのは何

だ? どういうつもりなんだ?

単にアジアの試合を

観戦しにきただけなのか……?

それにアザゼルの側にいる

巖つのおっさん

堕天使も黙ったままだし……。

俺は内心溜め息をつくくと、

目の前の試合に集中することにした……。

↓

結論から言うとりアスさん達の

チームはソーナさん達のチームに

敗れた。

ソーナさん達は策を練り、

連携し、リアスさん達の弱点を

把握した上で戦っていた。

禁手化だったかな？

あの鎧を纏って戦うモードには

ならなかったが

乳語翻訳なるトンデモ技を

イツセーが堂々と

披露して大顰蹙を買ったり、

ブチ切れ寸前のセラフォル様を

必死に宥めるハメになったりと色々あったけど……。

それでも最後は、お互いの力を

出し切つての素晴らしい戦いであった。

でも匙もイツセーも

ヴリトラやドライグと心を

通じさせる事で神器の力を

引き出していたのには驚いた。

俺も『奴等』と心を通じ合わせる事で

力を引き出せるのかも……。

「おっとそれは順序が逆じゃぞ

逸脱者。

赤龍帝もあの青年も

初めこそ力を求めての事であったが

今は双方とも宿る竜王と

向き合うことで力を引き出ししておく。

まあ、いずれはお前にもわかる時が来るだろう」

「……オーディン様」

流石知識を司る

(スコグルさんからそう聞いている) 神様だな。

敵わねえなあ……。

「え？ 終わった……？」

じゃあもうホテルに帰っていい？

ていうか高天原に帰っていい？」

「なりません。アマテラス様。

貴方はイザナギ様の名代として

リアス様、赤龍帝のイツセー様に

挨拶なさらねば。さ、行きますよ」

「ええ〜!？」

タケミカツチさんに襟首を

引きずられながらアマテラス様は退場していった。

もうやだこの太陽神……。

ー

イツセーSide

「はあ〜……」

レーティング・ゲームの後の

反省会を終えた俺はシャワーを

浴びてバスローブに着替えると

ベッドに寝転んでいた。

負けた事は確かに悔しいが

俺が落ち込んでいる原因は他にある。

コンコン、と控え目に

ドアを叩く音がする。

誰だろうか？

あまり馴染みのないノックの

音だけれども……。



「どうぞ」

俺が声をかけると扉が開き、  
そこから現れたのは……。

「こんばんは、兵藤一誠君」

「お前は……!?!」

ディオドラ!?

ディオドラ・アスタロト!?

何だよこんな時に……!

俺はドアを閉めようとしたが

爪先をドアに挟まれた!

「そう邪険にしないでくれないか

兵藤一誠君」

「煩いな……!」

お前は俺が嫌いなんだろう!

何しに来た!

落ち込んでいる俺の姿を

笑いにでも来たのか!?!」

俺は怒りに任せて怒鳴るが、

そんな事を意にも介さずディオドラは

笑みを浮かべている。

「まさか。僕はただ

キミと話がしたかっただけだよ。

だからこうしてわざわざ会いに来てあげたんだ。

嬉しいかい?

光栄に思うといいよ。

本来なら私の様な存在が

貴様の様な輩に……うう……!?!」

何だよ、冷やかしの押し売りに

来たらと思っただら頭を押さえ出して……、

大丈夫なのか!?!

「お、おい! 大丈夫か!?!」

「アジアを呼ぶか!？」

ディオドラの鬼気迫る姿に

俺はコイツを部屋内に入れ、

「すぐアジアに通信用魔方陣を飛ばし、  
来てもらった。」

「大丈夫ですかディオドラさん！」

「すぐに私が回復を……」

「煩い！ 私に指一本触るな！」

ディオドラは

ヒステリックに喚いて

「アジアの手を払い除けた!？」

「何なんだよホントに……!」

「お前はアジアを愛しているんじゃないのか!？」

するとハッと気がついた

ディオドラはアジアに

深く頭を下げた。

「すまない、アジア。」

少し取り乱してしまった。

「本当にすまなかったね。」

「……ところで話は変わるけれど、

君は今幸せかな？」

「毎日が楽しいかい？」

「充実した日々を送っているかな？」

「それともまだ何も成し遂げていないのに

既に満たされてしまったりしているのかな？」

「コラ！」

「何をいきなりアジアを

壺でも売りつける様な

口説きに入るなよ！」

「……つかお前は何でそんな事を聞いてくるんだ!？」

「私は……、

今の暮らしに不満はありません。

皆様とても良くしてくれます。

それに主のいない聖女としてではなく

一人の女性としても扱ってくださいますから……」

ディオドラの問いに答えた

アーシアの表情には

いつもと同じ優しい微笑があつた。

「そうか。それは良かった。

うん、実に良いことだ。

僕もアーシアを見ていると

幸せな気分になる。

君の笑顔を見れるだけで

心が癒される。

ああ、愛しい人よ。

どうかいつまでもその美しさで

僕の心を照らし続けておくれ」

いや、だからなあ!!

俺の目の前でアーシアを

口説くんじゃあないっ!!

「ありがとうございます。」

でも私の全てはイツセイさんの

ものですから。

他の殿方に想いを寄せる事など決してあり得ません」

はつきりとあの誰にでも優しい

アーシアが断言してみせた!

俺のために!

こんな子が俺を心から愛してくれている

事実感動の涙が止まらない!

ドライグの封印が解けないことに

悩んでいる場合じゃあない!!

「キミはそうかもしれないけれど」

兵藤一誠君はどうだろうね？」

ディオドラの言葉に俺は一瞬言葉を失った。

何だと？

どういう意味だ？

俺は……俺はアーシアを……。

アーシアは俺をジツと見つめる。

そして優しく俺の手を取った。

まるで聖母のような慈しみに満ちた瞳。

「君はハーレム王を目指している

そうだけどそれってアーシアを

蔑ろにしていると思わないかい？

キミは誰よりも彼女の近くにいるのに

彼女を見ようとしていない」

は、はあ？

俺がアーシアを見てないと!?

「そ、んなこと……!」

俺はディオドラに反論しようとしたが、

何故か言葉が続かなかった。

ディオドラは更に続ける。

「ねえ兵藤一誠君。

僕は思うんだ。

神器とは持ち主に

力を与えるだけじゃないと。

もっと大きな役割があるんじゃないかと」

何を……言っている？

戸惑う俺をよそに

ディオドラは歩み寄ると、

耳元で囁いてきた。

「……君、本当はアーシア・アルジェントの事  
なんてどうでもよかつたりするだろ」

「ちがうー」

思わず大声で否定する。

しかしディオドラは

俺の心を見透かす様な

薄ら笑いを浮かべてさらに続けた。

「違う？ 本当にな？」

彼女より強く美しい女性が現れても、キミの心は揺れ動かないのか  
い？ アーシア以上の女性がいても？ それでもなおアーシアを求  
めるのかい？」

ディオドラが俺に詰め寄ってくる。

「アーシアが俺の側に居てくれるなら、

俺はそれだけでいい」

そうだ、それでいいんだ。

アーシアさえいれば

俺は満足なんだ。

なのに何故俺はこうも

動揺している!?

「へえ、そうなのかい。

まあ別に僕は構わないさ。

アーシアが幸せならば。

けど、正直言つて僕の方が

彼女を幸せに出来ると

自負している。

アーシアは優しい子だ。

自分の気持ちを押し殺してまで

誰かの幸福を願うような。

そんな彼女にはきつと

僕の様な男な

彼女だけを愛する男こそ相応しい。

そうは思わないかな？」

ディオドラの奴、

今度は本格的にアーシアを

口説き始めやがった!

ふざけるな!

お前みたいな奴にアーシアを

渡さない……!

アーシアは俺の……

「俺のモノだっていうつもりかい?

けどそれって変じやないかな?

小猫ちゃんの心は誰のものでもないって

吠えた君がアーシアは

モノ扱いするんだね……!」

!?! 違う……! 違う!

違う……ないのか!?

俺は結局……ハーレムを

作ることにしか頭になくて、

アーシアや

一人一人の女の子の事を

真剣に考えた事は

なかったんじゃ……。

「アーシアは……!」

アーシアはお前なんか

渡したくない。

誰にも譲りたくはない。

でも……」

俺のやってることは間違っていたのか……?

まるで大地の裂け目に

飲み込まれるように、俺の精神が絶望に落ちていく。

俺が今までやってきた事は、

一体何だったんだよ……。

所詮俺は女の子を欲望のままに

弄ぶだけのクズ野郎なのか?

パシッ……！

乾いた音が響いた。

はっと気がつくのとディオドラの頬が打たれているじやないか。

アーシアの手によって……！

「いくら何でも今の言葉は

許せません。私にとっては

イツセーさんが全てです。

イツセーさんの心がどこに

あつても構いません！

私は私の心に従って行動します！」

アーシアが怒りに震えながら

ディオドラの前に

立ち塞がっている。

奴にビンタした手を握り締めて。

「アーシア……」

俺は呆然と呟く。

するとアーシアは振り返ると俺に微笑みかけた。

「大丈夫ですよイツセーさん。

私はずつと貴方の側に……。

例え世界が敵に回ろうとも、

どんな障害が立ちはだかつても。

それが私の望みであり願いだから」

そう言うときアーシアは俺に抱きついてきた。

その温もりに俺はようやく落ち着きを取り戻す。

「ふん……。アーシア。

君はどうやら兵藤一誠君のことを

深く愛しているようだね。

美しいな……。本当に美しい。

キミのような娘が僕のものに

なってくれたらと願わずにはいられないよ」

ディオドラはアーシアの美しさを絶賛するが、  
アーシアはそれを聞いても動じず、  
毅然としてディオドラに告げる。

「申し訳ありませんがお断り致します。」

それに……もう遅いのです」

「ん？ どういう意味だい？」

それは……まさか……」

ディオドラは俺とアーシアの  
関係に気付いたようだったが、  
アーシアは続けた。

「そう、

私たちは既に結ばれていますから」

「な、何ですって……!?!」

ぐう……黙れ……!」

僕はどんなアーシアであろうと……!」

彼女を……! 彼女だけを……!」

シヨックなのかディオドラは

青ざめるだけでなく

オネエ言葉になっていたが

すぐに元の言葉に戻った。

「ま、まあいいや……!」

気の迷いや

一時的な感情かもしれない。

けど覚えておくといいよ。

アーシア、君はいずれ必ず僕に感謝する日が来る。

アーシアは……私のもことになるのだからね……!」

ディオドラは捨て台詞を残して去っていった。

だがそんな奴よりも今はアーシアが大事だ。

俺はアーシアを抱き寄せて言った。

「アーシア、ごめん……。」

俺は君の事を考えていなかった」



「いいんです」

アーシアは俺を許してくれた。

けど、俺は自分が情けないぜ……。

結局はハーレム作りにかまけて、

肝心なことを忘れていたなんてな……。

それにしても処女じゃなくなった

だけであんなにシヨツクを

受けるものなのか……？

じゃあ何れは安里も……。

ルイーナちゃんの処女を

奪ってしまった俺の事も、

いつか恨むのだろうか……？

「あの、イツセーさん？」

「な、なんだ？」

「お願いがあるのですけれど……。

今夜、一緒に寝てもよろしいですか？」

「え……？」

「だって、最近は一人で寂しかったですし、

今日は私のせいで大変でしたでしょう？

だから少しでもいいので……ダメ、ですか？」

アーシアが潤んだ瞳で

俺を見つめてくる。

「ああ、いいよ」

アーシアの可愛さにやられた俺は

即答してしまった。

アーシアと一緒にベッドに入ると、

アーシアが甘えるように

すり寄ってきた。

「イツセーさん、

少しだけこのままでも……」

「構わないぞ」

アーシアは安心したように微笑んで、  
そのまま眠りについた。

(アーシア、

俺はお前を、

いや皆を絶対に幸せにする……。

そうしなければいけないんだ。

例え自分を捨てても……)

俺はそう決意して瞳を閉じた。

アーシアが側にいてくれたから

だろうか？

凄く安らかな気持ちで

俺は眠りについた。

↓

安里Side

そんな訳でアザゼルのおっさんから

ルイーナがリアスさんのチームと

レーティング・ゲームを

する事になったと聞かされた。

面子はリアスさん、

朱乃さんと小猫ちゃんに祐斗、

ギヤスパー、アーシアちゃん、

そしてイツセーだ。

「まあ、色々あつてイツセーは

赤龍帝の鎧を封じられて万全じゃないし、

アイツらが裕斗を除いて

伸び悩み気味でなあ……。

ここいらでシヨック療法も

ありかと思つてよ……」

おっさんが煙草に火をつけようと

したがスコグルさんが目にも止まらぬ拳で

煙草を握りつぶす！

「ルイーナは煙草嫌いだからさ、  
やめてくんない？」

「……悪い」

おっさんが素直に謝るなんて  
珍しいな、明日は雨が降るん  
じゃねえかな？

しかし、スコグルさんとルイーナ、  
いつの間に仲良くなっただろう？

ま、ルイーナに俺以外の頼れる  
誰かができるのは良いことだ。

「それにその言い方だと

アタシらをかませに使うって

聞こえるんだけど」

「別にそういうつもりはない。

あいつらはまだまだ発展途上だ。

今回の件は丁度いい経験になるだろうよ」

「ふうん、そう」

「それにお前もそろそろ次の段階に

進んでもいい頃合いだと思うがね……」

次の段階？ ああ、禁手化か！

確かに『忌まわしき狩人』や

『燃える三眼』の力を完全に

使いこなせるようになったら俺も

もつともつと強くなれそうだ。

そうすればもつと……。

ぎゅっ、とその時

袖を握られた。見るとルイーナが

不安そうな顔をしている。

「どうした？」

「安里さん、怖い人にだけは  
ならないで下さいね……」

「大丈夫だよ。

俺にはルイーナがいるから」

「……はい」

そう言っつて俺はルイーナの頭を  
優しく撫でた。

この娘のためなら俺は悪魔だろうと  
邪神だろうと何にだつてなつてやるさ……。

「貴方、

主の話聞いていたんですか？

まるで彼女のためなら命もいら  
ないみたいな顔をしていますけど？」

アヴェンジャーから厳しい

言葉が飛んでくる。

俺はそれを笑つて流した。

「ははは、バレたか」

「全く、

本当に馬鹿なマスターですね。

理解できません」

「そ、そうかな……？」

けどアヴェンジャーだつて、

復活を果たしてまで

復讐したいと思う程に

昔は誰かを想ったり、

愛したんじゃないのか？

とも思つたが、

それは言わなかった。

「それはそうとして

今回はニグラが不参加だ

そうですねから私が『女王』を

代行して宜しいかしら？」

「あと、くろかもぼるくも

いないからな。キユクロが  
てをかしてやる」

今俺達は

アザゼルの人工神器で

悪魔に擬態しているから

二人は特に問題ないらしい。

となると、アヴェンジャー、もとい

ジャンヌが女王、キユクロが兵士に

なるって事か？

「その事なんですが……。」

今回はアヴェンジャーさんが

僧正、キユクロさんが戦車を担当してくれますか？」

ルイーナがおずおずと言った。

するとアヴェンジャーがみるみる不機嫌になった。

「私が？ 僧正？」

ハッ！ 悪魔的なジョークにも

限度があるでしょう？」

「なんだ、ちゆうにびようは

あまさんになるのはいやなのか？」

「尼さんじゃないわよ！」

あと厨二病って言うな！

いい加減燃やすわよアンタ!!」

ほっ、と俺は安心した。

キユクロのとぼけた発言のおかげで

一触即発の空気が和んだ

からだ。

「と、いわれても

キユクロはおまえのかこを

しらない。

しらないから

きょうのおまえのことしか

キユクロもきゆうどーも  
わからない。

わかってほしいなら  
むかしのじゃんぬのことをはなせ」

「……」

「……わかりました。

今回だけ特別に私も  
僧正粹で

参加させて頂きましょう」

キユクロの言葉に渋々ながら  
納得した様子だった。

まあ、まだ俺とジャンヌには  
過去を話してくれる

信頼関係ができていないワケか……。

いつか、彼女が心を

開いてくれる日が来るといいんだけど……。

「くるといいな、では

いつまでたつてもきょうのままだ  
きゆうどー」

だからお前は妙な所で鋭いな！

お前の眼帯で抑えててもそれなら  
解放したらどうなるんだ……？

しかし、そうなる

女王粹がいらないんだけど？

「ああ、そのことならさ。

今回はアタシが兵士って事で」  
するとスコグルさんが俺の疑問に

答えてくれた。

「いいんですか？」

「うん、今回のルイーナのチームには  
女王がいらないじゃん？」

だからアタシが『プロモーション』を  
発動させやすくなるし、  
向こうもこつちを手薄と  
見れば守りじゃなくて  
ガンガン来ると思うんだよね。  
向こうの赤龍帝も釣り出しやす  
くなるし……」  
赤龍帝？ イツセーって言えば  
良いのに随分言葉の響きが  
冷たいな……？

「イツセーって言ってもいいスよ」  
「……」

俺の呼びかけにスコグルさんは  
答えなかった。

そうか！ スコグルさんは  
イツセーを鍛えるために  
ガチでやろうとしてくれているのか！  
いかんいかん！

俺も気を引き締めないとな!!  
遊びじゃねえんだぞ、  
レーティング・ゲームは！  
と、決心した辺りで

ルイーナが作戦の話が続けた。

「それと、  
もう一つお願いがあります」  
「ん、なんですか？」

「もしも、私が危なくなったら  
助けに来てくれませんか？」

「勿論！」

俺は迷わずに返事をした。

「ありがとうございます。」

でも、これはあくまで私達の修行なので、  
安里さんは自分のことを一番に考えて下さいね」  
そう言つて微笑んでくれた。  
この娘のためにも明日は  
気合入れて頑張らないとな……。。



## 第55話

そして、いよいよ運命の時は来た。

グレモリー眷属の

リアスさんチームと

ムールムール眷属の

ルイーナチームの

レーティング・ゲームのために全員が集合する。

メンバーは俺、ルイーナ、アヴェンジャー、

キユクロ、スコグルさん。

対するグレモリーチームは、

リアスさんと朱乃さん。祐斗に小猫ちゃん、

アーシアちゃん、ギヤスパー、そしてイツセーだ！

うくん、数は劣るが

こっちは少数精鋭だからな。

陣地制圧がメインのルールに

ならなければ問題ない。

「リアス様ー」「リアス様ー！」

「おっぱいドラゴーンー！」

やはりグレモリー領ということも

あるのか観客の殆どが

リアスさん達を応援している。

や、やりづらい……！

そんな中、審判役である

グレイフィアさんからルール説明が行われた。

「今回皆様に行っていたただくゲームは”王”を討ち取るか敵陣にある旗を破壊することで勝利となる

『フラッグ戦』です」

”王”とはこの場合

ルイーナとリアスさんのことだ。

リアスさんを倒せて言われても

それは至難の業。  
旗をぶつ壊した方が  
手っ取り早いかもな。  
それにこれは飽くまでゲームだ。  
命のやり取りをするような  
ものじゃない。

「今回は両陣営共に同じ数の兵士でございます。  
ただし、兵士には昇格・降格の概念があり、  
それにより各駒の役割が変化します」  
ふむふむ。と言っても  
お互い兵士は一人ずつ。  
スコグルさんとイツセーだから  
あまり難しく考える必要は  
なさそうだ。

「安里さんは木場さんを  
キユクロさんは朱乃さんを  
抑えて」

戦闘直前に指示を出すルイーナは  
すっかり一人前の王に  
相応しい風格になった。

この短期間でよくぞここまで……。  
あのおどおどして誰かに従う  
だけだった子とは思えない成長ぶりだ。

俺もルイーナの騎士として  
鼻が高いよ……。

「さあ、始めましょう。  
私の可愛い眷属たちよ。  
私の為に存分に戦いなさい！」

「おうっー！」  
そう高らかに宣言し、  
戦闘開始の合図が鳴る。

まずは俺とキュクロが前に出る。  
果たして申し合わせた様に  
祐斗と朱乃さんが応じてきた。  
祐斗のスピードや朱乃さんの  
広範囲の雷撃で旗を壊されたら  
あつさり敗北するのは目に見えている。  
ここは慎重に攻めよう。

「行くぜ、キュクロー！」

「うむー！」

俺は『武態』により片腕を  
巨大な機械の多頭腕に変化させ、  
その腕を大きく振りかぶる。

「いっくぜええええええッ!!」

雄叫びをあげて

勢い良く腕を振り下ろす。

だが祐斗はそれを冷静にかわす。

そしてすかさず剣を構えた。

『魔剣創造ー！』

直後、地面に降り立った

俺に向かつて無数の魔力刃が迫る！

だが、問題はねえ！

寧ろ好都合だ！

頼むぜ『冥獄長の辣腕』よ！

(これがメカメカ爺さんの

加護なのか？

腕の一本一本が

独立して動くなんて!?)

そして数十本の機械の腕は  
地に生えた魔力刃を掴むと  
そのまま全てを引き抜く！

「何だって!?!」

驚く祐斗目掛けて

今度は全ての魔力刃を投げ返す！

剣林弾雨！ 魔力刃のスコールだぜ！

シュバババババツ！

「うおおおおおっ！」

祐斗は咄嗟にそれを切り落とすが

防ぎきれず何本かの刃が

木場に迫った！

や、ヤバい！ 大丈夫か!?

「雷よー！」

朱乃さんの声と共に

天より雷が落ちる。

ズガアアアツ!!

木場が払い損ねた魔力刃は雷に

よって碎かれ細やかな破片となって飛び散った。

ナイスアシストだぜ！

流石朱乃さんだ！

……って向こうは敵チームだろ！

何ホツとしてるんだよ俺は!!

まあでもこれで

祐斗の動きもある程度

封じられた筈だ。

「成程、流石はイツセー君の

親友ですわね……忌々しいこと」

ドSな笑みを浮かべつつ、

朱乃さんは標的を旗から

俺達に切り替えようとしてくる。

当然それは許さないけどな。

「いくぞ、どえすおんな」

「失礼な、私は少々趣味が過激な

だけでしてよー！」

キュクロの言葉に朱乃さんは不機嫌そうな顔を見せた。

怒る所はそこなのか？

っていうかどっちも大概だと

思うんだけどな……。

「ほんらいはケラウノスを

ねだったがじーじがくるかに

あげてしまつたらしい。

だからこれをつかう」

あのエロジジイ……!!

一体何を考えてやがんだ!?

メカメカ爺さんが嘆くワケだぜ……!

「そんなワケでこれはてんくうをきりさく

『アダマスの大鎌』だ」

そう言うときュクロは

自分の倍はある刃渡りの大鎌を出現させた。

……!?

な、何だかあの鎌を

見るだけで股間に寒気が……!

あれは絶対ろくでもない代物だ。

キュクロの奴、

とんでもないモン出しやがって。

「さあ、かかつてこい」

「では遠慮なく!」

キュクロと朱乃さんの戦いが始まると

祐斗も再び『魔剣創造』を

発動させた!

しかし今度の狙いは旗の一つだ。

どうあっても旗は潰したいようだ。

だがキュクロも黙っちゃいない。

「むっ、させないぞ」

アダマスの大鎌を振るうと、  
祐斗が生み出した魔力刃を  
全て刈り取ってしまう！

あの馬鹿デカイ得物を自在に操りながら、  
あんな繊細な動きまで出来るのか!?  
つくづく規格外だよお前は！

「ふっ、ならばこれならどうかしら？」  
すると朱乃さんの体の周りに  
バチバチと火花のような物が見えた。  
まずい！

「こっちだぜー！」  
俺は咄嗟に『冥獄長の辣腕』を  
解除して、触手へと変化させると  
地面に展開し、屹立させた！  
即席の避雷針だ！  
バリバリイッ!!  
朱乃さんの雷撃は  
俺の展開した触腕で吸収できた。

「あら、  
外してしまいましたわね……」  
朱乃さんは残念そうな顔をした。  
残念ながら無効化させただけじゃ  
ねえんだなあ！　これが!!

「サンダー・シヨットオー！」  
イツセーのドラゴンシヨットの  
雷版って奴だ！  
他ならぬ朱乃さんの雷なら  
威力はメーカー保証付きだ!!

「うぐううっ!!」  
まともに食らった朱乃さんは  
片羽根を抑えて一旦着地した。

大丈夫か……？

「きゅうどー！ たたかいに

なさけはきんもつ！」

いや、キュクロ……！！

そうは言うけどな……。

と、俺が追撃を躊躇っていた

その時！

「ふざけているのかあーツ！！」

！！

祐斗らしからぬ声量と共に

一瞬千撃というべき

不可視の剣閃が俺達に放たれた！

ズババババ！ ザクザクツツ！！

その一撃はキュクロの肩当てと小手を破壊し、

更には俺の触手を全て切り落とした！

「うおおおっ！」

「きゃあっ！」

もう抜きやがったのか!?

アイツの禁手化された聖魔剣

『福音呼びし勝鬨の剣』を！

祐斗から凄まじいオーラが

溢れ出す。

髪は伸び、胸はせり出し

イザイヤさんと融合した時の

姿になった。

これはヤバイ！

今の祐斗はイツセー並だ！

「よくも、僕達の勝負を

侮辱してくれたな……！！

この借りは必ず返させてもらうよ……！！」

祐斗は怒りに震えていた。

くそ……！ まさかこんな事になるなんて……！

俺は心の中で歯噛みしていた。

だが良く考えれば

祐斗の怒りはもつともだ。

この場では皆真剣なんだ。

だが俺はどこかで試合というか

ゲーム気分が抜けていなかった。

だからつい朱乃さんに追撃を

躊躇ってしまっただ。

だが祐斗は違う。

アイツは

この戦いを本気で勝ちに来た。

そしてそれは俺も同じ筈だった。

なのに……！

「キュクロ！ ここは俺に任せろ！」

「うむ、わかった」

キュクロは素直に承諾して

アーシアの遠隔回復を受けて

回復した朱乃さんへ攻撃を開始した。

↓

イツセーSide

朱乃さんと祐斗が二人に

押されている……!?

どういう事だよ!?

あの二人が同時に相手をして

引けを取らないなんて……！

「部長、祐斗達は一体どうなってるんですか!？」

俺は焦り気味でリアさんに尋ねた。

すると通信用のインカム越しで

返答があった。

『あの二人が私達の想像よりも



成長していた様ね……。

けどアジアの『聖母の抱擁』と

人数の優位は変わらないわ。

落ち着いて対処すれば問題無いでしょう』

「そんな……。」

でも、確かにそうですね。

すみません、取り乱しました」

そうだ、冷静になれ。

ここで俺が動揺したら皆を不安がらせちゃう……！

『いいえ、謝る事はないわ。

寧ろ貴方は誇るべきよ。

それに、私の眷属達も決して弱くは無いの。

信じてあげましょう？』

「はい、そうですね」

俺が落ち着きを取り戻すと、

敵陣の旗を破壊する！

「か、隠されているのは

向こうですう！」

「にゃー！」

小猫ちゃんも籠に入った

ギヤスパーを背負いながら

隠されていた旗を破壊する！

ようし、これで後二つだ！

「あら、思ったよりも

早い到着ですね……？？」

「アヴェンジャー……ちゃん!？」

高い所に陣取る彼女の背後には

旗がたなびいている。

どうやら彼女が

旗の守り手らしい。

「どうしました？」

私に攻撃しないのですか？  
あと、ちゃん付けするな」

「……！」  
くっ！

今すぐ変な意味じゃなく飛びかかりたい所だけど、  
迂闊に飛び込めば

彼女の罠にはまる可能性がある。

ここは慎重に行くしかない。

……とは言つても、このままだとジリ貧だ。

何か打開策を考えないと！

俺が悩んでいると、

突然アヴェンジャーが口を開いた。

「さっきから黙って見ていれば、

随分余裕があるみたいですねえ。

なら、少しは面白い物を

見せてあげましょう！」

彼女はそう言うと、

腰から燃えあげる剣を掲げ

高らかに叫んだ！

「……顕現せよ、我が幻想の

御旗よ！ 忌まわしき記憶と共に！」

ズダダダダッ!!

「なっ!? 何だこりゃあ!?!」

突如としてアヴェンジャーの

背後から数十……いや、数百の

旗がたなびく焼けた鉄杭が現れた！

あれじゃどれが

本物の旗か解らないぜ……!?!

「我が異名は竜の魔女！」

ならば、これは如何でしょうか!?!

鉄杭よ！ その身を飛龍の牙となし

我が怨敵を噛みちぎれっ!!」  
ズドドドンッ!!

今度は鉄杭の雨が降り注ぐ!

「ぐっ! 避けきれない!」

「ひいひい! 怖いですううう!」

「……えい」

バシユン! バキイ! シュバツ!

俺達は黄金の剣、小猫ちゃんの

拳、そしてギヤスパアの時間停止で

次々と迫る鉄杭を撃ち落としていく!

「な……!?! 馬鹿な!?!」

我が宝具をこうも容易く……!?!」

アヴェエンジャーは驚愕しているが、

今の俺達に油断なんて微塵も無い!

「貰ったあ!!」

アヴェエンジャーちゃんが

女の子である限り

『衣服破壊』を行えば

確実に勝てる筈だ!

俺は全力で飛び上がると

腕に魔力をチャージするが……!

「なんちゃって……!」

何と彼女の背後から竜を模した

二門の大砲が現れた!!

照準は当然の様に俺……!

く、空中じゃ逃げようがないっ!!

「我は放つ……! 地竜の咆哮!」

ズゴオオオオツ!!

文字通り地竜が咆える様な砲撃が

俺目掛けて放たれた!

「うおおおおおっ!?!」

俺は咄嗟に黄金の剣と

ドライグの右腕でガードしたが

衝撃までは殺せず吹っ飛ばされる！

そしてそのまま

地面に落下してしまう。

「かはっ!？」

受け身を取る余裕もなかったから

モロに背中から

叩きつけられてしまった！

「先輩！」

「イツセー先輩！」

二人が心配して駆け寄ってくる。

だが、そんな事を気にしている

場合じゃない！

ドライグの力を封じられている

今、アヴェンジャーは

間違いなく強敵だ！

けど、まだ立てる！ 動ける！

アーシアの回復だってあるんだ！

俺は歯を食いしばり立ち上がる！

「あらあら、随分タフですね……」

流星は伝説の赤龍帝といった所ですか……

でも、これで終わりです」

「……それはどうかしら?」

「え?」

アヴェンジャーが疑問を口に出すと、

上空からリアスさんの声が

聞こえてきた。

すると空からアヴェンジャーめがけて

夥しい魔力弾が降り注ぐ!!

「又ウウ……!」

齒噛みしつつアヴェンジャーは  
背中に一本の旗をくくりつけると  
鉄杭を城塞の様に展開して防御した！  
という事はあの旗が本物だな！

「王が兵のために死地に赴くなんて……！」

本当に愚かな人達ですね……！」

「そうね、私は人じゃなくて

悪魔だから♪」

「減らず口をツ!!」

ギン！ ギン！ ガアアンツ!!

アヴェンジャーが撃ち落とすよりも

遥かに速く、そして多く

リアスさんの魔力弾が襲い掛かる！

「チィイ……い……！」

さすがの彼女も鉄杭を使つて

魔力弾を防ぎきる事が出来ず、徐々に被弾していく！

しかし、それでも尚彼女は不敵に笑い続けた。

「フ……フフフ……い……！」

確かにこの数を相手にするのは骨が折れますが、

私にはまだ奥の手があります！」

彼女はそう言うと、

旗に火をつけた……!!?

いや、そうじゃない！

彼女の旗から生まれた炎は

勢いを増し

やがてドス黒い炎の杭に

なっっていく……!!

『滅びの魔力』!?

まさか……バアル家以外の

ものが扱える筈なんて……！」

よくわからないが

相当にヤバい攻撃を

リアスさんに放とうとしているのは

バカの俺だって解る！

このままだと部長達が危ない！

「よし……！」

俺は覚悟を決めると黄金の剣を構えた！

「ふうー……！」

深く息を吐いて集中する。

狙うのは……彼女の持つ旗！

「これは憎悪によつて磨かれた我が魂の咆哮……！」

『ラ・グロンドメント・デュ・ヘイン  
吼え立てよ、我が憤怒！』

ドオオオオンツ!!!

アヴェエンジャーの詠唱が終わると

巨大な漆黒の炎の杭が

リアスさんに向かっていく！

「させるかあっ!!！」

俺はリアスさんの前に

飛び上がり

その一撃を黄金の剣で迎え撃つ！

「ぬうんっ!!!」

「……なっ!？」

俺の行動が予想外だったのか

アヴェエンジャーは驚愕していた！

そりゃそうだろな！

だって俺ってば

バカだから後先考えないからな！

けど、それでいいんだよ！

「おおおおおおおおおっ!!！」

俺は雄叫びを上げながら

アヴェエンジャーちゃんに

『衣服破壊』を発動させた！

シユバツ!

彼女の着ていた服が一瞬で消え去る！  
そして……………!

「おっしやあああつ!!」

今こそ

アヴェンジャーちゃんのおっぱいを!!

……………つてあれ?」

こんなの男なら耐えられるワケが

ないだろ! しつかり

脳内フォルダに収めるべく

彼女の裸を目に焼き付けねば……………!

そして今、アヴェンジャーちゃん

の下半身を覆うのは、

水着のような薄い布切れ一枚……………!

というか黒のビキニ姿!?

「何するのよこの変態がつ!!」

ビキイツ!!

「ぐ……………うああああ……………」

見舞われたのはある意味黄金の剣を

打ち砕く必殺の一撃……………!

股間蹴りだった……………!!

俺はあまりの痛みに倒れ伏す。

い、息が出来ないし……………

冷や汗も止まらない!

こ、こんなの男なら

耐えられる訳がないだろ!?

「た、大変ですう!

あれじゃイツセー先輩が!」

「イツセー先輩……………しっかり!」

小猫ちゃんが駆け寄ってくる。

だけど俺は今それどころじゃない!

何とか気力で立ち上がる！

「み、皆は早く逃げてくれ……。」

コイツは俺が倒す……！」

しかし足に力が入らない……！」

膝が震えて立っているのがやつとだ。

それにもう体力的にも限界に近い。

でも、だからこそここで

逃げる事は許されないんだ……！」

「そんな状態で何を言っているの！

ここは私に任せなさい！」

「いいえ……！」

王のために命を賭けずに

何が兵士ですか！ リアスさん！」

と、俺はリアスさんを制する。

すると、アヴェンジャーちゃんは

ため息をついて言った。

「ハア……、

アンタカッコつけるのはいいけど

キン○マ蹴り飛ばされて

ヒイヒイ言っているだけでしょ？

何一世一代の見せ場みたいになるワケ？」

……。

お、女の子が皆の前で

下品な事を言っちゃいけません！

それに口調が碎けすぎ!!

「ま、まだ……戦える！」

俺は歯を食い縛ってアヴェンジャーに向き直る。

すると彼女は呆れたように呟いた。

「バカバカしい……やめとくわ。」

アンタじゃ私の乾きを癒せそうにない。

私の「乾雲」と「坤竜」も



「そうだそうだとやっているし」

「……………？」

「ぶっ……………」

「あ、わ、笑っちゃダメなのに

笑っちゃいましたあ！

「ごめんなさいいいい！」

ギヤスパーはそう言って涙目になりつつ

笑いを抑えている……………！

「そ、それにしても……………」

「外人さんなのに日本刀って……………」

「二刀流って……………」

「い、いかん……………」

「笑うのを堪えなければ……………」

「……………怒らないで下さいね。」

「刀が喋ると思う

「なんてバカみたいじゃないですか」

「ダメよ小猫!!」

「人は本当の事を言われると

「一番傷つくのよ!」

「ううう……………」

「部長の言葉に思わずうずくまる俺。

「フッフ、この旗はあげます。」

「くれてやるわこんなモン!

「ではまたどこかで会いましょう。」

「その時はお互い

「敵同士かもしれませんが……………」

「てゆーか敵よ!

「絶対アンタら顔だけ出して浜辺に

「埋めてやるんだからあ!!」

「そう言うとな彼女は踵を返して去っていった……………」

「涙目で……………」

悪い事したかな……？

けどこれで旗は残り一本！

リアスさんがアーシアの所に

戻ればこっちの守りは万全だ！

後は残った奴らを片付けるだけだ！

「さあ、あとちよつとだな！

一気にカタをつけてやるぜ！」

「そうだね」

!?

酷く冷たい声に振り返ると

そこには試合前と全然雰囲気

違うスコグルさんがいた！

明らかにヤバイ……!!

ガシイッ！

顔をアイアンクローの要領で

掴まれる！

「うぐっ……！」

間髪入れず、スコグルさんは

地面を叩き割り、陥没させた！

のみならず俺をさらなる地下へと叩き落とす!!

「がはっ……!!」

な、なんだこれ……!!

息が出来ない！

そして視界に広がるのは

墓碑……!?

「好きな所を選びな」

!?

いつの間にか目の前に現れた

スコグルさんのその一言は

まるで吹雪の様だった。

ドゴオオオオッ!!

反応する間もなく俺は墓碑へと  
蹴り飛ばされた！

な、なんて威力だ……!?

アヴェンジャーちゃんの

大砲よりも衝撃的だぜ……!!

墓石に激突し、全身に激痛が走る！

「ぐっ……!」

く、くそ……!こ、このままじゃ

本当にやられちまう……!!

スコグルさん……まさか俺を殺す気か……!?

「そっだよ」

「!？」

な、何だと……!?

剥き出しのスコグルさんの殺意に

俺は身震いが止まらない……!!

まるで裸で雪中に放り投げられた気分だ……!!

「アンタ、苦しいだろ？」

親友を裏切って親友の初恋の

相手を傷つけた事をさ……?」

「……うっ」

そっだ……。

確かに俺は安里を救うためとはいえ

ルイーナちゃんに……。

「だから安心して下さい。

兵藤一誠さん」

!?

今度はルイーナちゃんが!?

王が直接陣地に来るなんて何のために!?

「貴方の罪は私が許します。

だから……」

「ル、ルイーナちゃん……」

ザクッ！

何とルイーナちゃんは自分の  
掌をナイフで刺した！

忽ち血がナイフに滴り、

墳墓の大地に染み込んでいく。

「……死んでくれませんか？

そうしたらもう二度と苦しまずに  
すむでしょ？

濃めよ、留めよ、血に満ちよ……

忌避<sup>ネ</sup>す<sup>ク</sup>べき<sup>ロ</sup>懊<sup>フ</sup>死<sup>オー</sup>の<sup>ビ</sup>醸<sup>ア</sup>造<sup>ー</sup>」

## 第56話

イツセイSide

何とルイーナちゃんは自分の  
掌をナイフで刺した！

忽ち血がナイフに滴り、  
墳墓の大地に染み込んでいく。

「……死んで下さい。」

そうしたらもう二度と苦しまずに  
すむでしょ？」

ルイーナちゃんはさながら燐火の  
様に瞳を輝かせて言った。

こ、これは……！！

「い、いかん！ 皆避けてくれええ!!」

俺は大声で叫んだ！

しかし次の瞬間、地面から

鳶で編まれた大蛇の様なもの  
数匹俺に襲いかかった！

「うおっ……!!?」

俺は黄金の剣を

引き抜き襲ってくる蛇を切り払う！

な、なんつー力だ……！！ そ

れにこの魔力！ これがルイーナちゃんの力なのか!?

「フッフ……。凄いでしょ?」

た、確かに……！！

切った側から鳶が復元し、更に増えていく……！！

しかもそのスピードは

どんどん速くなっていく！ だが……！！

「こんなものおっ！」

俺は迫り来る鳶の群れを切り払い、  
切り裂いて、ひたすら前進していく！

前進して！ 前進して……！  
どうする？

また、ルイーナちゃんを  
傷つけるのか？

俺の一方的な都合で……!?

……俺はルイーナちゃんを

切れない……!!

俺はどうしても……!!

でもこのままじゃあ……!!

「切らないんですね、私を」

ルイーナちゃんが寂しげに呟いた。

そして彼女は自らの身体から血を流す。

それはまるで彼女の涙の様に見えた。

「私の事なんて

どうでもいいんでしょね……。

どうでもいいから気まぐれに

傷つけたり、守ろうとする」

「違う！ そんなんじゃない！」

「だったら何故攻撃しないんですか？」

チクシヨウ……

自分の都合ばかり言いやがって……

「!? ち、違う！ 俺はそんな事は

考えていない！」

「ならどうして攻撃して来ないんですか？

貴方が本気になれば私なんて

簡単に倒せるはずですよね？

答えられないじゃないですか。

私を弄んで、バカにして……。

つまりそういう事でしょ？」

へッ、俺は最強の赤龍帝で

選ばれた存在なんだ！

俺は強いから何をしたって

ユルサレルノサ!

「そんな事、俺は……!!」

誰だよ! 俺を惑わそうとする

この声は!!

「やっぱりそうなんですわ……。」

最初から分かってましたよ……。

貴方にとって私は……」

「黙れえええ!!」

俺は黄金剣を振りかぶる! その時だった。

「ッ!」

ドゴオツ!!

スコグルさんの

強烈なボディブローが

俺の腹部を打ち抜いた!

俺は吹き飛ばされて地面に叩きつけられる!

「グハアッ!」

そして顔を上げた瞬間に

トーキックが顔面に迫る……!

「ガハッ!」

血飛沫が舞い、

視界が歪む……!

俺は何とか立ち上がり、

スコグルさんの方を見た。

まるで豚を見る様な残酷で

冷酷な目だった。

クソ……何だ、その目は……!

恩知らずめ、恩知らずめ、

オンシラズメエエエ!!

違う! 違う! 違う!!

そんな事俺は……! 俺は!!

(考えてないなんて本心から

言えるのか?)

(どいつもこいつも表では

善人面して汚い事ばかり考えて

やがるからなア)

(そうだろう? お前もそう思うだろう?

だからほら見ろよ、あんなにも

沢山の人が死んでしまったじゃないか!

ああ、哀れだ! 実に哀れだねえ!!)

(だから、アイツら殺つちまおうぜ?

俺達の力を使えば簡単だぜ?)

俺は……俺は……

「しやらア!」

スコグルさんの回し蹴りが迫る……!

俺は咄嗟に左腕でガードしたが

衝撃に耐えきれず吹っ飛んだ!

「ぐあっ!」

恐らく左腕が折れた……!

だがアーシアの『聖母の抱擁』が

あれば回復はできる……。

だから……!

ルイーナちゃんの放った

魔力弾の雨が降り注ぐ!

「うおおおおおおおっ!!」

俺は叫びながら黄金の剣で

攻撃を防ぎ、更にスコグルさんの

拳を全て受ける!

ドカツ! ベキツ! グシヤア!!

ボコツ! バキイ!

何度も、何度も、何度も……!

骨は折れ、肉は弾け、内臓は



破裂する中俺は痛み悲鳴を上げそうになる……。

だがアシアに回復して

もらうことで己の心を叱咤し、

奮い立たせた！　ここで倒れたら、

それこそルイーナちゃんを傷つけてしまう……！

俺はただ、守りたいだけだ……！

破壊じゃない……！

守るための力があるはずだ……！

その為の力を

俺は手に入れるんだ……！

↓

アシアSide

イツセーさんの痛み……。

ルイーナさんの悲しみ。

そしてスコグルさんの怒り。

様々な感情が陵墓内に渦巻きます。

私は祈る事でイツセーさんの傷を

癒やしていました。

本当は辛いです……。

ルイーナさんやスコグルさんが

イツセーさんに

酷いことをするのは嫌です。

でも、私には祈る事しかできません。

ですが目を逸らしてはいけません。

私が信じなくてどうするんですか？

きつと、大丈夫……。

私は自分に言い聞かせました。

その時でした。

「……っ。」

私は不思議な感覚に襲われました。

これは一体なんでしょう……？

温かい何かに包まれている様な……。  
まるでお母様の様な……。  
そして、私の背中を誰かが  
そつと撫でてくれました。

「……」

振り返るとそこには  
ゲイトさんがいました。

「……頑張っているね。」

少しいいかな？

時間は止めているから

安心してほしい」

そして彼は優しく微笑み、  
私に語りかけてきました。

「はい」

私も笑顔で返します。

……不思議ですね。」

イツセーさんと

この人の前だと自然と笑える。

「君が望むなら、

時を巻き戻す事ができるかもしれない」

「!? どういう事ですか？」

「……どうやら禍津星が

彼女達の『愛憎』の念を

観測し始めている。

今、彼等が具現化してしまえば

『滅びの未来』は

回避できないものになり得る。

それならばいつそ、スコグルが

兇弾に撃たれる前までに

時を巻き戻せばいい」

「そんな事が本当に可能なんですか!？」

「可能性はある。」

『滅びの未来』を回避できるかどうかは、君達次第だ。さあ、準備は良いかい？もう時間がないよ……」

ゲイトさんの言葉は

抽象的ですが真実味がありました。

うう、私がもう少し頭が良ければ

もっと具体的に理解できたのですが……。

でも、私にだつてわかります。

大切なのは気持ち。

なら……！

「それは、待つて下さい……」

「何故だい？ 『滅びの未来』が

回避できなくなってもいいのかい？」

ゲイトさんは私に尋ねます。

その口調は優しく静かで、

私に怒っていたり、批判している訳ではありません。

むしろ、私の身を案じて下さっている

様に感じられました。

だからこそ、私は伝えなければ

ならないと思いました。

「はい、構いませんー」

「どうして？ このままでは

君の大切な人が死ぬ事になるんだよ？

それでも構わないと言うのかい？」

「その……」

その可能性はあります。

寧ろ、巻き戻した方が正解なのかもしれません。

それでも……、それでも私は！

「自分達のしたことが例え

過ちでも、なかった事にはしたくないんです……。

私も、きつとイツセーさんも」

私は助けを求めてきた悪魔さんを

助けた事で、追放されました。

けどその事でイツセーさんや

安里さんに出会えて、

友人になり結ばれる事ができました。

私は自分の意思で行動しました。

後悔や未練もあります。

ああすればよかった、

こうするべきだった、

そんな事はしよつちゆうです。

でも、それでも……。

「自分に都合の良いものしか

残さない世界はきつと

歪んだものになってしまいますから。

それは神の御心に最も反することです」

私はそう言つてゲイトさんに笑いかけました。

「……ふう」

するとゲイトさんは

小さくため息を吐きました。

あうう……、呆れられてしまったのでしょうか？

でもゲイトさんはにこりと微笑みかけてくれます。

「君は、強いね。」

僕にはそれが眩しく見えるよ」

そして、少しだけ寂しげに笑うと言いました。

「……わかった。」

君がそうしたいと言うなら

そうしよう。

何故彼や彼女が

君達から知性を得ようとしたのか

解った気がするよ」

？

ゲイトさんのお知り合いの方々が

私達に何かをしたんでしようか……？

私の疑問は解消されないまま時は進みます……。

↓

安里Side

「流石だね安里君！

僕の『福音呼びし勝鬨の剣』に

ここまで対応できたのは

君が初めてだ！」

祐斗が興奮した様子で叫ぶ。

斬撃の瞬間に炎の壁を展開し、

斬撃を受け止めさせつつ

壁と空間ごと破壊したのだ。

だが、祐斗の指の皮もズル剥けに

なる程斬撃には負担がかかっている。

アーシアちゃんの回復も

さつきから中断されているから

向こうは魔力切れなのか？

ならもう少して決着がつくだろう。

ルイーナのためにもう一踏ん張りだ！

『気合が入っている所

悪いんだけどね安里』

っていきなり時間を止めて

出てくるなよゲイトさん！

ビックリするだろうが！！

『ああ、ごめんごめん。

それよりもキミの想い人の

ルイーナが魔道に堕ちようと

している。どうするつもりだい？』

はあ!?

いや、ちよつと待ってくれ。  
ルイーナが？

あの子に限ってそんな……！

『残念だけど、事実だよ』

ならこうしちゃいられん！

そしてゲイトさんが時間停止を

解除した瞬間、俺は走り出した！

「あ、安里君!？」

「こら、きゆうどー!」

どこへいく!

キョクロをおいていくな!」

(……本当に面白い子達だ。

さあ、見せてくれ。

この世界を生きる者達の可能性を……)

「これ以上は危険だ……!」

グレイフィア、リアス。

すぐにレーティング・ゲームを

中断する!」

「いいえ、お兄様。

それではイツセーの覚悟を

軽んずることになります……!」

「そうです。

それに彼は貴方は

私の義弟でもありますから」

」

イツセーSide

「な、何で……?」

何で反撃して来ないのさ!」

スコグルさんは反撃せずに

攻撃を受け続ける俺に

戸惑っている様だ。

「……」

攻撃を繰り返すスコグルさんの表情は焦りと怒りが混ざり合っている様に見えた。

……そう、まるで昔の自分を見ているようだ。

かつて、自分の悪行のせいだ

父さんや母さんたち、

クラスメイトに

迷惑をかけたり、

傷つけてしまったり時の……。

だから、わかる。

今、目の前にいる

彼女は迷っているんだ。

自分達が間違っているかも知れない。

と。

或いはただの八つ当たりかも知れない……。

しれない……。

だけど誰かが彼女達の

怒りや悲しみを引き受けなきや

反省して、前に進み出せないだろ！

……なんて、偉そうな事言っちゃってるけどさ。

俺だって間違える事もあるし、

悩む時もある。でもだからこそ、

「あなた達が抱えているものを

全部吐き出してくれれば、

力になれるかもしれないんだ！」

「ツ!!」

スコグルさんが

ハツとした顔をした。

「……アンタがそれで

良かったってさあ!!」

涙を流しながらルイーナちゃんの

生み出した鳶を拳に纏わせて

スコグルさんはドリルの様に

回転させて殴りかかってくる。

あれを喰らえば流石に

死ぬかもしれない……！

だけど、それでも！

俺は避けずに、その一撃を正面から受けようとした。

「「イツセー（先輩）！」「」

本陣のリアスさんや近くの小猫ちゃん

たちの声を聞きながらも、

俺は目を閉じず、真つ直ぐに見据えた。

そして……。

あれ、痛みがないな……？

それに誰かが、俺を庇って

盾でドリルを防いでいる……!?

すごく綺麗な髪だ……。

「天使様かな……?」

思わず呟くと、

「少し違います」

とその女の人は笑顔を返した。

「ロスヴァイゼー・ どうして!？」

スコグルさんは

同期のヴァルキリーが助けに入った事に驚いていた。

そりゃ俺だってビックリだよ！

「これはもう

レーティング・ゲームではなく私闘ですから」

シュバツ！

同時に縄か網の様なもの

スコグルさんを捕縛した。

「これは……!？」



グレイプニル!？」

スコグルさんは拘束された事に驚き、  
更にそれを為したのが

自分の上司だと知ると目を見開いた。

「そうじゃ、狼……」

いやさ、暴れ牛、いやバカ牛を

捉えるには逃え向きじやろう」

オーデイン様はスコグルさんを

ジロリと見つめると、言葉を

続けた。

「のう、スコグルよ。

ワシはお前に期待しておった。

例えワシがロキ達に敗れる

未来が訪れようともアスガルドを

ロスヴァイゼ達と取りまとめ、

国を導いていけるのは

お主らしか居らぬと思っておったんだがのう……。

しかしお前には、他者への分別、

そして何より思いやりが

欠けておる……。

独断で進むのはバカ牛じゃ。

牛とは本来地道に荷を運び、

田畑を耕し稔らせるものじゃ」

「ぐっ……」

スコグルさんは悔しげに俯き、

唇を噛んでいる。

「確かに、この世界は厳しい。

理不尽なことだらけだし、

不条理なことも多々あろう。

じゃが……転嫁し、誰かを

憎んでは待つのは『滅びの未来』だけじゃ。

だから、もし、まだチャンスがあるなら  
もう一度考え直して欲しい。  
そして、この少年のように  
他者に手を差し伸べて欲しいのじゃ。  
お主なら出来る筈だと信じておるぞ。  
すまなかつたの。

赤龍帝……いや、兵藤一誠。

何れはお主もエインヘルヤルと

して我が国に招きたいものじゃな。

では、さらばじゃ！」

オーデイン様はそう言うのと、

転移魔法陣を展開してどこかへ去っていった。

「……アタシは、

アタシはどうすれば……！」

スコグルさんは頭を抱えながら苦しんでいた。

そんな彼女にロスヴァイセさんが近づき、

優しく微笑む。

「スコグル……貴方にももう、

解っているのでしょうか？」

本当は気づいているはずです。

自分が何故こんなことをしていたのか。

だから、私が止めに来たのです」

「ごめんなさい……。兵藤一誠。

今更謝っても

許してもらえないけど……。

でも、それでも、本当に申し訳ありませんでした」

スコグルさんは深々と

頭を下げてきた。

どうやらオーデイン様と

ロスヴァイゼさんの言葉で

心が洗われた様だ……！」

……でもまあ、

正直スゲー怖かったけどさ！

スコグルさんが謝ってくれたなら  
許す！ 超許す！

あとはルイーナちゃんだけど……

安里が彼女を抱きしめていた。

うん、アイツならきつと大丈夫だろう。

↓

安里 Side

俺が駆けつけた時、

スコグルさんとルイーナが

イツセーをメツタ打ちにしていた！

ど、どういうことだ!?

これじゃリンチじゃねえかよ！

俺は思わず怒りに任せて

飛び出そうとした。

だけど……それはできなかった。

だってイツセーが殴られながらも

真っ直ぐな瞳で彼女達を見据えていたから。

それに気づいた瞬間、

俺の怒りは何処かに吹き飛んでいた。

ああ、イツセー。

よくわからんがお前はあの二人の

怒りや悲しみを引き受けてやるつもりなんだろう！

けどよ、友達ってのは喜びも

苦しみも分かち合うモンだろう！

水臭いぜ！ 俺だって力になるさ！

「アンタがそれで良かったってきア!!」

スコグルさんがドリルで

イツセーを貫こうとするのと

同時にルイーナはナイフを

握りしめたままイツセーの背中へと  
突っ込んでいった！

……まずい！

俺は『轟』の歩法にて

イツセーとルイーナの間に

割って入り、そのナイフを防ぐ！

「……!?!? 安里さん！」

どうして!?!」

怒りよりも恐れの色を浮かべる

ルイーナを見て、俺は何となく

理解する。

まるで自分の悪行を見咎められた

子供の様に怯えているのだから。

なら、俺のする事は一つだ。

「ルイーナ、言ったよな？」

『私が危なくなったら助けに

来てくれ』ってさ」

「は、はい………」

「だからさ、

約束通り助けに来たよ。

憎しみのままに誰かを殺そうとするなんて

危険どころじゃねえモンな」

「えっ……?？」

「お前の気持ちを

全部受け止めてやんよ。

安心しろ。俺がついてる。

ほれ、行くぞ！」

俺はそう言って、

ルイーナを抱きしめた。

「あ、あ……安里さん………」

「大丈夫、大丈夫だよ。」

心配しなくても良いんだ。

今まで辛い思いをしてきたんだもんな。

これからは幸せになろうな」

「う、あ……わああああん……!!」

ルイーナはまるで生まれたての

赤ん坊の様に泣きじやくっていた。

↓

安里 Side

そんなワケで

レーティング・ゲームは

乱入によるノーコンテスト。

ま、勝敗なんて大した問題じゃないし

イツセー達のわだかまりが

解消されたなら万々歳だ。

何でか知らんかイツセーが

神妙な顔で謝ってきたが

俺は気にするなって言っておいた。

どうせ、覗いたとかいつもの

エロハプニングが原因なんだろうしき。

それより問題はその後だった。

サイラオーグさんは仏頂面で

ルイーナに近づくと……。

パシッ!

と平手で彼女を頬を叩いた。

俺もイツセーも仰天したが

リアスさんは「口出しするな」と

言うように俺達へと目配せした。

「何故あんな事をしたのだ!」

あれではただの八つ当たりだ!」

「あ……あう……ご、ごめんなさい……!」

「お前の境遇には同情はしよう。」

だが、だからといって他人を傷つけていい理由にはならない。

そんな事はお前自身が一番よく解っている筈だ！

『蒼色の虜囚姫』と嘲られ、

卑しい血の生まれと謗られた

踏まれ続ける痛みと苦しみを味わったお前ならば……!!」

「!？」

サイラオーグさんの言葉に

ルイーナはハツとした表情をする。

「それでもなお、自分を傷付けた者と同じ道を歩み、復讐と怨恨の刃を振るおうと言うのか？

それは、本当に救われるという事なのか!？」

「……………」

サイラオーグさんは次期当主に

相応しい堂々たる獅子王

の様なオーラを纏いながら

厳しくも優しい口調でルイーナに語りかける。

「…………もう二度としないと、

兵藤一誠とお前の騎士である

九頭竜安里に誓えるか？」

「はい…………誓います…………ごめんなさい…………!」

…………何というか、

スゲー男前な人だな。

こういう人にこそ

皆ついていきたがるんだろうな。

俺はそのカリスマに

感心しきりだった。

「すまなかつたな、

兵藤一誠、九頭竜安里。

ルイーナはバアル家の

懐刀であるムールムール家の

跡取りであり、俺にとつても妹の様なもの。

妹の無礼は兄の無礼。

この通りだ、不満はあろうが水に流してやってほしい」

「バル家の次期当主が

他人のために、

転生下級悪魔のイツセーと

どっかの馬の骨に等しい俺に頭を下げた。

……こりや完敗だな。

カブトを脱ぐしかねえ。

「いやいや、

こつちも色々助かったんで。

全然構わないツすよ！」

「ええ、俺としても文句なんてありませんから」

「そう言ってくれると有り難い。

しかし、その若さで随分と

修羅場を潜って来たようだな。

お前たちの様な気概と

誇りあるものを一族に

迎えたいものだ！

いや、いかな！ これではオーデイン殿と

取り合いになってしまう」

サイラオーグさんは豪快に笑う。

よし、これでめでたしめでたし……。

とは、ならなかった。

「まあ、サイラオーグ様。

ソレを次期当主などと誤解を招く

発言をされては困りますわ。

そのの卑しい女は悪魔の駒一つも

持ち合わせぬ身、我らが一族の

末席にすら加えられぬ有様」

……何だこの辛気臭い銀髪ババア？  
すっげー線香臭いけど葬式帰り？  
身なりはいいし、

見た目はルイーナの

姉と言っても通用しそうだけど

それはそれとして

いきなり現れて何言ってるの？

「あら、メスブタ、

まだいたの？ お兄さまが用があるのは  
貴方ではなく私のほうですわ。

ねえ、サイラオーグ様？」

「俺の方には別にない」

なんだこのクソガキ!?

いきなり現れて何抜かしてやがる？

これにはサイラオーグさんも塩対応。

というかな！ 何がメスブタだよ、

テメーはメスカマキリみてーな

痩せぎす女だろうが？

コルセットみたいにドレスを

ギチギチに締めやがって。

それに何だよ

そのスケートブーツみてーな

ダッセー靴は？

俺は怒りの余り、

思わずルイーナの前に立って

庇う様に両手を広げた。

「ちよつと待てよ！

あんたらさつきまで

知らんぷりだったくせに何だ？

ルイーナが優しいのを



良いことに自分の都合ばっか押し付けんじやねえ!!」

「……!! き、貴様!!」

この私を誰と心得ている!!?

私は大王派を纏める長にして

死霊術を極めし

ハマーマ・ムールムールなるぞ!」

「知るかババア!」

ゾンビ以下の腐れ肉の塊が!

アンタが何者かなんて

どうでもいいんだよ!」

「お母様に何という口を……!!」

これだから私達名家に纏わりつく

蛆虫は嫌いなよ!」

俺の罵倒を聞いて、

カマキリ女は額に青筋を浮かべて

ヒステリック気味に叫ぶ。

「はあく? 蛆虫は腐った肉か

生ゴミに湧くから間違ってはいねえだろ?」

「な、なな……!!? 無礼者……!!」

この私が直々に処分してくれるわ!!」

「やってみろよ!」

そしたら俺も遠慮なくテメエを

ぶちのめせるってもんだ!!」

「……二人ともそこまでだ」

「ツ!?!」

サイラオーグさんの声に俺達はビクツとなる。

「ベラナディア。」

お前はもう少し美しい言葉を

覚えろ。安里もだ。

決してお前達がわかり合えぬ事は解ったが

こんなところで言い争うな。

見苦しい」

「申し訳ございません……」

「……すみませんでした」

……いかん、つい熱くなった。

「それで、サイラオーグ様。

何故その様な下賤な生まれの女を？」

「……繰り返しになるがルイーナは

俺の妹の様なものだ。

そして先ほども言ったように

兵藤一誠も九頭竜安里も俺の友人であり、

今回の件では恩人でもある。

そんな奴らを侮辱され、黙っているわけにもいくまい。

それに、ルイーナも自分の過ちを認め、謝れる子だ。

俺はそれを評価している」

「……」

「……」

やばい、この人は

マジモンの大物だ。

俺達の事なんか放っておいて

無視すればいいものを、

わざわざ自分から仲裁を買って出るとか……。

この人の器の大きさには感服するばかりだぜ。

「ま、まあいいでしょう……」。

今日のところはこれくらいにしておきましょう。

しかし、忘れないでくださいませ？

ムールムール家あつての

バアル家であり、貴方を擁立し

貴方と父君の政敵を排除してきたのは

我が家であるという事実を」

「……魔術を教わり

養育された立場としては

非才の俺が貴方の面子を  
潰したのは事実だ。

それは認めよう。

だが、俺とて男として

譲れないものがある。

それに今後、俺に挑んでくるものがあれば  
陰惨な暗殺ではなく

堂々と容赦なく叩き伏せるだけだ！」

「そうですか……。

ならば結構ですわ。

せいぜい今のうちに強がっておくことです。

近い将来、貴方は

私に頭を下げねばならなくなるのですから」

そう言うと、銀髪ババアと

カマキリ女は取り巻きを引き連れて

その場から去っていった。

クソッ！ ムカムカするなあ!!

おい、ギヤスパー！ 塩持って来い！

何!? 直接触れると

アレルギーみたいにかぶれる!?

仕方ねえな……!

俺は自分で持ってきてパツパツと振り撒いた!

あのカマキリ女と銀髪ババアは

俺が絶対泣かして

ルイーナに対して

「私達が間違っていました、許して下さい」って

土下座させてやるからな!

覚悟しやがれ!!

かくして後は会談を残すのみだ。

夏休みもまだまだあるし、

あんな葬式一族なんて忘れて、

楽しい思い出を一杯作ろうぜ、ルイーナ！

※幕間・異聞 おいでよ！エロフの森！（前）（イツ  
セー×ニグラ）

イツセーSide

「ええ!？」

俺達3人でエルフの村落を

襲うゴブリンを退治しろって!？」

「ええ、そうなの……。」

エルフ達は色々あつて

私達グレモリー領の森林に

定住しているのだけれど……。」

リアスさんは困った表情でそう言うと

リースが補足してくれる。

「ですがエルフの村は女人禁制の地。

そのためイツセー様、匙様、安里様の

御三方で討伐に赴かなければならないのですわ。

そしてこれはグレモリー領のみならず

他の領地でも問題になっていることなんです」

女人禁制？

男子禁制ならよく聞くけど……

女子禁制なんてあるんだなあ。

まあそれは置いといて、

そんな所に俺達が行っても大丈夫なんだろうか？

「あの一、リアスさん。

それって俺達みたいなむさい男が

行っちゃまずいんじゃない？」

安里が髪をかきながら聞いてくる。

確かにそうだよなあ。

せめて木場みたいなイケメンを

連れて行った方がいいのでは？

しかしリアスさんは首を横に振った。

「いいえ、あなた達の実力は既に知っているもの。それにその点は安心してちょうだい。」

ちゃんとした理由があるから」

リアスさんの話によると、

どうやらこの世界のゴブリンというのは、

『あらゆる種類の女性を襲う』

という習性を持っているらしい。

しかも、襲われた女性は孕まされてしまうんだとか！

更にはエルフの中にも

犠牲者がいるとか

いないとか……!?!

マジかよ！ 許せん!!

「そういうわけだからお願いね。」

祐斗も今は他の依頼に行ってしまったているし

ギヤスパーは人混みが

苦手だし……」

「分かりました！」

「了解ス！」

「はい、リアスさん！」

俺と安里、

そして匙が同時に返事をする。

「じゃあ早速出発だ!!」

こうして俺達3人はリアスさんの

邸宅からエルフの村落へと

転送された。

↓

「ようこそおいでくださいました

勇者様……♥」

な、何だかお色気ムンムンな

美人さんが現れたぞ!?

この人がエルフの村長かな？

な、何かイメージと違う……！

真珠の様な肌にウエーブがかかった  
金髪ロングヘアー、

そして大きく実った豊満なおっぱい。

露出度高めの薄着からは

セクシーさが滲み出ている……。

こ、こんな綺麗な女性が

まだまだエルフの集落にいるのか!?

エルフ最高!! エルフ最高!!

お前もエルフ最高と言いなさい!

しかし、安里はシラーツとした目で

美人さんを見ていた。

「オイ、安里。どうしたんだよ?」

「いや……なあ。」

いい加減にイタズラはやめてくれよ

ニグラさん」

………はい?

「あら?」

バレちゃったみたいねえ♥」

すると、美人さんが光に包まれたかと思うと

次の瞬間には

ニグラさんの姿になっていた。

さつきまでの妖艶な雰囲気は

変わらず悪戯っぽく笑っている。

「ど、どういうことだ?」

俺が戸惑っているのと安里が説明してくれた。

「多分趣味と実益を兼ねた潜入工作って感じでしょ? 全く……こう  
いうことをするなら先に言っただけ欲しいっすよ」

「ごめんなさいねえ。」

ちよつと退屈していたものだから」

ムワア……♥と

大人の色気を漂わせて

微笑むニグラさん。

くう〜!! たまんねえぜ!

しかし、リアスさんにお仕置きされるのはコワイ!

ここは我慢だ!!

「お前、煩惱がちよつと多すぎじゃねえのか?」

匙の神器『黒い龍脈（アブソーション・ライン）』

でちよつと吸い出してもらった方が

いいんじゃないの?」

「うぐ……す、すまん……」

おっぱいに興奮してしまったことは

事実なので謝るしかない。

でもさあ、安里。

お前も男だったら分かるだろう?

おっぱいを前にしたら本能が抑えられないんだ!

「お前なあ……」

とにかくここにいても

始まらない。とにかく

あの集落に行つてみよう」

匙も呆れた様に呟くが

好きなものは好きなんだから

しょうがない!

「ああ、そうだな! 行こう!」

俺はニグラさんに見送られて

エルフの村へと向かった。

↓

「おお、これがエルフの村落かあ……」

そこはまるで中世ヨーロッパの田舎町といった感じで、木で作られた家屋が立ち並んでいた。

あれ?



でも男のエルフと子供たちの  
姿がない……?」

「どうしたんだろうな?」

「もしかしたらゴブリン退治に

向かったんじゃないか?」

「そして子供達はゴブリンに

攫われない様に避難させているんじゃないのか?」

「そうかもしれないな。」

「とりあえず村長さんの家に行ってみるか?」

「そうだな」

俺達はエルフの村の村長さんの家に向かうことにした

「ごめんください!」

俺はいち早く家の中に入っていった。

「はい? 何でしょうか?」

家の中から出てきたのは真珠の様な肌にウェーブがかかった金髪  
ロングヘア、そして大きく実った豊満なおっぱい。

露出度高めの薄着からはセクシーさが滲み出ている……。

リアスさんよりも大きなそのお胸は、はち切れんばかりに自己主張  
をしている!

ニグラさんが化けていた女性

そのままじゃないか!?

「お待ちしておりました、

私の名はミダラーと申します♥」

恭しく三つ指ついて頭を下げる美女エルフ、改め、ミダラーさん。

「私はこのエルフの集落の長をしております。以後、よろしくお願い  
致しますわね」

「はい、ごちそうさー!」

ドレスが薄いからか、

おっぱいもお尻もラインが

うつすら見えているぞ!!

それにしても凄い迫力だ!!

「ところで、あなた方は

リアス様の眷属の方々ですね？」

「は、はい。」

リアスさんの使い魔としてやって来ました。

宜しく願います!!」

「はい、承りました。」

では早速ですが、ダークエルフの

長ともお会いして頂けますか？」

「ええ、構いませんけど……。」

どうしてですか？」

「はい、ゴブリン達が掠め取った秘宝は嘗て二天龍から賜ったと

母からは聞いております。

その秘宝の奪還には彼女の

知識が必要なのです」

「そういうことか。

分かりました。

案内してください」

「ありがとうございます。」

では、付いてきてくださいませ」

こうして俺達3人はダークエルフの

長のいる外れに連れて行かれた。

しかしドライグが封じられている今

話が聞けないのが残念だ。

「ここがダークエルフの集落……？」

ミダーラさんが

案内したそこには洞窟があった。

いや、これはもう穴だろ？」

「さあ、どうぞ。入ってください」

「はい、失礼します」

俺達はミダーラさんに連れられて

洞窟の中へと入っていった。

すると目の前には巨大な空洞が広がっていた。

「へえ、こんなところがあるのか……」

「なんかちよつと不気味っスね……」

「ああ、そうだな……」

しかし、洞窟の中には人影はなかった。

「誰もいないみたいだぞ？」

「ここじゃ……」

「えっ？」

「ここじゃよ」

どこからか声が聞こえてきた。

「お主ら、よく来たのう。」

わしがダークエルフの長、

ヤンリマじや。よろしく頼むぞ」

見ると、そこにはアンニユイな

雰囲気の褐色肌で

エロエロな踊り娘風

衣装とフェイスベールを纏う

美魔女が……！

な、なんなんだエルフって!?

本当にファンタジーの世界なのではここは？

俺は思わず唾然としてしまった！

しかしヤンリマさんは

まるで恥じる様子もない。

「どうしたのじゃ？ おぬしら？」

「いえ、なんでもありません！」

「そうかえ？ まあよい。」

何とも猛々しく雄々しいオーラを放つ若人じや。

流星はリアス殿が連れてくるだけのことはあるのう」

どうやら俺達はヤンリマさんの

お眼鏡にかなったらしく

一安心だ。帰れと言われたら

どうしようかと思っただぜ……！

(おい、イツセー。)

大丈夫なのか？ 何か

ミダーラさんとヤンリマさんから

肉食系っぽいオーラを

ひしひし感じるんだが……)

安里が耳打ちするが

そんなことはないだろう。

エルフは森ガール(死語)だ。

お前も

大概ムツツリスケベだよあ。

だが、確かに2人とも

俺好みの美人だし、

色々と目のやり場に困っちゃうな……。

うーん、贅沢な悩みだ。

「ところで、

リア様の眷属のお三方。

改めてゴ布林共の退治に力を

貸してもらえないでしょうか？」

「もちろんです！」

「俺は会長の眷属なんだけどなあ……」

ミダーラさんの確認に

俺は迷わず即答したが、

匙は少し不満げだった。

おいおい。

「俺達に任せてください！」

必ず犠牲になった

エルフさん達の仇を

取って見せます！」

「おお、頼もしい限りじゃ。

ふふ、ならばワシが卦をたててやろう。

これ、そんな悪人面の若人よ。

この水晶玉に手を乗せると良いぞ」

「悪人面……」

ヤンリマさんは安里の手を取り、

水晶玉に乗せた。

すると、水晶玉が輝き始めた。

「なるほどなるほど……」

奴等の拠点はここから

西に行った所にある洞穴のようじゃ。

しかし妙じゃな」

「どういうことですか？」

「ゴブリン達はその洞穴の中で

暮らしているようなのじゃが、

中には見張り役のゴブリンが1匹もおらんのだ。

これは一体、どういうことなのであろうか……」

そう言つて首を傾げるヤンリマさん。

たゆん、と顔位の大きさの

巨乳が揺れている。

なんて素晴らしい光景だ!!

そして、俺達がダークエルフの集落を出て、

洞穴に向かおうとしたその時、

ミダーラさんが俺を呼び止めた。

「もし宜しければ……」

私達の村の戦士二人も

お連れください」

おお！ 願つてもない提案だ！

それにしてもこの集落のエルフさん達は

みんなこんな感じで露出度が高いのか？

それともこの二人が特別なのか？

ともかく数分くらいの間を

置いて戦士さんが来てくれた。

「お待たせしたね……パコルです」

「オーブリーです！」

「どうか宜しくお願いします！」

「……現れたのは活発ながら

真面目そうな

バニーガール金髪ロン毛の

エルフさんと物静かな感じの

ラメ生地バトルスーツ姿の

片側三つ編み

ダークエルフさんですよ？

なんですかこれ？

しかも何故か、

二人とも発育がよろしい！

しかも俺に嫌悪の眼差しを

向けていない……！！

素晴らしいッ！

エルフ集落いいよね、エルフ集落サイコー！

「では参りましょうか。皆さん！」

「はい！ 行きましょう！！」

「お前ら遅れるなよ！！」

「こんな美少女二人を

連れて討伐に向かうなんて

テンション上がるなあ！

こうして俺達はダークエルフの村を出発し、

ゴブリン達の待つ洞穴へと向かった。

「あれ？ 見張りがいないぞ？」

俺達は洞穴までやって来たのだが、

中からは見張りの姿は見えない。

「妙だな……。俺の『顕色』で

探知したが奴らの生命力が

大分弱っているようだ……」

安里の『燃える三眼』で

見るところ、ゴブリン達は  
かなり衰弱しているらしい。

「恐らく、食料不足でしょうね。」

ゴブリンは肉食ですから……」

オーブリーちゃんは身なりはともかく、  
やはりエルフだけあって博識だ。

この辺りには牧場もないしな。

「……もしかして今、

何当たり前の事言っているんだ

この空気女……って思いました？」

「ええっ!？」

突然のオーブリーさんの

ネガティブ発言に面食らった俺は

フオローできずに固まってしまう。

すると、匙が口を開いた。

「まあまあ、オーブリーさん。

そんな事はないですよ!

オーブリーさんは空気は空気でも

この森の清浄な空気みたいなものです!

きつと清らかな心をお持ちだから

そう思うんです! 俺、そう信じています!

おいおい、何言ってるんだコイツ?

安里はそう言いたげに

顔をしかめていたが……。

オーブリーさんの表情を見ると、

どうやら匙の答えは間違っていないなかったらしい。

「ありがとうございます!」

私、個性がないのが悩みで……」

「大丈夫です! 俺達がいるじゃないですか!」

「はい……!」

あなたのような方に出会えてよかった……。私、もう死んでもいいです！」  
なんかいい雰囲気になってるけど、そういうのは他所でやって欲しいなあ……。安里もすつかり呆れ顔だが  
片腕を砲塔に変化させた。

「……どうする？」

俺の砲弾で燻り出すか？」

安里が提案するとパコルちゃんが  
首を左右に降った。

「それはよくない。

秘宝が中にあるから、

破壊してしまうと取り返しがつかなくなる」

「うーん……それもそうだな」

パコルちゃんは

とても真剣に考えている。

クール系美女の雰囲気が素敵だ。

「だから僕がゴブリン達をおびき寄せるから、

その際に皆で中に入ってほしい」

パコルちゃんが囧になると言うが

それだと危険過ぎる。

パコルちゃんに万一の事があつたら

ミダーラさんとヤンリマさんに

お詫びのしようがない！

と、その時匙が動いた。

「なら、こうしよう。

俺が『黒き龍脈』でオーブリーと

パコルちゃんをサポートしながら

囧になるから、安里とイツセーが中に入ればいい」

「そっか！ 確かにそれが一番安全だね」

「ああ、任せておけ」



俺達は互いに顔を見合わせる。

「よし行こう！ 皆でこの集落を守るぞ！」

「おうツ!!」「うん」「はいっ」

こうして、俺達は洞穴の中へと突入したのだった。

.....

「.....これは?」

俺達が目にしたのは

想像を絶する光景であった。

中では何故か多くのゴブリン達

バタバタと倒れているじゃないか!

毒かと警戒したけど、よく見ると

みんな気持ち良さそうな顔をしていた。

「何かの魔術で魅了されているな。」

俺達の前に誰かが侵入していたのか?」

「ああ。恐らくそうだろう。」

それにしても一体誰がこんな事を.....。

って想像はつくがな」

安里の言葉を聞いて俺も納得する。

こんな事ができるのはあの人しかいない。

ニグラさんがゴブリン達に

ナニか、

いや.....何かしたのだろう.....。

あの人、色んな意味でとんでもないからなあ.....。

すると洞穴の奥の方から声が聞こえてきた。

「んあ.....♥ああ♥あはあ♥

いいわ.....♥いいわあ♥」

「くひいッ!?!」

俺は思わず奇声を上げてしまった。

まさかこんなところで

こんな展開になるとは予想していなかったからだ。

しかし安里は冷静に呟いた。

「どうやらゴ布林達の相手を

してあげているのはニグラさんらしい……。

はあ……」

安里はため息をつきつつ

呆れた様に頭を振っていた……。

しかし、覗くわけではないが

ニグラさんが心配だ！

俺は急いで奥へと向かった。

……

「あつ……ダメ……そこ弱いのお……♡」

「あら、ここが良いのね？」

「じゃあ、もつと強く扱いてあげる……」

「ふああんっ……♡」

ぐちゅっ ♡ ぐちゅっ ♡

ぬによっ ♡ にゆるっ ♡

びくんっ!!

「い、イクうっ!!

あへえええええええ!!!」

「ゆ、許してくれえええ!!」

ビクンツ！ ドピュルルル——！

……とんでもない光景が

目の前にあった。

女の子を犯して孕ませるって

「評判のゴ布林達が

白濁まみれのニグラさんに

許しを乞いながら射精している

じゃないか！

ゴ布林達の凄まじいザーメンを

浴びるニグラさんだがその表情は

幸福そのものでとても嬉しそうだ。

俺は何とも言えない気分になりつつも

ゴブリン達を助け起こそうと手を伸ばした。

「大丈夫ですか？」

「今助けますよ！」

「おお……！ 人間族か！」

「助かったぜ!!」

「こ、このバケモノ女を

止めてくれえ!!」

「あれ？ 俺達確かゴブリンを

討伐しに来たんじゃ……？」

「いや、しかし助けを求めているワケだし……？」

「まあ、いいか。」

「分かりました。」

「俺に任せてください！」

「ありがとう……ありがとう……！」

ゴブリン達は涙ながらに

感謝の言葉を口にしていた。

しかし、ニグラさんをどうやって

止めようか……！

あの俺の乳独創を破った

性欲魔神のニグラさんを……

ドライグの力無しでヤレるのか？

……でも、やるしかないんだよな！

ニグラさんになんて絶対負けない！

安里が迷わず奥へと突き進む間に

俺はニグラさんと向き合う。

「あら……♡」

次はイツセーちゃんが

してくれるのお……？」

ニグラさんが俺に気づき

ザーメン塗れで舌なめずりをする。

「むわあ……♡と

ゴブリンの体液と

ニグラさんの

フェロモンが合わさった香りは

殺人級の魅了効果を生み出し、

しかもここは洞窟という閉鎖空間！

逃げ場はない！

ニグラさんは俺を逃さない為にわざとこんな事を！

「うふふ、捕まえたわぁ♥」

「ううっ！」

ニグラさんは俺を後ろから抱きしめると、  
耳元で囁いた。

「イツセーちゃん……」

今日こそ私と一つになりましょう……♥」

「そ、それは……どういう意味なんですか!?!」

「こういう事よぉ♥」

ニグラさんは俺のズボンを脱がすと、

そのまま俺のアソコを握ってきた。

そして上下に擦ってくる。

「ま、まずいですよー！

ニグラさんは安里と

同居しているんですよ!?!」

「あらぁ……」

それがどうかしたのお?」

「安里が知ったら怒りますって!」

俺も困っちゃいますし……!」

「大丈夫よお。

安里ちゃんなら分かってくれるわ♥

私達の愛は少し位じゃ揺らがないの♥」

す、少しって……!?!」

アイツの趣味、特殊すぎないか!?!

そんな事を思っている間にも

ニグラさんの手は止まらない。

「ふあ……あ……ああ……」

「気持ち良いでしょう……」

「あ……はい……」

「素直ねえ……」

この間は貴方が持たなかったから

副王様に咎められたけど……

今の貴方なら大丈夫よね

俺は快樂に負けてつい肯定してしまった。

す、すまん安里……!!

ニグラさんには勝てなかったよ……。

「あ、ああ……」

あああああツツ!!

どびゆるるるるる!!

俺はニグラさんの手で

あつさり盛大に果ててしまう。

な、何てテクニクだ……!

リアスさん、アーシア、ゼノヴィア、

リースと色々エツチな事で

経験を積んだ俺が子供扱い……!?

流石、ニグラさんだぜ……!

「うふふ♥まだまだ終わらないわよ♥」

「えっ……? ひゃうんっ♥」

俺は情けない声を出してしまった。

ニグラさんが俺のお尻の穴を舐めてきたからだ。

「な、何をするんですかあ!!」

「うふふ、リアスちゃんや

アーシアちゃんはこんな事して

くれなかったでしょ?

イツセーちゃん♥偶には

こういうプレイも良いじゃない?

私は貴方を満足させてみせるわあ♥  
さあ、私のお乳に

正しいチ○ポを入れてちょうだい……♥」

「は、はい……。」

俺、ニグラさんに

尻穴を舐めてもらいながら……

おっぱいを犯します……!」

抵抗するなんて無意味だし……

何よりバカバカしい……。

ニグラさんは俺をイカせてくれるみたいだし、

ここは大人しく従おう!

そして俺は壁に手をつけて、

膝をつけて俺の尻穴を舐め回す

ニグラさんの爆乳の溪谷に

チ○ポをずるずると

挿入していく……!」

「ふああっ♥あちゅううい♥」

ニグラさんの嬌声が益々

俺を狂わせ、夢中にさせる……!

犯したい……!

ニグラさんをめちゃくちゃに犯しまくりたい……!

俺はニグラさんのゴブリンのザーメン塗れで

ドロドロの彼女の乳肉に腰を打ち付けていく。

「ああ……ニグラさん……!」

俺、もうダメです……!」

「イツセーちゃん……♥」

ああ♥いいわよ♥

貴方のタイミングで出してえ♥」

「はい……!」 出ます!」

ニグラさんの乳の中に出します!」

「うふふ♥来て!」 いっぱい出して!」

貴方の子種をおっぱいに頂戴！ イッセーちゃん！」

ずりゆりゆりゆりゆ ♡♡♡

ぼちゅん ♡どちゅどちゅ ♡♡♡

ああっ……………！

このタイミングで動かれたら！

我慢できない……………！ 限界だ！！

「うあああっ！」

「あはああああっっ ♡♡♡」

びゅるるるる！ どびゅーっ！！

どびゅっ！ どびゅっ！

俺はニグラさんの

おっぱいのみでなく

お腹や股、太腿に出るまで射精した。

「はあ……………はあ……………」

「うふふ…………… ♡気持ち良かったかしらあ？」

「はい……………とても……………」

でも、俺だけ気持ち良くなっても意味が無いですよ。次はニグラ

さんが気持ち良くなる番ですよ」

「あらあ ♡前に私を抱こうと

した時は安里ちゃんに悪いって言って

へタレたのに…………… ♡大丈夫う？」

ぷりんっ ♡とお尻を向けて

壁に手をつきながらニグラさんは

俺を挑発する……………！

た、確かにあの時は俺が

ニグラさんを抱こうとしたが暴発してしまった……………。

だけど今は状況が違う！

安里は今、ルイーナちゃんと

ラブラブだからな！

それにおれだって成長したんだ！

「ええ、大丈夫です。」

それにニグラさんも

俺をその気にさせたんだから責任取ってくださいよ」

「ええ、もちろんよお……♡」

じゃあ、始めましょうか……」

ニグラさんのお尻が揺れる。

俺はニグラさんのお尻を掴み、

一気に奥まで挿入する。

「ああん♡素敵♡」

ニグラさんは挿入しただけで

気持ちよさそうにしている……。

俺も負けてられないな！

俺はニグラさんの爆乳を揉みしだきながら

腰を動かし始めた。

まずは様子見だ、ガツガツせずに

優しくしよう。

俺はゆつくりと腰を動かすと

ニグラさんの尻がふりふり上下左右に動く。

「うふふ……♡上手よ、イツセーちゃん♡」

「ありがとうございます。」

俺、頑張ります！」

「ええ♡頑張つてえ♡イツセーちゃん♡」

俺は腰を振り続ける。

ニグラさんは俺を煽るようにお尻を振ったり、

俺の動きに合わせて腰を回したりしてくる……。

くそ、余裕ぶりやがって……！！

なら、もつと激しくしてやるぞ！

俺はニグラさんのお尻を鷲掴んで

ピストンを早める！ 鞭を入れるように

強く、それでいて優しく

ニグラさんのお尻を愛撫する。

パンツ！ パアン！



ぐにゅっ！ むにゅん！

ニグラさんの尻肉に

俺の指がめり込む。

ニグラさんの尻肉が波打つ。

ニグラさんは俺に犯されて興奮しているのか、

身体を震わせていた。

俺はそんなニグラさんのお尻にピストンを続ける。

ニグラさんをイカせる為に。

ニグラさんを満足させる為だけに。

まるで天馬に乗って天空を駆け登る様な感覚だった。

「ああ……イツセーちゃん♥凄いわぁ♥

貴方のチ○ポ、私の子宮まで届いているわよお♥」

「はい！ ニグラさん！

貴方の膣内、熱くて狭いのに柔らかくて、

俺のチ○ポを慰める様に

包んでくれて……とにかく最高です！」

ニグラさんのオマ○コは

キュウつと締まって俺を離さない！

それだけじゃない！

ニグラさんはおっぱいだって大きい！

おっぱいを揺らしながら俺に犯されて

アヘアへ喘ぐなんて……！！

こんなの我慢できるわけがない……！！

おっぱいも尻も太腿も全部気持ちいい！

もう、ニグラさん無しでは生きていけない……！！

俺はもうこの人の虜だ！

「ああ……イツセーちゃん♥

貴方と出会えて良かったわぁ♥

私ね、貴方と出逢えた事が運命だと思うのお♥」

「はい！ 俺もそう思います！ ニグラさん！」

片手を胸からニグラさんの顎へと

移動させ、そのまま強引にこちらへ向かせる。  
そしてキスをする。

舌を絡め合い唾液を交換する。

お互いを求め合う激しい口付けだ。

俺とニグラさんは恋人のように愛し合った。

ずちゅっ♥ずちゅっ♥ずちゅっ♥

ニグラさんと俺の結合部から卑猥な音が響く。

ニグラさんは俺に突かれる度に艶かしい声を上げてくれる。

それが嬉しくてつい調子に乗ってしまう。

でも、それは仕方ない事なんだ。

だって、ニグラさんが魅力的過ぎるから悪いんだ！

ニグラさんが俺を誘惑するから悪いんだ！

俺をその気にさせておいて

俺だけ先にイクなんて情けないじゃないか！

だから俺がもっとニグラさんを満足させないと！

もっと俺が頑張らないと！

ニグラさんを喜ばせないと！

ニグラ、ニグラ、ニグラ、

ニグラニグラニグラニグラニグラニグラニグラ！！

「んはあああゝ♥♥♥

イグ♥イキながらまたイグ♥

死ぬ♥イツセーちゃんのチ○ポに

殺されちゃふううううう♥♥♥」

ニグラ……！！ うおお……！！

俺だけのニグラ……！！

望み通り、たっぷり可愛がってやるぜ……！！

汗と愛液が飛び散る勢いそのままに

トツプギアに入れてフルパワーで前後する！

どちゅっ！！ ばじゅっ！！ じゅぼぼ！！

ぶしゅーっ！！ どびゆるるるるーっ！！

「ひゃうん♥はげひっ♥激しすぎっ♥

らめええ♥イツセーちゃんの  
絶倫チ○ポお射精で

連続アクメきめちやつてるのお♥」

「はあ、はあ、はあ……!」

ニグラさん、俺はまだまだイケますよ!」

「ああん♥イツセーちゃん♥

素敵よ♥」

俺は射精しても萎えないチ○ポを

ニグラさんの中に擦り付け、

腰を振りながらニグラさんに言う。

するとニグラさんは

頭を撫でつつ俺を褒めてくれた。

嬉しい。もっと頑張りたい。

俺は腰を振りながらニグラさんの

爆乳をこれでもかと揉みまくる。

『Transfer』

あれ……?

ドライグの声じゃないのに

何かチ○ポが……膨らんでいく?

まあ、いいや。

今はニグラさんを犯さないと……。

「ああ、凄いわあ♥イツセーちゃんの

絶倫チ○ぽが私の中で暴れてる♥

気持ちいい♥

私、もうイツセーちゃんの女に

されちやつたのねえ♥」

振り向きながら頬を上気させ、

上目遣いのニグラさん……すごく可愛いよ。

俺のチ○ポをそんな風に締め付けて、

もっともっと欲しいのか……!?

なら、遠慮なくくれてやる!

ニグラさんの膣内を俺のチ○ポが搔き回し、  
結合部が

摩擦で発火するんじゃないかと思えるくらい熱い。  
更に俺のピストン運動に合わせて

ニグラさんのお尻が波打つように揺れている。

そしておっぱいも……！

おっぱいも一緒にバルンバルンと揺らして……！

俺の興奮も高まるばかりだ！

もう、限界だ……！！ ニグラさん……！！

「イツセーちゃん♥貴方の精液を私に頂戴♥

私、貴方の赤ちゃん産みたいのお♥」

「はい！」

俺もニグラさんとの子供が早く作りたいです！」

俺はそう言つて更に激しく突き上げる！

ニグラさん、俺もそろそろイキそうだ！

ニグラさんは俺を優しく抱きしめ、

そして耳元で囁いてくれる。

「イツセーちゃん♥

私の子宮にいつぱい出してえ♥」

「は、はいっ!!」

ニグラさん……!! イクっ!!

どぴゅっ!! びゅ——っ!!

「はあああ〜♥♥♥出てるう〜♥

イツセーちゃんの精子い〜♥

熱くて濃厚なのがたくさんい〜♥

子宮の奥にビュルビュルかかっている♥

ああああ〜♥孕んじやううううっ♥」

ドサツ!

俺は絶頂を迎え脱力し、そのまま倒れ込む。

ニグラさんと繋がっていた部分が離れ、

そこから大量の白濁した液体が溢れ出る。

俺がニグラさんを見ると、  
彼女はまだ足りない、と言いたげな  
ご馳走を出された美食家さながらの顔をしていた。  
まるで俺がニグラさんのおっぱいに  
ぶっつけたザーメンをナプキンに  
しているかの様に……。

「ふふ……♪」

さあ、次はどんなプレイをしましょうか？」

「え……？ まだ、するんですか……？」

流石にこれ以上は……」

「あら、私はまだまだ大丈夫よ♥

大丈夫よ……♥

私の力で、何度でも元気にしてあげるわ……♥」

『Transfer』

ああ……ま、まただ。またチ○ポが膨らんでく……。

俺は一体どうなってるんだ……？

「イツセーちゃん♥今度は私が責める番ね♥」

「はい……お願いします」

ニグラさんが俺の上に跨がり、

俺のチ○ポを最高の搾精オマ○コで

包み込んでくれる。

「ああん♥イツセーちゃんのおつきい♥」

「あ、ありがとうございます……」

「それじゃあ、行くわよお♥」

ああ、気持ちいい……たまらない。

ニグラさんは騎乗位の体勢から

腰を上下に動かし始める。

頭がひどくふわふわする。

まるで温泉か羽毛布団に全身を沈めていく様だ。

意識ははつきりしているが、

体が思うように動かない。

俺はただひたすらに快樂に身を任せる。

「はあ、はあ、はあ……！」

ニグラさん……俺、もう……！」

「ああ……イツセーちゃん♥いいのよ……♥

イツセーちゃんの好きだけ出してえ♥」

「あつ、あああああ!!！」

止まらない……止められない。

ニグラさん……ああ、ダメだ。

エッチすればエッチする程、

どんどん好きになつてしまう。

ニグラさんの事が愛おしくて仕方がない。

もつとしたい……もつと……！」

『Transfer』

「はあ、はあ……！」

もつと……もつと俺と

セックスして下さい！」

「いいわよお♥私も、もつともつと欲しいのお♥」

俺、ひよつとしたらニグラさんと

やりすぎて死んじゃうんじゃないかな……？」

なんて、そんなバカな事を考えてみる。

だって、こんなにも幸せなんだもの。

ああ、幸せ過ぎてどうにかなりそうだ！

俺がそう思った瞬間、急に視界がぼやけてきた。

あれ……なんだろう。なんか眠い。

すぐく疲れてるのか……な……

『ふう、危ない所だったわ』

あれ……エルシャさ……？」

1

安里Side

俺は多分ニグラさんに

搾り取られて鶏ガラみたい

痩せ細ったゴ布林キングに対峙した。

「頼みます！ お許してください！

もう田畑は決して襲いません！」

「女を田畑扱いかよ、クソ野郎」

するとゴ布林キングは

誤解だと弁解を始める。

『顕色』で奴の気脈を見る限り

嘘を言っている風でもない。

じゃあエルフが嘘を言っているのか？

そう言えばヤンリマさん、

いや、ヤンリマは何で

イツセーじゃなくて俺の手を

水晶玉に乗せたんだ……？

まさか、何かの魔術を俺にかけたのか……!?

「なあ、キングさんよ。

お前ら女を襲って孕ませるって

噂があるが本当か？」

「とんでもない誤解でさあ！

アツシらは女の子を無理やり

襲ったりしないです！

寧ろエルフの方が……!」

そして俺はゴ布林キングから

二天龍の秘宝と、

エルフ、というか

エロフ達の真相を聞いた。

とにかく、色んな意味で

イツセー、匙が危ない！

特に匙はデキ婚願望があるからな！

早く助けに行かないと！

※幕間・異聞 おいでよ！エロフの森！（後）（イツ  
セー×ミダーラ 安里×ヤンリマ 匙×オーブリー  
&パコル） キャラ立ち絵あり

安里Side

「分かったよ。

俺も鬼じゃない。

親の因果が何とやらだ。

あんたを見逃してやる。

だからもう二度と悪さするんじゃねえぞ」

「はい！ ありがとうございやす！

コレが二天龍の秘宝でやす！」

キングが渡してきたのは

何だか怪しく紫色に光る

顔くらいの大きさの鉱石だ。

確かに不思議な輝きを放つ石だが、

これじゃ何も分からないな。

まあいい、おっさんに解析させりゃいい。

あとは……。

俺は転移用の魔法陣でイツセーや

匙より一足先にエルフの集落に

戻った。

↓

匙Side

「はああっ!!」

パコルちゃんのシールドバツシュにより

ゴブリン達がふっ飛ばされていく！

あの華奢な見た目からは

想像もつかない威力だ！

何でもあのツインシールドも



神器らしい、  
攻めにも守りにも  
使えるがその分消費が激しいようだ。  
そのため俺は『黒き龍脈』の  
ペロでパコルちゃんとラインを  
繋ぎ、魔力を回す。それにより  
パコルちゃんの消耗を抑えつつ  
戦いやすくしたのだ。  
パコルちゃんからすれば  
余計なお世話かもしれないけど。

「はあっー」

気合を入れてバニーガール姿のまま  
パコルちゃんと俺の後方で  
オーブリーちゃんが  
ゴブリン達へと弓を引く。  
しかし流石はエルフ族。  
オーブリーちゃんは  
弓の扱いに長けており次々と  
敵を射抜いていく。  
自分は無個性だつて嘆いていたけど  
とんでもない弓の名手だ！  
でもパコルちゃんも負けてない！  
敵の群れの中へ突っ込み  
その身を盾にして仲間を守る。  
そしてパコルちゃん自身もまた  
敵の攻撃を的確に防ぎながら  
カウンター気味に盾を振るう！  
ドガアッ！  
その一撃を受けた敵が吹っ飛び  
近くの別の敵にぶつかる。  
そうやって出来た僅かな隙を逃さず

オーブリーちゃんが矢を放ち  
戦闘不能にする。

凄い連携だ！

この調子なら楽勝だな！

というかこれは俺がいなくても

大丈夫だったんじゃないかなあ……。

とにかく数分もしない内に

ゴブリン達は全滅していた。

「お疲れ様です匙さん！

本当に助かりました！」

「うん……。勝てたのは

キミのサポートがあつたからだ」

パコルちゃんもオーブリーちゃんも

左右からお礼を言ってきた。

俺は苦笑しながら二人に言う。

「そんな事はないさ。

二人が頑張ってくれたからこそだよ。

それよりも怪我とかは無いかい？」

「はい！ 大丈夫です！」

ありがとうございます！」

「ボクも特に問題無いよ。

ありがとう……。」

彼女達は自分の身体を

弄りながら確認しているけど……。

ばるっ♥ばるるんっ♥

むちむち♥むにん♥

二人の巨乳やお尻が揺れまくっている!!

俺は思わず顔を背けた。

見たいが、ここは我慢だ……!!

「ケガはないけど、

返り血や汗でベトベトだね……♥

だいぶ、濡れちゃったかも……♡  
なっ!?

「そうですねえ……♡

放っておいたら危険ですしい……♡

近くの川で洗いましょ……♡」

なななっ!?

何と二人は俺の手を引いて、

洞窟の方とは真反対の川原へと連れていかれた!

まさかっ……!?

川の水は透き通っていて綺麗なのを幸いに

オーブリーちゃんはバニーガール衣装を脱いで

全裸になっている。

水浴びするのかと思いきや、

彼女はいきなり川に飛び込み全身で水を弾いた!

ばしやんっ♡ばしやばしや♡

ぷるっぷるうくんっ♡

オーブリーちゃんは胸とお尻を揺らしながら

恥じらうわけでもなくこちらを振り向く。

「ふふふっ♡どうですか?」

私達の種族では、

こうして汚れを落とすんです♡」

オーブリーちゃんは明らかに

発情していた。

も、もしかしてゴブリンの体液の

せいなのか……?」

と、固まる俺の目の前で

さらなる衝撃的な光景が繰り広げられる!

「じゃあ次はパコルの番ね♪

脱がしてあげるからあ……♡」

今度はパコルちゃんの服に手をかける

オーブリーちゃん。

しかしパコルちゃんはまるで抵抗せずに自分からするすると

バトルスーツを脱いでいく……!!

オーブリーちゃんばりの

グラマラスな褐色肌と

それに相反するようなチヨコまんのような

もちもちボディに目が離せない……!!

ど、どうしたんだ……!?

俺はイツセーとは……イツセーとは違う……!!

でも……こんなの見せられたら……

我慢できるはずがないじゃないか……!!

『そうだ、我が分身よ。』

据え膳食わぬは男の恥という

言葉があるではないか……。

強くなりたくば喰らえ!』

こ……これはヴリトラの声!?

そ、そういうことか! 強くなれるなら、

もう何でもいい! 気持ちいいことならなお……!!

俺も覚悟を決めたぜ……!!

「オーブリーちゃん、

パコルちゃん、俺も混ぜてくれ!!」

俺は勢いよく川にダイブした!

「きやんっ♥」

「あんっ……」

二人とも嫌がる気配はまるでない。

寧ろ俺が襲うのを待っていたかのように、

受け入れてくれた。

俺はまずオーブリーちゃんのおっぱいに吸い付いた。

じゅるるっ♥

「ひゃあん♥」

舌の上で転がすように舐めると

サーモンピンクの乳首がどんどん  
コリコリに固くなつていく。

その感触を楽しむため何度も繰り返していると、  
オーブリーちゃんは興奮を顕にする。

「はぁん♥はぁはぁ♥もつと吸つてえ……♥

私の無個性ボディ、

匙さんの色に染め上げてえ♥」

と言われてしまったからたまらない！

「分かったよ！ オーブリーちゃん！」

俺はオーブリーちゃんのお望み通り

思いつきり彼女のおっぱいを吸引していく！

ちゅー♥

ぢゅううううううううっ♥

「あああっ♥す、すごいです♥

魂吸われちやう位気持ちいいよお♥♥♥」

黒い龍脈でラインを繋ぐ事で魔力供給をしていたので、今のオーブ  
リーちゃんは

感度が高まっている状態だ。

更に魔力と性感をオーブリーちゃんの

身体に直接流し込む！

何事も理解と経験が大事だからな！

「ああああっ!!! しゅーいですう♥

おっぱいとアソコが熱いですう♥

アソコの奥から力が湧いて来ますう♥」

オーブリーちゃんは更に乱れて汗振り乱す中

俺は更に彼女の下腹部に手を伸ばした！

ぐいっ♥

「やんっ♥そこダメエ……♥」

そこは既に洪水のように濡れていた。

指を入れて中を確かめる。

くちやくちよっ♥

「すっかりドロドロだね

オーブリーちゃん？

どこが無個性ボディなのかな？」

さわさわ……♡ぐちよっ♡

「いやあん♡言わないでください♡」

オーブリーちゃんは恥ずかしそうに顔を背ける。

俺はそんな彼女の顔を引き寄せてキスをした。

「んっ……♡」

「はむっ……♡」

俺達はお互いの唇を重ね合い、

舌を絡ませる濃厚な大人の口付けを交わしていると、まさしく垂涎

といった感じの

顔をしたパコルちゃんが近づいてきた。

「あ……あの……♡」

「どうしたのかな、パコルちゃん？」

俺が意地悪く尋ねると、暫しもじもじしていた

彼女は頬を赤らめて言った。

「ボ、ボクにもさっさきの

オーブリーみたいにエッチなこと、

いっぱいしてほしいな……♡」

そう言っって彼女は自分の胸を持ち上げた！

ばるんっ♡

「もちろんだよ！ パコルちゃん！」

俺は一旦オーブリーちゃんから離れ、

川原の浅瀬に仰向けに寝転びつつ

パコルちゃんを手招きする。

「おいでパコルちゃん」

「うん……♡」

パコルちゃんは俺の股間に顔を埋めた。

そして俺のモノを愛おしそうに見つめると、

優しく股で包み込んだ！

「お兄さんのこころ、すごく大きくなってる……♡」

パコルちゃんも俺に被さりながら

素又の体勢になった！

「ああ……♡これがオスの人の……♡」

ぱちゅんぱつん♡

パコルちゃんが動く度に柔らかくとむちりとした

太腿に包まれて、下半身が蕩けそうだ……！

「はあ……はあ……パコルちゃん……」

「ああん♡パコル……♡」

パコルって呼んでえ♡」

俺は彼女の要望に応える事にした。

「パコル……好きだ……！」

「嬉しい……♡ボクも好きだよ……♡」

パコルちゃんの動きが激しくなる。

ぱちゅんぱちゅん♡ぱんっぱんっ♡

「ああっ♡イクッ……♡」

オチン○ンでイク……♡」

本番前なのに、もうイクそうなのか？

流石に早いんじゃない……。

と思っただけど、我慢させる必要もない。

むしろこっちからイカせてあげよう！

そんなわけで俺はラストスパートをかけた！

ずぶずぶ……♡

どびゅどびゅ……♡どくどくんっ♡

「あふうう♡お尻っ♡」

ボクのお尻にと太腿にお兄さんの精液が

いっぱい出てるう♡」

俺の射精と同時に、

パコルちゃんも絶頂を迎えたようだ。

ビクビクと痙攣しながら倒れ込んでくる。

俺はその身体をじっくりと抱きとめた。

絶頂の余韻に瞳を潤ませ、火照った身体が清流で冷えた身体には心地よい。

「気持ちよかったよ、パコル」

「ボクも……♥お兄さんの事、好き……♥」

ちゅっ♥ちゅっ♥と

パコルは情熱的に

キスしてくるが、

ふと気がつくとな俺の目には涙目でむくれているオーブリーちゃんの姿が映る。

「う〜！ 次は私ですよね？」

パコルにばかり構わずに

私の事も見てくださいよお！」

そう言いつつオーブリーちゃんは

俺の上に跨ってきた。

騎乗位の体勢だ！

「今度はオーブリーちゃんの番だよ？」

俺はオーブリーちゃんの腰を掴み、

ゆっくりと挿入していく。

「ああっ……♥」

入ってきます……♥」

じゅぶじゅぶっ……♥

オーブリーちゃんの

自称無個性のワガママボディと

オマ○コを俺色に染められるなんて……。

何という幸せだろうか!?

エルフ最高！ エルフ最高!!

「全部入ったよ……」

「はい……♥」

俺は彼女の身体を抱きしめると、思いつき突き上げた！



ずぽっ♥ずぽっ♥  
パンっ♥パンっ♥

「ひゃうんっ♥激しすぎ……ますっ♥  
壊れちゃいますっ♥」

「ごめんね、オーブリーちゃん。

でも君が悪いんだよ？　こんなに  
個性たっぷりで

魅力的すぎるんだもの」

俺はオーブリーちゃんの

個性タツプリ唯一むにむにおっぱいに  
指を突き立てた！

「やんっ♥ダメエ……♥

そんなにされたらあ♥

おっぱい感じちやうう♥♥♥」

むぎゅーっ♥

俺は更に強く抱き寄せ

俺の身体にオーブリーちゃんを

引き寄せる。

そして、彼女の乳首を口に含んで吸い始めた。

ちゅぱちゅぱっ♥

「やあああっ♥吸わないでえ♥

ミダーラ様みたいに、まだミルクは

出ませんからあ♥♥♥」

オーブリーちゃんの甘い声が耳に心地良い。

俺は彼女のオマン〇に激しく

ピストン運動を繰り返し、奥まで何度も貫いた！

ゴツゴツ、と奥を叩く度にオーブリーちゃんは

ブルブル、と身を震わせた。

「あああっ♥イクウーっ♥」

びゅくびゅくっ♥

すかさずイッたばかりの

オーブリーちゃんの膣内に  
俺は大量の精液を注ぎ込む。

「熱い！　熱い！　熱い！　熱い！」

初めて味わう膣内射精に彼女は  
絶叫しながら俺の腹の上でよがり狂う。

「はあ……はあ……」

うれひい……♡

匙さんのおチ○ポ、凄かったです……♡

「俺もだよ、オーブリーちゃん。」

ありがとう

俺達はお互いの唇を重ねた。

「んっ……♡」

「んんっ……♡」

ちゅぱっ……♡　ちゅっ……♡

舌を絡ませ合うと、股間に素晴らしい刺激が走った！　見ると、パ

コルちゃんが

また股間に顔を埋めて、俺のモノを掃除している！

「ああん♡お兄さんのオチン○ン、

まだ元気になってる……♡」

パコルちゃんは

何と言われもしないのに

お掃除フェラを始めてくれた！

「ああ……気持ちいい……」

俺は思わず感謝を込めて

パコルちゃんの頭を撫でる。

「えへへ……♡」

パコルちゃんは嬉しそうだ。

しかし、その光景を見て嫉妬したのか？

オーブリーちゃんが俺に

そのたわわな胸を押し当ててきた！

「ちよつと……！　私だって頑張ってるんですよ？」

ほら、こつちにも構ってください！」

あちらを立てればこちらが立たず……!!?

俺はオーブリーちゃんの

巨乳を揉みながら、彼女に口づけをする。

「んんっ……♥んふう……♥」

オーブリーちゃんのおっぱいと

パコルちゃんの愛情マックス

お掃除フェラのダブル攻撃に、

俺は再び射精した！

どぴゅどぴゅどぴゅっ♥

「きやあっ♥」

「あふう……♥」

俺の射精が終わると同時に、二人は顔を離して、

互いの愛液と俺の精液でベトベトになった裸体を

見せつけて、

二人の美少女が同時におねだりしてくる。

くぱくぱ、と二人のオマ○コは

観光地の呼び込みの様に口を開いて

俺のチ○ポが飛び込むのを待ちわびている……!!

「ねえ、お兄さん、もう一回シよ？」

断る理由なんてあるはずもない。

こんなぼったくりならいつでも歓迎だ!!

「もちろんさー！」

俺は迷わず二人に覆いかぶさった。

↓

安里Side

「おお、早い到着じゃな……」

ヤンリマさん、いやヤンリマは

フェイスボールをつけたまま

横に寝そべり、俺達の到着を待っていた。

ここはヤンリマの寝室だ。

まるで俺を誘っているかの様に  
その身体を露出させている。  
普通なら飛びかかるのが当然だが、  
今はそれより大事な事がある。

「ゴブリンキングから

話は聞いたぜ。

どうしてこの村落に男手と

子供がいないのかってな……」

「ほおー……」

ならば話が早い……♥」

ことの真相はこうだ。

かつてこの村落は

男エルフ達が支配していた。

魔法知識、弓術、薬学、建築、鍛冶、

様々な分野に精通しており、

エルフの里、いや冥界の中でも

トップクラスの実力を持っていたという。

だが男エルフ達はその力を

いいことに他の種族の女性をさらったり、

時には暴力をふるう、無理矢理孕ませる、

キメラの実験材料にするなどやりたい放題だった。

何百年、何千年の間……。

そう、まるで今のゴブリンの様に、な。

その結果、残ったのは

男を悦ばせ、従い、奉仕するのに

最適化された肉体を持つ

不老長寿の女性のみ。

それが今の女エルフ達なのだと言う。

逆に男性エルフ達は魂、知識を

汚染されつくし醜い姿に

変わっていきゴブリンの祖に

なったらしい。

「うむ……。」

故に我等は時折雄の精を

絞り取ることでしか

生きられぬ身体になつてしまった。

さながら夢魔の様にの……。

もはや、子を為すことなど出来よう筈もない。

だからと言って、

この集落を捨てることはできぬのだ」

彼女は涙を浮かべていた。

それは悲しみからくるものだけ

ではない。

自分が無力であることへの嘆きだろう。

そして、彼女の心の中には

自分と同じ境遇の者達を救うという使命感があつた。

それこそが彼女とミダーラが

女王の座についている理由なのかもしれない。

「安心しろ。

俺とイツセー、

それにゲイトさんがお前らを救つてやる」

「本当か!？」

「ああ、約束する。

だから好きでもない男に抱かれるために

媚びたり、自分の身体を安売りしなくてもいいんだ」

俺の言葉にヤンリマは涙を流した。

今度は嘆きの涙ではない。

「ありがとう……ありがとう……!」

「これでもう、同胞達は救われる!」

「礼はいらない。

その代わりこの秘宝を

ゲイトさんに譲つてくれないか?」

さっきの鉱石は二天龍が激突した力の名残で  
異次元に色んなエネルギーを  
送り飛ばす力があるらしい。

それは恨みやら色欲やらマイナスのものも  
含めてらしい。

さすが、アザゼルのおっさん。  
解析が早い。

ぶっちゃけこの鉱石がなけりや  
俺もゴブリンの様に

ヤンリマを襲っていたかも知れん。

「ああ、構わぬぞ」

ヤンリマは快く承諾してくれた。  
なら話は早い。

ミダーラに地下に避難させていた

混血の子供達も含めたエルフを集めてもらい  
ゲイトさんに力を使ってもらおう。

「……どうかな?」

ゲイトさんは穏やかに

ミダーラとヤンリマに尋ねる。

すると、

二人の顔がみるみると

晴れやかな表情になっていった。

「はい……酷く健やかな気持ちです」

「ああ……解放された様な気分じゃ」

どうやら上手くいったようだ。

「ふう……良かったですね」

「はい、これで私達の役目は終わりました」

ミダーラは安堵した様子で言った。

「え? どういうことだ?」

「実は……私達は男性の精液の  
代替物として妊娠せずとも

母乳を出せる薬草を

栽培していたのですが……

ゴブリンキングに

荒らされてしまいどうしたものかと

思っていたのです……」

だがその薬草の成分も

ゲイトさんの『万華境』の力で

この集落全体に行き及んでいるらしい。

ま、何にせよこれでミダラーや

ヤンリマが見ず知らずの

来訪者に犯される事が

なくなつてめでたしめでたし……。

そして俺はエルフ、ダークエルフからの

もてなしを受けて、一眠りの後に出立。

の筈だったんだが……。

↓

歓待を受けて一眠りしていた時、

俺は股間に違和感を覚えた。

「んっ……っ？」

「はうううう……っ♥

安里殿の逞しい雄マラ……♥

最高じゃあ……♥」

なんとヤンリマは俺に

またがり腰を振り始めていた!?

それも先の恥じらいに満ちた態度とは

打って変わり、完全に快楽に溺れている様だ。

そして、その隣では……。

パンツ♥パンツ♥パコパコツ♥

と激しい音を立てて

ミダラーがイツセーに激しくピストンされていた。

しかも二人とも全裸である。

いや、それだけじゃない。

よく見るとミダラーの

乳首には搾乳機がつけられており、  
そこからミルクが滴っている。

そう、二人は搾乳プレイをしていたのだ。

そして匙も……。

見れば全裸のオーブリーとパコルに

挟まれて3人で舌を絡ませ合い、

ディープキスをしている。

「ちゅぷっ♥れろお……んむう……♥」

「ぴちやつ……はあはあ……♥」

ボク……♥お兄さんの子供が欲しいな……♥

デキ婚……したいよお♥」

「わ、私はイツセーさまの

赤ちゃんが欲しいです♥

こんなにセックスが

気持ちいいなんて知らなかったよお♥」

……!?

ど、どうということなんだゲイトさん!?

俺はヤンリマにされるがままに

されながら、ゲイトさんを見る。

「うーん、どうやら彼女達は

淫乱というよりは

愛した男性に対して極端に

従順になるみたいなんだ。

イツセー君は今の赤龍帝で

嘗ての赤龍帝に救われた

ミダラーは恩義を感じていた。

匙君はあの二人に

気に入られたみたいだね」

そう言っつてゲイトさんは笑う。



ちよつ、ちよつと待つてくれ!!

じゃあヤンリマは……!?

うう……! 気持ち良すぎる……! 限界だ!!

俺の質問より先に

ヤンリマの膣はキュウウと締まり、  
大量の精液を俺から吐き出させた。

「イクッ……イクッ……」

ふおお♥貴方には感謝してもしきれぬ……♥

このヤンリマの全てを尽くして

安里殿のやや子を孕むまするう♥」

おいおいおい!! なんだよそれ!?

ヤンリマは俺の身体から離れずに、

そのまま再び腰を振るい始めた。

や、ヤバい……! これはマジで……!

「それで安里。

キミは僕を使役してこの集落を

未来の子供達を淫獄から救った

英雄、ということになった。

だからとりわけ多くのエルフがキミに感謝している。

その証として、今宵は宴を開いたわけなんだ」

ゲイトさんは平然と言う。

え!?! あれは送迎パーティーじゃなかったのか!?

「いやいやいや……! 俺の人權は!?!」

「うん? 何か問題でもあるかい?」

みんな幸せそうだろ?

人間は異性を孕ませて子孫を繁栄させるのが

一番正しい生き方だと聞いたけど?」

ゲイトさんはキョトンとした表情を浮かべる。

どこ情報? どこ情報だよそれはあああ!!!

「い、いや、そりゃそうだけど……」

「それにこの集落を救った功績は大きい。

他の種族との同盟も組めるだろう。

つまり、これからはこの集落は

赤龍帝のイツセー君とキミのものだ」

「は……はははは……」

「ああ、安里殿……♥

妾にもつと子種をおくれえ……♥

子々孫々、妾は貴方の血筋にこの身を

捧げまする故にい♥おおっ♥太いい♥♥♥」

ヤンリマはすっかり

発情したメスの顔で懇願してくる。

こうなりやもう、

腹をくくるしかねえか……。

どちゅんっ♥♥♥

俺がヤンリマの股間を突き上げると、

彼女はフェイスベール越しに

その端正な顔を快楽に歪めた。

「ひいんっ♥き、気持ち良いのじゃあ♥

安里殿の極太チ○ポオ……♥

しゅごすぎるのじゃあ♥」

「そうか……今までの奴等と

比べてどうだ？」

俺はニヤリと笑いながら尋ねる。

すると、ヤンリマは体液を

穴という穴から垂れ流しにして

恍惚感に浸っていた。

「はうう♥こんなに気持ちのいい

交尾は初めてなのじゃあ……♥

比較するに及びませぬ♥♥♥」

「そうかよ、ならピースしてみな。

もつともつと……気持ちよくしてやるからよ

「は、はい……♥」

ヤンリマは言われるままに  
両手でアへ顔をフェイスボールで  
隠してピースサインをする。

俺はそれを確認すると片腕を  
触手に作り変えてヤンリマを拘束し、  
ピストン運動を開始した。

ズボツ♥グチュツ♥ドチュンツ♥

「あつ♥あんつ♥こ、これが……♥

安里殿のセツクスなのかや……♥

妾の全てが壊れてしまうのじゃあ♥

でもっ♥でもお……♥

気持ちいい♥壊れるのが気持ちいいのじゃあ♥

あ、あ、あひいいい♥」

「そうかい……そんなに嬉しいのか。

だったら……ほら、イキまくっちゃいな!!」

そう言つて俺が触手を纏わりつかせ、

耳や乳首などを責めると、

ヤンリマは敢なく絶頂を迎えた。

「おぐううう♥マ○コ♥

マ○コ♥♥全身が触手でオマ○コになっておるう♥♥♥イグウ♥イ

ク♥イグ♥イクウツ♥♥」

ブシャアアアツ!! ビクビクツ!

ブシャツ!!

まるで品性ごと排泄するように

幾度となくヤンリマは俺の上で

絶叫しながら潮を吹き出し、

もはやめくれ上がった

フェイスボールを治す余裕もないまでに

激しく乱れ狂った。

「おいおい、全身がオマ○コ?」

お前が俺のガキを孕むのはここだろ?」

俺はそう言って彼女の子宮口をこじ開け、  
マーキングするように何度も突き上げ、  
ヤンリマの身体を欲望で満たしていく。

「あざいい♡おほっ♡おほおおっ♡

申し訳♡申し訳ありませぬ♡♡♡

白痴の妾を教導していただきありがたやあ♡♡♡

チ○ポ♡チ○ポツ♡チ○ポ啓蒙幸せえ♡」

ヤンリマは俺に屈服したように舌を出しながら喘ぐ。  
その顔には最早知性など欠片も残ってはいなかった。  
だが、それがいい。

「さあ、出すぞ!!」

しつかり俺の子供を産んでくれよ!!

イクぜ!! 孕めっ! ヤンリマ!!」

ビュルルルル——ツ!

ビュ——!!!!

「ひいい♡い、イック——ン♡♡♡」

ヤンリマは俺が射精すると同時に

身体を大きく仰け反らせ、

そして、意識を失った。

俺はそのエンリマの痴態に

どことなく歪んだ充足感を

抱いてしまっていた……。

↓

イツセーSide

「あっ♡ひいいっ♡」

うう、ミダラーさん……! !

何て声を出すんだ……! !? !

ミダラーさんはその一際捻った

おっぱいに搾乳器を取り付けられ、

母乳を吸い出されていた。

何でもエルフの子供を

育てるために不可欠なんだとか。  
そして母乳の出を良くするためには  
意中の人に抱いてもらうのが  
一番らしい。

俺も正直ミダーラさんを

一目で気に入ってしまったので

こうしてミダーラさんと

気持ちいい事をしているんだ。

「んっ♥んんんっ♥」

ミダーラさんの甘い吐息と

ミルクの香りが

俺の耳と鼻に入ってくる。

ああ、なんて可愛い人なんだ……。

エルフの子供達に聖母の様に

接していたミダーラさんが

こんなにも淫らに悶えている……。

興奮を抑えきれない。

「んんっ♥んんんっ♥」

俺は思わず彼女を抱きしめる。

すると彼女は快樂のあまり体を震わせていた。

俺との後ろからのハグだけでこんなに乱れて……！

「ああ……♡イイ……♡」

もつと強くう……♡」

「わかりました！」

俺はミダーラさんの要望に応え

更に腕の力をぎゅつと強める。

「ああっ♥もつと……もつと……♡」

そう言うてより一層艶やかな表情を浮かべる。

更に水を含んだスポンジが握りつぶされた時の

様にぶしゅっ、ぶしゅーつと母乳が吹き出していた。

「ふふ、今のミダーラさん、

すごくエッチですよ……」

ゴツンッ♥

「あ……あ……♥当たるう……♥」

そう言った瞬間、

ミダーラさんは嬉しそうに

微笑みながら絶頂を迎えた。

「あは……♥

ありがとうございます……

これで私達も本当の

ママになれますね……♥」

そう言っって幸せそうな笑みを

浮かべる彼女を見て、

俺は胸の奥に熱いものを感じた。

「愛していますよ……ミダーラさん」

「はいっ！ 嬉しい……♥」

そうして俺たちは再びキスをした。

「ああん……♥もう……こんなに……♥

私が甘えん坊の赤龍帝様を

おチ○ポよしよししてあげますう……♥」

そう言いながら俺のチ○ポを優しく

柔らかなオマ○コで

包みこんでくれる。

キツさは程々だが

まるで薬湯の様に浸っていられる。

「だって……こんなに綺麗な人が

目の前にいたら……我慢できませんよ！」

「ああ……♥イツセー様に

褒めて頂けるなんてえ♥」

遥か年上の

女性を意のままに

しているような感覚。

そんな背徳的な感情も

互いに心地よいものだった。

「ううっ！ くうっ!!」

「あっ♥あっ♥イツセー様♥」

「あの……様づけはちよつと……」

「でしたら……イツセーくん♥

イツセーくん♥イツセーくん♥」

ミダーラさんは甘えたがりなのか？

いや、族長の責任感が

今までそうさせているのかもしれない。

そう思うとミダーラさんへの

愛しさが込み上げてくる。

リアスさんやアーシアの様に

この人とこの人に関わる全てを

守りたい、と心の底から思った。

「ミダーラさん……」

俺の赤ちゃんを産んでください……

俺の子を産んでくれれば

俺があなたを一生守り続けられますからっ!!

だからっ!! 俺の子供を産んでくれっ!!!」

「あ、あ、あ♥嬉しい♥嬉しいですう♥

ああっ!! イクツ♥イクツ♥イクウウツ!!!」

ビュルルル——ッ! ビュ——!!

「あっ♥あっ♥出てる♥いっぱい♥

私もイクツ♥イクツ♥イクうーッ!!!」

俺の欲望を一身に受け止めたミダーラさんは、

何度も何度も痙攣しながら、母乳を噴出し、

瓶を満たしていく。

同時に俺の心も満たされていった……。

??? |  
S i d e

所変わって……。

ニグラの膨れ上がった腹が  
脈動すると、

その中身が飛び出してきた。

ソレは傍目には人の赤子の様であった。

しかし生まれた時から

すでに赤黒い髪が生え、

歯も既に生えている。

そして、瞳は赤と青のオッドアイ。

更にその赤子は産声ではなく

咆哮を放つ。

「おおおおお!!!」

口からは羊水ではなく

炎が放たれ、赤子を包み込む。

産み落とした筈の我が子の

異様ぶりを見てもニグラは特に驚きもせず、

むしろ満足げに笑っていた。

「ふふふ、そう。

炎は全てを焼払い、新たな

混沌を生みだす……。

ようこそ。いえ、お帰りなさい、

と云うべきかしらね……。

○○○○○○○○○○……。

いえ、トウー・ルチャ」

そう言うと、ニグラは静かに微笑み炎から生み出された新たな同

朋に祝福を与えた。

「お久し振りですね……。

○○○○・○○○○」

炎から現れたのは女神の美しさと

地母神の豊満さ、



更には魔神の頑健さを併せ持つ  
淑女であった。

ともかくも

彼女は己の肉体を

見渡しながら呟いた。

「フム……どうやら私は貴方に

産み直された様ですね。

それにしても……」

「何か気になる事でも？」

「ええ、何せ今の私の体は

人の似姿をベースにしているとはいえ、

悪魔、そして

ドラゴンの血まで混じっています。

それが何故このような姿になったのか

疑問でなりません」

そう言うと、彼女の体からは

紅蓮のオーラが漏れ出す。

それを見たニグラは満足したように微笑む。

それはまるで、

自らの子供が成長を喜ぶ母の笑顔の様だ。

「恐らくそれは、

イツセーちゃんのお好みか反映した結果でしょうね」

「イツセー……？」

トウー・ルチャは初めて聞く名前に首を傾げる。

そんな彼女にニグラは説明を始めた。

「ふふふ、貴方もきつと気に入ると思うわ。

だって彼は……」

そう言って彼女が語り出した内容を聞いているうちに、トウー・ル

チャは自然と

その少年に興味を持っていたのだった。

「ほう……興味深い話です。」

是非会ってみたいものですね」

「ならまずは

この世界を楽しみなさいな。

幸いにもここには様々な種族がいるのだもの。

退屈はしないと思うわよ♪」

「はい、ニグラ様の御心のままに」

こうしてまた一人新しき眷属が誕生した。

※第57話（イツセー×白音【大人化小猫】）

イツセーSide

どうも！ 兵藤一誠です！

何やかんやで会談の準備で

大忙しです。

何せ、天使、堕天使、現魔王、

ギリシヤ神族、アースガルズ神族、

更には天津神と揃い踏みだ。

もうね、どんな会談になるのか想像がつかないよ。

「はあく……疲れたあく……」

休憩時間に俺は机に突っ伏した。

すると誰かが俺の頭を撫でてくれる。

リアスさんや朱乃さんにしては

少し手つきが違うな……？

顔を上げると、そこには小猫ちゃんがいた。

俺と目があつた小猫ちゃんは微笑んでくれる。

ああ癒される……。

なんとというか小猫ちゃんは

名は体を表す様に大人しい子だけど、

時折見せる女の子らしい仕草とか笑顔が

本当に可愛いんだよなあ。

「お疲れですか……先輩？」

「まあね。でも大丈夫だよ」

「……嘘ですよね」

「……はい、ごめんなさい」

見抜かれてしまった。

さすが小猫ちゃんだぜ。

「何だか黒歌さんとやり合ってから

調子が出なくてなあ……」

黒歌さんは小猫ちゃんの姉で

なんやかんやあつて猫鬼に  
変ずるまでに世の中と悪魔を  
怨んで怨んで恨み抜いている。  
その想いは凄まじく、

この世の全てを自分と同じ境遇へ  
陥れたいと思っっているんだ。

そして小猫ちゃんはそんな姉を  
止める為に力を得るべく奮闘しているんだ。

姉妹か……俺には色々あつて  
兄弟姉妹はいないけど、

もし兄や姉があんな風に

世の中を恨み抜いていたらどうしよう……。

想像するだけで居た堪れない。

小猫ちゃんは実際黒歌さんが

どんなことをしていたのか知ってるみたいだし、  
きつと辛かつたらうな……。

俺は小猫ちゃんの頭に手を伸ばした。

「先輩……？ 何をして……んっ」

「よしよし」

頭を優しく撫でてあげた。

小猫ちゃんは最初驚いていたが、  
すぐに嬉しそうに目を細めた。

「……気持ちいいです」

「そっか、良かったよ」

しばらく撫でてしていると小猫ちゃんが口を開いた。

「……先輩は優しいですね」

「え？」

突然の言葉に俺は思わず聞き返すが  
それは違う。

「……優しい奴は親友の彼女を  
傷つけたりしないよ」

「……まだ、吹っ切れていないんですね……?」

許されることと乗り越えることは

別だと思うんだ。

……俺だってまだまだ未熟なんだなって思うよ。

全く駄目だなあ……俺は。

十分の一でもいいから

ヴァーリの様な強さが欲しい。

「……先輩、

明日デートしましょう」

「え!? デ、デート!?」

唐突過ぎる提案に戸惑う俺。

「……はい。

私、先輩と一緒にいきたい場所があるんです」

「い、一体どこに行く気なの?」

「……それは行ってみてのお楽しみです」

……ふむ、確かに考えてみれば

今まで二人で何処かに遊びに行ったことってないな。

これは丁度良い機会かもしれない。

それに最近ずっと仕事漬けだったしな。

気分転換も兼ねて行くとするかな。

「分かったよ。じゃあ行こうか」

「……ありがとうございます」

こうして俺達はデートの約束を

取り付けたのだが……。

陰でルーナちゃんやんが聞いていたのを

俺達はまだ知らなかった。

↓

安里Side

「な、何だって……!?!」

イツセーが小猫ちゃんとデート!?!」

ルーナの言葉に俺は耳を疑った。

いや、あのおっぱい星人の  
イツセーがなあ……。

「うん。さつき二人が話しているのを聞いたの」  
ルイーナはあわあわと動揺しながらも答えてくれた。

「それで、お前はどうしたいんだ？」

「わ、私は……」

ルイーナは言葉に詰まりつつも  
答えた。

「私は……二人を見守りたい。

小猫ちゃんにもイツセー君にも  
幸せになつてもらいたいから……」

「そうか……」

ルイーナと小猫は仲がいいみたいだし  
俺とイツセーは無二の親友だし

心配なんだろうな。

しかし困つたな。

これでは迂闊に手出しできないぞ。

下手に介入すれば余計に拗れてしまう。

「とりあえず今は様子を見よう。

何かあればすぐ動けるようにしておくんだ」

「……そうだね。ありがとう安里」

「いいき。俺はお前の騎士だからな」

「うん……それでね。」

二人の様子を見ることについて  
なんだけれどね……」

何だか風向きが嫌な方向になつてきたような……。

「私もついていっっちゃだめかな？」

「……やっぱりそうなるよなあ」

まあ、予想はついていたけどな。

でもどうしたものか……。

「ねえ、お願い！」

私のわがままなのは分かってるんだけど、  
どうしても小猫ちゃんと

イツセー君のことが気になっちゃうの!」

必死に頼み込むルイーナに

どうも俺は弱い。仕方がないな。

「わかった。ただし俺の指示には従ってもらおうからな」

「うん。ありがとう安里!!」

「よし、そうと決まれば早速準備だ。

「明日に備えて今日は早く寝ろよ?」

「了解だよ♪」

しかしルイーナは

随分明るくなったな……。

まあ、いい傾向か。

↓

イツセーSide

ついにやって来た日曜日。

俺と小猫ちゃんはグレモリー領の

広場に来ていた。

「さてと、まずはどこに行けばいいのかな?

小猫ちゃん」

「……」

「小猫ちゃん?」

「……あつ、すみません先輩。

ボーツとしました」

「いや、別に構わないけど……」

大丈夫かい? 疲れてるんじゃないや?

そう言えば顔も赤いし……」

ピタリ、と俺は小猫ちゃん

の額に手を当てた。

すると突然……!

「うにゃああああ!」

突如小猫ちゃんが奇声を上げる。

うわ、ビックリした！

いや、そんな事より

小猫ちゃんの体調だ。

「熱があるじゃないか!？」

どうして黙っていたんだ!？」

「……いえ、先輩に迷惑をかけてはいけなさと

思いまして。それに少し頭が痛かっただけですから」

「そういう時は

ちゃんと言ってくれ。

俺は君の先輩なんだから。

体調が悪い時ぐらい頼ってくれないと寂しいよ」

俺がそう言う和小猫ちゃんは

申し訳なさそうに俯いた。

「……ごめんなさい」

「いいよ。それより何処で休もう？」

うーむ、この広場というか

街は広いし 店も多い。

どこがいいだろうか……。

予め候補を調べておくべきだった!

自分が情けない……!

「先輩、私は大丈夫です。

それより私、

行きたい場所があります」

「ん、どこだい?」

「……えつとですね。

その、あれです」

「あれ?」

「……お城です」

お城!?!ま、まさか……!

と慌ててみたが指差す先は遊園地!



いやー、俺ってば勘違いしちゃって恥ずかしいなあ。

「そっか。じゃあ行こうか」

「……はい」

俺達は手を繋いで歩き出した。

ところで今更だけど、

手を繋ぐ必要があるのかな。

小猫ちゃんの様子がおかしい。

いや、いつものクールかつ

舌鋒鋭い小猫ちゃんも

好きなんだけどき。

何ていうか……

しおらしいっていうか。

なんか調子狂うなあ……

↓

ルイーナSide

私と安里は二人を

そつと尾行していた。

「ふむ、やはり小猫ちゃんは イッセーのことを……」

「うん。これは決定的だね！」

私はずい燥いでした。

だって小猫ちゃんが

あんなに嬉しそうに

してるんだもん。

嬉しいに決まってるよね。

イッセー君、良かったね。

そして小猫ちゃんも……

本当によかった。

これで心置きなく二人を見守れる。

私が見守る中二人は

遊園地に入っていた。

と、言う事は私達も遊園地に

入っても問題ないよね？

えへへ……私も安里とデートだ!!

頑張るぞー!

安里 Side

さて、俺とルイーナは

小猫とイツセーを追って

遊園地に入ったのだが……。

いかんせん人が多いな……。

これでは二人が どんな

アトラクションに乗るのか わからないな……。

いや、アイツの性格上乘る所は

あそこだろうな!

「なあ、ルイーナ。

ちよつとあそこに行ってみないか?」

俺が指差したのはお化け屋敷だ。

あそこは暗いし、

ホラーやら何やらの

吊り橋効果やらに加えて

堂々と小猫ちゃんにタッチしようなんて

考えてるんだろうな。

変な所で頭が回るヤツだからな。

ま、俺には関係ないけどね。

せいぜい頑張ってくれ。

「うん。

私、こういう所初めてだから……優しくしてね?」

上目遣いでもじもししながら

ルイーナは言った。

……ぐっ、可愛いな畜生。

というか誤解を招くような

表現はどうなんだ……?」

「ああ、わかったよ」

「ありがとう♪」

俺とルイーナは手を繋ぎながら

お化け屋敷に入っていく。

さて、俺は小猫ちゃんと

イツセーの様子を見守りますかね……。

↓

「ばあーっ!!」

「あア!？」

「ヒイ！ す、すいません！」

しまった、つい急にお化けの

エキストラが出てきたから

脅しをかけてしまった！

すっかり腰を抜かしている……。

俺はこの通りの悪人面だからな。

逆にスタッフをビビらせて

申し訳ないことをしてしまった。

隣のルイーナは

クスクス笑っている。

こっちもこっちで 可愛い笑顔だな畜生。

「ふふふ、凄い声だったね。」

安里ってばびっくりすると そんな顔になるんだね」

いや、ビックリしたというか

ついルイーナを襲ってくる奴が

いないかと警戒してしまった。

というか、それならお化け屋敷に

入るんじゃねえってツツコミが

ありそうだが……。

いや、違うんだよ。

小猫ちゃんとイツセーの様子を 見たかっただけで……。

「あはは……その、ゴメンな。」

驚かせてしまっ……。」

「ううん、大丈夫。」

「それより早く進もう！」

「そ、そうするか……」

ー 小猫Side

先輩と二人で入った

お化け屋敷はとても

楽しかったです。

「どわあー!?」とか

「うひゃあ!」とかいいながら

先輩はしがみついてくるのです。

戦いの時はあんなに勇ましくてカッコいいのに、

今は子供みたいで可愛かったです。

「ふう……怖かった」

「……そうですか？」

私は平気ですよ。

先輩はお化けが苦手なんですか？」

「ああ、俺は怖いのがダメなんだ」

……何だか意外です。

先輩は強いから

何でもできると思っていました。

「そうなんですか。」

先輩にも弱点があったんですね」

「ははは、俺は弱点ばかりだよ。」

部長や朱乃さんにはナイショな。

こんなカッコ悪いところ見せたくないしさ」

「わかりました。二人だけの秘密ですね」

「そうだな。」

俺と小猫ちゃんだけの秘密だ」

二人きりで内緒の話。

それが何だかとても嬉しく

感じます……。

これはきつと……。

発情期によるものだけではないと

私は……思いたい。

「小猫ちゃん、

次はどこに行きたい？」

「そうですね……。

先輩とならどこでも」

私はそう答えた。

本当にそう思うのだから。

「そうか。じゃあ観覧車に乗ろうか」

「はい」

私達は手を繋いで歩き出した。

そして観覧車に乗り込む。

係員のお姉さんの誘導に従って

ゴンドラに乗っていきます。

「それでは良い旅を〜」

お辞儀をしながら 係員の人は扉を閉めました。

……これで二人きりですね、先輩♥

↓

イツセーSide

俺と小猫ちゃんは

観覧車の中に入った。

さつきまでいた遊園地の景色は

段々と小さくなっていく。

俺の隣に座っている小猫ちゃんは

窓の外を眺めている。

俺も釣られて外を見た。

……平和だなあ。

今日は本当に楽しい日だ。

小猫ちゃんと一緒に いろんな乗り物に乗ったり、  
一緒にご飯を食べたり……。

そして今、小猫ちゃんと こうやって向かい合っている。

「小猫ちゃん、今日のデートだけど……」

「はい、何でしょう?」

「すごく楽しかったよ。」

「ありがとうな、誘ってくれて」

「……先輩」

小猫ちゃんは席を移動して

俺の横に来た。

そして、肩に頭を乗せてきた。

俺の手を握ってきた。

リアスさんや朱乃さんと比べて

か細くて小さな手だ。

でも、温かい。

「私も……凄く楽しかったです。」

ずっと、このまま時間が

止まればいいのになって思ってます」

「小猫ちゃん……」

お前は美しい……って答えたら

ファウスト博士のパクリだと

言われてしまうだろうか?

俺にはわからない。

でも、この気持ちだけは本物だと思う。

俺は小猫ちゃんの頭を撫でる。

すると彼女は目を細めて すり寄ってきた。

子猫みたいに可愛い。

「先輩、お願いがあるんですけど……。」

「いいでしょうか?」

「ん? 何だい?」

「その……黒歌姉様の『弱憎強贖』を

私の仙術なら解除できると思うんです」

な、何だって!?

あのシユタークさんやアザゼル先生すら  
解けなかった禁断の奥義を

小猫ちゃんが解呪できるのかよ!?

「そ、それは本当なのかい?」

「はい。私と黒歌姉様は姉妹ですから。

それに、先輩に救われてから、

少しずつ自分の力を取り戻しています。

だから、きつと大丈夫です」

救ったなんて少し大げさだけど、

小猫ちゃんは自信に満ちた

表情で言った。

ああ、なんて頼もしいんだ!

俺は小猫ちゃんを信じよう。

「わかった。じゃあ頼むぜ小猫ちゃん!」

「はい!」

小猫ちゃんはそう言うと、

いきなり服を脱ぎ出した……!?

って!!

「ちよ、ちよっと待て!?

どうして脱ぐの!?!」

まるで妖精の様な

美しさの 裸体が露わになる……。

胸は小さいが形が良くて、腰はキュツとくびれていた。

ある意味で理想的だが……!!

「え? 何故って……?」

これから仙術を使って 先輩と交わるんです」

「はい!」

い、幾ら何でもこんな所でえ!?

小猫ちゃんは俺の前に来ると

俺のズボンに手をかけた。

そしてパンツごとずり下ろす。

が、悲しいかな。

観覧車の中という状況

で 俺の息子さんは縮こまっていた。

「……………」

うう！ 小猫ちゃんが切なげに俺を見つめてくる…………。

しかしこの状況では流石に…………。

「…………やっぱり、今の私じゃ

ダメなんですわ…………」

小猫ちゃんは悲しげな顔で呟いた。

「ち、違うぞ小猫ちゃん！」

俺は別に小猫ちゃんの事が嫌いとか

そういうんじゃないんだ！

ただ…………その…………こういう所じゃあ…………」

俺は必死に弁明する。

観覧車の中でセックスというのは

ロマンチック過ぎるというか

アクロバチックというか…………。

しかし小猫ちゃんは続けた。

「大丈夫です。

服を脱いだ理由は他にもありますから」

え？他の理由って？

俺の頭に疑問符が浮かぶが

その疑問符はすぐに打ち砕かれた！

むくむく…………♥ ぷりんっ♥

ばるるんっ♥

何と小猫ちゃんの身体が

みるみる内に変化していくではないかあー!?

そして俺は見てしまった。

目の前にいるのは黒歌さんに

負けず劣らずのナイスバディを

持つ白髪の美女だった。



こ、これは……！愚息が……  
ムクムクとせり上がっていく……!!

そんな俺の愚息を小猫ちゃんは  
優しく握ると上下にしごき始めた。

俺の愚息は瞬く間にフル勃起。

おおおおお!!?

す、すごい！ 何だこのテクニックは!?

小猫ちゃんは俺の顔を見て

興奮しきっている様で荒い吐息を漏らしていた。

「はあ……はあ……♡」

先輩のオチン○ン……♡

凄……匂い……♡」

そ、それはすまない！

昨日ちゃんと洗ったんだけど！

しかし、そういう事ではないらしい。

「ああ……♡そうじゃなくてえ♡」

男の人の……汗臭い感じの匂い……凄く好きなんです……♡

特に先輩のは濃くて素敵ですよ……♡」

小猫ちゃんは俺の愚息をしごく

速度を上げるや

先走り汗が出てきた。

小猫ちゃんはそれを指で

すくい取り、舌で舐め取った。

そして、

「はううう……♡♡♡」

まるでマタタビを与えられた猫の様に蕩けた顔をして、更にしごくスピードを上げた。

「せ、先輩……♡先輩い……♡ 私……もう我慢できません……!」

先輩のザーメンを……飲ませてください……!」

「お、おい小猫ちゃん!」

「はあ……はあ……! お願ひします……!」

小猫ちゃんは俺の愚息の前に  
パチンコ台のチューリップみたいに  
ぱかりと口を開けて待っていた。

その光景はとても扇情的で、

俺は思わず小猫ちゃんの口に 発射してしまった。

どぴゅ！びゅー！

「んんん……♡」

小猫ちゃんは全て飲み干すと、

艶かしい笑みを浮かべた。

「はふ……凄いです……先輩……♡」

とつても濃いです……♡

ああ、ドキドキします……♡

ドキドキするにやあ♡」

語尾が猫になってる!?

それにしても……

なんてエロさだ……!!

こ、このまま

最後までしてしまうのか!?

観覧車の中だが！今！ここで！

「ああ……待ってくださいにやあ♡」

今日は白音は危険日なんですよにやあ♡」

ああ！小猫ちゃん改め白音ちゃんは

すっかりエロエロ大妖怪モードに入っていた。

ちんちんの姿勢でロケットおっぱいを

ぶるんぶるん揺らしながら 腰を振る。

その姿はまるで発情期のメス猫だった。

「だから♡こうしますにやあ♡」

ムチムチなお尻をこっちに向けながら

小猫ちゃんは財布をまさぐっている！

な、なんていやらしく先輩を

誘惑する無礼なお尻なんだ……!!

観覧車が降りるタイムリミットも

迫っているというのに……!!

だが、襲うわけにはいかない!

これはあくまで封印を

解除するため……ガマンガマン!しかし、

「あつたにや! これをどうぞにやあ♥」

小猫ちゃんが差し出したのは コンドームだった。

しかもLLサイズ……。

「え? どうして持って……」

「ニグラ先生が持たせてくれましたにやあ♥」

これで思う存分出来るにやあ♥」

な、なにしてくれてるんですか

ニグラ先生……!!

いたいけな後輩の小猫ちゃんが

こんな……こんな風に

手段と目的がないまぜになった

エロエロに堕ちていくとは……!!

ありがとうございます!

「先輩……♥先輩♥」

白音、汗とザーメンの匂いで

我慢できないにやあ♥

どうか白音のラブラブオマ○コ

仙術で先輩の封印を

解除させていただきますにやあ♥♥♥

お願いしますにやあ♥♥♥」

こ……これは全裸土下座!?

俺はなんてバカなんだ!

かわいい後輩の小猫ちゃん、

いや白音ちゃんを辛い目に

あわせるなんて!

俺は白音ちゃんの思いと

コンドームを受け取ると

白音ちゃんのお尻の前に 膝立ちした。

そして、ゆっくりとギチギチのコンドームを装着後に白音ちゃんの中に挿入した。

ぬぷっ………！ ぶち………っ！

「い、痛いじゃあ………！」

でも、いいじゃあ………♥

やっと先輩のモノになれたじゃあ♥」

「大丈夫か？無理しなくても………」

ぶち………っ！

ぎちぎち………！！ ずぶっ！！

こ………これは!?

白音ちゃんの身体は成熟しても

内臓、とりわけ子宮は未熟なのか!?

「ああ………♥動いて………♥

動いてくださいじゃあ♥♥♥」

そんな自分の身体を知ってか知らずか

白音ちゃんはお尻だけじゃなく

二又の尻尾まで振り回している。

だが、ダメだ！

ここで欲望のままに前後しては

白音ちゃんの体に負担をかけてしまう。

それでは本末転倒だ。

俺は白音ちゃんの背中に手を当てて

抱きしめつつ 駅弁の姿勢になる。

「いや、いやあ!？」

子宮口にずぶりと亀頭がめり込む

中、俺は着席すると

目を？く白音ちゃんは優しく囁く。

「無理は駄目だよ、白音。

今日は繋がるだけにしような………」

「う……うう……先輩のいじわる……！」

涙目で訴える白音ちゃん。

「ごめんよ。」

本当は俺だって我慢してたんだ。

だから、

この先はゆつくりやっていこう。

俺達のペースでね」

「はい……にやあ♥」

ちゅ……ん……

観覧車の中で俺達は結合したまま

何度もキスをした。

唇も股間も繋がる中で

俺の中の何かも

繋がっていく様な気がした。

凄く静かだ……だが、温かい。

観覧車を降りたら

またいつもの関係に戻れるだろうか？

俺は不安になりつつも、

今はただ白音ちゃんを 大切にしたいと思った。

『浸っている所悪いがな、相棒』

……！

ドライブグ！封印が解けたんだな！

『ああ、もう大丈夫だ』

そうか……！

良かった！…これで……！

『とこころで相棒。』

もう観覧車が降りそうだぞ？

おっぱいドラゴンの次は

青姦ドラゴンにでもなる気か？

俺は一向に構わんがな、ガツハハハ！』

豪快に笑うドライブグをよそに

俺の身体からは滝のように汗が噴き出す。

「そ、それはまずい！」

早く出よう！」

「はいにゃあ♥

頑張つて

いっぱいいっぱい♥

破ける位に出して下さいにゃあ♥♥♥」

白音ちゃんは嬉々として

一旦俺の愚息をオマ○コから

抜くと二又の尻尾で

コンドームを外すなり、

一方は鈴口を、もう一方で

竿全体をしこしこと扱き始めた！

尻尾の毛のふさふさ、

チリチリ具合が手で扱くのはまた違う刺激を

齎してくれるのが格別……！

ってそんな感想を抱いている場合

じゃない!!

出口が！出口が近づいてるうう！

「白音！頼むから止まってくれえ!!」

「嫌ですにゃあ♥

赤龍帝復活記念

ラブラブ尻尾コキするんですにゃあ♥」

観覧車が降りるタイムリミットも迫っていた。

俺は必死に白音ちゃんを静止しようとするが

それに構わず

白音ちゃんも絶頂寸前だったのか

ラストスパートをかけてくる。

「イクにゃあ♥イツちやいますにゃあ♥」

「た、頼む！早く！早く!!」

ああ、窓に！窓に!!」

だが時すでに遅し!?

ガコン!という音と共に

扉が開いてしまった!!

ああ……終わった……!!

俺はこのまま変態露出狂

赤龍帝として裏冥界社会で

ひっそり幕を閉じてしまうのか……!?

『安心しろ。相棒。』

既に手は打ってある』

絶望に駆られる中、

ドライグの声だけが響く。

と、俺以外の全てがモノクロになって停止している!?

ギャー助の時間停止か?

いや、あいつの性格上遊園地に來れる筈がない……。

となるとこれは……。

「やあ、イツセイ君」

にこやかにゲイトさんが

上空から漂いながらやって來た。

た、助かったには助かったけど

なんとという恥ずかしさ……!」

「ありがとうございます……!」

こんな大掛かりな魔法を

使って頂いて!」

それはそれとして感謝はしないと

いけないよな。うん。

「いやいや、気にしないでくれ。

君達と僕の仲だからね」

そして俺は愚息に白音ちゃんの

尻尾が巻き付いているのを

丸出しにしたまま小猫ちゃんの

衣服を持ってそそくさと

その場を後にする……！

しかし、密室で人にバレない所はどこだ!?

俺は一抹の不安を覚えつつ

トイレを探し当て、鍵をかける！

流石グレモリー領の遊園地の

多目的トイレだ！綺麗だし広い!!

そしてゲイトさんの時間停止を

解除してもらった！

しゅっ♥しゅっ♥

くにゅ♥くにゅ♥

忽ち再開されるフルスピードの

尻尾奉仕！しかも白音ちゃんは

どこで覚えたのかその白魚の様な手で

俺のタマタマまで揉みほぐしてくる！

「う……ああ……」

たまらず射精しそうになるが

ここは我慢して耐えるしかない……！

「ふふ……可愛い先輩にやあ……♥♥♥」

白音ちゃんの瞳の奥で妖しい光が

爛々と輝いている！

しかし……俺も白音ちゃんの先輩！

やられっぱなしではない！

ぢゅうううう！ぱちぱちっ♥

くりくりっ♥ぱちっ♥むちいつ♥

とびきりいやらしい音を立てながら

帯電した舌で白音ちゃんの

舌に吸い付き唾液を絡ませる！

更に指で白音ちゃんの乳首を

摘まんだりする！

「んんにやああん♥♥♥」



たまらず白音ちゃんの口から

悲鳴にも似た喘ぎ声が漏れ目がカツと

見開かれる！そして俺の玉袋を揉んでいた

白音ちゃんの手が

ギューツと握り込まれ、

更には尻尾が雁首を締め上げた！

うおおっ……………！

俺は堪えきれずに勢いよく精液を吹き出した！

びゅーっ♥

どびゆるるるる♥♥♥

ドライグが復活した事もあるのか

白音ちゃんの身体に盛大にぶっかけてしまった！

「い……………めん！」

「……………平気です。」

先輩の精液ですから……………」

おお、落ち着いたのか

エロエロ大猫又白音ちゃんから

いつもの

クール系美少女小猫ちゃんに

戻ってくれたらしい……………」

↓

安里Side

な……………何やってんだアイツら……………」

観覧車をラブホ代わりに使うとかマジありえねえ……………」

ルイーナも対面側で顔を真っ赤にして

俯くのも無理はない！

き、気まずい……………！

「そ、そう言えば……………」

ルイーナは遊園地に来た事って

あるのか？」

俺は何とか話題を逸らす為に

観覧車に乗ってからずっと

黙ったまま 窓の外を

見つめているルイーナに話しかける。

するとルイーナは少し 考えるような

素振りを見せた後、 静かに口を開いた。

「ううん。一度も……」

そう言えばルイーナの異名は

『蒼髪の虜囚姫』って言われる位の

箱入り娘だったんだ。

そりゃあ来たことなんて なかっただろうな……

俺は苦笑しながら 外の風景に視線を移す。

その時だった。

ちゅっ……♡

不意打ち気味に頬にキスされた。

見るとルイーナが恥ずかしげに

しながらも微笑んでいる。

「あのね……私今凄く幸せだよ……？」

だって大好きな安里と

こうして二人きりなんだもん……」

か、可愛すぎる……。

「そ、そうだよな……」

俺もすっごく楽しいよ……」

バカ！俺のバカ！

もう少し気の利いた事は

言えねえのか!!そんな事を考えているうちに

観覧車は頂上に差し掛かっていた。

眼下に広がる遊園地の景色は

確かに絶景だ。

だがそれ以上に……

「な、なあ、ルイーナ……？」

お前は本当に俺の事……好き……なのか？

俺なんかの何処がいいんだよ」

俺はつい疑問を口にしてしまった。

何て卑怯者なんだ！俺は！

こんな時にこんな質問をするなんて！

でも、聞かずにはいられなかった。

俺は自分の気持ちすら

はつきりとは分からない根性なしの

泣き言野郎だ！

だから……だからせめて……

良いも悪いも曖昧でめちやくちやな

この世界の中でも

ルイーナの本心だけは

知りたかったんだ！

「全部が好き」

即答だ！

そしてルイーナは 真つ直ぐに俺の目を見て言う。

「顔立ちとか体つきとか

性格とか能力とかそういうんじゃなくて

……ただ単純に安里という存在そのものが

私は大好き……愛してるの……」

ああ……もうダメだ……

我慢できない……

俺は無我夢中で 目の前にいる

俺を好きだと言ってくれる女の子を抱きしめた。

「俺……俺も……」

お前の事が……好きだ……！

世界中の誰よりも！ 愛してる!!」

「嬉しい！ 私も……私も！ 安里が大好き！

世界でたった一人の私の騎士様……！」

俺達はどちらからもなく唇を重ねた……。

イツセーや小猫の事は

もう頭のどこにもなかった。  
そして……。

「えへへ……安里。

私、アイス買ってくるね。

何がいいかな？」

「ルイーナが選んでくれたら

何だって美味しいよ」

「じゃあ、行ってくるね！　すぐ戻るから待ってて？」

「おう！行つてこい！」

俺がそう答えるとルイーナは　嬉しそうに

売店へと向かって行つた。

彼女を警護するのも忘れて。

その時の俺は

初恋の成就に頭が浮かれきつた

バカなガキだったんだ……。

↓

ルイーナSide

「えへへ……安里とお揃いの

アイスにしちやつた♪」

私はアイスのカップを両手

それぞれに持って歩いてた。

すると、ドン！と誰かにぶつかった。

「あつーっ、ごめんなさい！」

慌てて謝る。

するとそこには白髪でコートを

着た男の人がいた。

「いやいやア〜？」

俺ちゃんのコート君はアイスに

目が無いでございますから？

ルイーナちゃんとあのクソボケ

触手洗脳マニアのアイスを  
つまみ食いしてしまつたみたいで  
ございますですねえ！

お詫びに俺ちゃんのお尻でも  
触らせてあげますぜエ〜？

ケツの穴舐めろ雌豚ア！

なんつって☆ギャツハハハハ！！」

な、何なの……この人？

それに初対面なのに

どうして私の名前を……？

私が戸惑っている間にも

男は どんどん近づいてくる。

ま、まずい……逃げないと……！！

「ううっ!？」

身体が動かない……！！」

よく見ると私の身体は いつの間に

光の輪で拘束されていた。

これは……!!？

「いんや〜、くっせえ悪魔に

囲まれての地獄巡りは

流石に堪えましたわあ！ マジ辛すぎイイー!!

辛タンゴ！ 掃除をするのはルンバルンバ！

でもその甲斐あつて！ こうして！

ルイーナさんを ゲットできた訳ですよオ！

ディオドラさんが宜しくつてさア！」

ディオドラ……？

まさか……あのディオドラ……？

私の中で警鐘の様に胸がドクンドクンが鳴る。

「おいおい、 そんな怖がらないでよお！

大丈夫だつてえ！ 俺ちゃんは紳士だよ？

ルイーナたんには指一本触れないし

優しく丁寧に扱うから！

なわけねえだろボケが!!なんつって☆

あ!そうだ!これあげるね!」

そう言っつて男が投げてきた物を

私は咄嗟にキャッチしてしまった。

「こ、これは……?」

それは小さなペンダントだった。

「俺ちゃんの今の大本スって

チート能力半端ねえのよ!

だから俺ちゃんはソイツで

『記憶』も自由に操作できる様になったんだよねー!

『嘲弄』パワーまじパネエ!最高!!

そいや!そいや!はい!これでルイーナたんは

俺ちゃんの彼女になったよ!

やったねフリード君!

クツソ汚え悪魔どもとの

殺し合いで手に入れた ルイーナたんの処女は

俺のモンだ! もう誰にも渡さないぞ!

愛してるよルイーナ! ちゅっちゅー♥

なわけねえだろクソ悪魔が!ブツ殺すぞ!!」

いや……いや!逃げないと……!

逃げなきゃ……!あれ……?」

どうしてフリードから逃げる必要があるの?

あれ?

でも……何か大事な事を……

忘れてる様な……。

まあ、いいか。

忘れるって事は大した事ないって

事だもの。

↓

イツセーSide

「あ、アジアが攫われた!？」

な、何で! どうしてですか!？」

「申し訳ありませんイツセイ様!」

リースは俺に頭を下げる。

キズの手当はしてもらっていたけど

まだ顔色は悪かった。

隣には包帯をあちこちに巻いた

朱乃さんもいた。

申し訳無さそうにうつむき、

表情は沈み切っている。

「私達も油断していたのです。

あの金髪でサングラスをかけた

男が突然現れて……

アジア様を気絶させて連れ去ったんです……。

そして私達を一蹴して

『天下無敵の大英雄、

赤龍帝クンに宜しく』と……」

何だって!?! あの『英雄殺し』か?

何が『英雄殺し』だよ!

リースは普通のメイドだぞ!

それをこんな目に遭わせるなんて!

許せねえ! 絶対にぶっ殺してやる!

『落ち着け相棒。』

ヤツは安里を死ぬ寸前までに

追い込んだ毒や魔弾の使い手。

『竜喰者』とはいかぬまでも

竜に対して効果覲面な

毒や魔弾は手配炭だろう。

更に今のお前はグレモリー領では

『英雄』扱いだ。

つまり奴は今のお前にとって

天敵中の天敵なんだ。

迂闊にやりあえば

お前は確実に死ぬどころか

消されちまうぜ?』

そうかもしれないが……!

そうかもしれないけどさ!!

悔しさに

齒噛みするしかない俺の前に

安里が今までに見たことのない顔で

カテレアさんを連れて立っていた。

「イツセー……。」

死ぬ気で来た。

力貸してくれねえか」

今の俺にはすぐにピンと来た。

ルイーナちゃんに何かあったんだな!

「ああ!任せろ! 今すぐ行くぞう!」

俺はそう言っただけですぐに駆け出した。



## 第58話

イツセーside

まさかディオドラの奴が  
アーシアを攫うだなんて！

そこまでなりふり構わない奴だとは思わなかった！

俺達はグレモリー領内の

アスタロト家用の邸宅に乗り込むべく、急いでいた。

「待つてろよアーシア……！」

必ず助け出してみせるからな！

そして、俺達が邸宅に辿り着いた時――

「やあ、来たね兵藤一誠君」

邸宅の窓にはディオドラと

もうひとりの男がいた。

見た事のない男だけど

明らかに俺に敵意の籠った

視線を送ってきている。

悪いが俺が今用があるのは

ディオドラだけだ。

だからそつちの男には構わず アーシアを探す為に

辺りを見渡すが……

アーシアの姿はどこにもない！

クソッ！一体どこに隠した！

「ディオドラアアア!!」

怒りに任せて俺は叫ぶが、

そんな俺をディオドラは嘲笑する。

「わざわざそんな大声を

出さなくても聞こえているよ」

「全くこれだから品性のない

下級悪魔は嫌になる。

そしてそんな屑共を是とする

「現魔王派も同類だな」

「そう言いながら男は

侮蔑の眼差しで俺達を見る。

「コイツ、俺だけじゃなく部長まで

馬鹿にしやがったのか!？」

「お前……誰だよ？」

「なんで俺のことをそんな目で見る？」

「するとその問いにえらっそうな

態度で男は答えた。

「私はシャルバ・ベルゼブブ。

偉大なる『原初の6魔王』の

血筋を持つこの冥界の正当な支配者だ」

「それが何だ！」

「お前が何処の何様だろうが

俺には関係ないんだ！」

「俺はただアーシアを助けたい！」

「ただそれだけなんだ!!」

「すると俺の隣にいる

安里が笑い始めた。

「その笑いは当然だが俺に

向けられたものではない。

「フッフ……どうやら

貴様にもようやく私の偉大さがわかったようだな」

「シャルバは安里の笑いを恐怖に

よるものと錯覚しているらしい。

「まあそれはそれでいいけどな。

「相手がふんぞり返れば

足元を掬うのも楽になる。

「アザゼル先生の受け売りだけどき。

「それにしても——

「いやあー。何でお前らって

懲りもせずバカなんだよ？

お前らの先祖が偉いからって

何でお前らまで偉いつて話には  
ならねえだろ」

……うん。確かにそうだ。

俺もちよつと思つてたけど

敢えて言わなかった事をズバツと言いやがった。

しかもそれを聞いたシャルバは、

プルプル震え出した。あ、凶星か。

しかし次の瞬間、シャルバは突然笑い出す。

「クハハハハハッ！ 何を言っている？

私こそが至高の存在！

魔王の血族として相応しいのだ！」

シャルバはいきなり笑い出し、

自分の方が優れていると豪語し始めた。

どうやらコイツは

自分が一番でないと 気が済まないタイプのようにだ。

「なーにが至高の存在だよ。

サーゼクスさんたちに負けて

地方に追いやられたカスが

ほざくんじゃねえ。

至高は至高でも齒クソの血統が

人並な口を聞くなトンチキが！」

おいおい……

随分な物言いだな……。

安里はルイーナちゃんを

攫われたから怒っているんだ。

「お、お前は一体……」

流石にこれにはシャルバも

俺も戸惑っている。

「ああ!? テメ工等に

名乗る名前なんて無エよ！」

啖呵を切るなり安里は

飛び上がって二人へと殴りかかろうとするが……！

何やら霧の様な物が

安里を包み込むとアイツの姿が

霧の中にかき消えてしまった！

これはいったいどういうことだ!?

「クフフフ、蚤が天に睡せんと

飛び上がるからこういう事になるのだ」

シャルバは勝ち誇ったように言う。

あの野郎！

俺の仲間に出しやがって！

「落ち着きなさい兵藤一誠！

今のはディオドラの神滅具『絶霧』による

結界術の応用。

安里様はまだ生きています！」

「カテレアさん……！」

カテレアさんが俺を制止する。

カテレアさんは旧魔王派だったけど

色々あつて今は安里と

アザゼル先生に力を貸してくれている。

なら、彼女の信用できる。

「おや、そこにいるのは

クルゼレイの恋人であつた

カテレアではありませんか？」

ディオドラがそう言った途端、

カテレアさんの表情が変わつた！

「……クルゼレイはもはや

私とは関係ありません。

私はもう旧魔王派ではないのです」

「へえ？」

まあ別に私には

どうでもいい事だけれど……

あの子はどう思うかしら？」

何だ？デイトドラの奴、

急に女の子みたいな話し方を

しやがって……？

「まあ、いんや……。

アーシア達はこの邸宅のどこかに

預かっている。助けたかったら

僕を倒せばいいさ。

もつとも、君達が束になって掛かってきても

僕の敵じゃないけどね」

そう言つて余裕の笑みを浮かべながら

窓から離れていくデイトドラ。

何だあの余裕は……!?

自分が絶対に勝つという自信の表れか……？

しかし、

ここでたじろいでも仕方がない！

俺は意を決して屋敷の中に入るべく玄関の扉を開く――

↓

安里 side

何だココは……!?

霧に囲まれたと思つたら突然こんな所に飛ばされちまった！

邸宅ではなく地平線が広がる更地。

しかも周りには俺以外の

誰もいない……!?

「クソッ！

どうなつてんだ一体!!」

シュゴオオオ!!

俺が叫んだ直後、

俺に向かってビームが照射された！

しかも曲射で狙い撃ちだと!?

俺は間一髪で片腕を大盾に変化させ

弾く事には成功した。

だが、相手は更に

連続で射撃してくる。

「チイッ！」

反撃しようにも相手がどこにいるのか解らねえ!

『顕色』を使おうにも

集中できる余裕が無い!

『燃える三眼』の能力は

万能じゃねえからな!

「どこだ!?! 何処にいる!?!」  
すると、

今度は横から砲撃が飛んできた!

「ぐわあああ!?!」

ドガアアン!

咄嗟に大盾で防いだものの

俺は大きく吹き飛ばされた。

ここままで為す術もないのは

久しぶりだぜ……!

しかし俺の位置をどこから

狙撃してやがるんだ?

「クソツタレが! これならどうだ!」

俺は腕を触手に変えると

自分の周りにまとわりつかせて

触手を周りの風景と同化させた。

これで俺の姿を捉える事はできまい。

これで時間を稼ぎつつ

『燃える三眼』の能力を使えば

相手の位置が特定できる筈だ。

それにしても、この能力を使っている

つくづく思う事がある。

言ったもん勝ちな所あるよな

神器はさ……。

ドバババババツ!!!

「うおおっ!?!」

形振り構わずつてやつか!?

当にビームの爆撃ってレベルの

攻撃が俺を襲う!

俺も流石にこれはヤバイ!

擬態中は腕を防具に出来ないからな!

しかし、いつまでも

受け身のままで終わる気はねえ!

「オラアッ!」

喰らいやがれえええ!」

俺は自分の姿を透明化させる

能力を解除すると同時に

左腕を大砲に変えて砲撃を放つ!

ギリギリの所で位置は

察知済みだからな!

ズツドオオオオオオオン!!!

「どうだ!?!」

だがビーム砲撃の主の周りを

蔓で編まれた蛇が

グルリと囲み

攻撃を無効化していた。

「……」

無言で俺の前に姿を現したのは

何と……ルイーナだった!?

ルイーナが何故ここに!?

いや、そんなことより!

「ルイーナ!無事だったんだな!」

「……」

しかし返事は無い。

まるで人形のように

虚空を見つめたまま動かない。

その瞳からは光が消え失せている……。

……奴等に何かされたのか!?

「おい！どうしたんだよ!? しっかりしろってば!!」

俺は必死に呼びかけるが反応しない。

「無駄だ。」

その女は既にフリードの手によって

傀儡となっているのだよ」

仮面をつけたやや細身の男が

淡々とそう告げてきた。

フリードだと……!?

奴にそんな能力があったのか？

「なんて事をしゃがるこの

クソ野郎共!!」

俺は怒りに任せて叫ぶ!

だが仮面の男はぶわつと身震いする様な

殺気を放ってきた!

「……貴様がそれを言うのか。

貴様がアアアツツツ!!!」

仮面の男の体から魔力の波動が溢れ出す……!!

「ク、クツソオオオッ!

何なんだこの威圧感は!？」

ルイーナも気になるが

先ずは仮面の男を何とか

しなきゃならねえ!!

先ずはあのビーム攻撃を防ぐために

歩法により間合いを詰める!

そしてそのままハンマーに



片腕を変化させたまま

仮面の男の顔面に向けて 殴りかかる！

だが……！

ズドドドツツ！！

地面から大量の蔓が仮面の男を

庇って現れた！

「チィイツー！」

だが俺は構わずハンマーで蔓を

殴りつける！

蔓自体は衝撃を吸収するが

俺の能力までは

吸収できねえだろ！

「燃えろオ!!」

俺の叫びと共に蔓から

炎が噴出される！

「何だと……!?」

俺の予想通り 炎は蔓を焼き尽くし

仮面の男にスキが出来た！

「喰らいやがれエー！」

俺はもう片方の腕を剣に変化させ

思い切り叩き斬った！

変化した剣は仮面の男の肉を抉り、

骨まで達している！ これなら……！！

「グウウツツ!」

ルイーナ！魔力を回せ！」

「は……」

ルイーナは光のない瞳のまま

仮面の男の言葉に答えると

ナイフを取り出すや自分の手首を

切った！

すると、彼女の傷口から

真っ赤に染まる血が地面に滴っていく……!!

「やめろっ！」

やめるんだああっ!!」

俺は咄嗟に叫んだが、

もう遅かった。

奴の肉体が凄まじい勢いで

復元されていき、反撃によって

俺は人形のように放り投げられる！

「フッフ……ハッハハハア!!」

仮面の男は着地した俺の

姿を見るや高笑いすると共に

天を指差す！

その指の先の遙か上空には

髑髏と骨で構築された

衛星が浮かんでいた。

アレは……一体何だ!?

いや、あれでさっきの

紅いビームを俺に撃ちまくって

いやがったんだな……!!

「さて、これで終わりだと思ふなよ？」

貴様にはもつと絶望を見せてやる！九頭竜安里！

罪を償え！フハハハハ!!」

仮面の男は仰け反りながら

狂人じみた声で笑う。

罪つてのは……どういう事だ？

しかし俺の疑問など

知ったことではないとばかりに

髑髏衛星の目に燐火の様な灯火が灯ると

再びビーム攻撃を開始した！

「クソツタレが！これじゃあ防戦一方だぜ！」

俺は毒づきながらも

何とかビーム攻撃を掻い潜ろうと する。

だが……! !

「馬鹿め!!」

長距離狙撃ならばいざ知らず

有視界においてこの

「無銘の鎮魂曲」から逃れる術はない!」

ギョルルル!!

ビームが急に曲がり始めやがった!

「な、何だと! ?」

うおおおつ!」

ズガガガガツ!!

俺の体をビームが直撃し、

肉を焼き焦がす程の熱量を持って 襲いかかってくる!

「ぐあああつ!」

「ククク、痛いかな?」

苦しいだろう?」

仮面の男は不気味に微笑む。

「だが貴様の罪は

この程度では無いぞ!

貴様はすぐには殺さん……。

まずは貴様の想い人である

この女の魂は我が『無銘の鎮魂曲』により

永遠に 地獄に囚われ続けるのだ!

そして私は貴様のその苦しみを 眺め続けよう!

それが私の復讐だ!!」

仮面の男はそう叫ぶと同時に ルイーナに向き直る。

「……待て! てめえ、何をするつもりだ! ?」

俺は叫ぶが、奴は振り返らない。

「貴様はここで見ていろ。

今からお前の愛した女が

魔力が尽き果て、

枯れ枝に火がつく様に死ぬ様を……!」

「や、やめろオオオツ!!」

「やめるわけがないだろうがあ

アアアアア!!」

仮面の男が吠えたと共に

ルイーナの姿を鬪體衛星が

捉える……そして……!!

キーン!ビイイイイツ!!

衛星から幾十もの

ビームが発射された!

「ルイーナアアアツ!!」

俺は絶叫するがビームは止まらず

ビームは容赦なく彼女へと

降り注ぐ……!!

そんな……!!嘘だろ……!!?

こんな……事が……!!

目の前が真っ暗になる。

「ハハハハハ!」

ヒヤーツハツハツハ!!!

どうだ!思い知ったか!?

これがカテレア・レヴィアタンも

操り、貴様の奴隷へと貶めた報いだ!

思い知れ!貴様の大切なものが

壊れていく瞬間を!

クハハ!ヒヤツハハハアア!!」

仮面の男は

心底楽しそうな笑い声を上げる。

だが……!?

「はあ……見てもらえませんね

全く手のかかるマスターです」

こ……この声は!?

顔を上げるとそこには  
ルイーナを小脇に抱えた

アヴェンジャー、  
もといジャンヌの姿があった！

「貴様……!!」

私の復讐を邪魔立てするなあ！」

「あら、いかにも小物そうな

殿方ですが何か御用？

生憎深い泥に塗れた

草場の陰より生まれた

田舎娘なもので

無作法はお許しく下さいまし？」

ジャンヌは仮面の男を挑発する。

復讐者の名を冠するジャンヌだが

何やら仮面の男が気に入らないらしい。

「それに復讐というものは

己の力と憎悪を研ぎ澄ました刃と

化してこそ成るもの。

それを貴方は何ですか。

人の力を借り、

この子に凶刃を振るい悦に入る。

そんな無様で矮小な復讐など

私はおろか、神であろうと認めはしないでしよう。」

「何だと……！ 貴様、

誰に向かってものを言っている！」

仮面の男は怒りの表情を浮かべるが

その横顔が突如殴り飛ばされた！

「グウウツ!!」

「アタシの友達に手エ出してんじゃねえよ」

剛拳の主はスコグルさんだ！

来てくれたのか……!!

けど、どうやってだ？

「遅くなってゴメン！」

オーデイン様の力を貸してもらうのに  
時間がかかってさ」

「私は貴方などどうなっても

構いませんがゲイトが

貴方を助けてやれと、

頼み込んで来たので加勢に来た

だけです。ええ、そうですとも」

俺の疑問に答えるように

ルイーナを降ろしながら

ジャンヌが呟く。

「ウツソだあゝ。」

『さっさと私を結界内に』

転移させなさいよこの虹色瞳！』

つてゲイトさんの胸倉掴んで

キレてたじゃくん」

「……黙りなさい。」

事実を誤認させる事を言うな」

スコグルさんの言葉に

顔を赤くして俯きながら ポツリと呟いた。

なるほど、そういう事だったのか……。

しかし……！

「ルイーナ、無事なのか!？」

よかった……」

俺は思わず安堵の声を漏らす。

しかし、まるで人形のように

動かないルイーナを見て 不安になり、

彼女の肩を掴む。

「おい、大丈夫か？ しっかりしろ！」

「……………」

俺が呼びかけても彼女は  
ただ虚空を見つめているだけだ……。  
まさか……。

最悪の事態を想定してしまい 血の気が引く。

「フハハハハハ！」

幾ら呼びかけたところで

その娘の記憶はあの御方の力により

ペンダントに封じられている！

最早その娘の魂は抜け殻同然！

もう貴様の知るその娘はいない！

だが、貴様には丁度いいだろうか？

貴様は所詮他者を洗脳し、

弄び隷属させる様な外道！

都合のいい女の人格を

植え付ければ良いだろうか？」

仮面の男は高笑いしながら こちらへ向き直る。

確かに、俺はミッテルトを操り、

レイナーレを弄び、更には

アヴェンジャー……：ジャンヌまで

契約で縛った最低野郎だ。

これは……：報いなのか？

自分の罪から目を背けてきた

報いが今ここでやってきたというのか？

「つて言っているけど」

ジャンヌはどうなのさ」

「さあ？ 興味ありませんね。

私が気に入らないのは

貴方の様な悪魔を

増長させる冥界そのものです。

まあ、こんなヘタレでも

私のマスターである事は

変わらない。

なので貴方には 消えてもらいます」

「ほざくな……娘エ！」

このカロックスを甘く見るな！」

仮面の男……いや、カロックスは

叫ぶと同時に髑髏衛星からビームを発射する。

「ふん、この程度の攻撃

私に通用すると思わない事ね！」

ジャンヌは剣を抜くと

迫り来るビームを全て斬り裂いた！

「な……なに!?」

「あらあら、貴方の鎮魂の炎は

まるで霧雨ですね。

これでは私の復讐の炎の前では

忽ち掻き消されるのも

道理でしょう」

ジャンヌが嘲笑うと 仮

面の奥にある目が怒りに染まる。

「ならば……これでどうだ！」

仮面の男は三角錐を

羽を広げる様に浮遊させると

自分の周りに展開した！

この技……まさか!?

「さあ、これが我が復讐の 奥義だ！ 受けるがいい！」

仮面の男が叫ぶと 三角錐は回転を始め、

そこから波動を放つ！

そして放たれた波動は 次第に巨大な竜巻となり、

俺達を飲み込むべく迫る！

「空からは髑髏衛星砲、

地からは波動の竜巻だ！



※第59話（イツセー×シユターク）※エロ挿絵あり

「さあ、これが我が復讐の 奥義だ！ 受けるがいい！」

仮面の男が叫ぶと 三角錐は回転を始め、

そこから波動を放つ！

そして放たれた波動は 次第に巨大な竜巻となり、

俺達を飲み込むべく迫る！

空からは髑髏衛星砲、

地からは波動の竜巻だ！

「空のデカいのはアタシが

なんとかするからさ！

安里達はあの仮面の奴を頼むよ！」

スコグルさんはそう言うと

パイスラの要領で帯を

たすきの様に締めると

まるでどこぞの配管工も真つ青な

対空ミサイルの様なハイジャンプを決める！

だけど、ビームに対抗する手段は

スコグルさんにはあるのか!?

下手をすれば撃ち落とされちまうぞ！

「どらっしやああい!!」

……何ともヴァルキリーとは

かけ離れた掛け声だ……。

それはいいとして

空高く飛んだスコグルさんの

手から何かが放たれる！

あれは……ハンマーか!? って事はまさか……。

「撃墜……もとい撃鎚『ミヨルミル』!!」

親指を下に向けるハンドサインを

決めるとそのハンマーに雷が

纏わりつき、髑髏衛星砲の

ビームを弾きながらその髑髏の口へ  
吸い込まれていく!!

バチバチバチバチイッ!!

激しい電撃の音と共に

髑髏衛星砲はその機能を停止した!

流石北欧神話最強武器の一角だぜ!

更に落下していく髑髏衛星砲は

波動の竜巻によって粉々になり

打ち消しあつた!

「アンタの切り札で奥義とやらを

防がせてもらってありがとさん!」

大胆不敵を地で行く挑発的な笑みを浮かべて

スコグルさんは

手元に戻ってきたミヨルニルを後ろ手でキャッチ!

そうか! さつき仮面の男を

ぶん殴った時につけていた

パワーグローブみたいなアイテムは

この為の仕込みだったんだ!

「もらったあー!」

位置は仮面の男の真上!

再び雷がミヨルニルに落ちると

稲光を帯びた大槌へと変貌した!

それを両手に持ち振りかぶる!

「これで終いだあああつ!!」

マイティ・インパクト  
「蛮勇隕力!」

ズドゴオオオオオン!!

落雷……いや当に隕石の衝突音だ!

それくらい大きな音が響くと同時に

仮面の男は地面に叩きつけられ

そのままクレーターを作りつつ 砂埃を巻き上げる!

俺の『冥獄長の剛腕』より

単純な威力は上かもしれないねえ……。

「やったかしら……？」

砂埃で視界が塞がれる中、  
アヴエンジャーがボソリと呟く。

「お前さんが幾ら

呪いの旗振りだからって

嫌なフラグを立ててるんじゃない！」

しまった！

思わずツツコミを

入れてしまった……！

するとアヴエンジャーは

プルプル震えだしたじゃないか！

どうやらこのネタが通じるらしい。

現代のサブカル事情に

意外と詳しいな……って

気を抜いている場合かよ俺は！

まだ奴は倒れていないかもしれないんだぞ！

そう思った瞬間、

片腕が肩から吹っ飛んだ

状態でもなお立っていた。

流星にノーダメージではないが、

それでも仮面の奥の目はギラついている。

痛みや恐怖を感じさせない目だ。

人の事は言えないが

感覚を麻痺させているか

制御しているのか？

「今の一発で何となく解ったけど……。

アンタ、もうこの世の

存在じゃないね？」

スコグルさんは核心を突いた一言を告げる。

仮面の男はそれに対して何も答えず

ただただ不気味な笑い声をあげるだけだ。

「あーあーそういう事かい。」

成程ねえ〜」

スコグルさんは何かを察した様だが

俺達には皆目見当がつかない。

「えっと、どういう事ですか？」

「アタシらヴァルキリーは

死んだ者の魂をオーデイン様の所に

連れて行くのが役目なんだ。

だからアイツはエインヘリヤル、

安里達にわかりやすく言うと

バーサーカーと似た様な肉体の

持ち主で何度でも復活するタイプなんだろうさ」

「な、なんてこった……！」

「そいつは厄介ですね……」

「フハハハハ……！そうだ！

私は死なぬ！

例え四肢がもがれようとも！

脳髓を砕かれようとも！

我が怨念は消えんのだ!!」

仮面の男はそう言うと

一瞬で腕を復元させてきた!!

正直俺やアヴェンジャーの

能力は持久戦向きじゃねえ。

相性は最悪って所か……。

しかし、グズグズしていたら

ルイーナがどうなるか……！

「ふふふ、

こういう死なない敵に対する

覲面な戦法をご存知？」

などとたじろいでいる俺を尻目に

アヴェンジャーは不穏な笑みを浮かべながら  
スコグルさんに問いかける。

「うーん……。再生できない様に

一片も残らずぶち砕く？」

「それも結構ですが、

私の答えはコレよ！」

と、啖呵を切る様にアヴェンジャーは

仮面の男に呪いの旗を投擲槍の様に構える！

そして、

「喰らいなさい！ 呪われし旗の一撃を!!」

アヴェンジャーが叫ぶと

その呪いの旗は禍々しい黒いオーラを纏い始めた！

「向こうが死にたくなるまで

殺し続ける！」

「なあ〜るほどジャンヌちゃん。

そういうのアタシ、好きだよ。

話せるねえ！」

二人はノリノリで仮面の男を

接近戦を仕掛け始めた！

奴も髑髏衛星砲の残骸を

再構築したり、三角錐を

飛ばして応じているが

俺は片腕を砲台にして

ルイーナを庇いながら

中距離からサポートに徹する。

……なんかさあ。

俺の周りの女の子がさあ！

皆バイオレンス過ぎるんだけど!?

ルイーナ……!!

早く目覚めてくれ〜……!!

!

イツセーside

俺がディオドラの邸宅の中に

入るが中は別の空間になっていた！

これもアイツの『絶霧』の力に

よるものなのか？

だとしたら相当にヤバいぞ！

安里の奴は大丈夫なのか!?

そんな事を考えていると 目の前に魔方陣が現れる！

「クッ！こんな時に……！」

現れたのは9つの指にキンキラキンの指輪を嵌め、

金髪サングラスに

トレンチコートというチャラチャラした感じの奴……。そうか、こ

いつが！

「デメエが『英雄殺し』か！」

「違うよオ？ほんの怪しいモンさ」

トントン、と二丁拳銃の片方を

項に当てながら否定してきた。

なワケねえだろ！

どう見てもお前だろ！って

ツツコミたいけど我慢だ……！

「なんつって。」

クローフォード・ゴールドスピーだ

宜しくなア！」

コイツの言っている事なんて

何一つ信用できるか！無視だ無視！

俺が気にせず飛び出そうとすると、

「おっと待ちなつて、まだ話は終わってないぜ？

この屋敷は今ボスの力で異次元化してんだ」

ババババババ!!

「お前さんはもうここから

出られねえのさあ！」

話の最中で銃を乱射する奴が  
いるかよ!!

奴の弾は安里も死にかけた  
強力な毒があるって話だったな!  
掠つても致命傷になるだろう。

ここは避けながら近づかないと……!

「オイオイオイ、

赤龍帝クンよお!

近づかなきゃあ自慢のパンチが  
当たらねえんじやねえのか!?

それとも赤いのはトサカだけの

チキン龍帝クンかなア?」

ミエミエの挑発しやがって……!

『熱くなるなよ相棒。

奴はお前が焦れて強引に

勝負を決める事を望んでいる』

ドライグが俺に冷静になるように促すけど、

そんな事は解っている!

でも、アイツのペースに乗せられると

本当にそうなつちまう気がして……。

「やっさと来いよオー!

こちとら暇じゃねんだよ!!

俺も一日幾らの商売だからよオ。

とつとと終わらせて半ドンで

帰りにエんだよ!!」

奴はそう言いながら両手の銃を乱射してくる!

クソツ!このままじゃジリ貧だ!

何か手はねえか!?!……そうだ!

奴の弾だって無限じゃないんだ!

なら、まずは弾切れを狙って接近戦を挑むしかない!

俺はそう考え、敢えて 奴の挑発に乗ってやった!

「うるせえ！すぐにぶっ飛ばしてやるよ！後悔しても知らないからな!？」

「上等だア!!」

俺の言葉にクローフォードはニヤつきながら懐の中に手をつ突っ込んだ。なんだ？何をするつもりなんだ？投げつけてきたのは

……手榴弾か！

「ハッハア!!対悪魔用の

特製手榴弾だぜエ！受け取れやア！」

「お断りだ!!」

俺は咄嗟に手榴弾を殴り飛ばす！

キーン………!

と、音を立てて床に落ちた瞬間、

ボンツ！と爆発した！

危なかった……。

あんなの食らったらひとたまりもないぞ……。

だがすぐにドライグが警告してきた。

『いや、待て！相棒！様子がおかしい!』

「へ？な、なんで煙が消えないんだ!？」

ゴホッ！ゲホ………!

な、何が起こってるんだ？

まるで時間が止まったみたい

に周りの景色が変わらない!

まさか、これも奴の能力なのか!

感知はできるが、身体の動きが

追いつけない……!?

「よつとオ………」

クローフォードはガスマスクの様な物を

いつの間に装着していた!

「ハッハハハア！」



フツ―は手榴弾見たら

身を隠すモンなのに逆に殴り飛ばすとはなア！  
えれー気合入ってンじゃねえか！」

「お前みたいなイカれた奴には

正面からぶつかかる方が性に合ってるんでな！」

「イカレてるウ？」

俺がか？ 冗談きついで。

俺はフツ―さ。誰よりもな。

嫌なことはしたくない。

金は欲しい。女にやあモテたい。

気に入らねえ奴は撃ち殺す。

コレ、フツ―の事じゃねえの？」

ニヤつきのない真顔で言った。

……コイツは

野放しにしちやいけない！

そんなのはただの 自分勝手に

我欲まみれのクズ野郎だ！

「ふざけんなー！

そんなのが普通な訳あるか！

お前は間違っている！」

「間違い？」

そもそも正しい必要があるのかよ？

お前が俺を否定するのは自由だが

お前の正義を他人に押し付けるなよ……。

なんてのはお前から英雄さんの常套句だわな！」

クローフォードの顔からは笑みが消えた。

そして、奴は再び銃を構える。

「俺の弾も時間も無限じゃねえ。

そろそろケリを付けようぜ赤龍帝クンよオ！」

「お前こそ、その余裕面を

すぐに泣き面に変わらせてやるぜ！」

俺と奴は同時に駆け出す！

「やってみろよオラア！」

「シッ！」

バキッ！ドゴツ！

「ぐああー！」

「チイツー！」

何とか奴の銃を弾き飛ばしたが……

俺は奴のブーツに仕込まれていた

ナイフで脇腹を切りつけられた！

「まだだア！お返したア!!」

「くっ………！があああ!!」

ドクン！と心臓が跳ね上がる衝撃と

血液が沸騰する様な熱さが全身を襲う！

するとクローフードは喜色を浮かべた。

「ハハハ！効いてるなア！

流石は赤龍帝サマ！ フツーの悪魔や

ドラゴンならとつくに消滅している筈なんだがなア！

お前さんは特別製らしいなア！」

「う、うおおおおお!!」

熱い！苦しい！ 身体が燃えるように熱くて痛い！

『コレは……アスカロン!』

まさか……複製か!』

何だって……!?!

なんでそんな聖剣を奴等が……!?!

「何でだろうなア!?!なア!!」

ザシユシユシユ!!

「がっ………！あっ………！」

奴は何度も何度も

仕込み刃のアスカロンとやらで

俺に斬りつける！

『相棒!!』

ドライグの叫び声が聞こえたが、俺は痛みと苦しみで何も見えない……!!  
何も聞こえない……!!?  
ここまで……なのかよ……!!  
俺はここで死ぬのか……。  
こんな……ところで……。

「それは嫌だねエ。」

イツセー君が消えたら  
ボクは悲しいからサ」

……!?

何だ？ 耳からじゃない所から  
シユタークさんの声が聞こえる!?  
これは一体!?

ってあれ？

身体が急に楽になったぞ？

って頭に何か符が貼ってある!?

何か剥がそうとしても

ビクともしない!

「な、何をした!?!」

「ハハハ、

流石普通だと言うだけあって

予想外の事には普通のリアクションだねエ。

君の不死竜……

いやアレの毒対策に

ちよつとした符術をアレンジ

したんだ。

アザゼルの解析が役に立ったヨ」

ガスマスク越しでも

焦っている様子のクローフォードに

俺と同じく頭に符を貼っている

シユタークさんはクスクス  
笑って余裕たっぷりの態度だ。

「……チィー！」

クローフォードは舌打ちすると

一瞬で二丁拳銃に超小型の

転移魔法陣を使った再装填を行い、

再び銃撃してきた！

バシユツ！

シユタークさんの額に奴の銃弾が

直撃した！ しかし……！！

「ハハ、残念だったネ」

「なにい？」

倒れるどころかツカツカと

クローフォードに歩み寄っている。

「まさか……テメエも……！！」

クローフォードは何か

シユタークさんの符術に気づいたようだ。

「ハハ、正解だヨ。

キミの雇い主と似た様なカラクリさア。

と言つてもボクの場合は

死霊化じゃなく

疑似的なキョンシー化だけだね。

さて……そろそろ終わりにしようカ。

これ以上は時間の無駄だし。

それに……」

「……………！！」

バシユン！

俺のノーモーションで放った

ドラゴン・ショットが奴の腕を吹き飛ばす！

「この通り、腕の一本ぐらい

リミッターが外れている今の彼には造作もないのサ」

「ハハハ……ハハハハハ！」

ガスマスクをもう一方の手で  
取り外したクローフォードは  
けたたましく狂人の様に

笑い始めた！

まさか、イカレたのか……？

いや、そんなタマじゃない……！！

「いやあ、参った！」

ボスからは何が何でも倒せなんて

指示は受けていねえからよ！

アーシアは奴の部屋に捕らえられているぜ！

達者でな！」

「待て!!」

「じゃーなー!!」

クローフォードは転移用の魔方陣を展開し、  
姿を消した。

「逃がすかよ！」

俺もすぐに後を追うが……駄目だ！

キョンシー化のおかげで

身体が固くなり始めてる！もう追いつけないのかよ!? くそっ！

「う、うううん……い！」

『相棒！無事か!？』

幸い右腕、心臓は俺の物だから

硬直はしないが……』

クソツ！ 奴を捕まえれば

雇い主って奴から色々

聞き出せると思っただが……！ 仕方がない……！！

今は奴よりアーシアの救出が先決だ！

「……」

俺は歯を食いしばりながら

必死に身体を動かそうとするが やっぱり動かない！

くっ！どうすればいい!?

必死に何かを掴もうと

俺は必死に右腕を伸ばすと……!!

むにゅん♥

「あん♥」

ヒンヤリしながらもハリが

マシマシのシユタークさんのおっぱいに当たった。

「……え？」

『おい、相棒……』

コレはまさかのラツキースケベ!?

いや、そんな場合じゃないけど!!

『いや、そういう場合でもないだろう!?!』

と、とにかく！ このままだと

シユタークさんに 迷惑がかかるかもしれない!!

俺は慌てて離れようとする……。

「ああ、大丈夫だよ。

そのままが良いヨ。

イツセー君」

さわっ……むにい♥

何とシユタークさんは

俺の手を取ると自分のおっぱいに押し付けてきたのだ！ しかも

何故か頬を赤く染めて トロンとした表情をしているぞ……ま、ま

さかこれは……!?!

背中と頭から汗が噴き出す感覚を感じながらも、恐る恐るシユタークさんの顔を見ると 彼女はニコツと微笑んでくれた。

「ふふ♪ キョンシー化を解くには

止むを得ない事だからねエ♪

それっ♪」

そう言うシユタークさんは

硬直しつつある俺の身体を

押し倒し、そのむちむちのお尻を俺の股間に擦り付けて来た！

な、何というエロゲ的な展開！

嬉しいような嬉しいような!?

だ、だがここは敵の本陣ですよお！

こんな事してたら……!!

しかし、ヒヤリと冷たい手が

鎧化の解けた俺の肌を弄ってくる！

ああっ！気持ち良すぎて力が抜けていくぅ！

クラゲみたいに骨抜きになるうぅ……!!

そして……。

シユルルルツ……。

……ん？あれ？ 躊躇いなく

服を脱ぎ去るシユタークさんの

肌はキョンシー化したためか青白く変色していた。

しかし彼女の胸は俺が触れていたせいか、

少し赤みを帯びており、乳首もピンと立っている。

その姿はまるで俺の事を誘っているようで……。

ごくっ……。

思わず生唾を飲み込んでしまう程、エロエロだった。

「フッフ、『絶霧』の効果が

切れるまでもう少し時間があるからサ♥

少し位ならいいだろ？」

すると、俺の耳元に顔を近づけて 甘い声で囁いて来る。

吐息がくすぐったくて、こそばゆい。

でも、嫌じゃなかった。

むしろ心地よく感じてしまう。

何故だろうか。

それはきつと、彼女が

リアスさんやアーシアと同じ位

俺の仲で大切な存在になっていたからだ。

「ねエ……♥欲しいんだア……♥

キミのチ○ポが欲しくて堪らないんだよオ……♥」

そんな事を言われて我慢できる男がいるわけがない。  
俺もクローフォードの事を

悪く言える資格は無いようだ。

「う、うおおおっ!!」

俺は欲望の高まるままに

キョンシー化して硬直した肉体を

動かし、シユタークさんを騎乗位の姿勢にしてから、

一気に挿入する!

ズブズブ……!

「アアッ……♥」

「う、ぐ……!」

俺とシユタークさんは同時に声を上げた。

冷たくてヌルついた感触が 俺のモノを包み込む。

冷たい筈なのに……頭の中が凄く熱い。

矛盾した感覚に頭をクラクラさせながら

腰を動かす!

「んんっ……♥」

イツセーくんのキョンシーチ○ポ♥

硬くって太くて……最高だよ♥」

ああ……シユタークさんの

オマ○コがうねり、吸い付いてくる! 気持ち良い……!

身体は仮死状態だからか

息切れもしないし、疲れもない。

俺はひたすらにシユタークさんを犯し続けた。

「ああん……♥」

いいよ……もつと激しく突いてエ……♥」

俺はシユタークさんの言葉に甘えて

待っていましたとばかりに更に強く、

早くピストン運動を行う。

パンツ! パンツ! パチンツ!

ぐぢゅっ! ずぶぶっ!



「ああん♥激しいイ……♥

あはあ……♥気持ちいいよオ……♥  
頭がトブう……♥♥♥

この世のものとは思えない程に  
いやらしく、官能的な喘ぎ声を上げながら、

シユタークさんは俺のチ○ポに  
自分のマ○コを押し付ける。

その動きに合わせて俺のモノが激しく出入りし、  
子宮口を強くノックしていく！

ビクッ！ビクビク！

本来なら射精しているだろう

快感を感じてもキョンシー化した

俺の肉棒は精液を吐き出さない。

「ひゃうんっ……！ダメえ！

そこばかり責めないでエ……！

おかしくなるウ……♥

俺はシユタークさんの反応を見て、

弱点を見抜くと、重点的に突きまくる。

なにせ射精しないで

その気になれば永遠にやれるのだ。

最高だ……！

「ハハッ……今のイツセー君♥

凄くオスっぽい顔してル♪

そんな表情も素敵だよオ……♥

俺が快樂に夢中になっていると、

シユタークさんは悠然と見下ろす様に

俺のチ○ポをマ○コで削り取るかのように

腰を振りつつこちらを見ていた。

「そ、そういうシユタークさん

だってすげえエロいぜ？

そんなにチ○ポが好きなのか？」

「ふふふ、キョンシーになっても

私の身体に火をつけるなんて……

やっぱりキミは素敵な男の子だネエ♥

大好きだよオ……♥」

そう言つてシュタークさんは

スパートをかける！

ビクビク！ ビクツ！

ビクビクビク！

「う……おおお……」

本来なら何度射精していただろうか？

だが、今は出ない……。

ただただ気持ち良すぎて

意識が飛びそうになるだけだ！

「ハハハ♥ いつものパイリンガルや

絶頂雷撃はどうしたのかナ？

生憎キョンシー化した

今のボクには効き目がないけどネ♥」

う……！見透かされていた!?

しかし、シュタークさんの腰の動きは止まらない。

それどころか、より激しさを増していく。

というか房中術によるのか

はらり、と札が外れた彼女の肉体は

生気を取り戻し、肌の色も、マ○コの熱も、

息づかいも、生者のものに戻っていく……！

グチュツグチャツ！ ズブズブズブ……！

「う、うおおっ……！」

また、イカされてしまう……！

だ、だけど振り回されてばかりでは

パートナー失格だ！

俺はシュタークさんが

腰を振るタイミングに合わせて、

下から思いつきり突き上げる！  
ズンツ！！

「ンアアツ……！！」

突然の衝撃にシュタークさんは仰け反った。  
生者に戻ったという事は

今のシュタークさんの体力や

耐久力は無限ではないんだ……！！

俺はキョンシー状態ながら死ぬ気で

腰を動かし続ける！

「あああんっ♥ イイよオ……！！

気持ちいいよオ……！！

もつと、もつと激しく突いてエ……！！♥」

ズブズブズブ……！！

パンパンパンパン……！！

「ああっ……！もう、ダメ……！！♥

キミももう……出したいよネ♥」

「ああ……シュターク！」

俺達はラストスパートをかけ、

お互いの性器を擦り付け合う。

「アアツ……イクツ♥イツちやうウ……！！♥

イツセーくんのキョンシーチ○ポに

負けてホントに死んじやウウ……！！♥」

「俺も……出るっ……！！

イクぞ……！！イクぞ！！

シュターク！！」

ドピユツ！ ビュルルルーー！

「ああああああ♥♥♥」

俺たち同時に絶頂を迎えた。

シュタークさんの身体がビクンと跳ね上がり、

それと同時に大量の精液が吹き出す！

それは俺の身体に降りかかり、

ドロリとした白濁色の液体となって肌に付着した。

「あはあ……♥熱いよオ……♥

イツセーくんの復活ザーメン……♥♥♥」

シユタークさんは幸せそうな笑みを浮かべながら、俺に覆い被さってきた。

そしてそのままキスをする。

「ん……ちゅっ……♥」

「んんっ……んむっ……」

舌と唾液が絡み合い、淫靡な音が響く。

俺はまだ仮死状態の筈なのに

まるで夢でも見ているかのような気分だった。

シユタークさんはゆっくりと唇を離すと、

俺の頬に手を当てながら妖艶に微笑んでみせる。

「フフ……気持ち良かったヨ♥」

「俺も……こんな気持ちいいのは

初めてでした……」

「そうかい？嬉しいヨ♪

ボクはいつでも相手になるからネ♪」

「はい……」

俺は嬉しかった。

こんなにも素晴らしい女性と巡り会えたことに……。

出来ることなら俺だけの彼女に……。

「うわ……マジかにやん……」

敵の目の前で盛るとか

青姦ドラゴンにやん……。

「アンタら未来に生きてんな……」

こ、この声は……!?

振り返ると同時に、

そこにいたのは黒歌さんだ！

次は彼女が相手か……!?

「おや？これは驚いたネエ。

まさか、キミみたいな可愛らしい娘が  
ボク達の相手をしてくれるのかナ？」

シユタークさんは意外といった表情で

黒歌さんを見つめていた。

いや、彼女はかわいいと言うより

セクシー路線なのは……!?

ってそんな話をしている場合じゃない！

## ※第60話（イツセー&シュターク×黒歌）

イツセーside

「うわ……マジかにやん……。

敵の目の前で盛るとか

青姦ドラゴンにやん……。

「アンタら未来に生きてんな……。」

こ、この声は……!?

振り返ると同時に、

そこにいたのは黒歌さんだ！

次は彼女が相手か……!?

「おや？　これは驚いたネエ。

まさか、キミみたいな可愛らしい娘が

ボク達の相手をしてくれるのか？」

シュタークさんは意外といった表情で

黒歌さんを見つめていた。

いや、彼女はかわいいと言うより

セクシー路線なのは……!?

ってそんな話をしている場合じゃない！

「いつの間私に私の

雷峰式・弱憎強贖を

打ち破った様だけど、

私のミックス呪術はそれだけじゃ

ないにやん！」

と、言って取り出したのは

何やらバチバチ、と電気の様なものを発する

剣の握り手が2つ合わさったような奇妙な武器だった。

「へエ……。それがゼウスの雷霆力。

まあ、レプリカだろうけど」

と、感心したように言うシュタークさんだが、

俺は目の前に現れた武器よりもある事が気になった。

(何で爺さんの武器の複製を

黒歌さんが……?)

確か『禍の団』にはヘパイストスが

武器を供給しているのは知っているけど、

流石にあのクラスの武器は

オリジナルがなければ複製できない筈……。

クローフォードが靴に仕込んだ

アスカロンの刃も恐らくは

ヘパイストスが提供したものでろうし……。

誰がヘパイストスにオリジナルを提供させたんだろう？

俺がそ

う考えている間にも、

黒歌さんはケラウノスからエネルギーを放出させて、

剣の様に振るってきた！

その瞬間——！！

ズガアアアツ!!!

激しい閃光と共に、

爆発が巻き起こり、

辺り一面を吹き飛ばした！

シユタークさんの結界符で

何とか防ぐ事は出来たけど、なんて威力だよ……!?

「ハハッ！」

今の一撃を防ぐとはやるにやー♪

と、言ってもその程度の結界なら

一分も持たないにや♪」

と、愉快そうな笑みを浮かべて

黒歌さんが眩く。

ちらりとシユタークさんの横顔を

見るとどうやら彼女の言う通りみたいだ。

「シユタークさんー！」

「心配いらないヨ、イッセイ君ー！」

そう言って彼女は懐から新たな術札を取り出した。

そして――。

『金城硅壁！』

ズドドドツ!!

凄まじい音を立てながら、

床から水晶の壁が俺達の周りに

せり上がり始めた！ しかもその壁はただの壁ではなく、強固な結界の役割も果たしているようだ。

これならしばらくは持ち堪えられるだろう。

「へえ〜……。」

確かにシリコン水晶なら

雷を防げるというのは

道理だにゃん」

黒歌さんはシュタークさんの防御を見て感心した様子を敵ながらあっぱれ、とばかりに見せていた。

「ま、厳密には五行相剋。

金は木に剋つという奴だけどネ。

キミには釈迦に説法だろうが、一応説明しておくヨ」

「……………」

黒歌さんの表情が僅かに曇る。

やはり自分の能力を看破された事で、

警戒しているのだろうか？

「フフ、確かにそうだけど、

ケラウノスの力は雷だけじゃないにゃん！」

何と雷はレーザーとなって

水晶の中に侵入すると、

そのまま乱反射を繰り返していく!!

「うわっ!？」

その光によって水晶の壁は次々と破壊されていき、

遂にはその光が俺達にまで到達してしまった!



「うわああアツ!？」

俺は咄嗟にシユタークさんを  
庇うべく身を乗り出したが

正面背後、上下左右からくる

レーザー攻撃では……………!

ズバッ! ジュウウウ……………!

「シユタークさあん!!」

ああ……………! シユタークさんの

身体のあちこちがレーザーで

貫かれたり、火傷したりしている……………!

「イツセー君……………」

大丈夫かい？」

「な、何とか無事です……………」

それよりシユタークさんの方が……………!

「問題ないヨ……………」

ボクの肉体は特別製だからネ」

と、言うものの彼女の衣服の一部も焦げていて、

肌が露になっていた。

ああ、あの素晴らしいおっぱいが

あんなお劳しい事に……………!!

『……………お前のその乳に対する

慕情と執念には敬服するよ』

ドライブは呆れるが、

俺は至って真剣だ! よくも!

シユタークさんとシユタークを

おっぱいを傷つけてくれたな!

許さん!

絶対に許さんぞオオオツ!!

我、目覚めるは……………

『おいおい! 幾ら何でも

乳を傷つけられただけで

「覇龍化を行おうとするな!!」

「イツセー君……」

ボクの胸なんかのをに怒ってくれるのは嬉しいけど、冷静になるんだ……。

キミが怒りに任せて暴走すれば、

勝てる戦いも負けてしまうヨ?」

「す、すみません、シユタークさん」

いけない、いけない。

危うく醜態を晒してしまうところだったぜ……。

「それに、まだ勝負は終わっていない……。

この戦いに勝つ為に、

キミの力は温存しておかないとネ。

キミの強みは女性に対して

効果覲面なものが幾つもあるだろう?」

「そうですね……。

ありがとうございます」

そうだ……!

俺の力はおっぱいを傷つけるために

あるんじゃない!!

皆のおっぱいを

守る為にあるんだ!!

そうだよな! ドライグ!

シユタークさん! ゼウス様!

『ワツハハハ! それも良かろう!』

「バカも極めれば究極よ!」

「フフツ……。

いい目になったネ、

それでこそボクの赤龍帝だ」

俺の決意にシユタークさんは

満足気に微笑んでくれた。

しかしボクの、と前置きされると

照れ臭いなあ……。

「さつきから何をぐちゃぐちゃ言っているにや！

もう、そろそろ死んでもらうにや！」

そう言っつて黒歌さんはケラウノスを振りかざし、

雷撃を放つ！

だが――！

「うおおおおお!!」

『Transfer!』

ボールクと

やり合った時の応用だ！

『譲渡』の力でケラウノスの力を

暴走させて、オーバーヒート

させてやる！　すると――。

「うにゃああああ?!」

ブオオオオオツ!!　と

轟音と炎を発したケラウノスの

レプリカはそのまま俺とドライグの宝玉に飛んでいき、

内部に取り込んだ!

「なっ……!　へパイストスの

作ったレプリカを吸収するにやんて!?

有り得ない!」

黒歌さんはショックを受けているが

錬鉄の神様だつて全能じゃない!

それに黒歌さんは

ミックス呪術の使い手であつて武器を扱う事には

長けていないんだ!

「調子に乗るにゃあ!!」

死霊を模した魔力弾が、一斉に俺達に襲いかかる!

だけど、今の俺ならこれくらいどうつてことはない!

それに……!

「ハアアアアツ!!」

気合と共に、背中ของウイングから  
雷撃のオーラを放つと魔力弾は  
一瞬で霧散してしまった！

やはり思った通り！

あのケラウノスのレプリカは  
武器だけじゃなくて

黒歌さんの雷峰式の起点となる  
増幅器だったんだ!!

その増幅器を取り込んだ今の俺は  
雷の力も意のままだ！

「衣服破壊（ドレスブレイク）！」

俺は両手を前方に突き出すと、  
その掌から波動を放って

衣服を破壊する技を発動させた！

すると、その波動によって黒歌さんの着ている着物が  
バラバラになって脱げ落ちた！

おおっ！ これは眼福……！

「にゃあああああ!？」

見るなああああ!!」

慌てて両腕で胸を隠すが、

それは悪手だよ、黒歌さん！

そして俺はケラウノスの

レプリカを取り込みながら、

黒歌さんの尻尾を掴む！

ぷりん♥と露わになる小尻……。

見惚れたい所だが……！

「ふぎゃういっいっいっ♥」

ビクン！ ビクビクウツ!! と、

艶めかしい声を上げつつ

身体を痙攣させる黒歌さん。

そんな彼女の瞳からは涙が溢れていた。

苦痛、羞恥、恥辱、快樂……！

様々な感情が入り交じっているのだろう。

俺は黒歌さんが動けないうちに、彼女の背後に回り込み、その豊満なおっぱいの先端に指を当てた！

『パインユール・クリムゾンシヨック乳峰式・絶頂雷神撃！』

黒歌さんの乳首の先端から

乳内に電流と光の力を流し込むや

「にやああああああんツツ！！！」

バリバリツ♥♥♥と、

甘美な電撃がおっぱい全体に駆け巡り、

黒歌さんは仰け反りながら果ててしまった……。

『全く……相棒も大概だぜ……』

幾ら敵とはいえ、相手を

イカせることで戦闘不能に

するなんてな……』

ドライブは呆れつつも納得してくれたようだ。

「イツセー君……」

キミは本当に凄い男だネ……」

シユタークさんは感心してくれているが、

こんな変態的な技が俺の切り札の一つとは……！

ちよつと複雑だった。

でもいいや。敵とはいえ、

黒歌さんは小猫ちゃんの姉じゃないか！

それに女の子を傷つけるのは

やっぱり気分が悪いしね！

それに何より、この技は女性に絶大な効果を発揮する。

「さて、まだまだよっ」

と、俺があれこれ考えている中

シユタークさんは符術でコテージを作り出すと、

未だに絶頂の中にある黒歌さんを引きずっていく。

ま、まあ流石に裸で放置するのは可哀想だしな……。

「何を惚けているんだイ？」

この女を君の眷属にするのに  
決まっているじゃあないカ。

身も心もキミに屈服させれば

もう二度と馬鹿げたことはしないヨ」

ま、まさに悪魔の誘惑……！

いや、俺の方が転生悪魔だけど！

でも、小猫ちゃんのお姉さんに

手を出すのには

抵抗があるんだよなあ。

「何を迷う必要があるんだい？」

ボクの赤龍帝なら、

もつと欲張りになっていいと思うけどネエ。

安里君だってキミや彼を殺した

レイナーレを屈服させて

あの身体を好き放題していただロ？

羨ましいとは思わないかい？」

た、確かにライザーとやり合った後に

二人が盛っていたのを見たことがある……。

リアスさんとエツチしていなければ

嫉妬でどうにかなっていたかもしれない。

駄目だ……！

このままでは俺の中の煩惱が爆発してしまう！

「ほら、早くしたまえよ。

大丈夫サ。

それに、もし仮に上手くいかなくても、

ボクがまた力を貸してあげるから安心するといいい」

「……分かりました。お願いします！」

「ふふっ、素直でよろしい。

それじゃあ始めようか。

1

「うにゃ……♥にゃあああん♥」

俺とシユタークさんは

黒歌さん……いや、黒歌の身体を

ハーブの弦のように弾きながら念入りに調律していく。

「はあん♥ひうつ♥そこおっ♥

気持ちいいにゃあ♥おっぱいと尻尾を弄られると

感じちやって堪らないにゃあ♥」

そう言いながらも、黒歌は俺達のマッサージを

受ける度に艶やかな声を上げている。

「どうだい？ そろそろ頃合いだと思っただけどネエ？」

シユタークさんはペタリと

黒歌の額に符を張った。

不死化の符だろうか……？

すると、黒歌の全身が淡い光に包まれる。

「これでよし、と。」

後は彼女の中に眠る因子を呼び覚ますだけだネ

「呼び覚ます……ですか」

「ああ、そうだよ。」

今から行うのは彼女の身体を変質させる儀式なんだ。

猫鬼から猫鍾にさせる為には、猫鬼の呪いを解除

させなければならぬのサ。

その為に必要なものが二つある。

一つは仙氣。そしてもう一つは

彼女の精神の奥底に眠っている本能を解放すること……！ その

二つの条件が満たされた時、

彼女は新たなステージへと昇華されるのさ！

だから、その二つを同時に

満たす為の儀式を執り行っているのサア。

ちなみにこの儀式を行えば、

君は彼女を眷属に出来るし、

彼女も君を主として認める筈だよ」

「や、やめろにやあ……！」

もう無理矢理奴隷にされるのは

いやにやああ……！♥

黒歌は泣きながら懇願するが、

シユタークさんは気にせず続ける。

「心配することはないサ！」

君も気に入っているみたいじゃないかい。

……おや？ これは驚いたネ。

まだ始まったもないのに既に覚醒の兆しが現れているようダ！

流石は赤龍帝の籠手！

宿主の欲望を増幅することで

真の力を発揮できるのだろうナア。

実に素晴らしい！ ……

……さて、ボクは儀式に集中するとしよウ。

イツセー君、君の仕事はこの女が完全に墮ちるまで、

しっかりと相手をしてあげることだヨ？」

「にやんでこんなことにい……！♥」

黒歌は涙目になりつつも、

俺に胸と尻尾を愛撫され続けている。

ルイーナちゃんやスコグルさんを

抱いた時の様な罪悪感はない。

何故なら……。

(んにやああ……！♥)

発情……しちゃう♥強いオスの子供……！♥

ヴアーリと同格のドラゴンの子供が

欲しいにやあ……！♥)

……黒歌も俺を求めている！

ならば遠慮する必要なんてない！

「黒歌……！俺はお前を愛してる！

絶対に離さないぞ……！」

「う、嘘だにやあ……！♥



そういつて私を犯したら

用済みだつて捨てるつもりにや……♡」

黒歌は必死に抵抗するが

、身体は正直に反応してしまっている。

「そんなこと言う訳ないだろう!？」

俺はお前が好きだから抱きたいんだ……!

俺の子供を産んでくれ……黒歌……!!」

「む、無理にやあ……♡」

猫鬼になつた私はもう処女じゃないにや……♡

妊娠したら子供が出来ちやうにや……♡」

「いいんだよ……!」

俺と黒歌の子ならきつと可愛い子が生まれる!

俺達が責任を持つて育てるよ!」

とは言え、無理矢理孕ませるなんてつもりはない。

あくまで同意の上でだ。

「ほ、本当かじゃん……?」

本当に私のこと好きになつてくれるの……?」

……ああ、勿論だとも!

俺は黒歌を抱き締めると、その唇を奪った。

「にやああん♡」

「黒歌……好きだ……!」

「わ、私も大好きにやあ♡」

俺達は舌を絡め合う濃厚なキスをしながら、

お互いの身体をまさぐり合つた。

「黒歌……そろそろいいかい……?」

「にやはは……♡」

仕方がないにやあ……♡いいよ、きてえ……♡」

俺が黒歌の中に挿入すると、

黒歌は艶やかな声を上げる。

「んにやあん♡」

な、なんでえ♡今までで一番気持ち良いにやあ♡」

「それはね、黒歌。君の心が解放されたからだヨ。

今の君は、自分の気持ちを素直に口に出せる筈だヨ？」

「にや、にやんてことお……！」

でも、ほんとにそうにやあ……♥

私、イツセーのこと大好きなお……♥

お願い、もつとパコパコ突いてえ……♥」

黒歌は自ら腰を振りながら、俺を求めてきた。

……くそっ！ 可愛すぎるぜ！

俺は我慢できずに激しくピストンした。

すると、それに応えるように

黒歌の膣内がキュツと締まる。

まるで精液を搾り取ろうとしているかの様に……。

そのあまりの快感に、

思わず射精してしまいそうになるが、何とか堪えた。

だが、そのせいでより一層、

黒歌の子宮口が亀頭にぐちゅぐちゅ吸い付いてくる！

そして、ついにその時が訪れた。

ドクン！ 何かが弾けるような感覚と

とてつもない快楽と共に、

俺のモノから大量の白濁液が流れ出す。

「あっはあああああ♥♥」

黒歌は一際大きな声で鳴きながら絶頂を迎え、

それと同時に黒歌の身体から光が放たれ始めた。

「ふーむ、まだまだ足りないネエ。

イツセー君、黒歌。

キミ達の幸せな未来のために、

ボクも一肌脱ぐとしようかな♥」

するり……♥ はらはら♥

むちっ♥

「うおっ!？」

シユタークさんは突然服を脱ぎ始め、全裸になる。

その裸体は妖しく、それでいて美しい。  
ついさつき、エッチしたばかりなのに……！  
いや、だからこそか？

……と、いかんいかん！ 見惚れている場合じゃない！  
今は黒歌の眷属化の儀式の最中なんだ！

しかしシュタークさんは

そんな俺の心情を察したのか

どうなのかは分からないが

ごぼり、と精液の溢れる

黒歌のアソコに指を出し入れしながら

彼女の背後に寄り添う。

ぶるるんっ♡

とシュタークさんと黒歌の巨大なおっぱいが  
激しく揺れ動く中、

シュタークさんは黒歌の首筋に

舌を這わせて舐め上げていた。

その度に黒歌の口から甘い吐息が漏れ出る。

ちゅぷ♡れろ♡じゅず♡ぢゅうう♡

やがて、シュタークさんは黒歌の耳元まで

顔を寄せたかと思うと

そのまま黒歌の耳にしやぶりついた。

「ひゃうん♡」

びくんっ♡と黒歌が反応し、

身体が震えると同時に広げた股から愛液が噴き出した。

なんというエロすぎる光景だ……！！

勃起が収まらない……！！

「ん、んん……ああん♡」

「さあイツセイ君、次はボクと一緒に

黒歌を悦ばせてあげようか？」

そう言っつて俺に見せつけるかのよう

に黒歌の胸を揉み始めるシュタークさん。

ぐにゆぐにゆと形を変える

黒歌のおっぱいに俺の視線が釘付けになってしまふ。  
そんな俺の様子を見て

シユタークさんがクスクスと笑っている。

ちくしよう……なんか悔しいな！

俺は気を取り直すと、黒歌の乳首に舌を這わせた。

ぺろ♥ぴちや♥舌先で転がすように舐める度、

黒歌の身体が小さく跳ね上がる。

そして今度はもう片方の手で乳房を掴み、

優しく揉んでいく。

柔らかな感触を堪能しつつ、

同時に親指で乳首を擦ってあげると

更に良い反応が返ってきた。

どうやら黒歌はここが弱いらしい。

俺が執拗にそこを攻め立てると、

次第に黒歌の呼吸が荒くなり、全身が紅潮してきた。

「にゃああん♥はあ……ん……♥

イ……イツセー……♥

もつと……もつとして欲しいにゃあ……♥」

黒歌がおねだりをしてくるが、

俺はあえて焦らすことにした。

すると、それを見たシユタークさんが

またも笑いながら、黒歌のクリトリスを摘まんだ。

くりゆ♥くにい♥

すると、黒歌の秘所からは

先程よりも大量の愛液が流れ出していた。

それを確認してから、

シユタークさんはようやく手を止める。

そして、再び俺に目配せするや

今度はシユタークさんの方から唇を重ねていた。

その間、俺は黒歌の秘所に指を入れて

掻き回してあげた。

くちゆくちゆと音を立てながら激しく出し入れする。  
そして、頃合いを見計らい、

指を引き抜くとシユタークさんが黒歌の耳元で囁く。

「フフ、随分羨ましそうな顔だねエ？」

黒歌、キミにも今からたつぷりとご褒美をあげるヨ」

すると、シユタークさんは

符を取り出すと、それは見る見る

双頭デイルドーへと姿を変えた。

「どうだいイツセー君？」

キミのペニスを参考にして

作ってみたんだけど、

なかなかいい出来だろうウ？ ん……♡」

シユタークさんはそれを手に取ると

自らの膣内に挿入していく……。……ゴクツッ！

初めて見る光景に思わず生唾を

飲み込んでしまう俺だが、

俺のチ○ポってそんな

風に見えてるのか……。

何とも言えない気分になりながらも、

黒歌への責めを再開すると

シユタークさんも腰を振り始めた。

「ふふっ、キミ達2人の可愛い姿を

見ながらだといつもより感じてしまうネエ♡」

パン♡パアン♡

美女二人のエロエロボデイがぶつかり合う音が

響き渡り、そしてその度に黒歌のお尻がぷるんぷるんと揺れ動く。

やはり柔らかな女性の身体だからか

ぶつかりあう音もどこか心地好い。

しかし、黒歌はそれだけでは満足出来ないようで、

シユタークさんに

アナルを貫かれながら俺に  
自分の股間を見せつける様に広げた。  
むわあつとした濃厚な雌の匂いが  
俺の鼻腔と本能を刺激する。

「はあ……♥はあ……♥お願いにやあ……♥

私のココ……はにやあああ！」

ズブズブズブ！

言い切らない内に

黒歌を咎めるかのようにシユタークさんの巨根が

黒歌のアナルを貫いた。

「んほおお♥」

黒歌が悲鳴を上げる中、

シユタークさんは容赦なく黒歌の腸内を突き上げる。

その表情はどこかサディスティックだ。

「ココ……じゃなくてオマ○コだロ？」

「あひい♥しゅ、シユタ……あああん♥

シユ、シユターク……！」

もう許し……んひい！ んぎいい！！」

黒歌が懇願するが、シユタークさんは

その言葉を遮るかのように更に深く突き上げていく。

「許してほしいならちゃんと

イツセーくんに対して眷属らしく

おねだりしないとねエ」

そう言うとシユタークさんは

黒歌の耳元で何かを囁いている。

一体何を言っているのだろうか……？

黒歌の顔が羞恥に染まっていく。

やがて意を決したのか彼女は俺の方を向くと、

ゆっくりと口を開いた。

「お、お願いしますう……！」

どうかこの卑しい雌猫に主様の

たくましいおち○ぽをお恵みください♥  
黒歌の発情しきつた淫乱なメスマ○コを  
思いつきり突いて下さいませえ♥」

「く、黒歌……」

黒歌のあまりの変わりように俺は驚きを隠せない。

だが、それと同時に俺は黒歌の痴態を見てかつてない程に興奮して  
いる自分がいることにも気付いていた。

それは俺のペニスを参考にしたというデイルドーよりも固く、鋭  
く、太く隆起している

チ○ポを見れば一目瞭然だった。

「はあ……♥ああ……♥」

まるで珍しい宝石でも相手に  
する様に黒歌は俺のチ○ポに  
うっとりしながら頬擦りをしている。

「これが……イツセーのち○ぽにゃのね♥

すつごく大きいにゃあ……♥こんなの入れられたら……

私……ホントにイツセーの眷属

にされちゃうにゃあ♥」

「さあ、イツセー君？」

彼女の望み通りキミの精子を

オマ○コの隅々までぶち込んであげるといいヨ」

シユタークさんの言葉に俺は黙って首肯すると、

黒歌の秘所に狙いを定めて……。

ぬぷ……♥つと龟头を潜り込ませる。

「んっ……んんっ……んあ……んはあー！」

黒歌のオマ○コは待っていましたとばかりに

俺の肉棒を包み込む。

なら、俺のする事は決まっている。

黒歌の一番奥まで一気に突っ込むのみだ。

ずぶう!!

「くはあ……♥にゃあああ♥」

「ん……んぐう！」

膺内は凄まじい締め付けで、  
入れただけでイキそうになる程だ。  
さつき黒歌を抱いた時の比じゃない。

黒歌の膺内のヒダの一つ一つの感触や  
体温までもが伝わってくる。

そして、何より黒歌の膺内はとても熱かった。

黒歌は俺のチ○ポを受け入れた事で、

顔はまるでトースターの中の

チーズの様に蕩けきっている。

しかし、まだこれで終わりではないのだ。

「動くぞ」

「うん……来てえ……♥」

黒歌の許可が出たところで

腰を動かす。

それだけで黒歌はみるみる内に快樂へと溺れていく。

だが、快樂の海に沈む黒歌には

助け舟ではなくさながら漁師か

狩人の様にシユタークさんのデイルドーと

俺のチ○ポがアナルとオマ○コを

貫き、抉り、穿っていく。

黒歌の身体は俺達二人の動きに合わせて

ビクンツと釣り上げられて電気鉗を

受けるマグロの様に跳ね上がる。

「ひい♥ひい♥ひい♥しゅづいにゃあ♥

しゅづいのお♥

私の中あ……イツセーとシユタークので一杯……♥

はああ……初めてにゃあ♥

私、私い……生まれ変わるう♥

イツセーの眷属として……

んあ♥んぎゆ♥あぎい♥トブラ♥



アクメ狂うううう ♡♡♡  
ブシャアアア!

そして遂に黒歌は絶頂を迎え、  
潮を吹き出した。

同時にシユタークさんも果てたようで、

黒歌のアナルから大量の精液を模した薬液が溢れ出す。

「ふう……なかなか良かったヨ♡」

シユタークさんは満足げだが

黒歌の身も心も充足させるには

俺のチ○ポでは足りないらしい。

(ああ、無茶苦茶だにやあ……♡気持ちいいのに♡

幸せなのに♡

もつとお……もつともつとお……♡

でも、ワガママを言ったら

イツセーに嫌われちゃうにやあ♡)

黒歌のおっぱいはそう言っつて更なる快楽を求めている。

なんていじらしい……!

これほど健気でいじましい眷属を満たせないで

何がハーレム王か!

「黒歌！ もつと欲しいなら

その三倍は要求したっていいんだぞ！」

「え……？」

「だから、お前の欲望を全部言っつてくれ!

俺が叶えてやる!!」

「……」

黒歌は呆然としていた。

だが、それも一瞬のことで、

すぐに彼女は笑顔になると俺に両手を

広げて抱きついてきた。

「嬉しいにや……♡そんな事言われたら……」

我慢できなくなっちゃうにや♡もう……私……♡」

「ああ、俺だつてそうだ……!!」

「なら……早く……♥」

「分かつてる」

そして俺はケラウノス・レプリカを

発動させてエロ電撃パワーをチャージし、

それを黒歌に注ぎ込む。

唇、乳首、そしてボルチオの

三点バースト!!

名付けて『乳峰式・三叉雷鉬!』

3つの絶頂雷撃が合わさつて

100万パワーになった俺の一撃に、

黒歌の全身が激しく痙攣する。

「んにゃああああああ♥♥♥♥」

「うおおおおおおお!!!」

俺はさらにピストン運動を加速させ、

トドメのラストスパートをかける。

パンツ! パアンツ! ズブツ! グチュツ!

「んあ♥んにゃん♥んにゃん♥」

「にゃん♥んはあ♥んつはあ♥はあああ〜♥♥♥」

黒歌は歓喜の声を上げ、

俺の背中にしがみつく。

これで……ラストだああ!!

ずぐんっ!! どちゆうっ!!

「イクう♥イツセーのち○ぽで……♥」

「イツクうううう♥♥♥」

子宮口に破壊鎚の如く叩き込まれた

チ○ポから放たれた膨大な量の魔力と

精子の奔流によって

黒歌は意識を失う程の壮絶な快感を受け、

ドスケベ極まりないアへ顔で白目を剥きながら

盛大に達していた……!!

同時に俺も満足感と充足を  
覚える中、限界を迎える。

どびゆるるるるる!!

「んほおおお♡♡♡」

黒歌のオマ○コから俺のチ○ポが引き抜かれると、  
大量の精液が勢いよく飛び出していく……。

そして黒歌はというと、完全に

俺とのセックスによりトリップしており

幸せそうな表情を浮かべていた。

こうして、俺は初の眷属である

黒歌を満足させる事に成功したのだった……。

※第61話（安里×カテレア&スコグル）

安里 side

ズガアアアーン!!

これで何度目になるか

解らねえがジャンヌ、スコグルさん、

そして俺の連携攻撃がカロックスに決まる!

「グハッ……!?!」

カロックスの半身は吹き飛び、

血反吐を吐きながら倒れた。

「ハアッ……ハアッ……流石にもう限界だな……。

そろそろ起きるなや……!」

【六合太極】で引き出せる力は

未知数だが生憎俺の身体が

限界に近い……!

骨は軋み、脈は乱れ、筋肉は悲鳴を上げている。

それはジャンヌやスコグルさんも

ほぼ同じだ。

ジャンヌは旗を杖代わりにして

なんとか立っている状態だし、

スコグルさんは息切れしている。

「ハッハハハハア!!」

ところがどうだ!!

カロックスは高笑いと共に

復元するなり起き上がったじゃねえかよ……!!

「馬鹿な……!?! 何故動ける……!?!」

「俺は死なん! 九頭竜安里!

貴様をバラバラにちぎり飛ばして

地獄の釜底の焚き木代わりにするまでは

決してなあ!」

なんて野郎だ……!!

もう100回は粉々にした筈だぞ……!!

なのにまだ生きているだと……?!

「いい加減に死になさいよ!」

「どうした小娘エ!

俺が死にたくなるまで

永遠に殺し続けるのではなかったのかあ!?!」

「くっ……!」

例の三角錐を飛ばしながら

嘲笑するカロックスの攻撃を

防ぐ手立てが今の俺たちには

ない……!!

ズガガガガッ!!

「うわあああ!」

「きやああああ!」

「ぐわああああ!」

俺達は3人共、蹴り飛ばされた

空き缶みてーに地面に転がされた!

クソッ……!!

わざと威力を弱めて俺達を

なぶり殺そうとしてやがる……!!

このままではルーナもジャンヌも

スコグルさんも殺されちまう……!!

何か打開策はないのか……!?!

「フハハハハ! 心地いい!

心地良いなあ!!

貴様らの悲鳴の多重奏は

この上なく俺の復讐の賛美歌となる!」

ダメだ……! 奴を殺す方法が

思いつかねえ……!!

そんなに……!!

そんなに俺が憎いのか

カロックス!!  
すると奴は

俺の憎しみに満ちた眼差しに  
気がついたらしい。

その禍々しい視線をジャンヌと  
スコグルさんに向けた。

まさか……テメエ……!!

「まずはその生意気な小娘と  
姦しい女から始末してやる……!」

ズビビビーツ!!

三角錐から微弱なレーザーが  
放たれるが魔力がカラになった  
ジャンヌとスコグルさんの肌を焼き、  
肉を裂くには十分だった……!

「うああ……!!」

「ぐううう……!!」

二人は悲鳴はあげないものの、  
苦悶の表情を浮かべて苦痛に耐えていた。

「テメエエエ!!」

怒りに身を任せた俺は  
ありったけの力を振り絞って  
カロックスに飛びかかった!

「フン、馬鹿が!」

ギャリリリリ!!

「ぎゃああああ!!」

何と奴の背後から回転ノコギリの様な  
円盤が出現するとそれが俺の腕を切断しやがった!!  
腕からは噴  
水の様に血飛沫が上がる!

「ハハハア! 無様な姿だなあ!

九頭竜安里オ!」

ああ……無様だ。

惚れた女は守れねえ。

ついてきてくれたジャンヌや

スコグルさんを庇う程度のことも

できねえ………！

情けなくて涙が出てくるぜ………！

だがなあ………！

「次は足だ!!」

ギャリリリリリ!!

肉が裂け、骨が断たれる。

フツ―の人間ならとつくに

死んでいるだろうな………。

だが………！

「ぬおおお!!」

残った左腕を触手に変えて

俺はカロックスに負ぶさる様に

しがみつく!

「な、なぜだ!? 何故死なない!」

「ああ!? テメエが言った通り

俺が『人でなし』だからだろうがア!!」

「あ、アンタまさか………!」

復讐者の名を冠するからか、

或いは俺の『燃える三眼』の

能力を知っているからか

ジャンヌは青ざめた。

おいおい、美人が台無しだぜ………。

「おのれ………! 離れろ!!」

「断る! テメエが死ぬまで俺は絶対に離さねエぞ!」

「チイツ! ならば………!」

ドゴオツ! 俺の腹に三角錐が突き刺さる!

「グハツ!」

内臓が潰れたか………? だが構わねえ!

「お、お前……何を考えているんだ……!?」

「ハア？ テメエは俺を殺して

復讐がしてえんだろうが！

なら付き合っつてやるぜ！

地獄までな！」

そーいや聞いたことがある。

復讐者つてのは目的を果たしたら

満足して消えちまうんだろ？

なら簡単な引き算じゃねえか。

三引く一は二だ。

俺が死んでもジャンヌやスコグルさんが

ルイーナを助けてくれる！

「やめろ!! やめろオ!!」

カロツクスが絶叫しながら

俺を引き剥がそうとするが

俺は意地でも奴に

しがみついたまま

『燃える三眼』の能力を

俺自身に発動させる！

「ぐわあああああ!!」

熱い……！ 苦しい……！

息が出来ない……！

ジャンヌ……！

お前はこんな風に炎の中で

信じていた皆に裏切られて

殺されたんだよなあ……！

痛かったろうな……、

苦しかったろうな……！

もう少し優しくしてやるべきだったなあ……。

本当にすまなかった……。

だけだよ……！



こんなド三流マスターの  
俺だって……!!

「テメーをぶつ殺すまでは  
死ぬ訳にはあ!

いかねえんだよオオオ!!!」

「グアアアア!!」

俺の全身の細胞が燃え上がる!  
そして奴の体と共に……

「……………!!」

ジャンヌとスコグルさんが  
泣きながら何か叫んでいる。

だが、何も聞こえない。

まあ……あの二人のために  
死ぬんなら……別に……いいか。

「駄目です」

!?! カテレアの……声?

あいつの声が聞こえたかと思う

同時に俺の額に何かが

撃ち込まれた……!?!

ジャンヌとスコグルさんが

振り向いた先には銃を

構えたカテレアがいる。

そうか……洗脳が解けたから……、

お前も俺を……。

これが……報いか……。

ん? 何だ……?

俺の身体が……!?! 癒えていく?

「間に合った様ですね。

旦那様、いえ……愛しい貴方」

カテレアが回復してくれたのか!?!

洗脳が解けたんじゃないのか?

しかし愛しい貴方って何だよ!?

「ああ！ 来てくれたのかカテレア！

俺だ！ クルゼレイだ……!」

カロックスは仮面を外して、

その素顔を顕にした！

だがその顔には肉も皮もない！

燐火の様に瞳に火が灯った

髑髏の顔があるだけだ……! !

「クルゼレイ……貴方は……」

「ああ、カテレア！

嘆く事はない！

俺は九頭竜安里に敗れた後、

ハマーマ様の反魂の法により

不死となったのだ！

素晴らしいぞこの身体は！

朽ちる事も老いる事も！

弱くなる事も醜くなる事も！

病む事も死ぬ事もない！

純血魔王に相応しい

永遠の命を手に入れたのだ！

さあ！ もうすぐだ！ すぐに私達の世界が完成する！

お前と永遠に生きられる日が……! !

フハハハハハ！

「……っ!」

「さあ！ 行こう！ 新たな世界へ!」

俺を引き剥がしたカロックス、

いや……クルゼレイは

カテレアに手を差し伸べる。

髑髏で表情は変わらないが

その笑い声は明らかに

この世のものじゃなかった……! !

カテレアは……どうするんだ？

すると、まるで復讐の炎も

凍てつく冷酷な視線でカテレアは

クルゼレイを睨みつけた。

「黙りなさい下衆」

「なんだと？」

「貴方は私が唯一愛する人を傷付け、

死してなお侮辱しました。

それは万死に値します」

「何を言っている？ 貴様の夫はこの私、

クルゼレイ・アスモデウス……！」

バキユウウン！

クルゼレイが言い終わる前に

奴の額にも同じ弾が撃ち込まれた！

回復弾か？

「アンタ……！ アタシ達を

裏切るつもり!？」

「いや、待ちなさいスコグル」

スコグルさんはカテレアを

裏切り者呼ばわりするが、ジャンヌは違った。

彼女は冷静だ。

「何故だカテレア！ 何故……！」

柔らかな緑の光がクルゼレイを包むと

ボロボロと決壊していく……！

そうか、アンデットには

癒しの力は猛毒に等しいのか！

「まだ解らないのですか……」

クルゼレイ・アスモデウスで

あったものよ。

貴方は克己心と探求心に満ち、

貴族としての責務を果たそうとした

嘗ての貴方ではない。

ただ己の復讐を成すために狂奔し、  
そのためならば他者をいたぶり、  
踏みにじるのも是とする怪物に  
過ぎない！」

パン！ パアン！

カテレアの叫びと共に2発の弾丸が  
首筋と胸に撃ち込まれた！

「う……ああ……な、ナゼダ……。

ナゼダ……カテレア……。

アイシテイル……アイシテ……

イルノニ……」

つう、とクルゼレイとカテレアの  
空洞と瞳から同時に涙が流れた。

「さようなら……クルゼレイ。

愛していました」

「アア……カテレア……

カテレア……アイシテイル……

アイシ……カテ……」

クルゼレイだったものは

灰になって崩れ落ちた。

まるでキャンプファイヤーの

焚き木の焼け滓の様に……。

「カロックス……いえ、クルゼレイ。

私は私の世界で生きます。

朽ちる事も、老いる事も、

弱り、病み、死ぬ定めにある

この残酷な美しい世界で」

カテレアは宣言した。

そして俺の方を振り向いた。

「俺は……殺さないのか？」

殺すなら動かせるのが

腕一本しかない今しかねえと思うぜ？」

俺の意志に関わらず俺の身体が

糸から復元を始め、骨、肉、皮を

再構築していくのが解る。

だが、俺の身体はまだ動かない。

「いいえ、殺しません。」

貴方が寿命を終え、安らかに死ぬ

その時まで側にあります……。

それが私の復讐です」

スツと俺の側に寄り添った

カテレア。

その顔は慈愛に満ちた聖母の様だ。

どこの世界にそんな優しい復讐が

あるんだよ……。全く。

人でなしの俺には勿体無すぎるぜ。

どうやらジャンヌもスコグルさんも

カテレアの回復弾で回復できた様だし、

俺は動けないがとりあえず一件落着か。

「所で、カテレア。」

お前が撃った回復弾って何だ？

フェニツクスの涙か？」

身体は治ったがガス欠で

ロクに動けない……。情けない。

「いいえ、

あれは私が作ったものです。

エルフの里にあつた男エルフの

残したデータからミダラー女史の

母乳より薬効成分を凝縮した

特殊弾頭です。

ですが未だ副作用がありました♥」

サラツととんでもねえ発言が  
幾つも聞こえた気がするんだが。

ん……？ な、何だ……？

急にカテレアやジャンヌ、

スコグルさんがこの上なく

魅力的に……？

「ふふっ、旦那様。

やっと効果が出ましたね♪

私特製の媚薬効果のある

エルフとゴブリンのフェロモンがたつぷりの

精力剤ですよ♡

これで私達を孕ませる事が出来ますね、うふふ♡」

いや……うふふって……。

まるで歓迎する様な顔でお前！

だ、駄目だ！

俺にはルイーナという彼女が！

しかし、勃起が治まらない……！！

う、おお……！！

「あん♡旦那様あ♡」

俺はまるで水に飛び込むカエルみたいに

カテレアにダイブしてしまう。

あつたかい、柔らかい……！！

「ちよっ……ちよっとー！

何いきなり盛ってるのよ

アンタ達！ 頭おかしいの!？」

ジャンヌの罵声が聞こえるが、

もう止まらない……！！

俺は本能の命ずるままに

カテレアの胸を揉みしだく……！！

やわらけえ！

これがカテレアのオツパイなのか！

何度も揉んだはずなのに

すげえ……！ 夢中になつて揉んでしまう……！！

ああ、なんて気持ち良いんだ！

すると、カテレアは俺を抱き締めて

そのまま押し倒した。

俺の顔はカテレアの豊かな胸に埋まる。

「しかし、この様な殺風景な所で

するのでは旦那様も興醒めでしょう。

ここは一つ、ニグラ様のお力を

借りて趣向を変えましょうか」

そう言つてカテレアが指を鳴らすと、

忽ちラブホの一室みてーな

妖しくもスケベな雰囲気の部屋に変わった。

と、言うかここはニグラさんの

ヤリ部屋空間……!?!

「うわあ……趣味の悪い……」

「あはは……凄いなあ……」

ドン引きしているジャンヌに対し

スコグルさんは頬を指で

搔きながら苦笑していた。

「それでは失礼しますね、旦那様」

カテレアは俺のズボンを脱がせ、

彼女は自らの服を脱ぎ捨て裸になった。

小麦色の褐色肌がエロ過ぎる……！！

俺は我慢出来ずカテレアの

股間に顔をつっ込みクンカクンカと

匂いを嗅いだ。

甘酸っぱい匂いに

クラクラして来る……。

「あん……そんなに

私のここを舐めたいのですね♥

では存分にお愉しみ下さいまし……♡」

カテレアは俺の頭を掴んで

強引に自分の性器へと押し付けた。

「あむう……ちゅぱ……れろ……！」

俺は舌を使ってカテレアの秘部を

丁寧に愛撫していく。

濃縮された様な本気汁が溢れ出して来た。

「あっ……やんっ……！」

素敵です……旦那様……もつと……

強く吸って……激しく……愛して……」

カテレアのリクエストに応えて

俺は膣内を乱暴に貪り尽くすや

カテレアは腰を浮かせ、ビクビクと痙攣し始めた。

「なあ……カテレア。」

お前のケツを俺の顔に乗せろよ」

「そ、そのような無礼な事を……♡」

とは言いながらもカテレアは

嬉々として尻を差し出す。

俺はカテレアのプリツとした

デカイ桃の様なヒツプにかぶりつき、

思いつきり吸い上げた。

「んひひひひひひひひひひ♡」

カテレアの悲鳴にも似た喘ぎ声が部屋に響き渡る。

俺はカテレアの尻穴に人差し指を入れ、

グチュグチュとかきまわしながら、

舌でカテレアのオマ○コの

花びらを優しくなぞっていく。

「ああ……♡駄目です……！」

そんな所まで……

そんなにしたら……私……もう……♡」

「はあ……はあ……カテレア……」



お前の身体……すげえいやらしいぞ」  
「ふっ、

ありがとうございます旦那様……♥

あら……お二方ともそのように

旦那様のペニスを凝視なさって……♥」

「な……!? ベ、別に見てないし！

っていうかアンタ達何時まで盛り合ってるのよ！

早く済ませなさいよね！」

俺からは見えないが、

どうやらジャンヌとスコグルさんが

俺達の行為をガン見している様だ。

恥ずかしがるべきなんだろうが、そんな余裕はない。

俺はカテレアを絶頂させるべく

弱点のアナルを責めるべく

尻たぶをかき分けて指で皺をほじくる。

「んっ……！ はあんっ……！

そこお♥良い……良いです！

旦那様……！ 私……もうイッてしまいます……！

あああああ!!」

遂にカテレアは盛大に潮を吹き出して果てる。

あの普段は敏腕秘書みたいに冷静沈着なカテレアが、こんなに乱れると興奮するぜ……！

カテレアのアクメ顔を想像するだけで

俺の肉棒は爆発寸前だ。

その時……！

ずぶずぶずぶ♥

どびゅーっ!!

「う、おお……」

突然俺のチ○ポが誰かの

オマ○コに挿入され、

精液を搾り取られた。

い……一体誰が!?

「ああ……♥安里のチ○ポ……♥

ザーメン、ビュルビュルって  
アタシの中に出てるう……♥

ゴメン、ルイーナあ♥♥♥

抜け駆けしないって約束……♥

破っちゃったあ……♥♥♥

蜂蜜を煮詰めたのかってくらい

甘ったるいスコグルさんの声が聞こえて来た。

彼女はジャンヌとカテレアの目の前で

俺に自ら犯されるべく俺のチ○ポに跨り、

騎乗位で合体したのだ。

「な、何をしているんですか!?

スコグルさん!」

ジャンヌは慌ててスコグルさんを止めようとするが、  
彼女が俺から離れることはない。

「良いの……♥

これは罰なんだからあ……♥

安里を裏切った罰に

私は安里のヴァルキリーになるう……♥

お、おおう♥

カテレアの回復弾の副作用なのか

スコグルさんは完全に発情してしまっているらしい上、俺も副作用  
によって勃起力が

異常なまでに強化されていた。

ガツン! ガツン! と俺達は何度も激しく

結合を繰り返し、快楽を貪り合う。

「まあ、スコグル様。

旦那様にご奉仕するとは殊勝ですね。

ですが、私の方がもつと

旦那様のお役に立ちますよ?」

そう言つてカテレアは俺の口に自らの  
性器を押し当てて来た。

俺はそれを喜んで受け入れる。

んぐっ……ちゅぱ……れる……！

俺はカテレアの陰核を舐め回しながら

スコグルさんと腰を振り合つて快楽を味わっていた。

「あぁっ……す、凄いよ……♡♡♡

安里のチ○ポ……♡

チ○ポがこんなに気持ちいいなんてえ……♡♡♡

カテレアの尻が俺の顔から離れたために

スコグルさんと目が合う。

彼女の瞳はハートマークになっていた。

このままスコグルさんの中に出すのもいいが……、

カテレアにも中出ししたいな。

俺はカテレアに目配せをして、

スコグルさんとのセックスを

中断してから彼女に合図を送る。

「ふっ、承知致しました。

それでは存分に私を孕ませて下さいまし♡

九頭竜家の世継ぎを私めが……♡」

そう言つとカテレアは俺に

尻を向けたまま四つん這いになった。

つう、とカテレアの膣内から

愛液が垂れているのが見える。

今すぐ栓をしないと……。

俺はカテレアの膣内に勢い良く

チ○ポを突き立てた。

ずぶずぶずぶ♡

「んはぁぁぁ♡奥まで♡

旦那様の極太ペニスがあ♡

私の子宮まで届いてますう♡」

パンツ！ パアンツ！ 俺はカテレアの尻を  
鷲掴みにして乱暴にピストン運動を行う。

カテレアの膣内はヒダヒダが沢山あって、  
まるで生き物の様に俺のチ○ポに絡みついて来る。  
スコグルさんも名器だったが、

カテレアのも負けていないくらい締め付けだ。

「ペニスじゃなくて、チ○ポだろ？」

ずぐうっ！ と最奥を割りながら

カテレアの耳元で囁く。

カテレアはビクンと身体を震わせ、

喘ぎ声を上げながら言った。

「はい、旦那様の極太チ○ポ♥

チン負け魔王を打ちのめす勇者の

最強無敵の巨根おち○ぽお♥」

い、いやそこまで言わんでも……。

流石にちよつと恥ずかしいんだが……！

「ああ……♥いいなあ……♥

エインヘリヤル級のチ○ポ……♥

アタシも欲しい……♥」

スコグルさんもすっかり

出来上がってしまった様で

俺とカテレアのセックスを

指を咥える様な格好で見ている。

流石に放っておくつても、な？

「ほら、スコグルさん……。

こっち来いよ」

「あ……♥うん♥」

俺が手招きをすると、

嬉しそうな顔で猫の様にこちらに寄って来た。

ふふ、可愛いな……。

そしてカテレアを責めながらも

彼女のおっぱいやオマ○コを弄り、  
爪や舌でもて遊ぶと

その度に淫らに反応する。

「ああ……♥あああ……♥

しゅごいよお……♥♥♥」

「ふふ、スコグルさんも

デカイ乳や尻をそんなにブルブル

揺らしてよ……誘ってんの？」

カリツと

カテレアのクリトリスを引つ搔いた後に

彼女のデカパイをぐにぐに揉む。

「ひゃあん♥ねえ……♥安里お……♥

もつと、もつとイジメて欲しいなあ♥」

スコグルさんは甘えた声で俺に

おねだりをする抱きついてきた。

「あーあ、しょうがないヴァルキリーだな。

よしよし、いっぱい可愛がってやるよ」

そう言つてスコグルさんの乳首を摘んだり、

引つ張つたり、時には優しく撫でたり、

軽く噛んだりする。

まるで粘土細工を扱う様に

俺がスコグルさんを扱っていると、

「ううっ……♥スコグルばかりズルい……！」

私だつて……私だつて……！」

カテレアは嫉妬心からか激しく腰を振り始めた。

バチユツ！ バチユン！ と結合部から

体液が弾け飛ぶまでの勢いだ。

「ああっ……♥激しい……♥

気持ち良すぎて死んじゃいそうだよお……♥」

「旦那様……♥旦那様……♥

私は旦那様の妻です……♥

旦那様専用の牝奴隷です……♥」

俺は二人の言葉に感じ入りつつも

彼女達の身体と痴態に溺れていった。

パンツッ！　パンツッ！　パンツッ！

パンツッ！　パンツッ！　パンツッ！

「出すぞっ！　一人ともっ!!」

ドピユツドピユルルルルー！

！　ビュルビュル~~~~!!!

「イクウウウツ~~~~~~~~~~~~♥♥♥」

俺達は同時に絶頂を迎え

射精とアクメの余韻に浸りながら

ベッドの上に倒れ込んだ。

「……ってアンタらねえ！

ルイーナとアーシアを放ったらかして

余韻に浸ってるんじゃないやあねーわよ！」

「「へ……!?!」」

俺達が呆けていると、

ジャンヌの激が飛んできた！

た、確かに……！

まだ戦いの最中だった……！

「すまん……!」

俺は慌てて謝るが、

二人は特に気にした様子もなく、

「ふう……」

まあ、別にいいけどさあ……」

「ええ、少し休めましたから……」

フォローになっっているのか

いないのかは解らんが

回復も済んだし……!」

あとはディオドラの奴に殴り込みを

かけるだけだな……!」

「カテレアはここで

ルイーナを保護してくれ!

俺はスコグルさん、ジャンヌと

カチコミをかける!」

「承知致しました! 旦那様の仰せのままに……!」

おお……! 事が済めば

いつもの知的クールなカテレアだ! やっぱり彼女はこうじやない  
いと!

「何精液塗れのメガネを

クイツとやってクールぶってるのよ! アホか!

あとアンタもチ○ポ丸出しで

何をイキリ倒しているのよ!」

いつにも増してジャンヌの

ツツコミが厳しい……。

ウツス……スマセン……。

「ねえ……♥

さん付けじゃなくてスコグルって呼んで♥

これからはさあ♥」

「は・な・れ・ろお〜!!」

これもある意味両手に花なのか?

なんてしようもない事が頭によぎった……。

## 第62話

イツセーside

「……な、なんとという事を」

はい、兵藤一誠です！

今俺は絶賛、正座中！

というのも、敵地の真ん中に

コテージを張って黒歌を

眷属にするためにエロエロな

なんやかんやに励んでいたワケで。

そりゃオーデイン様の言いつけで

加勢に来たヴァルキリー様も

怒るよな……。

「とは言うがねエ……。

致し方ない行動だよ

ロスヴァイセ君」

ベッドでアヘアへしている

黒歌にシーツをかけながら

シユタークさんがフォローに

入ってくれた。

「お言葉ですがいくらなんでもあれはやり過ぎです。

セイクリッドギアを抜きにしても

あんな破廉恥な行為……見過ごせません！」

そう言っただけ俺とシユタークさんを見る

ロスヴァイセさんの視線は

なんとも厳しい……！

「固いねえロスヴァイセ君。

そんなんじゃないモテないヨ」

「余計なお世話ですっ！

私だって！ 私だってえ!!

好きで彼氏いない歴〃年齢な



ワケじゃないんだからあ!!

あと私はビッチじゃありません!!

うわあああん!」

と泣き叫ぶロスヴァイセさん。

この人彼氏が居なかつたのか……。

スタイルも良いし、

性格も真面目そうだし。

これでフリーってのは奇跡に近いだろう。

ベルセルクって何なの？

女の子よりバトルとかいう

種族だったりするののか？

「まあまあ、落ち着いてください

ロスヴァイセさん。

ほら、涙拭いて……。」

「うう……ありがとうございます。」

でも、貴方のせいですからね？

貴方がオーディン様に気に入られたりするから

こんな事になったんですううう!!!」

また泣き出した!?

情緒不安定な人なのかなあ。

『全くやかましい女だ』

どうせあの老人から

相棒を色仕掛か何かで

引っ掛けてこいとか

言いつけられたのだろう』

さらっとドライグがとんでもねえ

事言つたぞおい!

「え、そうなの?」

思わず口に出してしまった……。

するとロスヴァイセさんは

キツと俺を見据えて不満を

ぶちまけ始めた！

「はい、その通りです！

貴方達みたいなのがいるせいで  
私の恋愛事情が滅茶苦茶です！

そもそもですね——」

そこから延々とロスヴァイセさんの  
愚痴を聞かされた。

なんかこう、アクの強い上司や

同僚に付き合わされて苦労してる人  
なんだなって事がわかった。

ロスヴァイセさんも疲れてるみたいだし、

ここは一つ、労ってあげよう。

「大変ですねロスヴァイセさん」

「わかってくれますか！

やっぱり持つべきものは理解者ですね！」

うんうん、と力強く首肯するロスヴァイセさん。

さつきまで泣いていたとは

思えないほどに元気になったようだ。

良かった良かった。

……いや、こんな事してる場合じゃないだろ！

アジアを助けに行かないと!!

「ロスヴァイセさん！

もうそろそろ出発しないといけません！

早く行きましょう！」

俺がロスヴァイセさんの手を取ると、

彼女は頬を染めながら俯いた。

あー、こういう反応されると困るんだよなあ……。

対応の仕方がわかんねえ！

しかも相手は北欧系美女だし！

これじゃあまるで俺の方が

意識しちやつてるみたいじゃないか……。

あ、ちよつとドキドキしてきた。

俺がそんな葛藤をしている中  
シユタークさんとドライグは

「チヨロいねエ」

『ああ、チヨロいな』

と、囁いていた。

ー

そして遂に俺達は

ディオドラの元へと辿り着いた！

部屋の中なのにまるで神殿の様な

作りなのは奴の絶霧の能力に関係あるのか？

そして、そこに居るはずの無い人物を

見た俺は驚愕した！

「リアスさんッ!?!」

なんとそこには、

リアス・グレモリー先輩の姿があつたのだ!!

何故ここに!?!

まさか部長もアジアと同じ目的で

攫われたつていうのか!?!

「イツセー!?! 来ては駄目よ!」

リアスさんとアジアは全裸で

蛇の様な鎖に繋がれ、

ずりずり、と二人の柔肌を

這い回り

ながら進むそれは

やがてリアスさんの胸元へと到達する。

そして蛇は鎌首をもたげ、

今まさにリアスさんの豊満な胸に食らいつこうとする。

な、何をするだアーツ!!

「やめろおおおっ!」

俺は叫び声を上げ、

瞬時に赤龍帝の鎧を纏い

突進の構えを取る！

「待ちたまエイツセー君！」

シユタークさんが俺を制止しようと叫ぶ。

だけどさ……！

愛する二人はあんな辱めを受けて

黙っていられるか!!

「邪魔しないで下さい！」

これは男として譲れない戦いなんです！」

俺は雷のオーラを鎧に纏わせて、

一足飛びに踏み込んだ！

だがその直後にドオンツ!!! という轟音と共に

部屋中に衝撃が走る！

「ぐあぁっ!!」

「イツセー！」

「イツセーさん！」

俺の全身から血飛沫が上がり、

激痛が駆け巡る。

何が起きたのか、

一瞬わからなかったがすぐに答えが解った……！

二人の前に何とディオドラが

立ち塞がっていた！

霧の結界で俺の雷を無効化した後

霧を鎧の中に侵入させた後に

魔力で起爆したんだ!!

ちくしょう……!!

こんな姑息な手を……!!

「ハハハ、

僕は前から不思議だったんだ……。

どうして皆赤龍帝の鎧を正面から

破壊しようとするのかなって。

意識をこの二人に向けさせた後に  
中の下級悪魔だけを破壊すれば  
いいじゃないか？」

「いい作戦だとは思うヨ。」

実行のためにその二人を

辱めた君の品性は最低だけドネ」

「同感です。上級魔族が

ここまで恥知らずな卑劣漢だとは

夢にも思いませんでした。

貴方には人として大切なものが欠落していますね……!!」

俺を庇う様にシユタークさんと

ロスヴァイセさんが前に立ち、

符術で俺の傷を癒やしてくれている。

しかし、ディオドラの野郎……

なんて事をしやがるんだ！

「フフ、僕の愛を受け入れてくれないなら、

いつそ汚してしまえば良いと思っただのさ。

美しいものを自ら穢す快感は、この上なく最高よ！

ほほほほ!!」

ゲスが……!!

お前みたいにな奴にアーシアやリアスさん、

それに朱乃さんや小猫ちゃんは絶対に渡さない！

俺は怒りに震えながら、ディオドラを睨み付ける。

だが、俺の怒りなど意に介さぬ風に

奴はアーシアとリアスさんに視線を向けた。

「ああ、アーシアさん。

君は本当に素晴らしいよ。

神器『聖母の微笑』に『僧侶』の力。

そしてその容姿！ 君はまさに神の奇跡そのものだよ。

やはり僕が見初めただけの事はある！

そしてリアス！ 君も綺麗だ……。

君達のような高貴な女は、そう簡単に堕ちない……。だからこそ、汚してやりたくなるものさ……！」

ディオドラは舌舐めずりしながら、欲望に満ちた眼差しと手で二人の肢体を弄る！

「や……止めなさい！」

「嫌あ……！ イッセーさあん……！」

二人の顔が恐怖に染まっていく。

クソ……！ 何とかならないのか!?

このままじゃ二人が危ないのに！

「やれやれ、仕方がないねエ」

シユタークさんが2枚の符を

取り出す！ 恐らくは転移用の符か！

あれなら二人をこっちに引き寄せられる筈……！」

しかしディオドラに焦る様子はない。

それどころか余裕の笑みを浮かべている。

「ハハハハ！ 無駄だよ！

私の神滅具の『絶霧』は

『赤龍帝の籠手』より格上さ！

君の様な悪魔祓い如きに

干渉できるものか！」

な、何だど!! 神滅具よりも上位の神器だつて!?

しかしシユタークさんは冷静だ。

「まあ、普通はそうだよねエ。

キミの神滅具にはボクは干渉できない。

けどそっちの『蛇の鎖』はどうかナ？」

そしてシユタークさんが

符術を発動させると……!?

ヒュン、と俺の前にたわわと稔る

4つのおっぱいが……!!

ってリアスさんとアーシア!?

なんで俺の目の前に……?」

あ、いや！ そんな事考えてる場合じゃない！

「部長！ アーシア！ 大丈夫ですか!？」

「え、ええ！ 私は平気よ！」

「イツセーさん！ ごめんなさい！」

私のせいでこんな事に……」

「二人とも無事で良かった！」

もう心配はいらない！ 今助けますから！」

俺は二人にマントを羽織らせると

状況を把握するために周囲を見渡す。

するとそこには……

リアスさんとアーシアの代わりに

蛇の鎖に拘束された

シユタークさんとロスヴァイセさんが！

しかも何故か全裸で……!!

「な、何で!? 何でお二人の姿が!？」

「ううう……！ 見ないで、見ないで下さいいい!!」

ぶるるんっ！ ゆさっ！ たゆん！

赤面するロスヴァイセさんが

恥ずかしがり、縛られながらも

裸体を隠す仕草が逆にエロティックだった。

ってそうじゃなくて！

くっ！ どうする！ 一体どうやって二人を助ければ……!!

「ハハハハハ！ 馬鹿な悪魔祓いと

ヴァルキリーだな！」

自分から人質になりにくるとはね！ しかも全裸で！」

「私は巻き込まれただけです！」

誤解しないで下さい！」

ロスヴァイセさんは涙目で

ディオドラに反論するが、

奴は下卑た笑みを浮かべたままだ。

ちくしょう！ こんな卑怯な手で俺の仲間を！

俺は悔しさに拳を握り締める。

その時、俺はある事に気づいた。

シユタークさんの体が僅かに光っている……!?

これはまさか……!?!? 俺は最悪の事態を想像した。

「人質？ 何を言っているのかな君ハ？」

ボクはそんなつもりは更々無い」

やっ、やっぱり！

シユタークさんは自爆するつもりなんだ！

駄目だ！ 駄目だ!! 駄目だ!!!

俺はまだ何も恩返しをしてないんだ！

俺を鍛えてくれて、俺に力をくれて、

俺を支えてくれた、

この人にまだまだ報いてないんだ!!

「が……ハッ!？」

けどシユタークさんが自爆する前に

シャルバが彼女の腹部を刺し貫く！

「お戯れは程々になさいませ。

ディオドラ……いや、イナンナ様」

……!?

何言っているんだ？

アイツの名前はディオドラ・アスタロトだろ！

俺が混乱していると、今度はディオドラが口を開く。

「……フフフ、

そう言わないで頂戴。

生憎この器の坊やが

色々邪魔をしてくるのよ……」

まるで女のような声と仕草に、

俺は愕然としてしまう！

「お前は……誰だ?! いや、それよりその体は!？」

「フフ、さすがに驚いたようね。

自己紹介しておきましたようか？



私はイナンナ。

アスタロト家の祖にして

『原初の魔王』の「柱」

ディオドラの身体から絶霧の霧が溢れ出し、  
それは女性の形になっていく……！

金の切り揃えられた前髪とウェーブのかかった金髪、  
そして天空の様に青い瞳に白磁のような肌……。

豊饒の女神のような艶やかな肢体に

俺は思わず見惚れてしまう……。

だがその手にはメイスが握られ

背中には怪鳥の翼が広がっていた！

『原初の魔王』だって!?

じゃあお前は『旧魔王』の一員なのか!?

「そういう事になるわね」

すう……とイナンナは

余裕たつぷりに翼で自分の身体を

包み込むと、胸と股が羽根が

変化した防具に隠される。

少し勿体無い様な……って違う！

何考えてるんだよ俺!?

「とは言え……。

流石に絶霧の力で具現化しただけでは不完全。

シャルバ、

そこのヴァルキリーを

孕ませなさい。

アーシアとリアスはあの

赤龍帝に抱かれた様だけど

このヴァルキリーは生娘の

様だから」

……はあ!?

「承知致しました」

いやいやいやいや!!

シャルバ! テメーも嬉しそうに  
快諾するんじゃないやねえ!!

「ひっ……!!?」

ロスヴァイセさんは異性経験が

ないのは明らかだし、

いきなりそんな事されたら

トラウマになるだろ! 馬鹿野郎が!!

「い、嫌です!」

どうして私が……私が!!」

「貴方が生娘だからよ。

破瓜の血と穢れを以て

冥界を下り、私は復活する」

ロスヴァイセさんは涙ながらに抵抗する。

けど抵抗虚しくシャルバは彼女を組み敷くと

その胸に手を這わせる!

「光栄に思うがいい。

本来ならば決して叶う事のない

高潔なる魔王との交わりだ」

「あ……ああ……あ……!」

ロスヴァイセさんの顔が

恐怖に引きつる中、

シャルバはニヤつきながら

ロスヴァイセさんの股を

広げようと力を込めだす!

卑劣な真似ばかりしやがって!

この変態レイプ魔が!

もう我慢ならねえ!

「やめろおおお!!」

俺と誰かが同時に叫んだ!

一体誰だ……って

ディオドラじゃないか!?

まさかお前が俺と同じ事を考えていたなんて……!

「勘違いするな!」

僕は純粹にアーシアさんを愛しているだけだ……!」

ど、どういう事だ?

お前はアーシアを穢す事に

歓びを感じる変態じゃないのか?

するとディオドラから攻撃を

受けたシャルバは嘲り笑う。

「ハハハハハ!」

そう言えばそうだったな!

アスタロト家の軟弱たる御曹司!

貴様はアーシア・アルジエントの様な

謂れなき罪を着せられ迫害された

はぐれ悪魔やシスター達を

眷属にし、保護する様な

愚か者だったなあ!!

そのくせ奴隷にも道具にもせず

仲間として接する不甲斐なさ!!

だからアーシアを助けようとした時に

サリエル如きに不覚を取り、瀕死になったあげく

奴が追放された切っ掛けとなるとはな!

絶望と悔恨に苛む貴様はイナンナ様の

最高の依代だったぞ!」

シャルバが嘲笑しながら言うと、

ディオドラが怒りの形相で睨む!

え? 何? つまりディオドラは

いいヤツじゃないか!

なのにアイツらと俺は

ディオドラを悪者にして貶めたって事か!?

ふざけんな! 許さねえ!!

俺はデイオドラの本心を察する事が出来なかった  
自分を激しく恥じた！

「黙れ……！ 僕の事はいくらでも蔑めば良い！  
だが彼女達への侮辱だけは絶対に許さない……！  
たえお前が相手だろうと……！」

そうだけデイオドラ！

お前がそんな奴じゃないって解った今

俺はお前を信じる！

「ハッ！ 笑わせてくれる！

強い者は弱い者に何をしても許されるのは  
当然なのだ！ 弱肉強食こそ真理よ！！

故に貴様が保護した女共は

既に絶霧の動力となり死んでいるのだ！！

「なっ……!?!」

シャルバの言葉にデイオドラは動揺するが、  
その隙を突いてロスヴァイセさんを再び後ろから  
首を押さえつけると強引に

後背位にて挿入しようとする！

「嫌あ!! 初めてがこんな……!?!」

い、嫌！ 嫌です！ お願いです！ 助けて……！

イツセーさん……！ 一誠さん……！ 兵藤さ……！

ブチンツ！

その時、俺達の中で何かが切れた……。

「おい……。」

いい加減にしろよクソアマア！」

「……シャルバ！」

お前は！ お前だけはあああ!!」

俺とデイオドラは激しい殺意を込めて

それぞれイナンナとシャルバへと突撃する！

「ぐふっ……!?!」

「へえ……。」

デイトドラの蛇の鎖を巻き付けたパンチが  
シャルバの顔にめり込み、

俺の黄金の剣を取り込んだ拳が

イナンナの翼に阻まれた！

「うおおおおおおおおお!!」

「はああああああああ!!」

「ぐぬぬ……!!」

偉大なるイナンナ様の本流でもない

分家の穢れたクソガキがあ……!!

バラバラにして肥溜めに沈めてやる!!」

「なら僕は君を純血の海に溺れさせてやるさ！

身体に替えても！

命に替えても！ お前だけは許さない!!」

おおっ！

デイトドラは完全にやる気だな！

男の決闘に水を差すなんて野暮な真似はしないぜ！

俺はこの『原初の魔王』イナンナと決着をつける！

だが明らかにイナンナは格上ぶった態度で

俺に挑発的な視線を向けた！

「あら？ 貴方が私と？」

トカゲ如きが天と戦を続ける

このイナンナと？」

『……トカゲとは言ってくれるぜ

年増のババアが。

いいだろう。格の違いってヤツを見せてやるよ!!』

「フフン。

面白いじゃない。私はね。

ドラゴンが一番嫌いなものよ！

トカゲはトカゲらしく

地を這い回り、天に頭を垂れなさい！」

そう言うと、イナンナは巨大な両翼を広げ、

空高く飛翔した！  
神だろうがなんだだろうが  
俺のハーレム王への夢を  
阻むんなら遠慮は無しだ！！

## 第63話

イツセーside

『……トカゲとは言ってくれませ  
年増のババアが。いいだろう。  
格の違いってヤツを見せてやるよ!』  
「フフン。」

面白いじゃない。私はね。

ドラゴンが一番嫌いなよ!

トカゲはトカゲらしく

血を這い回り、天に頭を垂れなさい!」

そう言うと、イナンナは巨大な両翼を広げ、  
空高く飛翔した!

神だろうがなんだろうが

俺のハーレム王への夢を

阻むんなら遠慮は無しだ!!

「喰らうがいい!」

イナンナはメイスを掲げると

『絶霧』の霧が収束していく……!

さつきは微小の刃で鎧の中を

ズタズタにされたから要注意だ!

『フン、こちらが来るまで

横着するとは年増には戦いは

重労働の様だな』

カウンターを警戒したドライグが

イナンナを煽り出す。

だが向こうは高笑いを始めた。

「ほほほ、安心するがいい。

直ぐに妾の術が発動するでな」

『原初の魔王』を名乗るイナンナは

余裕たっぷりでメイスを振り下ろした!

ゴロ……ゴロ……!!

収束した霧は雷雲に替わり

異空間の上空を覆い尽くさんばかりに広がっていく!

バリバリバリバリイ!!

凄まじい轟音と共に雷鳴が

あたり一面に降り注ぐ!!

しかも只の雷鳴じゃない!!

地面や木に落ちた瞬間、まるで生き物の様にうごめきながら放電し  
続けている!?

しかも巻き起こる炎はイナンナの

翼に引き寄せられ、まるで火炎竜巻のように荒れ狂っていた!

俺はともかく、全裸のリアスさん達には凶悪すぎる!

しかもシユタークさんは

シャルバの野郎に腹部を貫かれて重体だ……!!

今の状態で戦える状態じゃない! 俺が何とかしないと!!

「赤龍帝! アーシアさん達は

僕が守る! お前はイナンナを!」

俺が躊躇っている間

ディオドラが『蛇の鎖』を使い

鳥籠の要領でリアスさん達を

守ってくれていた。有り難いぜ!

「サンキュー! デイオドラ!」

「勘違いするな赤龍帝!

僕はお前が嫌いだ。

飽くまでアーシアさんを守るために

僕は行動している事を忘れるな!」

お、怒られた……!?

でも、まあいいさ!

今はイナンナを倒す事に集中だ!!

「うおおおお! ケラウノス!」

レプリカだけドイナンナの雷を



吸収させるには十分だ！  
俺はケラウノスを乳独創の要領で  
分裂させて三角錐のバリアを  
形成する。

「その様な小細工が妾に!!」

イナンナは吼えりと、

雷、炎、そして竜巻を同時に

俺めがけて放つ！

遠目から見ても凄い威力なのは

間違いないが、俺も男だ!!

惚れた女の子達や恩人の前でブザマはできない!!

俺は全身全霊の力を込めて三つの攻撃を迎え撃った!!

バリリリリリッ!!

ドガアアンツ!!

凄まじい衝撃が辺り一帯を襲い、

文字通りに地が割れ、空が裂けた！

けど……俺は無事だ！

流石レプリカとはいえ

ゼウス様の雷霆！

イナンナの数回の攻撃で

イカれる程ヤワじゃない！

「ほう、トカゲかと思うたが

カメの様に堅牢な雷の結界じやのう」

……どうやらイナンナの方は俺の防御力に驚いているらしい。

「そう思ったのがアンタの運の尽きだ！

コイツの使い道はまだあるぜ!!」

俺は龍気の剣

ドラゴン・ラグナロクを

具現化させると雷の結界の

エネルギーを敢えて決壊させた。

爆縮した雷のエネルギーは

ドラゴン・ラグナロクに宿り、  
巨大な光の剣となって天を衝いた!!

「なっ!？」

イナンナが驚愕の声を上げると同時に

光の剣は振り下ろされる!!

「天地をも切り裂く必殺の一撃!

喰らいやがれ! 『テラ・ブレイク』!!」

光の剣はイナンナに直撃するとそのまま異空間の大地と空を真つ

二つにした!!

ズバアアアア……!

ゴオオオオオンツ!!

!

安里 side

ズバアアアア……!

ゴオオオオオンツ!!

「な、何が起ったんだあ!？」

まるで暴風雨のど真ん中に

叩き込まれたんじゃねえかって位強烈な風圧と衝撃波に襲われた

!

これも敵の攻撃なのか? それとも……!?!? 俺は慌てて周りを見

渡すと……上空でイツセーと

見知らぬ女が死闘を繰り広げていた!

その戦闘の余波で

とんでもない事になったのか!

しかし、リアスさん達の姿が

見えないが一体何処へ行ったんだ?

「どうやらあちらの様ですが……」

カテレアが眼鏡をクイツとして指差す先には、リアスさん達が鳥籠  
の様なものに閉じ込められていた! しかも鳥籠の中にはアーシア  
やロスヴァイセさん、シユタークさんの姿があった! 全裸で……!

「うお……」

俺は言葉を失った。

なんせ控えめに言っても

美少女と美女四人の全裸だし……。

「何をボケッとしてるのよ変態！」

バキッとジャンヌから

頭を叩かれて俺はハッと我に返った！ いかんいかん！

「ロスヴァイセ……」

趣味は個人の自由だけどさ、

ちよつとマニアックすぎない？」

「そんなわけがないでしょう」

スコグル!! 色々訳があるの！」

腕で乳首を隠しながらも

涙目でロスヴァイセさんは

スコグルさんに抗議していた。

そりやそうだよなあ……。

何というかロスヴァイセさんから

薄幸オーラを感じるぜ。

そして俺達はロスヴァイセさんから

大凡の説明を受けた。

ディオドラが良いヤツだったのは

意外だが

これで事情は把握できた。

「なるほどね、それで裸で鳥籠の中にいたんだ」

しかしロスヴァイセさん達を

守りながらシャルバの野郎と戦うとはディオドラも大分根性のあ

る野郎だな。

そしてイナンナとイツセーの

足元の辺りで二人が戦っていたが

ディオドラの方が大分不利みたいだ。シャルバは目にも止まらぬ

高速機動でディオドラにダメージを与えていく……！

「フハハハハハ！」

所詮分家の生まれでは

正当なる魔王の血を引く

私には勝てん！」

「それでも……アーシアさんを守れるなら！」

……ディオドラは本当に

いい奴だよな。

俺がアイツの立場だったら

同じ事が言えるだろうか？

惚れた人は別の男に夢中でも

それでもその子のために

戦うなんてな……。

精神的にも貴族だ！

気に入ったよ！

俺は改めて決意を固めると

ディオドラの下に駆け寄る。

「君は……？」

「細げえ事はいい！」

俺はおせっかい焼きの

九頭竜安里！

お前はアーシアちゃんを

守ってやりたいんだろ！

手伝うぜ！」

まずはこの澄まし面の

シャルバ・ベルゼブブから倒す！　それが俺のケジメってもんだ！！

「ほごくなく小僧が！　この程度で勝ったつもりか!？」

「この程度だあ？」

なら望み通りフルパワーで

やってやるよ!!」

「させぬわ！　雑魚共が群がろうが無駄なこと！　私の邪魔をする者

は皆滅びるのだ！ 消え失せるがいい！」

俺の挑発に激高したシャルバは全身から凄まじい魔力を放出した！

「見るがいい！」

私の腐食結界を!!」

シャルバの周囲にドス黒い霧が発生し、その霧に触れた大地や木々がボロボロと崩れ落ちていった！

成る程、これじゃディオドラが

迂闊に手出しできない訳だ！ 「これが我が力！ 触れたものを腐らせ朽ち果てさせる腐敗の嵐！ 如何に貴様らが強者であろうが、身の生物である以上は耐えられま……!!？」

「話が長いよ」

シャルバがペラペラ喋っている間に

ディオドラの『蛇の鎖』が

十重二十重にシャルバに絡み付く！

ハハッ！ 確かにジャンヌや

スコグルがいるならアジア達を

守る必要はないからな！ その間にディオドラは全力で攻撃するって事か！

「クソが！ 小賢しい真似を！ その程度の力で私を縛る事など……!!」

「アホかテメエは」

俺が何のために来たと思ってやがる？ テメエをディオドラと一緒に倒してアジア達の安全を確保する為だろうか！

「うおおおおおっ!!」

俺は『冥獄長の辣腕』を

発動させてシャルバに

機械の多腕にてガトリング砲の

様な猛ラッシュをかけた!! 「オラオラオラアッ!!」

ドガガガッ！ ズドンツズドンズガンッ！

「グウアッ！ ぐうああああッ！」

「コイツでラストだあツ!!」

時間をかけちやいらねえからな!

『冥獄長の辣腕』から『冥獄長の剛腕』へとモードチェンジ!

俺自身が燃え盛る剛腕そのものに

変貌し、さながらハエ叩きの様にシャルバを叩き潰した!!

「ぐがっ……!?!? ああ!?!」

こ、腰の骨が……折れたア!?!」

シャルバは余りの激痛とシヨツクに

目を白黒させながら悶絶していた。

このまま握り潰してやってもいいが

それは俺の役目じゃねえな。

「ディオドラ、後は任せるぜ」

元の姿に戻った俺はイツセーの

援護に向かうべくその場を離れた。

「ま、待ってくれ……下さい!」

そうだ!

貴様……いや、ディオドラ様!

私、シャルバ・ベルゼブブは貴方様に忠誠を誓います! ですので

どうか、命だけは……!」

見てはいないがシャルバはきつと

立てなくなった身体で死にかけた

蠅の様にディオドラに這い寄って命乞いをしているのだろう。

だが、ディオドラの答えは……!」

「お前は、命乞いをした

僕の眷属に何をした?

僕の答えは……これだ」

ジャラララララ! ビシィツ!!

「んげ……ああ……!?!」

首が……!?! がはっ……!?!

息が……できな……!?!」

恐らく音からして、

奴は瓦礫の山で絞首刑の様に  
首を絞められている。

折れた腰じや立つこともできないからな。

ベギツ……ブチン！

恐らく重みと蛇の鎖の魔力で

シャルバの首がへし折られた音が聞こえてきた。

まさに御山の大将らしい最期だったな……シャルバ・ベルゼブブさ  
んよ。

ブーン……。ブーン……。

何だ？ 煩え蠅だな。

↑

イツセーside

「フム、シャルバも情けない。

あんな小倅に遅れを取るなどと」

イナンナがシャルバの

最期を鼻でせせら笑っていた。

どうやらシャルバはディオドラに

負けたらしい。

やったな、ディオドラ！

眷属の皆さんの敵討ちが出来たんだな！

「そんな余裕をかましていて

いいのかよオバさん？」

俺はドラゴン・ラグナロクを

一旦解除し、『黄金の剣』が

宿った拳でイナンナと交戦していた。

テラ・ブレイクはリアスさんや

サーゼクス様の領土で撃つには

危険すぎるものな……！！

というか、市民の人達は大丈夫なんだろうか!?

「ホホホ、どうやら貴様

民草に危害が及ぶのを気にしているようじゃなあ？」

イナンナはニマアつと根性の曲がつた下卑た笑いを浮かべると、俺の思考を読んだかのように言い放った！

「安心せい、既にこの場にいる市民共はこの技で死に絶える故」

……何だと!?

「どういう意味だ!?!」

「やはり脳足らずのトカゲよな。

まだ解らぬか？」

するとイナンナが再び霧を

雷雲に変化させて俺を嘲笑う！

「貴様が如何に二天龍であろうとこの霰と雷撃を全て防ぐ事は叶う

まいて……。ほほほ、何千、

いや何万が死ぬかのう？」

「汚えぞっ!!」

『堕ちる所まで堕ちたな』

「黙れい！ 全ては我らが覇道を邪魔する愚か者どもが悪いのじゃ！

貴様らは滅びるべき存在なのだ！

所詮貴様らは雑草！

尊ばれるべきは高貴なる我等！

それを理解出来ぬとはのお!!」

イナンナが本性を表すと

数千もの霰や雷が街へと無差別に降り注いでいった！

「うわあああつ！」

「きゃあああつ！」

「お母さん！ おかあさーん！」

「アアツ！ 坊や！ 坊やあ!!」

悲鳴を上げる人々、逃げ惑う人々を無慈悲に襲っていく……！

安里や何故か魔法少女の姿をした

リアスさん達もカバーしてくれて

いるが……数が多すぎる！

「ドライブ……」



悪い、俺と一緒に死んでくれるか？」

我、目覚めるは……。

『やれやれ。このドライブ様の

最後の相手がこんなババアか。

白いのと決着がつけられなかったのは心残りだが、おっぱいドラゴンと

呼ばれる身としては然程悪い最期でもない』

悪いな、ドライブ。

こんな不完全で甘ちゃんで

スケベな赤龍帝でさ……！ だけど、それでも俺は守りたい！

俺を信じてくれた皆を守り抜く！

それが今の俺の役目なんだ！！

『Juggernaut Drive!!』

俺は遂に『覇龍』を発現させた！

アザゼル先生からは二度と使うなど言われていたけど、今使わないでいつ使うんだよ!?

「フン、その程度の虚仮威しに！」

イナンナは鼻で笑うと、

更に大量の雷を放った！

バリバリバリバリ！

ズガガガガガガッ!!

だが、どうした……それが？

「馬鹿な!？」

何故、何故効いておらん!？」

「お前が弱いからだ。

他に何かがある?」

「舐めるな下等生物がア!!

妾は……!!

天の星より啓示を賜りし神!

戦を支配し! 魔を統べ!

勝利を確定させる! 我が名は……!! イナンナアツ!!!」

ドゴオンツ！ 俺とイナンナの戦いは傍目には熾烈を極めている  
だろう。

だが、なんの事はない。

俺とドライグが防御フィールドで  
街を守っているから被害ゼロだ。

それに……！

「……おおおおお!!」

奴の雷雲は全て俺とドライグが

吸い込んで文字通りに霧散させた。「な、なんじゃと!? 貴様、一体  
何をしたというのじゃ!?!」

「食った」「は?」

「だから、全部喰ってやった」

「何を訳の解らない事を!?!」

いや、事実だし。

まあ、イナンナにすれば

無理もない話だな。

「ふざけるでない! そんな芸当が出来るはずがない! ならば見せ  
てみよ! 貴様の実力をのう!!」

「見せたきや、見せてやるよ」

俺達はまるでスイカの種を吐き出すように、雷雲のエネルギーを  
吐き出す。

するとそれは雷光となり、

イナンナの翼を撃ち抜いた!

「な、なあああああああ!?!」

き、貴様ああああああ!!!」

「どうした? 天空神が

空を見上げるなんてお笑いだな」

イナンナは恐怖と悔恨が入り交じる表情で俺を睨んでいた。

ブーン、ブーン……。

………憐れなモノだ。

所詮信仰を喪った旧きモノよ。



もう『覇龍』はコントロール  
できるんだな。

「イツセー！　ありがとう……  
何度も私達を救ってくれて……」

リアス部長が涙を浮かべながらイツセーに礼を言う。  
だが、妙だ。

普段ならリアスさんの胸に  
飛び込んで甘えそうなモンだが……。

よく見るとアイツ……、  
目に生気が無い!?

「来るべきモノが遂に来たネ」

「すいません……シユタークさん。俺、どうやらハーレム王失格だっ  
たみたいツス……」

は？　な、何だよ？

シユタークさんとイツセーも

別れ際みたいな事を言い出して!!　まさか……!?

「イツセー……お前!？」

「イツセー！　どういう事!？」

俺とリアスさんがイツセーを

揺さぶるが……か、軽い!?

まるで燃え尽きた灰のような軽さだ!

「イツセー！　しつかりしろ!」

「何があつたの!？」

「……俺、やりましたよ？　皆を守り抜きましたよ?」

「ああ、見てたよ!」

お前は本当に頑張った!!

だから……だから……!!」

死ぬんじゃねえ!　と言いたいが

涙しか出てこない……!!

そんな、そんなバカな話が

あつてたまるかよ!!

「イツセー！」

お願い死なないで!!」

「そうだ！ 俺はまだお前に  
何もしてやってねえ!!」

俺とリアスさんは必死で叫ぶが、イツセーは微笑むと、  
静かに目を閉じた。

「イツセーええ!!」

ブーン……ブーン……。

俺とリアスさんは涙を流し、  
蠅の羽音を掻き消す程に  
絶叫した……。

↓

リアス side

ウソよ……こんなのウソよ！

イツセーが死んだなんて、

絶対に信じないわ！

私の胸に抱き寄せればまた

いつもの様に起きてくれる筈よ！ そうよ！ きつと起きるわ！

私はイツセーの手を取り、

胸

に押し当てる！ ほら、イツセー！ 貴方の大好きなお姉様のオツ

パイよ！

……………。

「もう止めなヨ。

彼は君の兵士として立派に戦い、その命を燃やし尽くしたのサ。

吊つてあげようじゃないカ」

「嫌アアア!!」

私は思わず叫んでしまった。

「あ、ああああ!!」

そして、その場で泣き崩れた。

どうして？ どうしてイツセーが死ななければならないの？ 私が弱いから？ もっと強ければイツセーは守れた？ でも、それも、やっぱり……!!

「ううう……！」

私はイツセーを抱き締めたまま、いつまでも泣いた……。

ブーン……ブーン……。

まるで、死体を集る様に

一匹の蠅がイツセーの周りを飛んでいる。

止めなさいよ……蠅が……!

私のイツセーから離れるおおっ!! 私は怒りに任せて、その蠅に魔力弾を放った!

「きやあっ！」

「大丈夫かい、アーシアさん！」

リアス……気持ちには解るが……!

余波からアーシアを庇いながら

ディオドラが私を宥める。

「だってコイツが！ イツセーを!!」

「僕も眷属を殺された……。」

今は彼女達とイツセー君の死を

悼もう」

そうね、ディオドラもシャルバに

眷属を殺されていた。

なのにイヤな女ね、私は……。

「イツセー……。」

私、これからどうすれば良いの？ 教えて……?？」

「どうすればいいかだど?」

どこからか声が聞こえた!?

でもイツセーじゃない……! 誰!?

「イナンナを倒すとは。

やはり保険をかけておいて

正解であつたな……!」

さっきの蠅が……!?

巨大化してゆく!?

「何なんだ!?! あの化け物は!?!」

……!?

誰かは解らないけど

イナンナの仲間だというの?

イツセーを殺したイナンナの!

「お前は一体……!」

「解らぬか?」

我こそは天より糞山たる

この大地に落とされし者。

『原初の六魔王』の一柱。

ベルゼブブなるぞ」

※幕間・異聞 煽情のメリークリスマス（イツセー×  
キュクロ 安里×ジャンヌ・オルタ）

イツセーside

……なんでいきなり俺のベッドの横にでっかいプレゼント箱が？

カレンダーの日付は8月24日。

誕生日でもないし……。

でもプレゼントの包みは

クリスマスなもの……？

俺達転生悪魔がイエス様の

誕生日を祝うのはどうなのか……。

それに人がすっぽりまるまる入る

大きさだぞ!?

「……開けてみるか」

俺は恐る恐る箱を開ける……。

「こ、これは！」

中にはキュクロちゃんが

入っていた!!

な、何で!?

しかもミニスカサンタの姿で！

うおおおおっ！ この衣装の胸元を押し上げている膨らみは――

体何なんだあああああつ！

「おっばいだろう。」

イツセーはそんなことも

わからないのか」

解ってるよ！誰よりもさ!!

外見は大人なのに

中身は子供なんだから全く……。

「そ、それでキュクロちゃんは



「何でそんな格好を……!?!」

「キユクロはクリスマスという  
ものにきょうみがある」

「……はい?」

俺の顔をまじまじと覗きこみながら

キユクロちゃんはそう言った。

「クリスマスというのは、こいびとたちがあいをふかめるための  
イベントだとゲイトからきいた。

そこでイツセーにおねがいます。

キユクロといっしょに あいのくりすますいべんとを つくって  
くれないか?」

ちよつとズレてないかなあ!?

誰だよいたいけなキユクロちゃんにこんなこと教えたのは!?

「……キユクロちゃん、クリスマスは 恋人同士じゃなくても仲良く  
過ぐすんだよ」

「うそをつけ。てれびでもこいびとどうしがぱごばごしていたではな  
いか」

「……」

ま、間違っつてはいないけどね!

「いいかキユクロちゃん。よく聞いてくれ。」

確かにクリスマスは愛を深めるためのイベントだけど、それは何も  
男女の関係だけに当てはまるわけじゃないんだ。

男同士でも女同士でもいい。

家族や友達と一緒に過ごしても楽しいものなんだよ」

「むう……」

納得してくれたいだ。

ふう〜。これで一安心——

「つまりはイツセーはこんじょうなしのヘタレやろうということか。  
それでよくもハーレム王になるといえたものだな」

前言撤回。

全然わかってなかった!

それにヘタレ野郎とは何ですか！失礼な！！  
しかしキユクロちゃんは  
勝ち誇った様な態度を見せる。

「どうしたどうした？」

こかんのものはかざりか？

ぎーこ、ぎーこ」

ブチツ、と頭の中で何かが切れた音が聞こえた気がする。

「バカにするなよ……」。

このメスガキキユクロちゃんが」

大人をバカにするキユクロちゃんにはわからせてあげないとな  
……。俺達の本気を！！俺は箱の中からキユクロちゃんを取り出し  
て抱え上げる。

そしてそのままベッドの上に押し倒した。

「ほう、すこしはやるようだな」

「ああ……。キユクロちゃんみたいな生意気なお子様には少し教育し  
てあげないといけないと思ってるね」

「そのころいきやよし！」

どこでそんな言葉覚えたの？

という疑問はさておき、

まずは服を脱いでもらうか……。

俺はキユクロちゃんのミニスカサンタコスを半脱ぎにする。

ぶるるん♥と大きなおっぱいが揺れながら露出された。

うおっ……！！

戦っている間はそれどころじゃ

なかったが……！！

デカいし、ハリもある！これはまさに極上のおっぱいだ……！！ 思  
わずしやぶりつきたい衝動に駆られる……。

だがここは我慢だ。

まだ焦っちゃいけない。

もっとじっくり堪能してからでも遅くはないはずだ。

次はスカートの中を見せてもらおうぜ。

俺はキユクロちゃんのパンツに手をかけ一気に引きずり下ろす。  
ぷりんとした可愛らしい尻が現れた。

「くっ……!」

キユクロちゃんは恥ずかしそうに身をよじる。

俺より背が高くて、リアスさんより

巨乳なのにお尻は小振りで可愛いなんて反則過ぎるだろう……!

「ほらキユクロちゃん。」

「こつちを見て」

「ぐぬっ……!」

顔を真っ赤にして目を逸らすキユクロちゃん。

やっぱり中身は子供なんだな。

そんなところも可愛いけどさ。

「へえ……意外とお尻が小さいんだな。」

まるで赤ちゃんのおむつを変えているような気分になるよ」

「ぐぬう……バカにするな……!」

「ならこつちを向いてよ」

「……」

キユクロちゃんはゆっくりとこちらを振り向いた。

俺はすかさずキユクロちゃんの唇を奪う。

「んっ……!?!」

一瞬驚いたもののすぐに受け入れるキユクロちゃん。

俺達は舌を絡め合いながら互いの唾液を交換し合う。

じゆる……ぐちゆるる……!」

くう……この子、意外とキス上手いぞ……!?! これもメスガキキユ

クロちゃんのエロパワーか……!?!

気を引き締めないと……ヤラれる!

「はあ……はあ……」

「ふう……」

長い接吻の後、俺達の間で銀色の糸が引かれた。

「さて、そろそろいただこうかな?」

「なにをするつもりだ?」

決まってるじゃないか。

キククロちゃんとセックスするんだよ。そのドスケベな身体なのに頭は子供のままのキククロちゃんに

大人の快楽を教え込んであげるんだ。

リアスさんやアーシアとはまた違うセックスへの期待に俺は興奮しきっていた。

「なにやらかおがいやらしいな」

「キククロちゃんがいやらしいからね……。」

責任を取ってもらおうよ」

「うむ、くるがいい。」

「しよせんはこどもだとおもわせてくれるわ」

「言ったな？」

俺はキククロちゃんの唇を奪いながら その豊満なおっぱいを揉みしだいていく。

柔らかく弾力のある感触が手に伝わってきた。肌もまるでシルクのようにスベスベしている。

素晴らしい……！こんな極上おっぱいは今まで味わったことがない！俺は夢中になっておっぱいを攻め続ける。

すると乳首が勃起してきたのか、コリつとした感触が指先に当たった。「ふふふ……どうした？もうかたくなっているではないか」

キククロちゃんは得意げな笑みを浮かべると、両手で左右の乳房を持ち上げて見せた。

「ふふふ、きゆうどーのテレビで

みたぞ。おっぱいにかおをはさまれるとおとこはしあわせになるらしいな？ イッセーもしあわせになるがいい」

「へえ……。それは楽しみだよ」

俺はキククロちゃんの胸に顔を埋めた。

「んんっ……！どうだ、きもちよいであろう？」

確かに気持ち良い……。

だがそれだけじゃない。

俺の顔を挟み込むキククロちゃんの大きな胸……。

その温もりと柔らかさが俺を幸せな気分にさせてくれた。

「ああ……。幸せだよ……。最高だ……」

「そうだろう、そうだろう。もっとすきにするがよい」

キユクロちゃんは得意気に言う。

俺は彼女の言葉に従い、さらに深く顔を押し付けた。

そして今度はキユクロちゃんのおっぱいを 口に含んでいく。

ちゅば……。れろお……！

俺は赤ん坊のようにキユクロちゃんのおっぱいを吸い始めた。

「んっ……。おい……。そんなにすって……。 おっぱいがでてしま  
うではないか……！」

「大丈夫……。出るまで吸うだけだから」

「ばかものめ……。 そのようなことをしてもよいとでもおもってか  
……。 ああ……。だめだ……。ちくびにかみつくな……。！」

俺はキユクロちゃんの乳首を甘噛みしながら、もう片方の手でキユ  
クロちゃんの股間をまさぐる。

そこはじつとりと濡れていた。

「ふふ……。感じてるんだね……」

「かんじる……。かんじるとは

なんだ……？」

ぐねぐねとロウが溶け出す様に

キユクロちゃんの身体が汗ばみ、

身をよじらせはじめた。

そればかりか、キユクロちゃんの身体はどんどん熱を帯びていき、  
やがては湯気が立つほどになった。

「あつい……。なんだこれは……!? からだのなかがぽかぽかしてく  
る……！」

「それが『感じる』ということだよ。

ほら、キユクロちゃんのおま〇こもぐちよぐちよじやないか」

「おま……。おま〇こ……。？」

「女の子のおちん〇んのことさ」

俺はズボンを脱ぎ捨てギンギンに反り返ったペニスを取り出す。

そしてキュクロちゃんの小さな秘裂に押し当てる。  
しかしまだ挿入しない。

まずは焦らすように擦り付けるのだ。

「くうう……！ なんなのだこれは……!? わたしのなかになにかは  
いつてくる……！ ぐぐぐ……！ ふあああああん!!!」

ビクンツ!! キュクロちゃんの全身が激しく痙攣する。

「はあ……はあ……」

「イツちやっみたいだね」

「イク……?」

「今のが女の人が気持ち良くなることなんだよ」

「これがきもちよくなるということだな。」

ふふ、おもしろいな。もつときもちよくなりたいものだ♥」

ふふ……。キュクロちゃん、

もう甘えた声を出して……。

すっかりセックスに夢中じゃないか。でもまだまだ終わらないよ。

「そうだね、キュクロちゃん。」

でも自分ばかり気持ちよくなっちゃ駄目だよね?」

「そ、それもそうか……」

ならばどうすればいい?」

アヒル座りで胸を強調しながら

キュクロちゃんは上目遣いで尋ねてくる。

素直でいい子だな……。

キュクロちゃんは。

「さつき、男は顔をおっぱいで

挟まれると幸せになるって

自分で言っていたよね?」

俺はそそり立ったペニス

キュクロちゃんの乳輪に

押し当てる。

「んっ……♥ あっ……いい♥」

「どうだい? これならもつと気持ち良いよ? キュクロちゃんも

もっと 気持ち良くなる事が出来るんだ」

「わ、わかった……！ やる……！ やらせてくれ……！」

キユクロちゃんはおっぱいを持ち上げると、俺のペニスを挟み込んだ。ぷにゅつと柔らかい感触が伝わってきて、亀頭が乳首に当た

る。

「こうか……？ こうやってはさむのだろう……？」

「ああ……。最高だよ……。じゃあそろそろ動くね」

俺はゆつくりと腰を動かし始めた。

たまらない快感が俺を襲う。

「んっ……！ んんっ……！ どうだ……？ きもちいいか……？」

「ああ……。すごく気持ち良いよ……」

「そうか……。うれしいぞ……」

もつとがんばるからな……」

キユクロちゃんは一生懸命に パイズリを続ける。

彼女の小さな口からは、熱い吐息が漏れて、赤黒く充血した亀頭にかかるたびにゾクツとした感覚を覚えた。

「ふう……♥ ふふう……♥」

キユクロちゃんの息遣いが更に荒くなっていく。

「パイズリ奉仕で興奮してきているようだね……。キユクロちゃんのエッチなおっぱいがピクピクしているのが分かるよ」

「ちがう……。これは……。その……」

はやくイッてほしただけだ……！」

「そうなのかい？ だったらもう少し頑張らないとなあ……」

俺はわざとらしく言うと、腰の動きを早めた。

ずちゅつ、ぬちゅつ、ぐちゅつ！ 卑猥な水音が部屋中に響き渡る。

「んんっ……！？ きゆうにはげしくなってる……♥」

「けど、一生懸命チ○ポに

しがついてくるじゃないか。本当は嬉しいんだろう？」

「そんなわけないだろう……♥ こんなことをされて……♥ きもち

よくなるはずがない……♥」

キユクロちゃんの目は完全に蕩けていて、口の端からは唾液が垂れ

ている。それでも健気に胸を動かすことをやめようとはしない。

そんな健気なキユクロちゃんには

ご褒美をあげないとね……。

「くうう……！出すよ……！」

どぴゅー！！

勢いよく飛び出した精液はキユクロちゃんの顔やおっぱいにべつとりと付着する。

驚きながらも俺の精子を浴びるキユクロちゃんは

あり得ない程にセクシーで、俺の愚息は

射精したのを忘れたかのように復活した。

「んん……♥ なんだこれは……。ねばねばしてる……？」

「それは精子っていうんだよ」

「せえし……？」

「そうだよ。今キユクロちゃんに ぶっつけた白い液体のことだよ」

「これがせいえきなのか……♥ これがおんなをよろこばせるのか

……♥」

キユクロちゃんは指ですくいとると、口に運んだ。

「んっ……♥ おいしいな……♥」

や、ヤバイ……！

精子を舐めすぎり、

こちらに流し目を送るさまが

あまりにエロすぎて

主導権を握られる所だった……！

危ない危ない……。

だがまだ終わらないぜ……。

次はいよいよ本番だ。

「じゃあそろそろ挿れるよ……」

「ああ……きてくれ♥」

キユクロちゃんはM字開脚すると、自分の手で割れ目をくばあつと広げた。そこは愛液まみれになっていてヒクついているのが見える。

こんなにエッチでいやらしいのに



俺が初めての男だなんて……。

「いくよ……！」

俺はギンギンになったペニスを キュクロちゃんの小さな穴にあてがい、ゆつくりと挿入していく。

「んん……」

「ぐう……」

俺達は繋がった瞬間にお互い同時に声を漏らした。キュクロちゃんの中は狭くてキツくて、 熱々トロトロで、とても気持ちが良い。

まるで初めてとは思えない程に

キュクロちゃんのオマ○コは

俺のチ○ポに馴染んでいく……。

そしてついに根元まで入った。

「全部入っちゃったね。」

キュクロちゃんのおま○この中は狭いから、俺のがキュクロちゃんの子宮の入り口に当たっているのが分かるよ」

「おなかのなかがあついな……。それにきもちいいぞ……。♥」

キュクロちゃんは結合部を撫でながら言う。

初めてのくせにもう馴染むなんて……。

「動くね……」

「ああ……」

俺はゆつくりとピストン運動を始めた。最初は痛かったが徐々に慣れてきたようで、キュクロちゃんの表情も柔らかくなってきた。

「どうだい？ 気持ちいいかい？」

「わ、わからない。わからないが……」

「あたまがぼくつとして……むねがドキドキする♥」

「それならもつと激しくしようか……」

俺は更に動きを早めていく。パンツ！ パンツ！と肌と肌がぶつかり合う音が部屋に響く。

「あつ……ああ……」

キュクロちゃんの声の調子は

益々高くなっている。もう絶頂に近いようだ。

「イクときはちやんと言うんだよ」

俺は耳元で囁いた。

キュクロちゃんは小さくうなずく。

さあ、そろそろフィニッシュといこうか！

ラストスパートをかけるように、腰の動きをさらに加速させる。

どちゅっ！ どちゅぶぶ！！

どちゅう！！

結合部からは愛液が俺のチ○ポが

掻き回すために逆流し、泡立っている。

その光景はとても淫靡で、興奮が抑えられない。

キュクロちゃんの膣内がビクビク痙攣し始める。

彼女の顔を見ると、快楽によって 完全に理性が崩壊していた。

その瞳からはハートマークが見えそうなくらい、とろんとしている。

どうやら、限界みたいだな……。

「あ、ああ……♡いく……」

イツセーのチ○ポで……いく♡」

びくん！ キュクロちゃんは大きく身体を仰け反らせると同時に、秘部が激しく収縮する。それと同時に大量の潮を吹き出した。

「おお……」

キュクロちゃんが果てたことで、締め付けが強くなったことで、射精感が高まってくる。だが、もう少し耐えなければ……。

「ほらっ……中に出してあげるよ……！ 嬉しいだろう!?」俺はラストスパートをかけて、腰を打ち付ける速度を上げていく。

どちゅどちゅどちゅどちゅ！！

キュクロちゃんは連続絶頂により、全身をガクンガクンと震わせている。

「~~~~ツ♡♡♡」

「くぅ……」

ビュルルルルー!!! ドクンドクン……

俺はキュクロちゃんの中に大量に 精を放った。しかしキュクロ

ちやんはまだ満足していない様子で、俺の首に腕を回して抱きついてきた。

キククロちゃんの顔が目の前にある。

キスしたい衝動を抑えきれず、そのまま唇を重ねた。舌を絡ませ合い唾液を交換しあう。

キククロちゃんとの濃厚ベロチュー最高すぎる……。

俺はしばらくの間キククロちゃんの口を犯し続けた。

ようやく口を離すと、銀糸を引いた。

俺達の口の間には透明な橋が出来上がっていて、それがぷつりと切れた。まるで貫通式を祝うために

テープを切るかの様だ。

「ん……♡ふう……♡」

けれどお互いにまだ収まりがつかないのははつきりしていた。

キククロちゃんは小ぶりなお尻を

俺に向ける様にしてうつ伏せになった。

「もつと……♡もつと、

イツセーのチ○ポ……チ○ポで

ついてほしいんだ……♡」

「欲しいんだじゃなくて、くださいだろ？」

「ああ……♡イツセーのチ○ポ……♡

チ○ポください……♡　メスガキキククロの

オマ○コにチ○ポのきもちよさをわからせて……

おとなのオマ○コにしてください♡」

そう言つてキククロちゃんはお尻を振り始めた。その姿に俺は堪らず覆い被さり、後ろから突いていった。

パンツ！パンツ！

肉同士がぶつかり合う音が響く。そして、その度にキククロちゃんの口から喘ぎ声が漏れ出していく。

「あんっーんふぁー！　はげしい……♡」

キククロちゃんはバックが好きなのか？

お望み通り、たっぷり犯してやるぜ……。

「はあはあ……キুকロちゃんのオマ○コ……凄く気持ち良いよ……  
♥」

「ほんとか……?」

「ああ……♥こんなにキツくてヌルヌルなのに、中はすぐ温かい……」

キুকロちゃんは嬉しかったのか、おま○こをキユンとさせた。俺はその反応が可愛らしくて、さらに激しく責め立てる。

パンツパチュバチュン！ ヌチャグチョッグツチュ!! キুকロちゃんのおま○この締め具合も最高だし、それになにより可愛い女の子とセックスしているという事実だけで興奮してくる。

そして俺はおっぱいにも手を伸ばし、寝バツクの体勢で揉みまくった。

「ひゃうっーちくびをそんなにつよくつまんじやダメだぞ……!」

キুকロちゃんは背中を反らせて悶えているが、嫌がっているようには見えない。むしろ感じているように見える。もつともつと気持ち良くさせてあげたい。

俺はキুকロちゃんの耳元に顔を近づけると、熱い吐息を吹きかけながら囁いた。

「キুকロちゃんのオマ○コ……」

俺のチ○ポを美味しそうに 頬張ってるよ……」

「あ……♥ はずかしいな……。でも、イツセーのチ○ポは とってもおおきいからしかたないのだ……♥」

キুকロちゃんの言葉に俺は興奮した。

腰の動きをさらに早めていく。

ズボオ!! ドヂュン!ゴリユルルル!!! キুকロちゃんの膣内を

蹂躪するかのよう突き上げていく。キুকロちゃんはその快感によつてもう前後不覚になっ

っている。

「あ、ああ……♥ すげい……♥」

「どうだいキুকロちゃん?俺のチ○ポは気持ちいいかい?」

俺は余裕のない声で訊ねた。

「うん……♥ イッセーのち○ぽ、さいこうだ……♥」  
キユクロちゃんは振り返り、蕩けた表情を浮かべる。  
もう我慢できない!

俺は唇を奪い、側臥位の状態で腰を動かし始めた。

「んっーちゅぱっ! れろっ! んむっ! イクッ……! イッセーの  
ち○ぽでいく……♥」

「俺もそろそろ限界だよ……!一緒にイこう……!」

俺はキユクロちゃんの手を恋人繋ぎにして握り、ラストスパートを  
かける。

どちゅん!どちゅん!ごちゅん!! キユクロちゃんは連続絶頂に  
より、全身をガクンガクンと震わせている。

俺達は同時に果てようとしていた。

パンツ!パアンツ!ヌチャグチョツグツチュ!!

キユクロちゃんのオマ○コが今まで以上に 強く締め付けてくる。  
俺達の結合部からは愛液や精液が流れ出ている。

俺はキユクロちゃんの子宮口に亀頭を押し付け、そこで思いきり射  
精した。

ビュルルルー!!ドクンドクン……

大量の精子がキユクロちゃんの中に注ぎ込まれていく。キユクロ  
ちゃんは幸せそうな顔をしながら俺を見つめていた。

しばらくして俺のペニス引き抜かれた。

キユクロちゃんは俺の上に覆い被さるようにして倒れ込んだ。

「はあ……はあ……♥」

2人とも汗まみれで、息を切らしていた。しばらくすると呼吸も落  
ち着いてきた。

キユクロちゃんは俺の顔を見ると、ニコリと微笑んだ。その笑顔は  
とても可愛かった。

朝だし時期外れとはいえ、最高のクリスマスプレゼントだ……。

1

安里side

「な、何だこれは……」

「な、何よこれ……」

朝起きると、俺とアヴェンジャー……もといジャンヌは水着姿でビーチに寝そべる形になっていた。どういう事だ!?

これも幻術なのか!?

しかし、ジャンヌの水着姿……。赤を基調としたビキニタイプの水着だが、胸元が大きく開いているため、豊満なバストが露わになっている。

しかも下半身にはスカートのようなヒラヒラとした布がついている。いわゆるセパレートタイプという奴だろう。更にサンタの様な帽子と

水着の外縁には白いモコモコがついていた。

所謂水着サンタと言う奴か?

ともかくジャンヌは顔を真っ赤にしながらこちらを睨んでいる。おそらく恥ずかしいのを必死に堪えているのであろう。

「な、なんのつもりですか!」

私にいやらしい事でもするつもりでしょう!?! エロ同人みたいに!」……チョットナニライツテイルノカワカリマセンネ。

まあ、とりあえずこの

空間から脱出しないとな……。

と言っても手がかりもないし、

何かしらんが【六合太極】の力も出せない。

これじゃ空間をぶち割って

脱出することもできないな。

「はあく……全くダメダメな

マスターですね。その腕は

飾りですか? 仕方ありませんね。

ここは我が「乾雲」と「坤龍」の  
出番ですね」

と、言うなり二刀流の構えを取る。

おお……！けど海で刀を扱うと

大変な事になるんじゃないかな？

しかし、二刀流を振るえど

ひゅんひゅん、と虚しく空を切るだけで何も起こらない。

どうしたんだ？

「あれ……おかしいですね……。」

何故力が出ないんですか……？」

「俺に聞かれてもなあ……」

何やら力を封じられている様だ。

「とにかく、今はここから出る事を優先すべきです。ほら、行きますよ」

「よ」

そう言つて俺の手を引つ張つて 歩き出した。

「ちよつ……ちよつと待て。」

手を繋ぐ必要はないだろ」

「うるさいですよ。黙つて付いてきなさい。」

あ、あと私の事はちゃんと 名前で呼び捨てにしなさい」

「解つたよ、アヴェンジャー」

「違うわよバカ！

……は

『ジャンヌ』と呼び捨てにする場面じゃない!!」

「お、おう……すまん。」

えつと……ジャンヌ」

「よろしい」

こうして俺達は出口を探し始めるが

砂浜はループしているらしい。

幸い、というべきか無人の海の家らしきものがあつたから食糧に

問題はなかつたが、それにしても……。

何で海の家にクリスマスケーキが

あるんだ？それも一ホール丸々。

「細かい事を気にしても……」

はむはむ。仕方ありませんよ。むぐむぐ」

ジャンヌは何食わぬ顔で クリスマスケーキを食べている。よくそんな甘い物食べれるな……。

疲れた時には甘い物とはいうが。

「何ですその顔は？」

舌が肥えていると人生の幸福度は上がっても満足度は下がるんですよ」

「そうかい」

ドヤ顔で人生哲学を語る所悪いが、

ジャンヌの横面にクリームがついていたから掬ってやる。

するとジャンヌの顔が茹で蛸みたいになり赤になった。

「ば、馬鹿！ いきなり何をするのですか！ こういうのはもっとムードとかそういうのが大事なので……！」

「はいはい」

俺はジャンヌの口元についた生クリームを指で取り、そのまま口に含んだ。確かに甘ったるいがコーヒーには合うかもな。するとジャンヌは口をパクパクさせながら固まっていた。

何だこいつ？ さつきまであんなに偉そうな事 言っていたくせに……。

まあいいや。とりあえず海の家を調べよう。何かしらヒントがあるかもしれない。

と、何やら机の上に紙切れがあった。

そこにはこう書かれていた。

【君たちは今、僕の作った空間にいる。脱出する方法はただ一つ。クリスマスをする事だ。 ゲイトより】

ゲイトの旦那の仕業だったのか!?

クリスマスをするって何だよ！

ワケわかんねえ神様だな

相変わらずさあ！

「クリスマスをするって

何でしょうね」



ってジャンヌは乗り気かよ！

「まあ、普通に考えれば プレゼント交換的な事だと思うが……」

「ふうん……なら、私がサンタになってあげましようか？」

ふふふ、私の様な陰険根暗女に

不吉なプレゼントを渡されるなんて

何て可哀想なマスターなのでしょう」

何かまたネガティブになっているが

もう水着サンタの格好なんだよなあ……。

まあ、このままでも可愛いから良いけど。

と、その時ザバアツと

浜のほうから音がした。

なんだ？

「あら、誰か来た様ですね」

見ると、そこにいたのは

大ダコだった!!

しかもデカすぎる。10メートルくらいはあるんじゃないか？

うげえ……気持ち悪い。

流石のジャンヌもドン引きしていた。

仕方ねえな、『武態』は使える様だから俺は片腕を解きほぐす様に

触手から剣に変えた。

「来いよ、タコ野郎。」

この俺が相手してやるぜ！」

触腕を回避したがザバアツ！と

波飛沫がかかる！

……!?

な、何だ身体が……固まる!?

まるでコールタールか強化プラスチックに全身を固められたかの様に身動きが取れなくなる。

『駄目だ……いー海の水……!』

恐ろしい……!』

な、何だ!? 誰の声だ？

戸惑っていた俺にメカメカ爺さんことヘケトンケイルが念話で語りかけた。

『恐らくはお主に宿るモノの声じゃ。お主ら旧き者には海水は天敵に近い存在らしいからの』

そんなどっかの悪魔の実を食った

輩じゃあるまいし！

俺は海賊王にもハーレム王にも

興味はねえんだ！

し、しかし動けない……！これはヤバイぞ！

「私のマスターに手を出すなあ！」

な、何だ!?いきなりジャンヌが

やる気に……!?!?

「我が憤怒よ！ 黒龍となりて

一切合切灰燼と歸せ!!

『不動俱利伽羅・煉獄衝!!』

ゴオオオオツ!!と 凄まじい熱量の業火が吹き荒れる！

おかげで俺に纏わりついた海水も乾き、大ダコも茹で上がった。

しかし最後の悪足掻きというべきか奴は口から墨を吐き出し、

ジャンヌへと浴びせかけた！

「きやあつ!?!」

ジャンヌは悲鳴を上げ、その場に倒れ伏した。

「ジャンヌ!?大丈夫か!?!」

「え、ええ……平気よ。」

幸い微温湯の様なものでしたから」

そう言っただけでジャンヌは立ち上がる。

だが、その表情には疲労の色が見えた。

「無理するな。」

毒を浴びせられたかもしれねえから

あそこで墨を洗い流そうぜ!」

俺はジャンヌをお姫様だっこして

シャワーのありそうな施設へと走る。

「ちよっ！ちよっと！ いきなり何を……！」

「大人しくしろ！ 暴れると落ちるぞ！」

俺はジャンヌを抱き抱えたまま、施設の扉を蹴り開けた。中に入るとそこは休憩所らしき場所だった。

…。

……。

そして、ジャンヌはシャワーを浴びていたが何か妙じやないか

この部屋……！

シャワーは鏡張りだし、

ベッドは一つだし……！

まさか、ここは……！ 俺はジャンヌに気付かれないように こっそりとシャワールームから出た。

するとそこには……。

水着姿のジャンヌが立っていた。

しかも何故か髪が解かれ、濡れているせいか艶っぽい。

「な、何ですか？」

「いや、何でも無い」

危ねえ。危うく理性が飛びそうになった。

「何でもないワケ、ないでしょ。」

そんなにアレ……お、おチ○ポを

勃起させておいて……」

!?

バレていただけと!?

しかしジャンヌは明らかに発情した様子で俺にしなだれかかってくる。

「べ、別に私は構わないのですよ？ 私なんかを抱いてくれる物好きは 貴方くらいですし……」

「い、いいのか？ 本当に……」

「う、嫌いわね！」

スコグルやカテレア相手には

猿みたいに腰振っているくせに！」

そ、それは……！ 確かに……！

「でも、今は私だけを見て……！」

抱いて……ください」

ジャンヌは俺の背中に手を回し、抱きついてきた。

こ、こんな事されたら……！ 我慢できるワケがねえ!! 俺はそのまま、ジャンヌを押し倒した。

「あ、あの……電気消してくれませんか？ 恥ずかしくて死にます……」

「ああ、悪い」

カチリとスイッチを切る。

……だが真っ昼間だからあんまり意味はない気がするが……。まあいいか。

それより、ジャンヌの身体は綺麗だ。

白くてスベスベして、触り心地が良い。それに、胸も大きいし お尻の形も良い。

思わずムシャぶりつきたくなる様な 身体だ。

でも、最初はキスからかな？ ちゅつと軽く口づけをする。

次は舌を入れてみる。

んむう……と吐息を漏らすジャンヌ。

可愛いな。もつと苛めたくなる。

今度は胸に手を伸ばす。

ふにゆりと柔らかい感触が手に伝わってくる。

「はあ…、だ、駄目え…♥」

私、やっぱり……魔女なのね……。

男に汚されて喜んでしまう……

アイツらの言う通りだわ……」

ジャンヌはやけっぱちになった様に言った。

そんな捨て鉢なお前は見たくない。

俺が見たいのはお前の笑顔だ。だから……

もう、泣かないでくれ。

俺はジャンヌに覆い被さる様にして 身体を重ねた。

水着越しでも分かるくらいに乳首がピンツと尖っていた。それを摘んでみるとビクンと震えて、更に硬くなっていた。もう片方の手で股間をまさぐると、既に愛液まみれになっていた。

俺は指先を膣内に入れる。

ぐちゃつという音が聞こえて、ジャンヌは喘ぎ声を上げる。

「関係ねえよ。そんな奴等の言葉なんて俺が

消し飛ばしてやる」

俺はジャンヌの乳首を摘み上げた。

「あひいつ!? あ、ああ……マスター……! 私のマスター……!」

ビクンツ!と震えるジャンヌ。

俺は更に責め続ける。

もう片方の手で太腿を撫で回す。

そして、遂に秘部へと辿り着く。

既にそこは愛液が溢れ出していた。

クチュクチュと音を立てながら 指先でかき混ぜる。

ジャンヌは快感に耐えられないみたいで身体を仰け反らせている。

「ああっ!ダメエ……! イツちやう……! イつちやいます!!」

俺はジャンヌのクリトリスを 親指で押し潰した。

「ひっ!? イグウウウツ!!」

ブシャアアアツ!という音をたて、ジャンヌは潮を吹き出した。

感じやすいんだなジャンヌは。

愛おしくなって俺はジャンヌにキスをした。そして、そのまま挿入する。

「ああ……!入ってきました! マスターのおち○ポが……! 嬉しい……!」

「俺もだよ……ジャンヌ……! 動くぞ……!」

パン!パン!と肉がぶつかり合う音が響く。

ジャンヌの中は温かく、ヌルヌルとっていて気持ち良かった。

まるで俺の精を搾り取ろうとしているかの様に締め付けてくる。

「凄い……です……! こんなに激しく突かれたら……! 私、おか

しくなってしまうです……!」

「いいぜ……! 壊れろよ……! 狂っちゃまえ……!」

ジャンヌの細い腰を掴み、何度も打ち付ける。

その度にジャンヌは絶頂を迎えていた。

だが、まだ足りない。もっと乱れさせなければ。

「ああ……! 好き……! 好き……! 好き……! 好き……! 大好きです……! マスター……!

私、もう……! イク……! また……! イグウー……!

「俺も……! 出る……!」

ドクンドクンと脈打つ様に射精していく。

「ああ……熱い……! 中が焼けてしまいそう……! こんなに沢山出されたら……

妊娠しちゃう……けど……!」

ジャンヌは満足そうな笑みを浮かべた。

「ジャンヌ……好きだ……!」

「私もですよ……? 貴方……!」

するとジャンヌは俺に尻を向けて

ぐいっと尻たぶを開く。

どろろ……つと白い液体が流れ落ちる。

「ほら、見て下さい……!」

これが私のおま○こです♥

色んな男や獣のモノを突っ込まれて、

ガバガバになってしまったんですよ?」

「それがどうした? お前は俺の女だ。

もう他の誰にも渡さない……!」

「マスター……!」

俺はジャンヌを抱き寄せた。

ジャンヌの身体はとても柔らかくて、良い匂いがして、ずっと抱きしめていられる様な気がした。

そして……

「んむう……♥」

キスをする。舌を入れ、唾液を交換する。

互いの呼吸を交換し合い、心まで溶けていく。  
そして迷いなく俺はジャンヌの中に己の分身を突き入れた。

「あはああっ♥」

「何がガバガバだよ……」

「こんなにギチギチでドロドロで、キツキツじゃねえか……」

「はあ……はあ……♥」

ジャンヌは答えない。

いや、答えられないみたいだ。

俺はそんな彼女を容赦なく犯す。

後ろから激しく突き上げると、膣内はきゆうっと締めまり、俺のものを強く包み込んでくる。

「あんっ！マスターあっ！そこお！イイれふうふうふう！」

「ここが良いのか？」

一際反応の良い場所を

集中的に責める。

子宮口をこじ開ける様に亀頭を押し当てる。

そして一気に引き抜くと、逃がさないとばかりに膣壁が絡み付いてきた。

パンツ！パンツ！と肌がぶつかる音と、結合部から漏れる水音がいやらしく響く。

俺は夢中でジャンヌを犯した。

「す、すっごい♥マスターの、おち○ぽっ！しゅごいっ！奥まで届いてええっ！ああああああっ！！」

汗なのか愛液なのかもう区別がつかないくらいに混ざり合った体液を撒き散らしながらジャンヌは喘ぎまくった。

「あああっ！ダメエ！！」

「こんな凄いのダメエ！！」

オマ○コがマスターの事覚えちゃってる♥マスターのじやないといけなくなるのお！！」

「ああーそうしてやる！

俺のチ○ポじゃないといけない様になれよ！

そうすりやもう、昔の事なんて

思い出さずに済むだろ!!」

あのジャンヌが乱れ、俺のチ○ポをただただ求める様に叫ぶ姿は卑しいのに、この上なく美しいと思った。

だから俺も彼女の求めに応じて、最高の快楽を与えてやる。

俺はラストスパートをかけ、腰の動きを早めた。

肉棒が引き抜かれると名残惜しげに吸い付き、押し込まれると嬉々として迎え入れる。

その度に愛蜜が飛び散り、シートが

まるで津波でも起きたかのようにドロドロに濡れていた。俺達は互いに限界だった。

「ああっ！マスター！マスター！ マスターあああああああ!!!」

「ジャンヌ！ジャンヌ！ 俺のジャンヌ！出すぞ！ 全部受け止めてくれ！」

「はい！マスター！ 私を孕ませて下さい！ マスターの子種で私を満たして……！」

「くっ……！出るう……！」

「ああああああ!!!」

満ちるう♥空っぽの私に……貴方のザーメンが

満ちていくの……♥♥♥」

ビュルルルル！どぶっ！

俺は大量の精を解き放った。

ジャンヌは絶頂を迎え、ビクビクと痙攣していた。

だが、まだ終わらない。

まだ俺の欲望は収まらない

「ジャンヌ……もう一回だ」

「はい……マスター……」

今度は正常位で挿入する。

「はあ……♥入ってます……♥」

「動くぞ……」

腰を動かす度に胸が激しく揺れる。



臍、胸、唇、どこに触れてもジャンヌの中がキュウツと締まった。

「ジャンヌ……好きだ……」

「私もです……貴方……」

俺達はもうお互いの事しか

見えていなかった……。

「んんっ……♡」

「んむう……♡」

キスをする。舌を絡め合う。唾液を交換しあう。

「んちゅ……♡マスターあ♡もつとお♡もつと下さいい♡♡♡」

「はあはあ……。ああ……。いくらでもくれてやる……。俺のジャン

ヌ……」

「嬉しいです♡マスターの、熱いのいっぱい欲しいですう♡♡♡」

「いい加減にしなさい!!」

「……」

!?

い、いつの間にかゲイトさんの力で

元の世界に戻っていたらしく、

声のした方向には真っ赤になって叫ぶニトクリスさんとセルベリ

アさんが立っていた。

「戦場であれば、昂ぶる事もあるだろう……。

しかし節度というものをだな」

この後、二人に滅茶苦茶説教された。

## 第64話

リアス side

……!?

誰かは解らないけど

イナンナの仲間だというのは？

イツセーを殺したイナンナの！

「お前は一体……！」

「解らぬか？」

我こそは天より糞山たる

この大地に落とされし者。

『原初の六魔王』の一柱。

ベルゼブブなるぞ」

「貴方が何処の何様であろうと……！」

私は目の前の奴を睨みつける。

原初の6魔王の一柱という事は

私達より遥かに先達……。

けれど……けれども！

「私は負けられない……！ イツセーの為にも!!」

「ふん、小娘如きが粹がりおって。

その程度の力で我に挑むなど片腹痛いわ。

貴様は我が子らを産み出す肉塊に過ぎぬのだぞ？」

「ふざつけないで!! 誰がそんなモノになるもんですか！」

私は啖呵を切る様に叫ぶと、魔力弾を放つ。

けれど、奴はそれを容易く蠅の手で受け止める。

そして、そのまま握り潰した。

「無駄だと言うておろうが。

貴様に勝ち目は無い。

大人しく我が眷属となり、

我が子らを孕むが良いわ」

そう言うのと、奴の手から紫色の霧みたいなのが放たれる。

咄嗟に防御魔法を発動するけれど、簡単に打ち破られてしまった。

「うう……あ……」

身体中が痺れて力が入らない……。

これは毒？ 違う……！ これは……！ 私の皮膚や骨を蠅の強酸で溶かしてるんだわ！

アーシアが『聖母の抱擁』で

回復してくれているけれど、焼け石に水よ……。

このままだと死ぬ……！ 嫌……死にたくない！ まだ、イツセーに何も伝えていないのに……！ こんな所で死んでたまるか!!

「ほう、しぶとく耐えたか。

だが、それも長くはあるまい。さあ苦しみ悶え、息絶えるがいい。

我が子らはそれを吞食し、汝が血肉とするだろう」

奴の言葉通り、私の体は溶けていく。

けれど、それでも私は諦めない。

だって……

「私が愛する眷属がいるもの。

私が死んだら悲しんでくれる人がいる限り、私は絶対に死なない

！」

そうだ……。

もしここで死んだとしても、それは仕方のない事かもしれない。

でも、だからといって何もせず無抵抗のまま殺されるなんてイツ

セーの主として、妻として相応しい訳がない！ それに、私には信じ

てくれる仲間もいるんだもの！ 皆がいればどんな逆境にも立ち向

かえるもの！ それを教えてくれたのは他でもないあなたよ、イツ

セー！

「はあああああ!!」

気合いを入れて立ち上がるけど

もう足腰に力なんか入っていない。

ただ、意地だけで立っているようなものね。

でも、それで十分！ 私は全身全霊を込めた魔力弾を放つ。

それはまるでゆらゆらと揺れる蠟燭の火のようだった。

そして、それが消え失せる瞬間――  
ブオオオオオツ!!

「ヌウウ……!!? この力は……!!」  
まさか……!! 奴らめと同じ力を……!!」

あのベルゼブブが翅を羽ばたかせ

奴の腕を鎮火していた。あれはお兄様の滅びの魔力!? じゃあお兄様が助けに来てくれたの!?

「いいえ、違いますお嬢様」

すると、後ろからグレイファイアの声が聞こえてきた。

「グレイファイア?」

「お見事です、お嬢様。また一つ壁を超えられましたね……」。

サーゼクス様と義父様は

領民達を保護するための結界の維持

と被害状況の確認に向かっております。ご安心くださいませ」

冷たいとは思わない。だっていつまでもお父様、お兄様に甘えていては駄目なんだもの。今こそ私、リアス・グレモリーは独り立ちしなければ!

「お嬢様。敵の目的は恐らく魔王の血族である貴女の肉体でしょう。」

貴方の肉体を苗床にして『絶霧』の力によって霧に過ぎぬ自らを具現化するつもりなのでしょう」

何ですって! 私の身体はイツセーだけのモノよ! 誰にも渡さないわ!!

と、気合を入れ直していた私達の上空に誰かが現れた……!?

身なりはお兄様の衣装と変わらないけど……何者!?

そして、その銀髪的中年男性はこちらを見下ろしながらこう言った。

「ほう? 随分と面白いことになっているではないか。

なるほど、これが神器というものか。実に興味深い。……しかし、

その娘では役不足だな。

そろそろ我が眷属の相手も飽きた頃だ……って役不足の意味が違

うじゃありませんかあ!? もしもしポリスメン?」

……明らかにイカれているわ。一体誰なのかしら?

「うわあ……俺つてもしかしてドマイナーなの? ねえベルゼちゃん?」

ベルゼブブに気安く話しかけているけど、知り合いかしら? 原初

の6魔王にあそこまで気安く話しかけるといいう事は相当な実力の持ち主だと思っただけれど……。

「奴等を侮り過ぎていた……」

「おお、同じババアでも反省出来る分イナンナよりマシだね! 流石の一番に水星に逃げた逃走のプロ!

違うなあ……ギヤハハハ!」

な、仲間割れかしら?

だとしたらこちらは助けるけれど

……。

「そんなワケでさ、ババア。

ここは一旦撤退しない?

ババアに相応しいピチピチビツチスペアボディも用意するから

さー」

な、何言ってるのか分からないわ……。

私達が困惑している中、

奴等は文字通りに霧となって消えてしまった。

結局、あいつらは一体何がしたかったの……? それに、あの男は

誰だったのよ……。

まあ良いわ。今はそれより重要な事があるもの。

そう、私のイツセーを助けなければ!

??? side

「何故だ! なぜ裏切る!

我が妻が! 我が友が! 我が子までもが……!」

何故だ、何故だ、何故だ。

愛しているのに……!」

愛しているのに……!!」

愛憎を刻むモノよ、

汝は愛しすぎたのだ。

己の妻子を、同朋を。

だから、壊れた。

だから、狂った。

だから、堕ちた。

愛ゆえに。

だが、それは悪ではない。

それもまた一つの愛のカタチなのだ。

ならば我もそれに倣おうではないか。

「何故だ、何故だ、何故だ。」

全ては無為なのに

お前達は進化の最果てに至り、

これ以上進歩も発展もしないのに

何故貪る……何故求める……。

お前達の未来には何もないのに！」

諦観を刻むモノよ。

汝は諦め過ぎたのだ。

全てを無為にする程に。

なれど、狂うほど求めたのだ。

何もかも。

だからこそ、別れた。

だから、壊された。

だから、壊そうとした。

そして、汝らは相容れない。

なればこそ我もまたそれに倣おうではないか。

「何故だ、何故だ、何故だ？」

善は善であるべき、

悪は悪であるべきだ。

なのに何故悪が善になろうとする？

善が悪に堕ちようとする？

お前達は私を笑うだろうが  
私はお前達を笑ってやる。

この世こそ数多の悲喜劇に劣ると  
私は貴方達に教示しよう。

この嘲弄を狂騒として響かせてやろう」  
嘲弄を刻むモノよ。

汝は知り過ぎたのだ。

己すら欺く妄執に囚われて。

なれど、それは決して悪ではない。

故に我もそれに倣おうではないか。

「何故だ、何故だ、何故だ？」

何故お前達は進歩できない？

何故ひ弱で残虐で愚かなままなのだ？

星の導きを経ても飛び立てぬ雛鳥であるならば、

せめて灼熱の大地にお前達を

葬ろう。惨めな残骸を残さぬ様に」

増上を刻むモノよ。

汝は望み過ぎているのだ。

己を知り彼を知り克己せんとする意思を。

なれど、それは悪ではない。

故に我もそれに倣おうではないか。

「何故だ、何故だ、何故だ！」

何故この世界は悲しみに満ちている！ 人は人を救えず、神は人を

救わない！ 救いなどありはしない！

ならば！ ……ならば……どうすればいい……？」

悲憤を刻むモノよ。

汝は既に救われていたのだ。

己の手で。

しかしそれに気づかなかった。

否、気づくことを拒んでいた。

なれど、

それは悪ではない。

故に我もそれに倣おうではないか。

「何故だ、何故だ、何故だ!？」

何故お前達は悪なのだ!

全能なる方より生まれ、光の祝福を

受けた者たちが何故、闇の眷属となりえる!？」

「墮ちる者を生む世界の機構そのものが誤りなのだ!

間違っている! 間違っている!

過ちは……正されねばならない!」

独善を刻むモノよ。

汝は信じすぎたのだ。

その果てにあるものは何か知っけていても尚。

なれど、それは悪ではない。

故に我もそれに倣おうではないか。

汝らの『狂気』を身代とし……

この星の揺り籠に在る遍く命は

微睡みながら永劫に回帰するのだ。

↓

イツセーside

「な、何だ? 今のは?」

愛憎、諦観、嘲弄、増上、悲憤、独善。

そして……狂気。

まるで映画のブツ切りカットを繋げたようなイメージだった。

何と言えばいいんだろうか……。

ただ、悲しかった。

俺は多分『覇龍』化によって

寿命が尽きた筈なのに……。

宇宙空間みたいな

ここはどこなのか解らないし、

右腕はなく、心臓の所も

ぽっかり穴が開いているのに



身体中から力が溢れてくる……。  
そして何よりも……。

俺には分かるんだ……。

これは恐ろしくて、哀しいものなんだって。でも……。  
止まっちゃいけないんだ。

悲しむ事は悪いことじゃない。

でも悲しみに囚われてはいけないんだ。

だって俺達は生きているんだ！

だから前を向いて進まなくちゃいけない。

「その先にあるのが絶望だとしてもか？」

そんなことは知らない！

俺達は前に進んでいくしかないんだ!!

「お前達が進む事で踏み潰される命があってもか？」

……ああ、そうだな。

確かにそういう奴らもいるかもしれない。

だけど……。

「お前達が進むことで過ちが繰り返されるのだぞ！」

……それでも、だ。

「何故だ？」

何故そうまでして進む必要がある!?

永劫の安息を得るために

命が在るのではないのか!?

それは誤解だぜどつかの誰かさん。

俺達が眠るのは起きるためなんだ。

いつか目覚めるために、いつか出会うために、

そしていつか旅立つ為に……。

だから、今を生きる為に、

俺は、俺たちは生きていく!

「何故だ? 何故だ? 何故だ?」

お前は狂っている」

かもな!

でもそれが俺なんだ！

頭も諦めも悪いハーレム王を

目指す史上最弱の赤龍帝！

兵藤一誠とはつまりそういう男さ。

「理解した、理解した、

我らはお前を理解した。

お前は希望の恒星。

まつろう者、くずおれる者に

等しく輝き導く者なのだ。

故に……お前は我等の敵だ」

「どわああああ!？」

まるで渦の中に放り込まれたみたい

俺は上下左右に揺さぶられた!!

な、何でそうなるんだよお!!

ここはアンタが改心して

ハッピーエンドの流れじゃないの!?

「遂に彼らに観測されてしまった様だね。

けれど……見事な答えだ」

慌てた俺の前にゲイトさんが

現れると漸く激震が収まる。そのゲイトさんの顔は何だか初めて

自転車に乗れる様になった時の父さんの表情に似ていた。

「ゲイト様、兵藤様……」

「ここは私にお任せを」

つて側にいる凄い美人の女の人誰!?

下乳丸出しだよ!?

そんな俺は下心丸出しだけどさ!!

なんて考えていたら彼女と目が合ってしまった。

するとまるで俺に騎士の誓いでもする様に跪く。

そして彼女の唇はこう告げた。

「貴方に永遠の忠誠を捧げます。

私の名はトウ・ルチャ。

貴方に我が全てを捧ぐ事を許して下さい。

この身は血の一滴、肉の一欠片に至るまで存分に使い倒して下さい」

ああ……ヤバい。

こんな美女にプロポーズされたの生まれて始めてだ！ しかも俺に全てを捧げるって言うてるよ！

それってつまりこんな事やそんな事あんなことやどんな事……でへへ。

なんて、そんなスケベな事を

考えている場合じゃない!!

でも姿も正体も解らないのに

どうやって戦えばいいんだ!?

しかしそんな俺の不安や疑問を

打ち消す様にトウーさんが笑みを

浮かべた。

「姿も正体も解らぬならば

空間ごと焼き払えばよいのです！」

あ、この人……ゼノヴィアと同じタイプか。

美女で野獣的なオーラを彼女からひしひしと感じる。そして彼女は両手を前に突き出すと

まるで炎の様に燃え盛る魔力を放出させた。

すると……何も無いはずの宇宙の様な場所が揺らめき、まるで燎原の火の如く辺り一面が紅蓮の業火に包まれた！ だが不思議な事に熱を感じない。

「ふむ、やはりこの程度では反応すらないか……。

ならばこれでどうだ！」

彼女が手をかざすと同時にまた宇宙空間が歪み始めた。

そして今度は先程よりも更に激しく炎が吹き荒れる！

まるで炎の瀑布だ！

幾らなんだってこれ程の攻撃なら

相手だって無傷じゃ済まない筈だろ!? そう思った次の瞬間、俺の視界に信じられないものが映った。

宇宙空間が徐々に人型の形になったのだ！  
周りが真っ白い空間になる中であつて  
奴等だけが宇宙の様になる。

あれは一体……。

『我等は無限に非ず、夢幻に非ず。』

因果地平の埒外に在りて、永劫に回帰を繰り返す者』

……な、何だつて？

アイツが何を言っているのかは

解らないけど、やろうとしている事は解る……！

ゲイトさんが言う『滅びの未来』の正体が……！

止めなければならぬのは解る。

けれど……今の俺じゃ勝てない！

クソ……身体が震えが……！！

「……大丈夫です」

「えっ？」

突然、トゥーさんが俺の手を握ってきた。

柔らかい感触だ。

「恐れる事はありません。」

貴方は希望の恒星、全ての光を束ね、輝く星となる。私にはそれが解るのです……全ては炎の中に」

そして彼女は俺の額に口づけをした。

「な、ななな……」

たじろぎながらも俺の全身に力が溢れてくる。

そして……！

『相棒、……は退くぞ！』

その声はドライグ!? お前も蘇ったのか!?

俺だけが蘇ったんじや

夢見が悪いものな……！

『とはいえ仮初めの復活だ。』

奴とまともにやり合うのは厳しいだろう』

流石百戦錬磨のドライグだ……！

あんなとんでもない奴を前にしても  
クールだな！

しかし向こうは逃してくれる  
つもりはないだろうけど……。

するとヤツは自身を拡大させてゆく……!!

巨大化なんて生易しいもんじゃない。

全体像が捉えられない位にデカくなったんだ。

まるで銀河の様にどこまでもだ！

さらにヤツは小手調べとばかりに

燃え盛る巨石、いや隕石を

俺達目掛けて四方八方から放ってきた。

サイズも数も今までの敵のものとは桁が違う！

「ゲイトさん！」

俺は譲渡の能力にて空間や時間を

操ることができるゲイトさんの

能力を増幅させる。

『万華境』の力にてまるで消しゴムで消したみたいに次々と隕石が消えていく。

でもこれは時間稼ぎに過ぎない。

このままではいずれ押し切られる！

何とか逃げ道を作らないと……。

けれど次に襲ってきたのは

凄まじい衝撃波の様なナニカだ！

それは俺達を吹き飛ばしながら

同時に燃え盛る隕石に叩きつける程の威力があった。

しかもそれだけではない。

「うわああああ!?!」

まるで巨大な手で掴まれた様な圧迫感を感じる。

死ぬ……。死ぬ……。死んでしまう！　まるで棺の中に押し込めら

れた後にプレス機で圧殺される気分だ！　なんて強さだ……!!

『知性を得た矮小なる者たちよ。』

汝等は何故に戦う？ 何の為に生きる？ 何故、我等に抗する？  
汝らが世界は滅びる定めにある。

それを覆す事は出来ぬ。ならば永劫の回帰に身を委ねれば良いものを』

そうかもしれない……。

そうかもしれないけどな……！

俺の夢が……俺の願いがそんな事を認めてたまるか!!

「汝の願いとは何だ？」

汝の求めるものは何だ？

安寧、榮譽、報奨、賛美、愛、快樂、平穩、幸福、繁榮、栄光、力、  
名誉、富、支配、権威。

それは全て永劫の回帰の中にある」

まるで悪魔の誘惑の様に、

神様の啓示の様に、

俺の心の奥底に入り込んでくる言葉。

確かにそうなのかも知れない。

この宇宙に永遠の命があるというならそれに溺れてしまえば楽になれるのかも知れない。

だけど……それでも！

「アンタの言う回帰には

俺の欲しい物が2つだけない!!」

全方位からの重圧をギリギリで

跳ね除けるべく気合を込めて叫ぶ。

『理解している、未来と進歩と

嘯くのだろう』

ちげーよ！ そんな大層なモノじゃねえ！

もつと単純なモンだよ！

俺が望むのは……

「まだ見ぬ女の子に出会って

ビンタされる事と、その女の子と幸せになる事だ！」

『相棒……』

「兵藤様……」

「……」

あ、あれ？　なんか呆れられてる？　……まあいいか！

だって本心だからな！　自分を偽ってまでハーレム王になっても意味がない！

『フツ、相変わらずブレないな』

「フフ、やはり君は面白い」

するとドライブとゲイトさんが微笑んで、

重圧が解除された！

良く分からないがヤツが動揺しているのか？

『おお………汝の欲望や見えず』

……えっ、どういうこと!?

俺が見えないって言ったのか？

観測がどうこうってゲイトさんは

言っていたし……。今、スキが出来たって事だよな！

「ゲイトさん！　一旦俺の精神世界に門を開けてください！」

「解ったよ」

そして俺達は精神世界のゲートを通って俺の心の中に入った。

ヤツは俺をもう一度自分の理解の枠内に収めようとするのに必死なのか、追ってくる気配はない。

はあく、何とか逃げられた。でも俺があの時、ヤツの言っている事が少しは分かったのはどうしてなんだろう。

「たぶんそれはニグラと君がセックスしたからじゃないかな」

ゲイトさん！　もう少しオブラートに包んでくれないかなあ!!

トウーさんの前なんですよ！　しかし彼女はそうした事に無頓着なのだろうか。

あまり気にしている様子はないが、

寧ろ逆に恥ずかしい……。

すると、俺の精神世界ではすっかりお馴染みのエルシャさんがクスクスとと笑っている。

「ウフフ、イツセー君たら。もう、ホントに可愛いんだから♪」

「いや、俺からしたら笑い事じゃないんですけどね……」

『しかし肉体もない、魂だけの存在というのは

不便なものだな……。俺達の肉体が消えた事で

覇龍による赤龍帝達の呪いは何者かに回収されてしまった様だし  
な』

えーっ!?! い、一体誰がそんな事を!!

それってヤバいんじゃないか!?

「ええ、ヤバいわね。私も物見遊山に耽っている

場合ではない位ね」

エルシャさんは真面目な顔で俺に言った。

ということは俺に力を貸してくれるのか!?

これは地獄に仏のありがたさだ!

しかし肉体がないんじゃないやどうしたらいいのか……。

「それなら僕にいい考えがある」

すると人差し指を立てながらゲイトさんが何やら

思いついた様子だった。だ、大丈夫かな……。



## ※第65話（イツセー×ニグラ）

ぶるんっ……いっ！ たゆんっ……いっ！ ぼいんっ……いっ！ ばあんっ……いっ！ そこには樂園が広がっていた。

まずは胸だ……。

おっぱいの神様に愛されているとしか思えない程の 巨乳……。重力に逆らって上向きな ロケットおっぱい……。

彼女の母性の象徴は、見る者の心を優しく包み込むような温かさと、思わず手を伸ばしてしまいそうな艶めかしさを内包していた。

次に下半身だ。

引き締まったウエストと そこから流れるように伸びる長い脚線美。

そして大きく張りのあるヒップ。その曲線は、まるで芸術品のように美しく完成されていた。

更に、女性らしさを象徴するかのような 魅惑的なラインを描くヒップの下から覗かせる、白く柔らかな二つの丘。

その頂点には、綺麗なピンク色をした小さな蕾。

彼女はその双丘を自らの手で軽く揉み解すと、俺に向かって妖しく微笑んだ。

「うふふ……どうかしら？ 私の身体は。」

少し恥ずかしいわね……。」

「最高です！ おっぱいもおしりも！ そして、あなた自身も！」

「嬉しいことを言ってくれるのね。」

でも、まだまだよ。

だって、まだ貴方は本当の私を知らないもの。

だから、もっとよく見てちょうだい。

そして、知って欲しいの。

私の全てを……。

私という女を……いっ！」

そう言うのと、ニグラさんは 自らの手でオマ○コを広げた。

「さあ、イツセーちゃん。」

私と一緒に気持ち良くなりましょう?」

「はい! よろしく願います!」

そして、俺はニグラさんの股間に顔を近づけると……………ゴクリッ!  
俺は生唾を飲み込んだ。

なんて素晴らしい光景なんだ! この世に存在するありとあらゆる  
快樂の頂点が今ここに結集している! これぞまさに至高にして  
究極! 俺は感動に打ち震えながら口を開いた。

「それじゃあ、いきませう」

「ええ、いつでもどうぞ」

俺は舌を伸ばすと、ニグラさんの陰唇に触れた。

ぬちゅっ……………

くちゅつくちゅっ……………

そこは既に熱く濡れていた。

ニグラさんは、自分の指でクリトリスを刺激しているようだ。

しかし、それでも足りないのか、時折腰を動かして快感を得ようと  
する姿がなんとも言えず色っぽい。

やがて、彼女の呼吸が激しくなっていく。

そろそろ限界だろうか? だが、ここで焦ってはダメだ。

俺はゆっくりと時間をかけ丹念に舐めることで彼女を満足させる  
のだ! れろっ……………ぴちやっぴちやっ……………

ぐちよっ……………じゅぽっ……………

ぴちやっ……………ずちゅっ……………

どれくらい時間が経っただろう? もう何十分か経っているかも  
しれないし、あるいは数秒しか経過していかないのかもしれない。

時間の感覚が完全に麻痺してしまったかのように感じられた。

ただ一つ確かなことは、今の俺には目の前の女性を喜ばせること  
だけが全てだということだった。

そんな俺の様子を見て、ニグラさんは嬉しそうに微笑むと、  
くるり、と姿勢を変えて

お尻を俺の方に突き出した。

ぷりんつと張り詰めた桃のようなヒップが眼前に迫る。

俺は大きく口を開けて、その柔らかい肉にしゃぶりついた。

そしてそのまま舌先で割れ目をなぞっていく。

さらに両手を使って左右の臀部を鷲掴みにし、同時に揉んでいく。

ヤバい……エロい、エロすぎるぜ

ニグラさん……！

前戯だけなのにチ○ポが

爆発しそうだ……！

じゅるるるる♡♡♡

うおおっ!?

ニグラさんのお尻で見えないけど

これは……シックスサインか!! 俺は夢中になって ニグラさん

の秘所に吸い付いた。

そしてニグラさんはがみ込んで 俺のモノを口に含む。

お互いの性器を相手に 奉仕していく。

これが本当のセックス……！ 俺たちは、まるで一つの生き物になつたかのような一体感を感じていた。

ニグラさんは俺のものを喉の奥まで飲み込み、舌を絡ませてくる。

凄まじいテクニックだ！ 気がつくと俺の口からは、情けない声が漏れ出していた。

ああ、ダメだ……！ 出るッ！

ドピュツ……！ ビュルルル——！

「んふうふうふうふう!!!」

ニグラさんは口の中に俺の精液を全て受け止めて、音を立てて啜っていく。

「うふ………いっぱい出たわね。

気持ち良かったかしら?」

「はい! 最高です!」

「ありがとう。」

でも、まだ終わりじゃないわよ♡

あなたが私を舌でイカせるまで終わらないんだから。  
ほおくら、頑張らないと……」

挑発するようにお尻を揺らしつつ亀頭を爪先ではじかれた瞬間、  
俺の身体はビクン！ と跳ね上がってしまう。くう……情けない！

俺は意を決して再びニグラさんの股間に顔を埋めた。

それからしばらくの間、俺は必死に舌を動かし続けた。

しかし……！ ニグラさんは

エツチな喘ぎ声を上げるものの、なかなか絶頂を迎えようとしな  
い。

「ああんっ！ いいわよ、イツセーちゃん。

でも、もう少し強く吸ってくれるかしら？ そうそう、上手よ……。

はあっ……、そうやって一生懸命私のことを愛してくれる姿、と  
ても素敵だわ。

可愛い……。

もっと好きにさせてあげる……。

だから、もっともっと私を愛してちょうだい……！」

ニグラさんのリクエストに応えて、俺は更に激しく攻め立てた。

「ああっ♡いい♡いいわ♡

あなたの舌、すごく気持ち良いの！ ねえ、分かる？ 私のアソコ

がひくついているのが？」

ニグラさんの言う通り、彼女の秘所からは大量の蜜が溢れ出し、太  
ももを伝って床にまで滴っていた。

それでもなお、俺は舌を動かすことをやめなかった。

すると、不意にニグラさんが動き出した。

なんと、彼女は俺のチンポを

その豊富な胸の谷間に挟み込んだのだ。

そして、そのまま上下に動かし始める。

ぬちゅっぬちゅっ……。

ぬちゅっ……。

くちゅっ……。

ニグラさんのパイズリは絶妙だった。

柔らかいおっぱいに包まれながら、亀頭が乳首に当たるたびに、快感が脳天を突き抜ける。

あまりの快感に、俺の頭の中からはもう何も考えられなくなっていた。

「ほらあ……どう？　これが好きなんでしょう？　じゃあそろそろイキなさい！　さっきみたいに出なくなるまで搾り取ってあげるわ」  
ニグラさんはさらにペースを上げてきた。

ずちゅっずちゅっずちゅっずちゅっ……！　どびゅっ、びゅ——っ  
！　俺は再び果ててしまった。

うう、またやってしまった。

これで3回目だ。

しかも、今度はニグラさんの顔に思いっきりぶっかけちゃったし。申し訳なさすぎて死にたい気分だぜ。

だが、ニグラさんは怒ることなく、むしろ喜んでいるようだった。「あらあら、こんなに出して……」

そんなに私のことが気に入ったのかしら？」

「はい！　大好きです！　ニグラさんとのセックスは最高です！」  
「嬉しい……！　私もよ。」

だから次は私をイカせてね。

そうしたら、ご褒美をあげるわ……」

ニグラさんは俺のチンポを掴むと

口の中に含んだ。

温かい唾液で包まれて、気持ちが良い。

じゅぽっ……じゅぽっ……

れろっ……じゅるるるっ……。

じゅぽっ……じゅぽっ……

ぐちよっ……じゅるるるっ……

ニグラさんは口をすぼめて、激しく吸い付いてくる。

うおおおおお!!　なんてことだ！　これは……バキュームフェラだ!!　まずい……また俺だけイク　ところだったぜ。

なんとか耐え切ったぞ！　しかし、ニグラさんの攻撃はまだ終わらない。

ニグラさんは舌先で裏筋を刺激し始めた。同時に両手を使って玉袋を揉みしだいてくる。

うおおおおお!!!　こ、これが噂に聞くダブル責めか!?　凄すぎる……!　俺のモノは今にも爆発寸前だ。

「んふう……んんん……♡　んふう……んんん……」

ニグラさんの吐息が激しくなる。

限界が近いようだ。

よし……!　こうなったら最後の手段を使うしかない!

俺は帯電した指と舌にて

彼女のヒクつくピンク色のお尻の穴を　穿った!　ぐりっ……!

くぱあ……!　ニグラさんの身体が大きく跳ね上がる。

さらに追い打ちをかけるように、俺はニグラさんの秘所にむしゃぶりついた!　ジュルルルッ……!　レロオ……!　舌を膣内に挿入して掻き回す。

もちろん、手の動きを止めることはない。

「あああああんっ!　だめえ……♡　イツセーちゃん、そこダメなお……!　はああんっ♡　はあんっ……!」

い、イク……♡年下の男の子に犯されてイツちやいます!」

ドピユウウッ——!!!　ブシャ————ッ!　ついにその時が訪れた。

絶頂を迎えたニグラさんの股間から大量の潮が吹き出す。

そしてそれと同時に、俺は射精していた。

4度目の大量放出である。

「ああっ……♡　いっぱい出たわね。

ありがとう、気持ち良かったわよ♡　ふふふ……♡」

ニグラさんは猫のようにゴロニヤンと甘えてきた。

それからしばらく経っても、俺たちの興奮は冷め止まなかった。

「ふふ……♡

じゃあご褒美をあげるわね……♡」

そう言うのとニグラさんは自分の服を脱ぎ捨てた。

そして全裸になると、仰向けになつて足を開いた。

ニグラさんの秘所はすでに愛液まみれになつており、まるで洪水でも起きたかのように濡れていた。

それを見ただけで、俺の息子は再び元気を取り戻してしまう。

「ねえ、イツセーちゃん……♡」

赤龍帝と私がセックスして

子供が出来たら……どんな子が生まれると思う？」

唐突にニグラさんが尋ねてくる。

子供……？ 俺が……？

……俺が……？ 考えたこともなかつた質問だ。

もし仮に俺の子が生まれたら……一体何者になるのだろうか。その答えを求めて、俺はニグラさんに尋ねることにした。

「それは……やっぱり強いんですかね」

すると、彼女は妖艶な笑みを浮かべながら言った。

「いいえ、違うわ。」

強くなるのはその人の資質によるものが大きいけれど、その子が強くないというわけではないの。

ただ、強さとは力のことじゃないってこと。

あなたなら分かるでしょう？」

そうだ。

確かに俺も今までたくさん敵と戦ってきたけど、強くなつても戦い方が下手だったり、そもそも戦う意志がなかったりで、結局は負けてしまった奴もいる。

つまり、本当に大事なことは……

「自分を信じる……ですかね。自分が正しいと思つたことをやり通すことが大事だと俺は思います！」

「ふふっ……正解！」

ニグラさんは嬉しそうな表情で微笑んだ。

どうやら俺の回答はかなりの的を射ていたらしい。

やったぜ！

「私はね、この世界に生まれてきてよかったと思っっているわ。だって、大好きな人とこうして一つになって子供まで産めるのだもの……」

ニグラさんは俺のことを抱きしめると、そのままキスしてきた。

お互い舌を出し合い、唾液を交換し合う。

ちゅぷつ……れろれろ……。

ぴちやつぴちやつ……。

しばらくして唇を話すと、銀色の糸を引いた。

「だから、私も信じている。

私達の子がきつと素晴らしい存在になることを。

そのためには、まずは二人で頑張らないとね。これから一緒にたくさん勉強しましょう。さて、そろそろいいかしら……もう我慢できないの……♡」

ニグラさんは自ら腰を上げて、俺のモノに狙いを定める。

そして一気に突き刺した！ズブツ！

「あああん……いっ！入ってきたあ……いっ！」

ニグラさんの膣内は熱くてヌルついており、とても心地が良い。入れた瞬間から、すぐに果ててしまいそうになるほどだ。

パンツ！ パアンツ！ 肉と骨が激しくぶつかりあう音が響く。

ニグラさんはとても激しい動きをしているのだが、不思議とその音はあまり聞こえない。

なぜなら、俺は彼女の胸に夢中になっていたからだ。

彼女の豊満なおっぱいが上下左右に激しく揺れ動いている。

なんて大ききなんだ……いっ！それに形もいい。こんなおっぱい初めて見たぞ！あまりにも衝撃的な光景だったので、思わず凝視してしまう。

「ああんっ……いっ！そんなに見つめられたら恥ずかしいわ……♡」

「あ、すみません！あまりにニグラさんが魅力的すぎて……いっ！」

謝ると同時に、俺は手を伸ばした。

むにゅっ！ むにむにい……いっ！！指先が柔らかい感触に包まれていく。

すげえ……いっ！手の動きに合わせて形が変わっていくよ！マ



シユマロみたいに柔らかく弾力が凄い。

「んんう……♡ イッセーちゃんつたら……エツチなん……だからあ……♡ はああつ♡」

俺は夢中になりながら揉み続けた。

やがて限界を迎えたのか、ニグラさんはビクビクと身体を大きく震わせ始めた。

「ああん……♡イク……♡またイっちやうわ……♡ふああつ……♡」

ドピユウウウツー!! ブシャ————ツ!!! ニグラさんの秘所からは大量の潮が吹き出した。

それと同時に、俺も絶頂を迎える。

ビュルルル——ツ! ビューツビュツ……! ブルブルと微振動する子宮口を取り押さえる様に龟头を押し付けてから射精をした。

ドクツドクン……どくんっ……!

「あは……♡イッセーちゃんの精液でお腹の中がいっぱいよお……!

今よ……ドライブ♡」

『やれやれだ』

ニグラさんの督促に対してドライブは呆れたように呟いた。

そして譲渡の力を発動させる……!

一体どうなるんだ……? 俺は恐る恐る様子を伺っていると、ニグラさんの下腹部に何か怪しい紋章が浮かんできた……! こ、これは俗に言う淫紋というやつなのではないだろうか!? その証拠にニグラさんの顔は紅く染まり、息遣いも荒くなっている。

さらに全身からピンク色のオーラのようなものを発していて、見ているだけで興奮してくるような姿になっている。

「ああ……♡あああゝ♡イッセーちゃんの精子が私の卵子と出会っているのを感じるわ……! ああ、妊む……! 私、赤龍帝の子を妊娠しちやってる……!」

ニグラさんはそう言いながら、自らの下腹部を愛しそうな目で撫で回している。

俺の遺伝子がニグラさんの中に入り込んで……そして新しい命が誕生するんだ……。なんか感動してきたな。

「ありがとう……これで私はあなただけのものになったわ……」

ニグラさんは俺に抱きつき、耳元で囁いてきた。

それを聞いた俺は彼女を優しく抱きしめ返す……だけでは終わらない。今度はこちらの番だと言わんばかりに再びピストン運動を開始した。

パンツ！ パシイーン！ 肌と粘膜が激しくぶつかり合う音が部屋中に響き渡る。

同時に俺の口からも声が漏れ出していた。

「はあ……はあ……！ ニグラさん……気持ちいいですか？」

「ええ、とつても……♡あなたのことしか考えられないくらいにね

……！ もっと突いてちょうだい……！ 奥まで届くようにして

……！ はあああん……！」

ニグラさんは俺の首の後ろに両手を回し、足を腰に絡めてくる。

「はい……わかりました……！ こうすれば良いんですね……！」

俺もそれに応えるべく、より一層強く腰を打ち付けた。

バチン！ ボチュユ！ ズブツ！ ズプウ！ 卑猥な水音を立てながら何度も出し入れを繰り返す。

ニグラさんの孕んだばかりの子宮を亀頭で押し潰すかのように突きまくった。

本当は駄目なのに……いけない事の筈なのに……！！ でも、止まらない……！ 止められない……！

「ニグラさん……好きです……愛してます……！ だから、俺の子供

産んでください……！！」

「嬉しい……！ ああ……イク……！ またいつちやううう……！！」

ビクビクツ……！ ビクツ……！ 再び彼女は絶頂を迎えた。そ

れと同時に俺も二度目の射精をする。

ビュルルル——ツ！ ビュルルル——ツ！

「ああん……！ 赤ちゃん喜んで……♡イツセーパパのミルクですくすく育っているの解るう♡」

ニグラさんはぷしゅっ！ つと勢いよく潮と母乳を噴き出して悦

んでいる。白磁器の様な肌は赤く火照り、汗が滴っていた。むわあつとした熱気が伝わってきて、とても色つぽい。

「はあ……はあ……イツセーちゃん……もう一回だけお願いできるかしら……？ まだ満足できないの……♡もつとしたい……♡」

「はい……俺もまだまだいけますよ……！ 次はどんな体位でしますか？」

「うふふ……♡じゃあ、このまま後ろからしましょうか……♡この体勢の方が激しく出来ると思うわ……♡」

ニグラさんは四つん這いになり、お尻を突き出す。するとニグラさんのお腹が張り出していた。息をするたびにお腹が上下に動いている。まるで妊婦みたいだ。

俺は誘われるがままに挿入する。

ニユルツ……！

「ああん……♡入って来たあ……♡パパのおちんぽお……♡」

「凄いです……！ さつきよりも締まってる……！」

ニグラさんの膣内はヒダの数が増えて、それぞれが独立した生き物のように絡み付いてくる。

ぬちゅっ！ ぐちよっ！ ぶぢゅっ！

あれ程出した筈なのに結合部からは精液が溢れ出す事はなく、代わりに大量の愛液が流れ出していた。

「ああつ……！ ニグラさん……！ 俺もう……我慢できません……！ 動きますよ……！」

「うん……来てえ……！ パパ……！ ママを犯して……！ 私をもつと、もつと一杯孕ませてください……！ ひゃああああああああ♡♡♡」

俺は本能のままに腰を振り続けた。ニグラさんもそれに呼応するように淫らに喘ぎ続け、射精される度に

まるで風船に少しずつ空気を入れられるようにお腹が膨らんでいく。

そして遂には臨月の妊婦のようになっていた。

ニグラさんは俺の子を身籠っているのだ。その事実が俺を更に興

奮させ、ピストン運動を加速させる。

「ああ……！ ニグラさん……！ 俺、また……！」

「いいわよ……！ イッセーちゃんの熱いのいっぱい頂戴……！ ああ……！ イク……！ イッちゃう……！ 私もまたイキそうなの

……！ 一緒に……！ 二人一緒に良いわ……！ だから、ね……？

早く、早く……！ ああ……！ イク……！ イ

グウウウウウウウツツ！！」

ニグラさんは絶叫しながら絶頂を迎える。同時に俺は彼女の子宮に子種を流し込んだ。

ドピュツ！ ドクツドクツ……！

ビュルルル——ツ！

「ああああ……！ イッセーちゃんが私の中にいる……！ 赤ちゃんに栄養送ってるの感じる……！ ああん……！ イッセーパパあ……！」

ニグラさんはそう言いながら、自ら腰を動かし始めた。

するとじわじわと奇妙な感覚に襲われる。まるで、ニグラさんの中にさながら漏斗の様に精子を吸い取られているような……。

やがてニグラさんの下腹部に小さな魔法陣が現れた。

「これは……？」

「これで準備完了ね……♡後は待つだけだわ……」

ニグラさんは満足げな表情を浮かべながら言った。

「あの……！ 一体何をしたんですか？」

「ふふっ、それは産まれてからのお楽しみよ……♪」

ニグラさんは妖艶に微笑みかける。本来ならば怯えるか、気味悪がるべき場面だが、今の俺はリアスさんと同じ位にニグラさんの

事を愛しているの、むしろ期待感で胸が高鳴っていたのだ。

『まあ、それなりに覚悟はしておけ相棒。まさか貴様のスキルで赤龍帝、兵藤一誠を再誕させようとは思わなかったぜ』

(え!? どういう事だよドライグ!!)

突然のカミングアウトに俺は動揺する。しかし、ニグラさんは特に驚く様子もなく、逆に誇らしげだった。

俺が戸惑っていると、ぶる、ぶると

ニグラさんのお腹が震えだす……。そして遂にその時が来た。

「あ、生まれるわ……！」

ボコツ……ボコボコツ……！ ニグラさんがそう言うと同時に、彼女の中から何かが這い出てきた。

ズリユ……！ズリ……！

「ううっ……！ぐっ……！ああっ……!!」

ニグラさんの股間から生まれたのは何とも形容しがたい何かだった。手足もなく、液状で少なくとも人の形はしていない。ただ言える事はそれが俺の子供だという事だ。

「頑張つて……！もう少して出てくるから……！」

俺はとつさにニグラさんの手を握り、応援する。すると少しづつ、這い出るスピードが上がった。

「んん……！ああん……！パパア……！パパア……！」

ニグラさんは顔を真っ赤にして喘いでいる。そして産まれるのは一人や二人といった規模ではなかった。「ああん……！ひゃんっ……！イツセーちゃん……！イツセーちゃん……！」

「ニグラ……！くっ……！」

ニユルツ……！ニユルニユルニユル……！

「あはあっ……！赤ちゃんが沢山出てるう……！私っ……！イク……！イクウウウツ!!産みながらイクウウウツ!!」

ビクンツ！ガクンガクンツ！ニグラさんは体を仰け反らせ、激しく痙攣させた。その拍子に大量の赤ん坊を産み落とす。

人の姿ではなかった。粘液状のスライムのようなったり脳や臓物、骨髄が露出している奇形の存在だ。

数はとても数えきれない。

「はあ……はあ……♡これが私の新しい命……♡」

ニグラさんは息を整えながら呟いた。

俺はそんな彼女の姿に見惚れていた。禍々しいが美しい、とても綺麗だと。そして子供達が凝縮されていく。やがてそれは一つの個体となった。

「ふふっ……お疲れ様、イツセーパパ。元気な男の子よ……♪」

その個体は俺と瓜二つ、いや俺そのものだった。寸分違わず同じなのだ。俺がその子に触れるとじわじわと融合していく。

「私の力が混ざっているから複製とも少し違うけど、大した問題ではないわよね？ 大切な事は一つだけ。どう生きるか、という事だから……」

ニグラさんは優しく語りかけてきた。俺は無言で彼女にキスをする。もう何も言葉はいらなかった。

まあ、そこからは大変だった……。

俺が帰ってきたら俺の葬式の最中だったんだもん。リアスさんも朱乃さんも、小猫ちゃんもアーシアも木場も安里も皆泣いてたんだよ。

そりやあ俺だつて死ぬほど驚いたさ。まさか生まれ直しなんて神様みたいな真似まですることになったんだからさ。でもそれ以上に嬉しかった。また皆に会えた事が……。

ディオドラは結局罪を償うのとシャルバに殺された眷属を弔うために

、アジユカさんの助手として出直すらしい。素質とガッツのある奴だからきつと大丈夫だろう。

↓

「にゃあああ♥♥♥」

黒歌が俺に組み伏せられて、甘い声を上げている。俺はゆっくりペニスで黒歌の膣壁を楽しむ様に腰を動かしていた。

「ご主人さま……っ、もっとお……」

「分かってるよ、いっぱい可愛がってやるからな」

「嬉しいですよにゃん……、あ、そこも♥入口も奥も気持ちいいにゃん……♥」

黒歌は目にハートマークを浮かべて

悶えていた。

生まれ直して最初にするのが眷属とのイチャラブセックスとか、俺

は幸せ者だぜ。今の俺の夢はハーレム王からハーレム神へとランクアップしたわけでこれも鍛錬の内なのだ。

「んにゃ……、ご主人様……、そろそろ出して欲しいにゃん……、子作りしたいにゃん……！」

「そうだな……、俺も出そうだよ……！」

「じゃあ早く……、お願いしますにゃん……！」

俺はラストスパートをかけて激しくピストンする。同時に黒歌を仰向けにして身体を密着させて抱きしめながら、唇を重ねた。

パンツ！ パチュンツ！ グチュツ！ ヌプウ！ 結合部から愛液が飛び散り、淫靡な音が響く。そして遂にその時が来た。

ドピュルルル——!! ビュー！ ビュルルル！ 子宮口に押し付けて射精し、精液で満たされていく。

「ああっ！ 熱い！ にゃあ！ イク！ イクううう!!」

ビクンビクン！ ガクガク！ 絶頂に達したのか黒歌は全身を痙攣させ、口からは唾液が溢れていた。俺はそれを舐めとり再び口づける。

「んむっ……んっ……ちゅっ……んんっ……んんんっ！」

「んんっ……ぷはっ……！ はあ……はあ……！」

ようやく長いキスを終わると、黒歌はトロンとした表情になっていた。そして息を整えると、甘える様に抱きついてくる。

「ご主人様……好き……大好き……！ ずっと一緒に居たいにゃん……！ 私だけのものになって欲しいにゃん……！」

俺はそんな彼女を優しく撫でる。何だかんだで黒歌は寂しがりののだ。

いつも俺の側にいて構ってあげないと拗ねてしまう。今も俺の胸に顔を埋めながらスリスリしているのだ。可愛いヤツだなあ。

それはそれとして……。

あの『永劫に回帰するもの』を倒すにはどうすべきか……。常識の範疇では絶対に勝てない。天使、悪魔、墮天使の連合だけじゃ足りない。もつと突飛な発想が必要だ。

例えば……、俺が魔王になる……とか？ いや、流星にそれはない

か。しかし、このままではジリ貧なのは確か。

何か、何か無いだろうか。俺があいつに勝つための手段は……！

一人や二人が束になっても倒せない存在な訳だから……。

ん……？ 赤龍帝や白龍皇が一人や二人……。そうだ……！！

エルシャさんや、俺達とは違う世界の赤龍帝や白龍皇の力を借りる事が出切れれば……！ いけるかもしれない。

「黒歌、ヴァーリとコンタクトは取れるかな？」

「にや？ 出来るけれど……。どうしてかにや？」

「うん、ちよつと頼んでみたい事があつてさ」

ゲイトさんの力はあまり知られたくないし、迂闊に認知されれば『禍津星』や『永劫に回帰するもの』から狙われかねない。

「ふーん……。分かったにや。今から連絡を取ってみるにや。多分大丈夫だと思うけど、一応確認しておくにや。でも、一体何を頼むつもりなのかにや……？」

「ああ、それは後で話すよ」

俺は黒歌の頭を撫でて微笑んだ。

↓

リアス side

……全く見舞いに行ったらあの黒歌とかいうはぐれ悪魔といちやいちやしてたわ。本当に油断も隙もないわねあのはぐれ悪魔！

い、いえ！ ここで堂々と振る舞うのも主人にして正妻である私の務めよ！ そうよ、堂々と振る舞えばいいのよ！ 深呼吸して……よしっ！

「イツセー！ お邪魔する……うつ」

急に吐き気が込み上げてきた。

私は慌てて洗面所に駆け込む。

「オエエ……ゲホッゴホ……」

なんでこんな時に!! まさか原初のベルゼブブの毒霧の影響がまだ残って……!?

「リアスさん！ 大丈夫ですか！」

「ええ、もう平気よ。心配かけてごめんなさい」



イツセーが背中をさすってくれたので、何とか落ち着いた。

それにしても、確かに最近の私はどこかおかしい。風邪気味でもないというのに、身体が怠かったり、吐き気を催したり、胸も少し大きくなつたかしら。ああ、情けないわ。

この程度の不調で主であり婚約者でもある私が皆に迷惑をかけるなんて……！ 安里もルイーナの看病に付きつきりなのだから甘えてなんていられない。一度アザゼルに診てもらった方がいいのかしら……。

## ※第66話（イツセー×アーシア&リース）

イツセー side

どうも、兵藤一誠です。

今日はニグラさんの協力にて

エルシャさんに稽古をつけてもらっている所です！

本来ならエルシャさんは精神だけの存在なのですが、ニグラさんの身体に一時的に憑依する事で力を発揮するとかなんとか……。そして今、俺とエルシャさんが対峙しています。

「では行くわよ?」

まるでビキニアーマーの様な赤龍帝の鎧に目が離せないぜ……！

『……』

おっとドライグ、お前の言いたい事はわかるぞ? 真面目にやれと  
いうのは解っている……! でもなあ……

稽古の最中におっぱいやお尻に手や顔が当たるのは不可抗力だよ  
ね? だよね!!

『まあ……どうするかはお前の勝手だ』

心なしかドライグの声が冷やややかなんだけど!?

「ふっ!」

そんな事を考えている内にエルシャさんから仕掛けてきた!

シユバババババ!!

放ってきたのは拳の弾幕、いや結界と言ってもいい程のラツシユだ  
! 俺は咄嗟の判断で魔力を腕に集中してガードする!

バキキキツ! ビキツ!

だがスピードだけでなく龍の気まで乗っている彼女の拳は赤龍帝  
の鎧にヒビを入れていく!

「くうッ!!」

このままじゃまずい! そう判断した俺はケラウノスの結界を発動  
させる! 雷の防護結界ならダメージは無いはずだ! バリリリッ!  
バチチイ! しかし予想に反してエルシャさんの拳は止まらない!

「ええっ!？」

ビシビシ……ビシイ?

こ……これは!? 結界の頂点を拳で潰す事により結界が暴走していく!

「ぐわああああっ!？」

ビリビリリイイイ!!

全身を襲う激痛にたまらず悲鳴を上げる俺そしてついに結界は壊れてしまった!

「これでトドメよ!! エルシャ式エクスカリバー!」

キイイイン!!

眩い光と高音が彼女の籠手を纏った右腕に集約されていき、手刀の形となる! あれを食らえば流石の俺もただでは済まない! ならばこちらにも全力でいくしかないだろう!

『ドラゴン・メガフレア!』

右手に収束させた魔力と竜のオーラを混ぜ合わせながら両手を前に突き出し叫ぶ! ドラゴン波さながらの光の砲撃がエルシャさんへと襲いかかる! だがエルシャさんは口元に笑みを浮かべて切り払う態勢に入った! だが……! 俺達の必殺技はここからだぜ!

「ドライグー!」

『EXTEND!』

ドライグの『倍化』を応用した『拡張』のスキルによりドラゴン・メガフレアは拡張して破裂!

圧縮していた数十もの小さなエネルギー弾となって広範囲に散らばっていく! これなら……!

「勝った、と思ったわね?」

俺の淡い期待を打ち砕くかのように彼女は不敵に笑うと、数十のエネルギー弾を全て手刀で捌くのみでなく纏っていたオーラに変換していくのだった!! ま、まずい!!

「喰らいなさい、これが私の奥義……!」

ゴオオオオオツ!! まるで炎の様に燃え盛るオーラを纏う彼女を見て俺は戦慄した。

『エルシャ式エクスカリバー・オーバーロード!!』

ズガアアアン!! 凄まじい威力の攻撃が炸裂し、爆発が巻き起こり土煙が舞う中、俺は赤龍帝の鎧の欠片達共々吹き飛ばされていた……。

「イツセー君大丈夫!？」

「は、はい……!」

エルシャさんが駆け寄ってくる中、辛うじて返事をした。

「ちよつとやり過ぎちゃったかしら? でも、この程度で音を上げられてたら困るものねえ」

「こ、この程度じゃ困ります!」

俺は何とか立ち上がると、拳を構えた。

すると、エルシャさんは何やらニヤツとした表情になった。

「ふふつ、いい目付きじゃない♪ どうやら赤龍帝として自覚に目覚めたみたいね?」

どうやら、まだやれるか試されていたようだ。

「まだまだやれますよ! こんな所でへこたれてられませんからね!!」

俺は強気に言い放つと、再び彼女と向かい合った。そうだ! 今の俺は人と同じ鍛錬をしていてはヴァーリに追いつけないし、ヤツらに手も足も出ない! 痛いとか苦しいとか言ってる場合ではないのだ!

「そう来なくてはね! それなら私も本気でいかせてもらおうわよお?」

そして数時間後……。

俺はアーシアやリースの回復も追いつかない位ボロボロになっていた。

「ハア、ハア、ハア……つ、強い……」

「ふふん、どうやら少しは強くなったようだけど、それでもまだまだだね。もっと鍛えないと駄目よ?」

「ありがとうございます」

俺はアーシアとリースに肩を貸してもらいながら何とかエルシャさんに礼を言うと、フツ……と意識が遠のいていく。

「イツセーさん!」「イツセー様!」「兵藤くん!」

三人の声を聞きながら俺はそのまま気絶してしまった……。

俺は目を覚ました時、ベッドの上にあった。ここは一体……ああそういえば修行中に倒れてしまったんだな……。

「ああ、イツセーさん!」

看病してくれていたらしいアーシアとリースが涙を浮かべながら抱きついてきた。

「心配かけてごめんな……?」

俺はそう言う彼女の頭を撫でてやった。くすぐったそうにしながらも嬉しそうな顔のアーシアは本当に可愛い。

「あの……イツセー様」

なんて事を考えていたらリースはおずおずと俺に対してある事を言ってきた。

「強くなるためには、そこまでしななければならないのですか?」

それは、俺が強くなりたい理由の事だった。

俺は彼女に今までの経緯を話した。滅びの未来を招くもの、『永劫に回歸するもの』という存在と戦うために必要だからだと。

「……わかりました。ですが、あまり無理をなさらないでください」

「イツセーさん、お願いします。どうか無茶だけはしないで下さい」

二人は真剣に俺の身を案じてくれてるのがよくわかったので俺は力強く答えた。

「ああ、わかっているさ。絶対に死にはしないさ!」

と、俺が気合を入れている中、二人はするりと離れて俺から離れていった。あれ?と思った次の瞬間には、二人の手は俺の胸に触れていた!むにゅっ!

「えっ!?!」

突然の出来事に戸惑う俺を尻目に、二人とも俺の胸に手を添えたまままで見つめてくる。

「あの、イツセー様を迅速に癒やすにはこれが一番良い方法と聞きまして……」

「そ、その通りなのです！ 決して他意はありませんので安心して下さいね？」

顔を赤くしながらそんなことを言う二人。

いや、絶対嘘だろ！俺の脳裏にある人物が浮かんできた。アザゼル先生め……また妙な事を純真な二人に吹き込んだな……ありがとうございます！ 3人に感謝しつつ俺は二人の行為を受け入れる事にした。

「アーシアも随分大きくなったなあ……」

俺は感慨深く呟く。出会った頃はまだ美少女だったアーシアの身体は今ではすっかり女性らしくなり、今やスタイル抜群である。しかも、最近ますます可愛さとエッチさが増してきてるんだよね……。

そしてリースは……。うん、やっぱりリースも成長している……。何がと言わないが……。

しかしそれにしても……。

「あ、はああ♥」

「ん、んん……♥」

おっぱいやお尻を触ると二人は甘い声を出し始めた。ステレオ音声のように交互に。俺は二人にマッサージをしてやっているのだ。アーシアのおっぱいとリースのおしりを同時に揉みほぐし、さらには乳首やアソコまで指先で弄ぶ。すると二人が同時に喘ぎ出す。

「あ、あんっ！ イッセーさん、ダメですよ……」「あ、ああっ！ イッセー様、そこは敏感なところなんですからあ……」

だが、俺は構わずに続ける。

「いいから、もつと気持ちよくなってもいいんだぞ？」

そう言いながら俺は二人の弱点を責め続けた。

「ああああッ!!」

二人は同時に絶頂を迎え、ガクンガクンと震えた後、力なくベッドに横たわった。

「ハア、ハア、ハア……」

「ハア、ハア、ハア……。い、イッセー様はお上手ですね……」

息を荒げながらも俺を褒めてくれるリースとアーシアに俺は興奮

を隠せない。

アーシアは服を脱いで全裸になると俺に抱きついてきた。リースも負けじと俺に身を寄せてくる。

「イツセーさん……大好きですう」

そう言つてキスしてくるアーシア。

「イツセー様、私もイツセー様を愛しています……」

両手に華状態の俺は二人を抱くために乳独創による分身を発動させる。これでアーシアとリースを満足させてやるぜ！俺はアーシアを、分身はリースへと挿入を開始。アーシアの秘所はもう濡れまくっていた。俺のモノがアーシアの中に入ると、彼女はビクビクと痙攣し始める。

「あああああああああーッ！」

アーシアは歓喜の叫びを上げると同時に、俺を受け入れるべく足を絡める。

「イツセーさんの、すごいですう！は、激しい！ああああ！いい、イツセーさあん！もつと激しく突いてえ！アーシアをめちやくちやにしてくださあい！」

アーシアは快感で呂律が回らなくなりつつも、俺を求めてきた。リースの方はどうだろうか？そう思いながら彼女の方を確認する。彼女は俺の分身とのセックスに酔いしれていた。

「ああっ！イツセー様のがあ……！凄すぎますう……♡」

彼女は手を分身の項に回して必死に腰を振っている。その姿はともドスケベで、見ているだけでイキそうだ。

「はあ、はあ、はあ……！」

「あ、ああん！ふあ、はあ、はあ……！」

俺達はお互いの性器をぶつけ合い、快楽を貪り合う。アーシアの胸が揺れる度に俺の理性が飛びそうになる。

パンツ！ パシッ！ズブッ！グチュッ！

卑猥な音が部屋に響き渡る。アーシアの膣内は熱くて柔らかくて、まるで俺の精液を搾り取ろうとしているかのようだ。俺のモノは限界まで膨れ上がっていて、今にも弾けてしまいそうな状態だ。リース

は俺のを根元まで受け入れてくれている。そのせいでリースの子宮口にまで届いているのか一番奥を突き上げていた。そのたびにリースの身体が激しく跳ね上がる。

俺もアーシアの身体を味わい尽くしていた。アーシアの身体はどこもかしこも柔らかい。特におっぱいなんて最高だ。俺は夢中になって揉みしだいた。

「ああっ！ イッセーさん、そこばかりダメエ！ あ、ああんっ！ ひやううううううう！！」

胸を弄られたアーシアが絶頂を迎えた。

それと同時に俺も射精してしまう。

「くうううううう……！！ アーシア、好きだあああああ！！」

ドピュルルルーツ！ ビュク、ビュツ！ ビュー！ 俺はアーシアの中に大量の白濁液を放出してしまった。

「あああゝっ！ 熱いです、イッセーさん！ アーシアのお腹にイッセーさんがいっぱい出てます！ ああっ！ イッセーさん、イッセーさんっ！ アーシア、幸せですううう！！」

アーシアは身体を大きく仰け反らせ、絶叫した。そしてリースも寝バツクの状態で激しくイッてしまう。

「ああっ！ イクウ……！ イッセー様あああああ！！」

しかし分身の方はまだまだ元気だった。リースのおしりを掴み、さらに激しくピストンする。

「ああっ！ イッセー様ああ！ そんなにされたら、またイッちやいますうう！！」

俺の分身は休むことなく、今度は後ろからリースを攻め立てた。

「あんっ！ ダメです、イッセー様ああ！ 私、イッたばかりなのにいい！」

リースはそう言いながらも、自ら腰を動かしている。そのいやらしい姿に興奮してしまい、俺のペニスがアーシアの中で大きくなった。

「ああっ！？ イッセーさん、また大きくなってますうう……！ いいですよお、もつとアーシアを犯してください！」

アーシアも再び感じ始め、俺の動きに合わせて腰を振り始めた。



「はあ、はあ、はあ……！」

二人はお互いの腰を動かし、気持ちよさそうに喘いでいる。俺は二人の喘ぎ声を聞きながら激しく攻め立てていく。アーシアの膣内とリースのアソコを同時に味わっているのだ。

「あ、あ、ああーッ！」

「あ、あ、ああーッ！」

二人同時に絶頂を迎え、ビクンビクンと痙攣し始めた。

「はあ、はあ、はあ……！」

「はあ、はあ、はあ……。あ、アーシアさん……。お尻、凄いですう……！」

「はあ、はあ……。リースさんのおっぱいも凄いですう！」

アーシアがリースの胸を揉むと、リースは甘い吐息を漏らす。アーシアとリースは俺達に貫かれながらも、お互いの身体を触り合っただけ快感を高め合っていた。

「アーシア……。リース……。！」

俺達は二人を更に激しく犯していく。アーシアの膣内は熱く、蕩けてしまいそうだ。

「ああっ！イッサーさん、凄すぎますう！アーシア、もうおかしくなっちゃおうう!!」

「イッサー様ああ！リースのことも、もっともっと愛してくださいさああい!!」

俺達はお互いに限界に達しようとしていた。

「はあ、はあ、はあ……。！」

「あ、あ、ああーッ！」

そして俺達は同時に達した。

ドピュツドピューツ！ ビュク、ビュツ！ ビューツ！俺達はアーシアとリースの膣内に精液をぶちまけた。

「ああっ！イッサーさん、アーシアの中にいっぱい出てますう!!あ、あ、ああああああああ——ツツ!!」

アーシアもまた盛大に潮を吹き出し、果てた。

「あ、あ、あああ……。♥」

リースの方は俺の精液を受け止めて、そのあまりの量の多さに呆然としていた。

「はあ、はあ、はあ……」

「はあ、はあ、はあ……」

俺達4人はベッドの上で荒く呼吸をしていた。

「はあ、はあ、はあ……。アーシアさん、素敵でしたあ。私、イツセー様に初めてを捧げてから、ずっとアーシアさんに憧れていたんです。だから、こうして一緒になれて嬉しいですよ」

「はあ、はあ、はあ……。リースさんもイツセーさんに処女を捧げられて良かったですね。でも、まだ終わりじゃないんですよ？これからもイツセーさんに可愛がってもらいましょうね？」

「はいいい……。アーシアさんと一緒にイツセー様にご奉仕しますうう!!」

あ、ある意味すごい光景だ。美少女二人がこんなことを言っているんだから……。素敵な回復の儀式はまだまだ終わりそうにない。

1

安里side

俺は今、エルフの里にある花畑にいる。今は花を摘んでいるルイーナの警護をしている最中だ。彼女はフリードに拐われた時に記憶を操作されたらしい。

「えへへ……。この花束を見たら、フリードは喜んでくれるかな？」

どうやら好きな人あげるつもりのようなのだ。

「きつと喜ぶと思うぞ。なんなら俺が渡しておいてやるよ」

ギリギリと奥歯が軋むのを抑えられない。

ルイーナの記憶を操作した奴が憎くてしょうがない。

「ありがとうございます。それじゃあお願いできますか？」

「任せろ」

俺は笑顔を浮かべながら答える。

例え偽りの記憶であってもルイーナの悲しむ顔は見たくない。だから俺が代わりに復讐を果たす。そして必ず救い出してみせる。

(待っていてくれ、ルイーナ)

ふと、視線を感じて振り返ると二人の男女がいた。一人は見知った顔だがもう一人は解らない。恐らく年は40そこそこに見えるが鍛え上げられた鋼の様な肉体に氷山の様な冷徹さと威厳を感じる。

「えっと……」

スコグルさんが気まずそうに口を開く。

「こちら、アタシとロスヴァイセが話した九頭竜安里です」

あの奔放を地でいくスコグルさんがまるで借りてきた猫の様に畏まっている。

「初めまして」

俺は二人に向かって軽く会釈をする。

「うむ……」

やはりペラペラ喋るタイプではないらしく一言だけ発すると後は黙ったままだ。しかし、その瞳は真っ直ぐ俺を見据えている。

「……………」

しばらく沈黙が続くとスコグルさんの方が先に根を上げたのか、

「え、えーつと、安里。この方は雷神のトール様。有名だから知ってるよね……ハハハ」

と苦笑いしながら言った。確かに北欧神話最強の神と言われていくくらいだから当然知っている。まあ明らかに只者じゃないオーラを纏っているからな。

「ほら、こないだアタシがカロックス、いやクルゼレイとやり合った時に借りた武具を返す序に紹介しようと思ってさ……。でも貸したものはそのままでもいいって言われちゃってねえ」

なるほど、そういうことか。

「……貴様は何故戦おうと思ったのだ？」

唐突にトールさんが質問してきた。

「それは……」

一瞬言葉に詰まる。

「大切なものを守る為です」

そう答えた瞬間、身体の奥底で何かが蠢く様な感覚を覚えた。まるで嘘を吐くな、本当の理由を言えと言っている様だった。トール様は

何も言わずに俺の目を見る。そして、

「小僧。何故冬に雷が落ちるか知っているか？」

と訊ねてきた。

「いえ、知りませんけど」

まさか化学の授業をするつもりでもないだろう。トール様は俺の返答を聞くと

「地に蠢く害虫を殺し、大地を肥やし、春に実りを齎すためだ」と言った。

「え……う？」

「つまり自然とはそういうものだ。天より降る雷は恐れと実りの双方を兼ね備えねばならん。神は人に対し時には慈悲を、時には試練を与えねばならぬ……」

俺はその言葉を聞いて背筋が凍るような恐怖を感じた。自然とは峻厳なものであり時には冷酷な一面を見せることもあるということだ。それがもし人に向けられたら……。トールさんはそんな俺を見てフツと笑うと踵を返した。そして去り際に、

——強くなれ、小僧。

と言い残して去って行った。

トール様とスコグルが去った後、俺はしばらくの間その場を動けなかった。

「……」

今のはどういう意味なんだ？強くなるって何に對してだよ？

……いや、深く考えるのは止めよう。きっと俺が知らないだけで意味があるに違いない。

「大丈夫ですか？」

心配した様子でルイーナが声を掛けてくる。

「ああ、平気だ。ちよっと考え事をしていただけだから」「……なら良いんですが。ところで安里さんは好きな人とかいますか？」

俺が愛しているのはルイーナ、お前だよ。

けどそれは今言うべき事ではない。だから

「いないよ」と答えた。

「そうなんですか？安里さんカッコいいからモテそうだなって思ったのに」

ルイーナの言葉を聞いた途端、胸がズキリとした。

「……俺はそんな大層なものじゃない。ただのガキさ」

思わず自嘲的な笑みが浮かぶ。

「私はそう思いませんよ。だって安里さんは優しい人ですもの。フリードさんみたいに。あれ、フリード……？　うう、頭が痛い……。苦しい……」

ルイーナが頭を手で押さえて苦しみ出した。

俺は慌てて駆け寄ると彼女の肩に手を置いた。

「ルイーナ!?!しっかりしろ!!」

俺の声が聞こえていないのかルイーナは苦しげな表情を浮かべたまま、ブツブツと呟いている。

そして突然ハツとすると俺の方を向いた。

「……私、行かなきゃ」

何処に行くんだ、と言う前にルイーナは走り出してしまった。俺はその後を追う。

「待ってくれ!」

ルイーナはどんだん先へと進んでいく。

そして里の外まで来ると急に立ち止まった。

「安里さん、今までありがとうございます。貴方に会えて本当に良かった。それと、ごめんなさい。もう二度と会うことはないと思います」

そう言つて彼女は微笑むと俺に背中を向けた。

「待て!　行くな、ルイーナ!!　俺はお前が好きだ!!!」

必死になって叫ぶが、その声が届くことはなかった。

そして次の瞬間、ルイーナの側にあの英雄殺しのクソ野郎が姿を現した。

「ヨオ、ルイーナちゃん。フリードの奴が心配してたぜ？　会いたい会いたいって布団を枕で濡らして気の毒なくらいだ」

英雄殺しがニヤつきながら言うのとルイーナは顔を真っ赤にして俯

き、モジモジし始めた。怒りで視界がぼやけていく……。涙まで流れてきやがった。

「まあ、泣くなよあっちゃん。人生は色々あるし、初恋は実らないもんさ。じゃ、またな」

そして、そのまま消えていった。

「……………」

何も考えられず呆然と立ち尽くしてただけだった……。突如雷雲が立ち込めたかと思うと、激しい雨が降り始めた。まるで誰かの怒りを代弁するかのよう……。……。

## ※第67話（安里×ナイア）

安里 side

「……おい安里くん。安里くん？　おい、クソ虫くん？」

ナイアに呼びかけられて俺ははっと気がついた。ルーナがいなくなってから数日、俺は毎日のようにあの日のことを思い出してぼんやりしていた。ナイアの口の悪さに何も感じない位までにだ。

「悪い……」

「こりや重症だなア……」

そう言いながらもナイアの表情には少し心配そうな色が見える。

「で、どうするんです？　メソメソイジイジされても正直言っつて面白くねえからクソムカつくんだわ」

「それは……」

どうすればいいんだろうな……。頭の中がまるで纏まらない。胸に穴が空いたような気分だ。

俺達は今、グレモリー家の列車に乗って移動している最中だった。乗っているのはゼウス様にキュクロ、そしてアマテラス様とお付きのタケミカツチ様だ。

「ちよつと挨拶してくるよ」

俺は席を立てて食堂車へと向かった。そこではアマテラス様が隅っこで体育座りしていてキュクロはアホ程皿を重ねてステーキを食っていた。ちゃんと噛めよ。ゼウス様はなんかグレモリー家の乗務員を口説いてるし、まともなのはタケミカツチ様だけくらいか。

「むむ、きゆうどー、ひさしぶりだな」

キュクロは俺に気がつくなり肉を飲み込んで言った。

「あいかわらざげんきがないようだな。あのどぐさにいやなことでもいわれたか」

「ああ……いや……」

俺が力なく答えるとキュクロはフォークで突き刺したステーキ肉を俺に差し出した。

「ほれ、たべろ」

「いや……いいよ。食欲ないし……」

「うまいぞ」

「うっさいわ!!」

思わず怒鳴ってしまった。しまったと思つて顔を上げるとタケミカツチ様がこつちを見つめていた。まずい、怒られるかな?と思つたらタケミカツチ様は何も言わずに目を閉じてしまった。……あれ、怒つてないのか?

「ああ……もう嫌だ。引きこもりたい……」

一方アマテラス様は相変わらず体育座りでブツブツ言っている。そつとしておこう。

「どころできゆうどー、あれはなんだ?」

と、キユクロは肉を頬張りつつ窓の外を指差す。と、言われても空を走っているから外の風景なんて大して変わらないと思うんだが……。

「ん?どれだよ」

実際豆粒の様な町並み位しか見えないぞ。

「ちがう、そちらではなくいわのほうをみるのだ」

岩?岩と言われて視線を向けて、『顕色』の力で視力を強化してみると確かにそこには……。見た事がない連中がいる。

誰だアイツら?ピクニックつて雰囲気でもない……。もしかして禍の団か?! だとしたら……!!

「のう、九頭竜よ。この辺りはグレモリー領空ではない筈じゃが……」

顎髭を擦りながらゼウス様が言う。な、何だつて!?運転手はグレモリー家じゃないのか!!

「ちよつと確認してきます!」

慌ててナイアの所まで駆け戻る。

「どうしました?漏らしたんですか?」

またナイアがふぎけた事を言うが否定している時間もない。俺はすぐに運転席へ来るように促すと二人で急いで向かった。

「すいません!グレモリー領外ですよね(こ)!!」

俺達が詰め寄ると運転をしていた女が振り返る。



「ええ、そうですが何か？」

「そうですが何かって……！今すぐ引き返してください！」

「何故ですか？」

女は不思議そうな顔をする。

何だこの女？ 状況がわかっていないのか！？

「危険だからですよ！とにかく早く！」

「あら、ご心配ありがとうございます。でも大丈夫ですよ……。私は脱出しますからね」

……何いつてんだこの女……？

まさかコイツも禍の団か！？

↓

??? side

「じゃあ、宜しく頼む」

俺は飛將軍に聖槍を預けた。奴は無言で受け取ると無造作に振り回した。風圧だけで地面が割れる。

全く御先祖様はこんな奴を相手にして遂には勝ったんだから恐れ入る。

「これ、戯れるな。その武器はお前の為に用意した物ではないのだぞ。のう、主様や……♥」

七符が髪をかきあげながら飛將軍に軽く注意をする。淫乱、色情狂を絵に描いた様な女狐だが俺が手綱を握っている間は問題無いだろう。

「曹操様……そろそろ」

司馬懿は孔雀の団扇を扇ぎながら言った。先祖は主家を出し抜いた男だが今世ではどうなるかな？

唯才此挙、口で言うのは簡単だが扱う器量は俺にはあるのかねえ。

まあいい、御先祖の墓陵はゴミ捨て場。事が成らねば飄然と死ぬだけさ。

「よし、始めてくれ司馬懿」

俺の言葉に司馬懿は頷き、陣を発動させる。

『陣略・十面埋伏』、ステルスに特化したこの陣にある限り、誰も俺達

が攻撃する瞬間まで存在すら気づかない。飛將軍が聖槍を弓に番え狙いを定める……。目標は勿論あの列車だ……。

↓

安里 side

ドグオオオオン!!

爆音が轟くと同時に列車が激しく振動する!! 何が起こった!? 状況を確認する前に女は運転席を切り離して離脱しようとしてやがる!

「させるかよー!」

俺は腕を触手に変化させ、更に先端をアンカーに変形させて射出! ワイヤーに変化した俺の腕は車両の連結部に引っ掛かり、その上をナイアが走ってゆく! あの女はナイアに任せるとして問題は……。

ガガガガガ! ガキン!!

激しい金属音と共に車体が大きく揺れ、俺はバランスを崩しかける。ま、まずい! 空を飛んでいる列車が撃墜されたってことは……! 墜落するってことじゃないか!! とにかく皆の安否を確かめないと!! 「皆さん無事ですか!？」

俺は食堂車に戻ると叫んだ。

「うむ、しかし機関室は撃ち抜かれた様じゃ」

「うわ、マジですか……」

「ああー! もう駄目! 私達ここで死ぬんだわあー!!」

「アマテラス様、落ち着いてください」

アマテラス様は泣き叫び、タケミカツ子様はそれを宥めている。そうしている間にも揺れは益々ひどくなる! 使用人の人達は覚悟を決めているのか、平静を保っているがこのままだと全員ぺちゃんこだ!

「じーじー! まがんをつかうぞー! いいな!」

するとキュクロが眼帯に手をかけながら叫ぶ! ゼウス様は仕方ないといった表情で頷いた。一体キュクロの魔眼ってのは何だ……!?

「きゅうどー! キュクロのめをみる!」

「目へ。」

俺は言われるままに視線を向けると……意識がそこで途切れた。

「……気がついたら俺は地面に倒れていた。どこだここは!? ナイアはともかく他の皆はどうなったんだ!？」

「む、おきたかきゆうどー」

キユクロの声ができるが姿が見えない……。どこだ？

「ここだよここ」

声が出したのは足元からだ。見下ろすとそこには……。

「キユクロ!? 何やってんだよその姿!？」

そこに居たのは小学生くらいの子供だった!

「うむ、キユクロはまがんをつかうとふくさようによってしばらく子どもになってしまうのだ」

子供になってもキユクロは相変わらず偉そうだ。

「そうなのか……」

とりあえず納得したが他の皆は？

「我々は無事だ」

「ワシも無事じゃぞ」

「ああ……もうやだ……帰りたい……」

よかった……皆無事みたいだな……。いや、アマテラス様は無事と言っているのか? 使用人の人達はまるで彫像のようになったままでキズ一つない。魔列車は完全にグシャグシャになってるけど……。

「気を抜くな九頭竜」

タケミカツチさんが厳しい口調で言う。

「え?」

「敵が我々を撃墜したという事は、次は死体の確認に来る筈だろう」

い、言われてみれば確かに……。

「ほー、流石は倭国随一の武神じゃのう。ワシも同感じゃ」と、言いながらもバチバチツと地面に火花を走らせている辺りゼウス様は感知型の結界を張っているらしい。この辺りは流石主神だよな。

「む、思ったよりは早かったの」

ゼウス様の結界が侵入者を感知したらしく、俺達の目の前に黒い霧

が渦巻いて人型に変わってゆく。

「おや、これは意外な展開ですね。まさかこんな所で会うとは思いませんでしたよ」

「よくもまあ堂々と言うモンじゃのう小童が」

何だかスカした感じの男が現れた。

その隣に居るのはフリード……!?

「フリードオオオ!!」

俺の叫びに反応する様に奴は俺を見るとニヤリと笑った。

「おんや〜? コレはコレはあ? タマナシヘナチンのアザトくんじゃあ〜りませんかあ?」

「黙れ!! お前だけは許さない!!」

「ギャハハッ! そうカツカすんなってえ。とてもお上手だったぜ、ルーナちゃんのテクニクはさあ! 仕込んでくれてありがとうねえ!! ギャハハハハハ!」

殺す。はつきりそう決めた。

「おい、そいつは誰だ? 知り合いか?」

タケミカツチさんの問いに答えず俺は腕を鎌に変えてフリードの首を掻き切るべく斬りかかった! だがそれをスカした男が槍で阻んだ!?! 何だあの槍は……!?! サリエルの持っていた聖釘と似た空気を纏っている辺り相当ヤバイ代物なのは間違い無い!

「ふんっ」

軽い動作で男は俺の腕を弾き飛ばすとそのまま槍を突き入れて来た!

「うおっ!?!」

俺は咄嗟に両腕を触手に変化させてガードしようとしたが、槍は腕をすり抜け、そのまま胸を貫かれた!!

「ぐ……!」

俺はその場に膝をつく。何なんだこの槍は!?

「ほお、流星は赤龍帝の友人にして逸脱者。」

今の一撃を受けて即死しないとは」

スカした野郎がそんな事を言っているが俺はそれどころじゃない。

「ぐうう……!!」

胸から血が噴き出し、激痛が全身を襲う。

「きゆうどー！っっかりしろ!!」

キククロが駆け寄って来る。

ああ、そう言えばまだガキの姿のままだな。

すると、キククロを目視したフリードは

目を見開いた。

「ああ、キククロちゃんじゃありませんかあ！アンタとも色々ありましたねえ！覚えてますよ！おぼえていますとも俺様ちゃんはあるわけえ、死ねやコラア！」

フリードの野郎……!!

「キククロ！」

俺はキククロを抱きかかえるとその場から離れた！次の瞬間には先程まで居た場所が燃え上がる！また何か変な力を手に入れたのかアイツは！

「オイオイオイオイ！なーにかわしてんだよ！新しいパワーをゲットした俺様ちゃんの晴れ舞台を台無しにしやがってよお！どうしてくれんだテメエエ！」

フリードが理不尽にキレて喚いているがすぐに黙った。

「こうするだけだ」

チン、とタケミカツチさんが刀を力みの無い音と共に鞘に収めるやフリードの首が落ち、体が倒れてゆく。

「あ……？」

首だけになったフリードは自分の身に何が起こったか解らない様子だった。

「……へ？」

そして遅れて自分の首が落ちた事に気づき、  
「ひぎやあああああ!!」

絶叫を上げてフリードの体がのたうち回る。

「痛え！痛え！滅茶苦茶痛えぞ!!あああ!!」「首を跳ね飛ばされても死なぬとは……御主、ヘパイストス辺りに何かされたのか？」

ゼウス様が訝しむ様にフリードの首なしの身体を眺める。するとフリードが苦し紛れに言った。

「う、うるせえ!! てめえ等みてえなカス共が俺様ちゃんを殺せるなんて思うんじゃねえ!! て、てめえ等は此処で全員死ぬんだよ!!」

「そう言う奴は首を拾って無理やり接合させた。」

「ま、マジかよ……。」

「おい、貴様は本当に人間なのか?」

「タケミカツチさんが汚い物を見るような目で」

「フリードを見やりつつ訊ねる。」

「ああ? 俺様は神だよ! 崇高なる墮天使サマだ!

「崇める悪魔共があ! 電波! 電波電波電波ア!」

「な、何いってんだコイツ? 頭がおかしいのか? 言っている事がムチャクチャじゃねえか……! するとスカした男が肩をすくめる。」

「これでは話になりませんね。フリード君には一度下がってユダ様と共に後詰めに回ってもらいましょうか」

「ああん!? ふざけんな!! 俺様はもつと戦えるぜ!!」

「フリードが叫ぶも男は取り合わず、」

「七符。あの狂人を下がらせなさい」

「と、言うとなフリードの足下に陰陽陣が現れて奴の姿が消えた。」

「さて、邪魔者は居なくなりました。改めて自己紹介をしましょう。」

「私は曹操。一応禍の団の一派である英雄派の首魁をやっています」

「曹操と名乗った男は優雅な動作で一礼した。」

「英雄派だと? 確かアザゼルのおっさんから聞いた事がある。旧魔」

「王派と双璧を成す派閥の一つだった筈だ。」

「英雄派が掲げるのは人間による世界の改革。そのために神器の奪取を狙っている連中らしい。そのトップがこの男と言う訳だ。……にしては微妙だな。」

「何でコイツはこんなにも堂々としているんだ? まるで自分が負けるとは微塵も思っていないみたいじゃないか……。それに曹操の隣に居る女は何者なんだ? チャイナドレスに金髪のロン毛なのに切れ長の目を持つ顔立ちだが……。ロクなものじゃなさそうなのは解る。」

曹操にベタバタひつついている辺り愛人か何かか？

「……随分余裕そうだな」

俺は警戒しながら曹操に話しかけた。

「おや、そんな事はありませんよ。所で我々と同盟を結びませんか？」  
「同盟だと？」

な、何をぶつ飛んだ話をしてやがるんだコイツ!? どの世界に列車を撃墜するようなテロリスト集団と交渉しようとする馬鹿がいるんだよ！

「そうです。我々は今、貴方達に対して敵対の意志は無い。むしろ共闘できるならしたいくらいですよ。この世界を我々人類の手に取り戻すために」

曹操は真面目な表情でそんな事を言ってきた。どうやら本気で言っているようだ。

「人類の手に……?」

俺は思わず聞き返す。

「ああ、九頭竜君。この世界について君はどう思う?」「……いきなりそんな事言われても困るんだけどよ。とりあえず言えるのは、こんなのが現実であってたまるかって事かな。正直に言っただと思いたいよ」

俺は溜息交じりに答えた。

「夢といっても悪夢の類だろうか？」

天使は聖書の神を失った事で暴走し、悪魔は人間を転生悪魔にしようと躍起になっている。そして堕天使は自分達の都合の良いように世界を作り変えようとしている。それは天津神もアスガルドの神もギリシャの神も変わらない」

「……」

「そんな中、神々は人間の味方をする者達と悪魔の側につく者達の二勢力に分かれてしまっている。

どちらについても待っているのは滅びの道のみだ。

このままでは人類史は滅亡してしまう。それを防ぐために、我々は力を蓄えなければならぬのだ」

……要するに今の世界の現状をどうにかするために戦力を欲しているってことか？

「ふーむ……。ワシも含めて神々も色々やらかしておるからな、耳が痛いわい……」「はんせいしろ、じーじ」

ゼウス様は苦笑を浮かべ、キュクロは辛辣な言葉を浴びせた。

「しかし曹操とやら、何故ワシらに同盟を申し込んだ？」

「簡単な話ですよ。私達は貴方達の力を借りたいのです。この世界で起きている問題を解決するには我々の力だけでは足りない。ならば他の勢力の力も借りれば良いと思っただけです。人間の手に取り戻すと言ってもこの世界は人間だけのものではないのですから……」

「……成程な、そういう事かよ」

確かにある意味一理あるな。俺達だけじゃ解決できない問題もあるし、何より俺達が狙われている以上、こいつ等と手を組めば安全というわけだ。

「それで、返答の方は如何でしょうか？」

まあ、普通はイエスって言うんだろうけどな……。

「目をかけた人間達に余計なお世話だといわれた……マジもう無理……引き籠もる」

アマテラス様……アンタって人は……！　そういつてアマテラス様は膝を抱えて列車の残骸の中に引きこもり始めた。おいおい……。そんな中で俺は確認する様に尋ねる。

「なあ、曹操さんよ。アンタのいう平和な世界じゃ悪魔や墮天使、天使はどうなる？」

すると曹操は微笑みながら答えてきた。

「勿論、善き者は迎え入れるとも。正しきものには寛容に、悪しきものは裁く。それが皆の理想とする英雄の姿なのだからね」

堂々と迷いなく言いきった。こいつは本気だ。なら、俺も本気で答えなくちゃいけねえな。

パシユン！と俺の膝から乾いた音が響き、矢が曹操の脇腹に深々と突き刺さった！

「がはっ……!？」



「主様!？」

何故だ、と言いたそうに曹操は俺を見る。俺は不敵な笑みを浮かべて曹操を見返した。

「皆の理想? 皆って誰だよ? チンピラの俺やドスケベのイツセーはぜってえ『皆の理想』とやらの中には入ってねエよなあ! 名前も知らねえ奴等の都合で排除されるのはゴメンだからなあ!」

「ぐう……!」

曹操は苦しげにうめいて矢を引き抜く。

「それによオ、俺は正義とか大義名分なんかに興味は無え! ただルイーナを傷つける奴と俺が気に入らないもんをブツ飛ばすだけだ!

お前らが正義のテロリストならよお! 俺は無法のならず者で十分だぜ!」

「ならば崇り殺してくれるわならず者めがあ!」

「やってみろよクソババア!」

七符と呼ばれた女が7本の尻尾に邪気を纏わせて襲い掛かってきたので、俺は全身にオーラを込めて迎え撃つ。

「ガアッ!」

「オラアッ!」

拳と尾がぶつかり合い、周囲に衝撃波がまき散らされる。

「馬鹿めが! 妾の呪法は尻尾のみではない!」

「なっ!？」

まるでシユタークさんの符術みたいに札が飛んできて、俺の体に張り付いた。すると体が動かなくなり、徐々に力が抜けていくのが解る。

「ハハッ! その状態なら貴様の攻撃など効かぬわ!」

動けなくなった俺をあざ笑うかのように七符は勝ち誇っている。

「調子に乗ってんじやねえよババア……俺のターンはまだ終わってないんだよ……」  
「フン、強がりを言いおって、所詮は負け犬の遠吠えよのお」

俺は何とかして拘束から逃れようと試みるが、どうにもならない。だがその時、不意に身体に張り付いていた札が剥がれ落ちた。どうい

う事だ、と思っっていたらタケミカツチさんに引きずり出されたアマテラス様が解呪してくれたらしい。

「ああ……寒い、面倒くさい、楽したい……でも仕方がないからやってやる……」

能力はスゲーのに思っていたイメージと全然違うんだよなあ!?

このアマテラス様『皆の理想』とは明らかにかけ離れてない？そこはタケミカツチ様も同意しているのか苦笑している。

「ふむ、これは面白い」

曹操は興味深そうに呟いていた。

「やはり俺の目に狂いはなかったようだ。九頭竜君、君は実に興味深い存在だよ」

「取り繕っても腸煮えくり返ってるのがバレバレだぜ？ 狂いが無かったら不意打ちなんて喰らうわけねえだろうが」

そう言う曹操はフツと笑ってきた。この程度の煽りじや動じる事も無いか。やりづれえな……。俺の『燃える三眼』による焼却もどろろというワケか発動しねえしな……。

「貴様！主様を侮辱するかあつ！」

「事実の陳列だババア！」

激昂した七符が再び尻尾を叩きつけてくる。俺はそれを腕で受け止めた。『冥獄長の辣腕』による機械の多腕だから呪力はヘカトンケイルのメカ爺さんが受け持つってワケだ！すまんメカ爺さん！

「何だ?!」

そして七符は驚愕していた。まあ、そりやそうだ。何せ俺の腕は焼け爛れるどころか傷一つ付いていない。それを見た曹操は 感心するのように口笛を吹いた。

「ほう、七符の呪いをこうも容易く無効化するとはね。その力、益々欲しくなった」

曹操は俺の力に目を輝かせている。だがそれは目新しい玩具に心を奪われた子供の目に過ぎなかった。

「悪いね、やっぱ俺、アンタの事は好きになれねえわ」

俺がそう言う曹操は残念そうにため息をつく。

「そうか。七符、始末しろ」

「承知しました主様」

そう言つて七符はさっきの術符を放とうとしている。「フハハハ！ どうせそこな引きこもりのアマテラスとやらに解呪させようとするのであろうが無駄なことよ！ 既に司馬懿の陣略は発動しておる！ これで終わりぞー！」

「やべえー！ 皆逃げろおおっ!!」

俺達は急いでその場から離れようとするが、

もう遅かった。

シユン！と音を立てて俺達の周囲に札が出現し、

それらが爆発……

「しねえんだよなあ!!」

「「「「?」」」」

俺が叫ぶと全員が驚いた顔をする。

それもそのはず、俺達の周囲にあった札は全て焼き払われていたからだ。

「糸の……結界……!?!」

七符は呆然と呟く。そう、俺が七符の尻尾を多腕でガードしたのはもう片方の腕で糸の結界を作り、自動で『燃える三眼』を発動させるためだったんだ。

「テメーらの国の偉い人から教わらなかつたかあ？ 『彼を知らずとも己を知らば五十戦危うからず』ってよオ!!」

俺は『冥獄長の辣腕』を『冥獄長の敏腕』へとモードチェンジ！多腕がまるでガトリングガンさながらに猛烈なラッシュを繰り出す！

「うおおおおおおっ!」

「があああああっ!」

ズガガガガガガアン!!

俺の両腕の連打を受けた七符は吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。

「まだまだ行くぜエー!」

「そこまでにしてもらおう」

「あん？」

音もない超高速の一閃により俺は胸元を裂かれた！

だが斬られたというのに痛みはない……!?

「お、お前は……!？」

「……」

黒の重装を纏う騎兵がそこには居た。

そいつは俺を斬りつけたまま微動だにせずこちらを見据えている。

「チッ、良いところで邪魔が入ったもんだ」

俺は舌打ちしながら距離を取った。

「……手酷くやられたな曹操」

「面目ない」

どうやら治癒をすませたらしい曹操は騎兵に五分の口を聞いてい  
る。あの騎兵は兄弟分つて事なのか……？

すると奴が噂の。

「フン、何を勘違いしておるか知らぬが妾は負けてなど……」

「ならば何故、震えているのだ。」

婦人の仁、匹夫の勇という言葉はあるがその逆もあると言うわけ  
もあるまい」

「ぐぬぬ……」

アイツ、確かイツセーは呂布だつて言っていたが本当にそうなの  
か？とてもそうは見えねえな。

「所で九頭竜安里。コイツの身柄と引き換えに今回は手打ちとせんか  
？」

呂布はいきなりあの運転手の女にナイアを運ばせてきた。

「な、ナイア……!？」

そこにはあちこちズタボロになったナイアの姿があった！

「おい！何やってんだよナイア！お前、そんなボコボコにされて死に  
かけるキャラじゃねえだろうが!!」

俺は慌てて駆け寄るがナイアは弱々しく笑みを浮かべただけだっ  
た。クソッ！ 一体誰の仕業だ！ って呂布しかいねえわな！

「とはいえ女だてらにかなりの強敵だった。我が勝てたのは状況が味

方をしたからに過ぎん。で……どうする？ この提案、呑むならこの女の身柄は引き渡す」

クソツ……呑むよ！ 煮え湯だろうが泥水だろうが引っくり返して覆水盆に返らず、になるよりマシだ！

「分かった、乗ろうじゃねえかその話」

こうして俺はナイアを引き受け、

曹操達を見逃すことにした。

だがそんな俺にゼウス様やタケミカツチ様は何も言わなかった。文字通り雷を落とされるかと覚悟はしていたが……。アマテラス様は少し愚痴っていたが何とか俺と車掌さんで宥めた。ゲイトさんに救難のメッセージを送り、暫く待つことにした。

「……あー、疲れた」

幸か不幸か、寝台車はほぼ原型を保っていた。何でも有事の際に備えて特に頑丈に作ってあった様だ。

それにしてもナイアの奴、何で俺についてきてるんだ？

「なあ……俺寝たいんだけど」

「まあ、そう言うなよ」

二人きりだから随分蓮っ葉な口調で喋るよなあ。

「でもお前があそこまでやられるなんて何があったんだよ？」

俺が尋ねるとナイアはバツが悪そうな顔をしながら答えた。

「落ちた先が海だったんだよ」

「海？ お前カナツチか？」

「まあ、何といたしますかね。光の届かない海の底では唯一無二にして輝くシスターナイア様の力が発揮できないんですよ」

何言ってるんだか……。まあ、海の側でナイアは戦えないって解って何よりだ。つーか……。

「何で脱いでんだよ！」

そう、何故かコイツは全裸だった。

「いや、ほらさっきまであんなに激しく戦ったじゃないですか？ 汗とか色々凄くてですね」

「そりゃそうだが服ぐらい着ろよ！」

「まったく、コイツはホントにもう……！」

「ん〜？　もしかしてルイーナに逃げられてチンポコイラついてんですか？」

俺が呆れていると突然、ナイアが俺の前に座り込んだ。そして俺の股間を弄り始める！　コイツ、一体何を!?　俺は慌てて止めようとするが……！」

「まあ、よくある話だろ。慰めツクスってヤツだよ」

ナイアはそう言いながら俺のズボンを脱がせ、俺のアレをしゅつしゅつ、と扱き出す！　挑発的な笑みを浮かべてナイアは更にチロリ、と赤い舌を出す。や、ヤバイ……！　俺のモノはみるみると大きくなっていく！　俺は必死に抵抗するが、いつの間にか俺の手はロープのような物で縛られていた。くそ、こんな時にも能力が使えるのかよ！

「おやあ？　随分あっけなく勃起しましたね。私みたいな美少女に迫られたら仕方ないですけど、ギャハハ！」

慰められているのかバカにされているのか……頭がぼーつとしてきて、よく分からなくなってくる。そんな中でナイアは俺のモノをおっぱいで挟み込んでいく。

「うふふ、どうですか？　私のおっぱい気持ちいいでしょう？」

確かに柔らかくて、温かくて、弾力があって……正直、最高だ。俺の気持ちいい所やしてほしい事を完全に解っている動きだ……。

「うわ、マジでデカくなりましたね。どんだけ溜まってたんですか？」  
そんな事を言われても、今の状況じゃ何も言えない。俺はただひたすらに快樂に身を任せる事しかできなかった。

「おや？　ビクビクしてますねえ。出ちやいますか？　チンポコから悔し泣きザーメンドピユドピユ〜！　ってしちやうんですか？」

「あ……ああ……」

俺は情けない声を出してしまう。

「あらら、可愛い。じゃあそろそろイカせてあげましょう」

そう言うとなイアはパイズリの動きを速める！　ダメだ！　もう我慢できねえ！

「ぐう……!!」

呻くように歯を食いしばりながら、俺はナイアを汚していく。

「きゃっ、熱い！ いっぱい出てますよ〜♥」

俺はナイアに精液をぶっかけていくとヤツは満更でもない様子で甘受していく。

「どうでしたか？ ナイアちゃんのパイズリマツサージは？」

「はあ、はあ……。すげえ良かったぜ」

正直、今までで一番興奮してしまった。

「うふふ、それは何より。じゃあ次はいよいよパコパコ大会と参りましょうかねえ？」

パコパコ大会？……何だそりや……。いいから……セックスさせろよ……。俺の……。俺だけの……。ナイア。

「あーあー、視点も定まらない様子になってまあ……。なあナイア様は優しいから解説してやるよ。お前はこれからこのナイア様とマジハメしてガチアクメ決めた方が勝ちだからな？」

なるほど……。そういう事か。なら話は早い。早く……。挿れたいなあ。

「……おい、聞いているか？ ほら、見てみるよ。お前のガツチガチになったチン○コがナイア様に欲情してるぞ？」

そう言っつてナイアは俺のモノを対面座位の姿勢でズブズブとマ○コの奥にまで挿入する。

「うああっ……。」「ほおおお……。♥」

処理済の脇を見せて、髪をかき上げる仕草をしながらナイアは目を剥いて喘ぎ声をあげる。むわっと湿気を帯びた香気がスチームさながらに湧き上がる。

「ほら、俺のが入ってんぞ？。これが欲しかったんだろうが！」

そう言っつて俺は腰を動かし始める。

ぐぢゅっ！ぐぢゅっ！ずぶずぶ!!

ぶしゅっ！びちゅっ！ばぢゅっ！

「はっ、はっ、はっ、はっ！ どうだ！俺のが欲しいって言えよー」

「ひいん！ はひっ！ もっと、突いてください！ナイアの敗北オマ○コぐつちやぐちやにしてくださいあいー！」

ナイアは俺の肩に手を置き、激しく俺のチ○ポをマ○コの中に抑え込もうする！ その瞬間、ナイアの膣内がきゆうっと締められ俺のチ○ポを離さない！

「はあ、はあ、はあ、はあ」

「はあ、はあ、はあ、はあ」

俺達は息を荒くしながら見つめ合う。

「んひ、ひひっ？ どうした安里くん……ちよつと演技したらコレだよ。まったく、この変態が」

「うるせえ。テメーこそ随分ノリ気だったじゃねえか」

「まーね。こういうプレイもたまにはいいかもなって思ってたね」

ナイアは舌を出して笑う。

「へっ、そうかい……！ 所詮俺とお前は身体だけの関係だったよな！」

苛立つ様に俺は叫ぶ。

「……ふっ、確かにそうだ。でも、そんな私達だからこそ、お互いの事を理解してる。……そうだろ？」

ナイアは俺の頬に手を添え、優しく微笑む。

クソ……。俺はナイアを愛しているのか？ ルイーナも愛しているのに……。なのはどうしてこんなにも胸が苦しいんだ？

「……ああ、そうだな。だけどよ、俺はやっぱりお前の事が嫌いだぜ」  
「奇遇だな。私も同じ気持ちだよ。でもセックスはいいだろ？ 私達の身体の相性は最高だ！」

そう言いながらナイアは再び腰を振り始める。

パンツ！ パアン！ グチュ！ズブツ！

肉と肉が激しくぶつかり合い、卑猥な音が部屋に響き渡る！

「ふっ、ぐっ、ぐうっ!!」

俺は必死に歯を食いしばりながら耐えるが、それでも漏れてしまう！

「おい、我慢すんなよ。出しちまえよ。嫌いな相手にもチ○ポぶち込めるケダモノ野郎だって証明しろよ」

そう言うとなイアはさらに動きを速める！ち、違う……！違う、違う、違う、違う!! 俺は……俺の内心は……！



「何が違うんだよ？オラッ！ケダモノザーメン出せ！よこせ……！私だけを見て……愛してほしいの……貴方さえいてくれれば……何も要らないの……」

ナイアの瞳から涙が零れ落ちる。

「私は……寂しいの……」

その言葉を聞いた瞬間、俺の中で何かが弾けた。

「うおおおおおお!!」

俺の理性は吹き飛び、本能のままに腰を打ち付ける！

「あひい?! 激しいっ！ ああん！ああっ！」

ナイアは俺を押し倒し、狂った様に腰を振る。愛液は粘りと濃さが増しており、ピストン運動を繰り返す度に泡立ち溢れ出る。

「あはは！あははははは!! どうしたの？ 急に積極的になって。いいよ、いいよ！ 好き！大好き！ もっと、もっとして！ ああっ、イク！イツちゃううううう!!」

ナイアは絶頂を迎え、同時に俺も限界を迎える。

「ぐおおおお！」

ドピュツドピュ……!!! 大量の精液がナイアの子宮を満たしていく。

「あは……あはは……。いっぱい出てる……。あつたかい……オマ○コ負けながら、勝ってるう♥ガチアクメ大会優勝……♥ふひひ……♥」

ナイアは幸せそうな顔で笑い、俺の胸に倒れ込む。

「……ふう。楽しかったぜ。またやろうな?」

そう言っただけでナイアは俺の唇に触れる様なキスをした。

「クソ、誰がやるか……」

「おやおやく? 口ではそう言ってもケダモノチ○ポは正直みただが?」

「うるせえ！黙ってる！」

俺はナイアを払い除けようとするが、

「おっと、危ない」

と言っただけでナイアはそれを軽々と避ける。

「ははは！怒んなくて。それよりさ、お前のチ○ポまだ元気じゃん。一発ヤつとこうぜ？ 今度は普通にさ」

普通って何なんだよ……。俺はナイアを愛したいのか……。それとも欲望を満たしたいだけでルイーナやナイアの事は本当に愛していないクズ野郎に過ぎないのか？

「そうに決まってんだろ？ テメーは所詮、自分に都合の良い女にだけしがみつくと鼻垂れのクソガキなのさ。おかあさーん！ ってな！ ギャハハハハ！」

うるせえ！うるせえ！うるせえ!! 俺は……。俺は……。俺の内心を見透かす様な不敵な笑みを浮かべ、裸婦像の様にナイアは俺のそばで寝そべる。

「ほら、来いよ」

クソ……。何て惨めな気持ちなんだ……。！何も、何も見えない……。！俺はただナイアを犯して、犯して、犯しまくった。その行為に愛情なんて欠片も無い。俺は……。最低のクズ野郎だ。

「ふふつ、お前も大概イカれてるよな……。でも、そんなところが私は好きだぜ」「……………」

ナイアは俺の下で嗤っていた。

俺はもう何も答えられなかった。何も答えたくない……。

「おいおい、そんな落ち込まなくても良いじゃねえかよ。別にお前がクズでも私は気にしないぜ？」

「……………」

「まーた無視かよ。……。まあ、いいけどな♥

う、おほつ♥ また、イク……。♥愛情ゼロチ○ポ……。いい♥」

イツセー……。お前は どうしている？ お前ならこんな時どうやって乗り越えられるんだ？ 教えてくれ……。……。

※第68話（イツセー×リアス 本番なし）

「んっ♥あっ……♥」

今日のリアスさんはいつにも増して色っぽく喘いでいる。今日は久々に2人きりだからか、いつもより興奮しているようだ。

（……にしても）

今、俺の目の前にはとてつもなく大きいおっぱいがある。それはもう大きくて柔らかさそうで、思わず触りたくなってしまいうくらいに魅力的だ。そしてその先には乳首がピンツと立っている。

（……やばい、我慢できない！）

俺は無意識のうちにリアスさんの胸を鷲掴みしていた。

むにゅっ♡

「ひゃあんっ♥」

指先が沈むほど柔らかい感触。それなのにハリがあって弾力性もある。何とも言えない至福の揉み心地だった。

「ちよっ、ちよっ！そんないきなりい……ああんっ♥」

リアスさんの言葉を無視して夢中で揉んでいるうちにどんどん大胆になってくる。今度は両手を使って思いつきり揉んでみた。

ぐにゅうううう！！もみもみもみっ！

「やんっ！だめえ……♥そんな強くしちやダメエ……♥」

いやらしい手つきで乳房を弄られながら悶える姿はとても可愛らしく、見ているだけで理性が崩壊しそうになる。しかしまだ足りない。もっと激しくしたい衝動に駆られた俺はついに行動に移すことにした。

「ぎゃうんっ!?!」

俺は両手でおっぱいを下から持ち上げると、そのままリアスさんの胸の谷間へとそそり立つ肉棒を挟み込んだのだ。

ずちゅるるるっ♡ぬぶぶっ……♡

「あふう……イツセーのおち○ポお……♥」

たわわなおっぱいでパイズリしながら上目遣いで見つめてくる。その姿はあまりにも卑猥すぎて一瞬で射精してしまいそうだ。だが

まだ終わらせない。俺は腰を動かしてさらに刺激を与えていく。

ぱんっ！ぱちゅんっ！ぱちんっ！ 胸の間を何度も行き来させながら上下運動を繰り返す。するとリアスさんの口から甘い声が漏れてきた。

「ああっ！すごいっ！イッセーの硬いおチ○ポで私のおっぱい犯されてるう！」

パンツ！パチンツ！ずぶっ♡ずぶずぶずぶっ♡ 激しいピストン運動のたびに大きな胸が激しく揺れ動く。それがまた視覚的にエロく感じてしまう。汗ばむリアスさんの肌は熱を帯びており、まるで媚薬のように身体中へ浸透していく。その一方でリアスさんは俺のヒクつく亀頭に鼻を押し当てて匂いを嗅いでいた。

すーっ♡くんくんっ……♡はしたなく舌を伸ばして尿道口を舐め回してくる。どうやら我慢汁の味が気に入ったみたいだ。

(うっ、ヤバイ……もう出ちまいそうだ)

あまりの快感に俺の股間は限界寸前まで張り詰めていた。このままでは胸に出す前に果ててしまいそうな気がする。そこで俺はラストスパートをかけるため一気にペースアツプさせた。

「ひゃんっ!?すっ……激しすぎるのお♡」

凜としたお姉様然としている普段のリアスさんとは

かけ離れた乱れっぷりにますます興奮が高まっていき、やがて絶頂を迎えた瞬間――

どびゅっ！びゅーっ！ビュッルルルルー!!!

「きゃあああっ！熱い！いいいいっ♡」

勢いよく飛び出した大量の白濁液が彼女の顔に飛び散った。「んっ……凄いわ……こんなにいっぱい出して……」

頬についた精液を指で掬って口に含むと妖艶な笑みを浮かべる。その表情を見て再び勃起してしまうのだ。

挿れたい……！リアスさんの中に思い切りぶちまけたい！ 欲望を抑えきれなくなった俺は彼女に覆い被さるように抱きついた。そしてキスをしながら下半身の方へ移動していき、秘部に触れようとしたその時――！

「ま、待って!!」

リアスさんの顔がさあつ、と青ざめた。

「え?どうかしましたか?」

な、何か不手際があったのだろうか……?するとリアスさんは俺の手を恋人繋ぎにし、寄り添いつつ話を続けた。

「ごめんなさい……今日はちよつと……」

リアスさんの気分がノラなかつたのだろうか?

あんなに乱れていたのに……?いや、リアスさんに

無理強いしてはいけない。ここは涙を飲んで引き下がろう。

「本当にすみません!気付かなくて……!」

「ううん、気にしないで。それにあなたが悪いわけじゃないもの」

そう言つて優しく微笑んでくれる。何て良い人なんだろう……!

「でも……どうしても我慢できないんです!お願いします!セックスはダメでも……もっとリアスさんとエッチなことがしたいです!」

土下座も厭わず必死に訴えかける。

「もう……仕方がない子ね」

呆れるように言いつつもどこか嬉しそうだ。

「けど、暫くはダメなの……♥」

その代わり……おっぱいとお口でなら幾らでもしてあげるから♥」

おっぱいとお口でなら幾らでもしてあげる……!?!? こんな素晴ら

しい日本語が存在していたなんて……勉強不足だった!

「ありがとうございます!」

「ふふつ、ホントに甘えん坊なんだから♥」

こうして俺はリアスさんの乳首やクリトリスを舐めてイカせまくったり、おっぱいで挟んでもらったりと至福の時間を過ごしたのだった。

1

所変わって、いよいよ会談の場だ。

(いや……昨日のリアスさんの

エロエロっぷりは凄かったなあ)

引き締めようとはするのだがつつい顔が緩んでしまう。リアス

さんの痴態を思い出しているうちに股間がムクムクと反応し始めた。  
『お盛んな所悪いがな、相棒。』

今は多神連合結成の会談を控えているのだぞ?』

そ、そうだった! ゆくゆくはサーゼクス様の義弟になる身として、  
しつかりしないと!

「よし! 頑張るか!」

と頬を叩いて気合を入れ直す。と言っても何を頑張れば良いのか  
分からないが。と、そこにイリナとミカエル様、ポールクさんとゼノ  
ヴィアがやって来た。

「お待たせイッサー!」

「こんにちわイッサーさん」

ミカエル様とイリナは気さくに挨拶してくれたが、よくよく見たら  
イリナの頭の上には輪っかがあるじゃないか! これはまさか……天  
使の力!?

「ふふん、そうよイッサー! 今や私、紫藤イリナは天界に所属する天使  
なの! つまり私の上司はミカエル様なのよ!」

そう言うといリナは自慢げに胸を張る。おおっ! 凄いなあ!

「そして天使名はラヴリエル! これからよろしくね!」

エル、つて名前がつくから大天使って事かな? 大出世じゃないか!  
そう言えば旧大天使派はシステムを一旦掌握したものの奪還されて  
今も抵抗を続けているらしい。サリエルも倒しきれていないし、神器  
は聖書の神が分かれたものだから、向こうの方が色々詳しいんじゃないかな?

なんて考えていると今度はポールクさんとゼノヴィアが俺の前へ  
やってきた。相変わらず涼しげな顔つきをしているけど以前と違っ  
て殺気のようなものを感じない。

「久し振りだなイッサー!」

まずゼノヴィアが話しかけてきた。ゼノヴィアも天使になったの  
かと思ったか輪っかの様なものや翼は見当たらない。

「フフ、あくまで私は人としての強さを極めるつもりだからな。今は  
ポールクに師事する形で修行中なのだ」

そう言って彼女はボールクを指差す。

「えっ!？」

「驚くのも無理はない。だがこの男こそが今の私の師匠であり、私が超えるべき壁なのだ」

そう言われて俺は改めてボールクさんを見た。

「まあ……押しかけ弟子の様なものだ。貴様が想像するような関係じゃあない」

どうやらボールクさんは俺が邪推したような事はしていないようだ。安心したぜ……。いや、安心するも何もゼノヴィアは俺の恋人というわけではないような……。でもちよつと嬉しいかも……。すると次はイリナが一步前に出て俺の手を握ってくる。

「もう、イツセーったら。いつまで経っても会いに来てくれないんだもん。寂しかったんだからね?」

イリナは上目遣いでこちらを見つめてくる。天使が悪魔に色目を送ってよいものなのか?

「ご、ゴメン……」

「ううん、いいの。それより私、ずっと待ってたんだよ?あの日……初めて会った時からあなたの事が忘れられなくて……。もう一度会えた時の為に強くなろうと思つて頑張つてたら天使になれちゃった!」

「そ、それは良かったね……」

頑張れば天使になれるものなのか! ミカエル様は苦笑していたしボールクさんは呆れた顔をしているけど、ゼノヴィアだけは真剣な表情で俺達の会話を聞いている。そう言えば多神連合結成の前に聞いておきたい事があったな。

「そう言えば……『永劫に回帰するもの』って、知っていますか?」

「!」

俺の質問を聞いたミカエル様とボールクさんの表情が変わった。

「……その単語を知っているとは驚きだな」

「やはり、何か知っているんですね」

「貴様よりはな……。だが、その話は誰かにしたか?」「いえ……」

まさかあんなチートどころじゃない能力を持っているなんて思わ

なかったし、話したところで信じてもらえないだろう。

「ならいい。迂闊に公表すれば世界はパニックどころの話ではなくなる」

うーん……やはりアザゼル先生の言う通り、かなりヤバい代物なんだろうなヤツは。

そうこうしているうちに会談の時間が近づいて来た。

「ではそろそろ時間ですので行きましょう。皆さん、宜しく願いしますね」

ミカエル様達を見送りつつ、俺は改めてアザゼル先生の所へと向かった。するとアザゼル先生はシユタークさんとトウーさんを侍らせてソファに座っていた。スーツを着こなしているのはいいんだけどさ……何かマフィアみたいだなあ。

「おう、遅かったじゃねえか。こっちは退屈だったぞ」

傍らのシユタークさんはいつもの中華服なのは良いとして、何故かトウーさんまでチャイナドレス姿になっていたが、ギチギチにピッチピチになってるからボディラインがハッキリ出てしまっている。

「やあ、イツセー君。元気がイ？今日はよろしくネ」

「あ、はい。こちらこそ……」

いつにも増してミステリアスな雰囲気醸すシユタークさんに軽く俺は会釈する。

「ほれ、座れよ」

とアザゼル先生に促された俺達はテーブルを挟んで向かい側の席に着いた。

「イツセー、お前も知つての通り今回の会談は多神連合の結成に向けた重要な会議となる。神滅具を持つお前は俺の隣に座れ」

「えっ!? 俺も会議に出るんですか!？」

「当然だ。お前はこの辺りじや原初の魔王であるイナンナを倒して、ベルゼブブも退けた英結扱いなんだぞ？ おっばいヒーロードラゴンと呼ばせてもいいぐらいだぜ？」

アザゼル先生はガハハと豪快に笑っていた。ひ、ヒーロードラゴン……。思えば随分遠くに来たもんだなあ。



「それは良いんすけどシユタークさんとトウーさんは？」

「ハハハ、ボクはフリーの悪魔祓い師だからネ。そこまでの権限は無いヨ」

軽く笑い飛ばすけど俺は不思議だった。

シユタークさん位の実力があるなら墮天使勢力の大幹部になんて簡単になれそうなものだけど……。アザゼル先生とも大人の関係だしさ……。いかん、少し黄昏れてしまった。

「ン〜……。？　しかし随分鍛えたみたいだネイツセイ君。いつその事、フリーの身から君の眷属に永久就職するのモアリ、カナ？」

俺の考えを読んだのか、シユタークさんが俺の首筋や腕を撫でながら妖しい視線を送ってくる。い、いかん！　俺にはリアスさんという心に決めた人がいるんだ！でも一夫多妻っていうのもハーレム神に一步近づけそうだな……。ってコラコラコラ！　シユタークさんは俺をいろんな意味で一人前にしてくれた恩人だぞ……。！

「あ、あははは……。！」

「フフフ、半分は冗談だヨ。皆のために益々励んでくれたまエ。なんちやって」

やっぱりこの人は掴み所が無いなあ。でもイヤな気分にはならない。この人といるとまるで自分が自然体でいられるような感覚になる。でも眷属って……。今は黒歌にトウーさんという心強い二人がいるからなあ。

するとそこに朱乃さんに案内されたオーデインさん達が入ってきた。俺達の対面にあるソファへ腰掛けた。

まだ会談の時間じゃないから、前もつての根回しか何かかな？

「久々じゃのう赤龍帝よ。今日は折り入って頼みがあつてのう」恭しく頭を下げるオーデインさんについて、こちらもつられて頭を下げてしまふ。「な、何でしようか？」「うむ。実はのう……。ロスヴァイセのことなんじゃが、あの1件以来すっかり落ち込んでしまつてのお」

ロスヴァイセさんといえばヴァルキリーの一人で北欧の主神であるオーデインの付き人の女性だったな。確かに人前で裸にされるわ、シャルバにレイプされかけるわと散々な目に合わされたから

なあ。

「うう……まんず都会は恐ろしい所だべ」

レディースーツを着こなしているのにロスヴァイセさんは顔色を喪い、ガタガタと震えていた。

『どうやらそのヴァルキリーはすっかり男性恐怖症になってしまったらしいな。カウンセリングでも受けた方がいいんじゃないのか?』

うーん、それも一理ある。でもヴァルキリーのカウンセリングってどんな事をやるんだろう?

「それでの、お主らのところに預かってほしいのじゃよ。今のままでは仕事に差し支えるからの」

確かに……。ヴァルキリーは戦士の魂をヴァルハラに運ぶ役目を持つている。それができないとなれば戦力外通告を受けるかもしれないし、他の神々から見放されてしまうだろう。

「分かりました。それではこちらの方で責任を持って預かります」

「おお、そうか! それは助かるわい。で、スコグルの方はあの安里に預ける事にしたでの。話を通しておいてくれぬか」

くれぬかって! そういう話は親友の俺じゃなくて上司のニグラさんやゲイトさんにしてくれよ!

とはいえノーといえない赤龍帝なんだよな、これが。

「は、はい。了解しました……」

「まんず、ご迷惑をおかけしますだともよろしくお願い申し上げます」

深々と頭を下げるロスヴァイセさんだが、オーティンさんの方はそんな彼女の肩に手を置いて微笑んでいた。ま、まあ頼れる仲間が増えたと考えよう。

そして会談開始時刻となったが何やら天使や墮天使の方々わざわざめき出した。何事かと思つて確認してみると、ゼウス様とアマテラス様の乗ったグレモリー家の魔列車が撃墜されたという一報が飛び込んできた。

マジかよ!? 魔列車には安里とナイアさんもいるんだぞ!

「……ッ!」

俺は思わず席を立ち、窓の外を見やった。

そこには墜落したと思われる魔列車の残骸の映像があった。嘘だろ……まさかこんな事になるなんて……!! 俺は激しい怒りを覚えた。会談の空気は一変して張り詰めたものになり、俺以外の人達は緊張した面持ちになっていた。アザゼル先生もさっきまでの気楽な雰囲気とは打って変わって真剣な表情を浮かべている。すると会場の上空に複数の男性が現れた。

「ロキ様!? それにトール様! バルドル様まんで! なしてな!」

現れた男達を見てロスヴァイセ様は方言丸出しで驚愕していた。そりやそうだ。ロキ、バルドル、トール。三者とも北欧神話の主神じゃないか! けど後ろの天使の羽を持つ奴と、陰のあるローブのメクカレさんは何だろう? けどロキと呼ばれた魔列車の残骸を映し出していたリーダー格の男は俺達に視線を向けた。

「やあやあ、初めまして諸君。私はロキ。北欧神話の神にして不吉の凶星（トリツクスター）だ」

俺達は突然の出来事に言葉が出なかった。自分で言っていれば世話は無い。

「ロキ、トール、バルドル。これは何のつもりじゃ?」オーディン様は怒りを抑えた声で訊ねた。

「何のつもりじゃ、とはいよいよ耄碌したか老害め」ロキは明らかに馬鹿にするような口調で言い放った。

「我々は戦い、鍛え、神々の黄昏に備えるのが本来の有り様。欲しければ奪う。満たされねば乱を起こす。」

風が吹かねば真水も澱んで腐る。わかりきった事だ」  
何がわかりきった事なんだか……。

「貴様らは神でありながら和平、共和、平等などという懦弱な人間の真似事をしている。だから私達が神の在るべき姿に戻してやるのだ」

「……つまり、戦争を仕掛けに来たということですか? それに懦弱という言葉は気に入らせんね」

トウーさんの言葉にロキは愉快そうに笑みを浮かべた。まるでテロリストの言い分じゃないか! いや、主義主張が無い分テロリストの方がマシかもしれない……。

「まあ、そういう事だからさ。キミたちみたいになつまんねー奴らはさ、俺たちの肥やしになってくんないかなあ？　って思ってたさ」

「な、なんだ！あのウェーブパーマのチャラチャラした奴は！神なのに何て言い草だ！」

「バルドル……。満たされすぎて歪んだか……。光の神たるお主を正しく導けなんだのはワシの落ち度でしかないが……」

「チャラ男の暴言に対してオーデイン様があぐりと肩を落とす。恐らくオーデイン様はバルドルって奴に将来を託そうとしたのに、あんな風に育ってしまったのがショックだったんだろうな……」

「気を落とすな、オーデイン卿」そこで真ん中の厳つい

おっさんが口を開いた。

「我々として人の事は言えん。平和に慣れ、戦う意義を忘れ、京楽に耽り、大地を貪った。誰もが好き勝手にこの星を穢したのだ。故に今この世界は危機に瀕している。全ては再生されるべきなのだ……。我等が怒りの鉄槌を持ってしてな！」

「バチバチバチッ！と雷のオーラがトール様の身体から放たれた。

その威圧感はまさに神そのものだ。

そして雷のオーラが巨大な槌の形状になる。あ、あれは……!？」

「武器に頼り、小人に媚びるなど言語道断。ミヨルニルなど所詮は克己を忘れた餓鬼めらの玩具に等しいわ。我が武器は闘志そのものよ！」

「トール様が手を振り下ろすと雷の巨大な槌が落下してくる……。まるで空が落ちてくるかの様な光景だ！」

「どわああああ!？」

『相棒！ケラウノスの結界を使え！あれは相性でどうこう出来る領域じゃない！』

ドライグが叫ぶ。確かに……。俺は咄嗟に赤龍帝の鎧を纏い、背中のスラスター状になった翼からケラウノスのレプリカを射出し、結界を展開する。

ズガアンツ！と凄まじい衝撃音が鳴り響き、俺の張った結界が砕けただけじゃなく会場が更地になってしまっている……。なんて威力

だ！

「へえ、中々頑丈じゃん。んじやもう一発！もう一発！トール様の！ちよつといいとこ見てみたい！」

ニヤニヤしながらバルドルはトール様を囁し立てている……！何だアイツは……!? 怪我をしたり気絶したりした墮天使や天使、それにグレモリー家の人達やリースもいるんだぞ！それを……！

「うっわ、なに神様に対してガン飛ばしてんの？チョーウケルんですけどお？」

俺の視線に気がついたバルドルはケラケラ笑いながら俺を指さして嘲笑している……！俺の奥歯がギリギリと音を立てる。ふざけやがって……！！

「おいテメー！沢山人が死んでんのがわかんねえのか！それでも神かよ！」

俺は我慢できずに怒鳴った。だが奴はどこ吹く風と言わんばかりにピユウ、と口笛を吹いた。

「は？ 何言ってるの？俺は神なの、万物に愛されて光り輝くもの、バルドル様だよ？お前ら人間とは格が違うんだよ格が」

バルドルは俺を見下すように鼻で笑った。

「何だと……！だったらその光とやらを俺に見せてみるよ！そしたら考えてやるぜ？」

「あー、はいはい。いいですとも。ロキさん、トールさん、ヘルちゃん。それと……ラミエルだっけ？」

コイツと俺でタイムンしたんだけど、いいよね？」

バルドルはニヤニヤした表情のまま、地面に降り立った。負けるなんてまるで思っていない様だ……。

「う、うう……」

「煩えなあ」

グシャッ！ ベキッ！

「ぐわああ！」

「ひいっ！」

それどころか奴はニヤつきながら傷ついて倒れている天使や墮天

使をわざと踏みつけている……！

「ほれ、もつと泣いてみせなよ！無様に這いつくばってさあ！アーハッハ！俺は誰かが泣いている所をみるのが大好きなんだよねえ！特にテメーらみてーな力のねえヤドリギどもがさあ！アツヒヤハハハハ！！」

クスめ……！

こんな奴のどこが神だ！

「な、何てことを……！」

「こ、こんな奴が北欧の神なのか……!?」

バルドルの非道な行いを見て、ミカエルさん達も絶句していた……。絶対許せない……！

「バルドル、遊ぶな！」

「へいへい、トールさんは頑固オヤジなんだから……古いんだよなあ。楽しくハッピーに行こうってのさ」

トール様はバルドルの態度に青筋を立てているが、バルドルは全く堪えていない様子だ。

「まあいいや。んじゃ、始めるかい。ま、結果は見えてると思うけどね。キミたちが束になっても勝てないって事をさ。なんたって俺は……」

「もう喋るな」

ズドオンツ！俺の渾身の右ストレートがバルドルの顔に突き刺さる。だが……。

「今、何かした？ハハッ、バトル漫画でよくあるよな！この手の台詞！」

何だと!? 全然効いていない!?

驚く俺に対してバルドルはニヤニヤしたままだ。

「じゃあ今度はごっちの番かな。いくぜえ！オラア！」

バルドルは拳を振り上げ、そのままスカイフックの軌道で振り下ろしてきた！俺は咄嗟に腕をクロスさせてガードするが……！

「ぐわっ！」

メキイツ！と嫌な音が鳴り、俺は地面に叩きつけられた……！

『相棒！』

「イツセー君！ 大丈夫ですか!？」

朱乃さんの叫び声が聞こえる。

くそ……！ なんて威力だ！ 鎧を纏っていたから何とかなつたけど、生身なら腕が砕けていたかもしれない！しかし、バルドルは手をプラプラさせてふざけた態度をとっている。

「かく、手が痺れる。殴るならやっぱ女の子がいいな」「ふざけやがって……！」

俺は立ち上がり、ケラウノスを構える。

「あれ？ 俺は素手なのに武器使うの？ ヒキョーモノー！ボーリョクハンターイ！ギヤハハハハハッ！」

バルドルは俺の様子にゲラゲラ笑い出した。完全にバカにしている……！

『相棒、挑発に乗るな。冷静になれ』

分かっている……！でもこのままじゃ……！そうだ！俺は雷の槍を生成すると、それを連続で射出する！だが、バルドルはかわそうともしない！

バチバチバチバチバチッ！バリバリッ！

「へえ、中々やるじゃん。ツールさんを10としたら5か6の間くれーかな？まあ、ゼロと大して変わんねーつての」

だ、ダメージどころか……！焦げついてすらいない……！

「どうなってるんだ……？」

「お前、今こう考えているだろ？」

やめりやよかった、こんなチート野郎と戦うんじゃないかってな？違った？」

違う、そうじゃないんだ……！俺は……！

「あ、違う？そんなゲドゲドの恐怖面されても説得力ないんですけどお？ ま、別にいいけど。お手付きは一回休みがルールだからな」  
情けないが竦み上がる俺に対してバルドルはゴロリと横になり始めた……！

「ほれ、何でもいから攻撃してみなよ」

クソツ！ 余裕ぶりやがって……！

『落ち着け、相棒。深呼吸だ。そしてイメージしろ。バルドルに勝つ為のイメージを……』

「ふう……はあ……」

俺はゼノヴィアの言葉に従い、心を静める。バルドルに勝つ為には、まずは冷静にならないとダメだ。

……よし、落ち着いた。

その間にもバルドルは大の字に寝転びながら「ほら、来いよ」と言わんばかりだ。俺は飛び上がると、ドラゴン・ラグナロクとケラウノスを同時に発動する……！ 大気が震え、渦を巻く！ 「ほお……」ロキが後方で腕組しながら感心しているようだが無視だ！

「うおおおっ！ テラ・ブレイク！」

俺はケラウノスの増幅した雷をドラゴン・ラグナロクで受けつつそのまま落下し、バルドルに向かって斬りかかる！

「へーっ!? いいねえー！ いい感じだよー！ だけどさあー！」

バルドルはガバツと起き上がり、俺の斬撃を受け止めた！

「まるで！ 全然！ 全く!! 俺には通用しないんだよねえ!!」

バギイツ！

「な、何だと……！」

嘘だろ……!? 俺の渾身の一撃が片手だけで受け止められちまった！

「オラア！」

バルドルはもう片方の手で殴りかかってくる！

「く、くそおっ！」

俺は慌ててケラウノスを引っ込め、防御態勢をとるが、まるで雷など最初から無かったかの様だった……。

ドゴオツ！

「がはあっ……ひっ……ぐうー！」

俺のガードは容易く突破され、思い切りボディブローを食らう！ 横隔膜が圧迫され、肺の空気が一気に押し出されていく……！

「ひぐうーっってお前殴られて感じるマゾなの？ うわっ……キモいんだ



けど」

バルドルはそのまま俺の顔面目掛けて爪先で蹴り上げてきた！

「イツセー君！」

「イツセー！」

朱乃さんと木場の声が聞こえた気がしたが、

俺は避ける事が出来ずにそのままモロに食らってしまった……！

ドガアツ！

「ぐはあああ！」

俺は地面をバウンドしながらも何とか立ち上がる。

「イツセー君！」

「イツセー君！」

「イツセー様！」

遂に黒猫に扮していた黒歌まで飛び出し俺を庇う様に前に立つ。

「おいおい、タイムンだって言っただろ？3人同時に相手すんのか？

流星に卑怯だぜ？」

バルドルはやれやれといったポーズをとっている。

「うるさい！これ以上イツセー様を傷つけさせないわお前は私が倒す

にやん！」

「そうだ！僕とイツセー君は二つで一つ！生きるも死ぬも一緒さ！」

「私も二人と同じ気持ちでしてよ！」

木場……朱乃さん、黒歌！気持ちは嬉しいが相手が悪すぎる！早く

呼吸を整えないと……3人が！

「あー成程成程……、キミらはある意味カレと一心同体って奴ね……。

それなら確かにタイムンだわ。いや〜感動的だなあ。涙が出てくる

わあ……」バルドルは顔の上半分を隠すように手を当てていた。だ

が口元のニヤつきが無くなり、指の隙間から見えた眼光は邪悪そのも

のだった。

## 第69話（キャラ立ち絵あり）

「うるさい！これ以上イツセー様を傷つけさせないわお前は私が倒すにゃん！」

「そうだ！僕とイツセー君は二つで一つ！生きるも死ぬも一緒さ！」  
「私も二人と同じ気持ちでしてよ！」

木場……朱乃さん、黒歌！気持ちは嬉しいが相手が悪すぎる！早く呼吸を整えないと……3人が！

「あー成程成程……、キミらはある意味カレと一心同体って奴ね……。それなら確かにタイムンだわ。いやゝ感動的だなあ。涙が出てくるわあ……」

バルドルは顔の上半分を隠すように手を当てていた。だが口元のニヤつきが無くなり、指の隙間から見えた眼光は邪悪そのものだった。

「雷よー！」

『福音呼びし勝鬨の剣』！」

「木遁！宿木！」

木場の聖魔剣に朱乃さんの雷が纏い、更には黒歌の仙術によってヤドリギが召喚され、バルドルを包み込む。

「お前の弱点はヤドリギだにゃー！」

黒歌はどうやらバルドルの能力をある程度見抜いていたようだ。

そして……！

ピシャアン！ズガガガガガッ!!バリバリツツ!!!

聖魔剣と仙術、更には雷の多重攻撃だ！いくらなんでもこれで倒せる筈……!?!

煙が立ち籠めて相手の安否を確認する事は出来なかったが、俺はそう思っていた。しかし次の瞬間、煙の中から一筋の閃光が朱乃さんの胸を貫いていたのだ。

「うっ……」

「朱乃さん!!」

ドサツ……

俺は倒れそうになる朱乃さんを支える。すると胸にポツカリと穴が空いているではないか！しかも出血が止まらない！

「あ、あああ……！」

「どういうことだにやん!?お前の弱点は確かにヤドリギの筈……！」

黒歌は信じられない、と言った面持ちだがバルドルはチツチ、と指を振っている。

「ああ、それな。確かに弱点は弱点だぜ？」

パツパツ、とズボンの埃を払いながら平然と答えるバルドル。

「けどな、『攻撃が通る』ってことと『俺を倒せる』っていうのはイコールじゃねえんだわ。覚えておきな！ハツハハハハア!!」

バルドルは高笑いをすると木場の目の前に光の速さで移動した。

「福音呼びし勝鬨の剣！」

「ただのジャブ……ってなあ」

ズババババツ!!

ドゴゴゴゴツ!!

「な、何て奴だにやん！木場の聖魔剣と鼻歌交じりのジャブの速度が殆ど同じだにやん！」

そ、それにあの拳圧……あれだけ連続で殴っているというのに息切れ一つしていないぞ！

ピシ……ピキピキッ！しかも、聖魔剣に徐々にヒビが入っていく！

このままでは……！

「祐斗！これ以上は！」

「祐斗オ！ここは私達が食い止めるにや！だから早く朱乃を連れて逃げるにやん！」

朱乃さんと黒歌の言葉を聞いた木場は歯を噛み締める。

「それはできない！ここで逃げたら僕はイツセー君と部長を守る事が出来なくなる！例え刺し違えても、この男を倒す！」

木場は全身からオーラのようなものを放出した。

「お？まだそんな力残してたか……。生憎、俺はそういうの反吐が出る位に嫌いなんだわ！うおー！って気合入れてミンナノタメー！つ

て頑張れば逆転できますよー！ってかあ？ ぱくくつかじやねえの？」

「こ、コイツ……！どこまでも歪んで腐り切ってやがる！」

「まあ、そんなお前らに敬愛と侮蔑を評して……………」

「楽にしてやるよ」

そう言うバルドルは右手を前に突き出す。

「グングニール」

眩きと同時に奴の肘から先が光そのものになり、穂先の形へと変わっていく。

「やめろおおおお!!」

「やめろ？ つくづくダセー連中だぜ全く……。もう、終わってんだよザコが！」

バルドルが吐き捨てる様に言うと同時に木場の背中から翼の様に血が噴き出した！

「ぐはあっ！」

木場はそのまま落下していき、地面に衝突してしまう。木場と朱乃さんがこんなにあっさりやられるなんて……………」

「黒歌！二人の傷を癒してくれ！」

「分かったにや！」

黒歌は急いで二人のもとに駆け寄り、回復魔法をかける。だが、それでも朱乃さんの出血が止まらない！これはかなり危険な状態だ！

「くっ！どうすればいいんだ……………!?!」

「死ねばいいんじゃないかな？」

バルドルは手を元通りに戻すと、再び俺の方に向かってきた。

「くっ……………」

「なーにくっ！だよ！姫騎士かテメーは！」

「望み通りにぶっ殺してやらあな！」

バルドルは再び光速で殴りかかってくる。ならカウンターを狙うまでだ！

「はあー！」

「遅せえ！」

ブンツ！ ガシツ！ バルドルの攻撃をかわしてカウンターを決めたと思ったのに……!?何故!?

「おいおい……、まさか今のが本命とか言わねーだろうな？」

嘘だろ!?完全に決まった筈なのに……!-

「まあ、決まってもノーダメージだったけどな？」

グオン！ ベキイ!

ニヤつきながらもバルドルは頭突きを俺の顔面に叩き込んで来た！顔を覆う仮面が割れてしまう！

「がああ!-

「ハツハハア！お綺麗な顔が見えちまったな！でも安心しろ！すぐに現代アートにしてやるっての!-

ドガガガガツ!!

「ぐあああああ!!-

俺はマシンガンの様なジャブの連打を受け続ける。一発受けるごとに意識が飛びそうだ……!-

「オラオラどうした!?さつきまでの威勢の良さはどこに行ったんだあコラア!？」

バキツ！ボゴツ!

「あ、あああ……!-

俺は既に満身創痍だった。もう立ち上がる事も出来ない。バルドルは俺をゴミを見るような目で見下している。

「フン、興醒めもいいところだな。結局最後はこうなるのか。つまんねえな、オイ。

じゃあな。バイバイ」

そう言っただけでバルドルはトドメを刺そうと拳を振り上げる。俺は……死ぬのか？折角ニグラさんに肉体を還元させてもらって……、エルシャさんに鍛えてもらったのに……!?ダメなのか……?やっぱ俺はこの程度で終わる人間なのか……?-

「諦めてたまるか……!-

俺は最後の力を振り絞り、砕けた小手から覗く素手を振るう。

「まだ抵抗する気力があるとは驚いたぜ……。でも、そんなボロボロ

の状態で何ができるとてんだア？」

よけるまでもない、とばかりにバルドルは余裕たつぷりに拳を止めた。だが……！！

「これなら……どうだ！」

パアアアアアッ！ 俺の手から発せられた光がバルドルを包み込んだ！

「何だ？ 自爆でもするつもりか？」

光の中でバルドルはつまらなさそうに呟いた。

この光は攻撃じゃない。ただ、相手の力を封じる為のものだ。そして、俺はその隙に魔力で地面を操作し、バルドルの足を固定し、動きを止める。

俺はそのまま光の剣を生み出し、それをバルドルに向けて突刺す！ ヤドリギの燃えカスを纏ったそれは、バルドルの肩にほんの少し刺さった。

「へー、それで？」

バルドルはまるで蚊に刺された程度の痛みしか感じていない様だ。だが、それでいい！

『EXTEND！』

ドライグの声が響くと光の剣が輝きを増す！

「……!?」

バルドルの顔色が変わり、驚愕の表情を浮かべる。歯茎から出血し、涼しげだった顔はあちこちに痙筋が浮かび、額には脂汗が滲み出ている。

「ぐっ……！ テ、テメー……何を……！」

「お前にはどんな攻撃も効かないんだろ？ だけど、回復や俺の拡張の力は通るみたいだな!!」

そうだ、バケツはバケツ一杯の水しか汲み取れないし、水風船に一気に蛇口を捻って水を注ぎ込めば破裂する！

「この野郎……!!」

ドクンッ！ バルドルの心臓が跳ね上がるのが解る。過剰なエネルギーによって暴走を始めたのだ。

「クソがつーふざけんなー！こんな事で、こんな事ぐれーで、俺が負けるとか、あり得ねえんだよ！くたばれやあ！」

「知るか！くたばるのはテメーの方だ！」

ズバンツ！ 俺とバルドルの間で巨大な火花が発生する！

「おおおおおっ！」

「ううおおっ！」

互いの力は拮抗していた。バルドルの腕が肥大化し、俺の体は更に傷ついていく。

「ぐが……！ああつ！！へ、ヘル……！何とかしろ……！」

バルドルは全身から血を吹き出しながらも、必死の形相で叫ぶ！

するとどうだ、フード付きのローブを脱いだ彼女の姿が頭になった。

な、何だ!?!あの露出の高い格好は!?! と、気が逸れた一瞬、ヘルはバルドルの胸に手を当てる。

ドシユウウウン！

まるで光を吸い込むかの様にバルドルの身体から俺が注いだエネルギーが吸収されていく……!?!

「ハハハア、危ねえ所だったぜ」

バルドルの身体が回復すると共に

奴のグングニールにより、俺の左脇腹が貫かれた。

「がふっ……」

「助かったぜヘルちゃん」

「……」

「チツ、相変わらず暗い奴だな」

俺は地面に倒れ伏しながら、二人の会話を聞いている。立ち上がるうとしても、力が入らない……！

「おいおい、まだ動けるんじゃないか？まあ、流石にもう限界みてえだな」

「……」

「ハッ、だんまりかよ。つまんねえな」

そう言うバルドルはこちらに向かって歩いてくる。

「じゃあな、小僧」

クソ……！ここまでなのか！バルドルが拳を振り上げる……！その時、

「させません……！」

トウーさんがチャイナドレスの裾を翻し、バルドルに飛び膝蹴りを放つ！

「がはっ……!?!」

不意打ちを受けたバルドルは、勢いよく吹き飛ばされ、俺との距離が大きく開く。

「イツセー様……！許可なく貴方の相手に手を出して申し訳ありません。ですが、これ以上貴方を傷つけさせるわけにはいきませんでした……！」

「トウー……さん……？」

眷属なのに……俺よりトウーさんは強いのか!?!いや、そんなことよりも、俺は彼女に助けられたというのか……？ 情けない……。俺なんかの為に……！俺は自分の無力さに絶望する。

だが、彼女は首を振りながら言った。

「そうではありません。奴はこの世界のものでは殆どダメージを与えられることが出来ぬ存在です。貴方は無力などではありません」

「おいコリア……！余計なこと言ってるじゃねえぞ……！」

バルドルは怒りを露わにして、立ち上がる。

「さつきからごちやごちやうるせえな。雑魚は引っ込んでろや！」

「黙るのは貴様だ、下衆め。私の主である兵藤一誠様に手を出そうとした罪は万死に値する。消えなさい！」

「調子に乗ってるじゃねエ!!」

バルドルの拳が放たれ、それが空気を切り裂き、トウーさんの頬にヒットする！だが、

「無駄だと解らないのですか?」

「何イ……げはあっ!?!」

目にも止まらぬタツクルでバルドルの足が取られ、ドサリと倒された！



「このアマ……!!?いきなり男を押し倒すたあ欲求不満かコラア!!」

「おや?先程までの威勢はどうしましたか?やはり、図体が大きいだけの木偶の坊ですね」

「こいつ……!!」

バルドルは激昂し、何度もトウーさんに蹴りを放つ!だがトウーさんはそれを小脇に抱えビン、と伸ばした!アキレス腱固めか、アレは!?

ブチブチブチツ!

「ぐぎやがああああ!?!」

「どうやら貴方自身の腱や骨を使えばダメージは与えられる様ですね……」

「があ……!」

ま、まさか関節技やプロレス技でダメージが通るなんて……!もつと頭を使って柔軟な考えをしなきゃダメなのか!

「さて、そろそろファイナーレと致しましょうか……」

「く、くたばりやがれ……!グング……」

「それは此方の台詞ですよ」

ギリギリギリギリイ!

余程の怪力なのか、逆さ天上吊り固めの態勢でバルドルの骨が悲鳴をあげる様に軋み、肩の骨が折れていく……!

「があああああ!!い……いたい……苦しい……!た、助けて……!!」

恐らくバルドルは嘗てヤドリギを食らった時とは比べ物にならない痛みを感じているだろう。

「お、お願いだ……!痛いんだ!このままじゃ死んでしまう!頼む!許してくれ!何でもするから……!な、な?」

命乞いをするバルドルにトウーさんはゴミを見る様な視線を浴びせる。

「痛みを知らぬ光の神よ……!黄昏に堕ちて痛みと悔いを知るがいい!」

「や……やめろおお!!」

バオオオオン!! 何と背筋の力だけでトランポリンの選手さながらに宙へと浮かぶ!そして、逆さ天井吊り固めをくるりと反転させ、バルドルを地面へと叩きつけた!

『ナパーム・ストレッッチ!』

ドゴオオオンツ!!! まるで隕石が落ちたかのような衝撃と爆烈波が辺り一面に広がる! バルドルの身体はクレーター状に陥没し、手足は不自然な方向に曲がってピクピクと痙攣していた。あのダメーシならもう立ち上がる事はできないだろう。

「ほお、まさかバルドルを倒すとは」

今まで手を出さずにいたロキはバルドルの半死の姿を見て感嘆の声を上げた。でも、ピンチに動じているというより寧ろ楽しんでる様に見えるな。

「痛めつけた私が言うのも何ですが……心配しないのですか? 貴方の部下なのでしょう?」

トウーさんはそう言っけてロキを睨む。だが、当の本人はケロツとした表情だ。

「戦士ならば、敗れる事もある。

これで使い物にならなくなるならば所詮それまでの駒だったということだ」

「何と言う非道な……!」

トウーさんは怒りを露わにする。

俺も似たような気分だ!

「貴方は神でありながら、人間の心を解さないのでですか? 仲間を失う悲しみを何故理解できないのです……!?!」

「ほう?では逆に問おう。

お前は外なるもののくせに人間に肩入れし過ぎではないか?」

外なるもの? 一体どういう意味なんだ……?

「私はただ……この世界の人々を守りたいだけ。その思いがあるからこそ、貴方達と戦う決意をしたんです」「それが大きなお世話だというのだ。我が友ツールよ、純粋な力のぶつかり合いならばお前に分がある。あの女の相手を頼む」

「心得た」

トウーさんの言葉を聞いたトールは即座に行動を開始した。

「ぬおおおおう!!」

雄叫びと共にトウーさんを投げ飛ばし遙か彼方へと飛ばし、奴も飛び立っていった!　なんてパワーとスピードだ……!　これが北欧最強の神の実力なのか……!?!　トウーさんが幾ら強くても一人じゃ無茶だ……!!

俺も行かなきゃ……!!

だが、ロキ、ヘル、ラミエルを前にしてはスキがない……!　俺がどうすれば良いのか悩んでいると、  
「では更に押しの手と行こう」

ロキが指を鳴らすと現れたのは狼と大蛇の様な一頭竜だった!  
あれは神話の怪物……フェンリルとヨルムンガンドって奴か!!

「兄さん……」

ヘルが二頭の怪物を見て眩くと  
それぞれの首に手を添えた。すると、

「ガアアアアッ!!」

「グルルルル……!!」

突然二頭が暴れ出し、それぞれが人の姿へと変貌していく……!  
片方は銀の長髪、もう一人は黒の長髪で両目を塞ぐ様な眼帯を付けている。これはまさか……!!

「な、何ということじゃ……!　黄金の林檎の力と知恵の実を力を融合させ、禁断の力まで引き出したというのか!」

「そつ、そつたらんことが出来るものなんだべか!?!」

オーデイン様とロスヴァイセさんは驚きを隠せない様子だ。俺だって驚きを隠せない!

「ええ、ご覧の通り……!　ヘパイストスの力と旧大天使たるラミエルのシステムへの干渉が加われれば、こんな事もできるのだよ」

ロキが不敵に笑う中、ヘルは静かに口を開いた。

「行きましよう、お兄様……」

「うむ」

「それはそれとして、嫁入り前の女の子がそのカツコはどうかと思うな」

「……………ッ！お、お兄様ッ!!」

顔を赤らめたヘルは素早くヨルムンガンドの背中をつねるとマントを羽織る。あ……………勿体ない。

「お、おほん！そ、そろそろ始めようかしら？」

「私はいつでもいいわよ！ラヴリエル・ヒール！」

ラヴリエルが杖を掲げると、柔らかな光が俺達の傷を癒してくれる！イリナ……………いつの間にかこんな力を……………！

「いや、アレはフェニックスの涙を振りまいているだけだ。俺が渡したものだ」

ボールクさんの冷静なツツコミが俺の感動を台無しにした。でも、でも回復したのは確かだし……………！気にしない気にしない！

「とお」

恐らくヨルムンガンドだろう男は気の抜けた声を出しながら蹴りを放った！その威力も速さもバルドル以上だ！

「奴は戦技以上に毒が厄介だ。俺が相手しよう」

そう言うボールクは前に出てヨルムンガンドの足を掴む。

「ふんッ!!」

ブオン!! そしてそのまま投げ飛ばしたが、

まるで蛇の様な柔軟さで体勢を立て直し着地した。

「危ないなあ。ケガするじゃないか」

「元よりそのつもりだ。お前を殺せばそれで済む話だからな」

「まあそうなんだろうけどね」。

黙って殺されるのはイヤだな」

ヘラヘラと笑いながらも戦闘態勢に入るヨルムンガンド、呑気な雰囲気だがまさに蛇の様な狡猾さを持つと見るべきだろう。

「ボールク！援護する！」

「させないよー！」

ゼノヴィアが援護に回ろうとしたがフェンリルが行く手を阻むべく飛び蹴りを放つ！

シユゴオツ！と音を立てて放たれた一撃をゼノヴィアがデュランダルを盾にして防いだ！

「ぐう……！なんて衝撃だ……！」

「あいちちち……！ちよつと爪先が切れちゃったよ。まだ人の姿に慣れてないからかな」

フェンリルは血が流れる右足からを見ながら呟く。狼の爪と牙、そして人の格闘術を持つ神代の狼男。これはとてつもない強敵だ。

ヨルムンガンド、フェンリル、ヘル、そしてロキ。一体誰から戦うべきだろうか……！

## ※第70話（イツセー×ヘル 快樂堕ち要素注意）

俺はまずヘルを倒す事に決めた。

理由は簡単だ。この中で最も危険な存在は奴だと直感で理解しているからだ。

「フム、私と戦うという事ですね？」

「ああ、そうだ。お前だけはここで倒しておかないとダメだって俺の中の何かがか叫んでいるんでね！」

『俺も同感だな。奴は俺の拡張の光を吸収してなおケロリとしている。それにヨルムンガンドやフェンリルに何らかの力を授けている可能性もある』

確かに……ロキならそれぐらいやりかねないよな。

「では、お望み通り私が相手をしましょう」

ヘルが指を鳴らすと巨大な黒い棺桶が出現した！

「我が名はヘル。

疫病、老衰、そして死を司る女王である！」

堂々と下着姿にマントという格好で自己紹介をするヘル。何でこんな時にそんなことすんだよ……！

『相棒、声に出ているぞ』

あ、いつの間に……。するとヘルの顔はかあーっと赤くなる。

「う、うるさいですよ！これは死の国の女王の正装なのです！お父様やオーデイン様が仰っていたのです！」

涙目で訴えるヘル。なんか悪い事をしてしまった気分になる。と  
いうか、何だかニトクリスさんに似た様な感じの神様だなあ……。真面目系ほんこつというのか……。

「ふ、ふん！何を考えているか知りませんが、貴方が来ないのならばこちらから行きますよ！」

ヘルが宣言するや黒い棺から無数の手が飛び出し俺に向かってくる！

「この程度！」

俺は向かってきた手を全て斬り払う。だが手は斬られてもすぐに

再生してしまう！ しかもその手は俺の腕を掴んできた！

「ぐっ……………離せ……………」

「いいえ、離しません！このまま私の中へ取り込んで差し上げます！」  
くそ……………振りほどけない！そして俺は棺桶の中に引き摺り込まれてしまう！

……………。

気が付くとそこは暗い闇が広がっていた。

何も見えない……………まるで闇の中に居るみたいだ……………。

『フッフッフ、どうです？ 泣いて許しを請いなさい！ そうすれば出してあげますよ！』

勝ち誇った様に言うヘルの声が聞こえる。なんとというか……………うん、やっぱりニトクリスさんに似てるわ……………。

『まあ、冥府に関わる意味では似ているかもな。それよりも今のうちに対策を考えようぜ？』

……………それもそうだな。さて、どうやって脱出しようかな……………。まずは飛び上がってみたがまるでループするかのようになに昇っていくだけだった。となると次は壁に沿って歩いてみるか。……………あれ？壁にぶつかっただけどすり抜けたぞ？…どうということだ？

『恐らく……………ここはヘルの世界だ。簡単に言えばヘルの心の中って事だよ』

ふーむ、心の中ということは思い浮かべた事は実現するということにもなるか……………。つまりここから脱出するには……………よし、これしかないな！俺はあるイメージを浮かべる。そして次にイメージするのは……………。

これを、こうして……………こうだ！

…。

……………。

……………。

「な、何をやっているのですか貴方はあ！ 人の心の中でえ！」

俺がイメージしたのはヘル、いやヘルちゃんを中心とした逆ハーレム空間だ。シヨタ化した俺、ちよい悪オヤジ風俺、イケメン風の俺、ワ

イルド系の俺に囲まれたたヘルちゃんという光景を思い描いたのだ！ その結果がこれである。

「おねーちゃん、おねーちゃん！」

「あらあら、可愛い坊やですね……ってそうではなくて！何なんですか！何なのですか貴方達は！」

「そんな事より挨拶代わりにこの四本の薔薇を貴方に捧げましょう。変わらぬ愛を貴方に……」

「あ、ありがとうございます……って違うでしょう！」

「ふっ、おもしれー女……」

「誰ですか!？」

「へイ彼女！お茶しない？」

「結構です！」

「おい姉ちゃん！ こんな夜中に一人で出歩くななんて危ねえぞ！」

「ええ、そうですよお嬢さん」

「お、お嬢さん……！ (ポツ)」

何というか感情の起伏が激しい子だなあ……。

「おねーちゃん、なんだかさみしそうだね」

「ええ、そうなんですよ。私の周りには悪人や老人……それに病人ばかりで出会いがなくて……はあ」

子供相手に愚痴る内容じゃないだろうにな。

しかし俺はたゆん、と溜息と共に揺れるヘルの胸に目がいつてしま  
う。

「おねーちゃんって、おっぱいおおきいね！」

「え？ あ、はい……よく言われます」

言われるんだ……。と俺は内心ツツコミを入れた。

「さわってもいい？」

「だ、ダメです！子供の内からそういうことをしてはいけません！」

ヘルは外見に見合わず意外と真面目な性格らしい。

だが……。むにっ♥むにいつ♥

「ひゃううう!? な、何を……んむうっ!？」

ついに焦れたのだろうかワイルド風俺が背後からヘルちゃんの胸



を下着越しに揉みながら唇を奪う！

「ふはあ！ だ、だめです！ 私はこんないやらしい事に興味なんて……興味なんてえ……」

うーん、そんなトロトロな顔で言っても説得力ないと思うんだけどなあ……。

「ふふふ、お姉さんもそろそろ我慢の限界じゃないのかい？ ほら、ここがもうこんなになっているじゃないか」「あつ、そこは……ああん！」

ヘルちゃんの下着の中に手を入れショーツの上から割れ目をなぞる。

「くくく、お前は俺の女だ。たっぷり可愛がってやるぜ！」

「ち、違います！私…… 貴方達のものになりません♥」

だがその言葉とは裏腹にヘルちゃんの身体はどんどん火照っていく！

「ふつ、素直になれよお姫様……！ そらっ！」

「あああつ！そこは……！ そこだけは許してください……！」

私、私……♥」

ヘルちゃんは口では嫌と言いながらも股間からは大量の蜜が溢れ出しているし股を開いたままで腰をクネクネさせている。

「くくく、良い表情だなあ……？ さあ、もつと気持ち良くさせてやろうか……！」

「い、いやあ……！これ以上されたら……！」

「おねーちゃん……ぼくも、いいよね……？」

「ひっ……♥だ、だめえ♥もう、許してえ♥」

シヨタ化した俺がヘルちゃんの太ももの間に顔を突っ込みペロペロしている。そしてヘルちゃんはというと……すっかり出来上がっていた。

「はーっ……♥ はーっ……♥ わ、私の負けです……♥ だから、もう……解放ひて……はううーっ!」

ヘルちゃんが降参したタイミングでちよい悪オヤジ風俺が後ろからヘルちゃんの胸に手を回し乳首を摘まむ！するとヘルちゃんはビ

クンツと跳ね上がる。どうやら弱点だったようだ。

「違うだろ？ ヘルちゃんはヴァルキリー達がされているみたいに強くて逞しい俺達みたいな雄に犯されたかったんだよな？」

確認というか誘導するように言うちよい悪オヤジ風俺。うくん、俺の中にもあんな一面が有ったのか……。ある意味ヴァルキリーに対する風評被害の様な

「ひ、ひがう……♡ちが……ちがわあ♡」

否定しながらもヘルちゃんの顔は完全に蕩けている。

「じゃあ何が違うんだ？」

「あ……う……それは……あ……あ……あーっ！」

「答えられないならお仕置が必要だな……！ オラア！」

「ひぎゆううううっ!？」

ちよい悪オヤジ風俺がヘルちゃんの尻をスパンキングする。ぼるんっ♡と胸に劣らぬ肉付きの尻から汗が飛び散り、紅葉型に赤らんでいく。

「あ……あへえ……♡い、いだあい♡いだいのいいっ♡きもちいいのおっ♡」

叩かれる度にヘルちゃんの口から喘ぎ声が漏れる。唾と涎、涙目と鼻水というぐつちやぐちな顔でヘルちゃんは快樂に溺れていた。

「おねーちゃん、おねーちゃん。おしりだけじゃなくておっぱいのさきっぱはれあがってるよ？ぼくがちゅーちゅーしたらなおるか？」

「あ……だ、だめえ……♡今そんなことされたら……♡」

「ちゅうう……れるれる……おねーちゃんのおっぱいおいしい……ん……おねーちゃんのからだぜんぶおいしそう……」

シヨタ化した俺は目を閉じて勃起したヘルちゃんの乳輪と乳首に吸い付く。母性と女を刺激される倒錯にヘルちゃんは我を忘れているのが見て取れた。

「あ……あ……あ……あーっ♡ おお、おちる♡ダメになる♡わらひ、ダメになつてりゅうう♡」

もうヘルちゃんは限界のようだった。

吐息は甘く、腰は抜けてカクついていた。

「よし、そんじや仕上げだ……!」

「う、うん!ぼくもがんばるよ!」

ワイルド風俺とシヨタ化俺が同時にヘルちゃんのパンツに手をかけ一気に引き下ろす!

「はう……♥み、見ないでえ……♥」

だがヘルちゃんの言葉とは裏腹に彼女の割れ目は大洪水を起こしており、太ももにまで愛液が垂れてきている。

「すげーなこりや……。ヘルちゃんは淫乱だねえ?」「は、はい……

♥私はあ……♥」

「何も躊躇うことはないですよお姫様……。これは貴方の心の中での出来事……。つまり夢のようなものなのですから」

背後からイケメン風俺が耳元で囁く。ヘルちゃんはその言葉を聞いて安心したような表情を浮かべた。

「そっか……。ゆめなんだこれ……。だから……。いいよね?」

どうやら分身達の言葉でヘルちゃんの理性のタガが外れてしまったようだ。

「おう、好きなだけヤっちゃまえ!」

「ふふ、可愛いお姫様ですね」

ちよい悪オヤジ風俺とイケメン風俺がヘルちゃんの両足を持ち上げM字開脚させる。

「あ……。ああ……。♥」

恥じらうどころか自ら足を広げ秘所を曝け出すヘルちゃん。

「わあ、おねーちゃんのこころすごきれいだよ?それにこころも」

「きゃううっ!」

ヘルちゃんの小さなクリトリスにシヨタ化した俺が吸い付いた!

「んん……。んむう……。♪」

そしてそのまま舌先でチロチロ舐め始める。

「ああーっ♥と、とても気持ちいいですう……。♥もつとお……。もつと吸ってくださいいいいいいいっ♥♥♥」

「お姫様のお望みのままに」

「じゃあ遠慮なく」

ヘルちゃんのおねだりとあつては断る理由もない。分身の俺達は一斉にヘルちゃんの弱点を攻め始めた。

「ひうううううっ!!? しよ、そこらめえっ ♡ 同時はらめえええっ ♡ ♡ ♡」

ヘルちゃんは身体を仰け反らせながら絶叫する。

「ははは、相変わらずエロい声だなあ」

「ほら、お口が空いてますよ?」

ちよい悪オヤジ風俺とイケメン風俺がヘルちゃんの口に指を入れかき回す。

「んぐう……! んん……! んんんんんーっ ♡ ♡ ♡」

3人の男達に責められ続けヘルちゃんの絶頂は近いようだ。

「あ……あっ……あへえ ♡ イキたいですっ ♡ イカせてくださひいつ ♡ ♡」

「じゃあ、おねだりしてみな?」

「そうそう、ちゃんと喋えたらイカせてくれるかもよお」

ちよい悪オヤジ風俺とワイルド風俺がヘルちゃんの耳に息を吹きかけつつ言う。それだけでヘルちゃんは

甘イキするまでになっていた。

「ね、ねえ……坊や……私をイカせて…… ♡ お願い…… ♡」

「いかせる?」

「坊やおしっこする所とお……私のおしっこする所を擦り合わせてほしいのお…… ♡」

ヘルちゃんは顔を真っ赤にして恥ずかしい台詞を口にする。

「おねーちゃんのいうとおりにはすればいいの?」

「ええ、上手に出来たらご褒美をあげる…… ♡」

貴方に弟か、妹が…… ♡」

「うん、わかった!」

シヨタ化俺がヘルちゃんの胸に顔を埋め、小さなおちん○んでヘルちゃんの割れ目をなぞる。

「あ、あへえ ♡ きもちいい ♡ ♡ ♡」

まだ未発達なおち○ぽで敏感な部分を刺激され、ヘルちゃんの顔は

快樂に蕩けていた。

「おい、早くしろよ」

ワイルド風俺がイラついた様子で言う。

「あ、あひっ♥すみませんっ♥」

ヘルちゃんは慌てたように腰を上げ、自分の膣内にシヨタ化俺のちんぽを招き入れた。

「あ、あ、あ、あ♥♥♥♥♥」

すっかり出来上がっていたヘルちゃんの口からチ○ポを受け入れた上での歡喜の聲が上がる。

「はは、すげえ顔……」

「本当に淫乱なお姫様ですね」

「あはは、おねーちゃんすごいうれしそうだね」

シヨタ化俺は初めてとは思えぬ動きでヘルちゃんの膣内を突き上げていく。

ずぶっ！　じゅぶ！　ぐぢゅぐぢゅーぢゅぼっ！

「あーっ♥いいいい……♥子供おチ○ポずぶずぶ気持ち良いですう♥♥」

「うわあ……すげえなこいつ……どんだけ変態なんだ」

「でもそんな彼女が可愛いでしょう？　ほら、貴方も手伝ってあげてください」

「へいへい……ったく」

ワイルド風俺がイケメン風俺に急かされてヘルちゃんの窄まった口に反り立つ肉棒をあてがい挿入していく。

「んぐううっ!?!」

ヘルちゃんの喉奥まで一気に突き刺さり、彼女は目を見開いた。

「おっと……大丈夫ですかお姫様？」

「ゴホッ……ゲホオッ……は、はいいい……♥」

咽びながらもじゅぼじゅぼと音を立ててしゃぶり続けるヘルちゃんに俺も分身達も興奮仕切りだ。

「うわあ……すっごくえっちなかんじだよー」

「ほら、お前も動いてやれよ」

「う、うん！」

シヨタ化俺がピストン運動を始める。

「んぶっ♥んっ♥んんーっ♥♥♥」

口いっぱい異物を押し込まれながら、オマ○コを犯されるという二重の快感にヘルちゃんの表情が益々崩れていった。必死にワイルド風俺のチ○ポをひよつとこの様に吸い上げる。

「お、おおお……！いいぞお姫様あ……！そろそろ出そうだぜ……！」  
「あふうっ♥」

嬉しそうに声を上げるヘルちゃんにちよい悪オヤジ風俺が囁やきかけた。

「じゃあおねだりしないかね？」

「んんーっ♥」

ヘルちゃんは絶頂寸前の快楽に浸りながら、最後の瞬間に最高の快楽を得る為に必死に言葉を紡いだ。

「ぷはあああ♥私いつ♥もう限界ですっ♥だからあっ♥どうか皆さまの濃厚な子種汁を私のいやらしい身体の中にも外にも沢山注いでくださいっ♥♥♥」

その言葉と同時に3人の男が射精した！

どびゅっ！どびゆるる！どびゅーっ！！

「ひゃああああっ♥イクうううっ♥♥♥」

ヘルちゃんは絶頂を迎え、ビクビクと痙攣する。

「あ……あっ……♥」

絶頂の余韻に浸りつつ汗塗れの身体を弄るヘルちゃんであるが俺の分身達はまだ満足していない。

「じゃあ次は俺の番だな」

ちよい悪オヤジ風俺は見るだけでヘルちゃんの性感帯を熟知しているのか、彼女の弱点を的確に攻め立てる。

「やめっ……今イツたばかりなのに……ああんっ♥」

「だからこそだよヘルちゃん。君がイキ狂わないと終わらないんだからっ！」

ちよい悪オヤジ風俺はそう言いつつヘルちゃんの乳首を指先で転

がす。まるでトグルスイッチを入れるかの様な動きにヘルちゃんは翻弄されているのを飲んでいた。

「あ、あ、あ、あ♥」

「ヘルちゃんは本当にここが弱いねえ」

「では僕もそろそろ……」

もう完全になすがままのヘルちゃんを

イケメン風俺とワイルド風俺がサンドイツチにして責め始める。

「あへえ♥またイグウ♥♥♥」

「まだまだいくよお♪」

ちよい悪オヤジ風俺がヘルちゃんのお尻の穴に指を入れる。すっかりお尻も準備万端の様で

「ひざいいい♥♥♥」

とある種の嬉しい悲鳴をあげて悶え始める始末だ。

「お、締まる締まる。こんなにキツキツなのにキュウキュウと締め付けてくるなんて、本当に淫乱なんだなヘルちゃんは」

ちよい悪オヤジ風俺は見るからに凶悪なチ○ポをすつと、ヘルちゃんのお尻にあてがった。

「あ、ああ♥お尻♥お尻も犯されちゃう♥チ○ポの気持ちよさ、覚えさせられちゃう♥♥♥」

既にヘルちゃんの頭にはセックスの事しか無いようだ。

「僕も忘れてもらっては困りますよ、お姫様」

更にはイケメン風俺が彼女のすっかりチ○ポに狂ったオマ○コにチ○ポをあてがっていく……。

「あ、あちゅい♥イツセー叔父様とイツセーお兄様のオチ○チンで私のオマ○コがいつぱいですよ♥」

「はは、まだこれからですよ」

イケメン風俺が腰を振り始めるや

「はああああああん♥」

舌足らずになるまでにヘルちゃんは再び快樂の世界へと堕ちていく。まさに分身達のザーメンが溶鉱炉の鉄の様に熱く、ヘルちゃんの身体はドロドロに溶けてしまいそうなまでに熱を帯び、そしてヘル

ちゃんの脳髄は快感という麻薬によって、子宮も腸内もまた同様に、完全に支配されていた。ザーメンを吐き出される度に、ヘルちゃんの膣壁がヒダが肉棒を搾り取るようにうねって絡みつく。

「あ、あああ♥凄いですう♥皆様の熱い精液が、私の中に入ってきているの感じますわあ♥ああっ♥素敵過ぎます♥もつと、もつと私にくださいまし♥」

「お、お姫様、ちよつと激しすぎ……」

「ああ♥ごめんなさい♥でも、我慢できませんのお♥」

そう言つてヘルちゃんは更に激しく腰を振る。

「あ、あああああああああっ!!!」

ヘルちゃんは絶叫し、絶頂を迎えた。ザーメン塗れでドロドロになりながらも白目を?いてアへ顔を晒している。

「あー……♥あーっ♥あはあ……♥」

よし………これでもうヘルちゃんは無力化できたな!分身達を解除して俺は一息つこうとした……その時!

「ねえ……♥もつと……♥もつとしましょう♥セックス……♥」

ヘルちゃんが抱きついてきた!

「ちよ!?ま、待ってくれ!」

「お願いします……♥私を滅茶苦茶にしてくださいませえ♥」

そう言いながらヘルちゃんは俺にキスをして舌を入れてきた。

「んっ♥ちゅぶっ♥じゅるっ♥レロオツ♥」

グイープなキッスをしながら、おっぱいやオマ○コを押し付けてくる。

「あ、ああっ………!やめてくれ………!俺にはリアスさんが………!」

俺は必死に抵抗する。だがヘルちゃんのテクニクの前に俺の理性は徐々に失われていった。

「大丈夫……♥今だけは、私だけを見てくれれば良いんです……♥だからあ♥ねっ♥いいでしょ?チ○ポ♥チ○ポ早くう♥」

しゅっ!しゅっ!シユコシユコっ!ヘルちゃんの手コキにより俺のチ○ポはこの状況下においてもギンギンに勃起していた。



「やめろヘルちゃん！正気に戻るんだ！」

俺は必死に説得するがヘルちゃんは聞く耳を持たない！というか敵同士なだけどきさ！

「ああん♥そんな事言いつつも、チ○ポは正直じゃないですかあ♥ほらあ♥先走り汁出てますよお？」

そう言うヘルちゃんは手についたカウパーを自分のオマ○コへと塗りつけた。

「ああん♥ヌルヌルしてるう♥これならすぐに入れられそうだわあ♥」

ヘルちゃんは俺の上に跨り、ゆっくりと腰を落としていく。

「あああ♥来たあ♥オリジナルのおっきいおちん○んで私のおま○こ貫かれちゃう♥」

ズプウ♥ヘルちゃんは一気に根元までチ○ポを挿入した。俺達は同時に歯を食いしばりながら結合の快感にぶるつと震えた。

パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！

ヘルちゃんはオマ○コでも身体全体でもはしたないまでに俺にむしゃぶりつき、そして貪るように絡みつき、締め付けてくる。

「ああっ♥気持ちいいいいいいいい♥♥♥」

ヘルちゃんは絶叫しながら腰を振り続け汗と本気汁が飛び散り、結合部からは愛液が噴き出している。

「くっ、くそお、こんなにチ○ポが好きなのかよ！」

「あはっ♥そうよ♥私はチ○ポが大好きなお姫様なの♥赤龍帝の立派なチ○ポで私を滅茶苦茶にしてくださいまし♥」

ヘルちゃんの表情はすっかり蕩けており、口の端からは唾液が垂れていた。浅ましくて品のない有様だが、それが何とも堪らない……！

「くうう！だったら望み通り、ヘルちゃんのそのいやらしい身体にたっぷり注いでやるからなあ！」

「はい♥来て来て来てえ♥バキバキチ○ポから

どびゅーっって精液ぶちまけてえ♥」

どびゅうううううううううう！！ 大量の精液を流し込むと同時にヘルちゃんは絶頂を迎え、

「ふあああん♥イクっ♥イツちゃうつうつうつうつうつうつう!!!」

彼女は潮を吹き出し、全身を痙攣させながら倒れ込んだ。

「あへえ……♥あひい……♥」

ヘルちゃんは完全に快楽に屈服してしまったようだ。ふう……かなりの強敵だったな……!と俺が一息ついていたその時だ!上空から誰かが降り立ってきた!見覚えのある銀髪で、牙と爪が生えた狼の様な顔立ちをした男。そう、奴は……

「へへっ! 次はオイラが相手だぜ!」

そう言っただけ現れたのは、ヘルの兄であるフェンリルだった!ま、ま、ま、ずい!これはいろんな意味でまずい!

「フ、フェンリル兄様あ……♥」

と、そんな状況でもヘルちゃんは甘えた声で彼にすり寄った。

「ど、どうしたヘル? お前すっごい臭いぞ!」

フェンリルはザーメン塗れのヘルちゃんを見て驚いている。ヘルちゃんは、俺とのセックスに夢中になり過ぎて、自分がどんな状態になっているのか忘れてしまっていたのだ!

「お前、すぐに風呂に入れ!」

オイラがその間にコイツをぶっ飛ばしてやるからな!

「はいい♥ 先にシャワー浴びてきますからあ……いっばい可愛がってくださいませね♥」

そう言っただけヘルちゃんはフェンリルの頬にキスすると浴室の方に向かっただけだった。

「ガハハ、ヘルもまだまだ甘えん坊だな。高い高いやお馬さんごっこをしてほしいなんてな!」

……。

お兄さん、多分それ違うと思うよ!

「だが、それはそれとして……」

ギロリ、とフェンリルの視線がこちらに向けられる。

「おいお前!よくも俺の妹にあんな臭いものをぶっかける意地悪をしたな!許さないぞ!」

フェンリルが怒りのオーラを放ち、俺の方に突っ込んできた!

「うおっ!？」

俺は慌ててかわすが、フェンリルはどういう原理なのかは不明だが回避された直後に軌道を変えてきた!

かわしきれない!俺は咄嗟に左腕でガードするが、フェンリルの鋭い爪が俺の装甲を切り裂いた!

「ぐあああっ!」

俺の腕に激痛が走り、血が滴る!

は、反撃だ!反撃しないと!俺はドラゴン・ショットを放つが、あっさり回避されてしまう!

「無駄だよ!オイラには当たらないさ!今度はこっちの番だ!食らえ!」

フェンリルが跳躍する。そして空中で回転しながら強烈なキックを繰り出した!

「うわあああ!」

ドゴオツ!俺の腹に直撃し、衝撃で吹き飛ばされる。

「ぐううう……」

なんとか受け身を取るものの、思ったよりダメージが大きい。

「まだまだ終わらないぞ!」

さらにフェンリルは連続で爪、拳、貫手、肘を使った様々なラツシユを仕掛けてくる!近距離だとかいつの方が有利だ!俺はケラウノスの結界を発動させて強引に距離を取った。

「あばばば!少し痺れたな……!」

少し痺れたか……。普通は身動きが取れなくなるはずなんだが、流石は魔王クラスといったところか。

しかし、この技を喰らっても平然としているとはな。それにしてもなんてパワーだ!まともにやりあったら勝てる気がしないぜ。

「ガハハハ、今の動きでオイラの強さを思い知っただろう?ヘルに意地悪してごめんなさいと謝れば許してやるぞ!」

フェンリルはガハハと笑いながらそう言った。

……よし、謝ろう!

「妹さんに意地悪してごめんなさい」

『あ、相棒……!』

ドライグは呆れるものの恥は一時!志は一生!

リアスさん達やトゥーさんを助けるため、ここはプライドを捨てて土下座をするんだ!

「よし、謝ったから許す」

フェンリルはそう言うのと、腕組みをして偉そうなポーズをとった。意外に話分かる奴だったようだ。

「だが親父がお前を倒せと命令したからな!悪いがボコボコにさせて貰うぜ!」

……やっぱりそうなるのかよお!くそつ、仕方がない!俺は覚悟を決めると、フェンリル目掛けて突進していった!

「ガハハ!向かってくる気力があるなら大歓迎だぜ!」

フェンリルは嬉々として迎え撃つ体勢をとる。だが甘い!俺は加速スキルを使い、一瞬で奴の背後に回り込んだ!見様見真似でフェンリルの真似をしたが上手くいったようだぜ!

「何イ!？」

背後からの攻撃に反応が遅れるフェンリル。

「オラア!!」

俺は渾身の一撃を叩き込む!決まった!と思っただが……フェンリルは咄嗟に身を捻ることでダメージを軽減した。

「グウウ!なかなかいいパンチ持ってんじゃねえか!だけどそんな攻撃じゃオイラは倒せないぜ!」

フェンリルは素早く振り返ると、俺に向かって爪を振り下ろしてきた!俺は慌ててかわす。危なかった……!!

「ガハハ!今の俺には足もあるんだぞ!」

だが次の瞬間に強烈な蹴り上げを顎に受けてしまう!しかも顎を下げたせいでモロにくらってしまった!脳震盪を起こし、視界が激しく揺れる。

「ガハハ!どうだ参ったか!」

俺は必死に意識を保ちつつ、なんとか立ち上がる。くっ……覇龍化

は今の俺には使えない……！このままではいずれやられてしまう  
……！何か……何か手はないのか!? 考えろ！考えるんだ！

## 誰71話

安里 side

ゲイトさんによって会場に転送された俺達だったが、何と会談の場所が更地になっていた！何か現代アートになっている奴がいるが無視だ無視！それよりボールクの旦那とゼノヴィア、イリナとロキと黒髪の蛇みたいな奴が戦っている！あと黒い棺がクレーターのど真ん中にある。状況がまるで飲み込めない！誰かに説明してもらわんと！アーシアちゃん達は墮天使や天使の治療に精一杯みたいだ。ここはセラフオルー様に聞くしかないな！

「九頭竜クーン！ 無事だったみたいね！」

いつものふざけた、もとい砕けた口調じゃない辺り緊急事態だと分かる。

「あの……一体これは？」

「ロキ達が多神連合の結成に納得できなくて反乱したんだよ」

「何じゃと!？」

「何ですって!？」

セラフオルー様の言葉にゼウス様もアマテラス様も驚愕している。そりやそうだろう。俺だって驚いてるんだから！状況は俺達の想像を遥かに越えて悪い様だ！

「しかし、国津神達は反乱に加わっていない様ですな。これもアマテラス様の御威光というもの」

タケミカツチさん！それはフラグ！フラグだから止めてくれ！するとアマテラス様はまたしても表情を曇らせ始める。

「だといいけど、ものすごくイヤな予感がしてきた……」

や、やめてくれ！日本の太陽神がそんな事言ったら洒落にならない！すると案の定、ロキがこちらに気がついたと言うのに笑みを浮かべた。

「ほーお。どうやら曹操達を撃退した様だな。『叛英雄』を取り込んだというのに英雄派も存外不甲斐ない」

だがその台詞は俺たちではなくいつの間にかロキの隣にいた奴ら

に対してのものだった。

「ふっ、それは違うぞよロキ殿。

曹操殿は乱世の奸雄。時はまだ至らぬと見て雌伏するのを選んだのでござろうよ、ほほ」

何だか人の良さそうな爺さんだが馬鹿長い刀を肩に乗せている。

「如何にロキ様であろうと、我等が盟主たる曹操様を悪く言うのは許しませぬぞ」

今度は美少女の様な、美少年の様な中性的な容姿をした女装した男がロキに苦言を呈していた。こっちは背中に古びた打剣を背負っている。

「それは失礼。口さがないのが私の数多い欠点の一つなものでね。私とラミエル卿は白龍皇を仕留める為に動かねばならないので彼の相手を宜しく」

そう言ってロキはその場を去った。

あ、コラー！ 待て！ お前がリーダーならお前をぶっ倒すのが最善だろうが！

「ほっほっほ、では某がお相手致す」

俺はロキに砲弾を放ったが爺さんがあのバカ長い刀をまるで物干し竿の様に軽々と振り回し防いだ！ なんて腕力してやがる！ロキの野郎が攻撃を避けながらどんどん遠ざかっていくというのに！

「将を射んと欲すれば先ず馬を射よ。戦場での常道でござるなあ。然るにまずは小手調べ」

歯噛みする俺にそう言いつつ爺さんは俺に向かっ斬撃をしかけてきた！ ヤバイ！ このスピードじゃ回避が間に合わない！

「兵法の基本ですね」

しかも、爺さんの背後から女装したさっきの男が俺に迫ってくる！

「知るか！ あと女装ヤローに迫られる趣味はねえ！」

「あら残念」

女装男はそう呟きつつも俺の目を狙って飛刀を飛ばしてきた！

くそ！ こんなもん食らったら目が潰れる！ 俺は咄嗟に身を捻っ

て何とか避けたが、そこに爺さんが斬りかかってきた！

「シヤラアッ!!」

俺は地面に屈みつつ水面蹴りを放つが爺さんは読んでいたらしく、ひよいと木の葉の様な身軽さで宙返り。

のみでなくその勢いに乗じた袈裟斬りを放ってくる！

「チッー」

俺もバックステップでかわすが、女装男の攻撃が迫ってきている！

アサシンか何かかよこの女装ヤローのスピードは!?

「余所見とは余裕ですなあ!」

「うおっ!」

俺の目の前には既に爺さんがいた！クソ！いつの間にも!?そして至近距離からの切り払いによって俺の左腕が肘から切り飛ばされる！

「ぐおっ……おおおお!!」

意識が飛びかけたが、俺は傷口から触手を生やして連結させると切られた肘から先を分銅にして振るい、女装ヤローの首に巻き付けた！

いくらなんでもこんな動きまでは予想できなかったろ!! 悪いがこのまま盾にしながら絞め落とさせてもらうぜ! 悪役みたいで気が引けるが二対一は分が悪すぎるんでな……!

「むっ!」

爺さんは俺の反撃を察知したのか、俺に斬撃を放とうとしていた手を止めた。いい判断だ! そのまま大人しくしていれば苦しませずに気絶させてやる!と、触手から変化させた鎖を振り回そうとした瞬間、予想していなかった事態が俺を襲った。

「舐めるなよ……! 田舎者めがア!!」

何と女装ヤローの口調と顔つきが変わり出し、服が破れるまでに筋肉が盛り上がるや俺の鎖を逆に振り回した!

「ぬううん!!」

な、なんてバカ力だ!? と驚嘆する暇もないまま俺は鎖ごと地面に叩きつけられた!



「ぐおっ……」

「ふううく……い！」

受け身は取ったが起き上がる前に

女装ヤロー改めマッチョヤローは高々と片足を上げている。

(まずい!?)

俺は身をよじろうと力を入れたが奴の攻撃の方が早い！

「八卦よい!!」

ドボオツ!!

「グハツ……!?!」

俺は腹に全霊のストンピングを受けてしまう！ や、ヤバい！ 腰の骨が折れたのかって位の衝撃だ！ 内蔵や血管が圧力で破裂するんじゃないか？

口から溢れそうな血を懸命に飲み込むが味を感じる余裕なんてない。

「うっ、ゴホオオオオ……」

「ほくお、流石大和随一の四股踏みじやお！ 醜(しこ)踏み、即ち邪なるものには効果覲面じやわい」

この爺さん何言ってるんだ？ 確かに今の俺はバケモノみてーなものだが……。つかこの痛みはマジでヤバイ。

「どうしました？ 反撃しないのですか？」

まるで噴火を終えた火山の様な威容を誇る女装ヤローが余裕綽々といった様子で聞いてきた。

「誰がするか……い！」

ペツと血を奴の顔に吐きかける。

当然だが、奴は怒るものさっきのムキムキマッチョの姿にはならない。

「慮外者！」

そう叫ぶなり女装ヤローは打剣で

俺を手討ちにするべく襲いかかってくるがその途中でヤローの顔面が燃え上がる！

「ぐわあああ！」

悪いな、俺の『燃える三眼』は俺の身体の一部、即ち血液からでも発動させられるんだ！

「いかん、すぐに消化を！」

爺さんは慌てふためいて消火活動に入る。だが無駄だ。この世の法則ではない方法で俺の血は炎として存在する。だから水をかけたところで意味がない！ フラフラながら立ち上がった俺はそう安堵していたのだが……！ 女装ヤローが剣を掲げるや炎がまるで嘘の様に消えた!?

「おお、そう言えば御主の剣は天下に名高い神剣であったわい。しかしその火傷では戦うことはできまい」

爺さんが気遣う様に女装ヤローの顔は火傷だらけだ。漸く一対一の状況に持ち込めたか。

「ふん、心配無用。某とて伊達に修羅場は潜ってはおりませぬ故。それに、これしきの傷など唾、とは言わずともこの因幡の霊薬があれば……」

と言うなり女装ヤローは腰につけていた袋の粉を振りかけた。するとたちまち傷口が塞がっていく。おいおいなんて回復力だよ！

いや、あの粉薬の力が凄いのか？

「ほほ、あてが外れたと言いたげじゃのうお若いの」

「まあな……」

爺さんがニヤリと笑う。俺も負けじと笑みを浮かべた。悔しいが強がるくらいしておかねえとビビったと思われちまう。まだ勝負はこれからだ。

セラフオール様達の避難は完了した様だし、ナイアももうすぐ駆けつけてくれる筈だ。それまでは……

「粘らせてもらうぜー」

「ふーむ、曰く必勝は攻めの中に有り、不敗は守りの中に有り。守りに徹底されては少々面倒じゃが、それならそれでやりようはあるわい。待てば海路の日和ありじゃて」

俺の決意表明に対し、爺さんはどこか楽しげだが反面女装ヤローは苛立ちを隠せぬ様子だ。

「何を呑気な！　この様に後れを取っては英雄派は弱輩揃いなり、とあらぬ誹りを受けるやもしれませぬ！　早急に片付けねば！」

「やれやれ、英雄の第一条件は勝利なりとは言うが……剣呑剣呑」

嘆息しながら爺さんはゆっくりと中腰の姿勢から自分の身体に対し直角にバカ長い刀を構える。いわゆる居合の構えか……？　だがよ、爺さん！　そんなバカ長い刀じゃ抜く前に俺が距離を詰める方が速えぜ！

バオンツ！と『轟』の歩法で距離を詰めて爺さんをぶっ飛ばすべく拳を固めたその刹那……！

「青いのお」

「なっ……!?!」

爺さんは鞘で俺の拳を受け止めた！

次元ごと打ち砕く俺のパンチでバカ長い刀は砕けたが女装ヤローの打剣をパツと掴んで一閃を放つ！

ぶしやあああああ!!

「ぐああああ!!」

バツサリと太腿を切断された!?

何て切れ味だ！　まるでバターを切るかの様に簡単に骨まで断ち切られた！　しかもどういうわけか再生しない！

「御主、知らず知らず自分の再生能力を過信し過ぎておらう？　故に、反撃に対して警戒がまるでない。それが御主の弱点じゃ」

「う……うるせえー！」

俺は激痛に耐えながら必死で距離を取りつつ炎弾で攻撃するが例の打剣で全て切り払われてしまう。

「はあっ！」

しかも女装ヤローが連撃を繰り返してくる！　くそっ、さっきより速い！　こいつ、本気になりやがった！

「ほらほらどうしたのですか？　先程までの威勢はどこへ？」

女装ヤローはまるで踊っている様な動きで俺を翻弄してくる！

「ではおしまいと参りましょう。」

「剣客殿！　私の打剣を！」

「うむ」

爺さんが手に持っていた打剣を受け取るやまさに剣舞の如く振り回す！

蝶の様に舞い、蜂のように刺すという喩えにある様な刺突が俺の全身を貫く！

「ぐわあああああ!!」

遂に足に力が入らなくなり俺はその場に倒れ伏してしまった。

「これでしまいじゃお若いの。」

とは言え戦略的には某らの負けじゃがなあ。アマテラス様達を捕らえることは出来ず仕舞いでは」

「く、くそう……」

俺としたことがこんな不覚を……。

悔しいが、ミミズの様には這い回ることしかできない……！

「ハア？俺とした事が？随分偉くなったモンじゃねえか坊主」

するとその時間き覚えのある声が響いた。この不敵な声は……!?

「ウチの若いのを随分可愛がってくれたみたいじゃねえか？ ってこれじゃヤクザの口ぶりだわな……」

「そうですね、ランサー。貴方も光の御子であるのならもう少し礼節と教養をですな……」

それにこの説教じみた口調は……！

「ニトクリス……さん」

「はい、お久しぶりです。」

ゲイトに突然呼び出された時は驚きましたが、まさかこのような事になっているとは。

私達が来たからにはもう大丈夫です。必ず助け出してみせます」

俺の言葉にニトクリスさんは優しく微笑みかけてくれた。

「あ、ありがとうございます。」

ランサーさんまで来てくれるなんて心強い……！」

俺は素直に感謝を述べる。

「おいおい、俺はおまけ扱いかよ。」

それはそれとして、爺さんと女装マニア相手にズタボロとはなあ」ランサーさんは槍を肩に担ぎながら苦笑している。返す言葉がないがニトクリスさんからの治癒を受けたおかげで何とか再起は出来そうだ。

「ま、良いんじゃないかねえのか？まだ若いんだし、これから幾らでも挽回のチャンスはあるだろうぜ。なあ、嬢ちゃん」

「ニトクリスです。ファラオである私に不敬が過ぎますよ」

ランサーさんの呼びかけにニトクリスさんはジロリと彼を睨む。

（相変わらずだなあ）

と俺は内心思いつつも二人に改めて感謝する。

「しかし、その爺さん。アンタどっかで会ったか？」

「さて……。他人の空似ではないかのう？」

一方、ランサーさんと爺さんは互いに牽制する様な構えを取りながら対峙していた。あの爺さんはランサーさんに面識があるのだろうか？だが確か槍は刀に対してかなり有利だっけ聞いたことがある。ならばあの爺さんはランサーさんに任せて俺は再びあの女装ヤローに挑むのが最適だろう。俺は息吹を一つ吐いて呼吸を整え、奴へと向き直る。

「さあ、仕切り直しと行こうぜ！」

「クツ……！」

女装ヤローは忌々しげに舌打ちして俺を見据えると再び剣舞の構えを取る。捉えどころのない動きは厄介だが、やりようはある！

「安里、恐らく彼は貴方の特性を見た上で、反撃主体の戦い方を選んでいる筈。つまり貴方の動きを読みやすい様にわざと後手を取っているのでしょう」

ニトクリスさんの忠告に俺は納得した。

（なるほど、確かにこいつは俺の再生能力を知っている。だから俺の攻撃に合わせてカウンターを仕掛けようとしている訳だ。ならその思惑に乗ってやる！）

俺は敢えて大きく踏み込んで拳を振りかぶった。

「愚かな、また防御を甘く見て、猪の様に突進してくるつもりですか

？」

女装ヤローは俺の行動を見て鼻で笑う。傍から見ればテレフォンパンチにしか見えない攻撃。

当然女装ヤローは俺の拳に合わせるように打剣を繰り出す！ 次の瞬間、俺は大きく後ろへ跳んで距離を取った。そして俺が居た場所に振り下ろされた打剣は虚しく空を切る！

「何っ!?!」

女装ヤローが驚愕の声を上げると同時に俺の拳が頬へとクリーンヒットした！

「ぐふう!!」

女装ヤローは衝撃で地面を転がるが、即座に起き上がる。どうやら今の一撃は効いている様だ。

「ぬうう……い！」

女装ヤローは俺を憎らしげに睨む。だが俺の仕掛けはそれだけじゃないぜ！

ザシユシユシャシユ！

俺の脚を触脚、更にそれを刃に替えて奴の周囲から一斉に切り刻む！ 木場の『魔剣創造』のパクリみたいだが、そこはご愛嬌！

「ぐあああつ!!」

全身を切り刻まれ、血飛沫を上げながら悶絶する女装ヤローだが女装ヤローも相当タフな様で、すぐさま打剣を構え直す。

「ふんっ！」

そして奴がヒュンと打剣を一振りするだけで触脚から展開した刃が全て砕かれてしまった！

「出ませい！」

しかしニトクリスさんが地面を杖で突くと、そこから無数のミイラが女装ヤローを羽交い締めにする！ 彼女のフォローはありがたい。

「よし、今度こそ終わりだぜ！」

俺は『冥獄長の剛腕』を発動させ全身を巨大な拳へと変えて殴りかかる。

「ぐおおおお……!!」

「うおおおお!!」

奴はガシリ、と拳と化した俺を全身にて食い止めようとする。立ち会いは互角！　だが……！

「天空よ！」

ニトクリスさんの魔力を受けて俺の勢いは更に増す！　これならイケる！

「こ、こんなもの……!!」

「ぶっ飛ばやああ!!」

ヒュウウウ……ドグオオオン!!

岩盤に女装ヤローは背中から叩きつけられ、そのままズルリと地面に倒れ伏した。これで流石に決まっただろう……。俺は『冥獄長の剛腕』を解除して元の姿に戻る。

「愚かな……。具体的にどこかと聞かれば困りますが、愚かな……」

ニトクリスさんが決まっているんだかいけないんだかビミョーな決め台詞を呟きつつ、倒れたままの女装ヤローに歩み寄る。女装ヤローは完全にボロボロになって気を失っているようだ。

「ですがこのままにはしておけませんね。この者はミイラと化し、情報を引き出しましょう」

ニトクリスさんは涼しげに、さも当然のように言う。意外とえげつない事をする人なんだな……。そしてランサーさんと爺さんの方だが、ランサーさんの方は爺さんのいつの間にも復元させたバカ長い刀を相手取っても互角以上に戦っている。

「ハハッ、良いねえ！　アンタとは存分に楽しめそうだ！」

ランサーさんは槍と蹴りを駆使して爺さんを攻め立てるが、爺さんはそれを巧みな体捌きと剣技で凌いでいる。

「むう……」

爺さんは一旦距離を取ると、さっきの居合の構えを取る。

「へえ……」

ランサーさんは真つ向勝負を仕掛けるべく、シユツと槍の穂先で彼を中心とした真円を宙に描く。

「かああっ！」

先に動いたのは爺さんだ！

当に電光石火、その速さから繰り出される居合はまるで雷光の如しだ！

「シエリアアア！ ツ！」

受けるランサーさんは獣の様な咆哮と共にくわつ、と目を見開くと棒高跳びの要領で跳躍する！文字通りに空を切ったその斬撃はランサーさんの槍を切断する！しかしランサーさんの対応は俺達の想像を遥かに超えていた！

「何だど!?」

驚愕の声を上げる爺さんに対し、ランサーさんは何とブーツを消去して、切られた槍の上半分を足の指で掴み、蹴り出しの軌道で振り抜く！

「この一撃……手向けと受け取れ！ 『蹴り穿つ死翔の槍』！」

放たれたのはゲイボルクの一撃だ。それは見事に爺さんの肩から胸にかけてぎつくりと貫いた！

「ぐおっ……!?」

爺さんは口から血反吐を吐き出すとその場にごくりと崩れ落ちる。流石に心臓を貫かれては助からないだろう。

「やるじゃねえか爺さん。俺に初見殺しの切り札を使わせるなんてよ」

ランサーさんが素直に力量を認める辺り、どうやら本当に凄い人だったらしい。それにしても……。

「片足でケンケンしながら言っても今ひとつ決まりませんね……」

思わず口に出して言ってしまったニトクリスさんだが、ランサーさんは気にせず、むしろ誇らしく笑っていた。

「まあな！ だが、これが俺の生き様って奴さ！ 戦いや英雄つてのは周りが言う程綺麗なモンじゃねえ。泥臭くて血生臭いものだ、だからと言って俺はこの生き方を後悔してはいねえんだな、これがよ」

「成る程、確かに貴方は真正正銘の英雄ですね」

ニトクリスさんが納得したようにうんうんと首を振るとランサー



さんはブーツを復元させながらも肩を竦めた。

「止してくれよ、あちこちむず痒くなる」

「そうですか、ではこの辺りにしておきましょう」

俺達は気絶している女装ヤローの方に向き直ると、奴を拘束しよう  
とニトクリスさんが杖を地面を突いてミイラ達を呼び出す。

「や、止める貴様ら……！ 私をまた根の国へと送ろうというのか  
……！」

すると突然、女装ヤローが意識を取り戻してそんな事を言い出し  
た。コイツ、日本の英雄か何かなのか？

「根の国？」

俺が疑問を口にすると同時に、パンパン、と銃声が響き渡る。

「うおっ……！ テメエは……！」

俺の知り合いで二丁拳銃を使う奴は一人しかいない。しかも敵側  
の方にいる。

「よお、久し振りだな。ルイーナちゃんは元気でやってるみたいだぜ」  
ぐぬ……！ あ、熱くなるな！

ルイーナは奴らに囚われているが

無事な筈なんだ。そう信じて今は耐えるしかない。

「誰だい兄さん？ まあ、武器を二つ持ってコート羽織っている辺り口  
クな野郎じゃないって相場は決まってるんだが」

ランサーさんは実感のこもった口調で言う。過去に何かあったん  
だろうか？ 一方の『英雄殺し』は、ふっと笑う。

「気をつけて下さい、ランサーさん！ ニトクリスさん！ 奴の異名  
は『英雄殺し』！ あらゆる英雄に対して優位を取れる存在らしいで  
す！」

「何ですって!? デタラメにも程があります！」

ニトクリスさんが珍しく驚愕の声を上げる。

「へえ……、そいつは大層な異名だ。だが悪いが、俺も伊達に槍使いを  
名乗っていないんでね。その程度の称号じゃ怯まないさ」

「なーに、アンタとはやらねえよ。何せ相性は最悪だからな」

ランサーさんは余裕たつぷりに言うのと、ゲイボルクを具現化させて

構えを取る。だが英雄殺しの目的は爺さんと女装ヤローの回収にあつたらしい。符術を発動させると3人の姿が忽然と消えてしまった。けど、これでいい。ヨルムンガンドはゼノヴィア、イリナ、ポールの3人が抑えているし、俺はロキを再び追わないといけないからな。

「さて、それじゃ俺らも行くか！ニトクリスさん！ランサーさん！」  
俺は二人に声を掛けると走り出そうとする。

「待ちな坊主。俺達はここまでだ」

ランサーさんの言葉に俺は愕然とするしかない。ええっ!? な、何で!? まだ全然戦えるじゃないスカ!

「何、俺達はここじゃ異邦人だ。」

坊主はともかく俺達が無闇矢鱈にしやしやり出たんじゃ、オーデインの爺さんのメンツが完全に潰れちまう」

「フアラオたる私も同意見です。オーデイン様にも立場があるでしょうし、ロスヴァイセやスコグルも未だ健在ならば彼らに助力を求めべきでしょう」

そ、そういうものかあ……。ランサーさんは指揮官として、ニトクリスさんは為政者としての判断をしたんだろう。俺はやっぱりガキなんだろうな……。

「そうしよぼくれた顔するなよ。」

それにお嬢さんの土産も色々解析しなきゃならん。駒王町は任せとおきな！」

俯いたおれランサーさんはニカツと笑いながら俺の背中を強く叩く。痛い！でもおかげで少し気が楽になったかも。

「分かりました!!」

俺がニトクリスさん、ランサーさんに別れを告げるとオーデイン様は二人の考えを読んでいたのでだろう。

六本足の天馬に乗ったロスヴァイセさんとスコグルさんが駆けつけてくれた。「安里さん、お早く！」ロスヴァイセさんに促されると俺はスコグルさんに引つ張られて天馬の背に乗った。「それでは行きますよ！」

そう言うところスヴァイセさんが手綱を握ると同時に馬が勢いよく駆け出す。

「安里？　もう少しアタシをギューっと抱きしめてもいいよ？　それに狭いんだからもっとひつつこうよ♪」

「い、いやそういうワケには……」

天馬、スレイプニルの背に乗りながらスコグルさんは俺に対してグイグイと密着してくる。この人は相変わらずスキンシップが激しい。

「いいじゃん、いいじゃん♪」

夜の時はあんなに積極的だったクセにいく☆

「ちよ、ちよっと！　変な言い方しないで下さいよ！」

俺が抗議すると、スレイプニルの手綱を握るロスヴァイセさんはブルブル震えていた。やはり名高い悪神ロキとはいえ、神話の中で有名な存在を相手にするのは怖いのだろうか？

「うう……、やっ、やっぱり都会は爛れてるべ……。ばっちや、オラはどうすればいいのけ？　都会でやっでいけるんだべか？」「あ、地元モードになってるし」

……そつとしておこう。

というか、決戦前にこんな調子で大丈夫なのか？

バシユウウウウン!!

ほら見ろ！　ロキか誰かは解らねえが迎撃の雷光が飛んできたぞ！

「悪いがロスヴァイセ、スコグル！　俺が出来るのはここまでだ！

あんなでも、俺の親父だからよ！」

スレイプニルが口を開いた。というか喋れたのか!?

「ええ、充分ですよ！」

「うん！　ありがとうね、オジサン！」

二人は礼を言うのと、バツと降りた！

って、背中には俺一人しか乗っていないんですけどお!?

するとスレイプニルはまるで暴れ馬のように身体を揺らして俺を天空から振り落とした！

「いつまで乗ってやがんだクソガキ！　降りろオラッ！」

人の恋路を邪魔したわけでもねえのに落ちる直前に蹴りまで食らわされた！ あの馬ア！ 後でシメる！ 俺は地面に落下しながら、決意を固めた。

視線の先にはロキ、ラミエルとかいう旧大天使の前でズタボロになっっているヴァーリの姿があつた。

ま、マジかよ!?

## 第72話

安里 side

俺がスレイプニルに蹴り飛ばされて地面に落下する中、スコグルさんとロスヴァイセさんは問題なく地面に降りたっていた。ぐう……何とも無様だ！ だが、改めて状況を確認するとヴァーリの奴がロキとラミエルとかいう奴のせいなのかズタボロになっているじゃねえか！

「……おい、ヴァーリ」

俺は何とか立ち上がりながらヴァーリに声をかけた。

「……お前も来たのか？ 悪いが今は相手をしている暇はないぞ？」

この状況で俺達を相手にしようって余裕があるとはな……。だが、そんなことはどうでもいい。

俺はヴァーリを睨み付けるようにしながら言った。

「バカ、今はそういう状況じゃないだろうが！ 意地を張ってる場合か！」

そう言うのとヴァーリの表情が変わった。

「……確かにそうだな。すまなかった」

ヴァーリも状況を察したようだ。

しかしこれはマズいな。

今のヴァーリではロキやラミエル相手に勝ち目がないかもしれない。い。

「んだば、わだすはヴァーリさんの傷の手当さ、せねばまいね」

ロスヴァイセさんがヴァーリに駆け寄り治療を始める。攻撃よりも回復の方が得意なのだろうか、アーシアちゃんにも劣らない手際の良さだった。

「ふむ、君の家はそもそも治癒術に長けている家系だったな。うっかり失念していた」

ロキの奴は凍てつくような視線をロスヴァイセさんに向けていた。どうやら狙いを彼女に定めた様だ。

「ならば君から先に消してしまおうか」

「させるわけねえだろタコ！」

ロキが仕掛けてくる前に俺は即座に動いた。まず腕を剣に変化させながら一気に距離を詰める。そしてそのまま上段からの一撃を見舞う。

しかし、その斬撃はあつさり受け止められてしまった。

「ほう、なかなか速いじゃないか。それにこの力……まさか君は神器所有者かい？」

「それがどうかしたかよっ!!」

「何、それなら我々にとつて好都合なだけさ」

言い終わると同時にロキは剣を振り払う様に振った。凄まじい冷気と魔力を帯びた薙ぎ払いが巨大な真空波を生み出し俺を吹き飛ばす。

「まだまだっ！」

スコグルさんがフォローに入るべくミヨルニルを方に担いで突撃してくる。

それを察知したのか、ロキは一旦腰を落として構えると片腕でスコグルさんの攻撃を受け止めた。しかも、もう一方の腕から魔力弾を撃ち込んでくるおまけ付きだ。

「ぐあっ!？」

カウンターに近い形で攻撃を喰らい吹き飛ばすスコグルさん。そこへ追い討ちをかけるようにロキが攻撃を仕掛けようとしたその時、回復を終えたばかりのヴァーリがインファイトをロキに仕掛けた！

バオン！ズドン！ズガガガガッ！

拳のラッシュ、いや暴風とも称すべき連撃を繰り出すヴァーリだったが、ロキはそれを全て受け止めていた。

だが、それでもヴァーリの攻撃を止めるには至らない。このまま行けば押し切れる筈だ！

「どうした？白龍皇の鎧は纏わないのか？」

ヴァーリの連撃を受け切りながら冷笑を向けてくるロキ。その言葉は何か質問というよりは挑発のように聞こえた。

「そうだよ！アンタの半減の力とやらを使えば良いじゃんか！」

ヴァーリの代わりにロキの言葉に反応したのはスコグルさんだった。ヴァーリは答えない。ただ表情を曇らせたただけだ。と、いう事はまさか……？ 使わないんじゃないのか!?

「黙れ……アルビオンの力を借りられずとも貴様らなど!」

ヴァーリは普段より更に鋭い踏み込みを見せるとロキの顔面に右ストレートを叩き込んだ! パアアアツ! すると今度はヴァーリの右腕が光り輝いた!

「俺には忌々しく、悍ましいルシファアの血が流れている! アルビオンの力がなくとも悪魔の力でお前達を倒す!」

悲壮感すら漂わせるヴァーリの叫び。確かにルシファアの血の力を使えばロキを倒せるかも……?だが……!」

「聖壁」

ラミエルがつぶやくと同時にロキとヴァーリの間には光の障壁が現れてヴァーリの拳を防いだ。それだけならまだしも……!」

バチバチツ……!ズバババツ!

光の障壁はヴァーリの翼や拳に雷光を走らせ、ズタズタに切り裂いていく!

「愚かな。私は天より降り注ぐ雷の権化であるラミエル。地を這い回る蛇の末裔すれの牙など通らぬ」

ラミエルが手をかざすとヴァーリの全身を電撃が襲う!

「ガハア……ぐう」

ヴァーリが口から血反吐を吐き出し膝をつく。

「そのような穢れた輩が聖書の神の一部であらせられる神器を宿すなど何たる侮辱、冒瀆。我が雷に討たれ、煉獄の底にて未来永劫悔やみ続けるが良い」

などとほざいてラミエルが右手を上げるとヴァーリに向けて特大の雷撃を放つや凄まじい轟音と共に閃光が走る。

「ヴァーリッ!!」

思わず叫んだ。くそっ、これじゃあヴァーリが死んじまう!ロスヴァイセさんが治療魔法で治療を試みるも焼け石に水だった。

「おや、もう終わりかい?しかし君も何とも滑稽で無様な人生だな?

いや、悪魔生か？祖父に踊らされ、父に虐げられ、白龍皇なりと力なき蟻に集られ、摩耗した果てに得た力は何とも中途半端なものとはね。ラミエルの『神器抹消』はあらゆる神器の発動や展開を無効にする。つまり、その鎧を纏う事もできないんだよ」

余裕綽々といった様子のロキは更に

憐れむような視線をヴァーリに向けていた。

「黙……れ……い……」

ヴァーリは何とか立ち上がろうとするがダメージが大きく上手く動けないようだ。あちこち焼け爛れ、血も噴き出し、意識を保っているのさえ奇跡に近い状態だろう。

「いや、黙らんね。君は実に哀れだよ。」

そうは思わないかい？」

ロキはヴァーリを嘲笑しながらゆつくりと近づいていく。

「黙れと言っている!! 貴様のような下衆に同情される謂われはない！俺は俺の意思で戦い、俺の選択で生きている！その選択を笑う奴らは誰であろうと許さない！殺す！」

ヴァーリの目には殺気と憎悪が渦巻き、

当に悪魔そのものの姿に変貌し始めていた。

「ハハハ！そうだ！憎め！怒れ！狂え！禍津星は貴様を観測するだろう！我が『不吉の凶星』はその加護を受けて燦然と輝くのだ！」

「グオ……ウオオオオオ!!」

ま、マズイ！これじゃヴァーリが身も心も悪魔、いやバケモノになつてしまう！

「いい加減にしろ！陰キャヤロー！」

スコグルさんは叫ぶと同時にミヨルニルをロキに向かって投げつけた！それにしても陰キャって……。

ギョオオオオツ!!

空を裂き、風を切り、稲妻を散らしてミヨルニルはロキに迫る！

「フーン……」

だが、ロキはさっきの薙ぎ払いでミヨルニルを弾き返そうとしている。だが、その程度では止まらない！



「むう……！使い手はともかく、流星は我が友の得物か！」

「まだ終わりにじゃないんだよ！」

弾き切れずにバチバチツツと火花を散らせるミヨルニルだったが、スコグルさんは更に魔力を込めてロキと目と鼻の至近距離でキヤツチするとありつたけの力を注ぎ込む！

「これならどうさーッ!!!」

スコグルさんの叫びに呼応してミヨルニルの輝きが増していく！

そして……！

「蛮勇隕力！（マイティ・インパクト）」

あの髑髏衛星をも叩き壊したスコグルさんの必殺技だ！

ズゴオオオオオン！

バキバキバキバキイ!!!

凄まじい衝撃音と共にロキがいた地面がひび割れて、窪んでいく！流星のロキもこれには耐えられなかったようで大きく吹き飛ばされて地面に激突する！

「……くッ……たかが一騎のヴァルキリーと侮り過ぎたな」

口元の血を拭うロキだが意外に冷静だった。逆上する程のダメージでは無かったのか、あるいは……

「この程度のパワーでは私を倒せないと聞いたげだね……」

スコグルさんも何かを感じ取ったらしく、肩で息をしつつも警戒している。

「ああ、その通り。君達は確かに強い。だが、私の想像を遥かに超えるほどではない」

「そりゃあツール様を基準にすれば大抵の神様やヴァルキリーは大したことないでしょうよ……全く」

ロキの言葉にスコグルさんは毒づくその表情はどこか悔しそうでもあった。そりゃスコグルさんはツール様からミヨルニルやらなんやらのマジックアイテムを借りているからな。ツール様の力を誰より知っている分、自分の力が及ばない事への悔しさも大きいんだろう。

「グルオオオオオッ!!」

両者の束の間の静寂を破ったのはヴァーリだった！見るからに暴走状態

といった感じで全身に禍々しいオーラが纏わりつき、背中からは漆黒の翼が生え、瞳は血のように赤く染まっている。

「キサマアアア!!」

ヴァーリは両手を龍の顎の形に変形させるとロキに向かって波動砲ばりのエネルギー波を放った！

イツセーの『覇龍』とはまた違う力の奔流だ。

「ほーお……。まさか悪魔王ルシファーと二天龍アルビオンの力を融合させてのロンギヌス・スマツシャーか。中々面白いじゃないか」

ロキはニヤアツと笑うとエネルギー弾を魔力弾を連発することで相殺していく。だがあの『覇龍』状態のイツセーが放ったヤツと同じ万物を滅ぼすというエネルギー波だ。勢いが弱まる気配はない。

これなら幾ら何だつて……!!

俺はラミエルがヴァーリのカットに入るのを防ぐために牽制しながら様子を窺っていた。

「フム。確かに威力だけならば今の私でも直撃を受ければタダでは済まないレベルだ。しかし……」

ロキが右手を前に突き出すと、ヴァーリが撃ったエネルギー波がブラックホールみたいな渦の中に吸い込まれていった!?

「驚いたかね?これがあのギャラルホルンの本来の力だ。ヘイムダルには嘗てこの力を使われ不覚を取ったこともあったがね」

「グオ……オオオオオ!!」

過去を振り返るロキに対してお前の過去なんてどうでもいい!ともも言っているのだろうか? ヴァーリは更にロンギヌス・スマツシャーの勢いを増す!だがギャラルホルンとやらの発動が収まる気配はなく、ヴァーリの肉体の方が悲鳴を上げ始めていた。

「オオ!オオオオオオオ……」

まるで無念の声を漏らすようにヴァーリは血の涙を流す。そして遂に……!!

「オオオオオオ!!」

「フハハハハハハハハハ！見るがいい！これが最強の白龍皇と謳われたヴァーリールシファアの最後の姿だ！」

「そうだ、穢れた悪魔王の血を持つ白龍皇よ、お前は生まれて来ないほうが良かったのだ」

「ウオアアアアアッ！」

ロキの高笑いに呼応するようにロキの背後にいたラミエルも嘲笑う。その声はまさに邪悪そのもので、思わず耳を塞ぎたくなるほど不快なものだった。

「オオオ……オオオ……!!」

ヴァーリはそれでもロキとラミエルを睨みつける。だがもう限界なのか、徐々に意識を失いかけていっているようだ。

「……ク……ソ……ガ……」

悔しいか？悔しいよなあ……！

あんな奴等の思い通りにされちまうんだからな。俺だって同じ気持ちだぜ！だからよ……！

「うおおおおお!!」

俺は『冥獄長の辣腕』を発動させて

片腕を機械仕掛けの多腕へと変化させた。

「成程、ギリシャ神の力ならば確かに『神器抹消』の影響を受ける事はあるまい、しかしその程度の力では……ッ」

「誰がテメーらを狙うって言ったア!!テメーらの物差しで測るんじやねえエエツ!!」

俺は多腕全てをヴァーリの背中を支える形で展開する。

「なあ、ヴァーリ！そんなんでいいのかよ!?!」

「……」

「こんなところで終わって満足か!?もっと欲張れよ！まだやりたいことがあるんだろ!?!」

「……っ」

「ここで諦めたら全部終わっちまうぞ！それで良いのかよ!?!」

「……ら……」

「目を開けてよく見やがれ！あいつらはお前が目障りで仕方ないみた

いだけー！このままじゃ殺されるだけだ」

「……め……ら……」

「それになあ、アイツらぶっ飛ばしたいんだろう!? だったらさ、俺も手伝わしてくれよ！」

俺の訴えと【六合太極】による魔力の充填のためかヴァーリの瞳に僅かな光が宿った気がした。

「らー……めん」

ヴァーリの口から放たれたのは意外な言葉だった。ラーメン？

ラーメンって、あのラーメンか？

「ふっ、ははははは！ 所詮カスの世迷い言か！ ヴァーリルシファー！

末期の台詞にしてはあまりに滑稽だ。お前が死ぬのは変わらないというのに！」

「……」

「貴様の死に様はしかと目に焼き付けておこう。そしていずれは我らの新たな糧となるのだよ。」

ロキとラミエルは勝利を確信しているのか愉快そうに笑っている。

そして俺も笑った。

「はは、ははははは！」

スコグルさんもロスヴァイセさんもギョツとした顔になる。無理もない。いきなり笑い出したんだから。

けど奴等のバカにした笑いとバカ笑いとじゃ意味合いがまるで違う。

「いいじゃねえか！ 世の中にや色んな料理やラーメンがあるって辰郎叔父さんが言ってたしな！ 好きなだけ食べばいいんだよ！」

するとその時、ヴァーリの身体に徐々に白龍皇の鎧が姿を現し始めた。『神器抹消』の効果が打ち消されているのか？

『いや、それは少し違うのお』

不意にどこからもなく声が聞こえてきた。この声は俺に力を貸してくれたヘカトンケイル……もといメカメカ爺さんか！

『どうやらアルビオンは神器としてではなく、一匹の龍としてヴァー

リールシフアーと共に歩むと決めたようじゃ』

「なんでまた？」

『ヤツが他人であるお前さんに本心を打ち明けたからじゃろう。心に壁がある内はどんなに強い力を持っていようと真の意味で強いとは言えぬ。兵藤一誠のオープンスケベ、いやさ天衣無縫ぶりを見習えとは言わんが、あれぐらいの心意気を持つ事が大切だとワシは思うておる！』

「はは……はははー！」

ヴァーリは再び笑い出す。その笑いは先程までの自嘲的なものは違う。

まるでこれから訪れるであろう戦いへの期待感を孕んでいるかのような笑い声だ。それに応える様に白龍皇の鎧は更に白金に輝く。「ずっと昔から、頭から離れなかったんだ。何故俺は生きているのかと……」

「知れた事をほごくな、痴れ者が！」

貴様らは裁かれ、滅びるために存在するのだ。今更そのような戯れ言を……っ」

ラミエルが牽制のために雷撃を放とうとしたがスコグルさんが割って入る！

「ごちやごちや煩いんだよアンター！黙ってな！」

「ぐおっ!？」

雷の矢が降り注ぐこうとする中、スコグルさんのミョルニルだけでなくロスヴァイセさんの魔法陣から魔力の矢が放たれ、それを相殺する。

「ヴァーリ！ お前の答えを聞かせろ！」

「俺は……生きたかった……!! もっと沢山のものを、世界を見てみたかった……!! 今なら母さんの言った事が解る……! 俺達は皆、幸せになるために生まれてきたと……! 俺にはその資格がないと思っていた……でも、俺はもう迷わない! 俺は生きる! 生きて生き抜いてみせる!」

ヴァーリの叫びに呼応し、まさに白金の如く輝く鎧を纏う。そし

て、ロンギヌス・スマツシャーは赤黒いオーラから漆黒に変わる。

「その……力は……!?」

ロキの顔に冷や汗と焦りの表情が浮かぶ。どうやらロキに取っても想定外の力らしい。

『ほほほ。ワシがあやつに呼びかける前に自力……いやさ、御主達の力で顕現させるに至ったようじゃのう』

メカメカ爺さんが好々爺然とした口調で呟いた。至ったって何にだよ？

「……ヴァーリ、お前……!」

「これが俺の……いや、俺達の力だ」

ヴァーリは全身から白光を放ちながら不敵に笑う。

『黒き杖』、いや……レーヴァテインと言った方が馴染み深いか」

『ロキよ。貴様にとっては亡骸を灰燼に帰した忌まわしい魔剣が、今度は貴様を滅ぼすために振るわれる』

今度はアルビオンの声が響く。ロキは怒りに震えているのか歯軋りする。それによく見ればヤツの使うギャラルホルンの力も弱まっているようだ。

「おのれヴァーリ＝ルシファーム……! アルビオンめ……! この屈辱、必ずや……必ずや晴らしてくれらうう!!」

「末期の台詞にしてはあまりに陳腐だな、ロキ。お前が滅び去る運命は変わらないと言うのに」

レーヴァテインの閃光に飲まれて消滅するロキに対してヴァーリは悠然と意趣返しめいたセリフを返した。

「ロキめ……! ファン……。所詮北歐の悪神如きでは荷が重すぎたか。まあ良い。」

奴の代わりなどいくらでもいるのだからな」

「そうだね、アンタの代わりだつて幾らでもいるからさあ!!」

スコグルさんの2発目の蛮勇隕力がラミエルに見舞われた。しかもロスヴァイセさんのサポートもあってか威力が倍増している。

「おのれ……! 小娘風情が……!」

「アタシ達は小娘じゃねえ! 誇り高いヴァルキリーだ!」

「ぐ……おあああああ!？」

俺も最後の力を振り絞って

『冥獄長の剛腕』を発動させて

自身を巨大な拳へと変貌させる!

「ウオオオオオオツツ!!」

喰らいやがれええええええつつつ!!」

アイアンクローの要領でラミエルの全身を握りしめ、万力の様に締め上げる!

「ぐがああああつ!? 貴様ら……貴様らよくも……!この私を!何も知らずに!この世界全てに古今未曾有の厄災、滅びの未来が待ち受けているというのに……!聖書の神の再誕なしに、世界は救われないというのにいい!」

成程、旧大天使はシステムを掌握し、神器を集めて聖書の神を復活させようとしていたのか……!だがな、その気高い理想とやりに巻き込まれる奴等からすれば堪ったもんじゃねえんだよ!だからな……!

シャキン!と拳の後ろから撃鉄の様にシリンダーを起こす音が鳴り響いた。そこに特大の一撃を打ち込めばコイツを仕留められる筈だ!

「ヴァーリさん!」

「ヴァーリ! やっちゃいなよ!」

ロスヴァイセさんの呼びかけと

スコグルさんからミヨルニルを

投げ渡されたヴァーリは高らかに叫ぶ!

「これで終わりだ! 大天使ラミエルよ! 光になれえええツ!!」

ヴァーリとアルビオンの力を結集させた ミヨルニルの一撃がシリンダーに振るわれ、掌の中で雷光のエネルギーが爆縮し、解き放たれる!

「ぬおおおっ! 私は……! 滅びる訳には……! 滅びるわけにはいかな……い……! 私の願いは……! 神が作り給うた世界が、永遠に……永劫に存続するため……!! それこそが……!」

そのみが……神……のみ……」

ラミエルが末期の台詞を言い終わる前に光の粒子になって消滅した。どうやら、その歪んだ正義と理想と共に散ったようだ。その光の粒子をヴァーリはちやつかり吸収していく。抜け目が無いな……。

「フウ……。流石に今回は死ぬかと思っただぜ……」

俺は元の姿に戻りながら息をつく。

もうマジでヘロヘロだ。ヴァーリも同じ位ヘロヘロだったようで俺の近くに大の字で倒れ込んだ。

「……俺達は勝った。……いや、勝ち取ったと言うべきだな。けれど、勝った後に誰かの前で大の字で倒れたのは初めてだ……」

ヴァーリはルシファアの一族として、最強の白龍皇としてのプレツシャーの中で生きてきたんだろう。俺達みたいに戦いの後、緊張の糸が切れて倒れるなんて経験が無かったに違いない。だからこそ、ヴァーリはこの戦いに勝利出来た事を素直に喜んでるように見えた。

「どうだい、彼らはなかなか興味深いだろう？」

「……不思議。我、望むは静寂。」

しかし、あの男達の行路にも興味がある」

だから、ゲイトの旦那と見知らぬ誰かが話していることも気づくよしもなかった。



## 第73話

イツセイ side

「どりやああつー！」

「せいやあつー!!」

俺とフェンリルの拳や蹴りが激突する。

互いの攻撃は互角で、どちらも決定打にはならない。ヘルちゃんの作り出した異空間の中だから外の状況が分からないけど、もしかしたら時間切れまでこのままかもしれないな。

でも俺は負ける訳にはいかない！ この世界で俺を慕ってくれた子達の為にも！

「ちいつ……やっぱりお前は強えよ兵藤一誠。けどオイラも負けてられねえんだ」

フェンリルはそう言うと、再び全身に力を込め始める。すると奴の体から凄まじい魔力が溢れ出した。どうやら向こうもケリをつける気らしいな。ならこつちも全力だ！俺は全身に力を貯めて一気に解き放とうとしたその時……！！

ピッシャアアアン!!

異空間なのに、俺達の間を割って入るように雷が落ちてきた!? 何事かと思つて空を見上げる。

「やあ、黒棺を解放するのに少し手間取ってしまったヨ」

見れば道士服姿のシユタークさんが手を振っていた。相変わらず神出鬼没な人だな……。

するとフェンリルは僅かの間、訝しむような表情を浮かべていた。

「んー？ 今度はお前が相手か？」

見た所そんなに強いオーラを感じないけど……まあいいや。邪魔をするなら全員まとめてぶっ飛ばすだけだぜー！」

「やれやれ、キミの頭の中にあるのは戦いの事だけかい？」

フェンリルの言葉に対してシユタークさんは呆れたように肩をすくめ、俺の方に視線を送るや符を投げ渡してくれた。多分空間脱出用の物だろう。

「ここはボクに任せて先にお行き」

「ん？ 待て待て。オイラは一誠をここで倒す様父ちゃんに言われているんだぜ？ それを勝手に……」

「おやおやそれは大変だね。けれどその前にこのボク、シュターク・ゴーズはキミに決闘を申し込むヨ！」

ビシツと、フェンリルを指差すシュタークさんに対してバトルマニアの血が騒いだのかは知らないが、フェンリルはその挑戦を受ける事にしたようだ。

「へへっ！ いいぜ！ だったらすぐに始めようじゃねーか！」

「ああ……直ぐに、ネ♥」

まるで蛇がネズミをロツクオンするような目つきでシュタークさんがフェンリルさんを見つめる。

多分フェンリルが想像しているものとは違う決闘だと思うぞ……。

ともあれ、これで何とか先に進めそうだな。

「ありがとうございますシユタークさん！ それじゃ後は任せます！」

俺は礼を言うと同時に、渡された符を使って異空間から脱出する。そして目の前に現れた光景は……！！

ー

「がはっ……」

「……」

ボロボロのトゥーさんと彼女の顔面をアイアンクローするトールの姿があった。戦いとはいえなんてことを！

「止せえー！」

慌てて止めに入る。

するとトールの方も俺に気付いたようで、ゆっくりとこちらを見やる。

「来たか、赤龍帝」

「ああ、来たともー！」

だから、トゥーさんから手を離して貰うぞ！とばかりに俺はまずド

ラゴン・メガフレアを放った!

圧縮した魔力弾はトールに当たった瞬間に炸裂して大爆発を起こす、筈だった。だが、トールは雷を纏った片腕で握りしめた!

「……なっ!?!」

『何い!?!』

俺にもドライグにも予想外の出来事だ。

なんたつてトールの腕には傷一つ付いていないのだ!

「……かあっ!」

トールの丸太の様な腕に筋が入り、次の瞬間、ドラゴン・メガフレアは握り潰された!

マジかよ!?

サタナキアをも軽くふっ飛ばしたエネルギー砲だぞ!?

「ちいっ!」

俺は咄嗟に後ろに飛び退いて距離を取る。だが、その消極さはトールには気に入らなかったらしい。

「来るがいいっ!生半可な攻めでは

俺の身体を傷つける事など出来ぬわっ!」

そう言くとトールは地面を踏み砕きながら突撃してくる。は、速い!?

筋肉の塊の様な見た目なのに加速力はスポーツカー並みだ!しかも両腕に纏っている電撃は、触れるだけでヤバい感じがビンビン伝わってくる!

「ぬおおおおっ!!」

さながら雷鳴の様なトールの雄叫びと共にリアットが俺の首筋へと迫る!

「くうっ!?!」

首を捻りギリギリクリンヒットは回避するが、それでも凄まじい衝撃だ!首が吹っ飛ばなかったのが

奇跡みたいだよ!しかし、トールの攻撃はまだ終わらない!振り抜いた勢いのまま体を回転させると、

後ろ回し蹴りを放ってきた!

「ぐおっ!？」

これは喰らうわけにいかないの、なんとか左腕でガードしたが、そのまま吹き飛ばされてしまう。

「がはあっ……」

「まだだあっ!」

トールはさらに追撃を仕掛けようと飛びかかってくる。両手に雷を纏わせている辺り、飛び道具か？

それとも拳でのストレートか？ どちらにせよまともに受けて良い攻撃じゃないのだけはつきりしている！俺は即座に体勢を立て直す、トールの動きに合わせてカウンター気味に右アッパーを放つ。

「甘いっ!」

トールは左手で俺の右腕を掴むと、右手を振りかぶつてのエルボーを繰り出そうとしてくる。だが甘いのは

俺だけじゃなくてお前も同じだってんだよ！

「食らえっ!」

俺は掴まれたままの右腕に魔力を流し込むと共に、背中のスラスター状の翼から『ケラウノスの雷光』を

放った！

バババババツ!!

放たれた数十もの雷撃はトールを直撃し、奴を弾き飛ばす。

「フハハハ!! この雷神と言われた俺に怖気づく事なく敢えて雷撃を放つとはな!その豪胆!気に入ったぞ!」

ではあるがトールはダメージを感じさせない動きで即座に立ち上がる。雷を無効にされたのか?と俺は一瞬考えたが、どうやら違うようだ。

『そうじゃない。奴の生命力と耐久力が俺達の想像を遥かに超えているというだけの話だ』

それはつまり……アレか?今までの強敵の体力を100とすると……1000とかそんなレベルなのか?

『そういうことになるな相棒。』

今までの俺達がやってきた倍化による短期決戦は通じないと考えた方が良さだろう』

おいおい、それじゃあどうやって倒せばいいんだ？

『……分かん』

ドライグの声が普段よりも心細く聞こえる気がするが、吞まれてはダメだ！俺達はこれまで何度もピンチを切り抜けてきたじゃないか！

『ああ、そうだな。それにこの戦いで多神連合が成立するか瓦解してしまうかの瀬戸際だ。ここで負けたら全てが終わる。』

だからこそ、絶対に勝たねばならない！』

ああ、そうだ！　ここで俺が負ければ、『禍の団』、ひいては『永劫』に回帰するものに勝つ手段が無くなる！　だからこの戦いは何としても勝利しなければならぬ！　その為には俺達二人だけでなく、皆の力が必要だ！　俺は決意を新たにしながら、改めてトールを見据える。

『どうした赤龍帝！それでも三大勢力を壊滅させかけた二天龍の片割れか！』

トールは挑発するように叫ぶ。

バチバチツと周囲にスパークを放ちながら、俺を睨みつけてくる。

足が震えるのを隠しながら、俺は必死に虚勢を張る。

『まだまだ小手調べだったの！本番はこれからだ！』

『Boost!』『Boost!』『Boost!』

ブーストを発動させて俺は一気に間合いを詰める！効果は薄いのは解っている！だが、何もしないよりはマシだ！

『うおおおおおおおっ!!』

叫び声を上げながら俺はドラゴン・ラグナロクを発動させ、渾身の一撃をトールに放つ！　だが、トールはそれを正面から受け止めた！

『ぬううっ!!』

そしてトールは片手でドラゴン・ラグナロクを受け止めると同時に、もう片方の手で掌打を放ってきた！

「ぐあつ!？」

トールの掌打をモロに受けて意識が吹っ飛びかける……!

『しっかりしろ! 気を失うんじゃない!!』

ドライブの叱咤を受けて俺は踏ん張り、なんとか持ちこたえる。

確かに一発一発は重いが、エルシャさんとの特訓で強化された今の俺なら耐えられない程じゃない!

「ふんっ! なかなかやるではないか! ならばこれでどうかな?」

そう言うのとトールは拳に雷を集中させる。あの技は……ミヨルニルか! トールは俺目掛けて巨大な闘気と雷で練り上げたハンマーを構え、飛び上がった!

どうする? 迎え撃つにしても火力に差がありすぎる……!

躲すにしても速度でもトールには敵わないだろう。

……ダメだ!

力でも速度でも魔力でも、俺は奴に劣っている! これじゃあどうしようもないぞ!?

『落ち着け相棒! お前は一人じゃ無いんだ! 一人で無理なことだって、皆で力を合わせれば出来る筈だ! 今こそ思い出すんだ! お前は今までどんな苦境も乗り越えて来ただろう?』

そうだ! こんな所で諦められるもんか! 俺は俺を信じてくれる仲間の為にも、この世界で知り合った人達を守る為にも、絶対負けられねえんだよっ!!

「弱者が群れをなしても、結果は見えている! 弱いものは群れてはならぬのだ! 戦士の誇りあるものに群れる事など許されん!」

トールはそう言い放ち、上空からの落下の勢いを利用して俺にトドメを刺そうとしてくる。

木場……! 朱乃さん……!

小猫ちゃん……いや、白音ちゃん!

アーシア……! リース!

そして、部長、リアスさん。

リアス……!

まるで走馬灯の様に俺は今まで出会った人の顔を思い浮かべる。

俺はその瞬間、一つのイメージを頭に思い描いた。  
そうだ！そうだった！

何で仲間を信じているのに何でも

自分だけで背負おうとしていたんだ！ 俺の背中を守ってくれる

皆がいるじゃないか！

「違うな、トール……いや、

トールさん！弱いから群れるんじゃない、群れるから弱くなるんで  
もない！俺達は、いや人間は強くなるために群れるんだ！人間っての  
は、そういう生き物なんだ！

俺達は一人じゃ弱くても、皆がいれば強くなれるんだ！」

「戯言は無用！俺を説き伏せようと言うのならば武で示せ！でなければ滅びよ！」

トールが俺にとどめをさそうとしたその時！

「ああ、示してやるぜ！」

赤龍帝なんて目じゃないオカルト研究会の力を!!」

俺の全身が光り輝き、トールの放ったミョルニルと激突した！

バアアンツ!!

凄まじい衝撃が辺りに響き渡り、俺の視界が真っ白に染まった！

そして次の瞬間、俺の姿は変化していた。

「ぬう……!?!? これは霊体?!」

先ずは白音ちゃんのと黒歌の仙術の力をイメージし、そこに神器の  
能力をプラスした事で霊体化する事に成功した。だが回避技だけで  
は終わらない！ 木場とイザイヤさんの『魔剣創造』を参考に俺は赤  
龍の鎧に剣ではなく双肩に魔砲を宿した！

『ハッハッハー！コイツは見事だ！』

嘗て俺が肉体を持っていた頃、白いアイツとやり合っていた頃の俺  
の姿を彷彿させるぞ！」

更に朱乃さんの墮天使の翼と悪魔の翼、更に雷の力をイメージする  
事で

ケラウノスの力を増幅させ、墮天使の光の力、悪魔の翼にて冥界に  
吹く風を取り込んでいく！

「モードチェンジ！地竜の僧侶！（ウエルシュ・ロボティック・ビショップ）」

光、雷、風、炎、冥府の力が俺の体を駆け巡る！

「うおおおおおっ!!」

ボルテック・ブラスター!!」

俺は双肩のキャノンと翼から

一斉にエネルギー波を放ちトールにぶつけた!

「ぐおっ!? ぐううううっ!!」

トールは咄嗟に両腕を交差させてガードするが、それでも威力は殺せないようだ。そのまま後方へと吹き飛ばされていく。

「これほどとはな……!!」

「これほどじゃないぜ！」

これからだよっ!!!」

俺はトールに向かって突っ込む。

木場やゼノヴィアの様な速さをイメージするんだ……!! いや、それよりも早く、荒く、凄まじく!

さながら津波や濁流の様に!

「モードチェンジ！ 水龍の騎士

（ウエルシュ・バイオニック・ダイダルナイト）!!」

装甲の一切をパージして軽装に変化する！本来ならば骨が軋み、肉が裂けるほどの超加速だろう！だが津波、濁流は無形！今の俺はゲル状になることで

あらゆる打撃や雷、衝撃を受け流せるんだ!

「この動きは……!!」

トール、いやトールさんが面食らうのも当然だ！ 液化化したようにトールさんの周りを高速で移動しながら俺はトールさんに拳を叩きつけまくる!

「ぐふっ！ ぬうっ！ ぬあっ！ ぐううっ！ ごはあっ！」

どんな大木だろうと、巨塔だろうと

土台を津波で覆されれば倒れるしかない！ 俺の攻撃に翻弄されたトールさんは次第にダメージを負っていき、膝をつく。



「ウオオオオオ!!」

まさにベルセルクの雄叫びと共に

雷の爆裂波をトールさんは放つ!

形が無いならば全て吹き飛ばそうというのか! 或いは自分自身をミヨルニそのものにしてしまおうとしているのか!?

「……凄いな! やっぱリアンタは

凄いやトールさん! 尊敬するぜ!」

俺も負けじと気合を込めて最後のイメージを顕現させる!

そう、俺の理想であり、最愛の人。

リアスさん、いや、リアスの姿を!

強く、美しく、気高く、慈悲深く、そして誰よりも愛しい女神様の様なリアスの姿を!

「モードチェンジ! 天龍の女王(ウエルシュ・ドラゴニック・クイーン)!!」

リアスの髪を彷彿とさせる龍の髭、そして紅色の鱗をイメージした鎧が俺に装着される!

「いくぞ、トールさん! これ俺達オカルト研究部みんなの力だああああ!!」

俺の黄金の剣に紅蓮の魔力が纏わりつき、巨大な剣となる!

「おおおっ!! リボルクラッシュ・ライトブリンガー!」

俺はトールさんに剣を刺して、

全てのエネルギーを倍化して解き放った! ドオオオオンツ!!

「がはあああああっ!!」

トールさんは絶叫を上げて、血反吐を撒き散らす!

「ぬぐおおおお……!!」

だがトールさんはまだ闘う意志を無くしてはいない! 俺の顔面を掴むとありつたけの雷を俺に送り込んできた!

「があああああ!!」

俺はトールさんの雷撃に意識を持っていかれそうになるが、歯を食い縛って耐える! トウーさんはこれ程のダメージを受けても俺がたどり着くまで耐えていてくれたんだ! 俺がここで倒れる訳にはいか

ない！

「うおおおっ!!」

俺が叫ぶと、俺の中で何か弾けた！　すると今度は俺の中に、  
トールさんの雷の力が注ぎ込まれてくる！

「まさか、俺の力を吸収したと言うのか!?!」

「そうだ！そしてこれは皆の想いの力でもある！」

「馬鹿な……!?!」

「仲間がいるから人間は強くなれるんだ！一人じゃ勝てなくても、仲  
間となら何度でも立ち上がれるんだ!!」

「ぬううっ……み、見事だ！」

良くぞこの俺をここまで追い詰めた！　だがまだだ！　俺はまだ  
見ぬ命あるものの為にもこの世界を守らねばならぬのだ！」

「それは違うぜ、トールさん！　誰かを守るっていう事はな、その大切  
なものと一緒に幸せになる事なんだよ！」

「ぬうう……!!」

トールさんの体から光が溢れ出す。

「赤龍帝……いや、兵藤一誠よ……!!　見事なり……!!」

「ありがとう、トールさん……。」

俺が礼を言うと同時にトールさんの体は光に包まれていく。

「俺の敗因は……俺自身のためにしか戦えなかった事か……!!」

トールさんの最後の言葉に俺はただ横に首を振った。

（そんなことないさ。まだ見ぬ命、つまり未来のために闘っていた  
じゃないか。

俺達はまだまだ未熟だ。だからこそこれからもっと学んで、鍛えて  
いかないといけない。

アンタみたいにな、さ。）

俺は心のなかでトールさんに語りかけ、まるで俺を励ますかの様に  
静かに風が駆け抜けていった。

「うむう……!!」

トールさんを倒した後、俺は全身を駆け巡る激痛に耐えていた。

『おいおい大丈夫か？　無理をするからだぞ?』

ドライブグの音が頭に響く。

「へ、平気だよこれくらい……!」

強がって胸をドン、と叩いたその時

ぽよん、と何故か懐かしくも柔らかい感触が手に伝わる？

こ、これは……!?

『あ、相棒……!?

こ、これは一体……!?’

な、何がどうなっているんだ!? 「……………」

改めて胸を弄ると……?

あ、あるっ!? おっぱいがあるっ!? 更に股間には……!?

な、無いっ! これはまさか、等価交換の法則!?

命と同じ位大切なモノがなくなり

命と同じ位大切なモノを貰った!? うわあああん! なんてい

う理不尽なんだあっ!!

※幕間・異聞（イツセー♀×木場&朱乃　フェンリル  
×シユターク&ヘル）

イツセーは困惑と陶酔の最中であつた。

トールを打ち倒すために皆の力を模倣した結果、彼の理想とする女性の肉体を得てしまったのである。

リアス・グレモリーもかくやという胸の膨らみ、ゼノヴィアの様に引き締まった腰回り、朱乃のような張りのある尻。そして全てを飲み込む様な漆黒の長髪。

イツセーは感動と失意を同時に味わっていた。まさか自らが理想の女性の肉体を持つことになるとは……。

イツセーは自分自身に興奮するような趣味は持ち合わせていない。というか、そもそも今は興奮を示す男のシンボルがないのだ。

（ああつ！戻りたいような！戻りたくないような……！）

奇妙な二律背反がイツセーを悩ませるものの背後から声をかけられた。

「イツセー様……そのお姿は？」

声の主はトウー・ルチャ。

イツセーの眷属となつた炎の魔人、ということになっている。

「これは……まあ何と云うか」

イツセーは隠しても仕方がない

と判断して事の経緯を話すことにした。

すると彼女は意外にも冷静な反応を示した。

「そうですね。一時的な肉体の変化自体はそう珍しい事でもありません」

「珍しくないの!？」

どうも外なるものの感覚はよくわからない。だが確かに考えてみればこの世界では魔法もあるし神もいる。そんな世界で身体が変わることくらいは大したことではないのか？

「いや、でも元の姿には戻りたいかな……」

名残惜しいがハーレム王、いやハーレム神を目指すイツセーにとってこの姿のままではいけない。それにこんな格好で家に帰れば家族が卒倒するだろう。

「それならば私の力で元に戻しますよ」

「本当か!」

やはり持つべき物は眷属だ。頼れる仲間とはこういうものを言うに違いない。とイツセーはトゥー・ルチャに熱い視線を送る。

しかし彼女の表情はどこか煽情的だった。

「ええ、ですがその前に少しばかり私のお願いを聞いて頂けませんでしょうか?」

「お願い? まあ、俺にできる事なら……」

「ありがとうございます。実は先程の戦いで消耗した魔力の回復のためにあなたの精気が必要なのです」

「せいぎ?」

「はい。つまりあなた様と交わる必要があるということですよ」

「まじかー……って、んっ?」

今とんでもない言葉を聞いた気がしたが聞き間違いだろうか? しかしトゥー・ルチャの表情は真剣そのものだ。

「えつと……それはどういう意味なのかな?」

「文字通りの意味ですが?」

「セックスしろと!」

「ええ」

平然と答えるトゥー・ルチャに対してイツセーの顔色はどんどん青ざめていく。

「いやいやいや! おかしいよね!? なんで急にそんな話になるんだよ!」

とうかさ、今俺は女の子だからそういうことは無理だと思うんだけど!」

イツセーの主張は極めて真つ当なものだったが、対するトゥー・ルチャは全く動じない。

「問題ありません。私だけではなく木場殿、そして朱乃様も協力してくれますから」

「いや、あの二人は関係ないだろ!？」

が、既に事態はイツセーの意思を無視して動き始めていた。トウー・ルチャはイツセーを姫のように抱き抱えるとその場を離れようとする。

「ちよつ!どこ行くつもりだよ!？」

「とりあえず木場殿と合流しましょう。彼はもう準備できているはずなので」

「待ってくれ!頼むから!」

イツセーは必死に抵抗するが無駄に終わる。

「さあ行きましょう。大丈夫です。痛くしませんから」

「そういう問題じゃないんだってばあ!!」

↓

そして、イツセーはニグラの支配する異空間、即ちヤリ部屋空間へと転移させられた。

そこは薄暗く淫猥な雰囲気醸し出す場所だった。

天井からは煌びやかな照明が吊り下がり、壁際には様々な形のベッドが置かれている。部屋の中央には大きなダブルサイズの天蓋付きベッドがあり、そこに全裸の木場祐斗と朱乃がいた。

「待っていたよ、イツセー君」

「うふふ、お待ちしていましたわ♥」

どうやらイツセーの到来を一日千秋の思いで待っていたようだ。

木場のペニスは龍の牙の如くそそり立ち、朱乃の秘所は既にとり、と蜜を垂らしている程だ。

「では早速始めましょうか」

そう言つてトウー・ルチャはイツセーをベッドの上に横たえる。

イツセーは抵抗しようとするが頭がふわふわして力が入らない。

ドライグに呼びかけても反応はなく、どうしようもない。

「そんなー!ドライグ!？」

(相棒……すまねえ)

どうやらこの空間はイツセーの精神に直接作用する類の物らしい。

「普段は僕とイザイヤが君に抱かれる立場だけ……こういうのも悪

くないね」

「うふふ、イツセーちゃん可愛らしくて食べちゃいたくなりますわ」

二人がゆつくりと近づいてくる。

まずい。このままでは本当に犯されてしまう。だが身体の自由がきかない上に頭の中に霞がかかったように思考能力が低下している。それにこの二人ならば、という妙な信頼感に下腹部も胸の先端もキyunと疼いているのがわかる。

どうすればいい？

「まあそう慌てなくても大丈夫ですよ。時間はたっぷりありますから」

「そうだね。ゆつくり楽しませて貰おうか」

「あう……」

二人の手がイツセーに触れる。

身体中が火照っているのかひんやりとした手の温度が心地よい。

木場の手が優しくイツセーの乳房を揉みほぐす。

「あつ、あんっ！」

普段なら特に感じることもない刺激だが今は違う。全身が性器になったかのように敏感になっており、乳首など軽く撫でられただけで声が出てしまう。

「あらあら、可愛い声ですね」

朱乃はイツセーの耳元で囁きながら太股の内側をさする。

「ひゃうん！」

たったそれだけでイツセーはビクビクと痙攣してしまう。

「感度良好……といったところかな？」

「ええ、とても美味しいです」

トウ・ルチャはイツセーの首筋に舌を這わせる。

「あはっ！ダメエツ！おかしくなるウツ！」

「イツセー君は感じやすいんだね。ならここはどうかかな？」

木場はイツセーの左胸に吸い付くとそのまま甘噛みをする。

「う、ああ……」

声にならない甘美な衝撃がイツセーを襲う。

同時に右の乳首をトゥー・ルチャが指先で弾く。

「くっ!!?」

あまりの快感にイツセーの意識は一瞬飛びそうになる。

「イツセー君のおっぱい凄く柔らかいよ、張りもあって……それに甘い味がする」

木場は夢中でイツセーの胸を貪る。

一方の朱乃はイツセーの耳に息を吹きかけたり舐めたりと絶え間なく責め続ける。

トゥー・ルチャに至ってはイツセーの背中や尻、脇腹などを愛おしむように撫で回す。

三人による同時攻撃にイツセーの理性は徐々に削り取られていく。

もはやまともにも考えることすらできない。

気持ち良い。もつと触ってほしい。

そんな欲望がどんどん大きくなっていくばかりだ。まるで水を限界まで注ぎ込まれた水風船、今にも破裂してしまいそうなまでにイツセーの身体は快楽に溺れていた。

木場に唇を塞がれ、舌を絡め取られる。口内を蹂躪される感覚がたまらなく心地よく、また彼の唾液には媚薬でも入っているのではないかと錯覚するほどだ。

「んっ！ちゅっ！じゅっ！ぷはっ！」

「うふふ、イツセー君ってば。」

オチン○ンがついていないのにそんなに腰をかくつかせて……可愛らしいですわ♪」

朱乃はイツセーの下半身に手を伸ばす。

「ああっ！」

「あら、もうこんなに濡らしちゃって。そんなに期待しているんですか？」

「ち、違あ……」

「じゃあどうしてこんなになっているのかな？これはどういうことだい？」

親友と先輩に指摘され、イツセーの顔が羞恥に染まる。今の彼、い



や彼女にとって肉体的な性別など最早どうでもいいことだった。

「う、うう……」

朱乃はイツセーの股間に顔を埋め、茂みの奥にある割れ目を丁寧に舐める。

「ふふ、しよっぱくて、とつてもおいしいわ。ここも綺麗にしてあげますわね」

「やめ、あああーっ!!」

朱乃の舌先がクリトリスに触れ、その瞬間イツセーは絶頂を迎えてしまった。水風船が破裂したかのように

秘部から大量の潮が吹き出し、辺り一面に淫臭が立ち込める。

「あらあら、イツセーちゃんったら。そんなに良かったのかしら？」

「ふふ、まだ序の口だよ。これからが本番さ」

「あ、ああ……ひうう……」

イツセーは虚ろな目で喘ぎ声を上げている。

既に彼女は堕ちかけていた。

だが、それでもなお抵抗しようとする意思があった。

だが、それも長くは続かない。

何故なら彼女の身体は既に男を受け入れる準備ができており、心もまた少しずつではあるが確実に女としての悦びを受け入れつつあったのだ。「ふふ、可愛いおへそだね。それに張りがあって丸っこいお尻。実に素敵だよ」

木場はイツセーのお尻を両手で掴んで丹念に揉みほぐす。

「あんっ、ああっ、あっ、ああああっ」

「イツセー君はおっぱいが好きだからあまり言い出せなかつたけど僕はこっちも好きなんだ」

木場はイツセーの臀部を割り開き、アナルに舌を這わせる。

「あひっ?!そこはだめえっ!」

「うふふ、イツセー君はお尻の穴も感じるのですね。私も負けていませんわ」

朱乃は狩人のような眼差しでイツセーを見つめるとそのまま顔を近づけてイツセーの唇を奪う。

舌と唾液が絡み合い互いの境界線が曖昧になるような感覚に陥る。  
(ダメなのに……気持ちいい)

朱乃はイツセーの乳首を摘まむとそのまま捻り上げる。痛みと共に痺れる様な快感が全身を走り抜ける。

そして、ついにその時が来た。

木場のペニスがイツセーの膣内に挿入されたのだ。

木場のモノは一般的な男性のそれよりもやや大きいサイズだった。しかし、今のイツセーにとってはそれがちょうどいい大きさであり、まるで最初から自分の為に用意されていたかのようにピッタリとフィットする。幸か不幸か、イツセーは幾度も激闘を繰り広げてきたために痛みに対しての耐性はある程度ついていた。だから破瓜の痛みに悶えるということもなく、ただひたすらに快樂に身を委ねるだけだった。

「凄いよイツセー君！君の中は最高だ！」

あのクールな木場でさえ、獣に変貌させうるイツセーの肉壺の威力は絶大であった。さながら蜂蜜酒のように甘美な蜜が溢れだし、木場を包み込む。

「ああっ！凄いつ！凄いのおっ！奥まで届いてるう！」

「ああ！そうだよイツセー君！これがセックスなんだね！気持ち良すぎておかしくなりそうだよ！」

「ああ……俺も、オレもおかしくなるう……♥　木場のマブダチ○ポで気持ちよくなってるう♥」

二人は互いに求め合うように激しく腰を打ち付けあう中で朱乃がイツセーの耳元で囁く。

「ねえイツセーちゃん。気持ち良いですか？」

「気持ち良いっ！気持ち良いですうっ!!」

「あらあら、すっかり女の子らしくなりましたみたいですね。それじゃあそろそろ……」

朱乃は肉が焼けたのを確認した料理長の様にニッコリと微笑む。だがその手には天秤の様に左右対称のデイルドーが握られていた。

「あ、ああっ！」

「う……ぐうっ!？」

イツセーの膣穴がさらなる快樂への期待に窄まり、収縮したのを受けて木場は齒を食いしばる事で辛うじて射精を堪えた。はあ、はあと肩で息をしながら木場はイツセーの膣内に未練がましくペニスを収納し、朱乃はイツセーの腰を掴むとゆっくりと前後に動かし始める。

「うああ……ああっ!？」

イツセーと木場は先輩である朱乃から同時に責め立てられる形になり、二人とも今までに感じたことの無い強烈な刺激に戸惑いの声を上げる。

「あらあら、二人で一緒になんて仲が良いんですわね。妬けちやいますわ」

朱乃はそう言っつてイツセーの尻たぶを掴み左右に押し広げる。すると結合部が露わになった。

「ああっ！そんなところ見ないでください……」

イツセーは恥ずかしさに頬を赤らめ、

口調もアーシアを彷彿とさせたものになっていた。

「うふふ……。そう言われてましても、今のイツセー君、いえイツセーちゃんは苛め甲斐があるんですの。」

「だからもつと虐めたくりますの♪」

「んほおお……っ!？」

「ふふ、可愛い声が出ましたわね。お次はこうかしら」

朱乃はサデイスティックな笑みを浮かべ、

イツセーの乳房に手を添えるとそのまま揉み始めた。

「ひやうんっ、胸があ……熱いのお……！先輩……せんぱあい♥」

イツセーはつい、朱乃に助けを求めてしまう。だがそんな甘えを許さぬかの様に朱乃は微弱な性感電流を乳首に送り込む。

「ひあああっ！乳首も熱くてビリビリしてるう！助けてくださいー！」

「助けてほしいだなんて、イツセーちゃんったら嘘ばっかり♪本当はこうしてほしかったんでしょ？」

「ああっ！ダメえ！気持ちいいのっ！乳首いじめられるの気持ちいい

いっ!？」

少女の様な言葉遣いになってしまったイツセーを見て木場のペニスが大ビクビクと震えだす。

(ああ……♥ これって……)

男ならばすぐにそれが何を意味するのか分かるだろう。木場はイツセーの尻肉を強く掴むと勢い良く腰を突き出した。子宮口を龟头がノックする度にイツセーの脳裏がスパークし、視界が虹色に明滅を繰り返す。

男を知ったばかりであるのに、イツセーの膣内は貪欲にも精液を求めて淫らに脈動し、粟立つような快感を生み出す。イツセーの絶頂に合わせて木場のペニスが膨張する。そして次の瞬間。

どちゅんっ!

木場のペニスが根元までイツセーの中に押し込まれた。灼けるような感覚と共に、イツセーは全身が蕩けそうな程の快楽に包まれる。

「あ、あああああっ!」

イツセーは身体を仰け反らせ、絶叫を上げた。

「ぐううううっ!出るっ!出すよイツセー君!」

「来て、来てくれえ♥ 親友のザーメンでオレの膣内をいっぱいにしてえ!」

「イツセー君っ!」

「木場あっ!」

木場がイツセーの腰を掴んだまま一際強く腰を打ち付けると、その衝撃でイツセーの膣奥で爆発が起きた。

龍がブレスを噴き出すかのように、木場の子種がイツセーの子宮へと流れ込む。

「あ、あっ♥熱いっ♥オレの中で出てるっ♥木場の精子が……オレの子宮にドクンドクン入って来るう……っ♥」

「ぐ……まだ止まらない……っ!ゴメン、もうちよっただけ付き合ってもらおうよ……っ!」

ぐり、ぐりっ。

木場はイツセーの腰を引き寄せながら、射精しながらピストン運動

を続ける。

「あ、ああっ！イクっ！またイツちゃうつ！ああっ！ いやっ！ いやあああああっ！ オレ、おかしくなるううっ!!」

「僕もだよイツセー君！君のおかげで僕は変わったんだ！君が僕の人生を変えてくれたんだよ！だから、今度は僕の番だ！」

イツセーも木場も互いに互いの肉体を求め合うように抱き合いながら絶頂を迎え続ける。

木場のペニスが脈打ったびに大量の子種汁が膣内に流し込まれ、イツセーはそれに合わせるように何度もアクメを迎えた。

(あらあら、すっかり二人の世界に入ってしまったわね)  
(その様ですね)

朱乃とトウ・ルチャは二人の様子を保護者さながらに微笑ましく眺めていた。しかし、いつまでもそうしているわけにはいかない。

「はあ……はあ……」

先に限界がきたのは木場のほうだった。木場はイツセーの尻からゆっくりと萎えた己を引き抜くとその場に崩れ落ちる様に座り込んだ。

「あらあら……、お疲れのようですね」

朱乃が悠然たる足取りで両者に割って入るとその手に双頭のデイルドーを携えて言った。

「では次は私とイツセーちゃんを楽しみましょうか？」

「あ……ああっ♥」

イツセーは期待に満ちた目で朱乃を見つめていた。自身が男性であるのか女性であるのかすら今のイツセーには曖昧になっていたのだ。

イツセーはもはや目の前の女体しか見えていなかった。

そんな彼女に対して朱乃は優しく語りかける。

「うふふ、そんなに慌てなくても大丈夫ですよ。ちゃんと可愛がってあげますから……♪」

木場とはまた違った愛撫にイツセーの身体はまたしても快楽に溺れていく。まるで蠟の様に粘着く愛液が太股を流れ、床に水溜りを

作っていた。

「ひゃうん……っ♡」

イツセーは朱乃の舌に乳首を舐められ、思わず甘い声を上げてしまう。

(ああ……気持ち良い……)

イツセーは朱乃に抱かれながら彼女の胸を揉みしだいた。女の身体になっても、朱乃の豊満な胸への興味と恋慕は消えなかったようだ。

「ああん、イツセーちゃんったら……。でも、お姉さん嬉しいですわ」  
朱乃はそう言ってイツセーの乳首を口に含むと、軽く歯を立てた。  
「あうっ!?お、お姉様あ!？」

先輩呼びではなく、いきなりお姉様と呼んだ事に朱乃はクスリと笑う。

だがその笑みは妖艶で、どこか小悪魔めいたものを感じさせるものだった。

「そんな風と呼ばれたらもつと苛めたくなくなりますわ」

「そ、それはダメえ……っ」

イツセーは慌てて否定するが、朱乃は意地悪そうな表情を浮かべると、イツセーの耳元に唇を寄せて囁いた。

「ダメじゃありませんわ。だって私は貴方のお姉様なんですもの」

「あ……あああっ!」

その言葉と共に、木場の寵愛を受けて充血した花卉に朱乃の双頭デイルドーの片割れがあてがわれる。

「あ、ああっ♡来る……♡」

じゅん、じゅわり。

イツセーの膣穴からは先程注がれた木場の精液が漏れ出し、淫猥な香りが周囲に漂う。

「あらあら、いけない子。木場くんのザーメンを漏らしてしまってますよ?それとも、もう待ちきれないのかしら?」

「はい……早く欲しいです……」

イツセーの瞳は潤み、頬は紅潮し、呼吸も荒くなっている。その様

子は発情期の雌犬そのもの。

男だった頃の面影など微塵も残っていないかった。

朱乃は満足げに微笑みながらダメ押しとばかりに続けた。

「素直でよろしい。ご褒美をあげないといけませんわね。えいつ  
ずぶんっ！」

「あひあっ♥」

朱乃はイツセーの中に一気に挿入すると、そのまま腰を動かし始めた。

ぬちゅっ！ぐちよ！ぐちや！

朱乃の腰使いに合わせて卑猥な音が響く。女性だけあって朱乃のデイルドー責めは巧みで、イツセーの性感帯を的確についてくる。そして、朱乃の腰が動く度にイツセーの子宮口がノックされ、木場によつて開発されきつた子宮が疼き出す。

（あああっ！気持ちいいっ！これっ！これが欲しかったんだあ！）

イツセーは涙を流しながら快感に打ち震える。背中に朱乃の柔らかい胸が押し付けられ、耳元に朱乃の吐息がかかる。まるでソファに背中を預けるかのように、全身を包むような快楽に身を委ねていた。「うふふ、可愛いですわよイツセーちゃん。ほおら、ここが良いんでしょう？」

「ひううっ！そこ、弱いんですう！だめ、やめてくださいっ！お願いしますう！」

「ふふ♥だーめ♥」

朱乃は嗜虐的な笑みを浮かべながら、イツセーの弱点を攻め続ける。イツセーは泣き叫びながらも、その顔は蕩け切っていた。

「やああっ♥イクツ！またイっちゃいますうっ♥」

「あらあら、仕方ないですわね」

朱乃がピストン運動を止めて双頭のデイルドーを引き抜くと、イツセーは名残惜しそうに声を上げた。

「あ……なんで……どうして止めるの……？」

「イツセーちゃんだったらそんな物欲しげな顔をして……。イキたいならちやーんと言わないと」

「う、うう……。お姉様……。オレ、オレ……。イカせて欲しいです」

イツセーは羞恥に頬を染め、消え入りそうな声で懇願する。

「うふふ、良くできました。さあ、もう一度」

「はい……。っ」

イツセーはゆっくりと大きく深呼吸した後、覚悟を決めたように呟いた。

「お姉様の極太ティルドーでオレのオマ○コを犯してくださいっ！」

その瞬間――

イツセーの中で何かが弾けた。

次の瞬間にはイツセーは獣のような雄たけびを上げていた。

「あ、ああっ!! あああああああっ!!!」

その声に反応してか、イツセーの女性器から大量の愛液が流れ出る。

「ああん♥イツセーちゃんったら凄い勢いですわ♥」

朱乃はイツセーの膣内から溢れ出した液体を見て、思わず生唾を飲み込む。

（なんてエッチな身体なのかしら。こんな身体を持っていたら誰でも夢中になってしまいますわ）

「あ、ああっ! お姉様あっ! 早くうっ!」

イツセーは待ちきれないといった様子で朱乃に催促をする。

「あらあら、そんなに急かさなくてもちゃんとあげますわよ」

朱乃はそう言うと、イツセーの秘所に己の双頭ティルドーをあてがい、一気に突き入れた。

「あああああっ!」

イツセーは歓喜の声を上げる。朱乃はそんなイツセーの姿を見てクスリと笑う。

「うふふ、そんなにコレが欲しかったんですの? じゃあ、もつと突いて差し上げますわね」

「ああっ! 嬉しいっ! もつと激しくして欲しいんです!」

「はい、わかりました」

朱乃はイツセーの願い通り、激しい挿入を繰り返す。その度にイツ



セーは艶やかな喘ぎ声を漏らし、朱乃は愉悦に満ちた表情を浮かべた。

そして遂にその時が訪れる。

朱乃はラストスパートをかけるべく、更に動きを早める。

イツセーもそれに呼応するように腰の動きを合わせていく。

二人の絶頂はすぐそこまで迫っていた。

そして――

二人は同時に果てた。

「あああああああつ!!!」

「くうっ……い！」

どくんっ！ 木場の精液とは比べものにならない程の精液代わりに朱乃の本気汁がイツセーの子宮に注がれていく。

「ああ……あつたかあい……♥」

イツセーは朱乃に抱きつきながら、至福の時を感じていた。光に包まれながら彼の肉体が少しづつ元の男性の姿に戻っていく中で安堵と同時に、奇妙な寂しさを感じていた。

ー

「んふう……♥ ん、んん……♥」

シユタークは目を閉じながらその豊満な胸にフェンリルの肉槍を挟んで、感触を味わっていた。

獣人特有の肉槍の凶悪さも、シユタークには愛しいものでしかない。

むしろその剛直さが心地よいとばかりに頬ずりし、舌で舐めしゃぶる。

「うお……くうっ！」

獣から獣人に変貌したフェンリルは初めての感覚に翻弄されていた。

増して獣であった頃でも交尾の経験はなかったのだから、当然の反応である。

シユタークの性奉仕を受けて獣のように吠えるしかなかった。

そんな彼の反応が可愛らしくて、シユタークは更に奉仕を続ける。

胸の谷間に挟んだ肉槍の先端を口に含み、吸い上げるようにしながら上下運動を始めた。狩りや闘争によって得た勝利や獲物とは別次元としての快楽だ。知恵を得たフェンリルにとってそれは抗い難いものであった。

「ぐおおおっ！ あぐううっ!!」

ねっとりした口内粘膜に包まれた肉槍はあつという間に絶頂寸前まで追い込まれた。亀頭はパンパンに膨れあがり、尿道からは先走り汗が滲み出る。濃度も量も人間より遙かに上回っている。しかしシユタークは子猫がミルクをちろちろと啜るかのように先端を優しく吸ったまま口を離さない。

「くううっ!! だめだあ……出ちまうっ!」

限界を感じたフェンリルはシユタークを引き剥がそうとしたが、彼女は逆に肉棒を強く挟み込み、根元まで飲み込んでしまった。そして喉奥にまで達する程の深々とくわえ込んだ状態で頭を激しく振り始める。

「ふあああっ!?!」

シユタークはまるで性行為をしているかのような激しいフェラチオを行った。

唾液まみれになった唇が激しく前後し、じゅぽじゅぽと淫らな音が響く。同時に左右の乳房によるパイズリも同時に行われ、柔らかさと弾力を兼ね備えた極上の乳肉が竿全体を包み込むようにして刺激を与えていく。まるで牛が臼歯で噛み締めるように、乳圧を高めつつ抜き上げていった。

「ひいっ！ もうダメだ……あああっ!」

フェンリルの口からはもはや悲鳴に近い声しか出ない。あまりの激しい快感に耐えきれず、彼はついに射精してしまった。

どくんつと脈打つ度に大量の精液が噴出され、彼女の顔を汚している。

それでもシユタークは動きを止めなかった。

それどころか射精中の敏感すぎるペニスをさらに責め立てる。

「う……おお……や、やめろ……」

やめてくれえ……!」

未知とは恐怖である。野生の蛮勇が薄まって初めて知った本能的な恐怖だった。

だがシユタークはその言葉を無視してなおも奉仕を続けた。

射精している最中にも関わらず、強烈過ぎるほどの乳奉仕を行うのだ。

やがて射精が終わると、今度は肉茎を横からくわえ込み、残った残滓を全て吸い尽くそうとする。

「ああ、駄目だ! 今出したばかりなのに……」

「ふふっ、ボクは別に構わないヨオ♥」

そう言うなりシユタークは再びフェラチオを開始した。しかもただでさえ凄まじかったパイズリに加え、胸を動かしながら両手を使い、陰囊まで揉みほぐし始めた。男根への快樂に加えて、二つの玉袋までもが弄ばれてしまう。これには流石のフェンリルも耐えられなかった。

「ぐっ! ああっ! また出ちまうっ!!」

二度目の射精がシユタークの熟れて淫らに育った肉体へと降り注いだ。その瞬間、彼女は嬉しそうな表情を浮かべてザーメンを飲み干す。

「うわああっ! なんてことだ……!」

自らの欲望を放出しながら、フェンリルは己の敗北を悟った。このままではシユタークなしには生きられない身体になりかねないとすら感じていた。それほどまでに彼の肉体と精神は魔性の快樂に蝕まれつつあった。

「どう? 気持ちよかったカナ?」

「う……」

もはや何も言い返せなかった。

確かに彼女の性技は素晴らしいものだ、そしてその魔性の魅力は狼の王を籠絡するに充分すぎた。

「ふふっ……♥」

シユタークはフェンリルをみやりつつ自身の肉体を撫で回してい

た。

そこには一片の穢れもない美しさがあつた。成熟した女体でありながら、少女のような瑞々しさと初々しさを併せ持った奇跡とも言える裸身である。

「どうか、フェンリル君？ボクのおっぱいと口は良かったかい？」

「ううっ……」

「素直に言ってくれればもっと気持ちよくしてあげるヨ。さあ、言つてごらん」

「ううっ……最高だ、あんたのおっぱいも口も、それにこのお尻も……！」

一度口に出してしまえばもう止まらなかつた。

「ああ、堪らないよ。オイラの女になれ、頼むから！ アンタのためなら何でもするよ！」

墮落。まさにそれであつた。

狼の爪も牙も魔女たる彼女を裂く事は敵わず、快樂の前に屈服したのだ。もはや彼には誇りも尊厳もなかつた。

「うふふっ……嬉しいナア♪ でもまだダーメ♥ もっとボクを楽しませてくれたら考えてあげル。例えば

……♥彼女とセックスするとかネ」

彼女の視線の先にはお預けを受けた形となつていたヘルがいた。

本来ならば死者同然の彼女の肢体は黄金の林檎による生命力の恩恵故か瑞々しく、艶やかだつた。冥府の女王にしてはあまりに美しい。

「ああ、分かつた。なんでもやるから、早く抱かせてくれ！」

「お、お兄様!？」

ヘルは思わず目を見開いた。彼女の知る限り兄のこのような姿は初めて見たからだ。

だがそんな妹の様子など気にする余裕も今のフェンリルにはない。

「へ、ヘル……！頼む……！頼む！」

オイラにお前をくれ!!」

「そ、そんな……♥ああ……♥」

落胆した様には見えるが、しかしヘルもまた満更ではなかった。むしろこの状況を喜んでいる節さえある。兄でありながらも、人の姿を得たフェンリルは異性としてあまりにも魅力的過ぎたのだ。

ヘルはイツセーにより、フェンリルはシユタークにより肉の悦びを教え込まれた。

もはや互いに肉欲を満たすことしか考えられぬ程に淫らな存在へと堕ちていた。増して馬の骨ではなく、兄妹揃って美女・美少女ときている。これほど極上の獲物はない。

「ふふふつ、じゃあボクの目の前でたつぷり愛し合いたまエ」

まるで仲人のようにシユタークが二人にアドバイスを送り出す。

彼女も彼女で、神族の近親相姦ショーに興味を抱いている様でもある。

「まずはキスかな。それからお互いの身体を舐め合うんだヨ。もちろん性的な意味でサ。そうすればより深く繋がることのできるんだ」

「ふむ……なるほど」

フェンリルはシユタークのアドバイスに従い、ヘルの唇を奪った。

「んちゅ……♡」

「ふああ……♡」

互いの舌が絡み合い、唾液が混ざり合う。同時にフェンリルの手がヘルの乳房に触れ、優しく揉みほぐし始めた。

「ひゃうん……♡」

ヘルの口から甘い声が漏れる。

先日までの彼女は性行為どころか、まともに男性と触れ合ったことすらない処女であった。

それが今ではこうしてフェンリルと濃厚な接吻を交わし、乳房を弄ばれて喘いでいるのだ。

その淫らさにフェンリルは雄としての本能をさらに刺激され、股間のペニスが痛いくらいに張り詰めていく。

「ああ、ヘル………可愛いぞ………」

「ああ、お兄様♡ こんなに激しく求められては私……♡」

フェンリルは今度はヘルの首筋に吸い付き、痕を残した。そしてそ

のまま首筋から鎖骨、胸元へと移動し、乳首を甘噛みしていく。一方のヘルの方もフェンリルの背に手を伸ばし、背中や脇腹などを撫で回す。

そして二人は自然の流れで体勢を変え、シックスナインの形となった。ヘルはフェンリルの男根に奉仕すべく、口を大きく開けてくわえ込んだ。一方フェンリルはヘルの女性器に顔を近づけ、割れ目を指先で広げながら観察している。そこには綺麗に整えられた陰毛と、サーモンピンクに色づいた粘膜が見え隠れしていた。そのあまりの美しさに彼は生唾を飲み込む。

そして誘われるように舌を差し込み、彼女の秘部を味わった。ヘルは肉体からは汗と雌の香りが入り混じったものが漂っている。それはフェンリルにとって最高の芳香であった。ヘルの肉体に夢中になっているうちに、フェンリルのペニスはずっかり勃起していた。

「ふうっ……」  
ヘルは息を吹きかけ、その熱さを堪能した。そしてゆっくりと口を開き、亀頭部分を包み込んでいく。

「うっ……！」  
「どうですか？お兄様……♥」  
「ああ、いいぞ……」

フェンリルの返事を聞くなり、ヘルはさらに奥まで男根を呑み込んでいった。

喉の奥にまで達するほどに深く、それでいて巧みに舌を使い、フェラチオを行う。

一方でフェンリルも負けてはいない。  
ヘルの尻を掴み、アナルに舌を這わせ始めた。

「ああん……♥」  
肛門への愛撫を受け、ヘルの声色がさらに艶やかなものとなる。フェンリルはそのまま彼女の尻穴に舌をねじ込み、ピストン運動を繰り返した。

「うふっ……♥ううっ……♥」  
尻を犯される快感にヘルは身を震わせた。

その振動は当然フェンリルにも伝わり、彼の興奮をより高めてゆく。

「ああ……♥シユターク様には及ばないかもしれませんが……♥お兄様のオチ○ポに、ご奉仕させていただきますね……♥」

シユタークには技術では及ばぬかもしれないが、ヘルスの乳と口に籠められた愛情は本物だ。

「うっ……いー」

ヘルは一心不乱に頭を上下させ、肉棒をしごく。

彼女の献身的なまでの愛撫はフェンリルの限界に近いことを察すると、一気にペースを上げていく。

ヘルは奉仕する事ですら恍惚としていた。

彼女の脳裏にあるのは愛する兄に快楽を与え、精液を搾り取る事のみ。

もはや彼女には冥府の女王として君臨する威厳も、死を司る女神としての冷徹さもない。ただ一人の女として兄を愛している。それだけだった。

そしてヘルの口内にフェンリルの熱い欲望が解き放たれた。

勢いよく発射された白濁はヘルの顔や髪を汚す。

「ん……♥はああ……♥」

禁忌を侵している背徳感がヘルをより昂ぶらせ、ゾクリと震える様な快感をもたらした。

「ああ、ヘル……！オイラもう我慢できないよ……！早くお前の中に入りたいんだ……!!」

「ええ、私もです……♥お兄様あ……♥ 頭が熱いのに……寒いのでから……温めてください……♥」

「ああ、もちろんだとも……!!」

フェンリルはヘルを押し倒し、正常位の体勢となった。そして自らの肉茎をヘルの秘部にあてがい、挿入を試みる。

「ん……♥」

ヘルは無意識に己の最奥へ兄を誘うように腰を動かす。フェンリルもそれに答え、少しずつペニスを埋めていった。そしてついに二人

の結合が完了する。

「くああ……」

「はああ……♥」

充足感と幸福にヘルとフェンリルは同時に声を上げた。元々一つであつたものが、ようやく完全な形で融合した様な感動は言葉などでは到底言い表せないものだったろう。二人はそのまま動かず、じつとしている。しかしそれでも十分すぎるほどに幸せを感じていた。やがてどちらからともなく、唇を重ねる。舌を絡ませ合い、唾液を交換し合う濃厚なキスだ。

その間フェンリルはヘルの乳房を揉みしだいていた。

「はあ……♥ もつと……♥ もつと強く揉んでください……♥」

「ああ、分かったー」

要望通りフェンリルの手の動きが激しくなる。

そのたびにヘルの乳房は形を変え、柔らかさと弾力を同時に伝えてきた。貪られている、というよりは愛されているといった感覚にヘルは酔い痴れた。一方、フェンリルの方も愛しい妹との性交に酔っていた。

だが、その快楽は海水の様に飲めば飲むほどに渴きを加速させる。故に彼らはさらなる悦楽を求めて激しく求め合った。

「はあっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ……」

「ひゃうん、ひゃん、あん、あん、あん、あん、あん……」

笑っているかの様に双方ともに吐息を漏らしながら互いの身体を波打たせあう。ヘルの内臓はまるでそれ自体が独立した生物であるかのように脈打ち、フェンリルの男根に絡みついて離さない。更に雌として花開いたかの様にヘルの肢体は薔薇色に火照り、汗と体液によつて濡れ光っている。自分の妹が己とのセックスによりここまで乱れてくれることにフェンリルは歓喜した。獣の体温は茹で上がるのではないかと錯誤するまでに高まり、蒸し器の中で蒸されるような熱気が立ち昇る。

「んっく♥はあ♥はあ♥」

くるるひい♥お兄様のおち○ポがぎちぎちで苦しいのおおっ♥で



も気持ちいいの♥ お兄様のモノにされて嬉しい♥」

「ああ、オイラもだよヘル……！愛してるぞ……！」

「はい♥私も愛しておりますうううう♥」

その言葉と共にフェンリルの剛直から高圧洗浄機のように体液が放たれた。

「おほおほおほ♥♥♥」

お兄様のせえしいいっ♥♥♥」

倒錯した愛に狂ったヘルは、兄の体液を受け止めると同時に絶頂に達した。

「ああ、それがちよつと違うんだ」

正気を失いかけるまで酩酊したヘルの頭にシユタークの声が響く。どうということなのか？と一瞬呆けたヘルだがシユタークの言葉の意味をすぐに理解した。

と、言うのもフェンリルの剛直は体液を吐き出して尚、萎えるどころかさらに硬度を増しているからだ。

「おおっ♥ほおっ♥か、硬い♥」

「今のフェンリル君は獣人だからネ。サラサラした汁でキミの子宮を馴らすと共に精子の放出量を増やして、より孕みやすくしているんだヨ」

シユタークが解説を終えて浮かべたのは嘲笑か、あるいは祝福の笑みか。ヘルには判別できなかった。ただ分かるのは自分がこれからこの兄と子作りを行うということだけ。

そう思うだけでヘルの肉壺からは愛蜜が溢れ出す。愛する人との愛の結晶を宿す事だけが彼女の望みなのは明らかであった。

「ああ、ヘル……♥愛している……愛している……！」

子袋が満たしきつてもなお、フェンリルは腰を振り続けた。それは最早捕食であった。ヘルは兄からの愛情と快楽の暴力に身を震わせ、悲鳴を上げる。

「ああああ〜っ♥ あっいっ♥

あつういい♥♥♥」

もはやヘルの頭の中には兄との性行為の事しかなかった。彼女は

自ら足を絡め、余熱で吹きこぼれたのかと思うほどに泡立つ腺液まみれの美尻が、フェンリルの腰に密着する。そして、その動きはフェンリルの射精を促した。

「ヘル……ヘル……ヘル……！　ぐっ……!!」

「あああああああ　♥♥♥」

最初の腺液など比較にならない。

泥の様に濁った白精はヘルの子宮内を満たしていく。どくん、どくんと脈打つ肉棒はヘルの膣内で跳ね回り、その度に大量の精を吐き出していった。

「はああ……しゅぐ……すごいよお……♥」

ヘルはうっとりとした表情を浮かべながら、最愛の兄に抱かれる幸せを噛み締めていた。フェンリルはヘルしか見えていないし、ヘルもまた

フェンリル以外の事は考えられなくなっていた。故にシユタークが2枚の符を取り出した事にも気づかない。

## 第74話

安里 side

所変わってここは俺のバイト先、

喫茶店ラヴ・クラフトだ。

「成程、そいつは大変だったな」

辰郎叔父さんはヴァーリの話を信じているのかいないのか微妙な感じで聞いていた。まあ、ルシファードとか白龍皇だとかいきなり言い出したら救急車呼ばれるよなフツー。

何でヴァーリが堂々とここにいるかというところ、ロキ討伐の功績によつて禍の団とは決別した、という事になったのだそう。アザゼルのおっさんが大分駆けずり回ったらしい。

「ま、とにかく食べよ。ラーメンは専門外だがな」

コトン、と置かれたどんぶりの中には澄んだスープに海鮮系の具がたっぷり入っている。美味しそうだ。

「いただきます！」

「頂こう」

俺達は箸を割って麺を口に運ぶ。……うん、うまい！なんというか上品な味で洗練されているって言うのかな？

しかしヴァーリはどこか不満そうにしている。どうしたんだろうか。

「……何というか野趣味がないな。」

ラーメンというには上品すぎる」

「ふーむ」

叔父さんは思い当たる節があった様に腕を組みながら唸る。

いや、ヴァーリ。叔父さんラーメン屋じゃないからな？喫茶店のマスターだから！

しかし叔父さんはやはりアザゼルのおっさんと長い間友達やっていられるだけある。

ヴァーリの言葉をガハハと笑い飛ばした。

「いいんだよそれで。」

ここはあくまでオレの店だからな。

喫茶店の雰囲気の中で気取って食うなんてラーメンじゃねえわな！はつきり物をいう奴は好きだぜ」

「確かにな」

ヴァーリも納得した様だ。

それから俺達はしばらく無言でラーメンを食べていた。すると、カランと鈴が鳴る。

お客さんだろうか。

「ああ、すまねえな。

今の時間は休憩中でね」

「休憩中の看板は出ていなかった様ですが？」

何だ、イヤに粘るヤローだなと

目を向けてみればそこには見知った顔がいた。というか、さつき叔父さんに話したばかりの曹操じゃねえか！

「ゲホーゲホツ……テメツ……どの面下げて来やがった!？」

俺は思わず咳き込んでしまう。

しかし曹操はそんな事全く気にせず俺達を見据えた。隣にはチャイナドレス姿の七符までいる。

「あら？随分と懐かしい顔を見かけたものね。……あの時は世話になつたわね」

とは言うが七符の顔は明らかに俺に対しての敵意が剥き出しになつていた。

「おつと。今はキミ達とやり合うつもりはない。寧ろキミ達と話がしたいと思つて来たんだ」

宥めるような仕草で曹操はほざく。

相変わらずキザったらしさが鼻につくヤローだぜ……。

「話し合いだと？ふざけんじゃねえぞ。こつちはお前のせいで散々な目にあつたんだからな！」

「だがロキ、ツール、バルドルといった反主流派を退けて多神連合が結成できたのは怪我の功名と言えなくもないんじゃないかな？」

……チヨットナニツテルノカワカリマセンネ。

あまりの厚かましさに俺は絶句するしかなかった。

しかし曹操の隣にいる七符は俺に粘着く視線を送る。何だババア、俺にはルイーナっていう彼女がいるんだからな！

すると、七符はフンと鼻を鳴らす。

「全く……主様の力があればルイーナとやらを元に戻せるやもしれぬのにのう……」

瞬間、俺の心がざわついた。

「何だ？　するとテメエは俺が女のために親友や仲間を売る男だつて思つてやがるのか……」

「安里、ここは人間界だ。少し落ち着け」

ヴァーリが肩を叩いてくる。た、確かにここで暴れたら叔父さんに迷惑をかける所の話じゃない。

多分、それを見越して

曹操はこの場にやって来たのだ。

「ああ、思っていたとも。と言つてもキミを卑劣漢だと考えていたのではない。寧ろその逆だよ」

曹操はそう言つて笑う。

「私はね、自分の欲望を満たすために他者を犠牲にするような存在は例外なく嫌いなんだ。私達が戦うべき相手は他にある筈だろう？」

「それで？　テメーが王様になつて好き放題やりたいってハラか？」

俺は冷静さを心がけつつ、しかし怒りを隠しきれない声で言った。

「私はそんな俗物に見えるかい？」

私は王様になりたいわけじゃない。

とはいえ自分の才覚がどこまでこの世界に通じるのか試してみたというくらいの気概は持つていたい。

その結果皆から王になるべきだと請われたのならば従おう。それが英雄のあるべき姿というものさ」

曹操は余裕たつぷりに言い放つ。

やはり乱世の奸雄だけあつて演説が上手い。

「英雄のあるべき姿というのは我儘を通す力を振るうということか？」

ヴァーリは挑発的な口調で問う。

しかし曹操は挑発には乗らず、ただ笑みを浮かべるだけだ。まあ、流石にそんな安い挑発に乗るほどバカじゃないよな……。すると、曹操はふつと笑いを漏らす。

まるでヴァーリの態度が予想通りだったと言わんばかりに。

「勿論、それもあり……。」

といつてもその手の輩は英雄に叛くもの……叛英雄というべきかな。

彼らは正直俺の手にも余る」

叛英雄……。物凄くありがたくない響きだ。

『余るからなんだというのだ。お前達の内ゲバにヴァーリや兵藤一誠を巻き込むつもりか？』

突然、どこからともなく声が聞こえてきた。恐らくアルビオンの声だろう。案外面倒見がいいのか？それともロキの一件でヴァーリと共闘したせいだろうか。

「巻き込まれる、か。それはどうかな？」

曹操は意味深に呟く。

「そもそもこの世界で起きていることは全て世界の理の中に組み込まれている。誰かが干渉しない限りね」

「持って回った仄めかしで人を煙に巻くのが好きなようだな。お前、モテねえだろ」

俺は曹操の言葉にイラつきながら言う。軽口を叩いたつもりだったが曹操の表情が僅かに険しくなった。

「話にならぬ。主様、やはり此奴らとは話しても無駄じゃ」

「初めて話があったな若作りババア。」

老い先短い身の上なんだから時間は大切になあ？」

俺と七符のいがみ合いを聞いていられないとばかりに叔父さんが深いため息をつく。

「お客さん。ここは喫茶店だ。」

何か注文してくれよ」

「ああ、申し訳ない。俺は紅茶派でね、名残惜しいが予定も詰まってい

てね……」

いや、何しに来たんだコイツ！

曹操は踵を返して店を去ろうとするが振り返って何かを思い出したように口を開く。

「そうだ。シユタークという悪魔祓い師には気をつけた方がいい」

「ああ、そうかい」

「では失礼するよ」

曹操は今度こそ本当に店を出て行った。ケチがついてしまったが、取り敢えずラーメンを食べてしまおう。

するとまたしても来客があったのだが……その人物はあまりにも予想外すぎる人物、もとい悪魔だった。

↓

「レイヴェル！レイヴェルを知らないか！」

……ライザー？そこには焦燥感に満ちた顔のフェニックス家の三男坊がいた。確か、まあ色々あってリアスさんとの婚約が破談になった筈だ。

その男がどうしてこんな所にいるのかという疑問はさておき、俺達は唾然とする他なかった。

「お客さん、ここは喫茶店ですぜ。いなくなった身内を探すなら警察に行きなさい」

叔父さんの言う事は尤もだ。だが、今のライザーは明らかに冷静さを欠いている。

「貴様などには聞いていない！九頭竜安里！俺の最愛の妹をどこに隠した！隠すとタメにならんぞ！」

いきなり俺の襟を掴んで締め上げてきた。力強えなコイツ！

「おい、焼き鳥ホスト野郎！離せ！つーかテメエの妹なんざ知らねえよ！」

「惚けるな！貴様らがレイヴェルを連れ去ったことはわかっているんだぞ！」

ダメだ、まるで話を通じねえ！しかしここで騒ぎを起こすわけにもいかない。すると、コトンとコーヒーカップを置く音が響いた。

「まあ、一杯飲んで気を静めな兄さん」

辰郎叔父さんは落ち着き払った声でそう言う。ライザーは意外にも素直に従った。だけど折角のコーヒートをグイツと一気に呷るなよ。不死鳥だから火傷はしねえんだろうけど。

「……ふう。それで俺の妹はどこにいる？」

「だから知らねえよ！警察行けって言ったろ！」

話が堂々巡りになりかけたその時、俺達にとって聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「すまない、辰郎殿！彼女に何か暖かいものを出してもらえないか！」

このはきはきとした容赦なくデカい声量は間違いなく煉獄さんだ。

まあ、それはそれとして……。

ヴァーリと煉獄さんとは思いつきやり合った仲だけど大丈夫かな？俺は心配になって二人の様子を窺う。

「ラーメン……食べるか？」

「頂こう！辰郎殿！俺と彼女にも同じものを頼む！」

「はいよっ」

「ありがとう、感謝する！」

……まあ、いいか。というか、

傍らにいるレインコートを纏った女の子って……アレ!?こ、このお嬢様の空気丸出しのドリルロールは……!!

「お兄様!」

「レイヴェル!」

俺達が驚いていると、ライザーは妹の元へ駆け寄っていく。

「無事だったかレイヴェル！」

「ええ……」

兄らしく妹の肩を抱くライザーに、レイナーレは伏し目がちになつて答えた。何だか訳ありの様だが……。

「うむ！実は彼女はネフレンとやらと政略結婚させられるのを良しとせず、家出したそうなのだ！」

相変わらず煉獄さんは直ぐに事情を火の玉ストレートに説明するよなあ。話が早くなるから有難いけどさ！



「何と言うことを……。兄さんも父さんも母さんも、皆お前を心配しているというのに……」

ライザーが呆れた様子で嘆く。

あ、コラー！思い詰めた娘を追い詰める様な事を言うんじゃないよ！案の定、レイヴェルの肩は震えていた。そして遂に耐えかねたかのように涙を浮かべ、叫びを上げる。

「お兄様達はあの男と私が結ばれば全てが丸く収まると思っただけでしょうけれど、私は絶対に嫌ですわ！あんな男なんて死んでもごめんです！それに私、もう決めましたの！ お慕いしている方がいますのよ！」

「な、何だとおおおッ!?!」

ライザーは驚きのあまり目を見開きながら絶叫した。

「そ、そんな相手がいるのか!? 一体誰なんだ!?!」

「……」

レイヴェルは顔を真っ赤にして黙り込む。恥じらっているのかあるいは別の理由なのか。

「ほほう、青春だねえ。」

「はいよ、特製ラーメン二丁」

「うむ、うまいっ!」

叔父さんは微笑ましそうに呟いてラーメンを出すと煉獄さんは美味そうに食べた。

なんとというか、マイペースというか我が道を行く人というか……。

「それで、その男はどこのだいつなんだ!?!」

「……」

「言えないような奴なのか!?!」

「いえ、その……」

「まさかあの赤龍帝とか言わないだろうな!」

「……はい」

レイヴェルが恥ずかしそうに俯きながらもそう答えると、ライザーは雷でも打たれたかのように硬直する。

しかし、お嬢さんの好きな相手つてのも大変だな。ライザーはどう

反応するんだらう？

「うーむ、兵藤一誠か……。」

少し妻が多過ぎるな！」

ライザーより先に煉獄さんが評を下した。いや、まあ……。親友ながら否定はできんわ。

「い、今何て仰いましたの!？」

「ん？ だから、妻が多いとな」

「ほ、ほら見ろレイヴェル！ 奴は女をアクセサリーとしか捕らえていない貴族の風上にもおけない見下げ果てたゲス野郎だ！ あんな男の何処が良いんだ!？」

レイヴェルは目を白黒させて驚く中、ライザーは必死の形相で捲し立てる。

まあ、親友だけど気持ちはわかるぜ。俺だって同じ状況になったら、やっぱりそう思うだろうな。

「お兄様がそれを言えまして！ お兄様の眷属も全て女性ではありませんか！ 何より私を僧正の駒 にしたのも、妹萌えなどというマウンティング欲を満たす為だったのでしよう!？」

「違う！ あれは、お前の将来を思ってたんだな!？」

「私の将来は私が自分で決めます！ お兄様達の指図を受けるつもりはありませんわ!？」

兄妹喧嘩が勃発してしまった。まあ、仲の良い証拠なんだろうけど。

ヴァーリは我関せず、といった感じだし。

「まあまあ、二人とも落ち着きなつて。まずはご両親に話を通してみようじゃないか。その上で決めるといいさね」

「……わかりました。それでは早速帰って父さん達に報告して参りませ。行くぞ、レイヴェル!？」

「ちよ、ちよつと待って下さいお兄様！ まだ話は終わってません!？」

「いいから帰るぞ!？」

「いやっ！ 離して！ 人攫い!？」

「な、何いつ!？ 人聞きの悪い事を……!？」

い、いかな。また暗雲が立ち込めてきたぞ……。しかしヴァーリがスマホにて誰かと連絡を取り出した。

まあ、この状況下でコイツが連絡する相手は一人しかいないと思うんだけど。案の定、数分もしない内にアザゼルのおっさんがやってきた。

「あのなあ、今の俺は多神連合の結成のあれやこれやで忙しいんだぞ？」

ロスヴァイセの奴は俺のマンションが豪華すぎて住めねえとか言い出しやがるわ、男性恐怖症が治ってねえから俺の顔を見るたびに卒倒しそうになるわ、スコグルの奴は俺の酒のコレクションを勝手に……」

「お前の愚痴になど興味はない。そんな事よりフェニックス家の騒動をなんとかしろ」

ヴァーリの言葉にアザゼルは深いため息を吐いた。

「多神連合をそんな事呼ばわりかよ。相変わらず恐れ入るぜ。ま、いい。取り敢えずライザー、お前さんは一旦冥界に帰れ。親父さんとお袋さんにレイヴェル嬢ちゃんの件を相談し、許可を貰えたなら人間界に連れてくるんだ。そしてレイヴェル嬢ちゃんはその間、俺の家に居候するといい」

「う、うーむ……」

ライザーは考え込む様子を見せたが多分コイツも妹の政略結婚には乗り気ではない様だ。

「まあ、仕方ない。一度実家に戻ってみる事にしよう」

そう言うライザーは転移魔法陣を展開して去っていった。

「じゃあ、レイヴェル嬢ちゃん。ついてきてくれ」

「はい」

そしてレイヴェルもアザゼルのおっさんの後に付いていった。

「ああ、これで一安心だな！一安心したら一安心だ！」

「そう言えば煉獄さんはどうして彼女を保護できたんです？」

「うむ！俺が見回りのために駅前に来た時、彼女が不良に絡まれているのを見つけてな！見過ごす訳にもいかなかったので助けに

入ったのだ！」

「へえ……」

「しかし、近頃の不良は分身したり

影を分離して攻撃してきたり、実に多彩だ！侮れん！」

いや、そういう問題じゃない気が……。

絶対不良じゃねーよソイツら!!

「それにしても、ラーメンというのは素晴らしいものだな！ 麺類の

中でもトップクラスにうまい！」

「そうだろう」

いや、誇らしげに煉獄さんに握手を求めるのはいいけどよヴァーリ

！

作ったのは辰郎叔父さんだよ!?

「いやあ、嬉しいねえ。こんなに褒めてくれるなんて」

叔父さんも満更でもないみたいだし……。もう、どうにでもなれ。

↓

ヴァーリと別れ、もう少し見回りを

続けるといふ煉獄さんとも別れ、俺はニグラさんの家に戻った。

「お帰りなさい、安里」

ニトクリスさんが水着みたいな普段の格好ではなく今どきの学生

風の私服姿で出迎えてくれた。なんと言うか新鮮だ。

「ああ、ただいま。何か変わった事はありました？」

「……………」

何だか機嫌が悪くなった様に見えた。……あ、そうか！

「何だか今日はいつもと違う雰囲気ですね。よく似合ってますよ」

「そうですか？……ありがとうございます！」

途端に上機嫌になった！ やっぱり女の子って服装とかを誉めら

れると喜ぶもんなんだな。

「ですが、私はファラオですからね。もっとこう私に対して言う事が

あるのではないのですか？」

「え？ あ、はい。……えっと、その服も凄く可愛いですよ」

「ふふん、当然です！ だって私が着ているのですから！……ではな

くてですね!!」

ええっ!? 違うのか!? じゃあ一体何を言えっただんだ!?

「えーと……そうだ。いつも部屋を掃除してくれたり、家事をしてくれて本当に助かります。ありがとう」

感謝しているのは本当だ。俺一人だったら絶対にゴミ屋敷になつてたと思う。

「うーん、ちょっと違いますけどまあいいでしよう。私に対して敬意を払う態度に免じて許してあげます」「はい、すみません」

許されたのなら良かった……。

すると俺達の様子を眺めていたセルベリアさんが口を開いた。

「お前達を見ているとある3人を思い出すな……」

何やら過去を懐かしんでいるようなそうでもない様な微妙な表情でそう呟いた。そういや、俺はニトクリスさんやセルベリアさんの過去ってあんまり知らないな。しかしランサーさん曰く『興味本位でやたらと聞く事じゃあねえぜ。増して女の過去なんてものはな』と釘を刺されているんだよな。確かに……。けどな……。最初に会った頃より大分打ち解けたし、セルベリアさんは表情や態度も柔らかくなってきた。だから少し踏み込んでみようと思う。

「あの、良ければ二人の昔の話を聞かせてもらえないでしょうか?」

「ほう、私の話を聞きたいとな」

「はい。興味があるんです」

俺の言葉にセルベリアさんは顎に手を当てて考える素振りを見せる。

「私は貴様の武器としてこの世界に降り立った。それでは駄目か?」

「ダメです」

俺だけでなくニトクリスさんもキツパリと言い切った。

「少なくとも私や安里は貴方を駒や兵器などとは思っていません。家族だと思っています」

家族か……。いい響きだな。

と、ボケーンツとしていてどうする。俺からも言わないと。

「俺も同じ気持ちです。俺達は皆仲間であり、大切な家族だと思って

いるんですよ」

「そう、なのか……」

セルベリアさんは戸惑っている様に見える。やはりいきなり過ぎたかな。だが、流石というべきか。落ち着きを取り戻した彼女は普段通りの凜とした顔つきに戻っていた。

「分かった。そこまで言うなら語ろう。とはいえ、玄関で立ちながら話す内容でもないだろう。リビングに移動して茶でも飲みながら語るとするか」

「あ、はい。そうしましょう」

俺達はリビングに移動し、

ソファに向かい合って座った。

「まずは私の出自についてだな。と言っても大した事ではない。よくある話だが……」

セルベリアさんの前置きに反して全然よくある話じゃなかった。

なんでもとある国の被検体として生まれたらしい。その国の名前は伏せておくが、その上層部はかなり腐敗していたらしく、自分達の欲を満たすために様々な実験を行っていた。そして生まれたのが彼女だった。

「生まれながらにして私は強大な力を有していた。こちらの世界でいう神器、ないし宝具と呼ばれる物に近いかもしれない」

更にセルベリアさんは軍の指揮官としてのカリスマ性や戦闘センスも兼ね備えており、その強さはまさに一騎当千。ヴァルクユリアと呼ばれる特殊な存在の中でも別格の強さを持っていた。ヴァルクユリーっていうとロスヴァイセさんやスコグルさんを

思い出すな。

「そんな仲で閣下……、いやマクシミリアンは私を被検体から救ってくれて部下にした。彼のために戦える事は誇りだった」

「……」

過去を語るセルベリアさんの口調や視線はなんというか、悲しみを孕んでいた。

だが真相はそれもマクシミリアンとかいうヤツが

セルベリアさんを手駒にするために仕組んだ事だ。

「それは……、つまり……」

「ああ、恐らくお前の考え通りだろう。マクシミリアンは所詮私、いや私達を人間ではなく有効な道具だと思っただけでいなかつたのだろう。

無様だろう？ 私を人を人ではなく道具に貶めた者に敬意を払い、忠誠を誓っていたのだから」

自嘲気味に笑うセルベリアさんに俺はかける言葉が見つからなかつた。

セルベリアさんの話を聞いて俺は怒りを覚えた。

「……許せませんね。その男も、その男の言いなりになっていた貴方も」

ニトクリスさんはセルベリアさんを批判するような調子で言う。

「生まれ変わっても尚心を閉ざし、

自らを兵器だと嘯き、己の意思すらも捨ててただ武を振るう。恵みを齎さぬ激流など災厄でしかありません」

「……」

セルベリアさんはニトクリスさんの言葉を受けて何も答えない。ただ黙って俯いている。セルベリアさんにだつて解っているんだ。自分のやってきた事がどれだけ愚かしい行為だつたのかを。

「私は、どうすればよかつたんだ？ 教えてくれ、ニトクリス。私は、一体……何なんだ……？」

「簡単な事です。貴方は貴方のままでいいのです。貴方はもう兵器ではありません。貴方は貴方のやりたい事をやりなさい。私達と共に」  
セルベリアさんにそう告げるとニトクリスさんは立ち上がり、キッチンに向かつた。

「ニトクリスさん？」

「お茶のお代わりを用意します。貴方も何か飲みますか？」

「あ、じゃあ俺もお願いします」

「分かりました」

ニトクリスさんがお湯を沸かし、ティーポットを温める間にセルベリアさんが口を開いた。

「なあ、安里。一つ頼みがあるのだが」「なんです?」

「私の過去を、私の罪を知ってくれてありがとう。だが、それだけじゃない。まだ聞いていない事があるだろう?」

「えっと、なんでしよう?」

俺が聞き返すとセルベリアさんが真剣な眼差しで見つめてきた。

「貴様の過去だ。貴様の過去を教えてほしい」

俺の過去か……。正直あまり語りたくないんだけど……。けど、セルベリアさんは俺の事を知りたいと思っけていてくれる。だったら俺も彼女の気持ちに応えよう。

「はい。俺の昔話になりますけどいいですか?」

「構わない。聞かせてくれ」

「わかりました」

俺もセルベリアさんもお互いの過去をまだまだ知らない。ならば、俺達の過去を語り合おう。それが俺達にできる精一杯だ。

↓

「で、まんまと心の闇……。つていうと厨二臭いんすけど、イツセーへの嫉妬を利用されちゃって取り込まれる所だったんですよ」

「イツセーへの嫉妬……?」

正直ピンと来ないな。貴様が奴に負けている点など殆ど無いと思うのだが……」

セルベリアさんの意見はごもつともだ。確かに一誠はスケベで変態でおっぱい星人で女たらしでハーレム願望丸出しだ。だが、いいヤツだ。

他人のために怒る事ができるし、誰かの為に戦う事も出来る。

そして誰よりも優しい。

「でも一誠は強いですよ。あいつは自分が傷つく事を恐れずに前に進む事が出来ます。そういう強さはきつとこれから先も必要になると思っています」

ニトクリスさんの淹れてくれたコーヒーを飲みながら話す。

「そうか。羨望する友も、嫉妬できる仲間も持てなかった私からすると酷く羨ましい」



「大丈夫です。セルベリアさんには仲間がいるじゃないですか。ニトクリスさんやランサーさん達がいいます。それに俺達も」

「ふっ、そうだな」

「はいー」

少しだけ笑顔を見せたセルベリアさんにニトクリスさんも笑みを浮かべた。

「ふふ、安里の事を羨ましいというのなら、彼は貴方にとって羨望に値する友、ということになりますね」

「そ、それは……、その……」

セルベリアさんは顔を真っ赤にして俯いてしまった。どうやら照れたようだ。クールビューティー系美人だけど意外と可愛いところがあるんだな。マクシミリアンって奴はクズな上にバカだな。

こんなに魅力的な人を弄び、悲しませてよ。

と、その時チャイムが鳴った。

もう夕方になってきたし、誰か来たのかな？

「はい、どちら様……」

玄関を開けるとそこには金髪ドリルロールお嬢様、もといレイヴェル・フェニックスがいた。

のみならず、ロスヴァイセさんもスコグルさんまで……!?

「オイッス、安里ー」

言葉を喪う俺に構わずスコグルさんが上がり込んでいった。え、何？

コレはどういうことなんだ!?

誰か説明してくれよお!!

「うむー何でもレイヴェル嬢とロスヴァイセ嬢はアザゼル殿の乱行三昧にうんざりしたというのだ！

何でもシユタークのみならず

見知らぬ男や女を連れ込んでくるらしい！」

送ってきた煉獄さんの解説が入る。

あ……はい。何となく解る。

あのおっさん、飲む、打つ、買う。

三拍子揃っているもんなあ。

墮落しきっていると文句を言ったが

『バカヤロー。俺は墮天使総督だぞ？ お上品にヒンコーホーサーに振る舞うなんざ墮天使として恥ずかしくて出来ねえんだよ』

とか言ってた。どうしようもねえな全く！

「うう……やつぱ都会は恐ろしい所だべ、ばっちや。都会モンだば信用できねえべ。故郷さ帰りてえだ」

田舎訛りの方言で嘆いているのはロスヴァイセさんだ。すっかり地元モードになっている。こつちのロスヴァイセさんの方が親しみやすくいいな。って、そんな俺の意見なんざ求められてはいないんだけどな！

「兎に角！暫くはこちらで生活させていただきますわ。よろしいですわよね？」

「はあ、まあ……」

「よろしくお願えますすだ」

有無を言わせない調子で詰め寄ってくるレイヴェル。

少しはロスヴァイセさんを見習ってほしいものだよ全く。

「えーっ!? このクツキー、セッチャンが作ってくれたの!?マジプロ級でしょ！控えめに言って！アタシ、料理なんてできないからスゴイなー！憧れちゃうなー！」

スコグルさんはすっかり馴染んでいた……順応性高え……。

「そ、そうか……」

セルベリアさんは褒められるのに

然程慣れていないのか嬉しそうだ。

まあ、セルベリアさんが満更でもないならそれでいいんだけど……。

## ※幕間・異聞（イツセー×ニグラ&クトゥー）

イツセー side

どうも！ 兵藤一誠です！

まだまだ夏休みの続いている俺達ですが遊んでばかりもいられない！

最近リアスさんは安静にしている事が多い。夏バテではないだろうか？ アーシアとゼノヴィアちゃんも心配していたからな……。

で、今俺は何をしているかというところ――。

「よーし、それじゃあ行くぞー！」

「了解です」

「うう、やっぱり帰りたいですうー！」

「おー」

藤岡探検隊みたいなカツコの小猫ちゃんとデカイリュックサックに入っているギヤー助、そしてキュクロちゃんを連れて俺は冥界の秘境、メチャタカイ山に来ているのだ！引率をしてくれるのはトゥーさんとニグラ先生だ。格好がハイキングスタイルなのはマズイような……。

「問題ありません。私は炎の魔人ですので」

「それにいざとなったら、皆で温め合えばいいじゃない？」

あ、相変わらずニグラ先生はエロエロだ……。嬉しいような嬉しいような……？ とにかく！ 今回の俺達の目的はメチャタカイキノコを採ってくる事なのだ！このキノコには滋養強壮効果があるらしく、これを食べた人はどんな病気でも治ってしまうという凄い効能があるらしい！ つまり、リアスさんに食べてもらって元気になってもらうんだ！やっぱリアスさんには元気でいてもらわないとね！

ー

まあなんやかんやあつて色々キノコを採っていたら

もう夕暮れだ！

さ、寒い！8月なのに寒い!? 雪こそ降っていないけど肌寒さを感じるんだけど!? なんなんだこの寒気は!? 小猫ちゃんなんて震えてる

じゃないか！

「暫し、ここで暖を取りましょう」

「うむ、かまくらづくりはキユクロにまかせろ」

トウーさんがキャンプ地を定めるとキユクロちゃんは自慢のパワーでかまくら……というか岩を拳でくり抜く様にして中に入る事ができるシエルターを作ってくれた。

おおっ！ これなら中で火を焚けば快適な空間ができあがるぞ！

「うう……情けないです」

小猫ちゃんは猫鍾だからか寒さに弱いのだろう。黒歌も嫌だといって同行していないしなあ……。寒さに震えているしかない自分を不甲斐なく思っているようだ。

「大丈夫だって！ ほら、こうすればあったかいぜ？」

俺はそう言つて小猫ちゃんを抱き締める。

「あ……暖かいです……」

「うん、これで風邪とかひく事はないだろう」

「はい……ありがとうございます」

しばらくするとトウーさんの微弱な炎の息吹でシエルターの中はかなり温かくなってきた。

「ただ小猫ちゃんは抱きついたまま離れようとしなない。」

「あ、あの、小猫さん？」

「……このままがいいんです」

上目遣いで言われてしまった！

いや、いかんいかん！ 今日にはリアスさんのためにキノコを採りに来たんじゃないか！ こんなところでイチャついてる場合じゃないぞ！

「……もう少しだけお願いします」

うわあああつ！ なんか小猫ちゃんが甘えてきたよ！ 普段はクールなのにギャップ萌えって言うのかなこれは！と、とりあえず落ち着け俺！ ここは冷静になるんだ！

「お二人とも、キノコを採る前にまずは食べられる植物の知識が必要

ですよ」

「ふふふ、キノコ狩りの基本は知識と経験。どっちが欠けてもダメなのよ〜ん♪」

くっ！ ニグラ先生とトウーさん二人の正論が胸に突き刺さるぜ！しかし確かにその通りだ！ キノコは毒キノコもあるからな！

俺達はキノコの専門家じゃないんだ！ 素人が安易に手を出しているものじゃないからな……！

「うう、寒い〜！ 寒いですう〜！」

「こら、ひきこもり。おとこがなきごとばかりいうな」

「そんな事言われても寒いものは寒いんですよおー！」

シエルターの中で震えていたギャー助をキユクロちゃんが叱咤する。なんだかんだ仲がいいのかな？凸凹コンビというのか、

見た目的にも性格的にも真逆な感じがするが意外とお似合いかもしれない。まあ、それはそれとして今はキノコ鍋だ！トウーさんは炎の魔人だし、こういうサバイバル的な事も詳しいんじゃないだろうか？

「焼けば大丈夫です」

「大丈夫よイツセーちゃん♪」

飯に毒キノコでも私の力で復活させてあげるから安心してね」

いやいやいやいや！ そんな危ない事できないです！ 煮ても焼いても毒キノコは毒キノコですからね！

ああ、なんてことだ！ キノコに関しては俺達には当てがえないぞ！ どうしたらいいんだよ！

「うう、寒いいい……。もう駄目ですう……」

ギャー助はガタガタと震えて今にも死にそうな顔をしている。このままじゃ本当に死んじまいかねない！

「ほれ、きのこなべだ。くえ」

「ありがとうございますう〜……」

いや、言っている側からよくわからないキノコ鍋を食べさせちゃダメでしょキユクロちゃん！

「大丈夫よく。可愛い子には旅をさせろって言うでしょ〜」

いや、旅って天国に送ることですか!? まずいでしょ!

「う…………お…………」

何だかギヤー助の様子がおかしい……………! 目は血のように赤く、蝙蝠のような羽が背中から生えてくる!

大丈夫には見えないぞ!

「む、ひきこもりがこーぶんしている。はんこうきというものか」

いや、違うよね? どう見ても暴走とかそんな感じだよ!

「うおおおおお!!」

ギヤー助は雄叫びと共にキククロちゃんに鋭い爪を向け襲いかかった!

しかも魔眼で時間を止めた!?

「うつ……………」

キククロちゃんは反応できずに攻撃を食らってしまったらしいが……………何と彼女の雪のように白い肌には傷一つついていない!ただ、服が……………!

ばるるるんっ♥

ば、バレーボールの様な迫力のキククロちゃんの生おっぱいが披露された……………! 一つ見ても素晴らしい光景だぜ……………!

「ぐおおおおおっ!!」

何とギヤー助はキククロちゃんをひん剥くに足らず、キククロちゃんにダイブを決め込んだ!

い、幾ら何でもそれ以上は洒落にならんぞギヤー助!

「ふふ、やるなひきこもり。だが、キククロはこのていどでおちたりはしないのだ」

キククロちゃんは余裕の表情を浮かべ、ギヤー助を優しく受け止めるとそのまま抱きしめる。

「あ…………」

「ほほう、そうか。おまえもおなじだったか。ならばしかたあるまい」  
そしてキククロちゃんは何かを悟ったように小さく微笑み、ギユツと強く抱き締める。

「……………あ、ああ……………」

すると、キユクロちゃんの柔らかな双丘に挟まれたギヤー助はビクン、ビクンと身体を大きく痙攣させる！あ、あれはまさかおっぱいとおっぱいの間に顔を挟む、ぱふぱふ……！！

「きゆう……」

ギヤー助は気持ちが良いそうだ……！ く、クソ！ 羨ましい……じゃなくてけしからん！

とにかくこのキノコ鍋にはリアスさんに食べさせるには危険……。いや、ドスケベエロエロ大魔王にパワーアップしたリアスさんも見てみたいけど……ここは勇気の撤退だ！ 「ニグラ先生！ トウーさん！ キノコ鍋は諦めましょう……つてむぐう!？」

ニグラさんが口に含んだキノコ鍋を俺に口移しで飲ませてきた！

「ん……ゴク……う……うわあつ！」

なんだこれ！ 体が熱い！ それに力が溢れてくる！

『うおおおおお!!』

ドライグも山全体に響くような声で吠えている！ 間違いない！

このキノコは危険すぎる……！！

「ふふ、イツセーちゃんならできるわ♪さあ、私達の愛の力でキノコ鍋を食べても大丈夫な体に作り替えちゃいませよ♪」

な、なんだつてえく!!

ああ、ダメだ……！！ニグラさん、トウーさんがメチャクチャエロく見える……！！ ヤリたい……！！ ヤリたい！

「イツセーちゃん、いい目をしているわ♪」

「ええ、流石です。では早速、私達もいただきますか」

二人が捕食者の目で俺を見つめながら迫ってくる。ああ、堪らない。俺は服を脱ぎ捨て、生まれたままの姿になった二人にむしやぶりつく。「ああん♪イツセーちゃんったらいつにも増して積極的ねえ♪」

ニグラさんの身体からはいやらしい位に甘い香りが立ち込めており、その胸元から覗かせる谷間に俺の頭を埋め込む。

「ひゃうんっ♪」

凄まじい弾力性を持った極上のおっぱいに俺の顔はどこまでも沈んでいく……。

なんて幸せな感触なんだろう……。ずっとこうしていたいなあ……。

と、その時、項から延髄にかけて肉々しいおっぱいの感覚が……！

「いかが、でしょうか？」

トウーさんの恥じらう様な声が聞こえてくる。

ああ、素晴らしい！二人のおっぱいと美女のむちむちボディに挟まれる俺は幸せのチリドック！

「ああ、最高ですう……」

間の抜けた声が出てしまうし、

何だか楽しくなってきたなあ。「ふふ、じゃあそろそろ……」

「ええ、お願いします」

「うふふ……イッセーちゃん、いいかしら……？ 私の乳首を口に含みなさい……♪」

ニグラさんが俺の頭を自分の胸に押し付ける。あ、はい……。俺、ニグラさんのおっぱい大好きだから喜んで吸い付きまーす。

ちゅぱ、ちゅうううう！

「うっ……」

まるで果実から蜜が溢れる様に、ニグラさんのミルクがどんどん出てくる。

ううっ……！ 止まらん！

「う、ううっ……」

俺の唾液と混ざり合い、それはもう濃厚なジュースとなって喉を通り過ぎていく……！

「はあ……はあ……どう、かしら……？ イッセーちゃん……？」

「美味しいですよ……」

「ふふ、よかったわ……♪次は貴女の番よ、トウーちゃん……♪」「はい……！ イッセー様♥どうぞ♥」ぐるんと体勢を入れ替えて、今度



はトウーさんが俺の顔をおっぱいに埋める。

「はあ……はあ……んっ……♥」

「んんっ……！…んっ……！…んっ……！…んっ……！…」

ニグラさんのおっぱいがプリンとするならこっちは中身の詰まったジューシーなシウマイだ。柔らかくもハリのある素晴らしい感触。

トウーさんは体温が高いのか、彼女の熱気が顔全体を包み込み、汗ばんでいて少し塩辛い。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

二人の激しい息遣いと柔らかかなおっぱいを堪能しながら、俺は勃起したペニスを向きを変えるたびに二人の間で擦らせ、快楽を得る。

「ふふ……♪ イッセーちゃんたら……♪」

「うふふ……可愛いですね……♪」

二人はそんな俺を見て楽しげに笑う。

そして、までもや体勢を変えると、二人のおっぱいが左右から迫り、俺を挟み込んだ！

「あ、ああ……！…」

更に膝を曲げてその腿で挟み込んでくる！ビクビクと脈打つ俺のチンポの先をトウーさんが優しく撫で回してくる！

「あ、ああ……！…やばいです……！…これ凄すぎます……！…」

二人の柔らかいおっぱいに圧迫され、ペニスを優しく刺激されるこの快感は……！

「う、ううっ……！…」

射精寸前まで追い詰められた俺にニグラさんとトウーさんが囁く。「ねえ……イッセーちゃん……私達のおっぱい一杯味わってね……♪」

「うふふ……イッセー様……いっぱい出してください……♥」

「あ、ああっ……！…」

そして俺はあえなく一発KOされてしまった。

「ふふ、イッセーちゃんったらこんなに出してくれちゃって……」

「ふふ、とはいえまだまだ元気ですね」

「ええ、イツセーちゃんはまだ満足していないみたいだし、続きをしましょうか♪」

「ええ、そうしましょう」

二人は俺を挟んで微笑み、するすると股下から潜り込むように、俺の身体の下に入って来た。

「さあ、イツセーちゃん♪次は私達と一緒に楽しみましょう♪」

「イツセー様、今度は私達二人で気持ちよくして差し上げますね」  
むにゅっ♥むちいっ♥

プリンおっぱいとシウマイおっぱいが俺のチンポをサンドイッチにして上下に揺れ動く。汗ばんだ二つの乳房の肉圧に俺の興奮も最高潮に高まる。ニグラさんとトゥーさんがおっぱいで挟んでくれるというので、俺は仰向けになってその豊満な双丘に埋もれていた。

二人とも凄いポリウムのおっぱいなのに、俺の下半身に密着していても全く垂れていないのが不思議だ。「ふふ、どう？ イツセーちゃん。私のおっぱいの感触は？」

「私の方はいかがでしょうか？」

イツセー様

二人が俺の顔を見上げながら、

ニグラさんは悠然かつ妖艶に、トゥーさんは恥ずかしげに尋ねてくる。タイプが違う美女二人によるパイズリは最高の一言だ。

「ああ、いいです……。とても……」

正直な感想を述べると二人は嬉しそうな表情を浮かべる。

「うふふ♪ よかったわ♪」

「ありがとうございますイツセー様、光栄です」

二人は笑顔を見せ、さらに強くおっぱいを押し当ててくる。

むちむちとしたおっぱいの弾力が心地よい。

「それじゃあ、もつと楽しんでもらうために……♪」

「ええ、頑張りますー！」

ニグラさんとトゥーさんのおっぱいが更に激しく動き俺のペニスを責め立てる。ぐりぐりと刺激してくれるトゥーさんのおっぱいと、ふわふわと包み込んで

くれるニグラさんのおっぱい。二人のおっぱいはまるで別の生き物のように形を変え、異なる快感を与えてくれる。

「うっ……！ ううっ……！」

ひよつとしたらセックスよりも気持ちいいかもしれない。俺は二人のおっぱいを更に貪るべく腰を動かし、自ら快楽を求める。

「ふふ、イツセーちゃんたら……♪」

「い、イツセー様！ そのように激しく動かれては……ああっ♥」  
舌なめずりして

見下ろすニグラさんと、顔を赤らめて喘ぐトウーさん。二人のおっぱいに挟まれて幸せすぎるぜ！

「はあ……はあ……はあ……！」

俺の息も荒くなり、いよいよ限界が近づいてきた。一気にスパートをかける。

「ああん♥イツセーちゃんたら……♥」

「うっ……くっ……！」

ニグラさんの胸の谷間から勢い良く飛び出したペニスの先端から白濁液が飛び出す。それは二人の顔や髪に降りかかり、

「はあ……はあ……ああ……す、すみません……！」

俺は慌てて謝るが、二人は顔についた精液を指で掬い取り、舐め取った。

「ふふ……イツセーちゃんたらこんなに出して♪」

「ふふ……美味しいですよ♥」

二人の余裕溢れる

態度に俺はドギマギしてしまう。「うう……すみません……」

「うふふ……いいのよイツセーちゃん♪」

「はい、イツセー様のお役に立てて嬉しいです」

そう言つて二人は優しく微笑む。

「でも……まだまだ元気そうね♪」

「じゃあ、最後までしましょうか？」

俺も人の事は言えないが、ニグラさんのエロさは底なしだ。ズブズブと泥に嵌るように俺達は快楽へと沈んでいく。

「あ、あの。ニグラさん、トウーさん。今度は二人のお尻を並べて入れさせてください！」

俺が懇願すると、ニグラさんは物怖じせずに、トウーさんはその頑健な身体に反して恥ずかしそうに、しかしどこか期待した様子で答えた。

「うふふ、イツセーちゃんも好きねえ」

「うう……は、恥ずかしいですね……」

俺はそんな二人に構わず欲望のまま突き進む。

「ではいきますー！」

俺はまずトウーさんの背後に回り込む。エロエロでノリノリなニグラさんと愉しみたいけど、身体も態度も硬さの残るトウーさんをエッチに可愛がってあげたいと思ったのだ。

「ど、どうぞ♥お見苦しい身体ではありますが、私めをイツセー様の好きなように使ってくださいませ」

「真面目ねえトウーちゃんは。」

初めてイツセーちゃんに抱かれるんだから愉しまないと」

ニグラさんに合わせる様に俺はまず彼女の引き締まった巨臀を鷲掴みにする。そして左右に押し広げ、秘部を露わにした。トウーさんの顔が真っ赤に染まる。「あら、もう濡れてるじゃない。トウーちゃんったらいやらしいわね」「う、うう……申し訳ありません。

で、ですがこれは……イツセー様のせいなんです……」

イツセー様のペニスが素敵すぎて……私はおかしくなっちゃったのです」

俺のチンポが素敵すぎたからトウーさんがおかしくなった……!?

こんなとてつもない日本語がこの世にあったとは……!」

「うふふ、トウーちゃんたら可愛い事言うのね♪イツセーちゃんも嬉しいでしょ?トウーちゃんのこと、すごく綺麗でいやらしくなってるのよ」

「ええ、最高ですー！」

俺は力強く答える。

「そ、そうですか？うう……恥ずかしいです」

恥ずかしがるトウーさんだが、その表情には隠しきれない喜悦の色がある。

「うふふ、それならよかったわ♪ じゃあ、早速始めましょ♪」

「はいー！」

俺は元気よく返事をする。そしてそのままトウーさんの肉厚なオマ○コの割れ目にペニスを押し当てた。

「あ、ああ……♥イ、イツセー様のおちん○んが私の中に入ってくるう♥」

俺のペニスがトウーさんの膣内に侵入していく。やはりキツクはあるが、十分に潤っているおかげですんなりと挿入できた。

「あ、あぁつ……！こ、これが男の人のペニスなんですね……！すごい……熱くて……硬くて……太い……♥」

トウーさんはうっとりとした声を上げる。俺はその感触を楽しみながらゆっくりと腰を動かしていく。

「あ、あぁつ……♥いいっ……！イツセー様のおちん○ん気持ちいいですっ！あぁつ……！もつと……！もつとしてくださあいっ！」

トウーさんは淫らに喘ぎまくり、腰を揺らして快感を求める。俺もそれに答えて激しく腰を打ち付ける。

パンツッ！ パアン！腰同士がぶつかり合う音が響く。

その度にトウーさんの巨乳がぶるんつと揺れ動き、とてもエロい。だが俺の見た所、トウーさんの性感帯は胸ではない。

(……だ！)

俺は片手を腰からトウーさんの6つに割れた腹筋に移し、そこを撫で回す。

「ひゃうん……！ー！」

ビクンと身体を震わせるトウーさん。俺はさらに彼女のヘソを指先で刺激する。

「はぁ……はぁ……♥おへそなんて……ダメですよ……♥」

トウーさんは身を振らせ、息を荒くしている。

「あら、トウーちゃんっいたらお臍が弱いのか？」

ニグラさんは楽しげに笑う。

「うふふ、だったら私も混ぜてもらおうかしら♪」

そう言ってニグラさんはトウーさんの後ろに回り込み、トウーさんの両乳首を摘む。

「ああんっ………」

「うふふ、相変わらず感度いいわね♪」

「はぁ……はぁ……あ、ありがとうございます……」

ニグラさんに褒められて嬉しそうなトウーさん。

ニグラさんはトウーさんのおっぱいを揉みしだきつつ、彼女の耳元に口を寄せる。

そして舌を出してトウーさんの耳の穴を舐め始めた。

レロオ……ジュルル……。

ぶちゅっ!! どちゅんっ!

二人が奏でる水音に、トウーさんはますます興奮を高めているようだ。更に俺はトウーさんの引き締まった尻を掴み、激しくピストン運動を行う。

「あう……ふう……あ、あぁっ! イッセー様のペニスが私の中を掻き回していますう♥お、奥まで突かれてえ……♥い、イクウ♥ イツちやいますう♥」

トウーさんは身体を仰け反らせて絶頂を迎える。その瞬間、彼女の中から大量の愛液が吹き出し、結合部から溢れ出す。水圧で押し返されるような感覚すら覚えるほどの勢いに、俺は射精してしまいそうになるが何とか堪える。

「あ、あぁあ……♥イツセー様のおちん○んでイカされてしまいました……♥ふうう!!」

トウーさんがイツてくれた事で、俺も限界が近かった。なので遠慮なく中に出させてもらおう事にした。

「く……ふう……」

「はっ♥はっ♥はっ♥はううううううう!!」

四つん這いになり、後ろから犯されているトウーさん。彼女は俺の突き上げに合わせて、獣のように喘いでいる。その姿はまるで雌犬の

ようであり、俺はそんな彼女に容赦なく腰を叩きつける。そしてどう  
とうその時が来た。

どびゅどびゅどびゅーっ！

「きやうん………！ 熱いの出てますう♥」

「ふふふ、イツセーちゃんたら凄いわね♪」

俺はたつぷりとトウーさんの子宮目掛けて精を放つ。「あ……あ

……あ……あ………！」

トウーさんは全身を痙攣させて快樂の余韻に浸っていた。「あ、あ

……あ……あ………！」

トウーさんは身体を小刻みに震わせながら、艶かしい声を上げてい  
た。どうやらまだイツてるらしい。

「イツセーちゃん♥次は私にもちようだい♪」

「はい、わかりました！」

俺は返事をする、ニグラさんの柔らかな尻を鷲掴みにして持ち上  
げる。そしてそのまま自分の方へと引き寄せ全身を磨くようにな  
で回す。「あはは、くすぐったいわよイツセーちゃん♪」

「すいません、でも気持ちよくないですか？」

「うくん、どうかしら？」

ぐぬぬ、流石ニグラさん………！

俺を挑発し、ハーレム神への道を阻もうとするとは………！だが俺は  
負けん！必ずあなたも墮としてみせる！俺は決意を新たに、ニグラさ  
んへの攻めを再開する。

まずは彼女の爆乳を揉みほぐす。

「あはは♪ イツセーちゃんのエッチい♥」

ニグラさんは愉しげに笑いながら俺の頭を撫でてくる。

俺は構わずニグラさんのおっぱいを揉み続ける。そして乳首を口  
に含んだ。

「あん♥ふふ、赤ちゃんみたいね。よしよし」

ニグラさんは優しく微笑みながら俺の頭を抱き締めてくれる。

「ふふ、可愛いわね♪ねえ、今度はこっちの方お願いできるかしら？お  
口でして欲しいのよね」

そう言つてニグラさんは自分の股間を指し示す。俺はそれに従い顔を近づける。食中植物に引き寄せられるハエのような気分だ。だが彼女の体臭は芳香というべきものであり、不快感は全く感じなかった。むしろこの匂いは癖になる。俺はその香りを楽しみつつ、彼女の秘部に舌を這わせた。

「ん……………ちゅぷ……………」

「そう、いい子ね……………」

ニグラさんは満足げに呟くと尻を押し付けて来る。俺はそれを受け止めつつ、彼女の肉厚の花弁に吸い付いたり、舌を差し込んだりする。

「んっ……………ふふ、上手になったわね……………」

「ちゅぱっ……………はい、ニグラさんのおかげです……………」

「あらあら♪ 嬉しい事言ってくれちゃって♪」

ニグラさんは上機嫌に笑う。

「じゃあ、そろそろいいかしらね……………♪」

ニグラさんは俺を立ち上がらせると、自分から挿入するように促してきた。

「さあ、来て……………♥」

ニグラさんは脚を開き、自ら両手で割れ目を拡げる。

俺はそこにゆつくりと腰を沈めていく。

ずぶぶっ……………。

亀頭が膣内に侵入する。相変わらず表現しようがないくらいに心地良い感触だ。

「んっ……………ふふ、相変わらず大きいのね……………♥」

「ありがとうございます……………!」

褒められたのが嬉しくてつい礼を言う。

「ふふ、イツセーちゃんったら、本当に可愛くて素直なんだから……………♪」

ニグラさんは妖艶に微笑む。

「あの、そろそろ動きますね」

「ええ、きて……………♥」



俺はゆっくりとピストン運動を開始する。最初は小刻みだったが、徐々に速度を上げて突き伏せる様に腰を動かしていく。パンツ、パアンと肌がぶつかり合う音が響く。

「ああっ……いいわよお……もつと突いてえ……♥」

ニグラさんが俺から種付プレスを受けつつ甘い声で囁きかけてきた。「はい……!」

俺も興奮が高まりさらに激しく動くお互いの汗が混じり合い、お互いの体が溶け合ったような錯覚を覚える。

「あはっ♥すごいっ♥こんなの初めてっ♥」

ニグラさんは恍惚とした表情を浮かべている。どうやら気に入ってくれたようだ。

俺達は互いに快楽を求めあいながら絶頂に向かって駆け上がっていく。

「ああんっ♥イクウー♥」

「うう……!」

どびゅどびゅどびゅー!!ニグラさんが絶頂を迎えると同時に、俺もまた限界を迎えた。

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……♥」

「ふう……ふう……ふう……ふう……ふう……!」

お互いに荒くなった息を整えるヒマもなく俺はニグラさんに被さる。

「んふふ〜♪ イッセーちゃんたら激しいんだから♪」

ニグラさんは楽しげな声音で言う。

「すいません、なんか止まらなくて……!」

「ふふ、いいのよ。それにまだ元気いっぱいみたいだし♪」

そう言うと彼女はそのすわりとした足で俺の腰をクワガタのように挟み込んでくる。そしてそのまま器用に腰を動かし、自分の気持ちいい所に擦り付けてくる。

ぐおお……!?! 言葉を紡ぐ余裕すらない程の快感だ……!」

「ほ〜ら、(ニ)こ(こ)かどうっ?」

ニグラさんは俺の反応を見て楽しむように、様々な角度で押し付け

てくる。

「くっ……うう……!!」

あまりの気持ち良さに、思わず情けない喘ぎ声が出てしまう。

「あはは、イツセーちゃんったら可愛い♪」

ニグラさんは愉しげに笑いながら、膣をうねらせペニスを刺激する。「うう……ううう……!」

俺は歯を食い縛り必死に耐えるが、「ふふふ……えい♪」

ニグラさんが突然乳首を摘んできたせいで力が抜けてしまった。そして次の瞬間には彼女の胎内に吐き出してしまった。

「ああ……ダメだ。出る……」

か、かなわない……。ハーレム神になるには越えるべき壁が多すぎる……!まだまだ修行が必要だと思いき知らされました。

俺は敗北感に打ちひしがれながらも、なんとか彼女に搾られないように頑張っていたのだが、そんな努力は無駄だと言わんばかりにニグラさんの締め上げによってあっさりと屈服させられてしまい、彼女の子宮に大量の精液を流し込んだ。

ドピユツドピユーツ!

「んっ……♥また出たわね……♥」

「くっ……!」

俺は悔しさを滲ませつつも、彼女の膣内に射精した。

「んっ……♥はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……♥」

ニグラさんとトウーさんの喘ぎ声を子守唄にする様に心地よい疲労感と共に眠りについた。

小猫ちゃんやんは猫舌だからキノコ鍋を食べられなかったのが幸いだったぜ。俺達が乱痴気騒ぎを繰り広げる間にゲイトさんと呼んでくれたらしく、気がついたらリアスさんの家

へと戻っていた。

それでリアスさんにキノコ鍋を勧めてみたんだけど……。

「ごめんなさいね。キノコは嫌いというわけではないのだけど、今は駄目なの」と断られてしまった。

うーん、確かにリアスさんは次期当主なワケだし、滋養強壮のため

とはいえ妙な薬は避けたいだろうからね。仕方ない。

「ちよつといいかな」

俺がしょんぼりとキノコ鍋を台所に戻しにいく最中、

ゲイトさんが声をかけてきた。

「朱乃くんがキミに話があるそうなんだ」

話って何だろう？取り敢えず行けば解るよな。

※幕間・異聞（安里×キユクロ ギヤスパ×ナイア  
&トウ）

??? side

ここは駒王学園の建て直された旧校舎。立入り禁止とされている  
その場所はギヤスパ・ヴラデイが住まう場所でもある。

普段ならば半ばひきこもりの彼は、自室である物置で引き籠もって  
いるのだが……。

「はっ……はっ……」

パソコンの画面の前で息を荒げながら、その顔には汗が滲み出てい  
た。

机の下で手に握りしめているのは、マウスではなく猛り狂うペニス  
だ。

（どうして……？ メチャタカイキノコの効果は消えた筈なのに……  
？）

あれ以来欲望が抑えられない。

吸血など及びもつかない肉の快楽。

女の柔肌、膣肉に絡み付かれる感触。脳髓まで蕩けそうな甘い声  
音。

そして魂の交換ならぬ交姦

による悦楽の記憶。

それら全てが彼を虜にして離さない。

「ああ……ダメえ……」

彼の右手が激しく上下する度に淫らな水音が鳴り響く。

しかしそれでもなお彼の欲求不満は満たされず、乾きと飢え  
にも似た焦燥感が募るばかりだ。

「出る……！ 出すよ……！

キユクロちゃん……！ キユクロちゃん！」

初めて抱いた巨軀の美少女の名を叫びながら、遂に絶頂を迎える  
ギヤスパ。大量の白濁液がモニターの中に映し出された件の少女

の顔や身体に降り注ぐ。

「はあ……はあ……。どうしよう。僕は……僕は……ヘンタイになっちやっただなあ……」

そう呟くギヤスパーの声音には悲哀と苦悩の色がありありと浮かんでいた。けれどどうすればいいのか彼自身からなかつたのだ。

だから、最後の手段を取ることにした。



「まさか、悪魔同士で契約の依頼なんてなあ……。しかもお前は成績トップで俺は未だ契約ゼロなのに」

イツセーは呆れ顔で目の前にある

ダンボール箱を見つめていた。

「うう……、すいません先輩。」

でもヘンタイのエリートである先輩達なら何とかしてくれると思っ……

「俺の評価ってそんなもんなのか!? ぜ、前科があるだけに

反論できん……!」

「何で俺まで……」

イツセーと安里は変態のエリート呼ばわりに複雑な表情を浮かべている。だが二人は同時に思った。

「あの……僕、もう限界なんです!お願いします! どうか助けてください! あの日以来、エッチなことしか考えられなくて頭がおかしくなりそうなんですぅ……!」

涙目になりながら懇願してくる後輩を前にして断れるはずもない。イツセー達は快く依頼を受けることにした。

「さて、まずはギヤスパー!」

お前は どうしたい?」

「どうと言われても……」

まずは安里が尋ねるが、ギヤスパー当人は困惑気味だった。

「いや、女なら誰でもいいのかそれともハーレムでも作りたいのか、あるいは惚れた女とセックスしたいのかとか色々あるだろうが」

「そ、それは……」

ギヤスパーは言葉に詰まる。確かにそういう願望はある。けれどそれを他人に打ち明けるのは恥ずかしかったし、ましてや相手が男の先輩二人なのだから尚更だ。

「ぼ、僕は女の子をとつかえひつかえしたいわけじゃないです！ただその……キユクロちゃんとエツチなことをいつぱいしたいだけなんです！」

顔を真っ赤にして叫ぶギヤスパー。

「お、おう。よく言えたな」

安里は若干引きながらも、気を取り直して質問を続ける。

「成程。キユクロと恋人になりたいってことか？　じゃあ告白しろよ」

そしてこの身も蓋もない発言である。

「こ、告白ですか!!?　ムリですよ！」

当然のように拒絶するギヤスパーに安里の悪人面が更に凶悪になる。

「やってみなきや解んねえだろ。」

顔だの身体つきが何だよ、ボディビルダーのコンテストやってんじゃねえんだ」

「ひいっ！　ごめんなさい！　ごめんなさい！　生まれてきてごめんなさい!!」

彼としては叱咤激励のつもりだったがいかんせん顔つきと迫力がヤカラそのものなので逆効果だ。

しかしイツセーは違った。彼は優しい笑顔を浮かべるところ言つたのだ。「おい、安里。あんまり脅かすなつて。ほら、落ち着けよ。深呼吸だ。ヒツヒツフー、ヒツヒツフー。よし落ち着いたな」「ラマーズ法じゃねーか！　つーか全然落ち着いてねえぞ！」

安里は突っ込むが、一先ずはギヤスパーが怯えなくなったので良しとすることにする。

「しかし、キユクロのどこに惚れたんだ？」「あ、安里。その話をするとかややこしくなるからパスな」

「あー……成程。だいたいわかった」

キノコ狩りの時の乱交をニグラかトゥー辺りから聞き知ったらしく、イツセーが話を振る前に安里は理解したようだ。

「愛よりエッチが先つてアルファベットみてーだなお前」

「あううう、すいませんん〜!!」

「でも解る！ キュクロちゃんは言動は幼いけどスタイル抜群だし……睨むなよギヤスパー……その顔コワイぞ」

謝罪したり嫉妬したりと忙しいギヤスパーだが、安里は解決策を提示する。それは嘗て安里が、イツセーと夕麻のキューピットとなろうとした方法だった。



さて、場所は旧校舎の保健室。

殆どの器具や机は移動済だが、

古びたベットは残っている。

そのベットに安里は座りながら呼びつけたキュクロを待っていた。

そして……。

「たのもうー」

元気良く扉を開けて入ってきたのは、学生服姿のキュクロだ。

白いボブカットに、黒の眼帯。胸元にはリボンを付けており、下はミニスカートという格好をしている。

学生離れたスタイルはまさに垂涎ものだ。

キュクロは室内を見渡すと、

「それで、なんのようだきゆうどー。キュクロはみたいテレビがアルのだぞ。ようけんはかんけつにたのむ」

安里はキュクロの口調に思わず苦笑するが、気にせず要件を切り出す。

「お前、良いカラダしてるよなア」

まるで凌辱系エロゲのモブのような台詞である。確かに似合っていると言えばそうなのだが……。

「ふふん。キュクロのカラダはとくべつなのだ。ととさまがいうにはガラテアを超えた在りし日のビーナスさまのおからだをさんこうにしたとのことなのだ」

キユクロは得意げに言う。どうやら彼女にとって自分の身体は自慢のタネらしい。

「へえ……」

安里はニヤリと笑うと、おもむろにキユクロの腰に手を回して抱き寄せ、そのまま唇を奪う。

「ぶはっ……。どうした、きゆうどー……。？」

「何だよカマトトぶってもメスの顔してんぜ？お前も俺と同じで溜まってんだろ？」

「たまって……。しゅっきんか？」

かーどのしゅっきんならばあのしゅうわるおんなにおしつければいい。くとうーるちやもそれがいいというはずだ

性悪女というのはナイアの事で、くとうーるちやと言うのはトウー・ルチャの事であろう。

(どうも調子が狂うな……)

無理やり迫る雰囲気にならねえ)

そう思いつつも安里はキユクロの胸を握りつぶすように揉み始める。

「いいじゃねえか、やらせろよ」

これでキユクロが抵抗した所を

ギヤスパーが助けに入る。そういう手筈なのだが……、

「なんだ。きゆうどーはキユクロとせつくすがしたかったのか？」

もてるおんなはたいへんなのだ

キユクロは意外にもあつさりと受け入れる姿勢を見せた。そして、安里にされるがままになっている。

(こ、コラー！ 抵抗しろキユクロ！)

これじゃ俺が後輩の惚れた女を寝取るクソ野郎になるじゃねえか！)

焦る安里だが、キユクロの身体は彼女が得意になるのも当然なまでに魅力的だった。

キユクロの身体は細く引き締まっていながら胸やお尻の肉付きが良い。



安里の手の動きに合わせて形を変える様は実に扇情的だ。手を離そうとしても指が食い込んでしまう。

「ふふ、あのしようわるおんなにしりにしかれ、るいーなににげられたのがつらいのだろうか？」

このキユクロがよしよしをしてやるのだ」

キユクロは安里の首に腕を回す。

「キユクロお……」

安里はキユクロの胸に顔を埋めた。

「うむ、くるしゅうないのだ。

きゅうどーはかわいそうだから、このキユクロがまぐわってやってもいいのだぞ？」

（ああ……ヤベエ……。このままだと俺はキユクロに惚れちまいそうだ……。でも……。それでも……。！）

思い浮かぶのはルイーナの顔だ。

彼女を取り戻す前に他の女性

に手を出すわけにはいかない。

「キユクロ……。悪いな。

俺は今、好きな奴がいるんだ。

アイツの、ルイーナの為なら

どんな事だつてするつて決めたんだよ」

安里はキユクロから離れると、彼女の肩を掴み真剣な表情で告げる。

「だから……。お前とはセックス出来ないんだ」

「どんなことでもするなら、キユクロとせつくすすればいいではないか」

無邪気な顔で首を傾げるキユクロに

流石の安里も戸惑った。

話の流れはおかしくなる一方だ。

「いや、だからな！ 話を聞いていたのか!？」

「うむ。キユクロはきいていたぞ。

だが、きゅうどーがすきなせいぶつのためになにかをしたいという

なら、そのせいぶつはキュクロにするべきなのだ」

「生物ってお前なあ……！」

安里は頭を抱えなくなった。

何でこうなってしまうのか、

安里には理解出来なかった。しかし、キュクロの気持ちを察することは出来た。彼女は自分の事を好きになって欲しいと言っているのだ。

それは間違いではない。

だが、何故ここまで話がこじれるのだろうか？そして……、事態は更に悪化していく。

「そういえばあけのがいっていたな。さんばんめ、というのがおいしいポジションなのだそうだぞ。そんなわけでキュクロはきゅうどーの3ばいめのこいびととなるのだ」

キュクロの言葉に安里は愕然とするしかなかった。身体は熱いの冷や汗が出るという奇妙な経験をする羽目になる程に。

(姫島さん！ アンタ何キュクロに吹き込んだん!!)

心の中で絶叫しつつも逡巡していた。このままではマズイ事になる。

折角ひきこもりから脱却しかけたギヤスパーの恋路を邪魔してしまおうと。

だが、キュクロの次の言葉が安里の心に火を点けた。

「しかたのないやつだ。イツセーはキュクロをなんどもはげしくおかししたというのにな。きゅうどーはかいしようなしだな」

「なっ……!!」

「ふふふ、きゅうどーはおろかなおとこなのだ。きゅうどーはきゅうどーらしく、キュクロをはげしいせつくすでわからせてやればよい」  
キュクロは普段の彼女らしくもない妖艶な笑みを浮かべると、安里を押し倒した。

「くそっ……。どうなっても知らねーからな……！」

安里は覚悟を決めると、キュクロを抱き寄せて唇を奪った。



ギシ、ギシとベットが軋む音が室内に響く。

「くうん……。きゆうどーはせけんばなれした、うまいせつくすをおぼえるのだ。キユクロももつとうまくなりたいのだ」

キユクロは安里の腰の上でまるでドリブル中のバスケットボールのように跳ねながら言う。

「くう……。キユクロお……」

「きゆうどーはさみしそうなときがいいかおをしているな。

きゆうどーのいいかおがキユクロはだいすきなのだ」

キユクロは安里に抱きつく舌を絡めたキスをした。にゆるり、と安里の口内に侵入してくる。

「何だよ……。そりゃあ」

キユクロの中は文字通り名器であった。安里のモノを締め付ける膣内は、まさに男を喜ばせる為だけに作られたかのようだ。

「きゆうどーはキユクロのところがきらいなのかもしれないが、キユクロはきゆうどーのこころはきらいじゃないのだ。

きゆうどーもキユクロのからだはきらいじゃないだろう？」

「ああ、嫌いじゃねえよ。むしろ好きだぜ」

「ふふ、ならばキユクロはうれしい。きゆうどーのこどもをたくさんうみ、きゆうどーをたすけてしんせつにしてやろう」

キユクロはそう言って笑う。

まるで妻のような台詞だが、安里の背筋にゾクツとした感覚が走る。

キユクロは安里に跨がり、激しく動く。

「うあ……。キユクロお……」

強がる余裕も必要も今の安里にはなかった。彼はただひたすらにキユクロの名を呼び続ける事しか出来ない。

キユクロとのセックスに夢中になっている自分を自覚しながら、それでも本能には逆らえない。

「ふむ、だいぶじかんがたったが

イツセーよりもだすのがおそいのだな。にぶちんどでもいうべきか……」

キユクロは呆れたように安里を

文字通りに尻に敷いていた。

彼の頬を両手で掴んで、自分のペースで腰を動かす。

その度にキユクロの乳房が激しく揺れる。

安里はその光景に目を奪われていた。

キユクロは安里の視線に気付いたのか、安里の顔を見つめ返す。

そして、安里の顔を掴むと強引に自分の胸へと押し付けた。

むわあつ、と香ってくるキユクロの甘い匂いに安里の理性は崩壊寸

前だった。

「ほれ、きゆうどー。」

きゆうどーがすきなのはこのおっぱいなのだろう？キユクロがあいしてやるから、いっぱいもむといいぞ」

安里は言われるままにキユクロの胸に顔を擦り付け、柔らかさを堪能する。

「ふふ、きゆうどーはかわいいのだ。」

キユクロのむちむちのすけぼでいをたつぶりかわいがつてもらうぞ」

キユクロは安里の頭を撫でながら言うと、安里は夢見心地に目を細めた。

「ああ、いっぱいかわいがってやる……キユクロ……キユクロ……」

安里は何度もキユクロの名前を呼ぶ

と、キユクロの身体を強く抱きしめた。まるで蟬が木に

張り付くかのようにキユクロの身体に密着する。「きゆうどーはせつちちなのだ。」

キユクロをそんなにだきしめたらキユクロのからだにぎやくたいになってしまわないか」

「くう……、キユクロお……」

キユクロの身体を力一杯抱き締める。

するとキユクロは苦しげな声を上げるが、その表情はどこか嬉しげだ。

「きゆうどー、キユクロのことをだいすきななら、もうちよつとやさしく

してくれてもいいんじゃないか？」

「すまん……。けど……。俺はお前のこと……。！」

「わかっている。きゆうどーはやさしいおとこなのだ。」

だからキユクロはきゆうどーのことがだいすきなのだ」

キユクロはそう言つて安里を優しく抱擁した。そして……。

ビュルルル！ ドピュツドピュー！安里のモノから大量の精液が放出され、キユクロの子宮を満たしていく。

「くう……。！」

キユクロの膣内から溢れ出た白濁がベッドシートを汚していく。

しかし、キユクロは満足していないのか、まだ安里を離そうとしない。

「きゆうどーはまだまだげんきなのだな。」

きゆうどーがもつとしたいというのであれば、キユクロはつきあうのだ」

余裕の笑みと言つてもいいような笑みを浮かべたキユクロだが、次の瞬間に強引に唇を奪われた。

「んんっ!?んんん?!」

安里の舌が別のナニカ、極細の触手

のようにキユクロの口内に侵入してきた。それはキユクロの舌を絡め取り、キユクロの口内を蹂躪する。

「んんっ!! んんんんんんん!!!」

(なんだこれは!?)

キユクロは安里を引き剥がそうとするが、安里の力が強くて離れない。

安里はキスをしながらキユクロの乳首を指先で摘まんだ。

「んっ!?んぶうーっ!」

しゅるり、じゅるり……と安里の指の先が触手から糸になつて乳首から乳房の中へと侵入してくる。

(な、なんなのだ……。？ これは?)

キユクロは恐怖を感じた。得体の知れないモノが自分の中に入つてこようとしているのだ。だが、同時にキユクロの肉体はそれを受け

入れ、変質させていった。

「ふはあ……」

安里が口を離すと、唾液の橋がかかった。

安里はキユクロの乳房を揉むと、彼女の耳元で囁いた。

「キユクロ、我等のモノになれ」

「きゆうどー……。ちがう……?」

おまえは……?」

キユクロは安里の声を聞いている内に頭がボーツとしてきて、安里の事を愛しさとは別の劣情を感じ始めた。乳房は張り出し、口の中から唾液が汲めども尽きぬ泉の如く湧き上がる。

しゅるるる!!

「あつ……♥ううう……♥」

更に彼の背中から滑り気を帯びた吸盤つきの触手が這い上がり、キユクロの全身を愛撫する。まるで洗車機にかけられているかのような快感にキユクロは喘いだ。

「きゆうどー……おぉ♥」

瞳が濁り、魂が縛られていく。

慈愛は穢され、肉欲に塗り替えられてしまう。

キユクロの身体はどんどん淫らに変化していった。

「はあ……はあ……」

安里が手を離してもキユクロの乳房は重力に逆らい、天を向く。

ぶる、ぶると震える乳房の先端ではピンと勃起した乳首が自己主張していた。

「きゆうどー……♥キユクロはきゆうどーのこどもをたくさんうみ、しんせつにしてあげる……♥」

陶然と、当然の様にキユクロは

安里らしき何者かに誓った。

キユクロの身体は彼が望んだ通りの淫らな女体へと変貌しつつある。

「そうか」

安里……いや、彼はキユクロの変貌ぶりに満足する様に口元を歪め

た。そして、背中からの触手達の先端が熱り立つペニスに変わる。  
「ああっ……すごい……！」

キュクロは目の前に現れた異形の剛直の数々に歓喜の吐息を漏らす。

その全てが目の中の美女を犯して孕ませる為に存在しているのだ。

「どれでもすきなものをえらんでいいぞ」

「はい……♡」

まるで宝石を選べと言わんばかりの口調だったが、キュクロにとってはどの男根も等しく価値のある宝物だった。

「じゃあ……これを……♡」

キュクロは一番大きいものを手に取る。彼の股間にあるモノより二回り程大きなものだ。

「ほう、それがいいのか？」

「はいっ……これがいいです……！」

キュクロは即答する。

「そうか」

ビシッ！ ビシッ！！

まるで無礼を咎めるかの様な剛直の鞭打がキュクロの身体を打つ。

「あああんっ……！」

まるでブラック・ジャックの様に重く響く痛みがキュクロの身体を駆け巡る。しかし、キュクロの身体はその痛みすら心地良いと感じてしまう。

「なんとあさましい女だ。」

選ばれなかったモノが哀れではないか」

「ごめんなさい……！……！……！……！……！……！……！……！……！……！……！」

謝罪の言葉を言い切る前にまた触手とペニスの鞭が振るわれる。今度はさつきよりも強く、重い一撃だ。

「ううううっ……♡ああああああっ！！」「どうした？ 痛いか？ 苦

しいか？ならば何故お前の胸はこんなにも張り詰めているのだ？」

「ううっ……そんな……こと……！」

「正直に答えろ」

「ううっ……！　くるしい……けど……きもちよくてえ……♥」

キュクロの乳房は真っ赤に腫れて、先端の突起からは白い液体が漏れ出ていた。ベロリ、と舌を垂らし天を仰ぐキュクロの姿はまさに娼婦そのもの。その淫らな有様に彼女を囲む触手ペニス達は興奮して脈動する。

まるで花粉を放出する雄しべのように、無数の触手達がキュクロの身体へと射精し始めた。「うわっ……♥あつ……い……♥」

「ふむ、この程度ではまだまだ物足りないだろう？　もつとくれてやる」

「ああっ……♥」

びゅるるるる!!　ドピュツドピュー!!　ビュルルルーツ!! 大量の精液がキュクロの身体に降り注ぐ。キュクロの身体はたちまち白く染まっていった。

「ううっ……♥うううっ……♥」

キュクロは身体中をザーメンまみれにし、悦楽に酔い痴れる。その姿はまさしく快樂の虜となった牝豚だった。

「さあ、これで準備は整った」

「じゅん……び?」

「そうだ。お前はこれから我が眷属となるのだ」

「けんぞく……」

「そうだ。我等の仲間となり、永遠に我等の慰み者になるのだ」  
「なる……」

正気を失いかけているキュクロは濁りきった、何も見ていない瞳で白痴の彼の言葉に従順に答える。

「そうか」

転じて、彼は淡々と言った。

「では、行くぞ」

彼の背中から生えている触手の二本が、キュクロの乳首に触れた。

「はあ……そこ……は……?」

「ちが……あつ……♥」

キュクロの乳房にペニスが沈み込み、更に変形する。それはまるで



搾乳機に吸い付かれていますのような感覚。そして、同時に乳房の中を何が這いずり回る感触。

「あっ……ああっ……！！」

常軌を逸した事が行われている。

ひくつく閉じた瞼の裏には、自分の乳房の中に男の性器が入り込んでいる光景が見えている。

だが、キククロはそれを拒絶する事が出来ない。

「んが……あ……あひあ……！！」

乳房の中で肉棒が膨張していく。

乳腺が圧迫され、更に細分化した触手ペニスが神経を犯す。

「おおおおおおおお！！」

脳が狂気に浸されていく。

尊厳も理性も破壊されていく。

精液と得体のしれないナニカに

全てが白く塗り潰され、消えていく。

「おお……おっ……んほ……あ……あ……あ……！！」

「お前の細胞一つ一つを犯しぬく。その上で、お前を新たな肉体として再構築するのだ。」

「さあ、生まれ変わるが良い！」

「おお……お……あ……あ……！！ いやだ……！！」

ぶしゅっ！ぶしゅうう！！

凄まじい量の母乳が乳腺から彼の触手ペニスを押し返した。

「ほう」

だが彼は余裕を崩さない。

「あ……あ……いやだ……！！ いやだ……！！ いやだ……！！」

キククロは必死に抵抗を試みる。

脳裏にイツセーや安里の事を

思い浮かべて首を振った。

「無駄だ。既にお前の魂は我が手の中にある」

「い……い……や……だ……！！」

ほんの僅かの抵抗であったが

それで十分だった。

ブーン……。と低音が響くと

彼の周囲の景色がセピア色に転じていく。

「ちよつと眠つてろお前」

「これは……!? き……さまー」

触手の継ぎ目に鍵の様な形状のナイフが背中から胸に突き刺された。

刺した相手はしようわるおんな、こと九頭竜ナイア。自称唯一無二にして輝くシスターである。

その側には魔眼を発動させたギヤスパーが居た。

「私としてはアンタに目覚めて欲しいのは確かなんですけどね、タイミングってものがあるんですよねエ」

「が……が……」

「まあ、もう暫くはゆっくりして下さい。大丈夫、悪いようにしませんよ。アンタにもこの世界にとつてもね、ハハッ！」

ニマアツ、とナイアは性悪女に相応しい邪悪な笑みを浮かべ、鍵をかけるかの様にナイフをぐるりと回して抉った。その顔は邪神そのものだ。尤もギヤスパーは魔眼の力の発動にかかりきりでその凶相を見ることはなかったがそれで良かったのかもしれない。

そして……。

ー

「う、うあ……」

ちろ、ちろ……ちゆうう……♥

「くああ……」

じゆる、じゆる……♥

場所と時間は替って数日後の

ギヤスパーの部屋。

あの後、ギヤスパーは意を決して

キユクロに告白したものの、

あっさりと振られてしまったのだ。

「すまん、ひきこもり。」

「たいぷではないのだ」

「う……うわああああん!!」

そしてまたひきこもりになりかけた矢先、今は二人の美女に奉仕されている。

彼の腫れ上がる様に勃起したペニスを二人とも口に含んで舐めしやぶっていた。

一人はナイア。そしてもう一人はトウー・ルチャである。

「あ、ああ……!」

地獄から天国へ昇天しそうな快楽に、思わず声を上げる。

「ん……ちゅ……!♥」

「うふふ、気持ち良いですか?もつと吸っちゃいますよ?」

「あ、あ……!」

二人は競い合う様に舌を動かしながら口内で亀頭を責め立てる。妄想以上、いや想像すらしていなかった快感に、今にも射精してしまいそうだ。

「ふふ、どうぞ。いつでもお好きな時にお出しなさい」

「ハア? 解ってませんねこの脳筋メスゴリラときたら。こういうのは焦らせば焦らす程いいですよ」

甘えさせ頑健レイとサディスタの二人がかりのフェラチオは、まさに極楽浄土の如き心地良さだ。「はあ……!♥」「んっ……!」

ちゅぱっ、ちゅぱっ、ぢゅぽっ♥淫猥な水音が部屋中に響き渡り、

ギヤスパアの興奮を煽っていく。

そして遂にその時が来た。

どびゅーっ! びゅくっ、どくっ、ごぼっ!大量の精液が溢れ出る。

それをトウーは喉を鳴らして飲み干していく。

一方のナイアは吐き出したザーメンを手を取ってぺろり、と嘗めた。

その姿はとても扇情的で、ギヤスパアの性欲を刺激するには十分過ぎるものだった。

「おいコラ、誰がチ○ポから汁出しているっていったんだア?」

ぎゆううううっ!!

「ひいっ!? ゆ、許して下さいいっ!!」

「ん、なんだコレは。まさか、まだこんな元気とは。流星は坊やですねエ」

睾丸を握られ泣き叫ぶ様に哀願するギヤスパーに、ナイアは嗜虐的とも言える笑顔を向ける。そんなナイアの手首をトウーが掴む。

まるで握りつぶさんとばかりに力を込めている様だ。

「ぐっ……! 放せやこの雌犬!」

「全く仕方のない蛆虫ですね。」

この様な者を側に置くとはニグラ様もさぞ苦勞なさっている事でしょう……」

「は……うう……」

睾丸を熱い手で愛撫されると

痛みが蒸発したかのように消え去り、代わりにじんわりとした熱が広がっていく。その淫熱は海綿体へと伝わり、ペニス再び怒張していった。

「あ……ああ……」

「恥ずかしがらずとも良いのですよギヤスパー。存分に私達を使ってくれれば良いのです」

自分の色情狂を咎めるどころか肯定され、戸惑いを覚えるギヤスパーだったが、その言葉の意味を理解すると同時に全身の血が沸騰するかの様な錯覚を覚えた。

「っ、使う……!?!」

「そうです」

トウーはシスターの様な慈愛の笑みを浮かべて言った。一方のナイアはあからさまに馬鹿にした表情で嘲笑う。

「キュクロに振られた次はメスゴリラにホの字ですかあ? 次は石かオナホでも相手にすればいいんじゃないやねエのオ?」

「ぐ、う……う……!」

怒りと悔しき、安堵と喜びが入り交じった感情が胸中で渦巻き、上手く言葉を紡げない。

「ふふ、大丈夫。何も難しい事はありませんよ。貴方はただ身を委ねてくれればいいのです。それが何であれ、私は受け入れますよ?」

「う、うう……!」

「良かったなア、クソガキ」

「ふ、ふふふ……!」

もはや二人の言葉に逆らう気力はギヤスパーに残っていなかった。

ー

「は、あ……あ……ああ……!」

「ほら、どうしたんです? もっと激しくしないとイケませんよ。私達はその為にいるんですから」

パンツッ! パンツッ! パンツッ!

「アツハハハアア! 安里みてーに

必死こいて私にしがみつくのはいいですけどオ!!まるでコバンザメですねぇギヤスパークゥん♥」

「ほ、僕を……! 僕をバカにするなあ!!」

じゅぶつ!ぐぢゅつ!

トウー、ナイアの膣穴をギヤスパーは夢中になって犯していた。それはまさに肉の快楽を貪る獣であった。

「ハハハッ! アンタみたいな童貞がアタシをイカせるテクなんて持つてる訳ねエじゃん♥」

「そ、それでも僕は負けられないんだ……!」

ずちゅつ、ぬちゅつ、ぢゅるっ♥ギヤスパーの動きに合わせてナイアの腰も動き始める。

「うふふ……可愛い子……♥」

そんな蛆虫に負けてはなりませんよ、ギヤスパー♥」

ちゅっ♥ぐりいっ!

ギヤスパーの頬には女神のキス。

尻穴には魔人の指を突っ込まれて前立腺を刺激され、再生の炎が生命力のみでなく英気を満たしていく。

「は、はいっ! 頑張ります!」

僕……! ナイアさんのオマ○コになんて絶対負けません!」

「ええ、ええ♥それで良いんですよ。その調子でもっとこの蛆虫を屈服させて、誇りを取り戻しなさい」

「は、はいいつ♥」

ぎゅっ！トウーの豊満な胸に顔を埋めながら、より一層ピストン運動を早める。

それに応える様にナイアの締め付けも強くなっていく。

（ああ、トウーさんのおっぱいとナイアさんのオマ○コ気持ち良すぎるよお〜!!）

どちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅっ♥

「あはあっ♥い、イイツ♥ギヤスパーのシコザルチ○ポしゅごいイっ♥」

トウーのコーチングは効果覿面だったのかそれともギヤスパーの天賦の才なのか、ナイアの弱点を正確に突いていた。

ナイアは舌をだらんと垂らし、蕩けた顔を晒している。

その表情は彼女が普段見せるものとは違う、とても淫靡なものでギヤスパーの興奮を煽っていく。

「ど、どうですかナイアさん！ 僕のチ○ポ凄いでしょ!!」

「は、はひい……♥さいこうれすウ……!」ナイアは焦点の合わない瞳でギヤスパーを見つめ、だらしない笑みを浮かべていた。

「全く、口程にもない淫売ですね貴様は。この程度でよくもギヤスパーに大きな口を叩けたものだ」

「ひ、ひい……!」

トウーは蔑む様な目つきでナイアを睨む。

「さあギヤスパー。止めを刺してやりましょう」

「は、はい……!」

「や、やめろオ……!」

恐怖と絶望に染まったその声を聞いて、ギヤスパーは嗜虐的な悦びを覚えた。

「あ、あ……! イクッ！ ナイアさんのオマ○コに出しちやいますううううううう!」

ぐりいつ！どびゆるるる！ ぶぴゅーっ！

「あ、あ、ああああああっ!!」

ナイアは絶叫しながら絶頂を迎え、ぐびぐび、と子宮口が亀頭を呑み込んでいく。

その強烈な快感に、ギヤスパーもまた耐え切れず射精してしまう。

「はあ……あ……う……」

ぐったりとギヤスパーが痙攣するナイアに身を預けようとしたその時、トウーが彼を抱き寄せる。

ぐにゆうううっ ♡

「ふえっ!」

「予習復習は大切ですよ、ギヤスパー。貴方の身体はまだまだ学び足りないと言っているではありませんか」

そう言つてトウーは自らの乳房でギヤスパーの顔を挟み込んだ。

「ふわあ……」

柔らかく弾力のある乳肉に包まれ、ギヤスパーは思わず息をつく。

ほんの僅かな休息で、急速にギヤスパーは

元氣を取り戻した。

そして、再び激しいストロークを

始める。今度は後ろからではなく、

前からの姿勢で挿入していく。

「あ……ああ……」

「うふふ、どうですか？ 女性とのセックスはひきこもるよりもずっと、ずっと気持ちいいでしょう?」

「は、はい……」

ナイアに責められるのとはまた違った快樂に、ギヤスパーは夢中になって腰を振り続けた。トウーの爆乳を揉みながら、彼女の唇に吸い付き、唾液を貪りながらピストンを続ける。

「んっ……ん……♡」

「んんっ……ん……♡」

ちゅぱっ……ちゅるっ……♡

先までの快樂を奪い合うような激しさは無く、互いを慈しみ愛しあうかのようなキス。

それはまさしく恋人同士の性交であった。

「ぷはぁ………！ トウーさん………僕………もう………！」

「あらあら、仕方のない子………」

ちゅっ♥

「ん………！」

「んんんんんんんんんんくっ♥♥♥♥」

ぎゅううううっ♥トウーにキスされた瞬間、限界まで膨張したペニスは大量の精液を放出した。

それと同時に、膣壁がギュウウツと収縮し、ギヤスパアのモノを締め付ける。

「はぁ………はぁ………」♥

「お疲れ様でした。これで今日の社会復帰レッスンは終了です。明日も頑張りましょう………」

「今度は安里も混ぜて四人でやるのはどうですか？」

左右から二人に抱きつかれ、耳元で囁かれる。

「は、はい………」♥

その言葉に、ギヤスパアは抗えなかった。そのつもりもない。  
(僕、リアス様の眷属になって

ホントに良かった………)

こうして、ギヤスパアは新たな性癖の扉を開いたのだった。



## 第75話

イツセーside

どうも！ 兵藤一誠です！

今日はゲイトさんと共に姫島神社にやって来ています！

名前の通り朱乃さんの家なんだけど、今日は大事な話があるという事でやってきたのだ！

「お待ちしておりましたわ、ゲイト様。そしてイツセー君」

おお！ 巫女服姿がいつにも増して眩しいぜ！ 夏の太陽よりも輝いてるよ!!

「ど、どうもー」

「やあ」

俺とゲイトさんは朱乃さんの挨拶に応える。すると朱乃さんは笑顔で俺達を応接間へと案内してくれた。

するとそこには和服姿の厳つい堕天使のおっさんが座っていた。この人が……？

「君と直接話をするのは初めてだな……私はバラキエル。朱乃の父だ」

……ええっ!? この堕天使が!? 朱乃さんとは似ても似つかないんですけどおっ!? それに朱乃さんの表情が少し硬い気がするし……。一体何があったんだろう？

「初めまして。俺はリアス・グレモリー様に仕える兵士の兵藤一誠と言います」

「僕はゲイト・オールドワン……と名乗らせてもらっている」

胡散臭いというかミステリアスな雰囲気を持つ安里の上司であり恩人もとい恩神——ゲイトさんと一緒に自己紹介をする。するとバラキエルさんが口を開いた。

「そう畏まらなくていい。私としても堅苦しいのはあまり好きではないからね。それに君の事は色々と聞いているよ」

「そ、そうなんですか?」

一体どんな事を言ってたんだろう? ちよつと不安になってくる

ぞ……。

「というか、これってアレじゃないか!? もしかして『貴様などに娘はやらくん!』とか文字通り雷を落とされたりするんじゃないのか!? 俺が内心戦々恐々としているとバラキエルさんが渋い表情を浮かべた。」

「娘と君との関係はともかく、

ゲイトさんには不思議な力があるとアザゼルから聞いたが……」

「慥かにゲイトさんは名前通り、門に関わる力を持っている。それは単に建物とか、結界に留まらず、様々な次元への扉を開く事も可能らしい。」

「それを聞いたバラキエルさんは何やら思案顔になったが鹿威しがかこん、と音を鳴らすと口を開く。

「その力があれば、妻を……朱璃を呼び戻すことはできるのかね?」

「貴方は……!」

「バラキエルさんに朱乃さんが詰め寄ろうとするのを見て俺は慌てて二人の間に割って入った。」

「待った! 落ち着いてください! 朱乃さん! 今はそんな場合じゃないでしょう!」

俺の言葉にハツとなった朱乃さんはすぐに頭を下げてきた。

「ごめんなさい。取り乱しましたわ。でも貴方にそんな資格があるとはとても思えないのです。母さまは既に亡くなっていますもの……。」

「貴方が私と母を見捨てたばかりに!」

「朱乃さんが俺達には勿論、はぐれ悪魔にすら見せたことのない冷たい視線を送る。しかもバラキエルさんが二人を見捨てただって!」

「どういふことだよ!? そんな卑劣な人には見えないぞ!」

「しかしバラキエルさんは目を伏せて弁解すらせずに耐えていた。」

「どうして何も言わないの!」

「そんな父親に怒りを抱いたのか朱乃さんはぶわっと手を振り上げる!」

「だ、ダメだ! いくら親子でも殴っちゃいけない! 俺は咄嗟に朱乃さんとバラキエルさんの間に割って入った。」

パシイ……ッ!

乾いた音が室内に響く。

俺が二人の間に割り込んだことで朱乃さんの平手打ちは俺の頬に見舞われた。とはいえ全然痛くないが。

寧ろ痛いのは朱乃さんの心だ。

きっとこの人はバラキエルさんに裏切られたことに対して怒っているんだと思う。だからといって暴力を振るってもバラキエルさんの本心が解るわけじゃない……。

すると朱乃さんは目尻に浮かべた涙を拭いながら微笑んだ。

「イツセー君。御免なさい……」

「いやいや、慣れてますから!」

女の子を追いかけ回したり、覗いていた過去の悪行の数々を思い出しながら俺は言う。……あれ? なんぞだろう? 目頭が熱くなるぜ……。

すると朱乃さんが静かに涙を流し始めた。どうしたんだらう?

「私は父様が大好きでしたわ……。けれど父様が母様を捨てた理由だけはどうしても理解できません……。だってあんなに母様と貴方は幸せそうだったのに……」

「呼び戻す事自体は可能だよ」

ってゲイトさん! このタイミングで答えるかなあ!? 朱乃さんが泣き出しちゃったよ!!

「ほ、本当に可能なんですか?」

俺は思わず訊き返す。するとゲイトさんは首を縦に振った。

「ああ。僕の持つ能力を使えば、

死者の魂を呼び戻す事はできる。

お盆は過ぎてしまったが、まだ間に合うはずだ」

おおっ!?! マジですか! これは期待できるかも!

「そ、それじゃ早速お願いします!」

「解ったよ……けれど」

ゲイトさんが前置きする様に言葉を切ると、誰かが応接間へと入ってきた。

「話は聞かせてもらったわ……」

……アマテラス様!?

確か多神連合結成のときに挨拶したっけな。太陽神なのに根暗なひきこもりっていう残念神様だっけ。

「貴様、今アマテラス様に対して

無礼な事を思つたらう?」

い、いつの間に首筋に刃が……!?

このチョンマゲ姿にビジネススーツの人はタケミカツ子様だ。

アマテラス様に対して限界オタクの様な態度を取るけど、実際は凄い実力者らしい。

「あの、アマテラス様、一体何しに来たんですか?」

「……何をしに来た?」

帰れって言われた……。無理……。しんどい……。帰りた……。……」

俺の言葉にアマテラス様はガツクリと肩を落とすとどんよりオーラを

醸し出して体育座りをし始める!

うわあ! めんどくさ! 認知が歪んでいる上、メンタルが弱すぎ

る!

いや、こんな事を考えているとタケミカツ子様到手討ちにされそうだから止めよう。

「アマテラス様。今日は朱璃様の死と貴方の転生に関しての真相をお話するために参ったのでしよう。

しつかりなさい」

「そ、そっか。そうだよな。ごめんなさい……」

「流石アマテラス様」

いや、謝らなくていいから早く説明してくれよ。謝っただけで褒めるとかどんだけ過保護なの? 俺達は皆、そう思いながらも黙って待つ。

アマテラス様のお話というのはこうだ。

「姫島神社では火之迦具土という

荒ぶる神様を祀っている。

嘗て産まれる時にイザナミ様を焼き殺し、イザナギ様に切られたつていう凄惨い曰くのある神様なんだけどそれはいいや。アマテラス様は嘗て

旧大天使と同様、『滅びの未来』を予知してしまった。そこで全盛期の力を取り戻すために朱璃さんの力によって火之迦具土神を顕現させ、アマテラス様自らを焼き払わせる事でまさに不死鳥の如く転生しようとした。

所が……だ。火之迦具土神が暴走したために神社は文字通り火の海と化し、転生は未遂で終わり朱璃さんも死んでしまった……。と、言うのが真相らしい。

「しかし私にはどうにも解せぬ。

朱璃の力は火之迦具土神様を調伏するに足る力を持っていたはずなのだが……」

タケミカヅチ様が腕組みしながら言うたちまちアマテラス様が鬱になり始めた。

「ああ……、やっぱりアンタも私なんて太陽神どころか疫病神だと腹の中で思っていたんだね……」

「滅相もない！

ならばこの痩せ腹を掻き切つて

腹の中をお見せ致します！」

なんかまた落ち込んだよ！ さつきからネガティブすぎない!? この神様！ タケミカヅチ様も物騒な事を言うなよ！

「ふむ。ジャパニーズ・ハラキリという奴だね。ナイアが喜ぶかもしれない。後で写メって送ってあげよう」

いや、そういう問題じゃないだろ！ なんでこの人、いつもシリアスブレイカーなの!? あーもう、滅茶苦茶だよ！

「すまない、朱乃。父さんはお前達を守れなかった……。

口では幾らいい事を言っているも

火の中で助けを呼ぶお前を助けてここから飛び立つ事しかできなかったのだ……」

バラキエルさんが朱乃さんに頭を下げる。すると朱乃さんは静か

に首を横に振った。

「いえ、私が勝手に怒って叩いたのですわ。父様は悪くありません」  
ちよつと後ろでアマテラス様が騒いでいるけど、二人の仲が元に  
戻ったのならよかつたよ。

「所がこつちとしては全然良くないんだよねえー!! 火之迦具土神が  
さあ! 封じられているからさあ! 俺ちゃんのパワーが十全に  
発揮されませんですよ!!」

その時、耳障りな甲高い声が響き渡った。

この特徴的な喋り方……まさか!?

「フリード!」

「なくに馬鹿面下げて人を呼び捨てにしてんのかなあ? このゴミタ  
メクソカス悪魔がよオ!」

そこには銀髪の神父服を着た男が立っていた。あい変わらずキチ  
○イ染みた言動だが、こいつはとんでもない実力の持ち主だ。

「フリード! どうしてここに!」

「さつき話しただろう!」

話聞けよや! さつきの話で俺ちゃんを殺気をパナし! けけけ  
けけっ!」

狂った様に笑うと奴は両手に青紫の炎を灯して俺に襲いかかつて  
きた。

「イツセー君! 危ないツ!!」

ブオオオオツ!!

朱乃さんが咄嗟に俺を突き飛ばしてくれたおかげで俺は助かつた  
が

凄まじい炎が神社を焼き払っていく! なんて罰当たりなヤロー  
だ!

悪魔の俺が言う事じゃないけどさ!

「うおおおおっ!! あつぶねえええっ!」

「あらら? 外しちゃいましたか? ざっこ! ザツコ! でもまあ  
いいです! 今度こそ死ぬやああつ! ヒヤハアツ!」

十字を切ると炎が渦を巻きながら襲ってくる! こいつ、マジか!

こんな狭い部屋の中であんなの放たれたら全員焼け死ぬぞ?!

「これ以上はやらせん! タケミカツチ殿!」

バラキエルさんが大喝するとタケミカツチ様が無言で頷く。そして右手をかざすと雷が降り注ぎ、フリードの四肢を貫いた!

「ぐっひゃはああああ!!」

痛え! 痛えな!! 悔しいなあ!

気持ちいいなあ! あっひゃ! ひゃっは! ウヒへハハハハハ!!」

「な、何アイツ……キモい……」

アマテラス様もドン引きしているが俺も同感だ。

そしてタケミカツチ様は

更に追い討ちをかけるべく居合の構えから必殺の一閃……いや八連の斬撃を繰り出した。

無数の光の刃が奴の身体を切り刻んでいき、またしても首を跳ね飛ばした! 流星はタケミカツチ様だ。あの生き汚いフリードの奴を一瞬で倒すなんて!

「……違うわ」

感心した俺を諷める様にアマテラス様が物々しい調子で呟く。

タケミカツチ様も刀を見て顔を顰めていた。手応えが無かったとかそういう奴なのか?

「これは……」

「フヒツ、流星は武神。

だけど残念でしたねエ」

「なに?」

次の瞬間、タケミカツチ様が突然吹き飛ばされ、ボロボロの刀が折れた! マジか!? 神様の使う刀だぜ!? 今のフリードの肉体は

神すらも凌駕しているっていうのかよ!? 跳ね飛ばされた首が生首みたいの不気味に動き、フリードの本体へと飛んでいく。

『奴め……。どうやらどこぞの神と融合したらしいな。あの炎とマグマの血液からすれば火之迦具土とかいう奴だ』

奴の切り飛ばされた首から噴火の様な血飛沫が上がり、溶岩の様に

体にこびりついたかと思うと赤黒い血の魔装に変化していった。

そしてフリードの顔が蠟燭の炎の様に燃え上がり、やがて顔の形を成していく。

「どうだい？ 俺ちゃんの新しいボディは！ 火之迦具土ってのはねえ！ 日本の武神達やら何やらの始祖なんだよねえ！ つまりさあ！」

フリードは両手を突き出して何やら魔力をチャージし始めた！  
明らかに危険なオーラが辺りに充満していく！

「お前等みたいな雑魚が俺ちゃんに勝てる訳ねーんだよ!!」  
フリードが放ったのは

巨大な炎の球だった！ あれを食らったら神社どころかこの山ごと吹っ飛ぶ！

「イツセー君！ 避けて！」  
「駄目ツス！」

朱乃さんが悲鳴をあげるが俺は逃げなかった。避ければ、朱乃さんだけではない、バラキエルさんと朱乃さん、朱璃さんとの思い出の詰まったこの神社まで無くなってしまう。

俺は皆を守るんだ！  
「ぐ、おおお……!!」

赤龍帝の鎧が融解しかけ、背中の翼が消し炭になりながらも俺は何とか炎を受け止めた。

「な、何だとオ!？」  
揺らめく炎は驚きの表情に見えた。

す、スキが出来たぜ！ 今ならヤツに攻撃出来る！  
「ドライグ！」

『応!』  
「モードチェンジ！ 地竜の僧侶！ (ウエルシュ・ロボティック・ビショップ)」

ツールにも通用した俺の新技！

様々な属性を倍化……いや相乗化させて放つ砲撃！ これで一気に決める！



「喰らえええっ！

ボルテックブラスター・フルパワー！」

ゴオオオオオツ!!

俺の全身全霊の一撃が放たれ、

奴の炎を掻き消した！

「うぎやああああっ!!

俺ちゃんの力がああっ……!?!」「はあ……はあ……!」 やったぜ  
……!」

俺達の砲撃によつて、片腕と脇腹を失ったフリードが苦悶の声をあげ、俺は膝をつく。

やったか!? はフラグだからな!

言い切る事で回避成功だ!

「イツセー君! 大丈夫!?!」

「はい! それより、朱乃さんこそ怪我は無いですか!?!」

「ええ! イツセー君のお陰よ。ありがとう!」

朱乃さんは嬉しそうに微笑んでくれた。俺はそんな彼女の笑顔を守れた事を心の底から誇りに思った。

「なあくんちやって♪」

!?!

フリードの嘲笑う声と共に奴の傷口が再生し、失われた腕や脇腹が元通りになった。

「嘘だろ!?!」

「ウヒヒヒヒ! ぎっこ! ぎっこ! 何がボルテックブラスターだ! 笑わせんじやねえ! 俺ちゃんにはそんなチンケなビーム効かねーんだよ!! 俺ちゃんの力は神をも凌駕するうっ!! ヒヤハハハハハハ!」

ゲヒヤハハハ!!」

奴の顔に宿る炎の勢いが更に増し、奴は両腕をクロスさせた。

またあのヤバい炎を撃つ気か!?!

「ギヤツハハハハ!」

ちげーよバカ！」

「拙い！ 皆、飛べ！」

バラキエルさんの咄嗟の指示

で俺達は上空へ避難した。

その直後、マグマの大蛇達が地面から現れ、地面を焼き払っていく

！

何てことをしやがる……！！

「ほらあ！ どうだよ？ 俺ちゃんのマグマは？ 熱いだろ？ 気持

ちいいだろ？ もっと苦しめやあつ！

フヒツ！ フヒヒヒツ！！

狂った様に笑いながらフリードは次々とマグマを生み出していく

！

「八岐大蛇の分霊だど!？」

奴め……本格的に火之迦具土神と融合しつつ、その力を自分のもの  
にしているのか!？」

バラキエルさんが忌々しげに吐き捨てた。マジかよ……。

神様の能力を自在に使えるってのか!？」

「……噴火というのは本来、破壊だけを齎すものじゃない。それは大  
地のエネルギーを天へと導き、同時に地に巢食う悪霊達を打ち払い、  
新たな生命を生み出す力となるの。けれど……」

アマテラス様がタケミカヅチ様におんぶされながらも冷静に語る。

「今のあの子からは、憎悪と破壊衝動しか感じられないわ。

彼は破壊と殺戮のみを愉しんでいる。神などではない、厄災の化  
身。まさに悪魔というべき存在よ……」

「……………」

フリードの炎の蛇は止まる事なく暴れ回り続け、山は炎に包まれて  
いく！

「もう止めてくれ！ これ以上、俺達の思い出の場所を壊さないでく  
れ!！」

「無駄ですよお！ クソゴミ悪魔もドグサレ堕天使も纏めて焼却！

天上天下唯我独尊！ この世の全ては俺ちゃんのものだ！

ヒャーハツハツハ!!」

「いい加減に……しやがれ!」

お前みたいなモンが悪魔呼ばわりされたら俺やリアスさん達に迷惑なんだよ!

俺は怒りに身を任せてフリードに突っ込んでいった。

「ダメよイツセー君!」

朱乃さんが制止するが俺は止まらない。そして遂に俺はフリードの目前まで迫り、ボディへと拳を放つ。

だが……!

『これは……溶岩による分身か!』

俺の拳を受けたフリードの肉体が融解してマグマの塊となり、俺の翼、拳に纏わりつき焼き焦がしていく! 「ぐあああつ!」

「イツセー君!」

朱乃さんが必死の顔で俺の元へ

降り立とうとするがバラキエルさんに止められてしまう。

「離して!」

「そういう訳にはいかん!」

私は……! これ以上家族を……失いたくないのだ!」

バラキエルさんは俺を見捨てたワケじゃない。寧ろ逆だ。

今のフリードは俺をいたぶり、

朱乃さんやアマテラス様をおびき寄せて殺害し、火之迦具土神を完全に

復活させようとしているんだ!

「……イツセー……!」

「部長……?」

俺がフリードにやられそうになっているのを見て、朱乃さんが悲痛な顔を浮かべていた。

「……ごめんなさい。私達が至らなかつたばかりに……貴方まで……!」

朱乃さんの顔が哀しみと不甲斐なさで歪む。俺はそんな彼女を安心させる為に笑みを向けた。

「大丈夫ですって！ 俺がこんな奴に負けるハズないでしょう!!」

「何を根拠に言ってるんだこのクソ雑魚が！ バカなんですか、アホなんですかア？ 死ぬんですか？ 死ぬよ！ ヒヤッハー！」

フリードはゲラゲラと下品に笑いながらマグマの蛇を放ち、今度は俺の全身を絡め取っていく！

「ああ、そうだ！ 俺はアホさ！」

バカさ！ ハーレム王、いや、ハーレム神になる為なら命だつて賭けられる！ 例えそれがどんな相手だろうとな！ だから……！

お前みたいに女を泣かせる野郎は許せねえんだよ!!」

俺は自分を拘束していたマグマの蛇を逆に吸収した！

「うおっ!? な、何をしやがったテメエ!」

「見ての通りだぜ！ お前の攻撃を全て喰らい尽くしたんだよ!!」

「バカな!? んな事が出来るワケがねえ！」

「出来るんだよ！ 俺のドラゴン是最強の龍！」

『そして俺の相棒は最狂のハーレム神!』

「最強にして最狂！ それが俺達だ!」

「い、イかれてやがる……。」

マトモじゃねえ……。」

「褒め言葉として受け取ってやるよ!」

昔の人は言ったぞ元気があれば

何でもできるってよ!

実際、蝮の様にマグマの大蛇の腹を裂いて産まれた小蛇達を翼に取り込み黒曜石の羽根に変えて射出!

奴を斬り刻んでやった!

「グギャツ!? こいつ……! 調子に乗るんじや……! ゲヒイ!?

ウゴオ!」

「おらああっ!!」

羽根の刃はマグマの分身を切り裂き、本体にもダメージを与えてい

く!

??? side

「綺麗……」

私はイツセー君の黒曜石の羽根を  
見て自然に眩いていた。

私の忌まわしい同じ

黒い羽根の筈なのに……。

どうしてあんなに美しく見えるのだろうか……。

私は悪魔にも墮天使にもなれない

半端な存在だから？ 彼の様な眩しい光に憧れてしまう。

「どちらにもなれないじゃない。

どちらでもあるのさ」

ゲイトさんがいつもの超然的な態度で言い放つ。

「それはどういう意味？」

「そのままの意味だよ。

あるべき形なんてものは存在しない。君がどう在りたいのか、それ  
だけが重要なんだ。

君は悪魔でも墮天使でもないと思いが、それは違う。

君は既にその両方を兼ね備えている。彼女もそう言っている」

ゲイトさんの視線の先を見て

私もバラキエル……いえ、父様も

息を呑んだ。

「お母様！」

「朱璃！」

そこにいたのはお母様の魂。

昔の記憶にある通りの姿だった。

「ごめんなさい。

私が至らないばかりに……」

「謝らないで下さい！ 貴方は何も悪くありません！」

「許してくれ、朱璃……！ 私は肝腎な時にお前を守れなかった……  
！」

「いいえ、貴方は良くやりました。

あの時、私は確かに死んだのです。

もう自分を責めるのは止めましょう？ それより……朱乃。

自分を偽るのを止めなさい。

貴方には本当の自分を愛してくれる人がいる。

イツセー君を信じなさい。

そして……自分の心に素直になりなさい」

「……はい」

そう、私はもう自分に嘘を吐かない。私は……！

「イツセー君が好き。大好き！」

私は翼を広げ、指先に雷を集める。

「ゲヒヤハハハハ！ やっぱりハンパモンだなあ！ 今の俺は火山にして大地の災厄の化身！ つまりは世界そのもの！ テメエみてえなザコが勝てるワケがねえんだよお！」

あいも変わらず下品な虫が吠えている。何て惨めで見苦しい姿なのかしら……。いえ、人の事は言えないわね。私だってリアスの女王として弱いものやはぐれ悪魔をいたぶり、時には命を奪ってきたんだから……。

けれど、それでも私は……！

「私は貴方みたいな醜い化け物にはならない！ 大切な人達と一緒に幸せになる！ それが私の夢！ そして願いよ!!」

「よくぞ言った姫島の巫女。」

今こそ雷神であるこのタケミカツチの力を受け継ぐのだ。

さあ、アマテラス様もお早く」

「メンドくさいけど……火之迦具土神の不始末は私達の責任だし……」

お二方が鏡と勾玉を取り出すと、

勾玉が私の雷を増幅させ、鏡がレンズの様に光を凝縮していく。

これは……？ 凄い力を感じる！

「鎮まりたまえッ!!」

私は雷光をフリード・セルゼンに向けて解き放った！

「ぐぎ……!!? げはあああ!!?」

「おおっ!?!」

フリードが雷光によって霞んでいきイツセー君が驚愕する。

「キヒヒヒヒッ……！ まあいい！

俺は大地の災厄だ！ 何度でも蘇ってやるぜ！ ヒャーハツハツハ！」

フリードは完全に消滅する前に、ボトン、と燃え盛る顔を地割れに落とすと残った身体は灰になり消えていった。

ー

イツセーside

「やったあ！ 流石朱乃先輩だぜ！」

俺のボルテック・ブラスターを軽く凌ぐ雷光に感動していると、朱乃さんが俺の元へ降りてきた。

「イツセー君……」

「朱乃さん！」

「ありがとう。私の為に戦ってくれて……」

あれ？ なんだかいつもの

朱乃さんじゃないぞ？ それに何か雰囲気が違うような……？

俺が戸惑っているら朱乃さんに抱きつかれた！ うおっ!? いつもより大胆!? お父さんの前ですよ!?

でも嬉しい！

「お母様が教えてくれたんです。

本当の自分を受け入れなさいって。

だから、これからは……

素直になろうと思うの」

「朱乃さ……!?!」

言い切る前に唇を塞がれてしまう。「んっ……」

「ぷはっ！ 朱乃さん!? い、一体何を!?!」

「朱乃って呼んで。

二人きりの時じゃなくても、そうして欲しいの……。ダメ?」  
潤んだ瞳で上目遣いをお願いされたら断れるハズがない!

「わ、分かりました……」

そ、その、朱乃……」

これでいいですか？」

「はい♪」

朱乃さん改め、朱乃が満足気に微笑む。バラキエルさんが険しい顔でこつちを見ている気がするが気のせいだろう。

「む、む、む……」

いや、気の所為じゃなかった！

ここはどうすべきだ!?

やはり娘さんを僕にください！ と

言うべきか!?

いや、それだと朱乃をモノ扱いしてるみたいで嫌だし……。

「娘が独り立ちしようというのに

何を渋い顔を……これはお話が必要ですね」

バラキエルさんの長い耳を引つ張りながら朱璃さんが引つ張っていく。

って肉体がいつの間にな!?

「この神社の中だけにしか顕現できない土地神の様なものだけど僕の方で実体化させたんだ。アマテラスに聞いたら安里の眷属にするのには障りがあるらしいからね。迷惑だったかな？」

いえ、そんな事はないです！ 本当に助かりました！ いやホント！

「はあ、お母様つたら……」

朱乃が溜め息を吐く姿も美しい。

いかんいかん。煩惱退散！

姫島神社は焼き払われてしまったけどゲイトさんが直してくれるらしいし、皆が無事ならそれでいいさ！



※第76話（イツセー×朱乃　バラキエル×朱璃）

「しかし、一瞬で姫島神社を

復元させちゃうなんてなー……」

「まさか一瞬で神社を複製しちゃうなんてなあ」

イツセーは姫島神社の客間に敷かれた布団の上で寝転がりながらそう呟いた。ゲイトの力で一瞬にして姫島神社は復元し、更には朱乃の母親である朱璃さんも限定的な条件つきで生き返らせてくれた。

取り敢えずはめでたしめでたし、と言った所だろうか……。

（と言いたい所だけども……）

イツセーはどうにも気が昂るのか眠れずにいたし、股座の息子が元気になりすぎていて困っていた。

（朱乃さん、いや朱乃の家に泊まってるんだもんなあ……）

しかも、朱乃はイツセーに告白してきた上に、両親の前でキスマでしてきたのだ。更には「これからは自分の気持ちに素直になる」とまで言ってくれている。正直期待するなと言う方が無理だった。

（あの部長よりもスタイルが良くて、おっぱいが大きい女の子に迫られて興奮しない男なんていないよな！）

そんな事を考えながら下半身の熱を持て余していた時だ――。

スツ、と襖が開く音が聞こえたと思ったら、そこには浴衣を着崩す姿の朱乃がいた。

（来たー！）

朱乃の姿を見た瞬間、イツセーの中で何かが弾けた。

朱乃はしゅるり、と帯を解くと、そのまま浴衣を脱いでいく。そして現れたのは下着を着けない全裸の状態であり、その身体からは湯気が立ち上っていた。

「お待たせ、イツセー……♡」

口調も声色も学園の

時のものとは違い、艶のある女のものになっている。それはまるで別人のようだ。

「どうしたの？」

朱乃は小首を傾げながら微笑みかける。その姿はとても美しく、同時に淫靡な雰囲気を感じているように感じられた。

「あ、朱乃……」

「ふふっ♪」

朱乃は妖しい笑みを浮かべると、そのままイツセーの上に覆い被さってきた。

むにいい、と柔らかい感触と共に甘い香りが漂ってくる。

「イツセーだったら、凄く苦しそうな顔をしているわね？ 私が楽しんであげるわ……」

朱乃はそのまま唇を重ねてきた。互いの舌が絡み合い、唾液を交換し合うような激しい口付けを交わしていく。

（ん……!? こ、これは……?）

僅かに違和感を覚えたイツセーは

そっと朱乃の下乳に手を当ててみる。

「は……あ……♥」

すると朱乃はビクンツと反応し、甘美な吐息を漏らした。まるで弦楽器のような美しい音色だ。

だが、それ以上に気になったのは……。

（何だこの感覚は……!? 下から母乳みたいなものが吹き出しているぞ……!!）

そう、朱乃の胸の先端から白い液体が流れ出ており、それがイツセーの手に付着していたのだ。更にこの感度の良さというより、男がどう反応すれば喜ぶかを知っているかのような巧みなテクニク……。

（も、もしかして朱乃じゃなくて

夜這いに来たのは朱璃さん!?)

汗ばむ肌が湿り気を帯び、しっとりとした柔らかさと心地好さが伝わってくる。

朱乃はその豊満な乳房でイツセーの顔を挟み込むと、ゆっくりと腰を動かし始めた。

「ああん……!」

朱乃の口から漏れ出た喘ぎ声を聞いて、思わず股間が疼く。

(ああ、朱乃のおっぱいで顔をパイズリされてるう……!)

顔に触れる柔肉の感触だけでも堪らないのに、そこに温かく湿った谷間が加わればどうなるのかなど言うまでもない。しかもただ挟んでいるだけではない。時折上下運動を加えながら擦るように刺激してくるのだから、快感も倍増だ。むせ返る様な雌の匂いが鼻腔を満たし、脳髓を蕩けさせていく。

「うふふ……気持ちいいかしら？ 私のおっぱいはどうかしら？ 好きよね？ こうやってされるのが好きなんでしょう？」

朱乃、いや朱璃は妖しく微笑むと、更に強く挟み込んできた。それだけに留まらず、両手を使い左右のおっぱいを交互に動かし始めたではないか！

「うおっ！ す、凄いつ!!」

左右から圧迫されながらも揉まれているおっぱいの柔らかさに感動すら覚えた。そして、朱璃の胸の動きに合わせて形を変えている様が実に扇情的だ。

朱璃のおっぱいは大きいだけでなく、張りもあり形も良い。まさに極上のおっぱいと言って差し支えないだろう。その素晴らしいおっぱいによつて顔面を蹂躪されているのだ。

更に朱璃は自らの胸に手を添えて絞り出す様にしながらも太腿に力を込めて前後に揺すり始める。それによつて与えられる快樂は先程の比ではなかった。

「ああ……！ こんな、凄すぎるよお……！ おっぱいも太腿も気持ち良すぎてもうダメだ……」

あまりの悦楽に意識が飛びそうになるのを必死に堪えるが、それも限界に近い。

「ふふっ♪ 我慢なんてしなくても良いのよ？ ほら、イツちやいなさい。お義母さんのおっぱいと太腿でいっぱいイってね？」

朱璃は妖艶な笑みを浮かべると、イツセーの耳元に口を近づけた。そして――

「愛してるわ、イツセー君……♡」

甘く囁かれた瞬間、イツセーの中で何かが弾けた。

「あつ、出る……!」

ドピユツ、ビュルルル——!! 勢いよく放たれた精液は朱璃の身体に降りかかり、彼女の綺麗な太腿と豊かな胸を汚していく。

「ああんっ♥」

朱璃は艶めいた声を上げながら、更に激しくイツセーのペニスを刺激してきた。

「フフ、出しながら勃起させるなんて元気ね。もっと出したい?」

朱璃は妖しい笑みを浮かべると、イツセーの股間に手を伸ばした。

朱乃やリアスは当然として、エルシャやシユタークにも劣らないテクニツクの持ち主である朱璃に責められたい気持ちはあったが、イツセーは首を横に振った。

「や、やっぱりダメです!」

「あら? 不思議な事を言うのね。」

貴方はハーレム神を目指すんでしょ?」

そう言つて微笑む朱璃さんだが、やはりこの人は朱乃の母親なのだ。俺がどれだけ拒絶しても諦めるつもりはないらしい。

それどころか朱璃は妖しい色気を躊躇いなく放ちながらカエルの様に脚を開いてくる。

リアス達との経験がある筈なのに

、朱璃さんの姿を見ただけで心臓が激しく高鳴ってしまう。

「私なら大丈夫だから遠慮しないで」

「で、でも……」

「それに私は朱乃と違って経験豊富だし、胸だつて朱乃よりも大きいわ。」

そんな私が好きなんでしょう? だったら気にする必要ないじゃない」

「うっ……!?!」

確かにそうだ。この人は間違いなく朱乃以上の美人であり、スタイルもいい。おまけに胸のサイズでは朱乃を上回るほどだ。

しかし、それでも俺は——。

「ごめんなさい！ やっぱり朱璃さんとはできません！ 朱乃さんを悲しませる事はハーレム神云々より男、兵藤一誠として許されることじゃないんです!!」

イツセーはキツパリと言いきると、

朱璃はキョトンとしたが直ぐにクスクスと笑い始めた。

とはいえ、馬鹿にしている感じではなく、むしろ嬉しそうに見える。

「ふふ、女なら誰でもいいというわけじゃないのね。安心したわ」

「はい。朱乃が大切だからこそ、朱璃さんとはできないんです。恥をかかせるみたいですすみません」

申し訳なさそうに頭を下げると、朱璃はニツコリと微笑んだ。

「もう大丈夫よ、朱乃、貴方」

朱璃の言葉にイツセーは心臓が口から飛び出しそうになった。

(ま、まさか今の聞かれてたのか……?)

恐る恐る振り返ると、そこには朱乃とバラキエルの姿がある。

「私達はつまらない肝試しは

止してと言ったのだけれど」

「う……うむ」

バツが悪そうに鎮座していた二人であったが朱璃はまるで蛇の様にバラキエルへと夫婦らしくしなだれかかった。

「うふふ、いいんですよ？ 私は別に怒っているわけではないのですから。ただ、少しだけ意地悪をしてみました。ごめんなさいね？」

朱璃は妖艶な笑みを浮かべ、バラキエルの頬を撫でる。

「うう、朱璃よ……。お前の言う通りだな。私は夫失格だ」

バラキエルは妻から顔を背けるが、朱璃はその唇を奪った。

「んっ……」

朱璃から舌を差し込むと、バラキエルもそれに応えていく。

(お、置いてけぼりな気分だ……)

何やらバラキエルと朱璃の夫婦生活のスパイスになってしまった感があるが、背中に朱乃のふくよかなお胸の感触が伝わってくるのは

悪くない。

「あ、あの、朱乃——ぐえっ!?!」

イツセーが振り向くと同時に唇を塞がれた。熱烈かつ濃厚なキスだ。

しかもそれだけに留まらず、朱乃はイツセーの股間に手を伸ばし、優しく愛撫してきたのだ。お預けを受けて敏感になっていたイツセーのペニスは否応なしに反応してしまう。

雷光の巫女の異名はこちらでも健在で、朱乃はイツセーの弱点を知り尽くしている。

朱乃はイツセーの弱いところを的確に刺激しながらも赤みが増した乳首をイツセーの胸に擦り付けてきた。

突起が彼の胸板に引っかかる度に甘い痺れが朱乃の全身を駆け巡る。

(ああ……いー 気持ち良い……いー おっぱいとクリトリスが擦れて凄  
い快感ですわ!!)

イツセーの胸の感触を楽しみながらも、朱乃は絶頂を迎えようとしていた。

だが——。

イツセーは朱乃の腰を抱き寄せると、彼女の秘所へ躊躇いなく挿入した。

「あっ……待っ……ああああっ!」

朱乃はイツセーの突然の行動に驚きの声を上げるも、既に身体は準備万端だった。処女膜は破れ肉体は雷鳴の如き衝撃を受け、朱乃の意識は真っ白に染め上げられてしまう。

昇天する様に浮き上がる軟尻を両手で押さえつけながら、イツセーは更に奥まで突き入れた。

子宮口を突き上げられるような感覚に朱乃は目を見開き、身体を大きく仰け反らせる。

「んああああっ!?! い、いきなりなんてえ……♥♥♥」

甲高い声で喘ぎながら身を振る朱乃だが、イツセーが離すはずもない。更に激しくピストンを繰り返すと、朱乃は髪を乱しながら乱れま

くった。

「あひい♥そ、そんなに突かれたら壊れちゃいますわああ!!」

朱乃はあまりにも激しい責めに涙を流して悶えるが、イツセーは一切容赦しなかった。

(頭がクラクラするう……!　これが、セックス……!?)

自慰による快楽とは比べ物にならない程の強烈な性悦に朱乃はすっかり打ちのめされ、なすがままであるがイツセーの責めはそれのみに留まらない。

「絶頂雷撃(クリムゾン・ショック)！」

帯電したイツセーの指と亀頭が朱乃の乳首とGスポットを直撃し、朱乃は一瞬にして二度目のアクメを迎えた。

「あ、イクツッ！　イツてしまますうううううう!!」

後輩であるはずのイツセーに犯される形でイカされた朱乃は、その背徳的な状況も相まって、今までで一番のオーガズムに達した。この快楽の前では今までの自慰による絶頂など

津波を前にした砂城に過ぎない。

全てを押し流された朱乃は放心状態ながら本能的に自らも腰を振って更なる快楽を貪ろうとする。

「おっ♥おおおっ♥しゅごいつ、こんなの初めて……!」

目を剥き、美しい顔が無惨なアへ顔に変えて、朱乃はイツセーとの性交に没頭した。

「ふふふ、朱乃ちゃんたらあんなにはしたない声を出して。イツセー君とのお楽しみが待ち遠しかったみたいね」

「う……うう、そうだな……」

朱璃は二人のセックスを見やりつつ最愛の夫に跨り、互いの局部を結合させていた。

朱璃は騎乗位が大好きで、夫と交わる時は決まって自ら上になるのだ。

(ふふ、可愛いわね。私も早く孫の顔を見たいわ)

しかし今日のバラキエルのペニスが生前の時より一回り以上大きくなっている。熱く脈打つ肉棒は朱璃の奥深くまで侵入し、膣壁をゴ

リゴリと削っていく。

「あん、凄い……！ バラキエルのが私の中に入ってる……！ んんっ、おつきくて気持ちいい……っ！」

朱璃は夫の剛直を受け入れ、愛する人と繋がる幸せを噛み締めていた。

（ああ、朱璃よ……。 お前と一つになれたことに感謝しよう）

バラキエルもまた妻の温もりを感じ取り、かつて失った家族が今再び蘇ったことを実感していた。

二人はそのまま舌を絡ませ、互いの愛を確かめ合う。

「んっ、ちゅっ、んんっ……」

朱璃は情熱的なキスをしながら、腰を動かして夫を刺激していく。

バラキエルは朱璃の柔らかな臀部を掴みながら、下から妻を突き上げていった。奇しくもイツセーと朱乃、

バラキエルと朱璃は同じ体位を取り、互いを高め合っていた。

「ああっ、貴方あ♥父親としてイツセー君に手本を示してえ♥」

「はああっ♥イツセー♥父様の前で情けない姿を晒さないでくださいまし♥」

二人は髪留めのリボンを外しながら、同時にそれぞれの番を競わせるかの様に淫らなダンスを披露し始めた。

「はあ、はあ、二人とも……なんて綺麗なんだ……！」

イツセーは目の前で繰り広げられる光景に興奮を隠しきれずにいた。

朱乃と朱璃は普段の清楚な雰囲気からは想像もつかない程、妖艶に乱れている。

「ああ……！ 朱璃、朱乃……！」

「あっ、貴方……っ！ もっと、奥まで突いて……！」

「父様……っ！ 朱乃はもう……限界ですわ……っ！」

四人とも汗だくになりながらも激しいセックスに興じ、絶頂へと昇りつめる。

そして――。

「あああああっ!!」



絶頂と同時に、四人は達した。

子宮口まで突き上げられた朱乃はイツセーにしがみつき、朱璃は身体を仰け反らせながら絶頂を迎える。

「あ、ああつ、ああつ、ああつ……!!」

「ああつ、ああつ、ああつ……!!!」

二人共恋人、夫からの膣内射精を受け、全身を痙攣させながら歓喜の声を上げた。

「あ、あひい……♡」

「お、おおお……♡」

朱乃と朱璃は快楽に表情を蕩けさせて余韻に浸る。

「あ、ああああ……♡朱乃さんと朱璃さんのおっぱい……すげえ柔らかい……! それに朱乃さんのお尻、最高だよ……!」

イツセーは朱乃の乳房と尻を揉みほぐしながら、腹筋を恥丘に擦り付ける。熱く粘ついた精液が馴染む様に塗りつけられ、朱乃は甘い吐息を漏らした。

「あ、ああんっ♡イツセー君の熱いのが私の中に染みてますわあ……!」

朱乃は膣内に注がれる熱さにうっとり酔い痴れ、その感触に身を委ねる。

そして朱璃もまた射精しても未だ萎えないバラキエルのペニスに身震いしていた。

「あひいっ♡凄いい♡マゾ堕天使の貴方のデカマラ最高♡」

母ではなく一人の女としての悦びに打ち震えながら、朱璃はバラキエルの剛直を貪っていた。

まるで歴戦の騎馬兵ばりに堂に入った騎乗位はバラキエルを抑えつつも

興奮させるという見事な手綱捌きを見せている。更には言葉責めやボディタッチなどあらゆるテクニクを駆使し、バラキエルを翻弄していく。

「ふふ、どう? 気持ち良いでしょう? 義息子と私が抱き合う様を見て興奮しちゃったマゾ豚さん?」

「う……うう……！」

朱璃の言葉攻めにバラキエルは顔を赤らめ、齒噛みする。バラキエルのペニスは朱璃の中でさらに一回り大きくなり、彼女の秘所を押し広げた。

「ああっ、おつきくなってるう♥貴方の極太チンポで私をメチャクチャにしてえ♥」

バラキエルのペニスが大きくなったのを察した朱璃はより激しく腰を振り始め、バラキエルのペニスを締め上げる。

「くっ……！ お前の膣内は相変わらず凄いな……！」

バラキエルは思わず声を漏らす、朱璃の膣壁の圧迫は衰えない。むしろ締め付けは強くなっていき、バラキエルの剛直を搾り取ろうとしてくる。

「まだよおっ♥もつと、もつと出してっ！ 貴方の子種を私の中にぶちまけてちょうだいっ！」

朱璃は舌を出しながら喘ぎ散らかし、腰の動きをさらに加速させた。

「ああ、朱璃よ……。そんなに動いたらもう出てしまうぞ……」

「いいのよっ、出しなさいよっ！ さつきから我慢してるのバレてるんだからねっ！ 本当は出したくて仕方がないんですよ!? いいわよ、好きなだけ私の中を満たしてえ♥孫より先に朱乃に妹を作つてあげるといいわあ♥」

そう言つて朱璃は腰を上下に動かし、まるで頭が3つあるかのよう

に双乳と頭を振り乱し、肉棒に刺激を与えていく。

この絶技の前にバラキエルも限界に達し、ついにその時が訪れた。

どびゅ、ぶしやああああああああ!!

「ああっ♥イクツッ！ イツくうううう!!」

子宮口に亀頭を密着させられた状態で大量の子種を流し込まれた

朱璃は、同時に絶頂を迎えていた。結合部から愛液と精液の混合液が吹き出し、辺り一面に飛び散っていく。

朱乃と朱璃は互いの身体を抱きしめ合いながら、絶頂の余韻に浸つ

ていた。

「ああ……！ ああ……！ 貴方のがいっぱい出てますわ……！ 熱い……！ んっ……ちゅっ♥」

「はあ……はあ……はあ……、イツセー……見てえ♥私達が中出しされてるところお……♥」

二人は絶頂を迎えたばかりで息を荒げながらも、幸せそうな笑みを浮かべている。

イツセーは二人の美女の痴態を目に焼きつけつつ、己の分身から性の奔流を吐き出した。

↓

一方その頃。

冥界はムールムール領。

領主であるハマーマの邸宅。

彼女は水晶玉にてイツセー達の乱痴気騒ぎを覗き見ていた。

まるでガラスの様に蒼い瞳にマネキンの様に整っているが生気を感じさせない顔立ち。銀色のホーステイルに喪服の様な黒いドレスという出で立ちは貴婦人と呼ぶに相応しい優雅さを醸し出している。「何をしていらっしやるの？」

お母様？」

血の様に赤いドレスと長い髪を揺らしながら現れた少女は愉快げに微笑みかける。ハマーマは実の娘が相手故か、表情一つ変えずにいた。

「兵藤一誠を暫く観察していたのですが、そろそろ頃合です。色欲に溺れるだけの戯けなら捨て置いても良いと思っていました。彼の力は少々目に余ります」

母の言葉にベラナディアは怪訝な表情を一瞬見せたがすぐに笑みを浮かべた。

「それは考え過ぎですわお母様。二天龍だの赤龍帝だのと言ってもお母様の御力ならば一捻りでしょう？」

酷薄、非情、冷徹。その言葉こそが相応しいと思わせる程に冷酷で、美しい笑顔だった。

「それ程気を煩わせるなら私が直接手を下してあげましょうか？」

自分が敗れることなど微塵も想像していない、絶対強者の余裕を漂わせながら、ベラナディアは母に提案する。

「それもいいでしょう」

意外にも、ハマーマは娘の進言を受け入れた。

「しかし、万一という事もあります。あの男を連れていきなさい」

「……分かりましたわ。では早速行って参ります。ごきげんよう、お母様♪」

ベラナちはそう言うと、転移魔法陣を展開して何処かに去っていった。

「……………」

一人残されたハマーマはただ無言のまま、虚空を見つめるだけだった。

## 第77話

「……!？」

突然の事にニトクリスは目を白黒させるしかなかった。諸事情あつて安里の眷属になつた身であるが

まさか安里に女として求められるとは夢にも思つていなかった。

「お、お待ちなさい我が盟約者！」

この様なふしだらな行為に耽つてはなりません！不敬ですよ！あぁっ！」

首筋を舐められ、手首を掴まれる。ニトクリスの制止も聞かず、安里は手際よく彼女の裸体を弄つていく。

「あ、あなたという人は……っ！ 何時か天罰を下されますよ？」

顔を真っ赤にして抗議するニトクリスだが、その瞳には怒りの色はまるで、ちつとも無かつた。

むしろ快樂に蕩けそうなほど潤んでいる。そして……。

「うわーんっ！ やめて下さいっ!!」

安里は思考がタスクオーバーに至り泣き叫ぶニトクリスをそつと抱き寄せた。その目は優しかった。

「大丈夫だよ。安心して良いんだ。俺達は何も悪い事はしていない。ただ一緒に気持ち良くなるだけなんだから……」

そう言いながら優しく頭を撫でてやる。するとニトクリスは、すすり上げながらも安里の胸に顔を埋めてきた。

「本当ですか？本当に私達は愛し合つても良いのでしょうか？私は兄弟を守れず、神官を謀殺した挙げ句ファラオの果たすべき務めを放棄した女です。そんな私が今更誰かを愛しても許されるのでしょうか？」

身体のみでなく心も剥かれていく。そんな感覚を覚えながらニトクリスは震える声で問いかけた。

「……………」

安里は無言のまま彼女を強く抱きしめると、その唇を奪つた。どち

らからともなく舌を差し込み絡ませ合い唾液を交換する。

(ああ……頭が、ぼうつとする……♥)

やがて二人はゆっくりと唇を離すと、名残惜しげに銀糸を引いた。「いいかいニトクリスさん。君はとても魅力的な女性だし、それに君はもう充分苦しんできたじゃないか。だからもう自分を許してあげよう?」

心なしか声も顔つきも普段の彼とは別人の様に穏やかになっていく。そしてそれは同時に、今までの彼が決して見せなかった一面でもあった。

「あつ……♥」

耳元で囁かれる言葉だけでニトクリスは甘い吐息を漏らしてしまふ。

そして気付けば彼女は曝け出すかの様に身を預けていた。安里はその様子を確認すると、再びベッドに押し倒した。

「ああつ♥ だめえ……そこは弱いのです♥」

「へえ……じゃあ、ここは?」

「はううつ♥」

どこを触れられても感じてしまう。ニトクリスはその度に甘く喘ぎ続けた。

乳首や尻は当然、

臍、耳たぶ、背中、腋の下などあらゆる部位が性感帯となってしまうのだ。

(ああ……♥自分を曝け出す事がこんなにも心地好いなんて……)

全身くまなく愛撫された事でニトクリスは完全に出来上がっていた。

褐色肌は汗ばみ、瞳は潤みを帯びていく。

(いや……そうではなくて、

受け入れる事がこんなに幸せだなんて知らなかったのです。私の中に渦巻いていた悲しみや後悔が全て溶け出していく様です……)

ニトクリスの心の檻が瓦解していく中でそして、遂にその時が来た。

「ひゃうん♥」

股間に指を入れられ、かき回される。ニトクリスの秘所からは大量の蜜が溢れ出し安里を指をふやかす。

「凄いな……。大洪水だぞ？これならもう挿れても大丈夫かな？」

「え……。？」

どくん、どくんと心臓が高鳴る。

期待なのか不安なのか、自分でもよく分からない感情に支配されたニトクリスは、次の瞬間目を見開いた。

ちゅん、ちゅんと小鳥のさえずりが聞こえてくるだけでなく、自分の顔を覗いてくる顔があったからだ。

「ホラ、早く起きやがってください」

ニトクリスさん。メシの時間ですよ？」

「ナイア……。？」

目を擦って辺りを見回すと、そこにはいつもの漆黒のシスター服を纏うナイアの姿があるではないか。

と、言う事は……。

(あ、あれは夢……。!?な、な、なんと破廉恥で浅ましい夢を見るなどと……。歴代のファラオに対し不敬極まりない!!)

「何です、青くなったり赤くなったり信号機ですかアンタは」

「う、煩いですよ！ファラオの寢床

に無断で入るとはどういう了見ですか！」

「仕方ねーでしょう。安里がここに来たらニトクリスさんに襲い掛かっちゃうかもしれないから、私が代わりに様子を見てこいって言われたんですから」

「な……。!?」

思わず絶句するニトクリスだが、

ナイアは馬鹿にするように舌を出す。

「な、ワケねーでしょうが！どうせアンタの事だから、安里の奴を押し倒して既成事実を作ろうとか企んでたんじゃないですか？この淫乱ファラオが」

「そ、そんな事ありませんよっー！」

口では否定するが

果たしてそうだろうか？

あんなふしだらな夢を見るといふ事は、そういう願望が自分にあるからではないのか？生真面目故か、ニトクリスはナイアの前で悶々と悩み始める。ナイアはそんなニトクリスの純情さを鼻で笑うと何時もの調子に戻ってこう告げた。

「とにかく、安里が起きたら呼べと言われてるんですよ。さっさと来てください」

「む、分かりました……」

「それと、あんまし一人で抱え込まない方が良いんじゃないですか？」  
「……？」

「神官達を謀殺した罪悪感や兄弟を失った悲しみは確かに大きいかもしれないけど、それで安里まで失う事になったりしたら、それこそ本末転倒つてもんだと思いますよ？」

「……」

ニトクリスは押し黙ったまま、しばらく考え込むと、

「ありがとうございます」

と言ってベットから起き上がるなり

着替をするためか足早に立ち去っていった。

↓

「……よしー」

何故か洗顔を終え、髪を整えた後のニトクリスは気合いを入れると台所へと向かう。

「お待たせしました我が盟約者。朝食の準備を始め……」

努めて冷静を装いながら台所に入ったニトクリスは、そこで言葉を止めた。

何故なら、既に安里がテーブルにて左右から給餌を受けている。

二匹……いや二人とも背中の中の烏羽を見るに墮天使だろう。

片方はレイナーレ、もう一人はミッテルトと名乗る女性だ。

そしてそんな彼女達が甲斐甲斐しく安里の世話をしている。

「あ、あ、朝から何をしているのですあなた達はっ!!」



「あぁっ ♥ 安里様ぁ ♥」

「安里サマ ♥ ウチにも ♥」

くねくねと身体を揺すりながら、二人は同時に懇願している。まるで雛鳥の様に口を開けて食事を待つ姿はとても愛らしい。

が、当の安里は困り果てた様子で頬を掻いていた。

「いや、自分で食えよ……」

「そ、そんな……！安里様、もう私達の事なんて嫌いになってしまったんですか？」

「ひ、ヒドいッス！ 身も心も弄んで自分色に染めたら紙屑の様に捨てるだなんて！」

ニトクリスは辛うじて目眩を抑えたが、両者の言い分を聞く限り、どうやら彼に対する恋愛感情は本物である様だ。

（しかし、あの男……一体何人の女を手玉に取れば気が済むのでしょうか？）

ニトクリスは呆れた表情を浮かべると、ため息をつく。すると、それに反応する様に二人の視線が向けられた。

「うふふ、おはようございますニトクリス様」

「おはようッス！」

愛想を振りまいているように見えて、その実ニトクリスを警戒する様に睨み付ける。

「……随分と仲が良いのですね？」

ニトクリスも負けじと微笑み返すが、内心穏やかではない。

「はい♪実は昨晚、私の部屋に安里さんが来てくださって……。その時からずっと一緒です」

「なっ……!?!」

「まあ、当番制スからね……」

惚気けるレイナーレに対してミッテルトは肩をすくめる。

「ウチらは夜通し見張りをしてた訳ですし、安里サマの身の回りのお世話をする権利はあると思うんすよ」

「そうですね。だから、ニトクリス様はどうぞごゆっくりして下さいませ」

（え、ええ。そうですとも。安里とて年頃の男です。兵頭一誠と同じく、性欲を持って余しているのでしょうか）

ニトクリスは己にそう言い聞かせるが、どうしてもモヤモヤとした感情が湧き上がってくる。

（い、いえ、これは嫉妬などではありません！）

ニトクリスは頭を振って雑念を追い払うと深呼吸をして心を落ち着けた。

「ええ、そう致します。致しますとも」

何やら自分に言い聞かせる様に呟くニトクリスは食事をするものの、全く味がしなかった。

そんな折に、ナイアがわざわざ隣に座ってきた。

「どうしたんですか？そんな不機嫌そうな顔をして」

「別に、何でもありませんよ」

「ふーん、まあいいんですけどね」

ナイアはそう言うなり、ニトクリスの耳元で囁いた。

「アンタがどんな夢を見てたかは知りませんが、あんまり気にし過ぎない方が良くないじゃねーですか？今のアンタはファラオでもなければ女王でもない。一人の女の子なんですよ」

「っ!？」

ニトクリスの鼓動が大きく跳ね上がり、顔中に熱が集まる。

あつてはならないことだ。と言い聞かせてはいるのだが、ニトクリスの心の奥底では、ある思いが芽生えつつあった。

「……はい」

ニトクリスは小声で返事をする。

「おや、素直になりましたねえ？」

「わ、私はファラオですから！いつまでもメソメソしてはいけません！」

「ファラオじゃなくて女のコだって言ったでしょ？ アンタ人の話聞いている？」

「ぐぬう……!？」

何とも騒がしい食卓風景だが、それでも安里は嫌がる素振りを見せ

なかった。むしろどこか嬉しそうだ。

「ハーレム最高とか思ってます？このムツツリスケベはどうしようもねーですね」

「ハーレムってお前な、俺はただ皆仲良くしてくれたら良いなって……」

「へー、そーなんすかー。つまりは自分を敬い、傳けと？」

「なんでそうなるんだよ……」

安里は疲れた様子を見せるが、そのやり取りを見ていたレイナール達は頬を紅潮させて目を輝かせていた。

「まあ、敬ってほしいなら任務を果たして甲斐性の一つも見せてくれねーと。触手プレイだけじゃ女は満足できねーっつー事ですよ」

「しよ、しよくしゅぶれい……」

ニトクリスはあまりの衝撃に言葉を失った。彼女の常識の中に、そのような卑猥なものは存在しないからだ。

「あ、あのな……。今日はドライグの秘宝を探しに行くんだから、そういう話は無しだ！」安里は慌てて否定するが、レイナールは妖艶に微笑む。

「あら、私達に飽きてしまったんですか？」

「いや、違うって……」

「そうッスよね！ウチらみたいな可愛い子ちゃん達を放っておいて他の子とエッチするなんて、安里サマには無理ッス！」

ミッテルトの言葉にレイナールも同意を示す。

「そうです。私達の身体に溺れさせれば良いんです！」

二人の息のあったコンビネーションに安里は思わずたじろぎ、ニトクリスは一時の気の迷いだっただと自分に言い聞かせる。

そんなこんなで、食事を終えた一同は出立の準備を始めるのであった。

……

場所は冥界の一角にある湖畔。

「うわ、マジですか。私は水に弱いんですけど」

到着するなりナイアがげんざりとした表情を浮かべた。

「いや、水の中に入るわけじゃねーからさ、安心しろって」

「でも、水辺を歩くだけで体力を消費しちゃいますからねえ」

（何か嘘くせーな……）

心の中で毒づく安里であるが、ここで反論しても意味が無いのは理解していた。

「大丈夫ですよ。もし、万が一の事があっても私が何とかしますから」

ニトクリスがふん、と得意げな笑みを見せた。その様子はフアラオというよりかは、年相応の少女に見えた。

「ありがとうございますゴザイマスホント。これで心置きなく無茶が出来ますよ」

そして湖の中をレイナーレとミツテルト、湖畔を安里とニトクリスが調査する事となった。

因みにナイアはベースキャンプがどうのこうのと言っただけだが要はサボリである。

ー

「……」

「……」

（気まずい……）

湖畔の暗がり进行搜索するニトクリスと安里の間に会話は無い。そう言えば、杏寿郎やランサーと組む事は多かったが安里と二人で行動するのは初めてかもしれない。

増して昨夜の淫夢の一件もある。

ニトクリスは気恥ずかしさを誤魔化す為に口を開いた。

「あの、安里」

「はい？」

「昨晩はよく眠れましたか？」

「ええ、まあ」

「それは良かった」

再び沈黙が訪れる。

しかし、先程よりも少しばかり空気が和らいだ気がした。

（これでミツテルトやレイナーレ、或いはナイア、ニグラに囲まれて眠

れなくてさあ、等と

ほざいたらどうしてくれようかと思いました。つて、私が何故安里の男女関係に口出しする必要があるのですか!? 個人の勝手というものですよ! いえ、それにしても杏寿郎ではありませんが妻が多すぎます!

妻ではありませんけれど! 全く不敬ですよ!

ニトクリスは心の内で葛藤し、

一人煩悶していた。完全な一人相撲ではあるが、それでもこの感情を抑え込むのは難しい。

「あの、ニトクリスさん?」

「はいっ!」

突然声をかけられて、ニトクリスは飛び上がる。

「あ、いや、なんか考え事をしているみたいでしたから」

「い、いいえ! お構いなく! 私はフアラオですから!」

「はあ……。でもつまんねー事でも相談して下さいよ。俺達、盟約を結んだ仲間じゃないですか」

「つ、つまらない事ではありません! 不敬な!」

「お、おう……」

思わず大声で否定してしまい、安里は面食らい、後ずさった。

が、それがいけなかった。

ボゴオツ、と音が響くと同時にニトクリスの足元の地面が陥没したのだ。

「きゃあっ!」

「ニトクリスさんっ!!」

安里は咄嗟にニトクリスの腕を掴むと、己の胸元へと引き寄せた。

「うおおおおっ!」

安里のもう片方の腕が触手からフックに変化させ、樹木へと巻き付ける。宙ぶらりんの状態で停止する。

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして」

ニトクリスは顔を真っ赤にして俯きながら礼を言う。

(ああ、もう……。どうしてこんなにドキドキするんでしょうか?)  
安里の鼓動を感じていると、不思議と落ち着きを取り戻していく。  
それと同時に、この時間がもう少し続けば良いのに。とさえ思っ  
てしまった。

(何を考えているんですか私は!これではまるで恋する乙女ではない  
ですか!)

ニトクリスは必死で頭を振って邪念を振り払う。

「いつまで触っているのですか!」

降り立ちますよ!」

「は、はい」

(そんなに怒らなくても)

(何も怒る事はありませんでした。我ながら何と未熟な……)

何とも渦巻く感情を処理しきれず、ニトクリスは安里の死角で  
そつと拳を握った。

とは言え、ニトクリスはファラオでありエジプトの秘術を収めた魔  
術師でもある。マジエドの法衣をばつと広げるとパラシユートの様  
に広げ、そのまま滑空して着地する。

「ふう」

「ニトクリスさん、大丈夫ですか? 足とか捻ったりしてませんか?」

「問題ありません。安里こそ、私の体重を支えていた腕は平気ですか  
?」

「全然。ナイアに比べたらまるで羽根ですよ」

「……。それはどういう意味です?」

「へ?」

ニトクリスはジト目になって安里を見つめた。安里には何故ニト  
クリスが怒っているのかが解らない。

(何でだ? ナイアの方が体重が重いつて言ったのに……)

「あの、ニトクリスさん。何か怒ってます?」

「いいえ。別に」

「あ、いや、何かごめんなさい」

「何故謝るんです?」

まるで蜘蛛の糸が絡まるかの様に

静いが拗れていく。

「いや、だってニトクリスさんが凄く怖い顔しているから……」

「私はいつも通りです。貴方が気にする必要はありません」

「え、ええ……」

安里は気まずそうに頬を掻くと、ニトクリスもそれ以上は何も言わずに湖畔を歩き始めた。

(うーむ……)

安里はニトクリスの背中を眺めつつ考える。

先程までは会話もあったし、特に険悪な雰囲気では無かった筈なのだが。

(ナイアの方が重いという事は彼女を抱いたという事ではありませんか！姉弟の様な顔をしていながら陰では男女の仲になつていたなどと！ いえ、これは決して嫉妬ではありません。ファラオとして盟約者である安里を導く為にも知るべき事なのです！)

ニトクリスは一人悶々としていた。

吊り橋効果、というものにしても余りにも意識し過ぎである。

「安里」

「はい」

「貴方は今まで何人の女性を手籠

めにしたのです？」

「ぶふうっ!？」

安里は盛大に嘔き出した。

そして慌てて口を拭う。

「な、なな、何を言っているんです!？」

「誤魔化さないで下さい。私は知っていますよ。ファラオたる私の目を誤魔化せるなどと思わない事です」

分かっているのなら聞かなくてもよいのではないかと安里の頭の中に疑問符が浮かぶ。

だがニトクリスは真剣だった。

その表情を見て安里は観念した様に口を開く。

「ええと……。ニグラさんに、ナイアに……。レイナーレ、ミツテルト。カテレアに、スコグルさんに……。あとは、ヤンリマも……」

「幾らなんでも多すぎます!!」

この色魔！不敬です！ 不潔です！ 破廉恥です!!」

ニトクリスは顔を真っ赤にして叫ぶ。

流星にこの反応は予想外であった。

しかし、ニトクリスは至極真面目な様子で安里を睨みつけている。

「そう言われると一言も言い返せませんが……」

「ならば改めなさい！ いいですね!」

「は、はい」

ニトクリスの勢いに圧倒されて安里は思わず首を縦に振る。

するとニトクリスは満足げに微笑んだ。

「分かれば良いのです。これからは盟約者である私を大切にすること。いいですか?」

「わ、分かりました」

「よろしい」

フアラオではなく年相応の少女の顔を見せるニトクリスに安里は思わず苦笑する。

同時に、彼女の言葉が突き刺さる。

(大切に、か)

心に思い浮かべるのは今まで並べ立てた女性でもなく、ニトクリスでもなくルイーナの笑顔だった。

今はどうしているのか?

囚われの身で辛い思いをしていないだろうか? そんな考えが頭を過った。

「どうしたのです? 私と地底湖を

調査するのではなかったのですか?」

「あ、ああ。すいません」

ニトクリスの声に我に返り、安里達は地底湖へと歩みを進める。

「んん? この水は……」

ニトクリスは水面に手を入れて感触を確かめる。



「この水の成分は……聖水に近いですね」

「聖水？」

「ええ。この湖の水が何らかの力によって霊的に清められている様に感じます」

「なるほど……」

ニトクリスの言葉に安里は頷く。

と、なると悪魔であるイツセーや

水の力に弱い自分やナイアでは手の出しようがない。だがニトクリスは別だ。彼女はこの世の存在ではないが聖水によってダメージを受ける訳ではない。

「ニトクリスさん、お願いできますか？」

「ええ。お任せください」

ニトクリスはメジエドの法衣を纏うなり地底湖の中へと揚々と飛び込んでいく。

その様子を見て安里はふと思う。

(ニトクリスさんが着ていた法衣ってどう見ても白水着だよなあ……)

↓

「……ふはっ！」

地底湖に潜る事数分。ニトクリスは無事に潜行を終えて水面から顔を出した。すると水の滴る宝玉が目に入る。恐らくあの宝玉が水源なのだろう。目を凝らすと、宝玉の側に見慣れぬ男性の姿があった。

どうやら彼も異変の調査に来た様だがニトクリスにすれば問題だ。

「お待ちなさい！それは我々が先に見つけたものですよ」

ニトクリスはそう言って宝玉を手に取りろうとする男を制する。

「……面倒くさいからパス」

などと言い出したその不健康そうな男はニトクリスの制止を聞かずして宝玉を鷲掴みにして持ち去ろうとする。

「ちよ、ちよつと貴方！人の話を聞いていたのですか!？」

ニトクリスは慌てて男の手を掴む。

「いや、だってネフレン様からこれを持って来いって言われたからさあ」

「ネフレン様？」

名前に聞き覚えがあった。

レイヴェルを無理矢理側妻にしようとした人面獣心の男、ネフレン・カ・マンモン。

その男が何故こんな場所にいるのであろうか。

「貴女達こそ、僕達の邪魔をしないでくれるかな？」

「い、いえ。これは正当な所有権を持つ我々の物です」

「そんなの知らないよ。僕は命令されただけだし」

「そ、それでも……」

「面倒くさいなあ……。殺していい？いいよね、うん」

「なっ!？」

ニトクリスは眼前の男の豹変振りに絶句すると同時に男の姿が大鰐と巨人の性質を併せ持つ魚人へと変貌していく。

「あ、貴方は何者なのですか!？」

「ああ、自己紹介がまだだったね。僕の名はセベク。ネフレン様の側

近で『万魔喰らいの大鰐』さ」

「万魔、喰らい……!？」

ニトクリスは息を飲む。

その名には聞き覚えがある。

自分達の世界では軍神とされる鰐の神と同一の存在であろうか。

「悪いんだけど、この姿になると

色々抑えが効かなくなるんだ」

風を切る音よりも先に尾撃がニトクリスに直撃した。

「ぐうッ!？」

ニトクリスは為す術も無く吹き飛ばされて地底湖に沈む。

(水の中は……い・拙い!)

水中では鰐の化身であるセベクは圧倒的に有利であった。

ニトクリスは必死に足掻くが、水の流れがそれを許さない。

「がぼおッ!!」

肺の中の空気を全て吐き出してしまい、ニトクリスは意識を失いかける。

(駄目ですーこのままでは……)

だがその時、一筋の光が差し込んだ。

(この光は……?)

ニトクリスは薄れゆく視界の中で空を見上げる。

(全く……！貴方という男は……！)

いつもここぞという時に

現れてくれますね)

そう思うと自然と笑みが零れた。

そして、ニトクリスの身体は錨に巻き付かれて引き寄せられた。

「ゲホッ！ゴホオッ！」

水面から引き上げられたニトクリスはくずおれつつ水を吐く。

「大丈夫ですか？」

「あ、ありがとうございます」

ニトクリスは礼を言うが、

反応する余裕は安里にはない。

視線は地底湖の黒い影へと向けられていた。

(ドサクサに紛れて逃してはくれねえか……引きずりこまれたら

その時点で終わりだな)

背筋に冷や汗を掻きながら安里はゆっくりと片腕を砲塔に変化。

照準を黒い影へと定めた。

## ※第78話（安里×ニトクリス）

（ドサクサに紛れて逃してはくれねえか……引きずりこまれたらその時点で終わりだな）

背筋に冷や汗を掻きながら安里はゆっくりと片腕を砲塔に変化。照準を黒い影へと定めた。

——ドンツ！爆音と共に地底湖に砲撃音が響いた。

しかし、砲撃に対して対象が大きすぎた。その上鰐の鱗は非常に堅く、砲撃では貫けない。

「どうかしたのかい？」

ざばあつ、と地底湖から悠然とした態度で這い上がってくるセベクは腹這いの姿勢で顔だけを向ける。

その視線の先には安里がいた。

（どうかしたのかい、じゃねえよ！）

どうかしてるぜ！！

心の中でそう叫ぶ安里だったが、

口には出さなかった。だが不安は

傍らのニトクリス、向こうのセベクにも伝わったようだ。

「ニトクリスさん！逃げましょう！」「ええ!？」

無論、了承ではなく驚きから出た声だった。先の騎士さながらに自分を

颯爽と助けた彼は何処へ行ったのか？と思いがよぎるがニトクリスは乙女である以前にファラオでもあるのだ。安里の判断は単なる臆病からではない事を彼女は理知的に理解していた。

「いや、逃がす訳がないだろう？」

ニマアつと、鰐のような笑みを浮かべると、セベクは巨大な口を開けた

まさか、口から吐息でも吐こうというのか？と安里が思った瞬間――

ガバアン！と顎門が閉じるとその延長線上にあつた岩盤が噛み砕かれたかの様に消失していた。まるで最初からそこに何も無かつた

かのように。

「あ……ああ……」

ニトクリスは恐怖のあまり言葉にならない悲鳴を上げている。

「どうだい？…これなら逃げる暇も与えずに君達を食べれるだろう？」

余裕綽々の態度でセベクは口元を歪める。鱈が笑うとここまで禍々しく見えるものなのか。ニトクリスは英霊の身である筈なのに、蛇に睨まれた蛙のように動けなくなっていた。

（どうしたのですニトクリス！しつかりなさい！貴方はこの程度の敵に臆する女ですか!?!）

必死に己に言い聞かせようとするが足は震えて動かない。そもそも英霊たる彼女がこんな状態になるなど本来は有り得ない事なのだ。それを為し得る程の威圧感、存在感を目の前の存在は放っていた。

セベクはニトクリスのいたエジプトでは軍神として信仰されていた存在だ。同一の存在ではない筈だがその顎門は冥府の門さながらであった。

「うふっ……それじゃあ食べようかなあ？」

舌なめずりしながらゆっくりと四つん這いで近づくとセベク。その巨体が近づく度に圧迫されるような感覚を覚えてしまう。

このままでは自分は死ぬ、捕食される。尊厳も、魂すらも無くなる。そんな未来しか見えない。

（ああ……寒い……怖い……死にたくない……誰か……!）

死の予感に怯える彼女の脳裏に浮かんだのは、かつて自分を守ってくれた父や兄弟の姿だ。

「ガタガタ煩えんだこの糞バカ！」

突然の罵声と同時にセベクの横面に文字通りの鉄拳が叩き込まれた。それは安里による一撃だった。

しかも全身を鉄拳にした『冥獄長の剛腕』によって強化した状態での一撃だった。しかし……。

「アヌビスを倒した時より大分強くなった様だねえ。けど……どうって事ないなあ！」

フン、と鼻を鳴らすとセベクは怯むこともなく顎門を閉じた。そし

てその延長線上にあるものは――

「ぐわあああああつ!!」

安里の右腕だった。肘から先が綺麗に食い千切られたのだ。

鮮血が飛び散る中、激痛に悶える安里だったが、それでも彼は戦意を失ってはいなかった。

「安里!」

「なくに、痛覚は遮断できるから問題ないツスわ……!」

（大ありです! 顔色が真っ青じゃないですか!）

ニトクリスは内心そう叫んだ。痛みを感じないという事は即ち自分の肉体の状態が分からないという事である。

仮に今、安里の腕どころか足が使い物にならなくなったとしても気づかぬまま戦い続ける事になるのだ。

「大丈夫ツスよ。俺、頑丈なんで」

「そういう問題ではありません! 早く治療しないと!」

「まあまあ、それよりアイツを倒す方が先決でしょう?」

そう言つて安里は再び左腕を構える。今度は先程より小手の部分を大きく変化させた。

「自己再生が出来るんだったね。」

ふーん、久々に腹一杯食えそうだ」

セベクはニヤリと笑みを浮かべると、またも顎門を開いた。

（来るか!）

安里が身構える中、今度はその下顎がガパリと開き、そこから黒い影のようなものが飛び出してきた。まるで闇そのものを凝縮したかのような、黒々としたものが安里目掛けて一直線に伸びてくる。

「何だそりゃ!? ぐが……!?!」

吐き出されたのは噛み砕かれ、圧縮された岩の散弾。それが安里の身体中に突き刺さった。

「安里!」

ニトクリスが叫ぶが、安里は無言のまま立ち上がった。

だが、そのダメージは見た目以上に深刻であった。先程の攻撃で受けた傷は即座に修復されつつあるが、それ以外の箇所からも出血して

いる。

「くそつ、こんな時に……！畜生め……！」

悪態をつく彼の眼前には既にセベクの尻尾が迫ろうとしていた。

「硬い肉は叩いて柔らかくするに限るよねエ？ハハッ」

「やらせません！」

ニトクリスは咄嗟に身を翻し、蹴りを放つ。メジエドの加護のある今の状態ならばセベクにも通じる筈と

見越しても事であろうか？

「ハハハ、自分から食べられに来たのかな？それなら遠慮なく頂こうかア！」果敢なニトクリスの蹴撃も踏みつけもセベクの鱗には霧雨ほどの効果も無く、ガバア！と顎門が開かれた。

（ダメです……！噛み砕かれる！）

覚悟を決めて目を瞑るニトクリスだったが、いつまで経ってもその瞬間は訪れなかった。

恐る恐るニトクリスが瞼を開くと

セベクの舌と歯が燃えていた！

「アヅウイ!？」目を白黒させるセベクに安里は中指を立てて不敵に笑う。

「悪いな、俺がぶん殴った奴は発火する。そういう能力なんだ。だからテメーが火達磨になるのは自業自得だぜ！ニトクリスさん！奴の口の中に何か打ち込んで下さい！」

「は、はい！」

ニトクリスは咄嗟に死霊術を応用しての瘴気をセベクの口内に撃ち込んだ。瘴気とはこの場合メタンガス、と言い換えてもいいだろう。

顎門を閉じたものだから口内でメタンガスと炎が混ざり合い爆発的に燃烧し、セベクは堪らずに仰け反った。

「グオオオオッ!!オノレエ!!」

「マジかよ……口の中で大爆発が起きたってのにまだやる気か？」

いや、まだやる気だというより完全にやる気になっているようだ。怒りに燃える瞳で安里とニトクリスを睨みつける。

「許さん……！許さんぞ……！貴様ら如きに……！！」

口調や声色もまるで変わっていた。さつきまでの気怠い雰囲気は完全に消え失せている。

「ウオオオオオオオオ！！」

そして鰐でありながらセベクは雄叫びを放った。その迫力たるやまさに神話の怪物の威容だ。竦み、震え上がるのは何も安里やニトクリス

だけではない。地底湖の洞窟の岩盤もまたビリビリと震え、罅割れていく。

(このワニ野郎……！洞窟を崩落させて生き埋めにする気か!?)

虎の子の転移の符だがここで使うべきか悩む。しかし迷っている時間は無い。即座に決断すると安里はその一枚を取り出した。

「させるわけがないだろう！

マヌケがあ!!」

セベクが大口開けて飛びかかってくる。その牙は鋭利な刃物のように研ぎ澄まされ、戦鎚の様に巨大な凶器となっていた。

「ニトクリスさん！危ない！」

咄嗟の判断でニトクリスを突き飛ばしつつ転移の符を張る安里。その甲斐あつてニトクリスは助かったものの、安里自身はその顎門に捕まってしまった。

「安里！」

「クソツタレ！離れるよコラー！」

安里は必死に抵抗するがセベクの顎門の力は凄まじく、徐々に押し込まれていくのが分かる。このままでは喰われるのを待っただけだ。

「安里、安里ッ!!」

彼を何とか転移に巻き込もうとニトクリスは呼びかけるが、無情にもその手は届かない。「うわああああつ!!」

ついに安里は絶叫と共にその顎門の奥へと飲み込まれた。

「安里おつ!!」

ニトクリスの悲痛な叫びが響き渡る。最早彼女に出来る事はただ祈る事だけだった。



ニトクリスの転移先はナイアのベースキャンプだった。

「ナイア……！貴方は……！！」

「痛っ!?何ですかいきなり!?!」

リクライニングシートに寝そべる彼女の頭にニトクリスは拳骨を落とした。

「痛てて……。全く乱暴ですねえ……。私はソシヤゲでいう指揮官ポジションですけどオ?」

「呑気に何をしているんですか!早くあのセベクとかいうワニを止めないと!」

ナイアのふざけた態度を一々咎める余裕もなくニトクリスは叫んだ。

「はいはい、分かりましたよ」

やれやれといった感じでナイアはニトクリスと共にキャンプの外に飛び出す。外ではレイナーレとミッテルトが渦に飲まれかけたが、飛び立つ事で難を逃れていた。

渦から現れたのは……当然セベクである。

「ああ……」

ニトクリスの視界がぐらりと揺れる。安里の姿がないと分かった瞬間、彼女は遂に膝をついて倒れてしまった。

(そんな……私はまた……守れなかった……)

何がファラオだ。何が天空の化身だ。結局、自分は大事な一人も守る事が出来ないではないか。暗澹たる気持ち彼女を襲う。

「おや?ニトクリスさん、どうしたのですか?さっきまでの勢いはどこへやら?」

「……放っておいて下さい」

自嘲気味に呟きつつ、ニトクリスはよろめきながら立ち上がった。レイナーレとミッテルトも心配そうに駆け寄ってくる。

「大丈夫かい?ニトクリス」

「ニトつち……しっかりして!」

「二人とも……ごめんなさい」

「謝る必要はありませんよ。悪いのは全部あのセベクというワニです」

「ええ、それに安里様ならきつと無事ですよ!」

二人の励ましの言葉を受けてニトクリスの目に再び力が宿った。そうだ。今の自分は一人ではないのだ。

「フフ、少しばかりは立ち直ったらしいが無駄な事だ。あの男の様に噛み砕いてくれる!」

セベクは再びその顎門を開いた。今度は先程のように吠えるのか、あるいは散弾を吐き出すかと思われたが……違った。

「ガアツ!!」

セベクの口から飛び出したのは炎だ。それもまるで火炎放射器の如く激しく燃え盛っている。

「ぐ……ッ!」

ニトクリスは咄嗟に障壁を展開したが、その炎の奔流を防ぐには至らなかった。全身を炎に包まれ、その身を焼かれていく。

(ぐ……う……! 熱い……! けれどこの程度の痛みが何だというのです……!)

苦痛に顔を歪めながらもニトクリスは必死に耐え続けた。それどころか逆にメジエドの法衣を纏い、炎の中に飛び込んでいく。「ハッ! 自ら焼け死ぬつもりか!? まあいい!

自ら鴨のローストになってくれるとは有り難い! そのまま丸焼きにしてやるよオ!!」

セベクの言う通り、このままニトクリスは自らを火達磨にするつもりだった。だが、その目論見は外れた。

「見損なうな! 神の名を騙る愚か者め……!」

(安里…… 貴方は自らの身を呈して私を守ってくれましたね……。貴方の数分の一でも…… 私は誰かを守る事が出来るでしょうか?)

ニトクリスは静かに瞼を閉じる。そして……

「我が名はニトクリス! 悪逆なる邪神の使徒に裁きを下すフアラオナリ!」

カツ! と目を見開くと同時にニトクリスは焰の中から現れた水の

宝珠を掲げた。すると、その水球より大量の水が溢れ出し、辺り一面に広がっていき、瞬く間に地底湖全体を覆っていく。

「こ、これは!?」

驚くセベクにニトクリスは告げた。

「この地底湖の水を媒介として、私の罪と穢れを媒介と為し発現する！」

ナイル河の奔流を思わせる激しきで流れ出した水流はセベクを呑み込み、その巨体を地底湖の深みへと沈めて行った。

「ぐああつ!! 貴様……この俺に何をしたアツ!! ぐが……ばっ!? 水が……! 水がああつ!!」

「貴様の罪と私の弱さを押し流し、洗い流す……存分に味わわない

……!!  
穢れスネフェルをイオテル、青く美しきナイル！」

ニトクリスが掲げた手を振り下ろすと、水流は炎を消し去りセベクの腹を満たし、膨張させていく。

「なあゝるほどツス！」

幾らダイヤみてーに硬い鱗を

持つていてもあのビール腹じゃ意味無いつて訳ツスねー!

「そういう事ですわ! あのデブワニはもうおしまいですわよ!」

セベクの腹部は膨れ上がり、既に身動き一つ取れない状態になっていた。

「クソツタレ……俺は……こんな所で終わらんぞ……!!」

「別にテメーの都合なんざ知らねえつての? ねえ、お三方。

バーベキューパーティーは如何でございますっ!」

ナイアの呼びかけに3人は不敵に笑う。

(朱に交われれば何とやら、ではありませんが……今は合わせるのも悪くありません)

鎌、光の槍、銃火器、魔術。

それら全てがセベクの腹に見舞われると断末魔の叫びと共にその腹は破裂し、その臓腑をぶち撒けた。

安里がはっ、と気がついたのは  
ベットの上だった。

あちこちにミイラじみた包帯が巻かれている辺り、ニトクリスが手  
当してくれたのだろうか？

(いや、このテキトーな結び方はニトクリスさんじゃないな。ナイア  
の奴……)

起き上がろうとする安里だったが

ひどく怠い。まるで身体に神経が通っていない様な感覚だ。

「起きたのですね」

声の方を見るとそこにはニトクリスがいた。

「ああ……うん。何とか生きてるみたいだ」

「それは良かったです」

そう言つて微笑む彼女の顔を見て安里は何やら照れくさくなる。

何故また、下着とも水着ともつかぬ姿で添い寝をしてくれているの  
か。そんな疑問も頭に浮かんだが、聞くのも酷く野暮な気がして止め  
た。

「……(こ)は？」

「ナイアが用意したキャンプのベツトルームです。セベクは私達が倒  
したから安心してください」

「そっか……」

「……ありがとうございます。私を守ってくれて」

ニトクリスの瞳には涙が浮かんでいた。その事に驚きつつも安里  
は首を横に振る。

「いや……。俺は何の役にも立たなかったよ。結局、あの時だつて何  
も出来なかったし……!?!」

言いきる前にニトクリスは安里の唇

を自らのそれで塞いだ。

「ん……ちゅ……ふう……」

「に、ニトクリスさん……!?!」

安里の知るニトクリスはもつと奥ゆかしい筈であった。それがい  
きなりキスしてくるなど一体どういう風の吹き回しなのか。

「私はファラオですよ。神を崇めるのが仕事なのに……貴方はいつも無茶ばかりするんですもの。だからこれは褒美であると同時に罰でもあるのです。今後、勝手に死なないように……!」

顔を真っ赤にしてまくしたてるニトクリスの姿は年相応の少女にしか見えず、安里は思わず苦笑してしまう。

「分かった……肝に命じておくよ」

「何を終わったみたいなの顔をしているのです? まだ終わってませんよ。貴方の魂は大分弱っているのですから今すぐ癒やす必要があります。さあ、私に全てを委ねなさい!」

「え……ちよつ……ニトクリスさ……んっ……!」

濁流ではなく清流の様に静かで嫺やかに、ニトクリスは安里に覆い被さった。

その褐色肌は熱を帯び、全身に汗を浮かべながらも彼女は硬直していた。かああつ、と頬を染め、恥じらいに震えながらニトクリスと言った。

「ぼ、房中術は……初めてなのです。上手く出来ないかもしれません……我慢して下さい。」

だ、大丈夫です。私がリードしますので、安里はただ快樂に身を任せていれば良いんですよ」

ニトクリスの割れ目から滴る蜜は糸を引き、当に聖水の源流となりつつあった。

「で、ですが私は決して誰にでもこういう事をする訳ではありませんからねっ! 勘違いせぬ様に! これはあくまで……そう! 治療の為に! これは必要な事なのですよ!」

そう言うとニトクリスは一気に腰を沈めた。

「あ……くっ……!」

「ニトクリスさん……!」

苦痛に歪むニトクリスの顔を見て安里は彼女を気遣うように腰を引こうとしたが、それをニトクリスが制止する。

「駄目ですっ! 動かないでっ! いいですか? 私の事は気にせず、ゆっくりと呼吸を整えてリラックスしてください。さあ、私を感じて

「……？」

そう言つてニトクリスは安里に跨がりながら安里のペニスを己の水牢へと沈めていく。

「はあ……はあ……全部入りましたよ……？気分はどうです？痛くはありませんか？」

「あ、ああ。ニトクリス、さんは？」

そう答えて安里は彼女の頭を撫でる。するとニトクリスは嬉しうに目を細めた。

「嬉しい……貴方に優しくされると……なんだか幸せな気持ちになりますね。もつと、私を甘やかしてください……安里……！」

ニトクリスの膣内は狭く、安里の分身が押し返されるような感覚があった。しかし、それ故に安里のモノを包み込む肉壁の感触は心地良く、安里の緊張は瞬く間に蕩けていった。

「んっ……んっ……ふうっ……んっ……♡」

それはニトクリスも同様。

いや、それ以上だ。

最初はぎこちなかったニトクリスの動きも次第にスムーズになつて行き、安里の剛直も徐々にだがその大きさを増して行く。ニトクリスは鼻から抜けるように甘えた声を上げていた。

「あん……ふふ……大きくなって来ましたねえ……？可愛いですよ……安里……♡」

そう言つて妖艶な笑みを浮かべるニトクリス。

彼女の表情はすっかりメスのそれになつていた。

「安里、安里……私の誇らしい盟約者……貴方の魂は本当に綺麗ですね……私、惚れ直しちゃいましたよ……？」

そう言つてニトクリスは結合部に尻を擦り付け、より深くまで繋がろうとする。

「ニトクリス……さん……俺……もう……」

「まだです……。まだ……貴方を、感じたい……♡」

M字開脚で跨り、安里の上で淫らに踊るニトクリス。その度に豊満な乳房が揺れ動き、安里の視界を刺激する。ビッグツ、と安里のペニス

が脈動するが、ニトクリスの房中術の影響なのだろうか、一滴も精液が放たれる気配は無い。

「安里、安里……好き……大好き……愛しています……安里い……んっ……ちゅ……れるお……んっ……んっ……ふう……んっ……んんんんんんっ……んんんんんんんっ!!!」

互いに数え切れぬ程に絶頂に達しつつ、手を絡み合わせ、唇を重ねて繋がる様は主従というよりも恋人同士のそれであった。

「安里、安里……安里、安里、安里、安里……!!ああっ、貴方の魂はなんて美しいんでしょう!」

ややもするとニトクリスは錯乱気味に叫ぶと兎のように安里の鋼の様な腹の上で炙られる様に跳ねる。

醸し出される汗と愛液が更に彼女を燻していく。

「貴方の魂は私だけの物……誰にも渡しません……!ずっと一緒……貴方は永遠に私の物なんですから……!」

「ああっ、ニトクリスさん……!」

「んっ……んんっ……!あ、安里……私、そろそろ……」

「ああ、俺も……!」

「んっ……んんっ……!」

房中術の癒しが完了したのか、

安里の精液が尿道を通り、勢いよく駆け抜ける。盟約者、いや最愛の妻であるニトクリスへの愛の証として。

「んっ……んんっ……!」

ニトクリスもまた、安里の射精を受け止めるべく子宮口をぐちゅつと震える亀頭に押し付けた。

そしてその瞬間――

「くっ……うっ……!」

「くうっ……ふ……ううん♥」

二人は同時に果てる。

びゅるるるるるるっ!どびゅーっ!とぶとぶとぶ……とくん……とくん……とくん……

ニトクリスの膣内へ大量の白濁液が流れ込んでいく。それはまる

で溶岩のようであり、煮え立つマグマの様に熱かった。

(はあ……はあ……はあ……あ、熱い……！これが……安里の精液……！ああ、私は今、『愛されて』いるのですね……♡)

「はあ……はあ……はあ……はあ……あ、安里……？」

ニトクリスが恐る恐る安里の顔を見ると彼は真摯な瞳で見つめ返して来る。その視線に彼女は胸を高鳴らせた。

「ニトクリスさん、ありがとう。凄く気持ち良かったよ」

「……ッ!？」

ストレートな感謝の言葉にニトクリスの顔が一瞬で真っ赤に染まった。

「ふ、不敬です！フアラオである私をまるで妻か何かの様に扱うなど……！」

「す、すいません。つい」

『一度ヤツたからって『俺の女』ムーブするなんてマジで引くわー』

嘗て臍腑を抉る様なナイアの言葉を

安里は思い出していた。ニトクリスを軽んずるつもりは毛頭無い。

しかし、彼女達はあくまでゲイトの盟約であり本来ならば格上。

それを弁えず、眷属として扱う事はニトクリスの誇りを傷付ける事になりかねない。

「いえ、その、謝らなくても良いのです。寧ろ貴方にはもっと褒めて欲しいくらいなのですが……じゃなくてっ！」

さざなみの様に静かで控え目であった彼女が今や怒涛の勢いで感情を爆発させている。

それは彼女の変化なのか、それとも房中術の影響なのだろうか？

「いいですか？私は貴方の盟約者であって、そうした立ち振舞を忘れ私に溺れるなどと……♡そんなに私と交わるのが良かったのですね

♡」「あ、あの……？」

何やら話の雲行きが怪しくなって来た事に安里は困惑した。

「ふふふ、そうですね。今宵は勇者である貴方に報いる特別な夜……

♡ギザザン……ギザザン♡」

押し返す波の様に穏やかに、それでいて艶めかしい声でニトク



リスは囁いた。

「今夜は特別ですよ……♥夜を通して……私と二人きりの時間を楽しみましようね……」

そう言うとニトクリスは再び安里の分身を己の秘裂へと導くべく腰を沈めていく。結局文字通り夜が明けるまで二人は交わり続け……

ツヤツヤのニトクリスとミイラの様に搾り取られた安里の姿があつたのかなかつたとか。

※幕間・異聞 イツセーのなつやすみ（イツセー×黒歌 イツセー×シユターク&アーシア） ※疑似NT  
R注意！

イツセーは夏休みを満喫していたが大切な事を忘れていた。

夏休みといえば、そう宿題である。

「し、白い……！・ 我ながらビックリするくらい白い！ ノートが白龍皇の鎧みたい我真っ白だ！」

などと巫山戯た事を言っている場合ではない。今日は8月28日。あと3日で夏休みも終わるという時に、イツセーの課題ノートは真っ白だった。

「やっべえ……」

今更ながら焦り始める。夏休みに入る前は何とかかなると思っていたのだ。しかし現実には甘くなかった。

アーシアのノートを映そうかと思っではいたがリアス部長から待ったがかかった。それではイツセーのためにはならない。彼の将来のためにもここは心を鬼にしなければならぬと……。

『リアスさん、俺が間違っていました！』

（あの時のリアスさんの顔は母性溢れる優しい笑顔だった）

そんなわけで頼れるのは自分のみ。だが悲しいかな、英語に至っては全くと言っていいほど理解できない。何故日本語が公用語ではないのか。

（俺が領主になったら絶対日本語にしてやるからな！ ハハハハハハ……はあ……）

現実逃避をしたくなる気持ちを抑えて机に向かい、課題に取り組むがある意味ヴァーリヤロキにも勝る厳しい戦いであった……。

「うう……頭がオーバーヒートする……！ 限界だ……!!」

意識が朦朧とする中、一誠はベッドに倒れ込んだ。

もう無理だと諦めかけたその時。

（そうだ！ ノートを写すなどは言われたけれど、力を借りるなどは

言われていない！)

ガバツ、と起き上がりまずは眷属である黒歌を呼ぶことにした。  
したのだが……。

ー

「呼ばれて飛び出てにやにやにやにや〜あ♥貴方のパートナー、黒歌だにやあ♥」

久々に呼んだからかテンションが妙に高いが今のイツセーにはそんな事に気を配っている余裕はなかった。

「頼む！ お前の力を貸してくれ!! この課題を終わらせたいんだ!!!」

イツセーは頭を下げる所か土下座までして頼み込むとあっさり快諾した。

「もちろん協力するにや♪ 私はイツセーのだけの使い魔だからにやあ♥」

その言葉を聞き、イツセーは涙目になりながら喜んだ。

「ありがとう！ 本当に助かるよ！」

……。

……。

「あ、あの……黒歌」

「何にやあ？ 御主人様♥」

机に向かっていているイツセーにしなだれかかり、ズボンを弄る黒歌はちろり、と舌なめずりをする。その姿を見ただけでイツセーの下半身は熱くなつてきてしまう。

「いやさ、なんつーかさ……」

言い淀むイツセーに対し、黒歌は妖艶な笑みを浮かべて言った。

「大丈夫にや。ご褒美を期待しているんでしよう？ このテキストを終えたらあ……♥ たつぷり可愛がつてあげるにやあ♥」

どちらが主人なのか解ったものでは無いが、とにかくイツセーは駒王学園入学試験以来の集中力を発揮して課題に取り組み始め……。

「じゃあ、ご褒美タイムスタート♥」

ばふん、とピンクの煙が巻き起こるや何と黒歌が分身した。

まるで双子のような姿となった黒猫姉妹は瞬く間に服を脱ぎ捨てると、イツセーを押し倒してきた。

「ちよ!? ま、まだ課題が終わってないんだけどおおおっ!?」

「ふふふ、インターバルという奴だにやあ♪」

「そうだにや♪ 構ってくれなくてずっと寂しかったんだにや♥」

傾国の美女と化した黒歌が二人同時にイツセーの唇を奪う。

（あああああつ！ ヤバイヤバイ!! こんなに我慢できる訳ねえええ!!!）

イツセーは二人の豊乳を思いつき揉みしだき、反応を楽しむ。

「あんっ♥ 本体だけズルいにや！ 私も気持ちよくして欲しいにやあ♥」

「にやんっ♥ 御主人様、こっちも忘れちゃダメなのにやあ♥」

二人は競うようにイツセーへ奉仕を始める。

片方は胸で挟み込みパイズリで快楽を与え、もう片方は黒歌の豊乳からびよこんとはみ出す勃起ペニスを口に含み舐め回す。

「あああああつ！ た、たまらん……！ もつと、もつとしてくれえ!!」

「いいにやあ、御主人様あ♥ いっぱい気持ち良くしてあげるにやあ♥」

「うんっ♥ 私たちで一杯気持ち良くなって欲しいにやあ♥」

二人がかりでの愛撫により、イツセーの限界はすぐに訪れた。

「ぐああああつ!! で、出るうううっ!!」

びゅるるると勢いよく射精された精液が、二人の顔を白く染め上げる。

「にやあああ……熱い……凄い量にやあ♥」

「ああ……美味しいにやあ……これが御主人様の味なんだにやあ……♥」

うつとりとした表情で顔についた白濁液を指ですくうと口に含んでいく。

「にやにや、次は分身の私がパイズリするにやあ……♥」

蜂蜜の様に粘つき、甘ったるい香りを放つ白い液体をペろりと舐めると、今度は分身した黒歌がパイズリを始めた。分身だけあって大き

さや形も同じなので、与えられる快感は本物と変わらない。

「にやにやにやにやく〜♥どうにや？ 私のおっぱい、気持ち良いかにや？」

「お、おう！ すごい気持ちいいぜ！」

「むう〜……。本体の私を差し置いて生意気な分身だにやあ！ でも負けないにや♪ ほら、こうするとどうかにや？」

黒歌は左右の乳房を手で押さえつけ、上下に動かすと更に激しく擦れ合い、その度にイツセーは強い刺激に襲われる。

「くはっ！ それスゲエよ！」

「あはっ♥分身パイズリは効くにや？ ならこのままイカせてあげるにやあ♥」

「うおおおおおっ!!!」

とはいえ一度出したばかり。そう簡単に果てる事はない。

「ああ……。♥御主人様のオスチンポ、また大きくなってきたにやあ♥」果てることはないが、太く熱くたくましい肉棒を見て黒歌は興奮したのか、より強く乳圧をかける。

「御主人様あ♥そろそろ出してもいいんだにやあ♥」

「ふふん、所詮分身パイズリじゃ

御主人様は満足なんてできないにやあ」

「ふふ、言うじやないにや。だったら勝負してみるかにや？ どっちのパ・イ・ズ・リが気持ち良いか」

「望むところだにや。私だって本気出せば御主人様に気持ち良くなってもらえるにやあ」

そして始まるのは淫夢の狂宴。二人の黒歌によるパイズリ合戦が始まった。

「にやにやにやにやにやああああっ！」

「んにやにやにやにやにやにやにやにやにやあっ！」

激しいパイズリ音と共に二人の巨乳が波打つ。

「はあ……。はあ……。はあ……。こ、これはこれで……」

左右から来る違った柔らかさと弾力、それに熱さ。

その全てがイツセーを快樂へと誘う。

「ふふふ、まだまだこれからだにやあ♥」

「そうだにやあ♪ 私たち二人とも、もつと気持ち良くさせてあげるにやあ♥」

「ぐううつつ!! こ、こんなの……我慢できる訳ないだろおおおつ!!」

イツセーの雄叫びが部屋中に響き渡ると、黒歌と黒歌の二人同時の乳内射精。

「あああああつ!! イツセーの熱いのいっぱい出てるうううつつ!!」

「ああんつ♥イツセーの御主人様のミルクがたっぷり注がれてるにやあつ♥」

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……! ヤベえ……! 全然収まらねえ……! やるぞ……黒歌!」

イツセーのペニスは萎える事なく、寧ろますます硬くなり続けていた。

「にやあああつ♥」

「ひやあああつ♥」

両者共に完全に発情しきっていた。

両者の蜜穴はもう愛液で溢れており、今にも男根を受け入れたくて仕方がない状態だった。

「御主人様あ……早く入れて欲しいにやあ♥」

「うんっ♥御主人様のおっきなおちん○んで、私たちのいやらしいオマンコいっぱい突いて下さいにやあ♥」

二人はスカートを脱ぎ捨てると、お互いが向き合う形で座る。

「御主人様あ……私たちのオマンコ、好きただけ犯していいからにやあ……♥」

「御主人様あ……私たちのいやらしくてトロトロマンコに、御主人様の熱いのいっぱい注ぎ込んで欲しいにやあ……♥」

二人は両手で互いの秘部を広げ、ヒクつく膣口を見せつける。それだけでイツセーの理性は完全に吹き飛び、獣欲のままに背後から両者を貫いた。

「あああああつ♥いきなり激しすぎるにやあ♥」

「ああああんっ♥御主人様あ……大好きいいっ♥」

激しく腰を打ち付けながら、本体と分身は抱き合いながら主を悦ばせようと必死に奉仕する。

「御主人様、キスして欲しいにやあ♥」

「私もお願ひしますにやあ♥」

「おう！ 任せとけ！」

イツセーは分身、本体と交互にペニスを挿入しながら、舌を絡めた濃厚なデープキッツを交わす。

「ちゅぷう、れりゅ、んむううっ、御主人様あ、好き、しゅきいっ、だ  
いすきにやあ♥」「あむうっ、じゅぶうっ、れりゅうっ、御主人しや  
まあ、らいしゅきらよお、らいしゅーっ♥」

イツセーは更に激しくピストン運動を繰り返し、遂にダムが決壊したかのように勢いよく精を解き放った。

「ああああっ♥イクうううううううっ♥♥♥」

分身も本体も目を剥き、鼻を垂らしながら無様なアへ顔を晒す様は姪靡な万華鏡のようだった。

更に分身が精根尽き果てて、本体に合流することにより感度は相乗的に跳ね上がる。

「おおっ♥おおおっ♥イグッ♥

イグイグッ♥イグっふううう♥♥♥」

キャパオーバーの快感に膣圧は際限なく高まり、イツセーのペニスを更に締め上げていく。

「お、俺も出るっ！ また出すぞおおおっ!!」

「出してええっ♥御主人様のザーメンまた子宮にぶちまけてえええっ♥♥♥」

「あああああっ！ くそおおおっ！ 止まらねええええっ!!」

またしても放たれる業火のような白濁液。だがそれでもイツセーのペニスは萎えることを知らない。

「ああああああああっ!! 凄いにやあああああっ!! 御主人様のチンポがビクビクしてるにやあああああっ♥♥♥あああああっ♥熱い  
いいっ♥熱いのが私の中を満たしていつてるにやあああああっ♥♥♥」

恍惚と至福に包まれた黒歌は

、その快樂のあまり意識を失ってしまった。

「し、しまった……。やりすぎ、

いや、やりすぎちゃった！」

イツセーは反省するが時既に遅し。

完全にダウンしてしまった黒歌を

一旦ベッドに休ませ、再び課題に取り組む事にした。

（そうだな……。次は……。こういう時は頼れるお姉さんことシュタークさんだ）

「よし、決めたぜ。シュターク先生、頼みます！」

イツセーは気合を入れて、早速電話をかけるとすぐに出た。

「やア、イツセー君じゃないカ。

どうしたんだイ？」

言うなり転送の符でやってきた。

セキュリティーは大丈夫なのか？　と思うイツセーだったが、今は

それよりも大事な事がある。

「あの、シュタークさん。実は課題の件で御相談が……」

「ふうん？　今も昔も学生の悩み事は変わらないねエ」

たゆん、と大きな胸が揺れる。

「いいだろうウ。一時的に君のやる気を爆発的に高める符術を使ってあげようじゃないカ」

「はい！　お願いします!!　俺、頑張ります！」

イツセーは元気よく返事をした。

「いい返事ダ。じゃあ行くヨ」

「はい！」

「ではペタツとナ」

オデコにキョンシーばりに符を張られると頭がクリアになる様な感覚を覚える。

「見えるぞー！　俺にも方程式が見える！」

通常の3倍の集中力と理解力、更には演算速度と記憶力まで上昇していた。怒涛の勢いで問題を解いていき



課題はみるみる内に減っていく。

しかし……！

「うう……ぐうう……！」

イツセーは悔しそうに歯噛みしていた。と、言うのもだ。

「あはア……♥分身君のオチンポ、もうこんなにバキバキじゃないかア……♥」

イツセーの分身がシユタークとセツクスしているからだ。

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……！」

「ほら、もつと激しく腰を動かしてごらんよオ♥今のキミはイツセー君の性欲の分離体なんだカラ♥」

シユタークは妖艶な笑みを浮かべながら、騎乗位でイツセーの分身と交わる。

（くう……！ 俺もシユタークさんとやりたい……！ あのドロドロでキツキツなのに、ギュウツと抱きしめてくれる様にチンポを包み込んでくれるマンコに突っ込みてえ！）

性欲を分離させてなお、この悔しがりと昂り様である。

分離していなければどうなるか。

「ほら、イツセー君、ボクのお尻を掴んでくれる？ そう、そのまま一気に奥まで突いてみてサ」

『は、はい！』

分身イツセーは言われた通りにシユタークのヒップを鷲掴むと、そのまま激しく上下に揺さぶる。

「ひゃああんっ♥いいネ、上手いよおっ♥でもまだ足りないかなア♥」  
『くっ……こうですか!?!』

イツセーは更に激しくピストン運動を繰り返すとシユタークは更に淫らに乱れていく。

「ああっ♥そうっ♥それだよおっ♥あああっ♥凄いつ♥凄すぎるよおっ♥」

嬌声、甘酸っぱい香水と混ざった臭い、瑞瑞しく柔らかな尻肉が分身イツセーの指が食い込む程に形を変える。そのあまりに淫らなシユタークの有様にイツセーの視界は涙に滲む。

(く、くそう！ まさか自分の分身が俺の目の前でシュタークさんと生でヤツてるなんて！)

悔しさと嫉妬に苛まれながらも、イツセーの手は止まらない。

『ああああっ！ イクっ！ 俺もイツちやいます！ シュタークさんの中に出しちやつてもいいんですかあっ!?!』

「あああ！ いいよオ！ ボクの危険日子宮に熱いのいっぱい注いでエっ♥イツセー君の目の前で、分身ザーメン子宮に流し込まれて妊娠しちやうウ♥」

(な、何だつてえ!?! 危険日に中だしだとっ！ そ、そんな事されたら本当に孕んじやうじやないのか!?)

これは浮気なのか？ どうなんだ？)

数学の課題を終えた明晰な頭でも答えは出ない。いや、人生とは明確な答えが出るものの方が少ないのかもしれない。ならば……。

「はあ……すごかったヨ……♥」

流石イツセー君の分身♥欲望に忠実で激しいセックスだったネ……

んひいいいつ!?!」

余韻に耽るシュタークの乳首が

まるで制裁を与えるかの様に強く摘まれた。

いつの間にか、分身を取り込みつつも

怒りと嫉妬により自我を失わずにすんだようだ。

とはいえ鼻息は荒く、目は血走っているが。

「あひっ♥な、なんだヨ、イツセーくうん♥」

「見損ないましたよシュタークさん！ 分身の俺にあんなにヤラせておいて、本命の俺にはヤラせないつもりなんですね!?!」

「えエ？ ちよ、ちよつと待ってくれヨ、イツセー君。コレはあくまでイツセー君が課題をクリアするためのサポートであって、別にキミを裏切ったわけじゃ……はうううっ!?!」

問答無用とばかりに、イツセーはシュタークの胸を暴力的に揉み引き、乳首をつねる。

怒りの籠もる猛攻と剥き出しにされた獣慾に

シユタークは鼻を鳴らして媚びてしまう。

「あふっ♥ま、また胸を乱暴にイ…………♥」

「こうでもしないとシユタークさんは浮気性だから、他の男にも色目を使うじゃないですか!」

「い、いや、それは違うヨ…………♥ボクはただ、皆と仲良くなりたくてだね…………」

「嘘だ! 俺というものがありませんが、俺以外の奴ともエッチする気満々じゃないですか!」

「そ、それはあ…………♥ひいい〜っ♥」

ジユボオツ!! と容赦も遠慮もなくシユタークの膣穴へペニスを突き刺す。あまりの刺激にシユタークは正気を

飛ばしかけた。

「お、おおおっ♥こ、これだヨツ♥これが欲しかったんだアっ♥『女殺し』の生チンポ♥

チンポしゅごいいいっ♥」

先ほどまでの余裕はどこ吹く風か、シユタークはだらしないアへ顔を晒して快樂に悶える。

「く、くそう…………! こんなに気持ち良さそうにしやがって…………!」

こんなの見せられたら、我慢できる訳がないじゃないかああっ!! この淫乱変態エクソシストめえっ!! そのオマンコで愛にはぐれた悪魔も退治して

みせろ! ほらっ! ほらあっ!!」

パンツ、パンツ、と腰を打ち付ける音が響く度に、

シユタークは喘ぎ、身体を震わせる。どれもこれもが

イツセーの望むリアクションだ。

「はあ…………♥はあ…………♥しゅごいい…………♥やつぱり、イツセー君のチンポが一番イイ…………♥」

「そんな事を言ってアザゼル先生にも媚びを売って抱かれていますんだろう! この浮気者ツ!!」

ハーレム神を目指す男が、女を寝取られて黙っているはずもない。他の相手にはしないであろう

懲罰の鞭打ちにも等しい突込みとスパンキングが  
シユタークを襲う。

「ああっ♥ダメえっ♥そんなに強く叩かれたら、ボクのお尻が真っ赤に腫れちゃうよオっ♥」

「うるさい！ 尻を叩かれて感じるなんて、マゾヒストのドMじゃないですか！ そんなに尻をぶたれたいなら、いくらでもぶってあげますよっ！」

バシッ！ バシ！ バシ！ イッセーはシユタークの尻を叩きまくる。

「ああっ♥あうっ♥痛いっ♥でも、気持ちいいよおっ♥」

「くそう、くそう……！ 俺が、俺が先にシユタークさんのマンコに突っ込んで孕ませてやるつもりだったのに……！ 掻き出してやる

……！ 分身の俺や、他の男どもの精液全部……！ 俺のザーメンで上書きしてやるツツ!! 俺の……！ 俺だけのシユターク……!!」

覇龍化しかねない程の愛憎の炎にイッセーは身を焦がす。その炎は火力発電所さながらにタービンを回し

爆発的なピストン運動のエネルギーを生み出していた。

「あうう♥ひいっ♥ひいっ♥」

「はあはあはあはあ！ もう限界です！ 出しますよ！ シユタークさんの中に出しちゃいますからね！ 覚悟してくださいっ！ 孕め……！ 孕め!! アザゼル先生でもなく、赤龍帝でもないこの俺……兵藤一誠の子供、産めっ！」

念を押しつつ汗ばむ尻肉を掴み、思い切り引き寄せると子宮口に龟头を密着させ、射精した。

「ああああっ♥熱いイイイっ♥子宮にザーメンいっぱい出るウウウウウウっ♥♥♥」

どぷり、どくり、と子宮に流れ込む白濁のマグマ。

子宮はたちまち満たされ、結合部から逆流する。

しかしイッセーはそれでもまだ足りないのか、腰を動かし続け、最後の一滴まで絞り出すように、シユタークの子宮口に押し当てる。

「あふう……♥熱いよオ……♥イッセー君の子種汁、熱くて濃厚でネ

バネバで、ボクの卵子を受精させようと頑張ってるよオ……♡」

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……」

二人は見つめ合うと口づけを交わした。

「んふう……イツセー君、好き……大好きだよ……♡」

「シユタークさん、俺も好きです……」

そして再び唇を重ねる二人。

「んちゅ……んん……イツセー君、もう一回シよう……?」

「はい……」

まるで射精自体がなかったかのように、イツセーのペニスは力を取り戻し、シユタークの膣穴へと突き刺さる。と、その時。

「い、いけませんイツセーさん！」

そんな暴力的に女性を抱くなんて……!」

ドアを開くと共にアーシアが猛然と

抗議の声を上げた。

「い、いや、これは違うんだよ！ アーシア！」

慌てて弁明するイツセーだが、

「嘘です！ 私にはわかります！ イツセーさんがシユタークさんに酷いことをしているのを私は知ってるんです！」涙目になってアーシアは訴える。

「そんな、暴力で女の人を無理矢理従わせようとするイツセーさんなんて見たくないですう！」

「あ、アーシア……!?!」

あのアーシアに否定され、イツセーは砕け散りそうな程の衝撃を受けた。

(そ、そうか……そうだよな……)

俺は今まで女の子に対して優しく接してきたつもりでいたけど……それは間違っていたという事なのか……

こんな乱暴に、自分勝手に、欲望のままに女を犯してしまうのが本当の俺の姿だというのか……? じゃあ、俺は一体どうすれば……!)

ハーレム神を目指すイツセーの足元が揺らぎかけたその時、シユ

タークが口を挟んだ。

「フフフ、アーシアちゃんはまだまだ子供だねエ♥愛の形は人それぞれサ。イツセー君はただ単にボクと愛し合いたいだけなんだヨ。だから、何も問題はないんだ……♥」

「え、でも……でも……!」

「なら、アーシアちゃんもイツセー君にスパンキングされてみたらどうだい? 百聞は一見にしかずと言うだろう?」

「あ、あうう……そんなあ……」

アーシアは赤くなり、たじろぎながらも嫌がる素振りは見せない。寧ろ、他者へ奉仕するのがアーシアの喜びであるからマゾ的な趣味も

あるのやもしれない。

「わ、分かりました……! イツセーさんが望むなら、私……頑張ります……!」

「お、おい、アーシア!」

するする、とパジャマを脱ぐと

益々成長したアーシアのおっぱいとお尻がイツセーの目を引く。

(夏休みの間にまた大きくなったんじゃないか……?)

アーシアの裸身を見て、思わず生唾を飲み込むイツセー。

「あ、あんまりジロジロ見ちゃダメですよ……♥」

と、言いつつアーシアはベットにもたれ掛かり、成長した尻をイツセーに向ける。

「ほおラ、イツセー君。遠慮なく叩きたまえよ。大丈夫、ボクが保証してあげるヨ。この子は打たれても悦ぶタイプだってネ。さあ、やってみたまえ」

「い、いや、でも……」

「さあ、早く」

躊躇うイツセーを急かすシュターク。

「う、うう……えいつ!!」

イツセーはシュタークの言葉に押され、思い切って手を振り上げた。

バシイッ!!

「きゃうっ!!」

汗によつてか湿った音が響き、アーシアの汗と太腿を伝っていた愛液が飛び散った。

「あうう……♥」

「こ、これでいいんですか……?」

「ああ、それで良いとも。アーシアちゃんの身体に刻み込んであげてよ。イツセー君の愛情をたくっぷりとネ♥」

「は、はい……!」

イツセーは更に二度三度と尻を叩き続ける。

「あうう♥痛いですう♥」

「ご、ゴメンよアーシア!」

「謝らないでください♥私、嬉しいんです♥イツセーさんが私の事を想って叩いてくれていると思うだけで……♥」

「あ、アーシア……!」

その言葉にイツセーの胸は高鳴る。

「あはは、イツセー君、ボクの言った通りだったろう? アーシアちゃんは打たれれば打たれるほど、より一層感じちゃうんだ」

「は、はい……♥もつと、もつと強く叩かれてもいいんですよ♥」

「そ、それじゃあ……」

イツセーは少し力を込め、再びアーシアの尻を打ち据えた。

「あひイン♥」

「あはは、イツセー君、ボクの時より力が入ってるじゃないか。妬けるねえ」

「す、すみません……」

「まあいいさ。アーシアちゃんの身体は極上だからネ。仕方がないさ」

そう言うとシユタクはアーシアの

整ったアナルに蛇の様な舌を差し込んだ。

「あふうん♥」

「ふふふ、可愛い声を出すじゃないカ。アーシアちゃん。

ボクも負けていられないネ。んちゅ……んむう……」

シユタークは自分のクリトリスを指で擦りながら更にアーシアの腸内を嘗め回し、更に勃起したイツセーのペニスを握り締める。

「んちゅ……んふう……イツセー君、アーシアちゃんのお尻に挿入れてあげたらどうだい？ きつと気持ちよくなるサ」

「え、で、でも……まだ慣れていないんじゃないやあ……」

「大丈夫だよ。それに、アーシアちゃんもキミのチンポで犯されたくてウズウズしているみたいだしねエ」

シユタークは鼻歌交じりな様子で

アーシアの赤みを増した尻たぶを

ぐいっと左右に割り開く。シユタークの舌によつて解されたアナルはヒクつき、まるで別の生き物の様に脈動していた。

イツセーは恐る恐るといった具合にシユタークの指示に従い、アーシアの小さな蕾へと己の男根を突き刺していく。

「はうっ……！ うう……！」

ずぷっ！ 亀頭が埋没し、アーシアは苦悶の声を上げる。しかしそれも束の間、すぐに快感が押し寄せてきたのか表情が蕩けていく。

最も表情はイツセーからは見えないが。

「痛くないか？ アーシア……」

「はあ……ああ……うう……」

(やっぱり抜いた方が……)

イツセーがそう思った瞬間、シユタークはアーシアの顔を覗きこむ。

「いやア大丈夫サ。アーシアちゃんはお尻の穴でも感じちゃう淫乱悪魔シスターだものねエ」

アーシアの耳に舌を這わせ、耳元で囁きかける。

「あうう……そ、そんな事……言っちゃダメえ……♥」

「フフン、強情だね。でもそんな所がまた可愛らしいんだけどサ」

「あう……あ、ああ……♥」

アーシアは乳首と耳穴を責められ、快樂に喘ぐ。

(だ、大丈夫かな……？ アーシアが益々エッチになってしまうので



は？

……それはそれで!!)

何とも現金なものでイツセーのペニスはアーシアの痴態を見て更に硬度を増す。

「さあ、イツセー君。アーシアちゃんを満足させてあげようじゃないか」

「は、はい……!」

イツセーはシユタークの言葉に押され、アーシアの腰を掴みピストン運動を開始した。

「あっ……! ううっ……♥」

アーシアは苦痛と悦楽が入り混じったような声を上げ、尻を震わせる。

イツセーは激しく肉棒を出し入れしながら、アーシアの尻を平手で打ち据えた。

パシンツ!

「あうう♥」

「ご、ゴメンよアーシア……でも、これが一番いいんだろ……?」

「はいい……♥ イツセーさんにいっぱい叩かれて……私、凄く感じますう……♥」

イツセーはアーシアの尻を叩きながら、何度も抽送を繰り返す。

そしてアーシアはその度に枕に顔を埋めながらもしつかりと、イツセーのペニスをアナルで締め上げていく。無垢なアーシアを自分の手で開発していく倒錯的な快楽にイツセーは正気を失いかけるまでに酩酊していた。

「あ、ああ……イキそうだ……!」

「はいい……私もですう♥」

イツセーは更に強くアーシアの尻を打ち据え、遂に絶頂を迎える。どびゆるるる!! 熱い精液がアーシアの腸内に放出され、アーシアもまた達した。

イツセーとアーシアはそのまま倒れこみ、お互いの荒い息遣いだけが部屋に響く。

「はあ……はあ……イツセイさん……♥私、エツチな子でしょうか……？」  
「こんな風にされて……嬉しいなんて……」

「あ、ああ……最高だよ、アーシア……」

イツセイはアーシアを抱き寄せ、口づけを交わす。雨降って地固まる、という諺がある様に二人の絆はより一層深まったようだ。

「愛憎、そして妄執……また一つ焼き付けたネ、フフ」

## ※第79話（イツセー×ゼノヴィア&イリナ）

ゼノヴィアは天界の一角で天使達と模擬戦を行っていた。

「どうした？ もっと私に攻撃を当ててみる」

ゼノヴィアが挑発的な笑みを浮かべ、デュランダルを構える。

「ヌウウ……い！」

対する天使達は歯噛みし、その身に宿る魔力を全開にしてゼノヴィアへと斬りかかった！ だが――

「フツ」

ゼノヴィアはそれを軽く受け流すと、デュランダルを一閃させ、天使達の鎧を破壊していく。

そして数秒後、そこに立っていたのは――

「……くっ!?!」

様々な男装の麗人達が地面に膝を突き、荒い息を上げていた。

そんな彼らをゼノヴィアは冷たく見下ろす。

「まだだ……まだ私は負けていないぞー！」

悔しげな表情と共に一人の女天使が立ち上がった。きた。

「ほう?？」

ゼノヴィアはその女性天使を見据えると、小さく笑う。

「なら来い。私が相手になってやろう」

「言われずともー！」

そう言うなり、女性は両手に持つ剣を構えて突進してきた。

それを見たゼノヴィアはスツと目を細めると、彼女の攻撃を弾き返すのではなくあえて受ける。

そしてデュランダルで相手の攻撃を受け止めた瞬間、女性の身体がふわりと宙に浮いた。

「うぐっ……!?!」

そのままゼノヴィアに蹴り飛ばされた彼女は空中で体勢を立て直すと着地し、再び向かってくる。

しかし次の瞬間には既にゼノヴィアの姿はなく、気づいた時には背後から首筋に刃を押し当てられていた。

「勝負ありだ」

ゼノヴィアの言葉を受け、女天使は悔しげに歯ぎしりをする。そして他の者達も同じように武器を収めていった。

「……………」

イツセーはゼノヴィアの成長ぶりに

感心しきりで、つい先ほどまで行われていた模擬戦を眺めていた。傍らに居るのは今や彼女の師匠に

治まっているボールクだ。

「ゼノヴィア、いつの間に強くなつたなあ……」

先の模擬戦で見たゼノヴィアの動きは以前より格段に上達しているように見えた。

イリナとボールクの力を借りたとは言え、ミドガルズオルムを倒したのは伊達ではないという事だろう。

「ふふ、どうだイツセー。」

あれだけの強さを見せられては私の女としての魅力にも気づかざるを得まい？ さあイツセー、遠慮はいらぬぞ？ 私の胸に飛び込んでこい！」

「何でそうなるんだよ！ 人前、もとい天使達の前でよく言えるなお前は！」

ゼノヴィアの大胆発言に対し、イツセーが顔を真っ赤にして叫ぶ。

「しかもイリナの部下達もいるんだぞ?！」

イツセーの言う通り、今ゼノヴィアと模擬戦を行なった天使達は皆イリナ、もといラヴリエルの直属の部下である。

「相変わらずね、二人共」

と、そこへラヴリエル、もといイリナが近づいてきて苦笑いを浮かべる。やはりミカエルの側近となり、

かつまた天使となったためか

以前とは雰囲気が違う。

以前のようにおちやらかした面影は一切なく、どこか堂々とした態度であった。

「しかし、このバトルスーツの性能には驚かされたよ。まるで聖人の

加護を受けたかの様だ」

「ふふふ、そうでしょう。ガブリエルの水の力をベースに私が改良したものだから！」

ゼノヴィアの言葉を受けて、イリナは得意げな表情となる。

(それはいいんだけど……)

イツセーは目のやり場に困っていた。と、いうのは件のバトルスーツはまるで極薄のラバースーツのようなデザインのだが、それが身体にぴったり張り付いているため体のラインがくつきり出ているのだ。

更に言えば、イリナとゼノヴィアはスタイルが良いためか余計エロく見えてしまう。

「あら？ どうしたのかしら兵藤くん？」

「……」

わざとらしくイリナが訊いてくる。

イリナも同様のバトルスーツを纏っているがゼノヴィアの青に対してピンク色のスーツを着ているため、こちらはこちらで艶めかしさが倍増していた。

「べ、別になんでもないよ！ ただちよつと目線が吸い寄せられるだけで！」

慌てて視線を逸らすイツセーだったが、ゼノヴィアがニヤツと笑みを見せる。

「そうなのか？ 私は別に構わないぞ？」

「こつちが良くねえんだよ！ つたく！ お前達はもう少し恥じらいを

持ってくれよ！」

イツセーは頭を抱えながら嘆息する。やはりリアス、朱乃、アース、果てはリースやミダーラと、

数多の女性と愛を育んだためか

色事に対して余裕ができたのかもしれない。

「というかお前ら、ゼノヴィアはともかくイリナは天使になったんだろ！ 墮天したらどうするんだ！」

イリナの羽が白黒に点滅する様を見ながらイツセーは叫ぶ。

「ああっ!? いつの間に……!」

何と言う事なの! 愛しあっているのに結ばれない定めなんて!

よよよ……!」

芝居がかった口調でも言いつつ、両手で顔を覆うイリナ。

それにしてもよよよ、はないだろう。いつの時代の表現だ。とイツセーは内心ツッコミを入れる。

「大袈裟過ぎるわ!」

「まあまあ落ち着けイツセー。」

私は人間だから問題はないぞ?

だから子づくりしましょう?」

「急にトーンを変えるな!」

立場は変われど相変わらずのイリナとゼノヴィアの様子にイツセーは辟易しながら、ボールクに話しかけた。

「あの二人はどうしてあんなつたんですかね?」

「さあな。貴様はニグラによって肉体を外なるものから再構築された存在。異性を魅了する能力が備わっていても不思議ではあるまい」

「うーん……。俺としては女性を惹き付けるのはあまり嬉しくないですけどね……」

イツセーはボールクの言葉に複雑な気分で頭を掻いた。確かに自分がモテるのは嬉しいのだが、同時にある種の虚しさも感じ始めているのだ。兵藤一誠を愛してくれているのか、

それとも異能者である赤龍帝という存在を愛してくれているのか——そんな考えが脳裏に浮かぶようになっていた。

贅沢な悩みではあるのだが、この手の懊悩は一度宿るとそう簡単には消えてくれないものだ。証明する手段がないのだから、尚更である。

ひたひた、と狂気が這い寄る様な感覚にイツセーは近頃苛まれている。

シユタークやアーシアに対して倒錯的なセックスを求めてしまっ

たのもその影響かもしれない。

『その答えはお前自身で見つけなければ理解はできても納得はできん  
だろうな。だが、今は目の前の事に集中しろ』

不意に、イツセーの内に宿るドライグが語りかけてきた。

「そうだな、悪い」

イツセーは気持ちを切り替える様に深呼吸すると、改めてボールク  
に向き直る。

「それで……ボールクさんは俺を天界に招いて何をさせるつもりなん  
ですか？」

「それは私から説明します」

と、そこへ割り込んできたのは

政務を終えたばかりのミカエルが  
姿を現した。

「お久しぶりですね、兵藤一誠くん」

「はい。ご無沙汰してます」

イツセーはミカエルに向かって頭を下げると、ミカエルは微笑を浮  
かべつつイツセーの身体を見る。

「ふふ、以前と比べて随分と成長しましたね。今の貴方ならば黄金の  
剣の力も引き出せるでしょう」

（あの剣は今、エルシャさんが

使っているんだよなあ……）

イツセーは内心で呟くも、とりあえず話を進める事にした。

「……それで、俺はこれからどうすればいいんですか？」

「そうですね。今日はまず貴方とイリナに試してほしい事があるの  
で、それをやってもらいます」

試してほしい事とは何だろうか。

と疑問を抱きつつ、ミカエルの案内のもと、とある棺の様なものが  
安置されている場所へと通された。

「これは……？」

「これは聖櫃、と呼ばれるものを

複製したものです」

「せ、せいひつ?」

聞いた事のない単語に首を傾げるイツセーにイリナが説明する。

「イエス様が神のもとに召された際納められた棺の事をそう呼ぶの。神滅具とは違って聖遺物。この棺の中の空間は基本的に干渉できない、強大無比な結界が張られているのよ」

「へえ……」

「残念ながらオリジナルの聖櫃、聖骸布は旧大天使のリーダーであるラジウルに持ち去られてしまいました……」

旧大天使の狙いはラミエルを取り込んだヴァーリから聞くところによると神器を収集、融合することによる

神の復活だと聞いている。恐らく

足取りが掴めないのは聖櫃や聖骸布によるものではないか。との話である。

「でも、これがどうかしたんですか?」

イツセーはもつとも質問する。

「はい。これを、貴方達に使ってもらおうと思ひまして」

「え、俺一応リアスさんの駒として悪魔になつた筈なんですけど……」

「大丈夫ですよ。あなたの肉体は

今や規格外の存在ですからね」

ミカエルは笑顔で言い放つ。

「それに、これはあなた方にとつてとても重要なものになるのです。是非とも協力してください」

「……分かりました。やりましょう!」

ミカエルに促され、イツセーは気合を入れて聖櫃に手を当てる。すると、イリナ、ゼノヴィアと共に

中へと吸い寄せられていった。

↓

「やあ、イツセー君。元気かい?」

なんと聖櫃の中にいたのはゲイトであった。まるで清掃員のような身なりで、箒とちりとりを手に行っている。

「げ、ゲイト先生!」



「あら、意外そんな顔をするじゃないか」

「そりゃ、まあ……。つてか何でここに？」

「掃除のためだよ」

思わずすてーん、と転びそうになるイツセーだが堪えた。相変わらず天然というか超然的というか、不思議な人だ。

「ここは『システム』からの干渉を受けないある種の聖域、にしたいというからね。だから僕が派遣されたんだ」

「成る程……」

イツセーは納得して周囲を見渡す。

ピンク色の装飾にウオーターベット……。何やら怪しい雰囲気。漂う室内に、イツセーは僅かに頬を染めた。

「……なんか、如何にもな感じの部屋ですね」

「うん？ 何でもここで天使達の『訓練』を行うらしいね。そのための設備を整える必要があるとミカエルが言っていたよ」

「そ、そうですか……」

そういえば、先ほどミカエルは「試してほしいことがある」と言っていたな。まさかこの部屋でやる事とは。とイツセーは思うも、それより先にゲイトが口を開いた。

「墮天せずにセックスする訓練、というものをしてみたいだね」

「やつぱりなああ!!」

あまりにも予想通りの展開にイツセーは絶叫するも時すでに遅し。

イリナもゼノヴィアも既に準備万端だった。二人共何やらラバースーツのようなものに身を包んでいる。

(ああ、もう……。！ どうしてこうなるんだよ……。!!)

イツセーは半ば諦めの境地のため息をつくがこうなればやむを得ない。

「けど、俺のやり方でやらせてもらいますからね！」

「ああ、そうするといい」

かくしてイリナとゼノヴィアとの淫靡な戦いが幕を開けたのである。

「先ずはイリナ、ゼノヴィア。

二人はオマ○コとお尻、どっちを見られるのが恥ずかしい？」

イツセーはまず、二人の羞恥心を確かめるべく、そんな質問をぶつけてきた。

「そ、そんな……！ オマ○コなんて言えるわけ……！」

「ふーむ。私は尻だな……。鍛えてはいるのだが、どうも肉付きがよくてな……」

イリナは恥じらいつつ、ゼノヴィアはどこか誇らしげに答える。

「そ、そうか……」

「じゃあ俺にその恥ずかしい所を見せてみる」

「うう……！ わ、分かったわよ……！」

「仕方がないな……」

イリナは意を決し、ラバースーツの股間部分を突きだすように開く。

「こ、これでいいんでしょう……？」

「くっ……！」

イツセーは思わず生唾を飲み込む。

なんと、そこには見事なまでの縦スジがあったのだ。男を知らないであろう清純さを残しつつ、しかし女としての性を感じさせる。

それはまさに神秘の造形美と呼ぶに相応しいものであった。やはり大天使に転生したただけあって、イリナの肉体の完成度は高いようだ。

「な、何か言つてよ……」

「す、すまん……」

イツセーが見惚れている間に、今度はゼノヴィアがラバースーツに覆われた臀部を突き出してくる。こちらもまた素晴らしいもので、張りのあるヒップは芸術的な曲線を描いていた。

「おお……」

「こ、こんな感じで良いのか？」

「あ、ああ……」

イツセーは思わず感嘆の声を上げるが、そこでハッと我に返った。

「ごめん、ちよつと待ってくれ。

今メモ取るから」

「ええ!？」

「おいおい……」

突然の事に驚く二人だがイツセーは構わず、紙とペンを取り出すと、それを目の前の光景を模写し始めた。

「いやあ! 何してるのよお!」

「流石の私もこれは……な」

「まあまあ、これも墮天するのを本当に防ぐ事が出来ているのかを調べる為なんだから」

イツセーの言葉にイリナとゼノヴィアは納得するしかない。

「まあ、そうだな。仕方ない」

「うん……」

二人は覚悟を決めると、それぞれ股間部分を指差した。

「私はこちらが特に恥ずかしいわね。ほら、クリトリスが大きいでしょう? だからそこを見られると凄く興奮するの」

「私は尻の方だな。鍛えてる分、肉付きが良いだろう? そこを見られてみると妙にドキドキするんだ」

「よし、よく言えたね」

イツセーは満足げに笑うと、早速デッサンを始める。まずはイリナからだ。

「んんっ……! んんん……!」

「くっ……! んんん……!」

イツセーの視線が自分のコンプレックスの根源に注がれているのを感じ、イリナとゼノヴィアは顔を赤らめる。イツセーは時折感想を挟みながら、一心不乱にスケッチしていった。

(ああ……♥見られてるう♥)

私のオマンコがあ……♥)

(くっ……! 尻の割れ目まで……! 一体どれだけ観察するつもりだ!?)

二人は屈辱に震えるも、呼気はっしとりと湿りを帯び始め、秘部か

らは蜜が溢れ始めていた。

イツセーは勿論見逃さず、二人が興奮している様を言葉攻めで責め立てる。

「おやおやく？ 随分と濡れてきているじゃないか？ もしかして見られただけで感じたのかな？」

「ち、違うわよ……！ これは汗で……」

「わ、解らない♥解らないがあ♥」

イツセーに私の恥ずかしい所を見られてるとお♥体が熱くなってきてしまうのだ……♥」

「へえ？ そうなのかい？ じゃあその証拠を見せて貰おうか？」

イツセーはニヤリと笑い、ゼノヴィアの尻を撫で回し始める。

「ひゃあん！ い、いきなり何をする……！」

「あれ？ 俺はただ触っているだけだぜ？ それが嫌ならやめようか」

「くっ……！」

ゼノヴィアは齒噛みするが、体は正直だった。イツセーの手の動きに合わせて尻をフリフリと揺らしてしまう。

「どうしたんだよゼノヴィア？ そんな風に尻振ってさ？」

「う、うるさい……！ こ、これはお前が……！」

「ああ、悪い悪い。つい手が出てしまった。

詫びとしてもつと激しく揉んでやるからな？」

「な、何だと……！ うう……！」

ゼノヴィアは頬を染めながらも体を震わせて悶える。そんな彼女を見て、イリナは思わず声を上げた。

「ちよ、ちよつとゼノヴィア！ そんなにいいようにされて悔しくないの!？」

「し、仕方がないだろう……！ イツセーに触れられると気持ち良くて逆らえなくなってしまう……！」

「そ、そう……」

イリナは呆れつつも、自分もまたイツセーに触れられたいと願っていた。

「ねえ……！ 私にもしてよイツセー君！」

「ああ、いいぜ、イリナ……」

イツセーはイリナのラバーズーツ越しに胸を鷲掴みにする。

「ああっ……♥イツセー君の手がおっぱいにいい♥」

「おお、やっぱり大きいな……。それに柔らかい……」

けど、感度はかなり良いみたいだね」

イツセーは両手に力を込め、乱暴にイリナの乳房を弄ぶ。

「はあんっ！ イ、イツセー君激しすぎよお♥」

「はははっ、ごめんごめん。」

じゃあ次は乳首だな……」

イツセーはラバーズーツに包まれたイリナの乳首を摘まむと、グリグリと押し潰す。

「ああああんっ!! イツセー君に乳首いじめられちゃったあ♥」

「おいおい、まだ始まったばかりなのにもうこんなになってるぞ?」

「はあ……♥だってえ♥イツセー君が上手すぎるんだもん……♥」

散々女性を抱いたイツセーのテクニクはイリナには刺激が強すぎたようだ。早くも絶頂寸前といった様子である。

「ふーん。じゃあここはどうかな?」

イツセーはラバーズーツの股間部分に手を突っ込むと、イリナの秘裂を指でなぞる。

「ああっ?! イツセー君そこはダメええええっ!!」

イリナが悲鳴を上げるがイツセーは構わず、イリナの最も敏感な部分を擦り続ける。

「あひっ！ あひいいいいいいっ!!」

あまりの快感にイリナは絶叫を上げながらガクガクと痙攣する。

「イツセー！ イツセーイツ！ イクウ！ イツちやうのおおおおとおおおおおっ!!」

次の瞬間、イリナの全身から力が抜け、ウォーターベットに倒れ伏した。

「はあ……♥はあ……♥」

むちり、

と豊満な肢体を投げ出し、ビクン、ビクンと震えるその姿は実には官能的であった。すると毒蛇の如くイツセーのペニスがラバーズーツ越しにイリナの処女膜を突く。

「あ、あああ……♡」

イリナはその大きさに圧倒される。だが同時に子宮の奥が疼き、愛液がドプドプンと溢れ出す。

(これが男の人の……♡なんて大きな……)

「くくく、どうしたんだい？ そんな物欲しそうな顔して？」

「い、いえ、何でもないわ……！」

「そうか？ それなら良いんだけどね？ ほら、入れるよ……！」

「え!? 待ってイツセー君！ 心の準備が……！」

イリナは慌てるが時既に遅し。イツセーの剛直が一気に奥まで突き入れられた。

「ああああっつつつ!!」

破瓜の痛みと衝撃がイリナを襲う。しかしそれは一瞬の事だった。

「はあっ……♡はあっ……♡」

ジュンツ、と蜜壺から大量の蜜が分泌され、イリナの表情は蕩けるような笑みに変じてしまう。

(ああ……♡私、天使だけど墮天しちやいそう♡イツセー君のおちん○んで犯されて凄く幸せだわ……♡)

「くっ♡ふううっ♡んんっ♡」

雌犬のように喘ぎ声をあげ、麻酔針を撃ち込まれたかのように身体も精神も弛緩していく。

「ああっ♡ああっ♡すごおいつ♡おっきいいつ♡ドクドクって脈打ってる♡」

墮天を防ぐ筈のラバーズーツも今では即席のコンドームに成り果ててしまっており、その事実が更にイリナを興奮させる。

「ふう……！ 流石にキツイな……！ けど、この締め付け具合は癖になりそうだ……！」

「あはあっ♡イツセー君に喜ばれて嬉しいいつ♡」

「おいおい、ラヴリエル様。大天使のお前が悪魔と繋がって悦んでど

うすんだよ？ これじゃあ本当に墮天しちゃうぜ？」

つい、イツセーはからかいの言葉を口にしてしまう。

「あ、あうう……！ で、でもイツセー君だから良いもん……！」

「そう言ってくれると俺も男冥利に尽きるが……！ そろそろ動くぜ？」

「うん……！ 来て……！」

イリナの言葉と同時にイツセーは腰を振り始める。

ぐぢゅっ！ ぐぢゅっ！！ 肉と肉がぶつかり合い、卑猥な水音が鳴り響く。

「あはあっ♥ああっ♥あああっ♥」膣内を蹂躪される度にイリナは艶めいた声で鳴き叫ぶ。

「ああっ♥イツセー君好きいつ♥大好きいつ♥」

元悪魔に愛を捧げるといふ大天使にあるまじき行為。しかしその背徳感さえも今のイリナにとっては快樂の一部だった。快樂に支配されながらもその羽は白痴の様に白い。

「ああ、知ってるよイリナ。俺も好きだよ……」

「イツセー君……♥」

二人は見つめ合うと、自然と唇を重ね合わせる。互いの舌が絡み合い、唾液を交換し合う。

「ちゅぱ……♥んふ……♥れる……♥」

(ああ……♥気持ち良い……♥イツセー君とのキス、最高……♥)

イツセーはイリナの頭を撫でながら、より一層激しくピストン運動を行う。

「んっ♥んっ♥んっ♥んんんんっ！！」

子宮口をノックされる度、イリナの視界で火花が散る。もう限界が近いようだ。

「イ、イツセー君！ もうダメエ！ イク！ イツちやう！ イツちやうのおおっ！！」

「ああ、いいぞイリナ！ 一緒にイクぞ……！」

「あ、ああああああっ！！」

イリナは絶頂を迎えるとイツセーの亀頭から大量の精液を子宮に

流し込まれる。

「あ、熱い！いいいいっ!! ゴム越しでも分かるくらい熱くて濃いの出てるううっ!!」

イリナは歓喜の声を上げ、体を仰け反らせる。そして数秒後……。「おおっ♥溶けてるっ♥スーツが溶けてえ♥イツセー君のが入って来るう♥」

ペニスの先端部分のみが溶け、精液が子宮に直接注がれる。

「あ、ああ……♥こんなに出されちゃったら絶対デキちゃう……♥」  
子宮内に放出されたザーメンの量は多く、イリナの腹部が僅かに膨らんでさえた。

「はあ……♥はあ……♥」

「ははは、凄い量だな。それにしてもお前の中、かなり良かったぜ？  
またやろうな？」

「ええ……♥今度はちゃんと生が良いわ……♥」

イツセーの射精により彼女の心は既に堕ちかけていた。ずぼっ、と抜かれたペニスには、未だ衰えぬ剛直が聳え立っている。

「あ……♥」

イリナは名残惜しそうな目でそれを見るが、下腹部が燃えるように熱い。ラバースーツが一滴たりともイツセーの精液も漏らすまい、と張り付いてくる。

（ああ……だめえ♥動けない♥

イツセーにもっと中出しされたいよお……♥オナホ扱いされてもいいから犯して欲しい……♥）

ぼやける視界の先ではゼノヴィアとイツセーが寝バックの態勢で繋がっている。

（ああ……♥あんな風に後ろからガンガン突かれないよお……♥）

イリナの視線に気付いたのか、ゼノヴィアは彼女の方に振り向くと、ニヤリと笑みを浮かべる。

「んっ♥んんっ♥寝バック気持ち良すぎるう♥親友に見られながら犯されるなんて私、興奮しちゃううっ♥」

イツセーに責められるゼノヴィアの尻肉はまるで別の生き物のよ



うに躍動し、突き破られたラバースーツからはみ出た桃色の花卉は、ヒクツ、ヒクン、と痙攣している。

「くっ……い！　ゼノヴィアのマ○コ、締め付けが凄いな……い！」

「あああつ♥イツセーのが奥まで来てるう♥硬くて太いのが私の一番感じる所を何度も擦ってえ♥

メスになっちゃおう♥イツセーのチンポでメロメロになっちゃうのお♥」

ゼノヴィアは腰を上下に動かし、イツセーのペニスを貪欲にしゃぶる。その度に結合部からブチュツ！　グチヨツ！　という淫靡な水音が鳴り響く。

（あああつ♥羨ましいよお……♥）

その様子を見ていたイリナの子宮はキュンと疼き、愛液を垂れ流す。

そしてゼノヴィアもまた恥部を晒す様に股を大きく広げ、腰を前後に揺さぶり始める。

イツセーは更に激しくピストン運動を行い、二人は獣の様に快楽をむさぼり合う。

その光景はまさに絶景であった。

そんな二人の交わりをイリナはじつと見つめている。

「ああーっ♥イグウツ♥安産型のデカケツ振ってイツちやうのおおっ♥」

イツセーのペニスによって、限界を迎えたゼノヴィアは全身を激しく痙攣させ、盛大に潮を吹き出す。

同時に膈壁が収縮し、イツセーのペニスを痛いほどに締め付ける。その強烈な刺激に耐えきれず、イツセーは大量の精液を流し込む。

ビュルルルーツ!!　ゼノヴィアはその熱さに身悶える。

しかしそれでもイツセーの射精は止まらない。

（あああつ♥イツセーの精液、子宮にドクドク流れ込んで……♥）

熱い奔流が子宮を満たす感覚に酔い痴れながら、ゼノヴィアは意識を失った。まるで秘湯に溶けてしまうかのように。

さて、その頃……。

安里は帰宅の最中、とある女性に呼び止められていた。

場所はよりにもよって商店街のアーケードだ。

「フフ、お久し振りね。あの女は元気にしてる?」

「デメエ……」

安里のこめかみに青筋が浮かぶ。

解っていてこちらを挑発し、弄ぶ意図が見え見えだったからだ。

「あら怖い。未来の義妹になるかもしれない相手に、随分な態度じゃない? まあ、あんなアバズレに絆される下賤な男に嫁ぐくらいなら、オークかゴブリンの慰み者になった方がマシだけど、アハハハッ!!」

堂に入った悪役令嬢の高笑いを披露する美女。

その美貌は見る者を魅了する程だが、内面が外見とは真逆なのは言うまでもない。まるで蠍か毒蜘蛛だ。

「ここが地上だからって安心してんのか? ルイーナのためなら俺ア形振り構うつもりなんざねえ」

「まあ怖い。私はその気になれば」

あの雌豚に相応しい地獄を見せてあげますわよ?」

「何だと……!?!」

目の前の女、もといベラナディアは明らかにルイーナの身柄を拘束しているのだ。と、言う事はフリードや『英雄殺し』の一件も、この女の差し金に違いない。血は繋がってはいないというのに姉をここまで憎悪するなど安里には理解不能だったが。

「……で、今日は何用だよ?」

「そうですね……。簡単に言えばあの兵藤一誠だったかしら? あの汚らわしいトカゲを貴方の手で殺して頂戴?」

安里は怒りで我を忘れかけた。

一誠は無二の親友である。最愛のルイーナのためとはいえ、天秤にかけられるものではない。ましてや一誠が死ねば、間違いなく彼の心は壊れてしまうだろう。

「……ふざけんな。一誠に手を出すんじゃないよ。アイツは……俺の  
ダチなんだからよオ……！」

「ふうん。断るって訳ね。じゃあ、  
これをご覧なさいな」

と、言つてベラナディアは懐から携帯端末を取り出す。そして画面  
を指差すと、そこには衝撃的な映像が表示された。

「な……なんだと……!?!」

ルイーナがネフレンと思しき男と

談笑している所だ。まるで安里と初めてデートした時の様な笑顔を  
浮かべている。

「アハハハハハ！ ご覧なさいな！

あんな豚の様な男にすら媚びを売るなんて！ 本当に哀れなもの  
よね！ だから弱いヤツは大好きよ！ 無様で、滑稽で、その上醜悪  
だもの！ 笑いが止まらないわあ！」

嘲笑うベラナディアとは対称的に安里の顔は血を抜いた様に蒼白  
となる。今すぐにも駆け出したい衝動に駆られる程だ。

「まあ、アンタも別にいいでしょ。

口ではあの雌豚を愛しているといっても他の女にせっせと種撒き  
をしているんだから。それとも私と取り引きする気はないの？」

「……テメエの目的は何だ……?」

「私の目的？ 解らないの？」

これだから下賤な男は嫌いよ。私はね、私が愉しむために生きてい  
るの。そしてその楽しみを邪魔する者は誰であろうと容赦しないわ。  
それが姉であろうと何であろうとね」

ケラケラと嗤うベラナディア。

安里は拳を握り締める。

「テメーは宇宙人かよ？」

「ハア？ 私から言わせればお前達の方が異邦人よ？ 世のため人の  
ためなんて虫唾が走る。結局は自分が一番大事でしょう？ それに  
お前達がどうなろうと知った事じゃないわ。せいぜい玩具として役  
に立つてもらっただけ」

「クズが……」

「フフツ、褒め言葉に聞こえるけど？ まあいいわ。答えを聞きませうか。兵藤一誠を殺しなさい。」

そうしなければ、お前の愛するルイーナがああ男の性奴隷に成り下がる事になるわ。フフツ、そうなたらもう二度と元の関係に戻ることはできないわねえ……」

ベラナディアは何が面白いのかクスクスと笑う。既に彼女は常軌を逸しているのが見て取れる。

「……一晩時間をくれ」

振り絞る様な声で言う。

「フフツ、良い返事を期待してるわ。と、いうより貴方に出来る事なんて一つしかないのだけれどね！」

アハハハハハツ!!」

ベラナディアは満足げに去って行った。

安里はただ立ち尽くす。その表情からは生気が感じられない。

(クソ……畜生……!!)

脳裏に浮かぶのは愛しい少女の姿。

彼女のためなら犬畜生に堕ちようと構わない。

脳裏に浮かぶのは無二の親友の姿。彼のためなら犬畜生に堕ちようと

悔いはない。

「俺は……どうしたらいいんだよ……」

絞り出すような声で呟き帰路に着く。その後ろ姿は激流に流される木っ端の様に頼りなかった。

オリジナル強め 暗黒のフェアオ編

※第80話（安里×ミツテルト&レイナーレ）

食事をしたのかどうかすら臆げなまま、安里はベットに体を預ける。ふわりと羽毛の様に軽い布団に対して身体は鉛のように重い。

「ルイーナ……」

無意識に口から漏れるのは最愛の人の名。

彼女が自分以外の男に抱かれる姿を想像するだけで、頭がおかしくなりそうだ。いつそ狂ってしまった方が楽かもしれない。

しかし、それは許されない。

自分は彼女に惚れ、彼女もまた自分に好意を寄せてくれた。その想いに偽りなどない。だからと言って友を裏切つてまで彼女と結ばれるのは本意ではないのだ。

「……くっー」

涙が溢れそうになる。

安里はルイーナへの恋慕の情を自覚してから、何度も涙を流してきた。だが、今回のこれは今までの比ではなかった。

「……畜生が……」

思わず舌打ちをする。ドス黒い感情が胸中を満たしていく。何で俺がこんな目に遭わなければならぬ？ そもそもレイヴェルがネフレンの所へ行けばこんな事には……。

「助けな……」

安里は慌てて口を塞いだ。

『助けなければよかった』などと発してしまえば人として終わりになってしまう。あのとき成り行きもあつたがレイヴェルを助けると決断したのは他ならぬ自分自身なのだ。

その決断を否定することは、自分の存在そのものを否定してしまう事に繋がりがかねない。

（自分で決めた事だろうが、ケツまくってんじやねえよ！）

己自身に喝を入れ、安里はむくりと起き上がる。向かった先は居候

のレイヴェルの部屋だ。(と、言っても安里もニグラ邸の居候なのだが)

ノックをして返事を待つことなく扉を開ける。

そこには案の定と言うべきか、レイヴェルがいた。

「な、何ですの！ レイヴェルの部屋に許可なく入るなんて非常識にも程がありますわ!!」

レイヴェルの怒りはもつともである。だが安里にとってはその事はどうでも良かった。一も二もなく安里は膝をついて彼女に頭を下げる。

「頼む!! お前にしか頼めないんだ!!」

「ひゃい!?!」

いきなり土下座されて戸惑うレイヴェルだったが、すぐに我に返ると抗議の声を上げる。その顔は火を噴かんくらいに赤い。

「な、何を言っておりますの!」

私はそんな軽い女ではありません！ お断りいたしますわ!」

「……いや、そうじゃなくてさ」

「……へ?」

てつきりそういう事を頼まれたのかと思っていたレイヴェルは拍子抜けした様に肩をすくめた。

安里が頼みたい事というのは至極単純なものだった。

「ネフレンの奴からルーイーナを取り戻したいんだ。だからレイヴェルにはネフレンに嫁ぐフリをしてもらいたい」

「……本気ですの? 貴方正気?」

レイヴェルが呆れるのも無理はない。レイヴェルの経歴にもフェニックス家の歴史にも傷がつく上にマンモン家は冥界でも屈指の有力者。

フェニックス家に恥をかかされたとなれば怒り狂うであろうし、最悪戦争にもなりかねない。

しかし安里は真剣だった。

「ああ、俺は本気だ。だから協力してくれ。恩に着るとしか言えないがもし協力してくれるなら何でもする」

「何でもですか？」

「え？ あ、まあ出来る範囲でだけど……」

「分かりましたわ。私も腹を決めましょう」

「いいのか？」

意外過ぎる反応に安里の方が面食らう。しかし、レイヴェルは力強く首肯するとまずは兄であるライザーに話を通すべく話をするべく転移魔法陣を展開した。

そして……。

ー

「ふざけるなこの馬鹿者がア！」

話を聞いてライザーは烈火の如く怒り、拳を安里の頬に叩き込んだ。

「ッ!」

あまりの力強さに安里は椅子ごと吹っ飛ばされ床に転がった。とはいえ反抗するつもりはない。ライザーの怒りは真つ当なものだからだ。

「何故貴様ごときの色恋のために、我が妹が犠牲にならねばならんだ!! 恥を知れ! 恥を!!」

更に蹴りまで飛んできた。安里は無抵抗のまま蹴られ続ける。付き添いのユーベルナ、並びにレイヴェルもライザーの怒りに言葉を失い、ただ立ち尽くしていた。だが、安里とてこのまま引き下がるわけにはいかない。何とか説得しようとい口を開く。

「フェニックス家に迷惑はかけない。俺一人の暴走で事を済ませてくれればそれでいい。責任を取るために俺の首がいるってんなら差し出す。だから頼む。お前の妹を貸して欲しい」

「……………」

ライザーは黙り込み、安里を見下ろす。

そして、ゆっくりと手を振り上げた。

殴られるか、と思ったその時、ライザーの手を掴む者が現れた。

「そこまですなさい、ライザー」

「母上……………」

「お母様……」

ライザーとレイヴェルは驚いたように声を上げた。

二人の視線の先にいたのは、安里は初めて見る女性。金の長髪を後ろに結わえた妙齡の女性だ。安里の視線に気がついた女性はニッコリと微笑み自己紹介をした。

「初めまして、私の名はリゼ・フェニックス。ライザー、レイヴェルの母です」

「は、はじめまして……」

慌てて安里も挨拶をする。

「安里君でしたね。レイヴェルがお世話になってます。それと、先程の話は聞かせてもらいました」

リゼは安里に手を差し伸べると安里は手を掴んで立ち上がる。とはいえ、娘を囮に使うと言った立場の身としては、やはり居心地が悪い。

「……すいません。無茶なお願いなのは重々承知しています。それでも俺はあいつを救いたいです」

「ええ、分かっていますよ。だからこそ、私がここにいるのですから」「え?」

「あなたが言った事は、全てこちらでも把握しております。その上で私はここに来たのですよ。遂にあの男、ネフレン・カ・マンモンは実力行使に出ました」

「じ、実力行使……?」

「ええ、そうです」

リゼは静かに目を閉じた。

「……私達フェニックス家が作り出した霊薬『フェニックスの涙』はご存知ですね? 彼はあの霊薬の偽造に着手し、更に霊泉の宝珠を手に入れようとしているのです」

霊泉の宝珠はセベクを倒した事で手に入れたもので、今は安里の眷属となったニトクリスが所持している。

「何ですって!?!」

「これは単に霊薬を作るというだけではありません。過剰に万能薬が



作られれば、冥界のみならず人間界にも争いの火種になりかねません。それだけは何としても阻止しなければなりません」

リゼの言葉には有無を言わさぬ迫力と真実味があった。ライザーはそんな母の姿を見て深いため息をつく。

「……母上は、最初からこうなる事がお分かりになっていたのですか？」

「いいえ、分かりませんでした。ただ、あの方が何かを企んでいるだろうということだけは感じていました。まさか、ここまで大胆な事をするとは予想していませんでした。まさか霊泉を凍結させるなんて……！ネフレンさんには本当に申し訳ありませんが、もはや手段を選んではいられなくなりました。ライザー、貴方はどうしますか？」

「愚問です。妹を奴の手に渡すなど以ての外。フェニックス家は火を支配するものではありませんが戦火を拡げて支配してまで繁栄しようなどとは思っていません。家族を守る為ならば、私は火の鳥となりましょう」

ライザーは胸を張ってそう宣言する。その目には確かな覚悟が宿っていた。外見こそチャラチャラしているが中身は立派な兄である。

「安里さん。そういう訳で貴方達にも協力頂きたいのですが、よろしいですか？」

「は、はい！ 勿論ス！」

「良かった。では、まずは皆様にご説明しましょう。皆が集まれる場所にご案内頂けますか？」

リゼの申し出に安里は頷き、リビングへと移動し、レイヴェルらも交えて作戦会議を行う事となった。

↓

「成程！ 要は霊泉の凍結の調査と

ネフレンとやらの領地に潜行すれば良いのだな！」

相変わらずはきはきとした調子で杏寿郎はリゼからの話を纏めた。

「はい、お願いできますか？」

「うむ！ 任せよう！ 俺は霊泉の凍結の調査に向かう！ ロス

ヴァイセ殿！ ジャンヌ・オルタ！ 同行願えるか！」

「はい、問題はありません」

「あの女がいないのにオルタ呼ばわりしないでくれますか？ 何か腹が立つんですけど？ というか、何故呼び捨て？」

「嫌か？」

「当然です、デリカシーのない人ですね。日本の男って皆こうなんですか？」

「フツ、とジャンヌは鼻で笑いながら小馬鹿にしたように言う。すると杏寿郎は納得する様に頷く。

「うむ！ではジャンヌは留守居を頼む！」

「何でそうなるのよこの太眉熱血脳筋柱がア!!」

あつさりジャンヌは地金を露呈するが安里達は既に慣れっこなのでスルーだ。

「む。ジャンヌは作戦に参加するのが嫌と言ったのではないのか？」

煽るのではなくしんから不思議といった様子の杏寿郎を見て、ジャンヌは毒気を抜かれたらしく溜息を

漏らして肩をすくめた。

「違うわよ……いえ、もういいです。竜の魔女としての本分を果たせば良いのでしょうか？」

二人のやり取りを見ていてレイヴェルは若干ジト目で杏寿郎を見つめていた。

（この方、もしかしなくても天然なのかしら？）

「ライザー殿も同行願いたい構わないだろうか？ まさか無断で立ち入ったとなれば余計な諍いを生むかもしれん」「うむ、煉獄の言う事も尤もだな。了解した」

ライザーが承諾したことで方針は決まった。

後は具体的な行動だが……。

「それじゃあ、俺はネフレン・カ・マンモンの領に潜行する事にするよ」「じゃあ、私もお供致します。

霊泉の宝珠は今、私が所持している訳ですから」

ニトクリスがいち早く名乗り出るとニグラもまた手を上げた。

「私も行くわ。安里ちゃんとニトクリスちゃんの二人だけじゃあちよつとねえ……。二人で調査に向かったら三人で帰って来たりして」

「な、な、何をっ?!」

「あはは、冗談よ」

からかわれたニトクリスは顔を真っ赤にして怒り出すが、既にそういう関係になった彼女としてはまんざらでもないようだ。それを察した安里は苦笑しつつ、

「分かった。なら頼んだぞ、ニトクリス」

「ええ、任せてくださいまし」

「ふくむ。だが、ニグラ、ニトクリス、きゅうどーではちようさどころか、らんこうになつてしまわんか?」

そしてこのキユクロの一言に一同は固まる。

「ら、乱交つてお前なあ!!」

「そ、そうです! 一体何処でそんな言葉を覚えたのですか!」

「きゅうどーのもつていたほんからだ。キユクロはベンきようちゅうなのだ!」

「お、お前な……」

「安里! 妻を娶るのは構わんが乱交は感心しないぞ! 節度は守れ!」

「火の玉ストレートにも程が

ありすぎなのよアンタはあ!!」

何とも個性が強すぎるメンツであるがこうして、安里達は靈薬『フェニックスの涙』の偽物の製造を止めようと動き出したのであった……。

↓

そして、英気を養うべく安里は寝室に戻り一息つこうとした。正直安里は冥界だの人間界だの政治めいた事にはあまり興味はない。何としてでもルイーナを助けたいという気持ちがある今の彼の全てだった。

「……待ってるよ、ルイーナ」

「何なんスか、安里サマ。」

ルイーナ、ルイーナって」

いつの間にかミッテルトがベッドの縁に座っていた。彼女は不満げに頬を膨らませて安里を見る。

「ウチは一番初めに安里サマの眷属になったって言うのにく。最近、ルイーナの話ばかりじゃないスカ。ウチの事、どう思ってるんスカ？」

潤んだ瞳で見上げながらそう言うと、安里は無言で彼女の肩に手を置いた。その表情は真剣そのものだ。

「悪いとは思っている」

「ええく……？　そこは嘘でも好きとか言つて欲しいんスケどお……」

ミッテルトはわざとらしく落ち込む素振りを見せるが、安里にすれば殴られた方がマシかもしれない。

「前にも言ったけどよ、俺はお前の心を弄つて無理矢理俺に惚れさせた。だからお前が本気で好きな奴が出来ればいつでも解消する。だから、それまでは我慢してくれ」

「はあ、分かかってないツスね。」

ウチは別に嫌々やってた訳じゃ無いし、今はマジでアンタが好きなんスよ？　前にも言った気もするんスケど始まりがウソでも、そこから続く愛はあるツス」

「そうですわ安里様。私も貴方に

蘇らせて貰わねばアザゼル様に報いる事も出来なかったでしょうし、感謝こそすれ恨むなど以ての外……」

「それが作られた感謝でもか？」

影からスツと現れたレイナーレもミッテルトに同調するなか、安里は念を押すように尋ねる。すると二人は同時に力強く首肯した。

「はい！ですから、どうか私達の気持ちをご疑わないでくださいまし。貴方の為ならば、私は喜んでこの身を捧げましょう」

「ウチも同じツスよ。安里サマが望むなら、どんな事でもしちゃうんで」

二人からの真摯な告白を受けて、安里は思わず目頭が熱くなった。「……ありがとうな。これからもよろしく頼むぜ」

「はい、(こちら)こそ！ それはそれとして……♡」

レイナーレとミツテルトの視線が何やら熱を帯び、蕩けたような目つきになる。

「ちよつ、おい！」

「ふふつ……安里様、ニトクリスだけ抱くなんてお人が悪すぎますわ」  
「そうっすよ。ニトクリスばかりズルいつす。ウチらも可愛がつて欲しいんすよ……」

「お、お前らなあー！」

安里が戸惑う中、二人はゆつくりと服を脱ぎ捨て全裸になると、そのまま安里に抱きついた。墮天使の翼がさながら安里を覆い隠すかの如く広げられ、安里を慰撫するように動く。清められているのか、それとも汚されているのか、安里には分からなかった。心地よさと絡みつく二人の肉質と香り、そして肌と肌が擦れる感覚が思考を麻痺させる。

「なあ、安里サマ……ウチら、もう準備万端なんすよ……早くして欲しいッス」

「私達、安里様の寵愛を受ける為なら何でも致しますわ。だから、どうか私達に……」

「ああ、分かった分かった。

分かったからそんな泣きそうな顔をするなよ。

ったく、お前らは可愛いな」

「ふふふ……♡」

「えへへ……♡」

微笑む二人の笑みが眩しいのか、

安里は目を細める。その機微に呼応する様に彼のペニスが勃起を始める。二人も嬉しげに笑った。

「安里サマのつてやっぱり大きいッスねえ……」

「本当に凄いわ。あんなに立派に……」

発情して艶っぽい声を漏らす二人の秘部を安里は指先で弄り始める。既にそこは濡れていて、各々、クリトリスと花卉を摘んで、縁を擦り刺激を与える。主からの快樂に歓喜の声を上げる二人の声色は

何処までも甘く切なげだ。

「くぅ……ん♥」

「きゃうくん♥」

「こんな濡らしちまって、犬みたいに舌を出して、すっかり出来上がってるじゃねえか。どうして欲しいんだ？」

安里の口調がサディスティックなものになっていく。しかし、二人はそれを気にする事なく、甘える様な声で懇願した。安里を煽る様に、淫らに腰を振ってみせる。その仕草があまりにも扇状的で、安里は生唾を飲み込んだ。そして、安里の指先が二人の膣内へと侵入していく。一本、二本、三本……。それぞれの指が別々に動き、その度に二人は甘い喘ぎ声を上げた。

「あんっ！はあん……んんっ！！」

「ひゃう！あっ、あゝゝゝ♥♥」

「何だ、まるで餓鬼みてえに盛ってるな。

いつもより感じてるんじゃないか？」

「だつてえ……安里サマの触り方、ヤバいんスもん……」

「そうですね……優しく、暖かくて、でも激しくて……」

「そうか、そりゃ良かった。

ほれ、ここが良いんだよな？もつと強くしてほしいか？それとも、

こうやって焦らされたいか？」

「あ、あ、あ……そ、そこお……」

ダメっすよお……」

「はい……お願いします、安里さまあ……！」

「へっ、仕方がねえな」

そう言つて安里はミツテルトの乳首をつねるように捻ると、彼女は一際大きな嬌声をあげた。

「あ、あ、あ、あ!!それ好き……！」

「そうか、それじゃあこれはどうだ？」

そう言つて安里はミツテルトの陰核を摘んだ。

些かの隙もない手馴れた動作で蕩かす様に

刺激を与える。

「ふにや!? にや、にやんでえ……?」

「お前はコレが好きなんだろ? レイナーレは どうしてほしい?」

「わ、私は……♥」

首を捻って安里はレイナーレの張りでた胸をなめまわす。するとレイナーレの口からは普段からは想像もつかない程甘い吐息が漏れた。

「あ……はあ……! 安里様♥」

レイナーレは自らの両手で乳首を弄り始め主たる安里に奉納すべく、硬く尖らせた乳首を寄せて見せた。

「ふふ……随分とご機嫌じゃないか」

「はい、私は貴方様のモノですもの……! どうか存分にお使いくださいませー!」

「そうかい。それなら遠慮は要らなさそうだ」

そう言うくと安里は躊躇なくレイナーレの両乳首に吸い付きちゅぱちゅぱと音を立ててしゃぶり始めた。

「ふわあぁっ、あ、あ、あ、あ、あぁっ!」

敏感な部分を吸われビクビクと震えながら悶える中でも責めは続いている。彼は彼女の豊満な乳房を口に含み、先端を舌先で転がすように舐め回していた。

「ん、んんん♥」

「おいおい、自分達ばかりよがるなよレイナーレ、ミツテルト」

「あ……申し訳ありません安里様」

「あ……すいませんッス」

「悪いと思うなら俺を楽しませてくれよ?」

「はい……喜んで」

「ウチらも頑張るッスよ……」

そう言うくと二人は安里のペニスに手を伸ばし、愛撫を始めた。嫌々でなく自ら進んで行く奉仕、それは主人の性欲を満たし、隷属する悦びから来るものだ。

二人の手つきは巧みだった。男を知り尽くしているとしか思えなようなテクニクが二人の美少女から繰り出される。

ミッテルトの手は安里のペニスを掴み、上下に扱き上げる。その動きはまさに熟練の娼婦のようだ。一方のレイナーレは安里の雁首と睾丸を手で包み込み、マッサージするかのようによく揉みほぐす。そして、その二つの快感に堪えかねて安里の腰が浮く。

「くっ……いいぞ……そのまま続けろ」

「も、申し訳ありません安里様あ♥私、もう……♥」

安里は手淫を指示したがレイナーレは我慢の限界であった。桃の様な尻で主の浮き上がった腰をベツトに押し付け、主のペニスをその墜ちた子宮口に押し当てる。そして主の精を注いで貰うべく、腰を前後に動かし始めた。肉棒の先端が子宮口をノックし、その度にレイナーレの口からは喘ぎ声が漏れる。

「あ、あああつ♥安里様のが私の中に……あ、あ、あ、あ!!」

「おい、勝手にイクんじゃねえよ。まだ俺がイッてないぜ?」

「はいいい!安里様にイカせて頂けるよう、この卑しい牝犬にお慈悲をお与え下さい♥」

「へっ、しょうがねえな」

そう言うと安里はレイナーレの膣内を蹂躪し始めた。彼女の中は狭く熱かったが、それが逆に安里の射精欲を掻き立てる。

「んっ!んっ!んっ!あ、あ、あ、ああっ!」

「ふん、随分と締め付けてくるじゃねえか。そんなに欲しいのか?」

「はい!お願いします!私の中に安里様の子種を……あ、あ、あ、ああっ!!!」

限界に達したレイナーレは激しく絶頂を迎えた。それと同時に安里も果てる。どくん、という脈動と共に大量の精液が吐き出され、それを受け止めたレイナーレは歓喜に打ち震えた。

「あ……ああ~~~~っ!!! 熱い……!!こんな……凄い……!!」

全てを吹き飛ばしてしまう嵐の様な快楽にレイナーレは目を白黒させて身悶える。全てを投げ去り、捨て去ってしまったとしてもおかしくはない程の衝撃を彼女は味わっていた。

「あ、あ、あ……ありがとうございませう安里様……!」

「どうだ? 満足したか?」



「はい……♥」

「そうかい、そりゃ良かったな」

ズルリ、とレイナーレの膣穴からペニスを引き抜く。愛液に塗れ、白濁とした液体がこびり付いたそれは、ひどくグロテスクなものに見える。

しかし、当のレイナーレとミッテルトは至福に満ちた表情を浮かべていた。まるで大腿骨にでもしゃぶりつく犬の様に、ミッテルトは安里の股間に顔を埋め、陰囊を口に含んで舌で転がすように舐め回す。一方、レイナーレの方もミッテルトと同様に安里のペニスに舌を這わせ、尿道に残った残滓まで吸い出さんとばかりにしゃぶりついていた。

（安里様のおちん○ん……素敵ですわ……すぐに復活して、また私達の望みのままに犯して下さい……なんて素敵なのでしよう……）

（ウチらは幸せ者ツス。ご主人様みたいな素晴らしい殿方に巡り会えて……ウチはご主人様の事が大好きツスよ♪）

洗脳によるものなのか、それとも彼女達自身の本心がそう思っているのか……それは分からないが、とにかく二人は安里を愛しているのだ。

安里は真贋定かならぬ混沌が這い寄る様な感覚を覚えた。

（俺は……一体どうしちまったんだ？ルイーナを愛しているのに、二人を性処理に使う事に何の躊躇もない……）

その疑問をよそに、二人の美少女は安里を喜ばせようと懸命に奉仕する。その事実は安里の胸を打ち、かつ興奮を高めていく。

するとどうだ……。

「アツ、ふうん♥安里サマあ♥

ウチ……アレが、またあ……♥」

アザゼルの人工神器の作用によるのか彼女の身体が少女から女に変わろうとしていた。

ミッテルトの身体が一回り大きくなり、乳房が張り詰める。乳首が肥大化し、肌が男好みのするローストされたかの様な褐色肌へと変わる。尻肉もむっちり丸みを帯び、腰つきが女性らしいものになる。

そして彼女の秘裂からは白い粘液が垂れ落ちた。

「ああつ♥ウチ、こんないやらしい身体になつてえ♥」

「ミッテルト……」

「あんつ♥そんな切なそうな目で見つめられたら……」

あ、あ、あ、あつ!!」

ミッテルトの全身が痙攣する。と同時に、その腹部には淫紋が刻まれる。主である安里に細胞の一片に至るまで支配される悦びを刻み込む為に。

「ふふ、何ていやらしい墮天使なのかしら。安里様に見つめられるだけでイクなんて……」

元上司のレイナーレはミッテルトが淫らに墮ちる姿を見て嘲笑するが、その瞳の奥底では自分も安里のペニス欲しくて仕方がないといった欲望が渦巻いているのが見て取れる。

「ううう……!・レイナーレ、アンタだって早く欲しいって思ってるくせに……! 先に安里サマにザーメン出して貰ったから……いい気にならない方がいいツスよお!」

「ふんっ、この程度の事で勝つたつもりになってるとは……貴方もまだまだだね。それに私の方が安里様の事を想う気持ちは強いわ」

(本来なら、二人のやりとりを寒々しいと感じるべきなんだろうな。けれど……例え作り物であろうとも、俺を慕ってくれるという存在がいるのは悪い気分じゃないな……)

「ありがとうな、ミッテルト。」

俺好みの女が変わってくれて嬉しいぜ?」

「えへへ、そう言つて貰えたらウチも頑張った甲斐があるつてもんです!」

「俺の為にそこまでしてくれるお前の期待に応えたいと思う。だから……」

「お……ふうううう♥♥♥」

堕ちゆくミッテルトを

抱き抱える様にながら、受け止めるかの様に挿入していく。ドロドロに蕩け、安里を悦ばせる事にだけ特化したミッテルトの膣は、熱

さと柔らかさに加えて適度な締め付けをもって安里を歓迎し、彼のペニスを包み込んだ。

「お前の一生は俺が貰った」

「あ、あああああ♥安里様あ♥安里様あああ♥」

ミッテルトは安里に抱かれ、愛されているという実感に歓喜の声を上げる。

一方のレイナーレは嫉妬と羨望の入り混じった表情を浮かべながら、二人を見守る。

「うう……。淫紋が浮かべば私にだって……」

下腹部を切なげに見つめても哀しいことに何も起こらない。

レイナーレは歯噛みしつつ、しかしその一方で安里がミッテルトを激しく犯す様を見て興奮している自分に気がついて自ら慰め始める。

「ん……くっ……いー」

「あっ♥イイツスよお♥

嬉しい♥嬉しいっす♥幸せ♥しあわせえ〜!!♥」

両手を自らの頬に当て、ミッテルトが狂乱気味に叫ぶ。安里に突かれる度にミッテルトは嬉しげに声を上げ続けた。その姿を眺めつつ、安里もまた快感を覚えていた。

「嬉しそうだな、ミッテルト」

「だ、だってえ♥ウチ、今とつても幸せなんスもん♥ああっ、こんなにされて、ウチはもう戻れないくらいご主人様にメロメロなんスよおっ♥」

「そうか。だったら……」

「ひゃうんっ♥」

安里はミッテルトの両手を綱の様に引っ張り、彼女を背後から突き上げる形で犯し始めた。

感涙に咽ぶ様に結合部からは愛液と精液の混合液がシエイクされては溢れ出る。

「あっ、ああっ、すごいッスう♥こんな、こんなの初めてッスよおっ♥」

「良かったか？満足か？ほら、もつと味わわせてやるよ」

「ふわあ……あああ……はいっ……はいッス……♥ごしゅじんさまあ

……♥ウチ、ウチはあ……ああん♥」

射精が放たれたのに安里のペニスは衰えず、ミッテルトの膣内に留まり続ける。ミッテルトの子宮口をこじ開け、直接精液を流し込みたいという欲望の表れであった。ミッテルトの尻肉を掴み、安里が腰を打ち付ける度にミッテルトの口からは甘い喘ぎが漏れる。

「はああんっ！ウチのおまんこ、壊れちゃうっ！でも、それが良いっ！壊してええっ！ウチをめちやくちやにしてええっ！ウチはご主人様のモノっ！だからウチを好きないようにしていいのっ！ウチを壊してええっ！ああっ！イクっ！またイツっちゃう！ウチ、イツくううううーっ！ああっ！ああっ！ああっ！あひっ！あひんっ！あひい！いいいっ！！」

ミッテルトの身体が痙攣する。絶頂を迎えたミッテルトだが、それでも安里は止まらず、ミッテルトを犯し続け、ミッテルトはそれを受け容れ、そしてミッテルトの意識が飛び、レイナーレもまたダウンするまで続いた。

『ああ、そうだ。墮天使共。』

何もかも忘れてしまうまでに狂うがいい。お前達が何者なのか、何故墮天したのか、何の為に生きているのか、全てを忘れ去るまで……そして我等の望むままの姿になるのだ』

ミッテルトとレイナーレは安里の

変化に違和感を感じることにすらできぬまでに心身ともに安里に染められていた。

「ああん……ご主人様あ……」

好き……大好きですわ……♥」

「ご主人様……」

ウチ、幸せツスよお……♥」

盲目的に、白痴の様に安里を愛しているミッテルトと、安里への忠誠を絶対のものとしているレイナーレ。二人の姿は泊地に流れ着いた漂流物の様であった。

## ※第81話（安里×カテレア）

ネフレン領に入るには魔列車に乗らなければならない。しかし全席指定席な上にチケットは完売しているという。

「困ったわねえ……」

ニグラは麦わら帽に白いワンピース姿という出で立ちで呟いた。避暑地に向かう様な清涼な出で立ちではあるがいかんせん地母神の様な豊満な肉体が隠しきれていない。事実、すれ違う男性達が振り返るし駅員も明らかに見惚れている。その有様に安里もニトクリスも呆れるしかない。

「何とか魔列車に乗せてもらわないと潜入が出来ないものねえ、どうしたものかしら安里ちゃん？」

わざとらしく安里を誘惑でもするかの様にニグラは囁く。以前の安里ならば骨抜きにされるか、或いは慌てふためいて逃げ出すところだが……

「うーん……ダフ屋辺りから買えばいいんじゃないスカね」

「……あら？ お姉さんの誘いに乗ってくれないなんてちよつと寂しいかも」

予想外に冷めた反応だった事にニグラは少しだけ驚いた様だ。やはりルーイーナの存在が安里の中で大分大きくなっているのだろう。

「私も同意見です。ダフ屋なるものに心当たりはありませんが」

ニトクリスは安里に同調する様に言った。出で立ちは砂漠用の外套を羽織り普段の露出の激しいものではない。

「あれは私の秘術を高めるための正装なのです。誤解なきように」

安里の心の中を読んだのか、あるいは男女の仲になった事での以心伝心なのか、ニトクリスは安里の疑問を口に出す前に返答していた。

（流石はファラオ、察しが良い）

安里としては感心せざるを得ない。

それはそれとして……。

「では、私が交渉して参りましょう」

眼鏡をクイ、と上げながらカテレアが申し出た。旧魔王派の元幹部

である彼女は顔が広く、そういったコネも多いらしい。実際、カテレアはその美貌も相まってかなりモテていたらしい。

「ええ、お願いねカテレアちゃん」

「カテレアちゃん……」

今や安里の敏腕秘書を地でゆくカテレア・レヴィアタンもニグラにかかれればこの通り形無しである。そんな様子に苦笑しつつ、安里はカテレアが交渉するのに平行してダフ屋を探すことにした。

……およそ一時間後、カテレアとの交渉を終えたニグラと合流した安里達は魔列車に乗り込むことに成功した。ちなみにダフ屋の方は空振りに終わった。

↓

「申し訳ありません、安里様。」

この様な席しか用意出来ませんでした」

カテレアが入手したのは二人用の

特殊寝台、他のメンバーは貨物室という何とも天地の違いのあるものだった。

「い、いや……割りと広いし、他のメンバーも連れてきても良かったんじゃないか……？」

「いけません」

安里の提案をカテレアはキリリ、と眼鏡を光らせて却下した。

「ここはVIP用個室です。」

本来なら貴族階級の方々が使用するものなのですが、今回は私に譲って頂きました。当然、他のお客様との相部屋などもつての他です。

万が一にも何かあつては大変ですから」

「そ、そうですね……ハイ」

有無を言わさぬ迫力に押され、安里は思わず敬語で返事をした。確かに今の自分はただでさえ目立つのだ。もしカテレアの言う通りにしなければ余計なトラブルを招くかもしれない。

(それにしても……ホントに列車の中なのか?)

安里が感心したのは窓の外に広がる光景だ。レールは無く、まさに

どこかの銀河鉄道の様な様相を呈している。更に室内も列車とは思えない程に豪華かつ広々としている。しているのはいいのだが……。(しかしこれじゃまるでラブホテルじゃねーか！VIPってそういう接待も兼ねているのか!?)

心の中で叫びつつ、安里は頭を抱える。しかしすぐに気を取り直し、今回の作戦を整理する。

(ルイーナを取り戻すにはまず、リゼさんの信頼を得なきゃいかん。で、フェニックスの涙の偽物を製造している所を突き止めて告発すると共に破壊する)

これが今回、安里達に与えられた任務だ。そしてその為には……。「乗車券を拝見します♡」

と、その時祿にノックもなく車掌、あるいは車娼というべきだろうか？とにかく乗務員が部屋に入ってきた。その姿を見て安里はぎょつとした。バニースーツ、もといキャットスーツに身を包んだ女性だったからだ。

「あ、ああ……」

「こちらはVIP専用席ですから確認の必要はないはずですが？」

たじろぐ安里に対してカテレアは流石旧魔王派の幹部と言うべきか？ 平然と対応していた。

「いえ、規則ですので♪お嬢様方、こちらに手を触れて下さいね」

しかし、そんなカテレアの態度を意に介さず、彼女はにこやかな笑顔を浮かべながら二人の手に触れた。すると……。

「はい、結構です♡それはそれとして子宮の……もとい至急の御用はございましたかあ？」

胸を強調する様に乗務員は安里達に問いかける。その時カーブにでも入ったのか車体が大きく揺れた。その際バランスを崩した乗務員が安里の顔を胸で挟み込む形になった。

「うおっ！」

「あらら、大丈夫ですかあ？私ったらついうっかり♡」

薔薇と蜂蜜を煮詰めたかの様な

甘い香りに包まれ、安里は赤面するが、当の本人は特に気にした様

子もない。

「だ、大丈夫です!!」

「あら、それなら良かったわくん♥」

安里の言葉を受け、彼女はパツと身を引き、改めて姿勢を正した。

(くそ……油断してたぜ)

危うく手を出してしまふところだった。そう思いながら安里は心の中で自戒する。

(俺がこんな調子じゃ駄目なんだ)

そう思いながら安里はカテレアを見る。彼女は冷静そのもので特に動揺している風でもない。やはり旧魔王派の幹部というのは伊達ではないのだろう。

「な、なんというか……スマン」

「いいえ、安里様も殿方ですし、仕方ないですよ」

安里の謝罪に対し、カテレアは微笑んで応じる。内心はともかく、外面では余裕を見せようとするその姿はやはり大人びていて、それについて美しい。

(クソ……まただ。俺はルイーナを愛しているのに、仲間を……カテレアを意識しちまう。最低だ……!!)

そんな安里の内心を察してか否か、カテレアは優しく微笑みかけた。

「あまり気負ってはなりません。安里様は安里様らしく振る舞えば良いのです。……それに私は安里様のもの、ですから……」

頬を染めつつ、カテレアは安里の手を握った。

「なあカテレア……。何でそんなに都合の良い事を俺に言ってくれるんだ？ ミッテルトもレイナーレもカテレアもさ……」

「私達は貴方に救われ、同時に貴方を愛する事を決めたのです。貴方がどんな鬼畜外道であつても……」

飽くまでこれは喩えですから、どうか誤解なきように」

「あ、ああ……そうだよな」

カテレアの言葉に安里はホツとする。だが、その一方で疑問が浮かぶ。



(いや、本当にそうなのか?)

確かに自分とカテレア達は愛人関係になっている。それは事実だ。しかし、それだけだろうか？ 自分はこの世界にゲイトの力で復活し、そして神器やら力を得て、ハーレムを築いている。罪悪感や呵責は報いを受けて当然だという気持ちは拭いきれぬものではないのだ。増して洗脳や催眠によつて得た愛情ならば。

(だから、この好意も、愛情も、全ては俺の身勝手がもたらしたものだ。だからいつか俺は報いを受ける事になるだろう。そうでなければカテレア達があまりにも不公平だ……)

安里はそんな不安に駆られていた。

しかし人間とは誰も彼もが英雄になれる訳ではない。まして、彼は最近までただの学生に過ぎなかつたのだ。故にその懊悩は無理のないものだろう。

「……どうされましたか、安里様？」

「い、いや……何でも無い。それより、今は……」

安里は慌てて取り繕い、窓の外を見た。そこには砂漠にて怪物と戦う貧民達の姿があつた。

「あの人達は……?」

「恐らくは避難民でしょう。」

私達の様に魔列車に乗り込めなかつた者達ですね。……嘆かわしい事です」

カテレアは憂いを帯びた表情で呟いた。以前の優生思想に凝り固まつた旧魔王派では考えられない発言だ。だからといって安里の苦悶が消える訳でもないのだが。

「カテレア、窓を開けるぞ」

カテレアは当然止めない。いや、それどころか嬉々として窓を開いた。

「カテレア!?俺のワガママに付き合う必要は無い!」

「いいえ、構いません。」

針のゆく所には糸がついていくものなのです。それが世界の有り様というもの……」

カテレアは慈母の様な笑みを浮かべると安里の腰に抱きついた。カテレアの温もりを感じながらも安里はバツ、と窓から砂漠の大地へと飛び降りていく。

そして両手をパラシュートの様に変化させると、風圧を利用して落下速度を緩め、砂煙を上げながら着地した。

そして貧民を襲っていた低位の一頭竜（ナーガ）達をまるで引きちぎる様に『冥獄長の辣腕』で倒していく。

「グオオオオオッ!!」

「うおおおおっ!」

「ギャアアッ!」

安里の攻撃で次々と断末魔を上げるナーガ。その光景を見て貧民達は歓声を上げた。

「ありがとうございます!これで助かりました!」

「前に出るのではありません!」

安里様の迷惑でしょう!」

などと叱咤しつつもカテレアは結界を張り、貧民たちを守る。

「……お、おい。アンタ、一体何者だ?何で俺達の味方をするんだ……?」

「……助けてくれて感謝する」

貧民達は戸惑いつつも安里に礼を述べる。するとカテレアは誇らしげに胸を張って宣言した。

「この御方の顔をよく覚えておきなさい……! この方こそ貴方を圧政から解放する救世主となるべき御方です……!!」

（いや、カテレア……流石にそれは盛り過ぎじゃ……そもそも潜入に来たんだぞ俺達!）

（いいえ、私は嘘偽りなど申しません。戦いというものは高度な柔軟性を維持しつつ臨機応変に対処すべきです）

（いやいや、お前のそれは行き当たりばったりというんじゃ……）

カテレアの発言に戸惑う安里。しかしカテレアの勢いは止まらない。

このアジ能力は流石に想定外だった。

「……け、けどネフレン様はあまりにも強すぎる……」

「俺達なんかじゃとても相手にならないよな……っ」

やはり一度や二度の功績ではネフレンの苛政に虐げられ、牙も爪も折れてしまった者達の心に希望を与える事は出来ないようだ。

「ま、まあ……。恩に着せるつもりはないからさ。マンモンの野郎には俺達の事は内緒にしてくれよな?」

「あ、ああ……。分かった……」

そう言い残し、安里はその場を去ろうとするが……。

「ま、待ってくれよ!」

ターバンを巻いた少年が安里を呼び止める。

「ん? どうしたんだ?」

「あ、あんたがどんな奴かは知らないが……この国を変えてくれるって言うなら……頼む!! オイラも仲間に入れてくれよ!!」

「はあ? いや、それは……」

突然の申し出に困惑する安里だが、カテレアは微笑んで言った。

「良いではないですか。この者達は私達の仲間です。この国の行く末に心を痛め戦う決意を示したのですから」

「そ、そうか……そうだな」

カテレアの言葉に安里は納得して、そして改めて自己紹介をした。

「俺は安里だ。よろしくな」

「へへ、オイラアフメドってんだ

宜しくな! 強いあんちやんと、

デツカいねえちやん!」

アフメドと名乗ったターバンの少年は人懐こい笑顔を浮かべた。他の貧民達は遠巻きに見ているだけだ。

「お前、親はいないのか?」

「いねーよ! 父ちゃんも母ちゃんも死んじまった! オイラを捨てて逃げようとした所をナーガに頭から喰われちゃった!」

安里は思わず顔を歪める。何と酷い話だろうか。地獄というものは罪人を裁くためのものであるのに、この少年は生きながらに地獄に落とされたのだ。

「それで今は独りで生きてるんだ」

「そうか。……辛い事を聞いて悪かったな」

「気にすんなって！オイラはもう慣れっこだよ」

アフメドはカラカラ笑う。安里はアフメドの健気さに心を打たれた。

「ごめんなあ……」

「何であんちゃんが謝るんだよ？わっかんねえなあ」

涙で顔をくしゃくしゃにしながら

詫びる安里に対し、きよとんとした顔でアフメドは首を傾げる。

「いいや、何でもない。それより、俺達と一緒に来るか？」

「うん！行くこうぜ!!」

こうして安里一行は新たな仲間を加えることと相まった。

カテレアの用意した魔法の絨毯で三人は一路、アフメドの案内によつて街へと向かっていく。

ついた頃には既に夜となっていた。

情報を集めるにしても、ニグラ達が合流してくるまではこれ以上断行動を取る訳にもいかないだろう。

「ひえー、オイラベットで寝るなんて初めてだ！」

「そんなに喜ぶもんでもないと思うけどな……」

安里は苦笑しつつアフメドを眺めている。両親は死に、貧民窟でも過酷な環境にあったのは割れた爪とささくれ立つ指を見れば明らかだ。それが今や柔らかなベッドで眠る事が許されているのだ。嬉しく思う気持ちも分かるというものだ。

「今日は色々あったし、ゆっくり休めよ」

「へへへ、解ってるよあんちゃん。それよりさ、あのデツかいねーちゃんといチャイチャして来なくっていいのかい？ あんちゃんのコレなんだろう？ デシシ」

小指を立てて見せるアフメドは逃う様に尋ねた。

「こ、これって……！お前な、ガキのくせにそういう下品なのは止めておけよ！」

安里は慌てて弁明するが、アフメドはニヤニヤ笑いを止めようとし

ない。

「へえ、ふうくん。そっかー。」

あー、たいへんだなく。オイラのイビキは冥界一だからなあ。あんちゃんは眠れなくて困っちゃうだろうなく」

「……」

完全に調子に乗っている様子のアフメドに安里はため息を吐いた。

(……まったく。まあいいか)

しかし安里は怒る事もなく、ただ黙ってアフメドの頭を撫でた。

「……解った解った」

と、いうと安里はアフメドとの相部屋からカテレアのシングルルームへと移っていった。

「安里様？ よろしいのですか？」

「アフメドの事か？ 悪いなあ、

汽車からは飛び出すわ人攫い同然にアフメドは連れ出すわ……あいつの面倒まで見させてしまった」

安里はそう言ってベッドに腰掛けた。これほど無軌道かつ無鉄砲な主ではカテレアも苦勞するだろうと安里は内心申し訳なさそうにしている。一方、カテレアは安里の言葉に微笑んで答えた。

「私と安里様の間に子供が授かるならばああした快活な子がいいですね」

その言葉に安里は思わず赤面する。

カテレアの容姿が絶世の美女である事も相まって、カテレアの言葉は冗談ではなく本音に聞こえてしまうからだ。

カテレアは安里の隣に座ると、安里の手を握る。心が安らぐような温もりが伝わってくる。

「……カテレア」

「安里様……」

(許されると思っているのか？)

貴様の様な人でなしが。ミッテルトやレイナーレを操り、カテレアを拐かし、ルイーナに災厄を齎す……この外道が！)

「安里様、どうかなさいましたか？」

カテレアは血を抜いた様な顔色に変わり、汗を噴き出している安里に心配そうな視線を向け、寄り添う。

だが、今の安里にはカテレアの温もりが逆に辛かった。

「止めろよ。俺に都合よく吹き込まれただけの言葉を繰り返すのは……!?!」

自分の意志とは関係なく、口から飛び出していく言葉に安里は戦慄する。まるで自分が得体のしれぬ何かに飲み込まれて水に溶けてゆくかの様な恐怖を抱いた。

「俺はそんな奴じゃない!!俺はお前達の主人なんかじゃ……!」

「大丈夫です、安里様。貴方は私の大切な御方……!この身に代えても私は安里様を守ります……!」

「黙れ! 黙れよ!! 俺はそんなんじゃない! そんなんじゃないんだ! 酷いことをしたんだ! 許されない事をしたんだ! だから……だから……」

「……落ち着いてください。さあ、深呼吸をして……」

錯乱して取り乱す安里を優しく抱き締め、背中をさするカテレア。(そうだ。お前は鍵などではない。増しては誰かを救うなど出来よう筈もないのだ。お前は罪人。お前が救われる日は決して訪れない。お前は永遠に咎人のまま彷徨い、無為に死んでゆくのだ。

お前の歩む道行きは地獄よりも辛いものになるだろう。お前に救いはない。あるとすればそれは俺からの祝福だけだ、DOMINANT E)

安里の脳裏に響く声。

その声は何処かで聞いた事があるように思えた。父の怒りのように、母の嘆きの様に安里の精神を引き裂き、蝕み、破壊しようとする。

「安里様……! 無礼を……!」

「……えっ?」

安里は気がつくのと、カテレアに唇を奪われていた。カテレアは肉體操作にも長けているのか、安里の身体を自分の思うままに動かす事が出来るようだ。

「んっ……ちゅ……」

カテレアの舌が安里の口内に侵入して来る。そして、カテレアの唾液が流れ込んでくると、安里はそれを嘔下してしまった。

「あ、ああ……」

ズボンを突き破らんばかりに安里のペニスは勃起していく。逞しいという月並みな形容詞では言い表せない程に怒張した安里の剛直は、アフメドの拳ばりの太さに膨張していた。

「……凄い。こんなに大きくなっていますよ。安里様」

カテレアは安里の股間に手を伸ばし、彼のペニスを露出させてその手でしごきたてる。乾いた音から忽ち湿った音が響き始める。赤黒く染まった亀頭からはカウパー液が滲み出し、カテレアの手を汚していった。

「ふふふ、もう我慢できませんね。安里様」

「あつ……うう……」

カテレアは安里の巨根から手を離すと、そのまま自身の秘所へと導いた。既にそこは濡れそぼっており、カテレアの指先が触れるとピチャリと淫猥な音を響かせた。

「安里様のが欲しいのです。どうぞ私を犯してくださいませ……♥」

カテレアの言葉に安里の中の何かが

舞い降りた生贄に歓喜するかの如く、脈動する。

「ううっ……!」

「おぐ……おっ、おおっ♥」

理知的で凛々しい才女の顔が一瞬にして崩れ、快楽に染まっていた。カテレアは安里に組み付されることを悦び、刺し貫かれる事に至上の喜びを感じているかのように、激しく腰を振り立てた。

「安里様あ、もっとお、もっともっと突いてえ!!」

カテレアの媚肉は安里の男根によつて蹂躪され、子宮口をこじ開けられる度にカテレアは喜悦の声を上げる。麻薬の様な快感に溺れながら、カテレアは必死に腰を振る。

「安里様、愛していますう! 私の中へ出してください! 貴方の子種を下さいませ!!!!」

「なんだ、随分と浅ましいおねだりをするものだな。旧魔王、純血の誇

りはどうした？」

「だって、だって気持ち良いんです！ 安里様のおチンポ凄く硬くって大きくなって！ ああん、素敵い♥旧魔王なんてこのおチンポの前じゃ何の価値もないゴミですわ！ このおちんぽ様が大好き！ 好き！ 好きなの！ 愛してます！ だからお願い！ 早く貴方の赤ちゃんを産ませて！」

カテレアはそう叫ぶと一際強く膣を締め付けた。

「隣れな女だ、純血の誇りを忘れ、旧魔王派を忘れ、クルゼレイを忘れ、俺の女となる事を選んだか。だが安心しろ。お前は我等のモノになるのだ。我等がお前の望みを全て叶えてやろう」

「はい……嬉しい……！」

涙を流し、幸福そうな笑みを浮かべてカテレアは安里のようなもののピストンに身を委ねた。

(くるぜ……れい？ 何それ……？)

嘗ての恋人の名を呼ばれ、僅かにカテレアは眉を寄せたが、すぐにその表情は淫らで卑しいものに変わっていく。

「ああ♥イグツ♥イキながら

チンポでオマンコ擦られてイグツ♥子宮口も♥Gスポットも♥クリトリスも♥全部犯されてるのにまだイグウウツ!!!♥」

白目を剥き、泡を吹き、涙と鼻水を垂れ流しながらカテレアは絶頂し続ける。しかし、そんな状態になってもなお、カテレアの尻も膣もまるで磁石の様に安里のペニスに吸い付いて離れない。

「ああ、イク、またイツちやううっ!! 安里様にイカされるの幸せすぎますううう♥♥♥いらないう♥安里さましか私にはいらないう♥だから♥安里様だけの雌に♥なりたいう♥だから孕ませてくださいう♥! この哀れで惨めな女に♥! どうか安里様の子をつ! お願いますつ! 孕ませてつ!」

「さあな……」

身も心も従属し、女としての最後の砦も明け渡そうとしているカテレアに対し、安里は冷たく言い放った。

「ああ♥ひどいう♥私をここまで犯して♥屈服させて♥なのにつ♥



こんなにもっ♥酷いことを仰るなんてっ♥ああっ♥でもっ♥そんな安里様もっ♥ああ、私は好きですっ♥愛していますっ♥ああ、安里様、安里様、安里様あああっ!!!」

カテレアは絶叫すると、メガネを飛ばし纏めた筈の髪を振り乱し、狂ったように腰を振って精を喰らうとする。

「もう許して、許してくださいっ♥これ以上されたらおかしくなるううううううううっ!!!」

「いいぞ、許してやる」

「ふえ……っ? えっ♥

えへえええっ♥♥♥」

高圧洗浄機のような勢いで安里のペニスから白濁した粘液が発射され、カテレアの子宮を満たしていく。その瞬間、カテレアの全身を衝撃と甘美な快楽が駆け巡った。

「おおおっ、おほおおおおおおお!!!」

獣じみた声を上げ、カテレアは背筋を大きく反らせる。そして、安里が射精を終えると、彼女はその場に崩れ落ちた。

「あ、ああっ……♥」

「ふふふ、どうした? 何を惚けている」

「はい……申し訳ありません……」

安里に促され、カテレアは立ち上がる。その顔はすっかり蕩けきり、瞳の奥ではハートマークが浮かんでいた。

「安里様の……おちん……おチンポ様が凄すぎて、私、呆けてしまっ……」

「ほう、まだ物足りないのか?」

「はい、もっと欲しいです……安里様のザーメン、もっとください」

カテレアはまるで雌犬が降参と屈服を示す様に腹を見せるポーズを取る。下腹部には怪しく輝く淫紋があった。つん、と龟头が淫紋に触れると、カテレアはビクンと身体を震わせる。クリトリスや尻穴などの性感帯を一斉に刺激されたかの様な劇的な快楽にカテレアは打ちのめされ、一瞬意識を失いかける。

「ひゃうんっ! あうっ!」

「どうした、そんなに嬉しいのか？」

「はい、嬉しい、嬉しいんですうー！」

「お前は俺の女だ。そうだな？」

「はいっ、そうです！ 貴方だけの牝奴隷です！ だから、だから早く！ 早く入れてくださいいい！」

カテレアの懇願を聞き届けると、安里は再び彼女の中に挿入する。先程とは打って変わって優しく引き伸ばす様な動きだ。

「あ、ああっ♥これしゅごいいいっ！ さつきより凄いのきちやうううっ♥」

「そうか、ならば好きだけいくが良い」

「はい、ありがとうございます♥」

安里の言葉に嬉々として答えたカテレアはまるで痴女でもしないような卑猥極まりない格好で激しく腰を振る。

「はあ、はあ……安里様のチンポ凄い……私の中をいっぱいにしてる……ああ、幸せ……♥」

「くく……どうした？ 随分幸せそうな顔をしているじゃないか」

「だって……安里様のオチンポ素敵すぎるんだもん……♥」

カテレアは淫らな笑み、普段とはまるで別人の様な口調で言った。安里の男根に媚びるような視線を向けながら、カテレアは安里のペニスを膺全体で慰撫するように締め付ける。

「ああんっ♥オマンコ気持ち良いよお……♥」

「ふん、お前のここはもうすっかり俺の形を覚えてしまったようだな。お前のオマンコは今どんな感じだ？」

「はい、安里様に犯されて悦んでますう♥」

「なら、これはどうだ？」

安里はゆっくりと腰を引くと、一気に突き上げる。

「おっ♥」

突然の強烈な一撃にカテレアは目を白黒させる。だが、すぐにその表情は喜色に染まった。

「ああ♥それも好きい♥どれも好きい♥選べない♥どれが一番なんて選べません♥」

「そうか、それじゃあ全部味わえばいい」

夜が明けるまで言葉通りに全てを味わい尽くしたカテレアは、ベッドの上で幸せそうに微笑むと、そのまま気を失った。

時同じ頃。魔列車の貨物室から天井へと移ったニグラは月を見つめていた。暗雲の切れ端が纏われた月はまるで口元を大きく歪めて囓う怪物の様にも見えた。

囓っているのは何に対してなのかは誰にもわからない。  
わかる筈もない。怪物とは理解の外に在るものだから。

※第82話（ニグラ×モブ モブ姦注意！）

「しかし、この荷物は何なんスカね〜……」

「薬草なのは解るけど、種類も量も普通じゃあないわ」

安里とカテレアが魔列車から飛び出してから一夜明けた頃、ミツテルトとレイナーレは魔列車の貨物室にて、山のように積まれた大量の薬草を前にして呆然となっていた。その量はまさに山であり、とても1人で運べるような代物ではない。

「しかし、これが『フェニックスの涙』の偽物の原料なのでしょうか。この『霊泉の宝珠』を奪おうとした輩は本格的に贋作作りに動き出したという事ですかね？」

ニトクリスはそう言いながら、手近にあった薬草を手取る。それは確かに彼女の言う通り、一見するとただの薬草にしか見えない。だが……

（……ん？ 何だかこれ、ちよつと違う気がする）

彼女はふとその薬草を見て違和感を覚えた。そしてはつと気がつく。

（この薬草は嘗て神官達が私の兄弟を殺めた時に使った毒草に似ている！ まさかこれは……）

ニトクリスはハツとしてその薬草を捨てると、それを見ていたミツテルトは怪しむように尋ねる。

「どうしたんスカ？ 何かあったつスカ？」

「ええ、あります。この草はただの薬草ではありません！ この草からは私の同胞がかつて使っていた猛毒と同じ臭いを感じます！」

「猛毒!？」

ニトクリスの言葉に驚くミツテルト。そんな2人にレイナーレは厳しい表情で命じる。

「急いでこれ運び出しましょう。この薬草の正体を確かめる必要があるわ」

「そうつスね！ つてニグラさんはどこにいるつスカ!？」

ミツテルトの声に辺りを見回す一同……その時、貨物室のドアが開

き、中から明らかに碌でもなさそうな連中が現れた。彼らは全員、目つきが悪い凶悪な雰囲気をもとっている狼男の様な獣人だ。

(ま、拙い！ 一先ず私の術で誤魔化しましょう！)

(ウツス！ お願いしまっす！)

咄嗟の判断でニトクリスが幻惑魔術を発動する。ニトクリス達は貨物室の壁に張り付くようにして隠れつつ色彩は壁と同化しつつ、実体化していた。それを見た男たちはまるで気がつく訳でもなく薬草やら何やらの中身を確認し始める。

(ふう……これでひとまず安心ですね)

ニトクリスは額の汗を拭う仕草をする。ミッテルトも安堵のため息をつく。

(しかしカテレアは、車掌と話をつけていると言っていたのになぜ荷物を確認に来たんでしょう?)

ニトクリスは首を傾げるが、ともあれ今は目の前の状況である。男たちは積荷を確認するとそのまま去って行った……はずだったのだが、どういうわけか一人の男がその場に残った。男はしばらくその場に佇んでいたが、やがてゆっくりとニトクリスが張り付いている壁へ歩み寄ってくる。

(ど、どうしてバレたんですか!?)

(さっきの壁の色と同化してるはずなのに!)

3人は焦るが、男の視線は明らかにこちらに向けられていた。

「へへ……」

ニヤニヤと気がついていいるのかいないのか判らない笑みを浮かべながら近づいてくる男に対し、ニトクリスは息を潜めてやり過ごそうとするが……。

ぐにいつ ♡

(はぐうっ!?! い、いきなり何を!?)

男は見えていない筈のニトクリスの尻を撫で回してきたのだ。当然ニトクリスは悲鳴を上げそうになるが、ミッテルトとレイナーレがいる手前、何とか堪える。そしてミッテルトもまた突然の出来事に声も出せずにいた。そんな中、男はさらにニトクリスのお尻を揉んだり

撫でたりしてくる。

(っ)……(っ)……このお!?

安里以外の下賤な輩が私に欲望を剥き出しにしながら触れるなんてえー!)

(ニトさん落ち着いて! ここは耐えるっスよ!)

(そうですねよ! 我慢して下さい!)

2人の言葉に必死に耐えるニトクリスだったが、男は立ち小便でもしようというのかペニスを取り出す。

まさに獣の様に盛り狂ったペニスは明らかに欲情しきっており、ニトクリスの柔らかな尻たぶの間を狙って突き入れられようとしていた。

そして明らかに気がついてしている男がニトクリスのパンツを引き裂こうとしたその時……!

「いい加減になさいっ!!

この下郎がッ!!」

流石にニトクリスもキレた。彼女は怒りのままに杖を反り立つ男のペニ스에叩きつける!

「ぎゃあああっ!!」

凄まじい激痛に絶叫を上げて床に転がる男の

鼻面に更に追撃が振るわれ、鈍い音が響いた。

「ああ! もうく! 何でやり過ぎ(っ)そうとしないスかあく」

「全く、生娘でもないでしょうに」

「冗談ではありません! 盟約者である安里以外に身体を許すなど、絶対に有り得ません!」

ミッテルトとレイナーレの言葉に肩で息をしながらニトクリスはそう叫ぶ。ある意味とんでもないカミングアウトにミッテルトは啞然とし、レイナーレは呆れ果てた。

「そ、そんな事よりこの場をどうするか考えないと……ってやっぱり増援が来るツスよねえ……」

どれもこれもが山犬か狂犬といった雰囲気の中ばかりなので、ミッテルトはげんなりした顔で呟きレイナーレも渋面を作る。

「へへへ、やっぱり隠れてやがったぜ。匂いで丸わかりだったけどどれもこれもバステト様ばりの上玉だ」

「アヌビス様には悪いけどよオ、殺る前に犯るか?」

「いーねエ! 俺ああの姉ちゃんが好きだ!」

貨物室を覗き込んだ男たちは舌なめずりしつつそう言う。まるで品性の欠片もないその言葉にミッテルトたちは顔をしかめるが、すぐにニトクリスが言い放つ。

「下種が!」

フアラオの大喝と共に放たれるのは、ニトクリスの全身から放たれたのは衝撃波だ。強烈な波動が貨物室内に荒れ狂う。それはニトクリスの怒りがそのまま具現化されたような力であった。貨物室の屋根も壁も吹き飛び、上空を走る魔列車全体にアラームが鳴り響く。

「な、なんだア!?!」

「うわわわわわわ!」

中に乗っていた乗客達が慌てふためいているが中でどんな乱痴気騒ぎをしていたのやら、全員がろくでもない格好だった。

『緊急事態発生! 緊急事態発生! 当列車は緊急停止します! 乗客の皆さまは速やかに非常用の脱出艇に』

お乗りください!』

車内放送が響き渡る中、ニトクリスは戦闘用の礼装に変換魔法をかけて着替えるや、ゴロツキ共を睨みつけた。

「へへへ、何だよ踊り子さん。そんなに色っぽい恰好しちゃって誘ってんのか? へへへへへ……げひいつ!?!」

先頭にいたリーダー格の男が、ニトクリスの放った光弾を受けて吹っ飛ぶ。ただではなく、取り巻きもボンテージ姿となったミッテルトとレイナールに一捻りされて転がっていた。

「ふん……無様な。具体的に言えば、安里の爪先にも劣る位に無様な。こんな程度の相手に手こずるとは……不覚です」

（何かニトクリスさん、さつきから安里サマの事をノロケてるんすけど）

（ニグラ様から聞いた話では案外、深情けなタイプらしいわよ。ファ

ラオなのに湿度は高めみたいね)

ミッテルトとレイナーレはそう言つて嘆息する。そんな中、ニトクリスはリーダー格の男に問う。

「答えなさい。この麻薬と毒草は何ですか!? 一体何に使うつもりだったのです!?!」

「そ、それは……!?! ぐげ、げ、げ……!?!」

男は苦痛にうめく。とはいえニトクリスはまだ何もしていない。ただ質問をただけだ。だが男は苦しみ始める。肉が軋み、目が出目金のように膨らんでいく。

「ま、まさか……!?!」

ミッテルトがそう叫んだ時、男の身体は風船の様に膨れ上がり、そして爆発した。

「な、何なんスカこれ!?!」

「これは呪法です……!?! すぐに解呪を!」

ニトクリスはそう叫びつつ、解呪の呪文を唱える。血を浴びたニトクリスやミッテルト、レイナーレにも影響は無い。

「これは、一体……?」

ミッテルト、レイナーレのみでなく精神耐性を持つニトクリスすらも動揺している。それ程までに目の前で起こった出来事は衝撃的だったのだ。

どろり、とした肉と血液が混ざった肉塊がぶしゅぶしゅ、と音を立ててギョロリ、とした目玉が浮かぶ。

見るだけで正気を削られるかの様な光景。しかしニトクリスは意を決して問いかける。

「あなた……いえ、お前は誰なのです?」

「ギャハハハハハ! 其奴は『禍津星』様トリゼヴィム様の力で外なるものを模倣した肉塊だよオ!!」

のそり、と現れたのはジャツカルの頭部を持った隻眼の獣人。

「な、何者ツスカアンタ!?!」

ミッテルトが叫ぶと、男は目を見開く。

「んく? テメエら……臭うなあ!」



臭うなあ!! あの九頭竜安里の臭いがしやがるなあ!! 許せねえ  
! 許せねえ!! 許せねえなあああ!!」

男の激昂に対し肉塊がまるで鬼軍曹に指揮される兵卒の如く整然  
と並び出す。

「……ん? そういやアンタ、安里サマにボコボコにされたアヌビス  
じゃないツスカ? 近衛兵から輸送係に左遷されたって感じツスカ  
ね?」

「あらあらお可哀想に」

ミツテルトの言葉にレイナーレが微笑む。口ぶりとは裏腹に、その  
表情は嗜虐的で、アヌビスと呼ばれた男を侮蔑していた。

「クソが! クソが! 糞がアアアツ!!! この俺様を嘗め腐りやがっ  
てええええええ! 殺す! 殺す! テメエらの腸を引きずり出し  
て、グチャグチャにしてやるよオオオオツ!」

「下賤な山犬よ! 貴様などが冥府の神たるアヌビスを名乗るなどあ  
まりにも不敬! ここで成敗してくれます!」

「ははっ!? ハッハハハハハハ!」

冥府なんぞ腐れた土塊だ! 天より指し示す『禍津星』様ア! 使  
徒たる我にそのお力を!! ウガア! クトウン! ユフ! クトウア  
トウル グプ ルフブ! グフグ ルフ トク!

グル! ヤ、ツアトウグア! イクン、ツアトウグア!

燦々と照りつける太陽を直視しながらアヌビスは笑う。彼は明ら  
かに正気を失い、その瞳は重油の様に濁っていた。

「狂人の戯言などにっ!!」

レイナーレは吐き捨てんばかりに言い放ちながら仮面を装着する  
と戦闘態勢に移行。ボンテージ、仮面にマントという何とも怪しい姿  
となる。だが、狂人の相手には道化こそ相応しいかもしれない。

「うー、あー」

肉塊は声とも音ともつかない音を響かせてレイナーレに迫りくる。  
しかしレイナーレとて歴戦の墮天使だ。更にはアザゼルにより人工  
神器も賜っている。

「下がれッ! この愚物どもが!」

鞭と剣が合わさった様な武器を手にしてレイナーレは振るう。しかしながら肉塊は怯まない。それどころかレイナーレの肉体へと飛び掛かってきた。

「きゃあつ!? く、この………!」

レイナーレは悲鳴を一瞬あげるも、すぐさま冷静さを取り戻し、光弾を放って迎撃する。

光弾を受けた肉塊は、そのまま床に叩きつけられ、潰れたトマトのようにぶちまけられた。

「……………」

だが、肉塊は結集しギョロリ、とヒキガエルの様な2つの瞳が浮き出る。

「うー、あー」

またしても声とも音ともつかない、叫びとも嘆きともつかぬものを肉塊は発する。

「このっ………!?!」

理解の範疇にないものに恐怖を抱くのは知性体の性である。そのため若干反応が遅れた。

「レイナーレ! 影エ!!」

嘗ての上司であるレイナーレにミッテルトは警告すると同時に影から肉塊の破片がカエルの舌のように向かってきた。

「くう!?!」

咄嗟にレイナーレは身を捻り、回避するも腕に掠ってしまう。するとレイナーレの腕がジクジク、と膿み始める。呪いか毒かは解らないが有難いものではない。

「レイナーレ! 大丈夫ツスか!」

ミッテルトが駆け寄り直ぐに手当をする。とはいえアーシア程の治癒能力は無いため、そこまで効果は望めない。しかも肉塊は一つではない。次から次に襲ってくる。

「これは………厄介ですね」

ニトクリスは眩きながらも解呪を続けて行っている。

「ギャアツハハハハハハ!?!」

俺の事を忘れてんじゃねえぞオ！」

アヌビスが叫ぶなり、ニトクリスへと肉薄する。肘から先が裂けて血管が別の生き物の如く脈動している。

「なっ!？」

ニトクリスは驚愕と悍ましい姿に動揺しつつも即座に結界を張る。

「そんなもんで防げるかよオ！」

アヌビスは嘲笑いながら拳を振るうと、結界はひび割れていく。

「狗が……! 調子に乗るな!!」

腕が化膿しているにも構わずレイナーレは外なるものを呼び出す。現れたのは以前、アザゼルを貪り食った肉喰らいたちだ。

「せいなるかな、せいなるかな」

肉喰らは歓喜の声を上げつつアヌビスに殺到する。手足が吹き飛び、顎が割けようともアヌビスに纏わり、齧りつくのを止めようとはしない。

「お、おおっ! げっ……!？」

血飛沫が飛び、肉片が辺りに散らばる。気味の悪い咀嚼音が響き渡り、術者のレイナーレですら仮面の下で顔を顰める程だ。

「うえ……流石に暫く挽肉料理が食べられなくなるツスね……」

ミッテルトの言葉にレイナーレは苦笑しつつ、アヌビスを見る。既に原型を留めていないものの、未だ動いている。ぶち、ぶちと肉が引き千切られ、ばりと骨が砕かれる。

(これでは再生はできないでしょう。後は肉塊を潰すのみ)

そう思った矢先だった。

「ひ、ふひひ、ひひひひひひ」

念話越しに聞こえてきたのはアヌビスのものとは思えない、ひきつつた笑い声。そして、ぼこ、ぼこ泡立ちながらその血液は沸騰し、酸へと変わっていく。

「おアああ……」

肉喰らい達が融解されていく中、アヌビスの身体は泥状に膨れ上がり、その体積を増していく。色彩はコールドタルの様になんく染まり山犬の頭部を象る、更に泥はアスファルトの様に硬化し、獣と化したア

ヌビスの首から下を再構築していく。

「げヒヤヒヤヒヤヒヤ!! だから冥府は腐れた土塊だと言っただろうがア!!」

「うー、あー」

アヌビスの高笑いに賛同するかの様に肉塊はアヌビスであったものの周囲を囲み、援護するかの様に光弾を放つ。

レイナーレ達は咄嗟に回避するものの、床や壁が融解し始め、激しく貨物室が揺れる。

(拙い………！) これでは勝負がつく前に魔列車が墜落してしまいます！)

ニトクリスは焦燥感を抱きつつも、肉塊の対処に追われている。

「このっ………！ いい加減にしなさい！ メジエド様!!」

このような悍ましいものにメジエド様など呼びたくはなかったが、他に手が無い。ニトクリスはメジエドを召喚した。だが、肉塊たちはメジエドを見ても怯むことなく、光弾を放ち続ける。

「むーん」

しかしメジエド様は10メートルはあろうかという巨体にも関わらず、俊敏な動きで光弾を回避しながら接近し、光弾を放っている肉塊に蹴りを入れる。

「うー、あー」

肉塊はメジエド様に蹴られるも怯まず棘状の触手を伸ばしてくる。

「むーん」

だが、布を被ったメジエド様はどしんと足で肉塊達を踏んで抑え込む。まるで害虫を踏み潰すかの様だ。

「今ですー」

「はいー…このっー」

レイナーレは光の槍を作り、ミツテルトも光の矢をメジエド様に踏まれて蠢く肉塊達に向けて放つ。

「うー、あー、あー」

肉塊達はレイナーレ達の攻撃を受けて霧散するも、アヌビスに吸収されていき、時間切れのためかメジエド様もかき消えてしまった。

「くっ！ この化け物め！」

レイナーレはアヌビスに再度攻撃を仕掛けるが、アヌビスの首から下はまるで金剛石の様な硬さになっていた。全力の連撃で引つ掻き傷すらつけられない。

「くひゃひゃひゃひゃ！ 無駄だぜエ!? 俺は神に等しい存在になつたんだからなア！」

「神？ 狛犬が何を言っているのですか？」

ニトクリスは侮蔑の視線を向けつつ解呪を続ける。

「狛犬だとオ!? てめえら墮天使崩れ如きが俺を馬鹿にしてんじやねえぞオ！」

「馬鹿にしているつもりはありませんよ。事実を指摘したまでの事です」

アヌビスの咆哮に対しニトクリスは淡々と言葉を返す。何とも気丈な態度だがその清々しさはアヌビスには殊更不快であったらしい。

「てめえ……い！ ふざけてんじやねえぞ！ ぶっ殺すぞ！」

殺意に濁りきつた眼でアヌビスは睨みつけるが、ニトクリスは全く意に介さず、解呪を続けている。

「貴方にはもう誰も殺せませんよ」

「うるせえ！ 黙れ！ 死ぬ！ クソアマがア!! 俺様はなア！ 最強のアヌビス様なんだよ！」

ニトクリスの結界に飛びかかり、彼女の肩目掛けて牙を突き立てるべく大口を開ける。ただのひと噛みで彼女は血肉と化すだろう。

「させねえツスよ！」

ミッテルトがアヌビスの死角から飛び出し、腕を伸ばす。するとアヌビスの口が閉じられなくなる。

「ぐがつ!? おいお!?」

「今ツスよニトさん！ この間の宝珠で浄化するツス！」

「はい！」

ニトクリスは意識を集中して、アヌビスを包んでいる闇を祓い清めるべく霊泉の宝珠に魔力を込めてアヌビスを濁流で魔列車の貨物室から押し流す。

「お、おとおお!?」

アヌビスは抵抗する事もできず、貨物室の外へと流されていき、魔列車からはじき出された。遙か上空から落下していく様をニトクリスは見送る。

「ざまあみやがれってんすよ!」

ミッテルトはアヌビスを見下ろしながら中指を立てる。この高さから墜ちたならいくら硬くても粉々に砕け散る筈だ。しかしニトクリスの顔色は優れなかった。いかんせん魔力を消費しすぎたのだ。

「ふう……」

ニトクリスは息を吐いて床に座り込む。膝から下の感覚が殆ど無い。立っているのがやっとだ。

「ニトさん、大丈夫ツスか?」

「はい、なんとか……」

「にしてもあの狗野郎、とんでもないバケモンだったツスね……」

ミッテルトの言葉にニトクリスは苦笑しつつ、同意を示す。あれはこの世のものでもあの世のものとも思えないものだった。

「はい……まさかあんなものが居ようとは……でも」

ニトクリスはアヌビスが変化した際に言った言葉を思い出す。

(確かに冥府は腐れた土塊でしかないと言っていました……それに『禍津星』とは炎の災厄を授けるだけではないというのでしょうか)

ガゴゴゴツ!!

尋常ではない振動と衝撃音が貨物室を襲う。恐らく脱出艇が魔列車から射出された事で結界が解除されたのだろう。一番傷の浅いミッテルトが結界を張るが魔列車自体の崩壊が激しい。

(これは拙いツスね……。早く脱出しないと全員仲良くぺしゅんこになるツス)

ミッテルトがそう思った矢先、ニグラがトゥールチャと共にやってきた。ニグラの顔がやたらツヤツヤしていたのが気になるが指摘する時間も余裕も無かったのでスルーした。

「ニグラ様あ! ウチらがしんどい思いしている時に何やってたんすかあ!」

「それはもう……ねえ？ フフ♪」

ニグラは妖艶な微笑を浮かべつつ、トゥー・ルチャと顔を合わせる。  
(この色欲の化身は……)

ニトクリスはニグラの淫蕩ぶりに頭を抱えるがニグラはニトクリスの苦悩などどこ吹く風だ。

「まあまあ、そんな顔をしないで。」

脱出艇を1隻他のVIPから頂戴してきたらそれでいいのよ。ほら、貴方達も乗りなさい」

「えっ、それって盗んできたって事じゃ……」

「盗むだなんて失礼ねえ。乗り手がいなくなったから貰ってきただけよ」

「は、ははは……」

ミッテルトもニトクリスも乾いた笑いしか出てこなかった。もう深く考えるのは止めようと思った。

「さ、さっさと乗るツスよ。ニトさん立てます？」

「ええ、なんとか」

ニトクリスはミッテルト、レイナーレに支えられて脱出艇へと乗り込んだ。中はまるでコクピットの様になっており、複雑な計器が自己主張するかのように並んでいる。

「それでどうやって動かすんすか？」

「簡単よ。スイッチを押せば動くわ！」

「動くわ！ じゃねーツスよ!!」

ニグラの大雑把な発言に思わずツツコミを入れるミッテルト。その横でトゥーがマニュアルを読む。

「操縦桿を引けば前進、押せば後退。あとは目的地を入力するだけでコースを示してくれる様です」

と、言うなり彼女が操縦桿を引く。するとモニターに映し出されていた地図上を赤い線が走り始める。

「おおく凄いじゃないツスカ！」

「ふふん♪ どう？ 見直したかしら」

得意げな表情をするニグラだが、トゥーの手柄ではないだろうか。

と傍らで休息に入ろうとするニトクリスは頭をよぎったが口にはしなかった。

「成程、次はカーブを曲がれば良いのですね」

トウーは地図に従って操縦桿を思い切り振り回さんばかりに引いた。

「ちよつ!? トウーさん! 幾ら何でもそりやないツスよ!」

ミッテルトが慌てて止めるが既に遅い。バギン! と鈍い音を立てて操縦桿が外れて吹っ飛んでしまう。

「申し訳ありません。力加減を間違えました」

「ごめんなさいね。この子ったらちよつとドジっ子属性があつて」

「オイオイオイオイ! ドジで形容できるミスじゃあねーでしょうが!!」

なんとという有様かと、ミッテルトは突っ込みつつも頭を抱えた。このままでは地面に激突して粉々に

砕け散ってしまう結末しか訪れないではないか。

「まあまあ、砕け散つても肉体を再構築すればいいだけの話ですよ」

「できるわきやねえだろうがあ!! アンタら基準で考えんなってんスよー!」

「え? ミッテルトちゃん達は出来ないの? 遅れてるわねえ」

「進んでるのはアンタのボケ!」

神視点からのマウンテイングに対しミッテルトは涙目になりながら叫ぶ。もういっぱいいっぱいだ。

「お、落ち着いてくださいミッテルトさん。まだ壊れると決まったわけではありませんから……」

「うう、ニトさん優しい……でも多分これ駄目ツスよ……」

「諦めるのはまだ早いわ!」

絶望にくずおれるミッテルトにレイナーレがやおら叫ぶ。その瞳は眩しく輝いている。

「な、なんスか急に?」

「こういう時にはアザゼル様が駆けつけて下さるわ。あの方ならきつと……」



輝く瞳が夢の世界に向けられているのを理解したミッテルトは考えるのをやめた。

「……そうツスね」

ミッテルトは疲れきっていた。もう何もかも投げ出したかった。しかし安里から渡された呪符の存在を思い出した。

『何スカコレ?』

『バイト代をはたいてシユタークさんに作ってもらった呪符だよ。「タダで作ってあげたら、キミは何でもかんでもボクに頼って呪符を乱用するだろうからネ」ときたもんだ。事実だから言い返せねえが』  
『で、どんな効果があるンスか?』

『ああ、それはだな——』

「この列車から脱出する為に必要なんだよオ!! 頼むから出てくれよオ!! お願いしますウ!! 神様ア!! ウチを助けてくださいイ!! どうか! どうか!」

手を擦り合わせて呪符を握りしめつつ、ミッテルトが必死の形相で祈る。その祈りが届いたのか、脱出艇はシユン、と姿を消し……。パツ、と町を歩いていった安里とカテレアの真後ろに転送されてきた。

「ひいやああああああ!!」

「うわああああああ!!」

安里達は辛うじて脱出艇を回避するが脱出艇は町を抜けてオアシスに不時着していった。

(ニグラ様達とはもう乗り物には乗らねえ)

ミッテルトは固い決意をした。

ーおまけー

時は二トクリス達が貨物室で

世を明かしていた頃……。

「くうっ……! 堪らん!

まさかこんな美女と魔列車の中で

楽しめるとは!」

VIPルームにて男はニグラの白磁の肌に触れて興奮する。

「フッフ、私の美貌に酔って頂戴♪」

ニグラは妖艶な笑みを浮かべつつ、VIPの首筋を撫でる。春風のような心地よさと色香がVIPを包み込む。

「ハア、ハア……！ 素晴らしい、実に素晴らしいぞ！」

「あら、随分と元気なのねえ。じゃあ次はこっちかしら？」

ニグラは妖艶な微笑を浮かべ、VIPの下腹部に手を伸ばす。昨日までは不能に悩まされていたペニスが初めて女を抱こうとした時の様に力強く脈打っている。

「くっ！ なんだこれは！ 今まで感じたことの無い快感だ！」

「ウフフ、気持ちいいでしょう？ もっと私に夢中になってちょうだいかな？」

ニグラは更に強く首筋を撫で回し、耳元に吐息を吹きかける。三半規管を揺さぶられ、酩酊の表情を浮かばせるVIPのでっぷりした腹は中で灼が燃えているかの様に熱を帯びていた。その熱はペニスにも作用し、血管を浮き上がらせていた。

「す、素晴らしいぞ！ 『フェニックスの涙』の廉価版を飲んだ時より遥かに気分が良い！」

「あら、そんなものまで用意しているなんて流石はVIPね」

「当然だとも！ 私はあらゆる快楽を追求する為に金を惜しまない！」

「素敵よ♪」

ニグラはそう言って彼の頬に軽く口づけをし、ペニスを握る手を激しく動かす。技巧は勿論、彼女の掌から発せられる魔力が更なる刺激を彼にもたたらす。

「ぐおおおっ！ 出る！ 出てしまおううっ！！」この快楽が終わるのが名残惜しいと思いつつもVIPは欲

望を解き放つ。ドクンドクンと大量の精液が放出され、ニグラの手が白く染まる。

「ああ……！ 凄いわ……！ 貴方、とっても素敵な殿方ね。このままずっと一緒に居たいくらい……」

「はあ、はあ、はあ……」

絶頂の余韻に浸りながら、VIPがニグラを見つめ、唇を奪う。

「んむう……」

ニグラも抵抗することなくそれを受け入れ、舌を絡ませる。互いの唾液を交換し合う、淫靡なキスだった。まるで海水で喉を潤している様な矛盾に満ちた病的な渴きが男の脳髓を満たす。

「んふう……んん……ちゅぱ……れろ……」

長い接吻の後、二人はようやく顔を離れた。ニグラの口から伸びた銀糸がぷつりと切れる。

「はあ、はあ……どうやら貴様も相当な好き者のようだな……」

「ええ、だってえ……こんな美味いんですもの」

ニグラはそう言うと言いついた精液をペロリと舐めた。その様は雌の卑しさと女神の美しさを併せ持つ。

「ククク、淫売が。だが気に入った。妃として飼ってやる。光栄に思え」

「ありがとうございます。では早速、子作りを始めましょうか？」

「ククク、そうだな。まずは貴様を我が妻に相応しい肉体に改造してやろう」

「楽しみだわあ……♥」

余裕たっぷりといった様子のニグラに男は不敵に笑う。

「クク、安心しろ。貴様には最高の悦楽を与えてやる」

男は懐から注射器を取り出した。中には赤い液体が入っている。

「それは何かしら？」

『『フェニックスの涙』の廉価版だ。これを投与すればどんな傷もたちどころに治るぞ』

「へえ、便利なものがあるのねえ。でもお高いんでしょう？」

「それがな、マンモンの奴は秘密工場で大量に生産しているな。安く譲ってくれたのだ」

というものの男の頭の中にある目の前のニグラを犯すこと以外の思考は消え去っていた。

「きやん……冷たい♥」

男が薬液を注射したのはニグラの膣穴だ。

「クク、効いて来るぞ。じきに子宮も襲も男を知らなかった頃に戻る

だろう」

男は下卑た笑みを浮かべつつ、軽くニグラの下腹部に触れる。するとニグラの身体に変化が現れた。

「ふう……ん♥ああ、お腹の中が……乙女に戻っちゃったみたい♪」

襲、膣穴、子宮口がりセットされたかのように窄まり、繋ぎ止める処女膜が再生する。胎内が漂白されていく感覚。ニグラは自分が再び純潔を取り戻したことを悟った。

「ほう、随分と早いな。流石はフェニックスの涙と言ったところか」

「うふふ……穢れを知らない売女なんてとんでもない矛盾だわあ……」

♥ナイアにも劣らない位の悪趣味ねえ……ふふっ♥」

「フッフ、その減らず口がいつまで続くかな？」

ぐぐ……とペニスが処女穴を押し広げていく。

「うぐっ……！ あ、ああっ……！」

破瓜の痛みがニグラを襲う。強張った膣穴と肉棒がぶつかり合い、血が滴る。毒物を吐き出そうとするようにニグラの膣圧が高まり、男根を押し戻そうとしている。

「ぐうっ……！ 堪らん！ 堪らん！」

初夜を奪い、瀆す猟奇的な快感に男は興奮し、ピストン運動を始める。

「あつ！ あん！ あう！ ううっ！ くう！」

ニグラは必死に耐えるが、それでも声が漏れてしまう。男根が出入りを繰り返す度に激痛が走り、意識が飛びそうになる。肉傘がGスポットを擦り上げる度、背筋が震え、快感が脳髓を蕩けさせる。やがてニグラの表情が苦痛ではなく快楽に染まっていく。

「ククク、気持ちいいか？ 気持ちいいんだろ？ 素直になれよ。なあ？」

ニグラの反応の変化に気付いた男は更に激しく腰を打ち付ける。更には彼女の胸を揉みほぐしながら乳首を弄ぶ。ニグラの身体がビクビクと痙攣し、結合部から愛液が溢れ出す。漂白された子宮が再び色欲を取り戻し、ニグラの表情も徐々に緩んでいく。

「ああっ！ 気持ちいいですう！ もっと！ もっと突いてください

いい！ お願いしますウ！ ああつ！ イクツ！ イツくううつ  
!!」

ニグラは甲高い声で叫びながら絶頂を迎える。同時に膣壁が収縮し、ペニスを締め付け射精を促す。

「おおおつ！ 処女のくせに先にイキやがったな！ この淫乱めが！」

「ごめんなさいイ……でもお……我慢できないんです……」

「クク、ではそろそろフィニッシュといこうか」

男はニグラの両脚を掴み、正常位から屈曲位へと体位を変える。種付プレスの体勢だ。

「きやあ……凄い……私、こんな格好で犯されてる……♥染まる♥染まっちゃう♥」

「ハア……ハア……これで貴様は俺の女だ……!」

「ああん♥嬉しい♥貴方のお嫁さんにしてください♥」

「当然だ！ 貴様は一生俺の性奴隷だ！ 受け取れ！ 孕みやがれえええ!!」

ニグラの身体が処女に戻った様に彼の精神もまた童貞に戻っていた。欲望のままに精液を放出する。子宮が熱い液体で満たされ、膣内を満たしていた血液を洗い流す。

「ああ……出てます……♥私の中に……赤ちゃんの種が出てます……♥」

ニグラはだらしのない顔を浮かべ、歓喜の声を上げる。

「はあ……はあ……クク、どうだ？ 気持ちよかったか？」

「はい……最高でした……」

「そうか。ならば次はマンモンに貰った媚薬でも試してみるか」と言つて男は座薬を取り出す。

「あら、今度はお尻の穴を使うのかしら？」

「そうだ。貴様も興味があるだろう？」男はそう言つてニグラの肛門に指を突っ込む。

「あん……そこは……汚いわあ……」

「フン、今更何を言っている」

男はカマトトぶるニグラを鼻で笑い、座薬を挿入する。アナルはフェニックスの涙の影響の外にあり疑似的な性器としての機能を記憶したままだ。

「ひゃうんっ!？」

「さて、効果が出るまで少し時間がかかるからな。それまでは好きなようにさせてもらおうぞ」

そう言うと男はニグラを四つん這いにさせ、背後から犯し始める。

「あっ…………… やあん♥」

「クク……………ケツ穴犯される気分はどうだ？」

「んふう……………すごくいいわ♥」

月並みな感想であったが彼女のアナルは月並みのものではない。パン！ パチン！ という肉を打つ音と共に豊満な臀部が揺れ動くのみでなくまるで別の生き物のように男根に絡みつき、貪欲に精液を搾り取るうとしていた。

「ああっ……………♥お尻の奥う……………当たって……………♥」

突き上げられる度に甘い声を上げ、膣からは大量の愛液が噴き出し、シートに大きな染みを作っている。まるで蠟が溶けるように彼女の理性はドロドロになって行く。

「くく、もうすっかりメスの顔になったじゃねえか。そんなにこつちの具合もいいのかよ？」

「はいいい！ おまんことお尻両方責められて……………すっごく感じちやいますう！」

「へっ、上等だ。だったら望み通りぶち込んでやるよ！」

男はニグラの腰を掴むと、一気に肉棒を突き入れた。

「あっ！ 入ってきたあ！ 大きいのきたあ！ イクっ！ またイツちやうううう！」

ニグラは獣のような声を上げて忽ち絶頂を迎えた。

「はは！ すげえ締めまりだ！ 持ってかれちまいそうだけぞ！」

口調も若返った男はニグラの最奥を何度もノックするように腰を叩きつける。その度に子宮が押し潰され、ニグラの口から喘ぎ声が漏れる。



「き、気持ちいい！ 気持ちいいですう!!」

男は泣き叫びながら叫ぶ。だが、それはもはや絶叫に近かった。

「そうよね？ 気持ちいいわよね？ だってこんなに勃起してるもの。私の中で貴方のおちんぽビンビンになってるわよ？ 嬉しい？」

「嬉しくない！ 俺はそんな事望んでいないんだあ!! 死にたくない！ 死にたくない!!」

ニグラの淫靡な言葉によって男の精神は限界を迎えようとしていた。

「そう……なら死ぬ前に私がイカせてあげる。たつぷり中に出して頂戴♪」

ニグラはそう言うのと激しく腰を振り始めた。

「やめっ！ やめて！ お願いだからやめて下さい！ 許して下さい！ 何でもしますからあ！」

「ダメ♥」

「ひいっ！ やだあ！ もうやだあ！ 出させてくれ！ 出させてくれえ！」

男は恥も外聞もなく泣き喚く。

まさに檻か地獄に繋がれた鼠のようだ。

「あはっ♥いいわよ♥いっぱい出しなさい♥」

ニグラはそう言い放つとラストスパートをかける。

「ひぎいいいいいいいい!!」

男の意識が混濁する。死の恐怖はこの快樂地獄が一刻も早く終わってほしいという願望に摩り替わり、意識が蜘蛛の糸の様にプツン、と切れた。



## ※リクエストSS（ニグラ×モブ 偽イツセー登場）

時期は安里達が冥界に向かう少し前のことである。

イツセーは実績作りのために悪魔稼業に励んでいた。その仕事の内容は……。

「いや〜参った参った。泣く子とモンペには勝てねえってなあ」

オカルト研究部顧問ことアザゼルはポリポリと頭を掻きながら愚痴る。

「モンペって……」

アザゼルの呟きを聞いたイツセーが苦笑する。一応教師だから保護者からのクレーム対応もしなければならぬようだ。

「……しかも30そこそこでPTA会長に収まったバリバリのキャリアアウーマンだぜ？ オカルト研究部の存在が目障りらしいんだよなあ。どんだけヒマなんだか……」

アザゼルは肩を竦めて嘆息した。

「まあまあ先生、これもお仕事ですよ？」

「バカヤロー、俺の仕事は堕天使総督、次いでお前らのコーチング。教師の仕事なんざグ〇コのおまけ、刺し身のツマだ！」

（え、エラいことを言う人だなあ）

あまりの発言に流石のイツセーも絶句してしまふ。ロスヴァイセも本来の年齢をサバ読みして教師に扮しているというのに。

と、その時、控えめに部室のドアが開かれ誰かが入ってきた。

「あの……失礼します……」

遠慮がちに入室してきたのは何とも気弱そうな、ギヤスパーを彷彿とさせる様な少年か少女か曖昧な体つきをした生徒だった。アザゼルはその生徒を見て大きいため息をつく。

「また来たのかよお前さんは……。俺は言ったはずだぞ？ 『もうここには来るな』ってな。それにここじゃなくなたって他にいくらでも行く場所はあるだろうに」

アザゼルの言葉を聞いて少年（？）はやや怯えながらも意を決し口を開く。

「いえ、先生以外に頼れる人が居なくて……」

「つたく。しょうがない奴だなお前さんは。ほれ、そこ座んなさい」

「はい！ ありがとうございますう！」

少年（？）は嬉々としてソファアに腰掛ける。この様子だと何度も来ているのだろう。アザゼルも満更でもない表情をしている。

「で、オフクロさんはどう言っただ？」

「母さんは関係ありません！ ボクは一人前の男になるんです！ そのためにも先生のお力を是非お借りしたいと思わせて……」

話を纏めるとどうやら少年は母親から自立したいらしい。少年の名は天城拓人（あまぎたくと）

と言い、今年中学三年生になったばかりの15歳だという。だが見た目は完全に女の子にしか見えない。拓人は幼い頃からずっと母親の言いなりになって生きてきた。母親は息子を過保護過ぎるほど溺愛しているらしく、その愛情表現が度を過ぎているのだという。

例えば学校への送り迎えから始まり毎日手作り弁当を作ってくるわ、休日にはシヨツピングに連れていくわ、誕生日やクリスマスには高価なプレゼントを贈ってくるわと。

そこだけ聞けばいい母親じゃないか、と思わなくもない。しかし拓人の交友関係に関してはまるきりの毒親ぶりを発揮する。

友達が出来ればその子の家に電話を掛けて怒鳴り散らす。そして二度と自分の息子に近づくなと言っただけ聞かないのだ。当然携帯やスマホの類は取り上げてしまう。

その結果、拓人に友人と呼べる存在は皆無となった。更に気弱で中性的な彼は脱落者達が鬱憤を晴らすのに格好の対象となってしまうのだ。

当然彼の母親である瑠美子は烈火の如く怒り、警察まで介入させようとする有様。

校長はストレスで胃をやられたらしく病院へ搬送された……。

「まあ校長の下りからは俺の創作だが」

「アザゼル先生エ……」

イツセーはアザゼルの相も変わらぬテキトーさに呆れた。

「ま、まあそういうわけなんです先生。どうかお願いです！ 僕を強くしてください！」

「と、言われてもなあ……チラリ」

「口で言わんでください！」

アザゼルの視線を受けたイツセーは即座に突っ込みを入れた。イツセーは目の前の少年に対して少し同情していた。

(可哀想だなあこいつ。オフクロさんの管理っぷりはリアスさんよりよっぽど悪魔だよ)

と、その時部室の扉が再び開いた。

「うふふ、ちよつと退屈だから遊びに来ちゃったわ♥」

やってきたのは保険医のニグラ・サセコヴィツチ。

こちらもちちらで相変わらず暴力的なまでの色香を振りまいていた。イツセーはアザゼルはともかく拓人には刺激が強すぎたらしい。顔を真っ赤にして目を逸らしすが当然見逃す筈もない。

「あら、今日は随分可愛い子がいるじゃない？」

一方のニグラはというと、そんな拓人を興味深そうに見つめる。

「な、何ですかあなた!？」

突然現れた見知らぬ美女の登場に戸惑いを見せる拓人。無理もない話である。

「フフ♪ 私は保健医のニグラよ。よろしくね？」

「あ、はい。天城拓人といいます。よろしくお願いします……」

「ええ、よろしく。ところで拓人君、さっきの話だけど……私ならその悩みを解決できるかもしれないわよ?」

「えっ? どういうことですか?」

「簡単な事よ。拓人君だったわね?」

貴方が男として強くなれるよう私が鍛えてあげるわ。そしたらもうお母さんに心配される事は無いんじゃない?」

「ほ、本当ですか?」

拓人は思わず身を乗り出して聞き返す。確かに彼女の言う通り母親から解放されることが出来ればどんなに良いだろうか? このままではいけない、変わりたい、と心の底から思っている拓人はニグラ

の提案に飛びついた。

「うふふ、じゃあ決まりね♥

イツセーちゃんも手伝ってくれるかしら?」

「はい、俺に出来る事でしたら」

「良かったな拓人」

「はいっ! ありがとうございます!」

「それじゃ早速始めましょうか」

こうして拓人のトレーニングが始まろうとしていたが、その内容は彼の想像を絶するものだった。

性的な意味で。

↓

場所はニグラの管轄する保健室から繋がる異空間、もといヤリ部屋。

拓人はニグラと交わる事となった。

「はあ……はあ……」

全裸のニグラを見る拓人は既に牡の本能に支配されつつあった。外見に不釣り合いなペニスははちきれんばかりに膨れ上がり痛みすら感じる程に勃起している。

「ウフツ♥拓人ちゃんは女の子みたいな顔して意外と立派なモノを持つてるのねえ……。それにしても」

拓人の興奮の度合いは嘗てのイツセーばり、いやそれ以上かもしれない。

「随分興奮しているみたいだけど拓人ちゃんは女の子の裸を見るのに慣れていないのかしらあ?」

「はい、その、初めて見たわけじゃないんですけど……」

恐らくは母の瑠美子がそういった雑誌やビデオなどを彼に見せるのを禁じているからだろう。拓人はこれまで異性との接点が無かったため免疫が無いようだ。

「フフ、可愛いわね拓人ちゃんは♥でもこれからはもっといろんな女の子の体を見ていかないといけないわ。ほら、私のおっぱいを触ってみて」

「あつ、は、はい……」

言われるがままにニグラの乳房に触れる拓人。その柔らかさと温かさに感動を覚える。

「どう？ 女の人の体は気持ちいいでしょう？」

「は、はひい……！」

拓人の反応を見たニグラは満足げな笑みを浮かべた。

「拓人ちゃん、今度は自分でやってみなさい。まずは乳首からよ」

「は、はい」

ニグラの指示に従い拓人が両手で彼女の両胸を揉む。ぐにゆり、とふくよかで丸みを帯びた豊かな胸が彼の指によって形を変えていく。「んう……なかなか上手いわよ拓人ちゃん……。次は舌を使ってみるのよ」

ニグラの指示を受けて拓人は恐る恐るといった様子でニグラの左胸にしゃぶりつく。ちゅぱつ、と水音を立てて吸い付く拓人。ニグラの肌はしつとりと汗ばんでおり、それがまた彼の性欲を掻き立てる。

やがて拓人は自らの欲望のままに行動を開始した。右手でニグラの右の乳房を鷲掴みにし、左手で左の乳房を激しく揉んだ。

そして再び口に含んでいた乳房に吸い付き、舐め回す。一心不乱に彼女の乳房を求めるその姿はまさしく牝に飢えた獣じみている。

ニグラはそんな拓人を優しく抱き締めると耳元で囁いた。

「うふふ♥いいわよ……拓人ちゃんのオチンポも良くしてあげる♥」

彼女の手が拓人のペニスへと伸びていくとゆっくりと上下に擦り始めた。

「うああー！」

ニグラの手淫により拓人は快感を覚えてしまう。思わず性交の予行演習でもする様に彼女の指をオナホ代わりに腰を動かしてしまう。しつかりと乳房にしゃぶりつきながらなので非常にアンバランスだ。しかしニグラはそんな事は気にせず、手コキを続ける。

「さあ、イッチャいなさい」

「は、はい！ 出ます!!」

次の瞬間、拓人のペニスから勢いよく精液が放出された。それは二

グラの下腹部を汚していく。

「あらあら、随分溜まってるのね拓人ちゃん。そんなにお母さんが怖いのか?」

「は、はい……僕が母さんに逆らったりすると、凄く怒るんです。僕はただ普通に暮らしたいだけなのに……」

ニグラの乳房の谷間に顔を埋めて拓人が言う。その表情はどこか切なげだった。

「大丈夫よ拓人ちゃん。貴方を縛っている鎖は私が断ち斬ってあげるわ」

そう言って拓人の頭を撫でるニグラ。その瞳には慈愛に満ちた光が宿っていた。

「先生……」

「だから今は沢山出しましょうね? お姉さんのオツパイにいっぱい甘えてね。さあ、オチンポを突き出してみ……♥」

拓人は操り人形のように言われた通りに動く。彼の目の前にあるのは豊満なニグラの肉体。彼は無意識のうちにそれを求めてしまっていた。

「ああ……すごいです……」

ニグラの巨乳にペニスを挟み込んだ拓人は白痴の様な声を上げる。柔らかい肉の塊に包まれ、亀頭がコリコリとした固いものに当たる感覚に彼の理性は完全に崩壊していた。

「うふふ♪ 気持ち良いかしら?」

「はい……すごく気持ち良いれすう」

「じゃあ……さつきみたいに動いてみて♥」

ニグラはウインクすると共に拓人に指示を出す。拓人は再びペニスを抜き始め、ニグラの爆乳に腰を打ち付ける。

「うああ……ああ……き、きもちいいです……ニグラさんのおっぱい……柔らかくて気持ちいい……!」

「ウフフ♥拓人ちゃんったら本当に可愛いわねえ♥」

拓人のあまりの可愛さについて抱きしめてあげたくなるが、今はまだその時ではない。ニグラは拓人の背中に手を当てて魔力を送り込む。

「はあ……はあ……」

拓人の顔が上気し、呼吸が荒くなり始める。更にペニスの硬さと大きさが増していき、限界まで張り詰めていく。射精寸前のペニスはビクビクと痙攣している。

「あつ……！ あ?!? ああつ?!?」

陶酔から驚愕、そして混乱の感情へ。拓人の表情が目まぐるしく変化していく。というのもペニスは張り詰めているのに、射精する事が出来ないのだ。

拓人は何度もペニスを扱いたり、腰を動かしたりして必死に絶頂を迎えようとする。しかし、どうしてもイク事が出来なかった。そんな拓人を見てニグラはクスリと笑う。

「ダメよ拓人ちゃん♥一人前の男というものは、自分だけが気持ち良くなったりしないものだよ」

「そ、そんなあ……」

拓人は泣きそうな顔をする。この苦痛と絶望から解放されるにはどうすればいいのか、と。

「うふふ、拓人ちゃんのカッチカチのオチンポで私のおっぱいを刺激して……、乳首コリコリしたり、パンツパンって突いてイかせてみなさいな♥そうすればドピュドピュってザーメンが出せるはずよ」

ニグラの言葉を聞いた拓人は乳首と谷間を同時に責める様にペニスを動かす。ニグラの乳房が形を変え、その柔らかさが伝わってくる。

「はっ、はっ、はっ、はっ……」

「んっ……んんっ……んんっ……」

ニグラの口から艶かしい吐息は溢れるものの絶頂には至らぬ様だ。拓人も焦りと苦しさで次第に冷静さを欠いていく。

「せ、先生！ イキたい！ 出したい……！ 出す……！ 出すぞ……！ 出してやる!!」

気弱で大人しかった拓人の面影は既に無く、そこに居るのは快楽を求める一匹の獣であった。

ニグラの胸を鷲掴みにして乱暴に揉むと、腰を激しく動かして自分

のモノを擦りつける。その姿はまるで肉食に目覚めた熊か獅子のようであった。

そんな拓人を見たニグラは満足げに彼を激励する。

「フフ、いいわ♥いいわよ拓人ちゃん♥あんっ♥母親の鎖なんて引き千切ってしまいなさい♥」

「う、嫌い！ ニグラさんも母さんと同じだっ！ 綺麗で！ 優しくて！ 僕の事を理解してくれるけど！ 結局は僕を縛り付けて！

自由を奪うんだ！ ば、バカにするな！ イかせてやる！ 僕の……！ いや、俺のチンポで！ 絶対に!! はあ！ はあ！ はあ！ はあ！

「うう……！ いいわあ……！ その調子よお……♥もつと！ もつと激しく♥私をイカせてえ♥」

拓人の未熟ながら殻を破った本気のピストン運動にニグラの表情が蕩けたものへと変わっていく。彼女の股間からは愛液が溢れ出し、太腿を伝って床に水溜りを作る。

「ああ♥いいわあ♥拓人ちゃん最高よ♥もうすぐイケそう……♥さあ、出して！ いっぱい出して！ お母さんの事なんか忘れてしまいましよう♥」

「はあ！ はあ！ はあ！ はあ！ ああああああ!!」

拓人が一際強く腰を打ち付けた瞬間、彼のペニスから大量の精液が放出された。それはニグラの顔にまで飛び散り、白い肌をさらに白く染め上げていった。

「うふふ……いっぱい出たわね……でもまだまだ足りないみたいねえ……♥」

拓人は俊敏な動作でニグラをベットに横倒しにすると投げ出されたかの様に突き出た尻に馬乗りになった。

「はあ……はあ……ニグラさんのせいですよ……こんな身体にした責任……取ってもらいますからね……」

「あらあら……困った子ねえ……」

ニグラは自分の秘所にペニスを必死にこすりつけている拓人の頭を撫でると腰の動きは激しさを増し、ペニスの先端が徐々に膣内へ侵入していく。



「はあ……はあ……ああ……入っちゃいます……ニグラさんの中に入っていきます……」

「いいわよ……拓人ちゃんの童貞、お姉さんが奪ってあげる……♥」  
「は、はい……お願いします！」

即断即決。拓人は躊躇する事なくペニスを突き入れた。

「あああああっ!？」

「くっ……! 拓人ちゃんのオチンポ凄いわ……! 私の中、全部入ってる……! ああっ……!」

「す、すごいです……! ニグラさんのおまんこ気持ち良い……! 熱くてヌルヌルしてて……すごく気持ち良いよお……!」

拓人は夢中で初体験をすませた。ニグラの子宮口に鈴口を押し当てると、そのままビュルルツと勢いよく射精し、胎内に白濁とした欲望を流し込む。自分よりも格上の存在に種付けする征服感に拓人は酔い痴れていく。

「はあーっ……はあーっ……はあーっ……」

拓人は射精の余韻に浸っていた。今まで感じた事の無い快感に彼は完全に虜になっていた。

「うふふ……どう? 拓人ちゃん……初めて女の中に出した感想は?」

「は、はい……すごく……良かったです……」

「そう、けど一人前の男になるにはまだ足りないんじゃないかしら」  
「えっ……そ、そんな……」

拓人は絶望的な顔を浮かべるもののニグラの言う通り、一度果てたというのにも関わらずペニスは硬度を保ったままであった。

「うふふ、大丈夫よ。さっきのは拓人ちゃんが牡になる為の準備運動みたいなものだもの。本番はこれからだわ♪」

「ほ、本当ですか……!」

「もちろんよ。だから、頑張ってね♥」

そして始まったのは彼を牡として昇華させる雌の狂宴。憧れていたクラスメイトや、自分を苛めていた女生徒、はたまた名前も知らない上級生。皆が拓人を鍛え上げるためにニグラに墮とされ、磨き上げ

られた肉体を拓人に捧げてきた。

「はううう♥拓人君しゅごいよおおお♥♥♥」

「んぶう♥んぢゅ♥んぐうう♥♥」

ある者は快樂に溺れ、淫らな牝豚に。

「あんっ♥あんっ♥あんっ♥」

「イキますっ♥イキますっ♥イキますっ♥」

ある者は常に絶頂を繰り返し、早々と拓人に屈服して性奴隷と化していた。

「ああ〜♥拓人さまあ♥今までオカマヤローだなんてバカにして申し訳ありません♥どうかこの哀れなイキリメスブタに愛の鞭をおおおお♥」

「はあああああん♥拓人君のオチンポオオオ!! 先生のチンポより太くて硬くてえええ♥♥」

犯せば犯すほどに拓人の獣性と

魔性の才覚は開花していった。

テクニツクもペニスもニグラの想像以上に成長し

女達を蕩かし、喰らい、落としてゆく。

「ああ……ああ……!! 出る! 出すぞ! 孕め!」

「はいい♥拓人様の赤ちゃん♥いっぱいください♥」

「私にも♥私にもくださいあい♥」

「私も! 私も欲しいです♥」

「二はいっ! ありがとうございますうううう!!」

ドビュルルル! ビュク! ビューツ! ブピユウウ!

「うう……!! ううう……!!」

「うふふ、よく出来ました。偉いわね」

女生徒達が快樂により失神していく中、

ニグラは拓人の頭を優しく撫でる。

「はあ……はあ……はあ……」

拓人はニグラに言われるままに精液を出し続けた。彼女の命令に逆らえず、ただひたすらに腰を振り続け、女達の胎内に精液を吐き出し続けた。

「ふふふ、これで貴方は立派な男の子になったわね。拓人ちゃん。さあ、最後にアレを見てご覧なさい？」

「アレ……？」

ニグラに促されるがまま、拓人はモニターに目を向ける。そこには自分の母親である天城瑠美子が他の男、イツセーに抱かれていた。

「ああ……母さん……」

拓人は母親の変わり果てた姿に言葉を失った。肩で切り揃えられた黒のセミロング。経産婦とは思えない拓人の姉といつても通る程に若々しい容姿。その美しい顔立ちが今は見る影も無く、涙と鼻水、唾液といった体液で汚れていた。

「あひいいい！ イグー！ またイツちゃいますうううう！ お尻！ お尻気持ちいいいいいいいいい！」

「モンスターはモンスターでも、

飛んだ性欲モンスターだな？ えええ！」

パン！ パアン！ 肉同士がぶつかり合う音が響き渡る。

「はひっ！ そ、そうです！ 私はお尻を叩かれて♥若いツバメにケツ穴ズボズボされて喜ぶ変態マゾ豚ですうううう！」

「へっ、ようやく素直になりやがったか。ならもっと激しくしてやるぜ！」

「はいいい♥お願いしますうううう♥」

拓人は瑠美子の墮落ぶりに唾然とした。

「はあ……はあ……拓人ちゃん、これが本当のお母さんの姿よ？ どうう？ 幻滅したかしら？」

「……………」

拓人は何も答えなかった。しかしニグラには拓人がどういった感情を抱いているのか手に取るようにわかった。ペニスが初めてニグラを犯した時以上に勃起しているのだから。

「あら？ ふふっ、どうしたの？ そんなにチンポをおっ立てて。拓人ちゃん、もしかして興奮しちやってるの？」

「ち、違います……」

拓人は否定するが、ニグラの言う通り、彼のペニスは痛いほどに張

り詰めていた。

「嘘はダメよ。ほーら、こんなにガチガチじゃない。許せないでしょ？ 自分を雁字搦めにしたのに、あなたのお母さんはイツセー君のチンポで喜んでるのよ」

「くっ……！」

拓人は悔しそうに歯噛みする。

「ほーら、拓人ちゃんも見てあげなさい。あんな風に犯されながら悦んでいるあの雌の姿を」

「うっ……！ ううっ！」

堪りかねた拓人は遂にニグラや屈服させた美少女達をさておいて、部屋の向こうへと駆け出していく。

果たして部屋の中ではイツセーに貫かれてイキ狂っている母親の姿が……。

「へえ……随分よがり狂っているじゃないか母さん」

「あっ……ああ!? ち、違うのよ拓人！ これは……!?! ひいつ!?!」

墮落した母、いや女の顔を息子に見せてしまった事に羞恥と罪悪感を感じ、取り繕おうとするが、拓人に乳首を摘まれてしまう。

「ああん♥だ、だめえ♥」

「何が駄目なんだよ母さん。イツセー先輩に犯されて、母さんのこっこ、もうグシヨ濡れじゃん」

口調や態度ももはや別人の拓人にイツセーは瑠美子の尻穴を穿りながらも驚愕していた。嘗て自分を支配していた夫が若返って復活したかの様な感覚に囚われる。

「なあ、母さん。どうして俺に隠し事なんてしていたんだ？」

「ああん♥だってそれはあ♥」

「言い訳は聞きたくない」

「あひいいい♥」

拓人の指先が瑠美子のGスポットを刺激するや忽ち、

瑠美子はビクビク、と体が反応してしまう。

「俺がどんな思いで今まで生きてきたと思ってているんだ？」

「ああ♥ごめんなさい♥他の女に貴方を取られないようにと思っ

て……つい……」

「じゃあ、俺を愛していたからって事で良いんだよね？」

「は、はいいい♥ 拓人を愛してますう♥」

「ふふ、良かった」

拓人は満足そうに微笑むと、瑠美子に覆いかぶさる。

「た、拓人!？」

瑠美子の美貌が恐怖にひきつる。受け入れてはならない禁忌が目の前にあった。だが、拓人のペニスは瑠美子の膣内に侵入していく。

「だ、ダメ！ それだけはダメエエ!!」

瑠美子は必死に抵抗するが、イツセーに背後から胸と尻を揉みしだかれ、抵抗力が弱まってしまふ。

拓人は腰を突き出し、瑠美子の胎内に自らのペニスを埋め込んでいく。

ズブウウ!!

「あぎいいい！ 入ってくるううう！ 息子のがあああ!!」

「うっ！ 凄い締め付け……！ これが本物のセックスなんだね。

ああ……気持ちいいよ……!」

拓人は快楽に震えていた。これまで散々ニグラ達に調教されてきたにも関わらず、そのあまりの快感に腰を動かす事が出来なかった。一方の瑠美子は、実の息子との近親相姦という背徳的な行為に脳髓まで蕩けそうになっていた。しかし、彼女はそれでもなお、最後の一線だけは越えまいとしていた。

「はあ……はあ……! お願い拓人！ 目を覚まして！ あなたはこんな事をするような子じゃないわ!」

「母さん。これは躰だからね。独占欲が強いくせに浮気性な母さんのオマンコは今日から俺だけの物だ。これからは毎日可愛がつてあげるよ」

「そ、そんな……!」

「大丈夫、母さんは淫乱だからすぐに慣れるよ」

にこり、と拓人は微笑むが瑠美子から見たその笑顔は悪魔のそれだった。ズチュツ！ スプスプツ！ パンパンパンパンパン！

取り繕う瑠美子の仮面を剥がすべくイツセーから直腸に対して激しいピストン運動が開始される。

「おっ!? おぐう!? あづいっ!?」

ある種此方でもイツセーは拓人の先輩であったようだ。瑠美子の弱点を知り尽くしている動きに、瑠美子はなす術なく翻弄されていた。

「ほら、息子の先輩のチンポでケツ穴穿られてアクメに狂うなんて、淫乱マゾ豚の鑑ですね?」

「すいません、先輩。俺の母さんがこんな変態で……」

「いや、気にするな。お前の母親はこういう奴だ。それより、拓人君。母親を犯して興奮しているのか? チンポビンビンじゃないか」

「はい……母さんを犯したくて堪らないんです」

言葉通りに瑠美子の胎内でペニスを脈打たせる拓人。脈打つ度に瑠美子の膣穴は収縮を繰り返し、肉棒をきつく締め付ける。

「ああ……母さんの中温かいよお……!」

「うっ……くっ……! だ、ダメよ拓人……! お母さん、本当におかしくなっちゃう……!」

「へへっ、いいぜ。もっと乱れちまえよ」

イツセーは瑠美子の尻たぶを平手で叩く。パァン! と乾いた音が響き渡り、瑠美子は悲鳴を上げる。

「ひい! 痛い! やめてええ! 叩かないでええ!」

「あはは、何言ってるんだよ。母さんはDMの変態なんだろう?」

「ち、違おう! 私はお母さんのよ!? なのに、息子に犯されて悦んでしまうなんてえ♥」

ゴリゴリ♥ぶじゅっ♥

拓人のペニスが子宮口をこじ開け、さらに子宮の後方をイツセーのペニスが押し潰す。前も後ろも一回り年下の男に犯されてしまったという事に、瑠美子はどうしようもない屈辱と共に、背筋を駆け上がるような被虐の喜びを感じていた。

「母さん、もうイクんだね。俺ももう出ちやいそうだよ」

「あっ♥ああ♥ダメよ拓人……中はダメ……妊娠しちゃう……♥」

「ははは、とかなんとか言つて

拓人君の腰に足を絡ませているじゃないですか」

事実を指摘された羞恥も瑠美子には興奮の種でしかなかった。

「だつて……だつて気持ち良すぎるんだもの♥もう我慢できない♥」

もはや取り繕うことさえ忘れた雌の顔になった瑠美子を見て、拓人はますます昂り、ラストスパートをかけるべく激しく腰を振り始めた。

ズブツ！ グジュツグポツ！ ブピユツ！ パンパンパン！ 膣もアナルも責められ続け、瑠美子はいよいよ絶頂を迎えようとしていた。

「あひつ♥イグうううう！ イキますううう！ 息子のチンポにイカされるううううう！！」

「ああ！ 出る！ 中に出すぞ！ 母さんの中にたっぷり出してやるからな！」

宣告と共に、決壊が始まる。倫理も道德も何もかもかなぐり捨てて二人は快楽に溺れていく。そしてついにその時が訪れた。

どびゅっ！！ びゅ——っ！！ ドクツドクツ！！

瑠美子の胎内が大量の精液に満たされていく。同時に瑠美子もまた盛大に達していた。

ビクンビクビクウウ！！ 瑠美子の身体が激しく痙攣し、結合部から愛蜜を吹き出した。

「いひいひいーっ♥♥♥」

「おおお！ 締まる！ 搾られる！」

「くくく、息子に種付けされてよがり狂っているな。ほら、お前の大好きなケツマンザーメントリートメントだ。しつかり味わえよ」

そう言うと、イツセーは射精中のペニスで瑠美子の尻穴を穿った。

「んほおお！ そ、そんな！ 今敏感になつてる時に……だめえ！ またイク！ イツちやうううう！」

ぷしやあああああ！ 瑠美子は再び潮を吹いて絶頂した。しかし、それでもイツセーと拓人は瑠美子への陵辱を止めない。

「おいおい、まだ俺は満足してねえぜ？」

「俺もまだまだ満足してないよ？ 母さん。」

孕むまでしっかり俺のチンポで栓をして塗り込んで

あげるからね……ぐう……出すぞ……！」

「あぁっ♥ 息子のザーメン、またぁ……」

瑠美子は絶望に打ち拉がれる様に眉を寄せたが、その表情はどこか嬉しげでもった。

ー

「こ、これで契約完了って事でいいのかなあ」

ことの顛末を聞かされたイツセーは首を捻る。

実際今回親子の快樂堕ち……もとい関係の修復に

尽力したのはニグラとイツセーに扮したアザゼルだ。

イツセー自体は擬態の人工神器に協力したのみであるが、これも中級悪魔に昇進するためなのだ、と強引に割り切ることにした。しかし、まだまだ契約数は足りない。イツセーの奮闘(?)はまだまだ続くのだ。



## 第83話

さて、安里達がネフレン領に入ったその頃……。

「杏寿郎様。服の肩口が破けておりますわ」

「いや、これは失態だな！ 俺もまだまだ鍛錬が足りん！」場所はフェニックス領の山岳。

『フェニックスの涙』の原料である泉が凍結した原因を探るため、ライザーやレイヴェルらは調査をしていた。

「れ、レイヴェル！ 貴族であるお前がそんなことをするんじゃないっ」

「まあ、お兄様。今時の貴族たるもの裁縫の一つぐらいできなくてはなりませんわよ？」

そう言つて、レイヴェルは懐からソーイングセットを取り出し、針に糸を通すと手早く破けた箇所を縫い始める。その手際の良さに思わず見惚れてしまうほどだ。

「はい、終わりましたわ。これでもう大丈夫です」

「うむ、ありがとうレイヴェル嬢！ 助かったぞ!!」

礼を言う煉獄に、微笑み返すレイヴェル。しかしライザーはあからさまに不機嫌な様子で二人を遠巻きに見つめていた。

（人間界で妹を助けてくれたとは聞いてはいたが距離が近い！ 距離が!）

そう思いながら歯軋りをするライザーだったが、それを察したのか煉獄が話しかけてくる。

「どうしたライザー殿？ 腹が痛いのか？ ならば俺の持つ丸薬を飲むむといい！ 胡蝶の調合した特別製だ！」

そう言いながらポケットから取り出した丸薬を差し出す煉獄であつたがすげなくライザーは断つた。

「いらん!! それより調査を続けよう！ こんな所で油を売っている暇はないんだぞ!!」

シスコンの気があるライザーは妹との仲睦まじい様子を見せられる度にイラついてしまい、八つ当たり気味に怒鳴ってしまうのだ。

「貴方、さつきから何をイライラしているんです？ まさか妹が他の男に取られたとか思っているわけじゃないでしょうね？」

「そ、それは……」

見かねたジャンヌ・オルタが横から口を挟むと凶星だったのだろう。ライザーは言葉に詰まってしまふ。だが、ここで引き下がってはいけないと思ひ直し反論しようとするが……

「ふん、馬鹿らしい。そんな事あるはずがなからう！ そもそもレイヴェルはだな……」

「そうだな！ ライザー殿の妹君はまだ幼い子供なのだから、恋愛対象には成り得まい!!」

ライザーの言葉を待たずして煉獄がバサリと快刀乱麻を断つかの如く切り伏せる。

「私はもう大人ですわ!」

「いや、そういう意味ではなくてだな……」

「ではどういう意味ですか?」

「うむ！ ライザー殿は妹君の事を心配されているだけだ!!」

「何でもかんでもアンタが答えるんじゃないっての!」

ワイワイガヤガヤ

まるで子供の喧嘩のようなやり取りが続く中、ロスヴァイセが洞窟の入り口を見つけて声を上げる。

「皆さん、ここを見て下さい!」

「これは……氷柱か?」

そこには無数の巨大な氷柱が天井まで伸びていた。そして更に周囲を確認すると、その光景に全員が絶句する。

「何という数だ。これ程の量の泉の水が全て凍らされたというのか!?!」

「信じられんが事実を前にしてはな……」

目の前に広がる光景に驚愕する一同。そんな中、煉獄はある事に気づく。

「むう……おかしいぞ！ 氷の中に何か居るようだ!!」

「……こ、これは?!」

氷柱の中には見張りの衛兵らしき悪魔達が閉じ込められていた。しかし不思議なことに悪魔達の表情は普段通りのもの。

「奇襲を受けたにしては表情に恐怖や驚愕の類が見受けられんな！」

「だから一々大声で叫ぶな！」

ジャンヌ・オルタが煉獄に注意する中ライザー達は炎で氷柱を溶かす作業に入る。数分後、全ての氷柱は溶け去り中に居た衛兵達も解放された。

「はっ！ ライザー様とレイヴェル様がいらっしやっただぞ!!」

「おおっ!! ご無事でしたか!!」

衛兵達は皆安堵し喜びの声を上げていたが、その中で一人だけ暗い顔をしている者がいた。

「ライザー様……申し訳ありません。私がいながらこのような事態を招いてしまい……」

「いや、構わん。お前はよくやってくれた。フェニックス家の者として感謝する。その忠義、見事であった」

「あ、ありがとうございますっ!!」

ライザーに褒められ感激する衛兵。

(妹が絡まなきや立派に貴族の振る舞いができているんだけどねえ)

その様子を見ていたジャンヌ・オルタは心の中で呟く。

「それにしても一体誰がこんなことをしたのかしら？」

「ネフレンの仕業なのは明らかだろう、わからんのか？」

ライザーの高飛車な物言いはジャンヌ・オルタを苛立たせたが、ライザーが言うように今回の件は明らかに何者かの意図が働いているとしか思えない。

「そのくらい解るわよチャラ男！」

……コホン。ちよつと見直したらこれですもの。人の話は最後まで聞きなさいな。それとも焼き鳥頭にふさわしく三歩歩いたら忘れてしまうのかしらっ？」

「ちよつと貴方！ お兄様に対してなんて口を利いているのですか!?!」

「ああもううるさいわね！ いいからアンタは黙ってなさい!!」

「黙れとはなんですか！ この魔女！」

「ビッチ！ アバズレ！」

「れ、レイヴェル……。そんな汚い言葉をどこで覚えたのだ……」

「ワイワイギャアギャア」

まるで子供の喧嘩のようなやり取りが続く中、煉獄は

（やはり姉妹というのは良いものだな！）

と、微笑ましく眺めているのだった。

そんな中貧乏くじを引いたかのようにロスヴァイセは探知魔法を使い、周囲を調べていた。

すると……。

「何だ、貴様等か……」

「ああ、ボールク様でしたか。」

「ロキの反乱の際は大変世話になりました」

「礼などいらん。俺はミカエルからの依頼を果たしただけだ」

「そ、そうですか、あはは……」

あまりににべもない返答に思わず苦笑いしてしまうロスヴァイセだったが、ジャンヌ・オルタが気になって仕方がないのか話を切り出す。

「そう言えば貴方、前から気になっていたのですけど最初はレイナーレに雇われていたんですよね？ かと思えば悪魔に手を貸したり、ミカエルとも親しいみたいだし……。アンタ何者よ？」

焼けた鉄杭の穂先をボールクに指し示す構えを取り、問い詰めるジャンヌ・オルタだったが、当の本人は気にも留めていない様子だ。ジャンヌは更にそのスカした態度が気に入らないのか更に表情を陰しくする。

「アンタ、まさか安里がアンタを兄貴分だとみなして義理立てしてるから、眷属である私達が手を出さないとか思ってたんでしょうね？ もしそうなら、今ここで……」

フォン、と風を切る音と共に槍の先端がぶれる。次の瞬間にはジャンヌ・オルタの手から槍が消えており、彼女の手には代わりに剣が握られていた。

「好戦的な女だな……」

ピシ、ピシと音をたてて周囲の空気が凍り付く。ボールクの結果が発動したのだろう。緊迫した雰囲気レイヴェルはたじろぐ。レーティング・ゲームとはまるで別物の雰囲気に飲まれかけていた。

「まあ待てボールク卿！ レイヴェル嬢がすっかり怯えてしまっている！ 女子供を怯えさせるのは戦士として恥ずべきものだろう！」

「ふん、相変わらず暑苦しい男だ。……だがまあ、いいだろう」

そう言つて矛を収めるボールク。どうやら煉獄の言葉を聞き入れてくれたらしい。

「その女は殺気が強すぎる。反英雄として在るべき姿ではあるのだろうが、憐れな事だ」

「なっ!？」

「うむ！ 確かに君の殺意は凄まじい！ 病的な威圧感はそれ自体が暴力というものだな！ ボールクも君を心配しているようだ！ ありがたいな！」

「有難迷惑なんですけどオ!？」

完全に闘争の空気が弛緩している。ジャンヌ・オルタの怒声が洞窟内に響き渡った。

「……えっと、それで一体どういう経緯でこんな所に居るのでしようか？」

「アンタまさか、今度はネフレンに雇われてここを凍結させたっていうんじゃないでしょうね？」

「だとしたらどうする？」

「決まっているでしょ？ 貴方達が敬愛して止まない御主の様に……裁きを下すだけね」

再び険悪な雰囲気になる二人だ。

やはり秩序を重んじるボールクと混沌と妄想の泥濘より生まれたジャンヌ・オルタでは相容れない存在なのだろうか。

「いやー、それはないな！ ボールク殿がこの騒動に関わっている可能性は極めて低いと見るべきだ！」

「そうですね……。ボールク様がネフレンに与しているならば、もっ

と卑劣で残忍な手段を取るはずですわ」

落ち着きを取り戻したいレイヴェルは持ち前の明晰さを発揮して、ボールクがネフレンに加担している可能性が薄いことを告げる。確かに一理ある。

「今の貴方がフリーだというのはならば我々に雇われるつもりはないか？」

「悪いが今は先客がいる。二重契約はしない主義でな」

ライザーの勧誘をあつさり断るボールク。しかしレイヴェルは引き下がらない。

「その先約の方と話をさせてもらえませんか？ 違約金は私のポケットマネーから出しますわ」

「ほう？ 俺に交渉を持ちかけるか……」

「はい。私はこう見えてもお兄様の妹なのですから。それに、お兄様はフェニックス家の次期当主となる方です。そんなお兄様に将来の憂いや醜聞が及ぶのは私としても避けたいのです」

レイヴェルは真剣な眼差しでボールクを説得にかかる。その面持ちには貴族令嬢のそれではなく、兄を案じる妹そのもの。

「それはできんな。だが雇い主だけは教えておく。今の雇い主はジオテイクスだ」

「!! なん……だと……!?!」

ライザーも流石に度肝を抜かれた。まさか先代魔王が非公式ながら自分達とネフレンの諍いに介入するとは……。

「ここからは飽くまで独り言だ。」

どうやらジオテイクスは貴様らよりネフレンの方が疎ましい様だな。ネフレンは旧魔王派の残党を取りまとめ、更には『フェニックスの涙』の模造品を作る有様だ。旧知とはいえ我慢の限界なのだろうよ」

確かにマンモン家はグレモリー家やバル家の隆盛に、ムーラムーラ家と共に数百年もの間力を貸した。しかしだからといって旧魔王派を束ねて現政権に牙を剥いた事は許される事ではない。父親としても、一人の悪魔としても、許せるものではなかったのだろう。

「では、この泉を凍結させたのは

貴方ではなくネフレンの手の者か!? 答えてくれ！」

「そうでもある」

ボールクの言い回しは嘘ではないが何かを隠している。レイヴェルは敏感にそれを察したが、ここで追及しても無駄な時間を使うだけだと判断した。

「そうですか、解りました。私達に敵意が無いのであれば、これ以上は何も言いません」

「そうか、では失礼する。だが心しろ。星の届かぬ洞窟だからこそ蠢く影がある事をな……」

「貴方詩人にもなつたらう？」

「考えておく」

「ぐぬ……」

ジャンヌ・オルタにすればはぐらかされた事への皮肉のつもりだったが当のボールクは真顔で返答してきた。これにはジャンヌ・オルタも苦虫を噛み潰したような表情を浮かべるしかなかった。

「では、また会う事もあるだろう」

そう言つてボールクの姿はかき消える。転移魔法を使ったのだから。僅かな静寂の後、レイヴェルはため息をつく。

「結局何だったのかしら？」

「俺にも解らんが……。とにかく単に泉を解凍すればいいという訳では無いようだ」

「そうだなライザー殿！ 凍結した下手人すら定かではない現状、調査を続行するのが得策だろう！」

「ええ、そうですね。けれどとりあえず戻りましょう。衛兵達がキャンプを張っている筈ですし、情報交換をするべきですわ」

レイヴェルの提案に他のメンバーが賛同するも、ジャンヌ・オルタが難色を示す。

「待って、まだネフレンの手の者が居るかもしれないわ。もう少し調べてからにしましょう」

「だが、ここに長居するのは危険だぞ？」

「ええ、けど何もせずに引き上げるのも嫌よ」

ジャンヌ・オルタの意見も尤もであるが戦力を迂闊に分けるのも危険な行為である。そこでレイヴェルが折衷案を出す事にする。

「ではロスヴァイセ様とジャンヌ様はもう暫く捜索をお願いします。その間、私は衛兵達の所へ趣き、情報交換をして参りますわ」

「それが無難ね」

「分かりました。お任せください」

「うむ！ 了解だ！」

↓

「……さて、そろそろ出てきたらどう？」

レイヴェル達を見送るとジャンヌ・オルタは振り向くことなくロスヴァイセ以外の何者かに語りかける。

「えっ？ 探知魔法にはなんの反応もありませんよ」

「ええ、探知魔法にはね！」

自分の影に腰から抜いたサーベルを突き刺すとぐにやぐにやと形を変えたかと思うと覆面の男が現れた。

体格は凡そイツセと同じぐらいだろうか？

「ご名答、よく分かったな」

「……癩<sup>アイ</sup>だけど、ボールク<sup>アイ</sup>の言葉がヒントになったのよ。『星の届かぬ洞窟だからこそ蠢く影がある』とね。探知魔法も光だから影に扮したアンタには反応しなかったのね。ロスヴァイセにも解らないワケだわ。そこだけは褒めてあげる……。ってロスヴァイセ！ 何凹んでるのよ！」

話の途中だが俯いて肩を落として洞窟の壁に手をつけて反省のポーズを取るロスヴァイセにツツコミを入れるジャンヌ・オルタであった。

「……成程。一点物のアンタらは戦い前だつてのに余裕だな。所詮名前も持てない俺とは格が違うぜ……」

しかし闘争の空気は揺るがない。自嘲する覆面男に、ジャンヌ・オルタはハツと鼻で笑う。

「アンタも『悪名は無名に勝る』とか信じているクチ？ 傍から見たら



そうかもしれないけどね、当事者としてはいい面の皮よ? 『裏切られ、穢されて尚誰も憎まない聖女なんてあり得る訳がない。自分達凡人と同じく誰かを憎み、世界を怨むものであって欲しい』っていう下衆な願いから生まれた竜の魔女なんてね」

「ジャンヌさん……」

ロスヴァイセはジャンヌ・オルタの独白と懊悩に胸を痛めた。彼女は存在理由からして歪み、狂っている。

「まあそんな事より今はコイツよ。この覆面男が今回の騒動の黒幕よ。多分ネフレンの配下でしょうね」

「ふ、はははははは! 懺悔じみた啖呵には感心したがまるで見当違いだ。俺はネフレンの部下ではないし、騒動の黒幕というわけでもない。『アレ』の行動を誘導する様に指示を出しただけだ」

「『アレ』? 『アレ』とは何ですか!?!」

「その答えが知りたければ俺を倒す事だな……反英雄に戦乙女。

だが……焼きの回った銘刀が果たして禁手化に至った無銘の刀を断ち切る事ができるかな?」

覆面の男は静かに見得を切る。

数多の屍山血河を駆け抜けてきたであろう男の眼光が二人に突き刺さった。夜空に煌々と輝く昴星の様な。

「全く……コイツやボールクのせいかしら? 詩人臭い言い回しは私の趣味じゃないっていうのに!!」

頭に浮かんだフレーズを振り払うようにジャンヌ・オルタは叫ぶ。

↓

そして時同じ頃。洞窟入口に戻ったレイヴェル、ライザー、煉獄の三人であったが……。

「こ、これは……!?!」

「どういう事ですの!?!」

「むう……! 何とも異様な!」

三人が目にしたのはまたしても凍結している衛兵達と凍りついたテント、更には薪と炎であった。しかも衛兵達は談笑している間に一瞬で凍りついてしまったのか皆笑顔のまま固まっているではないか。

「あ、あり得ん……！ 理解不能だ！ 一体何が起こっているのだ!？」  
ライザーは取り憑かれたかの様に叫ぶが無理もない。今日の前で起きている現象は常軌を逸している。レイヴェルも同感だ。出来る事ならば一目散に逃げ去りたい位だ。だが、それはフェニックス家にある者として許されるものではない。ライザーもまた、同じ気持ちなのか、歯ぎしりする音が聞こえる。逃げ出したい気持ちを堪え、ライザーはふーっ、と深呼吸する。

「うーむ……。この足跡は水かき……。？ 河童でも現れたのか？」

一方煉獄は冷静に分析していた。

大した肝っ玉であるがどこかズレている。

「全く、貴様と言うやつは……」

しかし今のライザーには煉獄の冗談とも本気ともつかない鷹揚さがありがたかった。落ち着きを取り戻した二人は状況の確認を始める。

「この足跡は魔族のものではなさそうだが……」

「それにサイズも私達よりも巨大ね」

「ああ、俺達より遥かに巨大だ！」

まるで雪男と河童の間の子みたいな奴だな！」

「い、幾ら何でもそれは……」

「そうか！ 思った事を口に出したただだが間違っていたならば謝ろう！ すまん！」

「そ、そうか……」

二人が煉獄の天衣無縫ぶりに呆れ返っているとどこから衛兵の悲鳴が聞こえてきた。

「うわあああああ!!」

来るな！ 来るな！ このバケモノがあ！ わああああ!？」

『ひゅおおおお』

吹き抜ける風のような声が響いた後に静寂が訪れた。三人で背中を庇い合いながら確認に向かうとそこには恐怖の表情で槍を構えながら凍てつく衛兵の姿があった。

「ど、どうなっているのですの?」

レイヴェルは動揺の余り日本語が少々おかしくなっていた。

「こ、これではどうしようもないな！ 焼き払うしかない！ 焼却！

焼却するしかない!! 償却！ 消却！ ハハハハハハ！」

ライザーに至っては狂気に駆られた様に笑い出す始末である。

「はっ!? 俺とした事が……！」

「すまん、今のは忘れてくれ」

「あい分かった！ 忘れよう！」

二人のやり取りのさなか、

レイヴェルは再び足跡を確認する。

そのことからレイヴェルはいくつかの推理を立てて二人に話す。

- ①怪物は理解の外にあるもの
- ②足跡があることから瞬間移動の類は使用していないこと
- ③衛兵の構えた槍に血がついていないと言う事は遠距離から凍結させられるということ

④談笑している間の一瞬で凍結させられるが瞬間移動が使えないということとは不可視の存在であるという事

「成程……確かにその可能性は高いな」

「見事だレイヴェル嬢！ 俺では及びもつかない見識の高さだな！

まさに才色兼備とは君の事を言うのだろう！」

「ど、どうも……。それはそれとして不可視の存在をどう炙り出しましょう」

「さつきはその場の勢いで焼き払うとは言ったがなレイヴェル……。危険が大きすぎるぞ」

「ええ、分かっていますわ。ここは慎重にいきましょう」

「そうだな！ 所で俺に一つ良い案があるのだが協力してくれるか!?」

「勿論ですわ」

「いいだろう」

煉獄の申し出に二人は快諾した。

※幕間・異聞 イッセーの契約奮闘記（イッセー×リアス 妄想エッチ イッセー×清芽）

さて、中級悪魔への足掛かりのため悪魔の活動報告書なるものを作成しなければならなくなったイッセーであるが、ここで彼はとある問題に直面する。それは、『悪魔としての兵藤一誠』の活動報告書が求められており、『赤龍帝としての兵藤一誠』の活動報告書は求められないということだ。

そして当の『悪魔としての兵藤一誠』の実績はというと……。

シユタークと契約し、更には天城拓人とも契約してもらえる事にはなったのだがもう一声欲しい。

「そんな訳でリアスさん、何か契約に関してアドバイスを賜りたいのですが！」

「そうね……」

放課後にオカルト研究部の部室を訪れたイッセーの質問に対して、部長であるリアス・グレモリーはその豊満な胸の下で腕を組みながら考え込む。

「一応、学園内にも何人か悪魔の存在を理解し、協力してくれている人はいるからその人達を頼ればどう？」

とは言うが今や駒王学園の生徒は

大概ニグラによって悪魔の存在をサバトじみた儀式を通じて理解していたりする。彼、彼女は既にニグラに心奪われているため契約には応じることはないだろう。

となると、悪魔の存在を知りつつニグラの影響下にならないものとなるのだが……、

「……二人位、心当たりがあるわ。」

一人はあなたのクラスメイト。もう一人は私のクラスメイトなのだけど……」

「リアスさんのクラスメイトで！」

じゃあ早速、その人のところに案内してください！ 俺、早速交渉

に行ってきますよ!」

それにしてもこの転生悪魔、ノリノリである。

「解ったわイツセー。じゃあ早速案内……うっ!」立ち上がろうとしたリアスが突然口元を抑えた。顔色はあまり良いものでもなく、額からは汗が滲み出ている。

「大丈夫ですか!」

「! 触らないで!」

慌てて駆け寄るイツセーに対しリアスは意外にも振り払う様な態度を取る。

「あ……! ち、違うのイツセー! これはその……、最近寝不足で少しカリカリしているだけなの。だから、お願い……私を嫌いにならないで……!」

「嫌いになんてなるわけないツスよ! むしろ俺はどんなリアスさんでも受け止めるつもりです!」

「イツセー……!」

何時の間にか抱き合う二人。リアスの鼓動は暖かく、かつまた至高のおっぱいもまた温かい。

(ん……? 何だか先端が濡れているような)

イツセーが疑問を抱いたその時、リアスは赤面しながら離れた。

「こ、これは……その……! あ、汗ばんじやつたみたいね! ちよつとシャワーを浴びてくるから……待っていてね!」

そう言い残して逃げる様にシャワー室へと消えていくリアス。

残されたイツセーだが先程の感触を思い出すように手を握り締めると、ふと思いついたかの様に呟いた。

「そういえばリアスさんって汗かいても甘い匂いしかなかったなあ……。まるでミルクみたいな……!」

そしてポクポクチーン、と効果音を立てて閃くイツセー。

(な、何て事だ……!!)

彼の想像は彼にとって酷く衝撃的なものであったのだ。

(リアスさんはストレスで甘い物を食べすぎてミルクの匂いがするし吐き気を催したんだ……! そしてストレスの原因は間違いなく俺

に転生悪魔として実績がないことを他の純血悪魔にバカにされてる事に違いない!」

『聞きまして奥様? あのグレモリー家のご令嬢の事?』

『ええ、何でも眷属の一匹はチャリンコで移動するようなダメダメですし、もう一匹は何と言いますか、おつむの方も少々残念な感じの女の子らしいですわ』

『まあ、恥ずかしい。私ならばそんな子達と一緒に居るだけでストレスを感じてしまいそうですわ』

『本当に可哀想に……ほほほ』

「クソッ! 俺の事はいい!」

リアスさんを! リアスを馬鹿にするなッ!!」

妄想の貴族相手に激昂する様は完全な独り相撲である。それはともかくイツセーは自分の不甲斐なさに涙を流した。

「部長にこんな思いをさせておいて

何がハーレム神だよ! バカ野郎! 俺のバカ野郎!」

(全くホントの大バカだな相棒は……。今の嬢ちゃんはどういう状態にあるかははつきりとしているだろうに……。まあ、黙っておくか) ドライグにはリアスの情緒不安定ぶりの理由をしつかりと把握できていた。

1

一方リアスは……。

「んっ……! んんっ……!!」

ぷしゅっ♥ぷしゅっ♥と桃色の乳首からは乳白色の母乳が吹き出しており、リアスはそれを必死に拭っていた。彼女の胸と尻は更に一回りほど肥大化しており、その体はより女性らしくなっていた。リアスの滅びの魔力が反転し、彼女の肉体は母性溢れるものへと変貌していたのである。その理由は無論、最愛のイツセーとの愛の結晶を宿しているからに他ならない。

(……二ヶ月以上、生理が来ていないしこの胸の張り具合……。恐らく妊娠は間違いないでしょうね。だけど、イツセーの子供なら堕ろすつもりはないわ。私は貴族だけど、イツセーは転生悪魔。子供を産む

には様々な障害があるかもしれないけど、それでも……)

まだ見ぬ子供達のためなら何でもできる。リアス・グレモリーという女はその覚悟があった。下腹部がトクン、トクン、と脈打つ度に愛おしさが溢れてくる。リアスにとって、それは幸せ以外の何ものでもないが同時に渴きも覚えてしまう。

(だ、ダメよりアス！ お腹にはイツセーとの子供がいるのよ！ それなのに……どうして私の手はアソコにあるのかしら?)

リアスの手は無意識のうちに股間へ伸びており、指先は陰唇に触れていた。既にそこは熱く湿っており、ヒダは開きっぱなしになっている。そして中からは透明な液体がトロリ、と流れ出てきた。

(ああ……！ いけないわ！ 今、こんなことをしてる場合じゃないのに！)

「ふう……！ ふう……！」

荒くなる呼吸、漏れ出る声、そして潤んだ瞳。

リアスの理性は崩壊寸前であった。

(だ、だめえ……！ 我慢できないわ！ 今だけは許してちょうだい  
イツセー！)

「あつ、あんっ……！」

遂にリアスは己の秘所に手を伸ばし、自慰を始めた。

「あ、ああ……！ イツセー、イツセー……！」

愛する男の名前を叫びながら快楽を貪るリアス。溢れる想いは母乳と愛液となつて噴出され、辺り一面を濡らしていく。

「ああ……！ イク……！ イツセー……イツセー……！ イツセー  
ええええええ♥♥♥」

びくん、と体を震わせて絶頂を迎えるリアス。子宮はイツセーの膣内射精を妄想し激しく収縮を繰り返し、その度にまたしても愛液と母乳が噴き出す。

「はあ……はあ……！ んん……！」

ようやく落ち着きを取り戻したリアスは改めて自分の体の変化を認識する。

「ああ……ごめんね、ごめんね……。こんないやらしいママを許し

てね……♥」

そう言いながら下腹部を撫でるリアス。そこには確かに命が存在していた。更にトクン、トクンと鼓動を繰り返すたびに喜びが湧き上がってくる。子供達もリアスの愛情に応えようとしているのだ。

更にそれだけではなく……。

『ボク達もパパのミルク欲しいよ』

『私も欲しくい！』

(こ、これは……♥)

リアスが下腹部から感じ取ったのは我が子達の欲望だった。母からだけでなく父からも加護を受けたいと願う幼子の気持ちを察知したりリアスは、微笑みを浮かべた。

(解ったわ、あなた達……。

安心なさい、私がしっかり受け止めてあげるから)

その表情は聖母そのもの。リアスの心は優しきで満ち溢れていた。

そして頭に思い浮かべるのは最愛の夫の顔と、そのペニスを子を宿す自身のヴァギナへと導くイメージ。

「さあ……いらつしやい……イッサー……！ 私たちをいっぱい犯して！ あなたのモノで私の中を満たして欲しいの!!」

両手を広げ、その豊満な肢体に抱擁を求めるように誘惑する自分の唇とイッサーの唇、膣穴と龟头がくちゆり、とキスを交わす。子宮は既に降りてきており、いつでも準備は整っている。

「ん……！」

リアスの腰は自然と動き、ゆっくりと挿入を開始した。既に濡れている淫裂は抵抗なくイッサーの剛直を飲み込んでいく。

(あ、熱い……！ これがイッサーの……！)リアスの体は歓喜に打ち震えた。

(あ……♥)

リアスの脳内に電流が走り、視界が真っ白に染まる。イッサーと繋がったことで、今までの自慰では味わえなかった充足感に満たされる。

(ああ……！ 私は今、最高の幸せを感じてる！ もう何も怖くない



!!)

そして、リアスは本能のままにピストン運動を開始する。

「ああ……！ イッセー！ イッセー……!!」

リアスはイッセーの名前を呼び続け、彼の肉棒を味わい尽くすかのように、自ら膣内の形を変えていく。「リアス！ 俺……！ 俺……!!」

イッセーもまたリアスの名を呼ぶ。それは彼にとっての愛の告白であり、リアスにとっては愛の証。

「嬉しい……！ イッセーが私の事を呼んでくれるだけで私は凄く幸せな気分になれるわ！ だからもつと名前を呼んで!!」

「リアス……！ リアス……!!」

二人はお互いの体を求め合い、そして求め合う。

「イッセー……！ イッセー……！ ああ……！ イクツ！ またイクわ！ イッセーも一緒に……！」

妄想なのか現実なのか意識が混濁し、ただひたすら愛しい男の精液を注いで貰うことしか考えられない。

「ああ……！ イクぞリアス！ 中に出すぞ！ 全部受け取れよ!!」

「うん……！ 出して！ 私の子宮をイッセーの精子で一杯にして！

赤ちゃん達に貴方のミルクを飲ませてあげて……！」

「うおおおっ!!」

「ああ……！ イク……！ イクウウウツ♥♥♥」

ドクン！ ドクン！ と脈打つ度に大量の精液がリアスの胎内に流し込まれる。子供達が栄養を欲しているのだと理解したリアスは、一滴たりとも残さず飲み干そうと、膣壁で搾り取っていく……。至福の時間であった。

そしてリアスが絶頂を迎えたと同時に、彼女の胸からは母乳が勢いよく吹き出し、辺り一面を白く染め上げていった……。

1

「……はっー」

気がつくのとリアスは服を着た状態で頭に冷やしたタオルを当てられていた。

「大丈夫ですか？ 部長？」

「え、ええ……」

「すみません、俺のせいで……シャワー室で倒れちゃう位にストレス溜め込ませてしまつて……！」

愛するイツセーが自分に土下座して謝ってくる。リアスは一瞬状況を飲み込めなかったが、すぐに自分が先程まで何をしていたのかを思い出した。

（あれは夢……？ でも、どうしてあんなリアルな感覚が……？）

イツセーのペニスの熱さや硬さ、膣内射精された時の快感、それらがまるで現実の出来事のように鮮明に覚えている。だが、目の前のイツセーは裸ではなくちゃんと制服姿だ。

（そ、そうよ！ 私はこんなところで何を考えてるの!?!）

リアスは慌てて頭を振つて妄想を振り払い、イツセーに言う。

「いいのよイツセー。あなたが悪い訳じゃないわ。私の為に色々してくれているのは解っているから」

「り、リアスさん……！ 俺、頑張ります！ 絶対にあなたを幸せにしますから！」

「ありがとう……。私も、あなたを必ず幸せにするわ」

そう言つて微笑むリアスの顔はとても美しく、慈しみに満ちていた。

それはそれとして、契約相手の紹介はしてもらうのだが……。

↓

場所は変わつてテニス部のコート。

うら若き乙女達が汗を流しながら球を打ち合つていた。ある意味眼福とも言える光景であるが、そんな中に一人だけ異彩を放つ女性がいた。

栗毛を後ろできらびやかにロールした髪型は明らかにお嬢様と云つた雰囲気放つており、その美貌も学園内でもトップクラスだろう。

しかし、何故テニス部のコート側で乗馬服を着て馬に跨っているのか、しかも世紀末覇者の愛馬みたいなオーラを放つ巨馬に。

「相変わらずね、安倍さん」

「まあリアスさん。ごきげんよう。今日はどういった御用件で？」

悠然と馬上から挨拶する彼女こそ、テニス部部長の安倍清芽。名前の通り高名な陰陽師の家の生まれであり悪魔や妖怪に関する知識も豊富である。そのため駒王学園に入学してからというもの、リアスとは仲良くしていた。

「実はちよつと相談したいことがあって……」

「あら、何かしら？ 私で良ければ力になりますわ」

打てば響くようなレスポンスの良さは流石のお嬢様と言ったところか。

「じゃあ早速なんだけど……イツセーと契約してくれないかしら？」

「ど、どうも……」

リアスに紹介されたイツセーは恭しく頭を下げる。すると、

「うくん、急にそんな事を言われましても……。悪魔との契約は死後、悪魔に魂を売るという事ですもの。簡単には決められませんわ」

清芽は少し困った表情を浮かべた。

世間一般での悪魔のイメージは良くない。中には人間社会に溶け込んでいる者もいるが、基本的には人間の敵というのが一般的な認識だ。

（そうなんですか部長!?!）

（そういう悪魔がいるというのは事実よ。けど貴方は魂なんて貰っても仕方がないでしょ？）

（そ、それはそうですが……）

とにかく仮契約であろうとも、イツセーは契約を取らねば始まらない。

「この通りです！ 俺、決して貴方に迷惑はかけませんから！ どうかお願いします！」

イツセーは深く頭を下げて懇願すると清芽は「ふう……」とため息を吐いた。

「そこまで言われたら仕方ありませんわね……。取り敢えず一週間仮契約という形で宜しいでしょうか？」

「あ、ありがとうございます！　それで十分です！」

イツセーは再び深々と頭を下げた。

こうしてイツセーと安倍清芽の契約が成立した。そして彼女の要望に答えられたら本契約を行うという約束をしたのである。

↓

そして次の日。

イツセーは清芽とテニス部のコートで落ち合う。

「これで本当に透明になれるの？」

「はい、なれますよ！」

訝しむ清芽にイツセーは自信たっぷりに答えた。今、イツセーが持っているのはアザゼルの作ったマジックアイテムの一つである『不可視の腕輪』だ。これを使えばどんなに優れた視力の持ち主だろうと、視認することが不可能になるのだ。

「でも効果は30分位しか持ちませんよ。気をつけてくださいね」

「解りましたわ」

と、いうなりいそいそと腕輪を吸着すると、その姿が忽然と消えてしまった。

(凄いなコレ……。マジで見えなくなったぞ)

『もし、イツセー君。まずは食堂に向かってくださいまし』

声はするが姿は見えないと言うのは中々不思議な感覚だった。

「は、はい！　と言うか今どちらに？」

『こちらですわ』

声が聞こえてくるや否や

つんつん、と頬をつつかれた後に

チュツ、と頬に軽いキスをされた。

「うっおっお!!」

姿は見えねど清芽からのキスにより

いきなりテンションがクライマックスになったイツセーは興奮して鼻血を吹き出した。

「だ、大丈夫でして!？」

慌てて駆け寄ってくる清芽だが、やはり姿が確認できない。

なので傍目にはイツセーはいきなり興奮して鼻血を出した様子が見えない。

(うわ、相変わらずキモ……)

(何なのアイツ、テニス部の前で……また覗き？ いい加減にしなさいよね)

(最低……)

案の定、周囲は白い目でイツセーを見つめている。

「す、すいません……。お騒がせしました」

鼻にティッシュを詰め込んだイツセーは、周りに謝ると再び歩き出す。

『ご、ごめんなさいね。私のイタズラのせいで……』

しゅん、とする清芽にイツセーは気にしないで下さいと答えた。

「全然構いません！ むしろご褒美です！ 元々俺の評判は地に落ちてますからね。多少の事では誰も驚きませんよ！ ハハッ！」

そう言って爽やかに笑うイツセーは食堂へと辿り着く。

「はーい。ニンニク爆盛ホルモン焼き味噌ラーメン大盛りお待ちどうさまー」

どうやら清芽は学食のこのメニューに前から興味があったらしい。

『これがあの有名な……！』

清芽は感嘆の声をあげると、早速食べ始める。

『美味しいですわ！ 濃厚かつ芳醇な味わい……これは病みつきになりますわ!!』

姿は見えないが声から察するに相当感動しているようだ。

(確かにお嬢様が白昼堂々食べるような代物じゃないよな。けど嬉しそうな声を聞くとこっちまで嬉しいぜ)

そんな事を思いながらイツセーは食事を続ける。幸せな時間というのは案外早く過ぎてしまうもので、もう既に腕輪の効果時間が切れ始めていた。

「えくと、清芽さん、そろそろ時間が……っとうおっ!」

イツセーは傍らの清芽の席を見た瞬間絶句し、衝撃を受けた。

と、言うのもぼんやりとだが清芽の姿が見えてきたからだ。それは

いいが何と彼女は生まれのままの姿をしていた。つまり裸である。

「な、ななな……なんでえ!？」

「み、見えないのなら別に裸でも良いのでは……と!？」

清芽は顔を真っ赤にして胸を隠してその場にしゃがみ込む。

このままでは、清芽の学園生活は破滅してしまうだろう。

「おばちゃんお釣りはいいからね!」

イツセーは言うが早いか、

脱兎の如く清芽を抱えて、近くの職員用トイレに駆け込んだ。

「あ、危なかった……」

個室に入り鍵を閉めた後、イツセーは安堵のため息を吐く。しかし、イツセーの両腕には清芽の生乳の柔らかさと温もりがしっかりと伝わっていた。

「い、イツセー君……」

「……! すいません清芽さん!」

清芽を便座に座らせるとイツセーは慌てて土下座を敢行した。

「本当に申し訳ありません! 俺が至らないばかりにこんな事に……。本当にすいませんでしたあああつ!!!」

「そ、そんなに謝らなくても良いのですわ。私が浅はかだっただけですもの」

「いや、でも俺が不甲斐ないばかりに……!」

イツセーは悔しげに歯噛みすると拳を強く握りしめる。

すると、その手の上にそつと柔らかい手が重ねられた。

「イツセー君は本当に優しい方ですね、リアスが羨ましいですわ」

顔を上げると、そこには優しく微笑む清芽の顔とゼノヴィアやイリナにも引けを取らない大きな乳房が二つあった。

(で、デカイ……)

イツセーは思わずぐくりと唾を飲み込むとその谷間に顔を埋めさせる様に清芽が抱きしめてきた。

(いい匂いだ……それに柔らかい)

思わず勃起したペニスに手を伸ばして扱ってしまう。「んっ……ふうん……イツセー君ったら、私の身体に興奮してくれてるんですの

？」

「は、はい……。だって凄く綺麗ですから。あ、あとですね……。効果をまた発揮させるには一日休むか俺の体液が必要なもので……。信じてくれますか？」

平手の一つ二つが飛んでくる覚悟で言ったのだが、返ってきた言葉は意外なものだった。

「解りましたわ。貴方を信じます」

イツセーは清芽の言葉に心底驚いた。

(い、一体どういう風の吹き回しなんだ?)

イツセーは戸惑いながらも、清芽の豊満な肉体に触れ続けた。

そして、ついにイツセーの不可視の腕輪が再び効力を発揮する。

「おお……す、すげえ……マジで見えなくなっただぞ」

『良かった……これで一安心ですわ』

良かった良かった、とイツセーが立ち上がったその時。

じゅぽ♥にゆるるるるう♥

「うお……おおっ!？」

清芽からキスをされた時以上の衝撃と興奮、そして快感がイツセーを襲った。イツセーが感じているのは明らかに自分のペニスがいやぶられて愛撫されている感覚。

イツセーは必死で声を押し殺しながら、目の前で起こっている事を理解しようとする。

(あ、あの清芽先輩が俺のチンポを自分から……!?)

しかも清芽はイツセーの腰をガッチリ掴んで離さない。

イツセーの太ももを這い回る指先の感触や、舌使いの一つ一つまで鮮明に感じる。

(な、何だコレ……。気持ち良すぎる……!)

「んん……♥ふう……♥はあ……♥はあ……♥イツセー君のオチンチン……とっても大きいですわ……♥」

清芽は熱っぽい吐息を漏らしながら、イツセーの肉棒を貪っている。見えない状態での性奉仕に、イツセーは今までに無いほど興奮していた。

ちゅぽ♥ぬちや♥れろお……♥ 卑猥な水音を立てながら、清芽は自分の股間を弄り始める。

その姿はまさに淫乱な夜魔そのもので、イツセーは夢中で彼女の口の中に精を放った。

どびゅ……びゅ——ツ!! 清芽の喉奥めが

けて発射される大量の白濁。

イツセーは射精の快楽に酔い痴れる中、清芽は水筒の水を飲む様に音を鳴らして精液を飲み干していく。

ごく……ごくくん……。

『ふ……はあ……♥』

これでもう暫くは大丈夫……ですわよね♥』清芽はイツセーの耳元でそう囁くと、手を引きながらトイレから退室しようとする。イツセーは慌ててズボンを上げた後、彼女を追いかけた。

『ねえ……イツセー♥ 私ね、もう一つしたい事ができちゃったの……それをしてくれるなら、本契約してあげてもいいわ……♥』

「ほ、ホントですか!？」

清芽の提案にイツセーは食いつく。

こと、ここに至ればイツセーも男である。

清芽とセックスできるといふ誘惑には抗えなかった。

『ただし、条件があるの。それはね……』

↓

そしてここは、テニス部の部室。

「はあく疲れたなあ〜もう〜」

「やめたくなるわよね〜部活う〜」

「でも今日は部長さんいなかったし楽だったわよねえ」

下着姿、果ては裸になりながら女子部員達はめいめい好きな事を言っていた。部屋の中にて不可視の腕輪を装着していたイツセーにすれば桃源郷の様な光景だったが、今はそれどころではない。

何せ彼女達が談笑する中、

透明な姿で清芽とセックスしている最中なのだ。

(はああ……♥ 大きい♥イツセー君のおちん○ん……太くって長くつ



て素敵ですわ♥ 擦れるだけでまた……イクう♥)

ビクビクツ、と身体を震わせながら清芽はイツセーに尻と背を向けた側臥位の姿勢で犯されていた。

イツセーは、清芽の大きなお尻を掴みながら腰を静かに打ち付ける。肌同士が触れ合うと、膣内がきゅんきゅんと締まり、清芽の口から甘い喘ぎ声が漏れかける。

(はううううっ♥ 声出るう♥)

後輩達に透明露出セックスしてるのバレてしまいううう♥♥♥)

清芽は必死に唇を噛み締めて声を抑え、その分だけ快感が強くなっていた。

イツセーはそんな清芽の乳首を摘み、クリトリスを弄り回しながら緩やかに腰を動かし続ける。

(ひやうっ♥ ふああっ♥ あふううっ♥ だめえっ♥ おっぱいと

おまんこお♥ 同時に責められたらおかしくなるっ♥ イキまくっ

ちやいますわああああ♥♥♥)

ぷしゅっ♥ じゅわあああっ♥

人生の破滅というハイリスクが齎す

理外の快樂。清芽は絶頂と同時に結合部から潮を吹き出してしま

う。

(清芽さん！ い、幾ら何でもバレちゃいますよお!!)

イツセーは清芽に小声で注意するが、彼女は聞く耳を持たない。

(だ、だって……こんな気持ち良いコト我慢なんてできないですよ♥ イツセー君も……もつと激しく動いてくれても構わないんですのよ？ 私は大丈夫ですから……♥)

清芽はすっかりトリップしてしまい、イツセーの肉棒を貪り続ける。

(あ、あの清芽先輩がここまで乱れるなんて……！ た、堪らん！ 堪らんが……我慢だ!)

刷毛でペイントする様に、ゆっくりとしたストロークを繰り返すイツセー。その動きと先走り汗の浸透は今の清芽には充分すぎる程の快樂を与えてくる。

「おほおおおっ ♥♥♥」

遂に声が抑えられず、清芽は獣じみた声を上げてしまった。

「な、何?! 何か聞こえなかった?」

「そ、そう言えば聞いた事があるわ……! この学園で昔フラれたテニス部員の女の子が化けて出る事があるって……!」

「な、何だっ……!」

幸か不幸か、テニス部の部員達は学校の怪談を信じ切っている様で、イツセーの姿が見えずに騒ぎ始めた。

「ま……まさか……幽霊?!」

「嘘でしょ?! やめてよ!!」

「きゃああああ!!!」

女の子達が慌てふためく中、清芽はもはや理性も品性もイツセーとのセックスで蕩けて剥がれ落ちていた。

「もっと♥もっとお♥私を犯してください♥♥♥ もうどうなっ

てもいいのおおおっ♥♥♥」

「本尾?! やっぱりフラれた相手を呪っている地縛霊なんだわ!」

「助けてー! 呪われたくない!」

「肉っ♥肉いいっ♥ バキバキで、ガチガチのおちん○ん欲しいのお

お♥♥♥ 私のおまんこにぶっ刺してええ♥♥♥」

「憎い!! きゃー! 呪われるー!」

女子達は恐怖のあまり、着の身着のまま、中には下着姿のまま部屋から飛び出していく有様だった。そして、イツセーのペニスも限界を迎えようとしていた。

(う……俺も……また……出る……ッ!!)

どびゅ……びゅーっ!! 大量の精液が膣内に注ぎ込まれる感覚に、清芽は再び達してしまった。

「イグッ♥ チンポから熱いのが出てますわああっ♥ イクッ♥イクイ

クイクウウウッ♥♥♥」

清芽は立ちバックの姿勢で尻を潰れる勢いでイツセーの股間に押し付け、煙草を揉み消す様に、子宮口に押し当てながら射精を受け止める。

イツセーは、清芽に覆い被さる様な姿勢で彼女の背中に顔を埋め、息を整えていた。

やがて二人は繋がったまま床に転がると、どちらともなくキスを交わした。

「ん……ちゅ……♡ イツセー君のオチン○ン……まだ硬いですわね……♡ もう一回……シたいの……ね、もう一回♡」

清芽はイツセーの上に跨がりながら、騎乗位で腰を上下させる。

（う、うお……！ お嬢様だけあって禁欲的な生活を強いられた反動か……!?!）

イツセーは清芽の腰の動きに合わせて下から突き上げ、彼女を喜ばせる。

「んんっ♡ はあんっ♡ んっ♡ んっ♡ んっ♡ んっ♡ ふああっ♡ イツセー君……素敵……素敵よお……♡」

清芽はイツセーの上で踊る様に跳ね、快感を貪る。

（清芽さん……清芽さん!!）

イツセーも清芽の尻を両手で掴み、腰を突き上げる。

パンツ！ パアアンツ!! 肉同士がぶつかり合う音が響き渡る。

「あんっ♡ あふうっ♡ ふああっ♡ あああっ♡ ひやうううっ♡♡」

清芽は甘い声を上げ、淫らに乱れ狂う。

その姿はまるで生霊に取り憑かれたかの様に艶めかしく、イツセーは更に興奮して腰を打ち付ける。

「はあ……はあ……！ 清芽さん……！ 清芽さん!! 好きだ！ 愛しています!!」

「嬉しい……♡ イツセー君……好き……大好き……♡ 私も……私もよ……♡」

日が暮れても尚、どちらともなく性交は留まる事なく続けられた。シャワールームでも、部室でも、

果ては夜のコートで誰も見ていないのをいいことに。イツセーは清芽の身体を、清芽はイツセーの肉体を貪り続けた。

※第84話（ロスヴァイセ、ジャンヌ・オルタ 陵辱  
風味注意！）

「しかし、これで本当にうまくいくのか……？」

「解らん！　だが人事を尽くして天命を待つという言葉がある！」

杏寿郎の提案に対してライザーは半信半疑だったが、それでもやるしかない覚悟を決めた。

そして、レイヴェルもまた、自分のために行動してくれている二人の姿に胸が熱くなるのを感じながら見つめていた。彼の仕掛けた罠というのはテントに食べ物を用意し、その食糧に釣られた所を三人で強襲するという作戦だ。

「全く……酒まで用意していたなんて」

衛兵達の残していた中で凍結していない食糧を集める中レイヴェルが呆れたように言う。

「仕方があるまい。俺とてここまでの大事になっているとは考えもしなかった。締めるところは締めるべきだが、今回は大目に見てやろう」

「うむ！　正しく清濁合わせ呑むという奴だな！」

ともかく三人はテントの中に入り、そこに酒や食糧を置いて様子を見る。何せ不可視の相手であるから、こうして慎重にならざるを得ないのだ。そうしている間に時間は過ぎていく中、動きが起ころ。

『ひゅおおおお』

「ッ!?　今の声は何ですの!?!」

「恐らくヤツだろう！　行くぞ！　レイヴェル！　杏寿郎！」

ライザーの指示に従い、二人は蠢くテントに対して攻撃を行う。

「ノヴァ・ライザー！」

「壺の型、不知火！」

「え、えくと……!!　喰らいなさい！」

業火球、炎斬撃、魔力弾が同時に放たれると、テントが吹き飛び炎上した。何やら皮が焦げ、魚とも獣ともつかぬ匂いが漂ってくる。

そして、焦げたテントが吹き飛ぶと怪物がその姿を表わす。原人の様な輪郭を持ち、人のような形をしているが手足には水かきがあり、目に当たる部分の窪みから緑色の光が漏れている。魚人の類でも魔獣の類にも見えるそれは明らかに異形だった。

「な、何だアレは!?!」

ライザーの表情が強張る。無理もない、こんな生物がいるなど想像すらしていなかったからだ。慮外の存在にライザーは冷や汗を流し悪寒を覚える。

「何者だ！ 貴様はあ!!」

質問ではなく恫喝するかのように叫ぶライザー。しかし怪物は答えない。まるで雲の様に掴み所がなくあやふやな存在のように思えた。

「……どうやら、言葉は通じないようですね」

「ならば是非もない！ 河童退治は初めてだがやれぬ事はないだろう！ 臨戦態勢に入る二人に対し、怪物は構えをとる事もなく立ち尽くすだけだった。その態度にライザーは苛立つ。

「舐めているのか？ それとも恐れをなしているのか？ 何だか解らんが喰らえッ！」

先手必勝とばかりにライザーは炎を翼から放つ。しかし怪物はヒュン、と一行の間を通り過ぎる。

それだけの行動であったのに、ライザーの翼と片腕が凍りついていた。杏寿郎に至っては片目が開かない状態になっている。

「ぐうっ!?!」

「うおっ!?! これは一体……」

『ひゅおおおお』

怪物の鳴き声と共にライザーと杏寿郎の腕の氷結が進む。再び一行の間を通り抜けようとゆらり、と動いた瞬間、怪物の姿が消えた。今度は通り抜けるのではなく走り抜けた。その速度は凄まじいものでハリケーンじみた風圧が巻き起こった。

「きやあっ!?!」

「ぬうっ!?!」

煉獄は怪物から生じた暴風波から、レイヴェルを咄嗟に庇い立てるが衝撃までは殺せず大きく後退させられる。

「こいつ……!」

『ひゅおおおお』

怒りの形相で睨むライザーだったが、怪物は全く気にしていない様子で佇んでいる。

（なんとということだ。奴からすれば今の行動は攻撃ですらないのか!）

ライザーの心に霜が降ったのは寒さばかりのせいではないだろう。彼は数々のレーティング・ゲームを指揮官としても戦士としても勝ち抜いた猛者である。その経験から導き出された結論は目の前の存在は格が違うという事だ。

「どうやら、アレは俺達が思っていた以上にとんでもない化け物らしいな……。レイヴェル、お前だけでも逃げろ」

「そんなことできるわけありませんわお兄様! 私だってフェニックス家の令嬢ですもの!」

レイヴェルは怖じずに前が出る。彼女はライザーの妹であると同時に誇り高きフェニックス家の娘でもあるのだ。ここで逃げるなど出来るはずがない。

「レイヴェル嬢の意気やよし! 俺も微力ながら助太刀しよう!」

「俺に命を預けてくれるのか?」

「義とは相手次第で変わるものではあるまい!」

杏寿郎の言葉にライザーは笑みを浮かべた。彼の心にあつた不安や焦燥感といったものが消えていく。

「助かる。だが闇雲に俺達が攻撃してもあの怪物はそよとも動じない。奴を動揺させるか慄かせる何かが必要だ」

落ち着きを取り戻したライザーは冷静に分析する。レイヴェルもそれに同意するように何度も首を縦に振っている。

「そうですね。あの怪物の能力は未だ不明ですけど、少なくとも不死鳥であるお兄様の炎を受けて無傷だったところを見ると、並大抵のことでは倒せないと思いますわ」

「ならばどうするか……?」

ライザーは懸命に頭を捻り、策を考える。そして一つの考えが浮かぶ。

「行くぞー！ 杏寿郎！ レイヴェル！」

「承知！」

「はい！」

まず三人は氷柱を活かして怪物の動線を狭めるべく攻撃を行う。しかし怪物はヒュンヒュンと泳ぐように動き回り氷柱を更に凍結させていく。

「甘いですわー！」

レイヴェルは啖呵と共に敢えて水弾を怪物の動線に放つ。水弾が怪物に当たる前に凍てつく事で即席のトラップに変化してゆく。敵の能力を利用する事で相手を罠に嵌めようという算段なのだ。

(見事だレイヴェル嬢！ 俺も励まねばならんな！)

杏寿郎の鞘から抜かれた日輪刀炎が帯びる。彼が今、習得している技の中で最速を誇る技を放つ準備に入ったのだ。

「炎の呼吸・陸の型『燎火斬影』！」

燃え上がる炎が燎火の様に相手を照らし出すと共に放たれたのは影すら断つ居合抜き。文字通りの気炎万丈の一閃は怪物の身体に命中すると、そのまま怪物の肉体に裂け目を入れた。ここしかない、とライザーは直感する。

「今だー！ レイヴェル！ 合わせろ!!」

「はい！ お兄様！」

ライザーは自らを燃焼させて動きの止まった怪物に肉薄、レイヴェルは魔力の込められた石つぶてを更に放つ。杏寿郎は息吹を吐くと乱れ切りに怪物を斬りつける。

「炎の呼吸・漆の型『灼光の煌めき』！」

足の止まった怪物に乱れ切りは効果覿面であった。怪物は全身に傷を負いながらもまだ倒れない。だが、それは想定内だ。レイヴェルの石つぶてが怪物の傷に入り込み、畳み掛ける様にライザーが火の鳥に転じて突撃した。

『ロワゾ・ドウ・フリー!』

炎の塊と化したライザーが怪物に激突し、怪物につけられた傷口の石つぶてが炸裂していく。その衝撃で怪物から白煙が生じ始める。

『ひゅおおおおお……おおお……』「やったか!？」

怪物は苦しいな声を上げ、ゆらゆらと身体を揺らし始める。それを見てレイヴェルが歓喜の声を上げる。

「やりましたわお兄様! このまま押し潰してしましましょう!」

レイヴェルの意見は正しい。だがそれは一般的な魔獣なり魔族なりを相手にした場合の話だ。この怪物相手にそれが通じるかは疑問が残る。

「いや待てレイヴェル!」

ライザーが叫ぶと同時に怪物が急に動き出した。まるで薬缶から湯気が噴き出るかの勢いで膨張……いや、巨大化したのだ!

「何だとおおおおおつ!!?」

圧倒的質量の存在が駆け出した事による衝撃波は尋常のものではない。木々も、野営地も、氷柱も全て更地に変えてしまう程の威力であつた。「うおつ!？」

「ぎゃあつ!？」

「ぬうつ!？」

三人ともその衝撃に巻き込まれ吹き飛ばされた。不死鳥の再生能力がなければライザーもレイヴェルも無事では済まなかつただろう。

「無事か! 二人共!」

「杏寿郎様!?! お怪我は……!?!」

煉獄の声掛けにレイヴェルは慌てて彼の元へと駆け寄る。彼の片腕はまるで稲妻の様に複雑骨折していた。

更に片目は爆風により潰されたのか閉ざされた目からは赤黒い血が涙の様に溢れていた。

「問題無い! それよりも今は衛兵達を救助せねば!」

「お待ちください杏寿郎様! 直ぐに

『フェニックスの涙』を!」

レイヴェルはあたふたしながら魔法陣を展開するとそこからフェ



ニックス家の紋様が入った小瓶を取り出して蓋を開けて杏寿郎に差し出す。

「それは怪我人に使った方がいいな！」

「怪我人は貴方でしょう！」

「俺なら大丈夫だ！ それより早く！俺の前では何人も死なせない！」

杏寿郎の叫びにレイヴェルはハツとする。杏寿郎は重傷の身だが自分よりも遙かに弱く、守るべき民を優先しているのだ。折れた腕を固定し、潰れた目元を包帯で巻いて止血する。

「申し訳ありません杏寿郎様！ 私とした事が取り乱しましたわ！」

「気にすることはない！ 俺達は俺達の責務を全うするのみだ！」

「……そうだな！ 幸いあの怪物は逃げたのかそれとも俺達への興味が失せたのか行方をくらました様だ。今の内に負傷者を連れて撤退しよう」

ライザーはそう言うと、ユーベルーナを始めとした眷属達に指示を出す。彼女達が担架や薬を手配し、衛兵達を救助して回る。

（何だあの怪物は……？ あんなとてつもない存在が冥界にいたなどとは……!?!）

ライザーは冷や汗を流しながら怪物のいた方角を睨む。ボールクを手配していた辺りジオテイクスもあの異次元の存在に気付いていたはずだ。

（異次元か……。そう言えば九頭竜安里と戦ったときのあの姿も力も、この世のものとも思えなかつたな）

と、その時レイヴェルからの叱責が飛ぶ。

「お兄様！ ボーツとしてないで手伝って下さい！」

「すまん！ 今行く！」

ライザーは一旦怪物の事を忘れ、

救護活動に勤しんだ。



時間は少し巻き戻り、ジャンヌ・オルタとロスヴァイセは覆面の男と戦っている。ジャンヌの炎とロスヴァイセの破壊魔術が覆面の男

に襲いかかる。

「喰らいなさい！」

「燃え尽きろー！」

しかし二人の攻撃は覆面の男の生み出した影に吸い込まれ、そのまま影が触手となって二人を襲う。

「ひいつ……!? いやあつー！」

ロスヴァイセは触手にトラウマでもあるのか、或いは男性恐怖症故か顔を青ざめさせて悲鳴を上げる。一方のジャンヌ・オルタは主である安里も触手持ちのためか抵抗はなかった様だ。

「フン！ そんなもの！」

彼女は魔力の籠った剣を振るい、影を切り払う。そしてそのまま魔力を込めた炎弾を放つ。炎弾は男に命中したが、男は平然としていた。

「無駄だよ。私の『影』は全ての光を飲み込む。如何なる攻撃をも飲み込み、我が糧とする」

「随分ありふれた話ですね、ミスター」

ロスヴァイセは震えながらも破壊術式を展開して光の矢を射るが、それもまた影によって吸収される。

「……!?」

「さて、そろそろ幕引きとしよう」

男が手をかざすとそこから闇の渦が生まれ、それがどんどん広がっていく。二人は咄嗟に飛び退く事で回避したが、それは悪手であった。

「ぐううううううう!?」

「な……!? これは……!」

二人が飛び退いた直後、地面に広がった闇が二人を拘束したのだ。それだけではない。闇がまるで泥の様に身体に纏わり付き、身体の自由を奪ってゆく。

「う……ああ……」

「くっ……!」

やがて身体中から力が抜けていき、遂には武器を落としてしまう。

「いや……いやです……こんな……！」

「この……ふざけるな……！」

ロスヴァイセとジャンヌ・オルタ

は必死に抵抗するも身体は自由にならず、その動きは次第に緩慢なものへと変わっていった。

「ふっ、君達のような美しい少女を穢せる日が来るなんてね。実に愉快だ」

覆面の男はギラリ、と目を輝かせる。昴星の様な瞳は獲物を狙う肉食獣の眼差しであった。

「や……止めてください！ 私……まだ結婚もしていないのに……！」

「私だって……！ こんなところで死ぬわけにはいかない！」

「ははは！ ならばその身を差し出し、我らの為に尽くすがいい！ 君のその美貌、存分に使わせてもらおうよ！」

泥の様に粘つく闇が人の形に収束していく。

「いやあああ!!」

二人の悲痛な叫び声が響き渡る。そして闇が完全に人型を取ると、それはロスヴァイセにとって恐怖の対象、ジャンヌ・オルタにとって嫌悪の対象となった。

ロスヴァイセを穢そうとしたシャルバ、ジャンヌを穢した男達の似姿に。

「うわあああ！ 何ですかこれえ!! 気持ち悪い！」

「いい加減にしなさいよこの変態！」

ロスヴァイセは半泣きになり、ジャンヌ・オルタは怒りを露にする。だが男達は構わず二人に迫る。

ジャンヌ・オルタは魔力を練って炎を生み出そうとするが、上手く集中出来ない。

(クソ……！ 昔の記憶が……!?)

それはジャンヌが魔女として貶められた監獄の記憶だった。あの時の屈辱が彼女の心を蝕み、炎を生み出す事を許さない。

一方のロスヴァイセも破壊術式を展開しようとするも、シャルバの

似姿に動揺してしまっていた。

犯されかけた時の忌まわしい記憶がフラッシュバックし、魔法陣が展開しない。

「さて、震える君達を見るのも悪くないが、まずはこちらを頂こうか」  
闇が二人の鎧と衣服を溶かし、生まれたままの姿にしてしまう。

「きやあつ!? いやあ!」

「こいつ……!?!」

「フハハッ! 良い眺めじゃないか!これが『衣服破壊』というヤツか」

ロスヴァイセは羞恥で頬を赤らめ、胸元を隠す。一方ジャンヌ・オルタは憎悪の目で睨むものの、どうすることも出来ずにいた。

「ハハッ、そんな目で見られてはおちおち楽しめそうもないな」

わざとらしく覆面の男は肩を竦めると、闇が変じたものたちが二人の雪原を思わせる白い肌に舌なめずりをする。

「いやああつ! 離れてえ!」

「やめろ……! このケダモノ……!」

ロスヴァイセは涙を流しながら懇願し、ジャンヌ・オルタは悪態をつく。力を封じられた今、彼女達に出来るのはただ蹂躪されるのを待つことだけだ。シャルバや男達の舌が二人の頬は元より、首筋、乳房、脇腹、太腿に這っていく。

「ひゃあん!やだ……いやあ……!」

「やめろ……! 気色悪い……!」

ロスヴァイセは嫌悪感から涙を流すも、身体は正直に反応してしまう。一方でジャンヌ・オルタは不快感を顕にして抵抗するも、その顔は朱に染まっていた。

「ははははは! そんな媚びる様な顔で否定しても説得力はないぞ?」

「誰が……! んっ、ひうっ!」

覆面の男の言葉通り、ロスヴァイセもジャンヌ・オルタも無意識のうち男達を刺激するかの様に身体をくねらせ、乳房や尻が艶かしく揺れていた。

「違う……違うの……。私は、淫乱なんかじゃ……ない……」

悔しさに唇を噛み締めるも、ロスヴァイセの秘所からは愛液が滴っている。それを見て覆面の男はニヤリと笑う。

「なに、ヴァルキリーなどと言ってもこの程度さ。神に仕える女とは言ってもその本性は快楽に溺れた牝犬に過ぎない。ほら、この通り」

男達が泥のように溶け出すと再び触手となってロスヴァイセを襲う。「いやあつ！ 助け……！」

「ははは！ いい声で鳴けよ！」

ロスヴァイセの魅惑的な肢体が汗と粘液で濡れていき、その表情は恥辱と恍惚の間に揺れ動く。「うあつ！ だめつ！ そこはあつ！」  
「くっ……ふっ……うっ！」

触手がロスヴァイセの股間に伸び、その割れ目を擦る。既に蜜壺は潤んでおり、その奥にある子宮は子種を求めて蠢き出す。男を知らぬ子宮が疼き、身体は本能的に精を求めてしまう。「あ……ああ……！  
もう……ダメエツ!! 見ないで……！ 私がイクところなんて……見ちやイヤアアツ!!」

ロスヴァイセは顔を背けて必死に絶頂の瞬間を堪えようとするが、無情にも触手が敏感な突起を撫で上げた。

「いやああああつ!!」

ビクン、と大きく仰け反るとロスヴァイセはそのまま心が折れてしまったのか、身をゴロンと投げ出し虚ろな目で天井を見つめている。  
「ふふ、所詮女なんてこんなものだ。さて、次はお前の番だよ、ジャンヌ・オルタ」

「ふざける……な、あああつ!!」

凄んで見せたのも束の間、彼女の体にも多数の唇がついた触手が伸びてくる。「ひっ!!」

「さあ、たつぷり可愛がつてやるよ！」

「いやあああつ！」

無数の口が一斉に彼女の裸体を洗淨、いや染め上げるかの様にもしゃぶりついてくる。乳首や臍、太腿、果ては脇に至るまで、あらゆるところを舐められ吸われていく。

「うああっ！ やめろお！ そんな……とこまでえ!!」

「フフフ……可愛い声じゃないか。もつと聞かせてくれよ」

『魔女め』『雌豚め』『淫売め』

男の似姿達は嘲笑しながら彼女の耳元で囁く。

(ああ……もう、何もかもどうでも……よくなってくる……)

ジャンヌ・オルタの瞳に徐々に理性の光が消えてゆく。股の力が緩んでいくのが見て取れ、陥落寸前である事が分かる。

しかし、その時だった。

ジャンヌの脳裏にある男の顔が浮かんだのだ。

(あ……ぞと……?)

この世における彼女のマスターである九頭竜安里。その彼は今、ルイーナと盛っているではないか。

「ん……？ ははははは!!」

こいつはいい！ 君の中にある潜在的な恐怖がこんな形で浮かび上がってくるなんてなあ！」

「……っ！」

覆面の男の言葉にハツとする。確かに今、彼女は恐れていた。自分の主であり、愛する男が他の女を抱いていることを。いや、抱くのは百歩譲るとして自分以外に夢中になっている。

「ルイーナ……！ いいぞ……！」

最高だ……！」

「ああっ♥安里♥安里お♥

私、貴方がいれば他には何もいらなの♥」

幻とはとても思えない睦み合いにジャンヌ・オルタは言葉を失っていたが更に幻の二人は盛り合う。

「俺もだ……！ ルイーナ！ 俺にはお前だけだ！ だから……一緒にイこうぜ……！」

「ええ……！ 勿論……！ 来てえ！ 私の中にいつぱい出してええええええっ!!!」

ドピユッドピユ——ッ！ ブシャアアア——ッ！ ドクンドクン……!! ルイーナは満ち足りた表情で精を受け止める。一方の

安里も満足げに微笑んでいた。

「はははは！ 君は彼にとつてありがた迷惑な恋のお邪魔虫というわけか！ 実に滑稽だ！ だが悲しむことはないさ。君の望みもすぐに叶えてあげよう！」

覆面の男はまるで昆虫標本の針さながらに反りたつたペニスをジャンヌ・オルタの膣穴へ打ち込まれようとしていた……。

しかし、次の瞬間！

ドジュウウウ！！

灼けた鉄杭が覆面の男のペニスに直撃した！

「ぎゃあああああ!?」

覆面故、表情は分からないが痛みに悶える男の股間に、更に蹴りが見舞われた。

ブジュリ、と熟れすぎて腐った果実が弾ける様な不快な音と共に、男の身体は大きく吹き飛ばされた。

「う、が……ひ……ぐう……!!」

先までの余裕はどこへやら。急所を潰された苦悶と激痛から床で這いつくばって身動きが取れなくなっている。つかつか、とモデルが歩く様に全裸から黒のビキニ姿に霊衣を変えたジャンヌ・オルタが男の前に立つ。

「随分と好き勝手な事を吹いてくれたわね……。魔女だの、雌豚だの、淫売だの、恋のお邪魔虫だのあーだの、こーだの……!」

狂化のせいか、それとも怒りのためかその瞳は燃え盛る炎の如く紅く染まっている。その迫力に思わず覆面の男は息を呑む。背後に見えるのは黒き炎の頭竜。彼はまさに彼女の逆鱗に触れてしまった。「まっ、待ってください！ ジャンヌさん！ 気持ち解りますけどここは抑えて……!」

ロスヴァイセは裸のまま慌てて制止しようとし、覆面の男も便乗する。

「ま、待ってくれ！ 俺はあの女の力で禁手化に至ったんだ！ ネフレンとヤツが繋がっている生き証人だし色々知っている！ 生かしておいた方が得だろう!?!」

必死の命乞いにジャンヌ・オルタの歩みが止まる。ロスヴァイセもホツとした様子だったが、覆面の男は更なる絶望へと突き落とされる。

「喧しい!!」

非情にも黒龍は覆面の男に放たれ、悲鳴をあげる暇もなく彼の肉体はこの地上から消滅した。のみならまだ良かったのだが……。

『グオオオオオ!!』

まさに不動明王の生み出した俱利伽羅の黒龍の如く、火炎竜の勢いは止まらない。凍結していた地下水脈の霊泉を打ち砕き、溶かしていく。

洞窟が激しく振動し始めた。

すわ、崩落寸前の事態であつたが。

ヒュン、と疾風のように二人は何者かに抱きかかえられる。

救助に来たのは、先にヒントを与えたボールクその人であつた。

「あ、アンタは……!?!」

何で安里じゃないのよ!

空気読みなさいよマヌケ!

「知らんな」

「あわわわ……! は、離して下さいいい!!」

「人の脇で暴れるな痴女が……!」

全く、割に合わん仕事だ……」

ボールクはそう愚痴りながらも二人を抱えながら出口へと到達した。

「感謝するぞボールク殿! 今の俺では二人を救難する事が出来なかつただろうな!」

片腕の複雑骨折と片目が潰れているというのに、杏寿郎はボールクにまず礼を述べた。受けてのボールクは軽く肩をすくめ、呆れたような顔を浮かべる。

「貴様自身の治療よりも仲間の安否が気がりだつたとはな。サムラ



イと言うやつはよく解らん……」

「俺の身体の痛みなど何れは回復する！　だが、命を失われる事はどうあっても回避せねばならぬ！　それが鬼殺隊の柱としての責務だ！」

「キサツタイ？　何よそれは……？」

ジャンヌ・オルタは聞き慣れぬ単語に首を傾げる。

「後で話す！　俺の自慢である継子達の話と共に！　だが、先ずは衛兵達の救難をせねばならん！」

「専門用語で専門用語を解説するな！　ホントに何なのよアンタは！　というかまずはアンタの傷の治療をしなさいよ！」

ワイワイギヤアギヤア

騒ぐ一行からすつ、と立ち去ろうとするボールクをジャージに着替えたロスヴァイセが呼び止めた。

「あの、ボールクさん」

「何だ、何度も礼を言われるの想像よりも苦痛なのだぞ？」

「は、はあ……。つてそうではなくてですね！　あの男の覆面が残っていたので持ってきたのですが……！」

ロスヴァイセが取り出したのは覆面男のマスクだ。裏には魔文字が刻まれている上、炎で燃えない特殊な素材のようだ。

「符術やルーン文字、それに魔法薬なども使われています。幾ら何でも魔術のごった煮が過ぎます」

「俺に聞くよりアザゼルに調べさせた方が早い」

素っ気なく言い放つとボールクはヒュン、とまたしても高速歩法により霞の如く姿を消した。

「……もう！　どうして男の人って

いつもこうなんでしょう！」

ぷんすか怒るロスヴァイセは

上空をただただ身上げるのであった。

## ※第85話（曹操&ヘラクレス×七符）

「怪我はないかアフメド！」

墜落してきた脱出艇からアフメドを

触手で抱きかかえながら安里は叫んだ。

「う、うん！ 平気だよ！ ありがとう兄ちゃん！」

「よし、なら良かった。カテレアも無事か!？」

「御心配には及びません。私も旧魔王の端くれですので」

パツパツ、とスカートに着いた埃を払って立ち上がるカテレアに――  
先ず安堵する。

（それにしても妙だ。街の連中、飛行機みたいなモンが落ちてきたって言うのに騒ぎ立てもしねえ）

安里は街の人達を見て思案する。

そのどれもこれも生気が見られない。何もかもを諦めた人間や魔族達ばかりが目映るのだ。

「おい、お前ら大丈夫なのか？ 飛行機があのおアシスに落ちてきたんだぞ？」

「ええ、そうですね」

「そうですね、って……」

すたすたと歩き去っていく住民を見て安里は絶句するしかない。  
グレモリー領とはまるで別世界だ。

「無駄だぜ。この大人はもうネフレン様に逆らうつもりなんてねーのさ。この街はもう終わってんだよ。だからみんな諦めちまってんのさ」

「……どういう事なんだ？」

「それは私がお話しましょう。安里様。ネフレンは抵抗するものや反乱軍を処刑し続けて早数百年。今やこの国の民の心は絶望に染まっているのです。そして、遂に彼は国民全員を洗脳する事に成功した。というわけです」

「と、いうわけです。って……」

お前なあ……」

カテレアが悪い訳ではないのだが、つい溜息が出る。

「かくいう私も安里様に出会う前はそれが冥界のあるべき姿と信じこんでいました。私は愚かでした……」

（洗脳か……。俺もミツテルトやレイナーレ、カテレアにやった事だ。人の事が言えるのか？）

正しい洗脳、正しくない洗脳など区分けする事自体が何とも悍ましく感じる。何れ自分も何者かに裁かれる時が来るのだろう。だが今はそんな事を考えている場合ではない。

「しかし、あの脱出艇は私達が途中で降りていたネフレンの魔列車に備えられていたもの。墜落してきたという事は中で何かあったのかもしれません」

では、中に乗っていたニトクリス達は無事なのか？ 安里は焦燥感に駆られるが、まずは状況を把握しなければならない。

「まずはオアシスに行こうぜ」

「危険です。恐らくネフレンはこの事態を察知し、兵を差し向けてくるでしょう。そうなればいくら貴方でも勝ち目はありません」

「そうかもしれないけどよ！ 仲間を放っておく訳にはいかねえんだよ！」

「安里様、向こうにはニグラ様もおられます。仮にニグラ様が太刀打ちできぬ相手が現れた場合貴方が勝てるのですか？ 一網打尽にされては誰がネフレンを止めると言うのですか？」

「ぐっ……！」

確かにそうだ。カテレアの言っている事は正論である。ニグラは強い。そんな彼女が敵わない相手が襲ってきたら？ その時に自分はどうすればいい？ 足手まといになるだけではないか。

「それに彼女達ならば捕えられたとしても内からネフレンの邸宅なり居城なりを破壊できる筈です。彼女達とて一廉の英傑や墮天使なのですから」

「オイラ、難しい事はわかんねーけど、兄ちゃんの仲間なら強いんだろ？ だったらきつと大丈夫だよ！ 信じようぜ！」

「アフメド……ああ、そうだな。わかったよ。じゃあ取り敢えずは

『フェニックスの涙』のニセモノとやらを調べよう」

安里はカテレアの提案を受け入れた。ここで議論しても仕方がない。それにニトクリス達の事も心配だ。

安里達はニセの『フェニックスの涙』とやらを探すべく街へと繰り出した。

1

「……成程、想像以上に危険な代物ですね、これは」

安里とアフメドが手に入れてきたニセの

『フェニックスの涙』を手にとって眺めながらカテレアは呟く。

その表情は随分と険しい。

「傷薬のどこがおかしいの？」

一方アフメドは不思議そうに首を傾げる。

「ええ。回復作用は勿論ありますが、今調べたら微量の毒物や麻薬成分が混入されています。この状態ではどんな怪我も治りますが、副作用として依存性が高く中毒症状を引き起こしてしまうのです」

カテレアがアフメドにも丁寧な口調で話すのは安里が助けた少年だからだろうか。と、安里は二人を見ながらそんな事を考えていた。

「つまりどういう事？」

「ま、何だ。その薬が欲しくなって欲しくなって仕方なくなる。薬をくれるネフレンのためなら何でもやる様になっちゃう。気づいた頃には手遅れって寸法だ」

「そっかあ……」

「恐らくこれを大量生産して売れば莫大な利益を生むでしょう。そしてそれを利用してネフレンは冥界のみならず地上にもシンジケートを築こうとしているのかもしれない」

「とんでもねえな……」

安里は思わず顔をしかめる。地上全体がこんな世界になってしまふなど想像するだけで恐ろしい。

幸い、入手した相手から工場場所は聞いていた。何にせよ、まずは工場を押さえなければなるまい。

1

「おい、ここか？」

「はい、間違いありません」

安里達が辿り着いた工場は巨大な施設であった。

砂漠地帯にあるとは思えない程の広大な敷地と建物群。ある意味、魔王城よりも立派に見える。

（この規模の工場でニセの『フェニックスの涙』を量産しているってのか……。どれだけ金持ってたんだよ）

「なあ、兄ちゃん、どうすんの？」

「そうだな……。ここは俺達二人で乗りこむから、お前は待機しててくれ」

「えくっ!? オイラも行きたい！ 連れてってくれよ！」

安里の言葉に黙々をこねるアフメド。この辺りはまだまだ子供だ。しかし、カテレアの手前、あまり無下に扱う訳にも子供を戦場に連れて行く訳には行かない。

さて、どうやって説得したものか？と安里は悩んだ。

「アフメド様。貴方の役目はこの場を確保し、脱出ルートを確保する事です。私と安里様がこの工場の秘密を暴き次第、手引を頼みます」  
「……うくん、解ったよ」

カテレアはアフメドの目線の高さまで屈みこみ、諭すように言うた。アフメドは不満げに頬を膨らませながら、も、渋々と納得した。これでひとまずは安心だろう。

安里はそう判断し、アフメドに微笑むと彼も嬉しげに笑った。

「よし、じゃあ行くぞ！」

安里は気合を入れると、カテレアと共に工場の中へと侵入していくのであった。

↓

「どうやらニセの『フェニックスの涙』はこの工場で作られたものでしょう。恐らくこの先にある筈です」

「ああ、しかし当然見張りもいるよな」

工場内に入るにもまずは見張りをどうにかしなければならぬ。わかりきった話ではある。

「仕方ない……。あの手で行くか」

「あの手とは？」

「それはだな……」

丁度良く二人が隠れていた物陰へ見張り兵が二人ほどやってきた。来るが早い。安里は片腕を鈍器に変えて見張り兵の死角から襲い掛かった。

「ぐわっ!？」

「ぐえっ!？」

僅か一秒にも満たぬ間に安里は一撃で二人を昏倒させ空き部屋へと引きずっていく。阿吽の呼吸というものだろうか、カテレアもまた安里の動きに合わせて動き、見張り兵を拘束した。

「拷問はしないのですか？」

「お前なあ……」

カテレアの問いかけに安里は呆れ顔を浮かべる。やはり元旧魔王派だけあって荒事に容赦がない。

「いや、やめとく。俺の能力を使った方が早いからな」

安里は指先から糸の様にか細い触手を伸ばし、見張り兵の耳の中に突っ込むと脳内に侵入し、彼らの精神操作を始めた。

(カテレアの目の前でやるのも気が引けるが……仕方ないか)

安里は心の中でそう呟くとカテレアの方を見やる。安里の心配に反してカテレアは冷静だった。

「非道も策略もこの際はやむを得ません。それに安里様が追い立てられる立場になろうとも私は生涯お側を離れません」

と、安里の不安を払拭するように彼女は告げた。魔族であるのにまるで曙光の様な暖かさを持つ笑みを浮かべ。

(それも所詮、俺に作られた感情にすぎない)

そんな彼女に見守られながら安里は這い寄る様な昏い思いを振り切るように再び意識を集中させ、見張り兵への精神干渉を行う。

「……ありがとうな」

カテレアの心遣いに感謝しつつ、安里は再び作業に戻った。

1

見張り兵の案内により、ニセの『フェニックスの涙』の製造ラインが稼働している区画へと辿り着いた安里達。そこは巨大な空間で幾つもの巨大なタンクが並び防護服を纏った作業員達が黙々と作業をしていた。

「成程、ここが生産拠点という訳ですね」

「ああ、取り敢えず写真かデータを取っておこうか」

「それは私にお任せください」

カテレアは胸元に自分の指を差し込むとペンダントを取り出し、その先に付いている宝石を撫でる。

「カメラみたいなモンか？」

「はい。この機械は私の魔力を動力源としているのです」

カテレアは答えつつ、その手に握られたペンダントは二人の見た映像を記憶していく。

「よし、あらかたは済んだな。

ボロが出る前に退散しようぜ」

「お待ちください。折角ですから、

もう少し情報が欲しいとは思いませんか？」

いかにも敏腕秘書といった感じのクールな表情を浮かべてカテレアは言った。確かに、この施設について調べておくのは悪くはない。

「わかった。ただし、あまり時間はかけられないぞ」

「はい、承知しております。ですので、応接間にて待つことにしましょう。我々は彼らの中で客人ということになっていきますから。応接間ならば、怪しまれることもないでしょう。そして盗聴器の類を仕掛けましょう」

「全く、強かな女だなア……」

安里のぼやきにカテレアは小さく笑うと、見張り兵達の案内の下、工場内の奥へと向かった。

―工場内にある応接室。

そこで安里とカテレアは待機していた。工場の視察に来た政治家のボディガードという名目のもので。

「しかし、こんな簡単に侵入できるなんて、ザル過ぎねえか？」

「恐らく、我々が来ることは想定外だったのでしよう。それが、工場を見られたところで問題ないと考えているのか……」

カテレアは淡々と推測を語る。

「アザート様、アレテカ様」

「……あ、はい」

偽名で呼ばれたため一瞬対応が遅れて返事をする二人。

「こちらの子供が貴方達に用があるとか……」

そう言つて事務員らしき女性が二人に子供を紹介する。この状況で会いに来る少年は無論、アフメドを置いて他にいないだろう。

「でへへ、待ちきれないから来ちゃったよ！」

「ば、バカお前！ 俺達はボディガードつて設定なんだぞ!」

事務員から少し離れて、こそこそと会話する二人。

「あ、そつか。じゃあ、兄ちゃん、オイラ達は家族でボディガードしてらつて事でー！」

「いや、無理あるだろ……」

とはいえカテレアだけでなくアフメドも砂漠を生き抜いただけある。なかなか強かな子供であった。

「あれ〜？ おかしいな〜」

「こんな所に変な機械があるぞ〜」

もつともらしくカテレアが仕掛けた盗聴器を発見してみた。マッチポンプとは当にこの事。

「こ、これは盗聴器！ いつの間に!」

驚く事務員をよそにカテレアがこれまたもつともらしくアフメドの売り込みを始める。

「ふふふ、我が子ながら天才的な探知能力でしょう？ この力に私も夫も随分助けられました。ねえ、貴方？」

ぎゅつ♥と腕に抱きつくカテレアの豊満な胸が安里の腕に押し付けられる。

（お、おい……）

（安里様、これは演技なのですからそんな硬い表情ではいけません）

（お、おう……）



カテレアの囁くような言葉に安里は動揺しながらもどうにか冷静さを取り戻す。

「ま、まあそういうわけだから……盗聴器を探すために暫く人払いをしてもらいたいのだが……！　だが！」

安里はわざとらしく声を大きくすると、周囲の注目を自分へと集めた。

「おお、これは失礼しました。」

「ごゆっくりどうぞ」

事務員はそう言うと、退室していった。「ふう、これでいいだろ」

「はい、お疲れさまです」

「いや、お前の方が大変だっただろ」

「いえ、私は大したことはしておりません……♡うふふ♡」

蠱惑的な笑みを浮かべながら安里にしなだれかかるカテレア。傍から見れば仲の良い夫婦に見えることだろう。

「ところで、これからどうするつもりだ？」

「ここに改めて盗聴器を仕掛けつつ、私達がなりすましたボディガードの護衛主を確認いたしましょう。ネフレンが誰と癒着しているのか確実な情報を得たいところですね」

「ああ、そうだな……」

と、窓から外を見やるや予想外の人物が現れたではないか。

（あ、アイツはまさか!?!）

「安里様、どうかなさいましたか？」

仰天する安里を見たカテレアもまた、その視線の先を追う。

「あの方は……」

「ああ、間違いねえ。曹操だ。知らん奴らも付き合っちゃいるが……あの槍と隣の色ボケババアは見覚えがある」

七符とかいう妖艶な美女、そして灰色の髪の頑健な男。

どちらも一筋縄ではいかない強敵達である。

「あれは、『英雄派』の幹部の方々でしたね。曹操、七符、そしてヘラクレス……」

「ヘラクレスねえ……」

(随分と有名どころが来たモンだなあ……)

とにかく鉢合わせるのは避けねばならない。

「と、なるるところに盗聴器を仕掛けてさっさとずらかるか」

「はい、それがよろしいかと」

「ちよいと待つてよ兄ちゃん。」

オイラはこの天井に隠れてさ、曹操とかつて奴らの話を盗み聞きするよ」

「なッ!? バカ、止めろ! 危険過ぎる!!」

安里は慌ててアフメドを引き留めようとするが時既に遅し。彼はひよいっと天井に張り付くと、そこから安里とカテレアを見下ろした。

「大丈夫、大丈夫! オイラすばしっこいのが自慢だからさ!」

安里は呆れたように溜息をつくとき、カテレアと共に部屋を出た。

その数分後に曹操達は応接室へと通された様で、天井からアフメドは彼らを監視すべく息を潜めていた。

一応安里とカテレアから気配を遮断する類のマジックアイテムを借りてはいたが、それでも油断はできない。

『探知の魔法はどうするかえ?』

下の方で七符が曹操にしなだれかかりながら尋ねる。

『要らんよ。ネフレンに小心者だと笑われたくはないからな』

そう言って不敵に笑う曹操。

確かにこの男の自信は底知れぬものがある。しかし自信も過ぎれば傲慢だ。(気をつけないとなあ)

そう思いつつも、彼らの様子を確認していくアフメド。

(あれ?)

そこでアフメドは違和感を覚える。

曹操達の様子がおかしいのだ。

(なんだか、あの女が曹操を押し倒してる? ケンカでもしてるのかな?) アフメドはまだ子供なのでそう考えるが、それは違う。

『おいおい、こんな所ですか……?』

『こんな所だから良いのではないか……♥ネフレンに小心者と笑われたくないのであらう?』

曹操の股間に手を伸ばし、ズボン越しに指でなぞる七符。アフメドからは見えないが七符の顔は淫靡に歪んでいる。むにゆり、と恥知らずなまでに自己主張の激しい彼女自慢の巨乳に曹操の手が触れる。

『ふああ……♥』

そのまま二人は濃厚なキスを交わした。陶然としながら七符は目を閉じて着物をはだけさせながら曹操に身を預けた。受ける曹操は猫を撫でる様に七符の項から首筋にかけて愛撫している。もう片方の曹操の指が更に七符の乳房と乳首を弄ぶ。

(うわっ!?)

『ハハハ！ 二人だけでなくて俺も愉しませてもらおうかア?』

二人の顔の間に割り込む様にヘラクレスは棍棒の様な剛直を七符の眼前に突きつける。

一瞬驚いた様な表情を浮かべるも、すぐに舌を出して龟头を舐める七符。

『全くつくづく救いのない淫乱妖狐め！ チ○ポのために娘や孫まで捧げようと言うのだからな!』

『んぶ……んむうう……ふうん♥』

七符はヘラクレスの言葉を否定する様に首を横に振る割には些かもペニスから口を離そうとはしなかった。そんな彼女の痴態に興奮したのか、ヘラクレスの肉槍はますます怒張し、その先端からカウパー液を溢れさせる。

それを嬉しそうに嚙下する七符。

やがてヘラクレスの剛槍を根元から丹念にしゃぶり上げていく。

更に曹操から尻と乳房を揉みしだかれながら、手で曹操の男根をしごき続けるという器用な真似をする。

一方、曹操と言えば、七符を膝の上に乗せ、その豊満な臀部をまさぐりつつ、その柔肌に手を這わせている。

まるで餅つきの様に上下に揺れ動く二つの巨峰。

その頂きにある突起は今にも弾けそうな程ビンビンに立ち上がっ

ていた。その光景を眺めながら、曹操のモノははち切れんばかりに大きくなっていた。

『他人に自分の女が穢されて興奮しているのか曹操よ!? なかなか度し難い変態だなお前は!!』

ヘラクレスは曹操に向かって叫ぶ。

『そうだな』受けての曹操だが、怒りも恥辱もなく、淡々としている。そして、ヘラクレスの逸物をくわえたままの七符の喉奥目掛けて射精した。

どびゅツ!! びゅ——ツ!!! 大量の白濁が七符の口内を満たし、逆流する。あまりの量の多さに窒息しそうになるが、それでも健気に精を飲み干す。曹操の掌が七符の秘裂に触れると、そこは洪水のように濡れそぼっていた。

『あひいーっ!?!』

まるで獣の様に品性なく喘ぐ七符。

目を剥き、ヘラクレスの精液を鼻から垂らして、それでも彼女は快楽に溺れていた。

『おほおおおおっ♥あへええっ♥ひぎいいいつ♥イクウウウツ♥イキまくるのおお♥曹操の指でイカされるの気持ち良すぎりゅうっ♥』  
(な、何だよコイツら!?)

興奮よりも恐怖の方が先に立つアフメドだが、彼の事などお構いなしに曹操達は交わり続ける。

『ん、ひいつ……♥チンポ♥チンポ欲しい♥早くぶち込んでたもれ♥太くて熱い♥そなたの大英雄様を妾の淫乱マ○コに挿入れてくりやれえ……♥』

曹操の目の前で七符はヘラクレスに尻尾のみならず尻を振って媚を売る。ヘラクレスは満足げに笑い、曹操に視線を向けた。曹操は無言のまま、己の分身を取り出し、七符へと向き合う。

『ああ……♥』

七符の顔が喜悦に染まる。眼前にはヘラクレスにも劣らない、曹操の極太のペニスがあった。

『さて、どっちのチ○ポが欲しい? 七符?』曹操は七符の耳元で囁く

とその声音にゾクゾクと身を震わせる七符の姿があった。

『そ、それはあ……♡』

まさに宝石に目移りする乙女の如く、七符は悩んでいるとヘラクレスが意地悪く笑みを浮かべた。

『ほら、早くしないとチンポはお預けだぞ?』

『ふああつ……♡』

ヘラクレスが七符の腰を掴み、強引に引き寄せた。

『あ、ああつ♡す、すまぬ♡すまぬ主様あ♡選べぬっ♡主様のチンポもこの痴れ者のチンポも気持ち良すぎる♡どちらも好きすぎて選べんのじゃあ♡』

七符は曹操の胸に顔を埋めて泣き出す。

その姿は淫乱そのものだったが、どこか幼子の様な愛らしさも感じられた。

『では両方味わうが良いさ』

曹操はそう言うのと七符の菊門に男根を突き立てた。

『んほおおおっ!? ケツ穴きたアアアツ!! 二本挿し最高オオオツ!!』

『ハハハツ!! よりにもよって尻穴を先に犯して、俺にマンコの方を譲るとはな! 七符、俺のチンポをたっぷり味わいながらイケ!!』

曹操がピストン運動を開始すると同時にヘラクレスもまた七符の膣内にペニスをねじ込んだ。

前後から同時に責め立てられ、七符は脳を快樂の業火に焼かれながらも懸命に曹操とヘラクレスに奉仕し続ける。

『尻を突かれる度に締め付けてくるが、こっちの方が好きなのか?』  
『あひいいいっ! ひいいいんっ! ち、違うのじゃあ♡尻なんても嫌なのじゃあ♡妾は尻なんかよりもマンコ穴の方が好きなんじゃあ♡デカマラで尻の奥までズンズンされて、子宮まで突き上げられるのが一番感じるのじゃあ♡』

『ほーお……』曹操は冷え切った目で七符を見つめ……。ドジユウツ!! つと直腸奥に肉棒を捻じ込み、ぐりつと抉る様に腰をひねった。するとどうだ。

『おっ♥おごおおおっ!』

『七符は身体を仰け反らせ、舌を突き出しながら絶頂した。』

『ほら、またイッた。嘘をつくな。』

『お前は夫以外とのセックスが大好きだ。そうだろう?』

『ハハハ! 違う! 口でどう繕おうとマンコは俺達の子種を欲しがっているからな!』

曹操とヘラクレスの肉棒で膣もアナルも同時に貫かれ、前後からの激しい攻めに七符の思考回路はショート寸前だった。だが、それでも彼女は健気に二人への奉仕を止めようとしない。あるいは欲望に忠実なだけなのか。

『そ、そんな事はない♥妾は決してそなたらの子など孕まぬ♥そ、それにこの様な下賤の者共の精液など一滴たりとも飲みたくもないわ♥』  
その言葉とは裏腹に七符の表情は完全に蕩け切っていた。

『ふん、なら試してみるか?』

『ふあ? あ、ああ……!?!』

曹操とヘラクレスは同時に彼女から離れるや、まるで南国から急に氷原へと放り出されたかのように七符は震える。そんな彼女に曹操とヘラクレスは彼女の前にペニスを晒すと、まるで炉端の火でも見つけた遭難者の様に七符は目を輝かせ、貪るようにしゃぶりついた。

『あむうっ♥んぶぶっ♥んちゆるるるっ♥』

更には先までの曹操、ヘラクレスとの至高の交わりを思い起こして腰をへこへこ動かしている。痴態を晒すにも程があるがその無様さに曹操、ヘラクレスは元より七符自身も盛り、狂喜していた。

『下賤な者の精子なんぞ要らないんじゃないやなかったのか? 七符』

『んぶうっ♥んっ♥んふうっ♥』

嘘じやつ♥妾、嘘つきじゃったあ♥そなたらのチンポが気持ち良すぎて♥チンポのことしか考えられぬ♥チンポが欲しい♥チンポ欲しい♥チンポ欲しい♥よこせっ♥妾のマンコにそのチンポをぶち込めええッ!! 妾はそなたらのチンポ無しでは生きられぬ♥』

曹操の言葉にあっさり七符は屈服する。その変わり身の早さには流石の曹操も呆れ返る。すると、ヘラクレスがその剛直を七符の秘



そして俺達の為に働け!! お前はその為に生まれてきた存在なのだからな!! お前は誰の物だ!？」

『あへええっ♥妾はっ♥妾は英雄派皆様のものじゃあ♥悪女マンコ退治してえ♥大正義チンポの為ならなんでもしますのじゃあ♥だからもつといじめてください♥妾の身体で楽しんでください♥』

『クハッ!! この淫乱牝豚が!! 望み通り犯し尽くしてやるよ!! オラアッ!!』

ヘラクレスはそう叫ぶとピストン運動を早め、射精の準備に入る。

『ああ♥イクッ♥イツちやいますのじゃあ♥あ、ああ♥熱いのくる♥また中に出される♥孕まされりゅ♥んふああああ♥♥♥」どぴゅーッ!!!

『あ、ああ♥出てるう♥いっぱい出されてるう♥ああ……幸せですのじゃあ♥』

膣内と口内を同時に汚された七符は、絶頂の余韻に浸り全てを投げ出す様に倒れ伏した。『はあ……はあ……はあ……♥素敵い……♥』  
『さて、そろそろ工場長が来る頃だ。身だしなみを正しておかないとな』『ハハハハ! そうだな! まだ全然足りないが、今日だけで終わるものではない。なあ、七符?』

ヘラクレスの言葉を聞くや、七符は膣穴から精液と潮を吹き出しながら返答する。

『はい♥まだまだチンポが足りませんのじゃあ♥妾はチンポ狂いのド変態じゃから♥毎日でもチンポが欲しいのです♥どうか妾を皆さん専用の肉便器にしてください♥』

ヘラクレスの高笑い曹操の冷やかな笑みの中、七符は妖艶に微笑むのだった。

更にその数分後……。

三人の下に工場長が現れる。

その人物はアフメドは知らないが

安里にとってはよく知る男であった。



## 第86話

更にその数分後……。

三人の下に工場長が現れる。

その人物はアフメドは知らないが安里にとってはよく知る男であった。

「お久しぶりですね。ミスター・ヘパイストス」

ヘパイストス。ギリシャ神話における錬鉄の守護神であり、鍛冶の神である。安里に『制動の巨神』を破壊され行方不明になっていた人物である。尤もアフメドは知る由もない。

(とにかく安里兄ちゃんの役に立たないと)

そう思いながら、アフメドは天井にて盗み聞きをするため息を潜めて隠れ続けている。

『フェニックスの涙の出来栄はどうです?』

『私を誰だと思っている。ネクタル、ソーマに比べれば遥かに模造は簡単な物だった。寧ろ混ぜものを入れる方に難儀したぞ』

ヘパイストスは車椅子に乗っている状態で、部下がブリーフケースを曹操へと渡す。中身を確認した曹操

は満足げな表情を浮かべる。

「さすがヘパイストス様。オリジナルもイミテーションも素晴らしい出来栄ですね」

『当然だ。私は神だからな』

曹操の言葉にヘパイストスが自慢気に答える。その態度からは傲慢さと共に排斥された異能者特有の憤怒と怨念が滲み出ている。

『そう言えば、近々、機甲龍帝のみでなく機甲龍騎兵まで完成させたとか。恐ろしい話だ』

『抜かせ。寧ろそちらが貴様らの本題だろうが』曹操の指摘にヘパイストスはニヤリと不敵な笑みを浮かべると、曹操達を案内すべく応接間から移動を始める。

(た、大変だ! 早く安里兄ちゃんにこの事を伝えないと!!新しい警備システムとやらが完成すれば、僕達の居場所が無くなる!?)

焦燥感を募らせながらも、アフメドは安里に連絡を取りながら必死で天井裏を走り抜けていく。

「よし、解った！ お前は早くずらかれ！」

『兄ちゃんは？』

「俺はお前とカテレアが逃げる時間を作る。カテレア、お前も脱出してアフメドを守ってやってくれ」

「了解です。安里様、お気をつけて」

安里はアフメド、カテレアと別れて工場の奥へと向かう。その途中で、先程別れたばかりの曹操達が待ち構えている。

「やあ、九頭竜。久しぶりだね」

「……まんまと泳がれたってヤツか？」

わざとらしいリアクションの曹操を見るに初めから自分たちが潜入してくる事を予測していたようだ。

「解っているなら話は早い。どうだ？ 改めて我々の同志にならないか？」

「何言つてやがる。テロ集団の片棒担ぎになんぞなるか、つてこの間言ったばかりだろうが」

前回同様に勧誘してきた曹操に対して、安里は一蹴する。だが、曹操は余裕の表情を崩さない。何か罫でも張っているのかと身構えた瞬間だった。

「ルイーナを助け出すのに力を貸す……と言ってもかい？」  
「なっ……!?!」

安里は絶句した。彼の第一目的はネフレンに囚われているルイーナの救出であるのだから。しかし、それを知っていながら曹操は取引を持ち掛けてきたのだ。

「君だつて気が気じゃないだろう？ あんな醜男に君の想い人が弄ばれた挙げ句に純潔を散らされたとあつてはねえ……」

「ほんにのう。あんな醜男に犯されたとあらば、妾ならその場で自害してもおかしくないわえ」

曹操の隣にいた七符は身を揉む様な仕草をして震えてみせた。まるで安里の怒りを煽るかのよう。

「……」安里の握りこぶしから血が滴っていた。彼は今にも飛び出し  
そんな怒りを抑え込むように歯噛みしている。そんな彼に曹操は止  
めの一言を告げる。

「どうだい？我々に協力してくれるならば、彼女を救い出してあげよ  
うじゃないか」

「……」

「どうしたんだい？まさかとは思うけど、彼女の事が嫌いになった訳  
じゃあるまい？」

「……」

「ほれほれ、さっきまでの威勢の良さはどうしたんじゃ？ ん〜？」

「……」

「ふふん♪ どうやら言葉も出ないようじやのう♪情けなや、ああ情  
けなや♪この様な甲斐性なしに惚れられたとはルイーナとやらに心  
底同情してしまうわい」

「……」

「まあ良い。答えなど聞かずとも解っておる。さあ、こちらに来るが  
良い。そして我らの仲間になるのじゃ」

「……」

「おい、黙っていないで何とか言ったらどうだ？」

安里が何も答えないのを良いことに

七符とヘラクレスは嵩にかかった態度で安里に食ってかかった。  
すると……。

「……有難うな」

安里がぼそり、と呟いた。

「ふむ、礼を言われる程ではないぞえ。裏切りなど悪魔や堕天使、魔人  
には日常茶飯事よ」

「所詮この世は勝ったものが正義。勝者が全て正しいのだ。それは俺  
達の歴史が証明してくれている」

「くっくっくっ、その通り。さあ、早く来るがよい。その首輪を外して  
やろうぞ」

「……」

七符はまるで安里を誘惑する様に首筋に手を伸ばして妖艶な笑みを浮かべた。安里も不敵な笑みを返し、

彼女の美しい顔を殴り抜けた。

「へふうっ!?!」

防御壁がまるでガラス細工のように砕け散り、彼女はそのまま吹っ飛んでいく。だが、殴られた本人は何が起きたのか理解出来ていないようで、目を白黒させていた。

「き、貴様何をする!?!」

「大事な事を思い出したぜ……」。

ルイーナが好きだと言ってくれたのはテメエらみてえな奴らをつん殴るクソガキのままの俺だつて事をよお!」

「この痴れ者が!!死ねえ!」

七符の尾がまるでドリルの様に高速回転しながら安里に迫る。

「ほほほほほ!今の妾はヘラクレス殿と主様の精を受け妖力は2倍……いやさ、3倍に跳ね上がっておる!お主に勝ち目などない!」ギラついた目で七符は安里を睨みつけながら叫ぶ。

「そうかい」転じて安里は静かにそう言うのと、拳を構えて七符を見据える。その眼光は鋭く、まるで獲物を狙う肉食獣のそれであった。まるで狐を捕らえて食らう大熊のような殺気に満ちていた。

「ッ!?!」

安里の雰囲気が変わった事に気づき七符は動揺した。同時にその本能が危険信号を鳴らす。

(ま、まずい!?!こやつ本気じゃ!?!)

安里は触手を機械の多腕に換えて拳の弾幕を七符へと見舞った。七符の尾に対して拳の数も重さも段違い。瞬く間に七符自慢の尾はズタボロに切り刻まれていく。

「ひいひいひい!?!」

「オラア!!」

恐怖に駆られて逃げ出そうとする七符を安里の足が蹴り飛ばす。吹き飛ばされた先にはヘラクレスがいた。

「フン……」ヘラクレスは受け止めもせずひよい、と蹴飛ばされた空

き缶でもかわすように避けた。

それも安里には気に入らなかつた。「助けねエのか？」

「ハハハハハ！貴様、俺の話聞いていなかったのか？何故負け犬、負け狐を助ける必要がある？」

「……」

安里は無言でヘラクレスの顔面に裏拳を叩き込んだ。だが……。

「フハハハハ！なんだアそれは!？」

ヘラクレスはビクともしていなかつた。

「効かん、効かーん!! そんな豆鉄砲、いくら喰らつても痛くも痒くもないわあ!!!」

ヘラクレスは安里を殴り抜ける。

七符よりも威力のある一撃が安里を吹き飛ばした。

「ぐっ……」

安里は空中で体勢を立て直すと着地し、追撃に備える。

「おいおい、もう終わりか？俺はまだまだ遊び足りないんだがなあ……」

ヘラクレスは余裕綽々といった様子で安里を挑発する。

「舐めるなよ……」

安里の全身から闘気が登り、多腕が纏まり螺旋を描く巨大な槍となつて現れた。

「フハハハハ！先程七符が使った技ではないか！その程度の技でこの俺を倒せると思うなよ？」

「……試してみるか？」

「よかろう、ならば見せてもらおうじゃないか！」

ヘラクレスが言い終わる前に既に安里は螺旋槍をフル回転させ、突撃していた。だが……。

「懦弱懦弱懦弱う!!」

ヘラクレスは槍を掴むとまるでプラスチックの玩具をへし折るかのように簡単にへし曲げてしまった。

「くそっ！お、俺の最強の

ロンギヌスの槍があ!？」

「無駄だあ！」

ヘラクレスはもう片方の腕で安里を殴りつける。安里はそれを両腕でガードするが、衝撃までは防げず大きく後ろに弾き飛ばされてしまう。

「ぐっ！」

「どうしたあ!?それで終いか!?!」

ヘラクレスは更に追い討ちをかけるべく突進してくる。安里は為す術もないままタコ殴りされてしまう。

「がつ……はっ……!」

「ふん!どうしたあ!この程度なのかあ!」

「ぐはっ……!?ひひひ……!」

ゆ、許ひて下はいい……!」

先までの勢いはどうしたのやら、安里は涙と鼻水を流して歯を鳴らしながら命乞いをしていた。

「フハハハハハ!何と!何と無様な!所詮魔人と言えどこの程度。劣等種などにこの高潔なる英雄の中の英雄であるヘラクレスが負けるはずがないのだあ!!」

「た、たしゆけてえ……!たしゆけてくれええ!」

ヘラクレスは高らかに笑い、哀れな敗残者をいたぶるべく更に攻撃を続けた。

「さあ、止めを刺してやるぞ!」

ヘラクレスは安里の頭を鷲掴みにして持ち上げ、何度も何度も何度も、彼の身体がグチャグチャになるほど地面に叩きつけた。

「死ねえ!死ねえ!死ねえ!死ねえ!死ねえ!死ねえ!死ねえ!死ねえ!はははは!ハハハハハ!アハハハハ!!」

酒池肉林でも味わえない暴力の快感にヘラクレスは酩酊しきっていた。

彼は安里の残骸を幾度も幾度も踏みつけて嘲り笑う。

「ふははははははは!!見ろ!七符!この俺の勝利を!これが勝者の特権というものだ!弱者を踏み潰す事こそ強者の誉れなのだあ!!ははははははは!」

英雄などそこにはどこにもいない。

おごり高ぶり、力に溺れ、敗者を思うがままに痛ぶる醜悪な怪物がいるだけだ。

「ヒャーハハハハハ！どうだ！どうだ！人間風情が！懦弱な劣等な人間風情が！傷ついたか？貴様のプライドも傷ついたか!? ああ!? ああ!?」

彼は泥酔患者のようにゲラゲラと笑って、何も無い所を靴が割れ、つま先が血だらけになつても尚蹴り続けていた。

「……やってくれるね。いつの間に幻覚を見せる魔術を覚えていたとは」

横目でゴミの山でも見るような冷たい視線で曹操はヘラクレスを見ていた。

「違えよ。テメエらがバラまこうとしたこの『フェニックスの涙』のパチモンを濃縮して裏拳の時、アイツに打ち込んだだけだ」

カラン、と空の薬瓶を曹操に放つて安里は答えた。麻薬入りのそれを濃縮して打ち込んだのだから今のヘラクレスはトリップの只中だ。

「ぬ、主様！此奴を！此奴を殺してくりやれ！何でも言う事を聞くから！」

側で恐怖に駆られた七符が曹操に縋りつきながら懇願するが曹操は落ち着き払っていた。

「まあ、落ち着け七符。彼を殺すには時間も装備もない。と、いうか赤龍帝と彼にはこれ以上戦闘経験を積ませたくない、と言うのが俺達の本音だ……。おっと、口が滑ってしまったかな？」

（俺達……？俺達って言ったのか？ 曹操の野郎！まだ仲間がいやがるのか!?!）

「おっと……。そろそろ時間だな。

へパイストス殿がいい加減君にお礼がしたいと仰っている。では、また会おう」

「へひやはははは！しね！しねえ！」「ひい……嫌じゃあ……妾は……妾は死にたくない！」

正気を喪失した七符、ヘラクレスと共に曹操はいうだけ言うと転移陣で消えていった。

「ま、待てっ！クソツ……！」

（シユタークさんから買った転移の符で奴らを追うか……？いや、危険すぎるし、カテレアとアフメドを置いてはいけねえ！）

逡巡する間に安里は背後から気配を感じた。

現れたのは機械の兵隊。ブルーメタルの色合いをした装甲を纏うそれは、片腕はガトリングガン、もう片腕には槍の穂先の様な銃剣がついたグレネードランチャーの様な砲塔を備えていた。背中にはリフターとブースターを併せたような推進装置を背負っている。最後に西洋騎士の兜の様な頭部にはモノアイが輝いていた。

「何だテメエは！マーベルの住人かあ!？」

明らかに味方ではないそれに安里は先制攻撃を仕掛ける。

「オラア！」

まずは触手を飛ばし、牽制しつつ多腕で殴りかかる。

「……！」

ザクツ！ と銃剣が多腕の一つに刺さる。すると嘗てサリエルに聖釘を刺された時の様な違和感を覚える。そして多腕がまるで霞の様に霧散してしまった。

「何!？」

「!」

驚く安里を他所に、今度は両腕のガトリングガンが火を噴く。

「チー！」

弾幕が襲い来る前に安里は旋回運動により辛うじて回避する。彼のいた場所に弾丸は雨の如く降り注ぎ、工場の床のみでなく壁すら破壊していった。

「コイツ！なんて威力だよ！こんなもんまともに喰らったら……いや、それよりもだ！」この殺傷力は明らかに工場の警備が目的ではない。彼らにとってもこの工場が破壊されるのはダメージな筈だ。ならば何故？

「!」



安里が思考している隙を突いて兵達は背の推進装置を使い急接近してくる。

「こいつ！速い！だが！」

安里は腕が駄目ならば足だ、と言わんばかりに触脚を分銅に変異させ、兵に放ち、脳天に直撃させた。

火花が飛び散り、頭から血ともオイルともつかないものがぶしゅぶしゅと吹き出す。

「！」

しかし兵は怯むことなく突進を続ける。

「クソツタレが！」

更に数を増やした触脚が兵の手足に絡みつき、壁に叩きつける。

「！」

「おらあ！」

兵が起き上がるよりも早く、安里は残った足の踵を刃に換えて兵の喉笛を踏み潰した。

「……………」

だがモノアイは消灯せず、ガトリングガンが安里に向けられる。

きゅるるる、という禍々しい回転音と共にガトリングガンが回り始めた。

「やべえう！」

咄嗟に彼は近くの柱に飛び込む。直後、ガトリングガンが火を噴いて周囲の物を粉々に粉碎していく。

次々に発火し、緊急警報が鳴り響く中、安里は考える。

（あの野郎！一体何の目的で俺を攻撃してきたんだ？そもそもアレは何だ？この世界の産物か？だとしたら曹操の仲間か？それとも別の勢力か？）

「……………」

「オイオイオイ……………動かなくなったって事はあれか……………!?まさか……………」

キイイーン！と甲高い金属音を立てて、兵が輝き出していく。考えられるのは一つ。自爆しか無い。

「ふざけるなバカヤロー!!」

言うが早いか安里は逃げるどころか機械兵へと突進するや、それを抱えて、力の限り飛び上がる。

(工場の人達を巻き込む訳にはいかねえよなあ!!)

天井を突き破り、空へと躍り出る。

そのまま、空中で抱えていた兵を離そうとしたその時だ。

バシユウツツ!と地上から工場からバリアが展開されたのだ。まるで安里がする行動を予測していた様にだ。まるで飛んで火にいる夏の虫の様に安里の身体をバリアが焼き焦がす。「ぐわああああ!!」ショック死しかねない程の痛み、熱、酸欠が彼を襲い、意識を刈り取ろうとするが、彼は決して機械兵を振り落とす事なく耐えた。そして……。

凄まじい爆音と閃光が周囲を包み込み、工場に火と機械兵の破片が降り注ぐ。

その光景を遠くのビルの上から見てアフメドは叫んだ。

「あ、兄ちゃん!! 兄ちゃん!!」

涙を浮かべながら、必死になって叫ぶが返事はない。傍らのカテレアはそんなアフメドの肩を抱き、ただ呆然とするしかなかった。

「あ、あ……うああああん!」

遂にアフメドは堪えきれず泣き出した。

「アフメド……」

カテレアも唇を噛み締めて、今にも溢れ出しそうな感情を懸命に抑えている。だが……。ヒュン、と安里が転移してきた。あちこち服が焼けているが不思議な事に傷も火傷もない。

「あ、あんちゃん!!」

「安里様!」

二人は安里の無事を見て歓喜の声を上げる。安里は機械兵が爆発する瞬間にシユタークから買った虎の子の転移符を使うと共にギリギリの所で解毒した『フェニックスの涙』の模造品を吸収させて肉体を再生させたのだ。

「しかし……」安里は火炎を噴き上げ、あちこちが爆発し始めた工場を

遠目で見つめた。

「折角の潜入工作がパーだぜ……」

「しようがねえよ兄ちゃん。死んで花実が咲くものかって言うじゃん。生きてれば良いことあるさ」

「生意気言わない、コイツ」

「へへ……」

アフメドの大人びた言葉に安里はフツと笑みを漏らした。

ー

一方その頃……。

「ハイハイハイ！貴方達、笑顔が硬いわよ！」

ここはネフレン領にあるカジノ。

何とか墜落した脱出艇から生還したニトクリス達は潜入がてらここで働くことになったのだが、何故か彼女達はバニーガールの格好をしていた。それも普通のものではなく、露出度の高い物だ。私娼窟でもここまで品のない衣装はなかった。ニトクリスは恥ずかしそうに身を振らせるのだがそれがVIP達を唆らせるという悪循環に陥っている。

「あ、あううう……。ふ、フアラオたる私がこの様な辱めを受けるなど……！」

羞恥心から頬を赤らめるニトクリスに客の何人かが鼻の下を伸ばす。

彼女はその様子に更に身を縮こまらせた。

「くっ……！」

「殺せて貴方、姫騎士じゃないんすから……」「全く……何故普段の私よりこの姿の方がウケがいいのよ……」

ミッテルトはニトクリスを宥め、レイナーレは天野夕麻の姿でニトクリスと同じ逆バニーの格好をしている自分に溜め息を吐いた。因みにこのカジノでは賭け金の上限は無し、勝てば大儲け出来るが負けても借金にはなるが、請求された試しはないという。

因みにニグラは客として潜入し、トウーは

見世物の闘士役としてここにいる。

「これではカジノというより収賄、贈賄の場ではありませんか……」  
ニトクリスにすれば考えられない悪徳の極みであるがミツテルトは色々汚れた水を飲んだ経験もある。

ニトクリス程衝撃は受けてはいない。

「まあ、面の皮がオリハルコンで出来ている純血貴族の方々が返す筈もなく……圧政は黙認、色々融通を効かせたり、効かせてもらったり。ズブズブのドロドロ……と言うワケっすか……コイツら、クソっすね」

とはいえ何も思わないわけでもなくミツテルトは遠くの客たちに軽蔑の眼差しを向ける。

このカジノの経営者は無論マンモン。圧政による血と骨で得た財貨をこうして湯水の如く使う事で、彼は更なる権力を手にしていくのだろう。

このカジノは彼にとっての肥やしであり、同時に彼の王国でもあるのだ。まさに暗黒のフアラオ、とはこの事であろう。

(こんな事が……こんな無道が何故罷り通るのですか！異世界ながらこの様な所業がフアラオによって

為されているなど!!)

ニトクリスは静かに怒りを募らせる。彼女にすればフアラオという役目はそれ程のものなのだ。

そんな時だ。

店の中に二人の男女が入ってくるや三者は接客を忘れ、目を奪われた。と言っても美しきにはない。

現れたのはマンモンと安里の想い人であるルイーナの二人であったからだ。

※第87話（『英雄殺し』×トウ・ルチャ 敗北エロ  
注意！）

（な、何故彼女がこのカジノに？）

ニトクリスは驚きを隠せぬ様子でネフレンに付随するルイーナを見つめていた。その身なりは普段のミッテルトさながらのゴスロリファッションだが、どこか上品な雰囲気漂っている。

（ここは何とかして彼女を奪還せねば）

ニトクリスは逆バニーの格好で、周囲の客から好奇と色欲に満ちた眼差しに辟易しながらも必死に考えを巡らせる。そのせいか背後でのやり取りに気づかない。

「おや？ お客様、どうかなさいましたか？」

「いやね、あの女のコを俺のテーブルにつけて欲しいんだよ」

「はくい。ニトクリスさくん、お客様がお呼びよ」

「えっ!? 私ですか……」

不意に呼ばれて振り返ると、そこには忘れもしないあの男、『英雄殺し』がいるではないか。ニトクリスは辛うじて動揺を抑えた。確かルイーナ暗殺の任を受けていたと聞いていたがその機会を未だに伺っているのだろうか。誰が敵で誰が味方なのか、冥界の勢力図は複雑怪奇だ。

「……わかりました」

とりあえず今は大人しく従うしかない。そう判断したニトクリスは重い足取りで英雄殺しの座るテーブルに歩み寄った。そして侍女のように彼の傍に立つと恭しく一礼する。

「失礼します」

「へえ……近くで見るとますます美人じゃねえか。安里クンの周りにはいい女が揃ってんなア」

サングラス越しにニトクリスの姿を見た英雄殺しがにやにやしながら言う。軽薄な口ぶりながら懐から手を離さない辺りは強かさが垣間見える。「……………」

ニトクリスは無言のままじつとしている。すると英雄殺しは彼女の身体を下から舐めるように見上げていく。

「何だよ、こんなエロい格好しちゃってさア、安里クンの趣味？」

「そんなワケがないでしょうが！」

「貴方という人は！」

思わずツツコミを入れてしまったが英雄殺しはカラカラと笑う。

「カハハハ、アンタ本当に人がいいな。こういう類の話も広がらねーつまんねー質問はいなすかスルーするモンだぜ」

「貴方が言い出したのでしよう！」

「まあそれはそれとして、アンタらルイーナちゃんを助け出してーんだろ？ 繰り返すけど人がいいね。惚れた男のためなら自分の気持ちちは二の次かい？ 健気だねエ。浪花節だねエ」

「……」

ニトクリスは黙り込む。自分の気持ちを押し殺すことなど既に慣れている。だが泥の様に重く絡みつく感情がどこかにあるというところ、そういうのも事実だ。

「ま、それはそれとして酒を注いでくれ。代金はルイーナちゃんの洗脳の解き方」

「……」

ニトクリスは黙って酌をすると、『英雄殺し』はグイツと美味そうに一気に飲み干した。

「急に飲むと身体に毒ですよ？」

「ギャハハ、身体の心配をされたのはガキの頃以来だぜ」

英雄殺しは愉快そうに笑いながらグラスを回すとカラン、と氷が鳴る。

「ルイーナちゃんのリターンだが、ネフレンの首にかけているペンダントがあるだろ？ アレを奪えば元に戻る」

「その話、本当でしょうね？」

ニトクリスとしては念を押すのは当然だったのだが、彼はいかにもつまらなさそうにため息を吐いた。

『この野暮め』とでも言いたげにだ。

「信用ならねえ、ってか。」

仕方ねエ。なら一つ手を貸してやるかね」

『英雄殺し』はやおら立ち上がると、つかつかとネフレンの側まで歩いていく。

「よう、旦那。いつもいい女連れてんなア」

「ぐふふ、僕位になると気に入った娘はみんな僕のモノになるんだよ。キミみたいな吹けば飛ぶような傭兵崩れとは違うのさ」

「違えねえ、ハハハハハ！」

ネフレンの嘲弄を英雄殺しは怒りもせずには笑い飛ばした。しかしその目は些かも笑っていない。

「その姫さんのペンダントなだけでよオ、そいつを賭けて俺とアンタん所の新入り闘士とやり合わせちゃあくれねエか？」

「……どういふつもりだい？」

ネフレンの目が色ボケした醜男のモノからギラリとした独裁者のソレへと変わる。

「そう怖い力才するなよ旦那。」

アンタだつて、ルイーナちゃんとはともかくあの新入り闘士のルチャさんにや手を焼いてんだろ？ あんまり強すぎて一方的だから客がキレかけたつていうじゃねえか」

英雄殺しの言葉は事実だ。

ファイトマネーはいらないというから雇ったがルチャは興行というものを理解していないのだ。力に差がありすぎてハンデをつけても一方的に勝ってしまう。賭けは成立しないし、選手は壊されるしでいいことがない。

「確かに、このままだとボクの可愛い闘士が皆壊されちゃうからねえ。」

けど、キミが勝てる見込みがあるのかい？」

「そこは英雄殺しの二つ名を信用して欲しいなあ」

英雄殺しのビッグマウスじみた言葉を聞いているのかいないのか、ネフレンは虚空を見つめる。彼にすればどちらに転んでも悪い話ではない。「ぐふふ、いいとも。受けようじゃないか。負けた方は勝つた方の言うことを何でも聞く、というのも加えよう」「カッハハハ、そ

りや面白そうだなア」

こうして話はまとまり、英雄殺しは席に戻る。事の顛末はニトクリスにも聞こえていた。

(一体どういうつもりなのでしょうか……)

「お客様、よろしいのですか?」

「まあ見てなって。それより酒のお代わり頼むわ」

「……承知しました」

ニトクリスは釈然としないまま、グラスに酒を注いで英雄殺しを歓待するのであった。

↓

そして早くも次の日に試合は決まり、ニトクリス達は観客席にて試合を見守っている。

「さあーて! 今日のお客様は大変幸運! 無敗のチャンピオン、クトゥー・ルチャに対して最大最強の挑戦者がやってきたあー! 『英雄殺し』の二つ名を持つ男、その名も——ハーゲン!」

(ハーゲン? 彼もまた偽名を?)

ニトクリスは怪しんだが、どうせ試合が始まればわかることだ。彼女は疑問を押し殺してリングに目を向けた。

さて、トゥーの姿だがビスチエとドレスを組み合わせたような衣装で、露出が多く豊満な胸元と頑健極まりない腹筋が露になっている。

対するハーゲンはまるでどこぞのヒーローの様な首筋を防護する毛羽立った襟つきの黒いロングコートに銃剣付き2丁拳銃という出立ちだ。

リングの上で両者は睨み合う。

「貴方は確か……安里殿に毒を撃ち込んだ男でしたね」

「そうおっかねえ顔しないでくれよ。あれは渡世の仁義って奴だぜ」

ハーゲンは苦笑しながら銃を構える。

「俺ア一応人間の範疇にあるからよ、コイツを使わせてもらうぜ?」

「どうぞ(自由に)」

トゥーはチャンピオンにふさわしく鷹揚に構える。

『流石は不敗のチャンピオンだー! 余裕たっぷりだー!』



実況の声が響き渡ると、観客のボルテージは一気に上がった。しかしニトクリスはこの観客の熱気に異様さを嗅ぎ取っていた。まるで何かに興奮しているかのような熱狂ぶりにだ。更に観客席にいるのはその殆どが男性である。

(そう言えば今回は負けた方がなんでもいうことを聞くとか言っていました、まさか……)

ニトクリスは嫌な予感を覚えながらも、二人の闘いに意識を集中させるのだった。

先に仕掛けたのはトウーの方だった。

彼女が地面を蹴ると、その衝撃だけで土煙が上がる。目眩ましの類ではなく、蹴りの威力が強すぎるので風圧すら武器になってしまうのだ。トウーは弾丸のような速度で肉薄すると、その勢いそのまま拳を振るう。

その一撃は常人であれば即死級のモノだったが、ハーゲンはそれを紙一重でかわす。

そしてカウンターで銃撃を放った。

バババババツ!

まるで自動小銃の掃射を思わせる音が響く。

しかし、トウーの身体には傷一つついていない。女性の韌やかさがありながら鋼のように硬い筋肉の鎧が銃弾を弾いたのだ。

彼女の肉体強度は戦車の装甲を凌駕する。だが、これは想定内。

ハーゲンは飛び退いて距離を取り

再び発砲。彼が持つ二丁拳銃から放たれる魔力の弾丸を、トウーは腕を突き出すと火炎の壁を出現させて防いだ。

「私は安里様ほど器用ではありませんので……ばっ!」

クンツと開いた掌をかざすと炎の波、それも10メートルほどの炎の津波がリングを呑み込む。

しかし、ハーゲンはリングに用意された金網にワイヤーを伸ばして掴まると、そのまま跳躍。炎の津波を軽々と回避した。

「しえらああっ!!」

雄叫びと共に、ワイヤーアクションかさながらターザンのワイヤー

ジャンプかと言わんばかりの勢いをつけてハーゲンは飛び蹴りを見舞った。

しかし、フィジカルのみでなく五感も強化されたトウーにそれは通用しない。

「ふんぬー」

トウーは片腕でそれを受け止めると、ハーゲンをまるで砲丸投げの鉄球のように振り回して金網へと叩きつけた。

「ぐほお!？」

「ふうん！」

トウーはそのまま跳び上がったって膝蹴りを彼の鳩尾に喰らわせる。

ハーゲンは悶絶するが、トウーは容赦しない。

「ふぐおおっ！」

今度はハーゲンの頭を掴むと頭突きを放つと、彼のサングラスは容易く砕け散る。

「ほお、意外と美男子なのですね」

トウーはハーゲンの顔つきに少し驚いた様子を見せるも攻撃の手は緩めない。ベア・ナツクルでハーゲンの顔面を打ち据える。

ドガガガガツ!!

『出たー！ チャンピオンのラッシュュだー!! これは早くも決まったか!』

「ぐごぶっ！ げふっ！ おぼおっ！」

ハーゲンはなす術もなく殴られ続け、だらんと腕を下げる。

もはや勝負あったかと観客達も溜息を漏らし始め、トウーの彼を羽交い締めにして、金網を蹴り飛ばしてバツタの様に跳ね上がった!

グシャアツ!! 天井にハーゲンの脳天が叩きつけられ鈍い音が彼

女の耳に届くも、攻撃は終わらない。

トウーは更に天井を蹴って彼の脳天をリングに叩きつけようと試みた。

『こ、これはー!? 《変形式飯綱落とし》! 勝負は決まったかー!』  
隕石さながらにリングに迫る両者の有様に実況は興奮気味に叫ぶ。  
しかし、ハーゲンの口角が僅かに上がると彼の両腕が変化していっ

た。

「…………これは《龍の籠手》!?!」

ハーゲンの両腕が肥大化し、肘から先が赤い籠手が変わっていく。その籠手の色合いと形状にトゥーは動揺した。

「まさか…………赤き竜の…………!」

「さあ、どうかねえ!」

ドグオオオオン!

羽交い締めを振りほどいたハーゲンは、地面を殴る事で飯綱落としを防いだ。炎と衝撃波がリングを包み込み、土煙が舞う。

「ぬうう…………!!」

トゥーは拳を固めると、煙の中に突進して、ハーゲンと四つに組む。(この強度と力量…………!?! イッセー様とドライグ殿並みの力を持っている!)

ギリギリと両者の腕が軋み合い、

足元のリングがピシピシと音を立ててひび割れていく中で赤い龍の籠手がいつの間にか黄金色に変化していく。

「クカハハッ! インファイトは性分じゃねえがアンタみたいな美人なら歓迎だぜエ!」

「戯言を…………」

「本心だよ。だからよ、俺が勝つたら——」

ハーゲンはトゥーの耳元に口を寄せる。

「アンタを俺の女にするぜ。どうだい? 燃えるだろう?」

「…………ツ!!」

トゥーは顔を真っ赤にすると、ハーゲンの身体を持ち上げてぶん投げた。

「ハッハア! 情熱的なのは嫌いじゃないぜ!」

ハーゲンは空中で体勢を整えると

イッセーのドラゴン・ショットばりの魔力弾を連射する。その威力は先の弾丸の比ではない。リングをまるで豆腐のように破壊しながら迫る魔力の奔流に、トゥーは回避行動を取るしかなかった。

「逃がすかよ!」

ハーゲンはワイヤーを射出すると、それを足場にして飛び上がり、トウーに追いつがる。

「ちいつー！」

トウーは舌打ちをしつつ、迎撃のハンマーナックルを振るう。

だが、ハーゲンはその一撃を紙一重でかわすと、彼女の背後を取って首筋に注射器を刺す。

「うっ……何を……!?!」

「何だろうな？ ハッハハアア！」

ハーゲンは笑いながら、軽業師の如くトウーから飛び退く。恐らくは嘗て安里の体を蝕んだ毒薬と同じもの。だが、トウーはそんな事など気にも留めず、ハーゲンに飛びかかる。

「大したガッツだな！ 益々気に入ったぜトウーちゃんよお！」

「黙りなさい！ 私をその名で呼ぶな！」

トウーは激昂しながらも、ハーゲンに肉薄し、ラッシュユを浴びせかける。

「カツカカカカ！ トウーちゃんは基本技が大振りなんだよなあ！ 格下相手にやそれでいいかも知れねえけど、強敵相手だと隙だらけになるぞー！」

ハーゲンはトウーのラッシュユを全て回避して、逆にカウンターでトウーの顎に掌底を打ち込む。

「ぐあっ!?!」

しかしトウーのタフネスもまた規格外のものだ。ハーゲンの掌底を食らっても倒れるどころか怯む様子もない。

トウーはハーゲンの腕を掴むと、そのまま一本背負いを繰り出し更に落下に乗じてエルボードロップを脇腹へと叩き込む。ベキベキ、と骨が折れるような音が響き渡る。

「グウオッー！」

「ふっー！」

トウーは更に追撃としてハーゲンの鼻面に容赦ないトーキックを見舞った。蹴り飛ばされたハーゲンは小石の様に金網に激突する。

「……」

トウーは油断なく構えを取りつつ、ハーゲンへと歩いて迫るが……。  
ドクンツ！ と心臓の鼓動のような音が響くと、膝から下に力が入らない。

「これは……!?」

「驚いたか？ 何で自分の炎で解毒できねえんだって顔をしているなあ。

それはな……こういう仕掛けさ」

シャキン、と彼の手の平からスパイクの様な突起物が飛び出した。「ヘ・パისტス殿の旦那が《キュクロプス》に付けた《聖槍・影打》を複製したものでね。アンタの異能は封じられたって次第さア……」不敵に笑うハーゲンの傷が癒えてゆき籠手も元の人間のものへと戻っていく。傷が癒えたのは恐らくは《フェニックスの涙》によるものであろうか。

「くっ……！」

トウーは羞恥に顔を歪めた。

自身の浅慮とハーゲンと彼のバックにあるもの達を甘く見たツケが回ってきたのだ。

「ま、そう悲観することもねえぜ？ アンタはこれから俺に負けるんだからよ」

ハーゲンはニヤリと笑みを浮かべると、トウーに口づけをしようとして顔を近づけていく。

「んー♪」

「……ッ！」

トウーは歯を食い縛ろうとしたが顎に手を回されてはそれも叶わず、唇を奪われる。

「……ッ！ ……ッ！」

「……フツ……ハハハ！ 初々しい反応じゃねえか！ 可愛いぜ！」

ハーゲンはキスを終えると、彼女の頭を撫でながら、彼女の衣服を引きちぎる。ビリッ！ ビリビリイ！ と布地が破れる音と共にトウーの白い肌が露わになった。

「くっ……！こ、殺せっ！」

「ハツハハア！ものすげーテンプレな台詞だなあ！だが、そういうの嫌いじゃねえぜえ！むしろ燃えるぜ！アンタも炎の魔人って話だから満更でもねえだろ？ハツハハハハハ!!」

ハーゲンは高笑いを上げ、トゥーの乳房を揉みしだく。

むにっ ♥ むにいつ ♥ ぐにゅっ ♥

まるで粘土細工を弄ぶかのようにハーゲンはトゥーの豊乳を弄び、その先端の桜色の突起物を指先で摘む。

「ひううっ……！」

鼻息が荒くなってしまふ。暴力的な様でありながらも彼女にとっては甘美なる刺激。

それを堪えようと彼女は目を瞑るが、それが逆効果となり、感覚をより鋭敏にしてしまふ。

(こんな男などの手で私は感じているのか!?)

屈辱と快楽が混ざり合い、思考が定まらない。

「なあ、トゥーちゃん。俺のチンポもうバキバキでな……一旦シゴいてくんねえかな？」

「ッ！」

「頼むよ……な？」

ハーゲンは彼女の耳元で囁き、胸をまさぐる手を止める。

「うっ……ううっ……！」

握り……つぶしてくれりゅう……」

涙ぐみながらトゥーはハーゲンに迫るのだが、その弱まる様は彼をより興奮させる。

彼は舌なめずりすると、彼女の身体を引き寄せてペニスを握らせる。そして、そのまま上下に動かしてオナニーを始める。

しゅっ ♥ しゅっ ♥ シュツシュツ ♥ ハーゲンのモノは太く長く、熱かった。

その感触にトゥーは思わず生唾を飲み込む。しかし、そんな自分に嫌気が差した。自分は誇りあるニグラの忠臣であり安里の眷属なの

だ。

そんな自分が敵の性器を握って悦んでいるなどあつてはならない事である。

「へへ、握りつぶすんじゃないやあなかつたのかい？ 随分と気持ち良さそうな顔してんじやねえか」

ハーゲンは意地の悪そうな笑みを浮かべると、トウーは真っ赤に頬を染めた。

「し、してない……！ チンポがヌルヌルのベトベトで汚いだけだ……！」

トウーはそう言うと、ハーゲンの肉棒をぎゅつと強く握り締めた。

ハーゲンの肉茎からは先走り汁が漏れているがそれだけではローションをぶちまけたかの様に彼のペニスが濡れる事はない。蕩ける子宮から分泌された愛液によるものなのだ。

「ハハッ。自分から出たマン汁を汚えてか。そんなに自分を貶める事はねえだろうに」

「うああっ！ 言うな！ 言うなあ！」

トウーはハーゲンの言葉に動揺しつつも、彼の肉棒をしごき続ける。

既にハーゲンの巨根には血管が浮き出ており、今にも爆発寸前だった。

更に駄々をこねる様にトウーはペニスを扱きつつその身を揺らすものだから乳房や尻たぶが牡を魅了する為に揺れ動く様に更にハーゲンの怒張は激しく脈打つ。

（ああ、だ、ダメだ……♡このままじゃあこの男のチンポに屈服させられてしまう……！ そ、それはいけない……！ 絶対に避けなければ……！）

「ははは、そんなにマンコをクパクパさせてザーメン欲しがるなよ。ま、無理もねえな。疑似とはいえ

赤龍帝に近い今の俺のザーメンは解毒薬だからなあ？」

「解毒……薬……？」

トウーはハーゲンの言葉に眉を潜めた。

「そうだぜ。アンタは俺の《聖槍・影打》を打ち込まれて毒を注入されている。だが、俺のザーメンを注がれればその毒は消えるって寸法よ」

「な……!?!」

ハーゲンはトゥーを抱きしめ、彼女の秘所に指を挿入する。

「ひゃううううっ！ ああっ！ んああっ！」

指で膣内をかき回され、トゥーは艶かしく喘いでしまうのを抑えられずハーゲンは益々喜々として笑った。

「ハハハハハ！ どうだいトゥーちゃんよお！ 最高だろうが！」

「あ、ああんっ！ な、何がいいものか……！ 貴様の様な下衆の行為など、こ、これっぽっちも良くなんか……!?!」

「ふーん。じゃあコレはどうかな？」

ハーゲンはトゥーの陰核を摘み、捻り上げる。

「あ、あああゝっ!?!」

意識が弾けかけ、トゥーは絶叫を上げながら腰が浮き上がる。まるで疾走した犬のように舌を突き出し、瞳はグルリと上を向いていた。

「おー、良い反応じゃねえの。流石は炎の魔人。オマンコもマグマみてえにドロドロのヌルヌル。そんなに良かったかい？ ほら、言ってみな。『私は敵将ハーゲン様の指マンによってイキました』ってな」

ハーゲンはトゥーの耳元に口を寄せ、甘く囁く。

「だ、誰が……言うものかあ！ 貴様の指など蚊の嘴程度にしか感じぬわ！」

トゥーは涙目になりながらも、ハーゲンを睨みつける。だが、その態度とは裏腹に、彼女の膣穴と体からはそれぞれ汗と牝の匂いが漂っており、乳首はビンビンに勃起し、発情していることは明白であった。「成程、指じゃ刺激が足りねえってのか。なら、こうするしかねえよな？」

ぐちゆり、と膣穴に指よりも太く、逞しい何かが押し込まれる。それがなんなのか、彼女は理解していた。

（ダメ……だ。腰を下ろしては……自分からこの男の肉棒を受け入れることになる）



トウーは蹲踞の様に中腰の姿勢のまま震えていた。

「ふーっ♥ふーっ…………♥」

(落ち着け…………！ 落ち着くんだ私…………！ 耐えろ…………耐えるのだ…………)

トウーは必死に己を律しようとする。観客の目の前で敵であるハーゲンの肉槍を受け入れてしまったのは、自分の誇りがズタボロになってしまう。安里に顔向け出来なくなってしまった。

だが、身体は正直だった。既に子宮からはトロトロと蜜液が流れ出しており、今か今かと待ち望んでいるかの如く小刻みに痙攣している。

「ハハハハハッ！ そのままタイムアップまで粘るつもりかよトウーちゃん？」

「黙れっ…………！ 黙れ黙れ黙れえっ！」

ハーゲンの嘲笑にトウーは叫ぶが、その声は弱々しく、今にも消え入りそうだった。

「強がっても身体は正直だよなあ。もう我慢できねえって面してるぜ？」

「違う…………！ これは…………！ あぐううう♥」

油断していたトウーの乳房と乳首にハーゲンの毒牙に等しい指が伸びる。既に充血しきっているそこを責められ、トウーはビクンツ！と仰け反ってしまう。鍛えられた肉体はハーゲンによって蕩かされ、今や快楽を享受するだけの肉人形へと堕ちてしまっていた。

「ひいいいっ！ やめてくれええっ！ イキたくないのに、イツちゃううううっ!!」

「ハッハア！ いいぜ、イケよ！ 派手にイっちまいな！」

ハーゲンはトウーの乳房を揉みしだきつつ、その先端を摘む。そして、肉茎の先端を子宮口に擦り付ける。「ひやううううううっ!!! イクううううううう!!」

トウーは絶頂を迎え、愛液を撒き散らしながら膝を折った。その拍子にハーゲンのペニスが一気に根元まで挿入された。

「おおーっ♥♥♥」

飛びかけた意識がカンフル剤さながらにペニスを打ち込まれた事で覚醒させられる。

「ああ……入って……しまった……あ……ダメだあ……気持ちいい……」

悔しくて堪らぬとばかりに歯軋りするトウーであったが、膣穴と子宮はハーゲンのペニスを歓迎するかのようキュンキュンと締め付け、その熱さと太さにトウーは髪を振り乱し悶絶する。

「へっ。ようやく素直になったか。じゃあ動くぜ！」

「ひゃううっ!? ま、待て！ まだ動かれたらっ！ あひいいっ！」  
ずんっ！ とハーゲンの腰が突き上げられる。トウーの膣壁はハーゲンの巨根を離すものかと言わんばかりに絡みつき、搾り取る様にうねる。

「うおおっ！ なんだこりゃあ！ 名器じゃねえか！ こんなにマンコをヒクつかせておいてよく言うぜ！」

「ひゃううっ！ ダメっ、ダメエっ！」

パン、パチュ、バチュンと肉と肉がぶつかり合う音が響き渡る。

トウーはハーゲンのピストン運動に翻弄され、ただひたすらに喘ぎ続ける事しか出来なかった。

だが、そんな彼女の痴態に興奮したのか、観客達は歓声を上げる。それはまるでトウーが敗北してしまった事を祝福するかのようであった。

トウーは唇を噛みしめ、なんとか耐えようとするが、そんな彼女に追い打ちをかけるようにハーゲンは激しく腰を動かした。

子宮口をこじ開けるように龟头が侵入すると、トウーは背筋を大きく仰け反らせながら絶叫した。

「いや あ あ あ！ それ以上入らないでくれええええええええええええ!!!」

だが、その願いも虚しく、ハーゲンの剛槍はトウーの子宮口にぐりぐりと押し当てられる。

子宮口が徐々に拡張されていく感覚にトウーは恐怖と快感が入り混じった表情を浮かべた。

「ハハハハハ、そんなにデカケツを押し付けてどうしちまったんだ？  
もつと欲しいんだろ？ ほら、オマンコの奥まで突いてやるよ！」  
そう言うのとハーゲンは再びトウーの尻を鷲掴みにし、思い切り腰を  
突き上げた。

最奥部への強烈な一撃にトウーは目を見開き、舌を出して痙攣す  
る。

それと同時にトウーの秘所から潮が吹き出し、ハーゲンの腹を濡ら  
す。

「おーっ♥おっ♥イギだくないっ♥敵のチンポでイギだくないいっ  
!?!」

涙を流し、必死になって訴えるトウーだったが、彼女の言葉とは裏  
腹に、その身体は歓喜に打ち震えていた。「ハハハ！ 敵将のチンポ  
でイカされる気分はどうだいトウーちゃんよオ？」

「いやだ……嫌だ……！ 私は……お前なんか……！ 負けて……  
たまるか……！ くううっ♥」

必死に理性を保ち、抵抗しようとするトウーであったが、ハーゲン  
のストロークは徐々に激しさを増していく。

「おごっ♥おぐっ♥おおっ♥おふううっ♥」

口からは唾液と、濁った声が漏れ出る。  
「ハハハ！ 良い声出すじゃねえか！ オラ！ これが欲しかったん  
だろうが！」

「おおお♥おおお♥おふう♥おおお♥」

もはやまともに言葉を発することも出来ず、トウーは快樂の波に溺  
れていった。そして……。

ドピュルルツ！ ビュルツ！ ビューツ！ ビュツ！  
「あっ……♥ああっ♥熱いのがあ♥あああうっ♥いやあ♥いやあ♥出  
されて……るう♥イクツ……イグウウウツ!!」

ブシャアアアアッ！ と盛大に潮を吹き出し、トウーは絶頂を迎  
えた。

「ハハ！ 派手にイッたな！ これで俺の勝ちだぜ！」  
「ああ……ああ……♥」

ビクンビクンと身体を震わせ、絶頂の余韻に浸るトウーをハーゲン  
は嘲笑う。何やら実況と観客が盛大に騒いでいるようだが、今の彼女  
には何も聞こえなかった。

「…………あれっ?」

ルイーナが気がついた時、彼女はニトクリス達に囲まれていた。ひ  
どく頭がぼおっとして長い夢を見ていたような気がするが、その内容  
は全く思い出せなかった。

「お目覚めですか、ルイーナさん」

「えっと…………はい」

要領を得ないが、とりあえず返事をする。確か安里とデートをして  
アイスを食べて…………それからの記憶がない。だが、何となしに状況は  
解る。

「ご、ごめんなさい! 私、また皆さんにご迷惑をおかけして…………!」

慌てて頭を下げると、ニトクリスはクスリと笑った。

他の者達も微笑んでいる。

「フフ、構いませんよ。安里、いえ同盟者もきつと貴方に頼られるのを  
喜ばしく思っている筈ですからね」

「そ、そうでしょうか…………」

「そうですとも!」

ニトクリスは若干語気を強めた。

まるで言い含めるといふよりも自分に言い聞かせる様に。「さあ、  
参りましょう。皆様、待っていますよ」

「はい…………」

ニトクリスに促され、ルイーナは歩き出した。

だが、その足取りは何処かおぼつかない。

まるで何かに怯えているかのようだった。

「ん

## 第88話

話はニトクリスがハーゲンの協力を以てしてルイーナを助け出した後のこと。

「成程！それは大変だったな！」

工場の顛末を安里から直接聞いた煉獄ははきはきと大声で相槌を打つ。

（いや、煉獄さんも大概大変だったと聞いたけどなあ……。手と目を潰されて半死の状態だったのに救助活動に参加したって……）

内心でそんなことを考える安里だが、決して口には出さない。何故なら、煉獄杏寿郎はそういう人間だと既に知っているからだ。それはともかく、今後のネフレンへの対応をどうしていくのかと言う事は移っていく。

「フェニックス領に対する侵略と麻薬密売か。証拠が揃っているのだからやつぱりサーゼクス様に引き渡すべきじゃないスか？」

まず、ミッテルトがそう提案した。しかしこれに待ったをかけたのが、意外にもレイナーレだ。

「多分サーゼクスは動かないわ。いえ、動けないと言い換えるべきね」  
彼女の言葉に安里は何故だと言いたげに視線を送ると、彼女はここが自分の売り所とばかりに説明を始める。

「サーゼクス、ジオティクス……」

確かに最高の魔王ではあるけれど決して綺麗事だけで魔王として物事を進められるわけではないのは安里様にもお分かりでしょう？

ルイーナさんの実家であるムールムール家の様にマンモン家は様々な非合法活動をジオティクスやサーゼクスの治める秩序の維持のために行っています。例えば反対派の鎮圧のみならず扇動や紛争の激発も含めて、ね」

カテレアはレイナーレの説明に爪を噛む様な仕草を見せる中で安里は若干興奮気味に彼女に尋ねる。

「じゃあ、カテレア達はサーゼクス様達が正当である証のために当て馬にされたっていうのか!？」

「そこまでは言いませんが、反対派を炙り出すためにネフレンが彼女やシャルバに力を貸した、というのは

あり得る話ですわ」

(なんてこった。つまりカテレア達は初めからネフレンに騙されていたってのか!?)

衝撃的な事実にあ里は思わず目を見開くと共にカテレアを憐れに思う。

『ちよつと安里!』

するとその時、冥界の通信がレイヴエルより入った。

『どうした?』

『どうしたもこうしたありませんわよ! テレビをご覧なさいな!!』

レイヴエルは激しく動揺しているらしく、声色が少し荒くなっている。

その言葉に従って彼女が見ているというテレビ番組を見るべくチャンネルを合わせると、そこには驚くべき光景があった。

「なつ!? ドラグ・ソボール新シーズン放映決定!」

場にいるほぼ全員がずっこけた。

「ほう! 『あにめ』か! 俺には解らんが皆が喜んでいるのなら吉報なのだろう! よもやよもやだ!」

そしてこの杏寿郎である。

『煉獄様! 安里! ふざけている場合ではありませんわよ!』

『落ちつきなさいレイヴエル。』

ごめんなさいね、九頭竜さん。

娘が言っているのは冥界のテレビの事ですの。とはいえ貴方達がいる地上では電波が届きませんから、こちらをご覧なさい』

リゼがレイヴエルを宥め、更に映像を送ってきた。

そしてそこには……。

『ご覧ください、ネフレン領の新薬工場を破壊するテロリストの姿です!』

アナウンサーの言葉とともに、映し出されたのは安里と機械兵が戦う様子であった。

『何でもこのテロリスト』

【九頭竜 安里】は魔列車を爆破し一部VIP達を殺害するに留まらず旧魔王であるカテレア・レヴィアタンともども国家転覆を図っているとか……』

(で、デタラメにも程がある……！)

しかし権威ある国営放送とあつては冥界の庶民は恐らくこの報道を鵜呑みにするに違いない。こういった搦め手を使うとすれば恐らくはネフレンとヘパイストスからフェニックスの涙を横流ししてもらったあの男、曹操に違いない。だが、曹操の思惑通りにはいかないぞと意気込む安里だったが、事態は彼の予想を上回る方向に進んでしまふ。

『しかもこの凶悪な面構えのこの男の交友関係ですが、何と！かのおっぱいドラゴンと親交が深いとの事ですよ！』

スタジオが騒然と化していた。何せおっぱいドラゴンはグレモリー領ではイナンナから領民達を救った英雄の中の英雄である。

スキヤンダルここに極まれり、といったところだ。

「……やってくれたぜあの野郎」

安里は言葉を失う。まさかここまで露骨にやってくるとは思わなかったのだ。

「いや、どうですクソ虫安里くん？ 不良少年からテロリストにランクアップした気分は？」

「まるで嬉しくねえな」

ナイアが漸く喋ったかと思えば

嫌味たっぷりと言ってきたので、安里は不機嫌そうに返す。しかしナイアにキレた所で状況が好転するわけでもないため、彼は溜め息をつくと気持ちを切り替えて次の手を考える。

「サーゼクス様に直訴しに行くか？」

「それはなりません安里様」

安里の提案にカテレアは首を横に振り理由を話し始めた。

「貴方は墮天使総督であるアザゼルの懐刀という立場でもあり、私も貴方に忠誠を捧げている身なのは事実です。で、あれば私の首を差し

出さねばサーゼクス様にお会いする事など叶わないでしょう」

サーゼクスに面会を求めるならまずは彼女の言う通り自分の命を差し出す必要がある、と彼女は言うのだ。

それが政治というものだし、カテレアにも覚悟はあった。

「そんなバカな真似が出来るか！」

「俺も安里と同意見だ！」

だが、安里と煉獄はカテレアの言葉を真っ向から否定する。

「俺は仲間は売らねえ！」

きっぱりと言い切る安里に煉獄は満足げに頷く。継子、とは少し違うが彼にすれば安里は弟子の様なものであったからその啖呵に好感を抱いたのだろう。

そして安里はカテレアの方へ向き直ると、真剣に語りかける。

「カテレア、お前がどんな事情を抱えていようと、俺はお前を見捨てたりはしない。だからお前の命をサーゼクス様に差し出す必要は無いんだ」

「でもよ坊主。お前、レイヴェルをネフレンに差し出そうとはしたよな？身内はダメで、他人は平気って考えか？」

ランサーの言葉は寸鉄人を刺す。確かにその考え方は安里自身も認めざるを得ない所である。

自分は決して公明正大、清廉潔白、品行方正な人間ではない。卑怯な手も使うし、目的のためならば手段を選ばない一面も曹操と変わらないのだろう。

だが、いやだからこそカテレアを見捨てるワケにはいかないのだ。「それは否定できねえ。けど、ランサーさん。俺はカテレアを見捨てたくねえ。後ろ暗い所があるうと身勝手だろうと、な」

本心から出た言葉だった。

するとランサーはフツ、と笑った。

しかし嘲笑ではない。まるで昔の己を見るかのような懐かしさと寂しさが混じったような表情だ。

「いいんじゃないか。そういう奴は嫌いじゃねえよ。人間、なんもかんでも取っ払ったら最後に残るのは好きが嫌いかだ」



ランサーはそう言いながら安里の肩をポンと叩く。

「困った女のために貴族とやり合うってのも面白そうだな。まあ、頑張れよ」

「ありがとうございます、ランサーさん」

「礼を言うのはまだ早いぜ。まだ何も解決してねーんだからよ」

「ええ、分かっています……」

かくなる上は、ネフレンを討ち取るしかない。安里はそう決意を固めていた。短絡的と言えはそうだが、事がここに至ればそれ以外に選択肢はない。討伐は不可能だが、暗殺自体は決して不可能ではない。

「穏やかじゃねえ話だな……」

「すいません。けど今の俺にはこれしか思い浮かばかったんです」

「バカ。誰が反対だって言った。おい、ナイア。」

ゲイトの能力なら何人までにネフレンの邸宅に侵入できるんだ？

俺も行くぜ」

不敵な笑みを浮かべてそう問うてくるランサーに、ナイアはやれやれと言わんばかりに肩をすくめる。

「ならば私も共をしよう。破壊活動ならばそれなりに訓練を受けている」

「オイラも忘れてもらっちゃ

困るぜ兄ちゃん！」

更にセルベリア、アフメドまで名乗り出ると安里は思わず目頭が熱くなった。

「みんな……！ 本当にありがとうございます!!」

安里は深く頭を下げる。皆の協力が得られる事がこれほど頼もしい事だとは思わなかった。だが、これで決まった。ネフレンを強襲し、その悪行を白日の元に晒した所で捕縛し投獄する。という作戦が。

切り込むメンバーは安里、ランサー、セルベリア、ナイア、アフメド。

アフメドは置いていくつもりだったがどうしてもついていくと行って聞かなかつたのだ。

作戦の決行は明日。今夜は英気を養うためにも休息を取る事にした。

そしてその夜のこと……。

1

安里は自室のベッドにてぼんやりと天井を見つめていた。(カテレアの件は何かかなりそうだけど、問題はネフレンの野郎だ)

ネフレンの実力は未知数。

恐らくカテレアより強いであろう事は想像に難くないが、それでも油断は出来ない。それに、あの曹操が絡んでいる以上、何かしらの罠を仕掛けている可能性も否定できないのだ。

(わからん事をくよくよ考えても仕方がねえ。とにかく、今は休んでおかないとな)

ネフレンを討つにせよ、討たぬにせよ、明日は決戦なのだ。

今宵はゆつくりと休むべきだろう。

そう思っただけ目を閉じた時、部屋の扉がノックされた。

「はい、誰ですか？」

安里はうたた寝しかけた所で尋ねる。すると、鈴が鳴る様な声が返ってきた。

「えつと、今、いいかな？」

「ルイーナ!？」

安里は驚きのあまり飛び起きる。

「ああ、悪い。ちよつと待ってくれ！」

慌ててドアを開けるとそこにはパジャマ姿のルイーナがいた。風呂上がりなのか髪が濡れており、頬もほんのりと紅潮している。

「ど、どうしたんだこんな時間に」

「うん、ちよつと眠れなくて。」

良かったら一緒にお話ししたいなって思ったんだけど、迷惑だった?」

「い、いやそんなことないさ。」

むしろ嬉しいくらいだよ」

「本当? それじゃあ、入ってもいい?」

「あ、ああ。構わないよ」

「ありがとう。」

「じゃあ、失礼します」

そう言っただけでしらずしらずと部屋に入ってくると彼女は窓際の椅子に腰掛ける。

「今日は月が出てないんだね。」

「なんだか寂しくなっちゃうな」

「お、おう。そうだな」

安里は言った側から自身の語彙力の無さに絶望していた。だが、そんな彼に構わず、ルイーナは続ける。

「でも、こうしていると昔を思い出すね。子供の頃、よくお星様を見て手を伸ばしていたんだ」

すらりとした白魚の様な手を夜空に向けて伸ばす彼女。その仕草はどこか幻想的で、神秘的な美しさを放っていた。

「星か……」

ふと、安里は幼い頃を思い出していた。彼もまた、星に手を伸ばす子供であった。何かに焦がれ、暗闇に煌めく光を求め続けるのは生物の本能なのか、あるいは理知を得た者の宿痾なのか。それはわからない。

解らないがはつきりしていることもある。今の安里にはルイーナこそ闇夜を照らす月か極星の様に輝いて見えるということだ。

「どうかしたの？」

「綺麗だな、と思ってな」

「えっ……」

「あ、その……変な意味じゃねえぞ！ その、お前がすごく魅力的だと思っただから……」

「そっか、ありがとう」

恥ずかしげに笑う彼女の笑顔に安里の心臓の鼓動は高鳴る。彼女のためならば世界を敵に回しても構わないと思うほどに愛しい。巡り会えた事は自分にとってこの上ない幸運だ。

「なあ、ルイーナ。」

もし俺達が出会った事が運命だって言うなら……俺はその運命を信じたい。そして、その先もずっと、俺の隣で笑ってて欲しいんだ」ルイーナは言葉ではなくほほ笑みをもって答えた。安里にはそれで十分だった。と、

「ねえ、安里。明日の戦いだけど

私もついていくね」

「はあ!？」

突然の言葉に思わず頓狂な声を上げる。だが、ルイーナは真剣な表情のまま続けた。

「私も戦います。私だってもう守られるだけの存在じゃないんだよ？

だから、私も貴方と一緒に戦う」

安里は僅かに躊躇った。果たしてネフレンを相手にして彼女を守りきれぬのかと。だが、ここで彼女を拒絶する事は出来なかった。周りに流され、言うなりのままにしかなる事しかできなかったルイーナが勇気を振り絞って告げたのだ。ならば、男として、いや恋人としての自分がすべきことはただ一つである。

「分かったよ。けど、無理だけはするなよ」

「うん、ありがとう」

嬉しそうに微笑む彼女に安里は決意を新たにす。

今度こそ必ず守り抜いてみせると。

↓

そして翌日だが少々トラブルが起こった。といってもルイーナが急遽同行することになったということではない。

「ゲイトさんがいない!？」

「いやあ、そうなんですよお。

全くあの人は色々自由な

人ですから困ったものですよ」

と、いうのはナイアである。

何でもニグラ、トゥー共々アザゼルと共にどこかへ出掛けているようだ。どうやら何かの会合があるらしいが、それがどこなのかまでは分からない。

「まあ、代わりと言う事でこの方に  
来て頂いたワケなんですよ」

と、安里の困惑をよそにナイアの紹介で現れたのはシユタークである。

「やあ安里クン。すっかり有名人みたいじゃあないカ」

くつく、と笑って見せるシユタークにルイーナは訝しげな視線を送る。

「ハハハ、そんなに心配しなくても

実力は確かだヨ、ボクは。それとも安里クンを取られるかもなんて心配しているのかナ？」

「べ、別にそんなんじやありません！」

顔を真っ赤にして否定するが説得力はない。だが、そんなルイーナの反応を楽しむようにシユタークは更に続けた。

「安心し給え。君が嫌がる事はしないサ。何せ、安里クンが悲しむ顔は見たくないんでネ」

そう言つてウインクする様は悪女といふかなんというか。ルイーナは少しばかり頬を膨らませるが、

シユタークは妹でも相手をするかの様に目を細めていた。

「おやおや、これはまた可愛らしい反応をするものだネ」

「か、可愛いとか言わないでください！」

「いやいや、褒め言葉さ」

そう言いながら肩を抱く様は益々姉妹の様である。そんな二人を安里はどこか安堵したような気持ちで眺めていた。

(ルイーナは長い間一人ぼっちだったというし、こういう風に誰かと触れ合うのもいい傾向だよな)

そんな事を考えていると不意にセルベリアは声をかけてきた。だが、彼女にしては珍しいというか耳打ちするかのような小さな声で。

『安里、私は奴の事はよく知らないが信用できるのか？』

『勿論。何度か危ない所を助けてもらったし、実力も相当だ』

安里の本心であったがセルベリアは僅かに眉根を寄せた。

『そうか、詰まらん事を言った。お前がそこまで言うならばな』

それだけ言うと彼女は離れて行った。安里は首を傾げるが、すぐに思い直してルイーナ達の方へと意識を向ける。

「それじゃあ、ネフレンの邸宅で符術でワープすればいいんだネ？」

「ああ、頼むぜ」

「任せておき給工」

シユタークは呪符を数枚取り出し、地面に放り投げる。するとそれらは地面の上で溶けて混ざると一つの魔法陣を描き出した。

「よし、これでOKだネ。じゃあ行くとしようカ」

「……（フリーにしては随分仕切りたがる女だな）」

ランサーが僅かに視線を鋭くする中シユタークの音頭に従って皆は転移陣に乗る。そして転移陣が発動したのだが……。

↓

「……!? ……は!?」

場所は庭先から一変し、安里は見知らぬ屋敷の中にいた。しかし周囲にはルイーナの姿しかない。

「無事か? ルイーナ」

「う、うん。けれど他の皆は?」

バラバラに転送したのか、それともネフレンが何らかの手段を用いたのか。安里は思考を回転させるが、今はそれよりも目の前の状況に対処しなければならぬ。合流するべきか、或は敵の襲撃に備えるべきなのかと思索していると、ふと、声が聞こえた。

「いよう、相変わらずアツアツだなお二人さん」

聞き慣れた声と共に銃声が響いた。

だが、安里が咄嗟に腕を触手化させて盾にする事で弾丸を防ぐ。

「デメエは……!」

安里の表情が憤怒に染まった。そこに立っていたのはルイーナを失いかけた元凶であるあの男。

「久しぶりだなア安里」

そう言っつて男はニヤリと笑う。その笑みは安里にとっては全身の血が沸き立つ程に憎たらしいものだった。

「相変わらず趣味の悪いサンングラスしてんな」

「おいおい、そう睨むなよ。」

せつかく再会できたんだ。もっと楽しくいこうぜエ？」

安里の言葉にハーゲンは愉快げに笑った。まるで旧友との再会を喜ぶかのようなのである。だが、安里は警戒を解かない。

「テメエの目的はなんだ？ ルイーナを殺そうとしたと思えば助けたり……どういうつもりだ？ まさか人をいたぶるのが大好きなサイコ野郎なんてオチはねえだろうな？」

「ハハハ、そうかもな。俺も正直楽しんでやっている所もある」

安里の殺気に物怖じもせずに応えたハーゲンは視線を安里に向ける。それは値踏みするような目であった。

※異聞・幕間（セラフオール×安里 快樂墮ち要素注意！）

セラフオールは苦難の只中であつた。といつても領地経営や魔王の地位に関するものではないから彼女以外は誰にも気に留めない。だが彼女にすればある種の死活問題であつた。

「ね〜ね〜！聞いてよあつくん！〜」

「あ……あつくん……」

ここは安里が居候をするニグラの邸宅。珍しい来客であるがセラフオールは安里相手に涙ながらにくだを巻く有様であつた。

「魔法少女マジカルレヴィア☆たんが今シーズンで打ち切りだなんて……！信じられる!?!」

彼女が手掛ける魔法少女モノが打ち切りという憂き目にあうとあつて、セラフオールとしては涙にくれていた。

「ううっ……こんなんじや私、シトリーちゃんに姉として顔向けできないよお☆」

そう言つて泣きじゃくる姿はとても魔王とは思えない。その姿を前にしてはシトリーが寧ろ『これで姉も領地経営に専念できるでしょう。あんな下らないモノに現を抜かして何になるというのです』などと喜んでいたなどは夢にも思わないだろうし、安里もカテレアも黙っていた。

「しかし、拝見させて頂きましたがありがたすぎますね。マンネリとポリコレに毒され過ぎです。脚本を担当した者は一度死んだ方が良いですね」

「カテレアあ!?!」

あまりにも切れ味が良すぎるカテレアの評価に安里はフォローの仕様がなない。

「そ、それは私も解っているの……！解っているのよお!!けど、それでも！私は歩みを止めてはいけないの!〜」

涙を流して訴えるセラフオール。



何故ならばこの番組は幼い頃にシトリーが夢見た魔法少女のイメージそのものなだから。その想いを理解しているだけに安里としても厳しい事は言えなかった。何とかなだめすかそうとしたのだが……。

「そうでしょうとも。私は貴方の味方ですよセラフオール様！こんなおもしろ……いや、素晴らしい番組を続けていく為なら、私は何でも致しますよお！」

何故か話を聞いていたナイアはノリノリでセラフオールの番組作りに協賛する意思を示す。それを見たセラフオールはナイアの手を取ると満面の笑みを浮かべた。

「ありがとうナイアちゃん☆持つべきものは友達ね☆」

（だ、ダメだセラフオールさん！

溺れるものは藁をも掴むというが

ソイツは有刺鉄線だから！）

思わず心の中で突っ込みを入れる安里だったが、既に遅すぎた。こうしてセラフオールによる継続が決定してしまったのだ。しかしそれは電波に乗るものではなくDVDによる限定化という形になったのであった……。そして安里は物凄く悪い予感に囚われた。

↓

「どうかなく☆あつくくん？」

私の新コスチューム？」

ウキウキした様子と晴れやかな笑顔で尋ねてくるセラフオールに安里は生唾を飲み込む……。もとい言葉を失った。と、いうのは身体のラインがはつきりと浮き出る薄生地のリオタードスーツに身を包んだ彼女の姿があまりに扇情的だったからだ。

「あ、あの……えっと……」

言い淀んでいるとセラフオールは無邪気かつ屈託無い笑みを見せる。

「うんうん☆やっぱりシトリーちゃんのアドバイス通りね☆『今求められているのはクオリティではなくシコリティです姉様』って言ってくれたんだよ☆ところでシコリティって何かな？」

嬉々として語る彼女は無垢そのものだが、それがかえってエロティックさを醸し出している事に本人は気がついていないようだ。(というかシトリリーさんが言うわけないだろう！ナイアのアマ、偽者を用意してデタラメ吹き込んだな!?)

内心で歯噛みしているとセラフオールは上機嫌のまま安里の腕を取った。

「ねえ、どう思うかな☆あつくん?」

腕に伝わる柔らかい感触に安里の顔は真っ赤に染まる。

「ど、どうと言われても、よ、宜しいのではないでしょう?」

安里は10代少年特有の欲望に屈してしまい、真実を明かす事ができないままセラフオールの新コスチュームにお世辞を言う羽目になってしまった。

「では、安里様。撮影協力を宜しくお願いします」

キリツと引き締まった顔でカテレアは安里に言うのだが彼女の格好も正に悪の女幹部というか、ダークエルフの戦士的な趣きがあるのだが、それを着こなしてしまうあたりは流石と言えるかもしれない。というか

撮影協力とはいったい何の事だろうかと首を傾げる安里にカテレアは更に続ける。

「今回はレヴィアたんがアザー・トゥースの狡猾な罠によって辱めを受けるシーンの撮影を行います」

「……………はい?」

「つまりはレヴィアたんが敵の手に墮ちるというシチュエーションね☆シトリリーちゃんが言うには『時代は敗北エロ、無様系ヒロインですよ姉様!』だって☆」

アザー・トゥース、もとい安里は目眩を覚えた。もし真実を知ったら命の危機に陥る事だろう。しかしセラフオールは既にノリノリである。こうなったらもう誰にも止められない。

「さ、それじゃあ生本番行きましょう〜!」

「言い方あ!!」

監督のナイアに対し安里は突っ込みを入れたが最早後の祭りだ

あった。どうすれば役得……ではなく被害を最小限に食い止められるか……。

安里は懸命に考えたがもはや何も思い浮かぶはずがなかった。

「そ、そんな……まさかカテレアがアザー・トゥースの部下だったなんて……！」

「フッフ……！ハハハハ！アハハハハ！そうよ！私が何より見たかったのは貴方のその絶望に満ちた表情よ！」

愕然とするセラフォルーにカテレアは高笑いをする。名演、いや怪演と言ってもいい鬼気迫る演技に安里は舌を巻きつつも、何とかカメラを止められないものかと思案していた。

「貴方はこれからアザー・トゥース様の孕み袋として調教されるのよ！その身を汚され、淫らに悶え狂うが良いわ！」

（カテレア……やっぱり魔王の地位を追われた事をまだ根にもっているのか……）

安里はカテレアの心中を慮ると複雑な気持ちになるも……。

「そ、そうだぞー。キサマの様な極上の魔法少女は俺の子種を受けてこそ輝くのさ〜」

リアス級の下手法な演技だが撮影は続く。その演技にセラフォルーは思わず涙を浮かべて叫ぶ。

「い、嫌あ！好きでもない男の赤ちゃんなんか産みたくない！」

セラフォルーは涙を流して拒絶し安里製の触手に縛られた身体を揺らして抵抗しようとする。しかし乳首やクリトリスが浮かぶ程の極薄レオタードスーツに身を包んだ彼女の姿はまるで挑発しているようにしか見えない。

「フッフ、正に孕み袋に相応しい誘惑っぷりね、大分素質はありそうじゃない」

セラフォルーを嘲笑するカテレアは正しく悪の女幹部といった風情だ。その手が触手から滲み出る媚薬液に塗れたセラフォルーのレオタードスーツに触れるとセラフォルーの身体はビクンと震えた。

「い……いやあ♥よしてえ♥」

セラフオルーの懇願も虚しく、スーツ越しに彼女の秘所に指を入れられてしまった。クチュクチュという音を立てながら膣壁を擦られるとセラフオルーは身体を震わせながらも快楽に打ちひしがれていく。

「いやよ？して？なんて淫乱で浅ましい牝豚なのかしら？そんな貴女にピッタリの餌を用意してあるわ」

と言ってカテレアがエキストラに持ってこさせたのはビールジョッキであるが中に注がれているのは黄ばんだ精液だった。

（おいおい！幾ら何でもやり過ぎだろうがカテレア!!）

（ご安心下さい、あれはエルフの里にあるアヘア科の薬草カタクリーコを使った本物そっくりの人工精液です）

念話でナイアが補足説明を入れると安里はホツとするも、セラフオルーは恐怖で顔を青ざめさせる。これまた迫真の演技かそれとも真実なのか？真偽定かならぬ淫靡な空気がニグラ邸宅内のスタジオに満ちる中、撮影は続く。

「む、無理い！そんなの飲めない！」

「あら、残念。なら貴方のもう一つのお口で飲んでもらうしかないわねえ」

セラフオルーの儂い抵抗にカテレアは悪魔じみた笑みで応じると、セラフオルーの背後へと回り込むと、両手でセラフオルーのお尻を鷲掴みにした。

「ん……ひい!？」

「オマンコにたっぷり飲ませてあげる。貧民ならまだマシ……犬か豚か或いはキメラか。どんなバケモノとの間の子が貴方のオマンコから放り出されるか楽しみね……♥」

セラフオルーの膣穴にストローがツン、と当たると彼女はカチカチと歯を鳴らして怯える。

「わ……解ったわ。飲むから……」

だから乱暴しないで……」

項垂れ、心が折れた様子を見せるセラフオルーにカテレアは満足げな表情を見せたが……。

バシイッ！と痛烈な平手打ちがセラフオールの尻に炸裂した。

「きゃあああ!!」

「何を勘違いしているのかしら？」

解ったではなく、解りました。でしよう？」

カテレアの言葉にセラフオールは泣きそうな顔になりながらもココクと首を縦に振るしかなかった。その様子を見つつ、安里は（これはこれでアリ

かも？）と思い始めた自分に危機感を覚えていた。

（マズイ……。このままだと俺までナイアレベルのクソ野郎に落ちていく気がする）

安里は自分の中の何かが腐っていく感覚に戦慄を覚えた。しかし既に時は遅く、安里もセラフオールも撮影を止める事ができないまま次のシーンへと移っていった。

「う、うう……。く、臭い……。汚い……。苦い……。♥」

ストローから半分程人工精液を飲み干したであろう頃、セラフオールの嗚咽を漏らしていた。だがその顔は苦悶だけでなく悦びの表情すら浮かべている。

「全く、口のおごった雌豚ですこと。でも、まあいいでしょう。口直しに私のオマンコを舐めて綺麗にしてちょうだい」

言ってカテレアは自らの股間をセラフオールの顔に押し付ける。そして彼女の舌がレヴィアタンの膣穴内に侵入し、舌と膣壁が激しく絡み合う濃厚なキスが始まった。

「ちゅぱっ♥れるお♥じゅぷ♥」

「ん……。ああっ！いいわ！雌豚のくせに……。いえ、雌豚だからこそ素晴らしい舌使いだわ！さあ！もつと奥まで舌を入れて！」

「ふぁ……。ふぁい……。♥」

セラフオールは命令されるがままに舌でカテレアの膣内を犯し続けた。その姿は正に家畜そのものであり、安里はそのあまりの無惨さに目を背けたくなる衝動に駆られたが、同時にその背徳的な光景にペニスが熱を帯びていくのを感じずにはいらなかった。

「フフ、喜ばない雌豚。貴方と私の絡み合いでアザー・トゥース様が

興奮して下さっているわよ？おおっ♥」

カテレアの凛々しい顔は容易く快樂に蕩けていき、やがて絶頂を迎える。彼女の子宮から放出された魔力はセラフオールの喉を潤すと同時に彼女の身体を内側から冒していく（という設定である）。

「うぐう！熱いい！身体が……身体が焼けちゃうよお♥」

セラフオールは身体を襲う疼痛に喘ぎ、身を振らせるもカテレアの陵辱から逃れる事は出来ない。

「フフ、どう？あのチンポ汁が欲しくて堪らないでしょう？だったら私と一緒に堕ちましょう。魔法少女、いえ魔王の肩書も何もかも捨てて、ただの牝豚として生きるのよ」

「そんなの嫌あ！私は皆んなの為にも負けられないの！」

セラフオールは涙ながらに拒絶するものの、内股を自ら刺激するように擦り合わせ、腰を振ってカテレアの足に秘所を押し付けて快樂を得ようとしている。その様に安里は爆発しそうになる劣情を抑えるのに必死だった。

（さ、流石にこれ以上はヤバイ……！中止させないと！）

（ま、待って！あつくん！私は平気だから……！新シリーズに期待している皆とシトリーちゃんの為にやり抜いてみせるから☆）

セラフオールも念話で決意を伝えてきた。そう言われれば安里としても彼女の意向を尊重しないわけにはいかない。

「全く贅沢な雌豚ねえ……。けれど初めだから味付けしなおしてあげるわ。アザー様の慈悲に感謝なさい♥」

カテレアの言葉に安里が呆けたのも一瞬、彼女が安里の剛直を露出させると、カテレアは躊躇いなく根本まで飲み込んだ。

「うおっ!？」

突然の事に安里は思わず声を上げる。しかしカテレアはそんな安里の反応を楽しむように頭を上下に動かした。

「んむ……♥んむう♥」

「う……お……!？」

安里はカテレアの奉仕フェラに身を任せる事しかできなかった。カテレアはカテレアで安里のモノをしゃぶる度にその味に魅了され

更に積極的に舌を絡める。

「んむ♥ぷはあ……♥何をしているの雌豚セラフオルー♥アザー様のモノをお慰めするのは貴方の仕事でしょう!？」

「はいー♪めんなさいーすぐに……んちゅ♥」

カテレアに叱咤されたセラフオルーは慌てて安里のモノに舌を這わせる。その光景にカテレアは満足げに微笑むと、更に激しく責め立てる。

「ん……♥」

「ふう……♥」

カテレアとセラフオルーは互いに安里のモノを貪り合い、快楽を共有していく。それはある種二人の絆を深めていく行為であり、安里の胸中には形容し難い感情が渦巻いていた。そして膨張するペニスはビクビクと脈打ち、今にも爆ぜようとしていた。

「アザー・トゥース様、そろそろ限界ですか？」

安里の限界を悟ったカテレアが問いかけると、安里は素直に首を縦に振る。するとセラフオルーもそれに呼応するかのよう安里への愛撫を強めた。

「えへ……♥アザー様のミルク欲しい♥飲ませて欲しいのお♥」

「全く仕方のない子ねえ。アザー様。どうぞあのジョッキ内に貴方様の精液を放出してください」

カテレアの言葉に促されるまま、安里は自分の欲望を解き放った。

「くっ……出る!!」

どびゅーびゅー!!びちやびちやびちや!!ビールジョッキの上部に安里のひりたての精液がぶちまけられるとセラフオルーはグビグビと飲み干していった。

「ああん♥へ、変な味い♥臭いのにい♥美味しいいいいい♥」

精液を口で受け止め、ゴクリと喉を鳴らして嚥下したセラフオルーはうつとりとした表情で頬に手を当てた。

「あら、もう飲み干してしまったの?残念ね……」

カテレアはそう言うものの、その表情に落胆の色はない。むしろセラフオルーが安里の精を飲み干してくれた事に対する感謝すら感じ

ている様子だ。

「でも、まだ足りないわよね？今度は貴方のオマンコでアザー様のチンポを鎮めて差し上げなさい。それが今の貴方の使命よ」

「はい……………」

カテレアの指示に従い、セラフオールは安里のペニスの前に四つん這いになり、尻を突き出した。

「アザー様のお♥アザー様のお♥」

セラフオールは犬のように息を荒げ、ペニスを挿入しやすい体勢を整える。

「アザー様♥あつくん♥あつくん様のチンポ♥チンポ頂戴♥」

セラフオールは自ら指先で秘所を開き、安里に懇願する。その姿に安里は興奮を抑えきれずペニスはますますいきり立つ。

「ねっ？いいでしょ？早くう♥あつくんのチンポ入れてえ♥」

「おっ…おう!!」

安里はセラフオールの腰を掴むと、一気に彼女の膣内へと突き入れた。

「ふああああん♥」

「うっ……………」

セラフオールの膣内は安里のモノを歓迎するかの如く、彼の肉棒を招き入れるや締め付ける。その強烈な快感に安里は早くも射精しそうになるが、歯を食いしばって堪える。

「んああ♥しゅ〜いい♥あつくんのおちんぽ気持ち良いよお♥」

一方セラフオールは歓喜の声を上げ、快楽に酔いしれていた。演技なのか本気なのか伺いしれない。

(…………って思い切り名前呼びしてるが大丈夫なのか!?)

(後で編集するから平気ですよお)

安里の危惧にナイアが念話でフォローを入れる中、二人の演技は更に白熱していった。

「ほら、もっと腰を振りなさい！この雌豚！アザー様のお情けをいただけるなんて光栄でしょう!?!」

「はいい♥アザー様の極太チンポを私のマ○コに突っ込んでもらって



幸せだよ♥」

カテレアに罵倒されながらも、セラフオルーは快楽に顔を蕩けさせながら、必死になって安里のモノを自分の奥深くまで迎え入れようとする。

セラフオルーの淫靡な姿に、安里は思わず声を上げると彼女のツインテールを手綱代わりに引っ張る。

「ひゃううん♥引っ張られると当たるう♥アザー様のオチンポ、オマンコの奥に当たってるう♥

オマンコいいっ♥きゅんきゅんきゅんっとなっちやうよお♥」  
「くっ……!」

セラフオルーが絶頂を迎えた事で膣壁が収縮し、安里のモノを搾り取ろうとしてくるが辛うじて耐えた。

自身よりも遥か格上の魔王が自分とのセックスに溺れているのもう少し見ていたいと思ったのもある。

しかしセラフオルーは安里の内心を知ってか知らずか、彼に更なる刺激を求めた。

「お願い……キス……したいの……。んちゅ……んちゅ……んむ……」

振り返ったセラフオルーは安里の顔に手を添えると、自ら唇を重ねてきた。

そして舌を差し入れると、安里もそれに応えた。互いの舌を絡ませ合い、唾液を交換し合う。

「んちゅ……んむ……」  
「むぐ……」

セラフオルーの積極的な行為に安里は戸惑いつつも、彼女を受け入れ、自らも舌を動かした。そして二人の濃厚なディープキスが終わるとカテレアはセラフオルーの破れたレオタードスーツに手をかけると、乳首を露出させた。そしてそのまま彼女は安里に見せつけるようにセラフオルーの乳房を揉みしだく。

「全く、アザー様のオチンポ様を鎮める役目も果たせず自分ばかり絶頂するとは何という恥知らずな雌豚なのかしら?その非礼を詫びる

ため、貴方の胸でアザー様をお慰めなさい」

そう言うとかテレアはセラフホルーの背後に回り込み、背後から抱きつく形で彼女を羽交い締めにした。

カテレアの両手がセラフホルーの胸に伸び、彼女のバストを鷲掴みにする。

「はあ……♥はあ……♥はあ……♥」

カテレアに両胸を弄ばれ、セラフホルーは息を荒げ甘い吐息を漏らした。更に淫らに堕ち、肉棒を欲するセラフホルーの姿に安里の欲望は膨れ上がっていく。そして彼女はカテレアの手によって胸を寄せ上げられ、安里の前に差し出された。

「さあ、アザー様。どうぞ貴方様の手でこの淫乱女を調教してやってください。アザー様の精液をたっぷり浴びせ、注いでやれば、この程度の雑魚など一瞬で従順になりますわ」

「は……うう……」

嘆きなのか、あるいは期待か。

鼻から抜けるような声を出しながら、セラフホルーはカテレアに胸を揉みしだかれつつ安里のペニスを谷間へと挟み込む。

「ひう、あ、熱いよお……♥」

安里のペニスを挟み込んだセラフホルーはその熱さに身震いし、身体を仰け反らせた。

カテレアの手に収まりきるサイズではあるがレオタードスーツの質感や弾力によって安里のペニスが柔らかく包み込まれていく。

「はあ……はあ……はふう……♥」

亀頭を舌尖を使って舐め回し、セラフホルーは徐々に安里のモノへと奉仕を始めた。

「れろお……んちゅ……んんう♥」

やがて口の中に含み、丹念にしゃぶり始めたところで安里の限界が訪れる。

「ぐうっ……ーセラ……フォルー！」

どぴゅー！びゅー！！びちやびちやびちや!!!

「ふああああ♥きたあ♥あつくんのミルクいっぱい出てるう♥」

セラフオルーは歓喜の声を上げ、安里の精液を飲み干していく。くめども尽きぬその勢いに、セラフオルーは歓喜の声を上げ続けた。「んんっ……ぐく……ぐく……ぷはっ……美味しい……あつくんのザーメン美味しすぎるよお♥」

射精を終えた後も、セラフオルーは安里へのチンポ奉仕を怠ることはない。むしろ一度果てたことでより献身的になったのか、彼女の動きは激しさを増していた。

「んむう♥じゅるるるるるるるるる♥」

射精したばかりのペニスを、セラフオルーはまるでバキュームのように吸い上げ、尿道に残った精液までも残さず飲み干してしまう。

「んはあ♥ご馳走様でした♥あつくん様のザー汁最高ですう♥レヴィアにお恵みくださってありがとうございますう♥」

セラフオルーは安里の股間に頬ずりしたまま、感謝の言葉を述べた。

「あらあら、随分と夢中になってしまっているようね？」

「そ、そうなお♥レヴィアはあ♥アザー様のオチンポ様にメロメロなお♥もつとお♥もつともつと気持ち良くなりたいたいのお♥だからお願い♥早くさつきをシてえ♥」

魔法少女でも魔王でもない、ただの女として快楽を求めるセラフオルーの姿に、安里も我慢できず、彼女の腰を掴むと一気に挿入した。

「んほおおおっ♥また来たあ♥オマンコに来たあ♥あつくんの極太チ○ポお♥覚えちやう♥オマンコに焼き付いちやうよお♥」

セラフオルーの膣内は先程出したばかりの安里のモノを貪欲に求め、膣内を押し広げるように安里のモノは奥深くまで入り込んでいき、彼女を更に悦ばせた。

「んぎいいいっ!?!すっ……すっいいいいい♥これしゅごいのお♥こんなの初めてだよお♥」

セラフオルーは今まで経験したことの無い快感に悶え、涙を流し悦ぶ。

「ああ、何と無様なのでしょう。」

ほら、レヴィア。妹や皆に詫びなさい」

「はいい……♡ごめんなさい、レヴィアはアザー様のおちんぽに夢中で妹の事なんて忘れていましたあ♡許して下さい♡」

カテレアの命令に従い、セラフオルーは謝罪する。しかしその言葉とは裏腹に彼女の顔には喜色が浮かんでいた。

「ごめんなさいい♡レヴィア、チンポ大好きなセックス狂いの雌豚なんですう♡オマンコ突かれる度に頭真っ白になっちゃうのお♡魔法少女の役目も吹っ飛ぶ位、オチンポが欲しくなっちゃうんですう♡だからあ♡オチンポでオマンコめちやくちやにしてください♡レヴィアの子宮にい♡チンポ汁ドピュドピュくって注いで欲しいのお♡」

笑みを携え喜色満面の表情を浮かべながら、セラフオルーは安里のモノを受け入れていく。

「ふあああああつ♡入ってるう♡アザー様のチンポがあ♡私のオマンコにぶち当たっててきてるよお♡孕ませ上等特攻(ぶっこみ)ピストンすっごいい……♡腰が砕けちゃうう♡んひやあああ♡」

セラフオルーの秘所は愛液で溢れかえっており、安里のモノを容易く受け入れてしまう。

「あはっ♡凄いつ♡アザー様のデカマラア♡お腹の奥まできてるよお♡んひゆうう♡」

セラフオルーは安里のペニスを根元まで受け入れるとその圧迫感からか身体を痙攣させた。絶頂に継ぐ絶頂に理性も矜持も何もかもが吹き飛び獣のような喘ぎ声を上げる。

「んひい♡んひい♡ひい♡ひい♡イグウ♡イツクううう♡」

「くっ……イクぞ……！セラ……フォルー！」

セラフオルーの激しい締め付けに耐えきれず、安里は再び射精した。

「んおおおおおつ♡きたあ♡熱いのいっぱい出てるう♡イクう♡イクううつ♡魔神の子供身籠りますう♡アザー様の赤ちゃん産んじやいますうう♡」

セラフオルーは安里の精液を一滴残らず搾り取ろうと、その膣を収縮させる。そして安里の射精が終わると、彼女は脱力しその場に倒れ伏した。びく、びくと痙攣しながら全身を弛緩させ膣から精液を垂れ

流すその姿は淫猥であり、同時に美しい光景でもあった……。

なお、DVDはインディーズで爆売れしたとか顛末を知ったシリィが大激怒したとかしなかったとか……。

## ※第89話（イツセー×エルシャ 他）

安里の殺気に物怖じもせずと答えたハーゲンは視線を安里に向ける。それは値踏みするような目であった。

「前より大分強くなったな。いや、あれから色々あったって感じか？ まあいい。お前には感謝してんだよ。お陰で色々楽しめそうだな」

間を置かずに2丁拳銃から弾丸を放つ。安里はそれを触手で防ぎながら後退した。

「なあ、安里。俺はなあ、今までずっと退屈だった。この世界はつまらねえ上に綺麗事ばかりだ。やれ、絆だの愛だの友情だのってよ、皆キラキラして見えてしょうがねえ。けどな、そんなもんは所詮は薄っぺらいメッキでしかねえ。そう思わねえか？」

「知らねえな。興味もねえ。そんなに汚えものが好きならゴミ処理係でもやってみろよ」

吐き捨てるように安里はルイーナを庇いつつ、触手の一部を槍状に変化。そのまま斜め上空から撃ち降ろす軌道でハーゲンを狙う。

「おっと、あぶねえ」

余裕をもって回避するハーゲン。だが、安里の狙いは別にある。一旦ネフレン邸宅の床に刺さった触手の槍は根を張り、ハーゲンの周囲を持ち上げた！

「なっ!？」

「くたばれー!」

バランスを崩したハーゲン目掛けて螺旋の触手を叩きつける。

「ちい!!」

咄嗟に拳銃で防御するが、衝撃までは殺しきれない。そのまま壁に叩きつけられる。だが、それでもハーゲンは気絶する事なく床に降り立つ。

「!？」

安里は僅かに動揺した。ダメージがさほど見られなかったことにはない。発火能力が発動しなかった事もそうだが幻惑効果もだ。

「しかし、妙だな？ 俺の弾丸を何発も食らってんのに毒を受けた様

子もねえみてえだが」

ハーゲンは替えのサングラスを悠々とかけながらルイーナを見据える。その瞳に映るのは情欲か、それとも別の何かなのか。少なくとも好意を抱いている相手を見るものではない。

「シー……ああ、そうかそうか。」

愛の力つてヤツか？ ギャハハハハ！ そんなんでどうにかなるレベルじゃなかった筈なんだがな」

「……ッ！」

ルイーナは青ざめた。まるで罪を告発された罪人のようでもあった。その表情の変化に安里も気がつくが

彼女に問いただす真似はしない。代わりに、というわけでもなからうが、ハーゲンが口を開く。

「なあ、安里くんよお。ルイーナちゃんとはどこまでいったんだ？」

「……テメエには関係ないだろうが」

「所が大いに関係あるんだよなあ。」

俺の今の雇い主はハマーマ様とベラナディアだからな」

「何だと……!?!」

ハマーマ、ベラナディア共にルイーナの継母と妹である。安里はギリッと歯噛みした。義理の娘に生地獄を

味合わせるために殺し屋まで雇い、更には心まで翫ぶような事を平然とやる親や妹など安里にとっては唾棄すべき存在だ。

「あの女どもが……テメエらのボスカよ……」

「そう怖い顔するなよ安里くん。」

家族つてのは助け合うモンだろ？ 将来家族になる二人の名前を聞いてキレてんじゃねえよ、ハツハハハア！」

ハーゲンは高笑いしながら2丁拳銃をホルダーに収めた。無論降参した訳ではないのはわかり切っていたので安里は警戒を解かない。果たしてハーゲンの両腕が龍の籠手に変化していく。まるでイツセーの『赤龍帝の籠手』のように。

「さて、と。そろそろ本気で行くぜ？ お前さんは俺を楽しませてくれんだろ？」

「クソ野郎が……！ いいだろう、ブツ潰してやる！」

互いに臨戦態勢に入る。ハーゲンは籠手を纏うと拳を突き出し、安里もまた触手を機械の多腕へと変化させた。

「へえーっ、ソイツがヘカトンケイルの力って奴か。ハマーマ様が言うには俺との相性は最悪だからこの力は使わん方がいらしいが……」

ハーゲンが喋り終わらない内に拳の弾幕が放たれた。機械の多腕から繰り出される打撃は一発ごとに衝撃波を生み、それがハーゲンの体を揺らす。だが赤色の龍の手は黄金色に光る籠手となり安里の打撃を全て受け止めていた。

「何イ!？」

「何イ!? じゃねえよ！ ハッハハハア！」

しかも背後から黄金色の多頭竜の頭部を模した砲塔が展開され始めた。明らかに神器、いや神滅具と呼ぶべき代物だ。七色の閃光が砲塔より射出されるとその出力は安里の想像より遙か上であった。

「ぐあああっ!!」

咄嗟に防御したものの、完全には防ぎきれずに『冥獄長の辣腕』ごとと吹き飛ばされてしまう。

「安里！」

ルイーナは即座に駆け寄ると自分の掌を突き刺し、血を垂らす。すると床に広がった血液から植物の根のようなものが伸びて安里の体に巻きつき、出血を止めると同時に回復を促していく。

「サンキュー、ルイーナ。助かった」

「……うん」

安里は立ち上がると、今度は自分が前に出た。

「ハッハハハ。ひでえ女だなア」

ボコボコにされた恋人を更に戦わせようなんてよオ」

ハーゲンはヘラヘラと笑い、ルイーナを指差す。

「安里くんがそんな風になったのも、全部オメエのせいだつてのによ。その清純派面が気に入らねえつてのは完全にベラナディアと同意見だぜ」



「う……」

ルイーナは反論できずにたじろいでしまう。後ろめたさと罪悪感が彼女の心を蝕んでいく。

「喧しい。誰もためにも戦えねえ」

人でなしがルイーナを腐してんじやねえぞ」

安里がハーゲンを睨みつけながら啖呵を切る。

「俺がルイーナの為に戦う事を決めたのは俺自身なんだよ！ それを外野がごちやごちや抜かすんじやねえ！」

ハーゲンはその言葉に一瞬きよんとした表情を浮かべたが、すぐに大声で笑い出した。

「ヒヤッハハハハハ！ 男前だねえ安里くんはあ！ そうかいそうかい。惚れてしまえば何とかも笑窪か？ まあいい。俺はなあ、お前らみたいな甘ったれが気に食わねえんだ。テメエらは所詮誰かに守られてなきや何もできねえ借り物の力でイキリ散らすクソガキだ。そんなヤツらが、テメエらのエゴを押し通す為に、他人を犠牲にしてもいいと思つてやがる。正直に言うならまだ許せるがよ、キレーゴトで塗り固めて正当化しようとするヤツらには反吐が出るんだよ。テメエらの金メッキなんぞ俺の黄金の力で剥がして惨めったらしい本性を引き摺り出してやりたくなんだよなあ!!」

ハーゲンの口元は歪み、目は漆黒に染まっていた。憎悪と虚無が入り混じる瞳だ。安里は思わず舌打ちした。コイツは今まで出会ってきたどんな敵よりも厄介かもしれない。

「例えばヨオ、お前の毒に対する抗体だけどどうやって獲得できたか知つてんのか？」

「……!」

ルイーナがまたしても青ざめるが安里は敢えて無視した。

「何だ？ アザゼルのおっさんやルイーナから頂いたからつて言いてえのか？ 俺が一人じゃ何も出来ねえクソガキだつて言いてえんだろがそんな事はとっくに解つてんだよ。同じ事をわざわざ何度も言つてんじやねえ」

しかしハーゲンは安里の言葉を笑い飛ばした。どうやら真意は別

にありそうだ。

「ああ、違う違う。そうじゃないんだ。ルイーナちゃんを見てみるよ。まるでこの世の終わりが来ちゃったみてえな面してんぜ？ ギャハハハア！」

ハーゲンはわざとらしく肩をすくめてみせると、安里を見据えて続けた。

「その抗体はな、ルイーナちゃんとイツセーが交わった血清から生み出されたってワケなのよ。ハハハハハ！ 美しい友情の産物じゃねえか！ 親友のイツセー君とルイーナちゃんが生本番で愛し合って出来た愛の結晶！ それがお前の力ってワケさあ！」

「あ……、ああ……」

ルイーナは頭を抱えて震えている中、安里は黙って立っていた。その表情はルイーナからは見えない。いや見る資格もないだろう。ハーゲンは心底愉快そうな様子だった。

「まあそういうことだ！ お前さんはイツセーとルイーナの二人分の愛情を受けて、二人の力を得たってことさ！ いやあく、羨ましいねえ。

親友、恋人、叔父さん。更に上司と至れり尽くせり！ いいねえ！ 最高じゃねえか！ ハツハハア！ どうだア!? 今どんな気持ち

だ!?!」

「……………」

「どうしたア？ 化石みたいに固まっちゃってよオ！ おい、何とか言えよ！ ハツハハア！」

安里は俯いて答えず、ハーゲンは勝ち誇った笑みを浮かべる。ハーゲンの読みでは安里の精神は完全に崩壊している筈であった。

「どうしたよ、それが」

安里は顔を上げるとハーゲンを睨みつけた。その表情は憤怒に染まってはいるが憎悪はない。

「羨ましいっていうならテメエも心から誰かを信じたり、傷ついたり、裏切られたりすりゃあ良かったんだ。人の出会いや別れてのはそういうもんだろが。テメエは結局、自分の弱さを乗り越えられな

「かったんだ」

安里の脳裏に浮かぶのは苦難を受けても諦めず、絶望せず抗い続けたイツセー達の姿だ。

「だからテメエはそんな風に腐っちまった。自分の殻に閉じ籠もった。テメエは誰かと繋がる事を恐れたくせに力だけは求めた。それが一番手っ取り早くて楽な道だと思っただからだろ？」

安里の正鵠を射る言葉にハーゲンの顔から一切の笑みが消えた。

「テメエはただ逃げてるだけだ。」

他人を信じる事からも、他人に期待する事からも。自分が傷つくのを恐れてるだけなんだ」

「カウンセラーにでもなったつもりかテメエはよお！」

ハーゲンの叫びに呼応するように彼の神滅具が再び機動する。

「……その力はやっぱり義母さんの」

「ああ、そうだ。ハマーマ様が俺にくれた力だよこのアバズレ女ア！

歴代の赤龍帝の怨念を取り込み、俺の肉体と精神に融合させる事で禁手化に至った『砲塔三昧・黄金龍脈』！

テメエらみたいながき共をブチ殺す為に生まれた力なんだよオ！」

ハーゲンは激昂すると黄金色の光を纏った拳で殴りかかってくる。

安里は即座に反応して迎撃するが、背後に浮遊していた黄金龍の砲塔から放たれる閃光の破壊力は想像以上だ。

「ぐあっ!!」

「まだ終わりじゃねえぞお!!」

黄金の閃光が機械の多腕を融解させていく。灼熱に燃える右腕が安里に迫り、直撃こそ免れたものの装甲の一部を溶かし、肉にまで達していた。

「ハッハア！ どうよお！ テメエのお仲間のトゥーとヤツた事で得たこの熱量エネルギー！ これが俺の本当の力だあ！ テメエの腕なんぞ一瞬で溶かす事なんぞ造作もないんだよおお！」

ハーゲンの勝ち誇る声が響く。だが安里の目は未だハーゲンを見据えている。まるで極星のように鋭い眼差しだ。

「なんだアその目はア!!」

ハーゲンは苛立ち、左腕を振りかぶると安里を叩き潰そうと振り下ろす。

「抉れるッ！ 安里！」

安里は咄嗟にデロデロに融解した多腕を繰り出すも粘土細工の様に引きちぎられる。

「ああ……安里！ ごめんなさい……！ ごめんなさい！ 私が……！ 私なんの役にも立てないばかりに……！」

ルイーナは泣き崩れながら謝り続ける。しかし安里は彼女を責める事はない。

「何言ってるんだよルイーナ！ これでもいいんだよ」

「何だとお？ 腕をぶっ飛ばされて

心臓に俺の手が迫ろうって最中だぞこのスツタコ！ 現実が見えてねーのかア!!」

ハーゲンは叫ぶと残った左手を握りしめ、安里を殴ろうとする。しかし次の瞬間、ハーゲンは違和感に気がついた。

「な……何だア!! 身体の動きが……鈍い……!!」

ハーゲンが違和感を感じると同時に肩の付け根と関節部から煮え立つ液体金属が膨張、炸裂し血飛沫を上げた。

「がああああああ!!?!」

な、何だア!! 力の暴走かああ!!」

ハーゲンの絶叫が響き渡る中、ルイーナはその理由に気がついた。(違う。義母様の呪術が暴走するなんてあり得ない。安里のあの腕が融解した時にきつと何かをしたんだわ!)

「ぐがあっ……だがなあ、俺の砲塔はチャージ完了だア!!」

だがハーゲンの切り札は未だ健在。7つの多頭竜の砲塔は黄金に輝き、今まさに解き放たれようとしていた。

「おっと止めときな。俺とメカメカ爺さん……いやハカトンケイルの『冥獄長の辣腕』の一部が砲塔の中に入り込んでる。今お前がそれを撃とうとすればどうなると思う?」

「ば、爆発しちゃう!!」

ハーゲンの代わりにルイーナが答えを出した。

「そういうことだな。だがテメエにはルイーナを助けてもらったって恩がある。このまま逃げるってんなら手出しはしねえし、仲間にも見逃してもらおうように言っておく」

ハーゲンの吐息が荒くなり顔から汗が吹き出している。もはや立つことさえままならない状態らしい。

「は……はは……ヒヤハハハ！」

舐めてんじやねえぞ安里クンよオ!!」

しかしハーゲンの執念は凄まじかった。彼は暴発覚悟で出力を増大させ始めたのだ。バチバチと砲塔はひび割れながらも徐々にエネルギーを吐き出すべく充填されていく。

「ギャハハハ!! ザマア見やがれえ安里オ！ テメエの神器なんぞ歯クソみてえに消し飛ばしてやらあな!!」

遂に決壊寸前だった光の奔流は

ハーゲンの制御下を離れて放たれる。ハーゲンは勝利を確信し、そして黄金の光は安里を飲み込み……はせずに反射された。

「何いいい!? うぎよがあああああ!!」

ハーゲンの肉体は屋敷の複数の部屋を巻き添えにして木っ端微塵に爆散した。安里が立っていた場所にはドロドロの金属から武態により作り出した鏡のように輝く盾があった。液化化した金属の多腕をハーゲンの砲塔に詰まらせるのみでなく、反射壁としても活用していたのだ。

「なまじ強力な能力を持ったのがお前の運の尽きだったな……。テメエが自分の力だけで挑んできたら勝負はどう転ぶか分からなかっただろうよ……。自分のものじゃない力を過信しすぎたのが仇になったなハーゲン。戒めとして、テメエの事は覚えておいてやるぜ」

安里はそう言って十字を切り、ルイーナのもとへ向かう。

「大丈夫か？」

「うん……安里は？」

「な、何、元気イッパイだぜ！ わははははー！」

空元気なのは見え見えではあるが安里は笑ってみせる。

「でも、顔色が良くないよ。少し休んだ方が……」

「心配すんなって！俺は大丈夫だからさ！それより早くランサーさん達と合流しないと！」

「と言ってルイーナの手をとろうとしたその時だ。」

「危ないっ！」

ルイーナの視界に何やら形容しがたい形状の赤黒い屍肉が腐臭を放ちながら飛び込んできた。

ルイーナは咄嗟に突き飛ばすと背中に屍肉が掠る。

「あっ……!?!? ぐうっ……!!」

強酸性なのは解らないがルイーナの背は爛れ、煙を上げている。

「ルイーナ！」

安里は疲労も忘れて駆け寄るがルイーナは安里を

気遣い、力なく青ざめつつ笑みを浮かべる。

「だ……大丈夫だよ……これくらい平気……！安里の痛みに比べたら……ね」

「バカ！俺の痛みなんてどうだっていいんだよ！」

『ぐひやははははは！ハーゲンの野郎、デカイ口を叩いてこのザマか？が、まあ丁度いい。何せ恨み骨髓のお前をこの手でブチ殺せるからなあ!!』

屍肉が形を変え、頭部が現れる。

その隻眼の獣人は見覚えのある顔だ。しかし以前の澄まし顔は消え去り、狂気と殺意に歪んでいる。

「アヌビス……!?!」

『そうだよ！アヌビス様だよ！』

このドグサレがあ！テメエだけは絶対に許さねえ！あの日テメエに殺されかけた時からずっとこの瞬間を待ちわびていたんだからなあ！』

「それで消耗した俺を狙い撃ちってか？山犬からハイエナに鞍替えしたとは知らなかったぜ」

『ハッハア！何とでも言いやがれ！テメエに復讐できるならなんだってやってやらあ！こんなふうにい！なあっ!!』

屍肉が更に形を変え、首から下が泥状の獅子の半身になる。背には

翼という異形の姿だ。

「スフィンクス……？」

ルイーナの言葉通り、その姿はエジプトの神話に登場する怪物である。

『キハハハハ！ そうだよお！ 地より沸き立つ暗黒のフアラオの加護を受けた今の俺は無類無敵！ くたばりやがれえ！ 安里オ！』

ー

一方その頃……。

(いや、何だか最近は何調子がいいな！)

イツセーはまさに絶好調であった。学園での生活も充実しているし、女性とお近づきになる機会も増えている。リアスは最近太り気味だと言うので添い寝して貰えないのが少々気がかりではあったのだが、

「ん……あ、ああん……♡

い、イツセーさあん……♡素敵ですう……」

以前にもましてアジアが積極的に夜這いしてくるようになったのだ。すっかりトランジスタグラマーになったアジアだが、特に胸元のボリユームが凄まじく、彼女の大きな胸に顔やペニスを挟まれると天にも昇る心地だった。しかもアジアの方から積極的に誘ってくるものだから、イツセーとしてもたまらないものがある。イツセーのペニスを数え切れぬ程に挟んだおっぱいは今ではさらに大きくなっており、その柔らかさと張りのある弾力を兼ね備えた素晴らしい感触は筆舌につくし難いものがあった。

そして乳奉仕に勤しむのはアジア一人ではない。彼女の親友でもあり、聖剣使いであるゼノヴィアも負けじと対抗しているのだ。アジアに劣らぬ見事な乳房を持つ彼女もまた、自分の巨乳を駆使してイツセーのペニスを挟み込んでいる。まるで鮭が川でも遡るように、左右から二人の美少女によってパイズリされつつ亀頭を二人同時に舐め上げ雁首を刺激してくるのだから堪らない。

寝そべりながら両者に挟まれてパイフェラされる至福の時間にイツセーは溺れていた。

「こ、これはもう天国と言ってもいいんじゃないか？ ああ、幸せすぎるぜ……」

さらに天国にスパイスを加えるかのように、雪崩の様に白くも柔らかな爆乳がイツセーの眼前を塞ぐ。

「おおっ……い、こ、これは夢にまで見たおっぱいアイマスク！」

そう、視界いっぱい広がる双丘こそイツセーの夢にまで見た光景だった。その担い手は小猫、もとい白音だ。発情期を迎えつつある彼女は仙術により一時的に身体を大人化させているがその豊満さは姉である黒歌にも匹敵する。しかし白音の最大の武器はその大きさではなく形だろう。仰向けになってもなお形が変わらない美巨乳は正に芸術品であり、それを支える腰回りには無駄な贅肉など一切なくその分を尻と太腿へ振り分けているため、脚線美が見事という他ない。そんな彼女がベッドの上に四つんばいになって覆いかぶさって来るのだ。

「先輩……先輩♥」

白音は自らの乳首を摘み上げるようにして揉んで見せる。するとその動きに合わせて揺れ動く双丘はまさに魔性の兵器と呼ぶに相応しい。谷間から匂い立つ甘い香りが鼻腔を刺激し、否応なしに興奮させられる。さらにはイツセーの顔を挟むように左右から二つの膨らみが迫ってきた。それは黒歌のものであった。

「にゃはあ♥姉妹パフパフと友情パイズリの感想はどうですかにゃあご主人様あ♥」

「うわふ?!」

左右から押し付けられる爆乳に視界を奪われるイツセーだったがハーレム神を目指す身であるからなすがままでは終われない。彼は両腕を伸ばして二人の膣穴に指を突き入れる。

「あっ！」

「ひゃん♥」

イツセーの反撃を受けて二人は思わず声を上げてしまう。しかしそれだけで終わりではなかった。彼の手はさらに二人の秘所を攻め立てていく。クリトリスも花卉の縁もイツセーからは見えずつとも、彼



が今どこを触っているのかは手に取る様に分かる。だからこそ、最も敏感であろう部分を集中的に攻め立てる事ができた。

「ああっ♥だめえ……そこは弱いんですにやん……せんばあい♥」  
「にやふう……♥そこお……気持ちいいいい……♥もつと強くして欲しいにやあ……ごしゅじんさまあ♥」

イツセーの手の動きが激しくなるにつれ、白音と黒歌の声も激しくなっていく。姉妹故か性感帯も同じらしく、二人揃って甲高い喘ぎ声を上げる。イツセーも二人の反応を二人の喘ぎから推察し、さらに的確に攻める場所を変えていった。

「あん♥ああああっ！ ダメですう！ 私イツちやいます！ イツセー先輩の手でイっちゃいましゅううう!!」

「ああああん♥おねえちやんと一緒にイクにやあ白音！ ご主人様の手マンで一緒にイかせてええええ!!」

そして遂に二人が絶頂を迎えると同時に、イツセーのペニスも限界を迎えかけていた。ゼノヴィアとアーシアの美巨乳に包まれて扱われ続けていたのだ。我慢できるはずもない。そしてイツセーの射精を察知したゼノヴィアとアーシアはラストスパートとばかりに乳圧を強め、一気にイツセーを追い込んでいく。

「んはあっ♥ゼノヴィアさんの乳首が私の乳首をコリコリしてますう♥あああんイツセーさんのおちん○んがビクビク震えてるのが分かりますう！ もう出そうなんですな？ 良いですよイツセーさん♥出して下さい♥おっぱいにいっぱいかけて下さいあい♥」

「ああっ、イツセー♥私にも♥キミの熱い精液を注いでくれ♥ほら早く出すんだ!! アーシアだけに独占させるものか♥んちゅ……れろ……♥はむ……♥じゅぽ……♥んぐ……ごく……♥ああ……♥イツセーの精子が……欲しい♥」

淫欲の四重奏が響き渡る中、ゼノヴィアとアーシアの乳奉仕によつてついにイツセーは果てた。どぴゅっ、びゅーっ、と勢いよく発射された大量の白濁汁は、ゼノヴィアとアーシアの顔や胸にぶちまけられ、さらに二人の谷間を白く染め上げていく。

ゼノヴィアとアーシアは嫌がる素振りすら見せず、むしろ嬉々とし

てそれを受け止め、互いの乳房を揉みながら舐め取っていく。

「んん……♥ゼノヴィアさんの汗とイツセーさんの精液が混じって……何だか変な味ですね……でも美味しいです♥」

「ああ……。アーシアの言う通りだな。アーシアの汗とイツセーのザーメン……。もつと味わいたいな……。♥」

そう言っつてゼノヴィアはアーシアのイツセーの精液を浴びてぷっくりとさくらんぼのように膨らんでいる乳輪に舌を這わせ、母乳を求め赤子の様に吸い付いた。

「ああん！　だ、駄目ですう……。そんなに強く吸つたら……。ああん♥」

アーシアも負けじと自分の胸を夢中でしゃぶっているゼノヴィアの豊満な双丘を両手で揉みしだいて対抗する。二人の少女は互いに陶然とした表情を浮かべていた。

身も心もイツセーに染め上げられた聖女と聖剣使いの痴態は、まさに背德的なエロティシズムに満ち溢れていた。

(な、なんて素晴らしい光景なんだ……！)

目の前に広がる光景にイツセーは感動を禁じ得なかった。美少女たちが自分に心酔しているこの光景こそまさに至福！　そう、彼はようやく自分が本当に求めているものを理解しつつあった。

(そうか……。俺はただ女の子とエッチしたいだけじゃなくて、こういうシチュエーションを求めていたのか……!?)

「はあはあはあ……」

興奮のあまり荒い息をつくイツセーは白音と黒歌の事を忘れてつい、見入っていた。

「あら、ご主人様。白音と黒歌のパフパフはお気に召しませんでしたかにゃあ♥」

「にゃん……。♥ご主人様のココはまだ元気なのにゃん……。♥」

しかし黒歌と白音はすぐに気付いてイツセーの股間に乳を押し付けてきた。

「あ、いいいや……。そういうわけじゃないんだけど、その……。ごめん!!」

慌てて謝るイツセーだったが、黒歌と白音は彼の言葉など聞いていなかった。

黒歌と白音はイツセーに跪くかの様な態勢で姉妹パイズリを再開する。イツセーが出したばかりの精液が潤滑油となってヌルついた感触が何とも言えない快感を生み出していく。

「にゃふふふ♥アーシアとゼノヴィアばかりズルいにゃあ♥私たちだつてご主人様を愛したいにゃあ♥」

「はい♥私もイツセー先輩に愛されていますう♥だから今度は私と先輩の二人で先輩を気持ち良くさせてあげますにゃあ♥」

アーシアとゼノヴィアの百合プレイを着に姉妹パイズリに耽る二人は実に幸せそうだ。

「うわっ！ ちょ、ちょっと待って！ ストップ！ ストップ!!」

イツセーは静止しようとするが、四人娘は止まらない。

「ふにゃあ♥イツセー先輩のおちん○ん、まだこんなに硬いですう！んんっ！ 私、また我慢できなくなってきたあ♥もう、先輩のせいですよ?」

白音はイツセーの制止を無視してさらに強く乳房を押し当ててくる。柔らかな二つの肉球がぎゅつと形を変えながら潰れ、弾力のある圧力でイツセーのペニスを圧迫してくる。しかも左右から押し付けられた乳の隙間からは、二人の乳首が擦れ合う度に漏れ出る先走り汁が滴り落ち、それがローション代わりになってますます刺激が増していく。

「ああっ！ ゼノヴィアさあん！ 私……女の子同士するのがこんなに良いことだとは思いませんでしたあ！ ああああああああん♥」

「ああ、私もだよアーシア。まさかキミと一緒にイケナイ快樂に溺れる日が来るなんてね……♥」

ゼノヴィアとアーシアもまた、互いの乳首をこすり合わせ、さらには唇を重ねて舌を絡め合い、互いの唾液を交換し合っていた。更に股同士も太腿を使って密着させ、腰を動かして秘所を激しく擦り付け合っている。

「ああ……親友のキミとこうして交わる事ができるなんて……♥」

「はい……私も嬉しいです……ゼノヴィアさん……♥」

二人の顔には幸福に満ちた笑みが浮かんでおりイツセーはある意味蚊帳の外に置かれていた。

「ふふふ、あんなレズセックスに夢中でハクジョーな西洋女達なんか放っておいて、私たちともっとイチャイチャしましょうようにやあ♥んちゅ……♥れる……♥はむ……♥んぐ……ごく……♥んんっ……♥」  
「そうですねにゃん……♥姉様と私は先輩一筋ですにゃん♥先輩が望むなら、私は先輩の赤ちゃんだって産んであげられますにゃん♥」  
（い、いかん……！ 気持ちいい事この上ないが仲間たちに亀裂が生じさせてはハーレム神失格！ ど、どうする……!?）

イツセーは黒歌と白音の誘惑に戸惑う中二人の胸の谷間に誰かが人差し指をつぶりと差し込んだ。

「んにやつ……!?」

「にゃああん!」

二人は目を見合わせて驚いたような声を上げるが次の瞬間。

「ふにゃああ!? 白音のし、尻尾が私のオマンコとお尻にい!?」

「にゃひいん♥姉様の尻尾も私のアソコとお尻にい♥」

突如始まったのは互いの尻尾をバイブ代わりにしてのレズセックス。想定外の快楽と混乱に二人は思わずイツセーへのパイズリ奉仕を中断してしまう。

「昔の人は言いました！ 人のフリ見て我がフリ直せと！ アーシアとゼノヴィアを薄情だとあげつらうなら貴方達も耐えてご覧なさい！」

突如現れてはきはきと喋るのは

嘗て最強の赤龍帝と称されたエルシャその人である。

「え、エルシャさあん!」

「フフ、随分お楽しみねイツセー君♪」

「いや、これは……」

面目ない、と言わんばかりに頭をかくイツセーにエルシャは年上の余裕たっぷりウィンクする。

「まあ、皆が貴方に夢中になるのも解らなくはないわ。貴方ってカワイイ割に意外と男らしいもの」

『随分相棒を褒めるがいつの間にも実体化できるようになった？　しかも相棒に似たような技も使ったようだが』

エルシャの突然の登場にドライグは冷静に尋ねる。味方の立場であるから別に身構える程ではないが一応警戒はしておく。

「うふふ。これもアザゼルの人工神器の賜物よ。3分間だけど私は全盛期の姿で実体化できるわ」

『ほう、それは興味深い。俺もいつか使ってみたいものだ』

「あら、じゃあ今度私と一緒にやってみる？」

（まるで光の巨人みたいだなあ……。というか、やってみるって言葉のトーンが怪しかった様な）

イツセーの疑問を他所に白音と黒歌は姉妹レズプレイの只中であられもない嬌声を漏らす。

「ああん♥ダメえ♥姉様の尻尾、気持ち良すぎるにやん！　イツセー先輩の前でこんな恥ずかしい姿見られてるううん♥」

「にやふううん♥ご主人様に見られていると思うだけでイツちやいそうになるにやあ♥白音え♥一緒に気持ち良くなりましよううん♥」

姉妹は互いに相手の尻尾で秘所を攻め立てながら腰を振り続け、更に舌を絡め合う。

「あああん！　イツセー先輩、私たちを見て興奮してくれているんですね!?　嬉しいですう♥んんっ……♥ああん……♥」

「ああん……♥ご主人様の熱い視線が私を貫いてるううん♥んんっ……♥あああん……♥」

二人とも絶頂寸前なのか腰の動きが激しくなる一方だった。（す、すっかり四人とも出来上がっている……）

イツセーは四人の美少女が雌へと墮落、或いは昇華していく光景を目の当たりにして言葉を失う。

（俺もまだまだハーレム神として修業が足りないなあ）

「うふふ、隙あり♥」

「おうっ!？」

するとエルシャがイツセーの亀頭を軽くつつく。ほんのりとした痛みと快感が同時に襲い掛かり、つい声を上げてしまう。だが変化は

そのみに留まらない。

ビリビリ、とエルシャのナイトドレスをまるで薄紙の様に破け散り、彼女の肢体が露にしまったのだ。そしてその豊満な乳房が、更には黄金色の股間の茂みまでもが露出した。

「な、何だ!?!」

「あん♥乱暴ね♥でも嫌いじゃないわよ」

エルシャは艶めかしい笑みを浮かべると、身をくねらせ雌彪の様なポーズをとる。まさに女神と呼ぶに相応しい神々しさと色気を漂わせていた。

（か、身体が勝手に……!?!）

ぐうつ……!?! エルシャさんのドスケベわがままボディ！ 自分の意思とは無関係に手が動いてしまう!）

「ひゃうん♥もつと、もつと優しくしてえ♥」

（ぐあつ! 今度は乳首を強く摘まんでしまった!）

「うふふ、私のおっぱい揉んで良いのよ? ほら……もつと強くして……ああああん……♥」

（ぐああああ! オート操縦みたいに身体が勝手に! な、何て生地獄なんだ!?!）

「ああん……♥イツセー君、貴方ってテクニシャンねえ……♥」

（う、嬉しくない……! 泣きそうだ!）

イツセーはまるで絵に描いた餅を食わされている様な味気なさに悔し涙を流す。しかしそれでも身体は正直に動き、エルシャの胸や尻を撫で回す。

『やれやれ。その猫鍾娘でなくイツセーの身体まで操って何のつもりだ?』

どうやら真相を知るドライグが呆れた口調で言う。

「もう、ネタバラシが早いわよドライグ♥まあイツセー君のおっぱいテクニックを私なりにアレンジしたのよ。言うなれば『乳神操身』（パイプライン）と言った所かしら?」

エルシャは悪戯っぽく微笑む中、

イツセーは操られるままに勃起したペニスをエルシャの濡れそ

ぼった秘裂に擦り付ける。

「さあ、来てイツセー君♥お姉さんの受肉おマンコにいっぱい出して頂戴♥」

「ぐ、うう……!」

ずぶり、とエルシャの膣内に大砲の弾が装填されるかのようにイツセーのペニスが深々と突き刺さる。

「あぁっ……♥あはぁっ♥」

エルシャは忽ちイツセーのペニスを甘受し、背筋を仰け反らせて歓喜の声を上げる。

「ふふ、流石は現役の赤龍帝ね。凄いわぁ……♥お姉さん、久々だからちよつとイキそうよぉ……♥」

(な、何も感じない……! な、何でだよ! エルシャさんというこの上ない大人のお姉さんと合体しているのに全く興奮しないぞ?!)

イツセーは悲痛な面持ちで歯噛みする。乳神操身で操られているイツセーだがエルシャによって白音、黒歌と異なり一切の性感を遮断されていた。だが、生殖機能が遮断されているわけではなかったらしい。

どびゅっ! びゅるるる!!

挿入して間もなく、種馬の如くイツセーの精液がエルシャの子宮に注がれていく。

「あはぁあん♥イツセー君の濃厚ザーメン来たあ♥ああん♥まだ出てるううん♥」

「うううう……!」

イツセーは射精しながらも無感動に涙を流した。

「あらあら、そんな顔してどうしたの?」

タネを解っているエルシャはまるで鼠をいたぶるようにクスリと笑う。

(こ、こんなのは俺の求めるセックスじゃあない! こんなのはただの生殖行為! 互いに満たされて、気持ちよくならなきや意味がないんだ!)

イツセーは気合と共に乳神操身を解除するや誰の意志でもなく、己

の決意に基づいた彼女の背にのしかかり、両手でその豊かな双丘を掴みながら揉み始める。

「え、イツセー君!? も、もう解除しちゃったの!? は、早い!」

『まあ……何だ。エルシャ。お前は相棒の乳とハーレムへの執念を読み違えたようだ……』

ぐりゅっ! ぐぢゅぢゅ!

ぢゅぼぼぼ!!

普段のイツセーとは思えない荒々しく、凄まじい子宮へのノックینگがエルシャを襲う。

「ひぎいいいい!? い、イツセー君!? ちよ、ちよと待って! い、今入れられたら私……ひ、いやああああああ!!」

エルシャはビクンツ、と身体を痙攣させ盛大に潮を吹き出す。

「あ、ああああああん♥」

「ま、まだまだあ!!」

怒りと哀しみに火がついたイツセーの猛攻は歯止めが効かない。エルシャが絶頂したにも関わらず、構わずピストン運動を繰り返す。

「いやあん♥イツセー君、激しすぎよ! あんっ♥ああん♥ダメえ♥」

イツセーはエルシャの言葉を見殺し、彼女の豊満な尻肉を鷲掴みにして激しく揺さぶる。

「あああん♥イツセー君、感じる♥感じる♥私を自分だけのモノにしたいくて仕方のない貴方の想いが伝わってくるわあ♥」

「うおおおおおー!」

イツセーは雄叫びを上げ、更に腰の動きを速め、汗が飛び散るほどに激しい交わりを敢行するとエルシャは

おそろく初めて味合う屈服というものに興奮しきっていた。

「あああん♥イツセーくん♥好き♥大好き♥愛しているわあ♥貴方のためなら何でも捧げるわあ♥」

「ぐ、うう……!」

(俺はエルシャさんとのエッチで心から満足したいんだ! そのためにはエルシャさんを満足させてやらなきゃいけない!)

イツセーはそう意気込むと、エルシャの尻をがっちりとホールドす



るとそのままバックで攻め立てる。

ぱんっ！ ぱちゅんぱちん！ ぐじゅっ！ ずぶっ！ エルシャの尻を打つ音が響き渡る。

「す、凄いな。あんなに激しく誰かを犯すイツセーは初めてだ……」  
「あんな凄い勢いで腰を振るなんて

初めて私とエッチした時とは比べ物にもならないですう……」  
イツセーのあまりの豹変ぶりに賢者モードにあるアーシアとゼノヴィアは呆然としていた。

一方、当のエルシャはといえば、ぐっしより濡れそぼった秘裂に肉棒を突き刺され、子宮口を突かれる度に全身が震え、口から唾液が溢れ出ていた。

「あああん♥イク♥またイツちやう♥イツセー君、お願い！ 今度は一緒にイキましよう♥ね？ ね？」

エルシャは甘い声でおねだりしながら、自ら尻を振り、イツセーを誘惑する。

「勿論ですよエルシャさん！ 俺と一緒にイキましよう！ そらっ！ 行くぞ！」

トドメを刺すべく、イツセーは渾身の一撃を叩き込んだ。

「あああああああああー!!!」

エルシャは絶叫し、再び盛大に潮吹きする。

どびゅー！ びゅーー！ イツセーもまた大量の精液をエルシャの膣内に放出する。

「あはああああああん……♥」

「ふう……」

イツセーはようやく射精を終えると、エルシャの上に覆い被さる様に倒れ込み、荒い息を吐きながら脱力した。そして白音、黒歌もまた……。

「あうっ♥はうっ♥うっ♥

ジュボジュボ♥尻尾ジュボジュボきもちいっ♥白音の尻尾♥マンコも♥アナルも気持ちいいにゃ♥」

「黒歌姉様、黒歌姉様♥黒歌姉様のおっぱいミルク美味しいですう

♥ 黒歌姉様のおっぱいとオマンコ、尻尾バイブ最高れふう♥ イグ♥  
イツちやいますにゃん♥♥♥」

「あっはああああああ♥♥♥♥」

黒歌と白音は同時に果てた。

「はあはあ、気持ちよかったにゃあ♥」

「はあはあ、私も気持ち良かったですにゃん♥」

どうやら色んな意味で姉妹と親友の仲は深まった様である。だが、イツセーはまだ治まりがつかずエルシャを陥落しようと更に動き出そうとするが……。

「大変よイツセー！ 貴方の親友の安里が大変な事になっているの！」

バーン！ とイツセーの部屋のドアがリアスによって開け放たれた。

「な……な、なななな!!」

リアスの顔色が赤くなったり青くなったり忙しく変わる。どうやらこの惨状を見て動揺しているらしい。

『まあ、叱るなり痴話喧嘩するなりは後にしろ。一体何があった』

この惨状にあってドライグの存在は大きな救いだったとき。

※サタナエルの逆襲！ 前編（安里×偽リアス&偽朱乃&偽ルイーナ）

イツセーside

どうも！兵藤一誠です！今日は安里と一緒にアザゼル先生の隠れ家に招待されています！

何でも人工神器の実験だとか……。

「おい、おっさん。下らねー用事だったら俺ア帰るぞ？」

安里は相変わらず口が悪いな……。本当は優しくいい奴なのに勿体ないなあ。

「まあ、そう言うな。実はだな、お前ら異世界転移つてのに興味はあるか？」

アザゼル先生は手で遮るポーズをしながら俺達に言った。

「何だよそれ？意味が分からねえ」

「異世界転移つてあれですか？ゲームとかラノベにあるような……」

まさかトラックに轢かれるとでも言うのだろうか？

でもリアスさんやドライブから色々力を貰ったり鍛えたりしてるからトラックに轢かれても多分大丈夫だと思うけど……。なんて考えている俺の発想なんてアザゼル先生は理解しきっていた様で『違う違う』と言いたげに手を左右に振った。

「そうだ。ホレ、ヤスがエルフの里から二天龍の力の宿る秘石つてのを持ってきただろ？あれはグレートレッドやオーフィスの様に異次元に干渉する力があるんだ。んで俺はその力を解析し、人工的に再現する事に成功した。で、その実験に協力して欲しいんだよ」

「ふくん、そんな事が本当に出来るのかよ？何か胡散臭いなあ……。

おっさんが自分で試せよ」

「バカ言え、俺に何かあつたら世界の損失だぞ？」

世界の損失つて自分で言っちゃうんですねアザゼル先生……。確かにそれはそうだけど……。

うくん……。これはどうすれば良いんだろう？異世界の女の子に興

味がないと言えば真つ赤な嘘になるし何より他の世界の赤龍帝や白龍皇と出逢うことができれば……。

と、その時転移してきた奴がいた。つて！ヴァーリじゃないか！黒歌が話をつけてくれたのか？

「久し振りだな、九頭竜。それに兵藤一誠。鍛えているか？」

「ああ、まあそれなりにな。」

「つーかお前こそどうしてここにいるんだよ？」

「俺はここに来れば強い者と戦えるとシユタークから聞いたただけだ。それで君達が相手をしてくれるのか？」

「バカ！するか！」

「それは残念だな。君達を倒すための秘策を試したい所だったんだが……」

いかにも残念そうにヴァーリは言った。

……おいおい、マジかよ。勘弁してくれ。この前戦ったばかりじゃねえか。俺達三人は同時に溜息をつく。

しかしアザゼル先生は渡りに船と言わんばかりな表情を浮かべていた。ものスゴく嫌な予感！

「よし、なら丁度いい。ヴァーリ！お前、実験に付き合え。異世界にいけば強い奴等と戦えるぜ？しかも戦い放題だ！」

「ほう、それは楽しそうだな」

「いや、ちょっと待ってくれよ！異世界ってどんな場所かも分からないのに行く訳にはいかないでしょう!？」

「心配すんなって。そこは俺が上手くやるさ」

「おっさんがそう言って上手く行った試しがねえだろう！」

乗り気なヴァーリをよそに俺と安里は反対するものの

アザゼル先生は親指を立てながら言った。不安しかない……。ええい！だが虎穴に入らずんば虎子を得ずだ！行くしかねえ!!

「分かった、分かりましたよ！行ってやりますよ!!」

そんな訳で俺達3人はアザゼル先生の試作機である

マシーンの中に入る。なんだかSFアニメの培養槽みたいで大分不安だ。だが異世界ハーレムのためにはこの位のリスクなどは！

「で、行き先は？」

アザゼル先生が要望を聞いてきた！俺の答えは一つだ！

「ハーレム系でお願いします！」

「俺は強い者がいる世界だな」

「……なるべくトラブルのない世界で頼む」

三者三様の答えにアザゼル先生は苦笑いしながらレバーを倒した。そして光に包まれた俺達はいざ進めや異世界ハーレム！目指すはおっぱい！茹でたら服を剥いてぐにぐにと潰せ！テンション上がるなあ!!

シユルルル……。

って何か変な音がするんですけど？

「ん……いかなコリヤ」

アザゼル先生えええ!! 顎をポリポリと搔いて計器から目を逸らすなあ!!

いかなコリヤ!? そんな恐ろしい日本語があるかあつ!!! って俺の

首筋に真っ黒い蛇が!?

「いや、違うな。この気配はドラゴンではなく

堕天使の……」

「出せコラおっさん！機械止めろやア!!

開ける！駒王町市警だ！」

バンバンバンバン!

ヴァーリには思い当たる所があるようだが安里がマシーンを叩きながら抵抗していた!!

やめろ安里！壊したら後が怖いぞ！あと町なのか市なのかどつちだ!?

「まあいいか、ヨシ！」

まさかの完全スルー!? アザゼル先生!! 何を見てヨシって言ったんですかアアアア!!

「安心しろ、兵藤。骨は拾ってやるからな！」

「諦めろ。この展開はもう覆らん。男なら腹を決めろ」

「ちくしょう！俺は女の子とイチャイチャしてハーレムを作る筈だっ

「たんだあー!!」

「ルイーナああ!!」

「こうして俺は異世界転移を果たす  
事になったのだが……。」

↓

安里 side

はっ!?ここはどこだ!?周りを見渡すと、まるで世紀末みてーに荒れ  
果てた土地だ!クソツ……なんてこった!ここは地球だったのか  
…… (猿の惑星)

じゃねーよ!

俺はハーレムだの強い奴等とのガチバトルだのには興味はないん  
だ!早く帰らせてくれ!

俺はルイーナと普通の温かい家庭を築ければそれでいいんだ!

ガシャアアアン!!

って、平凡な夢に浸らせてくれもしねえのかよ!

どこかでガラスや壁が割れる音がする……。

明らかに揉め事の雰囲気だが……君子危うきに近寄らずだ。聞か  
なかった事にしよう!

見ざる、言わざる、聞かざる!

「誰か助けてー!」

「ヒヤツハハハ!人間狩りだー!」

「お前もヤルダバオト様の奴隷にしてやるぜえ!」

「くそお!こんな所で死んでたまるかあ!」

俺は何も見なかった。

俺はルイーナの元に帰るんだ!

……。

「くそお……ここまでか」

「どうして、どうして私達がこんな目に……」

「お前達がケガれた人間だからだよ!」

「恨むんならお前らが虫けらの様な弱さで生まれた自分を恨みな!!」  
……。

ああ！畜生！そうだよなあ！

ルイーナは由緒正しい貴族の令嬢で俺は君子どころか由緒正しい下々の生まれ！だから……！

「黙れやコラア!!」

バゴオオオン！

駆けつけるや偉っそんな方を思いきり殴りつけた！

お前らだってガルガルやろうといい女、どっちが好きだって聞かれたら聞くまでもなからうよ！

「な、なんだお前は！」

何だ君はってか!?変なお兄さんだよ！

見れば奴は片手をマシンガンの様な義手にしている！気づくが早いか奴は照準を合わせて射撃を放つ！

「死ね！」

バババツ！ドカアアアン！

「フハハハ……！正義の味方を気取ったつもり

だろうが我ら獅子の子たるアイオーンに逆らう者は

皆死ぬのだ……！」

あ、そうかそうか。お前らはそういうタイプか……。

自分のボスがケツを拭いてくれるから何をやっても許されるってか？そういう奴等は好きだぜ？

ぶっ飛ばしても良心はちつとも傷まねえからよ！

「!?き、貴様も『武態』の使い手か!？」

アイオーンとやらが途端に青ざめた。俺が右手を手甲に変化させて奴の放った全ての弾丸をキャッチしていたからだ。

「何が獅子だ！犬ならキャインと鳴きやがれ！」

俺は手を槍の形状に変化させるとそのまま奴の胸を刺し貫く！だが、肉を貫いた感覚もないし血が噴き出る事もない……。どういう事だ？

「ぎやいいいん……!？」

当のアイオーンとやらは悲鳴をあげると煙を吹き出してそのまま消滅してしまう。ひゅつと槍の穂先を払い、元の腕に戻すと、人間狩

りとやらにあつた女の子二人が震えながら抱き合っている。  
いかん……。

俺は口が悪いし悪人面だ。怖がられても仕方ないな。  
でも、少し傷つく。

「大丈夫か？」

俺が話しかけると2人はビクツとして怯えていた。  
大分傷つく。

「すまん、驚かせたか。俺の名は九頭竜安里。とりあえずお前達を助けに来たんだが……」

と、なるべく優しく語りかけたその時、背後から強力なオーラを感じた！

「そこまでだ！ヤルダバオトの手先め！」

見れば無然とした表情で赤いコートを纏う黒い短髪の

女の子が俺を指差している。何だか勘違いされているらしいが、俺がやった訳じゃないからな。

「何言つてんだ、俺じゃねえよ」

「嘘をつけ！その邪悪極まりない殺気！オレは誤魔化されないぞ！」

「だから違うつて……。アンタ名前は？」

すると女の子は得意げに名乗った。

「オレの名は兵藤一誠！皆を守る赤龍帝だ!!」

「……は？」

俺は呆気にとられて間抜けヅラを晒してしまった。

だってよ……一誠は俺の親友でおっぱいが大好きでハーレム王を目指す男の筈だぞ！それがどうして女になってんだ!!?つかなんてそんな格好してんだよ!!しかし俺の疑問なんて向こうは知る由もなく、勝手に盛り上がっている。

「行くぞドライグ！」

『よくってよマコー！』

明らかにドライグまで声が違う!?マジかよ!?この異世界じゃドライグまで女なのかあ!?

『Welsh Dragon Balance Breaker! (ウエル



シュ・ドラゴン・バランス・ブレイカー』

女性だけあつて赤龍帝の鎧のフォルムが綺麗で色っぽいな。

……つて異世界とはいえイツセー相手だぞ!?

なんでドキドキするんだ俺!?

「行くぞッ!!」

わざわざ戦う前に掛け声をせんでも

いいだろうが、なんて俺の余裕は

一瞬で打ち砕かれた!

「ドライバー錐揉みキーツク!!」

つてアレはドラグ・ソボールに並ぶ人気マンガの無免ドライバーの必殺技じゃねえか!!

しかも、飛び上がった後に後ろの翼からジェットを噴き出し破壊力とスピードを爆発的に高めている!

俺は咄嗟に大盾で防ごうとするが……!?

『Penetrate (ペネトレイト)』

女ドライバーの声が聞こえたと思ったら俺の片腕はまるで大砲の前のコピー紙さながらに粉々に打ち抜かれてしまった!

「ぐお……あああああ!」

痛覚遮断を使わないとおそらくショック死していただろう。何なんだこいつ!こんな奴が俺たちの世界に居たら魔王や神々すら瞬殺されるんじゃないのか!?

「まだまだあー!」

更に追撃してくる赤龍帝を俺は必死に逃げ回る。

こんなチート野郎……。もといチートお嬢の相手は

ヴァーリの筈だぞ!!

「くそお!逃げてばかりじゃないか!それでも男か!」

「待て!俺の!俺の話を聞け!2分だけでもいい!」

ダメだ、話を通じねえ!こうなったら仕方がない!俺は素早く右手を触手にて復元させると砲塔に変化させ、骨を銃弾にして発射させる。

「何のお!」

しかし女赤龍帝は軽々と銃弾を蹴り飛ばした！マジかよ！  
「なっ!？」

コイツ……! 一体どんな動体視力と脚力してやがる!?! というか戦闘経験がハンパじゃねえ! と、たじろぐ間にも赤龍帝が距離を詰めてきやがった!

ま、マズイ!!

「喰らええい!」

「く……!」

『Boost!』『Boost!』『Boost!』

『Boost!』『Boost!』

「必殺! ブーストキック正中線5段蹴!」

ズガガガガッ!!

俺の鼻、喉、心臓、腹、股間への5段蹴りが放たれる! 女赤龍帝の猛攻になすすべなく俺は廃墟の瓦礫へと吹っ飛ばされた。

「げほっ……」

俺は咳込みながらも立ち上がる。め、めちやくちや強え……!

こうなったら切り札を使うしか

ねえのか……!?! しかしヘカトンケイルの爺さんに呼びかけても反応がねえ……!?!

そんな中女赤龍帝の背後から声が出た。

見ればさつき助けた百合カップルが制止すべく行動している。

「もう止めて、イツセー!」

彼女は私達を助けてくれたのよ!」

「そうだゼイツセー! その人悪い人じゃないよ!」

「何を言っているんだ! こいつはどう見ても悪人だ!」

「だから違うって言ってるの!」

ちよつとアンタも黙ってないで何か言いなさいよ!」

ええく……!?!

何で俺が怒られるんだよお……!?!

泣きたい……!?!

『マコ、どうやら彼はヤルダバオトの手先ではないみたいよ』

おお……こつちの世界のドライブは話せるみたいだ……！何とか誤解がとけそうだ……！

「俺は九頭竜安里だ。アンタの仲間の言う通りだ。」

俺はアンタらの敵じゃねえよ。俺はただの人間だ」

いや、ただの人間は腕を武器にしねーよ！ってツツコミは無しな！！すると女赤龍帝は俺をジロジロと見てくる。

「嘘をつくな！お前からは邪悪なオーラを感じるぞ！」

いや、邪悪で！まあ、色々あつて邪神の眷属みたいな

モンだけどき、ヒドくない？

「お前、ホントにイツセーかよ！俺のダチのイツセーはそんな風に人をあれこれと疑ったりしねーぞ！！」

「なにい!？」

売り言葉に買い言葉かもしれんが俺はつい言ってしまった。だつてよお、イツセーはもつと素直で優しい奴だ。少なくとも初対面の他人の事をここまで疑った事なんて一度も無かつたぞ!!気まずい雰囲気漂う中で女ドライブが口を開く。

『……非礼は私から詫びるわ。マコは色々あつてね。」

人を素直に信じる事ができないのよ……』

マジか……！確かにこの世紀末みてーな

廃墟だらけの世界じゃ色々苦労したんだろうな……。

「悪い……言い過ぎた……さっきの言葉は全面的に

俺が悪い！」

俺は即座に謝った。そうだよ、こんな世界で生きていたら誰だつて警戒心が強くなって当然だろうが！俺が軽率だった……！

『ほら、ご覧なさいマコ。ヤルダバオトの手先が

自ら非を認めて謝るものですか』

「いや、いいんだ……！オレの方こそ早とちりしてゴメン!!」

女赤龍帝もペコリと頭を下げてきた。なんかこいつも良い奴っぽいな……。ホツとしたぜ。

「とにかく、誤解がとけて何よりだ。つーか俺は

アザゼルのおっさんにこの世界へと飛ばされてきてさ。何が何やらさっぱりなんだ」

俺がそう言うと、女赤龍帝はハツとしてから言った。

「やっぱり墮天使の仕業か！アイツらはアンタ達の世界でも好き勝手やりやがって！」

え？どういう事なんだ？アザゼルのおっさんは異世界でもロクなことをしていないのか？

『まあ……こんな所で立ち話をしても仕方がないわ。』

まずは私達のアジトに行きましょう」

戸惑う俺に女赤龍帝のドライグが提案してきた。ま、それもそうだな。

「わかった、案内してくれ」

「ああ、着いてきてくれ」

それから俺達は廃ビルの中に入り、地下へと降りていった。そしてたどり着いたのが……

ー

イツセイ side

どうも！兵藤一誠です！俺はアザゼル先生の実験で

異世界に飛ばされたばかりです！だからこの世界のことにはさっぱりです！

故に！水浴びをしている美少女御三方を陰から警護するのは紳士たる俺の仕事！やましきなど一切ありません！ありませんとも！

「ねえ、ヴァーちゃんてばお胸が大きくなつたんじゃない？」

そんな中でホーステールの活発そうな女の子がお婆ちゃんどころか銀髪ゴツデス美女のおっぱいを揉みながらそんな事を言ってます。いかん、鼻血が出そうだ！

「そうか？」

「お尻の方もまた大きくなってきたようですなムフフ」

次にぱつっつんロングヘア眼鏡の優し気なお姉さんがゴツデス美少女のお尻を触っています。なんとという眼福！俺は今、天国に来ている！感じたぞ！位置が来る！

「別段、カロリーを過剰に摂取しているワケではないのだが……。やはり義手、義足の影響だろうか」

なんとというドレットノート級なおっぱいとお尻でしようか!! 特にお尻の美しき……。おっぱい星人を自負する俺ですら宗旨変えしてしまいたいぞだ!

「……」

あれ? あの中に一人無口な子が居るな。

見た目は中学生みたいだけど透き通る様な白い肌と髪、そして神秘的なロリロリボディだ。

うーん10年後に期待だな!

なんて失礼な事を考えていた矢先!

「……木の死角から我々の裸体を凝視しているその貴方。人の身体をあれこれ寸評するのはやめてもらえますか?」

……はい、すみません。

バレてしまったなら潔く出ていこう。

「ごめんなさい。覗き見するつもりは無かったです」

俺は三人の美女の前に堂々と姿を現した。

「キヤー痴漢よ!」

「変態! 変態!! 変態!!!」

ホーステールの子と眼鏡の子から罵倒されるが

仕方がない! とにかく弁明をしないと……!

「ちよ、ちよつと待ってくれ! 俺は怪しい者じゃないんだ! ただの通りすぎりで!」

必死に弁解するが二人は聞く耳を持たずに罵ってくる。

「ふざけんなあ! このスケベ野郎!!」

「死ね! このドヘンタイ!!」

酷い言われようだ。でもこの反応は当然だよな。

「お願いします! 信じて下さい! 俺はただの人間なんです!」

俺は涙目になりながらも訴えた。と、その時。

『ど、どういう事だ! 白いの!』

いつの間にそんなふざけた姿になった!!』

ドライグが明らかに動揺していた。

「えっ?どうしたんだよドライグ?」

突然どうしたというんだろう。

「白いのとは何ですか……。」

無教養な野良ドラゴン風情が……」

『何い……?』

ロリロリな子は身体を隠すことなく

堂々たる態度だ!と言うかドライグを挑発しないで!俺の立場が危うくなるから!

『俺が野良ドラゴンとは随分ナメた態度を取るじゃないか?おい、相棒。この小娘には一度キツめの灸を据えてやる必要があるな』

ドライグも怒り心頭だ。

「ええ、良いでしょう。あなたは私の敵の様です。私は寛容ですが敵に対して容赦はしません。その身に私の恐ろしさを刻み込んであげましょう!」

ロリっ子から凄まじい光のオーラが溢れ出した。

ま、ま、マズイ!非常にマズイ!このままでは他の子が巻き込まれる……!と、その時!

ばるるるん♥むちいつ♥

うおおお!ゴッデス美女のグラマーおっぱいの感触が俺の顔面にダイレクトアタック!!

「待て。無闇に争うのは良くない」

ゴッデス美女様、超クール!ああ……なんという幸せ!おっぱい最高!おっぱい最高!もうチカン呼ばわりでもいいや。な、野良ドラゴン?

『誰が野良ドラゴンだ!全く相棒のおっぱいバカぶりには呆れるぜ……』

「ふむ。我が最愛のヴァーリが言うならば引き下がりましたよう」

おっと!あのロリっ子があっさり引いてくれたぞ!ラッキー!!

「ただし、もし次にヴァーリの柔肌を汚すような事があればその時はこの私が許しません」

「あつ、はい……」

なんか釘を刺されたけどとりあえず一件落着かな。

「すまなかつたな」

「いやいや、悪いのは誤解を招いた俺だよヴァーリちゃん」

……ん？ヴァーリ……？アルビオン？ヴァーリ？

も、もしかして！

「何だ、少し痛いぞ」

思わずぎゅむう、とおっぱいを鷲掴みにしてしまつたがヴァーリちゃん……いやこの世界の白龍皇が痛がつているなら夢じゃないな！ヨシ！

「何がヨシだこの変態ドグサレ野郎があああ!!!」

「死ね！死んで償え！」

バキツ！ドゴツ！グシャツ!!俺はホーステールの女の子と知的眼鏡の女の子からボコられまくつた。

つ……強い！レイナーレやフリードより遥かに……!!

「よせ、松田、元浜。たかが胸のことで争うことも

あるまい」

ま、松田……!?!元浜……!?!

う、ウソだ……!それぞれ89以上は確定の戦闘力を

持つこの美少女二人がああ悪友の松田と元浜だなんて……!俺は異世界とはいえ元はああ二人の裸に興奮していたのかあ……!?

だ、ダメだ……ショックで意識が……。薄れゆく俺の視界に映るのは俺に暴力を振るう二人を止める

ヴァーリちゃんの姿であつた……。

↓

安里side

「と、言う訳なんだ……」

縄でグルグル巻にされたイツセーが何ともバツの悪そうな顔をしていた。俺は恥ずかしいよ。

「異世界まで来て覗きつて幾らリアスさん達がいなくてお前は何をやってんだ？」

「そうだそうさ。こんなスケベが異世界のオレだなんて……。泣けてくるぜ」

こっちの世界のイツセー……

色々ややくいからマコって呼ぶがマコはガクリと肩を落として落ち込んでいた。まあ気持ちは分かんなくてもない。

「あ、そう言えばよ。こっちの世界にもちゃんどリアスさん達はいるんだよね？」

イツセーやヴァーリが

女になっているという事は美男子になっていたりするのか？あるいはガチムチか？

するとマコだけではなく、松田や元浜まで表情を曇らせた。ま、まさか何かあったのか!?

「実は……」

「お姉様達はいないわ……」

「えっ……」

松田の言葉にイツセーの顔が凍り付いた。

「そ、そんなバカな！リアスさんや朱乃さんがいないだど！」

無理もないだろう。イツセーにとつてあの二人は初恋の相手であり憧れの女性なのだから。

マコは悔しそうに嗚咽しながら続けた。

「ごめんな……オレが、オレがもつと強ければ……!!」

「辛いだろうが、話を聞かせてくれねえかな？多分ヤルダバオトとかいうヤローが関係してるんだろ？だったらオレ達も協力するぜ」

マコと松田と元浜の話によると、この世界はこの俺、九頭竜安里がないこととイツセー達の性別が逆転していること以外は概ね俺達のいた世界との違いはなかったらしい。だがロキを倒した辺りで突然とんでもない事が起こった。何でも京都で英雄派とかいう禍の団の一派は七符とヤルダバオトとやらに滅ぼされ聖槍と聖柩を奪われたという。それからもう無茶苦茶だ。七符が世界のあちこちか



ら神器やら神滅具、聖剣やらを回収してヤルダバオトは『竜喰者』とやらと融合し遂には純粹な神になった。但し純粹な悪だがな……！冥界、天界は封鎖され『システム』や冥界の門は消滅。聖櫃の力で『形あるもの』に矮小化されたオーフィスはヤルダバオトに飲み込まれその圧倒的な力の前にアザゼルのおっさん（この世界じゃお姉さんらしいが）、リアスさん達オカルト研究部、そしてヴァーリチームの面子も成す術なく殺害されてしまったという……。

「残っているのはヤルダバオトが人間狩りの趣味の

ために生かしておいている幾らかのコロニーとヤルダバオトに降伏して甘い汁を吸おうとする連中だけ……」

「ふざけやがって！オレは絶対に許さねえ!!」

元浜の悲嘆に縄を引き千切ってイツセーは立ち上がった！その目からは大粒の涙が溢れていた。

「この世界の俺やヴァーリ、皆を助けないと……！」

イツセーは拳を強く握りしめると外に出た！

そして赤龍帝の鎧を纏うと

天に向かって咆える様に叫んだ！

「やい！ヤルダバオト！テメエの好き勝手にはさせねーぞ！俺がこの手てぶっ飛ばしてやる!!」

いるなら出てこいこのクソ野郎!!」

イツセーが叫ぶと何処からともなく、巨大な影が現れた。影はぐにやぐにやと不定形に動くやがて人の形を取り始めた。現れたのは……おっさん!?

いや違うな……。

おっさんはヘラヘラ、フニヤフニヤの昼行灯みたいな雰囲気だがあんなドブみてーに腐った目はしていない。だとしたら……。

「ヤルダバオト……！」

「ハハハハハ!! 久し振りだな兵藤一誠!!」

余りにも矮小過ぎてアリかと勘違いしてしまったぞー!

余裕ぶった大物風に振る舞っているが何言ってやがるんだ？俺達

とテメーは初対面だろうが。それにイツセーのことをフルネームと呼ぶのも気になるな……。

……まあいい。

とりあえずはこいつをぶちのめして聞き出すとしよう。イツセーもハナからそのつもりみてーだものな！

「行くぜ相棒!!」

「イツセー！オレも付き合おうぜー」

イツセーとマコ、本来はあり得ないが二人の赤龍帝が

並び立つ姿は圧巻の一言だ！幾らヤルダバオトでも……！しかしヤルダバオトは余裕綽々だ。

それどころか……。

「フツ……ハハハハハ!!」

この日を待っていたぞオ!!」

「な、なんだ!？」

ヤルダバオトは空間の歪みから

光り輝く槍を取り出した……！あの槍は……まさか噂に聞く聖槍か？

「そうだア！貴様ら雑魚が必死に守ろうとしていた神器『聖槍』の力だ!!」

ヤルダバオトが手にした瞬間、聖なるオーラが周囲に満ちた。確か

マコもイツセーも転生悪魔だ。

聖なるオーラは逆に毒となりうる。

だが……！

『Transfer!』

イツセーとマコがそれぞれに『譲渡』の能力を発動させると二天龍のオーラを増幅させることで二人ともダメージを無効化させた！

「す、すごい……！マコもヴァーリちゃんもあのフィールドの力で散々苦しめられたのに……！」

「コレなら……！」

松田と元浜は手を取り合って喜んでいた。だが喜ぶのはまだ早い。なんて言ってもヤルダバオトはまだ聖槍を持っただけだからな！

「フン、くだらん真似を。」

まあいい、まずはこの世界のお前からだ兵藤一誠!!喰らえ、『絶霧』!」

アレはイナンナが使っていたインチキクセー霧の力か!けどな……!

「俺達を舐めるんじゃない!」

俺とイツセーは同時に叫び、ケラウノスの雷光と空間ごと全てをぶち割る拳のコンビネーションで絶霧を消し飛ばした!その霧の弱点はもう知ってたよ!

「ほう、この世界でそこまでの力を出せるのか。」

ならば今度はこれだ……!

ヤルダバオトが取り出したのは見覚えのある剣だった。あれは……!デユランダル!?

すると俺の態度を見るなりサタナエルは愉快そうに笑い出した。

「ハハハハハ!覚えがあるだろう!?!この世界のゼノヴィアを殺して私が徴収したものだ!

だがコイツも愚かでひ弱な転生悪魔風情に使われるより、私に使われた方が本望というもの!!」

そう言うとヤルダバオトはデユランダルを振りかぶって斬りかかってきた!だがそんな素人くせえ大振りに当たるかどアホ!!俺は軽くかわすとカウンターの一撃を見舞った。

バギツ!

確かな手応えを拳から感じると共にヤルダバオトの手からデユランダルは離れ、宙を舞った。

「ハッ!あんまりにもダツセー主に愛想尽かしたみてーだぜ!デユランダルさんはよオ!!」

「フツ……馬鹿めが!」

次の瞬間、俺は横面を何かに殴り飛ばされると壁に叩きつけられた!

「ぐっ……!?!」

一体何が……!? 血で濡れた頬を拭おうとした

その刹那……!

ズバツ……ブシャアアア!!

背中の壁から突然刃が突き出し、そのまま壁を突き抜けて俺の首まで迫ってきた! 俺は咄嗟に首を捻ったが肩口が切り裂かれる!

「残念だったな。今のデュランダルは言わば『斬響の聖剣』。お前の首を切り飛ばすまで永遠に貴様を追尾する!」

な、何だと!? そんなインチキ効果がデュランダルにあるなんてゼノヴィアからは聞いていないぞ!!

しかもその前にぶっ飛ばされた攻撃の正体が掴めねえ!!

「無事か安里! アーシア! 直ぐに回復を……!」

アーシアを呼ぶがこの世界にはアーシアはもういない。イツセーはすぐにハツとするとヤルダバオトは心底ムカつく笑みを浮かべていた。

「ハハハハハ。そんなに『聖女の微笑』の回復が欲しいとは。

なら貸してやろうかア?」

ヤルダバオトの右手が緑色に光ると自分の顎の傷を癒やしていく。

その意味を俺達はすぐ理解した!

「テメエ……この世界のアーシアまで!!」

「ああ、そうだ。

自分の神器と引き換えに孤児を見逃してくれと言うからな。なかなか笑えたぞ! 俺の手でグールになったアイツが見逃してやった孤児を食い殺す姿は……! ハハハハハ! アハハハハハ! ヒヤハハハハハ!」

ヤルダバオトはいつの間にも、おっさんの顔から元の面に戻っていやがった……! あの顔は……

紛れもなくサタナエルじゃねえか!

コイツ、どこまでも腐りきってやがる!!!

「ふざけんなあああ!!」

イツセーが怒り狂い、黄金の剣を構えてヤルダバオトに突進するが聖槍のオーラの前に弾き返される!

「まあそう焦るなよ兵藤一誠？」

貴様はメインディッシュだからなア……！先ずはこの忌々しい小僧から殺してやる。九頭竜安里……！貴様がそもそも元凶だからなア！

貴様さえ、貴様さえいなければ！」

コイツ、俺の事を知っているのか？それに俺の事を元凶と言った。まるで俺がこの世界にやって来たことが悪いみたいな言い方だ。いや、今はそれよりも……。

「ごちやぶごちや煩えんだこの三下ア!!」

俺は敢えてデュランダルを

片腕で受けた！

だがデュランダルは俺の腕を

切り裂く事はできない！

何故なら……。

「忌まわしき狩人よ!!」

『GYA——H A H A H A H A!!』

笑い声ともアラムともつかない正気を喪いそうな奇怪音が響く。忽ち俺の右腕はデュランダルが切り裂くよりも早く肥大化し、盲目かつ大顎を持つ蛇へと

異形化した！

『ふひ、ふひひひひ。そんなにこわいか、おそろしいか。しぬよりもわすれさられることが。』

じゃあやめてあげない。ふひひひひひひ』

相変わらず不気味で忌々しい感じだが、今は猫の手……いや蛇の手も借りたい！いや、蛇に手は無いな。兎にも角にも俺はデュランダルを掴むとそのまま力任せに引き千切った!!

「なっ!？」

ヤルダバオトは驚きの声を上げながら間合いを取ろうとするが寧ろ好都合だ！

「割れるオ!!」

俺の叫びと共に『忌まわしき狩人』の口が開き、デュランダルを丸

呑みにした！

『ふひ、ふひひひひ。おちろ、ちをはえ。どうけのへび』

「……ッ！馬鹿めが！たかが神滅具一つで私の力が覆せるものか!!」

ヤルダバオトは聖槍を構えるとデュランダルを吸収した事で強化された『忌まわしき狩人』の顎を支え棒の要領で殴りつけてきた！

「ハッ！確かにアンタの力は強大だ！だけどな……！」

ブチン！と俺は一旦『忌まわしき狩人』を腕から切り飛ばすと隻腕のまま再び構えた。

そして……！

「オレも忘れてもらっちゃ困るぜ安里！」

マコは赤龍帝の鎧を纏い、

例の飛び蹴りをヤルダバオトに喰らわせる！

『Penetrate』

向こうの世界のドライグの声と共にサタナエルは勢いよく吹き飛んだ。ハッ、ざまあねえぜ！

しかも俺達の攻撃はこれだけじゃねえ！

『Transfer』

何せ譲渡の力を受けたイツセーがヤルダバオトに稲妻の様な軌道で突撃しているんだからな！

「お前にも味あわせてやる！二天龍の恐ろしさをな!!」

「ぐあああああ!!」

カッ！ズゴオオオオオン!!イツセーの一撃は見事に決まり、辺りの廃墟ごとヤルダバオトは凄まじい爆発と衝撃によって砕かれた！ダブル赤龍帝の必殺技が2つも決まったんだ……！幾らなんだって！

だが……！

粉塵が突如突風により吹き飛ばされると其処には殆どダメージを受けていないヤルダバオトがニヤニヤしながら立っていた！

しかもボロボロのイツセーの胸倉を掴んで地面にバンバンと叩きつけていく。

「ああ!?誰が!?誰にイ!!恐ろしさを味あわせてやるだとオ!!?調子に乗ってんじやねえクソガキがあ!!聖槍の「反射」と聖枢の「有限化」を

使つてなア!! オーフイスを喰つて取り込んだ「虚無」に押し込めりやあ!! どんな攻撃も俺には通用しねえんだよボゲツ!!」「うわあああああ!!」

イツセーは絶叫すると更に地面に叩きつけられる!

「テメエ! イツセーをよくも!!」

「煩え! 死ね!! 誰であろうと俺に逆らうな! 死ねっ!!」

音もなく、一瞬という間すらなく、ヤルダバオトは憎悪を剥き出しにして俺の胸元に聖槍を投槍の要領で突き刺す! 避ける暇もない……だと!?

「ぐあっ……!」

「安里!! 安里オ!!」

「ヒヤハハハハハ! 無様だなあ! テメエら塵が光に逆らう事事態が間違いなんだ! 認識しろ! カスが!

死ねよ! いいから死ねって!」

ヤルダバオトの言う通り、俺はもう既に限界だった。

全身が鉛の様に重く、視界はぼやけている。ここまでなのか……? 奴の高笑いが響く中で俺は意識を失ってしまった。

↓

イツセー side

あ、あの野郎! よくも安里を!

許さねえ! 絶対にぶっ飛ばしてやる!

「この世界では俺は無敵だア! 誰も俺を殺せない! この世界の神は俺だアアアア!!」

『人々を苦しめて何が神だ!』

向こうのドライグが叫ぶが、俺も同感だ! 神様つてのは皆に幸せを配る存在だろうが! こんな風に人を弄ぶなんて間違っている! するとサタナエルの向こうから白い鎧を纏ったヴァーリがやってきた。

加勢に来てくれたんだな!

だが、ヤルダバオト、もといサタナエルは不敵な笑みを浮かべていた。

「だが、俺に構っていてもいいのか? 貴様らの来た方向からアジトの

位置は割り出した。今、私の部下や人間達が襲撃に行っているぞ？」  
「な、何だつて!？」

ヤルダバオトは更に禍々しく笑う。

「そしてお前達は生き残りから怨まれるだろう。『どうして私達を助けてくれなかったの?』『お前達さえここにやって来なければこんな事にならなかつたのに!』となあ? ヒヤハハハハハ!! 楽しい! 楽しいなあ!! 人間の本性を暴いてやるのが楽しくて仕方がない! アハハ! ヒヤーツハツハツハツ!!」

「そ、そんな事は!ない!」

マコちゃんは反論しようとするがどこか声が震えている。多分思い当たる節があるんだろうか。

「マコ、議論は無駄だ。ここは男達を置いてアジトの救援に向かうべきだ。それが彼等の為にもなる」

ヴァーリちゃん、クールだなあ。だけど、確かにその通りかもしれない。

「ここは俺たちに任せてくれ!」

「……どこまでも見下げ果てた男だヤルダバオト。そもそも貴様が生きていたのは俺の責任だ。俺がケリをつける」

おお、ヴァーリもやる気だ! やろうぜ!

『いや待て兵藤一誠、ヴァーリ・ルシファー。今のお前達の実力ではまだ無理だ』

するとアルビオンからまさかのダメ出しだ! な、何で!? 気を取られた一瞬、奴の両腕から大量の赤い眼が剥き出しになり眼光を発した! これはまさか、ギャー助の時間停止と同じ能力か? 次の瞬間には奴と安里の姿は霧の様に消えてしまっていた……!!

連れ去られたのか!?

「クツソオオオオオ!!」

「落ち着け、兵藤一誠。安里は恐らく無事だ」

悔しさを露にする俺にヴァーリはそう言った。

「どういう意味だよ! 安里は連れて行かれちゃったんだぜ!？」

「あのクズの性格を鑑みれば、人質として生かす筈だ。或は洗脳か、改



造して手駒にするか……」

「安里がそんな目にあうっていうのか!？」

「その位はすると言っているんだ。だが安心しろ。俺もお前と同じ気持ちだ。必ず救い出す。」

だから今はアジトの人間達を助ける事に専念しよう。その為に俺も力を貸す」

「……そうだな。ありがとう。頼むよ、ヴァーリ」

そして俺とヴァーリは急いで仲間達の元へと向かった! すまん安里! 絶対助けに行くからな!!

l s i d e o u t 1

「……う、うう、くつ、此処は一体……。俺は確か、奴と戦っていたんじゃない?？」

どうやら俺は生きているらしい。しかし全身が痛くて動けねえ。痛覚を遮断しようにも力を封じられているのかうまくいかない。

左右を見るといかにも牢獄、といった感じの部屋に俺は閉じ込められてしまったようだ。しつかり身体も

鎖に繋がれている。

(クソ、情けねえ……。イツセーやマコ、ヴァーリは無事なのか!?)

俺がそう思っていると部屋の扉が開かれ、そこから入ってきたのはヤルダバオトの野郎だけではなかった。

「うふふ……」

まるでサキュバスの様な格好をしたリアスさんと朱乃さんが部屋の中に入ってきた。その目には光がなく、まるで操り人形のように見えた。

いや、というか……。

「どういう事だ teme e! この世界のリアスさんや朱乃さんは殺されたんじゃないやあねーのか!!」

俺は怒りと共にヤルダバオトに罵声を浴びせたが奴はニヤつきながら、粘ついた様な手で二人の爆乳を揉みしだく。二人は嫌がるどころか、ウツトリとした表情を浮かべている。明らかに別人だ。姿形は同じだが中身が違うのがまるわかりだ。

イツセーが見たらどう思うか、考えるだけでも胸糞悪い……！

「テメエ、二人を元に戻せ！」

「元に戻す？何を言っている。コイツらは俺が聖杯の力で作った木偶人形だ。俺の言う事を忠実に聞く最高の道具さ。お前も俺に従えば幾らでも用意してやるぞ？」

ヤルダバオトはニヤつきながら誘ってきた。俺の答えは無論決まっている。

「ふざけんな！誰がテメーなんかに従うか！冗談はねじ曲がった根性だけにしろ！」

「……ツチ、口の減らないガキだ。」

まあいい。神つてのは慈悲深くなけりやあなあ。何も苦痛だけが人間の心を砕くやり方じゃねえんだぜ？」

ヤルダバオトは指を鳴らすとリアスさんと朱乃さんの眼が怪しく輝き、俺を見据える。

(か、体の自由が効かない……?)

「な、何しやがった!？」

しかし、偽リアス、偽朱乃さんは俺の言葉など意に介さず、ゆつくりと近付いてくる。

「うふふ、大丈夫よ。貴方は何も心配しないで。」

私が守ってあげるから」

「ええ、そうですね。私達が永遠に可愛がってあげますから」

するり、とズボンを脱がされ、パンツ一枚にされる。そしてそのままパンツ越しに、偽物のリアス達は俺のアレに触れてきた。

「な、何のつもりだ!？」

「うふふ、まずはコレから解放して差し上げようと思ひまして」

そう言つて偽朱乃は俺のモノを口に含み、激しく舌を動かしてきた。

「ぐっ、やめろ！離せっ！」

「あら、元気になってきましたわ。」

うふふ、やっぱり若い男の子はいいですね」

「あん、朱乃ばかりズルいわ。」

今度は私の番よ。ほら、見て。こんなに大きくなって、もう我慢できないのよね？楽しんで上げるから、じつとしてて……」

すると次は本物そっくりなおっぱいで挟み込んでパイズリをし始めた。その柔らかさ、張りは俺が今まで経験した中で間違いなく屈指のものだった。

「くっ、は、離れるー！やめるんだ！頼む、やめろ……!!」

我ながら情けないと思う。紛い物とはいえ親友の恋人に奉仕されて興奮している自分がいるのだ。

「うふふ、イツセー君より太くて熱くて遅しくて……♥」

「うふふ、それに凄く濃い匂いがしますわ。虜になってしまっそう……♪」

俺のモノを二人は爆乳で挟み込みながらぴよこん、と飛び出た赤黒い亀頭をチロチロと舐めて刺激してくる。その度に俺の身体に快感が走る。カリ首や裏筋を重点的に責められ、射精欲が高まっていく。

「美味しい♥安里君のおちん○ん、イツセー君よりも大きいけど、とっても素敵よお……」

「あはあっ♥私のおっぱいの中で勃起チンポがビクビクしてるう……♥」

俺のモノは更に膨張し、今にも爆発しそうだ。だが、俺は必死に耐えた。偽物とはいえ、イツセーの恋人達にそんな真似は出来ないからだ。しかし、そんな俺の思いとは裏腹に奴らは容赦なく攻めてくる。

遂に耐えきれず、俺は盛大に果ててしまった。

ビュルルルッ！ドピユッドピューー!!大量の精液が二人の顔や胸にぶちまけられる。

「あはあ……♥イツセー君のより濃厚なのがいっぱい……♥」

「うふふ……♥とても熱い……。でもまだ足りない……。もっと欲しい……」

そう言いながら二人とも、自分の胸についた白濁色の液体を指につけてまるで潤滑油替わりにするかのように秘所へと塗り込んでいった。

「んああ……♥イイ……。これ気持ち良い……。♥安里クンのチンポ汁がオマンコに染み渡っていくみたい……。♥」

「ああ、素敵い……♥私のオマンコも安里のザーメンで蕩けてしましますの……♥」

二人は腰をくねらせながら快樂に身を委ねている。その表情はまさに淫乱そのものだ。俺は目の前の光景を呆然と眺める事しか出来なかった。

「クククツ、とんでもないメスブタもあつたものだと思わねえか安里？」

ヤルダバオトはドブよりも汚らしい笑みを浮かべていった。この世界の二人を殺めただけじゃなく、偽物まで作つてここまで貶めるとは、どこまで腐つてるんだ！

「テメエだけは絶対に許さねえ！」

俺は鎖を引きちぎらんばかりに力を込める。だが、奴は余裕の表情を浮かべている。

「バカが。俺は神でテメエは生贄の羊だ。お前ごときに何が出来る？」

「羊だろうが何だろうが……！」

テメエみたいなゲス野郎には負けない!!」

「ヒヤハハハハ！いいねエ安里！」

此方のイツセーと合わせてお前、生贄の才能があるぜ！」

俺は全身に力を入れるが、全くと言っていいほど力が入らず、二人が鎖の様に絡みついてくる。その様をサタナエルは嘲笑する中二人の偽者が俺を囲む。

「うふふ、何をそんなに怒っているの安里？私達は貴方の事が大好きなのに……」

「そうですね。貴女はいつもそう。イツセー君に嫉妬してばかりで、少しは彼に優しくしてあげればいいのに」

「偽者どもが知つた様な事を!!」

俺が叫ぶと偽物のリアスさんと朱乃さんは俺のペニスをそれぞれ尻たぶに挟んで擦り付けてきた。

「んっ……♥安里のコレ、とつても硬くて大きくて……♥もう我慢できな……♥」

「ええ、私達でたっぷり可愛がってあげますわ……♡」

そう言うと二人は自らの割れ目に俺のペニスをあてがい始めた。その刺激は絶妙なもので、思わず声が出そうになる。

「ぐっ、くそっ！離せ！」

「うふふ、ダメよ。大人しくしてなさい……」

「そうですよ。私達のオマンコは安里のモノなんですから、好き勝手に使っていていいんですよ……」

そう言つて二人は俺に寄り掛かり、対面座位の姿勢になつた。そしてそのままゆっくりと挿入してきた。

「ぐあああっ！」

「あはあ……♡入ってきましたわあ……♡安里君の勃起オチンポが私の中に……♡」

偽朱乃の膣内は凄まじく熱くヌルついており、まるで意思を持っているかのように俺のモノを締め上げてくる。しかも、奥に進めば進む程、狭くなっているので余計にキツく感じてしまう。拒めない。抗えない。

(こんな……こんな事があつてたまるか！)

俺は歯を食いしばりながら必死に耐えようとするが、ぬぼっ、と中断されたかと思うと、押し倒された俺に偽リアスが背中と尻を向けて覆い被さってきた。

「ふふ、見てえ♡貴方のチンポが私の中に入っていくところお……♡ああ、スゴいわあ……♡」

「虜になりそう……♡♡♡」

偽リアスは自分の性器を見せつけるようにしながらゆっくり腰を落としていく。やがて亀頭が入口に触れたところで一気に根元まで飲み込まれた。

ズプウツ!!

「くあああっ!?!」

「ああんっ♡入ったあ……♡んん……っ♡どう？安里。初めて私の中に入った感想はあ……?」

「……」

「あら、黙っちゃった。恥ずかしいのかしら？でも大丈夫。すぐに何も考えられなくなるくらい気持ち良くさせてあげるから……♡」

恐らくイツセーにしか見せないであろうメスの顔でそう嘯くと、彼女は激しく動き出した。パンツ、パアンツ、と肉同士がぶつかり合う音が響く。その肉の振動で俺の心にびしり、と罅が入るのが分かる。

「ああんっ！気持ち良い……♡もつと突いて！安里のオチンポで滅茶苦茶にしてえ！」

「ああ……！やめろ！やめて……くれ……！」

「うふふ、可愛い声で鳴くわね……。でもまだ足りない……。もつと……もつと頂戴!!」

そう言うとは今度は後ろ向きに跨がり、自ら上下に動いてきた。

「んああっ！イク……！イイ！安里のオチンポ気持ち良すぎるう!!」

「ああ……！やめてくれ……！頼む……！お願いだから……！」

俺の懇願も虚しく偽リアスの動きが激しくなり、ラストスパートをかける。紛い物だが親友の彼女を穢し、裏切っているという事実には涙を流していた。気持ちいいのに気持ち悪い。消えたい。死んでしまいたい。そんな思いに支配される。

「あはあ……♡安里のオチンポ、私のオマンコの中でビクビクしてる……♡」

「ああ、出る！出ちゃう！安里のザーメン、私の子宮に出してえ！」

「くっ！ぐうっ！あああっ！」

ドピユツ！ビュルルツ！

「ひゃうんっ！熱い……！いっぱい出てるう……♡」

俺が射精すると偽リアスは恍惚の表情を浮かべながら絶頂し、そして満足げにペニスを引き抜くと次は偽朱乃が上に乗ってきた。

「ふふ、安里君♡貴方が囲っているレイナーレさんやミツテルト……それにカテレアさんの様に私も可愛がってくださいいな♪」

「な、何で……？」

偽朱乃がこの世界の住人ではない俺の状況を理解できているんだ……？

これもサタナエルの力なのか？

頭が回らず、朦朧とする中で更に俺はとんでもない光景を目の当たりにして絶句する事になる。

俺の射精により偽リアスの腹はみるみる内に膨らみ、妊婦の様な姿になっていったのだ。

「あはあ……♥安里の大好きなあの子……♥今、産んであげるわね♥」  
そう言うのと偽リアスは立ったままいきむ様に下腹部に力を込める。するとボコツ、という音と共に大量の愛液と共に何か飛び出していた。その何かは見る見る姿を替え、最も今の俺にとって罪深い存在となった。

「はふう……♥」

偽リアスは満足気な吐息を漏らす中、生まれでた存在、ルイーナと酷似した何かは俺に笑みを見せた。

それはいつもの照れた笑みや、はにかみではない。娼婦の様な笑みだ。

「や、やめろ……！止めてくれ！」

俺は必死に叫ぶ。耐えられない。

犯したい。犯したくない。奪いたい。傷つけたくない。様々な感情が入り乱れ、俺の心を掻き乱していく。

「安里……♥」

偽朱乃が譲るかの様に離れるや全裸の偽ルイーナは俺を押し倒し、そのまま馬乗りになる。そしてそのまま挿入してきた。

ブチツ……

ズプツ、グチュ、ヌチャア……♥

破瓜を掻き消す様な卑猥な水音が鳴り響き、俺の脳を侵してくる。まるで俺の心まで支配しようとしているかの様だった。

「あらあら、処女喪失して直ぐに感じるなんてとんだ淫売ですね。ルイーナさんは」

「仕方ないわ。安里君は自分に媚びて隷属する雌豚が何より好きなんですもの」

偽者達いや、リアスさん達の代理が卑しく浅ましい俺の本性を語

り、蔑んでいる。違う。俺はこんな事を望んでいない。こんな筈じゃなかった。こんな事は許されない。そう思っているのに、俺の欲望が沸き上がってくる。

「あっ……ああ♥安里のおチンポ♥ルイーナの中でピクピクしてますう♥」

違う。違う。違う違う違う。ルイーナはこんな……こんな淫乱でビッチじゃない。そう思っているけど、俺のモノは正直に反応し、更なる快楽を求めて激しく動いてしまう。

「安里い……♥もつとお……もつと突いてえ♥雌豚ルイーナの淫乱マスコを犯してください……♥」

「ぐっ……！あああっ！」

「ああ……♥安里のおチンポ、凄……♥」

俺はただひたすらに腰を打ち付け、彼女の膣内を犯した。偽者とはいえ、恋人と同じ顔の少女の体を貪る背徳感が俺をより興奮させていく。

「んああっ！イイツー！もつと！もつと突いてえ♥出して♥いっぱいルイーナの中に出してえ♥孕ませてえ♥ああんっ！イクウーっ♥♥」

膣内へと射精してしまった瞬間、偽者のルイーナも絶頂を迎えたのかビクン、と身体を大きく仰け反らせた後、俺の上に倒れ込んだ。

「ああ……ああ……」

俺は虚脱状態になりながらも、まだ足りないとはかりにペニスだけは未だ硬さを保っていた。そして俺の腹に寝そべるルイーナの腹部がボコツ、と膨らんでいく。

「あっ♥ふうっ♥出来ちゃった♥安里の子供、妊娠しちゃいましたあ♥」

嬉しそうに呟く偽者は偽リアスの様に軽くいきむとぶしゅうっ！と勢い良く羊水が溢れ出し、何かが吐瀉物の様に偽物の股から出てきた。すぐにそれも別の姿、幼馴染のイリナによく似た何かへと姿を変えらる。

「はふう……♥」

偽ルイーナは疲れ果てた様に俺の胸に頭を預ける。その表情には



幸せそうな笑みが浮かんでいた。

一方の俺は愕然となりながら目の前で起きた現実を受け入れられずにいた。

「何で……こんな……どうして……」

「ふふ、どうかしら？ イッセー君の女達とそっくりな偽者が貴方と子作りして新たな偽物を産む気分は？」

偽朱乃が勝ち誇る様に俺を見下ろしながら語りかけてくる。俺は何も言えず、ただ黙り込むしかなかった。

「じゃあ次は私を孕ませて下さいましね……♪アーシアちゃんかゼノヴィアちゃんか……ひよつとしたらイライザちゃんかしら？ 貴方が本当はイッセーから誰を奪いたがっているのか……じっくり観察させて貰いますわ♪」

「その次は私ね♪ホントは私、イッセーと同じ位貴方の事が好きだったの……♡」

俺の心は壊れかけていた。もう何もかもが分からない。こんな事に……？ そう自問しながら、俺は偽朱乃が俺のペニスによがり狂い孕んでいく光景をぼんやりと眺めていた……。

幕間・異聞 魔法少女レヴィアたんHNEXT（安里？ゼノヴィア 疑似NTR注意）

「久しぶりねー、あつくん☆」

まさか四魔王の一人であるセラフオール様から呼び出しがかかるとは思わなかった。まるでお忍びの芸能人さながらに変装しているけど、バレてないと思っっているんだろうか？

しかも隣にはカテレアまでいる。

まるでマネージャーみたいな雰囲気醸し出している。

「どもッス……」

挨拶もそこそこに俺は対面に座ると

アイスコーヒーを注文する。

「それで……話って何ですか？」

早速本題を切り出すと、二人は真剣な表情で俺を見つめる。黙っていれば美人を地で行くセラフオール様と黙っていても美人なカテレアに見つめられると緊張してしまっぜ……。

が、そんな緊張感もぶっ飛ぶとんでもない爆弾発言が飛び込んできた！

「魔法少女レヴィアたんHの続編を出そうと思うの☆」

………はっ!! いや待ってくれ！ 意味がわかんねえよ!!あのエロビデオの続編？

いやいやいや！貴方四魔王の一人ですよね!! そんな方が何を言っているんですかああああ!!

「実はこの前発売した『魔法少女レヴィアたんH』なんだけど、大ヒットを記録したのよね☆続編の需要があると思うのよ！」

いやいや需要があっても作っちゃダメだろおおお!! 貴方嫁入り前でしょお!?!しかもカテレアは敏腕秘書モードでノートパソコンを操作してデータを見せてくるしさあ！

「これをご覧ください。」

おっぱいドラゴンシリーズに対し

冷笑的、ないし批判的な層に対してバカ売れです。あちらが獲得できていない層を取り込む事に成功していますし、続編希望を望む声が97%を越えています」

いやいやいや！何冷静に分析してんだよ！それ絶対ヤバイって!! 下手すりゃ業界征服できるぞ！ っていうかさつきからセラフオルー様が熱っぽい瞳で俺の事見つめているんだけどさ！何コレ？どうすればいいわけ!?

「あつくんは……私ともうエッチするのはイヤなの？淋しいわ……」

ま、まさかの☆無しモードのガチトーンだ?! まずい！セラフオルー様は心と股を開いた相手には一気に距離感を詰めてくるタイプなのか!? そう言えばソーナ会長もそんな感じの事を話していた……。『私は貴方の義妹になるのはゴメンです』

……って言ってたもんな。匙が言うようになかなかキツイ性格をしている。

しかしソーナさん。こんなにも泣きそうな顔をされたら流石に断りにくいじゃんかよ……。

そして喫茶店だというのに今回の企画に関する説明が行われる。因みに防音の魔術によって俺たちの話が外に漏れる事はないそうだ。

「今回は悪堕ちと言えば褐色化、という事をコンセプトとして行おうかと考えております」

いや、堂々と言うけどカテレアは元々褐色美女じゃねえか！しかし褐色化となるとミッテルトカレイナーレが映えそうだな……。って乗り気になるなよ俺！

「尚堕天使サイドは色々不都合があるので駄目です」

俺の心を読んだかのようにカテレアはバツサリ切り捨てる様に言い放つ。確かにアザゼルのおっさんに聞かれたら『俺も混ぜろ』とかムチャクチャ言ってくるに決まってる！ じゃあどうするか……。

眷属に聞いてみる？

「俺と一緒にエロビデオ出ない?」

ただの変態どころか基地外全開じゃねえか!!

ジャンヌなら「死ね!」の一言で

俺は灰燼待ったなし!

ニトクリスさんなら「不敬者!」の一言でミイラ化待ったなし!

うーん……詰んだなこれは。

「お待ちください安里様。まだ見込みのある方がいます」

キラリ、と眼鏡を光らせるカテレアに俺は戦慄する。まさかこの女……俺以外に目星をつけていた奴がいるというのか!?!まさかナイアか?!

だがアイツの事だからルイーナに誕生日プレゼントですよく♪とか抜かして編集したDVDを送りかねない! いかん! ルイーナの脳が破壊されてしまう!

「いえ、彼女ではありません。」

私が推薦するのは……」

俺はその名を聞いて愕然とするしかなかった。いやそれは幾らなんでも……まさか……な。

1

そして撮影当日。

「ゼノヴィアだ。今日は宜しく頼む」

ホントに現れたあ!?!現れたのは現在人間では最強クラスの聖剣使いゼノヴィアだ。って……いやいやいや! お前兵藤と子供を作るとか何とかムチャクチャ言ってただろうが!

俺は思わずマナー違反だが人差し指を向けながらゼノヴィアに真意を尋ねる。

「お前!子供作るんじゃないのかよ!兵藤はどうするんだよ!」

「うむ。それはそうだが兵藤だけではなく信頼できるお前と子供を作る予行演習をするのも悪くはないと思う。イツセーが嫉妬に狂い私に目を向けてくれるならそれもそれでありだと思わないか?」

などと言いやがった。

「思わねーよ!というかイツセーに悪いと思えよ! お前聖剣使いだろ! 貞淑さはどうした貞淑さは!」

「全ては強くなるためだ！」

「お前それ言えば何でも許されると思ってたない!？」

キリツとした顔で言うんじゃねえよ！ 監督兼主演のセラフオルー様はどう思います!？」

「グッドよグッド☆

女の子の自分磨きはいつだって大事なのだから！それもダイヤの原石なら磨き甲斐があるというもの！」

ダメだ……この四魔王既にノリノリだ……そんなこんなで俺たちは撮影に入る事になったのだ……。

↓

「じゃあ早速始めましょうか」

カテレアが早速悪の女幹部じみたドスケベスーツを着た状態と並びたちながら全裸で拘束されたゼノヴィアを見下す様な冷徹な目線で語りかける。

「全く……。随分と手間をかけさせてくれましたね？ ゼノヴィー。この様な姿になる事が貴方の罪を贖う事になるのです」

ゼノヴィアからゼノヴィーと名乗りを換えてはいるがほぼ本名じゃないかコレ？ 大丈夫なのか？

「くっ……！こんな辱めを受けたからといって私が屈服するとも思ったのか!？」

ゼノヴィアは相変わらず凛々しい態度でなかなかの演技力だ。

それにしても……身体付きが前より成長した感じはする……。

そんなゼノヴィアの美貌と魅惑的な身体に視線を奪われた俺のペニスはムクムクと勃起していく。

そんな俺の節操なしなペニスにゼノヴィアは僅かに青ざめ、身を引いた。すると彼女の乳首やオマ○コがはつきりと見える様になる。そして俺のペニスをカテレアがすつと撫でまわすとゼノヴィアがビクリと反応した。

「ふふふ……♥相変わらず遅しくて極悪なチンポですこと♥流石冥界一の孕ませオーガですわ♥」

カテレアいやらしく舌を出して見せつける様に舌なめずりをして  
いる。

そう、今の俺は一時的にオーガの肉体に変化した状態になってい  
る。理屈は良く解らんがニグラさんの権能によるものだ。

しかし、ニグラさんに借りを作つたとすると後のお返しが怖すぎ  
る。

「こ、これが安里の……いや、オーガのちん……男性器……」

ゼノヴィアはごくりと唾を飲み込んでいる。まさかコレを見て興  
奮しているのか？

「……そ、それを入れるのか？」

「当たり前でしょう？何のために貴方をこの様な目に遭わせたと思っ  
ているのです？ 貴方が滅ぼした悪魔達の埋め合わせは貴方のオマ  
○コと子宮で支払ってもらいます。

さあ、早く股を開きなさい」

カテレアがまるで女王の様な口調で指示するとそのままゼノヴィ  
アと絡み合う。「んっ、んちゅっ♥ちゅうっ……♥」

最初は拒否しようとするゼノヴィアだがカテレアのキスにより抵  
抗力を奪われ唾液を交換している。同時にカテレアの指がゼノヴィ  
アの身体を這い回り、その胸の膨らみと秘所を揉みしだく。

「ふああ……♥やめろお……♥」

こんな♥こんなあ……♥」

嫌々と首を振りながらカテレアの責めに感じ、甘い声を漏らすゼノ  
ヴィア。だがその声音には確実に快楽の色が混ざっている。彼女の  
身体は既にスイッチが入っていた。

「あらあら、こんなに乳首を勃起させてますわよ？いやらしいですわ  
ね」

そう言つてカテレアはゼノヴィアの可愛らしい乳首とクリトリス  
を指で摘む。

「あおおお~~~~っ!?♥♥♥」

凜々しい聖剣使いの顔がたちまちオホ顔に変わる。

「ひっ、あ♥あうううん♥んふううううううっ♥♥」

ゼノヴィアは唇を噛み締め、必死に声を押し殺している。しかし、その表情は完全に蕩けており瞳の中にはハートマークすら浮かんでいるかのようだ。

「あらあら？ 聖剣使いともあろう者が随分と情けない顔を晒しますかね？ こちらのほうは大洪水の様ですよ？」

カテレアのしなやかかつ肉感的な指がゼノヴィアの女陰を、アナルを撫で回す。その度に彼女は身体を跳ねさせ喘ぎ声を上げるが、それでも必死に耐えようとする。

「くうっ♡こ、これしきの事です……私は屈しはしなひい♡♡♡」

歯を食い縛って抵抗の意思を示そうとはするも口の端から涎が溢れ、目は泳ぎきって、更に腰を自らカクカク、と上下させている有様。どう見ても陥落寸前である。

「くくっ、聖剣使いともあろう者が情けないですわよねえ？ ほら、さっさとイキなさい」

カテレアはそういうとゼノヴィアのオマンコに指を挿入して激しく動かす。それと同時に乳首を口に含み音を立てて吸い上げる。更にもう片方の手でクリトリスをつまみ上げた。

その瞬間、ゼノヴィアの顔が快樂に染まり瞳が上を向く。そして次の瞬間、彼女の股間からは大量の潮が吹き出した。

「あひいひいんっ♡♡イグウウウツ♡♡♡♡♡」

ゼノヴィアは盛大に絶頂を迎え、身体を仰け反らせる。彼女の秘裂からは透明な液体が大量に噴出していた。どうやら絶頂と同時に失禁してしまったらしい。その聖剣使いどころか聖職者としてもはしたない失態を見て、安里は思わずゼノヴィアの両足を開いて己の肩に乗せる。「っ!? やめろ！ 何をするつもりだ！」

ゼノヴィアは顔を真っ赤にさせて叫ぶが、それが逆効果である事を知らない。安里の剛直は既に限界まで膨張しており、何時暴発しても可笑しくない状態だった。それを目の当たりにしてゼノヴィアの顔は赤らんでいき明らかに期待しているのは一目瞭然であった。

「や、やめろ……無理だ……そんなの入らない……♡♡♡」

恐怖の表情を浮かべるゼノヴィアであるが彼女の膣穴は物欲しそ

うにパクパクと開閉を繰り返している。

灼けつく様な背徳感に安里は背筋が震える。

そして安里はゼノヴィアの膣口に優しく亀頭を差し込むと互いに感電したかの様な快感が互いを襲った。

「あー♥ああんー♥」

ゼノヴィアは切なく悶える。彼女の膣穴は既に愛液で溢れており、安里の巨根を受け入れる準備は完全に整っていた。そして安里もまたゼノヴィアの膣内の感触に感動と愉悦を感じていた。膣肉はまるで別の生き物の様に蠢いて安里のペニスを優しく包み込んでくるのだ。

「くうっ♥んあっ♥ああっ!♥」

やがて亀頭が子宮口まで到達すると、ゼノヴィアは一際大きな声を上げる。どうやら軽く絶頂を迎えてしまったらしい。目を剥き口をパクつかせて身体を震わせ、その快樂の深さを表しているかの様であった。

「くっ、締め付けて……っ!」安里は歯を食い縛りながら腰を動かそうとするが余りにも強烈な膣圧に射精感を堪えるので精一杯だ。

その時、ゼノヴィアは切なげな表情を浮かべて懇願してきた。

「もっと♥激しくしてくれえ♥」

「……くそっ!!」

安里はゼノヴィアの言葉を皮切りに一気にピストン運動を開始した。

「おごおっ!?!♥ あっ!強いっ♥安里(オーガ)のチンポつよいい♥♥」

凄まじい勢いでピストンされるゼノヴィアの口から獣の様な声上がる。しかしそれでもその表情は悦びに染まっていた。安里の剛直が膣内を擦る度、子宮口を突き上げられる度に意識が飛ぶ程の快感が押し寄せてくるのだ。安里もまた想像を絶する快感に襲われていた。

「くおっ、なんだこれ……っ?! ふーっ!ふーっ!!」

安里は歯を食い縛って必死に耐えるが、このままでは直ぐに果てて



しまうだろう。

しかしそれでも安里のピストンは止まらない。それどころかどんどん早くなつていく始末だ。

「いいいいっ♥♥あぎっ♥しぬっ、いき死ぬうっ♥♥♥」

ゼノヴィアは涙を流しながら叫ぶがその表情は完全に蕩けきつたものだ。もう何も見えていない様子でただひたすら快樂を受け入れ続けるだけの状態である。

「くうっ！もう限界だっ!!」

安里は限界を訴えると一度腰の動きを止める。そして今度は一気に腰を打ち付けるとそのまま臍奥に精液を流し込んだ。

「あひっ♥出てりゅ……っ！熱いのきてりゅうううっ♥♥」

ゼノヴィアは絶叫を上げながら身体を弓なりに反らして盛大に果てる事で、その快感を表現した。そんなゼノヴィアの様子を撮影するセラフオルーは時計をチラリと見る。

「あつくん。ちよつと出すのが速すぎかも☆今のままだと時間が余っちゃうからもう少し頑張つてね☆」

「え……ええっ!？」

安里は嬉しいやら悲しいやら。

しかし、まだこの撮影は終わらないらしい。安里たちは快樂墮ちの只中にあるゼノヴィアにのしかかる。

「あっ♥ひぎいいい♥♥♥」

イツたばかりなのにまた安里のチンポが入ってきてりゅう♥♥♥

たしゆけてイツせええ♥♥♥」

セリフは編集でカットされるのを知ったためかゼノヴィアは安里のペニスを受け入れながらこの場にはいないイツセーに助けを求めて涙を流す。

だがその涙は安里から齎される快樂によつて籬が外れてしまった彼女の表情に、どういった感情を宿していたのかは……安里には解らなかつた。

「助けを求めている割には自ら腰をカクカクと振っていますか?」

カテレアはゼノヴィアを蔑む様に言うと、ゼノヴィアは顔を真っ赤

に染めて反論する。

「ち、違うー！これは私が望んでいるわけじゃあ……♡♡♡♡ひいつ♡♡」

そう言いながらも腰を振り続ける辺り、本当に説得力が無い。短めであるのに髪は振り乱れ、汗と愛液を撒き散らし、涙と涎を流し続けている。表情は蕩けきって

口元は緩み切っている。最早、快楽の虜になる寸前だ。

「ゼノヴィア、そろそろイキそうだ……っ！」

安里の言葉を受けてゼノヴィアは更に興奮を高めていく。

「んおおおおっ！きてえっ♡おくにいつぱいだしてえええっ♡♡」  
「くうっ!!」

再び大量の精液を子宮内に流し込まれた事により、絶叫を挙げながら身体を仰け反らせるゼノヴィア。

それと同時に安里とゼノヴィアは同時に果て、ゼノヴィアの中に入ったままの肉棒がビクビクと脈打ちながら射精を続ける。

「んほおおおっ♡♡あちゆいい♡♡いつぱい出されてるううう♡」

あまりの量の多さに結合部から大量の精子が溢れ出し、床を汚していく。

ゼノヴィアはその感触さえも気持ちいいのか、身体を震わせて悦んでいた。

「ああっ♡ふああっ♡濃いい……♡♡♡」

ゼノヴィアは恍惚とした笑みを浮かべると、そのまま力尽きて地に崩れ落ちてしまう。完全に屈服したのを示すかの様に腹を安里のペニスでゼノヴィアは気を失った様で、満足そうな笑みを浮かべながら、その股間からは収まりきらなかった白濁液がポタポタと垂らしていた。

「はい☆カット♪」

いい絵が撮れたわね☆あつくん☆」

「ええ。これならば冥界のマニアも納得してくださる事でしょう」

カテレアとセラフオルーは動画を確認しながら二人で頷いた。

そしてゼノヴィアはと言うと、思考回路は性感電流で焼き切れ、完全に快楽に溺れきった表情を浮かべながら身体を投げ出している。

そんな彼女に人の姿に戻った安里は介抱する様に彼女の身体を拭いてやった。

「ゼノヴィア、大丈夫か？」

安里の言葉に反応し、ゼノヴィアはビクンつと身体を震わせると、トロンとした瞳で安里を見つめ返す。

「ああ……すごく良かったよ……安里♥」

(だ、大丈夫なんだろうな？ホントに？)

元の友人同士に戻れるのか一抹の不安を抱える安里であったがともかく一旦休憩を取る事になり、シユターク手製のマジカルコテージにて身体を休める事になった。

「ふう、やっと一息つけるな……」

無論、そんな訳はなかった。

ゼノヴィアは自ら安里の背中に胸を押しつけながら甘え、そのまま安里の耳を舐める。更に聖剣使いの巧みさと評すべきか安里のペニスに手を伸ばし、慣れた手つきでしごき上げてきた。イツセー達により磨かれたゼノヴィアのテクニクは、安里の理性を壊しかねない程強力だった。

「お、おいつ!? ゼノヴィア!」

撮影してるワケじゃないのにこんなマネはよせっ!?

「フッフ、上の口はそう言っても下の方は正直だな♥」

「立場が逆だっ……!?!」

ゼノヴィアは安里のペニスを指先で弄びながら妖しく微笑む。彼女の一挙手一投足が、非常に扇情的で、それが更に安里の情欲を煽っていた。

「流石の安里でもこうなつては収まりがつかないだろう？ 折角の

『休憩』なんだ……気持ちいい事、いっぱいしましょ♥安里♥」

「お、おまつ!? そんなセラフォル様みたいに甘えた声はやめろ!?!」

口調と声色まで変えてゼノヴィアは安里に性奉仕を行う。しゆるり、と位置を換えてゼノヴィアは安里の復活したペニスを自身の双丘

で挟み込んだ。

「うおっ?! こ、これは……」

安里はあまりの快感に腰が砕けそうになった。その極上の柔らかさと弾力を兼ね備えた巨乳によるパイズリは、まさにこの世の極楽であった。ゼノヴィアはそのまま上下に動いて安里のモノを刺激してくる。柔らかく温かいおっぱいが左右から同時に襲い掛かってくるというシチュエーションに射精感が込み上げてくるのは当然だった。だがそこでゼノヴィアは更に動きと胸を激しくする。

「ほら、もうイキそうなんだろう？ 遠慮せずにイッていいぞ♥」

そしてとどめとばかりにゼノヴィアは乳房を左右から押し付けながら龟头を口に含み、舌先で尿道を刺激する様にながら強く吸い上げる。舌先が雁首をなぞり、裏筋を刺激してくるのだから堪らない。「くうっ！出るっ!!」

ゼノヴィアの容赦の無い責めの前に安里はどうとう限界を迎えた。大量の精子がゼノヴィアの口内に射精されると同時に、彼女はそれを嬉しそうに受け止めると喉を鳴らして飲み干していく。その表情はとても淫靡で見ているだけで興奮してしまう程であった。

「ゼノヴィア……いー」

安里も籠が外れつつあった様だ。

ゼノヴィアをお姫様抱っこする様にして持ち上げると、そのままベッドへと連れていく。ゼノヴィアもそれに逆らう事もなく安里の頬にキスをしながら、艶めかしい声で囁いた。

「今は私がしてやるからな……♥」

ゆっくり休憩してくれ……♥♥♥」

ゼノヴィアはそう言うと、安里に仰向けに寝転ぶ様、促してくる。指図に従った安里のペニスは天を突くかの如く勃起しており今か今かと、ゼノヴィアの慰撫を待っているかの様に張り詰めていた。

ずっぷううう♥♥♥

まるでゼノヴィアの膺が安里のペニスを型取りするかの様に、包み込んでいき落し蓋宛らに安里の腹筋にゼノヴィアの尻が当たり龟头には子宮口 まで届く。

「んふっ♡♡全部入ったあ……♡♡♡」

ゼノヴィアは軽く痙攣しながらも、どこか恍惚とした表情を浮かべて安里に跨りながら腰を動かし始めた。M字騎乗位と言う所だろうか。大きく腰を浮かせてから一気に落とすという動作を何度も何度も繰り返す。その度にゼノヴィアの尻と安里の腹部が激しくぶつかり合い、パンパンと音を立てていた。

「あぁっ♡♡♡はぁっ♡♡♡あっ♡♡♡」

ゼノヴィアは快楽に溺れきった表情を浮かべて、一心不乱に腰を打ち付けてくる。その動きに合わせて安里のペニスも彼女の膣奥まで入り込み、子宮口にキスをしていた。

「んんっ♡♡♡すごいいいっ♡♡♡気持ちいいっ!!あっ!」

ゼノヴィアは歓喜の涙を流しながら夢中で腰を振っていた。最早、彼女は完全に理性を失っている様で、その口から漏れる言葉からも知性を感じられない。

「あっ♡♡♡はげしっ、もうむりいいっ♡♡♡イクウウウツ!!イツちやいましゅううっ!!」

ゼノヴィアは大きく身体を仰げ反らせると、そのまま絶頂を迎えたらしく身体をビクビク痙攣させていた。しかしそれでも彼女は動きを止める事はなく、今度は上下左右に腰を動かし始める。その動きによつて安里の肉棒が膣壁と擦れ、更なる快感を生み出していた。

「はあ……っ♡♡♡あっ、あああ♡ 安里……あざとっ♡♡♡」

「ああ、ゼノヴィアの膣内は最高だよ。ずっと犯していたくなる」

「やあああっ♡♡♡そんな事言われたらまたイツちやううううっつ!!♡♡」

もう何度目の絶頂だろうか。ゼノヴィアは数える事すら億劫になる程の回数を安里によつてイカされ続け、その度に彼女は幸せそうな表情を浮かべていた。安里もまたそんなゼノヴィアの姿に興奮し、ピストン運動を激しくしていく。

「あぁっ!♡♡♡ダメええええっ!!もう許してええええっ♡♡♡」

「ああ、じゃあ俺のモノになるって言えば許してやるよ、ゼノヴィア」  
ゼノヴィアははっ、と目を見開くと首を左右に振る。

「だ、ダメだっ♥ 私にはイツセーが……♥♥♥ひゃあん♥ 弱い所にチンポ♥チンポが当たるう♥♥♥」

いつの間にやら寝バツクの態勢で安里に伸し掛かれ、ペニスで弱点を責められたゼノヴィアは目を白黒させながら悶えている。もはやまともな思考回路すら残っていない状態であるのは明白であった。「これは飽くまで演技。ビデオ撮影のための演技だから……。愛しているって言ってみてくれよ」

安里の言葉にゼノヴィアは一瞬、躊躇う様な素振りを見せたが、すぐに口を開いた。

「あ、愛している……安里♥♥♥」  
「……ありがとうな、ゼノヴィア」

その言葉を聞いた瞬間、安里の心に熱いものが流れ込んできた気がした。そして次の瞬間には彼女の唇を奪っていた。舌を絡ませ合い、唾液を交換する濃厚なディープキスを交わしながら、二人は互いに求め合う様にして腰を打ちつけあう。その度に二人の結合部からは愛液が溢れ出し、シートに大きな染みを作っていた。

(ああ、もう我慢できない)  
そう思った瞬間、安里の中で何かが弾けたような気がした。それと同時に安里は腰を深く打ちつけ、子宮口をこじ開ける様にして龟头を押し込んでいくと大量の精子を流し込む。その感覚にゼノヴィアもまた絶頂を迎えたのか、身体を大きく仰け反らせながら絶叫を上げた。

「イックウウウツ!!♥イグううっ!これっ♥これ好きっ♥好きな相手と愛し合いながら中出しされるのしゅきいいっ♥♥♥あざと♥あざと♥♥♥イツセーとおなじくらいだいすきい♥♥♥」  
「最高だよゼノヴィア……」

結局休憩時間ギリギリまで二人は肉欲のままに互いを貪り続ける事になるのであった……。

果たして後半はどうなる事やら……

おまけ

ビデオを見たイツセーの反応

「あつぐううう ♡♡♡  
すごいつ ♡♡♡ イッセーのチンポ ♡♡♡ いつもよりおおき  
いっ ♡♡♡」

ゼノヴィアは俺に背後から胸を鷲掴みにされながら、腰を上下して肉棒を味わい続ける。顔はセラフオルーさんが撮った『魔法少女レヴィアたんH』に出演してオーガに犯されていた時の表情だった。  
(クソ……俺以外とこんなことまでしていたなんて……)

「あんっ ♡♡♡ ああんっ ♡♡♡ イッセー、もつと強く揉んでくれええっ ♡♡♡」

俺はゼノヴィアの要望に応え、腰を突き上げるのと同時に胸を揉みしだいた。するとゼノヴィアは体をのけぞらせ、膣壁をより強く締め付けてくる。その快感に俺も腰が勝手に動いてしまう。俺以外の男を知った膣を上書きするように、激しく腰を打ち付けていく。

「んほおおっ ♡♡♡ あうっ ♡♡♡ あうっ ♡♡♡ あつ、ふあああんっ ♡♡♡」

子宮口まで突き上げられる快感と、胸を揉まれる快感にゼノヴィアは何度も体を痙攣させる。褐色に焼けたゼノヴィアの肌は汗ばみ、それがまた更に色気を感じさせる。

普段は凜々しいゼノヴィアのこんな姿が見られるのは俺だけだ！  
俺以外の誰にも渡してたまるか!!

「ゼノヴィア！ これからは俺以外とこんなことをしちやダメだ！  
ゼノヴィアは俺の女なんだから！」

「ああんっ ♡♡♡ あつ、イッセー ♡♡♡ んちゅっ ♡♡♡ んちゅ…… ♡♡♡」  
俺はゼノヴィアの顔を振り向かせ、強引に唇を奪う。舌と舌を絡め合い、唾液を交換し合う濃厚なディープキスだ。

「ちゅっ…… ああっ ♡♡♡ んんっ ♡♡♡ はあんっ ♡♡♡」  
(くうう……！ この締め付けっ！)

「ああああつ！ ♡♡♡ わ、解ったあ ♡♡♡ お前以外とはもう、エッチしないからあ ♡♡♡ だからもう許してええっ ♡♡♡」

ゼノヴィアの体を反転させ、今度は正面から抱きしめる。  
灼ける様に熱い体温。汗と唾液が混じり合った体液の匂い、そして

ゼノヴィアの柔らかい体の感触に頭がクラクラしてくる。

「イツセー！♥♥♥私もうイクっ♥♥♥またお前のチンポでイカされるうう♥♥♥」

「ああ、今度は一緒にイケるぜー！」

俺はゼノヴィアの一番感じる部分を突き上げ、同時にクリトリスも強く摘み上げた。その瞬間、ゼノヴィアが大きく目を見開き、体を痙攣させた。

「イツクウウウウツツツ!!!♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

絶叫しながら絶頂を迎えたゼノヴィアの中に、俺はありったけの精を解き放った！ どぴゅっ♥びゆるるるうううっ♥♥♥

「ああ……熱い……♥」

恍惚とした表情でゼノヴィアは体を痙攣させ、絶頂の余韻に浸っている。だが……まだだ！

（おいおい相棒。あまり無茶はするなよ。そこの小娘は聖剣使いとはいえ、まだ戦いに慣れていないんだ。お前がやりすぎると壊れちまうぜ？）

ドライグが呆れたように言ってくるけど、悪いけど今回は無茶をさせてもらう！ もうゼノヴィアは俺の物だ！ 誰にも渡すもんか！

俺は肩で息をしながらぷりんとしたお尻をこちらに向けてベッドに身を預けるゼノヴィアに、背後からまた挿入する。

「ふあああんっ♥♥♥」絶頂したばかりのゼノヴィアが可愛い声で鳴く。

「ひああっ!?ま、待ってくれ、イツセー……！少し休ませてくれ……んあっ♥」

「ダメだっ！他のヤツに盗られたくないから、今日は俺が満足するまでゼノヴィアを抱く！」

後ろから胸を鷲掴みにし、背後から激しく腰を打ち付ける。その度にゼノヴィアの褐色のお尻がぷるんと揺れ動き、ゼノヴィアは快感に身悶える。

「んあっ♥♥♥イツセー！激しすぎだああ♥♥♥」

「こうしなきやゼノヴィアはまたすぐ他の男のところに行っちゃうか



らな！ 俺以外の男とはもう二度とエッチさせねえ！」

「し、しない♡♡♡んあつ♡♡♡もう誰ともエッチしないからあ♡♡♡  
♡だから許してくれええっ♡♡♡」

ゼノヴィアの尻肉に腰を打ち付けながら、揺れる胸を揉みしだく。  
ゼノヴィアの胸は手の平からは零れ、手に余るほどの大ききで、それ  
れでいて張りがある。

「ああっ♡♡♡ああんっ♡♡♡おっぱい気持ちいいっ♡♡♡」

乳首を指先で摘み上げると、ゼノヴィアの膣がより強く締め付けてくる。  
ゼノヴィアは俺に胸を愛撫されるのが大好きらしい。

「そんなに気持ち良いのか、ゼノヴィア！」

「ああんっ！♡♡♡ああっ！気持ち良いっ！気持ちよすぎて解らなくなるうっ♡♡♡」

もはや完全に快楽に蕩けきっただらしない顔でゼノヴィアが叫ぶ。  
その表情を見た俺のモノは更に大きくなる！

「んあつ♡♡♡また大きくなったあっ♡♡♡」

膣壁を押し広げる感触に、ゼノヴィアが歓喜の悲鳴を上げる。その快感に俺の腰の動きも激しさを増していく。

「ひうっ！♡♡♡またイクっ！イツちやうううっ！！♡♡♡」

「俺もだ！今度は一緒にイクぞ！」

ラストスパートをかけ、ゼノヴィアの一番感じる子宮口まで一気に突き上げる。

「ひああああああっ♡♡♡♡♡」

俺のモノをギリギリまで締め付け、ゼノヴィアが絶叫を上げる！それと同時に俺もまた限界を迎え、再びゼノヴィアの中に大量の精液を解き放った！ どびゅううっ♡♡♡びゆくびゆくううううっ♡♡♡

「あああああああああああんっ！！♡♡♡♡♡」

大絶叫しながら、ゼノヴィアはベッドに倒れ伏し、絶頂の余韻に体を震わせる。俺はそんなゼノヴィアからペニスを引き抜くと、その背中に覆いかぶさった。

「はあ……はあ……イツセー……？」

息も絶え絶えな様子のゼノヴィアが、不思議そうに振り向いてく

る。可愛い表情だ。まだ足りない。もっともつとゼノヴィアを抱きたい。

まるで初めてリアスと愛し合った時のように俺はゼノヴィアを求め、その体を後ろから責め始めた。

「ひうつ♥♥ああんっ！♥♥♥ま、待ってくれイツセー……！今私、敏感になって……♥」

「大丈夫だゼノヴィア。すぐに気持ち良くしてやるからな」

そうしてその日はゼノヴィアが失神するまでずっとセックスし続けた……。

※週末のワルキューレ（安里？スコグル イッセー？  
シユターク、ロスヴァイセ）

「何だか安里とこういう事するのも久し振りだよね♥」

久々にアザゼルのマンションからやって来たスコグルは俺の部屋にてしゆるり、と服を脱ぐ。

ワルキューレに相応しく、というのも変だけど女性らしさを失わな  
いながらも鍛えられた肢体が露になる。

思わずその体を見つめてしまう俺にスコグルはニヤニヤと笑みを  
浮かべた。

「ふふっ♪安里もイッセーやアザゼルと同じ位ドスケベなんだから♥  
しようがないなあ♥♥♥」

ツインテールに纏めている髪はまるで天秤の秤のように揺れなが  
ら、スコグルは俺を押し倒す。

「これじゃ立場が逆な様な……」

「大丈夫、心配しなくても良いよ♥アタシは本命とか愛人とかそうい  
う順列とかは気にしないタイプだから♥ だから今日は安里が満足  
するまでいっぱいエッチしよ♥」

そう言いながらスコグルはスコグルは俺のズボンのファスナーを  
外し、下着の中からはちきれんばかりになっている俺のペニスを取り  
出す。既に先走り濡れているそれを恍惚の表情で見つめる。

「あはっ♥相変わらず」

「おつきいね♥安里が満足するまで何回出せるかなあ？」

ぺろり、と舌なめずりしたスコグルは躊躇なく俺のモノをしゃぶり  
始める。

「んっ……ちゆるっ……♪安里のコレほんと好きい♥」

初めてセックスしてから数ヶ月程度しか経っていないけど、完全に  
俺の弱点を把握したスコグルの攻めに思わず腰が浮いてしまうがそ  
こはワルキューレの中では力自慢であるスコグルががっしりと俺の  
腰を掴んで逃がさない。そのみでなくスコグルの爆乳がまるでト

ラバサミのように俺のモノを挟み込み、上下に扱く。

「んふっ♥ほらっ……安里の大好きなパイズリだよ〜♪

他の女じゃこんな風に搾るような風にはしてくれないでしょ?」

まるで牛の乳首を乳を搾るかのようにスコグルは俺のペニスを乳や指、更には舌を使って弄ぶ。そのテクニックと肉体美、更には性に奔放な雰囲気俺の罪悪感を薄めていく。

射精欲が高まり、俺は思わずスコグルの頭を掴むがその手も空しくスコグルはより深く俺のモノを啜え込む。

そして勢いよく放たれた白濁液は全て彼女の胃の中へと流し込まれる。

「んんっ……♪んんっ♪」

嫌な素振りも見せず、ごくっ、と喉を鳴らして全てを?み込むスコグルはふふっ、と妖艶な笑みを浮かべながら自分の股間に手を伸ばす。

「あはっ♥アタシも準備万端だよ……安里♪ 今日はどうする?

安里からする?それとも私が動いてあげよつか?」

ばるるんっ、と汗に塗れた胸を弾ませながらスコグルは俺に尋ねる。

「じゃあ……頼むよ」

正直、我慢の限界だった俺は思わずそんな事を言ってしまう。

面倒だとかそういうワケじゃない。

色々あって、奉仕されたいというか愛されているって実感したかったんだと思う。

「ふふっ♪いよいよ♥

腰が抜けちゃう位愛してあげる♥」

スコグルはそう言う俺の股の上に跨って、そのそり立つ肉棒を自らの膣口へとあてがい、ずぶぶっ!と一気に挿入する。

そして既に準備が出来ているからか、スムーズに俺のモノを受け入れられるというか飲み込んだスコグルはロデオさながらに腰を振る。

「んくっ……♥んっ……♥あはっ♥安里の私の中いっぱいだよ♪」

俺を慰撫するスコグルの膣内に思わず射精しそうになるがそれを

堪えて俺は必死に歯を食い縛る。

そんな俺をあざ笑うかのようにスコグルの膣壁は更にうねうねと動きながら俺のモノを刺激する。

何を躊躇う。早く自分に正直になれ。悪魔の本能か、俺の心の声が囁きかける。

「うっ……うおおお！」

俺が獣のような雄叫びを上げるとスコグルは待つてましたとばかりに上下の動きに加えて前後にも動き始める。

そんな攻めに俺はどうとう堪え切れず、大量の精液をスコグルの中へと放った。

「あはあ……♪安里のが私の子宮の中にどぶどぶって入って来てるよお♥でも、ちよつと早くない？」

ジト目で俺に跨りながらスコグルはそんな事を言うが、俺のモノは未だ元気だ。

「いや……まだ足りない」

「いいよ♥いくらでも搾ってあげるね♥」

スコグルは妖艶に微笑むと再び腰を動かし始めた。俺の精液は潤滑油となつてスコグルの膣内で更に固さを増していく。

「んっ……♥良いよ安里あ♥私、もうイツちやいそうだから一緒にイこうっ。」

そう言いながらスコグルはラストスパートのように腰の動きを早める。

俺もまた我慢できずに腰を突き出し、スコグルの腰を掴んで打ち付ける。

「あっ、激しっ♥あはっ♥安里のが膣奥にい……んひっ♥

これすきっ♥いちばんすきいっ♥」

どぶどぶと精液をスコグルの中に流し込みながらも俺は未だに衰えない自らの性欲をぶつけるようにスコグルの子宮口へと亀頭を押し当てる。

「だめえっ！またイツちやうううううううううう！」

俺のモノを逃がすまいとするかのように締め付けながらスコグル

は絶頂を迎えた。俺もその衝撃で再び射精し、スコグルの子宮を満たす。

「あはっ♥安里のせーえきでいっぱいだよお……♪」

蕩けた表情を浮かべながらスコグルは俺に倒れ込み、キスをする。舌を絡ませる濃厚な口付けをしながらも俺は未だにペニスが収まらない事を自覚する。

「ねっ……まだ足りないから……もっとしちやお？」

そんな俺の様子にスコグルは妖艶な笑みを浮かべながら俺に囁くのだった。

……。

「……って大事な話するの忘れてたあっ!!」

深夜の2時だというのにベッドで微睡みかけた俺の側でスコグルは何かを思い出したかのようにベッドから飛び起きる。

「うわっ!?な、何だよこんな時間に大声出して」

「いや……大事なことあったの忘れてて……」

スコグルはいそいそと服や髪を直すと俺の方を向く。

「えっと、実は今日ここに来た理由はね？安里に話したい事があるんだよ」

「話……？」

「前にさ、オーデイン様がいつかアスガルドに安里に招待するって話したの覚えてる？」

「ああ。確かロキ達が襲撃してきた時だったか」

オーデイン様が俺達をアスガルドに招待するって言った時だ。

あん時は色々大変だったっけ。

「それでさ。最近アスガルドに入ってくる勇者の魂が明らかに少なくなってるね。アタシらもスカウトに向かつてはいるんだけどロスヴァイセはあの通り男性恐怖症のままじゃん。オーデイン様は由々しき事態だとかかなり深刻に捉えてるんだよね」

まあ……今は天界も冥界も色々ゴタゴタしてるからな。

ロスヴァイセさんの男性恐怖症はどうにかしないとマズいよな。

イツセーが何とかしてくれるとは思いますが……。

「それでき。オーディン様が安里とイツセーにアスガルドのアピールをして貰いたいって」

それって観光大使みたいなものか？アスガルドはこういう所でこんないい所があります！みたいなPRをしろってワケか……大丈夫かな？

あと、イツセーと俺の眷属……というかパートナーを選んで随行させてくれという話だった。

それについてはイメージにピッタリな人がいるから問題ないけどさ。

「解った。なんとかイツセーとスケジュール調整するよ」

「ありがとーいやー、安里がイツセーと仲がいいから助かるよー」

スコグルはそう言う俺の身体に抱きついてきた。

「いや、別にそれくらい良いけどさ……その、当たってるぞ？」

「当たってるんだよ？安里のエッチ」

妖艶に微笑みながらスコグルは胸を俺の身体に押し付ける。

そんなエロい恋人の姿にまた俺のモノが固さを取り戻しつつあったのだった……。

ー

そしてアスガルドに着くと出迎えたのは意外な人物であった。

と、言うのはアザゼルのおっさんにシユタークさんとヴァーリというメンバー。

俺達より先にオーディン様から招待を受けていたようだ。

そしてそのまま俺達はオーディン様に連れられ、宮殿の奥へと案内される。

「良く来てくれたの。二人共。」

義息子であるヴァーリとも仲良くしてくれて嬉しいぞい」

「……義息子お!?!」

まさかヴァーリがオーディン様の

養子になっていたとは……!?!

月までぶっ飛びそうな衝撃に俺とイツセーは顔を見合わせる。

「そういう事になった」

いや、そういう事になったの一言で説明を終わらせようとするなよ  
ヴァーリも！

「ま、それはそれとしてスコグルから話は聞いているだろうがアスガ  
ルドは今、空前の魂不足でろう。」

近頃はエインヘリヤルになろうという勇敢な魂があまりいないの  
じゃ」

ふうー……と髭を揺らし肩を落とすオーデイン様の様子は深刻だ。

まあ、死んでからも戦い、戦い！は今の御時世にはそぐわないのか。

大抵はスローライフ思考とかさとり世代、とでもいうのか。

「そこでじゃ。お前達にはアスガルドをアピールしてもらおうと同時に  
勇者の魂のスカウトに協力して欲しいのじゃ」

「具体的には？」

「うむ。それなんじゃが……先ずはこういう企画はどうかと思ってお  
る」

オーデイン様はそう言うのと俺達に何やら紙を見せる。そこには

『北歐美少女達とウツハウハ！』

ラグナロクを越えて酒池肉林！』

「つて……おい！これ完全にアウトだろ！」

思わず突っ込む俺にオーデイン様はしれっとした様子で答える。

「何を言っておる？これは北歐神話とイツセー達が共同で運営するプ  
ロモーションビデオじゃ」

「因みに原案、プロデュースは俺だ。ありがたく思えよ？ ワル

キューレ達とスケベし放題だ」

「ハハハ、良かったじゃないか」

アザゼルのおっさんが恩を着せる様にそんな事を言ってくる。何  
言ってるんだコイツ……。

イツセーはイツセーでアザゼルの手を取って感動したように震え  
ていた。

「アザゼル先生！ありがとうございます！俺は駒王学園に貴方の様な  
教師がいる事を誇りに思います！」

誇りに思うな恥と思え。



全く俺は恥ずかしいよ。セルベリアさんを連れてきたのは失敗だったかもしれない……どうしよう。

「どうした安里。落ち込んで、というより何か悩んでいるのか？」

と、セルベリアさんが声をかけてくる。相変わらずクールだが優しいな。

「プロモーションビデオとやらを撮るのだろうか？今のうちからそんなに塞ぎ込んでどうする」

「……セルベリアさんのイメージするアスガルドのプロモーションビデオってどんなイメージです？」

「そうだな……やはり兵士や騎士が戦乙女やワルキューレと共に戦場で戦う姿を描いた物だろうか？」

セルベリアさんはマジメに分析しているが、アザゼルのおっさんがそんなド真面目なプロモーションビデオ作るワケないんだよねあ……。

ー

そして始まったのはバーベキュー大会だ。

「あの……ここ北欧なんすけどいいンスかねこれ？」

「構いやしねえよ。アスガルドのイメージを少しでも良くする為の企画だからな！ガツハハハ！」

いやガハハじゃねえよおっさん！

ハワイに来たみたいなの浮かれたテンションでアザゼルのおっさんはビールを飲みながら肉ばかり食ってやがる。野菜を食え野菜を!! 大人は苦い野菜やビールを美味しいと言って味わうモンだろうが！（b y 辰郎伯父さん）

「何だお前苦行僧か？酒も飲まず肉を食わず女も抱かずして何が人生だ！」

「しょーもない人生観を力説するなこの堕天使総督！」

「だから何だその言い草は！この野郎、大人に対する尊敬ってモンをまだ知らねえな！」

「まあまあ、細かい事はいいじゃないか。折角のバーベキューなんだから愉しまないとネ」

と言つてシユタークさんが俺とアザゼルさんを宥めてくる。

……金色ビキニというところでもない服装でだ。

「シユタークさん……その格好は？」

『プロモーションビデオの撮影をするならこの衣装がいいじゃろ』つて勧められたんだヨ。

見られて困る様な身体でもないからボクは特に異論は無いネ」

ロングヘアをかきあげながら流し目を飛ばされた。アザゼルの  
おっさんと男女の関係な筈なのにいいのか!?!いいのかオイ!!

……い、いかん。

リアス部長や朱乃さんばりのドスケベボディのシユタークさんの  
水着姿とか、人の性欲を煽りすぎだ!

耐性がなければ飛びかかっていたかもしれない……危ない危ない。

煩惱を振り払っていると、セルベリアさんが俺の肩をポンと叩い  
た。

「安里よ。私はこういう場には疎いのだが……これがアスガルドの正  
しい姿なのか？」

「いや、違うと思います……」

ってセルベリアさんも黒ビキニなんて着てやがる! この人も大  
概スゲー美人だから正直、目のやり場に困るんだよなあ……。

そして極めつけはスコグル。

まさかの星条旗ビキニという最早アスガルドのPVって事も失念  
しているであろうセクシーさ!

「はい安里。お肉焼けたよ?」

「お、おう」

差し出された肉を口に入れる。

語彙力のない俺でもこれは絶品だと解る。

「どう?美味しい?」

「ああ、美味しいな」

「ふふ、良かったー!じゃあ次は安里が焼いてね!」

……なんだろうかこの感じ。

スコグル達の笑顔を見ているだけでなんかこう心が満たされると

いか落ち着くというか。ここにルイーナも連れてくるべきだったかもしれないな。

「どうも！ 兵藤一誠です！」

今、絶賛水着のお姉様達に囲まれてアスガルド最高！って感じですよ！

オーデイン様とロスヴァイセさんにはちよつと悪い気がしますが……。

「さあ、イツセーさん！お肉だけじゃなく野菜も食べて下さいね！」  
そしてロスヴァイセさんが甲斐甲斐しく俺の隣に陣取り、焼きたての野菜を俺に食べさせてくれます。

すっかり男性恐怖症も落ち着いた様で俺も一安心。これでジャージ姿じゃなかったら完璧なんですけど。

と、言うか暑くないのかな？

「やあやあ楽しんでる様だねエお二人さん♪」

「相変わらずノリがいいですねシユタークさんは」

何やら金色の泡だつ液体が注がれたジョツキを俺達の側に置いてシユタークさんは楽しげだ。

「あの、もしかしてこれは」

「ハハハ、これは不思議な麦芽ドリンクだよ？ ちよつとハッピーな気持ちになる飲み物だね」

100%アレじゃないですか!!

未成年が飲んじやいけないアレ！

「あ、あの、これはちよつと。」

俺は健全な学生なワケで……。

ガクセーはガクセーらしくですよ。

あと俺、一応おっぱいドラゴンという冥界の特撮ヒーロー的活動をですね」

「そう堅苦しい事を言うものじゃあないヨ、イツセー君。ボクは飲んだイツセー君がどんな風になるのかが知りたいなア……♥」

シユタークさんは俺に寄り添い、耳に息を吹きかけ顎を擦りながら

俺を誘惑する。

当に最高マンティス！

じゃない！サイコマンティス！

雌カマキリも真つ青の魔性っぷり！

「そんなふしだらな真似はいけません！ですから、私が飲みます！」

「ロスヴァイセさん!」

まさかのロスヴァイセさんが率先してそのドリンクを飲むと言いつ出した。

「イツキ！イツキ！」

「イツキ！イツキ！」

しかもワルキューレの子達も囃し立てる様に声を出し始める有様！

まるでコンパの様な雰囲気だ！

するとロスヴァイセさんは意を決した様にその飲み物をグイツと飲む。

グビグビ、と豪酒豪傑の如く喉を鳴らして一気に飲み干していく。

だ、大丈夫なんだろうか!?

『さてな。限界を知らない女の飲み方に俺には見える。万一の準備はしておけ』

ドライグがそう言うや否や、ロスヴァイセさんはジョッキをドン！と置く。

「ぐびぐび……ぶはあ〜」

するとロスヴァイセさんの顔がみるみる赤くなっていく。

ビー……例のアレにしては不思議な成分の回りが早くないですかあ!?

「兵藤君。貴方、一体どのくらいの女の子をヒイヒイ言わせてるんですう？ヒツク」

しゃっくりをしながらいきなり絡んで来たし！しかも火の玉ストレートな下ネタトーク！

「一応ボクもカウントされるネ」

「はあ？ 貴方は女の子って年じゃあないでしょう？鏡を見て出直し

て来なさい。ヒック」

何と言う言葉の暴力!?

ロスヴァイセさんは色々溜め込むタイプなのか？

「大体前から思っていたんですけど！ヒック！貴方、胡散臭いんですよ！曹操とかいう奴の部下の叛英雄……の司馬懿でしたっけ？」

何で初見なのに兵藤君に対策を仕込む事が出来たんです!?!あと黒歌って子といい勝負が出来るなんて……ひつく！

貴方、フリーの悪魔祓いと自称していただけますけどホントは裏でコソコソやってるんじゃないですか？ヒック」

いかん！完全に絡み酒になってる！回りの空気がヒエヒエになって行く中、シユタークさんというカラカラと笑った。

「ハハハ。まあボクはアザゼルの恋人でもある。彼から色々各派閥の情報を知っているのさ。あと符術は仙術にも通じている。曹操や司馬懿、あと猫鐘は中国関連だろ？仙術の本場は中国だからネ。対策は容易なのさ、まあそんな事よりもう一杯どうかナ？」

……お、大人の対応だ！

流石フリーの悪魔祓いにしてアザゼル先生の恋人！こうしたウザ絡みをいなすのはお手の物か！

「ん〜、まあいいでしょう。ひつく！それよりもっといイ話ないんですかあ？ヒック」

「いイ話って何だい？」

と、シユタークさんが聞き返すとロスヴァイセさんはトロンとした目で言う。

それはとんでもない爆弾発言だった。

「男性の落とし方です！」

「墮とし方ねエ。いいとモ」

ー

「フフフ♥ こうして皆に見られながらエッチするのも悪くはないネ、イツセー♥♥♥」

PV撮影は安里達に任せるといい、

俺達は休憩所にてワルキューレの皆やロスヴァイセさんが見守る

中、エッチする事になってしまったのだ。

金色ビキニというシユタークさんのボディは見ていただけでエロ過ぎる。

そしておっぱい！ 金色のビキニからはみ出した大きな乳房がたゆんたゆんと揺れて俺を挑発する。

「もう、そんなにジロジロ見ちゃって……キミも好き物だね♥ そんなにおっぱいが好きならこうしてあげるヨ♥♥♥」

水着の紐を解き、ぶるん！と凄い勢いでおっぱいが揺れる。まさに大海嘯！俺はそんな荒波に挑むべくおっぱいにダイブする。

「ああ……最高だ……！」

おっぱいは柔らかいがしつかりとした張りがある。

そして何よりも凄いのがこの弾力！ 押し返してくるような力強さがありながら、どこまでも沈んでいく様な包容力がそこにはある！

ああもう辛抱たまらん！俺は水着をずらしてピンク色の先端部分をしゃぶりだす。勿論乳首ばかりではなく乳輪や乳房も丹念に舐めてやる。

「あはぁん♥♥♥ イッセー君♥」

シユタークさんの感度は相変わらずバツチリだ。

舐めれば舐める程に反応してくれるし、強く吸えば吸う程、淫らに乱れてくれる。だが、快感に酔い痴れるばかりでは無いのが流石シユタークさんと言うべきか。しっかりと俺のチンポを掴んできた。

「フフ……♥ 前よりもっと逞しくなったネ？ もう、ボクにメロメロになってくれるのカナ？」

挑発的な笑みから始まるガチ手コキ。

しかもこの速度……！俺が絶頂に達しない様、微妙に調整している!?なんてテクニクだ！これは俺も負けていられないな！俺はシユタークさんの尻を掴みつつ、トロリとした彼女の大事な部分を指でまさぐる。

「ああぁん♥♥♥」

彼女も感じている事は確かだ。

だが、まだ足りない！俺は更に激しくシユタークさんを攻める！

そして……。

「そろそろかな？イク時は言っつてネ♥♥♥」

彼女の攻めが一気に加速する……！くっ、皆が見ている中自分だけイッてしまうのはハーレム神を目指す者として悔しいが……！

「ぐ、ぬおおー」

ドビュツ！と大量のザーメンが放出されていく。そしてシユタークさんも俺の耳元で熱い吐息を漏らす。

「ああ……凄いな♥」

俺は久しぶりに激しくイッた事で腰が抜けてしまう。

そんな俺を見下ろす彼女はとでもセクシーで、勃起が収まる事は無い。

ロスヴァイセさんだけでなくワルキューレの子達も淫気に当てられた様に生唾を飲み込んでいた。

そしてシユタークさんは不敵に笑みを浮かべると谷間から一枚の札を出す。いつの間に。

「皆が見ている事だし今回は少し変わった事をしてみようネ♥イッセー君♥」

と、言うなりシユタークさんが自分の臍辺りにその札を貼る。

すると忽ち、処理されていた筈の脇毛と陰毛が伸び始めた。まるで緑化さながらに彼女の脇と股間はジャングル宛らに生い茂っている。

「そ、それは……っ？」

「フフ、これは『毛根活性化札』ってヤツだよ」

ある意味ノーベル賞ものの発明だ！これは本当に画期的だ！俺も欲しいです！と叫びたいのを堪えつつ、シユタークさんの陰毛に手を伸ばし、うっすら汗ばむ彼女の脇に鼻を近づける。ああ、この手触り……！そして何よりもこの匂い……!!

下劣なのに高貴で、芳しい！

全てがギリギリのラインまで詰め込まれている……！

いや……まだだ！まだ究極の高みには至っていない！

「シユタークさん……。お尻……。いやケツ毛も見せてください！」

「フフ、いいヨ♥」

俺の破廉恥かつ不躰な欲求に何とシユタークさんは待っていたと言わん様子で四つん這いになり、尻たぶを開く。やはり彼女のピンク色のアナルは健在だ！

「ああ……、シユタークさんのアナルが……！」

俺は躊躇いなくそのアナルに顔を近づける。

むせ返るような濃厚な淫臭！だが全然嫌な気はしないどころか心地いい。卑しい姿を晒している筈なのに俺もシユタークさんも心底楽しそうにしている。

「フフ、イツセー君ったらボクのアナル大好きになっちゃったネ♥」

もう限界だ！俺はシユタークさんの足を掴み、彼女の尻穴を鼻の頭で突つつく。

ああ……やっぱり素晴らしい。柔らかくてしっとりとしていて、それでいてちゃんと押し返してくる弾力がある！

「んん♥♥ ハアン♥♥ ああん♥♥ うふ♥♥」

そしてシユタークさんもまた嬉しそうに腰を震わせる。まるで妖花が花開き始めたかの様だ。

「イツセー君……♥♥♥ ボクのアナル……、ペロペロしてえ♥♥」

シユタークさんは俺の頭を掴みながら自分の尻穴を押し付ける。

ああもう辛抱たまらん！俺は舌を突き出し彼女のアナルと回りの毛を舐める。

「んおおお♥♥♥♥」

舌をアナルに突っ込んだ瞬間にシユタークさんの腰が跳ねた。

……が、逃さん！俺は更に彼女の尻穴を攻めたてる。

舌で尻穴の内側を舐め回し、そして尻穴とその周りの毛をしゃぶる！これがまた癖になるというか何とと言うか……！！

「ひゃああああ♥♥♥♥」

もう完全に喘ぎ声を通り越して奇声になっているシユタークさんが実に卑しい。あのシユタークさんがこんなにも浅ましく卑しいケモノに墜ちていく様子は俺のチンポが爆発しそうな位に興奮させていた。「ああん♥♥♥ もう、イツセー君ったらボクをこんなにいやらしいオンナにしちやつてえ♥♥♥♥」



シユタークさんの言葉を遮る様に俺は唇だけでなく、チンポでシユタークさんのオマンコを味わい始める。

「んあああ♥♥♥ ああ、凄いネエ♥♥♥」

既に濡れそぼったオマンコは俺のチンポを容易く飲み込み、キュウと締め付けてくる。その快感たるや……！ 俺は夢中でシユタークさんの尻を掴む。柔らかくも張りのある最高の尻たぶだ！ そして腰を振りながら更にチンポをシユタークさんのオマンコに激しく出し入れさせる！

「ああ、凄いネエ♥♥♥ ボクのオマンコがイツセー君のチンポでズボズボされてるう♥♥♥」

「はあ、はあ……！シユタークさん！」

もうダメだ！俺は欲望のままシユタークさんの体を貪る様に腰を振る。俺のピストン運動に合わせて彼女の尻も揺れまくりだ。

「んあああ♥♥♥ ああ……もうボク、ダメになりそうだよ♥♥♥」

「お、俺ももう限界だ！一緒に……！」

俺が最後のスパートを掛けるとシユタークさんも嬉しそうに腰を振り始めた。

「ああん♥♥♥ もうイツセー君のがボクの子宮に届いてるう♥♥♥ あ

あ、もうイクヨオ♥♥♥」

「うおお！」俺は叫びながら彼女の膣内を蹂躪しまくる。

そして……。

「ああああああああああああ♥♥♥♥♥」

2人で同時に果てた……！それと同時に絶頂の波が俺達に押し寄せてくる。

「ああー！イツセー君のがボクの中で暴れて……んん♥♥♥」

俺はシユタークさんの尻から手を離さず、更に射精を続ける。この快楽を彼女に刻み付ける為に……！

「ふふ♥♥♥ もうこんなに一杯出してくれて嬉しいナア♥♥♥♥♥

見たかナ？相手を籠絡させるには

自らの穢い所も時には見せねば

ならないってわけサ♥♥」

蕩けきつた表情でシユタークさんは俺の頭や頬を撫で回してワルキューレの皆に言う。

『……危ういな』

ドライグが何か言っているが何も考えられない。ああ、このまま時が止まればいいのに……！

しかしそんな俺の思いはハーレム神としてまだまだ甘いと知らされる。

ー

「ああ……♡見られてるう♡♡♡ ボーボーの脇毛……あ、アソコの毛も兵藤君に♡♡♡ んん……、恥ずかしいけど気持ちいいよお♡♡♡♡」

ああ、俺の目の前ではロスヴァイセさんが裸体を晒して興奮していた。

道理で水着姿にならなかつたワケだ。身持ちの固いロスヴァイセさんをイメージさせる剛毛

つぷりだが、それが逆に新鮮で興奮する！

「ロスヴァイセさん！とってもセクシーですよ！」

俺はロスヴァイセさんの股間に顔を埋め、彼女の剛毛マンコを舐めまくる。

その度に彼女の体が仰け反り、歓喜の音が漏れる。俺より年上なのに男を知らないロスヴァイセさんをワルキューレの子達が見ている前でシユタークさんと協力して籠絡した。

そして今、ロスヴァイセさんは全裸で仰向けになり俺にオマンコを舐め回されている！

「ああ……♡♡♡ こんな事してるのに♡♡♡ 何でこんなに気持ちいいのお？♡♡♡」

ああ、俺も最高です！あの厳肅で真面目で厳しいロスヴァイセさんが俺の舌や指で乱れる様子は最高です!!さつきまで皮を被っていたクリトリスももうピンピンに勃起している！エロすぎる！エロすぎますよロスヴァイセさん！

「アソコなんて気取った言い方はダメだヨロスヴァイセ？ マンコっ

て言うんだヨ？」

「ああ、はい……。わ、私のオマンコをもつとペロペロしてえ♥♥♥♥♥  
兵藤君♥♥♥♥♥」

……あ、あれ？何か少しロスヴァイセさんの様子が……？

「ふふ♥ いいネエ。ロスヴァイセは処女なのにもうすつかり快樂の虜だヨ？」

シユタークさんがニヤニヤしながら言う。そうか！これが『牝堕ち』って奴か!! 俺はこの言葉の意味を噛み締める様に舌を動かす。ああ、ロスヴァイセさんが喜んでくれている……！それがまた嬉しい！

「あぐつ♥ バチバチしてるっ♥♥♥ シユタークさんに乳首と脇を責められて♥♥♥ 兵藤君にオマンコペロペロされて♥♥♥♥♥ 私、もうイツちやうううううううううう！」

ああ、ロスヴァイセさん！

俺は彼女のクリトリスに思いつきり吸い付き、指をねじ込む！その瞬間……！

「ああああああ♥♥♥♥♥」

俺とシユタークさんの指の隙間からブシャアアアつと勢いよく潮が吹き出す。そして彼女はビクビクと体を痙攣させた。

見えないがロスヴァイセさんはアクメをキメたのだろう。

「ああ♥♥♥ ああ……♥♥♥♥♥」

余韻に浸るロスヴァイセさんの淫らな顔は見えないが想像は容易だ。

俺は彼女の足を掴み、オマンコを上に向ける。そしてロスヴァイセさんの口の中に舌を入れるキスをしながら一気にチンポをぶち込んだ！

「んんん♥♥♥♥♥」

歡喜の声を上げるロスヴァイセさんを無視して俺はピストン運動を始める。この快樂……！もつと味わいたい！自分色にロスヴァイセさんを染めたい!!

「ふふ♥ ロスヴァイセったら凄いネエ♥♥♥」

シユタークさんが笑いながら言う。

ああ、確かに凄いい！ワルキューレの皆も目が釘付けだ！あの真面目なロスヴァイセさんが俺の巨根でよがり狂っている様は実に興奮する!!

「あ♥♥♥ あああ♥♥♥ イクウウウ♥♥♥♥♥ イッセー君のペニスでええ♥♥♥ 私のオマンコお、滅茶苦茶にされてるのおお♥♥♥♥♥」

「ああ、ロスヴァイセさん！好きだああああ!!」

俺は彼女のオマンコをチンポで蹂躪しながら叫ぶ。もう我慢ならない！

「ああ♥♥♥ ああ♥♥♥ いいよお♥♥♥♥♥ イッセー君の子供産むからああ♥♥♥だ、だからお願い!!私の中に一杯出して！イッセー君の精子を私の子宮にいい♥♥♥」

勿論だ！ロスヴァイセさんの中に俺のザーメンを注ぎ込んでやる！

「ああ♥♥♥♥♥ イクウウウ♥♥♥♥♥ イッちやううう♥♥♥♥♥ イッセー君！イッセー君!!イ、イグうううううううううう！」

ああ、俺も限界だ!!!

ビュルルルツビューーーーー！と物凄い勢いで彼女のオマンコに射精する。そしてロスヴァイセさんもまた絶頂した様に体を震わせた。

「……………♥♥♥♥♥」

「ふふ♥♥お疲れ様、ロスヴァイセ。イッセー君のザーメンはちゃんと子宮に届いたカナ？」

シユタークさんが優しくロスヴァイセさんの頭を撫でながら笑う。

「はい……………♥♥ 沢山頂いてしまいましたあ……………♥♥♥」

ああ！やっぱり最高だ！ハーレム最高!!俺は喜びに打ち震えながらも再びロスヴァイセさんに手を伸ばすのだった。

1

「所で安里。あの女、シユターク・ゴーズは信用できるのか？」

バーベキューパーティーの中にあつていきなりヴァーリはいつもの唯我、というかクールっぷりを発揮して俺に聞いてきた。

「勿論だって。何度か助けてもらった経験もある」

うくん。ヴァーリは良いヤツだが過去のイキサツもあるから手放しでは人を信用しないタイプか？

いや、シユタークさんとの付き合いがまだ浅いからな。

「それにあのアザゼルの恋人なんてやってんだぜ？余程の人徳者じやなきやあのおっさんの恋人なんて出来っこないだろ？」

『恋人というが、あの女はイツセーと交わっているがアザゼルは放置している。そんな恋人という関係が存在するのか？』

ヴァーリだけではなくアルビオンまで疑ってくる。

「それは……まあ、人それぞれっていうか……」

俺も人の事は強く言えんので語気が弱くなってしまう。と、そこで当の噂のおっさんが浮かれきった感じでやってきた。

「何だ良い若いモンが面を突き合わせて陰気くせえなあ。そんなヒマがあつたら若い女の1ダースでもナンパしてくるとかもっとこう、あるだろ！」

「俺には女の事は解らん。

それと、俺の血筋などこの世に残すべきではない」

おいおいヴァーリ……。

それはちよつと偏った考え方だぞ？

お前程のイケメンで強いなら、世の女性は放っておかないだろうに。

「何が残したくねえだ。おめえのそのイケメン面はお飾りか？ああん？」

アザゼル先生はヴァーリに絡んでくるが、やはり年季が違うのか余裕な態度で対応している。

「コイツを見ろ。お前より顔も良くない。実力もない。更には品性も俺に対する感謝の気持ちもまるでない。それなのに片手で余る位の女を取っ替え引っ替えしてるんだぞ」

鏡見ろ、クソ墮天使総督！

散々こき下ろすアザゼルのおっさんに俺は大分怒りを覚えるがこんなんで墮天使のトップが勤まるんだから世も末だ……。

そんなバカ話をしながら俺は妙な違和感を感じた。ロスヴァイセさんとシユタークさんはともかくとしてセルベリアさんの姿が見当たらない。

「なあ、スコグル。セルベリアさんが何処にいるか解るか？」

グビグビと何杯めになるか解らん位にビールを飲み干しているスコグルに尋ねてみた。しかし鯨かって位酒をガブ飲みしてるし。

「んー？ そう言えば見当たらないな。トイレじゃない？」

「お前なあ……」

デリカシーのない発言に呆れる俺。

と、その時だった。

「きやあああああああ!!」

ワルキューレの子が悲鳴をあげた。

その子の足元にいたのは一匹のネズミだ。いや、モルモットと云うべきかもしれない。

「なんだ、ネズミじゃん」

スコグルはあつけらんかんとした調子で言うが調理場辺りにネズミが出たら色々とマズいんじゃないか？

「むう……」

オーデイン様の眉間にもシワが寄る。しかしその真剣な眼差しは先までのヒヒジイじみた物とは違う。

「つてあ痛!」

するとスコグルが首筋を軽く押さえながら軽く痛がっている。その手には百足が握られていた。

ネズミに百足……どっちも北欧というかアスガルドのイメージにない生物だ。

「嫌な空気じゃな。アスガルドの連中がこの様な真似をするとも思えんが……」

オーデイン様も酒の入ったコップをテーブルに置き、辺りを見渡す。

「……この害虫が!」

スコグルは噛まれた痛みもあつてか怒りに任せて百足を地面に叩

きつけようとする。

が、その時。

「おっと、そいつは御法度だ。」

百足は摩利支天様の使い魔なんでねえ」

地面に叩きつけられた百足が何か膜の様なものがクツションと  
なつて衝撃を吸収していた。

それに聞き慣れない男の声。

まさか、敵か？禍の団か？

「見た感じ、バーベキューパーティーに参加しようつて風には見えねえなあ」

アザゼルのおっさんが軽口を叩きつつ臨戦態勢に入り、ヴァーリも  
即座に白龍皇の鎧を身に纏う。

「しかし、儂らの前に堂々と姿を表すとは余程の胆力かそれとも但の  
阿呆か……」

オーデイン様は相手を睨む。

相手はハットを被るスーツ姿でスキンヘッドの優男。イタリアン  
マフィアっつーか、ドン・ファン……つていうのかとにかくそんな雰  
囲気を漂わせる男だ。

なんつーかハーゲンの野郎に似たネバネバしたイヤ々な空気を醸  
し出している。

「テメエ、ハーゲンの仲間の叛英雄つて奴か？」

「ズバリ御名答！あつしとアイツはダチでね！禍の団は英雄派、叛英  
雄が一人『女殺し』は弓削道鏡さあ！」

芝居じみた台詞と仕草で俺達に名乗る弓削。ハーゲンの野郎とこ  
ういう所はそっくりだ。何が『女殺し』だこの自意識過剰が。

「なーにが女殺しだ。このアザゼル様を差し置いて何をほざきやがる  
かこのクソガキが」

黄金龍君の鎧を纏いだしておっさんは不快感を露にする。こりや、  
出る幕は無さそうか……？

しかし、その時。

シユゴオツ！とレーザー光がアザゼルのおっさん目掛けて飛んで

きた！

「何い!?コイツは！」

「何だと!？」

アザゼルのおっさんは驚いた声をあげつつあっさりレーザーを弾き飛ばす。確かに威力はあるが俺達が驚いたのはその事じゃない。このレーザーを放った相手だ。その相手はまさかのセルベリアさん。しかも何やら機械的な鎧を纏っている。

「セルベリアさん!？」

「マキシミアン閣下の敵は……

全て排除する!!」

マキシミアン？

確かセルベリアさんの以前の主だったヤツの話か？

でも、それはセルベリアさんがこの世界に転生する前の話だろ？何で急に……。まさか……?？」

「洗脳か？」

たじろいだ俺の背後から凄まじい殺気を感じる。即座に振り返る隙を惜しんで回避行動を取ったがそれが正解。俺のいた地面が文字通り隕石が落下したかの如くクレーター状の大穴を開けた！

「蛮勇隕力……!?!スコグルか！」

どうやらスコグルも操られてたらしい。セルベリアさんだけでも厄介なのにスコグルまで相手にするととなると……!」

「うーむ……。馴染みの子とやり合うのは好かん。安里。ここは任せるぞ！ おそらく曹操のヤツが何かしてやがる！」

「うむ！ワシも同感じゃ」

オーデイン様とおっさんは言うだけ言って、この場を俺に任せてさっさと逃げていく。

「ヴァーリ！俺達友達だよな!？」

まさか俺を置いて向こうの敵が強そうだからって曹操の所に向かうなんて考えてないよなー!？」

「……すまん。そいつ等程度では俺を高ぶらせるには足りん」

ヴァーリはあっさり言うやヒュン、とその場から消えた。



「薄情者おおおおおおお!!」

俺は叫ぶがヴァーリは戻ってこない。そしてスコグルとセルベリアさんは俺達に攻撃を仕掛けてくる!

だが、あの三人じゃやりすぎてしまうのは明白!俺が何とかしないと……!

ー

「はあ……はあ……」

どうも、兵藤一誠です。

ロスヴァイセさん、シユタークさん、ワルキューレの女の子達と散々楽しんで体力を消耗した俺は一旦休憩していた。死屍累々というか何と言うか絶頂により失神した彼女達。

うーむ……ハーレム神を目指す俺としてはもっと女の子を天国に導いてやりたいが、流石に体力が……。

『色ボケしている所悪いがな相棒。』

妙な奴が来るぞ。この臭い……鋼と油が混じった様な臭いは……兵器の類だな』

ドライグが何かに気付いたのか警戒した様に言う。

しかし、そんな所に一人の乱入者が現れた!

「ヘーイ!ジェントルマーン!

貴方は神を信じますカー?」

現れたのは妙な鋼の球体をピエロの様にバランスを取りながら乗りこなす、ジャンヌさんの様な鎧を着たインチキ臭いイントネーションで話すお団子頭の女の子だ。正直ムサイ男じゃなくて良かった。

「ああ!信じるよ!この出会いは神が与えてくれた運命さ!」

『よくもまあそんな浮ついた言葉がスラスラと出るもんだ』

相棒が何か言ってるけど、そんな事はどうでも良い。俺は女の子との出会いを大事にしたいんだ!

「オーウ!素晴らしい!ならばその命……神に捧げなサーイ!FIRE!!」

首をかつ切る仕草と共に鋼の球体から放たれたのは、導火線のついた黒い球体……!?

「ば、爆弾だあ!？」

ワルキューレの女の子達やロスヴァイセさん達を巻き込むわけにはいかない! 故に俺は爆弾を全て抱えて咄嗟に外に飛び出た! ドガアアツ!! と凄まじい爆炎!

「どわああああああ!」

爆発の余波で吹き飛ばされ、俺は地面に叩きつけられた!

赤龍帝の鎧が無かったらハンバーグになる所だったぜ!

「ゲホッ! …… 何だよコレ!？」

咳き込みながら俺は驚愕する。

「ユアビッグフル! (馬鹿めが)

なっていないせんネー!」

あの鎧を纏った女の子が高笑いと共に鋼の球体をけしかけてきた!

確かにデカいがこの程度の球体、今の俺なら!

「うおおおー!」

俺は球の突進を躲しながら拳を叩き込む! しかし…: 鋼の筈の球体はとぷん、と泥の様に俺の拳を飲み込んだ!?

「は!？」

更にその泥は俺の体を侵食していく! なんだこりやあ!?! 気持ち悪い!!

『いかん相棒! 直ぐに手を球体から抜け! お前が放った一撃へのカウンターが来るぞ!!』

「何!？」

ドゴオツ!! とヴァーリクласの拳が飛んできたかの様な衝撃!

俺のパンチってこんなに強烈だったのか!?! き、きく…:…:!!?

「嘗てカンダタという盗賊はブツダから蜘蛛の糸を垂らされてCHA NCEを与えられたそうですネー?」

フッフ、貴方は女性に対してブツダの如き慈悲を持っているそうですが…: それが私にはベリーラッキー! ユアノットマイマッチ! (相手にならないな)

『さつきからペラペラペラペラと相棒を散々コケにしてくれているが、貴様何者だ?』

ドライグが腹に据えかねた様な声を出す。

「オーウ、ソーリー! 自己紹介がまだでしたね! 私の名は叛英雄の一人にして『仏殺し』が大友宗麟! 神の御名に於いて異教徒と悪魔はこの平……もとい国崩しでマサクウル! (皆殺し)」

女の子は自己紹介をしながら鋼球の上で中指を突き立てる下品なポーズと名乗りをあげた。

大友宗麟……キリシタン大名として有名な人物だが、聖書の神を信仰するあまり悪魔や堕天使などの異種族や他宗教に対して異常なまでの敵意を持つ人物でもあったらしい。侵攻の途中で仏像や地蔵、果ては墓石まで破壊し尽くすものだから領民から愛想を尽かされて遂には鬼と呼ばれた島津家に敗北するって皮肉な結末を迎えたって歴史の授業で習ったっけな……。

と、言うか聖書の神は今はいないんだよな。そうだ! それを指摘すればこの子は戦意を消失するんじゃないか? よし!

「待て! 君が信仰している聖書の神はもうこの世界にはいないんだ! だから、その、戦う必要はないんだ!」

手を突き出し待ったのポーズをしながら俺は宗麟ちゃんに言う。しかし、宗麟ちゃんはショックを受ける所か俺の必死の訴えをゲラゲラと笑い飛ばした。

「ソウホワット? (それで?)」

聖書の神がないから何だと言うのデース? 天は自らを救う者しか救いません。故に我が神は絶対不可侵! 異教徒と悪魔も皆殺し  
DEATH!!」

駄目だ! 話が通じない!

理念に狂った人間の厄介さがこれ程とは思わなかったぜ! ロスヴァイセさん達に危害を及ぼす前に宗麟ちゃんをどうにかしないと!

## ※リクエスト編（イツセー×セラフオール＆カテレア &レイナーレ）

どうも！兵藤一誠です！

今日は安里の家にお邪魔していますが珍しいメンバーに出迎えてもらっているワケで。

セラフオールさんはともかくカテレアさんに……そしてレイナーレ。

旧魔王派と何より俺を一度殺した女とテーブルを囲うという一生のうちに一度あるかないかの体験をしています。

「……別に私は謝らないわよ。」

お互い命を奪い合った事でチャラ。文句は受け付けないから」

「いや文句はないけどさ……」

人間、いや転生悪魔だけどそんなあっさり割り切れるものじゃないって。でもよくよく考えれば安里もコイツに殺されてるけどなんやかんやで部下にしているワケだよな。うーん。親友ながら大したヤツだ。

ハーレム神を目指すものとしてその器の大きさは見習うべきやもしれん。

「そう言えば安里とアザゼル先生の姿が見えないけど何かあったのかな？」

「確か、安里様とアザゼルはゲイト様にドライグの秘宝の一つを発見しその解析にあたっているはずですよ」

「へえ、それは初耳だな。ドライグの秘宝ってなんだ？」

「それは貴方に宿る紅き竜に尋ねた方が早いのでは？」

俺はカテレアさんに尋ねるが何だか塩対応というかつつげんどんな返答だった。まあ、そうかもしれないけど気まずい。

……で、ドライグ？お前の秘宝って何なの？

『さてな。とぼけるつもりはないが俺が持っていた秘宝は幾つもある。』

「一々効果やら効能やら全部は覚えてないさ」

「エエー……マジかよ。ドライグ、お前ゲームの説明書や箱を取っておかないタイプなのか？いや、今は説明書なんて初めからないけどね？」

『だがまあ……そうだな。』

「今回の秘宝に関しては若気の至りというか……若さゆえの過ちが産み出した秘宝というかだな……」

「ん？ 何だかドライグにしては珍しく歯切れの悪い答えじゃないか。と、言うかドライグに若い頃があつたなんて意外というか何と云うか。『……あまり気にするな。』

「少なくとも今のお前にとつても無関係なものではないさ」

「何だよそれ、気になるな……」

「と、その辺りでポットのお湯がなくなっている事に気がついた。

「ここは俺が台所までお湯を注ぎに行くべきか。」

「俺は席を立つと台所へと向かうべくドアを開けようとした……。」

「だが、まるで開かない。ガチャガチャとドアノブを動かそうとしてもまるでドアが壁に描かれたトリックアートになったかのようでビクともしない。」

「な、何だこれ!?開かないぞ!」

「まさか英雄派やら禍の団やらの仕業か?いや、しかしここは安里の家だぞ? ゲイトさんを差し置いて誰かが何か仕掛ける事なんて……。」

「ねえ……♥イツセーくん☆

「この部屋、暑くなあい?」

「!? セラフォルー様が当に猫撫で声といった様子で俺の背中になだれかかってくる。」

「む、胸!おっぱいが当たってる!」

「そ、そうですか……? あ……暑すぎるならセラフォルー様の力で何とかできるのではないかと?」

「俺は何とかそれだけを口に出来た。」

「そう? まあ私としてはこのままでも良いんだけどね☆」

そう言うとセラフオールさんはシャツの胸元をはだけさせていく。ボタンを外す度にその豊満な谷間とピンク色の下着が目飛び込んでくる。な、ななっ?!

「ど、どうしたんですかセラフオール様!!」

「どうしたって……☆暑いから脱ごうかなって……♡」

「い、いけませんよ! 4魔王の一員たるセラフオール様がそんなふしだらな!!」

一体何がどうなっているんだ!?

これは俗に言う『セックスしないと出られない部屋』か!?

『厳密には少し違う。昔の俺は自分で言うのも何だが色々盛んな。』

ここは「相手を屈伏させねば出られない部屋」というヤツだ」

ヤツだ(キリッ)じゃねえよドライグ!見損なつたぞドライグ!俺が言うのもなんだけどそんな風にメスドラゴン、もとい女の子を手籠にする様なヤツだったなんて!!

無理矢理だなんてハーレム神を目指す俺がすべき事じゃない!

NOと言える勇氣!

『そうか。だがこの空間は俺達の竜の香気がどんどん満ちてゆく。竜の香気は女を魅了する。』

あまり長くは保たんぞ? 早く屈伏させた方が良いと思うがな」

く……っ!この、卑怯者め!俺は屈伏しないぞ!! そんな俺を嘲笑うかのようにセラフオールさんは俺の耳元で囁く。

「ねえ……イツセーくん♡私、キミにキスしたいなあ♡」

な、何ですと!?

キミにキスしたいなあ、なんて素晴らしい日本語なんだ! 是非お

願います!!

……って違うだろー!違うだろー!

「だ、ダメですって!そんな……無理矢理なんて!」

しかし俺は屈しない!たとえ今のセラフオールさんのような超絶美女の誘惑であろうと!匙から聞いたシトリーさんのお仕置きを俺も受けるわけにはいかない!それにセラフオールさんは安里といい

感じな仲だった筈だ……!」「……イツセーくん♥」

だがセラフオルーさんの手は止まらない。俺の顎にその豊満なおっぱいを押しつけながら、くいつと持ち上げる。

あ、顎クイってやつですか!?初めてされた!感激!! しかもおっぱいで!

「私、キミの事も好きよ?」

私達上位悪魔は世継の事も考えないといけないから……。

グっちゃんやリアスちゃんはもう大丈夫だけど私はそうはいかないのよ……」

くっ! そんな弱々オーラを出しても俺の心は屈しないぞ!

「でも、私は悪魔よ? 欲しいものは力づくでも奪ってみせる。だからイツセーくん……キミの全てを私に頂戴?」

そう言つてセラフオルーさんは俺を強引に抱き寄せつつ唇を近づけてきた……。

『首尾はどうかな?』

『相棒なりに安里に義理立てしているのだろう……。が、まあもつて1時間といった所だろうなア。』

抑えが効かなくなった時の備えの方はお前達に任せる』  
ゲイトからの問にドライグは嘆息混じりに答える。

そして1時間後のこと……。

「あっ♥あっ♥ああん♥」

「くっ!何が魔法少女ですか!」

こんなドスケベでエロエロなくせに!ほら、さつさとイツちやつてください!ドスケベ魔法少女!」

「あっ♥あああん♥もう、イツセーくんったらあ……☆あひいん♥」

赤龍帝の鎧を纏った俺に背後からチンポを突き入れられてセラフオルーさんはヒイヒイと悦びの声をあげていた。

俺よりも遥かに格上、四大魔王に名を連ねるセラフオルーを屈伏させるこの快感はある意味リアスとのエッチでは味わえないものだ。

「おっ♥ほおおっ♥おちんちん♥おちんちんがバチバチしてるっ♥♥

♥ お腹の中痺れるっ♥♥♥あはあっ♥♥♥」

乳峰式・絶頂雷神撃の効果は靦面。

今回は乳首ではなくセラフオルーさんのクリトリスと膣穴全体に性感電流を帯電させた俺のチンポと、その激しい腰使いによる衝撃にセラフオルーさんは限界を越えようとしていた。

「ああっ♥イクツ♥オマンコビリビリしながらイクツ♥イツセー君のおちんちんが暴れてるっ♥私のオマンコ支配してえっ♥♥♥」

すっかりセラフオルーさんは出来上がってしまった。このまま俺のチンポで屈伏させてやる！

だからこそ……。

「ふえっ？」

俺が動きを止めた途端に物欲しげな顔でセラフオルーさんが俺を見る。

「ど、どうして？ どうしてオマンコしてくれなくなったの？ あんなに私のオマンコずぼずぼしてくれたのにい♥♥♥」

「まあ、そうなんですけどセラフオルー様の立場とかもあるかなあ……っ」と

俺は満足して賢者モードになったフリをするが当然ウソである。これはセラフオルーさんが俺に身も心も屈伏するまでの我慢比べだ。

「立場とかそんなの……私はどうでもいいよお♥イツセーくんのおちんちん貫える方がずっと大事にきまつてるもおん♥ねえ♥イツセーくん♥♥♥ 私のオマンコ一杯穿ってえ♥キミのバチバチチンポでずこずこくっつて一杯してえっ♥♥♥」

「わかりましたよ。でも俺はちゃんとおねだりしてくれたらしてあげますよ」

「そ、そんなあ……♥♥♥」

セラフオルーさんは顔を羞恥と屈辱で真っ赤に染めながらも俺におねだりをしてきた。

「イツセーくんの肉便器オマンコにおちんちんください……♥いっばいズポズポして気持ちよくなってお腹の中でたつくさんザーメン出してえっ……♥リアスちゃんの代用オマンコにしてくれてもお……いいからあ♥♥」



「ふふふ、仕方ないですね。じゃあご要望にお応えして……」

俺はセラフオルーさんの求めに応じて再び正常位での挿入を開始する。

衣服破壊により全裸のセラフオルーさんの膣穴は愛液でドロドロになつており、俺はスムーズに奥まで突き入れる事が出来た。

「ああん♥キタっ♥バチバチ最強の生チンポきたあっ♥♥

勝てないっ♥最強チンポに負けるっ♥負けちゃうううう♥♥♥♥

すっかり敏感&箍が外れた淫乱モード真っ盛りのセラフオルーさんが歡喜に身体を痙攣させると同時に、俺は猛烈な快感を味わう。

「はあんっ♥♥あああん♥イツセーくんの極太ちんぽ最高なおお

♥♥♥♥♥こんな凄チンポ味わったら他じゃもう満足できないわっ♥

♥♥こんな知つちやつたらダメになつちやうううっ♥♥♥

もうとつくに俺のちんぽと相性抜群のメス穴になつてるセラフオルーさんだが、それでも俺は彼女への追撃は欠かさない。

今こそ乳峰式・三叉雷撃を放つ時！

キスにより唇、パイタツチ&乳首ずむずむによるおっぱい、そして帯電チンポによる3重性感クリティカル！

「あひいいい♥♥♥無理♥むりい♥♥こんなむりいいい♥♥♥♥

口も頭もおっぱいもおまんこも全部気持ちいいっ♥♥♥♥

「ほら、ちゃんとおねだりしてください！そしたらもつともつと気持ちよくしてあげますから！」

「あっ♥あひいん♥♥おちんぽでズポズポしてえっ♥♥♥いっぱい

ザーメン出してえ……っ♥♥♥

「違うでしょ？もつとはつきり言わないとわかりませんよ？」

わざとピストンを弛めて焦らし上げる俺。だが今のセラフオルーさんには耐え切れなかったようで、彼女は涙を流しながら懇願した。

「私っ♥堕ちましたあっ♥♥もうイツセーくん以外の男なんて考えられないのおっ♥♥♥だからお願いっ！私のオマンコにドツピュンしてえっ♥♥♥♥

もう完全に俺とのセックスの

虜になつたセラフオルーさんはオホ顔晒しながらおねだりした。

「よく出来ました」

だから俺はご褒美をあげないとな。腰を上下に振って突き入れながら、そして彼女の子宮に直接精液を注ぎ込む！

「あひいいいいっ♥♥♥イツセーくんの濃厚ザーメン入ってきたあああっ♥♥♥ああああああっ!!イクツうううう……っっ!!♥♥♥」

その瞬間にセラフオルーさんは身体を反らしてアクメを迎えた……それは普段の天真爛漫な姿からは想像もつかない程にいやらしさ極まる姿だった。

「ふふ、すっかり俺のモノになったみたいですねセラフオルー様。

じゃあ、俺のモノになった証にピースとかしてみましようか」

「ふ、ふえ？び、ピース……？」

絶頂の余韻から回復しきれていないセラフオルーさんに俺は無茶振りする。果たして彼女は俺の指示通り乳首を勃起させ、オマンコからだらだらとはしたないまでに愛液を垂らしながら、ダブルピースを試みせてただただいやらさを誇示する姿ばかりがあるのみだった。

「じゃあ次はカテレアさんですね」

「え？私には安里様が……」

あ、安里の秘書みたいなポジションにいるだけあってそういう関係なのか。普段ならたじろぐ所なのだが、セラフオルーさんを屈伏させた今の俺にそんな関係ねえ！

「何言ってるんですか、カテレアさん。これは俺とエッチしないと出られない部屋なんですよ？なら俺とやるしかないでしょう？」

「そ、それはそうですが……」

尚も尻込みするカテレアさんに普段のクールビューティさは欠片も見えない。だが本気で抵抗するつもりならば彼女は俺をあしらう事など造作もない筈。

つまりカテレアさんは俺が思う以上に俺とのエッチを期待してくれているのではないか？ならばこゝは思い切りやらせてもらおうじゃないか！

「衣服破壊！」

「!?」

忽ちカテレアさんの衣服が破れセクシーな褐色肌とエロティクな裸体が露わになる！

「な、何をするのでですか！安里様の親友とはいえ許されませんよ！」

「何を言ってるんですか。俺はカテレアさんがエッチしやすいように手助けしただけですよ」

手ブラの態勢で身を屈めるカテレアさんの乳肉やお尻の割れ目がチラチラ見えて非常にエッチである。

「さあ、カテレアさん……俺のものになってください！」

俺はそう言いながらカテレアさんの巨乳にしゃぶりついた！

「あつ♥ああん♥♥駄目えっ♥

乳首は弱いのお♥♥♥」

カテレアさんは甘々な喘ぎ声をあげて、俺の頭を両腕で抱きしめながら快樂を貪る。

「ふふ、カテレアさんったら乳首吸われて悦んでるんですね？敏腕秘書のカテレアさんはすっかり安里に開発されちゃったんですね」

「あ、安里様のことを悪く言わないでくださいまし！」

俺が乳首に吸い付きながらからかうとカテレアさんは泣きそうな顔で反論した。うーん、これはこれでそるものがあるな……。

「くう……！ならば私も容赦しません！貴方を返り討ちにしてさしあげます！安里様を喜ばせるための取っておきでしたが……!!」

そう言うときカテレアさんは俺の頭を抱きしめるのを止め、今度は逆に自分の胸を俺の顔に押し付けてきた！うお！柔らかえ!!しかもすごい濃い母乳が出てる！凄く濃厚なのに喉越しはさらりとして飲みやすい！

頭がクラクラしてきた。この味は安里の母乳とはまた違った味わいで凄く美味しい……。

「ふふふ、どうですか？私の母性溢れるおっぱいの味は？今の私はさながら乳海の女王です！ さあ私の権能に耽溺し、屈伏なさい！」

ぐぬぬ、どうやらカテレアさんは一筋縄ではいかない様だ。安里に

義理立てするためもあるのかエロバトルを仕掛けてくるとは！

だが、俺はハーレム神を目指す身！

その挑戦を受けてやるぜ！

「うおりゃああ!!」

俺はカテレアさんの一回り以上膨らんだ豊満なおっぱいを思いつきり吸う！

「ひゃああん♥♥♥」

するとカテレアさんは甲高い声を上げて身体を弓なりに反らす！  
いいぞ、その調子だ！このまま一気に屈伏させてやるぜ!!

「あああ……♥♥♥おっぱい吸われてるう……♥イツセー様ったら赤  
ちゃんみたいい……♥♥♥」

俺の頭を抱きかかえながらカテレアさんが悩ましげに腰をくねらせる。大蛇の様に蠢くカテレアさんの下半身に俺の一物は吸い付く様に密着し、刺激する。

「んふうう♥♥♥お、おちんぽが……私のオマンコにぐちゅぐちゅって  
くつついてるう♥♥♥」

そして俺はピストン運動を再開する！おっぱいを吸いながらのセックスはやっぱいいい！

更に俺は乳翻訳によりカテレアさんのおっぱいから彼女の本音を聞き出す。

(ああっ♥安里様♥安里様あ♥

安里様のお側にいるだけじゃイヤあ♥♥♥ 他の女じゃなくて私  
を見て♥♥♥ 貴方のためなら何でもするわ♥死んだって構いませ  
ん♥ だからお願い♥♥私を抱いてください♥♥♥)

クツソー！安里の奴！仕事もできて美人で敏腕秘書でおっぱいも  
大きくてこんなに一途なカテレアさんにここまで愛されて！羨まし  
いぞちくしょうめ！

「くううっ♥♥♥す、凄い……っ♥♥♥」

おっぱいを激しく吸われながらのピストン運動にカテレアさんは  
とうとう絶頂に達しようとしていた。いいぞ、このまま屈伏させてや  
る！

(ああっ、安里様あ♥貴方以外のおチンポでイカされる私をお許しく  
ださい……いいいい♥♥)

そしてカテレアさんは思いつきり身体を仰け反らせ、絶頂に達した  
!

「あひいいい♥助けてえ♥助けて安里様あっ♥♥♥」

その強烈な締め上げに俺は快感と共にカテレアさんの乳首から思  
い切り吸っていた乳首を放した……。その結果、先程までイッていた  
カテレアさんは深い絶頂へと到達する！　ぷびゅっ♥♥♥どぶつど  
ぶっ♥♥♥♥　絶頂を迎えて勢いよく潮を噴きだして身体を震わせ  
る。そしてその刺激で俺のペニスからはスペルマがカテレアさんへ  
と放たれた……!!

「あああああああっ♥♥♥♥イグッ♥イグうううう♥♥♥♥」

ガクガクと身体を痙攣させながら絶頂を迎えるカテレアさん。そ  
の目は焦点が合っておらず、完全にトンでしまっている様だった  
……。

「はあーっ♥はあーっ♥♥♥」

「あああっ……♥カテレアちゃんもイツセーくんのおちんちんに負け  
ちゃったね♥」

「ち、違いますう♥♥♥私としたことが安里様以外にイカされるなん  
て♥くひいっ♥　ま、負けてませんっ♥　私はまだイツセー様のおチ  
ンポに敗北してませんかりゃあ♥」

「そんなに腰をへこへこさせても説得力ないよお☆ああっ♥イツセー  
くんのおちんちん思い出ただけでオマンコがムズムズするう♥♥♥  
♥私もイツセーくんのおちんちんでオマンコゴシゴシして欲しい  
よお♥♥♥♥」

尻と背中を俺に向けながら恍惚とするカテレアさんに対して、セラ  
フォルーさんは淋しげにオマンコを自ら弄りだして俺を誘う様に尻  
をくねらせる。

あまりのスケベな堕ちっぷりに俺は感動すら覚えた。

だがこの部屋から出るためにはもう一人屈伏させねばならない相  
手がいる！　そう、ある意味全ての始まりである存在であるレイナーレ

だ！

生憎お前に対しては二人程優しくはしないぞ！

「わ、私には安里様だけじゃなくアザゼル様もついているのよ!?!そ、そんな私に手を出したらただではすまないわよ!?!」

そう言つて拒絶するレイナーレだったが俺はそんな彼女にハッキリと言つてやった。

「どの口が言っているんだ。そんなスケベな格好して説得力がないんだよ!あっちへフラフラこっちへフラフラのコウモリ女!」

ボンテージ姿のレイナーレの乳を思いつきり引つ張ると、彼女は痛みを喘いだ。

「ひいいっ♥♥♥や、やめりよお♥♥♥私のおっぱいをオモチャにしゆりゆなあ♥♥♥」

その痛みからなのかレイナーレのマンコから愛液がどぼどぼと溢れ出す。こいつも相当エッチな身体をしているみたいだ。カテレアさんといいコイツといい安里は相当女性をエロエロにする才能があるのか!?

親友だが侮れん……!!

感心しながらも俺はレイナーレのたわわに実つた大きな乳房を思い切り引つ張ると乳首を指先で弾く!

「あひいいんっ♥♥♥」

それだけで彼女は潮を噴いて腰をカクつかせる。感度もアヘアヘぶりも完璧だ。俺はレイナーレのおっぱいに張りでた尻をバシイツと乾いた音を立てさせながら叩いた!

紅葉みたいに俺の手型がレイナーレの白い尻に刻み込まれる。

「ぎゃうんっ♥♥♥」

突然の折檻に驚きと悦びが入り混じつた悲鳴を漏らすレイナーレ!そして俺はまた彼女の乳首を攻める!

「うひいいいっ♥♥♥あひいん♥♥♥」

いやあっ♥♥♥優しくしてえっ♥♥♥ひぐううっ♥♥♥」

イヤイヤと首を振るレイナーレだがオマンコはもうグツチヨグチヨになつている。アレか?レイナーレなマゾタイプなのか?叩か

れて喜ぶ変態め!! 俺は更に男が声に出して読みたい日本語ベスト5に入るあの言葉を発してレイナーレを更に屈伏させる事を決意したのだ!

「何を言ってるやがる! 上の口は拒んでいるが下の口はこんなに正直じゃねえか! そんな女がアザゼル先生や安里の恋人に相応しいと思ってるのか! 甘えるな!!」

バシイ!と今度はおっぱいにおしおきビンタだ! 少し良心が痛むがここは心を鬼にするんだ!

もつと非情になれとボールクさんも言っていたし、今がその時だ!

「んひいっ♡♡♡叩かないで♡おっぱいたたかないれえっ♡♡♡謝りますっ♡ごめんなさいいっ♡♡♡レイナーレは虐められて飲む変態マゾ墮天使ですう♡♡♡」

あひっ♡♡♡おチンポのためなら何をしてもいいのっ♡♡♡」

リアス達には絶対できないプレイだからか俺もなんだか興奮してきたぞ!

「なら俺のチンポにその素晴ら、無駄に張り出たマゾおっぱいで奉仕するんだ!」

「は、はいっ♡♡♡レイナーレのスケベおっぱいをご主人様のおちんぽでおしおきしてくださいっ♡♡♡」

蕩け切った顔でそう言うレイナーレは俺に縋り付く様な姿勢になるやそのいやらしいおっぱいで俺のペニスを挟み、扱き始める! 散々叩かれたおっぱいは独特の熱さと弾力があつてすごく気持ちいい!

「んひい♡痛いっ♡イツセー様に叩かれたおっぱいがおチンポ様に虐められてるう♡♡♡」

涙目で痛みを訴えながらおっぱいを虐めるレイナーレ!だが言葉とは裏腹に彼女はパイズリをしながら更なる快感を得ようと自らの身体を動かし、寄せて上げたおっぱいの先端を自ら舐めだしやがった!

「き、気持ち良いのお♡♡♡あああん♡♡パイズリしながら乳首ペロペロ気持ち良いっ♡♡♡アザゼル様あ、安里様あ♡♡ごめんなさ

いつ♥♥♥私は墮天使すら失格です♥♥♥おチンポ大好きでスケベな雌豚に調教されてオマンコとおっぱいをいじめられるのが大好きなんですよ♥♥♥」

「コラッ！自分ばかりアヘアへするな！俺のチンポも気持ちよくさせる！」

そう言つて俺はレイナーレのおっぱいに乱暴に腰を打ち据える！柔らかくて弾力のあるおっぱいとガチガチに勃起したペニスがぶつかり、先端から先走りが飛び散り、彼女の胸や顔を汚していく。

「あつはあん♥♥♥しゅごいっ♥♥♥」

だが最早そんなモノすら目に入らないのか、彼女は口から涎を垂れ流しながら俺のチンコに夢中だった。そして俺は仕上げとばかりにレイナーレのおっぱいを思い切り掴むと思いつき引き張る！

「イ、イツセー様あ♥♥♥私のおっぱいでドピュドピュってしてくださいっ♥♥♥」

このドスケベめ！そこまで言うならお望み通りしてやるぜ！俺は乱暴にそのいやらしいおっぱいに自分のペニスを押し込み、ズリユツと擦り上げるとそのまま彼女の顔面めがけて射精する。

びゅるるるっ!!どぶっどぶっ……。

凄まじい勢いで飛び出た俺の精液はレイナーレの綺麗な顔を汚した。

「あへええええ♥♥♥♥♥」

射精の感覚に涎を垂らしながら白目を剥いて悦ぶレイナーレ！普段あれだけスカした顔が下品にアへ顔になっているギャップが堪らなくエロい！俺は更に勢いをつけてザーメンを噴出し、彼女のおっぱいも顔もお腹も太股も全て白く染め上げる!!

レイナーレは歓喜に震えながら釣り上げられたカツオの如く身体をビクンビクンと震わせた。

あとは活締めつてワケじやないが、彼女のオマンコにたっぷり俺のザーメンを注いでやるぜ！

「あっ♥♥♥あああっ♥♥♥ああっ、ああああん♥♥♥」

白目を剥きながら絶頂に達するレイナーレ。そんな彼女のオマン



コからは大量の愛液が噴き出す！潮を吹きながらアへ顔を晒すレイナーレに俺は更に追撃を加えるべく、彼女に跨って淫唇へとペニスをあてがう。そしてそのまま勢いよく挿入した!!　ズプツ、グチュツ! 「おほおほおほ　♥♥♥　チンポ　♥♥♥  
チンポお　♥♥♥　赤龍帝様の雄々しいおちんぽ様素敵です　♥♥♥  
」  
絶頂に達したばかりのレイナーレは悦びながら腰を振りまくる! 俺と彼女の結合部から愛液が飛び散り、その快感に俺は溜まらず声を上げてしまう。

「何が赤龍帝様だ!俺の名前は兵藤一誠だぞっ!」

そう言つて俺は激しく腰を打ち付ける!その度にレイナーレのたわいな胸がプルンプルンと揺れ、マンコがきゅつと締まる!

「んひいひい　♥♥♥　おゆるひつ　♥　おゆるひくらしやいい　♥♥♥　まんこっ　♥　まんこ頑張つて締めましゅかりやあつ　♥　許してくらさ　♥　いいいっ　♥♥♥」

完全に快樂墮ちしてアへアへ顔を晒しながらレイナーレは謝罪する。

だが、俺はレイナーレに究極の屈伏の証を刻み込むべく、彼女の下腹部に手を添えて魔力電流を流す!

「や、やめへ　♥　何をしゆるの?　や、やめてええっ　♥♥♥　ら、卵巣が　♥　ピリピリしてりゅっ　♥♥♥　卵子生産しちゃううっ　♥♥♥　あつ、ら　♥　めっ!イグツ、イグウウウツ　♥♥♥」

ぷしやあつ　♥　下腹部から来る未知の快感に恐怖と快感を覚えて盛大に潮を噴きながら絶頂を迎えるレイナーレ。これでトドメだ!! 俺は再びペニスを勢いよく挿入してピストン運動を開始した!!

「あひいひいひい　♥♥♥　しゅごいっ　♥♥♥　おチンポしゅごい　♥　のおっ　♥♥♥　イツセー様のおちんぽに負けちゃったあ　♥♥♥　んひ　♥　いいいいいん　♥♥♥　敗北オマンコに私の卵子が種付けされて　♥　ましゅうううっ　♥♥♥　あつ、イクツ　♥　イツちゃうう　♥♥♥」

レイナーレはだらしなく舌を出して絶頂に達すると同時に俺のペニスを思い切り締め付ける!もう限界だ……!俺は彼女の中にあ

りっただけのザーメンを流し込む!! ドピユウウツ!! ドクツドクツ……。

長い射精が終わり、肉棒を抜くと俺はレイナーレを乱暴に寝転ばせて見つめる。彼女はすっかり大人しくなっており、だらしない笑顔を浮かべていた。

ふう、と一息つく俺に対し背中からセラフオール様とカテレアさんが忍び寄ってきた。

「ふふ、イツセーくんってば遂に強制孕ませまでやっちゃうなんてね☆」

「確かにこの鬼畜さと強引ぶりは安里様には足りないものですわ♥」

二人は褒めてくれていいのか貶しているのか解らない事を言いながら俺にしなだれかかってきた!二人ともなんか色々柔らかいし、エロいよ! そんな俺の視線に気が付いたのかセラフオール様が俺の耳元で囁く……。

「私達にも……して♥」

新旧四大魔王の囁きに俺の脳髓とチンポは焼け付くほどの熱を帯びていき、レイナーレにした様に二人にも屈伏の証を刻み込むことにした……。

1

「んふうっ……私を孕ませてくれたイツセー君のチンポ♥」

「ふあっ……♥ 出しても出しても治まらないミルクタンク、たっぷりと飲ませて頂きますわ♥」

「あはあ……すごい、私達全員に種付けした種馬チンポが……♥♥」

あれから何度射精したか解らない。既に三人とも絶頂に達しており、だらしなく緩みきった顔で俺のチンポや金玉、亀頭にむしゃぶりついていた。3人ともオマンコから俺がさんざん流し込んだザーメンがゴポゴポと溢れており、それがまたエロい。

「二「私は貴方の肉便器よ☆(ですう♥)二」

何と言う奇跡のハモリであろうか!!

俺の息子はまた元氣を取り戻してしまふ。

すると突然部屋の入り口辺りから声が聞こえたのだ。

「うふ、素敵ねイツセー君♥」

そこにいたのは美しすぎるほど美しいドレスを身に纏った女性の姿だった。その美貌はレイナーレ達と同格であり、一瞬誰なのか解らなかつた程だ。

「に、ニグラさん!?!」

「ええ、そうよ♥」

あ、相変わらず存在が18禁というべきな女性だ。

「あらあら、レイナーレにカテレア。イツセー君にすっかり手懐けられたみたいね。でも安心なさいな、あなた達はとても頑張ったわ」

「あひい…………♥」

「ああ…………安里様にはどうかご内密にお、お願いします…………♥」

二人は青ざめた顔でニグラさんに平身低頭する。しかしニグラさんはそんな二人の頭を優しく撫でてやる。

「うふふ、心配しないで…………私も楽しませて頂くわ♥」

そう言いながらベッドに上がり俺に身体を寄せてくるニグラさん。彼女のドレスはスケスケでその柔らかな肢体が丸見えだ! エロいぜ! 俺の胸板に豊満な乳房をむにゅんと押し付けると彼女は媚びた視線を送ってきた。そしてキスでもしよう俺の顔を掴む。

「うふふ、折角だもの♥私も屈伏させてみない? イツセーちゃんの逞しいおちんぽで私の子宮を滅茶苦茶にしたくない?」

「ニグラさんまで!?!」

俺は思わず叫んでしまった! ど、どうして!?! ニグラさんは俺みたいなエロガキなんて見向きもしないと勝手に思ってたのに…………!

安里がお世話になつている人(?)ではあるが…………!

こちらも抜かねば無作法というもの、毒を喰らわば皿まで!

『おい相棒! 前にも忠告したがその女と交わるのは危険極まりないぞ!』

前? ドライグの奴は何を言っているんだ? まるで、まえにも、

ニグラさんとエッチ、したことが、ある…………様な…………?

「さあ…………ね♥」

妖艶に微笑むと、ニグラさんは俺の唇を奪った。柔らかくも瑞々し

い彼女の唇が俺を刺激してくる！そして俺は自分でも知らないうちにその魅力的な肉体をまさぐりながら濃厚なキスを繰り返していた!! ああ……なんなんだ、この気持ちは……!!今まで感じた事のないこの感覚は……! キスだけで魂が持つていかれてしまう様な気持ちだ……!!

「はあ……っ♥イツセーちゃんの、熱くて大きなオチンポお♥♥」

そしてそのまま俺はニグラさんのオマンコにその剛直を突き入れた!なんて素晴らしいんだ!!あんなにキツキツで、それでいてドロドロに濡れていて……! ああダメだ!気持ち良すぎる!!

暖かい、心地よい、安心する……

やすらぎ、いやし、そんな思いが俺の心に染み渡り、蕩けていく……気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい、キモチイイ……♥♥

「ああっ♥すごい♥イツセーちゃんの逞しいオチンポっ、大好きいつ♥♥♥」

ああ、ニグラ様が悦んでいる……!後ろからセラフオール様の声が聞こえてくるが、もう何も聞こえない。俺達を見守るカテレアやレイナーレの姿も目に入らない。

全てが白濁し白痴と化したかの様な感覚。そして何よりも俺を支配するのは快樂への渴望! このまま永遠に彼女と繋がりに続けたいたい……! いや、それだけじゃダメだ……!彼女だけじゃない!レイナーレも、カテレアも、セラフオール様も、全ての女性を屈伏させなきゃダメだ!! もう、一人でいるのは嫌だ……誰もいない世界なんて耐えられない……!総て、続けて……!

『おい、相棒! 呑まれるんじゃないっ! クソツ!これだから光でも闇でもない混沌というものは……! ゲイト!!』

ドライグがゲイトさんと呼んだ辺りで俺の意識は途切れた。

「起きやがれ兄貴!とつくに朝だぞ!!」

萌え萌え100面子目覚しの声で俺はベッドから飛び起きた!

……ってこれは夢!?俺はあの素晴らしくも禍々しい淫夢を思い出

し思わず頭を抱える。でもさ……あれは俺の心の奥底にある願望なのかもしれないと思うとなあ……。

親友の部下や上司を屈伏させて孕ませるなんて人(?)としてダメ過ぎる……。いかんいかん!

俺の中にある悪い心を振り払うべく自らの頬つぺたをひっぱたくと、俺は洗面所で顔を洗い、身だしなみを整えるとリビングへ向かう。すると其処にはリアス、アーシア、父さん母さんだけではなくサーゼクス様やグレイフィアさん、更にはジオオティクス様やヴェネラ様までいる。さながら家族会議みたいな空気だ。

俺が困惑していると、父さんが俺の所に歩いてくる。

「父さん?」

「この……バカモンが!」

バキツ!といきなり殴られた!?

殴ったね!? 親父にもぶたれた事ないのに! いや殴ったのは父さんなんだけどさ!

あまりにも予想外な事態に俺の頭が真っ白になる!

「えっ!? ええっ!?」

殴られた頬を押さえながら俺は完全に混乱する中、更に父さんは俺の頭を押さえつけて一緒に土下座の姿勢に入った。

「この度は本当に申し訳ございませんでした! 一誠! お前も謝るんだ!!」

「えっ? な、何を!」

「何い!? まだとぼけるつもりか! 父さんはお前をそんな情けない恥知らずに育てた覚えはないぞ!」

あの優しい父さんがこんなに怒るなんて初めてだ。一体何がどうなっているんだ?

「待って下さいお義父様! イッセーは悪くありません! 何も話していない私が悪いんです!」

するとリアスが父さんを宥める様に入った。

「私が悪いんです! イッセーは優しい子ですもの……その優しさに甘えて何も話さなかった私こそ罪深いのです……」

「はあ……我が子ながら夫に対して母親になった事を明かさないでいるなんて、呆れるしかありませんね」

ヴェネラナ様が頬を抑えながら厳かにそう言い放つ。

「だ、だって初めての事だし……イツセーに嫌われたらどうしようって思ったら言い出せなくて……」

リアスはいつものエロエロクールぶりとはまるで違う年頃の女の子の表情でモジモジしていた。可愛い。

「リアスさんは可愛いなあ。コホン、とまあそういうワケだよイツセー君。君は父親になるんだ」

「イツセー様のボキャブラリーで言うとおめでたです」

お、お、おめでた……!?

ま、まさか!? リアスが!?

俺の!?子供を!?

こんな時どんな顔をすればいいんだ!?

「それで今後の話ですが……」

リアスは一度休学し、グレモリー領にて出産の準備を行うべきでしょう」

「休学!？」

じゃあその間はリアスとは別居!?!む、無理だ!俺にとってリアスは帰るべき故郷で、一番愛すべき女性なんだ!

「いやですっ!!リアスと離れたくない!!」

俺は子供の様に喚きながらリアスにしがみついた。リアスはそんな俺を優しく抱きしめてくれる。

「私も同じ気持ちよ……イツセー」

ああ……ああ……!! 今まで妄想してきた事が現実になったんだ! 神様ありがとう!俺、頑張るから!死ぬ気で幸せな家庭を築くから!!

「解らない事を言うのではありませんイツセー。貴方は将来グレモリー領のみでなく冥界をも治める事になるのです。リアスと共に学生生活を満喫したがる前に視野を広く持つ必要があります」

ヴェネラナ様が淡々と諭すように語り始めた。解るけど……理解

と納得は別の物だ。俺はリアスと学生生活を送りたいんだ！

「解りなさいイッセー」

今のあなたは学生としても赤龍帝としても中途半端なのです。仮にも魔王の血族を妻として娶るならば、それに相応しい見識を持たねばなりません」

ううっ……き、厳しい！

リアスの母親だけあり締める所は締めるスパルタンだ！ヴェネラナ様の言うことは最もだ……！でも、でも……!!

「まあまあ。ここは一つ僕に任せてくれないかな」  
するとここで渡りにノアの方舟！

さながら俺にとつての救世主の様な神々しさを放ってゲイトさんが来てくれた！何故か割烹着&三角巾を付けて炊いた赤飯を入れたおひつを抱えているけど！

相変わらず神出鬼没だな……。

リクエスト編2（サイラオーグ×クイーシャ 兵藤三  
希×兵藤五郎 ヴェネラナ×ジオテイクス サーゼ  
クス×グレイファイア）

「僕に任せてくれないか」というゲイトさんに俺達が連れて行かれたのは何の変哲もない部屋だった。

ただ、窓の外は星空しか見えない。

地面は見えないが高層にある感じもしない。一体ここは……。

「ゲイト、ここは一体どこなの？」

俺よりも先にリアスがゲイトさんにやや険しい表情で尋ねた。

無理もない。今のリアスのお腹には俺達の子供がいるのだから。

一方のゲイトさんは穏やかな笑みを浮かべている。敵意はないのは明らかではあるが、一体なぜ彼はここに連れて来たのだろうか。

「ここは精神と時のヤリ部屋だよ」

……は？ 俺とリアスはあまりにも予想外の言葉を受けて固まってしまう。ただ、ゲイトさんが冗談を言うようなタイプでないことは重々承知しているので、その言葉自体は真実なのだろう。

だが……精神と時のヤリ部屋はヒドい。もう少し何かしら名前はなかったのだろうか。

「おや？ ナイアは『こういうネーミングは分かり易い方がいい』と  
いって決めたのだけれどお気に召さなかったようだね」

「いえ、むしろ名前だけでも分かったことに感謝しています。つまり、  
この部屋では時間の流れを操作することができるとはですか？」

「うん、そうだよ。場合によってはお互いが望んだ姿や状態になるこ  
ともできる」

……相変わらずむちゃくちゃな人、もとい神様だ。

「ええと、こういう時は『あとは若者同士で楽しんでね』とでも言えば  
良いのかな？ じゃあまた」

とゲイトさんは風のように去って行った。リアスもポカンとしてい  
る。俺と同じ心境なのだろう。



「と、取り敢えず休もうか」

「そうね、イツセー」

しかし今のリアスにはお腹に赤ちゃんがいるのだからムチャは出来ない。そんなワケで……。

「何だかこうして二人きりになるのも久しぶりね」

リアスに膝枕をしてもらいながら頭を撫でてもらうことにした。

ああ……安らぐ。この安心感と幸福感は何物にも代えがたい。

「二人きりではないぞ相棒。俺とお前達の子供を忘れるとは薄情な奴等だな。まだまだ親としての自覚が足りないのではないか？」

ドライグの声がやけにはつきり聞こえてくる。というか、俺達の対角線上の壁にもたれかかるとワイルドな感じな無造作赤ロン毛のお兄さんがいるじゃないか。まさか、ドライグが擬人化したのか!?

「まあな。この空間では望んだとおりの姿になることが出来るとゲイトが言っていただろう」

ドライグは豪快に笑いながら退室していった。ドライグなりに気を使ってくれたらしい。

そして改めて二人きり、もとい3人きりになるのを実感した俺はリアスのお腹に耳を当てる様にして甘えてみる。

「うふふ、甘えん坊ねイツセー」

リアスはいやがる素振りもなくおっぱい越しからも解る聖女のような微笑みで俺の頭を撫で続けてくれる。

「俺……今、すごく幸せだ」

「うん、私もよ」

リアスが顔をおっぱいにうずめている俺の頭をぎゅつと抱き締めてくれた。お腹からはとくん、とくんと成長していくお腹の中の赤ちゃんの鼓動が聞こえる。

「幸せすぎて……怖いくらいだ。」

神様にマジで感謝します」

俺は思わずそう漏らしてしまった。リアスはそんな俺を静かに抱き締めて俺の声なき言葉を聞き取ってくれる。

「ふふ、イツセーつてば転生悪魔なのに神に感謝だなんて」

あ、あれ？神に感謝しても頭痛や動悸は起こらないのか？これもゲイトさん、ひいては精神と時のヤリ部屋の効果なのか？

「そうみたいね。ゲイトは相変わらずおたんこなすだけど、私達には想像もつかない力の使い道を見つけてくるわね」

「ホントホント」

俺はリアスの太腿やおっぱいの柔らかさを堪能しながら視線を備え付けのテレビに向ける。

「そう言えばここではテレビには何が映るんだろ？ 宇宙みたいな所だから衛星放送が映るとか？」

「ふふ、イツセーってば面白いこと考えるわね。じゃあ試しに見てみましょうか」

とリアスがテレビを付けると……。

ー

「ああっ♥凄いつ♥凄いつ♥」

どう見てもエロ動画です。

本当にありがとうございました。

リアスは固まってしまつて動けなくなっている。子供の教育に悪いとでも考えているのだろうか。

しかし……お、俺は個人的には嫌いじゃないというかむしろ大好物です！ だって金髪のお姉さんがオナニーしながらハイハイ言っているんだもの！スタイルも抜群だし！美人だし！！リアスが側にいなければ迷わずダウンロードして永久保存版のオカズにするレベルです！

しかし、ボコツとお姉さんのお腹にペニスの形が浮かび上がる。

最近のバイブは高性能だなあ、と思っていたら……。

「んひいっ♥♥♥ 修行先の禁欲おチンポ凄いつ♥♥♥サイラオーグの極太凶悪デカちゃんぽ凄いつ♥♥♥」

お姉さんはAV女優も真っ青のアへ顔と下品なセリフで快楽に溺れている。……というかサイラオーグ？

サイラオーグって……あのサイラオーグさん!?

「く、クイーシャ……!?!」

あのクイーシャがあんなに乱れて……!!」

リアスがプルプル震えている。

え？リアスの知り合いなの!?

「知り合いというかサイラオーグの『女王』よ。穴（ホール）という特殊な魔術の使い手なのだけれど……」

えーと、それはつまりサイラオーグさんとクイーシャさんはオトナの関係ってことですかあ!?

サイラオーグさんにもそういう欲求があったのか……。ある意味ホツとしたというかショックというか。

そんな俺達を差し置いて向こうはヒートアップしていく。

「イイっ♥♥♥そこ好きっ♥♥♥もつとグリグリっして♥貴方専用の穴（ホール）にもつと貴方を覚えさせてえ♥♥♥んあああああああああーっ♥♥♥♥♥♥♥♥」

ビクンと体を跳ね上げるクイーシャさん。それと同時にサイラオーグさんのモノであろう肉棒から精液が吐き出され、クイーシャさんのお腹にそれが溜って行く。

「はあ……♥はあ……♥最高お……♥♥♥ ああ……♥サイラオーグ♥私も愛している♥愛しているわ♥♥♥♥♥」

クイーシャさんの耳元に小さな亜空間の穴が見える辺りあそこからサイラオーグさんが愛の言葉を囁いていたのだろう。目にハートマークを浮かばせながら亜空間からヌツと突き出された棍棒じみたペニスに対してまるでフルートを吹くように唇を竿に押し付け始めた。お掃除フェラというやつだろうか。

「ああ、もう見ていられないわ!」

チャンネルを変えるわよ!!」

従兄弟の赤裸々な性事情を目の当たりにしていたたまれなくなったのだから。

リアスがテレビのリモコンを手にし、チャンネルを変えてしまった。

正直クイーシャさんのエロエロぶりに俺は興奮していたのだが、その興奮も一気に覚める映像が画面に現れたのだ!

映し出されたのは所謂ナイトプールみたいなところだった。問題は場所ではなくそこで盛りあっているメンバーである。

「んああっ♥♥♥あなたあ♥♥♥」

「くううっ……母さん！」

眼鏡をかけている事以外は俺と瓜二つな男とおかつぱセミロングの美女がセックスしていた。

おかつぱセミロングの美女の格好はスリングショットと呼ばれるドスケベ水着。乳首や尻穴が辛うじて隠れているだけの紐かと思われ、ほど際どい水着を着た美女は体全体を余すことなく俺そっくりの男性に晒している。そして下腹部にはいわゆる淫紋と呼ばれるハート型の模様が浮かび上がっている。

だが、俺は全く興奮しない。

いや、できない……。

なぜならば感覚で理解できた。

あの二人は精神と時のヤリ部屋の力で若返った父さんと母さんなんだと。

「イツセー、あ、あの二人はお義母様とお義父様よね……？」

「た、多分……」

恐る恐る俺は再び視線をテレビに向ける。

「ああっ♥お父さんのチンポ、私のいやらしい所を抉ってるう♥♥♥」

「母さんの中、凄く暖かいよ。締まりも良くて最高だよ……他の子の事なんて考えられない……」

ビーチチェアに寝そべった若い父さんの上で跳ねる様に若い母さんが腰を振っている。

何なんだこれは!?

どうすればいいんだ!?

「み、見ちゃ駄目だリアス！ すぐにチャンネルを変えよう！」

しかしリアスはリモコンを俺から取り上げてしまった。そしてあろうことか顔を真っ赤にしながらも食い入るように画面を見ているのだ！

「ちよ、ちよつとリアス!? なんて見てるの!？」

「だ、だって気になるんですもの……!？」

舅と姑の濡れ場だぞ?! しかしリアスは視線をそらすことなく、食い入る様に画面を見続けている。

そして、二人の側に歩み寄ってくるのはこれまた覚えのある二人の美女。グレイフィアとヴェネラナさんだ。

「ふふ、お二人共素敵ですわ。でも、まだ固さが抜けておりませんわね」

グレイフィアさんが父さんの耳元にて囁き始めた。

「グレイフィアの言う通りですわ。」

今のお二方は若返っただけではなく、三希さんはゲイト君の力で妊娠できる様になったのですもの。」

「んふうううっ ♥♥♥♥♥ お腹

お腹触らないでえっ ♥♥♥

ああっ ♥ 感じるっ ♥♥♥♥♥ 感じちやう ♥♥♥♥♥ 五郎さんの赤ちゃんミルクで私の卵巣がキョクンキョクンしちゃうのお ♥♥♥♥♥」

ヴェネラナさんが母さんの下腹部に浮かび上がった淫紋をなぞり、うっとりとした表情でその下にあるであろう卵巣の存在を感じ取るかのように擦ると母さんはビクビクと体を跳ねさせ、淫らに叫ぶ。

「うふふ、そんなに待ち遠しいのですわね。さあ、五郎さん。この中に溜ったザーメンを思いっきり出してあげて下さいまし ♥」

グレイフィアさんが父さんの金玉にそっと手を伸ばし、刺激を与えようとしたが父さんはグレイフィアさんの手首を抑え首を振る。

「す、すまないが私はいやらしい事をするのは三希だけと決めているんだ。私はこれといって才能があるワケでもない誠実さだけが取り柄の男だ。そんな男でも母さん、いや三希は愛してくれたんだ。だから私は三希が望む様に生きると決めた。私は三希を裏切るマネだけはしたくない!」

父さんはテレビ越しでも解る程に覚悟を決めた表情で言う。すると感極まった母さんは父さんに向き直り、密着騎乗位の形となる。

「ああっ ♥ 五郎さんっ ♥♥♥ 私♥私♥ 嬉しいっ ♥♥♥♥♥ 世界で一番貴方を

愛してるっ♥♥♥」

母さんが父さんの唇にむしゃぶりつく様にキスをすると父さんの目にも生気が宿った様な気がする。

「三希っ!!私もだ!私も愛している!!絶対に離さない!お前は私だけのものだっ!!」

「嬉しいっ♥嬉しいわあっ♥♥♥ 私達の愛の結晶を早く実らせて頂戴っ♥♥♥♥」

母さんの思いが通じたのか、父さんは下から母さん突き上げ始めた。二人は愛を確かめ合いながら高みへと昇りつめていく。

「イクっ♥♥♥ イツちゃう♥♥♥ 父さんのチンポでいつちやううううーっ♥♥♥♥♥」

「出すぞ三希っ!!全部受け止めるおっ!!」

父さんが母さんの膣内に射精したのだろう。母さんは幸せそうな表情で父さんの唇にキスをしながら体を震わせている。

「んっ♥んっ♥解る♥解るう♥♥♥ 五郎さんの精子が私の卵子に繋がっていく♥ああっ♥今、私……身籠ってる♥♥♥」

「三希……っ!!」

感極まった父さんと母さんは両手を恋人つなぎで固く握りしめあい、涙を流しながら愛を確かめ合う。

二人共幸せそうで息子ながら良かったと思う反面、俺はやはり複雑な思いだ。この年になって弟か妹が出来るとは……しかも俺とリアスの子供と

「ふふ、やはりお二方とも若くなられた影響でしょうか? とても情熱的に愛しあわれていらっしやいますね」

グレイフィアさんが羨ましそうに父さんと母さんを見つめている。ヴェネラナさんもウンウンと頷いている。すると二人の背後にそれぞれサーゼクス様、ジオテイクス様の両名が現れる。

「私達もそろそろいいだろう?」

「私もイツセー君の御両親の熱にあてられてしまったよ」

サーゼクス様とジオテイクス様がそれぞれグレイフィアさんとヴェネラナさんの肩を抱き、同時に唇を近づけるとグレイフィアさん

とヴェネラナさんは自ら求める様に互いの唇を重ねる。

「んちゅ……♡♡♡サーゼクスっ♡♡ちゅっ♡♡♡」

「あなたああ……ちゅっ♡♡♡」

二人は他人には絶対に見せないだろう蕩けきった表情でサーゼクス様とジオテイクス様の舌に自分の舌を絡ませていく。

「んちゅっ……♡♡♡うふふ、こうして触れ合うのも久しぶりですね？」

「ああ。だが、もつと深く繋がりたい……。こんな気持ちは初夜の時以来だな。果たしてどの位前だろうか？」

「妻に過去の話だなんて相変わらず無粋なお方。でも、そんなところがまた大好きですわ♡」

「ふふ、すまないなヴェネラナ。なにせ久しぶりだから嬉しくてね」

ジオテイクス様も若返り出す中、ヴェネラナさんの身体に変化はない。

恐らくジオテイクス様は今のヴェネラナ様が一番好きな状態なのだろう。

「あらあら、この年でまた妊娠だなんて……♡♡♡少しはしたないかも♡♡♡」

と、口では言うがリアス以上のポリウムのおっぱいでジオテイクス様のモノを挟むヴェネラナ様は明らかにジオテイクス様とのセックスを望んでいる。

「はは、そんな事を言うのはまだ早いさ。君もまだ若いのだから……」

「あん♡♡♡嬉しい……♡♡♡」

ヴェネラナ様は一旦パイズリを中断すると再びジオテイクス様のモノにしゃぶりつくると今度は自分のアソコを指で慰め始めた。

「くうっ……いきなりとは中々大胆だねヴェネラナ……！　だが、私も負けていられないよ……！」

ジオテイクス様もヴェネラナ様に負けじとその爆裂ド級おっぱいに手を伸ばし、揉み始める。

「んふっ♡♡♡良い……っ♡♡♡私のおっぱい、ジオテイクスに揉まれてどんどん大きくなってるの……っ♡♡♡」

「君の胸は素晴らしいよヴェネラナ。大きさも形も柔らかさも感触も最高だ。やはり君は最高の女だよ……」

ジオテイクス様はヴェネラナ様の胸をひとしきり揉んだ後、その先端にある乳首を口に含むと強く吸い付く。

「んあっ♥♥♥だめよジオテイクス……っ♥♥♥そんなに強くされたら私イッちやう……っ♥♥♥」

「ふふ、もうイキそうなのかい？ ならば我慢せずイクといい。君も一度くらいでは満足できないだろう？」

ジオテイクス様が乳首を甘噛みするとヴェネラナ様の身体がびくびく、と跳ね上げ、仰け反り始める。

「くうう……っ♥♥♥イ、イク……っ♥♥♥イッちやう……っ♥♥♥」

がくがく、と体を震わせるヴェネラナ様はもう限界が近いのだろう。するとジオテイクス様はニヤリと不敵な笑みを見せるとヴェネラナ様のドロドロになっていいるあそこに躊躇いなく自分のモノを突っ込んだ！

「くふううううううううーっ♥♥♥♥♥」

「ふふふ、イったばかりで敏感になっているね。とても気持ちが良いよ。このまま激しくいくぞ」

ジオテイクス様はヴェネラナ様を抱きしめながら激しく腰を振り始める。その動きに合わせてヴェネラナ様のおっぱいやお尻がぶるんぶるんと揺れまくる。

何と言う眼福か！ありがとうございます！お義父さん！お義母さん！

「ああっ♥♥♥激しすぎっ♥♥♥ジオテイクスのオチンポ激しいっ♥♥♥だめよこんなのすぐイッちやう……っ♥♥♥」

「いいじゃないか、何度もイキたまえ。今夜は私のモノで君の中を満たしつくしてあげよう」

ジオテイクス様はヴェネラナ様の耳元で甘く囁きながら更に腰を激しく動かしていく。激しいだけではなくヴェネラナ様の喘ぎや感じる様子を確認しつつ、まるでダイヤを彫刻する職人の様な精度で、かつ自分も気持ちよくなる事も忘れず、ヴェネラナ様を責めたててい



く。

これが魔王たるもののセックス……っ！

「ああっ♥ああ♥いいわ……いいわあ♥♥ジオティクスっ♥♥ジオティクスう♥♥もっ♥もっ♥もっ♥もっ♥メチャクチャにしてえ♥♥♥」

「ああ、お望み通りメチャクチャにしてあげよう。くっ……そろそろ出すよ！」

「出してっ♥♥ジオティクスのザーメンっ♥♥私の中に沢山注いでえええええーっ♥♥♥」

ジオティクス様はヴェネラナ様を抱きしめ、中に大量に射精する。そのあまりの気持ちよさにジオティクス様の腰は痙攣し、ヴェネラナ様の身体はガクガクと痙攣している。

そして結合部からは入りきらなかった精液が逆流してきている。

なんとという光景か！ 素晴らしい！ 感服いたしました！お義父さん!!お義母さん!! 尊敬の念で胸を一杯にしてその光景を見つめている中

サーゼクス様とグレイフィア様はと言うと……。

「ああ、グレイフィアお姉ちゃん……」

「うふふ♥サーゼクス様……♥」

いえ、サーゼクス♥子供の貴方は本当にミリキヤス以上の甘えん坊ね♥」

「うん……好き。僕、もっとお姉ちゃんと一緒にいたいよ……。僕の側にいて、ずっと僕の事愛して欲しい」

「ええ、勿論よ。私はあなたの妻だもの♥ずっとずっと、あなただけを愛すわ」

「グレイフィアお姉ちゃん……」

いつの間にシヨタ化しているサーゼクス様とグレイフィア様も盛り上がって

いた。

グレイフィアさんはサーゼクス様を抱きしめ、そのおっぱいにサーゼクス様の顔を押し付ける。

「うふ♥私って小さい男の子にとっても好かれちゃうの♥サーゼクス、

私のおっぱい美味しい?」

「うん……おいちい……」

サーゼクス様はグレイフィアさんの大きな胸に顔を埋めて恍惚とした表情を浮かべている。その姿は完全に母性を求める子供のそれだ。

だが、その一方でペニスは未だに隆々と屹立し、グレイフィアさんの中に入りたがっている。

「もうサーゼクスだったら♥こんなに大きくしちゃって……♥そんなに私の中に入りたいの?あふう♥」

グレイフィア様のアソコはちゅっ、ちゅっとならぬサーゼクス様の亀頭の先端が触れる度にぐちゅぐちゅ

と音をたて、サーゼクス様のモノを飲み込もうと蠢き、糸を引くまでに粘ついた蜜を垂らしている。

「うん……僕、グレイフィアお姉ちゃんが好きだよ。だから、僕のお嫁さんになって……!」

シヨタサーゼクス様がグレイフィア様に告白をするとグレイフィアさんは頬を赤らめて嬉しそうな表情を浮かべ、サーゼクス様のおでこにキスをした。

「嬉しいわサーゼクス♥勿論よ♥」

何度だつて貴方と結婚してあげるわ♥」

「ありがとう……グレイフィアお姉ちゃん♥」

まるで新婚に戻った様に二人はお互いを抱きしめあうとグレイフィアさんの姿がセクシーランジェリーとウエンディグドレスを組み合わせた様な姿に変化する。

「さあ、夫になったなら妻である私の全てを受け入れて……♥」

グレイフィアさんはサーゼクス様の上に乗ると、その巨大すぎるおっぱいでサーゼクス様のモノを挟み込み

更に文字通り、尻に敷いた。

シックスナインの体勢だ。

「ふふ、サーゼクスのオチンポをおっぱいで可愛がりながら私も気持ち良くしてもらうわね」

グレイファイアさんは腰を左右に振りながらおっぱいを上下に揺らし、更には胸だけでなく腰まで動かしてサーゼクス様を歓ばせる。

「んああっ♥サーゼクスが私のお尻♥無処理のケツしゃぶってるう♥♥♥」

グレイファイアさんはお尻をサーゼクス様にしゃぶられ、嬉しそうな嬌声を上げる。無処理、もといシユタークさんの『毛根活性札』を使つたのか脇や陰毛、果ては尻の割れ目にまでしっかりと毛が生い茂っていた。

さながら美女で野獣というべき肉欲への獰猛さと貪欲さが一目で解る。

「はあ、はあ……♥♥♥いいわあサーゼクス♥♥♥ケツ毛ごと私を愛してくれるのね♥♥♥本当の私を愛してくれるのね♥♥♥」

グレイファイアさんはサーゼクス様の愛撫に感じ入りながら、更に腰を激しく動かす。サーゼクス様の方はと言うとグレイファイアさんのお尻を舐め、その巨大な尻肉を揉みしだきつつ、両手の人差し指でグレイファイアさんのアナルをほじくり回す。

「あっ♥んあっ♥さ、サーゼクスう……っ♥♥♥そ、そこはあああんっ♥♥♥いいっ♥♥♥素敵よお♥♥♥」

「ああ、おねえちゃん……。こんなにキレイなのにお尻におけけが……。でも、僕はおねえちゃんの全部が好き。だから、僕もおねえちゃんのえっちな匂いがぶんぶんするお尻の穴、いっぱい可愛がるね」

「うんっ♥♥♥私はサーゼクスのモノよ♥♥♥貴方の好きにしているのよお♥♥♥んはあっ♥私のケツでサーゼクスが興奮してるう♥♥♥チンポ固く♥大きくなって♥♥♥私で感じてくれてるう♥♥♥あうっ♥♥♥ダメっ♥♥♥サーゼクスっ♥♥♥イグウ……っ！  
イツちやうよおっ!!♥♥♥♥♥」

「うああっ!! おねえちゃんのお尻がきゆうきゆうと僕の舌を締め付ける……!! 僕も出るよお……っ!」

二人の体はビクビクツツと震えたかと思うと噴水のようにグレイファイアさんのおっぱいの谷間からサーゼクス様の精液が噴き上がる。

「ああ♥♥♥いっぱい出たわねえ……っ♥♥♥」

グレイフィアさんの純白で大きなおっぱいだけでなくお尻にもサーゼクス様の精子がかかり、グレイフィアさんの体を白く染めていく。

「う……うう……。グレイフィアお姉ちゃんのおっぱい……♥おっぱいもっとな……♥♥♥」

「はいはい、サーゼクスったら本当に甘えん坊さんね♥♥♥でも、そんなあなたが好きよ♥♥♥」

グレイフィアさんはサーゼクス様のおねだりに応えて、おっぱいを更にサーゼクス様のペニスに押し付けるとむくむくと大きくなっていく。

復活の速さも流石はサーゼクス様である。

「ふふ、じゃあ次はこっちに挿入てくださる？」

グレイフィアさんはサーゼクス様をおっぱいから離すと、今度はサーゼクス様に向けてドスケベ丸出しな尻を振り、サーゼクス様におねだりする。

「ねえ、サーゼクスう♥夫になるなら私をお嫁さんからお母さんにしてみない？ 私、あなたの子供産むから、ね？♥」

な、何と言うフアビラスな日本語だろうか!!グレイフィアさん！貴女は素晴らしい!!

「うん。僕の子供産んでくれる？」

「ええ♥あなたの子供、何人でも産んであげるわ♥ミリキャスも兄になればきつと喜ぶわよっ」

「うん！僕、お母さん欲しい！」

「ふふっ、決まりね♥じゃあいくわ……っ♥♥♥」

グレイフィアさんはサーゼクス様のペニスを自らのアナルにあてがい、ゆつくりと腰を落としていく。そして、先端の亀頭部分が入りきると一気に奥まで腰を下ろした。

「あああああんっ♥♥♥イイっ♥♥♥やっぱりサーゼクスのペニスと私のオマンコは相性バツチリねえ……っ♥♥♥」

「くっ、グレイフィアお義姉ちゃんのきついよお……っ！でも、きもち

いい……っ！」

サーゼクス様はグレイフィアさんのオマンコに挿入した状態で腰を上下に揺らす。その刺激にグレイフィアさんも甘い声を漏らす。セックスの記憶は忘れていたが、

本能的にサーゼクス様はグレイフィア様の性感帯を責めていく。

「んあっ♥ ああんっ♥♥♥ サーゼクスったらそんなに激しくしたらダメえッ♥♥♥ ああっ♥ いいよお♥♥♥ もつと奥にい……っ！ 私の赤ちゃん部屋にサーゼクスの 赤ちゃんの種ちようだい♥♥♥」

「うんっ！ 僕、イクよっ！ 出すよっ！」

「イ、イクう……ッ♥♥♥ 私もイツちやううううっ♥♥♥」

グレイフィアさんは再び絶頂に達し、その強烈な締め付けでサーゼクス様もグレイフィアさんのアナルの中にたっぷりと精を解き放っていた。

「あはあーっ♥♥♥ 孕むっ♥ 妊娠するっ♥♥♥ お義母様の前でサーゼクスの子供孕んじやうう……っ♥♥♥」

二人ともすっっかり二人だけの世界に入っている。そしてそれは母さんと父さん、ヴェネラナ様とジオティクス様も同じだった。

「美希！ 美希い！！ 愛してるよ美希！！ 君のお尻も胸も全部私のモノだ……っ！」

「五郎さん……っ！ 私も大好きい！」

イツセーだけじゃなくて、貴方との子供がもつと、もつと欲しいの♥もつとたくさん種付けしてえ！！」

母さんはバツクの姿勢で父さんに犯されている。だが、母さんもそれが嬉しいのか自らお尻を高く上げ、父さんが突きやすいようにしている。

「んおっ♥ しゅごい♥ 赤ちゃんミルク出てるのに五郎さんのおチンポ萎えない♥♥♥ カチカチでアツアツの最強オチンポで美希のドスケベマンコ、 いっぱい可愛がってえ♥♥♥」

「ああ、たっぷりと可愛がってやるさ！ ほら、まだ締め付けてるぞ……っ！ 私のモノを離したくないってな！」

「うん♥♥♥ このオチンポ大好きい♥♥♥ だっけてえ……んっ♥♥♥ す

ごく気持ちいいんだもん♥♥私、貴方のこと大好きなお♥♥だからもつと私の中をあなたのペニスでかき混ぜてえ♥♥」

父さんと母さんの愛はお互いが疲れ果てて尚止まることはなかった。

そして、残るは俺とジオティクス様とヴェネラナ様。

「ジオティクス……私、もう我慢出来ないの……♥♥♥♥」

「ああ、私もだよヴェネラナ。私も君の愛を受け止めたい……」

ジオティクス様はそう言うどヴェネラナ様のおしりを掴み大きく左右に広げると、ヴェネラナ様のアナルに自らのペニスを宛がい一気に押し込んだ。

「ひああっ♥♥♥ お尻♥お尻の穴が広がるっ♥♥♥♥」

「ヴェネラナ、君のここも素晴らしいよ……っ！ こんなに私を締め付けて離さないとは……」

ジオティクス様は激しく腰を打ち付けながらヴェネラナ様を更に責めていく。そして、二人は体位を変えるとそのままキスをしながら互いの体を貪っていく。

「ジオティクス……好き♥大好きい♥♥だからもつとシてえ……っ！もつとお！♥♥」

「ああ、君が望む限り私は決して君を離さないよ！」

二人は獣の様な体位で交わり、やがてヴェネラナ様が絶頂に達する。

「イクっ♥♥♥イグう♥♥♥ジオティクスのオチンポでお尻ズボズボされてイッチやうう♥♥♥んはああああんっ♥♥♥♥」

ヴェネラナ様は全身を痙攣させ、その豊満なおっぱいからも母乳を噴き出させる。卑しくも美しく、淫らに。

「ふふふ、ヴェネラナ……。君は本当に美しいよ……」

ジオティクス様はそんなヴェネラナ様を愛でるように優しく口づけをし、自分の妻であるヴェネラナ様に 己の子種をアナルだけでなく、口やおっぱいにも、当然子宮にだって注いでいく。

父さんも、サーゼクス様も、ジオティクス様もとてつもない性豪だ。「さあヴェネラナ。私の妻に相応しく、美しい体で私達の家族を孕ん

「でくれ」

「はあい♥♥♥ジオテイクス……大好きよ♥♥♥」

……もう、俺も辛抱たまらん！

「リアス！愛してるぞ!!」

「ああん♥ お父様達のセックスにあてられちゃったのね♥

いいわ♥ お母様達みたいに私もメチャクチャにしてえ♥♥」

そんなワケで俺達は『精神と時のヤリ部屋』にてサバトさながらのドスケベオーケストラを繰り広げたのであった。

↓

「……煩い。我が求める静寂と赤龍帝はやはり相容れない」

虹色の大樹の下のテーブルにて

漆黒のゴスロリ少女は対面のゲイトと天使、そしてアザゼルに対して不機嫌に毒づく。彼女の名はオフィス。

無限を司るドラゴンにして、『禍の団』のトップである。

「然り。全ては既に決定されている。世界は等しく平らに、静寂（しじま）に包まれるべきだ。初めに光ありき、終わりに闇ありき」

天使もオフィスに同調する様に頷く。天使でありながら陰陽の仮面をつける様は奇抜極まりない。

二人の言葉に対してアザゼルははあく……と二人に呆れる様な長い溜息を吐く。

「つたく、ホントお前らは頑固だよな。聖書の神がいなくなっとなお陰気に拍車がかかったんじゃねえか？」

なあ、ラジエル？」

どうやら天使の名はラジエルと言うらしい。総てを識るが故に光を喪った天使であり旧大天使派のリーダーである。

「貴様達が野放図に過ぎるのだ。」

狂奔を進化と嘯き、退廃を自由と偽り、己を律さず、糺さず、悔い改める事もなく混沌を建前に他者を貶める。全ては主の……いや秩序の意思の下に統一されるべきなのだ。それこそが『滅びの未来』から世界が生き残る唯一の術なのだ」

この世の成り立ちを説く教師の様に説教するラジエルに対し、アザ

ゼルは欠伸で反応を返した。墮天使総督故、筋金入りの不良生徒である。

「いつにも増してラツパを吹くじゃねえかラジエル。ヴァーリなら『ラーメンが伸びる』ってキレだすぞ?」

「当代の白龍皇か。あの者も静寂には不要の存在だ」

「……だめっばいなこりや。ゲイト、旧大天使派はイツセー達を見てワクワクする事もねえときた」

恐らくは停戦交渉の場を設けたのだろう。だが、旧大天使派のトツプはこの通り聞く耳を持たない。

神が死して信仰を喪うどころか、

より強化されている。それは寧ろ狂気の類だろう。アザゼルはその源に警戒心を抱いていた。『滅びの未来』とやらに深く関わる『永劫に回帰するもの』とラジエルには何らかの接点があるのではないか。そしてそれはネフレンヤリゼヴィム、更にはヘパイストスも関わってくるのかもしれない。

「つたく、どいつもこいつも……」

お前ら、つくづく今の世界が嫌いなんだな。生憎、俺はこの碌でもない世界が大好きなんだな。

まあ、今日は話せて良かったわラジエル。楽しくはなかったがなあ。あのアザゼルが憎まれ口を叩く辺り元々犬猿の仲だったのだろう。アザゼルが席を立つとラジエルも霧のように姿を消す。

「キミは立ち去らないのかい?」

「我は、貴様に聞きたいことがあるからな」

ずい、とティーカップを突き出し、おかわりを催促するオーフィスの仕草は可憐な少女の見た目にふさわしく子供らしい。

「何かな?」

まるで親戚の様な気さくかつ親しげな対応で返すゲイト。その眼はオーフィスを慈しむ父親の様な印象を与える。

「何故、お前は自ら動かない?」

グレートレッドや我はともかく、あの軽薄な墮天使や不毛な大天使など貴様の本来の力であれば消すのも容易いだろう」



「それは出来ない、いや、してはならない。僕は副王であり、王ではないのだから」

「どこことなく煙に巻く様な物言いなのにゲイトの虹色の瞳は確固たる信念を感じる。」

「ふむ……。貴様の王とは兵藤一誠か？それとも九頭竜安里か？」

「おかわりを貰っても無然とした態度で尋ねるオーフィス。ゲイトはそれを穏やかに笑う。」

「そして何も答えなかった。」

「

「どうも！兵藤一誠です！」

「あれからの位の時が流れたのか……。リアスのお腹は臨月です。」

「ふふ、まさか双子だなんて思いもしなかったわねイツセー♥男の子と女の子♥」

「リアスが幸せそうにお腹を抱いて撫でてる。うん、俺もびつくりだ。」

「流石リアスと言うべきかな？」

「冥界で双子が生まれる事は滅多にないとのことだ。」

「ああ、幸せだなあ。幸せ過ぎて怖い位だ！まんじゅう怖い！」

「すっかりお腹も大きくなった様ですネリアス」

「そんな俺達の前に突如現れたのはお義母さんことヴェネラナ様だ。」

「そのお腹にはジオテイクス様との新たな子を宿しているらしく、リアスよりかは控えめだがはつきりとした膨らみがある。」

「ええ、毎日この子供がお腹を蹴るから大変よ？イツセーに似て狭い所が苦手みたいね」

「リアスは優しく愛おしそうに大きくなったお腹を撫でた。」

「そうですね。男の子ですからやんちゃな所もあるでしょう。でも、きつとこの子供も貴女に似て優しく強い子に育ちますよ」

「ヴェネラナ様もリアスに笑いかける。お義母さんはやはりいい人だなあ！」

「さて、それはそれとしてイツセーさん。貴方に大切なお話があります」

母親から元魔王の内助の功の持ち主の顔に変わる。

……ヤバい！何か怒られる気配がする！

「は、はい……っ！」

リアスが幸せそうにしているのに何で!?と怯えているとヴェネラナ様は俺に一つの話を持ちかけた。

「貴方には中級悪魔の認定試験を受けてもらいます。例年より前倒しになったと言う事で、今回は見送ろうとも考えていましたがこの部屋では他の世界と時間の流れ方が違うと聞いています。なら、受けてもらう方が良いでしょう」

な、何だってー!?

じゃあ俺はリアスと離れて、この部屋で缶詰になれと!?一体どの位!?

「そうですね。貴方次第としか今は言えません。できれば首席合格を期待していますよ」

え、ちよつと待って！駒王学園に合格した奇跡をもう一度起こせって事!?

しかも駒王学園の時と違って、

首席合格!? 一体何年勉強すればいいんだよお!?

「頑張ってねイツセー♥愛してるわ♥」

ちゆ、と口づけまでされてしまった。ううう……。こうなったら俺はやってやるぞ！そしてリアスの期待に応えてみせる！こうして俺は決意を新たに、部屋に閉じ込められる事になったのだ。

## 第90話

「大丈夫か？ ルイーナ？」

「うん、平気だよ。安里は？」

ハーゲンを倒した俺達はいよいよネフレンの居場所を探すために屋敷内を探索していた。

しかし、妙だ。ハーゲンを倒したというのに兵士の一人もやってこない。アヌビスやらセベクやら、アイツの配下はまだいる筈なのだが……。セルベリアさんやランサーさんが足止めしてくれているのか？ それにしては静かすぎるが……。いや、頭の中だけでグルグル考えても仕方ない。

今はとにかくネフレンを捜すのが先決だ。

(まさかアイツ、逃げたのか？)

十分あり得る話だ。

もしそうだとしたら、一刻も早くネフレンを見つけないといけない。だが……。

(どこにいるんだ？)

見つからない。廊下は入り組んでいて、しかも迷路のように曲がりくねっている。

部屋数も相当あるため、一つ一つ捜すのも一苦労だ。すると、その時だった。

凄まじい爆発音と共に壁がぶち抜かる。

「安里!」

ルイーナが戦く様に叫ぶが俺は何の心配もなかった。こういうド派手かつ型破りな真似をするヤツを俺は二人しか知らないし、どちらも俺の親友だからな。

「おう、無事か？」

やはりそこにいたのはイツセーとリアスさん……あと知らない人だった。色々あって他のメンバーはダウンしているらしい。

「所でその女、誰だ？」

俺はイツセーとリアスさんに尋ねるが女の人から名乗った。

「私はエルシヤ。名字はもう忘れてしまったけれど嘗ては赤龍帝と呼ばれていたものよ。イツセー君の先輩にして今は師匠というポジションだね」

さらつと言うからスルーしかけたが嘗ては赤龍帝と呼ばれていたってどういう事なんだ!?

またニグラさんかゲイトの旦那辺りが妙な力を使ったのか? いや、そんな事よりぶっ飛ばした壁の向こうには傷一つついていない頑丈な扉がある。

「あそこか」

俺とイツセーは同時に扉にタツクルをかますやあつさりと扉は吹っ飛び

奥にネフレンがいた。

「な、な、何だお前達はあ! 僕にこんな事をして……! どうなるか解っているのか!？」

相変わらずブクブクに太って、偉そうに喚いている。気持ちの悪いヤローだ。こんなヤツにルイーナやレイヴエルが汚されそうになったかと思うだけで殺意がわく。だが、コイツは何か勘違いをしているようだ。俺はそれに言っつてやる。

「どうなるつてんだ? 俺達に負けたテメーが」

「はあ!? 何をいつてるんだお前は!? そんな訳ないだろう!？」

ああ、やっぱりこいつは解つてないらしいな……。自分が誰を相手にしているのかを……いや、違うか。そもそも相手の力量を測るという知性すらないのかもなあ……このブクブク野郎にはよ!

「テメーこそ解つてないのか? この程度の扉や壁なんざ、その気になれば簡単にぶち破れるんだよ!」

俺はそう言うや否やネフレンに飛びかかり、そのまま腕を大きく振りかぶりネフレンの顔面を殴り飛ばした。

「ぶっぎやああああ!？」

ネフレンは情けない悲鳴をあげて吹っ飛ぶ。

「安里!？」

イツセーが驚く中、俺は言い放つ。

「コイツは俺のダチに手を出した。そしてお前のせいでレイヴエルとルイーナが酷い目にあいかけたんだ！ 当然だろ！許しちやおけねえ！」

「た、たしゆけ……」

この期に及んでネフレンは情けない声をあげ、尻餅をついた状態で後ずさる。こんな奴に沢山の領民が苦しめられたかと思うと本当に腹が立つ。

「今度は顔面じゃ済まないぞ」

俺はそう言うと、拳を握りしめる。ネフレンは更に情けない声をあげながら後ずさるが……逃げがさん！

「テメーのクソみてえな人生も今日で終わりだ！」

そして引導を渡すべく俺が拳を振り下ろそうとした瞬間、ぼとり、と俺の片腕が肘から落ちた。

咄嗟に痛覚を遮断して耐えようとするのとネフレンが口元をニヤリと歪めてニタニタ笑いだす。

「ぐっふふふ……。いいのかな？」

痛みつてのはキミに危険が迫っているのを示す貴重な信号なんだよお？自分に都合の悪い物を見ずにいると大変な事になっちゃうよお？」

こいつ……。説教じみた事を抜かしやがって……。だがネフレンの言う通り、ルイーナが青ざめながら叫ぶ。

「安里！ 貴方の腕が燃えてる！」

何だつて？ 俺は自分の片腕を見ると、確かに俺の腕は炎に包まれていた。燃える三眼の力よりも強力な炎だど!? そんな火力を出せるとは……!?!

「九頭龍君！」

エルシャさんが回復のオーラを腕に当てると鎮火こそしたが腕の復元の速度が酷く遅い。そんな俺の姿を見てネフレンが腹を抱えて笑いだす。

「ぐっふふふふふふふふふひひひひひひひひひひはははは!!ひひはははは!!」

ブチブチ、とネフレンが笑い転げると奴の背中が裂け、血飛沫と肉片が飛散るスプラッターな光景が広がる。しかし痛みは感じていないらしい……というよりネフレンの身体自体がデロデロに溶けてやがる……。

「うっ……」

腐った肉の臭いが広がる中、不意にエルシヤさんが俺とイツセーに視線を送る。

「気をつけて二人共。強敵よ」

「え？」

ルイーナが驚く中、急に何者かがルイーナの足首を掴み、宙吊にした。

い、いつの間に!?

「ルイーナ！」

彼女の足首を掴んで逆さ吊りにしているのは初めて見る男だ。顔立ちこそ整っているが鷹みたいな目に褐色肌、そして何より特徴的なのがその漆黒の翼の数だ。

10……いや12枚だと!?

サーゼクス様やセラフォル様と同格の12枚の羽……。

「テメエ！何者だ！ルイーナちゃんを離しやがれこの変態ヤロー！」

俺より先にイツセーが激昂するが男はイツセーを一瞥するとアイツと同じ下卑た笑い声とネットリとしたイヤミな声を放つ。

「何者だだって？ ネフレン・カ・マンモン様だよ！この間抜け共がア！」

男……ネフレンが叫ぶとルイーナの悲鳴があがる。

「痛っ！痛いよ！やめて！」

「いいとも！やめてやる！」

バキッ！と枯れ枝をへし折る様な音と共にルイーナの顔が苦悶に歪む。あの野郎！ルイーナの足首を折りやがった！

「この野郎！」

俺が激昂して殴りかかるとネフレンはルイーナを盾にするかの様に向けてくる。

「……ッ！」

駄目だ！今の俺の技じゃルイーナも危険な目にあわせちゃう！たじろいだ俺に対しネフレンはほくそ笑むと同時にスコールの様な多段の蹴りを放ってきた。百裂、いや千裂脚か！

「安里君！」

俺を守ろうとエルシャさんが前に出ようとするが、それよりも先に割り込む影があった。それは他でもないイツセーだ。

「この野郎！女の子を傷つけるなんて許せねえ！」

イツセーはネフレンの蹴りを、ケラウノスによる電磁結界を応用したバリアでガードしていた。

しかしネフレンはまるでそれが何だ？と言わんばかりな表情を見せている。

「ハハハ！ハーレム神なんぞを気取って人の女を犯した貴様が言えた義理かあ？」

「テメエエエ!!」

ルイーナへの侮辱に対して俺達は同時に叫び、同時に必殺技を叩き込む。

『ドラゴン・ラグナロク！』

『冥獄長の剛腕！』

どちらもシャルバやサタナキアをぶっ倒した技だ。倒すとまではいなくてもダメージは与えられる筈！しかしネフレンは何やら杖の様なものでイツセーの一撃をいなし、更には片腕で腕そのものになっっている俺の突撃を受け止める。

「温い温い温い温い!! 太陽神である俺がその程度の技にやられるかアア！黒陽臨界（ブラック・フレア!）」

ネフレンが喚くと同時に奴の身体からドス黒いオーラと衝撃波が放たれ、俺とイツセーの必殺の一撃が相殺されるどころか、オーラに弾かれてしまう。

「ぐわあああっ!?!」

俺とイツセーは同時に床へと叩きつけられてしまう。だがフレアとか言う割には大した火傷もダメージもない。くだらねーハツタリ

こきやがって！

「この野郎！」

俺はすぐさま反撃に移ろうとするが足がよろけてうまく立てない。クソ！きつきの攻撃で足をやられたのか？いや、足に変化はないがひどくクラクラする。まるで日射病になったかの様な……！

「まだまだあー！」

しかしイツセーはフェニックスの涙を豪快に飲み干してネフレンに挑みかかる。世界一金のかかった水分補給を躊躇わない辺り流石はイツセーだな。

だが、妙だ。いつもの『Boost！』の音声は聞こえるのに全然倍加が起こらない。

「Boost！……何でだ!?いつもみたいに倍加しねえ……ゴハツ!?」

「イツセー!?!」

イツセーがいきなり吐血し始めた！しかも赤黒い汚染された血だ！

フェニックスの涙を飲んだ筈なのになんで回復していないんだ!?

……ってあれ？お、俺の足にも変な違和感が……？

足から下の感覚がふわふわした物になるだけではなく俺の口からは血ではなく吐瀉物が出て俺は自分のゲロに倒れ込むハメになった。

「が、げえ……！」

一体どうなってるんだ!?これじゃまるで毒でも食らったみたいじゃねえ……か……?頭が酷くクラクラ……するし……。

「安里！安里!!しっかりして！」

足首を折られたルーイーナがゲロに塗れるのも構わず這いずりながら

俺の元にやってきて俺を母親さながらに庇う。何て情けないんだ俺は！

「う、うう……。くそ！毒か!?畜生！なんだってんだ一体！」

イツセーが血を吐きながら、鼻血を拭いながらもネフレンに一撃を入れるべく拳を放とうとする。



しかしその速さも威力も本来のイツセーに遠く及ばない。  
パシイツ、と乾いた音と共にネフレンの頬にイツセーの拳が当たる  
が1ミリたりともダメージは通らない。

「イツセー…どうしたの!?!いつものあなたのパワーはどこに行ったの  
!?!」

「り、リアス…!?!」

愛する女性の前で無様な真似は出来ないのはお互い様だ。

拳が無理ならば、とイツセーはケラウノスを発動させようとしたが  
……。ピクリともしない。

「な、なんだ? 一体何がどうなってる?」

ケラウノスも発動しない事に驚くイツセーだが、ネフレンはニヤニ  
ヤと笑い余裕の表情のままだ。

機械や神器にも作用する毒だなんてあり得るのか?

「クソツタレ! 立てよ俺の足イ! 根性見せろやアアア!」

俺は自分の足に力を込めるが右足は動かない。まるでコンクリー  
トで固められたかのようにビクともしない。

『これはマズいのお……。奴が放ったのは超多量の宇宙線に類似した  
毒素じゃ。耐性のない者や神器の使い手には猛毒に等しい』

あまり干渉してこないヘカトンケイルの爺さんが警告してきた  
……。つて事は相当凶悪な技つて事か!

それじゃルイーナはどうなる!?

「俺から離れるルイーナ! お前まで汚染されちまうぞ!」

俺はルイーナに叫ぶが、彼女は俺に覆い被さったままだ。

「離れない!」

「バカ野郎! 俺から離れろつてんだ!」

しかしルイーナは微笑みながら言う。

「……安里は私のヒーローだもん。私のピンチには何時だつて駆けつ  
けてくれるヒーローだもん……」

つう、と鼻から血を垂らしながらも太陽の様な笑顔でルイーナは俺  
に語りかける。

「ハハハハハ! さながら砂漠に咲く一輪の花つて所か! だが太陽

の化身である俺の前じゃカラカラに乾いて枯れるだけだな。いや、この場合デロデロに腐って生きながらゾンビになるんだがな。ハハハハハハ！」

ネフレンは醜悪な笑みを浮かべながらルイーナへと蹴りを入れた。「あぐつ!？」

足首を折られているから当然受け身が取れず、ルイーナは派手に吹っ飛び、床に叩きつけられる。

「やめろ！もうこれ以上ルイーナに手を出すな！」

「オイオイ。お前があの子に離れろって言ったんだろう。寧ろ俺に感謝すべき場面だろうが？ええ？」

クソ野郎が何か喋っている。

……殺してやる。

途端に身体が動く様になった。

恐らく蹴られた時に飛び散ったルイーナの血液の力によるものだろう。

「ほーお。あの女の力か？流石ハマーマの隠し玉なだけの事はある。だが所詮一時しのぎだな」

「関係ねえよ。一時しのげりやテメエをぶち殺せる！それで十分だ！」

言い終わるが早いか俺の拳がネフレンの頬にクリーンヒットした。「ぐ、ぬおおお!？」

顔面に強烈な一撃を貰ったネフレンが蹠踉めくがまだ足りねえ。

『いかん安里！無茶は禁物じゃ！』

先ずは解毒した後イツセーと足並みを揃えるのじゃ！」

「何悠長な事を言っているんだよメカ爺さん……。俺の答えはコレだ！」

「安里！」

「安里君!？」

「安里！」

俺の背中からコールタールみたいな汚染された血液が翼の様に噴出る。

汚染されてるなら吐き出せばいいだろうが！ 足りねえ分はイツセーの力と気合で補う！

「イツセー！頼む！」

「頼むって……何をだ？」

猛毒に侵されている所悪いが、俺はイツセーに譲渡の力を発動させる様に指示する。

「解った！やってみる！」

「ありがとよ親友！」

『Transfer!』

イツセーから莫大な力が流れてくるのを感じると同時に俺はネフレンを思いつきりぶん殴った。

「ぐうお!?」

先程と違い、今度はハッキリと手ごたえがあつた。だがそれでもネフレンは倒れない！なんてタフな野郎だ！

「調子に乗るな若造があ！」

「何年寄りみてえな事言つてんだ!?沈むのが怖いから若作りしてたのか！ 耄碌してんじやねえよクソジジイ！ 太陽だつていつか沈むんだよ！だからテメエもいつかは消える！ その終わりが今なんだよお！」

俺はネフレンの心臓を殴り、奴の顔面に蹴りをぶち込んだ。

「ぐぶあ！舐めるな小僧があ！」

永劫白夜（ホワイト・ナイト）！」

奴の全身から白いオーラが噴出され、辺りを白の世界に変えるやヤツのダメージがみるみる回復していく！

「太陽が沈むだとお!？」

その時が今だとお!?!バカがつ！

一つの星にしがみついている蟻風情が暗黒のファラオであるこのネフレン・カ・マンモンに向かってなんとという暴言を吐くかあ！ 大切断！」

その一撃は薙ぎ払いと呼ぶにはあまりにも強大無比で、俺の身体を胴から上下に両断しやがった。

「俺に逆らった報いだ！死ぬ寸前まで虫の様に地を這い回るがいい！」

「しねえよー！」

寧ろ身軽になった分コイツにパンチを多く入れられるから好都合ってもんだ。俺は汚染された血液を背中から吐き出しその勢いで頭突きをかまし、更に奴の首筋に噛み付いてやった。

「このお！血迷ったかクソ蠅が!!？」

「クソに纏わり付くのは蠅って相場が決まってんだよ！くたばれネフレンー！」

俺の歯が奴の肩に食込むと共に数多の触手が俺の身体を再び繋げ直していく。

「な、何だ!?!何だ貴様は!?!」

俺が善戦するものだからネフレンの野郎は流石に動揺し始めた。

「ざっけんじゃねえ！テメエに負けっぱなしでいられるかクソ野郎が！俺はイツセーみてえな無敵のヒーローじゃねえんだ!!だが、それでもなあ、勝たなきゃならねえ相手がいるんだよ！それがテメエってだけの話だ！燃えろお！」

『燃える三眼』の効果で発した炎はネフレンを飲み込み、辺り一面を火の海にする。

「グガアアアアアッ?!」

炎に飲み込まれたネフレンは断末魔の様な叫び声を上げてのたうち回っている。だがこれで終わる様なタマではないだろうことは『顕色』を使わなくっても解っている。

見た所イツセーは黒陽臨界の毒を克服しつつあるらしい。

側にリアス部長がついている辺り、愛の力か、あるいは部長の滅びの力が毒だけを滅ぼしたとかそんな感じか？ルイーナもエルシヤさんによって足首を治療してもらった様だ。

「やったね安里！私達でネフレンを倒すことが出来たね！」

抱きついてくれるのは嬉しいし、俺が無茶苦茶な戦法が出来たのもルイーナの血のおかげでもある。

しかし、フラグを立てるのは止めてくれないかな。

「いえ、まだよルーナ！あの男はお兄様ですら嘗ては一目置いていた存在……この程度で済む筈が無いわ！」

リアスさんの警告も最もだ。ハーゲンもアヌビスもしつこい連中だったし、そいつらの頭目であるネフレンがこの程度で終わる訳がない。

『よくもやってくれたな貴様ら！』

転生や復活も叶わぬ程にその靈魂を気化させてやる！』

吹き荒れる砂が禍々しい鬮のビジョンと化す！あれがネフレンの真の姿か！

そして砂嵐が巻き起こる。

「いけない！あの砂嵐は砂粒一つ一つがネフレンの邪悪な意思を有している！吸い込めば体内から破壊されて灰になるわ！」

エルシャさんがそう叫ぶと同時にルーナを庇ったリアス部長が砂嵐を吸い込んでしまい、大きく咳き込み始める。その口元から吐血しているのが解った。

「リアス!? テメエ！この陰険クソジジイ！堂々勝負しろや！」

「喧しい下賤の者めら！いいか良く聞け？俺は暗黒のファラオ、ネフレン・カ・マンモン様だ！この星を支配する真の王だぞ!!わかったか虫共!？」

貴様ら下等生命体は王の定める秩序に従ってこそ安寧を得られるのだ!!」

俺の安い挑発に激昂しながら次元ごと相手をぶった切る不可視の刃が飛ばしてくるのが『顕色』で解る。

あれが大切断とやらの正体か!?!「っ！」

イツセーが俺達の盾となるように

前に立ちほだかり、黄金の剣で奴の大切断を弾いた。

「さつきから黙って聞いていれば、ふざけた事ばかり言いやがって!!何が王だ！ジオテイクス様やサーゼクス様、セラフォル様の足元にも及ばないくせに無駄に年だけ食った老害が！お前がどれ程の大物だろうと、どれほどの力を持つとうとな！俺は絶対に許さねえ！」

リアスさんを傷つけられてイツセーは怒りに燃えているが怒りに

吞まれてはいない。エルシャさんのサポートもあつてか、良く立ち回っている。

「モードチェンジ！天龍の女王（ウエルシュ・ドラゴニック・クイーン）！！」

イツセーの赤龍帝の鎧が更に変化していくだけでなく髪はリアスさんの様な長髪に変わる。

「これで終わりだ！リボルクラッシュ・ライトブリンガー！！」

イツセーの手には光の刃が握られるが砂嵐に対して斬撃なんて通るのか？

「フハハハハ！愚か者めが！それでこの砂嵐を両断できると思つているのか!？」

「愚かなのは貴方の方ね。貴方は赤龍帝、いえハーレム神、兵藤一誠を甘く見すぎているわ」

エルシャさんの言う通りだ。イツセーが放つ光の刃は砂嵐をガラスへと変化させていく。恐らく光の刃による超高熱による力だろう。

目には目を。歯には歯を。太陽には太陽を。そんな所か。  
「ぐがああああつ!？ば、バカな！」

暗黒のフアラオたる俺が……!?!?こんな小僧にいいい!?!?だが、この身体ならば貴様の光なぞ反射してくれる！」

「残念ながらそうはいかないわ。  
リアス！」

なおも生き汚く悪あがきしようとするネフレンに対しエルシャさんが告げた。

するとリアスさんがありつたけの魔力を一点に収束させていく。  
「これで終わりよ!!」

まるでブラックホールの様な大魔力の塊はネフレンに直撃した。  
するとどうだ。滅びの魔力の力によるものなのかネフレンが魔力の塊に吸い込まれていく。

「な、何だこれは!?!?神魔や天使、墮天使のものでもない……!?!?  
この……力は……まさか……!?!？」

「貴方がそれ以上知る必要はないわ。『私達』はイツセーと共にあり続

けるだけよ！」

ネフレンを封じ込めた魔力の塊は炸裂。禍々しい髑髏のビジョンとなつて消滅した。

フラグを立てるなど言われるやもしれんが俺は敢えて言う。

「やったあー」と。

そしてネフレンが復活するなんて事もなく、俺達は勝利した！

↓

で、なんやかんやあつてネフレンは病死したという事になりその領土はサーゼクス様の直轄領となつた。

俺はテロリストの汚名を返上できてよかつたよかつた。

「所で、ネフレンの書斎には何かありましたか？」

グレイフィアさんとサーゼクスさんが俺達の家に見つめて来た時そんな事を聞いてきた。

「いや、何も。そんな所を探す余裕なんてありませんでしたよ。ルイーナを助ける事で頭が一杯だったもので」

事実だからなあ。

で、二人を見送つた後ランサーさんとセルベリアさんから話があるとの事で俺はルイーナと共にダイニングルームに呼ばれた。

「しかしそんなにベタベタくっついて飽きねえのか？」

「全然飽きません」

ランサーさんが呆れ半分に聞いてきたが俺は即答した。

「そうかい。若者とバカ者は紙一重……って奴か。ま、そんな話はどうでもいいんだ。それよりアイツらがさつき話していた事なんだがな」

ランサーさんは確か俺達と共にネフレン邸に乗り込んだ時に別行動をしてたな。ただそれをどうこう言うつもりはない。

「実はな、こんなモンを見つけてきた」

と言つてランサーさんが取り出したのは一冊の古びた本。

「これは……」

「異邦人の私にはこの本が何なのかは解らないがお前が持っていた方が良いと思つてな」

「俺も読んじやいないが大体の見当はつく。無知は幸福っていうからな。中身を確認するのは止めておいた」

セルベリアさんとランサーさんは俺が持っていた方がいいと判断して本を持ってきてくれていた様だ。

一体何が書いてあるかは解らないがサーゼクス様達を探しているものなら中身は見ずに返した方がいいだろう。きっとそうだ。



## 機械仕掛けの竜神と不毛なる愛憎

### ※91話（安里×ルイーナ&スコグル）

「そういやイツセーの奴はどこに行ったんだ？」

リアスさん達が大事な話があるというのには聞いていたが3日も姿を見せていない。まさかまた変な事に巻き込まれているんじゃないだろうか。

「イツセーさんなら大丈夫じゃないかな？」

「そうそう、殺したって死ぬタマじゃないでしょアイツは」

ルイーナとスコグルはそういうと微妙な空気が流れる。いや、解っているんだ……。

ハーゲンの野郎が言ったようにこの二人が俺を助けるためにイツセーに抱かれたって事はな。

仕方無かったって奴だし責めるつもりなんてない。

記憶を弄ったりなかった事にする手段もあるんだが、それはしたくない。

「なーに辛気臭い顔してんの安里！　こんな美女二人に囲まれてるのにさあー！」

スコグルは相変わらず陽気というかなんと言うか。ルイーナは……相変わらず不安そうな目で俺を見てる。我ながら情けない。

「そーいう顔してるとせっかく会いに来たのに本当に何しに来たんだか解らないわよ？　だから……元氣だしなさい！」

スコグルが突然俺に抱きついて胸を押し付けながら顔を近づけてくる。

「な、なあ、別に無理してしなくても」

「ふふふー、心配しなくていいのよ。私って、あんたもだけど、ルイーナもイツセーも結構気に入ってるから。なんだかんだいって皆に幸せになって欲しいんだ」

ふざけた調子だが目は真剣だ。俺は思わずその迫力に息を呑む。するとスコグルだけでなくルイーナも俺に抱きついてきた。

「うん、スゴグルの言う通り」

そう言つてルイーナは俺を真っ直ぐに見てくる。そしていつも怯えている目から確かな光を宿して口を開いた。

「私も同じ気持ちだよ。安里とイツセー君には幸せになつて欲しい」  
「二人共……」

正直嬉しかった。俺は誰かに必要とされているんだつて強く思つた。この二人の期待に応えたいともな。

「ふふ、すっかり二人ともいじけた心は吹き飛んだみたいね。私も安里ちゃんの保護者として一安心だよ♥」

そこにニグラさんが頬に手を当てながら安心しきつた顔で俺を見てる。ゲイトさん程ではないがこの神様も大概神出鬼没だな。

「そんな安里ちゃんとルイーナちゃんには私から特別なプレゼントをあげるわ♥ルイーナちゃんにはちよつとしたおまじないを。安里ちゃんにはこれをね♥」

「え？ な、何を……」

ニグラさんはまずルイーナの眉間につん、と手を当てた後に俺とルイーナの手を取る。

すると忽ちヒュン、と身体がどこかに飛んだ。次の瞬間には俺は別の部屋にいた。

「ここつて……」

ルイーナと俺は顔を見合わせる。

なんとというか、安宿というかボロアパートに装飾や家具を置いただけみたいな感じの部屋だ。

「うふふ、実はこの部屋は特別な術式を施してあつてね。まあ、簡単に言う時間の流れも違うし、外の世界よりゆっくり出来るわけ。

ふふふ、ここなら新婚気分でイチャつき放題よ♥それじゃごゆっくり」

「ちよ、おい、ニグラさん！」

俺の制止もむなしくニグラさんはどこかに消えてしまった。

「……………」

俺とルイーナは無言で顔を見合わせる。確かにこの部屋なら誰に

も邪魔されないしゆつくり出来るよな。

そう言えば昔はこんな感じのボロアパートに一人で住んでたんだよな。それが半年も経ってないのに激動の毎日だ。

「新婚さんだって……♥えへへ」

ルイーナは顔を真つ赤にして嬉しそうにはにかんでいる。控えめに言つて女神様だな。

「安里♥」

そして俺の名前を呼ぶやルイーナは正面から抱きついてきた。

「うわつと、どうした?」

思わずよろけそうになるがなんとか踏ん張り、ルイーナを支える。

そして俺は間近でルイーナの顔を見たんだが……すげえ綺麗な顔だな……まつ毛長いし肌が透き通るみたい綺麗だ。唇が柔らかさうで思わず吸い込まれそうさ。

「あ、あの、キスして欲しいな♥」

ああもう！　なんでこうこの娘はこうも可愛いんだ！　俺はルイーナに顔を寄せるとキスしてあげた。

「んっ♥」

唇が触れ合うとルイーナは嬉しそうに吐息を洩らした。そのまま舌を伸ばして絡めてくるので俺も舌を絡めてやる。

「ちゅ、む、ふううん♥」

舌先が擦れるたびにルイーナの息が荒くなっていく。そして俺の方も興奮し始めて股間が盛り上がってきた。

「あふう、んん……♥」

艶っぽい息を吐きながらルイーナが俺の股間に手を伸ばし布越しにさすってくる。

「おい、ルイーナ……」

「わ、私だって安里を気持ちよくさせたいもん……♥」

頬を赤らめながらルイーナは手を離そうとしない。そのままズボンを下ろし俺のモノを直接握ってくる。

「ふふ、安里の……もうこんなに硬くなってる♥♥♥」

嬉しそうな声でルイーナは軽くしごいてくる。柔らかい指先で握

られるとそれだけで出ちまいそうだ。

「うあ、ま、待った……」

「駄目♥もつと気持ち良くなつて安里♥」

ルイーナは止めるどころかより激しく手を上下させる。それがあまりにも気持ち良すぎて俺は声を抑えられなかった。

「く、ふっ……」

「ふふ♥」

俺の反応に気をよくしたルイーナは今度は亀頭の部分を指先でこねるようにしてくる。それと同時に竿の部分を上下にしごくスピードを上げてきた。いつの間にこんなテクニクを身につけたんだよ……。

「安里♥好き♥大好き♥♥」

うわごとのように眩きながらルイーナは俺の股間を愛撫する。その姿に俺の理性は限界を迎えた。

「ルイーナー」

俺はルイーナを抱き寄せると畳に押し倒した。そして衣服に手をかけると一気に脱がせた。

「きゃん♥」

可愛らしい悲鳴を上げるが抵抗はしない。むしろ協力的に動き、お互いに生まれたままの姿になった。

「安里の身体、凄く逞しいんだね。男の子らしいというか、私は好き♥」

「ルイーナの裸も綺麗だよ」

俺はそう返しつつ今度は俺の方から口づけをした。そしてそのままルイーナの胸に触れる。

「ん♥」

柔らかい胸の感触を味わいつつ乳首をつまむとルイーナの身体が震えた。反応が可愛くて何度も指先で転がす。その度にルイーナは甘い吐息を洩らした。そして絞り込む様におっぱいを握る。

「ふわああっ♥」

可愛らしい反応に興奮する。ルイーナの胸は張りがあつて、それで

いて柔らかかった。揉んでいるだけで幸せな気分になる。俺は胸から手を離すとルイーナの秘所へと移動させた。そして既に濡れている部分を指先でなぞる。

「んんっ、恥ずかしいよお♥」

ルイーナは咄嗟に股を閉じようするが俺は構わず奥へと進ませる。ルイーナのそこは熱く、そしてヌルリとした液が満ちていた。

「ルイーナのオマンコ、もうこんなに濡れてるな。お姫様なのにこんなにエッチだなんて」

「んああっ♥い、意地悪言わないでえ♥」

ルイーナは恥ずかしそうに両手で顔を覆う。

そんな姿も可愛くてますます興奮してしまう。俺は指先でルイーナのクリトリスをつまみ上げた。

「きやうん♥！」

その途端、ルイーナは身体を仰け反らせた。そのまま何度も指先でつまむとそれに合わせて身体が跳ねるように震えた。

「安里っ♥あふっ！ ふわあああっ♥♥」

更に尻の方にも俺は手を伸ばし、ゆっくり時計回りにもみしだく。ルイーナは身体を振りながらも抵抗する様子はない。

「やああっ♥安里の触り方、エッチだよ♥」

「そうかな？ ルイーナも人の事言えないと思うけど」

俺の愛撫に合わせてルイーナの膣から愛液が溢れてくる。その量はどんどん増え、俺の手やルイーナの足を汚していった。更にルイーナは目を閉じて恍惚とした表情をしていた。

「あああ♥安里の手が……♥ふわあっ♥」

ルイーナが身体を痙攣させる。そして一際大きな嬌声を上げると糸が切れた人形のように脱力してしまった。どうやら軽くイッてしまったようだ。

だがまだ終わりじゃないぜ、お姫様！ 俺は身体を起こすとルイーナの足を掴み大きく開脚させる。

「ひゃんっ！ やあっ、恥ずかしいっ♥」

しかし抵抗するそぶりは見せないで俺はそのままルイーナの股

に顔を埋めた。

「やあああん♥♥」

舌先を割れ目にそって這わすとルイーナは甘い吐息を漏らす。そしてそのまま両手の親指で膣口を広げると、小さな穴が現れた。

「これがお姫様のオマンコか……」

思わず見とれてしまうほど綺麗なピンク色をしたそれに俺は感動した。そしてじわりじわりと愚息を差し込んでいく。

「うああ……」

「くうう……」

お互い息を吐くのが精一杯な位、言葉を失う程に気持ちいい。腰を軽くよじるだけで脳がはち切れそうな程の快樂が襲ってくる。

「動くぞ……」

「うん♥」

俺はゆっくりと腰を動かし始めた。少しでも長く、ルイーナとの時間を味わう為に。ルイーナの膣は狭く、それでいて柔らかい。そして俺のモノを包み込むように形を変えてくる。

「やんっ♥あん、あんっ♥ああん♥♥安里……♥♥好き……大好きい♥♥」

「俺もだ！ 愛してる！ 絶対に離さないからな！ お前の一生は俺が貰った！ だから、俺もお前に一生を捧げる！」

「嬉しい……♥♥私の全部、安里の物にしていいよ♥」

ルイーナはそう言うのと両手両足を俺の身体に絡めてきた。俺はそのまま腰の動きを速める。限界は近い。

「ひゃうっ♥んんっ！ ふわああああっ♥♥」

「出すぞ！ ルイーナ!!」

俺は最後に一際深く腰を打ち付けるとルイーナの中で果てた。その瞬間、膣がギュツと締められ俺のモノを締め付ける。その刺激で残りの精子も全て吐き出された。

「はああん♥♥出てるう……安里の熱い精液……♥」

ルイーナは蕩けた表情で呟くとそのまま俺にキスをしてきた。舌を入れ合い、唾液を交換し合うような濃厚なディープキスだ。

「ちゅぷ、れろお♥はあ……」

「ふう……」

お互いに夢の中に浸る様な感覚だが、ルイーナの鼓動と体温は幻覚でも何でもない、現実の物だと実感できる。もっとルイーナを満たしたい。奪い合うのでは分かち合いたい。自然と俺とルイーナは静かに、けれど熱い口づけを交わした。

「安里……」

「なんだ？」

「大好き♥」

「……ああ、俺もだ」

俺達はそう言って微笑み合うと再び口づけを交わした。と、いうわけでルイーナとの初エッチは無事に終了した。俺達の初体験にしてはちよつと激しかった気もしなくはないが、ルイーナは凄く喜んでくれたから俺も大満足だ。そして……。

↓

「えへへ、新婚さんならこういうのもいいかなって」

今、ルイーナは所謂裸エプロンと呼ばれる姿で俺に朝食を用意してくれている。新婚さんの朝と言えば定番の格好だな。

「ありがとう、ルイーナ」

「あ、待って安里……そこは……」

俺は後ろからルイーナに抱きついた。そして形のいい胸を鷲掴みにする。相変わらず手に吸い付く様だ。

「あん♥もう♥まだダメだよお♥♥♥」

口では文句を言っているが本気で嫌がってはいないようだ。俺はそのままルイーナの首筋を舐め上げながらゆっくりと手を下に移動させるとスカートの中に手を入れた。

「ああん……安里のエッチい♥」

ルイーナも俺がやろうとしていることを理解しているようなのでそのまま前の方を触ると既に濡れていた。

「やだあ、朝ご飯の前にまたエッチな事しちゃってるよお♥♥♥」

シンクにしがみつくとルイーナの尻はふりふりと揺れていてとても

エロい。俺はルイーナの尻たぶを割り開き、割れ目に舌を差し込み、チロリとアナルに舌を這わせる。

「ふあああんっ♡♡や、安里い♡♡そこ、汚いからあ♡♡」

そう言いながらもルイーナは抵抗しない。むしろ俺の舌の動きに合わせて自分から腰を振っていた。

「お前の身体に汚い所なんてあるもんかよ。もしそんな事を言うやつがいたらぶっ飛ばしてやるさ」

歯が浮く様なセリフだろうが構わない。本心だからな。

「嬉しい……♡♡そんなに私の事を想ってくれてるんだ♡♡♡♡」

ルイーナは幸せそうな声で応える。その表情は見えないがきつと喜んでいると思う。だから俺もルイーナを気持ち良くさせてあげたいんだ。

俺は更に強く尻を掴みながら割れ目の中に指を入れ、上下に動かしたり膣口に指先を埋めて刺激する。

「あああんっ♡♡やあっ♡♡恥ずかしいのに♡♡エッチになっちゃう♡♡私、ああっ♡♡♡安里に♡♡いやらしい女の子にされちゃう♡♡♡♡」

「ああ、いいぞルイーナ。もっと乱れてくれ。もっと俺を感じてくれ」

「うん♡♡うん♡♡私、安里のものになりたい♡♡安里に全部あげたい♡♡だから……んんあああん♡♡♡」

ルイーナが言い終わる前に俺は背後から膣へ挿入した。朝ご飯より先にこっちの方が食べたくなったんだよ！ 許せよ!!

「やんっ♡♡きたあ♡♡安里のオチンチンが私の中に♡♡♡」

ルイーナは嬉しそうな声を上げながら尻をくねらす。俺は更に腰を動かしルイーナの膣奥を突く。

「ひやううんっ♡♡だ、ダメだよ安里っ！ 今は朝でっああん♡♡♡」

「ごめん、我慢できない！ ルイーナと愛し合いたいんだ！」

「ああああんっ♡♡♡ズルい♡♡」

真剣なカッコいい顔で私の目をまっすぐ見てそんなセリフ言うなんてえ♡♡♡そんなの、断れないよお♡♡♡」

ルイーナは泣きそうな声で懇願するが、それは逆に俺を煽る結果にしかない。



俺はルイーナの膣にピストン運動を更に激しくする。すっかり俺のチンポに順応したルイーナの中は壊れるどころかより強く締め付けてきた。

「ああっ♥♥安里っ、好きい♥♥愛してるう♥♥♥♥」

ルイーナはシンクにしがみつき、後ろから俺の動きに合わせて腰を振った。俺もそれに合わせるように何度も突いていく。その度にパンツ！ パアン!! という音がキッチンに響いた。まるでハンバークを捏ねている時みたいだ。

「あああん♥♥安里い♥♥私、もうイツちやう！ イツちやうよう♥♥」

「俺もだルイーナ!! このまま一緒に!!」

「うんっ！ 私のオマンコにいっぱい出してえ♥♥赤ちゃん孕ませてえ♥♥♥♥」

その言葉と同時に俺は思いっきりルイーナの子宮口を突き上げた。それと同時に勢いよく射精する。その瞬間、今までで一番強い快感が全身に走り、それと同時に俺のモノから大量の精液がルイーナの中へ注ぎ込まれた。

「あああああっ♥♥出てるう♥♥♥安里の熱い精液が私の中にい♥♥ああ♥♥幸せえ♥♥♥♥」

その瞬間、ルイーナも絶頂を迎えたようで身体を痙攣させ、俺のモノから一滴残らず搾り取るように膣を収縮させた。

「はああん……♥♥」

ズルリと引き抜くと俺はそのまま床に座り込む。そして呼吸を整えているとふと視線が合った。

「ふふ、凄く気持ちよかった……♥流石、安里だね♥」

「お、おう……。ありがとうな」

まだ頭がぼーつとしていた。それほどまでにルイーナとのセックスは凄かったんだ。

「でもごめんね？ セっかく作ってくれていた朝ご飯冷めちゃったよね」

申し訳なさそうに言うルイーナに俺は苦笑した。そんなの気にし

ないってのにな。

と、その時ピンポン、とチャイムが鳴った。誰だよこんな時に！

「えっ、えっ!? お、お客さん!? あわわわ……!」

裸エプロンという格好だからかルイーナはあわわあわと慌てふためく。俺はそんな彼女の肩を掴むと自分の胸に抱き寄せた。

「ひゃあんっ♥♥」

「大丈夫だ、俺に全部任せろ。お前は俺の妻なんだ、堂々としていればいいさ」

「安里……♥うん!」

俺の言葉に安心したのかルイーナは笑顔を浮かべて頷いた。そして、取り敢えず俺の上着をルイーナに羽織らせた後、応対することにした。

「どちらさんで?」

「どちらさんとは酷くない? アタシアタシ!」

誰かと思えばスコグルだった。

どうやってこの異空間にやって来たんだ?

「どうやってここへ来たんだ?」

「ん? ゲイトさんにアースガルド式交渉術で頼んだら『解ったよ』って連れてきてくれた。あ、色仕掛とかじゃないからね!」

弁解せずとも、ゲイトさんが色仕掛にかかるタイプじゃないんだよなあ。というかあの神様、性欲とかあるんだろうか? まあ、ドアの前に立たせっぱなしってのもな。

「まあいい、取り敢えず入れよ。朝ご飯の途中なんだ」

「あ! うん! お邪魔しまーす!」

スコグルは嬉しそうに靴を脱いで部屋に入ってくる。俺はその後ろを歩いて行ったのだが……。

「わお♥ルイーナってば大胆だね♥エプロン一枚なんて」

「ひゃうっ!」

俺の後ろで未だに裸エプロン状態のルイーナをスコグルは見逃さなかったようだ。というかルイーナの尻を触るな。いくら女でもその行為は許さんぞ?

「うわ、めっちゃ怖い顔してんじゃん。意外……でもないかな。情け深いっていうか執念深いっていうか」

「勝手に分析すんな。それより座れよ。腹減ってんだろ？」

「うん。ちよつと暴れたらお腹すいちやってさあ」

からから笑いながらお腹をさするスコグルに俺は少し呆れ、笑みが溢れてしまった。

おい、アースガルド式交渉術ってのは暴力で解決する事を言うのか。

まったく、美女で野獣を地でゆくとはなかなか恐ろしい。

「何か失礼な事考えてない？」

「気のせいだ」

相変わらず勘の良い奴め……。

そんなやり取りをしつつ俺はスコグルに朝ご飯を食べさせてやる事にした。まあ、俺も腹が減ってたしな。

「う〜ん！ 美味しい♥安里のご飯すつごく美味しいね！ 朝はやっぱりお米と味噌汁、そしてこの目玉焼とウインナー、口直しのザワークラウト。ついでにこの味噌汁なら毎日でも飲みたいな」

「お前ホントにワルキューレか？」

ルイーナには劣るけどな、とは言えないが褒められると悪い気はないな。ていうか素直に褒められるのは嬉しいものだな。

団欒の中、ルイーナが俺にふと質問を投げかけてきた。

「安里は料理を誰に習ったの？」

「まあ、辰郎伯父さんに少しな。」

店の手伝いとかもしててさ」

「そうなんだ。もし、よければだけど私も伯父様のお店を手伝う事つてできるかな……？」

恐る恐ると言った様子で聞いてくるルイーナに俺は腕組みする。

う〜ん……。辰郎伯父さんはあの通りの人だしなあ。料理は上手いけど頑固だし商売は下手だし。

リアスさんが前にスポンサーになろうとしても取り付く島もない態度だし取材も一切受けないし、今時写真撮影や動画撮影はさせない

し。でもタバコは好きに吸わせるんだよな。まったく変わった人なんだよ、辰郎伯父さんは。でも、ルイーナが手伝ってくれるなら正直俺も助かるな。

「頼んでみるよ。今時箱入りお嬢様なんて逆に珍しいからな」

「ありがとう安里！ えへへ、楽しみだなあ。安里のお手伝いができるなんて！」

俺の提案にルイーナは嬉しそうな笑顔を浮かべながら俺達の食器を下げ、洗い物を始めた。

「ルイーナってホントいい子だよな」

「ああ、俺の最愛の人だ」

「最愛の人ねえ〜……」

スコグルの目つきが若干じとり

とする。なんだ？ 何か気に入らないのか？

「いや〜ニグラさんにアタシに、ミッテルトにレイナーレ。後ジャンヌ、ニトクリス、キュクロにセラフォル様にかテレア。あ、エルフの子達もいたつけ。あの性悪シスターは論外としてなかなか派手にやってんじゃない？」

スコグルは俺の女性遍歴を次々に上げていく。

「うぐ。そう言われると一言もねえ。とてもイツセーやライザーにどうこう言える立場じゃねえな」

反省だけならサルでも出来るとはいうが、確かに俺もかなり浮気性だよなあ。

「別にアタシは気にしないけどね」

いや、お前の話をされてもだな……。と、その時スコグルが俺の横に座ってきた。

「たださ、少し妬けちやうかな」

「え？」

俺が驚いて顔を上げるとスコグルは俺に唇を重ねてきた。

そしてそのまま舌を入れ、激しく絡めてくる。俺の舌とスコグルの舌が絡み合い、唾液を交換し合った。やがてスコグルの方から唇を離し、俺と向かい合うように座る。

「確かに安里には沢山の恋人がいるのは解ってるよ？ でもね……少しは嫉妬するんだよ」

そう言いながら俺の上着に手をかけるとゆっくりと脱がせていく。

「それにさ、安里はアタシの恋人なんだからさ♥」

「ま、待て！ 今の俺にはルイーナがいるんだ!!」

「待たない♥というか安里は用がなくなったらはい、さようなら。なんて出来るタイプじゃないのは私もルイーナも知ってるし、そうだよね？」

「うん、でも私はそんな安里が大好き♥この世で一番貴方が好き♥」

「だってさ安里？」

俺とスコグルの攻防、いつの間にやらルイーナの援護射撃に俺は頭を抱える。過去は変えられないし、未来は誰にも解らない。なら、今をどうするかでこの先が決まってくるわけだ。

「う、うおおお!!」

俺は覚悟を決めるとスコグルの服を強引に脱がせると、纏っていたのは下着ではなくいつぞやの星条旗ビキニだ。

「あの時はちゃんと出来なかったから、今度はルイーナと一緒に楽しませて貰うぞ！」

ふたりの顔の合間に割り込ませる様に俺は勃起した男根を曝け出した。

「ああ♥安里のがこんなに大きくなって♥」

「うん……鈍器みたい♥固くて、大きくなってビクビク脈打って♥」

ふたりの湿った視線に射抜かれ、湿った吐息が龟头と男根にふりかかる。それだけで先走りが出てしまう程だ。

「あ……垂れてる。勿体無い♥」

「ふあん♥安里の大人のソーセージ、頂きますう♥」

俺のチンポにあてられたかの様に二人は頬を上気させつつ、ゆっくりと舌先を伸ばす。そしてまずはルイーナの舌が俺の龟头へと触れた。

「ちゅっ……♥安里のオチンポ凄い匂い……♥♥♥」

ルイーナはうっとりとした表情で龟头に何度もキスを繰り返すと

そのまま亀頭を口に含む。口内でカリや尿道口を舌で丹念に舐め回し、時折喉の奥まで飲み込んだりと一生懸命奉仕するルイーナの姿に思わず射精しそうになるがなんとか堪えた。

更にスコグルが唇だけで俺のチンポの雁首や裏筋、そして根元を食んだりしながら啜え込んだ。

「はあむ♥」

「おふうー!」

スコグルの口内は温かくて柔らかく、舌がまるで別の生き物の様に俺の亀頭や裏筋に絡みついてきて刺激を与える。あまりの気持ちよさに思わず声が出してしまった。

「ふふ、ルイーナ♥どっちが安里のチンポをイカせられるか競争しよう?」

「うん♥負けないんだから!」

どうやら二人の争いは勝負に発展したらしく、ルイーナが更に激しく俺のチンポをしゃぶってくる。スコグルもフェラを続けながら空いている手で金玉や尻穴といったアナルの辺りを刺激してきた。

「はあ……はあ……んむう♥」

「ああん! 安里ったら、アタシのフェラでこんなに硬くなってる♥」  
「ち、違うもん♥私だもん♥」

意地でも負けるかという気迫からかふたりが更に俺のチンポへ吸い付く。その快感たるや堪らないものがあつた。だが、ここでイってしまつては男の沽券に関わると俺は腰を引こうとしたのだが、スコグルが俺の尻に指を突っ込み前立腺を刺激してきたので身動きが取れなくなってしまう。

そしてルイーナの方も俺をイカせるために必死になっていた。喉奥まで啜え込んでジュポジュポと頭を上下させ、舌で亀頭をグリグリと刺激して尿道口を抉るように突き入れてくる。二人の美女がまるで奴隷の様に服従しながら俺のチンポに奉仕している。こんな光景を見せつけられたら我慢なんてできるはずもない。

「ぐ、おおっ……!」

唸る様に俺はルイーナの口からチンポを引き抜くと同時に二人の

顔に射精した。

「きやあつー！」

「ふああん♥」

ふたりの綺麗な顔に俺の精液がぶっかけられ、青臭い匂いが広がる。それでもふたりは嫌がるどころか嬉しそうに微笑んでいた。

「すごおい……♥こんな一杯出るなんてえ♥」

「あはっ♥まだ出てる……♥♥」

恍惚の表情を浮かべたルイーナとスコグルの顔は俺の精液でべつとりと汚されている。その姿は非常に扇情的だった。

しかし、それでもまだ満足しないのか二人は互いに目を合わせる。と、ゆっくりと二人が二枚貝のように唇を重ねる。そして、互いの舌と舌を絡めあいながら唾液を交換していった。

「んちゅ♥美味しい……安里のザーメン美味しいよお♥♥」

「ザーメンの味しかなないじゃん♥♥でも、もつと頂戴♥♥」

ふたりは唇を離すと、今度は互いにクリトリスと乳首同士を密着させて擦り合わせる。所謂、貝合わせの体勢だ。

「はああああん♥♥クリちゃんが擦れて気持ち良いよおおっ♥♥」

「ああん！ だめえ♥乳首がグリグリ潰されて感じちやうう♥♥」

二人はそれぞれの敏感な部分を擦り合わせながらビクビクと身体を痙攣させる。それでも更に快感を得ようと互いが互いに強く押し付け合い始めた。

「ああっ♥ゴメン♥ゴメンねルイーナ♥♥親友だけど♥やっぱり安里の事が忘れられないの♥ああん！ 安里い♥好き好き♥大好き♥♥」

「んんっ♥私もお♥安里を愛してるからあ♥♥だからスコグルとも仲良くしたいのっ♥♥だって同じ人を好きになっちゃいけないなんて決まりはないもんね♥♥♥」

「んああああっ！ そう！ そうだよおっ♥♥♥だからあ♥一緒に安里を愛そ♥♥ねえ、ルイーナ♥♥」

「うんっ!! スコグルと一緒に安里を愛するのおっ♥♥♥三人で幸せになるうねっ♥♥あああんっ♥♥イクううううっ!!! ♥♥」

絶頂と共に二人の股間から潮を吹き出す。さながら二人の蟠りを水に流したかの様に。なら、俺のやるべき事はただ一つだろう。

「ありがとうな、二人共」

「んん♥♥♥」

スコグルの膣内は温かく、うねりながら俺の男根を啜え込んでくる。締め付けが凄まじく、気を抜けばすぐにでも射精してしまいそう。入口は容易く侵入を許すのに、中はギチギチに締め付けてきても気持ち良かった。

「あああん♥安里のオチンポすごおい♥♥」

スコグルは自分から腰を動かし、更に快感を得ようとする。俺はそれに合わせて下から突き上げてやると、スコグルが身体を震わせながら悶えた。

「あつ♥だめっ！イクうううっ!!」

「んぐうううっ!!」

絶頂を迎えたスコグルの膣壁が今までになくうねりながら俺の射精を促してくる。それに対抗するように俺は更にスコグルの子宮口を突き上げた。

「んああああつ!!♥♥」

子宮の中に直接射精されたスコグルは快感のあまり背中を仰け反らせ、ビクンビクンと身体を痙攣させている。

「ああ、スコグル♥いま、凄くエッチな顔してるよ♥♥♥んああああつ!?!」

「ボーツとしているヒマはないぜルイーナ?」

俺はルイーナの尻を鷲掴みにすると、そのまま持ち上げてルイーナの中にならずぶと遠慮なく挿入した。

「ああああ♥♥安里のオチンポが♥また私の中にいい♥♥」

俺はルイーナの尻に何度も腰を打ち付ける。その度に尻と俺の腰、更にルイーナの身体とスコグルの身体がぶつかり合い、パンツという小気味のいい音が響く。その音すらも俺には心地良い音だと感じた。そして何より……

「ああん♥安里♥♥♥好きっ！大好きいつ!!」



「アタシもっ♥アタシも大好き♥」

ルイーナがとても嬉しそうに俺の名前を叫びながら俺にしがみ付いてくる。それに応える様に俺はルイーナとスコグルを激しく抱きしめた。

↓

「まあ……そんなワケでさ。」

ルイーナに店を手伝わせてやってくれないかな、伯父さん」

「わ、私お給料が無くても大丈夫です！ 伯父様と安里のお役に立ちたいって気持ちだけでっ！」

ヌツ、と話の途中で伯父さんが立ち上がる。俺の伯父だけあってなかなかの迫力だ。ルイーナも言葉を失いすくみ上がる。

「え？ あ、あの……？」

俺は咄嗟にルイーナを庇う様に前に出た。まさか殴ることはないだろうが「人の仕事を管めるな」とか説教されるのだろうか。

しかし、それは俺の杞憂だった。

それどころかあの伯父さんがつむじが見える位に深々と俺に向かって頭を下げてきたのだ。

「どうか、ウチのバカを末永く宜しくお願いします」

「へ？」

呆気にとられる俺とルイーナ。

まさか伯父さんがここまでしてくれるとは思ってもみなかった。

こうして、ルイーナはラヴクラフトの店員として働く事となった。

↓

精神と時のヤリ部屋で散々ルイーナとスコグルと愛し合ったためか学校に来るのも久々な感じがする。

しかし、イツセーの奴は相変わらずどこに行っただ？ まさか、アイツも精神と時のヤリ部屋でリアスさんとヤリまくっているんだろうか？ まったく羨ましくないが。

ともかく俺は教室に入ると自分の席へと向かう。そこには松田と元浜が何かを囲む様にして盛り上がっていた。

「よう、どうしたんだ？」

「フッフ、見るがいい！ この絶世の美女ふたりの無修正写真を！」  
松田が差し出す写真を見て俺は目を丸くする。その写真に写っているのは……!?

「ど、どうしたんだよこれ!？」

「フッフ、実はな……コイツは裏掲示板で知り合った裏の関係者から手に入れた貴重な写真なのだよ。今度は駅の裏路地で生本番映像を無料で譲ってくれるそうだ！ 無料だぞ!! 今年は最高のハロウィンになりそうだ！」

「おお、神よ！ 俺は今貴方の存在を確信する!! 悔い改めます！」

二人はガチ泣きしながら神に感謝していた。いや……やるなどは言わんがTPOは弁えようぜ、とかもう聖書の神様はいないぞとか言いたい事はあるが……。

目線は隠され、ザーメン塗れでピースサインをしている二人の女性……。

この二人の髪型はグレイフィアさんとロスヴァイセさんじゃないか!? いや、まさかそんな筈は……?

「全く三バカラスが首を揃えて何をしていらっしやるのやら。恥という概念は貴方方には欠落しているのかしら? 少しはイツセー様の真剣さを見習って欲しいものですわ」

「全くです……」

すると小猫ちゃんとレイヴェルから痛烈な言葉を浴びせられた。というか俺がカウントされている!?

「何だよイツセーの真剣さって?」

「はあく……貴方何もご存知ありませんのね。今、イツセー様は中級悪魔の試験を受けるために強化合宿の最中でしてよ。一切の煩惱を焼却しリアス様に相応しい殿方になるため、必死に修行中ですよ」  
「だからイツセー様の真剣さは私達にとつての希望なんです。リアス様を思う気持ちは誰にも負けない……そんな人が上級悪魔になってくれるならきつと私も……」

そ、そうなのか……。因みに松田と元浜には『リアス部長と同じ進路に進むため先んじて研修中』とか認識が弄られているので問題はな

い。

「で、何ですのこのふしだら極まりない写真は？」

「……最低」

「い、いや！ これは俺の趣味とかじゃなくてだな……」

俺は慌てて弁解するが二人の視線は冷たい。

「本当にどうしようもないですわね」

「……変態先輩」

はあ……と心底呆れた様子の小猫ちゃんとレイヴェル。あの写真が誰かのイタズラなのか本物なのか解らないが、俺に出来る事といたらこの写真の真相を確かめる位だろう。しかし、誰に相談するべきか。仕方ない……こういう時はあの人、もとい魔王に力を借りよう。

↓

「……あの子に何らかの加護が加わった様ですね。」

しかし私の千里眼に干渉できる程の神格とは。ネフレンを滅ぼした件も鑑みるに、彼等を少し甘くしていたやもしれません」

ムールムール家の居城にてハマーマは水晶に手を乗せる。氷を思わせる様に冷たい眼差しに情愛の類は見られない。

皮肉りながらもまるで地の底から沸き立つような、不毛な砂漠を現すかのようなしわがれた声がハマーマの対面にあるモノリスから響く。否、モノリスと言うよりそれは棺桶か墓標の様な雰囲気醸していた。

『それがどうした。奴は所詮古き神々の中でも木端に過ぎぬ。バアル家の与力にして片腕であるのにハーデスに与し悪神同盟の尖兵として『バアルを殺すもの』である私を復活させた貴様の用心深さには及ぶまい。『バアルを殺すもの』である故か、この棺は私に実によく馴染む』

「それは何より」

神滅具を身に纏う彼は上機嫌な様子だった。

秋になってもなお、安里たちに吹き付ける厄災の熱風は未だ冷めることはない。

## ※92話（安里×セラフオル）

「あ、あの……何故服を脱いでいるんです？」

「え？ 溜まつてるから私を呼んだんじゃないの☆なんて、溜まつてるのは私も一緒だったり？」

セラフオル様はキョトンとした顔になり、コテンと首を傾げる。魔王とは思えない位あざとく、可愛い。

「いや、俺にはルイーナがですね」

「うう、ひどいわあつくん。『オメーみてーな中古売女にはもう用はねーぜ！』なんてっ」

そんなヒドい事なんて言えるか！

それにセラフオル様は売女なんかじゃない！ 可愛いし、可憐だし！ 妹さんに対して少し愛情が深すぎるくらいはあるとは言え素晴らしい女性です。

「いやん♥あつくんが私をそんな風に想ってくれているなんてウソでも嬉しいっ♥」

「え？ 口に出てました」

「うん、はつきりとね☆」

セラフオル様は満更でもないと言わんばかりに身をくねらせ、光を纏い出した。

いつもの魔法少女姿になるのかと思いきや、駒王学園の制服姿である。

控えめに言って似合っている。

「駒王学園の制服ですか？ 良く似合ってますね」

「でしよう？」

「ええ、とつても可愛いです」

「うん♥じゃあしよつか。どうせ世継ぎを産むならあつくんの子が良いいし、ううん。もうあつくん以外とはしたくないの♥領民にはコウノトリが運んできたって事にしましょ♥」

さらつと世継ぎを産むと仰る。ソーナ会長になんて謝ろうか……。そんな俺の動揺を知ってか知らずかセラフオル様は上目遣いでウ

ルウルと瞳を潤ませる。その仕草は反則だ。俺は観念したかのように大きな溜息を吐くと、セラフオール様を抱き寄せる。ツインテールの先端がピコピコと可愛らしく揺れる。

「セラフオール様……」

「こういう時はセラフって呼んでね☆」

俺を見つめながらニコツと微笑むセラフオール様、いやセラの瞳は魔性の輝きを放っている。

セラの唇を奪うと、そのまま舌を絡ませる。

「ん……♥」

セラも俺の首に手を回し、積極的に舌を絡めてくる。

舌と唾液を交換し合いながら、セラは俺の項に手を回していた。自然と胸を揉んでしまう。

「んっ♥」

セラはビクンツと身体を跳ねさせるが、抵抗はない。寧ろ俺の愛撫に身体を委ね、自ら股を俺へと擦りつけてくる。

「んふう♥あつくくんも興奮してる？ ……ふふっ、今日は少し変わった事をしてみない？」

妖しい瞳でセラは提案する。見た目はともかく俺より遥かに年上かつ経験豊富な彼女からの提案に否と言う選択肢は俺にはなかった。

だから生唾を飲み込みながらこくこく、と頷くのがやつとだ。

「じゃ、じゃあ頼むよ。セラ」

少々凶太い気もするが俺はズボンを脱ぎ、下半身を露出させる。

「わあ♥」

セラは感嘆の声を上げると俺のモノをうつつりと眺める。その視線がこそばゆくも気持ちいい。それに変わったプレイというのは一体……？

「ううっ……!」

訝しんでいる間にセラのツインテールが俺のチンポに巻き付いていく。

しかも一本一本がそれぞれ意思を持っているかの如く、さわさわと蠢き刺激してくる。チクチクするが痛気持ちいい、というのか独特の

快感に俺はノックアウト寸前だ。

「うふふ☆ルーちゃん達じゃこういうプレイはできないでしょ？ 遠慮しないで私の髪をティッシュ代わりに行っていていいからね？」

セラは慈愛に満ちた微笑みを浮かべると、髪を擦るようにして俺のモノを愛撫する。

「おふっ！」

思わず情けない声が漏れる。それに気を良くしたセラはツインテールで俺のモノを扱き出した。

「あ、ああっ！」

髪に巻き付かれ扱かれる感覚に思わず俺はベッドに尻餅をついて仰け反ってしまう。

「うん？ あつくくん、こういうのは好き？」

髪をシゴク事によって生まれる凄まじい快感に俺は情けない声を上げる。セラは俺の反応を見てツインテールの扱い方を心得たのか、緩急を付けながら俺のモノを上下に擦る。

「くうっ！ せ、セラっ！」

「うふん♥じゃあこんなのはどうかなあ？」

シコシコシコ……。

そのまま勢いよく髪をスライドさせ始める。更に先走り汁に滑りだしたセラの髪はオナホのように俺のモノにフィットし、絶妙な快楽を与えてくる。

「がっ！ くううう！」

俺は歯を食い縛りながら喘ぐ事しか出来ない。セラの髪コキはどんどんスピードを上げていく。

「あっ♥あああんっ♥」

しかし、セラ自身も感じ始めているようで彼女も次第に顔を赤らめ身悶える。ツインテールで俺のモノを扱きながら時折自分の秘所を弄り始めた。

「ああん♥あつくくんのチンポ♥素敵よお♥」

髪をシゴきながら己の秘所を弄るセラの痴態は俺すら興奮させる。俺のモノも更に勃起し、はち切れんばかりに膨張している。

「うおっ……もう、出る！」

「あはっ♥出してっ♥私の顔に思いつきりぷりっぷりの赤ちゃんミルクをぶっかけてえ♥」

「お、おおっ！」

どぴゅうう!! セラの顔目掛け俺は盛大に射精する。丁度よいタイミングで髪が離れ、勢いよく噴射された精液はセラの顔にびちゃつと掛かり、更にツインテールで扱っていたモノから放たれた精子がセラの顔や胸、制服にまで掛かる。

「あはっ♥あつくんの赤ちゃん汁でマーキングされてる♥お前は俺のオンナだぞってえ♥うんっ♥いいよお♥私があつくんの女なお♥」恍惚の笑みを浮かべ、セラは自ら制服を脱いでいき、仰向けに寝そべるとM字に脚を開いて見せつけるように秘所を自ら弄り始めた。

「あつくん♥この格好を見てえ♥私のいやらしい姿みて興奮してええ♥」

指で弄くる度にくちゅくちゅといやらしい音を奏でる秘所を見せつけるように腰を振りながら喘ぐセラの姿は俺に更なる興奮を与えてくる。

俺は腰を上げると、無言でセラに覆い被さる。

「あん♥」

秘所から指を離し、セラは俺を迎え入れるかのように両手を広げる。俺は導かれるようにセラの唇を奪うと、そのまま腰をずぶりと沈めていく。

「あっ♥あんんんんっ♥♥♥♥」

セラも待ち望んでいたのか俺のモノをすんなりと受け入れた。ふわふわかつトロトロに蕩けたセラの肉壺はルイーナやスコグルとは違った締め付けで俺を絶頂へと導こうとしてくる。

「ぐっ！ぬおおっ！」

思わず声が漏れる。俺は我慢ができなくなり、激しく腰を前後させる。

「うんっ♥いいわあ♥あつくんのオチンチンとつてもいいよお♥もつと♥もつと突いてえ♥私のマンコ♥メチャクチャにしてえっ♥」

俺のモノで肉壁をゴリゴリ抉られ、その度にセラは快樂に打ち震えるかのように身体を震わせながら悦びの声を上げ、よがり狂いながらはしたなくおねだりをしてくる。

「う、おおっー!」

俺はセラのおねだりに応え、体勢をバツクに変えつつセラのツインテールを手綱のように掴むと一気に腰を加速させる。

「ああああんっ♥しゅーいよお♥あつくんたら激しすぎいつ♥でも気持ちいいのおおお♥♥♥♥」

髪を引つ張りながら乱暴にセラの膣を突きまくる。セラは髪を手綱のように引つ張られ、強引に犯される事に対して興奮するのか先程よりも大きな嬌声をあげた。

「くう……! 魔王なのに転生悪魔でもない俺にバツクから犯されて興奮するなんて……恥ずかしくないのか!」

「あああっ♥言わないで♥言わないでえ♥だって♥だってしょうがないんだもん♥♥♥本能があつくんのオチンチンを欲してるのぉ♥♥♥」

髪を手綱のように引かれながら犯される事にセラは酔いしれ、ツインテールが引つ張られる度に膣壁がキュツと締まる。

「こんな姿見たらソーナ会長なんてどう思うだろうな?」

「い、いやあ♥言わないでえっ♥あの子にこんな姿みられたら私、ソーナちゃんに嫌われちゃうっ♥」

番組じゃないプライベートの本気セックス♥♥♥

イヤイヤ、と首を振って汗を振り乱してそう言いながらもセラの腰と尻は激しく上下しており、もつと、もつとと言わんばかりに絶頂を求めてくる。

「ああ、イク♥イキそう♥♥♥」

お願いあつくん♥そのまま中に♥♥♥

おねだりされなくてもそのつもりだが、セラを更に快樂天国に導くため俺はダメ押しとばかりにセラの髪を引つ張り上げ、一気に腰を加速させ吠える様に大声を出す。

「なら会長に謝れ! 魔王のくせに会長のクラスメイトのチンポに負



「けちやいましたってな！」

「くっ♡♡♡」

セラは顔を真っ赤にし、目尻に涙を湛えながら首を何度も縦に振り、

自ら敗北宣言を始めた。

「ううっ♡うううっ♡♡♡ゴメンねソーナちゃん♡わ、私はあつくんのオチンチンに負けました♡♡♡魔王のくせにあつくんの逞しいオチンチンにメチャクチャにされて♡♡♡最後は自分からおねだりして中出しアクメしてしまうでしょうもない淫乱魔王なおっ♡♡♡」

「うおおおー！」

セラの告白に触発された俺はラストスパートをかけ、セラの子宮口を貫き、たつぷりと精液を吐き出した。

「ああんっ！ イクっ！ イッちゃうう♡♡♡♡♡」

どびゆるるるる!! どぶぶっ！ ごぼっ……ごぼっ……♡♡♡

ツインテールを手綱のように掴んでいた手を放すと、そのままベッドに倒れ込む。繋がったまま寝転がる形となり、俺はセラを優しく抱きながらツインテールを放す。

「ああん♡」

絶頂の余韻に浸り、身体を痙攣させるセラの頭をそつと撫でると、甘えるかのように俺にしな垂れかかって来る。

「はあ……これ、クセになりそう♡ソーナちゃんに謝りながら、あつくんに中出しされるのって凄く興奮するの……♡」

「ははは、普通のエッチじゃ満足できない身体になっちゃったんじゃないですか?」

「うん。だから責任取ってね♡あつくんの事、愛しているわ♡合同結婚式はいつにしよつか?」

セラはそう言う俺の首に腕を回して抱きついてきた。何か調子に乗ってヤバイ扉を開きかけているような気がする。

「合同って言うのは匙と会長、俺とセラフォル様とですか?」

「匙? 誰それ? 私、ソーナちゃんから何も聞いてないわよ」

声のトーンがいつもと違う！ 更に目からハイライトが消えている!?!

匙とソーナ会長との事はタブーだったらしい!

「と、言うのは冗談でルイーナとの事ですよね?」

「そうそう☆ホントは私が正妻になった方がいいんだけど、あつくんはルーちゃんが一番好きだもんね? ルーちゃんを正妻にして、私は側妻♥でもその代わりこれ以上結婚しちゃ駄目だからね☆」

「は、はあ……」

冗談なのか本気なのかわからない。

しかしセラフオルー様は冗談は言うが嘘は言わない。

「えっと……所で今日、セラフオルー様に来てもらったのはですね。この写真について相談したいなと思ひまして……」

俺はポケットから一枚の写真を取り出す。そこには目線は隠れているがベッドで乱れているグレイフィアさんとロスヴァイセさんの姿が映し出されている。

「ん? なにこれ?」

セラフオルー様は首を傾げながらまじまじと写真を観察する。やがて何かに納得したかのように頷く。

「ああ、これね。確か冥界のアングラサイトで今話題になっている画像よね。この写真が出回ってから匿名の書き込みがあちこちであるのよ。」

『グレイフィア・ルキフグスは夫に満足出来ない淫乱女』とか『私娼窟に自ら志願して何度も足を運んでいる』とか『ミリキヤスはグレイフィアが不倫して孕んだからサーゼクスと血が繋がっていない』とかね」

「何スカそれは! デタラメな中傷記事もいいところじゃないスカ!」

「そうよねえ。私もそう思うんだけど、冥界って娯楽に乏しいからこの手のゴシップネタはあつという間に広まっちゃうのよ☆」

まあ、私はサーゼクスちゃん以外の誰かがグレイフィアちゃんを孕ませた……つまり不倫したなんて信じてないわ。あの子の真面目さ

は私が一番良く知ってるし☆」

俺の頭を撫でつつ胸の谷間に導く。俺は誘われるがまま、セラフオル様の胸に顔を埋めた。

「そんなに気になるなら、噂の真相確かめてみる？ 多分これが撮られたのは冥界の娼婦街だから潜入捜査、やってみる？」

「はい！」

俺は即座に承諾するとセラフオル様の胸の中でうとうとと微睡んだ。

ー

そして週末。

冥界の色街であるソドムに俺、セラフオル様、イツセー、そして煉獄さんの四人でやって来た。

「はー……ほおー……」

イツセーは中級悪魔試験の受験勉強の息抜きという事で時間制限つきながらやってきた。色街という事で既に鼻息が荒く、キョロキョロしながら鼻の下を伸ばしている。なんか案内図まで持っているし。全く仕方ねえなあ。

「どうしたイツセー！ 色街がそんなに珍しいか!？」

煉獄さんは相変わらず声が大きい。

確か煉獄さんが生きていた時代には吉原とか飛騨新地とかもあつたし。

「うっす！ こう、何かエロい匂いというかオーラが充満してて頭がクラクラするツス！」

確かに……色街というだけあって、人間の生々しさを催した色んな匂いが入り交じって何とも言えない気分になってくる。

「安里！ 顔色が悪いがこういう所は苦手か!？」

「はい。あまり」

「そうか！ 俺も得意ではない！」

いや、そんなきつぱりと言い切られてもなあ。相変わらず竹を割ったような性格だよ。

「それで、まずは顔役に挨拶に行くのだろうセラフオル殿！ 案内

を頼む！」

「うん☆じゃあ行くこうか。みんな付いてきて」

俺達が向かったのは逆三角錐のタワーの最上階。所謂VIPルームと呼ばれる場所だ。そこで待っていたのは馬面……というか馬そのものの顔をした金ピカスーツと指に何個もの指輪をしている厳つい壮年の男性。

その横にはグレイフィアさんと同じ銀髪でマスクをつけた男がいた。所謂秘書兼護衛というヤツだろう。

しかしまあ……趣味の良くない身なりと部屋だな。赤と金が目立つ部屋でちつとも落ち着かねえ。

「これはこれはセラフオール様！」

こんな所にわざわざお越し下さるとは……ささっ！ こちらに座ってください」

金ピカ男が促す先にはこれまた趣味の悪い朱のソファ。そしてテーブルが置かれている。

「ありがと☆じゃあ失礼するわね☆」

セラフオール様は慣れた様子でソファに腰掛けると、俺とイツセーは左右に座る。煉獄さんは座らずにそのまま仁王立ちだ。

「座らないのですか？」

「お気遣いは無用だ！ 何があっても万全な様に備えるのが護衛というものだからな！」

煉獄さん！ 物言いがストレートすぎる！ それじゃ『私はお前らを疑ってますよ』って言っている様なモノじゃんか!!

「ほほう。サムライ……というモノですか？ 常在戦場というか……いやはや、素晴らしい！」

だがギレルは煉獄さんの態度に気を悪くするどころか上機嫌で自らグラスに酒を注ぎ、勧めてきた。

「すまんが、故あって俺は酒を断つと決めているので応じかねる！」

「ははは、それは残念」

ギレルは口ではそういうが目は笑っていない。コイツ、相当悪どいな。

「ぶはっ……☆今日はちよつとお願いがあつて来たの☆それで私より偉い人に挨拶した方が良いかなと思つて☆」

「はははこれは御冗談を。私など四大魔王であるセラフオルー様に比べれば馬車馬同然の男ですぞ」

「またまた、ご謙遜☆」

煉獄さんが断つたグラスを代わりにイツキに飲み干してセラフオルー様はギレルと探り合うように言葉を交わす。

「してセラフオルー殿。お願いとは？」

「うん☆実はね、この写真の女の子が今どこにいるか知りたくて☆」

セラフオルー様はグレイフィアさん、ロスヴァイセさんと思しき人物の写っている写真を取り出した。

「うゝむ……これは。噂には聞いておりましたがグレイフィア様がこの様なご乱行に耽るなどとは」

ギレルは噂を信じているらしく、明らかにグレイフィアさんを侮蔑したような言い方をする。何だこの野郎。やっぱり反社じゃねえか！

「その写真はつい最近撮られたものでしてな。確か、ここに写っている女達が働いていた娼館にグレイフィア様が自ら足を運んでいたという話をチラホラと聞いております」

「その話、信じてます？」

セラフオルー様の静かな口ぶりにギレルはむきつ、と齒を剥き出しにして笑った。

「返答はできませんな」

「じゃあ、この写真に写っている二人の少女なのですが……一体どこ誰だか知りませんか？」

「残念ながら私は存じません。」

なにせこのソドムにはワケあり美女の類は星の数ほどおりますからな」

セラフオルー様の問いかけをギレルは冷たくあしらひ、更にはぶひん、と馬らしい鳴き声を上げる。

「そう。じゃあ、私達がこの子を探す事には反対しないという事ね☆」

「それは勿論。この街は対価を払う限り誰もがお客様ですから。お客様の趣味嗜好に口出しをする権利は我々にはありません」

「そう、じゃあ他の従業員にも聞いてみますね☆」

「ギレル様。そろそろお時間が……」

それまで黙っていた秘書の男が腕時計を見ながらそう言った。

「うん、じゃあ今日はこのくらいにしておきましょうか☆次に来た時は何か手がかりになるような事を教えてくれると嬉しいな☆」

「それは構いませんが……一先ず我が娼婦街でお楽しみ頂きたい。浮世の垢を洗い流し、明日への鋭気を養ってからでも遅くはありませんまい?」

「うん☆そうだね☆じゃあそうしようかな」

何が浮世の垢を流してくださいだよ。ドブの塊みてえな馬ヤローが。セラフオール様が立ち上がり、俺達もそれに続いた。

ー

「はあく☆油でギットギットのラーメンスープに浸かっていた感じね」  
帰りのエレベーターにてセラフオール様は開口一番にそう言った。  
馬なのにブタ野郎ってか。ははは。セラフオール様もなかなか言うな!

「俺も同感です! アイツ、グレイファイアさんをビッチ扱いしやがった! グレイファイアさんはそんな人じゃないってのに!」

イツセーは鼻息荒くギレルへの憤りを口にする。女性への悪口、それも義姉になる人に対してビッチ呼ばわりされたらそりや怒るわな。

そういう所は変わらなくてホツとしたよ、俺は。

「しかし、妙だな。ギレルとやらがグレイファイア殿の事を侮辱した時、あのマスクの青年から怒気の様なものを感じた」

煉獄さんは顎に手を当て、思案を巡らす様な仕草を見せた。

「怒気……ですか?」

「うむ! あの男が一瞬見せたあの眼光から憤怒の気を感じた!」

「多分……その子、グレイファイアちゃんの事が好きなんじゃないかな☆」

セラフオール様はブランデー色の氷を床にポイと捨てながら推測

した。ギレルの勧めた酒を飲んだふりをしつつ凍らせ、袖に隠していたんだ。色々と流石だな。

しかし、このただ広い色街の中でどうやって写真の二人を見つけるか……。やはり、地道に聞き込み調査をするしかあるまいか……。

1

「いやー、ダメっすね。平均ランクの売春宿はあらかじめ当たりましたが、二人の外見的特徴が一致する女はいないっす。まじぴえん」

ミッテルトとレイナーレ、あとカテレアに命じて先にあちこち聞いてもらったが収穫はゼロだった。

「そうか。すまなかったな3人共」

俺は3人に無茶振りした事を詫びた。

「いやいや、こういうのは安里様の部下のウチらの仕事ツスから！」

「そういう事です。お気になさらず。ですがどうしても言うならば私達に休憩を与えてくださると……♡」

カテレアが安宿、というクラブホの看板に艶っぽい視線を送り、ミッテルトとレイナーレも同調するかの様にくねくねと俺にひつついてくる。

「ば、バカ！ 人前だぞ！ 増してセラフオール様の前だぞ!!」

「だからツスよ！ ウチら、安里様にもっと可愛がって欲しいのに♡」

「そうです。この火照った体を鎮めてくださるまで私達、寝ませんから♡」

ミッテルトとレイナーレは俺の手を取ると自分の胸に導いた。ふにゆん、と服の上からでもわかる柔らかい感触。

「あら？ あらあら？ あつくんてばミッテルトちゃんとレイナーレちゃんのおっぱいをモミモミしてるっ！」

「ちよー！ ち、違うんです！ この2人が勝手に……あー！」

俺は慌てて二人の手を振り払うが時既に遅し。

「取り敢えず今日の調査はここまでにしましょうか☆煉くん。私、ホストクラブに一回行ってみたいの！」

「ホストクラブ？ よくわからんが今日の俺は貴方の護衛だからな！」

「随伴しよう！」

スタスタとセラフオール様は足早に去って行ってしまった。怒らせちゃったかな……。

「い、イツセー！ 何とかしてくれ！」

俺はつい親友に助けを求めたがそれがいけなかった。イツセーは涙目で袖を噛んでいた。く、悔しがり過ぎだろ！ お前だって家に帰ればリアスさんやアーシアちゃんが待つてるだろうが！

「安里……お前だけいい思いしやがって!!」

イツセーは憎悪の炎を滾らせながらそう叫び、裏路地へと走り去っていく。お、おい！ 何処行くんだよ!?

↓

く、クソツ!! 安里の奴め！ 禁欲生活の只中にある俺に見せつけるように女の子を侍らせやがって!!

見損なったぞ!! 悔しくなんか！

悔しくなんか！ 無いからなあ！

『全く、隣の芝は何とやらか。相棒、お前だって家に帰れば選り取り見取りだろうが』

よそはよそ！ うちはうち！

理解する事と納得する事は別！

『……難儀な男だな』

しかし、涙目で闇雲に走ってきたからか妙な所に来てしまった。案内図にはない所だしメチャメチャアングラな匂いがしてくる。

「おい、お前。見ねえ顔だな」

む……？ 誰だ？ 俺は声のした方を振り返る。そこにはスーツ姿のホストみたいなチンピラがいた。

「お前も新入りか？ まあ、誰でもいいさ。取り敢えず金持ってそうだな……オイ！ ちよつと付いてこい！」

男は俺の腕を掴み強引に薄暗い路地裏へと引っ張るとやっぱりそこには屈強なおーク二人組

がいて、俺はあれよあれよと路地裏に引っ張り込まれる。

「なあお兄ちゃん。ここは俺達のシマなワケ。ここを通るには通行料



「がいるんだよ？ 解る？」

ホスト崩れはジャックナイフを取り出してなめすする。うわ、マンガ以外じゃ初めて見た！

「オイオイオイ、何ニヤニヤしてんだ？ テメーこの状況解ってんのか？ アア!!」

「あー、ゴメンゴメン。俺、この辺初めてでき。通行料って幾ら必要なの？ 俺の拳でいい？」

……数分後。

「す、すびばせんでひた……」

3人は鼻血を出し、すきつ歯になりながら俺に土下座していた。なんか八つ当たりしているみたいで嫌な気分だな。

「いや、財布は出さなくてもいいよ。それよりこの写真の二人、知らない？」

俺は3人にさっきの写真を見せる。

「あ、ああ！ その二人なら知ってるぜ！」

「マジかよ！ 何処いるの!? 教えて!!」

俺は思わずホスト崩れの肩を掴み、揺すってしまった。

「は、はいっ！ でもここは曰く付きなんで……少しいてきてくださいー！」

ホストとはある雑居ビルの地下駐車場まで俺を案内した。『立ち入り禁止』の虎柄のテープをひよいと跨ぎ中に入ると……。

「ん……あ、ああ……」

「くう……う、うう……」

バーベキュー用のコンロを明かりにして二人の目隠しと猿轡をされた女性が男たちに輪姦されている惨状だった。

な、何だよこれ!?

こんな事が、許されていいのか!

「あ、あれは一口馬主のパーティーッス」

一口馬主!? 何いってんだコイツ!

俺は思わずホスト崩れの胸元を締め上げ絞り上げてしまう。

『落ち着け相棒。その男は事情を知っているだけの使い走りだ。ま

あ、大方想像は付くが』

ドライグ！ どういう事だ!!

『恐らく共同購入した性奴隷をここで調教してオーナーにレンタルしているのだろう。馬だから人ではない、というのが奴らの言い分だろう』

何冷静に説明口調してんだよ！

『落ち着け相棒。こんな奴らにお前が熱くなっていてどうする。ここで騒いでも始まらんぞ』

く、クソ!! 俺は怒りを静めるべく深呼吸してホスト崩れを離れた。

改めて女性二人の姿を確認すると、写真に写っている二人だ。

まさか、グレイフィアさんとロスヴァイセさんは本当に……？

いや、良く見たら違う。

あの写真は加工されていたのかロスヴァイセさんに見えた子の髪型は少し違うし、グレイフィアさんにそっくりな子もおっぱいが少しグレイフィアさんより小さいし、黒子がある。なんだ……ただの他人の空似か。

だけど、だけどな。

乳語翻訳のスキルを使わなくても俺には解る。

『私達は奴隷じゃない』

『無理矢理犯されて悦ぶ趣味はない』

『誰でもいいから私達を助けて』

って、彼女達の心が叫んでいる。

「お前ら……！ こんな事して！ 許されると思ってたのか！」

俺は思わず犯していたクズに叫んでしまった。

「うるせえ！ テメーもコイツらを好きにしたかったのか!? あ!？」

「一緒にすんな！ この、クソ野郎共が!!」

俺は躊躇いなく赤龍帝の鎧を発動させた。こんな人未満のケダモノ達を放っておくなんて俺にはできない！

「うおっ!? な、何だテメー!？」

「俺は今最高に機嫌が悪いんだ!! 後悔すんなよ!!」

相手がどこの誰だろうと関係ない！俺は女の子のおっぱいと笑顔のために戦う！赤龍帝の兵藤一誠だ！！

『やれやれ、あんなクズ共でも死なない程度に倍化を加減するのは俺でも骨が折れるんだぞ？』

「わ、悪い……」

流石に肉塊にはしなかったが奴等は手足、或は鼻を俺に折られて散り散りバラバラに逃げていった。

しかし、気持ちは全然晴れない。

寧ろ先程までの怒りは何処かへ消え、俺の中にはやり場のない無力感だけが残った。

けど、そんな事は犯され、傷つけられ続けたこの二人には関係ない。

「大丈夫ですか？今拘束を解きますね」

俺はせめてもの罪滅ぼしに目隠しと猿轡を外してあげた。すると、

「ひっ……！許して！許してください！」

「あ、貴方には逆らいません！どんな罰でも受けます！だから、だから!!」

二人は震えて怯えた表情で俺に懇願してきている。これはハーレム神を目指す俺には相当堪えた。俺は何も言う事なくその場を立ち去ろうとする。

「ま、待ってください！……行っちゃうんですか？」

「もう、私達には価値が無いんですか？どんな仕打ちでも受けます！だからどうか私達メスブタ一号と二号をおチンポ様で犯してください!!」

「お願いします！どうか私達を、メスブタをおチンポ様の奴隷にしてください!!」

二人は自らガバツと股を開いて俺の許可を待つ。俺はそんな二人の姿に欲情する事なく罪悪感だけが募り、土下座した。

「ゴメン！ゴメンよ！」

こんなヒドい目にあわされたのに男を許してくれなんて言えないけど！本当にゴメンよ！」

そうか。俺が覗きやら猥談やらで女の子が嫌がっているのを何だコイツらなんて想っていたけど、それはこの子達と同じ位皆を傷つけてたのか。

「君達を救えなくてゴメン！　ただ、一つだけ言いたいんだ！　俺は、君達の笑顔が大好きだ！　だから笑ってほしい!!　今まで不幸だった分、これから幸せにならないといけないんだから！」

それは俺の心からの言葉だった。それを聞くと二人の顔にやっと笑顔が生まれた。

「……わ、私達が笑顔でも……いいんですか？」

「ああ、いいんだ！　逆に幸せにならないとダメだ！　誰が何て言うとうとー！」

「……あ……ありがとうございます……！」

二人は涙を流しながら俺に感謝の言葉を言ってくれた。俺はただ、無力さに打ちひしがれたただけだ。

『相棒……』

ドライグ……俺、もつと強くなるよ。今よりずっと強くなってハーレム神になってみせる！　そしてハーレムの皆は俺が守る!!

『そうか。まあ気張るがいいさ。』

『そういうお前は見ていて飽きないからな』

ありがとうドライグ。俺、お前を宿して良かったよ！　それはそれとして、傷だらけで裸の女の子達を放っておいてもいられない。そろそろあそこに戻らないといけないがエルシャさんに頼んであの子ごと転送してもらおう。

↓

で、ここは精神と時のヤリ部屋ではなくエルフの里。

あの後安里達と合流した俺は、カテレアさんの転送術によってここにやって来たのだ。安里はちよつとげつそりしていたが、まあいいや。大事の前の小事！

「まあ、イツセー様♥お久しぶりでございます♥♥♥」

ミダーラさんが恭しく、かつ極薄のホワイトロープ姿になって出迎えてくれる。相変わらず激エロだ！　俺は鼻血が出そうになるのを

抑えながら話を切り出す。

「あ、ああ！ ミダーラさん！」

この女の子達を保護してあげてほしいんだ！ 頼むよ！」

「はい♥イツセー様の申し上げる言葉ならば何でも♥♥♥」

ミダーラさんは二つ返事で了承してくれた。ありがたい！ 持つべきものは友達と頼れるお姉様達！

「それはそうと安里殿。何やら顔色が優れぬ様じゃが」

フェイスベール越しにヤンリマさんが心配、いや捕食する様に安里に迫ってきた。

「あ、いや。何でもないよ」

「本当かや？ わらわの目は誤魔化せませぬぞ？」

「いやホントだって！」

「……まあよいわ。ここはわらわと安里殿の屋敷じゃ。皆々様方も、長旅で疲れたじやろう？ 先ずは風呂でも入ってくつろいでたもれ」  
「何で俺の別荘みたいになってるの!? また俺がヤリチン野郎みたいに扱われるだろう！」

まあ、安里の事はいいや。それよりこの二人だよなあ。聞けば家族のことも名前も解らないとか。たぶん、あんなヒドい事をされつづけたせいでそうなってしまったんだろう。暫くはリアス（といってもメイドさんの方だけど）の下で色々レクチャーを受けた方が良くもな。

「あの、ありがとうございます！ 私達を保護して頂いて」

グレイフィアさん似の女の子が俺に向かって礼を述べてくる。

「ああ、気にしないで！」

男たるもの、弱いものや女の子を助けるのは当たり前さ！」

うーむ、カッコつけすぎかな。

いや、リアスの夫、更には父親になる身なんだからこれ位はね。でも二人の名前が解らないんじゃないや不便だよなあ……。

「では妾が卦を立てましょうぞ。」

これでもダークエルフの長として魔術を修めた身でありますれば「ヤンリマさんがそう申し出てくれ、水晶玉に手をかざし何やら呪文

を唱えだす。マンガ以外で初めて見たけど様になってるなあ。

「見えましたぞ！ 二人の新しい名が！」

「な、何て!？」

俺は思わず身を乗り出す。女の子二人も緊張した面持ちで水晶玉を注視している。

「……そちらの銀髪の女性はイザヨイ、そちらの長髪の女性はベルフラウと出ましたぞ」

「イザヨイとベルフラウ……うん、いい名前だね！ 君らもそう思わないか？」

「は、はい！ ありがとうございます!!」

「嬉しい……名前を貰えるなんて……」

感動に打ち震える二人。実際名前は大事だからな！ 俺は誰より一番誠実に生きる様にと願いを込められて一誠と名付けられたらしいし。

「ほく、それにしても長髪の子はともかく銀髪の方はマジでグレイフィアそつくりだなあ」

「あれ？ アザゼル先生じゃないですか！ シュタークさんは？」

いつの間にエルフの里に来ていたんだろう？ シュタークさんは一緒じゃないのかな？

「あのなあ。安里とルイーナじゃあるまいしいつもベタバタバタしてるワケにはいかねえんだよ。それでも俺ア組織のトップなんだぞ?」

「え？ じゃあ何でここに？」

「いやなあ。少し前にゴブリンキングの連中が妙な男にボコボコにされて、嘗てのエルフ達が遺した研究データとやらを脅し取られたらしいんだとよ」

はあ、あのゴブリンキングが。

キングと言ってもあんまり強くないのか。遺した研究データっていうとエルフみたいな長命で美女の奴隷、だったかな？

「何だ、キングとか言っても大した事ねえのか。情けねえなあ」

安里が呆れたように肩を竦めるが、アザゼル先生は首を横に振っ

た。

「いや、ゴブリン達には実験、もとい試作品の人工神器を渡していたから並の悪魔や怪物なら一捻りってヤツなんだが、どうもソイツが『赤龍帝の鎧』を装備してたんだと。それも禁手化状態でな」

「そ、そんなバカなの!」

エルシャさんや擬人化したドライグがそんな事をする筈がない!

じゃあ、俺の偽者がいるのか?

『そう言えば相棒がニグラの力で新たな肉体を得た時、赤龍帝達の怨念はどうなった?』

あ、そう言えばすっかり忘れてた!

まさかその怨念が?

『だが怨念は俺の力を持っているワケではない。と、なると奴等の怨念を取り込み、霸竜化する術を会得した者が現れたのやもしれん』

そ、そんな事ができる奴がいるのか? た、たまげた……。世界は広いな!

「まあ、あくまで仮定の話だ。ここでああだろう、こうだろうと推論を並べても何の意味もねエ。今はシクターが行方を追っている。とりあえず俺達はそっちの方に協力するつもりだ」

なるほど。だからここにアザゼル先生がいるのか。しかし俺と同じ姿の悪党がいるなんてゾツとしないな。

↓

場所はソドムの最高級娼館。

グレイフィアに生き写しの女性が男に犯されていた。

「あっ♥ああっ♥凄いい♥凄いい♥♥♥」

目は正気を喪い、腕や手首には無数の注射の跡が色濃く残る。

「おほっ♥♥♥また、また来る! あ、あっ♥♥♥♥♥」

ビクンツビクンツ!! と身体を震わせながら何度も絶頂を迎える女性。当に顔が似ているだけの別の別の存在。

グレイフィアの知性も優雅さも、美しさも何もない。それは最早、性欲しか頭がないメス豚だ。

「そうか。やっぱりお前もそうなのか。出来損ないの下らない偽物

め」

興奮めとばかりに男はペニスを引き抜くと、途端に女はすすり泣く。

「ああ……何で！ 何で貴方様のモノが私の中に入ってくれないの！！」

「姉さんと同じ声で媚びるなメスブタあつ！！」

上級悪魔、いや魔王級とも言える力を持つ男の拳が容赦なく振り下ろされる。

「うぐつ……！」

「た、助けて……お許してください！！」

女はまだ正気を保っていたのか許しを乞うたが、男は無言で女をベッドから突き落とし、吐き捨てる様に言った。

「貴様も『馬』に格下げだ」

「そ、そんな！ それだけは！ それだけは許し……」

男は無言で魔法陣を展開し、女を目の前から消した。恐らく転送先はソドムの最下層。彼女のヒトとしての生はそこで終わる。

「ありやりや？ ありやりやのありやりやんぱー？ チンポ丸出しで何かツカしてるんだよユーグリット君？」

現れたのはどこかヴァーリーの面影のある男性だがどこかおどけた様子と禍々しい視線をユーグリットと呼んだ男に向けながら近づいてくる。

「……大きなお世話です」

「えー、酷くない？ 俺とユーグリット君の仲じゃかんさあ！ エルフの遺した技術でグレイフィアちゃんのクローン作ったのにさ？ どーして『馬』なんて格下げしちやっただよ」

「何故？ 決まっています。アレはただの肉人形です。本物を辱め汚す為に貴方が創ったモノです。違いますか？」

ユーグリットと呼ばれた男は悪びれる様子もなく言い切るが、それを受けてヴァーリーに似た男性は爆笑した。

「ギャハハハハ！ そりゃ違いねえや！ 流石ユーグリット・ルキフグス！ 俺が見込んだ純粋なマジキチ！



「褒めているのか嘲弄しているのか解らない言葉。ユーグリットはそれでも表情を変えずに冷淡に言い放つ。

「私はその為だけに貴方に協力しているのです」

「そうかい。しつかしまあ、ヘパイストスといい、キミといい拗らせた天才を見るのはマジで面白エわ。いや、俺も誰かを愛して裏切られてみようかな」

おちよくる様に笑う男をユーグリットは無感情に見つめ、一言呟いた。

「貴方はどうに経験済みでしょう。貴方は冥界を愛したが冥界は貴方を裏切った。善くあれ、と願う行動した貴方の理念を下級悪魔共は欲あれ、と曲解した」

「ちよくと違うなあ。下級悪魔だけじゃなくて全ての悪魔だ」

一瞬ヴァーリにも劣らない殺気がヴァーリに似せられた男性から放たれるがすぐにふざけてくれた調子にリゼヴィム・ルシファアは戻った。

※週末のワルキューレ・イツセー編（イツセー&フェンリル×ヘル）

「ハーツハツハツハ！ どうしましたー!? そんなチープなPowerでは私を倒す事などデキませーん!!」

宗麟ちゃんは国崩しとかいう兵器を俺に差し向けつつ火縄銃を背後から展開し、掃射し始めた。

ズダダダダツ!!

「ぐわっ!? い、痛い!？」

赤龍帝の鎧を貫通する弾丸だつて!？」

「アツハツハツハ!! これこそゴッド・ブレス！ 即ち神の息death!!」

私が撃ちだしたのはかのアスカロンのレプリカから作ったもの！  
ユーミみたいなファツキンドラゴンには効果覿面なのdeath!!」  
あまりの痛さに膝をついた俺に宗麟ちゃんは神の信徒にふさわしくない言葉を吐きつつ追撃を加える。

「ゴッド・ブレス！ ゴッド・ブレス！ ゴッド・ブレス！」

「ちよ、ま、やめっ……!？」

チユドントツ!!宗麟ちゃんの連射に俺はたまらず空に逃げる。

「アハハハハ！ ユアビッグフル！（大バカ者め！）空中に逃げるとはこちらにとって好都合！」

「へ？ うわあああつ!？」

なんと国崩しとやらが八本の脚を展開し、跳躍！ 俺より高く飛び上がり押し潰す体勢を整えた。

「さあユーの遺言を言ってみると良いdeath!」

宗麟ちゃんが笑いながら告げると、国崩しがその巨体で落下してくる！

「パワー比でもする気か!？」

俺は倍化の力を使おうとしたが、咄嗟にさっきの攻撃が反射された事を思い出した。と、言っても竦み上がったワケじゃなくて逆転の一

手が浮かんだからだ。

「どりゃあっ！」

俺は国崩しに向ってドロップキックの要領で足を突き出した！ガシツッ！！

「なっ!?」

国崩しの巨体と、倍化の力で強化された俺のパワーが反射されるが想定済み！ 所謂三角飛びの要領で俺は反動を利用して国崩しの真上を陣取っていた！

「倍化が反射された時の為に考えておいた作戦さ！ 喰らえ宗麟ちゃん！」

そして俺はそのまま落下の勢いを借りて宗麟ちゃんに急降下攻撃をしかけた。

「くっ!?」

咄嗟に体を反転させる宗麟ちゃん。だが、こちらの狙いは攻撃じゃない。

「衣装破壊！」

宗麟ちゃんの鎧に手をかざして叫ぶ。流石に全裸になれば攻撃どころじゃなくなる筈……!!

だが、宗麟ちゃんの鎧は弾け飛ぶどころかヒビ一つつかない！

な、何で!? 俺の衣装破壊が通じない女の子がいるだなんて!?

まさに必殺技を破られたヒーローばりにショックだ……!! 「アツハハ！ 私の鎧は破れませーん！」

宗麟ちゃんは逆に国崩しを解除すると、そのまま飛びかかって来た。

「例えこの身が吹き飛ばうと、ユーが敵である限りは戦い続けるのdeath!!」

宗麟ちゃんのその決意の言葉と共に火縄銃が纏まりガトリングガンとして顕現した！

「ゴッド・ブレス!! ゴッド・ブレス!! ゴッド・ブレス!!」

そしてそのまま火を噴く！ズダダダダッ!!

「うおっ!? うわ、うわああっ!?!」

空中で逃げ場のない俺は蜂の巣にされ、あえなく落下してしまつた……。

「ハア……ハア……!」

『どうした相棒!?あの程度の攻撃避けられぬお前ではない筈だぞ!』  
「それはわかつてるけど……」

乳語翻訳も通じない!?

一体なにがどうなっているんだ!? おつぱいドラゴンにして乳龍帝この俺が、こんな華奢な女の子相手にここまで苦戦するなんて……!! 宗麟ちゃんはボロボロになつた俺を見下しながら勝ち誇つた様に嗤つた。

「ではそろそろFINISHするdeath!」

「悪いけどそうはいかないわ」

だ、誰だ!?!この状況で誰か助けに来てくれたのだろうか? だが、声のした方を見て俺は信じられない気持ちでいっぱいだった。

「だ、誰ですかあなたはー!?!また敵キャラdeath!?!」

宗麟ちゃんも困惑顔だ。突然現れた声の主は……シスターみたいなベールをつけた金髪のお姉さんだ! だがナイアちゃんとは雰囲気少し違う。というか、大胆にも上乳を露出し、ガードーベルトという刺激的な恰好だ! スタイルの良さはニグラさんと互角で素晴らしいおつぱい!

そう言えばニグラさんと同じく山羊角が目立つ辺り姉妹とかそんな感じ?

それにそれぞれ猫と豚と猪の顔をした獣人が曳く馬車には玉座みたいな作りの椅子に足を組んで跨っている……。ってノーパン!? は、破廉恥すぎる!

「な、何者death!?!」

「貴方の様な存在に名乗る名前は持ち合わせてはいないけれど、名前も知らない相手に倒されるのも不憫ね……。我が名はフレイヤ。アースガルドの戦女神と言えはわかるかしら?」

「な、なんdeathとー!?!」

宗麟ちゃんが驚きの声を上げた。うん、俺も驚いている! このお

姉さんも神様なのか!? 確かに神々しさとドスケベさは段違いだけど、そんな神様もいるんだなあ……。

「法の神に逆らう bitchめ! 神の JUDGE を受けなさい!」

「嫌よ。私は縛るのは大好きだけど縛られるなんてまっぴら」

冷徹な瞳でフン、と宗麟ちゃんを鼻で笑いながらフレイヤさんは足を組替えた。下も金髪!?

ありがたやありがたや!

「フレイヤ様に手出しはさせないニヤ!」

「させんブヒー!」

「我等におまかせイノシシ!」

3人の従者らしき獣人が主にいい所を見せようとズイ、と前に出た。

それはそうとイノシシって語尾は無理があるだろ!! せめてボアとかさー!

「やっとおしまいなさい」

「ブヒー!!」

「ニヤー!」

「ウリボー!」

爪研ぎをしながら指示を出すフレイヤ様はまさに余裕たっぷり女王様だ。そしてふうーっと息を吐くと、獣人達が黄金色のオーラに包まれた。まるで俺の『譲渡』の力かそれ以上のスキルだ!

そして国崩しに対して3人の連携が見事に決まった!

反射の力も貫通するなんてチートスキルじゃないか!

『ふむ。相変わらず恐ろしい女神だ。気をつけろよ相棒。あの女はまさに魔物だ』

ドライグが警告するだなんてそんなに凄いのかあの女神様は。

『ふふふ、私の心を覗こうとしても無駄よ』

乳語翻訳もやはり通じない! それどころか心を読まれている!?

思わずたじろぐ俺にフレイヤ様は俺を値踏みする様な視線で見

いる。

「トールやロキを倒し、ヘルを屈服させた男と聞いて期待していたのだけれど……。がっかりね。まさかこの程度だなんて」

溜息と共に痛烈なダメ出し！ たゆん、と揺れるおっぱいとムツチムチな太ももがなければ即死でした！

今日はなんて日だ！ 必殺技は通じないし、宗麟ちゃんにはズタボロにされるし、おっぱい、もとい戦女神様にごっかりされるし！ リアスの胸の中で泣きたい！

『まあそういうなフレイヤ。相棒はこの通り感情によつて強さが左右される。あの程度の雑魚ではいざという時の百分の一程度が精々だ』  
うお、珍しくドライグがフォローしてくれている!? 明日は雨か？

「ふうん……。いざという時にしか役に立たない男というワケ？ そういう汗臭いタイプは好みじゃないわ」

し、塩対応！ フレイヤ様が本当に嫌そうな目で俺を睨んでくる！ ある意味新鮮だけどさ！

「ち、違うんです！ ドライグの言う事は本当だし、いざという時は凄いですよ！」

俺は必死に弁明した。だって仕方ないじゃないか！ 綺麗なお姉さんが目の前で俺をゴミを見る目で見てくるんだからさあ！

「この異教徒共め！ ミーを無視するとはなんたる外道 death！」

宗麟ちゃんが俺達の態度に憤慨し、再び火縄銃を槍衾ばりにフレイヤ様に展開するが……。

パチン、とフレイヤ様が指を鳴らすと火縄銃は全て不発に終わった。ど、どういう原理？

「私は戦女神。戦、即ち武器を支配するもの。この世全ての武器は私には通らない」

ふあさり、と美しい金髪を手で払い悠々たる態度で宗麟ちゃんに向き直るフレイヤ様。これは勝負あったな。詰みゲーというべき状況は宗麟ちゃんも理解したのか冷や汗こそかいていないが悔しそうに

顔を歪めてる。

「女や作り物を囲う趣味は私にはないわ。お前達、その女に引導を渡しなさい」

フレイヤ様は死刑宣告をする裁判官の如く従者に命じると、獣人達が動き出した。

「ブヒブヒー!!」

「ウリボー!」

「我等に任せるニャー!」

獣人達が一斉に飛びかかる! 流石の宗麟ちゃんもここまでか!?

「申し訳ないがその辺りで矛を納めて頂きたい」

シユイイイン、と神々しい光を放つ槍を携えたイケメン……曹操と七符さんが従者達を弾き飛ばした。

あ、そうか。叛英雄といっても英雄派だから曹操にとっては部下になるのか。

「曹操……。あなた達まで来るなんて予想外だわ」

「貴殿と事を構える気はありません。ですが暴走しただけの同志を切っては組織の団結はありませんので」

「流石主様♥妾が見込んだ男よ♥」

見得を切る曹操の傍らで七符さんが曹操の腕におっぱいをぐいぐい押し付けていた。もげろ。

「……オーデインから下がれと指示が出たわ」

「それは重畳。今の俺では貴方を倒すからはできないからな」

「……ふん」

いかにもつまらなさそうにフレイヤ様は視線を従者達に送ると、従者達に馬車を曳かせて去っていった。

しかし、この状況は更にマズくなったのでは?

「それでもないぜイッサー!」

「成程、君達がまだいたか」

シユバツ! と真空の刃が曹操に見舞われたが曹操は槍を回転させて弾き飛ばした。

「久しぶりだなイツセー！」

また強くなつたみたいだな！」

「うふふ、お久しぶりねイツセー♥」

先ずはなんかチャラくなつた擬人化フェンリルと続いて俺にチユツ、と投げキッスをして現れたのはヘルちゃんだ。相変わらず下着みたいな服にマントというファンキーな出で立ちだ。しかもヘルちゃん、衣装も性格もちよつと大胆になつて……。

前は投げキッスなんてするタイプじゃなかったのに。

「まさか君達がオーデインに従うとはな。痩せ狼から飼い犬に成り下るとは隣れなものだ」

「ハツハツハ！ オイラがそんな安い挑発に乗ると思つたら……大当たりだぜ!!」

フェンリルの顔に脈が幾つも浮かび上がると口から赤黒い稲妻の様なブレスを曹操めがけて吐き出した！

「なっ!? 妾の多重結界が！」

七符さんが張つた5層の防護結界があつさり貫通するなんてヴァーリの技と同じ位の破壊力はあるんじゃないか!?

すると宗麟ちゃんが咄嗟に曹操達の壁となるべく立ちふさがつた。

「ここはミーが引き受けるdeath!」

しかしフェンリルが放つたブレスは宗麟ちゃんの鎧を砕き、肌を裂く！ しかし血しびきは上らず、代わりにスパークが発生し肉や骨ではない機械仕掛けの身体が露出した。宗麟ちゃんはサイボーグだったのか!?!バ美肉おじさんとかそんな感じ? だから衣装破壊や乳語翻訳も効かなかつたのか。少し安心した。

ギョツとしたフェンリルやヘルちゃんのスキについて曹操達は転移の魔法陣を展開して撤退した。

深追いする必要はないな。

「ガハハハ！ どうだイツセー！ オイラもまあまあ強くなつただろ?」

ヴァーリ達と毎日鍛錬してるからな！」



チャラくなってもバトルマニアな所は一向に変わらないなあ。しかしそれはそれとしてヘルちゃんの方だが。

「あら？ どうかした？」

「いや、随分自信を持つようになったなあと……」

はきはきとものを喋る様になったし、何よりも色気を隠そうともしなくなった。いいことだ！

「ガハハハ！ いいだろう！ イッセーだろうとヘルは渡さんぞ！」

「あん♥兄さんったらイッセーの前なのにいきなり♥」

ってフェンリル！ 俺の前でヘルちゃんのおっぱいを揉むな！  
羨ましくなるだろ!!

ー

「いやあ、大変じゃったなイッセー」

「いやあ、俺は特に何かしたワケでもないですし……」

オーデイン様に肩をポンポン叩かれるが、俺は特に何もしていない。

「お主と安里のおかげでPVもバツチリじゃ。重ねて礼を言うぞ」

「あ、いえ、それほどでも……」

別に礼が欲しくてやったワケじゃないけども、その反応はなんだかむず痒い。けどフレイヤ様の姿がない。

「あの、フレイヤ様は？ 寧ろフレイヤ様を出演させた方がPVももつと注目度が上がったんじゃないかと思うんですが？」

「お主の言う通りじゃ。」

だがフレイヤはな、出演するならヴァーリの童貞をよこせと抜かしおった」

なんとというご褒美か！

『ふふふ♥そんなに固くならなくてもいいわよ♥』

イメージの中で当に女神の肉体を現したフレイヤ様は豊満な身体を惜しげもなく俺に押し付けて、悩ましげな瞳で見つめてきた！

『ねえ、お願い♥ヴァーリは嫌だって言うのよ？』

うおおっ！ 神乳が顔に当たるううっ！ っていうかこの感触は  
!?

「ぶ、ブラはしていないのですか!？」

『うふふ♥私おっぱい大きいから普通の下着だと邪魔になっちゃうの。そもそも締め付けが苦しくてあまり好きじゃないの♥そもそも私は縛られるのは嫌だって言ったじゃない♥』

そんな事を言いながらも俺にばふばふしてくるのはどういう事でしょうか!？」

『ああ♥イツセーの顔がおっぱいに埋まってるう♥♥』

なんつってな! なんつってな! デヘヘヘ! しかしヴァーリ! 何でそんなご褒美を拒むんだ!？」

俺には理解できない! まさかロリコンなんて事はないだろうな!?! しかし、俺の疑念を感じたらしいヴァーリは質問せずともその理由を答える。

「前にも言ったが俺はこの呪われた血を後世に残すつもりはない。何より、俺は心から愛した女性としか子孫を残したくない」

「じゃあ好みのタイプは？」

おっぱいは大きい方がいいか?」

「答える必要はないが敢えて言うならば肉体的にも精神的にも強い女がいいな」

成程成程。丁度一人条件に合う美人がいるな。すぐオーデイン様に相談して見合いの席を設けよう。

「ガハハハ! ヴァーリ! 女の子はいいぞ! 最高だ! 特にヘルはいいぞ!」

「あん♥兄さんったらあ♥♥」

「さ、最低だべ! フェンリルさは都会の風にあてられておかしくなっちゃっただ!」

ヘルちゃん、嬉しがりすぎ……。

ロスヴァイセさんは方言丸出しでショック受けてるし。なにこのバカツプル?

まあ、それはそれとして安里は

スコグルさんとセルベリアさんと一緒に戻ってきたが明らかにヤツた後だな。

はあ……何と言うかアースガルドの風が身に沁みる。

で、俺はさつき心当たりがあるという女性、即ちトウ・ルチャさんを召喚しヴァーリとの見合いをセツティングした。

「……」

「……」

何か喋れよヴァーリ!

ご趣味は? とかキレイな方ですね。とかもつとこう……あるだろ!

「うーむ、どうやらワシらがいては気持ち解れぬ様じゃ。どうかアイツセー。後は若い二人にまかせてワシらは退散するか」

「あ、はい。それじゃヴァーリ。後は若い二人に任せたまよ」

まあ、俺も若いんだけどね!!

取り敢えず俺はアースガルドの温泉にでも入ってリラククスしようかな。

ー

「おお……! こ、これは……!」

当然のように混浴にされているやっぱりオーデイン様はわかっていらつしやる! ビバ! アースガルド! ビバ! 北欧神話! 俺は腰にタオルを巻いて早速温泉へと足を踏み入れる。既にいくつか服が駕籠に入っていたから誰か入ってるようだ。

「あああゝ♥♥♥ 兄さんのおチンポ♥私の弱い所をグリグリ突いてるう♥♥♥」

「うひよー! やっぱりヘルの膺はキツキツだぜ!」

な、何やってんだあの二人!? まさかあの二人が温泉でやってるなんて……。っていうかヘルちゃんってあんなキャラだったっけ!? 俺は一旦岩陰に隠れると、そーつと様子を見る。

そこには岩に上半身を預けて、オマンコを貫かれているヘルちゃんがあった。顔は快楽で蕩け、だらしなく開いた口からは舌を突き出している。

「あひゃああん♥♥♥ 兄さんの逞しいおチンポ素敵♥♥」

「イツセーに見られてるぞ？ いいのか？」

「いいのお♥♥イツセーに見られるとキュンキュンしちゃうからあ♥  
♥もつと見てえ♥♥♥♥」

完全にスイツチの入ったヘルちゃん！ というかバレてるのならば仕方がない！ 俺は堂々と温泉に入ると、二人に近づいていった。「ガハハハ！ イツセー！ 相変わらずスケベなヤツだな！ 俺達がヤツているのを見て興奮したか？」

フェンリルは何故か誇らしげにヘルちゃんを抱え上げながら背後から彼女のおまんこを容赦なく突き上げている！ ボゴツとヘルちゃんのお腹にフェンリルのチンポが浮かび上がっている！

「いや、たまたま覗いたらお前達がヤツてただけで……」

「ガハハハそうか！ ならどうだ？ お前もヘルと一緒にやるか？」

「いいのお♥♥イツセーも混ざる？ ♥♥」

フェンリルはそう言うのと、抱えていたヘルちゃんを自分の上に下ろした。所謂背面座位という奴だ。そしてそれに伴って俺の目の前にはヘルちゃんのおっぱいが！ フェンリルに散々エツチなことをされていて、乳首はピンと立っている！

「お、俺は……」

「あんっ♥♥イツセー♥♥そんなにおっぱい見ないでえ♥♥」

「ガハハ！ どうだ？ 柔らかいだろう？」

フェンリルが挑発する様に笑う。これはつまりそういうことなんだろう。ならば答えは一つだ！ 俺は両手でヘルちゃんのおっぱいをぎゅうつと寄せ熱り立ったチンポを露出させると、その谷間に挟み込んだ！

「あん♥♥イツセーのおちんちん、とっても熱い♥♥温泉よりあったかい♥♥」

「ガハハ！ どうだイツセー？」

フェンリルが自慢げに笑うと、ヘルちゃんは蕩けた表情のまま腰を動かし始めた。ヘルちゃんから湧き出た蜜が潤滑油となり俺のチンポを刺激する！ そして何よりも気持ちいいのは谷間から飛び出ている亀頭をペロペロと舐め回す事！

フエンリルに仕込まれたらしくその動きは絶妙だ！

「あ……ん♥♥♥イツセーのおちんちん、おっぱいの中でビクビクしてるう♥♥♥」

「ガハハ！ どうだイツセー！ ヘルのパイズリは!? ♥」

「……最高だよ！」

俺は無心で腰を動かし続ける。ああ、もう限界だ！ 出そう……。だがまだ出したくない。もっと楽しみたい……。そんな欲望が渦巻いて……。ああもう我慢できない!!!どぴゆるっ！

「ひゃあん♥♥♥熱い♥♥♥」

ヘルちゃんの顔に白濁液がぶっかけられ、更に背中とお尻にフエンリルの精液がぶっかけられる！

「はあ……♥♥♥いっぱい出てるう♥♥♥兄さんとイツセーのおチンポ源泉♥♥♥」

「ガハハ！ 気持ちよかったぞイツセー！」

俺は脱力して仰向けに寝転がると、ヘルちゃんのおっぱいが俺の身体の上に乗ってきた。

ああ、柔らかい……。けど俺の身体もさつき出したザーメンがぬめっついて変な感触だ。

「ねえイツセー♥♥♥次は私のお尻の穴も犯して♥♥♥」

ヘルちゃんは俺の身体に体重を預けつつお尻を使って、パイズリならぬケツズリをし始めた！ おっぱいとはまた違う感触が俺の下半身を刺激する！ ぬらぬらした精液とお尻の穴が擦れる快感！

「んんっ♥♥♥イツセーのチン毛♥♥♥チン毛がオマンコにチクチク当たって気持ちいいのお♥♥♥」

「ガハハ！ 良かったなヘル！」

俺はもう何も考えられなくなっていた。この快樂に身を任せよう。ぶるん、ぶるんと揺れるヘルちゃんのおっぱいを掴み、先端の桜色の突起を二つ、口に含む。

コリコリした歯ざわりと舌に広がる甘い味。

「はあ……♥♥♥おっぱい吸われるの好き♥♥♥もつと吸ってえ♥♥♥おチンポもお尻にゴシゴシしてえ♥♥♥」

ヘルちゃんの柔らかいお尻の肉が俺の下腹部を刺激してくる！  
そしてオマンコから湧き出た蜜がローションになってさらに俺の快感を煽る！

「うひよー！ すごいなイツセー！ またイツセーのチンポがでかくなつたぞ！」

「あふう♥♥♥イツセーのおチンポ大つきいい♥♥もう、何も考えられない♥♥出してえ♥♥さつきみたいに熱々のザーメン、今度は私のお尻にブチ撒けてえ♥♥」

ヘルちゃんはいやらしく無様におねだりしてくる。瞳の中にはハートマークが浮かんでいる。もうダメだ。出る……。

どびゆる！ びゆくびゆく！ ぶしゅううう！！

「あつはあ♥♥♥熱いのいっぱい出てりゆう♥♥♥私のお尻にぶつかかってりゆう♥♥」

「ガハハ！ すごくいい顔だなヘル！」

イツセーの俺のチンポがそんなに好きか！

「好き♥♥イツセーのおチンポも、兄さんのもどっちも大つきいからあ♥♥」

ヘルちゃんはどうつとりとした表情で左右から頬にチンポを押し付けられながら

交互にしゃぶりつき、顔にかけられたザーメンを美味そうに舐めとっていく。い、いつの間になんかいやらしくなっちゃったの!?

「ガハハ！ ヘルは本当にエロいな！ イツセー！ 今度はオイラとお前でヘルをサンドイツチしてやろうぜ！」

「あ、ああ……」

フェンリルはヘルちゃんを自分の上に乗せつつ、くいくい、と人差し指を曲げながら俺を誘導してきた。

俺は言われるがまま、フェンリルとヘルちゃんの間に入るように膝立ちになる。するとフェンリルはヘルちゃんの両足を広げさせ、その間からそそり立つチンポを出現させた。

「ほら！ イツセー！ オイラのチンポがヘルのマンコに挿入するときをよく見ておけよ！」

「おお♥おおお♥♥♥兄さんのおチンポが私のオマンコにい♥♥

まるでロケットの様な勢いでフェンリルのチンポがヘルちゃんのおマンコ目掛けて突っ込んでいく！ その衝撃でヘルちゃんのおっぱいがぶるんぶるんと跳ね、オマンコからは愛液が飛び散り、そして彼女の表情は完全に快楽に蕩けたアへ顔になっていた。

「ひゃああああ♥♥♥お兄ちゃあん♥♥♥しゅごいい♥♥しゅごすぎるううっうう♥♥♥♥」

尻たぶを自ら押し広げてオマンコとアナルを晒し、激しいピストンでアナルまで犯されまくるヘルちゃんはもう限界が近いみたいだ。

「ガハハ！ いいぞー！ イッセーに見てもらえて嬉しいか？ ああん？」

「うん♥♥♥嬉しいのお♥♥♥

イッセーに見られながら兄さんのチンポハマられるのが気持ちいいのお♥♥♥

「そうか！ ならもつと激しくしてやんよー！」

フェンリルは更にスピードを上げて、ヘルちゃんを責め立てる。

「ああっ♥♥お願いイッセー♥♥♥

イッセーのおチンポも頂戴♥♥♥私のお尻をグリグリ抉って♥♥穿って♥♥

ヘルちゃんは俺の方に顔を向けると、懇願するように懇願してきた。そんな姿見せられたら俺の理性が保たない……！俺はその体勢のまま、押しつぶす様にヘルちゃんのひくひくと俺を誘うように蠢いているアナルに挿入した。

「ひゃああ♥♥♥きたああっ♥♥♥イッセーのおチンポと兄さんのおチンポがああ♥♥♥♥」

ヘルちゃんのお尻の中はぬるぬるで、そしてきゅうつと締め付けてくる！ まるで生き物の様に絡みつく褻が堪らない！ 俺はガツン、ガツンと腰を前後に動かしていく。

「ああっ♥♥♥いいっ♥♥♥もつとお♥♥♥もつと激しくしてえ♥♥♥

お望みとあらば！ 俺はヘルちゃんの両手を掴むと、それを手綱のように引つ張りながらさらに激しいピストン運動を繰り返し、フェンリルは負けじとヘルちゃんのおっぱいを引つ張りながら揉みしだき、パコパコ腰を動かしヘルちゃんのおまんこを蹂躪する。

「ひっぎいいいっ♡♡♡こ、これすごいっ♡アタマも心もバラバラになるう♡♡♡二人のチンポ♡♡♡二人のチンポがお尻とマンコでぶつかってるのお♡♡♡しゅごいい♡♡壊れりゅううう♡♡♡」

「ガハハ！ ヘル！ もうそろそろイクぞ！」

「俺もだ！ ヘルちゃん、中に出すよ！」

「イツセーの熱い精液いっぱい出してええっ♡♡♡私の中を満たしてえええええっ♡♡♡♡♡」

どびゆるるるる!! びゆくびゆく！ ぶしやああ!! 破裂するんじゃないかと錯覚する程の量の精液がヘルちゃんの中にぶちまけられる！ それと同時にヘルちゃんもイキまくり、潮を吹き散らかす。

「はあ……♡♡♡いっぱい出てるう♡♡♡オマンコにもお尻にもザーメンいっぱい♡♡♡」

ヘルちゃんは絶頂の余韻に浸りつつ恍惚とした表情でうつ伏せに伏しながら腰をかくつかせている。

チヨロチヨロとおしっこまで漏らしている。

「ガハハ！ ヘル！ イツセーに見てもらえて嬉しかったか!？」

「うん♡♡♡見られながらするの気持ちいい♡♡♡さいこお……♡♡♡」

と、とんでもないドスケベ兄妹だな……。俺は若干賢者モードに入りながらそんな事を考えていた。

だが、そんな俺につんつん、と誰かが俺の背中を突く。

振り返るとそこにはワルキューレの女の子達が全裸待機していた

!?

い、いつの間!？」

「ヘル様ばかりズルいですう♡♡」

「そうです！ 私も早くう♡♡♡」

「いやいや♡♡♡イツセーさまあ♡ワタシとオマンコしてえ♡♡♡安



里クンもヴァーリ様も相手してくれないんだもん♥♥♥」

ワルキューレの女の子達は一気に俺に抱きついてきて俺の身体をまさぐり始めた。

「ちよ、ちよっと待つてー!」

俺は必死に抵抗するが彼女達はそんなの御構い無しに俺のチンポを復活させていく。いくつもの舌が俺のチンポを這い回り、足はそれぞれで絡まり合う。そしてお尻やおっぱいをこれでもかど押し当ててきた!

ふ、フェンリルはどうしたんだ!?

「フェンリル様はヘル様としかセックスしないの♥ヘンな所でマジメなんだからあ♥♥」

「だから私達はこうしてお兄さんに相手してもらおうの♥♥」

「そういうことで、イツセーさま♥♥♥」

ワルキューレの女の子達は服を脱ぎ、全裸になって俺にまたがった。彼女達のオマンコは濡れそぼり、俺の先っぽとキスしながらくちゅくちゅ音を立てている。かくして俺は散々に搾り取られてしまったのだ……! アースガルドのお姉様達は肉食すぎる……!!

※リクエスト編 おいでよエロフの森2前編（イツ  
セー×イザヨイ&ベルフラウ 安里×パコル&オー  
ブリー 本番なし）

どうも！ 兵藤一誠です！

修学旅行の前に冥界で中級悪魔試験を受ける事になった俺は今、エ  
ルフの里にて保養中。

そんな折、安里とアザゼル先生が何やら少し揉めている様子だ。ル  
イーナちゃんも恋人の安里と、教師のアザゼル先生が揉めていてオロ  
オロしている。

「どうしたんだいルイーナちゃん？」

「えっと、実はね……」

ルイーナちゃんが話すにはアザゼル先生がエルフの里に残るデー  
タの分析をしていたら若返りの薬とやらの開発に成功したらしい。  
それで安里がいつの間にかやら実験台にされたらしい。

「ふざけんなおっさん！ もとにもどせ！」

小学生位にまで戻った安里がアザゼル先生に凄んでもまるで迫力  
がない。

「いやだね。おっさん、おっさんと普段から年上を敬う事のないクソ  
ガキにはいい薬だ」

「このやろー！」

「そら、捕まえてみるー！」

「にげるなー！」

安里が小さい体でアザゼル先生にとびかかっているとアザゼル先  
生は笑いながら逃げて行き、安里は泣きながら追いかけて行く。

「何だか昔のアイツに戻ったみたいだなあ」

「そうなんだ？ 私は大人の安里しか知らないから今の安里が少し新  
鮮」

ルイーナちゃんは朗らかに微笑む。

うん、可愛い。

「一誠様。お茶の時間です」

「ルイーナ様も宜しければ」

イザヨイとベルフラウがそう言ってお茶とお菓子を持ってきた。男子三日会わざればなんとやらだがこの二人のメイドとしての成長ぶりは凄まじい。メイドのリアス曰く十分グレモリー家でも務まるのお墨付きだ。

「ありがとう。二人とも」

「ありがとう、いただきます」

二人からお茶とお菓子を受け取って安里達のドタバタを鑑賞しながらお茶をすする。……ん？

「何か私達に粗相でも？」

イザヨイとベルフラウが恐縮したように俺を見ていた。

「いや、二人とも凄いメイドっぽくなったなあって」

「そ、そうですか？　ありがとうございます……」

イザヨイもベルフラウも嬉しそうにはにかむ。やっぱり二人共美人だな。美人をアテに飲むミルクティーは最高だな！

今日はこのまま泊まっていくのもいいかな……。あれ？　頭がポーツと……。

ー

「おはようございますイツセー坊っちゃん」

「おねーさん達は誰？」

イツセーが目覚めると、背丈は安里くらいまで縮んでおり、しかも口ぶりも子供特有の喋り方になっていた。

「何を言ってるっしやるのですか？　イザヨイとベルフラウですよ？」

「えーと……ごめん。おぼえてない」

「いけませんねえ……。あなたは私達の主人なのですから。ほら、おはようございますのキスをして下さいませ」

「きすってなーに？」

イツセーはどうやら記憶が一部なくなっているらしい。困った顔をしてベルフラウの方を見るとベルフラウは目線を小さくした

イツセーに合わせて微笑む。

「おはようのキスですよ」

「!？」

「はい、おはようございます坊っちゃん」

そしてそのままベルフラウは小さなイツセーに口付けをする。突然の事に驚くイツセーにベルフラウは優しく微笑み、イザヨイもそれに続きイツセーに軽く口付けをする。二人共まるで花の様に爽やかな香りがする。

「では改めて……おはようございます坊っちゃん」

「おはようのキスは大事なんですよ？ だから私達の事も可愛がって下さいね？」

イザヨイにそう言われたイツセーは少し困った顔でベルフラウとイザヨイを見上げる。

「でもぼく、なんもおぼえてないよ？」

「大丈夫でございますよ坊っちゃん。今から覚えていけばよいのです」

「……うん」

そう言うといザヨイはイツセーを抱きしめ優しい口調で言う。イツセーは二人の美女に対し恥ずかしそうに頬を染めた。

↓

イツセーはイザイヤとベルフラウに連れられて向かったのは食堂だ。そこには既に安里の姿もあった。

「おはよう、あざとー！」

「よう、イツセー！」

親友の記憶は失わなかったのか安里は普段通りに接してくれる。それはそれとして安里の側にいる二人のエルフがイツセーには気になった。

「おや、どうしましたイツセー？」

「え、えつと……」

母親の様に慈愛に満ちた笑みを向けられるとイツセーは子供ながらに少し気恥ずかしくなった。

「イツセー、この二人はなんでも俺達のおかあさんらしいぜ」

「ええっ!?でも、俺達と肌の色がちがうし、耳もとがつてるよ?」

安里がいきなりそんな事を言い出すのでイツセーは仰天した。そんなイツセーの疑問は最もだが、その疑問を包み込むか、あるいは覆い隠すかの様に安里の側にいたハイエルフの女性、ミダーラは彼を抱きしめる。

イザヨイ、ベルフラウとは違った成熟した香りにイツセーはたじろぎながらもうつとりとしてみよう。

「おお……、何て愛らしいのでしょうか」

「えつと……」

「ああ、ごめんなさいね坊や。貴方はエルフの村長になるように神様が私達に遣わしたのよ。だから私達は貴方のお母さんなの」

「左様。故にそなた等は健やかに育つがよい。ともかく食事にしよう」

ミダーラにそう言われると不思議とそんな気にさせられるから不思議だ。ヤンリマがまとめると女性達が次々に料理を運んできた。

「はい、安里くんあーん♪」

「美味しい?」

「いっぱい食べてね!」

次々と自分の口に運ばれてくるスプーンの数々に安里は目を白黒させる。

「あ、あの……自分で食べれるよ」

「駄目よ安里くん! 貴方は私達の子供なんだから。ね?」

「そうです! 私達は全員、安里くんとイツセー君の為にいるんだからね!」

パコルとオーブリーの言葉に安里は照れながらも差し出された料理を食べ続けた。

「……」

「どうなさいましたかイツセー坊っちゃま?」

安里のある意味モテモテな様子に少しジェラシーを感じたのかイツセーは複雑な表情をしていたのをイザヨイとベルフラウは見逃

さなかつた。

「安里が皆に囲まれていて、少し寂しいですか？」

イザヨイが優しく問いかけるとイツセーは小さく頷いた。

「ふふふ。それは仕方ないですよ。私達もイツセー坊っちゃんにもつと構って欲しいと思っちゃん時もありますから」

ベルフラウが微笑みながら言うので、イツセーは申し訳なさそうな表情になる。

「でも、いつも優しくしてくれますし、私達もそんな坊っちゃんが大好きですから」

イザヨイがそう言うのとベルフラウがその小さい体を抱きしめて囁いた。

「だから大丈夫ですよ？」

「……うん！」

イツセーは屈託のない笑顔で大きく頷いた。そして食事を終えた後、安里はオーブリーとパコルに引っ張られていった。なんでも三人で遊びにくらしい。

「坊ちやまは私達と遊びましょうね」

ベルフラウがイツセーの手を引いていくと、イツセーは頬を染めて小さく頷く。

その様子を見てベルフラウとイザヨイの目に妖しい光が走っていることなどつゆ知らず。

↓

そして安里はというと、パコルとオーブリーと水浴び場にて3人仲良く遊んでいた。だが、パコルとオーブリーはその身に水着を纏っていない。

「アハハッ！ 気持ちいいよ安里くん！」

パコルは無邪気に笑いながら安里の顔に胸を当てるように抱きつき、オーブリーもまた自らの谷間に安里の顔を挟み込む。安里は二人の乳房から顔を離そうとするがオーブリーはそれを許さない。

「ちよ、ちよつと……やめてよ

二人とも……」

「あら駄目だよ安里くん」

そして二人は自らの胸に挟み込んだ安里の顔を上下に動かし始めた。パコルとオーブリーの巨乳で顔を洗われるような形になった安里は目を白黒させる。

(むがつ!?! く、苦しいっ!?)

安里は息ができない苦しきから逃れようと暴れるが二人の腕がそれを許さない。

「ほらほら暴れないの!」

パコルは楽しげな声を出しながら更に激しく胸を動かす。パコルの胸に顔を埋められたままの安里は抜け出そうと身を振らせると二人はくすくすと笑う。

「もー、安里くんたらくすぐったーい♥」

「ん……♥はあっ……♥」

オーブリーもまた楽しげに笑うがパコルは更に胸だけではなく乳首まで安里の顔を押し付ける。

「ううっ……」

安里の意識が落ちかける寸前に二人はようやく解放してくれた。ゲホゲホと咳き込む安里にパコルとオーブリーの笑い声が降り注ぐ。

「ひ、ひどいよ二人とも!」

「あはは、面白かったねオーブリーさん!」

「ゴメンね〜♥安里くんが可愛かったからついイジワルしなくなっちゃったのよ♥」

オーブリーの言葉にパコルは笑いながら頷く。

「安里くんは可愛いから仕方ないよ! ね、安里くん?」

「もう、二人とも意地悪!」

ぷいと横を向く安里をパコルは後ろから抱きしめて頬擦りをする。

「あーん怒らないでよー? 可愛い顔が台無しだよー?」

「男は可愛いなんて言われて喜ぶもんじやないやい!!」

そう言いながらオーブリーは今度は安里のお腹に手を伸ばしてこちよこちよとくすぐる。

「や、やめろようー!」

「ウフフ♥いいじゃない？ ほらほら、くすぐっちゃうぞー？」

パコルは安里を後ろから抱きしめてオーブリーと一緒に体をくすぐる。

「ひやはははー！ や、やったなあー！」

「ひやうん♥く、くすぐったあい♥♥♥」

安里も反撃とばかりにパコルをくすぐると彼女にも笑みが浮かぶ。もっともその笑みは無邪気とは言い難いが。

「あはは、安里くん！ くすぐりたい！」

「仕返しだ！」

「ひやあん♥♥♥」

二人のじゃれ合いを見ていたオーブリーが不意にパコルのお尻に手を伸ばし、パコルはビクン、と体を震わせる。

「きやん♥やあん♥♥やめてえ♥オーブリー♥♥♥」

「あら、可愛い声だすじゃない。ほれほれー！」

オーブリーがパコルのお尻を揉みしだくとパコルは顔を真っ赤にさせて身悶えする。

「ダメだよオーブリー！」

パコルはいやがってるじゃないか！

安里は子供返りしている故かパコルの言動の機微に気付かない。

「あはっ♥安里君ってばボクを庇ってくれるの？ 嬉しい♥♥♥」

潤んだ瞳でパコルは尻と股を安里に見せつけるような姿勢を取る。

「ふうう……♥安里くん♥♥♥パコルね♥オーブリーに擦られた所がムズムズするの……♥♥だから、私の代わりに安里君がナデナデしてほしいな……♥♥♥」

パコルの甘い声に安里はゴクリと喉を鳴らし、彼女の尻を優しく撫でる。

「んひやあ……♥♥♥そう♥♥♥上手だよお♥♥♥安里くん♥♥♥お胸とさきつぽ、おまたま、いっぱい可愛がつてえ……♥♥♥」

安里はパコルの要求に応えようと胸を揉み、尻を撫で、股に手を伸ばして優しく撫でる。

更にコリコリになった乳首をつまむと彼女は更に歓喜していく。



「ふひゃあん♥♥安里君の手つき……♥優しくて気持ちいいよお♥♥」

パコルは身を悶えさせながらも安里の愛撫を受け入れていく。

「あははっ！ パコルったらさつきから可愛い声でアンアン言っちゃって！ そんなに気持ちいいの？」

オーブリーがからかうように言うと、パコルは照れたように笑う。

「えへへ……♥安里くんが優しくしてくれるからつい声が出ちゃうの……♥♥♥」

「そ、そうなんだ……」

安里は性に目覚めつつある。

その証拠に股間のペニスが勃起していた。子供でありながら並よりもはるかに大きいそのサイズはオーブリーとパコルの二人を十分に満足させられるものだった。

「あはっ♥安里君のおちん×ん♥おつきくなってるね♥♥♥」

「うん……。なんだかさつきからムズムズするんだ……」

「ふふ、そうなんだ……♥♥それじゃ今度は私達が安里君をナデナデしてあげるね♥」

パコルは安里のペニスに手を伸ばして優しく撫で始める。

「わっ!？」

突然の行動に驚く安里にオーブリーも加わり、安里の乳首を舐めたり摘んだりして責め立てる。パコルの手は安里のペニスを優しく撫で回していく。

「ああ……♥凄いや♥毛も生えてないのに太くて……♥長くて……♥立派な大人ちんぽだよお♥♥♥」

パコルは恍惚とした表情で安里のペニスを撫でている。その目は妖しく光り、完全に魅了されているのが一目で分かる。

「ああ……♥安里君の大人おちん×ん♥♥♥」パコルは優しく安里のペニスを包み込み、上下に動かす。

「あー！ なにこれ……」

初めて知る快感に戸惑う安里だが、パコルの手つきに身を委ねると次第に快感が込み上げてくる。

(なんだろこれ……すぐ気持ちいいよ……)

そして次第にペニスの先端からは透明な液体が流れ出し始める。

「あはあ♥♥♥安里君のお汁きたあ♥♥♥」

パコルは嬉しそうに笑うと今度は先端を口に含み、舌で舐め始める。ヌルヌルした涎と染み出す液はボンドか何かの様に粘着してゆく錯覚に安里のみならずパコルも震えつつ感応しあっていた。

「な、何してるのパコル?」

「大丈夫だよ安里君。これは大人になるための準備なんだから。私に任せて? ♥♥♥」

オーブリーはそう言いながら今度は安里の玉袋を舐め始め、パコルは愛おしそうに安里の玉袋に口付けをする。

「う、ふうん♥安里君のキンタマ♥♥♥すぐおつきくて重たいね♥♥♥」

「うう……、なんか変な気分……」

初めて経験する快感に戸惑いながらも安里はされるがままになっている。だが彼のペニスは二人を悦ばせるために更に大きくなり、時折ビクビクと震えていた。いよいよ二人は安里のペニスを胸で挟み込み、ダブルパイズリを始める。ひんやりとした二人の体が脈打つ熱いペニスには心地よい。

「ふああ♥♥♥安里君のおちん×ん♥♥♥私たちのおっぱいでも覆いきれないくらい大きいよお♥♥♥」

パコルは熱い息を吐きながらうっとりとした顔で安里の亀頭をチロチロと犬の様に舐める。安里は初めて味わう快樂に思わず声が出てしまう中、そんな彼の様子を微笑ましげに見つめながらオーブリーも安里のペニスの裏筋を舐め吸る。二人の胸に挟まれているペニスの先端からはさらに透明な液が出てくる。

(なんだろこれ……。おしっこじゃないみたいだけど……)

安里が戸惑うなか二人は嬉しそうにその透明な液を吸り始める。

「んちゅ♥♥♥……ねえ、安里くん♥♥♥これなんだかわかるう? ♥♥♥」

「わ、わかんない……」

「そっかあ♥じゃあ教えてあげるね♥♥♥これはね、『男のミルク』って言つてエルフにとつては大事なものなんだよ♥♥♥」

「ミルク？」

パコルが上目遣いで聞いてくるので安里は素直に答えるとオーブリーが尤もらしく解説を始め、パコルも便乗する。

「そうだよ、男のミルクっていうのはね、大人になるために必要なものなのよ♥♥♥だからいっぱい出さない♥♥♥」

パコルはそう言うときさらに激しくパイズリを行う。パツン、パツンと音を立てて二人の胸が上下するたびに安里のペニスも震え、先端から溢れ出す透明な液も多くなる。やがて限界に達したのか安里は体を痙攣させると、勢い良く白い液体が噴出し、パコルの顔にかかる。

「きやあん♥♥♥きたああつ♥♥♥安里君の男のミルクいいっ♥♥♥」

パコルは嬉しそうに声を上げながら顔にかかった精液を舐める。

「はあ……♥すごい量……♥」

オーブリーも恍惚とした表情で呟くと、再び安里のペニスにしゃぶりつく。するとたちまちのうちに彼のモノは再び大きくなっていく。その様子を見て二人の淫妖な笑みはますます深まっていった。

「もつとお♥♥♥安里君のおちん×んミルクちょうだい♥♥♥」

「あああん……♥私も欲しい……♥♥♥」

パコルとオーブリーの二人はそう言うとき今度は安里にのしかかろうとしたのだが……。

「これ、あまり水浴びに興ずると風邪を引いてしまうぞ3人共」

唐突に背後から声をかけられ、3人は驚いた表情で振り返るとそこにはヤンリマが静かに佇んでいた。

フェイスベールによって表情は隠れているものの、声はどことなく呆れた様子だった。

「あ、あの……これは……」

慌てて言い訳をしようとするパコルの言葉をヤンリマは遮る。

「ふふ、別に隠さなくてもよい。皆、安里が可愛いから仕方あるまい。じゃが、風邪を引いてはいかぬ。安里よ。帰ったら風呂の用意をして

おこう」

ヤンリマはそう言つて微笑むと3人を水浴び場から連れ出していった。

パコルとオーブリーはどこか物足りない様子であつたがヤンリマには何も言えなかつた。

1

さて、イツセーの方であるが……。

「坊っちゃん。今日は赤ちゃんごっこで遊びましょうね」

イザヨイとベルフラウはマジメな表情で言つた。

「あ、赤ちゃんごっこ?」

イツセーが戸惑いながら聞き返すとイザヨイとベルフラウは頷く。

「そうです。赤ちゃんですから喋る必要はありませんし、この通りおしゃぶりやガラガラもありますよ」

そう言つてイザヨイはどこからかガラガラの玩具を取り出す。だがイツセーはそのおもちゃよりも二人の様子が気になるようだった。

(ど、どうしちやつたんだろ?)

すると今度はベルフラウが口を開く。

「坊っちゃん、まずはこちらのベッドへどうぞ」

ベルフラウはそう言つてイツセーをベッドへと誘導する。

「え、ええつと……」

イツセーは戸惑いながらもベッドへ横たわる。

するとイザヨイとベルフラウはそれぞれ手にした玩具でイツセー

の耳を、頬を撫で回し、ガラガラを鳴らしていく。

(ど、どうしよう……)

困惑しながらも大人しくしているイツセーを満足そうに見つめる二人の視線に妙な違和感を覚える。

やがて二人は耳から手を離すと今度は頬をさすったり揉んだりしてマツサージを始めた。

(なんだろう……何か変だ……)

そう思つた瞬間、二人はイツセーの股間を優しく撫で始めた。

「っ!? ま、待って!」

「イツセー様、今の貴方は赤ちゃんなのでですから喋ってはいけません」  
イザヨイはキリリと引き締まった顔で言うが安里に劣らぬサイズに勃起したイツセーのペニスを優しくさすっている。

「ち、違うよ。これは……その……」

「うふふ、恥ずかしがることはありません。男の人は皆こうなるのです。さあ、私達に任せて下さい」

ベルフラウもまたリアスや朱乃には劣るものの、それに準ずるサイズの自分の乳房でイツセーの頬を挟み込むとその乳房で撫で回し始めた。

「うう……、こんなの……おかしいよ……」

しかしイツセーの言葉は届かない。二人はうっとりとした顔でイツセーの頬や耳を撫でたり、首筋を舌でなぞったりしていた。

「んんっ……！　だ、ダメです……！」

その異様な光景に恐怖心を抱いたのか思わず声を発してしまったイツセーに二人は残念そうな顔をするがすぐに微笑むと再び彼の体を撫で回したり、キスをして舌を絡めてきた。更にはいつの間にもやら服を脱がされ、二人とも自分の乳首をイツセーの身体に擦り付け、頬や唇、乳首を舐めていく。

「うふふ♥赤ちゃんになったイツセー様だったら可愛らしいです♥」

「ええ。じゃあ次は私達のおっぱいを吸わせてあげますね？♥」

そう言って二人は自らの胸の谷間にイツセーの顔を挟み込むと、優しく頭を撫で始めた。

「ほら、お乳の時間ですよ？」

「遠慮しないでたくさん飲んでくださいね？♥」

（うう……こんなのおかしいよ……）

だがその思考もすぐに快樂に塗り潰されてしまう。

（でも頭がふわふわになって気持ちいいよお……）

やがて二人はイツセーの耳元へ唇を寄せると甘い吐息と共に囁く。

「あらあら坊っちゃんまってば。ここもこんなに大きくなってる♥」

「うふふ、素晴らしいですわ。イツセー様は赤ちゃんなのにこんなに大きくしてしまうなんて♥」

そう言うと二人は更に強く胸を押し付けてくる。

(ああっ……、もう我慢できない……！)

イツセーの頭の中はもう完全に快楽に支配されつつあった。やがて二人の乳首がコリつとした感触になり、唇まで甘く感じてきた。

「赤ちゃんはママのおっぱいを飲まないといけませんものね？ ああ、坊ちやまのお力で私達をママにして欲しいですわ」

「うふふ、そうですね。でもそれはもう少し我慢しましょう。まずはイツセー様を私達の赤ちゃんにして差し上げないと……」

二人はそう言つてイツセーの両手に濡れそぼる股を擦り付ける。ブラシではなく羽毛の様に柔らかな二人の陰毛と溢れ出す愛蜜が手に絡み付いていく。

「うふふ♥どうですか？ これが大人の女の身体ですよ？」

「ああ……、もう我慢できませんわ♥」

二人はそう言いながらイツセーの両手を自分の陰部へと導いていく。やがて二人の手は二人の淫裂に入り込んでいき、それぞれ膣内で二本の指を動かすように催促する。その二人の求めにイツセーは応ずるかの様に指をくにくにと動かすと二人は甘い喘ぎ声を発して身悶えた。

(ああっ……！ 凄い……！)

「はあ……♥ああ……ん♥♥♥」

「ふふっ……、坊ちやまの指使いが上手ですね……♥♥♥」

二人はそう言いながらも自分の指では満足できないのかイツセーの手に秘裂を押し付け、更なる快楽を求めるように腰を振り始める。

(もうダメ……！ なにか出る……！)

やがて限界に達したイツセーは盛大に射精した。二人の美しい顔や身体を白く染め上げていく。そしてイツセーの精液により二人は激しく絶頂を迎えた。

「ああああん♥♥♥イツセー様あ……♥♥♥」

「んんっ♥♥♥あああん♥♥♥」

(す、す……い……)

イツセーは今までに味わったことのない快楽に意識を失いそうに

なったが何とか堪えることが出来た。

一方、イザヨイとベルフラウの二人は恍惚とした表情でイツセーに微笑みかける。

「ああ、坊っちゃんま……」

「素敵でしたわ……」

なにか、いけないことをしている様でイツセーは不安になり始めた。それ故かイツセーは裸のまままで思わず部屋から飛び出していく。

(ど、どうしよう……。こんなこと……)

そして部屋に戻ったイツセーはイザヨイとベルフラウの痴態を思い出しながら自分のモノをしごき始めた。

「はあっ……いー はあっ……いー！」

やがて絶頂に達し、白い液体を放出する。しかしそれでもなお彼のものは硬度を保ったままだった。それどころか先ほどよりも大きくなっている気さえする。

「ど、どうして……」

イツセーは思わず呟くがそこにミダーラが入ってくるとイツセーのモノを見つめ、妖しく微笑む。

「ご、ごめんなさい！ 俺、悪い子になっちゃったみたいで……それで

……その……」

「いいのですよ。今の貴方は大人になろうとしておられるのですから」

イツセーが慌てて弁明しようとするミダーラはそれを遮るようになんと言おうと返答を待たずにミダーラはパンツ一枚のイツセーを風呂場へと連れていく。まるでヤンリマと合流するのがわかっているようだった。

※週末のワルキューレ・安里編（安里×スコグル&セルベリア）

「ば、バカな……!？」

この道鏡がナレ死……だと……!？」

何か知らんが言うほど大した奴じゃなかった。まさかパンチ一発でダウンする様なザコとは……。いや、俺が強くなりすぎたのか……？

「ハアアアツ!!」

なんてイキツている場合じゃなかった!クソツ!道鏡だか何だか知らんが倒されたら解けるタイプの洗脳にしておけてんだ!セルベリアさんもスコグルも本気で俺を殺りにきている。何か手はないのか……!？」

『ないでもないのう』

光の槍やミョルニルの雷光を回避しながら攻めあぐねている中、ヘカトンケイルの爺さんが念話で語りかけてきた。何だよ?冥界から生き返らせる事ができるから一旦息の根を止めるとかそういうのはゴメンだぞ?」

『そんな鬼畜じみた話はしとらんわい。ほれ、お主の親友である兵藤一誠がおるじゃろ?あやつの技を

真似てみてはどうじゃ?』

イツセーの技……?ま、まさか……?あの衣装破壊を二人に……。つてこの爺さん、ホントにヘカトンケイルか?いや、違う気がする!何て言うか、エロ爺みみたいな気配がプンプンする!

『ふむ、バレてしまったか。』

いかにもワシはヘカトンケイルではなくゼウスじゃ!ヘカトンケイルとワシは親戚じゃからな!ワシの権能によってヘカトンケイルを通じてお主と意識をリンクさせておるワケじゃ!凄じやろ?』  
なんつー軽薄なジジイだ!キュクロが聞いたら泣くんじやないか?いや、アイツなら案外、



『さすがはキユクロのじーじだ。きゆうどーもみならうがよいぞ』  
とか言い出しかねん！

「貰った！」

考えごとをしている側から光の槍が俺の脇腹を掠める！ビームを打ち出せる槍だけあって破壊力は俺の想像の遥か斜め上を行っている。

更にセルベリアさんの仕掛けはそれではない。

「はっ！」

セルベリアさんは異世界の軍人だけあって接近戦もお手の物だ。俺やイツセーの様な実戦で身につけた我流にはない最適化された無駄のない洗練された動き。銃や蹴り、その他諸々の打撃、更には目潰しが容赦なく俺を追い詰めていく！

『ほれ、ポケツとしてないで反撃するのじゃ。お主の大好きなおっぱいを合法的にむにむにできるチャンスじゃぞ？』

「誰がやるか！」

思わず天を向いて怒鳴ってしまう。幸か不幸か、その上には星条旗ビキニに包まれた爆乳……じゃなくてミヨルニルを構えて振り下ろしの態勢に入ったスコグルがいるんだが。

「ぶっ潰れるおおおっ!! 蛮勇隕力（マイテイ・インパクト）！」

なんてこった！ミヨルニルに雷光が帯電している!?今の掛け声は技を放つ時の掛け声じゃないか！ 咄嗟に手を差し出して受け止める。俺の腕からビキビキと骨が軋む音が鳴っているが、お構い無しに全身の力を振り絞って弾き返す！直撃していたらミートボールになっちゃう所だったぜ。改めてスコグルを見ると大分消耗したのかスコグルの体からは汗が大量に流れている。洗脳されているから後先考えずに大技を振るうのか。いよいよマズいな……。

「あーら。惜しいな、もうちよいで砕けたのに」

『ムフフフこれはこれで』

汗を拭いながらなお戦う意思を見せるスコグルにジジイは妙なエロスを感じてやがった。他人事みたいに……。

『ほれ、あそこのボインちゃんとかールビューテイの魂が消耗する前

にやる事があるじやろ？ほれ、ほれほれ！』

早くしろとジジイが急かしてきやがる。んなこたあ分かってるんだよ！でも、それをやったらセルベリアさんの心に深い傷が……。

『バツカモーン！貴様は単に自分が傷つく事を恐れ周りの顔色を伺っているだけ！そんな卑屈さのどこに真実の愛がある!!』

雷神だけあって雷の様な叫びだ。

「ち、違う！俺は……俺はセルベリアさんの事を思つて……」

『では貴様の言う真実の愛とは何だ？ 何を想い、何を目指す！一度でいいからその胸の裡を目の前の二人にぶつけてみよ！』

「くうっ……い！」

俺だつて……俺だつて本当は……！セルベリアさんにもスコグルにもこんな戦いをさせたくないし、洗脳された挙句に戦わされ続けるなんて地獄でしかないじゃないか！

『その胸の裡を叫ぶのだ。さすれば道は開けん！』

そうだ、俺は……俺はセルベリアさんにもスコグルにも笑つていてほしいんだ！その笑顔の為なら俺は命を懸ける！だから……一旦、俺はヘカトンケイルの爺さんの力を解除し、ゼウスのジジイのいうままに腕を数多の触手に変化させる。

「なんだ……？まだ何か隠し玉が……!?!」

警戒するスコグルだが、それは無駄な事だ。何故なら今の俺は例えどんな結果になろうとも俺は彼女達を救いたくてたまらないのだから！

「うおおおおっ！ 俺式・衣装破壊！」

俺は彼女達を触手で優しく縛り上げて触手から粘液によりセルベリアさんの装備やスコグルの籠手を外し、無力化する。

『ほほう。その様な無力化の方法があるとはな』

『しかし服や鎧だけを溶かす粘液とはな……なかなかやるのう。今度作り方をワシにそつと教えてくれ』

バカ！誰がジジイに教えてやるか！寧ろヘラさんに告げ口してやる！

『むう……男のロマンが解らぬとは。まあ、良い。装備を剥いただけではあの二人の戦意や洗脳は解けておらぬようじゃ。ここは一つワシが一肌脱いでやるかの』

と、言い出すや触手がそれぞれ小さな機械の多腕に変化してゆく。どうやらヘカトンケイルの爺さんの力をゼウスのジジイが利用している様だ。

「あははははは！な、なにこれ!?止めろ！止めろってばー！」

「ふ、ふふふ！こ、この様な辱めかどに屈する私では……あはははは！」

どうやら多腕で二人をこちよこちよとくすぐる事で戦意や洗脳を解くこうとしているのか？

「は、はははは！止め……ふわあああっ!!」

「ひ、ひひひ！ふひゃひゃひゃひゃ！」

二人はくすぐったさに耐えかねて身を振らせながら悶える。俺の目を気にする余裕はないみたいで、おっぱいやお尻、果ては可愛らしいヘソや小さなシミ一つない背中など普段お目にかかれないところを惜しみ無く見せてくれている。あ、やっぱり銀髪の人があつちも銀髪なんだな……。ってゼウスのエロジジイじゃねえんだぞ！何考えてんだ俺は！

「くっ……くふ、くふふふ！殺せ……殺せええ！」

セルベリアさんが姫騎士みたいな事を泣き笑いしながら言っている。ヤバい、俺のツボにクリーンヒットだ。

「ひひっ！くひゃ！あっはははははは！」

スコグルも涙や汗でぐしやぐしやになった顔を何とか腕で覆い隠そうとしながらも堪えきれないのか悶えている。

『殺せと言ったか、ならば良からう！じゃがワシが殺すのはお嬢ちゃんへの怨念と哀しみじゃ！（キリッ）』

いいことを言っている様でやっていることは女の子の裸をくすぐるといふ最低最悪な事をしているゼウスのジジイだが更にその斜め下に行く。

汗と粘液に塗れている二人の裸体に対し多腕を通じて電撃らしきものを放ったのだ！

『元祖・絶頂雷撃!!』

「あはあああああつ♥♥♥」

ガクガクと痙攣しながらセルベリアさんとスコグルは絶頂し、白目を剥きながら潮をぶしゆうつ、と吹き出す。

「セルベリアさん!!スコグルー!!」

俺は大切な二人の名前を叫びながら二人を触手で縛って支え、へたり込んでしまう。ああ……ああ……! 俺がもつとしつかりしていたらこんな結末にはならなかったのに……!

『ふむ……その様な顔をするでない。お主のお陰でこの二人が洗脳から解かれ、心から笑い合う事ができるのじゃ』

まともに入ってんじゃねえぞジジイ!人の腕を使って好き勝手しやがって!!誰がここまでやれと言ったんだよ!

「お、おい……大丈夫か?」

するとスコグルはともかく、あのセルベリアさんまで俺に抱きついてくる。

「あ、あの?お二人共?」

「ねえ♥安里お♥まさかこれで終わりじゃないよね♥♥♥」

「うむ……♥私達をここまで辱めたのだ。責任はとってもらおうぞ♥♥」

「え、ええ!?!」

「やだなあ……♥もうアタシ達が正気なの知ってるからお……♥♥」

「観念してもらおうか。イ・タ・ズ・ラ・さ・れ・た、分を返させて貰おうじゃないか……♥♥♥」

あ、そうか洗脳が解けたんだ。良かった良かった……いや良くない!状況が輪をかけて悪くなっている気がするが俺は一先ず二人に何か羽織る物を用意して、アースガルドの拠点へと戻る。

そこでは何やらウキウキとした顔で温泉に向かう浴衣姿のイツセーを見かけたが声をかける余裕はなかった。

1

そして、俺の部屋にスコグルとセルベリアさんを招き入れた訳なの

だが。

「んっ♥ちゅっ♥」

俺の部屋に入った途端、二人は俺にキスの雨を降らせる。

「あ、あの……二人とも？」

俺が戸惑っている二人はそつと一つしか無い布団に寝転んだ。

「ふふ♥私達の為に命を懸けて戦ってくれたんだろう？それは嬉しいさ……でも、もう私達に残された道は一つしかなくなったんだ。君と  
いう海で泳ぐ為にはね♥」

セルベリアさんは浴衣の胸元を大きく開け、そこから巨大な乳房をたふんとまろび出させる。セルベリアさんの身体はまだ少し汗ばんでいて、おっぱいの谷間もほんのりと濡れている。スコグルは浴衣を  
はだけさせその巨大な胸を包む水着も取り去ると俺を抱き寄せ、その  
大きなおっぱいを押し付ける。

「ふふふ……♥おっぱいの感触はどうだ？」

セルベリアさんの巨乳も相当だがスコグルのおっぱいはそれ以上。  
柔らかくて弾力があって温かい……。

「どうした？触らないのか♥スコグルやイツセーから貴様は相当おっ  
ぱいが好きと聞いているぞ？遠慮するな♥」

二人のおっぱいが俺を受け入れている。そう思うともう我慢でき  
なくなった！俺はセルベリアさんの胸に遠慮なく手を伸ばすと彼  
女の顔に笑顔が咲き誇る。

「はあ♥あんっ♥いいぞお、もっと強く揉んでくれっ♥♥」

「ううっ！セルベリアさん！セルベリアさん！」

俺は夢中でセルベリアさんのおっぱいを揉んだり、その先端の桜色  
の乳首を吸ったりして堪能する。ああ、セルベリアさんのおっぱいは  
こんな感触だったのか！

「ふふふ♥可愛い奴め♥ほらもつと可愛がつてくれ……♥♥」

俺の頭を抱き寄せ、おっぱいに埋めるとそのまま抱きしめてくれ  
る。ああ……心地良い……。

「やあん♥セルベリアだけじゃなくてアタシを忘れちゃだよう♥♥  
」

スコグルは浴衣の帯を外して、その巨大な胸を解放する。おっぱいはその大きさに反して重力に引かれず、見事な釣鐘型を維持できている。そして、その先端にある乳首は綺麗な薄桃色でまるで俺の為に自ら現れたかのようだ。

「んふふ……♡どう？私のおっぱいも触ってみたいと思わない？」

俺はその極上の果実に迷わずむしゃぶりついた。ああ……なんて甘いんだ。それに柔らかい……！

「はあん♡激しいっ♡もつと……もつとお♡」

スコグルは満足そうに俺に抱きついて、胸を押し付けてくる。ああ！柔らかい！最高だ！

セルベリアさんは俺を抱き寄せると、自らの乳首を差し出す。俺はその果実にむしゃぶりつき、その先端を舌で愛撫する。ああ、美味しい！もつと味わいたい！

「ひゃあん♡んんっ♡♡可愛い奴め♡でも、そんなに夢中にならなくても私のおっぱいはどこにも行かないぞ♡」

そう言いながらセルベリアさんは俺の頭を撫でてくれる。ああ……気持ち良い……！

「安里のチンポ、もうガチガチじゃん♡♡♡ホントに好きなんだねえ♡♡」

スコグルは俺の股に手を伸ばし、その手で俺の股間を撫で回してくる。ああ！気持ち良い！もう我慢できない！

「ねえ、安里お♡アタシとセルベリアのおっぱい……どっちが好きい？♡♡」

そ、そんな事聞かれなくて済んでるじゃないか！俺は二人の乳首から口を離して叫ぶ。

「セルベリアさんとスコグルの二人とも愛してるよ!!好きなんだからしようがないだろ！」

「ああん♡♡嬉しい♡愛してるとか言われちゃったあ♡♡」

「ふふふ……私もだ♡」

二人は俺への愛を囁きながら浴衣を脱ぎ去り、その美しい裸体を露にする。ああ……綺麗だ！

「ぎ、安里よ。貴様も脱げ♥私達が可愛がってやるぞ♥♥」

「セルベリアみたいにおっぱいで挟んであげても良いんだよ?」

俺はスコグルの誘惑に耐えきれず、自分から服を脱ぎ捨てた。二人の全裸の姿を見るだけで興奮してしまう。

「セルベリア、スコグル!挿れるぞ!」

俺は二人に覆い被さり、そのおっぱいを寄せて二人に自分のモノを擦り付ける。ああ、柔らかくて温かくて……最高だ!

「あん♥♥がつつかないのお♥」

「ふふ……本当に可愛い奴め♥好きだけ楽しむといい♥♥」

ああ、もう我慢できない!いくぞ!!俺は二人の谷間に遠慮なく自分のモノを突き立てて激しく腰を動かし始める。

「やあん♥♥すごいおい♥♥」

「ふわああ♥♥おっぱい犯されてるう♥♥♥♥」

俺は夢中になって腰を振る。ああ、気持ち良い!柔らかくて温かいセルベリアさんとスコグルのおっぱいは最高だ!もうこのまま死んでもいいくらいに!!

「あんっ♥♥ダメえ♥♥アタシも安里と……一緒にい……♥♥」

スコグルもセルベリアさんも自らの股間に手を伸ばして、くちゅくちゅと卑猥な音を立てながら自慰をしている。

「ふああん♥♥♥♥ダメ……イクう♥♥イツちやうよお♥♥」

「ふふ……♥♥安里よ、私もだ♥♥」

二人も絶頂が近いのかおっぱいを押し付ける力が強くなる。そして、俺は二人に導かれるように自らの欲望を吐き出す!

「ううっ!!出る!!」

どくん!と脈打つと同時に俺のモノから大量の精液が飛び出し、二人の顔をドロドロに汚していく。

「ふわあ!熱いい♥♥」

「くふ♥♥すごい量だな♥♥」

スコグルとセルベリアさんは顔に付いた精液を指ですくい取ると躊躇いもなく口に運ぶ。ああ……そんな姿を見せられたら俺は……!

「セルベリアさん！俺……！」

「ああ、ま、待て♥先ずはキスから……あああつ?!」

ズブズブツ！ブツン！俺はセルベリアさんの制止も聞く余裕もなく一気に挿入した！

……何だ？この感覚？スコグルやルイーナの時は違う独特の締付というか抵抗感がある。

「あ……あ……」

セルベリアさんは目に涙を浮かべて身体を震わせている。あれ？おかしいな？俺とスコグルとルイーナの時はすんなり入った筈なのに……。ま、まさか……。

「セルベリアさん……まさか」

確認する俺に『みなまで言うな』とばかりに目を泳がせるセルベリアさん。間違いない。セルベリアさんは初めてだったんだ。そんなセルベリアさんの初めてを奪えた事に興奮しつつも、冷や汗が止まらない。

「あの、セルベリアさん？今まで誰かとお付き合いをしたことって……？」

「な、無い！だから貴様が初めてだ！」

半ば逆ギレのように答えるセルベリアさん。これは……どうしたらいいんだ？

「ひ、ひとまず落ち着きましょう！一旦抜きますから！」

俺はゆっくりとモノを引き抜こうとするが、セルベリアさんはそれを許してくれなかった。

「ま、待て！抜く必要はない！」

いやでも明らかに……お互いにまごついている間、スコグルが助け舟を出す。

「まあまあ、ココは安里の彼女のアタシに任せなつて♥はい♥」

恐らくルーン魔術（ランサーさんから聞いたことがある）をセルベリアさんの下腹部に刻むとセルベリアさんの表情が少し和らぐ。

「これは……」

「そ♥ルーン魔術で痛みを和らげてあげたの♥ふふ、安里のチンポを



お腹いっぱい感じるといいよ♥」

なるほど……スコグルは魔術に長けているとは聞いていたけど  
ルーン魔術も使えるのか。すると、セルベリアさんは俺のモノを掴ん  
だまま腰を落とし始めた。

「いや！セルベリアさん!?無理しないで下さい！」

だが、セルベリアさんは『いいから黙っている』とばかりに睨んで  
くる。ああ、もうどうにでもなれ！

「ふんっ♥んんんっ♥♥」

ずぶずぶと俺のモノがセルベリアさんの膣内に入り込み、やがて根  
本まで入る。セルベリアさんの顔は痛みかそれ以外のものを堪える  
為か少し歪んでいる。

「はーっ♥はーっ♥ま、待っている安里♥私がすぐにイカせてやるか  
らな♥」

そう言ってセルベリアさんは激しく上下運動を始める。ああ！凄  
い！さつきより締付けが強くなって……！

「ふふ……安里のチンポ、もうびくびくしてきたあ♥♥」

スコグルは俺の胸に舌を這わせながら楽しそうに笑う。俺のモノ  
は今にも暴発しそうだ！でも、せめてセルベリアさんにも気持ち良くな  
って欲しい!! 必死に俺にしがみつきながら一生懸命に腰を振る  
セルベリアさんに連動して俺もチンポを彼女の最奥部に突き立てる  
!

「あっ♥安里♥♥」

「セルベリアさん！セルベリアさん！」

「ああっ♥来る♥何か、何か眩しいものがあ♥けど、イヤじゃない♥あ  
の青い光とは違う♥♥♥」

セルベリアさんの身体が一際大きく跳ね、それと同時に俺も限界を  
迎える！

「ああああああ♥♥♥♥♥」

どぶっ!どぶぷ!と大量の精液がセルベリアさんの膣内にぶちま  
けられる。ああ……気持ち良かった……。俺は快感に震えながら一  
旦ひびぎをつくがスコグルが俺とセルベリアさんから優しく離れると

同時に支えてくれる。

「お疲れ様♥と言いたい所だけどアタシもいいよね？」

「う、うん」

スコグルは答えを聞かずに俺の股間に腰を下ろしてくる。う……あの柔らかい尻が……。

「はあ♥♥安里のチンポ、さつきよりも大つきい♥」

スコグルは自らの性器を指で開きながら挑発的に言う。そんなエロい仕草されたらもう我慢できない！俺は一気に挿入し、激しくピストンを開始する！セルベリアさんの時より激しく！

「きゃあああ♥♥しゅ、しゅごい♥しゅごいのお♥♥」

スコグルは俺にしがみつきながら絶頂に達する。それでも俺は止まらない。俺のモノはまだ射精していないし、スコグルも全然満足していない。

「ああっ♥♥安里♥♥まだするのお♥♥」

スコグルは舌なめずりしながら俺を見つめると一気に腰を下ろして来る。じゅぽおっ！といやらしい音と共に俺のモノがスコグルの子宮口をノックし、彼女の口から歓喜の悲鳴があがる。

「ふああああ♥♥しゅごい♥しゅごいのおおお♥♥」

激しく腰を上下させ、自ら快感を求めるスコグル。そんな彼女に答えるように俺も彼女のお尻を鷲掴みにして腰を打ち付ける。

「んああ♥♥しゅごい♥♥おひり♥おひりもおまんこもきもちよしゅぎるう♥」

スコグルの膣内がきゆうきゆうと俺のモノを締め付けるが、それを跳ね除ける様にチンポは肥大化していく。

「きやん♥♥安里のチンポ♥♥どんどんアタシの中でおつきくなってるう♥♥」

俺のモノもスコグルの膣もお互い限界が近いのかビクビクと痙攣していき、さつきの触手のお返しでもするかのようにヌメヌメと絡みついてくる。

「いくう♥♥いくう♥安里のチンポでいっちゃうのお♥♥」

どぴゅ！びゅるるるっ！！俺はスコグルの中に遠慮なく精液をぶ

ちまける。同時にスコグルも絶頂を迎え、俺のモノから精液を搾り取るかのように膣がぎゅーっと締まる。何度味わつてもこの感覚はたまらない。俺は快感に身を委ね、覆いかぶさってくるスコグルの頂を撫でた。

「んふふ♥気持ち良かった？」

スコグルは俺の頭を撫でながら耳元で囁いてくる。うん、凄く良かったよ……。でも、流石に疲れたからちよつと休ませてくれ……。

1

ここは冥府。冥界ではなく咎人、怨霊、死後尚も転生せずに留まっているものたちの巣窟だ。さながら終着のない執着の回廊。怨霊も咎人も自己弁護と逆恨みを永久機関とし死んだものたちの怨嗟は、生命という生命を縛り呪い続けるのだ。

「ネフレンがやられた様だな」

「なに、所詮は古き神々の端くれ。

我々悪神同盟にも入れぬ程度の神格であったものなど拘る必要はないかと」

「左様で」

冥府の支配者ハーデスを囲む老若男女は次々とネフレンを軽んずる発言を口にしていく。この輩に仲間意識や情愛などというものは存在しない。野の獣より卑しく、禍々しく、得体のしれぬ邪神たちは嘲笑う。

「キミたち酷くなくい？」

ネフレンもまあまあ頑張った方なんだしさあ、もうちつとりスペクトしてあげようよ」

と、リゼヴィムは悪神同盟の面々に苦言を呈するが心にもない事とこののは誰の目にも明らかだ。

「はっ！ リゼヴィムの兄貴がそういうなら、まあ……ちつとはリスペクトしてやらねえといけねえかな」

「ギャハハハハ！キミがいのいちに賛同しちゃうなんて参っちゃやうねえ！」

リゼヴィムは悪神同盟の一人である鼻から下にかけて？の字が書

かれたマスクをつけたボサボサ髪の男とゲラゲラと姦しく、品のない笑い声を上げる。

「……喧しいクズどもが。バラバラに引き裂いてやろうか」

「キヤー怖い怖い。不毛レスバ免許皆伝万年引きこもりのキミがそういうとシヤレになんないよ！ その棺桶にシユールストレミング投げ込んでいい？」

諫めるといふより、単にイラつきを隠せないといった具合にモノリスじみた壁の何者かが苛立たしげに言葉を吐いた。それに対してリゼヴィムは、まるでイタズラが親にバレた悪ガキのような笑いで返す。

「そんな事よりオラ、腹減った……リゼヴィム、お前食っていいか？」

「ダメに決まってんでしょ！ このドカ食い気絶部長!! 食べるのはダークマターだけにしなさいな！ マーダだよ！」

「ダメかー」

「ではマダ様。私めの腕を一本ご賞味あれ。我は不死の化身ならば腕の一つや二つすぐ生えてきますので」

「いや、それはいいかな」

「ふ、所詮は喰らうしか能のない蛮神。知性というものをまるで感じぬな。これでは同盟の先行きは知れたものだ」

「貴様！ マダ様を愚弄するかっ!!」

何やらスカした態度の男が壁に背を預けながら鼻で笑う。よく見れば足、いや臍が長く頭には鬼であることを示す様な一本の長い角がある。そしてそんな彼に多腕のインド系らしき武人じみた青年が主を愚弄された事に気色ばんだ。

「ほざけ。貴様らは現人神の祖に追われ蜘蛛の子の様に散らばった悪神にもなりきれない半端者ではないか。これ以上のやり取りは不毛だな。失礼する」

「あくあく。流石レスバ最強。言うだけ言って回線切断しちゃうし。言わばこれは勇気の切断かな？」

リゼヴィムはそう、茶化す様に言うが皆の反応はまるでない。と、その時。

「そう言えばあの赤龍帝なるものは異空間にて今修行中らしいな」  
何やら黒いモヤの様なものがリゼヴィムに対して言葉を投げかける。

「らしいね。中級悪魔試験に向けて頑張るぞい！だってさ！笑っちゃうんだよね！もうすぐ上級だの中級だのそんなもの無くなっちゃうってのにさ！ギャハハハハ！」

リゼヴィムはイツセーの努力を嘲弄する様な発言をする。しかし、その目はまるで笑ってはいない。

「まあ、良い。我が眷属には傾城傾国の美姫と謳われた叛英雄がいる。私とその者で赤龍帝を墮落させ我々の手駒にするのも一興というものだ」

「おおー！いいねえいいねえ！ その提案に乗ろうじゃないか！」

リゼヴィムは指笛を吹くと、空間に穴が開きそこから一人の女が現れた。その女の姿はまごうことなき傾国。その美しさはまさに傾城と呼ぶに相応しい。女は長く艶やかな黒髪を無造作にかきあげる。

「お呼びですか？マール様」

黒いモヤに対して呼ばれた女性は忠誠を誓うかの様に膝をついた。

「うむ。例の赤龍帝を我が力と貴様の美貌をもって虜とするぞ。かの暴君や飛將軍すら虜にした貴様ならばそれも容易かろう」

「承知いたしました」

女性はマールにそう短く答えると再び空間の穴に消えていく。

「はく、モテる男は辛いねえ。そう思わん？」

リゼヴィムはそう言つて先のボサボサ髪の男に水を向ける。

「いやホントホント。でも大丈夫スかりゼヴィムの兄貴。まさか赤龍帝をお釈迦にしちゃうなんてオチは嫌ですぜえ？」

「あつはははは！それってアカ・マナフ君一流のジョーク？」

リゼヴィムは笑いながら言った。

アカ・マナフが喋るのは冗談ではなく嘘。真実とは真反対の事である。更に言えば彼は虚言、嘘の支配者と呼ばれる邪神なのだ。

「ひでえなあ……兄貴は」

つまり、彼はリゼヴィムの事を慕つてもいないし、尊敬していない。

寧ろ彼の主に比べればハーデスもリゼヴィムも、いやこの世全ての生命は取るに足らない羽虫にも満たないのだ。

## ※93話（イツセー×レイヴェル&ロスヴァイセ&木場（イザイヤ））

「聞いておりますの？ イッセー様！ この答えはこう！」

「違います！ この場合に当てはめる方程式は……！」

左右からスパルタン家庭教師が責め立ててくる。レイヴェルちゃんとロスヴァイセさん。どちらも負けず嫌いで、熱血的。

「私達がフォローに回れば、イツセー様はもつと上に行けますわ！ 人に教えると自分の復習にもなりますし、何よりも一緒に頑張っている感があつて大変結構！」

レイヴェルちゃん目がキラキラしている……バリバリの教育ママになりそう。子どもはもつと自由にのびのびと育ててほしい。しかし、それよりまるで参考書が減る様子がない。ヴェネラナ様が用意した膨大な参考書の山、山、山。これを解き明かすまでリアスのおっぱいはお預けをくらっている。中級悪魔試験を突破するために、俺は猛勉強中なのである。

「何で異世界にいるのに勉強しなくちゃいけないんだ……ッ！」

「まあまあ、イツセーくん。僕も出来得る限り力になるよ」

木場が爽やかに微笑んでくれる。しかし、その笑みはいつもの爽やかなものなのだが出で立ちが……。

「何で女教師姿に？」

「この方がイツセー君の好みかと思つて」

いや、堂々と言われても！イザイヤさんと完全に融合したせいで自在に女体化できる様になった木場は何故か俺にこうしたアプローチをしてくる。

「ふ、不健全ですわ……」

「そうです！ 駒王学園の生徒たるもの清く！ 正しく！ 美しく！」

レイヴェルちゃんとロスヴァイセさんから白い目で見られる木場。しかし木場はまるで堪えていない。

「勿論、不純な動機ではないよ？ イッセー君がリアス部長の夫に相応しい男性になれる様に僕もできる限りのお手伝いをしたいと思っているんだ。そののどろが不健全なんだい？」

「その格好が既に不純ですわ！」

「そうです！ エッチなお店で働いてらっしゃるんですか!? そんな破廉恥な格好で迫ってくるなんて……ッ」

二人から一斉に責め立てられても木場はニコニコと笑顔を崩すことない。

「まあ……君達では解らないか。この領域（レベル）の話は」

木場は挑発するかの様に二人に言うなり俺にしなだれかかった。あ、当たる!! 木場、もといイザイヤさんの聖なるおっぱいが! というか木場あ!?!お前ノーブラかよ! 禁欲生活にこのおっぱいは凶悪すぎる!

「イッセー様から離れてください!」

「そうです! 不健全です!」

二人が引き剥がそうとするが、木場は華麗に俺の腕に抱きついて離れない。この柔らかさ……至福! 至高だ! おっぱい最高!!

と、いかんいかん! レイヴェルちゃんとロスヴァイセさんの前だぞ!! 失速していく! じゃなくて、色即是空! 空即是色! 煩惱退散! う、うううう……ッ! このおっぱいを目の前になると勉強に集中出来ないんです!

「ふふふ、随分と勉強熱心ですこと」

ああ!?! 禁欲生活が祟ったのか!?! 急にボン・キュツ・ボン! かつ左右にシフォンをつけた踊り子のお姉さんが見える。更には鼻をくすぐる甘い匂いまで!?

「貴方、どちら様でして?」

「アザゼル先生がお呼びした方ですか?」

レイヴェルちゃんとロスヴァイセさんが驚きの声を上げる。あ、危なかった……。あと少しで意識を失いそうになった! おっぱいの魔力が恐ろしいぜ! それにしても、この凄まじい色気と艶っぽさは一体何なんだ!?



「ふふふ、それは違うわ。私の名は貂蟬。叛英雄派の一人にして貴方の力を頂きに参りましたの」

よ、よろこんでー！ 間違えた！ な、なんだってー！ 貂蟬って言えば董卓とか呂布をも虜にした超極上エロボディを持つお姉さんじゃないか！ そんなお姉さんが妖艶としかいいようのない蠱惑的な笑みを俺に向けてくるもんだから、おっぱいを視界から外せない！

「そんな事を僕が、いや僕達が許すと思うかい？」

「そうですね！ 今イツセー様は中級悪魔試験に向けて猛勉強中です！ 邪魔をされたくはありませんわー！」

木場とレイヴェルちゃんが俺を守る様に前に出る。更にロスヴァイセさんも警戒している。しかし貂蟬は動じることなく、自分の服をズラした！ なんとたる絶景か！ 富士山が二つあるぜ！

「貂蟬よ。そのまま赤龍帝を籠絡するのは任せたぞ。私はこの目障りな奴らを始末しておく」

いつの間にか黒いモヤが貂蟬さんの後ろに現れている。凄く邪悪な気配に俺のみではなく木場やロスヴァイセさん、レイヴェルちゃんも戦闘態勢を取った。

「うふふ、ああ、いけませんわ……こんなに早くイツセー様に出会えるなんて……貂蟬感激でございますわ」

う……またおっぱいが近づいて……！ しかし俺は意志の力を総動員して回避した！ 木場とレイヴェルちゃんからの殺気が痛い！ しかしこれが男という生き物なのです！ 抗えません!! しかし、ドライグが擬人化して俺から離れているこのタイミングはかなりマズいのではなからうか？

「勝鬨拳げし勝利の剣よー！」

「ほーお、それが噂に名高い聖魔剣か」

木場が聖魔剣を解放すると黒いモヤは感心した様にそれを見る。

「この様な邪悪な気配……貴方は一体なんなのですか!!」

ロスヴァイセさんが光の弓矢を黒いモヤに向けて構える。しかし黒いモヤは動じた様子もなく余裕たっぷりな態度を取ってきた。

「ふはははは！ 我が名はマール！ 悪霊と死を統べし魔王なり！」

「え？ チンポ？ 流石にその名前は同情するわ」

……俺が聞き返すと空気が凍りついた。名前自体がセクハラとかこの魔王相当変態だな。

「き、貴様あー！ 魔羅の呼名はこちらが元ネタだぞー！」

黒いモヤ……マールはモヤ自体を震わせながら怒っている。しかし何でだろうか？ 不思議とそんなに悪い奴には思えない。いや、魔王だから悪いヤツの筈なただけ……。寧ろこの魔王からはポンコツな感じが……。

「何だ。嘗て俺に敗れた女が何を喚いているかと思えば……相棒を籠絡するつもりで来たとは笑わせる」

「ぐぬ……！ ほぎけドライブ！ 我が父を消滅させ、私を辱めた罪忘れたとは言わせぬぞ!!」

「ああ、何かと思えば嘗て『ドライブ様の赤龍チンポしゅごしゅぎましゅう♥♥♥貴方のチンポ無しじゃもう生きていけましえん♥魔王やめてメスブタになりまあしゅ♥♥♥』とか言ってアへ顔ダブルピースとやらを決めた女か。あの映像は相棒の親友二人も大分喜んでいたぞ」

「うわああああ!! 貴様ーっ!!」

あ、ドライブとも因縁あるのかよ。しかし何でかあんまり憎めないんだよなあ。娘さんだからかなあ？ でも魔王つて言うんだからとんでもなく恐ろしい姿かも……？ いやいや、若い頃のドライブがコマしたんだからリアスやセラフォル様みたいな凄い美人の可能性もワンチャン……。

「イツセー君。顔がだらしないよ」

はっ！ 木場の言葉で我に返る。危ない危ない……。貂蟬さんは俺を熱い視線で見つめてくるし……あ、ヤバい、鼻血出そう……。

「ふふふ、まあいい！ このマールは父より人の欲望や渴望を暴走させ破滅させる力を継いでいるのだ。お前達のその欲望を暴走させて破滅させてやろうー！」

マールがモヤから七色の光を放つと俺を包みこんでいく！ なんだコレ!? ダメージはないようだけど？

「ふふふ、さあ欲望を解放したまえ。赤龍帝よ」

「そ、そんなことを言われても……うおお!? 欲望を暴走させろ? こんな美女達を目の前にしてそんな事言われてもなあ……。おっぱいもお尻もエロくて綺麗だし。だがしかし! 俺の欲望はそんなもんには負けたりは……。おっぱい! おお……。おっぱい! おっぱい! おっぱい!」

「い、イツセー君!」

「俺はまず木場の胸目掛けて飛び込んだ! うひよー! 木場、鎧を着てないから凄く柔らかいぜ! そして何て良い匂いだ!!」

「な、何をするんだいイツセー君!」

「木場あー! おっぱいを揉ませろおおおお!!」

「俺は欲望に任せて木場の胸を揉みしだく! ああ、これだよこれ!

「この感触だよ! 俺が求めていたのは! ああ……。堪らない……。この手にギリギリ収まる美乳バランスのサイズが堪らんツ!!」

「ああっ♥ダメだよおイツセー君♥♥皆の見える所でえ♥♥♥」

「だからこそだろう!!」

「パイ揉みだけでこんなになるなんて……。流石木場! だが親友としてこのチョロさは心配だ!! だから俺がお前のおっぱいを鍛えてやる!」

「うわ……。イツセー様のケダモノ……」

「最低だべ……。こんな……」

「レイヴェルちゃんとロスヴァイセさんはドン引きしている。だが構うものか! 俺の欲望の炎はこんなもんじゃあ収まらないぜ!

「ま、マール様!? これは!?」

「わ、私にも解らん……。!?」

「二人は呆然自失状態。しかし俺は止まらない! 欲望を抑えて何が人間だ! 転生悪魔だ! 抑圧から生まれる悟りなんてちよつとタガが外れる程度で崩れ去るものじゃないか!

「どこかの世界最強の人も言っていた。強くなりたければ喰らえと!」

「木場、好きだあああ!!」

そんなワケで俺は手始め木場のおっぱいに顔を埋めて匂いを嗅ぎまくる。

「あ♥ああん♥♥そ、そこはダメえ♥♥♥で、でもイツセー君ならー!」  
はあ……はあ……! こ、この感触……! この匂い! まさに夢にまで見た極楽浄土だああ!!

今ならば解る! 愛によって明るく染める王の力! 即ち愛染明王様の本当の力! 今こそ目覚めよ、我が欲望の力あツ!!

「イツセー君……♥♥♥」

「木場アア!! やるぞ! セックスだ!」

「ああっ♥君から求めてくれるだなんて夢みたいだよイツセー君♥♥♥」

木場はどうやら大分イザイヤさん側に精神が傾いているのか、あるいはその欲望を解放させられてこの様な状態になったのか定かではないが、そんな事はどうでもいい! 服を脱げば皆裸だ! それこそが解脱の境地なんだツ!!

「うおおおっ! 煩惱即菩提・衣装破壊!」

俺は全身からドライグではなく俺自身の欲望のオーラを滾らせる! するとどうだ。俺を中心としてオーラが円形状に広がり、その範囲にいるモノ全ての服のみならず纏っているモノを破壊するんだツ!

「な、なんですのコレはああっ!」

「ああー!? ゲイトさんに支給された一点もののレディースーツがツ!」

レイヴェルちゃんが驚いている。しかしもう遅いぜ! 今の俺は誰にも止められないツ!

「ふふふ、もう準備万端って感じだな木場」

「うん……♥イツセー君がいつもとは違って強引な感じだからかな……♥オマンコがキュンキュンして……たまらないんだ♥♥♥」

元々中性的な顔立ちだったが今は完全にメスの顔で木場は俺に股を広げた。

「ふふ、オマンコだけじゃなくチンポもすっかりご起立じゃないか♥

♥♥

「ああっ♥言わないでくれえ♥♥♥」

木場の股間はギンギンに勃起あがっており、我慢汁が垂れ落ち木場自身のオマンコにも伝っている。

「おいおい、我慢汁にも精子は含んでいるんだろ？ ならもう妊娠できんじゃないか？」

「そ、それはあ♥♥♥♥♥やあっ♥妊娠するならイツセー君との子供じゃなきゃだよおっ♥♥♥」

俺が木場の頬にキスしながらチンポを扱いてやると木場は顔を蕩けさせて悦ぶ。

「あ♥ああん♥♥♥だ、ダメなのにい♥♥イツセー君の手、気持ち良すぎるよおっ♥♥♥」

木場は全身から汗を流して快感を貪っている。本当にエロいなあ！

「そうかそうか。チンポはなかなかデカいのにケツはこんなにムチムチに、乳首もピン勃起で……木場はドスケベだなあ」

「♥♥♥♥♥ツ♥♥♥♥♥そ、それは君があ♥♥♥♥♥」

木場の股からは愛液がドロドロと溢れており、オマンコの割れ目はパクパクと口を開いている。まるで早く挿れてと言わんばかりに……。

「何だ!? 自分がスケベなのを俺のせいにするのか木場ア!? そんな情けない親友にはお仕置きしてやるぜ！」

「ああっ♥♥♥お、お願いだよイツセーくん♥♥♥♥♥」

俺は木場の乳首を舌で転がしながらオマンコを指で弄くり回す。すると木場は腰を浮かせて俺の指の動きに反応する。

ああ、何てエロいんだ！ 宝塚のスターといやらしい事をしているみたいで興奮してしまうぜ！

「あぐろう♥♥♥イクっ♥おチンポもオマンコもイツセー君の手でイツちやう♥♥♥出ちやう♥♥♥」

ドピュドピュドピュ!

ぷっしやあああ!! 木場のペニスから勢いよく精子が吹き出し、そ

れと同時に潮を吹いて絶頂を迎える。

「ふふ、俺もそろそろ……」

欲望MAXモードの俺のチンポはギンギンにそそり勃ち、既に先走りです。パンツはグチョグチョだ。

「木場、これからお前に俺の子種をプレゼントするぜ」

「うん……♡♡♡来てイッサー君……♡♡♡」

木場は俺のペニスをオマンコに擦り付けられると歓喜の表情で挿入を誘う。ああ、挿れてやるさ！ズブリと！お前のオマンコにな

!!  
「く、狂っているぞ貴様ら!？」

俺の煩惱即菩提・衣装破壊によりマールは真の姿(?)を表している。

なんだ、青膚少女か。ならいいや。

馬耳東風の喩えじゃないが、マールの言葉は俺には響かない。俺が今一番欲しいのは木場との愛だからな！

「あつ……あああああつ♡♡♡」

木場はすっかり女の悦びに目覚めたのか、俺のチンポを突っ込まれただけでメスの顔をしている。あの木場が舌をペロペロ出してアへ顔を晒して悦んでいるんだ！これはまさに感動モノの光景だぜ!!

「ああっ♡♡♡いいよイッサーくん♡♡♡」

木場は涙を流して涎を垂らして俺のチンポの虜になっていた。ああ、エロいよ！最高だ!! このトロ顔見てたかもっとしたくなって……きたあツ!!

「俺のチンポがそんなにいいのか木場!? どこがいいんだ!? 言ってみろ!」

つい、意地悪したくなって俺は種付プレスの状態勢で腰を振りながら木場に叫ぶ。

「ひ、ひいい♡♡♡そ、それはあ♡♡♡」

「言え! 言わないとチンポはお預けだぞ!」

ピタリ、と俺は腰を止める。すると木場は物欲しそうにしながら

ゆっくりと口を開く。

「オマンコお♥♥♥♥♥ イッセー君のぶつといオチンポでえ、僕の淫乱メスマンコをズボズボされるのが最高に気持ち良いんだ♥♥♥ あっ♥ 好き♥♥♥ イッセー君に強引に迫られてメチャクチャにされるの好きなんだあ♥♥♥♥♥」

木場はアヘアへしながら必死に答えてくれた。よし、ご褒美をあげなきゃな!

「そうか! そんなに俺のチンポが好きか!! ならもつとくれてやるぜ!!」

「ああっ♥ 頂戴っ♥ イッセー君の濃厚精子を僕のオマンコにいっぱい出してえっ♥♥♥♥♥」

木場は俺の全力ピストンを受け止めるながら懇願してきた!

「くうっ!! 出るぞ木場!!」

「うんっ♥♥♥♥♥ 来てえ♥♥♥♥♥」

ドピュルルル——ッ!! ビュルビュルウ! 俺の欲望が一気に弾けた。熱い精子が木場の子宮に注ぎ込まれていく……。果たして普段は男の木場が孕んだとしたらどうなるんだ? ずっとイザイヤさんの身体のままなのか?

「ああ♥♥♥♥♥ 熱いいい……。イッセー君の精子で孕んじゃうよお♥♥♥♥♥」

しかし木場が俺の子供を孕むならそれもそれでいい。木場の人生を引き受けられずに何がハーレム神か! 俺は木場と愛し合いたいんだ!

「あ、ああ……。何てことを。学生同士でセックスして、更に妊娠までさせようなんて……。! イッセーくん! やっている事がムチャクチャすぎますよ!!」

「い、イッセー様! どうか冷静になつて下さいまし!」

レイヴェルちゃんとロスヴァイセさんが俺を批判するが、俺には解る。二人共俺の煩惱に感化されて、木場を羨ましく思っていると!

「さあ……。次はレイヴェルちゃんとロスヴァイセさんの番だ!」

俺は二人に向かって手を伸ばす。しかし二人はその手を取るとこ

う言ってきた。

「こ、こんな破廉恥な行為はどうかと思いますわ」

「そ、そうです！ もっと自分の将来を大事にしてください！」

二人は俺を止めようとするが……明らかに乗り気だった。その証拠に俺の手を振りほどこうともしないではないか!! キミ達が抵抗する意思を見せなければ俺はキミ達を味わい尽くすだけだ!!

「くうっ……こんなこと、許されないことなのにい♥」

「あうう♥イツセー君、許してえ♥♥」

俺は後ろからレイヴエルとロスヴァイセさんを抱きしめて胸やお尻を揉みしだく。

「あひい♥♥♥ああん♥♥♥」

「ひゃああ♥♥♥イツセー様の手つきい♥だめえ♥私の身体をさわさわしないであ♥♥♥」

二人とも完全に発情したメスの顔をして俺に身を預けている。レイヴエルちゃんもロスヴァイセさんも意外にむつつりスケベだな!

「はあ……♥♥♥イツセー様の逞しい手とオチンポがあ……♥♥♥」

「あああ♥♥♥き、気持ち良いい♥♥♥」

二人は俺の愛撫で完全に出来上がっている様だ。はじける若さの喩えかのように、レイヴエルちゃんの胸もロスヴァイセさんの胸もはつきり解る程プツクリと膨らみ、その中心にある乳首はピンピンに勃ち上がっている。

「二人ともエッチだなあ! こんなに乳首をおっ勃てて!」

「あ、ううっ♥わ、私はフェニックス家の令嬢で♥こ、こんなはしたない事はお♥」

「そ、そうです! こ、こんな破廉恥な真似はいけません♥♥」

口では嫌々言っているがその実二人とも俺との行為に没頭している。その証拠に抵抗なんてしていないじゃないか。

「レイヴエルちゃん。どこがはしたないんだい?」

「う、ううっ。そ、それは……♥」

乳首と彼女の蕾の様で、つるつるのオマンコを指で揉み解す様に愛



撫すると、レイヴェルちゃんは恥ずかしそうにする。

「ほら、答えてよ」

俺はレイヴェルちゃんの耳に息を吹きかけながら尋ねる。

「ひんっ♡♡♡、婚約もしていない殿方とま、交わるだなんて♡ひうう♡お尻なでながら乳首クリクリしないで下さいましっ♡♡♡」

レイヴェルちゃんの感度の良い反応に俺は征服感を感じる。

「そうか、レイヴェルちゃんは俺なんかとセックスするのが嫌か？」

「い、イヤというわけでは……♡た、ただこういう事は段階を踏まなければ♡んん♡♡♡」

涙目かつ歯をカチカチ鳴らしながら俺の愛撫にノックアウト寸前になっていくレイヴェルちゃんの唇を奪う。

「あむ……ちゅ……♡」

「んん♡♡♡♡♡」

レイヴェルちゃんは俺の舌を受け入れ、自分からも舌を絡めてきた。暫く濃厚なディープキスを堪能すると俺達は唇を離れた。そして俺はレイヴェルちゃんの処女マンコに人差し指と中指を突っ込んでクリトリスとGスポットを同時に攻めたてた！

「つまりキスから始めろって言いたいんだな？ その要求は満たしているぜ!!」

「ああっ♡♡♡イツセー様あ♡そ、それだけはあ♡♡♡♡♡」

俺の指で激しく愛撫されてレイヴェルちゃんはガクガクと腰を震わせながら悦んでいる。実に良い反応だ！

「ふふ、安心しなよレイヴェルちゃん。上級悪魔は世継ぎのために色んな悪魔と交わる事はそんな珍しい事じゃない。セラフオルー様だって安里と生ハメセックス三昧なんだぜ？」

「う、ううっ♡あ、安里がそんなとんでもない事をつ♡♡♡♡♡さ、最低♡ルイーナ様という最愛の人がいると言っていたのに♡♡♡♡♡やつぱりあの男はさいてえですわああっ♡♡♡」

セラフオルー様と安里がオトナの関係である事を知り、どうやら理性のタガが外れたらしい。レイヴェルちゃんは遂に欲望をさらけ出し始めた！

「な、ならあ♥私もフェニックス家の将来のため♥イツセー様と交わるのもやむを得ないとお♥♥」

「そうだ。レイヴェルちゃんも俺を受け入れるんだ！」

俺はレイヴェルちゃんのオマンコから指を抜き、彼女を背後から抱きかかえる！ つるつるのオマンコからはダラダラとはしたないまゝで愛液が垂れ流れている。

「あと、交わるっていうのはちよつと気取りすぎじゃないかな？ 生ハメセックスって言いなよ。ほら、言ってみて」

「い、生ハメセックスう♥♥イツセー様の遅いオチンポでえ♥わ、私のオマンコに種付けしてください♥♥♥」

遂にレイヴェルちゃんも俺の欲望に完全に染まりきった！ 俺はピンピンになっているペニスをレイヴェルちゃんのトロトロのオマンコにあてがうと……一気に根元まで挿入した！

「きひいいいっ♥♥い、いだぎもちいい♥♥ち、チンポ♥チンポが私のオマンコをひろげでるうううう♥♥♥」

令嬢とは思えない下品な喘ぎ声を発するレイヴェルちゃんの子宮を俺は遠慮も容赦なくもなく突きこむ！ 肉と肉がぶつかり合う音と、淫靡な音が室内に響き渡る。

「きひ♥♥♥そ、そこダメエ♥♥♥」

「おや？…ここかな？」  
俺はレイヴェルちゃんの反応を見ながら腰の角度を調整する。すると……

「おひっ♥♥♥やだあ、イツセー様あ♥♥私い♥オマンコの弱いところばかり突かれてるのお♥♥♥♥」

入口辺りがレイヴェルちゃんの弱いところだと判明した！ よし、ここを重点的に責めてあげなきゃな！

「おや？…レイヴェルちゃんはここが弱いのか？ じゃあこうしてやろう！」

俺はピストンする腰の速度を上げながらレイヴェルちゃんGスポットを集中的に突き上げる！ すると……

「あゝああ♥♥♥すご♥すごいのお♥♥♥オマンコの奥がキュン

キュンしでるううっ♡♡♡♡」

「ふふ、どうだい俺のチンポは？」

「おほっ♡ほおっ♡こ、こんなの♡こんなの初めてですわあ♡トぶっ♡頭がはじげでおがじぐなりゆっ♡♡♡」

レイヴェルちゃんは完全に俺の攻めに陥落し、呂律が回らなくなっていた。そしてそのまま……

「ああ♡♡イ、イツセー様のお♡オチンポ汁出して下さいいいいっ♡♡♡」

「ふふ、まだまだダメだよレイヴェルちゃん。俺を満足させたいなら君も一緒に気持ち良くならないとね。もっとう激しく動くよ！」

俺は更にピストンの動きを速める！パンっ！パンっ!! とう音と共に、俺の下腹部がレイヴェルちゃんの小ぶりなお尻をペチペチ叩く音が響く。

「お、お、おおお♡♡♡♡チンポ激しいいい♡♡♡」

「ふふ、レイヴェルちゃんもかなり興奮してるじゃないか。マンコがキュウキュウ締まってきてるよ？ さすがフェニックス家のご令嬢。セックスも優等生だね」

「い、いやあ♡♡♡セックスの優等生だなんてえ♡♡♡わ、私はただイツセー様とのセックスが気持ちいいからあ♡♡♡オマンコにオチンポ様が擦れて凄くいいだけですわあ♡♡♡」

レイヴェルちゃんは最早俺の言いなりだった。元々無意識下でエッチな事に興味津々だったのだろうレイヴェルちゃんだ。

「あひっ♡ごめんなさい♡お兄様あ♡お母様あっ♡私、もうお見合います必要ありませんわあっ♡だって冥界一のチンポに出会うことができますから♡♡♡」

レイヴェルちゃんは完全に快樂の虜となり、他の男の事なんて頭がないようだ。その事に俺は内心安堵する。だってこれで心置きなくレイヴェルちゃんを俺のモノにできるんだからな!!

「ふふ、そこまで俺のチンポが気に入ったならお望み通りタツプリと種付けしてやるからな！」

俺はラストスパートを賭けるかの様に激しく腰を打ち付ける！

パンっ！ パアンっ!!! と激しいピストン音が部屋に響き渡る！  
「あゝ あああ ♡♡♡♡ は、激しすぎますわ ♡イツセー様あ ♡♡♡」  
「ほら、そろそろイクぞー！ レイヴェルちゃんの一歩奥に出してやる  
！」

俺はとどめとばかりに思いつきり腰を打ち付けると……。

「うおおお！ 出るッ!!」

どびゆるるる!! どくんどくんどくんっ！ ぶしゅっぶっしゅう  
ううううっ!!

「おゝ ぎひいいいっ ♡♡♡ チンポ ♡イツセー様のチンポ ♡はじげで  
るっ ♡♡♡ おっ ♡おっ ♡イグう ♡♡イツセー様のオチンポ汁で  
子宮がいっぱいになっぢやってりゅううううっ ♡♡♡♡

チンポ汁 ♡はらませチンポ汁ありがどうございまじゅうう ♡♡  
」

俺はレイヴェルちゃんの子宮に大量のザーメンを流し込んだ！

同時にレイヴェルちゃんも絶頂を迎え、目を剥き舌を突き出し、体液  
という体液を吹き流してのアへ顔ダブルピースをしていた。

「あ、あへえ……♡♡♡♡」

そのままレイヴェルちゃんはバターン！ と白目を剥いて倒れて  
しまった。俺はペニスを引き抜くと、ドロドロと大量のザーメンが溢  
れ出してきた。

それにしても孕ませチンポ汁ありがとうございますなんて破廉恥  
な日本語があるとは！ 流石レイヴェルちゃんだぜ！ ライザー  
……お前の妹は全くスゴい女の子だぜ！

「う、うう……♡こ、こうなつたらもうヤケです！ イツセー君！ 私  
だってアースガルドで貴方とエッチして以来、ずっと貴方とのセック  
スを望んでたんですから!!」

ついにロスヴァイセさんも俺に触発されて吹っ切れた！

「私もあなたの物になりたいです!! 私を愛して下さい!! リアスさ  
んとまではいかなくても、私もあなたの恋人にして下さーい!!」

「ああ！ 勿論だー！」

ロスヴァイセさんはまず、木場とレイヴェルの愛液に塗れた肉棒を

口で掃除し始めた！

「くちゅっ……ぴちゅ♥♥♥」

舌と唇を器用に使い、亀頭から竿まで唾液まみれにしていくロスヴァイセさん！ 更には金玉や根元のアナルにまで舌を這わせていく。

「うおう！ 凄いやロスヴァイセさん!!」

俺は思わず感嘆の声を上げてしまった。だがそれを言われたロスヴァイセさんは嬉しそうに微笑む。

「うふふ、まだまだこんなモノじゃありませんよ?」

大人の余裕というのか一皮むけたというのか、ロスヴァイセさんはドスケベな笑みと共にそのかまくらの様な白肌おっぱいで俺の剛直を包み込んだ！

「うおお……ッ!」

ロスヴァイセさんのパイズリは正直絶品だ。柔らかく温かい感触と、俺の肉棒にピッタリ吸い付いてくる様なこの密着感は正に極上の一言だ。これはリアスのおっぱいにも負けない……!」

「うふふ、いかがですかイツセー君? 私のおっぱいは?」

ぐぬぬ……ニグラさんやエルシャさんの様なテクニックで俺を翻弄しようとするなんて! ロスヴァイセさんのテクニックとエロさを甘く見ていた!! だが今の俺は責められるより責めたい気分だ! 故に! シュタークさんからまた貰ったあの符を使わせてもらう。

「え!? お金取るんですか!」

（まあね。ハゲ隠しとしてこの毛根活性化札は結構需要があるんだヨ。

キミの想像よりコンプレックスを抱えて生きている者は多いと言う事サ。けどイツセー君には友達価格で譲ってあげるとモ♥）

ピロー・トークの時のシュタークさんの姿と言葉を思い出す。シュタークさんにとって俺は所詮友達止まりなのか……!? アザゼル先生への嫉妬は押し込めとにかくロスヴァイセさんの頭に毛根活性化札を貼り付ける!

「ひゃあんっ! こ、これイヤあ!」

折角アザゼル先生から『永久脱毛剃り』を貰ってまで毛を剃ったの

にいい！」

ロスヴァイセさんの脇や陰毛がまた生え始める。俺はそんな彼女の股間に顔を埋めた！

「いやああ♥♥♥そ、そんな所を舐められたらああ♥」

ロスヴァイセさんは嫌々をしながらも快感に負けてしまったのか足を広げてしまう。その隙を逃さず、俺は彼女の愛液溢れるオマンコを舐め回した!! 毛のチリチリする感じと溜め込んだフェロモンを増幅するかのように、ロスヴァイセさんのオマンコからはどんどん愛液が溢れてくる。

「くうっ♥♥♥んううっ♥♥♥や、やんだあ♥」

舐める度にロスヴァイセさんは身体を震わせるが、それでも必死に声を押し殺している。どうやら完全に吹っ切れたわけではなく羞恥心が残る様だ。

「こ、こつたらボーボーなおなごなんてイツセー君みたいだシテイー！ボーイであるイツセー君には気持ち悪いベさ？」

「何言ってるんですか！

競うなツ！ ロスヴァイセさん！

持ち味を活かせツ!!」

「も、持ち味？」

そう！ ロスヴァイセさんはキレイで！ おっぱい大きくて！

包容力がある！ だがこの剛毛から醸し出されるフェロモンとチリチリとした見た目のギャップが凄いなだよ！

「俺は好きだぜ！ 毛深い女の子はさあ!! それにこんなにエッチなおマンコからこんなエロい汁が出てるんだ。そんなのエロくない訳ないじゃないか！」

「あ、あんがと……♥」

ロスヴァイセさんは顔を真っ赤にしながらボソツと礼を言った。そして……

「ふああっ♥イツセーさ♥わ、わだす♥脇かぎながらオマンコ♥オマンコズボズボって突かれてるだあ♥♥♥」

もはや言葉遣いを取り繕うことなく方言まるだしでロスヴァイセ

さんは俺に脇とオマンコを責められ、快感の余りヨガっている！

「ああ！ 最高ですよ！ マン毛まで俺のチン毛に絡んでくる！ こんなエロくて気立って良くて美人のワルキューレを放つたらかきにするなんて！ アースガルドの勇者が聞いて呆れますよ!!」

「んはああああ♥そんなにわだすを褒めねえでける♥本気でイツセーさの嫁になっちまうべ♥♥♥♥♥」

ロスヴァイセさんは完全に快楽に酔ってしまっている！ だが、それは俺も同じだ！

「出すぞ！ ロスヴァイセさん！」

「あ♥あ♥来てけろイツセーさ♥♥♥♥♥わだすもイツぢやうがらあ!!」

どびゆるるるる!! どくんどくんどくんっ!! ぶしゅっぶつしゅうううっ!! 俺はロスヴァイセさんのオマンコの最奥で思い切り射精した！ 同時にロスヴァイセさんも激しく痙攣しながら大量に潮吹きをする！

「はあ……♥はあ……♥ああ、しゅげえ♥♥♥♥♥イツセーさのチンポ汁がこんなにたくしやん♥♥♥♥♥」

ロスヴァイセさんは心底満足そうな表情を浮かべながら絶頂の余韻に浸る。そして……

「あの、そろそろ私も……♥」

さっきまで気絶していたレイヴェルちゃんが起き上がり俺の背中。ふむ、次は3Pをやるか！

「なら次はロスヴァイセさんとレイヴェルに鎮めてもらおうか」

「二はいい♥♥♥」

二人の目にはハートマークが浮かびその瞳には俺のチンポしか映ってない。完全に俺とのセックスにハマったみたいだな！

やはり3Pの基本はこれだ！

とばかりに俺は二人に目配せすると勘の良い二人は即座に俺のチンポに飛びつき、各々が亀頭をしゃぶり始めた。

「んっ……♥イツセーさのオチンポあ♥♥♥」

「はむっ……美味しいですわあ♥♥」

二人はジュルジュルと音を立てながら俺のモノを舐める！　こんな極上の美少女二人に奉仕されるなんて俺はもう死んでもいいかもしれない！

むにむに♥むにゆっ♥ぷによんっ♥

(うほお！　リアスと朱乃さんとはまた違った違った感触が！)

レイヴェルちゃんは大ききこそやや物足りないが、そんな物はどうだっていい！　この極上の柔らかさだけでも十分だ！　そしてロスヴァイセさんはやはり大人の色気漂う巨乳で俺のモノを包み込んでくれる。これはまた、いつもとは違う感触で新鮮だな……。

そんな二人が一心不乱に俺のチンポをしゃぶっている光景は、まさに絶景だった。

「くうっ！」

あまりの快感に俺は思わず声を漏らす！　そして二人はその反応を見て気を良くしたのか更に激しく責め立ててくる！　レイヴェルちゃんは亀頭から根元まで満遍なく唾液を塗りたくり、ロスヴァイセさんはおっぱいで挟みながらストロークして刺激を与える!!

「あ、ああっ!!　二人のフェラテク最高ッ!!」

堪らずそう叫ぶと二人は更に勢いを増して俺のチンポを舐めると遠慮無く俺は二人の口内に射精した！

どびゆるるるる!!　ぶしゅうううっ!!　どくんどくんっ!!

「んぶっ♥♥♥♥♥」

「むぐっ♥♥♥♥♥」

二人の顔に俺の白濁液が大量にかかる！　レイヴェルちゃん是不意打ちで飲んでしまったのかゲホゲホと咳き込み、ロスヴァイセさんも驚いてチンポから口を離してしまった。が、それでも大量に射精された精液は二人の口から溢れ出す。

そしてレイヴェルちゃんはクラリ、としたのかロスヴァイセさんにバランスを崩して覆いかぶさる様に倒れてしまった。

「だ、大丈夫ですかレイヴェルさん!」

「す、すいませんロスヴァイセ……ってちよつと！　なにおっぱいで挟んでるんですか!?　うっ♥」



倒れた拍子にレイヴェルちゃんのおっぱいがロスヴァイセさんのおっぱいに挟まれる形になり、レイヴェルちゃんはつるつるのオマンコをお尻ごとフリフリと振ってしまおう。

「ああっ♥レイヴェルさん♥オマンコを私に擦り付けないでえ♥」

「はああっ♥申し訳ありませんわあ♥けど♥ロスヴァイセさんの剛毛がクリトリスを刺激してきてえ♥♥♥」

レイヴェルちゃんはロスヴァイセさんに詫びながらも、しかし腰を振るのを止められない様だ！

「ふふふ……ならもつと刺激を与えてあげようレイヴェルちゃん！」

「んひゃあああ♥♥♥そ、それはダメですイッサーさまっ♥♥♥♥」

ずぶずぶずぶっ♥とレイヴェルのオマンコに俺のチンポを遠慮なくねじ込ませる。

するとレイヴェルちゃんは腰を逃がそうとするが、ロスヴァイセさんがそれを逃さないとはかりにガツチリと抱える。そのせいで更にロスヴァイセさんのおっぱいがレイヴェルちゃんに押し付けられ、結果レイヴェルちゃんがオマンコに俺のチンポとロスヴァイセさんのマン毛からのダブル責めを味わう事になってしまった。

「あああ♥♥♥ロスヴァイセさんの毛♥そしてイッサーさまのオチンポ様が♥♥♥私のオマンコの中で一つになってますわああ♥♥♥♥」

そう叫びながらレイヴェルちゃんは自ら腰を振る！俺のチンポの味が忘れられないとばかりに膣壁を絡ませながら精液を吸い取るかの様に蠢き、子宮口まで俺のチンポを迎え入れる。

しかし、俺は断腸の思いでレイヴェルちゃんのオマンコからチンポを引き抜き、すぐにロスヴァイセさんのオマンコに挿入した！

「くうっ……レイヴェルちゃんもロスヴァイセさんのオマンコも最高だ!! こんな名器に種付けできるなんて俺は幸せだよ!!」

「ああ♥♥♥わだすも最高だあ♥♥♥♥イッサーさのオチンポ♥♥♥オマンコいっぱいにぎでえ♥♥♥」

ロスヴァイセは頬を手を当てながら快樂に浸っている。

「ふあ……♥♥♥はああん♥♥♥♥」

一方レイヴエルちゃんは涎を垂らしながら蕩けた表情をしている。俺も二人の極上のオマンコの快樂に既に限界が近かった！

「ああっ♥きてきてきてえ♥

フェニックス家の世継ぎを孕ませるイツセー様のザーメン♥私に出してえ♥♥♥」

「んああ♥わ、わだすにも赤ちゃん孕ませてえ♥イツセーさのわらす♥アースガルド最強の勇者に育ててみせますだあ♥♥♥」

「ああっ!! 二人とも！俺の種汁を受け止めてくれえ!!」

どびゆるるるるっ!! ぶしゅううっ！どくんどくんっ!!

「んああああ♥♥♥イツセーさまの孕ませオチンポ汁♥♥♥♥」

「はあ……♥あっついのがお腹の中にい……♥♥♥」

二人の極上のオマンコに種付けするこの上ない幸福に俺はしばらく酔いしれてしまった……。

ハッ！と気がつくと俺はやり部屋のベッドの上で横たわっていた。た。

「あ、あれ？俺……ここで何してたんだっけ？」

と、そこで俺はレイヴエルちゃんとロスヴァイセさんのおっぱいに挟まれていた事を思い出した！慌てて左右を確認すると、そこに二人の姿がある。寝息を立てて眠る二人は全裸で、俺も同じく全裸だ。

どうやら3Pが終わってそのまま寝てしまったらしい……。

木場はどうしたんだ？ ドライグもまだ俺の中に戻ってきていない様だし。

「ま、まさか木場とドライグが!？」

最悪の想像が頭を過った。特に木場は俺のハーレムに入らないし、俺も別に強制する事は無かったからだ。だが……俺のいない間に二人の関係が変化してしまう可能性も十分にある！まして今のドライグは擬人化状態！ドラゴンオーラに当てられた木場がさつきみたいに暴走するかもしれない！俺は二人を起こすのも忘れ、急いで部屋を飛び出す。そしてドアの向こうでは……。

「全く。イツセー君を誘惑しようだなんてとんでもない女だな。君み

たいな色情狂がイツセイ君に愛されようだなんて烏滸がましいよ！」  
「ひいひい〜♥♥♥♥バイブ♥

聖魔バイブが私のマンコかき回してるうううう♥♥♥♥

「聖魔バイブじゃなくて『峻拒せし冒瀆の聖魔剣』

(アロンダイト)だよ。本来は相手の防御や結界に関係なく内側から破壊する技なんだけど」

貂蟬さんが木場からバイブ責めを受けていました。どういう事？

見れば貂蟬さんの身体やオマンコにはバイブみたいな何か巻き付いていて、それが貂蟬さんの身体とオマンコを滅茶苦茶に犯していた。しかもいわゆる三角木馬に乘せられて。

「ああっ♥♥♥も、もう許してくださいいいいっ♥♥♥♥わだじのまんこおがしぐなりゆううっ!!」

「この程度で音を上げてどうするんだい？ 次はドライグさんのドラゴンチンポが待っているんだからね」

「ひいひいっ♥♥♥許して♥許してえ♥♥♥あのおチンポぶち込まれたらもう、耐えられませんか♥♥♥♥」

既に呂律が回っておらず、完全に出来上がっている貂蟬さん。その口には極太バイブを咥え込んでおり、ズブズブと出入りを繰り返している。

そんな状態の貂蟬さんなどお構いなしに木場はサディスティックなイケメンスマイルを浮かべ、更に貂蟬さんのオマンコを聖魔バイブとやらで開発している。

あれが暗黒微笑というものだろうか……？

木場を怒らせるのは止めよう。俺は心に誓い、そつとドアを閉じた。後で聞いたらマールは逃げたそうです。

※幕間・異聞 若きギヤスパアの悩み（ギヤスパア×ニグラ）

「うふふ♥ギヤスパアちゃんってば私のおっぱいに顔を埋めちゃって、可愛いわあ♥」

「ご、ごめんなさいニグラさん！こんなエッチな事を頼めるのはニグラさんしか思いつかなくて……」

僕は謝りながらも、僕の顔くらいの大きさはあるんじゃないかっていうニグラさんのおっぱいから顔を離すことなんて出来なかった。

「別に気にしてないわ♥好きだけおっぱいに甘えてちょうだい♥」

「あ、ありがとうございます……」

「ふふつ♥いいのよギヤスパアちゃん、貴方のためならこれくらいお安いご用よ♥」

そう言ってニグラさんは僕の頭を撫でてくれる。なんだかすごく安心できる。キュクロちゃんにはフラれてルチャさんからは何故か距離を置かれて始め、ナイアさんからは呆れられてしまう僕みたいなダメダメ吸血鬼にもこんなに優しくしてくれて……やっぱりニグラさんは聖母様みたいだ。吸血鬼の僕が言うのもなんだけど。

「本当にありがとうございます、ニグラさん」

「どういたしまして♥」

そう言うとニグラさんは僕の顔を彼女の大きな胸で包みこんでくれる。僕はその柔らかな感触を顔で感じながら、改めて彼女に感謝した。

僕は幸せだ。こんなにも優しく素敵な人たちに僕なんかの面倒を見てもらってるんだもん！

「ギヤスパアちゃん？おっぱいから顔を離してもらってもいいかしら♥」

「ふえ？あ、はい、わかりました」

僕は言われた通りにニグラさんのおっぱいから離れると、ニグラさんは僕を包み込むように抱きしめてくれた。どんな布団でもかなわ

ない暖かさと柔らかさ、それに優しさが僕の全身に伝わってくる。

「あ……」

僕のおチンチンがムクムクと大きくなってゆく。その感覚に気付いたのか、ニグラさんは僕の耳に顔を近づけると、甘く囁き始めた。

「あらあら♥ギヤスパーちゃんのおちんぽが元気になっちゃったわね♥」

「ごめんなさい、僕……」

うう、僕はやっぱりサイテーだ。ニグラさんの優しさにつけこんで、僕の浅ましい欲望で穢したい、犯したいって心のどこかで考えているんだ。

「いいのいいの、男の子なんだもの当然よ♥このままじゃあ苦しいでしょう？お姉さんが楽しんであげるからね♥」

「だ、大丈夫です！自分でなんとかしますから！」

これ以上ニグラさんに迷惑をかけたくない、そう思って僕は叫ぶ。こんな僕にもニグラさんは優しい。

でもこれ以上甘えるわけには……

「ギヤスパーちゃん♥」

しかし、ニグラさんは僕から離れようとしなない。それどころか一層強く僕を抱きしめると、耳元で囁き始めた。

「いいのよ、私はギヤスパーちゃんの味方だから♥ギヤスパーちゃんが望むことならなんでもしてあげるわ♥」

僕の望みをなんでも？そんな夢のような言葉を聞いても良いんだろうか？そんなことを思いながらも、僕の口はまるで別の生き物のように勝手に喋り始める。

「何でも……う？じゃあ、僕の事を一人前の男にできるって言うんですか？僕はイツセー先輩みたいに優しくもないし、安里先輩みたいに強くもない。木場先輩みたいにカッコよくもなれない。こんな僕を好きになってくれる人なんていないんですよ？」

「うふふ♥そんなことないわよ？ギヤスパーちゃんは可愛いし、優しい子だわ。それに——」

ニグラさんはそこまで言うと言つて僕の顔をおっぱいから離し、僕をじつ

と見つめてきた。その瞳はどこか妖しく輝いているように見えて……なんだかすごくドキドキする。

「もう十分男立派なの子よ♥だって、こんなに私の事を求めてくれるんですもの♥」

そう言つて微笑むニグラさんの瞳は今までと全く違つて見えた。まるで獲物を見つけた獣のような瞳……。

「さあ、ギヤスパーちゃん♥私と一つになりましょう♥そして私をギヤスパーちゃんのものにしてちょうだい♥あら?どうしたのかしら、ギヤスパーちゃん?」

僕の体は勝手に動き出し、どんどん体が熱くなつてきたんだ!ど、どうして!?僕は一体どうしちゃったんだろう?

ぐにつ♥もみもみつ♥

「うう……ニグラさんのおっぱい柔らかい……それにすごくエッチだよお……」

僕はいつの間にかニグラさんのおっぱいを鷲掴みにしていた。大きさも柔らかさも一級品で、それでいて張りのある感触は今まで触つたことがないくらいの上のもの!こんなのずるいよ……こんなエッチな体してるなんて反則だよ!夢中にならない男がいたら見せてもらいたい位だ!

「あらあら♥ギヤスパーちゃんつたらそんなに私のおっぱいに夢中になつちやつて♥」

そう言いながら、ニグラさんは僕の手を掴むとそのままシコシコと僕のおチンチンを扱いていく。

「あつ♥だめっ♥ニグラさん止めてえ♥」

「いいのよ、我慢しないで好きなだけ出していいからね♥私の手の中でいっっぱい白白おしっこを出しちゃいなさい♥」

「ああっ!出ちやう!もう出ちやうよおお!!」

どぶっ♥どくっ♥びゅるるー♥♥♥♥僕はそのまま思いつきり射精してしまい、快感で頭の中が真っ白になってしまう。

「う、ごめんなさい……早くて」

「気にしないで♥ギヤスパーちゃんみたいな可愛い子に私の手コキで

気持ち良くなってもらえるなんて嬉しいもの♥」

そう言うと、ニグラさんは僕の唇を奪った。舌を入れ、僕の口内を蹂躪するような激しいキスだ。

「んちゅ♥れるお♥じゅるるる♥♥」

僕は抵抗もせず彼女のされるがままに体を任せる。でも不思議と嫌な気持ちじゃない。むしろとても心地よくて……なんだか幸せな気分になってきちゃう！ミントの様な爽やかですつきりとした香りが口から鼻へ抜けてゆくなか、僕のおチンチンはすぐに硬さを取り戻していた。

「うふふ♥またおちんぽが元気になってきたわね♥」

ニグラさんはそう言うと、今度は僕のおチンチンを自らのおっぱいで包み込んだ！柔らかくてすべすべな肌触りにつつまれて、僕は思わず声を上げてしまう。

「ふああっ!!ニグラさん!!」

「どう?気持ちいいかしら?」

オナニーとは比べ物にならない、ルチャさんにしてもらった時以上のおっぱいの柔らかさだ!こんな極上の感触味わったら、僕もう他の事なんて考えられなくなっちゃおうよ!

「ねえギヤスパーちゃん?私のおっぱいどうかしら?」

「最高です!すごく気持ちいいです!」

僕は夢中になって叫ぶ。するとニグラさんは嬉しそうに微笑むと、そのまま僕のおチンチンを上下に動かし始めたんだ!たぶんたぶんと音を立てながら揺れるおっぱいに、僕のおチンチンはどんどん追い詰められて……

「んっ♥はぁ♥ギヤスパーちゃんのおちんぽ、また大きくなったわ♥  
犯して♥ズコズコ突いて♥ギヤスパーちゃん専用のおちんぽケース  
にしてみせてえ♥」

「うう……ニグラさん!」

僕は衝動的におっぱいから飛び出ている乳首をコリコリといじりながら腰をカクカクと前後させ始めた。もう止まらない!僕はニグラさんのおっぱいを犯すことしか考えられなくなってるんだ!!

「ああんっ♥ギヤスパーちゃんったら激しい♥」

「ごめんなさい、でも僕……」

謝りながらも僕は腰を振ることを止めない。だってこんなに気持ち良いのに止められるわけがないじゃないか！僕のおチンチンはもう破裂しそうで、射精することしか考えられないんだ！そしてその時はすぐにやってきた。

どぶっ♥♥びゆるるるっ♥♥びゆくっ♥どくどくっ♥♥♥♥♥  
「うっ♥♥♥♥」

「ああっ！ギヤスパーちゃんの精子が私のおっぱいにかかっている♥熱いわ……とつても熱くて、いい匂い……♥」

僕のおチンチンからはさつきよりも大量の精液が溢れ出してニグラさんのおっぱいを汚していった。ドロドロなのにニグラさんは嫌な顔一つせず、むしろ僕の精液を美味しそうに舐めとっていく。

「あ、あの……ごめんなさい」

あまりの光景に僕は我に振り返る。しかしニグラさんは怒った様子もなくただ妖艶な笑みを浮かべるだけだった。

「いいのよギヤスパーちゃん♥だって私たちもう恋人同士なんだもの♥恋人ならこれくらい普通よ♥」

そうか、恋人なら普通なのか……だったとしても許されるんだよね？そうだよ！だって僕とニグラさんはもう恋人同士なんだから問題なんて一つもないんだ！

「ねえギヤスパーちゃん。もう一回しましょ♥今度はお口でしてあげるわ♥」

そう言うと、ニグラさんは僕のおチンチンをぱっくりと咥えこんだんだ。温かくてヌルツとした感触が僕のおチンチンを包み込み、そしてそのまま上下運動を始めた！

「ちゆる♥♥じゅぽ♥れろお♥♥」

まるで別の生き物のように絡みついてくる舌と口内が僕のおチンチンから精液を搾り取ってゆく。さつき出したばかりなのに、もう次の射精の準備が出来上がってきちゃったよ……。

「ふふ♥また硬くなってきたわねギヤスパーちゃん♥じゃあ、そろそ



ろ始めましょうか♥」

「始めるって……」

ニグラさんとセックスするってこと？僕みたいなダメダメな吸血鬼がそんな幸せになっていいの？

「もう♥恋人同士なんだから、愛し合うのは当然でしょう？ギヤスパーちゃんだって私のこと欲しいんでしょ？」

「うう……」

そんなの当たり前だよ！僕はニグラさんの事が好きで好きでたまらないんだから！だからお願いです！僕の精液がなくなるまで奪ってください!! もう我慢できない、我慢なんてしたくないんだ!!

「はい……！欲しいです……ニグラさんとエッチなことがしたいんです！」

「そう♥嬉しいわギヤスパーちゃん♥じゃあ、早速始めましょうね♥」

そう言うとニグラさんはベッドの上に横になり、M字に足を開いて僕に見せびらかすように自分のおマンコを指で広げながら僕に話しかけてくる。

「さあおいでギヤスパーちゃん♥ここにあなたのおちんぽを入れるのよ♥」

その言葉を聞いた瞬間、僕の理性は完全に吹き飛び、気がついたときには僕はニグラさんの上に覆いかぶさっていた。そしてそのまま彼女の巨大なおっぱいにしゃぶりつき、彼女のおっぱいを吸い続けたんだ！

甘くて濃厚な母乳が僕の口の中に流れ込んでくる。

「んちゅっ♥ちゅぱっ♥♥」

美味しいよお……もつと味わいたい！もつともつと飲みたい!!

「もうギヤスパーちゃんったらそんなに一生懸命に吸い付いちやっ

♥私だけのギヤスパーちゃん♥」

ぼ、僕はリアス様の眷属だけどそんな事を言われたら抵抗できない

よお……!!

「ギヤスパーちゃん、私のおっぱいはおいしいかしら？」

「はい！とってもおいしいですう！」

僕はそう言つてニグラさんのおっぱいに吸い付く。すると、彼女の大きな胸からはどんどん母乳が溢れてきた。そう言えば母乳と血液は成分が似てるんだっけ？ だったらこの母乳にも僕の力を活性化させる効果があるのかな？ ニグラさんに僕の子供を産んでもらえば……毎日ニグラさんの母乳をたっぷり浴びる様に飲み干せば、僕も一人前の吸血鬼になれるかも……。

僕の頭にそんな身勝手な考えが浮かんでくる。でもそれを止めることはできなかつたんだ……

「うふふ♥ギヤスパーちゃんのおチンチンから貴方の気持ち伝わってくるわあ♥私を孕ませたい、私のおっぱいにむしゃぶりつきながらパコパコしたいって思つてるのね♥」

「ううっ…ごめんなさいニグラさん……」

僕は自分の欲望を抑えられなくて情けなくなつた。でもニグラさんはそんな僕を見て微笑むと、優しく頭を撫でながらこう言つてくれたんだ。

「いいのよギヤスパーちゃん♥だつて私も同じ気持ちだから♥私にギヤスパーちゃんの赤ちゃん産ませて欲しいの♥」

その言葉を聞いた瞬間、僕はニグラさんを押し倒すと一気におチンチンを挿入した！ 熱くてぬるぬるでまるで底なし沼の様だ。ニグラさんとのセックスに僕はもう完全に嵌まり込んでしまった。

「んああっ♥♥ギヤスパーちゃんったらいきなり奥までえ♥」

「ごめんなさい！ でも我慢できないんです！」

僕はそう叫ぶと一心不乱に腰を振る。その度にニグラさんのおっぱいはぷるんっぷるんっつと震えてとても淫らだ。彼女の体はまさに男を喜ばせるためだけにあるかのように柔らかい。

「あんっ♥気持ちいいわギヤスパーちゃん♥もつと、もつと突いてえ♥♥」

「はい！ わかりました！」

僕はニグラさんの言葉に頷きさらに激しく腰を動かし始める。もう僕の頭の中は快樂の事しか考えられなくなつた。だつて仕方ないじゃないか！ ニグラさんが魅力的すぎるんだもん!! そんなこと

を考えている間も僕のおチンチンは熱り立ち、彼女の中で暴れまわり、そしてついに限界が訪れた！

「ううっ………出ますー！」

どぷっ♥びゆるっ♥♥どくんどくん♥♥♥♥ 僕のおチンチンから大量の精液がニグラさんの子宮に向かって流れ込んでいく。その快感はまさに天にも昇るほどの心地よさで、僕はそのまま彼女の胸に倒れ込んだ。するとニグラさんは僕を優しく受け止めてくれると、そのまま僕を抱きしめながら耳元で囁く。

「あ……はああ♥ギヤスパーちゃんの熱い精液が私の中にいっぱい入ってきてるのお♥♥♥♥」

ニグラさんが僕とのセックスで喜んでくれている……。僕のおチンチンが、精液が彼女の役に立ってるんだ。そう思うだけで僕は嬉しくてたまらなかった。

「ねえギヤスパーちゃん♥次はどんな風にセックスしたい？」

ニグラさんはそう言いながらまた僕の耳元で囁いてくる。もうこんなんじゃないやまだ足りない！もつともつと僕はニグラさんと繋がりたいんだ!!

「じゃ、じゃあ次はそのお尻を僕に突き出してくださいー！」

「うふふ♥わかったわギヤスパーちゃん♥」

そう言うとニグラさんはベッドの上で四つん這いになり、僕の方にお尻を向ける。そして誘うようにフリフリとお尻を振る姿はとても淫らで、僕は今すぐにでもニグラさんに襲いかかりたくなる衝動を抑えながら彼女のお尻を撫で回していく。柔らかいのに張りのある彼女の尻肉はいつまでも触っていたくなるほど魅力的だ。

「どうかしらギヤスパーちゃん？私のお尻も中々いいでしょ？」

ニグラさんは艶やかな長い黒髪をかきあげながら、僕の方を振り替える。その顔は恍惚としていて、とてもいやらしい笑みを浮かべていた。ニグラさんのお尻は満月の様で、僕を吸血鬼から狼に変えてしまうのでないかとさえ思ってしまう。

「な、なかなかだなんてとんでもない！ニグラさんのお尻は冥界一です！僕、ニグラさんのお尻を一生揉んでいたいです!!」

「あらあら♥そんなに私のお尻が好きならもつとギャスパーちゃんのおチンチンでお尻を可愛がってね♥」

「勿論ですー!」

僕の瞳が燃える様に熱く、赤くなってるのが分かる。その状態で僕はニグラさんのおマンコを僕のおチンチンで何度も何度も何度も打ち付けた!

「んああっ♥ギャスパーちゃんのおチンチン気持ちいいっ♥♥」

ニグラさんは激しく突かれながらもしっかりと僕を受け入れてくれる。すると不思議な光景が見えだした。

エロゲーじゃないけどニグラさんのオマンコの中に僕のおチンチンが入り込む断面図の映像が瞳に映っているんだ。膣壁のうねりや子宮口と龟头がぶつかる感触や映像までしっかりと伝わってくる。

「ふふ♥ギャスパーちゃんったら私の子宮まで犯して♥♥」

「ああ……すごい!ニグラさんのおマンコに僕のおチンチンが飲み込まれてく!!」

僕は夢中になって腰を振り続けた。でもそれだけでは足りなくて、僕は目の前にあるニグラさんの大きなお尻を両手で鷲掴みにして揉みしだきながら腰を動かし続ける。

「んああっ♥♥そんなに激しく揉まないでえ♥♥私だって女なんだから♥感じちやうううう♥♥♥」

不思議だ。ニグラさんの身体のどこをどう触れば感じてくれるのかがわかる。どうすれば彼女が喜んでくれるのかも分かる。まるで僕の瞳を通してニグラさんの全てが伝わってくるようだ……。

「に、ニグラさん!」

「ああっ♥♥ギャスパーちゃん♥♥」

僕は自分でも信じられない位の力でニグラさんをまんぐり返しにする。そして上から勢いよく、子宮に衝撃を与える様におチンチンを打ち付ける!

「ううっ♥♥♥♥ギャスパーちゃんだめっ♥♥そんなに激しくしたら……私、壊れちやううう♥♥」

ニグラさんは髪を振り乱しながら快楽から逃れようとしているが、

僕は逃がさない。寧ろ更に深く挿入して彼女を追い詰めていく。彼女の大きなおっぱいはぶるんぶるんと揺れ動き、その乳首から母乳が止めどなく溢れ続けている。とても美味しそうなその乳首に、僕は思わず声をあげてしまう。

「ニグラさん！僕に！僕におっぱい飲ませて下さい！」

「はい♥いいわよギヤスパーちゃん♥」

ニグラさんはそう言いながらも自分から胸を持って僕の顔に近づけてくれた。そして僕は遠慮なく彼女の大きなおっぱいにしやぶりつく！甘い母乳が口の中に流れ込んでくるたびに、僕は激しく腰を動かし、そして勢いよく子宮口に亀頭を叩きつけていく！ニグラさんの子宮自体がまるで磁石の様に僕のおチンチンを吸い寄せると感じると、僕は一気に射精感が込み上げてきた！

「に、ニグラさん……僕もう……！」

「ギヤスパーちゃん♥出してえ♥♥私の中にギヤスパーちゃんの熱い精液を注ぎ込んで♥♥」

その言葉を聞いた瞬間、僕の我慢は限界に達しその欲望を解き放つた!!

「出す……出します！ニグラさん！イツセー先輩でも安里先輩でもない僕の精液で……孕んでくださいあい!!」

どびゆるるるるっ♥♥どくんどくん♥♥どぶどぶっ♥♥びゅくくくくっ♥♥びゆるるるっ♥♥どぶどぶどぶどぶっ♥♥びゆるるるるっ♥♥♥

「ああっ♥熱い♥いい♥ギヤスパーちゃんの精子が私の中にいっぱい入ってくるうううう♥♥本気で私を自分のモノにしようとしているの解っちゃおう♥♥♥」

僕は今まで出したことのない程の量の精液をニグラさんの子宮に流し込む。そのあまりの量の多さに彼女のお腹はぽっこりと膨らみ、入りきらなかった精液が溢れ出してきた。僕の身体からこんなにも精液が出たのは初めてかもしれない。ニグラさんも僕の精液を受けて、今まで見たことが無いくらい嬉しそうな顔で喜んでいた。

「ふわあああ♥♥♥すごおい……♥私の母乳で男としても吸血鬼とし

ても立派になつてえ……♥」

まるで母であり、姉でありながらそれ以上にメスとして僕の成長を喜んでくれているように僕は思えた。そして僕もそんなニグラさんを見て、母であり姉であり女である彼女の存在に畏怖の念を抱かずにいられなかつたんだ。ああ、ごめんなさいリアス様。

と、その時ドアを叩く音が聞こえた。

「だ、誰ですかあぁっ!?!」

「おーい！ひきこもりのプロのお前にちよつと聞きたいことがあつてな！」

この声はイツセー先輩!? ひ、ひどいや！僕はひきこもりだけどプロのひきこもりじゃないよ！ でも、今この姿を見せるわけには行かない。僕は慌てて服を着ると、自分の部屋から出てイツセー先輩の所に歩いて行つた。

「イツセー先輩？い、一体なんの用ですか？」

「おうギャスパー！実はな、姫島先輩の神社にアマテラス様が居着いたらしくてどうしたらいいかと相談にな！あとイリナ達がお前に協力して欲しい事があるとかないとか！」

そう言いながら先輩は僕の部屋の扉を開けてしまったんだ！ ああ……僕の部屋にニグラさんがいるのにい!!

「だ、だだだダメですう！」

今僕の部屋にはお客様があー！」

僕は必死にドアを押さええるけどイツセー先輩は赤龍帝だからか僕なんかよりも遥かに力が強い。

「つてニグラさんじゃないですか」

うわあああ!!先輩がニグラさんの姿を見つけちゃったよ!!

……つてあれ？ ニグラさんのドレスには精液どころか汗ひとつ着いてない。どういうことなの？

「ええ。ギャスパーちゃんが外に出られる様に頑張りたいって言っていたから相談に乗っていたのよ♥」

「なるほどそういうことですか！いや俺は嬉しいよ！お前もリアスの眷属として頑張ろうとしているんだな！」

「あらあらイツセーちゃんはまだ契約はほとんどゼロじゃない。貴方もリアスちゃんの眷属としてもっと頑張らないとダメよ?」

「そ、それはわかってるんだけど……やっぱり俺は誰かを守る方が性に合うっていうか」

イツセー先輩が照れながら頭を掻いている。そんな先輩の姿を見たニグラさんはいつもと変わらない。

うう……あれは夢だったのかな?それとも何か僕の想像もつかない力が働いてるんだろうか……。

「ふふ、ギヤスパーちゃん。今度はどこかにお出掛けしましょうね♥」

「は、はい!ありがとうございます!!」

こ、これってデートのお誘いかな?ニグラさんみたいな美女とデートができるなんて夢みたいだ!

「おお!良かったなギヤスパー!」

ニグラさんみたいな美人とおでかけなんて羨ましいぜ!この!この!の!」

肘鉄砲をガシガシと受けると少し痛いけどそれでもよかった。だって夢じゃないって事だから!

※94話（イツセー×小猫&黒歌 イツセー×レイ  
ヴェル）

「んはあつ♥御主人様のチンポ♥相変わらずバキバキでマタタビなんて目じやないくらいヤバイにやあ♥」

「はあ……イツセー先輩の大人おチンポ……凄い匂いですう……♥♥」

朝チユンならぬ朝チン奉仕に俺はもう理性がぶっ飛びそうだ。美人の猫鍾ならびに猫又の姉妹が俺の愚息をザラザラした舌で一心不乱に奉仕してくれるのだ。こんなの耐えられるはずがない。

「ご、ゴメン！ 黒歌！ 小猫ちゃん！ 俺の……そのまま飲んでくれ！」

俺はそのまま2人の口にドプツと大量の精子を放出した。それをゴクゴクと喉を鳴らして飲んでくれる小猫ちゃんと黒歌。その凄まじいエロさは形容しがたいものがあつた。

「んはあつ♥御主人様のザーメン……最高だにやん♥♥」

「ぶはっ……はあはあ……イツセー先輩、素敵なぷりぷりザーメン……ありがとうございます」

二人は恍惚の表情で猫又が油でもなめるかのように互いの顔にかかった俺のザーメンをなめ取りながら感謝の言葉を言ってきた。

素敵なぷりぷりザーメンありがとうございます……!? こんな素晴らしい日本語が存在していたのか！ ロリ状態の小猫ちゃんがこんな……なんて素晴らしい日本語を!? もう！ たまらん！

「小猫ちゃん！」

「にやあつ♥ま、待って下さいイツセー先輩♥♥今は大人の状態じゃないからダメえ♥♥♥」

とは言うが、小猫ちゃんはもう既に発情しているのは見え見えである。俺は構わず彼女の体をまんぐり返しにしてその未成熟な蕾の様なおまんこにむしゃぶりつく。

「うにやああああつ♥♥♥」



ピッキングの様に舌先を割れ目の中にねじ込んで中を舐め回し、ついでにぷつくらと膨れているクリトリスを前歯で刺激してあげると、小猫ちゃんはスイッチが入ったかの様に喘ぎ、尻尾がピーンと伸びた。

「やんっ！　♥♥♥い、イツセー先輩っ！　♥♥♥♥♥そ、そんなに激しくされたらダメええっ！　♥♥♥♥♥」

ダメだと言いながら小猫ちゃんの尻尾は甘えるように俺の腕に巻き付いてきている。そんな可愛らしい尻尾を右手で優しくしごいてやると、

「んにゃああっ！　♥♥♥♥♥」

と一際大きい喘ぎ声が漏れた。反応も感度もバツグンな小猫ちゃんにはついつい意地悪したくなってしまう。

「気持ちいいかい？　小猫ちゃん」

「うにゃあっ♥き、気持ちいいですう♥♥♥」

どちらの口も正直に答えてくれるので、俺はつい調子に乗ってしまい質問を投げかけた。

「何がどう気持ちいいのかな？」

「にゃあっ♥せ、先輩♥そんな♥そんないやらしい事♥私の口から言わせないで欲しいにゃあ♥♥♥」

いやいや、と恥ずかしさにいやいやをする小猫ちゃん。ああもう！

なんだこの可愛い生き物は！　俺は彼女の小さなおまんこをレロレロしながら同時にクリトリスを指で弾いた。

「にゃあああんっ♥♥♥」

ぷしゅっ♥ぷしゅっ♥と小猫ちゃんの蕾から蜜が溢れ出してくる。

黒歌も小猫ちゃんの身体を弄りながら彼女の耳元をピチャピチャと舐め回した。

「小猫は本当、エロい体になったにゃ」

黒歌が耳元でそう囁くと小猫ちゃんは興奮のあまり体をのけ反らせながらおまんこから更に愛液を溢れさせる。

「ほら、ちゃんと口で言わないと止めちゃうよ？」

我ながらエロオヤジのような言葉攻めをかまししながら、俺は小猫

ちゃんのおまんこから口を離してもう一度尋ねた。

「わ、私は♥♥♥」

少ししてようやく観念したのか、小猫ちゃんは恥ずかしそうに両手で顔を隠しながら呟くように言った。

「先輩の太い指でグチュグチュってあそこを弄られて……♥♥♥♥♥姉さんに耳とか乳首を舐められて……♥♥♥ぐりぐり〜と私のオマッコを舌で穿られるのが大好きにやあ……♥♥♥♥♥」

「気持ちいいんだね？」

「は、はい♥♥♥♥♥す、凄く……気持ちいいです♥♥♥♥♥」  
俺は小猫ちゃんの可愛い反応に満足すると、その小さな蕾を思い切り吸い上げた。

「イツセー先輩♥そんなにつ♥♥♥あにやああつ♥♥♥♥♥」

ビクビクツツ！ と小猫ちゃんが痙攣したかと思うと、プシヤアツ！と勢いよく潮が噴き上がった。俺はそれを喉を鳴らして飲み込んでいく。

「にやあつ♥♥♥♥♥せ、先輩つ♥♥♥♥♥す、凄いつ♥♥♥♥♥」

「じゃあ今度は……」

俺はズボンを下ろし、ギンギンに勃起した肉棒を取り出すと小猫ちゃんのオマッコへとあてがった。

「はっ♥♥♥♥♥はあつ♥♥♥♥♥先輩つ♥♥♥♥♥」

その小猫ちゃんの愛液があふれたオマッコへ、俺は挿入せずそのまま亀頭で擦りつけ始めた。

「あにやつ♥♥♥♥♥そ、それ気持ちいいにやあつ！♥♥♥♥♥」

グチュツ……グチュツといやらしい音をたてながら、俺の我慢汁と小猫ちゃんの愛液が混じり合う。亀頭のエラの部分が割れ目に引つかかる度に小猫ちゃんはビクンビクンと身体を震わせて可愛い喘ぎ声を漏らした。

「あにやつ♥♥♥♥♥にやああ……♥♥♥♥♥」

そしてついに我慢できなくなったのか、小猫ちゃんの細い腰がへこへこと動き始めた。小猫ちゃんの様ないたいけなロリータ系美少女が俺のチンポを求めて腰をかくつかせる光景ははつきり言つて絶景

だった。

「はあっ♡♡♡はっ♡♡♡はっ♡♡♡」

「ははっ、白音ってばもうすっかり御主人様のチンポなしじゃ生きていけない体になっちゃったにや♡」

小猫ちゃんの痴態を眺めながら黒歌は楽しそうに笑う。姉妹故か、小猫ちゃんの絶頂のタイミングを黒歌も感じ取っている様だ。

「はああっ♡せ、先輩♡先輩が悪いにやあ♡♡♡先輩が私にこんな気持ちいい事、教えるからああ♡♡♡」

「そうだね。けど小猫ちゃんが可愛いのがいけないんだよ？ だから悪い小猫ちゃんには、お仕置きしないとね？」

そう言いながら、俺は遂に亀頭を小猫ちゃんの小さな割れ目にあてがうと……そのまま一気に中へと挿入した。

「にやあああ♡♡♡♡♡」

今まで散々焦らされていた膣肉は歓喜に震えるも、やはり容積的にはキツイのだろう。小猫ちゃんの膣はギチギチと音を立てながら、俺のチンポを締め付けてくる。

「あにやっ♡♡♡お、お腹が苦しいにやあ……♡♡♡け、けど苦しいのにドキドキして、幸せだにやあ♡だ、ダメになるう♡♡♡先輩のおチンポでわたしたい♡♡♡ダメになるにやあ♡♡♡」

「いいよ。俺のチンポで小猫ちゃんの頭バカにしてあげるね！」

そう言うと、俺は激しくピストン運動を開始した。その度に小猫ちゃんは可愛らしい声で喘ぎながら悶える。

「にやっ♡♡♡にやんっ♡♡♡くはっ♡♡♡んにやあああっ！♡♡♡」

亀頭のエラがGスポットをゴリゴリと擦り上げ、子宮口にも幾度となくノックする。そのたびに小猫ちゃんは背中を仰け反らせ、小さな体がビクン！ビクン！と跳ねた。

「にやああ♡♡♡しえ、先輩のおチンポ♡しゅごいにやあ♡♡♡♡♡」

小猫ちゃんは舌をだらしなく突き出して、アへ顔を晒す。そんな小猫ちゃん表情はどうしようもなくエロく、そして可愛らしかった。俺はその小さな体を抱き寄せながらピストンを続ける。

「しえんぱい♥♥こねこねしちやらめえっ♥♥♥♥」

プシッ！ プシッ！ と断続的に潮を噴きながら絶頂を迎える小猫ちゃん。しかしそれでも俺はピストンを止めない。小猫ちゃんは涙を流しながら悶え続ける。

「にやあつ♥♥♥♥にやつ♥♥♥♥んはあつ！ ♥♥♥♥♥」

そして遂にその時がやって来た。

「イツセー先輩っ♥♥♥♥またイクうううっ！ ♥♥♥♥♥」

「一緒にイコウか？ 白音！」

「にやあああつ！ ♥♥♥♥♥い、イク♥先輩と一緒に♥♥♥オマンコ

イクっ♥イクっ♥♥♥イクにやああっ♥♥♥」

ちゅっ♥と子宮口が鈴口にディープキスした瞬間、俺の肉棒が大きく膨張し、そして……

ビュルッ！ ビュルルル——ッ！

「ふにやああっ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

小猫ちゃんの小さな子宮の中に大量の精液をぶちまけた。俺は射精しながらもピストンを続けて最後まで小猫ちゃんの中へと出し切る。小猫ちゃんもお腹の中でビクンビクンと脈打つチンポの感覚を感じながら絶頂を迎えていた。

「はあ♥はあ♥せ、先輩♥♥大好きにやあ……♥♥♥♥♥」

うつとりとした表情で俺に頬擦りする小猫ちゃん。黒歌はそんな妹の頭を撫でながら、「白音ったらすっかり御主人様のチンポに夢中みたいにな♥♥」と揶揄する。

しかし小猫ちゃんは絶頂に次ぐ絶頂により意識がトビかけていて、何も言い返す事は出来なかった。しかし小猫ちゃんが妊娠したら身体に負荷がかかりすぎる、と前に言われていたような……。小猫ちゃんがエロすぎるのでつい夢中になっちゃったけど、大丈夫なのだろうか。

「ヤツた後で漸く白音の心配なんてワル〜い御主人様だにや♥イツセーは♥」

お掃除フェラならぬお掃除パイズリをしながら黒歌はからかう様に言う。小猫ちゃんは絶頂の余韻に浸っていて、意識も朦朧としてい

るようだ。

「んく、でもまあ……今の白音なら問題にやいと思うにや♥御主人様の影響で体も頑丈になってるみたいだし」

「そう……なのか？」

「うん。元々才能があつたのかにや？ それとも御主人様のチンポが凄すぎるのか……あ、両方か♥」

俺は少し複雑な気持ちになりながらも、黒歌のパイズリフェラを堪能する。彼女のおっぱい奉仕は極上だ。

「んにや♥御主人様のチンポ、まだガチガチにやん♥♥」

しかも黒歌は発情しっぱなしで、目を細めながら俺のチンポを咥え、いやらしい音を立てて舐めしゃぶっている。

「んふっ♥御主人様の精液まみれのオチンポ♥♥おいひいにやあ♥」

そして一通りお掃除フェラを終えた黒歌は、俺の耳元に顔を寄せてきた。

「ねえ……♥御主人様あ……♥白音だけじゃなくてえ……♥私の事も孕ませて欲しいにやん……♥♥」

耳元で甘くそう囁く黒歌に俺は興奮を隠し切れない。小猫ちゃんとはまた違った黒歌のエロさに溺れそうだ。

「ああ、いいよ。おいで、黒歌」

俺は黒歌の頭を撫でた後腕を広げて彼女を迎え入れ、そのまま騎乗位の形で挿入させた。パイズリフェラにより限界寸前だった俺のチンポは彼女の中に入った瞬間に

射精した。

「にやああ♥♥♥御主人様のチンポミルクでてるう♥♥♥堕ちるっ♥♥♥堕ちるにやあ♥♥」

子宮内にぶちまけられる精液の熱さに黒歌は背中を仰け反らせて絶頂するが、俺は逃さないとはかりに彼女のおっぱいを鷲掴みにして乳首を強く引っ張りながら更に射精を続ける。

「んにやあああっ♥♥♥御主人様のせーえきでイクの止まらないにやあああっ♥♥♥」

黒歌は身体を痙攣させながら絶頂し、その震えに合わせて膣肉がヒクヒクと脈動する。しかし俺の肉棒は未だ萎える様子はなく、ビクンビクンと未だに脈打ちながら黒歌の中で硬さを維持していた。

「はぁ♡はぁ♡しゅ、しゅごいにゃあ♡御主人様のチンポ……♡♡」  
とろんとした目で俺の肉棒を見つめる黒歌の唇を俺は塞いだ。舌を入れてやると彼女もそれに応えるように舌を絡めてくる。そしてそのまま俺たちはお互い貪るようなキスをし、黒歌は俺に体重を預けて身を任せてきた。

「御主人様ぁ♡♡♡好き♡♡♡大好きにゃあ……♡♡♡♡♡」

所謂密着騎乗位の態勢にて黒歌はうわごとの様にそう言うわ俺の首筋に舌を這わせてそのまま強く吸ってきた。チクツとした痛みが走るが、今の俺にとってはそれも心地よい刺激でしかない。

「御主人様が私のものっていう証、つけちゃったにゃあ……♡♡♡」と妖艶な笑みを浮かべながら言う黒歌は小猫ちゃんの姉とは思えないほどの色気を醸し出していた。

そして俺は繋がったまま体を起こすと、対面座位へと体位を変える。

「にゃっ♡♡♡御主人様ぁ♡♡♡」

嬉しそうに声を上げる黒歌を抱きしめながらピストンを再開した。先程とは違った角度からの刺激に黒歌は悦びの声をあげる。

「んにゃあ……♡♡♡気持ちいいにゃあ……♡♡♡御主人様とのセックス最高だにゃあ♡♡♡」

すっかり発情モードに入った黒歌の膣は愛液で満たされ、それをかき混ぜる俺の肉棒も結合部から溢れ出した大量の愛液がグチュグチュと卑猥な音を奏でている。

「あにゃっ♡♡♡御主人様、いきなり激しっ♡♡♡♡♡」

対面座位になり更にピストンが激しさを増した事で黒歌は目をチカチカとさせながらも快楽を貪っている。その姿が愛おしくなり俺は更に激しいピストンを続けた。

「あっ♡♡♡イク♡♡♡イクにゃあ♡♡♡んにゃあああああっ！  
♡♡♡♡♡」

体を仰け反らせながら絶頂に達する黒歌。その締め付けにより俺もまた限界を迎え、彼女の子宮の中へとありつただけの精液を注ぎ込んだ。

「あはあ♥♥♥熱いの出てるにやあ♥♥♥♥」

子宮内を熱い精液で満たされながら黒歌は幸せそうに微笑む。その表情はまさにメス猫そのものだった。

「にやー♥御主人様あ♥♥好きにやあ……♥♥」

「俺もや」

幸せを噛みしめながら俺は黒歌の頭を撫でる。二人の美少女が俺に愛を囁いてくるこの状況はまさに夢のような状況だった。そのためかもう一人の俺の眷属である彼女の視線に気づかなかった。

↓

「なあイツセー！ 新任の体育教師であるルチャ先生についてどう思う!?!」

昼休みに松田と元浜が俺にいきなりそんな質問をしてきた。トウー・ルチャ先生……もとい俺の眷属であるトウー・ルチャさんの事だろう。

「どうって……言われてもな」

「何だその気のない返事は!」

「そうだぞイツセー！ あの黄金の様な金髪にルビーの様な瞳！ 180超えの身長にして120を超えるあのバスト!」

「そうそう！ あの巨大な乳房！ あれは男なら誰でも夢見る秘宝だぜ!?! そんな先生、いやさ女性はこの学園に二人しかいないというのにお前ときたら!」

松田と元浜は二人で俺の腑抜けた態度に憤慨していた。もう一人っというのは当然ニグラ先生のことだろう。

「全く、おっぱいへの情熱を喪った貴様にはこの写真を渡す事はできません!」

元浜はそう言うと、俺に一枚の写真を差し出してきた。そこに写っていたのは、件のトウー・ルチャ先生の隠し撮りと思われる写真だった。

「これは!？」

「この前、生徒会室の清掃をしている時にこっそり撮ったものさ! どうだイツセー! これはまさしくルチャ先生の極エロボディを捉えた芸術の一品だとは思わないか!？」

松田が説明しながら鼻息荒くしている。まあ確かにエロい体ではあるな……。というかよく撮れたなこんな写真……。などと感心していたその矢先。

「コラア! このクソガキ共!」

怒号と共に俺達の頭に拳骨が飛んできた。凄く痛い。明らかに俺に対して教育的指導を越えた怒りの籠もりすぎた拳だった。涙も出てきた。殴ってきたのは新任の英語教師にして生活指導も担当するライザー……。もといライザー先生である。

「そんなものを学校に持ってきていいと思っているのかこのロクデナシが!」

この駒王学園に転校してきた妹のレイヴェルちゃんが心配だというのでわざわざ教師としてやってくるのだから大したシスコンぶりだ。

「でもなライザー……」

「ライザー先生だ! バカモン!」

また拳骨が飛んできた。ポカポカ人の頭を殴らないで欲しい。このご時世に体罰はマズいのではないかとは思うがいかにせん俺達は以前覗きやらセクハラなどをやりすぎた。悪因悪果、という言葉通り「よくやってくれた」と女子生徒達はライザー……。先生を拍手喝采で迎えているのだ。

「止めなさいお兄様! 権力にかこつけてイツセー様を虐めるだなんて!」

そんな俺達に救いの手を差し伸べてくれたのは、転入生であるレイヴェルちゃんだった。

「いやしかな……」

「しかしも駄菓子もありません! 私はその様なお兄様など嫌いです!」



「れ……レイヴェル!？」

ライザーはレイヴェルちゃんの言葉凄まじいショックを受けたように膝から崩れて四つん這いになってしまった。うーむ、これは勝負あったか……。

と、審判じみた感想を抱く俺にレイヴェルちゃんが近づいてきた。

「イツセー様、ネクタイが曲がっておりますよ」

「お、おう……」

俺のネクタイを直すレイヴェルちゃん。先程までライザーに啖呵を切っていたのに、俺の前だと途端にしおらしくなるのは彼女の可愛いところだ。

「この前は、その……ありがとうございますわ……」

俯きながら恥ずかしそうにお礼を言ってくるレイヴェルちゃんに俺は苦笑を返す事しかできなかった。

マーラのせいとは言え、煩惱全開モードになってしまった俺は彼女に対して好き勝手にエロい事をやってしまったのだが彼女はそれを許してくれた。それどころか……。

「放課後、体育館倉庫にいらしてくださいさる?」

レイヴェルちゃんはそう言っただけで俺に体育館倉庫の鍵を渡すと足早に去っていった。

↓

放課後、俺は指定された時間通りに体育館倉庫に向かっていた。中に入るとそこには既に先客がいて……。

「ま……待たせちゃったかな……?」

俺がそう問いかけるとレイヴェルちゃんはブルマ姿でマットの上になちよこんと座っていた。

「いえ、私も今来たところですよ」

レイヴェルちゃんは顔を真っ赤にしながらもじもじと太ももを擦り合わせている。そして恥ずかしそうにこう呟いた。

「あの……私、あんな事をおきながらイツセー様に対してまだ恥ずかしくて今はまともにお顔を見られませんの……」

そう言っただけで俯く彼女の姿は可憐だった。俺はそんな彼女を抱きし

めるとそのまま唇を重ねた。最初は驚きの表情をしていたレイヴェルちゃんだったがすぐにトロンとした表情を浮かべて俺を受け入れてくれた。

「んっ♥ちゅっ♥れるお……♥」

舌を絡ませ合う濃厚なキス。その間俺は彼女の胸を揉みしだいていた。手に余る大きさの胸は、触るだけでとても気持ちが良い。ブルマ越しでも解る位に乳首が勃起している。俺はそれを確認すると、キスを止めて彼女の背後に回り込むと後ろから抱き締めるようにして胸を責め始めた。

「はあああっ♥イツセー様♥いきなり♥あああんっ♥♥」

背後からの愛撫にレイヴェルちゃんは艶っぽい声を上げる。俺はそんな彼女の胸を下から持ち上げるように掴み、円を描くように揉んでいく。柔らかい……そして凄く揉み心地だ……。

「ああっ♥すごいですわ♥もっとお……もっど激しく♥♥」

彼女は俺の方に顔だけ向けるとそう懇願する様におねだりしてきた。その表情はとてもいやらしく、俺の中で新たな性癖の扉が開かれて行くのを感じた。

俺は彼女のおねだりに応えるべく乳首を重点的に責め始める。そして指先で摘まんだり引つ張ったりして彼女の性感を高めていった。

「ふああっ♥ああん♥♥」

乳首責めの快感に彼女は身体を仰け反らせながら身悶える。俺はそんな彼女を後ろから抱え込むような形で抱き寄せ、そのままブルマの中へと手を突っ込んで彼女の蜜壺を責め立てた。ノーパン、ノーブラのブルマ姿でここに居たという事はレイヴェルちゃんも最初からそのつもりだったのだろう。彼女の膣からは蜜が溢れ出してきていた。

「んあっ♥♥そこっ♥すごいっ♥♥」

膣をいじられ、快感が一気に跳ね上がったのだろう。レイヴェルちゃんは身体を痙攣させながら絶頂に達した。しかし俺は構わずに指を動かし続ける。

「イツセー様あ♥♥待って♥♥まだイツたばかりで♥♥敏感だからあ

♡♡

絶頂直後の敏感な状態で更なる刺激を与えられてレイヴェルちゃんは目に涙を浮かべながら懇願してくるが、俺はそれを知った上でチャックを下ろして自分の肉棒を取り出して彼女のお尻にブルマ越しに擦りつけた。

「んくっ♡♡大きい……♡♡」

レイヴェルちゃんはその巨根の感触に恐怖と期待の入り交じった声を上げると、振り向いて俺を潤んだ瞳で見上げて来た。その表情はさらなる刺激を求めている……俺はそんな彼女の期待に応えるべく、彼女の両足を肩に乗せ、海老反りの様な体勢で彼女の膣内へと侵入していく。

「あっ♡♡ああっ♡♡入ってっ♡♡♡♡イッセー様のおチンポが♡私の中にズブズブ入ってくるううう♡♡♡」

レイヴェルちゃんは足をピンと伸ばしながら身体を震わせた。膣内は既に愛液でトロトロになっていて、俺の肉棒をすんなりと受け入れていく。

「ふーっ♡♡ふーっ♡♡んんう♡♡」

レイヴェルちゃんは荒い息を吐きながら必死に快楽に耐えている様だった。俺はそんな彼女を気遣う様にゆつくりとピストンを始める。

「んっ♡♡ああっ♡♡そんなんっ♡♡優しいだなんて……♡♡ああんっ♡♡だめっ♡♡こんなのすぐにイツちやいますわあ♡♡♡♡んひいつ♡♡♡」

俺のゆつくりとしたストロークにレイヴェルちゃんは甘い声を上げ始める。じわじわとゆつくり俺の肉棒がレイヴェルちゃんの膣内をかき回していく。その度に彼女の子宮はキュンキュンと痙攣し、膣内は収縮を繰り返す。

「ああっ♡♡思い出してるっ♡♡イッセー様のおチンポが♡私の子宮をコツコツ突いて♡♡あんっ♡♡だめですっ♡♡♡♡思い出して……♡♡♡♡イツちやう♡♡ああんっ♡♡イクツ♡♡イツちやいますわあっっ♡♡♡♡」

レイヴェルちゃんの身体が一際激しく痙攣したかと思うと、膣内が

激しく収縮し彼女の絶頂を伝えて来た。彼女は俺の精液が子宮に満たされる悦びを思いだしているらしく幸せそうな表情をしている。「レイヴェルちゃんってばすっかり中出しが好きなドスケベになっちゃったね」

俺がそう言うのとレイヴェルちゃんはビクンと身体を震わせた。

「は、はい♥私、変態ですよ♥♥ですから♥♥イッサー様のおチンポ孕ませミルク♥♥♥どうか私の中に注いでくださいませ♥♥」

彼女はそう言うっておねだりするように自らヒップを振ってきた。俺はそんなレイヴェルちゃんのおしりを掴みながら激しく腰を打ち付ける。

「ああっ♥激しいっ♥♥イッサー様♥好きっ♥大好きですわあっ♥♥」

肉棒が出入りする度に彼女の膣からは愛液がしぶき、マットの上にいやらしい水溜りを作り出した。俺は彼女の最奥を貫き続けると、レイヴェルちゃんの期待に答えそのまま大量の精液を発射した。

「ふわあああああっっっ♥♥♥♥♥」

精液を子宮に叩きつけられたレイヴェルちゃんは歓喜の声を上げて絶頂を迎えた。膣内がきつく締まり、俺の肉棒から精液を一滴残らず搾り取ろうとしてくる。そんな彼女の膣内に俺は大量に射精していく……。長い射精が終わると、俺とレイヴェルちゃんの結合部から入り切らなかつた分が溢れ出してきたマットの上は白濁の水溜りが出来上がっていた。

「ああ……。♥♥♥♥」

彼女は恍惚とした表情のまま絶頂の余韻に浸っている様だ。俺はそんな彼女の首筋にキスをしてブルマを脱がせるとそのままマットの上でレイヴェルちゃんを押し倒した。

「あん……。♥♥♥♥」

俺の下でレイヴェルちゃんが期待に震えた声を漏らす。そんな姿も可愛い。俺は彼女の太ももを抱え込むと正常位で挿入した。そして激しいピストンを再開する。

「んっ♥♥んああっ♥♥♥やっぱいい♥♥このチンポじゃなきゃだめ

なんですわああ♥♥」

先程絶頂したばかりの身体は敏感で、レイヴェルちゃんはあつという間にまた絶頂を迎えた。膣内がきつく締められ俺の精液を搾り取るうとしてくる。

「私も♥♥またイキますわあ♥♥ああんっ♥イック♥イクツ♥イツちやいますわああ♥♥」

ビクビクと痙攣しながら二度目の絶頂を迎えるレイヴェルちゃん。そんな彼女の乳首を吸いながら俺はピストンを続けていく。

「ひゃあんっ♥♥だめえ♥乳首舐められたらたまらなくなっちゃいますわあ♥♥ああんっ♥♥」

ダメと言いながらもレイヴェルちゃんの膣はキュンキュンと俺のペニスを締め付けてくる。俺のチンポで冥界でも指折りなお嬢様であるレイヴェルが悶えるのは何とも言えない征服感があるな。俺は彼女の片足を持ち上げるとさらに深くペニスを突き刺した。子宮の入り口まで突き上げられ、レイヴェルちゃんの口が大きく開かれた。

「あヒイイイ♥♥弱い所に♥私の弱い所におチンポ突き刺さってるううう♥♥♥」

そしてそこからは大量の涎が垂れてきている。快楽に完全に屈服してしまつたかの様な蕩け顔だ。そんな彼女にとどめを刺すべく俺は今までで最大のストロークで腰を打ち付けた！ずじゅっ♥♥じゅぼっ♥♥と激しい音が響き渡り、レイヴェルの子宮口を龟头が容赦なくノックしていく。

「ああっ♥壊れるっ♥♥♥  
私の今までの常識も♥生活も♥全部ぶっ壊されてくの♥♥イクツ♥♥アクメくるっ♥♥♥♥」

彼女は大きく仰け反りながら絶叫した。膣内が激しく痙攣し、俺の肉棒を思い切り締め付けてきた。そして再び精液が俺のチンポから吐き出された。

「ふわああ♥♥熱いのがあ♥♥いっぱい出てますわあ♥♥ああっ♥♥やっぱりこれ、好き♥♥イツセー様から濃厚なお精子をぶち撒けられるふ

しだらな中出しセックスたまりませんのお♡♡♡」

レイヴェルちゃんの中から引き抜いた肉棒は未だに萎える事無く彼女のお腹の上に乗せられていた。俺はそんな肉棒をレイヴェルちゃんの頬に擦り付けるところ言っただ。

「ほら、綺麗にしてよ」

「はあい♡」

意外とレイヴェルちゃんはマゾっ気があるのかも、なんて考えている間もなく彼女は俺のペニスに口づけする。

「んちゅっ♡ちゅるっ……♡♡れろお……♡♡」

彼女はそのまま俺のチンポを口に含み、丁寧に舐め始める。時折口から離して竿の部分を舐めて綺麗にすると再び口に含み尿道に残っている精液も吸い出してくれる。

「んはあ……♡私、すっかりイッサー様に染められてしまいましたのね♡」

「その割には随分嬉しそうじゃないかレイヴェルちゃん」

俺がそう言うのと彼女は恥ずかしそうにしながらも嬉しそうにはにかんで見せた。うくん、レイザーの妹とは信じられん位に天使過ぎる。いや、悪魔なんだけどさ！

ともかくも俺はレイヴェルちゃんとのラブラブエッチを存分に楽しんだワケだけど……。

「お断りします。私はイッサー様の眷属ですので」

凜とした堂々たる女丈夫と言った感じの声の外から聞こえてきた。

この声はルチャ先生だが眷属なんてワードが出てくると言う事は悪魔関係者か？

「だが、聞けば君はヴァーリに袖にされたらしいじゃないか？ それにイッサーも君やリアスの事をほったらかしで他の女にうつつを抜かしているぞ？」

話相手はレイザーの様だ。なっ!?

俺がリアスやルチャさんを放ったらかしだと！ そんな事は……

!?! あるかもしれない……。

『まったく仕方ない相棒だな』

ドライグの嘆息が俺の頭に響く。

「まあ、良い機会じゃないか。俺ならあの男よりは君にマシな生活を提供する事はできるぜ？ 君は炎の巨人。俺は不死鳥。相性はバツグンだと思わないか」

「お気遣いありがとうございます。ですが、私は自らの意志であの方にこの身を捧げると決めました。故にあなたにも、ましてや他のどんな男に嫁ぐ事ありません」

ライザーはルチャ先生の言葉に一瞬鼻白んだがすぐに笑みを浮かべた。

「これは驚いたな！ まさかあの色狂いのイツセーにキープされている扱いの君がこんな立派な貞淑な娘だとは！ 世の中分らんものだ」

ライザーは益々ルチャさんに興味を持った様だ。俺はどうしよう？ このまま出ていくのも変な感じだしなあ。

「全くお兄様ときたら……」

レイヴェルちゃんは呆れ顔である。

「では、そろそろ私は帰らせていただきますわ。火のない所に煙は立たぬと言いますし、今日のご事は互いに忘れましょう」

そう言つてルチャさんは倉庫の前に出て行こうとしたのだが……。

「まあ待て」

ライザーはルチャさんの腕を掴むと無理矢理引つ張り、そのまま壁ドン of 態勢に。背丈はルチャさんの方が高いけど！

「君がハーゲンとかいう男に辱められたと知ったら奴はどんな顔をするかな？」

「……ッ！」

ルチャさんがハーゲンに辱められた？ というかこの脅し文句つてNTRモノの中盤頭のテンプレじゃないかー!! ライザーつてそーなのー!?

「いい加減になさいお兄様！」

なんとその時倉庫の扉を軽々と開いてレイヴェルちゃんがライザーに食つてかかる。何と言う気まずいシチュエーション。

「げえッ!? レイヴェル!?!」

「げえ! とは何ですの! 仮にもフェニックス家の次期当主ともあろうお兄様が、こんな所で間男じみた事を!」

うわあ、レイヴェルちゃんマジで怒ってらっしやる。ライザーは普段の余裕そうな表情が完全に消えてしまっていた。

「ち、違うレイヴェル! 誤解だ!」

俺はあくまでお前が抜けた穴を埋めるべくスカウトに……」

「抜けた穴を埋める!?! 何て低俗な!」

いや、レイヴェルちゃん! そういう意味で言っているワケじゃないよ!

エッチの後だからか頭の中がピンク思考なのか?

「あ、あ……い、イツセー様……」

それはそうとしてルチャさんはまるでこの世の終わりが来たみたいな顔でこつちを見ていた。凄く気まずい! 他の男にレイプされていたという事実を俺に知られたルチャさんは転移の魔法陣で立ち去ってしまった。や、やってしまった……。

「ふうん。それでどうしたらいいのかボクの所に相談しにきたんだネ?」

「す、すいません……。流石にリアスやロスヴァイセさんに相談するワケにもいかなくて」

ここは駒王街のマンションの一室。

俺はまたしてもシユタークさんに相談をもちかけていた。何だか駆け込み寺みたいになつて申し訳ないのだが、他に頼れる人がいないので仕方がない。

「まあ、取り敢えず炭酸水でも飲んで落ち着き給えヨ。確か君の好きな銘柄と好きなおつまみはこれだったかナ」

……覚えていてくれたのか?

ササツと俺の好みに合わせてつまみを作ってくれたシユタークさんは小皿に盛ったおつまみの皿を俺の方へ差し出してきた。

「ありがとうございます……」



「礼は要らないヨ。キミには散々楽しませてもらっているからサ」

シユタークさんはそう笑いながら酒瓶を傾ける。女子力も高いしセクシーだし、アザゼル先生の愛人なだけはある。

「それで、どうするつもりなんだイ？」

「俺はルチャヤさんをこのままにしておくべきじゃないのは解っているんです。確かにルチャヤさんにとつてハーゲンはトラウマなのでしようけど……。傷ついた彼女に無理に迫れば益々関係がこじれる事になるんじゃないかな、と……」

俺がそう言うのとシユタークさんは少し考え込む様子を見せた。

「うーン。でもそれはどうかな？ 確かにハーゲンは彼女に酷い事をしたんだろう。それで、キミは彼女を汚いと思うのかイ？」

「いくらシユタークさんでも今の言葉は聞き捨てなりませんよ！ 撤回してくださ……」

「勘違いするんじゃないヨ。ボクは汚いって言ってるワケじゃないんだからサ」

思わずテーブルを叩いてしまったがシユタークさんはテーブルを拭きながら俺の言葉を遮って言う。

「キミが彼女を助けたいと願うのは、彼女がヴァーリに袖にされた事で傷ついた事が可哀想だと思うからかイ？ それとも自分の快樂の為に彼女の肉体を貪った事への罪滅ぼしのためかイ？ どっちも違うだろ？」

「……はい」

「覆水盆に帰らず……という言葉はあるけどサ。溢れた水はまた汲めばいいとボクは思うがどうだろうネ？」

シユタークさんのその問いは俺の中で何度も反芻された。溢れた水はまた汲めばいい。ひび割れた器だってまた継ぎ直せばいいじゃないか！

「シユタークさん……。ありがとうございます！」

「いいサ。ボクもキミのそういう所、気に入っているからネ。そんなキミにボクからプレゼントだ」

そう言つて渡してきたのは符じゃなくて2枚のチケット。

このチケツトは……ネズミーランドのチケツト……。俺にとって  
レイナーレ、いや夕麻ちゃんも人生初デートで向かったいわくつきの  
場所！

「あ、あの……」

「キミがこの場所にトラウマがあるのは勿論知っているとモ。だから  
こそ互いのトラウマを克服するという意味でも、二人つきりで行って  
みるといいと思うヨ。まあ、無理にとは言わないけどネ」

「ありがとうございます！ シュタークさん！ 俺なんかのために何  
から何まで！」

俺は思わず立ち上がったって礼を言った。

「いいって事サ。そのかわりに今度ボクが悪魔祓いの仕事を手伝って  
欲しい時には手を貸してもらおうからネ？」

そう言っつてウインクするシュタークさんに俺は無言で何度も頷い  
た。

よしっ！ ルチャさんと一緒にネズミーランドだ！ それで彼女  
のトラウマを払拭するんだ!! 絶対に成功させてみせるぜ！

俺は早速準備のためにシュタークさんのマンションを立ち去る。

その時の俺はルチャさんの事に頭が一杯で背中を見送るシュター  
クさんの眩きには気が付かなかった。

「溢れた水は汲めばいい。ひび割れた器は継ぎ直せばいい。けどね  
イツセー。淀んで腐った水は決して清水には戻らないのさ」

カラン、彼女の持つグラスの中で氷が鳴った。

## ※第95話（イツセー×ルチャ）

「……変ではありませんか?」

「いやあちつとも!」

ルチャさんの出で立ちは赤のラグランスリーブペプラムトップスに灰色のズボンという出で立ち。なんというか戦闘の時とはまるで雰囲気が違う。

「やっぱり美人は何を着ても美人ですね」

「ふふ、イツセー様はお上手ですね」

微笑みながらルチャさんは俺の後ろに寄り添うように歩いている。

うーん、嘗て女性は男の三步後ろを歩くべしなんて言葉があった気がする。あるいは三步下がって師の影を踏まずだったかな?

「どうして俺の後ろを歩いてるの?」

「私はイツセー様の眷属ですから。今回はあなたのトラウマを払拭するという大切な役目を担っています。ならば、イツセー様に前を行って頂き、私はその後ろを歩くべきなのです」

「さいですか……」

俺はそう返して前を向く。

……女性が俺の後ろを歩いてるとか正直落ち着かないし、ルチャさんは美人だから道行く男の人達の嫉妬の視線を感じるしで胃が痛くなりそうだ。

「ルチャさん……俺、後ろから見られると凄く緊張するから出来れば隣に立って貰えるかな?」

「はい、かしこまりました」

そう言っつてルチャさんは俺の隣に立つ。うん、この方が落ち着く。

そして、だ。俺はなるべく自然に腕をルチャさんの腕に恋人同士の様な形で絡ませる。

「あ、あのイツセー様!」

「何かな?」

「その、腕を組んで歩くのですか!?!」

「ん? 歩きにくかったら言っつてね?」

「いえ……そういうわけでは」

ルチャさんはそう言いながらも顔を紅くしている。まあ、いきなり腕を絡められたから緊張するよな。ましてルチャさんはハーゲンに観客の目の前で辱められたワケだし。

「あの、イツセー様……」

「何かな？」

「……ありがとうございます」

顔を紅くしながらもルチャさんは微笑んでくれる。よかった、リラックスして貰えて。

↓

そんなわけで辿り着いたのはネズミーランドのエントランス。

「イツセー様。なんだか見られていますよ？」

「ルチャさんが美人だから注目浴びてるんだよ」

まあ、トップモデルばりに美人なルチャさんが俺の様なフツメンと腕を組んで歩いていれば、誰だって注目する。嫉妬の視線も混じってる気もするけど。

とにかく俺達はデート、というか乗り物チケット売り場にやって来た。

「どれに乗る？」

「イツセー様のお好きなのでいいですよ」

「いや、ルチャさんは何がいいの？」

俺がそう聞くと、ルチャさんはやや考え込んでから答える。

「……そうですね。私はジェットコースターというのに乗ってみたいのですがよろしいですか？」

「いいよ。あとこのマシーンは途中で写真を撮ってくれるらしいよ」

驚いた時の顔を見ることでお互いの距離感を縮めるとかなんとか書いてあった様な気もする。

「では、まずはジェットコースターからですね」

「うん」

というわけで俺達はジェットコースターに乗ったワケなんだけど。ジェットコースターに乗っている途中の写真を渡され、俺は顔から火

が出そうな思いだった。

変顔になっていた方が遥かにマシというレベルな事態だ。ルチャさんは無表情なのは別にいいよ？問題は俺！明らかにルチャさんのおっぱいをガン見している有り様！こうはつきりと己の浅ましきを見せられちゃうとルチャさんから俺のイメージが！

「どうかなされましたか？」

ジェットコースターから降りてもまだ凹んでいる俺にルチャさんは問いかけてくる。うう、その優しさがある意味辛い！

「う、うん。ちよつとね……」

「それはそれとしてイツセー様は本当に女性の胸がお好きなのですね」

そうだけどさア！人前ではつきり言われると辛いものがあるよ！けれどルチャさんはそんな俺を軽蔑する事もなく、微笑んでくれる。

「いいじゃないですか、イツセー様も男ですから」

「ルチャさん……ありがとう」

本当に優しいなあルチャさんは。俺が凹んでいるのは単に己の節操のなさに凹んでいるだけで、それに対して軽蔑もせず許してくれるなんて……。よし、汚名返上のために次はもつとがんば……って何を考えてるんだ俺は!?

「さ、次に行きましようか。イツセー様」

ルチャさんはそう言うって俺の腕に再び腕を絡めてくる。これは俺のダメな所を見て少し男性に対するトラウマが和らいだせいなのか、あるいは元々こういう性格だからなのかはよくわからないけれど……うん、ルチャさんの柔らかいおっぱいが俺の腕に……。

「……ふふ」

するとルチャさんは俺の考えを読んだのか微笑みを浮かべる。むう、これは完全にからかわれている気がする！けど悪い気はしないからいいんだけどね！ そんなこんなで次はコーヒーカーップに乗ることにした。

「ルチャさん、少しスピードが出過ぎない？」

「いえ、こんなものですよ」

そう言いながらルチャさんは凄まじい速度のコーヒーカップをまるで動じる事もなく回す。うーん、流石は炎の魔人。身体の強さも半端じゃないみたいだ。それにしても周りの景色がグルングルンと渦を巻く

ように流れていくんだけど……。

「こういうのはお嫌いですか？」

「き、嫌いではないけどちょっとスピードが早すぎるような……。」

これで壊れないんだからネズミーランド驚異の技術力である。

その後はメリーゴーランドに乗ったり、お化け屋敷でルチャさんがお化け役の人を一喝して逆に怯えさせたりという一幕もあったが概ね楽しいデートだった……と思う。

そして、気が付くともうすっかり夕方になってた。

「すっかり夕方ですな」

「うん」

俺達はベンチに座って夕日を眺めていた。駒王町が夕日に照らされて赤く染まって見える。

俺がこの街を守っているんだ、なんて偉そうな事を言うつもりはないけどさそれでも俺がこの街の平穩に僅かながらでも貢献できているんだと思うと少し嬉しい。

「今日のデートはどうだったかな？」

我ながらムードもへったくれもない事を聞いているな、とは思っても、どうしてもこれだけは聞いておきたかったのだ。

「ええ、とても楽しかったです」

ルチャさんはそう微笑んでくれる。けれどルチャさんの表情は夕日の逆光で見えない。どんな表情で答えてくれるのかがわからない。

……ぞわり、と悪寒が走った。

思い出すのは夕麻ちゃんの言葉と笑顔。ルチャさんと夕麻ちゃん……レイナーレは違う存在だ。

けど、俺の意識の底にある淀み、墮天使への恐怖、いや裏切られること、失望される事への恐怖は消えてなどいない。

だから、ルチャさんがどんな表情で笑っているのかわからない事が怖い。もしも、嘲笑を浮かべていたら？　そう思うと怖くてたまらない……。

『死んでくれないかな？』

やめろ。やめてくれ……。

俺の身体が震えだした事を不審に思ったのか、ルチャさんはこちらの顔を覗き込んでくる。

「大丈夫ですか!?!気を確かに!」

「あ、ああ」

違う!今俺の目の前にいるのは夕麻ちゃんじゃない!ルチャさんなんだ……。俺の恐怖の対象である墮天使じゃない!大丈夫、大丈夫なんだ……。今はデート中だ。ルチャさんを不安にさせちゃいけないんだ。だから、怯えるな……。

俺は父親になるんだ。弱さは否定しなきゃいけないんだ。怯えていては誰かを愛することなんてできないんだ!

「ごめん、なんでもないよ」

「……イツセイ様」

ルチャさんの表情が僅かに曇る。ああ、俺はまた失敗してしまったみたいだ。折角ルチャさんと楽しいデートをしていたというのに……。

「私では、あなたの悩みを解消することはできませんか?」

「……そんなことないさ。君と一緒にいるのが楽しいから今日は誘ったんだよ?」

俺は今できる限りの笑顔を浮かべながらそう言うけれど、それは間違いなく嘘で塗り固められた笑顔だっただろう。ああ、こんな調子で中級悪魔、いや誰かに対して責任を負う立場になんて本当になれるのか?

するとルチャさんは俺の頭を自らの胸にかき抱く。ふわりと鼻腔をくすぐる甘い香り。おっぱい!おっぱいだよ!ああ、気持ちいい……。って違う!今この状況で何を考えてるんだ俺は!?

「閉園まで、もう少し時間がありますね」

ルチャさんはそう言つて俺の頭を優しく撫でてくれる。ああ、これは気持ちいいなあ……。

「私はあなたに悩みを打ち明けて貰えるほど信用されていないのですね」

「違う！そうじゃない！俺がただ弱いだけなんだ……」

「けど、弱音を吐いたら私があなただを軽蔑していなくなると思つているのですね？」

「……うん」

俺は俯きながらそう答える。そうだ、俺は心のどこかでそう思つていたのかもしれない。本当に情けない俺は。ルチャさんの痛みや苦しみを癒やすつもりが俺が癒やしてもらうなんて。

「イツセー様。私はあなたを愛しています。リアス様、アーシアさんにもその想いは劣りません。彼女達の為に、あなたの為に、私はどんな事をしてでもあなたを護ります」

「ルチャさん……」

「ですから、あなたにも私を愛して欲しい。リアス様やアーシア様と同じくらいとは言わないまでも共に戦う戦友としてでもいいのです」

ああ、そうか……。俺は恐れていたんだ。俺を護ってくれと言つたルチャさんがいつか俺の元を離れて行ってしまふんじゃないかってそんなことを考えていたんだ……。

「だから、あなたが私に心を預けてくれるようになればこれに勝る悦びはありません」

そして俺達は閉園前に観覧車に乗る事にしたのだけど……。

↓

「んっ♥んん……♥♥♥」

ルチャさんと俺は観覧車の中で対面座位になつて唇を交わしていた。

「ルチャさん……大丈夫？」

「ええ……♥」

そう言つてルチャさんは再びキスをする。もう何度目かわからないくらいに俺は唇を重ねるけれど、それでも飽きることはない。むしろ



ろもつともつとと貪欲に求めてしまう。

それはルチャさんも同じ様で俺達はまるで競い合うかの様に口付けを交わし、舌と舌を絡ませ合う。

まさか観覧車の中でこんな事をするなんてな……。

「イツセー様♥♥♥」

ルチャさんは俺の首に腕を回し、貪る様にキスを求めてくる。俺はルチャさんの太ももを撫でまわす。すべすべで本当に気持ちいい！ああ、こんな事をしてしまうなんて本当にダメな男だと思……。思うけど止まらない……。

「んんっ♥♥♥」

キスをしながらルチャさんはビクンと身体を震わせる。彼女の着ている衣服は随分前に脱がされている。観覧車が頂点に達した時、彼女は自分から半裸になり俺の首筋に吸い付いたのだ……。

「……ねえ、一つお願いしてもいいかな？」

「ええ……」

そう言つてルチャさんは以心伝心で俺のズボンを下ろしてくれる。

「あつ……♥私に対してこんなに大きくして下さったんですね♥」

ルチャさんの瞳が潤み、呼吸には湿り気を帯びたモノが混じる。

「私、嬉しいです♥」

そして彼女は軽く俺のモノを扱きたてると俺の背中に甘い電流が走り、蛇口の水のように先走りの液が溢れて彼女の手を汚してしまつた。

「ゴメン……、ルチャさん。口ではいいことを言つても俺も君を皆の前でレイプした『英雄殺し』と変わらないかも……」

「イツセー様。その様に自分を貶める事はありません。私があつた野良犬崩れに汚されたのは私の甘さと不甲斐なさ故……。その甘さを払拭せぬ限り誰かの寵愛を受ける資格などないのです」

ルチャさんは俺のモノにその紅い舌を這わせながらそう言う。ああ、ダメだ。彼女は本当に優しいな……。こんなダメな男のためにこんなに尽くしてくれるなんてさ……。ニグラさんばりの爆乳で俺の愚息を挟み込み、扱きたてながら俺の愚息にキスをしてくれる。

「んんっ♥♥♥」

そしてルチャさんの背中が反り返り、彼女のおっぱいが揺れる。俺はその谷間に舌を這わせる。ああ……気持ちいい……。

「ふふ……♥♥♥」

ルチャさんはそんな俺を見て満足げに微笑むと俺のモノを舐るのは止めてくれたけれど……そんな寂しそうな顔をされると困るな……。

「……イツセー様♥私の胸は好きですか？この無駄に大きな乳房はあなたの役に立っていますか？」

「ああ、好きだよ。君の胸は柔らかくて、大きくて最高に気持ちいいし。ルチャさんの包容力を感じてすごく安心できる……。ずっとこうしていたいくらいだよ」

「そう言っていたけるととても嬉しいですね♥」

ルチャさんは再び俺のモノを胸の谷間で挟み、激しく上下に扱きたてた。ああ、ルチャさんのおっぱいも本当に気持ちいいな……。ああ、ダメだ……出るッ！

「ふああああああああ♥♥♥!!」

俺はルチャさんの胸の中に白濁液を放出する。彼女はそれをどこか恍惚とした表情で受け止める。その姿がますます俺の欲望を刺激した。

「ねえ、ルチャさん」

「……はい♥」

「今度は俺が君を愛してもいい？」

ルチャさんは俺の問いにコクリと頷く。そして俺は彼女を押し倒して、彼女の股に顔を埋めた。

ああ……なんていい匂いなんだ。いい香りなのは間違いないんだけどなんかこう嗅いだけで頭が蕩けるっていうかさ……。これがきつとフェロモンってやつなんだろう。ああ、もう辛抱できない！俺は本能の赴くままに彼女の秘部へと舌を這わせる。ああ、なんて甘いんだ……。彼女の蜜は砂糖水のように甘く、もつともつとと本能が俺を動かす。

「あんっ♥♥」

ルチャさんが艶めかしい声を上げる。もつとだ……もつと……！そして俺の舌先が彼女の一番敏感な部分に触れると彼女は激しく身体を痙攣させて絶頂する。その痙攣によって俺の顔にルチャさんの愛液が降り注いだけれど不思議と嫌な気分ではなかった。むしろ好きな女の子の愛液はいくらでも浴びたいと思うまである！ガタンツ！とゴンドラが揺れたが構わずに俺はルチャさんの股を舐め続ける。

「イツセー様、もつと♥もつと♥私を求めて♥」

不意にルチャさんが俺の頭を両手で掴むと自らの秘部に押し付けた。ああ、そういう事か……。ならお望み通りにしてやろうじゃないか！そして俺は彼女の秘部を貪り続ける。時折聞こえてくるのはゴンドラが軋む音と俺達の荒い呼吸の音だけ。

「イクツ♥イツちゃう♥♥」

そう言っただけで彼女は身体を仰け反らせ、ビクンビクンと激しく痙攣する。すると俺の口の中にねっとりとした液体が吐き出され、俺はそれをゴクリと飲み干す。

「まだ終わりじゃないよね？」

俺がそう尋ねるとルチャさんはコクリと頷いた。俺は彼女の両足を掴み、股を開かせる。するとトロトロの蜜が溢れ出す蜜壺が姿を見せた。ああ……もう限界だ……早く挿れたい……！

「行くよ」

俺はそう言い放ち、愚息の先端を彼女の秘部へとあてがう。そしてゆっくりと挿入していった。ああ……熱い、熱い……。それに絡みついてくる彼女の膣肉が堪らなく気持ちいい。脳が沸騰して弾け飛びそうさ。

「ふあああっ♥♥♥♥♥」

ルチャさんはそれだけで軽く達してしまったようでビクンビクンと身体を痙攣させている。しかし、俺の欲望は止まることを知らず更に奥へと突き進む。

「イツセー様♥♥♥」

ルチャさんが熱っぽい声で俺の名前を呼ぶ。ああ、本当に可愛いなあもう！そして俺のモノが彼女の子宮の入り口に到達する。

「はぐううっ♥」

「ゴメン、ルチャさん……！声、抑えて!!」

「ふあいつ♥♥♥」

そう言うのとルチャさんは必死に自分の手で口を塞いで声を抑える。ああ、そんな健気な姿が可愛すぎる……！もうダメだ……。もう我慢できない！俺は彼女の一番奥を思い切り突き上げる！

「んんっっ♥♥♥♥!!」

ルチャさんの身体が跳ね上がり、背中が大きく弓なりに反れる。その衝撃で観覧車が大きく揺れた。まあ、これだけ激しく動いていればゴンドラが揺れるのもしょうがないことだろう。彼女はゴンドラの窓に身体を預けて立ちバックで犯され、必死に声を押し殺そうとする。その姿がまた何とも言えずそそられる。

おっぱいが窓に押し付けられ、ぷりぷりのお尻がパンパンという乾いた音を立ててぶつかり合う。ああ、もう本当に可愛すぎる！俺は彼女の胸へと手を伸ばし、揉みしだきつつピストン運動を続ける。

ルチャさんが切なげな瞳で俺を見やる。だから俺は彼女を壁に押し付けて深くまで突き入れた。

俺の精をルチャさんが求めている事実俺の欲望は

更に煮詰まり濃縮されていくのが解った。

「んぐううううううう♥♥♥♥!!」

ルチャさんの背中が反り返ると同時に俺も射精した。彼女の子宮の中に俺の精子がドクドクと注ぎ込まれていく。ああ、すごく気持ちいい……。

「ねえ、ルチャさん……」

「……はい♥」

「俺さ、絶対中級悪魔試験に合格するから。そして上級悪魔にも絶対なってみせるから……。だから、眷属として側にいてくれ」

「ええ、いつまでもお側に」

ルチャさんはそう言って微笑んでくれた。俺は彼女の身体を抱き

しめつつキスをする。

「愛してます……」

「俺もさ、ルチャ」

ああ、時よ止まれ。貴方は美しい。確かファウスト博士だったかな。理想の国を作り上げた時に彼は感極まってそう言ったらしいが俺も理想のハーレムを作り上げた時に同じ台詞を言いたくなかったよ。

「お、お前らこんな所で何をしてやがるゴリチュウ!？」

い、いつの間にかゴンドラが一周していたらしく、ネズミーランドのマスコットがこちらを指さしながら中の人の地金を剥き出しにしていた。

隣の女性スタッフも顔を真っ青にしている有り様！

や、やってしまった!!

↓

「君たちはもうここに来なくてもいい。と言っていたよ」

リアスと父さん達に代わり保護者枠としてスタッフに謝りに来たゲイトさんが穏やかな笑みを浮かべて俺達に告げた。そ、それはつまり出禁という訳ですか？

「出禁?」

「えーと、出入り禁止という奴で著しい迷惑をかけた場合ですね、お店が僕らの入園を拒否できるんです」

というかこんな醜態をさらした以上もうここにくることはできそうにない。

「それなら大丈夫さ。僕の力を使えばあらゆる契約や制約、結界は意味をなさない」

いや、『遠慮なく僕を頼ってくれていいよ』みたいなロールキャベツ系男子みたいな包容力MAXの優しい笑顔は結構です！

そんな俺の動揺はさておいて

「イツセー様♥」とルチャさんは俺の腕にひしつ、と抱きついてくる。

ああ、柔らかいおっぱいが！

「申し訳ありません、イツセー様。私のせいで……」

ルチャさんがシユンとした様子で俯いている。うう、そんな表情は

反則だろう！俺は思わず彼女を抱きしめてしまった。

「ゴメンなルチャ。俺全然我慢できなかったよ」

「いえ、私は嬉しいです♥ あなたにあんなに求められて……」

「仲良き事は美しきかなだね」

するとその時、ルチャさんのもってるスマホが鳴った。炎の魔人もスマホは持つんだな、なんて言わない！

「はあ……」

画面を見るなりルチャは溜息をついた。何か悩みでもあるのかな？

「ゴメン、ちよつとスマホ見てもいい？」

あ、思わず口に出してしまった！俺のバカ！おたんこなす！浮気を疑う女々しい男か俺は！

「いえ、それは……」

「だ、だよね！ゴメン！ほんとゴメン!!」

「なら僕が見よう」

ひよい、とゲイトさんがルチャさんのスマホを奪取した。ほんとフリーダムすぎるよこの神様！

「あ……」

そしてゲイトさんはスマホに表示されている文面を読み上げた。

「えーと、何々。

『冥界の肌寒い風を感じる度にキミという女神に心焦がれる。ああ、愛しい我が女神。キミのその美しき肌と薔薇色の唇に早く触れたくて堪らないよ……キスの顔文字』

いや、キスの顔文字をウイスパークイケボで読んでも。と虚空にツツコミを入れてしまった。ていうか何だこのおっさん構文!? 歯がガタガタ浮くぜこのヤロー!

『この熱い想いを何に喩えよう? キミへの恋はルビカンテの吐息のように熱く、ゲヘナのように燃え上がり、火山が爆発するような激しいモノだ。ああ! 愛しのルチャ! 俺はキミの為にどんな事もできるし、全てを捧げられる! 握りこぶし』……か」

うわキツ。誰だよ人の眷属を口説き落としかかろうとする不届

き者は！ぶん殴ってやろうかマジで！

差出人はこのアンポンタンだ！

「ライザー・フェニックスとあるね。レイヴェル君の兄だった様な」

ああ、あの焼き鳥か。アイツ懲りずにまたこんなくっさいロミオメールをルチャさんに送ってきたのかよ……。いや、付き合っていないからロミオじゃないよ！

「で、どうするんだいルチャ？彼と一晩過ごすのかい？」

「そ、そんな……！幾らゲイト様のお言葉と言えどもそればかりは！」「そうですね！流石の俺もそればかりは見過ごせません！」

俺とルチャさんはゲイトさんに当然抗議する。ニグラさんやナイアちゃんの上司で実力は未知数だけど一戦も辞さないぞ！

『下手な冗談は止せゲイト。』

相棒はこの通り自分の女に対する冗談やら侮辱は一切流す事では  
きんタチでな』

ドライグがそう言うと、ゲイトさんはふむと頷いた。

「その様だね。どうも僕は人の心というものが解っていない様だ。リアスやアザゼルにも散々注意されてはいるのだが……。まあ、済まなかったね」

ゲイトさんはそう言ってスマホをルチャさんに戻す。

「ライザー様は私を眷族に迎える為に熱心にアプローチをかけてくるのですが最近頻度が増してきて」

「そんな奴の言うことなんか聞かなくていいよ！そうだ、俺とのデートでこんなロミオメール送ってく奴なんか忘れようよ！」

俺がそう言うのとルチャさんはクスリと笑った。な、何だこの天使みたいな笑顔は!?

「ありがとうございますイッセー様♥」

『しかしこのままだとライザーの執着は治まりはすまい。とはいえ相棒がレイヴェルとやらをハーレムに迎え入れるならヤツはゆくゆく相棒の義兄になる。下手に波風を立てては不味いのではないか?』

ドライグは年長者じみた事を言うけど、こればかりはイヤだぞ！ギヤスパーとルチャでさえギリギリのギリギリで我慢してるんだか

らぎ！

俺がリアス達と深い仲になっているのにルチャさんがギヤスパー  
といい仲になるのは我慢しろと言うのもフェアじゃないし、だからと  
いって本意じゃないのに彼女を誰かに差し出すのはもっと嫌だ！

「じゃあここは一つニグラに何とかしてもらおう」

『あの色情狂が具現化した様な存在にか？ 謀るのもこの際やむを得ん  
か』

何だか俺の頭を飛び越えてゲイトさんとドライブグがプランを練り  
だしてゐるぞ。大丈夫か？

1

#### ・安里視点

ライザーのヤツ、いやライザー先生が話があるとか言つて俺達を屋  
上に呼び出した。一体なんだつてんだか……。俺はルイーナと早く  
家に帰りたいつて言うのにな。

「ウース……」

テキトーに挨拶しながら屋上へ出ると、ライザー先生が屋上の柵  
にもたれかかっていた。危ねえなあ。大丈夫か？ まあ、そんな話は  
どうでもいい。それより俺もルイーナもライザーの取り巻きを見て  
ギョツとした。

「え、ええーっ!? ナイアさん!? ニグラさん!? どうしてライザーさんの  
側に!?!」

驚いて目をまんまるにするルイーナはこの上なく可愛い。こんな  
子が俺の側にくれてくれるなんて奇跡みたいなもんだとつくづく思う。  
絶対幸せにするからな。

「ルイーナ、落ち着け」

「落ち着けないよーなんで!?!」

俺に肩を触れられたルイーナが俺を見上げる。その仕草も表情も  
一つ一つが愛おしくてたまらない。ああ、やっぱり俺はルイーナに魅  
せられているんだな。

「ハア……だから言ったでしょ? こんな頭ドピンクゴリラに私はウ  
ンザリしてゐるって……ああん♥ライザー様の指い♥メスブタおっぱ



いに食込むう♥」

ナイアが挑発する様にライザーに乳を揉まれながら悶えている。ああ、それは大変ですねー。頑張ってるね？

「な、ななな……!?!」

しかし心やさしいルイーナはメスブタ……もといナイアのアレっぷりに怯んでしまっている。ナイアのアホのせいでルイーナが怯えてしまうなんて……!?!

「ナイア！お前はもつと節操ある行動をとれ！」

「はあー？クソ虫安里くんに私へ指図する権利があると思ってるんですかあ？」

俺が怒りに任せて叫ぶとナイアも負けじと言い返してくる。ああ、コイツはいつつもこうなんだよな。

嫌いだが波長も身体も合う。何て厄介な関係なんだ俺達は……。

「まあまあ二人とも。今回呼んだのは他でもない。俺達の間を揉め事になる前にお前らに見せておこうと思ってるな、ワハハハハ！」

「ああん♥ライザー様あ♥安里ちゃんの前で私のメスウシおっぱいニギニギしないでえ♥恥ずかしいのお♥」

「何を言ってるんだニグラ？お前はこうされて悦ぶ淫乱女だろう？」

「あひいっ♥ば、バレてるう♥」

うわあ、多分ニグラさんやナイアにルチャさんとお近づきになれる様に協力してくれと言ったんだろうな。

そしたら『あの子だけじゃなくて私達も可愛がってえ♥』とか言われてその気になったんだろうな。

何と言うか……羨ましいというよりご愁傷様というか。

「あ、あの……いいんですか？こういう事を安里、くんに見せて……」ルイーナは心配そうにニグラとナイアの方を見ながら俺に問う。

ああ、優しいなあ俺のルイーナは。

俺がショックを受けているのではないかと思っただけを使っているんだろう。やっぱりこの子は最高だ。

「別にかまわないよ。今の俺はルイーナが側にいてくれるだけで幸せなんだ」

「でも安里の側にはキレイな女の人一杯いるよね？ スコグルちゃんやセラフオルー様、カテレア様、ヤンリマ様はともかくニトクリスさん、セルベリアさん、ジャンヌちゃん。ニグラさんやナイアちゃんまで……ちよつと女の子が多くないかな？」

い、いかん！ キザな台詞を吐いたせいかわ虎の尾を踏んでしまったか？ でもヤキモチを焼くルイーナも可愛いぞ！

「ライザー様あ♥今度はこっちい♥」

「ハハハ！ まあそういうワケだ！ だが泣くな安里！ お前がオスとして劣っているワケではない！ 俺がフェニックス家次期当主として優れているだけだ！！ ハハハハハ！」

……つたく。一人で盛り上がりやがって……けどライザーってこんなにNTRモノのチャラ男みたいにいキリ散らすタイプだったか？ まさかあの二人に変な事吹き込まれたんじやなかるうな？

「ナイアさん！ ライザー先生！ 私と安里くんはもう帰りますね！」

「おう、またな！」

「あひいつ♥サヨナラあ♥」

「アンタってそんなキヤラだったか？」

するとライザーはニヒルに笑いつつ髪をかいた。うくん、危険な兆候だ……。

後でイツセーに聞いたら「あの焼き鳥の話はするな。俺は今メチャクチャ機嫌が悪いんだ」とけんもほろろだった。一体どうなってるんだかな……。

リクエスト編（ライザー×ナイア&ニグラ&ルチャ  
（？）安里×ルイーナ（本番無し） イッセー×ルチャ）

・ライザー視点

安里に近しい女二人が俺のペニスを求めて喘いでいる。九頭竜ナイア、ニグラ・サセコヴィッチ。どちらも絶世の美女と喻えて余りある。そんな女達が俺のペニスを求めて股間を濡らし、艶やかな声で俺を呼び続ける。たまらない。たまらないが——物足りない。

俺は身体を起こし、二人の乳房を鷲掴みにするとそのまま強く揉みしだいた。

「ああん♥」

「やん♥」

二つの嬌声が部屋にこだまする。その声色はどこまでも甘い。まるでドーナツの蜂蜜漬けを彷彿とさせるほどだ。

「ああ、二人のその声！たまらない！もつと喘げ！俺のために！！」

俺は二人の尻を叩き、ビン、とサーベルの様に反り立つペニスを二人の顔の間に差し出す。

「まずはこのペニスを悦ばせろ！それで俺をもつと興奮させろ！」

「わ、わかりました♥」

「よ、悦ばせていただきます……♥」

二人はその美しい唇を開き、俺のペニスにむしゃぶりつく。そして口と舌での愛撫を開始。

九頭竜ナイアは長い舌を駆使し、裏筋とカリを中心に丹念に舐め上げていく。ニグラは俺の睾丸を陰毛ごと頬張りじゅぶじゅぶ猥雑な音を立てながら吸い付いてくるのだ。冥界の高級娼婦ばりの性技を披露され思わず声が出る。

「ああ、いい！最高だ！お前達は最高の女だ！！」

そう、最高だ。しかし——何か物足りない。解っている。足りないのはトウ・ルチャ。炎の魔人でありながら麗しい美貌、豊満かつ清廉な乳房を持ち、貞淑かつ謹厳でありながら慈悲もある。俺の理想が

形となって顕現したような女だ。

俺の為だけに、その麗しい裸体を惜しげもなく晒させ、屈伏させることが出来ればどれだけ興奮するか！どれだけ征服感を得られることか！その達成感と、絶頂の快感は筆舌に尽くしがたいだろう。

「ライザー様あ……♡」

「ライザーさまぁん……♡」

九頭竜ナイアとニグラの声に意識が現実に戻ってくる。二人が俺のペニスを舐めるといふ激務を終えて、今度は身体を俺の身体に擦り付けてくる。まるで家畜だ。

「わ、私、そろそろ我慢できません♡」

「私も、もう、いっぱい濡れちゃってます♡」

九頭竜ナイアは自らの股座を俺の太ももに押し付け、にちやにちやといやらしい水音を奏でてくる。ニグラ・サセコヴィツチの方はすっかり出来上がっており、自ら秘所をほじくり快感に浸っている。

二人の熱気と火照った身体から汗が噴き出して、俺の身体を濡らすが、それは不快どころか興奮の材料でしかない。

「ははははは！いいザマだ！だが、俺のペニスをこの程度で満足させられると思うなよ!？」

俺は二人の乳房を揉みしだきながら立ち上がる。

「お前達、もっと気持ちよくなりたいか？」

二人がコクリと頷く。俺はニグラの秘所に指を挿入しながら尋ねた。お前が誰よりも愛している男の名を言ってみると。すると——ニグラが蕩け切った表情で叫んだ。

「ライザー・フェニックス様あ！」

負けじとナイアも同じように叫ぶ。

「ライザー・フェニックス様！ライザー・フェニックス様！」

「ははは、そうだ。お前達は俺に屈伏し、堕ちているんだよ!!だから気持ちよくなればなるほど、俺の慈悲を乞わずにはいられない!!」

俺は高らかに笑いながら指を激しく動かし、二人を絶頂へと導いていく。二人の身体がビクンと震え、絶叫が上がった。

「ンヒイイ♡♡♡ライザー様の指い♡マンコの中で蠢いて♡んほ

「おおおお♡♡」

「ライザー様あ！ライザー様あ！いっぱい、いっぱい愛してくださいませえ♡私のおまんこを貴方の愛で一杯にしてくださいませ♡♡」

二人は足をぴんと伸ばして絶頂。熱い吐息と共に絶頂の余韻に浸りながら俺の胸板に顔を預けてくる。

「いいだろう。お前達に俺の子胤をくれてやる。だが俺にあの女、トウ・ルチャを差し出せ」

同僚、部下を売れという俺の発言。しかし二人はそれを拒否するどころか、喜々として応じる始末だ。

「は、はいっ♡売ります♡ライザー様のために、ルチャを差し出します♡」

「ライザー様のおチンポのためなら、ルチャは喜んで差し出します♡」  
なんと卑しい雌共だ。と俺は獰猛な笑みで嗤う。

「クク、なら、お前らの全てを捧げろ！俺の慈悲を乞え！」

「はいっ♡私の全てはライザー様のものです♡」

「私もライザー様の為にこの身を捧げますわ♡」

「はは！そうだ、それでいい。お前達の魂、存在そのものを俺に捧げろ！」

俺は二人の秘所にペニスを押し当てる。二人はこれから襲い来る快感に身を震わせ、そして——一気に貫いた。

「んひひひひひひひひひひ♡♡♡♡♡チンポ♡激太不死鳥チンポが私のふやけマンコにひひひひ♡♡♡♡」

「んひひひ♡しゅごい♡フェニックスチンポ、太くて長くてカリ高でえええええ♡♡熱々チンポでマン汁蒸発しゆるううう♡♡♡」

品性なく二人はオホ顔で涙と鼻を垂らすがままにしながら身体が弓なりに仰け反る。俺は自分のペニスを二人の中で暴れさせる。激しいストロークと共に二人の乳房が激しく揺れ動く様はなんとも言えぬ絶景だった。

「ああああ♡ライザー様あ！もつと、もつと突いてくださいませ♡もつともつと気持ちよくなってくださいませ♡」

「ライザーさまっ♥んはあ！おまんこ、ごりごりしてえ♥ああん、気持ちいい♥♥」

二人の身体は熱く火照りきり、俺のペニスを貪るように絡みついてくる。俺は容赦なく腰を突き上げて二人に快感と絶頂の追い打ちをかけた。

二人は絶叫しながら痙攣し、俺に倒れ込んでくる。そんな二人の尻を叩きながら——俺は吼えた。

「ククク！はははははは!!いいぞお！いいぞお前達!!お前達は最高の女だあ!!絶頂しろ！絶頂しながら、もっともっと俺を喜ばせろお!!」  
「ライザーさまああ♥♥んほおお♥イグウウウウ♥イツグウウウウ♥♥♥」

「あへええええ♥しゅごいのおおお♥♥イツグウウウウウウウウウ♥♥♥」

二人は身体をガクガク痙攣させながら絶頂。俺はその締め付けに耐え、子宮へと精を吐き出した。

「ああああ♥♥フェニックス精液♥♥き、気持ちいいですううう♥♥」

「は、はひ♥イクウウウウ♥♥ライザー様の極太不死鳥チンポでまたイグウウウウ♥♥」

そして——俺は再び叫ぶのだ。あの女の名を。

「ルチャアアアアアアアア!!お前の主が俺に屈伏し、媚びてるぞ！お前らは、俺のなんだ!?!答える!!」

「はひいい♥ニグラの全てはライザー様のもんです♥♥」

俺はニグラの耳元に口を寄せ囁く。俺に屈服しろ、と。すると彼女は蕩けた表情で応えたのだ。

「はい……♥私はライザー様のために……存在しますう♥♥♥マンコもおっぱいも、全部ライザー様だけのものです♥♥♥」  
「クク、ならナイアは？お前はなんだ？」

ニグラと同じように蕩けた表情で俺の胸元に顔を埋めていたナイアが呟く。

「私はあ……ライザー様のためだけに生きています。私はライ

ザー様の所有物です……♡」

そして二人は俺に媚び切った表情を浮かべると――

「私の全てを捧げます♡どうぞお受け取りください……♡」と声を揃えて言った。

ハハハハハ！何という最低なメス共だ！だが、だからこそ墮とし甲斐があるというものだ！

「ククク！ハハ！！はははは！！」

俺の哄笑が部屋に響き渡る。そうだとはいは——俺が最高の快楽を手に入れるだけだ。

俺は二人の膣内に射精しながら、勝利の喜びに酔いしれた。そして、俺に屈服した二人への褒美を与えるべく続けて二人に尻を突き出させる。

「はうっ♡次は、私の番ですね……♡」

「いやあ♡マンコに中出しされるだけじゃ物足りないです♡ライザー様のデカチンポでえ、ニグラのケツマンコも犯してええ♡♡」

俺は二人を四つん這いにさせると、まずはお望み通りにニグラの anal に牙を立てるかの様にペニスをねじ込み、ピストンを開始する。

「ああああん♡♡きたあ♡♡ケツマンコにもフェニツクスチンポ入ってきたああ♡♡」

「あへええ♡オマンコぐりぐりこすらせるの気持ちいいいい♡♡ライザー様、もつと激しくうううう♡♡」

俺は腰を振りながらナイアの秘所に指を入れ、搔き回す。俺のペニスで攻められながらもナイアはしっかりと快感を感じてたらしく、激しい指遣いにも耐えてみせた。俺はさらに指を一本追加し、更に攻め立てる。ナイアの膣肉はキュウキュウと締め付けながらも、俺の指にしっかりと絡みついてきた。

「ああああん♡♡ライザー様あ♡♡そんなに激しくされたらあまたアクメ決まっちゃう♡♡♡ケツマンコ負けちゃう♡♡♡墮ちる、墮ちるうううう♡♡♡」

ニグラは哀れな程により狂い、売女のように腰を振り乱して絶頂に酔いしれる。俺はニグラをイカせるべく、一気にストロークを速め

た。

「んひいひい♥♥♥しゅ〜いひいひい♥♥♥♥」

「はは！〜どうだニグラ！俺専用のメスになった気分はどうだ!？」

俺は吼える様に吼え、そして——思いつきり叩きつけた。と同時にニグラの腸内を熱いマグマが駆け抜ける。

「あひいひいひいひい♥♥♥ケツマンコにお射精きたああ♥♥♥フェニツクス精子きてりゆうううううう♥♥♥」

ニグラは白桃の様に熟れた尻から俺の精液を溢れさせ、無様かつ滑稽にイキ散らかす。俺はそんなニグラに勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「クク、どうだ？俺のモノになるといふのは悪くない気分だろうか？」

「はひい♥♥♥最高れすうう♥♥♥」

ニグラはドロドロに蕩け切った表情と声で、そう答えた。

「クハ、クハハハハ！なら次はナイアの番だな！お前の尻も犯してやる！嬉しいか!？」

まるで強姦魔のように、俺はナイアの項を押さえつけるやコイツは自ら尻をシーソーの様に振って応えたのだ。

「は、はひ♥♥♥どうぞお使いください♥♥♥私はライザー様の所有物です♥♥♥私のケツマンコもライザー様の高貴なチンポ汁でえ♥♥♥んお

♥♥♥ケツアクメ決めさせてください♥♥♥♥」

「ハハッ！ハハハハハ！いいだろう！お前にふさわしい無様アクメをキメさせてやる!!」

俺はナイアの望み通り、彼女のアナルにペニスを突き入れ、ピストンを開始する。そしてナイアにも——屈服させた女にのみ許される最高の快楽をくれてやった。

「あああ♥♥♥気持ちいい♥♥♥ケツマンコ拡がってるう♥♥♥バキバキのライザー様チンポでケツマンコズボズボされてええ♥♥♥んあああん♥♥♥」

「ハハハハハハハ！お前はケツの穴をほじくられて感じる変態だったんだな！」

「はい♥♥♥私は変態です♥♥♥だからもつと突いてくださああい♥♥♥んひいひいひい♥♥♥♥♥♥」



ナイアの尻穴から大量の腸液が滴り、俺のペニスをまとわりつくのが解る。ぎゅうぎゅうと括約筋が締め上げ、俺のペニスを刺激するが——俺はそれでも構わず、ナイアのアナルを穿ち続けた。

「ああああ♥ライザー様の極太チンポでケツ穴犯されてるう♥♥♥んひひひひひひひひ♥♥♥」

「はは！もうまともな言葉が喋れないか!？」

「あひひひ♥♥ごめんなさい♥♥ごめんなさいひひ♥♥でも、お尻ズボズボされるの気持ちいいんですう♥♥」

ナイアはもうすつかり快樂の虜に成り果てており、自ら尻を突き出し、より深い場所までペニスを受け入れようとしてくる。

「そうだ、ナイア。俺のチンポをオカズにオナニーしろ。ケツアクメ決めながらマンコでも達してみせろ！」

「はいい♥かしこまりましたあ♥」

ナイアは蕩け切った表情で己の秘所に指を這わせる。そして——浅ましくも自慰行為を始めたのだ。

「んああああ♥♥ライザー様のチンポお♥♥アナルズボズボ気持ちいいひひひ♥♥こんなのすぐイツちやううううううう♥♥」

「ハハ！そうだ！お前はケツの穴で感じる変態女なんだ！だが、いいぞナイア！もつと下品にイケ！ケツマンコでチンポ感じて無様にアクメ決めろ！」

「あひひひひひひ♥♥イツグウウ♥♥♥ケツ穴ズボられながらオマンコでもイツグ♥♥変態な女でごめんなしやひひひひひひ♥♥」

ナイアのアナルが一層強く締めまり、俺のペニスを強烈に締め上げた。

そして——

「イグッ♥♥♥んほおおおおおおお♥♥♥ケツ穴アクメとマンコ絶頂両方キマってるううううううう♥♥♥」

俺は絶頂に達したナイアから己のモノを抜き出すと——彼女の尻を思い切り引っぱたく。

「あつひひひひひひ♥♥♥♥♥」

べちいつ！と湿った音が響き渡る。ナイアの尻に真つ赤な手形が

刻まれた。俺の所有物である事を示す烙印だ。

「ハハハ！いいぞナイア！お前は最高のメス豚だ！」

俺はナイアを四つん這いにさせると、その秘所に己の剛直を叩きつけた。そして——そのままピストンを開始する。

「あつはああ♥♥しゅごお♥ライザー様のチンポおお♥♥ありがとうございます  
ございます♥ライザー様のチンポ奴隷のナイアを使って頂いてあり  
がとうございますうう♥♥」

重油が燃え上がる際に発する煙の様なドス黒い欲望が滾り、燃え上がる。ニグラもナイアも、そしてルチャも……全て俺のモノだ。

「もつと、もつと♥♥ライザー様のペニスでえ♥私のケツ穴を犯して  
くださいああいい♥♥♥」

「ああん♥ナイアばかりじゃなくて私も可愛がって♥貴方のチンポ  
のために生まれ変わった私の身体をもつと使ってえええ♥♥♥」

俺は狂った様に二人の身体を犯し続けた。何度射精しても萎える事のない性欲と、全身を駆け巡る快感が俺をより高みに引き上げていく。

はは！ははははは！あははははは！

↓

・安里視点

「んん♥んんっ♥」

ルイーナがベッドで寝そべりながら俺のチンポをしゃぶっている。彼女の口の中で俺のペニスがびくびくと震え、その先端からは先走り汁がダラダラと垂れていた。

「んっ♥んん♥」

ルイーナは鼻から抜けるような吐息を漏らしながら、丹念に俺のペニスに舌を這わせてくれる。

技術とかそんなものは関係ない。ただ、俺のモノに彼女が奉仕してくれるという事自体がたまらなく気持ちいい。

「ん……んん……んん♥」

ルイーナが上目遣いで俺を見上げてくる。その濡れた瞳に俺はゾクゾクと背筋を震わせた。

小柄なのに肉付きのいい尻。すらりとしている様に見えて形も大ききさも申し分ない乳房。どれも一級品だ。

何より、彼女の口内は最高に気持ちいい。滑らかで、熱くて、そして――

「んっ♥んん♥」

ルイーナは俺の反応から感じる場所を察したらしく、そこを重点的に攻め立ててくる。ああ……もう駄目だ！出る！！

「んふうう♥♥」

俺は絶頂に達して精液を放出する。すると彼女は口から溢れ出す程の量を懸命に飲み干してくれた。

目を細め、感謝する様に俺のモノを舐めて綺麗にしてくれる。

「ぶはぁ♥」

ようやく彼女は口を離すと、満足げな表情で微笑んだ。その表情に俺の脳が思い切りハンマーで殴られたような感覚に陥る。こんなにエッチな一面は俺にしか見せない。いや……俺以外の誰にも見せてやるものか。

「どうしたのボーっとして？安里……私、ヘタだった？」

「ヘタとか上手いとかなんてルイーナには関係ないさ。俺はルイーナの事が好きだから、だから……こうしているんだ」

俺は彼女をベッドの上に押し倒すと、唇を重ねた。舌を入れ、互いの唾液を交換する。

「んん♥♥♥はぁ……あん♥♥♥安里……キスってこんなに気持ちいいんだね……んふ♥」

安里のザーメンと涎が混ざって……変な感じ♥」

唇を離すと彼女はうっとりとした表情を見せる。その顔はまるで恋する乙女といった様子で――とても可愛かった。

「イヤだったか？」

「イヤだとかいいとかなんて関係ないよ。私は安里の事が好きだから、だから……こうしているんだ。なんちゃって♥えへへ♥」

「……こいつ」

ツン、と俺は軽くルイーナの額を小突いた。

「あ♥えへへ、ごめんね?」

「まったく……可愛いヤツだな」

俺はルイーナの身体を愛撫しながら耳元で囁く。彼女はくすぐったそうに身をよじったが、すぐにその表情を蕩けさせた。

「んふ♥くすぐりたいよ♥」

「そう言う割に気持ちよさそうな顔してるじゃないか?」

俺がそう指摘するとルイーナは恥ずかしそうに顔を赤らめた。もう数えきれないくらいに身体を重ねているのに未だに恥ずかしがる彼女が可愛くて仕方がない。

「ゴメンね、今日は女の子の日だから……エッチはできなくて」

「いいさ。セックスするだけが俺達の関係じゃないだろ?」

これは本心だ。俺達はお互いに愛し合っていて、身体を重ねるだけじゃない。お互いをより深く感じ合う為にあるのだ。

「うん……そうだね♥」

ルイーナは微笑むと、俺に甘える様にすり寄ってきた。俺は彼女の小さな身体を優しく抱き締める。

「ねえ安里……好きだよ♥スコグルちゃんや、セラフオール様、カテレア様……ナイアちゃんやニグラさんよりも安里の事が一番好き♥」

「ああ、俺もだ。ルイーナ」

ふと、あの二人がどうしているか気になった。ライザーに靡いている様子は見せていたが……。ニグラさんやナイアが何を考えているのか?

女心と秋の空とは言うが、あの二人が何を考えているのか俺にもわからない。

「……ねえ安里」

「ん?」

ルイーナが俺を見つめながら呟く。その目はどこか不安げで、まるで捨てられた子犬の様な目だ。

「どこにも行かないよね……?」

俺はそんなルイーナの頭を撫でながら答える。

「ああ、俺はお前を置いていたりしないよ。寧ろお前が俺から離れ

る方が心配だ」

「えへへ♥じゃあずっと一緒だね♥」

ルイーナは俺に甘える様に頭を擦り付けてくる。その仕草が可愛くて、俺も彼女の頭を撫でてやった。

「ああ、そうだな。ずっと一緒だ。お前になら幾ら裏切られても、殺されたっていいさ」

何だか重い事を言っている自覚はあるが、俺にはそう思えるほどの価値がある。

「ええ!? 私が安里を? そんなこと絶対しないよ! そんな悲しい事言わないで!」

ぽかぽか、と俺を咎める様に

叩いてくるルイーナ。

「ゴメンゴメン。悪かったよ」

俺は苦笑しつつ謝ると、彼女を引き寄せてキスしてやる。するとすぐに機嫌を良くして微笑んでくれた。

「えへへ♥もつとキスしよ♥」

俺達はそれからしばらくの間、互いの身体を抱き寄せながら唇を重ね合ったのだった――。

↓

・ライザー視点

ここは冥界の色街ことソドム。

ギレル・クパンダが支配する退廃と情欲の園だ。そして俺——ライザー・フェニックスはそのVIP用タワーホテルの前にいた。両翼を固める様にナイアとニグラが付き従っている。ナイアは紅、ニグラは黒の乳首や股間以外は透けるまでに薄地のナイトドレスを身に纏わせている。

更には『メスブタ』『チンポ大好き』『肉便器』などの落書きが素肌に対して所狭しと書かれており、その淫靡な姿は街を歩く男達の視線を釘付けにするだろう。

だがこの二人は前菜の様なもので、メインディッシュはこれからだ。

ここでは何があるうと闇から闇だ。

拉致、誘拐、脅迫、強姦、凌辱、調教……なんでもござれだ。

「お待ちしておりました、ライザー・フェニックス様。さあこちらへどうぞ」

受付の男が深々と頭を下げて俺達を歓迎する。俺達は案内されるがままにエレベーターに乗り込むと、最上階のスイートルームへと通された。そこには既にルチャの姿があった。俺のリクエストで花嫁風の白いドレスを身に纏い、赤い口紅を引いている。

「初夜を迎える気分はどうだ？」

「最悪だな。貴様にはユーベルーナという女王がありながら私を籠絡するためにニグラ様を辱め、更にはこんな所にまで……！」

キツ、と鋭い視線を向けてくるルチャ。俺はそれを気にした風もなく、彼女の顎を掴む。

「くく、そう怒るな。ユーベルーナはできた女だ。お前達3匹を飼った所で恪気を起こす様な女じゃあない」

そうだ。どう取り繕ってもコイツらは浅ましく卑しく、男なしではいられないメスブタだ。それならそれで俺が好き勝手にして何が悪い？

「ふ、ふざけるな！ユーベルーナ様がそんな事を思うものか！」

ルチャは俺に対して敵意を剥き出しにする。その反応に俺は内心ほくそ笑んだ。そうだ、それでこそ墮としがあるというものだ。

「ねえ♥ルチャ……自分の心に素直になって？本当はライザー様に愛して欲しいんでしょ？」

ナイアがルチャの耳元で甘く囁きかける。すると、彼女は頬を染めて顔を背けた。

「だ、黙れ！私は貴様とは違う！」

「ふふ♥もう我慢しなくてもいいんですよ？私達と一緒に堕ちましようよ♥」

ニグラも甘い言葉を投げかける。ルチャは悔しそうに唇を噛み締める。主がここまで陥落し、色欲に堕ちた有り様を見てルチャは悔しくてたまらないのだろう。だが――

「さあ、お楽しみはこれからだ。ルチャ……お前はこのライザー・フェニックスを心から愛して仕えるんだ。いいな？」

「……っ！誰が貴様なんかを愛するものか！私はイツセー様の眷属だ！貴様の様な下衆に心まで捧げるものかっ!!」

ルチャは俺を睨みつけながら吠える。しかし、それが強がりだという事は明白だ。

「まあいいさ。お前が素直になれる様にしてやる」

俺はそう呟くとルチャを抱き寄せる。そして彼女の唇を奪った。

「んうっ……んんっ!?!」

目を白黒させ、自身が抵抗できない事実にルチャは混乱している様だ。俺は彼女の口内を蹂躪しながら、彼女のあまりにも稔る果実を収穫するかの様に揉みしだいた。

「んっ♥んん♥んっ♥♥」

ルチャは身を振らせて逃れようとするが、それをナイアとニグラが許さない。二人はいつの間やら落書きだらけの裸体を恥じらうことなく晒し、ルチャの胸を揉みしだき始める。

「あ……ぐうっ♥や、止めろ♥」

ルチャは唇を離されると、頬を紅潮させながら息を荒らげる。その目は快楽に潤んでおり、嫌々と頭を振るも彼女達から与えられる刺激から逃れるどころか、自ら胸を突き出して彼女達の愛撫を受け入れている様だ。

「ハハッ。止めろって言いながら自分からデカチチを押し付けてくるなんて、お前普通に変態だな」

「あらあらナイア。そういう風にルチャちゃんをいじめちゃいけないわ♥」

ニグラがルチャの胸を揉みながらナイアを嗜める。しかし、彼女は悪びれた様子もなく笑っていた。

何だあの笑みは……?」

「ええっ……だっ……ルチャったらおっぱい揉まれる度に『もっと強くしてください』って顔してるんだもん♥だからつい虐めたくなっちやうのよねえ♥」

「ああ……確かにそうね♥それにこんなドスケベな身体と心をしているんですもの♥♥虐めたくなるのも仕方ないわね♥♥」

二人はくすくす、と笑い合う。その間にもルチャの乳首を指で摘んで引つ張ったり、捻ったりと執拗に責め立てていた。

「ひゃうっ！♥♥」

ルチャはその刺激に目を見開きながら仰け反る。しかし、その反応とは裏腹に彼女の乳首はしっかりと勃起しており、俺が弄んでやると素直に悦びを示す様に固くなる。

「あははっ♥乳首弄られて感じてんじゃねえよルチャ！」

「仕方ないわよ♥ライザー様って凄いテクニシャンなんですもの♥」

ナイアとニグラの二人がかりでルチャを責め立てる。ルチャは歯を食いしばりながら必死に耐えているが、その目は完全に快楽に屈している。

「あ……♥うあ……ま、まで♥♥」

弱々しく制止するルチャを無視して二人の責めは続いていく。二人共それぞれ自身の胸を持ち上げると、乳首をルチャの乳首に擦り付けはじめた。

「ひっ♥やめっ♥♥」

ルチャの抗議を無視して二人の乳首が彼女の乳首を擦り上げる。その度にルチャの身体に快楽が走り、秘所から愛液が流れ出していた。

くくっ、中々面白い趣向じゃないか。俺はその様子を眺めながら自らの剛直を3者の顔に擦り付けた。

雄の臭いに彼女達は陶醉した表情を浮かべる。そして、愛おしげに舌を這わせ始めた。

「んちゅ……♥おいしい♥♥」

ナイアとニグラはうっとりとした表情で丹念に俺のモノを舐め上げる。亀頭を舌で転がし、竿や裏筋にまで舌を伸ばし奉仕する姿は実に淫靡で美しい。俺は二人からの奉仕を堪能しながらルチャへの責めを継続した。



「んううう♥♥やめろ♥♥もう許してくれっ♥♥」

「んぶ……ふう♥じゃあ、ライザー様のチンポ舐めたら許してやるよ♥」

「じゅるるっ♥それは名案だわ♥♥ほらルチャちゃん♥早く舐めなさい♥♥」

ナイアとニグラは激しく俺のモノに吸い付きながらルチャに命令を下す。

「わ、わかった♥♥舐めるっ♥舐めるからもう許してくれ♥♥」

ルチャは目に涙を浮かべながら懇願すると、震える舌先をゆつくりと伸ばし俺の先走り汁と二人の唾液に塗れたチンポを舐めた。

「お、おつきすぎる……き♥♥」

ルチャは今まで見たことのない大きさの肉棒に驚愕しつつ、その大きさと臭いに酔いしれていた。

「ククク、どうしたルチャ？お前は兵藤一誠の眷属だろう？お前が仕える男のチンポとの違いにたじろいでるのか？」

「ち、違う！私はイツセー様以外のチンポなんかに屈しない！！だから早く終わらせてやる！」

ルチャは歯を食いしばりながら叫ぶと、口を大きく開けて俺のモノを咥えこんだ。そして苦しげに嗚咽を漏らしながらも舌を絡ませてくる。

「んうう♥♥んううう♥♥」

俺はルチャの頭を掴みながら腰を動かし始めた。

ルチャの口の中は焼けるように熱く、滑りも粘りも堪らない。

「オラッ！もつと強くしゃぶれよメスゴリラ！お前みたいな淫売には格別の御馳走だろうが！」

ナイアがルチャの尻を叩きながら命令する。ルチャは涙目になりながらも必死に奉仕を続ける。そんな様子が可愛くて、俺は更に腰の動きを早めた。

「んぶっ！♥♥んっ♥♥んううう♥♥」

喉奥を突かれる度に苦しげな声を上げるルチャだったが、目尻が下がっていく。やはりこの女も根っからの淫売だな。俺がほくそ笑ん

でいるとニグラはルチャに対して耳打ちをする。

「ほら、ルチャちゃん？もつと頑張つてライザー様のオチンポ様を悦ばせないな♥例えば貴方の乳首と一緒にライザー様のおチンポを貴方の口と舌で可愛がってみるとか♥」

「んう♥♥んっ♥♥」

ニグラの提案にルチャは驚くも、言われた通りにするべく自分の胸を持ち上げ、コリコリに勃起した乳首を俺のモノに擦り付けながら自らの口と舌で奉仕を始めた。

「んぶっ♥♥おっっ♥♥」

ルチャの喘ぎ声が大きくなる。口からは大量の唾液が流れ出し、乳首もビンビンに勃起していた。

俺はルチャの頭を掴むと激しく彼女の頭を揺さぶった。

「おぼおおお!?!♥♥」

喉奥を蹂躪されながら喉の奥へ肉棒を叩きつけられるという未知の感覚にルチャは目を見開いて悶絶する。しかしその表情には苦痛以外にも見え隠れしている。

俺はニヤリと笑いながら激しくルチャの喉を突き続けた。

「ぐっ……そろそろ出すぞ!」

限界を迎えた俺がそう言うのと、ルチャは苦しげに顔を歪めながらもコクコクと首を縦に振った。そして——どびゆるるるっ♥♥♥♥大量の精液が発射され、ルチャの口内へと注ぎ込まれる。それと同時にルチャも絶頂を迎えたらしく、秘所から潮を吹き出していた。

「おぼお♥おぼお♥」

喉奥まで突き刺されても尚、ルチャは鼻から精液を逆流させながらも必死に精液を飲み干そうと奮闘する。

やがて俺のモノが引き抜かれると、ルチャは大きく咳き込みつつも荒い呼吸を繰り返した。

「あは♥ルチャったら可愛い♥♥」

ナイアがルチャを抱き寄せながらキスをする、ニグラもそれに続いてデープキスを開始する。二人がかりで責め立てられたことで力が抜けたのか、ルチャはそのまま二人に押し倒された。

「ねえ、ライザー様？私もう我慢できないんだけど♥」  
「ええそうね♥♥肉便器の私達にもご褒美おチンポ様をくださらない？♥♥」

二人は物欲しげな表情で自らの秘所を広げると、こちらに向けてアピールしてきた。もう片方の手はそれぞれルチャの濡れそぼった妖花をかき回し、蜜蕾へと変容させていた。

「うああっ……やめてえ♥私はイツセー様の眷属なのにい♥イツセー様以外のチンポはダメなのにい♥」

ルチャは涙を流しながらも、自らの指で自身の乳首を慰めつつ、ニグラの愛撫とナイアの愛撫の両方を感じてしまっていた。

「おいおい、まだ始まったばかりだろう？これからが本番だっていうのになあ？」

ああ、最高だ。最高の夜じゃないか。俺は欲望が滾るままにルチャの蜜蕾にペニスを突き立てる。

ギチギチに詰まった蕾をこじ開ける快感に軽い目眩を感じながら。

「い……ああ、入って……くるう」

「くうっ……！なんて頑な肉穴だ……初物以上の締め付けじゃないか！！」

「ぐうううっ……♥♥♥」

ルチャは俺の言葉に反論する事ができずにただ唇を噛み締めていた。だが俺のチンポの熱に、硬さに、太さに、そして何より快樂に抗えないのか次第に抵抗が弱まり、ヌルヌルとした淫蜜が染み出しはじめていた。

「あははっ！ルチャってばもう蕩けちゃってるじゃない♥このザコマンコト」

「うふふ♥貴方もライザー様のおチンポ様にすっかり夢中ね♥」

「うああ……♥そ、そんなあ……♥♥♥私、イツセー様以外のチンポで……感じてしまいううう♥」

ニグラとナイアはそんなルチャの痴態を面白そうに眺めている。さらに二人とも己の秘所を指で慰めるのに怠らず、その行為は俺の優

越感と独占欲を満たす為のものでしかない。

「ぐっ………出る……!!」

「ひょうっ♡♡」

俺の宣言にルチャは恐怖と期待が混じったような表情を浮かべる。そして俺は彼女の中に熱い子種を注ぎ込む。

どぴゅっ♡どぷっ♡どくんっ♡♡

「あ……あああ♡♡熱いいい♡♡いやだああ♡中出しセックス……気持ちいい……♡♡♡♡」

ルチャは身体を痙攣させ、絶頂を迎える。その顔には最早いつもの気丈さはなく、快楽に溺れたメスの表情へと堕ちていた。

俺はそんなルチャの痴態を眺めながら彼女の秘部から剛直を引き抜いた。すると、ルチャの秘所からは大量の精液が零れ落ち、彼女の太ももを伝っていった。

「ふあっ♡♡ああんっ♡♡」

ルチャは秘所をヒクつかせながら甘い声を上げていた。そんな彼女にニグラとナイアが近づいていく。

「フフッ……ライザー様だったら凄いでしょ？私も初めてした時は何度も失神させられちゃったんだから♡♡」

「あははっ！私達もうライザー様のオチンポ様がないと生きていけないわ♡♡」

「そうか、ならお前らにも褒美を与えてやらないとな」

俺はニグラの腰を掴むと一気に挿入する。

「あはっ♡♡きたあ♡♡」

ニグラは歓喜の声を上げて悦ぶ。俺はそんなニグラを突き上げながらルチャの方に目を向ける。

「ほら、お前も早く来いよルチャ……っってお前聞こえてるか？」

俺が問いかけるも、ルチャは焦点が合わない目をしながら身体を震わせていた。どうやら快楽に耐えきれずに気絶してしまっているようだ。やれやれ仕方のない奴だな。そう簡単に壊れるようでは兵藤一誠の眷属など務まらない。俺はニグラから肉棒を抜くと、ルチャの方へと歩み寄る。

「起きろルチャー！」

俺はそう言つて彼女の頬を叩くと、ルチャは意識を取り戻す。そして俺の姿を確認すると怯えた表情を浮かべる。

「ひっ!? す、すまない……私……」

「どうやらまだお仕置きが必要みたいだな？」

俺がそう言つと、彼女は身体を震わせた。もうすっかり従順になつてしまったものだな。なら従順になつたその肉穴がどんな具合になつたか確認してやるとしよう。俺はルチャの股間に剛直をあてがうと、そのまま一気に挿入した。

ずぶりっ♡♡

「おほおおっ♡♡♡♡」

ルチャは目を見開き絶叫する。先までの硬さや拒絶を示す様な抵抗はなく、まるで別の生き物のようにヌルヌルと絡みついてくる肉壁を俺は容赦なく蹂躪する。

「ほらほら、この腹筋は飾りかエロゴリラ？ もっとライザー様のチンポを締め付けて喜ばせろよ！」

ナイアがルチャの腹筋を指でなぞりながら命令する。ルチャは目に涙を浮かべながらも必死に力を込め、俺のモノを締め付けた。

「フッフツ……やればできるじゃないか！ ご褒美に出してやる！！」

「ああっ、いやー！ いやあ！ こんなヤツのザーメンでイキたくな……いつひいいい♡♡」

ルチャは顔を仰げ反らせながら絶頂を迎えた。それと同時に彼女の膣が激しく痙攣し、俺のモノから精液を搾り取ろうとする。俺はその感覚を愉しみながら射精した。

どぶっ♡ぶしゃああっ♡♡♡♡

「あ……ああ、出されてる♡中にドロドロで熱いザーメンがあ……♡」

ルチャは放心状態でうわ言の様に呟く。俺はそんな彼女の唇にキスをすると、ゆつくりと腰を引いた。すると彼女の秘所からは入りきらなかった精液をナイアとニグラは美味そうに舐め取っていた。

「さあ、まだまだ夜はこれからだぞルチャ」

俺がそう声をかけるとルチャはガクガクと震える足で立ち上がった。その目は虚ろで焦点が定まっていけないが、もはや逃げようという意思はないようだ。俺はニヤリと笑みを浮かべると、再度彼女の花弁にペニスを突き立てた。

・イツセー視点

「はああ……いけません」

「いけませんイツセー様♥このような破廉恥な服を私に着せて交わろうなどは♥」

ルチャさんがもじもじしながら、ベッドの上で恥ずかしそうに身を振る。……改めて思うけど、本当にエロいなこの人。優しく背が高くて、気丈なおっぱいが大きくて、頼れるお姉さんって感じのルチャさんが、恥ずかしがりながらも俺を誘っているというシチュエーションはそれだけでチンポが爆発しそうだ。

「何だかんだ言いながらルチャさんだってノリノリじゃないか……♥」

「そっ！それは……その……♥♥」

俺がからかうように言うと、ルチャさんはさらに顔を赤くする。そして潤んだ目でこっちを見上げて来た。

「……はしたない女だと思わないで下さいませイツセー様♥私は貴方の眷属として貴方に安らいで欲しくて、この衣装を着ているのです♥」

そう言つてルチャさんは自分の胸を強調するように腕を組む。そのせいで余計に大きなおっぱいが強調されていた。

「な、なら俺はそんな優しい眷属のルチャさんからたっぷりと安らぎを与えてもらわないとね♥」

「あんっ♥」

俺はルチャさんのおっぱいを両手で鷲掴みにする。今のルチャさんの衣装は所謂逆バニーという破廉恥極まりない衣装だ。当然おっぱいもほぼ丸出し、その大きな胸をしつかりと楽しむことができる。

「んあっ♥ああんっ♥♥」

俺の手の中でぐにゆりと形を変えるルチャさんのおっぱい。どこまでも沈み込んでいきそうな柔らかさと弾力を併せ持つそれは、何度揉んでもその感触に飽きることはないだろう。

「どうだいルチャさん……気持ちいい？」

俺は手を休めることなく彼女のおっぱいを揉み続ける。正直手だけでは絶対に足りないのだが、それでもこの感触は最高だ。

「あ、ああっ♥♥ええ♥♥ええ気持ちいいですっ♥♥気持ちいいです  
イツセー様ああ♥♥」

「そうか、それなら俺も嬉しいよ。ルチャさんのおっぱいは最高だからね♥」

俺はそう言うのと片方の手をルチャさんの胸から離すと、彼女のバニースーツの股間部分へと持つていった。そして……ぷにっ♥  
「ひゃんっ!?!♥♥」

ショーツを穿いていない逆バニーであるルチャさんの秘部にそっと指を触れるともう明らかにヌルヌルになっていた。

「ルチャさん、もうこんなに濡れちゃってるよ?♥♥」

「んあっ♥♥ああんっ♥♥だっ♥♥あんなに情熱的に求められたら♥♥あっ♥♥イツセー様あ♥♥」

俺はルチャさんに見せつけるようにして指を上下に動かす。そうするとさらに愛液が溢れてきて……♥くちゅっ♥くちゅっ♥ぬちよっ♥ずぷっ♥卑猥な音が響き渡る中、俺は空いている方の手でおっぱいへの愛撫を続ける。そうしてしばらく彼女の反応を楽しみ更には脇に俺の顔を近づける。ちゃんと処理している辺り、さすがと言った所だな!

「ちゃんと脇も処理している辺り、実は期待していたとか?」

「ち、違います♥♥あっ♥♥やんっ♥♥そこは♥♥」

彼女の脇へと舌を伸ばし、そしてゆっくりと舐め上げる。独特のしょっぱさと香りを感じながらも俺はルチャさんの体を堪能する。濃縮還元100パーセントのフェロモンが俺の脳を溶かしていく……

「ルチャさん。質問に答えなきや。キミの主人の命令だよ?」

あまりにもエッチで可愛すぎるルチャさんのせいかな？調子のつて少しいじわるな質問を試してみる。

「あつ♥♥はいっ♥♥本当は♥♥ああつ♥♥イツセー様との夜伽を期待して♥♥あんっ♥♥いました♥♥」

ルチャさんは目をとろんとさせながら俺に媚びるような視線を送ってくる。俺はそんなルチャさんの耳を甘噛みすると、そのまま耳を舐めながら囁いてやる。

「どんな夜伽を期待していたのかな？言ってごらん？」

「ああんっ♥♥それは言えませんが♥♥そんなはしたない事なんて♥♥」

そう言いながらもルチャさんは自分の割れ目に俺の手を持っていき、俺の手ごとその部分を擦り上げる。ぬちゃっという音と共に俺の指が彼女のエロエロな愛蜜にまみれてふやけていく感覚はそこいらの温泉なんて目じやないな！まるでスチームの様にルチャさんの身体から汗や熱気が噴き出していた。

「私の中につ♥♥ああ♥♥イツセー様の♥♥遅しいおちんぽを挿入れてもらってっ♥♥あつ♥♥あつ♥♥」

「それで？」

俺はさらに意地悪く言葉の続きを促す。

「ズボズボって♥♥突いてもらってえ♥♥私の奥まで入れてもらいたいですう♥♥」

ルチャさんはそう言うと、自ら俺の手を動かしながら腰を振って見せる。正直今すぐでもルチャさんとのセックスに溺れたい俺だが、中級悪魔を合格した時のために主としてここは少し……いや、大分辛抱して言葉責めを続ける。リアスや朱乃さん、小猫ちゃんはアーシアに気が引けてできないから、ここでしか出来ないエロ修行だ！単にちよつとサドっ気のあるプレイに興味があるわけじゃないぞ！

「ダメダメ、上司のニグラさんみたいにドスケベかつイヤらしく、男を興奮させる様な言い方じゃないと不合格だよ！」

「そっ、そんな♥♥あつ♥♥あああんっ♥♥」

「ほら、俺にどうされたいのか言ってごらん？ルチャさんがこの可愛いお口でねだってくれなきゃ俺は何もしないよ？」



俺の言葉責めにルチャさんは本当に泣きそうな表情を浮かべながらも、俺の言うとおりにしようと言を聞く。

「わ、わかりましたあ♥言います♥イツセー様の御主人チンポを♥私の眷属マンコに突っ込んで……♥ぐりぐりつと子宮まで押し込んでえ♥ドロッドロの主ザーメンを私の卵子にぶち当てて下さる様♥お願いしますうう♥♥」

そう言つてルチャさんはおマンコを俺のチンポに押し当てると、グリグリと俺のモノを刺激してくる。正直それだけでもイツてしまいたいそうになるが、俺は何とかこらえる。

「ふふっ、合格だよルチャさん♥それじゃあ……キミのおマンコに俺のチンポを受け入れてくれるかい？」

「はい……♥」

ルチャさんは俺の股間の上に跨ると、ゆつくりと腰を下ろしてくる。

ずぶぶっ♥と欲張りなりスが木の実を頬張っていくかの様にルチャさんのオマンコが俺のチンポを飲み込んでいくのだ……。

「んああ……♥」

「くうう……」

腰から下が溶けてしまうような甘い甘い、そして心地良い締め付け。俺は思わず声をあげてしまう。

「あんっ♥イツセー様のおチンポが奥まで……♥♥」

ルチャさんはそう言つと、俺のチンポの根元をしっかりと掴みながら更に腰を下ろしてくる。彼女のオマンコは俺のモノを全て包み込むと、きゅつと柔らかく絡みついて来た。

「んっ♥はあ……♥どうかイツセー様♥」

「ああ、最高だよルチャさん♥♥」

俺はそう答えながらルチャさんの胸を揉んでいく。彼女の大きな胸は柔らかく俺の手で自在に形を変えていくが、この感触をもっと楽しみたいという気持ちもあり……

「んっ♥ふふっ、イツセー様ったら♥……それでは動きますね♥♥」

そう言つてルチャさんは腰を動かし始める。俺のモノが出たり

入ったりする度に愛液がじゅぽじゅぽとイヤらしい音を立てて飛び散っていく。

こ、これはヤバすぎる！

一旦呼吸を整えて、暴発は避けるとして……こんな気持ちいいのを味わっていたらすぐに限界が来そうだ！

ルチャさんの主として自分だけさっさとイクなんて無様はできない！なんて俺のちんけなプライドなんてルチャさんにはお見通しらしい。妖艶な笑みを浮かべながら腰を動かし続けるルチャさん。

「あ……♥ あんっ♥♥ ふふっ♥ イッセー様ったらこんなに大きくして♥♥ 私の中にチンポ汁を吐き出したのでしよう♥ ほら♥ ほらほら♥ ご遠慮なさらず♥♥」

そしてルチャさんは俺の首に手を回すと、そのまま強引にキスをしてくる。ぬるりと甘い唾液を流し込まれ上からも下からも吸いつくされるかの様な快樂に俺はすっかり翻弄されて……

「くうっ!？」

どぶっ!どぶっ!どくんっ♥どくんっ♥どくんっ♥♥

ルチャさんの子宮めがけて思いつきり精液をぶちまける。大量の精子はルチャさんの中に収まりきらず、逆流して彼女の太ももを垂れていった。

「あ……♥ ああっ♥♥ 熱いですイッセー様♥♥ こんなにも私を想って下さるなんて♥♥」

媚びと癒やしを兼ね備えたエロエロスマイルで俺を見つめるルチャさんだがその瞳の奥にある燦りを俺は何と無しに理解していた。ルチャさんはまだ満足していない。そう……『眷属』としての『主人の役に立ちたい』という気持ちと、『女として快樂を味わいたい』という欲求がせめぎあっているんだ。

ならば俺はそれに応えなきゃならないだろう！

「ルチャさんー！」

「きゃっ♥♥」

俺はルチャさんを押し倒し、その大きな胸を揉みしだきながら連戦を宣言する。

「キミが満足してくれるまでさ！俺は何度でも、それこそ一晩中でも付き合うさ！だから……ルチャさん！今夜は寝かせないよ！」

「はいっ♥♥ いっぱい私を愛して♥♥ 可愛がってくださいイッセー様ああ♥♥」

「ああ！もちろんさ！」

「んっ♥♥ ちゅ……♥♥ ちゆるっ♥♥ ちゅっ♥♥」

ルチャさんと再び唇を重ね合わせると、俺はゆっくりと彼女のマンコにチンポを挿入れていく。俺のモノがすっかり濡れたマンコに包まれ再び快樂が身体中を駆け巡った。そして……

「あっ♥♥ あああんんんっ♥♥ イッセー様の愛が♥♥ お腹にも伝わって……♥♥」

「ルチャさん！愛してる！ずっと愛してるよ！」

「私も♥♥ 私も愛しています♥♥ あああっ♥♥」

そして俺達はその後も何度も何度も体位を変えながら互いを貪り合うのであった。

「はあ……凄く良かったあ……」

俺はルチャさんとの激しくも甘い行為を終え、ベッドに大の字になりそう呟いた。

結局あれから俺達は回数を数えるのをやめ、ただひたすらに快樂に溺れていった。そして今はようやく落ち着いたところである。

「ふふふ……私もですイッセー様♥♥」

俺にびったりと身体を寄せるルチャさん。彼女も満足してくれた様で何よりだ！

「あ、そう言えばさ。ライザーとの一件はどうなったの？」

「ああ、あの件ですか？」

我ながらウジウジと情けないがどうしても気になってしまふのだ。ルチャさんを失うなんて俺には考えられないからな。

「その件ならばもうイッセー様が思い思う必要はありません。あの方の眷属になることはお断りしましたから」

「けどライザーは諦めの悪い所があるから……」

「ふふふ♥♥ 確かにそうかも知れませんが。しかしあの方はフェニツク

ス家の三男です。多少強引な手段に出た所で私があのような方と結ばれることは永遠にありません」

「え？なんでさ？ルチャさんととても魅力的な女性だし、ライザーも決して悪い奴では……」

「いいえイツセー様♥私には心に決めたお方がいらつしやるのです♥」

そう言いながらルチャさんは俺を見つめてくる。その瞳はどこまでも真っ直ぐだった。

・ライザー視点

そして帰りのリムジンのソファアにてさらに三人を開発していく。

「うあつ♥♥イツセー様♥♥ごめんなさいいい♥♥♥」

「あひいいい♥♥♥」

「んあああああ♥♥♥」

女どもが俺のペニスに群がり、淫らに奉仕している。ルチャは俺に尻を向けるような体勢になり、ナイアとニグラはその胸で俺のモノを挟み込むと左右から挟み込んだまま、俺とルチャの精液と淫蜜が混じり合った即席のローションにて奉仕をしている。

「あは♥♥すごいですわあ♥♥」

「ふふつ♥ほんと、ライザー様のおチンポは最高ね♥♥」

「あ……ああ、もうダメ……♥」

このチンポ……良すぎるう♥♥♥」

Wパイズリとルチャの膣口を擦る多重快楽と女どもの淫靡な姿に俺の剛直は限界を迎えていた。

「うああっ！出してやる……全員飲んでくれ！」

どびゆるるるっ♥♥♥♥

「イクウウウウ♥♥♥」

俺が射精すると、女どももほぼ同時に達する。ルチャの膣口に大量の精液を叩きつけると彼女の身体が大きく跳ね上がり、それと同時にニグラとナイアの乳の間から俺のペニスが跳ね回る。

「ははは！どうだ!?ニグラ！ナイア！ルチャ！お前達のご主人様の味は！」

俺は笑い声を上げながら問いかけるが、女どもは俺のペニスから口を離す余裕すらないらしく、ただただ俺の剛直を愛おしげにしやぶっていた。

「あ……ああ……♡♡♡」

ルチャは虚ろな瞳で虚空を見つめ、言葉にならない声を漏らしていた。そんなルチャの髪を掴み強引に股ぐらへと押し付ける。未だに萎える事のない剛直を彼女の顔に押し付けると、ルチャは虚ろな表情で俺のモノを舐め始めた。

「あっ♡♡んっ♡♡」

快楽に堕ちたルチャの舌使いに、俺は興奮を覚えると彼女の頭を掴み無理矢理喉の奥へと肉棒を突き入れた。そしてそのまま欲望を解き放つ。

どぶっ♡ごぶっ♡どくんっ♡♡

「うぐうっ♡♡」

大量の精液が喉を直撃したのか、ルチャは目を見開き苦しげに呻く。

ああ、たまらない。ルチャが俺に穢され、俺によって快楽に溺れている。その事実がどうしようもなく俺を昂らせる。

「うふふ♡ライザーちゃんってばすっかり私達に夢中ね♡えいっ」

ニグラが相変わらず淫蕩な笑みを浮かべて俺の額をつん、と押し

た。……何を言っている？お前らは俺の奴隷で……メスブタで……あれ？あれれ？何かが……おかしい？

俺は……？ライザー・フェニックス。ライザー・フェニックスの筈だ……。愛しているのは、ユーベルナ……。お前だけの筈？女どもを侍らせ……。支配して……。違う。ちがう。ちがう。ちがう。ちがう。

「どうしましたア？三男坊さん？

顔色悪いですよオ？ふひひ、ひひひやはははは!!ぎやはははははは!!」

なんだ？なんだコイツは？ナイアであった肉の塊が膨らんでいく。

ルチャであった肉の塊が蕩けていく。ニグラであった肉の塊が弾けて窓に張り付いていく。

ザザ……ザザザ……とラジオのノイズのような音が脳内に響き、俺の意識が継ぎ接ぎされていく。

ふひひ！ひひやはは!!いやだあ！こわい！たのしい!!ひやあああ  
ああア!!かなしい……かなしいいいい！いたいっらいきもちわるい、  
「なんだよもおおお!!またかよおおお!!」

俺は哭きながら噛い、怒り狂いながら愉しみ叫ぶ。

……俺は……何だ？誰だ？

俺の大切なものがあの赤龍帝にうばわれていく。今まで真実だと思っていたことすべてが、影のようなものになってしまう。ぷつん、と糸が切れる様に意識が途切れた。

↓

#### ・安里視点

「コラッ！九頭竜！毎日毎日学園で盛っているんじゃない！この駒王学園を何だと思っているんだ！学園は貴様の婚活会場ではないのだぞ！」

ライザーのヤツ……じゃないライザー先生がイヤに張り切っている。一部生徒からもそうだそうだ、と俺とルイーナの間柄をやっかむ声が聞こえる。

「そうです！不純異性交遊はいけません！大体学生というものは……」

ロスヴァイセ先生まで便乗してきた。イツセーの奴とさんざんエロい事をしているくせに何てダブスタだよ。

「そんな事ありません！私達は真剣に愛し合っています！不純異性交遊だなんてとんでもない！」

おお、あのルイーナが！おどおど、ビクビクして人目を気にして自分を殺してばかりだったあのルイーナが！今じゃ俺との交際を公に認めさせるべく、声を大にして抗議している。

「ルイーナ……」

俺が感動していると、ルチャさんも嬉しそうに笑っていた。

「それにしても驚きましたわ。あんなにオドオドしていた彼女があんな大きな声で……」

「良かったじゃないか安里！こんな可愛い彼女がお前という親友に出来て俺も鼻が高いよ」

その気持ちはうれしいけどな。いや、お前らも明らかに男女の雰囲気だからなイツセー！そんな風にしてるとライザーの奴がまたキレ出すぞ！

「コラー！兵藤一誠！俺の話聞いていなかったのか！教師と生徒で何をイチヤイチャしている！」

「いいじゃありませんか。若い内は恋をしましょう（キリッ）そのひたむきな思いが本物なら、この学園の関係者ならば応援するのが普通です（キリリッ）」

「ええ〜……」

思わず俺とルイーナは顔を見合わせた。ロスヴァイセ先生コワ〜……。何なのこの寝返りの速さ！ひよつとして叛英雄？松永弾正か何か？

「何と言う浅ましきだ。こうなったら貴様の義母とリアスに貴様の呆れた実態を話してやらんといかん」

「あつ！汚えぞこの焼鳥！」

「教師に向かって焼鳥とは何だ貴様ア!!」

ボコスカと煙を巻き上げながら二人は子供のケンカを始める始末だ。……何かもう色々台無しな気分だけど……まあ、いいか。

「争いは同じレベルの間でしか発生しないって奴ですねぇ、全く」

ナイアは相変わらずシスター服姿のまま髪をかき上げながら見下しきった目で二人を眺めていた。

「おい、お前の御主人様がイツセーとぼこすか殴り合ってるぞ。止めないのか？」

「は？遂に頭が蠅で一杯になるくらいにまで発酵してチーズになったんですか？誰が？いつ？この唯一無二にして輝くシスター様が誰かの下につくつて言うんです？」

ナイアは口元を歪ませて嘲笑する。

いや、このくらいの毒気がないナイアとか逆に気持ち悪いな……。この間の顛末はやはり二人のきまぐれだったのか？ライザーはショックを受けてる様子はないし……。また何かやったんだろうな。はあ……。



リクエスト編 魔法娼女レヴィア☆たん（安里×セラ  
フォルー サーゼクス×グレイファイア）

・安里視点

「わざわざ休日だと言うのに悪かったね、安里君」  
「い、いえ」

まさか休日にサーゼクス様がわざわざ俺達の家に来てくるとは  
……。

しかし何故またイツセー達じゃなくて俺達の所にやってきたのだ  
ろうか……？

まさか、ネフレンの遺した書物について俺以上の事を知っていると  
か？サーゼクス様やセラフォルー様は時々二人でコソコソと何かし  
ていたみたいだが……。

いや、でももしかしたらリアス達には知られたくない内容で俺達だ  
けに話すつもりなのかも……。

「とりあえずルイーナ君。席を外しては貰えないか」

微笑みつつも威厳のある顔でルイーナに言うサーゼクス様。

「えっ……わ、分かりました」

それに対し、一瞬躊躇いながらも部屋から出ていくルイーナ。やは  
り相当緊急を要する事だろう。ルイーナを巻き込むまいとしてくれ  
るサーゼクス様の気遣いに俺は内心感謝した。

「それで、サーゼクス様。今回はどんな要件なのでしょう？」

「まあ、そう焦らないでくれ安里君。とりあえずお茶でもどうかな？」

「……では、いただきます」

用件を話さずにお茶を勧めてくるとは……。何か変だ。と言うか  
サーゼクス様の方がお客なのに。ともかく俺は不安と緊張を覚えな  
がらお茶を飲んでいく。サーゼクス様も同じく飲んでいたが……。  
暫くして紅茶を飲み終えた後、サーゼクス様は再び口を開いた。

「さて、実は今回わざわざ私がこうして足を運んだのには訳があるん  
だよ。実は……グレイファイアの偽物の一件についてなのだが」

そう言えばセラフォル様から前から聞いた。グレイファイアさんのそっくりさん……らしき輩が冥界の色街ことソドムで娼婦をしていたと言うことを。

「あれから色々調査をしてみたんだがね、どうにも偽物グレイファイアは一人で動いている訳ではなさそうだ」

「それは、どういう事でしょうか？」

俺は素直に疑問を口にした。サーゼクス様はそれに頷きながら答える。

「君の言う通りあの偽グレイファイアは複数人いる可能性があるという事だよ」

何人もそっくりさんが現れるなんてそんな偶然ありえるか？まさか他にも魔王級の奴等が一枚噛んでいるとかか？ マーラとかいう奴が言っていた『悪神同盟』とかいうちつともありがたい奴等もいる。或いは『禍の団』が出張ってきた可能性も？俺が様々な可能性を考えているとサーゼクス様がそれに答えてくれた。

「それでだね。その偽物達と我が妻が似ても似つかぬ別人であると証明しようとは考えているんだ」

「はい。それは俺も賛成です。グレイファイアさんがソドムの娼婦なんて誹謗中傷みたいな事を広められているなんて耐えられません」

「そうだろうか？ しかし、そうは言ってもあの手の連中は巧妙な手口で身を隠すからね。だから彼らの想像を越える一手を打たねば奴等はシツポを掴ませないだろうそこでだ、安里君。君にお願いがあるんだ」

サーゼクス様がここに顔をしながら俺に語りかけてくる。サーゼクス様とセラフォル様にはルイーナが駒王町で誰にも違和感を感じない様に暮らせる様にしてくれた恩がある。だから俺に出来る事ならなんでもしてあげたいと思っではいる。しかし、一体何を頼まれるのだろうか……。

俺はゴクリと唾を飲み込んだ。

「何でしょうか？」

「魔法少女レヴィア☆たんHに私達も出演させてほしいんだ」

「……は？」

い、いやいやいやいや！ 何を言っているんですか魔王様！ 一体何を考えてるんですか！俺は思わず脱力し、椅子からずり落ちてしまった。

今の魔法少女レヴィア☆たんは実質AVと化してしまっている。その事は魔王様達も知っている筈！それを出演させてくれとは……どういふ事だ!?

「なに、グレイフィア自身がシリーズに友情出演すれば彼女の偽物との裸体の違いは一目瞭然さ」

「は？」

グレイフィアさんは力強く頷く。はいじゃないが。魔王様達の性に対する感性はどうなっているんだ。いや、まあ、悪魔だから普通なのかも知れないけど！俺は少し頭が痛くなったが、サーゼクス様達は色々アイデアを出してくる。

まさか夫婦生活の新たな刺激を求めての御乱心じゃなからうか？でもセラフォルー様は俺以外とはセックスしたくないと言うし……俺が竿役として一肌脱ぐしかないのだろうか。俺は悩んだが、結局承諾することにした。

すまん、ルイーナ……。

↓

「ふははは。我がダーク★ピラミッドに閉じ込められては貴様達は真価を発揮する事はできまい！」

何だよ、ダーク★ピラミッドって。

と思わなくもないけどサーゼクス様の台本だから逆らえん。

今、セラ……もといレヴィア☆たんとグレイフィア……もといグレイ・スフィアの二人は三角錐の結界に囚われている。というストーリーだ。

「くっ、こんな結界程度で！ 私達を止められると思わないで！」

「そうですねわ！ この程度でやられる私達ではありませんわ！」

グレイフィア、もといグレイは二本のナイフでダーク★ピラミッドに切りつけるがビクともしない。

いくらかは手加減しているだろうけどやはり元魔王、カテレアの力は流石だな。

「おほほほほ！ 貴様ら淫売魔法娼女がアザー様やキャスアルド様に楯突く愚かさを思い知るがいい！」

カテレアは悪の女幹部めいた台詞を言いながら高笑いする。まあ、実際元悪の女幹部だったけど。というかその露出の高いボンテージは自前なのか？

「ま、魔法娼女ですって!？」

「そう。お前達はこれからアザー様、ならびにキャスアルド様に仕える魔法娼女として生まれ変わるのよ！」

迫真の演技というかちよつと旧魔王派の私怨が入っちゃいないかカテレア？ ポリコレなんて知った事じゃないという冥界の空気には恐れ入る。

「で、ではまず、お前達のその虚飾を取り払う必要があるなー」  
(安里様、お言葉ながらも少し邪悪かつ厭らしく台詞をお願いいたします)

俺にしなだれかかるカテレアが忠告してくるがどうしろと。俺は演技なんてロクにした事ないから分からんぞ。

「どうやらアザーは今の君達には食指が動かない様だな。では僭越ながらこのキャスアルドが君達を彼好みの淫らな牝へと調教してしんぜよう！」

いや、しんぜようって。サーゼクス様の言葉遣いも何だか段々怪しくなってきたるんだけど。

「キャスアルド！ 何をしようというの!？」

「ふふ、まずはこうだ」

サーゼクス様が堂に入った調子で指を鳴らすとそれぞれ三角錐の結果にピンク色の水が溜まっていく。

「なっ、何これ……!?! 力が抜けて……」

「くっ！… こんなものでー!」

二人は懸命に脱出しようとするが体に上手く力が入らない様だ。

「どうかな？ 私の淫水の味は？」

君達の衣服を溶かし、力を削ぐ特製の淫水だ。これで君達は淫らな牝奴隷に生まれ変わるのだ！」

まるで水牢の様に三角錐の頂点から魔法の鎖と手錠が現れ、二人を縛ってゆく。キャスアルド……もといサーゼクス様にこんな力があつたとはある意味驚きだがともかく二人の衣服は淫水により溶けてしまい、二人は生まれたままの姿になっていた。

「がぼ……がぼぼ……」

「むぶ……ぶぶ……」

って頭まで淫水に浸かってしまっているけど大丈夫なのか!? 確かに悶え苦しむ二人はエロいけどさ! 特殊性癖すぎないか!?

「さて、どうするね? そのままでは君達は窒息死してしまうぞ?」

悪辣な笑みを浮かべサーゼクス様は二人の結界に近づき、小さな穴を開ける。酸欠状態の二人は当然その穴に口を窄ませ僅かでも酸素を得ようとする。

「ふふふ、流石に君達でも息が出来なければ死ぬか……。ではちよつとした気付け薬をあげよう」

サーゼクス様はそう言いつつ、グレイファイアさんの鼻を摘み、口にギンギンに勃起したペニスを突っ込んだ。

「むがつ!? んぐ、んぐおおおおおっ!」

グレイファイアさんは目を白黒させ、上目使いでサーゼクス様を見る。ち、調教モノのAVばりだ。

「どうだいグレイ? 私のチンポの味は? 気付け薬にはなつただろう?」

「ん、ごっ! ちゆるるるる! じゅぼっ、ちゅぼっ!」

必死にサーゼクス様のペニスに吸い付くグレイファイアさん。

普段のクールビューティーな姿とのギャップが凄いと感心しきりだが、一方サーゼクス様は更に彼女の口にペニスを押し込み、喉奥まで犯してゆく。

「んぐおおお! んおお! んんんん!? んんぐ!!」

(ほら、安里様もセラフォル様に対してお早く)

カテレアがせつつく様に俺を急かす。いや、俺は別にセラを調教し

たい訳ではないよ!？」

「さあ、早く私のチンポを射精させないと窒息死してしまうよ?」  
そう言いつつサーゼクス様はグレイフィアさんの頭を手で掴んだ  
と思いきや激しく前後に動かしした。

「んごっ! んごっ! んっ、んおおおっ!」

(し、死ぬ……息があ……助け……)

白目を剥いて痙攣するグレイフィアさん。ああもう! 仕方ない  
な!!俺は意を決してセラフオール様の結界へと急いだ。

「なんともいい眺めだなあレヴィ☆たん。今から貴様にもあの魔法娼  
女達と同じ様に淫らで下品に生まれ変わらせてやろう!」

俺は演技を続けながらも俺もサーゼクス様と同じ様に卑猥な言葉を  
を吐き、結界の穴からはみ出た口に対して俺のペニスをねじ込んだ。

「おぶっ! んごほっ! んぼっ!」

(あ、あっ君!? んぶ、何これえ!?)

目を白黒させるセラフオール様に罪悪感を感じてしまうが、俺はそ  
のまま腰を振る。

「さあレヴィ☆たん! 君もこの淫水を飲んで淫らな牝奴隷に生まれ  
変わるんだ! そうすればこの淫水は君の力を更に高めてくれるぞ  
!」

サーゼクス様の言葉が俺の頭の中に響き渡る。ああもう! 後で  
土下座でも何でもするから許してくれセラフオール様!

「んぼっ!? んぼおおおっ!」

(こ、こんな♥目茶苦茶だよお♥)

心なしかセラの結界がさつきよりも小さくなっている。いや、俺が  
大きくなっているのか!?

「おほほほ! すっかりアザー様やキャスアルド様のチンポの虜に  
なって♥如何ですかレヴィ☆たん?」

「そうだぞレヴィ☆たん。貴様も我らの仲間となり、新たな魔法娼女  
として生きていくのだ」

(んぶっ! ぢゆるるっ♥じゅぼおっ♥もう……だめ……♥♥♥ど  
うなってもいい♥早くイッて♥♥♥)

俺は思い切り腰を突き入れた。そしてセラの喉に精子を流し込む

！

「んぐううううううっ ♡♡」

（イクウツッ！ イツちやう ♡♡♡♡♡♡）

セラも絶頂に達した様だ。俺の精液を飲み干し、体を痙攣させている。二人はビクビク、と体を震わせながら俺の精気を吸い取っていた。

「むぐ……ぶはっ！ はあ、はあ……」

（すごい量……あっ君の、いっぱい出てる♡）

蕩けた表情で絶頂の余韻に浸るセラフォルーに反応させるかの様に結界の形状がキューブ状に変化し、セラフォルー様とグレイファイアさんの顔と手、そして尻だけを露出させる形となった。尻、というかキューブ尻、というかとにかくまたしても調教モノのAVじみた格好だ。

「はあ……♡はあ……♡」

（ダメえ……お腹の奥がきゅんきゅんして止まらないよお♡）

（私もお……サーゼクスのおチンポの事しか考えられなくなってるう♡）

二人とも虚ろな目になり、しかし恍惚とした表情を浮かべて惚けていたが自らの身体が変化していくのを感じ、その表情は驚愕と羞恥に染まった。

「なっ!? わ、私の体が……!」

（いやっ！ こんなスケベな姿に……♡）

（ああ……♡私達、おかしくなっちゃう ♡♡♡）

二人が戸惑うのも無理はない。淫水を飲み干した事によるものなのか、二人のオマンコは充血して大きく膨らみ、クリトリスは肥大化していた。更にセラフォルー様、いやセラの肌は褐色に変じ、グレイファイアさんの脇やお尻からは彼女の髪と同じ陰毛が現れていた。

「ああ……、こんな♡こんな姿いやあ♡褐色肌なんて……♡」

「ああ……私の脇やお尻からこんなに濃い毛が生えるなんて♡は、

恥ずかしい♡♡♡」

とは言うものの二人共満更でもないというか、寧ろノリノリの様に見えるんだけど気のせいかな？

俺のそんなふとした疑問はさておいて、サーゼクス様は早速陰毛の生い茂るグレイファイアさんのオマンコやお尻の穴周りをその指で撫でたりくすぐったりし始めた。

「あひいいいい♡痺れるっ♡オマンコもお尻もっ♡お毛々からサーゼクスの指を感じちやうのお♡♡♡」

すると忽ち即落ち、というか悪堕ちというか……グレイファイアさんがイヤらしく腰をくねらせながらそう喘いだ。

「ふふ、ふふふ、絶世の美女の君がお尻からいやらしい匂いをプンプンさせて喘ぐ様はこの上なく官能的だね」

「ああ……、お、お褒めにあずかり光栄です♡」

サーゼクス様の愛撫に体をビクつかせながらもグレイファイアさんはそう答える。

（ああっ♡♡サーゼクスの手が私のお尻を♡♡ダメえ！ お尻の穴なんて汚いのお♡でも、体が悦んじやってるっ♡♡♡）

な、なんちゆう好きモノ夫婦だ!! ある意味冥界の魔王にふさわしくはあるかもしれんが俺はシヨックだ。

とうかグレイファイアって言っちゃったよ!! カテレアが編集でどうにかするだろうけど!!

「ふふふ。そうだろうさうだろう。私の淫水により君の毛からも性感を感じる様にしたからね。ほら、ここももうこんな……」

「ああっ♡♡そ、そこお♡♡♡」

（なにこれっ!! オマンコ弄られるより刺激がくるの!?!）

サーゼクス様はグレイファイアさんのお尻の周りに生えた剛毛を指にくるくると巻き付けながら指で彼女の肛門をほじくり始めた。

「おっ!! おほおほお♡♡♡♡♡」

（気持ちいいっ♡頭の中が♡♡♡真っ白になるっ♡♡）

「おほおほお♡♡♡♡♡」

（アナル気持ちいいいっ! そこばっかり弄られてイツちやうのお



おおお♡♡♡)

サーゼクス様の指を肛門で感じ、絶頂に達するグレイフィアさん。オマンコからは大量の愛液を噴き出し、お尻の穴はひくひくと痙攣していた。サーゼクス様はグレイフィアさんの尻から指を引き抜くと次はまさかの吸引までし始めた。妻相手とはいえアナル吸引は上級すぎやしませんかサーゼクス様!?

「おほおおっ!? おほっ♡♡♡♡♡」

(くう♡♡♡み、惨めすぎるう♡皆にサーゼクスからお尻を吸われてアクメ決めちゃうトコ見られちゃう♡♡でもケツ穴気持ちいいのお♡)

サーゼクス様の吸引責めに悶絶しながらもグレイフィアさんはその責めを愉しんでいた。サーゼクス様はグレイフィアさんのアナルを責めつつオマンコにも手を伸ばす。ぐちゅぐちゅと濡れそぼったオマンコから溢れる愛液を指で絡めとるとサーゼクス様の手の中で愛液が水飴状に変化した。

「うおお♡♡♡サーゼクスの指、熱くなってるう♡」

(オマンコ溶かされちゃうう♡もっと私を犯してえ♡♡)

ぐちゅぐちゅと愛液を指に絡めながら激しくオマンコを刺激するサーゼクス様。その感覚にますます恍惚とした反応を示し、グレイフィアさんはもはやメスの顔になっていた。

「ひぎいいっ!?!♡♡♡♡♡」

グレイフィアさんの絶叫が響き渡る。サーゼクス様が魔力を込めたせいか水飴状となった愛液が肥大化して固まり、即席の双頭デイルドーに変化していた。淫水の力はつくづく偉大だ。

「あひっ♡♡♡こ、こんな……♡おほおおっ!♡ふ、太い太い太

い♡♡私のマン汁吸い取って♡淫水デイルドーが膨らんで♡♡♡

♡♡死ぬっ♡オマンコ破裂して死んじやううう♡♡♡」

淫水から作られた軟体デイルドーに責められ、グレイフィアさんはオマンコから愛液をぶしゃぶしゃと吹き出す。しかしデイルドーがその潮吹きを吸収して更に巨大になりグレイフィアさんの心身を犯していく無限ループだ。

「あがつ♥ああつ♥た、たしゆけて♥アクメしすぎてしんじやうう♥♥あ、あぎーしやま♥キャスアルド♥おたしゆけくだしやひい♥♥」

涙と鼻水を垂らしながらアへ顔を晒し、懇願し始めるグレイフィアさんに魔王らしくサーゼクス様は悪魔の囁きを放つ。

「じゃあ、君のオマンコに入っているデイルドーをレヴィア☆たんのオマンコに分け与えなさい。そうすれば絶頂地獄から抜けられるよ」  
「!?♥♥わ、わかりまひた♥♥♥♥」

「ああ……だ、ダメえ♥今の私にそんなもの入れられたら♥♥♥」

その命令にセラが顔を青ざめさせながらグレイフィアさんを止めようとするがグレイフィアさんは自分のオマンコに入っているデイルドーをセラフォル様のオマンコに誘導し始めた。

「ひぎいい♥♥♥おほおおっ！入ってくるう♥♥♥あつくんと同じ形のデイルドーチンポ♥♥♥んはあああつ♥膨らんでる♥おつきくなってる♥♥♥私のオマンコ、馬鹿になっちゃう♥♥♥」

「んっ♥ぐっ……は、入ってくるう♥♥♥あ……入って、きたあ♥」

二人は自らのオマンコにデイルドーが入ってくる感触を味わいながら体を痙攣させ、二人は息を荒げながらお互いの淫水で濡れた手を握り合った。なんかこう見ると百合っぽいな……。

「ふふふ。快樂地獄にも友愛の花は咲くようだね、その花を摘み取るのも魔王たるものの嗜み……。そうは思わないかアザー君」

サーゼクス様はよがり狂うグレイフィアさんの口元付近に自らのペニスをあてがいながら俺に語りかけた。

(そうかな……？　そうかも……)

俺もいつの間にかパンツを下ろし、セラの顔にペニスを擦り付けていた。

「セラ、頼むよ」

「あつ♥あうう♥今、そんな風におチンポで顔弄られたら……♥♥♥」  
悪堕ち状態故か今のセラは快樂に対して抗う術も意思も喪っているようだ。

俺はセラの口を指でこじ開け、自らのペニスを捻じ込む。

「んぶっ!! ♡♡♡んんんん!!」

普段の俺からは考えつかない乱暴さでセラの喉奥にペニスを突き立てる。

「おぶ♡♡♡んんん!! ♡♡♡♡」

(ダメっ! 苦しいけど気持ちいいっ♡♡♡)

セラは涙を流して俺のペニスにむしゃぶりついた。それは悔し涙なのか嬉し涙なのかは俺にはわからなかった。

「おや、随分と素直になってきたねアザー君」

サーゼクス様はそんな俺に対して微笑みかけると、グレイファイアさんのオマンコからディルドーを外し、セラの両穴に連結した。

「んぶっ!! んん!! むうううん!!」

(ああっ!! 私、わたしい♡口もオマンコもお尻もムチャクチャにされて♡オモチャみたいに扱われてる♡♡♡それなのに♡♡♡)

セラは上と下の穴をディルドーにより犯されながら俺のペニスを口を犯されて興奮の極みにいた。

「んぶううう♡♡♡ふぎゅっ♡♡♡むううう!!」

(こんなのダメえ!! オマンコもお尻もズタボロなのにつ! 痛いのに♡♡♡ああっ……)

俺はセラの頭を押さえつけ、更に激しく腰を振る。逆流したセラの体液が彼女の目や鼻から垂れ、その美しい顔を汚していった。

「ああ! 凄い締め付けだよセラ!」

「んぶっ!! ♡♡♡おぼお♡♡♡♡」

(だめっ、私もうイク♡)

どびゅっ! どびゅ!俺のペニスから精液が放たれ、セラの口を満たした。セラは体を痙攣させ、また絶頂した。

「ふふ、アザー君もう射精してしまったのか? 全く堪え性が無いな……。いいかい? 最愛の人を敢えて犯す時は……こうするのさ!」

サーゼクス様はグレイファイアさんのオマンコに挿入していたディルドーを抜き取ると、今度は自らのペニスをグレイファイアさんの膣穴にあてがう。

「さあ、グレイファイア。君の主にして夫に対して何か言う事があるん

じゃないか?」

「はあっ♥♥♥ああっ♥♥♥サーゼクスさまあ♥♥♥」

(サーゼクスさま……ごしゅじんさまあ……)

快楽に溺れるグレイフィアさんの頭の中はもはやサーゼクス様に犯され、忠誠を誓うことしかない様だ。

「わ、わたしグレイフィアはあ♥♥♥んひい♥♥♥ごしゅじんさまのおちんぽ♥♥♥でえ♥♥♥犯されながら♥♥♥ごしゅじんさまあ♥♥♥んひいっ♥♥♥愛の結晶を育ませていただく淫乱妻です♥♥♥」

グレイフィアさんはもはや自分が何を言っているのかもわからない状態でサーゼクス様に淫らな言葉を紡いだ。

「よく言ってくれたねグレイフィア。嬉しいよ」

愛おしげにサーゼクス様は優しくグレイフィアさんに言うと、一気に彼女を貫いた。

「あ♥♥♥あああああ♥♥♥♥♥」

今までデイルドーによって刺激されていたオマンコについてペニスが入り入れ、グレイフィアさんは涙を流しながら歓喜の声を上げる。

「セラ……俺にもグレイフィアさんみたいにおねだりしてみてくださいな  
いか?」

くちゅり、とセラの膣口に鈴口を擦りつけながら俺は彼女に懇願した。

ちゅうちゅう、と甘えん坊の子供が親指をしゃぶる様に俺の亀頭をセラのオマンコが吸い付いてくる。

正直今すぐにも挿れてガンガン腰を振りたかったが、セラのおねだりが見たかったので我慢していた。

「ああっ♥♥♥あつくんお願い♥♥♥私の褐色ビッチマジカルオマンコに♥♥♥あんっ♥♥♥ああん♥♥♥あつくんのラブラブチンポ挿れて欲しいの♥♥♥後先なんて考えないで♥♥♥ズコズコ♥♥♥してえっ♥♥♥」

セラは懇願する様な瞳で俺を見つめながらおねだりをした。

「よくできました。じゃあご褒美をあげないとな」

俺は一気にセラのオマンコにペニスをぶち込んだ！待ち望んでいた快楽を膣中で味わい、獣じみた嬌声をあげるセラ。俺はそんなセラの腰を掴み、思い切り腰を振り始めた。パンツ！ パアン！ と肉と肉がぶつかり合う音が響き渡る。

「ああ♥♥♥しゅごいつ♥♥♥あつくんのオチンポオ♥♥♥きもちっ、きもちいいいいいいいい♥♥♥んおとおおとおおとおおとおおとおおおおお〜〜〜♥♥♥♥♥」

獣の様に咆哮を上げながら絶頂を迎えるセラ。俺はそんなセラの絶頂が終わらない内に再びピストンを始める。自分でも歯止めが効かなくなっているのがわかる。

「セラ、まだイツてるう♥♥♥敏感になっってるのにい♥♥♥んおとおおお♥♥♥おほおおおおおおおお〜〜〜♥♥♥♥♥」

再び絶頂に達したのか、体を痙攣させるセラ。しかし俺は構わずに腰を動かし続ける。チンポが焼き切れるのが先か、それともセラの理性が溶け落ちるのが先か。もう俺には分からなかった。

「サーゼクス、さま♥♥♥んはああ♥♥♥」

「グレイフィア！ 出すぞ！」

隣ではサーゼクスとグレイフィアさんが中出しセックスをしている。セラにもああやって気持ちよく絶頂して貰いたいものだ。

「ああんっ！ あつくん♥♥♥またおチンポ膨らんでるううっ♥♥♥おとおおおおお〜〜〜♥♥♥いぎゆうううう♥♥♥あつくんの孕ませミルク♥♥♥孕む♥♥♥孕んじやうううう♥♥♥♥♥」

セラのオマンコが締まった瞬間、俺は彼女の子宮に思いっきり精液を叩きつけた。

どびゅるるるっ!! びゅ——！ ぶびゅ！ どぶつどくどくどく!!

「んひいいいいいいっ!! んおとおおお〜〜〜っ!! ♥♥♥受精したあ♥♥♥あつくんのせーえきで♥イグウウウツ〜〜ツ!! ♥♥♥♥♥」

セラは体を痙攣させながら絶頂した。オマンコから俺の精液が逆

流し、セラの尻をドロドロに汚していく。映像か、現実か曖昧になる位の幸せ。

「はぁーっ♥♥♥はぁー♥♥♥あぁん♥♥♥」

俺はセラのオマンコからペニスを引き抜くと、セラは体を震わせながらぐったりと倒れ込んだ。どうやら気絶してしまったらしい。サーゼクスの方も終わったのか、グレイフィアさんから離れて俺に近づいてくる。

「私もつい夢中になってしまつてよ……グレイフィアがあんな風に乱れるなんて」

「俺もです。セラが俺のチンポであんなによがってくれるなんて……」

セラの痴態を目の当たりにして、俺のチンポはまだ萎えていなかった。サーゼクスさんも同じだ。

「ああ……貴方のチンポ♥まだ元気の様ね……」

「あつくん♥♥♥私も♥♥♥もつとイキたい♥♥」

グレイフィアさんとセラがこちらに尻を向けてねだる様な仕草を見せた。そして俺達は、グレイフィアさんとセラの二人とプライベートで愛し合うのだ。

「凄く……気持ちいいよ。セラのオマンコ。俺のチンポを優しく包んでくれるよ」

俺はベッドの上で四つん這いになっているセラに後ろから覆い被さっていた。いわゆる寝バックという体勢だ。

「んああ♥♥♥嬉しい♥♥♥あつくんのおチンポも♥♥♥あぁんっ♥♥♥好きい♥♥♥大好きい♥♥♥」

俺のチンポが挿入される度に、セラの膣壁が俺のペニスを優しくマツサージする。正直もうずっと挿入してたい位気持ちいい……。

「グレイフィア……」

「貴方……♥♥」

サーゼクス様達も二人の世界に没頭中の様だ。

「ん……♥グレイフィアのお尻、凄く可愛いよ」

サーゼクス様がグレイフィアさんの尻を撫で回しながら言う。そ

れに対してグレイフィアさんは恥ずかしそうに顔を背けるがその口元はどこか嬉しげだった。

「ん……♡もつとお♡♡」

そうやって自分から尻を振り、更にサーゼクス様の愛撫を求めるグレイフィアさん。その姿は普段の面影は一切なく、とても妖艶で淫らかなものだった。

「はあ、んっ♡♡んふう♡♡♡」

セラが切なげに吐息をはく。グレイフィアさんとサーゼクス様達の行為を見て興奮してしまったのだろうか。俺はセラの耳元に口を寄せた。

「どうした？ もう我慢できないのか？」

「う、うん……♡我慢出来ないよお……♡焦らさないでえ♡お願い……♡私の事好きって言いながらお腹擦とてどぴゅどぴゅとてあつくんの熱いの♡子宮にいっぱい出してえ♡♡」

「わかったよ」

セラのおねだりに応え、俺はゆつくりと腰を振り始めた。

「あふう♡♡ああくん♡あつくんもつとお♡♡あつくんのオチンポで私の中かき混ぜてえっっ！！♡♡♡♡」

セラは歓喜の声を上げながら尻を揺すった。膣壁がきゅつと締められ、俺のペニスを刺激する。我慢なんて出来る筈がない。望みのものをすぐにくれてやる。俺はセラの腰を掴み、ラストスパートをかける様にピストンを速めた。

「ああっ♡♡激しいよお♡♡あつくん激しすぎだよお！♡♡あひいいいっ！♡♡」

パンッ！パンッ！という肉を打つ音が響き渡り、その度にセラの小さな体が跳ねる。その喘ぎ声が更に俺を昂ぶらせていく。

「出すぞ……っっ！」

どぷっ!! どびゆるるるっ!! ぶりゆりゆりゆ!! どくっ! どんぐんぐんっ!!

「んひいいいいいい♡♡♡♡イッグううううううううううううううううううううっ!!!♡♡♡♡♡」

子宮口に亀頭を密着させた状態で大量の精液を注ぎ込まれ、セラは絶叫と共に絶頂に達した。膣壁が収縮し、俺のモノから子種を全て搾り取ろうとしてくる。あまりの快楽に意識が飛びそうになったがなんとか堪える事に成功した。

「はあ……♥はあ……♥あつくんのせーえき♥♥お腹いっぱいだあ……♥♥」

幸せそうな笑みを浮かべ、自分のお腹を撫で回す様に俺はなんともいえない幸福感を感じていた。

↓

??? 視点

ユークリッド君は新作を見て顔面を蒼白にしていた。

いや〜、サーゼクス君つてば鬼畜だねえ！ さつすが大魔王！ 先代として俺ちゃんも鼻とチンコが高いよ！

最大仰角天元突破って感じ？

「どったの先生？ 顔が真っ青よ？」

まるでNTRビデオを送られたみてーな顔して。いやこの場合BSSかな？

いや〜ガキンチョの頃刑事コロ○ボのファンだったから細かい事が気になるよと夜も眠れねーのよ」

「おま……このビデオ……」

「うん？」

「……魔王が、サーゼクス・ルシファーが撮らせたのか？」

「そりゃそーよ。いや〜しかしアレは傑作だね！ アッチのグレイフィアさんとセラフォルーちゃんのトコも見たいけど、俺ちゃんとしてはグレイフィアさんのオマンコとセラフォルーちゃんのお尻にブチ込むシーンをメインに編集して欲しかったね！ あとさ……」

「殺してやる……！！ 殺してやるぞ……！！ サーゼクス・ルシファー……九頭竜安里！！」

俺ちゃんの論評をガン無視し、ユークリッド君は悪魔みてーなブチギレフェイスで呪詛を吐いていた。

あらま、お二人共大変ね♥



あと、ユークリッド君は画面をブチ壊す位のキレっぷりを見せてほしかったな♪

まあ、ブチ壊すのは中級悪魔試験なんだけどサ！

ユークリッド君、ヘパイストス、機皇竜帝、

そんで『バアルを殺す者』も参戦と来たもんだ。

これで負けたらアホだぜ？

なかがきのようなもの（一言解説やら寸書き、一部ネタバレあり）

#### 九頭竜安里

努力型にしたいのか才能型にしたいのか、ハーレムがやりたいのか純愛がやりたいのかメガテン主人公のニュートラル主人公ばりにブレブレやんな。中の神などいない。（いる）

ワンピースやらマジンガーZから技をパクる最低系オリ主の鑑。基本イツセーを下げない様に意識はしている。

ルイーナ厨。だけど17歳ってそういうモンでしょ。

信念を貫く子供など薄気味が悪い（カテジナ・ルース）

ニグラ・サセコヴィツチ

ベースはモモンガさんが改変する前のアルベド。セックスするとパワーアップするという最凶死刑囚編のバキばりにやべー女。なお作者の保護棒のため敗北エロはない。初期は戦っていたがいつの間にならセックスばかりしているキャラに。いいからセックスだ！（ゴリ）性を介して人間の感情を理解しようとしている

（後付）

ナイア

外見元ネタはシュリセル（ゲニ子）。作者のお気に入り。書いていて楽しいが人気は恐らくない。萌えダメの最たる例。汝が後ろに……。

ゲイト・オールドワン

元ネタはマーリンと見せかけてデビサバ2のアル・サダク。なんでもいつもお菓子作ってるんだ。お菓子を作る事で人間の感情を理解しようとしているらしい。

ヤリ部屋を作るのはどうかと思うが。アザゼルが同盟を真つ先に組むと判断する辺り実力もあるのだろう。

トウー・ルチャ

m j a 8 2 3 . v e r 2 さん原案のキャラ。

元ネタは妖精騎士ガウエインことバーゲスト。

なお作者がククルカン要素も入れてしまう。

心臓を捧げよ↓超大型巨人↓うお、でっか……

繋がったな。全然解説の技使ってねえ。

ドーナシーク

チュートリアル枠なのに安里のレベルを一気に10位上げたメタスラポジション。

カラワーナ

哀れにもハーレム枠に参入できなかったキャラ。

ミツテルト

脳を弄られたり、人工神器やアーティファクトにより強化された堕天使。大人モード時は髪型と肌の色以外ほぼ鬼崎きららになる。感情に本物と偽物の違いってどこにあるんです？と哲学的な事を言い出すサブヒロインの鑑。安里にメロメロ。

レイナーレ

サタナエル（後述）からオリジナルの神滅具を貰って負けた挙げ句エロエロ落ちする敗北ヒロインの鑑。

アーティファクトにより「ティンダロスの猟犬」を出せる。お前は戦わんのかい！

ボールク

元ネタはまだ書かない。外見はコート装備版クリザリッドがイメージに近い。TMRみたいなスーツは着ていないが。天使サイドなのか堕天使サイドなのかはたまた悪魔サイドなのか。私にも分かんらん（博士）

アーシアは殺されかけたのに、ミカエルにシステム調整に口ぎきた件でコイツに感謝している。

（描写しろや）

イツセーにもっと非情になれ。とかツンデレアドバイスをしたりゼノヴィアの師匠もやっている。

キユクロ

元ネタは一騎当千の呂蒙、2B、アーニヤの合体事故。  
身体は大人！頭脳は子供！パワー系無知無知エロ！  
スコグルと戦闘スタイルが被っている。

魔眼持ち同士、かつギヤスパーが初めてエッチした相手という事で  
フラグが立っている。

フリード・セルゼン

今はペルソナ2の須藤が混ざっている。電波電波ア！

ハーゲン（後述）とキャラが被っている。

レイナーレ編について

何でいきなり死んでいるところから始めるのか。

しかもジョジョ六部ネタを仕込むのか、いや一巡した世界かもと深  
読みしてくれるかなど。

いきなりナイアが安里にかますワケだけど、

「イツセーをやたら下げたり、ヒロインかつさらってDANZAIや  
SEKKYOUはやらねえぞ」

というある種のメッセージなのね。

と、言うかイツセー嫌いじゃないんだよね。

フツーにいいヤツじゃん。

まあ覗きやセクハラは感心しないがそれなりに作中でペナルティ  
乃至反省させればいいワケで。

ポールクとキユクロのキャラがまだ定まってない。

あと原作通りにやって面白いのか？

なら原作読めばいいじゃねえかというのが持論だから  
レイドボス要素を足した。

ライザー編

ライザー・フェニックス

ただのカマセにしたくなかったから、言葉の端々に善人臭いところ  
を出したり名家の人間故に愛した者と結婚できない悲哀を表した  
かった。自分で書いておいてなんだが「チエスにおいて王が何故最強  
の駒でないか解るか」は粋だと思った。

イロイロ他作品ネタやパロディを入れたが反応はなかった。

レイヴェル・フェニックス

安里とフラグは立っていたがイツセーについたヒロイン。最初はこんなドスケベキャラになる予定はなかったのだが。

ユーベルーナ

捏造技もらったりライザーの最愛の人になったり出世した人。

アヌビス

かませ犬。他に言うことある？ゾオン系の能力者。

ネフレン・カ・マンモン

章ボスの顔みせ。最初はクソザコっぽいのに実は強キャラというズラシをやりたかった。

ゼウス

オーデインとキャラが被る気がしたのでエロ技をイツセーにいくつか授けるポジションにした。

当然主神なので強いが自分からはあまり動かない。

テイタノマキアで色々あったからだろうな。

ライザー編について

所謂オリ主の心の闇を描写しなかった。オルステッドに対するストレイボウ的な。だけドイツセーがスケベで明るいキャラだからあそこまで拗れなかったのだろう。秘密の皇帝は「月に吠えるもの」をそれっぽくこじつけるのに苦労した。九頭竜天君って何だよ太上老君の親戚か？あ、だから六合太極が使えるのか？知らんけど。顔は潰されるわ、婚約者は奪われるわ、妹はメロメロにされるわ、ライザー普通に可哀想だな。

聖魔剣編

イリナ

安里とも幼馴染み。いつの間にやらラブリエルという転生天使になっっているが「メタトロン様の例もあるしいんじやないの？」とジョーカーさんからお墨付きをもらった。旧大天使並びに一派はそ

れが気に入らない。

ゼノヴィア

転生悪魔にならずに超人の道へ進む事を選んだ。

人間なのにあの膂力はおかしい。それはそう。

イザイヤ

木場と肉体と精神が融合した(させられた)お姉ちゃん。聖剣使いとしての素質はまあまあ高かった。

スタンドになったりペルソナになるおもしれー女。

コカビエル

なんかヴァーリの噛ませにされるのが面白くなかったので作者が改悪した堕天使。「戦いこそが生物を進化させる」というゲッター線を浴びたかの様な持論を持つヨスガ思想の持主。多分滅びの未来を知って彼なりに抗おうとしたのだろう。

サタナキア(サタナエル)

一気に噛ませ&小物化した作者の犠牲者。

お前もう章ボス降りろ。ヤルダバオトとして復活したが続きはいつ書くんとか

(チマチマ書いてはいるんだが)

ヘパイストス

カロツゾばりに脳を破壊されたキユクロの父親。

ぶつちやけ煉獄さんの対比かつ「鬼退治だ」を言わせたかったから作った。機皇竜帝テュポーンはいつ出るんだよ。原作にもテュポーンはいるんだがゴジラとメカゴジラみたいな感じで一つ。

シユターク・ゴーズ

フリーの悪魔祓い師でありアザゼルの情婦。

※あなたのセキュリティクリアランスではこの情報について開示することはできません※

聖魔剣編について

クロスオーバータグつけると運営に怒られたシリーズ。振り返ると煉獄さんがカッコいいなあ。この人名言しか言わねえもの。イツ

セーと安里を食っちゃうから出番が控えめになったのも頷ける。

まさかの木場&イザイヤというアルダー状態。

三界輪廻はいつ使える様になりますか？知らねえよ。

この頃のバトルは書いていて楽しかった。

イツセーとボールク、コカビエルとイツセーのタイマンバトルでイツセーのいい所を書けたのでサタナエルは別にいいかなくなってた。まあいいかこんな章ボス、刹那で忘れちゃった。シユタークについてはアレだよ。知らず知らずの内に依存していくイツセーを書きたかった。

・3 勢力会谈編

ヴァーリ

いつの間にやら、安里と親友になった。原作より若干苦戦してもらう。まあアルビオンとも友人になったんだからええんちゃう？

ギヤスパー

なんやかんやでひきこもりからヤリチンルートに進みつつある吸血鬼。女装男子なのは変わらないが。

レリウル

特に書くことねーな。フェイスベールは好きだけど。

サリエル

外見に関しての元ネタはKKK+ナディアのガーゴイル様。悲しい悲しい、つてお前はトリスタンかドルマゲスカよ。なら面白いことの一つでも言え。

原作にもある聖釘だけでなく毒霧や大鎌を使う。だがまだ本気じゃないらしい。死が救済にして神と土塊（にんげん）との契約と考えているマジキチ。

ラジエル

九大天使改め旧大天使のリーダー格。

アザゼルやミカエルとは旧知の仲だったらしい。

大天使なのに陰陽仮面つけてる変なヤツ。

多分アブデイエルみたいにくぱあと開いて

悪魔の顔が出てくるんだろうな。知らんけど。

この時点ではセリフしかないけどな。

※あなたのセキュリティクリアランスではこの情報を開示することはできません※

カテレア・レヴィアタン

敏腕秘書メガネ＋褐色おっぱいという性癖に刺さったために続投になったキャラ。今はゲイト達の組織運営や魔法少女レヴィア☆たんHのプロデューサーもやっている。

クルゼレイ・アスモデウス

びっくりする位おいしい所のなかつた悪役。

夏休み編について

いや／＼色々あったシリーズでしたね。ストーリーでいう谷の部分。ストレスフリーの文言を外したのもこの頃。安里のメインヒロイン登場だというのに攫われてばっかりなのな。

ルイーナ・ムールムール

外見はともかく中身はライスシャワーに近い。血液に回復作用があるというヒーラーポジション。

『蒼髪の虜囚姫』ってフツーに悪口だよな。

ハマーマが特にその事について触れないっていうことからどういう親子関係かよくわかりますね。

スコグル

ファタさんのリクエストをベースに作成したキャラ。プレマートンと思わせておいて実はラストオリジンのケルベロスが元ネタ。いや／＼大分ヘイトを買ってしまったがまあネアカ系サブバトルヒロインとして頑張つてほしい。でも鈴鹿御前のエッセンスもある。

あるライン越えたら激重になるキャラっていいよね。

ハーゲン

安里に対するフリード枠として考案したがよく考えたらフリードで良くない？ってキャラ。

因みに元ネタはジークフリードを闇討ちで殺した奴。

たぶんまだ死んでないと思う。



ハマーマ・ムールムール

呪殺と反魂に定評のあるバル家お抱えの暗殺一家の領主。元ネタはf g oのモルガン。と言っても中身はゲロとヨーグルト位の差があるのだが。

今の所あまり活発に動いていない様ではある。

ベラナディア・ムールムール

ベラナディアの娘。ハマーマの側で育てられた様で純血派に近い思想の持主。元ネタはf g oのバーヴァン・シー。まあわかりきった事ではあつたが。

中級悪魔試験でもバリバリ関わってきてほしい。

アマテラス

ひきこもりかつ駄女神化が著しい主神。

転生が不完全だから致し方なし。

スサノオとツクヨミもイザナミもその内出ると思う。

タケミカヅチ

アマテラス限界勢。

元ネタはアトミック侍+早川アキ。

こうするだけだな。からの瞬殺居合ほんとすき。

火之迦具土

↓いまんとこフリードの中にいる。

曹操

↓原作より強化したい。(願望かよ)

叛英雄なる明らかにf g oをパクった奴等を部下にしているがもて余し気味である。

自分がどこまでやれるか試してみたいという実力も野心もある自信家として描写したいんだけどね。

あと目ん玉は移植しません(ネタバレ)

七符

↓セイバードラゴンさん原案のキャラ。

外見に関してはパツキンの白瀬咲夜。

曹操の情婦でありつつ彼の部下もつまみ食いしたり

あちこち渡り歩いているようだ。

※あなたのセキュリティクリアランスではこの情報を開示することはできません※

呂布

↓言わずと知れた三国志の最強格。

赤兔を乗り回し方天画戟やら火尖槍やら干将莫耶やら様々な武器を使う器用なキヤラ。

呂布にしては引き際を弁えたり、取引を持ちかけたり

七符や司馬懿を諫めたりとやけに賢い。

※あなたのセキュリティクリアランスではこの情報を開示することはできません※

司馬懿

↓曹操なき後の世界で晋を起こした人。

周瑜に並んでやたら諸葛亮の噛ませにされる。

孔雀の扇子とか石兵八陣とか孔明のパクリかお前は。

誰からも必要とされなくなる事を恐れるが承認欲求が高いワケでもない変なヤツ。

※あなたのセキュリティクリアランスではこの情報を開示することはできません※

ヤマトタケル

↓多分もう出番はないと思う。

佐々木小次郎

↓実は宮本武蔵とやりあった時はジジイだった人。

ランサーもといクー・フリーンのカッコいいシーンを書くために作ったキヤラ。というかクー・フリーンはなんでバカにされるんだ。ホントキレそう。「自害せよランサー」とか「ランサーが死んだ」とか同じネタを擦りやがって。俺もにわかだけど、劇場版アンリミテッドブレイドワークス観てねえだろうし、アンリミテッドコード絶対プレイしてねえだろアイツら。

ユダ

↓イエス様同担拒否勢。誰よりも信心深い故にイエス様を裏切り、誰よりも信心深い故に現世に見切りをつけた男。「イエス様は罪を背負って逝かれたのに何好き勝手してんだよコイツら。意味ねえよ。控えめに言つて死ねよ」って行動理念で活動している。

※あなたのセキュリティテイクリアランスではこの情報を開示することはできません※

トール

↓やっぱリヨスガ思想というか戸愚呂弟に発想が近いおじさん。嫁さんはデカパイで美人。

ラミエル

↓旧大天使の一人にして武闘派。背教者と悪魔にムチャクチャ言う天使。しかし信者を保護する意欲や聖書の神が作ったこの世界に対する愛着や『永劫に回帰するもの』に対する危機感はあるらしい。盗人にも3分の理。しかし3勢力会談のシーンを見るに禍津星シンパもいるから旧大天使も一枚岩じゃないみたいだな。

フエンリル

↓知恵の実&黄金のリンゴで擬人化した。

原作ではペット扱いだったがこのシリーズは強化されていてまああ強い。妹と散々やりまくっている。

ヘル

↓NTRモノで性の悦びを知った後はっちやける様になった様なキャラ。普段着は相変わらずアレ。

ヤンリマ

↓デカパイフェイスバールダークエルフたまんねえ。ぐへへ。元ネタは黒獣2のミスティオラ。

しかしエルフという長命種なら実質シヨタコンになるのではないか？イザヨイやベルフラウの名付け親になったりする辺り面倒見はいいのかもしれない。

案外一番早く安里の子を身籠ったりして。

ミダーラ

↓デカパイハイエルフたまんねえぐへへ。

元ネタは黒獣2のエレオノーラ。

さらつとシヨタイツセーやシヨタ安里の記憶を捏造するやべー女。

ゴ布林キング

↓キングだがあまり強くない。しかし話がわかりそうな安里にあつさり降参したり、女性エルフと和解したり、アザゼル傘下に入って人工神器を借り受けてつ、リアス達から領土（エルフ集落）を安堵されたりユークリッド相手に仲間と共に逃げおおせたりする辺り危機管理能力は高いのかもしれない。

世が世ならエロソシヤゲ主人公になれたかも？

パコル&オーブリー

↓13FAさん原案のキャラ。

エルフ族の戦士にして肉食派。すきあらば男を襲う。もう、男好きなアマゾネスだよこれじゃ。

エロフの森について

いわゆる冥界のダークサイドと、

よくあるゴ布林ものでチン負けアヘアへに対する逆張りとしてゴ布林チンポに完全勝利したニグラUCをやりたかったから書いた。

ディオドラ・アスタロト

後のサイタマである（大嘘）原作とは違いBSSを地で行く悲しき男。アーシアを守りきれなかった精神的負い目からイナンナに憑依された経緯がある。

でもアーシアさんが幸せならOKです。愛の形はそれぞれ。

シャルバ・ベルゼブブ

原作よりも悲惨な目にあつたキャラ。たぶん復活しません。

原初のベルゼブブ

↓リゼヴィムが新しいボディを用意するとか言っていましたけど  
どうなりましたか？

まあ、最近のリゼヴィムを見れば想像はつくかと。

イナンナ

↓覇竜相手に散った過去の栄光を追い求めた哀しきBBA。

暗黒のフアラオ編

かなーり不完全燃焼でしたね。

ホントはアフメドも死ぬ筈だったんだけどさ。

書き溜めしないからこうなるんだ全く。

悪神連合、頼むぞホント。(他力本願寺)

## ※リクエスト編（イツセー×イリナ&ゼノヴィア&アーシア）

ここは天界のとある一角。

そこではラブリエルもといイリナ、ゼノヴィア、アーシアがテーブルを囲んで会議に励んでおりました。

「えー、そういうワケで今回の議題はいかにして私が墮天せずにイツセー君の子供を作るか、という事なんだけど」

「と、言われてもな。天使となったお前は悪魔と交わると墮天使になつてしまうのだろう？ その点私は人間のままだからいつでもイツセーと子作りが可能なのだ」

何故かふん、と鼻高々で胸を張りながらゼノヴィアはイリナに勝ち誇るかの様に宣います。

「なあに言ってるのかなあ、ゼノヴィアちゃん？ あなた、安里君ともエッチな事したんでしょ？ そこんところどうなのよ」

友人とはいえカチンときたのかイリナは幼馴染みである安里とゼノヴィアの関係をジト目で問い質しました。しかしゼノヴィアはまるで怯みません。

「それはその場の流れというかな。あの後、イツセーは私を取られまいとそれはもう激しく私を求めてきてな」

「アンタって見た目によらず魔性の女よね……」

「あうう、ゼノヴィアさんは凄いですう……」

イリナは若干引きぎみに、アーシアは頬を赤くしてゼノヴィアの話に聞き入る有り様。しかしイリナとアーシアの性格上イツセー以外の男性にアプローチするのは中々にハードルが高い様ですね。

「じゃあどうすればいいの!?!」

「私に聞かれてもな」

「いや、これ会議だからね!?!」

「どうする、と問われても。墮天せずにイツセーの子を産むなんて無理だろう」

「いえ、最近イツセイさんは中級悪魔試験のお勉強のために『精神と時のヤリ部屋』という所で勉強に励んでいますから、もしかしたら……」  
アジアはゲイトの話の思い出しながら振り返ります。この世界と向こうで時間の流れが違うのならばあるいは……。

「ボクもアジアちゃんの見解に賛成だね。あの部屋にはボクの転送符でも行ったり来たりが出来ない辺り相当強力な結界を施してあるんじゃないかな？」

「い、いつの間に!？」

突如テーブルの一角に現れたシユタークにイリナは目を飛び出さなばかりの勢いで驚きます。まさか天界に一介の悪魔祓い師がやってくるなど、誰が想像出来ましようか。

「やあ、アジアちゃん。最近ますますイツセイ君との仲が進んでるみたいで何よりだね」

「シユタークさん、お久しぶりです。はい！ イツセイさんとは毎日一緒ですよ？」

「よしよしよしよし」

「あふ……くすぐったいですう……」

「なにに姉妹みたいに仲良くなってるのよ、アンタらは!？」

シユタークとアジアのスキンシップを目の当たりにしてツッコミをいれるイリナとは対称的にゼノヴィアの背中には冷や汗が流れていました。

(何故シユタークがここに居る？ 恐らくアジアの側に転送符とやらで飛んできたんだろうが、気配も魔力も妖力も感じさせずにレポートなどできるものなのか？ やはりポールクが言っていた様に油断のならない女かもしれん)

シユタークという人当たりの良い悪魔祓い師が只者ではないと感じたゼノヴィアは、一瞬気を張りつめます。

「おい、アジアに手を出すな」

「おお、怖い怖い。同じ男を愛した女のよしみじゃない力。そんなに殺気を放たれてはアドバイスもする気が無くなっちゃうヨ」

「アドバイス……だと?？」

ゼノヴィアが怪訝な表情をしながらシユタークに問い返すと、シユタークは優しげな笑みを浮かべます。

(この女、果たして信頼してよいものだろうか?)

ゼノヴィアは警戒するものの、イリナはまさに溺れるものは藁人形、もとい藁をも掴む勢いでシユタークに縋りつきました。

「そうよ! アドバイスしてよ、シユタークさん!」

「うんうん、人間も天使も悪魔も素直が一番サ!」

果たしてシユタークのアドバイスでイリナは子作りに成功するか、それとも失敗してしまうのか。

それは天のみぞ知るといったところなのでしょう。

・イツセー視点

「何だやればできるじゃねえかイツセー。なんで普段の時は赤点スレスレなんだよ」

アザゼル先生がテストの採点を終えて、出来栄を褒めてくれる。

「いやー、やっぱり目標が出来るって勉強に身が入るといふか」

「よく言うぜ。ロスヴァイセはともかくレイヴェルにまで手を出しやがって。ライザーのヤツが真赤になって怒っていたぞ」

アザゼル先生は呆れ顔で俺の節操のない行いをなじってきた。

「そ、それはまたライザーさんには謝りに行かなきゃなあ」

「そうしろそうしろ。ライザーは上級悪魔だから下手をすると中級悪魔試験で試験官としてバッタリなんて事もあるかもしれんぞ?」

「ええっ!? まさか試験官のえり好みで俺が不合格なんて事は……」

「ないない、安心しとけ。ただお前には貸しがあるからな。ライザーなら文句言いつつも普通に試験官やると思うぞ?」

そうであってほしい。と、俺が肝を冷やしていたら何だかドアの向こうから賑やかな声が聞こえてくる。

「おっ? 何だか盛り上がってんな」

アザゼル先生が気になってドアの方へ移動し、俺も何となく後をついていってみると、向こうにはゲイトさんとイリナ、ゼノヴィア、そしてアーシアが勢揃いしていた。

「おい、お前ら何か用か?」



「やあ、イツセー君にアザゼル君。

勉強の調子はどうかかな？」

「あ、お陰様でなんとか筆記試験

の方は大丈夫そうです」

「そうか、それは良かった。」

リアスから君の様子を見に行く様に言われていたからね」

リアスは今出産を控えている身だからな。俺もこの間の様な煩惱全開モードは控える様にしなければ。

反省を踏まえて今はアザゼル先生に勉強を見てもらっているワケなんだけど。なぜイリナ、ゼノヴィア、アーシアの三人が？

「それはだね。ギヤスパー君、宜しく頼むよ」

ゲイトさんは部屋の隅にある段ボール箱に目配せした。ギヤスパー？

何でアイツまで？　と言うかニグラさんとお出掛けするらしいんだからもう少しひきこもりを改める努力をして欲しいところなのだが。

「ご、ごめんなさいイツセー先輩！」

ギヤスパーの奴、一体なにを

・ギヤスパー視点

「成程、これが時間停止というものか」

ゼノヴィア先輩が感心した様な声をあげていた。な、何と言うか止まった時の世界で一人ぼっちじゃないのはちよつと安心する。

「ゲイトさんのお力で私達も動けるなんてちよつと不思議な気分です」

「だからって私の信仰は揺らがないんだからね！　私は神の力ではなく神の教えに従うものなんだから！」

アーシア先輩もイリナ先輩もゲイトさんの力で動けるみたいだ。ニグラさんの上司だからか凄い力の持ち主みたいだ。イツセー先輩は時の止まった世界では当然動けないみたいで石の様に固まっていた。

で、これからどうするつもりなんだろう？

「で、どうするのよゼノヴィア」

「うむ。シユタークから渡された『時間停止モノ』によればこういう時は対象と性的な関係に至れば良いらしい」

「せ、性的!？」

何故か誇らしげなゼノヴィア先輩の返答にアーシア先輩が頬を赤らめた。でも時間の泊まった世界でイツセー先輩のアレは反応しないんじゃないかな？

「案ずるな。時間停止モノの主人公はこういう場合、時の止まった世界では性的刺激をダイレクトに受けることができる」

ゼノヴィア先輩がそう言うやイツセー先輩の前に移動していくと、ズボンを脱がして先輩のアレを露出させるやゼノヴィア先輩は躊躇いなくそれを口に含む。

じゅぼじゅぼ、といやらしい水音が停止した世界にも響き渡る。

本来なら停止した世界では音も静止する筈なんだけど、これもゲイトさんの能力なのかな？

「ぶは……♥それにしても妙だな……？ イツセーならばこの刺激でもうギンギンに勃起してもおかしくない筈だが……」

ゼノヴィア先輩はイツセー先輩のアレから口を離して首をひねる。確かにさつきから全然反応していない様だ。

「当たり前でしょ！ 停止中に刺激を与えても感覚は伝わらないの！

ああ！ やっぱリイツセー君との子供を授かるのは私には不可能なのかしら！ 神よ！ どうかこの迷えるラブリエルを哀れと思し召しお救い下さい！」

イリナ先輩が天に祈りを捧げ始めた。大丈夫！ 多分イリナ先輩もそのうちイツセー先輩と子作り出来る様になると思いますよ？

うん、きつと、おそらく。あと毛がチリチリするから神様にお祈りするのを止めて下さい。

「ではこれを使うしかあるまい」

ゼノヴィア先輩はラブリエル、もといイリナ先輩の祈りには目もくれず胸の谷間から何とコンドームを取り出し始めた！ 何でそんな所に!？

せめて財布とかに入れてみましょうよ！

「な、何よそれ！」

「コンドームだが？」

「そういう話じゃないわよ！」

「うむ。シユタークによればあそこのアザゼルが発明した『停止世界でも勃起&射精できる様になるコンドーム』だそうだ」

「だそうだ……って！　なんでそんな限定的すぎる発明品なんてアザゼル先生作ったんですか!？」

「そんなワケでありがたく使わせてもらおう」

ゼノヴィア先輩は手際よくコンドームをイツセー先輩のアレに装着し、改めて口に含む。うわ………凄いい光景だよ……。

「ふむ。あいふあわらふいつふえーのふいんほはふおふいな♥」

ゼノヴィア先輩は口に啞えたままイツセー先輩のアレを上下に動かして、何か言おうとしていた。

「ゼノヴィア！　啞えながらしゃべるのは止めなさいよ！　昔から食べるか喋るかのどっちかにしろって言うでしょ！」

イリナ先輩がそう文句(?)を言うと、ゼノヴィア先輩はイツセー先輩へのフェラチオ奉仕に集中することにしたようだ。

ぐっぽ♥ぐっぽ♥とゼノヴィア先輩は頬を使ってまでイツセー先輩のアレを飲み込む様にピストンを繰り返す。その姿はすごく情熱的かつエッチで……。

「んはっ♥ぶはっ♥……あふ♥……」

ゼノヴィア先輩は頬を凹ませながら頭を上下に動かし、イツセー先輩のアレをシゴき続ける。口の端からはよだれが垂れて、目は発情している事をありありと表していた。

「んはっ♥……あふ♥……」

ゼノヴィア先輩の頭が激しく上下する度に、目を瞑りまるで夢見心地な表情になっていた。

(ああー羨ましいー！)

思わずそう思ってしまった。僕もニグラさんにあんな風にもたお口でご奉仕されたい！　とそんないやらしい考えが頭の中でグルグ

ルと巡っていく。もつともそんな僕の胸の内は三人の先輩方にすれば何の関心もない事ではあるんだけど。

「ちよっ、ちよっとゼノヴィア！」

準備するのはいいけどアンタばかりイツセー君のアレを味わうのは狡いわよ！ 私だってイツセー君との赤ちゃん欲しいんだから！

「そうですよお！ ゼノヴィア先輩だけズルいです！」

イリナ先輩だけでなくアーシア先輩まで抗議するなんて……。まさにイツセー先輩のアレはマジカルチンポというヤツなのかな？ なんとかいうか、僕の場合は羨むよりも圧倒されてしまうなあ……。

「それもそうだな。イツセーのチンポは皆で分かち合わねば」

やっぱりゼノヴィア先輩はアマゾネス系女子の素質があるのかも。

ともかくゼノヴィア先輩だけでなくイリナ先輩もアーシア先輩も混ざってイツセー先輩のアレにむしゃぶりつき始めた。まるで親鳥から餌を貰う雛の様に。

「ん♥……はあむ♥……あむ♥」

「あはあっ♥イツセー君のチンポ♥コンドーム越しでも美味しい♥」

「んっ、んくっ♥……ふああ♥……凄いです、イツセーさん♥♥イツセーさんのおチンチン嘗めてるだけなのに♥興奮しちゃいますう♥」

三者三様にイツセー先輩のアレを誉めそやし、その味と形を楽しむ。三人の先輩達が腰を動かして顔を揺らす度に汗や唾液が跳ね飛び、グチョグチョというドスケベな音までもが響き渡る。それからどの位経っただろうか？ 三人の先輩達は思い思いにイツセー先輩のアレにむしゃぶりつき、その刺激でイツセー先輩はどんどん膨張するのだが射精する様子はない。やはり時間だけでなくイツセー先輩の意識が停止しているからかな？

「多分君の考えている事が正解だろうね。あのコンドームの力だけではこれ以上イツセー君のチンポが勃起することはない」

なんて考えていたらゲイトさんがテーブルに座りながら淡々とした調子で言ってきた。

この人……いや、神様には性欲とかそういうのは無いのかな？ 雲

みたいに掴みどころのない人だ。

「そこで、だ」

ゲイトさんは僕の段ボールをひよいと取り上げる。うわあああ！  
お外怖い！ 段ボールの外の世界は怖いよ！

「君の『顕色・透過』の力を使ってイツセー君の意識だけをこの停止した世界で覚醒させるんだ」

ゲイトさんが何か言っているけどそれどころじゃないよお!! 段ボール返してくださいさああい!!

「大丈夫、君ならできるさ」

アルカイツクスマイルを浮かべてゲイトさんは僕に言うけど無理なものは無理ですう！ 頭を抱えて蹲る僕の首根っこをゼノヴィア先輩が掴んで立たせてきた。

「ギヤスパー！ なぜやりもしない内から出来ないなんて諦める！

イツセーはどんな状況でも！ 最後まで諦めなかつたぞ！ お前のイツセーへの尊敬は偽物だったのか！」

ゼノヴィア先輩は僕の鼻に人差し指を突きつけて、毅然とした態度で言った。

確かにそうだ！ 僕はイツセー先輩のことを尊敬している！

「う……うう……ぼ、僕は……やります！」

確かニグラさんとエツチした時の様に僕の目に意識を集中させる。

イツセー先輩の脈や脳髓が透けて見えるのがちよつとグロテスクだけど更に意識を集中させると、イツセー先輩の意識がぼんやりと見えてきた。

「うん、流石はギヤスパー君。後はこのままイツセー君の脳に覚醒の為の信号を送ってやるんだ」

「う……はい！ いきますー！」

僕はゲイトさんに言われるがまま、脳に覚醒を促す信号を送る。するとイツセー先輩の意識に反応があったのか徐々に瞳の光が灯り、そのまま目を見開いた。

「な、な、なにやってんだあ!?!」

でも身体は動かないみたいだ。今の僕の力じゃ時間停止世界では

イツセー先輩の身体までは動かせない。

けど、ゼノヴィア先輩達は構うことなくそのままイツセー先輩のアレを愛でていた。

「ふふ……身動きがとれないイツセーのチンポを愛でるのも悪い気はしないな♥」

「ああ……、おチンポ膨らんでるう♥私、天使なのに♥発情させられちゃう♥♥♥」

「ご、ごめんなさいイツセーさん♥でもイケない事をしているみたいで……♥」

3人とも目にハートマークを浮かべて、イツセー先輩のおチンチンをコンドーム越しに愛でている。

まるで3人ともメスの顔に豹変し、目の前のおチンポのことしか頭にないみたいだ。

ゲイトさんはテーブルに座って紅茶をすすりながら「うん、女の子の恋する表情って良いねえ」とか暢気な事を言っていた。

「い、いや！ゼノヴィア先輩！アーシア先輩！イリナ先輩！目を覚まして下さい！」

イツセー先輩は必死に懇願するが三人は聞く耳を持たない。それどころかむしろより一層激しく三人の先輩の愛撫は激しさを増していく。

#### ・イツセー視点

「ふ……う……♥はあ……♥」

「んふう♥イツセー君のおチンポお♥しゅごい♥」

「ああ……もつとお♥イツセーさんのおチンポでアーシアのエッチなおまんこぐちよぐちよにしてください♥♥♥」

な、なんとというもどかしさだ！

時間が停止しているが意識ははっきりしているせいなのか、コンドームの中で俺のチンポは爆発しそうだ！

「ふふ、どうしたイツセー？」

いつでも射精して構わないのだぞ？」

聖剣使いとはまるで思えないドスケベ&エロエロ挑発と共に金玉をくりくりと刺激され俺は思わずうめき声をあげてしまう。今すぐにも飛びかかってゼノヴィア達とエッチしたいところだが身体が全く動かない。

そのくせチンポの脈動は激しくなる一方で、いつ爆発してもおかしくない状態だ。

「あはあ♥♥イツセー君のおチンポ凄いい♥♥」

「うふ♥こおんなに勃起してえ……♥コンドームパンパンですう♥」

ゴム越しとは信じられない位にアーシアの口の中の感触が伝わってくる。

口の中を真空状態の様に窄めて、頬を凹ませての強烈なバキューム。

いつの間にこんな技を覚えたんだよアーシア!

「あはあ♥♥イツセーさんのおチンポお♥♥美味しいですう♥♥」

コンドーム越しに頬張りながら、アーシアは俺のバキバキに勃起したチンポをガンガン舐める。

フェラチオというにはいささか乱暴すぎる。いや、むしろ俺のチンポは愛犬に嘗め回される骨の様だ!

「うふ♥おチンポビクビクしてるう♥♥射精する? ねえ射精しちゃうの? イツセー君?」

金玉に舌を這わせながらイリナが俺を煽る。だ、駄目だ! 出るっ!!

「……!?」

射精する感覚はあるのに一滴も射精出来ない。チンポがゴムによつてギチギチと押さえられて精液を外に吐き出すことが出来ないのだ!

な、なんとという生殺し状態なんだ! 頭がおかしくなりそうだ……!!

「はあ♥はあ♥ごめんなさい♥イツセーさあん♥私、もう我慢できません♥♥」

だが生殺し状態だったのはアーシアも同じだったようだ。時間停止状態故か非力なアーシアですら今の俺を強引に押し倒し、騎乗位のような体勢で俺のチンポを自らの中に素早く飲み込んでいく。

「っ~~~~♡♡♡」

「……………!!」

ずぶずぶ、と俺のチンポはアーシアの中に侵入していく。ぴっちり閉じている清純な蕾の様なアーシアの割れ目を押し広げて、コンドームが被せられた俺のチンポが挿入されていく。まさに花開く、という言葉が相応しい程の光景。コンドーム越しても、アーシアの膣壁の柔らかさと締め付けがはつきりと感じられる。

時間さえ停止していなければこの光景だけでもう一発射精しているかもしれない。

「ふあああ〜っ♡♡♡」

イツセーさんのおチンチン久しぶりすぎてえ♡♡♡こんなのもすぐイツちやいますう♡♡」

挿入しただけでアーシアは軽くイッた様だ。ビクビクと身体を震わせながら立派に捻った聖女おっぱいの頂点では桜色した乳首がピンピンに勃起していた。

「ふ……………うっ!!」

おっぱいまであと一歩のところまで近づいたというのにコンドームのせいで俺のチンポはアーシアの中に挿入出来ない! ゴムを外してやればすぐにでも射精出来るというのに! ゴムを外そうにも身体は全く動かないから自分ではどうしようもない……………!

ぐああっ!? 満腹の腹にとびきりの一撃を喰らったかの様なこの感覚は……………!

「ふふ……………イツセー。アーシアにばかり気を取られているんじゃないぞ?」

「私達のこととも忘れちゃ駄目よん♡」

ゼノヴィアとイリナが左右から俺の乳首に自らの乳首に擦り当てながら俺の指を自分達それぞれの秘所に導いていく。

「く……………うー!」



イリナとゼノヴィアの愛液でべっとり濡れた指が二人の膣の入り口に触れ、その柔らかく温かい感触に俺は思わず声を漏らす。

だが指一本動かさない俺に対して二人は俺の指を自らの秘所に誘いながら、自らも快楽を求めて自らの腰を動かし始める。

「あんっ♥イツセー君の指い♥♥」

「うう……♥そんな焦らさないでえ♥♥早く欲しいんだあ♥♥」

二人の腰が動く度に指が二人の中を掻きまわし、二人の喘ぎ声も強くなっていく。

既に二人とも蜜壺からはトロトロの液体があふれ出し、俺の体をいやらしく濡らす。

「ふああんっ！ちくびきもちいいですう♥♥イツセーさんのおチンチン入れてもらいながら乳首いじると頭がふわふわしてえ♥♥イクウ♥♥イツちやいますう♥♥イツセーさんにおまんこズボズボされるのだいすきですうう♥♥♥♥♥」

俺の上で腰を振りながらアーシアが喘ぎまくりながら身体が激しく震え、俺のチンポを凄まじい力で締め上げる。時間が停止した状態でなければ何度射精していてもおかしくないだろう。こんな状況に射精できないのが本当にもどかしい……！

「こら、アーシア。一度イツたのだから交代だぞ」

「そうよ♥次は私がイツセー君と子づくりするんだから♥」

そう言いながらゼノヴィアとイリナは二人して俺の指を自らの秘所から抜き、交代とばかりにイリナが俺のチンポをオマンコに飲み込んでいく。

「ふああああ♥墮ちちやいそうう♥♥イツセー君のおチンポ♥子宮の入り口まで届いてるう♥♥」

イリナが恍惚の表情を浮かべながら俺の上で暴れる様に腰を振っている。しかし背中の中の天使の翼は真つ白なままだ。

「うあ♥♥ふあ♥♥んくう♥♥♥」

俺の上で跳ねる度にイリナのたわわなおっぱいが揺れ、お尻もぷるんと跳ねながら俺の腹にぶつかる。その度に膣肉はキュンキュンと俺のチンポを締め付け、快感を与えてくる。コンドーム越しても伝

わってくるイリナの体温も心地良い……。だがやはり射精出来ない！ ある意味拷問に等しいこの状態は時間停止が解除されるまでずっと続くのだろうか!?

「はあ……♡♡♡あっ♡いつ♡イッてない♡イッてない♡♡♡だからあ♡もつともつ♡もーつとイッサー君とセックスするの♡♡♡んあああ♡あ♡あ♡あ♡あ♡♡♡」

イリナは明らかに何度もイッているはずだが、それでも俺のチンポを貪り続ける。

「こら、イリナ！ 何を自分だけ勝手に満足している！ 私のも忘れるな！」

「そうですねー！ 天使のイリナさんがウソをついちゃいけません！」

そんな俺の心情などお構いなしにイリナ、アジア、ゼノヴィアが俺のチンポをかわりばんこに貪る。

「ふああああ♡♡♡」

「ひうううう♡♡♡んくううううう♡♡♡」

「んほおおお♡♡♡」

何度も繰り返し返される絶頂に3人は何度も何度も身体を跳ねさせてイキまくる。だがそれでもなお食欲に俺のチンポを求め続ける……。あまりのセックスの凄まじさにコンドームがはち切れそうだ！

誰の膣内でコンドームが破裂するかというまさにロシアンルーレット的な状況に、俺の欲望はますます猛り狂ってしまう。

「も……もつとお♡♡♡」

「ま……まだまだあ♡♡♡」

「も、もつとお♡♡もつともつとイキたい♡♡♡」

(くううう!! 限界だあ!!)

3人の食欲なセックスにより俺の性欲はもはや限界など超えていた。そして遂にその時が訪れてしまう。

どびゆるるるる!! コンドームが遂に限界を迎え、中から精液が勢いよく噴き出す。

「おっ♡おおっ♡♡♡出てるっ♡出てりゅう♡幼馴染みのチンポが私の中に射精してる♡♡♡時間停止している筈なのにサンダルフォン

様のご加護感じちゃう♥転生天使の卵子に転生悪魔の精子が絡み合ってりゆうううん♥♥♥

「むう……。今回はイリナの中に出したか」

「羨ましいです……」

ゼノヴィアとアーシアはまさに垂涎と形容すべき表情で俺の股間を見下ろしている。

「ふあ♥♥イリナさんすごいですう♥♥♥」

「おお……。これは凄まじいな……」

イリナは何度もイキまくりながら俺の精液を搾り取り、ゼノヴィアとアーシアもその光景を食い入るように見つめていた。

↓

「へえ、それは大変だったね」

「ホントにな。ギヤスパーはあの後目をぐるぐるさせて段ボール箱の中でダウンしちまってさ」

「時間停止を何十分もやってりやギャー助も流石になあ」

学食にて木場と安里は俺の話を聞いていた。たまには学食もいいもんだな。アーシアも頑張りすぎてダウンしているし、母さんは母さんで何と俺の弟か妹を妊娠したっていうし……。

「エラい事になってるなあ……。お前の家は母ちゃんが若返って妊娠するとかどういうファンタジーだよ」

「う……。うるせーな」

転生悪魔になった時以上の衝撃を受けたのは確かだ。まさか父親になると共に兄になるなんて少し前までは想像もしていなかった。

『でも家族が増えるのは喜ばしいことよイツセー君』

木場の肩にイザイヤさんのビジョンが浮かんできた。まあ、靈感が強くないと見えないから俺達以外は気づかないだろうけど。

そう言えばラヴリエル、もといイリナはどうなったんだろうか？

まさかホントに墮天したなんてことは……。ないよな？ なんて不安に駆られていると俺のスマホが鳴った。「ん？ もしもし？ おお、イリナか。ちょうどお前と話そうと思っていたところなんだ」

『ホント!? やっぱり私達は心で通じ合っているのね！ ……じゃな

くて天界が今大変なの！ イッセー君助けて！』

イリナの声は必死かつ切迫したものだった。状況が状況だけに  
ぐに

向かうべきだろう。

「俺も行くぜ。イリナとは俺も幼馴染みだからな」

「僕達も協力するよ」

安里や木場も協力してくれるらしい。やっぱり持つべきものは友  
達だよな!!

## ※96話（イツセー?ベラナディア）

「なあ、ルイーナ」

「? どうしたの安里?」

ベッドの中でいつものように愛し合った後俺はルイーナを胸に抱いて語りかける。

「イツセーの中級悪魔試験の前に、一度お前の母さんへ挨拶をしないかないか?」

「えっ……!?!」

ルイーナの顔が嬉しさに赤くなる。

今は駆け落ち同然で家に引き取っているワケだが俺達の将来を考えたら一度きちんと話をしておいた方が良いと思う。

辰郎叔父さんにもそれとなく釘を刺されたし。

「いきなり結婚して幸せにします! ってのはあれだし……まずはの挨拶と今の現状をありのまま話すよ」

「う、うん……」

一瞬不安そうになルイーナに俺は頭にキスをする。

「何だかんだ言ってもハマーマ……さんだつてルイーナの母親だろ?」

愛した男から生まれたお前を愛していないワケがないって」

「そうかな……そうだよね!」

「そうだつて!」

そう、その時の俺は無邪気にそう信じていたのだ……。

あまり大人数で行くのは向こうにも失礼だろうし、サイラオーグさんに負担をかける事になりそうだ。

そんなワケで俺、ルイーナ、スコグル、そしてジャンヌオルタ、イツセーの5人で行く事になった。ニトクリスさんは顔が割れているから色々マズい。スコグルは護衛兼ルイーナの友人。ジャンヌはまあ、護衛だ。あと、イツセーは向こうが指定してきた。どういうつもりだ?

「おー、似合う似合う。ワリとイケてんじゃん。惚れ直したよ！」  
「うん！　すごくカッコいいよ！」

「まあ、馬子にも衣装という言葉もありますし？　ボロ刀もアヴァロンに収まればそれなりに格好がつくというものでしょうか？　アヴァロン……セイバー……。なんかイヤなヤツの事を思い出したじゃないの！　どうしてくれるのよ！」

「なんでキレてるのジャンヌちゃん？　あとそのコート凄くキマってるよ」

「なんで貴方にちゃん付けされる言われがあるんですか？　あと、聞かれてもいないのに私の服装をあだこうだと論評しないでくださいます？　流石天下の赤龍帝様ですこと」

アザゼルのおっさん製のスーツ姿を見てなんかジャンヌオルタが勝手にキレ出している。スコグルとルイーナは褒めてくれたのに。しかもイツセーが褒めているというのにそんなにカッコするなよジャンヌ……私は悲しい。

「自分のキャラを見失うな！」

「ジャンヌさんはツンデレさんなの？」

「違うよルイーナ。あれは撚デレだよ。」

あれをツンケンって言っちゃ各方面に失礼だからさ」

「よし決めたアンタらそこに並びなさい」

女三人寄れば姦しい……というヤツだろうか。しかしジャンヌオルタはツツコミ気質だからある意味ありがたい。

「はっはっは。元気があつていい事だ。」

だが九頭竜。俺としては一夫多妻はあまりオススメせんぞ」

サイラオーグさんも苦笑いしている。

バアル家は確か一夫多妻制度を敷いていてそのせいで跡目争いや何やら血みどろな抗争が起きたらしいからなあ……。

その一件に深く関わっていたのがこれから会うルイーナの義母であるハマーマ・ムールムールってワケだ。

なにせ本来なら魂が消滅して復活できない悪魔や墮天使、更には天

使やらを反魂の法という秘術を用いて蘇らせる事も出来る。実際クルゼレイも復活して俺達に襲いかかってきたし。

カテレアがいなかったら多分俺は死んでいただろうな……そう思うと背筋に寒気が走る。

「すみませんサイラオーグさん。正直俺は自分の家系やらなにやらにはあんまり興味ないんですが……とりあえず今回の挨拶だけはさせていただきます」

「ああ、お前はそれでいい。愛する者を守るためにあらゆる辛苦に立ち向かう。その信念こそが貴族には無くてはならないものだ」

サイラオーグさんは笑いながら俺の肩に手を置く。貴族……まるでピンとこねえ。

俺はルイーナと真つ当な家庭を築ければそれでいいんだけどな。

↓

……で、現在俺達がいるのはムールムール家の応接間だ。なんとうか……まあ、慇懃無礼を絵に描いた様な部屋って感じだな。良く知らんけど壁一面サイズの肖像画なんてどんな神経で描かせるんだ？

「いい趣味してるわね、貴方のお義母様は」

うんざりしている所にジャンヌが皮肉げな笑みを浮かべながら口を開いた。

「マジで？ マジでそう思ってたのかジャンヌ？」

「相変わらず皮肉の通じない男ねえ。」

そうじゃなくて、一時間も待たせて音沙汰もなしだなんて私達を気疲れさせて粗相をさせる魂胆に決まっているじゃありませんか？

貴方の頭には脳漿の代わりに蜂蜜にでも浸かっているのかしら」

立板に水というかスラスラこうも罵倒の言葉が出るものなのかと俺は一周回って感心するよ。

「ま、まあまあ。ジャンヌちゃんは要するに気をつけろって言いたいんだよな？」

「だからちゃん付けするな！」

イツセーがフォローに入ったというのにジャンヌは一喝して黙ら

せてしまった。

お前らなあ……ここは人の家だぞ？

もう少し礼儀というか慎ましきさとかをだな……。

「フハハハハ！ お待たせ致しましたな！ 皆々様!!」

すると忽ちクソ喧しい笑い声が轟いた。そして一番奥にあった扉が勢いよく開く。

「この私！ エスクロ・デカラビアが挨拶に参りましたぞ！」

何だこのおっさん!? テンションが高すぎるにも程がある！ つてか、さつきからプンプン臭ってた甘ったるい匂いの元凶はこいつかよ！ パツとみた感じは白銀の髪を持つ壮年の敏腕執事って感じだがヒトデみたいな瞳と右目の周りにある鱗の様なひび割れがなんとも不気味な感じがする。

「あー……。やーつと出てきたか。待ちくたびれて鼻がバカになるかと思っただぜ」

「おおつと、これは失礼致しましたな兵藤一誠様！ かの古今無双たる赤龍帝たる貴方に失礼がないようにと香を焚いたのですが……御無礼の段、平にご容赦をば！」

「その香とやらのせいできつきからこの部屋の匂いが凄いことになっているんだけど？ 換気してくんない？」

イツセーとスコグルは露骨に嫌そうな顔をして鼻をつまんでいる。確かにこの匂いはキツイいな……。

「おお！ これは失敬！」

ピン、と指を鳴らすと甘ったるい匂いが消えて爽やかな空気に変わった。

コイツの能力か何かを使ったのだろうか？

というかこの香り……何かの毒か？

俺にはハーゲンのせいとかおかげというか、毒には耐性はあるけど。

「あの、エスクロさん。お義母様は？」

「おお！ おお！ ルイーナ様！ あまりの美貌に見違えましたぞ！」



恋をなされたと聞きましたがそれは真だったようですね！このデカラビア、歓喜の至りですぞ！」

「あ、あはは……相変わらずだねエスクロは」

ルイーナに向かってブンブン手を振りながら感激しているエスクロ。それに対してルイーナも困惑しつつも応じている。

この芝居がかかった態度、もう少しこうなるとかならないのか？

「いい加減にしなさいな、エスクロ。お姉様が困ってらっしゃるじゃない？」

「……」

その辺りであのやせぎす女……もといベラナディアと見た事のないヤツが現れた。

「どうかハママの姿はない。」

「どうなさいましたのお義兄様？」

「な、何でもありませんよ？」

人形みたいな笑みでベラナディアが話しかけてくる。正直ゾツとしないな。

しかし、ルイーナやサイラオーグさんのメンツを潰すワケにもいかないのではここは言葉を濁す。

「うふふ、お義兄様ったら私に啖呵を切った時とは別人みたい。まるで借りてきた猫みたい」

まるで蠟細工みたいな指で俺の顎を擦る。

ルイーナは不安げに俺の袖を掴んできた。

イツセーは『言つてやれ、言つてやれ』と言わんばかりに俺に視線を送る。

「猫だからと言って万年発情しているワケじゃあないぜ……ですよ？」

「まあ、お義兄さまってば。器量は小さいのに肝っ玉は太いのね♪」

ケラケラ笑いながらもベラナディアは俺と対面に座る。大きなお世話だ！とは言わんが……この女、マジ苦手なんですけど。でも、

義理の妹になるんだよなあ……はあ……。

「……」

って隣のいかにも重騎士ってヤツは何なの!? まさか俺の義父とか義兄になるってオチはないよな……な？

「おお！ 彼女は極めて無口なので私が代わりに紹介させて頂きましよう！ 彼女はサベージ・エリゴール。この屋敷の警備隊長をしております。どうぞお見知りおきを」

「で、アンタがその代わりに人の倍位ペラペラ囀るってワケ？」

「ついでに言えば将来の主人になるかもしれない男に対して素顔一つ見せられないなんて随分不躰な家柄なのですな。これはお里が知れるというものですわ」

しゃしゃり出てきたエスクロにスコグルやジャンヌは明らかに不快感を隠そうともせず毒を吐く。つーか二人共不機嫌すぎるだろ！ 愛想よくしてくれ！

「おお！ お里が知れる？ ハハハハ！ これは一本取られましたな！ いかにも我等の出自は草深い冥界の奈落に等しい貧民街でありますれば！ されども、ハマーマ様は力があればいかに氏素性の解らぬものでも斯様に厚遇してくださいます故に！ 私めはそんなハマーマ様に心酔しておるのですよ。おお、ハマーマ様！ 貴方様こそ我らの希望にして光！ 一生貴方様にお任せさせて頂きますぞー！」

いや、そんな事聞いてないから。というか掴みどころのない二人だな……。しかし、ハマーマ……さんが来られないとなるとどうしたモンか。

「待ってお義兄様。折角来てくださったのですからなんのおもてなしもなし、というのも失礼ではなくて？ ねえサベージ？」

「……」

そしてベラナディアの微笑みに対してもサベージは無口を貫く。徹底してんなあオイ!!

しかしおもてなしねえ……。

「まさか壁からいきなり兵士たちが押し寄せてくるなんておもてなしなんて事はないよね？」

「あら？ 天井が落ちてくるという古典的ながら効果的なトラップもあり得るわよ？」

「ふ、二人共オモシロイこと言うナー？

なあ、安里？」

「そ、そうだなイツセー。あはははは」

スコグルとジャンヌがヤカラみたいなお話を言う。頼むから話を荒立てないでくれよお!! 俺とルイーナの瀬戸際なんだから！

「まあ。流石お義兄様の眷属。野蠻というか常在戦場というか、周りが気疲れしちやいそう。これではお義姉様の様な女に心惹かれるのも当然ね」

ベラナディアは二人の疑いに一見鷹揚な笑みで応えた。言葉の端々から『お義母様の言いつけでもなければお前ら下級な存在などとは話したりしない』という本心が見え見えだ。いや、俺たちの関係をぶち壊しにしたいからワザと挑発してやがるな……。

そんな手に乗るかかってんだ。なあイツセー！

「ちよつといいかな。安里の親友兼ルイーナちゃんのクラスメイトとして言わせてもらうけど。ルイーナちゃんを女呼ばわりとは何だよ？ 血が繋がってなくても家族なんだろう？」

「おお！ 流石は赤龍帝たる兵藤一誠様！ 感銘の至り！ デカラビア、感涙致しましたぞ！」

ベラナディアより先にエスクロがでしゃばってくる。なんでコイツは一々茶々を入れてくるんだ？ サベージは相変わらず何も言わない。

「家族？ ふふふ、確かにそうね。」

私が悪かったわお義姉様。これからは仲良く暮らしましょう」

「ベラナディア……うん！ 私、立派なお姉さんになるね！」

ベラナディアはしおらしく応じるとルイーナと手を取り合う。イツセーは『解ってくれればそれでいいんだ』といった感じでうんうんと頷いていた。

……俺は捻くれているせいかどうかにもウソくさく見えてしまう。

美しいものに唾を吐きかける人でなしのようで自分がイヤになるな、全く。

「お義兄様もごめんなさいね？ 私ったらつい意地悪したくなっ

ちやつたの」

「ま、まあ……いいよ。お互い悪いところや誤解は少しづつ直していこうぜ」

「左様でございませとも！ このエスクロ、皆様が歩み寄るための仲介には骨身を惜しまず尽力いたしますれば大船にのつたつもりでいてください！ ニスロク！ 食事の用意はまだか！」

ニスロク？ ハマーマの側にはまだヘンなヤツが待っているのか？ とにかくエスクロが手を叩くとすぐに給仕の侍女たちがやってきました。

「さあさ、皆様方！ 料理の方は準備出来ております故お召し上がりください！」

「むっほおおおお!! うひよおおおお!!! うまそう!! 腹へったああ!!」

テーブルに置かれた料理の数々にイツセーは狂喜乱舞している。単に旨そうってのもあるが微妙な空気を変えようと道化を演じてくれている。相変わらず優しい奴だ。

(私とはかく、アンタはちゃんと食べなさいよ)

ジャンヌが耳打ちしてきた。確かにどんな物が出されても食わないワケにはいかない。

(ジャンヌは食べないのか？ ダイエットでもしてるのか?)

(そんなワケないでしょ！ 私は一応護衛という事で来ていますから？ それにサーヴァントは食事をしなくても問題はありません)

「うん！ 美味しい！ サイコー！」

「いや、今日はホントに来てよかった！」

スコグルとイツセーは遠慮なくバクバクと食い始める。俺も食つとこう。毒の心配は……まあ、ないかな？

ともかく俺とルイーナは出された前菜とスープを口に運ぶ。

こ、この味は!? 辰郎叔父さんが作っていた味とソックリじゃねえか!?

「どうかなさいまして?」

ベラナディアが小馬鹿にした様な笑みを浮かべて尋ねてきた。いや、考えすぎか。

疑って見れば柳の枝もなんとやらだ。

「いや、何だか食べた事のある味だなと」

「まあ、お義兄様は意外と舌が肥えていらっしやるのね。舌が肥えていると人生の幸福度は上がるけど満足度は下がるといってお話ですよ、ふふふふ」

含み笑いをしながらベラナディアは俺を見つめる。

「幸福度だか何だか知らんが俺はルイーナが作ってくれたものならなんだってご馳走になるけどな」

「まあ、お義兄様ってば。本当にお義姉様を愛していらっしやいますのね。少し、妬けちやうわ」

ギラリ、と僅かにルイーナに対してベラナディアの敵意の様なものを感じた。

ハマーマ共々何を企んでいるか知らねえがルイーナは絶対にもう離さない。何があつてもだ。そう決意しながら俺は食事を楽しんだ。

1

イツセーside

「はあく……疲れたあく」

俺は寢室に案内されるとベッドに身を投げ出す。安里とルイーナちゃんは同室で、スコグルちゃんとジャンヌちゃんも同室。

俺はというと一人部屋だ。いや、警戒されているとかそういう話じゃないからね！

いや、心当たりは……あるけど。

「まあ、いいや。今日は色々あったなあ」

俺はベッドに横たわり今日の事を反芻する。

ベラナディアちゃんは『お義兄様を宜しくね』とは言っていたけどなんだか怪しい雰囲気だった。まさかルイーナちゃんから安里を奪うつもりじゃなからうか？ いや、そんなワケはない。あの雰囲気は俺たちを試していただけだ。

俺はそう考えて目を瞑る。

でも何なんだろう？ あの子の安里を見る視線には『嫉妬』と『羨望』があつた様な気がした。まあ、考えすぎかな？ それにエスクロとかいう執事も正直得体がしれない。

芝居がかつているというか本心が見えないというか……。

その時、コンコンとノックの音が聞こえた。誰かと思いつつもドアを開くと立っていたのはベラナディアちゃんだ。

さっきのドレスとは打って変わって肌の露出の多い薄い生地を着て髪をアップに纏めている。

「こんばんは、お義兄様の親友兼護衛さん」

ベラナディアちゃんは俺を舐めまわす様な目つきで見つめてくる。

「あ……ああ。こんばんは……」

「うふふ……そんなに緊張なさらないで？ ムールムール家には主の全てを以てして客人を歓待する習わしがありますの♪」

えっ、何それは……？

「貴方はハーレム王を目指しているのだから察しはついでしょうに……」

お察しの通り、つまりそういう事ですわ♪」

「は？」

俺の素っ頓狂な声を聞いてベラナディアちゃんはクスクス笑う。いや、勿論意味はわかるよ？ ただ急過ぎてどうリアクションしているものか……。

「そんなに怖がらないで……その扉を開いたのは貴方なんですから」

頭まで痺れる様な甘い香りがしてくる。俺よりも小柄で細い身体からは想像もつかない程の色香だ。ほぼ初対面なのにまるでニグラさんを相手にしているかの様に本能がかきたてられ、そそられてしまう。「い、いや！ でもー」

「……さあ。お義兄様ではなく私にすがってくださいな♪」

そう言つて俺の手を彼女は取つて寝室の中に入っていく……。

「あっ♥ああっ♥あっ♥あっ♥」

彼女の触り心地は最高だ。特に肌はすべすべで滑らかだし、胸や尻の大きさも黄金比ともいうべきバランス。何よりも腰のくびれがセ

クシー過ぎるし足もスラツと長い！

口元が思わず緩んでしまう。

「あん♥貴方のもすっかり大きくなってるじゃない♪ このおちんぼ様で私をヒイヒイ言わせてくれるんでしよう？」

彼女は俺のモノを優しく、それでいて激しく扱ってくる。相当の手練というべきか……!?! しかし俺とてシユタークさんとエロエロな修行(?) を経てきたんだ！

「ヒイヒイ言わせたいの間違いだろ？」

「こんなにいやらしく乳首もクリトリスも勃起させちやつて……」

俺はわざとらしく彼女の乳首をギュツとつねってあげる。

「い、いやんっ♥痛いじゃない♥でも結構悪くないかも……」

「だろうね。キミみたいなタイプが求めているのは王子様より王様だ。権力と絶対的な力。そして……圧倒的な快樂ってヤツだろ？」

そう言つて俺は彼女のおっぱいを鷲掴みにする。

「ああつ……♥」

蕩けきつた顔で彼女は舌を突き出す。その顔にはさつきのような余裕は見られない。

「ははっ、舐めてもいないのにこんなにビショビショにしちやつて……キミのおまんこがどんな味か確かめさせてもらおうよ」

俺はそう言つて彼女の股座へ顔を突っ込みとそのまま舐め始めた。既に濡れているとはいえ、もつとグチャグチャになるまで彼女を淫らに染め上げたい。

「ひっ♥はあつ♥や、やっぱり慣れてるのね？ ああつ♥いいつ……もつと私のアソコを舐めて♥ああつ♥」

まるで清流の様に溢れ出す愛液を俺は貪る。彼女の茂みからはメスの臭いが漂つてきて俺の興奮をさらに加速させる。

「ああつ♥あつ♥あつ♥あひっ♥ひっ、はげしい……んあああつ♥」

「こんなにオマンコ濡らして……いやらしいお姫様だなあ」

膣穴に舌をねじ込み中を舐め上げると彼女は身体を大きく仰け反らせた。

「イ、イクう♥赤龍帝にオマンコ舐められて……私、いつちやいますうっ♥あひっ♥♥」

ガクガクと痙攣しながら彼女は盛大に潮を吹いて絶頂した。そして、すっかり力が抜けてしまった様だ。ベッドに四肢を投げ出し荒く息を吐いている。

「うん、お楽しみはこれからだからね？ まだまだ楽しませてもらうよ」

俺はそう言うのと彼女の上に覆い被さり既にビンビンになっているモノをトロトロのオマンコへねじ込んだ。

「ひぎい♥♥はあ♥ああっ♥♥♥

刺さってる♥♥オマンコにデカちんぽ刺さってるううう♥♥♥

ほひいいい♥♥おひっ、しゅごいいいいいいっ♥」

俺のモノでオマンコを串刺しにされ彼女はあまりの快楽からか潮を吹きながら絶頂を迎えた。それでも俺は容赦なく腰を打ち付け続ける。いきなりクライマックスともうべきピストン運動に対して押し出されるかの様にベラナディアちゃんから涙と涎、そしてマン汁がぶしゅぶしゅと溢れ出る。

「いやあああっ♥だめっ♥だめえええっ♥いまいつてるのおおおっ！ おほっ、またイクううううう んほおおおおっ♥」

「こんなにオマンコ締め付けて、まだ欲しいって言ってるみたいじゃないか！

とんだお嬢様だなベラナディアちゃんは！」

バックでガツンガツンと腰を打ち付け、おっぱいを揉みしだきながら耳元でそう囁くと彼女は全身で喜びを表すかの様に叫んだ。

「ほひいいい♥♥♥そうですうううっ♥オマンコもつとグチャグチャにして欲しいのおおっ！ おほおお♥イキシゅぎてもうわけわかんないいいいっ♥んほおおおおっ！」

絶頂に次ぐ絶頂により意識を失いかけたベラナディアちゃんを俺は無理やり覚醒させるとさらに容赦なく責めたてる。

「綺麗なバラには棘があるっていうけれど……キミの棘は剪定しなきゃね！」



まるでペンチで引き千切るかの様に彼女の乳首を思いつき引つ張ると更に膣穴がキュツと締まり、俺のモノから精液を搾り取ろうとしてくる。更にクリトリスも抓る勢いで刺激してやる。

「んひいい♡♡♡ちくびっ、ちくびとクリトリしゅ！ だめえええ♡♡♡」

彼女は白目を剥きかけながら舌を突き出してアへ顔を晒す。

「ひぎっ♡しにゅう♡セックスで死んじゃうう♡イグウウウツ♡♡♡」

「さあっ！ イクんだベラナディアちゃん！ エツチで素直なキミに生まれ変われ！ 俺の女になれ!!」

念を押す様に何度も何度も子宮口に亀頭を叩き付けると、彼女はその度に絶頂に達して全身を痙攣させる。

「はひいい♡♡♡なりゅう♡♡♡赤龍帝のおちんぼ様の女になりましゅううううっ♡♡♡イクウウウツ♡」

その直後、俺のモノから勢いよく精液が放たれる。彼女の胎内に烙印を刻むかのようにドプロドプと勢いよく精液を流し込む。

「ああ♡♡♡出てる♡♡♡んほおおっ……ほおおっ♡♡♡」

ベラナディアちゃんはアへ顔を晒して舌を突き出しながら絶頂の余韻に浸っていた。

……まだだ。もつと、もつと……。俺は意識を失った彼女に、また俺のモノをブチ込むと再び腰を動かし始めた。彼女の膣穴はもうグチャグチャで愛液や潮、精液が混ざり合って白濁とした液体が飛び散っている。それが妙にエロティックで俺をより興奮させていった。

「も……もうらめええ♡♡♡」

うわ言の様にそう言う彼女を無視して俺はひたすらに犯し続けるのであった。

ドライグではない誰かに見られているような気もするが……構うもんか。

穢したい！ この子を穢したい!!

↓

「フハハハハ！ 成程成程！ 兵藤一誠殿の五色の芒星、ここに観測

せり!! このエスクロ・デカラビアの権能は自他との境界、結界の構築と解析、浸潤、改竄にありますれば!!」

『……またぞろ厄介なヤツが魂の中に入り込もうとしたものだな。で、相棒をどうするつもりだ?』

「どうもいたしませぬが? 私はハマーマ様の言いつけ並びに我が盟友の頼みでこちらに参った次第でありますれば」

エスクロはケロリとした顔で言った。ドライグもこれには面食らう。大方イツセーの精神を荒廃させるような毒でも埋め込みに来たのか、とその魂ごと焼き尽くしてやろうかと身構えていたのが。

「フーン、人のビジネスパートナーにツバつけようっていうのかナ? それはボクとしてはヒジョーに不本意だなア」

道士服を纏う片目を隠した絶世の美女が二人の間に突如現れる。シユターク・ゴーズの符術式によるいわばイツセーの精神におけるマクロファージの様なものであろうか。

「うーむ、二対一では流石の私も分が悪い。となればココはピーピングポイントを作っただけで良しとしましょう」

肩を竦め、目を細めるとエスクロは霧のようにかき消えた。分が悪い、とは言うが勝てないとは言わない辺りが彼の豪胆さと厄介さというものだろう。付記すれば彼の主であるハマーマの底知れなさも伺いしれた。

『全く。相棒の魂は安宿ではないのだがな』

「全くだね。まあそんな放っておけない所が彼の魅力でもあるヨ。嘗ての赤龍王の如くネ」

『所で勘違いを避けるために言っておくが俺は相棒ほど貴様を信用してはいない。奴のためにあれこれ手を尽くしているからここに間借りしているのを目溢ししているのを忘れるな。無償の愛……俺はこの言葉を世界で一番信用せん』

「おお剣呑剣呑」

肩を竦めつつ、しかしゴーズは顔色一つ変えなかった。

この女もエスクロと似た手合か? いや、あるいは……。ドライグはそこで思案を中断した。これはあくまでイツセーの問題である。

王とは禅譲されるものではなく試練を越えて勝ち取るものだろう。そして古今の東西を問わず王の試練が簡単に乗り越えられるものであったためではないのだ。

イツセーside

う、うくん。昨日はちよつとやりすぎてしまったかもしれない。横でぐったりしているベラナディアちゃんを優しく介抱する。

「あ、ああん♥まだするのぉ♥」

つてすっかりエロエロデレデレな子猫ちゃんに……。

(先輩、最低です)

ああ！ 猫つながりか俺の中のイマジナリー小猫ちゃんから痛烈なダメ出しが！ そうだよな。欲望にまかせてやり過ぎてしまった！

「昨日はごめん！ ガマンできなかつたんだ！ 俺！」

キョトンとするベラナディアちゃんを差し置いて俺はやつすい土下座をする。

「べ、別にいいわよ？ 赤龍帝様をおもてなしできたのは光栄な事なんだし……」

恥ずかしげに顔を赤らめて彼女は言った。

うう！ やっぱりカワイイ!! 昨夜は彼女の魅力に翻弄されて我を失ってしまったていたけれど……改めて見ると絶世の美少女だ。燃えるような赤い髪に見るもの全てが吸い込まれそうな瞳。細くスラリと伸びた肢体に白い肌はまるで人形の様な美しさを持っている。

やはり義理とはいえルイーナちゃんの妹だ！ 根は素直ない子なんだな。

「フハハハハ！ 兵藤一誠様！ ベラナディア様と情交に耽るのはムールムール家のためには大変宜しいが！ ハマーマ様が九頭龍殿と併せて貴方と面談したいとの仰せですぞ！」

ドアの向こうからバカデカい声が轟く！

そ、そんな恥ずかしいことを大声で……！

俺とベラナディアちゃんはお互い真っ赤になって俯くしかなかつ

た。

1

「では改めて挨拶を。私はハマーマ・ムールムール。ムールムール家の現当主にしてバアル家の裏や日陰のことを取り仕切っています」

「は、はあ……」

女帝、という貫禄に気圧されそうになる。

喪服の様な黒いドレスに血を抜いたような白い顔、そして銀色の髪を後ろで纏めている。ルイーナちゃんやベラナディアちゃんの母親だけあって……美人だ！ でも、なんだか憂いを帯びた感じつかいか……。

「え、ええとお義母様……」

ルイーナちゃんがなにか言いづらそうに口籠ると安里が代弁する様に口を開いた。

「俺達の交際を認めて下さい！」

コイツ、いや、ルイーナは俺にとつてのかけがえのない存在です！  
安里がハマーマ様にしつかりと向き直って頭を下げた。俺もそれに続くように頭を下げる。

「どうか……安里達のことを認めて下さい！ お願いします!! コイツは見た目はちよつとエロマンガに出てくるNTRものの竿役みたいなナリですけどすげえいいヤツなんです！ ルイーナちゃんの事を絶対に幸せにできるヤツなんです！ 俺が保証します！」

って必死になりすぎて素っ頓狂な弁護をしてしまった……!!

「別段構いません」

紅茶をひとすすりしながら悠然とハマーマさんは交際を認められた。

ひどく事務的な態度にも取れなくもなかったが二人にとっては些細な事だ。

「まあ、意外ですね。てつきりどこの犬ころともしれない者に家の箱入り娘をやるかなんて言うかと思っていました」

「そうだね。それにアンタ、誰かさんの依頼でルイーナを始末しようとしたハーゲンに何の手も打って無いじゃんか。そのへんも誠意あ

る説明が欲しいよね」

じ、ジャンヌちゃんとスコグルちゃんが怖い……！俺ですらちよつと引くレベルに睨みを効かせてる！

しかしハマーマさんはそよともしない。

「そんな事を当事者でもない貴方がたに話す義務があるのですか？」

「ぐぬ……」

「そんな事よりも二人の交際を認めるにあたり、彼と貴方方の力を万人の前で示してほしいのです」

安里の力？ それはもうテロリストの汚名をマンモンのヤツに着せられたけどアイツをぶっ倒した事で示したじゃないか。

これ以上安里とルイーナちゃんに何かをさせようっていうのかな？

そしてハマーマさんから衝撃の発言が飛び出した。

「サイラオーグ・バルならびにリアス・グレモリー。彼らとレーティング・ゲームで戦い、勝利してもらいたいです」

リクエスト編（イツセー？シユターク、セラフオルー、七海、ベルフラウ、サクヤ）

「フハハハハ！ 見えましたぞハマーマ様！

兵藤一誠の心理的陥穽ならびに弱点が！」

「聞きましょう」

「ははーっ！ されば申し上げます！

かの赤龍帝は自分が誰かに裏切られるということを守るで考えておられません。その善性と大徳は美点ではありますが大器とは一度罅が入れば自壊するのは明らか」

「成程、東洋では埋伏の毒。西洋ではトロイの木馬。言い様は様々ですが彼のもとに裏切り者を忍ばせるか、不仲を招くための楔を打ち込もうというのですね」

「然り然り。幸いにしてこの間のベラナディア様との逢瀬で赤龍帝の方寸に我が分霊を忍ばせましたれば、彼の思考にある種の指向性をもたせる事は不可能ではありませんせぬ」

「いいでしょう。そちらに関しては貴方に任せます」

↓

どうも、兵藤一誠です！

この間は安里とルイーナちゃんに付き添ってハマーマさんに挨拶にいったワケだけどそこで安里とルイーナちゃんの交際の条件（？）としてレーティングゲームでリアスやサイラオーグさんに勝つことを提示されてしまった。

俺としては二人の交際を邪魔したくはないがリアスの夫として、更には生まれてきた二人の子供の父親として負けるつもりはない。それはサイラオーグさんも同様だろう。勝負の世界とは厳しいのだ。

でもなあ……。親友の将来を閉ざすのはどうよ？ という気持ちもあるんだ……。

ええい！ いかんいかん！

なんて堂々巡りをしてたら、スマホが鳴った。誰かと思えばセラ

フオルー様だった。

「やあ、イツセー君☆そっちの調子はどうか？ 何だかあつくんが大変なことになっちゃったみたいね〜」

ひよつとして安里から顛末を聞かされたのだろうか？ たしか安里はセラフオルー様とも男女の間柄になっているとアザゼル先生から聞いた。まあ、安里をあつくくんなんて呼べるのはセラフオルー様かニグラさん。

ひよつとするとナイアちゃんくらいだもんなあ……。

「そうなんですよ。つきましてはその事でセラフオルー様にお願いが……」

「ん？ なになに？ 何でも言ってみて？」

……赤龍帝説明中。

「そんなワケでセラフオルー様には安里とルイーナの交際について力になってあげて欲しいんです」

「ふくん……。イツセー君って結構ヒドいねえ。私があつくんとそういう仲だつて知つて身を引けつていうの？」

声のトーンが変わった。

セラフオルー様はジュデツカの構築に一役買っているほどの氷結魔法の使い手。思わず背中に寒気が走る。

いや、だがここは親友のためだ！

「はあ。確かにそう思われても仕方ないとは思いますが……、だが安里の将来を考えるとですね……」

「うふふ♪ ウソだよ☆ルイーナちゃんは私もいい子だつてわかつてるもの☆ハマーマさんはあまり彼女をよく思っていないみたいだけどね」

そ、そうなのか？ というかそんな親子があり得るのか？ うちの父さんや母さんを思い浮かべて俺は衝撃を受けた。血が繋がっていないければ何十年の思い出があらうと所詮は他人だつていうのか？ そんな考えは認めたくない。

「それに私があつくんの将来を左右するようなことするわけないよ。当然、イツセー君の今後の予定もちやんと確認してあるよ☆ 今夜時

間取れる?」

へ? 俺の今後の予定? 俺としては中級悪魔試験と修学旅行、更にはサイラオーグさんやルイーナちゃんとのレーティングゲームの対策とやるのが目白押しなんだけどなあ……。しかし、セラフオルー様とコネを作っておくのは今後の安里のこともあるし大事な事だ。

「は、はい。開けておきます」

ー

そんなワケで俺はセラフオルー様と会うことになったのだがそこで聞かされたのは……。

魔法少女レヴィア☆たんVS乳龍帝おっぱいドラゴンというコラボ企画であった。

「あ、あの……。確かレヴィア☆たんとおっぱいドラゴンは視聴者層が違うはずでは……? あと今の魔法少女レヴィア☆たんは確か……」

そう。テコ入れというか路線変更というか今はレヴィア☆たんRというアダルト版にシフトしていた筈……。安里が竿役でセラフオルー様だけでなく色んな女の子とそれはもう酒池肉林……。ソドムとゴモラ。

くそ、うらやまけしからん! ここは親友としてね愛のムチではないがルイーナちゃんに言いつけてやろうか……。しかしセラフオルー様はこう続けた。

「大丈夫大丈夫! 今回はレヴィア☆たんのピー周年記念と特別企画ということで全年齢版で行くことにしたから☆ 当然おっぱいドラゴンとコラボして大人気を博したレヴィア☆たんも続投だよ! イッセー君は何が不満なの?」

「いや、不満と言いますか……。なんかこう釈然としないものがあるというか……」

「そんな細かいことは気にしない☆」

何だか押し切られてしまった……。

けどまあ、悪い様にはならないよね?



そんなワケで撮影に入ったワケなんだけど……。

「うくん、なんかちよつと違うのよね〜」

と、ダメ出しをするのは今回のスポンサーである上級魔族のお偉いさんだ。何でも冥界のヒットメーカーだそうで、今回の企画に参加してもらったのだそうだ。

俺の演技がまずかったのだろうか？ この企画がポシヤツたら安里とルイーナちゃんの未来に暗雲が……。俺は慌てて弁明する。

「も、申し訳ありません！ 今後も一層の研鑽を積んでより良い作品を作りますのでどうかもう一度チャンスをください！」

「ああ、そうじゃなくてね。イツセーちゃんもセラフオールちゃんもナイス演技よ。グーよグー！」

どうやら俺やセラフオール様の演技に問題があつたワケではないみたい。

「問題はヴィランの方よね〜。顔が良くて槍とか見栄えのするアクションが出来て美女を侍らす様も絵になる感じの男と怪しい魅力のある魔道士とかそういう感じのを……。そういうラスボスが今は美味しいのかしら？」

何だかブツブツと独り言を続けるお偉いさん。

「そう言えばヴァーリちゃんは最近どうしてるのかしら？ 今こそ彼を起用すべき時なんじゃないかしら☆そうよ、彼ならヴィランにぴつたりじゃない☆」

セラフオール様が名案を浮かべた！ といった表情を浮かべる。いや、アイツはテレビとかに出たがるタイプじゃないですから！

「寧ろアザゼル先生が適任なのは」

「うくん。ダメね。今の奥様やおませさん達はガツガツした感じのおっさんに拒否反応を示すのよ〜」

お偉いさんは頭を振って却下した。う、うくん。となると……木場？ でも木場は女を侍らせるイメージが全然湧かない……けど怪しい魅力のある魔導師ポジションの女性ならうってつけの知り合います！ そんなワケで俺はシユタークさんに連絡を取る事にした。

「ああ、いいともサ。けどボクはテレビ映りが悪いけど大丈夫かい？」  
急な話だが彼女は快諾してくれた。

しかもお偉いさんのイメージするヴィランにピッタリの男性に心当たりがあるらしい。何から何までお世話になりっぱなしでホント、シユタークさんには頭が上がらないなあ……。

「それでは我ら生まれた日は違えども死す時は同じ日、同じ時を願いまして乾杯」

「それは桃園の誓いですよシユタークさん！」

そんなこんなで撮影は無事終了し今はセラフオール様主催の打ち上げの真っ最中だ。

なんでもここはセラフオール様の親戚が経営している会員制の料理屋さんなのだ。

スポンサーのお偉いさんや一部のスタッフは既に帰宅したけどね。しかし、何でまたシユタークさんは七海と呂布を連れてこれたんだろう。

七海は曹操の愛人だし呂布は叛英雄とはいえ英雄派の一員なんだから。

まあ、そのへん冥界はゆるゆるだから。

【力あるものが好きなのように変えられる世界】として数百年、数千年も維持されてきた世界だから俺達とは価値観が違うんだろう……ほら、昔の日本で言う坂東武者的な？

「ほお、暫く見ぬ間に男ぶりを増したのではないか赤龍帝？」

いきなり炭酸水を酌してきながら七海が語りかけてきた。悪の女幹部役として抜擢された彼女は黒を基調にしたボンテージスタイルのコスチュームで、露出度は高めだ。

何だよその尋常じゃないハイレグ。小さい子の性癖が破壊されるだろ!!

「いや、それはどうも……。そ、それよりなぜ撮影が終わったのにそのままの姿なんだ？」

「ふふふ、とぼけおって♥男はこうした女の格好を好むのであろうが

♡

ぐいぐいと迫ってくる七海。ち、近い！ 顔とおっぱいが近い！

この若作りのひよこBBA！金髪だけに

しかし今すぐトップアイドルやれるんじゃないかって見た目だから実にそそられ……ゲフンゲフン！

「俺の好みではないがな」

「貴様などには聞いておらぬ！」

端で豪華な料理を他所にして、塩を着にちびりちびり、と杯を舐めるように飲んでいた呂布がぼそりと呟くと七海は牙を剥くかのよう

に怒りだした。

そっか。呂布はアジアとかの清純系が好みなのかな。あ、そう言

えば……。

「あの、貂蟬の事なんだけど……木場のヤツが悪かったな」

別にコロしたワケじゃないけど尋問(?)の結果すっかりアイツにメロメロになってしまったらしいので俺が代わりに謝しておく。まあ……向こうもナイアちゃんをボコボコにしたからおあいこなんだけどさ。

「構わん。動乱の世であればなお人の心は移ろうものだ」

呂布は何でもない事の様

に言った。

あれ？ なんか哲学的？

呂布のイメージって言えばもっところ

暴力！ 裏切り！ 世紀末！ って感じなんだけどな。

「呂布さん、このお肉美味しいですよ？」

「む、そうか」

そんな俺の思考を読んだのかベルフラウちゃんとサクヤちゃんが呂布に料理を取り分けた。二人共すっかりメイドが板について俺も鼻が高いよ……。ってやっぱり女怪人役の姿のままだし!!

「そう言えばさ、何で曹操とつるんでるんだ？ 確か歴史じゃ負けた相手じゃん」

「浮世の義理というものだ」

「ホホホ。天下の飛將軍にして虎狼の如くと誇られたお主から義理と

という言葉が飛び出すとは。雨乞いでもするつもりかえ」

「……そうだな。俺らしくもなく喋りすぎた」

七海の抜き身の刃じみた煽り気味な発言を

これまた鞘のように呂布は腹に納めた。

し、シブいぜ……。

「あ、そう言えばそのアーマードデビルマンじみたカツコはともかく何で方天画戟を使わないワケ？ 何か宝具とか切り札的なモンだったりするのかわ？」

とはいえ、撮影の時に武器から龍のオーラをぶっ放してきたのはビビった。中国だからか青龍のオーラなんだろうか？ しかもこつちを追尾する性能まであるんだからな……。

「まあ、そんな所だ」

「おやおや、イツセー君。こんな華やかな席でむさ苦しい話は無しにしない力？」

これまたとくとくと呂布に酒を注ぎながらシユタークさんが割って入った。

呂布は豪胆というかまるで鯨みたいに盃を軽々と飲み干してしまった。

やはり天下の飛將軍の異名ゆえか酒の強さも天下一品らしい。などと感心していたらスツ、と盃を手渡してきた。

俺、転生悪魔とはいえ未成年なだけど!? というか前にも似たケースがあったような……!?!

「おや？ おやおや？ まさか尻尾を撒いて逃げ出すのではあるまいな？ ほほほほほ！ やはり甘ちゃん坊やの赤龍帝はリアスの乳の方が口に合うのかのう？」

「な、何を言ってるやがる！」

七海がここぞとばかりに挑発してくる。これはアレだよ！ パリコレとかテンプラとか……つまりそういう感じ!! お前ら昭和……いや中世以前の価値観とは違うんだい！

「もしかして、それはポリコレとコンプラかや？」

は、恥ずかしい！ 思い切り間違えてしまった!! だが俺はへこた

れない!

「へー、良く知ってるなあ。七海さんは物知りなんスね」

引くは一時の恥! 百戦して百勝というワケにはいかないのが人生! 再起できるならば負けつぷりは潔くな!

「……貴様はあの男に似ているな」

「誰に? 曹操」

「戯けめ。貴様と曹操殿が並び立つか」

なんて空元気で自分を奮い立たせしていると呂布がぽつりと呟いた。あの男? 一体誰だろうか……曹操と俺とは似ても似つかぬと思うんだけど。あと七海の辛辣な批評はいいから。

「そうではない。漢中王……というのを知っているか? 嘗て漢を興した高祖・劉邦はその地で国土無双・韓信を見出しついに霸王・項羽を斃すに至った」

「その漢中王に俺がそっくりって事?」

褒められて悪い気はしないな。面映ゆきを感じながら俺は側にあったジュースを飲む。うん、うまいなーこのオレンジソーダ。ちよつと薬品臭いけど!!

「あつ、イツセー様……それは」

「まあまあ。とはいえ劉邦は晩年猜疑心の虜になって人と会うのもいやがる様になったとも聞いている。キミはそんなつまらない大人にならないでくれたまエ」

「はい! オレは一生おもしろーヤツでいるっスよ!! ガハハハハ!!」

おお? おおつ? 何だか楽しくなってきた!

そうだ! 英雄派だの禍の団がなんぼのモンじゃ焼きじやい!

ヴァーリとだつてわかりあえたんだからこのメンバーともきつとわかりあえる!

ああ! そうだ! 空には線はねえし器にだつて仕切りはねえ!

「はいはい、飲んで飲んで」

「イツセーの♪ ちよつといいトコ見てみたい♪」

ななみんが手ばやしに俺のコップに酒を注ぐ。おー! リアスの

乳だけでなみなみんもシユタークもサクヤもベルフラウもセラフォルーもまとめてぐびぐび虞美人草！ 性霸王の気概を見せてやるわーい！

「悪い酒癖がつくと将来災いを招くぞ。俺にはそれで身を滅ぼした身内がいる。飲むなどは言わぬが慎むことだ」

「うるせえな呂っちゃん！ 俺はもう大人なの！ だからぱーつとやらかしたっていいの！ さあ飲めーい!!」

「……仕方のないヤツだ」

ー

「ふー☆」

店の中のテラスにてセラフォルーは涼んでいた。冥界の酒は人間界のものと比べて度数が高く 話も盛り上がった為に酔いがまわったのもあるのだろう。

そんな時シトリリーから電話がかかってきた。

（わお☆愛しのシトリリーちゃんからお電話がかかってくるなんて！ コラボ撮影もパーフェクトな出来になったし今日は魔王生最高の日ね☆）

感涙に咽びつつも

セラフォルーは通話ボタンを押した。

「もしもしシトリリーちゃん？ どうしたの☆」

『お疲れ様です、姉様。リアスからイツセー君はどうしているのかと電話がありました』

セラフォルーに尋ねるということは恐らくイツセーはリアスの電話に出なかつたのだろう。

「うんうん、イツセー君ならさつきまで一緒に打ち上げをしてたんだけど寝ちゃっててね。イツセー君のお部屋には誰か呼んで送っていつてもらうわ☆」

実際には眠ってはいないのだがこれは方便

というヤツだろう。

『そうですか。それではお騒がせしました』

「いいよいよ☆シトリリーちゃんのためならお姉ちゃん、何だつて

「やっちやう！」

これは方便ではなく真実の吐露であった。

その心はシトリーにも確かに伝わり彼女の胸を打った。

『姉様……』

確かに姉妹の絆はそこにはあった。

あつたのだが……。

「あつ♥ ああつ♥ あつ♥ ああ♥」

そんなしんみりとした空気を台無しにする艶やかな喘ぎ声。

『姉様？ 今の声は一体……？』

「あ、ああ！ 何でもないの☆じゃ、また☆」

セラフオールは咄嗟に取り繕い電話を切る。恐らく声の主は七海であろう。

「全くもうイツセーくんてば！ 姉妹の貴重な時間を台無しにするなんてー!!」

「ちよつと頭を冷やしてもらわないと！」

頭どころか全身を凍結させかねない程の魔力を溢れさせながら、セラフオールは店内へと戻っていった。のだが……。

ー

「あつ♥ ああつ♥ こ、こんなの♥ こんなのいやじゃ♥♥♥ 曹操以外の男に犯されるなんてイヤじゃあ♥♥♥」

「どの口が言ってるんだこのエロひよこギツネBBA！」

「ヒヨコらしくピーピーデカケツを振りながら鳴いてみせろ！」

『Transfer!』

「ああ♥♥ 曹操！ 助けてたもれええええ♥♥ 妾の身体あ♥ この男に改造されてしまおううう♥♥♥」

など言いつつもテーブルに突っ伏しながら身も世もないといった風情でよがりまくる七海。みれば胸も尻も先程よりも一回り大きくなっている様な気がする。

と、いうよりイツセーの性格が激変している様にもセラフオールには感じられた。彼女の知る限りこの様な暴力的なセックスで女性を屈服させることを好む男ではなかった筈だ。

「イツセー君？ 一体どうしちゃったの？」

セラフオルーは恐る恐るイツセーに尋ねる。すると……。

「ああ、セラフオルーさん。ちよつと七海が俺を挑発するものだから。わからせというヤツですね」

「わ、わからせ……？」

悪びれもせずイツセーは言う。その間にも七海の尻と乳房に爪を立て、自身の腰を落としてペニスを根本まで突き入れる。

「んひいいいいいっ♡♡♡」

七海はたまらず悲鳴をあげるがイツセーの腰の動きは止まらない。それどころか更に激しくなる一方だ。まるで玩具を与えられた欲求不満の幼児の様に破壊することを愉しんでいるかのような快樂責めが七海に襲いかかる。

「ほら、もつと締めろよこの駄肉BBA！ お前の身体はもう俺のものだし、お前の心だつてとつくに俺に屈服しているんだからな！」

イツセーはそう言いつつ七海の胸を揉みながら乳首をつねる。その痛みと快樂に七海は更によがり狂う。そして……ついにその時が訪れた。

『Transfer!』

「あひいいいっ♡♡♡お、お主の♡お主の能力のせいっ♡能力のせいじゃあ♡妾のマンコを犯しながらっ♡ おっぱいを絞りゆからああああ♡♡」

七海はイツセーに犯されながら絶頂を迎えた。しかしあふれる涙は決して屈辱や羞恥によるものではないことは明白で七海は自ら腰を振り立ててしまう有様だった。

「んひゃあああっ♡いやじゃ♡いやじゃあっ♡こ、こんな浅ましく乱れるのは妾のあるべき姿じゃにやひいいいいいっ♡」

ぷしやっ！ ぷしやあっ！ まるでスポンジが握りつぶされて水を噴き出すかの様に母乳と愛液が七海の秘所から噴出しフェロモンが部屋を満たしていく。

「はあっ♡ハアっ♡はあーっ♡♡♡」

イツセーに散々イカされた七海はトロンとした瞳で虚空を見つめ



ることしかできなかつた。その体軀はすっかり様変わりして豊満な乳房や尻はさらにボリユームを増し、もとより美しかった顔立ちにも妖艶さが増していた。狐の尾はまるで白旗を振るかの様にふりふりと振られている。

その尾のふさふさとした毛並みが女性の体のあちこちに張り付いた精液を拭き取るかの様に擦れて七海にさらなる快楽を与えるのだった。

「お、おおっ♥尻尾♥尻尾気持ちいいっ♥♥♥チンポ汁♥チンポ汁吸い取ってイク♥♥♥イクううう♥♥♥」

陰核や乳首、更にはアナルに精液のこびりついた尻尾がそれぞれ纏わりつく刺激に七海は白目をむいて自ら堕ちゆく。

羞恥も屈辱も全て吹き飛ばされ、悦楽の底へと吞まれていく。

「ハハッ、これじゃ錦毛丸尾ならぬ陰毛丸尾だな七海」

（うぐううう♥妾は♥妾は、恥ずかしい♥♥だがしかしっ♥これ程の快楽に抗える女がどこにしようものか♥やはり赤龍帝には勝てぬのじゃ♥♥）

イツセーの蔑む様な嘲笑すらも今の七海は甘んじて受け入れてしまふ。寧ろ全身がかつかと燃えたぎり、まるで炉のように子宮の中が熱くなつていく。

（ああ、もうダメじゃ♥妾はこの男に屈服する運命なのじゃ♥♥）

そして七海はイツセーの腰に足を絡める様にして自らその豊満な尻を密着させる。バックから海老反りという奇妙な態勢故かその快楽は尋常のものではなかつた。

『Transfer!』

「おおおーっ!?!」

更に譲渡の権能により快楽が増幅されてゆくのだから七海程の女であつても耐えられる筈がなかつた。

「んほっ♥♥♥おほおおっ♥♥♥

ゆ、許して♥許してたもれイツセー♥♥♥そなたのチンポ凄すぎる

♥♥♥」

完全に屈服し、ペニスを膣穴全体で啜え込みながら七海は自らの敗

北を認めた。

敗者に憐れみではなく快樂を与えるのは勝者としての慈悲であいわんばかりと、イツセーは七海を徹底的に屈服させるべく更に腰の動きを激しくする。

「そう言えば九尾の狐の力は殺生石に封じられているんだっただか？  
なら七海が石女かどうか確かめてやるよ」

「……ひっ!? そ、それだけは!？」

それだけはああ♥♥♥

——孕ませてやる。言外にそう告げられた七海は恐怖に身震いするが子宮がきゅん♥と疼き期待している自分に気づき更に混乱する。そして、それは更なる混乱を生むだけだった。

(妾はもう駄目じゃ♥♥この男には勝てぬ♥♥♥)

イツセーの腰使いに翻弄されながら七海は事実を認めるしかなかった。最早自分は完全に堕ちてしまっているのだ。と。

「フフっ……流石だネイツセー♥まさかあのエロひよこを屈服させちやうなんテ」

主の凄まじさに絶句しつつも憧憬を抱いてしまうサクヤとベルフラウを差し置いてシユタークは満足げに笑みを浮かべる。

まるで悪の組織の首魁の様にだ。

そしてその視線の先ではいよいよ七海の胎内にイツセーの精液が流し込まれようとしていた。

「ついでにコイツもくれてやるよ」

「ふえ……? おっ!? おほおおお!!」

七海のこめかみにイツセーの指が触れると先端から微弱な電流が流れた。数多の女性を虜にしたゼウスより教授された『絶頂雷撃』(クリムゾン・シヨック)によるものだ。

「おっ♥ひいっ♥ひいい〜♥♥♥

だめえ♥ああおお♥♥♥だめへえ〜♥♥♥」

絶頂雷撃を呼び水として悦楽の破城鎚が七海の脳天に見舞われるや血湧き肉躍るの表現そのままに全身の細胞が活性化していく。受精卵とペニスへの渴望が彼女の脳内を炸裂させ、まるで殺虫剤を浴びた

虫のように全身を痙攣させながら白目を？きつつテーブルに爪を立ててしまうほどであった。

「はぐう♥欲しい♥ほしいよお♥」

「どうした？ 古めかしい言葉遣いも忘れる位乱れちまってさ。まあいいや。なにが欲しいのかはつきり言ってくれよう。」

「あ、ああ♥ 精液♥ イッセーのバキバキに勃起したドラゴンチンポから妾のメス穴にい♥ザー汁ビュービュー中出ししてほしいのじゃ♥♥♥」

息も絶え絶えといった有様で七海は卑猥なおねだりをする。そしてそれを聞いたイッセーはニヤリと笑ったかと思うと一旦ペニスを引き抜いた。

「えっ……」

突然の喪失感に困惑する七海と視線が合った時、イッセーはそれは愉快そうに笑ってみせると再び彼女の秘所に剛直を突き入れた。

「おごおおおっ♥♥♥」

（あ、ああっ♥ やっぱりのチンポが最高なのじゃ♥♥ この男と交わっているだけで子宮がきゅん♥きゅん♥疼いてたまらないっ♥）

そして七海の耳元に唇を寄せると囁いた。

「良いぜ……一発で孕ませてやる」

それはこの上なく魅力的な囁きであった。理性や倫理を消し飛ばし、ただただ快樂に溺れることに七海は涎を垂らしながら屈服する他なかった。イッセーに孕まされるという事への無上の悦びを感じながら絶頂を越えて昂りへと飛翔してゆく。

そして……。

「ああああっ♥♥♥しゅごい♥しゅごしゅぎ♥♥ イッセーのチンポからドピュドピュ♥♥♥っってお汁が♥♥♥ ああっダメ♥イクっ♥ イツクううううう♥♥♥♥♥」

「そら、イケー！」

「あ♥ 熱いのきたああああああ……ツ!! 子宮でイクウウウウ♥♥♥♥♥ お腹っ♥ 裂ける♥ 蛙腹破裂しちゃううう♥♥」

子宮に精液が叩きつけられると同時に七海は盛大に絶頂へと達した。まるでヘリウムガスを詰められたゴム風船の様にその腹は膨れ上がった。九尾の尾と尻は愛液と精液との混合液に塗れ、浅ましくもある意味前衛芸術の様な様相を呈していた。

「ふう……良かったぜ七海」

「あ♥あひっ♥あひ♥」

イツセーが離れた後も七海は床の上で混合液まみれのメス腰をへこへこくねらせ、鼻息荒く子宮アクメを繰り返す。

粘りも濃度も精液とは信じられないくらいにまで濃縮された精液は一滴たりとも彼女の胎内から溢れる事はなく、ただただ七海の身体を淫靡な熱と魔力で支配する。

まさに妊婦の様に腹部を膨らませ、七海は快楽に蕩けきった顔で絶頂の余韻に浸っていた。そしてその七海の痴態に、始めからイツセーを慕うベルフラウとサクヤが耐えられる筈もなかった。

「ん……？」

二人はイツセーのペニスに砂糖に群がるアリの様に殺到する。そして、

「はむっ♥」

「ん……んっ♥」

左右から同時にそのペニスをしゃぶった。イツセーが七海に中出ししているのを見ていたためにか既に二人の秘所は洪水状態であり床にはポタポタと愛液が垂れ落ちていた。むちりと美尻が揺れ淫らに形を変えるがそれを気にする余裕など二人にはない。

「ん……♥」

イツセーは二人の奉仕を黙って受け入れて頭を優しく撫でつつも『絶頂雷撃』を発動する。

「ふぎいいいいっ♥♥♥」

「おほっ♥おとおおんっ♥♥」

たちまち頭を襲う快楽に二人は犬の様にだらしなく舌を突き出して悶絶し、口腔奉仕を中断してしまった。

「ははは、ごめんな二人共。二人が可愛いからついイジワルしたく

なっちまった」

「うう……♡ひ、ヒドいです御主人様♡」

「で、でも普段のお優しいイツセー様とも違う今のイツセー様も……素敵です♡」

快感に泣きながらもどこか恍惚とした表情を浮かべる二人にイツセーは優しく微笑みかける。その表情には七海へ向けたものとは違った甘さが感じ取れた。

ベルフラウはうつ伏せの態勢、サクヤは仰向けの態勢で自らの秘所を左右に開いてハメ乞いする。

「御主人様……どうか♡サクヤのマンコに、その逞しいおちんぽ様を……♡」

「サクヤだけではなく私にも……♡」

「ああ、勿論だ。二人とも……愛してるぜ」

「ああ♡♡♡」

愛の囁きだけで危うく達してしまいそうになりつつも、二人は自らイツセーの剛直を受け入れる。

「おお♡♡んほおおおお♡♡♡」

「ひいっ♡♡しゅごいっ♡♡♡♡♡ 御主人様のおちんぽ様でサクヤの子宮がいっぱいですうううううう♡♡」

ベルフラウは獣の様な喘ぎ声をあげ、サクヤは歓喜に全身を震わせる。

「まだまだ始まったばかりなのにちよつと飛ばしすぎじゃないか？」

「そんなことお♡♡あん♡♡ありましえんうううう♡♡♡」

イツセーはベルフラウの子宮をノックする様に腰を動かす。すると彼女は激しく絶頂し、ぷしゃあっ！ と潮を吹きながら激しく身体を痙攣させるのだった。

「あひっ♡♡あひっ♡♡しゅごいっ♡♡♡♡♡」

「ああ、俺も最高に気持ちいいよ……ベルフラウ！」

「ああ♡♡嬉しい♡♡♡ 御主人様が私で気持ちよくなってくれて♡」

そのベルフラウの乱れ様に呼応するかの様にイツセーのピストンは激しさを増し、彼女の身体をがくがくと揺らす。

「おっほおおっ ♥♥♥ しゅごい い い い ♥♥♥ おまんこ気持ちいい い い い ♥♥♥♥♥」

「ずばあん！ と肉を打つ音と共にベルフラウは白目を？ いて舌を突き出しながら絶叫した。更に……。」

『Transfere!』

譲渡の能力によりベルフラウの尻がむっちりとした肉感的なものへと変わってゆく。それは所謂安産型というやつでイツセーは今まで以上に激しく腰を打ちつける事ができた。

「くっ……い いぞ。ベルフラウのオマンコも最高だ」

「ああ♥ありがとうございませしゅ♥♥ 御主人様に褒められてベルフラウのマンコきゅんきゅんしてますっ ♥♥♥」

日頃はクールな言動の多かった彼女だが、今やその口から紡がれるのは浅ましい言葉のみだった。そんなベルフラウの有様にサクヤは嫉妬の炎を燃やし、ベルフラウの尻穴に指を突き入れ、己の秘所を擦り上げた。

「んひい い い ♥♥♥ さ、サクヤあ ♥♥♥」

「ず、ズルい♥ベルフラウばかり……私も御主人様の指で責めて欲しいです♥」

ドロドロにとろけ、愛液でテカる妖花と化した陰唇とを自ら慰めながらサクヤはイツセーに懇願する。雄を魅了し吸引するその本分を存分に発揮するその様は、まさに淫魔の様であった。

「ああ……サクヤも可愛いよ」

イツセーはそう囁くとサクヤの乳首に指を近づけ『絶頂雷撃』と譲渡の力を発動した。

「ひっ!? あへえっ ♥♥♥♥♥」

そしてそのまま乳首をピンつと弾く様に刺激する。すると途端にサクヤの乳房は肥大化しコルク栓を抜いたシャンパンの様に母乳を迸らせた。

「御主人様あ♥♥♥ アアアアアッ!! 乳首気持ちいいですっ ♥♥♥」

若干慎ましかった胸は今ではすっかり大きく実り、ベルフラウに負けず劣らずの豊満なバストとなっていた。その先端ではビンビンと

いやらしく勃起し、今にもはちきれそうな程に張り詰めた桜色の乳首がその存在を主張していた。

そしてイツセーはそんなサクヤの乳首を指で挟み、指の腹で押し潰し、爪を立てて刺激する。

「んひっ♥♥♥ あへあああああつ♥♥♥ ちくびっ♥ 乳首気持ちいいれしゅううううっ♥♥」

「サクヤもベルフラウも……もっと乱れるんだ」

イツセーはピストンを激しくし、そしてそのまま乳首を強く抓った。その瞬間に二人は絶頂を迎える。

「イグううううううっ♥♥♥♥♥ 御主人様の指で♥ベルフラウと一緒にイギますううううっ!!♥♥♥♥♥」

「わらひも♥おほおおおっ♥♥♥♥♥ イクツ♥イツちやいますうううううっ!!♥♥♥♥♥ 下さい♥下さいませ♥リース様より先にイツセー様の赤ちゃんを♥ベルフラウに下さいませ♥♥♥♥♥」

二人は舌を突き出し、焦点の定まらぬ目のまま絶頂を迎え続ける。その淫らなイキ姿にイツセーは堪らずペニスを膨張させ射精した。

「ああっ♥イクっ♥♥♥♥♥ イキますうううううっ!!!♥♥♥♥♥」

「あああっ♥んひいっ!!♥♥♥♥♥ でてるうううううっ!!♥♥♥♥♥ 孕ませ汁いっぱい出てましゅううううううっ!!♥♥♥♥♥」

子宮に叩きつけられる熱の奔流と腹部の膨れ上がる感覚、そして胸にかかる熱い吐息にベルフラウは脳が蕩けてしまいそうな程の多幸感に包まれていた。

更に射精したばかりであるのにイツセーのペニスは些かも萎えず、サクヤの膣穴に容赦なく叩き込まれた。

「はひいっ♥♥♥♥♥」

「ほら、油断していちやダメだろサクヤ。

キミだつて俺の自慢のメイドなんだからしっかりしないとね?」

「はいっ♥♥♥しっかり♥♥♥しっかりイツセー様のオチンポ気持ちよくなります♥オマンコ締めますかりゃあ♥♥♥♥♥」

快楽に涙を流しつつも懸命にマンコキ奉仕するサクヤ。それを愛おしげに見つめながらイツセーはピストンを再開し始めた。

まるで吸盤の様にサクヤの柔肌はイツセーの胸板に吸い付きホルド

し、その極上の肉体がもたらす快感にイツセーは満足げな笑みを浮かべ更にピストンを早めた。

「ははっ……そろそろ射精すよ」

「はいっ♥♥♥一杯注いでくださいましいいいいっ!! ♥♥♥♥♥欲しい♥♥♥欲しいです♥♥♥私も♥♥♥ベルフラウのようにっ♥♥♥御主人様の赤ちゃん欲しいですっ♥♥♥♥♥」

「ああ、孕ませてやる……よっ!」

一際強く腰を打ち付けると子宮口にぴったりと鈴口を密着させ射精する。そしてそれを歓迎するかの様にサクヤの膺はきゅつと締めまり、イツセーの肉棒から精液を一滴も漏らすまいと言うかのように吸い付いてくるのだった。

「ああああっ♥♥♥嬉しい♥♥♥幸せですうううううっ♥♥♥♥♥イクツ♥♥♥イツちやいますうっ♥♥♥♥♥イグっ♥♥♥イツちやいますうううううっ!!♥♥♥♥♥」

そしてサクヤも盛大にイキ果てた。精液の熱さと幸福感にすっかり蕩けた顔になっており、その表情には最早貞淑なメイドの面影すら無かった。イツセーはそんなサクヤの頭を優しく撫でながらその耳元で囁いた。

「可愛いよ、サクヤ……愛してる」

「ん♥♥♥♥♥えへへっ♥♥♥御主人様あ……私もです♥♥♥愛してますうううっ♥♥♥♥♥」

普段の彼女ならまず口にしないであろう甘い言葉にイツセーはふっと笑うとセラフォルーに向き直る。

「へうえっ☆ わ、私は呂布くんに用事があるからちよつとそういうのは……」

思わず逃げ腰になるセラフォルーだが、シユタークに羽交い締めにされて身動きが取れなくなってしまう。

「まあまあ、たまにはいいじゃないか。」

キミには四大魔王として優れた子供を産むという使命があるわけ



だシ。

安里君とルイーナ君がいい仲になっている間キミだけ貞節を守れ  
というのネエ」

「そ、それは……」

セラフオールとて魔王とはいえ女だ。

安里とルイーナが深い仲になるのは納得しているし応援もしてい  
る。

しかし、だ。なんの感情も抱いていないと言えはウソになる。

「何も不倫、とか托卵とかそういう話じゃないヨ。安里くとイツ  
セーの子をそれぞれ産めばいいのサ。一人の男からだけしか子種を  
貰えないというのは大変なリスクも抱え込むことになる……」

ワインに泥の一粒、という喩えではないが退廃的な提案にセラフオ  
ールの意思は揺らいでいた。イツセーに抱かれているベルフラウト  
サクヤを見ていると自分の中の欲望が鎌首をもたげるのを抑えられ  
ない。

前途有望な二人の若手が自分を孕ませる願望を秘めているという  
事態に彼女の中で何か弾けてしまい、コクリと頷いた。

↓

そして始まったのは魔王から地母神へとセラフオールを変性させ  
るかの様な狂乱の宴であった。

『Transfer』

譲渡の権能と共に乳首に放たれる『絶頂雷撃』。その衝撃と快楽に  
セラフオールは歓喜の嬌声をあげ、身体を痙攣させて絶頂を迎えた。

「イギイイイ!? イグううううううっ ♡♡♡♡」

全身を仰け反らせ舌を突き出しながら無様にアクメを晒すセラ  
フオール。しかしながらそれはまだほんの始まりに過ぎないのだ。  
イツセーの持つ『絶頂雷撃』は十秒ごとに彼女の身体に快楽の火を灯  
してゆく。

「ああ ♡あづいい ♡アツひいいいいっ ♡♡乳首がっ ♡♡嘔き出しちや  
う ♡

助けてっ ♡助けてあつくん ♡♡♡」

安里に助けを求めるセラフオルーの乳房は忽ち膨らんでいく。膨れ上がった乳房から母乳を噴き出すセラフオルー。その量と勢いは尋常ではないものであり、あつという間に彼女の上半身を白く染め上げた。

「まあ、セラフオルー様ったら。

イツセー様に抱かれるというのに他の殿方に助けを求めるだなんて」

「安里様も素敵な男性なのは認めますがこれはいけませんね」

イツセーの精液を未だ胎内に納め、妊婦

の様に膨らんだ腹を抱えながらベルフ라우とサクヤがセラフオルーを詰る。

「だって♥だってえええええつ♥♥」

「言い訳はいけませんわ、セラフオルー様。イツセー様に失礼ですもの」

「そうですよ。それにこれはセラフオルー様の為でもあるのです」

そういうつつ二人はセラフオルーの乳首にその麗しい唇を這わせるとチューチューと母乳を飲み始めた。

「ひあああああつ♥♥♥や、やめてっ♥♥二人とも♥♥」

乳首を吸われる快楽にセラフオルーは髪を振り乱しながら絶叫し身悶える。二人はそれぞれ右乳をベルフ라우が左の乳房をサクヤが責め立てる。クリトリスやペニスに等しい性感帯を二人同時に刺激され、セラフオルーは無限に湧き出るかの様な快楽の奔流に脳がショートしそうだった。

更にクリトリスやラビア、膣穴を二人の細指によつて責められる。二人のコンビネーションは絶妙であり、セラフオルーの様々な性感帯を刺激し合い高め合つてゆくのがあった。

「ひいいいっ♥♥♥そこっ♥♥だめえっ♥♥やめてええええええつ!!」

二人の唇から母乳が漏れるくらいに激しく貪られ、セラフオルーはついに絶頂してしまった。

「おほおおおっ♥♥♥イクっ♥♥イツちやうううううっ♥♥♥

あつくんやイツセーくんのオチンポじゃないのに♡♡♡アアアアアツ!!」

腰をガクンガクンと痙攣させ、そしてプシャッと彼女の膣からは潮が吹き出る。

くぱくぱと酸素を求めると金魚の口のように

受胎に不可欠な子種を求めて蠢く彼女の膣口は、その向こう側でビュルビュルとシユタークのパイズリ奉仕によって白い塊をひり出すイツセーのペニスとはまるで対照的であった。

「あはああつ♡イツセー君♡♡イツセー君のおちんぽっ♡♡♡熱くて硬くて素敵いつ!♡♡♡」

「ふふ、この間はシユタークさんに翻弄されちゃいましたけど、今日こそそうは行きませんか?」

フルネルソンの態勢でシユタークの膣穴にペニスを挿入し、しつかりと腰を密着させたまま抽挿する。一方でベルフラウはセラフオルーの尻肉に顔を埋めるとその菊門に舌を突き入れ舐め回し始めた。

「おほおおおっ♡♡お尻の穴あ♡♡」

イツセー君とシユーちゃんのセックスする所見ながら二人にまたお尻ほじくられてるううううっ♡♡」

「んぶっ、ふっ♡ふふ、私の舌技でまた気をやりそうになってますね?

セラフオルー様」

前と後ろの穴を同時にメイドから舌によって犯され、淫らな水音を部屋中に響かせながら快楽の虜となるセラフオルー。そんな彼女に更なる追い討ちをかける様にベルフラウは更に激しく尻穴に吸い付いた。

「ひぎいいいいいつ!?♡♡♡おほおっ!♡♡イグウウウツ!!

♡♡♡アナル舐め♡激しすぎイイイツ!♡♡♡」

ぷしやあつ!! と何度目かもわからない絶頂を迎え、快楽に染まりきっただらしのないアへ顔を浮かべるセラフオルーをイツセーはシユタークの胎内を刳り、かつセラフオルーと同様に乳房に譲渡と絶頂雷撃による刺激を与えながら不敵に笑う。

「どうですかセラフオルー様?」

「んはああっ♥気持ちいい♥気持ちいいよお♥♥♥こんなの知らないっ♥知らなかったのおっ♥♥♥だけど♥♥♥」  
「だけど?」

わざとらしくイツセーはセラフオルーに続きを促しながらシユタークの態勢を変えながら犯し続けている。背後から抱きかかえられる形となったシユタークの乳首と仰向けの姿勢で膣穴と尻を責められるセラフオルーの乳首が触れ合い、そして互いの母乳を混ぜ合わせる様にして三人は更に快楽を深めて行った。

「あひいいいっ♥♥♥乳首いいいっ!♥♥♥♥♥」

「セラフオルー様のおっぱいもすっかり大きくなってきましたね。ほら、シユタークさんの胸と擦れる度に気持ちいいでしょう?」

「き、気持ちいい♥シユーちゃんとの乳首レズセックス気持ちいい♥飛ぶっ♥飛んじやうっ♥♥♥けど♥欲しいっ♥

私もチンポ欲しいのお♥♥♥」

セラフオルーは快楽に蕩け切った表情のままそう叫ぶと、腰を突き出し自らグラインドさせる様にして膣内と腸内の感触を味わいながらイツセーの剛直を求めた。そんなどこまでも貪欲な彼女に対し、イツセーもそろそろ限界だったらしくラストスパートをかけるようにシユタークの身体を責め立てた。

「んひいいいっ♥ボクも♥ボクも気持ちいいっ♥♥♥イツセーとセラフオルーとの3Pセックス♥♥♥気持ちいいよお♥♥♥」

すっかり汁まみれになったセラフオルーとシユタークは理性が蒸発してしまっただかの様に快楽を貪り合い、そして同時に絶頂を迎えた。

「イクっ♥イツちやうううううっ♥♥♥」

ぷしやああっ! と盛大に潮を吹き上げ絶頂する二人。そしてそのタイミングに合わせ、イツセーは思い切り腰を突き上げるとまずはシユタークの胎内に大量の精液を解き放った。

「おおおーっ♥♥♥孕むう♥イツセーの精液がボクのおマンコ全部に注がれてるううううっ♥♥♥」

やはり、というべきかベルフラウやサクヤと同様にシユタークの腹

がぼっこりと膨らんでいく。そしてそれと同時にセラフオルーとシユタークの乳首から凄まじい勢いで母乳が噴出し、二人は互いに相手の顔にたっぷり乳白色の液体を浴びせあつた。

「んはああああん♥♥♥シユーちゃんごめんね……お口にもかかっちゃつた♥」

「ううん♥大丈夫……んっ♥ちゅっ……っちゅるっ」

そうして互いの母乳塗れの顔を雌犬達の様舐め合う二人。そうしている間にイツセーはシユタークの膣から肉棒を引き抜くと天を仰いで横になる。

「えっ……。イツセーくん、私は？」

「アハハ。セラフオルーってばお預けを食らつたワケじゃないのにガツカリしちゃつて」

「そうですよ。セラフオルー様は魔王の立場がございますから♥イツセー様と言えどお気持ちを無視して犯すワケにはいきませんもの」

「あ、あう……」

「どうしても、と仰るならセラフオルー様が自らイツセー様に跨り腰を振るのがよろしいかと」

「そ、そんなあ……」

暗にもうイツセーと安里二人の女になることを自ら示せ、とベルフラウ達に言われ、セラフオルーは耳まで真っ赤にして恥辱に打ち震えた。しかしそれでも身体は疼いて仕方がないのだ。卵巣も子宮も、全ては目の前の雄の精で孕みたいと叫び続けている。そんな合唱にセラフオルーは耐えられるはずも無く……。

ずぶぶ♥じゅぶるるう♥♥♥

（ああ……♥こんな下品な音を立てて男の腰に跨るだなんてえ♥♥）

自らガニ股に足を広げ、激しく上下に腰を振って男根を啜え込む。

「はあ♥ああああっん♥♥♥イツセーのおちんぽ気持ちいいっ♥♥しゅごいいいいっ！♥♥」

そして遂には自分から快楽を求め始めてしまう。その浅ましさに絶望する一方で、そんな自分を肯定するもう一人の自分があることにセラフオルーは気付いてしまっていた。

(ああっ♥ごめん♥ごめんねソーナちゃん♥こんなエッチなお姉ちゃんでごめんなさい♥でもっ♥私、もうこの快樂には逆らえないのお♥♥)

「ああああん♥イツセー♥イツセーくううん♥しゅきいいっ!♥♥大好きいいっ!♥♥」

もはや理性は完全に消し飛び、彼女は一匹の牝と化しつつあった。そしてそんなセラフォルーに同調したのか彼女の乳房から溢れ出す母乳も勢いを増していく。

今の彼女の脳裏にはイツセー、そして安里の子を抱きかかえるソーナの姿が浮かんでいた。果たしてどんな顔になるのだろうか。そんな想像をするだけでセラフォルーの興奮は更に高まってゆく。

そしてその背徳的な興奮はイツセーにも伝播していき、二人は遂に限界を迎えた。

「出るっ♥♥セラフォルー! 中に出すぞ!」

「うん♥出してええええ♥♥私のオマンコにザーメンぶちまけてえええええええっ!!♥♥♥♥」

その瞬間、まるで噴水の様に凄まじい勢いで熱い奔流が彼女の膣内を満たしていった。

「おっほおおおおおおおおおおおおおおおんっ!!♥♥♥♥イ

グううううううっ!!! イツセーくんの赤ちゃん孕む♥

ごめん♥ごめんねソーナちゃん♥まだ学生なのに伯母さんにしちやってごめんねええええええっ♥♥♥♥」

これでもかというくらいに結合部を密着させ、腰を揺すりながら絶頂を味わうセラフォルー。やはり彼女の腹も妊婦と見紛う程に膨らみ、そしてそこからは大量の魔力が胎動する様にして彼女の全身を駆け巡る。

「ああ……♥♥♥しゅごいいいい♥♥♥イツセー君の赤ちゃん孕んだのわかるう♥♥♥」

「くうう……ヤバイ……セラフォルー様に種付けセックス……ハマっちまうかも。」

「この一度だけじゃ……」

互いに禁断の快感を子宮とペニスから感じながらセラフオールーはイツセーの胸板ゆつくりと倒れ込んでいった。

「いや〜……久々にボクも本気で堕ちちやうと思ったヨ。まあ、これでエスクロやハマーマの企みの一つは潰せたって感じでもいいかな」  
「しかし良いのか？ あのイツセーのメイド達はともかくセラフオールーや七海まで赤龍帝の下僕にさせては貴様の目的にも支障が出るのではないか」

「飛將軍のくせに心配性だなア、キミは。まあテキトーに誤魔化しておくから君は七海の介抱を頼むヨ♥」

「あ、ああ……♥今度はそなたが妾を抱いてくれるのかや♥ヘラクレスや曹操にも引けを取らぬ叛英雄……いやさ英雄を超えた聖君であるそなたの寵愛を受けるのは妖狐たる妾にすれば至上じゃが……」  
「渴しても盗泉の水など俺は飲まぬ」

イツセーside

「う、うくん……」

俺はお店のスタッフルームにて目を覚ました。すつげえ頭が痛い……あと胃がキリキリするんだけど……。

『当然だ。ハメを外して呂布と酒盛りをした挙げ句我を忘れる程に酒に飲まれるからだ』

「あはは、ごめん……」

どうやら俺はやらかしてしまったみたいだ。しかし二日酔いにしててもなんかこう……凄まじくげっそりする感じがする。

『それはそうだろう。昔サーゼクスから乳に譲渡の権能を使ったらどうなるか、と言われた事を思い出すや実践し始めたのだからな。俺の倍化の力はノーリスクではないのだぞ？』

そ、そんな破廉恥な事を……？ うう、うっすら記憶がある。ベルフラウちゃんやサクヤちゃんが俺のいう事を何でも聞いてくれるからつい調子に乗ってしまった……！

バカ！ バカ！ ウカツ！ 俺のバカ！

『何を今更。このくらいすればあの二人の心がお前から離れる事はないだろうからな。とはいえ少しは慎め』

まったくだ……。今後はあんな事は控えよう……。

「あつー！ イッセー様！」

「まだご無理をなさってはなりません。」

「ご自愛下さいませ」

傍らの二人は俺に失望することもなく甲斐甲斐しく世話を焼いてくれる。

あれ……。他にも七海やシユタークさんにもあれやこれやしたような……。ダメだ。

この辺りはまるで記憶がない。



リクエスト編（安里？スコグル&フレイヤ イッセー  
？ロスヴァイセ+α バルドル？ニグラ&トウー&  
キユクロ 非NTR）

さて、イツセーが酒池肉林の最中に会った頃……安里とルイーナは  
珍しくイチャコラではなくうーんうーん、と面を突合せて唸っており  
ました。と、言うのもレーティングゲームに参加するにあたってメン  
バーを集めねばならぬとあいになりましたワケで。

↓

「安里にニグラさん、ナイアさん、煉獄さん、ランサーさん、ジャンヌ  
オルタさん、ニトクリスさん、セルベリアさん、キユクロちゃん、そ  
れにスコグル……。すごいメンバーだね」

ルイーナはメンバー表をみながら呆然としていた。まあなあ。  
ボールクの旦那は無理だったがこのメンバーならサイラオーグさん  
達やイツセー達にも引けを取らねえもの。

「おーい、安里いるかー？」

「いませーん」

アザゼルのおっさんの声がドア越しに聞こえ、安里は耳を塞いで返  
事をする。

「いるじゃねえか、古典的な手を使いやがって！ やれ、キユクロ！

通り抜けフープ（物理）だ！」

「うむっ」

ドガオン！ と凄まじい音でドアを破壊しながらアザゼルのおっ  
さんとキユクロが部屋に乱入してくる。何てことをキユクロにさせ  
やがるんだこの墮天使総督は!!

「つてなんだルイーナも一緒か。なら話は早いな」

目ざとくルイーナの姿を確認したおっさんは顎を擦りながらうん  
うんと頷く。このおっさんが張り切る時は大概ロクな事にならねえ  
んだよなあ……。つてキユクロの後ろにはスコグルが!? しかも口  
スヴァイセさんまで？

「あはは……なんかゴメン」

「いいよ、私とスコグルの仲だもん」

いや！　ここ人の家だからなルイーナ！

明るくなってくれたのはいいが凶太さも増したのでは……いや、これはこれで！

「なーにどうせ後で俺が直してやるからいいんだよ！　それよりだ。お前らレーティングゲームのメンバーを探しているんだったよな？」  
どこから話を聞きつけてきたんだか……。

何だ、どつかから紹介でもしてくれるのか？　言っておくが墮天使を紹介されても俺達は困るぞ……。

「バーカ、違うよ。この二人を見て思い当たるフシはねえのか？」

「おいすけべおやし。キククロはスルーか」

「お前さん、もう少しレディーの嗜みを学んだほうがいいんじゃないか？」

おっさんがニヤニヤしながら聞いてくる。うぜえ……。しかしレディになったキククロか……想像がつかんな。

「えつと……お、おっぱいが大きくて美人で背が高くて、経済観念がしっかりしていて、自分つてものをしっかり持っていて……あうう……」

ルイーナが二人を評価していく内にコンプレックスを感じてしまったのか俯いてしまう。

「何いってんだよルイーナ！　可愛さならお前の方が遥かに上だぜ！」

「そ、そうかな？」

「そうだって！」

ルイーナの手を取って俺は彼女を見つめた。

「はあ、そのすぐ二人の世界に入るところとか何とかした方がいいと思うよアタシ」

「わ、わかったから手を放してよお……」

ルイーナが照れながら小さく呟いた。宇宙一可愛いぜ！　スコグルが何か言っているが俺は知らんね。

「ふむ。これがバカツプルというものか」

「う……うう、いい人がいれば私だってえ……!!」

「なみだをふけいきおくれ。ならばキュクロのハンカチをかしてやる。あらってかえせよ」

「誰が行き遅れですか!!」

↓

そんなワケで(?)俺達とイツセーがやってきたのはアスガルドの地だ。まず出迎えてくれたのはオーデインの爺さんだった。

「おう久しぶりじゃのう魔人王」

え? 誰だよ魔人王って? 俺はキョロキョロと左右を見渡すがイツセー位しか思い当たるヤツがない。が、イツセーは赤龍帝だよな……。するとオーデインの爺さんは俺に向かって笑いかける。

「イツセーじゃなくてお前さんじゃよ。」

何でもハマーマがそういう風に喧伝しておるぞ」

マジですか……。あの義母、何考えてんだ? それに魔人王って何だよ? 俺の疑問に感づいた爺さんは髭をいじりながら答える。

「悪魔でもない英雄でもない神器にも依らない超常の存在。イレギュラーの中のイレギュラー。それが魔人じゃ。そんな魔人を総べているそなたは魔人の王。すなわち魔人王というワケじゃな」

「へー、凄いじゃんか安里。王様なんて」

「そうか。すっかりりっぱになったなきゆうどー。ほめてやるからりようどをはんぶんよこせ。セカイノハンブンとかいてあるいぬごやというオチはいやだぞ」

左右からスコグルとキュクロが寄ってきてからかってくる。バカ言えってんだ。領土なんて俺にはあっても四畳半くらいしかねーつつうの!!

「カツカツカ! イヤでイヤでたまらんという顔じゃのう安里よ。しかしこれも政治宣伝というものじゃ。そなたを伴侶とするルイーナの価値を高めるためのハマーマの策略よ」

親心じゃなくて策略かよ……。確かにあの女、いや義母さんはそんな

な所がある。俺は慥然としながらオーデインの爺さんを見つめる。そしてその視線に気づいたのか、わざとらしく咳をすると改めて要件を伝えた。

「それでじゃのう。不躰な頼みじゃがバルドルのヤツを覚えておるか？」

「……まあ、なあ」

俺もイツセーも表情を曇らせた。

弱いもの虐めや暴力を愉しむクソヤロー。そんな印象しかねえ。トウーさんとの相性ゲーがなければ勝っていたかどうか……。

「で、そいつがどうかしたんですか？」

「うーむ。言いづらいのじゃがお主らのチームに参加させて一人前にしてやって欲しいのじゃ」

なんとオーデインクラスの神様が頭を下げてまで頼んできた。俺とイツセーは思わず爺さんの肩を掴み頭をあげさせた。これだ、これこそ親心ってヤツだろ！

「わかりました！ がんばります！」

ルイーナも心に響いたのか、元気に返事をした。おお、流石俺だけのルイーナだ！

「アタシは反対だなア」

しかしスコグルは苦言を呈するように唇を尖らせて異議を唱える。お前、仮にも爺さんは上司だろうに……。

「私の立場としてもルイーナさんのチームが強化されてしまうのは賛成しかねます」

ロスヴァイセさんまでこの始末。バルドルのヤロー身内にも嫌われてんな。しかしだ。

「ルイーナちゃん为载体なんだから俺たちがサポートすればいいだけじゃないか！ それにバルドルのヤローが変な気を起こしたらまたトウーさんにボコボコにしてもらうさ」

「あ、アンタ程の男がそう言うのなら……」

スコグル、随分簡単に引き下がるがお前そのセリフ言ってみただけじゃなからうな……まあ、イツセーのいう通りここは先入観を

捨ててバルドルのヤローをチームに迎え入れよう。

「けど、歓迎はアタシらの流儀でやらせてもらおうよ。ルイーナも安里もそれでいいね?」

「う、うん。だけどイジメはダメだよ?」

いやイジメて……。ルイーナもスコグルや俺と一緒にのチームだからウチの流儀に染まっているな。

しかしスコグルはニカツと太陽の様な笑みをルイーナに向けると親指をグツとたてる。

「勿論、歓迎会を開くだけさ」

↓

「うう……チクシヨー! ルイーナ! 俺は寂しいよー!」

「ガハハ! 泣くな泣くな安里!」

ルイーナは何でも冥界の雑誌インタビューに答えねばならないというので帰ってしまった。ご馳走も美酒……楽しい気分になるジューズも砂を噛む様な味だった。

フェンリルのヤツが背中をバンバン叩いて慰めてくれるがお前にはヘルがいるじゃねえか!! チクシヨー! 悲しい! 悲しいよー! 涙が止まらねえよー! 楽しい気分になるジューズ! 飲まずにはいられないッ!

「さつきから煩いんですよ大の大人がルイーナ! ルイーナって!!」

貴方はルイーナ村の住人かって〜の!!」

「なんだとお……」

ロスヴァイセさんは大分酔っているのか俺に食ってかかってきた。

「ルイーナさんだっけいつかは貴方から離れていくんですよ!」

「あるワケねえだろ!」

「ありますー!」

「ありませんー!」

「二人共落ち着いて下さい。これでは子犬のケンカですよ」

トウーさんが仲裁に入ってきた。うん……よそう。こんないがみ合いをしてもルイーナが帰ってくるワケじゃないし。

↓

「チツ……何だつて俺がこんなカス共の下につかなきゃならねえんだ」

「それもこれもロキやトールの叔父さんが不甲斐ないせいだぜ。『禍の団』のリゼヴィムとかいうクソジジイやユークリッドとかいうクソガキに使われる様になるなんてよお……」

「おい、早く酒もつてこいよ。特に強い奴をだ」

「……」

「オイ！ 何だその眼は!!」

「ワルキューレの一人の胸ぐらをつかんで俺は凄む。このアマ俺に向かつて舐めた目つきしやがって！」

「我々は今日まで貴方をオーデイン様の孫であり、輝けるものとして無敵の権能があるからこそ従ってきました。ですがその2つが無くなった以上貴方に従う意味も義理もありません」

「テメエ……」

「ワルキューレのゴミを見るような眼と冷たい言葉に俺は青筋を立てる。ああ、そうかい。だったらテメーら全員ぶっ壊してやるよ!!そして俺が拳を振り上げようとしたその時手首をガシリと掴まれた!輝ける加護が効かないあのゴリラ女か!」と、振り返るとそこには別の女だった。美しく、かつ色香を漂わせた異国の女に見えるが山羊の角が頭にある……? このアマ、何者だ?」

「貴方とははじめまして、だったかしら? 私の名はニグラ。安里ちゃんの保護者って所ね♪ よろしく」

「ニコニコと笑みを浮かべているが握られた俺の手首の骨がギシギシと軋みをあげている。この女、恐ろしく強い!!」

「あらあらごめんなさいね♪ でも私としてはバルドルちゃんともっと仲良しになりたいの。うふふふふ」

「漸く手首を離された後痛みにうずくまる俺の顔を覗きこみながらニグラとかいう女が怪しく誘うような笑みを浮かべた。」

「黒いドレスの谷間からは白い柔肌が覗き、チラリと見え隠れする臍はそれだけで俺の性欲をそそる。この女なら、まあ一晩のお相手でも良い……か?」

いや安里の保護者ってんならヤツの鼻を明かすためにコイツを俺のものにするのも手だな。

俺は下卑た笑いを浮かべてニグラと名乗った女の腰を抱き寄せると耳元で囁いた。

「へへ……アンタもワルキューレの女共とは随分と違うみてえじゃねえか。ちったあ俺の好みだぜ？ どうだ、今晚？」

「あらあら野性的ねえ♥安里ちゃんもこの位オラついてくれれば頼もしいのに」

そう言うのとニグラの笑みがさらに深いものになる。女ってなあ、こういう顔には弱いもんさ♪ この見た目なら指だけで鳴いてくれるかもしれねえぜ！ ククク。

↓

イツセー視点

「あ、あのですね。ロスヴァイセさん」

「んぶ……♥何だべか？」

前の乱痴気騒ぎを猛省した俺は一滴も酒を飲まずにいたのにこれだ！

いや、あわよくばと思っていたのは否定しないけどさ……!!

ともかくロスヴァイセさんはそのおっぱいで俺のチンポを柔らかく、じつくりと包み込みながら舌を這わせる。

「ふふ♥どうだベイッセーさ。わだすのペエズリは？」

「マジで気持ちいいです!!」

そのフェラテクもさることながらあの堅物のロスヴァイセさんが方言を丸出してガチパイズリ！ 地おっぱい、もとい素を丸出しにしているロスヴァイセさんの姿に俺の理性はぶっ飛びそうだ!!

「うふふ♥わだす、イツセーさに喜んでもらいてくて色々勉強しただ♥松田くんと元浜くんがええええビデオさ借りでえ、さ。その成果がこうやって出たんだべえ♥」

「ええっ!? 松田と元浜からビデオを借りて!？」

あの二人を罵る資格は俺にはねえけどあのバカ共……ロスヴァイセさんになんてモン見せてんだよ！ しかし俺の怒りは次の言葉で

霧散する。

「うん。イツセーさがわだすに夢中になってくれるように勉強したんだべ♥だからイツセーさ、もつと気持ちよくなつてくんろ?」

そう言うのとロスヴァイセさんは俺のチンポをさらに皮むき器の様に動かしてきた!

「あ! ロスヴァイセさんダメっす! これ以上やると出ちやいますよ!!」

「構わねえべさ♥イツセーさのチンポミルクわだすぬ飲ませでけろ♥♥」

チンポミルクを私に飲ませて下さい!?(訳)

ロスヴァイセさんからこんなセリフが出てくるなんて……! ロスヴァイセさんの谷間に俺の濃厚な白濁液が放たれる。

「おお、ロスヴァイセもすっかり床上手になっちゃってまあ♥」

スコグルさんはししし、と笑いながら安里にパイズリをしていた。いつの間にやら俺と安里、どちらが男として上かという話題がワルキューレさん達の間でもちきりとなり、フレイヤ様立ち会いのもこの勝負(?)は行われたのだ。

「んー♥安里のチンポミルクも味わわせてよ♪」

「あ!ズルいですスコグル!」

ロスヴァイセさんが俺の精液を美味しそうに飲み干している中、スコグルさんはその豊富な胸で安里のチンポを挟み込み、ズリズリと刺激を与えていく。

「ふふ……ん♥安里、相変わらず太くて固くてあつつい鬼チンポいや、今は魔人カルチンポってところかな?」

スコグルさんが安里の亀頭に頬擦りしながらうっとりとした表情で呟く。こんなあわせ技があるだなんて……!!

彼女は技巧派だったのか!? これには安里もあっけなく果てるしかないんじゃないか?

「ぐ……!?! う、おお……!!」

「ほらほら〜♥ガマンしたっていい事なんてなくんにもないよ? 早く出せ♥出せ♥そんでアタシとオマンコしまくろ♥」



ゴクリ、と第三者の俺ですら生唾を飲み込んでしまう甘々な脳みそが吹っ飛ぶ誘惑。

だが、安里は耐える！　なんてヤツだ！

「お、俺は……！　ルイーナが一番大事なんだ……!!」

「うん♥知ってる♥だからアタシが安里を一番に愛して、ルイーナと同じ位大事な女になってやるんだ♥ほら、早く出してよ♥そしてアタシとドロドロセックスしような♥」

「存外頑固な男ね。あんな陰気そうな女が好みなのかしら？」

審判役のフレイヤ様は冷酷な目を安里に向けながらつぶやく。従者達を椅子のようにして座るフレイヤ様だが相変わらずはいっていない。

「う、うるせえクソビッチが……！」

心から惚れた男もいねえような欲深女が……俺のルイーナをバカにすんじゃねえ……!!」

「……」

おお、流石安里だ！　スコグルちゃんのパイズリに苦悶しながらも啖呵をきるとは……

「今の言葉は貴方へのハンデに値するわね」

心なしかフレイヤ様の眉がピクピクしている。意外と効いたのか？　ともかくフレイヤ様が指を鳴らすと安里のチンポの根本辺りに金のリングが装着されたぞ!」

「こ、これはっ!」

「ルールを変更するわ。兵藤一誠と貴方が競い合うのじゃなくて貴方が欲望を抑えられなくなったら負けという事にね」

「なんだと……!?!　くっ……うう!!」

え、ええ〜!?!　話の流れ的にとんでもないことになってしまったぞ！　親友が射精制御されているのに俺だけロスヴァイセさんとエロエロラブラブエッチをするなんて……!」

「イツセーさあ♥わだす、もう我慢できねえだ♥イツセーさのドラゴンオチンポでわだすを串刺しにしてけろ♥」

汗ばんだムツチムチのシミ一つ無いお尻をフリフリしながらロス

ヴァイセさんが俺を誘う！ 銀色のジャングルはまさにチアリーダーの持つポンポンの様に俺のチンポを励ましていく！ スマン安里……！ 据え膳食わぬは何とやらという格言もあるだろ？ それもこれも赤龍帝の定めなのだ……。俺は彼女のエロ尻に顔を近づけ鼻をスンスンと鳴らす。

「ああっ♥匂いばかがねえでけろ♥恥ずかしくて顔から火が出そうだべえ♥♥♥」

「恥ずかしがることなんてありませんよロスヴァイセさん。凄くいい匂いがする。これじゃ学園でロスヴァイセさんの顔を見るだけで勃起が収まらなくなるかもしれないな」

「う、嬉しいだ♥もつと嗅いでけろ♥わだすの臭いがイツセーさに染み込むまで嗅ぎ続けてけれ♥♥♥」

ロスヴァイセさんは俺の頭を抱き抱えるときさらに自分のお尻を俺の顔に押し付けてくる。

そして俺は彼女の尻たぶを両手で掴み、その奥の菊門に鼻を押し付ける！ ああ……なんて甘酸っぱいシナモンミルクティーの様ないい匂いがする！ この芳しい香りだけで射精しそうだ！ しかし、まだダメだ……！

俺はロスヴァイセさんのおっぱいとオマンコを弄りながら彼女の処女尻に舌を伸ばす。

「シア♥はあ、あ、んん♥」

ロスヴァイセさんのエッチな吐息が俺の耳の中をくすぐる。まるで恋人同士の情事のように俺たちは互いの体を貪り合う！ その様はさながら獰猛な獣だ!! しかし……

「ああん♥イツセーさ、わだすもう我慢出来ねえだ♥早くこのドスケベマンコにお前さまのデカチンぶち込んでくれえ♥♥」

四つん這いで尻穴を舐められるロスヴァイセさんはもうすっぴり出来上がっていた。

自ら尻たぶを割り開いてハメ乞いをするようにヒクつくオマンコを見せつける。

普通ならば即オマンコにハメるべきなのだろうか……。

「ぐ……!! おおっ！ くおおっ!!」

「ねえ安里♥ルイーナだってそんなツラそうなアンタの顔は見たくないと思うよ？」

だからあの二人のセックスをおかずにアタシのおっぱいの中に思いつきり出してさ♥ロスヴァイセとイツセーみたいにあタシとラブセックスしよ？ タフなアンタならルイーナに幾らでもあとで穴埋めできるっしょ♥♥♥」

と、なおも誘惑パイズリの勢いは留まるところを知らない！ スコグルちゃんもルイーナちゃん……俺はどつちを応援すべきだ？

「早く♥早く♥イツセーさのチンポ♥

わだすのドスケベマンコに打ち込んでえ♥♥♥」

俺や安里の逡巡は今のロスヴァイセさんには考えが巡らないらしく、彼女は自分の指をオマンコに突っ込みグチュグチュと掻き回しながら俺に向かって尻をいやらしく振ってくる！そして俺は……。

「ロスヴァイセさん。安里と板挟みで苦しんでいるのに自分の事ばかりですか？

そんなエロエロ教師のロスヴァイセさんにはおしおきが必要ですね！」

オマンコではなくお尻の穴に俺はチンポの先端をあてがった。

むりむり、とオマンコとは対称的に異物を排除すべく彼女の括約筋がヒクつく。

「ひいいん♥♥♥ おしおき♥ おしおきしてけろ♥ この淫乱ダメダメ教師のエロケツば、イツセーさのチンポで懲らしめてけろ♥ほんで、わだすば嫁にもらってけろおお♥♥♥」

ロスヴァイセさん、アンタって人は……!」

「わかりました。おしおきとして俺のチンポをケツ穴にぶち込んであげますよ!!」

「んほおおおおお♥♥♥」

ああ、なんていやらしいんだ！ あのクールなロスヴァイセさんがこんなはしたない声で鳴くだなんて!!そして俺は彼女の菊座に一気に挿入する。

「おごっつ♥♥♥おっつ♥♥♥あがつ……いぎいいいい♥♥♥」

流石にこれはキツイか？　しかし俺は自分の快樂の為にピストン運動を加速させる！

「おごっつ♥♥♥おっつ♥♥♥いぎいいいい♥♥♥」

ロスヴァイセさんは白目を向いてアへ顔を晒す。その無様な姿に俺の興奮は最高潮だ!!

「あ、あ、あ、イツセーさ♥わだすもうダメ♥イグツ♥イツちやうだ♥♥」

「安里はルイーナちゃんのために我慢しているというのに何ですかその無様さは！

反省しなさい!!」

我ながら少し理不尽な気もするが俺はロスヴァイセさんのお尻をソーナ様よろしくスパンキングする！

「オオオ♥♥♥痛い♥♥♥でも気持ちいいべさ♥♥♥」

あれ？　案外いい感じ？　ならばと俺はさらに何度も叩く。すると……。

「おほおおおっつ♥♥♥あ、あ、あづい♥♥♥ケツが熱いだああ♥♥♥

イグ♥イグツ♥♥♥イツセーさ♥♥♥わだすケツでイグううううううう♥♥♥」

ロスヴァイセさんのお尻の穴がギュツと締まり俺のチンポは爆発したかのように精を腸内に吐き出した。彼女はというと犬がおしっこマーキングするかのような態勢で潮を何度もぴゅっ♥ぴゅっ♥と吹き出している。

その様子が俺がつい口元を緩めていると見知らぬ二人の女性が俺の左右を囲む。

し、しまった！　流石に先輩ワルキューレをこんな風にメチャクチャにされては彼女らの沽券に関わる問題だったか!?

背の低い白肌ロリ巨乳トライテールの子と

長身褐色爆乳ケモミ風ヘアの武人肌メガネ女子というコントラストが実にエロティック！　つてそういう状況でもないな！

せめてビンタの一発や二発は甘んじて……。

「凄いの♥あのカチカチだったロスヴァイセ先輩がこんなエロエロになるだなんて♥」

イークも赤龍帝のオチンポに興味津々なのね♥」

「そうだな……。私もお前に興味がわいてきた。どうだ？ 私とも交わってみないか？」

「あはっ♥ミスブシドーって感じのムーザもノリノリなのね♥」

え？ お咎めなしどころかエッチのお誘い？ ここは天国ではあるまいか!!

いやヴァルハラだから天国かもしれないが！

「て、テメエら……。いい加減に……」

「フッフ、凄んだ所でダメよ魔人王？」

手も足も出ない貴方なんてまるで怖くないわ。所詮魔人とはいえ私の前では赤子同然ね♥悔しいの？ まあ貴方の様な弱つちいチンポで私達が屈服するなど有り得ないけど……。!?」

「手も足も出ねえ……。か!? だったらコイツはどうだ！」

おおっ!?

安里の背中から何十本もの吸盤の代わりに唇がついた触手が一斉に余裕ぶっていたフレイヤ様とスコグルちゃんに襲いかかる。

「くっ……。離れなさい！ 離れろっ!!」

「ああん♥やっとその気になってくれたんだあ♥たまにはこういうフレイもいいよネっ♥」

フレイヤ様のお身体とスコグルちゃんの裸体に触手が幾重にも巻き付き、フレイヤ様は歯によって見る間に裸に？かかれていき、スコグルちゃんの身体中に数十もの舌が這いずり回る。おお……。! なんか伝奇もののエロゲーみたいで興奮するなあ！

「く……。この程度の事で私が動じるとでも……。!」

「あんたが動じようが動じまいが関係ねえ！ ルイーナを貶してくれた報いをたっぷりと受けてもらおうぜ！」

安里のヤツ変なスイッチが入ったのか？

フハハハハ！ と高笑いを始めそうなヴィランみたいな顔になっ

てしまつて……。

「んはああん♥おっぱいだけじゃなくて、お臍もお尻も、オマンコの中もペロペロなめられてりゆうっ♥アタシの体、触手に可愛がられちゃつてるう♥♥♥」

「んぎいいいっ!? い、痛い!? 噛むな……! 私の身体に歯型をつけるなあっ!!」

タコ型触手はスコグルちゃんをメロメロにするための前戯なんだろうがイカ型触手はフレイヤ様の心を折るための荒療治の様だ! 安里は器用なヤツだなあ……。

「まあフレイヤ様には触手で愉しんでもらうとして、イークは赤龍帝のオチンポで気持ちよくしてほしいのね♥」

「そうだな♥赤龍帝には我々とたつぷり遊んでもらうとしよう♥」

イークちゃんとムーザさんのダブルパイズリが早速俺のチンポに見舞われた!

ロリ巨乳と大人爆乳はまさに歯車のように噛み合い俺のピストン運動を加速させた! ああ、もう我慢できない!!

「あ♥イツセーさのチンポがまたおつきくなつただ♥」

ダブルパイズリから覗く亀頭をロスヴァイセさんがチロチロと舌を伸ばして舐めてくる。こ、これはたまらない……!

思わず暴発気味に発射してしまい三人の顔に精液が飛び散る。

「はん♥セーしいっぱい射精てるう♥♥」

イークちゃんとムーザさんは顔に付着した俺のザーメンを美味しく舐め取る。そしてそんな二人のマンコから小さな潮が噴き出したかと思うとムーザさんはヘナヘナとその場にへたり込んでしまった。

「す、すまない……♥イツセーのチンポミルクが凄すぎて意識が飛びかけてしまったのだ……あはああああっ♥」

「なら気付けに俺のチンポはどうですか?」

我ながらアホではないかと思わなくもないが、だったらお前らこんな美人三人を相手にチンポがイラつかないっていうのか!?

ウソつけてんだ!! 俺はムーザさんのオマンコを堪能しながら

左右の手でイクちゃんロスヴァイセさんも気持ちよくするためぐちゅぐちゅと手マンを繰り出す！

「んおおっ♡ほおおお♡だ、だがこの程度のセックスでこのムーザは墮ち……あひいいいい♡♡♡触手♡触手が私のケツ穴にい♡♡♡」

ムーザさんのアナルにじゆるじゆると安里の触手が入り込みぬめぬめした粘液塗れの触手が彼女のお尻をコーティングしていく！

「やめ……あゝっ♡ひいいいい♡♡」

「んほおおお♡やめでえ♡触手に犯しやれりゆのやらあああ♡♡♡チンポ♡チンポがいいのおお♡♡♡」

「うるせえ！ テメーにハメる位なら石相手にチンポ突っ込む方が遥かにマシだ！

あとスコグル！ こうなつたらとことんハメてやるからな!! 覚悟しろ！」

「しよ♡しよんなあ♡ゆ、ゆるしやにやい♡このフレイヤにこんな屈辱ひいいいい♡♡♡マンコ♡マンコ噛まれてかんじちやつてりゆう♡♡♡」

「あああーっ♡♡♡」

あっさり陥落してチンポを強請るフレイヤ様に安里は怒鳴りつけつつスコグルちゃんのオマンコに凄まじいピストンをかましていた。そ、そんなにルイーナちゃんを貶されたのが頭に来たのか……。しかし触手アシストによりムーザさんもイクちゃんもすっかりアヘアヘチン媚び状態！ ガニ股でヘコヘコと腰を振っている！

楽園はここにあった!!

アレ？ そう言えばキククロちゃん達の姿がないような……いや！ 今はこの出会いに感謝しながら目の前の美女達を存分に味わうのが先だ！

「んほおお♡しゅごいい♡イツセーさのチンポしゅごすぎるべえ♡♡」

「あひいい♡もうダメえ♡またイキすぎてバカになっちゃうううう♡♡」

「イクウ♡イクのお♡♡♡赤龍帝の種付けセックス最高なおお♡

♥♥」

「んぎいいい♥♥♥イグうううううう♥♥♥イツセーさのせーし  
でわだすもイークちゃんもムーザさもイキ狂ってるだあ♥♥♥」

……………。

ー

一方その頃。

「うくむ。きゆうどーとイツセーのしょうぶはりようほうまけのひき  
わけだな」

「キユクロちゃんは厳しいわねえ♥」

「しかし安里様も随分と異形の力を使いこなすようになったのですね

♥少し……興味を惹かれます♥」

「あらあら？ トウーつてば安里ちゃんに浮気するつもりかしら？

まあ、触手ならセックスじゃないから浮気にはならないわね♥」

「うう……」

キユクロ、ニグラ、トウーの3人は映像にてイツセーと安里の乱痴  
気騒ぎをスポーツ観戦でもしているかの様に楽しんでいた。

その中で精魂尽き果てたバルドルは半立ちのペニスを弄ばれてい  
た。

「まったくなさないチンポだ。かおだけだなおまえは」

「仕方ありません。挫折を知らぬ増上慢の薄味の精などこの様なモノ  
でしょう」

「ヒドいわねえ二人共。ねえバルドルちゃん？ ここで奮起しないと  
一生この二人の風下になっちゃうのよ？ ほら、頑張っておちんちん  
立たせなさい♥」

ニグラは授乳手コキの態勢で無理やりバルドルのペニスを勃起さ  
せる。

「あ……ひいい……許して……くれえ……んぶ……。も、もう出ない  
んだ………本当にもう限界なんだ………」

「ほら、もっとおっぱいの乳首もしゃぶって……んう♥そうよお♥乳  
首をぺろぺろするの気持ちいいわよねえ？」



「全くニグラ様に可愛がっていただいているというのに何という無様さ。野生のゴブリンにも劣る不甲斐なさ。」

「いつそ死ぬべきではないか？ んん？」

「ずぶううう ♡♡♡」

罵りながらもバルドルのペニスをトウーの胎内が飲み込んでいく。溶けるように熱く、子宮や膣すら全て筋肉で出来たかの様な締め付けと吸い付きはまるで淫欲のマグマが煮え立つ火山に投げ込まれたかのようにであった。

「あ、あ……」

すっかり敗北してしまったバルドルの身体は射精せずとも彼女が激しく動けばそれだけで容易く暴発してしまう。

まるで殺虫剤を吹きかけられた蠅のようにバルドルは悶え苦しむ中ペニスをトウーのヴァギナに、睾丸はニグラに愛撫されていた。

「ほらほらもっと女を喜ばせる訓練をしましょうね？ イッセーちゃんや安里ちゃんはこのくらいの責めじや弱音なんて吐かないわよ？」  
「そうだぞ。むしろこれさいわいとキユクロたちをアヘアへさせてやる、とよろこびいさんでだいてくれるぞ」

「はあ……今からでも向こうに行ってもよろしいでしょうか？」

（ああ……こんなヤツラに勝てるワケがない……オレはダメなヤツなんだ……もうダメだ……おしまいだ……）

今までの自信を完膚なきまでに砕かれたバルドルはおぼろげな意識の中己の惨めさを痛感していた。

↓

「バルドルのヤロー、口ほどにもねえなア」

「まあ、彼は所詮猫の鈴程度の価値の男だよ。」

「気にすることはない」

「しかし駒王町は大分ガラ空きだな……」

「なら、俺が一つ仕掛けてみるか……」

「おっ？おっ？【この世全ての悪】の右腕であるキミが動くって、感じ？みたいなー！見たいなー！おじさん、キミのチート能力見てみたいなー!!」

リクエスト編 前編（ジャンヌ・オルタ&ルイーナ&朱乃？痴漢（※本番無し） イツセー？朱乃

「痴漢列車〜？ ついにエロビデオの見すぎで頭がヘンになったのかお前ら？」

駒王学園の昼休みの屋上。松田と元浜から奇天烈かつ破廉恥極まる噂を聞いて俺は呆れるしかなかった。

「データラメではないぞ！ 某掲示板にもはつきりとそう書いてあったのだ!! 【駒王町のとある列車にはフリーセックスのできる列車がある】と！」

「そうだ!! しかも【3人の美女が入ってきたらそれが合図】とのことだ！」

鼻息荒く証拠らしきネットの記事をスマホで見せてきた。バカバカしい……。そんなムチャクチャ、小学生でも信じねえ。そもそもリアスさんがそんなふざけたことを許す筈もねえだろうに。

「と、いうか女生徒の前で何て噂を話してるんですか貴方たち？ まあ、安里の友人ですからその程度の知性しか持ち合わせていないのでしょうけど」

「何おう!?!」

と、噂を鼻で笑ったのはジャンヌオルタ……もとい折田ジャンヌ。なんか知らんがルイーナともども学園に編入されてきた。桐生やアーシア、あとゼノヴィアともうまくやっているらしいからまあいいんだけどよ。

「ま、まあまあ。チカン電車？ っていうのは良くわからないけど気をつけてって事だね。心配してくれてありがとう！」

花が咲く、いや満開の桜すら霞む笑みでルイーナは二人に感謝した。

「う……うむ。まあ、気をつけてくれ」

「うおーっ！ ルイーナちゃんのエンジェル・スマイル！ これで世の艱難辛苦に勝てるっ!!」

そして二人は感涙にむせぶのみだった。

「ふふふ……ルイーナさんったら本当に純真ですこと。二人のエロスに染まった穢れた心も浄化されそうですわ。ね、イツセー？」

そんな二人はともかく珍しく居合わせた朱乃先輩がイツセーに同意を求める。

「そ、そうですね。でも、そんな噂が立ってるなんて……」

「まあ、確かにな」

リアスさんがそんな不埒なものを許す筈はねえし……だが俺たちに縁のある女性客は皆、美女揃いだ。もしそんな噂が本当だと思いいこんでる輩がいて、しかもその列車に3人の美女が入ってきたら……。ゾツとしないな。特にルイーナが標的にされたとしたら……。

思わずルイーナの肩を抱き寄せると彼女は目を白黒させるがいやがる素振りは見せない。俺は自分の胸に沸き起こった不安を打ち消すように断言する。

「安心しろよルイーナ！ 何があろうとお前を守ってみせるからな……。こんどこそ、絶対になー！」

「まあ、頼もしい騎士様ですこと。白馬の当てはございました？」

折田がいきなり混ぜっ返してきやがった。

なんだか最近お前トゲトゲしすぎだぞ！

猫をかぶれとは言わねえけど、もうちよつと愛想良くしてもいいんじゃないか？ 何人かに告白されたというのにボロクソにフってるのも知ってるんだぞ！

「あらあら、焼き餅なんて焼いちやつて。可愛らしいこと。そんなにツンケンしては愛人失格ですよ」

「誰が愛人よ！ こんな腕つぶしくらいしか取り柄がないゴリラの愛人なんて誰がなるもんですか!! ええ！ 絶対になりませんとも！

太陽が西から登ろうとも!!」

「お、おい！ 落ち着けよ折田ちゃん！」

「誰が折田ちゃんよ！」

いや、お前しかいないよ……。イツセーもすっかりお手上げで、『お前のチームの一員だろ！ どうにかしろ！』と訴えてくる。

「それはそれとして、ルイーナちゃんと折田ちゃんが転校してきた記念にホームパーティーでもしないかとリアスが言っておりますわ♪」

「パーティー？ この大事な時期によくもそんなふざけたことを……」

「そう言わないであげてくださいまし。きつと貴方たちや私たちに早く打ち解けてもらえるようにと、気を遣つてのことだと思えますわ」なるほど……。確かに折田の過去は俺たちとは大きく異なっている。そのことで俺たちが距離を置いてしまうのではないかと危惧しての事か。ありがたい話じゃないか。

「わかりました。今度の休みに俺の家で開催します。どうか都合をつけて出席してください」

「そうね……。マス、マスかきお猿さんが世話になってるわけだし、行つてもいいわよ」

「ま、まあそういうことなら参加してあげてもよろしくてよ？」

相変わらずの物言いだ、今回は俺も賛成だ。こうやってお互いを知っていくのが一番だからな。

「というかマスかきなんて言葉を使うんじゃないよ！」

そして放課後にイツセーの家でホームパーティーを行う事になったのだが……まさかあんな事が起こるとは思いもしなかった。

↓

「松田君、元浜君。悪いわね、荷物持ちなんてさせてしまった」

「いえいえ！ 朱乃さんたちのためならばこれくらい何てことはありません！」

「おうとも！ 例え火の中水の中！」

駅のホームにて荷物持ちを自ら買って出た松田と元浜に朱乃は笑みを携えつつ感謝を述べる。イツセーと安里は今トイレに向かっている所だ。彼らにも非がないワケではないがスケベ3人組＋αとして学園内で冷遇されている二人にとって朱乃の言葉は何よりの癒しだった。

「ありがとうね、松田君。元浜君。」

私、二人のために頑張つて料理を作るから」

「おお……ルイーナちゃんの手料理！」

「今日の日まで生きていて良かった！」

更にはルイーナの手料理まで振る舞われるというのだから、二人にとってはまさしく至福の時であっただろう。

「ホームパーティーごときで随分浮かれるなんてどんな人生を送ったらそうなるのよ……」

二人のオーバーリアクションに折田はやや呆れ顔だったがいつもの陰や険のある顔ではなく年頃の乙女そのままの表情だ。

「うーむ……いい」

「確かに美貌といい戦闘力といい、折田ちゃんは駒王学園、いや駒王町でも随一の美少女。もつと素を出せばいいのに勿体無い」

「うっさいわね！ そんなの私の勝手でしょう!?!」

「私もそう思うな。別に無理しなくてもいいんだよ」

「そうですね折田さん。時には自分の気持ちに正直にならなきゃ。イツセーの親友である安里君ならどんな貴方でも受け入れてくれますわ」

「アンタらまで乗つかるな!!」

赤面する折田に松田と元浜は思わず顔が綻んでしまうなか、ホームに列車が入ってきた。

「ほら、さっさと乗りますよ！ 時間は有限なんですから」

「ふふ、そうね。行きましようか」

「ま、待って！ 二人共！」

イツセーと安里を捨て置いて一足先に

【3人の美少女】が列車へと乗りこんでいく。彼らや彼女らはこの時気づいていなかった。今自分たちが乗り込んだ【列車】が普通ではない……ということ。

1

「? 何か変じゃない?」

まず列車の内部に違和感を覚えたのは折田であった。というのも乗客は皆男性ばかり。しかも皆が吊り革に捕まり座席に座らずにいる。更には彼らの表情は皆、正気ではないように見えた。何やら自分

たちを獲物として品定めしているかの様なギラつきと粘つきが感じられるのだ。

「!?」

折田の制服のスカートの中にいきなり誰かの手が入ってきた。

「な、何するのよ!? この痴漢!」

「……」

しかし手は止まらずそのままスカートをたくし上げてきた。そして折田が穿いていた下着が露わになる。それは……純白の下着であった。

「あ、あはは。キミの事だからいやらしい黒の下着をつけているんじゃないかって思っていたけど……」

痴漢はニヤニヤしながら折田のブレザーを引きちぎる。見知った風なことを言う痴漢であるが折田には身に覚えのないことだ。と、いうより服を破れる辺り尋常の火力ではない。

「な、何よ!? アンタにこんな事される謂れはないわ!! ぐうっ!?」

恐怖よりも怒りが勝った折田は威勢良く痴漢を怒鳴りつける。だがそれは逆効果であった。まろび出た彼女の双丘は着痩せする性分なのかかなりの大ききで、その割に形が崩れてない。まさに美乳であった。痴漢は怒鳴る折田を無視して背後から手を回し双丘を揉みしだく。

「ひい!? 何するのよ!!」

「うへへ……結構いいおっぱいしてるじゃないか。モミ応えも上々の一級品だし……」

じゅるり、と蛞蝓のような舌が首筋を這い寄る。無論快感など一切感じない。あるのは恥辱と憤怒、そして憎悪のみだ。

(殺す)

折田は決心した。松田と元浜には「竜の魔女」の姿を晒すことになるが関係ない。この醜悪で汚らわしい男を自分は絶対に許さないと。だが……

「……!?」

幾ら念じようとも能力が発動しない。

業火どころかマッチ一本ほどの火種すら発生しない。

「あはは。僕だけじゃなくっておじさんも一緒に揉める位おつきいなんてやっぱり折田さんはセックスが大好きな淫乱なんだね」

「全くこんな胸で男を誘ってたなんてとんでもない淫乱女だね!」

「いいか! これからは俺たちが常に肉便器にしてやるからな」

痴漢達は口々に勝手な事を言いながらも彼女の身体をまさぐり続ける。家畜場の豚にも劣る存在どもが自らを穢そうとする事実折田は顔を歪めた。

カシヤ、カシヤ、とスマホのカメラのシャッター音が響く。音のする方に目を向ければ他の乗客達が松田と元浜をリンチする傍らスマホで自分達を撮影していた。

「な、何なのよ! アンタら!」

「ひ、ひどいなあ折田さん。僕のことを酷くフツておきながら松田君と元浜君を待らせているなんて」

「どうせコイツら相手にヒイヒイヨガっていたんだろ? このメス豚女!」

改めて折田が周囲を見れば覚えのある顔がチラホラある。

「ふぎ……けんな!!」

しかし英霊である筈なのに力が封じられてはどうすることも出来ない。折田の虚しい叫びが虚しく響き渡った。

「少しうるさいな」

痴漢の一人が折田の口に猿轡を噛ませると愛情の欠片もない行為が再開された。

「へっへっへ……良い乳だ。すぐに俺好みの肉便器に仕込んでやるよ」

「い、いやあ……やめてえ……」

列車内の座席で男は目の前の女体をいやらしく弄ぶ。胸は巨乳、尻も安産型、顔つきもなかなかの上玉だ。ここまで魅力的な女はそうそう居ないだろう。

この牝豚を自分の好きに出来ると思うだけで男のサディズムと支

配欲が刺激されるというものだ。

男はルイーナのブラウスを剥ぎ取りスカートの中に手を突っ込み秘所をまさぐり始める。しっかりと剥き出しにされた爆乳にも手を伸ばし、舌で先端を攻め始めた。

「ん……んん」

猿轡をはめられたルイーナは必死に声を上げないよう堪えて身をよじる。だがその仕草が逆に男を煽る結果となる。

「おいおい、そんなに腰を動かしてどうした？ まさかもう欲しいのか？」

「……」

それは彼女にとって最大の侮辱だ。

ルイーナは無言で睨みつけるだけだ。それが男の加虐心を更に刺激した。男はズボンのチャックを下ろすと既に怒張しきった一物をさらけ出す。

「!!」

彼女の顔色が自らの髪に劣らぬ位に青くなる。最愛の安里以外との交わりなど絶対に、何があろうと嫌だ。

「ん……んん!!」

身体をよじり男からの愛撫から逃れようとするルイーナだが男は彼女の抵抗を嘲笑うかのように狙いを定める。

「んんーっ!?!」

「んん？ なんだコイツ！ 自分から素又をやってきやがった!?!」

少しでも時間を稼ぐためにルイーナは必死に腰を振って素又に勤しむ。男はルイーナの狙いなど全く気づかず彼女の思い通りにならない。

「う……うう……」

快樂ではなく悔しきで涙が溢れてくる。そんな醜態を晒した彼女が更に追い討ちを受けることになる。他の男が突然、舌のみを開放する猿轡の中にペニスを挿入してきたのだ。

「んぐうううーっ!」

髪を捕まれルイーナの頭が前後される。くぐもった悲鳴をあげる



容赦しないとばかりに乱暴に腰を打ちつけてくる。

じゅぽ！ ずぼっ!! ごちゅんっ!!!

「おぶうっ!! んぼっ！ おげえっ!!」

汚い、臭い、気持ち悪い……。更に乳首に亀頭を擦りつけられ、手には竿を握らされ、男の股ぐらに顔を埋める……。

(気持ち悪い……。吐きそう……)

ルイーナは内心で吐き捨てるのと再び男達の怒張したペニスを口で啜える。少しでも彼らの機嫌を取り媚を売ることしか出来ない自分に嫌気がさすが他にどうしたらいいのか分からないのだ。

「おほっ！ このメス豚の口の具合、すごくいいぜ！」

そんな彼女の心中など知る由もない男達はこみ上げてくる射精感に腰を震わせる。

「おごっ!! んぼおおっ!!」

「ひい！ ひいい！ こいつの素又最高だぜ！」

「デカパイもたままんねえ。パイズリ専用の乳マンコにしてやる！」

「んぶう！ んぼおおっ!!」

(いや……。もうやめてえ……！)

その反対では朱乃もまた後輩たちから痴漢

され屈辱にまみれていた。

「へへへ、姫島先輩にこんな趣味があつただなんて意外ですね。それとも兵藤先輩の調教の賜物なんですか？」

「……んん！ んんん！」

折田やルイーナと同様に猿轡を嵌められた朱乃は目を瞑つてなすがままにされてしまう。無論、朱乃にそんな趣味はない。愛人願望をイツセーに吹聴してはいるがそれは彼に拒まれないための方便であり、擬態に過ぎない。本来の彼女は嫺やかで従順、依存気質の強いところがある。

母の復活により若干過去のトラウマは和らいだがそれでも男の墮天使達や母方の一族に命を狙われたという事実は痴漢、暴漢たちを前にして彼女を萎縮させてしまっていた。故に【雷光の巫女】という異名を持つ程の彼女がこの程度の相手に抵抗できずにいたのだ。

「へへっ、コイツも良い乳してやがるぜ！」

しかしそんな朱乃の心情を痴漢達は知るよしもなく彼女の豊満な胸を鷲掴みにすると乱暴に揉みしだき始める。

「んん……!!」

嫌悪感と恐怖で顔を歪ませる朱乃だが猿轡がされているためくぐもった声しか出せない。

「うおっ!? 乳首ビンビンじゃねえか! やっぱり淫乱だなこの牝豚」

「んぐうっ!」

「ピアスカ立て札でもつけてあげましょうか? 【チンポ大好きなメス豚です】 ってなアハハハハ!」

「んん!! んー!!」

ポニーテールをぎゅつと引つ張られ猿轡の穴から舌がにゅうつと出てくる。

「はは、先輩の舌にチンポの味を覚えさせちゃいますからね」

痴漢の二人が朱乃の舌を引つ張り、それぞれのチンポを彼女の舌へと擦りつける。

「姫島先輩はチンポ大好きですから、きちんと味を覚えてくださいね」  
もう一人の痴漢が彼女の臀部を鷲掴みにし、後ろの孔へと舌を伸ばす。

「へへっ、姫島先輩のケツマンコも頂きだ」

「んんんーっ!」

痴漢の男は彼女の菊門に舌をねじ込み舐め回す。排泄する場所であるそこを舐められるという屈辱は計り知れない。

三者三様にその肢体を弄ばれる様を

痛めつけられた松田と元浜はただただ見ている他ない。

そして遂にその時が訪れた。まるでパーティの始まりにクラッカーを鳴らしたかのように精液が3人の身体に降り注いでいく。

「うっ……」

「くう……!」

精液の飛沫を浴びることに屈辱と嫌悪を顕わにする3人。松田と

元浜は3人の姿に興奮することはなく無念さと申し訳なきで一杯になつていた。親友の彼女や先輩、クラスメートが凌辱されているのにも出来ずただ見ているだけしか出来ないとは。これでいいのか? いや、よくはない。例え非力で無駄な抵抗であろうと、彼女らの尊厳を守らずしてなにが二人の親友だ。

「うおおおお!!」

「このおおおお!!」

傷だらけの身体で二人は痴漢達に立ち向かうがやはり多勢に無勢。

「ぐあつ!」

松田は痴漢の拳が鼻に当たり、鼻血を噴き出す。しかし彼は怯まな  
い。

「この……野郎!!」

「うおつ!」

今度は元浜が股間を蹴り上げる。急所を蹴られた痴漢は泡を吹きながら倒れた。だがすぐに別の男が二人へと襲いかかってくる。二人は応戦するがついには列車の床に組み伏せられてしまう。

「へっ。バカが。お前らみたいなカスはただ泣き寝入りするしかねえんだよ!」

「奇跡が起こるとでも思ったのか?」

凌辱の景気づけとばかりに松田と元浜に雨あられのように殴打や蹴りが見舞われる。

しかし二人は泣き言も言わず、命乞いも後悔もしない。何故なら彼らは知っている。この世に奇跡は起こらない。だが、必然はあるということを。魔法陣が展開されるや現れたのは憤怒の形相で痴漢達を睨みつける安里とイツセー。

「テメエら……」

「……」

二人の若獅子を前にしては痴漢達は蠶に寄生する蚤のようなものであった。

そんな蚤達が文字通りに一蹴されるのも必然であった。

1

「すいませんでしたあ姫島先輩!!」

「すまねえルイーナ! 折田!」

駅前のホームにて痴漢達が警察ではなくソーナ会長と匙らによって連行されていく側でイツセーと安里は3人に土下座して詫びていた。

「……いいわよ、別に」

「大丈夫だよ」

折田やルイーナは責めるでもなく、かと言って許すわけでもないという口調で言う。

安里は不甲斐なさと罪悪感に押しつぶされそうだった。

松田と元浜が勇気を奮い時間を稼いでくれなければどうなっていたか……。

「本当にありがとうな。松田、元浜」

「ああ。今度女の子を紹介してやるから」

「本当か!? イツセー!」

「この間のミルたんとかいう人三化七ではあるまいな!!」

イツセーが感謝と共に約束するや松田と元浜は色めきたつ。

「ねえ、イツセー……」

そんな中、イツセーに身体を預ける朱乃はいつもと違う様子であった。

「あ、朱乃さん……?」

「私……少し疲れちゃったみたい。安里君に頼んで少しあの場所で休みましょう?」

あの場所とは【精神と時のヤリ部屋】のことであろうか?

「え、えええ!! こんなことがあったのにですかあ!!」

「だからこそ……よ。それともイツセーは汚れた女とするのは……イヤ?」

朱乃は涙で潤んだ瞳を上目遣いにしてイツセーを見つめる。その破壊力は抜群だ。

「そ、そんな訳ないじゃないですか!」

「うふふ……嬉しいわ」

ちらり、と安里の方に目を向けるとルイーナが安里に耳打ちしているのが見える。

恐らく朱乃と同じ提案をしているのだろう。

「……」

朱乃さん、いや朱乃はシャワーを浴び終わり浴室から出てきた。あんなことがあったばかりだというのに、いやあったばかりだからこそかその表情はどこか心ここにあらず、と言った感じだ。

『いいかいイツセー君。朱乃君はああ見えて本当は打たれ弱い娘だ。サディスティックに振る舞っているのは本人の気質というより朱乃さんの性格を模倣しているのと、過去から目を背けているためなんだヨ』

ふと、シユタークさんの人物評を思い出した。その時はそうかなあ？ と半信半疑だったがこの状況になってみて改めて正解だったと確信する。無理をさせていた事に気が付かず俺は自分の頭を小突きたくなつたがそれは逆効果だ、ということも教わつた。

『そんなワケでイツセー君。彼女を抱く時は彼女に甘えたり従うのではなく、寧ろ逆だ。甘えさせたり従わせる、という感じでいきたまエ。まあ、キミなら大丈夫サ』

……うーん、エツチさせてくれるだけでなくメンタルをケアするやり方まで伝授してくれるとは、つくづくシユタークさんは底知れない。いや、今は朱乃さんの心の傷を癒やしてもらうのが先だ！

「さあ、おいで朱乃」

両手を拡げて彼女を迎え入れる。朱乃は一瞬、驚いた表情を見せるが直ぐに微笑を浮かべると俺の胸の中に身体を預けた。

「ふふ、イツセーにしては珍しいわね」

「ああ。リアスや朱乃にいつまでも甘えてばかりじゃいられないからね」

わ、我ながら格好つけすぎじゃないか!?

いや、いかんいかん!! 俺は必死に自分を鼓舞しながら彼女と口づけを交わす。

「んむ……待って。私、汚されちゃったのに……いいの？」

「関係ないさ」

不安そうに強張った朱乃さんの身体を抱きしめながら俺は再び唇を重ねた。

彼女の凍てつき強張った身体と心を少しでも解すべく息吹を彼女に流し込む。

「んん……♡ふうう……♡」

なんだか……昔を思い出すわ♡イツセーの竜の気を吸い出していた時の頃を。あの時のイツセーったらまだまだ弱々しくて可愛かったわ♡」

朱乃さんは俺の胸に手を置いてさわさわと撫で回しながらどこか遠い昔を懐かしむような目で言う。

「言つたろ？ いつまでも朱乃に頼り切りじゃいられないってな」

「ああ……♡ダメえ♡そんな強い眼差しで私を墮とさないでえ……」

はああ……貴方の息吹を……感じる♡」

俺の竜の気によって朱乃は敏感かつ

淫蕩になっていく。既に瞳は艶やかに潤んでおり、頬も上気して可愛らしく色気がある。

「ああ。もつともつと俺の気を流し込んでやる。お前に触れようとする奴等が俺の気配だけで肝を潰して死ぬ位にな」

「ふふ……逞しくなっても独占欲が強いのは変わらないのねイツセー♡」

「ああ。ドラゴンは昔から強欲だからな」

「嬉しいわ……♡もつと、もつともつと……貴方のものだって証を私に刻み込んで♡」

たわいないやり取りを経て俺は彼女の唇を奪いながら胸を優しく揉んでいく。すると次第に乳首が硬くなつていき、彼女が感じているのを教えてくれるのだ。

「はああん♡胸え……しゅいのお……。あ、ああ！ またイツちゃう！」

朱乃は軽く絶頂すると俺の首の後ろに両手を回し抱きついてくる。

俺も彼女の背中に手を回して優しく抱きしめるとそのままゆっくりとベッドに倒れこむ。そして俺は再びキスをしながら彼女の胸を愛撫する。

「んん♥ふううん♥ああつ♥ふわふわするう♥心も身体もふわふわしてるう♥」

竜の気と愛撫による相乗作用で朱乃の感覚はより鋭くなりまるで麻薬のような陶酔感と幸福感に包まれながら彼女は俺の愛撫を甘受する。

「ふわああつ♥あ、ああん……♥イツセー、私、もう……」

「ああ。そろそろ俺も限界だ」

俺は臨戦態勢に入っている肉棒を見た途端、朱乃は恍惚とした表情になる。

「ああ……♥素敵い……♥あんな奴等よりもずっと……」

「おいおい朱乃。そんな風に比較されると俺も萎えちまうぜ？」

無論萎えるどころか昂ぶっているのだが、そこはほら……！ アレだよ！ 駆け引きというか朱乃をもっともつと俺に夢中にさせるためのテクニクというか。

「ご、ごめんなさいイツセー！ もう貴方のモノが一番だって解ってるのに私ったら！ お願い……私を見捨てないで！」

さあつ、と朱乃は青ざめるときぎゆううつと痣がつくんじやないかという位に俺に抱きついてきた。俺はそんな彼女を愛しく、かつ強く抱きしめ返す。

「ゴメンな。お前に手を出そうとしたヤツらにイラついてつい意地悪な事を言っちゃったよ」

「う、うう……ごめんなさい。私ったらイツセーにあんな酷いことを言つて……あん♥んんっ♥」

俺の謝罪に朱乃は涙目になりながらも返答しそのまま濃厚なキスと共につながっていく。ずぶ、ずぶ……と暴力的ではなく静かに、ゆっくりと朱乃は俺を受け入れていく。

「うああ♥んん……あああつ♥！ んんんっ♥♥!!」

彼女のヴァギナは俺のチンポを包み込み込みキュウキュウと優しくそ

れでいて淫らに締め上げてくる。そしてピクピク、と彼女の女神に等しい裸体が揺れる。

「ふふ、挿入されただけで甘イキするなんて朱乃はエッチな娘だな」  
「はああ……♥ああ♥そ、そうなの♥私は……お姉様ぶってるけどホントはイッサーとエッチしたくて堪らないの♥」

朱乃は俺を涙で潤んだ瞳で見ながら懇願してくる。その愛らしい姿に俺は興奮した。

「ああ♥!! す、凄いい……♥! ああんあん♥♥!! ひいつ!? ああつ! しゅごいいいつ! イッサーのおちんぽが私のおまんこをゴリゴリつてえええ!」

彼女の脇と頭上に手をおきながら俺は正常位の姿勢で彼女の胎内を割りぬく。ずちゅ、ずちゅ、ぬぷぷつ! ぱんっぱんつ! と俺が腰を打ち付ける度に卑猥な粘着音が鳴り響く。その度に彼女のたわわな乳房が大きく揺れ乱れる。ああ……あの朱乃がこうして俺のチンポで乱れていると思うと最高だ……! もっと淫らな声を出させたいという衝動に俺は駆られた。

「悪い、朱乃! 我慢できない!」

「いいの♥いいのお♥我慢なんてしないで♥あなたのしたいように私のおまんこ♥メチャクチャにしてええ♥今はリアスじゃなくて私を見て♥♥♥」

彼女のいじらしい懇願に対して俺は全力のピストンで応える。

「あああつ♥!! イッサー♥しゅごいいいい♥♥」

俺のチンポに蹂躪される朱乃の身体は激しく痙攣する。それに合わせて俺は彼女のたわわな乳房を鷲掴みにするとそのまま腰を打ち付ける速度を上げる。

「ああん♥! あん、おっぱいもおまんこも気持ち良すぎるう♥!

私……もうダメえええ!」

「くうっ!!」

そして遂に限界に達した俺達は同時に絶頂を迎えた。

どびゅっ! どびゆるるるる! 俺は朱乃の胎内に大量の精液を解き放つ。同時に朱乃も絶頂を迎えたようで身体を弓なりに反らして



ビクビクと震わせていた。

「あ……ああ♥しゅごいいい……♥」

「はは、凄いやこれは……」

俺の射精は止まることを知らず、彼女の子宮を満たしていく。その感覚に彼女は恍惚とした表情で浸っていたがやがて力尽きたのかぐったりとした様子でベッドに横たわる。

「イツセー……ずっと私を、離さないで♥」

「当たり前だろ……」

俺が応えると朱乃は俺に抱きついてくる。

「ふふ、イツセーの逞しい身体……大好きよ♥勿論心も♥」

すっかり甘えてくる朱乃は俺に全身を預けるようにしなだれかかる。その感覚に俺は幸せを感じた。

「ああ、俺も大好きだ」

俺がそう言うのと朱乃はさらにぎゅうっと抱きついてくる。柔らかかく大きなおっぱいが俺の胸板で潰れて気持ち良いがちよつと苦しいので抱き締めるのを中断してもらいそのままキスをする。

「んん……♥ふううん♥」

キスしながら髪をなでると心地良さそうに目を細めるのでとても愛らしい。ああ！ もうっ！ この人はなんでこんなにかわいいんだ!! そんな思いを抱きながらふと、シユタークさんのくれた御札を思い出す。

（分身の符術……ですか？）

（いや、少し違うネ。分身じゃなくて分裂サ。キミの精神と肉体の一部を切り離れた存在を一時的に出現させるものだヨ）

俺の欲望を切り離して暴走気味の分身を生み出す乳創身とは違う感じの様だ。

よし、ここは一つ……試してみるか。

リクエスト編 後編（安里？ルイーナ&ジャンヌ・オルタ イッセー&分裂体？朱乃）

今俺たちがいるのは【精神と時のヤリ部屋】の一角で今回はラブホテルの様な作りになっている。

ルイーナと折田、もといジャンヌ・オルタは痴漢の被害にあったばかりだというのに。

「なんだか、ここに来るのも久しぶりだね♥」

シャワーを浴び終わったらしいルイーナは一糸まとわぬ姿で俺へ猫のようにゴロゴロと甘えてくる。人前では大人しくて清楚な彼女がこんな風に甘えるのは俺の前でだけだが今日はちよつと事情が違う。

「……で、私にどうしろと？」

ジャンヌもシャワーを浴び終えたばかりだからかいつもより肌に火照りがある。

蠟人形ではなく、まして影法師ではなく、一人の少女として彼女は今、ここにいます。

「ええと……俺とその……なんだ……」

俺は言い淀んでしまう。

痴漢にあつたばかりの彼女に抱かせてくれ、と頼むのはさすがに気が引けた。

そんな俺の逡巡をジャンヌは見抜いたのかはっ、と鼻で笑いこちらを見下げ果てた奴を見るような目で見下す。

「なんです？ 一度か二度私を抱いた位で、もう俺の女だ、みたいに思われてもこちらは迷惑なんですけど？ それともなんですか？ 私の事は放っておいても構わないけど他人に取られるのはイヤなんだ、とかまるで子供ですね」

ジャンヌはどこまでも俺を罵る。だが、今の俺には彼女の言葉に怒る資格はない。俺はルイーナのことばかりに頭が一杯でジャンヌのことを蔑ろにしていた。

「ごめん、ジャンヌ。お前がそんなに思い詰めているのに気がついてやれなかった。俺はダメなヤツだな……」

「フン。謝れば罪は帳消しになるとでも？ そんなだから貴方は……」

「ウソはダメだよジャンヌちゃん」

深々と安い土下座をして詫げる俺に、ジャンヌは追い打ちをかけようとした。しかしそれを優しくルイーナが制する。

「ハア？ 何をワケのわからない事を。貴方の頭もすっかりピンク色に染まっちゃったのかしら？」

「ホントに安里が嫌いだったらここには来なかった筈だし、何よりシャワーを浴びて身支度なんて整えないよね？」

「ぐっ……、それは！ その……ほ、ほら！ アレですよ！ ニホンは湿度が高いから髪がゴワゴワして気持ち悪いんですよ！」

ルイーナに言い返せず、ジャンヌは苦し紛れに声を荒らげる。

「ふっ、ははは……」

「ちよつと！ 何笑ってるのよ！ アンタは今謝ってる最中でしようが……！ ああ、もう！ もういいわ！ アンタがしたいようにすればいいわよ！ 煮るなり焼くなり、勝手にしなさい!!」

と、捨鉢な調子で怒り散らしながらどかつとジャンヌはベッドにまるで座り込みでもするかの様に腰掛ける。

色気も何もあったものじゃない筈なのに、今の彼女は凄く魅力的だ。そしてそんなジャンヌをくすくす、と姉のように見守るルイーナも、普段よりもずっと愛らしく見える。

「ジャンヌ……」

「なによう？」

俺はゆっくりとジャンヌに近づくと唇を重ねた。目を見開いて驚くジャンヌだがすぐに目を閉じて俺の行為を受け入れる。

「んっ、ちゅっ……♥」

最初は軽く触れるだけのキスだったが徐々にお互いの舌を絡ませる濃厚なものへと変わっていく。そして隣のルイーナにも、だ。

「ちゅっ……んっ、くちゅっ……」

彼女はすぐに俺を受け入れて激しく舌を絡ませる。

ジャンヌよりも更に激しく情熱的な口づけだった。

「ふはっ、はあっ……ハアツ……な、なんなのよ……？ 私を抱くんじゃなかったの？ あっちにも、こっちにも目移りばかりして……ホントにアンタは人の気も知らないでいつも……」

ジャンヌはジャンヌで、憎まれ口を叩きながらも俺の視線に気づくとそっと自ら股を開いていく。

「ふふ、ジャンヌちゃんって意外に大胆なんだね♥」

「ちよ、ちよつと!? ルイーナ……さん！ 何を勝手に私の身体に触ってるんですか!?!」  
「だってジャンヌちゃん、もう我慢出来ないって顔してるよ？ それに私も安里に抱いて欲しいし♥皆でイヤな事や辛いことは忘れて気持ちよくなろうよ♥」

まるでサキュバスのような妖艶な微笑みで、ルイーナはジャンヌを押し倒し耳元でそう囁く。

「あっ、うう……ん……」

耳を優しく舌で責められジャンヌは目を閉じて甘い吐息を漏らす。そして彼女のアソコにルイーナの指と俺の舌が伸びていく。

「はあ、んっ！ やあっ……」

「ジャンヌちゃんのここ、もうびしょ濡れだよ♥」

「ふ、ふざけないで……！ あっ……ん……あ」

口では抵抗しようとしてもジャンヌのアソコからは愛液が溢れて止まらない。その滑りを利用してルイーナは巧みに愛撫を続ける。ジャンヌも快楽に抗えず身体をくねらせているだけだ。俺の舌も休むことなく彼女の陰唇やクリトリスを丹念に舐め上げる。

「ふあっ……あっ！ な、なにか……んっ……きちやう、かも……」

ジャンヌの声が次第に切羽詰まってくる。そろそろ限界なのだろう。そして俺の舌と彼女の秘部を責める指もラストスパートをかけるように激しくなっていく。

「やあっ！ くう……！ んっ♥」

ジャンヌが背中をのけぞらせ、びくんびくつ、と痙攣する。そして

ドロリ、とした粘りと香りの強い本気汁が彼女の股から垂れ落ちてくる。

「あはっ♥ジャンヌちゃん、イツちゃったね♥」

「はーっ、はーっ……………はあ……………」

ジャンヌは完全に脱力して荒い呼吸を繰り返しながら天井を見ている。ルイーナはそんな彼女を微笑んで見つめると俺に目で合図しながら今度はジャンヌの乳首を弄り、更にキスをし、そして俺のモノを優しく撫で上げる。

「んっ、ちゅっ……………ジャンヌちゃん♥」

「はあ……………んっ、ルイーナちゃん……………」

二人はまるで恋人同士のように仲むつまじく右手の指を絡め合う。その姿に興奮した俺はルイーナの剥き出しかつとろけ始めていたオマンコに狙いを定めて一気に突き入れた。

「んっ！ふああああああっ♥」

一瞬、ルイーナは目を見開いて叫ぶように嬌声をあげ、その後ですぐに艶かしく微笑み俺に舌を絡めてくる。

「ジャンヌちゃん……………見て♥安里のが私の中に入ったよ♥」

「んっ……………あ、ああ……………うん……………。私にも……………」

ジャンヌはうわ言のような返事をしながら虚ろな目で俺たちの結合部を見つめている。そして彼女はゆっくりと自分の股へ手を伸ばすとその部分を指先で撫でながら切なげに言う。

「ずるい……………ずるいわ、ルイーナちゃん……………。私も、私も欲しいよお。」

安里……………マスターちゃんのおつきいおちんぽで私のオマンコも気持ちよくしてえ……………♥」

ジャンヌはその場に立ち上がると俺に見せつけるように股を開き、自分で胸や乳首を刺激しながらおねだりをしてきた。

「あっ♥ふうっ♥ふうっ♥安里♥ジャンヌちゃんにみられながら♥エッチするの……………♥気持ちいい♥ゾクゾクして……………私、癖になっちゃいそう♥」

ジャンヌが見ているせいかルイーナも普段以上に乱れている。俺は彼女が望むままに激しく腰を振って何度も何度も彼女をイカせ続

けた。思わずルイーナのおっぱいに手を伸ばし、揉みしだく。

「ああっ♥乳首もっ……んくう♥クリトリスもお♥抓つてえ……ああっ♥♥」

ルイーナは俺にバックで突かれながらも腰を振り、背中をのけぞらせて更なる絶頂を迎える。

「ああっ♥来るっ♥安里のオチンチンぷくーって膨れ始めてる♥♥♥  
いいよ♥出してっ♥私の一番奥で……んうっ♥♥♥ああーっ!!」  
「ルイーナー!」

びゅくっ! びゆるっ!! どぶっ、どぶうう……。

俺は彼女の腰を掴んで一番深くで射精する。一滴残らず彼女の子宮に注ぎ込む。

「ああ……♥出てる……安里の精子いっぱい出て来てるう♥♥♥イク……♥イツちやう……♥♥♥ラブラブエッチ……♥やめられないよお……♥♥♥」

ぎゅううーっとな彼女のヴァギナが締め、一滴残らず絞り出されるような感覚に俺は思わず腰が引ける。

「はっ、ああ……あはっ♥♥♥」

ずるり、と俺は萎えたペニスを引き抜く。するとジャンヌが待ちきれないとばかりに俺に抱きつき唇を重ねてきた。

「んちゅっ……マスターちやあん♥私にもお♥するの♥するっ♥マスターちゃんにすれば私はキープちゃんなんだろうけど、それでも貴方とエッチがしたいの♥しろっ♥♥♥」

「キープちゃんってお前なあ……」

まるで気でも狂ったかのようにジャンヌは俺に腰を擦りつけながらキスを繰り返す。

「ほら、ジャンヌちゃん♥安里もジャンヌちゃんとエッチなことしたいって言ってるよ♥」

「ええ……そうね。マスターちゃんのオチンチンおつきくなって……♥バキバキに反り返ってる♥」

二人の迫力に思わずたじろいだ俺は二人に押し倒される形になり、仰向けの俺の上に二人が乗ってくる。ジャンヌは騎乗位、ルイーナは

寄り添うかたちになる。

「んああ……挿入ってくるう……」

「あつ、すごい……♥ジャンヌちゃん、安里のオチンチンがずっぽり入ってくよ♥」

二人と俺の結合部が丸見えだ。ジャンヌは自ら腰を振って俺のモノを飲み込み、ルイーナは俺の胸板に舌を這わせる。

「んっ……あはっ！これっ、いいっ♥マスターちゃんのオチンチンが奥まで届いてるっ♥♥」

「あはっ！ジャンヌちゃんったら自分から腰振ってやらしいんだあ♥安里もほら、私のおっぱいもみみしながらちゅっちゅ♥いっぱいちゅっちゅっしようよ♥」

彼女のリクエストに応え、俺はルイーナのおっぱいを揉みながら彼女と何度も何度もキスを交わす。

「んっ、ちゅっ♥あんっ♥いいよっ、安里……んあっ！あ、はああああああっ!!」

「わ、私も♥マスターちゃんのオチンチンとオマンコちゅっちゅ♥はめはめして貰いながら安里とちゅっちゅしてる♥♥♥」

「マスターちゃん♥イク♥私、もうイク♥お願いっ、マスターちゃんのザーメンちょうだいっ♥♥」

「私ももうダメ……♥キスとおっぱいで、私……またイクウ♥♥♥」

ジャンヌの激しい上下運動に俺はたまらず彼女の子宮口に密着した状態で思いつき射精する。彼女は身体をのけぞらせ痙攣させたがそれでも俺のモノを放そうとしない。

「い……イクウウウ♥♥♥」

二人の美少女が同時に嬌声をあげる。

そしてジャンヌは俺に倒れこむように身体を預け、ルイーナは俺にもたれかかって荒い呼吸を繰り返す。

「はー♥はー♥すき♥だいすき♥マスターちゃん♥」

「わたしも♥わたしも安里が大好きだよ♥」

目をトロンとさせながら潮と精液を垂れ流し、二人は余韻に浸るように俺にキスを繰り返す。

「んっ……マスターちゃん♥」

「安里……♥」

「大好き♥」

俺は二人に甘く囁かれながら、幸せな気持ちで眠りにつくのだった。

↓

そんなワケでシュタークさんから貰った御札を発動させると……。おお、俺と瓜二つの存在が現れたじゃないか！ さながら双子の弟の様だぞ！

「よう！ 俺、二誠（にせい）って言うんだ！ ヨロシクな！！ でもニツセーなんてパチモン扱いはしないでくれよな朱乃さん！」

な、なんかノリが軽い分裂体だな……。というかこれもある種のシャドウとかアニマとかそういう感じなのか？

「え、ええ……宜しくね」

若干ドン引きしている朱乃に対してニツセーのヤツはいきなり土下座を始めた！ な、なんだコイツ！？

「どうしたの二誠くん？」

「お、お願いだ朱乃さん！ 朱乃さんとセックスさせてください！！」  
え、ええっ!? コイツマジで俺の分裂体？ 性欲に忠実すぎるだろ!!

いや、覗きとかセクハラをかましていた嘗ての俺を鑑みればまだマシ……なのか？

「あらあら、貴方ふざけておりますの？」

あ、朱乃があらあらうふふ仮面モードに入った。ははは、残念だったなニツセー！

「な、なんでだよ!? 俺、この世に生まれてきたからには朱乃さんみたいな美人とセックスしたいんだよ！ 頼むよ！」

「おだまりなさい。私が心と身体を許すのはイツセーだけですわ……」

「そこをなんとか！ 俺は朱乃さん以外には目もくれないから！ 一生大事にする！ 誓うよ！ 朱乃さんだけを一生愛していくから！」



だから！」

「う、うう……だ、黙って！ イッセーと同じ声で同じ顔で……そんな事言わないで」

あれ？ 朱乃さんの様子が……？

「お願いだからあ……本当にイッセーだけなの。私だけを大事にするって言うてくれるのは嬉しいけど、それだけは嘘でも言わないで」  
「嘘なんかじゃない。本気だよ。俺は朱乃さんのためなら死んだっていい」

「だ、ダメよ……私にはイッセーが……」

「っておいイ!? キスからおっぱいタッチまで早すぎやしないかあ!?」

「ああ……すげえ……朱乃さんのおっぱいってこんなに柔らかくてあつたくて、俺、生まれてきて良かったよ」

「ふふ……大袈裟ね♥そうね……貴方はイッセーから生まれでた存在なら浮気とは少し違う……かも♥」

更に二人はデープキスをし続けて次第に激しくなる。

「んんっ♥!! 二誠くん……♥」

「ああっ、朱乃さん！ そのシュツとしたうなじも、腰のくびれもお臍のセクシーさもお尻のムツチリさも、背筋の清らかさも全部、全部たまらないよ!! それに甘えたがりのギャップも最高にそそる!!」

「うふふ……イッセーはおっぱいばかり褒めてくるけど貴方は私の心も身体も両方を認めてくれるのね……♥♥♥」

あ、あの……朱乃？ 目がハートになっておりますが……。いかに！ 欲望に忠実だからか二誠には照れやカツコつけというものが存在しない！ その必死さと懸命さが朱乃さんの母性と乙女な部分を刺激してしまっているんだ！ よ、読めなかった！ 流石のシユタークさんは大人の女故に!!

「ね、ねえ……♥そろそろ……」

「ほ、ホントにいいの？ 朱乃さん!? 俺から言うておいて何だけど……!」

くちゆり、と二誠の先端が朱乃さんの淫花に触れると朱乃さんはビ

クン、と身体を震わせる。

「ええ……二誠くんの逞しいオチンポの童貞……私に頂戴♥」

「うお……おおお……」

「あ……あああ……」

俺の目の前で二誠と朱乃が一つになっていく。二人は目を閉じながら互いの結合感を味わっている。

「す、すげえ……朱乃さんのオマンコってこんなに気持ちいいの……!?!」

「んっ♥あ、ありがとう……これが女の子とエッチした時の本当の感覚よ。でもまだまだ……これからですわ♥」

「お、俺も！ 朱乃さんをもっと気持ち良くしてあげたい！」

二誠は腰を動かしながら朱乃の胸を揉み始める。その途端、朱乃は今までに無い反応を見せた。

「あああんっ♥♥そ、そう……そこお♥」

「え!?! ぐ、ごめん！ 痛かった!?!」

「ちがつうの……そこが……感じるのお♥もつと、もつと揉んでえ♥」

「うん！ わかったよ朱乃さん!!」

ぐにっ♥♥ぐににいつ♥♥と朱乃のたわわなおっぱいがグミの様に形を歪め、ぶちゅっ♥♥じゅぶぶ♥♥といやらしい水音を結合部から響かせる。

「あっ♥♥あああんっ♥♥い、いい……っ」

二誠が腰を動かして朱乃の胎内を往復するたびに朱乃は乱れた。苦悶や羞恥の表情はなく、俺としている時のように、いや俺としている時よりも更に快感を感じている？ あいつは俺の分裂体なワケだから寝取られているということではないのだが……!?!

なんだ、この焦燥感は?! そんな俺の焦りと不安を見透かした様に朱乃は俺に尻と横顔を向けつつ二誠に跨がり騎乗位の姿勢になると、まるで餅つき機のように自らのお尻を上下させ始めた！

「あ、朱乃さんっ!?! そんな激しくっ!」

「ふ……ふふ♥二誠くんのオチンポが気持ち良すぎて、私……もう我

慢できないの♡♡ああっ♡いいっ♡♡気持ちいいのっ♡♡もつと、もつと突いてえ♡♡

あなたのチンポで私をメチャクチャにしてえっ♡♡

ぱっんっ!! ぱっんっ!! と汗ばむ朱乃の尻とニッセーのシツクスパックに割れた腹筋がぶつかる音が響く。

「う、お……おおお!」

「んあっ♡♡あああっ♡♡」

朱乃は二誠の腰の動きに合わせて自らも腰を振りたくり、その度に大きな胸もぶるんっ♡と大きく揺れる。その淫靡な動きに俺は目が離せない!

「ぐ……うう。待って……朱乃さん」

「うふふ♡まーたない♡私の中にドピュドピューって二誠くんのザーメンぶちまけてえ♡♡」

朱乃は徐々に上下運動の速度を上げ、完全に二誠を射精へと導く動きへと移行する。更にポニーテールの髪留めが外れてしまうまでに腰をねじり、振り立てながら激しいセックスを続ける朱乃に俺は圧倒され……そして嫉妬していた。

「待って! 待ってよ朱乃さん!! 俺、もつと朱乃さんと繋がりたいのに……」

「あらあら♡甘えん坊なのねニッセーは♡」

朱乃は二誠にウインクをして笑う。その仕草はあまりにも可憐で淫靡だ。

「おおお! 朱乃さん!! 俺、もうっ!!」

「あはっ♡♡ほら、出して♡♡早くチンポ汁を私の子宮に出してえ♡♡」

「う! あああ……で、でも……!! うっ!」

ぬぼん、とニッセーは咄嗟にチンポを朱乃さんの中から抜いて射精した! どびゆるるるっ!! ぶびゅううううっ♡♡びゆる、びゆく

♡♡

大量のザーメンが朱乃さんの身体にぶつかかり、朱乃は全身でその熱さを受け止めベッドに倒れ込んだ。

「あ……ああ……」

二誠は朱乃の身体にぶつかかったザーメンを見て、がくりと膝をつく。

「あら、どうしたの？」

朱乃は二誠にしな垂れかかりながらその耳元で囁いた。

「私の中に出したかった？ それとも私の顔やおっぱいにぶっかけた方が良かったかしら？」

「……っ！ そ、そんな……俺」

「うふふ♥いいのよ？ 貴方は私のオマンコで気持ち良くなつたんだから♥それに貴方のチンポ汁、熱くて素敵よ♥」

朱乃は二誠に抱きつき、その唇を奪う。

ザーメン塗れの裸体が密着し、二人の胸板で朱乃の大きな胸がひしゃげた。更に慣れた手付きでチンポをしごき立てると俺の分裂体なだけはあるすぐに硬さと大きさを取り戻していた。ぐぬぬ、なんてヤツだ！加減しろ！

「あっ！ 朱乃さん……俺、もう……」

「しようがないわね♥♥今度はちゃんと私のお腹に……ああんっ♥♥」

朱乃が言い終わるか言い終わらないかの内に俺は朱乃の中にバツクで挿入した。これ以上、俺の分裂体が朱乃を穢すのは我慢ならねえ！！

「ああん♥♥どうしたのイツセー？ いつもと違って荒々しいわよ？」

「ず、ズルいゼイツセー兄さん！ 朱乃さんは今、俺とラブラブセックスしてるんだから！！」

「やかましい！ これ以上、お前の好き放題にはさせんぞ！」

ズンツズンツズンツ！ と朱乃を激しく突き上げると朱乃は歓喜の悲鳴をあげた。

「あっ！ ああっ！ ♥♥♥そ、そうよお♥♥もっと強く突いてっ！！ エッチな朱乃にイツセーのチンポでお仕置きしてえ♥♥♥」

「くっ！ 朱乃さん！ そんなにイツセーのチンポがいいのかよ！！」

汗を振り乱しよがり狂う朱乃の火照ったおっぱいの谷間にずぶずぶとニツセーのチンポが挿入されていく。

「はぁ♥♥あんっ♥二誠くんのチンポも素敵よ♥♥でもね、イツセーのも凄く素敵なの♥♥」

俺は嫉妬に燃えながら朱乃を突き上げ続ける！ そのたび朱乃は淫らで可憐な声で鳴いた。

「うふふ……どうやらイツセーったら嫉妬したみたいね♥あつ……いいわ……もつと激しく突いてちょうだいっ♥♥」

俺の怒りが伝わったのか朱乃は更に激しく俺を求め、俺もそれに応えるように腰の動きを速める。二誠も二誠でおっぱいセックスの快楽に酔いしれ、朱乃のたわわなおっぱいをムギユムギユと揉みしだいていた。

「はぁ……ああつ、二誠くん♥♥」

私のおっぱいオマンコ、気持ちいい？♥♥」

「うん……柔らかくて温かくて、朱乃さんのおっぱいは最高だよ！」

「嬉しいっ！ じゃあもつともつと気持ち良くしてあげる♥♥」

ヒートアップした朱乃はグラインドと共に

おっぱいをギュツと締め、腰をカクカクと前後させての大盤振る舞いだ。

「ああっ♥わかるわ♥二人のオチンポが私に精液出したいってビクンビクンしてる♥♥」

「くっ！ 朱乃さん!! 俺、もう!!」

「あっ♥♥あんっ♥♥私もいきそうっ♥♥お願い、二人一緒に出してえっ♥♥♥」

ズンツ！ とトドメとばかりに一際強く突き上げると朱乃は甲高い声をあげながら背中を弓なりに反らして絶頂を迎える。

それと同時に俺と二誠も限界を迎え、大量のザーメンを朱乃の子宮とおっぱいの谷間に注ぎ込んでいく。

「あ……ああ♥♥」

朱乃はうっとりとした表情を浮かべながら自分のおっぱいにぶっ

かけられたザーメンを指ですくうと、その指を口へと運び、舐め取った。

「ん……美味しい♥♥イツセーも二誠くんも素敵よ♥♥」

「はあ……はあ……」

分裂したためか大分へ口へ口になっちゃった……。

「あらら……イツセーったら体力使い果たしちゃったわね♥」

「お、おい朱乃さん！ イツセー兄さんばかりズルイぞ！ 次は俺と……」

と二誠が言いかけると朱乃は人差し指をヤツの唇に当てる。

「うふふ♥♥ダメよ二誠くん。今日はこの位で……ね♥」

今日は、というのが若干気がかりだが……ひどく、疲れた……。ああ、もうガス欠っていうか色々慣れないことをしたためか、とても眠いぞ……。

「あら？ イツセーったらもう眠くなっちゃったの？」

「お……おう」

もう瞼が限界だ。だが最後にこれだけは言っておかないとね。

「朱乃さん……」

「なーに？」

「俺は、その……朱乃さんの事が好きだからな」

それだけ言うと俺は睡魔に身を任せて瞼を閉じた。

↓

それより少し後のこと。

摩天楼の如きタワーマンシヨンの一室にて。

「おや、トウー君じゃないか？」

キミがボクの所に来るなんて珍しいネ」

「ええ。実はイツセー様の分裂体とやらについてお尋ねしたいのですが……」

「随分耳が早いネ。朱乃君が惚気けたのかな？」

(私はまだ、朱乃さんの話はしていないのだが)

トウーはシユタークに対し俄に警戒心を抱きつつも咳払いをする。

「コホン……まあ、そういう事にしておいてください。それでイツ

セー様の分裂体とは一体どういう事です?」

「どういう事も何も、彼の肉体や精神の一部を一時的に切り離して再現したもの……だけど?」

「はぐらかすのはお止めいただきたい。」

今のイツセー様はニグラ様のお力で生まれ直した存在です。その様にイツセー様以外の誰かの干渉により、姿や人格が複製、変質するなどあり得ません」

じつ、と一瞥するトゥーの眼差しにシユタークは余裕を崩すことなく向き合った。

「まあ、良いじゃないか? イツセー君にも分裂体や分身の概念を教えてあげた方がより強化に繋がるんじゃないかな?」

乳創身は今の所エツチなことにはしか使えない様だけど、分裂体の仕様を理解すればより多角的な使い方が出来る様になる」

「信じてよろしいのですね? 貴方は飽くまでイツセー様の友人であり味方」

「なのですね?」

「勿論。ボクはね、彼になら殺されてもいいって本気で思っている」

いつもとは違うクセのあるイントネーションはない。

「それは……どういう?」

「そのままの意味さ。愛することと憎むことはボクの中では両立するんだよ。わからないかな?」

真顔で言った。その瞳にも嘘はない。

だが真実というものが常に皆の都合がよいもの、健やかなものではないということをも魔人であるトゥーは知り抜いていた。

「まあそんな話より君たちに引越しの手伝いを頼みたいんだ。イツセー君やキミだけでなくキュクロくんやギヤスパークン達も連れてきてもらえると面白いネ」

彼女の真意がどこにあるのか、それを量る術はトゥーにはない。シユターク・ゴーズは謎多き悪魔祓い師なのであるから。

リクエスト編 前編（ギヤスパー？キユクロ）

「ふー、これで大凡は終わりましたね」

「いやあ、助かったヨ。天下の赤龍帝たるイツセーくんにつ越しの手伝いだなんて仕事を依頼してしまっテ」

今俺はシユタークさんの依頼でタワマンから郊外の庭付き一軒家へと引っ越しの依頼を果たした所だ。

「まったくひどづかいのあらいおんなだな。きさまのおふだでぱぱっとおわらせるワケにはいかなかったのか？」

「うわあああ!! 急に持ち上げないでくださいいい!!」

ツナギ姿のキユクロちゃんがぽんぽん、と手を払いながらそう愚痴る。

キユクロちゃんは見た目通りフオークリフトより力持ちだからなあ……。

というかギヤスパーは相変わらず段ボール箱の中にいたのか。

この状況では色々ややこしい。

「残念ながら符を作るコストと釣り合わなくてネ。まあ、ボクが蕎麦を茹でてあげるから許してくれたまエ」

「ひっこしのバイトだといはべつなのだろうな。キユクロはごまかされないぞ。

じーじたちにおみやげをかわねばならぬからバイトだがいるのだ」

「勿論サ。それほど欲ボケはしていないつもりだヨ」

お土産代？ キユクロちゃんの金銭感覚がしっかりしているのは意外だったが彼女はどこか旅行にでも行くのだろうか？

あるいはギヤスパーとデートとか？

いや、ギヤスパーも男ならデート代くらい出すだろ。幾らなんだっ  
て……。

「うわーん！ 出られない！ 暗いよ！ 狭いよ！ 怖いよー！」

……あいつ、荷物の中の山の中で更に下の方の段ボールに入っていたの



か。

二人の先行きは不安だ。

そんな俺の湧き出る疑問を察したのかこれまたツナギ姿のトウーさんが俺に耳打ちした。

「恐らくはイツセー様たちの修学旅行に同行するつもりではないでしょうか……?」

彼女はギヤスパー君と同じ中等部ではありますが修学旅行の日程は異なるでしょうし」

「ああ、成程……。でも出席とかはいいのかいキユクロちゃん」

「あんずるなイツセー。じーじのおくるかげむしやがかわりをつとめる。だいじなし、だ」

影武者とか大事なし、とかキユクロちゃんも大分曇化が進んでるなあ……。

というかつナギのジツパーを下ろして汗ばむシャツから色々と透けていらつしやるのですが……ぐへへ。じゃなくて！

「な、なあトウーさん！ キユクロちゃんの透けたシャツ越しの下着とか肌とかが色々と見えてるんだけどー！」

「あー、そうですね。まあ、イツセー様相手なら別に大丈夫じゃないでしょうか?」

「そうだな。イツセーとはねんごろだからな」

「そうだね。今に始まったことでもない」

「早く出してくださいいい!!」

え、ええ〜っ?!? そこまで信頼を得られて嬉しい様な、敢えてキヤーキヤー言われて追い立てられるリスクを背負ってチラチラ見る方がより興奮する様な……。

我ながら贅沢な悩みだ。

1

そんなワケで俺たちはギヤスパーを救出(?)したあとシユタークさんが作った蕎麦と稲荷寿司をご馳走になったのだが……。

「はむはむ。あれ? この稲荷寿司甘くないんですね」

「シユタークはりょうりはへたなのか？

そばをゆでるのはうまいようだが」

ギヤスパーは稲荷寿司を口に含み、ズルズルと蕎麦をたぐりながらキユクロちゃんは忌憚のない意見を口にする。

しかし食いつぷりはいいなあこの子。

水みたいに蕎麦を飲み込んでいくんだから。もう二十人前は食べてるような。

「ハハハ。関西式の稲荷寿司は甘くないのが特徴なんだ」

確かにゴマ、しいたけ、にんじん、ひじき、あとシヨウガが入っている炊き込みごはんが稲荷の中に入っている。肉こそ入っていないが独特のkokoroのようなものを感じるから不思議だ。うちの母さんの作るものとはタイプが違うが、うまい！

うくん、それにしても引つ越し前に一手間かかるものを作ってくれるなんてシユタークさんもマメな人だなあ。

「美味しいです！ シユタークさんの料理は格別ですね！ これなら毎日でも食べたいな」

「プロポーズかい？ いや、イツセーくんが褒めるほどじゃないサ。ささ、おかわりもあるからたくさん食べておくれヨ。食べっぷりのい者に食べられた方が食材も喜ぶヨ」

おかわり！ ご馳走してくれるなら断る理由はない！ 俺はありがたくシユタークさんの言葉に従って稲荷寿司を口の中に入れてモグモグと咀嚼する。

うん、うまいうまい。でも本当に美味しいのは……この味もだけどこうしてみんなでワイワイしながら食べるからなのかもしれないなあ。

「イツセー、にやにやしすぎだぞ」

「んぐつ!? そ、そんなに顔に出てたかい!？」

「はい、とつても。イツセー様は感情がすぐ顔に出ますから」

ああ〜っ！ 確かにそうだ……っ！ しかも両手でそれぞれ稲荷寿司を食べていると浅ましき！ くうっ！ 恥ずかしい……っ！

そんな俺を見てシユタークさんが笑う。

「ハハハ。まあ、いいじゃないか。」

それはそれとして関西の稲荷寿司は狐の神様に奉納するために、関東の稲荷寿司はお米の神様に奉納するために作られたんだヨ。君は修学旅行で京都に行くなら覚えておきたまエ」

「え？ そうなんですか？」

京都で稲荷寿司って珍しいな。何か意味があるんだろうか。俺はもぐもぐと咀嚼しながら尋ねる。

「そうだよ。修学旅行では有名な観光地でも周りへ日頃の感謝を忘れない様にネ」

「はい、わかりました！」

そんなこんなで食事を皆で楽しんでいただけのだけど、急にシユタークさんのスマホが鳴る。

「ちよつとごめんネ。せまくるしい所だがゆつくりしていてくれたまエ」

「あれ？ お仕事ですか？」

「まあネ。近頃リアス君が産休のためかあちらこちらで跳ね回る輩が増えているのサ。まあ、ボクとして商売繁盛で願ったり叶ったりなんだけド」

「ちや、ちやつかりしてるなあ。フリーで悪魔祓いを生業にしているだけはある。タワマンから引越したとはいえ羽振りと切符がいいし、それは前から変わっていない。」

「じゃあ俺も一緒に行きますよ」

「いいのかイ？」

「いいも悪いも俺たちビジネスパートナーシップじゃないですか！

水臭いことは抜きでいきましよう！」

「キユクロはふるにはいりたいたのでパスだ」

「イツセー様が出るなら私が出るまでもないでしょう。ここでお二人の仕事が終わるまで荷解きをしておきます」

「ぼ、僕はその……ええと……」

全く仕方ねえなあ。ギヤスパーはキユクロちゃんと一緒にいたいのだろう。ま、俺とシユタークさんのコンビならよほどの相手でもな

い限り遅れは取らないだろう……。

ー

そんなワケでここは人間界ではなく冥界の一角。

「それで、依頼というのは？」

「聞いて驚いてくれたまエ。なんと曹操君からの依頼だヨ」

「えーっ!？」

驚けと言われたからではなく俺は心底驚いた。曹操ってあの英雄派のリーダーの曹操だろ!?! 七符とか呂布とかを差し向けなければいいだろうに。

「いや、それがねえ。叛英雄の一人が暴走を始めたというから止めてくれないか、と言っているんだヨ」

「大丈夫なんですか……?？」

まさか向かった廃墟の先で騙して悪いが仕事なんぞでな。お前たちには死んでもらう。なんてのは勘弁だ。

「まあ、曹操君も禍の団の立場というのがあるのだろうか？」

「テロリストなのに立場だなんて考えるモンなんですか？」

俺の身も蓋もない疑問にシユタークさんは好ましいものを見るような笑みを浮かべた。

「ハハハ。君は小気味の良い子だね。

寧ろテロリストだからこそ内ゲバ、派閥争い、肅清はつきものなんだ。

なにせ天下の赤龍帝を敵に回してしまった結果貧すれば鈍する……ってヤツだろうサ」

「いやあ、なんか照れるなあ」

と益体もない話をしていたら早速廃墟の方に動きがあった。なんだか子供達がふらふらとまるで誘われるように廃墟の方へと向かっていく。やはり暴走した叛英雄の仕業だろうか。

とにかく、俺達は気配遮断の符を貼って様子を見ることにしたのだが……。

ー

「んはあああっ ♥♥♥ 凄いつ ♥凄いわあ ♥♥♥ 魔術で増強した○

学生のデカ太チンポ♥さいこおつ♥」

廃墟の中の踊り台で一人の女性が嬉々として子供達を犯していた。

「あ、あぁっ……お姉ちゃん、お姉ちゃんっ……♥♥」

「ほらほら♥お姉さんのお乳、好きに吸っていいのよ♥」

「う、うんっ！ ちゅうちゅう……」

「ああくんもうかわいいわぁ♥英雄たるものかわいい男の子とセツクスしなきゃウソよ♥♥」

と女はその少年の股間に跨がって腰を振りシヨタつ子との乱交に夢中になっていた。見た感じは俺達と同じくらいの年齢で真ん中分け。顎先くらいまでの紅い髪を外にはねさせた感じでマスクレードマスクをつけたニプレス逆バニー。更に更におっぱいもおしりも相当なサイズだ……。つてとんでもないもの見せられているぞ！、こ、これはまさか!? アレか!? 若い純真な子達を悪の道に墮とすための卑猥……じゃなくて卑劣な罠!?

クソ……なんで……なんで……!!

「俺が子供の時にやってきてくれなかったんだー!!」

「い、イツセー君!」

しまった! 怒りと悲しみのあまり素っ頓狂な叫びをあげたせいで気配遮断が無効になってしまった!

「……なによ。メス豚とオスドラゴンじゃないの。お呼びじゃないのよ! 消えなさい!!」

子供達におっぱいやお尻をもみもみされながら急に凛々しくなられても……なあ。というかシユタークさんをメス豚!? なんてことを言いやがるんだ!!

「あっ!? おっぱいドラゴンだ!」

「ホントだ!! おっぱいドラゴンだ!!」

「ぼく、おっぱいドラゴンだいききなんだ!」

子供達が瞳をキラキラさせながら俺のそばに寄ってくる。どうやらあの女の魔術は解けたのか……?」

「良く解らんが純粋な男の子を悪の道に引きずり込むのはやめろ!! お前は何者だ! このおっぱいドラゴンが成敗してやる!」

赤龍帝の鎧を纏い、俺は赤毛の痴女に対してそう言い放つ。

「誰が痴女よ!! 私エリザベート・バートリー! 血まみれの公女と畏れられたものの血を引く叛英雄よ……ってああん♥」

って何人かの子供がまだエリザベートってヤツの虜になっていやる! 俺と比べても見劣りしない大人サイズのチンポをしゃぶらされながら、エリザベートは乱れた赤毛をかき上げて名乗る。血まみれどころか痴まみれじゃねえか! ぶっ飛びすぎてエロいと感じるより先にドン引きだよ!

「お前らよせ! 女……の子? をいじめるようなヤツはりっぱな男になれないぞ!」

「で、でもおねえちゃんを見てるとオチンチンがむずむずするよお……」

子供の一人がチンポをエリザベートとやらのデカパイにこすりつけながら瞳を潤ませていた。気持ちはわからんでもない! だが……! そこをガマンだお前達!

「まあ、気持ちはわからなくもないけどねエ」

はー、と半分呆れ気味に嘆息しながらシュタークさんが合いの手を入れた。シュタークさんにもそういう趣味がおりなのか?

「あら? メス豚にしては見どころがあるじゃない♪ あなたもどう?」

「いや、ボクは遠慮しておこう。しかしエリザベート・バートリー……若い女性の血液風呂に入ることでは若さを保っていたと聞くけど子孫はちよつと事情が異なる様だネ」

エリザベートをチラ見しながらシュタークさんがそう言う。するとエリザベートは雌豹のポーズを取りながら不敵な笑みを浮かべた。うくんエロいものになんというか……。

「ふふふ♥おほおつ♥ご先祖様の愚かな所はあつ♥♥♥んひいいつ♥あああつ♥♥ぎもちいい♥セックス覚えたてのシヨタチンポからしか取れない栄養素さいこおおお♥♥♥イグウウウウ♥♥♥」

パンツ! パンツ! パンツ!!

だからやめろオ! シリアスなシーンが台無しだ!

シヨタっ子が必死に腰をカクカクと動かしているのを、エリザベータは甘受しながらアクメをキメ始めやがる。

(こいつと戦うのヤダなあ……)

そりや曹操もこんな痴女を超えた痴女なんて持て余すわ……。

「しかし見た所、キミには精神に関する魔術の心得はなさそうだけど……どんなタネがあるんだイ？」

一方のシユタークさんだが冷静だ。やっぱりこの人……只者じゃない……！

「いいわ♥ああ♥いいわあ♥♥あげる♥教えてあげるう♥♥♥あなたにセツクスの気持ち良さを教えてあげるううう♥♥♥」

「ああっ！ エリザベータおねえちゃん！」

いや、だからな!! ダメだ！ 会話が成立しない！ もうこいつを捕縛して矯正施設に送って終わりでいいんじゃないか!! しかしシユタークさんは廃墟の中のある装置に気がついた。

「ふむ……。これはハメルーンのフェア吹きだネ」

は、ハメルーンフェア吹き?!

なんてヒドい名前の装置だ！ ハーメルンの笛吹きをもじっているんだろうけど！

「な、何ですかそれ？」

「確かアザゼルが開発を中止した人工神器の一つサ。何でもサバトで生まれるエネルギーを促進させ、更に指向性を持たせようとしたけど結局うまくいかなかった……って話サ。そう簡単に人間の感情は支配できないって事だネ」

「ふふ、その通りよ！ このハメルーンの霧吹きは裏ルートで改良されたもの！ この人工神器でシヨタっ子の純粹無垢なエナジーを得た私は無類無敵！ アンタ達はここで私に敗れるっ♥おおっシヨタチンポが前から後ろから串刺し♥死ぬっ♥殺されるっ♥♥♥シヨタチンポに殺されりゆうううう♥♥♥」

だ、だが負けられん！

チビっ子達の眼の前で無様エロをかます変態相手に無様な真似はできない!! なにせ俺は乳龍帝、おっぱいドラゴンだからな！

ギヤスパ―視点

い、今僕はとんでもない状況になっていますううう!!

「どうしたひきこもやし。キユクロのはだかをみるのははじめてではなからう」

「そうですねともギヤスパ―様」

どたぶん♥とまさに波打つ四つのおっぱいにはさまれ僕は天に召されそうです……。

ここはシユタークさんのおうちの風呂場でツナギの洗濯ついでにお風呂に入ろうとなつたワケなのですが……。

「ふふ。ニグラ様の賜物でしょうか。」

また少し大きくなつたではありませんか?」

「そうだな。からだはきやしやだがひきこもやしのチンポはふとくっておおきいな♥」

う、うう……。好きな子と憧れの人にオチンチンをしごいてもらえる気持ちよさに僕は言葉を喪つてしまうほどに感じてしまう! 僕のチンポは魔眼をコントロールできるようになった筈なのに自分でも持て余すほど興奮してバキバキになつちやう!

ああ、は、恥ずかしいけど……なんだか興奮しちやうよ♥

「こら、ひきこもやし。おまえひとりだけきもちよくなるな。そんなことではださせてやらんぞ」

天国から急転直下! ギゅーつと潰れる位にキユクロちゃんの怪力が僕のオチンチンに襲いかかります!

「うぐっ! ち、ちぎれちやうよお……♥」

でも正直僕が少しでも抵抗しようとしたら彼女達に力づくで抑えつけられてしまうのでどうしようもありません。僕の力はいつの間にかみじんもなくなっているんです……。

「そうですね。今しばし我慢なさいギヤスパ―様」

ふわふわのおっぱいとムチムチなおっぱいに顔を挟まれながら僕はオチンチンを再びしごかれていく……。

僕は二人の股の間に手を伸ばしながらちゆうつと二人の乳首に吸



い付きます。

すると二人は嬉しそうに笑って僕の頭をなでてくれました……。

「ん♥ふふ、かわいいですよ。ギヤスパー様」

「そうだな……♥」

ああ……まるで揺り籠かお母さんのお腹の中にいるみたいだ。出来ればずっとこのままでいたいよ……。

でも、僕のタマからせり上がってくる精液は発射の瞬間を待っている。

「さあ、我慢せずに出しなさい」

トウーさんが僕の耳元でそつと囁いてくる。

ああ……その言葉だけで僕は本当に自分がダメになっちゃいそうな感覚に陥ります！　そして次の瞬間には二人は僕のチンポを強くしごいてきます！　もう堪らない！　気持ち良すぎて出ちゃう!!  
どぶっ♥♥♥♥♥どぶどぶ♥♥♥♥♥ぶびゅっ♥♥♥♥♥

まるで噴火のように僕は二人の手や身体にに射精してしまいます。

「ふふ♥いっぱい出ましたねギヤスパー様」

「うむ。りようもこさもなかなかだな。」

だがまだイツセーやきゆうどーほどではない。しようじんしろ」

……イツセー先輩や安里先輩ともキュクロちゃんはこんなエッチなことをしている？

い、イヤだ！　キュクロちゃんは誰にも渡したくない！　僕はイキ

たおして乱れている息を整えながら決意を固めると魔眼を発動した！

「む、どうした？　ひきこもやし。」

ときなどをとめて？　そんなことをせずともキュクロはお前とエッチをしてやるぞ」

「し、してやる……！　してやるって何だよキュクロちゃん！　ぼ、僕は！　僕はっ!!」

ブラディ家の跡取りとして僕はキュクロちゃんに遅れを取るわけにはいかないんだ！　男として！　僕の魔眼はキュクロちゃんの性感帯に狙いを定め、はち切れそうなオチンチンをオマンコにぶちこむ

「ひぐっ♥」

よし……!! 効果はバツチリだ! キュクロちゃんの身体は焼けた杭のように熱を帯び僕の脳を焼き焦がしていく様だ。

「キュクロちゃんっ♥い、行くよっ!」

キミの感じるトコロを全部見つけてやるからっ!!」

そして僕はその勢いのままオチンチンをピストンさせる! あ、ああっ! 気持ち良すぎて腰が止まらないよおおっ!!

で、でも魔眼の発動は忘れないぞっ!!

「ああんっ♥きやはっ♥ひあっ♥♥ふあっ♥♥ひきこもやしいっ♥はげしいぞおっ♥♥♥」

キュクロちゃんは乳首より乳輪が感じやすいんだよな……。ほらっ、いっぱいいいじつてあげるからね♥僕は乳輪を歯で噛みながら舌でそれをコロコロと転がす!

「ふうっ♥ひうんっ♥♥ひきこもやしいっ♥♥あひっ♥♥だめえっ♥きゅーどー♥♥」

「ま、まだ言うか! そんなに僕より安里先輩やイツセー先輩がいいんですかあっ!!」

パンッ! パンッ!! と僕の股とキュクロちゃんの股から打撃音に似た音が鳴り響く。

甘えてばかりじゃダメだ! 僕は僕の意味で! 全力で! キュクロちゃんをイカせるんだっ!! ノミの夫婦扱いされようかどうか! 僕はキュクロちゃんを大事にしたい!!

止まった時の中でもキュクロちゃんの鼓動と熱をはつきり感じる

……!

「う、うるさい! ひきこもやしのくせにっ♥♥なまいきぞおっ♥」

ああキュクロちゃん……イツセー先輩や安里先輩がいいんだよね? でも僕はキミを……。

「好きだ! 愛している! 誰よりも! イツセー先輩より! 安里先輩より! キミを愛しているんだ!!」

「ふ♥あああっ♥♥♥♥♥」

その瞬間キュクロちゃんのおまんこがギュッと締め僕もまた大量の精液をその中にブチまける！ ああ……やっぱり僕はキミとずっと一緒に居たい……！ そう願うことはいけないことなのか……？

「そんなことはありません。貴方の熱と焔は必ずや昏き笑いと冷たい夜を突き抜けるでしょう。熱がなければこの世は闇ですもの」

すべてを振り絞り、キュクロちゃんに覆い被さるクタクタの僕にトウーさんは頭をなでてくれながら頭をなでてくれた。

ああ、やっぱり心が安らいでしまう。僕はまだまだだなあ……。

リクエスト編 後編（トウー？シヨタ キュクロ？  
シヨタ ※非NTR）

「だ、大分強敵だったけどかなったぜ……」

「しかし後一步の所で逃げられたのは残念だったネ」

エリザベート・バートリー……か。

とんでもないシヨタだったが実力は相当なものだった。まさか赤龍帝の鎧を纏った俺とい勝負が出来るなんて。

「なんかすいません……。依頼を果たす役に立つことができずに」

「いや、いいサ。報酬はないにせよ、この「ハメルーンのフェラ吹き」は貰っていくことは出来そうだし」

シユタークさんはエリザベートが置いていった人工神器を撫でながらご満悦だ。

まあ……まさか返せ！ と言つて戻ってくることは恐らくないだろうし、いいかな……？

あとは……。のびていたり、眠っているこのシヨタつ子たちをどうするかだよな。

エリザベートがやりまくったせいで性癖が歪んだり、他の女の子達に手を出したりしたら大変だ。一旦どこかで記憶を消してから元の場所へ戻したほうがよさそうだ。

などと考えていたらスマホが鳴った。

誰かな、と思つたらヴェネラナ様からだった。

「はい」

『イツセーさん、今どちらに？』

で、電話の向こうからでもヤバいオーラを感じる！ 俺はまた何かやらかしてしまったのか!?

『今日は貴方、サイラオーグ、ルイーナと安里君で三つ巴戦の記者会見を行う日でしょう？ 皆、貴方を待っていますよ？』

わ、忘れていたー!! や、ヤバい！

背中からドバドバと冷や汗が流れ出す。

今から行つて間に合うか!? シュタークさんの瞬間転移を使えば  
なんとかなるか!?

「できなくもないネ。安里君の所に転移する形を取れば直ぐにいける  
ヨ。けど報酬次第だなア」

おお! ありがたい! 持つべきものは友とビジネスパートナー  
!! しかし報酬と!? われても今は三千円くらいしかないぞ!?

我ながら小学生の小遣いばりだ!

ともかく、シヨタつ子と人工神器の回収はトウーさんに一旦任せよ  
う。

1

安里視点

カシャ、カシャ! とフラッシュが焚かれ、

何台もの報道用のデカイカメラが俺たちを撮影している……。

気の利いたポーズなんて撮れねーよ!

だって俺、モデルじゃねーもん!

「え、えへへ……」

ルーイーナはカメラに向かってはにかみながら手を振っている。こ  
んな緊張する場面でも笑顔を絶やさず、ファンサービスを忘れないの  
はさすがだ。それにしても可愛いなあ。

「おい、クソ虫くん。元々ヒドい顔が更に視聴に耐えられない顔に  
なつてんぞ。」

冥界のご家庭にノロウイルスばりの猛毒でも垂れ流す気ですか?」

頬が緩んでいた俺にナイアの罵倒が飛んでくる。つーか! 何で  
ここにいるんだ!

「まあ最近出番が少ねえから。」

私だつて人並みに自己顕示欲はあるという事で♪」

などと仰る。何いつてんのか相変わらずワケのわかんねえ奴だな  
……。まあ、ルーイーナの顔を潰す真似だけはやめてくれよな。

「えー。兵藤一誠様はご不在ですが時間となりましたのでこれより  
【ケルベロス杯】開催前の記者会見を始めたいと思います」

司会者の仕切りと共に、俺やサイラオーグさん、ルイーナは着席する。

と、言うかケルベロス杯って何だよ？

誰が命名したんだ？ つーかこの試合は親善試合みたいなモンじゃねえの？

「えー。今回はハマーマ様、デイハウザー様、そしてアゼザル様の共催によるケルベロス杯。三つ巴の戦いを制するのは一体誰なのか！

冥界中で話題沸騰ですが皆様の意気込みを是非お聞かせください！」

意気込み!? と、言われてもパツとは思いつかない！ 頭の中が真っ白だ！

「い、いつ何時誰の挑戦でも受ける！」

しまった。つい伝説のレスラーの名台詞をパクってしまった。周りはポカンとしている。

「成程、既に周りは挑戦者とみなしているのか。さすがは彼女の秘蔵っ子の魔王。その強気な発言に心より敬意を表する」

と、サイラオーグさんは腕を組みながらウンウンと頷いている。

「だが俺はどんな弱い相手も見くびらないがどんな強い相手であろうと恐れはしない。性根を据えてかかってこい！」

サイラオーグさんが言い切り握手の手を差し出すやカシヤカシヤ、とフラツシュが焚かれ記者達が沸き立つ。

ここは俺じゃなくてルイーナが握手をかわすべきだろうな。あくまでチームのリーダーはルイーナだということを示さなきゃいかんよな。

「ふえっ!? わ、私……?」

ルイーナは不安そうに俺を見つめる。

そんな彼女に俺は肩に手を置き囁く。

「このチームのリーダーはお前だろ。だからお前が握手をしなくちゃ示しがつかねえ」

「う、うん……!」

ルイーナは勇気を振り絞ってサイラオーグさんと握手をした。だいぶ身長差はあるが

「うーん、やはりおっぱいドラゴンとのツーショットも欲しいですね」  
「いやいや。親友同士でどちらも麗しく可憐なリアス様とルイーナ様のツーショットの方が映えるのではないのでしょうか？」

「一部ではおっぱいドラゴンと魔人王との濃厚なカラミを期待する声もありますよ」

記者達はめいめい勝手なことをほざいている。それはそれとして  
イツセーのヤツはどうした？ リアスさんも気まずそうに記者達に  
曖昧な笑みを浮かべて稼いでいるが……。

その時、ガツシヤアアアン!! と、天井が割れるな否や二人の男女  
が会場に落ちてきた。ってイツセーとシユタークさんの二人じゃね  
えかよ!!

トウー視点

「申し訳ありません。セルベリア様。

わざわざ御足労頂きました」

「いえ、別段急用があったワケではないからな」

私達はイツセー様の言いつけで痴女に囚われたといういたいけな  
少年達と妙な偶像を回収し、シユタークの新居に戻っています。

しかし、子供というのは無邪気なものです。

「いけー！ おっぱいドラゴン！」

「わるものをやっつけろー！」

大画面のテレビでおっぱいドラゴンの活躍を楽しむもの

「うわあ……。まじんおうアザーこわいよー……」

「ひっ！ やだ！ こっちこないで！」

逆に怯えるものまで様々です。そして私はシヨタコンではありません  
なので怯えるシヨタっ子達を見てゾクゾクしたりはしません。し  
ませんよ？

「ほら、おまえたち。ポップコーンをつくったからてをあらってから  
たべろ。」

たべるまえにセルベリアにありがとうやーとかんしやすのを忘れるなよ」

「いや、私が感謝される様な事では……」

「はーい！　ありがとうやー」

「ありがとうやー」

子供は無垢なものですからキユクロの言葉を疑うことなく受け入れてしまいます。

「お、お前達……」

クールな彼女が赤面するという珍しい光景も見ることが出来ました。炎の魔人にして埒外の存在である私ですがこうした穏やかな昼下りも悪くはありません。

「よし、おまえたち。ビデオがおわったらひるねだ」

「えく……やだよー！」

「やだではない。ねるこはそだつというだろう。いっぱいねむらなければりっぱなおとなにはなれないのだぞ」

ふふ、キユクロはお姉さんぶりたい年頃の様でなんとも微笑ましい。仲良きことは美しきかな。

「ほら、トウーもてつだえ」

「お昼寝か……。たまにはいいかもしれんな」

セルベリア様も異論はない様です。

私達はマットを敷いたり毛布を掛け、子供達を寝かしつけることとなりました。

↓

イツセー視点

ふに……ふにふに。

このリアスに並ぶふくよかかつ柔らかくも張りのある極上の感触……。

確か俺は記者会見の会場に向かうためにシユタークさんの瞬転符で移動したのだが。

「だ、だめーっ！　離れて!!」

俺に押し倒される形になっていたルイーナちゃんが俺を壁へとは



ねのける！

な、なんてパワーだ!?

「はっはっは。相変わらず派手な登場だな赤龍帝」

「も、もう！ イッセーったらー！」

サイラオーグさんは豪快に笑い飛ばし、リアスさんも頬を赤らめながら苦笑する。

「す、すみません……」

俺は頭を掻きながら起き上がる仲いきなり凄い回数フラッシュが焚かれる！

すごい数の記者じゃないか!?

「兵藤一誠さん！ 今のは一体……!」

「ち、違うんです！ 誤解です!!」

ひとつのものをとったらどろぼう！ (ポケモン) これはアクショントというか予定が詰まっていたからワープせざるを得なかったというか……!」

遅れた挙げ句女連れで、しかも記者会見の場で親友の彼女を押し倒しておっぱいを揉む……。客観的に見たらクス以外のなにものでもないよ!?

「妻!? スワップ!? それはつまり、

ケルベロス杯ではリアス様だけでなく、ルイーナ様の乳をつつくと  
言う事ですか!」

なわけねえだろオ!! と叫びたかったが記者会見の場で怒鳴り散らしたが最後、俺は社会的に死ぬ。

「うわーん！ 安里!」

「泣くな泣くなルイーナ……。よしよし」

ルイーナちゃんは泣きながら安里の元に向かうと抱きとめられると共に優しく頭を撫でられていた。

「リアス様はこの件についてどうお考えですか!」 兵藤一誠様の主としてそして妻として!」

「し、知りません!」

「あと、そのの貴方!」 兵藤一誠様と同時に現れましたが……どう

いった関係ですか？」

「どういったもこういったも……交友関係さ♥」

こういう（こうゆう）と交友をかけたダジャレをかますやいなやシユタークさんは俺に抱きつきながら頬にキスをかました。

またしても夥しいフラツシユが焚かれ、記者会見は凄まじい騒ぎになる。

俺はシユタークさんを引っぺがそうとするもまるで岩の様にビクともしない。それどころかわざと胸を俺に押し付けてきたりする！  
ああもう！ いちいち柔らかいし暖かいし良い匂いだしで色々マズいんだよ!!

「うむ。リアス、ルイーナ、そしてシユターク。彼女らの乳によって今回の赤龍帝は古今無双の力を得ると言って差し支えはあるまい！」

あるよ！ 差支えしかないよオ!! サイラオーグさん!!

↓

トウー視点

「ん……んん……？」

何やらゾワゾワとした快感と子宮の甘い疼きによって目覚めた私は予想外の光景を目にします。

「はあ、はあ……。おねえちゃんのおっぱい……おつきくてやわらかくて……。いいにおいがするよお……！」

なんと！ 5、6歳程の少年達が私の胸を一心不乱にしゃぶり尽くしているではありませんか。動揺よりも先にまず私の身体に齎されたのは倒錯的な高揚感でした。

「ふう……ふう……。ぼくも、おっぱいドラゴンみたいなつよくてりっぱなおとこになりたいよお……！」

二人の少年は夢中で私の乳房に吸い付いています。性欲に翻弄されながらも邪心なく、純粹で真つ直ぐな子供たち……。

「ウフフフ。どう？ ケダモノどもや雌犬達とは対極にある純粹無垢な魂が私達を求めてくるシヨタっ子達にお乳を吸われるのは……！」

「き、貴様は……!?!」

私とした事が油断していました……!

謎の侵入者は子供たちに群がられ、彼らなりの未熟ながら情熱に溢れる愛撫を受けて墮ちゆく我々を見下ろしながらフン、と鼻で嗤いました。

「私はエリザベート・バートリー。」

さつきは赤龍帝に敗れそうになったけど、ギリギリのところまで逃げられたわ。

けどこのままやられっ放しではご先祖様の

名が泣くというもの！

そんなワケで私のリベンジ計画に付き合ってもらおうよ!!」

「な……!? 貴様！ 子供達に何をした！」

あの様な幼い子達をたぶらかし墮落させるなんて……!! 許せま

せん！ あうっ ♡

い、いけません ♡ 私は今 ♡ 貴方たちを守るために ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ふあああっ

♡

戦わなければならない ♡ のにいい ♡

「うおおおおん ♡ ♡ ♡ ♡ ♡」

全身の快樂神経が並行励起してしまい、私は無様にも絶頂を迎えてしまいました。

「あらあら、ボーヤ達の愛撫ですっかり出来上がっちゃってるじゃない」  
「い」

「くっ……!! うう……!!」

な、何たる無様かつみつともない姿か！

イツセー様の眷属でありながらこの様な痴態を……。

「さあ！ ボーヤ達！ 私がエンチャントしたその股間のエクスカリバーでその雌犬をヒイヒイ泣かせてやりなさい！」

エリザベートの指示の声を聞いた私は思わず子供たちのペニスを凝視してしまいます……。

それはあまりにも不釣り合いなまでに太く、大きく、黒光りするまでに逞しくそそり立っていました……。

(こ、こんな ♡ こんなチンポで貫かれてしまったら…… ♡ ♡ ♡)

最悪の想像をしている筈なのに生唾と本気汁が溢れて止まらない

のです……♥

しかしその時……。

「い、イヤだ！ おっぱいドラゴン言ってた！ 女の子を泣かせるのは男じゃないって！」

「そ、そうだよ！ ぼくらはおっぱいドラゴンみたいになりっぱなおとこになるんだ！」

子供達が私の前に立ってくれました！ ああ……。なんて健気で、勇敢で、優しいのでしよう……。イツセー様の志を受け継いだ戦士に、私の加護を授けたい……。♥

「アツハハハ！ いいわね貴方たち！」

私は貴方達みたいな尊敬に値するボーヤ達をセックス狂いにするのが最高にスキなのよ!!」

「うおーっ！ ドラゴン・ショット！」

子供たちはイツセー様の必殺技のマネをするやエリザベートはいかにも子供の世迷い言とばかり手をヒラヒラさせていました。

「アツハハ！ そんなチンケな攻撃が私に通用するワケないじゃない！」

「……甘い女だ。やはり貴様は叛英雄。」

所詮、未来の英雄に退治される定めにあるもの」

「ハア？ って、う、ウソでしょ!？」

キャアアアア!!」

『焼却四季』の権能によりヤツがシヨタっ子から得ていた力は総て無力化されていた事に気が付かなかったようです。

それに、大地母神ヘラからの授乳により半神の力を得たヘラクレスの故事に倣い私が彼らに与えた力は『鋼の鍛錬』と『超人化』！ 如何に相手が女子供だろうと侮ってはいけないという事です！

「くっ……。ふう……。危ない所だった……」

新居の半分が吹き飛び、瓦礫の中で気絶しているエリザベートやらをセルベリア様はシヨタっ子達にしがみつかれつつもなんとか捕縛していきます。

「うむ。あぶないところだった……。

こ、こら♥わたしのおしりにばかりさわるなっ♥おまえはケツ龍皇のしんせきかっ?」

と、言いながらキュクロの怪力ならば容易く子供を引きはがせるでしょうに……。

「うん! 僕、ケツ龍皇になる! それでキュクロお姉ちゃんをお嫁さんにするんだっ!」

「ま、まてっ♥キュクロには♥イツセーやきゆうどー、それにギヤスパーがいるというのになっ♥♥♥」

おやおや……キュクロは魔性の女の素養がある様ですね♥子供たちにチャホヤされるキュクロは私から見ても可愛らしかったです。

そしてセルベリア様もまた……。

「ふあああっ♥や、やめろ♥やめてくれっ♥私は♥私はお前達を傷つけたくないのだっ♥解つてくれっ♥♥♥」

「うう……せ、セルベリアお姉ちゃん! ごめんなさい!」

「ああーっ♥♥♥か、感じてしまう♥♥♥子供たちのチンポでっ♥オマンコをゴリゴリとこじ開けられてるうっ♥

そ、外から丸見えになっているのにい♥

子供たちとのセックスに興じてしまうううう♥♥♥」

子供と交わる欲望が濾過、精練されてゆき、彼女はみるみるうちに新たな力を得てゆくのがわかりました。

「ああ♥こ、子供たちの精子で♥私の身体が洗われるう♥兵器扱いだったヴァルクリアが♥変えられてゆくうう♥♥♥」

子供たちの種汁をこれでもかと膣内射精されてゆくセルベリア様の身体から魔力とは異なる輝きが溢れてゆきます。

「ああ、あはあ……。そ、そうか……♥私は元々……愛に飢えていたのだな。この子たちの様に無邪気に憧れる事も出来ずに女としての幸せをどこか諦めていたのかもしれない……♥ああ、今なら……♥安里に素直な気持ち伝える気がする……♥」

どうやら彼女はあの少年に好意を抱いていた様です。そしてそれは初恋の甘さも苦さも知り尽くした大人としての気持ちなのでしょう。

そしてキユクロは前と後ろから二本刺しにされながら恍惚の表情を浮かべていました。

「お、おおっ♥は、はじめてのくせにつ♥おしりのほうでえっちしたがるだなんてとんでもないエロエロこぞうだなっ♥」

「あ、ああ！ であるっ！」

「ぼくも♥ぼくもおしりにだすっ!!」

ドピュツ!! ビュルルツ!!

いかに巨根を得たといってもそこはまだまだ子供……。瞬間火力はイツセー様にも引けを取りませんが耐久力や持続力には難あり

……♥

「ああん♥♥♥まだでてるっ♥♥♥」

「ふああっ♥♥♥セルベリアお姉ちゃん！ 僕、もう出ないよおっ!!」

「頑張り♥私を未来の嫁にしたいのだろう♥♥♥」

そんな二人の嬌声を背に私もまた二人の若き戦士に加護を与えることに致しましょう♥

私はまず二人の戦士へまず、互いにペニスを兜合せをするように命じました。

「う、うう……チンポ。チンポ爆発しそうだよお……トウーお姉ちゃん」

「ぼ、ぼくも……オチンチンが変に

なっっちゃいそ……」

二人は不安と期待が入り交じった眼差しを私に向けてきます。二人の我慢汁と精液でベトベトになった2つの肉棒を私の胸の中に挟み込みます。

「あっ♥おっぱい柔らかいっ♥」

「ふわああ……。おっぱいが僕のチンポを包み込んで……」

「さあ、二人とも♥私の胸で果てなさい♥♥」

私は二人の少年にそう命じ、同時に胸での奉仕を始めました。

むにゅん！ むにゅん！ むにゅん!!

「あうっ!? お、おっぱいが動いてるっ！」

「す、すごいよ！ トウーお姉ちゃん!!」

おっぱいって……こんなに素晴らしいものなんだね……!!」

「うふふ、そうでしょうそうですね」

ある意味これもダブルパイズリ……と言えなくもありませんね♥  
私のおっぱいにより脳を焼かれた二人はいずれイツセー様の様に女性のおっぱいを求めずにはいられない性を背負ったモノになるでしょう♥

青田買……ではありませんがいずれ稔って熟成された性癖をどんな形で私にぶつけてくる様になるやら……♥ニグラ様の嗜好がまた一つ理解出来てしまいましたね♥

「あ、ああ！ 出るー！」

「ぼ、ぼくもっ♥」

ドピュツ!! ビュルルルツ!! 2つのペニスからほぼ同時に大量の白濁した子種が噴き出します。まるで当り年のボージョレ・ヌーボーの様な瑞々しい濃厚ながら清廉な精液……♥こればかりは確かにエリザベートに賛同せざるを得ませんね。

「さあ……次はあなた方の劣情を私のマンコとケツ穴にぶつけなさい♥♥」

私は脚を大胆に開いてヒクヒクと切なく蠢く蜜壺を見せ付けながら少年達を誘惑しました。

「で、でも……ぼ、ぼくら子供だから……で、でも！ 大人になるためには……！」

「だ、ダメだよ……ダメ……なのに……ああ、お姉ちゃん！」

「……やはりあなた方はすばらしい少年です」

私の胸は感動の涙で熱く濡れました。彼らはまだ小さな雛鳥ですがきつと素晴らしい戦士となりましょう。その雛の嘴を胎内で堪能しながら私は悦びと興奮に身悶えます。

「うああっ！ お姉ちゃんのオマンコ！ うねって……絞られるう!!  
も、もうダメっ!!」

「ぼ、ぼくも♥♥お姉ちゃんのおしりのなかにっ♥おしっこどびゅどびゅするから♥」

ビュツ！ ビュクツ!! ビュルルルツ!! 2つのペニスが私の子

宮で果てます。勿論一度の射精程度では終わりません。私は少年達の身体を抱き寄せながらさらに深く挿入させ、二人のペニスを心ゆくまで味わいました。

「あーあーあー……勿体ねえなあー。」

「いたいけなコ達の力が溢れるどころの話じゃねえーって……。イヤ、いたいけなコはゴ布林みてーにへこへこチンポコ突き立てたりしねーわな」

……サバトの様に交わり続けて朦朧とする私達をエリザベートではない誰かが嘲笑に満ちたゲスな笑顔と共に見下していました。この声と顔は一時たりとも忘れたことはありません……。ナイアめ……。

「う、うるさい……。ですよ。愛や充足を知らない憐れな存在風情が……。」

「愛ってなんですか？ 性癖歪めて隷属させることを言うんですかあ？ へえ、唯一無二にして輝くシスターであるナイア様は初めて知りましたよーギャハハハハ!!」

「笑い過ぎて腹イタアイ♪」

「ナイア……。貴様、何をしに来た？」

「何って……。大淫獣のあとしまつだよ。」

「玩具は遊んだらちやーんと分別してお片付けをだな……。」

「ま、まさか……。貴様……!!」

「ピハハハハ！ 精液まみれのバカヅラで何凄んでらっしやるんだよトウーちゃんよお！ 散々愛しのイツセー様○を裏切って陵辱に励んでおいて今更忠義に溢れる騎士様ですみてーな面してんじゃねーよ!!」

「テメーの頭はハッピーセットかよー！」

「ぐ……うう……!!」

万理万物を嘲弄するものの本領をイヤという程に見せつけられた私は唇を血が出るほどに噛み締めることしか出来ません。

「お、おねえちゃんは僕が守るー！」



「きつたねえ手で触んなクソガキ！ ウゼえんだよ!!」

ナイアは健気にも我々を庇おうとした少年を文字とおりに足蹴にする。なんとという非道な……!!

「おいおい、ナイア様に何か言う事があるんじゃないやねえかクソガキが？」

「お、おまえみたいなの……ゲスなやつには……ぜったいまけない……!!」

「ハハツ!! このガキ、テメーが私に勝てると思ってるのかよ？」

「あ、あたりまえだ！ ぼくは……ぼくは……!!」

少年はナイアを恐れ、泣きじやくりながら一歩も引くことなくフラフラと立ち上がりながら言い放ちます。それはまるでかつての私を見ているかのようでした。

「僕は将来イツセーおにいちちゃんみたいな強くてかつこいい男になるんだ！」

「な……に……?」

「もう、その位にしておきなさいナイア。

僕にはよくわからないけれど、あまり

この子達を虐めるのは良く無いと思うよ」

ゲイト様はナイア様に慈悲深い眼差しを向けながら諫めました。

ゲイト様は確かに慈悲深く、優しい……。ですがその優しさはイツセー様のものとは違い、個体に向けられるものではないのです。

謂わば、人類が昆虫を踏み潰すのをなんとなく避けるのと同じなのです。

「チツ……」

ナイアは洩々といった様子で引き下がりました。やはり彼女では副王には逆らえないのでしょうか。

「ひ、ひあ!? ひあああ!? あああああっ!?!」

「どうかしたのかい？」

エリザベートは叛英雄故かゲイト様の本質を知覚してしまった様です。恐怖と絶望に染まり引きつった顔で芋虫の様に這いずって逃げていました。

「ああ、そうか。この娘達は叛英雄……即ち『禍津星』と関わりがある

ということか」

「わ、私は一体どうなるのでしょうか？　こ、殺さないでください……！」

エリザベートの命乞いをゲイト様は何も見えていない目で見やるのみでした。

外伝・異聞リマスター (TS安里&イツセー?・アザゼル TS安里?ヴァーリ)

??? 視点

「ああっ♥やめろ♥やめろよおっ♥」

「ははは。そんなスケベな顔で止めるなんて言う男なんていないぜお嬢ちゃん?」

ぐりっ♥ぐりっ♥とアザゼルのチンポがオレのオマンコの奥をよしよしをする父親のように撫で回してくると身体に電流のものが走ってしまふ。

痛みではない、別の感覚。

もつとずつと強く、感じたことのない感触にオレはずつと身体を震わせていた。

「こんなに締め付けやがって。やっぱりお前さん才能があるぜ」

「いつ♥ひいつ♥な、なんの才能だよ……んぎっ♥♥」

アザゼルの言葉など耳に入らず、オレは歯を食いしばりながら唇を噛んで喘ぎを出さないように我慢していた。

淫紋で感度が上がったとはいえ、挿入の痛みを覚悟していたオレの膣は、何故か女として悦んでしまっている。

「そりやお前、セックスの才能だよ。俺の見るところお嬢ちゃんには男なしではいられない淫乱な本性が潜んでいると見たね。ニグラの知り合いだけあつて

面白いヤツだぜ」

「ふうっ♥そ、そんなことっ! あるはずない……! ふぎいつ♥」

否定しようとしても身体が言うことを利かない。オレはアザゼルのチンポが動く度に奥からどろりとしたものが溢れ出てくるのを感じた。

(なんで……!?! なんでこんなにつ♥♥)

頭の中が真っ白になるくらいの強い快感。なのにもつと気持ちよくなりたいたいと自分の意思とは別に腰を動かしてしまう。

そんなオレの姿に気を良くしたのか、アザゼルは更に腰のピストンを速くしてきた。

「ああああっ♥やめっ♥やめろって言うてるのに♥チンポズゴズゴすりゆなああっ♥♥♥」

ぱん！ ぱあんっ！ と汗ばむ俺の股や尻をアザゼルの足やチンポが打ちつけていく。

一突きごとにオレは更なる快樂への階段を昇って行ってしまふ。

「ひゃあああ♥バチバチ♥バチバチするう♥♥♥頭の中がバチバチおかしくなるっ♥♥♥」

「いいぜ！ どんどん気持ちよくなりな！

頑なにイクって言わない辺りが実に俺好みのいい女だよ！ 墮天使総督の名誉にかけて是が非でも墮としたくなつたぜ！」

アザゼルのおっさんは俺をまんぐり返しの体勢にさせると、オレのオマンコを串刺しにするくらい勢いよくチンポを出し入れしてきた。

「ひゃあああ♥♥奥うっ♥おくっあたってりゅうう♥♥♥」

アザゼルのチンポがオレの子宮口を押し潰すようにノックしてくる。その衝撃でオレはまた軽く達してしまった。

「おっ！ 今イキやがったな？ また墮天使総督とセックスしちまっ  
てイツちまったなあ？」

「いっ♥♥イツてなんてないっ♥おっさんのセックスなんかでオレは  
一回もイツてない♥♥」

「はは、じゃあもつと激しくしてもいいよなあ？」

アザゼルの腰が更に勢いを増した。オレの膣内をアザゼルのチンポが暴れまわる。

一突き一突きが子宮を責め立てて、オレの全身に快樂が木を割く雷撃のように走る。

「んはあああ♥♥こ、これヤバっ♥♥♥す、さすがさるう♥」

オレの中がどんどんアザゼルのチンポの形に変えられていく。そんな感覚がオレをおかしくしていく。

（こ、これがセックス……こんな気持ちいいものをオレは拒もうとしてたのかよ……！）

初めて感じる性の快感にオレは完全にメスにされていた。

もう目の前のおっさんに逆らえない、犯されることが気持ちよくて仕方がない……！ そんな考えで頭がいっぱいになってたオレにアザゼルが囁く。

「ほれ、イクって正直言ってみなお嬢ちゃん。そしたらもつと気持ちいいことをしてやるぜ？」

「えっ……」

アザゼルの甘い囁きがオレを惑わせる。オレの脳髄はもうすっかり溶かされていた。

「気持ちよくなりたいたる？ 俺とセックスしたくないのか？」

「うっ……」

もう限界だったオレの理性はあっさりと砕け散る。

「……な、なりたいです♥♥♥もつとアザゼルとセックスしたいですうう♥♥オマンコをチンポでズボズボされてイキたい♥気持ちいいセックスがしたい♥♥♥」

オレは自分が何を言っているかよく分かっていなかった。

もうただアザゼルとのセックスが気持ちよくて、そんな快感をくれるアザゼルにもう全てを預けたくなったのだ。

「よおしい子だ……そらイクぞ！ お前の淫乱な子宮の中にザーメンぶちまけてやる！」

アザゼルのピストンが今まで以上に速く、オレを気持ちよくするために激しくなる。

オレ自身もそれに応えるように自分から腰を振ってしまうほど夢中になっていた。

（ヤバい♥チンポすごい♥オマンコずぼずぼされるの好き♥♥これクセになるうう♥♥）

どぶうっ！ ぶっぴゅぶりゅるるるっ！

「ひゃああああん♥♥熱うい♥♥中出しされるの気持ちよすぎい♥イクイク♥イクううう♥♥」

アザゼルがオレの子宮に精液を撃ち込んだその瞬間、オレは人生で一番の絶頂を迎えていた。頭の中が虹色になって、身体が痙攣してい

るのがわかる。

(すっ……♡気持ちいいの止まらない♡♡こんなセックスはじめて♡)

アザゼルがチンポを引き抜くと、ゴポリと音を立ててオレのオマンコから精液が溢れ出る。それを見てオレは少しだけ物足りなさを感じていた。

(もっとなりたい……いやダメだ！ またあの気持ちよさを知ってしまつたら戻れなくなるっ……！)

オレは息を荒げながらそんなことを思っていた。そんなオレをアザゼルはニヤニヤしながら見ている。

「どうだ？ これでわかつたろ？ お前さんはもう男なしじゃ生きていけねえんだ。だから俺の女にならなつて。お前の親友のセーコちゃんやシユタークともども一生可愛がつてやるぜ？」

アザゼルはオレをまるで恋人のように抱きしめてそう言った。しかしオレは一瞬嬉しいと思つてしまつた自分が嫌になつた。

(なに、女なら誰でもいい男の言葉なんか騙されるな！)

こんなおっさんの甘言に乗せられてなるものかとオレは自分になんて言い聞かせる。

そんなオレの心を見透かすようにアザゼルがオレの頬を撫でると……

「ま、イヤつつつても俺の女にするだけだな。今のお前さんの顔を鏡で見せてやりてえよ。メスの快樂を知つたエロい顔してやがるぜ」「ッ!? お、オレいま……!?」

鏡の中のオレの顔はアザゼルの言つた通りだ。身体が燃えるように火照り、頭の中ではあの気持ちよさをもう一度味わいたいと叫んでいる様だ。透き通るように輝く長い銀髪にキリリ、としていながらどこか

可愛らしい美貌、そして妖艶に光る極薄の唇。その全てが男を欲情させるであろう要素を十分に持っていることをオレは理解していた。「そんなに俺の女になるのがイヤなのか？ ま、そう言うところも好きなんだけだな」

アザゼルはオレを抱き寄せながら続ける。

「い、いやだっ！ もうおっさんとセックスするのやだあつ！ やめろよおっ♥♥♥」

「ダメだね。欲しいものは手に入るまでとことん貪る。それが俺様の流儀なもんでね」

アザゼルはそう言っつてオレの胸に手をす。跳ね除けたい筈なのに両手は鉛のように重く、足もオレの命令を聞こうとしなかった。

（イヤだっ！ オレそんなのイヤなのにつ♥♥♥）

アザゼルの手が胸に触れる。たったそれだけの行為で、オレはまるでチンポを挿入された時のような強い快楽を感じていた。「ひゃああ♥♥♥」

「ま、時間はたっぷりあるからな。じっくり俺の女にしてやるよお嬢ちゃん♪ それにしてももみ心地も柔らかさも張りも極上だな。世が世ならおっぱいだけで天下が取れるぜ？」

「ひっ♥♥ひっ♥♥くうう♥♥」

オレは身体を振りながら喘ぎ声をあげていた。快楽に耐えようとしても、オレの胸は触れられる度に感じてしまうのだ。

そんなオレの様子にアザゼルは楽しそうだ。胸を揉みしだきながら更にオレの耳を舐め始める。

「んっ！ ひゃああ♥♥だめっそこ弱いのお♥♥」

（やつ……ヤバイこれえ♥♥♥こんなはずつとされたらおかしくなるう♥クソお……なんでこんなに女の身体を責められるのが気持ちいいんだよお……♥♥）

胸を揉まれながら耳を責められる快感にぼやけていく頭で俺はこうなっつてしまつたワケを考えていた。

↓

安里視点 エルフの里

「さあ、どんどん召し上がって下さいまし」

「私も頑張っつて作つたよー！」

ミダラーさんとルイーナが作つた様々な御馳走を囲み、俺とイツセーがそれを食べていく。

「ああ、本当に美味しいです！」

「ホントだ。こりや美味い！」

多分二人は俺達の好みを知らないから、一皿一皿にスパイスを利かしたり、味付けを変えたりと工夫している様だ。

エルフの里は長閑で気持ちのいい場所だが、いかんせん娯楽が少ないので退屈してしまうのも事実だ。そこに出された御馳走は刺激的で、あつという間に平らげてしまった。

「ご馳走さまでした！ 美味しかったよ二人とも！」

「ああ、ルイーナの作ってくれる物なら毎日でも食べたいな」

「ふふっ、嬉しいな♥安里大好き♥」

ルイーナが頬を染めながら俺に抱き着く。昔の俺なら人前でベタベタ、イチャイチャするなど言語道断！ というスタイルだったが今は大好きだった。

「俺もだよルイーナ」

側では『コイツら何やってんだ？』と言いたげにイツセーがジト目になったが、俺はそれを無視してルイーナの髪を優しく撫で続けた。「では続けてこちらのデザートはいかがですか？」

「うおっ！ ミダラーさんすごい！」

ミダラーさんが用意してくれたのはなんとマンゴーとバナナの盛り合わせだ。しかも素材そのまま！

「ああ……俺、こんなに幸せな時間を過ごしてもいいのかな」

「安里ったら大袈裟だよ♥」

ルイーナは自然な流れで俺の膝に横向きに座って、マンゴーをあーんしてくれる。こういうやり取りも俺とルイーナの間じゃ普通になってきたな。

そんな俺達を見てミダラーさんにはっこりと微笑みながらイツセーにバナナを食べさせていた。うーん、ミダラーさんの母乳を毎日飲んでたらイツセーもこんなにムキムキになったんだろうか？

「ふふっ♥安里ったらあんまりじつと見ないでよ。照れちゃう……♥」

そんなことを考えていたらルイーナが色っぽい目つきで俺に話し



かけてきた。しかも軽く唇を突き出してキスのおねだりまでしている！俺はそんな可愛い仕草をするルイーナに興奮してしまっていた。

その唇に触れようとした途端、俺とイツセーの身体に変化が起きていた。

(あれ？なんか力が……)

身体が急に怠くなってくる。身体の火照りもなくなり、まるで熱を冷ますように全身を冷たい感覚が襲ってきたのだ。

「安里!? どうしたの!?! 汗が凄いやー!」

「イツセー様!?! どうなさったのですか!?! お気を確かに!」

二人は顔を真つ青にしながら俺たちに呼び掛ける。だが俺達はそれに答えること無く、その場に倒れこんでしまうのだった……。

↓

「うくん……頭がボーッとしゃがる」

気がついたらちゅんちゅん、と外で小鳥が囀っているのが聞こえた。俺は目を擦ると、どうにか自分の状況を把握すべく身体を動かす。何やら違和感がありまくる。武態は出来ないし、糸も出せない。増して顕色も使えない……。コレ、もしかしなくても相当マズいんじゃないか？ 起き上がろうとして声を出そうとしたら、少し甲高い声が出て驚いた。声色はハマーマにそっくりだ。しかも身を起こすと股間には男の象徴たるモノも存在しなかった。その代わり胸には女性の象徴たる巨乳がたわわに実っていた。

「はっ? え? どゆこと?」

混乱のまま自分の手を見ると、若干白くて艶のある肌と細い指があるではないか。これってひよっとして……!?!

状況が掴めないなか、突然漆黒ぱつっんロングのデカ乳女が俺に抱きついてきた!

「うっひょー! この女神のおっぱい! 男の冒険心をくすぐるまさにエンタープライズ級! これぞまさに魔乳!!」

「お前は女だろうがこの変態ヤロー!」

バキッ! と思わず初対面の子をグーで殴ってしまった。しかも

ヤローとか言っちゃったよ俺!!

「な、なあ……君は一体誰なんだ?」

見た感じリアスさんにそっくりだが親戚とかそんな感じか? いや、こんな変態が果たしてグレモリー家にもいるのだろうか?

……サーゼクス様の事は忘れよう。

グレイフィアさんとエロDVDに出演したのは変態だからじゃない。うん、そうだ。

「俺は兵藤一誠! 愛とおっぱいのために生きるおっぱいドラゴンだ! ……ん? なんか変だな……つてうわああ! 俺、また女になつてるうう!!」

また、つて何だよまたつて……。

頭が痛くなってきたよオレは……。

しかし何でこんなことに……。オレは取り敢えず用意された着替えに袖を通し、これからどうするかを考えるのだった……。

↓

「ああ! 何たる事じゃあ! この里の終わりじゃあ!」

「かくなる上は私の死を以てこの不始末を償います!」

「ど、どうしよう。私のせいだ……」

食堂ではミダラーさんとヤンリマがこの世の終わりがきたかのように嘆いていた。ルイーナも初めて会った時の様に狼狽え、おどおどとしながら二人を見ている。

「き、気にすんなよ! だから泣かないでさ?」

「そ、そうだよ二人とも……。そんなに悩んでも仕方ないし……」

「ううっ……安里様あ」

今にも泣きだしそうな顔の二人に慰めの言葉をかけたものの、二人は更に悲観的な表情を浮かべている。そんな顔をするなよ。きつとアザゼルのおっさんの仕業に決まってるんだ。ホントにロクな事しねえなああの男は!

「とにかく落ち着いてみんなで考えましょう? ね?」

オレは二人を慰めながら、何が起きたのか必死に考えていた。とうか身体が女の子になったせいとか口調がおかしくなっていないか?

うーん、色々と良くないなコレ。

「なあ、安里。その声でイツセー大好き♥って言ってみてくれないか」  
「アホッ！言うか！」

イツセーのお陰で精神が身体に引つ張られず済んだのは僥倖だった。でも一体何なんだこの状態は……。こういう時に頼れる大人と言えば二人くらいしか思い浮かばない。だが溺れるものはなんとやら。薫にもすすがる思いで俺はニグラさんにスマホで連絡を取るとすぐにやってきてくれた。

「どうやらアザゼルの作った薬とエルフの里で栽培した果実が反応を起こして、性別を変える作用を引き起こしたみたいだ」

ニグラさんとディオドラがあっさりと

この事態の原因を推測してくれた。

まくたあのおっさんが原因かよ！

「それで元に戻る方法はあるのか？」

「うん……あるにはあるけど」

ディオドラは言いづらそうに目を逸らす。なんか嫌な予感がするな。

「どうしたんだよ？ 早く教えてくれ！」

「……はい、あのですね……」

「なんだよ!? はつきり言ってくれよ！ 俺このままじゃ嫌だぜ!」

不安そうなエルフ達を見て苛立ちを隠せない俺にディオドラはそつと耳打ちをする。それを聞いて俺はあんぐりと口を開けるのだった……。

「俺達より強い男とセックスしろ……だと」

「そういう点では僕は君達の条件からは外れるね。そもそも僕はアジア以外の女性を愛するつもりは毛頭ないけど」

キリツ、と美男子の表情で何を言ってるんですかね……。しかし俺より強い男……煉獄さんとか？

『君が何を以て俺と交わりたいかはわからないが俺の答えは一つだ！もつと自分を大切にしろ！』

と、言われるのがオチだな。じゃあヴァーリの場合はどうだろう？

『お断りだ。俺は君を抱く気はない。他の男を探してくれ』

うん、もうちょいオブラートに包んで言ってくれそうだがこんな感じのド直球だろう。と、なると……。

『オホンオホン！ コラ！ オリユンポスの主神であるワシを忘れてはおらんか！』

念話で話かけてくんエロジジイ！

へらさんに言いつけておくからな。

……じゃあボールクの旦那はどうか。

『バカめ』

……うん、きつとこんな感じになりそう。

あれ、オレつてひよつとして女として魅力がない？ いかん、無性に悲しくなってきたぞ。

「ねえ安里……私がいるよ？」

ルイーナがとてとて、と歩きながら俺に言ってくる。すまん、百合はちよつと……。

「もしもしアザゼルちゃん？ 貴方に紹介したい女の子が二人いるんだけど大丈夫かしら？ ええ、きつと貴方も気に入る筈よ？ ふつ、楽しみだわ♥」

つてニグラさんがアザゼルのおっさんとスマホで話を進めているんだけど!?

「じゃあそういう事だからよろしくね♥」

ニコニコ、と微笑みながら俺にスマホを差し出すニグラさん。どうやら既にアザゼルのおっさんとの交渉は成立したらしい……。

↓

「ああっ♥いいっ♥純血悪魔の私のオマンコがあ♥♥♥墮天使チンポに流されてるっ♥♥♥だめえっ♥♥♥ベルゼブブ家の血を薄めてはならないのにい♥♥♥墮天使チンポに屈服してしまううう♥♥♥」

呼ばれた部屋に全裸で入ると褐色肌の女がアザゼルのおっさんにバックで犯されていた。

「おいおいもう少し頑張れよシャルマちゃん。ニグラの力で転生してイツセーに復讐しよう、って息巻いてたじゃねえか。」

この程度でメス堕ちしてたんじゃあイツセーに勝つなんざ夢のまた夢だな」

「ご、ごめんなさいい♥♥♥純血悪魔の誇りを忘れてましたあ♥♥♥私が愚かでしたあ♥♥♥だからお願い♥♥♥もつと突いてえっ♥♥♥

♥赤龍帝チンポに負けないために私のマンコを鍛えてえ♥♥♥」

「いいともよ！ ついでにベルゼブブ家再興も手伝ってやるよ♪ 元気な赤ちやんを産んでみせな！」

……なんかとんでもないものを見てしまった。イツセーの手前、表情こそ平静だが内心はドン引きだ。と、いうかあのウエーブパーマのシャルマとかいう女にはなんか見覚えがあるような……。いや、まさかな。

「はうううっ♥イクっ♥イク♥♥♥生まれ変わって初めての絶頂でイっちゃううううう♥♥♥♥♥」

ドビュルルッ！ とアザゼルのおっさんがシャルマの中に大量射精をしている。っーかどんだけ出すんだよあのオッサン……。

「ははは。まあまあ良かったぜ。けど俺を満足させようと思うんならもつとスケベでいやらしい女にならないとダメだぜ？」

「はいっ♥♥♥アザゼル様の為なら私の持てる全てを捧げて尽くす所存です……♥♥♥♥♥」

シャルマは誓いの言葉を口にする、その場で跪いてアザゼルのおっさんのチンポに口を付けジュルジュル、とわざと音を立てて射精後のチンポをしゃぶり始めた。

な、何だか話の流れがおかしいぞ！ オレ達は元に戻るためにやむを得ずアザゼルのおっさんにヤラれる筈なのに……。

「ほくお。セーコにヤスコか。ありふれた名前とは思えないカワイ子ちゃんじゃねえの」

シャルマにチンポをしゃぶらせながら澄ました顔でそんな事を言うアザゼルのおっさん。おっさんのチンポは逞しく、太く、まるで黒い鋼の槍のようだった。

男だった時にはなんとも思わなかった筈のソレから目が離せない。ゴクリ、と唾を飲みながら俺は下半身がキュン……♥と疼くのを感じていた。な、何だよコレは!? オレ、別に男好きってわけじゃないのに……。

「何だ二人とも、俺のチンポがそんなに気になるか?」

おっさんはシャルマから口を離すとニヤリと笑った。バレてる! 途端に恥ずかしくなったオレは顔を赤くしちまったよ……! うう、油断したぜ! でもホント凄く立派だ! こんな初めてだな……。思わず物欲しそうな目で見つめちまう……。

「お前らは俺のコレが欲しくてここにきたんだろう? ならまずはそれ相応の誠意を見せてもらわねえとなあ。オマンコからも本気汁垂らしてる辺りその若さで二人共相当好きものだな?」

まるで悪代官みたいになニヤニヤしながらおっさんはオレ達が発情し始めるとすかさず言葉責めで更に昂らせようとしてくる。うう、なんつー策士なんだコイツ! 悔しいがその言葉だけでゾクゾクしちまうよ……!

「そんな……こと言われても……」

「仕方ねえなあ。じゃあまずはオナニーでもしてもらおうか」

お、オナニーだとお!? ふざけんな! 女の体でそんな事ができるかよ! 第一、どうやればいいのかわかんないし……。

「ん……んん……、ふうう……」

俺が固まっているとなんとイツセーはアザゼル達に尻を向けながらオマンコを弄りだした。た、確かイツセーは一度女になった時があっただったな。

顔を真っ赤にしながらオマンコを弄っている。サーモンピンクで綺麗な無毛オマンコがぐねぐねと怪しく蠕き、まるで客引きが招いているかのようだった。

俺が男のままでもルイーナがいなければ親友であろうと飛びかかり、そのまま二人してセックスしちまうほどの色香にゴクリと生唾を飲み込む。肉厚のお尻がプルン、と震えてとてもそそる光景だ。

「あ、ああ……。俺、親友と先生の前でオマンコとおっぱい弄ってる

……。二人の目の前で変態になっちゃう♥」

オマンコを弄るごとに肉厚のお尻が上下に揺れ、おっぱいもプルンプルンと弾んでいる。オマンコからはどろりと本気汁が垂れていくちゆくちゆという音と共にセーコ、もといイツセーの指を濡らしていた。

「ほお。お前さん達俺を先生呼びするって事はアレか？ 駒王学園の生徒か？」

「は、はい。そうです……♥」

アザゼルの言葉に素直に答えるイツセー。ダメだ、エロい妄想で頭がクラクラして何も考えられねえ……。男なら一発シコらなきや治まらねえが女の身体では出来るはずもなくして正直限界だ……！

「ふふふ、そうかそうか。本来不純異性交遊はご法度だが、ここは学園の外だから特別授業といこうか。俺様がお前たちに女の悦びつて奴をたっぷり教えてやるぜ」

「は、はいいい♥♥♥お願いしますう♥♥♥俺のオマンコに先生チンポのご指導をお願いします♥♥♥あああ〜っ♥♥♥」

言い切る前にセーコ、もといイツセーのオマンコにアザゼルのチンポがずっぽり挿入された。イツセーは体を仰け反らせながら快感に身をよじらせる。その口端からは涎が垂れ、恍惚とした表情を浮かべていた。

「おほっ！ 流石高校生だな。未発達なオマンコは締め付けがキツくてたまらん！」

パンツ、パンツと肉と肉のぶつかり合う音が部屋に響く。その度にイツセーの表情は更に蕩けていき、俺はその場にへたり込んだまま呆然とするしかなかった。

「どうだ？ そろそろ動きたいんじゃないか？」

「は、はい……♥先生のチンポをオマンコで感じたいです……♥♥♥」  
「ふふ、いいぜ！ たっぷりと味わえよ！」

そう言うのアザゼルはイツセーの身体を背後から抱きかかえて立ち上がらせる。所謂駅弁スタイルというやつだ。そしてそのまま激しく腰を動かし始めた。

「あひいつ!!? ♥♥あはあつ♥すごつ♥すごいつ♥♥先生のチンポ最高おつ♥♥んあつ♥♥ああつ、気持ちいいよおつ♥♥ああくんつ♥♥」

いつもの漢らしきとは全く無縁な、女の悦びに蕩ける顔。その表情はメチャクチャ可愛くてドキツとしてしまった。

「俺のチンポがそんなにいいか? セーゴ!」

「はいいつ♥♥♥先生の太いの凄いい♥♥カリが引つかかるのお♥オマンコ挟られて気持ちいいのおお〜♥♥♥」

気付けば俺はオナニーをしていた。夢中で自分の秘部に指を突っ込んでひたすらに弄っていたのだ。女の身体になってもオレはやっぱり男だという事を実感しちまったよ……。だが、俺の手淫ではおっさんが与えてくれるだろう快樂には及ばない。悔しいがめちやくちや羨ましい……。

「ひううっ♥♥しえ、先生のチンポっ♥俺の子宮に当たってるううっ♥♥気持ちいい! ああんっ♥イクっ! イツちやううううっ♥♥」  
「おつと。まだまだお楽しみはこれからだぜ?」

突然アザゼルが腰を止めてピストン運動を止める。何で止めるんだよ!? 俺なら絶対サルみたいにセーゴのオマンコ、いやセーゴの子宮をガン突きしてるのに!

「嫌あつ……♥なんで止めるんですかあ? ♥♥意地悪しないでえ……」

甘えるような声で懇願するイツセーもといセーゴ。上目遣いで涙目になるその姿は物凄く可愛いかった。思わず見惚れていた俺の背後に誰かがすつ、と近づいてくる。

「随分羨ましそうね、貴方」

「なっ……!?!」

シャルマって子が随分馴れ馴れしく俺に話かけてくるや俺のおっぱいに手を伸ばしてきた!

「ああつ、やめろよ! 俺は男なんだぞ!

さっさとアザゼルとセックスして元に戻りたいんだよ!」

「ホントかしら? こんなに乳首をいやらしく勃たせているくせに」



ニヤリ、とシャルマは口元を歪めると爪でカリカリと俺の乳首を弄りだす。それだけで全身に電気が流れたかのような快感が走った。

「ひうううっ！ ♥♥♥な、何だよコレえ……♥♥♥」

「あら？ 女の快楽を知らないの？」

「いやっ ♥知りたくなんかねえよおっ ♥♥♥俺は男だあつ！」

弱々しくも必死に抵抗しようとしたが子宮に力を吸い取られてしまっているかのようで、抵抗する事もできずにされるがままになってしまう。

「なら教えてあげるわ ♥女の子の快楽って奴をね……♥♥」

シャルマが妖艶に笑うと俺の中に手を入れてきた。そしてその指が割れ目に触れたかと思うとその長い指で俺のオマンコをかき回し始めた！

「くひやあああああつ ♥♥♥やめろおっ ♥♥♥それダメええええっ ♥♥♥」

そ、そんな!? 何で男の俺が女のシャルマに膣内を指で弄られてるんだ!? ダメっ ♥こ、こんなの気持ち良すぎるう ♥♥

「うふふ……さあ、堕ちなさい」

シャルマは俺に対してそう囁くとトドメとばかりに俺のクリ〇リスをピンツ！ と指で弾いた。その瞬間――

「ひやううううっ ♥♥♥♥♥」

ガクンガクンと全身を痙攣させながら俺は盛大にイッてしまったのだった。同時に猛烈な高揚感と気だるさが襲いかかり、俺はその場に崩れ落ちてしまった。

そしてふと見上げるとアザゼルの上でムチムチの尻を毬の様に上下させ脇見せのポーズでアへ顔を晒すセーコの姿があった。

「あひっ ♥♥♥ああっ ♥♥♥イイツ ♥気持ちいいのお……♥♥ん

あつ、ああっ ♥アザゼル先生のチンポ素敵 ♥♥もつとください ♥♥」

「おおー セーコ、いいぜ！ すっかりエロくなったな！ 快楽に素直な女は好みだぜ♪ ご褒美に中に出してやるよー」

「はっ、はいっ ♥♥♥セーコを先生のザーメンで孕ませてください ♥♥♥」

ぶちゆるるるるっ！ と子宮口をこじ開けるような勢いでアザゼルのチンポがセーコの中にブチ込まれる。セーコはただ快樂に身を任せて小刻みに震えているだけだ。

「ふあっ……あああ……どぴゅどぴゅって先生のオチンポから温かいのが出てる……♡♡♡ああ、セーコの中いっぱいになってくよお♡」

まるで初めからイツセーではなくセーコという美少女ではなかったのだろうか、とカン違いしてしまいそうな程今のイツセーは女そのものだった。

俺もあんな風になってしまうのか？

アザゼルに媚びて、屈服して……、あまつさえ自ら望んで犯されて……。

「や、やっぱりやめる！ オレ、他の方法を考えるから！」

恐怖を感じ始めた俺は部屋を出ようと走り出す。しかし、女の身体のせいかすぐに腰が砕けて倒れ込んでしまった。その衝撃で股の間の割れ目に刺激が走る……♡♡♡

「あつ、ああっ♡♡やだっ！ オレったらオマンコが濡れて……ひいっ♡♡♡」

アザゼルが素早くオレを抱きかかえるとそのまま壁際に引っ張っていく。そして壁に手を付かせると後ろからオマンコに指を二本挿入してきた！

「どうだ？ 女の快樂って奴は凄いだろう？」

アザゼルの指を挿れられただけでオレの下半身はジンジンと熱くなっけいき、子宮がキュン♡と疼いてくるのがわかる。セーコやイツセーと同じようにオレの中もすっかり女のそれへと変貌しつつあった。

ちくしょう……このままじゃまた取り返しのつかない事になっちゃう……！

そして話は振り出しに戻る。

1

ヤスコ視点

「んっ……んん……」

アザゼルのチンポをしゃぶりながらオレはセーコに身体を弄られていた。

ああ、チンポがこんなに美味しいなんて……！ セーコにおっぱいを揉まれるだけで、腹をさわさわと撫でられるだけでたまらない快感が襲ってくる。

「んう……んん♥♥」

もつと、もつととチンポを必死になってしゃぶるオレ。オレの知らないオレの姿をず思い知らせられているオレはすっかり女として開発されてしまっていた。アザゼルのオチンポの味を口でもオマンコでも味わったオレの中はもう完全に屈服してしまっていた。

「ん……♥くちゅ♥セーコ……オレ、もうダメだ……♥♥」

蕩けきった表情でアザゼルのチンポをしゃぶっていたオレは腰を浮かせていやらしくくねらせながら懇願する。するとセーコは優しく俺の頭を撫でた。その感覚は以前の男の姿の頃とは全く違っていた。まるでメスとして扱われている様でとても嬉しい気持ちになつてきちやう……♥

「うふふ……可愛いわよ？ ヤスコ……」

そう言つてシャルマはオレのクリトリスに舌を這わせる。その感覚に思わずオレは声を上げてしまった。

「ひゃっ♥♥!? そ、そこ♥いいっ♥♥♥」

逃げる必要なんて無い。オレはもう、アザゼルの女として生きていくんだ。アザゼルを悦ばせるために奉仕しなきゃいけない……♥♥

「ふふ、最高のドスケベ面になっちまってまあ。よし、次はパイズリだ」  
♪

「う、うん……」

返事と同時にオレは自分のおっぱいを両手で持つてアザゼルのチンポを挟み込んだ。それだけでアザゼルは気持ち良さそうな声を上げる。

「おほおっ！ パイズリか……これまた極上の感触だぜ……」

オレは夢中になって自分のおっぱいでアザゼルのオチンポを包み込む。すると突然、おっぱいの奥から何か熱いモノがこみ上げてきた

♥  
「なっ、何だコレ!? ああっ♥♥あひいい〜んっ♥♥♥♥♥」

あまりの快感にオレの口からまるで少女のような高い声が出てしまいが抑えられない。違和感なく声帯が女のものになってしまっている。

「な、何でこんなに気持ち良いのお……♥♥♥♥♥」

困惑しながらオレは夢中でおっぱいを上下させる。アザゼルは心底気持ち良さそうな声を上げた。

「んおっ！ 乳圧ヤバいな〜こりゃ♪ セーコもヤスコもよく出来た娘だ♪」

褒められて思わず嬉しくなつてさらに強くおっぱいを押しつけるオレ。

アザゼルのチンポがドクドク、と脈打っているのがわかる。早く出して♥♥♥オレのアザゼル専用おっぱいに思いつきりぶっかけて♥♥♥♥♥

「セーコ、シャルマ、ヤスコのおっぱいを吸ってやれ」

アザゼルの指示で二人はオレの乳首にちゅうつと吸い付いてきた。その瞬間、頭の中で火花が散ったかのような感覚がオレを襲った！

「あひいいいっ♥♥ち、乳首吸われてりゅううううっ♥♥♥んおおおお〜んっ♥♥♥♥♥」

も、もうダメだ♥♥気持ち良すぎてイッてしまっ♥♥♥♥♥  
「はひっ！ あああ♥おっぱい出るううっ♥♥あああ〜ん♥♥♥♥♥」

アザゼルのオチンポもおっぱいもいっぱいで幸せ……♥♥♥セーコやシャルマに授乳しているみたいだ……。

それが堪らなく嬉しくてオレの中がキユンとうずいて仕方ない。そして一際強く吸い上げられた瞬間、頭の中がはじけ飛んだ。

「うおおお！ イクぞー！」

アザゼルのオチンポが一際大きく膨らんだかと思うと精液がびゅるるるっ、とオレのおっぱいに放たれる。オレの顔にもセーコや

シャルマの顔にかかる。あ……♡♡♡　すごい……熱いのいっぱいかかってきちゃったあ……♡♡♡　あまりの快感に放心状態になっっているオレにアザゼルが笑いかける。その表情はまるで愛しい恋人に向けるようなもので思わず胸が高鳴った。ああ、オレはもうこの人の女なんだ……。そう思うと無性にアザゼルが愛おしく思え、ゴツゴツしたアザゼルの膝に頭を乗せて擦り寄る。

「おいおい、お前だけ気持ちよくなってないで俺のもしやぶってくれよ」アザゼルはそう言うのと再びオレの口の中にチンポをねじ込んできた。もうすっかりセーコやシャルマと同じでオマンコが疼いてしようがないオレは一心不乱にそれをしゃぶり続けた。ああ……♡やっぱり美味ひい……♡男の精液もいいけど女の愛液も最高だよ……♡♡♡　もう、戻れない……女として生きていくしかオレに道はないんだ……！　そう思ったら凄く幸せな気持ちになっってきた……♡♡♡

ヴァーリ視点

(やれやれ、アザゼルめ……)

いい加減オーデインとの下らん賭けはやめにして貰いたいものだな)

俺はアザゼルに呼ばれてマンションのエレベーターに乗りながら憂鬱な気持ちになっていた。

何でも俺が見初めるに相応しい女性をアザゼルが探し求めたら、あの爺さんが知る全ての叡智をアザゼルに伝授する……という話になっっている様だ。

(そんなものがあるなら義息である俺に渡せばいいものを……力のみを求める生涯になんの意味があるだろ？　知った風なことをクドクドと……)

そうこうしている内にエレベーターは目的の階に到着した様だ。俺はそのままアザゼルの部屋へと向かうとインターホンを鳴らす。

「おう、来たかヴァーリ」

「ああ、それで俺に見初めろという女性は？」

「ふふん♪ まあ入ってくれや♪」

酷く自信満々だが俺は俺の汚れ呪われた血統など残すつもりは毛頭ない。

俺は生まれた時から呪われ、忌み嫌われた存在だ。だが、そんな俺に生きる道を示してくれた男達がいる。兵藤一誠、九頭竜安里。この二人は俺に新しい生き方を与えてくれた。兵藤一誠にはライバルとして、安里には友人として最大の恩義を感じているのだ。

とにかくアザゼルの部屋についた。

バスローブ姿な辺り性懲りもなく行きずりの女を抱いたのだろう。シエムハザが頭を抱える様が目に浮かぶ……。

「よう、先にやらせてもらってるぜ？」

「これでダメだったら俺も諦める」

「随分と自信たっぷりだなアザゼル。」

「それほどまでの女か？」

「おうよ。爺さんの約束がなけりや俺の子を産ませていたね。美貌も宿している力も最高峰。シユターク以外で20年は見てねえレベルだぜ？ ま、入って確かめてみるよ。」

ま、お前さんに会わせたい方は改めて見ると辰郎の昔の女に瓜二つでな」

相変わらずの男だ。興味があるワケじゃないがアザゼルがそこまで言うのなら見てやるか。俺はその極上の女とやらが待つ部屋のドアを開ける。

……。

俺はベッドで寝息を立てる女性に目と心を奪われてしまった。美しい。その言葉しか出ない程、その女性は美しかった。まるで白銀を思わせる長い銀髪に端正な顔立ち……。俺は女性として美しい存在を数え切れない程に見てきたが美しさとは違うナニカを彼女から感じ取った……。

腰からヒップにかけてのラインは特に素晴らしい。安産型なのは間違いなく、男に欲情を齎すために存在するとすら思わせる。

全裸の為、その乳房の大きさも肉感的な太股も一望できる……。

じっくり眺めているうちに俺はアザゼルが彼女を俺に会わせかけた理由が何となくわかった気がした。

ヤスコ視点

「ん……んん……？」

あ、オレ……アザゼルにいっぱい気持ちよくしてもらったから疲れて眠っちゃったのか……ってアレ？ ヴァーリ？ 何でヴァーリがオレとキスしてるんだ？

しかもヴァーリはあんまり女の子とキスした経験無いみたいでぎこちないキスだった。それが可愛いと思っちゃって、つい自分から舌を絡めてしまった♥

「んっ……んん……」

ヴァーリは驚いたみたいだったけどすぐにオレの舌に自分の舌を絡めてきた！ ああ……オレ今親友とディープなキスしちやつてるんだ……♥♥

「んふっ……ちゅっ♥れろっ……んんっ♥♥」

「うう……き、キミは？」

「オレ……？ オレはヤスコ♥宜しくね♥」

狼狽えるヴァーリなんて初めて見た。

なんていうか、放っておけないっていうか

……♥ オレは松田や元浜が良く見ているアニメの女の子をイメージしてヴァーリに可愛く微笑む。するとヴァーリのオチンポがびくんと跳ねる♥

「ちゅぷ……どうしたの？」

「あ、いや、何でも……」

オレは何となく意地悪したくなってしまうヴァーリをからかう様に上目遣いで尋ねる。だって可愛いし♪

「もしかしてオレの事好きになっちゃった？ ♥♥」

「なっ！ 何を言うんだ！ 俺は別にキミの事なんて……！」

顔を真っ赤にして反論するけど説得力ゼロだよお〜♥でも、そんな所も可愛いなあ〜♥

「はいはい♪ じゃあオレがヴァーリの事好きっていうのはいい？」

オレは意地悪な気持ちで、あえてストレートに聞き返す。するとヴァーリは益々顔を真っ赤にしながら小さく頷いた……♡♡

「う、うん……」

「やったあ〜っ！ オレ嬉しいよ！」

ああもう、本当に可愛いなあ♡♡♡

もう戻れないならアザゼルやヴァーリの彼女として生きていくしかないもんね♪

「き、急に抱きつくな！ 女はもつと慎みを持つべきで……」

「嫌われるの怖いんだよね？ 寂しいよね？」

ヴァーリは誰からも愛されない。だから、ヴァーリは誰も愛さない。そんなの辛いだけだよ♡もつと心を開いて周りを見て♡

ヴァーリの頭を優しく撫でながらオレは囁く。するとヴァーリは涙ぐみながらオレに抱きついてきた……♡

「う、うるさい……！ 俺は他人にどう思われようが構わないんだ……」

そう言う割にその声は震えているし泣いてるの丸わかりだよ♪  
ああもう可愛すぎる♡♡もつと好きになっちゃおうよお♡♡♡

「あ！ 今ちよつとだけ心開いたよね？」

「だ、黙れ！ 少し俺の母さんに似ているからと言って……凶に乗るな!!」

そう言うつとヴァーリはオレに何度もキスしてきた。

「ちゅっ……ちゅっ……」

しばらくそうしているとヴァーリの方からオレを押し倒してきた！ オレに欲情してくれてるんだ……♡♡オマンコがキュンキュンしてしまうのが自分でもわかる。

「はあ……はあ……」

ヴァーリは息を荒らげながらオレを見つめてくる。その目はまるで獲物を狙う獣みたいでドキドキしちゃう♡

でも、その前に……。



ヴァーリ視点

「う、あ……ああ……」

俺はヤスコという女に骨抜きにされてしまったのか……？

「あはっ♥ ヴァーリって女の子のケツが大好きなんだっけ？」

「ぐっ……」

何故だ……？ 普段の俺ならば、『ああ、そうだ』と口にする筈なのに……。何故か口ごもり羞恥心に顔が赤らんでしまう。

「もうっ！ ヴァーリは正直なんだから♥」

そう言うとヤスコは絹の様な背中と満月に等しい美尻を俺に見せつける様にしながらメトロノームの様に左右にふる。

「ほら♥ほら♥どうかな？ アザゼルも褒めてくれたこのエロケツ♪ ヴァーリも好き？」

「お、俺の前で、他の男の話なんてするなっ!!」

「きやんっ♥」

俺はどうしてしまったんだ？

ヤスコがアザゼルの名を口にした途端、

こらえ難い怒りと嫉妬が胸に渦巻いた。

気づけば俺はヤスコの項を押さえつけながら彼女の尻を強引に掴んでいた！ 柔らかく弾力のある尻肉を揉むと、彼女は甘い吐息を漏らしながらトロンとした目で見つめてくる。

「い、痛いよおヴァーリ♥優しくしてよお♥」

「……す、すまない。俺は一体……」

こんなことは初めてだ……。

覇龍化も扱える筈の俺が自分の感情や欲望をコントロールできない……。

ヤスコを抱きたい。誰にも渡したくない。そんな独占欲が心の中で渦巻いて自分という物が分からなくなってしまうそうだ……。

「いいよ、謝ってくれたから許してあげる♥えへへ……ヴァーリ♥

おっぱいとお尻、どっちでしてほしい？」

「そ、それは……っ？」

蠱惑的な表情で俺を誘うヤスコ……。その肢体に目が釘付けになる！ 生睡が溢れ、喉がゴクリと鳴る……。

「おっぱい？ お尻？」

ヤスコは俺に胸を見せつける様にしながら両手で乳房を持ち上げる。その先端にあるピンク色の乳首がいやらしく俺を誘惑する。

「そつ♥パイズリと尻コキ♥どっちがいい？ オレのデカパイかエロケツのどっちかでヴァーリのデカチンをシコシコしてあげる♥」

「……じ、じゃあ胸だ」

本当は尻でしてほしいが、そんな変態まる出しの欲望をヤスコにぶつけたくなかった。……答だが？

「あははっ♥ウソはダメだってヴァーリ♥

チンポをオレのケツにツンツン、ツンツンって当ててるじゃん♥」

「……ち、違う！ これがアルビオンが勝手に……!!」

『お前の性癖の弁解に俺の看板を持ち出すな。その前にヴァーリ……。お前は赤いの宿主である兵藤一誠のライバルなのだろう？ ならば己の正直な欲望を愛する相手にぶつけてみるがいい……。男ならば己の欲望に素直になるべきだ……』

そんなアルビオンの声が響くと俺の理性は完全に崩壊してしまった。

ああ、そうだ！ ヤスコが俺に愛想を尽かして居なくなったら俺はもう立ち直れない!! この娘はずっと俺のそばにいてほしい……!!

「もーヴァーリったら♥仕方ないなあ〜♥」

そう言うとヤスコは尻肉で俺のペニスをぎゅむりつ、と挟み込んだ。

「うぐっ……!!」

肉厚で柔らかい尻の感触に俺は思わず声を洩らしてしまった！

ヤスコは嬉しそうに微笑みながら、更に激しく俺のペニスを尻肉で擦り上げる！

「ヴァーリのチンポ♥バキバキのアツアツ♥こくんなにカチカチにしちやっつて♥オレ嬉しいなあ♥」

ヤスコはそう言いながら俺のペニスを尻で扱き続ける。その快樂に俺は思わず腰を動かしてしまった！ すると……。

「きゃん♥何？ ヴァーリ、オレを犯してくれるの？」

俺が腰を振った瞬間、ヤスコは甘ったるい声で媚びた笑みを浮かべてくる……！ ああ、そうだ……！！ もう俺は我慢しないぞ！！ この美姫は俺のものだ！！ 誰にも渡さない！ 俺だけがこの雌を抱くんだ！！

後はもう自然のままに俺は背後からヤスコの胎内にペニスをねじ込み、腰を打ち付け始めた！

「ああっ♥ヴァーリのデカチンポいいっ♥♥オレのケツマンコにぎっちりハマってゴリゴリ擦れてるっ♥♥」

ヤスコは歓喜の声を上げながら俺のピストン運動に合わせるように尻を動かしてきた！ 堪らない快樂だ。俺はたまらずその尻肉を平手で叩くとヤスコが甲高い声で悶える！！

「ああん♥♥お尻叩いちやダメえっ♥♥♥♥」

「うるさい！ このエロ尻がっ！！ これからは俺以外に誘惑する事は許さないからな！」

俺はヤスコの尻を何度も叩き、その度に彼女は嬉しそうに悶える。その反応に俺の興奮も更に高まっていく！！ そしてついに限界を迎えた時、俺は彼女の腸奥目掛けて大量の精液を放出した！ 同時に彼女も絶頂を迎えたらしく、全身を激しく痙攣させる！

「ああん♥♥ヴァーリのザーメンきたあっ♥♥♥♥」

「はあ……はあ……」

俺は余韻に浸りながらヤスコの身体を抱きしめる。彼女の柔らかな肢体を全身で感じながらしばらく繋がったまま呼吸を整える。

部屋の向こうでアザゼルが

『アイツが安里のオ!? ななな、なんだとおく!? おい！ それえ！ ノン！』などと素っ頓狂な叫びが聞こえる。

この娘は安里の……親戚か？

そうか、あいつの親戚ならきつといい娘だろう。だから、だから……。

「ここにいてくれ……ヤスコ」

「うん……オレはヴァーリの側に……」

ひどい眠気が襲ってくる。だが俺はヤスコを離すまいと強く抱きしめたまま眠りについた……。

#### 安里視点

「はあく、全くひどい目にあっただぜ」

「ハハハ、まあ悪い悪い。今度焼肉でも奢ってやるからよお」

俺もイツセーもなんとか女から男に戻れたがどーも、途中の記憶が朧気だ。

何かとんでもない事になっていた気もするが……？

更に珍しくエルフの集落にヴァーリがやってきたかと思うと、「ヤスコ、という銀の長髪を持つ女を知らないか？」と聞いてきた。

どうしたんだ、と聞いたらヴァーリは

「俺に愛というものを教えてくれたたった一人の女だ。俺は彼女を娶る」とキツパリ言い切った。

お、おう……。取り敢えずルイーナ達にも聞いてみるわ……。